

ドラゴンクエストXI 魔法戦士の男、恋をする

サムハル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺もみんなの旅について行ってもいいか？」

昔、マルティナとロウがお世話になった人の住んでいた村がオーブと関係があるらしい。折角なのでその村によることにする勇者一行。そこから始まるある男とロトゼタシアを巡る冒険の話。

これは勇者のメンバーに一人加わる話です。

苦手な方はブラウザバック推奨です。

基本原作沿いですが序盤と途中でオリジナル展開があります。男主です。主人公の名前はイレブンです。

ロウ、マルティナ加入後から始まります。

マルティナ落ちです。

そして初投稿ですのでミスなどもあると思いますがよろしくお願ひします。何かありましたらコメントなどで教えてください。

ミスやスペースなどを全体的に直しました

目次

1章 出会いと告白

1.	始まり	1
2.	設定	5
3.	再会	9
4.	崩壊	19
5.	別れ	26
6.	マルティナ達との出会い	31
7.	出会い2	36
8.	出会い3	40
9.	出会い4	43
10.	出会い5	49
11.	大樹の根と決意	52
12.	本気	60
13.	決着	73
14.	ソルテイコへ	82
15.	白の入り江	86
16.	ナギムナー村へ	90
17.	クラীগオン	93
18.	時の流れ	99
19.	真実を	102
20.	悲しき恋	106
21.	海底王国へ	111
22.	事情説明	116
23.	メダル女学園へ	124

4 8.	温泉 6	257
4 7.	温泉 5	252
4 6.	温泉 4	247
4 5.	温泉 3	241
4 4.	温泉 2	236
4 3.	温泉	231
4 2.	優しき心	227
4 1.	化ける魔女	222
4 0.	魔女との戦い	210
3 9.	魔女と聖獣	207
3 8.	古代図書館へ	203
3 7.	魔女	193
3 6.	氷漬けの城下町	189
3 5.	クレイモラン王国へ	184
3 4.	気持ち	180
3 3.	新たな一面	174
3 2.	壁画世界の戦い	163
3 1.	壁画の真実	159
3 0.	壁画の世界	154
2 9.	壁画の美女	149
2 8.	プチャラオ村へ	145
2 7.	日常 4	141
2 6.	日常 3	136
2 5.	日常 2	132
2 4.	日常	128

49.	聖地ラムダへ	263
50.	始祖の森と夜	267
51.	魔王誕生	275
2章 崩壊した世界と誓い		
52.	崩壊した世界で	284
53.	最後の砦	290
54.	英雄グレイグ	296
55.	2人の騎士	307
56.	屍騎軍王ゾルデ	316
57.	再び歩く	333
58.	ドウルダ郷へ	344
59.	冥界	352
60.	修行	361
61.	シルビアとの再会	374
62.	フルフル	382
63.	シルビアとゴリアテ	395
64.	和解	401
65.	預言者	408
66.	悪夢	414
67.	勇者と愛情	429
68.	呪われしマルティナ	438
69.	妖魔軍王ブギー	448
70.	覇海軍王ジャコラ	464
71.	カミュという男	478
72.	カミュの罪	487

7 3.	兄妹の殺し合い	499
7 4.	魔竜	520
7 5.	無力	534
7 6.	後悔	546
7 7.	誓いをあなたに	552
7 8.	ケトスと神の民	569
7 9.	勇者の剣を求めて	577
8 0.	勇者の星、壊れる	587
8 1.	人食い火竜	593
8 2.	母は強し	602
8 3.	勇者の剣完成	610
8 4.	天空魔城	615
8 5.	魔王との決戦	628
8 6.	平和になった世界で	641
8 7.	忘却の塔	652
8 8.	過ぎ去りし時を求めて	660
3章 過ぎ去りし時と未来		
8 9.	時を超えて	666
9 0.	対決、ウルノーガ	681
9 1.	邪神現る	691
9 2.	グレイグ、打ち解け始める	705
9 3.	ラーズの過去	713
9 4.	決別	725
9 5.	フォースとは	735
9 6.	苗木	746

97.	苗木2	754
98.	ケトス覚醒	764
99.	試練	770
100.	悪夢、再び	779
101.	勇者の思い	789
102.	各地を巡る	803
103.	大いなる試練	813
104.	呪われし闘士達	828
105.	二度目の贖罪	840
106.	クレイモランでの依頼	844
107.	海水浴	860
108.	海水浴2	871
109.	町を救え	884
110.	レデイの扱い	897
111.	レデイの扱い2	908
112.	海の平和	921
113.	試練2	931
114.	二本目の勇者の剣	941
115.	勇者の剣改	949
116.	ラースvsグレイグ	957
117.	決戦！ニズゼルフア！	972
最終章 平和と幸せの道		
118.	本当の平和	982
119.	ラースの歩む道	991
120.	将軍	1003

1 4 5.	マヤと家族	125
1 4 4.	マヤの苦悩	127
1 4 3.	マヤの変化	126
1 4 2.	カミュの悩み	125
1 4 1.	謝罪	124
1 4 0.	メグとバン	122
1 3 9.	バンとラース	121
1 3 8.	ラースの楽しみ	120
1 3 7.	新婚旅行 6	119
1 3 6.	新婚旅行 5	118
1 3 5.	新婚旅行 4	117
1 3 4.	新婚旅行 3	115
1 3 3.	新婚旅行 2	114
1 3 2.	新婚旅行	113
1 3 1.	バンの成長	112
1 3 0.	これから	111
1 2 9.	新たな命	110
1 2 8.	強くなるために	108
1 2 7.	変わりゆく未来	107
1 2 6.	勇者、未来へ	106
1 2 5.	未来への手がかり	105
1 2 4.	結婚式	104
1 2 3.	結婚	103
1 2 2.	刻印	102
1 2 1.	遠征	101

146. 兄貴と兄ちゃん

147. 極意

148. ミルさんの変化

149. 憎しみ

150. ずっと幸せで

151. 数年後

152. 五歳の誕生日

153. 誕生日2

最終話 絆はいつまでも

おまけ キャラ設定

番外編

ラースは無防備？

ラースの他国指導

他国指導2

他国指導3

他国指導4

他国指導5

死後の世界

リベンジ

バン、見直される？

マヤとの旅

旅行

旅行2

旅行3

ユグノアへ

15381527151515021492148614721462145314431435142414121399

1387138113641352134113331322131513061295

ユグノア観光	1550
カミュとレース	1564
兄と弟	1574
秘密	1585
サプライズ	1595
サプライズ2	1607
サプライズ3	1617
一番強いのは？	1630
トーナメント	1639
ペロニカ&グレイグ対シルビア&ロウ	1648
カミュ&レース対セーニヤ&マルティナ	1658
カミュ&レース対ペロニカ&グレイグ	1673
セーニヤ&マルティナ対シルビア&ロウ	1687
ペロニカ&グレイグ対セーニヤ&マルティナ	1701
カミュ&レース対シルビア&ロウ	1715
レース対イレブン	1731
カミュ対イレブン	1746
デルカダール襲撃	1761
救出作戦	1774
闇のルビーの力	1787
リーズレットの過去	1800
チョコレート	1805
チョコレート2	1815
チョコレート3	1825
お返しを	1833

ホワイトデー	1843
ホワイトデー2	1850
ホワイトデー3	1858
ホワイトデー イレブンver	1864
ラースの異変	1873
夢の中へ	1884
夢の世界	1891
夢の世界2	1904
光	1916
声	1924
夢から覚めて	1937
命日	1947
家族旅行	1956
家族旅行2	1966
家族旅行3	1981
森の異変	1994
森の異変2	2006
新たな家族	2014
触れ合い	2026
対策会議	2038
アジト潜入	2049
真犯人	2062
父親とは	2074
魔物との会話	2080
ブレイブの一日	2089

命の大樹の異変	2357
シロと流星群	2341
初めてのデート4	1233
初めてのデート3	1232
初めてのデート2	1230
初めてのデート	922
子ども達の日常	2982
感謝の気持ち	2822
恋の予感? 2	2732
恋の予感?	2612
兵士達の休日2	2482
兵士達の休日	2236
サーカス開演	2226
シルビアの新たな芸2	2214
シルビアの新たな芸	2052
セーニヤの夢5	1942
セーニヤの夢4	1892
セーニヤの夢3	1772
セーニヤの夢2	1662
セーニヤの夢	1592
バンとブレイブ4	1492
バンとブレイブ3	1412
バンとブレイブ2	1213
バンとブレイブ	2211
ブレイブの一日2	1721
ブレイブの一日	1082
	100

ラムダを救え

酒飲み

バン達の出会い

シヨツピング

民達の要望

友達だから

バン対ベグル

ベグルの守りたいもの

ベグル、副長へ

マヤの卒業式

ユグノア大食い大会

人質救出

不穏

ジエーン、捕まる

はじめ

あなたへの想い

ラースの暇な一日

ラース、未来へ

未来での生活

未来での生活2

未来での生活3

元の世界へ

変化

追加キャラ設定

虹祭り

2625261526012591258425752568256025462534252325152507249324822472246424512439242624192405239723862368

海の呪い	2894
孤児院 2	2883
孤児院	2874
仲間達の休日 3	2868
仲間達の休日 2	2857
仲間達の休日	2846
グリーの变化	2839
幻の店	2828
酒場の真実	2815
動き出す影	2803
初めての仕事 2	2790
初めての仕事	2780
マヤ、働く 3	2766
マヤ、働く 2	2755
マヤ、働く	2743
マヤの一週間 2	2729
マヤの一週間	2714
潜入調査 3	2702
潜入調査 2	2692
潜入調査	2683
人身売買	2674
月虹	2662
夜の虹	2655
春の山 2	2643
春の山	2632

問題児？バン	102902
壺から出てきた神様？	192910
久しぶりのデート	291929
操られし者達	302919
ラースとブレイブ	452930
コロの成長	602945
ラース、ダイエツト	722960
ダイエツト2	297229
乗馬	629972
ジエーンの夢、完成	972985
ジエーンの夢2	301730
生誕祭	062997
生誕祭2	283017
生誕祭3	304130
生誕祭4	053041
ベグルの過去	230813
舞踏会	092308
レッドボーン	309230
バンの悩み	111310
優秀なバン	111931
違和感	231193
正体	131323
バン、覚醒	141313
師匠として、弟子として	311533
いつも通りへと	163315

兄貴とお酒	184
ホムラの秘蔵酒	198
城での飲み会	209
城での飲み会 2	226
城での飲み会 3	240
酔いは冷め	253
竜の宴	262
祝福の竜	275
祝福の鐘を再び	289
シロとブレイブ	299
シロとブレイブ 2	312
シロとブレイブ 3	329
バンとベグルの出会い	331
マヤ達の店、開店	332
マヤ達の店 2	335
夫婦喧嘩	337
夫婦喧嘩 2	338
夫婦喧嘩 3	339
油断	398
作戦失敗	103
天の川の下で	134
レース vs バン	263
レース vs バン 2	342
レース vs バン 3	446
レース vs バン 4	345

砂漠の遺跡

迷い猫

ブレイブ達の誕生日

ブレイブ達の誕生日2

ブレイブ達の誕生日3

合宿

合宿2

合宿3

幽霊騒動

幽霊騒動2

幽霊騒動3

幽霊騒動4

幽霊騒動5

ロウの異変

ロウの後悔

黄昏時の再会

遺跡泥棒

ブダン

救いの手を

グレイグとマルス

グレイグとマルス2

グレイグとマルス3

素敵な女性

スーナの思惑

バンの特訓

追加キャラ設定 2	3959395039383926391639053897388738793872386238503839382938203813380537923782377137633754374837403725
十五夜 2	
十五夜	
お月見	
セーニヤの秘密 3	
セーニヤの秘密 2	
セーニヤの秘密	
恋するギバ 4	
恋するギバ 3	
恋するギバ 2	
恋するギバ	
オーブ	
明日を生きる力	
旧友	
末路	
行方不明の両親	
目標	
暴走	
半魔人	
挑戦者	
僕の隣	
あの日の約束	
叶わぬ願い	
故郷帰り	
バンの特訓 2	

友達

友達 2

友達 3

真つ直ぐな言葉

友情と愛情

憧れの自分

憧れの自分 2

ドキドキデート

ドキドキデート 2

ドキドキデート 3

ドキドキデート 4

デートの成果

記憶喪失

記憶喪失 2

怪しきもの

仕組まれた争い

氷の力

遮断

集う心

ハロウィン

ハロウィン 2

ハロウィン 3

ハロウィン 4

障害物競争

障害物競争 2

波乱万丈
かいしんの出来栄え
打開策
店長の秘密
スランプ
一から
兄弟喧嘩
兄としての役目
ケニー
単独任務
友達になるために
絆
訓練開始
コレクション
魔物達の異変
恐怖
ゴライアス
謎の魔物
障害物競争9
障害物競争8
障害物競争7
障害物競争6
障害物競争5
障害物競争4
障害物競争3

45534542453145204511449944854477446844584446443644264419440843964378436444347433143164297428142644249

波乱万丈2	48
波乱万丈3	28
ありがとう	19
ありがとう2	12
不思議な木の実	6
入れ替わり	4
入れ替わり2	3
クレイモランの危機	2
レッドボーン、襲来	2
カミュ、暴走	2
危機脱出	2
素晴らしい働き	2
一から始めるために	2
クリスマスに向けて	2
プレゼントを求めて	2
プレゼントを求めて2	2
勇者達のクリスマス	2
勇者達のクリスマス2	2
兵士達のクリスマス	2
子ども達のクリスマス	2
聖夜を終えて	2
年末	2
年末年始	2
三が日	2
おせち料理	2

エマの悩み

見えぬ敵

犯人を探せ

発見

兵士長

兵士長2

初調査

事故

強敵

脱出

星夜祭

星夜祭2

星夜祭3

星夜祭4

星座

実力測定

実力測定2

メグの焦り

亀裂

メグとバンの出会い

理由

あなたのために

支える者達

節分

節分2

5101509350835068506050475034502350134997498549724963495149434928491749054895488948814869485948444836

節分3

節分4

ベルとの出会い

疑心

バン

分離

一騎討ち

アルモニア

奥さん達のバレンタイン

我慢のバレンタイン

嫉妬のバレンタイン

ハッピーバレンタイン

なくなったケーキの謎

探偵ステイロ

解決、ケーキの謎

人攫い

人攫い2

星のちようちん

古代のお宝

宝探し

王になるために

古代の指輪

ひな祭り

ひな祭り2

舎弟

侵略

ベロニカの魔法教室

ベロニカの魔法教室2

心と向き合って

男達の隠し事

男達の隠し事2

お礼

お礼2

お礼3

虫歯

虫歯2

虫歯3

破綻した関係

交わした約束

仲間

信頼

励ましの言葉

焼き付ける瞬間

慣れぬ生活

エイプリルフール

エイプリルフール2

エイプリルフール3

イースター

イースター2

イースター3

目撃	目撃
消えた思い出達	消えた思い出達
再利用	再利用
ライバル、友達	ライバル、友達
身を挺して	身を挺して
魔物、人間	魔物、人間
見放し	見放し
旅の理由	旅の理由
賑やかな旅路	賑やかな旅路
エドの郷帰り	エドの郷帰り
兄の本音	兄の本音
息の合う連携	息の合う連携
だいあくまの書	だいあくまの書
狙い	狙い
綻んでいく心	綻んでいく心
虎視眈々	虎視眈々
カミュと兵士達3	カミュと兵士達3
カミュと兵士達2	カミュと兵士達2
カミュと兵士達	カミュと兵士達
ぶつかる兄弟	ぶつかる兄弟
自慢の息子	自慢の息子
ブレイブの過去	ブレイブの過去
コロの変化2	コロの変化2
コロの変化	コロの変化
イースター4	イースター4

想いが集まって

思い出の館

ベタヤール

突然変異と強襲

謎に包まれた旅人

魔導核

ミラの夢

遺跡をめざして

遺跡の中で

決戦

決戦 2

決戦 3

596359525938592959215909589858905880587058625856

1章 出会いと告白

1. 始まり

ユグノア地方 ユグノア城 跡地

ようやく手に入れた虹の枝は茶髪のサラサラヘアの美青年、イレブンの勇者の力により、仲間達に赤、青、黄、緑、紫、銀の6つの色のオーブを集めて祭壇に捧げる映像を見せた

それを見た青いツンツンヘアの青年カミュは自身の鞆からレットオーブを取り出した

カミュ「それじゃあこいつはイレブンに預けるぜ。本当なら俺に必要なだったが、こういう事なら仕方ないからな」

イレブン「ありがとう、カミュ」

イレブンはレットオーブを手に入れた

また、黒く長い髪を後ろで一つに束ねた女性マルティナと赤い帽子を被った白いヒゲが特徴のイレブンの祖父ロウもそれに続く

マルティナ「ロウ様、仮面武闘会でもらったイエローオーブ。売らずにいて正解でしたね」

ロウ「うむ。使い道がわからず、危うく旅の金に変える所じゃった」

ロウは持っていたイエローオーブをイレブンへと差し出した

イレブン「ありがとう、おじいちゃん」

イレブンはイエローオーブを手に入れた

ロウ「祭壇のあった場所は命の大樹の真下……おそらく始祖の森と呼ばれる秘境じやろうて。イレブンよ、道は決まったな。残り4つのオーブを集め、始祖の森にある祭壇に捧げるのじゃ」

赤い服を着て金色の髪をした子どもの姿のベロニカと、その妹である緑の服を着て金色の髪をした女性セーニャは首を傾げている

セーニャ「残り4つのオーブ……でもいったいどこから探せば……」

ベロニカ「オーブといえば子どもの頃、海底に沈んだオーブがあるって聞いたけど、そんなの雲を掴むような話だものね……」

そんな時、マルティナがふと何かを思い出した

マルティナ「……！　そういえばロウ様、数年前にオーブを調べていたという人に助けられましたよね？」

ロウ「おお！　そうじゃったな！　確か名は……。　ラースじゃったかのう。そやつが育ったという村の場所を教えてもらったのう。」

ダーハル―ネの近くにある霊水の洞窟の横にある道を抜けた先にある山のふもとじやったか。じゃが、彼は放浪していたはずじゃ。会えるとは思えないがの」

カミュ「オーブを調べてたなんて物珍しい人もいたもんだな。まあ情報も少ねえみてえだし、その村とやらに行ってみるとしようぜ」

黒い髪で奇抜な服装をした体格のいいオネエ、シルビアが高らかに話し出した

シルビア「それじゃあまず、私の船ちゃんが泊まってるネルセンの宿屋まで戻りましょうか。そこから兵士ちゃん達に気をつけながら、ダーハル―ネの近くに船を停められる場所を見つけましょう」

その後、霊水の洞窟 奥地

洞窟の横には細い道が続いており、そこを全員で進んでいた

シルビア「洞窟の横に道なんてあったのね、最初来たときは気づかなかったわ」

カミュ「まあこういう山の周りは道が複雑なもんだからな、仕方ないだろ」

数分後

セーニヤ「あ！出口が見えてきましたわ」

洞窟から出るとそこは木々が鬱蒼と生い茂る森に出た

ベロニカ「でも、今度は森が広がってるわね。本当にこの先に村なんてあるのかしら」

ロウ「地図にも載っていない小さな村だと言ってたからのう。ただ、道は少し整備されてるようじゃな」

獣道程度ではあるが、どうやら人が二人ほど横並びで歩ける程度には道があるようだ

その時

カミュ「おい！みんな戦闘準備に入れ！魔物の群れだ。こつちに気づかれたぞ！」

先頭を歩いて警戒していたカミュが全員に指示を出した。その奥からはかなりの魔物の群れがこちらに向かってくる

シルビア「ちよつと！かなりの数じゃないの！どうしてこんな所にたくさんいるのよ！」

マルティナ「ひとまず手分けして倒していくわよ！」

全員が武器を構え、応戦態勢に移った

別の場所では

焦げ茶色の髪をした青年が草原を歩いていた

???「ふう… 久しぶりにこの景色をみるなあ… 懐かしいぜ…。皆はあれから元気になっているだろうか…。ん？あつちが騒がしいな、誰かが戦ってんのか？様子を見に行ってみるか」

青年は先にある森の方へと走っていった

2. 設定

設定です。今後もしかしたら追加するかもしれませんが
ここには大きなネタバレはのっていません

オリジナル主人公

名前 ラース

性別 男

年齢 27歳

身長 177cm

体重 74キロ

髪色 こげ茶色

性格 しっかり者で面倒見もいい。誰にでも明るい。頭の回りもよく、過去の情報や相手の発言などから物事を推測する事ができる。

仲間達の事もよく見ており、感情の変化にもよく気づく。その反面、自分の気持ちには奥手である。またイタズラをしたり、祭りが好きだったり子どもらしい一面もある。食べ物に好き嫌いはなく、よく食べる。

スキル 片手剣、ブーメラン、盾、かくとう、??? (まだ秘密です)

攻撃呪文 メラ系、イオ系、バギ系、ヒヤド系、ドルマ系、ジバリ
ア系

サポート呪文 バイキルト、ルカニ、ルカナン、マジックバリア、ザ
メハ、キアリー、マヌーサ

回復呪文 使えない

趣味 筋トレ、魔導書を読む事、催し物探し、食べ物巡り

ステータス比較 一位が左です

HP グレイグ>イレブン>マルティナ>シルビア≧ラーズ

MP ベロニカ>ロウ>セーニャ>イレブン>ラーズ>シル
ビア

力 グレイグ≧ラーズ>イレブン>マルティナ>カミュ

みのまもり グレイグ>イレブン||ラーズ||シルビア>ロウ

攻撃魔力 ベロニカ>ロウ>イレブン>ラーズ≧シルビア

回復魔力 0のため比較なし

素早さ カミュ>ラーズ>マルティナ>ベロニカ>イレブン

きょうさ マルティナ>カミュ>ベロニカ>セーニャ>ラーズ

みりよく マルティナ>グレイグ>セーニャ>シルビア>イレブ
ン||カミュ||ラーズ

ガラツシュの村で育った青年。村一番の戦士候補として10年前

までギルグードと共に村の守人になろうとしていた。また、頭の良さを見抜いた村長と一緒に村の秘宝シルバーオーブと勇者について研究していた。

しかし突如村を抜け出した。そこからは各地を点々とし商人の護衛などをしながら旅をしていた。

5年前に魔物に囲まれていて風邪を引いているマルティナとロウが戦っているところに出会う。そこを助け少しの間一緒に旅をした。マルティナとロウは彼に恩を感じていて、本人もまた会いたいと思っていた。

魔法と体術をメインで戦うスタイル。剣術と盾は基礎はあるが大体は我流。また、ホムラの里がお気に入り。好きな事は草原で寝転がること。嫌いな事は海に入ること（泳げないため）

オリジナルキャラ

名前 ギルグード

性別 男

年齢 27歳

身長 185cm

体重 80キロ

髪色 黒色

スキル 大剣、斧、短剣、盾

呪文 使えない

レースと共に育った幼なじみ兼ライバル。レースと同じく、村一番の戦士候補として村の守人になるために2人で努力していた。力ではレースより上だったが、呪文やその場の判断力では負けていた。

レースをライバルだと思いながらも、レースと2人で一緒に村の守人になると約束をする。しかしレースが突如村を抜け出したため、村の守人はギルグードに任されることになった。

勇者一行

基本は原作通りです。

しかしイレブンが発言していたり、オリジナル展開では少し性格が変わっているかもしれませんが、極力崩さないようにいきます。また、オリジナル展開が所々あるのでゲーム内では無かった事が起こります。暖かく見守ってください、お願いします。

3. 再会

その頃

イレブン達は森の中で魔物の群れと戦鬪を繰り返していた

魔物「ギイイイ！」

魔物の持つ鋭利な剣がイレブンに振り下ろされる

イレブン「ふっ！」

ガキン！

魔物「ギ!?!」

イレブンは剣でそれを防いだ後すぐさま剣に力を込め、その刀身に炎を宿した

イレブン「かえん斬り！」

炎を纏った剣が魔物の体を焼き切り、真っ二つにする

魔物「ギイイ……」ジュワッ

魔物はそのまま煙となって消えていった

カミュ「くそっ！中々面倒だな！」

他の仲間達の周りにはまだまだ魔物が群がっていた

全員輪になって戦っているが、常に囲まれているため油断が出来ない状況となっている

マルティナ「何だか連携が取れているわ。魔物同士で作戦でも決めているのかしら？」

マルティナは遠くの魔物が魔法を使ってきたり、常に囲まれるように戦わされている事に違和感を感じていた。魔物は普段は作戦などはなく、人間を見ると闇雲に襲ったり集団で襲っても協力などする事は極めて稀であるからだ

ロウ「あまり長く戦っているとこちらが不利になるやもしれん。早めに片付けねば」

シルビア「あつ！ごめんなさい、イレブンちゃん！そっちに行つたわ！」

シルビアが相手をしていた魔物の一体がシルビアをすり抜け、後ろにいたイレブンに向かっていく

イレブン「え!!？」

イレブンが振り返ると既に目の前には魔物が斬りかかろうとしていた

ベロニカ「マズいわ！イレブン！」

イレブン「くっ！間に合わない!!」

イレブンはなんとか剣で防ごうと動くが、もう魔物の剣が顔に振り下ろされようとしている

その時

??? 「シャインスコール!!」

魔物 「ギャア！」 ジュワッ

遠くから眩い光の雨がその魔物目掛けて降り注ぎ、魔物はたまらず消え去った

イレブン 「あ、危なかった……」

マルティナ 「今のは!？」

ガサガサ!

??? 「さあ!こっちに来い!」

森の中から焦げ茶色の髪をして、茶色のコートにオレンジの帽子を被った青年がイレブン達と魔物達の前に飛び出してきた

青年は指をくいくいと曲げて魔物達を煽って挑発している

魔物達 「ギイイイー!」

魔物達はその青年に向かっていき、青年もそれを確認すると同時に別の場所に走っていく

シルビア 「ちよっ、ちよっと!一人で危ないわ!」

しかし、シルビアの心配する声は届かず、青年はかなりのスピード

で草木が生い茂り視界が悪い森の中を颯爽と駆け抜けていく

木々を身軽に避けたり、時に木の枝を使って攻撃を避けたりと、この森を知り尽くしているように動いている

カミュ「あいつ、凄えな。こんな動きにくい場所だつてのに」

魔物達「ギイイ！」

更に遠くから援軍として魔物達が青年を追いかけていく

??? 「よし！そろそろいいな！」

青年はジャンプして生えている木の枝を掴んだ

??? 「よつと！」

青年は走った勢いと遠心力を利用して鉄棒のように一回転し、そのまま後ろに飛んで戻り、魔物達の群れの中に着地した

魔物達「!？」

魔物達も一瞬の出来事に驚き、固まっている

??? 「ばくれつきやく！」

ダダダダダ!!

魔物達「ギイイイ！」

一ヶ所に集まった魔物達は青年の強力な蹴りの乱打により、みるみ

るうちに倒されていく

その蹴りも素早くかつ的確であり、魔物の顔や腹にしつかりと当てていく

応戦する魔物もいるが、躲されたり防がれたりして青年には全く効いていない

ジュワー

魔物達は全員そのまま青年によって倒され、辺り一帯にいた魔物達はいなくなつた

??? 「ふう、何とかなつたな。大丈夫か？」

青年は汗ひとつかいておらず、そのままイレブン達を見た

イレブン 「つ、強い……」

カミュ 「助太刀してくれてありがとな。助かつたぜ」

セーニヤ 「みなさん、お怪我はありませんか？」

ベロニカ 「とりあえず大きな怪我は皆してないみたいよ」

マルティナ 「ラース、久しぶりね。また助けてもらっちゃったわね。ありがとう」

ラース 「おお！マルティナじゃないか！爺さんも！久しぶりだなー！何年振りだ？」

この青年こそ、先程マルティナ達が話していたラースのようだ

ラースはマルティナとロウの姿を見て嬉しそうに笑っている

ロウ「ふおつふおつ、お主には助けてもらってばかりじゃのう。今、お主が育ったと言っておった村に向かっておったんじや」

シルビア「貴方がマルティナちゃん達が言ってたラースちゃんね。助けてくれてありがとう」

ラース「おお！まさか、あの有名人のシルビアさんと会えるなんて嬉しいぜ。サインお願いしてもいいですか？」

ラースはシルビアの顔を見ると驚きつつ、鞆から紙を取り出した

シルビア「あら、アタシのこと知ってるのね？ありがとう、サインなら喜んで書くわよ」

ラース「やった！ありがとうございます！……それでマルティナ、こっちの人達は一緒に旅してる仲間か？」

マルティナ「ええ。今私達は悪いやつの手からこの世界を守るために、仲間達と一緒に旅をしているのよ。紹介するわ。この2人は聖地ラムダから来た姉妹なの」

ベロニカ「ベロニカよ、よろしくね。ラース」

セーニヤ「セーニヤと言います。先ほどは助けていただき、ありがとうございます」

ラース「ベロニカとセーニヤか。よろしくな（聖地ラムダ……）

か」

ラースはベロニカとセーニヤにお辞儀をされお辞儀で返している

マルティナ「それと、こっちの青い髪の人が盗賊のカミュよ」

カミュ「元、な。それと雑じゃねえか？まあいいか。俺の名前はカミュっていうんだ。よろしくな、ラース」

ラース「おう。こっちこそよろしくな、カミュ」

ラースとカミュは互いに握手をした

マルティナ「シルビアの事は知っているみたいだし平気かしら？」

シルビア「え、マルティナちゃん、アタシだけ省いちやうの」

シルビアは不満そうにしている

ラース「ああ、シルビアさんの事は有名だからな。大丈夫だぜ」

マルティナ「ふふ、ごめんなさい、シルビア。それでこの子がイレブン。私達パーティーのリーダーなの」

イレブン「どうも、僕の名前はイレブンといます。さつきは凄く強くてビックリしたよ、よろしくね」

ラース「ああ、よろしくな、イレブン」

イレブンもカミュと同じく握手をしようとする

ラース「ん?.....!?左手のその痣は!?まさか、勇者様なのか!」

全員「!」

ラースはイレブンの差し出した左手にある痣を見て驚いている。また、それを見てすぐに勇者だと判断したラースに仲間達からも驚いた反応が返ってくる

イレブン「え、なんで、それを」

カミュ「おい、イレブン下がれ!そいつ、危ないかもしれねえぞ!」

イレブンを守るようにカミュやベロニカ達がイレブンの前に出た

マルティナ「ちよつ、ちよつと待つて。ラースは悪い人なんかじゃないのは私が証明するわ!」

ロウ「オーブを研究していたという事は、勇者と関わりがある事も知っていたはず。そこまで警戒せんでもラースは信頼しても安心じゃ」

マルティナとロウが他の皆に説得しようとしている

ベロニカ「そ、そつか。オーブと勇者は切っても離せない存在だから.....で、でも!だからと言ってすぐに見抜かれるのもおかしいわ!」

ラース「す、すまん。警戒させたみたいだな。マルティナ、じいさん、擁護してくれてありがとう。助かった。俺の事については少し説明があったみたいなんだな。言われた通り、俺の村ではオーブについて研究していたんだ。」

その関連として勇者についても調べていたさ。勇者には必ず決まった痣がある事もな。イレブン、だったな。もう一度よく見せてくれないか？」

イレブン「わ、わかった。いいよ」

カミュ「イレブン、すぐに信用すんな！何かしてくるかもしれないぞ！」

ラーズ「警戒されたな、仕方ないけどよ。それなら、俺にすぐ攻撃出来るように武器を突きつけておけよ。それでどうだ？」

マルティナ「そ、そこまでしなくても」

カミュ「わかった。これでいいな？」

カミュは短剣をラーズの喉元に突きつけた

イレブン「カミュ、流星にそれは」

ラーズ「俺は構わないさ。どれ……」

ラーズはそのままイレブンの左手の痣を見て触っている

ラーズ「本物みたいだな……よろしくな、イレブン」

ラーズはそのまま手を離れた

イレブン「うん。こつちこそごめんね？」

ラース「構わねえさ、俺が言い出した事だしよ」

4. 崩壊

ラーズ「それで、俺の育った村にどうして向かってたんだ？」

ラーズはカミュから解放されると、そのまま一緒に森を進んでいた

ロウ「それはお主が前に話したオーブの事について聞きたいことがあつてのう。今わし達とはある場所に向かうためにオーブを探しておるんじやよ」

シルビア「そうなの。それで前にラーズちゃんがオーブを調べてたつて聞いて、村に行つてみようつてなつたのよ」

ラーズ「そうだったのか。調べてたつてのは俺もそうだが、もつと詳しいのは俺の村の村長だ。だから詳しいことは、もう少し先にある俺の故郷に着いてからだな（まさか………こんな巡り合わせがあるとはな）」

数分後

森を抜け草原を歩くと少しして洞穴があり、その中を歩いていた

洞穴自体はかなり整つており、綺麗な道となっている。隅には松明も置かれて洞穴全体が明るく照らされている

ペロニカ「ねえラーズ、村はまだなの？もうそれなりに歩いたけど」

ラーズ「いや、この真つ直ぐの洞穴の先なんだが……おかしい。もう村の人に会つていてもおかしくないし、何よりギルグードに会えるはずなんだが……」

ラーズはこの洞穴に誰もいない事に首を傾げていた

カミュ「なあ、さつきから何だか少し焦げ臭くないか？」

シルビア「確かに……少し焦げ臭いわね」

洞穴にはどこか煙のような匂いが立ち込めていた

ラーズ「この洞穴に入ってからだよな……まさか……」

ラーズは急にイレブン達を置いて走り出していく

マルティナ「あ！ラーズ！待って！」

それを見たマルティナも先に続く

セーニヤ「私達も追いかけてみましょう！」

更に遅れてイレブン達もマルティナに続いた

ガラツシュの村 入り口

ラーズ「嘘だ……ギルグードが守っていないながら……こんな事になるなんて」

ラーズは村の入り口で呆然と立ち尽くしていた

ロウ「これは……何ということじゃ」

そこは家は焼け落ち、黒い煙が村全体から上がっていた。広場はボロボロになり、大きな木が焼け落ちて更に煙の量を増やしている

さらに至る所には人の死体が辺りに転がっており、煙の匂いに混じり血の匂いもすさまじかった

ベロニカ「こんなの……酷すぎるわ」

イレブン達もその凄惨な光景に顔を顰めている

セーニャ「もしかして、先ほどの連携が取れていた魔物達はこの村を襲った後ということでしょうか」

イレブン「無事な人がどこかにいるかも知れない！みんな得手分けして探さないと！」

カミュ「火はまだ点けられてからそう時間も経ってねえみてえだ。犯人もまだ近くにいるかもしれねえ、みんな気を付けろ」

ラーズ「あいつは……ギルグードは何処にいるんだ」

呆然としていたラーズは小さく呟いた後、村の奥へと走っていった

マルティナ「ラーズ!?一人じゃ危険だわ！待って！」

マルティナは一人で行くラーズを止めようと追いかけていく

シルビア「マルティナちゃん！私達も追いかけましょう」

ガラツシュの村　広場　奥

ラーズ「!!!」

マルティナ「あれは!?そんな……」

そこには黒髪の青年が血だらけの状態になっており、大剣を支えに何とか立ち上がろうとしていた

ギルグード「うっ……くそっ……」

その青年の先には金色の長い髪をして、白い鎧をつけた男性が立っていた

???「ほお……まだ息があるか……だがこれで終わりだな、ドルモア！」

青年の足下に黒い魔法陣が描かれると、青年の体を暗黒の魔力が包み込みそのまま爆発した

ギルグード「ぐはっ……」

ドサツ

青年は口から血を吐き、倒れ込んだ

ラース「ギルグード!!!」

???「ん？」

ラースの叫び声に鎧を着た男性がこちらを見た

マルティナ「どうしてこんな事するの！あなたはこんな事をする人じゃなかったはずよ！ホメロス！」

そこに立っていたのはデルカダール王国双頭の鷲の片割れ、ホメロス将軍だった

過去にダーハル―ネの街でイレブン達を追い詰めた張本人である

ホメロス「おや……誰かと思えば……このホメロス、あの忌まわしき日から16年、姫様ご健在成りしは望外の喜びです。ですが、もう私は姫様の知るホメロスではないのです」

ホメロスはマルティナに向かって美しく頭を下げると同時にニヤリと睨んでみせた

ラーズ「この村を襲ったのはお前か！なぜこの村を襲った!!」

ラーズは倒れている青年の側でホメロスに向かって怒鳴り声をあげている

ホメロス「フン、もう手遅れだから特別に教えてやろう。この村はどうやらオーブを所有し、さらに勇者についても代々研究しているとウルノーガ様から聞き、早めに刈り取っておかねばならぬと言われたのだ」

マルティナ「ウルノーガですって!?!」

ホメロス「だが、本当にこの村にオーブは無いようだな。村も壊滅させたところだ。もう用はない」

そう言うとホメロスは闇に消えていった

ラーズ「てめえ、待ちやがれ！」

ラーズは消えていくホメロスに向かうが、もうホメロスはいなくなっていた

ラーズ「くっ…… ギルグード、生きてるか！」

ラーズは先程倒れた青年ギルグードに向かっていく

セーニヤ「あつ！あそこに2人ともいらっしやいました！」

そこにイレブン達もやってきた

マルティナ「セーニヤ！ロウ様！この人を助けられますか？」

ロウ「これは…… すまない、体や内臓へのダメージが酷い。もう回復魔法でも助からん可能性が高い」

ギルグードの姿を見たロウは顔を歪ませて呟いた

ラーズ「そんな!!!じいさん、何とかしてくれよ!!!こいつ、俺の幼なじみなんだ！頼む!!!」

ラーズはロウに縋り付くように頼み込んでいる

その顔は少し青くなっており、必死な表情で息を荒げている

セーニヤ「ラーズ様、どうか落ち着いてください。私達でやるだけの事はやってみます」

セーニヤとロウはギルグードに回復魔法を使い始めた

ギルグード「ラーズ…… やめろ…… 俺は助からねえ……」

ギルグードは苦しそうにしながらラースに話しかけた

ラース「ギルグード！何諦めてんだよ！」

ギルグード「さっきの魔法で内臓をやられた…… 助からねえ事くらいわかるさ……」

その言葉が示すようにギルグードの体からは止めどなく血が流れている

5. 別れ

ラーズ「な!!? 駄目だ! お前は俺のライバルだろうが! こんな所で死ぬんじやねえよ!」

ラーズはギルグードに向かい怒鳴るように話す

ギルグード「はは…… まだ俺を…… ライバルだと思っていてくれたんだな。だが俺は…… あいつら相手に手も足も出なかった。お前のライバル…… 失格だな」

ギルグードは時折痛みにも耐えるようにしながらボソボソと話している

口からも血が流れ、顔は既に白くなり目も虚ろになってきている

セーニヤ「あまり喋ると内臓に響いてしまいます。どうかお静かにお願いします」

セーニヤは真剣な表情で会話をしないようにお願いする

ラーズ「すまない…… ギルグード、手を握っていてやる。大丈夫だからな」

ラーズはまだほんのりと温かいギルグードの手をそっと握った

ロウ「…… ふむう……」

ロウとセーニヤは真剣な表情で、顔からはかなりの汗が出ている

シルビア「ロウちゃん! セーニヤちゃん! 凄い汗よ! 大丈夫なの

？」

ベロニカ「ここまで酷い怪我だと、相当な集中をかけないと駄目なのよ。それでもこの怪我だと……いくら回復魔法でも……」

しかし怪我は治らず、ロウとセーニヤは顔を見合わせて首を振ると回復魔法を使うのをやめた

ロウ「出血が止まらん。すまぬが、わしらにできる事はここまでのようじゃ」

ラース「!!!」

ラースはその言葉に酷いショックを受けていた

ギルグード「じいさん、姉ちゃん、悪いな。ありがとよ」

ロウ「……ラースよ、つらいと思うが最後の別れを済ませるのじゃ。わしらは他の人が生きているか確かめてこよう」

他の人達は静かにその場を去っていき、周りにはラースとギルグードだけになった

ラース「……わかった。ギルグード、俺が来るのが遅かったばかりに、お前一人にこんな目に合わせてしまった。許されないのはわかってる。だが……どうか許してくれ」

ラースの目からは涙が流れている

ギルグード「俺も……いつでもお前が帰ってきてもいいように村を守るつもりだったんだがな。俺の力不足だ。すまなかったな、ラー

ス」

ラーズ「……！手が……冷たくなってきた……」

ギルグード「じゃあ……な、ラーズ……元気でな」

ギルグードはそう言い、ゆつくりと目を閉じた

ラーズ「ギルグード!!!!そんな……」

ラーズは静かに声を抑えながら泣いた

その間、ギルグードの冷たくなった手はずっと握りしめられていた

その後、村に生き残りはいない事がわかった。
イレブン達はラーズと共に村の人達の墓を作るのを手伝っていた。

ラーズ「すまないな、こんな事を手伝ってもらって」

ラーズは表情を動かさずに黙々と石碑に村の人達の名前を書いて
いる

ペロニカ「いいのよ。それに今アンタが一番つらいのに一人でこんな事やらせるわけないでしょ」

マルティナ「そうよ。気にしないで」

ラーズ「……………ありがとう。そろそろ全員分集まったかな」

ラーズは広場の奥に大きな穴を掘り、その中に村人達の骸を全ていれ埋めた

シルビア「まとめて埋めちゃって大丈夫なの？」

ラーズ「ああ。焼け落ちてしまったが、広場には立派な神木様があったんだ。村のしきたりでその神木様の前の墓に埋めて、広場でお供え物を燃やす。

そうすると、入り口から吹いてくる風で煙がその木を登って上に向かっていく。そうやって墓にある魂はこの神木様を登り、命の大樹へ還ると言われていたんだ。もう……………登る物もないが、形だけでも……………な」

ラーズは最後の部分を悲しそうに言うのと両手を合わせ、大樹に向かって祈り始めた

その姿を見てイレブン達も祈りを捧げた

その後、辺りは夕方になっていた

ラーズ「長い間付き合ってもらってありがとう。本当なら村で休んでほしかったが、入り口の南側にキャンプできる場所がある。そこで休んでくれ」

カミュ「ラースはどうするんだ？」

ラース「俺は今日ここで休むよ。突然すぎて、まだ心の整理ができていないんだ」

ラースは苦しそうに笑った

マルティナ「わかったわ、こつちに来てても大丈夫だからね」

そうして、みんなとわかれた

6. マルティイナ達との出会い

その夜、キャンプ場

夕飯を食べ終えて、各々自由に過ごしていた

マルティイナは一人でガラツシユの村の方を見つめている

マルティイナ「……………」

ベロニカ「マルティイナさん、村の方ずっと気にしてるわね」

ロウ「ラーズが心配なのじやろう。一瞬で全てを失ったラーズと、16年前のあの日の自分に少し重ねておるのじやろう。それに、石碑に村の者達の名を全員書いておったな。あのつらさや気持ちはわたしにもよくわかるからの」

ロウもマルティイナを見て少し俯きながら呟いた

カミュ「……なあ、少し聞いてもいいか？」

ロウ「どうしたんじや？」

カミュ「じいさん達やラーズは過去に面識があったみたいだが、どうやって出会ったんだ？」

マルティイナ「ああ。それは5年ほど前にね、私が旅の最中に風邪をひいてしまったの。その時に運悪く、魔物に囲まれてしまってたね」

ここから回想シーンです

マルティナとロウの周りには数体の魔物が二人を囲んでいた

マルティナ「はあ…… はあ……」

マルティナは息をきらし、ダルそうにしている

その顔はどこか熱を帯びているように少し赤くなっている

ロウ「姫よ、その体で無理してはならん」

マルティナ「ですがロウ様、今は囲まれております。そんな事を言っている場合ではないでしょう」

魔物「ギイイ！」

一匹の魔物がマルティナに飛びかかった

マルティナ「来なさい！」

その時、マルティナ達の後ろから声が聞こえてきた

???「旅の方！伏せてください！」

二人「!!」

ロウとマルティナは驚きながらも言われた通りに身を屈めた

魔物「ギイ!？」

飛びかかった魔物はしゃがんだおかげでマルティナを通り越して

いった

??? 「イオラ！」

マルティナ達の周囲にオレンジ色の魔法陣が描かれ、魔法陣が光ると一斉に爆発が巻き起こる

ドオオン！

??? 「パワフルスロー！」

その爆発の直後、円を描くように勢いよくブーメランが飛んでくる

ザクツ！

魔物達「ガアア……」ジュワッ

ブーメランは的確に敵を切り裂いていった

魔物は全員いなくなり、少し後ろの方から先程のブーメランを持った焦げ茶色の髪をした青年が歩いてきた

??? 「大丈夫か？急にすまねえな」

その青年はブーメランについた血を払いながらロウ達に声をかけた
てきた

ロウ「いや、助かったぞ、ありがとのう」

マルティナ「ありがとう。あなたも旅の人かしら？」

???「ああ、そうだ。無事で何よりだな。…ん？君、顔が赤くないか？風邪か？」

ロウ「そうじゃ、姫よ。お主は休んでおれ」

マルティナ「いえ、私は平気ですよ」

疑問に思った青年はマルティナの額に手を当てる

???「ちよつと失礼。…おいおい、かなり熱いじゃないか。動いたら悪化するばかりだぞ。」

ちよつと待つてな。この近くに聖水をまいて魔物がよらないようにしてくる。それと、少し先に行ったところに川があるからそこで水も持つてくる。じいさんはその子を見といてくれ」

そう言い残し、青年は走っていく

マルティナ「あ、ちよつと！」

マルティナは青年を呼び止めようとするが、青年は既に遠くに走って行ってしまった

ロウ「姫よ、今は彼の言う通りゆつくりしておるのじゃ」

マルティナ「…わかりました」

ロウにも言われ、マルティナは渋々座る事にした

数分後

青年はタオルを持って戻ってきた

??? 「戻った。大丈夫か？」

ロウ 「おお、わざわざすまんのう」

??? 「いや、平気だ。タオルを濡らしてきたから、これを額に当てて冷やした後、結べるヒモで軽く縛っておこう。体温を下げれば少しは楽になるはずだ」

マルティナ 「ありがとう。そう言えば、あなたの名前まだ聞いてなかったわね」

ラース 「あ、すまねえ。名乗るのが遅れたな。

俺の名前はラースっていうんだ。各地を旅してる、よろしくな」

ラースは申し訳なさそうに述べた

マルティナ 「ラースね、よろしく。私の名前はマルティナよ」

ロウ 「わしはロウという。じいさんでも構わんよ」

二人は笑顔で自己紹介をした

ラース 「…… よろしくな、2人とも」

ラースは数秒固まった後、何事もなかったかのように返事をした

7. 出会い2

ラース「2人は一体どこへ向かってたんだ？」

マルティナ「ここからしばらく先にあるプチャラオ村に行こうと思っていたの」

ロウ「じゃが、途中でマルティナの体調が悪くなったのう。近くに休める場所を探していたんじゃが、中々見つからなくてのう」

ラース「なるほどな。実は俺もプチャラオ村に向かおうとしてたんだ。俺も一緒に行くよ。さつきみたいに戦闘になると大変だろ？それに、村まではまだ距離があるからな」

ロウ「おお、それはありがたい。お願いしてもよいかの？ラースよ」

ラース「もちろんだ。じゃあ、マルティナは俺の背中に乗ってくれ。歩いているよりは負担が少ないから楽になるはずだ」

ラースはしやがみ、マルティナに背中に乗るように促した

マルティナ「わざわざごめんなさい。お言葉に甘えさせてもらうわね」

マルティナはラースの背中に乗った

ラース「気にすんなよ、人助けだからな。戦闘になったら俺とじいさんがメインで戦おう。マルティナは後ろの方で待機していてくれ。体調が悪くなってきたら、遠慮なく俺かじいさんに言えよ。それじゃあ向かおうか」

しばらく戦闘を繰り返し

ロウは戦闘を見て気になっていた事をラースに聞いた

ロウ「ラースの魔法は少し変わっておるのう。詠唱時間が短いのかのう？」

ラース「ああ。俺の魔法は発生を早めるために、詠唱に必要な文字を少し省いているんだ。そうすると普通より早く魔法が打てるようになる。」

その分、威力は落ちるけどな。魔物相手だとそれでも牽制にはなるから、その隙に次の攻撃に移るんだ。ちゃんと詠唱すればしつかりした魔法も打てるぞ?」

ロウ「中々面白い発想じゃの。魔法使いの型にはまらんというわけじゃな。威力を削ってスピード重視というわけか。わしにも後でいくつか教えてもらってもよいかの?」

ロウは感心した様子で興味ありげに聞いてきた

ラース「構わないぜ。そろそろキャンプ場が見えてくるはずだ。急ぎでなければ、今日のところはそこで休むか。この状態で無理は禁物だからな」

マルティナ「私達も急ぎの旅ではないからそれで大丈夫よ」

ラース「じゃあもう少しだな……!この先に魔物がいるな。マルティナ、降りてくれるか?」

ラースはこの先に広がる草原に魔物の気配を感知した

マルティナ「わかったわ。気をつけてね」

その夜、テント内

マルティナ「ゴホツゴホツ……」

マルティナはつらそうな顔で横になっており、咳も出始めた

ロウ「また悪化してきたようじゃな。何か食べたいものはあるか？」

マルティナ「すみません、ロウ様。あまり食欲がわかりません」

声も少し枯れたような声に変化している

ロウ「なに、謝ることなどない……じゃが何か食べておいた方がいい。待っておれ、ラースに少し聞いてこよう」

キャンプ場

ラース「お、じいさん、マルティナはどうだった？何か食べれそうだったか？」

ロウ「いや、体調がまた悪化したみたいで。食欲がわからないそうじゃ。じゃが、何か食べさせねばならんから。何かよい食材はあるか？」

ラース「ふむ、そうだな……」

お、そういえばまだあれがあったはず……」ゴソゴソ

レースは自分の道具袋を漁り始め、何かを探し始めた

ロウ「この男、随分と面倒見がよいのう。よい人に助けられたもの
じゃ。感謝せねばな」

8. 出会い3

しばらく経ち、テント内

マルティナ「ゴホツ……」

ロウ「姫よ、入るぞ。ラーズが料理を作ってくれた。これを食べておくれ」

ロウが器と薬を持ってテントに入ってきた

マルティナ「これは……？」

ロウの持ってきた器の中には茶色いスープが入っており、いい匂いがしていた

ロウ「これはみそするというものらしい。ホムラの方に伝わる郷土料理での。わしも見るのは初めてじゃ。ラーズがホムラで手に入れたみそというものを使っているスープのようなものじゃ。

これなら簡単に喉を通れるじやろう。中の具材も小さく柔らかくしてあったぞ」

マルティナ「ありがとうございます。では、いただきます……！
おいしい！中に色々な具が入っているんですね」

ロウ「わしも少し飲ませてもらったが、中々美味じゃったのう。それを食べ終わったらわしが薬を作っておいたから、それを飲んでゆっくり休んでおれ」

マルティナ「ありがとうございます、ロウ様。ラーズにも礼をお伝

えください」

ロウ「ああ、おやすみ、姫」

そして夜が明けた

次の朝、キャンプ場

マルティナが外に出ると、ラーズはもう朝食の準備をしていた

ラーズ「お、起きたか、マルティナ。おはよう、体調はどうだ？」

マルティナ「おはよう、ラーズ。昨日は色々ありがとう。まだつらいけど、昨日ほどではないわ。少し水をもらえるかしら？」

マルティナは昨日の器を返し、コップをラーズに渡す

ラーズ「ああ、いいぜ。だが、無理はするなよ。もうしばらくしたらまた出発するから、昨日と同じ体制で行こう。村まではもうそんなに遠くはない。プチャラオ村についたら本格的に休めるしな」

マルティナ「……少し聞いてもいいかしら？」

ラーズ「？ああ、どうした」

マルティナ「どうして初対面の私達に、ここまで優しくしてくれるのかしら？決して嫌な思いかじやないし、ラーズの人柄かもしれないんだけど中々いないじゃない？」

ラーズ「ああ、そういう事か……」

俺は基本一人で旅をしてるんだが、流石にお金を稼がないとやって

いけないからな。だから大体は商人とかの護衛をしてるんだ。

けど少し前に旅行帰りの家族づれを護衛した事があって、その時にまだ小さい女の子が病に落ちてしまっただけ。俺は回復魔法は使えないから、普通の看病しかできなかったんだ。急いで村まで護衛したんだが、つく頃にはかなり酷い状態だな。医者の人にもかなり迷惑をかけてしまったんだ。

家族にはお礼を言われたが、俺はその時対処が遅れた事を悔やんでな。その時の事を、自然にマルティナと重ねてしまったのかもしれない。不快に思ってしまったらすまない」

ラーズはマルティナに頭を下げた

マルティナ「ふふ、大丈夫よ。そんな事があったの。ラーズは優しいのね」

ラーズ「そうか？ありがとな」

ラーズはその言葉に照れるように顔を少し赤らめた

マルティナ「話を聞かせてくれてありがとう。それじゃ、私はまた横になってるわね」

ラーズ「ああ、ゆっくりしてろよ」

そして、昼過ぎにはプチャラオ村に到着した

9. 出会い 4

プチャラオ村 入り口前

村に入ろうとしていた時、ラーズは何か気付いたように村の外を見た

ラーズ「！何だ？あつちの方向から凄い数の魔物の気配がする。まさか、この村に向かってきてるのか？」

ロウ「どうやらそのようじゃ。まずいことになったのう。マルティナよ、先に村に行つて戦える者を連れてきてくれ」

ロウもその気配に気付き、マルティナに救援を呼ぶように伝えた

マルティナ「わかりました。後で必ず向かいますので2人ともお気を付けて」

マルティナは村に入つていった

ラーズ「よし、じいさん、行こう！」

メダチャット地方 北の川沿い

ギガンテスのような魔物が周囲の魔物を従えて歩いていた

ザグ「ザググググ。これだけの数が揃えば、この先にある村なんて終わりだな」

身を隠しながらラーズとロウはそれを見ていた

ラース「あいつがこの群れを指揮してるやつか？」

ロウ「そのようじゃの。あいつを倒せば群れとしてのまとまりはなくなるはずじゃ」

二人は息を潜めながら話している

ラース「よし、それじゃまずはあいつを群れから少し遠ざけよう。あんな群れに正面からいったら敵わないからな」

ロウ「どうするんじゃ？」

ラース「じいさんもヒヤド使えたよな？それを応用して、小さな宝石みたいな形にしてくれ。俺はジバリカとマヌーサで罫を作ってる」

ラースは魔物が歩いていく先に向かっていった

その後

ザグ「ん？なんかあそこでキラキラしてるな……もしかして宝石か！お前ら！ここで待っている！」ドスドス

魔物は群れから離れていく

ザグ「へへへへ、これは綺麗な宝石だな。いい儲けもんだぜ」

ラース「……よし！今だ！マヌーサ！」

ドオン！

魔物が光る物を持った瞬間、魔物の体に地面が形を変えて突き刺さり、ラースが魔物の目に幻惑の力を与えた

ザグ「グアアア！何だ！痛え！しかもなにも見えねえ！どうなっ
ていやがる」

魔物は痛みを苦しむが、何も見えず困惑している

ロウ「それ、ヘナトスじゃ」

その隙にロウが魔物の足下に緑の魔法陣を描いた

ザグ「くつつ、力が抜ける」

魔物の体から力がなくなり、脱力感が襲った

ラース「よし、せいけん突き！」

ラースが魔物の前に出て、拳を勢いよく突き出した

バゴン！

ザグ「うぐうっ！」

その威力は高く、痛みで膝をつかせるほどの攻撃力をしている

ロウ「タイガークロー！」

ロウも杖から爪に装備を変え、顔に目掛けて鋭利な爪を三回振りか
ざす

ザク！ザク！ザク！

ザグ「くそつ！見えねえ所からちよこまかと！許さねえ！これでもくらいやがれ！」

魔物は適当に岩を持ち上げこちらに投げてきた

ラース「よつと、当たらねえよ！かえん斬り！」

ラースは岩を横に避け、炎を刀身に宿して斬りかかった

ジュツ！

ザグ「あつちい!!」

斬った胴体には傷は浅くとも、炎の跡により焦げた痕跡が残った

ロウ「ドルマじゃ！」

魔物の足下に小さめの黒い魔法陣が描かれ、凝縮された闇の塊が魔物に放出された

ザグ「くそ！はっ！見えるようになってきたぜ！てめえらの仕業か！まずはその爺さんから殺してやるぜ！」

魔物の幻惑状態が解け、ロウ目掛けてこんぼうを思いっきり振り落とってきた

ロウ「ふおっふおっ、危ないのう」

ロウも俊敏な動きでこんぼうを避けた

ボゴオン！

こんぼうの威力は申し分なく、大地に穴をあけるほどの威力をしている

マルティナ「ラーズ！ロウ様！ご無事ですか！村の戦える人達を連れてきました！」

マルティナと村の戦士達が魔物の後ろから走ってきた

ザグ「！誰でもいい！死にやがれえ!!」

魔物は先頭を走っているマルティナに向かって振り返り、殴りかかる

マルティナ「！」

マルティナは咄嗟に構える

ラーズ「マルティナ！危ねえ!!」

ラーズは空中に飛び、相手の肩まで跳躍した

ラーズ「はあ！しんくうげり！」

バシイッ！

ラーズは肩を足場に更に跳び、顔面に勢いよく蹴りをお見舞いする

ザグ「ぐつつ！」

ドゴン！

ラーズの蹴りによるめき、魔物は横に倒れた

マルティナ「ありがとう、ラーズ！ムーンサルト！」

マルティナは構えの状態から跳躍し、身体を捻りながら胴体に蹴りを入れた

ザグ「グハツ!!」

村の戦士達「俺らも行くぞー！」

戦士達も倒れた魔物相手にどんどん斬りかかったり、槍を突き刺したりしていく

ザグ「くそっ！こんな… やつらに…」ジュワー

魔物は消滅した

ロウ「これで群れの方もまとまりがなくなって、バラバラになるじやろう。ひとまずは大丈夫なようじやな」

村の戦士達「知らせてくれてありがとうございました！どうか村でゆっくりしてってください」

ラーズ「ああ、そうさせてもらおう」

10. 出会い5

プチャラオ村 宿屋

宿屋のテーブルで三人は喋っていた

ラーズ「まさか宿をタダにしてくれるとはラッキーだったな」

マルティナ「そうね。出費が少なくなっただけいい事だわ」

ロウ「マルティナよ、寝ていなくて大丈夫か?」

マルティナ「はい、ロウ様。薬が効いてきたのかだいぶ楽になってきました」

ロウ「それはよかった... ラーズや。これまでの戦闘を見ているとお主はかなり腕も立つし、頭も回るようじゃの。どこで教えてもらったんじゃ?」

マルティナ「そうね。かくとう技もかなり洗練されてるし気になるわね」

ラーズ「俺はガラツシユという村で村一番の戦士になるために育ったんだ。剣と体術はそこで教えてもらってな、魔法は俺のじいさんからだな。」

頭が回るかどうかはわからねえが、まあ一人旅していると色々考えなきゃだからな。自然と身についたのかもしれないねえ」

ロウ「ガラツシユ?聞かない名前じゃのう。どこにあるんじゃ?」

ロウは不思議そうにたずねた

ラーズ「山の近くにある小さな村だからな。地図にも載ってないんだ。ダーハル―ネの横に洞窟があって、その横道を抜けた先にある山の手もとにあるんだ」

ラーズは自身の袋から世界地図を取り出して説明する

マルティナ「そんな所に村なんてあったのね。全く知らなかったわ。でも、村一番の戦士になりたかったのならどうして旅をしているの？」

ラーズ「まあ色々あるんだが、俺には村やオーブの為にやらなきゃいけない事があるんだよ」

ロウ「オーブ？あの宝石みたいなやつのことか？」

ラーズ「ああ。俺の村はオーブを研究していてな。その研究の結果、ある事がわかったから俺は旅に出たんだ」

マルティナ「そうだったの。これ以上は聞かないでおくわね。何だか知られちゃいけない事もあるみたいだし」

ラーズ「すまねえな。それじゃ俺はこの辺で。お互い旅してるから、またどこかで会えるかもな。そしたらまた話そうぜ」

ロウ「こちらこそ、色々助けてくれてありがとう」

マルティナ「また会ったら声かけるわね。楽しかったわ」

ラーズ「ああ、じゃあまたどこかで！」

ラーズとマルティナ達は手を振って別れていった

ロウ「これがラーズとわしらの出会いじゃな」

セーニヤ「頼りになる方なんですね、ラーズ様は」

マルティナ「ええ。だからまた会えた時は恩を返そうと思っていたんだけど……」

シルビア「こんな事になっちゃったからねえ。あまりこちらも突っ込めないことだし、仕方ないわ」

カミュ「今はそつとしておいた方がいいかもしれないな」

マルティナ「……やっぱり私、ラーズの様子見てきます！」

マルティナは決心したようにガラツシユの村へと歩いていった

イレブン「あ、マルティナ。僕も行くよ」

イレブンもマルティナに続いて村に向かっていった

ベロニカ「イレブン、マルティナさん、気をつけてね」

11. 大樹の根と決意

ガラツシユの村 広場

ラーズは先程祈りをした場所に座り込んでいた

ラーズ「……………」

ザツザツ

ラーズ「……………」ブンツ!

ラーズは態勢を瞬時に変え、背後から近づく人に足を振り上げた

二人「!」

ラーズ「おつと!!すまない、マルティナ、イレブン。今、考え事をしていたんだ」

ラーズは二人に足が当たる前に止めた

マルティナ「いえ、私達の方こそ突然ごめんなさい。夜も遅くなってきたし、どうしてるかなと思って」

ラーズ「少し、昔の事を思い出していたんだ」

マルティナ「そう…………… 近くに座ってもいい?」

ラーズ「いいぞ」

二人はラーズの近くに座った

三人「……………」

しばらく沈黙が続く

イレブン「ん？あそこにあるのは……命の大樹の根っこだね。マルティナとラース、ちよつと来てもらっていい？」

二人「??」

二人はイレブンに言われるままについていく

ガラツシユの村 奥地

そこには命の大樹の一部である根っこが出ていた

ラース「！おい、イレブン。手の痣が光ってるぞ」

ラースはイレブンの左手の痣が光っている事に気づく

イレブン「やっぱり反応した。あのね、僕のこの手で大樹の根っこにかぎすと、過去の出来事を見る事ができるんだよ。試してみるね」

イレブンが左手を根っこに近づけると三人の頭の中に映像が流れこんできた

ガラツシユの村 広場

魔物達「ホメロス様、村の者共を全員集めました」

魔物により村の全員が集められていた。村人は全員怯えるように魔物達を見ている

ホメロス「うむ。貴様ら、単刀直入に聞こう。オーブと勇者の関係について知っているな？」

村長「何をおっしゃるのです。私達が知るわけがないに決まってるじゃないですか。私達を解放してください」

村長が前に出てホメロスに向かって話した

ホメロス「フン、あくまでもシラを切るか。愚か者め。私達は魔王ウルノーガ様より、この村は勇者の事を代々調べていると言われたのだ。隠した所で無駄な足掻きだ」

村長「…………… わかりました。はい、私の祖先は代々勇者とオーブについて調べておりました。あなた様の知りたい事は、私が知っている事であれば何でもお教えしましょう。ですから、村の者だけはどうかお助けを」

村長は悩んだ末に村の全員を救う事を条件にして、話す事を決めた

ホメロス「私が知りたいのはオーブのありかだけだ。さつさと吐け」

村長「…………… 申し訳ありません。村の秘宝シルバーオーブは、昔に幽鳥の溪谷に住むといわれるごくらくちように奪われてしまいました」

ホメロス「まだ嘘をつくか！ウルノーガ様はこの村にあるとハッキリおっしゃったのだ。そんな嘘に騙されると思うな。そこまでして

隠したいならば黙っているといい。お前ら、村に火を放て」

村民達「!？」

村人達はその言葉に顔が青ざめる

魔物達「へい。お前ら、火をつけろー！」

ゴオオオツ！

魔物達により、家々や木などが容赦なくどんどん燃やされていく

ドスン！

家が焼け落ち、広場にある神木様にまでも火が燃え移っていく

村民達「あ…… ああ、そんな」

村人達は絶望した表情でそれを眺めていた

ギルグード「てめえら!! 黙って聞いてりや勝手な事しやがって！」

ギルグードは我慢ならず到大剣を構え、火を点ける魔物に向かっていく

村長「やめるのじゃ！ギルグード!!」

ギルグード「!!? 何でだよ！村長！こいつら……」

村長はギルグードに怒鳴り、斬りかかろうとするのを止めさせた

村長「すまぬ。言うことを聞いておくれ。シルバーオーブはこの村にはもう無いのです。どうか、信じてください。この通りじゃ」

村長はホメロスの前で土下座をした

ホメロス「……もうよい。貴様が吐かぬなら他の者に聞こう。消えろ」

ザシユ！

ホメロスにより、村長は斬られた

村民達「村長!!」

ギルグード「てめえ!!!」

ギルグードはホメロスに斬りかかるが、闇のオーラがホメロスを覆い防がれる

ガキン！

ギルグード「ぐっ……ふん！な、なんだよ、これ。押しても斬ってもビクともしねえ」

ホメロス「フン。ただの雑魚が私に傷が付けられるとも思っているのか？では、一人一人聞いていくとしよう。知らないなら、最初の計画通り全滅させるだけだ」

ホメロスと魔物達は村人を追い始めた

村民達「逃げろー!!!」

村人達は恐怖で逃げ惑う

イレブン「……………ここで終わりみたいだ」

頭に送られてきた映像はここで途切れていた

マルティナ「ホメロス…………… どうして魔王の言うことを聞いているの？」

ラース「…………… 今のは俺が来る前の出来事…………… か……………」

ラースは顔を暗くしている

イレブン「うん。そうだと思う。ごめん、ラース。つらいものを見せてしまつて」

ラース「いや、イレブンは悪くない。それに色々知ることができたからな、ありがとう。さっきの場所に戻っていいか？イレブン達、いや、勇者様達に話したい事がある」

ラースは決意したような真つ直ぐな目で二人を見ていた

ガラツシユの村 広場

ラースはイレブン達にゆっくりと村での事を話し始めた

ラース「俺は10年前まで、ここで村の守人になるためにギルグードと毎日模擬練習をしていたんだ。」

俺は魔法こそあれど、力ではあいつに敵わなくてな。村の人からもあいつの方が頼りにされていたんだ。だから、俺は村の守人になるならあいつだと思っていたんだ。

でもギルグードはある日、ここにあった木の下で「お前は俺のライバルだ。だが、親友でもある。お前は俺についてくれる。だから2人一緒に村の守人になるぞ」と約束したんだ」

イレブン「ギルグードはいい人だね」

マルティナ「ギルグードはラースと一緒に村を守りたかったのね」

ラース「ああ。俺はその約束が嬉しくてな。絶対に叶えてみせようとその日からさらに努力したんだ。

だけどその2週間後、俺は村長に呼ばれて、村長にこの村に伝わるシルバーオーブについて研究した結果、勇者に必ず必要な物であることがわかった。

さらにこれは悪しき者の手に渡ると雷の如き力を得ると言われた。村長は俺にシルバーオーブを託し、俺を村一番の戦士と認め、世界のどこかにいる勇者を見つけた後この村に勇者を連れてきて、オーブに相応しい人かどうかを見極めろという任務を与えたんだ」

イレブン「!!」

マルティナ「じゃあ、ギルグードとの約束は……」

ラース「守れなくなってな。その事実が俺には苦しくて、俺のじいちゃんにもギルグードにも言えずに、次の日勇者を探す旅に出たん

だ」

イレブン「じゃあ…… ラースは僕をずっと探していたのか」

ラース「ああ。もう村長も村そのものも無くなってしまったが、村の宝シルバーオーブと使命だけは、まだ残ってる。

だからイレブン、いや勇者様。明日の昼、この場所で勇者様達のパーティーの力、村一番の戦士ラースが試させてもらいます」

二人「!!?」

イレブンとマルティナは同時に息を呑んだ

ラース「仲間達にも伝えておいてくれ。本気でいくぞ、と」

ラースの目は真剣そのものだった

イレブン「…… わかった」

マルティナ「イレブン!」

ラース「それじゃあまた明日な」

そして夜が明けた

12. 本気

ガラツシユの村 広場

ラース「よかった。ちゃんと来てくれたな」

ラースは昨夜と同じ場所で待つており、やってきたイレブン達に安心したようにしている

ロウ「ラースよ。本当に戦わなければならないのかのう」

ラース「ああ。これは俺に残された大事な使命だからな。だから、俺は本気でいくぞ」

マルティナ「……わかったわ。私達も本気でいくわ」

ラース「ああ。それじゃあ行くぞ！」

ラースがあらわれた

カミュ「情けはかけねえからな！」

カミュは自慢の素早さを活かして、ラースに走り込んでいく

ラース「ソードガード！ビッグシールド！」

ラースは武器と盾を同時に構えて攻撃に備えを取った

カミュ「ヴァイパーファング！」

カミュは短剣に毒を纏わせると正面から切りかかる

ラーズ「そんなのが効くと思うな！」

ラーズは盾で防ごうとする

カミュ「へっ、かかったな！」

カミュはラーズと盾の間に足を割り込ませ、滑るようにラーズの目の前に回り込んだ

ラーズ「!?」

カミュ「おらよ！」

ザクツ！

カミュの毒を纏わせた短剣がラーズの腹に突き刺さった

しかし、ラーズもカミュを蹴飛ばそうとする

カミュ「よつと！」

カミュは身軽にその足の勢いを足場に後方へ下がった

ラーズ「ちっ！毒か！」

ラーズは毒に侵され、少し苦しそうにしている

マルティナ「しんくうげり！」

その隙にマルティナもラーズと距離を詰めており、横に待ち構え蹴

りを繰り出す

ラーズ「見えてるぜ！」

ラーズは他に向かってくるイレブン達を見たまま片腕で防いだ

バシツ！

マルティナ「くっ！」

イレブン「かえん斬り！」

マルティナが下がり、イレブンが交代するように炎を纏わせた剣で斬りかかる

ラーズ「その程度か？」

ガン！

ラーズは盾を構え、イレブンの攻撃も防いだ

ラーズ「シールドアタック！」

ガツン！

ラーズは防いだ瞬間、イレブンに向かって突撃する

イレブン「ガハ！」

イレブンは反応出来ずに直撃し、押し戻される

セーニヤ「カミュ様！スカラ！」

一番離れているセーニヤは呪文を詠唱しており、カミュに緑の魔法陣を描くとカミュの服や皮膚の硬さを硬化させた

カミュ「ありがとな。だが、ダメージがあまり通らねえな」

ラーズ「イオラ！」

ラーズはスカラがかかる時間に呪文を唱えており、イレブン達全体にオレンジ色の魔法陣が浮かび上がり、光ると同時に強い爆発が巻き起こる

ドガアアン!!

全員「くっ！」

爆発による煙も発生し、イレブン達の視界も少しぼやけ始める

ラーズ「ヒヤダルコ！」

ラーズは休まず呪文を唱えており、イレブン達全体に今度は水色の魔法陣が浮かび上がり、氷の刃が降り注ぐ

パリイン！

セーニヤ「！魔法の発生が早いですわ！」

セーニヤは呪文の詠唱速度に驚いている

マルティナ「やはり厄介ね！ここは私が！」

マルティナはレースに再び向かっていく

マルティナ「はああああ！」

マルティナは足技を連続でレースに繰り返していき

レース「突撃か？かくとう技なら効かないぞ！」

レースはマルティナの攻撃を全て躲したり、防いでいく

マルティナ「まだまだいくわよ！てやああ！」

マルティナも負けじとより一層レースの隙を見つけるように蹴りを繰り返していく

レース「流石マルティナ、中々やるな」

そこにレースが少し足をよろめかせた

マルティナ「ここ！」

マルティナはその隙を逃がさんとばかりに勢いよく蹴りを繰り返した

ビュンツ！

マルティナ「!？」

レース「残念、予想通り」

ラーズの見せた隙は誘導であり、流れるように後方に回転しマルティナの蹴りを避けた

そのままラーズが後方に回転した際に振り上げた足がマルティナに向かう

マルティナ「くっ！（回避と同時に攻撃なんて！）」

バシイッ！

マルティナもギリギリで腕でガードするが、威力で僅かにのけぞった

ラーズ「せいけん突き！」

今度はラーズがその隙を逃がさず拳をマルティナに勢いよく繰り出す

バキイッ！

マルティナ「キャアッ！」

マルティナは流石に避けきれずに吹き飛ばされる

イレブン「マルティナ！かえん斬り！」

イレブンがこれ以上マルティナを攻撃されないように前に出て、ラーズに炎を纏った剣で斬りかかる

ラーズ「くっ！」

ガン！

ラーズは武器で防いだ後、後ろに下がった

セーニヤ「マルティナ様、ベホイミですわ」

セーニヤがマルティナに緑色の魔法陣を描き、マルティナに治癒の力がかかっていく。その治癒の力によりマルティナの傷が瞬時に治っていく

マルティナ「ありがとう、セーニヤ。完全に罨だったわ」

イレブン「マルティナ、かくとう技では不利かもしれない。ベロニカとかわろう！」

マルティナ「わかったわ。ごめんなさい、みんな。ベロニカ、後はよろしく」

ベロニカ「任せて、マルティナさん！」

マルティナは遠くで見守っていたベロニカとバトンタッチをして、戦線から少し離脱した

カミュ「イレブン！闇雲に突っ込んでも厳しい！連携をとるぞ！」

イレブン「うん、そうだね！カミュ！あれ、やるよ！」

カミュ「おう！」

イレブンはカミュとアイコンタクトを取った後、イレブンがラーズに向かって走っていく

ラーズ「！突撃か！」

イレブン「はあ！」

ガン！

ラーズはイレブンの斬り上げを盾で防いだ

ラーズ「!?いやしまった！後ろにも！」

その後ろにはいつのまにかカミュもきていた

二人「シャドウアタック！」

ザシユツ！

二人の息のあった前後同時攻撃により、ラーズは腕と胴体に深い切り傷がつく

ラーズ「くっつっ！」

ラーズが痛みで顔をしかめる

イレブンとカミュは反撃がこない内に後方へ下がった

ベロニカ「セーニヤ！やるわよ！」

セーニヤ「はい！お姉様！」

その隙にベロニカが魔導書を広げ、セーニヤが竖琴を奏で、同時に

魔力を込めるとイレブン達全体に虹の輪が広がる

二人「ラムダの祈り」

二人のポーズはまさにラムダの紋章そのものであり、その加護を授かるように全員に癒しの力がついた。イレブン達の周りには薄く虹のようなオーラが見える

イレブン「デイン！」

ラーズの足下に黄色の魔法陣が描かれ、その瞬間雷が降りラーズの体を貫く

ラーズ「(雷か！流石勇者様！) くっ！」

突然現れた雷にラーズは反応できずに直撃する

セーニャ「イレブン様！スカラです」

セーニャはイレブンに緑の魔法陣を描き、イレブンの服や皮膚の硬さを硬化させる

イレブン「ありがとう、セーニャ」

ラーズ「へっ！その連携、見事なものだな！だが、俺だって負けてられねえ！はあああ！」

ラーズは力を込めて雄々しい叫び声をあげた。その顔は目が見開かれ気迫に満ち満ちており、村全体がビリビリとした感覚に包まれる

全員「ゾーン!?!」

イレブン達はラーズの迫力に圧倒されそうになる。ラーズは極限の集中状態に入り込んだようで、青いオーラを纏っている

ラーズ「イオラ！」

ラーズは瞬時に呪文を唱え、再びイレブン達全体にオレンジ色の魔法陣が描かれ、先程よりも強力な爆発がイレブン達を襲う

ドガアアン!!

全員「うわああ!!／キヤアアツ！」

より強い爆発により、煙も多くあがっている

ラーズ「マヌーサ」

ラーズはその爆発の煙が止まぬ中、カミュの体に緑色の魔法陣を描き、カミュの目に幻の力を付与させた

カミュ「くっ！すまねえ！見えなくなっちゃった！」

カミュの視界は真っ暗になり、ふらふらしている

イレブン「わかった。カミュ、おじいちゃんと交代して！」

ロウ「カミュよ、こつちじゃ」

ロウがカミュの手を引っ張り、戦線を離れさせる

カミュ「じいさん、すまねえ。バトンタッチだ」

ロウ「魔法で攻めた方がいいのう」

イレブン「うん、そうだと思う！セーニヤ、おじいちゃん！回復は後回し！魔法で攻めよう！デイン！」

イレブンは全員に指示を出しながら、ラーズの足下に黄色の魔法陣を描き、雷を落とした

ガンツ

ラーズ「2度も喰らわないぞ！」

ラーズもわかっていたらしく、盾で雷を防ぎきった

ベロニカ「なら、連続はどうかしら!?メラミ！」

ベロニカが既に赤い魔法陣を自身の目の前に描いており、横から炎の塊をラーズにぶつける

ラーズ「くっっ！」

これにはラーズも反応出来ず、魔法に直撃する

炎は中々の威力をしており、ラーズの服を燃やし一部を黒く焦げさせている

セーニヤ「バギマ！」

セーニヤも回復の呪文を唱えるのを中止して、黄緑の魔法陣をラーズの周囲に描き、竜巻を発生させた

ラーズ「!!きついな」

吹き荒れる風の刃には対応できず、ラーズは連続で被弾し、服や皮膚が切り裂かれる

ロウ「ドルクマ!」

ロウも続け様にラーズが被弾している隙に足下に黒い魔法陣を描き、闇の塊を爆発させた

ガンツ

ラーズ「ギリギリ!」

ラーズはこれ以上はまずいと判断し、なんとか盾で防いだ

ラーズ「ふ!」

セーニヤ「!」

ラーズはガードしたと同時にセーニヤ目掛けて素早く距離を詰める

ラーズ「ミラクルソード!」

ラーズは癒しの力を込めた剣で斬りかかった

ズバツ!

セーニヤ「キャツ!」

セーニヤは剣を避けられず、体を斬られ少し吹き飛ばされる。ラー
スは剣の癒しの力により、ついていた切り傷が少し塞がった

ラーズ「ヒヤダルコ！」

ラーズは追撃をやめず、イレブン達全体に水色の魔法陣を描き、イ
レブン達に先程よりも多くの氷の刃が降り注ぐ

その威力も強力で、氷による冷気が周囲を包んだ

パライン！パライン！

セーニヤ「すみ……ません」ドサ

セーニヤは倒れたまま追撃に直撃し、動けなくなってしまった

イレブン「セーニヤ！」

13. 決着

イレブン「おじいちゃん！僕が一旦回復役になるから、セーニヤを蘇生させてほしい。ベホイミ！」

イレブンは回復の呪文を唱えながら、ロウに指示を出す。緑色の魔法陣はベロニカの体に描かれると治癒の力がベロニカにかかり、傷が瞬時に塞がっていく

ベロニカ「ありがとう、イレブン。でも、イレブンやおじいちゃん
は」

ベロニカが心配する通り、先程のラーズの猛攻によりイレブンは服や顔、腕などに傷が多く目立っていた。また、ロウも少し傷がついている

ロウ「セーニヤが戻れば、セーニヤにイレブンの回復は任せよう。
ベロニカはそのまま攻撃しておるのじゃ。ザオラル」

ロウが倒れたセーニヤの元で祈りを捧げ、魔力を込めると緑色の魔法陣がセーニヤの上空に浮かび上がり、セーニヤの体が光ると同時に聖なる力によってセーニヤがゆっくりと立ち上がった

セーニヤ「ありがとうございます。ロウ様」

ベロニカ「わかったわ。ラーズ！あんた、セーニヤに何するのよ！
第一、レディに向かって傷を作らせるなんて最低よ！」

ラーズ「ベロニカ、今は戦いの最中だ。そんなん気にしてられん」

ベロニカは挑発的な言葉でラーズの注意を向け、イレブン達からも

少し離れていく

ベロニカ「これでも食らいなさい！メラミ！」

ベロニカは赤い魔法陣を目の前に描き、炎の塊を呼び起こした

更にその炎の塊はベロニカの強い感情と結びついたのか、普通のメラミよりも大きく燃え盛っている

ラーズ「!?マジか！暴走してやがる！グハアツ！」

その大きな炎の塊はラーズが防ごうとしていたよりも大きく、ラーズをそのまま飲み込んでその姿を焼いていく

ラーズ「熱いだろうが！ミラクルソード！」

ラーズは黒く燻った状態で出てきて、ベロニカ目掛けて素早く距離を詰めると癒しの力を込めた剣で斬りかかった

ベロニカ「痛っ！」

ベロニカは避けようとするが、ラーズの素早さに反応出来ず腕が斬られ、倒れ込む

ラーズ「ばくれつきやく！」

ラーズはそのままベロニカに強力な蹴りの連打をお見舞いする

ベロニカ「(全部直撃はまずいー)！」

ベロニカはなんとか立ち上がりながら、数発をギリギリで避けてい

く

しかし、それでも躲しきれずに直撃する事も多く、かなりの蹴りが体に当たっていく

ベロニカ「くうっ！ごめんなさい、体力がかなり少なくなってきたわ」

ベロニカがなんとかイレブン達の元まで下がる

ラーズはそのまま攻撃を続けていこうと、蹴りの体勢を取ろうとしている

イレブン「ベロニカ、無理しないで下がってくれ！シルビア、頼める？かえん斬り！」

イレブンは向かってくるラーズに炎を纏った剣で斬りかかり、ベロニカとシルビアが交代する隙を作り出す

ラーズ「ぐっ！」

ラーズも攻撃の動作に移っていたため、避けられず足に剣が当たり、やむを得ず下がった

シルビア「わかったわ、ラーズちゃんは強敵みたいね」

無事にベロニカとシルビアは交代し、シルビアも警戒しながら出てきた

ロウ「ドルクマジやつ！」

「ロウはラーズが距離を取った場所目掛けて黒い魔法陣を描いて、闇の塊を爆発させた」

ラーズ「見えてたぜ！」

ガンツ！

ラーズは予想していたと言わんばかりに盾を構え、防いだ

セーニヤ「ベホイミ！」

セーニヤは復活するとすぐに回復の呪文を唱え、イレブンの足下に描かれた緑色の魔法陣がイレブんに治癒の力がかかり、瞬時に傷が塞がった

ラーズ「ミラクルソード！」

ラーズは向かってきたシルビアに癒しの力を込めた剣を鋭く突き刺した

シルビア「ふふっ！当たらないわよ！」

シルビアはラーズの攻撃を華麗に躲した

ラーズ「ヒヤダルコ！」

ラーズはそのままイレブン達全体に水色の魔法陣を描き、イレブン達に氷の刃が降り注ぐ

ラーズ「（シルビアさんがこれで下がってくれば………駄目か）」

ラーズの思惑とは違い、シルビアはその場に留まっていた

シルビア「ラーズちゃん、片手剣かなり使えるみたいね。お相手してもらいわ。はっ！」

シルビアは距離を取ろうとしたラーズに逆に距離を詰め、攻撃を仕掛ける

ラーズ「ふっ！」

キンツ！

ラーズも負けじと盾で防いだ

シルビア「どんどんいくわよく、それっ！はいっ！」

シルビアはそのまま連続で攻撃を続けていく。突き刺したり、横に斬り裂いたりしてラーズを攻撃の動作に移させないようにしている

ラーズ「(シルビアさん、片手剣こんなに上手いのかよ！)」

ガンツ！カンツ！

ラーズは防ぐ事に手一杯になりつつあり、シルビアの剣技に驚いている

シルビア「今よ！イレブンちゃん！」

ラーズ「!?しまった!!」

ラーズの背後にはイレブンが迫っていた

イレブン「かえん斬り！」

イレブンの炎を纏った剣がラーズの背中を斬り裂いた

飛びかかりながら背中を勢いよく斬られる

ラーズ「ガハッ！」

ドサ

ラーズをたおした

イレブン「ふう、何とかなったね。よかった」

イレブン達は安心したように戦闘態勢をやめた

ロウ「ラーズよ、すまんかったのう。ベホイムじや」

ロウはすぐさまラーズの体に緑色の魔法陣を描き、強い治癒の力をかけ、傷を塞がせた

ラーズ「ああ、ありがとな。じいさん」

ラーズはそのままゆっくり立ち上がり、イレブン達の前にひざまづいた

ラーズ「さて、勇者様。あなた方の力、拝見させていただきました。仲間達との絆、連携力、その場による判断力。どれも十分であると判断しました。

村一番の戦士ラーズにより、村の宝シルバーオーブをお渡しします。こちらをどうぞ」

ラーズは自身の鞆から銀色に光り輝くシルバーオーブを取り出して、イレブンに捧げた

イレブンはシルバーオーブを手に入れた

ラーズ「このシルバーオーブの他に、残り5つのオーブがあります。それを全て集め、始祖の森という場所にある祭壇に捧げると命の大樹に行くことができます。そうです。」

ですが、オーブは悪しき者の手に渡ると様々な力を与えるとので、十分お気をつけを」

ラーズはひざまづいたまま、イレブンに忠誠の構えを取って話している

その口調は今までのラーズとは違いかなり真面目な話し方をしており、大事な事なのだろうと全員が静かに見ていた

イレブン「うん。ありがとう」

ラーズ「ふう、それじゃ堅苦しいのは終わりだな。俺には似合わねえし」

ラーズは息を抜いたように元に戻り立ち上がった。少し伸びもしているため、ラーズも疲れるような仕草だったのだと予想される

ロウ「ふおっふおっ、中々似合っておったぞ」

ラーズ「そうか？それならいいんだが……
なあ、イレブン。俺もみんなの旅について行ってもいいか？

昨日のやつが言ってたウルノーガっていうのを倒すんだよな？俺もそいつを倒してこの村の仇をとるんだ。そのためにはもつと強くならないといけないからな。みんなと行けばもつと強くなれると思ってるな。

頼む！俺も連れて行ってくれ！」

ラーズはイレブンに頭を下げている

イレブン「うん。全然構わないよ。ラーズはかなり強いみたいだし、戦力としてもありがたいよ。よろしくね」

イレブンは笑顔でラーズに手を差し伸べた

ラーズ「へへ、ありがとな、イレブン」

ラーズもその答えに笑顔でイレブンの手を取った

ラーズが仲間にくわわった

マルティナ「ふふ、またあなたと一緒に旅ができるのね。あの時の恩もまだ返せてないし、この旅のどこかで返すわね」

マルティナはどこか嬉しそうに話しかけてきた

ラーズ「まだ気にしてたのか。あれは俺の善意でやったことだ。まあ、俺がピンチになったら助けてくれ。それでおあいこだな」

「レースも少し顔を穏やかにして答えている

カミュ「それで次の目的地はどこに行く？レースは他のオーブの場所
所は知らないのか？」

レース「知らないわけじゃあないが、ほとんどは伝説のような扱いで場所が明らかになっていないからな。今オーブはいくつあるんだ？」

ベロニカ「今私たちはレッドオーブとイエローオーブを持ってるわ」

レース「おお！イエローオーブの場所は知らなかったが、レッドオーブはデルカダールの国宝だったはずだ。よく手に入れられたな！俺があと知ってるのは、確かブルーオーブがここより北にある魔法大国クレイモランの国宝だって事ぐらいだな」

14. ソルティコへ

ここから原作を進んでいきます

セーニャ「それではまず、海に出る必要がありますわ」

ロウ「そうじゃな。ソルティコへ行つて水門を開いてもらおう。わしはあそこの領主のジエーゴ殿と知り合いでの。声をかければ開いてくれるじやろう」

イレブン「わかった。じゃあソルティコへ向かおうか」

イレブン達はダーハルーネから船に乗つてソルティコへと向かった

その後、ソルティアナ海岸

ラーズ「それじゃあ、ここから南へ行けばソルティコの街だな」

カミュ「ここも魔物が増えてきたからな。気を付けていくぞ」

ソルティコの街 入り口

皆で入り口を通っていると

シルビア「ああ、そうだわ。私、外でお花摘みしてくるわね。さつき綺麗な花畑があったのよ。お話が終わったら、また声かけて頂戴ね」

シルビアは少し焦るように街から出ていった

ペロニカ「急にどうしたのかしら…：シルビアさん」

ロウ「この街の領主ジエーゴ殿の家は、ここから向かって左側にある一番大きな屋敷に住んでおる。」

それと、わしがユグノアの前王であることはジエーゴ殿には伏せておいてあるのじゃ。ここでは旅人のロウとして話を合わせてくれ。それじゃあ行こうかの」

ロウはイレブンにラースが聞こえないように後半を静かに話した

ジエーゴの屋敷

屋敷に入ると、中年ほどの男性の執事がロウに話しかけてきた

セザール「おお、ロウ様。おひさしゆうございます。本日はお連れ様もお見えのようで」

ロウ「セザール殿も元気そうで何よりじゃ。今日はジエーゴ殿に用があるんじゃないが、おるかのう？」

セザール「申し訳ありません、ロウ様。ご主人様は本日、デルカダール城の方に剣術の講義に向かわれておりました、しばらくご不在なのです」

ロウ「ふむ、仕方ないのう。また各地の歴史や文化などについて語りたかったのじゃが」

セザール「ロウ様の見識の広さにはご主人様も大層感銘を受けておりました。ロウ様と会える日を楽しみにしておられましたよ」

ロウ「では話はまた次の機会にするとして、ジエーゴ殿がいないのであれば、代わりにセザール殿に頼むでしょう。

実は、さらなる見聞を広めるために外海に出ようと思つてな。水門を開けてほしいんじやが、頼めるかのう？」

セザール「もちろんでございます。他ならぬロウ様の頼みを断つては、私をご主人様に怒られてしまいます。

それでは私が水門を開けておきますので、皆様は船に乗って水門の前で待っていてくださいまし」

ロウ「かたじけないのう、セザール殿。ジエーゴ殿にもよろしく伝えといてくれ」

その後、水門

ゴゴゴゴ

船で水門の前へ向かうと塞いでいた水門が開かれた

カミュ「お、水門が開いたな。これで先に進めるぜ」

ロウ「おお、セザール殿がこちらに手を振っておる。ありがとのう」

屋敷の方を見るとセザールがこちらに向けて手を振っていた

シルビア「!?」コソコソ

シルビアは身を縮ませ始めた

ラース「?」（シルビア?なんで隠れるんだ?）」

セザール「おや？あのお方は……」

15. 白の入り江

水門を潜ってしばらくすると霧が発生し始めた

シルビア「んもうっ！なんなのこの霧！なんにも見えやしない」

シルビアは困ったように言った

カミュ「シルビアのおっさん。こんな霧、どこから出てきた？」

シルビア「わからないわ！急に霧が出てきたの！」

ラース「この近くで霧なんて出たか？すぐに抜け出した方がいいかもな！」

船の周囲には先が見えないほどの霧が出ていた

シルビア「そうね、気味が悪いし全速力よ！」

しばらく進み

マルティナ「見て！あそこに光が出てきたわ！霧が晴れるわよ！」

その時

ドシヤア！

大きな音と衝撃が船に走った

白の入り江

船は砂浜に乗り上げ、動かなくなってしまった。一先ず場所を確認するために全員降りていた

イレブン「シルビア、大丈夫？」

シルビア「ごめんなさい、イレブンちゃん。海図を散々調べてみたけど、この場所の事はどこにもものってないの。こういう気味の悪い場所は早くオサラバしちやいたいけど、船が乗り上げちゃって船を出せないのよ」

イレブン「ううん、気にしないで。取り敢えず先の方に行ってみるね」

イレブンはマルティナとベロニカとラースと共に奥まで来ていた

マルティナ「不思議なところね。幻みたいだわ」

ラース「そうだな。ここだけ流れが穏やかなように感じるな」

その時、近くの海辺から誰かが突然現れた

ザバアア！

全員「!？」

??? 「キナイ!?キナイなの?…ハア」

水飛沫をあげて出てきたのはピンクの髪をした女性だった

ベロニカ「ちよつとお姉さん、驚かさないでよね！それに人の顔見
てため息なんて失礼よ！」

それを聞いた女性は海から上がってきた

ザパアア!

ラース「この姿はっ!」

その女性は体から下半分が魚の姿となっていた

ベロニカ「お姉さん!に… 人魚っ!」

イレブン「……………」

???「あら、あなたは叫ばないのね。私を捕まえようとしないうし、珍しい人ね… キナイと同じね」

女性はイレブンを見て少し笑うようにそう言った

ロミア「驚かせてごめんなさい、私はロミア。キナイが来てくれたのかと思って、つい飛び出してしまったの」

ラース「驚いたな。人魚なんて本当にいたのか」

マルティナ「本当ね。私も御伽噺のものだとばかり思ってたわ」

ベロニカ「でも、そのキナイって人はいったい誰のこと?」

ロミア「キナイはナギムナー村に住む人間の漁師です。私はこの入り江で彼を待っているんです… 私たちは結婚の約束をしたんです」

マルティナ「結婚!?人間と人魚が!」

ロミア「私もそんな約束叶うわけないと思ってた。私達人魚には、オキテがあるから……陸にあがった人魚は再び海に戻る時、泡と成って消える。」

だから、私達人魚は海から離れて生きられない。

でも、それを知ったキナイは私のために海底でくらすと言ってくれたの。海底王国の女王様も許してくださいましたわ」

マルティナ「なんだか夢みたいな話。素敵ね、ロミア」

ロミア「でも、キナイが来ないの。一緒に海底王国へ行こうって、この入り江で約束をしたのに……キナイが約束を破るなんて、一度もなかったの。」

彼の身に何かあったんじゃないかと思うと、夜も眠れなくて。あの、失礼を承知でお願いがあります!キナイの様子を見てきてもらえませんか?私に出来ることなら何でもします!」

ラース「そう言われてもな……待てよ、海底王国があるって事は、無理だと思っていたオーブの事も……」

ラースは顎に手を当て、思い出すようにそう言った

ベロニカ「ロミア!私達を海底王国へ連れて行ってくれない?」

ベロニカはそれを聞き、ハツとしたようにロミアに聞いた

ロミア「はい!あなた方の船を人魚に伝わる秘宝で海に潜れるようにします!」

16. ナギムナー村へ

ラーズ「海底王国に行けば、海底に沈んだと言われているオーブの手がかりがあるはずだ。イレブン、ロミアのお願いを聞いてあげようぜ」

マルティナ「そうね。もし無かったとしても何か他のオーブの手がかりがあるかもしれないわ」

イレブン「うん、そうしよう」

ロミア「ありがとうございます！キナイのいるナギムナー村は、はるか東のホムスビ山地の海岸にあります。」

キナイは荒波のように男らしく、潮風のようにさわやかで海のように大らかな人がキナイです。船は私が動かせるようにしておいたので、よろしくお願いします！」

ナギムナー村

シルビア「フフフツ！ここがナギムナー村ね。ロミアに聞いた話だと、世界一の真珠がとれるって有名ないわ」

二人「ステキ！」

ペロニカとセーニヤは手を合わせ、喜ぶように声をあげた

シルビア「青い海！白い砂浜！きらめく真珠と屈強な男達！まさに地上の楽園ね！」

シルビアもノリノリで楽しそうにしている

ラース「……だが活気がないみたいだ。男達は見当たらないな」

周りを見渡しても人は少なく、女性やお婆さんしか見当たらなかった

カミュ「何だか訳ありみたいだな。まあいい、面倒事はゴメンだ。キナイとやらを探しに行こうぜ」

マルティナ「すみません。キナイという人を知りませんか？」

マルティナが近くにいた女性に声をかけた

お婆さん「キナイという人を知りたかったら、教会にキナイのお母さんがいるから、その人に聞いてみるといいさあ〜」

イレブン「ありがとうございます。教会に行ってみようか」

教会

教会前では紙芝居を持ったお婆さんが子ども達を集めていた

子ども「あ、お婆あちやんだ！みんな紙芝居が始まるぞ！」

お婆あちやん「みんな。静かにお聴き。」

今からの話は、この村に伝わる忌まわしき呪いのお話じゃ。この世で最も美しく、最も恐ろしい生き物の物語じゃ。

昔々、この村にとてもウデのいい漁師がおりました。村長は漁師を気に入りに、自慢の一人娘と結婚させました。娘は漁師が大好きでし

た。村長はこれで村は安泰だ。と安心しておりました。

しかし、悪魔のような嵐が漁師を海に放り出しました。漁師は死を覚悟しました。そこに、それはそれは美しい人魚が現れ、こう囁きました。

生きたいならば魂おくれ

その後、死んだと思われていた漁師が帰ってきました。

娘は大層喜びましたが、漁師は別人のようでした。

毎日海を眺めては、人魚と結婚するんだと言うばかり。

さらに、娘を見捨て村を出るんだというばかり。

村長は怒り、漁師を捕まえ漁師の船を燃やしてしまいました。

こうして人魚に魂を喰われた漁師は、暗くさびしいしじまヶ浜に閉じ込められてしまいました。

今日はここまでじゃ。みんな、また明日」

話が終わると子ども達はまた遊びに行った

ラース「すみません。聞きたい事があるんですけど」

おばあちゃん「おや、旅の方かね？こんな老いぼれに何か用かの？」

ベロニカ「私達、漁師のキナイって人を探してるの。この村にいるらしいんだけど」

おばあちゃん「おや、あんた達はあの子の友達かい？珍しい事もあるもんだねえ。キナイは私の息子だよ」

17. クラーゴン

おばあちゃん「あの子なら今、西の海じや。村を襲った化け物イカ退治に、村の男達と船を出しております。」

キナイに用事なら、化け物イカ退治をどうか手伝ってやってください。そうすれば戻ってくると思います。しかし、気をつけるのじやぞ。海で最も恐ろしいのは、人々を惑わせる人魚なのじやからな」

キナイの祖母は圧をかけるようにイレブン達に忠告した

西の海

そこではたくさん船がまとまっていた

シルビア「あ、見つけたわ！あれがクラーゴンを倒しにきた船団ね。あの中にキナイがいるはずだわ。ねーアナタ達、そっちにキナイって人いるー？」

シルビアは遠くの船に向かって声を出す

しかし、船の人達は大慌てでこちらに何かを伝えている

シルビア「…… あら？あの人達何か言ってるわ、遠くてよく見えな
いけど…… う…… う・え・だ？」

カミュ「!?みんな！上だ！」

全員「!?」

ドオオン！

バシヤアアア!!

何か船の真横を掠めていった。大きな水しぶきと波が船に襲いかかる

クラーゴン「プギシャー」

船を襲った本人の大きなイカの魔物、クラーゴンが海から姿を現した

ラーズ「くっ！いきなりか！」

イレブン達は突然の船の揺れに耐えながら戦闘態勢に移った

シルビア「みんな！あまり船ちゃんにダメージがないようお願いね！」

クラーゴンがあらわれた

ラーズ「まずは厄介な両足から倒すぞ！シャインスコール！」

ラーズが力を込めてブーメランを上空に投げる

その後、ブーメランから放たれる眩い光の雨がクラーゴンの足にどンドン降り注ぐ

クラーゴン「ギシャ……」

クラーゴンも眩しいのか目を閉じている

カミュ「ヴァイパーファング！」

その隙にカミュが左足に毒を纏わせた短剣を突き刺した

カミュ「！離れろって事か！」

カミュが攻撃後船に着地すると、クラーゴン全体にオレンジ色の魔法陣が描かれ始める

イレブン「イオラ！」

カミュがクラーゴンから離れた瞬間イレブンは魔法を発動し、魔法陣が光ると同時にクラーゴンの周囲が爆発する

マルティナ「しんくうげり！」

マルティナが爆発の煙も晴れないうちに体をしならせて勢いをつけると、クラーゴン全体に鋭く回し蹴りを放つ

遠心力や勢いが加わった強力な蹴りは空気すらも蹴り飛ばすような音が聞こえてくる

その蹴りを喰らい、クラーゴンの左足は海に沈んでいった

ラース「よし！左足は終わりだ！」

クラーゴン「プギシャー！」

しかし、クラーゴンはまだ元気なようだ

イレブン「カミュ！クラーゴン本体にヴァイパーファング！ラース

は僕と同じでイオラを！マルティナはヒツプアタック！」

イレブンはそのクラーゴンの姿を見て早く本体を倒す方が早いと判断して、指示を変える

三人「了解！」

その後

ラース「せいけんづき！」

ボズウ！

ラースの勢いよく突き出された拳はクラーゴンの顔面にめり込むほどの威力を出している

クラーゴン「プ……ギイ」

クラーゴンはふらふらし始めている

ラース「イレブン、そろそろ倒せそうだぞ！」

イレブン「わかった！」

イレブンは船からクラーゴンの真上まで飛び上がり、剣に力を込める

イレブン「かえん斬り！」

剣は炎をまとい、落下の勢いも合わせて上から下へとクラーゴンを真つ二つに焼き切った

ズバァン!!

クラীগオン「キシヤアアア」ジユワー

クラীগオンを倒した

シルビア「グツバイよ、暴れん坊さん」

村の漁師「いや、誰だかわがらんが助かったさあ。お礼に、村で
化け物イカの祝賀会をするからぜひ参加してほしいんさあ」

夜 ナギムナー村 酒場

イレブン「あ、ラーズ、マルティナ。今キナイの事、聞きに行こう
と思つてたんだ」

漁師達で賑わっている酒場にイレブンが向かうと、そこには既にマ
ルティナとラーズがいた

ラーズ「イレブン、キナイの事を聞いて回ったけどこの酒場にはき
ていないみたいだ」

イレブン「あ、そうだったんだ。先に調べてたんだね、ありがとう」

マルティナ「キナイを探しているんでしょ？ 私達も手伝うわ。あら
？ベロニカ、こんな所で何してるの？」

酒場の入り口近くではベロニカが一人で怒るように立っていた

ベロニカ「宴会に子どもはいちやダメって酒場に入れてくれないの

よ！どいつもこいつも頭が固いんだから！3人ともキナイを探してるんでしょ？アタシも暇だから手伝うわ」

イレブン「大変だね、その姿だと。あ、そこのおばさんに聞いてみようよ」

ラーズ「おばさん、急にすまない。キナイという人を知らないか？」

おばさん「キナイなら一人で仲間の船を直すつて、棧橋の方へ向かったさあ〜」

ベロニカ「ありがとう、おばさん」

マルティナ「棧橋の方に行ってみましょう」

棧橋

船には一人の男が残り、修理をしていた

イレブン「君がキナイという人かな？」

キナイ「ああ、あんたはクラークゴンを倒してくれた旅人さんか。ありがとな、おかげでまた漁に出られる。しかし、こんな所で何の用だ？」

イレブンはロミアの話をキナイにした

キナイ「すまないが、まったく身に覚えのない話だ。他を当たってくれないか」

18. 時の流れ

ベロニカ「ええ!? 何言ってるのよ! ナギムナー村のキナイと言え
ば、アナタしかいないじゃない! まさか、今さら人魚との結婚が嫌に
なったとか言わないでしょうね?」

ベロニカは驚き、責めるような口調で言う

キナイ「おい、お嬢ちゃん。この村では気安く人魚と言わない方が
いい。あんたらが探してるキナイってのは、俺の祖父のキナイ・ユキ
のことだ。あんたらは人魚の呪いを知ってるか?」

ラース「その話なら、君のお母さんに伺った。だが、現実とはあま
り思えなかったな。俺らは実際にロミアという人魚に会っているし、
現に今も君を待ち続けていたしな」

キナイ「その話に出てくる漁師が俺の祖父、キナイ・ユキのことだ」

四人「!!」

キナイ「あの話は50年前、この村に実際に起こった事なんだ。教
えてやるよ、あの話の続きをな。」

漁師が村を追われ10年が経ち、村長の娘は別の男と結婚し子ども
を授かった。人魚の呪いも、漁師の事も記憶から薄れていった。

そんなある日、村の漁船があの時以上の嵐に巻き込まれた。その嵐
により娘の夫と村長が亡くなった。そしてその後を追うように、娘と
子どももいなくなった。

村人達は噂した。キナイ・ユキを手に入れられなかった人魚の呪い

だ、と。村人達は祖父を問いただそうと手に松明を持ち、しじまヶ浜に向かった。その時、村人達は信じられない光景を見た。

一人でいるはずの祖父が、ずぶ濡れの赤ん坊を抱えて立っていたらしい。村人達はその赤ん坊を人魚の子だと恐れ、いつそう祖父を避けて暮らすようになった、というわけだ」

マルティナ「……」

ベロニカ「じゃあ、アンタのお母さんは人魚の子なの？それならアンタも人魚の……」

キナイ「バカを言うな！俺の母は人間だ！あの海辺に捨てられていた赤ん坊を祖父が引き取って育てたんだ。

人魚の子などとバカらしい噂は村のやつらが勝手に言っているだけだ！

いい機会だ。人魚が祖父を待っているというなら、そいつに渡してほしいものがある。

村の反対側にあるしじまヶ浜に来てくれ。教会の裏の扉を通ればすぐだ。鍵はあけておく」

しじまヶ浜

暗く寂れた浜岸が広がっており、墓が並ぶ中ポツンと古小屋が立っていた。イレブンがやってくるそこからキナイが出てきた

キナイ「このベールは俺の祖父が残したものだ。母が言うには、祖父が死んだ時、握りしめていたらしい。

俺はどうしても捨てられなかった。あんたらの話が本当なら、その人魚に渡してキナイ・ユキは死んだと伝えてくれ」

イレブンは約束のボールをてにいれた

キナイ「さつきは取り乱してすまなかった。俺達家族がこの村で暮らしていくのは楽な事じゃない。

俺の母は、祖父が死んでからやつと結婚できた。色々あつただろうに、今じゃそれを紙芝居にしてお金稼ぎをしている。強い人だろ？」

ラース「そうだったのか。何も考えずに悪かったな」

キナイ「俺は人魚が憎い。俺の子孫にはもう、人魚の呪いで蔑まれるような人生は送ってほしくない。ようやく、俺も船に乗れるようになったんだ。これ以上、過去の呪いをむし返さないでくれ」

19. 真実を

白の入り江

ロミア「おかえりなさい！ ずいぶんお戻りが遅いから、私とっても心配してましたわ！ もしかして、あなた方にも何かあったんじゃないかと不安で祈りの歌を歌っていたんです。

それでどうでしたか？ キナイは……私を、迎えに来て……くれま
すか？」

ロミアは伺うようにこちらを不安げに見つめている

イレブン「……… ロミア、ごめんなさい。キナイさんはもう、亡
くなっていたんです」

イレブンは顔を下に向けながらも言いにくそうに真実を告げ
た

ロミア「え？ …… キナイが…… 死んだ？
何を言っているの？ イレブンさん。いや…… よ。
そんな事ってないわ……」

ロミアはその言葉を聞くとまるで魂が抜け出たような顔になり、呆
然と言葉を呟いている

イレブン「ロミアにこれを……。キナイさんがこれを握って死ん
でいったらしい」

イレブンはロミアに約束のベールを渡した

ロミア「え?…キナイが、このベールを握って死んでいった?…ウソよ!!だって…だってキナイは、必ず迎えに来ると約束してくれた!

ごめんなさい、イレブンさん。私は彼の死を、この目で確かめるまでとても…信じられない。

あなた方にこのベールをくれた方と会わせてください!私をナギムナー村まで連れて行ってください!」

ロミアはベールを抱きしめるように見た後、はっきりとした目でイレブンに強く語りかけた。その姿は意地でもイレブン達に付いていこうとしているようだった

しじまヶ浜

ロミア「ここなら人が来ないようですから、私はここで待っています。何度もわがままを言ってごめんなさい。ここにその方を連れてきてください。どうか、どうかお願いします」

ナギムナー村

イレブン「キナイさん。ベールをロミアに渡してきたよ」

キナイ「そうか。嫌な頼み事をしてすまなかったな。お礼に、俺が出来る事なら、船の修理でも何でもしよう」

イレブン「…じゃあ、この後しじまヶ浜に来てもらってもいいですか?」

キナイ「しじまヶ浜に？あそこには何も無いぞ？まあ、そんな事でいいなら早速行こうか」

しじまヶ浜

空は雲で月が隠れて暗く、辺りが見えにくくなっている

キナイ「こんな所につれてきて一体どうしたってんだ？」

ロミア「キナイ……なの？」

ロミアがキナイの声に反応した

キナイ「ああ、俺がキナイだが、君は？」

周囲は暗く、キナイとロミアは互いに姿が見えていなかった

ラース「……月が出てきたな」

そんな時、まるで二人に姿を見せるためかのように雲が晴れ、月が姿を見せるとキナイとロミアの姿が互いにはつきりと見えた

キナイ「！そんな、まさか……本物の人魚なのか？」

ロミア「……あなた、キナイじゃないわ」

ロミアはキナイのその台詞で別人とすぐに判断した

キナイ「あんたが探してるキナイは、俺の祖父だ。あの人は、もう

いない。ここで……死んだ。あれが祖父の墓だ」

キナイが指差す先には、簡単な石でできたボロボロの墓があった

ロミア「?!……ああ………キナイは、こんなにもさびしい所で……一人ぼっちで……死んでいった。

人魚は500年の時を生きる。人間の一生は、私達人魚にとって一瞬な事を忘れてたわ……あれから、そんなにも時が経っていたのね」

ロミアはそれを見ると悟ったかのような顔になり、暗く苦しそうな顔を浮かべた。まるでロミアの心の中でもよぎっていたかのように静かに、切なく受け止めている

20. 悲しき恋

ロミア「イレブンさん、最後まで私のわがままを聞いてくれて本当にありがとう。お礼の品は白の入り江に置いてきました。直接渡す事ができなくてごめんなさい。」

私もういくわ」

ロミアは決心したように言い、ボールを頭に被せた

ラ〜

悲しげな人魚の唄が、しじまヶ浜に響き渡った

その唄は、人魚が禁断としている自身の体に足を生やす唄

マルティナ「!!ロミアに足が！」

ロミアの人魚であった魚の鱗がついていた場所は光り輝き、人間の足に変化した

ザッ……ザッ……

初めてで慣れない足を必死に動かしながら覚束ない足取りで、ロミアはキナイの墓へと向かう

ロミア「…………… ずっとまっていたわ」

たどり着いたボロボロの墓を抱きしめ、静かにキスをひとつそして、ロミアは海に戻っていく

ロミアはキナイにどうしても会いたいのだろう

ロミア「…………… あっ！」パシッ

転びそうになるロミアの手をキナイが掴む

ロミア「…………… 手は…………… キナイと同じ手をしているのね。

陸に上がった人魚は、泡となり消える。それが…………… 人魚のオキテ。最後にキナイと会えてよかった。

もしわたしが人間だったなら、キナイと共にいきられたのかしら

… さようなら」

ザバアアン！

ロミアは海に沈んでいくと泡となって消えていき、ベールだけが水面に残った

キナイ「あの姿… どこかで見た事がある… 確か祖父の小屋に！」

小屋内

一枚の絵に布が被せてあった

キナイ「あつた！これだ！」

バサツ！

キナイがその布を勢いよく取るとそこには一枚の絵が描かれていた

ラース「この絵は！ロミア！」

その絵は暗く綺麗な月夜が浮かぶ背景に、ロミアが約束のベールを頭にかぶせた姿が描かれてあり、まるで先程のロミアを描いているよ

うである

マルティナ「……………この挟まっているものは手紙?」

マルティナは悲しそうに絵を見ると、絵の裏側に紙が挟まっているのを見つけた

キナイ「祖父の……………手紙だ」

愛する人へ

君に助けられたあの嵐の日から、君を迎えに行く事だけを支えに生きてきた。それももう、終わりにしようと思う。すまない。俺は約束を守れそうにない。

あれは、俺が村を追われて数年後の事だ。ひどい大嵐でたくさんの犠牲が出た。その数日後、しじまヶ浜の崖の上に赤ん坊を抱いて立っているかつての嫁がいた。あいつは生きる希望を失っていた。

大きな悲しみを抱えたあいつに、俺の声は届かなかった。彼女は俺の目の前で海に飛び込んだんだ。俺はどっちも助けようとしたが、助けられたのは赤ん坊だけだった。この子には俺が必要だ。俺のような人が出ないように、人魚の呪いとして村に残すことにする。君の間を貶めるようなみんなの言葉を許してほしい。

君はまだ、あの入り江で俺を待っているのだろうか。俺はもう君を迎えに行く資格がない。だが、これだけは信じてほしい。

君を愛している

ロミア「キナイ、本当にもう体は大丈夫なのね？」

キナイ・ユキ「ああ、もう平気さ！」

ロミア「キナイ、私はいつまでもここであなたを待ってるわ」

キナイ「今までの無礼を許してくれ。ロミアに会わせてくれて、どうもありがとう。俺は人魚に取り憑かれたじいさんを心の中で恥じ、憎んでいたんだ。だが、じいさんの気持ちだが、今ならよくわかる気がする。

恋を……してしまいそうだった」

21. 海底王国へ

白の入り江

イレブン達はロミアの言っていた通りに白の入り江まで戻ってき
ていた

ラース「これは……ロミアの手紙だ」

イレブン「読んでみるね」

イレブンさんへ

あなたがこの手紙を読んでいるという事は、私の身に何か起きた
のでしょうか。最後まで迷惑をかけてごめんなさい。イレブンさん
は私が知る人間の中で、キナイの次に優しい人です。

お約束通り皆様を海底王国へお連れします。手紙の隣にある人魚
の秘宝、マーメイドハープが導いてくれるでしょう。

ソルツチャ運河を抜け、内海のある光の柱でハープを使って
ください。海底王国へ着いたら女王様に、私は幸せだとお伝えくださ
い。本当にありがとうございます

イレブン「……ロミア」

読み終えたイレブンは、悔やんでいるような表情で俯いた。握りし
める手紙はくしゃりと曲がっている

ラース「……イレブン、色々思う事はあると思うが、海底王国へ
行ってロミアの言葉を女王様に伝えよう」

イレブン 「うん…… そうだね」

カミュ「これだから人の色恋沙汰にはつつこみたくなかったんだがな。だが、真実を伝えたイレブンは正しいと俺は思うぜ。だから、あまり落ち込むなよ」

光の柱

内海を進むと、海から空へと向かって光の柱が出ていた

マルティナ「ここでこのハープを使うのね」

イレブン 「そうみたいだ」ポロロン

イレブンはマーメイドハープを鳴らした

セーニヤ 「船が泡に包まれましたわ！」

音が鳴り止むと船は泡に包まれ、そのまま海に潜っていった

海底王国ムウレア

潮の流れなどが全くなく、周りは人魚や魚達が泳ぐ不思議な光景が広がっていた

全員がその景色を不思議そうに見ている

ロウ「ほっほう。ここはまるで天国じゃのう。いやあく長生きはしてみるもんじゃ」

カミュ「海の中だつていうのに息ができるぜ。これも人魚の不思議な力つてやつか」

ラーズ「へく、これが海の中か。不思議なもんだな。まあとりあえず、これで海底に沈んだつていうオーブを確かめられるな」

イレブン「うん、虹色の枝も光ってるから近くにあるんだと思う」

イレブンのバッグに入っている枝が虹色に光っている

マルティナ「まずは女王様に会わなくちゃ。オーブもそうだけど、ロミアの事を伝えなきゃ」

イレブン達は真ん中に建つ大きな城に向かって歩いていった

玉座の間

玉座には金色の髪をした人魚が座っていた

???「お待ちしておりました。イレブン。ようこそ、海底王国ムウレアへ。私は人魚の女王セレン」

カミュ「イレブンだと？あんだ、何でこいつの名前を知っているんだ？」

セレン「ふふ、私はちよつとした魔法が使えるのです。地上のすべてを知っていますわ。

さつ、難しい話は後にしましょう。早速ですがイレブン、あなたが探しているのはこれでしょうか？ロミアの事ではお世話になりました。これはお礼です。あなた方にお返ししましょう」

セレンは既に緑色に輝くオーブを持っており、イレブんに渡した

イレブンはグリーンオーブを手に入れた

セレン「私は見ていました。ロミアとキナイのことを。陸に上がった人魚は泡となり消える。このオキテを超えて愛し合おうとした者達は、他にもたくさんおりました。

人間と人魚は、共に生きる道を何度も探してきました。けれど、それは叶う事のない夢。私達人魚から見れば力も体も弱く、未熟な心を持ったあなた方人間はとても危うい。

しかし、瞬きのような一瞬の中で何かを求め、力強く生きる姿は一際輝いて見えるのも事実。人間が海底に憧れるように、人魚もまた地上に憧れるのです。

キナイとロミア。2人の命が巡り回る命の大樹の意思の元、再び出会うことを祈りましょう。そして今、私とあなたが出会ったのも大いなる世界の意思でしょう。

我らが勇者イレブンよ。時の流れに身を委ねなさい。大樹がそれを望むのならば、私達はきつとまた巡り合う。すべては大樹の導きの

2.2. 事情説明

少しオリジナル展開を挟みます

ラーズ「セレン様。俺らがここに来る時に潜った光の柱は他のところにもあるのか？」

セレン「その通りです、ラーズ。他の光の柱を使えば、今まで行けなかった所にも行けるようになるでしょう。他の光の柱の場所と出る場所は地図に記しておきましょう。

ですが、このムウレアに来るにはあなた方が潜ってきた場所からしか来れません。…… ああ、それと、あなたはもう少し自分の気持ちに正直になった方がよいと思いますよ」

ラーズ「!? いや、どういう事だよ」

セレンの不思議な指摘にラーズは驚く

セレン「ふふ、まだその時ではないようですね」

セレンはラーズに意味ありげに微笑んだ

ムウレア王国 広場

ベロニカ「さてと、次はどこに向かうか決めましょう」

カミュ「そうだな。さつき付けてもらった印によると、西にある光

の柱を通って行くとプチャラオ村の近くに出るみたいだ。ひとまずはそこで情報を集めてみないか？」

イレブン「わかった。まずは西にある光の柱の方についてみようか」

船 内部

光の柱に到着するしばらくの間、船の中で各々が休んでいた

シルビア「ラーズちゃん、こっちにきてもらっていいかしら？」

シルビアは部屋から出てきたラーズに声をかける

ラーズ「ああ、どうした？つて、女子達全員いるんだな。こんな中に入っちゃってもいいのか？」

ラーズが食堂に行ってみると、テーブルにはベロニカ、セーニヤ、シルビア、マルティナが座っていた

マルティナ「大丈夫よ。あなたが旅に加わってから私達の深い事情を話していなかったから、今話そうってなったのよ」

ラーズ「別に俺は気にしないが？」

シルビア「んもう！そういう事じゃなくて、これから関わる事だから知っておいてほしいの！」

ラーズ「そうか。それなら聞いておこう。どんな話だ？」

ベロニカ「まず、私達姉妹の事なんだけどアンタ、私の事セーニヤの妹だと思ってるでしょ？」

ラーズ「？何だ、違うのか？」

ラーズは何も間違っていないかのように答えた

ベロニカ「違うわよ！私がセーニヤの姉なの！」

セーニヤ「色々と事情がありました、お姉様は魔力を魔物に吸われてこのようなお姿になってしまったのです。本来なら、私と同じ年齢ですわ」

ベロニカ「そつ！だから頭と精神は大人なんだから。知らないから仕方ないとしても、これからはひよっこ盗賊みたいに私を子ども扱いするのはやめてほしいわ！」

ラーズ「なるほど、そうだったのか。悪かったな。次からは気をつける」

マルティナ「次は私ね。ラーズ、ずっと黙っていて申し訳なかったのだけど、実は私は16年前に亡くなったと言われているデルカダー

ルの姫なの」

ラーズ「ああ、それなら何となく気付いてた」

マルティナ「それでね、ロウ様も…… え？ちよつと待って？気付いてた!？」

マルティナはラーズがなんでもないかのように言った言葉にかなり驚いている

シルビア「ラーズちゃん、気付いたってどうやって？」

ラーズ「いや、5年前に会った時にロウって名前を聞いて、確かユグノア王国の前王の名前だと思ってな。その方がマルティナを一度だけ姫と呼んでいたからきつと本物の姫だろうと予想したんだ。

そこからユグノアといえは16年前、あの時だと11年前か。あの悲劇の事を思い出して、あの場には偶然来ていたデルカダールの姫も亡くなっていたはずだが、デルカダール国王がおかしくなったのもあの頃から言われ始めたからな。

デルカダール王国の姫の死亡、ユグノア王国前王ロウに付く姫と呼ばれる女性。繋げて考えるなら、もしかしたらマルティナはデルカダールの姫なのでは？と予想していたんだ」

マルティナ「……………」

マルティナは呆然としている

ベロニカ「すごいけど、名前だけでそこまで普通考える？」

ラーズ「初めて会った時に悪いが、いろいろ観察させてもらってたな。一応ただの旅人にしては振る舞いや動作がやたらと優雅だった。普通に暮らしてたなら出来ない動きだな。あの動きは貴族とかに住んでないと知らない動きだ。そこに違和感を覚えたつてのが始まりなんだ。ただの旅人ではない、ってな。

だが、それまでは根拠の薄い仮説でしかなかったんだが、前に俺の村でホメロスがギルグードを殺した時に、マルティナに向かって姫様と呼んでいた。ホメロスといえばデルカダール王国の將軍の一人。その人が姫と呼ぶのだからもう間違いないだろう、とそこで確信したんだ」

セーニヤ「ラーズ様、素晴らしいですわ。探偵の方みたいでした」

ベロニカ「(貴族に住んでいないと知らない動き……。それなら、なんでただの村に住んでいたアンタがそんな事を?)」

シルビア「でも、ロウちゃんが王様だった頃なんてずっと前よ。ラーズちゃんだって生まれる前はずだわ。どうして他国の前王の名前まで知ってるの？」

ラーズ「ガラツシュの村は宝であるシルバーオーブを調べてたつて

話はしたる？その関連で勇者ってのは必ず出てくる言葉だった。だから勇者についてもよく調べていた。

16年前、村長は勇者がこの世界のどこかで誕生した事を探知した。村長はきたる時に備えて、勇者を守るような方針にしている国を調べた。その時にユグノア王国も調べたってわけだ」

シルビア「な、なるほどね。ちよつとマルティナちゃん？大丈夫？」

マルティナ「……私やロウ様の気憂は一体」

マルティナはため息をつきながら頭を押さえていた

ラース「まあ、バレたくなかったのはこつちもわかってた。そんなのホイホイ言える事じゃないからな。でも、言ってくれてありがとな」

マルティナ「あなたは本当に頭が回るのね。ロウ様にもお伝えしておくわ」

シルビア「それでね、今度はイレブンちゃんの事なんだけど」

ラース「おい、本人いないけどいいのか？」

ベロニカ「本人にはちゃんと確認とってきたわ」

ラーズ「そうか、それで？」

マルティナ「あの子は実は、ユグノアの王子でロウ様の孫なのよ」

ラーズ「何だつて!?!男にしては綺麗だと思つたが分からなかつたな！あれ？このパーティー王族の割合高すぎないか？俺、敬語の方がいいのか？」

ラーズは驚き、焦り始める

マルティナ「ふふ、普通でいて大丈夫よ。変に畏まられるとこつちも固くなっちゃうわ。それに、私は姫よりももう旅人としての生活の方が長いしね」

シルビア「それにね、このパーティー若い子が多いから、ラーズちゃんは今最年長クラスよ。そんな子が敬語なんてしなくてもいいのよ」

ラーズ「え……？俺今27なんだが、これで最年長クラスなのかよ！もしかして……この年齢はもうおっさんなのか？」

ラーズは少しショックを受けている

セーニャ「大丈夫ですわ、ラーズ様。私はお兄様みたいな感じだと思っております」

ラーズ「喜んでいいのか？それは？……ハア、何だか色々知って
疲れたな。俺は甲板の方に行くよ。ありがとな」

シルビア「またお話ししようね」

甲板

ラーズが食堂から甲板に出るとそこにはカミュがいた

カミュ「お、ラーズ、随分賑やかだったな。もう少しで光の柱に着
くみたいだぜ」

ラーズ「ああ、わかった。ありがとな、カミュ……
なあ、知ってたか？27っておっさんかもしれないんだってよ」

カミュ「は？おっさん？……何話してたか知らねえが、ラーズ
はまだおっさんってほどじゃねえだろ」

ラーズ「そうだよな。まだ……若いよな」

ラーズは少し遠い目をしながら呟いていた

23. メダル女学園へ

メダチャット地方

光の柱を渡り、船を止め全員降りてきた

ラース「ふう、ここに来るのも久しぶりだな。マルティナ達と一緒に旅していた時以来だ。ここから北に行くと、メダル女学園という場所があったな。小さなメダルを集めているらしいぞ」

イレブン「へえ、小さなメダルなら僕もそれなりに持つてるし、行ってみようかな」

ロウ「確かここいらには呪文を使う魔物が多かったはずじゃ。気を付けていくぞい」

メダル女学園

校庭では生徒達が集まり、校長の指揮に合わせて歌を歌っている

生徒の中には魔物の者もいる

しらかばのもりにー♪こもれびのはなー♪

スズランのベルを風が鳴らすよー♪

小さなレディは夢見るレディ♪

大きな世界が私を待ってる♪ルルル〜ル〜♪

歩こうザ・ワールド♪集めよう・トレジャー♪

ラララーラー♪メダル　メダル　小さなメダル♪

王立メダル女学園っ！

歌が終わると生徒達は学校へと戻っていき、校長だけになった。校長はこちらに気づき、話しかけてきた

???「やあやあ、お客さんとは珍しい。何かご用ですか？むむ！旅のお方！これは……驚くべきことだ！わかります。私にはわかりませんよ！」

ラース「何だ……このじいさん」

校長はイレブンを見ると目を輝かせながら近づいてきた

その姿を見たラースは校長に少しひいている

???「すーんばらしい！あなたはとんでもない才能を秘めておりますな！話せば長くなります。こんな所で立ち話も何ですからぜひ校長室へいらしてくださいな！」

校長はスキップをしながら学校へと入っていった

校長室

校長「よくぞ参られましたな旅のお方。私の名前はメダル校長。そしてここは王立メダル女学園！ステキなレディを目指す乙女の学校

ですな。

我が校では授業の一環として、世界中のありとあらゆる場所に散らばる小さなメダルを集めております。メダルを集めることで、ステキなレデイに必要な不可欠な優れた知性と教養を身につけるのですな。

あなたをお招きしたのは他でもない。私はあなたのその青空のように澄んだ瞳に、メダル集めの才能を見たのです！しかし、誠に残念な事にここは女子限定の学校ですからな。入学を許可することはできませんぬ。

ですから、校長の権力を使いあなたをこのメダル女学園の客員生徒として認めます！では、このメダルスタンプ帳を受け取ってください
「い」

イレブンはメダルスタンプ帳をてにいれた

校長「小さなメダルを集めてきたら枚数に応じて色々なプレゼントがあります。がんばってくださいな」

校内

ラーズ「お、イレブン。あの変なおじさん何て言ってた」

イレブン「何か僕に小さなメダル集めの才能があるから、小さなメダルを集めてくれだって。枚数に応じてプレゼントがあるみたいだよ」

カミュ「まあ、それなら旅のついでにもし見つけたらここに持って

くるか」

マルティナ「それじゃあプチャラオ村に向かいますよ。ここから南に向かった先にある橋を渡れば見えてくるわ」

イレブン「うん、わかった」

24. 日常

オリジナル展開をいれます。日常回でもあるのでよければ読んでみてください。

ある日の朝、キャンプ場

イレブン達は朝食を済ませ、全員が思い思いに過ごしていた

イレブン「最近戦いが多かったよね。みんな疲れてない？よかったら、今日一日は休まない？」

ベロニカ「そうね。戦いばかりだとこの体だし疲れるわ」

遠くではラーズとマルティナがいつもの朝の稽古として、組み手をしていた

ラーズ「それで、こつちの方向から攻撃が来たら普通ならこう避けるだろ？だけど、体を上手く使って相手の攻撃の勢いを借りながら避けるんだ。

その時の勢いのまま足を出せば、相手に反撃されずに威力も上がった状態で攻撃できる」

ラーズは地面に絵を書いてマルティナに教えている

マルティナ「なるほど、いいわね。やってみてもらっていい？」

ラーズ「ああ、もちろんだ」

シルビア「あの2人は朝から熱心ねえ。でも、何だかマルティナちゃんとラースちゃん距離近くなったわよね。前から仲良しさんだとは思ってたけど」

カミュ「内容はものすごく真面目だけどな」

ベロニカ「でも、結構お似合いじゃない？あの2人って。よく戦闘の時も隣り合ったり、背中合わせになって戦ってるわ」

セーニヤ「2人の格闘術を見てるととてもお似合いですよね」

シルビア「セーニヤちゃんのそれは少し論点が違うと思うけど、私もお似合いだと思うわ。それに、どっちも好意は抱いてると思うのよね。乙女の勘だけど」

ベロニカ「そうだね、イレブン！ダーハル―ネに行きましょう！道具も足りなくなってきたし、あの2人に頼みましょうよ！あそこなら色々あるからシヨツピングにもなるわ！」

シルビア「やだ、ベロニカちゃん！それってデートになるじゃない！いいわね、私もその案賛成よ！」

女性二人はキャツキヤと楽しそうにどんどん話が決まっていく

カミュ「おいおい、遊びじゃないんだぞ。それに、お前らもショッピングしたいだけだろ」

ベロニカ「いいじゃない、別に。それにさつきイレブンが今日一日は休もうって言ってたからいいでしょ!」

ロウ「ダーハルーネに行くのなら、わしはマッサージでもしに行こうかのう。この年になると体が固くてのう」

イレブン「デートってのはよくわからないけど、道具は確かに少なくなってきたからね。今日はダーハルーネに行ってゆつくりしようか」

シルビア「それじゃあ、アタシがあのだ二人に説明してくるわね。ね、2人とも!」

シルビアはニコニコしながらラース達の元に向かっていった

カミュ「はあ。あのだ二人もおもちやにされてかわいいそうだな」

イレブン「楽しそうだしいいんじゃないかな?」

ダーハルーネの町

ラース「ラムダ姉妹とシルビアがショッピングで、イレブンとカ

ミュが町の観光、ロウのじいさんがマツサージ……ねえ」

ラーズは出来すぎたように思い、訝しんでいた

マルティナ「どうしたの？ラーズ。買い物なんてすぐに終わらせて、私もショッピングしたいわ」

ラーズ「何だか仕組まれてるような感じがするが、深くは考えないでおこう）ああ、何でもない。すぐ行く」

25. 日常2

マルティナ「必要なものは上薬草5つ、まほうのせいすい6つ、砥石4つ、乾燥肉、塩……えっと、料理本、魔導書……ぼ、望遠鏡？」

マルティナはもらったメモを読みながら、後半にある物に対して少し困惑し始めていた

ラーズ「後半3つおかしいだろ」

マルティナ「料理本は字ではセーニヤかしら。魔導書はおそらくベロニカで、望遠鏡はイレブンね」

ラーズ「自分で買えと言いたいんだが……」

ラーズも呆れたような顔をしている

マルティナ「魔導書は私は読めないからわからないけど、ラーズがいるから頼んだんじゃないかしら？」

ラーズ「いや、魔導書だけだと何の魔導書かわからないんだ。魔法にも種類はたくさんあるからな。メラとかの初級魔法から補助魔法に至るまで。というか、ベロニカならそれくらいわかってるはずだろ。」

まあ、二つの本は適当なの買っていくか。文句は言わねえはずだ。あと、望遠鏡って絶対イレブンのやつカッコいいからって理由だろ。

前にカミュにそう言ってたしな」

マルティナ「まあいいじゃない。それじゃあ、先に道具屋の方に行きましようか」

ラース「そうだな。……あ、入り口にあるヤツより、こっちにある道具屋のほうが安いぜ。ちよつと裏通りになるけどな」

マルティナ「あら、そうなの？ やつぱり村の近くだから来たことあるのかしら」

ラース「まあ、この街を頼らないと俺らの村はやっていけなかったからな。子どもの頃からお使いとかでよく行かせられてたんだ」

マルティナ「ふふ、それじゃあ案内は頼んだわね」

ラース「ああ、任せておけ」

その後、道具屋で薬草などを買い揃えた

ラース「道具はこんなもんか。次は食料屋に行くか」

マルティナ「そこは街の真ん中にある所でいいのかしら？」

ラーズ「ああ。だが、塩は別の店だな。この時期になると塩が取れにくくなるから、あの店は塩を少なくしてさらにいつもより高くするんだ。だからそれより離れた所にあるじいさんの店で買った方がいい」

ラーズとマルティナが話しながら隣り合って歩いていると、それを見た近くの商人が話しかけてきた

商人「お！兄ちゃん！隣にいるのは彼女かい？えらいべっぴんさんだな？彼女にアクセサリーなんかプレゼントしてみないかい？」

マルティナ「いえ、そんなべっぴんだなんて」

商人「謙遜しなくたっていいんだよ、お姉さん。どうだい？そんな綺麗なお姉さんにこんなミサंगाがあるんだよ。」

このミサंगाの中にはな、小さいけど特殊な宝石が入っていて、切れると宝石と一緒に紐も消えていく綺麗な代物なんだ。兄ちゃんと色違いでどうだい？」

商人の手には光によって僅かにキラキラと光るミサंगाが握られている

光の色はミサंगाの色と同じ色が光っている

マルティナ「これは、綺麗ね。でも、ミサंगाって何かしら？」

ラース「ミサンガっていうのは、願いを込めたヒモを結んでそれ
体につとつけておくんだ。そうして、そのヒモが切れたらその願
いは叶う、といわれていることからのお守りみたいなものさ」

商人「お！兄ちゃん詳しいね！この近くの出身かい？なら、少し
まけてあげようかね。この値段でどうだい？」

ラース「マルティナ。どうする？」

26. 日常3

マルティナ「え？買ってもいいの？」

ラーズ「ああ。興味あるみたいだったしな。それに、折角の休日だ。俺らだって買い物したっていいだろ。マルティナにはこの色似合うんじゃないか？試してみろよ」

ラーズは様々なアクセサリーやミサンガがある中から、緑色のミサンガを手を取った

マルティナ「これはどこにつけるのかしら？」

商人「大体は手首か足首だね。お姉さんなら、手首にした方がキレイだと思うよ」

マルティナは言われた通り手首につけた

マルティナ「・・・ラーズどうかしら？」

ラーズ「おお！いいじゃないか！やっぱりこの色はマルティナと似合うな！」

マルティナ「ふふ・・・ありがとう、ラーズ。私はラーズにこの色が似合うと思うわ」

マルティナは少し照れながら、オレンジのミサンガを手にとった

ラース「じゃあ、俺はマルティナとは反対の腕につけようかな。……
どうだ？」

マルティナ「あら、似合ってるわよ。ラースにはこの色が似合うみたいね」

ラースとマルティナは互いのミサンガを見せ合い、笑っている

商人「お兄さん達いいね！仲良しで。よし！さらに安くしてあげよう！2つ合わせてこの値段だ！」

そんな様子を見た商人も優しく笑いながら、紙に更に値下げされた価格を提示した

ラース「いいのか？わざわざ悪いな。じゃあこれでちょうどな」

商人「はい！毎度あり！お幸せにね！」

マルティナ「あ！ちよつとラース！私の分も払ったでしょ。悪いわよ」

ラース「まあいいじゃないか。いつも頑張ってるマルティナに、俺からのプレゼントだ。受け取ってくれ」

マルティナ「あ、あり……。がとう」

マルティナは突然の事に照れながらもお礼を言った

ラース「それじゃあ食料屋に行くか」

その後、食料も無事に買い終わった

マルティナ「次は本屋に行けばいいかしら？」

ラース「そうだな。料理本はセーニヤの事だから、そこまで難しいものじゃない方がいいな。ペロニカの魔導書は俺が選んでくるから、マルティナは料理本を頼んだ」

マルティナ「わかったわ」

しばらくして

ラース「マルティナ、どうだ？あつたか？」

マルティナ「これでどうかしら？」

マルティナは自分が気になった料理本を見せた

ラース「ああ、大丈夫だろ。それじゃ、払いに行くか」

マルティナ「ええ…… あらう？あそこにいるのは」

マルティナはあるスペースに見覚えのある人物を発見する

ラーズ「ん？じいさんじゃないか。何読んで……！マルティナ！
見なかった事にしよう」

ラーズはロウに向かっていくのを急にやめ、マルティナを押し戻そ
うとした

マルティナ「え？どうして…… はっ！ロウ様！またそんな物を集
めていらしたのですね！」

マルティナはラーズを追い越してロウに向かっていく

ロウ「ひ、姫！なぜここに！これには訳がく」

ヒエエエ！

ロウの叫び声が聞こえてきた

ラーズ「…… お金払ってこよ」

ラーズは見なかった事にして二冊の本を持っていった

その後

マルティナ「まったく……」

ラーズ「まあ、これで買い物は終わりだな」

マルティナ「あら？イレブンの望遠鏡は買ったかしら？」

ラーズ「ああ、さっきの道具屋で丁度いいものがあったからな。買っておいた」

マルティナ「そうだったの。それじゃあ帰りましょうか。ふふ、何だか新鮮で楽しかったわ」

ラーズ「俺もいい息抜きになった。ありがとな、マルティナ」

27. 日常4

その夜、宿屋にて

ラーズ達は今日買ってきた物を皆に配っていた

セーニヤ「マルティナ様！ありがとうございます。丁度こういう本を探していたんです」

マルティナ「ふふ、喜んでもらえてよかったわ。選んだのは私だけど、決定したのはラーズよ。お礼ならラーズにも…… あら？ラーズは？」

セーニヤ「先程、お姉様が怒りながらラーズ様の所へ向かって行きましたわ。あ、あちらで追いかけてっことをしていますわ」

ベロニカ「ちよつとラーズ！これカバーだけ魔導書で、中身は絵本じゃない！しかも丁寧にラッピングまでして！ふざけるんじゃないわよ！」

ベロニカは怒りながらラーズに向かって魔法を打っている

ラーズ「ふん！どうせ今日の事はベロニカが仕組んだんだろ！文句言われる筋合いはないぜ！」

ラーズも魔法を防ぎながら、ベロニカをどんどん煽っていく

セーニヤ「まあ！」

イレブン「ねえ、カミュ見て！ラースから本当に望遠鏡買ってきてもらえた！」

カミュ「あ、ああ、よかったな（これ、おもちゃじゃねえか）」

イレブンはラースから貰ったおもちゃの望遠鏡を見て喜んでいますが、カミュは微妙な顔をしている

シルビア「ロウちゃんったら！マッサージに行ったんじゃないの？」

椅子には私はムッフ本を見ました。という札を首にかけたロウがいた

ロウ「いや〜これは仕方ないんじゃない」

シルビア「まったくもう！……それにしてもマルティナちゃん、いいデートになったみたいね。ウフフ！」

マルティナ「え？デート？」

シルビア「あら？だって男女2人で仲良く買い物なんて、どう見てもデートじゃない。それに、色違いのプレゼントも貰ったみたいだし、ね？」

シルビアはラーズとマルティナの手首を見て、ウインクしながら言った

マルティナ「!!!?」

デートだった事に言われて気づいたマルティナは顔が赤くなった

セーニヤ「マルティナ様！急にお顔が赤くなりましたわ。大丈夫ですか？」

マルティナ「だ、大丈夫よ。セーニヤ。そ、そうよ。あつちだつて深い意味は無かつたはずだわ。きつとそうよ。シルビア、変な事言わないで！」

シルビア「ふふ、マルティナちゃんかわいいわ〜」

その後

ラーズ「たくっ！ベロニカのやつあんなに怒る事ないだろ」

マルティナ「お疲れ様、ラーズ。気づかない間にイタズラしてたのね」

マルティナは平静を装いながらラーズに話しかけた

ラーズ「まあ、少しな。そういうえば、このミサンガに願い事はしたか？」

マルティナ「ええ、早速ね。ラースはどんな願い事をしたの？」

ラース「おっと。それは教えられないな。まあいつかは叶う願いさ」

マルティナ「それもそうね、聞いた私が間違ってたわ。ごめんなさい。ずっとつけてれば切れるのね？」

ラース「ああ、まあ簡単には切れないようにできてるからな。すぐには切れないぜ。それじゃあ、俺は部屋に戻って筋トレでもするか。じゃあまた明日な、マルティナ」

マルティナ「ええ、また明日（いつかはラースと、なんて願ってしまっただけれど叶うのかしら）」

マルティナは自分のミサंगाを少し握っていた

次回からまた原作に戻ります

28. プチャラオ村へ

プチャラオ村

マルティナ「この村の騒々しさは相変わらずね」

ロウ「この村は古代の遺跡がある事で有名でな。以前、わしらはウルノーガの情報を求めてこの村に来たんじゃ」

ラーズ「こんなの前に来た時あったか？この看板に書いてあることも古代の遺跡と関係があるのか？」

ラーズが指した看板をカミュが読みあげた

カミュ「プワチャット遺跡の神秘 壁画にて微笑む妖艶なる美女が絵を見た者に幸福をもたらす、だってよ。うさんくせーな。じいさん、こんな所で何かわかったのか？」

ロウ「ほほ、確かにのう。お主が言うように、その時は何の手がかりも得られなかった。じゃが、あの時とは状況も違うからの。今回はイレブンもおるし、改めて遺跡を調べれば何か収穫が得られるかもしれんぞ」

ラーズ「確かその遺跡なら道なりに進んで、奥の丘を超えた先にあったやつだな。ここは人も多いからな。各自で他にも情報を集めつつ向かおうぜ」

皆もそれに従い、バラバラに動いていった

遺跡前の丘

女の子「パパ…… ママ…… ぐすつ」

そこにはシルビアと泣いている女の子がいた

イレブン「あれ？シルビア、その子どうしたの？」

シルビア「あら、イレブンちゃん。ちょうどいい所にきたわ。この子ったら迷子みたいなのよ。ほら、泣かないの。アタシ達がついてるわ。ね？だからお名前を教えてちょうだい？」

シルビアは屈んで女の子の身長に合わせながら、優しく語りかけた

メル「メル……。あたし、メルっていうの。ここには、パパとママと一緒に何日もかけてきたの。でも、壁画のご利益でお金持ちになるんだって言ってパパもママもどこかに行っちゃったの。お兄ちゃん達お願い。メルのパパとママをみつけて」

シルビア「大丈夫よ。安心なさい。アタシ達があなたのパパとママを探してきてあげるわ。アタシは村の方を探すから、イレブンちゃんは遺跡の方を見てきてくれないかしら？いいでしょ？」

イレブン「うん、放っておけないしね」

シルビア「さっすがイレブンちゃんね！じゃあ遺跡の方はよろしくね！アタシも村の方を探したら後を追うわ」

遺跡内部

中に入ると、カミュとベロニカとセーニヤが先に絵を見ていた

カミュ「よお、イレブンも来たのか。このデカイやつが、噂の壁画だよ。確かにこいつは中々の迫力だな。でもってそこで笑ってる彼女が、俺らに幸福をくださる美女ってわけだ」

ベロニカ「ふーん、所々傷もあるけど思ってたよりもキレイな絵ね」

絵には左上に大きな切り傷がついている

セーニヤ「ん？…あの胸の所に掛かっている物って何でしょう？鍵のように見えますけど不思議な感じがしますわ」

ベロニカ「もしかしてあれってまほうの鍵じゃない？」

グウウウウ

何かの音が鳴り響いた

カミュ「おいおい、ベロニカ。派手に腹なんか鳴らして、そんなにハラペコなのか？まあお子様は食べるのが仕事だからな」

ベロニカ「あたしじゃないわよ！失礼ね！大体アンタこそ、さつき

から壁画の美女なんかに見とれちゃってさ！」

29. 壁画の美女

バンツ!

急に扉が開けられ、数人の人達が入ってきた

観光客達「おお!これが幸福を与えてくれる壁画の美女か!」

カミュ「おい!何だアンタら。俺達が見てたつてのに」

観光客達「アンタらこそ何だ。さつきから壁画を見てたくせに。ご利益はみんなのものだ」

カミュと観光客は険悪な雰囲気になっていた

セーニャ「イレブン様、一旦この場からは離れた方がよさそうですね」

イレブン「ちよつと待つて。すみません、この中にメルちゃんという子の親はいらっしゃいませんか?」

観光客達「誰?それ?知らないな」

観光客達はそれぞれ顔を見合わせた後、そう言った

イレブン「わかりました。すみませんでした」

遺跡前にて

ベロニカ「ふう。壁画の人氣甘く見てたわね」

カミュ「それでイレブン、さっきのメルちゃんってのは誰だ？」

イレブン「親とはぐれた子を見つけてね。シルビアと一緒に探してるんだ。今シルビアが村の方を探しに行ってくれてるんだ」

カミュ「そうか。そいつは大変だ。みんなで手分けして探そうぜ」

その時、遠くからシルビアが走ってきた

シルビア「おーい。イレブンちゃん。こっちはダメね。収穫なしだったわ。そっちはどうだった？」

イレブン「こっちにもいなかったよ」

シルビア「彼女のご両親どこに行っちゃったのかしら。メルちゃんも一人で心細いだろうし、もう一度彼女に会ってみましょう」

プチャラオ村

村に戻るとメルちゃんの姿も消えていた

シルビア「あれー？おかしいわね？メルちゃんもどこか行っちゃっ

たわ」

ラーズ「おーい。シルビア達ー」

遠くからラーズとロウとマルティナがやってきた

イレブン「どうしたの？ラーズ達」

ラーズ「前にマルティナ達と泊まった宿の女将さんが、俺達のことを覚えていてくれてな。今回もタダにしてもらえたんだ。

ただ、その女将さんが言うには、壁画を見に行ったお客さんが何人か帰ってきていないらしいんだ。だから、何か壁画には秘密があるかもしれないと思ってな。みんなを集めていたんだ」

ベロニカ「イレブン、もう一度壁画まで戻ってみましょう」

遺跡前

メル「……」

シルビア「あら？あそこにいるのメルちゃんじゃない？おーい、メルちゃん」

メル「……」スタスタ

しかし、シルビアの声は聞こえなかったようでメルちゃんは無言で

去っていった

シルビア「遺跡の方に向かっていくわね。あたし達も追いかけてみましょう」

遺跡内部

絵の場所まで行くと、そこには誰もいなかった

シルビア「あら？誰もいないじゃない。メルちゃんこっちの方に歩いてこなかった？」

ラース「確かに変だな。迷子はこっちに向かってたはずだがな」

セーニヤ「あら？……何だか壁画の絵、先ほど見た時と違いますか？」

カミュ「なあ、変な事言うようだが、ここに描かれてるヤツらさっきの連中に似てないか？」

ベロニカ「……何だか嫌な予感がするわ。早くここから出ましよう」

グラグラグラ

突然遺跡が大きく揺れ始めた

ロウ「いかん！様子がおかしいぞ」

マルティナ「あ！扉が閉まっていくわ！」

ギイイイ！バタン！

30. 壁画の世界

マルティナ「くっ！ふんっ！」

マルティナは扉を開けようとする

ラース「マルティナ！どいてろ！はああっ！」

ガンツ！

ラースは力強く蹴りを入れるが、扉はびくともしない

ラース「駄目だ！開かねえ！」

シルビア「見て！壁画が！」

壁画は突然光り始め

カアアアツ！

ベロニカ「きゃあー！」

部屋は光に包まれた

壁画の世界

全員が目を覚ますと、周りは見たこともない雰囲気になっていた

イレブン「くっ…。」

カミュ「何だ、この奇妙な場所は？夢の中ってわけでもないな」

セーニヤ「何だか不思議な感じがしますね。まるで絵の中に入ってしまったよう」

ラース「そんなのアリなのかよ」

シルビア「ねえ。もしかして、メルちゃんもこの場所に連れてこられてるんじゃないかしら。どの道いつまでもここにいても仕方ないし、探してみましよう。イレブンちゃん」

イレブン「確かにシルビアの言う通りだね。メルちゃんを探しながら、帰る方法も探そう」

マルティナ「こんな所でも魔物はいるみたいね。慎重に進みましょう」

その後

奥には先程カミュと言いついていた観光客達が扉のような物の前で立ち尽くしていた

扉のような物の前にも壁画と同じ絵が描かれてある

カミュ「あそこにいるのはさっきの観光客達じゃないか？おい、ア

ンタラそこで何してんだ」

セーニヤ「皆さんはここに集まって何を？それにこの女性の方は遺跡の壁画にも描かれていましたが、どなたなのでしょう」

ベロニカ「どこの誰だか知らないけど、自己主張激しすぎじゃない？」

その時、どこからか声が聞こえてきた

??? 「カカカ、妻の美しさがわからぬとは子どもとは言え、愚かやろう」

全員「!!!」

??? 「カカ、どこを見ておる、こちらじゃ愚か者どもよ」

ラース「みんな！絵だ！」

セーニヤ「絵が動きました！」

絵に描かれてある女性の目が動きこちらを見つめていた

??? 「ひい、ふう、みい…… ふむ、8色か。汚い色ばかりで飽いていた所じゃ、歓迎するぞ、ようこそ我が世界へ。特にお前。お前は他の

者とは違うな。なかなかよい色になりそうじゃ」

絵の女性はイレブンを見ている

イレブン「!？」

??? 「先だつて妾に魅了された者同様、残らず吸収し妾の美を支える一部としてくれよう。どのような色になるか楽しみにしているぞ」

観光客達 「うう…… ああ……」

扉が無くなり、観光客達はその先へと歩いていく

セーニヤ 「ああ！皆さん行つてはいけません！」

シルビア 「危険な匂いがプンプンするわ。早くメルちゃんを見つけ、この場所から出た方がよさそうね」

壁画世界内部

観光客達に追いつくと蔓のようなもので覆われた階段があり、そこから先には進めないようになっていた

セーニヤ 「これは…… 一体何を？…… とても嫌な感じがします」

シユルルル！グバア！

突如周りのツタが動き始めた

ベロニカ「何あのツタ！口を開いたわ！」

フワー

口を開けたツタに観光客達が吸い寄せられていく

ラーズ「観光客達が浮いて、あのツタの中に取り込まれていくぞ！まさか、これが吸収なのか!?!」

カミュ「チツ！こっちにも来るぞ！」

ロウ「こやつらに吸収させるために、あの者達やわしらをこの世界に引きずり込んだのか」

イレブン「！」勇者の痣が光りはじめる

ウウ…… グルルル！ドスン！

ツタは光を浴びると苦しそうに地面に落ち、動けなくなった

カミュ「今のうちに逃げるぞ、みんな！あっちだ！」

3 1. 壁画の真実

マルティナ「もうあのツタは追ってこないみたいね」

ラース「あそこに何か石碑みたいなものがあるぜ」

セーニヤ「所々壊れてますけど、どうやらこの壁画を発見した人が残したものですわ」

セーニヤが石碑を読み上げた

私が偶然にも村のそばで発見した、数百年前に滅んだ古代プワチャット王国の不思議な壁画。これで人も集まり村も栄えるはずだった。

しかし、それは大きな間違いだった。壁画は邪悪に呪われていたのだ。

壁画は人間の命を自らの糧とするために人々の欲望を叶え、惑わし、それにあやかろうとする者を吸収する。

また、欲深くない者の前には少女の姿で現れ、人の善意につけ入って欺き、壁画の中に引きずり込むのだ

シルビア「少女の姿……それってメルちゃんの事かしら」

カミュ「つまり、俺らはまんまと罠にはめられたって事か」

ラーズ「汚い手口だな。さっさとここから出るぞ、イレブン」

その先には大きな裂け目があり、そこから光が溢れ出ている

セーニヤ「この裂け目は一体？……！ここが絵の世界なら、もしかしたら横にあった大きな傷痕に繋がっているかもしれないわ！」

イレブン「そうだね！飛んでみよう！」

全員「はっ！」

遺跡内部

先程の絵があつた部屋へと戻ってきていた

シルビア「アイタタタ、みんな無事かしら？」

ベロニカ「ええ、何とかね」

セーニヤ「この壁画の恐ろしい真相を、早く皆様にお伝えしなくては」

イレブン「うん、村に戻ろう！」

プチャラオ村

シルビア「見て！あそこ！」

遠くにメルちゃんとおじいちゃんが楽しそうに話している

メル「嘘じゃないよ、おじいちゃん。私の病気も、あの壁画をみたら治っちゃったんだ。おじいちゃんも絶対に元気になれるよ」

おじいちゃん「おお、それじゃあ行ってみるかのう。ありがとう、お嬢ちゃん」

おじいさんは嬉しそうに遺跡の方へと向かっていった

シルビア「あら、それで元気になるのはおじいちゃんの方じゃなくて、お腹を満たした壁画の方じゃないかしら？」

メル「ウソ、どうしてここに？私の可愛い触手達を取り逃したの？」

セーニヤ「あなたが言葉巧みに人々を誘導して、皆さんを壁画に閉じ込めていたんですね？お願いします。もうこんな事はやめて、壁画の中に囚われている皆さんを解放してください」

ベロニカ「アンタの正体はもうバレてるのよ！大人しく降参しなさい！」

メルは雰囲気が変わり、邪悪さに溢れ、目が赤く光り輝いている

メル「……せつかく捕らえた獲物を解放しろだと？調子に乗るで

ないぞ、たかが塗料風情が。この素晴らしき力は、愛しきあの方から頂いたもの。人間如きに指図される覚えはないわ！不服があるなら、我が世界に来るがよい。今度は妾自ら歓迎し、綺麗に丸呑みにしてやろう」シュン！

メルは一瞬で姿を消した

ラース「待て！あの方って誰のことだ！」

ベロニカ「みんな！壁画に向かいますよ！これ以上あいつの好きにさせてたまるもんですか！」

32. 壁画世界の戦い

壁画世界

メル「カカカ、よくぞ来た、身の程知らずの塗料どもよ。もし無事に我がもとへ辿り着けたなら、その時こそ妾自らが貴様らを丸呑みにしてくれようぞ」

先程の階段のツタが無くなった

ラース「ツタが無くなって先に行けるようになったな。だが、罨である事はわかってる。何があるかわからないからな。気をつけて行くぞ」

壁画世界奥地

奥にはメルが浮きながらイレブン達を待ち構えていた

ペロニカ「追い詰めたわよ！」

メル「追い詰めただと？何を勘違いしているやら。わざわざ餌の方からデイナーの皿へ乗りに来ただけというのに、本当におバカな子どもよのう。妾は美と芸術の化身メルトア！その真の姿を、貴様らの眼に焼き付けるがよい」

メルは子どもの姿から巨大な女の姿へと変貌した

カミュ「来るぞ！気を付けろ！」

メルトアがあらわれた

マルティナ「は！」

ラース「ふ！」

マルティナとラースが同時にメルトアへ距離を詰める

マルティナ「さみだれ突き！」

ラース「せいけんづき！」

マルティナは前方から槍を、ラースが横から勢いよく拳を突き出した

メル「ぐ！小賢しい！」

メルが二人の方を向こうとすると

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンがその隙に剣を素早く構えながら突っ込んでくる

ガシャン！

メルトアのカゴに強く剣が当たる音がする

メル「ならば、お主だ。お主に鍵をしてやろう」

メルトアが真下にいるイレブンに不思議な力をかける

イレブン「ぐ……これは、力が」

イレブンの特技が使えなくなった

ラーズ「なんだよ、それ！反則だろ！」

メル「ゆけ！触手よ！」

メルトアの声に反応して、足場からまるで意思があるかのようにツタが生えてくる

近くにいたシルビアにツタが襲いかかる

シルビア「きゃっ！もう！」

ズバツ！

シルビアはツタを切って脱出する

シルビア「ラーズちゃん、バイシオン！」

シルビアはラーズの体に緑の魔法陣を描くと、ラーズの全体が緑色のオーラに包まれ、ラーズの筋肉が増大する

ラーズ「ありがとな、シルビア！ばくれつきやく！」

ラーズはそのまま真正面からメルトアの体に連続で力強い蹴りを繰り返し出していく

ガガガガガ！

メルトア「ぐっ、貴様ああ!!」

メルトアがラースを捕まえようとする

ラース「!」

マルティナ「させないわ!さみだれ突き!」

メルトア「ぐうっ!」

マルティナがその手を槍で連続で貫こうとする

ガシャン!

しかし、体は硬いのか金属が擦れるような音が鳴り響いている

ラース「サンキュー!」

ラースはその隙にメルトアから距離を取る

イレブン「特技が使えなくても硬いなら!デイン!」

イレブンはメルトアに黄色の魔法陣を描き、突然雷をメルトアに落とす
とした

メルトア「ぐっ………雷………を呼ぶだと」

シルビア「効いてるわ!イレブンちゃん!」

メル「我が虜になれ」

メルトアはラースに魅了の力をかけた瞳で見つめた

ラース「くっ、なんだこれ。体がこいつの方にいかねえ……」

ラースは魅了の力にかかり、体が動きにくくなった

マルティナ「ラース！大丈夫!？」

マルティナがラースの元に向かおうとすると

メル「これでどうじゃ？」

バチン！

マルティナ「くっつ！」

ドサア！

メルトアの巨大な手のデコピンがマルティナの横から落とされる

それはマルティナの体よりも大きく、防ぐには一人では不可能であり、体に大きなダメージが入り、端に飛ばされる

シルビア「ラースちゃん。なんでやねん！」

ラース「お、おお、助かった、シルビア。ありがとう」

シルビアもラースに駆け寄っており、ラースにつっこみをする事で魅了を治す事に成功する

イレブン「ラース、マルティナ、大丈夫？」

マルティナ「私はまだ平気よ」

マルティナもなんとか受け身を取って立ち直っていた

レース「すまない、ばくれつきやく！」

レースは再びメルトアに向かっていく

メルトア「同じ手が通用すると思うな！」

メルトアは真正面から来るレースを両手で捕まえようとする

レース「同じ手で何度も来ると思うな？」

メルトア「なに!？」

レース「よ！」

レースは掴もうとする腕に飛び乗ると、そこを足場にメルトアの顔面まで跳躍する

レース「ばくれつきやく！」

ガガガガガ!!

レースが降下しながらメルトアの顔に蹴りを連続で繰り出していく

メルトア「ぐうう!!」

ラーズ「皆！やっぱり顔はそんなに硬くないみたいだ！」

イレブン「了解！デイン！」

イレブンはメルトアの顔周囲に黄色の魔法陣を描き、雷を顔に浴びせる

メルトア「くう………」

マルティナ「はあ！」

マルティナは雷により、目を瞑っているメルトアの体を飛び登っていく

マルティナ「さみだれ突き！」

メルトア「ぐぬう！」

イレブン「ラーズ、カミュと交代して！マルティナ、ベホイミ！」

イレブンは緑の魔法陣をマルティナの足下に描き、治癒の力をかけるとマルティナの傷が瞬時に回復していく

マルティナ「ありがとう」

ラーズ「了解だ。カミュ、頼んだ」

カミュ「おう、行くぜ！」

ラーズは離れていたカミュとバトンタッチする

メル「これぞ美しさの力！」

メルトアの目から熱い熱線がイレブン達全体に放射された

全員「!？」

シルビア「キヤアツ！こんな攻撃があるの!？」

メル「ふん！」

メルトアはその隙にイレブンに巨大な手で平手打ちをした

イレブン「ぐは！」

しかし、平手打ちと呼ぶにはあまりにも大きく、武器では防ぎきれなかった

シルビア「カミュちゃん、バイシオン！」

シルビアはカミュの体に緑の魔法陣を描くと、カミュ全体が緑色のオーラに包まれ、カミュの筋肉が増大する

カミュ「サンキュー、シルビア！これでも喰らいな！ヴァイパーフアング！」

カミュは自慢の素早さでメルトアに近づき、毒を纏わせた短剣で切り裂いた

メルトア「!？これは……………毒か！」

メルトアは毒になった

マルティナ「失礼するわね、カミュ！」

ゲシ

カミュ「痛え！」

マルティナはカミュを足場に飛び上がる

マルティナ「さみだれ突き！」

マルティナの素早く繰り出される槍がメルトアの顔に連続で当たっていく

メルトア「調子に乗るなああ!!」

マルティナ「！」

空中にいるマルティナにメルトアが平手打ちをしようとする

イレブン「デイン！」

イレブンがすぐにメルトアの体に黄色の魔法陣を描き、雷を落とす

メルトア「ぐう！」

マルティナ「ありがとう、イレブン！」

メル「お主に鍵をしてやろう」

シルビアはメルトアに不思議な力をかけられる

シルビア「くっ！これは確かに力がなくなる感じね」

シルビアは特技が使えなくなった

カミュ「よし！もういつちよ！」

メル「させん！これでどうじゃ？」

突撃してくるカミュにメルトアの巨大な手でデコピンが繰り出される

カミュ「!?痛って！」

カミュは素早く避けようとしたが、巨大な手はその回避すらも範囲になっており、カミュはそのまま勢いよく後ろに飛ばされていく

イレブン「カミュ！大丈夫だよ！」

パシッ！

カミュ「イレブン！助かった！」

飛んできたカミュをイレブンがキャッチした

シルビア「マルティナちゃん、バイシオンよ！」

シルビアはその間にマルティナに緑の魔法陣を描き、マルティナが緑色のオーラに包まれると、マルティナの筋肉が増大する

イレブン「このままいくよ、カミュ！」

カミュ「頼むぜ、相棒！」

イレブン「えい！」

イレブンはカミュを全力でメルトアに向かって投げた

メルトア「な!？」

カミュ「タナトスハント！」

勢いよく顔面に突き刺さる短剣。バイシオンによる攻撃増強とイレブンの投げた勢いも合わさったその衝撃はメルトアを貫き、その後ろにまで衝撃が走りわたる

その威力はまさに会心の一撃

メル「グハ…… バカな、貴様ら一体…… おのれ。だが、まだ終わらぬ。我が造物主たる、偉大なるウルノーガ様がおられる限りは」

ロウ「ウルノーガじゃと！」

メル「ウルノーガ様の…… 永遠なる命の力が実現すれば…… 妾も再び」ジユワー

33. 新たな一面

後半にオリジナル展開があります

ロウ「まさかウルノーガの名を聞くことになるとはな。ヤツはかつてある国の宰相に取り憑き、その国を滅ぼしたと聞くがプワチャット王国がそうであったか」

マルティナ「永遠なる命の力と言っていましたね。それこそがウルノーガの狙い。一体何を企んでいるの？」

チャリン！

足下に鍵が落ちてきた

イレブン「なにこれ？」

イレブンはまほうのカギを手に入れた

ロウ「これはまほうの鍵か。これがあれば、今まで開けられなかった扉も開けられるようになるじやろう」

ラース「予想外の収穫だな。さっさとこの世界から出ようぜ、イレブン」

遺跡内部

メルトアを倒した事で吸収されていた人達も元の世界へ戻ってきた

観光客達 「この絵は危険だ！逃げろー！」

吸収されていた観光客達は一斉に遺跡から逃げ出していく

カミュ 「まあ一件落着つてどこか」

女将 「おや、どうしたんだい、遺跡から沢山の人が。つて壁画が無くなってるじゃないか。ちよつとラース君、何があつたんだい？」

その人達を見た宿屋の女将がやってきた

ラース 「実はあの壁画は魔物で、人を壁画の世界へ引きずりこんでいたんです」

女将 「まあまあ！そんな物だったのかい、あれは！またアンタには助けられたねえ。今度からこの村に来る時には声かけておくれ。いつでもタダにしておくよ！」

ラース 「ありがとな。だが、お金は今度からはちやんと払うさ」

宿屋 ラースの部屋

コンコン

ラースが一人で魔導書を読んでいるとノックの音がした

ラース 「おう、誰だ？」

マルティナ「私よ。入ってもいいかしら？」

ラーズ「マルティナか、いいぞ」

ガチャ

マルティナ「急にごめんなさいね。今何かしてたかしら？」

ラーズ「村にあつた魔導書を読んでいたが、あらかた終わったからな。俺に用事か？」

マルティナ「大した事じゃないのだけど、村の人達がお礼で私達にちよつとしたお祭りを開いてくれているの。よかつたら一緒に観に行きましょう」

ラーズ「おお！俺そういう催し物は好きだからな。さつそく行こうぜ」

ラーズは嬉しそうに本を閉じてコートを羽織った

プチャラオ村

マルティナの言っている通り、多少お店などが開かれている

マルティナ「流石商人の人達がたくさんいるだけあって、どの売店

も独特な物が多いわね」

周りには商人や旅人などの人が祭りの雰囲気誘われ、中々の人混みとなってきた

リース「人もかなり多いな。…… マルティナ…… 逸れないようにするぞ」

ギョツ

リースはマルティナの手を握った

マルティナ「！あ、ありがとう（手を…… 握ってくれた…… 意外とゴツゴツしてるのね）」

リース「見ろよ、マルティナ。あのちようちん中々お洒落じゃないか？」

マルティナ「え？…… あら、本当ね。白と青で爽やかな印象があるわ。ふふ、綺麗」

マルティナはちようちんを見て優しく笑っている

リース「……」

マルティナ「？どうしたの？リース。って、私を見てたの？」

ラース「え？あ、ああ、いや、何でもないぜ」

マルティナ「そう？あら見て、ラース。ここから屋台の食べ物が多
いみたい。何か食べていきましよう」

ラース「そうだな！よし、食い尽くすぞ！」

その後

ラース「おお！あれも美味そうだな」

ラースはまだ片手にウインナーを持ちながら別の屋台に向かおう
とする

マルティナ「ちよつと。まだ食べる気なの？」

ラースは既にかれこれ10軒以上の屋台を回っていた

ラース「いいじゃないか。俺らには安くしてくれるしよ。それとも
疲れたか？それなら、少しその座れる場所で待っていてくれ。すぐ
に買ってくるから」

ラースはそう言うと、少し奥にあるベンチを指した

マルティナ「わかったわ。それじゃあ待ってるわね（お祭りが好き
なのは知らなかったけど、楽しそうね。それに、思ったより結構食
べるのね。」

キャンプでは控えめだけど、あれが本来の姿なのかしら。少しかわ

いいわね。私もセーニヤみたい料理本とかで習ったほうが、これからにも役に)」

マルティナがラースの後ろ姿を見た後に考え事をしていると

ラース「マルティナ！」

マルティナ「キャツ！ラース、いつの間に」

マルティナの目の前には食べ物を買って戻ってきたラースがいた

ラース「ボーツとしてたからな。平気か？体調悪くなったのか？これ食べたら宿に帰ろう」

宿屋

マルティナ「楽しんでたのにごめんなさい。体調は問題ないのよ」

ラース「いや、今日は強い敵とも戦ったから知らぬうちに疲れてるのかも知れないぞ？祭りに浮かれた俺が振り回してすまなかったな。ゆっくり休んでくれ。また明日な」

マルティナ「わかったわ。それじゃあ休んでるわね、また明日（祭りの間、ほとんど手を握っててくれた。それだけで浮かれちゃうなんて。こんなの………私は駄目なのに）」

マルティナはラースに握られていた自身の手を嬉しそうに見つめていたが、顔は暗くなっていた

34. 気持ち

前回の続きです

その夜、宿屋 ラースの部屋

コンコン

ラースの部屋の扉が少し軽めに叩かれる

ラース「おう、入っていいぞ」

シルビア「うふふ、少しお邪魔してもいいかしら？」

シルビアが笑顔で顔を覗かせた

ラース「シルビアか。どうしたんだ？」

シルビア「さつき、アタシ見ちゃったわ。マルティナちゃんとラースちゃんが手を繋いで祭りを回ってた所。

やっぱりアタシとベロニカちゃんの読み通り、ラースちゃんはマルティナちゃんの事気になってるんじゃないかしら？」

ラース「……何の事だ？見当違いだと思うぞ」

ラースは何食わぬ顔でさらりと言い返す

シルビア「んもう！隠さなくたっていいのよ。普段のあなた達を見てたらわかるわよ」

ラーズ「…… ハア。誰にも言うなよ？確かに俺はマルティナの事を少し特別視してるが、マルティナはきつと俺の事は大して気にしてないだろ」

ラーズは少しため息をつきながら話した

シルビア「そうかしら？アタシにはマルティナちゃんも、ラーズちゃんの事意識してるように見えるけど？」

ラーズ「面白がってみてるからそう感じるんだろ。あんな美人な人が俺なんか気にしねえよ」

シルビア「まあ、マルティナちゃんの事は少し置いておきましょう。ラーズちゃん、あなたの気持ちはどうなの？」

ラーズ「俺の気持ち？」

シルビア「ええ。ラーズちゃんはマルティナちゃんの事特別視してるって言ったけど、それってどういう特別視かしら？」

ラーズ「そりゃあ……好きって意味だ。わ、悪いかよ」

ラーズの顔は少し赤くなっている

ラーズも自覚があるのか、シルビアから目を逸らした

シルビア「うふふ、全然悪くないわ。寧ろ、とってもいいじゃない。アタシ応援するわよ。二人はとってもお似合いなもの」

ラーズ「おもちゃにするの間違いだろ。それに、本当はこんな事してる時じゃねえんだ。オーブもかなり揃ってきた。しばらくすりや魔王と戦うんだ。それまでにこんな気持ちは消しておかねえとな」

ラーズは真面目な顔に戻ると淡々と言い放った

シルビア「ちよつ、ちよつと!!どうしてよ!?!いくらなんでも消す必要はないじゃない!いつかかならず伝えましょうよ」

シルビアはラーズの発言に驚いている

ラーズ「無理だ。俺は、傷つきたくねえんだ。断られるってわかってるのにこんな事したくねえ」

シルビア「まだ何もしてないじゃない。わからないわよ。その気持ちを消したら、後悔するかもしれないわよ?」

ラーズ「そりゃあそうだがよ」

シルビア「ラーズちゃんなら大丈夫よ。アタシ達が絶対にその気持

ちを伝える場を作ってあげる」

ラース「マジかよ。なんでそこまで」

シルビア「アタシは二人に笑顔になつてほしいの。もちろん、幸せにもなつてほしいわ。その一番の方法があるんだから、そのためならアタシなんだってするわ」

ラース「……………」

シルビア「それじゃあ突然ごめんなさいね。おやすみ」

シルビアは楽しそうに手を振りながら部屋を出ていった

ラース「ハア……………（シルビアのやつ、何だったんだよ。気持ちを伝える……………ねえ）」

35. クレイモラン王国へ

次の日、宿屋

ラーズ「そういえば、イレブン。少し思い出したんだが、ネルセンの宿屋の近くに今は滅んでしまったが、昔はそこにバンデルフォン王国ってのがあったんだ。

村の書物によれば、昔そこにパープルオーブが国宝としてあったらしい。なにか手がかりになるものがあるかもしれない。行ってみたいなか？」

イレブン「ほんと!?じゃあ行ってみようか!何か見つかるかも」

ネルセンの宿屋

ロウ「確か、ここから右に進んだ場所じゃったな、今は王国の姿は見るも無残じゃがのう」

バンデルフォン王国跡地

イレブン「何かないか周囲を手分けして探していた」

カミュ「おい、イレブン。こっちのほうに階段があつて、その奥に魔法の扉があつたぞ」

イレブン「ありがとう、カミュ。入ってみようか」

イレブンは魔法の鍵を使い、中に入った

セーニヤ「ここは、宝物庫みたいな場所でしょうか」

中には宝箱や古くなった武器などがおいてある

イレブン「あっ！パープルオーブあったよ！」

イレブンは宝箱の中から紫色の光を放つパープルオーブを見つけ、手に入れた

ベロニカ「やったじゃない、イレブン。これで残るはクレイモラン王国にあるブルーオーブだけね」

マルティナ「それじゃあクレイモラン王国へ向かいますよ。場所は外海に出て北に向かった大きな大陸よ」

クレイモラン王国 入り口

雪が降っており、辺り一面も真っ白な雪景色となっている

ロウ「さあ、着いたぞ。ここが美しき雪の都クレイモラン王国。ここにはブルーオーブがあるはずじゃ」

ベロニカ「うー。寒い寒い。雪の都とかどうでもいいから、早く中に入りますよ」

マルティナ「……………」

マルティナも寒いのか両腕を手で擦っている

ラーズ「マルティナ、ほら」

そんなマルティナを見たラーズは自身の茶色のコートを着させた

マルティナ「え…… あ、ありがとう。でも、ラーズも寒いでしょう？」

ラーズ「まあ薄着になったから寒いが、すぐ宿屋に行けば大丈夫だろ。男だから女性より頑丈だ」

シルビア「(うふふ、かつこいいじゃない、ラーズちゃん。気付くのが早いわね)」

セーニヤ「でも、城門がおかしいですわね。何かに覆われていますわ」

ラーズ「ん？おい、これは全部氷だ！城門が凍ってるんだ」

ラーズの言った通り、城門は巨大な氷で覆われて開かなくなっていた

セーニヤ「まあ！この寒さで凍ってしまったんでしょか」

ベロニカ「もう、セーニヤ！いくら何でも城門がこんな風に凍っ

ちやう寒さだったら、ここの人達はどうやって生活してるのよ」

ラーズ「前に来た時も寒かったが、こんな事にはなっていないかった。それに、その時よりかなり周りも寒いしな」

ベロニカ「どうすんのよ、ラーズ。オーブはクレイモランにあるのにこれじゃ入れないじゃない」

ラーズ「確か裏口があると話に聞いた事がある。どこかにあるかもしれない。イレブン、探してみよう」

その後

イレブン「あ、あったよ。この扉だと思う。入ってみよう」

イレブン達は魔法の鍵を使い、裏口からクレイモラン王国へと入った

クレイモラン広場

そこには城、家、草木、人までが凍りついていた

ベロニカ「ウソでしょ。どうなってるのよ、これ。城も人も町も全部凍ってるわ」

セーニヤ「ほら、お姉様。やっぱり寒さで凍ってしまったんですよ」

ラース「いや、セーニヤ。寒さで生き物まで凍るなんて、自然の為せる技じゃない。この町を調べてみよう（だが、この状況だ。凍っていない人なんていなさそうだな。いるとするなら、おそらくそいつは……）」

36. 氷漬けの城下町

クレイモラン広場 前

イレブン「あ、あそこに無事な人がいるよ」

そこには高級そうなレザーマントをつけた金髪で眼鏡をかけた女性
性がいた

「手には何かの本を持っている

ラース「(…:… 警戒しないとな) あ、ちよつといいですか？」

???「:…? キャツ! す、すみません。まさか旅人が訪れるとは思わ
なかつたので」

ペロニカ「あなたは無事のようなね。 どうしてこの町が氷漬けになっ
たのか知ってたら教えてくれない？」

???「はい。それは3ヶ月ほど前突然魔女がこの町に現れたのです」

セーニヤ「魔女!? 魔女ってよく昔話とか伝説にのっている、あの魔
女ですか？」

???「はい。そして魔女が何やら呪文を唱えると、突如激しい吹雪が
町を襲い、町全体を包み込みました。私は吹雪の中で気を失ってしま

い、目が覚めたら町は凍りついていました。なぜ私だけが助かったのかはわかりません」

ベロニカ「町ごと凍らせるなんて酷い魔女だわ。なんとか助けあげたいけど、この氷はあたしの呪文でも溶かせないわ」

ロウ「…ところで、その服にある紋章。ずっと気になっておったのじゃが」

ラース「やつぱりじいさんも気付いてたか。あれはクレイモラン王国の紋章だな。君は城の者なのか？」

シャルル「名乗るのが遅れました。私はクレイモラン王国女王シャルル」

ロウ「何!?!お主が女王じゃと。という事は先代の王はもう…。」

シャルル「はい。一年ほど前に亡くなった父から王位を受け継いだ矢先に町がこんな事に。私、もうどうしたら」

ベロニカ「私達大変な時に来たみたいね。オーブがとか言っている場合じゃないわね」

シャルル「オーブ？」

ロウ「あれじゃよ。クレイモラン王家に伝わる家宝のブルーオーブ。訳あって、わしらにはあのオーブが必要なんじゃない」

シャルルは少し考え込んでいる

ラーズ「王の娘という事は小さな頃から城にいたはず。なのに、国宝のブルーオーブを知らないのか？」

シャルル「ああつ！あの青い宝玉のことですね。あれでしたら、今はお城の中にありますので氷を溶かさない限り中には……」

ベロニカ「どっちみち氷を溶かさないとオーブは手に入らないのね。もしかしたら、魔女を倒せば氷が溶けるかも」

シャルル「実は、数日ほど前に来た外国の救援部隊に魔女退治をお願いしたのですが…… 苦戦しているのか全然音沙汰がなくて」

ラーズ「(救援部隊を送れるほどなら、それなりに大きい国のはず。1年しか経っていないとはいえ、女王ともあろうお方がその国の名前を知らない?)」

ラーズはシャルルに対して不信感を持ち始めた

ベロニカ「そういう事なら、あたし達も魔女退治に協力しましょう。」

イレブン」

イレブン「うん。凍った人達も心配だしね」

シャルル「ありがとうございます、皆さん。魔女は東のシケスピア雪原にあるミルレアンの森に潜んでいると聞きます。

ですが、あそこの森には魔女だけでなく魔獣も潜んでいると聞きます。みなさん、お気をつけてください」

ロウ「魔獣か、覚えておこう。では、ミルレアンの森に向かうとするかの」

37. 魔女

シケスビア雪原

雪原に出るとより一層雪も強く降り、かなり積もっている場所もある

ラーズ「き……流石に俺も寒くなってきた」

ラーズは体を震わせており、唇も少し色が変わってきている

マルティナ「ご、ごめんなさい、ラーズ！ずっと借りてたわね。私はもう大丈夫よ、ありがとう」

マルティナはすぐにコートを脱ごうとする

シルビア「待つて、マルティナちゃん。折角ラーズちゃんが冷えないうようにしてくれたのに、脱いだらまたマルティナちゃんが冷えちゃうわ。レディに冷えは禁物よ。」

ラーズちゃん、アタシのでよかったですら温かい服貸すわよ」

ラーズ「ああ、そうしてくれると助かる。シルビアなら俺もサイズがよさそうだからな」

ラーズはシルビアから毛皮のコートを借りた

シルビア「(うふふ、これでいいんでしょう？ラーズちゃん？)」

シルビアはラーズにウインクする

ラース「(……………感謝する)」

ミルレアンの森

森の中にはデルカダールの兵士達がいた

カミュ「あれは!?みんな、隠れろ!あそこにいるの、デルカダール兵じゃないか!派遣部隊つてのはデルカダールの事だったか」

ラース「おい、どうして隠れる必要があるんだ?協力してもらおうぜ」

ラースは慌てて隠れる皆を不思議に思う

カミュ「?おい、シルビア達。事情は話したんじゃないのかよ?」

シルビア「ごめんなさい、ラースちゃん。イレブンちゃんはデルカダールに悪魔の子として濡れ衣を着せられて追われているの。」

だから、デルカダールの兵士ちゃんにはバレないようにするのが遅くなってごめんなさい」

シルビアはハツとした様子で謝ってきた

ラース「そうだったのか。悪魔の子の噂は俺も耳にしたが、まさかイレブンの事だったのか。デルカダールは確か、勇者を支える国だと村長が言っていた。やはりおかしくなってきたのかもしれない

な」

マルティナ「だけど、ずっと隠れている訳にもいかないわ、バレないように慎重に行きましょう」

ミルレアンの森　奥地

ひどい吹雪が吹いている

満足に隣も見えず、風も強いため声も聞こえにくい

イレブン「……あれ？みんな？」

イレブンが気づくと周りに仲間達がいなくなっており、ラースだけがイレブンを引き戻しに来た

ラース「おい、イレブン。先に行きすぎだ。みんなは危ないから戻ろうって言って戻っていったぞ。ほら、俺達も戻るぞ」

イレブン「ごめん、ラース。聞こえてなかったんだ……ん？」

ラース「どうした？イレブン」

イレブン「奥から何か音がするよ？行ってみよう」

ラース「あ、おい！イレブン」

奥に進むと、白い体をして頭に金色の毛が生えた獣が誰かと戦っていた

??? 「ムフオフオ！ムフオフオ！」

謎の獣は素早くグレイグに蹴りを入れる

グレイグ 「くっ！」

ガンツ！

グレイグもなんとか対応して盾で防ぐ

グレイグ 「ハッ！テヤア！」

グレイグはすぐさま攻撃に移る

??? 「ムッフオ！」

しかし、獣の方が素早く軽々と避けられてしまう

グレイグ 「おのれ、魔女の手先め！……！そこにいるのは、悪魔の子！」

グレイグがこちらにいるイレブンとラーズに気づいた

??? 「ムッフオオ！」

ドガ！

獣はその隙を見逃さず、グレイグの大剣を蹴り飛ばした

グレイグ「グハッ！くそっ！俺とした事が」

獣はイレブン達の方を向いた

イレブン「!?こっちに来るか！」

ラース「たくっ！仲間達もいねえってのに」

二人もすぐに臨戦態勢を構えた

???「ムツフオ！」

ムンババがあらわれた

ラース「メラミ！」

ラースは自身の前に赤い魔法陣を素早く描き、炎の塊をムンババにぶつける

ムンババ「ムフオ！」

ムンババの腕に当たるが、少しジュツと音がした程度となっている

ムンババ「ムツフオ！」

ムンババはその場の雪を掴んで雪玉を複数投げつけてきた

ラース「俺か！」

ラーズはいくつか避けていくが

ベシヤツ!

ラーズ「つめてっ!」

ラーズの足に当たり冷えてしまった

ムンババ「ムフオ」

ムンババは隙を見せたラーズに攻撃を仕掛ける

イレブン「させないよ!はやぶさ斬り!」

イレブンがラーズとムンババの間に入り、剣を素早く降りムンババに反撃する

ムンババ「ムッフオ!」

ムンババの腕が少し斬り裂かれた

ラーズ「まもりのたて!」

ラーズの構えた盾が光り、前面に小さなバリアのようなものも形成される

そのままラーズはムンババのほぼ目の前まで接近する

ムンババ「ムッフオ!」

ムンババは雪玉をいくつも盾にぶつけていく

ベシヤツ！ベシヤツ！

ラーズ「あまり効かないぜ！イレブン、俺があいつの注意を引く。イレブンはその隙に、どんどんダメージを与えてくれ。俺の回復も頼んだ！」

ラーズはそのままムンババの目の前にいて、盾で殴ったりメラミを繰り出しムンババの気を引いている

イレブン「わかった、ラーズ。あまり無理しないでね」

その隙にイレブンはムンババの背後を取るように位置取った

しばらくして

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンがムンババの背中を強く剣で二回切り裂いた

ムンババ「ムフォオ……」

ムンババも弱ってきており、そのまま雪に倒れこんだ

グレイグ「ずいぶん手こずらせてくれたな、魔女の手先め。ハッ！」

立ち上がったグレイグが大剣でムンババの背中を刺した

ムンババ「ムフォオン……」ジュワー

グレイグ 「次は貴様だ、悪魔の子らよ。今度こそ逃がさん！」

グレイグはそのままイレブンとラースに大剣を向ける

イレブン 「くっ！ラース、まずいよ」

ラース 「なんだよ、このいかついおっさん。敵って事か」

二人が身構えると

ヒュオオオオ！

吹雪と共に三人に何か飛んできた

ラース 「!?あぶねっ!?」

パキッ！

二人 「!?」

イレブンとグレイグは足から腰にかけ凍りつき、動けなくなった

グレイグ 「何だこれは！動けん！」

イレブン 「あ…… 足が……」

ラース 「大丈夫か、イレブン！………！これは……魔法の氷！俺

の炎じや溶かせない！」

ラースは手に炎を出す、溶かす事ができなかった

??? 「フッフ、捕まえたわ。英雄グレイグ」

その時、空から誰かが現れる

グレイグ 「氷の魔女！これは貴様が……」

ラース「こいつが…… 魔女か（何だ、こいつ。シャルル王女と気が似ている）」

氷の魔女は紫の肌に白い髪をして、杖を持っていた

魔女「このままお前を氷漬けにすれば、私を解放してくれたあの方との約束を果たせる」

チャツ！グレイグの胸についていたペンダントを取った

魔女「あの方と同じペンダント。これで私達お揃いだわ！」

グレイグ 「何だと！」

魔女「ハア、英雄と呼ばれた男も呆気ないものね。まだ私の攻撃を避けたお兄さんの方ができるじゃない。まあ、いいわ。二人仲良く永遠に凍るがいい！」

魔女は攻撃を仕掛けようとしている

ラーズ「!?イレブン！」

ベロニカ「させないわ！ハッ！」

ベロニカが遠くからメラを放ち、魔女に当てた

魔女「グッ！」

魔女の首にメラが当たり、魔女が怯んだ

ラーズ「ナイス！ベロニカ！イオ！」

ラーズも小さくオレンジの魔法陣を魔女に描くと、小爆発が起こる

ヒュッ！

ラーズはイオを当てると同時に道具袋から何かを投げた

トサ 魔女は衝撃で持っていたペンダントを落とした

魔女「チッ！」

魔女はどこかに飛び去っていった

38. 古代図書館へ

パライイン！

イレブン「!?あ、動けるようになった」

魔女がいなくなった事でイレブンとグレイグの氷が溶けた

ベロニカ「イレブン、大丈夫!？」

ロウ「救援に来ていたのは、グレイグの部隊だったのじゃないか」

グレイグ「……………」

グレイグは何かを考えている様子でペンダントを拾う

ロウ「どうした？グレイグ。わしらを捕まえるのではないのか？」

ラース「ぎつきの魔女は、君と同じペンダントをした男と語っていたな。その男って一体……………」

グレイグ「余計な詮索は不要だ。貴様らを捕らえる前にやるべき事ができた。ただ、それだけだ」

グレイグは去っていった

イレブン「……………うっ、みんな、ごめん」

ドサ

イレブンは倒れてしまった

リース「イレブン！魔女にやられたからな。身体が冷え切っている」

マルティナ「ここに来る途中に小屋があったはずよ。そこに休ませましょう」

小屋内

イレブン「ん？ここは？」

ガチャ

???「おお。お目覚めかな。もう体調は大丈夫かね？」

少し歳をとったおじさんが入ってきた

イレブン「はい。ありがとうございます」

???「それはよかった。仲間の看病のおかげじゃな。あれほど心配してくれる友は中々見つからん。大切にせねばならんぞ」

イレブン「心配かけたようです。えつと…」

エツケハルト「おつと。自己紹介がまだだったの。ワシは魔法学者エツケハルト。クレイモランに住んでいたのだが、今はここで町を氷漬けにした魔女について研究しておる。

じつは魔女が現れた時、私はたまたま国を離れておつてな。幸運にも氷漬けを免れたのだ。君達が、シャルル様から魔女退治を引き受けている事は仲間達から聞いた。私も魔女について知っている事を話そう。

君を襲った氷の魔女リーズレットは、古の時代、高名な魔法使いによつてある禁書に封印された魔女なのだ。神話の時代に作られ、膨大な古文書が眠るといふ古代図書館。そこに魔女を封印した禁書を収めたという。

そこで私は、魔女を封印する手がかりを求め古代図書館に足を運んでみたのだが、中はすっかり魔物の巣になっていてな」

ガチャ

外からベロニカが入ってきた

ベロニカ「あ、イレブン。よかった。目が覚めたのね」

エツケハルト「うむ。もう心配は無さそうじゃ。君もベロニカさんに感謝せねばならんぞ。彼女は特に熱心に君を看病しておつたからな」

イレブン「そうだったんだ。ありがとう、ベロニカ。助かったよ」

ベロニカ「もう！エツケハルトさん、余計な事言わないでよ！」

ベロニカは恥ずかしいのか少し顔を赤くしている

エツケハルト「はっは。そう照れるでない。それと魔女に関する話は伝えておいた」

ベロニカ「そう、じゃあ話は早いわね。エツケハルトさんと一緒に古代図書館へ行つて、魔女を倒す手がかりを探しましょう」

イレブン「そうだね。そこで何か手がかりを探してみよう」

エツケハルト「古代図書館は東にあるが、南の道から遠回りせねばならない。気をつけてくれ。では、向かうかの」

39. 魔女と聖獣

古代図書館

スライム「あれ？人間が来るなんて珍しいね。ここは古の時代の書物がたくさんある古代図書館だよ。折角来たんだから、いい事教えてあげる。

この図書館は特殊な構造をしていてね。スイッチに手をかざすと、壁や階段が動いて、行けなかった場所にも行けるようになるんだ。まずは僕の隣にあるスイッチに手をかざしてみなよ。そしたら、別のスイッチが使えるようになるよ」

スライムは自分の横にあるスイッチについて説明してくれた

ラーズ「なるほどな、ただの図書館じゃないって事か。よし、みんなで手分けして、魔女の手がかりになりそうな本を探そうぜ」

仲間達はバラバラに分かれ、様々な本を読み始めた

古代図書館3階

エツケハルトとイレブンとベロニカとラーズは魔女についての本を見つけた

エツケハルト「おお！これじゃ。この本を読めば、魔女を封印した時の事がわかるはずじゃ。では、読むぞ。

魔女の魔力は余りに強大だった。私の力を持ってしても倒す事はおろか、封印する事すらできなかった。そこで私は、魔力を吸い取る聖獣を操り、魔女の魔力を吸い取ってから魔導書の中に封印する事に

した。

この計画は成功し、魔女を封印した禁書を古代図書館に収めた後、私はミルレアンの森で聖獣と共に余生を過ごす事にした。

なるほどな。この聖獣とやらが、魔女を倒すには必要不可欠らしいな」

ベロニカ「ミルレアンの森に聖獣なんていた？魔女の手先ならいたけど、イレブンとラーズが討伐したわよね？」

ラーズ「あの白くて金色の頭で、ムフオムフオ言ってるやつだな」

エツケハルト「な?!?!?! バツカもん!!これを見よ!お主達が倒したのは、ここに書かれてある聖獣じゃ!」

エツケハルトはラーズの発言に怒り、本を見せる

三人「え!?!」

ベロニカ「でも、女王様がミルレアンの森にいる獣は魔獣で、魔女の手先だって言ったのよ!イレブンとラーズは悪くないわ!」

エツケハルト「何?シャルル様がそう言ったのか?ふむ、なぜそんな事を...」

本を見たラースは少し考えた後、何かに気づいたような顔をした

ラース「……………なるほどな、そういう事か。してやられたな」

ベロニカ「何かわかったの？ラース？」

ラース「最初から彼女はおかしいと思っただけ警戒していたんだ。

何故か彼女は王の娘でもあるのに国宝を知らなかった。さらに兵士達を派遣してきた国の名前を、ましてやデルカダール王国の名前を女王であるにも関わらず知らなかった。女王としてはおかしいよな。

そしてその本の隣に刻まれてる紋章、シャル様が持ってた本と同じ紋章だよな。その紋章は禁書の紋章だとそのページに書いてある。

つまり、シャル様は封印された魔女の禁書をなぜかあの時持っていたという事だな。これでもうわかったんじゃないか？」

三人「!？」

ラースの説明により三人も気づく

ベロニカ「ここで考えていても仕方ないわ。直接シャル様に聞きにいきましょう」

イレブン「うん。もし本当なら戦う事になるだろうから、準備もしていこう」

40. 魔女との戦い

クレイモラン広場

シャルル「ああ、皆さん。ご無事だったんですね。私、このまま帰ってこないんじゃないかと心配で」

シャルルの肘は何かが貼りつき光っていた

ラース「……なあ、シャルル様。いや、リーズレット？どんなに姿は騙せても、気配までは隠せないぜ？さらに、その肘が光っているにはお気づきで？」

シャルル「え？……！何これ、いつの間に」

ラース「俺があの時イオをしたのは、お前にダメージを与える為じゃない。この発光虫を付けるためさ！さあ観念しろ！」

リーズレット「あら、小賢しい真似をしてくれたのね」

シャルルは変身を解き、氷の魔女の姿に戻った

エツケハルト「まさか！魔女が女王様に化けておったとは」

リーズレット「ふふ、アンタ達が聖獣を倒してくれたおかげで、昔の力が蘇ったわ。英雄グレイグを取り逃がしたあの時の借り、ここで返してあげる。

特に、私に傷を負わせたお嬢ちゃんとお賢しい真似をしたお兄さん、覚悟しなさい？さあ、私の腕の中で永遠に凍りなさい！」

リーズレットがあらわれた

リーズレット「ふふ、今の私の力を持ってすればあんた達なんて」

ラース「長い話はいい」

ラースはリーズレットの言葉が言い終わるよりも早くリーズレットに距離を詰める

リーズレット「!?!」

ラース「あの時のイレブンの借りは返させてもらおうぜ！」

ラースがリーズレットの足下に来ると、剣に力を込めた。その力により刀身に炎が纏う。更に、ラースの気持ちに呼応したのか剣よりも大きく炎が纏い、まるで炎の剣のようになっていく

ラース「かえん斬り！」

ジュウウウ!!

リーズレット「キャアアアツツ!!」

完全に油断していたリーズレットに強力な炎の斬り上げが繰り出される

その炎は傷をつけたリーズレットの皮膚を焼いている

リーズレット「なんて事をするのよ！」

ベロニカ「そんなの知らないわよ！メラミー！」

ベロニカは自身の目の前に赤い魔法陣を描き、炎の塊を呼び出して
リーズレットにぶつける

リーズレット「もう熱い思いはしないわ！」

リーズレットはもっていた槍で貫いて、炎の塊を壊した

リーズレット「雪だるまになりなさい！」

リーズレットはそのまま離れていこうとするラーズに体を凍てつ
かせる吹雪をふらせる

パキパキパキ！

ラーズ「こんなもの！」

パライイイン！

ラーズは一瞬凍りつきそうになったが、振り解き動けるようになっ
た

リーズレット「凍りつけ！」

リーズレットは冷たい氷の風をイレブン達全体に吹きつける

イレブン「冷たい……。でも、負けてられない！」

イレブンは冷たい風が吹きつける中走っていき、リーズレットの元へ向かう

リーズレット「!?」

イレブン「はやぶさ斬り！」

リーズレット「くっ！」

イレブンはリーズレットの意表を突いたが、リーズレットに間一髪で防がれてしまった

セーニヤ「氷の旋律ですわ！」

セーニヤが魔力をこめて豎琴を奏でると、イレブン達全体に薄く青い膜が張られた

ラーズ「はあああ!!」ラーズは力を込めて雄々しい叫び声をあげ、極限の集中状態に入り込んだ。ラーズは青いオーラに包まれ、ゾーンに入った

ちから すばやさ 呪文の威力があがった

ラーズ「は！」

ラーズは先程よりも目に追えないほどの速さでリーズレットの懐へ入り込む

リーズレット「!?!」

ラーズ「ばくれつきやく！」

リーズレット「く!!」

パキパキ!!

危険を感じたリーズレットは即座に自身の前の空気を凍らせて
ラーズとの間に壁を作った

パライイイン!!

リーズレット「嘘!!」

ラーズはそれをたった一蹴りで粉碎した

ラーズ「はああああ!!」

リーズレット「キヤアア!!」

リーズレットは強烈な蹴りを喰らい、かなり後ろに飛ばされていく

ベロニカ「どんどんいくわよ!メラミ!」

ベロニカはそのまま追撃として炎の塊をリーズレットに飛ばして
いく

リーズレット「これ以上好きにはさせないわよ!」

リーズレットは高く浮き上がり、イレブン達の元まで勢いよく戻っ
てきた

リーズレット「はあっ！」

着地と同時にイレブンに槍で攻撃する

イレブン「流石に当たらないよ！」

リーズレット「雪だるまになりなさい」

リーズレットは避けたイレブンにそのまま連続で凍てつかせるような吹雪をふかせた

パキパキパキ

イレブン「はあっ！」

イレブンも体が凍りそうになるが、なんとか振り解く事に成功する

イレブン「ベロニカ！ラーズ、連携だ！」

二人「了解！」

三人は綺麗に縦に並ぶ

ベロニカ「ラーズいくわよ！ハアアアッ」

ベロニカは普通よりも大きなメラミをラーズに向かって放つ

ラーズ「任せろ！ハアッ！イレブン！」

ラーズはそのメラミに合わせてさらにメラミを重ね、より大きな炎

の塊にさせてイレブンに向ける

イレブン「ハアッ！」

イレブンも息を合わせてメラミを重ねる。すると、三人の合わさった特殊なメラミは形を変え、炎の鳥となった

炎の鳥はリーズレットに向かって真っ直ぐ飛んでいく

三人「ファイアーバード！」

リーズレット「な、なによこれ！キヤアアアッ!!」

リーズレットは浮いてよけようとするが、炎の鳥はリーズレットを追いかけて空中でリーズレットは激しい炎に包まれる

リーズレット「く……. なかなかやるわね。でも、私の力はこんなものじゃないわ！」

セーニヤ「イレブン様、キラキラポーン」

セーニヤの聖なる力を持ったステッキがイレブンに加護の力を与え、優しい光にイレブンは包まれる

ラース「せいけんづき！」

ラースはリーズレットに距離を詰め、目前で拳を勢いよく突き出す

リーズレット「ふふ、そんな見え見えだと避けるに決まってるじゃない。お兄さん、かなりの攻撃力だけど当たらなきゃどうって事」

ラーズ「よっ」

ラーズはそのまま姿勢を低くした

リーズレット「ない……!!」

リーズレットの目前には炎の塊が向かってきていた

ジュウウ!

リーズレットの顔に炎の塊は直撃する

リーズレット「あつついわよ!くっ!どこから!」

ベロニカ「あら、気付かなかったの?」

ベロニカはラーズの真後ろにおり、ラーズの姿でベロニカは死角となっていた

リーズレット「仲間の背中に向かって打ったというの!?!しかもこのお兄さんもそれをわかって……。どこまでも小賢しい事してくれるじゃない!」

リーズレットはベロニカに向かって強い吹雪をふかせる

リーズレット「雪だるまにしてあげるわ!」

ベロニカ「きゃっ!」

パキパキパキ!

凍てつかせるような吹雪により、ペロニカは雪だるまになり動けなくなってしまうた

リースレット「もう許さないわ！吹雪よ、吹き荒れなさい！」

街全体を覆い尽くすほどの雪雲が現れ、風も更に強くなる。吹き荒れる猛吹雪で近くすらも見えにくくなり、イレブン達を包んでいた青い膜も砕けた

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンはリースレットがいた場所に向かって剣を振る

リースレット「うふふ、どこにいるか見えてないようね」

イレブン「くっ！」

リースレットはそこにはおらず、声だけが聞こえてきた

リースレット「さあ！こちらからいかせてもらおうよ！」

セーニヤ「させません！氷の旋律ですわ！」

セーニヤが再び豎琴に魔力をこめて演奏し、青い膜をイレブン達全体に張った

リースレット「ヒヤダルコ！」

イレブン達全体に水色の魔法陣が描かれ、氷の刃が無数の数降り注いでくる

全員「く！」

ラース「そこか！ばくれつきやく！」

ラースは魔力を感知した場所に向かって蹴りを入れる

リーズレット「あら、危ない。探知されそうになるなんてね。でも、
一歩遅かったわね。凍りつきなさい！」

リーズレットが上空からイレブン達に冷たい風を吹きつける

リーズレット「はあっ！」

リーズレットはそのままセーニヤに向かい槍を当るように落ちて
きた

セーニヤ「キヤア！」

イレブン「今なら見える！はやぶさ斬り！」

イレブンがセーニヤの元に現れたリーズレットに攻撃しようとする

リーズレット「危ないわね」

リーズレットはまたふわりと後ろに避け、吹き荒れる猛吹雪の中に
紛れ込んだ

ラース「イレブン、もう一回！」

その時、突然ラースがイレブンの目の前にやってきた

イレブン「え？う、うん！はやぶさ斬り！」

イレブンはラースの言われるまま剣を素早く前に振ろうとすると

ラース「よつと！」

ガン！

ラースは素早く振られる剣を足場に、勢いよく猛吹雪の中に突っ込んでいく

リーズレット「!？」

そうすると、リーズレットの目の前に勢いよくラースが現れる

ラース「メラミ！」

ラースはそのまま手から炎の塊をリーズレットにゼロ距離でぶつける

リーズレット「キヤアツ！」

ドサツ！

リーズレットはその勢いに吹き飛ばされる

ベロニカ「今よ！エツケハルトさん、魔女を封印する呪文を！」

エツケハルト「ポカポカズマパ！ポテズマパ！ムチヨムチヨズマパ

！ポチャズマパ！ズマズマズマパ！ポカ？えっと、これは確か…：
ポカジヨマジヨ！」

そう言うとは本は光出し、リーズレットはその本の中に吸い寄せられていく

リーズレット「イヤアアア、謝るから許し」

シユン！

リーズレットは本に吸われ、消えていった

セーニヤ「あ、氷が溶けていきますわ！」

しばらくすると、街は何事もなかったかの様にみんな動き始めた

ラーズ「ふう、これで安心だな」

4 1. 化ける魔女

街が元通りになって少しすると本が光りだした

カアアッ！

全員「うっっ！」

光が収まるとシャルル女王が出てきた

シャルル「う……ここは？」

エツケハルト「ご無事でしたか、シャルル様」

シャルル「……そうだ、思い出しました。魔女が私をこの本の中に閉じ込め、女王に化けていたのです」

エツケハルト「よかった。記憶もきちんとしておられますな、一時はどうなるかと思いましたが、もう安心です。魔女は私達が封じました」

シャルル「ありがとうございます。皆さんののおかげでクレイモランに平和が戻りました。何かお礼をしなければなりませんね。」

「そうだ！本の中で聞いていたのですが、皆さんオーブが必要なんですよね？差し上げますから、後ほど城に来てください。それでは、この本は預かりますね」

ラース「待つてください。この本は危険です。私達が預からせても
らいます」

ラースはエツケハルトが持っていた魔女が入った本をもらった

シャルル「あ、あら。そう」

ベロニカ「よかったわね、イレブン。オーブはすんなり貰えそうよ」

イレブン「うん、そうだね」

ラース「この本はイレブンに預けておきな、俺は街の人達に情報を
集めてこよう」

イレブンは魔女の禁書をてにいれた

カミュ「俺も街の方に行ってくる。オーブは任せませ」

カミュは返事も聞かずに去っていった

ラース「……なあ、イレブン。カミュのやつ、クレイモランに
来たら様子がおかしいよな。何か知ってるか？」

イレブン「あ、ラースも気づいた？そうなんだよね。でも、僕らに
は何も言っこないからどうしようもできなくてさ。もし、カミュが

ラースに何か頼ってきたら力になってあげてよ」

ラース「ああ。もちろんそのつもりだが、カミュが頼るならイレブ
ンだと思うけどな」

イレブン「そうかな？ そうだと嬉しいけど。まあ、僕はお城でブ
ルーオーブをもらってくるね」

ラース「わかった、また後でな」

クレイモラン城前

??? 「ねえ…… ちよつ…… まっ…… き…… すか」

どこからか声のような音が聞こえる

ベロニカ「今何か聞こえなかった？」

セーニヤ「お姉様、急にどうしたんですか？」

ベロニカ「変ねえ。聞き間違いかしら」

玉座の間

シャルル「イレブンさん、よくいらっしやいました。さっそくブ
ルーオーブを差し上げましょう。さあ、もつと私のそばに……」

??? 「ちよつとまって」

ベロニカ「！ねえ、イレブン。その本から声がするわ」

イレブンは本を開く

本「まって！私が本物のシャルル。目の前にいるのは、魔女が化した偽物よ」

シャルル「え!?そんな訳ないでしょう。皆さん、騙されてはいけません。本の中の魔女が嘘をついているのです」

ベロニカ「しつこいわね、私達が二度も騙される訳ないでしょう。封印されたんだから、本の中で大人しくしてなさい」

本「違います！エツケハルトの詠唱が途切れた事で、封印は失敗したんです。私を信じてください」

シャルル「イレブンさん！封印は成功しました。魔女の嘘に騙されてはいけません。私を信じてください」

周りはこちらを信じたらいいかわからず混乱している

エツケハルト「お待ちください！ここはどちらが本物か判断する為

に、10年シャルル様の教育係を務めた私からある質問をします。

クレイモランに代々伝わる家宝とは何か。父上の教えを受けた女王様ならわかるはず」

シャルル「ブルーオーブに決まってるわ！」

本「厳しい冬を耐え抜き、勤勉に働くクレイモランの民。それこそがクレイモランの宝。お父様がいつも言っていた事です」

42. 優しき心

エツケハルト「そう！それこそクレイモランに伝わる王族の教え！全てが明らかになりました。本の中のシャルル様こそが本物！」

リーズレット「またバレちゃった。もういいわ、降参よ。折角取り戻した魔力もなくなっただし、私には何の力も残ってないわ。煮るなり焼くなり好きにしなさい」

目の前のシャルルは変身を解き、氷の魔女の姿になった

また本は光を放ち、本物のシャルルが中から出てきた

エツケハルト「魔女を捕らえるのだ！」

リーズレットを城の兵士達が取り囲む

シャルル「待ってください！」

シャルルはリーズレットの前に立ち、兵士達からリーズレットを庇っている

エツケハルト「女王様！何をなさるのですか。そやつは危険です！」

シャルル「皆さん聞いてください。確かに、クレイモランを氷漬けにした彼女の行いは、決して許されるものではありません。

でも、私が本の中に閉じ込められている間、彼女は女王の重責に押

し潰されそうな私の相談に乗り、悩みを聞いてくれたのです。

彼女の明るい言葉を聞きたびに、父を亡くした悲しみは和らぎ、女王という責務に対しても、再び向き合っていける気がしました。

お願いします。もう彼女に悪さが出来るだけの魔力は残っていません。命だけは助けてあげてください」

シャルルは頭を下げて懇願している

リーズレット「ちよつとあんた……」

ベロニカ「エツケハルトさん。女王様がここまで言っているんだし、助けてあげてもいいんじゃない？」

エツケハルト「うむ。シャルル様はこの国の王。その王が決めた事ならば、臣下は喜んで従いましょう」

リーズレット「ふん、お人好しな娘ね」

ロウ「リーズレットよ、なぜクレイモランを氷漬けにしたのじゃ？」

リーズレット「それは、あの美しいカオをしたあの方が助けてくれたからよ。本の中にいた私は退屈だね。」

でも3ヶ月前にそのお方に、本から出してやろう。その代わりに、私

のいう事を聞くんだけ、と言われてね。それが、クレイモランを氷漬けにすれば私と同じペンダントをつけた男が来る。その男、英雄グレイグを倒せて事だったの」

ロウ「グレイグと同じペンダントをした男か。その男の名はなんという?」

リーズレット「さあ?名前までは知らないわよ。封印を解いてくれた後、すぐにどこかに行ってしまったから。でも、とにかくいい男だったわね」

シャルル「皆さん本当にありがとうございます。このブルーオーブを差し上げます」

イレブンはブルーオーブをてにいれた

ベロニカ「でも、国の宝なんですよ?貰っちゃっていいの?」

シャルル「いいんです。クレイモランの民こそがこの国の宝。あなた方が宝を救ってくれましたから」

ベロニカ「そう。じゃあ貰っていくわね。プレツシャーに負けちゃダメよ」

リーズレット「心配しないでいいわよ。これからは私が付き人とし

て、シャルルを守ってあげるわ」

43. 温泉

この後の展開に大事なオリジナル展開を挟みます。読んでいただけると、今後わかりやすく読めると思います。

クレイモラン城門前

先に待っていたラース達と合流した

ラース「お？ブルーオーブは手に入れられたのか？」

ベロニカ「もつちろん！ラースの機転もすごかったわね。あの発光虫って何なの？」

ラース「ああ、あれは一度どこかにくつつくとしばらくの間そこで光り続ける虫でな。一匹だとそんなに光らないが、何匹か集まればランプ代わりになってな。俺らの村ではよく使っていたんだ。」

そう言えば、さつき街の人と話してた時に氷漬けになったのを助けてくれたお礼として、ホムラの里の旅館と温泉のチケットを貰ったんだ。しかも団体の方向けだってよ」

ラースはチケットを皆に見せる

カミュ「おいおい。折角オーブも全部揃ったんだし、先を急いだが……」

ベロニカ「最高じゃない！今回ずっと寒い思いしてたのよ」

カミュ「マジか……」

シルビア「仕方ない事だったけど、キャンプ続きでちゃんとしたお風呂にも入れてなかったわね。お肌が荒れちゃうわ」

セーニヤ「命の大樹に向かう前に、体を清めていきましょう」

マルティナ「暖かい所が恋しくなったのよ。丁度いいわ」

女性達からは賛同の意見が止まらない

ベロニカ「さあ、ホムラの里へ向かいましょう。イレブン！」

イレブン「わかったよ、ベロニカ。引っ張らないで、ルーラ！」

ホムラの里

ベロニカ「やっぱりこっちは暖かいわね」

ラーズ「カミュもどうやらクレイモランから離れたかったみたいだからな」

ラーズはカミュをチラリと見てそう言った

カミュ「…………… なんかラースって色々計算してこういう事してん
じゃねえか？」

ロウ「ふおお、まあラースも一人旅は長かったようじゃかな。
皆が少しでも休めるようにやっておるのじやろう。悪い事ではある
まい。わしらもこういう時はゆっくり羽をのばそう」

イレブン「そうだね、おじいちゃん。ねえ、カミュ。前にここにき
た時はゆっくりできなかったから、温泉から出たら一緒にゆっくりし
て休憩しようよ」

カミュ「仕方ねえな、そうするか」

旅館

イレブン「皆、人数を言ったら2人部屋が4つか、3人部屋が2つ
と2人部屋が1つのどっちかなんだって。どっちがいい？」

二人「！」

ベロニカとシルビアはそれを聞いて顔を合わせた

ラース「俺は何でも構わないぞ」

カミュ「俺も同じくだ」

シルビア「イレブンちゃん、アタシ今日丁度ベロニカちゃんとセーニヤちゃんとお話ししたい事があったのよ。だから3人部屋の方でもいいかしら?」

セーニヤ「いいのですか!? 私もシルビア様と沢山お話ししたいですわ!」

ロウ「それならイレブンにカミュや、ちよつと今夜わしのお願いを聞いてはくれんかのう」

イレブン「わかったよ、おじいちゃん」

カミュ「?まあ、かまわねえけどな」

ベロニカ「じゃあこれで部屋割りは決まったわね。マルティナさん、ラースと一緒にだけどいいわよね?」

マルティナ「え、ええ。私は大丈夫よ」

イレブン「じゃあ鍵の方貰ってくるね」

ベロニカ「やったわね、シルビアさん」

シルビア「(ええ、また少し前進させてあげましょう)」

44. 温泉2

部屋内

ラース「（またあの二人か、まあ構わないが）お、マルティナ、どうやら浴衣があるみたいだぜ。着たことはあるか？」

ラースはクローゼットから浴衣を取り出した

マルティナ「いや、私はないわね。こんな大きな布をどうやって着るの？」

ラース「これはな、この帯を腰のところで結んで着るんだ。着方が少し難しいから、俺が一回着てみるな。見ていてくれ」

マルティナ「ええ、ありがとうラース」

バサツ

ラースは着ていたコートを脱いでその下の服も脱ぎ始めた

マルティナ「え!?!ど、どうして服を脱ぐの!?!」

ラース「いや、これは下には下着以外着ないで着るものなんだ。流石に今は全部脱がないけどな、少し上着をとって楽になるだけだ。驚かせてすまないな」

ラースは黒いシャツ一枚となっている

マルティナ「あ、ああ、なるほどね。そうだったの」

ラーズ「それでまずは腕を通して……ってマルティナ、俺のもつと近くにこないと見えづらいぞ。背中の方にこいよ」

マルティナ「わ、わかったわ(そ、そうよ、これは着方を教わるだけ、大丈夫)」

マルティナは少し顔を赤らめながらラーズの側に寄った

ラーズ「その後ここを……」

ラーズはそのまま浴衣の着方を教えている

マルティナ「(こうやってよくみると、やっぱり私よりも筋肉がすごいよね。よく筋トレもしてるし)」

マルティナはラーズを観察するように見ていた

服の上からでもわかる太い腕や胸、腹など動かたびに筋肉が伸び縮みしている。マルティナも充分女性にしてはしなやかな筋肉がある方だが、やはりラーズの方が筋肉質である

ラーズ「そして、この帯をまたこつちへ……」

マルティナ「(あら。ラーズっていい匂いするのね。顔もよく見ると結構整ってるし強いし、頼りになるし、欲張りすぎないかしら)」

ラース「これで終わりだ。わかったか、マルティナ？つて近っ！しかも俺の顔見てたのか？なんか付いてたか？そもそも、ちゃんと聞いてたのか？」

ラースは想像よりもマルティナが近くにいた事に気付き、驚いている

マルティナ「はっ！いえ、ごめんなさい！話は聞いてたわ、意外と結び方以外は簡単なのね、ありがとう」

マルティナは考えをやめ、急いでラースから距離を取った

ラース「…そうか。それならいいが、マルティナみたいに綺麗な女の人の顔が近くにあるとドキッとするからやめてくれよな」

マルティナ「え？…そ、そう？ありがとう」

ラース「あ、ああ…」

マルティナ「…」

二人は赤面しながら沈黙が続く

ラース「…へ、変な空気になっちまったな。そういえば、浴衣には色んな種類があったぞ。ちよつと待ってる…よし、マルティナにはこれだな！」

それは紺色に金色の刺繍が入った浴衣だった

マルティナ「私にこんな綺麗な似合うかしら」

ラース「それは絶対大丈夫だ！マルティナなら必ず似合うからな」

ラースは笑顔で自信満々に言った

マルティナ「そうかしら？ありがとう。ラースのはどんなやつなの？」

ラース「俺のは適当でいいだろ」

マルティナ「！ダメよ、色々あるんでしょ。ラースに似合うのもあるわよ……ほら、これとか！」

それは紺色に赤い刺繍が入った浴衣だった

ラース「……これ俺に似合うかな。まあ、折角マルティナが選んでくれたしそうするか」

マルティナ「そういえば、ラースはホムラの里に詳しいいわよね。村の近くでもないのに、料理だったり着物だったりよく知ってるわね」

ラース「ああ、俺は初めてホムラの里にきた時、ここがとても居心

地がよくてな。温泉は気持ちいいし、食事も美味しい、見た目も綺麗だし、俺には最高だな。ここが気に入ったんだ。

だから、一人で旅をしていた時もわりと頻繁に通っていたんだ。それでここの文化や料理とかに詳しいんだ」

マルティナ「たしかに、キャンプとかでラースがよく作ってくれるホムラの料理も美味しいものね」

ラース「何だか照れるな。それにこの話をしたら温泉に入りたくなってきたな。よし！それじゃあホムラに来た醍醐味の温泉に入りに行くか！」

マルティナ「そうね。私も楽しみだわ」

45. 温泉3

男湯

ロウ「ほっほう！これはまた凄いとこじやのう」

温泉は周りにいくつもあり、たくさん種類があるのが見えた。泡が出ている温泉やハーブの湯なども見える。奥には大きな露天風呂もあるようだ。

シルビア「色んなお湯があるわね！楽しみだわ！」

カミュ「旅館の部屋もかなり立派だったよな。ラースが貰ったやつかなりいいチケットだったんだな」

ラース「お！カミュにもわかったか、あのチケットの凄さが。だから俺は皆誘ったんだ。こんな所、いつ行けるかわかんないからな」

カミュ「……おい、シルビアのおっさんとラースはあんまこっちくん」

カミュはシルビアとラースから距離を取った

シルビア「ちよつとどうしてよ。カミュちゃんのいけず」

ラース「……ホー、なるほどな」ニヤニヤ

シルビアは口を尖らせ、ラースは気づいたようにニヤニヤしながらカミュに近づく

カミュ「ラース、うるせえ、こつちくん。そのガタイで近寄られると暑苦しいんだよ」

ラース「そんな事言っつて、本当は身ちよ」

バキッ！

ラース「いて！」

カミュはラースの顔面を殴った

カミュ「うるせえつっつてんだろ！ぶつとばすぞ！・テムエ！」

その時、壁越しに声が聞こえてきた

ベロニカ「ちよつと、カミュ！騒がしいわよ！広くてはしゃぐのはわかるけど、程々にしなさい！」

カミュ「ハア？何言っつてんだか。はしゃいでたのはどうせ自分だろ！お子さまはひろーい場所がお好みですからね」

ベロニカ「何言っつてんのよ！私は静かに楽しんでたわよ！騒がしくしたのはそつちじゃない！」

マルティナ「まあまあ、ベロニカ。落ち着いて、ほら今度はあっちの方に行ってみましょう」

ロウ「……この壁の反対側は女風呂なのか」

イレブン「?おじいちゃん、どこに行くの?」

ロウ「おお、イレブンよ。お主もくるのじゃ。実は、この温泉にはお宝があつてのう。それを見つけようと思うんじゃ」

イレブン「え!?お宝!?面白そう!行く行く」

イレブンは喜び立ち上がるが、カミュに引き止められる

カミュ「おい、イレブン。やめておけ、そのじいさんの言っている事は嘘だ。地獄を見る事になるぞ」

イレブン「え、嘘なの、おじいちゃん?……行っちゃった」

露天風呂

ラース「なあ、じいさん。本当に覗く気か?」

ロウ「おお、ラースよ。この先には男のロマンが広がっておるのじゃ。お主も……」

ゴンツ！ドサ

ロウは倒れた

ラーズ「まったく。王の威厳はどこへやらだな」

シルビア「あら、ラーズちゃん。あなたも止める側なのね。意外だわ。それとも、マルティナちゃんを見られたくなかったのかしら？」

ラーズ「……何を言っているのか、さっぱりだな。大体、ベロニカもシルビアも俺とマルティナの事を何だと思ってやがる」

シルビア「うふふ、ごめんなさいね。でもねラーズちゃん、私達はこの後命の大樹に行って、魔王ちゃんからこの世界を守れたら、こんな風に一緒にいる事は難しくなると思うのよ。」

特にマルティナちゃんは、お姫様に戻っちゃうからなおさらだわ。だからもしあなたが伝えたい思いがあるなら、怖がらないで早いうちに伝えた方がいいと思うわ。自分の気持ちに素直になっ

ラーズ「……（そういえばセレン様も同じ事を）」

シルビア「もう2人でゆつくりできる機会も少ないわ。お節介かもしれないけど、アタシ達はあなた達のこと応援してるのよ」

ラース「………… ハア、本当お節介がすぎるぜ。だが、ありがとな。シルビアの言う通りだ。俺だって、怖がって伝えないまま後悔はしたくない」

ラースは少し考えた後、決意したような目が変わった

シルビア「うふふ、どういたしまして。頑張ってね、ラースちゃん」

その後

中ではイレブンとカミュとロウが同じ温泉に入っていた

ロウ「イタタ、まさかラースにまで止められてしまうとは。老体にげんこつなど手荒すぎんかのう」

イレブン「おじいちゃん、大丈夫？頭にたんこぶできてるよ」

カミュ「ほつとけよ、イレブン。じいさんが悪いんだからな。そういや俺達に何の用事があるんだ？」

ロウ「なに大した事じゃないんだが、孫とチェスをやってみたくてのう。わしはけっこう好きなんじゃが、ラースとシルビア以外みんなチェスを知らなくてのう。ラースが、カミュなら知ってるはずだと言っつてそれで声をかけたのじゃ」

カミュ「チェスカ。たしかに知ってるが、ルールくらいしか俺も知

らないぜ？」

イレブン「カミュ、おじいちゃん、チェスって何？僕にも教えて」

カミュ「部屋に戻ったらじいさんと一緒に教えてやるよ」

ロウ「ふおっふおっ、楽しみじゃのう」

46. 温泉4

旅館休憩所

ラースは先程マルティナがくれた浴衣を着ていた

シルビア「あらラースちゃん、その浴衣とっても似合うわよ。あなたにピッタリね」

ラース「お、そうか？よかった。似合うか不安だったんだがな」

シルビア「ふふ、もしかしてマルティナちゃんが選んでくれたのかしら？」

ラース「あ、ああ、そうだ」

シルビア「やだ！当たっちゃったわ！という事は、マルティナちゃんの浴衣はラースちゃんが選んだのね。絶対見に行かなきゃ」

シルビアは驚きながらも喜んでいる様子で女風呂の方へと向かっていった

ラース「……シルビアには敵わねえな」

隣からは紺の浴衣を着たカミュが話しかけてきた

カミュ「あのおっさんに勝とうなんて難しいだろ」

ラース「まあ、そうだよな。お、カミュも浴衣着たのか。いいねえ、顔がいい男は何でも着こなせて」

カミュ「茶化すのはよしてくれよ」

ラース「はは、悪いな。お？もしかしてあそこにあるのは……」
しばらくして

ベロニカ「はあー、最高だったわ」

セーニャ「お肌もしつとりしてますわ」

マルティナ「ふふ、ラースに後でお礼いしましょう」

シルビア「3人とも、お風呂すごく気持ちよくなかった？」

ベロニカ「あ、シルビアさん。ええ、とってもよかったわ」

シルビア「色んな種類もあったし、アタシも気持ちよかったわ。そして、マルティナちゃん。その浴衣とっても似合ってるわ。流石ラースちゃんが選んだだけはあるわね」

マルティナ「ありがとう。どうして知っているの?」

シルビア「ラースちゃんが教えてくれたのよ」

ベロニカ「へー、ラースもいいセンスしてるじゃない。あれ?もしかしてラースの浴衣はマルティナさんが?」

マルティナ「ええ、これならラースに似合うと思ったものを... 何だか言ってるて恥ずかしいわ」

シルビア「大丈夫よ、マルティナちゃん。ラースちゃんもバツチリ似合ってたわ」

セーニヤ「あら? お姉様、皆様があちらで何かしていらっしやいますわ」

旅館前

そこではロウ達が棒のような物に火をつけていた

ベロニカ「ちよっと、何やってるのよ」

ロウ「おお、ベロニカ達も来たかの。これは花火という物じゃ。火

を棒の先端に付けると、このように火の花が咲くらしい。ホムラらしい風情ある物じゃな。皆もやってみるといい」

ロウの持っている花火からは黄色い火花が出ている

セーニヤ「お姉様、見てください！これ、変わった色になりますわ」

カミュ「お、セーニヤ達も来たな。綺麗だよな、この花火つてやつは。ラースが見つけてくれたんだ。何やら、団体の人にはプレゼントだったらしいぞ」

イレブン「カミュ！見て！二刀流！」

イレブンは花火を両手に持ち少し振り回している

カミュ「おいおい、イレブン。危ねえからあまり振り回すなよ」

シルビア「これはステキじゃない！今度のサーカスのネタになりそうね」

マルティナ「あら？ラースが見当たらないわね。どこにいるのかしら」

ロウ「先程、少し離れたところに向かっていくのをみたのう。あっちの方じゃ」

マルティナ「ありがとうございます、ロウ様」

マルティナはロウの指した方向へと向かっていった

シルビア「(ベロニカちゃん!)」

ベロニカ「わかってるわ、シルビアさん。追いかけてしょう」

47. 温泉5

旅館の離れ

ラースは一人でベンチに座っていた

マルティナ「結構離れた所に行ったのね」

ラース「ああ、マルティナか。少しのぼせてな。はは、別に羽目を外した訳じゃないんだがな」

マルティナ「そうだったの、席を外した方がいいかしら？」

ラース「いや、大丈夫だ。なあ、マルティナ。朝の日課になった模擬練習、すまないが無くしてもいいか？」

マルティナ「いいけど、どうしたの？もしかして相手にならないかしら？」

ラース「まさか。そんな事ない。だけどマルティナは、もう俺の戦い方をマスターしつつあるだろ。俺と同じタイミングでできるレベルになった筈だ。それに、この前古代図書館に行った時に試してみた魔法もあってな。少し勉強しなくちゃいけないんだ」

マルティナ「確かにそれなら時間がほしいものね、わかったわ。ま

たろう様と一緒に練習するわ」

ラーズ「勝手ですまないな、ありがとう……。

なあ、マルティナ。実は一つ花火を持つてきてるんだ。一緒にやろうぜ」

ラーズは自分の横に置いてあつた花火をマルティナに見せた

マルティナ「ええ、いいわよ…… 随分細かい花火ね。どういう物なの？」

ラーズ「これは線香花火と言ってな。物凄く小さな花火でよ、数秒で終わってしまう。最初の小さな火花はどんどん大きくなり、激しくなつて、また萎んで終わるんだ。俺はこれが一番好きなんだ。この花火を見ていると、まるで人の一生みたいだと…… 思うんだ」

ラーズは火をつけながら説明した。その姿は何か考えているような顔をしている

マルティナもラーズに続き、花火に火をつける

マルティナ「…… 本当ね。短い時間にだんだん激しくなつて、そして小さくなつていく。何だかとても儂いわね。私も気に入ったわ」

ラーズ「希少品だからな。あつという間に無くなつてしまうんだ。ほら、最後の一本だ」

マルティナ「ありがとう。長く持つといいんだけど……あつ、落ちちやったわ、残念ね……？
どうしたの？ラース」

ラース「……なあ、マルティナ。聞いてくれ。大事な話があるんだ」

マルティナ「ええ、どうしたの？急に」

ラース「言え！言うんだ、俺！碎けてもいい。後悔なら、後でいくらでもやってやる！今伝えないで、いつ伝えるんだ!!」

ラースは目を強く瞑ったり、深呼吸をしたりしている

マルティナ「ラース？大丈夫？」

ラース「……アナタが好きです」

マルティナ「え……………」

ラーズ「アナタの飾らない、けどはつきりと持つ意思と心の強さに…… 惹かれました。アナタが姫だろうと、次期デルカダール王女だろうと、俺はアナタが好きです。どうか、俺と付き合ってください！」

ラーズはマルティナに頭を下げた

マルティナ「…… ほ、ほんとに？ だって…… 私…… 女なのに男より強いし、ガサツだし……」

ラーズ「別に強さや性格なんて関係ない！ それに、マルティナは自分が思ってるよりもかわいくて、美しいんだぞ…… つてマルティナ、泣いてる！ すまない、嫌だったか」

ラーズはマルティナの顔を見ると、マルティナの目から涙が溢れて

いた

マルティナ「ぐすつ、ううん……違うの。ぐすつ、でも、でも私は、イレブンを助けられなかった16年前から、自分は幸せになつてはいけないんだと思つてた。そんな事していいはずないつて。でも、今の私は………幸せになりたいと思つて………こんなのいいのかなつて」

48. 温泉6

ラーズ「何言ってるんだ、マルティナ!!そんなの!いいに決まってるだろ!!マルティナ、そんな風に思っちゃダメだ。」

それに、そんな風に思ってたなんてイレブンが知ったら絶対イレブンは悲しむさ。イレブンは皆に、もちろんマルティナにだって幸せに生きてほしいだろうし、笑っていてほしいに決まってる!そういうやつだろ、あいつは。

俺だって、そう思ってる。マルティナにずっと笑っていてほしい。幸せでいてほしい。できれば、俺がずっとそうさせてあげたいけど、俺じゃ無理だったとしても、その思いは変わらない!」

ラーズはマルティナの手を握りながら優しく、でも力強く語りかけた

マルティナ「ぐすつ…… ラーズ…… ありがとう…… どう」

ラーズ「泣かないでくれ、マルティナ。君は泣き顔よりも、笑顔がよく似合う」

ラーズはマルティナの目についた涙を指で拭いた

マルティナ「ありがとう。少し落ち着いてきたわ…… 私も…… 好きです。ラーズの事が、好き」

マルティナはラーズの目を見ながらそう伝えた

ラーズ「……な、え？それは……本当か？マルティナ」

マルティナ「ふふっ、こんな嘘なんてつかないわよ。ラーズ、私を幸せにしてください。よろしくお願いします」

ラーズ「いよっしやああー！」

ラーズは喜び、飛び上がった

マルティナ「ちよっ、ちよっと！驚いたじゃない」

ラーズ「ははっ！悪かったな。でも、こんなに嬉しい事があるもんか。やった！夢じゃないんだ」

ラーズは喜びのあまりはしゃいでいる

マルティナ「もう、大げさよ。まったく。ふふ」

ラーズ「おっと、それじゃあもう一つ約束しようぜ、マルティナ」

マルティナ「もう一つ？」

ラーズ「俺はずっと君の隣で君を守り続ける。
君がいつまでも幸せで、笑顔でいられるように。」

俺からの約束だ。ずっと側にいるぞ」

マルティナ「ラーズ……………ええ、私もあなたと一緒にいるわ。
これからはずっと一緒よ」

ラーズとマルティナは優しく見つめあった

ラーズ「さて、早速皆に報告だ！行こうぜ！マルティナ！」

ラーズは旅館へと走っていく

マルティナ「え!?!いきなり!?!ラーズ！ちよつと待って！」

走り去っていくラーズの耳は赤くなっていた

旅館

イレブン「え、付き合い始めた!？」

カミュ「やっとくっ付いたのか」

セーニヤ「まあ!素敵ですわ!」

ロウ「ううっ!遂に姫にも春がきたか」

二人「ぐすつ、ぐすつ。よがっだわね、ほんとに」

ベロニカとシルビアは涙を拭いている

マルティナ「どうして2人は泣いてるのよ」

ラーズ「(最初から盗み聞きしてて、最後の方で涙に堪えきれずになくなったもんな。本当なら怒ってやりたいが、まあいいか。めっちゃくちゃ嬉しいしな)」

シルビア「ラーズちゃん、マルティナちゃんの事、幸せにしないとダメなんだからね!」

ベロニカ「そうよ!もしマルティナさんがアンタに泣かされたって知ったら、私がアンタの事焼き尽くすからね!」

ラーズ「はは、それは怖い脅しだな。大丈夫だ、そんなのするわけないだろ。任せておけ！」

ロウ「頼もしいのう、ラーズ。姫を、よろしく頼んだぞ」ペコリ

ロウは微笑みながらラーズへと頭を下げる

ラーズ「！おいおい、じいさん。元とはいえ、王が簡単に頭下げんなよ」

ロウ「いいんじやよ。16年前の悲劇から、姫が自分から幸せになろうとするのはこれが初めてじや。どうか、隣で支えてやってくれ」

ロウはマルティナとラーズを見ながらも一度頭を下げた

マルティナ「…… ロウ様、ありがとうございます」

ロウ「ふおっふおっ、それじゃあ部屋に戻ろうかの」

部屋

マルティナ「何だか一晩でたくさんあったわね」

ラーズ「ああ、まあ何よりも、マルティナと付き合えた事がダントツで大きいけどな」

マルティナ「私も、まさか告白されるなんて思ってたわ。あら？ミサंगाが」

ぷつつ　キラキラキラ

マルティナの手首についていた緑のミサंगाが切れ、緑色に輝きながら落ちてきた

ラース「マジか。これは綺麗だな。どうだ？願いは叶ったか？」

マルティナ「……ええ。ラースと付き合えますようにって願いがね」

ラース「……もつと早くに勇気出せばよかったか」

マルティナ「ふふ、私は叶ったんだから構わないわ」

ラース「はは！これからもよろしくな、マルティナ」

マルティナ「こちらこそよろしくね、ラース」

49. 聖地ラムダへ

次の日

ロウ「それでは、ここから命の大樹に向かうとするかの」

セーニヤ「始祖の森に行くには、私達の故郷のラムダから行くことができませんわ。ラムダはシケスビア雪原の横にある、氷獄の湖を奥に行った先にあるゼーランダ山の頂上です」

ベロニカ「ふう、私達もやっと故郷に帰れるわ」

シルビア「山登りつて事ね。大変かもしれないし、一日くらい山のどこかでキャンプした方がいいかもしれないわね」

イレブン「わかった。それじゃあその近くのキャンプ場までルーラで行こう。ルーラ！」

次の日、聖地ラムダ

そこは綺麗な石で出来た大きな門があり、そこからとても立派な神殿が目に移る。全ての建物が白い綺麗な石で出来ており統一感がある。陽の光に照らされ、全体が輝いている

マルティナ「何だか今までとは空気が違うわね。険しい山道を抜けた先に、こんな神秘的な場所があるなんて」

ラース「そうだな。里全体が神殿のようになってるし綺麗だな。神聖な雰囲気だぜ」

ベロニカ「静かすぎて退屈な場所だけど、故郷を褒められると何だか照れるわね」

セーニヤ「行きましょう、イレブン様。勇者様がいらしたと聞けば、皆さん喜びますわ」

広場

広場には人が集まっており、真ん中には老人が赤ん坊を抱えて、何かを喋っている

??? 「世界中の命を束ね、見守りし命の大樹よ。今日、このラムダの地にまた一つ、新たな命が生まれました。」

かつて古き葉として散った命は、こうして新たな葉として芽吹き、また違う一生を歩んでいくのでしょうか。我らの母、命の大樹よ。聖地ラムダのいとけない若葉に、どうか祝福を授けたまえ」

祈りを済ませた老人は振り返ると、ベロニカとセーニヤに気付いたか！
??? 「……むっ？おお！双賢の姉妹ベロニカとセーニヤではないか！」

セーニヤ「長老様、お久しぶりですわ。皆さまお変わりないようで

何よりです」

長老「ぬ？ベロニカ。そなた、しばらく見ない間にずいぶん背が縮んでしまったようじゃな」

ベロニカ「これにはちよつと色々あつてね。それよりほら、私達言いつけ通り、勇者様を見つけてきたわよ！」

長老は奥にいるイレブンを見る

長老「おお！赤子に祝福を授ける日に勇者様がいらつしやるとは。なんと今日はめでたき日よ。私は長老ファナード。こうしてお会いできる時を、何年もの間お待ちしております」

セーニヤ「長老様、私達世界中を旅して、勇者様の命を狙う邪悪な者の存在をついに突きとめたのです」

今までの事を長老に話した

長老「……なるほど。ウルノーガなる者がデルカダール王国の誰かに化け、勇者様を亡き者にしようと」

セーニヤ「私達はウルノーガを倒すため、闇の力を払う何かを眠っているという、命の大樹の所へ向かうことになりました」

ベロニカ「命の大樹には、始祖の森の頂上にある祭壇に6つのオー

ブを捧げれば行けるらしいわ」

長老「私はかつてベロニカとセーニヤが勇者様とともに命の大樹を目指し、天高い山を登っていく夢を見ました。あの夢はきつと大樹の神託。そう思い、ベロニカとセーニヤの二人を勇者様のもとへ遣わしたのですが、これで全て明らかになりました。

あの夢は、勇者様が始祖の森の頂上にある祭壇へ向かう光景を示していたでしょう。始祖の森へ続く道はこの先に見える大聖堂の奥にあります。それではこちらへついてきてください」

50. 始祖の森と夜

大聖堂

中には何枚もの絵が飾られていた

マルティナ「なんて綺麗な絵。この絵は一体何を描いたものなのかしら」

長老「こちらの絵の数々は、ラムダの地に伝わる神話の一節を表したものです。

勇者とは、世界に災厄が訪れる時大樹に選ばれて生まれてくる存在

この世界にはじめて勇者という存在が降臨されたのは、はるか古の時代のことです

ロトゼタシアの全ての命の源は命の大樹。邪悪の神はその大樹の中に眠る生命力の根源、大樹の魂を奪おうとしました。

そんな時代に命の大樹に選ばれ生まれたのが、イレブン様と同じ痣を携えた伝説の勇者ローシユ様です。

そして、勇者ローシユ様とともに戦ったお仲間の一人、賢者セニカ様

そのセニカ様の生まれ変わりと言われているのが、そちらのベロニカとセーニヤなのです。

ウルノーガ。邪神亡きこの時代に、イレブン様がなぜ勇者として生

を授かったのか。皆様の話を聞いて全て繋がりました。どうか、ウルノーガなる者を倒し、世界の未来をお守りくださいませ」

イレブン「はい！」

始祖の森

ラース「ここが始祖の森か。見たことない植物がいっぱい生えてるな」

森は様々な植物や木々が生い茂っている。不思議な色の葉や花、人が余裕で通れるほどの倒木など自然に出来た迷路のようだ

カミュ「魔物も中々厄介なのが多そうだ。気をつけて登っていくぞ」

夕方

ロウ「ふう、ふう。流石にこの年で山登りは足腰にこたえるのう」

ロウはかなりバテている様子だ

ラース「じいさん、つらそうだな。だが、山頂までもう少しかかるな」

シルビア「今は大樹ちゃんに会う大事な時だし、ここでしつかりと休んでいきましょう」

夜、キャンプ場

ロウはラースにマッサージしてもらっていた

ロウ「はあ、ありがとうのう、ラース。だが、もう少し弱くしてもらってもいいかの」

ラース「おう、これくらいか？他に痛いところあったら言えよ」

ロウ「それくらいで大丈夫じゃ。肩のほうも頼もうかのう」

他の仲間達は火の回りで喋っていた

ベロニカ「いよいよ明日は命の大樹のもとへ向かうのね。なんだか緊張してきたわ。

……ねえ、セーニヤ。あの曲を聞かせてよ。あなたが子どもの頃からよく弾いていた、私達の故郷に伝わるあの曲を」

♪

セーニヤの豎琴が静かな森に響いていく

シルビア「大樹って夜はこんな幻想的に見えるのね。アタシ達の命も、あの葉の一枚なのかと思うと、何だか不思議な気分になってくるわ」

マルティナ「……………」

マルティナは少し俯いている

ラーズ「マルティナ、どうした？暗い顔して」

マルティナ「今、デルカダール王国にいるウルノーガによって、お父様はおかしくなっている。でも、私にとって昔のお父様は常に優しい人だったわ。そのお父様を疑うことが……私にはどうしてもできなくて」

イレブン「マルティナ……」

ラーズ「……俺は、そのままでもいいと思うぞ。マルティナにとって、王様は優しい人だったんだろ？それなら、その王様を信じ続けるんだ。疑うことなんてしなくていい。16年間、与えてくれた優しさを忘れなかったんだしな。」

今、その優しかった王様を知ってる人は少なくなってきたらう。ウルノーガさえ倒せば、必ずマルティナの知ってる優しいお父さんに戻るさ」

ラーズは優しくマルティナに笑いかけた

マルティナ「……ありがとう、ラーズ。そうね、私が信じてあげないとね」

ラーズ「……それにしても、いい曲だ。俺も懐かしい曲を思い出したな。俺も少し故郷の子守唄を吹いてもいいか？」

ロウ「おお、ラースも楽器の心得があったのか」

ラース「いや、俺ができるのはピアノと草笛だけだな。草笛ならここでもできるからな。それじゃあ短い一節だけ吹くな」

♪

ラースの草笛の音が周りに響いていく

セーニヤ「何だか心が温まるような不思議な曲ですわ」

マルティナ「ええ。少し悲しく聞こえたけど、安らぐ気分になれたわ」

ロウ「この曲は初めて聞いたが落ち着くのう。子守唄というのにも納得じゃ」

ラース「俺のおばが草笛の達人でな、俺はよく教えてもらったんだ。まあ、この曲しか俺はやろうとしなかったけどな。」

曲名は無いんだが、俺達は安らぎの唄と呼んでいたな。喧嘩してる子どもがいても、おばがこの曲を吹いてやると必ず落ち着いて謝ったりしていたんだ」

イレブン「僕も草笛ならできるよ。音を教えてよラーズ」

ラーズ「いいぜ。本来はもっと長いが、音は簡単だからな。すぐに見えるぜ」

その時、ベロニカも笛を袋から取り出した

カミュ「お？なんだ、ベロニカ。お前も楽器ができたのか？」

ベロニカ「違うわ。たしかに笛はできるけど、これは長老からもらったお守り。私達の祖先、賢者セニカ様が昔ラムダに残していたものらしいわ」

ラーズ「でも笛ができるならよ、今度4人で一緒に楽器で演奏してみたいな」

セーニヤ「素晴らしい提案ですわ、ラーズ様。今ラーズ様が吹いてくれた安らぎの唄でぜひやりましょう」

シルビア「でもみんな、お喋りはその辺にしておきましょう。夜更かしはレデイの天敵よん」

その夜、キャンプ内にて

セーニヤ「……ねえ、お姉様」

ベロニカ「ん？」

セーニヤ「私とお姉様はきつと、芽吹く時も散る時も同じですよね？」

ベロニカ「セーニヤはいつもグズだからどうかしら……でも、そうだといいわね」

外では

マルティナ「火は消したし、もう大丈夫そうね」

ラーズ「マルティナ」

マルティナ「あら、ラーズ。どうしたの？」

ラーズ「そろそろこの旅も終盤だからな。これだけは言っておこうと思う。俺はマルティナの隣にずっといるが、もし、マルティナを守るために必要なら、この命をかけて守ってみせるからな」

ラーズは真面目な顔をしている

マルティナ「……きゅ、急に何を言いだすのよ、ラーズ。それに、そんな事言わないで。私の隣にはずっとラーズがいてほしいわ。そう約束してくれたじゃない。守ってくれるのは嬉しいけど、私のため

に命なんてかけないでちょうだい」

ラーズ「まあ、皆と協力して2人で助かればいいだけの話だしな。悪い事言つたな。言いたい事はこれだけだ。おやすみ、マルティナ」

マルティナ「ええ、おやすみなさい。ラーズ」

マルティナとラーズはそれぞれのテントに入っっていった

51. 魔王誕生

次の日の朝

イレブン「よし、そろそろ頂上に向けて出発しようか」

ペロニカ「そうね。今日の昼には着くと思うわ」

天空の祭壇

そこには大きな祭壇があり、いろんな色の台座のようなものがある

カミュ「なあ、イレブン。ここって虹色の枝が見せてくれた例の祭壇と同じ場所じゃないか？」

ロウ「間違いあるまい。さあ、イレブンよ。6つのオーブを祭壇に捧げるのじゃ」

イレブンは袋から六つのオーブを取り出した

フワー

6つのオーブが浮きながら光り出し、各色6つの穴に降りていった

ゴゴゴゴゴ

キラーン！

祭壇から命の大樹に向けて七色の橋が出来上がった

セーニャ「これは、虹の橋？なんて眩いのでしょうか」

ベロニカ「いよいよ、命の大樹へのお目通りが叶う時がきたわね。
さあ、イレブン行きましょう」

大樹の神域

大樹の真ん中に来るとそこには世界の命の源、大樹の魂があった。
周りはツルで囲まれており、少し雷を纏っている

マルティナ「これが大樹の魂……なんて大ききなのかしら」

カミュ「世界中の命がパンパンに詰まってるからな。これくらいで
かかないと収まらないんだろ」

シルビア「こうしてそばで見ているとちよつぴり怖いわね。なんだ
か飲み込まれちゃいそう」

シルビアが手をのばす

ビリッ！

シルビア「やあん！なあにこれ！ビリリってはじかれたわ」

ロウ「やはり勇者の紋章を携えた者しか、大樹の魂の中には入れな

いようじやな。そして、あれこそ闇の力を払うもの。おそらく勇者のつるぎであろう」

大樹の魂の中には光り輝く剣が入っている。

ラース「イレブン。大樹の魂の中にある勇者のつるぎを手にいれようぜ」

イレブン「うん、行ってくるよ」

勇者の紋章が光り始める

ツタが勝手に動いてどかされていく

その時

ブウン！

全員の後ろから攻撃がイレブンに向かって飛んできた

イレブン「グッ……」

ドサ！

イレブンは攻撃に当たり気を失ってしまった

全員「!？」

全員が突然の事態に振り返ると

ホメロス「くつくつくつ」

後ろにはホメロスが立っていた

カミュ「てめえ、ホメロス！いつのまについてきやがった！」

ホメロス「まったくニブいネズミどもだ。誰一人として、尾行に気づかぬとは」

ラーズ「テメエは!!!」ダツツ！

ラーズはホメロスに向かい走り始めた

マルティナ「ラーズ！」

ラーズ「ハアアアツ！」

ドガン！

ラーズはホメロスに向かって蹴りをいれる

ブウン！

ギルグードの時のように闇の力がホメロスを覆い、防がれる

ホメロス「おや？貴様はあの時の村にいた男ではないか」

ラーズ「テメエは俺の村を、皆を殺しやがった！許さねえ!!」ガツン！

ラーズは攻撃を続けるが、闇のバリアに防がれる

ホメロス「なるほど、貴様はあの村の生き残りか。どうでもよい。オーブなどのために愚かにもそれを守ろうとした地図にももらぬ小さな村と、そこに住む間抜けな人達がいなくなっただけのことだ」

ラーズ「テメエ!!これ以上俺の村と皆を馬鹿にすんじゃねえ!」

ホメロス「さつきからうるさい男だ」ガシ

ホメロスはラーズを掴み上げた

ラーズ「!?ぐっ……何だ、これ。離せねえ」

ラーズは必死に腕から離れようとするが全く動かない

ホメロス「ふん。すぐに貴様もあの村の皆のもとへ送ってやろう。この力でな、ハアツ！」

ホメロスは握った手に闇の力を込めた

ラーズ「ガアアアアツツツ!!!」

ラーズは全身に痺れるような激しい痛みを襲われた

ホメロス「ふん、他愛もない。消えろ」

ドサア！

ラーズは隅に投げ捨てられた

マルティナ「そんな……ラーズ!？」

マルティナはラーズに向かっていく

ホメロスは黒いオーブをとりだした

ホメロス「ハアツ！」

オーブから出た黒い波が皆を襲う

全員「グアアアツ！」

ドサドサ

全員が黒い波の謎の力により、吹き飛ばされ倒れていく

そこに

グレイグ「ホメロス！」

グレイグがデルカダール王を連れてやってきた

グレイグ「王よ、見ていましたか、今の戦いを。ホメロスの力こそ、闇の力。私達は、ずいぶん大きな勘違いをしていたのかもしれない。ホメロスこそ、この大地に仇をなす者。」

ホメロス！何故に魂を魔に染めた!?もはや弁明などさせぬ！ホメロスよ！王の御前で成敗してくれる！がはっ！」

ドサ

グレイグの後ろから誰かが剣でグレイグの体を刺し、グレイグは倒れる

デルカダール王「今までご苦労だったな、グレイグ」

デルカダール王の持っている剣からグレイグの血が垂れている

グレイグ「王よ……これは一体」

デルカダール王「グオ、オオオオ」

王様の中から何かが出てきた

ドサ

王様は倒れた

出てきたやつは青白い皮膚に黒い数本のツノ、魔道士のような黒いローブ姿に杖を持っている

こいつからは黒い闇のような力、恐ろしいほどの魔力、禍々しい雰囲気が溢れ出ており、ただ者ではない事が予想できる

ウルノーガ「そして、ホメロス。よく勇者達をしとめてくれた。褒めて使わそう」

ホメロス「おお、ありがたきお言葉。我が主君ウルノーガ様」

ロウ「お前がウルノーガ!?まさか王に取り憑いていたとは」

ウルノーガ「イレブンよ。今こそ我が手中に落ちる時、その力頂くぞ。ハアツ！」

ウルノーガが倒れているイレブんに近づき力を込めると、イレブンの体が浮いていき、ウルノーガの魔法がイレブンの体を貫く

イレブン「グハアツ！クツ！」ドサ

イレブンの体からは勇者の紋章を浮かべた何かが浮かび上がり、ウルノーガの手に渡った

イレブンの手にあった勇者の紋章は消え、代わりにウルノーガの左手に勇者の紋章があらわれる

ウルノーガ「ほう、これが勇者の力。これさえあれば……」

ウルノーガの勇者の紋章が光り輝く

その光に反応してツタがどかされていく

全員「!？」

ウルノーガは大樹の中にある勇者の剣を持った

ウルノーガ「そしてこれが勇者のつるぎ……だが、我は魔王なり！ハアツ！」

ウルノーガが力を込めると勇者の剣は形を変え、おぞましい形の大剣へと変わった

セーニヤ「勇者のつるぎが魔王の剣に！」

ウルノーガ「生命の根源 大樹の魂 その力、我がもらった!!」

大樹の魂に魔王の剣を突き刺した

全員「ああっ!!」

大樹の魂は壊れ、バラバラになっていく

魂に詰まっていた光は解き放たれていく

ウルノーガ「ワハハハハハ！この世界は我の物だ！」

立派だった大樹がみるみるうちに枯れ落ちていき、闇が溢れ出していく

ベロニカ「このままだと、世界が………」

2章 崩壊した世界と誓い

52. 崩壊した世界で

海底王国ムウレア

イレブンが目をゆっくりとあけると、見知らぬ空間が広がっていた。周りには魚達が泳いでいる

イレブン「あれ？僕、どうなったんだっけ？魚達？なんか、体にも違和感がある。声も出ないし、鏡で見てみよう」

イレブンは体が動かしにくいと思いながら鏡の前に行った

イレブン「……うわ！僕魚になってる」

イレブンの姿は魚になっており、ぷかぷかとその場に浮いていた

その時、部屋の入り口から来た魚人がイレブンに気がついた

魚人「おお！勇者様が目覚めおった！一時期はエラ、皮膚ともに呼吸停止しておったというのに、これは奇跡じゃ！女王様に報告じやっ！」

魚人は急いで部屋から出ていった

イレブン「あ、ちよつと……。行っちゃった……。僕も何とかお城の方に行こう」

イレブンはヒレを動かす感覚に戸惑いながらもゆっくりと動き始めた

玉座の間

イレブン「ふう、やっとついた。これだけで疲れた感じがする」

イレブンが一息ついていると、突然大きな揺れが襲ってきた

グラグラグラ!

城の上から小さな破片のような物が落ちてくる

セレン「くっ……ハッ！」

セレンが持つ杖が光出し、セレンが力を込めると揺れが止まった

魚人「陛下！」

セレン「大丈夫よ、私にはまだやるべき事がある。

あらおはよう、イレブン。その姿とってもお似合いよ。いつにも増して可愛らしいわ。傷はだいぶ癒えたようですね。王国の民があなたを運んできた時には、難破船のようにボロボロだったんですよ。

魔王は、あなたを死んだ者と思っていました。私は魔王の目を欺くために、あなたを魚の姿に変えていたのです。あれからも数ヶ月になるかしら。

魚になったあなたは今まで眠り続けていたわ。傷が完全に癒えれば、人間の姿に戻れるでしょう。無理は禁物ですよ。

フフツ、これであなとも、釣られるお魚の気持ちかわかるかも……

ですね」

セレンは少し冗談を言いながら優しく微笑んだ

グラグラグラ!

再び強い揺れが襲ってきた

イレブン「セレン様、聞きたい事がたくさんあるんですが」

セレン「あなたが挑んだ戦いのこと、共に戦ったお仲間のこと。私は全てを見ていました。イレブン、全てを受け入れる覚悟ができたら、私に付いてきなさい」

セレンは真剣な表情をした後、玉座の後ろにある扉に泳いでいった
守り人の海

セレン「人間を連れてきたのは何百年ぶりかしら。ここは守り人の海。海底の王たる者だけが入ることを許された海。これは千里の真珠。川や海、一滴の朝露全ての水に魂を乗せて、地上の様子を見る事ができる秘宝です。」

地上にこつそり雨を降らせました。今なら、世界の様子を見る事ができます。さあ、世界はどうなっているのか。覚悟はいいですか?」

イレブン「はい」

セレンが真珠に力を込めると、真珠は青く光りだし、イレブンに映像を見せた

命の大樹は焼け落ちていた。世界は燃えたような跡がいたるところにあり、黒く燃えた岩がたくさん落ちている

セレン「魔王に戦いを挑んだあの日、世界は死んだのです。

熱を帯びた猛烈な爆風が世界を駆け抜け、草木を焼き払い、水を干上がらせた。

空からは燃え盛る大岩が降り注ぎ、山脈を崩し、大地を砕いた。

ウルノーガは多くの命を一瞬にして奪ったのです」

映像は色々移り変わり、たくさんの人達が倒れている場面や小さな女の子が一人で助けを求めている場面などがある

セレン「絶望が新たに生み出すものは悲しみだけ。私は、全てを見ていましたがどうすることもできませんでした。

そんなこの世界でも諦めずに抗おうとする、小さな希望の炎の力を各地で感じます。ですが、その炎も今や消えようとしている。

その炎を灯してあげるのが、あなたの役目。そして、今世界を統べるのは悪しき天空魔城に住む魔王ウルノーガ。魔王は大樹の魂だけではなく、世界全ての命をつみとり悪しき力に変えようとしているのです。あれをござらんさい」

セレンが指す方を見ると、海に大きな魚の魔物やマーマンなどの群れが何かを激しく攻撃していた

セレン「あれは私達海底の民の命を狙う、魔王ウルノーガの手下です。海底王国は私が作った結界で魔王の目を欺き、難を逃れてきました。ですが、それももう限界です。魔王の力は私の力を遥かに凌ぎます。結界はじきに破れ、海底王国は魔物に飲み込まれることでしょう」

イレブン「……………」

海底王国 広場

セレン「不思議な人ですね。あの世界の惨状を目にしても、瞳に浮かぶ光は消えてはいませんね。

勇者イレブンよ、世界に再び光をもたらすために、希望の炎を灯しなさい。希望の炎は、あなたの仲間達と共にある。あなたの仲間達に宿る炎が照らす先に、歩むべき正しい道が示されるでしょう……………くっ！」

パリンツ！

セレンの持つ杖が割れてしまった

それと同時に国を覆っていたバリアも消えてしまった

先程バリアを攻撃していた魔物達が王国に押し寄せてくる

セレン「ウルノーガはせっかちなね。別れの言葉も言わせてくれないなんて。

イレブンよ、前を向きなさい！後ろを振り返ってはなりません。

勇者とは！最後まで……………決して諦めない者のことです!!」

セレンはイレブンに力強く言葉をかけると、イレブンの周りに強い水流を作り出し、遠くへと流した

イレブン「あ、か、体が…… どんどん押し流される！駄目、セレ
ン様!!」

??? 「海底王国の民どもよ、魔王ウルノーガ様のためその命もらいう
ける」

魔物達が国を襲い始め、人魚達は逃げ惑っている

その光景をただ、イレブンはどうしようもなく見ているしかなかっ
た

53. 最後の砦

デルカコスタ地方 船着場

イレブン「ん……。あ、人間に戻ってる。ここは……デルカコスタ？」

イレブンが目を覚ますと、デルカコスタ地方の船着場のベッドにいた

船乗り「おまえさん、お目覚めかい？しかし、朝だっというのに夜みたいに暗いよな」

船乗りがイレブンに気づいて話しかけてきた

イレブン「あの、どうしてこんなに暗いんですか？」

周りは朝なのに暗く、太陽も出ていなかった。空は真夜中のように真っ黒に包まれていた

船乗り「何だい、知らないのか？あれを見ろよ」

船乗りと共に外に出て、船乗りが指差す先にはデルカダール城が見える

そこは前までのような立派な雰囲気はなく、廃墟となったようにロボロで城からは黒い闇が絶え間なく出ている

船乗り「あの不気味な闇は、おっかねえ爆発がおきた日にデルカダールの城から湧いてきたんだってよ。それ以来、闇が空を覆っちまってここに住む俺らはお天道様が見れねえってわけだ」

キイツキイツ!

遠くから魔物の声が聞こえてきた

船乗り「まずい!隠れろ!」

船乗りはイレブンを引っ張ると近くにあった岩に隠れた

ギヤーギヤー

イレブン達の上空を大量の魔物達が飛んでいった

船乗り「ふう、危ねえ危ねえ。やつらは闇と一緒に城から湧いてきた魔物達だ。早く安全な所に逃げた方がいい。

ここから西に行くとイシの大滝がある。その先に最後の砦っていうのがあって、そこではあの英雄が守ってくれているんだ。そこに行くといい」

イレブン「わかりました。ありがとうございます」

イレブン「最後の砦?イシの大滝の近くは、僕の村があった場所なんだけどな、行ってみよう……。みんな大丈夫かな」

イレブンは共にいた仲間達の事を不安に思いながらも、前に進むために魔物だらけとなったデルカコスタ地方を進んでいった

最後の砦 入り口

イレブン「え!？」

イレブンが通ると中からイレブンが見覚えのある大きめの茶色い犬が飛び出してきた

ルキ「ワン!ワンワン!!」

犬はイレブンに喜んでいるようで、激しく尻尾を振っている

イレブン「ルキー!どうしてここに……君がいるってことは、もしかして」

イレブンはルキを追いかけていく

最後の砦

イレブン「これは……僕の村が砦みたいになってる」

かつてのイレブンの故郷だったイシの村の姿は変わり果て、まるで要塞のようになっていた。丈夫な木の柵に大きい門、あちこちには武器やボウガンが用意されている

ルキ「ワンワン!」

ルキの近くにはオレンジのバンダナが特徴的な金髪の女性が立っていた

エマ「ルキッ!どこにいったの?」

イレブン「エマ！」

イレブンはエマの姿を見て安心したような笑顔になった

エマ「えっ！イレブン…… イレブンなのね!!よかった。私、ひどい噂ばかり聞いて…… 本当におかえりなさい！」

私達の村、ずいぶん変わってしまったでしょ？イレブンが旅立ってすぐに、ホメロスという将軍がやってきて、皆殺しだと言ったわ。でも、あの方が命まで奪う必要はない、と止めてくれて私達は生きてたわ。村は焼かれてお城に閉じ込められたけど、あの人には優しくなかったわ。誰も傷つけなかったし。

あ！ごめんなさい。長旅で疲れてるわよね。それに、誰よりもあなたの帰りを待っている人がいるわ。イレブン、私についてきて」

イレブン「うん、ありがとう。エマ」

砦 休息所

ペルラ「さあみんな！チャツチャカ手を動かして！チャンバラは男どもにまかせな！私達の戦場はここだよ！」

そこでは数人の女性達を鼓舞しながら織物をしているイレブンの義母、ペルラがいた

エマ「いたいた！おばさま！大ニュースよ!!」

ペルラ「あら、エマちゃん。どうしたの？」

イレブン 「母さん、ただいま。長い間、心配させてごめん」

ペルラ「あつ…… ああつ！イレブン!!よかった。本当によく無事でいてくれたよ。恐ろしい事ばかりおきて、もしやと思って…… うっ！」

ペルラはイレブンの姿を見ると、持っていた織物を放り投げて駆け寄り抱きしめた。ペルラは涙を流して喜んでいる

少ししてエマとペルラはこれまでの事を話していた

エマ「あの爆発で大勢の人が亡くなったの。次に朝が来なくなつて、恐ろしい魔物が大陸中に溢れかえつたわ。生き残つた人達も、だんだんと生きる力を失っていったの」

ペルラ「そんな時、あの方が私達の前に現れて身分も国も関係なく、困つた人を皆助けてくれた。私達を守りながらこの村に連れてきてくれた。

あの方がいなかったらどうなつてたか。今じゃここは最後の砦なんて呼ばれて、大陸中の人が集まっているんだ。それに、なんとデルカダール王もいらしてるんだよ」

二人「……」

イレブンとエマはその名前を聞いて少し暗い顔をする

ペルラ「そんな顔するもんじゃないさ。村を焼かれた事は、忘れられないさ。

でもね、人を恨んだって仕方ない。まあ今すぐじゃなくても、イレブンは王様に会いに行くべきだよ。おじいちゃんならきつとそう言うさ」

イレブン「…… うん、そうだね。会いに行ってみる。ありがとう、母さん」

54. 英雄グレイグ

王様のいるテント

イレブン「少し緊張するな。でも、前に会った時とは違ってウルノーガは入ってないんだ。大丈夫）失礼します、王様。イレブンです」

イレブンが中に入ると、そこにはウルノーガがいなくなったデルカダール王がいた

デルカダール王は以前の姿と変わらず、鋭い目付きでイレブンを見ると少し驚いたような、されど安堵した顔をした

デルカダール王「おお……生きておったか。わしは長い間、悪い夢を見ておったようだ。そなたが生まれた日からな。」

わしの所業は聞いた。何も思い出せぬが……民にも……そなたにも本当に申し訳ない事をした。……許してくれとは言わん。この業は、民達を守ることで返していくつもりだ。イレブンは、大樹での出来事を覚えておるか？」

イレブン「はい、しっかりと覚えています」

デルカダール王「そうか。わしは何も思い出せぬ。ただ、わしに取り憑いていた何者かが抜けていったような……そして気を失い、氣付いた時にはこの砦に運ばれた後だった。

のう……イレブン、一つだけ聞かせてくれ。

我が娘、マルティナは生きておるか？」

イレブン「はい、一緒に旅をしていました。今も、きっとどこかで生きています」

デルカダール王「そうか」

デルカダール王はそれを聞くと少しだけ安心したように口角を上げた

その時、兵士が入ってきた

兵士「報告いたします！英雄の帰還です。今回も、逃げ遅れた民を救い出したようです」

デルカダール王「さて、我らの英雄がお帰りか。望まぬ事かもしれないが、そなたもあやつを出迎えてやってくれ」

イレブン「わかりました」

二人は同時にテントを出た

最後の砦 入り口

イレブン「…… グレイグ」

入り口からは数人の人達を連れてグレイグがやってきた。その姿はあの日から変わっており、彼を象徴していた黒と金色の線が入った

鎧は着ておらず、盾もなくなっている。

青と水色の市松模様の服に黄色のシャツとズボンという、なんとも言えない服装をしている。また、その顔もあの気迫に満ちた表情はしておらず、どこかやつれたような顔をしている

グレイグ「……………生きていたのか」

グレイグはイレブンを軽く見てそう言った

デルカダール王「よく戻ったな、グレイグ。して、成果は？」

グレイグ「デルカダール城に何やら不穏な動きが……………闇に生じて何かが始まりました。王よ。民達を安全な場所へ。」

皆聞け！じきに魔物どもが来る。戦いに備えよ！かがり火をたけ！」

グレイグは周りの人達に準備をさせている

デルカダール王「悪く思わないでくれ。グレイグほどの男でも、これまでの事を整理できていないのだ。近頃のあやつは、まるでおのれを痛めつけるかのように戦っておる。」

わしには見てられん。これ以上、あやつを一人で戦わせたくないのだ。頼む。そなたの力を貸してやってくれ」

イレブン「わかりました。僕にできる事ならば」

デルカダール王「今夜の戦いを凌げば、わしらに勝機はある。準備を整え、砦の外に向かうのじゃ。頼んだぞ、イレブン」

砦の外

イレブンが支度を終えて向かうと、既に兵士達やグレイグは列を作り待機していた

イレブン「グレイグ！僕も一緒に戦う！みんなを守るよ！」

グレイグ「お前も来たのか」

グレイグ達の前からは魔物の群れが向かってきていた

グレイグ「来るぞ！いけえーっ！」

兵士達「うおおおーっ！」

魔物達「ギイイツツ!!」

兵士達と魔物の群れとの勝負が始まった

大量の人と魔物が武器でぶつかり合う中、イレブンにも魔物がやってくる

イレブン「かえん斬り！」

イレブンは目の前に向かってきた魔物を炎を纏った剣で一瞬で二つにした

ザシユ!

ジユワー

魔物「ギイイ!!」

魔物が煙となって消えた瞬間に目の前から別の魔物が攻撃を仕掛けてきた

イレブン「はやぶさ斬り!」

イレブンは怯む様子もなく、そのまま魔物の懐に入り込み剣を素早く二回強く斬りつける

魔物「ギャ」ジユワー

魔物達「ギャギャア!!」

今度はイレブンの周りから同時に複数の魔物達がやってくる

イレブン「ハッ!」

イレブンは力強く剣を天空に掲げると勇者の力、聖なる雷が剣に落ちる

魔物達「ギイ……」

魔物達もその雷に怯む

イレブン 「ギガスラツシユ！」

イレブンは剣に纏った勇者の雷を魔物ごと横薙ぎに切り裂いた

魔物達 「ギャアアア！」

ジュワー

く
イレブンのギガスラツシユにより次々と魔物が斬り伏せられてい

兵士 「ひい！もうダメだー」

イレブンの後ろで魔物から今にも攻撃を喰らいそうな兵士がいた

魔物 「ギイイ!!」

イレブン 「はやぶさ斬り！」

イレブンは素早くその魔物に走り、背後から力強く二回斬りつけた

魔物 「ギイイイ」

ジュワー

兵士 「助かった、ありがとう！」

イレブン 「グレイグの所に行かなくちゃ！グレイグ！」

イレブンは先頭にいるグレイグを援護しようとグレイグに向かっていく

グレイグ 「!?伏せろ！」

イレブン 「!?」

イレブンは言葉の通りに伏せた

イレブンの後ろからは魔物が斬りかかろうとしていた

魔物 「ギイイ！」

グレイグ 「デヤアアア！」

グレイグが乗っていた馬を走らせ、イレブんに近づくと馬から飛び降りて魔物に大剣で魔物の体を二つにした

ズバン！

ジュワー

イレブン 「ごめん、ありがとう！」

グレイグ 「気を抜くな！」

グレイグとイレブンの周りにはまた大量の魔物が集まってきた

魔物達「ギィィ……」

イレブン「!? 囲まれたか」

グレイグ「次は構う余裕はない、なんとかするんだ。いくぞ!」

イレブンとグレイグは互いに背中合わせとなり、迫り来る大量の魔物達を相手にしていく

イレブン「ハッ! えいつ! てやああ!」

グレイグ「ふん! どりやああ!」

グレイグとイレブンは攻撃を避けながらも反撃をしつかり決め、確実に数を減らしていく

イレブン「はあっ! ……!? なんだ? 魔物が避けていく」

グレイグ「何かくるぞ」

突然魔物達が道を作り出し、そこを大きな鎧をつけた魔物が歩いてきた

魔物「その大剣、その強さ。貴様がグレイグか。魔軍司令様が言う通りだな。馬鹿正直で間抜けなツラよ。貴様をしとめれば、褒美はた

んまりだ。魔軍司令殿は気前がいいぞ。

かかれ、おまえら！グレイグを殺せ！」

周りの魔物達が一斉にグレイグ目掛けて飛びかかった

イレブン「させないよ！ギガスラッシュュ！」

イレブンが飛びかかる魔物達とグレイグの前に割り込み、聖なる雷を纏った剣で群れを全て斬り伏せる

魔物達「ギャアアア!!」

グレイグ「お前！」

イレブン「僕も一緒に戦う。大丈夫、足は引つ張らないようにする」

グレイグ「勝手にしろ」

イレブン「勝手にするよ！ギガスラッシュュ！」

イレブンは再び迫り来る魔物達を斬り伏せていく

その後

グレイグ達の周りの魔物もあらかた片付け終わった頃

魔物「ひけーっ！退却だー！」

「魔物の声により全員引いていく

イレブン「終わったみたいだね」

その時、後ろから兵士が話しかけてきた

兵士「グレイグ様、イレブン殿。王様がお呼びです」

グレイグ「わかった、すぐに行く」

王のテント

デルカダール王「この度の働き、見事であった。よくやった、グレイグ、そしてイレブン。わしはお前達の強さを見て確信した。今こそ、この地に光を取り戻す戦いを仕掛ける時だとな。

魔物の巣窟と化したデルカダール城に潜入し、常闇を生む魔物を打ち倒す。お前達にこの作戦をまかせたい」

グレイグ「!?お言葉ですが、王よ」

グレイグはデルカダール王の発言に眉を上げると、すぐに不満そうな顔をした

デルカダール王「まあ聞け。私とて無策ではない。何か敵に一矢報いる事はできないかと、城を探らせてあったのだ。報告によれば、デルカダールの崖上に地下水路に続く洞窟があるという。

城の中に入るにはこの方法しかない。この鍵で地下水路から城内へ忍び込むのだ。イレブン、そなたに任せよう」

イレブンはデルカダールの鍵を手に入れた

グレイグ「王よ！私は反対です！その間、砦の指揮は誰が取るのです！我らの留守に攻め入れられれば、ここは魔物の餌場と同じですぞ！」

デルカダール王「そこを利用するのだ。魔物がここを攻めている間、城の警備は手薄になろう。その時、城に潜入し魔物を打ち倒すのだ」

グレイグ「しかし、私は！！私は、これ以上民を失うわけにはいかない！！」

グレイグは叫ぶようにデルカダール王に詰め寄るが、デルカダール王は優しくグレイグの肩を叩きながら伝えた

デルカダール王「だからこそ、お主に頼むのだ。お主しかいない。このまま夜が続けば、いずれ人の心は失われよう。なめに案ずるな。

わしはこの数ヶ月で思い知らされた。我が民達は強く、優しさに満ちて、なによりも勇敢だ。一晚だ、一晚守り切れればわしらの勝利だ。砦はわしが守る。そなたらは、我らの希望じゃ」

デルカダール王は運命を託すかのように二人を見ていた

55. 2人の騎士

最後の砦入り口

出発の準備が終わり、村を出ようとしていたイレブんとグレイグに後ろから誰かが追いかけてきた

ペルラ「待つておくれ、イレブン！グレイグ様お願いです。少しだけ、少しだけ息子と話をさせて」

グレイグ「……………手短にな」

イレブン「母さん……………」

ペルラ「行くのね？」

イレブン「うん。僕とグレイグで皆を助けて、また朝を迎えられるようにするんだ。だから、行くよ」

イレブンは真っ直ぐにペルラへと伝えた

ペルラ「何があつても、へこたれるんじゃないよ。グレイグ様と助け合つて、しっかりお役目を果たして来るんだよ。ふう……………母さんも年かねえ。辺りがこう暗いんじゃ、あんたの顔も見えやしない。

……………だからお願いだよ。今度は太陽の下で、あんたの顔をよく見せておくれ」

ペルラは涙ぐみながら、イレブンの手を優しく包みこんだ

イレブン「母さん……。うん、絶対に帰ってくるよ。約束する。だから母さんも皆も、どうか無事でいてね」

ペルラ「グレイグ様、どうか息子をお願いします」

グレイグ「うむ。リタリフォン、ご婦人を砦まで送ってやってくれ」

グレイグの愛馬はペルラへと向かっていった

イレブン「頑張ろう、グレイグ」

グレイグ「勿論だ。母上や砦の皆の事は心配するな。我が王が、約束を違える事は絶対に無い。命を賭して、砦を守ってくださいさるだろう。

我々の役目は、デルカダールの崖上にある地下水道から城に潜入し、魔物を打ち倒すこと。まずは導きの教会まで行こう。そこを拠点として、潜入していくぞ」

イレブン「わかった、行こう！」

導きの教会

森を抜けて、教会があつた場所までやってきた。教会は大岩や焼け

た木々などにより倒壊していた。

イレブン「崖がある場所は僕も知ってる。そこまでは早足で進もう」

グレイグ「ああ、だが周りに気を抜くなよ」

デルカダール 地下水道 前

ギヤアーギイイイ

城から大量の魔物達が飛んでいった

グレイグ「魔物達が砦の方角へ飛んでいく。我々にできるのは、信じることだけだな」

イレブン「地下水道も急いで抜けて、城まで行こう。そこまで行けたらすぐだね」

地下牢獄

魔物が大量に湧くようになった細い一本道を抜けていくと、見覚えのある牢屋に辿り着いた

イレブン「あ！ここは！」

グレイグ「ここは前にお前と盗賊を捕まえていた所だ。ここまで戻ってきたな、城はすぐそこだ」

デルカダール城内

城内は至る所がボロボロになっており、床が崩壊していたり、柱が倒れて通れなくなったりしていた

グレイグ「…… 酷いありさまだな。上にかかる階段まで壊されている。おそらく、この先の玉座の間に常闇を生み出す魔物が潜んでいるのだろう。」

神聖なる玉座を穢すとは許せぬ。何とか上にあがる道を探すぞ」

中庭

そこにある木には大樹の根っこが巻きついていた

イレブン「これは、大樹の根っこ。グレイグ、少し過去を見てみよう」

イレブンが根っこに手をかざすと、二人の頭に映像が流れ込んできた

子グレイグ「こいつ！ホメロス！」

子ホメロス「行くぞっ！やあっ！」

子グレイグ「ハアッ！」

グレイグとホメロスは木刀を交えるが、グレイグが力で押し勝ちホ

メロスはそのまま倒れ込んだ

子ホメロス「ちっ！相変わらずの馬鹿力だな、グレイグ」

グレイグが倒れたホメロスの手を掴んで立ち上がらせた

デルカダール王「ハハハハ、相変わらず元気がいいな。2人とも、挨拶がまだであつただろう。我が娘のマルティナだ」

その時、デルカダール王が赤ん坊のマルティナを抱きながらやってきた

赤ちゃんはデルカダール王の腕の中で安心して眠っている

デルカダール王「お前達2人がこの国の未来を守るのだ。頼んだぞ。グレイグ、ホメロス。お前達にこのペンダントをやろう。これからも励むんだぞ」

デルカダール王は金色のお揃いのペンダントを渡した

二人「はい！」

部屋内

子グレイグ「なあ、ホメロス。お前の知恵と俺の力。二つが合わされば、王国一の騎士になれるぞ。そして、姫様とこの国をお守りするんだ。おいっ！聞いているのか、ホメロス」

子ホメロス「この本を見ろ」

ホメロスは見ていた本をグレイグに見せつける

子グレイグ「なっ、なんだよ」

子ホメロス「王国最強の騎士に与えられるという盾が、王の私室にあるらしい。見てみたくはないか？いずれ、僕達が手にする盾なんだろう？」

ホメロスは最後の部分を少し恥ずかしそうに言った

子グレイグ「へへっ！いいな！」

グレイグは嬉しそうにホメロスの背中を叩いた

子ど　グレイグ「しかし、どうやって見るんだ？王の私室なんて、魔法でも使わないと入れないぞ」

子グレイグ「誰にも言うなよ？俺はこの間、一人のつまみ食い犯を見つけた。誰だったと思う？」

子グレイグ「誰だ？」

子ホメロス「我が王だよ。食器棚の後ろから出てきて、ケーキをパクツとき。あれは王の私室に繋がってるはずだ」

子グレイグ「ハハハハ！そういう事か。近頃、お腹がだらしないうて王妃様に叱られてたもんな」

子ホメロス「今晚、台所裏に集合な」

子グレイグ「おうっ！」

グレイグとホメロスは手を合わせた

映像はここで終わっている

グレイグ「…… そうだ、長らく忘れていた。台所に王の私室へ続く隠し階段がある。しかし、この現象は一体」

イレブン「どうやら勇者の力は取られても過去は見れたみたいだ。これは僕の勇者の力の一つで大樹の根っこから、そこで起こった過去の出来事を見ることができるとだ」

グレイグ「…… 時を超え世界の記憶を知る。そうか、それが大樹へと連なる勇者の力というものか。」

台所は城の北側にある食堂の奥だ。そのの食器棚を調べよう。行くぞ、イレブン」

イレブン「あ、今…… 僕の事をイレブンって……」

食堂裏

イレブン「あ、この柵動くね。この事か」

イレブンは柵を横に押した

隠し階段があらわれた

グレイグ「あの時は俺が衛兵に見つかって、この階段を見つけないとできないかった。王に叱られて城中の鎧を磨かせられた。ホメロスは怒ってな。取っ組み合いの大げんかだ。」

あの頃は悪さばかりして、王を困らせていたものだ。だが、楽しかった。2人でデルカダールの未来を担うのだと、心から信じていた。……イレブン、今までの非礼を詫げる。すまなかった」

グレイグはイレブんに頭を下げた

イレブン「……そんな事ない。確かにグレイグは怖かったけど、あれは仕方ない事だよ。グレイグの良心につけ込んだウルノーガが悪いんだ。グレイグは何も悪くない。迷う必要もないんだよ」

グレイグ「ありがとう、イレブン。そう言ってくれると嬉しい。」

この先に誰が待ち受けていようとも、俺は戦う。もう二度と、俺の剣が道に迷わぬよう力を貸してくれ」

イレブン「うん、グレイグのその力を僕も頼りにしている。行こう」

イレブンとグレイグは互いに見つめ合った後ゆっくりと階段を登っていき、玉座の間に向かっていった

56. 屍騎軍王ゾルデ

玉座の間

玉座にはホメロスが座っていた

パチパチパチ

ホメロスの乾いた拍手の音が鳴り響いている

ホメロス「お元気そうだなにより。我が友、そして哀れな悪魔の子よ」

グレイグ「ホメロス……やはりきさまかつ！デヤアアア！」

グレイグはホメロスに向かって斬りかかった

シュン！

ホメロスはその場から消えた

ホメロス「フフフ、その短気、治した方がいいな。周りが見えていないからお前はいつもから回る」

ホメロスは瞬時にグレイグの後ろへと回った

グレイグ「ハアッ！」

シュン！

再びホメロスの姿は消え、グレイグの横に現れた

グレイグ「なぜ魔王に魂を売った！共にデルカダールを守る……
そう誓ったはずだ！ホメロス！」

ホメロス「なぜ？なぜと問うのか？お前が？私に？ははは。は
はっ……ハハハハハハ」

ホメロスは空を見上げて高らかに笑っている

グレイグ「なにがおかしい」

ホメロス「では私もおまえに問おう」ブンツ！

ホメロスはグレイグに持っていた杖で殴りかかる

キン！

グレイグはそれを防ぐ

ホメロス「なぜ、お前は私の前を歩こうとする？」ブン！

キン！

ホメロス「なぜ、お前ばかりが力を得る？

なぜだっ！グレイグ!!」ブン！

ガキン！

グレイグは攻撃に押されてしまう

グレイグ「ぐぬう！」

イレブン「グレイグ！」

ホメロス「私はもう、お前の後ろは歩かない。愛も、夢も、光もそして友も。この世界では何の意味も持たない。あるべきは力。

世界を統べる闇の力だけ。私の力を認めてくれる、あの方こそが真の王！王の歩みを邪魔する者は、私が許さぬ！ハアツ！」

ホメロスはイレブンに向かって魔法を打った

イレブン「!?」

グレイグはイレブンの前に出て魔法から守った

グレイグ「イレブン！ぐぬう！……くっ！」

故郷を奪われ、民を失い……友は去った。英雄と呼ばれて戦い続けても、俺に守れるものなど、何も無いと思った。だが……まだだ。まだ、俺にも守るべきものがある」

グレイグはゆっくりと立ち上がり、イレブンの方を向いた

グレイグ「イレブン、お前が世界を救う勇者なら……俺は、勇者を守る盾となろう。」

ホメロス！いや、魔王の手の者よ。その命、私がもらいうける」

グレイグは剣を元親友へと向け、宣言した

ホメロス「できるかな？我が友よ」

ホメロスはそれを薄ら笑いしながら見ていた

グレイグ「デヤアアア！」

シュン！

ホメロスは翼を生やした魔物へと姿を変え、空へ飛び立った

ホメロスの胸には光り輝く銀色の宝石が埋め込まれていた

ホメロス「お遊びはここまでだ。グレイグよ、私はお前の先を歩く。お前はここで朽ち果てるのだ！」

バサア！

ホメロスはどこかへ飛び去っていった

グレイグ「……ホメロス」

イレブン「ホメロスの胸にあったもの、まさか……シルバーオーブ？」

その時、玉座からうごめく影が現れる

ゾルデ「シッフ。フッフッフ。」

我は、魔王様の力を受けし六軍王が一人。屍騎軍王ゾルデ。闇を愛し、光を嫌う者。我は思う。そなたらはいやしい光を望む者達。

そしてなにより、哀れな者達。魔王様は闇をお望みだ。私の命尽きるまで、清浄なる常闇は消えん。なれば、この地に光は戻らん。

さあ、汚れた光を癒しましょうぞ」

屍騎軍王ゾルデがあらわれた

イレブン「グレイグ、頑張ろう！はやぶさ斬り！」

イレブンはゾルデに突っ込んでいく

ゾルデ「愚かな」

ゾルデは持っている剣でイレブンに迎え撃つ

グレイグ「スクルト！」

グレイグはイレブンと自身に緑色の魔法陣を描き、二人の皮膚と服を硬化させた

イレブン「はああっ！」

イレブンはゾルデの剣と真っ向勝負を仕掛ける

ゾルデ「無駄だ」

ガキン！ギリギリギリ

イレブン「くっ！」

イレブンが力負けし、どんどん押されていく

グレイグ「イレブン！無茶をするな！」

ゾルデ「いつまで持つかな」

イレブン「ここ!!」

ゾルデ「!?」

イレブンは剣から力を一瞬で抜き、ゾルデの剣の下に滑り込んだ

ゾルデは力をかけたままだったため、前に倒れこむ

イレブン「ギガスラッシュ！」

勇者の雷を纏った剣がゾルデの体を下から上へ切り裂いた

ザグッ!!

ゾルデ「ぬおおお!!」

イレブン「よし！」

イレブンはゾルデから離れる

グレイグ「隙を突くのは素晴らしいが、見ていて心配になる。あまりやるんじゃないぞ」

イレブン「うん、わかってる。でも、最初だからこそ通用しやすい
と思って」

ゾルデ「ぐっ！ソードガード！」

ゾルデは剣を構え、防御の姿勢に移る

ゾルデ「はあっ！」

ゾルデはそのままイレブン達に走り込み、二本の剣を振りかざした

グレイグ「俺に任せろ！ふん！」

ガン！

グレイグがイレブンの前に出て、盾で二本の剣を防いだ

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンがその隙に横に素早く移動し、ゾルデの体に剣を素早く二
回斬りつける

ゾルデ「くっ！」

ゾルデが二人から離れる

グレイグ「てやあ！」

グレイグはその隙を逃さず、ゾルデの元まで飛び跳ねて大剣を叩きつける

ゾルデ「甘い！でやあ！」

ゾルデは剣で横になぎはらい、グレイグを横に大剣ごとふりはらった

グレイグ「ぐっ！」

ゾルデ「ドルクマ！」

ゾルデはそのまま追撃に、グレイグの足下に黒い魔法陣を描き、闇の塊を爆発させた

グレイグ「くっ！」

イレブン「はやぶさ斬り！」

ゾルデがグレイグに向いているうちにイレブンがゾルデの後ろに回り込んでおり、そのまま剣を素早く斬りつけようとする

ゾルデ「わかっておりますぞ！」

イレブン「!?」

ゾルデはいきなり振り向き、そのまま剣をイレブンに振りかぶった
ザクッ!

イレブン「ぐうっ!」

グレイグ「てやあ!」

ゾルデがイレブンを斬りつけた間に、グレイグが再び大剣でゾルデの背中に斬りかかる

ズバツ!

ゾルデ「ぬうう……。厄介な者達よ。だが、我のこの力に平伏せ!」

ゾルデの瞳は怪しい紫の光を放った

ゾルデ「来い!我が影よ!」

ゾルデと全く同じ姿をした影が作り出された

その影も意思があるようで勝手に動いている

二人「!?」

イレブン「あの光!こいつ、パープルオーブの力を使ってくるの!」

影がイレブンに向かっていく

グレイグ「イレブン、隙を見せるな！やられてしまおうぞ！」

イレブン「!!」

影「ぐおお！」

影がイレブンに斬りかかる

ガキン！

イレブンは剣で咄嗟に防いだ

イレブン「そうだった、ごめん、グレイグ！ギガスラッシュユ！」

イレブンは防いだ状態から剣に勇者の雷を纏わせ、反撃に影を切り裂いた

影「ギヤアア……」

グレイグ「イレブン、影はそこまで強くはないぞ！てやあ！」

イレブンの強力な一撃によるよろと下がった影にグレイグがとどめに大剣を振り下ろした

ザグッ！

影は倒れた

ゾルデ「我をお忘れで？ふん！」

ゾルデがイレブンの背後を取っており、イレブンの体に深く剣を突き刺した

ブスツ!!

イレブン「グハア!クツ……」

イレブンの胸から血が流れてくる痛恨の一撃

ゾルデ「ハア!」

ゾルデはそのままイレブンの横から剣をなぎはらう

グレイグ「させん!はあ!」

ガギャギャギャ!キン!

グレイグが間に入り、盾で剣を滑らせながら弾き返した

イレブン「助かった、グレイグ!ベホイム!」

イレブンは即座に自身に緑の魔法陣を描き、強い治癒の力をかけ傷を塞いだ

グレイグ「気にするな!てやあ!」

グレイグはそのままゾルデに斬りかかる

ゾルデ「ドルクマ!」

ゾルデはグレイグの体に黒い魔法陣を描き、闇の塊を爆発させた

グレイグ「!?ぐっ！」

イレブン「ギガスラッシュ！」

イレブンは走りながらゾルデに雷を纏った剣でなぎはらう

ゾルデ「ソードガード！」

ガキン！

ゾルデのガードにより防がれた

イレブン「くっ！もう一回！ギガスラッシュ！」

た
イレブンは即座に反対周りにもう一度雷を纏った剣でなぎはらっ

ザグッ！

ゾルデ「ぬうっ！」

グレイグ「てやあ！」

グレイグが怯んだ隙を逃さず、連続でゾルデに斬りかかる

ゾルデ「くっ！」

ガキン！ガン！キン！

ズバツ！

ゾルデ「ぐう……。はあ！」

ゾルデはグレイグの攻撃に当たるが、ゾルデも剣をなぎはらった
ザク！

グレイグ「ぐっ！」

グレイグも攻撃に当たり、横に軽く飛ばされる

イレブン「はやぶさ斬り！」

グレイグがいなくなった場所からすぐにイレブンが飛び出し、ゾル
デの顔に剣を素早く斬りつける

ザクッ！ザクッ！

ゾルデ「ぬうう……。」

グレイグ「スクルト！」

再びイレブン達の皮膚と服が硬化した

ゾルデ「ドルクマ！」

ゾルデは呪文を唱えたグレイグに向かって黒い魔法陣を描き、闇の
塊を爆発させた

グレイグ「効かんぞ！」

ガン！

グレイグは盾で防ぎきる

イレブン「やあつ！」

イレブンはその間にゾルデに向かっていく

ゾルデ「ふん！」

ゾルデはイレブんに剣で迎え撃ち、今度は剣が当たる瞬間に一瞬で押し返した

イレブン「!？」

ゾルデ「はあ!!」

ズバツ！

イレブンの体に大きく縦に切り傷がつく。そこから血が流れてくる

イレブン「ぐっ………」

イレブンは膝をついた

グレイグ「イレブン！大丈夫か!？」

グレイグがイレブんに駆け寄ろうとする

ゾルデ「させませんぞ！」

ゾルデがグレイグの前に現れ、剣をなぎはらう

グレイグ「くっ！」

グレイグは攻撃を避けるが、イレブンと距離が開いた

イレブン「ハア……………ハア……………ハアアアア!!」

二人「!？」

イレブンは大きな叫び声をあげ、立ち上がった。先程よりも研ぎ澄まされた視線や顔つきとなり、青いオーラをまとっている

グレイグ「ゾーン状態か！」

ゾルデ「なんと」

イレブン「グレイグ、合わせるよ！はやぶさ斬り！」

イレブンは一瞬でゾルデの背中にたどり着いた

ゾルデ「!？」

グレイグ「はああ！」

グレイグも後ろを振り返ったゾルデの隙を逃さず、前から大剣で斬りかかる

ズドン！

イレブンとグレイグの息のあった同時攻撃がゾルデの胴体を切り裂いた

ゾルデ「ぐおおお!!」

ゾルデは苦しそうにしながら、立ち上がろうとしている

グレイグ「まだ立つか」

イレブン「終わりだよ！はあ！」

イレブンはゾルデを上から下へと綺麗に斬った。それがトドメとなり、ゾルデは真つ二つとなった

ゾルデ「おお、私の愛しき闇が……。ああ、汚らわしい光が、あふれて」ジユワー

ゾルデは消え、目に入っていたパープルオーブが落ちた

コトン

イレブンはパープルオーブを取り戻した

イレブン「やつぱりパープルオーブだ。という事は、ホメロスの胸にあったものもシルバーオーブで間違いないはず。オーブは、悪しき者の手に渡ると力を与える……。ラース、忠告してくれたのにごめん。こんな事になって。必ず、全部取り戻すよ」

常闇を生み出す魔物が消えた事により、空を覆っていた闇は全て消え去った。空からは朝方なのか、薄明るい久しぶりの太陽の光が差し

込んでいる

グレイグ「……………」

グレイグは黙ってその場を立ち去っていく

デルカダール王国 入り口

入り口には二頭の馬が待っていた

グレイグ「…………… 流石だな、リタリフォン。きてくれたのか。イレブンの馬もいるようだぞ。常闇は消えた。しかし、砦が心配だ。一刻も早く帰るぞ」

57. 再び歩く

最後の砦

そこはテントは少なくなっており、争った跡があつた。人は見当たらない

グレイグ「誰か…… 誰か!! 生きている者はいないのか! 王よ! どこにおられる!!」

二人で探していると、村の奥から明るい音が聞こえてきた

イレブン「…… この音は?」

いまひびくよろこびの歌

朝が来た 朝が来た

我らを照らす明日への光

大鷲が天を舞い我らをたたえる

山河の水は清く澄み我らを癒すだろう

歌えデルカダールの民よ

強き心の太陽の民よ

歌え 歌え よろこびの歌を

遠くから国の旗を掲げながら高らかに歌う人達が歩いてきた

夜は明け、朝日が周りを照らしている

デルカダール王「グレイグ。よくぞ、よくぞやつてくれた」

デルカダール王はグレイグに優しく微笑みながら肩に手を置いた

グレイグ「は！う、ううっ！」

グレイグはデルカダール王の言葉に感動している

イレブン達は囲まれていたが、それをどかすようにしてある人が突き進んできた

ペルラ「もうどいて！どいておくれよ！イレブン！！今まで薄暗くてよくわからなかったけど、男前になったじゃないか！フフツツ！やっぱりあんたは私の子だ！」

ペルラはイレブンを抱きしめた

デルカダール王「イレブンよ。グレイグと力を合わせ、よくぞ太陽を取り戻してくれた。礼を言おう。しかし、世界は未だ混乱を極めておる。

そなたはこの世界の希望、勇者じゃ！どうかロトゼタシアに光を取り戻してくれ。

グレイグよ、今日まで我らのためよく戦ってくれた。今宵の勝利は、お前の力あってこそそのもの。されば、お前の剣を今こそ世界のために役立てる時じゃ。意味はわかるな？

砦の事は案ずるな。民は強い。そして、わしもな。はっはっはっ！
悩む事はない。お前の心はどうに……： 決まっておるのだろう
？」

グレイグ「王にはお見通しですか。イレブン、我らが勇者よ。この
命、今日からあなたに預けます。何なりと指示をどうぞ」

グレイグはイレブンの前に跪いた

イレブン「違うよ、グレイグ。そんな事しなくていいの。僕や仲間
の皆と一緒に世界を守ろう。ほら、手をとって」

イレブンは笑いながらグレイグに手を差し伸べた

グレイグ「ああ！」

グレイグはそれに笑顔で手を取った

グレイグが仲間に加わった

デルカダール王「皆の者！夜が明けたぞ！我らの勝利だ！」

ワアアアア！

太陽を取り戻した最後の砦の祝宴は一昼夜続き、山間の砦に絶え間
なくよるこびの歌が響いた

そして、夜があけた

次の日、王のテント

イレブンがテントに入ると既にデルカダール王とグレイグが待っていた

デルカダール王「おお、イレブン。昨日はぐっすり眠れたか？それとも、民に眠らせてもらえなかったかな？平和の証だからな、民達も喜んでるんだ。

さて、本題に入るかの。グレイグ、お前に渡すものがある。これじゃ」

デルカダール王はグレイグにある物を差し出した

グレイグ「!?これは、デルカダールの盾！」

デルカダール王「お前は、わしにとって我が子のようなもの。旅立ちにふさわしき身支度を整えるのが親の役目。祝いじゃ、受け取れ」

グレイグ「どうでしょうか」

グレイグは早速構えてみせた

デルカダール王「うむ。よく似合っておるぞ。その盾は世界最高の騎士の証。そなたこそ勇者を守る最強の盾じゃ。よいな？」

グレイグ「ハッ！」

デルカダール王「さて、イレブンよ。道標となる大樹は地に落ち、勇者のつるぎは魔王に奪われたと聞く。しかし、わしはそなたの父ユグノア王からこんな話を聞いたことがある。

北のゼーランダ山と南のドゥーランダ山。その山頂に住まう民達は、なにやら勇者とゆかりのある者達らしい。あの話が本当であるとすれば、そなたは彼らに会うべきであろう。魔王を倒す助けを得られるかもしれない。

ナプガーナ密林を西に抜けると、ソルティアナ海岸に通じる谷がある。その先にある関所を抜ければ、ドゥーランダ山はすぐそこじゃ。我らも預かり知らぬ道ゆえ、何が起こるかわからぬ。心して向かうがよい」

最後の砦　入り口

何人もの村の人々や兵士達がイレブンとグレイグを見届けようと集まっていた

ペルラ「ああ、イレブン。これだけは覚えておいて。世界を救う勇者だろうが何だろうが、あんたはあたしの息子だよ。

ちやつちやと世界を救って、イシの村に帰ってきておくれ。あんたの大好きなシチューを、大鍋いっぱいにつけて、母さんはいつまでも待ってるからね」

ここから少しだけオリジナルです

ナプガーナ密林　キャンプ場

最後の砦を出た際に高く登っていた太陽は既に沈みかかっていた

イレブン「グレイグ、今日はここら辺で休んでおこう。距離はまだあるからしつかり休んでおきたいんだ」

グレイグ「了解した、それでは薪を持ってこよう」

イレブン「お願い、グレイグ」

その夜

夕食も終えて、焚き火の前でイレブンとグレイグは黙り込んでいた

イレブン「……………」

グレイグ「……………」（気まずい、何を話せばいいんだ。今までの事もあつて接し方がわからん、ううむ）

イレブン「グレイグ」

グレイグ「(！) ああ、どうした」

イレブン「母さんやエマをホメロスから、ウルノーガから守ってくれてありがとう。まだ、ちゃんとお礼言えてなかったから。グレイグ

がいなかったらきつと、村の皆は殺されてた。本当にありがとう」

イレブンはグレイグに頭を下げる

グレイグ「感謝されるような事じゃない。たしかにあの時村は焼いてしまったが、罪も無い民達を殺すなど、俺にはできなかつた。……俺は、あの時からホメロスがおかしい事に気づくべきだった」

イレブン「でも、ホメロスも元はそんな酷い人じゃなかつたんだよね？」

グレイグ「当然だ。昔から口は悪かつたが、俺と共に歩んだあいつは人を簡単に殺すようなやつじゃない。ずっと共にいた俺はあいつの優しさを誰よりも知っている。魂を魔王に売る前は、あいつも良き騎士だったのだ」

イレブン「……それを僕の仲間のラーズって人にも、会つたら聞かせてあげて。ラーズは、ホメロスとホメロスが連れていた魔物達に故郷の村を滅ぼされた上に、村の皆やラーズの幼なじみを目の前で殺されてるから」

グレイグ「何だ?! あいつは……そんな事まで。だとしたら、ホメロスの事を憎く思っていて仕方ないだろう。俺は、そのラーズという男に謝り尽さなければならぬな。」

その村にも、いずれ必ず向かつて謝罪しなければ。もしや、その男は氷の魔女の時、イレブンの隣にいた茶髪の男か？」

イレブン「うん、そうだよ。きつとどこかで生きてるから、会った
ら伝えた方がいいと思うよ。僕も手伝うからさ」

グレイグ「そうか。ありがとう、イレブン」

イレブン「そういえばね、ラースってマルティナと付き合ってるん
だよ」

イレブンは思い出したように笑いながら伝えた

グレイグ「な、何だと!!? 姫様と!?! 本当か! イレブン!」

グレイグはかなり驚いた様子でイレブンに詰め寄った

イレブン「うん。皆が言うにはどっちも愛しあってるんだって。僕
もね、2人をみてて仲いいなーって思うんだ」

グレイグ「な、何と...。イレブン達は、彼女がデルカダールの姫
という事を知っているのか?」

イレブン「うん。全員知ってるよ。ラースは関係ないって言って告
白したんだって。ラースって頭もいいし、とっっても頼りになるんだ
よ」

グレイグ「だが、姫様と付き合うなら相当強くなくてはこの先やっていけないぞ」

イレブン「ラーズはね、かなり強いんだよ。格闘センスはマルティナを超えてて、強い魔物に武器無しでも普通に倒すんだよ。」

それに魔法も使えて、僕より使うのが上手でたまに教えてもらったんだ。回復魔法は出来なかつたみたいだけど」

グレイグ「ふ、ふむ。俺も姫様の格闘センスには驚いたが、それを超えているのか。魔法も扱うのが上手いなら相当できるやつだな。両方扱うのは、日頃からどちらも鍛えていないと出来ないからな。」

言われてみれば、魔女の手先との戦いの時も俺が翻弄されていた素早いあいつに、盾や魔法を使って上手く注意をひいていた。ただの旅人では絶対にできない動きだったな」

イレブン「朝とかの時間がある時に、僕らは模擬練習をよくしてたんだよ。ラーズはマルティナ以外にもいろんな人とやってたから、今度グレイグもラーズと戦ってみなよ。片手剣と盾も使うから、グレイグと少し似てるかもよ」

グレイグ「なるほど、いい考えだ。実力も知りたいからな」カサカサ

グレイグの側の木から何かが落ちてきた

イレブン「あ、ミノムシがグレイグのそばに落ちてきた」

グレイグ「!!!??
!!!ノアアアア!!!」ダツツ

グレイグは大きな叫び声を上げながら凄いスピードでテントの中へと入った

イレブン「え!?グレイグ!?急にテントの中入ってどうしたの?」

グレイグ「す、すすすまない、イレブン。俺は虫が大の苦手なんだ」

グレイグは震えながら顔だけを出していた

イレブン「……………ぷつ、アハハハハハ!」

グレイグ「な、なぜ笑うのだ!!」

イレブン「だ、だって……………ク、クク……………僕より体大きいのに、そんな小さいのがダメなのがかわいくって」

グレイグ「う、うるさいぞ!イレブン!男にかわいいなんぞ使うな!」

グレイグは恥ずかしいのか、怒っているのか顔を赤くしている

イレブン「アハハハハ!!」

イレブンは我慢出来ずに大きな声で笑い出した

グレイグ「笑うのをやめろー!!」

二人の賑やかな声が静かな森に響いていた

そして夜が明けた

58. ドウルダ郷へ

次の日の夜、ドゥーランダ山 キャンプ場

イレブンとグレイグはお互い気楽に話せるようになっていた

イレブン「勇者とゆかりのある人達、か。北にある聖地ラムダのよ
うな人達なのかな」

グレイグ「俺は王に入っていたウルノーガに、ドウルダ郷との間に
関所をおけと言われていた。魔王が恐れていたほどの力があるのか
もしれない」

イレブン「そんな恐ろしい力があるってのは怖いけど味方だとあり
がたいね」

グレイグ「そうだな。明日は山の洞窟を登るだろう。キツイだろう
が、踏ん張るぞ」

さらに次の日、ドウルダ郷

グレイグ「ここが勇者ゆかりの地か。しかし、大樹が落ちた場所か
ら近いというのに、郷は全く無事な様子。一体何が……」

その時、郷の入り口にいた男性が話しかけてきた

郷の男「その顔、見覚えがあるぞ。さては貴様、デルカダールの者
だな。今まで我が郷を封鎖しておって、忌々しい。我らドウルダの民の

怒りを思い知れ！」

た
そう言うのと男性達は数人でイレブン達を囲み、不思議な動きを始めた

グレイグ「むむつ。何だこの動きは。どこから攻撃が飛び出すかわからん。イレブン、油断するな」

その時、奥から大きな声が聞こえてきた

???'「お前達、やめなさい！騒がしいと思って来てみれば何事ですか。郷の外の方に無礼は許しませんよ」

男「サンポ大僧正！違います！怪しいデルカダール兵が来たので調べていたのです」

そこには小さな坊主姿の男性がいた

サンポ「デルカダール兵ですつて?.....なるほど、たしかに。ですが、あちらの若い方は兵士には見えませんね.....!?あ、あなたから感じるこの力は!?も、もしや勇者様ではありませんか?」

イレブン「う、うん。僕は勇者だよ」

グレイグ「なんと、一目見たただけでお前の素性を見抜くとは」

サンポ「ああ、どれだけこの時を待ちわびたか。この者達の無礼な

ふるまい、大変申し訳ありませんでした。後ほど、郷の一番高い場所にある大師の宮殿を訪ねてください。お話したい事があります」

グレイグ「変わった子だな。まだ年若いというのにこちらの心を見透かされる様な、不思議な力を感じる。他にアテもない、とりあえず大師の宮殿に向かおう」

男「丁重に迎えるはずの勇者様に、大変無礼な態度をとってしまいました。何ともお許しください」

先程囲んでいた男性達はイレブんに丁寧に頭を下げている

イレブン「大丈夫だよ、仕方ない事だからあまり気にしないでね」

大師の宮殿

サンポ「勇者様、よくぞドウルダ郷へ参られました。私は郷を治める大僧正サンポと申します」

グレイグ「サンポ大僧正。ドウルダの人々はイレブンの事を知っているのか？」

サンポ「もちろんです。我々は、16年前イレブンさんがユグノアに生まれてからずっとその訪れを待っていました」

イレブン「僕を待ってたの？どうして？」

サンポ「訳をお話ししましょう。あの旗を見てください」

サンポの上にある緑色の旗にはある国の紋章が描かれている

イレブン「あ、これユグノアの紋章の旗だよ」

サンポ「ドウルダは古来よりユグノアと縁のある郷。ユグノアの王家に生まれた男子は幼子の6年間、郷に修行に出されるといふ掟があります。」

ユグノアの王子として生まれたイレブンさんも、本来は郷に修行に出されニマ大師に師事するはずだったのです。不幸にも、ユグノアが魔物に滅ぼされそれは叶いませんでしたが」

グレイグ「もし運命が違っていれば、イレブンはこの郷で幼少期を過ごしていたのだな。しかし、その師匠になるはずだった肝心のニマ大師はどこに？」

サンポ「我らの指導者ニマ大師は世界が魔王によって崩壊した時、その衝撃から郷を守るため、巨大な守護方陣を展開しました。その強力な結界によって郷は助かりましたが、命を犠牲にしたニマ大師はそのまま帰らぬ人となったのです」

グレイグ「そうだったのか。ニマ大師はこの郷を守るため犠牲に……」

サンポ「ニマ大師の代わりに、イレブンさんに見せなければならぬ
い物があります。宮殿の裏にある大修練場まで来てください」

大修練場

サンポの前には大きな扉がある

サンポ「この扉の先がドウルダの大修練場になります。実際に修練
場を見る前に、郷に語り継がれる伝説の勇者ローシユの伝承について
お話ししましょう。」

神話の時代、ローシユは邪悪なる神を倒す旅の途中、賢者の集まる
神秘の郷ドウルダを訪れました。深き知恵を持つ郷の初代大師テン
ジンに弟子入りしたローシユは、この修練場で力を磨いたと伝えられ
ています。

そして、修行を続けるローシユはある人物と運命的な出会いを果た
しました」

グレイグ「ほう……その人物とは？」

サンポ「同じく大師の元で修行に努め、弟子の中でも一番の実力者
とされた大魔法使いウラノスです。共に切磋琢磨し、互いの力を認め
あつた二人は意気投合して友となりました。」

修行を終えた後ウラノスはローシユの仲間となり、邪悪な神との戦
いで大いに活躍したと伝えられています。その石碑には二人が友情

を誓い、邪悪な神を倒す事を決意した言葉が刻まれています」

グレイグ「ローシユとウラノスカ。大変興味深い言い伝えだな」

サンポ「昔語はこれくらいにして、実際に修練場をお見せしましょうか。私について来てください」

サンポは扉を開け、イレブン達を中に入れた

サンポ「ここが歴史深きドウルダの大修練場。神話の時代からある場所で、鍛錬した者の血と汗が染みついています。イレブンさんも歴代のユグノア王子と同様に、ここでニマ大師の稽古を受けるはずでした。」

わざわざここに来ていただいたのは、ローシユの時代から続く伝統の地をイレブンさんにも踏ませてあげたからです。あなたの祖父ロウ様もここで修行を受けたのですが、彼の偉業は今も皆の記憶に残っています」

イレブン「偉業？おじいちゃん、すごい事したの？」

するとサンポはどこからか棒を取り出した

サンポ「ニマ大師の修行は厳しい事で有名です。これは弟子がオイタした時にお尻をたたき、通称お尻叩き棒。なんとロウ様は、6年間の修行でこの棒でお尻を叩かれる事1万回！

この記録は未だ破られる事なく、ロウのようになることなかれ、と

いう戒めが今も語り継がれているのです」

イレブン「……………」

それを聞いたイレブンは微妙な顔を浮かべている

グレイグ「…………… 大した偉業だな」

グレイグも少し呆れている様子だ

サンポ「ロウ様が心配ですか？ ですがあの方はニマ大師の厳しい修行を耐え抜き、今も伝説の弟子として語り継がれる方。世界崩壊の衝撃で亡くなるほどヤワではありません。きつとどこかで無事でいます。」

今日はイレブンさんのために、ささやかながら宴を開かせてください。ニマ大師がいない今、私達に出来る事は多くありませんが、イレブンさんのために出来る限りの事をしたいです」

こうして郷を訪れたイレブンのためにその夜ささやかな宴が開かれ、修行僧達は久しぶりの宴を大いに楽しんだ

そして、夜が明けた

イレブン「おはよう、グレイグ」

グレイグ「目が覚めたか、イレブン。せめてニマ大師が生きていれば、魔王を倒す手がかりを得られたかもしれないな。まあ、過ぎた事を言っても仕方がない。そろそろ行こう」

イレブン「まあそうだよね。わかった」

59. 冥界

宮殿前

そこではサンポと数人の修行僧達が話していた

サンポ「それで、修行者の安否は？」

修行僧A「申し訳ありません。山道の魔物は我々の手に負えず、修行者を発見する事はできませんでした」

サンポ「そうですか……」

グレイグ「サンポ大僧正、何か困りごとでも？」

サンポ「ああイレブンさん、グレイグさん。実は半月ほど前、一人の修行者が郷を訪れ、ドゥーランダ山頂へ向かったのです」

グレイグ「たった一人で……なにゆえそのような事を」

イレブン「確かに。今外は危ない状況なのに」

サンポ「わかりません。ただその修行者は、郷の者からニマ大師が亡くなった事を聞くと何も言わずに山頂へ向かったそうです。」

山には魔王の影響で凶暴な魔物が住み着いているため、救出の為に僧兵を派遣したのですが、この通り怪我をして戻ってくる始末。それでどうしたものか思案していたのです」

グレイグ「では、我々がその修行者の救出に向かうのはどうだろうか？」

イレブン「うん、僕もその人の事心配だよ」

サンポ「申し出はありますが、大切な使命がある方に迷惑はかけられません」

グレイグ「ここには一宿一飯の恩もある。イレブンも心配しているし、向かっても大丈夫だ」

サンポ「わかりました。ですが、ご厚意に甘えてばかりもいられません。私も連れて行ってください。ドゥーランダの山頂は郷を出て、東の道から行く事ができます」

ドゥーランダ山頂

道中の険しい山道を登った先にある山頂には、道中以上の雪が積もっており凍えるような冷たい風も吹きつけている。そこにある祠にはほとんど骨と皮だけになった人が座っていた

グレイグ「くっ……こいつは見るに耐えんな。もしや、これが一人で山頂に向かったという修行者なのか？」

サンポ「きつとそうに違いありません。しつかり座禅を組んで生き絶えた所を見るに、この者は覚悟の死を決めたのでしよう。しかしこの姿、どこかで見覚えが」

その時、グレイグがその修行者の近くに何かが落ちているのを発見する

グレイグ「む？……これは、数あるムフフ本の中でも最高と名高いピチピチ☆バニーではないか！……はっ！」

二人「……」

イレブンとサンポはジッとグレイグを見つめている

グレイグ「ゴホンツ！不幸中の幸いとはこのこと。この修行者、哀れな最後ではあったが、きつと幸福に包まれ天に召されたに違いない。」

む……？これはユグノア王家の者が持つ首飾り。何故この修行者が……」

それを聞いたイレブンはハツとしたように言う

イレブン「そんな!?おじいちゃん!!」

グレイグ「そうか、ロウ様はニマ大師の愛弟子。ニマ大師が亡くなった事を知り、世を儚んで安らかな死を選んだのだろう」

サンポ「待ってください！まだ息があります」

イレブン「ほんと!?よかった」

サンポ「おそらく今ロウ様の御霊は生と死を彷徨っておられます。ですが、このままだと死。救出するには、イレブンさんが生と死の狭間の世界、冥界に行きロウ様を救出して戻ってくるのです」

グレイグ「冥界に行くだと?だがどうやって?」

サンポ「実はドウーランダ山頂にあるこの御堂は、古来より冥界と繋がる霊感あたたかな場所だと伝えられています。私がイレブンさんに郷に伝わる分霊の儀式を行い、肉体から魂を離脱させれば冥界に入ることができます。」

ですが、冥界は生と死が揺らめく世界。生者が行けば、二度と帰ってこられないかもしれませぬ。それでも行きますか?」

イレブン「もちろんだよ。おじいちゃんをこのまま見捨てるなんて、僕には絶対できない」

サンポ「わかりました。それではイレブンさんを冥界に送ります」
そう言うときサンポはイレブンの前で不思議な踊りを始めた

グレイグ「おい、何だその変な踊りは？本当に大丈夫なのか？」

イレブンは意識を飛ばした

冥界

真つ暗な空間が広がっており、まるでこの世の終わりを感じさせるような場所に一つ、場違いな場所があった。白い床に大きな門がある場所にイレブンは降りた。そこに一人の女性が現れた

???「あらあら、よるべなくさまよう哀れな魂がまた一つ、この世の果てに流れ着いたようだね。顔を見てみりやまだ若い。こんな子が冥府に落ちるなんて、ほんと神も仏もありやしないよ。あんた随分呆けた顔してるけど、これからどんな運命を辿るかわかってるのかい？」

その謎の女性はオレンジのローブを着て、ベージュの長い髪をしていた。また、まるでイレブンを見透かしたかのような問いを投げかけてきた

イレブン「そこは覚悟してる。大丈夫だよ」

???「そうかい？そんな顔には見えなかったけどね。まあ、見ての通りこの世界には何も無い。ここは無の世界さ。」

本来、冥府に誘われた魂は新しい命として再生するために大樹へ向

かうんだけどね、魔王によって大樹が失われた今、冥府は完全な無の世界さ。だからあんたの魂はもうすぐこの虚無の中で消えちまうんだよ。

大樹による命の循環は絶たれ、やがて全ての命は消え去る運命にある。魔王がいる限りこれは変えられない。魔王に敵うやつなんていない。諦めな。でもね、そんな魔王に抗うやつはまだいる。ほんと諦めの悪いやつだよ」シユン！

シユン！

女性の姿は無くなった

イレブン「あれ？消えた」

奥地

先に進むとそこではロウが踊っているかのように動いている

ロウ「はっ！ほっ！よおっ！」

イレブン「あれ？おじいちゃん！」

イレブンは声をあげたが、ロウには聞こえていないのか集中しているのか動きをやめなかった。イレブンの隣には再び先程の女性が立っていた

ニマ「ロウが、この世を夢んで死んだとでも思ったかい？その逆さ。あいつは諦めてなんかいないよ。魔王をぶちのめすことをね。あんたのじいさんは郷の奥義を習得するために、決死の覚悟で死んだあた

しに会いに来たんだ。

あたしが誰だかわかっただろう？ロウの師匠のニマさ。あの魔法陣が見えるかい？ロウは魔力を纏って舞い踊り、大樹の模様を魔法陣に描いてるのさ。

それが奥義習得の修行さ。ここに来てからやつはずっと踊り続けている。身体が自由に動く年でもないのに、ほんと無茶するよ。見てな。あの魔法陣が完成した時、ロウは奥義を会得するよ」

ロウ「ふんぬああ。おんどりやああああ！」

ロウの足下にはどんどん魔法陣が描かれていき、ついにその魔法陣が光り出した

ダウン！ゴウウウ！

ロウの足下にあつた紋章が完成し、力を空に放つと十字型の大きな攻撃となった

イレブン「おおー！」

ニマ「あのやろう、やりやがったね。たまにはかっこいい姿見せんじゃないか」

ロウ「うひゃひゃー。大師様ついにやりましたぞ。わしの勇姿、見ておられましたか？」

ロウは奥義を打てた事を確認するやいなや、すぐさまニマの元に走ってきた

ニマ「根性なしのあんたにしちや頑張ったしやないか。しようがないから、褒めてあげるよ」

ロウ「な、なな、何と！大師様、今わしの事褒めましたねえ!? うひよひよーい。大師様に褒められるとは何十年ぶりか！その言葉だけでご飯10杯はいけますぞ！」

ニマ「はあ。あんた調子に乗りすぎて大事なもの見落としてるんじゃないかい？隣をみてごらん」

イレブン「おじいちゃん！かつこよかったよ！」

ロウ「お、おぬしは、イレブン!! おおイレブンよ。死んでしまうとは何事じゃ」

ニマ「落ち着きな、ロウ。早とちりするのはあんたの悪いクセだよ。イレブンは生きてる」

ロウ「何ですと!?! イレブンは生きてる！」

ニマ「イレブンはあんたが死んだと思って、現世から助けにやって

きたんだよ」

ロウ「そうか、そうか。まったく危険な事をしおって。わしならもう大丈夫じゃ。さあ行こう。奥義を会得したわしと、勇者のお主がいれば恐れるものはない。現世に戻って憎き魔王をぶちのめすのじゃ」

60. 修行

ニマ「待ちな。これからはイレブンの修行を始めるよ」

イレブン「え？僕の手？」

ニマ「本来なら私があんたの師匠になるはずだったんだけど、こうなってはどうしようもないからね。技を教えるなら今しかないってわけさ」

ロウ「しかし、イレブンもグランドクロスを？」

ニマ「いや、イレブンは別の大技さ。さっきロウが放った技こそが、ドウルダの奥義グランドクロス。あの技は神話の時代、勇者の仲間の一人ウラノスによつて編み出された技だ。」

そして、あんたに教える技はグランドクロスにも引けを取らない大技、霸王斬さ。霸王斬は初代大師テンジンとの修行の中で編み出した、空前絶後の秘奥義だからね」

ロウ「なるほど。わしがウラノス様の技を覚え、イレブンがローシユ様の技を覚えれば向かう所敵なしじゃな」

ニマ「でも霸王斬は郷に受け継がれながら、ローシユ以外には誰も習得できなかった。その技を僅かな時間で覚えようってんだから、当

然修行はとても厳しいものになる。どんなに厳しくつらい修行が待ち受けていても、それに耐える覚悟があるかい？」

イレブン「うん。僕は世界を守るために、もつと強くならなくちゃいけないんだ！」

ニマ「いい返事だね。それじゃあ修行を始めるよ。」

霸王斬は自身の魔力を刃の形にして放つ技。さあ手を前に出し、剣をイメージし、魔力を集中させな」

イレブン「(剣、剣、こんな感じの剣)」

シユン！

イレブンの前には小さいながらも黄色い剣の形をした魔力の塊が出来上がった

ニマ「まあ最初はそんなもんだろう。後は実戦で技を磨いていくとしようかね。ロウ、あんたイレブンと戦いな」

ロウ「ええ！わしがイレブンと戦うのですか！」

ニマ「さつき奥義を覚えたお前ほどピッタリな相手はいないだろ。ユグノア王家の血を引く者同士の戦い、こいつは見物だね。それじゃあ、ロウにパワーを貸すからちよつと待ってな」

ニマはロウに向かって力をこめる

ロウ「うおおお!?力がみなぎる!若き日の力を取り戻したようじゃ。今なら大師様にも勝てるようじゃ!」

ロウはパワー全開のようになった

ニマ「いいかい、ロウ。手加減はいらないよ。全力のグランドクロスをお見舞いしてやりな。イレブンはロウの猛攻に耐え、隙を見つけながら霸王斬を使うんだ。そうやって繰り返し返す内に霸王斬はどんどん威力を増していく。そうやって完成させるんだ」

イレブン「わかりました!」

ロウ「さあ、ありったけのお主をみせてみい!」

ロウがあらわれた

ロウはグランドクロスを放つための精神統一をしている

イレブン「(剣、剣を思い描け!)」

イレブンも先程のように剣をイメージしながら手に魔力を込めていく

ロウ「グランドクロス!」

ロウの方が早く技が完成し、先程空に打った大きな十字の攻撃がイレブンを中心に広がる

ゴオオオツ！

イレブン「ぐうっ！かなり強力だ。ベホイム！」

イレブンは想像以上の攻撃力に驚きつつも、自身に緑色の魔法陣を描き強い治癒の力をかけて、傷を瞬時に回復させた

ロウ「とりや！」

ロウはその隙にイレブンに突っ込んできた

イレブン「これくらい！」

イレブンは軽々と避けてみせた

イレブン「今度は僕の番だよ、霸王斬！」

まだ小さい剣の形をした攻撃がロウに突き刺さった

ロウ「大師様から貰った力、見せてやるわい！」

ロウが力を溜めると、ロウの姿が歪んでいき、ロウの影ができた

イレブン「この技はパープルオーブと同じ!?なら、ギガスラッシュ！」

イレブンは分身に驚きつつも、聖なる雷を宿したなぎはらいでロウとロウの影ごと切り裂いた

ロウ「ぬう……。イレブンも少し見ぬ間に勇者らしい技を使うようになったわい」

ロウは折角の自身の影がすぐに消えてしまった事を残念に思いながら、精神統一を始めた

イレブン「霸王斬！」

イレブンはそれよりも早く剣のイメージを素早く終わらせて、ロウに向かって先程よりも大きくなった魔力の剣の塊をぶつける。その大きさは普通の剣と変わらないほどになっていた

ロウ「ぬう！わしも負けてはおれん！グランドクロス！」

ゴオオオツ！

ロウも剣で少し後ろに押しやられるが、そこからイレブンに向かって高く跳びながら十字の攻撃をイレブンに放った

イレブン「ぐっ！ベホイム！」

イレブンもグランドクロスの威力で後退しながら、緑色の魔法陣を描いて強い治癒の力をかけて、傷を瞬時に塞いだ

ロウ「とりや！」

再びロウが突っ込んできた

イレブン「霸王斬！」

イレブンも先程と同じようにロウに向かって更に大きくなって剣の塊をぶつける。その大きさは大剣よりも大きくなってきている

ロウ「ほうっ!!」

イレブン「!？」

ロウは突然しやがみ込み、イレブンの放った霸王斬はロウを素通りしていった

ロウ「先程と同じとはいかんどぞ！」

ニマ「いいじゃないか、ロウ！そのままやっちゃいな！」

ロウ「はっ！大師様がわしに期待している!?!ならば！その期待に応えて見せましょう！はああああ!!」

ロウはニマから貰った力を最大限に発揮するかのような声をあげて、極限の集中状態に入り込んだ。ロウはゾーンに入った。ちからがあがった

更にそれと同時にロウの影が再び出来上がった

ロウはグラウンドクロスを放つための精神統一を始めている

イレブン「(長期戦になるとまずい！これで終わらせられるか!?) 霸王斬！」

イレブンは影とロウを同時に巻き込むような大剣を思い描き、上空に放った。その大剣はそのままロウ達に向かっていき、ロウ達に突き刺さった

イレブン「どうだ!？」

ロウ「まだじゃ！グラントクロス！」

イレブン「!?」

煙の中からロウが飛び出して、先程よりも大きくパワーアップした十字の攻撃をイレブンに放った

ゴオオオツ!!ドガアン！

イレブン「ぐはああっ!!」

その強力な攻撃は地面を綺麗に十字に割る威力をしており、イレブンを強く叩きつけた

イレブン「ぐっ………。流石、おじいちゃん。でも、僕だつて……。まだやれる！霸王斬！」

イレブンは最後の力を振り絞り、これまでよりもずっと大きな剣を上空に放った

ロウ「な、なんと！」

ロウの上空に巨大な大剣が矛先をロウに向けている

イレブン「はあああ!!」

イレブンはそのまま両手を振り下げると、大剣もそれに合わせてロウに急降下していく

ドガアアン!!ビュオオオ!!

深々と地面に突き刺さった大剣の衝撃が周りに強い風を吹かせた。煙が晴れると刺さっていた大剣も消え去った

ロウ「うう……」

ロウはたおれた

ニマ「いいねえ、いいねえ。よくやったイレブン。僅かな時間で霸王斬を習得できるか内心不安だったけど、取り越し苦労だったようだね。やるじゃないか」

イレブンは霸王斬を習得した

ニマ「いいかい？あの光の剣の強さは、あなたの心の強さ。あの剣を鍛え上げるんだ。決して折れない強き剣に。そうすれば、あなたはどんな困難にも立ち向かっていけるよ。心を強くあり続けるんだ。それじゃあロウを起こすとするか」

ニマは倒れて傷だらけのロウを回復させ、イレブンの傷も回復させた

ロウ「まさか奥義を覚えたわしを倒すとは。ここまで成長しているとは思わなかったぞ」

イレブン「おじいちゃんこそグランドクロス、凄く強かったよ」

ニマ「つらい修行から逃げずによく頑張ったね。これであなたもあたいの立派な弟子さ」

その時、地を這うような声が聞こえてきた

見つけたぞ

死滅した世界で這いずり回るムシケラどもよ
ここで滅ぼしてくれ

イレブン「!？」

ロウ「その声はまさか！」

ニマ「魔王ウルノーガ！」

空に大きな裂け目が出来ると、ウルノーガの攻撃がイレブン達に降り注いできた

ニマ「はあっ！」

ニマが咄嗟に力を込めてバリアを作り出した

バアン！バアン！ドン！

ウルノーガの攻撃はバリアにより守られた

ニマ「ちいつ！魔王め！とうとうこの冥府にまでその力を！ヤツの力を甘く見過ぎてたか！」

まだ教えたい事があるって言うのに忌々しいやつだよ。だが仕方ないね。あんた達2人には最終奥義を授けるよ！

ローシユとウラノスが協力して放つ合体技。それこそが、初代大師が考案した真の最終奥義だ。

さあ二人とも。覚悟はいいかい？ 遙かなる時を超え、もう一度伝説を繰り返すんだ。その最終奥義を、あたいの冥土の土産にさせておくれ」

ニマは早口で説明をする。その様子からあまり時間がない事が伺える。ロウとイレブンは互いに顔を合わせて頷いた

させるか

ウルノーガの攻撃がどんどん激しくなっていく

ニマ「あたいの掛け声に合わせて技を放ちな！ チャンスは一度きりだよ！ ロウ！ ありったけの力で空にグランドクロスを放ちな！」

ロウ「ぬうああああ！」

ドゴオオオン！！

空に大きな十字型が浮かび上がる

ニマ「イレブンはそこに霸王斬を！」

イレブン「心を強く！ 皆を、世界を今度こそ守る！ 心を剣に！」
アアア！」

イレブンの心の強さを持った巨大な剣がロウのグランドクロスの真ん中に突き刺さる。大剣が回りながら十字型の攻撃と一緒に突き

進んでいく

ニマ「この技こそ、ドウルダに伝わる最終奥義！グランドネビュラだ！」

二人の大技が隙間からの魔王の力を弾き、冥界に大きな穴を開ける

ドゥーランダ山頂

サンポ「あつ！戻ってきました！これはいけません。身体が衰弱しています。急いで2人を郷まで運びましょう！」

疲労の中気を失ったイレブンは、ニマ大師が最後の力を振り絞り、魔王の目を眩ませる夢をみた

そして夜が明けた

ドウルダ郷

イレブン「……………あれ？ここは……………」

イレブンが目を覚ますと、そこは宮のベッドだった

グレイグ「よかった、イレブン。目が覚めたな」

近くにはグレイグが立っていた

イレブン「おはよう、グレイグ」

イレブンはゆっくりと起き上がった

グレイグ「体も大丈夫そうだな。ロウ様は先に目覚められて、一足先に外に出ている。俺達も行こう」

宮殿前

ロウ「おお、よかった、イレブン。目覚めたようじゃな。何じゃ？人の顔をジロジロ見おって」

「ロウはすっかり元通りになっていた

イレブン「だって、おじいちゃん。一日ですっかり元通りなんだから」

ロウ「ふおつふおつ、あれくらい大師様の修行に比べればなんでもないわい。飯を食べればすぐ元通りよ」

サンポ「ロウ様から話は聞いています。冥府でニマ大師と出会い、修練を受けられたようですね。ローシュ様の技を覚えただけでなく、ドウルダの最終奥義まで習得したとの事。大変喜ばしい限りです」

ロウ「そうじゃ、グレイグ。わしがあつちの世界にいる間、イレブンが世話になったようじゃな。礼を言うぞ」

グレイグ「それには及びません。これまでの無礼を考えれば、当たり前前の事をしたまで。むしろ、こちらがお詫びする立場です」

ロウ「いいんじや。グレイグ。顔を上げい。そなたも運命に翻弄された哀れな男。お主を責めるつもりはない」

グレイグ「しかしロウ様、我々はこれから一体どうすれば。ドウルダに来れば何かかわかると思ったのですが」

ロウ「それなら心当たりがある。大師様の話によると、先代勇者達は神の乗り物で空を飛び、邪神と戦ったらしい。その乗り物を手に入れば、天空にいる魔王を打ち倒す方法も見つかるやもしれん。

それに、バラバラになった仲間の事じやが、皆諦めの悪い者ばかりじやから、きつと世界のどこかで生きのびているはず。

よいか、イレブン。仲間を探しながら先代勇者の足跡を辿る為、もう一度聖地ラムダを訪ねるのじや」

ロウが再び仲間に加わった

サンポ「イレブンさんが強大な魔王ウルノーガと戦うために、我らドウルダの民も協力いたします。勇者様のために特別な修行を用意しました。自らの力を高めたいと思っただけで、ドウルダの大修練場に来てください」

61. シルビアとの再会

メダチャット地方 大橋付近

橋を歩いていると、橋の向こう側で一人の男性が魔物に襲われていた

グレイグ「む？旅の者が魔物に襲われている！助けにいくぞ」

三人で向かおうとするところから軽快な音楽が流れてきた

ドンドコドコドコドコ

すると、近くの丘の上から大きな紫の羽をつけた奇抜な格好をした人達が現れた

パレードの人達「はい！」

イレブン達も魔物もその不思議な人達をポカンと見ていた。その中心には笑顔の伝道師、シルビアの姿があった

イレブン「あ！」

シルビア「その悪い魔物ちゃん！無垢な民を襲うのはやめなさい！」

魔物「グアオオオ！」

魔物はシルビアを見た後、何事もなかったかのように襲おうとして

いる

シルビア「やれやれ。お仕置きしないとわからないようね。とうっ
！」

シルビアはそこから飛び、魔物に向かって剣を振り下ろした

魔物「グウウ……」ジュワー

魔物はシルビアにより片づけられた

シルビア「はい！」

パレードA「きゃ〜！カツコイ〜！」

パレードB「流石はオネエさま〜！なんて優雅な身のこなし！美しいわん！」

シルビアに先程のパレードをしていた人達が群がってきた

グレイグ「……………」

グレイグはポカンとした様子で見ている

イレブン「シ、シルビア。久しぶりだね。なんか、シルビアみたいな人がたくさんいるけど」

イレブンが少し苦笑いしながらシルビアに話しかけた

シルビア「…………… あら…………… やだ。もしかして…………… イレブンちゃんじゃないっつー！」

シルビアはイレブんに気付くと、独特な動きで近付きながら嬉しそうに抱きついた

グレイグ「…………… おい、なんだこいつらは。イレブンの知り合いか？ 一体何をしているんだ？」

シルビア「何よ。見てわからないの？ 決まってるじゃない。世界に〜」

パレード達全員「笑顔を取り戻す!!」

シルビアの掛け声に合わせて全員がポーズを合わせている

シルビア「そんな訳で暗い世界に光を照らすため、アタシ世界各地を練り歩いて、世助けパレードをしていたの。この子達は大切なナカマ達。アタシに共感して、旅の途中でパレードに加わってくれたの」

イレブン「すごいよ！シルビア!!とってもいい考えだよ！」

シルビア「ありがとう、イレブンちゃん。それにしても、あんな事があったのに二人とも生きてるなんて奇跡よね！イレブンちゃんとまた会えて感激だわ！」

??? 「あ、あのおく」

襲われていた人が少し申し訳なきように話しかけてきた

シルビア「あら、アナタ！ほっぽりだしちやつてごめんなさい。怪
我はなかったかしら？」

バハトラ「おかげさまで擦り傷一つもないだ。あんた、ヘンテコリ
んな格好してつけどすんげえ強えんだな。オラ、バハトラってんだ。
南にあるプチャラオ村から来たけど命拾いしただ。感謝するだよ」

シルビア「あら、そうだったの。なら、プチャラオ村まで送り届け
てあ・げ・る・わ。ねえ、イレブンちゃん。これからの事は後で考え
るとして、ちよこつとだけ世助けパレードに付き合ってみない？」

イレブン「うん。楽しそうだし、僕もやりたい！」

グレイグ「な!?イレブン!？」

シルビア「うん。それでこそイレブンちゃんね。さあ、新しいセカ
イの扉を開くわよ！ちよつとこれ着てみて！」

イレブン「いいよ」

イレブンは渡された服を着てシルビアに見せた。その服もまたパ

レードの人達のように紫の羽がついており、白の服に紫の線が入っている独特な服だった

シルビア「きゃ〜ッ！ステキ〜ッ！アタシの目に間違いはなかったわ！皆〜、この子がアタシと一緒に冒険していた、かの有名なイレブンちゃんよ！

さ！今からイレブンちゃんが、アタシ達チーム世助けパレードのボスよ！みんな！イレブンちゃんに続けー！」

パレード達「ワーー！」

また軽快な音楽を流しながら、パレード達がイレブンに続いていく。また、グレイグやロウも半ば強制的にピエロのような格好に変えられてしまった

プチャラオ村

シルビア「ハ〜イ！プチャラオ村にとうちやく〜！

あら…… やっぱりの村もドンヨリした空気に包まれてるわね」

プチャラオ村は崩壊前の常に商人で賑わっていた面影はどこにもなく、暗く静まりかえっていた

バハトラ「…… それじゃあオラはここで失礼するだ。ここまで世話になったな。ありがとうよ」

バハトラはさっさともどっていった

グレイグ「あの男、村から離れたあんな所まで行っていたのはワケ

がありそうだな。この村の悲壮な様子とも関係があるのかもしれない」

シルビア「ウフフ。それなら、世助けパレードの出番ね。まずはこの村で何が起こっているのか調べましょ！さあ、村の皆を笑顔にするわよ！聞きこみくはじめく！」

シルビアの掛け声に合わせて、パレードの人達も散り散りになっていった

グレイグ「……あのシルビアとかいう者、どこかひっかかる。ずっと昔に会った事あるような……」

バハトラ宅

そこでは村の男性がバハトラの帰りを喜んでいた

男「おお、バハトラ！いやーよかった。息子のチエロンだけでなく、お前までいなくなったと思っけて心配してたんだ」

シルビア「あなたのおぼっちゃん、いなくなっちゃったの？」

バハトラ「……フン。チエロンみてえな自分勝手な息子なんて知らねえだ」

バハトラは不機嫌そうに家の奥に行ってしまった

男「すみません、旅の方。バハトラのやつ、大事にしてた嫁さんに

先立たただけでなく、息子までいなくなつて気が立つてるんです。

フルフルの話はご存知ですか？大樹が地に落ち、世界が闇に包まれた直後の事。ヤツは魔物の群れを引きつれ現れました。私達は逃げる事も出来ずに恐怖に震えました。

するとヤツは私達を広場に集めて、お前達の一番大切な物を教える。その大切な物だけは助けてやろうと言つたのです。怯えた私達はその言葉にすがつて、大切な物をあげていったんです。お金、愛する妻や夫、子どもなど。

ところが、それはウソだった！あの忌々しい魔物は、その大切な物を奪つていったんです」

シルビア「まあ！何て事を。ウソつきは一番許せないわ！アタシ達世助けパレードが攫われた皆を助けてあげる！」

男「ほ、本当ですか！ですがヤツは強く、ズル賢いですよ」

シルビア「ご心配あれ。騎士に二言はないっていうでしょ」

グレイグ「騎士だと？」

グレイグはシルビアの言葉に疑問を抱く

男「フルフルは南の方へ去つて行きました。そこにヤツの住処があるのかもしれませんが」

イレブン「わかった。それじゃあまずは、南の方を探ってみようか」

62. フールフール

南の洞窟

??? 「わく。ハネの人達楽しそうに何してるだ？」

隅からは小さな少年が話しかけてきた

シルビア「あらく。アタシ達攫われた村人を助けるために、悪い魔物ちゃんをやっつけに行くのよ」

グレイグ「坊主。お前もしや、バハトラの息子チェロンではないか？」

チェロン「うん」

グレイグ「どうしてこんな危ない所に。お父さんが心配していたぞ」

チェロン「父ちゃんが魔物に言ってただ。父ちゃんの一番大切な物は、死んだ母ちゃんのペンダントだって。父ちゃんの大切なもの、おらじゃなかった。それ知って、すごく悲しかっただ。」

だから母ちゃんのペンダント取り返して、父ちゃんを見返してやるって思っただ。それで魔物を追っかけてきただ。でも途中で怖くなくて、ここで隠れていただ」

グレイグ「なるほど。バハトラがそんな事を。しかし、この辺りは子どもには危険すぎる。私達にまかせて早く村に帰りなさい」

チエロン「嫌だ！みんなが行くならおらも行く！母ちゃんのペンダント取り返すまで、村には絶対帰らないだ！」

チエロンは反発するように言った

グレイグ「はあ」

シルビア「いいじゃない。連れてってあげましょうよ！アタシ達と一緒にいれば、チエロンちゃんも安全じゃない？」

グレイグ「ふうむ、わかった。貴様が責任を持って、チエロンを守るのだぞ」

チエロン「ありがとう、ハネのお兄ちゃん達。フルフルのやつはこの先の岬の洞穴に入っていただ」

岬の洞穴

中にはピンク色の龍のような賢者の姿をした魔物がいた

フルフル「ホツホツホ、これは驚きました。このフルフル様の前にノコノコと現れる人間がいるとは」

フルフルの奥にある牢屋には村人達や宝物の山が置いてある

シルビア「アナタがプチャラオ村を襲った悪い魔物ちゃんね！村の皆を返しなさい！」

フルフル「ホッホッホ。そんな事のためにわざわざ危険を冒しここまでできたのですか。とんだお馬鹿さんがいたものです。

……いいでしょう。そんな馬鹿げた勇気を評して、村人を解放してさしあげます。ですが、アナタの一番大切な物を譲ってくださいれば村人を解放しましょう。悪い話ではないでしょう？」

イレブン「それなら……」

シルビア「待つて！イレブンちゃん。アナタにこれ以上、大切な物を失わせはしないわ。ここはアタシの番。アタシがずっとずっとあたためてきたとっても大切な物。この魔物にあげるわ」

フルフル「ホッホッホ。人間にしては物わかりがよくて助かりますよ。では早速いただきましょうか」

シルビア「ハイ、これ。大切に使ってね」

シルビアは惜しそうにフルフルにある物を渡した

フルフル「どれどれ。お、おお……これは何とかぐわしい香

り。こ、これは……って、うまのふんじやないですかあ!!」

フルフルは手のひらに握られた物を見ると地面に投げ捨てた

シルビア「あつかんべー。アンタなんかうまのふんがお似合いよ」

イレブン「アハハハハ！シルビア、最高」

フルフル「わたしを怒らせましたね。このフルフル様をここまでコケにするようなおバカさんは、これでもくらいなさい！」

フルフルはいきなりイレブン達周囲に魔法陣を作り出し、イレブン達の魔力を封じ込めた

全員「!？」

フルフル「泣いて詫びようが絶対に許しませんよ。アナタ達の大切な命、力づくで奪ってあげましょう！」

フルフルがあらわれた

シルビア「アンタにはお仕置きが必要みたいね！」

イレブン「はやぶさ斬り！」

シルビアの攻撃に合わせて、イレブンもフルフルに剣を素早く斬りつける

フルフル「ふっふっふ、さあ当ててごらんささい」

フルフルは余裕そうに二人の攻撃を躲している

グレイグ「ならば当てさせてもらおうぞ！」

フルフル「なに!？」

正面からのイレブンとシルビアに気を取られていたフルフルの真横にグレイグが大剣を構えていた

グレイグ「全身全霊斬り！」

ズバァン！

フルフル「ぐおお……」

ロウ「いやしの雨よ、ふりそそげ」

ロウはその間に祈りを捧げて雨乞いをする、聖なる雨がイレブン達に加護のように降り注ぐ

フルフル「中々やるようですねえ。ならば、スクルト！」

フルフルは自身に魔法陣を描くと、皮膚を硬化させた

フルフル「ベギラゴン！」

更に連続でイレブン達全体に朱色の魔法陣を描くと、魔法陣から包むように強い炎が放射されイレブン達を焼いていく

全員「くっっ！」

ロウ「魔法が封じられた中でのこれは厄介じゃのう」

シルビア「アタシだってこれくらい出来るわよ！」

シルビアは謎の対抗心を見せて、口からフルフルフルに向けて炎を吹き出した

フルフル「おやおや、面白い事が出来るものですねえ」

フルフルは全く気にも留めていない様子だ

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンがそのままフルフルフルに向かって攻撃を仕掛ける

フルフル「ホッホッホ、わかっていますよ」

フルフルは余裕そうに避けてみせた

ロウ「グランドクロス！」

フルフル「!?」

しかし、フルフルが避けた先にはロウの放つ十字の攻撃が待っていた

ドオン！

フルフル「グハア……。くっ、この老いぼれが！」

フルフルはロウに向かって攻撃を仕掛ける

ロウ「ほっ！ほほ、ただの老人だと舐められては困るのでな」

ロウも軽々と避けてみせた

フルフル「ほざいている！ラリホーマー！」

フルフルはロウにカチンときたのか、ロウを中心に緑色の魔法陣を瞬時に描くと強い催眠の力をかけた

ロウ「!?ぐう……」

ロウは立ったまま眠ってしまった

フルフル「これで私の自由ですよ！」

グレイグ「させん！全身全霊斬り！」

フルフル「ぐっ、つくづく邪魔をしてくれますねえ」

ロウに向かおうとするフルフルの前にグレイグが大剣で攻撃して立ちほだかった

イレブン達にかかっていた魔力の封じ込めの力が弱まり、イレブン達も魔法が使えるようになった

シルビア「ロウちゃん！起きなさい！」

シルビアはロウの元に走り、頭に鋭いツツコミをいれる

ロウ「おお、すまぬのう」

ロウはその衝撃に目を覚ました

イレブン「ありがとう、シルビア！はやぶさ斬り！」

フルフル「ぐあっ！」

フルフルの後ろからイレブンが素早く剣で斬りつけた

ロウ「グランドクロス！」

前に押し出されたフルフルにロウが再び十字の攻撃を放つ

フルフル「これ以上喰らってなるものですか！」

フルフルは倒れそうになった体を持ち堪えさせ、横へと避けた

フルフル「マホトーン！」

再びフルフルはイレブン達周囲に魔法陣を描き、魔力を封じ込めた

シルビア「効かないわ！」

シルビアは魔法陣の力が影響しなかったのか、封じられずに済んだ

フルフル「ならば！デイベインスペル！」

フルフルは今度はイレブン達周囲の魔法陣から、呪文に対する抵抗力を弱める魔法をかけた

グレイグ「ならば！マジックバリア！」

グレイグが対抗策として、イレブン達に呪文に対する抵抗力を上げる魔法をかけて打ち消した

フルフル「ぐぐぐく……こしやくな」

イレブン「おじいちゃん！奥義やるよ！」

イレブンがロウに合図を送る

ロウ「まかせろい！グランドクロス！」

ロウがフルフルの頭上に十字の攻撃を放つ

フルフル「な、なんですか!?!」

イレブン「霸王斬！」

そこにイレブンが巨大な大剣を作り出して、グランドクロスには向かって振り落とした

二人「グランドネビュラ！」

巨大な大剣は回りながら十字型の攻撃と大剣が凄まじい音をたててフルフルに突き刺さる

フルフル「グアアアア!!」

ロウ「ルカニじや！」

ロウは倒れたフルフルに追い討ちとして魔法陣を描くと、皮膚軟化の魔法をかけた

フルフル「ぐぐぐ、力が…… 抜けていく」

グレイグ「全身全霊斬り！」

イレブン「はやぶさ斬り！」

二人の攻撃が倒れているフルフルに直撃する

フルフル「嘘だあ！このフルフル様が負けるなんて。グアアアア！」

ジュワー

シルビア「他人の物を欲しがるゲス野郎にはお似合いの末路よ」

チエロン「みんなく。怪我ないか？ハネの人達と助けにきただ」

チエロンが急いで牢屋にいる皆の元に走っていった

村の女性「あ、牢屋が開くようになってる。チエロン、勇敢なのね。閉じ込められていただけで、みんな怪我はないわ。旅のお方、助けてくださってありがとうございます。何とお礼を言ったらいいか」

シルビア「いいのよ、アタシの使命は皆を笑顔にする事だからね」

チエロン「あつた！母ちゃんのペンダント！あつ……壊れちまつてる。父ちゃん悲しむだ」

チエロンは近くにあった宝物の山から形見のペンダントを見つけたが、チエーンは壊れ、ペンダントの部分も割れてしまっていた

シルビア「そんな事ないわ！大切なのは気持ちよ。チエロンちゃんの気持ち、きつと伝わるわ。たった一人の家族なんですよ」

チエロン「うん！」

シルビア「それじゃあ、皆を連れてプチャラオ村に帰りましょう」

プチャラオ村　バハトラ宅

恐る恐るチエロンは家に入り、座っているバハトラに話しかけた

チエロン「……父ちゃん今帰つただ。ごめん、父ちゃんが一番大切にしてた母ちゃんのペンダント、壊れちゃつただ」

チエロンは壊れたペンダントを申し訳なさそうにバハトラに見せた

バハトラ「ペンダントだと……。このバカモンが!!」

バハトラはチエロンの姿を見ると怒鳴って近寄ってきた

チエロン「!!」

バハトラ「どんだけ……心配したと思つてただ！お前の命より大切なものなんてねえべ！」

バハトラはチエロンを優しく抱きしめた

チエロン「え……。だけど父ちゃん、母ちゃんのペンダントが一番大切だって」

バハトラ「そんなの、嘘に決まつてる。あの魔物に質問された時、悪い予感がしてとっさに嘘をついただ。おめえを守るために」

チエロン「……本当？おらの事なんて……どうでもいいのかとすっかり勘違いしてただ。心配かけて本当にごめん」

チエロンからは涙が出ている

グレイグ「チエロンは父親の本当の気持ちを確かめないまま、勝手に勘違いをしていた。話し合えば分かり合えるものだな」

シルビア「……そうね。アタシ先に戻つてるわね」

シルビアは顔を暗くして出ていった

チエロン「そうだ父ちゃん！この兄ちゃん達が皆を救ってくれた

だ
」

バハトラ「旅のお方には二度も助けられちゃったな。アンタ達はお
ら達のヒーローだ。本当にありがとう」

チエロン「あれ？ハネのお姉さんは？お礼言いたかったのに」

グレイグ「急に出ていったが、どうしたのだろうか。探してみよう」

63. シルビアとゴリアテ

プチャラオ村高台

イレブンが向かうとシルビアは一人で遠くを見つめていた

シルビア「話し合わなくちゃ伝わらない……か。

……!?イレブンちゃん!いつの間にそこにいたの?あの親子、再会できて本当によかったわね。

だけど……失われた命や人々は帰ってこない。ねえ、イレブンちゃん。魔王ウルノーガは世界を滅亡させるほどの強大な力を持っていたわ。あの力を前にしても、やっぱり戦うというの?」

イレブン「うん。僕らは魔王なんかに負けない。この世界を守るために、もう一度戦うんだ」

シルビア「やっぱりイレブンちゃんは勇者ね。世界に笑顔を取り戻す!なんて言って世助けパレードを始めたけど、魔王を倒さなくちゃ本当の笑顔は訪れない。」

だからアタシ、イレブンちゃんの旅にもう一度ついて行くわ!だけど、その前にお願ひがあるの。アタシはウルノーガと戦って命を落とすでも構わないわ。

だけど、パレードの皆は巻き込めない。だから皆を信頼できる人の所に預けたいんだけど、実は一人だけ当てがあるの。

でもその人ホントにおっかなくて一人で会うのは心細いの。だからお願い。イレブンちゃん、ついてきてくれない？」

イレブン「うん、いいよ。それなら一緒をお願いしに行こうか」

シルビア「ありがとう！それじゃあパレードの皆に伝えに行きましよう」

プチャラオ村 入り口

パレードA「何かしら、オネエさま。大事な発表って」

パレードB「きつと大事な事なのよ。ドキドキするけど」

パレードの全員が集まり、シルビアの発表を待ちわびていた

シルビア「はい！みんなく聞いてく」。

アタシ、パレードやめる！」

パレード達「えええええ!!」

シルビアのその発言にナカマのパレードの人達も驚いている

シルビア「だけど安心して。魔王ちゃんをやっつけるまでの間よ。倒したら、絶対に皆のもとに戻ってくるわ」

ガヤガヤガヤ

全員はどうしようなど不安そうな声をあげて騒いでいる

その時、一人が決心したように叫んだ

パレードA「……アタシ、オネエさまを応援する！みんなの笑顔
を奪う魔王ちゃんなんて絶対に許せないもの！」

パレード「アタシも応援するわ！オネエさまと離れるのは寂しいけど、魔王ちゃんを倒すなんてオネエさまにしかできないもの！」

不安そうだった声はいつしか応援する声へと変わり、どんどんシルビアを応援する声が上がっていく

シルビア「そう。世界に笑顔を取り戻すためよ。だから、それまでの間アタシのパパがいるソルティコって町で待っていてほしいの」

グレイグ「……パパ？……ソルティコ？」

グレイグは何かを思いついたのかシルビアに近づいて顔を覗いた

グレイグ「……貴様まさかとは思いますが、ゴリアテか？」

シルビア「うふふ、やっと気づいたのね。いつ気づくかずと待ってたのよ、グ・レ・イ・グ」

シルビアはグレイグの問いにウインクで返した

グレイグ「な!!？」

グレイグはかなりのショックを受けたようで驚いたまま固まってしまった

イレブン「え？ゴリアテ？誰？」

シルビア「それじゃあソルティコへむけてしゅぱ〜っ！」

シルビアはそんな事を気にした様子もなく進んでいく

イレブン「だ、大丈夫？グレイグ」

グレイグ「な……何て事だ。あの生真面目なゴリアテが、あんな姿に。さぞ、ジエーゴ殿はお怒りになるに違いない。おお、イレブン、すまない。あまりにもショックだったもので取り乱してしまった。

ヤツの本当の名はゴリアテ。剣の達人とうたわれる、ソルティコの名門騎士の跡継ぎだ。

ヤツは幼少から父上のジエーゴ殿に鍛えられていたから、さぞ立派な騎士になると思っていた。ところがある時、理由はわからないがジエーゴ殿と凄まじい大げんかをして、町を飛び出していったのだ。それきり行方はわからなかったが……

丁度いい、私もジエーゴ殿にお会いしたかったのだ。このままソルティコへ向かおう」

ソルティコの町

シルビアは懐かしそうな、どこか苦しそうな顔でソルティコを見ている

シルビア「不思議なものね。この町には二度とくるまいと思つたのに、まさかこんな風に帰ってくるなんて。心の準備をしたいから、イレブンちゃんはパパのお屋敷に先に行つてて」

ジエーゴの屋敷

グレイグ「師匠、グレイグでございます。久方ぶりです」

部屋に入ると中年くらいの男性がベッドに座っていた

頭には怪我のような跡がある

ジエーゴ「おうおう、グレイグじゃねえか。てめえが修行を終えて旅立つてからもう数十年か。近くに来てツラ見せろい。」

…… てめえの活躍は聞いてるぜ。図体でかいだけが取り柄だったお前が今やデルカダールの英雄様だ、ハハッ！」

師匠と呼ばれたジエーゴという男性は乱雑な言葉遣いだが、グレイグの来訪に喜んでいようだ

グレイグ「思つたよりお元気そうで何よりです。師匠の元で騎士道を教わっていないければ、今の私はありませんでした。」

…… ここを旅立つてから色々な事がありました。16年前のユグノアの悲劇に始まり、先日の大樹の落下、そして今や魔王が……。

そういえばあいつはどうしたのだ。俺は師匠と話しているから、イレブン、様子を見てきてくれ」

64. 和解

ソルティコの町 海岸

海岸ではシルビアが立っていた

イレブン「あ、シルビア。こんな所にいた」

シルビア「あつ、イレブンちゃん。そっか、アタシを探しにきてくれたのね。実はねアタシ、もしイレブンちゃんと再会できたらウルノーガと戦うって心に決めてたの。」

だけど、パレードの皆を預けるためにパパに会う決心が中々つかなかったの。あのプチャラオ村の親子を見るまでは。

話し合えば分かり合える。そう覚悟を決めてここまで来たんだけど、やっぱりパパと会うのが怖くてね。アタシがこの町の出身だって言っただかしら？」

イレブン「いや、僕はグレイグから聞いたんだ」

シルビア「そう、グレイグが言ったのね。聞いての通り、アタシは子どもの頃から騎士になるべく徹底的に鍛え上げられた。だからアタシは、ずっとこの町で騎士として生きていくと思ってた。」

そんな時、サーカス団が町にきたの。そのサーカスのショー、とにかく面白くて！不思議と体の中から力が湧いてくるの。アタシはサーカスのパワーに魅せられたの。そして、アタシは確信したわ。笑

顔は人を強くする！アタシの騎士道はこれだってね。

いてもたってもいられなくなつてね、今のアタシに必要なのは旅芸人の修行だってパパに打ち明けたら、当然のように反対されてその時言つてやったのよ。

世界中の人達みんなを笑顔にできるような、アタシにしかできない騎士道を極めてやる！それまで町には帰らない！って、屋敷が壊れるくらいパパと大喧嘩して、アタシは町を飛び出していったわ」

イレブン「そつか、シルビアの始まりはそこからだったんだね。でも、僕はそのシルビアの騎士道はとつても素晴らしいものだと思ふし、いろんな人を笑顔にする事ができてる。世界中を笑顔にするのもそう遠くないと思うよ」

シルビア「おセンチな話しちゃったわね。でも、イレブンちゃんに励まされて勇気が出てきたわ！よくし！パパに会いにいきましょう」

シルビアは決心した様子で屋敷へ向かった

ジエーゴの屋敷

先程の決心した様子とは裏腹に、シルビアはイレブンの後ろに申し訳なく隠れていた

シルビア「パパ…… ただいま」

ジエーゴ「誰だあ、てめえ……！?その顔は！我が息子ゴリアテ！

てめえ、どのツラ下げて帰ってきやがった!!」

ジエーゴはベッドから立ち上がり、大声で叫んだ

シルビア「ひいいい!ご、ごめんなさい!」

ジエーゴ「ごめんなさいだと?ハア……てめえ何か勘違いしてねえか?」

シルビア「え?」

ジエーゴ「てめえの騎士道ってやつで、世界中を笑顔にできたのか?」

シルビア「……いいえ。まだです」

シルビアはジエーゴの問いにイレブンの前に出て、声色を変えて答えた

ジエーゴ「だったら……なぜ帰ってきやがった!てめえは大口叩いて出ていった。なのに、夢を果たさぬままよくも抜け抜けと!そんな風にてめえを育てた覚えはねえ!うぐっ!」

ジエーゴは傷が痛んだのか少し頭を押さえた

シルビア「パパ!それって……」

ジエーゴ「……ちくしょう！こんな身体じゃなけりや、てめえをぶん殴ってたところだ」

シルビア「ありがとう、パパ！ずっとアタシの事認めてくれてたのね！アタシ、確かに夢半ばのまま帰ってきちゃったけど、それには理由があるの」

ジエーゴ「……魔王か」

シルビア「そう。魔王がいる世界じゃ、人は心の底から笑えないの。だから、アタシ魔王を倒す。そして明るい世界を取り戻して、今度こそ夢を叶えてみせるわ」

ジエーゴ「ハッ！魔王を倒すだと？てめえ、またでかい事言いやがったな。おもしろえ、やってみやがれ」

シルビア「ええ！騎士に二言はないわ。それで実はパパにお願いがあつて来たの。魔王を倒すまでアタシのナカマ達を預かって欲しい。そして、アタシの代わりに皆の中心になって導いてほしいの」

ジエーゴ「ハッ！そんなもんお安い御用よ！困ってる人を助けるのが騎士道つてもんだ」

シルビア「えっ、パパ、本当？」

「ジエーゴ」おうよー！ドーンと引き受けてやらあ。騎士に二言はねえ！」

シルビア「きゃーッ！パパ、ありがとう。それじゃみんなく、パパに挨拶なさーい」

ピューイ！

シルビアは口笛を吹いた

ドドドド！

バタ！

「パレードA」きゃーッ！すつごくキレイなお部屋だわ。ステキ！」

「パレードC」わー。オネエ様のパパがっこいい。これからよろしくね」

パレードの人達が続々と入ってきた

「ジエーゴ」お、おい、ゴリアテ。これはどういう事だ！」

「ジエーゴは突然奇妙な服を着た人達がたくさんやってきた事に困惑している

シルビア「はい、パパ。これを着てね」

シルビアは自身が着ているような大きな紫の羽がついた特殊な服を見せた

ジエーゴ「おい！何だ、この服は！聞いてないぞ！」

ジエーゴはシルビアと同じ奇抜な服に驚いている

シルビア「だって、アタシの代わりに皆の中心になってくれるって言ったじゃない。騎士に二言はないんでしょ？」

ジエーゴ「そりや言ったが……ちっ！仕方ねえ、引き受けてやらあ！」

ジエーゴも渋々その服に着替えた

屋敷前

パレード達「オネエさま。やっぱりお別れなんて嫌よ」

屋敷前では見送りとしてジエーゴ達の他にパレードの人達も来てシルビアに泣きついている

シルビア「アタシだって皆と別れるのは寂しいけど、魔王ちゃんを倒さなくっちゃ。それまでの短いお別れ。パパの言う事、ちゃんと聞くのよ？アタシ達は遠く離れてたってナカマよ！」

パレード達「オネエさま、いつでも呼んでね！アタシ達、どこだろうと駆けつけるから！」

シルビアはイレブンの連携技、ナカマ呼びを覚えた

シルビア「アタシのわがままに付き合ってくれてどうもありがとう。これからもよろしくね、イレブンちゃん」

シルビアが再び仲間に加わった

シルビア「アタシの船なら東の浜辺に置いてあるの。今まで通り好きに乗っていいわよ」

グレイグ「船が使えるれば、今まで行けなかった場所に行けるようになる。引き続き仲間を探しながらラムダを目指そう」

シルビア号

アリス「そう言えばダンナ、こんな話知ってるでげす？バンデルフォン地方のネルセンの宿屋って場所に泊まると、皆が同じ夢を見るんだとか」

ロウ「それは気になるのう。それじゃあ、ネルセンの宿屋に向かってみるかの」

65. 預言者

内海

突然強い風と雨が降り始め、海は大荒れとなってきた

ロウ「何じゃ、急に海が荒れて来たのう」

グレイグ「おい、ゴリアテ。貴様の船はこれしきの嵐で沈んだりしないだろうな」

シルビア「くっ！今、荒波ちゃんと戦ってるんだから話しかけないで！」

におう……におうぞ…… 命の匂いだ

どこからか声が聞こえてきた

グレイグ「何だ、今の声は」

グラグラ！

船が大きく傾いた

ロウ「のわー！ー！」

ロウが転びそうになる

ハハハハハ！我が名は、覇海軍王ジャコラ！

魔王様より、この海を統べるよう賜った

ザバアン!!

ジャコラ「我が海を汚すザコ共めが。その命、もらいうける」

海からは巨大な魚のような魔物が姿を現した

頭には赤く光るオーブがある

イレブン「こいつは!!」

ロウ「ぬう、化け物め。なめくさりおって。グランドクロス!」

バン!

ジャコラ「ハハハ!効かぬわ」

ロウの放ったグランドクロスは当たったが、ジャコラにはびくともしなかった

ロウ「何じゃと!?!わしのグランドクロスが効かぬじゃと!?!どうなっておるんじゃ」

ジャコラ「魔王様より授かったレッドオーブの力を使えば、そんな物効かぬわ!海の底に沈め!」

ドオン!

イレブン「うわー！」

ザバン！

ジャコラの攻撃を受けた船は強く傾き、イレブンは弾き飛ばされて海へと落ちていった

ロウ「イレブン!!」

イレブンは意識が遠のいていった

???

イレブン「……ん。あれ、ここどこ？」

イレブンが目を覚ますと草原が広がっており、先には小さな小屋があった

イレブン「とりあえず小屋に行ってみよう」

小屋内

そこには釣りをしているおじさんの姿があった

??? 「なくんじや、誰かと思えばお主か。驚かんでもええ。ここは天国でも地獄でもない場所。安心するがいいぞ。どれ、一緒につりでもやらんか」

イレブン「……… わかりました。……… ってあれ？」

目を離した瞬間におじさんの姿からおじいさんの姿になっていた

??? 「なんじゃ。わしの顔をジロジロ見おって」

イレブン 「いや、さつきと人が……」

??? 「わしのこの格好が気に入らんか、これでどうじゃ?……これもダメか。これでどうじゃ?……ふむ、ワシの姿が定まらんところを見ると、お主ワシの事を知らんようじゃな。」

ワシはお主の世界では預言者と言われている。ワシに抱く姿形が人によって違うのでな。その姿によってワシの姿は変わるのじゃ。どうじゃ、何か釣れたか?」

イレブン 「いや、何も釣れてないよ」

預言者 「じゃろうな……今はまだその時でないという事じゃ。釣れる時は釣れる。来たるべき時が来るまで、耐え忍ぶ事。それが肝要じゃ。」

そういえば、お主の仲間にも会った気がするの。名前はカミュと言ったか。まあよい。部屋に戻るとするかの」

部屋

預言者 「さて、ここに来たという事は何か迷っておるな、失礼するぞ。ふむ……お主、勇者の力を無くしたと思っておるな?」

預言者はイレブンの頭に手を添えると悩みを言い当てた

イレブン「そうなんです、僕は勇者の力が無くなってしまってます」

預言者「残念じゃが、ワシにできることは何も無い。だが、一つ言える事はある。勇者の力を魔王に握り潰されたと思っておるようだが、力なんてもんは、見えやしないし、触れもしない。簡単に握り潰せるようなヤワなもんじゃやない。特に……勇者の力なんてもんはな」

イレブン「えっと……つまり？」

預言者「何だ、まだわからぬのか。まあよい。釣れる時は釣れるように時が来れば自ずと掴めるものじゃ。そういえば、お主今気絶しておるんじやの。じゃが安心せい。大樹が言っておる。

お主は、まだ倒れる運命にないとな。ゆっくりしてはいられんぞ。お主は勇者。やるべき事はわかっておろう？世界を救え」

その言葉を最後にイレブンは意識が遠のいていった

船着場

シルビア「あ！目を覚ましたわ！」

イレブン「こ、こころは？」

ロウ「イレブンが海に落ちた後、何とかわしらはお主を救出しようとしたんじやが絶望的での。そんな時、お主が光に包まれて海から上がってきたのじや。わしは腰を抜かしそうになったがのう。なんとかあの場を切り抜け、ここまで逃げおおせたわけじや」

イレブン「さつきまで僕、不思議な場所にてね、次々と姿を変え
る預言者って人に出会ったの」

シルビア「んもう！イレブンちゃんったら。夢でも見たのね」

グレイグ「疲れておるのだろう。船員の宿舎を借りれるようだから、そこで一晩休んで行こう」

その時、海に光が登り文字が浮かんできた

イレブン「？勇気を胸に　いかずちを手に」

ロウ「？どうしたのじや、イレブン？海を見て」

イレブン「……　ううん、何でもないよ、おじいちゃん」

66. 悪夢

ネルセンの宿屋

イレブン「ふう、ネルセンの宿屋についたね」

シルビア「それじゃあ夢というのも気になるし休みましようか。もし、何かみれたら明日報告してね」

夢

男がそこにいる。周りには青い炎があがっている

???「ああ、くちおいしい。後悔という名の鎖がこの身を縛りつける。私は何もできなかった無力な存在。もしあの日に戻れるのなら、地獄の業火に焼かれても構わない。ああ、くちおいしい、くちおいしい」

今度は男とは別の女性の声が聞こえてきた

……誰か私の願いを受け止めて。あの人を暗い絶望の闇から解き放つて。私の声よ、どうか誰かに届いて。お願い

朝

ロウ「ふむ。それでは噂通り、皆が同じ夢を見たようじゃな。くちおいしいと嘆く戦士の夢を」

シルビア「何だか必死に助けを求めてたわね。できれば手を貸して

あげたいけど、手がかり無しじゃお手上げだわ」

ロウ「あの戦士の甲冑に描かれた紋章は、間違いなくユグノアのものじゃった。そういえば、世界が闇に覆われてからユグノアがどうなったかも気になる。少し様子を見にいかんか？」

イレブン「そうだね、ユグノア城に行ってみようか」

ユグノア城 跡地

ここにも黒く焼け落ちた岩や木が落ちており、前よりも更に酷い荒れ方となってしまった

ロウ「この場所は元々崩壊しておったが、さらに酷い有様になってしまったのう。たしかこのあたりじゃったかのう。すまんが、このガレキをどかしてもらえんか？」

イレブン「わかった、ちよつと待っててね」

ガレキをいくつかどかしていくと階段があらわれた

ロウ「これは地下通路への入り口。ユグノアに何か危機が訪れた時に、城の外へ逃げるための道じゃ。わしの読みが正しければ、この先に夢で見た戦士の手がかりがある」

地下通路 奥地

そこには夢と同じ姿の戦士がいた

???「おのれ、またやってきたのか。邪悪なる魔の者達よ。貴様ら魔族のせいで、私は全てを失ったのだ！許さんぞ！」

謎の戦士は剣を抜いて今にも襲いかかってきそうである

ロウ「この戦士はやはり！……イレブン、あの戦士を宥めるのじゃ。あの戦士と話がしたい」

イレブン「わかった。気をつけていこう」

嘆きの戦士があらわれた

シルビア「グレイグ！バイキルト！」

シルビアはグレイグの体に緑の魔法陣を描くと、グレイグ全体が緑色のオーラに包まれ、グレイグの筋肉がかなり増大する

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンが戦士に向かって攻撃を仕掛ける

戦士「はっ！」

キンツ！ゲシツ！

イレブン「!!」

戦士はいとも簡単にイレブンの攻撃を受け止めると同時に蹴りをイレブンに入れてイレブンを押し戻した

戦士「ダークブレイク！」

戦士はそのまま闇の力を纏った剣で薙ぎ払ってきた

全員「ぐっ！」

戦士「許さんぞ！」

戦士は手から黒い球を作り出すとグレイグに向かって投げつけてきた

グレイグ「くっ！これは呪いか！」

グレイグは全身が呪われた影響で、筋肉が固まり上手く体が動かせなくなった

グレイグ「全身全霊斬り！」

なんとか意地で攻撃を仕掛ける

戦士「はっ！」

ガン！

グレイグ「ぐうっ！」

しかし、戦士には通用せず逆にカウンターとして脇腹に剣を叩き込まれる

ロウ「グレイグよ、おはらいじゃ」

ロウはグレイグの体に聖なる力をかけて呪いはらった

グレイグ「ありがとうございます、ロウ様。あの戦士、かなりの剣の腕前をしております」

イレブン「みたいだね。油断していると本当に危ないや」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

シルビアはイレブンの体に緑の魔法陣を描くと、イレブン全体が緑色のオーラに包まれ、イレブンの筋肉がかなり増大する

イレブン「ありがとう、シルビア！はやぶさ斬り！」

イレブンはパワーアップした攻撃で再び戦士に攻撃を仕掛ける

ガキン！

戦士「ぬ……」

イレブン「やあ！」

カアン！

戦士とイレブンは力比べの結果、イレブンが戦士の剣を弾き飛ばした

戦士「ビッグバン！うおおお！」

「戦士は呪いの力を凝縮させ、イレブン達全体で爆発させた

全員「グアアア！」

全員の体が呪われ、上手く体が動かせなくなった

シルビア「まずいわ！全員動けなくなっちゃう！」

ロウ「わしが祓おう！頼んだぞ、グレイグよ。おはらいじゃ！」

ロウはなんとかグレイグの体に聖なる力をかけて呪いはらった

グレイグ「ありがとうございます、ロウ様。ここは俺が！」

グレイグが戦士の前に出る

グレイグ「うおおお！」

グレイグが連続で大剣で攻撃を繰り返していく

戦士「ふんっ！やあっ！はっ！」

キン！ガン！キン！

激しい打ち合いが続く

グレイグ「！ここだ！全身全霊斬り！」

グレイグが一瞬の隙を突いて、戦士の体に全力で肩から腰にかけて切り裂いた

戦士「うう………。くちおしい、くちおしいぞ。よくもエレノアとイレブンを。ゆるさぬ、許さぬぞ！」

戦士は膝をついた。その戦士からはイレブんとイレブンの母であるエレノアの名前が出てきた

イレブン「え………。？僕と、母さんを知ってる？」

ロウ「やはりそうか。お主はアーウィンじゃな。アーウィンは、このユグノアの王であった男じゃ。それと同時に、勇敢なるユグノアの戦士でもあった。そしてイレブン、お主の父親でもある。まさかこんな形で再会するとは思わなかった。

アーウィンよ、なぜお主はこのような姿になってしまったのだ。わしによく顔を見せておくれ……。なっ！これは一体！」

ロウが被っている兜を取るとそこには顔はなく、黒く渦巻いている

その時、どこからか夢の中でも聞いた女性の声が聞こえてきた

???「ああ、ついに来てくれた。彼を救ってくれる人が現れるのをずっとお待ちしていました。

あなた方のおっしゃる通り、この方はユグノア王国を治めていたアーウィン王です。16年前ユグノアを襲った悲劇の時、彼は闇に怯む事なく戦い抜き、正義の光を胸に立派に王国を守りました。

しかし、今やその光は失せてしまった。今の彼は生きることすら死ぬこともできない、悪夢を彷徨う悲しい屍。

どうかお願いします。暗く悲しい悪夢から彼を解放してあげて。彼の絶望に、光を照らしてあげてください」

イレブン「おじいちゃん、僕がやってみる。父さんを助けてみせる」

イレブンは顔を覗き込んだ

すると、イレブンは黒く渦巻く場所に意識が飛ばされていく

??? 「ケフアフアア、また餌がきた。さあ、我が絶望の中に落ちてくるがいい。極上の悪夢を見せてやろう」

何者かの怪しい声がイレブンの頭に僅かに聞こえた

ユグノア城

イレブン「ここは……？あれは父さん？」

イレブンは気づくとお城の中にいた。周りからイレブンは見えていないようだ

男性「アーウィン王！イレブン様の誕生おめでとうございます！」

アーウィン「ありがとう」

イレブン「ここは、僕が生まれた日なのか」

アーウィン「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。本日は、我が国ユグノアにとっても大切な日。祝杯の宴をどうか楽しんでください」

エレノアの部屋

イレブンが静かに部屋に入ると、そこには実の母であるエレノアと子どものマルティナと産まれたばかりの赤ちゃんであるイレブンがいた

子マルティナ「赤ちゃんってこんなに小さいのね。ちよつと触ったら壊れちゃいそう。エレノア様、イレブンに触ってもいい？」

マルティナは興味深々でイレブンを見ている。マルティナが優しくイレブンに触ると、イレブンはマルティナの指をふんわりと掴んだ。エレノア「ふふ。この子つたらマルティナの事好きみたいね。遊んでほしいって言ってるわ。イレブンは勇者として生を受けた希望の子。この子が大きくなったら、いかなる困難も乗り越える、力強く逞しい子になってほしいわ」

子マルティナ「エレノア様に似たら皆に優しい子になるわね、きつと！あ、アーウィン様！」

扉の前で見ていたイレブンの後ろにはアーウィンがやってきていた。アーウィンは立っているイレブンを通り抜けてエレノア達の前にはやってきた

アーウィン「さあ、エレノア。もうすぐ四大国会議が始まるよ。イレブンをこちらに」

外は雨が降り始め、雷も落ちている

エレノア「こんな特別な日に急にこんな天気になるなんて。それに私、さつきから妙な胸騒ぎがして」

アーウィン「エレノア、安心してくれ。何があっても、君とイレブンは私が守るから心配いらなよ」

四大国会議中

バタン！

兵士「王様方！お逃げください！数えきれない魔物達が！」

兵士が王様達に緊急事態を知らせるが、既に城内には多くの魔物が侵入していた

デルカダール王「くっ！何という事だ！そなたはイレブんとエレノアを連れて城の外に逃げろ！ここは私とロウが引き受けた！」

デルカダール王とロウはアーウィンとイレブンを部屋から出して魔物の気を自分達に惹きつけた

アーウィン「ありがとうございます、デルカダール王！」

エレノア「あなた！ああよかった！窓から魔物の大群が見えてあなたとイレブンが心配で」

エレノアとマルティナもなんとかここまで逃げてきていた

アーウィン「あまり話している時間はない。早くここから出よう。君とイレブンは私があつても助ける」

地下通路

アーウィン「さあ！早く逃げろ！追ってはここで私が何とかする！」

アーウィンは外に出る扉の前でエレノア達を逃すと、自分はその場に残り追つてを倒すために剣を抜いた

アーウィン「さあ、忌々しい魔物達め！覚悟しろ！」

その後、アーウィンが魔物達を倒すと

デルカダール王「マルティナ!!ここにもいないのか？マルティナ！」

デルカダール王が焦った声でマルティナを探している声が聞こえてきた

アーウィン「デルカダール王、そうか。マルティナはエレノアと共に逃げた。伝えなければ」

デルカダール王「ぐはっ！」

ドサア

アーウィン「デルカダール王!?おのれ、お前は一体何者だ!」

デルカダール王は突然倒れ、アーウィンが発見するとその側には謎の魔物が立っていた

ウルノーガ「フッフ」

ウルノーガはデルカダール王の中に入っていく

その後、すぐにデルカダール王が目を覚ました

アーウィン「デルカダール王!ご無事でよかったです!うぐ!一体何を…」

ドサ

デルカダール王は近づいてきたアーウインを剣で貫いた

デルカダール王「フッフッフ」

若グレイグ「デルカダール王!いらっしやいますか!これは!」

その時、まだ若いグレイグがデルカダール王を探しにやってくる
アーウインが倒れている事に驚いている

デルカダール王「アーウインは魔物に取り憑かれ、私に襲いかかってきたのだ。私は仕方なくこの手でアーウインを……………。やはり、勇者という光が闇を引き寄せたのだ。

勇者イレブンがいなければこんな事にはならなかった!イレブン

はこの世界に光をもたらす希望の子ではない。災いを呼ぶ悪魔の子だ！

悪魔の子を生かしておくわけにはいかない！草木をわけても探し出せ！」

デルカダール王はグレイグと共に去っていった

アーウィン「く……ちが……イレブンは悪魔の子なんかじゃ……すまない、エレノア、不甲斐ない私を許してくれ」

アーウィンは誰にも聞こえないようなか細い声を出した

???

謎の空間にイレブンは侵入しており、そこでは魔物が今の光景をムシヤムシヤと食べている

バクームス「ゲファファファ、うまいうまい。我が名はバクームス。絶望を喰らうもの。国は滅び、愛する家族とは死に別れ、この男の絶望はまさに高級フルコース。一度食べたなら忘れられぬ。16年間こいつの絶望を食べたが、そろそろ違う味も試したかったところだ。

さあ、お前の新鮮な絶望をいただくとしよう。これは、お前の記憶の中にある最も忌まわしい記憶」

バクームスが目を光らせると、イレブンの頭の中にあの時の大樹の光景が浮かび上がる

バクームス「お前は勇者の力を奪われ、魔王を誕生させてしまった。だから世界は滅びたのだ。お前は誰も守れなかった。お前は世界を

救えなかった。それは無力な勇者の罪」

イレブン「う、うう……」

思い出したくない記憶を、言われたくなかった事を言われ、イレブンは苦しそうにしている

ドサ

バクーモス「さあ、絶望の中に落ちてしまえ」

倒れ、暗い場所に落ちていくイレブンの頭に先程の女性の声が聞こえてきた

???「イレブン。私の声が聞こえますか？あなたの中にある聖なる光は、決して消える事はありません。

その光はあなたの中で密やかに目覚めの時を待っています。さあ、その光で再びこの世界を照らすのです！

闇を滅ぼす事ができるのは勇者であるあなただけ!!
さあ、目覚めなさい！

イレブン「!?そうだ、僕は負けない！」

カアアッ！

イレブンからは光が溢れてくる

67. 勇者と愛情

地下通路

カアアッ！

全員「!？」

アーウィンから眩い光が発せられる

バクーモス「くううう！忌々しい光で前がみえん！」

バクーモスが現実世界に現れた

イレブン「あ、ここは。戻ってきたのか」

イレブンも同じく現実世界に戻ってきた

ロウ「おお！イレブン！無事であったか」

イレブン「うん！皆、こいつが元凶だよ！倒して父さんを救い出すんだ！」

バクーモスがあらわれた

バクーモス「こうなれば、今度はお前達の絶望を食べてやる！ハアアッ！」

バクーモスは口から黒く波打つ闇の吐息をイレブン達に吐き出した

シルビア「キャッ！なによこれ、なんだか汚いわね」

ロウ「なにやら嫌な力を感じる。あまり連続で喰らいたくはないのう」

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンはバクームスに向かって剣を素早く斬りつけた

バクームス「ぬう！」

グレイグ「イレブン、ゴリアテ！連携するぞ！」

二人「うん／ええ！」

シルビア「ふふ」

グレイグ「ふん！」

二人は光輝く剣を構える

グ、シ「ナイトプライド！」

二人は互いに持つ剣を合わせる。すると剣は一つとなり、グレイグとシルビアの力がイレブンに向かっていく。

イレブン「ハアアアア!!」

イレブンが二人の力を受けて黄色いオーラを纏うようになった。更にイレブンは極限の集中状態になり、ゾーンに入り込んだ

イレブン「はやぶさ斬り！」

二人の力を受けたイレブンは目にも止まらぬスピードで力強く斬りつける

バクーモス「ギャアアア！」

バクーモスもその威力に壁まで吹き飛ばされる

ロウ「イレブン、わしともやるぞい」

イレブン「うん、おじいちゃん！」

ロウとイレブンの不思議な唄が地下に響き渡る

バクーモス「グウ……」

バクーモスは眠ってしまった

シルビア「これで安心ね！グレイグ！バイキルト！」

シルビアはグレイグの体に緑の魔法陣を描くと、グレイグ全体が緑色のオーラに包まれ、グレイグの筋肉がかなり増大する

イレブン「はやぶさ斬り！」

イレブンが再び目にも止まらぬスピードで寝ているバクーモスを斬りつける

グレイグ「俺も行くぞ！全身全霊斬り！」

グレイグもイレブンに続き、大剣をバクーモスに全力で振り下ろした

バクーモス「ギャアアア!!こ、こいつら、舐めおって！」

バクーモスはあまりの痛みに飛び起きると、近くにいたグレイグに素早く噛み付いた

グレイグ「!?眠く……」

攻撃を喰らったグレイグはいきなり眠ってしまった

バクーモス「ハアアッ！」

バクーモスは口から黒く波打つ闇の吐息をイレブン達に吐き出した

ロウ「ぬっ!?こ、これはわしの魔力が……」

イレブン「僕も変な感じがする。魔力が無くなったみたい」

シルビア「やつぱりロウちゃんが言っていた通り、嫌な感じがする技ね。さっさと倒しちやいましょう」

イレブン「そうだね、はやぶさ斬り！」

イレブンはもう一度バクーモスに向かっていき、今度は後ろから強く斬りつける

バクーモス「ぬう！さつきから貴様だけ目に追えん！」

バクーモスもイレブンのスピードについていけずにまた壁へと飛ばされる

ロウ「グランドクロス！」

バクーモス「ギャアアア！」

そこへロウの十字の攻撃が追撃として放たれる

シルビア「グレイグ！おきなさい！」

シルビアはグレイグの元へ行き、小気味良い音を立てて頭を叩いた

グレイグ「む!?す、すまない、ゴリアテ」

イレブン「はやぶさ斬り！」

バクーモス「ギャアアア!!く、くそつ、ならば最後にこれでも喰らうがいい！ハアアツ!!」

バクーモスは息も絶え絶えのまま、力を振り絞り黒く波打つ闇の吐息を吐き出した。その量は今までの比にならず、地下を覆い尽くすほどである

全員「うおおお!!」

それぞれが吐息に包まれ見えなくなる

「ロウ「ゴホッ、こ、これはまずい！魔力がどんどん失われていくぞ！」」

シルビア「やだ、力が抜けてくる……」

グレイグ「耐えろ！倒れてしまえばそれこそ取り返しのつかないことになるぞ！」

イレブン「ぐっ……（こんなのに…… 負けてられない！僕はもう、負けないと決めたんだ!!）」

「カアアッ！」

再びイレブンから眩くも暖かい光が放たれる

バクームス「ゲギヤアアア！」

ジュワー

バクームスがその聖なる光を浴びて消えると、地下全体とアーウィンを覆っていた黒いものは消えていった

アーウィン「こ、ここは……!?その眼差し、その目に宿る優しい光は。まさか、そんな!!…… イレブン！イレブンなのか!？」

アーウィンは目の前に立つイレブンの姿を見ると、驚いたような顔をしてイレブンを抱きしめた

イレブン「そうだよ、父さん。父さん達の息子イレブンだよ」

アーウィン「そうか……。私を絶望の淵から救ってくれたのは、お前だったのだな。立派になったな、イレブン」

アーウィンをイレブンを優しく見つめている

その時、先程と同じ女性の声が聞こえてきた

??? 「……あなた。ようやくもとのあなたに戻ってくれたのね」

アーウィン 「……ああ。信じられない。君なのか、エレノア」

アーウィンは上を見つめながら優しい顔をしている

エレノア「あなたを苦しめていた呪縛は、イレブンが解き放ってくれた。これで私達、安心して旅立てるわね」

アーウィン 「ああ、そうだな」

そう言うとアーウィンは光の玉になり、イレブンの周りをひとしきり回った後、天に登っていった

イレブンには暖かい光がさしている

エレノア「イレブン。私のかわいいイレブン。あなたにはこれから、多くの困難が立ちはだかるでしょう。それでもそのまま、真っ直ぐに進みなさい。」

あなたの中にある希望の光が、きつとあなたを導いてくれるはず。父と母は、いつもあなたを見守っていますよ。

さようなら、イレブン。ずっとあなたのことが大好きよ」

暖かい光はなくなり、エレノアの声も聞こえなくなった

ロウ「これで…… 本当にお別れじゃな。アーウィン、エレノア」

シルビア「あ！イレブンちゃん！その手！」

イレブン「あ！勇者の紋章だ！」

イレブンの左手には勇者の紋章が元通りになっていた

ロウ「おお！アーウィンとエレノアが勇者の力を蘇らせてくれたんじゃない」

イレブン「父さん、母さん。ありがとうございます。僕はまた勇者として戦う！この世界に光を照らすんだ！見守っていてください」

その後

イレブン「このままグロッタの町の様子も見に行こうと思うんだ」

ロウ「ふむ、そうじゃのう。もしかしたら何か異変がおこっているかもしれないの」

ユグノア地方

道中にいた男性が話しかけてきた

男性「よう！あんた達も噂を聞いてやってきたのかい？」

ロウ「はて？噂とな？」

男性「なんでもい。何も知らないのかい？世界が滅亡して、皆落ち込んでるだろ。そんな心の傷を癒す世界の楽園がグロツタにはあるって話よ。」

こないだすれ違った旅の武闘家もグロツタの町に行くって言ってたしな。皆癒されたくて仕方ないのさ。その姉ちゃんすげえ美人だったな、俺も楽園に行くか」

そう言うと男性はグロツタの街の方へ向かっていった

ロウ「もしやマルティナの事かもしれぬのう」

イレブン「そうかもね。よかった、無事みたいだ。早速グロツタの町に行ってみよう」

68. 呪われしマルティナ

グロッタの町

中に入ると前までの熱気溢れる雰囲気はなく、ネオンのライトが至る所で光っておりどこか賑やかになっている。また、大きな銅像も姿が変わっていた

シルビア「何だか様子がおかしいわね。それにあんな悪趣味な像あつたかしら？」

イレブン達の近くにて話しかけてきたのは魔物だった

魔物「ようこそ、グロッタの町へ」

グレイグ「町の中に魔物!?油断するな、イレブン!」

グレイグ達は全員魔物の姿を見て構えた

魔物「おやおやお客さん。困りますよ、どうか落ち着いてください。このグロッタの町は今や幸せな楽園に変わったのです。そんな場所で戦闘なんてヤボですよ。」

野蛮なコロシウムなんてもう古い!これからは六軍王であるブギー様が作ったモンスターカジノが、ここの新名物ですよ。あなた達も興味がおありでしたら、ぜひ2階にあるカジノへ行ってください」

ロウ「怪しい匂いしかしませんが、マルティナがいるやもしれん。モンスターカジノに向かってみるとするかの」

モンスターカジノ

イレブン「あれ？ここから先は？」

魔物A「ここから先はVIPなお客さんしか入れない所だよ。VIPに選ばれたかったら、ラブリーエクスを持ってきてね」

グレイグ「なぜまたそんな物を」

イレブン「仕方ないね。ここにマルティナはいないみたいだから、VIPの所に行ってるのかも。スロットでラブリーエクス分のコインを集めよう」

しばらくして

イレブン「はい、ラブリーエクス。これで通してくれる？」

魔物A「あゝこれよ、これ。これで君も立派なVIPなお客さんだね。さあ、通って」

イレブン「ふう、すぐに集まってよかった」

魔物B「あら、人間のお客様なんて珍しい。どんどん楽しんでいてね。さあ、こっちに来て。ねえさあん！出番よ！今日もやつちやつ

てちょうだい」

「奥からはある女性がやってきた

??? 「うふふ、次はどんなボウヤが来たのかしら?」

全員「な!?!」

それはバニー姿になったマルティナだった。しかし、前までの凜とした雰囲気はなく黒い体に包まれ、大人の女性の雰囲気がかなり強くなっている

グレイグ「ひ、姫様!?!」

呪いマルティナ「あら?グレイグじゃない。あなたみたいな頭でっかちでも、こんな所に入りするのね。あんたも刺激が欲しいのね。たーっぷりサービスしてあげるから、アタシと一緒に遊びましょ?」

マルティナはグレイグの胸に背中をくっつけて誘うようなポーズをとっている

グレイグ「ひっ、ひっ…… 姫様!何とほしたない!」

呪いマルティナ「ハア。グレイグ、あんたって本当ウンザリするほど真面目な男ね。忠実なだけなら犬でもできるわよ。ねえ、アタシの犬にしてあげましょうか?世界で一番幸せなペットにしてあげる」

ロウ「な、何とハレンチなっ！一体どうしたんじゃ、マルティナ！今は冗談を言っている場合じゃないぞい！打倒ウルノーガの信念を貫くため、わしらにはお主の力が必要なんじゃ！さあ、もう一度わしらと旅を」

呪いマルティナ「んもう！相変わらざるさいじいね。楽しい雰囲気はシラケちゃうじゃない。いい？今のアタシにとって、ウルノーガなんてどうでもいいの。」

こんな世界、もつと壊れちゃえばいいわ。アタシが興味あるのは、このカジノを作った六軍王ブギー様だけ。アタシの身も心もブギー様の物なのよ」

シルビア「マルティナちゃん！そんな事をラーズちゃんが知ったら何て言うか！目を覚ましてちょうだい！」

呪いマルティナ「ラーズ？ああ、あの男ね、もう忘れたわ。一時の迷いよ。だから、アタシはあんた達にはついていけないわ！アタシはブギー様と一緒に、このカジノを盛り上げていくんだから」

グレイグ「姫様、こんな所からは早く出ましょう。さあ！」

グレイグは強引に手を掴もうとする

呪いマルティナ「はあっ！」

マルティナはグレイグの手を払い除けた瞬間、回しげりを叩き込む

グレイグ「ぐうっ！」

グレイグは顔に飛んできた蹴りを間一髪でガードする

呪いマルティナ「気安く触らないでくれる？女の誘い方も知らないの？あんた、何もわかってないのね？どうやら、あなた達みたい人にはきついお仕置きが必要みたいね。アタシの蹴りで黙らせてあげる！」

呪われしマルティナがあらわれた

グレイグ「イレブン、姫様の目を覚まさせるぞ！」

イレブン「あまり痛くないようにしないとね！」

イレブンがマルティナに大剣を持って向かっていく

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

シルビアはイレブンの体に緑の魔法陣を描くと、イレブン全体が緑色のオーラに包まれ、イレブンの筋肉がかなり増大する

イレブン「渾身斬り！」

イレブンはパワーアップした渾身の一撃をマルティナに放つ

呪いマルティナ「うふふ、そんなの当たるわけないじゃない」

マルティナは大振りの一撃を軽々と避ける

イレブン「だろうね！」

呪いマルティナ「!?」

ガン!

イレブンの大振りの一撃は地面に強く当たった

イレブン「斬り返し！」

イレブンは地面で跳ね返った反動を利用しながら、避けたマルティナに向かって下から大剣を斬り上げた

ザシユツ!

呪いマルティナ「キヤアツ!!くっ、なぎはらい！」

マルティナは直撃するが、負けじとイレブンの脇腹に槍を薙ぎ払った

イレブン「ガハツ！」

イレブンは横に飛ばされていく

呪いマルティナ「ふふ」

マルティナはグレイグの元に向かう

グレイグ「さあ、来るのです、姫様！」

呪いマルティナ「あなたにはこれよ。そくれ、ぱふぱふ」

マルティナは女性特有の部分をグレイグの体に優しく挟むように当てる

グレイグ「!!?う、うおお」

グレイグは予想外の動きに困惑してしまった

イレブン「え!?!」

ロウ「な、なんと羨まし……じゃない。グランドクロス!」

ロウは気持ちを切り替えて、十字の攻撃をマルティナに放つ

呪いマルティナ「じじいなんかにはやらないわよ」

マルティナは簡単に避ける

シルビア「グレイグ!バイキルト!」

シルビアはグレイグの体に緑の魔法陣を描くと、グレイグ全体が緑色のオーラに包まれ、グレイグの筋肉がかなり増大する

イレブン「渾身斬り!」

戻ってきたイレブンが横から大剣を振りかぶる

呪いマルティナ「!?!なぎはらい!キャアツ!」

イレブン「ぐっ!」

二人の攻撃がどちらにも直撃する

グレイグ「蒼天魔斬！」

マルティナが怯んでいる所にグレイグが斧で斬りかかる

呪いマルティナ「はっ！危ないじゃない、セクシービーム！ぱっきゅーん！」

マルティナは避けた後、体から色気の力を指先に溜め、ハートの形にしてグレイグに放った

グレイグ「ぐっ！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

イレブン達の周囲に緑の魔法陣が描かれ、強い治癒の力がかけられると、全員の傷が瞬時に塞がっていく

シルビア「あら、マルティナちゃんがするならアタシだってやるわ！ほとばしるく、アモくレ！」

シルビアはみりよくの力を指先に溜め、ハートの形にしてマルティナに放った

呪いマルティナ「!?私と同じ技!?!」

マルティナはまさかの同じ技で返された事に驚いている

イレブン「渾身斬り！」

イレブンはその隙にマルティナに再び斬りかかる

呪いマルティナ「てやあ！」

マルティナは大剣を蹴り払った

ガンツ！

イレブン「くっ！」

呪いマルティナ「あまり調子に乗らないで！なぎはらい！」

マルティナはイレブんに勢いよく槍を薙ぎ払った

イレブン「そっちこそ！」

ガキン！

イレブンは剣で防ぐ

呪いマルティナ「チツ！」

と
マルティナが防がれた事により、イレブんと距離を取ろうと離れる

グレイグ「蒼天魔斬！」

グレイグがマルティナの後ろから斧で斬りかかる

呪いマルティナ「くっ！」

マルティナはギリギリで横に避ける

グレイグ「はあっ！」

呪いマルティナ「キヤアッ！」

グレイグは間髪入れずに横にマルティナを蹴った

ロウ「グラウンドクロス！」

その場所にロウの十字攻撃が放たれる

呪いマルティナ「キヤアアッ！」

イレブン「今だよ、シルビア！同時に！」

シルビア「まっかせてく！ほとばしるく、アモくレ！」

イレブン「渾身斬り！」

シルビアのハート形の攻撃とイレブンの大剣の大振りがマルティナに同時に直撃する

呪いマルティナ「キヤアア！」ドサ

呪われしマルティナを倒した

69. 妖魔軍王ブギー

ロウ「ふう、これで目を覚ましてくれるといいんじゃないが」

???「困りますなあ、お客さん。ウチのナンバーワンディーラーをいじめてもらっちゃ」

奥から謎の魔物が騒ぎを聞きつけてやってきた

???「泣かせた女は数知れず。最強のキングオブモンスター。妖魔軍王ブギー様、参上だじよ」

緑色の太った魔物が現れた。目の近くには緑色に輝くオーブがある

シルビア「こいつがグロツタの町をこんな風にした張本人ってわけね」

ブギー「ああ、よちよち。かわいいそうなボクちゃんのかわゆい子猫ちゃん。カタキはボクちゃんが取ってあげるからね」

ブギーはマルティナに近づき、頭を撫でている

グレイグ「無礼者が!!即刻、姫様から離れろ!」

ブギー「ふっふっふ。この子を仲間に引き入れようたって、そうはいかない。ボクちゃんの力で、マルティナをナイスバディーな魔物にしてボクちゃんの忠実なるしもべにしたからね」

シルビア「人間を魔物に？ということとは、ここの魔物達は」

ブギー「ここの従業員はみんな人間だったんだじよ。カジノで大勝ちして調子に乗った人間を魔物に変えて、コキ使いまくるのがボクちんの何よりの楽しみなんだよーん！」

ロウ「マルティナはわしらの大事な仲間！お主の悪行に付き合わせる訳にはいかん。マルティナを返してもらおうぞ」

ブギー「いっくじょー」

妖魔軍王ブギーがあらわれた

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

シルビアはイレブンの体に緑色の魔法陣を描くと、イレブンの全身が緑色のオーラに包まれ、イレブンの筋肉がかなり増大する

イレブン「渾身斬り！」

先程と同じくイレブンのパワーアップした大剣が振り下される

ブギー「ギャアアア!!い、痛い！なんか思ってるより痛いぞ！」

ブギーは直撃した腕を涙目で擦っている

ブギー「そんな乱暴な事するな！どいつもこいつもー！踊らにやそんそん！」

ブギーがカジノに飾られてあるミラーボールに力を込めると、どこからか愉快的な音楽が奏でられ、ブギーに合わせて楽しげな雰囲気になっていく。また、音楽に不思議な力がかかっており、イレブン達の体は勝手に動き出しそうになる

ロウ「なんじゃ!?体が勝手に！」

ロウはつられて踊ってしまった

グレイグ「な、なんだこの技は！」

ロウ「体が止まんわい！これはどうなっておる！」

イレブン「おじいちゃん!？」

シルビア「本当なら素敵な技なんだけど、今はそんな事言ってもらえないわね。厄介な技だわ」

ブギー「お前達がその気なら、ボクちんだってやっちゃうんだじよー。メラゾーマー！」

ブギーは一瞬で赤い魔法陣を描き、大きな火球をイレブンにぶつける

イレブン「これくらい！はあ！」

イレブンは炎を大剣で二つに切った

ブギー「むー、当たると思ったんだけじよなー」

グレイグ「よそ見など舐められたものだな！」

ブギー「え？」

ブギーがイレブンの方を見ている間にグレイグはブギーの後ろに回っていた

グレイグ「鉄甲斬！」

ズバツ！

ブギー「ギャアアツ！こ、これも痛い！皮膚が裂けた！」

ブギーの背中に斧でついた大きな切り傷が出来た

シルビア「グレイグ！バイキルト！」

シルビアはグレイグの体に緑色の魔法陣を描くと、グレイグの全身が緑色のオーラに包まれ、グレイグの筋肉がかなり増大する

イレブン「渾身斬り！」

ブギー「もうそんなの喰らいたくないじよ」

ブギーは警戒していたのか、イレブンの攻撃を見ないで避けてみせた

ブギー「ふっふっふ、とっておき使っちゃうじよー」

ブギーの目の近くにある緑色のオーブが怪しく光り出す

イレブン 「まさか！」

ブギー 「ギガマホトラ！」

ブギーはグリーンオーブの力を解き放つ

シユユウウウ!!

全員 「ぐっ……」

ロウ 「なんじゃ、この感覚は」

シルビア 「まるで体力が取られたような」

グレイグ 「力が出なくなったような感覚だ」

イレブン 「こんな技まであるのか」

ブギー 「ありがとじょ、こっちは元気になったじよ。さあ、いくじよ！メラゾーマ！」

ブギーは瞬時に目の前に赤い魔法陣を描き、大きな炎の塊をシルビアにぶつけた

シルビア 「キャアッ！」

イレブン 「シルビア！」

シルビア 「平気よ、ちよつとビックリしすぎて対応が遅れたわ。ご

めんなさい」

グレイグ「蒼天魔斬！」

グレイグが再びブギーの背後に回り、斧で斬りつける

ザクツ！

ブギー「ギャアアツ！ま、またお前か！さっきの傷を狙うな！」

グレイグ「ふん、そんなもの聞きいれるはずがないだろう」

ブギー「むううう、お前！怒ったじよ！」

ロウ「シルビアよ、ベホイムじゃ」

ブギーとグレイグが言い合っている間にロウはシルビアの足下に緑色の魔法陣を描き、強い治癒の力をかけ、シルビアの傷を瞬時に塞いだ

シルビア「ありがとう、ロウちゃん。ほとばしるく、アモくレ！」

イレブン「渾身斬り！」

シルビアとイレブンがブギーの横から同時に攻撃を仕掛ける

ブギー「お前達は邪魔するんじゃないじよ！」

ブギーは手でハートを握りつぶし、大剣は軽く跳ねて避けた

ブギー「お前達は踊ってるんだじよ！レッツダンシング！」

先程と同じ音楽が鳴り響き、不思議な力がかかった踊りはイレブンの体を操ろうとしてくる

イレブン「な、なにこれ！本当に体が勝手に！」

シルビア「やだ！今は戦いの最中なのに！ちよつと楽しいけど」

イレブンとシルビアは音楽に合わせて踊り出してしまった

ロウ「ぬう、今度はイレブンとシルビアか」

ブギー「さーて、君は絶対許さないじょー」

グレイグ「俺こそ姫様をあんな淫らな姿に変え、こんな場所で働かせている貴様など断じて許してなるものか」

ブギー「お前なんかこうしてやるじょ！ぐるぐるドーン！」

ブギーは腰にあるフラフープを勢いよく回すと、腰からフラフープが抜けてグレイグの頭上に動いていく

グレイグ「！」

グレイグはフラフープから離れるが

ビュオオオオ!!

フラフープを中心に激しい竜巻が巻き起こった

グレイグ「ぐう！」

竜巻の刃にグレイグの鎧や顔はどんどん切られていく

シルビア「さつきから意表を突くような技ばかりだわ。ふざけてるみたいだけど強いわね、この魔物ちゃん」

ロウ「ベホマラーじゃ!」

ロウはイレブン達の周囲に緑の魔法陣を描き、強い治癒の力をかけると、イレブン達の傷が瞬時に塞がっていく

グレイグ「蒼天魔斬!」

グレイグも負けじとブギーに斧で斬りかかる

ブギー「当たらんじよ!メラゾーマ!」

ブギーは軽く避けた後、すぐに赤い魔法陣を描き、大きな炎の塊をグレイグにぶつける

グレイグ「舐めるな!」

グレイグも斧で炎を二つに斬る

ブギー「お前こそボクちんを舐めるな!」

グレイグ「!?!」

ブギーはグレイグの真横にもう一つ赤い魔法陣を描き、メラゾーマをもう一つ繰り出した

ボツツ!

グレイグ「ぐうっ!」

流石に連続では防ぎきれずにグレイグは炎に包まれた

ブギー「ギガマホトラ!」

ブギーはグリーンオーブの力を放った

シユユウウウ!!

全員「くっ!」

ロウ「ルカニじゃ!」

ロウはその隙にブギーの体に緑の魔法陣を描き、皮膚軟化の魔法をかける

ブギー「うんっ!?!体から力が抜けたじょ!?!」

シルビア「ハッスルダンスよー、そーれ!」

シルビアの元気で愉快的踊りと笛の音に、イレブン達の力がみなぎってきた

イレブンはそのままブギーの背後に回る

イレブン「グレイグ!渾身斬り!」

グレイグ「ああ!蒼天魔斬!」

ブギー「あ！え、ま、待つじよ！挟み撃ちなんて」

ズバッ！ザクツ！

ブギー「うぐううう、もうダメだ。体中が痛くて、力がコントロールできないじよ」

ブギーは倒れ込み、周りの魔物達が人間に戻っていく

マルティナ「こ、ここは。私どうしたのかしら」

マルティナも雰囲気に戻り、意識も元に戻った

イレブン「マルティナ！よかった。戻ったんだね」

マルティナ「まあ！イレブンじゃない。隣にいるのはグレイグ!?どうしてここに？」

ブギー「ぐぞう！どぼじでボクちゃんがこんな目にあうんだ！楽園を作ったはずだったのに！は！」

マルティナとブギーは目が合い、マルティナは全て思い出したようだ

マルティナ「全て思い出したわ。妖魔軍王ブギーさん？よくも今まで好き放題してくれたわね。ハッ！」

マルティナは倒れているブギーの元まで行くと、先程のバニースー

ツを着た魔物の姿になった

ロウ「な、なんと！姫がさっきの姿に！」

ブギー「あ、あの…… そ、それは……」

ガタガタ

マルティナは殺意を込めた目でブギーを睨んでおり、ブギーは震え上がっている

マルティナ「百万倍にして返してあげるわ！」

ブギー「ほげえええええ!!」

ブギーの悲痛な叫び声と共にバシン！ベキイ！などの強烈な音が鳴り響いている。まるでかいしんのいちげきを常に出し続けているようだ

コロコロ

イレブンの足下にブギーがつけていたグリーンオーブが転がってきた

イレブン「も、ものすごい音がしてる。ん？」

イレブンはグリーンオーブを取り戻した

マルティナはすつきりした様子で戻ってきた

マルティナ「今まで魔物になっていたせいかしら？新しい力が使えるようになったわ！ラースとの特訓の成果も、さっきのブギーに目一杯出せたしね」

マルティナはデビルモードを覚えた

マルティナ「ロウ様ご心配おかけしました」

ロウ「いいんじやよ。お主が無事で何よりじや。これでまた一緒に旅ができるのう」

グレイグ「姫様！今までの非礼をお許してください。私は今、イレブンに命を預けた身。打倒ウルノーガの信念を貫き通すまで、このグレイグ皆の盾になりましょう」

マルティナ「グレイグ。頼りにしてるわ。イレブン。見ない間に随分たくましくなったみたいね。これ、渡しておくわね」

イレブンはマーメイドハープを手に入れた

マルティナ「世界各地を旅している時に見つけたの。そういえば、ラースはまだ見つけていないのかしら？見当たらないけど」

シルビア「ええ、他の皆もまだ見つかってないわ。アタシ達は今、他の仲間達を探しながら聖地ラムダへ向かってるの」

マルティナ「そうだったの。ねえ、イレブン。もしかして、ラーズはあの故郷の村にいるんじゃないかしら？わからないけどそんな気がするの」

イレブン「言われてみれば、ダーハルラーネの方にはまだ行ってないね。可能性はあるね。この後ガラツシユの村まで行ってみようか」

マルティナ「それじゃあイレブン。またよろしくね」

マルティナが再び仲間に加わった

グレイグ「ついにラーズの出身の村に行けるのか。前にイレブンに聞いた話なら、この世界崩壊のせいでさらに酷くなっているかもしれないな」

イレブン「じゃあダーハルラーネまでひとまず行こうか」

ダーハルラーネの町

イレブン「よかった。ここは前より賑やかではなくなったけど、特に問題は無いみたいだね」

マルティナ「それじゃあこのままガラツシユの村まで行きましよう」

道中

グレイグ「ふむ、こんな辺境の地に村があつたのか。着いたら俺は村のお墓の所でホメロスの代わりに謝罪しなければ」

マルティナ「ラーズもそこにいてくれるといいんだけど。でも、不思議といるような気がするのよね」

シルビア「マルティナちゃんが言うならきつというわ。何たって、恋人同士なんだから」

ガラツシユの村

そこはあの日からあまり変わっておらず、焼け落ちた大木や家々はそのままになっている。また、死体があつた付近には乾いた血がまだ残っている

世界崩壊の影響もあり、ここにも焼け焦げた大岩や山が燃えた跡や燃えかすなどが広がり更に酷い有様となっている

マルティナ「やっぱり世界崩壊のせいだ、ここも前よりも酷くなつてるわね。それに、ここにいるとラーズの泣いてた姿も思い出してくるわね」

グレイグ「ここが、ラーズが育つたという村だった場所か。本当に今は見る影もないな。くっ……すまない」

イレブン「でも、ラーズは見当たらないね」

シルビア「おかしいわね。マルティナちゃんの勘が外れたのかしら」

マルティナ「まあ、ラーズの事だから各地を歩いていると思うわ。彼は魔物なんかにはやられる人じゃないし、私の隣にいてくれるって約束してくれたわ。絶対大丈夫よ。折角だし、お墓参りして行きましよう」

ガラツシユの村　奥地

ロウ「ここにもおらんか。なら、世界のどこかにおるのだろうか」

グレイグ「村の皆さん、私の親友が罪のないあなた方の命を奪い去った事、彼に代わり私がこの場に謝罪いたします。申し訳ございませんでした」

グレイグは墓の前で土下座をしている

イレブン「グ、グレイグ。土下座までしなくても」

マルティナ「そうよ、あなたは悪くないわ」

グレイグ「いや、こうでもしないとこの村の人達は意味もなく死んでいった事になります。だから、せめてもの償いです」

イレブン「……わかった。僕らもお祈りしようか」

その後

イレブン「ここからどこに行こうか」

ロウ「今度は外海に出てみるかの。それでクレイモランの方に向かってみるのじゃ。あっちの方での情報も集めておこう」

イレブン「わかった、じゃあ外海に出ようか」

70. 覇海軍王ジャコラ

船内

外海に向けて船で進んでいると

ガタン！

シルビア「あら？船倉のほうから何か音がしたわね。イレブンちゃん、様子見てきてくれる？」

イレブン「うん。わかった」

船倉

そこには誰かがフードを被り、食べ物を必死で食べていた

イレブン「そこにいるのは誰？」

??? 「はっ！」

フードが取れると、あの特徴的なツンツンとした青い髪の青年、カミュだった

イレブン「あ！カミュ！」

シルビア「大丈夫？皆も呼んできたわ。って、カミュちゃん！」

ロウ「おお！カミュよ。やはり生きておったか。お主なら、ただでは転ばんと思っておった」

イレブン「でもカミュ、何か変だよ？どうしたの？」

カミュ「ゆっ、許してください！」

カミュは全員に土下座している

全員「!？」

カミュ「俺、三日も飲まず食わずで、この船に食べ物が積まれるのが見えて、つい出来心で」

シルビア「…… えーと、カミュちゃん？」

グレイグ「どういう事だ？この男、カミュではないのか？」

カミュ「あの、俺の名前は多分カミュであってますけど、どうしてそれを？あなた達は俺の事、何か知ってるんですか？」

ロウ「お主まさか、記憶が無くなったのか？」

カミュ「俺、昔の事が思い出せないんです。気付いたら世界は大変な事になってるし、本当訳が分からなくて。覚えてるのは俺の名前と、何か大事なやらなくちゃいけない事があったような気がするだけなんです。

あの、こんな事頼める義理じゃないんですけど、もし俺の事何か知ってるなら俺も同行してもいいですか？特に、あなたといれば何か思い出せそうで。盗み食いした分は弁償します。皿洗いでも掃除でも何でもしますから」

カミュは怯えた様子をしながらも、イレブんに頼み込んでいる

ロウ「確かにわしらと行動を共にすれば、いずれ記憶も蘇るだろう」

シルビア「それに、今のカミュちゃんを放っておくと危険だと思うの」

イレブン「そうだね。かわいそうだし、早く記憶も戻してあげないと大変だからね。いいよ、一緒に行こう」

カミュ「ありがとうございます！俺、精一杯頑張ります！」

カミュが再び仲間に加わった

シルビア「うーん、なんかムズムズするわ。ベロニカちゃんとラーヌちゃんが今のあなたを見たら笑い転げるでしょうね」

クレイモラン大陸 前

巨大な黄金の氷が海から壁のように生えており、まるで侵入者を拒んでいるようだ

シルビア「何よこれ。前はこんななかったわよね」

ロウ「ふむ。困ったのう、この先には魔王討伐の手がかりになる聖地ラムダがあるというのに」

イレブン「そういえば前にセレン様に光の柱の場所を教えてもらった時に、クレイモランの北から中に入れる場所があったよ。そこに行ってみよう」

北海

におう……におうぞ、命のおいだ

どこからか声が聞こえてきた

全員「！」

ザバアン！

船の近くから大きな魚のような魔物が水飛沫をあげて現れた。そいつは前にイレブンを海に落とした覇海軍王ジャコラだった

カミュ「ヒイツ！」

船端にいたカミュはいきなり目前に現れた巨大な魔物に怯えている

イレブン「カミュ！」

イレブンはそんな様子のカミュを守るように前に出た

ジャコラ「おや？お前は確か前に取り逃したやつか？まあよい。海に沈むがいい！」

ジャコラは船に向かって攻撃し始めた

ロウ「まずいぞ！攻撃が効かないやつにどうすれば」

その時、イレブンの左手に復活した勇者の紋章が光り始める

イレブン「はあっ！」

イレブンは天に手をかざすと雷がジャコラに向かって落ちてきた

ビシャアアン！！

ジャコラ「グアアアア！なんだっ！これは！」

聖なる雷の力により、ジャコラを守っていた赤い膜が砕けた

ジャコラ「許さん！貴様ら海の藻屑にしてやる！」

覇海軍王ジャコラがあらわれた

マルティナ「デビルモード！」

マルティナは魔物の影響を受けた力により、黒いバニースーツを着た姿へと変身した。その力により、マルティナの体に力がみなぎっていく

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

シルビアはイレブンの体に緑色の魔法陣を描くと、イレブンの全身が緑色のオーラに包まれ、イレブンの筋肉がかなり増大する

ジャコラ「ふん！」

ジャコラが腕を振るわせてくる

イレブン「全身全霊斬り！」

ズドン！

イレブンのパワーアップした全力の一撃がジャコラの腕ごと叩きつける

ジャコラ「ギヤアア！腕が！」

イレブン「やつぱりあの赤い膜がバリアだったんだ！皆、攻撃が通るようになってるよ！」

ロウ「それならば今度こそ喰らうがよい！グランドクロス！」

ロウは十字の攻撃をジャコラの体に放つ

ジャコラ「はあっ！」

ジャコラは火球を吐き出し、グランドクロスと相殺させた

ジャコラ「海の藻屑になれ！」

ジャコラは強く両腕を船に叩きつけて船を揺らした

全員「うおお！」

船は右に左にギシギシと音を立てて激しく揺れている

ロウ「ひゃあっ！」

ロウは揺れに耐えられずすっ転んだ

マルティナ「さみだれ突き！」

マルティナはその激しく揺れる中でもしっかりとバランスを取り、ジャコラに向かって槍を連続で突き出した

ジャコラ「ぐっ！」

シルビア「ハッスルダンスよー、そーれ！」

シルビアの元気で愉快的な踊りと笛の音に、イレブン達の力がみなぎってきた

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンは再び全力の一撃をジャコラに叩きつけようとする

「ジャコラ「もう当たらん！」

ザブン！

ジャコラは海に潜り込んで船から見えなくなった

イレブン「くっ！どこにいった！」

マルティナ「ロウ様、大丈夫ですか？」

ロウ「すまんのお、腰を強く痛めたようじゃ。後で薬を塗らねば」

今のうちにとマルティナがロウを立ち上がらせていた

ジャコラ「はあっ！」

その隙をジャコラが海から突然現れて、二人に向かって攻撃した

二人「！」

マルティナ「は！」

ロウ「ほほ、奇襲とは汚いのお」

二人は驚きつつも華麗に飛んで避けた

ジャコラ「ボミオス！」

イレブン達全体に緑色の魔法陣が描かれ、まるで体が重くなるような力がかけられそうになる

全員「？」

しかし、イレブン達はなんともないような顔をしているためどうやら不発に終わったようだ

ジャコラ「チツ！」

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの変身した姿は更に強力なものとなり、黒く纏ったオーラも濃くなっている

シルビア「ほとばしるゝ、アモゝレ！」

シルビアはみりよくの力を指先に込めると、ハートの形にして撃ち出した

ジャコラ「ぐっ、なんだこれは！」

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンはジャコラがシルビアの攻撃に怯んだ隙に斬りかかるが

ジャコラ「メイルストロム！」

全員「な!?!」

ジャコラは一瞬で船全体に巨大な黄緑色の魔法陣を描き、船全体に大きな嵐のような竜巻が巻き起こった

ビュオオオッ！

イレブン「ぐううっ！」

ズバッ！シュバッ！

イレブンは特に風の刃に当たり、顔や防具が切られていく。また船にもどんだん切り傷がついていく

ロウ「これはなんとかせねば！グランドクロス！」

ロウが上空にある黄緑色の魔法陣目掛けて、十字の攻撃を放った

パライイイン！

グランドクロスに直撃した魔法陣は十字に斬られ、消え去った。それと同時に船全体を覆っていた激しい竜巻も消えた

ジャコラ「このジジイ！はっ！」

ジャコラはロウ目掛けて火球を放った

ロウ「ゴールドフィンガー！」

ロウは爪に力を込めると、金色の球を作り出し飛んでくる火球目掛けて打ち出した

ボオン！

火球とゴールドフィンガーは相殺された

マルティナ「さみだれ突き！」

ジャコラ「なに!？」

ズドドドド!

変身したマルティナが目にも止まらぬスピードでジャコラの腕を足場に、目前まで跳び上がるとそのまま槍を連続で繰り出した

その威力にジャコラも思わず前屈みに倒れそうになっている

シルビア「ハッスルダンスよ、そくれ！」

シルビアの元気で愉快的な踊りと笛の音に、イレブン達の力がみなぎってきた

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンは倒れてくるジャコラに飛び上がり、頭から思いっきり大剣を振り下ろした

ズバツ!!

ジャコラ「ギヤアアアア！」

ロウ「グランドクロス！」

そこに更にロウの十字の攻撃が追い討ちをかける

ジャコラ「く、くそ！もう許さん！この船諸共沈んでしまえ!!はあっ！」

ジャコラの頭についている赤いオーブが怪しく光り出した

マルティナ「あれはレッドオーブ！」

ジャコラはレッドオーブの力を解き放つ

すると、どこからか赤い霧が船全体を覆いつくした

ロウ「なんじゃ、この霧は」

シルビア「不気味な霧だわ、つて！皆見て、あの魔物が！」

ジャコラ「うおおお!!」

ジャコラは体が赤いオーラで包まれており、目も全てが赤くなり、まるで暴走しているようだ

ジャコラ「はっ！」

ジャコラが腕を船に振るわせた

ドオオン!!

先程よりも激しく強い一撃がイレブン達を襲った

全員「うわあああ!!」

その強力な一撃は船も一部壊し、波も船もその威力に大きく揺れている

イレブン「くっ、凄いパワーだ」

ジャコラ「ぐおおお」

ロウ「じゃが、理性が無くなっておる。早い所片付けてしまおう」
マルティナ「それならイレブン、ロウ様、あの連携技で！」

二人「うん！／＼うむ！」

ロウとマルティナはイレブンに力を送り込んでいく

イレブン「はあああ…… やあああ!!」

イレブンが二人の力を合わせて右手を挙げるとその手から巨大な雷が撃ち放たれる。雷は猛スピードで真っ直ぐジャコラに向かっていく

三人「ジゴデイン！」

ズバアアン！

雷がジャコラの体を貫いた。その衝撃により、理性を失っていたジャコラが元に戻った

ジャコラ「グアアアア！このジャコラ様が敗れるはずが…… あの雷はまさか、勇者!？」

ジュワー

ジャコラは煙となって消え、頭についていたレッドオーブが落ちてきた

コトン

イレブンはレッドオーブを取り戻した

ロウ「勇者の力を取り戻したイレブンにかかれば、あんなの敵ではないわい」

イレブン「でも、僕が勇者でまだ生きてるって事がバレたね。うかうかしてられない。急いで皆を探さなきゃ、クレイモランに行こう」

71. カミュという男

クレイモラン王国

カミュ「……………」

カミュは少し暗い顔をしている

ロウ「あれほどの大惨事の後じゃ。クレイモランもただではすむまい。シャルル女王のもとへ向かうぞい。皆は城下町で情報を集めてくれ。ん？どうした？カミュ、ひどい顔色じゃが」

カミュ「いえ、俺なら平気です。町の様子を見てくれればいいんですよね」

イレブン「でもカミュ、顔色がよくないよ。本当に大丈夫なの？」

ロウ「記憶もないのに一人にいるのも心許ない。お主もわしらと共に来るのじゃ」

クレイモラン城 玉座の間

シャルル「……………」

シャルルは落ち込んでいるようで、顔色もよくない

ロウ「顔を上げなされ、シャルル殿。王たる者、常に民に不安を与えてはならぬぞ」

シャルル「!?あ、ロウ様！それにイレブンさん達も。ご健在だったのですね。大樹が落ち、世界が闇に包まれ、黄金病がこの地に蔓延しても、希望は残されていたのですね」

ロウ「ふむ。その黄金病とやらを教えてくれるか？」

シャルル「数週間ほど前から、クレイモラン王国全域で、突然奇病が流行りだしたのです。この病に感染した者は、人間も動物も植物も身体が黄金と化してしまうのです」

カミュ「身体が……黄金に？」

シャルル「原因も治療法もわからぬこの病は、怯える人々から黄金病と呼ばれるようになりました。他の国に助けを求めようにも、病と共に現れた巨大な黄金の冰山により、陸路も海路も閉ざされ、この地は今や陸の孤島」

病を調べていた魔女リーズレットもあらぬ疑いをかけられ、城の地下に幽閉されてしまいました。友人として彼女を解放しようとしたが、民達の強い反対にあい、それも叶わず。黄金病がこの国を混乱に陥れているのです」

ロウ「なんとそのような事が。じゃが、シャルル殿安心なされよ。黄金病の謎、わしらが調べよう」

シャルル「ありがとうございます、皆さん。城の者や城下町の民にも、協力するよう伝えておきます。どうか、よろしくお願いします」

クレイモラン城下町

ロウ「おお、そこ行くご婦人。よければ、わしらに話を聞かせてくれんか？」

おばあさん「何だい、あんた達は？こんなところでボサツとして身体が金になっても知らないよ。……ちよつとお待ち！あんたもしかして、カミュじゃないか？」

おばあさんはカミュを見ると驚いたように話しかけてきた

カミュ「俺の事知ってるんですか？」

おばあさん「知ってるも何もおまえさんは……うぐっ！う、うう……。そんな、これは、まさか……私も感染しちまったのかい！うあああ！」

突然おばあさんは苦しみ始めると光りに包まれ、その光が消えるとおばあさんは金の像になっていた

全員「!!」

マルティナ「何て事！これが黄金病！」

グレイグ「こんな突拍子もなくだとは……」

カミュ「あ、ああ…… うあああ！」

カミュはおばあさんの金の像を見るとその場に倒れ込んだ

シルビア「ちよつとカミュちゃん!?急にどうしたの!?!」

イレブン「カミュ！」

神父「…… カミュ?声を聞きつけてきてみれば、まさか君がいるとは」

奥からは神父がやってきた

ロウ「お主もカミュを知っておるのか。わしらは旅の仲間なんじやが、今カミュは記憶を失っておつてのう」

神父「わかりました。私の知ってる限りですが、カミュの事をお話ししましょう。後ほど教会の方に来てください」

教会

神父「よく来てくれました。カミュ、君も元気そうで何よりだ。最後に見かけてから、5年ぶりくらいだろうか」

カミュ「5年前……ですか。それまで俺はこの町にいたんですか」

神父「かつて、このクレイモラン城下町は北海で活動するバイキングの寄港地でね、以前は交流も盛んに行われていたんだ。……カミュ。当時君は、そのバイキングの手下だった」

カミュ「俺が……バイキング」

グレイグ「盗賊カミュの出自は、我らデルカダール王国がいくら調べても謎だった。まさかバイキングの生まれだったとは」

神父「いえ、生まれに関しては何とも。カミュは幼い頃、彼の妹と共にバイキングに拾われ育てられたようです。それが幸せだったのかはわかりません。彼と妹はかなり過酷な生活を強いられていたようでしたし。」

実際ある日、彼の妹が亡くなったという知らせを受け、その日を境に彼もまた姿を消してしまいました」

カミュ「……やめろ」

妹の話題が出た辺りから、カミュは俯き始め、小さく呟いている

神父「神父として彼らを救えなかった事は、私の中で心残りとして強く残りました。ですから、彼が困っているなら今こそ」

カミュ「やめてくれっ! : : : しばらく一人にしてください」

カミュは怒鳴ると、その場から飛び出していった

イレブン「あっ! カミュ!」

栈橋近く

そこではカミュが一人で佇んでいた

イレブン「カミュ、見つけたよ」

カミュ「あ、イレブンさん。すみません、俺急に飛び出して」

その時

キヤアアアツ!

二人「!?!」

港からの叫び声にイレブンとカミュが振り向くと、船に乗って金色の魔物がやってきていた

カミュ「: : : : : !?! あいつらはまさか! : : : う、ううう!!」

カミュは再び頭を押さえて地面にうずくまった

イレブン「カミュ！」

グレイグ「イレブン、カミュ！ここにいたのか。港に接近する船を見たか？叫び声といい、ただ事ではないぞ」

イレブン「うん！でも、カミュが……」

神父「カミュの事は私に任せてください！皆さんは港のほうに」

ロウ「うむ！イレブン、行くぞ！」

神父がうずくまったカミュに寄り添うようにして、イレブン達は城下町へ走っていった

クレイモラン城下町

金の魔物達「この世全ての黄金は、偉大なる六軍王が一人、鉄鬼軍王キラゴルド様のもの！さあ野郎ども、仕事の時間だ。宝石だろうが人間だった黄金像だろうが、この町のお宝を根こそぎ奪いとれ！」

魔物達「ヤイサホー！」

グレイグ「この魔物達、黄金像になった人達を持ち去ろうというのか。ならば黄金病もこいつらが？」

魔物「貴様ら、鉄鬼軍王キラゴルド様に逆らう気か？お宝ゲットの邪魔はさせないぞ！」

魔物達「ヤイサホー！」

魔物達はイレブン達に襲いかかってきた

イレブン達が魔物達を倒し終わると、他の場所では別の金色の魔物達により、黄金の像は取られていった

ロウ「まずい！こやつらは困じやったか。黄金像が他のやつらにとられてしまった。追いかけるぞ」

港

グレイグ「イレブン！あれをみる！」

引き上げようとしている船の中には金色の像と魔物達と一緒にカミュがいた

イレブン「え!?!カミュ!!どうして！」

シルビア「出発しちゃうわ！急がないと！」

しかし、イレブン達が到着する頃には船は出発してしまった

マルティナ「くつ、間に合わなかった。まさかカミュが連れて行か

れるなんて」

シルビア「それじゃあ取り返すだけよ。神父ちゃんに話を聞いてみましょう」

すると、神父が焦った様子でこちらに走ってきた

神父「すみません、皆様！私が気を抜いていたばかりに、カミュが魔物にさらわれてしまいました。しかし、カミュは宝石も何も持っていなかったのに、まるで最初から知っていたように迷う事なく連れ去っていきました。

……あの魔物の喋り方や癖……まさかそんな事が？」

神父は何か思い当たるところがあるようだ

マルティナ「何か知っているの？」

神父「実は先ほどの魔物達の喋り方や癖に私は見覚えがありました、この地に寄港していたバイキング達にどこか似ているのです。彼らなら、カミュの事を知っていてもおかしくない。

当時の彼らの住処は、このクレイモランのすぐ横の洞窟にありました。そこに行けば何かわかるかもしれない」

イレブン「わかりました、それじゃあ行ってみます」

72. カミュの罪

バイキングのアジト

ロウ「この先から何やら騒いでおる声がするのう」

目の前にある扉の先からは騒がしい声が聞こえてくる

イレブン「あ、ここに穴が空いてるよ。少し覗いてみるね」

イレブンが穴を覗くと、そこでは先程の金色の魔物達が騒いでいた

金色の魔物リーダー「お前ら、ラム酒の用意だ！思わぬお宝が手に入ったからな。キラゴルド様もお喜びになるだろう。こんな簡単に手に入るとは思わなかったがな」

魔物達「ヤイサホー！」

金色の魔物達は集まって酒瓶を手に騒いでいる。その奥にある牢屋には、静かに横たわるカミュの姿が見える

イレブン「!?皆、カミュを救い出すよ！」

バダン！

イレブン達は油断している魔物達の元に突撃していった

イレブン「魔物達！そこまでだ！カミュを返して！」

金色の魔物リーダー「なぬ!?なぜここが!..... おや?お前、まさか勇者イレブンか?」

魔物A「そういえば手配書の絵に瓜二つだ。間違いない、こいつだ。キラゴルド様に報告だ!」

一匹の魔物が奥に走っていった

シルビア「あら、イレブンちゃん。随分有名人名みたいね。ちよつとだけヤケちゃうわ」

マルティナ「もう、変な事言っていないでカミュを助けるわよ」

金色の魔物リーダー「笑わせやがって。魔王様にボコボコにされた負け犬共が吠えやがる。行くぞ野郎ども、やっちなまえ!」

魔物達「ヤイサホー!」

しかし、魔物達はイレブン達にすぐに倒された。カミュは牢屋に入られていたが、鍵もかけられていなかったのですぐに救出できた

ロウ「大丈夫かの、カミュ。怪我も無いようだなによりじゃ」

マルティナ「さあ、一緒に帰りましょう。神父様も心配されてるわ」

カミュ「おれは……ここで…… そうだ、あいつを…… あそこに」

カミュはまるでイレブン達の事など見えてないかのように、ふらふらと歩いて奥へ向かっていった

イレブン「あ、カミュ、どこ行くの」

グレイグ「何か思い出したのだろうか。様子も少しおかしいから。俺達も急いで追いかけよう」

アジトの奥は外になつており、人も殆ど通らないため降り積もった雪が多く残っている。その先に割と頑丈な扉が入り口に付けられた大きな洞穴があつた

風穴の洞穴

そこは洞穴の天井が空いているため風こそ防げないが、雪は殆ど通らない場所でまるで誰かがここで生活していたような跡がある

カミュ「おれは…… あいつを」

洞穴の真ん中は床が黄金になつており、そこでカミュは地面にうずくまっている

ロウ「カミュの様子がおかしい。ここで何があつたというんじや」

イレブン「大樹の根っこがある。これで見てもよう」

イレブンは隅で光っている大樹の根っこに左手をかざした。する

と、頭の中に映像が流れ込んできた

バイキング「おい、カミュ！ちゃんと働きやがれ！誰が10年前雪の中にいたお前らを助けたと思ってるやがる」

カミュ「…………… わかったよ、あんたらには感謝してる」

まだ今よりも少し幼さが残るカミュがバイキングと思われる大柄な男に怒鳴られていた。カミュは不服そうにしながらも渋々手伝っている

バイキング「次はこれもあるからな、早くしろよ」

カミュ「ちつ……………」

マヤ「本当ヨリヨイ悪いよな、兄貴は」

バイキングの男が見えなくなると、運んでいた木箱の裏からカミュと同じ髪色をしてポニーテールにしたカミュの妹、マヤが笑いながら出てきた

カミュ「マヤ、お前も手伝えよ。大体はお前があいつらの財布チヨロまかしたからだろうが」

マヤ「いしし…………… やだ」

その夜

カミュ「つたく！こんなに遅くなったのマヤのせいだからな」

カミュはマヤと共に疲れ果てながらこの洞穴に戻ってきた

マヤ「うるさいな。そんな事言っていると、いつか俺が大金持ちになった時に分けてやらないからな」

カミュ「またその話かよ。でも、そうだな。いつか俺たちでドデカイお宝とってやって、こんな生活とはオサラバだ」

グウゝ…

二人の腹の音が洞穴に響いた

カミュ「だが、まずは今日のメシが問題だな。俺達もあの鳥みたいに翼があれば、こんな所すぐにでも飛んでいくのに」

カミュは洞穴の上空を飛んでいる鳥を羨ましそうに見ていた

マヤ「まったく、兄貴は夢ばかりみてるぜ」

しばらく日が経って

マヤ「ああ、兄貴おかえり」

カミュが戻ってくるとマヤが既に洞穴に戻っていた

カミュ「ほらよ」

カミュはマヤにある物を渡した

マヤ「え？兄貴、これって」

そこには金色のチェーンに赤い宝石のような物がついたペンダントがあった

カミュ「今日の航海でたまたま見つけたんだ。今日はお前の誕生日だからな。プレゼントだ。おめでどう、マヤ」

マヤ「…… はあ!?何このダサイ首飾り。兄貴さ、もつと俺の誕生日くらい頑張れよな。俺、あれが欲しいな。噂で聞いたレッドオーブってやつ。デルカダール王国の宝なんだってさ」

カミュ「はああ……。やれやれ」

カミュは呆れたようにしている

マヤ「へへへ」

マヤはそう言いながらも、大切そうにペンダントを抱きしめて早速自身の首につけた

カミュ「その首飾りにはいわくがあつてな。身につけたものに金銀財宝をもたらすらしいぜ」

マヤ「な……」

マヤの手にあつた銅貨が光り始め、金のコインになつた

カミュ「な!? マヤ、何したんだ」

カミュは突然の事に目を疑つた

マヤ「わかんない……。俺、銅貨を磨こうと触つたら……」

マヤも驚きつつも近くにあるバナナにも触れると、光を放つた後金のバナナに変わった

マヤ「は……はは。スゴイ!! マジなんだ!! スゴイよ! この首飾り、兄貴ありがとな!」

カミュ「……」

さらにその後

その洞穴には黄金でできた物が多くなつていた

カミュ「また増えたな」

マヤ「いしし、どうしたんだよ、兄貴。シケた顔してさ。なんなら、黄金分けてやろうか? こいつでどうかな」

それは黄金でできたカモメだった

カミュ「!! おい、マヤ。何だこれは」

マヤ「あれ？こんな小さいのじゃ嫌なの？流石俺の兄貴、案外よくばり」

カミュ「違う!!いい加減にしろって言ってんだ!」

マヤ「う、うるさいなー。びつくりするだろ。そんな大声出さなくても」

カミュ「……………」

カミュはマヤを睨んでいる

マヤはカモメを罰が悪そうにみている

マヤ「………… わ、悪かったよ。ちよつと調子にのっただけじゃん。だからそんな怖い顔はやめろよ」

カミュ「いや、俺もカツとなっちまった。だがな……………」

マヤ「わかったよ、この首飾りの力はしばらく使わない」

マヤは首飾りを外そうとする

マヤ「あれ?……………なんで?兄貴、どうしよう。首飾りが外れない」

マヤは首につけたペンダントをガチャガチャといじるが、まるで石のように固く離れない

カミュ「はあ？そんな馬鹿な」

マヤ「嘘じゃないってば、本当に」

その時、首飾りが怪しく光り始める

マヤ「くそっ、何だこれ。!?……え……。ど、どういう事だよ。俺、何もしてないのに」

マヤの体がどんどん黄金になっていく

カミュ「!?マヤ!動くなよ!」

カミュは短剣で壊そうとする

ガキン!パキパキパキ

カミュ「な!?!」

パキン!

だが、短剣はペンダントに触れた瞬間金に変わり砕けた

その間もマヤの体は黄金になっていく

既に足は全て金に変わっていた

マヤ「やだやだ！何で俺の体が金に！」

マヤもなにがなんだかわからず混乱しながら泣き叫んでいる

マヤの体は既に胴体まで金に変わってきている

カミュ「マヤ！くそつ、どうすればいい」

床もどんだん金に変わっていく

マヤ「やだ!!助けて!!兄貴!!や……………あに……………き……………おにい……………ちや……………」

マヤは必死に助けを求めてカミュに手を伸ばし、カミュも手を伸ばすが、伸ばしたマヤの手も黄金に変わる

カミュ「な!?!」

それに怯んだカミュの手はマヤの手を握る事なく、途中で止まってしまう

マヤ「!!」

そして首飾りの光がなくなると、そこには動く事も喋る事もなくなった、兄に助けを求めようとして手を伸ばしたままの金のマヤの塊があった

カミュ「あ……………ああ……………ううう、うああああ!!!」

慟哭を上げ、涙を流しながら拳を打ち続けるカミュ

その後どれくらい経ったのかはわからないが、洞穴の扉を閉め、そこから出て行くカミュの姿があった。金のマヤを置いて。

カミュ「妹を……マヤを失って、俺は逃げるように旅に出た。……全部俺のせいだったんだ。旅の途中調べていてわかった。

あいつに贈ったのは、誕生日の祝いどころか、呪われたアイテムだったんだ。自分の犯した過ちから逃げたくて、忘れたくて、あちこちでヤケになった……。気づけばいっばしの盗賊さ。

そんな時だった。預言者と名乗るやつにこう言われたんだ。伝説の宝珠を集め、地の底で出会う勇者に力を貸せ。さすればお前の贖罪も果たされるだろうってな。最初は信じちやいなかった。うさんくせーのはもうコリゴリだったからな。

けれど、その予言通り俺はお前と……イレブンと出会った」

カミュはイレブんに静かに振り返ると今までの怯えたような顔ではなく、前までの盗賊カミュの顔に戻っていた

ロウ「カミュ、お主記憶が」

カミュ「ああ、随分迷惑かけたみたいだな。預言者のいう贖罪が何かは知らねえ。だけど、お前達と旅を続けるうちにその預言を信じられそうな気がしたんだ。

イレブンも見たんדר？この場所に黄金になった俺の妹がいたはずだ。この辺りには黄金を集めてるキラゴルドってやつがいるんだってな。

おそらくそいつの仕業だろう。北の方にそいつらの城があるらしい。乗り込んでやろうぜ」

イレブン「うん。マヤちゃんもそうだけど、町の人達も救わなきゃ」

カミュ「ありがとな、イレブン。俺も一緒に戦わせてくれ！」

カミュが再び仲間に加わった

73. 兄妹の殺し合い

黄金城

洞穴の先には黄金に光り輝くお城が出来ており、そこは壁、床など全てが黄金で出来ていた

マルティナ「何なのここ、ありとあらゆる物が金でできてるわ」

カミュ「ちつ、あまり金はもう好きになれねえんだ。さつさと皆を救い出して、ここから立ち去るぞ」

黄金城 奥地

金で出来た玉座には誰かが座っていた

カミュ「な!?!…… マヤ」

マヤ「マヤ…… ダサくて貧乏臭い名前。今はキラゴルドって呼んでよ…… クソ兄貴」

それはカミュの妹、マヤだった

カミュ「マヤ、まさかお前が……」

キラゴルド「そうだよ。黄金病を撒き散らしてるのも、人間どもから宝を徴収してるのも、ゼーんぶこの俺キラゴルド様の仕業さ」

カミュ「くっ……」

キラゴルド「緊張しちゃって、そんなにビビるなよ、クソ兄貴。健気な妹らしく、これでも気を使ったんだぜ？大人しく黄金兵どもに捕まったら、ペットにして死にたくなるほど可愛がってやろうと思っただのに。アハハハハ」

カミュ「お前が俺を恨むのはわかる。俺の事は好きにすればいい。だが、なぜこんな!?!」

キラゴルド「はん！めんどくさいやつ。まあいいや、特別に教えてあげる。大樹が落ちたあの日、俺の身におきた魔王の奇跡ってやつを」

大樹が落ちた瞬間

風穴の洞穴

金のマヤの像の周りに黒い影ができ、謎の声がマヤに語り始めた
???「哀れな者よ。貧しさに苦しめられ、愚かな人間どもに虐げられ、あげく兄にまで見捨てられたか。」

だが、貴様の中に渦巻く欲望と孤独と絶望こそ、この闇が支配する世界にはふさわしい。

我が名は魔王ウルノーガ。この新たなるロトゼタシアの支配者が

貴様に戯れの力を授けてくれよう！」

そうするとマヤの金の像は闇の力に包まれると、金の像の姿から元通りになった

全てを金へと変える力を持つて

カミュ「魔王ウルノーガ！あんのクソ野郎が！」

キラゴルド「クソなのはそっちだろ。この世界の誰も……兄貴でさえ、結局俺を助けてくれなかった。」

でもいいんだ。ウルノーガ様のおかげで、俺はこうして復活できた。今じゃ黄金化の力も思いのままさ。あのバイキング共を手駒に変えたように、今度は俺がこの力で世界中のやつらをこき使つてやるんだ」

カミュ「やつぱり黄金兵共はお前が……それがお前の今の望みなのか？魔王の配下になってそんな事が！」

キラゴルド「アハハ！今さら説教しようつての？本当バカなクソ兄貴！ハア！」

マヤは闇に包まれ、恐ろしい魔獣の姿になった

カミュ「……この5年間ずっと考えていたんだ。俺が生き残ってしまった意味。やるべき事を。マヤ、お前がそんな姿になったのも全て俺に原因がある。」

なら！今ここでお前を倒す事が俺の贖罪だ！」

カミュは短剣をマヤへと向ける

キラゴルド「クソ兄貴とザコ勇者どもが偉そうに正義のヒーロー気取り？俺さえ救ってくれなかったやつらが今さら！

…… ああ、うざい。超うざい。くそくそくそつ、バカな兄貴も勇者も！みんなみんな！黄金にしてやるよ！」

鉄鬼軍王キラゴルドがあらわれた

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

シルビアはイレブンの体に緑色の魔法陣を描くと、イレブンの全身が緑色のオーラに包まれ、イレブンの筋肉がかなり増大する

イレブン「全身全霊斬り！」

キラゴルド「はあっ！」

ガキン!!

イレブンが向かってくるキラゴルドにパワーアップした全力の一撃をぶつけるが

ギリギリギリ

キラゴルド「っなあ!!」

ガン!!

イレブン 「くっ！凄いパワーと固さだ！」

イレブンとキラゴルドは押し合ったのち、互いに後方へと戻された

キラゴルド 「みんな八つ裂きにしてやる！」

キラゴルドはイレブン達の周囲を素早く回りながら、爪で無作為に切り裂いていく

全員 「ぐっ……」

イレブン 「！ここ！」

ガアン!!

イレブンが大剣を使いキラゴルドの進行を阻み、動きを止めさせた

キラゴルド 「な!?!」

グレイグ 「ナイスだ、イレブン！鉄甲斬！」

バギイン！

キラゴルド 「いっただあっ!!」

グレイグの勢いよく振りかざされた斧が固いキラゴルドの装甲を裂いた

ロウ 「グランドクロス！」

ロウがその裂かれた場所目掛けて十字の攻撃を放つ

キラゴルド「そんなもの！」

しかし、キラゴルドは高く飛んで避けた

シルビア「グレイグ！バイキルト！」

シルビアはその隙にグレイグの体に緑色の魔法陣を描くと、グレイグの全身が緑色のオーラに包まれ、グレイグの筋肉がかなり増大する

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンは再びキラゴルドに攻撃を仕掛ける

キラゴルド「俺の黄金の力、見せてやる！」

キラゴルドが両手をイレブンとシルビアに向けた。それと同時にキラゴルドの体が怪しく黄金に光り出す

全員「!？」

キラゴルド「黄金になっちまいな!!ゴールドアストロン！」

キラゴルドはイエローオーブの力を解き放つ

パキパキパキ！

イレブン「あ………」

シルビア「うそ……」

イレブンとシルビアは黄金の像になってしまった

グレイグ「ゴリアテ!!イレブン!!」

ロウ「な、なんという事じゃ!」

キラゴルド「どどんいくぜ!バイキルト!」

キラゴルドは自身に緑色の魔法陣を描くと、キラゴルドの爪が更に凶悪に鋭く伸びた

二人「!?!」

グレイグ「一旦私達だけで凌ぎましょう、ロウ様!蒼天魔斬!」

グレイグがキラゴルドに攻撃を仕掛けていく

キラゴルド「邪魔だ!」

ガキン!!

グレイグ「ぐうっ……」

グレイグの斧の攻撃をキラゴルドは受け止めた

キラゴルド「雑魚が!!」

グレイグ「ぬおっ!」

キラゴルドは余裕そうにグレイグを弾き飛ばした。その時、キラゴルドの頭上に緑色の魔法陣が浮かび上がる

ロウ「ヘナトスじゃ！」

ロウがキラゴルドに衰弱化の魔法をかける

キラゴルド「ううっ、このジジイが」

キラゴルドの爪は少し縮み始めた

シルビア達はまだ金の像のままだ

キラゴルド「ジジイも黄金になっちまえ!!」

ロウ「!？」

キラゴルドは先程と同じくロウに手を向けた

グレイグ「させん！まもりのたて！」

グレイグがロウとキラゴルドの間に盾を構えて飛び込み、盾の前面に小さな光のバリアを作り出した

パァン！

キラゴルド「!？」

バリアが黄金化の力を防いだ

グレイグ「やはりそうか！石化と同じ類の物！ならば防げる！」

ロウ「助かったぞ、グレイグよ」

キラゴルド「な、なんだと……」

その時

パライイン!!

シルビア「はっ！黄金が溶けたわ！」

シルビアの黄金が割れ、シルビアが動けるようになった

キラゴルド「な!？」

シルビア「こんな事しちゃうのなら悪いけど、アタシだって本気、出しちゃうわよ。はあああ!!」

シルビアは力強く声をあげて極限の集中状態になり、ゾーンに入っ
た。

ちから　みりよく　身かわし率があがった

シルビア「ほとばしるゝ、アモゝレ！」

シルビアはみりよくの力を指先に溜め、ハートの形にしてキラゴルドに放った。その大きさはいつもより数倍も大きく、キラゴルドを包むほどの大きさが放たれる

キラゴルド「なんだよ、これ!!うっ！」

バアアン!!

当たったハートが凄いい音を立てて弾けた。その威力でキラゴルドはかなり奥へと押しやられる

グレイグ「ここまで大きいと……ハートとはいえ、最早恐怖だな」

パライイイン!!

イレブンも黄金が割れ、動けるようになった

イレブン「僕も溶けた! 全身全霊斬り!」

イレブンはすかさず、キラゴルドに向かって大剣を叩きつける

ズバァン!

キラゴルド「ぐぐぐ……」

グレイグ「蒼天魔斬!」

飛び退いたイレブンに代わってグレイグが斧で斬りつける

キラゴルド「ゴールドフィンガー!」

キラゴルドは倒れた姿勢から手に力を込め、大きな金色の球を作り出してグレイグにぶつけた

グレイグ「ぬうっ!」

グレイグは球に押し戻された

キラゴルド「さあ、やっちないな！」

キラゴルドは増援を呼ぶと、黄金兵長が駆けつけてきた

ロウ「ベホイムじゃ！」

ロウはグレイグの体に緑色の魔法陣を描き、強い治癒の力をかける
と、グレイグの傷が瞬時に回復した

シルビア「ほとばしるゝ、アモゝレ！」

シルビアは再び先程と同じく大きなハート形をキラゴルドに打ち出す

キラゴルド「ふざけやがって!!壊れちまえ!!」

キラゴルドはハートに思いっきり爪で切り裂くと、ハートはバラバラになって砕けた

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンがその隙にキラゴルドに大剣を振り下ろす

キラゴルド「調子にのるな!ゴールドフィンガー!」

キラゴルドはイレブンの体にゼロ距離で金色の球を作り出して打ち出した

イレブン「ぐはあああつ!!」

ドガァン！

イレブンは強く壁に打ち付けられた

ロウ「イレブン!!」

ロウが急いでイレブンに向かおうとすると

黄金兵長「……」

黄金兵長がロウの前に立ち塞がり、キングダムソードを繰り出した

ロウ「ぬううっ!!」

シルビア「ロウちゃん!」

グレイグ「オノ無双!」

グレイグが斧を持って回りながら、黄金兵長に目掛けていく

黄金兵長「!?!」

ガギン!

黄金兵長に当たったグレイグはそのままキラゴルドに向かっていく

キラゴルド「はあっ!」

ガン!

グレイグ「くっ」

しかし、キラゴルドはグレイグの斧を受け止めた

キラゴルド「ピオリム！」

キラゴルドはキラゴルドと黄金兵長に緑色の魔法陣を描くと、脚力強化の魔法をかけ、素早く動けるようになった

ロウ「グラントクロス！」

ロウは十字の攻撃をキラゴルドと黄金兵長に放つ

黄金兵長はたおれた

キラゴルド「ふん、こんなもの！」

キラゴルドは素早く横に移動して避けた

シルビア「ほとぼしるゝ、アモゝレ！」

シルビアがそこに大きなハート形を撃ち出した

キラゴルド「もう効かねえよ！」

キラゴルドは再び爪で切り裂き、バラバラにした

キラゴルド「今度こそ八つ裂きにしてやる！」

再びグレイグ達の周りを素早く回りながら、爪で切り裂いていく

全員「ぐっ……」

イレブン「全身全霊斬り！」

キラゴルド「!？」

隅で動けなくなっていたイレブンが戻ってきた

キラゴルド「チツ！雑魚勇者はもう死んだんじゃねえのかよ！」

イレブン「僕はもう簡単にはやられない！渾身斬り！」

ガキン！

キラゴルド「クソ！」

キラゴルドはイレブンの大剣を受け止めると後ろに退いた

グレイグ「鉄甲斬！」

キラゴルド「な!？」

ズバツ！

キラゴルド「くっ……」

背後にはグレイグが既に回っており、キラゴルドの背中を勢いよく斬りつけた。

キラゴルドは地面に膝をつけている

ロウ「ベホマラー！」

ロウはイレブン達全体に緑色の魔法陣を描き、全員に治癒の力をかけて傷を治した

シルビア「ほとぼしるゝ、アモくレ！」

シルビアは倒れかけているキラゴルドにトドメとして、大きなハート形を撃ち出した

バアアン!!

キラゴルド「うああああ！」

キラゴルドの金の装甲が剥がれ、中から金の触手のようなものごとりに襲いかかる

その中央にはマヤと黄色に光るイエローオーブがある

ロウ「いかん！完全に力が暴走してある！このままでは黄金病の呪いがとどまることなく広がりかねんぞ！」

ドスン！

ロウ「こつちにも来るぞ！」

シルビア「避けて、皆！」

仲間達の間触手が襲いかかり、仲間達と離れてしまった

マルティナ「カミュ！イレブン！二人があつちに取り残されたわ
！」

カミュ「くっ、仲間達と離れちまった！イレブン！平気か！」

イレブン「うん、大丈夫！それよりもマヤちゃんが！」

マヤ「あ……うああ……」

カミュ「これ以上俺のせいで、お前に罪を背負わせるわけにはい
かない！マヤ……お前は俺が……この手で……」

カミュは短剣を握った手を震わせながら何かを決めようとしてい
る

マヤ「おにい……ちや……」

マヤは苦しそうにしている

イレブンはカミュの前に立ちはだかる

カミュ「くっ……！イレブン、止めないでくれ」

イレブン「カミュ。そんな悲しい事はさせない！君はマヤちゃんを
どうしたい？僕に言つて、必ず力を貸すから。だって君の相棒だから

ね！」

「イレブンは真っ直ぐカミュを見つめた

カミュ「……イレブン。俺は…… やつぱりマヤを助けたい！お前の力を貸してくれ！あいつは、この世界でただ一人の俺の妹なんだ！」

イレブン「うん！もちろんだよ！カミュ！」

マヤ「くる…… しい、助けて」

マヤは助けを求めようと手を伸ばしている。しかし、金の触手がイレブン達を襲う

イレブン「カミュの行く手を邪魔させないよ！」

勇者の紋章を触手に向かって光らせる

ドスン！ドスン！

聖なる光を浴びた触手達は地面に落ちていった

イレブン「カミュ！」

カミュ「うおおお!!!」

カミュは勢いよく走り出し、触手を避けながらマヤに向かって飛ぶ

と、伸ばされた手を掴もうとする

バァン!!

しかし、透明な壁のようなものがカミュとマヤを遮る

マヤ「離れろ……このままじゃ……兄貴が」

カミュ「うおおおお！」

カミュは体が金になりながらも透明な壁を貫通し、中にいるマヤの手を掴み引つ張り出すと、強く強く抱きしめた

マヤ「あに……き」

カミュ「……ごめんな、マヤ」

それだけを言い残すと、カミュの体は全て金になってしまった

全員「!!」

マヤ「!!あ……ああ……」

マヤは動かなくなったカミュの金の像を抱きしめる

マヤ「やだ!!兄貴!俺は、兄貴と一緒にいたい!!喧嘩して、笑って、また喧嘩して、そんなろくでもないけど楽しい毎日に比べたら、貧しいのなんて、何でもない!

寒いのだって、ひもじいのだって我慢できる。だから兄貴！戻ってきてくれ！

兄貴がいてくれるなら！俺は！黄金なんて！もういらないっ!!」

その時、マヤの落とした涙がペンダントにあたり、清き力によりペ
ンダントはバラバラになった

パライイイン!!

するとキラゴルドの装甲も辺りにあつた触手もなくなり、黄金に
なつた魔物や人も元に戻つた

マヤはその場に倒れるが、カミュが抱きしめる

マヤ「いししし…… まつたく。バカ兄貴のせいで…… また、貧
乏に逆戻りだ」

そう言うとマヤは気を失つた

カミュ「マヤ!…… 眠っただけか」

コロコロ

カミュの足元に黄色いオーブが転がってきた

カミュ「これは…… イエローオーブ」

イレブン「カミュ!よかつたね」

イレブン達がカミュの元へやってきた

カミュ「へへっ！ああ！」

クレイモラン城下町 教会

神父「人知を超えた力を使った反動ですね。体力が完全に回復するまで、目は覚まさないでしょう。ですが、命に別状はありません。いずれ必ず意識を取り戻しますよ」

カミュ「ああ、ありがとな」

神父「目を覚ますまでは責任を持って私がお世話いたします」

クレイモラン城下町

カミュ「イレブン、世話かけたな。さつきキラゴルドを倒した時に手に入れたこのオーブはお前に渡しておくぜ」

イレブンはイエローオーブを取り戻した

カミュ「俺に課せられた預言は、全て本当だったってわけだな。マヤはここに預けておけば安心だし、俺はあいつのためにも新たな旅に出るぜ。」

お前と魔王を倒す旅にな！これからよろしくな！相棒！」

イレブン「うん！僕の隣は任せたよ！カミュ！」

74. 魔竜

シケスピア雪原

カミュ「しかし、ベロニカもセーニヤもラーズもいないってのに聖地ラムダに向かっていいのかよ」

イレブン「うーん、そこは気になるけどひとまずはラムダに向かって魔王を倒せるヒントがないか確かめた方がいいと思うんだよね。それに、3人とも魔物なんかにはやられないと思うし」

ロウ「なに、ベロニカとセーニヤなら自分でラムダへ向かおうとしておるかも知れん。ラーズも賢いやつじや。むしろがラムダへ向かうのは予想できておるかもしれん。わしも行ってみるのがよいと思うぞ」

氷獄の湖

イレブン「あれ？ここってこんな大きな穴空いてたっけ？」

イレブン達が歩いている湖には凍っているが、そこに大きな穴が空いている

マルティナ「いえ、こんなに大きな穴は空いていなかったはずよ」

グレイグ「……何やら禍々しい気配がする。イレブン、周囲に注意……ハッ！イレブン、上だ！下がれ！」

上からは黒い竜が降りてきた

ネドラ「氷獄の湖の氷が砕かれ、我は長き封印から解き放たれた。我が名はネドラ！貴様らの命、我が糧としてくれるわ！」

魔竜ネドラがあらわれた

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

シルビアはイレブンの体に緑の魔法陣を描くと、イレブン全体が緑色のオーラに包まれ、イレブンの筋肉がかなり増大する

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンが真正面から全力で大剣をネドラに振り下ろす

ネドラ「ふん！当たらんわい！」

ネドラが軽々と避けると

グレイグ「鉄甲斬！」

ネドラの背後に回っていたグレイグが斧を振り下ろした

ズバツ！

ネドラ「ぐうつ、そうか、今のは誘導」

ネドラの体の鱗が一部剥がれた

ロウ「降り注げ、いやしのあめよ」

ロウは祈りを捧げて雨乞いをする、聖なる雨がイレブン達に加護のように優しく降り注ぐ

ネドラ「うがああっ！」

ネドラは大きなおたけびをあげる。その声は気迫に満ちており、声の大きさと合わせて腰を抜かしてしまいそうである

グレイグ「そんなもの効かん！」

ネドラ「グラランドプレス！」

ドスウン！

ネドラはイレブン達に勢いよくのしかかった

イレブン「ぐぐぐく……はあっ！」

イレブン達は盾で堪えた後、ネドラを空へ押し戻した

シルビア「グレイグ！バイキルト！」

シルビアはグレイグの体に緑の魔法陣を描くと、グレイグ全体が緑色のオーラに包まれ、グレイグの筋肉がかなり増大する

イレブン「グレイグ、同時に！全身全霊斬り！」

グレイグ「ああ！蒼天魔斬！」

イレブンとグレイグは息を合わせて、同時にネドラの左右から攻撃

を仕掛ける

ネドラ「ふんっ！もうその程度の動きは通用せん！」

ロウ「ベホマラー！」

ロウはイレブン達全体に緑色の魔法陣を描くと、周囲に強い治癒の力をかけて、イレブン達の傷を瞬時に治した

ネドラ「ドルモア！」

ネドラはロウの足下に黒い魔法陣を描き、闇の力を集めて爆発させた

ロウ「ぬう……」

ネドラ「うがああっ！」

ネドラは再び大きな声をあげるが、イレブン達は誰も腰を抜かさず立ってネドラを見ている

シルビア「うふふ、吠えてばかりいたって無駄よ！」

ネドラ「ぬぬぬ……。我の声に怯まぬとは」

シルビア「ほとばしるゝ、アモッレ！」

シルビアはみりよくの力を指先に集めると、ハート形にして撃ち出した

ネドラ「な、なんだこれは。はあ！」

ネドラはハートに噛み付いて砕いた

ネドラ「ふん、こんなもの……!?!」

砕け散ったハートの真後ろは、まさにイレブンが大剣を振り下ろす瞬間だった

イレブン「全身全霊斬り！」

ズバァン!!

ネドラ「グアアアアツ!!」

ネドラの頭から体までに勢いよく叩きつけられた大剣は見事に鱗を剥がし、ネドラに深い傷を与えた。骨すら砕けたような音がしたその威力はまさに会心の一撃

グレイグ「蒼天魔斬！」

地面に横たわったネドラに追い討ちとして、グレイグが斧で斬りつける

ネドラ「我は…… 負けん!!」

バシン!

グレイグ「ぐっ……」

ネドラは傷を堪えながら勢いよく起き上がり、グレイグに長い尻尾をぶつけた

ロウ「ベホイムじゃ！」

ロウは自身に強い治癒の力をかけ、傷を塞いだ

ネドラ「もう許さぬぞ!! グランドプレス！」

ネドラは再び勢いよく全員にのしかかった

ドスウン!!

先程よりも素早くかつ更に体重をのせてイレブン達を押し潰す

シルビア「きゃっ！」

シルビアは耐えきれずに転んでしまった

ネドラ「貴様からだ! ドルモア！」

転んだシルビア目掛けて黒い魔法陣が描かれると、シルビアを中心に闇の力が集まっていき爆発をおこした

全員「うぐっ！」

イレブン「全身全霊斬り！」

イレブンが爆発が終わった瞬間にネドラの前に飛び出してきた

ネドラ「もう当たらんと言っただろう！」

ネドラも警戒していたのか、軽々と避けてくる

グレイグ「蒼天魔斬！」

その後ろからは再びグレイグが回り込んでいた

ネドラ「貴様もだ!!」

しかし、これも予想されていたようで今度はグレイグの攻撃も避けられた

ロウ「大丈夫かの？シルビア。ベホイムじゃ」

ロウは転んだシルビアに手を出して立ち上がらせると、強い治癒の力をかけてシルビアの傷を瞬時に治した

シルビア「ええ、ありがとう、ロウちゃん」

ネドラ「はあっ！」

ネドラがシルビアに向かってくる

シルビア「ロウちゃんはアタシの後ろに。さあ、アナタの相手はアタシよ！」

ネドラ「ドルモーア！」

ネドラはシルビアに向かって闇魔法を放とうとすると

ロウ「ならば、妨害させてもらおう！わしもドルモーアじゃ！」

二人が同時に闇魔法を繰り出し、シルビアの周囲は真っ暗で見えな

なくなった

ネドラ「ぬう、厄介な」

シルビア「うふふ、アタシはここ」

ネドラ「!？」

シルビアはいつの間にかネドラの後ろにやってきていた

シルビア「ほどばしるゝ、アモゝレ！」

シルビアがネドラに向かってハート形を撃ち出した

ネドラ「ぬうっ！この強さ！遙か昔にaimamimiet勇者ローシユを
思い出すわ。だが、所詮は人間！ハアアッ！」

ネドラは高く飛ぶと、オレンジ色の息をイレブン達に吹きつけた

ゴウツ！

マルティナ「ごほっ！ごほっ！」

イレブン「これは、やけつくいき！くっ！体が……」

仲間達は麻痺して動けなくなった

ネドラ「己の無力さをあの世で悔やむといい。貴様らの命、くらい
尽くしてくれる！」

ネドドラが倒れているイレブン達に向かっていくと

ベロニカ「させないわ！メラゾーマ！」

別の場所から、大きな火の塊がネドドラに飛んできた

ネドドラ「ぐぬう！」

♪

ネドドラが突然の火に怯むと、今度は聖なる豎琴の音が聞こえてきた

ネドドラ「なんだ、この音は。体中から……力が抜けていく」

近くにある丘の上にはセーニヤが豎琴を奏でながら、自身の周囲に黄緑色の魔法陣を描き、大きな竜巻を発生させている

セーニヤ「忌まわしき魔物よ、風の裁きを受けなさい。バキクロス
！」

セーニヤの周囲にある大きな竜巻は弱ったネドドラに向かっていき、
ネドドラの体を風の刃が切り裂いていく

ネドドラ「ギイヤアアア！」

ジュワー

ネドドラは消え去っていった

ベロニカ「皆！大丈夫？セーニヤ！」

セーニヤ「皆様、今お助けいたします。キアリク！」

セーニヤがイレブン達全体に緑色の魔法陣を描き、イレブン達の体についた強い痺れを取り払った

カミュ「ベロニカ！セーニヤ！」

二人「勇者様、私達は勇者を守る宿命を持って生まれた聖地ラムダの一族。世界が滅びようとも、命に代えてあなたをお守りいたします。

イレブン／（様）、よくぞご無事で」

ベロニカとセーニヤはイレブンの前にひざまづくこと、互いの手を合わせて綺麗に礼をした

マルティナ「2人とも助けてくれてありがとうございます。今までどこで何してたの？」

ベロニカ「私達は気づいたら2人で知らない場所において、魔王のせいで苦しんでいる人達を少しずつ助けながら、ラムダを目指していたの」

セーニヤ「黄金の氷山が溶けたと聞いてやってきたら、まさかこんな所でお会いできるなんて」

ロウ「聖地ラムダに行けば、魔王を倒す手がかりの神の乗り物について何かわかるに違いない」

ベロニカ「うーん、私達は知らないわね。まあ、そう言う話なら長老様が知ってると思うわ。それじゃあ、このままラムダへ向かいましょう。皆、改めてよろしくね」

セーニヤ「イレブン様、皆様、またよろしくお願ひします」

ベロニカとセーニヤが再び仲間に加わった

聖地ラムダ

前までの神聖な雰囲気はなくなり、燃えた木や岩が降り注ぎ、家や神殿、広場などが一部ボロボロになっていた

マルティナ「なんて酷い光景。あんなに綺麗な場所だったのに」

シルビア「やっぱり大樹ちゃんの近くだから、被害はどこよりも大きいわね」

ラムダの広場

ベロニカ達の父、母「おお、私の天使達よ、今頃どこに」

ベロニカ達の父親と母親が祈りを捧げている

ベロニカ「お父さん！お母さん！」

セーニヤ「よかったですわ、お二人とも元気で」

ベロニカ達の父「おお、私の天使達よ！よく顔を見せておくれ。よく生きていてくれた」

ベロニカ達の父はベロニカとセーニヤにゆっくり近づきながら抱きしめた。その目は少し涙が流れている

ベロニカ「もう！お父さん。恥ずかしいわよ！」

長老「いやはや、勇者様方もよくぞ無事でいてくれました。……おや？お仲間が一人見知らぬ方ですな。あの茶髪の青年はどうされました？」

ベロニカ「そうだ、ラーズがいないじゃない。どうしたの？」

マルティナ「まだ見つかってないのよ。賢い彼の事だから、ラムダに来るんじゃないかと思ったんだけど」

セーニヤ「そうだったんですか。でも、ラーズ様ほどの方なら魔物にやられる事はないですし、きっとどこかで生きていますわ」

グレイグ「俺はデルカダールの騎士グレイグと言います。ラムダの

長老様に伺いたい事がありました」

長老「はい、私に答えられる事であれば……」

ロウ「実は伝説の勇者ローシユは邪神と戦う時に、神の乗り物というものに乗ったと聞いたのだ。その事を何か知ってはおらぬか？」

長老「ふむ、神の乗り物……。すみませんが時間をください。里にある古文書を読みあさってみましょう」

ロウ「かたじけないのう……。それじゃあ、その間わしらはどうするかの」

イレブン「うーん、やっぱりレースもまた旅にきてほしいよね。頼りになるし、きつとレースも僕達の事を探してると思うんだよ」

マルティナ「そうね。それにやっぱり私、レースがガラツシユの村にいる気がしてならないの」

ベロニカ「そうじゃない、レースならあそこに居てもおかしくないんじゃない？」

シルビア「でも、アタシ達一度向かったんだけどいかなかったのよね」

マルティナ「まあ時間も経ったし、もしかしたら何か手がかりはあるかも。もう一度ガラツシュの村まで行ってみましょう」

75. 無力

ガラツシユの村

ベロニカ「ここも、世界が崩壊した影響で前よりも荒れてるわね」

セーニヤ「ここやユグノアに来ると、どうしても切ない気持ちになりますわ」

マルティナ「この感じ、ラーズの気配だわ！ラーズ！どこにいるの？」

マルティナは急いで村の中に走っていった

ガラツシユの村 奥地

イレブン「あ、あのお墓の前に立ってる人。あの姿は！」

マルティナ「ラーズ!!」

村の人達の墓がある場所にはラーズが立っていた

ラーズ「よお、マルティナ、皆。やっぱり生きていてくれたか」

シルビア「ラーズちゃん！あなたもよかったわ、無事でいてくれて」

ラーズ「グレイグもいるんだな。それに、どうやって俺がここにいらつてわかつたんだ？」

ベロニカ「マルティナさんがラーズはここにいる気がするつて言ったのよ。流石恋人同士ね、何となくでもわかるものなのね」

マルティナ「ベロニカ、恥ずかしいからやめて」

ラーズ「ハハハ！流石マルティナだな」

マルティナ「ふふ。それにしても、皆で無事だったなんてきつと奇跡ね。……ねえ、ラーズ。私、ずっと会いたかつたわ」

マルティナはラーズにゆつくりと近づいていく。その顔は安心したような優しい顔をしている

ラーズ「……悪いな、マルティナ。少し待ってくれないか」

マルティナ「え？」

ラーズ「俺は待つていたんだ。イレブンが、皆が全員揃つてくれる事をな。真実を伝えるために」

マルティナ「待つていた？真実？何の話よ、ラーズ」

ラーズ「なあ、イレブン。勇者の紋章が光ってるだろ？それで俺の事をかざしてみてくれよ」

イレブン「え？……あ、本当だ。わかった」

イレブンの勇者の紋章はなぜか光っており、イレブンはラーズの言う通りにかざした。すると、全員の頭の中に映像が流れ込んだ

あの時の大樹内

ラーズ「ぐっ……みんな……な……」

周りは仲間達が気絶し倒れている

ラーズ「はあ、はあ。俺が……何とかしねえと……このままじゃ……世界は……」

大樹はもう闇の力により、爆発しそうになっていた

ラーズはゆっくり立ち上がり、足元に白い魔法陣が描かれる

ラーズ「はあっ！」

ラースは魔力で仲間達を包むと一人ずつ浮かせていく

ラース「くっ！魔力の消費量がすげえ……」

5人ほど浮かせた後

ラース「がっ……くっ、やっぱり俺の全魔力じゃ足りないか……
なら！」

ラースは膝をつくが、ある呪文を唱え始める

すると、足元に光る魔法陣が赤黒く変色していく

ラース「じいちゃん、ごめんなさい。絶対にしてはいけない禁忌を
俺はやります。どうか、許して」

ラース「はあああああ!! 人体魔力置換！」

すると、ラーズの足先が段々と光の粒になり、消えていった

ラーズ「グアアア!!……なんて痛みだ」

ラーズの体にまるで足や腕を無理矢理引きちぎられるような強烈な痛みが襲う

ラーズ「でも、皆を……守るためなら……こんな痛み!……何ともねえ!!」

全員浮かし終わる頃には、ラーズの足は無くなり、肘から先も無くなっていた

ラーズ「……これで……全員、だよな。よし!バシルーラ!!」

そう唱えると、浮いた仲間達はどこかバラバラに飛んでいった

残ったのはラーズだけ

ラーズ「へ……へへ。俺でもできた。今まで何も守れなかったけど、今度こそ俺は誰かを守れたんだな」

ラースはその場に倒れ込んだ

大樹が闇の光に包まれていく

ラース「皆、絶対に生き残れよな。皆なら世界が崩壊しても、きつと強い希望でこの世界を照らしていける。魔王なんかには負けるな。頑張れよ、皆。

…… マルティナ。俺が死んだって知ったら、お前はなんて言うかな。怒るだろうな、悲しむだろうな、恨むだろうな。たくさん約束を破っちまうしな。

でも、俺は…… 君に出会えて、君に恋をした……。あの日々はかけがえのない一生の宝物だ。君が俺を愛してくれた事も絶対に忘れない……。光が強くなってきたな。

イレブン！カミュ！ベロニカ！セーニャ！シルビア！ロウ！そして、愛して愛してやまないマルティナ！！

俺は皆に出会えて、旅が出来て、幸せでした。皆！後は任せたぞ！
……
ありがとう」

ラーズの言葉を最後に大樹は闇の爆発に覆われ、世界を包むほどの
巨大な衝撃が走りわたっていった

全員「……………」

今の光景に誰も反応できず、しばらく沈黙が続いた

マルティナ「……………え？……………何よ、今の。だって……………ラーズ
は、今ここに……………」

マルティナがそう言ってラーズに手を伸ばし、体に触れると

キラキラキラキラ……

全員「!!」

ラーズは光の粒になって消えていった

マルティナ「……え?……ラ、ラーズ?どこ行ったのよ。ねえ
!ねえ!!ラーズ!!」

マルティナは周りを必死に見回している

イレブン「……う……そ……」

カミュ「……くそっ!」

ベロニカ「あ……あああ、私は……何て事を……」

セーニヤ「……ラーズ……様?」

シルビア「……そんな……嘘よ、ダメ、そんな事ってあんまり
だわ」

ロウ「…… ラース、お主まで…… なぜ、皆してこんな老いぼれを」

グレイグ「…… 俺は、あの場所にながら…… 何も……」

マルティナ「嘘よ…… だって…… だって、だって!!! さっきまで、目の前にいたわ!! 話もしたわ!! 皆だって見たでしょ!!」

グレイグ「…… 姫様……」

マルティナ「ラース…… ずっと隣にいてくれるって…… 約束したじゃない。

連携技もやろうって言ったじゃない……。

ダーハルーネと一緒にスイーツを食べるって約束も……。

私にピアノを聴かせてくれるって約束も。

…… どうしてよ!! ラース!!!」

マルティナは両手で顔を押しさえながらその場に崩れ落ちる

シルビア「マルティナちゃん……」

マルティナの目からは涙が溢れている

マルティナ「わたし……は、何を……今まで、皆が、無事でいるなんて。あの爆発の中、皆がどうして生き残ったのか、深く考えもしなかった！

……勇者の奇跡なんだと……勝手に信じてた！そんな訳ないのに!!!あの時のイレブンはそんな事できる状態じゃなかったのに!!!

普通に考えればわかる事だったのに……ラースが……私の愛する人が……全てを犠牲にしてまで守ってくれたのに……私はこの数ヶ月……簡単に考えて……私は……魔物なんかには操られて……一体何をしていたの。

大切なものを守るために強くなったと思ってた……でも！そんな事なかった!!私は……16年前と何もかも同じ!!!この手は！何も守れない!!

私は……弱い!!弱すぎる!!!誰かに守ってもらわなきゃ、何もできない!!」

マルティナは手を血が滲むほど握りしめ、石でできた床を殴り続ける。石が割れ、大地にヒビが入ろうとも殴り続ける。手はどんどんロボロになっていき、血が辺りに飛び散る

ロウ「姫よ!もうやめるのじゃ!!」

!!
グレイグ「姫様!おやめ下さい!手が使えなくなってしまう
!!」

2人の声は届かず、マルティナは止まらない。
怒り、悲しみ、憎悪、絶望。これらが全て混じったような状態に陥った今のマルティナには、全ての声が届かない

ロウ「すまぬ、姫よ。眠っていてくれ。ラリホー」

マルティナ「うつ……」

ドサ

ロウがマルティナの背中に静かに魔力をこめた指で触り、眠らせた

全員「……………」

グレイグ「……………一旦外のキャンプ場へ行こう。俺も皆も、心の整理が出来ていないだろう。ここにいと、頭が真っ白になってしま……う……」

グレイグは静かにマルティナを抱くと、顔を伏せたまま皆に声をかけた

イレブン「うん…………… そうだね」

イレブン達もまた、暗く重たい表情でゆっくり村から出ていった

76. 後悔

キャンプ場

マルティナをテントの中に寝かせた後、皆で集まっていたが暗い霧
囲気が漂っていた

全員「……………」

イレブン「……………」僕、ラースはすつごく頼りになって、色々出
来て、知識もあって、僕の代わりに作戦を立ててくれたり、出来ない
所は皆に指示出してくれたりして、その強さに甘えてた。

僕が……………このパーティーのリーダーだったのに……………そうやって
甘えてたから、あの時も後ろを取られて、何も出来なくて……………世界
は崩壊した。僕が……………甘えてばかりいたから……………」

イレブンは下を向きながら、必死に涙を堪えるように声を震わせて
話している

カミュ「そんな事ない、イレブン。お前はよく頑張ってた。俺だっ
て、あの時何も……………」

イレブンをフォローしながらカミュは唇を噛んでいる

セーニヤ「ぐすつ、ううつ…… ラース様」

セーニヤは涙を流し、必死に手で拭おうとしている

ベロニカ「…… 皆、ごめんなさい！私、古代図書館であの古代魔法、バシルーラが載っている魔導書を見つけて、もしもの為に覚えたの。」

その時、一度だけ後ろからラースが来てこの呪文の事を話したの。私は、あいつの魔力量じゃ唱えられないって思ってたから少し見せてしまったわ。あいつは興味ない感じにしていたけど、一回見て、魔道式も構造も方法も全部、あいつはその一回で覚えたんだわ。

しかも、魔法使いが使つてはいけない禁忌の術の一つの、人体魔力置換まで出来るなんて思わなくて…… だから、バシルーラは本当なら私の役目だったのに…… 私は一番肝心な所で…… 気絶して…… 私が代わりになればよかったのに……」

全員「!？」

セーニヤ「お姉様！いつの間にそんな物を！それに、何を仰るんですか！私はお姉様がいなきや……」

セーニヤはベロニカの発言に驚き、ベロニカに抱きつく

グレイグ「そうだ、ベロニカ。君が代わりになる必要なんて無い。俺が代わりになれば……」

シルビア「ダメよ、グレイグ。あなたまで何を言い出すの……こんな話はダメ。誰かが代わりになんて、そんなの、言っちゃいけないわ」

シルビアも遠くを見ながら自分の両手を強く握りしめている

ロウ「そうじゃの。それにきつと代わりになりたかったのは、皆同じ気持ちじゃろう。今は、この後姫が目を覚ましたらどうするか話した方がよい」

カミュ「たしかに、マルティナにとってこの事実はつらすぎる。俺らにだって、まだ受け入れがたいってのに」

セーニヤ「マルティナ様はきつと、ずっとラース様と会えなくて不安だったはずです。そして、ようやく会えたと思ったらこんな事に……」

マルティナ様の心境を思うと、心が張り裂けそうになりますわ」

全員「……………」

セーニヤの言葉に全員が再び重い空気のまま黙り込んでしまった

イレブン「(どうしたらいいんだろう……………。何も考えられない。ラースがいなくなるなんて……………。ラースはいつも支えてくれたのに……………。そういうえば、前にラースに教えてもらったっけ。

考え方を変えてみるといって。えっと、ラースは…………。死んじゃって、ラースはどうしてたっけ?…………。あ)」

イレブンは何かに気付いたように立ち上がった

全員「？」

イレブン「…………。そうだ……………。僕は、僕達は、それでも前に進まなきゃ行けない。ラースはあの爆発の時、僕達に、後は任せただけで言った」

全員「!!」

イレブンの眩きに全員がハツとした顔をした

イレブン「そうだよ……。僕達は託された。魔王に負けるなど
いう思いと、ラースからこれまでの感謝をもらった。きつと世界をま
た元通りにしてくれるって信じてくれてた！これがラースの残され
た想いだよ！

皆でラースの想いを果たそう！僕は残された皆で魔王を倒して、世
界を救う!!!

それが、ラースに僕達ができる精一杯の謝罪と感謝の気持ちになる
と思う。それに、ラースの事だからそれが出来たら褒めてくれそうだ
よね、あの笑顔を浮かべてさ」

イレブンは少し苦笑いしながら皆に語った

ロウ「イレブン……。本当に強くなったのう。そうじゃな！われ
らは歩き続けるんじゃない！」

シルビア「そうね！それに、パパとの約束のためにも絶対に魔王を
倒してみせるわ！」

ベロニカ「イレブン、見ない間にかなり逞しくなったじゃない。私
も魔王をぶつ倒してやるんだから！」

セーニヤ「そうですね、お姉様！イレブン様、励ましていただきありがとうございます。私もお姉様と一緒にどこまでもお供いたします」

グレイグ「イレブン、お前に勇気をもたらしたのはこれで何度目になるのだろうか。こんな弱い俺ですまない、だがこれからも俺は皆を守り続ける盾であろう！」

カミュ「へへ、カツコイイ事言うようになったな、相棒！俺も魔王なんかには絶対負けねえ！マヤをたぶらかした分もラースの分も、あいつに何倍にもして返してやろうぜ！」

仲間達も続々と立ち上がる

イレブン「うん！皆、頑張ろう！……後はマルティナが目覚ますだけだね。皆の誓いをマルティナにも、そして、ラースにも言おうと思うんだ」

ロウ「そうじゃな。姫が目覚ましたら、あの墓の前でもう一度誓うかの。名前も刻んでやらんとな」

77. 誓いをあなたに

その夜

マルティナが目を覚ました

マルティナ「ん？ここ……は」

ベロニカ「あ！皆！マルティナさんが目を覚ましたわ！」

セーニヤ「マルティナ様、大丈夫ですか？」

全員がベロニカの呼ぶ声に集まってきた

マルティナ「…… ラースは、もう…… いないのよね」

マルティナは全員を見渡すと、下を向いて呟いた

イレブン「うん。ラースは、僕達を守って死んでいった」

ベロニカ「ちよつと、イレブン！そんな直球に！」

マルティナ「いいのよ、ベロニカ。はつきり言ってもらえた方がありがたいわ。そうよね…… 私に力が無いせいで……」

マルティナは両手を握りしめる

ロウ「姫よ、わし達はさっきまで皆とこれからの事を話しててのう。お主とラーズに伝えたい事があるんじゃない。外に来てもらえるかな」

マルティナ「私とラーズに……伝えたい事？」

キャンプ場

マルティナ「それで、伝えたい事って？」

イレブン「マルティナ、僕達はラーズにこの世界の未来を託されたんだ。マルティナも見たよね？ラーズが爆発に飲まれる前、僕達に後は任せたぞって言ったのを。」

だから、僕達全員はラーズの想いを受け継ぐ。

ラーズが願っていた魔王を倒してこの世界に光を取り戻すんだよ！そうすればきつとラーズは喜ぶし、ラーズに対する謝罪と感謝にもなる。

その為に、マルティナ。君の力が必要なんだ。

僕達と一緒に魔王を倒すんだ！」

イレブンはマルティナに強く真っ直ぐに語りかけた

マルティナ「…………… ラースの…………… 願い……………。 そうだわ…………… 私、ラースに教えられた。彼の想いを、無念を、そして、私に対する愛を。」

…………… そうよね。このまま悲しみに暮れてても、ラースはきくと喜ばない。

イレブン、私も行くわ！そして、絶対に魔王を倒しましょう！！」

マルティナはイレブンの目を見てはつきりと宣言した

イレブン「！マルティナ！！ありがとう」

マルティナ「ふふ、お礼を言うのはこっちの方よ。やっぱりイレブンは勇者ね。絶望に落ちていきそうな私の手を掴んで引っ張り上げてくれた。大事な事に気づかない所だったわ。本当にありがとう。皆も、ごめんなさい。」

もう迷わないわ。私は皆と一緒に行く。ラースにもこの誓いを伝えましょう」

ガラツシユの村 奥地

墓の前にはラースがつけていたオレンジのミサンガが落ちていた

マルティナ「あら？これは…… ラースがつけていたミサンガだわ」

シルビア「どうしてここに。もしかして、さっきのラースちゃんの姿はこのミサンガが見せてくれたのかしら」

イレブン「そうかもしれないね。よし、皆。ここでもう一度誓おう」

イレブンは墓の前に向かっていく

イレブン「ラース、僕達を助けてくれてありがとう。僕は、僕達は、君の想いを絶対に無駄にはしないからね。」

僕、あれから少しは強くなったんだよ？魔法もちよつとは得意になつてきた。だから、魔王を倒してこの世界に光を取り戻す！もし出来たら、また前みたいに褒めてくれると嬉しいな」

イレブンが終わると、続いてカミュが交代で墓の前にやってくる

カミュ「ラース、お前は周りをよく見てたよな。前に俺がクレイモランから離れたがってたのも気付いてくれたもんな。お前は最後まで皆を想っていた。」

お前の願い、しっかり受け止めたからな。見てろよ。こんな世界、さつさと終わらせてきてやるよ」

カミュの後ろからベロニカが走ってきた

ベロニカ「ちよつと、ラーズ！あんたは本当に馬鹿なんだから。……でも助かったわ。ありがとう。」

まだ言いたい事はたくさんあるけど、それは魔王を倒してきたら言うわ。首洗って待ってなさいよ」

ベロニカはすつきりした表情でセーニヤとバトンタッチした

セーニヤ「ラーズ様。私達を助けてくださった事、大変感謝いたします。あなたの想いは私達の中にしっかりと残りました。私も、ラーズ様のように強くあります。」

もう、ついていくだけのセーニヤにはなりません！遠くで見てください、私の精一杯の勇姿を！」

セーニヤは綺麗に一礼してシルビアと交代する

シルビア「んもう！ラーズちゃんったら。最後までカツコイイんだ

から。アタシはね、あなたの笑顔とっても素敵だと思ってたわ。

だ・か・ら、これからもずっとその笑顔でいられるように、アタシ頑張るわね。アタシの皆を笑顔にする力、必ずそこまで届けてあげる」

シルビアはクルツと回って華麗にポーズを取ると、向かってくる口ウの背中を支えた

ロウ「ふおつふおつ、お主はわし達を何度助ければ気が済むのかう。お主はいつも立派じゃった。姫を想い、皆を救った。その功績に元王として答えなくてはならぬのう。」

見ておれ、ラーズよ。このロウ、ただの老いぼれになるのはまだまだ先じゃ」

グレイグが歩いてくると、墓の一步手前で礼をしてやってきた

グレイグ「お前とは喋った事はなかったな。あの時の俺は愚かだった。何も出来ず、ウルノーガに騙され、友に裏切られた。」

お前が姫様達を守り続けてきたからこそ、今こうして俺達はここにいる。本当にありがとう。お前は、俺よりもよっぽど英雄という名がふさわしい。だが、俺もタダでは転ばん。

お前という盾がいなくなってしまうた今、俺がお前の代わりに勇者の盾となる。どんな攻撃にも耐え、皆を守ってみせる。見ていてくれ」

グレイグが言い終わると、ゆっくりとマルティナがやってきて、墓の前でしゃがみ込んだ

マルティナ「……私とあなたが初めて出会ってから、私はあなたに何か返す事ができたかしら。あなたは、私にたくさんのものを残してくれた。力、勇気、希望、そして愛情。どれも、大切なもの。私は皆と行くわ。

少し寂しいけど見ていてね、ラーズ。私頑張るから。魔王を絶対に倒してみせる！」

静かに立ち上がってナイフを取り出すとマルティナは長い髪をほどこき、首から下の髪をバツサリと切った

全員「!?」

長かった黒髪が風でハラハラと飛んでいく

マルティナ「これが、私の覚悟の証よ！」

粗い切口のショートヘアとなったマルティナが強い覚悟と決意のこもった目で墓を見ていた

……皆

どこからか声が聞こえてくる

全員「!?!」

マルティナ「この声は、レース!?!」

皆が辺りを見渡していると、ミサンガがあった場所にレースが現れる

全員「レース!!」

レース「朝が来るまでの短い間だけだが、思いを伝えたくてな。皆、ありがとな。挫けずに、そして俺の想いを受け止めてくれて」

そう言うと、レースは各仲間達の元に歩いてきた

ラース「イレブン、見ない間に強く逞しくなったな。カッコイイぜ。お前は立派な勇者だ。負けるなよ。魔王なんかぶっとぼしてやれ」

ラースはイレブンの肩に手を置いて励ました

イレブン「うん！絶対に負けないよ！」

ラース「カミュ、色々あったみたいだな。お前はいつも気を張ってたからな、たまには仲間達に頼れよ？皆もお前の事を心配してるんだからな。魔王のやつには、俺の分もしっかりと頼んだぜ」

カミュ「ああ、任せな！」

カミュとラースは互いに手を握り合った

ラース「ベロニカ、お前も色々考えすぎだ。あの魔導書は確かに覚えていたが、ベロニカが責任を感じる必要は全くもってないんだからな。

俺が勝手にやった事だ。大丈夫、そんな物に頼らなくなっただけでお前は強い。頑張れよな」

ラーズはしゃがんでベロニカの目線に合わせて優しく帽子越しに頭を撫でた

ベロニカ「……ありがとう」

ラーズ「セーニヤ。君の回復魔法にはいつも助けられていた、ありがとな。でも、君も本来はもつと強いのでは？」

なんたつて、ベロニカの妹なんだからな！自信を持つんだ。君達姉妹がいれば、イレブンは安心だ。2人で使命をすっかり果たすんだぞ」

セーニヤ「ぐすつ！はい、ラーズ様！」

ラーズはセーニヤにもベロニカと同じく優しく頭を撫でた

ラーズ「シルビア、いつも皆のムードメーカーになって、相談相手になったりしてくれてありがとう。俺もシルビアの笑顔には元気をもらっていた。乙女心、バカには絶対にできないな。」

それに、剣の技術も相当なものだよな。あの基礎の固まり方を見ると、君はどこかの騎士や兵士の出なのかな？これからもみんなを支えてやってくれ」

シルビア「ウフフ、流石ラーズちゃんね。任せてちょうだい。皆を笑顔にしてみせるわ！」

ラーズとシルビアは互いに笑い合っている

ラーズ「じいさん、その年でよく動けるよっていつも思ってたんだ。無理だけはするなよな。孫にしてもらいたい事、まだいっぱいあるんだろ？」

じいさんは俺なんかよりずっと博識だし、魔法もできるしすごいよ。いっぱい長生きしろよな。これは俺だけじゃなくて、皆の願いだぜ」

ラーズはロウの両手を優しく包むように握った

ロウ「……いかなのう、年をとると涙が出やすくて敵わんわい」

ラーズ「グレイグ、君と話すのはこれが初めてだな。知ってると思うが俺の名前はラーズ。このガラツシユの村の一番の戦士だ。」

お前にも色々あったんだろうが、あまり考えすぎるなよ。もっと楽にいこうぜ。そうすれば、自ずと見えなかったものが見えてくる。聞こえなかった声が聞こえてくる。世界はもつと優しさと楽しさに満

ちているぞ。

俺は皆の盾だったつもりはないが、デルカダールの英雄様に守られてるなら、俺の時よりもずっと強固な盾になったな。皆を頼んだぞ」

グレイグ「ああ……… すまない。感謝する」

グレイグはラースに深く礼をした

ラース「マルティナ。俺は君に恋をしたのはいつだろうか。気付いたら、俺の心の中に君がいたんだ。そしてマルティナは分からなかっただろうが、俺はマルティナから貰ったものは多く、そしてどれもが大切だったんだ。

……… 朝が来てしまうな、消える前に伝えないと」

マルティナ「本当だわ。ラース、体が薄くなってきてるわ」

辺りはだんだんと明るくなってきている

ラース「まず、君に最初にもらったものは、俺である事だ。」

俺は村が無くなったあの夜、あのままマルティナとイレブンが来なかつたら俺は、ラースでは無くなっていたと思う。俺の中にあつた絶

望が、俺の体を支配し尽くしていた。だが、君達が来た。

イレブンが過去を見せてくれ、マルティナが俺に声をかけてくれた。もし、それが無かったらと思うと恐ろしい。少しでも自分の思いを口に出す事で、俺自身の中にある本当に大切なものにも気づき、ラースである事ができた。あの時、君には生きる希望を貰った。

次に、マルティナに分かち合う喜びをもらった。

俺は一人旅が長かったから、他人と協力する事や分かち合う楽しさも知らなかった。だが、マルティナと一緒に戦って、街を巡って、キャンプをして。そうするうちに今まで一人でしていた事がとても楽しくて、嬉しくて、輝かしく見えた。あの日々のどれもが俺にとっては凄く楽しかったんだ。

次に、マルティナに愛をもらった。

俺は、マルティナと恋人同士となってから嬉しくて嬉しくて仕方なくてな。ずっと不安に思っていた時とは違う。マルティナが、俺の事を思っているのがわかったから。戦闘の時も一緒に戦って、お互いの事がわかってるあの瞬間、俺は幸せだと感じていた。

他にもたくさん貰ったものがある。だから、君は心配する事なんて何もない。今でも、皆にこうやって思われて俺は幸せだ」

マルティナ「ううつ、ラース……体が」

ラースは薄くなり、透けて景色が見えてきていた

既にその後ろからは朝日が顔を覗かせている

ラース「泣かないでくれ、マルティナ。君には泣き顔よりも、笑顔の方がよく似合う」

ラースはマルティナの目についた涙を指で拭った

マルティナ「ラース……」

ラース「前にも言ったな。だから、たくさん笑ってくれ。それだけで俺は嬉しいんだ。そして、あの約束をここでもう一度するよ」

その言葉を告げると、ラースはミサンガを手を取った

ラース「マルティナ、これは俺からの最後のプレゼントだ」

ラースの持っていたオレンジのミサンガが綺麗な銀の指輪に変

わった

全員「!？」

ラースは跪き、マルティナの薬指にそれをはめる

ラース「俺は神に誓おう。

俺はずっと君の隣で君を守り続ける。

君がいつまでも幸せで、笑顔でいられるように。

俺は、君の事が大好きだ。君を愛している。マルティナ」

マルティナの目を見てはつきり伝えた後、指にキスをひとつ

マルティナ「うん…… うん…… 私も大好きよ、ラース」

ラース「へへ、俺もだ」

今にも消えそうなラースと泣きながら抱きしめるマルティナ

そして、2人でキスをした

その瞬間、朝日が登りラーズの姿は消えた

マルティナを抱きしめていた腕も、合わせていた唇も、ほんのりと感じていたラーズの体温も、まるで夢を見ていたかのように全てなくなつた

マルティナ「……………」

マルティナはその場に立ち尽くしている

ロウ「…………… 姫よ、大丈夫かの」

マルティナ「はい、ロウ様。私にはラーズがいます。もう涙は見せません。ラーズが好きな笑顔でいます」

皆に振り返つたマルティナは笑顔だった

イレブン「うん、僕も皆にずっと笑顔でいてほしい。さあ、ラムダに戻ろうか」

全員「うん！」

笑顔の中、戻っていく勇者達

朝日が照らす影はそこに9つあった

村一番の戦士、レース。ここに眠る

78. ケトスと神の民

聖地ラムダ

長老「おお、皆さん。お探ししました。どうでしたか？ ラース殿は見つかりましたかな」

セーニヤ「長老様。ラース様はあの大樹が落ちた日、私達全員を爆発から守るために、自らの命を犠牲にして助けてくださいました」

ベロニカ「そう、だからラースはもうこの世界にはいなかったの」

長老「何と!!それは…… さぞかしつらい事実だった事でしょう。ぜひ心の傷が癒えるまで、この里でゆっくりなさってください」

イレブン「ありがとうございます。でも、僕達はもう大丈夫です。彼は魔王を倒す事を僕達に託しました。僕達はその想いに絶対に答えます。だから、先に進まなきや行けないんです。」

神の乗り物について何かわかりましたか？」

イレブンは強い瞳ではつきりと伝えた

長老「…………… 流石勇者様、何たる心の強さ。感服いたしました。乗り物について古文書を読んでみた所、ベロニカにお守りとして渡したあの笛。」

賢者セニカ様が邪神討伐後にこの里に残したあれこそが、神の乗り物ケトスと呼ぶための物らしいのです。ある場所へお連れします。こちらへどうぞ」

勇者の峰

長老「ここは勇者の峰。かつて邪神を倒した後の勇者様が、空から舞い降りてきた場所だと言われています。ここで勇者様が笛を使うことにより、神の乗り物ケトスと呼ぶ事ができるそうです」

イレブン「わかった、それじゃあやってみようか」

笛をイレブンが受け取った瞬間、笛と勇者の紋章が光り始めた

全員「!?!」

笛は伸びて光の糸ができ、雲の中に下がっていった

グレイグ「笛が釣り竿のように……バカな、俺は夢でもみているのか」

その時、笛は強くしなった

シルビア「キャツ！当たりがきたわよ。イレブンちゃん。引いてみて」

イレブン「くうっ！重……い」勇者の紋章が光る

イレブン「うわあ！」ドサ

イレブンは釣竿を引き上げるが尻もちをつく

カミュ「おい、イレブン！大丈夫か？」

その時、雲の中から何かが現れた

ベロニカ「あれは、空飛ぶ……クジラ!？」

長老「おお！神話は本当だった。あれこそが私が夢で見たもの。神の乗り物ケトス。今……伝説が蘇りました。その笛を吹けば神の使いは、イレブン様を大空へ誘いましょう」

イレブンは天空のフルートをてにいった

長老「イレブン様。世界のどこかにある天空に浮かぶ島を探すのです。きつとそこに闇を打ち払う新たな力があるはずです。」

イレブン様、お願いいたします。諸悪の根源たる魔王ウルノーガを、どうか討ち果たしてくださいませ」

全員「任せて！」

イレブンが笛を吹くと仲間達の足元が光り始め、気付くとケトスの背中にいた。

イレブン「すごい、こんな事ができるのか」

ベロニカ「わあ、すごい景色だわ！」

カミュ「おい、危ないからあまりはしゃぐなよ」

ベロニカ「もう！うるさいわね！それくらいわかってるわよ！」

ロウ「いやはや、長生きはしてみないとわからんものじやのう」

マルティナ「…… ラース、見てる？私達、空にまで冒険できるようになったわ」

シルビア「それじゃあ、空に浮かぶ島ってのを探して見ましょう」

しばらくして

グレイグ「む？イレブン、小さいがあれの事じゃないか？」

イレブン「あ、本当だ。グレイグ、ありがとう。早速向かってみよう」

神の民の里

セーニヤ「ここが天空に浮かぶ島。長老様の話ならここに闇を打ち払う力が……。あれは、神殿のようですが何でしょうか」

神殿内

カミュ「……おい、何者か知らねえが出てきな。そこに隠れてるのはわかってんだ」

柱の陰から誰かが出てきた

??? 「ふーん、なるほど…… 兄ちゃんがそうなのか」

それは人間ではなく、不思議な形をした生物だった

カミュ「な、何だ！こいつ！」

神の民「オイラは神の民だよ」

カミュ「神の民？何だそりゃ」

神の民「そっか、最近の地上人は知らないんだな。神の民はロトゼ
タシア創生の時代から、世界を見守ってきた天空の住人さ」

カミュ「マジかよ。けど、そんな大層なやつがこんな所で何してんだ？」

神の民「そりゃあ元々、この辺りは神の民達が暮らす里だったからね。けど、魔王軍に襲われて里のあった浮島をほとんど地上に落とさ

れちゃってね。オイラは生き残った最後の神の民なのさ」

セーニヤ「そんな事が。さぞおつらかったでしょうね」

ベロニカ「魔王のやつ、なんて事するのよ！」

カミュ「…… さつきは疑って悪かったな。あんたの気持ちも考えずに」

マルティナ「でもこの辺りは無事みたいよね。あなたが助かった事と関係があるのかしら？」

神の民「この神殿の奥には、世界が誕生した時から燃え続けているという聖なる種火が祀られているからね。神の民の里が襲われた時、オイラはたまたま神殿を掃除してて、聖なる種火の加護に守られて助かったんだ」

ベロニカ「聖なる種火の加護。もしかしてそれが……」

セーニヤ「私達は魔王の闇を打ち払う力を求め、この天空の地まで赴いたので。もし何かご存知でしたら教えてください」

神の民「うーん。魔王を倒せるほどの力か。聖なる種火は武器じゃ

ないし、何の事だろう。教えてあげたいけど、オイラこう見えてまだ子どもでさ。そういう話は詳しくないんだ」

イレブン「まあ、知らないのは仕方ないよ。聖なる種火は調べてもいい？」

セーニヤ「ですが、このままでは…。」

神の民「ああ、オイラの事なら気にしないで大丈夫。神の民の名はダテじゃないよ。それに魔王が倒されて、大樹様が復活すれば大いなる命の流れも蘇る。」

そうすれば死んでしまった者達も、いつかまた新たな命として生まれてくる。オイラの家族や友達も救われるってもんさ。聖なる種火を調べれば、何か手がかりがあるかも知れないしね。だから頼んだよ。勇者の兄ちゃん」

シルビア「あら？イレブンちゃんの事どうして…。」

神の民「フッフ、すごいでしょ。神の民にはわかるんだよ」

聖なる炎の間

中央には大きな炎が神々しく燃え盛っている

セーニヤ「これが聖なる種火。なんて清らかで神々しいでしょ

う」

マルティナ「イレブン！紋章が反応してるわ」

イレブン「本当だ、じゃあ近づけてみよう」

すると、聖なる種火は光り始めた。

そして、光が無くなると

ベロニカ「今何が起こったの？そこにある器に、聖なる種火の力が宿ったって事かしら？」

イレブン「そうみたい。持って行ってもよさそうだね」

イレブンは聖なる種火をてにいれた

ロウ「皆、あれを見るんじや」

そこには苗木が3本光っていた

セーニャ「あの苗木からは、命の大樹にも似た不思議な力を感じます」

ベロニカ「あの苗木を調べましょう。何か大事な事を伝えようとしているのかもしれないわ」

79. 勇者の剣を求めて

イレブンは苗木に手をかざした

そこには浮島で鉱石を取る4人の人達がいた。その内の一人は左手にイレブンと同じ痣があった

シルビア「今の光景、皆も見えてたのよね？」

ベロニカ「イレブンと同じ位置に勇者の紋章があったわ……あの人ももしかして」

ロウ「うむ、わたらの祖先。伝説の勇者ローシユ様で間違いなからう」

カミュ「今のが邪神を倒した先代の勇者達か。という事は、闇を打ち払う力について何かわかるんじゃないかねえか？」

ロウ「うむ。試してみる価値はありそうじゃ。イレブン、もう一つの苗木も見てみよう」

イレブンはもう一つの苗木に手をかざした

そこには砂漠の町でハンマーを掲げる姿と、火山がある町に向かう勇者達が見えた

グレイグ「あのハンマーは何だ？武器よりも鍛冶用の形をしていた

が」

セーニャ「それにあの場所も見ただことありましたわ」

シルビア「イレブンちゃん、最後の苗木も見てみましょう」

イレブンは最後の苗木に手をかざした

そこには火山の中でさっきのハンマーで鉱石を打ちつけ、仲間と共に剣を作る勇者達がいた

マルティナ「もしかしてこの光景は、先代の勇者達が勇者の剣を作った時のものかしら」

グレイグ「そうに違いありません、姫様。邪神と戦うためにも、特別な武器が先代の勇者達にも必要だったのでしょう」

ベロニカ「やっぱり勇者の剣は闇を打ち払う力を持つてるのね」

カミュ「今勇者の剣は魔王の手だ。だが、まだ手はある」

イレブン「そうだね、カミュ。僕達で先代の勇者達みたいに勇者の剣を作ろう」

ロウ「最初の鉱石はここと同じ浮島にあったの。神の民の子に聞けば何かわかるかもしれない」

シルビア「ハンマーのあった砂漠の町はサマデー地方ね。王様に聞いてみましょう」

セーニヤ「そうですね、火山がある町はホムラの里ですわね」

マルティナ「それじゃあ、その浮島とサマデー王国とホムラの里に向かえば勇者の剣を作れるかもしれないわ」

神殿内

神の民「あ、兄ちゃん達、何かわかった？」

神の民に何が見えたのか伝えた

神の民「ふーん、なるほどねえ。その鉱石がある場所はきっと天空の古戦場だね。古い話だから詳しくは知らないけど、かつては特殊な金属が取れる場所でそれを巡って大きな戦いがあったんだ。」

行くなら気をつけてね。何百年もの間、神の民も近寄らない場所だからどうなってるかわからないよ」

ベロニカ「なるほどね、それじゃあ行ってみましょう。ありがとう」

天空の古戦場

マルティナ「何かしら、あのもや。ここから先が見えないわ」

ロウ「ここにあるのはどうやら大きいが、燭台のようじゃな」

イレブン「あ、聖なる種火が反応してる」

聖なる種火は自分から中の炎を少し出してその炎を燭台に灯した

シルビア「すごいわ！あのもやが全部晴れたわ！」

イレブン「これで先に進めるね、行こう」

道中

カミュ「かなり道が入り組んでるし、相当深くまであるんだな」

ベロニカ「魔物達の巣になってるみたいだし、迷わないようにしましよう」

セーニヤ「あ！イレブン様。奥の方にキャンプができそうな場所がありますわ。休みたい時はあそこで休みましょう」

天空の古戦場奥地

シルビア「だいぶ奥に来たしこれ以上進めないみたいだけど、この

鉱石が先代の勇者ちゃんが使った鉱石かしら？」

カミュ「!?おいおい、これは！」

シルビア「カミュちゃん？」

カミュは興奮した様子で鉱石を確かめている

カミュ「イレブン、スゲエぞ！こいつは各地に伝わる財宝伝説に登場する古の神の金属オリハルコンだ！」

ロウ「何とっ！オリハルコンじゃと！わしも文献で目にした事はあ
るが、この鉱石がそうじゃと言うのか」

カミュ「ああ、お宝は俺の専門分野だ。まさかこんな所にあるとは
な。これで剣を作ればとんでもないのが作れるぞ」

イレブン「そっか、それが勇者の剣か。取って行こう」

イレブンは伝説のオリハルコンをてにいれた

サマデイー王国

グレイグ「サマデイーに勇者の星が迫っているという噂は、本当
だったのか」

空の上には勇者の星が迫り、その光によりサマデイー全体は赤く染まっていた

グレイグ「大樹が地に落ち、世界が闇に包まれた後突如として落下を始めたそうだ」

そこに黒いヨツチ族の姿が現れる

イレブン「ん？何だろ？あのヨツチ族。初めて見た」

ロウ「どうしたんじゃ？イレブン。ひとまずは王様に話を聞いてみるのがよいじゃろうな」

玉座の間

サマデイー王「フアーリス！危険な真似はよすのだ」

フアーリス「父上、心配いりません。僕がああ星の謎を解き明かし、サマデイーの民を安心させてみせます」

フアーリスは自信満々に城から出て行った

サマデイー王「ん？おお、イレブンか。いつぞやはフアーリスがお世話になった。ああ！そのご尊顔は！」

ロウ「久しぶりだな、サマデイー王よ。ユグノアを忌まわしき災厄が襲った日から16年ぶりになるか」

サマデイー王「ロウ殿！勇者が悪魔の子という噂はデタラメだった事は伝わっております。デルカダール王の嘘を見抜く事ができず、世界崩壊という最悪の事態を招いてしまった事、どうかお許しください」

ロウ「もうよいのじゃ。誰の非があるわけでもない。それよりも今は、あの勇者の星の事じゃ。あれが地上に落ちれば取り返しがつかん。あの星について何かわかっておらんのか？」

サマデイー王「国の学者達に調べさせているのですが、何も……ですが、息子のファアリスがあゝの星を覆う赤い結界に刻まれた文字のような物を見たというのです」

ロウ「勇者の星に結界が？そこに文字のような物か。わしらも見に行ってみよう」

サマデイー王「ロウ様、もしよろしければファアリスの様子を見てきてくれませんか？私は心配で。関所には通すように伝えておきます」

ロウ「ふむ、わかったぞ」

サマデイー王「ありがとうございます」

関所前

フアーリス「ここじゃ文字が見えないだろ！」

学者「しかし、王子。バクラバ砂丘に入るのは危険です」

フアーリス「じゃあここから文字が解読できるのか？」

フアーリスと学者は何やら揉めている

シルビア「フアーリスちゃん、久しぶりね」

フアーリス「あ！イレブンさん、シルビアさん。それに皆さんも」

ベロニカ「王様から事情は聞いたわ。あの星を調べるんだってね、随分とできるようになったじゃない」

フアーリス「いや、王子として仕事をしてるだけさ。皆さんはどうしてここに？」

グレイグ「俺達がここに来た目的はお前と同じ。勇者の星の調査に来たのだ」

フアーリス「あつ、あなたはデルカダールの英雄グレイグ將軍じゃ

ないですか！こんな所でお会いできるとは！」

グレイグ「俺の名を知っているのか？」

フアーリス「もちろんです！あなたは騎士の憧れ！僕はグレイグさんの部隊に入るのを目標にしてこれまで頑張ってきたんです！」

グレイグ「その言葉は嬉しいが、我が隊に入らずとも民を守ろうとするその勇気があればお前は立派な騎士だぞ」

フアーリス「ああ！グレイグ將軍からお褒めの言葉を頂けるなんて感激です」

ロウ「時に王子よ、その様子を見るに勇者の星の調査は苦戦しておるようじゃな」

フアーリス「じいさん、そうなんだよ。学者が怖気付いちゃってさ」

ロウ「それではお主が見つけた古代文字、わしが解読してやろう」

フアーリス「えっ、じいさん、あんたも古代文字が読めるのか！ありがとう！助かるよ。多分バクラバ砂丘の中心にある遺跡からならよく見えると思う。俺は先に行ってるね」

フアーリスは砂丘へと向かって行った

80. 勇者の星、壊れる

バクラバ砂丘 遺跡

ファーリスは遺跡の真ん中で大の字になっていた

シルビア「ちよつと王子ちゃん。何寝てるのよ」

ファーリス「いや、だつてこんな大きな星を真下から見ると機会なんてなくてさ」

黒いヨツチがまたあらわれる

シルビア「肝が座ってるのね。それにしても、この遺跡は何のためにあるのかしら」

ファーリス「さあ。じいさんのじいさんのそのまたじいさんの時代からあるみたいだけど、わからないや」

セーニヤ「作られた時は大切な役割があつたという事でしょうか。古代のロマンを感じますわ」

ロウ「ふむ、確かに文字が書いてあるのう。それじゃあさつそく調査を始めるか」

望遠鏡を出して調べ始める

黒いヨツチ族は遺跡の真ん中で上を見上げている

??? 「ワタシガミエルノカ？」

イレブン 「うん、君は何なの？」

シルビア 「イレブンちゃん、どうしたの？ 独り言なんて珍しいわね」

??? 「スギサリシトキヨ、サアワガモトヘキタレ」

その瞬間、星が動き始めた

グレイグ 「見ろっ！ 星が落ちてくるぞ！ ロウ様！ ここにいては危険です！」

ロウ 「待っつんじや、もう少しであの文字が読めるんじや。ニ…
ズ…ゼ…ル……フア？」

グレイグ 「ロウ様！ もう限界です。早くこちらへ！」

その瞬間、横から星に向かって斬撃が飛んでくる

星の紋章はなくなり、さらにどこからか現れた黒い影が星を大剣で粉々にした

??? 「これで、世界は我のものなり」

粉々になった衝撃であたりを暴風が襲う

全員「うわあああ！」

その後影はどこかにいつてしまった

ロウ「あれは……魔王の剣」

マルティナ「まさか……。でも、どうして？」

グレイグ「あの星は本当に勇者の星だったのか？それにあの剣を
持った魔物は一体」

フアーリス「何言ってるんですか、グレイグさん。あの方はサマ
デーを救ってくれた救世主ですよ。僕は皆に伝えるため帰ります。
それじゃあ何かあったらまた気軽に王宮まできてね」

ロウ「消えてしまったがああ星にはニズゼルフアという文字が刻ま
れていた。ニズゼルフアとは一体」

黒いヨツチ族はそこでショックを受けているようだった

玉座の間

サマデー王「勇者の星がいきなり砕け散ったので心配していまし
たが無事で何よりです。フアーリスから話は聞いてあります。救世

主が現れ救ってくれたと」

ロウ「救世主かどうかはわからぬがまあよい。それよりも聞きたい事があるんじゃないが、星にはニズゼルファという文字が刻まれておつた。なにか聞き覚えはないかの？」

サマデュー王「ニズゼルファ？うーん、わかりませんねえ」

ロウ「空に浮かぶ勇者の星に刻まれたこの言葉。きつと深い意味があるはずなのじゃが、まあ仕方ないのう。

それと漠然として申し訳ないのだが、この国にある巨大なハンマーについて心当たりはないかの？」

サマデュー王「おお、もしや王家に伝わるガイアのハンマーの事かな。ファールリス持ってきてくれ」

ファールリス「いいんですか？父上。これって確か今度のブラック杯の…。」

サマデュー王「黙っておれ、ファールリス。これを使えばどんな金属でも叩けるという。持っていってくれ」

イレブンはガイアのハンマーをてにいれた

ロウ「それじゃあ、最後にホムラの里に向かうかの」

ホムラの里

ペロニカ「それじゃあここを治めてる巫女さんがいる場所に行きましよう。その方なら何か知ってるかもしれないわ」

神社

内部からは怒鳴り声が聞こえてきた

ヤヤク「化け物ごときに尻尾を巻いて逃げてきおつて！このたわけが！くそつ！怪我さえなければ、化け物なぞこの手で成敗してやるのに。一刻も早くあの儀式をやらねば。」

……すまない。客人か、見苦しい所を見せてしまったな。ん？どうやら随分とウデが立つようだ。名を聞いてもよいか？」

イレブン「僕の名前はイレブンといいます」

ヤヤク「イレブンか、少し私の話を聞いてくれぬか？」

この里には火の神を讃えるため、ヒノノギ火山である儀式をする風習がある。里を守るには絶対欠かせぬ儀式なんだ。前にその儀式をするために神官を送ったのだが、その道中に神官が化け物に襲われてな。

化け物は鋭い牙と爪を持っていたらしい。本来なら私が成敗してやる所なのだが、この地に巢食う人喰い火竜を倒した時に怪我をしてな。今では歩くので精一杯だ。旅の者に頼むのは気が引けるが、里の

ために化け物を退治してくれぬか？」

イレブン「はい、僕らで良ければ力になります」

ヤヤク「おお、ありがたい。化け物はヒノノギ火山の西にある道中で出現したらしい。その辺りを調べてみてくれ」

81. 人食い火竜

ヒノノギ火山

??? 「立ち去れ、立ち去れ」

謎の大きな怪物があらわれた

グレイグ 「出たな、化け物め。このグレイグが成敗してくれる！」

??? 「わ、我は火の神の化身なるぞ。そのはらわた八つ裂きにされたくなくば、早々に引き返せ」

シルビア 「里の人を襲う悪い魔物ちゃんはアタシ達がやっつけてあげるわ」

化け物はフラフラし始めた

シルビア 「な、なに？どうしたの？」

??? 「にいちゃん、この人達全然逃げてくれないよ」

??? 「バカっ！喋っちゃダメだろ。怖がつて逃げてくようにちゃんと化け物になりきるんだ」

その後バランスを崩して化け物は倒れる

??? 「バカっ！サキのせいでこの人達に見つかったじゃないか」

??? 「違うもん、テバ兄ちゃんがサキの事支えないからだもん」

倒れた所には小さな子どもが二人いた

シルビア「あら、ビックリ。こわーい化け物がこんなかわいい子達
だったなんて」

グレイグ「お前達は里の者か？どうしてこんな事をしたんだ？」

テバ「だっておいら達、ヤヤク様に儀式をやらせる訳にはいかない
んだよ」

サキ「あのねあのね、儀式を止めないとね、大変な事になるんだよ」

ロウ「何かわけがあるようじやな」

イレブン「僕の名前はイレブン。もしよかったら、僕達に理由を聞
かせてくれる？」

テバ「えっ、兄ちゃん達おいら達の話聞いてくれるの？」

サキ「ねえテバ兄ちゃん。この人達なら協力してくれるかも」

テバ「そうだな、腕っ節も強そうだし心強いや。この先においら達の秘密基地があるんだ。詳しくはそこで話すよ」

秘密基地

お母さん「この方達がさつき話してた方達かい？」

テバ「うん。旅人のイレブンの兄ちゃんさ」

グレイグ「先程、里の儀式をさせないために化け物のフリをしていたと言っていたな。どうしてそんな事をするんだ？」

テバ「……儀式をしないと皆困るのはわかってる。でも、儀式をしたら俺達の母ちゃんが生贄として火山に落とされちゃうんだよ」

セーニヤ「まあ!!」

シルビア「生贄ですって!?儀式ってそんな物騒な物だったの?」

テバ「ある日、ヤヤク様がおいら達を集めて我らは火の神の怒りに触れた。捧げ物をしなくては、火山が噴火し里は火の海になるだろうって」

サキ「初めは大根とかお芋とかあげてたの。でも、急にお日様が出なくなつて食べ物が出たなくなつちやつたの」

グレイグ「太陽が……か。という事は魔王の影響か」

ロウ「魔王誕生の余波がこんな遠くの地にまで」

お母さん「ヤヤク様は里を守るため、火の神様への捧げ物を絶やさぬようにと人間を生贄に捧げると宣言しました。誰が生贄に相応しかヤヤク様が火の神様の神託を受けて私が選ばれました」

テバ「おいら達は母ちゃんを生贄になつてほしくなくてあんな事をしていたんだ」

グレイグ「なるほど、お前達なりに母ちゃんを守っていたのだな」

お母さん「私の死が里のためになるのなら、覚悟はできています。ですが、この子達は……」

テバ「おいら里のためとかよくわからないけど、母ちゃんが死ぬのは嫌だ！こないだの夜、母ちゃんが儀式以外立ち入りを禁じられた火山にヤヤク様が一人で登るのをみたんだって。」

その事をヤヤク様に言ったら、母ちゃんは生贄に選ばれたんだ。まるで見られた事を知られないように。ヒノノギ火山には何か秘密がある。それを暴いて母ちゃんを助けたいんだ。でも、おいら達だけで行くのは無理だから」

イレブン「わかったよ、それならヒノノギ火山の様子を見てこよう」

テバ「本当！この秘密基地の奥にヒノノギ火山に入れる道があるんだ」

ヒノノギ火山裏道

テバ「あれ？ここで終わりか。何だ、何も無いじゃないか」

グラグラ！

ロウ「何じゃ！この地響きは」

グルルル

テバ「兄ちゃん！下から声がするよ」

下を覗くと

火竜「グルルオオオーオン」

下には赤い姿の竜がいた

テバ「あ、あ、あれは!!人食い火竜だ!」

グレイグ「あれが人食い火竜!しかし、ヤヤク様が倒したはずでは」

テバ「ヤヤク様はこれを隠してたんだ。人食い火竜を退治できなかったから、こうやって隠して皆を騙してたんだ。こうしちやいられない。早く皆にこの事を教えなきや。里に戻ろう」

ホムラの里 神社

テバ「皆!大変だ!人食い火竜が生きてたよ!人食い火竜は死んでない!火山の奥で眠っているのをおいら見たんだ」

ヤヤク「貴様まさか、ヒノノギ火山に入ったのか。どうやって」

テバ「あんたは火竜を倒せなかつたんだろ。だから自分だけ助かるために、里のみんなを火竜に売ったんだろ!火の神様が怒ってるなんて嘘だ。生贄に選ばれた人は、人食い火竜の餌になって食べられるんだ!」

ザワザワ

周りはテバの言葉に困惑している

ヤヤク「皆の者!案ずるな!人食い火竜は、我が息子ハリマが刺し違えても殺した。貴様がしている事は火の神への冒瀆!隠している母の居場所を言え!そうすれば私が火の神の怒りを鎮めてみせよう

！」

テバ「嫌だ！誰がお前なんかに渡すもんか！」

その時

グオオオオ！！

人食い火竜が出たぞー！

外からは大きな声が聞こえてきた

全員「！！」

ヤヤク「くっ…」

村の男「打てえ！打てえ！」

グルルウ

村の男達はボウガンを火竜へと撃っている

村の男「よし、効いてるぞ！もう一回」

しかし、ヤヤクが火竜の前にでて庇う

ヤヤク「やめてくれえ！どうかこの火竜を殺してくれるな！」

村の男「ヤヤク様！」

ヤヤク「わかっているわ、お腹が空いているのね。さあ、この私を。
だから里の人達は」

ヤヤクは火竜の前に出て優しく触っている

しかし

バクン！

村の女「キヤアアアー！ヤヤク様が人食い火竜に食べられた！」

テバ「兄ちゃん！この里を守るために、あの人食い火竜を倒して！」

人食い火竜があらわれた

シルビア「マルティナちゃん！バイキルト！」

マルティナの攻撃力が二段階上がった

イレブン「全身全霊斬り！」

マルティナ「氷結らんげき！」

人食い火竜の通常攻撃！

人食い火竜は火球を連続で吐き出した！

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

マルティナ「氷結らんげき！」

イレブン「全身全霊斬り！」

人食い火竜は火山に飛び去っていった

里の辺りは少し焼け、家も壊されていた

シルビア「ヤヤクちゃん、どうして火竜をあんなに必死に庇ったのかしら」

村の人達「もうこの里はおしまいだ。ハリマ様だけでなく、ヤヤク様までいなくなってしまうとは……」

テバ「知りたくないよ、あんな裏切り者のやつなんて。でも人食い火竜は倒さないと。ヤヤク様の部屋に火山に入れる鍵があるはずだよ」

82. 母は強し

ヤヤクの部屋

部屋の中ではヤヤクの母がいた

ヤヤクの母「ううう、火の神よ。なぜあなた様はヤヤク様に、このような試練をお与えに？」

テバ「…… おいら達火竜を倒しにヒノノギ火山に行きたいんだ。山門の鍵を渡してくれないかな？」

ヤヤクの母「ヤヤク様が亡くなった今、あなた方に頼むほかありません。どうぞ」

イレブンは山門の鍵を手に入れた

ヤヤクの母「火竜を倒す前にどうか、これをお読みになって真実を知ってください。これはヤヤク様の日記です」

ヤヤクの母は日記をイレブんに渡した

ヤヤクの日記

時折、無性に大声で叫びたくなる。己の罪を決して忘れぬよう、この手記に真実を記しておこう。激闘の末、私とハリマは人食い火竜を倒した。ハリマの一太刀がとどめとなったのだ。

だがその刹那、火竜は黒い瘴気を吹き上げ、ハリマはそれを浴びて

しまった。倒れたハリマを連れ、私は急いで里に帰りあの子を看病したが、あの瘴気は火竜の呪いだっただ。ハリマの姿はだんだんと火竜に近づき、とうとう里では隠しきれなくなった。

里の者に知れたら殺されてしまう。私はハリマを火竜との戦いで死んだ事にして火山に隠す事にした。私はハリマを元の姿に戻す方法を死に物狂いで探した。そして私は見つけた。真実の姿を写すというやたの鏡。これでハリマも元に戻るはず。

しかし、いくら火竜を写しても鏡は反応せず。鏡の使い方がわかるまで、私は肌身離さず鏡を持っていることにした。だが、時は待つてはくれぬ。ハリマが人の血肉を欲するようになり、里から生贄を出すしかなかった。

生贄を出す事を悩み苦しんだが、私はどうしてもかわいい息子ハリマを見殺しにする事などできぬのだ。やたの鏡の使い方さえ分かれば、ハリマを救う事ができる。

ハリマを生かすためならば、この修羅の道歩いてみせよう。例えどんな罰を受けたとしても

ロウ「母親というのは、子どものために自ら辛い道を選んでしまうのじゃ。ヤヤク殿も葛藤し苦しんだ事じゃろう。やたの鏡さえあれば、わしらの手で呪いを解けたかも知れぬが…」

テバ「…： 鏡はもうヤヤク様と一緒に火竜のお腹の中…： 呪いを解く事はもう…：」

ヤヤクの母「全てを投げうち救おうとした母親を食べるなど、もは

やあれはハリマ様ではありませぬ。自らの欲望のままに人を喰らう悪竜でございます。どうかあの火竜を討伐してください」

テバ「兄ちゃん！行こう！おいら先に山門で待ってるから」

山門

テバ「兄ちゃん、早速来てくれたね。おいらも行ってもいい？おいらが行っても足手まといなのはわかってるけど、おいらどうしてもヤク様達の結末を見届けたいんだ。お願い！兄ちゃん！」

イレブン「わかった。ただ、すごく危険だから絶対に僕らにくっついてるんだよ」

ヒノノギ火山奥地

そこにはあの火竜が横になっている

テバ「あの人食い火竜がハリマ様だなんて、今でも信じられないよ。ハリマ様は凄く優しい方だったんだ。おいらにも剣を教えてくださいたいんだよ。」

ハリマ様はいつも言っていた。里を守るためにはどんな困難にも立ち向かわなくちゃならないんだって。

兄ちゃん、頼むよ。人食い火竜を、ハリマ様を苦しみから解放してあげて！」

人食い火竜があらわれた

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

火竜のガードクラッシュ！

イレブン「くっっ！」イレブンの守備力が2段階下がった

火竜の通常攻撃

火竜の通常攻撃

イレブン「全身全霊斬り！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

グレイグ「鉄甲斬！」火竜の守備力が2段階下がった

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力がさらに一段階上がった

火竜のガードクラッシュ

シルビア「キャッ！」シルビアの防御力が二段階下がった

火竜はおぞましいおたけびをあげた

仲間達は全員平気だった

火竜の通常攻撃

イレブン 「全身全霊斬り！」

シルビア 「グレイグ！バイキルト！」

グレイグの攻撃力が二段階上がった

グレイグ 「蒼天魔斬！」

マルティナ 「氷結らんげき！」

火竜のガードクラッシュ

グレイグ 「くっ！」グレイグの守備力が2段階下がった

火竜は火球を連続で吐き出した

火竜の通常攻撃

イレブン 「全身全霊斬り！」

火竜は倒れた

テバ 「ハリマ様！」

シルビア 「何だか様子がおかしいわ」

火竜のお腹から模様が浮かび上がる

??? 「これで終わりだ、悪しき火竜よ。やたの鏡の力の前に、滅するのだ」

火竜の姿は消え、そこには青年が立っていた

テバ 「ハリマ…様」

ハリマ 「ようやく元の姿に戻る事ができた。そなた達のおかげだ。礼を言う。火竜の呪いの力は強く、やたの鏡で外側から照らしてもその光は届かなかった。

だが、そなた達が火竜を弱らせてくれたおかげで、体内にあったやたの鏡の力が発揮されたのだ。しかしなにゆえ、火竜の体の中にやたの鏡があつたのか…。」

テバ 「あつ…。」

シルビア 「ダメよ、テバちゃん」

ハリマの体からは光が出ている

ハリマ 「長く火竜になりすぎていたらしい。私の寿命はもう尽きるだろう。最後に頼みを一つ聞いてくれ。私の母ヤヤクに伝えてくれ。これで、里は救われたと。そして、いつまでも幸せにと」

ハリマは光となって消えていった

落ちていたやたの鏡をテバが拾う

テバ「…… おいら、ここで火竜を見つけた時、皆を騙してたヤヤク様を絶対に許さないって思ってたんだ。でも、おいらが母ちゃんを生贄にしたくなかったみたいに、ヤヤク様も家族を守りたかったんだよね。

ヤヤク様とおいら、同じだね。悪い事したところも、家族が大好きなところも。ううっ……。ぐす。里に帰ろう。兄ちゃん。皆に報告しなくちやな。火竜はもう出ないから安心してってさ」

テバは涙を零しながら戻っていく

ホムラの里

男「人食い火竜を倒してくれたか！よかった。もう火竜に襲われることはないんだな」

女「許してちょうだい。里のためとはいえ、あなたを生贄にするなんて」

お母さん「私は誰も恨んだりしない。もう一度この子達を抱けるんだもの。それだけで私は幸せよ」

お爺さん「ヤヤク様は生贄といって、わしらを火竜の餌にするつもりじゃった。わしらは騙されたんじゃ。信じていた長に裏切られ、この里はどうなってしまっくんじゃ」

大人達は顔を暗くする

サキ「おかしいの。みんな大人なのに、どうし自分の事自分で考えられないの？」

テバ「人食い火竜を退治できたのはここにいる兄ちゃん達と……やっぱりヤク様のおかげだよ。ヤク様のした事は許されないけど、もしヤク様がいなかったら、この里はとっくに火竜に滅ぼされてるよ。」

きつとヤク様は心の中で、ずっとずーっとおいら達に悪いと苦しみながら、心を鬼にして生贄を出したんだよ。

おいら達を縛るものはもう何もないんだ。英雄も神様も助けられないけど、これからはおいら達で頑張っで行こう。

ヤク様とハリマ様の秘密は、皆には言わない事にするよ。二人はずっとこの里の英雄さ。すぐには無理かもしれないけど、これからは自分達の力で里を守るよ。だって、おいらの大好きな里だからな！」

83. 勇者の剣完成

イレブン「そういえば鍛冶場について聞かないとだね」

ベロニカ「ヤヤク様のお母さんなら、何か知ってるんじゃないかしら？」

神社

イレブン「すみません、ヒノノギ火山の中にある鍛冶場について何か知りませんか？」

ヤヤクの母「おお、その話なら私が生どもの頃聞いた事があります。火山の頂に聖なる種火を投げ入れし時、はるか古より伝わる大いなる鍛冶場が蘇るだろう。」

その伝承を守るためにヒノノギ火山は長い間、禁足地として封じられておりました。ですが、あなた方なら大丈夫でしょう。これをお渡しします」

イレブンは禁足地の鍵をてにいれた

禁足地

聖なる種火が火山に反応している

種火は中から出てきて溶岩の中に入っていた

グラグラグラ!

マルティナ「一体何！」

マグマの中から鍛冶場が現れた

シルビア「すごい！マグマの中から鍛冶場が出てくるなんて！ここがきつと先代の勇者ちゃん達が剣を打っていた場所ね」

カミュ「よし、イレブン、やろうぜ！魔王のやつをぶっ倒すためここで新たな勇者の剣を作るんだ」

カーン！カーン！カーン！

鉱石を打つイレブン。

形は出来上がってきていた

イレブン「ふう……」

カミュ「イレブン。次は俺の番だぜ」

シルビア「あら、カミュちゃん。抜け駆けはなしよ。ねえ、イレブンちゃん。アタシ達にも手伝わせてほしいの」

ロウ「先代の勇者も仲間達と力を合わせて剣を作っておったようじゃ。わしらも負けてはおれん」

マルティナ「そう、これはあなただけの戦いではないわ。私達みんなの戦い」

ベロニカ「私達は、イレブンと一緒に戦うの」

グレイグ「新たなる勇者の剣、我らの思いもその刀身に込めさせてくれ」

セーニャ「イレブン様、どうか私達の間をお使いください」

イレブン「皆、そうだね。ありがとう！」

カミュ「イレブン。お前のおかげで俺は贖罪を果たし、マヤを救う事ができた。今度は俺が、お前の力になる番だ！」ガアン！

カミュはその誓いの通りに力強く剣を叩く

シルビア「イレブンちゃん！あなたに見せてあげる。世界を救い、皆を笑顔にするシルビア、一世代のエンターテイメントを！」ガアン！

シルビアはハンマーを回しながらしつかりと剣を叩く

ロウ「エレノアよ、アーウィンよ。どうか見守っていてくれ。お主らの子に勝利と幸福があらんことを！」ガアン！

ロウは祈るようにそれでも力強く剣を叩く

ベロニカ、セーニヤ「イレブン／＼（様）、二人は、いえ、私達全員はあなたと共にどこまでもついていきます。私達姉妹の力もどうか、勝利のためにお使いください！」ガアン！

ベロニカとセーニヤはハンマーを二人で支えながら協力して剣を叩く

グレイグ「イレブンよ。俺は騎士として誓う！たとえいかなる敵が相手だろうと、最後まで希望を守り続ける盾であり続ける事を！」ガアン！

グレイグはハンマーを掲げ、宣言してから思いっきり剣を叩く

マルティナ「…… ラース。私は、皆と共にどんなにつらくても戦い続ける。希望は、あなたの残してくれた光達は、絶対に負けない！」ガアン！

マルティナは目を瞑り、ラースとの思い出を呼び覚ましながら剣を叩く

イレブン「皆、ありがとう。もう仕上げだね。皆の想い、絶対にこの剣に入ったよ。僕が、この最高の一本を完成させてみせる！」

カーン！カーン！

イレブン「これで完成だよ！」

イレブンが手に持ち天に捧げると、勇者の紋章が光り雷が落ちてき

た。その雷により、剣は光り輝く。

その光はまるで、闇を打ち払う希望の光。

イレブンは勇者の剣をてにいれた

マルティナ「共に戦う仲間と神の乗り物。そして、勇者の剣。魔王と戦う準備は揃ったわね」

カミュ「さあ、イレブン！行こうぜ、天空魔城へ！魔王のやつを倒すんだ！」

84. 天空魔城

天空魔城上空

イレブン「これで城を覆ってる結界を剥がせるね。切ってみるよ」

イレブンが剣を掲げると、紋章と剣が光り始めた

イレブン「ハアツ！」

イレブンの放った斬撃が結界を消し去った

ベロニカ「いよいよね、イレブン。行きましょう」

天空魔城入り口

グレイグ「イレブン！危ない！」

イレブンのいた場所には剣が落ちてきた

カリンガ「我が剣をかわしたか。流石は数々の軍王達をほふつただけはある。我が名は邪竜軍王カリンガ。魔王ウルノーガ様の居城の番人である。」

勇者よ、非力な人の身でありながら我ら魔王軍の攻撃を掻い潜りここまでたどり着いた事は褒めてやる。だが、魔王様が手を下すまでもない。私が貴様らを血祭りにあげてやる」

邪竜軍王カリンガがあらわれた

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ロウ「ヘナトスじゃ！」カリンガの攻撃力が下がった

グレイグ「スクルト！」仲間達の守備力が上がった

カリンガ「魔人の絶技！」

カリンガのランダム四回攻撃！

カリンガ「はあっ！」通常攻撃

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力がさらに一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ロウ「ヘナトスじゃ！」カリンガの攻撃がさらに下がった

グレイグ「鉄甲斬！」カリンガの守備力が二段階下がった

カリンガ「はやぶさ斬り！」

カリンガ「マヒャド！」

マルティナ「ばくれつきゃく！」

イレブン「つるぎの舞！」会心のつるぎの舞！

ロウ「ベホマラーじゃ」

全員が回復した

グレイグ「蒼天魔斬！」

カリंगा「グアア！何て事だ……。このカリंगा様が、人間如きに敗れるとは。これが勇者の力だというのか。だが、お前達がいくら足掻いても世界は魔王様のもの。過ぎ去りし時はもう戻らぬ」ジユワー コトン

イレブンはブルーオーブを取り戻した

イレブン「これで残りはシルバーオーブだけになった。やはりあいつが……」

グレイグ「ホメロスが持っているという事か。待っている、ホメロス。お前との因縁、ここで終わらせてやる」

マルティナ「シルバーオーブは、よりもよってホメロスに渡っていたのね。ラーズは村を滅ぼした張本人に、村の宝をいのように使われて絶対に怒ってるはずだわ。ラーズのためにも負けられないわね」

天空魔城

カミュ「中は随分複雑な構造をしてるな。罠もある事だろう。気を付けていくぞ」

セーニヤ「強そうな魔物も至る所にいます。あまり無茶はなさらないでくださいね。無理そうでしたら入り口に女神像がありますので、そこで回復していきましよう」

天空魔城4階

うう……くそっ……

どこからか声が聞こえてくる

マルティナ「この声は、まさかラース？」

真ん中にはラースがいる

ラース「……マルティナ。それに皆も。皆、遅いじゃないか。ずっと待ってたんだぞ。」

ラースはイレブンに詰め寄っていく

ラース「なあ、イレブン。一つお願いを聞いてくれ」

ラースはイレブンの胸倉を掴む

ラース「今すぐに死んでくれないか？」

俺はお前を守ったせいで死んだだろ？イレブンだけが生きてたら不公平じゃないか。

だから死ねよ！自らの死をもって償え！やりたい事たくさんあったのに、お前のせいでこうなったんだから！グハアツ！」

ラーズは突然吹っ飛んでいく

マルティナ「ふざけるんじゃないわよ！！私の愛する人は、こんな事を思っただけで死んでない！死んでからも、後悔なんて全くしてなかった！！私達にはわかるわ！お前はラーズじゃない！！ラーズの姿をしてい たって無駄よ！」

♪

ラーズ「う、ううっ！」

セーニヤが豎琴で清らかな音を奏でる

セーニヤ「消え失せなさい、悪しき幻影よ。マルティナ様とラーズ様の事を馬鹿にするのは許せません」

ラーズ「グオオオオ！」 ジュワー

グレイグ「こんな胸糞悪いものを見せるのは一人しかいない。姿を見せろ！ホメロス！」

奥からはホメロスが歩いてきた

ホメロス「大好きな恋人を想う気持ち。愛というやつだな。くだらない。実にくだらない。グレイグ、まだ生き延びていたのか。相変わらず執念だけは立派だな。そのしぶとさ、尊敬に値するよ。」

この先はウルノーガ様のいらっしやる領域でね。虫けらどもにしては頑張ったが、この私が全員葬り去ってやろう。ハアアア！」

ホメロスの姿は変わり、翼と角がはえる

ホメロス「どうだ、この身体、この魔力。グレイグ、私はお前を超える力を手に入れたのだ」

グレイグ「もうお前は、魔物になってしまったのか」

ホメロス「さあ、覚悟するといい」

魔軍司令ホメロスがあらわれた

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

ホメロス「裁きの冥槍！」

雷を纏った槍が仲間達に突き刺さる

ホメロス「さあ、惑え！」マルティナにはきかなかつた

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「雷鳴の旋律です！」

仲間達の雷耐性が上がった

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力がさらに一段階上がった

シルビア「ハッスルダンスよー、そろれ！」

全員が回復した

ホメロス「闇の炎よ！」暗く輝く闇の炎をはいた

ホメロス「はあっ！」通常攻撃

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

マルティナ「ばくれつきやく！」

シルビア「ピオリム！」

全員の素早さが一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ホメロス「はあっ！」通常攻撃

ホメロス「ハアアア！」ゾーンにはいった。ちからがあがった

ホメロス「はあっ！」通常攻撃

セーニヤ「スクルト！」

仲間達の守備力が一段階上がった

マルティナ「ハアアア！」ゾーンにはいった。ちから
すばやさ
魅力があがった

マルティナ「ぼくれつきやく！」

シルビア「ハッスルダンスよー、そくれ！」

全員が回復した

イレブン「つるぎの舞！」

ホメロス「闇の炎よ！」

ホメロス「さあ、惑え！」

イレブン「あれ？」イレブンは幻惑になった

セーニヤ「ベホマラー！」

全員が回復した

マルティナ「ばくれつきやく！」

シルビア「イレブンちゃん！なんでやねん！」つつこみ！

シルビアのつつこみでイレブンの幻惑が治った

イレブン「はっ！ありがとう、シルビア。つるぎの舞！」

ホメロス「はあっ！」通常攻撃

ホメロス「雷よ！」胸のシルバーオーブが輝く！

シルバーオーブの力を解き放った

シルバースパーク！

巨大な雷が仲間達全体を包み込む！

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

マルティナ「ばくれつきやく！」

ホメロス「バ、バカな！俺は六軍王を束ねる魔軍司令。この俺が、貴様らに敗れるというのか。

グレイグ、お前はまたそうやって俺の先を歩くのか。お前が称賛を浴び、光り輝くほど、俺は影になっていった。俺はただ、お前のようになりたかっただけなんだ」ジュワー コトン

イレブンはシルバーオーブを取り戻した

グレイグ「……」

グレイグは黙って先へ歩いていく

ベロニカ「グレイグさん……」

ワープ地点

セーニャ「あの奥からとてつもなく邪悪な気が。おそらくあの先に」

グレイグ「ウルノーガ。決着をつける時が来たようだ。行こう、イレブン」

その時、後ろから闇の鎖が飛んできた

仲間達「グッ！」

イレブン以外全員が鎖に繋がれた

イレブン「皆!!何なの!?!」

カミュ「何だ、これ。力が入らねえ」

ホメロス「まんまと引つかかったようだな。ホメロスがあれ如きで

終わると思うたか。ククク！やはりこうなるのだよ、グレイグ！貴様は俺には敵わない。

イレブンよ。魔王様の元へ行きたくば一人で行くといい。その代わりこいつらの命はもらっていく」

グレイグ「一人ではない。俺は勇者の盾！剣たる主を一人にはさせん！」

マルティナ「侮るな、ホメロス。最早私達はこんなものじゃ止まらないわ！」

ロウ「もうお主の騙し討ちは効かんわい！お主らを倒してウルノーガの元へいく。そして、16年前の借りを返すんじゃない！」

シルビア「アタシ決めたんだから！イレブンちゃんと魔王を倒すって！世界中の笑顔を取り戻してみせるって！」

ベロニカ「絶対にあんたなんかの思い通りにはさせないわ！私達は一緒にいくのよ！」

セーニヤ「最後まで勇者様を、イレブン様をお守りすると私は決めたんです！」

カミュ「一人なんかにはさせねえぞ、イレブン！俺にも見させてくれよ！魔王を倒す、勇者の奇跡を！」

全員「ハアアアア！」

仲間達からは力が溢れ出し、鎖は千切られた！

ホメロス「バカな！俺は……まだやれる、ウルノーガ様……今一度お力を」

グレイグ「ホメロス、もう終わりにしよう」

ホメロス「いやだ、俺は……お前を超えるまで」

グレイグ「ホメロス、お前は俺になりたかったと言ったな。だが俺は、王に拾われて以来、お前の背中を追い続けてきた。

お前こそが……俺の光だったんだ。今の俺があるのはお前のおかげだ。

ホメロス、なぜそれがわからぬ」

グレイグはホメロスに手を差し出す

ホメロス「グ、グレイグ……」ジュワー

ホメロスも手を伸ばすが、掴む前に消えてしまう

ホメロスのいた場所には、あの時王から貰った誓いのペンダントが残った

グレイグ「……………」ペンダントを握りしめる

ベロニカ「グレイグさんは、ホメロスの背中を追ってここまで来たのに、ホメロスにはそれが、とても眩しく見えてしまっていたのね」

カミュ「眩しい光を浴びて、出来上がった黒い影をウルノーガにつけ込まれた……………」

グレイグ「行こう。全てを狂わせた元凶ウルノーガのもとへ」

85. 魔王との決戦

魔王の神殿

玉座にはウルノーガが待ち構えていた

ウルノーガ「来たか、勇者の名を継ぎしものよ。万物を創りし命の大樹は死んだ。今や、我こそがこのロトゼタシアの王。生命の根源、大樹の魂を得た我にとって、貴様など吹けば散る一葉に等しい。」

その目、かつての勇者達を思わせる。気に入らん。愛、夢、希望。くだらぬ幻想にしがみつき、しぶとくもがき続ける人間どもめ。この全世界の王たる我が、貴様らの骸に刻み込んでやろう。永遠に消えることのない絶望をな！」

魔王ウルノーガがあらわれた

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ウルノーガ「シルバースパーク！青の衝撃！」雷が仲間達を包み、仲間達にかかっているよい効果が消えた

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ウルノーガ「パープルシャドウ！」ウルノーガの影ができた

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃！

影を倒した

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力がさらに一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ウルノーガ「ダークブレイク！ギガマホトラ！」

仲間達のMPが吸収される

シルビア「ハッスルダンスよー、そくれ！」

全員が回復した

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

マルティナ「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

ウルノーガ「アルテマソード！」

シルビア「ハッスルダンスよー、そくれ！」

全員が回復した

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃！

マルティナ「ばくれつきやく！」

ウルノーガ「我に膝をつかせるとは……。流石は勇者の名を継ぐ者よ。だが、我は万物の頂点なり。剣に宿りし力を持って、全てを滅ぼさん！」

剣の力を吸い取り、ウルノーガの姿は変わり二匹の竜になった

ウルノーガ「忌まわしき大樹の子らよ。貴様らの命を我が身に委ね永遠なる闇へと落ちるがいい」

邪竜ウルナーガと魔王ウルノーガがあらわれた

邪竜ウルナーガが前におどりでた

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ウルナーガとウルノーガは不適に笑っている

ウルナーガ「メラゾーマ！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃！

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力がさらに一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ウルナーガ「いてつくはどう！」

仲間達のよい効果は消え去った

ウルナーガは下がり、魔王ウルノーガが前におどりでた

ウルナーガとウルノーガは不適に笑っている

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

イレブン「ベホイム！」

イレブンは回復した

ウルナーガ「メラゾーマ！」

ウルナーガ「イオナズン！」

シルビア「ハッスルダンスよー、そくれ！」

全員が回復した

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃！

マルティナ「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

ウルナーガ「いてつくはどう！」

仲間のよい効果は消え去った

ウルナーガも前におどりでた

イレブン「マルティナ、ロウおじいちゃんに交代して！」

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

マルティナ「わかったわ、ロウ様、お願いします」

ロウ「うむ、まかせるんじや」

ウルナーガはシルビアに食らいついた

シルビア「キャアア！」

ウルナーガ「ドルモア！」

ウルナーガはシルビアをはきだした

シルビアに猛毒のこうか

シルビア「いったーい、やってくれたわね」

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃！

イレブン「大剣に持ち替えて、全身全霊斬り！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員が回復した

ウルノーガの不気味な閃光！

全員の呪文耐性がかなり下がった

ウルノーガ「イオナズン！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

イレブン「全身全霊斬り！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員が回復した

ウルノーガは深く集中した

ウルノーガとウルナーガはゾーンにはいった。ちからがあがった

シルビア「ほとばしるゝアモゝレ！」

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃！

ウルナーガを倒した

イレブン「全身全霊斬り！」

ウルノーガを倒した

ウルノーガ「グウウ、我はウルノーガ。万物の頂点。我が覇道が潰えるなどあつてはならぬ事。グアアアア!!」ジュワー

ウルノーガは消え去った

マルティナ「……………やったのね」

どこからともなく不思議な声が聞こえる

よくぞウルノーガを倒してくれました。これでロトゼタシアは息を吹き返し、再び命で満ちていくでしょう

グラグラグラ!

ベロニカ「みんな、ここはもう待たないわよ。早く逃げましょう」

崩れゆく城の中、イレブン達は近くに来てくれたケトスに飛び乗った

マルティナ「ついに魔王を倒したわ」

セーニャ「けれど、多くの命が失われてしまいました」

シルビア「あの光は？」

天空魔城は崩れ光になっていき、その光は命の大樹に集まっていく

ベロニカ「見て、命の大樹が！」

命の大樹は蘇り、周りには木々や花々、川が辺りにどンドン蘇っていく

ロウ「ウルノーガが取り込んでいた大樹の魂が戻り、命の大樹が息を吹き返したんじゃない」

マルティナ「ねえ、皆。ガラツシユの村に行きましょう。誰よりも最初にラースに報告しなきゃ」

イレブン「もちろんだよ、マルティナ。もうガラツシユの村に向かっただよ」

カミュ「俺達は勝ったんだぞって自慢してやろうぜ！」

ガラツシユの村奥地

村のお墓の前に皆で集まっている

墓の名前の中には、ラーズの名前も刻まれている

イレブン「ラーズ、ただいま。僕達、ついに勝ったよ。世界に光を取り戻したよ」

カミュ「ラーズ、見てるか？俺達が救った世界だ。お前のおかげで、俺達はここまでやる事ができたんだぜ」

ベロニカ「ラーズ、あんたはよくふざけて私の事子ども扱いしてたけど、もうこれで子ども扱いなんてできないでしょ」

セーニャ「ラーズ様、命の大樹も蘇りました。あなた様のおかげで、私も少し自信を持てるようになりました」

シルビア「アタシ達やったわよ、ラーズちゃん。騎士に二言はないんだから。どうか、いつまでもあの時の笑顔でいてね」

ロウ「ラーズ、お主からもらった恩も少しは返せたんじゃないだろうか。村の皆ともまた出会えておるといいのう」

グレイグ「ラーズ、俺は皆を守る盾であり続けたぞ。この世界を救ったのは俺達だけじゃない。お前も、この世界を救うのに大きな力を貸してくれた。どうかゆつくり休んでくれ」

マルティナ「ラーズ、ただいま。もしかして、隣にいたかしら？私、あなたの幻影が出た時も、魔王と戦う時も、私はあなたが隣にいる気がしてたわ。」

もし見守ってくれてたなら、ありがとう。どう？私、少しは強くなれたんじゃないかしら？私はあなたのくれた指輪もあるし、皆もいる。もう寂しくはないわ。あなたの似合うといってくれた笑顔で、これからを過ごしていくわ」

ブワツ！

後ろから、皆へ暖かい風が心地よく吹いてきた

マルティナ「あら？もしかして、ラーズからのお礼かしら？」

イレブン「そうかもね、お疲れ様って事かな？」

シルビア「ウフフ、そうだとっても素敵よね」

セーニヤ「きつとそうですわ。ラーズ様ありがとうございます」

イレブン「それじゃあ、他の所にも報告に行かないとだね」

ロウ「そうじゃのう、これから少し世界を回ることになるのう」

カミュ「色々歓迎されるんだろうな、あんま好きじゃないんだが」

ベロニカ「あら、いいじゃない。別に。まずはラムダに行つて長老様に報告しましょう」

イレブン「わかった。どうせならケトスで行こうか」

グレイグ「たしかに、他の皆にもそれなら少しは伝えられるな」

マルティナ「それじゃあ、ラーズ。また今度くるわね」

86. 平和になった世界で

オリジナル展開です。飛ばしてもらって構いません。

その後、勇者達一行は世界各地を回り、魔王は倒され世界は平和になった事を報告した。あちこちで宴が開かれ、勇者達は必ず主役としてもてなされた。仲間達は数ヶ月後にまた会う事を約束し、各地で別れていった。

最後の砦

パチパチパチ

待っていたかのように全員がイレブン達を出迎えた

イレブン「やっぱりここでもそうだよね」

マルティナ「これで何回連続かしらね？もう数え切れないわ」

デルカダール王「勇者イレブンよ、よくぞ魔王を倒し、世界を救ってくれた。本当にありがとう。王として、この世界に生きる一人の間人としてお主に感謝する。」

そして、我が娘マルティナよ。よく生きていてくれた。こっちにきてよく顔を見せてくれ」

マルティナ「お父様。私、頑張りました」

デルカダール王「ああ、マルティナ。よかった、本当によく頑張った」

デルカダール王はマルティナを抱きしめる

ペルラ「イレブン！私はあんたなら絶対にできると思ってたよ。よく無事で帰ってきてくれた」

ペルラも人混みの中からかき分けて出てきた

イレブン「母さん。うん、ただいま。もう世界は平和になったよ、心配しないでね」

ペルラ「ああ、イレブン。おまえのじいさんも喜んで、きつと今頃私みたいに泣いてるよ。おまえの大好きなシチューたっぷり作ってあるからね。たんとお食べ」

ペルラは涙を拭っている

デルカダール王「グレイグ、お主もよく無事でいてくれた。そして、勇者を守る盾であった。お主はこの国の、いや、この世界に誇れる最高の騎士だ」

グレイグ「王よ、私は、私は、ううっ」

グレイグはデルカダール王の言葉に涙している

デルカダール王「さあ、皆の者。宴だ！世界は平和になった！騒ぐ

のだ。わしも久しぶりに宴に参加するかのう」

マルティナ「お父様、私も一緒に行きますわ」

デルカダール王「そうだ、忘れるところだった。イレブン達に聞きたいことがあるんじゃないや。すぐに終わるからこの後、わしのテントまで来てくれ」

イレブン「何だろうね？」

マルティナ「まあ、わからないけど行ってみましょう」

王のテント

デルカダール王「おお、来てくれたか。お主らは、ラーズという茶髪の男を知っておるか？」

3人「!？」

マルティナ「お父様、どうしてその名前を！」

デルカダール王「わしにもよくわからないのだが、2週間ほど前にわしの夢の中に出てきたんじゃないや。そして、自分の事をラーズと名乗り、マルティナを悲しませたと言って謝罪してきてな。」

それで詳しい事はイレブン達に聞けばわかると言い消えていったのだ」

イレブン「2週間くらい前といえば、たしか」

グレイグ「俺達がガラツシユの村でラーズに誓ったあの日と同じだ」

マルティナ「お父様、ラーズは私達の旅の一員でした。そして、私はラーズと付き合っていたんです」

デルカダール王「何!?!マルティナと付き合っていただど!?!」

デルカダール王は驚いている

グレイグ「王よ、落ち着いてください」

マルティナ「でも、大樹が落ちた日、私達はお父様と一緒にあの大樹の中心にいました。本来なら、爆発に巻き込まれて全員死んでしまっていたのです。」

そこをラーズが命を犠牲にして、自分以外の全員を助け出したのです。おそらく私を悲しませたというのは、それを知った私が絶望に落ちていきそうだったからだと思います」

デルカダール王「…… という事は、イレブン達やわしが今ここに
生きているのは、その男のおかげなのか」

グレイグ「…… そういう事になります」

デルカダール王「マルティナよ、お主もさぞかしつらい思いをした
だろう。その男には感謝してもしきれないな。こうして、愛する娘と
抱き合えるのもその男のおかげなのだからな」

イレブン「よかったら王様も今度ラースの墓にいきましょう」

グレイグ「おい、イレブン。王は簡単に外には」

デルカダール王「いや、そこまでしてくれた男の墓に出向かない訳
にはいかん。わしもそこまで連れて行ってくれ」

グレイグ「王よ、いいのですか？この村の事などは？」

デルカダール王「なに、民達はいつもよく働いてくれている。一日
休みも必要じゃろう」

マルティナ「それじゃあいつにしましょうか」

イレブン「3週間後ぐらいでどうかな？世界も落ち着いてくると思うんだ」

デルカダール王「ふむ、了解した。それではその日を一日休みにして、村の者や兵士達にも休んでもらおう」

3週間後

デルカダール王「それでは行くでしょう」

マルティナ「お父様と一緒にどこかに行けるなんて16年ぶりね」

グレイグ「それじゃあイレブン、ガラツシユの村まで頼んだぞ」

イレブン「うん、ルーラ！」

ガラツシユの村

マルティナ「着きましたよ、お父様。ここがラーズの故郷、ガラツシユの村だった場所です」

デルカダール王「随分と酷い状態だな、滅んでしまっているのか」

グレイグ「……これは、魔物に魂を売ったホメロスとその魔物達
が、村の民達諸共滅ぼしました。ラーズの目の前で」

デルカダール王「……ホメロスの話はグレイグに聞いたが、そう
か。あの子はこんな事まで。わしはあの子の心に気づく事ができな
かった。この村の者にもラーズにも申し訳ない事をした」

ベロニカ「イレブン、先に来てたのね」

セーニヤ「あら？デルカダール王様？どうしてこちらに？」

入り口からはベロニカとセーニヤもやってきた

デルカダール王「君達はたしか、イレブン達の仲間の……」

ベロニカ「ベロニカよ、よろしくね、王様」

セーニヤ「妹のセーニヤといます」

グレイグ「王はここに我々と一緒に墓参りに来たのだ。何やらラー
スが王の夢に出てきたようでラーズの事を知っていたのだ」

マルティナ「ベロニカ達はどうしてここに？」

ベロニカ「あれ？イレブンから何も聞いてないの？」

セーニヤ「私達はここであの安らぎの唄を演奏しようときたんです」

イレブン「ごめんね、どうせなら予定合わせちゃったほうがいいかなって思ってたさ」

マルティナ「そういえば、大樹に登る前に約束してたわね。いいわね、私もまたあの曲を聴きたいわ」

イレブン「僕がラムダに行っちゃよくちよく一緒に練習してたんだよ」

ベロニカ「でもイレブン！王様がいるなら言いなさいよ！間違えちやったら恥ずかしいじゃない」

イレブン「まあまあ、そこはごめん。忘れてたの。それよりほら、お墓に行こう」

ガラツシユの村奥地

デルカダール王「ここが彼の墓、そして村の者達の墓か。私の息子同然のホメロスがこんな事をしてすまなかった。そして、ラーズよ。

わしの娘マルティナに息子同然のグレイグ、そして勇者まで救ったその勇気。誠に感謝する」

イレブン「ラーズ、久しぶりだね。今日はデルカダール王も来てくれたんだ。それと、あまり上手じゃないけど、君や村の皆が好きだったっていう安らぎの唄を練習してきたんだ。よかったら聞いてね」

グレイグ「安らぎの唄とは何なのだ？」

セーニヤ「そういえばグレイグ様は知りませんでしたね。安らぎの唄はラーズ様に教えていただいた、このガラツシュの村に伝わる子守唄だそうです。優しく心が暖かくなるような唄なんです」

ベロニカ「どうせならラーズに教えてもらったフルバージョンでやろうと思ってるの。それじゃあ行くわよ。セーの」

♪

ゆつくりと曲が流れていく

グレイグ「これは…… 何とも心地のいい」

デルカダール王「落ち着く気分になれるのう」

マルティナ「これがフルバージョンなのね。やっぱりいつ聞いても

いい曲だわ」

演奏が終わるとどこからか風が吹き、花びらが数枚イレブン達の上を舞っていた

ベロニカ「あら？もしかして」

セーニヤ「あの時と同じ風でしたわ！」

イレブン「感動してくれたのかな。ラーズはやっぱり僕たちの事見ててくれてるんだね」

マルティナ「きつとそうよ。今一瞬だけラーズの気配がしたわ。私も久しぶりに聞いて優しい気持ちになれたわ」

デルカダール王「今の曲がこの子守唄。とてもよかったぞ」

グレイグ「ああ、心が穏やかになっていくような気分だ。ラーズもきつと褒めているな」

ベロニカ「ありがとう。最初は緊張していたけど、私もこの曲を吹いている時はどうしてか緊張しないの」

セーニヤ「それではお参りしたら私達はラムダへ帰りますね」

イレブン「うん、ありがとう。また演奏しようね」

マルティナ「それじゃあ、イレブン。私達も帰りましょう」

デルカダール王「そうだな、イレブンよ。ここに連れてきてくれて感謝する。もし時間があればまたここに来よう」

イレブン「ありがとうございます、王様。それじゃあ、ルーラ！」

87. 忘却の塔

数ヶ月後、ガラツシユの村には勇者達全員が揃っていた

イレブン達は安らぎの唄を吹いている

マルティナ「ラース。今日は世界が平和になって3ヶ月ね。早いものだわ」

カミュ「今日はお前が好きだった飲み物持ってきたぜ。ホムラのこの酒だったよな。俺も後で少しもらうぜ」

ロウ「わしは花を持ってきたぞ。この花はお主に似合いそうでな」

シルビア「それにしても、この曲久しぶりに聞いたけどいい曲だわ」

グレイグ「俺もこの曲が気に入ったな。イレブン達もどんどん上手くなっていつてるしな」

その後、久しぶりの仲間同士で色んな話をした

カミュ「そういえばイレブン。前に世界中に魔王を倒した報告をしてた時に、グロッタの町の南側で何か光るものがあったんだ」

イレブン「え？本当？気づかなかったよ。行ってみる？」

ロウ「ふおっふおっ、また皆で旅をするのもいいのう」

ベロニカ「まあ、少しの間だけだね。行ってみましょう」

ユグノア地方 南

そこには不思議な建物や石像が落ちていた

マルティナ「この独特な装飾。たしか神の民の里でも見たわね。何か関係があるのかしら？何か新しい発見があるかもしれないわ。探索してみましょう」

イレブン「ん？隅に何か落ちてる」

イレブンは神秘の歯車をてにいれた

イレブン「??何だろう？これ」

その後

ロウ「この遺跡を調べている間に、神の民が書いた書物を見つけたんじゃ。そこにはこう書かれておる。

ロトゼタシアの大地より生まれし、悠久の時間の流れを紡ぐ精霊。その名は失われた時の化身。神の民の伝承曰く、失われた時の化身が守りしは刻限を司る神聖なる光。

その光輝き燃ゆる時、悠久の彼方に失われしものが大いなる復活を

はたさん」

シルビア「復活してもしかして、その光には失ったものを蘇らせる力があるって事かしら？」

ベロニカ「という事は、もしかしてラーヌも？」

全員「!？」

マルティナ「ラーヌが…… 生き返る？」

シルビア「ちよつとロウちゃん！その光の力についてもっと詳しく書いてないの？」

ロウ「お、おお。刻限の光、忘却の塔にて静かに輝けり。古より神の民が守りし神秘の齒車手に入れし時、失われし時の化身が集う忘却の塔を目指すべし」

マルティナ「神秘の齒車、それがラーヌを生き返られる手がかり！皆、私はもう一度ラーヌに会いたい！お願い、手伝って！」

ベロニカ「もちろんよ、マルティナさん！」

シルビア「だけど、肝心の神秘の歯車はどこにあるのかしらねえ？」

カミュ「この壁画の真ん中にある歯車の形をした穴、もしかしたらこの近くにあるかもしれないねえぜ」

イレブン「もしかしてさっき拾ったこれのこと？」

セーニヤ「まあ！イレブン様、流石ですわ。もう既に見つけていらしたのですね」

グレイグ「後は忘却の塔という場所か。聞いたことない名前だな」

カミュ「そういえば、命の大樹の北に見慣れない塔があったよな。そこに行ってみようぜ」

忘却の塔

イレブン「あ、この塔に歯車の形の窪みがある」

イレブンは扉にある窪みに歯車をはめてみた

ガタガタガタ

ペロニカ「やったわね、扉が開かれたわ！ここが忘却の塔だったのね。早速先に進んでみましょう」

塔 最上階

そこにはヨツチ族のような不思議な生物がいた

番人「私は時の番人。時の行く末を見守るもの」

カミュ「時の番人？あんた一体何者なんだ？」

番人「私は何者でもありません。ただ時の流れを見守るだけの存在」

セーニヤ「時の番人様。この塔には失ったものを復活させる力を持つ光があると聞きました。私達には蘇らせてほしい人がいます。どうか知っていることを教えてください」

番人「この先には、時のオーブと呼ばれる宝玉が祀られています。その時のオーブの力を使えば、あなた達の願いは叶うでしょう。ですが、あなた達には本当に失われた時を求める覚悟がありますか？」

グレイグ「覚悟だと？どういう事だ？」

番人「時のオーブとは、失われた時の化身がはるか古より紡ぎ続けた、ロトゼタシアの時の結晶。その時の流れを壊す事で、時空の流れが乱れ、全てが過去に巻き戻るのです。」

仲間を蘇らせたければ、世界の時を断ち切らなくてはならない。失われた時を求める。あなた達のしようとしていることは、世界にとって大きな選択です」

マルティナ「ラーズを復活させるには、世界の時を巻き戻す」

ロウ「うむ……いや、その話が本当ならば、大樹が落ちるより前の日に戻り、ウルノーガの野望を食い止める事が出来るのではないか？」

全員「!？」

イレブン「そうすれば、ラーズだけじゃない。あの日失われたロトゼタシアの全てが蘇る」

番人「おそらく、今この時を紡いでいる一番新しい時のオーブを壊してしまえば、あなた達が望む世界が闇に覆われる直前に戻る事もできるかもしれません」

グレイグ「もし世界の命運を分けたあの日に戻り、ウルノーガをこの手で止められるなら、俺は喜んで過去に戻るぞ」

全員「うん！」

番人「残念ですが、全員は行けません。時のオーブを壊すには、全てを断ち切ることでできる大いなる力が必要です。そのような力は、この世界でおそらく一つしかありません。あなたの持つ勇者の力で。あなたのお名前は？」

イレブン「イレブンと言います」

番人「イレブン、あなたの持つ勇者の剣なら、時のオーブも砕く事が出来るはず。それができるのは、あなただけ。そう、過去に戻る事ができるのはイレブンだけなのです」

全員「!？」

カミュ「ちよつと待てよ。過去に戻ったイレブンは、またここに戻ってこられるんだろうな？」

番人「一度過去に戻れば、おそらく二度とこの世界に戻ってくる事は出来ないでしょう。それに、壊れた時のオーブが暴走すれば、捻じ曲がった時の渦に飲み込まれてしまうかもしれない。」

時の渦に飲み込まれたら、イレブンは永遠に時の狭間をさまよう事になるでしょう」

ペロニカ「そんな！」

番人「かけがえのない仲間と別れ、たった一人で過去に戻る。あなた自身もどうなるかわからない。」

イレブン。それでもあなたには、失われた時を求めて、過去に戻る覚悟がありますか？この選択はあなたが決めるのです。覚悟ができたら、時のオーブがある祭壇へどうぞ」

88. 過ぎ去りし時を求めて

ザツザツ……

イレブン「え？皆？どうして……」

仲間達は全員、イレブンの前に立ち塞がった

ベロニカ「イレブン！あんたは行かせないわ！」

グレイグ「俺も同意見だ。お前を一人で、過去に行かせるわけには
いかない。お前の代わりに俺が本当は行ってやりたいが。くそっ！
何故俺はここで手をこまねいているというのだ」

セーニヤ「イレブン様、私達姉妹はあなた様を守るという使命があ
ります。ここを通すわけにはいきません」

シルビア「お願い、イレブンちゃん。アタシ、もう大切な仲間を失
いたくはないの」

ロウ「過酷な運命はいつも…… わしから様々なものを奪う。娘、
娘の夫、ユグノアの民達、ラーズ……。しかし、今度ばかりは止めね
ばならん。イレブンよ、どうか一度だけ、この年寄りのわがママを聞
いてはくれんかの。お主までいなくなったら、わしは……」

マルティナ「私からもお願い。どうか考え直して、イレブン。ここ

で止めないとまた私は、ラーズの時のように後悔する。私はラーズがいなくなっただけでもつらいのに、イレブンまでいなくなったら、もう立ち上がれなくなってしまうわ」

ベロニカ「ダメよ、イレブン！お願い、行かないで。こんなきつかけを出したのは私なのよ。ラーズの時もきつかけは私だった。もう、私のせいで誰かを失いたくないの！」

カミュ「時の番人が言ったように、過去に戻ったらもうこの世界に戻ってこれない。お前だつてどうなるかわからないんだぜ。それでも本当に過去に行くのかよ？」

イレブン「皆、ごめん。僕は行くよ。ラーズとマルティナをちゃんと結ばせてあげたいし、世界の皆を救いたい。僅かでもその希望があるなら、僕はこれにかけてみる！」

カミュ「…… 負けたよ。お前はおっとりしてるようで、こういう時は頑固なんだよな。もう決めたんだろ？ だったらもう何も言わねえ。俺はお前のその決断を信じるぜ。イレブン、お前の手でもう一度世界を救うんだ。頼んだぞ、相棒！」

イレブン「カミュ！ うん、絶対に救ってみせるよ」

ベロニカ「…… さあ行きなさい、イレブン。私達はあなたの意思を尊重するわ」

番人「覚悟を決めたのですね、イレブン。それでは私の知りうる限りのことを教えましょう。時のオーブを壊しあなたが過去に持っていきける

物は、あなたの記憶でもある冒険の記録と、これまでに得た戦いの経験、時の祭壇を回っている悠久の金庫の中身のみ。

悠久の金庫はあなたと共に時を遡る事ができる世界で唯一の存在。これからの冒険に必要なものを過去へと運んでくれるでしょう。オーブとともに今装備している勇者の剣は壊れてしまうかもしれないが、あなたはかつて、勇者の剣だった魔王の剣を持っているはずですよ。

しばらくはそれを装備しているといいでしょう。私の知りうる事はこれで全てです。さあ、時のオーブへ」

全員「イレブン!!」

グレイグ「過去で会う俺は、以前と同じく敵対する身だろう。しかし、お前が望んでくれるのなら、俺は再びお前に命を預けるだろう。俺は何度だって勇者の盾になる！」

シルビア「んもう！グレイグったら。堅苦しい別れはやボよ。旅立ちの挨拶は気楽な方がいいの。サヨナラなんて言わないわ！だって、また過去で会えるしね！」

マルティナ「イレブンならきつと大丈夫よ。どんな困難にも打ち勝てるわ。でも、もしダメになりそうな時やつらくなつた時は、私達やラースに頼ってね。きつと私達は、あなたが頼ってくれるのを待ってるわ」

ロウ「イレブンや、立派な顔つきになつたのう。なあに、ちよつとの間お別れするだけじゃ。わしはお主を信じとるよ。今度こそ皆を救ってくれるとな。なんたつて、わしの自慢の孫じゃからのう。ほっほっほっ」

セーニヤ「…… 私は、あなたをお守りする使命のもと必死にここまで歩いてきました。グズな私も少しはあなたの役にたてましたか？ 私は信じています。あなたなら、絶対にまた世界を救ってくださいると」

ベロニカ「イレブン、私はあんたと、ううん、皆と冒険してるのが楽しかったわ。私の冒険はここで終わるけど、あんたはそつちに行つて、もう一人の私や皆と冒険してね。きつとそつちの私も、皆との冒険が楽しくて仕方ないはずだわ」

イレブン「皆、さつき番人はおそらくこの世界に戻つてこれないつて言った。でも、絶対には言わなかった。僕は勇者イレブンだよ？ 僅かな可能性があるなら、それを成功させてみせる！ あつちの世界を救つたら、いつかこつちに帰つてくるよ。だから、待ってて」

全員「待つてる！」

番人「さあ、時は満ちました。過ぎ去りし時へ」

イレブン「ハア！」

勇者の剣が時のオーブを砕いたと同時に剣は折れてしまった

辺りは強い光に包まれる

ロウ「う、うう…… イレブンよ、待ってくれ、イレブン！」

イレブン「皆、行ってきます」

カミュ「イレブン！俺達はもう一度、お前と旅をするからな！

また、会おうぜ!!」

イレブンの姿はなくなった

全員「……………」

全員が何も言わずに、ただ、ただ涙を流していた

ロウ「おお………… イレブンよ…………。どうして………… お主まで…………」

グレイグ「ぐっ…………。世界が平和になった…………。だが、なぜこんな事にならなければならんのだ…………」

シルビア「アタシは………… 皆の笑顔を守りたい…………。そう思ってここまで来たのに………… アタシは、イレブンちゃんにも笑顔でい続けてほしかった…………」

ペロニカ「悔しい…………。こうやって見送る事しかできないなんて」

セーニヤ「イレブン様…………」

マルティナ「ラース、ごめんなさい。イレブンまでもが、いなくなってしまうなんて…………。私達を守るはずだったのに…………」

カミュ「……………泣いてたって始まらねえ。イレブンは、戻ってくるって言ってた。俺の相棒は、何があっても諦めねえ。なら、俺達はイレブンを信じるしかない。勇者の奇跡でもう一度、この世界に戻ってきてくれる事を。」

それまで俺達はこの世界を元通りにするんだ。いつか、イレブンが帰ってきた時に、驚かせてやろう。そして、皆で言っただろうぜ。お帰りってな」

3章 過ぎ去りし時と未来

89. 時を超えて

聖地ラムダ

イレブン「う……ここは……ラムダ？今はどこら辺の時間なんだろう。大樹は、まだあるね」

婦人「あら？勇者様。こんな所でどうしたんですか？仲間の方達がきつと心配されてますよ。大聖堂へ向かうというお話だったと思いますよ」

イレブン「なるほど、その辺りなのか」ありがとうございます、そうですね、きつと心配してます。行ってみます」

大聖堂前

ラーズ「お、イレブン見つけたぜ」

イレブン「!？」

ラーズ「まったく、長老の話を聞いてるのかと思ったら、急にどこか行つたから驚いたぜ。皆、お前を探してたんだぞ」

イレブン「(本物の生きてるラーズだ)う、うん。ごめんね、急にい

なくなって。鍛治で作っておきたいものがあつたのを思い出してさ」

ラース「……まあ、それならいいけどよ。あまり心配かけるなよな。その大剣を作りたかつたのか？それと、俺の顔に何かついてるか？そんなにじつと見つめて」

イレブン「あ、ごめんね。何でもないよ。この大剣強そうでしょ？」

ラース「まあ強そうだが、イレブンが作るにしては随分と趣味が悪いんじゃないか？まあ、構わないけどな。皆にもお前が見つかったて声かけてこようぜ」

イレブン「うん、謝らないとだね」

ラース「(何だ、この違和感)」

その後

イレブン「(大樹に登る前の皆だ、懐かしい)皆、急にいなくなつてごめんね」

シルビア「よかつたわ、イレブンちゃん見つかつて。どこにもいなくて心配したんだから」

カミュ「おいおい、イレブン。随分ぶつとんだ剣持ってるな。そんなの持ってたなら悪魔の子って言われても仕方ねえぜ」

シルビア「？イレブンちゃん、そんなに皆の顔見つめてどうしたの？」

イレブン「ああ、ごめんね。少しブーツとしてた」

ベロニカ「まったく、リーダーなんだからもっとちゃんとしてよね」

セーニヤ「始祖の森の山頂にある祭壇に6つのオーブを捧げれば、命の大樹に行けるんでしたよね」

マルティナ「あの扉から始祖の森へ行けると長老様はおっしゃっていたわ。まずは、山頂の祭壇を目指しましょう」

ロウ「長かった旅ももう終盤じゃ。魔王ウルノーガを倒すためにも、命の大樹に向かうぞい」

大樹の神域

大樹の真ん中に来ると、そこには世界の命の源、大樹の魂があった。周りはツルで囲まれており、少し雷を纏っている

マルティナ「これが大樹の魂……なんて大ききなのかしら」

カミュ「世界中の命がパンパンに詰まってるからな、これくらいデカくないと収まらないんだろ」

シルビア「こうしてそばで見ているとちよつぱり怖いわね。なんだか飲み込まれちゃいそう」

シルビアが手をのばす

ビリッ！

シルビア「やあん！なあにこれ！ビリリってはじかれたわ」

ロウ「やはり、勇者の紋章を携えた者しか大樹の魂の中には入れないようじゃな。そして、あれこそ闇の力を払うもの。おそらく勇者のつるぎであろう」

大樹の魂の中には光り輝く剣が入っている

ラース「イレブン。大樹の魂の中にある勇者のつるぎを手にいれようぜ」

イレブン「この後、ホメロスが）うん、行ってくるよ」勇者の紋章が光り始める

ツタがどかさされていく

その時

ブウン!

全員の後ろから攻撃がイレブンに向かって飛んできた

イレブン「(来た!) ハア!」イレブンは攻撃を弾いた

ホメロス「な! 貴様、今何をした!」

カミュ「ホメロス! てめえいつの間についてきやがった!」

ホメロス「尾行にも気づかぬドブネズミに語る言葉など持たぬ。私の目的はイレブンただ一人」

ラーズ「テメエは!!!」ダツツ!

ラーズはホメロスに向かい走り始めた

マルティナ「ラーズ!」

ラーズ「ハアアアっ!」ドガン!

ラーズはホメロスに向かって蹴りをいれるが、闇の力により防がれる

ホメロス「おや？ 貴様はあの時の村にいた男ではないか」

！
ラーズ「テメエは俺の村を皆を殺しやがった！ 許さねえ!!」ガツン

ラーズは攻撃を続けるが、全て闇の力により防がれる

ホメロス「なるほど、貴様はあの村の生き残りか。どうでもよい。オーブなどのために愚かにもそれを守ろうとした、地図にものらぬ小さな村とそこに住む愚かな人達がいなくなっただけのことだ」

ラーズ「テメエ!!! これ以上俺の村と皆をバカにすんじゃねえ!」

イレブン「ラーズ！ 離れて！ そいつは危険だ!」

ラーズ「!? イレブン?」

ホメロスは黒いオーブを取り出した

ホメロス「この力に跪け!」ブウン!

イレブン「させない! ハアア!」

イレブンは攻撃を弾いた

ホメロス「闇のオーラを切り裂いただど!? その剣は一体……だ

が、剣一つで私に勝てると思っっているのか？悪魔の子イレブンよ！悪魔の子と手を結びし者共よ！この命の大樹を貴様らの墓標にしてやる」

ホメロスがあらわれた

シルビア「イレブンちゃん！バイシオン！」

イレブンの攻撃力が一段階上がった

イレブン「全身全霊斬り！」イレブンは闇のバリアを消し去った

ラーズ「ばくれつきやく！」

セーニャ「スクルト！」

仲間達の守備力が一段階上がった

ホメロスは闇のバリアを貼った

ホメロス「ドルモア！」

シルビア「ラーズちゃん！バイシオン！」

ラーズの攻撃力が一段階上がった

イレブン「全身全霊斬り！」イレブンは闇のバリアを消し去った

ラーズ「ばくれつきやく！」

セーニャ「ベホイムですわ！」

ラースは回復した

ホメロスは闇のオーブから閃光を放った

ホメロス「はあっ！」通常攻撃

シルビア「イレブンちゃん！バイシオン！」

イレブンの攻撃力がさらに一段階上がった

イレブン「全身全霊斬り！」

ホメロス「ぐあああ！」

ホメロスの持っていた黒いオーブは割れてなくなった

ホメロス「バカな、この私が敗れるなど。こんな事ではあの方へ申し訳が立たぬ！ハア！」

イレブン「ハア！」イレブンは攻撃を弾いたが、その衝撃で剣は砕けてしまった

デルカダール王「この破片は……」

グレイグ「ホメロスを追って来てみれば、これは一体。ここで何が起こったというのだ」

ロウ「グレイグよ、この者の姿を見るがよい。デルカダール王国の将として仮面を被りつつ、裏で魔物に魂を売っていた者の末路じゃ」

マルティナ「グレイグ、よく聞きなさい。魔物の手先として暗躍していたのは、イレブンじゃないわ。ホメロスだったのよ！」

ホメロス「うぐ…… うう……」

グレイグ「…… やはりそうだったのか。ホメロスよ、お前ほどの男が何故魔物に……」

ラース「(このグレイグという男はホメロスの事を知っているのか?)」

ホメロス「お、お助けを……」

ラース「(なぜ助けを求めにデルカダール王の元へ?魔物になった男だというのに)」

デルカダール王「ふんっ！」ズバ!

デルカダール王はホメロスを斬った

グレイグ「!？」

マルティナ「……っ!!」

デルカダール王「人民を誑かし、世を乱した悪魔の手先め。死をもつて償うがよい」

ホメロス「う、ううああ！」ジュワー

デルカダール王「グレイグよ、よくぞホメロスの正体を見抜き、わしをここまで連れて来てくれた。そなたがいなければ、私はずっとホメロスの口車に乗せられ、魔物達の企みに手を貸していただろう」

グレイグ「くっ……。ありがたきお言葉。ホメロスの凶行を事前
に防ぐ事ができて幸いでした」

デルカダール王「イレブンよ、どうか今までのわしの行いを許してほしい。わしは今までホメロスから、勇者こそが魔物を呼ぶ存在。悪魔の子なのだと言き伏せられてきたのじゃ」

マルティナ「……お父様」

デルカダール王「おお、そなたはマルティナ！よくぞ無事でいられた。こつちにきてもつとよく顔を見せてくれ」

マルティナ「……」

マルティナは不安そうにロウを見つめる

ロウ「うん」

マルティナ「お父様！」

デルカダール王「ロウよ、お主にも苦勞をさせたな。ユグノアの件は残念だったが、これからは力を合わせて復興していこうではないか」

ロウ「それも大事じゃが、まずは16年前にユグノアを滅ぼした張本人ウルノーガを倒さねばな」

デルカダール王「ふむ、おそらくホメロスも魔王ウルノーガの手先だったのだろう。」

イレブンよ、話は聞いたな。全ての元凶たるウルノーガは、今も世界のどこかで息を潜めているはず。さあ、勇者イレブンよ。大樹の魂に宿る勇者の剣を手に入れるのじゃ」

イレブン「……はい」勇者の紋章が光り始めツタがどかされた。

イレブンは勇者の剣を手に入れ、中から出てきた

デルカダール王「おお、なんとという素晴らしい剣だ。私にもよく見せてくれないか？」

デルカダール王が剣に近づく

ラース「お待ちください、王様。私達の村で調べた結果、勇者の剣は勇者にしか扱えない剣。紋章がない人が触れば、雷の裁きを受ける可能性がありますので、あまり近づくのはおやめください」

デルカダール王「お、おお。そうだったのか。忠告すまなかつたな」

ラース「いえ、大した事じゃありません」

デルカダール王「まあよい、それよりも早く城に帰って宴の準備をせねばな」

ロウ「ほう。もしやわしらをデルカダール城へ招待してくれるのか」

デルカダール王「今更何をいう、ロウよ。そなた達はウルノーガの手先ホメロスから命の大樹を守った英雄ではないか。イレブンよ、聞いている通りだ。そなた達の功績を称えるため、我が城に招待させてほ

しい」

ラース「!?」

デルカダール王「グレイグよ、そなたも準備を手伝ってくれ」

グレイグ「……………」

グレイグはホメロスの残したペンダントを見つめている

グレイグ「…………… すまない。今は言葉が見つからない。私がこれまでしてきた事はいつか日を改めて詫びさせてくれ」

デルカダール王「さあ、わしらは先に城へ帰るとしよう。宴の準備をしておく」

ベロニカ「やったわ！お城に行けるのね」

セーニヤ「お料理も楽しみですわ！」

ラース「…………… デルカダールに…………… か」

マルティナ「ラース？暗い顔してどうしたの？」

ラーズ「……いや、何でもないぜ、マルティナ。それにしてもよかつたな、16年ぶりに城に帰れて」

マルティナ「ええ、そうね」

ロウ「ラーズよ、先程、王になぜ剣に近づいてはならぬと嘘を言ったのだ」

イレブン「あ、それは僕も気になる」

ラーズ「……マルティナには悪いんだが、俺にはデルカダール王が怪しく見えてきていてな。確証はないんだが、どうもおかしい気がするな。あんなに容赦の無い人だったのかと思ってな。というか、じいさんも怪しんでるじゃねえか」

ロウ「ふおつふおつ、バレておったか。わしから見たらやはりデルカダール王はかなり怪しいのう。長い付き合いじゃ、何となくわかるわい」

マルティナ「実は、私もなの。お父様なんだけど、お父様じゃない感覚がしてて。記憶違いというわけでもなさそうだし」

イレブン「そっか、気をつけた方がいいかもね」

シルビア「イレブンちゃん達へ、遅いわよ、早く行きましょう」

イレブン「うん、今行くよ！」

ラース「怪しいのは君もだぞ、イレブン」

90. 対決、ウルノーガ

デルカダール城下町

ラーズ「……………」

ラーズはピリピリとした空気を纏っている

セーニャ「どうしましょう、お姉様。ラーズ様がどんどん怖くなつていきますわ」

ベロニカ「なんか殺気立ち始めたわよね」

シルビア「確かにあれはいつものラーズちゃんとは違うわね。マルティナちゃん、何か知らないの？」

マルティナ「え、私もわからないわ。ただ、さつきから反応がなかったりするのよ。ラーズは人の話はよく聞いているのに」

ロウ「どうしたんじやろうかのう。こんな事今まで無かったのだが」

カミュ「まあ、急いで城に行った方がいいかもな。俺も人混みは苦手だからな」

イレブン「そうだね（こんな事、前の世界だと無かったなあ。どうしたんだろ？）」

デルカダール城 玉座の間

デルカダール王「よくぞ参った、勇者イレブンよ。こうして、そなたを再び迎え入れることができ嬉しく思うぞ。

ホメロスに誑かされたわしは、長い間勇者こそ災いと呼ぶ悪魔の子だと思ひ込んできたが、イレブン。よくぞホメロスを打ち倒し、我が娘マルティナを見つけてきてくれた。おかげでようやく目が覚めた。そなたに会わせたい相手がいるのだ。のう、グレイグ？」

グレイグ「はっ！」

グレイグが扉を開けると、エマとペルラがいた

イレブン「エマ！母さん！」

エマ「イレブン！私よ！幼なじみのエマよ！」

エマはイレブンまでかけよる

エマ「よかった、イレブン。無事だったのね。……酷い噂ばかり聞いて……私、ううっ……。あなたが旅立つてすぐに、ホメロスという將軍が来たの。」

その方は、私達を村の広場に集めて兵士達に皆殺しだと言ったわ。でも、遅れて現れたグレイグ將軍が、ホメロスを止めてくれたの。長

い間お城に閉じ込められたままだったけど、あなたが本物の勇者だとわかって、出してもらえることになったの」

ペルラ「イレブン、本当によく頑張ったね。天国のおじいちゃんもきつと、今のあんたを見たら喜ぶはずだよ」

デルカダール王「さあ、勇者イレブンよ。急な準備ゆえ、大したもてなしもできぬが今日は存分に宴を楽しんでくれ。皆の者、心して聞け。この日よりイレブンを真の勇者と認め、その名を讃えるものとする」

その日は夜遅くまで宴が催された。ある者は歌い、ある者は踊って勇者イレブンの活躍を讃えた。

その夜

イレブンはベッドで横になって寝ている

そこに、音を立てないようにデルカダール王が入ってきた

そして剣に触れようとした瞬間、イレブンから黒い触手のようなものが出てきて、その手を払い除けた

ガシヤン！

剣が落ち、大きな音になる

デルカダール王「なぜだ、なぜ剣に触れられぬ。まさかこの力は」

イレブン「王様、何故ここに」

イレブンは剣を構えながらいう

デルカダール王「その勇者の剣を私によこせ！」

デルカダール王の目が赤くなる

バン！

マルティナ「イレブン！大丈夫？皆も連れてきたわ！」

グレイグ「姫様！これは一体」

ラーズ「やはりこいつはデルカダール王ではねえな。いや、人ですらないようだ」

ロウ「わしと姫とラーズは勘付いておったわい。特にわしはデルカダールと何十年も親交があったんじゃ。誤魔化せるわけなからう」

カミュ「宴まで開いて王になりきるとはな。とんだ狸がいたもんだぜ」

デルカダール王「ちっ！」シユン！

マルティナ「消えた!？」

ベロニカ「ちよつと！出てきなさい、卑怯者！王様に成り済ましたり、逃げ回ったりセコいやつね」

ラーズ「まだ遠くには行っていないはずだ。城の中を探すぞ！」

グレイグ「……我が主君は王ではなく、人ですらなかった？では、私が今まで信じてきたものは一体……」

玉座の間

ベロニカ「見つけたわよ！このベロニカ様から逃げようつたつてそうはいかないわよ！」

セーニヤ「デルカダール国王に化けた悪しき魔物よ。観念して正体を表しなさい」

デルカダール王「うっ……くはっ……」

デルカダール王の中から魔物が出てきた

ウルノーガ「我は魔道士ウルノーガ。16年前にユグノア王国を滅ぼし、デルカダール王になり変わったもの。

今まで貴様を追い回していたのも、すべては勇者の剣を奪い、大樹の魂を得るため。あの場で勇者から奪おうとしたが、その男に嘘をつかれて邪魔をされたな。そして、先程の作戦も失敗に終わった。

もはや手段は選ばぬ。ここが貴様らの墓標となるのだ。はあ！」

辺りに紫の霧がでる

ロウ「貴様が魔道士ウルノーガ！こうして会える時を16年もの間待ちわびたぞ！」

グレイグ「ウルノーガ、貴様！今までずっと王に取り憑いて、私を謀ってきたというのか！」

ウルノーガ「グレイグよ、貴様はよい手駒であった。焦らずともすぐに天国の家族のもとへ送ってやろう」

グレイグ「!? 貴様、まさか！我が祖国バンデルフォン王国を！」

マルティナ「幼いイレブンを襲い、ユグノア王国を滅ぼし、私達の16年を奪ったあなただけは許さない！この無念、思い知らせてやるわ！」

グレイグ「イレブンよ、私も戦わせてもらう。こいつは私の家族と友を奪った仇でもあるのだからな」

カミュ「イレブン！こいつがお前の運命を狂わせた元凶だ。力の限り
を尽くして戦うぞ！」

ウルノーガ「来るがよい、イレブン！貴様の力を奪い、地上の命全
てを我が供物にしてやろう！」

魔道士ウルノーガがあらわれた

シルビア「マルティナちゃん！バイシオン！」

マルティナの攻撃力が一段階上がった

ウルノーガは呪文を唱えた

なんと、ウルノーガの杖が2本あらわれた

ウルノーガ「ドルモア！」

イレブン「ギガブレイク！」

マルティナ「さみだれ突き！」

ロウ「ルカニじゃ！」

ウルノーガの守備力が二段階下がった

グレイグ「渾身斬り！」

シルビア「マルティナちゃん！バイシオン！」

マルティナの攻撃力がさらに一段階上がった

ウルノーガの杖は漂っている

ウルノーガの杖のベギラマ！

ウルノーガの杖のメラミ！

ウルノーガ「はあっ！」通常攻撃

イレブン「ギガブレイク！」

ウルノーガの杖達をたおした

マルティナ「さみだれ突き！」

ロウ「ドルクマ！」

グレイグ「におうだちだ！」

シルビア「イレブンちゃん！バイション！」

イレブンの攻撃力が一段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ウルノーガ「グオオオオオ！……時を遡ってきたのは……お前
だけだと思ふなよ。グフツ！」ジュワー

デルカダール王「う、うう……」

マルティナ「お父様！お父様！どうか目を開けてください！」

デルカダール王「マ、マルティナ？まさかそなた、マルティナなのか？随分長い夢を見ていたようだ。ユグノア王国が魔物に襲われてから、わしは一体何を……？」

イレブン「王様、大丈夫ですか？」勇者の紋章が光る

デルカダール王「おお、それは勇者の紋章。あの時の赤子が、なんと逞しく成長した事よ。そなたにはきちんと話をしたい所だが、まだ体が言うことを聞かぬ。ゴホッ！ゴホッ！」

マルティナ「お父様、あまり喋ってはいけません。ひとまず体を休めましょう。私はお父様の容態を見るわ。明日になったらまたここまできてちょうだい」

デルカダール王とマルティナは立ち去っていった

シルビア「マルティナちゃんは16年ぶりにパパと会えたんだもの。ゆっくりさせてあげましょ」

デルカダール王が魔物に取り憑かれていた事は、たちどころに城中に広まった。本物の王は介抱され、イレブン達は王の目覚めを待ちな

がら、一晩休む事にした。

その夜、イレブンの体から黒いヨツチ族が外に出てきた

そして夜が明けた

91. 邪神現る

イレブン「おはよう、エマ」

エマ「おはよう、イレブン。マルティナさんから伝言で、王様から大事な話があるから玉座の間に来てくれたって。きつといい話に違いないわ」

イレブン「わかった、ありがとう、エマ」

玉座の間

デルカダール王「話は臣下達とマルティナから聞いた。わしは悪夢に囚われている間、随分酷い王だったようだな。そなたがいなければ、この国は、世界は、ウルノーガに焼き尽くされ、地上の命は絶えていた事だろう。」

イレブンよ！よくぞ悪しき元凶ウルノーガを倒し、ロトゼタシアを救ってくれた。そなたこそ、古の勇者ローシュの名に相応しい若者。今ここに、勇者の称号を授けよう」

カミュ「俺達とうとうやったんだな」

ベロニカ「ええ、大変な旅だったけどね」

イレブン「(これで、世界は救われた。やったよ、皆)」

その後、しばらく玉座の間は皆で騒いでいた。

その時、辺りは急に暗くなった

カミュ「何だ？急に暗くなったぞ？」

セーニャ「とてつもなく邪悪な気配を感じます。この力、一体どこから」

カミュ「そういえば、ウルノーガが変な事言ってたよな。時を遡ってきたのはお前だけだと思うなよって。どういう事だ？」

バン！

兵士「王様！大変です！直ちにバルコニーまでお急ぎください！勇者の星に異変が！」

デルカダール王「何だと！そなた達も3階にあるバルコニーに来てくれ！」

バルコニー

ベロニカ「皆、あれ見て！」

ロウ「勇者の星が落ちているのか？」

イレブン「世界は守れたはずなのに。どうなってるの!?!」うそ…」

その頃、サマデー地方 遺跡

そこではあの黒いヨツチ族が勇者の星に向けて何かを行なっている

???「カツテワガニクタイハ、ウルノーガニヨリホロボサレタ。ダガ、ウルノーガナキイマ、トキヲコエヨウヤク、ヒトツニナレル。今こそ復活の時」

その後、デルカダール城 玉座の間

デルカダール王「勇者の星が落ちてしまったのか? 一体何が起ころうというのじゃ。イレブンよ、何やら胸騒ぎがしてならん。

勇者の星の様子を見てきてくれぬか? 勇者の星が落ちたのは、バラバ砂丘の方角。デルカコスタ地方へ赴けば何か見えるかもしれない」

グレイグ「王よ。私もイレブンと共にいきます。イレブンよ。今まで勇者に刃を向けてきた償いは、勇者の助けになる事で果たさせてほしい。

まだ、俺にも守るべきものがある。お前が世界を救う勇者なら、俺は勇者を守る盾となろう」

グレイグが仲間にくわわった

イレブン「グレイグ、違うよ。世界は皆で救うんだよ。もちろん、君

も一緒にね」

グレイグ「ああ、ありがとう」

デルカコスタ地方 海岸

マルティナ「何て大ききなの」

カミュ「様子を見てこいとは言われたが、こいつはぶったまげたな。何なんだよ、あの黒い物体は」

セーニヤ「表面から禍々しい気を放っています。聖なるものでない事は確かですわ」

ベロニカ「あれが勇者の星なのかしら？とてもそうには見えないけど」

ラース「というか、あれ命の大樹と同じで空にあるな。あんな所どうやって行けばいいんだ？」

イレブン「何なんだろう、あれ。前はこんな事なかったのに。似た事ならあったけど、どうしよう」

その時、後ろから誰かに話しかけられる

??? 「勇者よ、お困りのようじゃな」

振り返るとそこにはウルノーガがいた

全員「な!?!」

カミュ「ウルノーガ! てめえ、生きていたのか!」

??? 「このわしがウルノーガとな? そうか、お主らにはわしがウルノーガに見えるのか。わしはこの世界では預言者と呼ばれておる」

カミュ「預言者だと!?!」

シルビア「それって確かカミュちゃんが前に会ったって言う……」

預言者「とはいえ、この姿では落ち着かんじやろう。わしは人によって抱く姿、形が違うのでな。様々な姿に変えられる。ほれ」

預言者が手を頭に置くと、女の人の姿になった

預言者「わしには見える。おぬしらが神の使いケトスに乗って、天空の民と出会う姿がな」

カミュ「神の使いケトス? 天空の民? なんだそりや」

預言者「伝説の笛の音がかの地へ導く。わしが言えるのはこんな所かのう」シユン！

預言者はいなくなった

ラーズ「おい、全然わからねえぞ！……カミュ、あの人が信じていいのか？」

カミュ「俺にもわからねえぞ。ただ、間違っている事は言わねえはずだ。そこは信じてくれ」

ベロニカ「笛って言われても、長老様にもらったこれしかないけど」

ベロニカはカバンから笛を取り出した

イレブン「あ！それ、持ってるの？」

ベロニカ「え？ええ、そうよ」

イレブン「ちよつとだけなら僕、笛吹けるよ。試してみたい？ほら、物は試しって言うし」

ベロニカ「ええ、いいけど……」

ラース「(急に何だ？イレブンのやつ)」

♪

空からケトスが現れた

ラース「ええー！何だよ、あれ！」

シルビア「くじらが空を飛ぶですって!？」

セーニヤ「あれが神の使いケトスなのでしょいか」

ベロニカ「よーし！それじゃあ行きましょう、イレブン！あの空飛ぶくじらに乗って、天空の民つてのに会いにくわよ！」

空

ラース「これは、凄い景色だな。こんなの見たことねえ。ってマルティナ？大丈夫か？」

マルティナ「ご、ごごめんなさい。あまり立ってられないわね」

ラース「それなら真ん中で座ってようぜ。そこなら下は見えないから怖くないし、俺も隣にいてやるよ」

マルティナ「あ、ありがとう、ラース」

神の民の里

カミュ「何だ、ここ。町ごと空に浮いてるのかよ」

その時、神の民が歩いてきて話しかけてきた

神の民「古の昔、生き物達は大樹の加護のもと、長きに渡って繁栄し、我ら神の民も大樹のしもべとして、平和に暮らしていました」

イレブン以外「うおっ！」

イレブン以外は全員見た事もない生物に戸惑う

神の民の「ですがある日、闇が空を覆い、遙か天高くより災厄が飛来しました」

ラース「いや、続けるのかよ」

神の民「その災厄の名は、ニズゼルフア。地上に現れたあの黒い太陽は、ニズゼルフアの復活を示しているのかもしれない。」

ニズゼルフアとはかつて、地上を地獄に落とした災厄なる邪神の名。ケトスを操りし勇者よ。事態は一刻を争います。長老様の元へお越し下さい」

神の民は去って行った

ラース「な、何なんだ？あの変な生き物は」

ロウ「預言者の言っていた天空の民とは彼らの事に違いあるまい」

グレイグ「黒い太陽、あれは勇者の星ではなかったのか。とにかく長老に会ってみよう」

広場

神の民「こちらが我らが長老、イゴルタブ様です」

神の民「長老様は神話の時代から生きている方だよ。普段は深い眠りについておられるから、めったに目を覚まさないんだ」

神の民「勇者を目の前にすれば目を覚ますと思いましたが、仕方ありません。この里に伝わる神話の方を私からお話しましょう。この壁画をご覧ください。

古の昔、ニズゼルフアは命の大樹に眠る大いなる力を狙い、この口トゼタシアに現れました。邪神は大勢の魔物を引きつれ、邪悪な瘴気で地上を汚したのです。世界は滅びの時を迎えようとなりました。

しかし、万物の創造主たる命の大樹はこの事を予見し、地上に一人の救世主を遣わしていたのです。その者の名はローシユ。あなたの祖先、伝説の勇者です。

ローシユはケトスに乗って大空を舞い、広大なロトゼタシアの大地を巡って、共に戦う仲間を集めました。そして、戦士ネルセン、賢者セニカ、魔法使いウラノスという頼もしき3人が勇者のもとに集ったのです。

4人は力を合わせ、勇者の剣を作り、邪神討伐へと向かいました。長き戦いの末、ついに邪神を倒し平和を取り戻したのです」

ロウ「その話が本当ならば、なぜ倒されたはずの邪神が復活したのじゃ」

神の民「それは私にもわかりません。ですが、勇者が生まれた意味はわかります。あなたと邪神は表裏一体。邪神を倒すため、あなたが産まれたのでしょう。ですが、どうやって立ち向かえば」

イゴルタブ「苗木じゃ」

全員「!？」

イゴルタブ「大樹の苗木を頼れ。苗木が全てを知っておる」

神の民「大樹の苗木?… そういう事か!こちらにお越し下さい。見せたいものがございます。」

太陽の神殿

神の民「あちらの苗木は遙か古の時代から、この地を見守ってきた聖なる苗木。その中には当時の記憶が眠ると言われています。残念ながら、ここの苗木は邪神を倒す手がかりを得ることはできないようです。

ですが、地上にある3本の聖なる苗木の記憶からなら、邪神討伐の手がかりを得られるかもしれません。それではそちらの聖なる種火に手をかざしてください」

神の民「聖なる種火はロトゼタシアの創造主たる聖龍様より受け継いだもの。その光は勇者の力を呼び覚ますと言われています。

その聖なる炎は、あなたがニズゼルフアを倒す旅を続ける上で、きつと役に立ってくれるでしょう」

イレブンは聖なる種火をてにいれた

神の民「長老様、ここでいいんですか？」

神の民「長老様!!」

イゴルタブ「わしもその者らの眠れる力を呼び覚ましてやろうと思つてのう。この者らの目には希望の光が宿っておる。光を絶やしてはならぬ。

大樹の葉より生まれいでし子らに、大いなる祝福を与えん」

ブワー！

光が全員を包んだ

カミュ「すげえ！力が溢れてくるみたいだ！」

ラーズ「今まで出来なかった特技もできるかもしれないぜ！」

イゴルタブ「勇者がいるから邪神が生まれるなどという、間違った
伝承がよからぬ因縁をうんだ。

イレブンよ、そなたが長きにわたる因縁を断ち切るのじゃ。聖龍の
加護があらんことを」ドスン！

イゴルタブは倒れた

全員「長老様！」

イゴルタブ「スピー、スピー」

ラーズ「何だよ、寝ただけか。驚いたな」

神の民「久しぶりに起きたからきつと疲れちゃったんだね。起こさ
ないように連れてってあげよう。うんしょつと」

ラース「おい、大丈夫か？俺が手伝うぜ？」

神の民「本当？ありがとう。じゃあお願いしてもいい？」

ラース「おう、任せな。よつと」

広場

ラース「ほらよ。ここでいいか？」

神の民「うん、大丈夫だよ。ありがとう、お兄ちゃん」

ラース「こつちこそ長老様には力を引き出してもらったからな。少しは助けになれば幸いだ」

グレイグ「それじゃあ、世界のどこかにある3本の大樹の苗木を探そう」

イレブン「全く心当たりがないんだよね。ひとまず報告もかねて、デルカダールに戻ろうか」

マルティナ「そうね、邪神が復活したっていう事を伝えないとね」

ライス「……ハア」

マルティナ「？」

9.2. グレイグ、打ち解け始める

ここからラースについてのオリジナル展開です。

ラースの過去についての話になります。

デルカダール城 玉座の間

デルカダール王「ふむ、なるほど。あの勇者の星だったものは、邪神ニズゼルフアというやつだった。そして、そいつは古の時代にローシユにより倒されていたはずが、なぜか復活したと。」

こうしてはおれん。勇者イレブンよ。魔王から世界を救ってもらい、すぐにこんな事を頼むのも気が引けるが、どうか邪神からも世界を救ってはくれぬか」

イレブン「はい、大丈夫です。任せてください。それで倒すための手がかりが大樹の苗木なんです、世界のどこかにあるそうなんです。もし何か知っていたら教えてくれませんか？」

デルカダール王「大樹の苗木……。ふむ、力になれずすまないが、わしにはわからない。しかし、出来るだけの事はしよう。兵士達や民達に声をかけて知っていれば、勇者の力になるように伝えよう」

イレブン「ありがとうございます、王様」

デルカダール王「その大樹の苗木とはどのようなものなのだ？」

イレブン「それはですね」

その頃、城内では

仲間達はイレブンを待ちながらそれぞれ話していた

ラーズとマルティナはグレイグと話していた

ラーズ「なあ、グレイグ。自己紹介の時には言わなかったが、これから長い付き合いだし、言わないと驚くだろうから先に言っておきな」

グレイグ「どうした？ラーズ」

ラーズ「俺とマルティナは付き合い合ってるんだよ」

グレイグ「な、何だと!? 姫様! それは本当ですか!？」

グレイグは驚き、マルティナに詰め寄る

マルティナ「ええ、そうよ。私はラーズに告白されて、それを了承したのよ」

グレイグ「な、何という事だ。距離が近い気がしていたが、そのせいか」

ラーズ「まあ、お姫様を守るのもグレイグは大事な役目だろうけど、それは俺も守ってるから安心しろよ。グレイグと合わせて二重バリアだな」

グレイグ「変な事を言うな！」

ラーズ「はっはっはっ、まあ気にするなよ。それと、少し大事な話なんだが、グレイグはホメロスと仲がよかったのか？」

ラーズは真剣な表情で聞いている

グレイグ「ああ、そうだ。俺達2人は子どもの頃から、このデルカダールを支える騎士になるのだと約束したのだ。その約束は……叶わなかったが」

ラーズ「ホメロスは簡単に人を殺すようなやつだったのか？」

グレイグ「そんな訳なからう！口は悪かったが、俺と共に歩んだあいつは簡単に人の命など奪わなかった。魔物に魂を売ってから、そうなってしまったのだろう」

ラーズ「……そうか」

マルティナ「ラーズ、グレイグの言っている事は本当よ。私も子ども頃、二人と一緒によく遊んだもの。その時のホメロスは嫌々ながらも、私に対する手や口は優しくかったわ」

グレイグ「しかしなぜ、そんな事を聞くのだ？」

マルティナ「グレイグ、ラーズの育ったガラツシユの村は、魔物を引きつれたホメロスによって滅ぼされたのよ。村人達も全員殺されたの。ラーズの幼なじみはラーズの目の前で息を引き取ったわ」

グレイグ「な!?! あいつは…… そんな事まで!…… すまなかった、ラーズ。友の俺が代わりにお前に謝罪をしよう。こんなので許される訳ないが、俺の気持ちだけでもどうか、頼む」

グレイグはラーズに土下座する勢いで頭を下げている

ラーズ「俺はホメロスが憎くてな、元からあいう奴ならクズ呼ばわりする所だったが、グレイグ達の話通りなら、魔物に魂を売ったからあの非道な行いもできたのだろう。ホメロスも色々あったんだろう。きつとあいつも可哀想なやつだったんだ。もう憎い気持ちは無くなったさ」

グレイグ「そう言ってくれると本当に助かる。今度村にも連れて行ってくれ。村の皆にも俺が謝罪をしよう」

ラーズ「おいおい、別にそこまでしなくてもいいぞ」

グレイグ「だが、そうでもしないと村人達はただ死んでいただけになる。俺の友がした罰は、俺も背負うべきだ」

ラーズ「真面目だなあ、固すぎるぞ。いい事でもあるが、これは俺が別にいいって言ったんだ。あまり背負いすぎるのもよくないぞ。

そういう風に考えるから、顔が固いんだろ。もつと笑え、ほら。口をこうやって、目もこうして」

ラーズはグレイグに近づき、グレイグの顔をいじり始める

グレイグ「な、何をする。ひやめろ！」

グレイグは歪な笑顔のようになっている

ラーズ「アハハハ！いい顔じゃねえか！」

マルティナ「ウッフ、グレイグ、あなた今とっても面白い顔してるわよ」

グレイグ「ラーズ、やめろ！」

グレイグはラーズを引き剥がした

ロウ「ほほ、楽しそうじゃのう」

ベロニカ「アハハ！流石ラーズね。グレイグさんともう仲良くなってるわ」

セーニヤ「ふふ、グレイグ様は難しいお方かと思いましたが、どうやらそうでもなさそうですね」

騒いでいる二人を見て、皆も集まってきた

その時、イレブンもちょうど戻ってきた

イレブン「皆、戻ったよ。ってラーズ何してんの？」

ラーズ「おお、イレブン。おかえり。今グレイグをおもちやにしてみたんだよ。面白いやつだな、こいつ」

グレイグ「貴様！やはり俺で遊んでいたな！」

ラーズ「おう、楽しかったぜ」

ラーズは笑顔でグレイグに返事をしている

グレイグ「ぐぬぬぬ、反省のかけらも見えない」

イレブン「知ってたけど流石ラーズ。馴染ませるのが早い」グレイグさんって案外面白い人なんだね」

グレイグ「イレブンまで！誰かこの暴君を止めろ！」

ラース「ひでえやつだな、グレイグは。皆も面白かったよな？さっきの顔」

カミュ「ああ、いい顔してたぜ、おっさん」

ベロニカ「私も笑っちゃったわ」

セーニャ「でも、グレイグ様も楽しそうでしたわ」

シルビア「グレイグ！笑顔は大事なのよ！」

ロウ「ふおっふおっ、流石ラースじやのう」

グレイグ「くっ……」顔が赤くなっている

ラース「はは、流石に頭が固いグレイグにからかいすぎたか。悪かったな。だが、これでお互い話しやすくはなったんじゃないか？これから頼りにしてるぜ、グレイグ」

グレイグ「……まさか、最初からこれが狙いで」

グレイグはハツとしたように尋ねる

ラース「さあ？それはわからないぞ？ホメロスの話もしたかったのは本当だしな」

グレイグ「食えん男だな、お前は……。これからよろしくたのむ」

ラース「おう！」

93. ラースの過去

デルカダール城下町 上層

イレブン「この先どうしようか」

ベロニカ「大樹の苗木ねえ。他の人達にも聞きながら世界を回るしかないかしら」

その時、誰かが話しかけてきた

??? 「やっと見つけましたわ！」

マルティナ「あら？あのご婦人、こっちにくるわ」

ラース「!？」

婦人「見つけましたわ、グラン。お前が世界を救った勇者様の仲間の一人と聞いて探し回りましたわ」

イレブン「すみません、僕らの仲間にグランという人はいないんですわ」

婦人「まあ勇者様、すみませんね。愚息子が世話になって。グランはこれですわ」

婦人はラースを引つ張った

ラース「……………今更何の御用ですか、母上」

全員「ラース!?!」

ラースの母「お前が勇者様の仲間と聞いて、これは家に戻さなきゃとお父様と話していたの。だから家に戻りなさい。必ずよ」

そう言いラースの母は帰って行った

ラース「……………」

ラースは下を向いている

マルティナ「どういう事、ラース。グランって?」

ラース「すまない、皆。別に隠してた訳じゃないんだ……………グランという名は捨てたんだ。それで終わりのはずだったんだ。家には、俺一人で行く。皆はそのまま旅を続けてくれ。俺も必ず追いつく」

ラースはゆっくりと下を向いたまま話している

マルティナ「ダメよ」

ラース「マルティナ、どうして……………」

ラーズはマルティナを見る

マルティナ「ラーズ、あなた今自分がどんな顔してるかわかってる？」

ラーズ「え？」

シルビア「あなたとつてもつらそうな顔してるわ。今にも泣き出してしまいそうよ」

マルティナ「あなたにそんな顔をさせる場所に一人でなんて行かせない。私も行くわ」

イレブン「うん、僕もラーズにつらい思いをさせる場所に一人で行かせたくない。僕も行くよ」

シルビア「それじゃあ皆で向かいますよ。その方がラーズちゃんも楽になるんじゃないかしら」

ラーズ「……俺は、あの家には弱い俺がいる。皆に、弱い俺は見せたくない」

ラーズは悔しそうに唇を噛み締めている

ペロニカ「大丈夫よ、ラース。人なんて誰もが弱い所はあるわ。私達はあなたのそんな所を見たって嫌いになんかなりやしないわ」

マルティナ「そうよ、それに皆の前では無理でも、私の前だけでも弱いあなたは出しているのよ。全部受け止めてあげるわ」

セーニヤ「マルティナ様、かつこいいですわ」

ラース「はは、ありがとな。それじゃあ案内する。こつちだ」

ラースは皆を案内するが、歩幅はいつもより小さかった

貴族階層

ラース「この家だ…」

ラースの前には大きな屋敷が立っている

カミュ「ここって貴族の住む場所だぞ。ラースってデルカダールの貴族の生まれだったのか」

ラース「そうなるな…。よし」

ガチャ

ラース「ただいま、帰りました。ラ…：グランです」

??? 「グラン坊っちゃま!!」

玄関を開けると、近くにいたメイドが駆け寄ってきた

ラーズ「あ、ミルさん。ただいま」

ミル「あああ、また生きてグラン坊っちゃまに会えるなんて……。私感激で涙が止まりません。しかも、勇者様のお仲間だなんて。ご立派になられて」

ミルはハンカチで流れる涙を拭っている

ラーズ「俺の部屋、まだある?」

ミル「もちろんでございます。あの日からいつでも帰ってきていいように毎日お掃除していました」

グランの部屋

ラーズ「…… 本当にあの時から何も変わってないや」

そこには簡単な本棚と机、布団しかなかった。

カミュ「…… ここが、お前の部屋? 貴族なのに、こんな的一般宅より何も無いじゃないか」

ミル「皆様、椅子の方になります。申し遅れました。私、この屋敷

でメイドを務めているミルと申します。グラン様は幼少期から、私もお世話させていただいております」

ラーズ「すまない、ミルさん。俺の昔の事、皆に話してくれ。全部話してくれて構わない。俺は、思い出さたく無いんだ」

ラーズは机に伏せてしまった

ミル「わかりました。皆様はどこまでグラン坊っちゃんまの事を知っておられますか？」

マルティナ「私達はラーズがグランって呼ばれてるのはさつき初めて聞いたわ」

ミル「ラーズ？それが今のグラン坊っちゃんまのお名前ですか？」

ベロニカ「ええ、そうよ」

ミル「なるほど、それでは皆様の前では、ラーズ坊っちゃんまと呼ばせていただきますね。ラーズ坊っちゃんまは、このダナー一家の長男として生まれました。ラーズ坊っちゃんまの本名はダナー・グランでございます。」

この家は、ラーズ坊っちゃんまが生まれる前までは祖父のギン様がトップに君臨していたのですが、ご年齢により今のラーズ坊っちゃんまの父である、ジルゴ様がトップになりました」

セーニャ「どうして家にトップというのがあるのですか？」

ミル「この家は、トップに立つ方の言うことは基本的に絶対です。そのため、トップに立つ方は慎重に選ばなければならないのです。ジルゴ様は魔法の腕はとてよいのですが、この家を魔法で支配してしまっただのです」

シルビア「魔法で支配？」

ミル「はい。この家の中では、魔法の力が絶対になりました。魔力を持たざる者に権限などないのです。そんな時にラーズ坊つちやまが生まれました。ラーズ坊つちやまは生まれながらにかなりの魔力を持っており、家族の期待も高かったのです。そのせいか、ジルゴ様は4歳の頃からラーズ坊つちやまに魔法の勉強をさせました」

ベロニカ「4歳!?!いくらなんでも早すぎよ。字だってそこまで読めないのに、魔導書なんて読めるわけないわよ！」

ミル「しかし、ジルゴ様はラーズ坊つちやまにここが読めなければ今日のご飯はないと仰り、ラーズ坊つちやまは必死に読もうとするのですが、当たり前ですが読めないのです。そうして、ジルゴ様は本当にラーズ坊つちやまのご飯を無くしてしまうのです」

セーニヤ「そんな… 読めないものを読ませた上でそんな罰まで」

ミル「それだけ、ジルゴ様の期待は大きかったです。ですが、ラー
ス坊つちやまは一向に魔法が上達せず半年が経ち、弟であるクリフ様
が生まれました。

そのクリフ様が4歳になる頃、ラース坊つちやまは8歳。その頃に
はメラを使えるようになっていました。ですが、クリフ様はわずか4
歳にしてメラを使えたのです」

ベロニカ「どうして!?! 4歳じゃあまともに魔導書を読むこともでき
ないわ」

ミル「才能だったのでしょう。まるでわかっているかのように炎を
出せたのです。それを知ったジルゴ様は、クリフ様の指導に夢中にな
りました。

そしていつからかラース坊つちやまは相手にされなくなり、名前を
呼ばれなくなり、さらにはゴミ、クズなどと呼ばれて過ごしていまし
た」

ロウ「自分の息子になんて言葉を…」

ミル「居場所がなくなったラース坊つちやまは、祖父のギン様のも
とへよく訪れていました。そこで、ギン様に魔法や人の心について教
わっております。ギン様はクリフ様よりもラース坊つちやまの事

を大変気に入り、可愛がっておりました。

9歳になる頃、ラース坊っちやまにまともな食事は与えられず、別の部屋の隅で、椅子に僅かなご飯と、骨しかないような魚と、具がないスープをのせ、冷えた状態で食べておりました。そんな食事でさえ与えられない日も珍しくなかったようです。私達は、どんどん痩せていくラース坊っちやまを見ていられず、自分達の食事を少し隠れながら分けてあげていたのです」

マルティナ「許せない……」

ミル「そして、10歳になりラース坊っちやまはメラとイオを使いこなせるようになりました。しかし、ギン様と私以外、それを知る者はいませんでした。」

そんなある日、ご家族でダーハル―ネへ行くことになりました。私やギン様は家に残り、ラース坊っちやまは旅行へ行かれました。しかしその数日後、帰ってくるとラース坊っちやまの姿はありませんでした。

話を聞いてみても死んだ、としか返してくれず。その日からラース坊っちやまは帰ってこなくなったのです」

グレイグ「その日に何かがあつたという事が……。しかし、酷い親だ。我が子に対してなんたる仕打ちを」

ラースは起き上がった

ラース「……全部話したみたいだな。ここからは俺の話だ。旅行に行った日、俺は馬車の中の隅っこに座って、視界の邪魔にならないように小さくなっていったんだ。どれだけ馬鹿にされたって構わなかったさ。」

ただ、その馬車が魔物に襲われ、乗っていた馬車が2つに割れたんだ。魔物の方に落ちていきそうな方にはクリフが乗っていた。それを見た父上は俺とクリフを掴み、入れ替えたんだ。俺はもちろん魔物の群れの中に落ちた。

そして、お前などいなくても誰も困らない！いい気味だと言い残し、馬車で置いて行っただ。俺は、そこで捨てられたのさ。

俺は魔物に囲まれて、イオとメラで対抗しても、たかが子どもの魔法。一瞬でポロボロさ。俺は血だらけになり腕も折れて、自分の血の中で体温が下がっていくのを感じ、どんどん眠くなっていったんだ」

ロウ「それは……もう死ぬ手前じゃ」

ラース「だけどその時、騒ぎを聞いたじいちゃんが来て、俺に回復魔法を使ってギリギリ命をつなぎ止めたんだ。じいちゃんは格闘技と魔法で魔物を倒して、俺を担ぎ、ガラツシュの村まで連れて帰ったんだ。」

そこで初めて貰って食べたパンが旨くてな。今思うと何でもないただのパンだったんだが、暖かくて、優しくて初めてあんな物を食べた。今でもはつきりと覚えている。その後、帰れないならこの村にわしの息子として住まないか？と誘われて、俺はガラツシュの村に住む事になったんだ」

ミル「ラース坊っちやまはガラツシユの村?という場所で、この様に遅しく育ったのですね」

ラース「そういえば、お爺さまはお元気ですか?」

ミル「ギン様は...一昨年亡くなられました。ギン様は最後まで、ラース坊っちやまの事を心配していましたよ」

ラース「...そうだったのか、わかった」

ベロニカ「それにしても!ラースの親って何てやつなの!私許せないわ!さっき初めて会った時も嫌な感じしたのよ。まるで決定したかの様な感じできー!」

セーニヤ「ラース様の事もお前やこれ呼ばわりしていましたね。私もいい印象は受けませんでした」

イレブン「でも、どうして急に連れ戻そうとしてるの?」

ミル「おそろく、ラース坊っちやまが生きていて、さらに世界を救った勇者様の仲間だと知った日に、家族で話し合いをされたのでしよう。先日の集まりで、グラン様のお金やこの家の知名度を上げる話を

しておりました。ラーズ坊っちやまのお金さえあれば、おそらく本人は用済みとされると思いますが」

シルビア「許せない、まるで物みたいな扱いだわ。ラーズちゃんはこんなにもいい子なのに」

94. 決別

ラーズ「俺はこの家にはもう帰ってこないものだと決めていたんだがな。運命って不思議だな」

カミュ「なあ皆、これ見ろよ。このペン、血がベツトリついてやがる」

ラーズの側に置いてあるペンをカミュが持っていた

ミル「あ、そんな所にまでついていたんですか。その机はラーズ坊っちゃん血が酷くて、取るのには苦労したのですが、ペンにまで付いていましたか」

イレブン「血が出るほど努力したのに、誰にも見られなかったのか」

セーニャ「ラーズ様にとってこの家は、ほぼ全てが忌まわしい記憶なのかもしれませんね」

コンコン

ジルゴ「グラン、入るぞ。おや、勇者様方もいらっしやったのですか。どうぞこゆっくり。グラン、貴様生きているとは思わなかったが、ここに帰ってきたという事はわかっているな?」

ラーズ「…… もう少ししたら稽古の時間です」

ジルゴ「そうだ、覚えているじゃないか。あんなに言っても魔法は覚えられなかったくせに。まあ、いい。練習場に来い。私が直々にどれだけ強くなったのか、見てやろう。まあ、この私に叶うわけがないのだがな。昔のようにおもちゃにしてやろう」

ラーズ「準備します」

バタン！

マルティナ「あいつがラーズの父親…… 完全に見下してるわね」

ラーズ「すまない、ベロニカ、セーニヤ、シルビア、マルティナ。後ろを向いていてくれ。上を脱いで着替えるから」

ラーズは椅子にかかっている服を着ようとしていた

3人「わかったわ」

シルビア「あらん、ラーズちゃん。アタシも入れてくれるのね、そういうところ好きよ」

ラーズ「…… もう大丈夫だ」

セーニヤ「あら？その服、不思議な感じがしますわね。何か魔法でもかかっているんでしょうか」

ミル「はい。こちらは来た者の魔力を下げる魔法がかかっておりま
す」

ロウ「何と！そんなものを来て幼いころは練習していたのか」

ミル「はい、ジルゴ様がこれ以外着るものはないと言われて」

マルティナ「ラース大丈夫？」

ラース「ああ、問題ない。練習場に案内する。ミルさんも離れた所
で皆と見ていてくれ」

ミル「わかりました。どうかお気をつけを」

練習場

ジルゴ「ふん、体は立派になったな。だが、この家では何の意味も
持たない。魔法が出来なければ結局は全て意味はないのだ」

ラース「……」

ジルゴ「それでは始めよう。メラゾーマ！」

レースに向かって炎の塊が飛んでくる

レース「……………」

レースは避けずにそのまま立っている

メラゾーマがレースに向かってくるが、レースに当たる直前で消えた

ミル「避けないのですか、グラン坊っちゃま！」

ベロニカ「違うわ、ミルさん。あいつ今、当たる少し前にバギマでメラゾーマを消し去ったわ」

ミル「え？いつの間にそんな事を」

ロウ「ほぼ動かずにやったのう。流石じゃ、魔法のコントロールではパーティー内一番じゃからな」

ミル「あのグラン坊っちゃまが、そんなに強く…… ああ、ギン様、見ていられますか？」

ミルはまたハンカチで涙を拭っている

ジルゴ「今何が起きた？ベギラゴン！」

ラーズの全方位が炎に包み込まれる

ラーズ「……………」

ラーズは動かない

カミュ「今全方位にジバリアを使ったな」

ジルゴ「マヒヤド！」

ラーズの頭上に大きな氷の塊が落ちてくる

ラーズ「……………」

ラーズは動かない

イレブン「今メラミ一発で消したね」

ミル「よ、よく皆様、わかりますね。流石勇者様です」

ロウ「指で発射しておるからのう。詠唱時間も普通より少ないから、集中してみないとむしろわからんわい」

ジルゴ「くっ……バキクロス！」

ラーズの周囲に竜巻が発生する

ラーズ「……………」

ラーズは動かない

シルビア「バキクロスを打って相殺したわね」

ジルゴ「何故私の魔法が効かぬ！その服を来て何故！」

ジルゴは自分の魔法が効いていない事に憤りを隠しきれない

母「お父様！ゴミはきつと不正をしますわ！」

クリフ「そうだよ、父上！ゴミがこんなに強いわけない！」

それを見ているラーズの母と弟も大きな声で反対の声をあげている

ラーズ「……………」ザツザツザツ

ラーズはジルゴに近づいていく

ジルゴ「こ、こつちに来るな！お前などこの家にいらなんだ。消えろ！邪魔だ！失せろ！お前らは悪魔の子だったんだろうが！グラ
ン共々きつと魔物に魂を売った連中どもだな！」

ジルゴはラーズに恐怖を感じ、壁に下がっていく

ラーズはジルゴの目の前まで来た

ラーズ「父上。母上。私をこの世界に産んでくださった事は大変感謝しております。ですが、それ以外の感情はあなた方に持ち合わせておりません。私の事はどれだけ罵ろうとかまいません。しかし、

仲間達の事を馬鹿にするのは絶対に許しません!!」

ラーズはそう叫ぶと同時に横方向に全力でバキクロスを発動し、ジルゴは声を上げる暇もなく、吹っ飛んでいった

ジルゴは壁を突き破り、動かなくなった

母「あ、ああ、うそ…。」

ラーズ「母上、クリフ、見ていましたね？私はトップを倒したのであなた方に命令します。

二度と俺と関わるな。お前らは俺の視界にいるだけで不愉快だ。そして、グランと呼ぶな。俺はじいちゃんからもらった大切な名前がある。

俺は、ガラツシユの村のラーズ!!二度とグランなどと呼ばないように」

そう言うと、ラーズは着ていた服を破り捨てた

ラーズ「お前らとは決別だ！」

グランの部屋

ガチャ！

カミュ「おい、ラーズ！ かつこよかつたぜ！」

ベロニカ「本当よ！ 私、あの男が吹っ飛んで行った時スカツとしたわ！ って！ 早く服を着なさい！」

ラーズ「いや、いきなり入ってきたのはそっちだろうが」

その後

ミル「うう、ううっ…… グラ…… ラース坊っちやま。 やはり行ってしまうのですね」

玄関前ではミルが見送りにきていた

ラーズ「うん、ごめんね、ミルさん。 あとミルさんは俺の事、グランって呼んでも大丈夫だ。 ミルさんもここじゃないとここでメイドやってもいいんじゃないか？」

ミル「ありがとうございます、グラン坊っちやま。 ですが、この場所にはグラン坊っちやまとの思い出やギン様との思い出もあります。 私はここで最後まで働き続けます。 それと、こちらをお持ちください」

い」

ミルはラースに厚い本を渡した

ラース「これは…？本？」

ミル「ギン様から、グラン様への贈り物です。フォースの秘伝書と聞いております。心の強さや優しさを力にするものらしいです。ギン様はグラン様ならこれを使えるはずだったと仰っております。どうか、これからの旅にお役立てください」

ラース「フォース…。ありがとう、ミルさん。俺、負けねえよ」

ミル「はい。このメイド、ミルは勇者様方々を、そしてラース様をいつも応援しております。どうか、頑張ってください」

ミルはイレブン達に深く頭を下げている

イレブン「はい、色々ありがとうございました」

デルカダール城下町 広場

ラース「皆！色々迷惑かけてすまなかった！」

ラースは頭を下げている

グレイグ「いや、何も迷惑などかかっていない。ラースはあの家にいた自分を弱いと言ったが、お前はあの苛烈な環境の中でも決して諦

めなかつた。俺なら諦めてしまうような環境でも、挫けずにいたお前を俺は尊敬する。ラーズは決して弱くない」

マルティナ「そうよ。それに、あの家は確かに私も帰りたくないわね」

ラーズ「……ただ、俺はマルティナやグレイグが愛しているこの街を俺は同じ目で見る事はできない。どうしてもこの街はその記憶が蘇ってきてしまうからな。一緒にいるのに申し訳ない」

マルティナ「そんなの気にしないで。一緒にいるからって同じ考えを持ってなんて絶対言わないわ。人の考えなんて人それぞれ。たくさんあるからこそ、私達は私達らしくいれるのよ」

ロウ「姫よ、いい事を言うではないか」

シルビア「そうよ、マルティナちゃん。今の一言、すっごくよかつたわ！」

マルティナ「そ、そうかしら？思ったままを言っただけなのに」

ラーズ「ははは！ありがとな、マルティナ！少し元気出てきたみたいだ。皆、これからも俺は強くなる。邪神にだって俺は絶対負けねえ！これからもよろしくな！」

95. フォースとは

デルカコスタ地方 キャンプ場

ラーズはミルから貰った本と睨み合っている

ラーズ「あああ！上手くいかねえな！」

ラーズは頭をかいている

イレブン「ラーズ、大丈夫？」

マルティナ「だいぶ参ってるみたいね。フォースって難しいのかしら」

シルビア「どういう力なの？」

ラーズ「簡単にいうと、属性を味方に付与するんだ。例えばファイアフォースなら味方の剣でも蹴りでも、炎の力を纏わせる事ができるんだ」

イレブン「なるほど。じゃあメラが弱点の相手にはファイアフォースを使うのがいいんだね」

ラーズ「そうそう、そういう使い方だ。他にも、アイスフォース、ストームフォース、ライトフォース、ダークフォースがあるんだ」

グレイグ「つまり全部使えば、どんな敵にも弱点で攻撃できるという事か。素晴らしい力だな」

ロウ「それで、ラーズは何に困っておるんじや?」

ラーズ「いや、一人にその力を使うことはもうできるんだ。ただ、仲間全体にフォースの力をかける事ができるのに、それが俺にはできなくてな。仲間を助けたっていう心がコツらしいが、そんなもんだから前に思ってるんだがな...」

セーニヤ「ラーズ様、サラリとカツコいいこと仰りましたわ」

カミュ「焦んなくてもいいんじゃないか?急にやれなんてそりや無理な話だろ」

ベロニカ「そうよ、ただでさえ新しい力に戸惑ってるっていうのに」

シルビア「まあ頑張り屋さんなのはいいことだけど、ラーズちゃん、大事なことを忘れてるわよ?」

ラーズ「ん?何がだ?」

シルビア「今日の料理当番はあなたという事よ」

ラーズ「げ!?マジか!忘れてた!すまねえ、皆!もう少し待っててくれ。今から作る!」

ラーズは大慌てで本を閉じて準備を始める

マルティナ「ラーズ、私も手伝うわよ」

ラーズ「ありがとな、マルティナ。頼んでもいいか?」

マルティナ「任せてちょうだい」

グレイグ「むう…」

セーニヤ「グレイグ様、どうかなさいましたか?」

グレイグ「セーニヤか、いや、姫様とラーズはいつもあんな感じなのかと思ってな」

セーニヤ「ラーズ様とマルティナ様ですか?いつもあんな感じですか。どちらも仲良しで、お互いの事を大切に思ってるのが伝わってくるようで羨ましいですわ」

グレイグ「うむ、ならばいいのだが」

その時、遠くから魔物が全員のいるところに穴を作り出した

全員「うわあああ！」

その穴に皆吸い込まれていった

謎の世界

ラーズ「う、うう……ここはどこだ？とりあえず、マルティナ、グレイグ、セーニヤ、起きろ」

マルティナ「あ、ラーズ。ここは？」

ラーズ「わからない。俺も目を覚ましたらここだった」

グレイグ「う、何だ？ここは」

セーニヤ「不思議な場所ですわ。他の方達はどこに？」

ラーズ「わからない、とりあえず皆を探さないといけないな。先に進んでみよう」

奥地

グレイグ「何かいるぞ、あれは魔物か？」

機械「ピピピピ、標的確認。メラで十分なダメージを与えて私を倒せ」

セーニャ「ど、どういう事ですか？」

機械「攻撃モード開始」

そういうと、機械は飛びかかってきた

マルティナ「な！急に襲ってきたわ！」

機械「ミサイル！」

機械からはミサイルが次々と飛んでくる

グレイグ「くっ！大人しくさせるしかなさそうだ」

ラーズ「メラでとか言ってたな！これでも食らえ！メラゾーマ！」

機械「不足！不足！とびかかり！」

機械は思いっきりぶつかってきた

セーニヤ「きゃあ!」

マルティナ「メラゾーマじゃ足りないの? ラース、今こそファイアフォースよ!」

ラース「そうだな! マルティナ、ファイアフォース!」

マルティナに炎の力が纏った

マルティナ「ばくれつきやく!」

機械「不足! 不足!」

グレイグ「セーニヤ、平気か? ベホイムだ」

セーニヤ「ありがとうございます、グレイグ様。転んでしまいました
て」

機械「レーザービーム!」

機械の目のような部分からレーザーが全員に撃ち込まれる

ラース「メラゾーマ!」

マルティナ「ぼくれつきやく！」

機械「不足」回転しながら突っ込んできた

グレイグ「鉄甲斬！」

セーニャ「ベホマラー！」

ラーズ「皆に！ファイアフォース！」

しかし、炎の力はグレイグにしかいかなかった

グレイグ「だめだ、ラーズ。俺にしかきていない」

マルティナ「ぼくれつきやく！」

機械「????」

マルティナ「駄目ね、炎以外は受け付けていないみたい」

機械は突っ込んできた

マルティナ「きゃあ！」

マルティナは転んでしまった

ラース「マルティナ！くそっ！」

グレイグ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力がさらに一段階上がった

ラース「もう好き勝手させるか!!」ゾーンに入った！ちから、すばやさ、呪文の威力があがった

ラース「ファイアフォース！」

全員が炎の力を纏うようになった

セーニャ「！成功ですわ、ラース様！」

ラース「なるほど、この感覚か。よし！メラゾーマ！」

マルティナ「ばくれつきやく！」

グレイグ「蒼天魔斬！」

セーニヤ「さみだれ突き！」

機械「メラオーバー」ジュワー

機械は消え去った

ラース「はあ、何とかなった」

マルティナ「目の前の壁も消えたわね。あ！奥で戦ってるのイレブン達よ！同じ機械と戦ってるわ！」

壁があつた先ではイレブンの姿が見える

グレイグ「俺達も救援に急ぐぞ」

機械「ヒヤド不足」

ロウ「ぬう、これでも駄目かの」

カミュ「だああ！うざってえ！何なんだよ、こいつは！」

ベロニカ「ヒヤドは今私とおじいちゃんしか使えない。でもそれじゃ足りないって言われる。どうしよう……」

シルビア「ハッスルダンスよく、そろれ！」

全員が回復した

ラーズ「皆、救援に來たぜ！」

イレブン「あ！ラーズ！この機械ヒヤドで倒さないと無理みたいで、どうしよう」

ラーズ「任せろ！アイスフォース！」

全員が氷の力を纏うようになった

カミュ「!?これは、俺のブーメランが氷属性に」

ロウ「おお！これがフォースの力！出来るようになったのか！皆、行くぞ！」

その後

シルビア「やったわ！機械ちゃん、撃破よく」

グレイグ「む？段々眩しくなってきた」

光がなくなると、元のキャンプ場にいた

イレブン「あ、戻ってきた」

マルティナ「今のは何だったのかしら」

セーニャ「不思議な体験でしたわね」

ラーズ「だが、これで俺はフォースが使えるようになった。また作戦の幅が広がるな」

ラーズはファイアフォース、アイスフォース、ストームフォース、ライトフォース、ダークフォースを仲間全体にできるようになった

次回から原作に戻ります

96. 苗木

グレイグ「苗木についての情報を集めるなら、やはり神の民に聞いてみるのが早いのではないか？」

イレブン「あ！そうだね。グレイグ、ありがとう。早速いってみよう」

神の民の里

ラース「それじゃあ3人ずつで散らばって聞いてみるか。30分くらいしたらまたこの神殿前に集まろう」

ベロニカ「そうね。色んな神の民達に聞いて回りましょう」

その後

ラース「すみません、地上の何処かにある苗木について何か知りませんか？」

グレイグ「太陽の神殿にある苗木と同じようなやつなんだが」

神の民「ああ、それなら昔に見た事あるよ。修行者がたくさんいる場所の入り口だったなあ」

マルティナ「ドウルダ郷の事ね。教えてくれてありがとう」

ラーズ「早速情報もらえたな。もう少し聞いて回ろうか」

30分後

イレブン「僕達はわからなかったよ。ごめんね」

ベロニカ「私達はダーハラ湿原の断崖絶壁にあるって情報があったわ。ケトスに乗れば行けるんじゃないかしら」

ラーズ「俺達はドウルダ郷の入り口にあると聞いたな」

マルティナ「それと、バンデルフォン地方の絶壁にあるとも聞いたわ。ここにもケトスで行ってみましょう」

イレブン「3本全部情報が出たね。最初からここで聞けばよかったよ、ごめんね」

シルビア「気にする事ないわよ、イレブンちゃん。それじゃあ、まずはドウルダ郷に行ってみましょう」

ドウルダ郷

ドウルダ郷の入り口には小さな苗木があった

イレブン「あ、これの事だね。早速見てみよう」

イレブンは苗木に手をかざした

そこには火山のある場所で先代の勇者達が、勇者の剣を作っている
光景だった

ラーズ「今、皆に見えていたよな」

セーニャ「イレブン様と同じ場所に痣がある方がいらっしやいました。もしやあの方は……」

ロウ「うむ、あのお方こそ我らの祖先。伝説の勇者ローシユ様に違いない。勇者の剣が完成するのが見えたが、勇者の星に何があったのかわからんな」

カミュ「他の苗木を調べた方がよさそうだな」

ロウ「じゃがイレブン。折角ここに来たんじゃ。お主もここでわしの師匠に会うといい」

イレブン「あ、そっか。ニマ大師は生きているもんね」うん、わかった」

ドウルダ郷 大修練場

ニマ「ユグノアの王子イレブンよ。ドウルダ郷へよくぞ参られました。私は郷の大師を務めるニマと申します。

我らドウルダの僧一同、古き誓約の元、あなたを弟子として迎え入れ、心身共に健やかに育てる事を誓います」

仲間達「！」

イレブンとロウ以外はイレブンがユグノアの王子である事を知っている事に驚いている

ニマ「いきなりで驚いたかい？ 堅苦しいのはここまでにして、まずはわけを話そうか。ドウルダは古来よりユグノアと縁のある郷。ユグノアの王家に産まれた男児は幼子の6年間、郷に修行に出されるといふ掟があるんだ。

ユグノアの王子として産まれたあなたは、本来この郷に修行に出されてあたいに師事するはずだったんだよ。ユグノアが滅び、それは叶わなかったけど、あたいた達ドウルダの民は16年間あなたが来るのを待ち続けてたってわけさ」

ロウ「お久しぶりです、大師様。今まで顔を出さず、申し訳ありませんでした」

ロウはニマに礼をしている

ニマ「本当に久しぶりだねえ。ユグノアが滅びてから心配してたけど、元気そうでよかったよ」

イレブン「生きてる大師様だ、こんな感じだったのか」

ニマ「何だい？死人でも見るような顔して。でも不思議だね、あんたとは初めて会った気がしないんだ。どこか遠い世界で会ったことがあるような。

おっと、話がそれたね。空に現れたあの黒い太陽。あれから邪悪な気をビンビン感じるよ。あれはタダモノじゃないね。あんた達は、あの黒い太陽に挑むんだろ？そうくると思っ、あたいが特別な修行を用意しといたよ」

ロウ「大師様！私はこの16年間自らに禁欲を課し、修行してまいりました。その成果、今こそ見せてやりますぞ！」

ラース「(じいさんが禁欲？いつ?)」

ニマ「ふふ、あんたも見ないうちに少しは成長したみたいだね」

ロウ「はっ！ほっ！やああ！」

ロウは様々な構えを取って動かしてみせている

ビリッ！

背中の袋が破れ、中からムフフな本が出てきて、風で中身が見えた

ラーズ「おっと、悪いな、セーニヤ」

ラーズは両手でセーニヤの目を塞いだ

セーニヤ「ラーズ様？どうされたのですか？何も見えませんわ」

イレブン「何だろう、あれ？」

グレイグ「(な!?!この中身は、あの伝説の...)」

他の周りからは、凍えるような視線がロウに突き刺さっていた

ニマ「前言撤回。やっぱりあんたは何も変わってないみたいだね。久しぶりに、特大の一発をお見舞いするよ！ハア！」

バチーン！アヒヤヒヤ〜！

ニマのお尻叩き棒により、ロウは気絶させられた

シルビア「まったくもう！ロウちゃんったら！ラーズちゃん、あれはもうしまったわよ」

ラーズ「ふう、急に悪かったな、セーニヤ」

セーニヤ「いえ、平気でしたわ。まあ！ロウ様！どうされたのです

か？」

セーニヤはいきなり口ウが気絶している事に驚いている

ペロニカ「セーニヤ、何も気にしなくて大丈夫よ。それとラーズ、ナイスよ」

ペロニカはラーズにグツと指でサインをしている

ラーズ「本来なら女性陣全員塞いだ方がいいんだが、俺の手は2本しかないし、近くにはセーニヤしかいなかったからな。すまなかったな」

マルティナ「まあ、私達はセーニヤよりは平気よ」

ラーズ「それならいいが、グレイグ？少しいいか？」

グレイグ「な、何だ？ラーズ」

グレイグはラーズに呼ばれ、少しビクツとしていた

ラーズ「お前だけやたらと中身を熱心に見てたな。目まで見開いてよ。はしたないから、そういう事はやめておけよ」

グレイグ「ぐっ……。す、すまなかった」

カミュ「まったく、おっさんまで興味あったのかよ」

グレイグ「だ、だがあれは！ムフフ本の中でも最高と名高いピチピチ☆バニーちゃんだったのだ！見てしまうのも仕方ないであろう！」

一部の仲間達からは、睨むような視線がグレイグに向けられる

グレイグ「はっ！今俺の言ったことは忘れてくれ」

ラース「なあ、ベロニカ。今すぐにこいつも燃やしたほうがいいと思わないか？」

ベロニカ「そうね。同感だね、ラース」

シルビア「ラースちゃん！ベロニカちゃん！やっちゃいなさい！」

ラースとベロニカは呪文を唱え始める

グレイグ「ま、待て、ラース！ベロニカ！落ち着いてくれ!!俺は、俺は！悪くない!!」

2人「メラゾーマ！」

その後、気を失ったロウと黒く焦げたグレイグがドウルダのベッドに寝かされていた

97. 苗木2

ダーハラ湿原 北西の高台

ラーズ「こんな所、人が来れないってのに人が通れるようになってるな」

カミュ「先代の勇者達が開いたのかもしれないねえな」

イレブン「あ、あの奥に苗木があるよ。見てみよう」

イレブンは苗木に手をかざした

そこにはセニカが笛を吹き、ローシユが勇者の剣を掲げると、光を出しケトスはその光によりパワーアップしている光景があった

カミュ「おいおい、ケトスのやつ随分立派な姿になってたじゃねえか」

グレイグ「あのケトスが邪神討伐の鍵になるのだろうか？」

マルティナ「考えていても仕方ないわ、次の苗木も見に行きましょう」

バンデルフォン地方 北東の高台

セーニヤ「ここも先程と同じで、人が通れるようになってますわね」

ロウ「各地にこのような場所があるようじゃな。何か関係があるんじゃないろうか」

マルティナ「あ！イレブン、あそこに苗木があったわ」

イレブン「ありがとう、マルティナ。これで最後だね。見てみよう」

イレブンは苗木に手をかざした

そこには先程のパワーアップしたケトスに乗り、黒い太陽をケトスが破りニズゼルフアと戦う光景があった

セーニヤ「見えましたわ、ケトスが黒い太陽に向かっていく姿が」

ペロニカ「ケトスの角で黒い太陽を壊してたわね」

ラーズ「ただ、今のケトスに角なんてねえもんな。どうしたもんかな」

その時、背後から誰かが話しかけてきた

??? 「勇者よ、お困りのようじゃな」

そこには預言者がいた

カミュ「な、あんた！いつの間に」

「預言者「ケトスを覚醒させるには、賢者セニカの方が必要となる。彼女の行方を知るために、もう一つの記憶を読み解くとしよう」

ベロニカ「もう一つですって？聖なる苗木は全部調べたわよ？」

預言者「ベロニカよ、こちらへ」

ベロニカ「なによ？」

ベロニカは預言者の近くにくる

預言者「お主の今の姿、本来あるべき姿ではないな？」

ベロニカ「!?どうしてその事を」

預言者「これをつけるとよい」

預言者はネックレスを取り出した

ベロニカがつけると、ネックレスは光り出した

光がなくなると

全員「!？」

シルビア「べ、ベロニカちゃん？」

ロウ「こいつはたまげたのう」

ベロニカ「戻れたわ！」

大人の姿に戻ったベロニカがいた

預言者「セーニヤよ、ベロニカのもとへ。お主らは、勇者の導き手となる運命の双子。二人が力を合わせて心より願えば奇跡も起きよう。だが、ベロニカが子どもの姿ではダメなのだ」

セーニヤ「預言者様、あなたは一体……」

ラーズ「」ボソツ。おい、カミュ」コツ

ラーズは呆然としているカミュを小突く

カミュ「はっ！な、何だよ、ラーズ」

ラーズ「……いや、別に？ポーツとしてたからな」

預言者「さあ、運命の双子よ、祈るのだ。全ての真実を明らかにするために」

二人が祈ると、二人は白い光で覆われ光は段々と木の形になっていった

グレイグ「な!?何という事だ」

カミュ「二人が木になっちまった」

預言者「勇者よ、導きの木に手をかざすのだ」

イレブン「わかった」

イレブンは導きの木に手をかざした

そこにはニズゼルフアにトドメを刺そうとするローシユがいた
しかし

グサ!

ローシユ「ぐっ…なぜだ…ウラノス」ドサ

ローシユはウラノスの剣に心臓を刺され、倒れてしまう

ウラノスは邪神の目の前に来ると、邪神から力を吸い取った

ウラノス「魔力がみなぎってくる。これが邪神の力か」シユン！

ウラノスはいなくなり、セニカとネルセンが到着する頃には、ローシユは息絶えていた

ロウ「何という事じゃ。これがかつて起きた真実だというのか」

グレイグ「仲間であるウラノスに裏切られ、ローシユが命を落としていたとは」

シルビア「伝説の勇者が、まさかこんな最期を迎えていたなんて」

預言者「導きの木の光はまだ消えておらん。イレブンよ、もう一度手をかぎすのじゃ」

イレブンは導きの木に手をかぎした

先程の続きの光景が浮かんだ

神の民達とセニカとネルセンは、封印した邪神の肉体を浮かべようとしていた

ネルセン「勇者の剣の力でなければ、邪神の体を完全に消滅させるのは無理だ」

イゴルタブ「だがローシユなき今、勇者の剣を扱える者はおらん。滅ぼせないなら、せめて封印するしかあるまい。賢者セニカよ、頼む

ぞ」

セニカ「これより、封印した邪神の肉体を地上より遙か彼方の空に閉じ込めます。皆様の力をお貸しください」

皆で魔法陣を作り、勇者の星にし、空に飛ばしていった

ネルセン「これからどうするんだ？」

セニカ「勇者の剣をあるべき場所へ……命の大樹へ返しにいきま
す。その後は……旅に出ます。もう一度、あの人に会うために」

その後、セニカが勇者の剣を命の大樹に返した後、古代図書館で探
し物をして、勇者の剣をもって忘却の塔へ向かった。

セニカ「これが、時のオーブ。これさえ壊せば……。ハア！」

ガキン！

オーブは壊れずに、剣が折れてしまった

セニカ「そんな……。私にはその力が無いというの？」ドサ

セニカ「も……。う一度……。あなたに、会いたかった……。」

倒れたセニカの周りにヨツチ族が集まる

そして、セニカは時の番人の姿になった

マルティナ「何て悲しい結末なのかしら」

ラース「俺達が勇者の星だと思っていたものは、邪神の肉体だったんだな」

導きの木は形を無くして、セーニャとベロニカに戻った

ロウ「二人とも、よくぞ勇者を導くという使命を果たしてくれたな」

セーニャ「私達にも見えていました。まさかセニカ様があのようなお姿になっていたなんて」

預言者「そうじゃ。邪神を倒す鍵である賢者セニカは姿を変え、今もあの塔で生きておる」

カミュ「なあ、預言者さんよ。不思議に思ってたんだが、あんたはなぜそんな昔の事を知っているんだ？」

ラース「そうだよな。そこも気になるし、姿がコロコロ変わるのも古代魔法モシヤスだとしても、本当の姿も気になる」

預言者「ふむ、それではわしの本当の姿を見せよう」

姿が変わると、そこには

カミュ「お、お前は！」

そこにいたのは、先程の光景にも出てきたウラノスの姿だった

ウラノス「そう。わしはウラノス。伝説の勇者ローシユの仲間じゃ。ローシユが邪神にトドメを刺そうとしたその時、わしの頭の中に声がよぎった。

ローシユを殺せ。さすれば力をやろうと。

わしは心を奮い立たせ、甘言に抗おうとしたが……気づけばローシユを殺していた。邪神の力を吸い取り、悪に染まったわしはウルノーガとなったのじゃ。

だが、ウルノーガの心には善なる心が僅かに残っていてな、もう一人のわしが生まれたのじゃ。ウルノーガが倒された今、最後の預言を授ける。

時の賢者は命の大樹の北にて、勇者の訪れを待つ。神の民の力を借り、かの地を目指せ

イレブンよ、どうか邪神を討ち果たし、この長き戦いに終止符を打ってくれ」

そう言うと、ウラノスは消えていった

カミュ「行こうぜ、イレブン。俺達に止まってる時間はねえ。まずは神の民に会いに行こう」

イレブン「そうだね、行こう！」

98. ケトス覚醒

神の民の里

神の民「お帰りなさいませ、勇者様。聖なる苗木から何かわかりましたか？」

イゴルタブ「懐かしい匂いがするのう、この匂いはウラノスか。お主らはウラノスに会ったと見える。一体何があったのじゃ」

イレブンは今まで見た光景を伝えた

イゴルタブ「もしやと思っておったが、やはりそういう事じゃったか。ウラノスはロトゼタシア随一の魔力を誇る天才であったが、あやつ心の中には確かに危ういものがあつたからのう。

己の魔力を高める事だけに執着し、そのためには手段を選ばぬ。そんな男であつた。それはそうと、お主らはセニカに会いに行くんじやろう？ならば、これを持っていくがよい」

イレブンは神秘の歯車をてに入れた

イレブン「ありがとうございます、長老様」

イゴルタブ「セニカに、よろしくのう」スピー、スピー

ラーズ「また寝ちまったな。まあ、命の大樹の北にある塔つてのに行ってみようぜ」

忘却の塔

入り口には歯車の形をしている穴があった

イレブンはそこに神秘の歯車をいれた

ロウ「おお、道が開かれたぞい。この先に賢者セニカがおるのか。先に進むぞい」

時の祭壇

時の番人が立っていた

セーニヤ「あなたがセニカ様なのですね」

番人「セニカとは誰でしょう。何か私に用ですか？」

ベロニカ「邪神が目覚めてしまったの。世界を救うために力を貸して」

番人「世界を救う……？」

ベロニカ「思い出して、セニカ様。これはセニカ様の笛よ」

ベロニカは自分の持っている笛を見せる

番人「ああ、この笛の事はかすかに覚えていますが、私の記憶の中の笛はもつと力に溢れていました」

番人がそう言い、笛に手をかざすと、笛は光り始めた

番人「この笛で奏でる音色は一つ。聖地に伝わる目覚めの調べ」

セーニヤ「お姉様、もしかして…」

ペロニカ「ええ、あの曲ね」

二人「時はきたれり。今こそ目覚めるとき」

番人「大空はおまえのもの」

三人「舞い上がれ、空高く」

♪

セーニヤとペロニカが演奏を始める

辺りから、光が勇者の剣に集まっていく

イレブン「そういう事か。よし、ハアツ！」

イレブンが剣を掲げるとその光は真っ直ぐ上にいき、ケトスに当た

り、ケトスは光の鎧に包まれ、角が生えた

そして、イレブン達はケトスの背中にワープしていた

シルビア「すごい！聖なる苗木で見た時と同じだわ。これが覚醒したケトスちゃんなのね」

ケトス「私はケトス。かつて勇者ローシユを背に乗せ、邪神ニズゼルフアと戦いました」

ラース「今のはケトスの声なのか？」

マルティナ「他にも何か話そうとしているわ」

ケトス「邪神ニズゼルフアの強さは想像を絶するでしょう。バンデルフォンの地下迷宮。ローシユの仲間ネルセンが遺した試練に挑み、邪神に負けない強さを身につけるのです。」

我が心、ローシユと共に。私の力があれば、結界を打ち破る事ができるでしょう」

ロウ「バンデルフォンの地下迷宮か。確かに、邪神と戦う前に準備をしておいた方がよいな」

カミュ「いきなり仕掛けても勝ち目はないって事か。今は力をつけ

ようぜ、イレブン」

バンデルフォンの地下迷宮

試練の里への道

ラース「な、何だここ。いきなりどこに飛ばされたんだ？」

ベロニカ「何だか見た事ある場所ね。でも雰囲気は全く違うわ」

カミュ「魔物もやたらと凶暴みてえだな。気をつけていくぞ」

試練の里

スライム「ここは英雄王ネルセン様が、迷宮に挑む人のために作った試練の里だよ。ここに来るまでに疲れたでしょ？休んでいってね」

安らぎの神殿

神の民「よくここまでいらっしやいました、勇者様。ですが、ここで終わりではありません。周囲にある三つの苗木。勇者があれに手をかざせば、迷宮のさらに奥に行くことができます。」

その先の試練を乗り越えれば、勇者様は真の強さを手に入れることができるでしょう。心してかかってください」

グレイグ「なるほど、試練はここからが本気という事か。イレブン、準備が終わり次第挑んでみよう」

導師の試練

ベロニカ「うわ、ここは私が魔力を取られた場所じゃない」

セーニヤ「ですが、あの時より禍々しい気配に満ちていますわ。魔物も皆、様子がおかしいですわ」

ラース「とりあえず、色んな敵と戦っていこう。そこから情報を集めて、俺が敵に合ったフォースをかけていく。こんな感じで行こう」

イレブン「そうだね、ラース。それが一番楽だと思う。皆、頑張るよ！」

道中

カミュ「また場所が変わったな。ここは確か、寄り道で来た怪鳥の峡谷か」

マルティナ「まだ道は続くようね、気を引き締めて行きましょう」

イレブン「色んなところに宝箱や貴重なものも落ちてるみたいだ。それも取っていききたいから少し寄り道もするね」

99. 試練

最深部 ウラノスの間

どこからか声が聞こえてくる

??? 「流石勇者とその仲間達だ。よくぞここまでたどり着いた」

光が集まり、人の姿になった

ラーズ「あなたは、戦士ネルセン！」

ネルセン「うむ。私はネルセン。かつてローシユと共に戦った男だ。私は、邪神ニズゼルファを天空に封印した後、荒廃した世界を復興するためにバンデルフォン王国を建てた。

我が統治の下、王国は大いに繁栄し、人々はいっしか私をこう呼ぶようになった。偉大なる建国者、英雄王ネルセンと。そなた達の中にも、バンデルフォン縁の者がいるようだな。

その眼差し。お前がかつての俺と同じく、勇者の仲間になったのは偶然ではなく、運命だったのかもしれない」

グレイグ「!?!」

グレイグは自分の事だとわかり、驚いている

ロウ「ときにネルセン様。あなたが伝説の勇者と共に戦ったのは、遠い昔の事。どうして今もこのような場所に？」

ネルセン「私は死の間際、いつか訪れるかもしれない、邪神復活の日に備え、神の民と共に、この迷宮を建設し、強力な武器を隠した。そして、邪神と戦う勇者が現れた時、その力になるため、魂だけの存在となつてここでお前達を待っていたのだ。

お前が勇者の名を継ぐ者か。確かにローシユと同じ目をしている。この迷宮はそれ自体が勇者を試す試練。よくぞそれを乗り越えた。褒美にお前達の願いを一つだけ叶えてやろう。

ただし！私が課す最後の試練に打ち勝つことができたならだ！この試練では自分自身を脅かす最大の敵。お前の中にある恐怖が、実体となつて立ち塞がる。

だが、もしそれを乗り越える事ができれば、お前は何者にも負けな
い強さを手に入れるだろう。これから現れる敵を25手以内で、全て
倒す事が出来ればお前の願いを一つ叶えてやろう。それでは行くぞ
！」

憎悪の剣鬼があらわれた

イレブン「!?この敵は…… やはりあの時の」

ラース「イレブン、来るぞ！集中しろ！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

ラーズ「メラガイアー！」

剣鬼のなきはらい！

剣鬼のパープルシャドウ！

剣鬼の影ができた

ラーズ「な!?!この力はパープルオーブ!?!どうなっぺいやがる！」

イレブン「これには全体攻撃だよ！影は強くないからね！ギガブレイク！」

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

シルビア「ゴールドシャワー！」

ラーズ「イオグランデ！」

影は倒れた

剣鬼の通常攻撃

剣鬼はラーズ目掛けて武器を振り落とした

ラーズ「はっ！」ガン！

ラーズは盾で防いだ

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

シルビア「ラーズちゃん！バイキルト！」

ラーズの攻撃力が二段階上がった

ラーズ「ばくれつきやく！」

剣鬼のドルマドン！

剣鬼のなぎはらい！

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

シルビア「ほとばしるゝアモゝレ！」

ラーズ「ばくれつきやく！」

憎悪の剣鬼は倒れた

ネルセン「お見事だ！14手で敵を倒したぞ！よくやった、イレブン！お前は自らの恐怖に打ち勝ったのだ。さあ、この中から叶えてほ

しい願いを言うといい」

ネルセンは全員に願い事のリストを見せた

全員「(色々あるけど、イレブンならレシピかな?)」

全員がその中の一つのレシピだろうと予想している

イレブン「(エツチな本?これってよくおじいちゃんが読んでるやつかな?僕も見なかったんだよね)じゃあ、エツチな本を...」

カミュ「待て!イレブン!!」

イレブンのセリフをカミュが途中で遮った

イレブン「え?どうしたの?」

ラース「どうしたはこっちのセリフだ!いきなりどうしたんだよ、お前!」

イレブン「え?だってエツチな本って、よくおじいちゃんが読んでるやつだよ?たまにグレイグもみてるし、僕も一度見たかったんだよね」

セーニヤ「エツチな本?シルビア様、それは何なのですか?」

シルビア「セーニヤちゃんは知らなくて大丈夫よ！」

ロウとグレイグに鋭い視線が浴びせられる

ネルセン「なるほど、勇者と言えども興味はあるのだな。願いはそれでいいか？」

ベロニカ「ダメよ！イレブン！考え直しなさい！」

シルビア「そうよ！イレブンちゃん！レシピなんかとっても魅力的じゃない」

イレブン「そうだね、悩んじゃってさ」

ラース「とりあえずレシピにしてその本はまた今度だ。な？」

イレブン「わかった。皆がそう言うなら、レシピをお願いします」

ネルセン「仲がよくて何よりだな。それではレシピをお前に授けよう。ここには、勇者の剣をさらに強化できるレシピが載っている。試練はこれで終わりではないぞ。次に来る時はまた新たな敵が待っている」

イレブン「なるほど、何回か挑まないとなんだね」

ネルセン「これは私からの褒美だ。それでは試練の里まで戻してやろう」

イレブンは魔力の種をもらった

試練の里

イレブン「ふう、流石に疲れたね」

ラーズ「おい、じいさん？グレイグ？何人かお前達に言いたい事があるんだが、ちよつとこつちに来てくれるか？」

ラーズは指を鳴らしながら二人を呼ぶ

二人「……はい」

ロウとグレイグは顔を青くしながら、ラーズやマルティナ達と宮殿から出て行った

イレブン「あれ？皆どこにいくの？」

カミュ「あー、イレブンはここで休んでいいぞ。ほら、さつき貰ったレシピはどんな素材が必要なのか一緒に見てみようぜ」

セーニヤ「……まあ！聞いた事も無いような素材が多いですね」

イレブン「うーん、何処かにあるのかな？ヒヒイロカネとか、僕知らないや」

その後

ラース「戻ったぜ、イレブン」

イレブン「あ、おかえり、皆。あれ？グレイグとおじいちゃんは？」

マルティナ「二人は別の場所で休憩してるわ。疲れちゃったみたい」

イレブン「そっか、試練は道中も大変だったもんね」

ラース「どうせ休むんならネルセンの宿屋で休んだ方がいいんじゃないか？ここよりゆっくりできるぞ？」

ベロニカ「そうね、ここだとキャンプみたいにしかならないしね」

イレブン「じゃあネルセンの宿屋に行こうか、ルーラー！」

ネルセンの宿屋

主人「こんにちは、旅人さん。もしかしてあの噂を聞いて来てくれ

たんですか？」

セーニヤ「噂？すみませんが、わからないですわ」

主人「そうですか。実は今、うちに泊まるとお客様全員が同じ夢を見るところが起こっております、お客が増えつつあるのです」

イレブン「あれ？それって確か…」

カミュ「へー、不思議な事もあるもんだな。まあいいか。部屋割り
はいつものでいいよな？」

全員「うん」

主人「それではごゆっくりなさってください」

100. 悪夢、再び

夢

男がそこにいる。周りには青い炎があがっている

??? 「ああ、くちおしい。後悔という名の鎖がこの身を縛りつける。私は何もできなかった無力な存在。もし、あの日に戻れるのなら、地獄の業火に焼かれても構わない。ああ、くちおしい、くちおしい」

どこかから女性の声が聞こえてくる

…… 誰か私の願いを受け止めて。あの人を暗い絶望の闇から解き放つて。私の声よ。どうか誰かに届いて。お願い

朝

ロウ「ふむ、それでは噂通り、皆が同じ夢を見たようじゃな。くちおしいと嘆く戦士の夢を」

シルビア「何だか必死に助けを求めてたわね。できれば手を貸してあげたいけど、手がかり無しじゃお手上げだわ」

イレブン「(過去に戻ってきたから、こっちでは解決してない事になっっているのか。僕は、何て事を)」

カミュ「イレブン? どうした?」

イレブン「ううん、何でもないよ。ちよつと眠くてさ」

ラース「さつきあんなに元気に朝食食べてたじゃないか」

イレブン「そうだよ。それでお腹が膨れちゃってさ」

ベロニカ「もう！子どもみたいな事言つてないで、あんたも夢見たんでしょ？」

イレブン「うん、見たよ。あの戦士の鎧はレシピにあるけどユグノアの鎧だよ」

ロウ「そうじゃな。あの鎧はユグノアの戦士のもの。そういえば、魔物が凶暴になってから、ユグノア城がどうなったか気になるのう」

シルビア「それじゃあユグノア城に行ってみましょう。何か夢の手がかりもあるかもしれないわ」

ユグノア城跡地

ごろつき「お？旅人か？見ろよ、これ。ここにあったガレキをどかしたら、いかにも怪しげな階段が現れたんだ」

ごろつきの前には大きな階段がある

ロウ「これは城から外へ抜け出すための脱出経路。わしの読みなら、この先にあの戦士の手がかりもあるはずじゃ」

地下 奥地

そこには夢の中の戦士がおり、側には魔物がいた

???「ゲフアファア。腹が減って我慢できん。もつともつと覚めぬ悪夢に絶望しろ！このままでは飢え死にしてしまう」

ベロニカ「ちよつとあんた！そこで何してるのよ！その人をどうするつもり！」

???「ゲフアファア。旨そうな食材が現れたわい。お前らも我が糧にしてやろう。邪神様の僕、バクーモスのな」

イレブン「やはりお前か！バクーモス！」

ラース「(やはり?)」

バクーモス「邪神様が目覚めたおかげで、我が体にも凄まじい力がみなぎっているのだ。この世の絶望を全て食らい尽くせるほどにな。この嘆きの戦士は16年前、無残にも散ったユグノア王のなれの果ての姿」

ロウ「ユグノア王じゃと!?その男はまさかアーウィンなのか!?アー
ウインはユグノア王にして、最強の戦士だったのだ。そして、お主の
父親じゃ」

セーニヤ「あちらがイレブン様のお父様!」

バクーモス「国は滅び、愛する家族とは死に別れ。この男の絶望は
まさに高級フルコース。一度食べたなら忘れられぬ。16年間食べ続
けても飽きぬほどだ」

ラーズ「てめえ!人の父親に何て事しやがる!」

バクーモス「だが、食べても食べても満たされぬ故、もはやこの男
の絶望だけでは満足できぬ。次はお前らの新鮮な絶望を食うとしよ
う!」

バクーモス・邪があらわれた

イレブン「ラーズ!こいつはバギが弱点だよ!」

ラーズ「!?わかった、イレブン!ストームフォース!」

仲間達は風の力を纏った

シルビア「イレブンちゃん!バイキルト!」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

バクームスの暗黒の吐息

イレブン達の呪文の回復力、威力が下がった

バクームスのドルマドン！

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

ラーズ「ばくれつきやく！」

シルビア「ラーズちゃん！バイキルト！」

ラーズの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

バクームスの暗黒の吐息

イレブン達の呪文の回復力、威力がさがった

バクームスの通常攻撃

セーニャ「すう…」セーニャは眠ってしまった

ラーズ「フォースブレイク！」バクームスに全属性耐性ダウン

シルビア「セーニヤちゃん！起きなさい！」つつこみ！

セーニヤ「はっ！シルビア様、ありがとうございます！」

イレブン「つるぎの舞！」

バクーモスのバイキルト！

バクーモスの攻撃力が二段階上がった

バクーモスのドルマドン！

セーニヤ「ベホマラー！」

全員が回復した

ラース「ばくれつきやく！」

シルビア「かえん斬り！」

イレブン「つるぎの舞！」

バクーモスの暗黒の吐息

イレブン達の呪文の威力がさかった

バクーモスのドルマドン！

セーニヤ「ベホマラー！」

全員が回復した

ラース「ぼくれつきやく！」会心のぼくれつきやく！

バクームスは倒れた

バクームス「ゲギヤアアア！」ジュワー

アーウィンにあつた黒い瘴気が無くなった

アーウィン「ここは、一体……。その眼差し、その目に宿る優しい光は。まさか、そんな……。イレブン！イレブンなのか！」

イレブン「そうだよ。父さんの息子、イレブンだよ」

アーウィン「そうか、私を絶望の淵から解き放ってくれたのは、お前だったのだな。立派になったな、イレブン」

その時どこからか声が聞こえてきた

???「ああ、よかった。ようやく元のあなたに戻ってくれた」

アーウィン「ああ……。信じられない。君なのか？エレノア」

エレノア「あなたを苦しめていた呪縛は、イレブンが解き放ってくれた。これで私達、安心して旅立てるわね」

アーウィン「ああ、そうだな」

アーウィンはそう言うのと光の玉になり、イレブンの周りをひとしきり回った後、空に登っていった

イレブンには暖かい光が差し込んでいる

エレノア「イレブン。私のかわいいイレブン。あなたにはこれから、多くの困難が立ちはだかるでしょう。それでもそのまま、まっすぐに進みなさい。自分の思った通りに行きなさい。

あなたの中にある希望の光が、きっとあなたを導いてくれるはず。父と母も、いつもあなたを見守っていますよ。さようなら、イレブン。ずっとあなたの事が大好きよ」

光も無くなり、声が聞こえなくなった

ロウ「これで本当にお別れじゃな。アーウィン、エレノア」

ライス「これが……親からの本当の愛情ってやつか。少しだけ……羨ましいな」

イレブンの近くには何かが落ちている

イレブン「この鎧は……父さんの鎧！」

イレブンはアーウィンの兜と鎧をてにいれた

ロウ「それじゃあ、墓参りしていこうかの」

その後、ユグノア地方 キャンプ場

イレブン「あ、ごめん。僕さっきの所に忘れてた事があった。皆、ここで待ってて。すぐ終わらせてくるから」

ラース「あ、ああ。気を付けろよ」

イレブンはルーラで戻っていった

ラース「……………なあ、皆。イレブンのやつ、どう思う？」

ベロニカ「ずっと変よね。何だか前までのイレブンとは別人みたい」

グレイグ「そうなのか？」

シルビア「グレイグにはわからないでしょうけど、アタシ達からすると今のイレブンちゃんはおかしいのよね」

ラース「カミュ、何か知ってたりしないか？」

カミュ「いや、俺も前にそれとなく聞いたんだが、会話がすぐに切れてしまったな。あいつがこれ以上この事は話さないって感じだよ。聞き出せなかったんだよな」

ラース「……………」

マルティナ「ラース、無理やりはダメよ？隠しておきたい事なんて誰にだってあるものだよ」

ラース「それはわかってるんだが、皆も試練の時のイレブンの戦い方見ただろ？前までは俺らと隣で戦ってたのに、急にあいつはグレイグより、誰よりも前に出て皆を庇うみたいなの戦い方だった。そんな戦い方、俺はしてほしくないんだ」

セーニヤ「そうですね。それに、考え込んだりする事も前よりかなり増えましたものね」

ロウ「前にもあったが、最近になって再び、誰かに謝るようになっておったのう」

ベロニカ「……………」 ラース、頼んでもいい？」

ラース「そうだな。聞き出せるかはわからないが、やってみるか。イレブンだけにつらいものを背負わせたくないしな」

ラースはキメラの翼で飛んでいった

101. 勇者の思い

オリジナル展開です

イレブン君が爆発します

ユグノア城跡地

イレブン「……」

イレブンは何もない場所で座り込んでいた

ラーズ「こんな所で何してんだよ、イレブン」

イレブン「あ、ラーズ。少し考え事してたんだ。他の皆は？」

ラーズ「俺だけだな、そろそろ心配してたからな」

イレブン「そっか、思ってたより時間経っちゃったんだね。それじゃあ、戻ろうか」

イレブンは立ち上がり、ラーズに近づく

ラーズ「いや、戻る必要はない」

イレブン「ラーズ？」

ラース「率直に聞こう。お前、誰だ？」

イレブン「!?な、何言ってるの？ラース？イレブンだよ？」

ラース「そうだな、イレブンだ。だが、大樹に登る前から急に別人のようになったよな。あの突然消えた時からだな」

イレブン「……それは皆の思い違いじゃないかな。僕はあの時から勇者として、もっと頑張った方がいいと思って覚悟を決めたんだよ。そりやあ今までとは変わるさ」

ラース「……そうか。いい心がけだと思うぞ。それじゃあなぜ笛の事を知っていたり、ケトスや神の民を見ても驚かなかったんだ？」

イレブン「……驚いてたよ？顔に出てなかっただけ」

ラース「じゃあ今日の試練の時の敵はなぜ知っていた？カミュに聞いたが、あんな敵とは出会った事はないと言っていた。それなのに、イレブンだけが知っているのも不思議だな。パープルオーブの力を使われた時も、まるで戦い方を知り尽くしてるようだった。

バクーモスもそうだな。あの時イレブンは、やはりお前か、と言っただな。名前や、どんな魔物か、弱点まで俺にいきなり教えてくれたな。なぜ初めての敵をそこまで知っている？」

イレブン「……」

ラーズ「皆が突然ついた力に戸惑っていたのに、イレブンだけはすぐに使いこなせたよな。まあ、勇者だからと言われたらそれまでだが、そこも不自然だな。」

だが、イレブンだけはウルノーガと戦った時とほぼ強さは変わらなかった。ウルノーガの、いや大樹に登る前の時点で、急に強くなりすぎだとは思ったがな」

イレブン「……流石だね、ラーズは。どうやら隠し通せないみたいだ。いつ頃から怪しいと思ってたの？」

ラーズ「始まりは、お前がラムダでいなくなってからその後俺に会った時だな」

イレブン「はは、最初じゃん。嫌だな、そんな早い段階で疑われてたなんて」

ラーズ「それで？話す気にはなってくれたのか？」

イレブン「うん。本当なら話さないつもりだったんだけど、僕も無理みたい。疲れちゃったよ」

ラーズ「それじゃあ、キャンプに戻って皆に話そうぜ」

イレブン「うん。そのためにラーズだけが来たんだね。つまり、皆にも気づかれてるのか。わざわざごめんね」

ラーズ「気にすんなよな、仲間なんだから」

イレブン「相変わらずラーズは優しいね。ルーラ！」

ユグノア地方 キャンプ場

カミュ「お、戻ってきたな」

イレブン「皆、心配かけてごめんね。僕、今まで皆に隠してた事があるんだ」

ベロニカ「あら、本当に話してくれる気になったのね。流石ラーズだわ」

マルティナ「でもイレブン。無理しなくていいのよ。私達はそこままでして聞き出したいわけじゃないわ」

イレブン「ありがとう、マルティナ。でもいいんだ。僕も隠し通すのは無理みたいだし、疲れちゃった。まず、僕はね、イレブンであつてイレブンじゃないんだよ」

グレイグ「イレブンじゃない？ どういう事だ？」

イレブン「えつとね、今、皆の目の前にいる僕は、違う世界から来たイレブンなの」

セーニヤ「違う… 世界？」

イレブン「うん。僕がいた世界では、大樹の魂がある場所で僕がホメロスに気絶させられて、皆もそこでホメロスにやられるんだ。そこにデルカダール王に入り込んでいた魔王がきて、大樹の魂を奪いとつたんだ」

全員「な!？」

イレブン「そして、世界は崩壊した。命の大樹は落ちて、魔王が統べる城が立ち、熱を帯びた岩が降り、川は干上がり、草木は枯れて、山は割れた。ウルノーガは一瞬で世界中の命を大量に奪ったんだ」

シルビア「そんな世界が…」

イレブン「その世界でも僕達は魔王を倒し、世界を救った。でも、命の大樹が落ちた時に、ラースが命を犠牲にして、僕らを守って死んでいったんだ」

全員「え!？」

マルティナ「ラースが!？」

ラース「俺が……死んだ……」

イレブン「そう。それを知った僕達は悲しんだ。特にその時のマルティナは見ていられなかったよ。僕達は世界を救った後、時のオーブというものを壊せば過去に戻り、たくさんの命を救えると知り、それを使って過去に戻ろうとした。」

だけど、そこで過去に行くことが出来るのは勇者である僕一人だけだったの。だから、僕は仲間達と世界に別れを告げて、この世界に来たの。そのおかげで今日の敵の事を知ってたの」

全員「……………」

全員は下を向いている

イレブン「あ、ごめんね。急にたくさん話してわからなかったよね。もう一回話そうか？」

ラーズ「…… イレブン、てめえ、齒食いしばれ」

イレブン「え？」バキ！

イレブンはラーズに殴り飛ばされる

ラーズ「てめえは！テメエは！！何て事してんだよ！！」バキ！ドガ！

ラーズは泣きながらイレブンを殴っている

イレブン「ぐっ！痛いよ…… ラーズ？泣いてる？」

ラーズ「うっ…… 当たり前だろうが」

カミュ「おい、イレブン。なんで今ラーズが殴ったかわかるか？」

イレブン「それは、僕が仲間や世界を見捨てた…… から」

ラーズ「それもあるが、一番大事な事を忘れてやがるんだ！てめえは！」

ペロニカ「そうよ！！ラーズはね！あんたが自分の事をあまりにも大事にしないから怒って殴ったのよ！」

イレブン「大事……」

ラース「お前を一人で過去に行かせた俺らも馬鹿だが、お前はもつともつと馬鹿だ！大馬鹿野郎だよ！」

グレイグ「なぜ……そこまでして俺らを助けてくれる。勇者だからと言って世界の全てをお前一人に抱えさせるなど、そんな事あつてはならない」

イレブン「だって、僕は一度大樹で魔王に負けた時、自分の馬鹿さと無力な事に気づいた。皆だって世界が崩壊して、たくさん苦しんで、僕のせいでたくさんさんの命が無くなった」

イレブンは下を向き、両手が震えている

イレブン「この世界の皆には、そんな悲しい思いしないでほしかった！だから、僕が来た！二度と繰り返さないために！！そのために、大事な仲間と別れてきたんだよ！！」

イレブンは顔を上げ、強い意志を持った目を向けた

ラース「それは、勇者としてのお前の本音だろうか！！」

イレブン「そうだよ！僕は勇者だ！勇者イレブンだ！！だから世界を救うんだよ！何度でも！！」

イレブンは大声で叫ぶ

まるで自分に言い聞かせるように

シルビア「それなら、イレブンちゃん。勇者じゃないあなたの本音はどこにあるのかしら?」

イレブン「僕の……本音?」

マルティナ「そうよ。今は勇者なんてどうでもいいの。あなた自身はどうしたかったの?何をしたかったの?」

イレブン「……………」

セーニヤ「イレブン様は勇者である事に頭がいつぱいで、大切な事を忘れていきます。イレブン様は勇者である前に、イシの村のイレブン様です」

ロウ「お主がやりたい事は何じゃ?言ってみてくれ」

イレブン「……僕は……また……皆に会いたい!!……未来の皆に会いたい!会いたくて、たまらないよ……」

イレブンは涙を零し始める

ラース「それがお前自身の本音だな。何だ、言えるじゃねえか。その素直なお前は、勇者であるお前よりもずっと大事にしなくちゃいけない所だ」

イレブン「うん……。でも、関係ない皆に迷惑が……」

カミュ「迷惑？関係ない？何言ってるだよ、イレブン」

ラース「仲間を救うのに理由なんかいらねえだろ」

グレイグ「関係に過去も未来もない。どちらも同じ仲間なのだからな」

マルティナ「それに、イレブンの願いは迷惑なんてならないわ」

ロウ「ふおっふおっ、孫のお願いなら断るわけにはいかんのう」

ベロニカ「私達はあんたにたくさん救われてるのよ。少しくらいお礼をさせなさい！」

シルビア「イレブンちゃん！私の夢の世界中の笑顔には、あなたも含まれてるのよ？アタシはあなたも笑わせなくちゃね」

セーニャ「私達はイレブン様の助けになれるなら何でもいたしま
す」

イレブン「皆……ありがとう」

ベロニカ「それじゃあ、やる事は決まったわね」

イレブン「え？」

カミュ「まずは邪神をぶっ倒すだろ？そして世界を救った後、お前
を未来に返すんだよ」

グレイグ「そうだな。未来からこっちに來れたのなら、こっちから
未来に返す事もできるかもしれない」

セーニャ「皆で方法を探せばすぐですわ！」

ラース「だが、本来はいたはずのイレブンはどこにいったんだ？」

イレブン「あ、それなら大丈夫だよ。僕の中には二人の僕がいて、僕
の中で、本来の僕が同じ景色を見てるよ」

マルティナ「つまり、合体しているようなものなのね」

イレブン「そういう事になるね。本来の僕にはもう僕が話してあるから事情は知ってるんだ。………なんか叫んだり泣いたりしたから疲れちゃったよ。僕、先に寝てもいい？」

セーニャ「わかりましたわ、どうかごゆっくりなさってください」

イレブン「ありがとう、皆。また明日ね」

イレブンはテントに入ってしまった

ラース「………まさかそんな事を抱えてたなんてな」

ベロニカ「全く！未来の私達は何考えてるのかしら」

カミュ「しかし、これで全部謎は繋がったな」

グレイグ「ああ、あいつ一人では到底抱えきれぬ物だ。俺達も一緒に支えて行こう」

シルビア「ウフフ、グレイグも大分イレブンちゃんに肩入れするよ

うになってきたわね」

グレイグ「む……。あいつはいつも頑張りすぎているのだ。もっと大人である俺達に頼ったっていいだろうに」

ロウ「そうじゃのう。わしらがあの年の頃などここまで立派じゃなかったわい」

ラース「そうだなあ。だけど、これはイレブンに限った話じゃないからな。カミュ、ベロニカ、セーニヤ。お前達もだぞ。もつと俺ら大人に頼れよな」

シルビア「そうよく。アタシ、あなた達のためなら何だってするわ」

マルティナ「私もどんどん頼ってくれていいのよ？」

ベロニカ「ちよつと！何か話が違う方向にいつてるわよ」

セーニヤ「私達としては十分甘えてる方だと思うのですが……」

カミュ「自分でできる事をやって何が悪いんだよ」

ラース「やれやれ。少しは楽にしても平気という事だ。今回の試練の道中も、俺達はある程度楽にできる状況では楽にしたが、そういう場面でも、四人とも気を張り続けてたからな。ずっとそうやってると肝心な時にダメになってしまうぞ」

カミュ「けっ。大人ぶりがあって」

ベロニカ「そうよ！子ども扱いすんじゃないわよ！」

シルビア「違うわよ。あなた達より年を取った人達からのアドバイスよ。決して子ども扱いなんかじゃないわ。まあ、お喋りはこの辺にしておきましょうか」

マルティナ「そうね。明日もあるし今日はもう休みましょう」

ラース「それじゃあ皆、おやすみ。また明日な」

102. 各地を巡る

次の日の朝、ユグノア地方 キャンプ場

イレブン「皆、おはよう」

シルビア「あら、イレブンちゃん。おはよう。今日は少し早いのね」

イレブン「崩壊した世界では、僕も頑張っこの時間に起きてたんだよ。皆を引っ張らなきゃだったから。そしたら、これくらいの時間に起きる事に慣れちゃって」

グレイグ「それなら、俺達の朝の練習に付き合ってもらってもいいか？」

イレブン「うん、いいよ。グレイグともあっちでは何回も練習してたんだ」

しばらくして

セーニヤ「ふわあ……。皆様、おはようございます」

ベロニカ「全く、いつまで経っても寝坊助は治らないんだから」

イレブン「これで全員揃ったね。今日は世界各地を訪れようと思っ

てるんだ」

ラース「世界を？ 試練を先にやった方がいいんじゃないか？」

イレブン「僕も最初はそうしようと思ってたんだけど、昨日の父さんを助けた件は、実は未来で解決した事だったんだよ。だけど、僕が過去に戻った事で解決してない事になった。だから、解決しておかないといけない事が各地であるんだ」

ロウ「なるほどのう。確かに知っておれば情報はあるからのう。それに、魔物が凶暴になった事で異変もおきてるやもしれん」

イレブン「最初は僕の故郷のイシの村に行こうと思ってるんだ」

カミュ「それじゃあこの後はイシの村で決まりだな」

イシの村

ラース「……ここもかなり酷い有様だよな」

イレブン「エマ、ただいま」

エマ「あ、イレブン。お帰りなさい。私達の事を心配してくれたの？ 確かに焼けた村を見て皆落ち込んだけど、落ち込んでるだけじゃ何

も始まらないし、皆で力を合わせて村を復興させようと頑張ってるの。

とはいえ、村の人だけじゃ手が足りなくて、手伝ってくれる人を募集してるんだけど、中々集まらなくて困ってるのよ」

イレブン「それじゃあ、僕が世界中の知り合いの人に声をかけてみようか？」

エマ「本当!?!ありがとう！助かるわ、イレブン。どんな人が欲しいかっていうと、まずは物資を取り揃えてくれる商人さんね。復興に必要な物とかを揃えてほしいの。デクさんみたいな人がいいな。

次に来てほしいのは、村の用心棒ね。私達だけじゃ守りが薄くなっちゃうから。

次は世界に詳しい人が来てくれるといいな。ホムラの里に詳しい人がいるんだよね？

最後は村のマスコットキャラクター。何か特徴のある子がいいな」

イレブン「たくさん言ったね。わかったよ、ある程度目星をつけて話してみるね。村に僕の紹介で来たって言うようにしてもらってから、エマは村の皆に話をつけといて」

エマ「ありがとう、イレブン。村には話しておくね」

マルティナ「でも、その間も復興の支援が必要でしょ。デルカダールも援助をするように私がお父様に話をしてみるわ」

グレイグ「そうですね、姫様。特にここは我々が自分達の手で壊してしまった場所。責任を持って直さなければ」

エマ「ありがとうございます。グレイグさん、マルティナさん」

イレブン「それじゃあ、デルカダール城へ向かおうか。デクさんにも声をかけてみよう」

デルカダール城下町

ラース「それじゃあ、俺とグレイグとマルティナは城に行つて王様に声をかけてくるな」

イレブン「わかった、僕とカミュはデクさんの所に行くね。皆はゆっくりしてていいよ」

ベロニカ「あら、ありがとうございます、イレブン」

それぞれがバラバラになっていった

デルカダール城 玉座の間

マルティナ「お父様、今帰りました」

デルカダール王「おお、マルティナ、グレイグ、ラーズ殿も来てくれたか。他の者達はどうした？」

グレイグ「今は少し別行動をしております。今日は王に少しお願いがあつて参りました」

マルティナ「そうなんです、お父様。前にウルノーガの指示によって壊されたイレブンの故郷、イシの村を今村の皆で復興をしているんだけど、人手が足りないみたいなの。だから、私達にもお手伝いできないかと思つて」

デルカダール王「なるほどのう。確かに、あそこはわしらが壊してしまつたようなもの。わしらもしつかりと手伝うべきだな。いいだろう、兵士達を定期的にそちらに向かわせる。デルカダール国も復興を手伝うとしよう」

グレイグ「ありがとうございます、王よ」

マルティナ「お父様、もう一つお話があるんです」

デルカダール王「どうした、マルティナよ」

マルティナ「私はこちらのラーズという人とお付き合いをさせてもらっているわ」

デルカダール王「何だと!?!我が娘と付き合っておるだと!」

デルカダール王は驚いてラーズを見る

ラーズ「はい、王様。私ラーズは、マルティナ姫と真剣にお付き合いさせていただけます」

マルティナ「今日はそれをお父様にも伝えておこうと思って」

デルカダール王「……………何と。知らない間にマルティナにも春がきておったのだな。だが、ラーズ殿よ。娘は世界を救った後、姫として、次期王女としてこのデルカダールを担う。」

お主はそれについていく自信はあるのか?お主もマルティナだけでなく、このデルカダールを支える男となる自信があるのか?」

デルカダール王は目を鋭くして問いかける

ラーズ「勿論です、王様。俺は、彼女の真つ直ぐでありながら、高い意志や心の強さに惹かれたのです。身分など関係ありません。それに、俺はマルティナと約束しました。」

ずっとマルティナの隣にいて、君を守る、幸せにしてみせる、との約束が守れるのなら、俺のこの力全てをデルカダールに尽くしてみ

せましよう」

マルティナ「ラース……」

デルカダール王「はっはっはっ。素晴らしい、立派な男だ。うむ、いいだろう。わしもお主の事を認めよう。それに、勇者の仲間の一人が娘の結婚相手なら文句など何もない。」

だが、もしお主がマルティナを泣かせるような時は、覚悟しておいてもらおう」

ラース「そんな事は絶対にさせません。俺はマルティナには笑顔でいてほしいのです。マルティナには笑顔がとても似合います。それを俺が奪うなら、俺は死んでも構いません」

グレイグ「俺からも頼んだぞ、ラース。お前が姫様を幸せにしてみせるんだ」

ラース「任せろ、グレイグ」

その頃、デクの店

イレブン「すみませーん。デクさーん」

ミランダ「ああ！いいタイミングで来てくれました、勇者様」

カミュ「あんたは確か、デクの妻のミランダさんだったな。デクに何かあったのか？」

ミランダ「はい。夫が魔物にさらわれてしまったのです。こうなつては頼れるのはあなた方だけ。どうか夫をお助けください！夫は神の岩がある方へと連れて行かれました」

イレブン「そんな事があったのか。それは心配だ、行こう、カミュ！」

カミュ「ああ、もちろんだ。ミランダさんはこのまま家で待っていてくれ。俺達が必ずデクを連れて帰るからよ」

ミランダ「ありがとうございます。どうか皆様もご無事で」

神の岩

イレブン「誰にも言わずに来ちやったね。すぐに救い出さないと」

カミュ「いたぞ！デク!!平気か!？」

デク「ア、アニキ!？」

デクの近くには魔物がいた

カミュ「行くぞ、イレブン！デクのやつを救い出すんだ！」

イレブン「もちろん！」

その後

デク「カ、カミュのアニキー！久しぶりだよ！ワタシ、商談に出かけたら魔物にさらわれてこんな場所まで。一人で心細かったよ。イレブンさんも本当にありがとう。命の恩人にはこれをあげるよ」

イレブンはアレキサンドライトをてにいれた

デク「安心したら何だか疲れちゃったよー。ワタシここで少し休んでいくね」

イレブン「あ、デクさん。お願いがあつて、この下にあるイシの村は僕の故郷なんだけど、今復興しててその人手が足りないんだ。デクさんの商人としての力を貸してくれないかな？」

デク「ワタシは全然構わないよー。むしろ、命の恩人の故郷の力になれるなら何でもするよー。それじゃあワタシは村の方に行くね」

カミュ「デク、元気でやれよな。また顔を出すぜ」

イレブン「それじゃあ城の方に戻らないとね。ルーラ！」

103. 大いなる試練

次の日、ソルティコの町

ラース「次はソルティコか」

グレイグ「懐かしい。俺はこの町の領主、ジエーゴ師匠の元で修行をしていた事があってな。その頃から、この町はまるで変わっていない。

ジエーゴ師匠や、仲間達と共に修行に明け暮れ、ソルティコの海から自然の厳しさを教わった。俺にとって、この町全てが人生の師だ」

イレブン「ふふ、あっちでもグレイグはここに来た時に、その話をしてくれたよ」

シルビア「それじゃあ、アタシ外でお花摘みしてくるわ。外で待つてるから、終わったら呼んでね」

グレイグ「……おい、待て。前から気になっていたのだが貴様、ジエーゴ師匠のご子息、ゴリアテなのではないか？」

シルビア「……思ってたより気付くの早かったじゃない。バレちゃったなら仕方ないわ。久しぶりね。グ・レ・イ・グ」

グレイグ「何という事だ。あの生真面目なゴリアテが、こんな風になつてしまうとは。師匠はさぞ驚かれるだろう」

グレイグはため息混じりに呟いた

ラース「やつぱりシルビアは騎士の出身で、この町の生まれだったんだな」

シルビア「やだ。アタシ、この町の話したかしら？」

ラース「前にこの町に来た時も、シルビアは急にいなくなつただろう？この町に嫌な思い出でもあるのかと思つていたが、ジエーゴさんの屋敷に行つた時に君と思わしき絵があつたんだ。

それと、セザールさんが手を振っている時のシルビアの隠れるような動きと、その時のセザールさんの反応を見て予想してたんだ。後は片手剣が基礎からものすごくしっかりしている事かな」

シルビア「それってラースちゃんが入つてすぐじゃない。流石ね、よく見てるわ」

グレイグ「貴様、先程逃げようとしていたな。ジエーゴ師匠とお会いしなくていいのか？かつて師匠との間に何があつたのかは知らぬ。何か深い事情があるのだろうか。」

だが、今は勇者の星が落ちた変事の時だ。今こそ、ジエーゴ師匠と和解し、力を借りるべきではないか？」

イレブン「怖いんだよね、シルビア。大丈夫だよ。きっと話し合えばわかりあえる。ジエーゴさんだって相手の話を聞かない人じゃない。だから、少しだけ勇気を出してみよう」

シルビア「二人の言う通りね。アタシ、怖いけど勇気を出してみる」

ジエーゴの屋敷 ジエーゴの部屋

シルビア「……パパ、ただいま」

シルビアはイレブンの後ろに隠れている

ジエーゴ「誰だあ、てめえ……!!てめえは我が息子ゴリアテ!どの面下げて帰ってきやがった!」

シルビア「ひいいい!ごめんなさい!」

ジエーゴ「おい、ゴリアテ。てめえ何か勘違いしてねえか?」

シルビア「え?」

ジエーゴ「お前の騎士道ってやつで世界中を笑顔にすることができたのか?」

シルビア「……………いいえ、まだです」

ジエーゴ「じゃあなぜ帰ってきやがった！てめえは大口叩いて出て行った。それなのに、夢も果たさぬままよくも抜け抜けと！そんな風にてめえを育てた覚えはねえぞ！」

シルビア「え？それって」

ジエーゴ「こんな身体じゃなかったら、今ごろてめえをぶん殴ってた所だ」

シルビア「ありがとう、パパ。アタシの事ずっと認めてくれてたのね。アタシ、確かに夢半ばのまま帰ってきちゃったけど、それには理由があるの」

ジエーゴ「あの黒い太陽の事か。確かに底知れねえ邪悪な気を感じるぜ」

シルビア「そう。黒い太陽があつたんじゃ、人は心の底から笑えないの。だからアタシ、黒い太陽を何とかする。そして、明るい世界を取り戻して、今度こそ夢を叶えてみせるわ。」

そのために、パパにお願いがあるの。あの黒い太陽に立ち向かうため、パパの力を貸してくれないかしら？」

グレイグ「師匠、私からもお願いします。世界は今、禍々しい気配に満ちています。この闇を払うため、教えを請いたいのです」

ジエーゴ「こいつは傑作だ。十数年ぶりに顔を見せに来たと思えば、この俺に力を貸してほしいだと？いいだろう。あのデカブツをぶっ壊すまで、とことんおめえらに協力してやらあ！」

シルビア「え！パパ、本当!？」

ジエーゴ「おう！てめえみてえなドラ息子だろうが何だろうが、困ってる人を助けるのが騎士道つてもんだ。騎士に二言はねえ！よし、早速だが古より我が家に伝わりし、大いなる試練を与えてやろう」

グレイグ「大いなる、試練?！」

ジエーゴ「そうだ。デルカコスタ地方にあるデルカダール神殿に金色の巨人が眠っている。そいつを倒せ。だが、二人で息を合わせて大魔人斬りで倒せ。これが試練だ。」

見事試練を果たせば、どんな強大な力にも立ち向かえる、最強の武器が手に入るだろう。あのデカブツにも引けはとらねえはずだ」

シルビア「最強の武器が手に入るとなれば、俄然燃えてきたわね。」

その試練受けて立とうじゃないの」

ジエーゴ「ハッ！威勢がいいのだけは相変わらずだな。デルカダール神殿の封印は俺が解いておく。二人で協力してせいぜい頑張りな」

デルカダール神殿 奥地

巨人「我は試練なり。双方共に大魔人斬りで倒せ」

ラース「何だよ、二体いたのか。少し面倒だな」

イレブン「メンバーは僕ら四人しか来てないからね。頑張らないと」

グレイグ「倒せそうになったら言ってくれ。俺達が必ず決めてみせる」

シルビア「アタシはそれまで援助をするわ」

ラース「それじゃ俺とイレブンで火力役だな」

イレブン「もしもの時は僕も回復に回るよ。グレイグはどっちにもダメージをいれてほしい」

グレイグ「わかった、それでは行こう！」

試練1と試練2があらわれた

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「ラースちゃん！バイキルト！」

ラースの攻撃力が二段階上がった

グレイグ「鉄甲斬！」 試練1の守備力をかなりさげた

試練1の通常攻撃

試練2の通常攻撃

ラース「イレブン！こいつらの弱点は知ってるか？」

イレブン「こんなのは見た事ないけど、似た敵なら知ってる。多分
ドルマだと思う！」

ラース「了解だ、ダークフォース！」

仲間達は闇と土の力を纏った

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

グレイグ「鉄甲斬！」

試練1の通常攻撃

試練2の通常攻撃

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「ほとぼしるゝアモゝレ！」

ラース「こいつはそろそろ倒せるはずだぞ！」

グレイグ「ゴリアテ！行けるな！」

シルビア「準備OKよ！せーのっ！」

二人「大魔人斬り！」

試練1はたおれた

試練2の痛恨の一撃

ラース「痛ってえ！」

イレブン「ラース、ベホイムいる？」

ラース「いや、ハッスルダンスで大丈夫だ。ダークフォース！」

仲間達に再び闇と土の力が纏った

イレブン「わかった、つるぎの舞！」

シルビア「ハッスルダンスよく、そろれ！」

全員が回復した

グレイグ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

試練2の通常攻撃

ラース「ビッグシールド！」

ラースの盾ガード率が高まった

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「ハアアア！」ゾーンに入った　ちから　魅力　みかわし
率が上がった

シルビア「ほとばしるゝアモゝレ！」

グレイグ「鉄甲斬！」試練2の守備力をかなりさげた

試練2の痛恨の一撃

イレブン「まずい！」

グレイグ「イレブン、危ない！うぐっ！」

グレイグがイレブンを咄嗟に守った

イレブン「ごめん！ありがとう、グレイグ！」

グレイグ「平気だ！」

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「ベホイム！」

グレイグは回復した

シルビア「ラースちゃん！バイキルト！」

ラースの攻撃力が二段階上がった

グレイグ「会心完全ガード！」

グレイグは会心攻撃に対して守りを固めた

試練2の通常攻撃

試練2のランドインパクト

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！どうやらもう少しみたいだよ！」

シルビア「グレイグ！早くゾーンに入って！ハッスルダンスよく、そくれ！」

全員が回復した

グレイグ「うおおおお！」ゾーンに入った　みのまもり　すばやさ
会心率があがった

グレイグ「待たせた、すまない。行くぞ、ゴリアテ！」

シルビア「せーのっ！」

二人「大魔人斬り！」

試練2はたおれた

シルビア「やるじゃない、グレイグ。流石は英雄ね。あなたの勇ましい戦いぶりを見て、アタシもパパから教わった騎士道を思い出したわ」

イレブン「うん。僕を庇ってくれた時も、流石英雄と呼ばれてるだけあるなって思ったよ」

グレイグ「認めたくはないが、俺が上手く立ち回れたのはラース達の力もあるが、ゴリアテのフォローがあればこそ。貴様の乙女心とやらも大したものだ」

ラース「そうだよな。いつもシルビアには助けってもらってるから、乙女心はバカにできないよな」

シルビア「ありがとう。褒めてくれて嬉しいわ。だけど変ね。パパの言うには試練の巨人を倒せば、最強の武器が手に入るって話だったのに」

ラース「いや、シルビア。それはおそらく……ん？ 気配が増えた？ うお!？」

ラース達の間にはいつの間にかジエーゴがいた

グレイグ「師匠!! いつの間にも!？」

ジエーゴ「ガツハツハ！ よくぞ試練を果たしたな。青二才だったおめえらが、まさかここまでやるとは思わなかったぞ！」

シルビア「ちよつとパパ！ 試練を果たしたら最強の武器が手に入るだなんて真つ赤なウソじゃないの!!」

ジエーゴ「フフン。何を言ってやがる。お前らはすでに手に入れているはずだ。最強の武器をな」

ラース「やはりそういう事ですよね」

ジエーゴ「お、兄ちゃん。察しがいいな。さっきの立ち回りも中々よかったぜ。極限の集中状態で互いの心を通わせて戦うと、心が研ぎ澄まされ、己の短所を埋めるよう新たな素質が目覚める事がある」

ラーズ「相手に影響された眠れる素質と、仲間と協力する絆の力が最強の武器だったんだ。二人ならわかるんじゃないか？」

シルビアのスキル騎士道が解放された

グレイグのスキルはくあい解放された

ジエーゴ「おめえらはまだ剣を手に入れたばかり。これからも二人で協力して、切磋琢磨していくんだな。ハッハッハッ！」

シルビア「ちよつと待つてよ！そんな事言わずに、パパも一緒に切磋琢磨しましょうよ！」

ジエーゴ「何でそうなるんだ！」

シルビア「仲間と協力する絆の力こそ最強の武器なんでしょ？それなら二人よりも、たくさんあった方がずっと強いわよね？」

それに、前に言ったじゃない？あの黒い太陽をぶつ壊すまで、とことんアタシ達に協力するって」

ジエーゴ「だ、だが………」

ラース「(流石だよ、シルビア)」

グレイグ「師匠が共に戦ってくれるとは心強い！私からもお願いします！」

ラース「(あ、自然と逃げ道を失くした。グレイグ、気付けよ)」

ジエーゴ「ぐぬぬぬ！あーっ！わかったよ！俺の剣だつてまだまだサビついちゃいねえぜ！助太刀してやっからいつでも呼びやがれ！」

シルビアとグレイグは新たな連携技師匠呼びが使えるようになった

ジエーゴ「はあー………」

ラース「ジエーゴさん、お疲れ様です。シルビアにこれから振り回されそうですね」

ジエーゴ「おう、お前はラースつて言ってたな。まったくあのドラ息子にも困ったもんだぜ。それにしても、お前もかなり素質があるな。俺が鍛えてやってもいいんだぜ？」

ライス「うーん、かなり魅力的なお誘いなんですけど、すみませんがまた別の機会でお願ひします。俺はデルカダールに行くので」

ジエーゴ「それなら、俺もたまにデルカダールに指導に行ってるからよ。その時に教えてやるよ」

ライス「それなら有難い限りですね。ぜひお願ひします！」

104. 呪われし闘士達

その後、グロツタの町

男「グロツタの町は生まれ変わりました！闘技場ではなく、カジノで遊べるようになりましたよ。ぜひ遊んでみてくださいね」

ベロニカ「今度はグロツタの町ね。イレブンがチャンピオンになった場所ね。昔のように感じるわ」

イレブン「僕もそう言われると、かなり昔な気がするよ。そういえばハンフリーは元気かな？見に行ってみようよ」

孤児院

男「ああ、チャンピオン！大変です。元闘士の人達が、孤児院に押し寄せて地下へと入って行ったんです。ハンフリーさんがすぐに追いかけたんですけど一人じゃ心配だし、チャンピオンも向かってくれませんか？」

イレブン「それは変だね。行ってみよう」

グロツタ地下

ラース「グロツタの町の地下にこんな場所があったのか」

マルティナ「前はここにアラクラトロってやつがいて、ハンフリー

がそいつに悪い事をさせられてたのよ」

奥地

奥にはハンフリーがいた

イレブン「ハンフリー！」

ハンフリー「イレブン！どうしてここに！いや、そんな話は後回しだ。あれを見てくれ」

ハンフリーの前には過去の闘士達がいる

ラーズ「何だこいつら、邪悪な力で満ちていやがる。魔物みたいだ」

ハンフリー「とにかく今は皆の目を覚まさせるのが先だ。手伝ってくれないか？」

ガレムソン「力が溢れてくるぜ。今なら何でもぶっ壊せそうだ」

ベロリンマン「ベロロロ！お前の血、なめたらどんな味ベロン？」

ビビアン「ウッフ、またボクちゃんと戦えるなんてうれしいわあ。前とは違うビビアンちゃんを、たあっぷり見せてあげる」

サイドリア「チャンピオン、アタイあんたと戦いたいんだよ。あの時みたいに熱く、激しくさあ」

ハンサム「シルビアさん。あんたはもう過去の男さ。今のボクはアラクラト様なしでは生きられない体になってしまったんだよ」

ラーズ「まずいぞ。急いで目を覚まさせないと魔物になっちゃう！」

呪われし闘士達があらわれた

ラーズ「イオグランデ！」

カミュ「イレブン！ラーズ！連携行くぞ！」

二人「ああ！」

二人のデュアルブレイカーとギガブレイクが合わさる

三人「クワトロブレイク！」

闘士達は悪い状態にとてまかかりやすくなった

ハンサム「デュアルカッター！」

ベロニカ「イオグランデ！」

やまびこでもう一回イオグランデが出た

イレブン「霸王斬！」

サイデリアの投げキッス

ラース「効かないぜ！」

ラースはハートを砕いた

ビビアンのメラゾーマ

ビビアンは自分にベホイムをかけた

ベロリンマンの通常攻撃

ガレムソンの通常攻撃

ハンフリー「ウイングブロウ！」

ラース「イオグランデ！」

カミュ「ぶんしん！」

ベロニカ「イオグランデ！」

ハンサム「デュアルカッター！」

イレブン「ベロニカ！おじいちゃんと交代して！霸王斬！」

サイデリアとビビアンはたおれた

ベロリンマンの通常攻撃

ガレムソンの通常攻撃

ハンフリー「タイガークロー！」

ラース「イオグランデ！」

闘士達をたおした

アラクラトロ「シユルルル！思ったよりも役に立たなかったな。所詮は前座に過ぎなかったようだ」

ハンフリー「アラクラトロ！貴様、なぜ生きている！」

アラクラトロ「シユルルル。邪神様の力により復活したのだ。以前よりも、ずっと強力になってなあ。今の我にかかれば、欲に塗れた闘士どもの心を操って、我が僕に変えるなど容易い事。

だが、ハンフリー。貴様からはかような欲が消えて操れぬ。勇者によって改心したか、忌々しい。本当なら貴様も支配して我の尖兵として、闘士どもの暴力と恐怖によって、この町を支配してやるつもりだったのだからなあ！」

ハンフリー「そんな事は絶対に許さん！イレブン！ヤツを倒すぞ！一緒にグロツタの町を救うんだ！」

アラクラトロ「ほざくな、ハンフリー。貴様ごときのようなザコな

ど、私の相手にならんわ！勇者よ！邪神により強くなった私の恐怖、とくと味わうがいい！」

アラクラトロ・邪があらわれた

イレブン「ベロニカ！シルビアと交代して！」

ベロニカ「わかったわ！シルビアさん、お願い！」

シルビア「任せて、ベロニカちゃん！」

ラース「カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

イレブン「つるぎの舞！」

アラクラトロは死グモのトゲを放った

イレブン達の守備力が上がった

アラクラトロは糸を出してきた

カミュ「あぶねっ！」カミュはかわした

ラース「ファイアファース！」

仲間達は炎と爆発の力を纏った

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

シルビア「ハッスルダンスよく、そくれ！」

全員が回復した

イレブン「つるぎの舞！」

アラクラトロの通常攻撃

アラクラトロは死グモのトゲを放った

イレブン達の守備力がかなり上がった

ハンフリー「ウイングブロー！」

イレブン「くっ！これはまずい。ラーズ！セーニヤと交代して！」

ラーズ「そうだな！セーニヤ、体制を立て直してくれ！」

セーニヤ「わかりましたわ、ラーズ様！」

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

シルビア「ハッスルダンスよく、そくれ！」

全員が回復した

イレブン「つるぎの舞！」

アラクラトロの通常攻撃

アラクラトロは糸を出してきた

ハンフリーは糸に絡められてしまった

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「スクルト！」

守備力が少し戻った

アラクラトロは死グモのトゲを放った

イレブン達の守備力がさがった

アラクラトロは糸を出してきた

イレブン「うわっ！」

イレブンは糸に絡められてしまった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

シルビア「ハツスルダンスよく、そくれ！」

全員が回復した

セーニヤ「スクルト！」

全員の守備力が少し戻った

イレブンは動けない

アラクラトロの通常攻撃

アラクラトロは糸を出してきた

セーニヤ「効きませんわ！」

セーニヤは盾で防いだ

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

シルビア「ほとばしるゝ、アモゝレ！」

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が戻った

ハンフリー「ウイングブロウ！」

アラクラトロは死グモのトゲを放った

イレブン達の守備力がさがった

アラクラトロの通常攻撃

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が戻った

イレブン「つるぎの舞！」

ハンフリー「ウイングブロウ！」

アラクラトロは糸を出してきた

カミュ「あぶねっ！」カミュはかわした

「アラクラトロの通常攻撃

カミュ「デュアルブレイカー！」会心の一撃！

アラクラトロを倒したイレブン達は、操られていた闘士達と共にグロツタの町へと戻った

孤児院

ハンフリー「俺一人じゃ、きつと皆を助け出せなかっただろう。手伝ってくれてありがとう。相変わらず孤児院の経営は楽じゃないし、大したものを用意したわけじゃないが、感謝の気持ちと思つて受け取ってくれ」

イレブンはクリスタルクローをてにいれた

孤児院 入り口

ベロリンマン「助けてくれてどうもありがとう。何かお礼をしたいベロン。何か困ってることはないかベロン？」

イレブン「それなら僕の故郷のイシの村つて場所に行つて、用心棒をしてくれないかな？今人手が足りなくて困ってるんだよ」

ガレムソン「おお。それなら俺達は喜んで引き受けよう」

イレブン「ありがとう。イシの村は地図に書いておくれ。着いたら、イレブンの紹介で用心棒として来たって言えば大丈夫だよ」

105. 二度目の贖罪

次の日、クレイモラン城下町

マルティナ「次はクレイモランなのね。氷の魔女を思い出すわね。シャルル達は元気かしら？」

ロウ「そうじゃのう。何か困ってれば助けてやらんとな」

グレイグ「町の人達にも何か情報を聞いてみよう」

イレブン「あれ？あの人何かしてるよ？どうしたんですか？」

シスター「どうした事でしょう。最近、私の耳に誰かの悲しみの声がぼんやりと聞こえてくるのです。これは……薄暗闇で嘆く女の子の声。感じます……バイキングのアジトの北から、少女の声が……微かに」

イレブン「(そうだった、マヤちゃんの事も救わないとだった。一番最初に気づくべきだった)」

カミュ「……………」

セーニヤ「カミュ様、どうされましたか？」

カミュ「いや、何でもない」

イレブン「皆、バイキングのアジトの北に行こう」

風穴の洞穴前

カミュ「イレブン。こんな時にすまないが、お前に大事な頼みがある。この扉の奥には俺にとつて、どんな財宝よりも大切なヤツがいる。そいつを、お前に助けてもらいたいんだ」

イレブン「分かってるよ、カミュ。全部知ってる。急いで助けよう」

中に入ると動く事も喋る事もない、助けを求めている黄金の姿となったマヤの像があった

カミュは仲間達に自分の過去を話した。5年前、妹のマヤが黄金になり、逃げるように旅に出たことを

カミュ「そうして旅を続けるうちに預言者に会い、地の底で出会う勇者に力を貸せ。さすれば、お主の贖罪も果たされるだろうと。最初は信じちやいなかったが、イレブンと出会った。

お前との旅の中で、俺なりに考えていたんだ。もしかすると、勇者の剣の力なら、この呪いも打ち破れるかもしれねえ。頼む！どんな姿になってもこいつは俺の妹なんだ！」

イレブン「うん、任せて。ハア！」

勇者の剣を掲げると、勇者の剣は光りだし、聖なる光を浴びたペンダントは首から外れた

マヤ「おにい……ちゃん」

マヤは倒れ込む

カミュ「マヤ！」

カミュは走って駆け寄り、マヤを抱きしめる

マヤ「……俺、不思議な夢を見た。すごく寂しくて怖くて、でも最後はとっても暖かい夢。その夢の中で兄貴達、俺の事助けてくれた」

カミュ「ごめんな、マヤ」

マヤ「いしし、いいよ。許してやる」

カミュ「預言は本当だったってわけだな。ありがとな、イレブン。これで俺の贖罪は果たされた。今度は俺が、お前の期待に答える番だな。よろしく頼むぜ、相棒！」

イレブン「頼りにしてるよ、カミュ！マヤちゃん、体は大丈夫？」

「マヤはゆっくり立ち上がった

マヤ「俺の体はもう大丈夫。なんて言うか、助かったよ。ありがとう。でもそれよりさ、俺の首飾り、さっきので黄金に変える力なくなつたみたい。」

勇者様達のせいでもた貧乏生活だよ。旅が終わるまでここで待ってるけど、クソ兄貴は旅が終わったら俺と宝探しの旅に出る事。これで許してやる。それまで、俺の首飾りはあんた達に預けとくよ」

イレブンは海賊王の首飾りをてにいれた

106. クレイモランでの依頼

その後、クレイモラン城

エツケハルト「やあ、君達か。久しぶりだな、元気そうで何よりだ」

イレブン「エツケハルトさん、お久しぶりです。今日はこの町で、何か変わった事がないか聞きに来たんです」

エツケハルト「実は、かつて君達が倒した聖獣ムンババが復活したという噂があつてな。それだけならいいのだが、そのムンババは訪れた人達を襲っているのだ。」

私の研究によると、聖獣たるムンババはそのような事をするはずがないのだ。悪しき力に染まってしまったのだろう。古代図書館にある森の守り神という本に、ムンババを悪しき力から解き放つ方法が書かれていると聞いたことがある。

あのままやつを放置しておくわけにはいかない。古代図書館でその本を読み、ムンババを元の聖獣に戻してはくれないか?」

ラース「あのムフォムフォ言ってたやつか。あーイレブン。元に戻ったムンババならマスコットになるかもしれないぞ」

グレイグ「あれをマスコットにするのか!?!」

イレブン「あーそうだね、まあまあ可愛いもんね。いい案だと思う。よし、エツケハルトさん任せてください」

エツケハルト「マ、マスコット？何の話かは知らないが、頼んだぞ」

ラース「まずは古代図書館に行こうか」

古代図書館

イレブン「あ、どこにあるのか聞いてくればよかった」

カミュ「そうだな。またこの大量の本の中から探すのも大変だぞ」

ベロニカ「9人もいるし、一階から一人本棚一つで調べていきましよう」

その後

マルティナ「あ、あつたわ！イレブン！この本ね」

イレブン「これだ！ありがとう、マルティナ。えっと……」

シケスビア雪原にある森の奥深くには、巨大な獣が生息しているという言い伝えがある。古代のクレイモランの人々は、豊かな恵みをもたらす森の守り神として、その獣を崇拜していたそうだ。その名はムンババ。

長きにわたる研究の末、私は聖獣ムンババがどのように誕生したのかを突き止めた。意外な事に、ムンババは元々邪神の力によって生まれたムンババ・邪という魔物だったらしい。

ムンババ・邪は相手の力を吸収して身体を再生するため、通常の攻撃や呪文では絶対に倒すことができない。だが、勇者が使う雷の魔法、デイン、ライデイン、ギガデイン。勇者が仲間と連携して使うミナデインでとどめを刺せばその力に屈するという。

その時ムンババ・邪は勇者の聖なる力を吸収し、聖獣ムンババへと生まれ変わるのである」

ラース「イレブンはギガデインを使えるからな。それでとどめを刺せば、ムンババは聖獣になるんだな」

グレイグ「あのすばしっこいやつ相手には苦勞するだろうが、やってみよう」

ミルレアンの森 奥地

ムンババ「ムブオ？ムブオムブオ！ムブオブオ！」

ムンババはこっちに向かってきた

ムンババ・邪があらわれた

ラース「ファイアフォース！」

仲間達は炎と爆発の力を纏った

イレブン「ギガデイン！」

ムンババはいてつく雪玉を投げつけた

マルティナ「きやつ！」

マルティナのよい効果は消え、氷耐性がさがった

ムンババはけとばした！

ムンババのラリホーマ！

イレブン達には効かなかった

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

ラース「ぶふっ!!マ、マルティナ!!?何だ!その格好は！」

ラースはマルティナのバニーの格好に驚いている

マルティナ「何だか覚えてたのよ。力が溢れてくるしいいかなって」

ロウ「ほほ、こりやあええのう」

グレイグ「……………」

グレイグは顔を赤くしながらチラチラと見ている

ラース「…… 戦闘に集中しないとだな」

セーニヤ「氷の旋律ですわ！」

「全員の氷耐性が上がった」

ラース「バイキルト！」

ラースの攻撃力が二段階上がった

イレブン「ギガデイン！」

ムンババはいてつく雪玉を投げつけた

ラース「効かないぜ！」盾で防いだ

ムンババは高くけとばした！

ムンババのラリホーマー！

仲間達には効かなかった

マルティナ「ぼくれつきやく！」

セーニヤ「キラキラポーンですわ！」

セーニヤは嫌な効果から守られている

ラース「マルティナ！あの連携行くぞ！」

マルティナ「任せてちょうだい！行きましょう！」

二人は相手を挟み込み、息ピッタリなコンビネーションで蹴りをたたき込む

二人「疾風双脚乱舞！」

イレブン「ギガデイン！」

ムンババはいてつく雪玉を投げつけてきた

セーニヤ「きやつ！」

キラキラポーンで守られた

ムンババは高くけとばした！

ムンババのラリホーマ！

セーニヤはキラキラポーンで守られた

マルティナ「ばくれつきやく！」

セーニヤ「ラース様！キラキラポーン！」

ラースは嫌な効果から守られている

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「ギガデイン！」

ムンババはいてつく雪玉を投げつけた

イレブン「くっ！」

イレブンのよい効果は消え、氷耐性がさがった

ムンババは高くけとぼした！

ムンババのラリホーマ！

仲間達には効かなかった

マルティナ「ばくれつきやく！」

セーニヤ「ベホマラー！」

全員が回復した

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「ギガデイン！」

ムンババ「ムフォー!!」

ムンババ・邪は聖なる雷の力を吸収し、森の聖獣ムンババになった

ムンババ「ムフオムフオ！ムフオフオ！」

イレブン「よかったね、ムンババ」

ムンババ「ムフオフオ！ムフオフオ！」

イレブン「え？本当？それなら、僕の村のイシの村って場所で皆を見守ってもらえないかな？」

ムンババ「ムフオムフオフオ！ムフオフオー！」

イレブン「ああ、待つて。僕の手紙も持つていつて。今から書くから待つてね」

その後、ムンババはどこかへ去っていった

イレブン「よかったー」

ラース「えーつと…イレブン？何言ってるのかわかったのか？」

イレブン「え？わかんないよ」

ベロニカ「じゃあ何でムンババと話せてたのよ！完全に言ってる事、理解してたんじゃないの？」

イレブン「大体こんな事言ってるのかなって思つてさ。喜んでるみ

「たいだったし」

シルビア「確かに喜んでるみたいだったけど、大丈夫なのかしら？」

イレブン「きつといい子だから問題ないと思うよ」

セーニャ「イレブン様がおっしゃるならきつと大丈夫ですわね」

ラース「適当だなあ。まあ、いいか。一旦戻って報告しようぜ」

クレイモラン城

イレブン「エツケハルトさん、もうムンババは暴れないよ」

エツケハルト「おお！ムンババを元の聖獣に戻してくれたか！ありがたい。流石、勇者様達だな！」

シャルル「イレブンさん、お久しぶりです。再開を喜ぶ暇もなく申し訳ないのですが、あなた達に一つお願いがあるんです。実は、シケスピア雪原の南東にある凍った湖から、巨大な黒竜があらわれたのです。

あれは古の昔、クレイモラン王国を襲い、人々を恐怖のどん底に陥れた伝説の魔竜、ネドラに違いありません！今は雪原にいただけですが、もしあの魔竜がクレイモランを襲えば、この国はひとたまりもな

いでしよう。

討伐の為にクレイモラン兵を何度も派遣しているのですが、全く相手にならず退却するばかり。イレブンさん。もうお頼みできるのはあなたしかいないんです。お願いします！あの魔竜を倒してくださいませんか」

イレブン 「安心してください、シャルル王女。倒してきます」

シャルル 「ありがとうございます、イレブンさん。お礼は必ずいたします」

氷獄の湖

シルビア 「イレブンちゃん！上よ！」

上空からネドラが降り立ってきた

ネドラ 「グアオオオ！我は魔竜ネドラ！いてつく湖に封じられし、古の存在なり！待ち望んだ我が主の復活とともに、かつての力が蘇ったわ！

ローシュの手によって、湖に封じられたあの時の雪辱を今こそはたさん！勇者よ！その体、八つ裂きにしてくれよう！」

魔竜ネドラ・邪があらわれた

ラーズ 「バイキルト！」

ラーズの攻撃力が二段階上がった

イレブン「ラーズ！行くよ！」

ラーズ「おう！いつでも来い！」

イレブンのデインがラーズの足にのる

二人「雷光ばくれつきやく！」

ネドラはおたけびをあげた

セーニヤ「きやつ！」セーニヤは腰を抜かしてしまった

ネドラの通常攻撃

グレイグ「効かん！」盾でガードした

ネドラのグランドプレス

セーニヤは動けない

グレイグ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

ラーズ「ばくれつきやく！」

イレブン「セーニヤ、ベホイム！」

セーニヤは回復した

ネドラのやけつく息

イレブン達には効かなかった

ネドラの通常攻撃

ネドラのグランドプレス

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

グレイグ「鉄甲斬！」ネドラの守備力がかなりさがった

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「アルテマソード！」

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が更に一段階上がった

ネドラのおたけび

イレブン達には効かなかった

ネドラの通常攻撃

ネドラのギラグレイド

グレイグ「マジックバリア！」

全員の呪文耐性が一段階上がった

ラーズ「イレブン！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「アルテマソード！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

ネドラの通常攻撃

ネドラのやけつく息

ラーズ「ぐっ。動けねえ」ラーズはしびれてしまった

ネドラのグランドプレス

グレイグ「蒼天魔斬！」

ラーズは動けない

イレブン「アルテマソード！」

セーニャ「キアリク！」

ラーズ「ありがとな、セーニャ」

ラーズの麻痺が取れた

ネドラの通常攻撃

ネドラはおたけびをあげた

セーニヤ「きゃっ！」

セーニヤは腰を抜かしてしまった

ネドラのギラグレイド

グレイグ「蒼天魔斬！」

ラーズ「ばくれつきやく！」

イレブン「アルテマソード！」

ネドラ・邪は倒れた

クレイモラン城

イレブン「シャルル王女、倒してきましたよ！」

シャルル「イレブンさん、ありがとうございます！リーズレットの事といい今回の事といい、あなたには助けられてばかりです。本当に心から感謝しています。ささやかですが、お礼を用意しました。私からの感謝の気持ちですので、どうか受け取ってください」

イレブンはクラウンダガーをてにいれた

シャルル「それはブルーオーブと同じく、クレイモラン王家に伝わる秘宝。きつとあなたの冒険の役に立つはずです」

イレブン「ありがとうございます、シャルル王女。ありがたくもらいます」

リーズレット「ねえ、イレブン。あなた達あの黒い太陽に挑むんでしょ？もし、魔竜のたましいってのを持ってたら私に持ってきて。そしたら滅多にお目にかからない素材と交換してあげる」

イレブン「あ、さっきのネドラから一つ落ちたよ」

リーズレット「あら、本当？それじゃあどれと交換する？」

イレブン「じゃあヒイロカネってやつでお願い」

リーズレット「いいわよ、ちよつと待っててね」

イレブンはヒイロカネを手に入れた

イレブン「やった。ありがとう、リーズレット」

リーズレット「いいのよ、他にもあつたら持つてきてね」

107. 海水浴

オリジナル展開です。皆が楽しく遊んでたらいいなと思ひ、作りました。

次の日の朝、クレイモラン城下町

イレブン「皆、戦いばかりで疲れてない？大丈夫？」

ベロニカ「こうも戦いばかりだと大変よ！たまには休みましょう！」

セーニヤ「寒い場所だと、やはり暖かい場所が恋しくなりますわね」

マルティナ「前に温泉には行ったから、今度は海なんてどうかしら？」

シルビア「賛成よ！マルティナちゃん！海ならソルティコが一番だわ！」

グレイグ「うむ。ソルティコの海は綺麗だし、暖かく泳ぎやすいからな」

カミュ「もう完全に遊ぶ気だな。まあ、連戦ばかりだししかたねえか」

ラース「そうだな。俺も疲れたしな。息抜きにはいいだろ」

イレブン「それじゃあソルティコに行こうか。ルーラ！」

ソルティコの町

シルビア「海に行くなら、やっぱり皆で泳ぎましょう！水着やうきわなんかはあっちで貸し出してゐるわよ！」

ベロニカ「そうよね！楽しまないと！」

女性達はワイワイと奥にいった

ロウ「水着なんていつぶりのかう」

グレイグ「私も久しく着ていないですからね。おお、いろんなサイズがあるのありがたいな」

ラース「……水着かあ。これでいいか」

イレブン「男だとやっぱり着替えるのは早いよね。先に行ってパラソルとか準備しよう」

カミュ「イレブンも遊ぶ気満々だな」

イレブン「だって！皆でこんな事するの久しぶりなんだもん！すつごく楽しみだよ！」

その後

シルビア「あ、ベロニカちゃん達ー！こつちよー！」

ベロニカ「わあ！パラソルまで立ててくれたのね」

セーニヤ「ビニールボールもありますわ」

ラース「マルティナ！似合ってるぞ！」

マルティナ「ラース。いきなりびっくりしたわ。でも、ありがとう。こういうの着たことなくて、ベロニカに教わったの」

ラース「ナイスだ！ベロニカ！」

ベロニカ「当然よ！このベロニカ様のセンスをなめてもらっちゃ困るわ！」

その後、海ではベロニカ達が遊んでいた

ベロニカ「海って気持ちいいわね。疲れが癒されるわ」

ベロニカはうきわで浮かびながら、空を見上げていた

セーニヤ「お姉様！とってもお似合いですわ！きやつ！」パシ！

転びかけたセーニヤの手をイレブンが掴んだ

イレブン「セーニヤ、大丈夫？」

セーニヤ「イレブン様、ありがとうございます。波に足を取られてしまっ」

イレブン「僕も少し歩きづらいよ。気をつけないとね」

ベロニカ「もう！セーニヤったら！ほら、私はこれ無くて大丈夫だからあんたが使いなさい」

セーニヤ「ありがとうございます、お姉様。でも、お姉様はどうするのですか？」

マルティナ「そういえば、うきわの他にもボートみたいな板もあつたわよ」

シルビア「あら、素敵じゃない。結構大きいやつもあるはずよ」

ベロニカ「それじゃあ私はそれを持ってくるわ。ついでに飲み物も持ってくるわね」

シルビア「飲み物は私も手伝うわ、ベロニカちゃん。一緒にいきましよう」

パラソル内ではグレイグとロウとラースがベロニカ達を見ていた

グレイグ「皆、海ではしゃいでいるな。若いとは素晴らしい」

ラース「発言が完全におつさんだぞ。いいのか、そんなだとどんどん老けていくばかりだぞ」

ロウ「若い者の水着はええのう。目の保養になるわい。特に……」

ラース「……おい、じいさん？今、誰の事を目で追いかけた？あ？」

ラースはロウを睨みつけている

ロウ「え？いや、何でもないんじやよ。そう、わしは別に姫を追いかけていたわけではないんじや。それに、ラースとグレイグは海に行かないのかの？」

グレイグ「私はもうはしゃげるような年ではないですからね」

ラーズ「俺は皆には言っていないが、泳げないんだ。深くまで海に入ると沈んでしまうんだよな」

ロウ「なるほどのう、それならチェスに付き合ってもらえんかの？」

ラーズ「じいさん、チェス強すぎんだよ。俺じゃあ相手にならねえよ」

グレイグ「ロウ様、チェスお強いのですか。私もホメロスにかなり鍛えられましたからね。受けて立ちましょう」

その時、マルティナがやってきた

マルティナ「ラーズ、こんな所にいたの？一緒に泳ぎましょうよ」

ラーズ「あ、マルティナ。悪いが俺は泳げなくてな、あまり海で遊べねえんだ」

マルティナ「それなら、さつきベロニカが海に浮かべる大きな板を持ってきたわ。それに乗ればラーズも大丈夫よ。一緒にいきましよう」

マルティナはラーズの手を取って海へ連れて行く

ラース「………… わかったよ。でもマルティナを助けてはやれねえからな」

マルティナ「ふふ、どうせなら私が泳ぎ方教えましょうか？」

ラース「それはいいや。溺れそうなの見て、他の皆に笑われそうだからな」

離れた場所ではチエアに横たわるカミュがいた

カミュ「へっ。皆、はしゃいでガキじゃねえんだからよ。俺はこのまま寝てるとするかな」

ベロニカ「えいっ！」

ベロニカがカミュの首元に飲み物をつけた

カミュ「ひいっ!!! テンメエ！ベロニカ！何しやがる！待ちやがれ!!」

ベロニカ「アハハハ！ひいって言ったわ！アハハハ！」

ベロニカは海に逃げて、カミュもそれを追いかける

その頃、海ではラースが大きな板に乗って海に浮いていた

マルティナ「どう？ラース。板の乗り心地は？」

ラース「おお、こんなに岸から離れた事ねえから新鮮な気分だな。こりゃあ楽でいいな」

その時、ベロニカが泳ぎながらやってきた

奥からはカミュもやってきている

ベロニカ「あ！ラース！いいのに乗ってるじゃない！私も乗せて
！」

ラース「お、おう。慌ててどうした？ってカミュ？」

カミュ「ベロニカ！てめえふざけやがって！絶対に許さねえからな
！」

カミュは板をひっくり返した

マルティナ「あ！ラース!!」

ベロニカ「プハア！ちよつと！急に何するのよ！危ないじゃない
！」

カミュ「うるせえ！元はお前が悪いんだろうが！…あれ？ラース？」

ラーズ「ガバガバゴボ！」

ラーズは溺れていて、どんどん沈んでいく

カミュ「ハハハハハ！あいつ急にどうしたんだよ。すごい顔になつてるぜ」

マルティナ「違うわよ、カミュ！ラーズは泳げないの！助けないで！」

ベロニカ「えっ！ラーズが!?大変！」

その後、砂浜

イレブン「ラーズ、大丈夫？」

ラーズ「ゲホゲホゲホ！ゴホツ！ハア、酷い目にあつた」

マルティナ「少し休んでみましょう。飲み物持ってくるわね」

ラーズ「ありがとな、マルティナ……………おい、カミュ？」

カミュ「……………」

ラーズの背後に般若でもいるのかと錯覚してしまうほど、怒っているのが伝わってくる

ラーズ「覚悟はできてるよな？」

カミュ「…お、俺だけじゃねえ、ベロニカが最初に…」

ラーズ「ベロニカのやつはまた今度だ。お前はあそこで板をひっくり返す必要はなかったよな？」

カミュ「(相棒… ザオリク頼んだ) はい」

イレブン「(わかったよ、カミュ)」

その後

マルティナ「戻ったわ。カミュは… まあ、仕方ないわね」

ボロボロになり、動かなくなったカミュが砂浜で横たわっており、イレブンがザオリクを唱えようとしていた

パラソル内ではグレイグとロウのチェスが続いていた

ロウ「ラーズを怒らせるとんでもない事になるのう。グレイグ、降参かの？」

グレイグ「ぐっ。参りました、ロウ様」

シルビア「んもう！二人とも、折角海に来たのに何してんのよ！」

シルビアがパラソルまでやってきた

グレイグ「ゴリアテか。だが、俺達のはしやげるような年じゃないんだが」

シルビア「年なんて関係ないわよ！皆で一緒に遊ぶのが大事なんだから。ほら、ロウちゃんも！」

ロウ「わしもかの。ふおっふおっ、シルビアには敵わんのう」

シルビアはグレイグとロウの手を取って砂浜まで連れて行く

108. 海水浴2

セーニャ「グレイグ様！ロウ様！こっちにいらっしやってくれたのですね」

シルビア「ビーチバレーなんてどうかしら？これならラースちゃんでも楽しく遊べるわ！」

ラース「確かにそれならありがたいな。やろうぜ」

ベロニカ「でも、男相手だと私達は敵わないわよ」

ロウ「それじゃあ、男女別れよう。わしは男側の審判でもするかの」

シルビア「アタシは女子側に行くわね！その方が綺麗に別れるわ！」

ラース「俺達はチームはどうする？」

イレブン「カミュ！やろう！」

カミュ「よし、俺達のコンビネーション見せてやろうぜ」

グレイグ「ならば、ラース。俺達も姫を守る者としてのコンビネーションを見せなければな」

ラース「そうだな、グレイグ！やってやるとするか」

カミュ「ただ、勝ち負けだけじゃあつまらねえな。何か罰ゲームつけようぜ」

ラース「というと？」

カミュ「負けた方が勝った方に今日の晩飯のメニューを2品渡すつてのはどうだ？」

ラース「それは!!負けられないな!!」

グレイグ「そ、そんなにやる気を出すのか…?」

ロウ「それじゃあ開始じゃ!」

女性側ではマルティナとベロニカ、シルビアとセーニヤとなつていた

シルビア「セーニヤちゃん、お願いできるかしら?」

セーニヤ「わかりましたわ！えい！」

シルビア「いい感じよく、えい！」

マルティナ「はい！」

ペロニカ「うんしょ！」

マルティナ「ハア！」

バス！

セーニヤ「あ！すみません！シルビア様」

シルビア「大丈夫よく、セーニヤちゃん。気にしないで」

オラア！

ボスウン！！

っしやあ！！

マルティナ「男側の方からバレエなのか怪しいくらい、激しい音と
声がするわね」

ベロニカ「本当男って単純なんだから」

セーニヤ「観戦しに行きますか？」

男性側では

イレブン「ハアア！」バゴン！

ラース「甘いぞ！ハア！」

グレイグ「いい高さだ、ラース！行け！」

ラース「オラア！」バゴン！

カミュ「くっ……。ラースのやつ、ギリギリを狙ってきやがる。しかもなんてパワーだよ」

イレブン「えい！」バゴン！

グレイグ「コンビならあっちが上だな。僅かな合図で動いている」

ライス「俺らは力で行くぞ！ハア！」パン！

ビーチボールが割れてしまった

四人「え？」

ロウ「ライス、グレイグペアがボールを壊したため、カミュ、イレブンペアの勝ちじゃ！」

カミュ「よっしゃ！やったぜ、イレブン！」

イレブン「夕飯増えるね！やった！」

ライス「ぐっ……。すまない、グレイグ。力が入りすぎたようだ」

グレイグ「いや、ライスの気迫は凄かったからな。俺もいつか破れるんじゃないかとずっと思っていたんだ」

マルティナ「お疲れ様、ライス、グレイグ。凄い迫力だったわね、どうしてそんなに本気になっていたの？」

ライス「ありがとな、マルティナ。今の戦いは勝った方に今日の夕飯のメニューの2品を譲るってルールだったんだ」

マルティナ「あら。それはラースにとって一大事じゃない。だから誰よりも必死だったのね」

グレイグ「ラースはよく食べるのか？キャンプではそんな事ないが」

ラース「俺は元々食べるのが好きなんだ。でも、キャンプだと食べる物は限られてるからな。俺ばかり食べるわけにもいかない。だから、こういう宿でのご飯は多く食べるんだが……」

マルティナ「よかったら私の分、分けてあげましょうか？」

ラース「いや、そこまでしなくていいぞ、マルティナ。勝負に乗ったのは俺達だ。負けは負けだ。認める」

グレイグ「潔いな。男らしいぞ、ラース」

その後は全員で海で水を掛け合ったり、泳ぎの競争をしたりした

その夜

カミュ「へへ、悪いな、グレイグ。ありがたく食わせてもらうぜ」

グレイグ「ああ、俺の分までしっかり食べるんだぞ」

イレブン 「何かごめんね、ラース。一品だけでもいいよ？」

ラース「…… いや、俺は負けたんだ。情けはいらない。さあ、食べろ」

グレイグ 「ラース、俺達はロウ様と一緒に酒でも飲むか」

ラース「そうしよう。ソルティコはどんな酒があるんだ？」

ロウ「ソルティコはワインが上物での。このハムとの相性は抜群なんじゃ」

グレイグ「ロウ様もそう思いますか。私もワインにはここのハムが一番だと思います」

ラース「どれどれ？…… おお！これは、うめえな！」

イレブン側では

イレブン 「何か今さらになって申し訳なくなってきたよ」

カミュ「そんなの気にするなって。あいつらだって乗ってきたんだ

からよ」

ベロニカ「それにしても、そんな単純な事であんなに凄いバレーしてたのね。本当よくわからないわ」

セーニヤ「皆様、かつこよかったですわ」

シルビア「ラースちゃん、意外と食べる事好きなのね。ちよつとか
わいいわね」

マルティナ「そうよね。お祭りや楽しい事も好きだし、かわいい所もあるのよ」

カミュ「あいつが？かわいい？どこがだよ。悪かったとはいえ、俺
なんて今日ボゴボゴにされたぜ？」

ベロニカ「そういえば、私ラースに次のキャンプでは当番俺だから
覚悟しとけよって言われたんだった」

イレブン「でも、ラースの作るご飯いつも美味しいから大丈夫じゃない？」

セーニヤ「見た目も綺麗ですよ。よくホムラの方の料理を作って

ますわね」

シルビア「アタシ、あれ好きだわ。天ぷらってやつ。お酒にもあつて美味しかったわ」

ベロニカ「何出るのかしら。ちよつと怖いわ」

カミュ「まあ、俺みたいに鉄拳制裁じゃないだけマシだろ」

その後、宿にて

マルティナの部屋

コンコン

マルティナ「はい、どなたかしら？」

ラーズ「マルティナ、今いいか？」

マルティナ「あら、ラーズ。どうしたの？」

ラーズ「今星空が綺麗だよ。海に映つてすごくいい景色なんだ。一緒にみようぜ」

海辺

マルティナ「すごい、こんなに沢山星が見えるのね」

ラース「だよな。俺もさつきシルビアに教えてもらったんだ。海も見てみるよ。この星が海に映ってるんだ」

マルティナ「本当だわ。幻想的ね。デルカダールではここまで綺麗に星は見えなかったわ」

ラース「それじゃあ、これからも偶には一緒に見に行こうな」

マルティナ「あ……。ふふ、そうね。楽しみにしておかなくちゃ」

ラース「それでは、マルティナにプレゼントがあります！」

マルティナ「プレゼント？いいの？何もない日よ？」

ラース「まあ、俺があげたいからマルティナにあげるだけなんだけどな。これを、君に」

ラースは小さな箱をマルティナに差し出した

マルティナ「箱？……これって！」

そこには銀色のリングに淡い紫の宝石が入った指輪がはいって
いた

ラーズ「これからずっと一緒なのに、指輪がないのはおかしいな
と
思ってた。マルティナに似合いそうなのを少し前に買ったんだ。
つけてくれるか？」

マルティナ「もちろんよ、ラーズ！ありがとう！ずっと大切にす
るわ！」

ラーズ「よかった。喜んでもらえて俺も嬉しい……。そしてお二
人さん？いい加減に出てこいよ」

マルティナ「え？」

宿の隅からベロニカとシルビアが出てきた

ベロニカ「もう！気づいてたのね」

シルビア「まあ、睨まれてるのは感じてたけど、邪魔はしなかつた
じゃない？」

ラーズ「シルビアは最初からこのつもりだったんだろうが。俺が今
日指輪を渡そうとしてる事までわかっていたな？」

シルビア「大正解よく。流石ラースちゃんだわ」

ベロニカ「私達は二人の事を応援してるの！だから、影で見えてたっ
ていいでしょ？」

マルティナ「ありがたいけど、私はすこし恥ずかしいわ」

ラース「ほら、見ろ！マルティナが恥ずかしがってるじゃないか。
もう覗き見すんのやめろよ！」

ベロニカ「……マルティナさんがそう言うなら」

ラース「俺の時もすぐに引き下がれよな」

シルビア「マルティナちゃん、ラースちゃん！いつまでもお幸せに
ね！」

シルビアとベロニカは楽しそうに戻っていった

ラース「まったく！あの二人は……」

マルティナ「私達応援されてるのね……………ねえ、ラース。邪神
を倒して、世界を救ったら……………私と結婚してくれる？」

ラース「おいおい、マルティナ。俺がどういう意味でその指輪を贈ったと思ってるんだよ。好きな女性に指輪を贈るなんて、一つしか意味はないんじゃないか？」

マルティナ「え?..... あ」

マルティナは顔が赤くなった

ラース「ハハハ。顔赤いぞ?」

マルティナ「私..... すっごく嬉しいわ」

ラース「二人でどこまでも歩いて行こうな」

マルティナ「ええ、よろしくね」

その後、二人は手を繋いで星空を見ていた

109. 町を救え

次の日、宿

イレブン「今日は、プチャラオ村とダーハル―ネの町に行こうと思ってるんだ」

セーニヤ「残りの町も少なくなってきましたわね。どの町も魔物が凶暴になって困っているようですわ」

カミュ「しかも邪神によって復活したり、パワーアップしてたりするからな。気は抜けないな」

ラーズ「それじゃあこの後支度して、プチャラオ村に行こうぜ」

プチャラオ村

シルビア「まあ！この村色んな人が踊ってるわ！素晴らしいじゃない！」

ラーズ「……いや、何やらおかしいぞ。皆、顔がとても苦しそうだ。ん？あそこにいるのは……女将さんじゃないか！」

女将「はあ、はあ。あそーれ、ハッスルハッスル。あ！ラーズ君じゃないか！助けておくれよ！変な魔物に呪いをかけさせられちゃったのよ。数日間踊りっぱなしで……もう足が……フフフーン！

時折変な言葉を勝手に言っちゃうし、もう大変なのよ！」

グレイグ「死ぬまで踊り続ける呪いか。ふざけてるようだが、恐ろしいな。急いでその魔物を見つけなければ」

村の高台

そこにはチエロンとその父親がいた

チエロン「あれ？兄ちゃん旅人さんだべか？……何だか懐かしい感じがするだ。それより大変なんだべ！いきなり変な魔物が現れて、村の皆に呪いをかけていっただ。

子どもやおっちゃんは魔物に入られなかったみてえで、呪いをかけられずに済んだけど、兄ちゃんとても強そうだべ。あの変な魔物は遺跡の方に向かっただ。あいつを倒して村を助けてほしいだ！」

グレイグ「俺はあの子どもを知っているような……」

ロウ「わしも何となく知っておる気がする。どこかで知り合ったかのう？」

シルビア「なぜかしら？私もとっても懐かしい感じがするわ。それより、遺跡に向かいましょう！」

遺跡

男「旅人さんか！魔物が壁画の中に入っていたんだ。頼む！助けてくれ！」

ロウ「壁画世界か。皆、行くぞい」

グレイグ「絵の世界ですか!？」

壁画世界

グレイグ「こ、こんな世界があるとは……………」

グレイグは辺りを見渡している

カミュ「グレイグのおっさんは知らねえもんな」

マルティナ「ここではメルトアっていう絵の魔物が村の人達をこの世界に取り込んでいたの」

奥地

???「ホッホホーイ！ええのう、ええのう。若いもんのダンスはええのう！フレッシユなダンスでワシもハッスルしてきたぞい！ホーレホレ！もつともつと踊るんじや！」

男「も…もう、足が限界…。誰か…助けて」

???「だらしがないぞい！邪神様に捧げる大事なダンスなんじゃ。へばってないでホレ、踊れ、踊れい！」

ん？まーだ踊つたらんノリの悪いやつらがおるのう！ホレ！お前さん達にも踊ってもらうぞい！」

ハッスルじじい・邪があらわれた

ラース「ダークフォース！」

仲間達は闇と土の力を纏った

イレブン「つるぎの舞！」

セーニヤ「キラキラポーン！」

セーニヤは嫌な効果から守られている

ハッスルじじい「バギクロス！」

ハッスルじじいは仲間を呼んだ

ニズゼナイト達があらわれた

ロウ「ドルマドン！」

ラース「イレブン！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「ギガブレイク！」

ニズゼナイト達はたおれた

セーニャ「ロウ様！キラキラポーン！」

ロウは悪い効果から守られている

ハッスルじじい「メラガイアー！」

ハッスルじじいの誘う踊り

イレブン達には効かなかった

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員が回復した

レース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「レース様！キラキラポーン！」

レースは嫌な効果から守られている

ハッスルじじいは仲間を呼んだ

ニズゼナイト達があらわれた

ハッスルじじいの誘う踊り

ロウはキラキラポーンに守られた

ロウ「ラーズよ、準備はいいかの？」

ラーズ「もちろんだ！」

ロウのグランドクロスにラーズの岩石落としが合わさる

二人「大地の怒号！」

ニズゼナイト達はたおれた

ラーズ「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

セーニャ「キラキラポーン！」

イレブンは悪い効果から守られている

ハッスルじじい「ハッスルダンスじゃ！」

ハッスルじじいは回復した

ハッスルじじい「バギクロス！」

ハッスルじじいは仲間を呼んだ

ニズゼナイト達があらわれた

ロウ「グランドクロス！」

ラーズ「イオグランデー！」

ハッスルじじい「ギャアアア！」ジユワー

村人「旅の方達、倒してくれてありがとう。おかげで自由に動けるようになったよ。俺達はここへ連れてこられて、不思議な服を着せられて、ひたすら踊らされていたんだ」

セーニヤ「無事でよかったですわ。私達と一緒にこの世界から出ましょう」

プチャラオ村

チエロン「あ、兄ちゃん達が魔物を倒してくれたんだよね？本当にありがとうだ。これ、村の皆を代表してお礼だべ」

イレブンは小さなメダル10枚をもらった

女将「ありがとねえ、ラーズ君達。ずっと踊るのは辛かったけど、何だか少し楽しかったよ。これからは踊りもやってみようかね」

ラーズ「ハハハ！流石プチャラオ村だな、商魂逞しいぜ」

イレブン「本当だね、ただでは転ばないもんね。それじゃあダーハルーネの町に行こうか」

ダーハルーネの町

入り口にはルパスとルパスの子どもがいた

ルパス「おお！イレブン達じゃねえか。ちょうどいい所に！」

カミュ「ルパス！何でここに！ホムラにいるんじゃないのかよ」

ルパス「俺はルコを連れて旅に来ただけだ。そしたら、この町を魔物が制圧しちまつてるんだ！町の人達は全員避難したようだが、このままじゃこの町は魔物の町になっちまう」

カミュ「イレブン！魔物達を全部倒すぞ！」

イレブン「そうだね！三つに分かれよう。左と真ん中と右で三人ずつ。その後、ステージの上で集合だよ！橋の上も確認してね！」

全員「了解！」

イレブン「カミュ！シルビア！左に行こう！」

ベロニカ「グレイグさん！セーニャ！真ん中に行くわよ！」

ラース「マルティナ！じいさん！俺達は右だ！」

その後

イレブン「全員集まったね。あいつがボスだ。行こう！」

ヘルガイオンがあらわれた

ラース「バイキルト！」

ラースの攻撃力が二段階上がった

ベロニカ「イレブン！バイキルトよ！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ヘルガイオンの通常攻撃

ヘルガイオンのばくれつけん

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

ラース「ばくれつきゃく！」

ベロニカ「メラガイアー！」

イレブン「つるぎの舞！」

ヘルガイオンは倒れた

その後、街の人達が戻ってきた

ラバディオ「ルパスという男から聞きましたよ。この街をあなた方が救ってくださったと。何とお礼を申したら言いか。もはやこの街には二度と戻れまいと覚悟して、街の人々を避難させましたから。」

その報いに足りるかは分かりませんが、どうぞこれをお収めください。ダーハル―ネの住民達全員の気持ちです」

イレブンはライトニングソードをてにいれた

ルパス「あんたの活躍見せてもらったぞ。流石は勇者だな、感動すらしたぜ。不運ばかりの人生だった俺だが、あんたに巡り合えたことは唯一にして、最大の幸運なのかもしれないな。」

今回だつてあんたが来てくれたから、俺達親子の命も助かったようなもんだ。礼をしたいんだ。何か困っていたら助けになろう」

イレブン「それじゃあルパスさん。僕の故郷のイシの村で、復興を手伝ってほしいんだ。ルパスさんの情報の力は絶対に役に立つからさ。お願いします！」

ルパス「俺の情報の力……か。いいぜ。あんたが望むなら、俺はイシの村に行こう。場所を教えてくださいませんか？」

イレブン「はい、地図に書いておきますね。着いたら村の人に、イレブンの紹介で来たと言えば通じると思います。ありがとうございます」

その夜、ダーハル―ネの宿

イレブンとカミュの部屋

イレブン「うーん……」

イレブンはレシピを見ながら悩んでいる

カミュ「イレブン、どうしたんだ？悩んだ顔して」

イレブン「いや、鍛冶をしたいんだけど、どの装備にもリーズレツトから魔龍のたましいで交換してもらわないといけない素材が多くてさ。でも、魔龍のたましい全然持つてなくて」

カミュ「それなら確か、前にネルセンの宿屋の前にいる魔物から盗めたな」

イレブン「本当？それじゃあ明日素材集めに付き合ってくれない？」

カミュ「おう、俺は構わないぜ。他の皆はどうするんだ？」

イレブン「基本僕とカミュで終わらせるから、全員はいらないよね。女性陣はダーハル―ネで一日待ってもらおう」

カミュ「じいさん達はどうする?..」

イレブン「そこなんだよね。どうしようかな.....。相談してくるね」

ロウとグレイグの部屋

ロウ「なるほど。それならわしもこの町で待っていいよいかの。じやが、回復してほしいければついていくぞい」

イレブン「いや、僕も回復はできるし、宿屋の近くにずっといるから多分大丈夫だよ」

グレイグ「だが、二人では危険ではないか?俺も行くか?..」

イレブン「でも、ただひたすらに戦って盗んでを繰り返すだけだから、かなり暇かもよ?..」

グレイグ「俺は構わんぞ」

イレブン「じゃあ、グレイグは来てもらってもいいかな？」

グレイグ「わかった。ラスとゴリアテはどうする？」

イレブン「三人もいればいいかな。申し訳ないし、二人とも待って
てもらおう事にするよ」

110. レデイの扱い

オリジナル展開になります。飛ばしてもらっても構いません。

次の日、宿

イレブン「というわけで、今日は女性陣とラースとシルビアとおじいちゃんは休んでいいよ」

ベロニカ「やったわ。シルビアさん、一緒にショッピングしましょう」

ラース「まあ、仕方ないか。あまり遅くなるなよな。カミュ、グレイグ、イレブンの事ちゃんと見てろよ?」

カミュ「当たり前だろ」

グレイグ「ああ、夕食までには帰ってこよう」

イレブン「じゃあ行ってくるね。ルーラ!」

イレブン達は出ていった

ラース「俺は今日どうするか」

マルティナ「ラース、よかつたら前に約束してくれたスイーツ巡りはどうかしら？」

ラース「おお、そうだな。でもいいのか？マルティナ。ベロニカ達と一緒に行かなくて」

マルティナ「最初はそうしようと思ってたんだけど、約束があつたのを思い出してね」

ラース「そうか。まあ、それなら今日はマルティナをエスコートする日だ、なんてな」

その時、ベロニカがラース達の前にやってきた

ベロニカ「いい事聞いたわ！ラース！私達もついて行くわ！」

ラース「ベロニカ？いきなりどうしたんだよ」

ベロニカ「ラース！あんたのレディに対する扱い方を、このベロニカ様が見てあげるわ！私達をエスコートできなきゃ、マルティナさんなんてもっと無理よ！」

シルビア「ベロニカちゃん、とっても面白そうじゃない。ラースちゃんがどういうエスコートをするのか、アタシも興味あるわ」

ラース「おいおい、そんな大層な事俺は無理だぞ。ほんとしちよつとした事だけだ」

シルビア「それじゃあ、アタシが教えてあげるわ。今後マルティナちゃんと二人で何処かに行く時に絶対使えるわよ」

ロウ「ふおっふおっ、楽しそうで何よりじゃのう」

ロウは荷物を持ってどこかに向かおうとしていた

ラース「じいさん、見てないで助けてくれよ。俺はマルティナと行きたいんだ」

ロウ「わしはこれからマッサージに行くのでな。頑張るんじゃないぞ、ラース」

セーニャ「ラース様！本日はどのようなスイーツを食べに行くのですか！私楽しみですよ！」

マルティナ「まあいいじゃない、ラース。普段通りで私は全然嬉しいわ。それに、大勢いても私は楽しいから平気よ？」

ラース「……ああ、もう！わかったよ！皆、行くぞ！」

四人「おおー！」

ラース「(さらばだ、俺の幸せな休日)」

ダーハルルーネの町

マルティナ「それで、最初はどこに行くの？」

ラース「元々行こうとした場所なんだが、俺の顔馴染みがやってくるカフェがあるんだ。そこのパフェがすごく美味くてな。」

俺もダーハルルーネでいくつかパフェは食べてるが、そこが一番だな。しかも、顔馴染みだからかトッピングをし放題なんだぜ」

セーニヤ「それは最高ですわ!!ラース様!急いで行きましょう！」

シルビア「それは楽しみね。期待できそうだわ!それに、アタシ達の外側で歩いているのも流石ね」

ベロニカ「あ、本当だわ。なるほど、これくらいは当たり前なのね」

カフェ

ラース「皆、お先にどうぞ」

マルティナ「ありがとう、ラーズ」

セーニヤ「ありがとうございます、ラーズ様」

シルビア「格好いいじゃない、ラーズちゃん」

ベロニカ「ま、まあ、これくらいはね」

ラーズ「おーい、店長！俺だ！ラーズだ！」

そうすると、キッチンからラーズと同じくらいの身長男性がやってきた

店長「お、ラーズ！久しぶりに顔出したな！つてお前！！何こんな美女達引きつれてんだよ！羨ましいな！こんちくしょう！」

ラーズ「おうおう、文句は後にして、テーブル席頼むぜ」

店長「くっ！おら、こっちだ」

ラーズ「さ、行こうぜ」

店長は窓側の席に連れていった

店長「ここでいいだろ？景色もいいしな。メニューはいつものパフェでトッピング全部か？」

ラースは全員の椅子を引いて先に座らせていた

ラース「ああ。だが、普段の倍の量を一つで頼む。それと、飲み物も頼んでいいぞ」

マルティナ「私はブラックコーヒーにしようかしら」

店長「温かいのと冷たいのどちらにしましょう？」

マルティナ「冷たい方をお願いできるかしら？」

シルビア「アタシは紅茶をお願いするわ」

セーニャ「私も紅茶をお願いします」

ベロニカ「私はオレンジジュースを一つ」

店長「ありがとうございます。ラースは水だな。それではお待ち下
さい」

ラーズ「おい、勝手に決めんな。たくつ、さつさと行きやがって」

セーニヤ「私楽しみです！それに、とても甘い香りがしますわ」

マルティナ「私もこうやって甘い物を食べるのが夢だったのよ。嬉しいわ」

ラーズ「それならきつと満足してもらえるはずだ。あいつはあんな口してるが、腕はたしかだからな」

ベロニカ「中良さそうだったわね。どうやって知り合ったの？」

ラーズ「あいつの名前はシンジ。ここの店で店長をしてるんだ。ダーハル―ネではそれなりに有名なパティシエらしいぜ。一人旅の時に護衛を頼まれて、その時に仲良くなってな。それから甘い物を食べたかったら、この店に来るようにしてたんだ」

シルビア「ラーズちゃんは人当たりが良さそうだから、色んな人と仲がよさそうよね。それにさつきも流れるようにアタシ達の椅子を引いて、座るのを先に譲っていたのも素敵だったわ」

マルティナ「これくらいならラーズはいつもしてくれるわよ？」

ラース「まあな。俺は腐つても貴族だったからな。お爺様に扱い方は叩き込まされたんだ」

その後

店長「お待ちせしました。特製パフエとお飲み物の方になります。それと、こちらトッピングの方になります。好きなだけお使いください」

五人の真ん中には大きなパフエが置かれた

ベロニカ「すつごーい。何これ！いろんなフルーツやお菓子がのつてるわ！」

セーニヤ「夢のようなパフエですわ！早速いただきます！」

マルティナ「美味しい！パフエってこんなに美味しいのね！」

シルビア「これは……すごいわ。アタシもダーハル―ネのパフエはたくさん食べたけど、ここまでの美味しさは出会えた事がなかったわ！」

ラース「だろ？しかもトッピングし放題。最高の一言に尽きるよな」

セーニヤ「私、ここに住みますわ！」

ラーズ「そ、それはどういう事だ？」

ベロニカ「セーニヤ、興奮しすぎよ。気持ちはわかるけど、少し落ち着きなさい。でも、スプーンが止まらないわね」

しばらくして

店長「よう、ラーズ。今日のパフェはどうだった？」

シンジが話しかけにやってきた

ラーズ「おう、変わらず美味かったぜ。ありがとな」

店長「へへ。そう言われると嬉しいぜ。お姉さん方はどうでしたか？俺の作ったパフェ、気に入っていただけましたか？」

セーニヤ「もう最高でしたわ!!店長様の作ったパフェはどれも一級品のような口溶けと甘さ、スポンジやフルーツの美味しさが無駄なく詰まった一品でした！」

店長「お、おう。そこまで言ってもらえると、パティシエとして冥利に尽きるってもんだな」

マルティナ「私も初めて食べたけど、パフエってここまで美味しいのね。感動したわ」

シルビア「本当に美味しかったわ。また食べたくなったら来てもいいかしら？」

店長「ぜひまたのご来店をお待ちしております。あれ？もしかして…：シルビアさんじゃないですか？」

シルビア「あら？アタシの事知ってるの？」

店長「もちろんです！俺、あなたのショーを見ていつも笑顔にしておらってたんです！！まさか本物に会えるなんて！！サイン、お願いします！」

シンジは自分のエプロンにサインをお願いしている

シルビア「あら、嬉しいわ。あなたのパティシエの腕も素晴らしいけど、笑顔もとっても素晴らしいわよ」

シルビアも笑顔で答えた

店長「ありがとうございます！シルビアさん！俺、このエプロン店の入り口に飾りますね！」

ベロニカ「すごいわね。シルビアさんのファンだったなんて」

ラース「俺も知らなかったな。さて、会計しに行くか」

店長「お、もう行くのか？それならパフェの値段と飲み物合わせてこの値段だな」

ラース「じゃ、これで丁度だろ。また来るぜ」

セーニヤ「私も必ずまた食べにきますわ！」

ペロニカ「美味しかったわ！」

マルティナ「別のメニューも食べにくるわね」

シルビア「また来るわ〜！」

店長「それでは！またよろしく願いします！」

111. レディの扱い2

ラース「それじゃあ、この後はどうする？もう一件スイーツを食べるか？それともショッピングするか？」

マルティナ「流石にさっきので私はお腹が膨れたわ。ショッピングして動きましょう」

ベロニカ「そうね。私もお腹いっぱいだわ」

セーニャ「甘い物は別腹ですわ！」

ラース「俺もまだ食えるな。でも、一度ショッピングするか。その後また考えよう。何か欲しいものはあるのか？」

シルビア「アタシ、香水見たいのよね。皆、いいかしら？」

ベロニカ「あ、私も見てみたい！」

マルティナ「あまり気にした事なかったけど、確かに興味あるわね」

シルビア「それじゃあ向かいましょう！」

セーニヤ「スイーツの香りがありますでしょうか」

ラース「ハハ、香りまで甘くするのか？流石だな、セーニヤ。俺は香水なんて使った事ないから、よくわからないな」

マルティナ「あら？そうだったの。グレイグはたまに香水つけてるわよ。バンデルフォンの花の匂いって言ってたわ」

ラース「まじか。俺も何かつけてみようかな」

香水店

シルビア「あら、この香りいいわね」

ラース「どんなやつなんだ？」

シルビア「カモミールちゃんよ。どうかしら？」

ラース「……おお、いいな。でもシルビアには、このバラとかの方も似合うんじゃないか？」

シルビア「バラちゃんは残念だけど、もう持ってるのよ。でもありがとね、ラースちゃん」

ラーズ「おう。しかし、たくさんあるんだな。俺にはどんなのが似合うのだろうか」

ベロニカ「ラーズならこの柑橘系なんてどうかしら？」

ラーズ「ふむ……。どうだ？」

ラーズは腕につけてみた

ベロニカ「うーん、悪くないけど……」

マルティナ「そうね。悪くはないけど、もっとしつくりくる匂いはありそうよね……。あら？このライラックってやつはどうかしら？」

ラーズ「いい匂いだな。どうだ？」

ベロニカ「あ！いいじゃない！」

マルティナ「そうね、何だか少し甘いような匂いがするわ。こういう香り好きだわ」

ラース「おお、それじゃあ買ってみるとするか」

その後

セーニヤ「スイーツの香りはありませんでしたが、ミルクの香りというものがありました、つい買ってしまいましたわ」

マルティナ「私は皆みたいになってものが見つけれなかったわね」

ベロニカ「私はこのスズランの香りってのにしたわ」

シルビア「アタシはシロツメクサちゃんの香りにしたわ！素敵な匂いだったわ」

ラース「次はどこに行く？」

ベロニカ「私、服がみたいわ！」

セーニヤ「私も新しい服が欲しいですわ」

シルビア「それじゃあ服屋さんに行きましょう！」

服屋

マルティナ「ラース、これなんてどう？似合うかしら？」

ラース「おお！いいな、似合っているぞ。このカバンをワンポイントでつけるとどうだ？ヒモがアクセントになるんじゃないか？」

シルビア「あら、マルティナちゃん、素敵！似合ってるわ！」

マルティナ「それじゃあ買ってみようかしら」

セーニャ「お姉様！こちらお揃いになりますわ！色違いで買いますよ」

ベロニカ「私が元に戻れたらね」

ラース「ベロニカのサイズだと、子ども用になっちゃうもんな。でも今はそのサイズが必要だろ？ベロニカもたまには思い切って、セーニャみたいな緑とかどうだ？姉妹だから似合わないなんて事はないだろ」

ベロニカ「……そうね。アリだと思っわ」

セーニャ「それではお姉様。子ども用の方にいきましょう」

シルビア「うーん…」

ラーズ「シルビア、結構持つてるな。ほら、俺が持つてるから試したいなら行ってこいよ」

シルビア「あら、ありがとう！それじゃあ、お願いするわね」

マルティナ「ラーズ！この帽子どうかしら？」

ラーズ「マルティナに麦わら帽子、緑のリボンか…。。白い服と合わせてみたら黒い髪と映えるんじゃないか？」

マルティナ「…。こんな感じの服でいいかしら？」

ラーズ「!!マルティナ！ぜひ買ってきてくれ！そして、皆に見せるんだ。絶対似合うって言ってくれるぞ！いや、何なら俺が買おう！」

マルティナ「そ、そう？そんなに？じゃあ買おうわね」

その後

ベロニカ「欲しい服も買えたし、大満足よ！」

シルビア「アタシも思ってたよりも買っちゃったわ」

セーニヤ「ラーズ様、すみません。全部持ってもらって」

ラーズ「気にするなよ、力は有り余ってたんだ。これくらい平気だ」

マルティナ「でも、少し休憩しましょ。あそこにベンチがあるわ」

ベロニカ「あ！アイス屋さんがあるわ。私、喉が乾いたし皆で買いましょよ」

その後

シルビア「荷物番ありがとね。はい、ラーズちゃんとマルティナちゃんの分よ」

シルビアはマルティナにカップのアイスを渡した。スプーンは一つだけになっている

マルティナ「ありがとう、シルビア。それじゃあ食べましょう」

ラーズ「ああ、そうだな……お、中々美味しいな」

マルティナ「本当だわ。甘いのにしつこくないわね」

マルティナはラースと一緒に食べている

ラース「マルティナ、もう少し大きくても平気だぞ」

マルティナ「そう？ごめんなさいね。これぐらいでどうかしら」

ラース「おう、ありがとな。うん、美味しい」

ベロニカ「……シルビアさん。思ったのと違うわ」

シルビア「おかしいわね。わざと一つのスプーンにしたのに平然としてるわ。しかもマルティナちゃん、普通に食べさせてるわね」

セーニャ「とっても仲がいいですわ。お姉様！私達もやりましよう」

ベロニカ「普通、恥ずかしがるとかしなさいよね。セーニャの分も少し分けてね」

ラース「残念だったな、ベロニカ、シルビア。これがマルティナの素だ。気づかないでやってるのがいいんだよな。言ったらもうしてくれなくなるかもしれないし、黙っておこう」

ラースは心の中で喜んでいた

宿屋

ラース「ふう、夜になるにはまだ早いな。でもそろそろイレブン達も戻ってくるだろう。皆は荷物を片付けてこいよ。俺は戻ってくる三人に、追加で何か作るからよ」

ベロニカ「宿の料理もあるのに？」

ラース「きつと腹空かしてくるだろう。まだ夕飯まで結構時間あるからな。多少のつまみだよ」

マルティナ「私も手伝いましょうか？」

ラース「いや、すぐに終わるから大丈夫だ。部屋で休んでてくれ」

その後、イレブン達が帰ってきた

イレブン「今帰ったよー」

カミュ「今日は上出来だったな。たくさん素材集まったぜ」

グレイグ「うむ。しかし、少し帰るのが早かったか。夕飯にはそれ

なりに時間がかかるようだな」

その時、ラーズが皿を持ってやってきた

ラーズ「お、帰ってきたか。素材集めお疲れ様だな。そんな三人に少しつまみを用意したぞ。よかったら食べてくれ」

イレブン「あ！これ焼き鳥だよ。久しぶりだな。また食べたかったんだよ」

グレイグ「ほう、食べた事ないな。だが、旨そうだな」

カミュ「こいつは酒とよく合うんだぜ。ラーズ、酒はないのかよ？」

ラーズ「夕飯まで程々にしとけよ？あと、イレブンはやめておけよ？ほらよ」

カミュ「へへ、これでバッチリだぜ。ありがとな」

グレイグ「どれ、もらうとしよう。…… おお！これは酒が欲しくなるな」

カミュ「だろ？わかってんな、おっさん」

イレブン「そんなに美味しいの？僕はお米に合うと思うけど、そっ
ちもそんなにいいの？」

カミュ「イレブンはもう少し大人になってからだな。だが、確かに
米とも合うよな。おいおっさん！一人で食い過ぎだ！」

夕食時

ラーズ「で……二人はあつちで酒飲みになってると」

イレブン「うん、まあ今日は頑張ってもらったからね。怒らないで
あげてね」

ラーズ「怒る気は元からねえけどよ。忠告したのに、全く」

ロウ「わしも後で混ざろうかの。それでラーズよ、今日はしっかり
エスコートできたのかの？」

セーニヤ「ロウ様、ラーズ様の案内は素晴らしかったですわ」

ラーズ「いや、ほとんど何もしてなかっただろ」

ベロニカ「まあ悪くなかったわよ。レデイの扱いはしつかりわかっ

てるみたいじゃない」

シルビア「そうね。ショッピングの時もアタシ達に混ざって色々言ってくれたし、そういう一緒に楽しむってのが女性にはとてもいい印象を与えるのよ」

マルティナ「確かに意見を聞いて適当に返ってくるんじゃないわ、しっかり考えてくれるのはとても嬉しかったわね」

ラース「お、おう……照れるな」

シルビア「ウッフ、恥ずかしがる必要はないわよ。自然とそういう事が出来てるんだから、ラースちゃんはカッコいいって事よ」

イレブン「確かにラースと話していると、話を広げてくれたり、しっかり反応してくれるから楽しいよね」

ロウ「ラースを褒める言葉が止まらないのう」

ラース「……何だ、これ？罰ゲームか？」

マルティナ「ウッフ、皆、あなたが大好きって事よ」

「レース「何だ、そういう事か。それなら俺も皆が大好きだぞ。もちろん一番はマルティナだけだな」

112. 海の平和

次の日、海底王国ムウレア

ロウ「今度はムウレアじやの。何度見ても、ここの景色は素晴らしいのう」

ラース「とりあえずセレン様に話を聞いてこようぜ。何かあるかもしれないぞ」

玉座の間

セレン「よくぞいらしてくれました、勇者イレブン。あなたを真の勇者である事を見込んで、お願いがあります。黒い太陽が現れ、世界中の魔物が凶暴化しているのは知っていますね？この海においても、それは同じです。」

世界を見通すことができる千里の真珠。その輝きが、魔物に奪われてしまったのです。千里の真珠は私達人魚族の秘宝。どうか魔物を倒し、輝きを取り戻してはくれませんか？」

イレブン「それは大変ですね。任せてください、僕達を取り戻してきます」

セレン「そう言ってくれると思っていました。流石です、勇者イレブン。その魔物の名はデスエーギル。外海の北東にある孤島近くに潜んでいます。」

船で孤島の近くまで行けば、あなたの持つマーメイドハープが存在を知らせてくれるはずです。勇者イレブンよ、お願いします」

外海の孤島

マルティナ「この近くのはずよね？」

イレブン「うん、きつとそうだよ…… あ、マーメイドハープが勝手に鳴り始めた」

セーニヤ「あ！イレブン様、海を見てください。何かが出てきますわ」

デスエーギル「マーメイドハープの音色！貴様ら、人魚どもの手先か！面白い。この海が誰の物なのか、貴様らの死を通じて、人魚どもに改めて教えてやるとしよう。行くぞ！」

デスエーギルがあらわれた

ラース「ライトフォース！」

仲間達は雷の力を纏った

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

セーニャ「スクルトですわ！」

全員の守備力が一段階上がった

デスエーギルの通常攻撃

デスエーギルのマヒャデドス

ラース「バイキルト！」

ラースの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「ハツスルダンスよく、そくれ！」

全員が回復した

セーニャ「氷の旋律ですわ！」

全員の氷耐性が上がった

デスエーギルの通常攻撃

デスエーギルのメイリストロム

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「ハッスルダンスよ、そろれ！」

全員が回復した

セーニヤ「風の旋律ですわ！」

「全員の風耐性が上がった

デスエーギルの通常攻撃

デスエーギルのれんごく斬り

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

シルビア「ほとばしるゝアモゝレ！」

セーニヤ「スクルトですわ！」

全員の守備力が更に一段階上がった

デスエーギルはゾーンに入った 力があがった

デスエーギルの通常攻撃

デスエーギルは紫電の如く突き刺した。痛恨の一突き！

イレブン「くっ！」

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

デスエーギル「まさか……こんなやつらに……」ジュワー

イレブン「よし、倒せたね」

セーニヤ「イレブン様、大丈夫ですか？ベホイムですわ」

イレブン「ありがとう、セーニヤ。それじゃあ報告しにムウレアに戻ろうか」

玉座の間

セレン「ありがとう、勇者イレブン。デスエーギルは海の藻屑と消え、千里の真珠も輝きを戻しました。本当によくやってくれました。これは私からの感謝の印です。ぜひ、受け取ってください」

イレブンは女王の愛をてにいれた

セレン「このロトゼタシアの各地では、勇者であるあなたの助けを求めている人が未だ少なからずいるはず。それを知りたい時、あなたが女王の愛を使えば、それを通じて私がお教えしましょう。」

それと、もしこの海底王国の魚達と話したり、巡りたければ私があるあなたを魚の姿に変えてあげましょう。そうすれば魚達と話せるようになり、王国の色々な場所に行けるでしょう」

イレブン 「ありがとうございます、セレン様」

ムウレアの広場

マルティナ「ここに来るとロミアとキナイの事を思い出すわね。ロミアは今でも待っているのかしら」

ラース「そうだろうな。だが、あの子に真実はつらい事だ。あれでよかつたんだろうな」

イレブン 「え？待って、どういう事？」

カミュ「どうしたんだよ、イレブン。お前が本当の事を伝えるのはあまりにもかわいそうって言ったんだろ？」

イレブン 「え？こっちの世界の僕は真実を伝えなかったの？」

ベロニカ「ええ、そうよ。イレブンの世界では真実を伝えたの？」

イレブン「うん。そしたら、ロミアはキナイの墓を見るためだけにオキテを破り、陸に上がってキナイの墓を見て、悲しみながら泡となくなって消えていったんだ」

ロウ「真実を伝えると、ロミアは消えてしまったのか。じやが、こちらのロミアは生きて、今でもキナイが来てくれると信じて白の入り江で待っているはずじゃ」

イレブン「そうだったんだ……。ねえ、白の入り江に行ってもいい？」

ラース「そうだな、行ってみてもいいと思うぞ」

白の入り江

奥ではキナイとロミアが魔物に囲まれていた

シルビア「大変よ！キナイちゃんとロミアが魔物に囲まれてるわ！」

キナイ「くそっ！こっちに来るな！来るんじゃないっ！！ちくしょうめ！！」

カミュ「よかった！何とか間に合ったみたいだぜ！」

魔物「ギョギョギョ！新しい獲物がやってきたギョ！もしや、助けのつもりかギョ？お前達もサメの餌にしてやるギョ！」

魔物のむれがあらわれた

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ベロニカ「イオグランデ！」

イレブン「ギガブレイク！」

グレイグ「イレブン！行くぞ！」

イレブン「わかった、グレイグ！」

グレイグの斧にイレブンの雷が合わさる

二人「雷神むそう！」

マーマンダイン・邪の通常攻撃

カミュ「デュアルカッター！」

三人の分身による一斉攻撃

魔物のむれをたおした

キナイ「イレブン、よく来てくれた。やつらを倒してくれてありがとう。心から礼を言うよ。マーマン達に襲われ船を失い、海を漂っている」と奇跡的に、この不思議な入り江に流れ着いてな。

傷だらけで動けない俺を、この人魚が介抱してくれたんだ。おかげで命だけは助かった。まさか人魚を恨む俺が人魚に救われるとはな。

それにマーマン達を前にした時、俺はなぜかこの人魚を今度こそ助けなければと思ったんだ。

この入り江に来るのも、人魚に会うのも初めてだったのに、あの気持ちは一体？」

ロミア「イレブンさん、ありがとうございます。入り江に珍しいお客と思ったら、傷だらけの人間だったんです。本当に驚きましたわ。」

人間の方の怪我を手当てして、やっと意識が戻ったと思ったら、マーマン達が襲いかかってくるし。

でもこちらの人間の方が、傷だらけの身体で私を守ってくださいったから、怖くはありませんでした。それに、何故かしら？彼と会うのは初めてじゃない気がして、不思議と信じる事ができたんです。

私ったらおかしいんですよ。あの人が助けに来てくれた。そんな風にさえ思ってしまったんです」

イレブン「そっか……。二人とも無事でよかったよ」

キナイ「俺の記憶の中の彼女は、月明かりに照らされた夜の浜辺で、俺を見ていた。海の底のように悲しい目をして。その記憶の中で俺は、彼女に、恋を……。」

いや、すまない。船が襲われた時に頭を打って、記憶が混乱してい

るのだらう。彼女も襲われたばかりで一人は不安だらう。一人にしてはおけない。俺はもう少しここに残る。村の皆に伝えておいてくれないか？」

ロミア「人間さんのお仲間の方が来てくださるなら、安心ですね。でも、彼が私をマーマン達から守ってくれた時の真剣な眼差し。あの眼差しを、私は前にどこかで見た事があるんです。

あの日は月がとってもきれいで、静かな、とても静かな夜だったわ。その浜辺で、私は…………。

ふふっ、私ったらおかしいですね。キナイの事ばかり考えてるから、そんな夢を見るんですよ。私はまたここでキナイの事を待ちます。よかったら、またここにいらしてくださいね」

113. 試練2

試練の里

イレブン「世界もこれである程度は何とかなつたし、僕らはまたここで試練を進もうか」

マルティナ「そうね。それに世界を回っている時でも力はそれなりについたわ」

賢者の試練

セーニャ「ここは、始祖の森ですわ」

イレブン「皆、あそこに看板があるよ」

グレイグ「灯台下暗しという言葉があるように、簡単な事は意外と気付かないものだ、と書いてあるな」

ラース「ふむ、この先のヒントだろうか。注意して進もう」

道中

カミュ「ここは、黄金の城？来たことあるか？こんな場所」

イレブン「僕が前の世界で行ったことがある。皆は僕についてき

て」

ベロニカ「わかったわ、案内は任せたわよ」

賢者の試練 奥地

ネルセン「勇者イレブンよ。よくぞここまでたどり着いた。今から現れる敵を30手以内で倒せば、願いを叶えてやろう。さあ、行くぞ！」

憤怒の海獣があらわれた

イレブン「今度はこいつか！皆、こいつは力が強くて全体攻撃が多い。ラーズ、こいつの弱点は雷だよ！」

全員「了解！」

ラーズ「ライトフォース！」

仲間達は雷の力を纏った

イレブン「つるぎの舞！」

マルティナ「ラーズ！セーニャ！連携よ！」

セーニャの音色に合わせ、マルティナとラーズが踊る

三人「妖精達のポルカ！」

全員の攻撃力と守備力がかなり上がり、HPとMPが徐々に回復する

セーニヤ「風の旋律ですわ！」

「全員の風耐性が上がった

海獣は火炎を吐いた

海獣のメイルストロム

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

マルティナ「ばくれつきやく！」

セーニヤ「ベホマラー！」

全員が回復した

海獣の通常攻撃

海獣は船を揺らした

イレブン「うわ！」イレブンは転んだ

ラース「ばくれつきやく！」

イレブンは動けない

マルティナ「ばくれつきやく！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

海獣の猛毒攻撃

海獣のバイキルト

海獣の攻撃力が二段階上がった

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

マルティナ「ばくれつきやく！」

セーニャ「炎の旋律ですわ！」

全員の炎耐性が上がった

海獣の通常攻撃

海獣のメイルストロム

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

憤怒の海獣は倒れた

ネルセン「見事な戦いぶりだったぞ！よく自分の恐怖に打ち勝ったな！今回かかった手数は18手だ！さあ、この中から願いを一つ選ぶんだ」

イレブン「それじゃあ、今度こそエツチな本を……」

ラース「ストップだ！イレブン！」

イレブン「え、駄目かな？」

マルティナ「お願い、イレブン。そこはできるだけ選んでほしくないわ。あなたは今のままでいいのよ」

カミュ「そうだけ、イレブン。それを読むと、あのじいさんやおっさんみたいになっちゃうぞ？お前はあんな風になっちゃ駄目だ。馬レースなんかどうだ？確かプラチナ杯まで終わらせてただろ？」

イレブン「そっか……。じゃあ、馬レースでお願いします」

ネルセン「わかった……。それではサマデー王にお告げをしておいた。最上位のレースが開放されているはずだ。頑張るのだからさらなる試練に挑みたければまた来るといい。それでは」

グレイグ「カミュ、さつき俺の事を出さなかったか？」

カミュ「いや？別におっさんの事じゃねえぜ？」

ラーズ「ほら、グレイグ、何してるんだ。戻るぞー」

グレイグ「むう。わかった、今行く」

試練の里

イレブン「それじゃあ、サマデイーに行つて馬レースしてこよう」

サマデイー王国

ベロニカ「でも、本当にレースが開放されてるのかしら？一度王様に聞いてみたら？」

ロウ「確かに確認は取っておいた方がよいかもしれんのか」

イレブン「それじゃあ、王様の元に行つてみようか」

玉座の間

サマデイー王「おお、イレブンよ、いつぞやは息子が世話になった

な。今やこのサマデー王国は、突如あらわれた黒い太陽により未曾有の危機に瀕しておる。

黒い太陽は兵を派遣して調査中だが、民達を勇気づける方法に悩んでおつてな。そんな時、夢の中にネルセンという男が現れ、最上位の馬レースを開催しろとお告げをくださったのだ。

そこでわしは、世界中の民達を熱狂させる空前絶後の馬レース、ブラック杯を開催することにしたのじゃ。お主も興味があつたら参加してみてください」

馬レース受付

イレブン「すみません。イレブンです。ブラック杯に出たいんですが」

受付「はい。イレブン様ですね、イレブン様はプラチナ杯まで勝ち進んでおりますのでブラック杯に出れますよ。ブラック杯の一位の商品は何と！王家に伝わるガイアのハンマーです！」

イレブン「え!?ええええ!!」

イレブンはかなり驚いている

カミュ「おいおい、イレブン?急にどうしたんだよ」

イレブン「あ、ご、ごめんなさい!えっとわかりました。出場するので手続きの方お願いします」

受付「は、はあ。わかりました」

イレブン「皆、まずいよ！必ず僕一位にならないと！」

イレブンはかなり焦っている様子だ

シルビア「イレブンちゃん、何をそんなに焦ってるの？あのハンマーって何なのかしら？」

イレブン「あのハンマーはね、先代の勇者達が勇者の剣を作るのに使ったハンマーで、あれが無いと勇者の剣を作る事ができないの！」

全員「え!？」

それを聞き、全員焦り始める

イレブン「頑張らないとかなりまずいよ」

ラーズ「それなら俺も出よう。俺も馬の扱いはかなり自信があつてな。一人旅のときにここでも金を稼いでたんだ。プラチナ杯までは終わってるぜ」

シルビア「アタシも出るわ！またイレブンちゃんと戦いたいしね」

グレイグ「俺も出よう。ここで俺は馬術を習ったのだ。プラチナ杯をとったのはかなり前だが、大丈夫なはずだ」

セーニャ「何だかすごい話になってきましたね。まさか仲間同士で馬術争いなんて」

ロウ「じやが、これなら誰が一位になろうと問題はないの」

カミュ「こうなると誰を応援したらいいかわからねえな」

ペロニカ「まあ、私達もこれなら応援に熱がはいるわ」

その後、ブラック杯が開催された

そしてイレブンが一位を取った

受付「イレブンさん、おめでとうございます！一位のガイアのハンマーです」

イレブンはガイアのハンマーをてにいれた

イレブン「よかったー。これで安心だね」

シルビア「流石イレブンちゃんね。また負けちゃったわ」

グレイグ「うむ、いい走りっぷりだったぞ」

ラーズ「三人ともうますぎるだろ。俺、最下位だったぞ」

シルビア「ラーズちゃんも上手だったわよ」

グレイグ「俺達は騎士として学んだ時に馬術も教わったのだ。何も習っていないラーズが、あそこまでできるのはすごい事だぞ」

ラーズ「……悔しい」

マルティナ「あまり気にしない方がいいわよ。別に上手い下手で優劣なんかつかないんだから」

ラーズ「まあ、そうだな」

114. 二本目の勇者の剣

カミュ「だが、これでどうやって剣を作るんだ？」

イレブン「剣を作るには、天空の古戦場で採れるオリハルコンが必要で、ヒノノギ火山の中にある鍛冶場で打つんだ」

ロウ「オリハルコンとは、またすごい物を使うのじゃな」

イレブン「作ってみない？もう一つの勇者の剣」

セーニヤ「そんな簡単に作れる物なのですか？」

イレブン「簡単ではないけど、オリハルコンなら前にアメジストワームっていうのを倒しに行った時に取ったし、試練の中でも取れたから。ハンマーも手に入れたし、ヒノノギ火山に行くだけかな」

ラース「なるほどな、それじゃあ俺らだけの勇者の剣を作ってみようぜ」

ホムラの里

イレブン「あれ？あの人ウロウロしてるね？どうしたんですか？」

男「ああ、旅人さんかい？俺はこの鍛冶場の職人でね。長い事修行の旅に出ていたが、最近ようやく戻ってきたんだ。俺は修行の果てに王者の剣を作りたいってなったのさ。」

王者の剣はその名の通りこの世で最も美しく、切れ味が良い王の名を冠するにふさわしい剣。だが、そいつを作るにはオリハルコンが必要でな。どうしたものかと悩んでいたんだ」

イレブン「オリハルコンなら僕達持ってますよ」

男「本当か!?こ、これは本物のオリハルコン!た、頼む!俺の全財産22500ゴールドをやるから譲ってくれないか?」

イレブン「大丈夫ですよ、どうぞ」

男「やった!!ありがとな、旅人さん!王者の剣が出来上がったら一番にあんたに教えるよ!」

神社

イレブン「すみません、ヤヤク様はいらっしゃいますか?」

男「すみません、ヤヤク様は今ヒノノギ火山の方に向かっており、いらっしゃらないのです」

イレブン「わかりました。それではヒノノギ火山の方に行ってみます」

ヒノノギ火山奥地

グレイグ「おい、あそこの人の前に何かいるぞ」

ラーズ「あれは、竜じゃないか！」

ヤヤク「む？旅の人か。まさかこんな所に人が来るとはな。これを見て驚いたか？信じられぬかもしれないが、この火竜は私のひとり息子、ハリマの変わり果てた姿なのだ。火竜の呪いでこうなってしまったのだ」

イレブン以外「え!？」

ヤヤク「私はハリマを救う手立てを探し求め、ついにこの映した相手を真の姿に戻すという、やたの鏡を手に入れた。だが、そのまま向けても反応はない。真の力を引き出すには、ラーの滴というものが必ず要らしい。

旅の者よ、どうか旅先でラーの滴を見つけたら私に譲ってはくれぬか？」

マルティナ「ラーの滴って確か、前に試練の中で…。」

イレブン「そうだよ、すみません。これの事ですか？」

イレブンはバックの中からそれと思われる物を出した

ヤヤク「おお！そなたが持っているのはまさしく書物で見たラーの滴！それをやたの鏡に使えば、ハリマの呪いは解けるやもしれぬ。旅の者よ、ホムラの巫女ヤヤクのたつての頼みだ。どうか譲ってくれぬか？」

イレブン「もちろんですよ。ハリマさんを早く元の姿に戻しましょう」

ヤヤク「ああ、ああ、かたじけない。おお！何という眩い輝き。これが真のやたの鏡の姿なのか。これならばきつと・・・」

ヤヤクが鏡を火竜に向けると鏡が光り出し、光が止むと、そこには男の人が立っていた

ヤヤク「ハリマ!!」

ハリマ「母上！」

二人は駆け寄り抱きしめあつた

ヤヤク「よくぞ、よくぞ戻ってきてくれた。もう一度この顔を見られるなんて、これほど嬉しい事はない。母がどれほどお前に会いたかったか。幾千の孤独と悲しみの夜を耐えながら、必ず戻ってくると

信じて待っていたよ」

ヤヤクの目からは涙が溢れている

ハリマ「母上、ご心配おかけしました。これでもう二度と、人食い火竜めが里を襲う事はないでしょう」

イレブン「(そうだ、ここにも悲しみの連鎖があつたんだ。よかった、救う事ができて)」

ハリマ「母上、あちらの方達は？」

ヤヤク「この者達はやたの鏡の真の姿を取り戻し、そなたの呪いを解いてくれた旅の者じゃ」

ハリマ「ありがとう、旅の者達よ。そなた達のおかげで火竜の因縁は断ち切られ、私は母と再会する事ができた」

ヤヤク「我ら母子、この恩は決して忘れぬ。里に帰ったら改めて礼をさせておくれ。ホムラの里の社で待っているぞ」

ホムラの里 神社

ヤヤク「来てくれたのだな、旅の者よ。いや、世界に光をもたらす者勇者、イレブンよ」

全員「!？」

ヤヤク「ふふ、私とて巫女の端くれ。ラーの滴を持ってきた時の目を見て確信したのさ。そなたが勇者だと。そなたの使命は邪悪なる者を討ち滅ぼし、世界中の人々を救う事。まずはこれを受けとってくれ」

イレブンは禁足地への鍵をてにいった

ヤヤク「私がまだ子どもの頃に聞いた事がある。炎の山の頂にて、聖なる種火を投げ入れし時、遙古より伝わる大いなる鍛冶場が蘇るだろう、と。」

そのような伝承を守るために、ヒノノギ火山の頂上は長い間禁足地とされてきた。そなたなら大丈夫であろう。イレブンよ。勇者の使命を果たすため禁足地の鍛冶場を大いに役立ててくれ。そなたの旅の無事をここで祈っているぞ」

ハリマ「そなた達の助けが無ければ、私は身も心も火竜として認められる所だった。火竜は人を喰らう邪悪な魔物。もし私が火竜になつていたらと思うと身の毛がよだつ。」

しかし、あのような希少な品を見つけてくれるとは、そなたには感謝してもしきれぬ。どうかこれを受け取ってほしい」

イレブンは名刀斬鉄丸をてにいった

ハリマ「それは古よりホムラに伝わる風や雷をも裂くと言われる名

刀。そなた達ならきつと使いこなせるだろう。そなた達の無事を祈っているぞ」

その後

男「おおい、兄ちゃん達！王者の剣ができたんだ！持っていつてくれ！」

イレブンは王者の剣をてにいった

カミュ「これが王者の剣ねえ。俺も片手剣はできるが、性能はよくわからねえな」

ラーズ「カミュならこつちの名刀斬鉄丸を使えるんじゃないか？」

カミュ「確かにいけそうだが、ラーズも使えるだろ？俺は無理に片手剣にする気はねえよ」

イレブン「二人とも斬鉄丸を使えるってすごいよね。僕は無理だなんて思ったのに」

シルビア「アタシもよ。その剣とっても扱いが難しそうだね。もちろん手入れもね」

ラーズ「おそらく、これはよく目にする剣とかではなく刀の部類だ。切り方や手入れの仕方、立ち回りまでもが片手剣とは違うな」

グレイグ「ふむ、そこまで変わるとなると俺にも厳しいものがあるな。ラースは詳しいのか？」

ラース「まあ、何度か使った事はあるからな。いけると思うぞ」

イレブン「それならラースが装備してて。よし、禁足地に行こうか」

115. 勇者の剣改

禁足地

イレブン「ここの中に聖なる種火をいれると鍛冶場が現れるんだよ」

聖なる種火がマグマの中に入っていく

グラグラ!

すると、マグマの中から鍛冶場があらわれた

鍛冶場

ガキン!ガキン!

イレブン「これで完成だよ。後は僕が手に取るだけ」

イレブンが手に持ち、掲げるとその剣に雷が落ち、光り輝いた

イレブンは勇者の剣をてにいれた

カミュ「まさか二本目の勇者の剣を作る事になるとはな」

ラース「作った方がいいが、どうするんだ?」

イレブン「前にネルセン様にもらったレシピはこの勇者の剣をさらに強化するものだったんだ。ここから、さらに強くするよ」

イレブンは勇者の剣改+3をてにいれた

ベロニカ「これで準備万端ね！さあ！最後の試練に行きましょう！」

勇者の試練

グレイグ「ここはまた知らない場所だな」

セーニヤ「とても複雑な構造をしたお城ですわね」

イレブン「ここは僕達の世界で魔王がいた城なんだ。僕についてきて」

ラース「わかった。敵も厄介そうだ。回復はこまめにしていこう」

勇者の試練 奥地

ネルセン「勇者イレブンよ、よくぞここまでたどり着いた。最終試練を突破すれば願いを一つ叶えてやろう。今から現れる敵を40手以内に倒してみろ！さあ、いくぞ！」

冥界の霸王達があらわれた

イレブン「こいつらか！右のやつが厄介だからそっちを皆で優先して！」

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ラース「カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

イレブン「ギガブレイク！」

ロウ「マヒャデドス！」

背徳の帝王の超誘う踊り

イレブン達には効かなかった

背徳の帝王のメラガイアー

戦慄の牙王のゴールドフィンガー

戦慄の牙王のくるい裂き

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ラース「イレブン！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「ギガブレイク！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員が回復した

背徳の帝王の超誘う踊り

イレブン達には効かなかった

背徳の帝王はたつまきをおこした

戦慄の牙王のバイキルト

戦慄の牙王の攻撃力が二段階上がった

戦慄の牙王のくるい裂き

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「ギガブレイク！」

戦慄の牙王はたおれた

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員が回復した

背徳の帝王は目を見開いた

ロウ「うぬう……」ロウは魅了されてしまった

背徳の帝王のギガマホトラ

全員のMPが吸収される

ラース「これは……確かグリーンオーブの力」

イレブン「そう、よくわかるね。流石ラース」

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

ロウは動けない

背徳の帝王はたつまきをおこした

背徳の帝王の超誘う踊り

カミュ「体が！」カミュは踊ってしまった

カミュは動けない

ラース「ばくれつきやく！」

イレブン「つるぎの舞！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員が回復した

背徳の帝王のメラガイアー

背徳の帝王の通常攻撃

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ラーズ「カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎの舞！」

ロウ「ドルマドン！」

ネルセン「見事な戦いぶりだったぞ！今回の戦いは24手だ！よく自分の恐怖に打ち勝ったな！素晴らしいぞ！さあ、この中から願い選ぶといい」

イレブン「エツチな本でお願いします」

ネルセン「やはり勇者と言えど興味はあるのだな。いいだろう。程々に楽しむのだぞ。私がこれまで大事にしてきたエツチな本だ。それではまた試練に挑みたくなったら来るといい」

試練の里

イレブン「やった！僕もこれでおじいちゃんの言っている大人に近づけるんだね」

ロウ「ふおつふおつ、そうじゃよ、イレブン。お主が読み終わったらわしにも読ませておくれ。どんな物か気になるからもう」

グレイグ「俺も読んでもいいか？イレブン」

イレブン「もちろん！皆で読もうよ！あれ？この本、装備できるよ！？という事は、不思議な鍛冶台で＋3にできるよ！」

グレイグ「な、何と！さらに中身がよくなるというのか……素晴らしい！流石だ！イレブン！」

ベロニカ「……いいの？あのバカ共止めなくて？」

ラーズ「もういいよ、一度くらいならイレブンにも読ませるべきかなど」

シルビア「この男どもはもうダメね」

カミュ「おい、シルビアのおっさん！俺らまで含めるな！」

セーニヤ「皆さん、魔導書を読むのに熱心ですわ。勤勉なのですわね」

マルティナ「セーニヤ、どうかそのままできてちょうだいね」

116. ラース vs グレイグ

オリジナル展開になります。飛ばしてもらっても構いません

試練の里

イレブン「皆、明日になったら僕は邪神に挑もうと思うんだ」

カミュ「おお、ついにか！確かにかなり力をついたもんな」

ベロニカ「装備も皆、ほぼ最強装備じゃない」

イレブン「そうだよね。だから今日一日は、各自でゆっくりして明日に備えておこう」

ラース「そうだな。明日のためにも万全の状態にしておかなきゃな」

マルティナ「それじゃあ言葉に甘えるわね」

セーニャ「お姉様！この前途中だった本と一緒に読みましょう」

ロウ「わしはイレブンから借りたあの本を読むかの」

仲間達が続々とやりたい事をしようとしていると、グレイグがラスに向かつて真剣な表情で話しかけてきた

グレイグ「…… ラース。一つお願いがある」

ラース「ん？何だ？グレイグが俺に頼み事なんて珍しいな」

グレイグ「俺と真剣勝負をしてくれないか？」

全員「え!？」

グレイグ「何も命まで取る気などさらさらないが、俺はお前の本気がどれほどのものか知りたいのだ」

ラース「…… なるほどな。さては、これからマルチーナの側にいる者としての実力を試そうとしてるな？」

グレイグ「考えはお見通しか、流石だ。お前が強い事はこれまででよくわかっている。その強さの本気を見てみたくなってるな。俺で通用するかわからないが、頼まれてくれないか？」

ラース「ああ、いいだろう。だが、一つ条件がある」

グレイグ「何だ？」

ラーズ「少し前からマルティナとグレイグが話しているデルカダー
ル城内における俺の今後の役職の話とやらを全て無しにしてくれた
ら俺はその勝負に乗ろう」

マルティナ「え!?! どうして知っているの？」

ラーズ「コソコソしてわからないと思ったのかよ。宿とかで偶に話
してたもんな」

グレイグ「だが、あれはラーズと姫様が一緒にいられるように
と…」

ラーズ「その気持ちはとてもありがたいのだが、そんな事をしてマ
ルティナの隣にいたら周りが何て思うかわかるだろ？安心しろよ。
俺は一般兵士から地位を積み上げていくさ」

グレイグ「一般兵士がそんな強さであってたまるものか」

ラーズ「まあ、それで？その話を全部無しにしてくれるのか？何や
ら立派な地位を与えようとしているみたいだけどな？」

マルティナ「……………いいわよ。グレイグ、話は無しにしましょう。私もラースを無理に隣に縛りつけたくないわ。ラース、ごめんなさいね」

グレイグ「わかりました、姫様。ラース、すまなかつたな。お前の気持ちも考えるべきだったな」

ラース「いや、謝る必要はないぞ。俺のためを思ってくれたんだから、寧ろ感謝するべきかもな。それじゃあ、グレイグと本気で戦いますか」

グレイグ「よろしく頼む。イレブン、どこか広い場所はないか？」

ラース「俺の村の近くのキャンプ場なら草原だからな。あそこなんてどうだ？」

イレブン「そうだね。そこにしようか。ルーラー！」

ガラツシユの村前 キャンプ場

イレブン「僕も観戦していい？」

カミュ「俺も興味あるな」

マルティナ「私はラースを応援しようかしら」

シルビア「それじゃあ皆で観ましょうよ」

セーニャ「何だか不思議な感じですね。興味はあるのですが、お怪我をされないか不安です」

ベロニカ「まあ、あの二人なら怪我はしても大した事ないでしょ」

ロウ「これは見物じゃのう。ラースの頭のよさや機転が勝つか、グレイドの今までの努力と実力が勝つか。どっちになるかのう」

ラース達から少し離れて全員が観戦し始めた

ラース「本気と言われても、俺には出来る事を全てぶつけることしかできないからな」

グレイド「それでいい。俺はお前の強さを見たいのだ。武器を使うのは久しぶりを見るな。キャンプの時でしか使わないな」

ラース「流石にグレイド相手に何も無しはつらいからな。よし、いくぞ！」

グレイド「こい！」

ラーズはグレイグに一直線で向かっていく

ラーズ「かえん斬り！」

グレイグ「効かん！」カン！

グレイグはラーズの攻撃を盾で防ぐ

ラーズ「なんてな」

ラーズは盾を利用し、滑るように背後に急速で回った

グレイグ「な!？」

ラーズ「メラゾーマ！」

ほぼゼロ距離から打つ

グレイグ「グアア！くっ！マジックバリア！」

グレイグの呪文耐性が上がった

ラーズはグレイグにまた突っ込んでいく

グレイグ「天下無双！」

ラーズはグレイグの攻撃をかわし、いなしていく

ラーズ「ばくれつきやく！」

グレイグ「うおおお！」

グレイグも全て盾と剣を使い、防いでいく

ラーズ「メラミ！メラミ！メラゾーマ！」

グレイグ「はあっ！ふん！てやあ！」

グレイグはラーズからの炎を全て斬っていく

ラーズ「ミラクルソード！」

グレイグ「蒼天魔斬！」

観戦側では

イレブン「凄いな。お互い拮抗してる」

カミュ「おっさんは流石の一言に尽きるが、ラーズもやつぱすげえな。剣と魔法と体術をあそこまで使いこなすのかよ」

マルティナ「ラーズは多分何か作戦があるわね」

ベロニカ「わかるの？マルティナさん」

マルティナ「さつきからメラ系の魔法しか使わないわ。ラーズはいろんな技を使って相手を翻弄していく戦い方なの。だから一種類し

「使わないのは変だわ」

シルビア「なるほどね。それじゃあこれからが楽しみだわ」

レース達は

レース「メラガイアー！」

グレイグ「俺に魔法はもう効かないぞ！蒼天魔斬！」

グレイグは魔法ごとレースを斬ってきた

レース「あぶね！」

その時、地面が突如盛り上がりグレイグを包んだ

グレイグ「うお！これは、ジバルンバ！いつの間に、はあっ！」

グレイグは地面を斬る

その時、岩の影にレースが潜んでいた

レース「心眼一閃！」

グレイグ「ぐうっ！」

グレイグは少し飛ばされる

レース「マヒャド！」

グレイグの頭上から氷の塊が降り注ぐ

グレイグ「オノ無双！」

グレイグは斧を回しながら氷が降り注ぐ範囲から出た

ラース「な！ぐうっ！」

グレイグ「無心こうげき！」

ラース「ここだ！」ガキン！

ラースは盾で防ぐ

ラース「ヒヤダルコ！バギクロス！」

グレイグを中心に風が巻き起こり、中で氷の刃が回る

しかし、グレイグは気にせず出てきた

グレイグ「天下無双！」

ラース「ばくれつきやく！」

お互いの攻撃が防いでいく

最後の一発をラースがかわし、グレイグに近づく

ラース「せいけんづき！」

グレイグ「くっ！」

ラーズ「マヒヤド！」

グレイグの頭上から氷の塊が降り注ぐ

グレイグ「鉄甲斬！」

その時、氷を割ったグレイグの目の前には歪な形をしたラーズが何体もいた

グレイグ「これは……どうなっているー！」

観戦側では

セーニヤ「まあ！ラーズ様がたくさんいらっしやいますわー！」

カミュ「どれかが本物なのか？全部変な形してるぜ？」

ロウ「……ほ！これは、流石じやのう、ラーズは」

シルビア「ロウちゃん、わかったの？」

ロウ「この辺りは元々温暖な土地じや。そこをさらにメラで温度を上げた。そこからヒヤドで急速に冷やし、空気の水分の密度をあげたのじや。そうして固まった空気をバギで集めて、あその一部分にはわずかだが、霧が発生しておる。この歪な形をした現象は心綺楼とも呼ばれるのう。」

心綺楼で今のような光景になっておるんじや。今、レースはわし達に見えている場所にはおらんだろうな。光が正しく屈折せずに、違う場所にいるように、そして変な形に見えておるんじや。レースは自然をも味方にしたのう」

ベロニカ「なるほどね。もしかしてここを指定したのもそのためだつたりするのかしら？」

マルティナ「おそらくレースの事だからそのはずよ。あの時からもう勝負は始まっていたのね」

シルビア「グレイグがこの事に気づくかだけど、どうなるかしら？」

レース達は

レース「さあ、どれが本物かわかるかな？行くぞ！グレイグ！ばくれつきゃく！」

縦横無尽から蹴りが飛んでくる

グレイグ「うおおお！」

グレイグは必死に防ごうとする

グレイグ「うぐっ！横か！はあ！」

グレイグはすぐに反応し、斧で斬りかかる

ラース「残念、もう上だ」

ラースは上からグレイグに飛び乗り、後ろの首筋に剣を当てていた
グレイグ「ぐっ！なぜそんな所に」

ラース「勝負ありだな」

ロウ「ラースの勝ちじゃな。ラースよ、心綺楼を作り出すとは流石
じやのう」

ラース「流石じいさんだな、気付いていたか」

グレイグ「心綺楼だと？白いもやなど出ていなかったぞ」

グレイグに種明かしをした

グレイグ「くっ！なるほど、一部の呪文でひたすら攻撃していたの
は、攻撃だけじゃなかったという事か」

ラース「まあ、正攻法じゃ俺はグレイグには敵わないからな。卑
怯かもしれないが、こんな手段で攻めさせてもらった。悪かったな、
グレイグ」

グレイグ「いや、そんな作戦を思い付くだけで凄いぞ。やはりお前は軍師に向いているのではないか？」

マルティナ「そうよ、あなたの頭のよさにもピッタリだと思ったのに」

カミュ「ハハ！ラーズが軍師か、面白えな」

ラーズ「うるせえぞ、カミュ。俺はそんな立ち位置になるのかはわからんが、なるなら自分で登りたいからな。諦めてくれ」

セーニヤ「ラーズ様、とつてもかつこよかったですわ！」

ベロニカ「そうね、グレイグさん相手にどうするのかと思ってたけどこんな戦い方もあるのね。私にもできるかしら？」

ラーズ「ありがとな、セーニヤ、ベロニカ。ベロニカならできると思うが、やるなら相当難しいぞ。霧ができる温度を自分で感じないとしたし、僅かに暑くても、寒くても上手くできないからな。俺みたいにバギで集めて何とかするのはあると思うが」

イレブン「そんなに難しいんだ。よくやろうと思ったね」

ラーズ「まあ、だからこそ俺のよく知ってるここを指定したんだけどな」

グレイグ「な!?!あの時からもう既に決めていたのか!」

イレブン「うわ、本当に凄いや、ラーズは」

シルビア「でも、グレイグも凄かったわよ。魔法を対策してその上でしっかりと体術も捌いてたじゃない。かなり激しくラーズちゃん
は攻撃してたのにほとんど防いでたわよ」

ラーズ「そうだよな。俺が本来ならああなつて、相手にならなかつたはずだ」

グレイグ「ラーズの攻撃が激しくなるのはわかっていたのだが、途中でラーズの作戦に気づくべきだったな」

ラーズ「まあ、これで満足か?俺は疲れたんだが」

グレイグ「ああ、この戦いは王にも伝えようと思っている」

ラーズ「何だつて!?!おい、そんな話聞いてねえぞ!」

マルティナ「うふふ、実は前にお父様に頼まれてたの。実力を測ってほしいって。始まりのグレイグの理由はこれを隠すためのものよ。言ってなくてごめんなさいね」

グレイグ「そういう事だ。王もきつと喜ばれるだろう」

ラース「たくっ！知らなかったぜ。まあ、それなら報告していいぞ」

イレブン「それじゃあ皆で休もうか」

シルビア「そうね、明日もあるしゆっくりしてましよう」

117. 決戦！ニズゼルフア！

次の日、空

イレブン達はケトスに乗り、黒い太陽に向かっていた

イレブン「ケトス、結界は頼んだよ！」

ケトスは角で結界を破る

中に入ると、宇宙のような景色が広がっていた

その時、ニズゼルフアの声が聞こえてきた

ニズゼルフア「ここまで来るとはな。私はニズゼルフア。闇の深淵より生まれし者」

セーニヤ「これがニズゼルフア。何という恐ろしい邪気」

ニズゼルフア「聖竜の残した大樹の魂。それさえ消せば全ては闇に包まれる。闇こそが私の喜び」

イレブン達の前には巨大な邪神、ニズゼルフアが現れた

グレイグ「人間が何とかできる相手なのか？」

マルティナ「本当に勝てるのかしら？」

ラース「皆、大丈夫だ。俺達だつて強くなつた！今、俺達がする事はこいつに恐怖する事じゃない。俺達は負けないという思いを抱く事だ！」

シルビア「そうよ、皆！アタシ達がこいつを倒さなきゃ、この世界は終わりなんだから！」

ベロニカ「絶対に負けない！絶対に！」

ロウ「よいな、イレブンよ。今こそ真の勇者の使命を果たす時！」

カミュ「行くぞ！これが最後の戦いだ！」

イレブン「僕達は、この世界は」

全員「絶対に負けない!!」

ケトスがイレブン達を魔法で浮かせ、ニズゼルフアに攻撃が当たるようにした

ニズゼルフア「来るがいい、光の子孫達よ。時間も記憶も空間も、存在する全てを闇に染めてくれよう」

邪神ニズゼルフアがあらわれた

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ベロニカ「カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

ニズゼルフアのなぎはらい

ニズゼルフアは天に向かって魔力を打った

なんと邪神の子があらわれた

ニズゼルフアのしやくねつの息

イレブン「はあ！」勇者の剣を掲げた。あたりに眩い光があふれる！

ニズゼルフアの闇の衣が剥がれた

ニズゼルフア「ほう、我が闇の衣を剥がす術を知っていたとはな。しかし、無駄な事。我が腕の中で息絶えるがよい！」

イレブン「ベホマズン！」

全員が全回復した

セーニヤ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

邪神の子達をたおした

ベロニカ「魔力かくせい！」

ベロニカの攻撃魔力が二段階上がった

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が更に一段階上がった

イレブン「ギガブレイク！」

ニズゼルフアの仮面が割れた

ニズゼルフアの通常攻撃

ニズゼルフアは腕からミサイルを出した

ニズゼルフアのバギムーチヨ

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ニズゼルファは不適に笑っている

ニズゼルファの通常攻撃

ニズゼルファの流星の如き攻撃

ベロニカ「イオグランデ！」やまびこでこだまする

イレブン「ギガブレイク！」

左腕をたおした

セーニヤ「ベホマズン！」

全員が全回復した

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ニズゼルファの仮面が取れた。ついに本性があらわれた

ニズゼルファは悪い効果にかかりやすくなった

イレブン「セーニヤ！きせきのきのみだよ！」

セーニヤ「ハアア！」ゾーンに入った　みのまもり、呪文の回復力、
暴走率があがった

セーニヤ「キラキラポーン！」

セーニヤは嫌な効果から守られている

イレブン「ギガブレイク！」

右腕をたおした

ニズゼルフアのバギムーチョ

ニズゼルフアの瞳が怪しく光った

セーニヤはキラキラポーンで守られた

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ニズゼルフアは黒く輝く闇の炎を吐いた

ニズゼルフアは不適に笑っている

イレブン「アルテマソード！」

セーニヤ「ベホマズン！」

全員が全回復した

ベロニカ「カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ハアアア！」ゾーンに入った　ちから、きようさ、みかわ

し率があがった

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ニズゼルフアの通常攻撃

ニズゼルフアの瞳が怪しく光った

イレブンには効かなかった

イレブン「アルテマソード！」

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が更に一段階上がった

ベロニカ「ハアアア！」ベロニカはゾーンに入った！みのまもり、呪文の威力、暴走率があがった

ベロニカ「メラガイアー！」

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ニズゼルフアは不適に笑っている

ニズゼルフアの通常攻撃

ニズゼルファのイオグランデ！

イレブン「僕もきせきのきのみで。ハアアア！」ゾーンに入った
ちから、みのまもり、かいしん率があがった

イレブン「四人とも！いくよ！」

三人「ああ！」

四人の足元と上空に巨大な魔法陣があらわれ、全員で空にある魔法陣に魔力を使い、雷を放つ！

四人「ミナデイン！」

ニズゼルファ「一度ならず二度までも、この私が敗れるとは。だが、光が闇を凌駕するなどあり得ぬ事。我が肉体滅びようとも、我が魂は永遠なり。光が……あふれる！」ドオオン！

ニズゼルファの体から光があふれだし、爆発していった。爆発は周りの世界も巻き込んでいく

イレブン達はケトスで急いで黒い太陽から抜け出した

しばらくすると、黒い太陽は消え去った

ロウ「終わった……。これでもう、この世界を脅かす者はいない。
長い長い旅がついに終わったんじゃ」

セーニヤ「先代勇者ローシユ様から続く時を超えた戦い。本当に長

い……冒険の物語でしたわね」

イレブン「皆！こんな時に言うのもあれなんだけど、僕はこの世界でもう一人救いたい人がいるの！セニカ様を、ローシユ様の時代に返してあげたいんだ」

ベロニカ「そつか。あの人の事、救いたいんだね。それなら行きましょう」

忘却の塔 時の祭壇

番人「また会いましたね、不思議な旅人達。ロトゼタシアに影を落とす邪悪な気配は消え、世界は救われました。もうここには用は無いです。どうしてここへ？」

イレブン「僕は、あなたを救いにやってきました。この、勇者の力で」

イレブンはそう言うと、勇者の紋章が光り出し、番人を包んだ。

すると、番人の姿がセニカ様に戻っていった

セニカ「ここは……」

イレブン「セニカ様、僕はローシユ様ではない、新しい勇者です。この世界は平和になったので、あなたにこの力と剣をお渡しします」

イレブンの手にあつた紋章が、セニカの手に移つた。

セニカ「まさか、私をあの時へ？」

イレブン「はい、ローシユ様に会いましょう」

セニカ「……ありがとう。ハア！」

セニカは時のオーブを砕いた

そして、光の中に消えていった

勇者の剣は床に落ちた

カミュ「消えた。あれ？こういう事があつたな……。そうか、イレブンから聞いた時の記憶なのか？」

マルティナ「愛する人に……。会えるといいわね」

ラース「会えるさ、人の思いの力は強いんだからな」

イレブンは勇者の剣を拾つた

イレブン「うん。僕も絶対に会えてると思うよ。大丈夫。」

最終章 平和と幸せの道

118. 本当の平和

ここからはずっとオリジナル展開が続きます

ラースがこれからどう過ごしていくのかを書いたものです

邪神を倒し、平和を取り戻したイレブン達はそれぞれの故郷へと戻り、穏やかな日々を過ごす事となった

イレブン「残ったのは僕達だけになったね」

ラース「まあ、最後はデルカダールだからな。この面子だろ」

グレイグ「俺は中途半端な加入だったが、とてもいい旅だった。ありがとな、イレブン」

マルティナ「もう、グレイグ。皆に似た事を言ってるじゃない。つまらないわよ」

ラース「ハハハ！いいんじゃないか？グレイグらしくてよ。俺も、イレブンや皆と出会えて、旅をする事が出来て本当によかった。それに、何だか俺がこうしていられるのが不思議な感じがするんだ」

イレブン「僕も皆と出会えて、たくさん笑って、泣いて苦しんで、で

も最後はこうやって皆と笑えてる。僕もこの出会いに感謝しなくちゃ。皆がいなくちゃ何もできない勇者だったけど、皆がいれば僕はいつだって勇者になれるよ」

グレイグ「いい事を言うではないか、イレブン。イレブンを未来に戻す方法はいつ頃から探し始める？」

ラース「とりあえず世界が落ち着いてからじゃないか？俺達もこれから大変だからな。悪いがそれまでは待っていてくれ」

イレブン「うん、ありがとう。僕もイシの村の復興だったり、ユグノアの復興だったり頑張るんだ」

マルティナ「デルカダール城が見えてきたわ。イレブン、近いんだからいつだってデルカダール城に来てちょうだい。三人でいつでも待ってるわ」

ラース「そうだけ、イレブン。会いに来てくれよ？もしかしたら俺はそっちに行けるかもしれないけどな」

グレイグ「声をかけてくれるだけでもいいぞ。イレブンが元気な姿が見たいんだ。いつでもきてくれ」

イレブン「うん、ありがとう。マルティナ、ラース、グレイグ。皆

にも言ったけど、皆の事大好きだよ！」

その後、イレブンと別れ、三人でデルカダール城へ帰ってきた

玉座の間

マルティナ「お父様！邪神を倒し、無事に帰ってきました！」

デルカダール王「おお！マルティナよ！よかった！無事であったか！黒い太陽が無くなった事は知っている。よくがんばってくれた。グレイグ、ラーズも本当にお手柄じゃった。お主達はこの世界の誇りだ！お礼を言わせてほしい。ありがとう」

デルカダール王は頭を下げている

マルティナ「いやだわ、お父様ったら恥ずかしいですよ」

ラーズ「王様、流石に王に頭を下げられると恐縮なんですが」

グレイグ「王よ、もったいなきお言葉。ありがとうございます」

デルカダール王「イレブン達はどうしたのじゃ？もしや故郷へと帰ってしまったか？」

グレイグ「はい。イレブンや他の皆は故郷へと帰って行きました」

デルカダール王「ふむ、そうであったか。宴を開こうと思っていたが、仕方あるまい。他の故郷でもきつと厚く労われているだろう。わたし達もお主達を労おうではないか。だがその前にマルティナよ、グレイグよ。ラーズの強さは試したか？」

グレイグ「はっ、王よ！私が本気で挑んだ所、ラーズは私に勝ちました」

マルティナ「ラーズは頭がいいんですよ、お父様。戦いの時も作戦を立ててグレイグに勝ちました」

デルカダール王「ほう！グレイグに勝ったか。それは凄いのう。ラーズよ、試すような真似をしてすまなかった」

ラーズ「いえ、平気ですよ、王様。それと、俺のこれからの事についてですが、俺は一般兵士として入り、そこから地位を積み上げて行くかと思うています」

デルカダール王「何をいう、ラーズよ。何もそんな所から始めなくてもよい。それにお主は勇者の仲間として知られておる。兵士では役が務まらないだろう」

グレイグ「やはり王もそう思われますか。私はこれまでの戦い方や頭の回りのよさから、ラーズには軍師の職がいいのではないかと姫様

と話しておりました」

デルカダール王「ふむ、軍師か……」

ラーズ「いえ、王様。私は軍師の職にはつきません。いえ、就くこととは絶対にできません」

マルティナ「え？どうして？」

ラーズ「その席はもう既に埋まっているでしょう」

グ、マ「!?」

デルカダール王「ホメロスの事か。確かにあやつもそうだ。だが、今はもう……おらんのだぞ」

ラーズ「グレイグとホメロスは共に育ち、王とも親しい関係だったとお聞きしております。王もグレイグの事を息子同然と仰っております。つまり、それはホメロスと同じという事。私は王にとって息子のような男が、必死に努力して就いた地位を奪うなど絶対にできません」

マルティナ「ラーズ……」

デルカダール王「……そこまで考えてくれていたのだな。ありがとう。それならば、お主の気持ちを尊重しよう。お主には、デルカダールの兵士達を鍛える兵士長となってもらおう」

ラーズ「兵士長？それはグレイグの役目なのではないのですか？」

グレイグ「確かにそうだったのだが、俺はこれから王と姫の付き人として働かなければならなくてな。そっちの人手は足りていないのだ」

デルカダール王「そういう事だ。この職ならばお主は城にいる事ができるし、マルティナとも一緒にいる事ができるだろう。どうであろう？」

ラーズ「心遣い大変感謝いたします。わかりました。俺はこれから兵士長となり、このデルカダール王国を支えていきましよう」

デルカダール王「うむ、励んでくれたまえ。ああそれと、孫ができたらわしに一番に教えてくれ」

グレイグ「ぶっ!!」

マルティナ「お、お父様!!何を言って」

ラーズ「わかりました、王様。お任せください」

マルティナ「ラーズ!!!」

デルカダール王「ハツハツハ！楽しみにしておるぞ。それでは今日はお主達のために少しばかり宴を開こう。これまでの傷を癒してくれ」

その後、ささやかながらも宴が開かれた

そこで、王から娘マルティナが無事に帰ってきた事。英雄グレイグがこれからは王と姫の付き人として働く事。そしてその代わりとしてラーズが兵士長になった事を発表した

宴では、身分関係なく騒ぎ、踊った

その中でラーズは兵士達に自己紹介のため兵士達を集めていた

ラーズ「急に集めてもらってすまなかつたな。さつき発表があつたから分かると思うが、これからは俺、ラーズがグレイグの代わりに兵士長として君達を鍛える事になった。よろしく頼む」

兵士達「よろしく願います！」

ラース「よかったら俺に自己紹介をお願いしてもいいか？」

その後兵士達の自己紹介が終わった

ラース「ありがとな。俺に何か聞きたい事はあるか？」

バン「はい！」

ラース「確か、バンだったか？何だ？」

バン「はい。勇者様の仲間ともあろう方がどうしてこここの兵士長になつてくださったんですか？」

ラース「敬語を使われるのか……。慣れてないな。まあ、いいか。俺は旅をしている時にグレイグに認められてな。そこからは成り行きかな」

ロベルト「はい！使える武器とか魔法は何ですか？」

ラース「俺が使えるのは、片手剣とブーメランと盾と体術だな。特に体術はかなりの自信があるぞ？魔法はたくさん使えるな。回復魔法は無理だけだな。だからグレイグとは違う教え方になると思うが、そこはすまないが頑張ってくれ」

ベグル「はい！グレイグ將軍とは戦った事はあるんですか？」

ラーズ「おう、本気勝負を挑まれてな。俺なんかだと、真っ向から挑んでも敵わないから作戦を立ててな。そしたらグレイグに勝てたんだ」

ベグル「え!?あのグレイグ將軍に勝ったんですか？」

ラーズ「ああ、一応な。だが、まぐれだぞ。本人にも聞いてみる？多分次やったら勝つのはグレイグだからな。質問はもう無いか？それならお近づきの印に皆で騒ごうぜ！俺、こういう宴は楽しんじゃうんだよな！」

1119. ラースの歩む道

次の日、訓練場

ラース「よし、全員揃ったな。それじゃあまずは、各自で筋トレをやってくれ。俺もいつも朝やっていた筋トレをやるからな。はじめ！」

その後

ラース「よし、次は素振りをしていてくれ。俺はそれを見て回るかな。はじめ！」

ラース「(ふむ、流石はグレイグの教えていた兵士達だけあるな。皆、しっかりとっている)」

ラース「ありがとな。次は二人一組で模擬練習をしてくれ」

その後

ラース「今、剣をこうやって当てようとしたが、それだと力が切る方向と違ってしまっただ。だから、そこから攻撃するならば、剣をこっちから攻撃してみる。そうすれば少ない力でもかなりダメージが入る」

ラース「相手の動きを見るのはいい事だが、避けることも考えておかないとな。避ける時も後ろにばかり避けるから、相手に読まれてしまっただ。避けるのは何も後ろや横だけじゃない。前に踏み込めば、

相手が攻撃できない位置に進みながら攻撃できる」

ラーズ「今のタイミングの切り返しはよかったぞ！ただ、多様はするなよ？反撃をされると、モロにくらってしまふからな」

数時間後

ラーズ「よし！こんなもんか。それじゃあ、最後の仕上げといこう。五人一組で俺と組手をしてもらおう。俺は全部避けるからな。全グループ避けきいたら俺の勝ちだ。」

全グループの中から誰か一人でも俺の剣を抜かせたり、魔法を使わせたらかお前らの勝ちだ。お前らが勝ったら…… そうだな。今日の夜、酒場で全員に何でも奢ってやるよ。これでどうだ？」

兵士達「いいんですか!？」

ラーズ「もちろんだ！だが、誰か一人でも俺に剣を抜かせたり、魔法を使わせたらかからな。よし、こい！」

その後

ラーズ「俺の勝ちだな。奢りはまた今度にお預けだ」

兵士達「ハア……ハア……」

グレイグ「お、やっているな。ラース」

グレイグが訓練場に降りてきた

ラース「おお、グレイグ。何だ、様子を見にきてくれたのか？」

グレイグ「ああ、どうしているかと思つてな。しかし、お前ら情けないぞ！何を疲れている！」

ラース「今、全員対俺で賭け事をしていたんだ」

グレイグ「賭け事？教えていたんじやなかったのか？」

ラース「グレイグが教えていただけあつて、俺はあまり教えられないような事は少なそうだったからな。実践を踏まえた方が体にも覚えるだろうと思つてな。五人一組で俺から剣を抜かせるか、魔法を使わせたら勝ちとして組手をしていたんだ」

グレイグ「ふむ、なるほどな。だが、お前から剣を抜かせるなど難易度が高いのではないか？」

ラース「いや、そんな事ないだろ。太刀筋や踏み込みはいい線いつてるぜ？」

ロベルト「あ、あのグレイグ將軍！」

グレイグ「む？どうした？ロベルト」

ロベルト「ラーズさんの弱点って何ですか？」

ラーズ「おい！何聞いてんだよ！」

グレイグ「うむ、ラーズの弱点か…」

ラーズ「いや、何グレイグも考えてんだよ！」

グレイグ「当たり前の事だが、大人数は苦手だよな。決して弱くはないが、どちらかといったら一対一で圧倒的な力を発揮するな」

ラーズ「まあ、そうだな。魔法やブーメランがあるとはいえ、火力にはあまりならないからな。イオグランデが最高火力だと思うぜ」

兵士達「(会話の次元がおかしいのでは!?)」

グレイグ「これも当たり前だが、予想してない攻撃は防げないな」

「ラース「それは皆そうだろ」

ロベルト「という事は、何か致命的な弱点があったりする訳じゃないんですね？」

グレイグ「そうなるな。まあラースは強いからな。頑張れよ」

ラース「どうか何聞いてんだよ！俺にだって出来ない事はあるからな！水には弱いからな、俺は！」

グレイグ「自分で言うことないだろう」

ラース「いいよ、別に。弱点くらい教えても」

バン「はい！グレイグ將軍！ラースさんと戦ってみてはくれませんか？」

グレイグ「俺が？構わないが」

ラース「本気勝負はもうごめんだぜ。よくやってたキャンプでの感じで組み手でもいいならいいけどよ」

バン「俺はそれでも大丈夫です！お願いします」

グレイグ「ならばやるか、ラーズ」

ラーズ「おう。いくぞ、グレイグ」

その後

グレイグ「やはり剣が上手くなったな、ラーズ」

ラーズ「グレイグやシルビアに教えられたからな。そりゃあできるよようになるだろ」

バン「ありがとうございます！グレイグ将軍がすごいのはわかっていますでしたが、ラーズさんもすごいです！」

ラーズ「おう、ありがとな。今の戦いで俺がやっていた避け方や攻撃の移り変わりはこれからお前達に教えようと思っているが、コツさえ掴めば簡単だからな。楽しみにしとけ」

兵士達「はい！」

グレイグ「それは俺も興味があるな。時間があればきてもいいか

？」

ラーズ「別にいいが、グレイグなら必要ないぐらいもう強いだろ」

グレイグ「お前のその避け方やいなしかたは前から興味があったんだ。俺も出来るなら習得したいからな」

ラーズ「わかったよ、今度な。それじゃあ今日の練習はここまでだ！何か聞きたい事があったら俺の部屋にきてくれて構わないからな。それじゃあまた明日な！」

マルティナの部屋

コンコン

ラーズ「マルティナ、いるか？」

ガチャ

マルティナ「あら、ラーズ。訓練は終わったの？」

ラーズ「ああ、今終わらせてきた。入ってもいいか？」

マルティナ「大丈夫よ、どうぞ。どうだったかしら？初訓練は？」

ラース「流石グレイグが教えてただけあるな。皆、基礎はしっかりしている。俺が教えなくてもいいくらいにはな。後は実践で覚えるだけだと思うぜ。だからこれからは戦い形式で進めて行こうかと思う。マルティナはどうだ？王女としての勉強は」

マルティナ「まだ慣れないことばかりね。わからない事もたくさん。それにどうしても体を動かしたくなっちゃうわ。でも、お父様のためにも頑張らないとね」

ラース「ハハ、あまり根詰まりすぎるなよ？もし動かしたくなったら訓練場に来いよ。キャンプ場の時みたいに俺と組手をしようぜ。今日グレイグも途中で来て、俺と組手をしたんだぜ」

マルティナ「いいのかしら？それじゃあお言葉に甘えようかしら。部屋の方はどう？何か足りない物とかあったら言ってね」

ラース「俺からすると、あんな立派な部屋にいとソワソワするんだよな。俺は貴族だったけど、見たと思うがあんな部屋だったし、村にいた時もそこまで広い部屋じゃなかったからな。どうも、あまり落ち着かないんだよな。時間の問題だろうか」

マルティナ「それじゃあ、私の部屋に来てもいいのよ？」

ラース「とても素晴らしいお誘いだし、ぜひと言いたいところだが、まだ駄目だ。そんな姿を兵士達やメイドの人に見られてみる？城中

大騒ぎだぞ」

マルティナ「それならお父様に相談して、もう結婚の約束もしているって発表しましょう」

ラーズ「おいおい、肝が座りすぎてないか？俺はただの村の出だぞ？よく思わないやつらがゴロゴロ出てくるぞ」

マルティナ「それもそうね。でも、お父様の事だからきつと時間の問題だと思うわよ？」

ラーズ「どういう事だ？」

マルティナ「お父様がバラしていくと思うわ。メイドさんとかコックとかに言う可能性が高いわよ」

ラーズ「何してんだよ！王様!!」

マルティナ「うふふ、だから深く考えてもきつと変わらないわ」

ラーズ「マジか……。だが、イレブンが未来に戻るまではこのままだな。それが終わってから、一緒の部屋になろう」

マルティナ「わかったわ。楽しみにしてるわね」

ラーズ「おう、俺も楽しみにしてる。それじゃあ、俺は部屋に戻るぜ。じゃあまた夜の食事の時にな」

マルティナ「ええ、お疲れ様」

夕食時

ラーズ「やつぱりこの席に俺がいるのはおかしくないか？」

マルティナ「え？どうして？」

ラーズ「俺、王様と一緒にご飯食べる日が来るとは思ってた」

デルカダール王「うむ？わしが気になるか。ならば、わしは別の場所に行こうかの」

ラーズ「あああ！待ってください、王様！俺が兵士達と同じ所に行けばいいんです！親子で食べる事は変じゃありません」

グレイグ「だが、それだと俺もここにいてはいけない事になるだろう」

ラーズ「グレイグは王様にとって息子同然だからいいんだよ！俺、関係ないよ！」

デルカダール王「何を言う、ラーズよ。お主はマルティナの夫ではないか。妻と夫が同じ空間でご飯を食べなくてどうする」

ラーズ「……それはそうですけど」

マルティナ「ラーズ。私は今までみたいにあなたと一緒にご飯食べたいわ？駄目かしら？」

ラーズ「よし、これからもここでご飯食べようか」

グレイグ「いいのか、そんなすぐに決めて」

ラーズ「マルティナの頼みだからな。仕方ないな」

デルカダール王「ハツハツハ！ラーズよ、お主さえよければ、お主もわしの息子になってもいいのだぞ？」

ラーズ「この年でそんな誘いを受けるとは。魅力的なお誘いです

ね。いいのですか？」

デルカダール王「なに、息子は何人増えようと嬉しいものだからな。それにそうした方が、お主もわしと接しやすいのではないか？」

ラーズ「わかりました、ありがとうございます」

グレイグ「王は心の広いお方だ。ラーズ、感謝しなければならないぞ」

マルティナ「よかったわね、ラーズ。お父様とも仲良くしてね」

ラーズ「これからよろしくお願いします、王様」

120. 将軍

二ヶ月後、世界は落ち着きを取り戻し、前のような平和が流れていた

訓練場

ラーズ「そうだ！そこからどうする？」

バン「はあ！ふん！でやあ！」

ラーズ「いいぞ！攻めの姿勢が大事だ！相手に反撃の隙を与えないようにするんだ」

恒例になった最後の組手は、ラーズが武器を出し、自分に攻撃を当てられたらという条件に上がっていた

ロベルト「！ここだ！」

ラーズ「な!?!」

ラーズの脇腹に剣が当たった

ロベルト「あ！やった!!ラーズ将軍に入った！」

ラーズ「あーあ、入っちゃったか。仕方ねえな、今日は俺の奢りだ！お前ら、どんどん飲めよ！」

全員「よっしやあああ！」

ラーズ「ハハハ！そんなに嬉しいのかよ。それにしても随分強くなったな。俺もそろそろキツくなってきたぜ。五人はやめてもっと少なくなるか」

ロベルトは英雄のように周りに褒められている

ラーズ「それじゃあ今日の訓練はここまでだ！夜は前にもやったあの酒場に集合な！」

兵士達「ありがとうございます！ラーズ將軍！」

廊下

グレイグ「見ていたぞ、ラーズ。ついに一本取られたな」

ラーズ「げつ。グレイグ、見てたのかよ。そうだよ、流石に手が回らなかった。まあ、仕方ねえな。そろそろヤバそうだと前から思ってたからな」

グレイグ「心なしか、俺の時よりも兵士達は生き生きとしている気がするな。お前の教えがいいのだろうな」

「ラース「大した事はしてないんだがな。まあ慕われるのも悪くねえな」

「グレイグ「兵士達とは随分仲良くやっっているな。俺の時は口下手なせいもあってあそこまで馴染めなかった」

「ラース「そんなに仲よさそうか？まあ、見てたならわかると思うが、今日の夕飯は俺いないからな。王様とマルティナに伝えに行ってくる」

「グレイグ「ああ、姫様は部屋に、王は玉座の間にいるはずだ」

「ラース「ありがとな、グレイグ」

「マルティナの部屋

「コンコン

「ラース「マルティナ、いるか？」

「返事は返ってこない

「ラース「あれ？マルティナ？入るぞ？」

「ガチャ

「中ではマルティナが机で寝ていた

ラース「ハハ、最近頑張ってるもんな。お疲れ様。ただ、寝るならベッドでな」

ラースはマルティナを抱き、ベッドまで連れて行った

ラース「おやすみ、マルティナ。あ、メモしておかなきゃ」

玉座の間

ラース「王様、少しご報告があります」

デルカダール王「ラースか、どうした？」

ラース「いえ、大した用事ではないのですが、今日の夕飯は俺が兵士達を奢るのでいない、という事を伝えておこうと思ひまして」

デルカダール王「という事は、兵士達に一本取られたのだな？」

ラース「うっ……。そうです。一本入れられました」

デルカダール王「ハツハツハ！ラースから一本取るとは、我らの兵士達も強くなった。お主のおかげだな。今夜は騒いでくるといい」

ラース「ありがとうございます、王様」

デルカダール王「お主は知らんかもしれんが、何やら兵士達は夜な夜な集まって打倒、ラーズ將軍！というのを掲げて対策を練っているらしいぞ」

ラーズ「…… あいつら、いつの間にそんな事を」

デルカダール王「ハツハツハ！仲がよくていいことだ。それもお主の人柄なのだろう！」

ラーズ「そうなんですかね？それでは報告は以上です。失礼します」

夜、酒場にて

酒場には既に兵士達が全員集まっている

ラーズ「(ん？何やら集まっているのが早くないか?)」

ラーズは兵士達が何かをしているのを見ていた

ラーズ「(あ、あいつら本当に俺の事ノートにびっしり書いてやがる)」

ラーズは気配を殺して近づく

ラーズ「ほう？いつの間にそんな事してたんだね？君達？」

兵士達「ラーズ將軍!?いつの間に!」

ラーズ「よく書かれてるなあ? 剣の時、体術の時、ねえ。その時に合わせた対策を考えるのはいい事だな。だが、明日が楽しみだなあ?」

兵士達「ひいつ!」

ラーズ「まあ、今は飲もうぜ。ほら、片付けな。今日は俺に一撃入れたロベルトに乾杯だ!」

その後

ラーズ「そういえば、お前らなんで俺の事將軍ってつけて呼ぶようになったんだよ。何て呼ぼうが別にいいけどよ」

ダバン「俺達はグレイグ將軍から、ラーズ將軍は勇者様のパーティーを頭脳と力で支えていたと聞いて、グレイグ將軍と同じで尊敬したんです。だから、グレイグ將軍と同じく將軍をつけるようにしたんです」

ラーズ「グレイグめ、余計な事を。別に俺は大した事はしていないぞ。一緒にいただけだ。尊敬してくれるのは嬉しいが、お前らだって頑張れば俺みたいになれるぞ?」

マーズ「俺でもなれますかね!？」

ラーズ「マーズは魔法もできるからな、俺と似た道を辿れるんじゃないか？ただ、魔法と剣術をどっちも極めるのはかなり至難の業だからな。どっちかに重きを置いたほうがいいぞ」

バン「そういえば、前に聞いたガラツシユの村はラーズ將軍の故郷なんですよね？」

ラーズ「ああ、そうだ。知ってるのか？」

バン「いえ、聞いた事なかったんですけど、何でラーズ將軍はその村に帰らなかったんですか？勇者様だって故郷に帰ったのに」

ラーズ「俺の故郷のガラツシユの村は魔物に滅ぼされてな。俺が到着するのが遅かったせいで、村の全員も失ったんだ。だから俺に帰る場所はなかったんだ」

バン「あつ……。そんな事が、すみません！嫌な事を聞いてしまつて」

ラーズ「いやいや、気にするなよ。俺が気にしてないんだからな。」

そうだ、明日ダーハルーネに遠征に行くだろ？その近くに俺の村があるんだ。よかったら寄っていこうぜ。村の皆に俺の自慢の教え子達だって教えてやらないとな」

ロベルト「ありがとうございます！」

その後

ラーズ「おい！お前ら！酔いすぎだろうが！たくっ！マスター、すまねえ、金はここに置いていく！」

ラーズは酔って歩けない人を五人ほど背負い、城まで歩いて帰った

ラーズ「おい、このアホ共部屋に連れて行ってくれ。そして伝えとけ。明日お前らだけ特別メニューだってな」

121. 遠征

次の日、訓練場

ラーズ「さあ、今日も一撃入れられるといいな？今日はブーメランと魔法で行くぞ。だが、午後からは遠征だからな。少し早めに切り上げるぞ」

兵士達「えええ！」

ラーズ「前に言っただろうが。どんな武器でも立ち回りが重要だつて。ほら、かかってこい」

端では昨日酔い潰れた五人が既にヘトヘトになっていた

ガザル「ぜえ、ぜえ、疲れすぎて死にそう」

ロベルト「完全におもちやにされてたぞ、俺達」

しばらくして

ラーズ「残念だったな。遠距離からの相手は慣れてないみたいだな。今度また立ち回りを教えるからな」

その時、訓練場の二階から声が聞こえた

イレブン「あ！ラーズ、見つけた！」

ラース「ん？おお！イレブン！久しぶりだな！」

イレブンが降りてきた

イレブン「本当に兵士達鍛えてるんだね。ラースならいい教え方できるし、適任だと思うよ」

ラース「そんな事ねえだろ。俺にこんな事似合わねえぜ。今日はどうしたんだ？顔を見せにきてくれたのか？」

イレブン「うん。それもあるんだけど、今から僕とベロニカとセーニヤで勇者の剣を命の大樹に返しにいくんだ。そのついでによったの」

ラース「なるほどな。世界は平和になったから剣はあるべき場所に返すのか。まあそうだよな。あ！イレブン！なら、少し時間あるか？」

イレブン「？急ぎなんかじゃないから全然大丈夫だけどどうしたの？」

ラース「いや、俺が鍛えた兵士達が勇者相手にどこまで通用するか気になってよ。少し戦ってみてくれないか？」

イレブン「ええ！僕なんかで相手になるかな？」

ラーズ「大丈夫だ、イレブンはいつも通りやればいいんだからな。というわけでお前ら！今から三人でイレブンと戦ってもらおう！負けると思うが、同じ片手剣使いのやつや、魔法を使うやつは俺やグレイグ以外から学べるいい機会だ。しっかり見てるんだぞ！」

兵士達「わかりました！」

その後

イレブン「前に戦った時よりも強くなってるよ。剣も強いし、魔法で隙を埋めようとしてくるから、結構強敵だね」

ラーズ「ありがとな、イレブン。ベロニカ達はマルティナの所か？」

イレブン「うん、今話してると思うよ」

ラーズ「それなら、俺も行くのかな。よし！今日の訓練は終わりだ！午後の遠征に備えておけよ！」

マルティナの部屋

コンコン

ラーズ「マルティナ達、いるか？」

マルティナ「あ、ラーズ！ベロニカ達が来てくれたのよ。ってイレブンとは会ってたのね。入って一緒に話しましょう」

ラーズ「よお、ベロニカ、セーニヤ。久しぶりだな。元気そうではよりだ」

ベロニカ「ええ、久しぶりね、ラーズ。兵士達を鍛えてるなんて凄いいじゃない。まあ、流石と言った所ね」

セーニヤ「お久しぶりです、ラーズ様。皆様、お変わりないようですね。安心しましたわ」

グレイグ「今日は午後から遠征だろう？準備しなくていいのか？」

ラーズ「ああ、昨日のうちに準備は終わらせたからな」

マルティナ「いいわね、外に出れて。私もダーハルーンにまた行きたいわ」

イレブン「遠征ってダーハルーンに行くの？」

ラース「おう、何やらあそこ周辺の魔物の様子がおかしいらしくてな。その調査だ」

ベロニカ「それなら私達も行くわ。丁度ダーハル―ネからの便に乗ってクレイモランに行く所だったのよ」

ラース「おお、そうか。だが、兵士達もいるぞ？大丈夫か？」

セーニヤ「私達は構いません。また旅の時みたいで少し楽しみですわ」

マルティナ「ええ!?皆して行っちゃうの！私もお父様に言つて今日お休みもらつてくるわ！」

マルティナは部屋から走って出ていった

ラース「あ、おい！マルティナ！……行っちゃったよ。遊びじゃないんだがな」

その後

ラース「あー、皆、すまないが遠征には勇者達とマルティナとグレイグも行く事になった。想定よりも大所帯だが、気にしないでくれ」

兵士達「は、はい！」

ラーズ「魔物と戦いながら行くからな。俺と皆が戦うから、イレブン達は後ろで見えてくれ。何かあったら兵士達にビシビシ言っ
やってくれ」

しばらくして

グレイグ「ふむ、魔物相手でもしつかりと立ち回れているな。俺の時よりも成長しているようだな」

バン「ありがとうございます！やった！グレイグ將軍に褒められた」

ラーズ「お、よかったな、バン。お前は皆の中でも特に太刀筋や戦闘がうまいからな」

バン「俺もつとがんばります！」

マルティナ「兵士達とも仲良くやってるのね。年が近いし、ラーズが優しいからかしら？」

ベロニカ「確かに教官というよりは、どっちかといったら先輩的な感じよね」

イレブン「僕も最近体動かしてないからな。うかうかしていると、兵

士に負けちゃうかも」

セーニヤ「皆様、傷をおつたらすぐに私の元まで来てください。回復いたします」

兵士達「あ……はい」

ラース「おう、お前ら。どこに行く気だ？まだ怪我なんざ少ししかしてねえだろ。甘えてんじやねえぞ」

兵士達「……はい」

ダーハルーネの町

ラース「さて、ここから魔物の調査だな。外に出て調べてみよう。その後は兵士達と俺の村に行つて墓参りだ」

イレブン「あ、ガラツシユの村にも行くんだ。じゃあ僕達も墓参りしていくよ」

ベロニカ「そうね。ここに来たら思い出しちゃうからね」

ラース「そうか？ありがとな」

霊水の洞窟

ギバ「ここら辺は俺、来たこと無いんですよ。綺麗な所ですね」

バン「俺はこの洞窟には入った事無かったな。それと何だか魔物が変じゃないか？」

イレブン「そうだね。この感じ邪神がいた頃の魔物に似てるね」

ラーズ「そうだな、まだ完全には抜けきっていないのか？取り敢えずお前ら！戦闘はイレブン達が代わる。お前らは後ろで待機していてくれ。何かあったらすぐに言えよ」

兵士達「はっ！」

マルティナ「やっと体が動かせるわ！それに、ラーズとまたこうやって戦ったかったのよ」

ラーズ「それはよかったな、マルティナ。俺も君とまたこうやって戦えるのはいいい気分だ」

マルティナとラーズは息ピッタリで動いている

セーニヤ「仲は変わらずとってもよさそうですね。お二方に任せておけば、ある程度は安心ですね」

グレイグ「ですが姫様、あまり派手に動かせない方が」

ベロニカ「聞こえてないわね、グレイグさんの言葉」

ガラツシユの村

村は異様な雰囲気か漂っていた

イレブン達「!？」

ラース「お前ら！これ以上進んじや駄目だ!!」

ラースは兵士達にここで待機していろと指示した

兵士達「は、はい！」

イレブン「何？この雰囲気？」

マルティナ「前に来た時はこんな事なかったわよ」

グレイグ「とても嫌な気配で満ちているな」

セーニヤ「奥から邪悪な気配を感じますわ」

ベロニカ「行ってみましょう！」

ガラツシユの村奥地

墓の前に男の人が立っている

グレイグ「あそこに人がいるぞ！」

ラース「な!?!嘘だろ!どうして!!」

マルティナ「彼は!!」

ギルグード「よお、久しぶりだな」

そこにいたのは死んだはずのギルグードだった

ラース「ギルグード!何故生きている!お前は俺の腕の中で確実に死んだはずだ!」

イレブン「そうだよ。それに、君から感じるその気配は!まさか!」

ギルグード「何だよ、つまらねえな。すぐにわかっちゃまうのかよ。俺は邪神様によってパワーアップした呪術師マーガン。この場所には死者がたくさんいてな。特にこの男は力がいい。だから俺が中に

入ってやったのさ」

グレイグ「貴様！死んだ人に対してなんたる事を！」

マルティナ「その体から出てきなさい！彼の体で好き勝手にするのは許せないわ！」

ギルグード「はん！嫌だね！どうしても出したきや、俺を倒してみな！」

ラーズ「お前はギルグードに見えるが違うやつだ！皆、こいつは俺がやる。俺の親友を馬鹿にするこいつは絶対に許さねえ」

ギルグード「何だ？お前、この男の知り合いか？ギャハハ！なら、思うように攻撃できなからう？どうだ？お？その隙に思う存分痛めつけ、ベフツ！」

ギルグードは吹っ飛んだ

ギルグード「て、てめえ！親友だったんじゃないのか！？親友を殴るとか正気か!!」

ラーズ「あ？何言ってるやがる。てめえはギルグードなんかじゃねえ。それに、俺はギルグードとはライバルでな。お前とはずっと戦ってきたんだよ！せいけんづき！」

ギルグード「ぐう！もう許さねえ！これでも食らえ！全身全霊斬り！」

ラーズ「そんな切り方はあいつはしてこなかった！姿だけ真似たって無駄なんだよ！ばくれつきやく！」

ギルグード「くそ！アイスブレード！」

ラーズ「メラゾーマ！」

ラーズ「マヒヤド！」

ギルグード「くそ！こんなやつ体なんかいられるか！出て行ってやる！」

すると、ギルグードの体から煙のような魔物がでてきた

ラーズ「てめえが本体か！イオグランデ！」

マーガン「ギヤアアア！」ジュワー

ラーズ「たくっ！ふぎけやがって……ゴホッ」

セーニヤ「ラーズ様、大丈夫ですか？」

ラーズ「ああ、平気だ。怪我もしてないしな。これで邪悪な気配も無くなっただろ。兵士達も連れてくる」

その後全員で墓参りをした

ロベルト「ラーズ將軍はこの村を復興しようとは思わないんですか？」

ロベルトは周りを見渡している

グレイグ「そうだな、この村はどうするのだ？復興するなら俺達は手伝うぞ」

ラーズ「いや、この村は瓦礫を片付けたらもうこのままでいい。村は人がいなきや成り立たないからな。元々こんな辺境な場所にあったせいで、人はあまり来なかつたんだ。俺は、俺の心の中でこの村の景色を思い出すとするよ」

ベロニカ「そう、それならいいんだけど」

マルティナ「それじゃあダーハルーネに戻りましょう」

イレブン「そうだね。それに、もしかしたら魔物達もさっきのやつが原因で凶暴になってたかもね。帰り道に様子をみてみよう」

ダーハル―ネの町

ラーズ「どうやらイレブンの読み通りみたいだったな。これで安心だな。王にも報告しよう。それじゃあ、イレブン達はここでお別れだな」

ベロニカ「ありがとね、新しいラーズの姿も見れて楽しかったわ」

セーニヤ「またお城の方に行く時は連絡しますわ」

マルティナ「ええ、いつでも来てちょうだい」

グレイグ「また色々話そうではないか」

イレブン「それじゃあまたね！」

122. 刻印

デルカダール城

ラーズ「ゴホツゴホツ！」

ラーズは息苦しそうにしている

ガザル「ラーズ將軍、大丈夫ですか？」

ラーズ「ああ、すまない。体がおかしくてな」

マルティナ「大丈夫？ラーズ。先に休んでいいのよ？」

グレイグ「そうだと、顔色もあまりよくない。報告はしておいてやるぞ？」

ラーズ「いや、報告くらい自分でやるさ。このまま行こう」

玉座の間

ラーズ「王様！遠征よりただいま戻りました」

デルカダール王「おお、帰ったか。それで、どうだった？魔物の方は？」

ラーズ「魔物は確かに凶暴になっておりましたが、その原因となる魔物を倒した所、周りの魔物は正気を取り戻して行きました。もうあの周りは平気だと思われまます」

デルカダール王「うむ、それはご苦労であつた。ラーズ、何やら顔色がよくない。部屋でゆっくり休むといい」

ラーズ「ありがとうございます…。うぐっ…。」ドサ！

ラーズは突然倒れた

デルカダール王「ラーズ！どうした！」

ラーズ「カハッ！こ…。これは…。」

ラーズが悶えながら、王から離れていく

マルティナ「ラーズ!!どうしたの!大丈夫!!?」

マルティナが急いで近寄る

ラーズ「ぐるなあ!マルティナ!!今、俺に近づいちゃ駄目だ!」

ラーズはマルティナを突き飛ばした

マルティナ「きゃ!ラーズ!」

ラーズ「うぐおおおお！」

ラーズの回りに黒い瘴気が集まる

そして、ラーズは倒れた

マルティナ「ラーズ!?ちよつと!ラーズ！」

グレイグ「急いで衛生兵を呼べ!大至急だ！」

マルティナ「ラーズ!大丈夫なの!?!ラーズ！」

マルティナは必死にラーズを揺らす

その時、ラーズが目を覚ました

マルティナ「ラーズ!よかった!きや！」

ラーズはマルティナを突き飛ばした

ラーズ「ふん。やつとこいつの体を取り込めたか。散々抗いやがって。だが、まあいい。この体は素晴らしい。何でも壊せそうだ」

グレイグ「貴様!!ラーズではないな!まさか、さっきの！」

マーガン「ここがどこだか知らぬが、さっき見た顔もいるな。俺は

魔術師マーガン！こいつの体はいただいた！体に刻印を刻み込んでやったのだ。

これで私を倒すには、この男を殺すしか方法はなくなった！俺をバカにした男のいい末路だ！ギャハハ！」

デルカダール王「何じゃと!?!」

マルティナ「そ、そんな!!ふざけるんじゃないわよ！ラーズを返さない！」

マーガン「ふん、貴様一人などこの男の前では無力だ。ハア！」

マルティナ「ハッ！テヤア！」

マルティナはマーガンに取り憑かれたラーズと戦っている

グレイグ「呪いの類なのか。急いでロウ様をお呼びしなければ！王よ！ロウ様に連絡をしていただけじゃないでしょうか？ロウ様はユグノア地方にいらっしやるはずですよ。私は姫様と共にあいつを食い止めます」

デルカダール王「うむ、任せておけ。あいつの事は頼んだぞ」

デルカダール王は急いで部屋から出ていった

グレイグ 「姫様！私も参戦いたします！」

兵士達 「俺達も微力ながら参戦します！」

マーガン 「ちっ！雑魚共が、群がって邪魔をするな！イオグランデ
！」

グレイグ 「天下無双！」

マルティナ 「ばくれつきやく！」

マーガン 「ばくれつきやく！」

マルティナ 「ラーズの戦い方なら熟知してるわ！ミラクルムーン
！」

マーガン 「この女、鬱陶しい！どけ！うおおお！」

マルティナ 「キャツ！」

マルティナが力負けし、後ろに倒れる

グレイグ 「姫様!!」

マルティナ「大丈夫よ！」

マルティナはすぐに体勢を立て直した

マーガン「メラガイアー！」

グレイグ「蒼天魔斬！」

マルティナ「氷結らんげき！」

マーガン「見切ったぞ、女！せいけんづき！」

マルティナ「キヤアツ！」

マルティナの脇腹にせいけんづきが当たった

マーガン「貴様から壊してやろう！」

マーガンはマルティナに馬乗りになり、剣を刺そうとする

マーガン「……なぜだ！なぜ、手が動かぬ！」

マルティナ「ハア！」

マルティナはマーガンを投げ飛ばした

マーガン「ぐぬう！体が思うように動かぬ！」

ラーズ「てめえ、これ以上好き勝手に暴れるのは許さねえぞ！」

マルティナ「ラーズ！」

マーガン「貴様！私にまだ抗うつもりか。もう手遅れだというのに、何を！」

ラーズ「うるせえ！お前はマルティナを傷付けようとしたな！！そんな事、俺の体で死んでもさせるものか！！」

マーガン「ふん！だが、こうして動きを止めるのが精一杯であろう！しばらくすればまた動けるようになる。そしたら貴様の物を全て貴様の体で壊してやろう」

ラーズ「そんな事させねえ！うおおお！」

ラーズは自分の体を必死に操り、持っている剣を自分に向けた

マーガン「な、何をする！貴様！自分を刺せばどうなるかわかっているのか！」

レース「そんなのどうだっていい！俺は、自分の体で勝手に大切なものを壊されるのは絶対に嫌なんだよ！」

マルティナ「ダメよ！レース!!やめて!!」ダツ！

マルティナはレースに走って近づく

マーガン「やめろおおおお！」

レースの持っていた剣が、自分の腹を深々と貫いた

マーガン「うぐわああああ！」ジュワー

レース「……………」ドサ

グレイグ「レース!!」

マルティナ「いやあああ!!レース!!ダメよ!!起きて!!」

レースの腹からは血が溢れ出ている

デルカダール王「ロウを連れてきたぞ!…… な!?これは、一体!」

ロウ「レース!!いかん!!急いでベホマじや!腹の穴を塞がなければ、ザオリクも間に合わなくなる!」

デルカダール王「衛生兵も回復魔法を使うのだ！」

グレイグ「俺はベホイムしかできぬ。気休めにしかならないが、俺も使うぞ。急がなければ本当に死んでしまう」

マルティナ「いや！嫌よ！！ラース！！」

ロウ「姫よ、気持ちはわかるが今は離れてくれ。早急に何とかしてみせる」

その後

ロウ「ひとまずはここでやめよう。ザオリクの有効時間が切れてしまふ。ザオリクじゃ」

青白くなっていたラースの顔が元に戻った

マルティナ「どうですか！ロウ様！」

ロウ「おそらくは間に合ったはずだが、目を覚まさんな。医療部屋で様子を見よう。セーニヤも呼ぶのじゃ。何かあった時のためにな」

グレイグ「わかりました。急いで連絡します」

その後

セーニヤ「そんな事が……すみません。私達があの時気づいていれば……」

グレイグ「いや、俺達だって気づくのが遅れた。それで、ラーズはどうだ？目を覚めますか？」

セーニヤ「目は覚ますとは思いますが……」

イレブン「え？何かあるの？」

セーニヤ「……」

セーニヤは顔を暗くしている

ロウ「セーニヤよ、言いづらいであろう。わしが言おう。ラーズは目を覚ます可能性は高いが、無事である可能性は極めて低いと思われる」

グレイグ「ど、どういう事ですか？」

ロウ「目を覚ました時に体に障害が残っている可能性が高いんじゃない。魔物に体を強く支配された影響じゃない」

抗った時も、相当負担がかかっていたはずじゃ。体がどこか動かなくなるか、はたまた脳に障害がでるか。何が起こるかはわからん」

マルティナ「そ…… そんな」

ベロニカ「相手の呪術は強力な物だったわ。普通なら刻印を刻まれた時から全て支配されていてもおかしくないのよ。抗えたのは流石といった所ね。凄まじい精神力だわ」

イレブン「いつ頃目を覚めますの？」

セーニャ「時期はわかりません。体の回復が間に合うまでは眠り続けると思います」

グレイグ「…… わかった。俺は王に報告してこよう」

マルティナ「バカ！馬鹿!!何で早く言わないのよ！」

ロウ「わしらも回復にはこれから毎日努めよう。姫はいつでもラスが目を覚ましていいように傍にいてやるんじや」

123. 結婚

それから二週間が過ぎた

医療部屋

ラース「ん？ここ…は？」

ラースは目を覚まし、自分の状況を確認する

マルティナ「スウ、スウ」

マルティナがラースの近くで寝ていた

ラース「マルティナ、寝てるのか。迷惑かけたな」

ガチャ

セーニヤ「あ!!ラース様！目を覚まされたのですね！」

ラース「お、セーニヤ。おはよう。俺、生きてるんだな」

セーニヤ「お体は大丈夫ですか？記憶はどこまでございますか？」

セーニヤは少し焦ったようにしている

ラース「ど、どうした？体はまだあまり動かないが、変な所はないぞ。記憶は俺がマーガンに取り憑かれて、暴れまわるのを阻止するために俺が自分で腹を刺したところまでかな」

セーニヤ「これは……奇跡ですわ！マルティナ様！起きてください！ラーズ様が目を覚ましました！」

マルティナ「……ん？あれ？私寝ちやってたのね。つてラーズ！目を覚ましたのね！」

ラーズ「ああ、心配かけたようだな。すまなかった、マルティナ」

マルティナ「体はどう？記憶は？」

セーニヤ「どちらも問題無いそうです。これは奇跡ですわ、マルティナ様。私は皆様に伝えてきます」

マルティナ「本当によかった。私、ラーズが死んじやうのかと思って本当に心配したんだから」

ラーズ「すまなかったな、マルティナ。俺の体で君を殺そうとするあいつが許せなくてな」

マルティナ「そんなの平気よ！私はあなたにずっと隣にいてほしいんだから、もう二度とあんな事しないでちょうだい！」

バタン！

イレブン 「ラース！大丈夫!？」

カミュ 「目を覚ましたのか！」

シルビア 「ラースちゃん、本当によかったわ〜！」

ロウ 「体も記憶も問題ないとは……勇者の奇跡が起こったのかのう」

グレイグ 「王も後ほど来るとおっしゃっていた。無事でよかった、ラース」

ベロニカ 「ちよつと！ラース!!」パチン！

ベロニカはベツトに飛び乗り、ラースの頬を叩いた

ラース 「痛っ！何だよ、ベロニカ」

ベロニカ 「何で体がおかしい事を言わないのよ！私達本当に心配したんだからね！」

ラース 「俺だって気づかなかったんだよ。体調悪くなったのは急

だったからな。まさか取り憑かれてるとは思っていなかったんだ。悪かったな」

マルティナ「いいのよ、ベロニカ。無事で帰ってきてくれたんだから、それでいいのよ」

ラーズ「あれからどれぐらい経ったんだ？」

ロウ「二週間じゃのう。お主はその間ずっと眠っておった」

ラーズ「げー！そんなに経ってるのかよ。皆、本当に迷惑かけたな、すまなかった」

シルビア「でもよかったわ。アタシ、ラーズちゃんが死にかけてるって聞いて飛んできたんだから」

カミュ「俺も肝が冷えたぜ。まさか、お前が死にかけるとはな」

イレブン「皆してここ数日はお城にいたんだよ」

コンコン

デルカダール王「ラーズよ、入るぞ。体はどうだ？記憶の方もしっかりしているのだな？」

ラース「王様！大変ご心配おかけしました。体も記憶も大きな問題はございません。仕事の方が溜まっておられるでしょうから、私はこの後からでもすぐに動こうと思っております」

デルカダール王「いや、今はゆっくり休めるのだ。なんせ死にかけてのだからな。わしもあの場で、お主の腹に穴が空いているのを見て血の気が引いた。

死んでしまったのではないか、とな。本当に無事で何よりだ。仕事はお主には回しておらん。兵士達もずっと心配しておったぞ。声をかけてやるといい」

ラース「ありがとうございます、王様」

デルカダール王「それと、お主はわしに大事な話をしていないのではないか？」

ラース「と、言いますと？」

デルカダール王「マルティナと結婚を約束したのだろうか？いつ式を挙げるかなど、わしは聞いておらんぞ？」

マルティナ「お、お父様！そこまで詳しい事は決まっていななんです」

ラーズ「マルティナが言ったのか？この事」

マルティナ「ごめんなさい、あなたを看病してる時に言ってしまったの」

シルビア「やだ！ラーズちゃんったらいつの間になんか約束してたのよ！アタシ知らなかったわ」

ラーズ「ふむ、そうだな。マルティナ、いつにする？俺が元気になったら式を挙げるか？」

マルティナ「え！今決めるの!?……でも、そうね。私も早く決めたいから、ラーズが元気になったら式を挙げましょう」

イレブン「その時は僕達も呼んでね！絶対行くから！」

カミュ「何かお祝いの品取ってきてやるよ」

ラーズ「おお、勿論だ。皆でパーツとやろうぜ」

デルカダール王「ハッハッハ！それでは連絡を楽しみにしておる

ぞ」

ロウ「じゃが、まずは体の回復が何よりも最優先じゃ」

セーニヤ「そうですね、ラーズ様。早く元気になってくださいね」

その後、ラーズは兵士達に会い無事である事を伝えた

兵士達は喜び、中には泣いている者もいた

それから数日後、ラーズは完全に回復した

訓練場

ラーズ「よし！お前ら！今日から俺がまた教えるからな！よろしく頼むぜ！」

兵士達「はい！ラーズ将軍！」

ラーズ「まず、今日は遠距離の相手の立ち回りについて教えていくぞ」

訓練終了後

ラーズ「よし！今日の訓練はここまでだ。何か聞きたい事があるやつはいるか？」

バン「はい！ラーズ將軍とマルティナ様はいつから付き合っていたのですか？」

ラーズ「ちよつと待て！何で知っている！」

マーズ「え？もう有名ですよ？ラーズ將軍とマルティナ様がご結婚されるって城はその話題で持ちきりです」

ラーズ「マジかよ、いつの間に……。俺とマルティナは旅の途中で付き合う事になったんだ」

ダバン「どっちから告白したんですか？」

ラーズ「それは俺からしたな」

兵士達「ヒューヒュー！」

ラーズ「うるせえ！茶化すなお前ら！」

その後、マルティナの部屋

マルティナ「あ、ラーズ。結婚式場はどこにしようかしら？」

ラーズ「ウキウキだな。まあそりやそうか。あそこなんかどうだ？
導きの教会。いい雰囲気あるじゃないか」

マルティナ「一緒ね、私もそこにしようかと思ってたの。それなら
そこにしましょう。お父様がドレスとティアラを買ってくださいった
の。人は誰を呼ぼうかしら？」

ラーズ「城の人全員だろ？後はイレブン達、それに各国の王様達も
呼ばないとだな。うわ、すごい面子になるぞ」

マルティナ「私、とっても楽しみだわ！」

ラーズ「俺は緊張すんなー。俺もスーツ買いに行かないとだな」

コンコン

グレイグ「姫様、グレイグです。入りますよ。おや、ラーズもいた
のか。丁度よかった。二人とも王が呼びびです」

玉座の間

デルカダール王「おお、マルティナ、ラーズ。お主達の着るものが
届いた。これを着て結婚式を挙げてほしい」

デルカダール王はドレスとスーツを二人に渡した

マルティナ「お父様！ありがとうございます！」

ラース「え？王様、俺の分までいいのですか？しかもこんな立派なやつを」

デルカダール王「我が娘の夫が普通のスーツでは締まらんからな。気にするな。お主の事はわしも気に入っておるのだ。ぜひ受け取ってくれ」

ラース「ありがとうございます、王様。お言葉に甘えさせていただきます」

デルカダール王「場所は決まっておるのか？」

マルティナ「はい。導きの教会で挙げようかと考えています」

デルカダール王「わかった。手配しておこう。各国の王にも話をしておく。皆、祝ってくれるだろう」

ラース「王様、実は楽しみなんですか？」

デルカダール王「当然だ、ラースよ。我が愛する娘の人生一度の結婚式をこの目で見れるのじゃ。楽しみでもあり、嬉しくもある」

グレイグ「俺も楽しみにしているぞ、レース」

レース「どんどん緊張してくるぜ、全く」

124. 結婚式

結婚式当日

導きの教会は普段と姿は変わり、花やりボンなどで飾り付けられとても豪華な見た目になっていた。周りには各国の王や王女が集まり、皆ラース達の事を祝っていた

イレブン達もスーツやドレスなどを着て、ラースとマルティナの姿を料理を食べながら待っていた

マヤ「なあ兄貴、俺もう待ちくたびれたんだけど」

カミュ「もう少し待てよ。お！ラース！そのスーツ似合ってるぜ！」

シルビア「本当だわ！ラースちゃんカッコいいわよ！」

ラース「何だか苦しいな。ネクタイ緩めちやダメか？」

ラースは、白いスーツを着ていた。白のネクタイにオレンジの線が少し入っている

マヤ「わあ、兄ちゃんカッコいいじゃん。いしし、似合ってるよ」

ラース「そうか？ありがとな、マヤちゃん」

グレイグ「我慢してくれ。お前は今日のもう一人の主役だ。王様達の前であまり崩さないでくれ」

ロウ「ふおつふおつ、似合っておるぞ、ラースよ。わしもこんな風にしてた時が懐かしいのう」

ラース「何だか恥ずかしいな」

イレブン「マルティナ達はまだかな？見にいってみようよ。って丁度きたみたいだね」

マルティナ「どうかしら？変ではないと思うんだけど」

マルティナは白いウェディングドレスに白いベールを被っている。黒の長い髪がそのドレスととても合っている

ラース「……最高だ、マルティナ。綺麗だな、とても似合っている」

ラースは目を細めながら、ゆっくりと伝えた

ベロニカ「このドレスすごいわ。とっても綺麗。流石王様を選んだだけあるわ」

セーニヤ「花嫁姿は女性の憧れですわ。マルティナ様みたいに私も

美しくなれるでしょうか？」

シルビア「セーニヤちゃんなら大丈夫よ。マルティナちゃん、とっても似合ってるわ。そのヴェールも綺麗ね」

マヤ「姉ちゃんすつごく綺麗じゃん！」

マルティナ「ありがとう、皆。さあラース、行きましょう」

ラース「ああ、一緒にな」

その後、拍手の中マルティナとラースは教会の真ん中を歩いていった

神父「新郎ラース、あなたはここにいる新婦マルティナを健やかなる時も病める時も、富める時も貧しい時も、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

ラース「誓います」

神父「新婦マルティナ、あなたはここにいる新郎ラースを健やかなる時も病める時も、富める時も貧しい時も、夫として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

マルティナ「はい、誓います」

神父「それでは誓いのキスをお願いします」

ラーズ「マルティナ、俺はここでもう一度あの約束をしよう。

マルティナ、俺は君の隣で、いつまでも守り続けよう。君がいつまでも笑顔で、幸せでいられるように」

マルティナ「もちろんよ、ラーズ。私の隣には、あなたしかいないわ。私を幸せにしてください」

二人は抱き合い、キスをした

周りからは拍手が巻き起こる

神父「ここに新たな夫婦ができた事を祝福いたします。どうかこの二人に、いつまでも神の御加護がありますように」

その後、ラーズ達は王達や来た人達に祝われていた

イレブン「結婚……かあ。どんな感じなんだろう。僕はまだ想像もつかないなあ」

グレイグ「きつとイレブンにもこの人がいいと思えるような婦人と会えるはずだ」

カミュ「自分に言い聞かすような言い方だな、おっさん」

グレイグ「ぐ……。。カミュ、黙っている」

マヤ「二人ともずっと笑ってる。幸せそうだな」

ベロニカ「マヤちゃんもわざわざ来てくれてありがとう。カミュに連れて来られたの？」

マヤ「兄貴が結婚式に行くっていうから気になってさ。俺もどんな感じなのか見たくなってついてきた」

カミュ「失礼な態度取らないかこっちはヒヤヒヤだぜ」

マヤ「なんだよ！俺は別に大した事しねえよ！」

シルビア「まあまあ。ほらマヤちゃん、今日は特別な日だからね。いろんな食べ物があるわよ。いーっぱい食べましょう」

セーニヤ「マヤ様もお酒は飲まれますか？様々な種類がありましたわ」

「マヤ「本当!? 飲む飲む!」

カミュ「たくっ! ここはお子さまが来ていい場所じゃないんだがな。ラース達も断ってよかったのに。わざわざドレスまで貸してくれてよ」

マルティナ「ふふ、マヤちゃんに似合うドレスがあつてよかったわ」

イレブン「あ、マルティナ達もこっち来たんだ。もう挨拶はいいの?」

ラース「これで全員終わりだな。なあ、これ全部俺食べていいんだよな?」

ロウ「ほほ、そうじゃよ。お主を祝うためじゃからな。好きに食べるよ」

グレイグ「あまり汚すなよ。特別なスーツなんだからな」

ラース「やったぜ!!」

マルティナ「さっきまであんなにかっこよかったのに、急に子ども

もっほくなつちやつて」

カミュ「まあ、食い物にすぐ飛びつく辺りはまだまだガキだよな」

シルビア「いいじゃない。あんなに楽しそうなんだから」

その後、結婚式も終わりになり最後のイベント花嫁によるブーケトスが行われた。

マルティナ「それじゃあこのブーケを私が投げるので取った人が次の花嫁、花婿になります。皆さんいいですか？」

教会の二階からマルティナが下にいるたくさんの人達に訪ねる

ベロニカ「マルティナさーん、こっちは大丈夫よー」

マルティナ「では、えーい!!」

マルティナは後ろ向きにブーケを投げた

キャアアア!!

周りの女性達や男性がブーケ目掛けて追いかけていく

ポス

マヤ「え?」

ブーケは少し離れた所にいたマヤの頭の上に落ちた

マルティナ「あら！それでは次の花婿さんはマヤちゃんね！」

マヤ「えええ!!？」

ラース「ハハハ！よかったじゃないか、マヤちゃん」

マヤ「お、俺、別に恋とかわからねえよ！」

ラース「まあそういう言い伝えっただけだ。別に急いでやれっわけじゃないから安心しろよな」

こうして結婚式は無事に終わった

125. 未来への手がかり

オリジナル展開です。主人公の救済があつたつていいと思うんです。

結婚式から二週間後

イシの村 広場

イレブンは剣の練習の休憩をしていた。周りを見渡している

イレブン「この村も大分人が増えたな。新しい家や建物ができて、前とは別の村みたいだ」

エマ「イレブン！あなたにお客さんよ！なんか羽をたくさんつけた人なんだけど、知ってる？」

イレブン「あ！シルビアだ！うん、ありがとう、エマ。今行くね」

イシの村入り口

シルビア「あら、イレブンちゃん！近くに寄ったから顔を出してきたの！元気そうで何よりだわー！」

イレブン「うん、シルビアも元気そうだね。相変わらず世界を飛び回ってるみたいだね」

シルビア「そうよ！アタシの夢は世界中を笑顔にする事だもの！邪神ちゃんがいなくなつた今、皆、素敵な笑顔で笑ってくれるの！最高だわ！それとね、イレブンちゃんに大事な報告があるの」

イレブン「何？いい事？」

シルビア「とつてもいい事よ！」コソツ イレブンちゃんが未来に帰る方法を探し始めようと思ってるのよ」

イレブン「!?本当！いいの!?!」

シルビア「もちろんよく！アタシ、イレブンちゃんのためなら何だってするわ！だから、皆にこうやって声をかけてるの。」

ベロニカちゃんとセーニヤちゃんとロウちゃんにはもう声をかけてあつて、古代図書館で探してくれてるわ。

カミュちゃんはまだ見つけてないし、マルティナちゃん達にはこれから声をかけるけどここら辺は忙しいし、ずっと探し続けるのは難しいと思うの。だから、イレブンちゃんにも探すのを手伝ってもらおうと思つて」

イレブン「わかつた、ありがとう、シルビア。カミュなら多分、今はサマデーの近くにいるって手紙が一昨日来たから僕が行つてみるよ。見つけたら僕もデルカダール城に行つて、皆をルーラで連れていくよ」

シルビア「わかったわ、ありがとう。それじゃあアタシはデルカ
ダール城へ向かうわね。カミュちゃんが見つかったら来てちょうだ
いね」

その後、古代図書館

イレブン「そっか、ラースとマルティナは来れなかったのか」

グレイグ「ああ。姫様は勉強、ラースはデルカコスタ地方の神殿の
調査だ。俺だけ休みを王からもらったのはありがたいが、姫様が拗ね
ておられたな。ラースに宥めてもらおうとしよう」

カミュ「まあ、仕方ねえさ。忙しいのはわかってるからよ」

シルビア「マヤちゃんは寒くないかしら？少し暖かい毛布貸しま
しょうか？」

マヤ「俺だつてこの近くにずっと住んでたんだから寒いのは平気だ
ぜ！サマデーってのは暑かったんだよ。溶けるかと思ったぜ」

グレイグ「それなら俺にその毛布をくれないか？寒くて敵わん」

シルビア「もう！仕方ないわね！ほら！」

マヤ「おっさん、体大きいのに寒いのが苦手なのかよ。なんかダツ
セーぞ」

グレイグ「仕方なからう。お前達が暑いのが苦手なように、俺は寒いのが苦手なんだ」

イレブン「ベロニカ達はどこで探してるのかな？」

シルビア「多分最上階ね。行ってみましょう」

その後

ロウ「ほほ。皆来てくれたかの。おや？マヤちゃんじやの。カミュに付いて来てくれたのか。元気にしてたかのう」

マヤ「あ、じいちゃんだ！久しぶり！俺は元気だぜ！」

セーニヤ「ラース様とマルティナ様はいらっしゃらないのですか？」

グレイグ「すまない、二人とも忙しくてな。代わりには何だが、俺が来たというわけだ」

ベロニカ「仕方ないわ、忙しいのはこっちもわかっているもの。グレイグさんが来てくれただけでもありがたいわ。マヤちゃん、久しぶりね」

マヤ「へへ、ベロニカさんとセーニヤ姉ちゃんだ。久しぶり！」

シルビア「それで何か見つかったかしら？」

ロウ「いや、目ぼしい物は見つかっておらん。古代文字で書かれている本も多くてな。時間がかかりそうじゃ」

イレブン「その事なんだけど、僕、最近夢を見るんだよね。暗い何も無い場所に立ってるんだけど、どこかからラースが呼ぶ声がするの。もしかしたら何か関係があるかもしれない」

カミュ「ラースが？そんな事言ってたか？あいつ」

イレブン「多分だけどあの声は、僕の未来の世界のラースだと思う。もう少し詳しい事は、夢を見続けないとわからないけど」

マヤ「え？未来？勇者様、どういう事？」

カミュ「あー、マヤには俺が後で説明しておく。それと、ここに来た時はあの忘却の塔から来たんだろ？そっちにも行って、何かないか探してみようぜ」

セーニヤ「そうですね！そこにも何かヒントがあるかもしれないん」

ベロニカ「それなら人数を分けましょう。私達三人とグレイグさんはここに残って本を探すわ。カミュとマヤちゃんとシルビアさんとイレブンは忘却の塔に行つて、何かないか探して来てちょうだい」

全員「わかった」

空

マヤ「すっげー！俺、こんな景色見た事ねえ！勇者様つてやっぱりすげえ！」

カミュ「おい、マヤ。あまりはしやぎすぎで落ちるなよ」

マヤ「そんなくらいわかつてるよ、クソ兄貴！いいじゃん、楽しんだつてさー！」

イレブン「ふふ、こんな景色見られるのはマヤちゃんくらいなものだよ。この世界の特等席、楽しんでね」

シルビア「それにしても不思議な夢ね。その夢の中のラーズちゃんの声は、イレブンちゃんの名前を呼ぶだけなの？」

イレブン「うん。イレブン、こっちだ！こっちに來いって呼んでるんだ」

忘却の塔 時の祭壇

マヤ「ここで勇者様は俺達の世界に來てくれたのか。全く、勇者つて何なんだよ。こんな若い兄ちゃんにとんでもないことするじゃねえか」

カミュ「ん？イレブン、時のオーブの近くに變なのがないか？割れ目？なのか？」

イレブン「本当だ。何だろう、これ」

時の祭壇には小さな裂け目のようなものが空間にある

シルビア「近づいても何も無いわね…… あら？何だか声が聞こえるわ」

イレブン「どれどれ……。あ！本当だ！何か言ってる。でも、小さくてよくわからないや」

カミュ「勇者の力でどうにかなるものじゃないのか？」

イレブン「僕はもう勇者の力は渡しちゃったからね。多分そこまで大きな力は残ってないよ」

マヤ「この事、じいちゃん達に報告した方がいいんじゃないか？」

シルビア「そうね。これ以外特に目ぼしい物は無さそうだし、一旦戻りましょう」

古代図書館

ロウ「ふむ、空間に裂け目みたいな物ができて声が聞こえた……と」

セーニヤ「不思議ですわね。前はそんな物ありませんでしたわ」

ベロニカ「待つて！確かさっきの本に似た記述が……。グレイグさん、さっきの本棚から青い本とってくれないかしら？」

グレイグ「これの事でいいか？」

ベロニカ「ありがとう。待つてね……。あつたわ！これよ！この

世界には時折割れ目ができ、そこには自分と同じ姿が映るらしい。それを見た者は未来を知る事ができる」

マヤ「未来を知る？自分と同じ姿？でも、声しか聞こえなかったぜ？」

シルビア「もしかして、どんどん大きくなっていくのかしら？」

カミュ「そうすると俺らの未来の姿が映るのか？だけど、そんな鏡みたいな事が起こったからって、どうやって未来を知るんだよ」

イレブン「……もしかして、さ。そこに映るのは僕の世界の皆なのか？未来の自分達の姿が見られる、もしくは、違う世界の僕達が見れるのかもしれない」

グレイグ「なるほど。だから未来を知る事ができるという事か。だが、そんな夢のような事があるのか？」

イレブン「僕が時を超えたんだから、不思議ではないかもよ」

ベロニカ「あら？この本、途中で開かないページがあるのよね。最後の方が固くて開かないのよ」

グレイグ「どれ、貸してみてくれ。む？これは…… ふん！本当だ、開かないな」

グレイグが持っても全く動かない

イレブン「僕が開けてみるよ…… あれ？開いたよ？」

イレブンは何もなかったように開けられた

ロウ「どういう事じゃ？まあよい、何て書いてあるのかのう」

イレブン「えつとね、私を救ってくれた勇者のために、あなたを元の時に戻す方法をお教えます。これって……！」

セーニヤ「まさか、セニカ様の記述ですか！」

シルビア「ちよつと！イレブンちゃん、何て書いてあるのよ！」

イレブン「うん。あなただけ時の流れが周りと違いました。おそらく、私と同じ事をしたのでしょう。もしあなたが元の時に戻りたければ、世界のどこかに極めて稀にできる、時の裂け目を見つけるのです。その裂け目は未来と繋がっています。」

そこで、互いの世界からこの呪文を唱えると裂け目は扉となり、一時的に未来の世界へ帰る事ができます。ですが、帰ればもちろん、過去には二度と戻れなくなります。どうするかはあなた次第です。呪文は下に書いておきます。

このページは勇者の力を持つものしか見れないようにしておきます。あなたが私を救ってくれた事、大変感謝いたします。どうか、あなたにも救いがありますように。 セニカ」

126. 勇者、未来へ

ベロニカ「すごいわ。きっとセニカ様を救った事で、歴史が少し変わったんだわ。でも、互いの世界からって事は、この世界とあつちの世界で呪文を唱えないといけないのよね？そんなの無理じゃない？」

ロウ「確かに。わしらは未来に何か伝える事はできんからもう」

シルビア「最高の方法が見つかったと思っただけで、そう甘くはないわね」

イレブン「……僕なら。僕なら未来に伝えられるかもしれない」

マヤ「え？勇者様って未来に向かって話せるのか？」

イレブン「ううん。流石にそんな事はできないかな。でも、僕の夢の中でラーズの声に返事すると、返ってくるんだよね」

全員「!？」

イレブン「だから、そこで僕がこの呪文を伝えれば、もしかしたらラーズに伝わるかもしれない」

グレイグ「だが、あつちの世界のラーズは死んでしまっているのだろうか？あいつに伝えても、唱えるのは無理なのではないか？」

イレブン「そうだよね……でも、今はこれしか方法が無いよ」

セーニャ「もう少し探してみましよう。何か見つかるかもしれないまん」

カミュ「そうだな、こんな方法まで載ってたんだ。未来の誰かと話せる方法だって載ってるかもしれないねえ」

ロウ「それじゃあ皆で探してみるかの。古代文字があったらわしに貸してくれ」

その後、皆で探したが見つからなかった

ロウ「わし達はしばらくここで探そう。グレイグ達は戻ってもらって構わんぞ。また時間があつたら来てほしい」

セーニャ「そうですね。私達も何か見つけたら報告しに向かいます」

イレブン「うん、ありがとう。僕はまた明日来るよ」

カミュ「俺達も旅の道中情報を集めてみるぜ」

マヤ「町の人にも聞いてみてやるよ」

グレイグ「俺やゴリアテは時間が取れるかはわからん。だが、俺は城に基本いるから、報告はデルカダール城にきてほしい」

シルビア「アタシも各地で聞いてみるわね。何かわかったら知らせるわ」

六日後の夜、イレブンの夢

ラーズ「おーい、イレブン。大分近づいてきたな。お前が前に言ってた呪文はマルティナに伝えたぜ。凄く驚いてたぞ」

イレブン「え！本当?!ラーズ、ありがとう。今よく声が聞こえるよ！」

ラーズ「よかった、俺の声も聞こえてるみたいだな。よし！もう少しだ！こっちに来い、イレブン」

イレブン「うん、今行くよ！」

しばらくすると金色の光が見え、八人の人の影が見えた

そこでイレブンは目を覚ました

イレブン「ハッ!.....今の夢は.....それにあの姿、もしかして」

朝、デルカダール城 玉座の間

バタン!

イレブン「王様!マルティナとラースとグレイグをお借りしてもいいですか!?大事な話があって、大至急皆を集めてるんです!」

デルカダール王「お、おお。勇者の頼みなら仕方あるまい。今日は大事な仕事は無いのでな。連れて行って構わんぞ」

イレブン「ありがとうございます!王様!」

古代図書館

イレブン「皆!忘却の塔に行こう!今日の夢で、ラースがマルティナにあの呪文を伝えてくれたって言うてくれたの。それに、光が見えてきて、未来の皆の影も見えたんだ!」

ベロニカ「本当!?それなら急いで行きましょう!」

忘却の塔

カミュ「いきなり現れてビックリしたぜ。マヤにほとんど何も言わずに来ちやったじゃねえか」

イレブン「ごめんね、カミュ。焦ってたんだ、チャンスは少ないと思ってるよ」

シルビア「アタシもあんなに焦ってるイレブンちゃんは初めて見たわ。でもそれなら仕方ないわよね。さあ、割れ目があった場所に行ってみましょう」

時の祭壇

裂け目はあれから凄く大きくなっていった

セーニヤ「まあ！こんなに大きいのですね！」

カミュ「おいおい、急にでかくなりすぎだろ」

イレブン「中から声が聞こえるよ」

マルティナ「この声はリースじゃない！」

リース「俺、こんな声なのか？」

イレブン「リース！僕らの声聞こえる？」

未来ラース「おお！ やつと来たか、イレブン！ あつちはもうベロニカが準備して待ってるぜ。お前も早く準備して帰ってきてくれよ、皆、待ってるんだぜ」

裂け目からはラースの声が聞こえた

グレイグ「お前は本当に未来の死んでしまったラースなんだな!？」

未来ラース「その声はグレイグか。そうだ、俺は大樹から皆を守って死んだラースだ！ 俺がイレブンの橋渡し役になる！ さあ、開けてくれ」

ラース「本当に俺は死んだんだな。何か不思議な感じだな」

ベロニカ「それじゃあ私も準備できたわよ、ラース」

未来ラース「待ってろ、伝えてくる……よし、唱えてくれ」

ベロニカが呪文を唱える

すると裂け目は扉の形になり、開かれた

その向こう側には、未来の仲間達がいた

未来の皆「イレブン!!」

イレブン「皆!!よかった!僕、戻れるよ!」

未来ロウ「おお……。この日をどれだけ待ちわびたか」

未来マルティナ「ラース!!よかった……。生きてるのね」

ラース「マ、マルティナの髪が短くなってる。それに、俺の姿は本当に無いんだな」

未来セーニャ「ああ、ラース様。生きてる姿をまたこの目で見られるなんて……」

未来グレイグ「そちらの世界の俺よ。お前はちゃんと勇者の盾であつたのだろうか?」

グレイグ「もちろんだ。俺は最後まで勇者の盾だった。未来の俺もそうだったのだろうか?」

未来カミュ「どうだった、俺。未来から来た俺の相棒は頼りになつただろ?」

カミュ「ああ、別人かと思うくらい頼りになつたさ。ありがとな」

ベロニカ「ちよつと！あんだ達！イレブンに何て事させてるのよ！もつとしつかり考えなさいよね！！そうすればこの子はこんなに抱え込むことなかったのよ！」

未来ベロニカ「仕方ないじゃない！私達だつて行かせたくなんて無かったわよ！でも、イレブンが絶対に行くつて聞かないんだから、私達はそれを信じたのよ！」

セーニヤ「フフ、あつちのお姉様、少し大きくなつたみたいですよ」

マルティナ「ねえ、未来の私はどうして髪を短くしてしまったの？」

未来マルティナ「私はラーズが守ってくれたと知つたあの日、皆と共に絶対に魔王を倒してみせると、皆でラーズの墓の前で誓つたの。その時の私の決意を示したのよ。だから髪が短い。戦闘でも短い方が役に立つのよ？」

マルティナ「私も切ってみようかしら？」

未来ロウ「わしよ、こつちはユグノアも少しずつだが、村程度には復興してきた。そつちはどうじゃ？まだそこまで進んではおらぬか」

ロウ「おお！そこまで進んでおるのか。楽しみじゃのう。お主の世界のわしの孫はとて頼りになったわい。やはりどこであつてもイレブンはわしの自慢の孫じゃのう」

未来マルティナ「ねえ、ラース。そっちの私とは、今でも一緒にいてくれる?」

ラース「もちろんだ。俺がああの約束を生きてるのに破るわけがないからな。この間結婚したんだぜ。そっちのマルティナは俺がいなくて平気か?」

未来マルティナ「あら！私もね、ラースからこの指輪を貰ってるのよ。私はこれのおかげで寂しくないわ。これから私はデルカダールの王女として国を支えていくの。そっちもいつまでも仲良くいてね」

未来シルビア「そっちのアタシ！ちゃんとイレブンちゃんの笑顔も守ったんでしょね!」

シルビア「あつたりまえじゃなくい。イレブンちゃんはこの世界で最も守らなきやいけない笑顔の一つよ。世界中を笑顔にさせるまでアタシ今頑張ってるわ!」

未来シルビア「そうよね。アタシの方も色んな人達が心の底から笑ってくれるようになったわ！アタシも頑張るわよ!」

イレブン「皆、そろそろ行くよ。僕はあつちに帰るけど、僕の中にいる本来の僕がここに残るはず。だから安心して。それじゃあまたね」

そう言い、イレブンは扉を渡っていく

未来ラース「きたな、イレブン。俺が引っ張るから、お前はそのままでいろよ?。」

ラース「未来の俺!死んでもお前は、ちゃんとマルティナの事守っているんだろ?。」

未来ラース「愚問だぞ!俺!いつだつて近くにいるやつてるさ。マルティナも最近わかってきてるんだからな、俺が近くにいるのを」

ラース「それでこそ俺だな。絶対に幸せにしてやるんだぞ!」

未来ラース「任せておけ!」

全員「イレブン!ありがとう!」

イレブン「皆!どっちの皆も大好きだよ!僕の方こそ、たくさん助けてもらえて力になってもらえて嬉しかった!さようなら!」

未来の皆「それじゃあな!!」

そう言い、扉は閉められた

扉は無くなり、その場所にはイレブンが立っていた

イレブン「あ……。僕は帰ったんだね」

カミュ「ああ、おかえり、イレブン」

イレブン「ふふ、知ってた？途中で僕とあっちの僕で入れ替えっこしてたんだよ？」

ベロニカ「え！そんな事してたの！全然気づかなかったわよ！」

イレブン「だろうね、僕達も面白くなってたくさんやってたもの」

リース「まったく、うちの勇者様はイタズラ好きで困るぜ」

イレブン「リース、マルティナ、結婚おめでどう。僕の口からはまだ言えてなかったからさ。とっってもお似合いだと思おうよ」

リース「おう、ありがとな、イレブン」

マルティナ「嬉しいわ、イレブン。ありがとう」

イレブン「それじゃあ帰ろうか。ごめんね？急に呼び出して」

シルビア「いいのよ！気にしないで。それに未来のアタシ達と喋れて楽しかったわ！」

ロウ「やはり長生きはするものじやのう。未来の自分まで知れてしまうとは」

ラース「そうだよな、グレイグ、未来のお前、何だか髪が少なくなっ
てなかったか？」

グレイグ「な!?!何を言う！ラース！そんな事…… 無い!!」

全員「ハハハハ！」

その後、皆はまたいつもの生活に戻っていった

127. 変わりゆく未来

イレブンが未来に帰ってから三ヶ月後、城にはカミュとマヤが来ていた

訓練場

カミュとマヤは二階からレースを見ていた

ギバ「ハア！」

レース「そう、槍は普通は突きの攻撃をしがちだが、何もそれだけじゃない。そうやって横になぎ払う攻撃もできる」

ギバ「なるほど、突きと組み合わせていくといいんですね。ありがとうございます、レース將軍」

レース「気にするな、ギバこそ残って練習とは精が出るじゃないか。その努力がいつか報われるぞ」

カミュ「お、やってんなあ、レースのやつ」

マヤ「あ、あの人前に会った事あるよな？へー、ここで兵士達を鍛えてたんだな」

カミュ「ここで兵士達を鍛え始めたのは、俺達との旅を終えてからだぞ。まあ、俺からすりやおかしな話だけどな。おーい！ラーズ！」

ラーズ「ん？おお！カミュ！それに隣にいるのは妹のマヤちゃんか！久しぶりだな！今そつちに行く」

ラーズはカミュ達の元まで来た

マヤ「兄ちゃんここで兵士達鍛えてるんだ。兄貴より強そうだな。それに、結婚式の時も綺麗な姉ちゃんと結婚してたよな」

ラーズ「マヤちゃん、元気そうだな。でも旅の時は、俺より君の兄貴の方が頼りにされてたんだぜ？」

マヤ「えく!?このクソ兄貴のどこが頼りになるんだよ！」

カミュ「おい、マヤ、騙されるなよ？旅の時に、俺はこいつに蘇生呪文が必要になるほどポッコポコにされたんだからな」

マヤ「うわ、兄貴ダツサ。でもやっぱ兄ちゃんの方が強いんだな」

ラーズ「まだ覚えてんのかよ。まあ、折角来てくれたんだ。マルティナの部屋で近況報告でもしようぜ。お菓子もだすぞ」

マルティナの部屋

コンコン

ラース「マルティナ？いるか？カミュ達兄妹が来てくれたぞ」

ガチャ

マルティナ「あら！カミュ！それにマヤちゃんじゃない。久しぶりね」

マルティナは部屋に三人を招き入れた

カミュ「よお、マルティナも元気そうだな」

マヤ「あ、結婚式の時の姉ちゃんだ」

マルティナ「ふふ、こうして話すのは初めましてね。私はマルティナって言うの。よろしくね、マヤちゃん」

マヤ「兄貴から聞いてるぜ。姉ちゃんはこのお城のお姫様なんだろう？いいなー、俺もお城に住んで大金持ちになりてえ」

カミュ「マヤ。あまりそういう事をここで言うな」

ラース「ハハ、いいじゃないか。それに、お金持ちは憧れるもんな」

マルティナ「私は全然気にしないわよ。それに、マヤちゃんもかわいいわ」

マヤ「どっかのクソ兄貴より二人とも優しい。それに、俺かわいいって。やった、クソ兄貴は言ってくれねえんだよ」

カミュ「お前が？かわいい？マルティナ、お世辞はよしてくれよ。正直に言っ方がいいんだぜ？こんな教育もなっていないようなやつ、可愛げなんかないぞ？」

マヤ「ハア！何言ってるんだよ、クソ兄貴！そう言う事ばかり言うから彼女の一人もできねえんだろ！この二人を少しは見習えよ！」

ラース「仲がよさそうで何よりだな。それに、カミュ？お前はこういう生活を望んでたんじゃないのか？」

カミュ「何言ってるんだよ、ラース。俺はいつも各地でマヤが起す騒ぎで疲れてばかりだぜ。まだ皆との旅の方が楽だった気もするぜ」

マルティナ「うふふ、でもカミュ、今とっても幸せそうな顔をしてるわよ。兄妹水入らずの旅なんて羨ましいわ。私もまた旅をしたいわ」

その後、近況報告をしていた

カミュ「え!? 赤ちゃんが出来たのかよ!」

マヤ「え!! 姉ちゃん、すげえ!」

マルティナ「そうなの。今朝お父様に報告したら大騒ぎだったのよ。グレイグは嬉し泣きをするし」

ラース「王なんかもう気を急かして、赤ちゃん用のベッドを買おうとしてよ。何ヶ月も先の話だったのに早すぎるんだよ、全く」

マヤ「なあなあ、俺、お腹触ってみたい! いい? 姉ちゃん」

カミュ「おい、マヤ。まだ触ったって動いたりはしないんだから、何もわからないぞ?」

マルティナ「そうね、カミュの言う通りよ。ごめんなさいね、マヤちゃん。でも、今度来たらその頃には大きくなってると思うから、その時は触っても大丈夫よ」

マヤ「何だ、そっか。じゃあまた今度来る! 約束!」

マルティナ「ええ、約束よ」

コンコン

グレイグ「姫様、グレイグです。入りますよ。おや、カミュ達兄妹じゃないか。来ていたのか。久しぶりだな」

カミュ「おお、おっさん！相変わらず元気そうだな」

マヤ「あれ？この前のおっさんだ。久しぶりじゃん」

グレイグ「マヤちゃん、久しぶりだな。元気そうで何よりだ」

マヤ「そういえば、おっさんも勇者様と一緒に旅してたんだな。いつの間にか兄貴にはすげえ知り合いばかりで、そこは兄貴のすげえ所だと思ってるぜ」

マルティナ「それでグレイグ、私に何か用事かしら？」

グレイグ「ああ、姫様、大した事ではないのですが、王が赤子用のオムツはどうするのかと話されておりました」

カミュ「おいおい、王様本当に急ぎすぎだろ。まだお腹だつて大きくなつてねえのによ」

マルティナ「まったく本当よ、お父様だったら。グレイグ、私から後でちゃんと言っておくわ。ごめんなさいね」

ラーズ「あ、グレイグ。バンとマーズに、もう少ししたら城下町の方に見回りに行くと伝えておいてくれないか？」

グレイグ「うむ、了解した。それじゃあな、カミュ、マヤちゃん。ゆっくりしていつてくれ」

カミュ「それなら俺達もその見回りに合わせて町に戻るぜ」

マヤ「え、もう戻るのかよ、兄貴。もっとゆっくりしていこうぜ」

マルティナ「そうよ、もっと話していきましよう」

カミュ「ハア。俺はこの城にいい思い出がなくてな、あまり近付きたくないんだがな」

ラーズ「それは前の事じゃないか。今は気にするなよな」

マヤ「そうだぞ、クソ兄貴！過去の事をいつまでもウジウジ言つて

るとだらしないぞ」

カミュ「へいへい。それじゃあもう少しいますよ」

マヤ「やった！あんな、姉ちゃん。俺、この前ダーハルーネって町に行った時にな」

ラーズ「それじゃ俺は見回りに行ってくる。ゆっくりしてろよ。まあ、終わったらまた戻ってくるさ」

城門前

マーズ「あ、ラーズ將軍！俺らは準備終わりましたよ」

ラーズ「ああ、それじゃあ行こうか」

二時間後

ラーズ「それじゃあ見回りは終わりだな。明日の当番はギバとロベルトだったな。伝えておいてくれ」

マーズ「はっ！」

バン「あの、ラーズ將軍、俺少し相談したい事があるので、今夜部屋を伺ってもいいですか？」

ラーズ「おう、わかった。それじゃあ夜は部屋で待ってるぞ」

夕食時

マルティナ「もう！お父様！気を早くしすぎです。まだまだ先の話なんですよ！」

デルカダール王「むう、すまない、マルティナ。少し浮かれてしまっ
てな」

マヤ「でも嬉しいんだもんな、王様も。孫の顔が早く見たいんだろ
？」

デルカダール王「おお、わかってくれるか、マヤ殿よ。そうなのだ、
マルティナ。わしは楽しみでもあり、嬉しくもあるのだ」

マルティナ「それにしたって順序というものがあります。報告は
しつかりするので待っていてください」

ラーズ「マヤちゃん、こつちに残っていいのか？カミュが心配する
ぞ？」

マヤ「兄貴にはしつかり言ったし、しぶしぶだったけど了承は得た

からな。俺、お城の部屋に泊まれるなんて初めてでワクワクしてるんだ」

グレイグ「それなら存分に楽しんでいってくれ。何かあつたら言つてくれて構わないからな」

マヤ「へへ、おっさん、ありがとな。ここのご飯もめちやくちや美味いし、もう最高！」

グレイグ「そうだ、ラーズよ。王と話していたのだが、この先姫様が王位を継いで王女となった時、ラーズには姫様の専属の騎士として働いてもらおうと考えているのだ」

ラーズ「ぶっ！ハア!?俺が騎士だって!!無理、無理!今だって似合わねえ事してるのに、その上騎士なんて!俺、何もわからねえぞ」

グレイグ「そこは俺が教えよう。だが、そうすればお前は今よりもずっと、姫様の側にいられるのだぞ」

デルカダール王「そうだ、ラーズよ。わしにグレイグがついているように、王女となるマルティナにも常に守る者が必要なんじゃ。」

そして、それは夫であるお主がふさわしい。強さも問題あるまい。言葉使いは公の場でさえ気をつけてくれれば、今のままで構わん。どうだ?」

マルティナ「私もその方がありがたいわ。騎士として、なんてのは無くていいけど、私も信頼できる人が隣にいた方が安心できるもの」

マヤ「俺も兄ちゃんなら姫様を守るのにピッタリだと思うぜ」

ラース「……………少し、考える時間をください」

デルカダール王「もちろんだ。返事はすぐでなくともよい。ゆつくり考えてくれ。だが、わし達はお主が騎士になる事を応援するという事は忘れないでほしい」

128. 強くなるために

夜、ラースの部屋

ラース「……………。どうしたもんかな」

コンコン

バン「ラース將軍、いらっしやいますか？バンです」

ラース「おう、入ってこい」

ガチャ

バン「失礼します」

ラース「それで、俺に相談ってどうしたんだ？」

バン「実は、俺付き合ってる女性の方がいるんです」

ラース「なるほど、そういう相談か。まあ、座れよ」

バン「はい。それで前に休みをいただいた時に、ソルティアナ海岸

にデートに誘ったんです。その時、彼女が魔物に襲われまして。

俺は何とか倒したんですが、彼女は大怪我をしまして……。俺が……。弱いせいで、彼女を傷つけてしまったんです」

ラーズ「その彼女さんはどうしてる？」

バン「今、治療していてまだ目を覚まさないんです」

ラーズ「そうか……。それは、つらいな」

バン「俺、ラーズ將軍にたくさん教わって、グレイグ將軍にも褒められて、調子にのってたんだと思います。でも、いざ一人で戦ってみたら、自分の事で手一杯で……。大事な人一人すら、守れなかったんです。俺……。自分が情けなくて……。弱くて……」

バンは下を向き、震えながら話している

ラース「……俺もな、魔物に村を滅ぼされ、村の皆も殺された時、そんな気持ちだった。俺のどこが強いんだ、この有様で何が村一番の戦士だってな。そうやって、絶望の中に飲み込まれていきそうだったんだ。」

でもな、俺はその時に、イレブンとマルティナがきてくれた。二人は特に何をしたわけじゃないんだが、俺が話す事をずっと聞いてくれた。そうする事で一人で黙って考えてるよりも、自分の心が何を求めているかが見えてきたんだ。

だからな、バン。お前は今、絶望に落ちようとしている。その悲しみのあまり、立ち直れなくなりそうになっている。絶望は、絶対にいけない事だ。人の歩みや成長を止まらせるからな。

だからそうならないために、俺でもいい、他の仲間達だっていい。言いたい事を言え。必ず受け止める。馬鹿になんて絶対にしない。いろいろ吐き出してみろ。お前は、何がしたい？自分は、どうなりたい？」

バン「……俺、昔から人によく笑われてて、だらしないやつだとか、適当すぎるって馬鹿にされてて、それが気に食わなくて、見返してやろうと思って兵士になるって決めたんです。」

親には反対されたんですけど、俺が押し通して、ここにいるんです。ここでたくさんの強さとか戦いとか、心構えとかを教わりました。俺は昔より強くなったとは思いません。

でも！俺は！！もつともつと、強くならなくちゃいけないんです！大事なあいつだけは、守れるような男になりたいんです！」

ラーズ「それがお前の心の声か？」

バン「はい！これが、俺の今なりたい自分です！俺は、もつともつと強くなりたいんです！もう、あいつが痛い思いなんてしないように、俺が守ってみせるんです！ラーズ将軍！俺を鍛え直してください！！お願いします！」

バンははつきりとラーズを見つめ、頭を下げた

ラーズ「わかった。お前のその決意、絶対に無駄にはしないからな。そうと決まれば、明日からバンには特別メニューだ。だが、普段より量も多くなるし、厳しくもなるぞ。つらいことも多くなる。逃げずに

ついてくれるか？」

バン「はい！絶対についていきます！逃げませんよ！」

ラース「ハハ、愚問だったようだな。いい決意だ。男は信念を決めた時、本当の強さに近づく。バン、お前はこれからどんどん強くなる。楽しみにしてろよ？」

バン「ありがとうございます！ラース將軍！いえ、師匠！」

ラース「おいおい、急に呼び名変わったな。まあ、構わねえけどな。元気も出たみたいだし、これで平気か？」

バン「はい。相談に乗っていただき、ありがとうございます。それでは失礼します」

ラース「おう、ゆっくり休めよ」

次の日、訓練場

ラース「今日からバンだけ特別メニューのため、お前達には参加しないが、あいつも頑張っているんだ。お前達も負けずに頑張っていけよ」

兵士達「はい！」

バン「師匠！朝の筋トレ、素振り、模擬戦は終わりました！」

ラース「おう、そしたら次はこれをつけろ」

そういい、ラースは重りをバンと自分の両足と両腕につけた

ラース「その状態で、俺と体術で戦ってもらおう。体術はお前もそれなりにできる分野だからな。まずはそこを伸ばしていくぞ。体術ができれば、武器がなくとも戦える。行くぞ！」

数分後

バン「ゼエ、ハア、ハア」

ラース「どうした！その程度か！もっとこい！」

バン「はい！」

その特訓は普通の訓練の時間だけでなく、夕方と夜も続いた

バンは諦める事なく、ラースについていった

それから半年後、マルティナのお腹はかなり大きくなっていた

中庭

そこではバンとラースが組み手をしていた

バン「ハア！トウ！」

ラース「よし！いい動きだぞ！かわし方や力の込め方も上手くなつたな！」

バン「はい！ありがとうございます！」

ガチャ

マルティナ「あ！ラース、やつぱりここにいたのね。バンも頑張ってるじゃない。今の蹴りとっても綺麗だったわよ」

ラース「あ！マルティナ！またグレイグから抜け出してきたな！」

マルティナ「私も体動かしたいのよ。ねえ、いいでしょ？グレイグだったら何言っても聞かないのよ。お願い！少しだけ！ね！」

バン「姫様、そのお体であまり動かせない方がいいと思いますよ」

ラース「全く……。少しだけだからな。俺が止めろと言ったら止めるんだぞ？絶対だからな」

マルティナ「やったわ！ありがとう、ラース。少しだけでも構わないわ」

その後、少しラースと組手をした

ラース「何だよ、全然鈍ってないじゃないか。さては、部屋でもやってたな？」

マルティナ「あら、わかっちゃった？だってグレイグがあまりにも何もさせてくれないんだもの」

バン「姫様、すごい。俺と全然動きが違う。隙が少ないな。あれが洗練された動きってやつか」

ラース「!?マルティナ、止めるんだ。これくらいでいいだろ？」

マルティナ「あら、やっぱり終わっちゃうのは早いよね」

ラース「何やら怒っている気配がこっちに来ているからな。まあ、誰とは言わずもがなだけど」

バン「あ」

バタン！

グレイグ「姫様!!やはりここにおられましたね!あれほど動き回らないように言ったのに!ラーズ、貴様!姫様のお腹が見えないのか!お前も夫なら、むやみに動くなと姫様を止めろ!」

マルティナ「もう!大声出さないでよ、グレイグ。中の赤ちゃんが驚いちゃうじゃない」

ラーズ「グレイグ、マルティナに何もさせないなんてかわいいそうだと。それだとストレスになるぞ。ストレスはよくないんだぞ?」

グレイグ「ぐっ……。ですが、姫様……」

マルティナ「ラーズが少し体を動かさせてくれたから、スッキリしたわ」

ラーズ「まあ、グレイグの言う事はわかるからな。それじゃあ、よいしょと」

ラーズはマルティナを抱き上げる

マルティナ「キャツ!ちよつと、ラーズ。私自分で歩けるわよ!」

ラーズ「はいはい、姫様は自分の体を大事にして、俺につかまって

てくださいね」

ラーズはマルティナを持って出ていった

バン「ハ、ハハ……（ラブラブだなあ）」

グレイグ「はあ、まったく。姫様もだが、ラーズにも困ったものだ。バン、すまなかつたな。ラーズと特訓をしていたのだろう。俺が見ていた頃より、体も戦い方も大分見違えたな。俺でよかったら少し相手になろうか」

バン「え!?!いいんですか、グレイグ將軍!ぜひ、お願いします!」

グレイグ「ああ、それじゃあかかってこい!」

マルティナの部屋

ラーズ「はい、お姫様はここで休んでいてくださいね」

マルティナ「もう!ラーズ!いろんな人に見られたじゃない!恥ずかしかったわよ」

ラーズ「お転婆なお姫様には、これくらいの罰がちょうどいいんですよ。ほら、楽にしとけ」

マルティナ「もう！…… あ、そう言えば一昨日くらいにカミュから手紙が来て、マヤちゃんがまた行きたいってうるさいから、近々来るそうよ？ベロニカ達も一緒に来るみたい」

ラーズ「おお！また数ヶ月ぶりになるな。マヤちゃんがこのお腹みたら驚くだろうな」

マルティナ「そうね…… ねえ、ラーズ。私、この子が男の子ならマルスって名前にするわ。私とラーズの名前をとったの」

ラーズ「ハハ、いいな、気に入った。それなら、女の子だったらルナだな。マルティナの名前からもらおう」

マルティナ「あら、嬉しいわ…… すつごく楽しみ。早く産まれておいで」

ラーズ「俺も楽しみだ。家族が増えるんだもんな。そういえば、最近よく動くんじゃないか？」

マルティナ「そうね、たまに蹴ってるのかしらね。この様子だと男の子かしらね」

数日後、マルティナの部屋

ベロニカ「マルティナさん！会いにきたわよ！」

セーニヤ「まあ!とつても大きくなってますわ!」

マヤ「うわー!姉ちゃん、動きづらくないの?大丈夫?」

マルティナ「フフ、いらつしやい、待つてたわよ。私はそこまでつらくはないわね。疲れやすくなっただと思うけど。マヤちゃん、約束通り触っていいわよ」

マヤ「本当?!いしし!覚えててくれたんだな。それじゃあ……お。妊婦さんのお腹ってこんな感じなんだな」

カミュ「おい、マヤ。あまり激しく触るなよ?」

マヤ「それくらい俺でもわかってるよ!あ!今動いた!俺の手が蹴られた!」

ベロニカ「あら!元気なのね、その子。レースに似るんじゃない?」

セーニヤ「でも、ここまで大きいと双子かもしれないね」

カミュ「そうなのか?俺は初めて妊婦を見たからわからねえが、そ

んなに大きいのか？」

マルティナ「ええ、お父様もおそらく双子の可能性が高いって言うてたわ」

マヤ「なあなあ、姉ちゃん。名前は決めたのか？」

マルティナ「ええ、少し前に決めたのよ。男の子ならマルス。女の子ならルナにしようってね」

セーニヤ「素敵ですわ、マルティナ様。お母様の姿になられても優しいお母様になりそうですわ」

ベロニカ「ラーズなんて親バカになるんじゃないかしら？」

カミュ「ハハ、ありえそうだな」

マヤ「子どもはこうやって産まれてくるんだな……きっと、俺達も……産まれた時はこうやって、お腹の中にいたんだよな……」

カミュ「マヤ……」

マルティナ「大丈夫よ、マヤちゃん。その後がどうだって、あなたが産まれた時は、こうやって誰かに望まれて産まれてきたはずだわ。そうじゃなきゃ、マヤちゃんはこの世界に生まれてこないんだから」

マヤ「そっか……。そうだよな。いしし」

129. 新たな命

カミュ達が出来てから一ヶ月後

マルティナ「う……」ドサ

マルティナはお腹を押さえて倒れた

グレイグ「姫様!? どうされましたか!!」

メイド「もしかして! 今、医師の方をお呼びします! グレイグ様は姫様を安静にさせといてください!」

その後、医療部屋

医師「これは、そろそろ産まれるね。皆に知らせなさい。でも、この部屋に多くの人は入ってはいけないよ。私とラーズ様だけに、外で待っていてください」

グレイグ「わかりました。後は頼みます」

バンツ!

ラーズ「マルティナ! 大丈夫か!!」

医師「ラーズ様、お静かにお願いします。今からマルティナ様の出産を始めます。ラーズ様はどうかマルティナ様を支えてやってください」

ラーズ「そ、そうか。ついに産まれるのか」

マルティナ「ラーズ、私頑張るわね。手を握っていてくれる？」

ラーズ「ああ、もちろんだ。頑張つて耐えるんだぞ、マルティナ」

数時間後、部屋の外では全員集まっていた

デルカダール王「マルティナ、大丈夫であろうか」

デルカダール王は部屋の前でウロウロしていた

イレブン「王様、落ち着いてください。マルティナなら絶対大丈夫ですよ」

マヤ「そうだけ、王様。あの姉ちゃんなら絶対に産んでくれるぜ」

マルティナ「うううううう！」

マルティナの声が聞こえた

グレイグ「ひ、姫様!!くっ……」

ベロニカ「これは……緊張するわね」

セーニヤ「お願いします、どうか大樹の御加護を」

シルビア「マルティナちゃん、頑張つて！」

カミュ「マルティナなら大丈夫に決まってる！」

ロウ「姫よ、ここが正念場じゃぞ。耐えるのじゃ」

全員が祈っている

ガチャ

全員「!？」

医師「皆様、ご心配おかけしました。無事に産まれました。元気な双子の兄妹です」

全員「やったー！」

全員急いで部屋の中に入っていく

デルカダール王「マルティナ、ラース、よく頑張った。わしにも赤子を見せてくれ」

マルティナ「お父様、この子達が私達の子ども達です」

マルティナの腕の中には小さな赤ん坊が二人眠っていた

赤ん坊「おぎやあ、おぎやあ」

ラース「へへ、よく頑張ったな、マルティナ。君のおかげだ。ありがとう」

デルカダール王「よくぞ……頑張ってくれた……」

グレイグ「王よ、ぐすつ、皆もいるのです。涙は……見せない方が」

シルビア「やーね、誰も気にしないわよ。実の娘が頑張って産んだもの。親なら泣きたくなるわ。グレイグも泣いていいのよ」

ロウ「新たな命が産まれる瞬間は、やはりいいものじやのう」

マヤ「これが……赤ちゃん。すごい小さい……」

ベロニカ「マヤちゃんもこれくらいだった時があるのよ。もちろん、私達全員ね」

カミュ「マルティナ達なら絶対大丈夫だって信じてたぜ」

セーニヤ「新たな命の大樹の双葉に、祝福をお祈りします」

イレブン「マルティナ、僕持ってみてもいい？」

マルティナ「ええ、お父様もぜひ」

そう言い、ラースがイレブンに男の子を、デルカダール王には女の子を抱かせた

イレブン「かわいいな。こんなに小さいのに、僕の手握って離さないや」

デルカダール王「マルティナの産まれた時を思い出すのう。あの時もこんなに小さい女の子だった」

マヤ「勇者様、俺も触りたい！」

ラース「マヤちゃんも触れてやってくれよ」

カミュ「マヤ、そーつとだぞ」

マヤ「う、うん。…… はは。笑ってる。かわいい」

ペロニカ「この子はマルティナさんと同じ黒い髪ね」

シルビア「こっちの女の子はラースちゃんと同じ茶色よ」

グレイグ「二人の血が入っているんですね。賢く、強く、優しい子に育つでしょう」

その後、無事に出産できた事はアルカダール王国に知れ渡った。王国はお祭り騒ぎになり、至る所で双子の事を祝っていた

その夜、マルティナの部屋

マルティナ「これからはまたドタバタするわね。皆に頼る事も多くなるわ」

ラース「そうだな。俺もこれからはマルティナの部屋で過ごす事にするぜ。でも、俺らが頼る前に王様とかグレイグが何とかしそくだよな」

マルティナ「フフ、きつとそうだわ。また色々たくさん買ってきそうね。私達が買った物なんて少ないんじゃないかしら？」

ラーズ「今日あれからイレブン達がおもちゃを早速買ってきたぞ。イレブン達も全員しばらくは近くににいるらしいぞ」

マルティナ「私、とっても幸せだわ。皆に支えられて、子どもも産めて、こうしてラーズと隣にいられる」

ラーズ「マルティナ、俺、決めたよ」

マルティナ「どうしたの？」

ラーズ「俺はマルティナの騎士となろう」

マルティナ「え!?! 本当に!?! 決意してくれたのね」

ラーズ「ああ、俺が守るべき物は一つじゃなくなった。それを守るためなら俺は騎士になって君を守り続けよう」

マルティナ「よかったわ、私を守る人がラーズで。正直言ってそれ以外だったら私が勝負を申し込んで、それに勝ったらって事にしようと思ってたわ」

ラーズ「ハハ、マルティナらしいな。でも、もしそうになったら俺が多分そいつをぶっ飛ばして、その座を奪い取る気がするから、結局は

変わらなかったかもな」

マルティナ「ウフフ、それもラースらしいわね。結局は、私達隣にいるのが一番いいのね」

赤ん坊「おぎやあ、おぎやあ！」

ラース「あ、夜泣きが始まった。ほれほれ、大丈夫だぞ」

マルティナ「あらあら、これから大変だけど、頑張っていきましょう」

ラース「マルティナ、これからもずっと愛してるぜ」

マルティナ「私もよ。ラース、愛してるわ」

130. これから

次の日、朝食時

デルカダール王「おお、マルティナ、ラーズ、おはよう。昨晚は眠れなかったか？」

マルティナ「そうですね。あれから夜泣きで何度も起こされてしまってます」

ラーズ「マルティナが俺は寝てていいって言ってくれたんですが、流石にそんな訳にもいかずに結局二人で寝不足です」

デルカダール王「マルティナも一人で二人をあやすのは大変じゃ、ラーズも出来る限り支えてやってくれ。わしも出来る限りサポートしよう」

ラーズ「王様、俺、昨日決めました。俺はマルティナの騎士となります」

グレイグ「おお！ついに決めてくれたか！ありがとう、ラーズ。おかげで姫様の騎士相手探しをしなくてすんだ」

ラーズ「げ!?そんな事してたのかよ！それなら言ってくれよ、多分こんなに悩まなかったぜ？」

デルカダール王「ハツハツハ！それはすまなかつたのう。だが、お主ならきつとやってくれと信じておったぞ」

マルティナ「でも、お父様はまだ王を退く気はないわ。私もまだまだ勉強しないとだし、ラーズもまだ先の事よ」

ラーズ「まあ、そうだけだよ。これは国の大事な事だから、あまり先延ばしにしてもいい事じゃないだろ」

グレイグ「そうだな。その理解もしてくれているのは流石だな。それと、今日から大変だろう。ラーズはこれからしばらく先は兵士長を休んでいいぞ」

ラーズ「え!?大丈夫だぜ?それは仕事なんだからちゃんとやるさ」

デルカダール王「だが、ラーズがいない時にマルティナだけでは対処しきれない事も多くなるだろう。お主はマルティナと一緒に子ども達を支えるのじゃ」

グレイグ「そういう事だ。その間、兵士達には俺がまた教える。お前は休んでいてくれ」

マルティナ「お言葉に甘えましょう、ラーズ。これは譲る気は二人とも無さそうよ」

ラーズ「わかった、ありがとう、グレイグ。ありがとうございますごいませ、王様」

その後、マルティナとラーズの部屋

ラーズ「と、言われたけどどうしよう。落ち着かねえな」

マルティナ「まあ、急にお仕事取られちゃうとそうなるわよね」

ラーズ「まあとりあえず、おもちゃやおむつをいつでも使えるようにしておかないとだな。袋から開けておこうぜ」

その後

マルティナ「これで大丈夫。後はこの子達に朝ご飯ね。まだ寝てるわね」

コンコン

マヤ「お姫様、いるー?」

マルティナ「あ、マヤちゃん、どうぞ」

ガチャ

マヤ「へへ、来ちゃった。どう？新しい生活は？」

マルティナ「これから大変になりそうだわ。夜泣きだけで大変だったのよ」

マヤ「夜泣きってなんだ？」

ラース「赤ちゃんは夜になると、不安で不定期で泣き始めるんだ。俺達はそれを昨晚あやすのに何度も起こされてな。あまり眠れなかったんだ」

マヤ「えー、大変なんだな。なあなあ、俺にも何か出来ることない？」

マルティナ「それならちようどよかったわ。今から朝ご飯をあげようと思っただの。マヤちゃんも手伝ってくれる？」

マヤ「おう！俺もやる！」

ラース「カミュはどうしたんだ？」

マヤ「兄貴なら宿でゆっくりしてるよ。城に行くって言ってきたか

ら大丈夫だぜ」

マルティナ「あら、一人で来たのね。よく迷わなかったわね」

マヤ「まあね！何回も来てるし、覚えちゃった！」

ラース「そういや今日はいい天気だな。どうせなら、バルコニーで食べさせないか？」

マルティナ「それもそうね。外の空気を吸わせてあげましょう」

バルコニー

マヤ「おお！ここすげえ景色いいね！城下町ほぼ全部見えるじゃん！」

ラース「ここでの夕日は格段に綺麗だな。今度機会あったらマヤちゃんにも見せてやるよ」

マルティナ「それじゃあ、私はこの子達にご飯あげてるわ」

マヤ「あ、俺も支えるよ」

マルティナ「ありがとう、マヤちゃん」

その後、カミュとイレブンがやってきた

カミュ「全く。しばらく戻ってこないから様子を見にきたら、あんまり迷惑かけんじゃねえぞ」

マヤ「迷惑なんかかけてねえし！俺も少しは手伝ったからな！」

マルティナ「ふふ、とつても助かったわ。マヤちゃんは頼りになるわね」

マヤ「へへ、俺赤ちゃんを見てたら、何かしてやりたくなつてさ。これからも来てもいい？」

ラース「どんどん来ていいぞ。俺達はいつでも歓迎するからな」

カミュ「おい、マルティナ、ラース。あまりこのじゃじゃ馬を甘やかすなよな。手がつけれなくなるぞ」

マヤ「ハア！誰がじゃじゃ馬だよ、クソ兄貴！全く、兄貴も二人みたいに優しくしろよな」

イレブン「マヤちゃんは何を手伝ったの？」

マヤ「俺は赤ちゃんにご飯をあげるのを支えてたんだぜ」

イレブン「赤ちゃんについて事は…… あ、そっか」

ラーズ「わかったか？イレブン。俺にはあまり手伝いにくい事だな」

カミュ「へー、お前にしてはちゃんとやってたんだな」

マヤ「どう！ちゃんと出来てたんだからな！」

その時、グレイグもやってきた

グレイグ「あ！姫様、ラーズ、それにイレブン達もいたのか。どこに行ったのかと探したぞ」

マルティナ「あら、グレイグ。探してたのね、ごめんなさい」

グレイグ「いえ、訓練が終わったのでラーズに報告をしに来たんです。ラーズ、俺が知らない間に、随分と兵士達の戦い方が実戦的になったな。

俺は型を基本的に教えていたが、お前はそこからさらに実的にさ

せていったのだな。最後の組手は俺にもかなり厳しかったぞ。素晴らしいじゃないか。

特にバンだな。あいつはお前と特訓してるだけあって、他の者の追随を許さないレベルで全ての技が磨かれているな。あのレベルなら隊長どころか、副長を任せてもおかしくない強さだ」

ラース「どうだ！俺の育てた兵士達は！グレイグにそこまで言ってもらえるとは、俺も頑張った甲斐があるな。それにバンの強さに驚いただろ？あいつ、メキメキと力をつけていったな。

確かに隊長を任せられる強さはかなり前から持っていたが、俺はそういう隊での縛りはしてないからな。皆で平等にしていたんだ。別にそこはグレイグの好きにして構わないぜ。

ただ、バンの特訓は俺が直々に見よう。あいつは俺の事を師匠と呼んでくれてるからな。全部グレイグに任せるわけにもいかない。報告ありがとな、グレイグ。俺はバンの所にいつてくる。イレブン達と話していてくれ」

訓練場

ラース「おーい、バン！急に兵士長が代わって驚いただろ？すまなかったな」

バン「あ！師匠！いえ、全く！グレイグ將軍も色々教えてくださり、とても参考になりました！師匠は赤ちゃんの方は大丈夫なんですか？俺達の事は気にしなくて大丈夫ですよ？」

ラース「いやー、俺も体を動かしてないとどうも落ち着かなくてな。
ハハ、マルティナの事を言えた口じゃなかったみたいだ」

バン「そうだったんですか、それじゃあ今日は何やりますか？」

ラース「今日は片手剣と盾を持ちながら、体術で戦ってもらうぞ。
もちろん剣と盾も使えよ？」

バン「わかりました、行きますよ、師匠！」

数時間後

ラース「剣がブレているぞ！しっかりと力をこめろ！足と体幹で前進
してくるのを止めるんだ！」

バン「ハア！フン！こんな感じですか！」

ラース「ああ、そうやって押さえこんで戦え。そうすれば相手は守
る手段が少なくなるからな。防御は最大の攻撃。相手のできる事を
どんどん封じろ。そうすれば、相手は隙ができてくる」

バン「はい！わかりました！」

その時、カミュとイレブンが走ってやってきた

カミュ「おい！ラーズ！子どもが泣き出しちゃった！」

イレブン「マルティナだけじゃあ泣き止まないんだ！急いで戻ってきて！」

ラーズ「わかった！今行く！すまねえな、バン。ひとまずここまでだ」

バン「いえ、気になさらないください。どうか赤ちゃんの方へ」

ラーズ「ああ。そうだ！イレブン！カミュ！バンと戦ってやってくれ！頼む！」

ラーズは去り際にそう残していった

イレブン「え、僕達が？」

カミュ「おいおい、マジかよ」

バン「あの、勇者様達、俺に指導してもらってもいいですか？」

カミュ「まあ、しないと怒られるのは俺らだしな」

イレブン「何か教えられるわけじゃないけど、よろしくね」

バン「ありがとうございます！じゃあ本気でいきますー！」

その後、バルコニー

ラーズ「すまねえ、マルティナ。大丈夫か？」

マヤ「あ！兄ちゃん来た！助けてくれよ、マルスが泣き止まねえんだ」

マルティナ「ごめんなさい。ルナが泣き出したら、マルスまで泣き出してしまつて」

ラーズ「いや、気にするな。こういう時はな、少しルナと離れてゆっくり安心感を与えるんだ。焦らないで一定のリズムで撫でてやるんだ。もう大丈夫だぞ」

少したつと、マルスはゆっくりと落ち着いていった

マヤ「うわあ！兄ちゃんすげえ！俺、慌てちゃってどうしようって思ってたんだよ」

マルティナ「そうね。安心感を与えるのが大事だったわね。私も少し焦っちゃってたのが伝わっちゃったのね」

ラース「赤ちゃんは意外と俺らの事をよくわかっている。特に感情面をな。俺らが不安だったりしていると、赤ちゃんもそれに影響されちゃうんだ」

マヤ「そうなんだ。赤ちゃんってすげえな。泣き出しても慌てないで落ち着かせればいいんだな」

ラース「ああ、そうだ。マヤちゃんもわからなくても何とかしようとしてくれたのには感謝しないとだな。優しいな、マヤちゃんは」

マヤ「本当？ありがとな、兄ちゃん」

マルティナ「グレイグ、もうこっちに来て大丈夫よ？」

ラース「何で端っこにいたんだよ」

グレイグ「俺が近づいたら、赤ん坊達がさらに泣き喚いてな。俺はこの顔で、体も大きいから不安を与えているかもしれないと思って端っこに避難したんだ」

マヤ「おっさん、隅ですげえ申し訳なさそうにしてたんだぜ。これで英雄だなんて呼ばれてるなんて信じられねえ」

マルティナ「うふふ、でも彼は戦闘ではとっても頼りになるのよ」

グレイグ「ひ、姫様。ありがとうございます」

マヤ「俺にはただの面白いおっちゃんにしか見えねえな」

ラース「ハハハ！そんな捉え方でいいと思うぞ。これからは戦いなんて少なくなっていくんだからな」

その後

カミュ「おい！ラース！何だ、あのバンってやつ！とんでもなく強いぞー！」

イレブン「本当だよ。僕が久しぶりに剣を握ったってのもあるけど、負けるかと思った！いや、あれはもう運で勝ったようなものだから、負けみたいなものだと思う」

マルティナ「え!?イレブン、負けちゃったの!?!」

マヤ「マジ!?勇者様に勝っちゃう兵士がここにいるのかよ!」

カミュ「そうなんだよ、イレブンが負けそうになって俺もビビったぜ」

イレブン「いや、これは僕も本格的に旅の時の感覚取り戻さないと」

ラーズ「やっぱりイレブンとはいい勝負したみたいだな。カミュともいい勝負になるんじゃないかと思ったが、それでもなかつたか」

グレイグ「ラーズの教え方でここまで変わるとは……。やはり、前は恐ろしい男だ」

カミュ「ブーメランがほぼ効かないし、短剣も戦い方わかつてやがる。兵士とは思えない戦い方してきたぞ。何でそんなの教えてんだよ」

ラーズ「それがあいつの信念って事だ。俺が教えられる戦い方全てを叩き込むつもりだからな。もしかしたら、俺よりも武器の面では強くなるかもしれないぞ？」

マヤ「すげえ、兄貴の戦いは色んなところで見てて強いって思ってたのに、それよりすげえやつがここにたくさんいるのか」

マルティナ「これだと私も負けちゃうわね。体も元に戻ったら、また動かさないと」

131. バンの成長

それから、半年以上の月が流れたある日

玉座の間

バタン！

ガザル「王様！至急の連絡が入りました！デルカコスタ地方の西にある山から、魔物の群れが湧いているそうです。それがこちらに向かってきているとの事です」

デルカダール王「何じゃと！それはまずい。すぐに兵士を派遣する」

ラーズ「王よ、ここは俺にお任せください」

デルカダール王「うむ、それが適任であろう。だが、無理はするなよ。回復のできる衛生兵も連れて行くのじゃ」

ラーズ「はっ！」

マルティナ「ラーズ！無事で帰ってきてね」

ラーズ「ああ、俺の帰る場所はこの城だ。お前達、聞いていたな！

すぐに支度をしろ！魔物どもを倒すぞ！」

兵士達「はっ！」

デルカコスタ地方 関所

ラーズと他の兵士達は関所にたどり着いた

ラーズ「状況はどうなっている？」

ベグル「あ！ラーズ將軍！来てくださいましたか！怪我人や巻き込まれた者はまだいらっしやりません。ですが、魔物達は何やら一つの場所に集まって、こちらに向かってきているようです。親玉のような存在がいると予想されます」

ラーズ「了解した。少し様子を見てこよう。行くぞ、皆！」

兵士達「はっ！」

デルカダール神殿近く

ラーズ「ふむ、かなりの量がいるな。皆、一人ではあまり戦うなよ。仲間とペアで倒していけ。普段から言っているが、油断はするな！これは命に関わる事だからな！」

兵士達「はっ！」

ラース「バン、お前は俺と来い。最前線で戦ってもらおう。お前の腕なら平気だ」

バン「わかりました、師匠」

ラース「俺とバンが真ん中から攻め込む。お前達は両側から倒していけ」

兵士達「はっ！」

ラース「行くぞ！イオグランデ！」

兵士達「うおおおっ！」

ギャアー、ギイイイ！

魔物達はこっちに向かってくる

ラース「デュアルカッター！」

ギイイイ！

少しして

ラース「ちっ！数が多いな。バンともはぐれちまった。あいつが無事だいいが。しんくうげり！ん？」

バン「うおおお！なぎはらい！せいけんづき！しんくうげり！一閃突き！」

ギヤアー、ギイイイ！

ラース「ハハ、あいつ囲まれてんに物怖じすらしてねえな」

しばらくして

ラース「俺の所はもういなくなつたな、皆は無事だろうか」

ギバ「なぎはらい！」

バン「ギバ、伏せろ！一閃突き！マーズ、三本下がれ！しんくうげり！」

ラース「おいおい、バンのやつ、仲間達のサポートにまで回ってるな。これは俺の出番はねえな。だが、原因は何だ？親玉らしきやつはいなかったが」

その時、遠くで光る物があった

ラース「これは……何やら怪しい力を感じるな。この宝石が原因なのか？」

魔物達は一掃された

ラーズ「よくやった、お前達。すぐに関所に戻るぞ。怪我人がいれば、そこで医療班に手当してもらえ。行くぞ！」

その後、玉座の間

ラーズ「王よ、ただいま戻りました……。何してるんですか？」

ラーズが戻るとデルカダール王は四つん這いになり、背中にはマルスが乗っていた

デルカダール王「おお、ラーズよ、無事帰ってきたか。よかった。すまぬが、報告の前にマルスをどけてはくれぬか？」

マルズ「とー！とー！」

マルズはラーズに向かって手を伸ばしている

ラーズ「ハハ、マルズ、じいちゃんに何やってんだよ。ダメだろ？背中で跳ねたら」

ラーズはマルズを抱き上げた

マルズ「キャッ！キャッ！」

デルカダール王「すまん、ラーズよ。それでどうだった？」

ラース「は！魔物の群れは一掃し、全滅しました。原因と思しき物はこちらのルビーかと思われます。何やら邪悪な気配を感じます」

デルカダール王「ふむ、流石じやな。だがそのルビーはわしもわからん。調査班に調べさせるのがよかろう」

ラース「そうですね。そちらの方に預けさせてもらいます」

デルカダール王「それでは兵士達もご苦労じやつたと伝えてくれ。ゆっくり休んでくれ」

大広間

ラース「おい、バン！お前カツコよかったぞ！俺の近くからいなくなった時は心配したが、勇ましかったなあ！」

バン「はい！俺、師匠のおかげで全力を出せました。ありがとうございます
ざいます」

マーズ「ありがとう、バン。俺達のサポートに入ってくれて」

ダバン「ああ、助かったぜ！やっぱりお前はすごいやつだな！」

ラース「よし！今日はいつもの酒場でバンの成長を祝って乾杯だ！奢ってやるぞ！」

兵士達「イエーイー」

酒場

ラース「よし！お前ら！今日の任務怪我人ゼロ、さらにバンの成長を祝い、かんぱいだ！」

兵士達「かんぱーい！」

しばらくして、酒場は騒がしくなった

ラース「いや、マスター。いつもすまねえな、騒がしくしてよ。こいつら騒ぐのが好きで仕方ねえんだ。また少し金は多めに置いていくぜ」

店主「いえ、ラース様達がよく使う酒場としてうちも鼻が高いですよ。それのおかげで、売り上げも上がってきているんです。本当にありがとうございます。」

お金の方は気になさらないください。それに、私も騒いでいるのを見ると楽しくなってくるんですよ」

ラース「そうだったのか。じゃあお言葉に甘えさせてもらうとするかな」

バン「ラーズ師匠！俺、今日、カツコよかったですか！」

顔が赤くなつたバンがラーズに声をかけてきた

ラーズ「おい、バン。お前、酔ってんな？全く、お前達はすぐ誰かを酔わせるんだからやめろよな。バン、お前は今日カツコよかつたぞ。今日の主役だ」

バン「やったー！師匠が褒めてくれたー！」

ラーズ「あー！何してんだコラ！脱ぐんじゃねえ!!」

夜中

ラーズはまた数人酔い潰れたり、そのまま寝てしまった人を抱えて城へと帰っていた

ラーズ「たくつ！何で俺がいつもこうやって、酔い潰れた奴らを通して帰んなきゃならねえんだ。こういう時ばかりうまく甘えてきやがって」

バン「うぐつ！師匠、すみません。もう少し優しくお願いします」

ラーズ「ああん？つてバカ！やめろ！ここはまずいだろ！トイレだ！耐えろよ！」

ラースは猛スピードで走り出した

しばらくして

バン「いやー師匠、吐いたらすつきりしました。ありがとうございます」

バンはスツキリしていた

ラース「ゼエ、ゼエ、おう……。そいつはよかったなあ」

ラースは息苦しそうにしている

バン「……師匠、もしかなくても怒ってますか？」

ラース「いやあ、明日がすつごく楽しみだなあ？バン？覚えてろよ」

ラースの額には青筋が立っている

バン「ひいっ!!」

次の日、訓練後に何故か血まみれで医療室に運ばれるバンの姿があった

それを見ていた兵士達は皆、口を揃えて言った

「あれは死ぬ」と

132. 新婚旅行

子ども達が産まれて一年が経とうとしていたある日

デルカダール城 朝食時

ラース「え!?新婚旅行!？」

マルティナ「よろしいのですか?お父様」

デルカダール王「ああ、お主達はまだであつただらう?子ども達もわし達が責任を持って様子を見よう」

グレイグ「うむ、ぜひそうした方がいい。二人とも今までずっと旅行に行っていないからな。子どもも小さい今のうちに行つてくるといい」

ラース「そうですね、ありがとうございます。よし、行くか、マルティナ」

マルティナ「わかりました。ありがとうございます、お父様。何か甘いお土産を買ってきますね」

ラースとマルティナの部屋

ラースとマルティナは準備をしながら行く場所について話してい

た

マルティナ「突然だったけど何だか楽しみだわ。どこに行こうかしら」

ラース「あ！じゃあ俺から提案があるんだが」

マルティナ「却下よ」

ラース「え……。何も言っていないんだが……」

マルティナ「世界食べ巡りツアーみたいな事言う気だったんじゃないかしら？」

ラース「…………… そんな事ないぞ？」

ラースはマルティナから目を逸らしている

マルティナ「目を合わせてから言っただろう。それに、私知ってるんだからね？最近お腹が出てきたこと」

ラース「な!?! そんな事ないぞ!?!」

マルティナ「グレイグから聞いているわ。城に来てから食欲がいいの

は素晴らしいが、腹が出てきたように思えるってね」

ラース「それは……その分動いてるから………平気だ！グレイグ、許さん」

マルティナ「全く。とにかく他のにするわよ」

ラース「それじゃあよ、俺達が各地の皆の所に訪ねるのはどうだ？連絡無しで驚かせようぜ。まあ、居なかつたらその時でさ」

マルティナ「あら、それは面白そうね。いいわね、いつも来てもらってばかりで悪いと思ってたのよ。でも、日が結構かかるわよ？」

ラース「それが王様がよ、お主は働きすぎじゃ。もつとマルティナとの時間を大切にしてくれ。この旅行は一ヶ月は帰らなくてもいいぞって言われててな」

マルティナ「一ヶ月!?そんなのもう旅行じゃないわ！お父様ったら何を言ってるのかわかってるのかしら」

ラース「多分本音は子ども達を占領したいんだろ。まあ、流石に一月はやりすぎでも、それなりに長く旅ができるな」

マルティナ「そうね。所々はカメラの翼で行きましょう」

その後、大広間

デルカダール王とグレイグが見送りに来ていた

マルティナ「それではお父様、行ってまいります」

デルカダール王「うむ、しばらくは帰ってこないで夫婦水入らずの時間を過ごすんじゃ」

ラース「グレイグ！兵士達の事は頼んだぞ。バンには別のメニューを渡してある。だからバンは構わなくても平気だ！」

グレイグ「ああ、任せておけ」

イシの村

マルティナ「まあ、最初はここよね」

ラース「そりやそうだ。あ、エマちゃん。久しぶり」

偶然通りかかったエマに話しかけた

エマ「あ！えっと、確かラースさん。それにマルティナ様も！イレブンに用事ですか？」

マルティナ「ええ、突然ごめんなさい。いるかしら？」

エマ「はい、今村の広場で剣の練習してると思っています。呼んできますね」

すると、すぐに来てくれた

イレブン「ラーズ！マルティナ！久しぶり！急にどうしたの？」

ラーズ「よお！イレブン！久しぶりだな、最近は全然城に来てくれなかったな。俺達は今新婚旅行中なんだ」

イレブン「え!?!新婚旅行!?!イシの村でいいの？」

マルティナ「違うのよ、イレブン。私達の新婚旅行は各地の仲間達の所を突然訪れてみようってものにしたの。ほら、私達がいつも来させて悪かったから」

イレブン「そんなの全然気にしないのに！そっか、じゃあ一番最初に来てくれたの？」

ラーズ「まあ、一番近いからな。カミュはどこにいますとか知ってるか？」

イレブン「カミュは少し前の手紙でクレイモランに戻ったって書いてあったよ。今は旅は終わったみたい。折角来たんだし、僕の家でゆっくりしていつてよ」

イレブンは自分の家に案内した

イレブンの家

ペルラ「おや、イレブン。お客さんかい？おや!?マルティナ姫じゃないかい！わざわざこっちに来てくれてありがとねえ。そちらのお兄さんもイレブンの仲間だったのかい？イレブンがいつもお世話になっております。母のペルラといいます」

ラース「こちらこそイレブンにはお世話になりました。俺はラースといいます」

マルティナ「気にしないでください、お母様。今日はサプライズでこっちにきたんです」

イレブン「母さん、この二人は夫婦で子どもも二人いるんだよ。今、新婚旅行でここに来てくれたんだって」

ペルラ「まあ!?それはおめでとうございます。何も無い村ですが、どうかゆっくりしていつてくださいね。イレブン、昼はご馳走だよ。倉庫からカボチャを持ってきてくれ」

イレブン「はい」

マルティナ「あ、お母様。突然押しかけたのは私達です。何かお手伝いします」

ペルラ「いいんですよ。お客様はどうか座って待っていてください」

ラーズ「へえ、ここがイレブンの育った家か。優しい雰囲気だな、俺の場所とは大違いだ」

マルティナ「そうね。ペルラさんも優しい人だし、イレブンもいい子に育つわけだわ」

その後、昼食は四人で色々な話をしながら食べた

イレブン「いいなあ、僕も行きたいけど、流石に邪魔するわけにはいかないもんね。またこっちにも来れたらきてよ。歓迎するよ」

ペルラ「イレブン！姫様とその騎士様なのよ。そんな簡単に出れる訳ないでしょ！自分から行きなさい」

ラーズ「ハハハ！気にしないでくれ、ペルラさん。俺ならたまに時間あるからこっちに来よう。その時はよろしくな」

イレブン「じゃあね〜！」

マルティナ「次はソルティコね。歩いていってもいいと思うけど、どうする?」

ラース「今から歩いていけば夜には着くはずだ。歩くか」

マルティナ「わかったわ」

道中

マルティナ「そういえば、ラースと二人でこうやって歩くななんて初めてじゃないかしら?」

ラース「言われてみれば確かにそうだな。町の中では珍しくなかったが、町の外で二人きりで歩いた事はなかったな」

マルティナ「なんだか新婚旅行とは違うわねって思ってたけど、これはこれでありかしら」

ラース「そうだな。俺達には豪華な場所よりも、こんな感じがいいのかもしれないな」

夕方、ソルティコの町

ラーズ「魔物が少なくなっただけで早くついたな」

マルティナ「そうね。先に宿を取っておきましょう。その後でシルビアに会えるといいんだけど」

ジエーゴの屋敷

セザール「おや、ラーズ殿。それにマルティナ様も。ようこそいらっしやいました。ゴリアテ坊ちゃんに御用ですか？」

ラーズ「ああ、シルビアは今家にいるのか？」

セザール「はい。先日帰ってきて、まだこの家に滞在しております。お呼びしますね」

セザールがいなくなると、すぐにシルビアがやってきた

シルビア「キャー！ラーズちゃんとマルティナちゃんが訪ねてきてくれるなんて嬉しいわ！」

マルティナ「久しぶりね、シルビア。家にいてくれてよかったわ」

シルビア「今から丁度晩ご飯だったの。二人はもう食べたかしら？」

ラーズ「いや、俺達もまだなんだ。一緒に食べてもいいか？」

シルビア「もつちろんよく。パパとたくさん話しながら食べましょう。ソルティコの新鮮な魚介類、味わって食べていって！」

その後

ジエーゴ「おう！ラーズじゃねえか！悪いな、そっちに顔を出せなくてよ。指導の約束したつてのに。だが、もう少ししたらこつちも時間が取れそうだ。そしたら俺が教えてやるよ！」

ラーズ「ありがとうございます、ジエーゴさん。俺も楽しみにして待ってますね」

シルビア「パパ、聞いて。ラーズちゃんはデルカダールの騎士になったのよ。しかも、兵士ちゃん達を鍛えてるの。アタシも兵士ちゃんと戦ったけどすっごく強かったのよ」

ジエーゴ「な、何だと!?俺が知らない間にそんな事になっていたのか！ラーズ、お前指導者の素質もあるつてのか。ならその力、俺が今度直々に見てやるよ」

マルティナ「あら、すっごい期待されてるわよ、ラーズ。頑張らな
いとね」

ラーズ「マジかあ。荷が重いぜ」

シルビア「それで、急にどうしたの？城から抜けて、二人だけでここまで歩いてきたんでしょ？」

マルティナ「私達は今新婚旅行中なのよ。各地の仲間達の所に突然行ってみようってラーズが」

ラーズ「まあ、色んな所を巡れるし、仲間達の顔も見れるしで丁度いいなと思ってよ」

シルビア「キャー！新婚旅行なの！素敵だわ！そういえば、結婚してから子どももできて、しばらく経つけど行ってなかったのね！いいじゃない！

それなら、どんどん食べてちょうだい。このパスタとか、パエリアとか。ラーズちゃんならこれも好きなんじゃないかしら？」

シルビアは両手を合わせて喜んでいる

シルビアはテーブルの上の様々な料理をラーズ達の方へ持つていく

ラーズ「うおー！いいのか！！やったぜ！」

マルティナ「結局、たくさん食べるのは変わらないのね」

ラース「フフン、マルティナ、甘く見たな。俺はこうすれば各地でもてなされると思ってたんだよ」

マルティナ「な!? もう! ラース!! 全然反省してないじゃない! それなら、私が食べてラースの分減らしてやるんだから!」

マルティナはラースの近くにある食べ物からどんどん食べていく

ラース「あ!! マルティナ、やめてくれ! 頼む! 俺の分もくれ!!」

シルビア「あらあら、とっても仲良しさんなのは変わらないわね」

ジエーゴ「ガツハツハ! 楽しそうでいいじゃねえか。ラース、ワイン注いでやるぞ」

ラース「ジエーゴさん、ありがとうございます。このワインにはハムが合うんですね?」

ジエーゴ「お!! わかってるじゃねえか! そうだ、このハムが最高にワインと合うんだ」

ライス「美味しい！いや、この組み合わせいいですよ！俺も今度からはこの組み合わせで食べますよ！」

ジエーゴ「おお！いいねえ、それならこいつはどうだ？」

ライス「これ初めて食べますね。これは……貝？」

シルビア「この近くでとれる貝なの！中はとっても爽やかで、ライムのような味わいなのよ！アタシはこれ単品でも好きよ」

マルティナ「へえ、美味しそうね。私ももらうわね」

ライス「どれどれ……。おお、確かに爽やかだな。これにワインだと？……。美味え！何だか甘みと爽やかさが増したな」

ジエーゴ「そうだ。実はあまり知ってる奴はいなくな。ワイン本来の甘さを引き立てるんだ」

シルビア「さあ、他にも色々あるのよ。どんどん食べて行ってね」

その夜、宿

ライス「ふう、食べた、食べた。ソルティコの海鮮料理は美味しいなあ」

マルティナ「本当ね、私少し食べ過ぎたかもしれないわ。お腹が重たく感じるわ」

ラーズ「そりゃあ、欲張って俺の分まで食おうとするからだろ」

マルティナ「ラーズには太ってほしくないの！」

ラーズ「ハハ！確かに俺も太りたくはないな。ただ、別に俺はもう少し太くてもいいんじゃないか？」

マルティナ「そんな事ないわ。ラーズは元々筋肉で大きく見えてるんだから今より大きく見えたら大変よ」

ラーズ「何だか俺が筋肉でできてる人みたいな言い方だな」

マルティナ「実際ラーズは筋肉すごいじゃない。グレイグだつて身長と体重は適正だけど、ラーズは普通より重たい方だと思うわよ」

ラーズ「そうなのか？興味ないからわからないな」

マルティナ「とにかく！この旅であまり食べ過ぎないように、私が

見張ってるから！」

レース「うっ…… わかったよ」

133. 新婚旅行2

次の日

マルティナ「次はユグノアね。ロウ様は全然お城の方に来てく
ださいらないから言つてやらないと」

ラーズ「じいさんは仕方ないだろ。ユグノアの復興で忙しいんだ。
イレブンもそれなりの頻度で行ってるみたいだしな。それじゃあキ
メラの翼で向かおう」

ユグノア城跡地

二人が到着すると小さな家や広場や花壇などができていた

周りには何人か復興を目指して作業している人がいる

ラーズ「おいおい、もう小さな村みたいにはなってきたじゃねえか」

マルティナ「本当ね。ロウ様はお手紙でしか聞いてないから、こ
んなに復興が進んでいたとは思わなかったわ」

広場

ラーズ「あ、あそこにいるのは。おーい！じいさん！」

ロウ「む？おお！ラーズ！それに姫よ。久しぶりじゃな。元気
じゃったか」

マルティナ「もうロウ様！こんなに復興が進んでるなら、手紙にも
しっかり書いてください。私もすぐに会いに行つたというのに」

ロウ「いや、すまんう、姫よ。お主の事だから、仕事を抜け出し
て来るんじゃないかと思つて大きな事は書けなかつたんじゃ。それ
にしても、二人だけでこんな所までどうしたんじゃ？」

ラーズ「俺達は今、新婚旅行中だな。各地の仲間達の所を回つて
るんだ」

ロウ「ほほう！新婚旅行とな！いいのう!!だが、折角来てもらえた
のに悪いんじやが、ここにはまだ酒場のような場所はなくてのう。こ
こだとまだゆつくり休めるような場所は無いんじや」

マルティナ「気にしないでください、ロウ様。ロウ様は今、ここで
どうやって住んでおられるのですか？」

ロウ「わしはここから少し進んだ先にある木造小屋の中で過ごして
おる」

ラーズ「じゃあそこに一日世話になつてもいいか？」

ロウ「ああ、構わんよ。わしも楽しみじやのう」

マルティナ「それではロウ様。私達も復興を手伝います」

ロウ「いやいや、いいんじゃないよ、姫。気持ちはありがたいのだが、新婚旅行中のお主らにそんな事させられんわい」

ラース「俺達は気にしないぜ？じいさん。それに、今こんな時じゃないとこつちに来れないからよ。手伝えるのも今だけなんだ。な？少しだけだ。いいだろ？」

マルティナ「そうですよ、ロウ様。私もアーウィン様とエレノア様の故郷を早く元の姿に戻したいんです」

ロウ「ありがとのう、優しい心は老体に染みるのう。どれ、それなら手伝ってもらおうかの」

ラース「おう。力仕事なら任せろよ、じいさん」

マルティナ「そうよ、ラース。少しでも多く動いて痩せてよね」

ラース「俺はまだ太ってねえだろ！」

ロウ「ふおっふおっ、相変わらず仲が良いのう」

その夜、小屋

ロウ「基本は一人じゃからな。大した食材は無いんじや。ここをよく使うのはわし以外にイレブンくらいじゃからな」

ラース「それならじいさんは座って待っててくれ。俺が作ろう」

マルティナ「あら、ラース。私も手伝うわよ?」

ラース「大丈夫だぜ、マルティナ。久しぶりにキッチンに立つけど、まだまだ作れるはずだ。待っててくれよな」

マルティナ「それじゃあ待ってるわね」

ロウ「何だか、初めてお主と出会った時の事を思い出すのう」

ラース「そういえばあの時も俺が飯を作ったな。マルティナが風邪を引いてたんだったな」

マルティナ「そうね。すごく懐かしいわ」

しばらくして

ライス「よし、できたぜ！」

ロウ「いい香りじゃな。おお！これはわしも知っておるぞ。鍋じゃな」

マルティナ「鍋。確か皆で集まって食べる物だったかしら？」

ライス「そうだ。具材は特に決まっていなからな。じいさんが持ってたものをけっこう入れたんだ。それじゃあ早速皆で食べようぜ」

ロウ「おお、美味じゃのう。この味、確か味噌汁を作ってくれた時も似た味がしたのう」

マルティナ「本当だわ。あの時の味噌汁の味に似てるわね」

ライス「へへ、流石に気づいてくれたか。味噌を溶かしてその味に近づけてみたんだ。俺らの出会いの味だからな」

ロウ「いい事をしてくれるのう。お主もあの出会いを大切に思ってくれとるんじゃな」

ラーズ「当たり前前だろ、じいさん。俺とマルティナの出会いだぜ？
忘れたくても忘れられねえよ」

マルティナ「ちよつ、ちよつと。私それだと変な印象持たれてない
かしら？」

ラーズ「何言ってるんだよ、マルティナ。初めて会った時から俺は綺麗
な人だと思ってたぜ」

マルティナ「そ、そうなの？ありがとう」

少し経ち

マルティナ「ちよつと、ラーズ！一人で食べ過ぎよ。少しは控えな
さい！」

ラーズ「うっ……。いいだろ、別に。俺、今日力仕事したじゃない
か」

ロウ「何じゃ？ラーズはダイエットでもしようとしてるのかの？」

マルティナ「そうなんです、ロウ様。グレイグが最近ラーズのお腹
が出てきた気がするって言って、私も気になってるんです」

ライス「そ、そりゃあ城の飯は美味いからよ。つい、多めにおかわりしてたとは思うが、俺はちゃんと訓練でしつかり動いてるから、消費出来てるとは思ってるんだが……」

ロウ「ふおつふおつ、幸せ太りというやつに似ておるのう。わしもそうじゃったわい」

マルティナ「ほら！見なさい、ライス！ロウ様みたいになるわよ！」

ライス「マジか!!じいさんみたいにはなりたくねえ!!」

ロウ「いきなり扱いが酷すぎんかの!？」

カタカタカタ

台所で鍋の蓋が揺れ始めた

ライス「お？そろそろか」

マルティナ「あら？まだあるの？結構量はあると思うんだけど」

ライス「いや、これは簡単な箸休めに作ったんだ。まあ、時間がかかるせいで少し遅くなったがな」

ライスは茶碗を二人に出した

中には黄色いものが入っている

ロウ「これは……プリン？かの？」

ラース「いや、茶碗蒸しつてやつだ。中は卵と醤油で味付けされて、キノコとか山菜を茶碗に入れて蒸したんだ。だから茶碗蒸し。実は俺の自信作でな。中々作れないんだが、今回は時間があつたからな。食ってみてくれ」

マルティナ「これは……美味しいわ。ほのかに醤油の味やスープのような味が優しく広がっていくわ」

ロウ「ほっほう！これは大変美味じゃのう。優しめの味わいがいいのう。お酒の後でもパクパク食べれそうじゃ」

ラース「美味しいだろ？ただ、これ作るの大変なんだよな。まあ、またいつか作ってやるよ。さあ、残りの鍋も食べちまおうぜ」

その後、三人で片付けをしていた

ロウ「明日はもう行ってしまうのかのう」

ラース「どうする？マルティナ」

マルティナ「もう少ししましょう。今までお手伝い出来なかった分、たくさん復興の手伝いがしたいわ」

ラース「やっぱりそうだな。じいさん、俺達もう少しここにいてもいいか？」

ロウ「ありがとう。数日間よろしく頼んだわい」

そうして、三日間ユグノア復興を手伝った

134. 新婚旅行3

三日後、クレイモラン城下町

マルティナ「久しぶりにこつちに来ると、やっぱり肌寒く感じるわね」

マルティナは少し肌を擦っている

ラース「大丈夫か？俺の上着でも着てろよ」

ラースはマルティナに自分の上着を貸した

マルティナ「あ……。ありがとう」

ラース「しかし、イレブンから家の場所を聞いておくんだっとな」

マルティナ「そうね。ここにいるのはわかっててもクレイモラン自体広いから、探し回るのは無謀よね」

ラース「でも、ひとまず俺達もユグノアで食料を結構使ったからな。少しだけ買っておこう」

商店街

二人が歩いていると少し先に見覚えのある後ろ姿が見えた

ラース「ん？おいおい、あの後ろ姿は」

マルティナ「あ！おーい！マヤちゃん！」

マヤ「ん？え、ああ！兄ちゃん！お姫……姉ちゃん！」

マヤは二人に気付いて驚いている

マルティナ「久しぶりね。旅は終わってこっちに戻ってきたって聞いたから来たのよ」

マヤ「あれ？二人だけ？おっちゃんとか子ども達は？」

ラース「皆、城にいるぜ。俺達は今仲間達の所を回っててな、それでここにも来たって訳だ。そうだ！カミュのやつ驚かしてやろうぜ」

マヤ「いしし！何それ面白そう、俺ものった」

マルティナ「もう！イタズラなんて久しぶりに見るけど、そこは変わってないのね」

カミュとマヤの家

ガチャ

マヤ「兄貴、頼まれた物買ってきたぜ」

カミュ「おお、おかえり、マヤ。ありがとな」

マヤ「それとな、兄貴に大事な話があるんだ」

カミュ「ん？何だよ、改まって」

マヤ「前から気になってた人がいてな。実は今日その人を連れてきたんだ。兄貴も気に入ってくれると思うぜ」

カミュ「え……。そ、それは、どういう……」

マヤ「入ってきていいぞ」

カミュ「ちよつと待て！マヤ！心の準備が……！」

カミュは焦り始める

ガチャ

ラース「初めまして、マヤちゃんのお兄さん。ラースと言います。よろしく願います」

カミュ「……………」

カミュはポカンとした顔で固まっている

マヤ「ぷつ。アツハツハツハツハ！ダッセー顔!!」

ラース「ハハハハ!!何だよその間抜けな面は！」

二人はカミュの顔に大笑いしている

カミュ「て、てんめえ、ラース!!何しにきやがった!!」

カミュは顔が赤くなっている

マルティナ「カ、カミュ、ひ、久しぶりねえ」

マルティナも口を押さえながら入ってきた

カミュ「マルティナまでいたのかよ……。くそつ、笑いこらえやがって」

マヤ「兄貴の心の準備って何だよ！アハハハ！」

ラース「マヤちゃん、作戦成功だな！いい顔見れたぜ！」

ラースとマヤちゃんデハイタッチをする

マルティナ「も、もう！カミュがかわいそうでしょ！そろそろやめ

てあげて」

カミュ「よお、ラース。てめえ、わざわざ喧嘩売りにきてくれたみてえだな。ありがとよ、表でやがれ」

カミュは指を鳴らしながらラースに近づく

ラース「ハツハツハ！待て、まだ笑いが少し出てるんだ。収まってからな」

カミュ「うるせえ！てめえ、いい加減にしやがれ！」

その後、カミュとラースで戦いが始まる

マルティナ「あ！ちよつと！家の中でやめなさい！」

マルティナに摘み出される二人

マヤ「いやー、面白いもんみれたぜ！最高だった！」

マルティナ「カミュからしたら心臓に悪いわ。あまりしないであげてね」

マヤ「稀にやるから面白いんだよ、姉ちゃん。あ、子ども達大きくなった？俺もまた行きたいんだけど、クソ兄貴が動いてくれねえんだよ」

マルティナ「ええ、どんどん大きくなって今は少しだけ喋ろうとしてるわ」

マヤ「ええ!?! すごい!?! 早くない!?!」

マルティナ「本当よね、赤ちゃんの成長速度には驚かされるわ。最近はお父様とラースでどっちが名前を早く呼ばせるか競ってるのよ? じいじととうちゃんって」

マヤ「うーん、それだと王様の方が簡単だし、早いんじゃないか?」

マルティナ「でも意外なことに、もうとーまでなら言えるし、そう呼んでるのよ」

マヤ「え!?! もうそこまで言えるならすぐじゃん」

マルティナ「私もお父様が先だと思ってたんだけど、ラースの日頃の努力の賜物ね」

話している内にラースがカミュを連れて戻ってきた

ラース「おう、戻ったぜ」

マヤ「あ、兄ちゃん、おかえり。つて、兄貴ダサすぎ」

ラースの肩にはボロボロになったカミュがいた

ラース「いやー久しぶりに激しく体動かしたぜ。やつぱり動かして
いかないとダメだな」

マヤ「兄ちゃんほとんど無傷じゃん。流石姫様の騎士なだけある
ね。クソ兄貴なんて、自分から挑んだくせに返り討ちにされてると
か、カツコ悪すぎて何も言えないんだけど」

マルティナ「ちょっと、本気でやってない？大丈夫？！」

ラース「そこは大丈夫だ。カミュだって本気じゃないしな。じゃれ
あいみたいなもんだろ」

カミュ「じゃれあいでもここまでされてたまるか！」

マヤ「あ、兄貴起きた。ダサ兄貴、マジでカツコ悪いぞ」

カミュ「いつか覚えてろよ、ラース。絶対ぶっ飛ばしてやる」

ラース「おう、いつでも城に来いよな！」

マヤ「それで?ここに来た本当の理由は何なの?」

マルティナ「あら、気づいてたの?マヤちゃん」

マヤ「外だから気を使ってたのがわかったからね。ここなら俺らしくないぜ」

カミュ「そうだ。何しに来たんだ。とつとと帰りやがれ」

ラーズ「酷い言い方だな。俺達は今新婚旅行中なんだ。それで各地の仲間達の所に俺達から出向いてるんだよ。いつも来させてばかりで悪かったからな」

マヤ「ええ!?新婚旅行!!いいなあ!俺も憧れる!」

マルティナ「マヤちゃんもいつか来るわよ。それで、お父様達に子どもを預けて数日旅に出てるの」

カミュ「そしてここに来た結果、マヤと意気投合して俺をバカにしてきたってわけか。いい迷惑だぜ」

ラーズ「楽しい事はどんどんやっていかないとない!」

カミュ「ちったあ反省しろ！てめえ！」

マヤ「いやー、俺兄ちゃんとは気が合うと思ってたぜ！」

マルティナ「もう。この話は終わりよ。それでカミュ、マヤちゃんよかつたらご飯一緒に食べましょう。近況報告とかもしたいわ」

ラース「そうだな。まだご飯食べてないだろ？俺が何か作るぜ？」

カミュ「それはありがてえけどよ、新婚旅行だつてのにそんな事してていいのかよ」

マヤ「そうだよ！もつとこう、何か海とかバカンスに行くもんなんじゃないの？」

マルティナ「もう海は皆と行つたし、私達はバカンスよりもどこかを転々と旅している方が慣れてるのよ」

マヤ「えく、そんなもんなの？それで楽しいの？」

ラース「まあ、楽しみ方は人それぞれだろ？俺達はこれで楽しいけ

ど、マヤちゃんが旅行する時は、自分が楽しいって思える事をすればそれが一番さ」

カミュ「それじゃあライス。ご飯は任せてもいいか？」

マルティナ「あ、ライス。私も手伝うわ」

ライス「おう、任せろ。食材借りるぞ」

マヤ「お姫様はわかってたけど、兄ちゃんも料理できたんだ。なんか意外かも」

カミュ「こんな見た目して結構上手なんだぜ」

ライス「カミュほど器用じゃないからな。凝ったものはそこまで作れねえよ」

マルティナ「あ！ライス！茶碗蒸しの作り方教えて。私も作ってみたいわ」

ライス「おお、いいぜ。時間もあるし、食材もあるから作るか。見てろよ？」

マヤ「……………何かこうやって見てると、俺らの家に新婚が来てラブラブしてるだけに見えてきた」

カミュ「実際見せつけられてんだろ。全く困った姫様達だぜ」
しばらくして

マヤ「この茶碗蒸しってやつ美味え！俺、これ好きだ！」

カミュ「確かに美味え、これもホムラの料理なのか？」

ラース「ああ、俺の自信作だ。旅の時は時間も無いし、食材もそこまで揃えられないからできなかったが、今はそんな事ないからな」

マルティナ「後は煮付けとか、雑多煮になっちゃったけど許してね」

マヤ「全然！兄貴の料理は飽きてきてたんだよ。お姫様達も城ではご飯作ったりしてんのか？」

ラース「いや、城にはコック達がいるからな。その人達に任せつきりだな」

カミュ「まあ、王族ともあろう人達が自分で飯作ってるなんて起

こつたらどういう事だ！つてなるだろうからな」

マルティナ「まあそれでも、偶には借りたりしないと腕も落ちちやうんだけどね」

その後

カミュ「この後はどこに向かう予定なんだ？」

マルティナ「この後はラムダまで歩いていこうと思ってるの。ベロニカ達にも久しぶりに会いたいわ」

マヤ「俺も久しぶりに会いたいな、ベロニカさん達」

カミュ「それじゃあ、今度また連れてつてやるよ。だから今にもついて行きそうなのを押しえろよ」

ラーズ「なんか気を使わせてごめん？俺達も気軽に旅が出来たらいいんだけど」

マルティナ「そうよね。私もまた少しだけ旅をしたいわね」

カミュ「それは仕方ねえだろ。王族としてやらなきやいけない事だつてたくさんあるんだからな」

マヤ「それじゃあ、今度俺達が二人を旅に連れて行くぜ！」

カミュ「おい、マヤ。お前はまた突拍子な事言いやがつて」

ラーズ「お？そうか。それじゃあ楽しみにしておこうかな」

マルティナ「うふふ、またお城にきてちょうだいね。マルス達も待ってるわ」

135. 新婚旅行4

夕方、聖地ラムダ

ラーズ「ふう、ここの山道は少しデコボコしてるから大変だな」

マルティナ「いいトレッキングになるわね。それにしても、夕日に照らされて神殿がさらに綺麗に見えるわね」

ラーズ「本当だな、これはいい景色だ。さて、ベロニカ達の家に行ってみよう」

ベロニカとセーニヤの家

コンコン

ラーズ「すみませーん」

セーニヤ「あら？その声は……」

ガチャ

セーニヤ「まあ！ラーズ様、マルティナ様！どうされたのですか？」

ラーズ「久しぶりだな、セーニヤ。元気そうで何よりだ」

マルティナ「突然ごめんなさいね。久しぶりに顔を見たくなったの」

セーニヤ「私も久しぶりにお二人に会えて嬉しいですわ。早速家にあがってください。お姉様もお呼びしますわ」

リビング

ベロニカ達の父「おや、セーニヤ。お客さんかね？」

セーニヤ「はい、お父様。私達と一緒に旅をしていたラーズ様とマルティナ様です。今日はこちらに顔を見せに来てくださったんです」

ベロニカ達の父「おやおや、それはどうも、家の娘達がお世話になっております。セーニヤ達の父です。何もない家ですが、ゆっくりしていってください」

マルティナ「いえ、気にしないでください。私達の方こそ突然来たものですから」

ラーズ「そうですよ。そのままくつろいでてもらって大丈夫です」

ベロニカ達の父「ありがとうございます。母さん、ベロニカ達の友達に来てくれた。今日はご馳走にしよう」

ベロニカ達の母「まあ！こんな所までわざわざありがとうございます。ベロニカ達の母です。いつも娘達がお世話になっております」

ダダダダ！

二階からベロニカが走ってきた

ベロニカ「マルティナさん！ラース！久しぶりね！」

ベロニカ達の母「こら！ベロニカ！騒がしくないの！」

ベロニカ「うっ……。ごめんなさい、お母さん。それにしても突然どうしたのよ、連絡も無しに来るなんてマルティナさんらしくないわね」

マルティナ「ごめんなさいね、ベロニカ。今、私達は新婚旅行中なの。それで各地の仲間達の所を回っているのよ」

ラース「この仲間達の所を巡ろうって発案したのは俺だからな。しかも、連絡無しっていうサプライズ付きだ」

ベロニカ「ええ！新婚旅行!? いいじゃない！だからグレイグさんもマルス達もいないのね」

セーニヤ「まあ！とっても素敵ですわ！新婚旅行なんて憧れますわ」

ベロニカ達の母「セーニヤ、悪いのだけどお料理手伝ってくれる？今日は腕を振るわなくちゃ」

セーニヤ「わかりましたわ、お母様。それではラース様、マルティナ様。ゆっくりしててください」

ラース「何だか悪いな。こっちが突然押しかけたっていうのに。俺達も何か手伝おうぜ」

マルティナ「そうね。私達も料理できるし、何か力になれると思うわ」

ベロニカ「いいのよ、気にしないで！それに、新婚旅行中なんでしょ？甘えてもいいの！おもてなしくらいさせてよね」

ラース「そ、そうか？まあ、ベロニカと話してるか」

ベロニカ「そうよ、私も聞きたい事たくさんあるわ」

夕食時

ベロニカ達の父「おやおや、お二人は結婚された上に子どもまでいらっしやるのですか。素晴らしいですなあ。子どもはいいですけど。私達を笑顔にさせてくれる、まさに天使のような存在です」

マルティナ「お父様がおっしゃると説得力が違いますね。私達もこれから頑張っていくます」

ベロニカ「マルスやルナはどれくらい大きくなったの？」

ラーズ「今な、少し喋れるようになってきて、俺の事をとーって呼ぶようになったんだぜ。マルティナの事はかー、だな」

セーニヤ「とってもかわいらしいですわね。また近々伺おうと思っ
てたんです」

マルティナ「赤ちゃん達の成長には驚かされるわ。数日で変わって
いくんだもの。最近簡単な事じゃ泣かなくなったのよ」

ベロニカ「そろそろ一歳になるのよね？私達もお祝いしないのだ
わ」

セーニヤ「もうそんなに経つのですね。時の流れは早いものです
わ」

マルティナ「ちよつとライス？私が何を言いたいのかわかるわよね？」

ライス「うっ……。だってよ、このグラタンとか美味しいんだぞ？マルティナも食べてみるよ」

マルティナ「わかったわ、それはあなたに近づけないでおくわね」

マルティナはグラタンをライスから遠ざけた

ライス「ああ！マルティナ！やめてくれ！」

セーニヤ「ライス様は食事制限でもされているのですか？」

マルティナ「聞いてよ、ベロニカ！セーニヤ！ライスったら最近本当によく食べるのよ！グレイグにお腹が出てきたって言われたんだから！」

セーニヤ「まあ！そうなのですか？見た目は変わっていないようですが」

ベロニカ「あんた、旅の時も宿とかでよく食べてたわよね。あの時はよく動いてたから問題無かったけど、今はまずいんじゃないの？」

ラース「そんな事ないんだよ！俺は今だって訓練でよく動いてんだ！だから、腹が出てきたのはグレイグの気のせいだ！」

ベロニカ「本当に？ちよつと失礼するわね…………… 触ってみても確かに腹筋だらけね」

マルティナ「でも、だからといって食べ続けるのはよくないわよ！適度な量つてもものがあるわ」

ラース「うっ……………」

ベロニカ「アハハ！完全に尻に敷かれてきてるじゃない」

セーニヤ「でもお姉様、明日のあれはどうしましょう。私、ラース様達を誘えば必ず勝てると思っていたのですが」

ベロニカ「あ……………。それもそうね。どうしようかしら」

マルティナ「何の話？明日何かあるの？」

セーニヤ「実は、明日ダーハル―ネでスイーツ大食いコンテストが

あるんです。一位の商品が世界の最高峰スイーツ盛り合わせでして、私とっても食べてみたくて。

お姉様と頑張って出ようとしていたのですが、二人では流石に一位は無理だと思って、ラーズ様に頼ろうとしていたんです」

ラーズ「はい！俺も出ます！」

ベロニカ「回答早すぎよ。でも、確かに大食いならラーズを連れて行くのが私達の中では一番なのよね。シルビアさんは明日は難しいって言ってたし。私も一位の商品は気になるのよね」

マルティナ「うーん、でも、それだとラーズが……」

ラーズ「マルティナ、何を悩んでいるんだ！俺は一位の商品は特に興味はない！だが、その一位の商品を王様へのお土産にしよう！甘い物好きの王様なら絶対に喜ぶぞ！」

マルティナ「な、なるほど。それは確かにありね……。わかったわ。出ましよう。ただし！私も出るわ。四人ならラーズの担当する量も減るでしょ？」

セーニヤ「まあ！マルティナ様も出てくださるのですか！ありがとうございます！」

ベロニカ「やったわ！これなら一位間違いなしよ！」

ラース「よし！明日はダーハル―ネでスイーツ食べまくりだ！！」

三人「おーー！」

マルティナ「……心配だわ」

136. 新婚旅行5

次の日、ダーハルルーネの町 ステージ上

そこにはコンテストを見るために多くの人が集まっていた

ベロニカ「やっぱり賑わってるわね。ここの人達、皆コンテストに出るか、観戦するかだと思っわ」

セーニヤ「私、負けませんわ！」

マルティナ「ここまで来たら簡単には譲らないわ、勝ちを獲りにいくわよ！」

ラーズ「受付はあそこか。俺がしてこよう」

その後

司会者「それでは今からスイーツ大食いコンテストを始めます！私、実況を務めさせていただきます、ドンという者です。よろしくお願ひします。」

それでは、立候補者達にはこのテーブルで競っていただきます。立候補者の方達どうぞこちらへ」

全員ステージに上がっていく

司会者「こちらの方々は女性三人でのご参加となります。意気込み

の方聞いてもよろしいですか？」

女性陣「大食いなら自信あります！何でも食べますよ！」

司会者「ありがとうございます！これは期待ができますね！次の方々はなんと女性三名、男性一名の混合チームです。意気込みの方聞いてもよろしいですか？」

セーニヤ「甘い物には目がありません。一位絶対に取ってみせますわ！」

司会者「おお！素晴らしいです！応援しています。最後の方は何と男性たった一人でのご参加となっております。これは強者の予感がありますね！意気込みの方聞いてもよろしいですか？」

男「俺の胃袋なら何百人前でも行けるぜ！今日のために好きな甘い物も我慢してきたんだ！負けられねえ」

司会者「ありがとうございます。これは誰が勝つのか予想が全くできません。それでは、早速始めていきましょう！」

まず最初に食べていただくのは、こちらのチョコタルトです。ですが、その量は何と！350個！いきなりハードですよ！それではお願ひします！」

女性陣「一人120個でいくわよ！」

男性「……………」

マルティナ「いきなりあなた達エースには任せられないわ。ここは私とベロニカで全部食べるわ」

ベロニカ「ええ、そうね。私だってペンダントで大人に戻ったんだもの。200個くらいならいけるわ！」

司会者「さあ！各チーム続々と食べていきます。しかし、混合チームの方達は何と！たった二人で食べております。これは今後の温存かー!?期待していきましよう！」

数十分後

司会者「さあ！各チーム全員タルトを食べ終わりました。まだ行けそうですね！次は難関ですよ！これならどうだ！超巨大ケーキです！量は何と！200人前！ここを乗り切れるか!?!」

しばらく経ち

女性陣「うっ……………」

司会者「おっと、女性陣のチームが苦しそうだ！無理しないでくださいね」

マルティナ「私達で大体6割は食べるから、そこからはお願いしていいかしら？」

ラース「おう、無理すんなよ」

ベロニカ「そこまでならいけるわ。後は頼んだわよ」

司会者「おおっと！ここまでたった二人で食べていた混合チームも、作戦を変えてくるか!?しかし、後ろの二人はまだ何も食べていない！このチームの勝ちとなるか!？」

男性「ふう……」

司会者「おおっと、しかし男性の方も負けてはいません。もうケーキは半分ほど無くなっています。やはり強い！意気込みは伊達ではない！」

数十分後

女性陣「ごめんなさい」

司会者「あーっと！ここで、リタイア！ですが、よく頑張りました！皆様、女性陣のチームの方々に拍手を！」

パチパチパチ！

マルティナ「バトンタッチね。お願い」

ラース「ああ、任せておけよ。セーニヤ、行けるな？」

セーニヤ「もちろんですわ、ラース様」

司会者「ここで混合チームはバトンタッチだ！凄いスピードで残りがなくなっていくきます！これは、強い！やはり戦力を温存していたようです！」

男性「負けられん！」

司会者「おお！これを見て男性の方もスピードアップ。こちらも残りがなくなっていく！さあ、これが今後にどう響くか！」

その後

司会者「それでは、最後のメニューとなります！最後はやはりデザート。さっぱりといきましょう！超特大パフェだ！100人前！さらにこれを2つだ！さあ！優勝商品はどちらの手に渡るのでしようか！」

ラース「ここまでくると、もうパフエではないだろ」

セーニヤ「それでは一人で食べていきましよう」

男性「これくらいなら!」

数十分後

男性「……………」

司会者「男性の方、まっすぐ見つめております。これはまずいで
しょうか」

ラース「うめえな、こりゃあ」

セーニヤ「私も美味しくいただいていますわ」

司会者「こちらの二人は余裕の表情で食べております!どうなっ
ているでしょう!これは勝負は決まったか!」

一時間後

ラース「完食だ」

セーニヤ「私も終わりましたわ」

司会者「あーつと！ついに完食!!混合チーム！この二人はやはり強かった!!」

男性「ぐっ……。すまない、リタイアだ」

司会者「これで心が折れてしまったか。残り半分にして断念！しかし、一人でここまで食べるとは素晴らしいです！一人で食べた量なら確実に一位です！ぜひ皆様、こちらの男性の方に大きな拍手を！」

パチパチパチパチ!!

マルティナ「やったわね！流石ラースとセーニヤね。飲み物みたいにあの大きいパフェを食べてたわね」

ベロニカ「あんた達本当どうなってんのよ」

司会者「それでは優勝者の混合チームの方々！代表の方、前にどうぞ」

ラース「俺だな」

司会者「それでは優勝者の混合チームに、商品の最高峰スイーツ盛

り合わせをプレゼントいたします。優勝おめでとうございます！」

大きな箱がラースに渡された

ラース「やったぜ、ありがとな」

司会者「感想の方お聞きしてもよろしいですか？」

ラース「やっぱり最初の温存は大事でしたね。彼女達が頑張ってくれたので、俺達が食べたのは僅かで済みました」

司会者「なんと！あの量を僅かと言いつりました！これは凄い！普段からよく食べていらつしやるのですか？」

ラース「ああ、食べる事は結構好きだからな。色々なものを普段から食べてるんだ」

司会者「それなのにこのお体なんですね。何とも素晴らしい！皆様、こちらの混合チームの方々に拍手をお願いします！それではコンテストはこれにて閉幕となります！多くの皆様、お集まりいただきありがとうございました！」

その後

セーニヤ「ああ、幸せですわ。どれから食べていいか迷っちゃいますわ」

ベロニカ「本当ね。雑誌とかで目にした物も多いわ。夢のような物だと思っていたけど、まさか食べられる時が来るなんて」

マルティナ「私達もいくつかもらうわね。城の方に持ち帰るわ」

ラース「えつと… マルティナ、もしかして、俺の分もあったりとか…」

マルティナ「え？何を言っているの？あるわけないでしょ。私達はここでたくさん食べたじゃない。むしろ、今日からしばらくは禁止よ」

ラース「……………」

ラースはそれを聞き、肩を落とした

セーニヤ「あ、ラース様、気を落とさないでください」

ベロニカ「そんなに食べる事に拘っていると本当に太るわよ」

ラース「美味しいものは誰だって食べたいだろ!!」

マルティナ「この数個でいいわ。残りはセーニヤ達で食べてちょうだい」

セーニヤ「ありがとうございます、マルティナ様」

宿

ラーズ「ふっ……。ふっ……」

ラーズは筋トレをしている

コンコン

マルティナ「ラーズ、いる？入ってもいいかしら？」

ラーズ「ああ、マルティナか。大丈夫だぜ」

ガチャ

マルティナ「キャツ！ちよつと！大丈夫じゃないわよ！なんで上を着てないの！」

マルティナはすぐに後ろを向いた

ラーズ「いや、今筋トレしてたんだよ。別に俺の裸なんて何度か見た事あるだろ」

マルティナ「少しは躊躇いなさい！もう！上を早く着て！」

ラーズ「わかったよ。かわいいなあ、マルティナは。ほら、着たぜ」

マルティナ「全く！ああ、そうだったわ。今、前に行ったパフェの店の店長さんが来てるのよ。コンテスト見てたらしいわよ。ラーズの事呼んでるわ」

宿屋前

店長「おい、ラーズ！見たぜ、コンテスト。ちやっかり優勝しやがって！しかもあの時の美女の方々と一緒じゃないか！どこまでも羨ましいやつだな！」

ラーズ「何だよ、見てたのか。どうだった？余裕だっただろ？」

店長「ああ、お前の顔が常に憎たらしかったよ。それと最後のパフェ、作ったの俺なんだぜ？気付いてたか？」

セーニヤ「まあ！そうだったのですか!?!色々乗っていたのでわからなかったですわ」

ラーズ「流石に俺も気づかなかったな。美味しいとは思ってたが、まさかお前が作っていたとは」

店長「俺の巨大パフエ、あれが好評なら店でも出そうかと思つてたんだが、あまりの大きさに途中で残していく人が多くてな。もう作るのはやめていたんだ。」

だが、お前達なら食えるんだな！なら、今度来た時あれが食べたかったら事前に俺に連絡くれれば作っておくぜ？」

セーニヤ「まあ！本当ですか！私、ぜひまた食べたいですわ！」

ラーズ「へえ、そりゃあいい。俺も次からは頼もうかな」

店長「そうだ。俺からラーズにプレゼントやるよ。あのパフエを作ってくれたお礼で貰つたんだが、俺には相手がいなくてな。ラーズなら使えるだろ？」

店長はあるチケットをラーズに渡した

その夜

マルティナ「ええ!?ソルティコのリゾートホテル!？」

ベロニカ「そんなの貰つたの!?!いいなー!」

ラーズ「ああ、新婚旅行の最後はここに泊まろうぜ」

セーニヤ「それはとってもいい案だと思います、ラーズ様！」

マルティナ「でもケーキがあるわよ。これはどうするの？」

ベロニカ「それなら私達が一緒に保管しておくわ」

ラーズ「お！それいいな！頼んでもいいか？」

セーニヤ「はい。保管するだけなら増えても問題ありませんので」

マルティナ「それじゃあ甘えちゃうけど、よろしく頼むわね」

ベロニカ「折角の新婚旅行なんだもの！たっぷり楽しんでよ、マルティナさん」

マルティナ「ふふ、ありがとう、ベロニカ」

ラーズ「それじゃあ明日はまたソルティコに行こうか」

137. 新婚旅行6

次の日、ソルティコの町

ラーズ「この前来た時は夜だったが、明るい時のソルティコも綺麗だな」

マルティナ「そうだわ！ねえ、ラーズ。一緒に海で遊びましょう、今度は二人きりで」

ラーズ「え!?!だが、俺泳げねえんだぞ?」

マルティナ「その特訓よ。少くらい泳げるようになっておいた方がいいわよ」

ラーズ「えー……。別に、そこまでしなくてもいいんだがな」

マルティナ「それに、前とは違ってあなたを一人占めできるじゃない」

ラーズ「……………」

ラーズは今の発言に固まっている

マルティナ「あ……………。い、今のは忘れてちようだい」

マルティナは少し恥ずかしがっている

ラース「ハハ、仕方ねえな。かわいいマルティナの願いなら少し頑張るとしますか」

マルティナ「も、もう！忘れてよね！」

砂浜

着替えが終わったラースが先にやってきた

ラース「まあ、着替えの影響で俺の方が早いよな。先に飲み物でも用意しておくか」

しばらくして

ラース「マルティナ、やたらと遅くないか？何かあったのか？」

その後

マルティナ「ごめんなさい。私、夫と一緒にきているので」

マルティナの近くには数人の男達がいた

男達「ええー、そんなの近くにいないじゃん。君みたいな美人さん放つとくやつなんかよりこっちに来なよ、ほら」

そう言つて、一人の男が手を伸ばした時

男「ギャツ！」

男は真横に蹴られ飛んでいった

ラーズ「失礼。俺の妻に何やら虫がたかっているみたいでな。駆除をしないと」

マルティナ「あ、ラーズ！」

男達「え……。あいつすごい速さで飛んでいったぞ。な、何すんだよ！」

ラーズ「あ？てめえら、人の妻に手を出そうとしていながらその言い草は何だ？あいつと同じようにしてやろうか？」

ラーズは男達相手に凄んでいる

男達「ヒツ……」

マルティナ「ちよ、ちよつとラーズ！やめなさい！あまり暴れないで！私は平気だから、あっちに行きましょう」

マルティナは男達の間から出てラーズの手を掴んで戻っていった

ラーズ「チツ……。命拾いしたな、二度と来んじやねえぞ」

その後

マルティナ「もう！ラース！助けてくれたのは嬉しいけど、私だつて何とかできたし、あの人の事本気で蹴り飛ばしたでしょ？」

ラース「あんなやつらにはあれくらいしないと懲りないからな。まあ、死んではいないだろ。知らないけど」

マルティナ「大事になると大変なんだから控えてよね。はい、これ」

マルティナはラースに小さめの板を渡した

ラース「これは板か？何のために持ってきたんだ？」

マルティナ「もちろん泳ぐ練習のためよ。これで海に浮いて練習しましょう」

海

ラース「あ、すげえや。板につかまっていれば浮くんだな」

ラースは板を両手で掴み、体を浮かしていた

マルティナ「それじゃあそこから足を動かして前に進んでみましょう」

ラース「こんな感じか？お…… 少しずつ進めるんだな」

マルティナ「そうそう、そんな感じよ。そこから顔を水に入れて、苦しくなったら顔を上げてみて」

ラース「……………」

マルティナ「ちよ、ちよつと？長くないかしら？大丈夫？」

ラース「ふう。いやあ、落ち着いて海の中を見る機会なんてムウレア以外なかったから、つい見とれちゃったぜ」

マルティナ「あ、なるほどね。確かに海の中を見る機会なんて、ほとんどなかったものね」

数時間後

ラースは何も無しで海に浮こうとしている

マルティナ「平気よ、落ち着いて。ゆっくりで大丈夫だから、そのまま足と手を動かしてバランスをとってみて」

ラース「よつ……………ほつ……………。すげえ、俺、何も無しで海に浮いてる」

マルティナ「やったわね。苦手を一つ克服できたじゃない」

ライス「ハハ！やった、初めてできたぜ！！あ、やべっ、沈む！」

マルティナ「ああ！力加えないで！沈んじゃうから！ライス！」

浜辺

ライス「ゴホツゴホツ！あーあ、結局溺れかけた」

マルティナ「もう少し力を抜く事が出来れば、泳ぐ事だつてできるようになると思うわよ」

ライス「ただ、腹空いたな。なんか食べようぜ」

マルティナ「そうね。屋台もいろいろ出てるし、そこで何か買って食べましょうか」

その後、焼きそばとたこ焼き、お好み焼きを買った

ライス「全部美味そうだな！マルティナも食べようぜ」

マルティナ「そうね。いただくわ」

ライス「おお！マルティナ、このたこ焼きってやつ美味しいぞ！ほら」

マルティナ「あ、ありがとう。……美味しい！それじゃあ、こっこの焼きそばも分けてあげるわ、はい」

ラーズ「ありがとな。このソースがいい味してるぜ、酒もほしくなるな」

マルティナ「この旅行中、お酒はあまり飲めてないものね。お城に帰ったら色々あるんだし、それまで楽しみにしてましよう」

ラーズ「それもそうだな。あ、たこ焼き最後の一個になっちゃった。マルティナ、ほら」

マルティナ「あら、早いわね。ありがとう」

ラーズ「次はお好み焼きってやつだな！これも楽しみだ！」

マルティナ「そういえば、確かにお腹は出てるようには見えないわね。少し摘んでみてもいいかしら？」

ラーズ「おお、いいぜ。……って痛え痛え。マルティナ、それは皮膚だ」

マルティナ「あ、ごめんなさい。そうね、無駄な肉は少ないわ」

ラース「だから言っただろ！出ていないって！帰ったらグレイグのやつ覚えてろよ。ぶっ飛ばしてやる」

マルティナ「まあまあ、グレイグだって悪気があつたわけじゃないんだから、あまり怒らないであげて」

ラース「まあ…… おかわりが多かつたりしたのは、事実だからな。動いていたからお腹が空いていたと考えるもいいが、食う量が多ければ心配するか」

マルティナ「そうよ。お父様も私が子どもの頃、お母様にお腹がだらしないうって言われてるのを何回か見たわ」

ラース「王様もそうだったのか。まあ、城の飯は美味いからな。それが悪いって事で」

マルティナ「褒めてるのか貶してるのかよくわからないわよ、それ」

夕方、リゾートホテル

ラース「す、すげえ。オーシャンビューってやつだな。景色がよく見えるぜ。こんな立派な場所いいのかよ」

マルティナ「これは想像以上ね。でもとっても素敵だわ。あの店長さんに今度お礼持っていかなくちや」

ラーズ「マルティナ、見ろよ。風呂が外にあつて、海を見ながら入れるぜ」

マルティナ「それはすごいわね。楽しみだわ」

ラーズ「なら、後で一緒に入ろうぜ」

マルティナ「え!? な、何言ってるのよ、ラーズったら」

夕食時

ラーズ「凄い豪華なご飯だな。もしかして俺、いつの間にか城に戻ってたのか?」

ラーズは目の前に用意されたご飯の内容に驚いている

マルティナ「勘違いするのも仕方ないわ。このアワビとかサザエって貝は高級食材なはずよ」

ラーズ「なんかいきなり新婚旅行感が湧いてきたな」

マルティナ「本当ね、少し緊張しちゃうわ」

しばらくして

ライス「マルティナ！この魚、美味いぞ。食べたか？」

マルティナ「それなら私も食べたわ。美味しくてすぐ食べてしまったけど」

ライス「それなら俺の分少しわけてやるよ。ほら」

マルティナ「え!?!（ライスがご飯をあげるの!?!）」

ライス「……今、失礼な事考えてるだろ。俺だって飯くらい分けるからな!」

マルティナ「あ、あら。顔に出ちゃってたかしら。ごめんなさい、初めて見たものだから、つい」

その後、部屋内

マルティナ「結構お腹いっぱいになっちゃったわ」

ライス「俺はまだ入るな。ただ、この旅行では動くよりも食べた方

が多いからな。城に帰ったら訓練の量増やさねえと」

マルティナ「そうね、私も付き合うわ。このままだと私も太っちゃうわ」

ラース「じゃあまた組手やろうな。そろそろ風呂入ろうぜ」

マルティナ「わかったわ。行ってらっしゃい」

ラース「え？来てくれないのか？」

マルティナ「ええ!?!さっきの本気だったの!?!」

ラース「当たり前だろ。なんでそんな嘘つかなきやいけないんだよ。ほら、行こうぜ!」

マルティナ「……わかったわよ。先に入ってて」

しばらくして

ラース「おお!これは綺麗な景色だな」

マルティナ「え、ええ。そうね。星空もすごく綺麗だわ」

ラーズ「…… 何で少し離れてるんだよ」

マルティナ「恥ずかしいのよ！一緒に入ってるんだからいいでしょ」

ラーズ「チエツ…… つまらないな」

その夜

ラーズ「……」

マルティナ「もう、ラーズ。何すねてるのよ」

ラーズ「マルティナと一緒に湯船に入ってくれなかった」

マルティナ「あ、あれは仕方ないでしょ！」

ラーズ「そんなマルティナには罰を執行します！」

マルティナ「キャツ！どうしたのよ、ラーズ」

ラーズ「今日の夜、マルティナは俺の抱き枕です。マルティナはそのまま寝てください」

マルティナ「もう！子どもみたいな事言わないでよ、ラーズ」

ラーズ「たまには俺から甘えたっていいだろ？な？」

マルティナ「知らないと思うけど、朝とかたまに私、あなたの抱き枕にさせられてるんだからね。それで起きれないんだから」

ラーズ「え……。それは知らなかった。無意識かも知れん。悪かったな。だが、それはそれ、これはこれだ」

マルティナ「わかったわよ。明日はお城に帰るんだから、少し早めに起きるわ」

ラーズ「だな。俺もそのつもりだ。おやすみ、マルティナ」

マルティナ「ええ、おやすみ、ラーズ」

ラーズ「(マルティナ、前みたいにもう少し俺に甘えてきてくれよ)」

138. ラースの楽しみ

新婚旅行から帰ってきた次の日

朝食時

デルカダール王「どうじゃ、ラースよ。勝負はわしの勝ちであるよ
うだな」

デルカダール王はラースに誇らしそうにしている

ラース「そんな……。嘘だろ、マルス、ルナ！」

ラースは床に膝をつけ、相当ショックを受けている

マルス「とー、じーじ、じーじ」

ルナ「じーじ！」

マルスとルナはデルカダール王の腕の中で手を伸ばし合っている

マルティナ「一週間でちゃんと言えるようになったのね。すごい
わ、マルス、ルナ」

グレイグ「ラース……。そんなに落ち込む事ないだろう」

ラース「親を一番最初に呼んで欲しかったんだよ！」

デルカダール王「ハツハツハ！わしにもグレイグにもこの数日で随分と懐いてくれた。これからもどんどん成長していくのだぞ」

訓練時

ラーズ「今日はグレイグと二人で教えるぞ！グレイグ、この数日で何を教えたか見せてくれ」

グレイグ「ああ、基礎はもうしつかり固まっているからな。俺は対人で有効な立ち回りを教えたんだ。お前達、ペアで昨日までの復習をやるんだ。それを見ていこう」

兵士達「はい！」

その後、ラーズはペアの動きを見ていた

ラーズ「なるほどな、対人特化か。俺は魔物と人両方だからな。それに、グレイグは耐えて攻め込む教え方なんだな。

俺は避けたり相手の力を利用する立ち回りだ。やはり戦い方が違うと教える事も変わるな。なあ、グレイグ。もし時間ができた時は俺に言ってくれ。その時はグレイグが兵士達を教えるんだ。

兵士達にもグレイグの教える戦い方は勉強になるはずだ。様々な戦い方を学べば、自分なりの戦い方も見つけやすいだろう」

グレイグ「なるほどな、わかった。だが、あまり時間は作れないぞ

？」

ラーズ「そこは無理しなくて構わないぞ。それはわかってる事だからな」

訓練も終わって少しした後、大広間

外に出ているこうとしているラーズをバンが見つけた

バン「あれ、師匠？どうされたんですか？見回りは今日無いですよ？」

ラーズ「ああ、何でもないぜ。ただ町の様子を見に行くだけだ。実は、マルティナや王様に民達の様子を伝えるのも、俺の仕事だからな」

デルカダール城下町

お菓子屋

女性「いらつしやいませ！あ、ラーズ様。何だか最近顔を見なかったので心配だったんです。どうされたんですか？」

ラーズ「すまないな。実はマルティナと新婚旅行に行っていたんだ。だからこつちに来れなかったんだ。あ、これ新作のお菓子なのか？」

ラーズは店員と仲良さそうに話している

女性「まあ！それはよかったですね！それと、こちらは昨日から売り出した新商品なんです。よかったら、ラーズ様も一口食べてみてください」

ラーズ「お、いいのか？ありがとな。どれ…… おお。優しいバターの味がほんのり伝わってくるな。これは売れると思うぜ」

女性「本当ですか！ありがとうございます。よろしければ、ラーズ様オススメと書いてもいいですか？」

ラーズ「ハハハ、俺なんかの名前で効果あるのかよ」

女性「あら、知らないんですか？ラーズ様はよく城下町に来て私達ともよくお話されるので、優しいお方だって住民からは人気なんですよ？」

ラーズ「マジか。それは知らなかったな。そう言えば、酒場のマスターも俺の行きつけの店だって知られてから、売り上げ上がったとか言ってたな」

女性「あ！そのお店なら私も知ってますよ！結構有名になってきたみたいです」

ラーズ「そんな変わるものなのか？まあ、売り上げが上がるなら何

でもいいか。俺はそうやって皆が笑ってくれるなら、それでいいんだ。すまなかつたな、長々と話して。仕事頑張れよ」

女性「はい！またお待ちしてまーす」

噴水前

子ども達「あ！ラーズ様だー！ねえ、また魔法出してー」

周りで遊んでいた子ども達がラーズを見つけるとすぐに駆け寄ってきた

ラーズ「お、来たな、ちびっ子。今日はどれがいい？」

男の子「俺、イオのやつ！パチパチしててカツコいいじゃん！」

女の子「私はヒヤドがいいわ！綺麗なもの」

男の子「やっぱりメラでしょ！俺も打てないかなー」

母親「いつもすみません、ラーズ様。この子ったらメラを打ちた
いってずっと言ってる」

ラーズ「いえいえ、構いませんよ。どれ、それなら見てろよ？俺は
な、こんな事出来ちゃうんだぜ？」

そう言う手と手に小さくイオの魔法を出し、それを凍らせた

男子「えー！すっげー！！氷の中で爆発が起こってる！」

女子「すっごーい！こんなの初めて見た！キラキラしてる！」

二人はラースの手のひらに夢中になっている

ラース「これは君達にプレゼントだな。ほら、二人分だ」

男子「ありがとう、ラース様！これ溶けないの？」

女子「中の爆発はどうするの？」

ラース「一日は爆発が続くけど、次の日には爆発しなくなってると思うな。ただ、その後は氷も溶けちゃうからな。明日には親に渡しておくんだぞ？」

二人「ありがとう！」

男子「なあなあ、ラース様！俺も！」

ラース「もちろん忘れてないぞ。ほら」

レースは手のひらに炎を出した

男の子「カッコイイー！あれもやってよ。たくさん出すやつ」

レース「危ないから離れてろよ？…：…これだろ？」

そういうと、レースの周りに火の玉がたくさん出来上がった

男の子「うわー！レース様ってすごいや！」

レース「へへ、ありがとな」

カフェ内

女性「こちら、ブラックコーヒーのホットになります」

レース「ああ、ありがとな」

男性「あ、レース様じゃないですか」

レース「おお、俺の事知ってるのか？」

男性「はい。有名ですからね。こんな所でどうされたんですか？もしかして、レース様も一息いれにきたんですか？」

ラース「ああ、まあそんな所だ。ずっと城にこもっていたら固くなっちゃうからな。それに、住民達の様子や町の変化もわからない。だから、俺はこうやって町によく休みにきてるんだ」

男性「やはり優しい方ですね、ラース様。私達の事までしっかり考えてくださるんですね」

ラース「いやいや、俺の休むための口実に使ってるだけだぜ？あまり美化しすぎるなよな」

男性「そんな事ありませんよ。よく兵士達と見回りに来る時も、今もラース様は優しそうな顔をしていると皆、言っていますよ」

ラース「そうか？…… そうかもしれないな」

その後、裏通りの階段近くで

婆さん「ああ！」ドサア！

お婆さんが段差につまづいて転び、持っていたものを落としてしまった

ラース「婆さん、大丈夫か!?怪我はあるか？」

婆さん「ああ、ありがとうございます。すみませんね、わたしや足が弱くてね」

ラース「折角の花が散らばっちゃったな。集めるの手伝うぜ。この袋に入ればいいか？」

婆さん「ええ、ありがとう」

ラース「これで全部だな。さあ、婆さん。おぶるから俺に乗ってくれ。この花を届ける場所まで連れていくぜ」

婆さん「若い方、そこまでしてくれるのかい？優しいねえ。それじゃあお願いします」

花屋

婆さん「ここが私のお店です。わざわざありがとうございます」

ラース「いや、平気だぜ。色んな花があるんだな」

婆さん「何かお礼にお花をお造りしますよ」

ラース「そうだな……。女性に花を贈る時ってどんなやつが好まれるんだ？」

婆さん「あら、想い人でもいるのかい？」

ラーズ「いや、どうせなら妻に贈ろうと思ってな。何でも似合いそうだが、あまり適当なのも悪いからな」

婆さん「あら、素敵ですねえ。それならバラなんかが人気ですが、私はこっちもオススメしたいですね。その奥様を大切になさっているなら、尚の事オススメします」

お婆さんは一つの鉢植えを出した

ラーズ「いろんな色の花だな。これはなんていう花なんだ？」

婆さん「カランコエといいます。花言葉は、あなたを守る。葉が雲のような形で、花も小さくかわいらしいんです」

ラーズ「これは確かにいいな。白色の花でもらっていいか？」

婆さん「はい。助けてくれたんですもの。これくらいのお礼はさせてください。待っていてくださいね、今ラッピングしますので」

少しして

婆さん「はい、こちらになります。きつと喜んでもらえますよ」

ラーズ「ありがとな、婆さん」

その後

マルティナとラーズの部屋

ラーズ「マルティナ、帰ったぞ」

マルティナ「あら、ラーズ。また城を抜けて町の方に行ってたのね。あら？その花は？」

ラーズ「まあ何にもない日だが、マルティナにこの花をプレゼントだ」

マルティナ「え？私に？とっても可愛い花ね。素敵だわ。綺麗にラッピングもされてるし、これを買に行ってたの？」

ラーズ「いや、婆さんを助けたらその人が花屋の人でな。お礼に造ってくれたんだ。その花の名前はカランコエ。花言葉は、あなたを守る。どうだ？俺みたいだろ？」

マルティナ「あら……。そんな意味があったのね。うふふ、確かにラーズみたいだわ。ありがとう！大切に飾るわ。あ、そうだ！廊下に置かれてるテーブルに飾ってもいいかしら？」

ラース「俺は構わないぞ。マルティナが飾りたい場所に飾つてくれ」

マルティナ「そうするわ。そこなら皆が眺める事もできるわね」

139. バンとラース

それから一週間後、デルカダール城

訓練場

ラース「え？ 今日マーズが風邪ひいたのか。わかった、連絡ありがとう。だが、代わりに今日の見回り誰か変わってやってくれ。何か町に用事があるやつでもいいぞ」

バン「あ!!じゃあ師匠。俺がマーズの代わりに見回りに行きますよ。町に用事もあるんで丁度いいので」

ラース「おう、わかった。それじゃあいつもの時間にベグルと城門前で待っていてくれ」

その後、城門前

バン「あ！師匠！俺達はもう準備終わりました」

ベグル「おい、バン。まだ時間には早いんだから、ラース將軍を焦らせるなよ」

ラース「ハハハ！心遣いありがとう、ベグル。俺は構わないぞ。いつもより早い、それなら向かうか」

デルカダール城下町

三人で見回りをしていると、男性がラースに話しかけてきた

男性「あ！ラース様、今日は見回りですか？この前お喋りできてよかったです。俺、これからラース様行きつけの酒場に行くんですよ」

ラース「おお、そうなのか。あそこは酒のつまみも美味いからな。楽しみにしてるといいぞ。だが、あまり早い段階から飲み過ぎで暴れたりするなよ？大変なんだからな」

男性「俺はそこまで飲まないんで大丈夫です。つまみ楽しみにしますね！それでは、お仕事頑張ってください」

ラース「おう、ありがとな」

ベグル「ラース將軍と来ると、いつもいろんな人に話しかけられるんですよ。皆、ラース將軍の事気に入ってるみたいですよ」

ラース「何でだろうな？俺、それなりに怖がる人とかいてもおかしくない体なんだがな」

バン「それはもう師匠が誰にでも優しく接するからですよ。明るいですし、基本的に温厚じゃないですか」

ラーズ「基本ってなんだよ。俺はそこまで優しく接してる人、いないんだがな。子ども達くらいだろ」

バン「いえ、気にしないでください（前、怒った時に俺殺されたからだけど）」

ベグル「まあ、町に王族の関係の人がよく来てる事なんて今までなかったんですよ。たまにグレイグ將軍が来る時も、いつも囲まれてましたからね」

バン「あれは凄かったよな。グレイグ將軍の慌てる反応も面白かった。ただ、見回りだけですごい時間がかかったのは困ったものだったけど」

その後

ラーズ「まあ、こんなもんだな。それじゃあ後は城に戻るだけだな。あ、バン。町に用事あったんだろ？行ってきていいぜ」

バン「あ、本当ですか？なら、師匠とベグルも来てくださいよ」

ラーズ「ん？行ってもいいのか？俺は構わないが、ベグルは用事はないか？」

ベグル「悪い、バン。俺、この後ロベルト達と少し練習するんだ。俺

は先に戻ってます」

ラーズ「お、いい心がけだな。俺も向かえたら行こう。それじゃあな、ベグル。見回り、お疲れ様」

ベグル「はい。ありがとうございます」

バン「それじゃあ案内します。あっちのカフェに用事があった」

ラーズ「お前がカフェ？不思議な組み合わせだな」

カフェ

女性「いらつしやいませ。あ！バンさん。また来てくださったんですね。あら？確かラーズ様ですよ。前も来てくださいましたね」

バン「よお、メグ。また顔出しにきたぜ。師匠の事知ってたのか？」

ラーズ「俺もここには何度か来た事あるからな。覚えられていたとは」

メグ「あ、はい。何となくですが覚えてました」

バン「怪我はあれからもう平気なのか？記憶はどうだ？何か思い出せそうか？」

ラース「(怪我？記憶?)」

メグ「怪我の方はもうなんとも無くなりました。記憶は……まだあまり戻ってないですね。仕方ないですよね、戻る可能性は低いと言われましたから」

バン「そうか……。あ、師匠もブラックコーヒーでいいですか？」

ラース「ああ、俺も必ず頼んでるからな。二人いるからこのパウンドケーキもお願いしていいか？」

メグ「はい。ありがとうございます。それではお待ちください」

バン「……………」

バンはメグを黙って見つめている

ラース「なるほどな。あれがお前の彼女さんか」

バン「え……。俺、何も言ってないですよ？もしかして、会話だけでわかったんですか？」

ラース「当たり前前だろ？それに、何よりもその顔だ。今自分がどんな顔してるかわかってねえだろ？大事なものを見る男の顔だぜ」

バン「ハハハ……。師匠はすげえや。はい、あのメグって人が、俺が前に話した彼女だった人です」

ラース「だった？」

バン「はい。前にお話しした時はまだ眠ってたんですけど、二週間ほど前に目を覚ましたんです。俺はすぐに向かったんです。でも……メグは怪我とショックの関係で、ここ数年間の記憶が飛んでるんです。だから、俺の事は覚えてなくて」

ラース「そうだったのか……。だが、今は覚えられてるんだな」

バン「俺はその時ショックだったんですけど、メグに「あなたを見ていると、何か不思議な感じがします。それに、私の事何か知ってるんですか？よかったら教えてください」と言われ、俺が様子を見ていたんです」

ラース「だが、彼女では無くなっているという事か」

バン「そうなんです。……………俺、すっごくつらいですし、苦しいです。ただ、きつかけは全て俺です。俺のせいなんです。俺が弱いくせに、調子にのった罰なんですよ、これは。だから、俺はこうやって彼女を見守るだけでもう、いいんです。彼女に例え戻れなくても……………」

メグ「あ、お待たせしました。ブラックコーヒー二つとパウンドケーキになります」

バン「……ありがとな、メグ」

ラース「……………」

ラースは黙ってバンを見ている

バン「師匠？」

ラース「ハアー。だらしねえ男になったもんだな、バン。いつの間にそんな弱気な男になってたんだ？俺は、お前をそんな風に育てた覚えはない。」

そんな気持ちでいるなら、俺はもうお前に教える事は何も無い。ここからは周りと同じ扱いに戻す」

バン「!?え！そんな！どうして!?俺、何かしましたか？」

ライス「あ？何でも聞かねえとわからねえのかよ？ふざけんじゃねえぞ。俺が育てた兵士達にこんなやつはいねえ。

お前がその程度だったのなら、お前はもうあの中にいなくて平気だ。兵士なんかやめちまえ」

ライスは冷たい顔で言い切った

バン「そ……そんな…… 師匠、どうして…… ウツ！」

ドスン！

バンはライスに床に倒された

ライス「こんな弱つちい弟子なんか、俺にはいらねえ。二度と師匠と呼ぶんじゃねえぞ」

ライスはケーキとコーヒーをすぐに食べると、金を少し置き出ていった

バン「…………… 師匠」

次の日、訓練場

訓練終了後

バン「あの…… ライス將軍……」

バンはライスにゆっくりと話しかけた

ラーズ「あ？まだお前ここにいたのかよ。やめていいって言っただろうが」

ラーズはバンを一瞥しながら言った

兵士達「!?」

他の人達はラーズの対応に驚いている

バン「……師匠は……師匠は、俺がどれだけつらいか何もわからねえだろ!!俺だって!俺だって、あんな風になりたくなかったんだ!!でも、俺のせいだから……俺があいつを傷つけたから。

俺が苦しめばいいんです!そうすれば、いつか……きっと……。

そんな事もわからない師匠なんか、俺だって願ひ下げです!!俺、ここを辞めます!!」

バンはラーズに向かって怒鳴りながら宣言した

ロベルト「な!?バン!お前、何言ってるんだよ!」

ラーズ「おお。こんな弱つちいやつなんか俺の育てた兵士にはいないからな。さっさと出て行け」

ダバン「ラーズ將軍!」

バン「くっ……」ダッ!

バンは走り去っていった

ガザル「あ！バン!! 待てよ！」

兵士数人も追いかける

ロベルト「ラーズ將軍、バンと何があっただんですか？」

ラーズ「バン？誰だ、そいつ。知らねえ名だ。ほら、今日の訓練は終わったぞ。解散するなり、残るなりしろよ。悪いが、俺は今日もうここに来れねえからな」

次の日、バンの姿は城からいなくなっていた

140. メグとバン

朝食時

マルティナ「ええ!?バンがいなくなった!」

グレイグ「そうなんです、姫様。兵士から聞いた話だと、昨夜のうちにはなくなったそうです。ラーズ、何か知らないのか?」

ラーズ「……俺は弟子のバンなら知っているが、この城にいるバンの事は何も知らねえ」

ラーズは目を合わせず淡々と答えた

デルカダール王「何かあったのか、ラーズよ。兵士達が皆戸惑っているぞ」

ラーズ「弱いやつが嫌な事から逃げ出しただけです。俺はそんなやつを止める気などありません。兵士達の混乱は鎮めておきます」

マルティナ「……ラーズ」

マルティナはラーズを心配そうに見つめている

訓練場

ラーズ「よし、全員揃ってるな。訓練始めるぞ」

ギバ「待つてくださいいよ、ラーズ將軍。バンがいなくなっただんですよ？」

ラーズ「俺には関係ないな」

ロベルト「バンから少し聞きました。俺も、ラーズ將軍と同意見です。あいつが、あんなに情けないやつだとは思いませんでした」

ラーズ「そうか。お前らは嫌な事があつても、すぐに諦めたりするんじゃないぞ。逃げたって何も変わらないんだからな。それじゃあ、ペアになれ」

訓練終了後、マルティナとラーズの部屋

ラーズは部屋の中にある机からあるものを探している

ラーズ「ええっと、確かここに……。あつた。これだな」

しばらくして、カフェ

カラン

メグ「いらつしやいませ。あ、ラーズ様。昨日はどうされたんですか？もしかして、美味しくありませんでしたかね？」

ラース「いや、何でもないんだ。ケーキは美味しかったぞ。昨日はすまなかったな。お詫びにこのチケットをやるよ。よかったら、誰か誘って行ってみてくれ」

メグ「まあ、私にですか？しかもこれ、シルビアさんのサーカスのチケット！あれ？……私、前にも誰かに誘われたような……」

ラース「どうした？大丈夫か？」

メグ「いえ、気にしないでください。こんな高価なもの、もらってもいいんですか？」

ラース「構わないぜ。ただ、俺があげたとかは城の周りの人に言わないでくれ。変な噂立てられても困るからな。それに、俺はシルビアとは友達でな。俺の事を言えば直接話せると思うぜ。それじゃあな」

メグ「あ、ありがとうございます！ラース様」

その頃、バンは町の隅でうずくまっていた

バン「どうしよう……。俺、師匠に……。いや、師匠だつてなんで突然……。今日もカフェ行くか」

カフェ

カラン

メグ「いらっしやいませ。あ、バンさん。丁度よかったです」

バン「どうした？メグ。俺に何か用事か？」

メグ「実は私、シルビアさんのサーカスのチケットを手に入れました。場所はソルティコみたいです。よかったら、今度一緒に行きませんか？」

メグは笑顔でチケットをバンに見せる

バン「!?(前と…同じ…ソルティコ)」

メグ「あれ？バンさん？どうかしましたか？」

バン「あ、ああ、平気だ。いいな、俺も行きたい。一緒に行こうぜ」

メグ「わあ、嬉しいです。私、このサーカスの日なら空いています。バンさんはどうですか？」

バン「俺もその日は大丈夫だぜ。それじゃあその日にしよう」

メグ「楽しみにしてますね！」

バン「ああ（こんな……偶然が）」

一週間後

バンは見回りに来る兵士達から隠れるように生活していた

バン「(城の皆に会いづらい。コソコソして、俺何やってんだろ)」

カフェ

メグ「あ！バンさん。お待ちせしました。それではソルティコに行きましょう」

バン「ああ、行こうか」

ソルティアナ海岸

砂浜に到着すると、メグが頭を抱え始めた

メグ「うつ……。頭が……。あれ？私……。前にもここに……」

バン「メグ！大丈夫か!?痛むか?」

メグ「あ、ああ……。何か思い出せそう……」

バン「無理しなくていい。海岸で少し休むぞ」

バンはメグを支えながら歩いていく

しばらくして

メグ「ありがとうございます、バンさん。少し思い出しました。私、一年ほど前、ここに誰かと来た記憶があります。男の方だったような気がするんですが……。まだ、ぼんやりとしか思い出せませんね」

バン「……。そうか、ゆっくりでいいんだ。思い出していけばいい」

その時

ザバア！

ギイイイ！ギョギョギョギョ！

海から魔物の群れがあらわれた

メグ「キヤア！魔物!?海から来るなんて！」

バン「メグ!!俺の後ろに下がっていてくれ。俺が倒してみせる！」

メグ「バンさん!!あ……。ああ……。うううううー！」

メグはまた頭を抱え始めた

バン「メグ!!? どうした!!?」

魔物「バギクロス!」

魔物はメグの周りに暴風を発生させた

メグ「キャアアアー!」

メグは竜巻に飛ばされそうになっている

バン「あ!しまった!(俺は... また繰り返すのか... ? 同じ過ちを...。そんな事、嫌だ!絶対に!!)」

バンは自ら竜巻の中に入った

バン「メグー!!」パシッ!

飛ばされそうなメグをバンが掴み、抱きしめる

バン「大丈夫だ。メグは俺が守ってみせる。もう、君を二度と傷つけないから!」

バンは竜巻から離れた

メグ「バンさん... ありがとう」

バン「メグ、離れてるんだ。俺は、こんなやつらに負けない! しんくうげり!」

魔物「ギイイー……」ジュワー

メグ「バン……」メグは気絶した

バン「てめえら。絶対に許さないからな!!」

その後、ソルティコの宿

メグ「ん……。ここは……？」

バン「メグ!!よかった、目を覚ましたな。覚えてるか？」

メグ「……」

メグは少しボーツとしている

バン「メグ？」

メグ「そうだね。全部……思い出した。私は、バンと一緒にここにきて、あの時も魔物に襲われた。バンが戦ってくれたけど、私が鈍臭いせいで、私がやられたんだった」

バン「メグ!!記憶が……」

メグ「とつても怖かった……痛かった……。でも、最後はバンが私を抱きしめて「大丈夫だ」と言ってくれた。私、それにすっごく安心したんだったわ」

バン「……………」

メグ「えへへ、私またバンに助けて貰っちゃった。しかも、今度はバンもすっごく強かった。いつのまにかそんなに強くなってたんだね。流石、お城の兵士さんだね」

メグは笑っている

バン「……………すまなかつた！メグ!!俺が……あの時、弱かったばかりに……お前に苦しい思いも、痛い思いも、怖い思いもさせた!!」

バンはメグに思いっきり頭を下げた

メグ「え!?!えええ!?!そ、そんな謝らないでよ、バン!私だって、逃げるのが遅くてあなたにたくさん迷惑をかけた。バンは悪くないよ」

バン「あの時の俺はすげえ馬鹿だったんだ。だが、もうそんな俺はいねえ!!俺は、あの日からずっと強くなった!!」

メグ「たしかにバンは強くなってたわ。それに、思い出したの。私がああなたの恋人だった事を」

バン「うっ……うっ……。俺……メグの記憶が無くなった時……前みたいなの恋人の関係は諦めたんだ。俺が……弱いから、こうなったんだと。」

こうなったのは俺のせい。せめてもの償いとして、メグの記憶が戻るまで見守ってしようと決めていた。

でも、俺は……逃げてたんだな。記憶が戻ってほしいと思いつつ、戻った時の事が怖くて、戻す方法を探そうとしなかった。俺らしくもなく弱気になって、勝手にいろいろ決めつけて、現実から逃げたんだ。そんな事したって、何も変わらないのに。

……そっか。だから、師匠もあんな事を……

メグ「私は記憶が無くても、あなたをどこかで覚えてた。だけど別の人な感じがしたのは、多分違いがわかってたんじゃないかな。これはバンじゃないのかもって」

バン「俺、やっぱり馬鹿だった。何もわかつちやいなかった。師匠の事も、メグの事も。何より、俺自身を。」

俺、師匠と約束したんだった。お前を守るためなら、強くなって、どんなにつらい事でもついていくって。

この約束すら守れてない。そりゃあ師匠も怒るし、呆れるよな。ハハ……」

バンはガツクリと肩を落とし、自分に呆れている

メグ「バンはその師匠さんと喧嘩したの？」

バン「ああ。俺が何もわかってなかったのに、勝手に怒鳴って城を出てきたんだ。本当、取り返しをつかない事をした」

メグ「…………… それ、本当に取り返しをつかない事？」

バン「え？」

バンはメグを見る

メグ「私、よく知らないけど、この数年の間バンはその師匠さんにたくさん教わっていたんでしょ？師匠さんもきつと、本当に見捨ててないと思う。だって、バンはあんなに強くなってた。」

そこまでしてくれた師匠さんなら、あなたを信頼している人だと思うの。そんな人が簡単に見捨てたりはしないと思うわ。」

酷い言葉を掛けられたかもしれないけど、もしかしたら心のどこかでは戻ってきてくれる事を待ってるかもしれないよ？」

バン「でも……………」

メグ「もう！何弱気になってるの！喧嘩した時は、まず謝るの。バンは今、自分の悪い所をわかってる。相手がどう感じたかもわかって

る。それを相手に伝えるの。

伝えなきゃ何も伝わらないし、始まりもしないわ。何もしないよりも、試してみても失敗した方がいいわよ。それに、前のバンはそうやってきたじゃない。私は知ってるわよ」

バン「メグ……。ハハ、そうだったな。悪い、どうやらまた弱くなっていたみたいだ。情けなくてごめんな？俺、決めた。明日、城に戻って師匠と話してくる」

メグ「そうよ！それでこそバンだわ」

バン「ありがとな、メグ。俺に勇気を、励ましをくれて。やっぱりメグは最高だな！

俺は、ずっとお前に言いたかった事があるんだ。怪我で記憶が無くなったから言う機会は無くなったが、今ならお前に誓える！」

メグ「え……？バン？」

バン「俺は、もう二度と、お前に痛い思いなんかさせねえ。怖い思いもさせねえ。俺が全部守ってやる。そのために強くなった！お前の側で守ってやれるように」

バンはメグを抱きしめる

メグ「……バン」

バン「俺とずっと一緒に未来を歩いてください」

メグ「うん……。私も、バンがいるなら……。何も怖くないよ」

バン「……………いいのか……………？俺は、お前を守れなかった。記憶まで失うほどの怪我をおわせた。そんな俺を……………許してくれるのか？」

メグ「だって、記憶が無い時も、記憶を取り戻して目を覚ました時もどっちにもバンがいた。私の事、見てて守ってくれたんだよね？だから、許すも何もないよ。ありがとう、バン。私、幸せ者だよ」

バン「メグ……。俺も今とっても幸せだ」

しばらく二人で抱きしめ合っていた

メグ「あ……………。今って何時かしら？」

バン「ん？今は夜になって結構経つがどうした？」

メグ「私達、ここにサーカス見に来たんだったわ」

バン「あ………。忘れてた。ま、まあメグが記憶も戻ったし、俺もたくさん気づいた事がある。サーカスは残念だったけど、代わり的大眼睛なものは得られたじゃないか」

メグ「……。そうね。また今度にしましょう。これをくれたラー
ス様には悪いけど」

バン「え!!?師匠がこのチケットくれたの!?!」

メグ「あ……。言ってなかったわね。そうなの。ラーズ様が先週、急にこのチケットを二人分くれたの。誰かと行ってきなつて。というより、師匠ってラーズ様の事だったの!?!」

バン「……。師匠、もしかして」

メグ「ふふっ、どうやらお見通しみたいよ?」

バン「流石すぎて言葉が出ないよ。そっか……。最初から、師匠は

全部わかって……」

メグ「仲直りできるといいわね。どうやら、心配はあまりしなくて
もよさそうだけど」

バン「ああ、ただメグ。俺、多分しばらくは会えなくなる」

メグ「え? どうして? お仕事忙しくなるの?」

バン「いや……。地獄を見るから……」

メグ「??よくわからないけど、頑張っつてね」

141. 謝罪

次の日、デルカダール城

バンの部屋

ガチャ

バンが部屋に入ると中にはラースが待ち構えていた

ラース「ん？何だ、お前？（そろそろだと思ってたよ）」

バン「し、ししよ……。ラース將軍！」

ラース「何しに来やがった。辞めたんじやなかったのかよ」

バン「ラース將軍……。俺、間違っていました。嫌な現実から目を背けて……。逃げていました。そんな事したって、何も変わらないのに。メグの事を守るとか言っておきながら、弱気になって……。ラース將軍との約束も守れてませんでした」

ラース「何が言いたい」

バン「俺、もう逃げません!!途中で諦めたりなんかしません!!俺は、またあいつの隣に居続けたいんです。これからも、一緒に笑っていきます」

そのために、強くなりに戻ってきました!!どうか、もう一度、俺に強さを教えてください!!」

バンは土下座している

ラース「……………」

バン「俺の心は、師匠とメグに捧げました。師匠に、どこまでもついていきます。どうか、弱い俺を、また弟子として鍛えてください!お願いします!!」

バンはラースの目をはつきりと見ている

ラース「……………ふ。ハハハハ!やっと元のバンに戻りやがったか。そうだ、その目だ。現実を見て、覚悟し、負けぬ心を現したその強い目だ。お前のその目を、俺は待ってた。あんなに弱いお前なんか知らなかったからな。おかえり、バン」

バン「師匠……………!ありがとうございます。俺、馬鹿だから何もわかってなかったんです。何もわかってなかったのは俺の方なのに、師匠を馬鹿にしてごめんなさい!」

ラース「俺も少しハツパをかけすぎたな。悪かった。だが、お前なら戻ってきてくれると信じていた」

バン「やっぱり全部お見通しだったんですね。あのチケットも、メ

グの事も。俺の心の中も」

ラース「何だ、気づいたのかよ。そう言われると恥ずかしいな。それで？どうだったんだよ」

バン「メグの記憶は全部戻りました。俺はそこでメグに励まされ、自分のバカさに、師匠の思いに気づけたんです。それと、メグと生涯一緒に歩いて行く事を約束しました」

ラース「ハハ！そこまで行ったのかよ。それは想定外だ。まあ、よかったじゃないか、バン」

バン「はい！師匠には感謝してもきれないほど感謝してます！今日からまたお願いします！」

ラース「これで謝罪は終わりか？」

バン「はい」

ラース「まだ足りないよなあ？」

バン「え……。と言うと...？」

ラーズ「謝罪って何で書くか知ってるか？罪を謝るんだ。そう、お前は罪を犯した。罪には、何が必要だ？」

ラーズはニコニコしている

バン「…… あ、アハハ…… 罰……… ですかね」

バンはだんだん顔が青くなっていく

ラーズ「よくわかってるじゃないか、バン。つまり、わかってるな？」

バン「あ…… あの…… 何でそんなに笑顔なんですかね？（やっばりこうなるのかな）」

ラーズ「いやー、今日の訓練は楽しみだなあ？今までで一番きつーいやつにしてやろう」

バン「わ…… わあー、俺も…… 楽しみ……… （メグ、次会うのは命の大樹かもしれない）」

バンの目からは涙が出そうになっている

その後、訓練場

ラーズ「今日の訓練はこれで終わりだ。各自、できなかつた所はまた覚えておけよ！解散！」

バン「……………」

隅にはボロ雑巾のようなバンが倒れていた

ギバ「あれ、生きてるのか？というか、腕が変な方向向いてないか？」

ロベルト「さつきから動いてない。おい！医療部屋に連れて行くぞ！」

ベグル「俺、バンの訓練、見てるだけで死にそんな気分になったぜ」

ガザル「つまり、バンはもう……」

マルティナとラーズの部屋

ラーズ「特訓終わったぜ」

マルティナ「ラーズ、お疲れ様。よかったわね、バンが戻ってきてくれて」

ラーズ「また手間がかかるぜ。お？ルナ、お絵かきか？」

ルナ「かー」

マルス「とー、とー。あー」

マルスはラースに手を伸ばしている

ラース「マルスは俺見るとすぐに抱っこをねだるな。マルティナの方がいいだろうに」

マルティナ「そんな事ないわよ。ラースだって上手だわ。さつきグレイグがマルスに車にさせられてたのよ」

ラース「ハハハ！でも、グレイグ喜んでただろ？あんな見た目して、子ども好きだからな」

マルティナ「そう言えば、明日ラースはお休みよね。また町の方に行くの？」

ラース「ああ、そうだな。それとイシの村に行つてこようと思つてるんだ。何か用事か？」

マルティナ「それなら尚更よかつたわ。マルスとルナを、外に連れて行つてほしくて。最近窓からよく外を見てるから、偶にはお城から出してあげないと。バルコニーだけじゃ限界だわ」

ラース「たしかにそうだな。イレブンにも見せにいこう。よし、マルス、ルナ。明日は父さんと一緒にお出かけだぞ」

142. カミユの悩み

次の日、デルカダール城下町

女性「まあ、この子達がマルティナ様達の子どもなんですね。かわいらしいですね」

ラース「ハハ、ありがとうございます」

男性「この頃の年齢はまだまだ目が離せないですよね」

ラース「そうなんです。最近何でも興味を持って動き回るんですよ。少し目を離しただけでも大変です」

ラースは周りの人達の対応に追われていた

その後、道中

ラース「ふう、大変だった。ほら、マルス、ルナ。外の空気はどうだ？綺麗だろ？父さん達が守った世界だぞ」

イシの村、イレブンの家前

コンコン

イレブン「はい」

ガチャ

イレブン「あ！リース！」

リース「よお、イレブン。今日は休みでな、この村に遊びにきたんだ」

イレブン「よかったよ、昨日カミュ達も来ててね。この後お城に行こうって話をしてたんだ」

リース「おお、それは危なかったな。あやうく入れ違いになる所だった」

イレブン「どうぞ、入って。今から遅めの朝食なんだ」

イレブンの家

ペルラ「おや、リース様。久しぶりです。子ども達もいるじゃないですか。子ども達も出してやってください。相手しますよ」

マヤ「あれ!? 兄ちゃんだ！久しぶり！子ども達もいるじゃん！」

カミュ「げ。また面倒なやつが突然きやがった」

リース「やあ、マヤちゃん。久しぶりだな。カミュ？喧嘩なら大歓

迎だ。返り討ちにしてやるから表でようか」

「カミュ「すみませんでした」

マヤ「本当に大きくなったな、子ども達。あ、手を伸ばしてくれてる」

ペルラ「まあまあ、かわいい事。イレブンがこの頃だった時を思い出すねえ。こんなお婆さんだけどよろしくね」

ルナ「キヤツ！キヤツ！」

マルス「うー？あー」

カミュ「何だ、マルス。俺に手を伸ばして」

ライス「カミュに抱っこ求めてるんだな。ほら、頼んだぞ」

カミュ「やった事ねえんだがな。こんなんでいいのか？」

カミュは不安そうにマルスを抱き抱える

イレブン「カミュ、似合うよ！」

カミュ「それは褒めてるのか？」

マヤ「ルナちゃん、俺の髪で遊んでる。へへ」

ルナ「あー、あー」

ペルラ「おや、どうしたんだい？」

イレブン「かぼちや指してるよ。気になるのかな？」

ラーズ「最近何でも興味を持ってな。いろんな所を動き回るんだ。新しい場所でウキウキしてるんだろうな」

カミュ「いて、痛え、おい、引っ張るな！ラーズ、こいつ何とかしろ！」

マルス「キャツ！キャツ！」

マルスはカミュの髪の毛を引っ張っている

ラーズ「ハハ、ほら、マルス。髪の毛が気になるのはわかるけどやめなさい」

その後

ラーズ「折角来たんだし、神の岩に登って見たかったんだよ」

マヤ「あのでつけえ岩の事だよな！俺も行きたい！」

イレブン「いいよ、それじゃあ行こうか」

ペルラ「気をつけるんだよ」

神の岩

カミュ「結構デコボコしてるな」

イレブン「うん。途中から少し険しいから、ラーズは特に気をつけてね」

ラーズ「まあ、何とかなるだろ」

頂上

イレブン「ここが頂上だよ。ここ景色結構お気に入りなんだ」

マヤ「すげえ……。いろんな所が見える。かなり高いんだな」

カミュ「やっぱいい場所だな、ここは。気持ちがいいぜ」

ラース「ほら、お前達、いい景色だろ？城からとはまた違うんだ。よく見てるんだぞ」

ラースは二人を下ろして景色を見せていた

その後

カミュ「そういえばイレブン。道中下の川が海に繋がってる所あったよな」

イレブン「うん、あるよ。よく気づいたね」

カミュ「そこが干潮で通れる様になってたぜ。行ったことあるか？あの先にお宝の匂いがしたぜ」

イレブン「え!?!本当!?!」

マヤ「兄貴、それマジ!?!イレブン、探しに行こうぜ!」

イレブン「うん、行こう、マヤちゃん!」

二人は走っていった

カミュ「さて……と、ちよつといいか？ ラース」

ラース「人払いまでして何だよ。喧嘩なら下に降りてからな」

カミュ「それは俺がボコボコにされて終わりだからやらねえ。一つ相談があるんだ」

ラース「カミュが、俺に？ 何だよ」

カミュ「お前もそうだが、マルティナにもだな。最近、マヤのやつがおしゃれに気を使いはじめた。服とかイヤリングとか靴とかに興味あるみたいなんだ。

俺は平和になったからマヤのやりたいようにやってほしいんだが、あいつは綺麗だとは思っても、自分には似合わないみたいなきもちで諦めてるんだよな。

俺が買えばいいって言っても聞かねえんだ。俺もそういう服とかよくわからなくてよ。特に女物なんてもっとわからん。だからどうしようかと思ってるな」

ラース「なるほどな。マヤちゃんは12か13だったか。確かに、その年はおしゃれに気を使い始める年頃だ。俺もマヤちゃんは女の子だから、そういう事にどんどん興味を持っていいと思うが、何か悩

みがあるのかもしれないな」

カミュ「ラースもそう思うだろう？ただ、俺じゃあダメみたいなんだよな。イレブンにも相談して、レシピにあるかわいい服とかを見せてやったんだが、あいつは興味はすごいんだがどうしても一步踏み出さないんだよな。」

ベロニカやセーニヤに相談しようと思ってたんだが、マヤが子ども達を見たいと言つてな。一先ずこっちに来たんだ」

ラース「優しいお兄ちゃんだねえ。ふむ………。よし、こんなのはどうだ？俺とマルティナがマヤちゃんをお城でしばらく預かろう。そこでマルティナからいろんな格好を試させてもらうんだ。」

昔、王様が小さかったマルティナのために用意していた女の子の服が捨てられずに余ってるからな。それを着て自分の姿を見てもらうんだ。同じ女性からの意見なんてマヤちゃんには新しいと思う。マヤちゃんはそれで少しでも自信をつけてもらおう。

マヤちゃんはお城に泊まれるし、ご飯もたくさん食べれる。子ども達ともたくさん遊べる。どうだ？メリットは多いと思うぞ。最終判断はカミュやマヤちゃんだけだな」

カミュ「なるほどな。それなら確かに好都合だ。俺はそれで構わないが、マヤの事だ。迷惑たくさんかけるぞ？」

ラース「そんな事ないさ。カミュが思っている以上にマヤちゃんは

もう気を使える。敬語や字が書けないなんて、どうだっていいんだよ。

前の時だって王様も全く気にしてなかったからな。むしろ、娘にできなかつた事ができるって喜んでるまでであつたんだから」

カミュ「そうか。なら、俺はそれで構わないぜ。後はマルティナとマヤに聞いてみないと。マヤにはお城に泊まりたかつたら言えよつてくらいにしておくか」

ラース「前はかなり喜んでたからな。今回も悩む事なくこつちに来るだろ」

カミュ「ありがとな、ラース。助かるぜ」

ラース「お？カミュが珍しく素直だな。ありがたいが、何だか気持ち悪いぞ？」

カミュ「チツ！本当に俺はその口を黙らせてやりたいんだがな」

しばらくして

イレブン「本当にお宝があつたよ。しかも新しいレシピ！すごく嬉しい！ありがとう、カミュ」

マヤ「そんなにいいのか？俺には全くわからねえや」

ラーズ「俺はそろそろ城に戻るぞ。イレブン達もどうせこっちに来ようとしたなら来るか？歓迎するぜ？」

イレブン「じゃあ顔を出しに行こうかな」

マヤ「俺、またお城泊まりたい！兄貴、いいだろ？」

カミュ「予想通りだな。マヤ、お前子ども達に前から会いたいってうるさかったもんな。我慢してた分、何泊かしてこいよ」

マヤ「え!?そんなにいいの!!やった!!兄ちゃん、泊まっていい？」

ラーズ「おう、どんどん泊まれよ。王様もグレイグもマルティナも待ってるぞ。王様なんて、マヤ殿は次いつ泊まってくれるのだ？って催促された事あるんだからな」

イレブン「そんなになの？すごいじゃん、マヤちゃん」

マヤ「あそこ皆、俺に優しくてさ。飯も美味しいし、ベッドはふかふかだし天国だぜ」

カミュ「何だかラースがやたらと優しく感じるな。どうしたんだよ」

ラース「別に大差ないと思うぞ。関係あるとするなら、昨日からバンの特訓に熱を入れてる事かな。あいつもまた頑張り始めたからな。俺も体動かせていい気分なんだ」

マヤ「イレブンに勝ったっていう兵士の事だよな」

カミュ「あの強い兵士の事か。大丈夫か？そいつ、死んでないか？」

イレブン「僕も心配だな。ラースに付き合っていると、本体がもたないもの」

ラース「医療班にザオラル使えるやついるから、たまにお世話になってるみたいだぜ」

イレブン「駄目じゃん！何してんの!?可哀想だよ！」

カミュ「お前、本当手加減してやれよ！」

ラース「だってよ、あいつが俺の事は気にしないでください。お願い

いしますって言うから、つい、な」

カミュ「ハア―（相棒、今日お見舞い持って行ってやろうぜ）」

イレブン「うん、絶対その方がいいよね」

マヤ「俺、楽しみだな！」

143. マヤの変化

デルカダール城 玉座の間

イレブン「王様、お久しぶりです。ラーズが村に遊びに来てくれたので、僕達も顔を見せに来ました」

カミュ「俺もお久しぶりです。元気そうで何よりです」

マヤ「よお、王様！久しぶりだな」

デルカダール王「おお、イレブン、カミュ殿、マヤ殿。久しぶりだな。顔を出してくれてありがとう。ぜひ、ゆっくりしていつてくれ」

カミュ「マヤ!!お前、兵士達もいる前では流石に口調を変えろ！いくら何でも礼儀つてもんがあるだろうが！」

マヤ「うつ……。ごめ、あ。えつと、すみません、王様」

デルカダール王「ハハハ。気にせんでよいぞ、マヤ殿。わしは何も、強制的に敬ってほしくなどないのだ。お主の喋りたい口調で構わん」

マヤ「本当!?!いしし、ありがとな、王様」

デルカダール王「ラース、よく連れてきてくれた。わざわざ休みだというのにすまん。グレイグは先程自分の部屋に、マルティナは訓練場に向かっていった。お主もゆっくり喋るといい」

ラース「ありがとうございます、王様。それでは失礼します」

グレイグの部屋

コンコン

グレイグ「む？誰だ？」

ガチャ

マヤ「おっちゃん！遊びに来たぜ！」

カミュ「あ、マヤ。相手が開けるまで待つてろって前に教えただろ！」

グレイグ「おお！マヤちゃん、カミュ、それにイレブンも来てくれたか。久しぶりだな」

イレブン「グレイグ、突然ごめんね。何か用事とかあったらそっち優先していいよ」

グレイグ「いや、俺もこれから少し休憩なんだ。ラース、姫様はどうした？」

ラース「マルティナは訓練場にいるらしい。また体動かしてるんじゃないか？」

訓練場

下に降りるとマルティナとバンが組み手をしていた

ラース「お、やっぱりな。おーい、マルティナ！イレブン達が来てくれたんだ」

マルティナ「あ、ラース！あら、イレブンにカミュ達じゃない！来てくれたのね！今、そっちに行くわ」

バン「マルティナ様、付き合ってくださいありがとうございます」

マルティナ「気にしないで、私から誘ったんだから。前よりずっと上達してて凄いけど、頑張りすぎないようにね」

バン「はい。ありがとうございます」

カミュ「あ、バン。ラースから聞いたぜ。昨日からさらに熱が入ってるんだってな。何でもザオラルを使ってもらってるのか」

バン「あ…… はい、そうなんです。でも、俺が馬鹿な事やった罰なんで仕方ないんです」

イレブン「いや、例えそうでもこれからもザオラル使わされるまで付き合う必要ないんだよ？ ラースには後でやり過ぎないように強く言っておくから、これで疲れ取つて。はい、塗り薬と湿布」

バン「あ、勇者様達に氣遣われるなんて。ありがとうございます。本当に薬は水のようになくなつていくんで、ありがたいです」

カミュ「ほら、見やがれ、ラース！ てめえがいつもやり過ぎるせいで、バンがかわいそうじゃねえか！ お前が全力でやると人を簡単に殺すんだからやめろ！」

ラース「お、俺だって、最初は手加減してるさ。ただ、こう、熱が入るとだな。少し、忘れるというか、あれだ。本氣が出てしまうんだ」

イレブン「それが駄目だって言ってるの。ラースの本氣なんて、僕らでも抑えきれないんだから。熱くなるのはわかるけど、そこも抑えないと兵士長としてどうなの？」

ラース「…… はい、すみませんでした」

バン「師匠が言い負けてる……。あ、あの、俺は気にしてないんで大丈夫ですよ？」

カミュ「駄目だ、バン。こいつには一度ガツンと言ってやらないとな」

バン「あ、はい。わかりました」

マルティナ「何だか珍しい光景ね。私、ラースがカミュ達に叱られてるのを初めてみたわ」

グレイグ「私も旅の時に一度見かけたくらいですね。ラースはしっかりしているので、怒られている姿は中々見られないですからね」

マヤ「兄ちゃんでも怒られるんだな。なんか不思議」

マルティナとラースの部屋

六人で近況などを話していた

マヤ「あ、姉ちゃん、おっちゃん。俺、今日から何日かここに泊まってもいい？」

マルティナ「あら、泊まってくれるの？嬉しいわ。お父様も喜ばれ

るわね」

「グレイグ「俺も全然構わないぞ。食事がまた楽しみになるな」

マヤ「いしし。やったぜ。子ども達ともいっぱい遊ぶんだ」

イレブン「そういえばラースとマルティナってさ、新婚旅行の時にベロニカとセーニャと一緒に、ダーハルルーネの大食いコンテストで優勝してたんだね。前にダーハルルーネに行った時、写真があったよ」

その後、夕方になり

カミュ「マヤ、それじゃあ楽しめよな。あと迷惑かけんじゃねえぞ」

マヤ「俺どんだけヤバイやつだと思われてんだよ！何回も言うな、クソ兄貴！」

イレブン「それじゃあマルティナ、あの事もよろしくね」

マルティナ「ええ、任せてちょうだい」

グレイグ「たくさん話せて楽しかったぞ。また来てくれ」

夕食時

マヤ「やつぱりここのご飯は美味しいな！兄ちゃん達は毎日こんなご飯食べてるのか。いいなあ！」

ライス「だよなあ、マヤちゃん。俺もここのご飯美味くて、毎日おかわりしてんだよ。前に誰かさんのせいで止められそうになっただけだな」

グレイグ「うぐっ……。だが、俺はお前の事を心配していただけだ。好きな事を制限させたのは悪かったが、少しは気にしてほしい」

マルティナ「まあ、私も過剰に反応し過ぎたわね。ごめんなさい、ライス」

デルカダール王「ハツハツハ！ライスの食べっぷりは見ていて気持ちのいいものだ。いい事だな、若い頃のわしもそなたのようじゃったぞ」

ライス「やったぜ！王様、ありがとうございます。まあ、二人が気にしてるのはわかったからな。多く食べたらよく動くようにするぜ」

デルカダール王「それにしても、マヤ殿が何泊もしてくれとはな。ここが気に入ってくれたようで、わしは嬉しいぞ。お主は小さき頃のマルティナと似ておる。

わしは、それくらいの年のマルティナに出来なかつた事がたくさんあつてな。わしはそれを後悔しているのじゃ。お主に何かしてやれる事があれば、わしは何でも手伝おう」

「マヤ「へへ、本当？王様。ありがとな」

グレイグ「確かにマヤちゃんの好奇心がある所や、はしゃいでいる姿はとても姫様と似ているな。小さき命に興味がある所も」

マルティナ「そうね。私もイレブンが産まれた時はずっと嬉しかったわ。自分に弟ができたみたいだった」

ラース「王様、小さい頃のマルティナに着せたかつた服がありましたよね？あれをマヤちゃんに着させてみてはどうでしょう？」

デルカダール王「おお、それはよい考えじゃ。マヤ殿よ、マルティナが着るはずだった服が余っておるのじゃ。それを着て、気に入ったものがあれば、ぜひお主にプレゼントしよう」

マヤ「え……。俺に、服？……。いいの？やった！ありがとな!!」

マルティナ「うふふ、それじゃあこの後私達の部屋に来てちょうだい。お父様も一緒にどうですか？」

デルカダール王「それではわしも行こうかの」

ラース「俺は今日バンの部屋で休ませてもらうぜ。マヤちゃんはそのまま、マルティナや子ども達と一緒にその部屋で寝て大丈夫だぞ」

その後、マルティナとラースの部屋

マヤ「お城のお風呂って広いし、綺麗！俺の家のお風呂と全然違う！シャンプーもすっごいいいやつだった」

マルティナ「気に入ってくれてよかったわ。それじゃあ、お父様が来るまで子ども達と遊びましょう」

マヤ「うん。マルス、俺の事わかるかな？」

マルス「うー？かー？」

マルティナ「あら？私と勘違いしてないかしら？かーって呼ぶのは私の事なのよ」

マヤ「本当？同じシャンプーの匂いするからかな？あ、リボン取られた」

マルス「???あーん」

マルティナ「ああ、食べちゃダメよ、マルス。ごめんね、マヤちゃん」

マヤ「ううん、全然平気。俺、多分この子達に何されても怒れないと思うんだ。俺も、さつきお姫様が言ってた弟ができたみたいって気持ち、わかるんだ。俺もこの子達が生まれてから、関係ないのにまるで自分に弟と妹ができた感じだった」

ルナ「かー?とー。とー……」

マルティナ「ルナ、ごめんね。今日はお父さんいないの」

コンコン

デルカダール王「入るぞ。遅くなった、マルティナ、マヤ殿。服が思っていたより多くてな。それと、色々な髪飾りもあったのだ」

マルス「じーじー!」

ルナ「じーじー!じーじー!」

デルカダール王「おお、マルス、ルナ。元気じゃな、どれ、おいで」

マヤ「あれ？王様の事、じーじって呼べるようになってる。兄ちゃん負けちやったの？」

マルティナ「ふふ、そうなの。新婚旅行から帰ってきたら二人とも呼べるようになってたのよ。それにとっても懐いてね。姿を見ると、二人ともお父様の事を呼んで、そっちに行きたがるの」

マヤ「兄ちゃん完全に負けじゃん。悔しがってた？」

デルカダール王「ああ、悔しがっておったぞ。やはり簡単な言葉にした方がすぐに呼んでくれるからな。マルティナで経験しているのだ。簡単には負けん」

マヤ「アハハ！王様も負けず嫌いなんだね。どれ、服は……本当に多いね。俺、こんなに持てないよ」

マルティナ「流石にそうよね。まあ、今からマヤちゃんに似合いそうなものを探すから少し待っててね」

デルカダール王「子ども達はそろそろ寝かせた方がいいかもしれんな。どれ、わしにもまだ出来るはずじゃ」

144. マヤの苦悩

その後

マルティナ「マヤちゃん、その服とっても素敵よ！マヤちゃんの髪色と、とっても合ってるわ。リボンも、こっちの黄色の髪飾りに変えてみましょう。きつといいアクセントになるわ」

マヤ「こんな服、俺いいの？」

デルカダール王「気にするな、マヤ殿。水色はやはりとても似合っておるぞ。さらにかわいらしくなったではないか」

マヤ「いしし……。何か照れるな。俺、服とか最近興味あるんだけどさ、周りの女の子達って俺なんかより、すっごい可愛いじゃん。

俺、綺麗になる方法わかんなくてさ。今まで生き残るだけで必死だったから。この髪型もリボンも兄貴がくれたやつなんだ。ずっと大切にしてる」

マルティナ「マヤちゃん……」

マヤ「俺……。こんな言葉遣いだし……。性格だって女らしくない。だから、服はもう何でもいいかなって、考え直そうと思ってるんだ。俺、綺麗になんてなれないや。普通の女の子には、なれないんだ」

マヤは失笑している

デルカダール王「…… マヤ殿。お主が求める、普通の女の子とは何なのだ？」

マヤ「え？そんなの周りにたくさんいるような、俺くらい年代の女の子だよ。自分の事を私って言って、友達もたくさんいて、お化粧とか可愛い服や靴、アクセサリをつけてるような…… そんな子。俺とは…… 真逆の存在だよ」

デルカダール王「それはお主と何処が違うのだ？」

マヤ「え？」

マルティナ「ふふ、マヤちゃん。鏡でまだ見せてなかったわね。ほら、見て。あなたは今こんなに可愛らしくて、綺麗なのよ」

マヤに姿見を見せた

マヤ「あ……。これが…… 俺？髪型も違う、服もアクセサリもついてる。だ、駄目だよ、姉ちゃん、王様！俺、こんなの着れない。俺なんか着たらいけないやつだよ！」

マヤは頭のリボンを取ろうとした

デルカダール王「気に入ってくれなかったかの？」

マヤ「あ……。ううん、とつても綺麗だった。俺じゃないみたいだった。でも、こうやって着飾って誤魔化したつもりでも、俺は俺なんだ。」

男勝りで、ガサツで、意地っ張りで、まともな教育なんてない、女の子らしさの欠片も無い俺なんだ。俺は……. こんなの着る資格はないんだよ」

マルティナ「マヤちゃん、あなたが生まれてから、今までどんな生活をしてきたのか、私達勇者の仲間達は知っているわ。」

とてもつらかったでしょう。苦しかったでしょう。痛かったでしょう。寒かったでしょう。私には、とても想像もできない事だったわ。でも……」

マヤ「何だよ……。全部……. 知ってたのかよ。だから、俺に優しくしてくれたのか?……. そんなのいらねえんだよ! 同情なんかいらねえんだよ!

どうせ、心の中では馬鹿にしてたんだろ? 可愛くもない女だって! そんな事くらい自分でもわかって……」パチン!

マヤ「ウツ!」

マルティナはマヤの頬を叩いた

マルティナ「ぐすつ……. ううつ……. どうして、そんな事言うの

よ。確かに私やラーズ達は、あなた達兄妹の過酷な生活を知っていた。どれだけ悲惨かも知っていた。

でも！決してあなた達を馬鹿になんてしてないわ！寧ろ、あの生活の中で必死に足掻いて、生きたあなた達を、私達は尊敬しているの！！

カミュにも私は尊敬してる！あの生活の中、あなたを守りながら空腹を、寒さを凌いだ。あなたが黄金になってからの五年の間も、カミュは必死に生きた。たとえどんな事をしようとも、あなたを救って見せた！

カミュは立派よ。もちろん、それまでを生きたマヤちゃん。あなたも立派なの。そんな風に考えないで。例え今までがどれだけ苦しくても、不幸でも、今は幸せになっていいのよ。

資格なんて、そんなの存在しないわ。マヤちゃん、あなたはどれだけ綺麗になってもいいの。あなたも普通の女の子よ。

優しくて、笑顔が素敵で、小さな命を大切に感じることできる女の子。そんな自分を認めてあげて。あなたは、とっても可愛いわ」

マルティナはマヤを抱きしめた

マヤ「……………ううっ……………ううああ!!ごべん、姉ちゃん。ううう」

マルティナ「いいのよ、たくさん泣いて。そしたらまたあの笑顔をを見せてちょうだい」

しばらくマヤは泣き続けた

マヤ「ぐすつ……。ごめん、うるさくした。でも、なんかスッキリした。俺、親とか知らないし、家族は兄貴しかいなかった。さつきも今も胸が凄くあったかくなるんだ。これって本とかでしか知らなかったけど、もしかして俺、愛ってやつをもらったのかな？」

マルティナ「そうよ。これは私からの愛。愛は、あなたを大切に思っている人があなたにくれる最高の気持ちなの。この愛と言う気持ちをくれてるのは、私だけじゃない。

ラースも、イレブンも、勇者の仲間達全員、あなたに愛をあげてるわ。そして、それを一番あなたにくれている人はあなたのお兄さんよ」

マヤ「兄貴が……。俺に？」

マルティナ「ええ。カミュはあなたをいつも心配しているのよ。あなたが無事であるか、元気であるかってね。彼は口には出さないけど、表情は隠せない。

いつもマヤちゃんを見る顔は、旅の頃では見る事なんてなかった優しい顔をしているのよ。きっと、世界で一番あなたをかわいと思うているのはカミュよ。そんな素敵なお兄さんを大切にしてあげてね」

マヤ「おにい……。ちゃん……」

デルカダール王「マヤ殿よ、わしもそなたを大切に思っている。そ

して、わしにできる愛の形を今からそなたに聞こう」

マヤ「王様も？」

デルカダール王「先程家族はカミュ殿しかおらんと言ったな。ならば、わしの娘にらんか？もちろんカミュ殿も息子として入れよう」

マヤ「俺達が…… 王様の…… 子どもに？でも、姉ちゃんがいるよ？」

マルティナ「私はもちろんお父様の娘よ。でも、あなただつて娘になつていいのよ。私の妹になりましょう」

マヤ「…………… ありがとう、王様、姉ちゃん。でも俺、すぐに返事できないや。考えさせて」

デルカダール王「ああ、ぜひ検討してみてくれ」

マルティナ「さあ！話はここら辺にして、とりあえず他の服も着てみましょう。髪型も少し変えればいろんな服が似合うわ。マヤちゃん、いいかしら？」

マヤ「うん！お願い、姉ちゃん！」

その夜

マヤ「……………俺が、家族に？」

マルティナ「スウ……スウ」

マヤはベッドから起き、そつと部屋から出ていった

バルコニー

そつとバルコニーに入るとラースとグレイグがお酒を飲んでいた

マヤ「……………あ、兄ちゃん、おっちゃん」

ラース「ん？マヤちゃんじゃないか」

グレイグ「こんな時間にどうしたのだ？もう遅いぞ」

マヤ「何だか眠れなくてさ」

ラース「……………何かあったみたいだな。俺達でよければ相談にのるぜ？」

マヤは先程の事を全て話した

グレイグ「なるほどな。マヤちゃんはそれを気にしていたのか。そして、姫様の言っていた通り、俺もマヤちゃんに愛というものを贈っているぞ」

ラーズ「そうだぞ、マヤちゃん。愛っていうのは、多くの人から貰える事なんて少ないんだ。そして、マヤちゃんはたくさんの人に愛されている。それは絶対に揺るぎのない事実だ。マヤちゃんはかわいいんだ。もつと自信を持つていいんだぞ」

マヤ「俺……かわいいのか？」

グレイグ「ああ、俺にも娘ができたなら似たような気持ちになるのかもしれないな」

マヤ「でも俺、愛なんてわかんないよ」

ラーズ「俺も、これが愛だって説明するのは難しいな。ただ俺がマルティナに向けている思いが、愛だ。これは自信がある」

マヤ「それは、何となくわかる。俺もお似合いだと思うよ」

ラーズ「ハハ、ありがとな。そして、もう一つ言える事がある。それは、マヤちゃん。君が俺達の子どもに向けている思い。それも愛だ」

マヤ「俺が……愛を向けている？」

グレイグ「先程、マヤちゃんはマルスやルナの事を弟や妹のように思っていると言ったな。それは家族に向ける感情だ。家族はお互いを愛する気持ちがあるんだ」

マヤ「家族……。俺、血も繋がってないのに、王様の娘になってもいいのかな？」

ラーズ「フフ、実は俺とグレイグもな、王様の息子なんだぜ？」

マヤ「え!?! 兄ちゃんとおっちゃんって兄弟だったの!?!」

ラーズ「まさか。こんな頭固い兄貴は、俺は嫌だぜ」

グレイグ「おい」

ラーズ「俺達は王の息子だ。血は繋がってないけどな。王様は家族になってほしいくらい、俺達を愛してくれているのさ」

グレイグ「俺はマヤちゃんより小さい時から、王に息子同然として

扱われてきた。だから、王にとって家族とは愛する気持ちがあれば、血など関係ないのだ」

ラース「マヤちゃんは、俺達の息子達に愛の感情を向けてくれている。とても感謝しなくてはならない事だ。俺は、マヤちゃんが家族になっってくれたら嬉しいぜ」

グレイグ「俺もそうだ。王がマヤちゃんを愛するように、俺もマヤちゃんを愛している。もちろん、兄のカミュの方もな」

マヤ「……いしし。何だか今日は胸がよく熱くなるんだ。こんな不思議な気分は俺、初めてだよ。もしかして、これも愛の力なのかな？」

ラース「そうさ。そして、家族の力でもある。相手の思いを感謝して、相手に何かしてあげたい。そんな思いが互いに連鎖して、一つの家族となるんだ。誰彼構わずにな」

マヤ「そっか……。俺、決めたよ。王様の娘になる」

ラース「ああ、おいで。マヤちゃん」

グレイグ「ううっ！ぐっ……。マヤちゃん。少し大人になれたな。おめでとう」

マヤ「おっちゃん、泣くなよな、全く」

リース「明日の朝、マルティナと王様に連絡してやれ。きっと喜ぶさ」

マヤ「うん。ありがとう、兄ちゃん、おっちゃん」

グレイグ「ぐすつ、気にするな、マヤちゃん。もう遅い。ゆっくり休みなさい」

マヤ「そうだね。何だか眠れそうになってきた。おやすみ、兄ちゃん、おっちゃん」

リース「おやすみ、マヤちゃん」

145. マヤと家族

次の日、朝食時

マヤ「皆、おはよう！俺、寝過ぎちゃった！」

デルカダール王「おお、マヤ殿。おはよう。そんなに慌てなくともご飯は逃げないぞ？」

マルティナ「ごめんなさい、マヤちゃん。あまりにも気持ちよさそうに寝てたから起こせなくて」

マヤ「あ、王様、姉ちゃん。俺、昨日の夜決めたんだ。俺、王様の娘になるよ！」

デルカダール王「おお！本当か!?!よいのか？マヤ」

マヤ「うん！俺、たくさんの人から愛されてるんだってわかった。俺は、それに気づかせてくれた王様達が好きだ！こんな妹でよかったらよろしくな！」

マルティナ「ああ……マヤちゃん。ありがとう。私とっても嬉しいわ」

マルティナは目に涙を浮かべている

マヤ「へへ、姉ちゃん、泣かないですよ。俺、自分に今まで自信なんてなかったけど、少しだけ変えてみようかな」

グレイグ「ああ、そうだぞ、マヤ。ゆつくりでいい。変わっていいば、また新しい事にも気づける」

マヤ「おっちゃん、俺の呼び方変わった。いしし、そっちの方が嬉しいぜ」

ラース「え？そんなのか？なら、俺もマヤって呼んだ方がいいか」

マヤ「おう！兄ちゃんもそれがいいな！あ！兄貴にも知らせなきゃ。俺達家族になったぞって」

デルカダール王「そうだな、カミュ殿も呼んでこの事を報告せねばなるまい」

ラース「それなら俺が行ってきます。クレイモランに帰っているはずです」

マヤ「俺も行く！俺が決めたんだから、俺が報告しないとだからな！」

その後、クレイモラン城下町 カミュとマヤの家

マヤ「兄貴！一旦ただいま！大事な事を報告しないとだから戻ってきた！」

カミュ「え！マヤ!?急にどうしたんだよ。それに、ラースまで」

マヤ「兄貴！俺達、王様の家族になったんだ！」

カミュ「は？」

マヤ「王様達が俺達の事を血が繋がっていなくてもいいから、家族にならないかって言われて、俺、いいよって言ってきたんだ」

カミュ「……………」

カミュはラースに説明しろと目で告げた

ラース「そんな顔でこつち見んな。あのな、順を追って説明するとだな」

ラースは昨日あった事をマヤの説明もいれながら伝えた

カミュ「そうか……。お前が服を着たがらなかったのは、そういう意味があったのか」

マヤ「うん。俺、普通の女の子になれないって思ってた。でも、姉ちゃん達に教えられた！かわいいって、俺は綺麗になっていいんだよって。」

「そうやって、俺に愛を覚えてくれた。俺、王様達なら家族になつてほしい。兄貴もお願い！一緒に家族になつてくれ！」

「ラース「別になつたからって、特に大きく変わるわけじゃない。帰ってきていい家が一つ増えるだけだ。それに、カミユ一人で生活を支えるのが大変な所も人が多ければできるだろ？カミユの考えはどうだ？」

カミユ「俺も……家族なんて知らねえ。愛とかもよく分からねえ。それに、そこまでしてもらつても、俺達には何も返せるものがないぞ」

「ラース「返すもの？そんなの一つに決まってるだろ。簡単だ。お前達が生きたいように生きる。これだけだ」

カミユ「!!……それに、俺は大罪人だぞ？勇者の仲間でデルカダールの罪は消えた。ただ、消えたのはその罪だけだ。俺はお前達に話してないような事もやってるんだぞ。そんなやつが城にホイホイと行けるかよ」

「ラース「知らねえのか？カミユ。お前の素性を調べている時にある

程度の罪も判明してる。それは王もグレイグも知ってる事だ。それを知った上でなお、お前も誘われてるんだぞ?」

カミュ「……………。たくっ!どうなってんだ、デルカダール王国は。ウルノーガがいなくなっても、おかしい奴らばかりじゃねえか。いいよ、負けだ。俺もマヤと一緒に家族になるよ」

マヤ「本当!?兄貴、ありがとう!!」

カミュ「お前……普通に感謝できたんだな」

マヤ「ハア!どういう意味だよ、クソ兄貴!俺だっありがとうくらい言えるからな!」

カミュ「へいへい。悪かったですね。それじゃあ王様に会いに行きますかね」

デルカダール城 玉座の間

デルカダール王「来てくれたか、カミュ殿。それで返事は決まったのか?」

カミュ「はい。マヤが決めた事なら俺は従います。ですが、本当によろしいのですか?俺は過去にいくつも罪を犯しています。そんな者を城にホイホイと入れて」

デルカダール王「確かにそうだな。お主はたくさん罪がある。だが、それは過去の事。お主の心は今、その時とは全く別物であろう？」

カミュ「ハハ、お見通しなんですか？わかりました。これからマヤ共々よろしくお願いします」

マヤ「よろしくお願いします」

デルカダール王「ハツハツハ！そんなにかしこまらなくてもよい。こちらから誘った事だ。それに、レースから聞いたと思うが、何かが大きく変わるわけではない。」

ただ、帰る家と後ろ盾ができただけじゃ。自由に帰ってきていいのだぞ。そして、わし達を頼るのじゃ。お主達をサポートしよう」

カミュ「ありがとうございます」

マヤ「王様！俺、前から考えてた事があります！」

デルカダール王「どうしたのじゃ、マヤよ」

マヤ「俺、メダル女学園に入ります」

カミュ「な!? マヤ! それは金がまだ貯まってないから待ってっ!」

デルカダール王「ハツハツハ! なるほどのう。早速甘えてきてくれたか。いいだろう、お金は少しお主達に支援しよう」

マヤ「ありがとうございます、王様。俺、前から女の子に少しでも近づけるなと思うって入りたいと思ってたんだ。そうすれば字も習うし、言葉遣いも、世界の事も知れる。俺、頑張るよ!」

デルカダール王「いい事じゃ。頑張るのじゃぞ、マヤ。ただ、偶には顔を見せにきてくれ」

マヤ「もちろんだぜ! 俺、ここが好きだからな!」

カミュ「何から何まですみません。マヤの事、どうか気にかけてやってください」

デルカダール王「もちろん、カミュもわし達に頼りたい事があつたらすぐに相談してくれ。力になろう」

カミュ「ありがとうございます」

その後

カミュ「何かいろいろ疲れたぜ」

ラーズ「いやー、よかった。王も嬉しそうだった。ありがとな、カミュ」

カミュ「俺はこれからどうすっかな」

ラーズ「お？決まってるのか？」

カミュ「まあしばらくはこっちにいるな。揃えなきゃいけないものもあるし」

ラーズ「いやーそれは丁度いい。体を動かす相手が少なくてな。マルティナやグレイグは誘いづらいし、バンはお前達に止められて困ってたんだ」

カミュ「あ、悪い。俺、クレイモランに帰」ガシ

ラーズはカミュの肩を掴んだ

ラーズ「まあまあ、そう言うなって。ほら、訓練場の場所わかるだろ？ちよつと付き合えよ」

カミュ「痛え！引つ張んな！おい、やめろ！レース!!あの、本当に!!やめてくれー!」

マルティナとレースの部屋

マルティナ「よかったわ、マヤちゃん。カミュも来てくれて」

マヤ「今、兄貴の叫び声が聞こえたような?まあ、いいか」

マルティナ「メダル女学園は確か寮での生活だったはずね。私達も偶に会いに行くわね。いつから行くの?」

マヤ「あと半年後かな。手続きとか準備とかあるからな。それまでは基本クレイモランに居ると思うけど、前よりは頻繁にこっちに帰ってくるぜ」

マルティナ「ぜひそうして。いつでも帰ってくるのを待ってるからね」

数時間後、訓練場

カミュ「ぜえ、ぜえ、マジもう無理」

レース「いや、よく動かさせたぜ。偶にはこれくらい動かしたいからな。これから頼んだぜ?弟よ」

カミュ「ぜってえクレイモランに帰る。もう来ねえ」

ラーズ「んな事言うなよ。お前クレイモランそこまで好きじゃねえだろ」

カミュ「ここに比べりゃ天国だわ」

ラーズ「まあ、引きずつても連れて行くけどな」

カミュ「俺、人生で一番のミスをした。数時間前の俺、マジで馬鹿だろ」

ラーズ「まあそんな冗談は置いておいて、マヤちゃんはあと数日預かるな。何やら服をまだ決めてないらしい。これからどんどん決まって行くと思うけどな」

カミュ「どこからが冗談だったのかわからねえんだよ！まあ、マヤの事はわかった」

146. 兄貴と兄ちゃん

次の日、デルカダール城

朝食時

マルティナ「じゃあマヤちゃんは特に好きな色はないのね」

マヤ「そうだね。そんなの考えてる暇無かったから。強いて言うなら派手な色かな！黄金とか！」

ラース「黄金の服かー。すっごい重たいと思うぞ？もうそれは服じゃなく鎧だな」

ラースは少し苦笑いしている

デルカダール王「明るいマヤには似合うのではないか？黄色や赤なども試してみるといい。わしは前の水色や白がかなり似合っていたと思うぞ」

マヤ「やつぱさうだよね！俺もその服はもらうんだ！」

グレイグ「今日時間があれば、その服を着たマヤちゃんを連れて、城下町の見回りについて行くといいんじゃないか？」

ラース「お！いいな、それ。マヤちゃん、一緒に見回り行くか？町

の皆にマヤちゃん姿を見せつけてやろうぜ」

マヤ「いいの!?行く行く!」

グレイグ「そう言えばラース。師匠から手紙が届いてな。今日の夕方、城に来てくれるそうで、訓練の時間を作ってくれたんだ。だから訓練はいつもの朝ではなく今日の夕方から始めてくれ。俺も向かう」

ラース「了解だ、皆に伝えておくな」

その後、訓練場

ラース「という事だから、訓練は今から自主的にやっていいが、夕方にはジエーゴさんが久しぶりに来てくれる。お前達の強さ、見せてやれ!」

兵士達「はい!」

ラース「それと、今日の昼の見回りは俺だけでやる事になった。今日の当番だった人は明日にしてくれ。それじゃあ解散!」

兵士達「はい!」

マルティナとラースの部屋

コンコン

マヤ「やったー！ー！」

マヤが突然出てきた

ラース「うお！マヤちゃん、どうした！」

マヤ「ルナが俺の名前呼んでくれたんだ！」

ルナ「マヤヤ？マヤヤ！」

マヤの腕の中にはルナがおり、マヤの手を掴みながら喋っている

ラース「嘘だろ!!俺、とーちゃんすらまだだぞ!!そんな…」

マルティナ「あら？ラース、知らないの？前にマルスは一回だけとーちゃんって言ったわよ」

ラース「何だって!!俺、その時いたか？」

マルティナ「えつと……。あ、ナプガーナ密林に行ってた時だわ。ごめんなさい、聞いたのは私とグレイグだわ」

ラース「ま、まあそうか。よかった、マヤにすら抜かれるのかと思つて涙出る所だったぜ」

マヤ「でも、俺呼ばれるまでの期間めちやくちや短いよな!？」

マルティナ「そうね。やっぱり赤ちゃんの頃から近くにいた事が多かったからかしらね？」

マヤ「へへ、名前呼ばれるとこんなに嬉しいんだな。兄ちゃんと王様の気持ちわかったかも」

ラース「あ、マヤ。今日の見回りは昼前だからな。それまでは自由にしてていいが、着替えはすませておけよ？」

マヤ「わかったよ、兄ちゃん。へへ、楽しみ」

その後

ラース「マヤ、準備できたか？」

マヤ「うん！見てよ、兄ちゃん！似合うだろ！」

ラース「お、おお!! 雰囲気見違えたな！髪形も変わって下ろしたんだな。水色の髪と服が似合うな！これは、カミュにも見せてやろうぜ

！」

マルティナ「私もこれはマヤちゃんに本当に似合ってると思うわ。水色の服に少しだけ入った白の線が綺麗でしょ？黄色の髪飾りでアクセントを出してみたの」

マヤ「姉ちゃん、本当センス最高！俺、こんな綺麗な姿するの初めて！なんか緊張してきた」

ラース「ハハハ！大丈夫だよ、マヤ。普通にしてればいいんだ。それじゃあ行こうか。まずはカミュに見せに行こう」

カミュの部屋

コンコン

カミュ「ん？誰だ？」

マヤ「見ろ!!兄貴！」

マヤは得意げな顔で見せつけている

カミュ「……………は！マ、マヤか!?!お前、どうしたんだよ!!間違えたな!?!」

マヤ「これで兄貴も俺の事、女の子だって再認識しただろ！」

ラーズ「マヤのこの服、かわいいと思わないか？」

カミュ「ハハ、馬子にも衣装だな。似合ってるぜ、マヤ。かわいいぞ」

マヤ「……」

ラーズ「……」

カミュ「な、何だよ。急に黙り込んで」

マヤ「兄ちゃん、どうしよう。兄貴が変だよ」コソコソ

ラーズ「これはヤバいぞ。ちよつと気持ち悪いな」コソコソ

二人でコソコソと話している

カミュ「てめえら、人が素直に褒めりゃあ何だ、その態度？特にラーズ!!てめえ、聞こえるようにやってるだろ!!」

ラーズ「あ、バレた。だが、マヤにはその言葉くらい素直に言えよ？」

カミュ「うるせえ！余計なお世話だ!!マヤ、その服もらうのか?俺は貰った方がいいと思うぞ」

マヤ「うん!俺、この服気に入った!」

カミュ「フツ……。そうか、よかったな」

カミュはマヤを撫でている

マヤ「あ、この目、兄ちゃん達も俺に前に向けてくれてた目と同じだ」

デルカダール城下町

ラース「見回りは町の中と、外も少しやるんだ。外はもうあまり危険じゃないけど、あまり離れすぎるなよ?」

マヤ「うん。旅の時にも兄貴にたくさん言われた。慣れたから離れないよ」

男性「え!?!ラース様!そちらの子はどなたですか?すごい綺麗ですけど」

マヤ「え……………」

リース「この子は今お城に泊まってるマヤちゃんだ。カミユの妹なんだ。かわいいだろ？」

マヤ「よろしく！マヤと言います」

男性「カミユって確か勇者様の仲間の方ですよね！うわー！すごい子じゃないですか！かわいいね、マヤちゃん。その服似合ってるよ」

マヤ「本当!?ありがと...!!」

男性「元気だね。この町を楽しんでね」

噴水前

女性「あら？リース様！そちらの子はどなたですか？見慣れない方ですね」

女性「まあ、かわいい。この服とっても似合ってるわ」

女の子「お姉さん、綺麗だね。私もその服ほしい」

マヤ「あわわわわ」

マヤに皆が注目しており、人がどんどん集まってくる

その後、デルカダール地方

マヤ「俺…… あんなに沢山話しかけられたの初めて」

ラース「すまなかつたな。町の人達は俺を見ると喜んで話しかけてくるんだ。その影響もあるかもな。でも、皆口々に言ってたな。綺麗だ、とか、かわいいとか」

マヤ「ありがとな、兄ちゃん。俺、変わろうと思わなかったら、きつとこんな気持ちには絶対になれなかった。城の皆のおかげだ」

ラース「俺達はマヤの背中を少し押してあげただけだぜ。戻る事だつてできたはずだ。だが、マヤは自分で一歩を踏み出したな。その少しの勇気がマヤをここまで変えたんだぜ」

マヤ「いしし。俺、本物の兄貴がいるけど、兄ちゃんはやっぱり兄ちゃんだよ！兄貴だつて俺の自慢の兄貴だけど、兄ちゃんも俺の自慢の兄ちゃん！兄貴とはまた少し違う優しさを持つてる。

それに、姉ちゃんの言う通りだった。兄貴がさつき俺の事を兄ちゃん達が前に俺に向けてた、愛が籠ってるような目で見てた。俺、兄貴から愛を貰えてたんだ」

ラース「そうだろ？カミュはマヤと話してる時に、よくあの顔をするんだ。今度よくみてるといいぜ？それと、ありがとな。俺はマヤの自慢か。へへ、嬉しいぜ。俺もマヤは自慢の妹だな！」

その後、デルカダール城下町 貴族階層

ミル「あら！グラン坊っちゃま！お久しぶりです」

ラース「あ、ミルさん。久しぶり」

マヤ「(グラン?)」

ミル「流石グラン坊っちゃまですね。沢山のよい噂を耳にしますよ。私もギン様も鼻が高い思いです。そういえば、伝えておかなければならない事があるんです」

ラース「俺に？どうしたんだ？」

ミル「グラン坊っちゃまには大した事ないのですが、実は私達ダナー一家は引っ越しする事になったのです」

ラース「え……。引っ越し？そうか。どこに行くんだ？」

ミル「魔法大国クレイモランになります」

ラース「なるほどな……。まあ、ミルさんに会いづらくなるのは残念だな。そうだ、そのクレイモランには俺達の仲間の青い髪をしたカミュっていう男が住んでるんだ。

もしミルさんにどうしても何か起こったら彼の所に訪ねてくれ。絶対に力になってくれるよ。もしくは、彼の妹であるこのマヤちゃんに頼ってくれ。絶対だよ?」

マヤ「えっと……。よろしく」

ミル「まあ、可愛らしい子ですね。よろしくね、マヤちゃん。ミルと言います。それではグラン坊っちゃま、お仕事頑張ってください」

147・極意

マルティナとラースの部屋

マヤ「……………」

マヤはラースをジッと見つめている

マルティナ「マヤちゃん？どうしたの？」

ラース「聞きたい事があるって顔してるな。わかってるさ、説明する。何から知りたい？」

マヤ「全部。と言いたいけど、まず、何で兄ちゃんはラースって名前なはずなのにグランって呼ばれてたんだ？しかも、それで反応してたよな」

マルティナ「ちよつと!?ラース、それって！」

ラース「そういう事だ、マルティナ。大丈夫、変な事があつたんじやない。ミルさんと話したただけなんだ」

マルティナ「そう……。私が代わりに話しましょうか？」

マヤ「あ、姉ちゃんも知ってるのか」

ラーズ「いや、平気だ、マルティナ。ただ、手は握っていてくれな
いか？」

マルティナ「もちろんよ。つらかったら言っ
てね。すぐにかわる
わ」

マヤ「あ……ごめん。俺、聞きにくい事聞い
ちやっ
たみたいだね。
いいよ、兄ちゃん、無理して話さなくて」

ラーズ「いや、マヤにはこんな事もあるって
いうのを知ってほしい。
だから話すよ。まず、俺はデルカダールの
貴族の家で生まれたんだ」

マヤ「え？兄ちゃんって確かガラツシユの
村って場所
で育つたん
じゃないのか？イレブンも兄貴もそう
言っ
てたはず
なんだけ
ど」

ラーズ「それは間違っ
てない。ただ、
生まれた場所
は違
うという事
だ」

それからラーズは自分の過去をマヤに話した

時に手が震え、冷や汗をかきながら

ラーズ「そうやって俺はガラツシユの村で育つ事
になったんだ」

マルティナ「ラース、大丈夫？ やっぱり私、何度聞いても許せないわ」

マヤ「俺……今までは、親がないし、食事も満足に取れなかった。貴族とかそういう人を見るたびいつも、こいつらはどうして俺達とこんなにも違って幸せな生活をしてるんだろうって思ってた。

でも、兄ちゃんはそんな事なかったんだな。貴族なのに、家族なのに、俺達が頼りたかった親から見捨てられ、食事もまともに与えてもらえず、拳句捨てられた。俺は苦しくても兄貴がいたし、幸せになる事を夢見て、毎日頑張ってた。

兄ちゃんは、目の前に幸せな風景があつたんだ。それを見せられながら、俺達のような生活を、たった一人で十歳までしてたんだな。俺……兄ちゃんの立場だったら……絶対耐えられねえかも」

ラース「マヤ。世界にはこういう親もいるんだ」

マヤ「俺達、似た者同士だったのかもな。愛を知らなくて、過酷な生活をして」

ラース「マヤもこの事を知っても幻滅しないんだな」

マヤ「そりやそうだけ！ そんな事されたら、俺なら悲しくなるからな。それに俺、兄ちゃんの事すげえと思うぜ。そんな状態からこま

で来たんだろ？努力とかたくさんしたんだよな」

マルティナ「そうよね。ラースのいつでも努力を怠らないのは、ここがきつかけかもしれないわね」

ラース「なるほど、言われてみればそうかもしれないな。ハハ、俺のこんな過去なんかでも自分は何か学べていたんだな」

マヤ「俺も学校に入ったらいろんなことチャレンジするよ！がむしやらに色々取り組んでたら、もしかして兄ちゃん達みたいに俺もなれるかな？」

マルティナ「マヤちゃんは優しいもの。絶対なれるわ」

ラース「そうだな、いつかそういう大事なものが見つかるさ」

夕方、訓練場

グレイグ「師匠！お久しぶりです！」

ジエーゴ「グレイグもいやがったか。おい！来たぞ、ラース！どれだけ強くなってるのか見てやろうじゃねえか！」

兵士達「よろしく願います！」

その後

ジエーゴは全員と軽く戦った

ジエーゴ「ほー、こいつは確かにすげえ。型の形もしつかりしてるくせにかなり実用的かつ隙の少ない戦い方だ。ラース、お前すごいやつじゃねえか！」

ラース「本当ですか!?ありがとうございます」

ジエーゴ「特にあの男だ。あの男だけ周りとは違うな。別格の強さをしている。俺は手を抜いてなかったが、あいつは俺に反撃してきた。しかもかなり避けるのが難しいタイミングだな。お前、あの男に何をした？」

ジエーゴはバンを指している

ラース「あいつの名前はバン。俺の一番弟子です。今、あいつには俺の教えられる事を全て叩き込んでいる所です」

ジエーゴ「あいつがゴリアテの言っていたバンか!なるほど、ゴリアテも強いと評価する理由がわかったぜ。それに、まだまだ強くなるのか!ガツハツハ!こりやあ楽しみだな!

それと、グレイグ。お前もバンと同じ避け方をしたな。兵士の中にもしてくるやつがいた。その避け方いつ教わったんだ?相手の攻撃の強さを利用する避け方。武道に近いな」

グレイグ「この避け方はラースから教わったものです。元々彼は技術をメインで戦っているのですが、こいつの避け方やいなしかたはそこから利用されたものです。相手の意表を突く戦いができるため、俺も教えてもらい習得しました」

ジエーゴ「なるほどな。ラース、お前中々嫌な戦い方だな。俺はこういうやつは敵にしてほしくねえな。まあいい。それに、このレベルなら俺もこいつらに高難易度の技を教えられる。ラース、お前の修行はこの後だ！」

ラース「はい！わかりました！」

その後

ジエーゴ「待たせたな、ラース。次はお前の番だ。てめえらは休んでこの兵士長の特訓でも見てな。お前に教える技は騎士の最上級レベルの技だ。

これはグレイグに教えようとしたんだが、あいつは結局習得できなかった。お前ならできるんじゃないやねえか？二刀流を同じ力で扱えるな？」

ラース「はい。できます」

グレイグ「まさか、あの極意か！」

バン「すげえ、師匠の片手剣の二刀流なんて初めてみた」

ジエーゴ「その状態でお前は左手で攻撃を捌いてもらう。一旦やってみろ。おらー！」

ラース「は！」

ジエーゴ「確かにその捌き方でも問題はない。だが、かなり難しい事だが攻撃の方向に対して、五度だけ上に上げるようにしてみる。イメージは、攻撃が剣を滑るような感じだ。おらあー！」

ラース「は！ぐっ……。難しい」

ジエーゴ「いや、最初にしちや悪くないぜ？もっと精度を上げてみる！これ続けるぞ！」

数時間後

ジエーゴ「ハア！おりゃあ！」

ラース「ハ！えい！」

シャイン！シャイン！

ジエーゴ「やったな、いい感じだぜ！それが騎士の片手剣の極意「鈴鳴流」だ。今度来た時は右もやるからな。それまで感覚忘れんじやねえぞ！」

ラーズ「はい！ありがとうございました！」

兵士達「ありがとうございました！」

その後

バン「師匠！流石です！俺、ずっと見てて真似したんですけど、難しすぎますよ」

グレイグ「俺も流石の一言に尽きる。攻撃を見極める目、力の加え方、様々な条件が必要だ」

ラーズ「バンは最近二刀流をできるようになったもんな。左手と右手が同じ筋力で攻撃出来る様になってなきや、できないな。それとかなりの器用さが必要だ。俺も正直言つてきつい」

グレイグ「だが、俺は片手もできなかつたぞ」

バン「あれを習得できたらすごいですよ。攻撃を弾くと同時に攻撃できます。よく師匠が体術でやっている事と同じですね！」

ラース「そうだな。こりやあ楽しめそうだ」

148. ミルさんの変化

マヤが城に泊まり始め、それから最終日となった

朝食時

マヤ「あーあ、時間はあつという間に過ぎるもんだな」

ラース「マヤ、昨日はマルティナやベロニカ達とダーハルーネ、楽しめたか？」

マヤ「うん！かわいい服も買えたし、兄ちゃんの知り合いがやっている店のあのパフェってやつ、めっちゃくちゃ美味しかった！」

マルティナ「新婚旅行の時のお礼は渡してきたわ。気にすんなって言われたけどね」

デルカダール王「マヤ、またいつでも帰ってきていいのだぞ」

マヤ「ありがとう、王様。俺、此処あったかくて優しい気持ちになれるんだ。また、必ず帰ってくるよ」

グレイグ「連絡はしなくて大丈夫だぞ。ここはマヤのもう一つの家なんだからな」

その後、カミュが迎えにきた

カミュ「結構服とか増えたんだな。楽しかったか？マヤ」

マヤ「ああ！兄貴もここにもっと住めばいいのに」

マルティナ「そうよ。皆でご飯とか食べましょう」

カミュ「いろんな準備終わったら、俺もこっちにくるよ」

マヤ「じゃーなー、皆！あ、行ってきまーす！」

グレイグ「ああ、行ってらっしゃい、マヤ」

クレイモラン城下町、カミュとマヤの家

カミュ「しかし、本当に増えたな。新しいタンス用意しないとだな」

マヤ「これ、全部俺が着ていいんだ。いしし」

マヤは笑顔で貰った服を見ている

カミュ「(どうやら預けて正解だったようだな)よかったな、マヤ」

それから三ヶ月後

ベロニカ「カミュ！マヤちゃん！遊びに来たわよ！」

セーニヤ「カミュ様、お久しぶりですわ。マヤ様はダーハルーネの時以来ですわね」

ベロニカとセーニヤがカミュ達の家に来た

マヤ「あ！ベロニカさん、セーニヤ姉ちゃん」

セーニヤ「この服は確か、ダーハルーネと一緒に買った時の服でしたわね。とつても似合ってますわ」

カミュ「急にどうしたんだよ。茶くらいなら出すが、大したもてなしはできないぜ？」

ベロニカ「丁度こっちに用事があったのよ。そのついでに寄ったの」

その後、話を続けていると

コンコン

カミュ「ん？誰だ？」

玄関

カミュ「はい、どうぞされ……。って！あんたは！ミルさん！」

ミル「あ、お久しぶりです。カミュさん」

マヤ「あ、あの時のメイドさん。もしかして、ここに来たって事は」

ミル「はい。少しご相談したい事がありました」

カミュ「とりあえず上がってくれ」

リビング

ベロニカ「あれ!?確かラーズの家のメイドのミルさんじゃない！」

セーニヤ「まあ!どうしてこちらに?」

ミル「確かグラン坊つちやまのお仲間のベロニカさんにセーニヤさんでしたね。お久しぶりです。私達ダナー一家は、二ヶ月前にこちらに引っ越してきたんです」

カミュ「だからこっちにいたのか」

マヤ「なあ、ここに来たって事は、兄ちゃんが言ったように何かあつ

たの？」

ミル「はい。グラン坊っちやまに、クレイモランに住むならそこにカミュさんが住んでおられる、と。何かあつたら彼かその妹のマヤちゃんを頼ってほしい、と言われました。少しお願い事があつて伺つたのです」

カミュ「どうしたんだ？」

ミル「大変勝手に申し訳ないのですが、私を少しの間匿っていただけないでしょうか？」

ベロニカ「匿う？どうして？」

ミル「皆様はグラン坊っちやまが私達ダナー一家と決別したのをご存知ですよ？その後グラン坊っちやまの噂が出る度に、ジルゴ様はイライラしておられました。母様や弟のクリフ様と共にグラン坊っちやまの悪口を言っていました」

ベロニカ「そこは変わらなかったのね」

ミル「怒りは年を重ねるごとに大きくなっていき、半年前にはグランの部屋の取り壊されました。私は少しとはいえ、あの思い出のあつた場所がなくなってしまうのは悲しかったのですが、たかがメイ

ド。言った所で何も変わりません。

そして噂を聞きたくないと言い、こちらに引越す事になったのです。ですが、引越してきてもグラン坊つちやまへの怒りは消えませんでした。

その怒りを無くすため、グラン坊つちやまと仲のよかったギン様の墓や残した本などを全て燃やされてしまいました。一月前はそれで終わりだったのですが、最近また怒りが出てきたようで、次の標的は私になりました」

セーニヤ「何て事を……」

カミュ「それで、あんたは大丈夫なのか？」

ミル「私の食事が無い事くらいなら平気でした。しかし、一昨日から暴力や魔法が、私に向かって飛ぶようになりました」

マヤ「何でだよ！ミルさん、関係ないじゃん！」

ミル「おそらく、あの家からグラン坊つちやまの気配を少しも許したくないのでしょう。だから少しでも関わりのあつた私に飛んできているんだと思います。私もこんな生活が続くと耐えられません。なので、数日だけどうか匿ってはくれませんか？」

カミュ「それなら全く構わない。ミルさんの体の方が大事な事だ。しばらくここにいて、様子を見るんだ」

ペロニカ「何なら帰らなくていいわよ、ミルさん。あんな家、人に対してとんでもない事しかしないじゃない！あんな所いるだけ無駄よ！」

ミル「いえ、あそこにはまだ私の残した物があります。いずれ必ず帰らなければなりません。その間だけでもよろしくお願いします。何もしないわけにはいきません。お詫びといっちはなんです、家事の事はおまかせください」

カミュ「気にする必要なんてねえが、まあわかったぜ」

ミル「それと、グラン坊っちゃんにはこの事を話さないでいてもらえますか？グラン坊っちゃんには優しいので、原因は自分だと考えてしまうかもしれませんが。私のせいで、グラン坊っちゃんに心配をかけさせたくないんです。もう、グラン坊っちゃんをあの家と関わらせたくないのです」

マヤ「わかった、兄ちゃんには伝えないでおくぜ」

ミル「ありがとうございます」

149. 憎しみ

それから二ヶ月後

カミュとマヤの家

マヤ「最近ミルさん来なくなつたよな、大丈夫かな？」

カミュ「確かにそうだな。前は一週間に二、三回は来てたのに」

マヤ「何かあつたのかな」

カミュ「俺達は……無事である事を祈るしかないかもな。マヤ、今日の郵便物を見てきてくれ」

その後

マヤ「あ！兄貴！混じつててわかんなかったけど、これ、ミルさんからの手紙！」

カミュ「マジか、読んでみるか」

その後、デルカダール城

マルティナとラーズの部屋

バタン！

カミュ「ラース！いるか!？」

カミュは猛スピードで部屋のドアを開けた

ラース「お前な、いくら何でもノックくらいしろよな。それで？何だよ」

カミュ「悪い、急いで来たからよ。俺、お前に隠してた事があるんだ」

ラース「ん？お前が隠してる事なんかたくさんあるだろ」

カミュ「そ、そういうやつじゃねえ！俺とマヤとベロニカとセーニヤはお前に隠してる事があったんだ。ミルさんの事だ」

ラース「何だって!!？」

カミュ「お前がミルさんにクレイモランに来て、何かあったら俺に頼れって言ったんだよな。ミルさんはその通りに俺の元に来た。それが大体四ヶ月前だ。その日は、丁度ベロニカとセーニヤもいたんだ。だからあの二人も知ってる。

ミルさんはお前の元家族にお前への怒りから、子どもの頃のお前のような事をさせられ始めたんだそうだ。それで体がつらくなったから、俺の元でたまに匿ってやってたんだ。

二ヶ月くらい続けてたんだが、最近ミルさんが来なくなつたんだ。何かあつたのかと考えていたら、この手紙が来た。お前も読んでくれ」

カミュはラースに手紙を渡した

ラース「カミュさん、マヤさんへ

急にお手紙になってしまい、すみません。どうやら、私はもうそれらには行けません。私はこの後、新たにできた魔法の実験台にさせられるようです。

もうこうなつた以上、生き残る事も難しいでしょう。最後のお別れがこのような形になってしまい、大変申し訳ございません。

カミュさんやマヤさんに匿われていなければ、私はもつと早く倒れ、この世を去つていたでしょう。少しでも長く生きられたのは、あなた達のおかげです。

本当に感謝します。僅かな期間でしたが、あなた達兄妹をととても微笑ましく、そして羨ましく見ておりました。

仲がよく、お互いを信じながら笑いあい共に生活する。本来の家族の形でした。私の家ではもう見られなくなった光景でした。何十年ぶりに家族の光景を見たと思います。

いつまでもその形を大切になさってください。

グラン坊つちやま、いえ、ラース様。私はもうあなたのお世話係ではなくなつてしまいましたが、私の中にはいつも優しいあなたがおりました。

どれだけ酷い事をされても、痛みを受けても、私やギン様に向けてくれた笑顔。今でもすぐに思い出せます。私の人生の支えとなってくれました。

私は命の大樹へと還ります。ですが、そこからギン様と共にあなたを見守っていますよ。

これからもマルティナ様や子ども達とどうか、あの頃にはあり得ないものだった幸せを、作り続けてください。ミルはいつでもあなたを応援しています。ありがとう」

ラースは読んでいる途中から泣き始めていた

カミュ「……………」

ラース「何で…… どうしてだよ!!カミュ!!?なぜ知らせなかった!!」

ラースはカミュを睨みつける

カミュ「すまねえ、ミルさんに口止めされてたんだ。私の事で無駄な心配をかけたくないって。あの家の事をもうお前と関わらせたくない、と」

ラース「ミルさんがそんな事を……。くっ……。ミルさんは俺のお世話係なんかじゃなかったんだ。本当は俺のお爺様、ギン様のお世話係だったんだ。」

だが、俺の待遇に我慢できなくなったミルさんが、俺に手を伸ばし

てくれてな。それのおかげで俺は生きる事ができた。ミルさんは俺にとって一番最初の命の恩人なんだよ」

カミュ「…………… すまねえ、俺、匿って生活させるだけだったんだ。まさか、ここまで話が進んでいたとは思ってなかったんだ。家の場所とか教えてくれなくてよ。」

ミルさんに気配を無くしてついて行った事はあるからおそらくの場所はわかるんだが、その家は不思議な感じだな。魔法でもかかっているのか、窓からは何も見えないんだ。

だから、俺に出来る事はこっちに來てくれた時に怪我の手当てとかしてやるくらいだったんだ」

レース「俺、その家に行く。もう親なんて関係ない。その家全部ぶち壊してやる」

レースは立ち上がり、部屋を出ようとする

カミュ「な!? 馬鹿! やめろ!!」

カミュはレースの前に出た

レース「どけ!! カミュ!! 俺はな、あいつらが憎くてしょうがねえんだよ!!」

カミュ「やめろ!! レース!! 早まるんじやねえ!!」

二人は取っ組み合いになった

バタン！

マルティナ「何の騒ぎ!? カミュ!? ラース、何してるの! カミュから離れなさい!」

グレイグ「何があったと言うのだ! 一旦落ち着け!」

ラース「俺は! 俺の人生から大事なものをいくつも奪っていくあいづらが許せねえんだよ!! 邪魔するんじゃないぞ、カミュ!!!」ガン!

カミュ「痛ってえ!! おっさん!! 早くこいつ取り押さえてくれ! 俺じゃあ限界だ!!」

グレイグ「ラース!! どうしたのだ! お前らしくもない! 落ち着かなか!!」

マルティナ「ラース! 暴れないで!!」

その後、グレイグとカミュによりラースは気絶させられた

カミュは事情を二人に説明した

グレイグ「そうだったのか、ミルさんが」

マルティナ「ラースはきつと親に対する憎しみで暴れていたのね。でも、そんな事したって何の解決にもならないわ」

カミュ「むしろそうやってしまえば、あいつらと同じ事をしていくって事だ。ラースにはそんな風になってほしくねえ」

グレイグ「このまま椅子に縛っておこう。また目を覚まして暴れられたら大変だからな。すまない、ラース」

その後

ラース「ぐっ……。ここは……」

ラースは目を覚ました

マルティナ「ラース！目を覚ましたのね！覚えてる？」

ラース「俺……。そうだ。俺の親が、関係ないミルさんまで……。この紐を解いてくれ！マルティナ！俺は、あいつらに復讐するんだ!!」

ラースはジタバタと暴れている

マルティナ「ラース！そんな事したって何も変わらないのよ!!」

ラース「俺は、今までたくさんさんの傷をあいつらから受けてきた！大切なものをたくさん奪われてきた！その俺が復讐したって当然だろ

うが!!」

マルティナ「絶対に駄目よ、ラース!!それをしてしまえば、あなたはその人達と同じになるわよ!!」

ラース「!!……でも、どうすればいいんだよ。俺のせいで関係ないはずのミルさんの命を巻き込んだ。この怒りは、どこに向ければいいんだよ!!」

マルティナ「ミルさんはあなたに最後まで望んでいた事は何だったか覚えてるかしら?」

ラース「……………」

マルティナ「あなたがいつまでも幸せであってほしいという事よ!!その願いを、あなた自身が壊してどうするのよ!!」

ラース「!!」

マルティナ「私と子ども達と一緒に幸せを願ってくれているのよ?そんな事したら、あなたはミルさんを悲しませてしまうの。ね?だから、恩人の最後の願いくらい叶えてあげましょう」

ラーズ「…………… そう…………… だな。俺、あいつらへの憎しみに囚われて、大事な事を見逃してた…………… ありがとうな、マルティナ。俺に気づかせてくれて」

ラーズは大人しくなった

マルティナ「当たり前前でしょ？私はラーズの妻よ？あなたを支えなくちゃ妻として恥ずかしいわ」

ラーズ「ハハハ！マルティナ、かつこいいな！」

マルティナ「それに安心して。国以外で認められてない魔法の研究は御法度なの。今、カミュがシャルル王女達に話をしに行ってるわ。あなたが手を下さなくとも、罰がくると思うわ」

ラーズ「いい気味だな。あ、もう暴れないから解いてくれるか？体が痛いんだが」

マルティナ「あ！ごめんなさい、グレイグが目を覚ました時にまた暴れたら困るって言って縛ったのよ。すぐ解くわ」

ラーズ「ふう…………… ありがとうな、マルティナ。うわ、跡ものすごい残ってるじゃん！どれだけ強く縛ったんだよ」

ラーズの手首にはクツキリと跡が残っている

マルティナ「違うわよ。それだけあなたが暴れたの。覚えてないの？」

ラーズ「カミュに突っ掛かったのは覚えてるんだが、その先は切れただんだと思う。覚えてないや。後で謝らねえと」

マルティナ「カミュなんてあなたに思いつきり殴られた跡が顔についてるのよ。見てて痛々しいわ」

ラーズ「マ、マジか。やべえ、あいつ怒ってるだろ。今回は俺が悪いから、素直に罰受けるか」

マルティナ「カミュとグレイグと私で何とか抑えられたんだから。何だかあなたの強さを体感したわ。それに、とっても怖かったわよ」

ラーズ「うう……。すまねえ、マルティナ。怖がらせたんだな」

ラーズは少し小さくなっている

マルティナ「そうしてると少し可愛いのにね。人って変わるものね」

ラーズ「男に可愛いとか使うなよ。嬉しくないからな」

マルティナ「うふふ、ごめんなさい」

150. ずっと幸せで

次の日、イレブンとカミュとベロニカ達が城にきた

マルティナとラーズの部屋

イレブン「そっか。ミルさんにそんな事があったのか」

ベロニカ「そんな結果になっていたなんて。ラーズも悲しんでいるわよね」

カミュ「あの後どうなったかは俺も知らねえからな。ラーズのやつかなり荒れてたんだ」

セーニャ「カミュ様のその痣はラーズ様につけられたものだったのですね。ホイミしましょうか?」

カミュ「いや、ラーズに見せて謝ってもらわねえとな」

ベロニカ「うわ、子どもっぽい」

イレブン「悪い顔してるよ?カミュ」

カミュ「うるせえ!顔は元からだ!」

ガチャ

マルティナ「待たせちゃってごめんなさい」

ラーズ「昨日はすまなかったな。随分と暴れたみたいだ」

セーニヤ「あ、ラーズ様、ミル様の事、黙っていて申し訳ございません」

ベロニカ「私も謝らなきゃ。ごめんなさい、ラーズ。まさかミルさんが亡くなってしまうとは思わなかったの」

ラーズ「いや、ミルさんにそう言われていたんだから仕方ないさ。亡くなったのは悲しいけど、幸せになってほしいって願いを俺は受け取ったからな。いつまでも悲しんではいられないぜ」

マルティナ「あの後、何とか落ち着いて正気を取り戻してくれたの」

カミュ「あーあ、何だよ。すっかり元通りか。なら、この顔についた痣の事どうしてもらおうかな？」

ラーズ「やっぱり怒ってるのか。マルティナから聞いたが確かにはつきり残ってるな。悪かった、カミュ。だが、体を張って止めてく

れたのは感謝している。お詫びに今日一日お前の言う事を聞いてやるよ」

イレブン「あ、ラース。あまり変な事言わない方がいいよ。カミュ変な事企んでるから」

ベロニカ「そうよ！こいつひよっこなんだから、甘やかすと痛い目にあうわよ」

カミュ「うるせえぞ、お前ら。へへ、言質は取ったからな。俺の好き放題させてもらうか」

ラース「まあ、もし余りにも目に余るようなら次の日自分がどうなるかわかってろよ」

カミュ「流石にそこまで馬鹿じゃねえよ。まあ、セーニヤ取り敢えず謝ってもらったからこの瘡治せるか？」

セーニヤ「はい、お任せください」

マルティナ「わざわざその為だけに残してたの？」

カミュ「当たり前だろ？ちゃんと謝ってもらわねえとな」

ラーズ「やれやれ、これは今日一日大変そうだ」

訓練場

ギバ「あの、イレブンさん、ラーズ將軍とカミュさんは何をしているんですか？二人の取っ組み合いというよりは、カミュさんが一方的って感じですけど」

イレブン「なんかね、今までラーズの事ぶっ飛ばしたかったんだけど、返り討ちにされて腹がたってたんだって。だから、気がすむまで今までの分を返してるらしいよ？」

バン「うわあ、師匠が一方的にやられてるのなんて初めて見た。でも、この後まざくくないですか？カミュさん死んじゃいますよ？」

ベロニカ「ラーズも一応そんなんでいいならって言って認めてたから怒る事はないけど、あいつはこれだから子ども扱いされるのよ」

その後

カミュ「確かに体を動かすとスッキリするな。ラーズの言ってる事は正しいって事だな」

ラーズ「身体中痛え、本気で殴ってきやがって。どんだけ俺にストレス溜まってたんだよ」

カミュ「俺の事を今まで散々馬鹿にしてきた分だろうが。さあ、次は酒場でおごってもらおうかな」

ラーズ「はいはい。怪我の手当てするから待ってろよな」

酒場

カミュ「へえ、こんな高い酒飲んだ事ねえや。…… おお！中々けるな！」

ラーズ「まったく、人使いが荒い弟で困ったもんだな。俺ももらうぜ。…… おお、これは確かに美味しいな」

カミュ「何かつまみも頼もうぜ」

ラーズ「おう、どんどん頼め。たくさん食べようぜ」

夕方

カミュ「よし、これくらいで勘弁しといてやるよ。ありがとな、ラーズ。楽しかったぜ」

ラーズ「俺は酒場以外楽しくなかったんだが？まあ、いいけどよ。泊まって行かねえのか？」

カミュ「マヤが家で待つてるからな。流石に無理だ。また今度来るぜ」

ラース「わかった、それじゃあな」

夕食時

グレイグ「あの後からさつきまでずっと飲んでいたのか!？」

マルティナ「ちよつと飲み過ぎじゃない?酔ってないの?」

ラース「ん?飯なら食えるぞ?」

マルティナ「そういう事は聞いてないわよ。まあ、ラースが楽しかったならいいけど」

デルカダール王「ハツハツハ!仲がよくていい事だな」

その夜

マルス「とーちゃん、だ!」

ラース「だっこか。マルスも随分とマルティナに似てきたな」

マルティナ「ルナもあなたに似てきたわ。小さい頃のラーズの写真とか残ってれば見たかったわ」

ルナ「かーちゃん？」

ラーズ「村にあったが、もう残されてないからな。悪いな、ルナを見て想像してくれ」

マルティナ「この子達が大きくなったら何をさせてあげましょうか」

ラーズ「マルスには少し剣とか体術を教えてやろうぜ。少しでも強くなつてほしいからな」

マルティナ「そうね。ルナにはラーズがピアノを弾いてみせてあげて。きつと喜ぶわ」

ラーズ「おいおい、マルティナも見ただろ？俺、しばらく弾いてなかったから随分と下手くそだったんだぞ」

マルティナ「そんな事なかったわよ。子ども達も興味持つと思うわ」

ラース「そんなもんなのか？まあ、何にせよこの子達の未来は俺達
が作って行ってやらないとな」

マルティナ「そうね。これからまた頑張らしましょう」

ラース「もちろんだ。さあ、おやすみ、マルティナ」

マルティナ「ええ、おやすみなさい、ラース」

151. 数年後

それから四年の月日が流れた。ラーズの子ども達は五歳になろうとしていた

朝食時

マルス「おじいちゃん、グレイグさん。おはよー」

ルナ「おはよー!」

デルカダール王「おお、マルス、ルナ。おはよう。母さん達はどうしたのだ?」

ルナ「えっとね、先に行つてつて言われたの。すぐに行くつて言つてたよ」

マルス「おじいちゃん、グレイグさん。僕、気になる事があるの!」

グレイグ「どうした?マルス」

マルス「父さんと母さんとグレイグさんって誰が一番強いのか?」

ルナ「あ、私も気になる。お母さんはお父さんの方が強いって言っ

てて、でもお父さんはお母さんやグレイグさんの方が強いって言うてるのよ。どっち?」

デルカダール王「ハツハツハ！そういう事か。お主達の親とここに
いるグレイグはどちらも勇者が世界を救った時のメンバーじゃから
な。三人とも強いはずだぞ」

マルス「え!?! そうなの!! グレイグさんすごい!」

グレイグ「王よ、恥ずかしいのでおやめください。マルス、ルナ。俺
はお前達の母さんや父さんには敵わないぞ」

ルナ「えく。グレイグさんも違う事言ってる。もうわかんない」

デルカダール王「お主達は誰が強いと思うのだ?」

二人「お父さん!」

グレイグ「それでいいと思うぞ。それを伝えてやるんだ」

マルティナ「お父様、遅れてすみません」

ラース「おはようございます、王様、グレイグ」

マルス「父さん！やっぱり父さんが一番強いんだね」

ラース「ん？またその話か？マルス」

ルナ「おじいちゃんが私達が一番強いと思ってる人でいって言ったの」

ラース「王様、俺そこまで強くないですよ」

デルカダール王「ハツハツハ！子ども達の期待くらい背負ってやらんか、ラースよ」

マルティナ「私達のお父さんは国一番の戦士よ。強いに決まってるわ」

ルナ「お父さん、強いー！」

グレイグ「ハハハ！ラース、よかったな」

ラース「やれやれだぜ、まったく」

訓練場

マルス「えい！やあー！」

バン「ああ、いいじゃないか、マルス。昨日よりよくなってるぞ」

マルス「本当！バンさん、ありがとう」

違う場所ではラーズが魔法の指導をしていた

ラーズ「よし！今日はこの後、魔法を使えるやつは残れ。魔法の訓練もするからな」

兵士達「はい！」

マルス「ねえねえ、バンさん。バンさんはここで一番強いのは父さんだと思う？」

バン「そりゃあそうだろうな。俺は師匠が一番強いと思うぞ。あ、でもグレイグ将軍も強いし、マルティナ様もすごいな。うーん、難しい質問だな」

マルス「僕はね、父さんが一番強いと思うんだ！」

バン「ハハハ！マルスが思うならそうかもしれないな」

その後

マーズ「ラーズ將軍、見ていてください！マヒヤド！」

ラーズ「ああ、いいぞ、マーズ。ただ、氷を出す位置に気をつけろ？避けられるような間隔でおくなよ。お前の魔法のレベルなら周りに教えても大丈夫だぞ」

ルナ「マーズさん、すごい！私、メラしかできないよ？」

マーズ「ルナちゃんか。その年でメラができるならルナちゃんの方がすごいと思うぞ？俺はできなかつたからな」

ルナ「本当?!私もいつかお父さんみたいにたくさん魔法使えるかな？」

マーズ「ルナちゃんならできるさ。魔法好きなんだろう？」

ルナ「うん！好き！」

ラーズ「それじゃあルナ。メラの訓練やってみるか？」

ルナ「え、いいの、お父さん！やる！」

ラーズ「マーズは周りの奴らに教えていてくれ。よし、それじゃあこの手に向かって打ってみろ」

ルナ「え？でも、お母さんが人に向かって魔法は打つちやダメって言うってたよ？」

ラーズ「これは訓練だからな。それに、父さんなら打ったって平気なんだぞ？ほら、打ってごらん」

ルナ「えー、お父さんすごい！じゃあ行くよ。メラ！あれ？お父さんまで届かない」

ラーズ「メラってな、炎を出すイメージよりも、炎を飛ばすイメージでやると遠くに届きやすいんだ。こんな感じだな、メラ！」

ルナ「すっごーい！天井まで届いてる！わかった、私もやる！メラ！」

ラーズ「お、いい感じだぞ。そのままどんどん打ってみようか」

その後、マルティナ親子の部屋

マルス「ただいまーお母さん」

ルナ「私も訓練してきたー」

マルティナ「あら、お帰りなさい。どうだった？」

ラーズ「成長が早いな。流石マルティナの子だ。飲み込みや理解が早くて助かるよ」

マルティナ「あら、賢いのはきつとあなたの子だからよ。体を動かすのが好きな所とかね」

ラーズ「それは君もだろ？」

そう言い、二人がハグをすると

ルナ「あー、お母さん達またラブラブしてる」

マルス「僕、グレイグさんに聞いたんだ。母さん達がラブラブしてると子どもができるんだって。ルナ、僕達に弟ができるかもよー!」

ルナ「え!?!本当、マルス?やったー!」

ラース「マルティナ、すまねえな。大至急でグレイグに大事な話を
してこなくちやいけなくなつたみたいだ」

マルティナ「どうやらそうみたいね。これはコテンパンに話をし
きてちょうだい。衛生兵はいらないわ」

ラース「グレイグー！貴様、どこにいやがる!!」

ラースは部屋から出ていった

マルス「母さん、父さん急にどうしたの？」

マルティナ「今からお父さんはね、グレイグに大事なお話をしに行
くのよ。それと、そのグレイグが言っていた子どもができるってのは
嘘なのよ？」

ルナ「え、グレイグさんに嘘つかれたー！」

マルス「でも母さん、僕弟欲しい」

マルティナ「それはあなた達がいい子にしてたらきっとできるわ。
だから、いい子にしましょうね」

グレイグの部屋

ボタン！

グレイグ「む？ラースか、どうし……。何をそんなに怒っているのだ？」

ラース「よお、グレイグ。どうやら俺の子供たちに、とっても素敵な事を教えてくれたみたいだな？ラブラブしていると子どもができるってどういう事かな？」

ラースは指を鳴らしながらグレイグに詰め寄る

グレイグ「ぐっ……。！なぜ、それを。いや、決して変な意味では言っていない！それに、間違っていないだろう！！だから落ち着くのだ！」

ラース「てめえ!!変な事教えやがって！覚悟しやがれ!!」

グレイグ「やめろ!!ラース!!待て！俺は、悪くない!!」

夕食時

デルカダール王「先程、グレイグが部屋でボコボコにされて倒れていたそうだ。今、急いで医療部屋に連れ込んだが何かあったのか？」

マルティナ「いえ、お父様。子ども達に悪い事を教えた者への罰が

当たったんですよ。何も心配いりません」

ラーズ「そうですね。悪い輩には制裁が必要ですからね」

デルカダール王「(グレイグよ、可愛いそうに)」

マルティナ「そういえばお父様、今度のマルス達の誕生日パーティーはかなり豪勢に祝うんでしたよね」

マルス「僕、もうすぐで五歳！」

ルナ「私も！」

デルカダール王「ああ、各国の王達も呼んで孫達を自慢しようと思ってるな」

ラーズ「本当ですか。まあ、この子達なら平気でしょう。でも、正装にならないといけないな。面倒だな」

マルティナ「そんな事言わないで。折角似合ってるんだから。それに、イレブン達からも参加するって手紙が届いてるわ。とっても楽しみじゃない」

ラース「確かに、マヤも大型休みで帰ってくる時だもんな。皆、久しぶりだな。一年くらい会ってないからな」

152. 五歳の誕生日

二週間後

デルカダール城

大広間には各地の王様達やイレブン達が集まっていた

全員正装をしている

マルティナ「皆様、この日は私達の息子、娘の誕生日にお集まりいただき誠にありがとうございます。こちらが大きくなつた自慢の息子達です」

ラース「ほら、前に出て自己紹介だ」

マルス「マルスです！五歳になりました！父さんみたいに強くなりたいです！」

ルナ「ルナです。私も五歳になりました。魔法を頑張っていきます」

二人は階段から手を繋いで全員に礼をした

パチパチパチパチ

全員から拍手が贈られる

ラース「本日はお集まりの皆様と共にお祝いをしようと思い、宴をご用意しました。それでは皆様、マルスとルナの大きいなる成長を祝
い、乾杯！」

全員「乾杯!!」

その後、宴で城は賑やかになっていた

イレブン「ラース、マルティナ。久しぶり！マルス君もルナちゃんも久しぶりだね」

マルス「あ！勇者様達だ！」

ルナ「こんにちは」

ラース「お！イレブン、それに皆も来てくれていたのか」

ベロニカ「こうやって皆で集まるのは何年ぶりかしらね？」

セーニヤ「個人でなら会ってはいたのですが、全員では中々ありませんでしたね」

ロウ「わしも忙しくてのう。中々顔を出せなかったが、元気じゃったぞ」

カミュ「ラース、見てたぜ？気持ち悪い喋り方してたな？面白かったぜ」

シルビア「聞いたわよ、ラースちゃん、マルティナちゃん。カミュちゃんと義理の親子になったんですってね」

ラース「カミュ、似合わないのはわかってるからはつきり言うな。それとシルビア。俺はマヤなら妹として迎えたが、こんな弟はいらないんだがな」

カミュ「うるせえ！俺だってこんな兄貴いるか！」

グレイグ「だが、こうして皆で集まると旅の頃を思い出すな」

マルティナ「そうね。久しく旅なんてしてないけど、あの時の事は今でもはつきりと覚えてるわ」

ルナ「お母さん、皆と旅してたの？」

シルビア「そうなのよ、ルナちゃん。ここにいる九人で世界中を旅してたのよ」

マルス「じゃあ皆は世界のヒーローなんだね！いいなー！カッコいい！僕もなりたい！」

ロウ「ふおっふおっ、見ない間に随分とお主らに似てきたのう」

グレイグ「そうなんです。特にマルスは幼い頃の姫様によく似ておられる。性格はどうかはわかりませんが、もしかしたらこれはラーズに似ているのかもしれないね」

ルナ「ベロニカさん、見てー。私、メラ使えるようになったの！」

ルナは手に小さな炎を出してベロニカに見せている

ベロニカ「あら！すごいじゃない、ルナちゃん。五歳でメラが使えるなんて才能あるんじゃない？」

セーニャ「すごいですわ、ルナちゃん。お姉様も確かこの頃にメラを使えるようになりましたよね」

その時、デルカダール王が話しかけてきた

デルカダール王「すまない、ラーズ、マルティナ。王達に孫を見せにいききたいのじゃが、借りてもよいか？」

ラーズ「わかりました。マルティナ、俺が付いていくからマルティ

ナはここで皆と喋っていてくれ。ほら、マルス、ルナ。お父さんについてこい、皆に自己紹介しに行こうな？」

二人「はい」

た
ラーズはマルスとルナの手を持ってデルカダール王についてい

なっただね」
イレブン「ラーズもすっかりお父さんだね。優しそうなお父さんになっただね」

カミュ「いや、イレブン。騙されちゃダメだぜ？あいつは昔とほとんど変わってねえ。俺を馬鹿にしたり、組手相手をボコボコにしたりしてるぜ」

シルビア「あら、いいじゃない。何年経っても変わらないのはいい事だわ」

セーニヤ「そういえばシルビア様は大変有名になられましたよね。世界の至る所で名前をお聞きしますわ」

シルビア「そうなのよ！最近、王族の方の宴に呼ばれるようになって。アタシの夢を達成するのもあと一歩まで来たって感じね」

マルティナ「ベロニカ達は どうしてるの?」

ベロニカ「私は魔法の研究を進めながら、クレイモランで魔法の先生をやったりしてるわ」

セーニヤ「私はラムダで長老様の後を継ごうと思って、歴史を勉強しております」

ロウ「皆、自分の道を歩み始めておるのじゃな。ユグノアもお城が復興し、町として英気が戻ってきた。まだここほど賑やかではないが、頑張っておるぞ」

イレブン「僕はそこの王子として、今はユグノアに住んでるんだ」

グレイグ「何と! ついにイレブンも王子としての道を進み始めたのか」

マルティナ「いいじゃない! ユグノアを支える国、デルカダールとして私達もこれで本格的にサポートできるわ!」

ロウ「そうじゃのう。これで国同士での交流も増やしていこうと思っておる」

シルビア「カミュちゃんは どうしてるの？ マヤちゃんはメダル女学園に行っちゃったけど」

カミュ「俺はクレイモランのお城でシャルルからのお願いや交易の方の担当になって魔物の討伐や運ばれてくる物のチェックだな。後はデルカダールにクレイモランからの物を届けたり、逆もそうだな。後はラースにしごかれてるな」

マルティナ「そうね。カミュがこの城に来る時は大体仕事関係よね。マヤちゃんがないと全然遊びにきてくれないのよ」

イレブン「それ結構大変じゃない？ 特に一番最後」

カミュ「ああ、そうなんだよ。あいつ俺を見つけると嬉々として誘ってきやがるんだ。全くいい迷惑だぜ」

その後

マルスとルナとラースが戻ってきた

マルス「いっぱい偉い人いたー」

ルナ「綺麗なお姉さんが氷の魔法見せてくれたの！ とっても凄かったんだよ！ たくさんキラキラしてたの！」

ラーズ「リーズレットに遊んでもらったんだ。あいつ意外と子ども好きだったんだな」

マルティナ「あら、お帰りなさい。よかったわね、ルナ。そのお姉さんにお礼言ったの？」

ルナ「うん！ありがとうって言ったよ！」

ロウ「ルナは姫の幼い頃の性格によく似ておるのう。見た目はラーズじゃが、性格は姫のようじゃな」

ラーズ「今、何の話してたんだ？」

セーニヤ「今どんな事をしているのかという近況報告ですわ」

ベロニカ「そういえば、ラーズ達は今どうしてるのよって聞くまでも無さそうね」

マルティナ「これを言えば驚くんじやないかしら？そろそろ私、王女になるのよ」

シルビア「ええ!!本当!?お父さんは？」

マルティナ「お父様がそろそろ譲つてもいいとおっしゃっているの」

ラース「そうなんだよ。だから俺の仕事も本格的に始まるってわけだ。今の兵士長の仕事は終わっちゃうわけだ」

カミュ「よっしゃああああ！」

カミュはガッツポーズを取っている

ベロニカ「カミュ、喜びすぎでしょ」

イレブン「でも代わりに教えてくれる人はいるの？」

ラース「俺もたまには顔を出して教えるが、基本は武器に沿って教える人を決めたんだ。剣が一番得意なやつ、槍が一番得意なやつ、魔法が上手いやつ、って感じでな。総合的なのはもちろんバンだ」

グレイグ「なるほどな、教えるやつらを複数にしたのか」

ラース「ああ、出来る事を教えるだけの実力があれば大丈夫だと思つてな。教えていいレベルかどうかは俺の判断と本人の意向だ。あ、バンは強制だったけどな。そういえば、マヤの姿が見えないな。まだ来てないのか？」

カミュ「学校が終わったら飛んでいくって言ってたからそろそろだとは思うんだが」

バタン！

ロウ「ん？誰か城に入ってきたようじゃ。おお、噂をすれば何とやらじゃな」

マヤが走ってやってきた

マヤも白いドレスの姿をしている

マヤ「ハア、ハア、兄ちゃん達、ごめんなさい、遅くなった」

マヤは少し汗をかいて、息を切らしている

カミュ「おいおい、マヤ。折角綺麗な格好してきたのに、走って乱したらもったいないだろ」

マルス「マヤねーちゃん！」

ルナ「マヤお姉ちゃんだ！久しぶり！」

マルスとルナはマヤの姿を見て喜んで駆け寄った

マヤ「久しぶりだね。マルス、ルナ。五歳になったんだよね？おめでとう！」

マルス「ありがとう、マヤねーちゃん。マヤねーちゃん今日の服とっても綺麗だよ」

ルナ「マヤお姉ちゃん、私、メラ使えるようになったの！」

マヤ「私に似合ってる？マルス、ありがとう。ルナ、すごいじゃん！私にも見せてよ！」

シルビア「ほらほら、子ども達とはしゃぐのもいいけど、少し整えてあげるわ。折角かわいい格好なんだから」

マヤ「いしし、ありがとう、シルビアさん」

シルビアはマヤのドレスを直し始めた

ロウ「マヤちゃんは見ない間に大きくなって女の子らしさが更に増したのう。この白い服も似合っておるぞ」

マヤ「あ、じいちゃんだ。久しぶりだね！この服似合うよね!?友達にも褒められたんだ！」

マルティナ「急いで来てくれたのね、ありがとう、マヤちゃん」

リース「学校が今日で休みになってよかったな。それと、まだ俺達に言っていない事があるぞ?」

マヤ「あ、いしし。忘れてた。兄ちゃん、姉ちゃん、ただいま!」

マヤは笑顔で言った

リース「ああ、お帰り、マヤ」

マルティナ「お帰りなさい、待ってたわよ、マヤちゃん」

二人もそれに笑顔で返した

153. 誕生日2

ロウ「そういえばイレブン。お主あの事を皆に発表したらどうじゃ？」

セーニヤ「あら、イレブン様。何かあるのですか？」

イレブン「うん。実はね

僕、ついにお酒が飲めるようになったんだよ!!」

カミュ「おお！本当か！イレブン!!」

ラース「やったな!!ついに俺達の仲間入りじゃねえか!!」

シルビア「えー!!やったじゃない、イレブンちゃん。それなら早速皆で飲みましょう」

その後

マルティナ「イレブンと一緒にお酒を飲める日が来るなんて」

グレイグ「何か飲んでみたことはあるのか？」

イレブン「ううん。僕、初めて飲むなら皆と一緒にがいいから、この日まで待ってたんだ」

ベロニカ「嬉しい事言ってくれるじゃない、イレブン。なら初めてだしそこまで度数強くないやつで様子をみましょう」

ロウ「じやが、わしにお酒を注ぐ事もしてくれなかつたんじや。少し悲しかったのう」

セーニヤ「ですが今日から出来るようになりますわ。ロウ様、早速注いでもらってはいかがですか?」

ロウ「そうじやのう。イレブンよ、わしのコップにお酒を注いでくれんかの?」

イレブン「うん!もちろんいいよ!僕もずっとやりたかつたんだ!」

ロウ「ふおっふおっ、涙が出るのう」

マルティナ「ロウ様の夢の一つでしたからね。ほら、涙を拭いてください。イレブンの顔が見えなくなっちゃいますよ」

イレブン「こんな感じでいい？」

ロウ「おお、充分じゃ。どれ……。ああ……。孫の入れてくれた酒はどんな酒よりも格別じゃのう。美味しいぞ、イレブン」

イレブン「よかった、おじいちゃん。僕は何飲めばいいかな？」

シルビア「このカルーアミルクとかで試してみたらどうかしら？イレブンちゃんがお酒に強いかどうかかわかないでしょ？」

ラーズ「いやいや、シルビアさん。何言ってるんですかね。なあ、弟よ？」

カミュ「ああ、本当だな、兄貴。初めはこのホムラの酒で一気にガツンといくのが流儀つてもんだよなあ？」

カミュとラーズは互いに肩を組んで呆れた様子でホムラの酒の瓶を見せた

イレブン「あ、それってラーズのお気に入りのお酒だね。僕、興味あるな」

シルビア「駄目よ！イレブンちゃん！あの兄弟の顔見て？悪い事企んでる顔よ？」

グレイグ「確かに。ラースがあんなにニコニコしてるのも、カミュがニヤニヤしてるのも普通はない。俺も何か企んでると思うぞ」

ベロニカ「さつきこんな兄や弟はいらないって言ってたのに何よ。あの仲良さそうな感じ」

マルティナ「うふふ、意外とカミュとラースって似てる所あるのよ」

ラース「さあ来いよ、イレブン」

カミュ「相棒と一緒にお酒が飲みてえなあ」

イレブン「じゃあ少しだけ飲むよ」

イレブンは二人の元へ行った

セーニヤ「イレブン様、大丈夫でしょうか？」

シルビア「絶対酔わされるわよ。あの二人かなりお酒強いもの」

グレイグ「そうだな。俺もラースやカミュとはたまに飲んでいるが、あいつらのペースで飲むと俺もきついものがある」

ベロニカ「まあ酔うのも勉強になるでしょ。ほっときましよう」

マルティナ「私、子どももいるからあまり最近は飲めて無かったの。今日は多めに飲んじやおうかしら」

ロウ「姫とこうして飲むのも久しぶりじゃのう」

グレイグ「姫様、あまり無理はしないようにお願いします」

数時間後

イレブン「うえええええ。気持ち悪い…」

イレブンは机に突っ伏していた

ラース「何だよ、イレブン。だらしないぞ。なあ？カミュ」

カミュ「そうだな、兄貴。ほら相棒、まだ残ってるぜ。がんばれよな」

イレブン「ううううう。カミュとラースの馬鹿」

シルビア「ほーら、二人とも。イレブンちゃんかわいそうじゃない。やめてあげなさい」

ラーズ「まあそれもそうだな。イレブン、酔い覚まししてこいよ」

カミュ「楽しかったぜ。また飲もうな」

イレブン「もう二人とは飲まないから！」

シルビア「ほら、イレブンちゃん。バルコニーで風に当たりましたよ」

ラーズ「嫌われちゃったぜ、俺達」

カミュ「へへ、想定内だろ？ 兄貴。次はどんな作戦でいくんだ？」

バルコニー

イレブン「風が気持ちいい。あの二人に騙された。酷いんだよ、二人して。僕の事いじめてくるんだから」

シルビア「まあまあ。あの二人だつてイレブンちゃんとお酒飲みた
いって旅の頃から言ってたもの。少し羽目を外しちゃっただけよ」

マルティナ「あら、イレブンも酔い覚まし？ よくあの二人に付き

合つてて倒れなかったわね」

そこには先にマルティナが来ていた

シルビア「でも、もうヘトヘトよ。しばらくここで覚ましていましょう」

イレブン「マルティナも酔い覚まし?」

マルティナ「ええ、久しぶりに飲んだら体が慣れていなかったみたいなの」

シルビア「ずっと飲んでないとそうなるわよね。わかるわ、アタシも久しぶりに飲む時はたまになるもの」

イレブン「ラーズ達のお酒苦かった。あまり味もしなかったよ」

マルティナ「ラーズが好きなあのお酒はかなり度数が強い。私が今飲んでるこのワインの五倍はあるわよ」

マルティナはワインをゆっくりと飲んでいた

イレブン「マルティナの飲んでみてもいい?」

マルティナ「ええ、どうぞ」

イレブン「…… あ、さっきのより全然美味しい。アルコールもあれほど強くないし、ぶどうの味がする」

シルビア「普通最初はそういうお酒を飲んで体に慣れさせるのよ。あの二人は最初からイレブンちゃんを潰そうとして誘ってたのよ」

イレブン「もうあの二人とは飲まないもん。シルビアの言ってた通りにすればよかった。あー、気持ち悪い」

その頃、大広間

マヤ「あ、兄ちゃん。子ども達が眠そうにしてるんだ。私、部屋に連れて寝させてくるね」

マヤがマルスとルナの手を取っていた。二人はあくびや目を擦ったりしている

ラーズ「ああ、そうだったのか。悪かったな、世話をさせて。今日は疲れてるだろうからゆっくり寝させてやろう」

マヤ「ううん。むしろ楽しいよ。私に懐いてくれるのも嬉しいし、こうして遊べるのも久しぶりだからね。あ、後で私もお酒飲むね！」

マヤとマルス達は去っていった

カミュ「マヤのやつ、学校入ってから随分変わったよな。昔とは大違いだな」

ラーズ「ハハハ、いいじゃないか。昔のマヤは、目に少し絶望があった。未来を……考えていない感じだった。今はとっても明るくなった。どこかのお嬢様なんて言われても違和感ないぞ?」

カミュ「あいついろんな事やってるんだぜ。学校内でクラスをまとめたり、学園代表として学年関係なく皆が遊べるような企画を作ったりしてるらしい」

ラーズ「学園代表って…… 主席ってことか!? マジかよ!!」

カミュ「そう、あいつはこの城に帰ってくるためにもっと賢くなりたいし、いろいろ学びたいって言って勉強頑張ってたんだ。それに、王様にたくさんチャレンジするって言った事を実現させてる。すげえやつだよ、あいつは」

カミュはマヤを優しく見つめている

ラーズ「カミュ……」

ベロニカ「ほーら、二人とも。イレブンいなくなったんだから、こっちで皆と飲みましょう。ほら、そのお酒はまた後で」

ラーズ「わかったよ、ペロニカ。ほら行くぞ、カミュ」

カミュ「ああ、そうだな」

その後

マヤ「私、お酒飲むの久しぶりだなー。学校じゃあ飲めないからさ」

セーニヤ「マヤ様はどんなお酒がお好みですか？」

マヤ「私、あんまり種類わからないんだよ。昔は安いお酒しか飲めなかったから」

ペロニカ「それならこのライムのお酒はどうかしら？久しぶりならこういう爽やかなやつで行ってみましょう」

マヤ「へー、美味しそう。ありがとう」

ロウ「おお、いい飲みっぷりじゃな。ほれ、おつまみも食べなさい」

マヤ「ふう。これ美味しい！どんどん飲めそう！あ、私この豆好き」

セーニヤ「喜んでいただけてよかったですわ。私のこのお酒も美味

しいですわ」

マヤ「セーニヤ姉ちゃんのそれってワイン？」

セーニヤ「いえ、これはトウモロコシのお酒なんです。少し濁りはあるんですが、甘みもあるんですよ。飲みますか？」

マヤ「うん！私、それ飲んだ事ないや」

グレイグ「今度、城の皆で飲み会をしてもよさそうだな」

ラーズ「お！いいな、それ！兵士達も巻き込んで騒ごうぜ！」

カミュ「お前の所の兵士達、酔うの早ええんだよ。あつという間に酔っちゃうじゃねえか」

ラーズ「そうなんだよ。俺が前に鍛えてやったら、皆ぶっ倒れてよ。次の日訓練にならなかつたんだぜ」

グレイグ「ああ、あの日か。あれは最早一種の事件だったぞ。城に兵士が立ってないんだからな」

ペロニカ「あんたその時何飲ませたのよ」

ラース「ん？俺のよく飲んでるやつだ。皆してどんどん青ざめて
いってよ。不味いだの何だの言いやがって」

ロウ「ほほ。お主に付き合わされる兵士達もさぞ大変じゃのう」

ロウは少し苦笑いしている

マヤ「兄ちゃんは酒強いんだから、あまり周りを巻き込んだりや駄目
でしょ」

カミュ「そうだぞ。お前無自覚でそういう事やるのタチ悪いからす
んな」

ラース「えー。だけど、それのおかげもあつてか多少の耐性は付い
たみたいだぜ」

バン「俺達にとってその日は悪夢のようだったんですからね」

バンが横から話しかけてきた

グレイグ「おお、バン。お前もこつちに来るといい」

グレイグは空いている椅子を出した

バン「ありがとうございます。皆様、お久しぶりです。お元気そうですね」

バンもそこに座って話し始めた

マヤ「バンさん、久しぶり！」

バン「おお、マヤちゃん。見ない間にまたかわいくなつたね。お酒も飲めるんだ」

セーニヤ「バン様、大分お姿変わりましたね。この数年でまた鍛えられたようですわ」

バン「そりやあもう師匠から…… 本当に」

バンは苦笑いしている

ベロニカ「あー、まだ続いでるのね。ご愁傷様ね」

ラース「おい、バン。最近、師匠の俺に対しての扱いが雑になつてきてるぞ」

バン「カミユさんから師匠だからって何でも許していいわけないつて言われたので、つらい所はつらいって言うようにします」

ラーズ「あ……… おう」

ロウ「ふおっふおっ、兵士に勝てなくなってきたのう、ラーズよ」

ベロニカ「最近だどどっちが強いのか？まだラーズなのかしら？」

ラーズ「………」

グレイグ「それが意外とわからなくなってきたのだ。ラーズ、お前
たまに負けているな」

全員「ええ!!」

ラーズ「………」

バン「たまに俺が勝てる時があるんですよ。その日はめっちゃくちゃ
師匠落ち込むんですけど」

ラーズ「俺、マジで本気出さないとうっかり負けるんだよ、バンに」

ベロニカ「驚いたわ。もうそんなレベルなの？私達より絶対強い
わ」

カミュ「アハハハハ!! ラース、ダツセー!」

ベロニカ「ちよつとカミュ! 笑いすぎよ!」

ロウ「しかし、バンよ。それならもう師匠と呼ばなくてもいいのではないか?」

ラース「そうだぞ、バン。俺、お前に負けた事何回かあるのに何で師匠って呼び続けてるんだよ」

バン「いえ、もう慣れつてのもあるんですけど、俺の人生を変えてくれ、俺をここまで強くしてくれました。そんな人を師匠以外で呼ぶなんて俺にはできません」

セーニヤ「素敵ですわ、バン様。師弟の絆というものですね」

マヤ「しかし、兄ちゃんが本気を出して負ける姿か……。想像できないな」

ベロニカ「確かに……。私も想像できないわ。見てみたいけど」

グレイグ「俺も初めて知った時は驚いた。おそらくもう俺もバンには敵わないだろうな」

ロウ「もしや、この城最強の座はバンになるかもしれんの」

ラース「まだ……まだ、勝率的には俺だ！まだ……」

バン「師匠に鈴鳴流を使われると、俺勝ちにくくなるんですよ」

カミュ「攻撃が全く意味なくなるあれか」

グレイグ「俺もあれを使われるとこつちとしては手が出しにくくなるな」

ラース「逆に言えば、あれは俺が勝つための最終手段だ。そこまで追い詰められてるんだよ」

カミュ「今度皆で見えないか？」

ベロニカ「私、ラースが負けるのみたいわ！」

マヤ「私も見に行く!!バンさんを応援する！」

ラース「そんな気持ちで見にくるな！」

バン「それじゃあ俺、勝てるように頑張りますね！」

ラース「お前はたまには手加減しろ！」

バン「訓練で手加減なんかいらなんて言ったのは師匠です!!」

ラース「ぐっ……」

全員「アハハハハ！」

最終話 絆はいつまでも

その夜

バンが兵士達の所へ戻っていき、しばらくして

ラーズ「なあイレブン、ベロニカ、セーニヤ。一緒にあの曲合わせないか？前に何回かやったよな？」

イレブン「いいね！何年ぶりかな？ラーズは何を担当するの？」

ラーズ「俺はピアノだな。まだ覚えてるはずだ」

セーニヤ「安らぎの唄は私達も里でたまに演奏してましたわ」

ベロニカ「あまり大勢に見られたくないけどね」

グレイグ「安らぎの唄？何だ？それは」

シルビア「あら、グレイグったら知らなかったかしら？安らぎの唄はラーズちゃんの故郷の子守唄なんですって」

マルティナ「私もラーズが前に吹いてくれた時以来ね」

カミュ「俺はおそらくあの大樹に登った日の夜が最後だな」

ロウ「イレブンも前にユグノアができた時に吹いてくれたぞ」

マヤ「私も知らない！いしし、楽しみだな」

ラース「それじゃ俺が始めだからそこから各自で入って行ってくれ。せーの」

♪

しばらく演奏が続いた

パチパチパチ

ラース「いや、やっぱり大勢でやった方がいいな」

イレブン「うん！全部やったのは何年も前だもんね」

ロウ「何度聞いてもいい曲じやのう」

グレイグ「今のが安らぎの唄。確かにこれは心が温まるな」

マヤ「私も。励まされるような、優しさに包まれてるような不思議な感じだった」

カミュ「子守唄つてのも納得だよな。眠くなってくるぜ」

シルビア「四人ともとっても上手だったわよ」

マルティナ「ラース、ピアノまだまだ弾けるじゃない。今度ルナにも教えてあげて」

ラース「まあ、少しだけならな。本格的なのは無理だからな」

ベロニカ「シルビアさん、ありがとう」

セーニヤ「私達もこの曲を弾いていると落ち着く気分になれるんです」

マヤ「ねえ、兄ちゃん。学校にもピアノあるんだ！私も今度引いてみたいから教えて！」

ラース「ああ、いいぞ。おいで、マヤ」

その後、マルティナ親子の部屋

ラース「今日は疲れたなく。よく眠れる気がする」

マルティナ「皆と久しぶりに会えたし、たくさん話せて楽しかったわ。皆もこれからどんどん違う道を歩いていくのね」

ラース「そうだな。本来なら絶対に会う事はなかった俺達が、あの旅で皆がイレブンに出会った。そして、今までの関係が続いている。イレブンに出会えて俺は本当によかったと思ってる」

マルティナ「そうね。私もイレブンに会わなかったら今ごろどうしていたのかしら。なんて、想像できないわね。あの旅ではつらい事や苦しい事、悲しい事もたくさんあったわ。」

でも、楽しかった事や一緒に笑って過ごした事も多い。あの旅の中でできた絆はきつとこれからも消える事はないんでしょね」

ラース「へへ、そうだな。俺達は皆とずっと一緒だな。何たって魔王も邪神も倒せたんだからな！」

マルティナ「そうね。絶対そうだわ！私も皆とならどんな事になって立ち向かえる。いつだってそうよ」

ラーズ「もちろん、いつだって俺はマルティナの隣にいるからな。例え皆と一緒にいても俺はマルティナのそばにいる」

マルティナ「うふふ、私もよ。これからは私の騎士として守ってくれるんでしょ？期待してるわよ。ガラッシュの村の戦士さん？」

ラーズ「ああ。俺が絶対に君を支えて、子ども達を立派に育ててみせるぜ。だが、俺のサポートも頼んだぜ。デルカダール王女様？」

マルティナ「当たり前前よ。私はあなたの妻。どこまでもサポートするし、いつだってあなたの帰りを待ってるわ」

ラーズ「おやすみ、マルティナ」

マルティナ「おやすみなさい、ラーズ」

二人はゆっくりとキスをして、眠りについた

おまけ キャラ設定

他のキャラの設定を載せておきます。

バン

初期 城の兵士

途中 ラースの弟子

未来 兵士長

身長 170cm

体重 73kg

性格 明るく、努力家。決めた事には一直線。昔の事をそこまで引きずらない

年齢 初登場時 20歳

信念 当たって砕けろ

スキル 片手剣、槍、かくとう、盾

魔法 使えない

兵士には親の反対を押し切り入る。昔の笑われていた自分を変えようとしていた。ある日メグと出会い、恋をする。順調に進んでいき、デートに行くが魔物に襲われ、メグが大怪我をする。

その時メグを守れなかった事を強く後悔し、強くなるためにラーズの弟子となるが、ラーズには散々しごかれる。その後力をつけ、ラーズを越す。数年後ではラーズが兵士長の仕事を辞め、騎士になったため、バンに任される事になった。

兵士長としてはまだまだだか、マーズ達の力を借りて何とかうまくやっている。しかし、周りには馬鹿とよく言われいじられる。素直な性格が災いする事が多い。

これからもずっとラーズの事を師匠として尊敬している。メグと結婚し、二人で幸せに暮らしている。子どもはまだいないらしい。

ラーズが辞めた後の各武器の担当

総合 バン

片手剣 ロベルト

槍 ギバ

大剣 ベグル

体術 バン

盾 ダバン

ブーメラン ガザル

魔法 マーズ

作戦や指揮はマーズがたてる。船上の戦いや気配の探知などバンにしかできない事も多くあるため、頼りにはされている

担当者達の簡単な性格

ロベルト 温厚。リーダーシップも取れ、周りからよく頼られる

ギバ 熱血漢。バンと共に熱くなりやすい

ベグル 鬼畜。兵士達の中でトップであり、ガザルと共に鬼畜コンビと呼ばれる

ダバン 優しく、皆を守ろうとする。だが、バンには素で接している。素の性格は少し攻撃的

ガザル 鬼畜。ベグルと共に鬼畜コンビと呼ばれる

マーズ 冷静。バンの保護者的立ち位置にいる。本人は嫌がっている

兵士達のステータス

HP バン>ダバン>ベグル>ロベルト>マーズ>ギバ||ガザル

MP マーズ>ガザル>ダバン>ロベルト||ギバ>バン>ベグル

ちから ベグル>ギバ>ダバン>ガザル>バン||ロベルト≧
マーズ

みのまもり ダバン>ロベルト>ベグル≧ギバ>バン>マーズ
>ガザル

攻撃魔力 マーズ>ガザル>ダバン>ロベルト>ベグル (バ
ンとギバは0)

回復魔力 ダバン>ガザル>マーズ>ロベルト (バンとベグ
ルとギバは0)

素早さ バン>ガザル>マーズ>ギバ>ダバン||ロベルト>ベ
グル

きようさ ロベルト>ダバン>ガザル||マーズ>ギバ>ベグル
>バン

みりよく ガザル>マーズ>ダバン>ギバ>ロベルト>バン>
ベグル

メグ

初期 カフェの店員

中盤 バンの元恋人

未来 バンの妻

性格 優しく、頑張っている人を見ると応援したくなるらしい。

年齢 初登場時 20歳

ラースがたまに訪れるカフェで働く店員。バンの恋人でもある。バンとは外で見回りや馬術の訓練を頑張っているのを見て、声をかけたのが出会い。その後バンにデートに誘われ、ソルティコに向かう途中で魔物に襲われ、大怪我を負う。

数年の記憶を失いバンの事を忘れるが、ラースの介入で再びソルティコへ向かい、記憶を取り戻す。バンが自分の事を守り続けてくれた事を知り、恋人となる。

数年後ではバンの妻となり、いつも疲れて帰ってくるバンの癒しとなっている。子どもは欲しいが、バンの気持ち次第だと考えている。

ミル

ラースのメイド

ラースが家族に見放され弱っていく姿を見ていられず、助ける。本当はギンのお世話係だったが、それに兼任してラースのお世話係となった。家では家事全般の担当。ギンと共にラースを優しく見守っている

ギン

ラーズの実の祖父

ラーズが生まれる前までの家のトップだった人。誰にでも優しく、時には厳しく接する。年齢で息子のジルゴにトップをしぶしぶ譲る事になる。

家が魔法で支配されてからは、罪悪感に駆られる。ラーズが家族に見放されてからは自分が魔法を教え、自分の息子には無いラーズの心の優しさに気づいたギンは、フォースの力を託そうとする。

ジルゴ

ラーズの実の父親

ラーズの家のトップ。生まれた時はラーズに期待していたが、魔法を上手く扱えないラーズに苛立っていた。しばらくして生まれたクリフに才能を見出してから、ラーズをこの家のクズとして扱う。魔法はたくさん使えるが、威力はそうでもない。

マルス

初期 赤ちゃん

途中 元気な男の子

未来 マルティナを守る騎士（見習い）

性格 とにかく元気。どんな事にもまず、試してみようとする

ラーズとマルティナの間に生まれた男の子。見た目はマルティナに似ているが、性格はラーズに似ている。楽しい事がとにかく大好き。お城を駆け回ったり、イタズラをしたりと自分が楽しいと思う事をどんどんやる。ただ、本当にまずいと思う事はやらない。

父親のラーズの事を尊敬している。ラーズにマルティナを守るようになるんだと言われ、マルティナの騎士として頑張っていく。ルナとはいつも仲良しでどんな時も一緒にいる

ルナ

初期 赤ちゃん

途中 明るい女の子

未来 マルティナを守る魔法使い（見習い）

性格 明るく、綺麗なものが好き

マルティナとラーズの間にも生まれた女の子。見た目はラーズに似ているが、性格はマルティナに似ている。どんな物にも興味を持つ。お城の中にある物の名前やどうやって使うのかをいろんな人に聞いて回っている。

魔法が使える、マルスとよく遊んでいる。マルスとはすごく仲良しでいつも一緒にいる。ラーズの事も大好きだが、マルティナの事も大好きである。ラーズのように魔法をたくさん使えるようになっていたいらしい。体を動かす事も得意である

マヤ

初期 カミュの妹

途中 王様の義理家族となる

未来 兄ちゃんのような男性を求めている

カミュと共に苦しい幼少期を送ったカミュの妹。最初はツンツンしていたが、段々と旅をしていくうちに人に慣れて少し優しくなる。そしてラーズ達の子どもが生まれる瞬間に立ち合い、知らない思いを抱く。

しかし自分の今までの生活と、それによってできた性格を気にして、普通の女の子にはなれないと思っていた。しかし、マルティナ達に愛を教わり王の義理の家族となる。

その後メダル女学園に入学し、様々な事を学ぶ。そこを主席で卒業し、皆に自慢する。今は恋人を募集中だそうだが、カミュとラーズの審査を通らないといけならしい。

シンジ

ラーズの友人であり、ダーハル―ネにあるカフェで店長を営んでいる。腕前は確かなもので、お菓子作りにかける情熱は本物。ラーズとは昔、食材調達の護衛の時に知り合い、そこで仲良くなった。口調は多少荒いが誰にでも明るく接するため、好印象は持たれやすい。表情が豊かなため、ラーズによく遊ばれている。

シルビアの大ファンであり、今までの公演は可能な限り観に行っている。悩みは女性と付き合えない事。工作上あまり時間を費やせないため、何回か付き合ってもすぐに別れてしまうらしい。

ラーズ

初期 ガラツシユの村の戦士

中盤 マルティナの元恋人

終盤 愛を捧ぐ魔法戦士

未来 マルティナ王女の騎士

細かい設定は二話を見てください。ここからは最終章の話です。

最終スキル

片手剣 かえん斬り ソードガード メタル斬り ドラゴン斬り
ミラクルソード 二刀の心得

ブーメラン スライムブロー メタルウイング パワフルスロー

デュアルカッター シャインスコール デュアルブレイカー 二
刀の極意

盾 ビッグシールド シールドアタック まもりのたて 会心完
全ガード うけながしのかまえ

かくとう あしばらい せいけんづき しんくうげり 岩石おと
し ばくれつきやく

フォース ファイアフォース アイスフォース ストームフォー
ス ライトフォース ダークフォース フォースブレイク

最終段階の最強魔法 メラガイアー イオグランデ バギクロス
マヒヤド ドルモーア ジバルンバ

仲間達とのれんけい技

イレブン 雷光ばくれつきやく デインとばくれつきやく
敵ランダム攻撃で雷属性

クワトロブレイク (カミュも必要) デュアルカッターとギガ
ブレイク 敵全体攻撃で必ず悪い効果にかかりやすくする

ファイアーバード (ベロニカも必要) メラミ 敵全体攻撃

安らぎの唄 (ベロニカとセーニヤも必要) 敵全員を眠らせ、仲
間達の悪い状態を解除し中量回復、しばらく悪い状態を受け付けない

カミュ 殺傷斬 アサシンアタックと心眼一闪 高確率で一
体の息の根をとめる

クワトロブレイク (イレブンも必要) デュアルカッターとギ
ガブレイク

ベロニカ ファイアーバード (イレブンも必要) メラミ

安らぎの唄 (イレブンとセーニヤも必要)

セーニヤ 妖精達のポルカ (マルティナも必要) 効果は同じ
です。イレブン君奪ってごめんなさい

安らぎの唄 (ベロニカとイレブンも必要)

シルビア 愛の舞踏 (マルティナも必要) ローズタイフーン
とピンクサイクロンとばくれつきやく 敵全体攻撃で高確率で魅
了させる

ロウ 大地の怒号 グランドクロスと岩石おとし 敵全体攻
撃

大岩石おとし (グレイグも必要) 本来は二人技だったが、仲
間にいれてもらった。効果は同じ

マルティナ 疾風双脚乱舞 ばくれつきやく 一体に十回攻
撃

竜巻旋風脚 バギクロスとしんくうげり 敵全体攻撃

愛の舞踏 (シルビアも必要) ピンクサイクロンとローズタイ
フーンとばくれつきやく

妖精達のポルカ（セーニャも必要）

デルカダール三銃士（グレイグも必要） 三人の攻撃力、守備力、素早さ、全属性耐性を二段階上昇。

グレイグ 二重バリア におうだちとビッグシールド 仲間への攻撃を高確率でガードする

氷結世界 アイスブレードとマヒャド 敵全体攻撃

大岩石おとし（ロウも必要）

デルカダール三銃士（マルティナも必要）

兵士長として長らく兵士達やバンを鍛えていたが、王様がマルティナに王位を継いだためマルティナの騎士として働く事になった。マルティナと共に他の国との交流や招待に赴いている。

本人はこれはこれで幸せだが体も動かしたいと思っている。たまに訓練場で体を動かしている。バンとの実力は五分五分となっている。嬉しいが、複雑な心境らしい。

妹となったマヤを気に入っているが、同じく弟となったカミュは悪友な感じだと思っている。無自覚でいろいろやらかすタイプであり、暴れると抑え込むのが非常に大変。酒はかなり強く、滅多な事がない限り酔うことはない。

カミュは弟にいらな思っているが、マルティナ曰く二人の何か企んでる時の顔はそっくりらしい。バンと決着が付きにくくなったため、カミュがよく被害にあっている。カミュとバン達曰くDS

番外編

ラーズは無防備？

カミュ達兄妹と家族になってから一年後

デルカダール城 玉座の間

マヤ「王様、ただいま！学校がしばらく休みになったから、帰ってきたよ！」

デルカダール王「おおマヤ、それにカミュ。よく帰ってきたな。元気にしておったか」

マヤ「俺は元気にやってたよ！寮の生活にも少し慣れてきたぜ！」

カミュ「すみません、王様。クレイモランでの仕事が多くなり、半年ほど顔を見せていませんでしたね。お久しぶりです」

デルカダール王「元気にやっていたのなら構わん。今日はマルティナもグレイグもラーズも休みじゃ。ゆっくり過ごしていくといい」

マルティナとラーズの部屋

コンコン

マルティナ「はい」

ガチャ

マヤ「姉ちゃん、ただいま！」

カミュ「よ！顔出しに来たぜ」

マルティナ「カミュ！マヤちゃん！久しぶりね。マヤちゃんは仕方ないけど、カミュも最近顔を出さなくて心配してたのよ。今、グレイグと喋ってたの。入って」

グレイグ「カミュ、マヤ。久しぶりだな。マヤ、学校はどうだ？楽しんでるか？」

カミュ「よお、おっさん」

マヤ「おっちゃんも久しぶりだね。学校楽しめてるよ。この前友達もできて、一緒に遊んだんだ」

マルティナ「あら、それはよかったわね。ふふ、たくさん友達増やすといいわよ」

カミュ「ラースはいないのか？」

グレイグ「普段ならこの時間は訓練しているが、昨日レースはバンの訓練で熱が入りすぎて訓練場を壊してな。あいつには罰として、一週間出入り禁止にした所だ」

カミュ「アハハハ！レースのやつ、馬鹿だなー！」

マルティナ「笑い事じゃないのよ。バンの治療にまたザオラル使う事になったし、修理費もかかるし何よりレースの落ち込みがすごかったんだから」

マヤ「兄ちゃん、相変わらず熱くなるとすごい事になるよね」

グレイグ「まあ、本人も悪いと思っっているから俺は一週間もする必要はないと思ったのだが、本人がそれでいいと言うのでな。まあ、それで今レースがどこにいるかはわからないんだ」

マヤ「じゃあさ、皆で兄ちゃんの事探しにいこう。二人とも休みなんですよ？」

グレイグ「俺は構わないぞ。レースが体を動かす以外に何をしているのか気になるしな」

カミュ「確かにあいつが休んでる姿は旅の頃もあまり見かけなかったよな。船の上で休んでるのは見た事あるけど、それくらいは皆もやってたしな」

マルティナ「うふふ。きっとラースはいつもの場所にいると思うわ」

マヤ「姉ちゃん、知ってるの？」

マルティナ「ええ。彼の秘密の場所よ。案内するわね」

ナプガーナ密林の近くの滝

マルティナ「あ、ほら。いたわ、ラースはここでよくお昼寝してるのよ」

ラース「スウ… スウ」

ラースは川の近くの草原で横になり寝ていた

グレイグ「ほう、こんな草原で寝ていたのだな。確かにここは気持ちがいいな」

マヤ「周りが草で囲まれてて意外と見えないね」

カミュ「へえ、あいつの寝顔なんてレアじゃないか？それに、少し無防備なんじゃないか？なあ、マヤ。いたずらしてやろうぜ」

マヤ「いしし、面白そう。やろう」

気配をなるべく殺して近づいていく

グレイグ「確かに少ないとは言え、魔物もいるのに無防備な気がするな」

マルティナ「見てて、グレイグ。ラース、すごいから」

グレイグ「??？」

カミュはラースのすぐ近くまで来ていた

カミュ「へ、ここまでくりやあ何でもできるな。日頃の恨みだ」

グイツ！

カミュ「な!？」

ドサ！チャキ！

ラース「……」

ラースは一瞬で起き上がり、カミュの手を掴んだ後引き込んで体に乗り上げ、近くに置いていた剣をカミュの首筋に当てていた

マヤ「え……？」

ラーズ「あ？カミュじゃねえか。んだよ。人の寝込み襲うとか元盗賊とは言え汚くないか？」

ラーズは少し眠そうな目をしている

カミュ「…… お前、寝てたんじゃなかったのかよ」

ラーズ「ほんの数秒前まで寝てたわ。でも、近くに気配を感じたからな。飛び起きたのさ」

マヤ「よ、よお、兄ちゃん、久しぶり！」

ラーズ「マヤ、君もいたのか。久しぶりだな。学校は休みなのか？」

マヤ「うん。長めの休みになったから顔を見せに来たんだ」

ラーズ「そりゃあいい事だな」

カミュ「いや、いい加減俺の上からどけよ！重いんだよ！首も締め
るな！」

ラース「あ？寝込みを襲う盗賊にこの程度で許してやってんだから感謝しろよ」

カミュ「うるせえ！お前がこんな所で無防備に寝てるのが悪いんだろうが！」

ラース「はあ、マルティナ。ここ俺のお気に入りなんだぞ。カミュなんか呼ぶなよ」

カミュ「んだと！てめえ！うぐつ…強く締めるな！」

ラースはカミュの首を絞め始めた

マルティナ「あら、やつぱりバレちゃったわね。こっちとしては本当に寝てるのか怪しいわよ」

グレイグ「本当は起きてたんじゃないのか？」

ラース「げ、グレイグにまで寝顔見られた。それと普通に寝てたからな！近くに気配があったら飛び起きるのは普通だろ！」

マヤ「兄ちゃんって無防備な所あるのかと思ってたけど、やつぱり抜け目ないんだね」

マルティナ「私と二人の時はずっと無防備よ」

ラース「そこはいいだろ、別に。警戒なんてするものないし」

カミュ「いいからどけ！そろそろギブ！」

ラース「皆もお休みなんだろう？ここで一緒に寝るか？マルティナは寝た事あるからわかると思うが、ここで寝ると気持ちいいんだぜ」

カミュ「話聞けよ！」

マヤ「俺も寝るー！」

マルティナ「私も久しぶりにゆっくり寝ようかしら」

二人はすぐに横になった

グレイグ「しかし、こんな所で……」

マルティナ「あら、いいじゃないグレイグ。こういう自然の場所で過ごすのも大事よ？」

グレイグ「いえ、そうではなく……」

ラース「ああ、ここなら虫はそうそう来ないぞ。だから安心して寝ろよ、グレイグ」

グレイグ「そう、俺はそこを気にし……。なぜ貴様が知っているのだ!!」

ラース「マルティナや兵士達から聞いたんだ。グレイグは虫が大の苦手ってな」

グレイグ「ぐぬぬ。貴様、人の恥ずかしい所を……」

ラース「苦手なものは仕方ないだろ。恥ずかしがるなよ。まあ、これで心配は無くなったな」

カミュ「もう……マジ……本当……落ち……る」ガク

カミュは気絶した

ラース「さて、悪い盗賊へのお仕置きも済んだし、皆で寝ますかね」

グレイグ「カミュは寝ているではなく気絶というんだぞ」

ラーズ「まあ、細かい事は気にすんなよ」

数時間後

ラーズ「いやーよく寝た」

マルティナ「やっぱりここは気持ちいいわね」

グレイグ「確かに思っていたよりも快適だったな」

マヤ「いいね、ここ。俺もまた来る！スッキリした！」

カミュ「俺だけ苦しい思いしたんだが」

ラーズ「こんなに気持ちいい場所なのに変なやつだな」

カミュ「誰のせいだと思ってやがる！ふざけやがって」

その夜

マルティナとラーズの部屋

ラーズ「よかったな、カミュ達も泊まってくれて」

マルティナ「ええ。ゆつくり休んでほしいわね」

ラース「マヤはまた騒いでそうだけどな」

マルティナ「いいじゃない。兄妹水入らずの時間も必要だわ」

ラース「それにしても、俺ってそんな抜け目ないように見えるか?」

マルティナ「そうね。私と出会ってから、私はラースは常にしっかりしてると思ってたわ」

ラース「いや、俺結構雑だからな? 抜け目なんてありまくりだぞ?」

マルティナ「私は最近わかるようになってきたけど、他の人はそうもいかないわ。結構しっかりしてるように見えるわよ」

ラース「だって俺、考えてても出来ない事だってあるし、料理だつて適量とか知らないし、休んでる時なんて周りまったく見てないからな」

マルティナ「それでも周りには他の事で綺麗に見えるわ。それに、そんな所ずっと一緒にいないとわからないわよ」

ラース「そ、そうか？あ、マルティナという時は確かにずっと無防備だな。今とか」

マルティナ「それは私もよ。いいのよ、近くには子ども達以外ないんだから」

ラース「まあ、ずっと警戒してるなんて馬鹿らしいもんな」

マルティナ「そうよ。こうやって気を抜いている時間も大切よ。だから私の前では抜けてていいの」

ラース「それじゃあ喜んでゆっくり寝ますかね。あ、俺明日も訓練場行けないじゃん…」

ラースは少しショックを受けている

マルティナ「やっぱり結構応えてたのね」

ラース「バンには謝ったけどよ、やっぱり動かしてないと落ち着かないんだよな。あ、明日カミュのやつ引きずって外で体動かそう！」

マルティナ「程々にしてあげてね」

ラーズ「流石にな。また暴れてどこか壊れたら多分俺、しばらく城
来れないと思うぜ」

マルティナ「それは私も困るわ。そうならないでね」

ラーズ「ああ、そうだな。さて、寝るか。おやすみ、マルティナ」

マルティナ「ええ、おやすみ、ラーズ」

ラーズの他国指導

五歳の誕生日を迎えてから、数ヶ月後

デルカダール城

朝食時

ラーズ「え？俺が他国の指導に？」

デルカダール王「うむ。先日、各国の王達とわしらの兵士の成長について話していてな。ぜひ教えにきてほしいと言われたのだ」

ラーズ「俺、そこまで指導はよくないですよ？元がよかったです。だからグレイグの方がいいんじゃないですか？」

グレイグ「そう言ってくれるのは嬉しいのだが、俺は基礎を教えただけに過ぎん。そこから発展させ、体に身につけさせたラーズもいい教え方をしているという事だ。あまり謙遜するな。お前の教え方も素晴らしいぞ」

デルカダール王「そういう事だ。特に、サマデュー王から強く勧誘されておったぞ。今回はサマデューとクレイモランに行つて指導を頼みたい。そうすれば他国との交流にもなるし、お主の勉強にもなるだろう」

「ラース「なるほど…… わかりました。俺、行ってきます」

「マルティナ「気をつけて行ってきてね。私も待ってるわ」

「グレイグ「子ども達は俺達に任せてくれ」

「ラース「えー……。グレイグはまた変な事教えられると面倒なんだが」

「グレイグ「うぐっ……。あれは、仕方ないのだ。どうして？とねだられてな」

「ラース「まあ、もし何か変な事教えてたら、それはもう命の大樹に還る覚悟ができたと認識しておこう」

「マルティナ「安心して、ラース。私も見張っておくわ」

「グレイグ「姫様まで!?私、そんなに信用無くなっていたのですか……」

「デルカダール王「ま、まあそれでは頼んだぞ。期間は二国合わせて二週間ほどだ」

ラーズ「わかりました。一部の兵士達も連れていきますね」

訓練場

ラーズ「と、言うわけで俺と一部の兵士達は一週間ずつサマデーとクレイモランに教えにいく事になった。俺が抜粋するやつは一緒に来てもらうが、自主的について来たいやつは俺に言ってくれ。行く日は四日後だ」

兵士達「はい！」

ラーズ「ベグルとマーズは俺と来てくれ。俺の代わりはロベルトとギバが務めてくれ」

四人「はい！」

バン「あの… 師匠。俺ってやっぱり…」

ラーズ「ん？どうした、バン。お前は這ってでも俺と来るだろ？」

バン「あ…… ですよ（すまん、メグ。新婚旅行はもう少し待ってくれ）」

四日後

リース「よし、集まったな。今回のメンバーはバンとベグルとマーズに加えて、新人のガクも来る事になった。よろしくな」

ガク「はい！よろしくお願いします！俺、リース様やバンさんに憧れて入ったんです！」

バン「え……俺も？」

ガク「はい！俺、少し前から兵士に憧れててよく訓練場を覗いてたんです。その時にいつもバンさんが頑張っているのを見て、この方のように努力をしてれば、俺もバンさんのように強くなれる、と思っていました」

バン「へ……へへ。お前、かわいいやつだな。よし！俺についてこい！」

バンは照れながらガクの前を歩いていく

ベグル「何ニヤニヤしてんだ、バン。気持ち悪いぞ」

バン「ああ!？」

マーズ「ガク、駄目だぞ。こいつ馬鹿だからついていくとろくなことないからな」

バン「ふざけんな!! 変な事教えてんじゃねえぞ、マーズ！」

ラーズ「ほら、お前ら。遠足じゃねえんだぞ、あまりはしやぐな。特にバン。うるさいぞ」

バン「ううっ……。師匠、この二人が俺のかわいい後輩に嘘教えようとしてるんですよ！」

ラーズ「ガクはお前だけの後輩じゃねえだろ」

サマデー「城下町

ガク「ここ、暑っついです。俺も皆さんみたいに鎧少し取りますね」

ラーズ「おう、取っていいぞ。そうしないとやっていけないからな……ん？あの人だかりにいるのは……」

ラーズ達の前には少し人が集まっていて、その中心には見覚えのある人物がいた

シルビア「ほら、押さないで。サインは皆書いてあげるから。順番に待ってちようだい」

マーズ「あ、あの方ってシルビアさん。ラーズ將軍のお仲間でした

よね」

ラーズ「おーい、シルビア！人気者は大変そうだな！」

ラーズは少し大声で声をかけた

シルビア「あら？この声は。まあ！ラーズちゃん！こんな所でどうしたのよ。お話したい所だけど、ちよつと待っててね。皆のサイン書き終わるから」

数十分後

シルビア「ラーズちゃん、パーティーの時以来ね。バンちゃん達もいるのね」

バン「お久しぶりです、シルビアさん」

ラーズ「俺達は今日から一週間、ここの城の兵士達を鍛えてほし
いってサマデー王から頼まれてな。今から向かう所だったんだ」

シルビア「あら！という事はフアーリスちゃんにも会うじゃない！
アタシも久しぶりに会いたいわ！一緒に行ってもいいかしら？」

ラーズ「俺は構わないが、遊びじゃないからな。それとフアーリス
って確かここの国の王子様だったよな。イレブンやベロニカから
色々聞いてるぜ。よくない事もいい事も」

シルビア「そう、そのフアーリスちゃんよ。遊びじゃない事はわかってるから大丈夫よ。アタシもラーズちゃんの指導に加わるわ！それじゃあ行きましよう」

「サマデイー城 玉座の間」

ラーズ「サマデイー王、お久しぶりです。先日は宴の方にご参加いただき誠にありがとうございます。本日は私に兵士達を鍛えてほしいとお伺いしたので、参りました」

サマデイー王「おお！来てくれたか、ラーズよ。お主は勇者達との旅の時も見かけたが、まさかそこまで指導が上手いとは思っていなかったぞ。兵士達にはお主が来る事を伝えてある。ぜひ、わしの息子共々鍛えてやってほしい」

ラーズ「了解しました。私の力が及ぶ範囲で頑張らせていただきます」

「訓練場」

ラーズ「話には聞いていたと思うが、俺が今日指導を担当するラーズだ。よろしくな」

フアーリス「あれ！イレブン君の仲間の方じゃないか！デルカダールからの指導者ってラーズさんの事だったのかい!?!」

ラーズ「君がファールリスか。話すのは初めましてだな。イレブンやベロニカから色々聞いてるぞ？情けないとかこれからが楽しみってな」

ファールリス「ア、アハハ。虹の枝の件は申し訳なかったからね」

ラーズ「お前に会いたがってる人がいてな、一緒に来たんだぜ」

ファールリス「え？僕にかい？どこにいるの？」

シルビア「ここよ！ファールリスちゃん！とうっ！」

シルビアは訓練場の壁の上から降りてきた

ファールリス「ああ!!シルビアさんじゃないか！お久しぶりです！」

シルビア「久しぶりね、ファールリスちゃん。何だか見ない間に遅くなっただんじゃないかしら？」

ファールリス「ああ！僕もこれからはちゃんと自分の力で頑張っていないと駄目だって気づいたからね！あれから毎日頑張ってるんだ」

シルビア「あら！すごいじゃない！それじゃあ今日の指導楽しみに

してるわね！」

ラース「それじゃあ皆、まずはいつもやってる事をしてくれ。筋トレだったり素振りだったりな。俺達はそれを見ていくからな。あ、ガク。お前もいつも城でやってるメニューをここでやってくれ」

ガク「はい！」

その後

ラース「(ふむ、悪くないやつはいるが、少し詰めが甘すぎるな)バン、ベグル、マーズちよつと来い」

三人「はい！」

三人は隅で話し合った

ラース「さて、三人はどう思った？」

バン「そうですね。悪くないと思いましたが、少し雑な感じが多い印象ですね」

ベグル「そうだよな。素振りの時もあまり意識している感じが見られませんでした」

マーズ「型はそれなりにできていますが、どうしても隙や振り方が大きいですね」

ラース「そうだな。お前達の感じ方は正しいはずだ。だから、今回はお前達が指導してみるんだ。俺は見ているからな」

三人「え!?!」

ラース「俺が受け持った事だが、俺が直々に教える事はもつと基礎が固まってからだな。だからそれまではお前達が教えるんだ」

バン「わかりました!」

ラース「よし、頼んだぞ。まあ、多少は俺もアドバイスとかするかな」

シルビア「ふーん、なるほど。しっかり考えてるじゃない」

シルビアはそれを見ていた

その後、バン達で少し話し合い内容を決めた

バン「それじゃあまず、俺達三人の所に適当でいいから分散して集まってくれ」

マーズ「集まった人達でこれからの話をしていくからな」

ベグル「その後、また別れて数日はそのグループでやってもらおうぞ」

一方、ラースはガクの方へやってきた

ラース「お、ガク。終わったか？」

ガク「はい、ラース様。俺もグループに加わりますね」

ラース「いや、お前は俺が教えよう。あつちは任せていて大丈夫だからな」

ガク「え！ラース様が俺に教えてくれるんですか？ありがとうございます！
います！」

ラース「んゝ。ムズムズするなあ。ガク、兵士になったんだから俺の事は様とつけなくて平気だぞ？」

ガク「あ、すみません。癖になってしまつて。それじゃあ、師匠とお呼びしますね！」

ラース「ハハハ！それはバンのやつにでも呼んでやれ。あいつ喜ぶ

からな。普通にレース將軍で構わないぞ」

ガク「わかりました、レース將軍！」

レース「それじゃあまずは俺と模擬戦だな。得意分野で構わないから基礎を確かめながらやっていけよ？」

ガク「はい！よろしくお願いします！ハア！」

レース「よし、いいぞ！その調子だ！」

他国指導2

その後

三人の所にバラバラになった人達は練習の説明を受けていた

マーズ「まず、型は皆それなりに出来ているからな。直さないといけないのは、意識の低さだ。ただ型通りにやっても、それは教えられただけの戦い方になる。自分がどういう戦いをしたいかによって変えていく方が自分のためにもなる。」

俺の場合だと、魔法も得意だからそれを交えた剣の使い方をしたい。という風に考えたんだ。自分の得意な事や出来そうな事を活かせる戦いが出来ればそれでいいと俺は思うぞ」

兵士達「なるほど」

マーズ「自分が何が出来て、何が出来ないかはよくわかってるだろう？深くまで考えなくていい。剣が得意なら、剣の何が得意だ？素早く攻撃する事か？重い一撃を与える事か？と、そんな感じで少し考えてみてくれ」

ラーズは少し離れた所で見ていた

ラーズ「(いい感じみたいだな、ベグルも問題なさそうだな。まあ、問題は……)」

ラーズはもう一人の元へ向かっていった

バン「俺はな、師匠にこの攻撃をすると、剣をこうやって返されるんだ。だから自分は手をこう捻って」ゴン！」

バン「痛え！な、何するんですか、師匠！」

ラース「ああ？てめえ、誰がそんな事教えろつつたよ。おい」

バン「え、だから戦い方を……。あ、基礎だった」

ラース「ハア。全く困ったもんだぜ。悪かったな、うちの馬鹿が。お前達には少し基礎が足りないと思っていたんだ。型はもちろん出てきている。筋だつて悪くない。だが、剣が迷っているな。」

もつと自分に素直になつてみる。自分は何ができる？片手剣か？体術か？魔法か？馬術か？それによつて、戦い方なんて変わるんだ。

何も全て型通りになんてしなくていい。むしろ、それは自分の良さを出させなくしている可能性だつてある」

フアーリス「僕が……出来ること、か」

バン「師匠、流石です！俺も言えるようにならないと」

ラース「ハア、お前は相変わらず一直線だな。何事にも順序つての

があるんだ。そこもしつかり考えろよな」

バン「はい！」

ラース「ほら、今度はお前が続けろ」

バンはまた話を始めた

シルビア「なるほどね。カッコいいじゃない、ラースちゃん」

シルビアは黙って見ていたがラースに感想を言ってきた

ラース「カッコいい？何がだよ」

シルビア「一人一人の個性を出させた戦い方をさせてるのね。確かに、型通りにやったってそれが通用するか、と言われたら答えはノーだわ。

でも、基本を覚える上では大切な事だから、どうしてもやりなれたその戦い方になってしまおう。兵士ちゃん達によくありがちな事ね」

ラース「気づいてたんだな。流石シルビアだ。そう、俺のじいちゃんにも言われた事だ。型が出来るから戦えるのか？それがお前が一番得意と思ってることなのか？ってな。俺は、誰かに教えられた事を伝えてるだけだ」

シルビア「ステキなお爺様ね。その教えを伝えるのは大事な事よ。結局は誰かが誰かに教えられた事を教え、その人がまた別の人に教える。こうして、教えは受け継がれていくの。ラースちゃんがやってる事はとっても大切な事だわ」

ファアリス「あの、ラースさん。僕、何が得意かわからないんです。どうすればいいですか？」

ラース「得意な事がわからない……。ね。得意とかで考えなくていい。ファアリスは何が出来る？」

ファアリス「僕、片手剣ならできます。でも、他の人よりは全然出来なくて」

ラース「別に他の人と比べてほしいなんて言っていないぞ。ファアリスにできる事が片手剣なら、それを使う戦い方で行こう。ファアリスはいつも戦う時、何を感じて戦ってる？」

ファアリス「僕はいつも相手の出方を待って、そこから動いていきます」

シルビア「あら、いいじゃない。出方を待って、それに応じた反撃ができれば、それはあなたの個性的な戦い方になるわ」

フアーリス「ええ！でも、シルビアさん。僕はそんな上手いことま
だできないんだ」

ラーズ「出来るかじゃないぞ。まずはその戦い方をしてみたいと思
うか？」

フアーリス「え。そりゃあ、そうできたらカッコいいと思う」

ラーズ「じゃあ決まりだな。フアーリスのこれからの戦い方はその
形でいこう。だが、そのためには出方に対する反撃策を考えておかな
いとな」

フアーリス「わかりました。頑張ってみます」

バン「師匠、全員決まったそうです」

ベグル「俺達のグループも決まりました」

マーズ「俺も大丈夫みたいです」

ラーズ「よし。今から、お前達がやりたいと思った戦い方があるは
ずだ。大きく四つにわけろ。

この男、バンの元には相手の出方を反撃するような戦いをしたいやつは集まれ。

この男、ベグルには一撃で決めたい戦いをしたいやつだ。

この男、マーズには素早い攻撃をする戦いをしたいやつだ。

どこにも含まれないようなやつは、俺の所に集まれ。さあ、別れてみてくれ」

兵士達「はい！」

ラーズ「シルビアはどうする？」

シルビア「それじゃあアタシはバンちゃんの所で見てるわ。バンちゃんの暴走はラーズちゃんも気にしてるでしょ？」

ラーズ「まあ、そうだな。それならありがたい。頼んだ」

数分後

ラーズ「ふむ、俺の元にはそこまで来なかったな。さて、二人はどういう戦い方をしたいんだ」

兵士「俺、剣よりも魔法やブーメランなどの遠距離武器で戦う方法がよくて」

兵士「俺は避けるのが得意だから回避をメインで使いたくて」

ラース「なるほどな。確かにどこにも含まれない。わかった、その得意な所を伸ばしていくぞ」

数時間後

ラース「どうだ？ブーメランも投げ方を変えるだけでより遠くに飛ばせるだろうか？」

兵士「はい！」

ラース「回避も大事だ。だが、避けるだけよりも避けると同時に攻撃する方が相手を翻弄できる。そのためには、腹筋、上腕、体幹、足、全ての筋肉を使う。まずは筋トレだな。そこがまだ足りない」

兵士「は…：… はい」

ラース「全員、今日はここまでだ！また明日このグループで始めるからな。覚えていろよ、それじゃあ解散だ」

その後、バン達を集めて今回の感想を集めていた

ラース「どうだった？」

マーズ「俺の所は問題無さそうです。言う事を理解してくれて、とても助かってます」

ベグル「俺の所は何だか脳筋な考えが多いですね。まあ、仕方ないんですけど、もっといろんな考えを持たせた方がいいと思ってます」

バン「俺の所は何だか自信がないやつばかりですね。自分から動けないから、相手を待つしかない。そんな感じがします。少し自信をつけさせないとすね」

ラース「ふむ。了解した。それなら明日と明後日はベグルの近くで俺も指導しよう。三日後から四日後はバン、五日後と最終日はマーズだ。それじゃあ、頑張ってくれ」

三人「はい！」

ラース「ガク、すまなかつたな。途中でやめてしまつて。この後軽くもう一度確認するぞ」

ガク「はい。俺は大丈夫です。お願いします」

バン達はシルビアと話していた

シルビア「三人ともお疲れさま。ラーズちゃんっていつもあんな感じなの？」

バン「あ、シルビアさん。はい、師匠は俺達に最初教えてくれた時もあんな感じでしたね」

マーズ「今思うと懐かしいな」

ベグル「俺達もたくさん学んだもんな。ラーズ將軍って教えるのが前から上手かったんですか？」

シルビア「そうねえ。アタシ達と一緒に時はしつかり教えるなんて事必要なかったからよくわからなかったけど、イレブンちゃんやマルティナちゃんはよくラーズちゃんに教わってたわ。わかりやすいとは聞いていたわ」

バン「師匠の指導者の素質は前からあったんですね」

マーズ「でも怒ると怖いよな。手加減が一切なくなるからな」

ベグル「あれはもう絶対に殺しにかかっていると思うぜ。バン、お前なら身をもってよく知ってるだろ」

バン「ハハ、何回死にかけたかわかんないや。いや、ザオラル使われるって事は死んでるのか。最近は少なくなったんですけど、前はよく花畑が見えてたんです」

シルビア「ああ、カミユちゃんやイレブンちゃんがよく言ってる事ね。あ」

シルビアが何かに気づいた

ベグル「ん？あ」

マーズ「お、おい。バン」

ベグルとマーズも気付く

バン「師匠は本当教えるのは上手いんですけど、体に直接叩き込んでくる事も多いので参っちゃうんですよ。あれはやっぱり俺達の事、痛ぶるの楽しんでる顔してますよもの。カミユさんも言っていましたけど、師匠ってDSな所あるんですよ」

ポン

バンの頭に手が置かれる

バン「ん？」

ラーズ「それってもしかしてこんな顔だったりするのかな？」

バン「……アハハハ、そうそう、その顔です」

その後、バンはサマデーの医療部屋に運ばれた

バンはその日久しぶりに花畑を見ていたという

それを見ていたガクはレースに対して若干の恐怖を抱いたらしい

他国指導3

次の日

ラース「ガク、お前は今日から個別で動け。どこのグループを歩き来しても構わない。そこで自分が使えそうな情報を覚えるんだ。紙とかに書くといいな。訓練終了後、何を学べたか俺が聞くからな」

ガク「わかりました！」

ラース「今日からは俺も各グループを見る。教え方はお前達に任せるが、何か困った事とかあれば俺に頼ってくれ」

三人「はい！」

その後、訓練場

ラース「魔法も使うなら魔力をもう少し高めてみよう。自分の中にある魔力は出せるか？特に思い浮かべないで手に出せるはずだ」

兵士「はい。俺は風がでます」

ラース「よし、できるようだな。その中にあるお前の魔力は風という事だ。瞑想はした事あるか？魔法を使うなら、やった事あるやつは多いんだが」

兵士「そこまで得意ではないですけど、やった事あります」

ラーズ「まあ、それなら慣れてもらわないとだな。瞑想はただ魔力を落ち着かせるためだけじゃなく、魔力を引き出すこともできる。

自分の中にある魔力を感じながら、ゆっくり自分の周りに纏わせるんだ。風ならおそらく浮かぶ事ができるはずだ。その状態を長く維持続けるんだ」

兵士「わかりました」

ラーズ「筋トレはやり方を変えるだけで随分つらいだろう?」

兵士「はい……。こんなに苦しいんですね」

ラーズ「だが、これを乗り越えればバランスと共に体も思い通りに動かしやすくなる。頑張ってくれ。さて、ベグルの方はどうなってるかな」

ラーズはベグルの方へ向かっていった

ベグル「攻撃をしやすくなる瞬間はいつだと思う?」

ベグルは一人を指名した

兵士「えっと、相手が攻撃を外した時ですかね」

ベグル「そう、それもあるな。だが、それは相手もよくわかってい
る事だ。俺達の一撃は強い分、どうしてもわかりやすくなる。分かり
易ければ相手は避ける事も防ぐ事も出来るだろう。警戒しているタ
イミングなら尚更だ。

だから、相手が隙を見せがちな攻撃をする瞬間が一番決めやすいん
だ。攻撃が来るとわかった時、瞬時に目の前や後ろに動き、一撃を思
いつきり決めてやる。

そんな感じで戦略が無ければ、俺達の一撃はただ振り回すだけに
なってしまうからな。少しは頭も使って考えてみてくれ」

兵士達「わかりました！」

ラーズ「なんだ、問題無さそうじゃねえか」

ベグル「あ、ラーズ將軍」

ラーズ「前の俺の説明をよく理解してるな。流石だ、ベグル。それ
と、攻撃が来る瞬間もそうだが、相手の攻撃を封じる事も大きな一撃
を決めやすくなる。」

剣だけでなく、体や体重を存分に使い相手に引かせない。そんな戦
い方も出来るはずだ。ベグル、俺が試しにやってみせるから相手役頼

むぜ」

ベグル「はい！」

ラース「こうやって攻撃が来た時、または来るのがわかった時に剣や盾、体を前に押し、相手に圧をかける。その瞬間相手は固まりやすくなるからな。そこに一撃を決める。」

この圧のかけ方や、さつきベグルが言った瞬時に近づくのにも体の筋肉は欠かせなくなってくる。筋トレもしっかりしておけよ」

兵士達「はい！」

ベグル「ありがとうございます、ラース將軍」

ラース「おう、気にすんなよな。俺もお前達が誰かに教えるのを見るのは初めてなんだからな。いい教え方だと思っぞ。どこかの馬鹿と違って順序もわかってるな」

ベグル「またやってるよ、あいつ」

二人はバンの方を見ている

バン「さつき言った動きは剣と体を動かすタイミングが違うんだ。剣を先に動かして、体は捻るんだ」

ラース「俺、今回だけであいつに何回教えてやらなきゃいけないのかね。毎日続くと流石にキレルぞ」

ベグル「バンも教えてる事は合ってるし、頑張ってるのがから回ってるだけです。難易度は合っていないですけど」

ラース「まあ、それはわかってるんだがな。ちよつと行ってくる」

ベグル「はい、こっちは偶に来ていただければ大丈夫だと思います」

ラース「おい！バン！お前、それはまだ早いだろうが！」

バン「あ、師匠。あ……そつか。そうですね。すみません！皆、悪かったな。もっと簡単なやつから行こう。今のは頭の片隅にでも置いていてくれ」

ラース「昨日からすまないな。こいつも悪気はないんだ。急に難しい事言われて大変だよな。まず、初歩的な物としては相手の攻撃を跳ね除けるやり方と隙の少ない躲し方で避ける事の二つだな」

バン「そうですね。攻撃を跳ね除けるやり方は何となくわかるか？想像は出来ると思うんだが」

兵士達「はい！」

ラーズ「隙の少ない躲し方ってのは横からのなぎはらいをしゃがむ、とかな。まあ、これは胴体より上のなぎはらいじゃないと危ないけどな」

バン「要は相手の攻撃を避けるのが後ろや横だけじゃなくて、その場で避けるやり方の方が隙も少なくて相手を翻弄できるって事だ。そのチャンスが増えるほど、俺達の反撃のチャンスだ」

兵士達「なるほど」

バン「よし！試しにいくつか教えるからやってみようぜ！ペアになってくれ」

ラーズ「はあ、バンは少し流れがわかれば大丈夫なんだがな」

訓練終了後

ファアリス「あの、ラーズ様」

ラーズ「え……。駄目、駄目、ファアリス。王子が人にあまり様なんてつけちゃ駄目だろ」

ファールリス「サマデーでは兵士に身分は関係ありませんよ。僕もそれがいいんです」

ラーズ「……せめてさんか將軍をつけてくれ。俺がムズムズするんだ」

ファールリス「それならラーズさん。僕、まだ習いたいので教えてもらえませんか？」

ラーズ「ふむ。まあ、ファールリスなら問題は無いな。さっきの避け方も周りより出来ていたしな。よし、少し他のを教えてやろう」

ファールリス「ありがとうございます！僕、父上にちゃんとした自分を見てもらうんです」

ラーズ「……………」

ラーズは少し固まっている

ファールリス「あれ？ラーズさん？」

ラーズ「……………自分の姿をはつきり見てもらえないと悲しいもんな」

ラーズは目を瞑りながら静かに言った

フアーリス「はい。前は民達のためと思いやっていましたが、それは自分の首を締めるだけだとイレブン君達に教わりました。これからは自分の力で、父上を驚かせてみせます」

ラーズ「へへ、お前すごいやつだな。気に入ったぜ、よし。こんな避け方もあるんだぜ」

他国指導 4

最終日

ラース「さて、今日は俺達が教えられる最終日だ。最後は別のグループの人達と実際に戦ってみろ。お互い教わった事を活かして、自分がやりたい戦いをするんだ」

兵士達「はい！」

ラース「それじゃあ適当にペアになるんだ」

兵士達がバラバラに動き始めた

バン「師匠、どうなると思いますか？」

ラース「おそらく拮抗するか、体力が持たなくなる方の負けが多いだろうな。だが、俺はファアリスに期待だな」

ベグル「ファアリスって確かあの王子の事ですよね。ラース將軍が訓練後に付き合ってますからね」

マーズ「なるほど。周りより練習量が多いのか。それは確かに期待しておこう」

ラース「よし、組んだな。それじゃ始めてくれ。俺達が回りながら見ていくからな」

四人で色々見ていく

ラース「ふむ、しつかりと皆出来ているな。やはりできる所を伸ばした方が戦いやすいだろう。お、ファールリスだ。相手はマーズの所のやつか」

ファールリス「……………」

兵士「ハア！フツ！トウ！」

ラース「いいじゃないか、防ぎながら相手の反撃を伺っている。相手は素早い攻撃だから隙は少ない。さあ、どうする？」

兵士「ハアア！」

ファールリス「！ここだ！」ガン！

兵士「ぐっ！」

ファールリス「やった！できた！」

ラーズ「ハハハ、よくやったな、ファリス。相手は反撃の隙が少ないのによくできたな」

ファリス「あ、ラーズさん！はい！教わった事をやれたら僕でもこんな戦いができるんですね！ありがとうございます」

ラーズ「だが、お前もよかったぞ。素早い攻撃で今まで相手に防ぐしか手段を与えなかったんだからな。いい動きだぞ」

兵士「ありがとうございます！」

その後

ラーズ「さて、今日でこの指導は終わりだ。何か少しでも自分の戦いや強さに気づけたなら、お前達はこの一週間で確実に強くなっているはずだ。これからも頑張ってくれ」

兵士達「ありがとうございます！」

玉座の間

サマデー王「おお、ラーズよ！これでもう指導は終わってしまおう。息子が前よりもとても頑張っているようだな。少し見ていたが、兵士達も皆いい動きだった。やはりお主はすごいやつじゃ。デルカダール王が自慢したくなるのも頷ける」

ラーズ「いえ、俺は少しでも意識を変えさせただけです。結局は自分の努力が無ければ、俺の教えは何も意味を為しません。この兵士達は皆、努力家です。途中で諦めない心を持ったいい兵士達ですよ」

サマデイー王「おお、そうだったか。それはいい事を聞いた。わたし達も負けてはられないからな。もし良ければまた今度指導に来てやってくれ」

ラーズ「わかりました、サマデイー王。それでは私達はクレイモランの方にも行かなければならないのでこれで失礼します」

その後

バン「師匠！俺、やっぱり師匠の敬語って変な感じがしますよ！」
バシツ！

バン「痛い！」

ラーズ「カミュのやつにもよく言われるよ。わかってるからはずきり言うんじゃないわねえ。次はクレイモランだ。寒いからしっかり対策しておけよ」

クレイモラン城 玉座の間

ラーズ「シャルル王女、本日より私ラーズにこの国の兵士達を鍛えてほしいと話を伺い、こちらに参りました」

シャルル「や、やだ。ラースさん。わざわざそんな丁寧な言葉遣いしなくていいんですよ。あなたは勇者様達と共にこの国を何度も救ってくれたお方。もっと普通の話し方でいいんですよ」

リーズレット「そうよ。それに、カミュもそうだけど貴方達にそんな敬語は似合わないでしょ。気持ち悪いだけだから、次からはやらないでほしいわ」

シャルル「ちよ、ちよつとリーズレット。そんな強めに言うことないでしょ。ごめんなさい、ラースさん」

ラース「……ハア。わかったよ。ほら、これでいいか？」

リーズレット「ええ、その方があなたらしいわよ」

ラース「全く、人が遊びとかじゃなく真面目に来たつてのに。それじゃあ、今日から一週間兵士達を鍛えよう」

シャルル「ぜひお願いします。それと魔法や剣だけでなく、よろしければ船上での戦い方も指導してほしいんです」

ラース「ん？船上で？」

リーズレット「ええ、この国は他の国との貿易や海に囲まれてる事も関係して、海や船の上で戦う事も多いの。そこでの戦い方もあなたなら教えられると聞いたわ」

ラーズ「なるほどな。わかった。それじゃあその事も指導しておこう」

シャルル「実は偶にベロニカさんにも教えてもらってるんですよ。そろそろ来る頃だと思います」

ラーズ「え？ベロニカが？」

バタン！

ベロニカ「シャルルさん！来たわよ！ってラーズ!?!どうしたの？」

シャルル「実は、今日からラーズさんにも兵士達を鍛えてもらおうと思っ呼んだのです。一緒に教えてあげてください」

ラーズ「ベロニカ、お前兵士達に指導なんてできたのか？」

ベロニカ「違うわよ！私は魔法を教えるの！ここの兵士達は皆、魔法を得意としてるからね！あなたみたいな剣とかは教えられない

わ。確かにそこも教えた方がいいし、一緒にやりましょう」

ラーズ「なるほどな。クレイモランらしいな」

大広間

ラーズ「マーズ、お前はこっちに残って教えるのを手伝ってくれ」

マーズ「はい！そのために呼ばれたんだと思ってましたよ」

ラーズ「ハハ、お見通しだったか。バン達は各自でやっつけてもらって構わないが、どうせなら外の魔物を相手に練習してみてもいいぞ。こっちの魔物はデルカダールより強いし、訓練にはもってこいだろう」

三人「はい！」

ラーズ「ああ、それとバン。この国は結構綺麗なアクセサリや宝石もある。今回バンには俺が無理言っついてきてもらったからな。メグに何かお土産でも買って行ってやるといいぞ」

バン「え……。う、ううっ……。ぐすっ……。師匠。俺、師匠がドSでも、師匠に一生ついて行きます!!」

バンは少し泣きそうになっている

ラース「おう、お前後で覚悟しとけよ」

ベグル「ほら、泣いてねえで外行くぞ、バン。ほら」

バン「馬鹿！引つ張んな！師匠！ありがとうございます!!」

マーズ「ほら、とつととあっちいけ」

バン「何だと！マーズ！お前、師匠に迷惑かけんじゃねえぞ！」

マーズ「お前に言われる筋合いはねえよ!!」

ベロニカ「ふーん、厳しいだけかと思ってたらそうでもないのね。やっぱり優しい所は残ってるのね」

ラース「なんで俺が鬼みたいな事してると思ってたんだよ」

訓練場

ラース「というわけで話には聞いていたと思うが、今日から俺、ラー
スが指導するからな。よろしく頼む」

ベロニカ「私は今まで魔法しか教えられなかったけど、ラーズは騎士だから剣の指導もすっかりできるわ。魔法も得意だから学べる事は多いと思うわよ」

ラーズ「魔法ならベロニカの方ができただろうが。それと俺の隣にいる男の名はマーズ。こいつはデルカダールの兵士の中でもかなりの魔法の腕前だ。もちろん剣の方もな」

マーズ「ラーズ將軍にそう言われると照れますね。よろしく頼むぞ」

兵士達「よろしく願います」

ラーズ「ベロニカから魔法が得意だと聞いている。だが、魔法だけ強くちや、それは魔法使いだ。兵士にはなれない。そのためには剣の方もしつかりしないと。まず、各自が得意な魔法を手に浮かべてみる」

その後

ラーズ「よし、皆できるな。それを手に纏ってみろ。炎なら赤く、氷なら青くなるはずだ」

兵士達「はい！」

ラース「そうだ、その感じだ。それを剣を握っている時にもやってみろ。剣までそれを纏わせる感じだな」

少しして

ラース「…… やはり出来ないな。まずは初歩的な物としてこれを使えるようになってもらおうぞ」

兵士達「はい！」

ベロニカ「ねえ、ラース。私はどうしたらいいかしら？」

ラース「ベロニカは明日からがメインになるかな。明日は魔力の出し方や増幅の仕方、使い方を教えていくからな。今日はどうやら大丈夫みたいだ。明日また来てくれ」

ベロニカ「わかったわ、明日また来るわね」

数時間後

マーズ「ラース將軍、全員なんとかできるようにはなつたみたいですよ」

ラース「わかった。それが魔法を纏わせる魔法剣だ。かえん斬りに似た物ではあるが、少し別物だからな。今からそれを使う戦い方を教えていく。それと、魔法と剣を同時に使う戦い方もな」

他国指導5

クレイモランで指導を始めてから三日目

玉座の間

カミュがシャルル達と話していた

シャルル「魔物の件はどうでしたか？カミュさん」

カミュ「シャルル王女、かなりまずい事がわかりました。魔物が一部で凶暴になっていたのはこの嫌な力を感じるルビーの欠片だと思われます」

カミュは欠片を見せた

リーズレット「あら、本当ね。確かに魔の力がこもってるわね。それぞで？」

カミュ「これを取引していた商人によると、もう片方の欠片は鳥の魔物により海の方へ持ち去られたとの事でした。おそらく、海の魔物達も凶暴になっているでしょう。しばらくは北海に向かうのは控えられた方がいいと思われます」

シャルル「まあ！大変！ラーズさん達が危ないわ！」

カミュ「え？ラーズがここにいるんですか？」

リーズレット「今この国に兵士達を指導しに来てるの。今日から北海で船上での戦い方を指導すると言ってベロニカと朝、向かっていったの」

カミュ「マジか!?そいつはまずいな。急いで俺も向かいます」

クレイモラン城下町

カミュ「ん?もしかしてあそこにいるのは...」

ベグル「ん?あ!カミュさん!お久しぶりです。こちらにいたりや
はり住んでいるだけあつて会えるんですね」

カミュはベグル達と出会った

カミュ「確かレースの所のベグルとマーズか。もう一人は見ない顔
だな。それより、レース達が今大変な事になってんだ!」

ガク「え!?!何かあったんですか?」

カミュ「ああ、詳しい事情は後で説明するから俺と一緒に北海まで
来てくれ。今すぐ船上の指導を止めさせるんだ」

その頃、北海

北海は大荒れとなっていた

ラーズ「ちっ！一体どうなつていやがる！こんなに急に荒れてくるとはな！」

クラীগオン？「キシヤアアア！」

さらに船は魔物のクラীগオンに襲われていた

バン「しかもやたらと凶暴な魔物付きですよ！さみだれ突き！」

ベロニカ「ラーズ！兵士達は全員他の船に避難させたわ！」

ラーズ「わかった！次はベロニカとバン！お前達が先に乗れ！俺もすぐに行く！さあ、こっちに来い！メラガイアー！」

バン「師匠！気をつけてくださいいね！」

ブンツ！

ラーズ「ベロニカ!!危ねえ!!!」

ベロニカ「あ………」

ベロニカにクラীগオンの足が薙ぎ払われようとしていた

ラーズ「ふん！うわああああ!!」

ラーズはベロニカを底い触手に飛ばされ、海に飛んで行った

バン「師匠!!」

ベロニカ「そんな!!!ラーズ!!」

クラীগオン? 「プギシャー!!」

クラীগオンの攻撃は止まない

バン「くっ……。ベロニカさん、逃げますよ!」

ベロニカ「でも、ラーズが!!」

バン「師匠ほどの方なら…… 大丈夫です。絶対に。それに、俺は師匠から何か緊急事態が起こっても、自分がやるべき事を間違えるなと何度も言い聞かされています。今、俺がやるべき事は皆を安全に送り届ける事です!」

ベロニカ「わかったわ!ラーズ、絶対大丈夫よね?」

しばらくして

バン「北海を抜けたら嵐は収まりましたね」

カミュ「おーい!!お前ら!!無事か!」

遠くからカミュ達の乗った船が来た

ベロニカ「カミュ!!大変なの!私を庇ってラースが北海に落ちてしまったのよ!!どうしましょう、あいつ泳げないわ!!」

カミュ「何だつて!!?あんの、馬鹿が!!俺が助けに行ってくる!お前達は仲間達を呼んでくれ!」

バン「カミュさん!俺も行きます!場所を案内しますよ!俺なら船の上でも戦えます!」

カミュ「わかった!ついて来い!」

北海

カミュ「何だよ、この嵐は。どこら辺だ?」

バン「飛んでいったので正確にはわかりませんが、この辺りだと思います。俺、潜って探してきます!」

カミュ「馬鹿!やめろ!凍えて死ぬぞ!!」

マーズ「でも、それ以外どうやって見つけ出すんですか？」

カミュ「……………ん？何だ、あれ」

少し先から光が昇ってきた

その中には気絶したラースとセレンがいた

カミュ「セレン様！」

カミュ以外「に、人魚!？」

セレン「ギリギリ体力を繋げたようです。かろうじて生きてはいますが、勇者でも無い人がこのままではかなりまずいでしょう。体は冷え切り、水も中に入り込んでいます。どうか処置をお願いします」

セレンはカミュにラースを渡した

バン「師匠！」

カミュ「すまなかった。ありがとな、セレン様！」

セレン「気にしないでください。大切な勇者の仲間の一人です。救いたくなるのは当然ですよ」

その後、クレイモラン城

ベロニカ「ラーズは!!？」

マーズ「今、医者とシスターの方が治療しています。ですが、体も冷えて水も飲んでいるそうです。カミユさんが今、必死に心臓マッサージをしています。俺達と交代でしばらくは続けていきます」

ベロニカ「……わかったわ。ラーズ、体を温めてあげる。ほら、ずっとこうやってメラを使ってるから早く治って」

ベロニカがラーズの近くに座り、炎で体を温めている

その頃、デルカダール城では

訓練場

マルス「うわあああん!!わああああ!!」

マルスが大声で泣いていた

ロベルト「お、おいおい。急にどうしたんだよ。マルス」

マルス「とうさーん。うわあああん」

ロベルト「ギバ、俺マルティナ様にマルスの事お願いしてくる。そのまま続けててくれ」

ギバ「ああ、わかったぞ」

一方、マルティナ親子の部屋

ルナ「ううっ……ぐすっ……」

マルティナ「全く。急にどうしたの？泣くなんて久しぶりなんじゃない？」

ルナも少し前に泣き出し、マルティナに宥められていた

ルナ「お父さんが急に心配になったの。よくわからないけど、すごく怖い気持ちになったの。あれ？マルスの声？」

マルスの泣き声が扉の前から聞こえて来る

コンコン

ロベルト「すみません、マルティナ様。さっきマルスが急に泣き出しまして。特に痛い思いとかをしたわけでは無いのですが」

マルティナ「ええ！マルスまで？ごめんなさい、ロベルト。わざわざありがとうございます。訓練に戻って大丈夫よ。ほら、マルス。落ち着いて」

マルス「うわあああん!!父さん……父さん」

マルティナ「一体何があつたの？二人が泣くのを見るなんて何年ぶりかしら」

バタン！

グレイグ「姫様!!!大変ですぞ!!ラーズのやつが!」

マルティナ「え……。この子達は、まさか本当に」

グレイグ「ラーズがクレイモランで死を彷徨っているそうです!!」

マルティナ「何ですって!!?」

グレイグ「今すぐにクレイモランへ!私も準備してきます!姫様も準備の方を!!」

マルティナ「わかったわ!ラーズ、そんな……」

死後の世界

クレイモラン城

バタン！

マルティナ「ラーズ!!!」

ロウ「おお、姫も来たか」

マルティナ「皆、ラーズに何があったの？」

ベロニカ「ごめんなさい、マルティナさん。今日ラーズと一緒に北海で兵士達と船上での戦いの指導をしたの」

カミュ「だが、その時の北海は運が悪い事に嫌な力を持ったルビーがあるらしくてな。魔物が凶暴になっている事が後でわかったんだ。それを知った俺が止めに行ったんだが、少し手遅れだったみたいだ」

バン「俺達が北海に来てしばらくすると、嵐が突然やってきてクラゴンのような魔物が襲ってきたんです。そいつは俺達を知ってるやつより明らかに大きくて、凶暴でした。」

クレイモランの兵士達を別の船に移動させ、俺とベロニカさんも移動しようとした時に、ベロニカさんが触手に襲われそうになり、それを庇った師匠が飛ばされて、海に落ちていったんです」

グレイグ「ラースが海に落ちただと?!こいつは泳げないはずだ!しかも、鎧を付けた状態なら普通でも浮くことは無理だ」

カミュ「その後、俺達が助けに行った時セレン様がラースの事を海中から上げてくれてな。それで今は助かってるんだ。まあ、体は冷え切ってるし水も飲んでる。心臓も止まってるから助かるとは言えないけどよ」

ロウ「イレブンよ、そろそろ交代するぞい。疲れるであろう?」

イレブンはラースに心臓マッサージをしていた

イレブン「ハア……ハア……。わかった、お願い」

シルビア「次はアタシが代わるわ」

マルティナ「ラース……」

その頃、ラースは

ラース「あれ?ここはどこだ?」

ラースは不思議な空間で目を覚ました

???「お?何だか聞き覚えのある声がするなあ」

ラーズ「ん？その声は……」

ラーズが振り返るとギルグードがいた

ギルグード「よお、ラーズじゃねえか。久しぶりだな。俺が死ぬ前以来だな」

ラーズ「え！ギルグード！お前、なんでこんな所に」

?? 「ギルグードだけじゃないぞ。ラーズ」

ラーズ「あ……。まさか、その声は」

ギルグードの近くからはもう一人現れた

爺「ラーズ、随分立派にやっておるようだな。わしは嬉しいぞ。自慢の息子じゃな」

ラーズ「爺ちゃん!!俺、ごめん。爺ちゃんに何も言わずに村を出て、しかも……皆を守れなかった」

爺「ハツハツハ！そんな事をいつまでも気にするんじゃない。わしはラーズが元気にいるならどこでだって平気じゃ」

ギルグード「それと、さつきお前なんでこんな所につて言ったけどよ。お前こそ何でここに来たんだよ。ここがどこだかわかってるか？」

ラーズ「え？知らねえけど」

ギルグード「ハアー。全く、お前は本当昔からそういう所は変わらねえよな。感情に左右されすぎだぞ。少しは自分が今どれだけまづいのか気づけよな」

ラーズ「な、何だよ。うるさいな！ギルグードだつてそうやって昔からいつも知ったかになつて勝手に勝手に呆れてさ、その悪い態度を直さないから村の女の子にもモテないんだからな！」

ギルグード「ほ、ほほう？言うようになったじゃねえか、ラーズ。どうやら、久しぶりに力の差を見せないといけないようだな？ああん？」

ギルグードの顔は少しピクピクとしている

ラーズ「力の差だあ？お前が俺に勝ち越した事なんてそうそう無かつただろうが。死んだからつて寝ぼけた事言つてんじゃねえぞ」

ギルグード「はい、俺、切れました。もう絶対に許しません。死ねええええ！」

二人の殴り合いが始まった

爺「全く、この二人はいつも争っておるな。そこが何よりも相変わらぬのは気づいておるのかねえ。なあ、婆さんや」

婆「フフ、私はこうやってまた仲良しな光景が見れて嬉しいですよ。爺さんも久しぶりに顔が見れて嬉しいのでしょう？顔が隠せていませんよ？」

爺「ハツハツハ！婆さんには敵わんなあ」

その後

ギルグード「ぐふう。オラア！」

ラーズ「ゴフツ！くつ……。てめえ、死んだ癖にまだ鍛錬積んでやがったな。とつとと楽になれや！」

ラーズは苦戦している

ギルグード「ハツハツハ！驚いたか！俺はどこでだって鍛錬してるからな!!ラーズなんか遅れをとつたらそれこそ俺は終わりだ。存在価値がなくなつちまう。ラーズはその程度か？なら、俺はもつと激しくいかせてもらおうぜ！オラオラオラア！」

しばらくして

ラーズ「ぐふう……」

ラーズはたんこぶや痣などが出来、動けなくなっていた

ギルグード「へっへーんだ。いやー、久しぶりにラーズのやつをボコボコに出来たぜ。最初からそうやって這いつくばってれば、痛い思いしなくて済んだのにな」

婆「あらあら、ラーズが負けたわ。あの子だって相当強くなったのにねえ」

爺「まあ、ギルグードもかなり鍛錬を積んでおったからのう」

ギルグード「そんなんじやあ、いつまで経っても俺には敵わねえな。俺としてはそれで構わねえけどな」

ラーズ「痛つてえ。たくっ！こんなに動けなくさせる必要あったのかよ。またあの頃みたいに傷だらけじゃねえか」

ギルグード「へっ……懐かしいな。あの木の下で毎日稽古してよ。お前が俺や爺さんに剣や体術を習って、俺に毎日挑んできて俺が返り討ちにしてたよな」

ラーズ「おい！そこは記憶が違うぞ！俺だって何回も勝ってただろうが！自分の都合のいいように変えてんじやねえぞ、馬鹿ギル！」

ギルグード「おいおい、まだ殴られ足りないのかよ。勘弁しろよな、俺はお前を痛めつけたいわけじゃねえぞ。ただその方がスツキリするだけだ」

ラーズ「こいつ…… もう一回死ねばいいのに」

爺「それでラーズよ。お前は今ここがどこかわかったかの？」

ラーズ「(やべえ、考えてなかった)…… えっと…… あまり考えたくないが、死後の世界か？」

ギルグード「何だよ、わかってたんじゃねえか。さては、俺に殴られてる時の衝撃でわかったな？」

ラーズ「黙れ、馬鹿ギル」

爺「ラーズが今ここにおるといふ事は、お前さんの体は死にかけているという事じゃ。しかも、ほぼ意識はこっちにあるようじゃな」

ラーズ「そうだ。俺、クラーゴンみたいなやつからベロニカを庇って、海に落ちたんだった」

婆「ラースはまた無茶をしたのね。もう、昔から無茶はやめてって言ったのにいつも聞かないんだから」

ラース「ご、ごめん、婆ちゃん」

ギルグード「ブヒヤヒヤヒヤ。アツハツハツハツハ！ダツセー！泳げねえ癖に海に落ちるとか！しかも、そんな事で死にかけてやがる！！ヒイ、腹痛え」

ギルグードは笑い転げている

ラース「……………てめえ」

爺「よさんか、ギルグード。仲間を守る優しい子を馬鹿にするでない。それで、お前さんはこっちに来たいかね？」

ラース「……………そんなの駄目だよ、爺ちゃん。俺、まだ守らなきゃならないものがある。村の皆や馬鹿ギルは守れなかつたけど、それでもこんな俺でもまだ守るべきものがある。俺、帰らなきゃ」

婆「勇者様やマルティナさんの事ね。いつも見てたわよ」

爺「ラースはやはりいい子じゃ。そうじゃぞ。守るものがあれば、人はどこまでも強くなる。これからも頑張るんじゃぞ。わし達はお

前さんを見ておるぞ」

ラーズ「爺ちゃん……。へへ、ぐすつ、ありがとう」

爺「ほほ、泣いていいんじや。よく、今まで頑張っていたのう。ずっと見ておったわい。自慢のわしの息子は強くなった」

しばらくして

ギルグード「泣き虫な所はまだあったんだな。まあ、お前の気持ちを考えたらあれは泣けるか」

ラーズ「ギルグードが……人の気持ちを考えるなんて。そんな……嘘だ」

ラーズは少しショックを受けている

ギルグード「さーて、次はどうやって力の差を思いしらせればいいかな？ラーズ」

ギルグードはまた戦闘態勢に入った

ラーズ「へつ、さっきのようにはいかなからな。ギルグード、こいよ。まだまだお前には負けられないぜ！」

爺「やめなさい、ラーズ、ギルグード。ラーズよ、お前さんを待っている人がいる。いつまでもここにいたら行けないよ。ほら、戻して

やろう。さあ、行きなさい」

ラーズ「チツ！ギルグード！次に会った時はお前をポッコボコにして土下座させてやるからな！覚えておけよ！」

ギルグード「へっ！その減らず口また黙らせて今度は俺のパシリにしてやるよ！光栄に待ってるんだな！ほら、はやく行きやがれ」

婆「ラーズや、誠に強き者は心優しき者。どうかゆめゆめ忘れずに」

ラーズ「わかつてるよ、婆ちゃん！ありがとな！」

爺「それじゃあの、ラーズや。またお前さんと会え、こうして話せて楽しかったぞ。次はもつと年をとってから来るんじゃないぞ」

ラーズ「うん。じゃあ、またね。爺ちゃん、婆ちゃん、ギルグード」

ギルグード「お前が無様な姿してたらまた俺が笑ってやるよ！」

ラーズは意識を無くした

リベンジ

バキッ!

ラーズ「何だと!ギルグード!!ん?」

ラーズは起きたと同時に何かを殴った

イレブン「痛いよ、ラーズ。急に起きるからビックリした」

イレブンは顔を押しさえている

ラーズ「あ、悪い、イレブン。すまねえ」

イレブン「もう大丈夫なの?」

ラーズ「んー。寒い」

イレブン「うん、大丈夫そうだね。皆を呼んでくるよ。暖かくして
て」

ラーズ「この返事でその判断もおかしいんじゃないか?」

しばらくして

マルティナ「ラーズ!大丈夫なの!?!」

セーニヤ「ラーズ様!!」

ラーズ「よお、マルティナ、セーニヤ。おはよう」

マルティナ「何だか随分と平和そうね!」

ラーズ「え? いや、死にかけたのはわかってるさ。でもほら、帰ってきたぜ?」

セーニヤ「よかったですわ、一時はどうなるかと思っていました」

カミュ「呑気なやつだぜ、全く。昨日までこっちはあんなに必死になって心臓動かしてやってたのに」

ラーズ「そんな事してくれてたのか。悪かった。迷惑かけたな」

ロウ「ラーズよ、何やら知らぬ傷が増えておらんか?」

ラーズ「あ、マジか。体にも残ってるのかよ」

シルビア「どういう事?」

ラーズ「俺、今まで死んだ後の世界にいてよ。そこで俺の爺ちゃんと婆ちゃんとかとギルグードと会って話してきたんだ。ギルグードとはそこで戦ったんだ。ボコボコにされたけどな」

グレイグ「な!?!お前がボコボコにされたのか!」

バン「師匠がボコボコにされるなんて……」

マルティナ「ギルグードってかなり強かったのね」

ラーズ「あいつ死んだ癖にずっと鍛錬してやがった。呆れたもんだよな。俺が救われてからどれだけ経ったんだ?」

バタン!

ベロニカが部屋に入ってきた

ベロニカ「ラーズ!よかったわ!目を覚ましたのね!」

ラーズ「おお、ベロニカ。無事で何よりだ」

ベロニカ「もう!庇ってくれたのは嬉しいけど、私よりよっぽどま
ずい事になったじゃない!心配させるんじゃないわよ!」

ラース「ハハハ、まさか海に落ちてしまうとはな」

ベロニカ「笑い事じゃないわよ！全く！」

イレブン「今、ラースが倒れてから四日が経ってるよ」

ラース「という事は……。今日が指導の最終日じゃねえか！俺、全然指導出来てねえぞ！」

シルビア「それ以前に死を彷徨ってたのよ。そんな事言ってる場合じゃなかったわよ」

バン「あ、師匠。その事なら船上の戦いは俺が、魔法や剣の事はマーズが教えてました。こうした方が師匠のためにもなると思ひまして」

ラース「本当か!?バン!!いやー、やっぱり持つべき者はいい弟子だよ。助かった！マーズにも後でお礼言わねえとな」

カミュ「助かってもう仕事の話かよ」

コンコン

リーズレット「ごめんね、ちょっとお話があつて」

リーズレットが部屋に入ってきた

ラース「おう、リーズレットか。迷惑かけたな」

リーズレット「あら、気にしないで。目覚めたようで何よりだわ。それで話なんだけど、あなた達が出会ったクラーゴンみたいなやつのことよ。おそらくあれは闇のルビーを取り込んだやつね。

今、北海で暴れまわってるわ。魔の力があいつを大きく、凶暴にさせてるみたい。あいつの事をキングクラーゴンとでも呼んでおくわ。あいつを討伐して、体内にある闇のルビーを回収してもらえないかしら？」

イレブン「なるほど。話に聞いたやつのことか」

ベロニカ「いいじゃない！リベンジよ！」

セーニャ「頑張りますわ！」

ラース「おっしや！今度こそあのイカをぶつとばしてやる！」

ロウ「ラースよ。お主はまだ休んでおるんじや。病み上がりに寒い場所に行き、体を激しく動かすでない」

シルビア「そうね。アタシもその方がいいと思うわ」

ラース「えー!?!いいじゃねえか、別によ」

カミュ「駄目に決まってるだろ、馬鹿。昨日まで心臓止まってるだぞ。そんな事させるわけねえだろ」

マルティナ「そうよ。イカなら私達が仇をうつてくるから、ここで待ってて」

バン「ですが、大丈夫ですか?あいつかなり大きかったですし、凶暴でしたよ」

ラース「ハハ、それなら問題いらなぞ、バン。今ここにいるメンバーはどういう奴らだ?」

グレイグ「そういえばこのメンバーで魔物を倒すなど久しぶりだな」

バン「あ……そっか。このメンバーは勇者様の仲間が全員揃ってるのか」

ラース「そうだ。魔王も邪神も倒したメンバーだ。たかがイカなんて敵わないさ。だが、俺は行けないのか……。本当に駄目か？」

イレブン「まあ厳しそうだよね」

セーニヤ「お気持ちは分かりますが、どうか安静にしてください
い」

ラース「うう……。あ！それならよ、代わりにバンを連れて行つてくれ」

バン「ええ!?俺が!？」

ベロニカ「あら、それは名案じゃない。戦力にも全く問題ないわ」

ロウ「そうじゃのう。それに、船の上でも戦いはできるようじゃな」

バン「でも俺、こんな豪華な中に入っているんですか？」

マルティナ「フフ、大丈夫よバン。あなたの力なら私達とも並べるわ」

グレイグ「俺達もお前ならフォローの心配はないからな」

シルビア「おいで、バンちゃん」

ラース「ほら、世界を知ってこい。バン」

バン「……わかりました！俺、どれだけ力になれるか分かりませんが、少しの間、よろしくお願いします！」

イレブン「そんな固くならなくても大丈夫だよ。よろしくね、バン」

バンが仲間に加わった

ラース「それじゃあバンの事よろしく頼むぜ。どんどんコキ使っちゃってくれ。俺はここでいい報告を待ってるぜ」

リーズレット「私もよろしく頼むわね。これ以上あのキングクラークオンに好き勝手にさせないで」

マルティナ「フフ、久しぶりに体を動かせるわ！鈍ってないといひんだけど」

ロウ「確かにそうじゃのう。そういう意味でも、戦い慣れておるバ

ンはありがたいのう」

セーニャ「バン様、回復はお任せください」

バン「うわあー。緊張する。俺、帰ったら皆に自慢していいですか？」

シルビア「ええ！胸を張っていいわよ！」

ベロニカ「この前もすっかり立ち回れてたし、今回も大丈夫よ。頑張りましょう」

北海

シルビア「本当だわ。急に嵐が出てきたわね」

バン「皆さん、気をつけてください。やつは近くにいるはずですよ！」

ザバアアン！

キングクラークゴン「プギシャー！ー！」

ベロニカ「出たわね！この前みたいにはいかないんだから！」

セーニヤ「足の数が普通より多いですわ！」

ロウ「これは、確かに大きい。それに体の色もなにやら相当毒々しいのう」

グレイグ「油断するな、お前達！」

キングクラーゴンがあらわれた

ベロニカ「イレブン！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「ギガブレイク！」

バン「ぼくれつきやく！」

セーニヤ「スクルトですわ！」

全員の防御力が一段階上がった

クラーゴンの右足1のぼくれつけん！

クラーゴンの右足2は本体を庇っている

クラーゴンの左足1のなぎはらい！

クラーゴンの左足2は浮いている

ベロニカ「イオグランデ！」

イレブン「ギガブレイク！」

右足2は倒れた

バン「氷結らんげき！」

左足1は倒れた

セーニャ「スクルトですわ！」

全員の防御力がさらに一段階上がった

クラীগンの右足1のばくれっけん！

クラীগンの左足2のばくれっけん！

クラীগンのメイルストロム！

ベロニカ「イオグランデ！」

クラীগンの右足1と左足2は倒れた

イレブン「アルテマソード！」

バン「ばくれっつきゃく！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

クラীগオンは炭をかけてきた

ベロニカ「きやつ！見えないわ！」

クラীগオンは上空に向かって毒をはいてきた

毒がふりそぞく！

ベロニカは動けない

イレブン「アルテマソード！」

バン「ばくれつきやく！」

セーニヤ「お姉様！キラキラポーン！」

ベロニカは嫌な効果から守られている

クラীগオンのメイルストロム！

クラীগオンは足を復活させた

ベロニカ「イオグランデ！」

イレブン「ギガブレイク！」

バン「ばくれつきやく！」

クラীগオン「キシヤー……」
「ジュワー

バン「やった…！倒せたー！」

イレブン「何とかなったね。よかった」

マルティナ「これで問題解決ね」

シルビア「アタシの船ちゃんにもそこまで被害は無かったわ。アタシ達の勝利よ！」

コトン

ロウ「む？これが例の闇のルビーかの。確かに嫌な力を感じるのう」

セーニヤ「そうですね。こんな物、一体どこから…」

グレイグ「お手柄だったな、バン。大活躍じゃないか」

バン「ありがとうございます、グレイグ將軍！」

カミュ「流石ラーズのやつに鍛えられてるだけあるな。立ち回りも上手かったぞ」

ベロニカ「そうよね。私もラーズがいるのかと思っちゃったわ！」

ロウ「もはや城の兵士なんて肩書きではすまなくなったのう」

バン「へ…：…へへ。照れますよ、皆さん」

マルティナ「フフ、よかったわね、バン。それじゃあ戻ってラーズに報告しましょう」

バン、見直される？

その頃、クレイモラン城

ガク「ラーズ將軍が無事生き返ってよかったです。俺、あんなに青くなった人初めて見ましたよ」

ベグル「そりゃあそうさ。普通あんな風にはならないからな」

ラーズ「お前達、何でここにいるんだよ。訓練でもしてたらいいんじゃないか？」

マーズ「駄目ですよ。俺達はカミュさんとバンからラーズ將軍を見張っていると言われているので」

ラーズ「俺って信用ねえな!!いいじゃん、別に少しくらい動いたって」

ベグル「ほら、そういう所ですよ。とにかく今は休んでください。ラーズ將軍が心臓も止まってるって聞いた時は俺らも慌てたんですから」

ラーズ「それは……悪かったよ。ハアー。仕方ねえか、大人しくしてるよ。筋トレぐらいはさせてくれ」

ガク「それはいいんですかね？」

マーズ「まあ、この人は何かしら動いてないと落ち着かない人だからな。これくらいなら多目にみようぜ」

その後

イレブン「戻ったよー、ラーズ」

カミュ「ちゃんと大人しくしてたのかよ」

ラーズ「おお！お帰り、皆。イカは倒せたか？」

マルティナ「ええ、もちろんよ。バンがトドメを刺したの」

ラーズ「おお！本当か!?バン、やったじゃねえか！」

バン「はい！師匠の分まで頑張りましたよ！」

グレイグ「いい動きをしていたぞ。船の上でもしっかりと戦えるように訓練してあったのだな」

ラーズ「ああ。こいつには全部教えたからな」

カミュ「下手すりや、ラーズいらねえんじやねえか？バンの方がお前なんかよりよっぽど可愛げがあるぜ」

カミュはニヤニヤしている

ラーズ「何だど!?カミュ!!」

ペロニカ「でも、実際に戦ってる最中は私バンの事をラーズと見間違えそうになったわ」

イレブン「それは僕も思うよ。よく似てるよね」

バン「そ、そうでしたか？俺、あまり気にした事ないんですが」

ラーズ「嘘だろ。え？バンがいれば俺いらぬのかよ」

セーニヤ「そ、そんな事ないですわ、ラーズ様！ラーズ様も頼りになります」

シルビア「そうよ！カミュちゃん達の言ってる事は少し違うわ。だから真に受け止めちゃ駄目よ」

バン「ハハ、俺はどんなに頑張つても師匠にはなれませんよ。だって、この世界を救った勇者様の仲間の一人は絶対に師匠しかいません。俺は代わりにしかありませんよ」

ラース「バン……。お前、いいやつだよ。本当に。嬉しいぞ！それに比べてカミュ!!てめえ、ふざけた事言いやがって！お前、こういう所見習えよ！」

カミュ「俺は本当の事を言っただけだぜ？普通の魔物を相手するだけならバンで十分だからな」

バン「ア、アハハ……。また言い合ってる。あ、イレブンさん。短い間でしたがありがとうございます。俺、足は引つ張らなかつたと思います。勇者様達の戦い方を近くでみれて俺、よかったです！」

イレブン「こつちこそありがとうございます。バンは頼りになったよ。また機会があったら一緒に戦おうね」

ロウ「そうじゃな。また共に戦おう」

バン「はい！ありがとうございます！」

その後、それぞれの仲間達はまた故郷へと戻っていった

ラーズ達もデルカダール城へ戻っていった

城の中では、バンが勇者達の仲間と共に戦い実力を認められた事で話題になったが、他の兵士達から尊敬の目を向けられる事はなかった

ガザル「お前が？勇者様達に認められた？ハッ！本当か怪しいな！」

バン「何だと！ガザル!!見てねえくせに何がわかるんだよ！」

ギバ「バン。お前は本当に馬鹿だな。世の中には、お世辞という言葉があるんだぞ」

バン「ふざけんな!!俺はちゃんと認められたからな!!」

ガク「バンさん！やっぱり凄いですよ！」

バン「そうだろう、ガク！お前は本当いいやつだな！わかってくれるだろ？俺は頑張ったんだからな」

ベグル「駄目じゃないか、ガク。敬う人を間違えてるぞ。そいつは馬鹿にする人だ」

マーズ「ガク、バンの方に行ったら戻れなくなるぞ。引き返すなら

今だ」

バン 「お前らは実際に、俺が褒められてるのを見ただろうが!!」

二人 「何言ってるのかわからねえな」

バン 「もうー!! 師匠ー!!!」

兵士達 「ハハハハハ！」

マヤとの旅

ラーズが他国指導から戻ってきて一ヶ月後

デルカダール城

朝食時

デルカダール王「昨日マヤから手紙が届いてな。何やら学校で困った事があるらしいのだ。それでマルティナとラーズが呼ばれておるのだ。近々様子を見に向かつてはくれんか？」

マルティナ「え？マヤちゃんか？」

ラーズ「わざわざ手紙まで送るなんて今まで無かったよな。何かあったんだろう。わかりました。明日には学校に伺います」

デルカダール王「うむ。わしも娘が心配じゃ。ぜひ不安を取り除いてやってくれ」

マルス「父さん達お出かけするの？」

ルナ「ルナ達も行きたい！」

グレイグ「マルス達は城でお留守番だぞ」

二人「えー」

ラース「いや、グレイグ。偶には連れて行ってやろう」

マルティナ「そうね。最近外に出れてないし、外でゆっくりしましよう」

ルナ「やったー!」

マルス「何して遊ぼうかな?」

グレイグ「わかりました。俺達は城で待っていますので、何かありましたらご連絡をお願いします」

次の日

大広間でデルカダール王が見送りに来ていた

ラース「さーて、マルス、ルナ。準備はできたな?」

二人「うん!」

ラース「それじゃあ父さん達と出かけるぞ！」

二人「おー！」

マルティナ「それでは行つてまいります」

デルカダール王「うむ、よい報告を待っているぞ」

マルス「じーじ、行つてきまーす」

ルナ「遊んでくるねー」

デルカダール王「ああ、楽しんでくるのだぞ」

メダル女学園

マルティナ「着いたわよ、二人とも。ここがマヤちゃんがいる学校
という場所よ」

マルス「大きいー！」

ルナ「綺麗！お花がたくさん咲いてる！」

リース「さて、マヤは確か食堂にいるんだったよな」

食堂

学生「え？あの美人さんとかっこいい人どなたかしら？見慣れない方達ですわ」

ザワザワ

見慣れない人がいると噂になり、食堂には生徒が集まっていた

マルス「人がいっぱいいる。お城みたい」

マヤ「あ！やっぱりそうだった！兄ちゃん、姉ちゃん！来てくれたの！」

マヤが人混みから出てきた

リース「おお、マヤ。来たぞ！」

ルナ「あ！マヤおねーちゃん！」

マルス「マヤねーちゃん、いつもと違うね」

マヤ「あ、マルス達も来てくれたの？ありがとね」

マルティナ「それでどうしたの？急に呼び出したりして」

マヤ「実はさ、私に宿題が出てて。それが難しくて兄ちゃん達に頼ろうと思ったの」

ラース「ほう？首席が悩むレベルの宿題が出たのか。どんな難しい問題なんだ？」

マヤ「ううん。問題とかじゃないの。最近の家族との思い出を作って、それを文章にして提出するって宿題なの」

マルティナ「なるほど。それは確かにマヤちゃんにとって難題ね」

ラース「家族との思い出、ね。カミュじゃ駄目なのか？」

マヤ「兄貴は最近忙しくなったんだって。何か魔物がどうとか言っていた。だから少し先延ばしにしてたら提出期限が近づいててさ。お願い！私の宿題のために、何か思い出を作って！」

マルティナ「ふふ、構わないわよ。マヤちゃん。一緒にどこか出かけましょう」

マヤ「本当!?!いいの!?!」

ラース「断る理由も無いんだ。それに、かわいい妹の頼みでもあるしな」

マヤ「よかったー!私、これで断られてたらどうしようかと思つたの。ありがとう、兄ちゃん、姉ちゃん。おかげでチケットも無駄にならなくてすみそう」

マルティナ「チケット?何の事かしら?」

マヤ「いしし。実はもう手は打つといたんだ。ほら!ホムラの里の温泉旅館の家族チケット!」

マヤは二人にチケットを見せた

ラース「な!?!そ、それは!?!あの旅館のやつじゃないか!」

マヤ「え?兄ちゃん知ってるの?私の友達から貰ったやつなんだ」

マルティナ「ちよつと見せてもらつてもいい?... あら!この場所って!」

ラース「へへ、これはいい偶然だな」

マルティナ「ふふ、本当ね。これはぜひ行きましょう」

二人は顔を合わせて笑っている

マヤ「え？え？何？どうしたの？」

ラース「実はな、その旅館は俺がマルティナに告白して恋人になった思い出の場所なんだ」

マヤ「えー！?!マジで!?!そ、そんな場所だったの!?!そんなの行くしかないじゃん！」

マルティナ「うふふ、懐かしいわ。今でも鮮明に思い出せるわよ」

マヤ「やった！私、前に姉ちゃん達に旅に連れてってあげるっていう約束果たせそうだね。私、ずっと気にしてたんだよ」

ラース「それって新婚旅行の時じゃないか。よく覚えてたな」

マヤ「うん！だって姉ちゃんと兄ちゃんとの約束だもん。忘れないよ！じゃあ待ってて。私、準備してくる」

マルティナ「私達もお父様に連絡しておきましょう」

ラース「そうだな。俺がキメラの翼で城に帰って報告してくる。マルティナはここで子ども達と一緒に待っていてくれ」

マルス「父さん、お出かけ？」

ラース「ああ、これからとってもいい所にお出かけだぞ。しかもマヤ姉ちゃんと一緒だ。楽しみだな？」

ルナ「マヤおねーちゃんもいるの!? やった! ルナ、嬉しい!」

ラース「じゃあすぐに戻るから待っていてくれ」

マルティナ「ええ、待ってるわね」

デルカダール城 玉座の間

ラース「というわけで、マヤと俺達は今日と明日、城にはいない事になりました」

デルカダール王「ハッハッハ! 大きな問題じゃなかったようで何よりだな。ぜひ楽しんでくるといい。なんなら、わしもついていきたいくらいじゃ。お主達が恋人となった場所に泊まれるようになったの

も何かの縁だろう。ゆっくりしてくるのだ」

ラーズ「ありがとうございます、王様。何か土産を買ってきますね」

グレイグ「あまりこちらの事は気にするな。思い出の場所なのだろう？家族で楽しんでくるんだ」

ラーズ「マヤからしたら、グレイグも王様も家族ですから少しメンバーは足りないですけどね」

デルカダール王「わしも行きたいのう……」

グレイグ「お言葉ですが、王よ。城に誰もいなくなるのは問題です。どうか我慢なさってください。私も我慢するので」

ラーズ「すみません、王様、グレイグ。それでは行ってまいります」

メダル女学園 食堂

ラーズが戻ると、マヤが準備を終えて待っていた

ラーズ「戻ったぞ。王様がついて行きたいとねだってたな。何だか申し訳ない事をしたな」

マヤ「そつか。王様も行ききたかったのか。まあ、仕方ないよね。今度たくさん学校の話してあげよう」

マルティナ「ぜひそうしてあげて。お父様も絶対喜ぶわ」

ルナ「お父さん、早く行こう！」

マルス「マヤねーちゃんも準備できたんだよ！」

リース「ああ、それじゃあいこうか」

マヤ「いしし、私、すつごく楽しみ！家族と一緒に旅行って私の夢だったの！」

旅行

少し残酷な描写があります。苦手な方はご注意ください

ホムラの里

マヤ「こつちに久しぶりに来たけどここも火山のせいで暑いよね。私、苦手なんだよね」

マルティナ「まあ、北国育ちだもの。暑いには慣れてないはずだわ。カミュも時々参ってたもの」

ラース「あれ？あそこにいるのはじいさんじゃないか？おい、じいさん！」

少し離れた所にロウの姿があった

ロウ「うん？おお！姫達ではないか！マヤちゃんや子ども達もおるのかのう」

マヤ「じいちゃんだ！偶然だね！」

マルス「おじいちゃんだー。こんにちは」

ルナ「こんにちはは。何してるの？」

ロウ「ほっほっほ。こんにちは。わしは今お休みで。孫からお祭りをやっていると聞いて遊びに来たのじゃ」

マルティナ「イレブンから？急にどうされたのですか？」

ロウ「わしに働きすぎだと言われたのう。「今日はゆっくり温泉でも浸かって体を休めてきなよ。こっちは僕達で何とかするからさ」と半ば無理やりに来させられたのじゃ」

ラース「流石イレブンだな。爺さん思いの優しいやつだ」

マヤ「勇者様優しいもんね。それにしても、賑やかだとは思ったけど、祭りをやってたのか」

マルス「母さん！あのわたあめってなに？」

ルナ「私、あのボールをすくいたーい！」

マルティナ「うふふ、ちよつと待ってて二人とも。ロウ様、よろしければ一緒にお祭りを回リませんか？」

ロウ「おお、いいのかのう。それでは一緒に行こうかの。そう言え

ば、お主達はなぜここにおるのじゃ？」

マヤはロウに宿題の事を話した

ロウ「なるほど。宿題のためじゃったか。ほほ、それにしてもあの旅館にまた泊まれるとはよかったのう、姫、ラース。ゆっくりしていいかい」

マヤ「あ！それならさ、おじいちゃんも来なよ。家族用だから大丈夫だと思っよう！」

マルティナ「マヤちゃん、とってもいい考えだわ！ロウ様、ぜひそうしましょう！」

ロウ「なんと！しかし、いいのかのう？」

ラース「全然構わないぜ。むしろ賑やかになるから俺も歓迎だぞ。一緒に泊まろうぜ、じいさん」

ロウ「ありがとうのう。それじゃあ、わしは今日一日お主達の爺となるかのう」

マヤ「いしし。じいちゃんも家族にいれちゃった！」

マルス「母さーん！父さーん、早く、早く！」

マヤ「子ども達は私にまかせてよ。私も一緒にいたいし、先に旅館に行つて荷物置いてきていいよ」

ラース「わかった。ありがとな、マヤ。すぐに戻ってくるからな」

マルティナ「お金は使いすぎないようにね」

マヤ「うん！大丈夫だよ！はい、チケット。それじゃあ、また後でね！」

マヤ達と別れた

旅館 受付

ラース「それじゃあ、じいさんは俺と同じ部屋な。マルティナとマヤと子ども達は違う部屋にしたぜ」

ロウ「わざわざすまんろう」

マルティナ「気にしないでください、ロウ様。私達もそつちに行きますね」

部屋

ライス「さて、多少は身軽になっておかないとな」

ロウ「子どももおると荷物も増えるものじゃな。それにしても、お主と同じ部屋など初めてかもしれないな」

ライス「あー……。一回あったような気がするが、確かにほとんど無かったよな。よろしく頼むぜ、じいさん」

ロウ「優しい息子を持ったものじゃな」

ライス「おいおい、じいさんの息子はいないだろ」

ロウ「今日一日、わしはお主達の爺なのでな。ライスと姫はわしの息子と娘の設定じゃ」

ライス「ハハハ！それならマヤは俺達の娘で、子ども達はマヤの弟と妹か。上手くできてるな」

その後

ライス「あれ？マヤ達どこにいるんだ？」

マルティナ「人もたくさんいて見つけにくいわね」

ロウ「ふむ。水色の髪など珍しいから、わかりやすいと思ったのじゃが」

ラーズ「少し待ってろ。気配を探してみる……………ん？こつちの方だ。マルス達の気配だ」

マルティナ「いつの間にそんな事出来る様になってたのよ」

ラーズ「目を離してもいいように、な。賢い子だから遠くまで離れることは無いってわかってるしな」

ロウ「まさに子を思う心じゃな。流石じゃ、ラーズ」

少しするとルナとマルスが見つかった

ルナ「あ！お父さん!!どうしよう！マヤおねーちゃんが！」

ラーズ「マヤに何かあったのか!？」

マルズ「怖いお兄さんに僕達話しかけられて、マヤおねーちゃんがあつちに連れてかれちゃったの！マヤおねーちゃんは平気だからって言ってたけど、僕心配で」

マルティナ「そう。怖い思いしたわね。マヤちゃんもきつと大丈夫よ。ラーズ、暴れちゃ駄目よ……… って！もういないわ！」

マルティナが後ろにいるラーズに声をかけようとするが、もうラーズの姿はなかった

ロウ「いつの間に。これは少しまずいかもしれんのう」

マルス「父さんどこにいったの？」

マルティナ「ハア、全く。お父さんはね、そのお兄さんとお話をしに行ったの。マヤ姉ちゃんも戻ってくるから、ここで待ってましよう」

ルナ「わかった」

その頃

マヤ「何するの、お兄さん達！離してよ！」

マヤは男に腕を掴まれていた

男「へへ、何だよ、結構可愛らしいじゃねえか。しかも珍しい髪の色だな。高く売れるんじゃないか？」

マヤ「ヒッ！や、やめてよ。来ないで！」

男達「ヘッヘッヘ」

男達が複数人でマヤに向かってくる

マヤ「や、やだ。来ないで……助けて、誰か」

その時

ラース「よお、マヤ。探したぜ」

マヤ「あ……に、兄ちゃん！よかった！」

男達がラースに気を引かれている間に、マヤはラースに駆け寄る

ラース「よかった、怪我は無さそうだな。マヤ、あつちにマルティナ達が子どもと一緒に待っていてくれる。先に行ってるんだ。俺はしばらくしたら社の方に向かう。そこで待ち合わせよう」

マヤ「あ……うん。わかった、ごめんね、兄ちゃん」

マヤは走っていった

ラース「さて……と」

男達「折角の高く売れそうな商品に何しやがる！」

ラース「ゴミは処分しなくちゃいけないんでね。手が汚れてしまうが、まあ仕方ない」

男達「ああ!!? 誰がゴミだと!」

ラース「貴様ら、俺の大切な妹に手を出したな。楽に死ぬると思うなよ? 生きてる事を後悔させてからあの世に送ってやるよ」

ラースは冷酷な顔で男達を睨みつけている

その後

マルティナ「マヤちゃん!」

マヤ「姉ちゃん! 私、怖かった……」

ロウ「無事でよかった。どこも怪我はないかの?」

マヤ「うん。兄ちゃんがギリギリで助けてくれたの。私、売られる所だった。兄ちゃんが話をするから、しばらくしたら社で集合しようってさ」

マルス「マヤねーちゃん、大丈夫?」

ルナ「どこか痛いの？」

マヤ「あ……。ううん、平気だよ、マルス、ルナ。二人は怪我はな
い？」

マヤはすぐに目を擦って笑顔で対応した

二人「うん！マヤねーちゃん、ありがとう！」

マヤ「いしし。よかったよ」

ロウ「ほっほ。すっかりお姉ちゃんじやな」

マルティナ「レースったら。まあ、こればかりは目を瞑りましょう。
人身売買なんて奴らは許せないわ」

その頃、レースは

男「コヒユ……。ヒユー……」

男達「ヒツ……。の、喉が開いてやがる」

レース「ふん、だらしないやつだ。さて、次はもっと持ってきてくれよ
な？」

男「お、俺、もう無理」

男は倒れようとする

ラース「おい。勝手に倒れてんじゃねえよ」

そう言うと、その男の地面がトゲに形を変え、貫いた

ドサ

男「ヒ、ヒイイイ！あ、悪魔かよ。こいつ」

ラース「さて、残りはお前だけだな。お仲間は全員還ったぜ。もうつらいだろ？特別にすぐに楽にしてやるよ」

男「あ、あの……。お、俺、やだ。し、死にたく」

ラース「黙れ」

ズバツ！

ドサ

ラース「たくっ！体を洗ってこないとな。替えの服多めに持ってきてよかったぜ」

その後、社

ラース「ああ、悪いな、皆。待たせたみたいだな」

マヤ「あ、兄ちゃん！よかった！あれ？服変えた？」

ラースは先程までの服と色が変わっていた

ラース「おう。どうせならホムラの雰囲気に合わせてようと思っ
な。変か？」

マヤ「う、ううん。全然。そうだよ、合わせるのって大事だよ」

マルス「父さん、僕わたあめ食べたい！」

ルナ「ルナもー！」

ラース「よーし！祭りを楽しむぞ！」

二人「おー！」

マルティナ「全く。服を変えなくちゃいけないまで手を下す必
要なかったと思うわよ」

ロウ「ラースは切れておったからのう。もはや男達は生きてはおらんだろうな」

マヤ「あ、やっぱりそうだよ。兄ちゃん、私のために……手を汚しちゃった」

マルティナ「いいのよ。そいつらに同情なんて私もしないわ。相応の罰が落ちただけ。マヤちゃん以外の人もたくさん被害にあつていたかもしれないんだから」

ロウ「そうじゃよ、マヤちゃん。お主はあんな事忘れてよい。あまりに気にせぬようにな」

マヤ「そっか………わかった。忘れるようにする。よし！私もお祭り楽しもう！」

旅行2

その後

屋台を食べ歩いていた

ライス「このお好み焼きってやつは美味しいな！前のは味も違うぜ」

マルス「かき氷美味しい！」

ルナ「つめたーい。マヤねーちゃんのはブルーハワイ？って言うの？」

マヤ「うん、そうだよ。初めて食べたけど美味しいよ。食べる？」

ルナ「食べるー。ありがとう」

マルティナ「ライスはいいとして、子ども達はそろそろ食べるのやめさせなくちゃ」

ロウ「まあ、ライスも気づいておるようじゃ。さりげなく食べ物があつた屋台から遠ざかっているからの」

マルティナ「え?… あら、本当だわ。ここは、射的?」

マヤ「兄ちゃん、この射的って何?」

ラース「射的?俺も聞いた事しかないから詳しくはわからないが、的当てゲームみたいなものじゃなかったか?」

ルナ「ルナ、やりたーい」

マルス「僕もー。父さん、いいでしょ?」

ラース「ああ、やってみるか」

店員「お子様二名と大人二名ですね。それぞれ別の場所から始めてください。その棚の位置から銃で、遠くにある好きな商品を狙ってください。後ろまで落とせたらその商品を差し上げますよ!」

ラース「ふむ、なるほどな」

マヤ「兄ちゃん、私この銃の使い方わからないよ」

ラース「ああ、確かに簡易的な物だからな。ここを引っ張ってから、

弾を銃口に詰めるんだ。そして後は打っただけだな（何か違和感あるな、この銃）」

ルナ「うーん、上手く球が詰まらないよ」

マルティナ「貸して、はい。これで大丈夫よ」

パンツ！

マルス「あ！倒れたよ！これってどうなの？」

受付「すみません。奥に落ちないと駄目なんですよ。もう少し近づいて真ん中を狙うとやりやすいですよ」

マヤ「私、あのぬいぐるみにしようかな。結構かわいい」

リース「じゃあ、俺もマヤと同じやつを狙うか」

パンツ！

マヤ「あー、少し揺れたくらいだね。何回かやればいけるかな？」

リース「…………… ちよつと待て、マヤ。この銃もしかして」

リースは銃を上投げて、また手に持った

「ラース「なるほどな。そういう事か」

「マヤ「え？今の何か意味あったの？兄ちゃん」

「ラース「今、この銃の重心と風の方向を確かめたんだ。この銃は普通の銃と違って重さが左に寄ってる。だから綺麗に構えると、思ってるよりも球が左にいくんだ。」

「さらに、あの扇風機。あれはわずかな風しかないように見えるが、球からすれば強い風となる。それもあってさらに球は左にそれていく」

「マヤ「じゃあ、重心と風向きを考えると、かなり右の方を狙わないと真ん中にいかないんだね」

「ラース「そういう事だな。ぬいぐるみのバランスを支えているのは首にあるあの鈴くらいの位置だ。そこを狙っていこう。俺が何回かやってみよう」

「パンツ！」

「マヤ「あ！凄い！さつきより後ろにいきそう」

「ラース「これならすぐかもな。もう一回やってみる」

パンツ！

コロツ

受付「おー！おめでどうございます！こちらのぬいぐるみをプレゼント致します！どうぞ」

ラーズ「へへ、ありがとな。ほら、マヤ。やるよ」

マヤ「え？いいの？兄ちゃんが取ったやつなのに」

ラーズ「まあ、そこまでして俺は欲しいわけじゃないからな。マヤの方が欲しいだろ？」

マヤ「うん。欲しい。ありがとう！兄ちゃん！寮に飾るよ」

ロウ「ほっほっほ。よかつたのう、マヤちゃん。のう、ラーズや。よければあの端にある酒瓶も取れないかのう」

ラーズ「お？そんな物まであったのか。どれどれ……。おい！あれは俺の好物のホムラの酒じゃないか！ナイスだ、じいさん！これは今日の夜、飲むぞ！」

パンツ！

ラーズ「うーん、残り一発か。難しいな。重たいせいで奥に動いたくらいだしな」

ロウ「ラーズよ、耳を貸すのだ。ゴニョゴニョ」

ラーズ「!!へへ、じいさん。あんたも悪だなあ。だが、いいぜその案。乗っかってやろうか!」

パンツ!

ゴトン

受付「す、凄い!まさかこの酒瓶まで落とすとは!どうぞ、持っていつてください。お兄さん、凄いですねー」

ラーズ「ありがとな、ありがたく飲ませてもらうぜ」

マルス「父さんすごい!」

ルナ「ルナ達、お菓子しか取れなかったよ」

マヤ「お菓子取れたんだ。よかったじゃん、旅館で食べようね!」

二人「うん!」

マルティナ「最後のどうやって取ったの？何だか強い力がかかっていたように見えたけど」

ロウ「ほほ、なーに、簡単な事じゃ。バギの力を入れて打ったんじゃない。魔法が禁止なんて、どこにも書いておらんかったからのう」

マルティナ「ええ!?それはちよつとずるいんじゃないかしら?」

ラーズ「このじいさんも中々悪だぞ。まあ、今回は仕方ないという事で!」

マヤ「そんな案に乗っかる兄ちゃんも兄ちゃんだよ。そんなにそのお酒欲しかったの?」

マルティナ「ラーズのお気に入りのお酒なの。欲しいならまた買えばいいのに」

ラーズ「ゴールドで払うより安上がりで済んだんだ。お得だろ?」

マヤ「そういう考え方なんだ。私も後で飲んでみていい?」

ロウ「いや、これはかなりアルコールが強いんじゃない。あまり女の子が飲むものではない」

ラース「そうだぞ、マヤ。それに、首席からお酒の匂いがするなんてバレたら学園中大騒ぎだぞ。それはまた長期休みにはいったら、だな」

マヤ「そっか。わかった」

マルス「あれ？ここでお店終わり？もう無いの？」

屋台はもう無くなっていた

マルティナ「本当ね。どうやらお店はここで最後みたい。でもいい時間だし、旅館に戻りましょうか。お祭り楽しかった？」

ルナ「楽しかったー。ルナ、わたあめ好きー」

マルス「僕かき氷が好きー！」

ロウ「ほっほっほ。食い意地が張っておるのはラース似かのう」

マルティナ「ええ、絶対そうだわ。困ったものね」

マヤ「これからどんどん大きくなるね。 太りすぎないといいけど」

ライス「な、なんで皆してこつち見るんだよ。 何だよ、その顔！いいじゃないか！たくさん食べる事は幸せなんだからな！」

三人「ハハハハハ！」

その後、旅館 部屋

ライス「いやー飯も美味かったな。 またたくさん食べたぜ」

ロウ「あの味のついた米はよかつたのう。 少し焦げておつたのもまたいい味じゃった」

ライス「あれは炊き込みご飯って言うやつだな。 窯で火を入れて米を炊いたんだ。 中々食えないやつだからな。 流石ここの旅館の飯だぜ」

ロウ「…… のう、ライスよ。 真剣な話があるんじゃないが」

ライス「な、何だよ。 真面目な顔して」

ロウ「よく聞くのじゃぞ」

レース「おう」

ロウ「この後、風呂に入るj」ドゴン！パラパラ…

ロウの顔を掠める勢いでレースの拳が飛び、後ろの壁にヒビが入った

ロウ「ヒ、ヒエエエ！」

レース「あ、悪い。俺の妻への冒瀆かと思って先に手が出ちまった。まあ、外したから大丈夫だな。ほら、さっさと続き言えよ、ほら。」

ロウ「違うんじや！お主は勘違いしておる！話は最後まで聞くものじゃ！ゴホン！それで、この後のお風呂で混浴というものが今回あるらしくてのう。ぜひ、入ってみたくはないか？」

レース「さて、遺言は終わりか？じいさん。イレブンには惜しい人を亡くしたって伝えてやるよ。安心して逝け」

レースはロウに殴りかかろうとしている

ロウ「ま、待つんじや！レース！お、お主だって夫なら、妻と共に風呂に入りたいと思わんかの!？」

ラース「……………」

ラースは動きを止めた

ロウ「そ、そうじゃろ？子ども達とも入れるんじや。これから先、子ども二人とお風呂に入る機会も少なくなってくるんじや。わしにはわかる。経験者じゃからな。お主にとっても悪くない事だと思いうんじやが、どうかの？」

ラース「………… ハア。いいだろう。その意見に乗ってやるよ。俺も前の新婚旅行の時、マルティナと一緒にお風呂に入ったのに、マルティナは恥ずかしかがって湯船の中に一緒に入ってくれなかったからな。その仕返しも兼ねてやろう」

ロウ「お、おお。お主意外と大胆じゃな。それでは、姫達には今回はその風呂にしか行けないという風に伝えておこう」

ラース「俺が提案してきてやるよ。じいさんと怪しまれるだろ？俺なら完璧だぜ」

ロウ「なんじゃ、ノリノリではないか。ラース、お主もいい性格しておるのう」

ラース「にしてもよかったな、じいさん。もし本当にふざけた事言ったら、さっきの拳の百倍は力を込めたやつを顔にプレゼントする所だったんだぜ」

ロウ「ほ……ほほ。そ、それはまた、寿命が縮むような恐ろしい事じゃな」

ラーズ「まあ、次は無いからな。また提案するなら、その前にイレブンに向けて遺書を残しておく事を強く勧めるぜ。じゃ、話してくる」

ロウ「わし、とてつもなく危ない橋を渡ったようじゃな。ラーズは恐ろしいのう」

旅行3

その後

ルナ「わーい！お父さんとお風呂、久しぶり！」

マルス「僕も母さんとお風呂は久しぶりだな！」

マルティナ「本当なの？ラース。家族専用の混浴なんて」

ラース「ああ！ちゃんと調べてきたからな。貸し切りにできたぜ！」

ロウ「楽しみじやのう。マヤちゃん（ラースのお金がかかり消えたがの）」

マヤ「家族でこんな大きいお風呂なんて、私すっごくいい思い出になるよ！」

風呂場

マルティナ「いい？ラース、ロウ様。あまり近づかないでくださいね。特にロウ様！」

ロウ「わ、わしにそんなに強く言わんでもわかっておる」

ラース「それじゃあマルス、先に入ってようぜ」

マルス「うん。先に行ってるねー」

ルナ「ルナも早く行きたいー」

マヤ「焦らなくても大丈夫だよ、ルナ。ほら、落ち着いて脱いで大丈夫」

マルス「すつごーい！お城よりたくさんお風呂あるー！」

ラース「マルス、まず体を洗ってからだぞ」

マルス「はーい！」

ロウ「走ると滑って危ないからゆっくり歩くんじやぞ」

その後

ルナ「お母さん、すつごーい！ここ、たくさん泡が出てるよ。気持ちいい」

マルティナ「そうね。この泡はリラックスするためのものね。こうやって背中にあてると気持ちいいのよ」

マヤ「すごい。ワイン風呂だって。こんなのもあるんだ」

ロウ「前はこのハーブ風呂もよかったのう。マルス、おじいちゃんと一緒に入らんかの？」

マルス「入るー！おじいちゃん、一緒に入ろー！」

ラーズ「子ども達も大はしやぎだな」

マルティナ「そ、そうね。これは確かに他のお客さんがいると、迷惑かかったりして大変だったかも。貸し切りにした判断は正しいわね」

ラーズ「だろ？だからもう少し近くにいても」

マルティナ「駄目よ」

ラーズ「寝てる時はいいのに……」

マルティナ「我慢してね」

ラーズはトボトボと奥へ行った

マヤ「あ、兄ちゃん拗ねたよ。姉ちゃん、少しくらいいいんじやないの?」

マルティナ「……………」

マヤ「露天風呂もあるみたいだよ。そこに二人で行ってきたら? 私達はしばらくは中にいるからさ。子ども達もじいちゃんを見てあげる。行ってきなよ」

マルティナ「…………… マヤちゃんったら。大人をからかわないの。まあ、今回はそうしてみるわ。ありがとう」

マヤ「うん! 兄ちゃんもその方がいいだろうし」

風呂の端

ラーズ「…………… 少しくらいいいじゃんか、マルティナ」

マルティナ「ラーズ。そんな所にいないで、一緒に外に行きましょう。二人で」

ラーズ「え!?行く!」

ラーズは大急ぎでマルティナを追いかけた

露天風呂

ラーズ「でも急にどうしたんだよ。嬉しいけどさ」

マルティナ「マヤちゃんが、ラーズが少しかわいそうだって言っ
て気を使ってくれたのよ。しばらく外のお風呂には来ないらしいわ」

ラーズ「へへ、マヤはいい妹だな。前からこうやって隣り合っ
てお風呂に入りたかったんだ。夫婦って感じするだろ?」

ラーズとマルティナは背中合わせになっている

マルティナ「……そうね。少し恥ずかしいけど、いいわね。落ち
着くわ」

ラーズ「やつと素直になってくれた。子どもができてから、マル
ティナは少し気を張りすぎなんだよ。もつと甘えてくれたっていい
し、俺にくっついてくれたっていいのによ。まるで付き合う前の旅の
時みたいで、俺は寂しかったんだからな」

マルティナ「ふふ、言われてみるとそうだったかもしれないわ。ご
めんない。新婚旅行の時も、その為にお風呂に誘ってくれたのね。

あの時は他に誰もいなかったから」

ラーズ「そうだけ。俺は頑張ってるマルティナも好きだが、俺に甘えてくれるマルティナだって大好きなんだからな。これから王女として頑張り続けるのはわかってるさ。でも、俺や子どもの前なら頑張らなくたっていいんだ。こうやって二人で寄り添っている時間も大切だ」

マルティナ「……ごめんなさい。ラーズはそんなにも私の事を考えてくれていた。それなのに、私は気づかずにラーズを拒んでいたのね」

ラーズ「仕方ないさ。恥ずかしいとか、みつともないって思っってしまうのはわかるからな。でも、こうやって人目を限りなく少なくすれば、マルティナも楽になれるだろう？これからも俺がそういう機会を用意できたらするから、その時はまた甘えにきてくれ」

マルティナ「うん。ありがとう、ラーズ。ラーズも私にどんどん甘えていいのよ」

ラーズ「もちろんだぜ、マルティナ。俺も放つとかれると寂しいかな。甘えさせてくれよな」

マルティナ「ええ、ありがとうラーズ。私、ラーズが変な事考えてるんじゃないかと思ってたわ」

ラーズ「そりゃあ、本当に無かったかと言われたら嘘になるぞ。でも、それよりもマルティナの心配の方が大きかったからな」

マルティナ「も、もう！結局は少しはあったのね！まあ、心配してくれていたのは嬉しいわ」

ラーズ「ハハハ、気にすんなよ！それじゃあ、別の風呂にも入りに行こうぜ。あの樽風呂とかどうだ？二人で入れそうだぞ？」

マルティナ「隣にもう一つあるじゃない！何で一つで入ろうとするのよ」

ラーズ「チエー。駄目か、抱っこしながら入ろうと思ったんだがな」

マルティナ「も、もう！ラーズ!!自然とそういう事に移るのやめて！」

ラーズ「ハハハハ！わかってるさ、少しは冗談だ」

マルティナ「ほとんど本気だったって事じゃない」

その後

マヤ「兄ちゃん、姉ちゃん。マルス達がのぼせると悪いから先に上がってるね」

ラーズ「ん？そうか。結構経ったもんな。俺達もあがるか」

マルティナ「そうね。長湯しすぎるのも問題なもの」

ラーズ「マヤはお風呂楽しめたか？」

マヤ「うん！あのね、奥にミルク風呂つてのがあって、そこお肌がすっごいすべすべになるの！何回も入っちゃった！」

マルティナ「あら、懐かしいわね。前にセーニヤと入ったわ」

ラーズ「男湯には無かったやつだな。少し種類も違ってたのか。あ、マヤ。先に部屋に戻っていてくれるか？」

マヤ「ん？いいよ。何かするんだね」

ラーズ「まあ、思い出の場所に行こうかなと思ってな」

マルティナ「あ、あそこね」

マヤ「いしし。じゃあ楽しんできてね」

その後、旅館の離れ

マルティナ「ここね。懐かしいわ」

ラーズ「ああ、もうあれから何年も経っちゃったな。でも、忘れる事はないな。俺、今でもあの時の勇気を出した自分を褒めるな」

マルティナ「私も、ここでラーズに幸せになっていいって教えてもらった。忘れないわ」

ラーズ「へへ。どうせなら、ここで今度はキスしてみるか？この初めて思いが通じ合った場所だよ」

マルティナ「ええ、そうね」

二人はゆっくりと抱き合い、キスをした

しばらくして、旅館 部屋

ガチャ

ラーズ「じいさん、ありがとな。マヤ達の面倒見てくれて」

ロウ「ほ！ほっほっほっ。な、なーに、気にせんでよい。わしも家族ぐるみに混ぜてもらったんじや。爺になって楽しまんとな」

ロウは驚いてカバンに何かを隠した

ラース「じいさん、今何を隠したんだよ。まあ、察しは付くけどよ。何も言わねえが、いい趣味とは言えねえぞ」

ロウ「こ、これはわしの唯一の楽しみなんじや。許してくれ。混浴も貸切になってしまつて不服だったんじや」

ラース「は？」

ロウ「……あ」

ラース「……じいさん？まさか、俺を騙したのか？」

ラースからは段々と殺気が出てくる

ロウ「い、いやいや、今の発言は違くてのう。な、何というか、その、言葉の綾というか」

ラース「流石、元ユグノア王。人の心で遊ぶのがお上手です。ですが、そんな王にはとっておきの刑に処してあげましょう。覚悟はいい

な？」

ロウ「ヒ、ヒイイイ!!」

夜中

マルティナ「もう、トイレに行きたかったならもっと早くに言っ
ね」

ルナ「ごめんなさい、お母さん。ん？あそこに誰か倒れてるよ」

ルナは隣の部屋の前を指さしている

マルティナ「え？……」。ルナ、何言ってるの。あそこには何も無
いわ。さあ、トイレはあっちよ、行きましょう」

ルナ「えー、本当だよ、お母さん。誰か倒れてたもん」

マルティナ「お母さんには見えなかったわ。あまりそういうのは気
にしちゃ駄目よ」

廊下にはボロボロになったロウがムフフ本と共に、縄で縛られて倒
れていた

ユグノアへ

次の日、朝食時

マルス「父さん、おじいちゃん、おはよう」

ライス「おお、来たか。おはよう、皆」

ロウ「おはようじやな。姫達よ」

マヤ「おはよう、兄ちゃん、じいちゃん」

ルナ「色んなご飯があるー。マヤねーちゃん、どれ食べる?」

マルス「僕も見るー」

マヤ「ああ、待つてよ、二人とも。先にご飯取ってくるね」

マルティナ「ええ。行ってきて。……ねえ、ライス、何で昨日ロウ様が廊下で凄い姿になったの? まあ、ある程度は予想ができるけど」

ロウ「ひ、姫に見られておったのか。わしが婆さんと話してた時か

の？」

ラーズ「まあ、マルティナの想像通りだが、今回は俺まで騙してきたからな。少しだけ痛い思いしてもらったんだ」

ロウ「あ、あれで少しとな。あれだけでわしのような老体は死の間際だったというのに。最近腰もまた痛くなってきたのに容赦ないわい」

ラーズ「何だ、じいさん。それならそう言ってくれば、その時にマッサージとして骨砕いてやったのによ」

ロウ「ほ、ほほ。言わなくて本当によかったと思うわい」

マルティナ「ロウ様、前からずつと言ってきてるのに直さないからですよ。やめてくださいいね」

その後

ラーズ「おいおい、マルズ。そんなに食えるのか？」

マルズ「全部美味しそうだから持つてきた！」

マルティナ「お腹いっぱいになったらお父さんにあげるのよ」

ルナ「本当だ、マルスのお皿いっぱいある」

マヤ「今日はこの後どうするの？」

ラーズ「うーん、特に考えてないんだよな」

ロウ「わしはこの後ユグノアに帰ろうと思っておるぞ」

マルティナ「あ！それならユグノアに行きましょう。お城ができてからまだ行った事ないわ」

ラーズ「お！いいな、それ。イレブンにも会いに行こうぜ。じいさん、いいか？」

ロウ「わしは構わんよ。王子としてのイレブンもぜひ見てみるといい」

マヤ「しかし、勇者様は亡国の王子だったなんてなー。綺麗だとは思ったんだけど、まさか王族だったとは」

ルナ「勇者様って王子だったの!?!すごい！いいなー!」

ラーズ「ハハハ、何言ってるんだよ、ルナ。お前はお姫様じゃないか」

マルス「あ！そっか！母さんは王女だもんね！それなら僕も王子だ！やったー！」

マルティナ「ああ、そんなにはしゃがないで。ご飯落ちちゃうわよ」

その後、ユグノア王国

マヤ「すつげえ。兄貴と来た時はまだまだ復興途中だったのに」

マルティナ「私達が来た時よりもずっと大きくなってわね」

ロウ「ほほ。皆の努力のおかげじゃ。さあ、城はこつちじゃ」

ユグノア城

ロウ「イレブンや、今帰ったぞ」

イレブン「あ！お帰り、おじいちゃん。つて！ラーズ達！」

ラーズ「よお、イレブン！王子の姿似合ってるな！」

マルス「勇者様が綺麗な格好してる！」

ルナ「勇者様、カッコいい」

マルティナ「うふふ、イレブン。とっても似合ってるわ。頑張ってるみたいね」

イレブン「本当？ありがとうございます、色々習わなきゃいけないで大変だよ」

マヤ「勇者様ってどんな格好しても似合うんだね」

イレブン「あ、マヤちゃんもいたのか。どうして皆は集まっているの？」

マヤはイレブンに宿題の事を話した

イレブン「そっか。宿題が出ちゃったのか。でも、またあの旅館に行ったんだ。いいなー、僕もおじいちゃんと一緒に行けばよかったよ」

ロウ「また機会があればわしと行くかの？」

イレブン「うん、そうする。マヤちゃんも思い出作れてよかったね。」

よかったら、ユグノアでも思い出作って行ってね」

マヤ「うん。ありがとう、勇者様」

バタン

兵士「イレブン様！ロウ様！クレイモランの国の方から謁見の申し込みがあります。如何なさいましょう」

イレブン「クレイモランから？いいよ、通して」

しばらくして

カミュ「よお、イレブン、じいさん。来たぜ。つて、ラーズ達までいるじゃねえか！それにマヤ!?こんな所で何やってんだよ」

ラーズ「よお、カミュ」

マヤ「兄貴!?ええ？クレイモランの人って兄貴だったの!?!」

イレブン「今ちようどラーズ達も来てたんだ。カミュはどうしたの?」

カミュ「俺はシャルル達からユグノア王国との貿易の話の手紙を持ってきたんだ。後は顔を見せに来たんだ」

ロウ「ほほ。そうであったか、悪いのう、カミュ」

マルティナ「あら、クレイモランもユグノアと交流していくのね。いい事じゃない」

カミュ「あの国は色んな所と交流していかないといけないみたいだからな。マヤは何でここにいるんだよ」

マヤはカミュに宿題の事を話した

カミュ「あー……。なるほどな。悪かったな、マヤ。あの時は俺もかなり忙しくてよ。凶暴化した魔物を討伐してて、そっちに行けなかったんだ。ラーズ達、マヤのお願いを聞いてくれてありがとな。助かるぜ」

ラーズ「気にすんなよ、カミュ。忙しくなるのはマヤもわかってるさ。そういう時こそ、達の出番だからな。家族って助け合っていくもんなんだぜ」

マヤ「いしし。兄ちゃん、姉ちゃん、ありがとう！兄貴も心配かけてごめんね」

カミュ「ありがとな、ラーズ。それとよお、マルス、ルナ。元気にしてたか？」

ルナ「カミュさん。こんにちは」

マルス「カミュ！よ！」

カミュ「ああ？おい、マルス。カミュさん、だろ？しかも、よ！つて何だよ」

マルス「父さんがカミュにはこれでいいって言ってた」

ラーズ「やべっ！」ダツ！

カミュ「待てや、コラ！ラーズ！！てめえ！！」ダツ！

マルス「あれ？父さん達急に追いかけてこ始めた」

イレブン「ハ、ハハ。相変わらずだね、ラーズとカミュは」

マルティナ「似てる所はたくさんあるんだけどね。中々相容れないのよ」

ロウ「ほっほっほっ。まあ、あれも兄弟の形の一つであろう。それとイレブン。わしに休日をくれてありがとうのう。ゆつくり休めたわい。死にそうにもなったがの」

イレブン「し、死にかけた？よくわからないけど、休めたならよかったですよ」

ロウ「そんな優しい孫には今日一日休みをやろう。ラースやカミユ達と楽しんでくるといい。わしも昨日楽しんだからのう」

イレブン「え？いいの？おじいちゃん」

マルティナ「そんな。ロウ様、気になさらないでください。私達はただ顔を見せに来ただけですよ」

ロウ「なに。昨日はわしも楽しかったから。ラースもよく言っておるではないか。楽しい事はいろんな人とやる方がいい、と。それに則ってみただけじゃよ」

イレブン「じゃあ、言葉に甘えちゃおうかな」

ロウ「ああ、行ってくるといい。このユグノアを案内してやるのじゃ」

マヤ「勇者様も来てくれるの？いしし、よろしくね」

マルス「勇者様、遊ぼう」

ルナ「ルナも追いかけてこしたーい」

マルティナ「ごめんね、イレブン。騒がしいと思うけどよろしくね」

イレブン「ううん。気にしないで。着替えてくるから少し待っててね」

マヤ「じゃあ、その間にどこかに行っちゃった兄貴と兄ちゃんも探さない」と

マルティナ「全く、どこまで行ったのかしら」

その後、頭にこぶができたラースを連れてカミュが戻ってきた

カミュ「悪かったな、今戻ったぜ」

ラース「くそう、カミュに素早さでは勝てねえ。捕まった」

マルティナ「あら、戻ってきてくれて助かったわ。今からイレブンにユグノアを案内してもらおうと思ってるの。よかつたらカミュも行きましょう」

カミュ「お、そうなのか。なら、俺も行かせてもらおうとするか」

マルス「カミュって早いんだね。さつきも父さんより早かった!」

ルナ「やっぱりツンツンだから?」

カミュ「マルスはもういいや。ルナ、俺の頭のツンツンは関係ないからな」

ラーズ「ふふっ…」ゴンツ!

ラーズ「痛ってえ!カミュ、何しやがる!」

カミュ「うるせえ!笑いやがって!マルスの事だってまだ許した訳じゃねえんだからな!」

イレブン「お待たせ。あ、ラーズがカミュに捕まってる。やっぱり素早さじゃ勝てないよね」

マルティナ「イレブン、来たわね。カミュも行くことになったの。案内頼めるかしら？」

イレブン「何だか随分と賑やかになったね。ふふ、楽しみ」

マヤ「あーあ、ここにおっちゃん和王様もいればほぼ完璧なのにな」

ラース「それじゃあ、いつか皆でまた来ようぜ。今回は仕方ないさ」

イレブン「じゃあまずは広場に案内するよ。こっちだよ」

ユグノア観光

広場

中央には大きな噴水があり、周りには花壇やベンチなどがあり休めるようになってい

イレブン「ここが今の王国の広場だよ。いつもいろんな人が集まってるんだ」

ルナ「噴水だー。デルカダールにもあるよ」

イレブン「隣は住宅街だし、向こう側は商店街で、ここを真っ直ぐ通ればお城に着く。この場所が全部の中継地点になってるんだよ」

マルティナ「へえ、いいじゃない。植木や花もたくさんあつて綺麗だわ」

マヤ「こういう憩いの場も大事だもんね」

マルス「勇者様がここを作ったの？」

イレブン「ううん、違うよ。僕も手伝ったけど、皆と一緒にこの町を作ったんだ」

ルナ「えええ!?町を作ったの!?すごい!」

マルス「え、じゃああのお城も!」

イレブン「うん。そうだよ」

カミュ「皆が頑張って作ったんだぜ。いい場所になったな」

ラース「人の力ってすごいよな」

イレブン「次は商店街に行ってみようか」

商店街

様々な店が並んでおり、たくさんの人で賑わっている

マヤ「やっぱり商店街は賑やかだね。いろんな物が売られてる」

イレブン「うん。僕やおじいちゃん顔見知りの所に頼みに行つて、そこからユグノアに届けてもらうように頼んだの。だから世界各地の物が集まってるよ。今度はここにクレイモランの宝石とかも入りたいね」

マルティナ「素敵ね。世界が手を取り合って、物を通じて交流ができる。ユグノアはどんどん世界に広まっていくのね」

ラース「おお!!カミュ、これ見ろよ。クレイモラン産の三十年産の酒だぞ!」

カミュ「何だって!?!凄えじゃねえか!この酒はクレイモランの中の酒でも最高級レベルだぞ!」

ラース「わかってるな?弟よ」

カミュ「当たり前だな、兄貴」

二人「この酒、ください!」

マルティナ「全く。あの二人は酒豪で困るわ」

イレブン「ふふ、こうやってみてると兄弟でも違和感ないよね」

マヤ「あ、こんな腕輪もあるんだ。変わってるんだね。あれ?兄ちゃんも確かオレンジのやつをしてたよね?」

マルティナ「あら？これ、ミサングじゃない。懐かしいわね。マヤちゃん、これはね、私とラーズが前にお揃いで買った物なのよ。

お願いを込めて腕につけてると、紐が切れた時にお願ひ事が叶うつて言うお守りなのよ」

マヤ「へえ、じゃあ私も買ってみよう。おじちゃん、この水色のやつ一つください」

マルス「僕も何か買いたいな」

ルナ「私も何かほしい」

二人はどんどん先に進んでいく

イレブン「ああ、待って二人とも。何か欲しいのがある？案内するよ」

マルス「僕、お菓子が欲しい」

ルナ「ルナもお菓子」

イレブン「わかったよ、二人とも。お菓子屋さんはこちらだよ。ラーズ達、僕達少し先にあるお菓子屋に行ってるよ！」

イレブンはマルスとルナの手を繋いで先に進んでいった

ラーズ「おう！すぐ行く！なあ、弟よ。耳を貸せ。さっきいい場所を見つけた。それで、面白い提案があるんだ」

カミュ「お？何かいい事思いついた顔だな。へへ、何だよ兄貴」

ラーズとカミュはゴニョゴニョと話し始めた

その後

マルティナ「ごめんね、イレブン。わざわざ買ってもらって。何ゴールドしたかしら？払うわ」

イレブン「いいよ、マルティナ。僕から子ども達へのプレゼントだよ。だから気にしないで」

ラーズ「悪かったな、イレブン。ほら、お礼は言ったのか？」

二人「勇者様、ありがとう！」

イレブン「ふふ、どういたしまして」

マヤ「そろそろお昼かな？私お腹空いてきちゃった」

イレブン「確かにそうだね。お城に戻って食べようか。用意してもらうよ」

マルティナ「わかったわ、それじゃあ行きましょう」

カミュ「(兄貴!)」

カミュはラースにアイコンタクトを送る

ラース「(へへ、作戦通りにいくぞ)なあ、こっからお城まではすぐだろ?俺達もう一つ行きたい場所があってよ。イレブンだけ借りてもいいか?案内してほしいんだ」

イレブン「あ、そうだったの?それなら案内するよ。皆は先にお城に戻ってて」

マヤ「わかった、戻ってるね」

マルティナ達は先に進んでいった

カミュ「こっつてイレブンは顔を結構知られてるよな?イレブンには何かしてくれたりするの?」

イレブン「うん。一品くらいならタダで食べさせてくれたり、何かもらえたりするよ」

ラース「へへ、それならよ。こつちだ！イレブン！」

ラースはいきなりイレブンの手を掴み、走り始めた

イレブン「ええ!?ど、どこ行くの、ラース！カミュまで！場所知らないんじゃない!?」

カミュ「さっきいい店を見つけたんだよ！そこに行こうぜ！」

ラース「おつと。ここだな」

イレブン「え?ここつて……酒場だよ」

ラース「さあ飲むぞ、イレブン！」

カミュ「へへ、またお前と飲むのを楽しみにしてたんだよ」

ラースはイレブンを引っ張り、カミュは背中を押している

イレブン「え!?待つて、ストップ！駄目だよ、絶対酔わされるもん！やだ！行きたくない！帰る!!押さないで、カミュ！」

ラース「さあ観念しろ、イレブン！それに前は酔い激しくなかっただろ？勇者なら、もっと先の世界も見に行こうぜ！」

イレブン「そんな世界いらなから！見たくない！嫌だー！誰かー！」

酒場内

マスター「おや、イレブン様じゃないですか。酒場に来られるなんて珍しいですね」

イレブン「ア、アハハ、無理に連れてこられたんです」

ラーズ「マスター！見てくれ、この酒！この酒に合うつまみを頼むぜ！」

マスター「これは、クレイモラン産の三十年物！素晴らしいお酒ですな！これはマスターとして腕が鳴ります。待っていてください、用意いたしましょう」

カミュ「このお酒を飲むぞ、イレブン。お前もきつと気に入ってくれるぜ」

イレブン「もう信じないからね！二人のお酒に付き合っているとロクな事ないってわかったんだから！」

ラーズ「まあまあ、イレブン。そう怒るなって、飲んでもないのに決めつけるのはよくないぞ。騙されたと思って飲んでみるよ」

ラーズは少しコップに注ぐとイレブンに差し出した

イレブン「少しだけだからね！もう！………あれ？美味しい。スツと喉を通ってく」

カミュ「だろ？流石、俺の相棒だな。この酒の良さをわかってくれたか！」

ラーズ「この酒高くてな。俺も一度しか飲んだ事無いんだが、病みつきになってよ。もう止まらねえよな！」

イレブン「う、うん。これなら僕も飲めるよ。ごめん、ラーズのお気に入りのホームラにあるお酒と同じだと思ってた」

カミュ「あれもイケルが、これとは別物だな。ほら、どんどん行くぞ」

マスター「こちらををご用意させていただきました」

ラーズ「お！枝豆があるじゃねえか！いいねえ、マスター！」

カミュ「この緑の豆は枝豆って言うのか。俺もこの豆と酒は何でも合うと思うぜ」

イレブン「あ、塩の味がする。美味しい！」

リース「それとこの酒合わせてみる？堪らねえんだよな！」

イレブン「あ、凄い！どんどん欲しくなるね」

カミュ「だろ？まあ偶には水も飲めよ。ほら」

イレブン「ありがとう、カミュ。リースも誘ってくれてありがとう。嫌々いってごめんね」

リース「わかってくれりゃあいんだよ。さあ、今日は飲もうぜ！」

二人「おー！」

マスター「イレブン様、かわいいそうに。そちらのお酒はアルコールが体に来るのが遅いというのをご存知ないようです。そんな勢いで飲んでしまわれると、あつという間に……」

その頃、お城では

ロウ「イレブンとカミュとラーズはどうしたのじや?」

ロウはイレブン達がない事を疑問に思っていた

マヤ「なんか行きたい所があるって言って勇者様をどこかに連れて行っちゃったよ」

マルティナ「そういえば、その前にラーズ達はクレイモラン産の三十年物で大はしゃぎしてたわね」

ロウ「……ほほ。イレブンよ、かわいそうに。これは夜まで帰ってこないかもしれんおう」

二人「え?」

ロウ「おそらく今頃は酒場におけるじやろうて。昨日ラーズが、イレブンと次に飲む時は怪しまれないように絶対に酔わせると言っておったからおう」

マヤ「うわ、マジか。これはやられたね」

マルティナ「全く、あの兄弟には困ったものだわ。本当そっくりなんだから」

ロウ「二日酔いの薬を作っておくかの」

その頃、酒場

イレブン「ねえカミュ、ラース。実は僕達全員、二人の事を兄弟として見てもおかしくないって思ってるんだよ」

二人「はああ？何言ってるんだよ」

二人「ハモんな！」

イレブン「アハハハ！そっくりな所多いよ。マルティナも言った」

カミュ「俺はこんなに性悪じゃねえよ。人の事をなんだと思ってる。こんな兄貴はゴメンだ」

ラース「俺だつてこんな素直じゃないし、可愛げのかけらも無い弟なんざ、いらねえ。バンのやつの方がまだ弟として迎えられるぜ」

イレブン「口ではそう言うけどさ。実際はどうなの？本当にそう思ってるの？」

二人「当たり前前だろ。だから被せんな！」

イレブン「僕、マヤちゃんとかラースが仲良くしてるのを見てると、カミュとラースも仲良くなれると思うんだよ。駄目かな？」

ラース「……まあ、本当に嫌いだったらこんな事しねえし、助けもしねえ。カミュは俺に無い強さや心を持つてる。そこは尊敬できる部分だ」

カミュ「そりやあ俺だつてラースのやつは強いと思うし、仲間の事を大切にしてるし、俺より頭もいいから頼りになる。俺とは違ういやつだ」

イレブン「でしょ？それならさ」

二人「だが、気に入らねえ！」

イレブン「あ、あれ？」

ラース「あいつはすぐに一人で考えやがるし、自分で解決しようとしやがる。もっと頼れって言っても聞きやしねえ。あと、単純にイケメンなのがうざい」

カミュ「あいつは俺の事をおもちやか何かと勘違いしてやがる。人の事をすぐに馬鹿にしやがるし、頭も回る分何手先まで考えてやがる。俺が対抗できなくさせてくるのも腹が立つ。すぐに手も出るしうざいんだよ」

ラース「てめえ、黙って流してれば隣で散々人の悪口言いやがって」

カミュ「ああ？てめえだって俺の事散々言ってるじゃねえか。自分の事棚に上げてんなよ」

二人「上等だ、てめえ！表でろ!!」

二人は互いの胸倉を掴みながら喧嘩モードになっている

イレブン「あ、ああ、嘘、どうしよう。落ち着いてよ、二人とも」

ラース「駄目だ、イレブン。兄に逆らうとどうなるのかこいつに教えてやらねえとな」

カミュ「そうやって自分が上だと思ひ込んでんじゃねえぞ。足下掬われるぜ」

イレブン「も、もう！やめてよ！聞いてってば！二人とも！」

カミュとラーズ

しばらくして、ユグノア城

兵士「ロウ様！イレブン様が救援を呼んでおります！何やらラーズさんとカミュさんが喧嘩しているとの事です！」

ロウ「な、何じゃと!?!」

マルティナ「もう！何やってるのよ。私達も急いで行きましよう！」

マヤ「えー。兄貴達の馬鹿。何やってんの」

その後、広場

カミュ「もう許さねえからな！ラーズ！」

ラーズ「何とでも吠えてろよ！弱い犬ほど何とやらつてな！」

カミュ「これならどうだ！ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ラーズ「お、おいおい。それはいくら何でも」

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ラーズ「くっ！やべえな、避けきれねえ！」ザシユ！ズバ！

ラーズは避けきれず何発か当たっていく

イレブン「もうやめてよ！二人とも！」

マルティナ「ラーズ！カミュ！やめなさい！！」

イレブンとマルティナは二人の前に出た

ラーズ「くっ……」

カミュ「チツ……」

ロウ「なぜ暴れておるのじゃ。お主達は仲良く飲んでいたので無
いのか？」

カミュ「ああ？じいさん、誰と仲良くだつて!？」

ラーズ「こんなやつと仲良く飲めるわけねえだろうが！」

また一触即発の雰囲気となっている

マヤ「お願いだよ！兄貴！兄ちゃん！もうやめてよ!!」

マルティナ「ラース、落ち着いて。これ以上暴れるなら捕まえないといけなくなるわ」

ラース「……」

イレブン「カミュもだよ。僕の軽率な発言が、二人の気分を害させたのは本当に悪かったよ。だから、せめて仲直りしてよ」

カミュ「……」

カミュは何も言わずに立ち去っていく

イレブン「あ、カミュ！待ってよ。僕も……」

カミュ「来んじやねえよ、イレブン！」

イレブン「カミュ……」

マヤ「……」

マルティナ「落ち着いた？ラース」

ラース「ああ、悪かったな。迷惑をかけた」

ロウ「一体何があったというんじや」

イレブン「僕が二人に兄弟みたいなんだから、もう少し他の所でも仲良くしてほしくてそんな話をしたの。でも、二人は互いの悪い所をどんどん上げていって互いに喧嘩になっちゃったの」

マルティナ「ハア。ラース、悪口を聞かされ続けて嫌な気持ちになるのはわかるけど、もう少し我慢して。暴れられると困るのよ」

ラース「そう……だな……。すまない、城に帰ろう。少し一人にさせてくれ」

マヤ「……………」

マヤはずっと不安そうな顔をしていた

その後、カミュと喧嘩してから数日経った

マルティナとラースの部屋

ラース「……………」

マルティナ「どう？ラース。カミュと仲直りした？」

ラース「俺だつてあんな事したかつたんじゃない。俺はカミュの事は嫌いじゃなかったんだ。でも、カミュは俺の事嫌いになったはずだ。元々そこまで好かれてもなかったんだ。わざわざ顔を出す必要もないだろ」

マルティナ「ラース。あなたの事だから、何か考えがあつてお酒とか稽古によく誘つてたんじゃないかしら？私はそう思っていたのだけど」

ラース「ハハハ、流石マルティナだな。俺の考えも読まれるようになってきたなあ。そうだよ。俺は、あいつにも家族の暖かさをわかつてほしかったんだ。カミュはすぐに一人になりたがるうとする。盗賊時代の癖なのかもしれないが、俺はそれをやめてほしいんだ」

マルティナ「その思いをカミュに伝えないの？今、あなたとカミュに仲直りしてほしい人が来てるのよ」

ラース「え？」

マルティナ「マヤちゃんよ。入ってきて」

ガチャ

マヤ「兄ちゃん、お願い。兄貴と仲直りしてよ」

ラース「……………」

マヤ「兄貴は兄ちゃんの話をしようとすると逃げちゃうんだ。私、折角兄ちゃん達と仲良くなれたのに、兄貴だけ仲間外れみたいで嫌なんだよ」

マヤは下を向いて涙が出そうになっている

ラース「マヤ……………」

マルティナ「泣かなくて大丈夫よ。ほら、言いたい事を言って」

マヤ「うん…………」。私、兄貴にも家族を教えてあげたいの。私以外にも家族になって、一緒に笑いながらご飯を食べて、一緒に助け合って生きていく事ができるって教えたいのに…………。クソ兄貴はいつも、俺はいいって言っただけで何処か行っちゃうの。

私！兄貴と兄ちゃんにもっと仲良くしてほしいの！私ともこうやって仲良くなれたんだもん！絶対できるよ！だから…………。お願い」

ラース「……………」

マルティナ「よく言えたわね、マヤちゃん。ほら、涙拭いて」

マヤ「うん…… ありがとう」

ラーズ「…… 少し考えてくるよ」

ラーズは部屋から出ていった

バルコニー

バン「あ！師匠！」

ロベルト「お疲れ様です！ラーズ将軍！」

バルコニーにはバンとロベルトがいた

ラーズ「おう……」

バン「師匠、マルティナ様に話を聞きました。カミユさんと喧嘩したそうですね」

ラーズ「まあ、な。俺も少し言いすぎたが、あいつだっただって俺の事迷惑がってたんだ。仕方ないだろ」

ロベルト「最近、考え事が多いのはそのためだったんですか。仲直りはしないんですか？」

ラーズ「仲直り……。ねえ。もう手遅れだろ。俺、あいつに面と向かって会えない気がするぜ」

バン「師匠……」

ラーズ「大体、俺とカミュはあまり馬があわねえんだ。互いに売り言葉に買い言葉だしよ。俺はあいつと家族になったが、カミュは認められないんだろう。もう、俺じゃあ無理だ」

バン「何でそんな簡単に決めちゃうんですか」

ラーズ「ハハハ、少しはわかるさ。俺はあいつに弟になってもらっても構わなかったが、あいつが望まないならそれでいい。もう、俺にできる事は何もない」

ラーズは少し下を向いて乾いた笑いをしている

バン「ああ、もう！師匠、すみません！」

ラーズ「ん？何だ」バキッ！

ラーズ「グハツ！」

ラーズは少し飛ばされた

ロベルト「お、おい。バン」

ラーズ「な、何すんだよ。バン！」

バン「師匠はそんな簡単に何かを諦める人じゃないでしょう！今の師匠はカミユさんと仲直りするのが、会う事が怖いんですよね!?それを隠して、最もな理由を自分で挙げてるだけじゃないですか！

俺の知ってる師匠は、簡単に諦めないでどんどんぶつかっていく人だったじゃないですか！師匠は今、何もしてないですよ!!それなのに、逃げちや駄目です！前、俺にそう教えてくれたじゃないですか！」

ラーズ「……………」

バン「師匠！カミユさんと会いましょう！会って話をするんです。思いをちゃんと相手に伝えて、しっかりと話すんです。師匠は優しい方です。カミユさんだってそれは知ってるはずですよ。お互い文句とかは無しにして、向かい合って見てください。何か変わるはずですよ」

ラーズ「……ふつ。ハハハハ！バン、流石だよ。そうだったな。俺はお前に、逃げてちや始まらないと教えた。その俺が今、こうして逃げていたんだな。」

ありがとな、バン。思い出させてくれて、励ましてくれてよ。こんな師匠で悪かった。俺、カミュと話してくる。この問題と向き合ってくるぜ」

ラーズは立ち上がった

バン「はい！それでこそ師匠です！」

ロベルト「何だかラーズ將軍らしさが戻ってきましたよ。俺も応援してます」

ラーズ「ああ、ありがとな。バン、今度このお礼に何か奢ってやるよ。じゃあな」

バン「へへ、やったー！」

兄と弟

その後、カミュとマヤの家

ガチャ

ラース「カミュ、邪魔するぜ」

カミュ「……………。何しにきやがった、ラース」

カミュは入ってきたラースを睨みつけた

ラース「お前と仲直りだ」

カミュ「ハッ！仲直りだあ？どうせマルティナとかに言われたただけだろ。お前の気持ちなんかじゃねえだろ」

ラース「いや、俺もカミュと仲直りしたいからな。ほら、この前のクレイモラン産の三十年物だ。少し話し合おうぜ」

カミュ「……………」

ラース「まあ、俺も面白い言葉になって悪かったな。俺自身、気が短い方だからよ、カツとなっちまう事は多い。俺はカミュにしてみらいたい事があるんだ」

カミュ「俺にしてもらいたい事？」

ラーズ「ああ。カミュにも家族として、王様達と飯を食ってもらいたいんだ」

カミュ「……………」

ラーズ「お前が一人になりたがろうとするのはわかってる。自分である程度生きていけるのも知ってる。だが、俺はお前を一人にさせたくないんだ」

カミュ「………… 甘い考えだな。俺みたいなお尋ね者は、そんな綺麗なものには行けないんだよ」

ラーズ「それは過去の話だろうが。周りももう忘れてるはずだ。それに、王様だって許してる。なあ、家族なんだからよ。同じ家で暮らしてもいいんじゃないか？」

カミュ「俺はその家族がよくわからねえんだよ。俺はお前達とは違う。いくら認められたからって違いが無くなるわけじゃないだろ」

ラーズ「違いなんざ、あの城の家族にはたくさんあるぜ。血や見た目、性格。似てる所の方が少ないぞ。それに、家族つてのは互いを思

「いあい、助け合う事になれるものだと思ってる。カミュは違うのか？」

カミュ「俺は……確かにお前達を助けたいとは思ってる。だが、俺なんかの事は構うなよ。マヤの事を気にかけてやってればそれでいい。俺は別に一人で大丈夫だからよ」

ラーズ「そのマヤがよ。俺達に仲良くしてほしいんだって頼んだけど。お前、マヤの話を聞きたくなかったそうだな。泣きながら俺に頼んできたんだぜ」

カミュ「マヤが……か。俺は、別にラーズが嫌いなんじゃねえ。仲間としては好きだし、頼りになる。すげえやつだとも思ってるぜ。ただ、お前が俺に構ってくるのが嫌なんだよ。気にすんなよ、俺の事なんか。何処かでのたれ死んだってそれが俺にふさわしい末路だ」

ラーズ「カミュ、お前は死んでも構わないって思ってるのかよ」

カミュ「ああ、俺は構わない。誰も特に困らないだろう」

ラーズ「ふざけた事言ってるじゃねえぞ!!」

ラーズは怒鳴った

カミュ「な、何だよ。別にラーズには関係ないだろうが」

ラース「困らないだって？お前のその考えは間違ってたんだよ！お前が死んだらどれだけの人が困ると思ってるんだ！まず、仲間達全員悲しむんだからな！俺もそうだ！特にイレブンは絶対に泣くぞ。相棒としてあれだけ信頼してるんだからな！」

カミュ「旅の頃から思ってたが、お前らはお人好しすぎるんだよ」

ラース「次に王様やバン、それにシャルル王女達だ。そして他の誰よりも悲しむのは、お前の実の家族のマヤだろうが！マヤは俺達と家族になってからも、俺達が絶対に踏み込めない領域にカミュがいるんだよ！

マヤが望む家族の形には、カミュが必ずいるんだ！そんな妹を残して死ぬ事は許さねえぞ！」

カミュ「……………」

ラース「なあ、カミュ。その考えは直してくれ。お前は死んだらいけないんだ。死ぬ事は誰かを悲しませる事だ。わかってくれ」

カミュ「ああ…… そうだな。俺も、お前達やマヤに悲しんでほしいわけじゃない。すまなかつた」

ラーズ「よかった。なあ、カミュ。お前は前に、愛を知らない、わからない、と言ったな。だが、お前がマヤに向けている感情こそが愛だという事に気付いているのか？」

カミュ「俺が、マヤに？」

ラーズ「そうだ。カミュはマヤにいつも楽しんでほしいんだろ？悲しんでほしくないんだろ？それは、家族だからこそ向ける愛の気持ちだ」

カミュ「あの気持ちが……愛」

ラーズ「俺達はマヤに愛を向けている。だが、何もマヤだけじゃない。カミュ、お前にだって向けているんだ。カミュに苦しんでほしくない。カミュには、させたい事をさせてあげたい。一人きりでいてほしくないんだ」

カミュ「……何で、お前は、お前達は……そうやって……俺に優しくしてくるんだよ！やめろよ!!うぜえんだよ!!」

カミュはラーズに乗り掛かり、殴り続ける

ラーズ「……」

ラーズは無抵抗でカミュの話を聞く

カミュ「そうやって優しくしたってよ！俺は…… どうしたらいいかわからねえんだよ！昔から、そんな事される時は決まって騙されてきた！お前達みたいな優しさは、わからねえんだよ！俺は…… 何もしてやれねえのに」

ラーズ「それがカミュの本心か？」

カミュ「そうだよ！俺は、何もできねえ！何でこんなやつに優しくするんだよ！」

ラーズ「カミュは何がしたいんだ？カミュにしかできない事はたくさんある。お前は何がやりたい」

カミュ「俺は……。わからない、自分がしたい事なんて無い。生きる目的も、今はもうあまり無いんだ」

ラーズ「本当か？」

カミュ「何が言いたい」

ラーズ「マヤの事を思い浮かべたんじゃないのか？」

カミュ「そりゃあそうさ。だが、あいつはもう一人で生きていける。」

ラース達だっている。俺はいらないのさ」

ラース「いらなくなんてない。マヤにはお前が必要だ。マヤを本当に守れるのは俺じゃない。実の兄であるカミュ、お前だけだ。マヤを守るためにも生きてくれ」

カミュ「確かにそれは俺もそうしたいが、俺が生きるか死ぬかはわからねえだろ」

ラース「俺達はカミュに一人になってほしくないのさ。死んでほしくないからな。何がなんでもお前に生きてほしい」

カミュ「……」

ラース「だから俺はカミュを引き留めるんだ。あの手この手を使つてな」

カミュ「なら、俺を半ば無理やりに訓練に誘うのも、城に来いと言うのもそれが理由か」

ラース「ああ、そうだ。兄としても、一個人としてもお前を守つてやりたいんだ。カミュは一人ぼっちなんかじゃないんだからな」

カミュ「本当、馬鹿だな。そんな事して何になるんだよ。俺は何もできねえ」

ラーズ「俺がカミュに望む事はひとつだ。自分の生きたいように生きろ。これだけだ。それさえできれば、何もいらぬ」

カミュ「前にも言つてたな。だが、俺はどう生きたらいいかわからねえよ」

ラーズ「やりたい事をやればいいのさ。マヤのようにな。クレイモランで働いてたつていいし、どこか別の働き方を探したつていい。何でもやってみるんだ」

カミュ「やりたい事……ね………ラーズは、俺にどうして愛をくれてるんだ？」

ラーズ「愚問だぞ。大切な仲間であの弟で家族だからだ。俺だけじゃない。皆、カミュを思うし、助けたいのさ。周りの人からカミュはたくさん思われてるんだぞ」

カミュ「それで優しくしてくれてるのか？」

ラーズ「いや、優しくしてるわけじゃない。ただ、今までカミュにはたくさん助けられたからな。俺ができる精一杯の恩返しだ」

カミュ「……………」

ラース「……………」

カミュ「ハハハハハ！お前には負けたよ。それなら、俺もラースを助けるぜ。お前達に愛とやらを返してやる。家族なら互いに助け合うんだろ？それが今の俺のやりたい事だ」

ラース「お？いいのか？」

カミュ「当たり前だろ？兄貴。俺達は家族。なら、愛を返してやらないとな？」

ラース「へへ。そうだな。家族の中ではお前は手を焼きそうだな」

カミュ「こつちだって兄貴には手を焼きそうだ。これからよろしくな」

ラース「おう！どんどん頼れよな！」

カミュ「さて、それじゃあ城に帰るとするか。マヤも泣いてるんだったな。報告しに行つてやるか」

ラーズ「そうだな、行くか」

デルカダール城

マルティナ親子の部屋

ガチャ

ラーズ「よお、戻ったぜ」

カミュ「マヤ、心配かけたな」

マヤ「兄貴！兄ちゃん！仲直りできたの？」

カミュ「ああ、今まで悪かったな、マヤ。俺もラーズに説得されたよ。俺のやりたい事をやっていいんだってな。今度からはラーズの弟として、この城にも帰ってくるぜ」

マヤ「ほ、本当!? やった!! 私、ずっと兄貴と一緒にこの城のご飯食べたかったんだよ!」

ラーズ「やっぱりカミュもいた方がいいもんな。よかったな、マヤ」

マルティナ「ラース、大丈夫なの？顔、結構腫れてるわよ？」

ラース「全くだよな。怖い弟で困るぜ」

カミュ「ぐっ……。悪かったな」

ラース「ハハハ！気にすんなよな、カミュはマヤと同じ部屋がいいか？それとも違う部屋にするか？好きな方を選べよ」

マヤ「兄貴、一緒の部屋にしようよ！」

カミュ「わかったよ、マヤ。同じ部屋で頼む」

マルティナ「わかったわ。それじゃあ二人分の用意しておくわね」

カミュ「ラース、今まですまなかった。お前の好意を気づかずに無下にした。これからもマヤと共に頼んだぜ、兄貴」

ラース「おう！任せろ、弟よ」

秘密

旅行から帰ってきて、数ヶ月後

マルティナ親子の部屋

そこではラースを除いた仲間達全員とバンが集まって話していた

マルティナ「皆、考えてきてくれたかしら？」

イレブン「うん。バッチリだよ」

カミュ「最高のものを思いついたぜ」

ベロニカ「驚かせてやるんだから」

セーニャ「喜んでいただけるといいのですが」

シルビア「アタシもとってもいいものを思いついたの」

ロウ「皆の意見も楽しみじゃのう」

グレイグ「俺はあまりいいものとは思えなかったが、これ以外考えつかなくてな」

バン「師匠の事ならお任せください！」

マルティナ「それじゃあまず、来月のラースの誕生日プレゼントをイレブン達から聞いてもいいかしら？」

イレブン「うん！カミユの意見が面白そうで採用したんだ」

カミユ「兄貴にはパイ投げをプレゼントしてやろうと思ってな！」

ベロニカ「ちよつと。何考えてるのよ」

イレブン「やつぱり驚かせてみたいじゃん？カミユ曰くパイ投げをするですつごく驚くんだった」

カミユ「しかも、パイは兄貴の好きな味噌をいれてやるんだ。どうだ？サプライズとプレゼント両方を兼ね備えてるぜ」

マルティナ「却下よ」

マルティナは考える間もなく、即答する

カミユ「な、何でだよ！」

バン「ハ、ハハ。カミュさん、また恨みをはらそうとしてるんですか？」

バンは苦笑いしている

マルティナ「魂胆が丸見えよ。喧嘩になるからやめて」

イレブン「え!?!カミュ、そうなの?」

イレブンは気づいていないようで、カミュに驚きながら聞いた

カミュ「チツ!ダメだったか」

ベロニカ「やっぱリリースと言えば食べ放題でしょ!」

セーニヤ「私達はたくさんのデザートを集めて、目一杯食べてもらおうと思ったんです」

ロウ「おお、それはいいのう」

マルティナ「いいわね。候補に入れましょう」

シルビア「次はアタシね!アタシはマルティナちゃんに踊ってもら

おうと思ってるの」

マルティナ「え？私に？」

シルビア「ええ。マルティナちゃんは旅の時に踊ってるのを見せてくれた事があつたでしょ？その時ラーズちゃんも喜んでたから、また見せてあげるのよ。セーニヤちゃんやベロニカちゃんと一緒にアタシは演奏してるわ」

グレイグ「姫様は確か旅の頃、踊り子として旅していましたね」

ロウ「懐かしいのう」

イレブン「僕もまたみたいな」

マルティナ「今も踊れるかしら？恥ずかしいけど、頑張ってみようかしら。これも候補に入れるわね」

ロウ「わしとグレイグは同じ意見でのう」

グレイグ「私とロウ様のおすすめのお酒を数本用意してみようと思つたのです。ラーズはいろんな酒を飲みますからね」

カミュ「お！いいじゃねえか！おっさん達の酒は美味いよな」

マルティナ「うーん。あまりサプライズには欠けるけど、候補に入れましょう」

バン「最後は俺ですね。やはり師匠は何より体を動かす事が好きなんです。なので！俺が一週間、師匠の好きな時に組み手に付き合うというのはどうでしょうか！」

ベロニカ「確かにあいつは体を動かすのが好きだけど、それはどうなの？」

マルティナ「言ってる事はわかるんだけど、それだとバンもつらくないかしら？」

カミュ「そうだぞ、バン。たまに勝てるからと言って、兄貴も手は抜いてる。そんな事させると、兄貴は止まらなくなるぞ」

バン「俺の修行にもなるのでいいかなと思って」

グレイグ「それはいいのだが、あいつは一度訓練場を壊しているからな。また激しくされて壊されるのも困るのだ」

マルティナ「ごめんなさい、バン。少し外させてもらうわね。でも意見を出してくれてありがとう」

バン「いえ、気にしないでください」

マルティナ「今の所の候補は、スイーツ食べ放題と私の踊り、お酒種類の三つね。お酒とスイーツは合わせてもいいかもしれないわね」

セーニヤ「マルティナ様は何か考えておられるのですか？」

マルティナ「私も考えたんだけど、どうしても簡単なのしか思いつかなくて」

ロウ「簡単というと？」

マルティナ「二人でまた旅をしたいって考えがあっただけど、もう流石に難しいわ」

イレブン「確かにレースも喜びそうだけど、うーん……」

シルビア「確かにマルティナちゃんやレースちゃんの事を考えると

難しいわね」

マルティナ「ごめんなさい、大した事思いつかなくて」

ベロニカ「ううん、気にしないで。いつも支えてあげてるんだから、こういうのは近い人ほど考えつかないのよ」

カミュ「だが、どれもサプライズにはあまりならないよな。兄貴は相当な事がないと驚かないぞ」

マルティナ「そうなのよね。どうしましょうか」

バン「あ……。今思い出したんですけど、師匠って城下町の人と触れ合うのが好きなんですよ」

バンは少し考えた後、何かを思いついた

グレイグ「確かによく合間をぬって町の方に行っているな」

ロウ「ほほう。それはいい事じゃな」

バン「師匠の行くルートって大体決まってるんですよ。この道を通って、あの店に入ってって感じで。だからその店の人に、ドッキリみたいなのを頼んでみたらいいんじゃないですか？

町の人達は師匠に対してかなり好感を持つるので、誕生日のドッキリとあれば喜んで引き受けてくれると思いますよ」

シルビア「バンちゃん、それとってもいいわ！」

マルティナ「確かにそれならレースもきつと驚くわ！行く先々の場所では何か仕掛けておけばいいのね」

グレイグ「町ぐるみでのサプライズか。民達も楽しめるし、いい事は多いな」

セーニャ「これならレース様もきつと喜んでいただけますわ！」

カミュ「へへ、いいじゃねえか、バン。ルートはある程度はわかってるのか？」

バン「はい。見回りの時とかに聞いたり、町の人が言っていたりするのでもわかりますよ」

カミュ「それなら内容は俺達で考えるか。イレブンと俺とじいさんとバンはこれから一緒に考えようぜ」

ロウ「そうじやな。お酒はグレイグに伝えてあるから、わしはそっちに移ろう。悪いが、グレイグよ。お酒をかうのは頼んだぞ」

グレイグ「お任せください、ロウ様」

ベロニカ「それじゃあ私達はデザートを集めてくるわ」

セーニヤ「終わり次第、私達もすぐにお手伝いいたします」

シルビア「ええ、お願いね。マルティナちゃんはアタシと一緒に練習しましょう。少しでも感覚を取り戻しておかないと」

マルティナ「そうね。シルビア、お願いね。マルスやお父様達にはお城の飾り付けを頼んであるの。それも手伝わないとね」

バン「あ、それなら俺達兵士も手伝います。人数が多ければすぐですよね」

マルティナ「ええ、助かるわ。それじゃあ一ヶ月後を目指して頑張っていくわよ」

全員「おー！」

全員が1ヶ月後のレースの誕生日に向けて動き始めた

サプライズ

一ヶ月後、デルカダール城

朝食時

ラーズ「おはようございます」

ラーズが入るとそこには既に全員揃っていた

マルティナ「おはよう、ラーズ」

マルス「父さん、おはよう！」

ルナ「うー、まだ眠いよ」

グレイグ「おはよう、ラーズ」

デルカダール王「ああ、おはよう、ラーズ」

ラーズ「???皆、早くないか？俺、寝坊したわけじゃないんだが」

デルカダール王「なに、マルティナ達が早く起きたのでな。お主にはゆっくり寝ていてもらおうと思っただけじゃ。気にせんでよい」

ラース「あ、そうだったんですか」

グレイグ「ラース、訓練が終わったら今日は俺の部屋で勉強だ」

ラース「えー。ハア、面倒だな。わかったよ」

訓練場

ラース「あれ？今日は何だか少くないか？」

訓練場に来ると兵士達はほとんどいなかった

ガク「皆さんは今日用事がある人が多いらしいですよ」

バン「師匠！俺はいつでもここにいますよ！」

ラース「まあ、それなら今日は自主練にさせとくか。バン、俺の組み手に付き合ってくれ」

バン「はい！喜んで！」

その頃、マルティナ親子の部屋

ルナ「お父さんに気づかれなかったかな？」

マルティナ「大丈夫よ、全然怪しまれなかったもの。さあ、飾り付けよ。ラーズはしばらく帰れないわ」

マルス「母さん、こんなのがあった！面白そうだよ」

マルスはある物を見つけた

マルティナ「あら、マルスよく見つけたわね。ふふ、それじゃあラーズに渡して驚かせてあげましょう」

しばらくして

ラーズ「ふう。いい汗かいた」

バン「ハア、ハア、ありがとうございます……………師匠ってこの後城下町に行きますか？」

ラーズ「ん？この後グレイグの部屋で勉強した後行くな。何か用事か？」

バン「いえ、俺も城下町に用事があったので、行くならその時に一緒に出た方がいいかと思ひまして」

ラーズ「そうだったのか。なら、俺の勉強が終わるまで待ってくれ」

バン「わかりました！待ってますね」

その後、グレイグの部屋

ラーズ「あーあ。勉強って嫌になるぜ」

ラーズはグレイグと勉強しており、ラーズはつまらなそうにしていた

グレイグ「ハハ、まあ我慢してくれ。これでも覚えてもらうものは少ないのだからな」

ラーズ「俺はこういうの苦手なんだよ」

グレイグ「まあ、確かに似合うとは思わないな。だが、覚えはいいし、一度覚えればかなりの間忘れないではないか。やはり頭はいいのだな」

ラーズ「まあ……そりゃあそうかもしれないけどよ、好きとは違うからな……あ、悪い、ペンを蹴ってしまった。ベッドの下にいたか」

ラーズは自分のペンを取りにベッドの下に手を伸ばす

グレイグ「ああ……！！待ってくれ、ラーズーそこは」

グレイグは突然焦り始めた

ラース「ん？何かあるぞ？」

ベッドの下からはムフフ本が出てきた

ラース「……………」

グレイグ「……………」

ラース「ハア…………。隠す所が古典的すぎないか？」

ラースはため息をついている

グレイグ「う、うるさい！戻してくれ！」

グレイグは顔を赤くして恥ずかしそうにしている

ラース「まあ、マルティナや子ども達に何もしなきゃいいけどよ」

ラースはベッドの下に戻してペンを取った

グレイグ「すまない、ラース」

ラース「面白そうだから王様には報告しておいてやろう」

グレイグ「鬼か、貴様は!!やめてくれ!!」

その後、大広間

バン「あ！師匠、終わりましたか？」

リース「おう、待たせて悪かったな。荷物とつてくるからもう少し待っていてくれ」

バン「あ！あの師匠！俺、少し時間無くてもう行きたいんですけど、いいですか？」

バンは焦って引き止める

リース「ん？そうだったのか。なら行くか。まあ、荷物くらいなくても平気だろ」

バン「ありがとうございます！」

バンは少し安心した様子だ

デルカダール城下町

バン「師匠はいつものルートですか？」

リース「おう。何だかんだ落ち着くからな」

バン「俺、メグのカフェに居るんで何かあったら呼んでください」

ラース「おう、わかったぜ。それじゃあな」

バンと別れていった

少し先の路地裏

バンが向かった先にはカミュとイレブンがいた

カミュ「よし、ナイスだバン。後は作戦通りに行くぞ」

バン「はい。部屋に戻られそうになった時は焦りましたよ」

イレブン「でも、こんな後ろから着いてっていいの？」

カミュ「何言ってるんだよ。兄貴の面白い反応を見逃すわけねえだろ。後でたくさん馬鹿にしてやるんだ」

カミュは悪い顔をしている

イレブン「それ絶対ラースに切られるやつじゃん。僕はそんな命知らずな事したくないんだけど」

バン「お、俺も師匠に何されるかわかんないのでやめたいんですが」

カミュ「駄目だ。お前達も巻き添えにしてやる」

カミュは二人の肩に腕を回して逃げられないようにする

二人「最悪だ」

その頃、ラーズはお菓子屋さんへ入っていった

女性「いらっしやいませ！あ、ラーズ様！こんにちは！」

ラーズ「よお」

女性「ちようどいい所に来てくださいました。あの、こちらの商品なんですけど、私達の手作りなんです。今ここに来てくださったお客様にも配ってるんです。よかったら、ラーズ様も食べてみてください
い」

女性からお餅を渡される

ラーズ「おお、そうなのか。それなら一つもらうぜ。ありがとな」

女性「奥の方にお水もあるので座ってゆっくりしてってください
い」

ラーズ「おう。さて、座ったし食べさせてもらうか……………!!!

（辛い！辛すぎるだろ!!水!!）」

ラーズは大慌てで紙コップを取るが

ラーズ「すっぺえ!!」

ラーズは水を吐き出してむせている

女性「ラ、ラーズ様？」

イレブン「え？あれどうなってるの？」

バン「あの渡したお餅は激辛のものがたくさん入ってるんです」

カミュ「それを食べて水が欲しくなった所に、水の紙コップの中には代わりにお酢が入ってるんだ」

イレブン「え……きつ。もしかして隣のお茶も……」

カミュ「しょうゆが混ざってるぜ。いつまで経っても水は飲めないんだ」

バン「流石カミュさんです。用意周到ですね。お店の人もお客さんもよく受けてくれましたね」

ラーズ「これ水なのか？ものすごくすっぱいぞ？」

男性「ええ？俺もその紙コップからもらいましたけど水でしたよ？とって飲んでみましょうか？……はい、ただの水ですよ」

近くにいた男性は紙コップに水を入れて飲んでみせた

ラース「ええ!?!な、ならよ。このお餅はどうだ？辛くなかったか？」

女性「そ、そんな！少し貰いますね……!!……普通ですよ。ただのお餅です」

ラース「な、何だと!?!」

イレブン「あれって辛いんじゃないかなかったの？」

バン「多分あの人、根性で耐えきりましたね」

カミュ「お、俺もそこまでするとは思っていなかった。すごいな、騙す事にノリノリだぞ」

カミュとバンも今の光景には驚いている

ラース「じゃ、じゃあお茶を代わりにもらおうか………しよっぺえ!!」

た
ラーズは隣にあるお茶の入った紙コップを取るが、それも吐き出し

女性「ラーズ様、本当にどうされたんですか？」

男性「これも普通のお茶ですよ……ほら、普通に飲めます」

男性はまたも紙コップにお茶を入れて飲んでみせた

ラーズ「……………」

ラーズは驚愕の表情で呆然としている

カミュ「クククツ！見ろよ、兄貴のあの顔」

イレブン「ククツ……これは……面白いね」

バン「アハハハハ！し、師匠！面白いです、最高ですよ、その顔！」

三人はラーズの表情に笑いを抑えられない

ラーズ「……す、すまなかつたな。どうやら調子がよくないみたいだ。また今度来るよ。悪かった」

女性「い、いえ、気になさらないでください。またのご来店お待ちしております」

ラースはトボトボと店から出ていった

ラース「あれ？おかしい。朝食食べた時は普通だったんだがな……」

ラースは広場へと向かっていく

イレブン「あ、次は僕が考えたやつだよ」

バン「勇者様ですか。楽しみですね」

カミュ「また面白い反応してくれよな」

サブライズ2

噴水前

男の子「あ！ラーズ様だ！」

そこにはいつもラーズと遊んでいる男の子がいた

ラーズ「よお、どうしたんだ？また魔法見たいのか？」

ラーズは男の子と視線を合わせるために屈んだ

男の子「ううん、違うの。僕、ラーズ様に言いたい事があるの」

ラーズ「おう。どうしたんだ」

男の子「僕、ラーズ様の事嫌いなのだ！」

笑顔で言い放った

ラーズ「……………え？」

カミュ「ほほーん。なるほど、イレブンらしい可愛らしいサブライズだな」

イレブン「あまり酷い事は出来ないけど、こういう事くらいなら許してもらえるかなって」

バン「あ、あのイレブンさん。実は師匠って結構子ども好きなんですよ。だから、これは師匠にとってかなりキツイものだと思いますよ？」

イレブン「え…… 本当？ごめん、ラーズ」

カミュ「あ、確かにひでえ顔してる」

男の子「あ、ごめんね。ラーズ様、でも、これ言わなきゃいけない」

ラーズ「……………」

ラーズは固まっている

男の子「じゃ、じゃあね！」

ラーズ「……………」

ラーズは男の子が見えなくなると、そのまま落ち込んだ表情をしている

イレブン「ああー、ごめん、ラーズ。そんな顔しないで」

バン「やっぱり応えてますね」

カミュ「アハハハハ！本当に嫌われたと思ってんな！これはこれで面白いぜ！」

バン「カミュさんも師匠に対しては本当にいい性格してますよね」

イレブン「あ、ラーズが動き出した。次はどこ？」

バン「あ！メグのカフェです！俺とメグが仕掛け人なんで急がなきゃ」

カフェ

メグ「いらつしやいませ。あ、ラーズ様。バンもいらつしやいますよ」

ラーズ「よお、さつきぶりだな。バン」

バン「はい、師匠…………… 何だか疲れてませんか？」

ラーズ「ハ、ハハ。何だかちよつと体が変だな。俺も歳かな」

メグ「大丈夫ですか？ ラース様、ハーブティーでも飲んで疲れを取ってください」

バン「(ごめんなさい、師匠!) 俺、ハーブティーに砂糖入れるんですよね。こんな感じで」

ラース「ほう、砂糖か。俺は入れた事なかったな」

バン「ぜひ師匠も試してみてくださいよ。メグ、師匠のハーブティーに砂糖入れといて!」

メグ「はい!」

ラース「バンは今日ここで休憩してたんだな。俺はこの後一度城門に寄って行くがバンはどうする?」

バン「あ、それって魔物の様子見ですよ? なら、俺も行きます」

メグ「お待ちせしました、ラース様。ハーブティーです」

ラース「ならこれを飲んだら向かおうか。って! これ、ハーブティーなのか? 俺の知らない色してるんだが」

出されたハーブティーは少し鮮やかな緑色をしていた

メグ「一昨日からの新作なんです。バンも気に入ってくれたのでお試しで店を出してるんです」

ライス「し、新作……ね。まあ、飲んでみるか………本当だ。爽やかで飲みやすいな」

バン「緑色だから少し警戒しますよね。でもハーブの色が強く出るだけで味は変わらないんですよ」

少し経ち

バン「師匠って俺の事どう思ってますか？」

ライス「何だよ、突然。バンはいつも頑張ってるし、俺の無茶振りにもついてくるしすごいやつだよ。あれ？」

バン「し、師匠！」

バンは嬉しそうにしている

ライス「あれ？言うつもり無かったんだけどな。今日は何かおかしな事がたくさん起こるんだ。帰ってマルティナに慰めてもらわないと。って！何だこりゃあ!!」

ラースは自分の発言に驚いている

バン「師匠、惚気ですか？」

イレブン「うわ、本当に心の声なんだね」

カミュ「バンのやつも結構えぐい事するよな。正直にしか話せなくなる葉だつてよ。隠し事出来なくなんのか」

ラース「い、いや違うんだ、バン。俺はこんな事言いたいんじゃない。マルティナは本当にいつも可愛くてよ、綺麗でずっと見てられるんだ。マルティナと出会えた事は俺にとって最高の幸運だ。つてやめろ！」

メグ「フフ、ラース様はマルティナ様が大好きなんですね」

バン「何だか師匠つてマルティナ様の前だと可愛くなるらしいんですよね。マルティナ様がよく言ってますよ」

ラース「な！マルティナ、そんな事ないだろ。まあ俺だつてマルティナには甘えたい時あるからな。マルティナならどんな俺だつて受け止めてくれるんだ。もう俺は喋らないからな!!」

ラースは机に突っ伏した

イレブン「アハハハ！ラーズが面白い事になってる」

カミュ「こりやあい。俺ならもつと弄つてやるが、バンはそろそろやめるのか。まあ、師匠思いだもんな、仕方ねえか」

その後

メグ「ラーズ様、楽しかったです。またマルティナ様のお話聞かせてくださいね。バン、行ってらっしゃい」

ラーズ「……………」

ラーズは口を押さえている

バン「おう、行ってくるぜ、メグ」

イレブン「この後城門にいつて、おじいちゃんが仕掛けたやつだよ
ね」

カミュ「ああ、そこから城に戻ってくるんだ。さあ、じいさんはどう
いうのを仕掛けたのかな」

城門前

バン「師匠、大丈夫ですか？」

ラーズ「……………」

ラーズはまだ口を押さえている

バン「もう！喋ってくださいよ。俺は平気ですから」

ラーズ「早く魔物の様子をみてとつと帰るぞ。今日は厄日だ。間違えねえ。おお、治った」

バン「よかったじゃないですか、師匠。なら、早めに終わらせましょう」

ラーズ「たくっ！本当にどうなって」ガサツ！

ラーズが踏んだ場所が抜け、ラーズが落ちていった

ラーズ「えええええー！」

ドスン

バン「師匠!?師匠、大丈夫ですか!?!」

ラーズ「あ、ああ。受け身はとった。だが、登れねえな。誰だよ！こんな所に落とし穴なんて作ったやつは!!」

バン「俺、誰か呼んできますね！」

バンは走っていく

ラーズ「あ、おい、バン!... もういつちまったか。なら、待ってるとするか。ん? 隣にも道があるんだな」

バン「カミュさん、イレブンさん、蓋をしますよ」

イレブン「え? ラーズ何も見えなくなっちゃうよ」

カミュ「よし! やってやるか!」

バン「この隣には地下水道に繋がる道があります。そこを通って城の地下から帰ってこれます。これがロウ様の仕掛けです」

三人で蓋をした

ラーズ「あ! おい、誰だ! 俺が中にいるんだ! 蓋するんじゃないぜ!!」

イレブン「ごめん、ラーズ」

カミュ「アハハハ! 兄貴、慌ててたなー。愉快極まりないぜ」

バン「さて、俺達は城に戻って準備しましょう」

ラーズ「全く！どうなってやがる。俺がメラ使えなかつたら何もみえねえぞ。取り敢えず、この道進んでみるか」

ラーズは手に炎を出して明かり代わりにする

しばらく歩き

ラーズ「ん？この道つてもしかして……。あ、やっぱり地下水道だ。こんな所に繋がってたのか。助かったぜ。本当今日はどうなってんだ。もう今日はゆっくりしてよう。ロクな事ないからな」

サブライズ3

デルカダール城 大広間

ラーズが城にようやく戻ると誰もいなくなっていた

ラーズ「あれ？誰もいない？おかしいな。というか、こんな装飾されてたか？朝は無かったのに」

マルティナ親子の部屋前

ラーズ「ここにくるまで誰もいなかった。何でだ？敵襲があつたわけではなさそうだし、どうなってる？それに、装飾的には何かのお祝いみたいだが？」

コンコン

ラーズ「あれ？マルティナ？いるか？」

ガチャ

中は真っ暗である

ラーズ「暗いな、おい。何も見えないぞ」

パァン！パァン！

ラーズ「うおっ!!」

カチツ！明かりがつき周りが見えるようになった

全員「ラース、誕生日おめでとうー!!」

ラース「え?.....」

ラースは呆然としている

ベロニカ「ちよつと!なに間抜けそうな面してるのよ!」

デルカダール王「皆で驚かせようと思ってな、この部屋で隠れてお主が来るのを待っていたのだ」

シルビア「いい反応だったわよく、ラースちゃん」

セーニャ「お誕生日おめでとうございます、ラース様」

ラース「あ..... そうか。俺、今日誕生日か」

ロウ「何じや、気づいておらんかったのか」

マヤ「兄ちゃんは毎年関心無さそうだったもんな」

グレイグ「お前は今日で35歳だ。立派なおっさんの仲間入りだな」

ラーズ「な!?俺はまだ若いからな!!」

ルナ「お父さん、お誕生日おめでとう!」

マルス「これ、僕とルナからのプレゼントだよ!はい!」

マルスから箱を渡される

ラーズ「お、マルス、ルナ。ありがとな。何が入ってるんだ?」

マルス「面白いものだよ。開けてみて」

ラーズがプレゼントを開けると、中からカエルのおもちやが飛び出してきた

ラーズ「うおおおっ!!」

全員「アハハハハハ!」

ラーズ「マ、マルス!父さんを驚かせるな!!」

カミュ「アハハ!子どもに騙されてやんの!」

イレブン「それ驚くよね。僕も見た時びっくりしたもん」

バン「師匠！まだサプライズは続きますよ！大広間に行きましょう！」

大広間

シルビア「それではアタシ達からラースちゃんにプレゼントよ！」

セーニヤ「私とお姉様とシルビア様とマヤ様で安らぎの唄を演奏いたします」

ベロニカ「それに合わせてマルティナさんがラースに踊ってくれるのよ」

ラース「え!?!マルティナが!?!」

マヤ「綺麗な衣装も着たんだ。楽しみにしてて」

シルビア「それじゃあ始まるわよ！セーの！」

♪

演奏が始まると、隅から紺の衣装を纏ったマルティナが踊りながら

出てきた

ラーズ「おお……………」

その後

パチパチパチ

デルカダール王「素晴らしい演奏と踊りだったぞ！」

ラーズ「最高だったぞ、皆！演奏も上手だったし、何よりマルティナが綺麗だった！」

マルティナ「ありがとうございます、お父様、ラーズ。感覚を取り戻そうと少し練習したの。成果が出せてよかったわ」

ベロニカ「もう！ずっとマルティナさんの事追っかけてて私達の方全然見てなかったじゃない！」

シルビア「仕方ないわよ、ベロニカちゃん。ラーズちゃんはマルティナちゃんの事大好きなんだから」

ラーズ「追いかけてたのバレてたのか。いや、つい見惚れてな」

デルカダール王「それでは、ラーズのためにお主の好物を取り揃え

た。ぜひ好きなだけ食べてくれ。わし達も騒がせてもらおう」

ラーズ「本当ですか、王様！やったぜ!!」

しばらくして、大広間は兵士やメイドも交え、宴会のようになっていた

ロウ「ラーズよ、お主にプレゼントがあるんじゃない」

ラーズ「おお！じいさんからもあるのか！」

グレイグ「俺とロウ様のおすすめの酒を五本ほど用意した。ぜひ飲んでくれ。どれも味や飲みやすさは期待してもらって構わない」

ラーズ「マジ!!?こんなにかよ！二人の酒は俺も結構好みなんだ！ありがとな！二人とも！」

イレブン「僕からもこれ。鍛冶で作ったんだ。ラーズに似合うんじゃないかと思って」

イレブンは鎧をプレゼントした

ラーズ「おお！新しい鎧か！へへ、イレブンの作った防具は本当に凄く良い性能してるからな。明日から早速使わせてもらおうぜ。ありがとな、イレブン」

イレブン「うん。今日のお詫びになればと思って」

ラース「詫び？何のだよ」

イレブン「あ……。何でもないよ。気にしてないなら大丈夫」

バン「師匠！兵士達一同からはこちらのプレゼントになります！」

バンはチケツトを渡した

ラース「訓練指定券……。ってことはつまり、俺の好きにしていって事か？」

バン「王様やグレイグ將軍から激しくはやるなと言われたのですが、それでもよければぜひ使ってください！体を動かしたくなったら、俺達が誰でも付き合いますよ」

ラース「へへ！ありがとな！これから使わせてもらおうぜ！」

マヤ「兄ちゃん、私からはこれあげるよ！」

マヤは小さな袋を渡した

ラース「これは？見慣れないものだな」

マヤ「最近メダル女学園にも旅人が訪れるようになってね。お土産に新しく作り出したんだ。リボンと桜の花びらを入れたお守りなんだ。それは私が作ったやつだよ」

ラーズ「おお！それなら大切にしておかないとな。ありがとな、マヤ」

シルビア「アタシからのプレゼントはソルティコの海鮮盛り合わせよ！凍らせれば長く食べられるから、たくさん食べてね！」

ラーズ「やったぜ！！ソルティコの海鮮料理はどれも美味しいよな！ありがとな、シルビア！」

マルティナ「ラーズ、私からはこれよ」

マルティナは箱を渡した

ラーズ「これは……指輪？」

中にはオレンジの宝石が入った指輪が入っている

マルティナ「ええ、私とお揃いよ。宝石は違うやつだけどラーズに似合うと思ってね。私と反対の場所につけましょう。前のミサンガみたいに一緒に」

ラース「ハハハ！最高だぜ、マルティナ！よし！これでお揃いだ！」

マルティナ「ええ、素敵よ、ラース」

二人はお互いの手を見せけている

ラース「ありがとな、マルティナ。おい、弟！お前は俺に何も無いのか？」

カミュ「自分からねだってくるんじゃないよ。おい、イレブン、バン！覚悟はできたな？」

イレブン「ええ!?い、いや僕はまだ」

バン「お、俺、用事思い出して」

二人は逃げようとする

ガシ

カミュが逃がすはずもなく、肩を掴んで戻してきた

カミュ「はいはい、逃げんな。同罪だからな」

ラース「何やってんだよ、お前ら」

カミュ「俺達からのプレゼントは楽しめたか？ラース」

ラース「え？三人から何かあったのか？」

カミュ「本当はここにじいさんもいたんだが、今はいい。今日やたらと変な事起きただろ？」

ラース「あ、ああ。特に城下町は酷かったな」

カミュ「あの城下町の人達は全部俺達の差し金なんだぜ」

ラース「……………は？」

イレブン「ヒ、ヒイ！やだ！カミュ！離してー!!」

バン「し、師匠！落ち着いてください！そんな濃い殺気を向けないでください」

カミュ「冷や汗が止まらねえ）俺達が兄貴を驚かしてやろうと思っ
て、町の人達に頼んでドツキリを仕掛けたんだぜ。それを俺達は後ろ
から見てたんだ。俺達の考えた罠に兄貴がどんな反応してるのか見

たくてよ」

ラース「つまり、お前達三人は不愉快極まりないあの出来事の数々を陰でゲラゲラ笑っていた……という事だな？」

ラースはどんどん殺気が濃くなっていく

イレブン「死んだ……」

バン「メグ、お前に最後一目会いたかった」

イレブンとバンは顔が青ざめ、諦めの表情になっていた

カミュ「ハ、ハハ。面白かったぜ、兄貴」

カミュも顔が青ざめ、苦笑いしている

ラース「とつても素晴らしいプレゼントだ。これは俺も特別なお礼をしてやらないといけないな。この後、遺書を書いておけよ？明日はとつても楽しい一日になるからな」

三人「……………」

その夜、バンの部屋

三人は部屋に閉じ込められていた

バン「嫌だー！師匠、一生のお願いです！城から出してください

!!」

イレブン「僕もほとんど笑ってないの！だからお願い！僕、関係ない！大笑いしたのはカミュとバンだけでもん！」

カミュ「て、てめえ、イレブン！何相棒を売ってるんだ！お前だつてお菓子屋の時の兄貴の顔笑ってたじゃねえか！正直にしか話せなくなる薬の時も面白がってただろ！」

バン「そうですね、イレブンさん！俺達だけこんな所に置いて行かないでください！」

ラース「うるせえぞ、てめえら。今何時だと思っていやがる。静かにしろ。明日になれば大樹に還れるんだ、会えなくなった人と会えるぞ？」

ラースは扉の前で椅子に座り、出れないように見張っていた

イレブン「嫌だー！」

バン「師匠！お願いします！許してください！」

カミュ「俺は腹は括った。明日を待つだけだ」

イレブン「カミュ！こんな時までカッコよくしなくていいから！」

その次の日から、三人は行方不明になった

一週間後に見つかるが、三人はラーズの誕生日の日の出来事を忘れていたらしい

一番強いのは？

ラーズの誕生日から二ヶ月後

デルカダール城 朝食時

デルカダール王「グロツタから手紙が届いておつてのう。何やら勇者の仲間達全員に大切な話があるそうなのじゃ」

グレイグ「私達全員と。中々珍しい声掛けですね」

ラーズ「何かあったんだらうか？」

デルカダール王「いや、特にそういうわけではないらしい」

マルティナ「皆もすぐに向かうかしら？私達も明日には向かった方がよさそうね」

デルカダール王「頼んだぞ、お前達」

次の日、グロツタの町

グレイグ「ここに来ると俺の像があつて少し恥ずかしくなるのだ」

グレイグは街の真ん中にある大きな自分の像を見ている

ラーズ「あんなデカデカとあると目立つよな。まあ、いいんじゃないか？英雄グレイグさん？」

ラーズは少しニヤニヤしている

グレイグ「貴様、面白がっているな？」

マルティナ「あ、その像の前にイレブンとベロニカ達とロウ様がいるわ」

イレブン「あ！ラーズ達も来た！」

ロウ「残りはシルビアとカミュじゃな」

ベロニカ「シルビアさんは忙しいし来れるかしら？」

セーニヤ「カミュ様も忙しそうでしたわ。都合が合わないかもしれませんか」

ラーズ「皆も今日きたのか？」

イレブン「僕とおじいちゃんは昨日からいたよ。まあ、すぐ近くだからね」

グレイグ「明日まで待つてみるのも手だな」

マルティナ「うーん、一先ず話だけ聞いてそこからどうしても二人が必要な声をかけにいくって方法が確実じゃないかしら？」

ロウ「まあ、これだけ集まれば上出来じゃろう」

イレブン「じゃあコロシウムの方に来てほしいんだって。行ってみようか」

コロシウム受付

町長「おお！勇者様！よくいらしてくれました。お仲間の方々も忙しい中申し訳ございません」

ベロニカ「それで私達に話って何かしら？」

町長「実は最近はてつきりこのコロシウムも使われなくなっしてしまい、取り壊しの話も出ています。このコロシウムは、私の祖父の代から作られた思い出深い場所。使われなくなったからいきなり壊すのはやめていただきたいのです」

セーニヤ「確かにそんな大切な場所を壊されるのは心が苦しいですわね」

町長「そうなんです。それでせめて壊される前に何か大きな大会を開こうと思ったのです。それをこのコロシウムでできる最後の思い出として、終止符を打つ事にしたのです」

ラーズ「なるほどな。だが、俺達全員を呼んだ理由は何だ？それなら数人でも充分だが？」

町長「私は最初は初代の大会通りにしてみようなど、過去のチャンピオン達全員で戦ってみようなど色々考えたのですが、どうもパンチが弱い気がしまして。そこで目をつけたのが貴方達、勇者様のメンバーです」

グレイグ「俺達に？」

町長「はい。勇者様のメンバーの中で一番強い方は誰なのか。これなら誰でもわかりやすいですし、興味も惹かれやすいと思ったのです。なので、内容としては参加者は勇者様のメンバーだけのトーナメントです」

マルティナ「でも、この中で一番強いと言ったら」

全員「ラーズでしょ」

全員がラースを見てハッキリ言った

「ラース「ええ!?!全員一致かよ!」

町長「ええ!?!勇者様まで認めるのですか!?!」

イレブン「でも実際そんな気がするよ」

ラース「俺は皆と本気で戦った事は一回しかないだろ。俺は町長の意見に賛成なんだがな」

町長「勇者様を抜いて、各自でペアになってもらい、他のペアと総当たり戦にし、勝率が高かった方に勇者様と戦う。という形式にしようとしていたのですが」

ラース「面白そうじゃねえか」

ベロニカ「なるほどね。ペアなら確かに実力は変わるわね」

セーニヤ「戦略も必要になってきますわ」

イレブン「でも僕、二対一は無理だよ?」

町長「いえ、流石にそんな事はしません。一対一になってもらいます」

マルティナ「でも、仲間達の中で今も体を動かしてる人は少ないわ。仲間達の中で差ができてしまっているんだけど、どうすればいいかしら？」

町長「開催は半年以上先の話になってはいるんです。その間に何とか取り戻してはいただけないでしょうか？」

ロウ「確かにそれだけ空いておれば何とかなるかのう」

町長「一位になったペアは勇者様の仲間内最強ペアとして世界に知る事になります。さらに勇者様にも勝てば、歴史に刻まれると思えますよ」

グレイグ「話がかなり大きくなるな。だが、世界も関心を向けるという事か。やるならば、俺達も恥がない戦いにしないとイケないな」

ラース「これは全員一致で出るって事でいいだろ！」

ベロニカ「まだシルビアさんとカミュに聞いてないわよ。二人の都合が合わなかったらわからないわ」

町長「それでは話が決まりましたら連絡の方お願いします。あ、ペアは当日くじ引きで決めていきます」

ラーズ「え!?!俺、マルティナとペアになれないかもしれないのかよ!?!」

イレブン「なったら一位になるに決まってるじゃん」

セーニャ「そのお二方になってしまわれると、私達も勝つのが難しくなりますわ」

グレイグ「お前と姫様の組み合わせはイレブンとカミュ以上に厄介だ」

マルティナ「ま、まあラーズ。なれたら嬉しいけど、それは仕方ないわ。運に任せましょう」

ロウ「わしも孫と組もうと思っておったが、そのルールなら仕方ないのう」

イレブン「それじゃあカミュとシルビアに話をしないとだね。どこにいるのかな?」

ラース「俺達の城に来るように言えばすぐじゃないか？」

マルティナ「本来お城は簡単に集まる場所ではないのよ？」

ベロニカ「そ、そうよね。すっかり集まる場所になってるわよね。ごめんなさい、マルティナさん、グレイグさん」

グレイグ「いや、俺は気にしてないぞ。城は広いし集まるにももつてこいなのはわかるからな」

マルティナ「まあ私も気にしてないけど、ラースがあまりにも簡単に指定するものだから自覚あるのかしらと思って」

マルティナは横目でラースを見る

ラース「うぐ……」

ロウ「ふおっふおっ、お見通しのようじゃな。やはりラースも妻には敵わんのう」

その後、カミュとシルビアにも話をし、全員で出ることになった

シルビア「面白そうじゃなくい！アタシはもちろん出るわ！」

カミュ「俺は興味ないな。俺だけパスでもいいか？」

ラース「そういえば、優勝商品の中に世界各地の珍しいお酒やブランド物の酒の詰め合わせが……」

カミュ「優勝狙って頑張るとするか!!」

その日から仲間達は旅の頃の感覚を取り戻すため、修行を始めた

そして八ヶ月後、大会が開催される事になった

トーナメント

グロッタの町 闘技場

コロシウムには大勢の人が集まっていた。客席は全て満席であり、立ちながら見ている人も多くいる

実況者「皆様、このコロシウム最後の大会にお集まりいただき誠にありがとうございます！これだけの人数が集まった事は過去を含めても例にないでしょう！席を交代するなどして観戦していただけると幸いです。

それではまず、勇者様にご登場していただきましょう！皆様、歓迎の方をお願いいたします。イレブンさん、どうぞステージの上に」

ワァー！ヒュー！

イレブンが出てくると歓声が沸き上がる

イレブン「どうも、初めましての方が多いですよね。イレブンといいます」

実況者「はい、ありがとうございます。イレブンさんは皆様ご存知の通り、この世界を魔王や黒い太陽から救ってくれた勇者様です！これからなんと！勇者様と共に戦った仲間達の間で一番強いのは誰なのか！というのを見ていこうと思います」

イレブン「僕も実況の方をやっていますので、何が起こったかや技の説明などをさせてもらいますね」

実況者「ありがとうございます、イレブンさん。ルールは簡単！勇者様を除いた八人の中でくじ引きでペアを組んでもらい、ペア同士で総当たり戦になります。なので、一ペアあたり三戦行ってもらいます。その中で勝率が高かったペアが、勇者様の仲間内で最強タッグとなります。

そして！そのペアは勇者様と一対一を行い、勇者様に勝てるのか。というのも見ていきたいと思っております。皆様、結果がどうなるかぜひ予想してみてください！

それでは、仲間達の方々にもステージに上がっていただきましょう！皆様、拍手でお出迎えをお願いします！

パチパチパチ！

八人全員ステージに上がる

イレブン「それでは僕の方から少しだけ皆の事を紹介しますね。まず、この青い髪の男の人がカミュといいます。僕らの旅の中で一番最初に仲間になってくれた人で、僕の自慢の相棒でもあります。カミュ、何か言っているよ」

カミュ「イレブン、恥ずかしいからやめてくれ。それに、何かって言われてもなあ。まあ、優勝目指して頑張るぜ。待ってろよな、イレブン」

パチパチパチ！

イレブン「ありがとう、カミュ。突然ごめんね。それで次のこの姉妹達がベロニカとセーニヤといいます。二人はラムダから来てくれて、僕を導くという使命の下ずっと支えてくれました。二人とも何か一言お願い」

ベロニカ「確かにこれは恥ずかしいわね。まあ、魔法なら私は誰にも負けないわ！仲間だろうと容赦しないからね！皆、覚悟してなさい！」

セーニヤ「私は回復やサポートがお仕事なのであまり戦闘向きではないですが、精一杯頑張りますわ！」

パチパチパチ！

イレブン「うん、ありがとう二人とも。次は皆知ってる人も多いよね。旅芸人のシルビアだよ。世界中の皆を笑顔にするという凄い夢を叶えるために僕達と来てくれたんだ。はい、シルビア」

シルビア「皆々！元気かしら〜？」

キヤー！！

シルビア「素晴らしいわ！アタシもイレブンちゃんの大切な仲間の一として絶対に負けないわ！皆、応援よろしくね！」

パチパチパチ！キヤー！

イレブン「ふふ、シルビアは流石だね。ここから有名人は続くんだ。

次は僕の祖国ユグノアの人なら知ってる人も多いよね。僕のおじいちゃんやロウさんだよ。結構年は皆と離れてるけど、実力は本物だよ。はい、おじいちゃんも何か一言お願い」

ロウ「ほっほ。これは照れるのう。皆、初めましての方もおるじやろう。イレブンの祖父のロウじや。年齢には勝てぬが、経験なら誰にも負けぬ。まだまだ老いぼれには程遠いわい」

パチパチパチ！

イレブン「ありがとう、おじいちゃん。体には気をつけてね。次も有名になったよね。デルカダール周辺に住んでる人は知ってるはず。マルティナだよ。旅の時も僕を立派な体術や勇敢さで導いてくれたんだ。マルティナ、何かお願い」

マルティナ「イ、イレブン。恥ずかしいわ。コホン、皆様こんにちは。マルティナです。普段はデルカダール王女として王国を支えています、少し前まではただの女武闘家として過ごしていました。」

今は夫も子どももでき幸せに暮らしています。ですが、まだまだ体は動かせますよ。見ていてください、驚かせて見せますね」

パチパチパチ！

イレブン「流石マルティナ、慣れてるね。次も知ってる人もいるよね。今はもう無くなっちゃったけど、ガラッシュの村という場所の一番の戦士、ラーズです。ラーズは頭がよくて、魔法も剣も上手なんだ。僕もよく旅の頃は作戦とか考えるのに頼りにしてたんだ。ラーズ、何かお願い」

ラーズ「これは本当に恥ずかしいな。イレブン、人前でよくそんな事言えるな。紹介にあった通り、ラーズと言います。今はデルカダール王国でマルティナ王女を支える騎士として働いています。」

そしてマルティナの夫でもあります。皆様、俺の力は仲間達を、マルティナを守るためにあります。その力、お見せしましょう！」

パチパチパチ！

イレブン「おお、ラーズも慣れてきたね。最後までまた有名人だよ。英雄のグレイグさん。グレイグさんは仲間になった時期は遅いんだけど、そこからは僕達全員の盾となって敵の攻撃から守ってくれたんだ。とっても頼りになるんだよ。グレイグ、何かお願い」

グレイグ「イレブンからこうも称賛されると誇らしくなるな。何を話せばいいのかわからないが、俺は俺の全力を出し切るまで。俺も本気でいかなければ負けてしまう連中ばかりだ。お相手、よろしく頼む」

パチパチパチ！

イレブン「これで僕の仲間達の紹介は終わります。ありがとうございます、マイク返すね」

実況者「イレブンさん、ありがとうございます！皆様、豪華な方々でしたね！それにどのお方も大変頼もしく、勇者様が頼りにしておられるお方でした！これはどうなるか全く予想が付きませぬね！」

この興奮の中、早速くじ引きの方を始めていきましよう！皆様には、こちらの箱の中にある数字が書かれたボールを引いていただきませう。同じ数字の方がペアとなります。それではお願いします！」

その後、全員ボールを引いた

実況者「全員行き渡りましたね？それでは一斉にボールを上げてもらいませう。さあ！ペアはどうなっているのか!？」

カミュ 3番

ベロニカ 1番

セーニャ 2番

シルビア 4番

ロウ 4番

マルティナ 2番

ラース 3番

グレイグ 1番

実況者「ペアは、1番がベロニカさん、グレイグさんペア。

2番がセーニャさん、マルティナさんペア。

3番がカミュさん、ラースさんペア。

4番がシルビアさん、ロウさんペアとなりました！

それでは、対戦表の方はこちらになっております！」

第一試合 1 番対 4 番 2 番対 3 番

実況者「それでは一旦戻っていただきます。第一試合は三十分後行われます。皆様、奮闘の方よろしくお願ひします！」

ワアー！パチパチパチ！

その後

ラース「いきなりマルティナと当たったー!!」

ラースは頭を抱えている

マルティナ「まさかいきなりとは思わなかったわね」

セーニヤ「マルティナ様、よろしくお願ひします」

マルティナ「ええ、セーニヤ。相手は強敵よ。一緒に頑張りましょう！」

カミュ「まあ、仕方ねえな、兄貴。兄弟パワー見せつけようぜ」

ラース「もちろんだ、カミュ。女性相手はキツイものがあるが、俺の面子のためにも簡単に負けるわけにはいかない。本気でいくぞ！」

ロウ「シルビアと組むのは初めてじゃな。頼んだぞ」

シルビア「まっかせて、ロウちゃん。大人の実力見せてあげましょう！」

ベロニカ「グレイグさん、よろしくね。頼りになるわ！」

グレイグ「俺もベロニカの魔法を頼りにしていよう。安心して俺の後ろにいるといい」

イレブン「何だかバランスよく割れた感じだね。皆、頑張ってるね。僕も実況頑張る」

ラース「いいよなー、イレブンは楽だよ。こんなの魔王なんかより絶対苦戦するに決まってるぜ」

イレブン「ま、まあまあ。ほら、僕も最後は誰かと戦うし」

案内「第一試合まで残り十分です。準備はよろしいですか？」

イレブン「よし。皆、行こうか」

ベロニカ&グレイグ対シルビア&ロウ

ステージ

実況者「それでは第一試合を行います。初めは1番対4番のペアでの戦いです。それでは各ペアは上にあがってきてください」

ワァー！

シルビア「ウッフ、何だか不思議な感じ。血がたぎるわね」

ベロニカ「シルビアさん、おじいちゃん、負けないわよ！」

グレイグ「手加減は無用だ。本気で来い！」

ロウ「ふおっふおっ、シルビアよ、頑張っていくぞい」

実況者「イレブンさん、この試合はどう予想されますか？」

イレブン「うーん。どっちが勝つとかはわかりませんが、シルビアとグレイグは昔からの知り合いですからね。この二人の戦いは目を離せないと思います。あと、ベロニカが魔法をどれだけ安全に打てるかもかかってくると思います」

実況者「ありがとうございます、それでは皆さんいきますよ。第一

試合開始です！」

シルビア「ピオリムよ！」

シルビアとロウの素早さが一段階上がった

ベロニカ「魔力かくせい！」

ベロニカの攻撃魔力が二段階上昇した

ロウ「ヘナトスじゃ」

グレイグの攻撃力が一段階下がった

グレイグ「ぐっ！オノ無双！」

グレイグは斧で突っ込んでくる

シルビア「グレイグ、あなたの相手はアタシよ！」

シルビアはグレイグの斧をガードした

グレイグ「やはり来たか、ゴリアテ！」

ロウ「ベロニカよ、すまぬ。ドルマドンじゃ！」

ロウはベロニカの近くにきた

ベロニカ「くっ！見えにくくもなるわね。流石おじいちゃん。考えがあるのね。でも、負けないわよ！」

実況者「いきなり激しくぶつかり合っております！イレブンさんの予想通りシルビアさんとグレイグさんの戦いだ！隣ではベロニカさん達の魔法勝負が行われております！」

グレイグ「天下無双！」

シルビア「効かないわ！ここよ！」

シルビアは盾で防いだ後、隙を突いて攻撃した

グレイグ「くっ！だが隙を見せたな、ゴリアテ！はあっ！」

グレイグも負けじと反撃する

シルビア「キャッ！やってくれるじゃない、グレイグ」

ベロニカ「メラゾーマ！」

ロウに炎の塊が向けられる

ロウ「ドルモーアじゃ！そこからのマヒャド！」

ロウは闇の力で炎を消した後、ベロニカとグレイグの頭上に氷の塊を降らせた

グレイグ「な!?!こっちにまで！ハア！」

グレイグは氷を斧で砕いた

ベロニカ「おじいちゃんまでラーズのような打ち方をできるのね」

実況者「今、ロウさんの魔法がかなり早い出方でしたね。マヒヤドはかなり強力な魔法なはずですよ。詠唱時間も長いはずでは？」

イレブン「あれはラーズがよく使う戦い方の一つで、魔法の詠唱に必要な言葉を少し短くしているんです。その分威力は落ちるんですけど、ああやって相手に隙を与えないんです」

実況者「なるほど！そんな方法があるのですね！これは勉強にもなりますね！確かに戦いで隙の少なさは非常に重要ですからね」

シルビア「ピオリムよ！」

シルビアとロウの素早さが更に一段階上がった

グレイグ「急に何をしているのだ、ゴリアテ！無心こうげき！」

グレイグは疑問に思いながらも隙を逃さない

シルビア「キャアツ！ふふ、ロウちゃん！準備はできたわ！」

シルビアは攻撃を食らうが、ロウに合図を出した

ロウ「マヒヤデドス！マヒヤド！」

ロウは合図を確認すると数え切れない程の氷の塊をグレイグ達に降らせた

グレイグ「何て氷の多さだ。ベロニカ、下がれ！」

ベロニカ「そうね。グレイグさん、マジックバリア！」

ベロニカとグレイグの呪文耐性が一段階上がった

シルビア「バギマよ！」

氷が降り注いだ所に風によってその冷たさが周りに吹き荒れる

軽い吹雪のような状態になった

実況者「うおお！何て寒さだ。氷の魔法の重ねがけにより、見えづらくなっております。皆様、何か寒さ対策の方お願いします！」

イレブン「これは何か来ますね。シルビア達にはピオリムが二回掛かっているのだから早く動き回れますよ。グレイグ達はどうするでしょうか」

ベロニカ「グレイグさん、私が何とかするわ！メラガイアー！」

グレイグ「頼んだぞ、ベロニカ！」

ジュワー

巨大な炎により温度が上がった。辺りが見えやすくなったが、そこ

には歪な形をしたロウとシルビアがたくさんいた

グレイグ「こ、これはまさか!？」

ペロニカ「は!?!しまった!乗せられたわ!」

実況者「何という事でしよう!ロウさんとシルビアさんが大量発生しております。何が起こっているのでしょうか!」

イレブン「ハハハ!すごいや、流石おじいちゃん。これはラースがグレイグと戦った時に使った戦法で、熱い空気と寒い空気の差によって心綺楼が発生しているんです。

空気の水分で光がうまく屈折しないので、本当の場所とは違う場所に偽物の像がたくさんできるんです。だから二人は見えない場所のどこかにいますよ。しかもかなり素早く動きます。これは作戦勝ちになるかもしれないです」

実況者「凄すぎて理解が追い付きにくいですが、これが勇者達の戦いです。これは第一試合からすさまじい!」

グレイグ「二度も同じ手段で負けてたまるものか!オノ無双!」

グレイグは像を全て斬り伏せていく

ペロニカ「そうね、グレイグさん!イオグランデ!」

ベロニカも大爆発で像を消していく

シルビア「残念ね、ベロニカちゃん」

ロウ「わし達の狙いはお主じゃ」

ベロニカの背後から声が聞こえてきた

ベロニカ「!？」

グレイグ「そんな所にいたのか！まずいぞ、ベロニカ！」

シルビア「ごめんなさいね、ベロニカちゃん。アモくレ！」

ベロニカ「くうっ！」

ロウ「ゴールドフィンガーじゃ！」

ベロニカ「キヤアア！」ドサ

ベロニカは倒れた

グレイグ「くっ……。俺は一人でも負けぬ！天下無双！」

グレイグは二人に斬りかかった

ロウ「流石グレイグじゃ。怖いもう」

ロウは避けていく

シルビア「ミラクルソード！かえん斬り！」

グレイグ「はあっ！効かん！」

グレイグはシルビアの攻撃を防ぐ

ロウ「ドルマドン！」

グレイグ「ぐうっ！無心こうげき！」

グレイグは魔法にあたるが、負けじと反撃する

ロウ「ぬうっ！ベホマラーじゃ！」

シルビアとロウは回復した

シルビア「今ね、アモゝレ！」

グレイグ「くっ！鉄甲斬！」

シルビア「無駄よ！キラージャグリング！」

シルビアはグレイグの攻撃を避けて、球を何発も当てた

ロウ「マヒヤデドス！」

グレイグの頭上から巨大な氷の塊が降り注ぐ

グレイグ「グアアア！」ドサ

グレイグは倒れた

実況者「勝負ありです！勝ったのは、4番のシルビアさんとロウさんペアです！」

パチパチパチ！

イレブン「やはりあの心綺楼が発生してからが圧倒的ですね。あの戦い方はかなり難しいんですけど、相手を誘発させる形で実現させたのもすごかったです」

実況者「それでは次のペアに移ります。2番と3番のペアはあがってきてください」

ワァー！

ラーズ「マルティナ、これは組み手とは違う。ガンガンいかせてもらうぜ！」

マルティナ「もちろんよ、ラーズ。私も負けないわ！」

セーニヤ「マルティナ様、私も頑張りますわ！」

カミュ「まずはマルティナを何とかするぞ、兄貴」

イレブン「これは何と言っても見所はマルティナ夫婦の戦いですよ。一人の戦力として考えると、ラーズは恐らく僕を入れても仲間内最強です。ですが、マルティナはそんなラーズの戦い方を熟知してい

ます。

でも、それはレースも同じ事。レースもマルティナの戦い方を熟知しています。僕もとつてもこの結果は気になりますね。どつちが勝つてもおかしくないですよ。それとセーニャのサポート力も凄いです、カミユの分身のダメージも気になる。頑張れー！」

実況者「これは目を離せませんね。それでは第一試合二回戦、始め！」

カミュ&レース対セーニヤ&マルティナ

カミュ「兄貴、作戦通りいくぞ！ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

レース「当たり前だぜ、カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

ワァー！ヒューー！最高ー！

マルティナの突然のバニー姿に観客の男性陣から歓声があがる

レース「マルティナ！！人前でその技を使うな！！」

レースは顔を赤くして怒っている

マルティナ「あら、いいじゃない、別に。勝つためよ」

マルティナは全く気にしていない

セーニヤ「スクルト！」

セーニヤとマルティナの守備力が上がった

実況者「まさかマルティナさんの姿が変わるとは！しかもバニー

スーツです！これは男性陣には素晴らしいサービスですね！夫の
ラースさんにはある意味痛手です！」

イレブン「でもあの格好は侮れなくて、全能力が上昇しているんで
す。マルティナの本気モードでもあるんですよ」

カミュ「固めてきたな！だが、俺だって負けてないぜ！デュアルブ
レイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

二人「キヤア！」

カミュ「兄貴！」

ラース「任せろ！オラア！」パシツ！

ラースはブーメランの一つを受け取った

ラース「パワフルスロー！」

マルティナ達にもう一度ブーメランが飛んでくる

マルティナ「そんな事できるの!?くっ！」

実況者「これは凄いコンビネーションですね。カミュさんの技を素
手で掴んだだけでなく、攻撃として再利用してくるとは」

イレブン「僕も初めて見ました。最近この二人の交流が増えたんです。その成果かもしれない。流石ラーズだなー。予想もつかない事するね」

マルティナ「ラーズ、流石ね。でも負けないわよ！氷結らんげき！」

マルティナはラーズに向かって攻撃していく

ラーズ「しんくうげり！」

ラーズは槍を足で捌いていく

セーニヤ「ベホマラーですわ！」

セーニヤとマルティナは回復した

ラーズ「ばくれつきやく！」

ラーズは矛先を変え、セーニヤに向かっていく

セーニヤ「こっちにきますか！天地の構え！ハア！」

セーニヤはカウンターをした

ラーズ「それは読んでるぜ、セーニヤ！ハア！」

ラーズは更にカウンターを捌いた

セーニヤ「まさかカウンターすら返されるなんて！」

マルティナ「サマーソルト！」

マルティナは横から攻撃する

ラース「効かないぜ！」バシ！

ラースは腕で防ぐ

実況者「なんとラースさん、まさかの二対一です！しかも負けておられません。これはイレブンさんの言った通り、単純な強さだけなら最強と言われるだけあります！」

マルティナ「カミュの姿が見えない。まさか）セーニヤ、ラースは任せてカミュの相手をお願い！」

セーニヤ「わかりましたわ！」

セーニヤはマルティナから離れていく

カミュ「へへ、少し手遅れだったようだな」

しかし、カミュは既に戻ってきていた

ラース「マルティナ、残念だったな。岩石落とし！」

ラースは岩をマルティナにぶつける

マルティナ「ハア！セーニヤ！大丈夫？」

マルティナは岩を砕いて、セーニヤと離れた事を心配している

カミュ「設置完了してるぜ！ジバルンバ！」

ズズズズ！

地面が一直線に盛り上がり壁となった

セーニヤ「これは！マルティナ様！」

マルティナ「しまったわ！分断された！」

壁はマルティナとセーニヤの間にできた

実況者「おおつと！ここで地面の最上級魔法ジバルンバだ！攻撃以外でこんな使い道があるとは！セーニヤさんとカミュさんは反対に取り残されてしまった！」

イレブン「そっか！サポート呪文は届かないと意味がないんだ。壁があれば届かないのか。これは考えたなー」

マルティナ「くっ！私だって負けないわよ！ばくれつきやく！」

マルティナはラースに攻撃する

ラース「ばくれつきやく！」

ラースも同じ技で対応していく

マルティナ「ラース、格闘技では確かに私は敵わないわ。だけど、私

にだってあなたへの秘策があるんだから。あなたを無力化させるためだね！」

ラーズ「ほう。そんなものがあるのか。だが、本当に効くのかな？」

カミュ「セーニヤ、すまねえな。勝つために本気でいくぜ！」

セーニヤ「私だって覚悟はできてます！簡単にはやられませんわ！」

カミュ「ヴァイパーファング！」

セーニヤ「天地の構えですわ！ハア！」

セーニヤはカミュの攻撃をカウンターで跳ね返す

カミュ「くっ！これは避けるの難しいな！兄貴はどうなってやがるんだ」

カミュはカウンターに当たる

実況者「分断された場所で一騎討ちが始まっております！どちらも目が離せません！」

イレブン「どっちが勝つかで勝負は決まってくると思います」

マルティナ「ふふ、人目なんて気にしないわ。そりゃ、ぱふぱふよ」

マルティナはラーズにお色気を使った

ラーズ「な!?マ、マルティナ!?やめろ！」

ラーズは戸惑っていく

マルティナ「そこよ!さみだれ突き！」

マルティナは隙を逃さない

ラーズ「ぐうつ!まずいな、ビッグシールド！」

ラーズの盾ガード率が上がった

マルティナ「ピストルキツス！」

ラーズ「ハア!せいけんづき！」

ラーズはハートを砕き、攻撃する

マルティナ「ハア!雷光一閃突き！」

マルティナは避けて、雷の槍で一撃を決めにきた

ラーズ「危ね!からのしんくうげり!バイキルト！」

ラーズはギリギリで避けて回避と同時に蹴りを出した

マルティナが避けて離れた瞬間にラーズの攻撃力が二段階上がった

マルティナ「くつ!流石ね、回避すらも攻撃に変える。そして離れ

た隙に攻撃を上げる。それなら、ぱふぱふよ」

マルティナはまたラースにお色気を使う

ラース「やめてくれー！マルティナ！」

ラースは動けない

マルティナ「ばくれつきやく！」

ラース「痛ってえ！くっ！メラガイアー！」

ラースは避けられないが、魔法でマルティナを離れた

マルティナ「キヤア！魔法を使うようになってきたわね。少しピンチなんじゃないかしら？ヒツプアタック！」

ラース「ハア！マヒャド！」

マルティナの頭上から氷の塊が降り注ぐ

マルティナ「それは効かないわよ！ばくれつきやく！」

マルティナは氷を砕く

実況者「何とマルティナさんがラースさんを押しております！しかし、とてつもなく羨ましい限りです」

イレブン「な、なるほど。確かにラースは魔物からのぱふぱふは効かないけど、その分マルティナのぱふぱふは必中レベルで効くのか。

これは盲点だったな」

カミュ「ヴァンパイアエツジ！」

カミュは体力を吸収した

セーニヤ「キヤツ！ベホイム！」

セーニヤは回復した

カミュ「キリがねえな。ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

セーニヤ「そうはさせませんわ！氷結らんげき！」

セーニヤは分身を全て攻撃しようとする

カミュ「くっ！危ねえ！デュアルブレイカー！」

カミュは避けて、三人の分身で一気に決めようとする

セーニヤ「キヤアア！ま、まだですわ！ベホマ！」

セーニヤは全回復した

カミュ「まずいぞ、回復で押し切られてしまうかもしれねえ」

実況者「こちらカミュさんがセーニヤさんの回復魔法に苦戦して

いる様子です。しかもセーニヤさんは戦闘には向かないと仰つていたのとは裏腹にヤリの使い方が素晴らしいです！これはすごい！」

イレブン「セーニヤもあは言つてもそこら辺の魔物なら一人で全滅できますからね。強みはサポートだけではないんですよ」

セーニヤ「さみだれ突き！」

カミュ「くっ！ハアアアツ！」ゾーンにはいった　ちから　きよう
さ　みかわし率が上がった

マルティナ「しんくうげり！」

ラーズ「ふんっ！ハアアアア！」ゾーンにはいった　ちから　すば
やさ　呪文の威力が上がった

ゴゴゴゴ

地面が元に戻った

ラーズ「カミュ！」

カミュ「おう！行くぞ、兄貴！」

二人「爆破陣！」

マルティナ「これは！」

セーニヤ「新しい技ですわ！」

セーニヤとマルティナは自身の足元に罾が仕掛けられた事に気づいた

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ラース「岩石落とし！」

ラースは二人に岩をぶつけた

マルティナ「キヤツ！」

二人を別々に包むように地面が盛り上がった

その瞬間、岩は爆発した

二人「キヤアア！」

カミュ「そこだ！デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ラース「イオグランデ！」

二人がいた場所に大爆発が起きる

煙が晴れると二人は倒れていた

実況者「そこまで！勝者は3番のカミュさんとラースさんペア！」

パチパチパチ！

イレブン「まさか最後で新技を出すとはね。僕も知らなかった。あれはイオとジバリア？しかも今までのとは違ってかなり凶悪だね」

カミュ「さつき思いついてよ、試してみるかと思ってやったんだ」

ラース「失敗したらそれまでだったな」

実況者「何と運までも味方にしておりました！それにしてもお二方もかなり危ない所も多かったですね。こちらも手に汗握りました。それでは次は第二試合の発表になります！」

第二試合 1番対3番 2番対4番

実況者「この対戦表となっております。次は一時間後に行われます。どうかそれまで休んでいてください」

その後

ラース「だーっ！負けるかと思った！（でも、少し幸せだったかも）」

ラースは複雑な気持ちだった

カミュ「へへ、だが勝てたな。作戦をいくつか考えておいた甲斐が

あつたな」

マルティナ「いい所までいったと思っただけで残念だったわ」

ロウ「ふおっふおっ、姫も恥を捨ててきたのう。羨ましかっ」

ラース「ああん？」

ラースはロウを睨みつける

ロウ「ほーそ、そんな怖い顔をするでない、ラース。わしは何も言っておらんぞ」

セーニャ「最初のブーメランや分断した戦い方は流石の一言に尽きますわ」

ベロニカ「本当よ。グレイグさん、私達も相当考えておかないと何かやられるわ。またシルビアさん達みたいに作戦負けはしたくないわ！」

シルビア「アタシ達もあんなに上手いくとは思ってなかったわ」

ロウ「そうじゃな。シルビアがバギで集めてくれたおかげもあるのう」

ラース「俺の戦い方を使われたか。成功した時は驚いたぞ。じいさんの相手は怖いな」

グレイグ「ベロニカ、これは闇雲に行っても勝機は無いな。少し話し合ってみようか」

マルティナ「セーニヤ、私達も考えましょう。次は勝つわよ」

セーニヤ「はい！マルティナ様！」

イレブン「皆、お疲れ様。見てる方はとっても楽しかったよ」

カミュ「やつてるこつちはそんな気にしていらねえよ。途中でらお前達の声聞こえてなかったしな」

イレブン「やつぱり誰が勝ってもおかしくないよ。僕も本気で挑まないとすぐに負けちゃうよ、これは」

ラース「悪いな、イレブン。俺達も作戦会議だ。また後でな。カミュ、次の作戦考えるぞ」

カミュ「おう、じゃあな、イレブン」

イレブン「ふふ、これはこれで面白いな」

カミュ&ラーズ対ベロニカ&グレイグ

実況者「さあ！第二試合の一回戦を始めていこうと思います！最初は1番ペア対3番ペアの戦いになります。各ペアの方はあがってきてください」

カミュ「これは関門だな。どうなる事やら」

ベロニカ「もう簡単にはやられないんだから！」

ラーズ「条件は似たもの同士だな。回復なしの火力よりだ」

グレイグ「お相手頼む」

実況者「イレブンさん、この試合はどうなると思いますか？私としてはまたラーズさん達の作戦が炸裂するのではと思うのですが」

イレブン「正直な事言うとラーズの作戦は読めないんですよ。だから考えるだけ無駄な気がします。だからその場の対応力が必要になります。そういう意味ではグレイグがかなり強いので、どうなるかと言った感じですかね」

実況者「ありがとうございます。それでは始めていきましょう！第二試合一回戦、開始です！」

カミュ「行くぜ、おっさん！会心必中！」

カミュはグレイグに猛スピードで走り出し、攻撃する

グレイグ「いきなりか!?ぐうっ！」

ラーズ「どんどん行くぞ！メラガイアー！」

ラーズもグレイグに巨大な炎の塊をぶつける

グレイグ「ふんっ！」

グレイグは斧で炎を斬った

ベロニカ「私を無視すんじゃないわよ！イオグランデー！」

ベロニカはカミュとラーズの中心に大爆発を起こした

ラーズ「カミュ！俺の後ろだ！ヒヤダルコ！」

ラーズは自身の前に氷を出した

カミュ「頼んだぜ、兄貴！」

ドオオン！パライイン！

グレイグ「会心完全ガード！」

グレイグは会心攻撃を防ぐようになった

煙が晴れると二人は無傷だった

実況者「爆発の魔法を防いだ!?あれはどうなってるんですか、イレブンさん」

イレブン「ええ!?何あれ!?ごめんなさい、僕も初めて見ました。イオを防ぐのにあんな方法があったなんて。恐らくですが、爆発の来る辺りから少し引いた場所で一点に集まり、衝撃から身を守るためのヒヤダルコですね。僕もよくわかりませんが」

カミュ「ぶんしん!」

カミュは三人に分身した

ラース「ドルモア!」

ラースはグレイグに闇の力をぶつけた

グレイグ「ハア!くっ!見えにくくもなるか!」

グレイグは斧で斬るが、斬った範囲が見えにくくなった

ベロニカ「マジックバリア!」

ベロニカとグレイグの呪文耐性が一段階上がった

グレイグ「スクルト!」

ベロニカとグレイグの守備力が一段階上がった

「カミュ「守りを固めてきたな！兄貴、作戦開始だ！」

「ラース「そうだな、カミュ！」

グレイグ「何か来るぞ、ベロニカ。あいつらの狙いは俺だ！俺から離れるんだ！」

ベロニカ「いいえ！ここはグレイグさんのそばにいくわ！離れてまた分断されたらたまらないわ！危険でも何とかするわ！」

二人「ジバルンバ！」

ゴゴゴゴ！

至る所から大地が盛り上がり、岩の柱だらけになった

グレイグ「これがどうした！壊せばいいだけの話だ！」

ベロニカ「そうね！イオグランデー！」

ドオオン！

ステージの中央にある柱はどんどん壊れていく

バラバラバラ！！

ベロニカ「!?まずいわ、グレイグさん！土煙よ！」

グレイグ「これが狙いか!?ゴホッ!満足に前も見れない!」

ステージは壊れた柱の土煙で見えなくなった

カミュ「どうだ?つらいだろ?」

ラーズ「俺達なりの第二ステージの完成ってわけだ。楽しませてもらうぜ!」

二人の声だけが聞こえてくる

ペロニカ「どこから来るかわからないわ!グレイグさん、気をつけて!」

実況者「これは凄い!やはりラーズさん達の作戦は予想できない!!岩の柱を作り出し、それを破壊させた衝撃で何も見えなくなった!!これはしばらく見えない戦いが繰り広げられそうです!」

イレブン「ジバリアの応用力って高いんだね。罫としての魔法は巧みに使ってこそ真の効果を発揮するわけだね。僕も覚えたいな」

カミュ「アサシンアタック!」

カミュはグレイグに攻撃する

グレイグ「そこか!ハア!天下無双!」

グレイグは攻撃が来た場所を攻撃するが、当たらない

カミュ「へへ、そんなんじや当たらないぜ」

ラーズ「心眼一閃！」

また別の場所からラーズが攻撃してくる

グレイグ「くっ……！やはり狙いは俺か！なら、ビッグシールド！」

グレイグは盾を持ち、ガード率を上げようとする

ラーズ「そんな隙はないぜ」

グレイグの真後ろからラーズの声があった

グレイグ「な!?!俺の後ろか！」

グレイグが振り向くと同時にラーズの手がグレイグの目の前に現れた

ラーズ「マヌーサ」

グレイグ「ぐっ……」

ベロニカ「グレイグさん!?!大丈夫!?!どこにいるの！」

カミュ「ナイスだ、兄貴！よし、もう一つの作戦開始だ！頼んだぜ、兄貴！」

ラーズ「任せろ、ベロニカはあそこだ！狙えよ、オラア！」

ラーズはカミュと足を合わせ、ベロニカの方へ蹴り飛ばした

ベロニカ「来るなら来なさい！マヒャド！」

ベロニカの周囲に氷の塊が降り注ぐ

カミュ「当たったって構わないぜ！心眼一閃！」

飛んできたカミュが攻撃する

ベロニカ「急に目の前に!?キヤアア！」

グレイグ「ベロニカ!?どうなっている!?無心こうげき！」

グレイグは幻惑がかかっており、何も見えていない

ベロニカ「くっ！でもそこにいるなら！ベギラゴン！」

ベロニカはカミュがいた場所に魔法を放つ

カミュ「おいおい、俺がそんな一点にずっといるわけないだろ」

煙が晴れていく

実況者「おおっと！見えるようになってきた!!戦況はどうなっているのか！」

ベロニカ「あれ!?グレイグさんがあんな所に！嘘！さっきまで近くにいたのに！」

ベロニカとグレイグはかなり離れている

そしてステージにはまた岩の柱が少し出来ている

実況者「これは!?また岩の柱が出来上がっています!同じ事をするのでしょうか!?そしてグレイグさんが一人離れた所に移動しております!あれは何をしているのでしょうか!?!」

イレブン「幻を見せられていますね。マヌーサにかかってしまったんだと思います。マジックバリアの上からでもかけるなんて何があったんだ。あれ?ラースは?」

ベロニカ「グレイグさんを戻さないと!」ダツ!

ベロニカはグレイグの元は走っていく

カミュ「行かせるかよ!おチビちゃん!かえん斬り!」

カミュは攻撃を仕掛ける

ベロニカ「その力借りるわ!ハア!」

ベロニカは杖で剣を防ぎ、その反動で後ろに大きく飛びグレイグに近づいていく

カミュ「チツ!」

ベロニカ「もう!グレイグさん!起きて!」ガン!

ベロニカはグレイグを杖で殴る

グレイグ「ぬ、ぬう!? な、ここは?」

ベロニカ「まずい状況よ。岩がまた復活してるし、ラーズの姿が見えないわ!」

グレイグ「くっ! さっきまでののは幻か! マヌーサにかかってしまっていたか」

カミュ「へへ、兄貴はすげえな。思い通りになるぜ。ジバルンバ!」

二人の間に小さな岩が浮いていく

ラーズ「バギクロス!」

二人の間にある岩が、風により強制的に当たる

ベロニカ「ちよつと! そんなのずるいわよ!」

グレイグ「ラーズはあそこだ! ベロニカ!」

岩の柱の一つの上にラーズがいた

ラーズ「カミュ! 決めてやれ!」

カミュ「デュアルブレイカー!」

ベロニカとグレイグにブーメランが飛んでくる

グレイグ「ベロニカ！俺に近づけ！ハア！」

グレイグは盾で防ぐ

ラース「それを待っていた！」

ラースは岩の柱から飛び降り、柱を蹴りながら高速で移動してくる

ラース「カミュ、合わせろ！」

カミュ「おう！」

二人が同時にグレイグに攻撃する

二人「心眼一閃！」

グレイグ「グアアア！」ドサ

グレイグは倒れた

ベロニカ「嘘！グレイグさん！くっ！メラガイアー！」

ラース「ハア！」

カミュ「さあ、ベロニカ。お仕置きの時間だぜ」

ラース「悪いな、ベロニカ。ばくれつきやく！」

カミュ「会心必中！」

ベロニカ「キャアアア！」ドサ

ベロニカは倒れた

実況者「勝負あり！勝者は3番ペアのカミュさんとラーズさんです！」

イレブン「まさかステージをこんなに変えてくるとは思わなかったよ。なんでこんな事したの？」

カミュ「最初はベロニカに魔法を打って欲しくないから防ぐのに使おうと思ったんだが、ラーズが逆に大量に作ればいいって言ってよ。その結果、あぁなったんだ」

ラーズ「相手に何か来ると思わせて壊させるんだ。そうすれば土煙で見えなくなる。そこからは何とか各個の撃破を狙ったんだ。もう一回作ったのは警戒させるためと、俺達の移動を素早くするのに使ったり、もしもの盾としてだな」

実況者「ラーズさんは頭がいいと聞いていましたが、これは確かにすごい。こんな作戦わからないですよ」

イレブン「イオグランデはヒヤダルコでどうやって防いだの？」

ラーズ「イオの魔法は広範囲の爆発だ。あれはかなり強力な上に避けようがないように見えるが、実は爆発の真ん中以外はそこまで大き

なダメージはない。

衝撃から身を守ればあとは何とかなるんだ。だから正面から来る衝撃から守るためにヒヤダルコを前に貼ったのさ」

カミュ「それを言われた時、俺もそんなにいいのか不安だったが
大成功だな！」

実況者「四人ともありますがどうぞございます。ゆっくり休んでください。それでは第二回戦を始めたいと思います！ですが、会場が今は柱だらけですので、急遽後片付けを致します。三十分ほどお待ち下さい」

ラース「あ、俺もやりますよ。仕掛けたのは俺ですから」

実況者「いえ、お気になさらずに。とても興奮する試合でした。私達で直しておきますので休んでいてください」

ラース「悪いな、ありがとう」

その後

カミュ「やったぜ、兄貴！二勝したぞ！優勝に近づいたな！」

シルビア「すごいわ、カミュちゃん、ラースちゃん。息もぴったり

ね」

ロウ「これは恐ろしいのう。ラーズの作戦は予想不可能じゃな」

セーニヤ「私も柱だらけになった時、これは警戒して壊した方がいいと思ったのですがそれこそが思う壺だったのですね」

ラーズ「ああ。だが、壊さなかったらそれはそれで別の使い道もあったからな。魔法も打ちにくくなるし、設置さえできれば俺達にはメリツトしかなかったんだ」

マルティナ「ステージすらも変えるなんて本当わからないわ。普通作戦って言うのは技や組み合わせの事なんじゃないの?」

イレブン「アハハ。ラーズにとって場所は関係ないって事だね」

カミュ「俺も兄貴が相手じゃなくてよかったぜ。これは兄貴の力で勝っていいけそうだな」

マルティナ「セーニヤ、私達も負けられないわ。シルビア、ロウ様手加減しませんからね」

セーニヤ「そうですね。私達も作戦通りにいきましょう」

シルビア「これはまた厳しい戦いになりそうね。ロウちゃん、サポートよろしくね」

ロウ「ああ、わし達も油断せずレース達のように二勝しよう。シルビア、頼りにしておるぞ」

セーニャ&マルティナ対シルビア&ロウ

実況者「それではお待たせいたしました！第二試合二回戦を行います！次は、2番ペア対4番ペアになります。それでは各ペアの方はあがってきてください」

ロウ「わし、こんな女性ばかりの所にいていいのかのう」

シルビア「もう！ロウちゃんったら何呑気な事言ってるのよ！シャキツとしないとあつという間にやられちゃうわ」

マルティナ「ロウ様、甘い考えは持たない方がよろしいですよ。ラースほどではないですが、私もロウ様には日頃からお伝えしたい事がありましたのでいい機会です」

セーニャ「シルビア様、ロウ様、手加減は無用です。お願いします！」

一人を除いてステージでは緊迫した雰囲気になっている

実況者「イレブンさん、この戦いはどうなると思いますか？」

イレブン「おじいちゃんもラースほどでは無いけど色々考えてくるはず。何か策があるかもしれない。でもマルティナだつてラースから作戦についてとかは教わってるはず。作戦のぶつかり合いになるかもしれないです」

実況者「なるほど、これは面白いものが見れそうですよ！それでは
二回戦開始です！」

マルティナはロウに一直線に向かった

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

ワァー！ヒューー！

また観客から歓声が上がる

ロウ「ほほ。ええのう」

ロウも満更でもない様子だ

シルビア「(ロウちゃんとマルティナちゃんだと分が悪いわ。アタシがマルティナちゃんと戦うようにすれば)ロウちゃん！そっちに行くくわ！」

シルビアがロウの方に向かおうとすると

セーニヤ「させません！バギムーチョー！」

セーニヤがロウとシルビアの間に巨大な竜巻を発生させた

シルビア「キャッ！しまった！そっちに行く隙が」

セーニヤ「シルビア様は私と戦っていただきますわ！」

セーニヤはシルビアに槍を構えた

シルビア「これは少しまずいかしら」

マルティナ達は

マルティナ「ロウ様、どうですか？ロウ様がよく読んでるバニーの姿に似せてきました」

マルティナのデビルモードのバニーは多少変わっている

ロウ「ほほ。眼福じゃのう」

マルティナ「ばくれつきやく！」

マルティナはロウに向かって容赦なく攻撃する

ロウ「タイガークロー！」

ロウも顔はニコニコしていたが、攻撃の体制はとっておりすぐに反応する

マルティナ「予想済みですよ！ヒップアタック！」

足で払い除けた後、ロウの体にお尻をぶつける

ロウ「ほ、ほほ。これはええのう」

ロウは幸せそうにしている

マルティナ「さみだれ突き！」

マルティナは隙を突いていく

ロウ「あひゃー！」

実況者「離れた場所で戦いが行われております！マルティナさんは
またも本気モードです。しかもロウさんにはどうやら効果的面！こ
れは羨ましい！しかし、油断している所にヤリや格闘技が飛んでいる
！マルティナさんが押していますね」

イレブン「ラーズはあまりいい反応しないんですけど、あれもマル
ティナの戦う強みの一つです。敵を動けなくさせて攻撃する。ふざ
けてるように見えますが、あれも立派な戦術です」

シルビア達の方では

シルビア「ほとぼしるゝ、アモゝレ！」

セーニヤ「水流の構え！ハ！」

セーニヤはシルビアの攻撃を払い除けた

シルビア「キラージャグリング！」

セーニヤ「スカラ！氷結らんげき！」

セーニヤは防御力を上げて攻撃を喰らいながら近づき、反撃した

シルビア「キャツ！かなり押してくるわね。セーニヤちゃんが攻撃的になるとこんな風になるのね。ローズタイフーン！」

シルビアもセーニヤの周りを舞いながら攻撃する

セーニヤ「ベホイム！からの悪魔の調べです！」

セーニヤは体力を回復して、その隙に豎琴に持ち替えてすぐに演奏する

シルビア「そ、そんな事できちゃうの!?!」全属性耐性が下がった

シルビアは近くにいたため、効果を受けてしまう

セーニヤ「氷結らんげき！」

またすぐに槍に持ち直し、攻撃する

シルビア「バイキルト！」

シルビアの攻撃力が二段階上がった

セーニヤ「なら近づかせません！バギムーチョ！」

セーニヤとシルビアの間に巨大な竜巻が発生する

シルビア「くうっ！」

マルティナ達は

マルティナ「ピンクハリケーン！」

マルティナのお色気の力を爆発させた

ロウ「アヒヤー！べ、ベホマじや！」

ロウの体力が全回復した

マルティナ「雷光一閃突き！」

マルティナは雷を纏った一閃で隙を狙う

ロウ「ゴールドフィンガーじや！」

ロウはギリギリでかわし、反撃する

マルティナ「キヤツ！」マルティナのよい効果が消えた

マルティナの姿が元に戻り、上昇効果も消えた

ロウ「マヒヤデドス！」

マルティナとセーニヤの頭上に巨大な氷の塊が降り注ぐ

マルティナ「なぎはらい！セーニヤ、そっちにもいったわ！」

マルティナは自身に来る氷だけを砕く

セーニヤ「お任せください！バギクロス！」

セーニヤは上に竜巻を作り、氷から身を守る

ロウ「ドルマドン！」

マルティナ「ここね！一閃突き！」

マルティナは僅かに後ろに下がり魔法を避けると、そこからロウに向かって狙い澄ました一撃を当てる

ロウ「ぬう！魔法越しに当ててくるかの」

マルティナ「ヒップアタック！」

マルティナはお尻で攻撃する

ロウ「む、むう」

ロウも体力が減って、厳しい表情になっている

実況者「両者、激しくぶつかり合っております！先ほどから奇抜な作戦が多く見られたので、純粹な力比べというのはこの大会で初めてですね！」

イレブン「本来コロシムではこれが正しいんだよね」

イレブンは少し苦笑いしている

シルビア達は

シルビア「ゴールドシャワー！」

セーニヤ「負けませんわ！」ゾーンにはいった　みのまもり　呪文の回復力　暴走率があがった

マルティナ達は

ロウ「ドルマドン！」

マルティナ「くっ！ハアアア！」ゾーンにはいった　素早さ　魅力
会心率があがった

マルティナ「セーニヤ！一気に行くわよ！」

マルティナとセーニヤは合流した

セーニヤ「お任せください！バキクロス！」

た　バキクロスの中にマルティナが入り、風の力を纏い蹴りを繰り出した

二人「竜巻旋風脚！」

シルビア「キヤアアア！」

ロウ「ぬおおお！」

シルビアとロウを中心に竜巻がマルティナの蹴りの威力と合わせ
さって荒れ狂う

実況者「これは凄いいれんけいだ！息もあっております！」

イレブン「嘘。あれってラースとマルティナのれんけいなのに。バキクロスが出来れば、ラースじゃなくてもできたんだ」

イレブンは呆然としている

シルビア「ミラクルソード！」

セーニャ「天地の構え！ハア！」

セーニャは槍で受け流し、カウンターを繰り出した

シルビア「わかってるわよ！ハア！」

シルビアはカウンターを跳ね返した

セーニャ「カウンターが効かない!？」

シルビア「どんどん行くわ！ミラクルソード！」

セーニャ「キャツ！」

ロウ「ライガークラッシュ！」

マルティナ「ばくれつきやく！からのセクシービーム！ばつきゅーん！なんてね」

マルティナは爪の攻撃を足で防いだ後、すぐにハートのピストルをぶつける

ロウ「こりやたまらん」ロウは魅了された

ロウは魅了され、動けなくなった

マルティナ「決めるわ！デビルモード！ばくれつきやく！」

マルティナの全能力が一段階上がった

ロウ「アヒヤー！」ドサ

ロウは倒れた

シルビア「ああ！ロウちゃん！」

セーニヤ「ハア、ハア。さみだれ突き！」

シルビア「危ないわ！セーニヤちゃん、ごめんなさい。アモ〜レ！」

シルビアの攻撃を避けきれず喰らってしまう

セーニヤ「キヤアア！」ドサ

セーニヤは倒れた

マルティナ「セーニヤ！」

実況者「ここで両者の片割れがダウン！残りはマルティナさんとシルビアさんだ！どうなるのか!？」

シルビア「やつぱりロウちゃんとマルティナちゃんをぶつけるべきではなかったわね。アタシもセーニャちゃんに苦戦させられたわ」

マルティナ「セーニャがかなり削ってくれたはず。なら、私は負けないわ！氷結らんげき！」

シルビア「タツプダンス！」

シルビアの回避率が二段階上がった

マルティナ「それなら！ばくれつきやく！」

シルビア「一撃が強いわね。厄介だわ。極竜打ち！」

シルビアは避けていくが、二発ほど当たってしまった

マルティナ「しんくうげり！」

シルビア「クイーンウィップ！」

マルティナ「ここよ！雷光一閃突き！」

マルティナはムチの攻撃を喰らうが、攻撃をやめなかった

シルビア「そんな!? 躲さないなんて！キヤアア！」ドサ

シルビアは倒れた

実況者「勝負ありです！勝者は2番のセーニャさん&マルティナさんペアです！」

パチパチパチ！

イレブン「マルティナ、お疲れ様。最後大分無茶してなかった？」

マルティナ「あ、バレちゃったかしら。シルビアは隙が少ないから、攻撃を喰らってでも大きな一撃を当てないと勝てないと思ったの」

実況者「それでは次は最終戦になります！ここで仲間内最強ペアは誰なのかがはつきりいたします！それでは次の試合まで一時間ほど休んでください」

その後

控え部屋に戻つてくると、ラースが腕を組んで待っていた

ラース「マルティナ？ちよつと話があるんだが」

マルティナ「あら、流石に怒っちゃうかしら」

ラース「ああ、デビルモードは……百歩、いや二百歩譲って認める。だが、最後の無茶な戦い方はやめてくれ。傷を簡単に作っていい体じゃなくなっただぞ」

グレイグ「そうですぞ、姫様！ラース、偶にはいい事を言うではないか！」ガン！

「グレイグは脇腹を殴られる

グレイグ「ぐふっ！」

ラーズ「一言余計だ。なあ、マルティナ。さつきはすつごくヒヤヒヤしたんだ。次からはしないと約束してくれ。頼む」

マルティナ「そうね。わかったわ。私も心配かけたいわけじゃないもの。次からはもっと安全に攻めていくわ」

ラーズ「ぜひそうしてくれ。あ、あとそのエロじいには個別で話さなきゃ行けないから外に連れてくくな？来るなよ？」

ラーズはまだ気絶しているロウを引きずって出ていった

カミュ「(じいさんのやつ、死んだんじゃないか?)」

ベロニカ「あれはかなり怒ってるわね。さつきもイライラしてたもの」

イレブン「おじいちゃん、どうか生きて帰ってきて」

グレイグ「(余計な事を言わなくて本当によかった)」

セーニヤ「次はお姉様とですね！私、頑張りますね！」

ベロニカ「妹には遅れを取らないわ！」

グレイグ「俺は姫様と戦うのか……。何とやりづらい」

グレイグは相当苦しそうな顔をしている

マルティナ「あら、ダメよグレイグ。そしたらベロニカがかわいそうだわ。本気で来て。これは命令よ？」

グレイグ「…………… 姫様の命令とあらば」

グレイグは顔を歪めながらも渋々了承する

カミュ「俺達もここまできたら全勝目指さないとな！」

イレブン「皆、誰が来るかまだわからないけど待ってるからね！」

ベロニカ&グレイグ対セーニャ&マルティナ

実況者「それでは最終戦となります！一回戦目は1番ペア対2番ペアです！各ペアはあがってきてください」

ベロニカ「グレイグさん、私達はここで何としても勝たないとまずいわ」

グレイグ「そうだな。やりにくい事この上ない相手だが、負けるわけにはいかない！」

セーニャ「お姉様！私、本気でいかせていただきます！」

マルティナ「グレイグ、手を抜いたら許さないわよ」

実況者「イレブンさん、この試合はどうなると思いますか？」

イレブン「ベロニカとセーニャの二人の姉妹が戦うというのは、僕達全員見るのは初めてなんです。正反対の二人がどうやって戦うのか興味はすごくあります。」

グレイグとマルティナも、マルティナが姫であるからグレイグは本気を出せないんです。でも、どうやら本気を出さざるを得ないようです。どっちも気になるな」

実況者「これはまた見所が多そうな試合です！楽しみにしてましょ
う！それでは最終戦、一試合目開始です！」

ベロニカ「イオグランデ！」

ベロニカはいきなり二人に大爆発を起こした

二人「くっ！」

マルティナ「いきなり来るわね！デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

ワァー！ヒューー！

またも観客から歓声が上がった

セーニヤ「お姉様！ご覚悟を！雷光一閃突き！」

セーニヤはベロニカに一気に距離を詰めて攻撃してくる

ベロニカ「セーニヤがいきなり攻めてくるなんて!？」

ベロニカは後ろに避けるが、流石に驚きを隠せない

グレイグ「通さんぞ、セーニヤ！ビッググシールド！」

セーニヤの前にグレイグが立ちはだかる

グレイグの盾ガード率が上がった

マルティナ「グレイグの相手は私よ！ミラクルムーン！」

マルティナはグレイグに向かっていく

グレイグ「やはり来ますか、姫様！ならば私も腹を括りましょう！
無心こうげき！」

グレイグはまた苦しい表情をするが、覚悟を決めて攻撃に移る

マルティナ「そうよ！来なさい！セーニヤ、ベロニカのもとへ！」

マルティナもそれに安心する

ベロニカ「来させないわよ、セーニヤ！いくらあんたでもこれは大事な勝負なんだから！メラガイアー！」

ベロニカはセーニヤを近づかせないように魔法を打っていく

セーニヤ「負けませんわ、お姉様！水流の構え！」

炎の塊を槍で受け流した

ベロニカ「どれだけ持つかしら？ギラグレイド！」

セーニヤの中心を炎が包み込む

セーニヤ「炎の旋律です！」

セーニヤの炎耐性が上がり、セーニヤはそこまでダメージが入っていないようだ

マルティナ「氷結らんげき！」

グレイグ「姫様、知らない間にまた腕を上げましたね。ですが、ただですぞ！天下無双！」

グレイグは槍での攻撃を斧で払い除ける

マルティナ「ばくれつきやく！からのサマーソルト！」

マルティナは足で攻撃しながら、次の攻撃に即座に移り変わる

グレイグ「その動きはラースで慣れています！私には効きませんよ！オノ無双！」

グレイグは斧を回しながら突進してくる

マルティナ「ここね！」

マルティナは斧を足場にしてグレイグを飛び越した

グレイグ「な!？」

マルティナ「セクシービーム！受け取って！」

マルティナは空中でグレイグに向かって、ハートを打ち出した

ヒューー！

観客からまた歓声上がる

グレイグ「ぐっ、しまった」グレイグは魅了された

グレイグは動けなくなった

マルティナ「セーニャ！援護にいくわ！」

マルティナはセーニャに向かっていく

セーニャ「さみだれ突き！」

ベロニカ「かなり接近戦ね。それなら極竜打ち！」

ベロニカは杖からムチに持ち替え、槍を防いだ

セーニャ「天地の構え！ハア！」

セーニャは槍でカウンターをする

ベロニカ「キヤツ！」

マルティナ「ばくれつきやく！」

マルティナがベロニカの横から攻撃をしかける

ベロニカ「キヤアア！マルティナさん、いつの間に！」

ベロニカはかなり飛ばされる

セーニャ「ありがとうございます、マルティナ様！バギムーチョ！」

ベロニカを中心に巨大な竜巻が発生する

ベロニカ「風は一見対処できないと思うけど、こんなものもあるのよ！メラガイアー！」

ベロニカは地面に巨大な炎の塊をぶつけた

シユッ

竜巻は消え去った

セーニヤ「あ、あら？風が無くなった？」

実況者「ん？どういう事でしょうか？バギムーチョが発動したと思っただですが」

イレブン「え？僕もよくわからないな。何が起こったんだろう」

ラース「なるほど。流石ベロニカだな」

イレブンの横にはラースがやってきていた

イレブン「え!?ラース!こんな所で何してんの!」

ラース「ん?いや、グレイグが何やら俺の妻にメロメロになってるそうじゃないか。これは後で制裁が必要だと思ってるな。」

まあそれは置いて、さっきのベロニカのやつはバギムーチョに

メラガイアーを打って、風を暖かい風に変えたんだ。そうする事で激しかった冷たい風もゆつくりとした穏やかな風になる。よく考えられてるよ」

イレブン「なるほど、そんな事もできるのか。皆よくそんな方法思いつくよね。賢くてついてけないや」

実況者「私もこんな高度な頭脳戦がいとたやすく行われてる事に驚きを隠せませんよ」

グレイグ「はっ！何やら殺気が。くっ、姫様ご覚悟を！渾身斬り！」

グレイグは殺気を感じ、魅了が解除された

グレイグはすぐにマルティナに向かっていく

マルティナ「大剣に切り替えてきたのね。少しまずいわね」

マルティナは大剣に少し冷や汗を流す

グレイグ「逃げ場はございませんよ！アイスブレード！」

マルティナ「しんくうげり！キヤア！」

マルティナは大剣を足で防ごうとするが、力に押し負ける

グレイグ「下手に向かい打つのはおやめください。いくら姫様でも怪我しますぞ！全身全霊斬り！」

マルティナ「くっ！これはどうしたらいいかしらね」

マルティナは攻撃を避け始め、少し苦しい表情になっている

ベロニカ達は

ベロニカ「メラゾーマ！」

セーニヤ「なぎはらい！悪魔の調べ！」

セーニヤは炎を斬った後、豎琴に持ち替えた

ベロニカ「効かないわよ！メラガイアー！」

ベロニカもわかっていたようで、耳を塞ぎながら詠唱をしていた

セーニヤ「キャツ！」

ベロニカ「疾風迅雷！」

ベロニカは隙を突いてムチで攻撃する

セーニヤ「天地の構え！ハア！」

セーニヤは槍でカウンターをする

ベロニカ「くっ！それ厄介ね！」

ベロニカはカウンターに苦戦していた

マルティナ達は

グレイグ「姫様！避けてばかりでは勝てませんぞ！アイスブレード
！」

マルティナ「(ラースならどうするかしら) ピンクタイフーン！」

マルティナは避けながら勝つ方法を考えていた

グレイグ「くっ！ですが捉えました！全身全霊斬り！」

グレイグの重たい一撃がマルティナに直撃する

マルティナ「キャアア！」

ブー！ブー！

実況者「これはマルティナさんが押されています！なんとも悲痛な
叫び！これは観客もたまらずブーイング！ですが、これは真剣勝負！
気持ちはわかりますがどうかおやめください！水をさしてはいけま
せんよ！」

観客達を宥めていく

イレブン「ベロニカとセーニヤの方は互角って感じだね。どっちが
倒れてもおかしくないと思う。回復がない分ベロニカが先かもしれない」

セーニヤ「氷結らんげき！」

ベロニカ「キヤア！ハアアア！」ゾーンに入った　みのまもり　呪文の威力　暴走率があがった

ベロニカ「グレイグさん、下がって！セーニヤ！マルティナさん！容赦しないわよ！特大の一撃をお見舞いしてあげるわ！ハア！」

ベロニカのペンダントが光り、大人の姿に戻った

ヒューー！

子どもだった姿から大人の姿になったベロニカに観客から歓声と驚きの声があがる

セーニヤ「まさか！」

グレイグ「これはまずいかもしれんな」

グレイグは急いでベロニカの方へいく

ベロニカ「炎の力と氷の力を合わせて！行くわよ！メドロア！！」

二人を中心に炎と氷の大爆発が起きる

二人「キヤアアア！」

実況者「うおお！凄まじい一撃だ！」

イレブン「嘘……。あれ、僕とのれんけい技なんだけど。まさか大人に戻ると一人でできちゃうの？」

イレブンはまたも呆然としている

煙が晴れると二人は倒れていた

実況者「ああつと！ここで決着！勝者はベロニカさんとグレイグさんペアだ！」

パチパチパチ！

ベロニカ「やってやったわ！」

ベロニカはガッツポーズを取っている

グレイグ「なんて恐ろしい技だ。こんなのひとたまりもあるまい」

イレブン「ベロニカ、まさか一人でできたの？」

ベロニカ「この数ヶ月の成果よ！大魔法使いベロニカ様にできない事なんてないんだから！」

ベロニカは胸を張っている

実況者「それでは第二試合の方に移りたいと思います！次は3番ペア対4番ペアです！三十分後に始めます！準備の方よろしくお願ひします！」

その後

シルビア「カッコよかったわ、ベロニカちゃん！」

ベロニカ「えへへ、ありがとうシルビアさん」

カミュ「えへへとか可愛い感じ出してっけど、えげつない事したぞこいつ」

ラース「ベロニカ、あれ生きてるのか？」

ラースとカミュは少し冷や汗をかいている

ベロニカ「失礼ね！ちゃんとそこは考えてるわよ！相手は魔物じゃないんだから！」

グレイグ「隣で見ていた俺も肝を冷やしたぞ。あんなの食らったら俺でも倒される自信がある。魔法は恐ろしいな」

イレブン「あれ？おじいちゃんは？」

ラース「外で作戦でも考えてるんじゃないか？」

カミュ「（お前が犯人だろうか！）」

グレイグ「……………ハア、俺が見てこよう」

ラース「そうだ、グレイグ。お前もさつきマルティナにメロメロになつてなかつたか？」

ラースはグレイグを睨みつけると同時に殺気をぶつけた

グレイグ「な!?何をいう、ラース!!俺は決してそんな事は」

グレイグは焦り始める

カミュ「兄貴、それ以上はやめてやれ。おっさんは不可抗力だ。許してやれよ」

ラース「次はないからな。意地でも耐えてみせろ」

グレイグ「は!必ずや!」

グレイグは誓いのポーズを取る

ラース「じいさんの蘇生は頼んだぞ」

グレイグ「承った」

カミュ「もはや立場逆転してるじゃねえか」

イレブン「え？蘇生？」

シルビア「イレブンちゃん、どうしたの？ラースちゃんはそんな事言っていないわ。アタシ達の応援頼むわね、イレブンちゃん」

カミュ「おいおい、イレブンは俺の相棒だ。相棒を応援しないなんて事はないだろ？」

イレブン「僕は全員応援してるよ。皆に勝って欲しいから」

ラース「ハハハ、流石イレブンだな」

カミュ&ラース対シルビア&ロウ

実況者「それでは最終戦の第二試合を行います！最後は3番ペア対4番ペアとなります！各ペアの方は上にあがってきてください」

ラース「ここで勝てば全勝だ。油断するなよ」

カミュ「当たり前だろ、兄貴。何かあったら指示頼むぜ」

シルビア「簡単にはやられないわよ！」

ロウ「ほほ。間に合ってよかったわい」

実況者「イレブンさん、この最後の試合はどうなると思いますか？」

イレブン「ラース達には全勝がかかっていますからね。本気で勝ちを取りに来ると思います。おじいちゃん側に作戦が無いと負けてしまいかもしれないです。おじいちゃんに限ってそんな事無いと思うけど」

実況者「それでは最終戦、開始です！」

ラース「カミュ！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

シルビア「ピオリムよ！」

シルビアとロウの素早さが一段階上がった

ロウ「（これは普通に攻めてくるかの）グランドクロス！」

カミュとラースを中心に十字の攻撃が飛んでくる

カミュ「危ねえ！」

ラース「ストームフォース！」

カミュとラースは避けた後、風の力を纏った

実況者「フォース？一戦目も使っていましたけどフォースとは何なんですか？」

イレブン「フォースっていうのはラースだけが使える奥義で、仲間達に各属性の力を与えるんです。それを使って全ての敵に弱点を突く事ができるんですよ」

実況者「ほお。そんな技があつたんですね。しかし、相手は人間です。何か意味があるんでしょうか？」

イレブン「確かに。今度は何する気なんだろ」

カミュ「よし、行くぜ！」ダツ！

シルビア「な、なに!？」

ロウ「何をしておるんじや？」

カミュはぶんしんと共にシルビア達の周りを大きく回り始めた

ロウ「よくわからんが意味があるのだろう。なら、妨害させてもらうまで。マヒヤデドス！」

自身達とカミュを中心に巨大な氷の塊が降り注ぐ

ラーズ「待ってたぜ、じいさん！デュアルブレイカー！」

ラーズはどんどん氷を砕いていく

シルビア「ロウちゃん！無闇に何かしない方がいいわ！特に魔法は影響が大きい。今までもそうだったし、控えていきましよう！」

ロウ「むう。そうじゃな。下手な事はするべきではない」

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ロウ「ゴツドスマツシュ！」

シルビア「クイーンウィップ！キヤア！」

ロウとシルビアは対応するが、シルビアが捌き切れずに当たってしま
う

ラース「マヒャド！」

ラースは地面に手を置くと、ロウとシルビアの地面から氷の塊が出
てきた

ロウ「何と！地面からマヒャドをしてくるか!?!その方向からは難度
が高いというのに」

シルビア「キヤアア！」

二人は避けきれずに当たってしまう

ロウ「グランドクロス！」

ロウはラースに反撃する

ラース「ジバルンバ！」

ラースはどんどん当たりながらも、魔法を出した

カミュ「俺も行くぜ！ジバルンバ！」

辺りの地面が一部盛り上がる

実況者「これは……何が起こっているのでしょうか？」

イレブン「うーん。何してるんだろう。ラース達は何か狙っているはずなんだけど全く予想ができない。この地面も前までとは違って、分断とかしたいわけではないみたいだし」

ラース「マヒヤド！」

シルビアとロウの頭上から氷の塊が降り注ぐ

シルビア「飛んで避けるわ！ローズタイフーン！」

シルビアは舞いながら飛んで逃げようとする

カミュ「逃さないぜ、おっさん！デュアルブレイカー！」

カミュはシルビアを狙って攻撃する

シルビア「かえん斬り！」

シルビアは剣でブーメランを叩き落とした

ロウ「ぬうっ！これなら使ってもいいじやろう。ドルマドン！」

ロウは氷に当たるも、ラースに闇の力をぶつけた

ラース「心眼一閃！」

ラースは避けながら攻撃する

ロウ「危ないのう」

ロウは軽い身のこなしで避けていく

ラース「マヒヤド！」

ロウの頭上から氷の塊が降り注ぐ

ロウ「……………ん？…何じゃ？」

ロウは避けながら違和感を覚える

カミュ「シルビア！逃げんじゃねえぞ！」パシ！

カミュはシルビアの手を掴んだ

シルビア「キャツ！掴まれた！」

カミュ「じいさんの元に戻りな！」

カミュはロウの元までシルビアを投げた

シルビア「キャアア！」

ロウ「シルビア！何やらここの様子がおかしい。あまり来てしまつてはならん！」

しかし、シルビアはロウの近くまで投げられてしまった

ラーズ「さあ、弟よ！見せてやろうぜ！ストームフォース！」

カミュとラーズにまた風の力が纏った

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

実況者「ラーズさん達が何かを決めようとしています！私達にはわからない何かが起こっているのでしょうか!?……ん？風？」

イレブン「あれ？おじいちゃん達の周りに風が吹いてる」

イレブン達からはロウ達の周りを風が回っているように見える

ロウ「こー！これは、まさか竜巻!？」

シルビア「え!?何これ！風が周りを囲んでるわ!!」

シルビアとロウも自分達の周りが大きな風で囲まれている事に気付く

ラーズ「気づいた時には手遅れだぜ！暴風には気を付けろよ!!」

カミュ「そういうこった！耐えてみるよ！デュアルブレイカー！」

風を纏った三本のブーメランが竜巻をさらに大きくさせていく

シルビア「どうしましょう!?もう出られない!」

シルビアとロウの周りには周りが見えないほどの竜巻となつていく

ラーズ「さあ、飛んでいけ!バギクロス!」

そこにラーズが更に魔法で竜巻を発生させた

二人「ああああ!!」

二人は上空へと飛ばされる

ビュオオオオ!!!

コロシウム全体にも強い風が吹き荒れる

実況者「なあああ!!す、凄い風です!皆様、飛ばされてないでしょうか!」

イレブン「普通のバギクロスじゃこんな大きな物は無理だ!自然の竜巻の力をさらに増幅させたのか!」

風が止むと、シルビア達はいなくなっていた

カミュ「終わりだな」

ラーズ「あーあ、どこか飛んでいったか？少しまずかったか」

実況者「え、えー。し、勝者はカミュさんとラーズさんペア！」

ロウ「まだじゃぞ！グランドクロス！」

カミュとラーズに空から十字の攻撃が降ってきた

二人「!？」

ロウがシルビアを抱え、空から降ってきた

カミュ「な!?!どうやって戻ってきたやがった！」

ロウ「空に打ち上げられた後、グランドクロスを空に打ちその反動で戻ってきたんじゃないや。シルビアは気絶してしまっただが、わしはまだ動けるぞい！ハアアア！」ゾーンにはいった 呪文の威力 回復力 暴走率があがった

ロウ「マヒヤデドス！」

カミュとラーズの頭上に巨大な氷の塊が降り注ぐ

ラーズ「相変わらず化け物みたいなじいさんだな!!メラガイアー！」

ラーズは頭上の氷を溶かす

ロウ「行くぞい、レース！ハア、ホアア！」

ロウはレースに蹴りを繰り返していく

レース「じいさんも武闘家だったもんな！負けねえからな！カミュ！わかってるな！」

レースは腕で防いでいく

カミュ「ああ！もちろんだぜ、兄貴！」

ロウ「させんわい！ドルマドン！」

ロウはレースに向いたまま、カミュに闇の力をぶつけた

カミュ「グアア！」

レース「チツ！俺に集中してもらわないと困るぜ！ばくれつきやく！」

ロウ「ゴツドスマツシュ！」

ロウはレースの足毎爪で切り裂こうとする

レース「やべ！足引っ込めねえと持ってかれる！」

ロウ「マヒヤデス！」

レースの頭上に巨大な氷の塊が降り注ぐ

レース「メラガイアー！」

レースは炎の塊をぶつけ、すぐに溶かした

ロウ「グランドクロス！カミュが近くからいなくなったか」

ロウは攻撃で距離を取った後、周りを確かめる

レース「くっ！ミラクルソード！」

レースはロウに剣で攻撃する

ロウ「タイガークロー！」

ロウは爪で防ぐ

レース「岩石落とし！」

ロウの前に岩を置いた

ロウ「ゴールドフィンガー！」

ロウは爪で岩を砕いた

レース「それを砕くのを待っていたぜ！心眼一閃！」

レースは岩に隠れて、攻撃の機会を伺っていた

ロウ「ぬうう！」

カミュ「こんなんでいいだろ！ジバルンバ！」

ステージには岩の柱が出来上がっていく

実況者「おおつと！ここでまたあの岩の柱が登場だ！」

ロウ「その作戦は効かんぞい！」

レース「それはどうかな？じいさん」

カミュ「辺りには気を付けろよ？デュアルブレイカー！」

レース「シャインスコール！」

二つのブーメランが柱の隙間を縫うように飛んでくる

ロウ「なるほど。これは目視では避けられん！」

ロウは必死に避けるが、当たっていく

レース「そこか！」

レースは岩の間を蹴り、高速で移動していく

ロウ「!？」

ロウの前に突然レースが現れる

レース「せいけんづき！」

ロウ「ぐううっ！」

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ロウ「ドルマドン！」

カミュ「当たらねえぜ。デュアルブレイカー！」

カミュは避けた後、三人の分身で一斉攻撃した

ロウ「アツヒャー！」ドサ

ロウは倒れた

実況者「勝負ありです！今度こそ勝者はカミュさんとラーズさんペアです！」

パチパチパチ！

イレブン「あんな竜巻なんてどうやって発生させたの？」

カミュ「兄貴、説明頼んだ」

ラーズ「はいはい。まず、風が吹くつていうのは気温の差によってできるものなんだ。冷えてる方から風が吹くんだ。だから俺はマヒヤドで辺りを冷やしてたんだ。風が外側に吹くようにな。

そこに、ストームフォースの力で風を纏ったブーメランで風の大ま

かな回る流れを作り出す。次に、ジバリアで一部を塞ぎ風の方向をコントロールする。そうすると、風はステージの周りで自然に回り始め竜巻となる。わかったか？」

イレブン「わかんない！」

実況者「私もよくわからなかったです」

ラース「ま、まあ竜巻は勝手にできたわけじゃないってわかればいいさ」

カミュ「兄貴、説明下手なんじゃないか？」

ラース「うるせえ!!」

実況者「それではこの後結果発表の方に移ります。シルビアさん達を回復させますので、少々お待ち下さい」

その後

ラース「やったぜ！全勝！」

カミュ「後はイレブンだけだな！」

カミュとラースはハイタッチしている

イレブン「どうしよう。個人的にはあまり来てほしくなかった二人だよ。負けると思う」

セーニャ「ラース様、カミュ様、お疲れ様でした。自然の竜巻なんて私、初めて見ましたわ」

マルティナ「ラース、天気を操るの好きなの？」

ラース「まあ、戦法として好きだな。相手を驚かせられるし、動揺でミスも誘えるからな」

グレイグ「恐ろしいやつだな。自然を味方にしてくるなど普通ありえない」

ベロニカ「あんなの気づきようが無いじゃない」

ラース「意外と対策は多いぞ。しっかり考えれば天候なんて俺達だけのものじゃないからな。上手く使えば俺達に大きな被害を出させる事もできる」

ベロニカ「それが難しいって言ってんのよ」

イレブン「もしかして僕の時も何か考えてるの？」

ラース「そりやあ教えられないな？」

ラースはニヤニヤしている

イレブン「嫌だー！絶対何かあるじゃん！皆の前で恥かきたくない」

案内人「皆様、準備の方整いましたのでお願いします」

ラース「ほら、行くぞイレブン」

レース対イレブン

実況者「それでは皆様、結果発表の方に移りたいと思います！」

ワァー！

実況者「とは言っても一位はどのペアかもうわかりますね。結果はこのようになりました！」

一位 3番 カミュさん&レースさんペア 3勝0敗

二位 1番 ベロニカさん&グレイグさんペア 1勝2敗

二位 2番 セーニャさん&マルティナさんペア 1勝2敗

二位 4番 シルビアさん&ロウさんペア 1勝2敗

実況者「二位以外は何と、全員同じ結果となりました！」

イレブン「やっぱり実力自体はそこまで大きな差は無いのかもしれないね。皆、凄く強いし。大事なのはチームワークもそうだけど、そこは僕達全員問題無い自信があるから、やっぱり作戦だよね」

実況者「レースさんの作戦はどれも奇抜で予想が出来ませんでしたからね。それでは皆様にあがって来ていただきましょう！お願いします！」

八人全員あがってくる

実況者「皆様、大変お疲れ様でした。そして、一位のカミュさん、ラースさんは仲間内での最強タッグとなりました！おめでとうございます！」

パチパチパチ！

全員から拍手を贈られる

ラース「何だか恥ずかしくなるな」

実況者「他の方々も激しい戦いを本当にありがとうございました！」

パチパチパチ！

また全員から拍手を贈られる

ベロニカ「えへへ、照れるわね」

実況者「この後はイレブンさんと一対一で戦ってもらいます！よろしいですか？」

カミュ「当たり前前だぜ。俺は最初の時待ってるよな、とイレブンに言った。宣言通りに来たわけだ。イレブンもわかってただろ？」

イレブン「うん。まあ、カミュなら来ると思ってた」

実況者「それでは最初はどちらから始めますか？」

ラース「カミュ、相棒対決は大トリの役目だ。俺が最初に行こう」

カミュ「わかったぜ、兄貴。イレブン、兄貴は強いけど負けんなよな」

イレブン「自信ないよ、カミュ。負けたらごめんなさい」

実況者「それでは早速、ラースさん対勇者様の試合を始めていこうと思います。他のお仲間さん達は私と一緒に実況をお願いしてもよろしいですか？何が起こったかを好きに言うだけでいいので」

全員「はい」

実況者「それではまず、この試合はどうなりますかね？」

ペロニカ「イレブンには何としても勝ってほしいけど相手が……
ねえ」

セーニヤ「私達も想像がつきませんね」

マルティナ「どっちも応援したい…… どうしましょう」

グレイグ「姫様、恐らくイレブンを応援し続けると、後でラーズのやつが拗ねますぞ」

マルティナ「そ、そうね。私はラーズを応援するわ。ごめんなさい、イレブン。でも頑張つて」

イレブン「ラーズと一対一なんて初めてだよ。初めて戦った時は一対四だったよね」

ラーズ「ガラツシユの村での事か。そうだな、あれがイレブンと初めて本気で剣を交えた勝負だったな。あれが最初で最後だと思つていたが、こんな機会を与えてくれるとはいいいいものだな」

イレブン「お互いいろいろあつて強くなつたから、あの時とは全く違くなりそうだね。僕、本気で勝ちにいくからね！」

ラーズ「当たり前だ。イレブンとはまた本気で戦いたかつたんだ。作戦なんて無しの実力でな！」

二人は構える

実況者「それではエキストラマッチ、開始です！」

ラーズ「ライトフォース！」

ラーズは雷の力を纏った

イレブン「剣の舞！」

ラーズ「ばくれつきやく！」

剣と足が交互にぶつかり合う

イレブン「借りるよ、その力！ハア！ギガスラッシュ！」

足を滑るように剣が動いていき、そのまま攻撃に移った

ラーズ「意味ないな、メラガイアー！」

イレブンに巨大な炎の塊が飛んでいく

イレブン「剣の舞！」

イレブンは炎を斬っていく

実況者「これが勇者様の力！雷の力を巧みに操っております！」

ロウ「ギガスラッシュ、ギガブレイクなど、イレブンは勇者の力で
わしらとは全く違う強さを持っておる」

シルビア「単体に一番ダメージが出せるのは、イレブンちゃんか
ラーズちゃんがトップよね？」

カミュ「イレブンは剣技もそうだが呪文も使いこなせる。回復、攻撃どっちもな。本当、勇者って万能だよな」

イレブン「剣の舞！」

ラーズ「マヒャド！」

イレブンの頭上に氷の塊が降り注ぐ

イレブン「アルテマソード！」

イレブンはラーズに向かって突撃してきた

ラーズ「それはまずいな！ビッグシールド！」

ラーズの盾ガード率が上がった

イレブン「ギガブレイク！」

ラーズ「その技は終わりに隙ができるもん！待ってたぜ！」ガシ
！

ラーズは攻撃を気にせず向かってきて、剣を素手で掴んだ

イレブン「え！剣を掴んだ！どうやって!？」

ラーズ「しんくうげり！」

ラーズはイレブンの体に蹴りを入れ、剣から手を離させた

イレブン「うわああ！」

イレブンは飛ばされ、剣を落としてしまった

イレブン「あ！勇者の剣が！」

ラーズ「さあ、お楽しみの始まりだな」

実況者「何と！ラーズさんがイレブンさんの剣を素手で掴んだ！しかも怪我をしていない！どう言う事だ！」

マルティナ「ラーズの方が無茶するじゃない。あれってライトフォースによる力でゴリ押ししただけだわ」

グレイグ「なるほど。雷の力をラーズも手に纏い、傷を最小限にしたという事ですか」

ベロニカ「でも、イレブン最大の火力が無くなったわ。取りに戻るか、呪文で攻撃していかないと」

イレブン「くっ！だったら、ギガデイン！」

ラーズに突然巨大な雷が落ちる

ラーズ「マジックバリア!ぐっ…流石につらいか」

ラーズの呪文耐性が上がった

イレブン「メラゾーマ!」

ラーズ「岩石落とし!ばくれつきやく!」

ラーズは落とした岩で炎を防いだ後、砕いてイレブンにぶつけていく

イレブン「痛たた!何その原始的な方法!?あれ?ラーズは?」

イレブンが目を離れた隙にラーズはいなくなっていた

カミュ「馬鹿!イレブン!上だぞ!」

ラーズ「イオグランデ!」

イレブンを中心に大爆発がおきる

イレブン「うわあああ!くっ!ベホマズン!」

イレブンは全回復した

実況者「勇者様が剣を取られてからラーズさんに押されております!やはりラーズさんは強いですね」

ラース「せいけんづき！」

イレブン「くっ！あ、あそこに剣が！」ダツ！

イレブンは視界に剣があるのを見て取りに行く

ラース「へっ……」

ゴゴゴゴ

イレブンの周囲の地面が盛り上がった

イレブン「よし！取り戻した！ってあれ？何これ！」

イレブンには何も見えなくなっていた

実況者「おや？イレブンさんが剣を取り戻してから様子がおかしいです。キョロキョロしております」

カミュ「兄貴のやつ、やりやがったな」

マルティナ「あれはマヌーサね。しかも、ジバリアと一緒に出てたわ。罠として設置してあったのね」

イレブン「もしかして…… 剣よ！悪を払え！」

剣は光り、悪い効果を払った

イレブンのマヌーサは解けた

ラーズ「な!?!忘れてた!そんな事もできたんだったな!」

イレブン「やっぱりマヌーサだった!アルテマソード!」

ラーズ「ぐうつ!それ強いな!ドルモーア!」

ラーズは攻撃に直撃する

イレブン「ギガスラッシュ!」

イレブンは闇魔法を切り裂いた

ラーズ「やべ、闇魔法なんて使っても意味ねえや。なら、イオグラ
ンデー!」

イレブン「ラーズから教わったもの!ハア!」

剣を掲げ、雷を辺りに呼びおこし爆発と相殺させた

ラーズ「げ!?!俺の馬鹿!何教えてんだよ!」

イレブン「ギガスラッシュ!」

イレブンの攻撃はラーズに当たる

ラーズ「ふっ。イレブン、どうやら忘れてるようだな」

イレブン「あ、あれ？おかしいな、さつきから当たってるのに効いてない？」

ラース「この鎧をプレゼントしてくれたのはお前だったよな。作ったのもお前だ。性能は知ってるはずだろ？」

イレブン「えつと…… あ！雷耐性ついてる、それ！そうだった！ほとんど効かないじゃん！」

実況者「な、何やら不思議な感じになってきました」

セーニヤ「互いにいろいろ忘れてますね。戦法が効かない事を忘れてしまっただけじゃないですわ」

グレイグ「ハァー、何と気の抜ける……」

ラース「ハハ、お互い様みたいだな」

イレブン「えへへ、恥ずかしいね。よし！切り替えて、はやぶさ斬り！」

ラース「ジバルンバ！」

イレブンの周囲に地面が盛り上がっていく

イレブン「これも同じだよ！ハァ！」

イレブンは剣を掲げ、雷を呼びおこした

ラーズ「甘いんじゃないか？もらうぜ、その雷の力！」

ラーズは雷が落ちてくる場所に足を構えた

イレブン「え!？」

ラーズの足に雷の力が宿る

ラーズ「へへ、行くぜ！雷光ばくれつきやく！」

イレブン「うわあああ！」

実況者「おおっと！何とラーズさん雷を物ともせず、足に纏わせ攻撃に転じた！」

ベロニカ「あれってイレブンとの連携技じゃない！あんな事できるのね！」

マルティナ「私とセーニヤのを見て思いついたのかしら？」

イレブン「もう！アルテマソード！」

ラーズ「ソードガード！」

攻撃を剣で防ぎ、剣ガード率があがった

イレブン「ベギラゴン！」

ラーズの周囲が炎で包まれる

ラーズ「うっ…… どうしたものかな」

イレブン「ソードガード！」

イレブンの剣ガード率が上がった

ラーズ「ばくれつきやく！」

イレブン「今は効かないよ！アルテマソード！」

イレブンは全て剣で防いだ後、反撃する

ラーズ「ぐあああ！」

イレブン「はやぶさ斬り！」

ラーズ「くっ！調子にのるな！イオグランデ！」

イレブンを中心に大爆発がおきる

イレブン「デイン！そして、ミラクルソード！」

雷で自身の一番近くだけ相殺した後、突撃する

ラーズ「岩石落とし！」

イレブンの前に岩を置いた

イレブン「アルテマソード！」

イレブンは岩事攻撃してきた

ラース「何！岩ごとか!?グハッ！」ドサ

ラースは倒れた

実況者「勝負ありです！勝者は勇者様です！」

パチパチパチ！

イレブン「ハア、ハア。か、勝てた。途中どうなるかと思ったけど何とかなった」

マルティナ「ラースが大きな作戦を練ってなくてよかったわね」

イレブン「本当だよ。そんなのあったら僕負けてたはず。一回罠にかかったからね」

カミュ「しかし、兄貴がやられるのを見てると少しスツとしたぜ」

ベロニカ「そんな事思うからいつも喧嘩になるのよ」

セーニヤ「お疲れ様でした、イレブン様」

シルビア「何だか途中で不思議な時間が流れてたわね。真剣勝負の途中とは思えなかったわよ」

イレブン「えへへ、恥ずかしい。僕もラースも忘れてる事は多かったです」

実況者「それでは回復が終わり次第、本当の最後の試合のカミュさん対勇者様を始めようと思います。しばらくお待ちください」

カミュ対イレブン

実況者「長かった大会ももうこの一試合で終わりになります。それでは最後の戦いに移っていきます！カミュさん、勇者様、どうぞ上がってきてください」

イレブン「カミュ、君と戦うなんて思わなかったけど、どうせなら本気でやろう」

カミュ「へっ、当たり前前だぜイレブン。お前が頼りにしてる相棒の力、お前自身にみせてやるよ」

実況者「最初の紹介でもありましたが、カミュさんは一番最初の仲間だったんですね？何時ごろから相棒として関係を築くようになったんですか？」

ベロニカ「次に入ったのは私達姉妹だけど、その時には今のような相棒の関係になっていたわ」

セーニャ「互いを信頼しあっていてとても仲がよかったですわ。おそらく、初めから互いを頼っていたんだと思います」

実況者「となると、仲も相当よかったですね。喧嘩などはあったのですか？」

シルビア「結構あつたわよね。キャンプや宿の時に喧嘩すると見てわかるようになるのよね」

ラース「そうだな。わざと離れたりそっけない感じを出したりしてな。だが、一日と続いた事はないが」

マルティナ「すぐに仲直りするのよね。どうしてるのかはわからないけど、いつの間にか直ってるのよ」

実況者「二人の関係も聞いた所で、この勝負どうなるとおもわれま
すか？」

ロウ「わからんのう。二人が息を合わせて戦う所は何度も見ておる
が、本気で戦うのは見ておらん」

グレイグ「実力的にも大きな差はない。だが、万能な分イレブンが
若干有利かもしれんな。カミユの素早い攻撃をいかに対応できるか
もかかっている」

実況者「さあ、そんな相棒同士の戦いです！皆様、最後まで盛り上
がって行きましょう！それでは、試合開始です！」

カミユ「ヴァイパーファング！」

イレブンは毒になった

イレブン「くっ！そう来たか！剣の舞！」

カミュ「よつと！ジバルンバ！」

カミュはイレブンの攻撃を避けて、岩の柱を作り出す

イレブン「ギガブレイク！」

カミュ「シャドーステップ！」

カミュの回避率が二段階上がった

イレブン「ギガデイン！」

イレブンは避けられない魔法を使う

カミュの頭上に突然巨大な雷が落ちる

カミュ「がああ！くっ！ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

イレブン「剣の舞！」

カミュ「当たらないぜ！タナトスハント！」

三人のカミュは華麗に避けていき、短剣で特効攻撃をする

イレブン「グハアアア！ベホマズン！」

イレブンは全回復した

カミュ「ジバルンバ！」

辺りは岩の柱がたくさん出来上がっていた

実況者「激しいぶつかり合いの間に柱がどんどん出来上がっている！また何か作戦でもあるのでしょうか？」

グレイグ「だが、イレブンも何度か見ているはずだ。無闇に突っ込んではこれないだろう。作戦は成り立つのか？」

ラース「へへ、カミュも随分ジバリアをうまく使いこなせるようになってきたな。コツを掴んだんだろう。おそらくあれはオトリだ。何かあると思わせて行動を制限させる。それと同時に、雷の呪文や特技も地面に吸われてあまり有効ではなくなるからな。これはいいやり方だ」

ロウ「ほほう。それは考えたのう。確かにイレブンの雷の特技や呪文は強力な上に防ぎ方はほぼ無い。じゃが、これなら対策としては最高じやろう」

イレブン「これは壊したらまた大変な事になるな。自然の物だから剣じゃどうにもならない」

カミュ「へっ！萎縮してんなよ、イレブン！デュアルブレイカー！」

柱の隙間を縫うように攻撃が飛んでくる

イレブン「ぐうっ！隙間から飛んできて攻撃が見えない！ソードガード！」

イレブンの武器ガード率があがった

カミュ「ジバルンバ！」

さらに岩の柱が出来上がる

イレブン「まずい！移動できる場所が無くなる！少しだけでも壊さないと！はやぶさ斬り！」

ドガアン！

カミュ「そこか！心眼一閃！」

カミュはイレブンにすぐに近づき、攻撃する

イレブン「うわあああ！」

カミュ「逃がさないぜ！シャインスコール！」

カミュは追撃を緩めない

イレブン「くっ！何とか防がないと！アルテマソード！」

イレブンは必死に防ぎ、柱を壊していく

衝撃で何本か柱が倒れていく

バラバラバラ!

イレブン「ゴホッ!ゴホッ!結構脆いな。逃げないと」

イレブンの周りは土煙だらけになっている

カミュ「油断するなって普段から言ってたよな?」

イレブンの後ろからカミュの声が聞こえてきた

イレブン「!?!」

カミュ「会心必中!」

イレブン「ぐあああ!ベホマズン!」

イレブンは全回復した

カミュ「回復したからって安心してるとなよ!ぶんしん!」

カミュは三人に分身した

イレブン「ギガブレイク!」

しかし、辺りの岩に雷が吸われていく

イレブン「嘘!ほとんど意味なくなっちゃった!」

カミュ「もつと考えるよな、デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

イレブン「グアアア！」

実況者「カミュさんが圧倒的に勇者様を押しております！これはキツいか!?」

マルティナ「完全に流れはカミュのものね。何とか断ち切らないとイレブンのMPが尽きてしまうわ」

ベロニカ「今は地の利もカミュが支配してるわ。ラースの知恵のおかげで大変な事になってるわね」

ラース「人を悪者みたいな扱いするな、ベロニカ。カミュだって勝つためにやってんだ。俺らは見守るだけだ」

カミュ「へっ、終わりか、イレブン？」

イレブン「ぐっ…… まだだよ、カミュ！僕はまだ倒れてない！ベホマズン！」

イレブンは全回復した

「カミュ「ああ、どんどん来いよ！ヴァイパーファング！」

イレブン「ハア！」

イレブンはカミュの突撃に合わせ、後ろに大きく引いた

イレブン「こんなの壊してしまおう！剣の舞！」

ドガアン!!

バラバラバラ！

カミュ「ふっ、いいのかよ、そんな事して」

イレブン「イオナズン！」

ドオン!!

バラバラバラ！

柱はほとんど壊され、辺りは土煙で何も見えなくなった

カミュ「見えなくなつて当たればいいんだろ！ぶんしん！デュアル
ブレイカー！」

カミュの三本のブーメランが土煙を晴らしていく

カミュ「もつと行くぜ！デュアルブレイカー！」

実況者「ブーメランの攻撃が止まらない！勇者様はどうしているの

か!？」

セーニャ「大丈夫でしょうか、イレブン様」

シルビア「イレブンちゃんも何か考えがあって壊したんでしょうけど、心配ね。ブーメランがほぼステージ全部を攻撃してるわ。避けるのも難しいと思うけど」

煙が晴れていく

カミュ「な!？」

イレブンは鉄の塊になっていた

パリエイン！

イレブン「驚いた？アストロンだよ。これで無傷で全部なくなつたよ。アルテマソード！」

カミュ「グアアア!……へっ！面白くなってきたじゃねえか！」

イレブン「ギガテイン！」

カミュ「ジバルンバ！」

地面を盛り上げて、雷を防いだ

イレブン「イオナズン！」

地面とカミュをまとめて爆発させる

カミュ「シャドーステップ！」

カミュの回避率が二段階上がった

イレブン「ベギラゴン！」

カミュの周りを炎が包み込む

カミュ「ヴァイパーファング！」

イレブンは毒になった

イレブン「くっ！剣の舞！」

カミュ「危ねえな！ぶんしん！」

カミュは華麗に避けた後、三人に分身した

イレブン「アルテマソード！」

カミュ「グハアアア！や、やべえな」

イレブン「今だ！剣の舞！」

カミュ「負けてたまるか！タナトスハント！」

二人の攻撃が同時に当たり

イレブン「うああああ！」ドサ

カミュ「グハッ！」ドサ

二人は同時に吹っ飛び、どちらも倒れた

実況者「な、何と！相討ちだー！」

マルティナ「こんな対戦形式で相討ちなんてあるのね」

ロウ「最後にお互いの一撃が決まったのう」

ベロニカ「こんな所まで同じなんて本当呆れるわ」

その後

実況者「お集まりいただいた皆様、このコロシウム最後の大会はいかがでしたか？興奮した方もたくさんいたと思われます。この場所はまさにそんなお客様の興奮や高まりを何年も見届けてきました。

そしてこのステージには闘士達の血と汗、涙がいくつもこぼれ落ちました。そんな歴史ある場所でしたが、ここもついに取り壊しになります。ですが、皆様の心の中だけにでもこのコロシアムの存在、勇ましい闘士達の事を覚えていてほしいのです。

それではまたいつか会いましょう。大変ありがとうございました！」

パチパチパチ！

一層大きな拍手で大会は閉幕となった

しばらくして

町長「勇者様方、白熱した戦いを本当にありがとうございました」

町長は深々とお辞儀をしている

イレブン「そんな。気にしないでください。僕達もすつごく楽しかったです」

グレイグ「そうだな。あんな機会など無かったからな」

シルビア「皆の本気が見れてアタシも楽しかったわ！」

町長「そう言っていただけで大変光栄です。お礼と言っては何ですが、私達の方で様々な物を用意しました。ぜひ好きな物を持っていてください」

そう言い、持ってきた物は各地の名産品やブランド物の服など大量にあった

全員「ええ!?!」

ペロニカ「こ、これ選んでいいの!?!」

町長「はい。ぜひ好きな物を選んでください。私もあのコロシウムがあんなに熱気に包まれたのを見たのは初めてでした。最後にはふさわしかったです。見ている途中で涙が出てきました。皆様には感謝してもしつくせません」

ロウ「これはすごいものう」

ラーズ「ここまで言ってもらってるのに何ももらわないのも変だな。皆、何か貰って行こうぜ」

町長「ああ、一位となったカミュさんとラーズさんには賞金の方と、このクレイモラン産50年物と、世界各地のお酒の詰め合わせもございますよ」

ロウ「何じゃと!?!50年物じゃと!?!」

ラーズ「クレイモラン産50年物って!伝説の酒じゃないか!?!」

カミュ「俺も一度しか聞いた事ねえ!実在してたのか!?!」

町長「このために一度だけ復活していただいたのです。どうぞお大事に」

町長はラースに黒い漆の酒筒を渡した

ラース「や、やべえ、カミュ。俺、こんな飲めねえ」

カミュ「お、俺だつて無理だ。そ、そうだ。しばらく飾っておこうぜ。城に飾って皆に見せてやろう」

その後、仲間達は食べ物や服、武器、鍛冶の素材などを貰った

イレブン「何だか随分得した気分だね」

セーニャ「そうですね。戦いは大変でしたけど楽しかった気持ち
が大きいですし、こんな物まで貰って本当にいいんでしょうか」

シルビア「まあもう返せないし、ありがたく貰っちゃいましょう。
ウフフ、このお酒お気に入りなんだけどほとんどの店に無いのよね。
やっと手に入ったわ」

ベロニカ「私もこんな服着てみたかったの！可愛い！」

カミュ「マヤのやつ、このアクセサリ好きそうだな。偶には学
校に行ってみるか」

ロウ「ラース、いつかそのお酒を飲む時はわしにも是非声をかけて

くれ。死ぬ前に飲んでみたいんじゃない」

グレイグ「ラーズ、俺も是非呼んでくれ。俺も飲んでみたい」

ラーズ「当たり前だぜ、じいさん、グレイグ。じいさんが死ぬ前には必ず飲むぜ。それにこんな立派な酒、俺一人じゃ申し訳なさすぎて飲めない。皆も誘うぜ」

イレブン「30年物であんなに美味しかったもんね。それよりさらに上か。本当に凄そうだね」

マルティナ「ラーズがあんなに興奮してるのも珍しいわ。私は服にしたけど、着る機会あるかしら？」

カミュ「まあ、どうせラーズに連れ出されるぜ。何か企んでるみたいだな」

マルティナ「ふふ、それならその時まで待ってましようか。あの約束守ってくれるのね」

デルカダール襲撃

トーナメントから半年後

デルカダール城 玉座の間

バタン！

ガザル「大変です！王様、王女様！救援を！」

ガザルが大慌てで入ってきた

デルカダール王「何事じゃ!?!」

ラース「どうした、ガザル！何かあったのか!?!」

ガザル「保管庫にあつた闇のルビーが光り始めました！それとほぼ同時に、大量の魔物の群れが城門前に突如謎の隙間から現れています！」

全員「何だって!?!」

グレイグ「今はどういう状況だ！」

ガザル「近くで警備していたロベルトとダバンが何とかしています。ですが、余りにも数が多いので時間の問題と思われる。

住民達は裏口から避難をさせています！しかし、隙間は前触れも無く現れたので、まだどこかに現れる可能性があるため安全とは言えません！」

マルティナ「わかったわ、ラーズ！」

ラーズ「わかっているさ。マルティナ、俺は今から全兵士を連れて急いで向かう！」

グレイグ「俺も行くぞ！」

ラーズ「頼んだ、グレイグ。グレイグには城の入り口を頼んだ。俺達が城門前で取りこぼしたやつを何とかしてくれ。数人そつちに兵士も配置する」

マルティナ「私だって戦えるわ！」

ラーズ「駄目だ、マルティナ！君に危ない事はさせられない！」

マルティナ「今はそんな事言っている場合じゃないわ！少しでも戦力になるなら、何だって使うべきよ！国や民達を守るのに、王女とか関係ないわ！」

マルティナは強く言い放った

グレイグ「姫様……」

マルティナ「ラース、私に指示をお願い！何だっしてしてみせるわ！」

ラース「わかった、マルティナ。マルティナにはこの玉座の間を守っていてくれ。メイドや子ども達がいる。戦力として、王様とバンをここに残す。三人で守ってくれ。隙間がここにも現れる可能性がある。そのもしもを防いでくれ。ここだけは落とされてはいけない」

マルティナ「任せて、ラース。誰が来ても負けないから！」

ラース「頼りにしてるぞ、マルティナ。グレイグ、ガザル、行くぞ！」

二人「は！」

デルカダール城前

ラース「グレイグ、ここは頼んだ。マーズ達も残すから存分に使ってくれ」

グレイグ「任せておけ、必ず守って見せよう」

ブウン

城の前に突然隙間のようなものが現れる

マーズ「お二人とも！前に何か隙間が！」

ギイイ！ギヤギヤギヤア！

隙間からはたくさんの魔物が出てきた

ラーズ「本当に前触れも無く現れやがった！」

グレイグ「ラーズ！お前は急いで城門前に行け！ここは俺達は何と
かしてみせる！」

マーズ「イオナズン！ラーズ將軍！道は作りましたよ！」

ラーズ「すまねえ！ガザル、ついてこい！うおおお！どけえ！」

ガザル「はい！」

ラーズ達は走りながら城門に向かっていく

城門前

ラーズ「ロベルト！ダバン！無事か!？」

城門前ではロベルトとダバンが必死になって魔物達を倒している

ダバン「ラーズ將軍、ガザル！ありがとうございます！」

ロベルト「俺が最初に奇襲にあってしまいました！すみません！」

ガザル「俺がフォローするぞ、ロベルト！」

ラーズ「そうだ。気にするな！しかしかなりの量だ、一体どこから押し返すぞ！ダバン、続けろよ！マヒヤド！」

ダバン「ハッ！わかりました、はやぶさ斬り！」

ロベルト「俺もいきます！アイスブレード！」

氷の壁と攻撃で蓋をして進軍を防いだ

ラーズ「少し時間を作ったぞ。ダバン、ロベルトを回復してやってくれ」

ダバン「はい。ロベルト、ベホイミだ」

ロベルト「悪い、助かった」

ラース「何があった」

ロベルト「今日、俺とダバンで警備をしていたら何も無い所から急に、隙間のようなものが現れたんです」

ダバン「近くにいたロベルトが警戒していたら、魔物の群れがすごい数で出てきてロベルトが急いで対応したんですけど、その時に負傷したんです。そこからは近くにいたガザルに連絡を任せて、俺達で必死に対応していたんです」

ガザル「よくあの数に対応できたな」

ダバン「俺は受け流しの構えで何とかなっていました」

ロベルト「俺はあまりにも多くて負傷は避けられなかったんですが、群れの多くに一撃切り込む事で周りを怯ませながら戦ってました」

ピキッ！ピキッ！

壁にヒビが入り始めた

ラース「どうやら氷の壁も時間切れだな。正念場だ、踏ん張っていけよ！」

三人「は!!」

その後

ラーズ「全員片付いたか」

ロベルト「す、すげえ。あの数をほぼ一人で倒した」

ダバン「これが本当のラーズ將軍の力」

ガザル「俺達もいつかこうなれるのかな」

ラーズ「俺は城に戻ってどうなっているか確認してくる。三人は警戒を続けてくれ！」

三人「は！」

デルカダール城前

グレイグ「ラーズ！無事だったか！」

マーズ「こっちも片付きました！グレイグ將軍、凄いです！」

ギバ「バツサバツサと倒していつてかつこよかったです!!」

グレイグ「なに、マーズの魔法やギバの槍での援助があったからこそだ。お前達も充分かつこよかったぞ」

ラース「こっちも平気か。よかった、怪我はないか？」

ギバ「平気です。皆、大きな負傷はないです!」

グレイグ「ラース、姫様が心配だ。何も無いとは思うが、もしもの事があったら大変だ。急いで戻るぞ」

ラース「そうだな。マーズ、ギバ、ここは任せた。何かあったら連絡をくれ」

二人「は!」

玉座の間

ラース「マルティナ! な!?!」

グレイグ「バン!?! どうした!?!」

そこにはバン以外誰も居なくなっていた

バン「……………」

ラース「バン!!……………!?グレイグ、ザオリクを頼む!」

グレイグ「ザオリク!」

バン「ゴホッ!ゴホッ!あ、あれ?俺、確かあいつに……………」

ラース「バン!大丈夫か!何があった!」

バン「あ!し、師匠!すみません!!俺、突然現れた変な魔物の奴らに負けてしまって……………」

グレイグ「お前ほどのレベルが負けただど!?皆はどこにいった!」

バン「すみません。俺と姫様が戦っていたんですが、俺が先にやられてしまったのでわからないです」

ラース「くっ……………。そんな事ってあるのかよ」

ラースは下を向き、拳を握りしめる

バン「すみません！すみません！俺、取り返しのつかない事をしてしまいました!!」

バンは涙目になりながら土下座している

グレイグ「過ぎた事はどうしようもない。だが、これは一大事だ。ラース、どうする?」

ラース「ん?玉座に何かあるぞ」

玉座の上には紙が置かれていた

ラース「これは……地図?」

グレイグ「あまりにも簡単すぎる。地名も何も書かれていないな。しかも、まるで子どもが書いたようなものだ」

バン「ここに皆様がいるという事でしようか?」

ラース「この地形に見覚えあるか?」

グレイグ「すまない、俺はわからん」

バン「うーん、わからないですね」

ラース「くっ、罨の可能性だってある。早く救いに行かないと」

バン「すみません、師匠！グレイグ將軍！本当にすみません！」

グレイグ「二人とも落ち着くんだ。気持ちはとてもよくわかるが、焦っては考えが浮かばなくなる。一先ず皆に連絡だ。俺の仲間達にもな」

その後

ロウ「何という事じゃ」

ベロニカ「二人もいながら何してんのよ!!」

セーニヤ「お姉様、そんな強く言っではいけませんわ」

シルビア「でもこの地図みたいなものはアタシもわからないわね」

カミュ「この赤い点が目印なんだよな。山が周りであって、下の方に村があるのか。川も途中に流れている。うーん」

ラース「似た場所ならたくさんあるんだよな」

イレブン「この赤い、怖い、楽しいってのもよくわからないね」

グレイグ「おそらくだが、マルスカルナが書き残したものだと思っている。二人が知っている場所である可能性が高い」

ロウ「となると、二人がまだ行った事のない場所はどこなんじゃ？」

ラース「ラムダとドウルダ郷、ナギムナー村とグロツタの町だな」

ベロニカ「その周辺はありえないのね。グロツタだとユグノアも近いから可能性はあるけど」

シルビア「それと川のない場所もありえないわね。メダル女学園やユグノアの近くは海だからそれも無いと思うわ」

カミュ「クレイモランやサマディーも川はほぼ無いから恐らくそこも無いな」

イレブン「イシの村の近くもないね。デルカコスタ地方も無いよ」

セーニヤ「残りはデルカダール周辺とホムスビ山地、ダーハルーネの周りくらいでしょうか」

ロウ「ふむ…………… おお！もしやここはホムスビ山地の場所ではないか？」

イレブン「…………… あ、本当だ！川の位置とか村の位置も大げさだけど合ってるかも！」

ラース「よし！皆、行くぞ！」

全員「うん！」

ラース「バン、お前もついてこい！」

バン「はい！」

救出作戦

荒野の迷宮

ロウ「赤い印はこの付近じゃな」

ラース「この奥が怪しいが、マルス達はこんな所まで来た事はないぞ。場所を知らないはずなのにどうやって書いたんだ？」

ベロニカ「ここは私がこの姿にされた場所でもあるわ」

イレブン「懐かしいね。取り敢えず入ってみよう。何か手がかりがあるかもよ」

内部

シルビア「中は結構入り組んでいるのね」

グレイグ「何やら雰囲気がおかしいぞ」

バン「魔物達が何かに怯えてませんか？」

カミュ「これは何かあるな。探索してみよう」

その頃、最深部では

魔物「ふっふっふ。最強と名高いデルカダール国をこんな簡単に落とせるとは思いませんでした。やはり私は！最強！」

デルカダール王「む……むう……」

マルティナ「……………」

そこにはデルカダール王とマルティナが磔にされていた

メイド達は牢の中に入れられて気絶している

魔物「ムジーナ、俺こいつらを早くこの槍で殺したいぜ。俺達は邪神様の力とルビーの力でこの世界最強の二人なんだと思いき知らせてやるんだ」

ムジーナ「待ちなさい、ギージャ。確か私達二人に歯向かった愚かな餓鬼が二人いたはずです。そいつらの目の前で殺してあげましょう」

ギージャ「バツハツハ！流石ムジーナ、いいこと言うじゃねえか。どれ、餓鬼ども！隠れたって無駄だぜ！この部屋にいるのはわかっているんだからよ！早く出てきた方が痛い思いしなくて済むぜ？」

ルナ「ヒツ……………」

マルス「ルナ、声出しちゃダメ」

ムジーナ「その箱の裏ですか。それ」

ムジーナが指を動かすと箱が浮いた

二人「ああ！」

ギージャ「バツハツハ！そんな所にいやがったか。ほら、お前らの母ちゃんとじいちゃんの死に目を見せてやるよ」

二人「うわあああん!!」

二人は大慌てで逃げ出す

ムジーナ「逃げる場所なんてありませんよ。捕まえました、さあ絶望に落ちなさい。ギージャ、やるのです」

しかし、ムジーナに簡単に捕まってしまう

ギージャ「バツハツハ！まずは母ちゃんからだ。行くぜ！オラア！」

ギージャの槍がマルティナの脇腹を貫いた

マルティナ「ああああああっ！」

マルティナの叫び声が響き渡る

二人「お母さん!!!」

二人は涙を流しながら叫ぶ

ギージャ「バツハツハツハツハ！こりやあ愉快だ！」

ムジーナ「いい声ですねえ。この餓鬼どもの絶望の声も素晴らし
い。さあ、もっと聞かせてください」

デルカダール王「マル…… テイナ……」

マルス「母さんを離せー！」ガブツ！

マルスはムジーナの手を思いつきり噛んだ

ムジーナ「ぐうっ！」

ルナ「メラ！」

ルナはギージャに炎をぶつけた

ギージャ「あっちい！」

その隙にルナは礫にされているマルティナとデルカダール王の下
まぐいぐ

ルナ「お母さん！今助けてあげる！えっと、確かこうして魔力を手
に込めて、ホイミ！ホイミ！ホイミ！ホイミ！」

しかしマルティナの傷は治らない

ルナ「え!?!どうして!?!あ！おじいちゃんにはえっとね、こうやって、
キアリー！」

デルカダール王の毒が治った

デルカダール王「お、おお。楽になってゆく」

ギージャ「てめえら!!餓鬼だから優しくしてやったのにぶざけや
がって!!」

ムジーナ「その女の餓鬼には、どうやら先に逝って貰わないとい
けませんねえ」

二人はルナに向かっていく

マルス「ルナ！危ないよ!!うりやあああ！」

マルスはギージャに斬りかかる

ギージャ「ふん、何だこいつ」ガシ

マルスの攻撃が当たる前にギージャに頭を掴まれる

マルス「ううっ！離せ!!」

マルスはジタバタしている

ルナ「マルス!!」

ムジーナ「ギージャ、やりなさい」

ギージャ「大人しくしてればよかったのによ。死ねええええええ!」

ギージャはマルスを地面に落とすと、槍をマルスに振りかぶる

マルス「や……やだ……」

バタン!

マルスは目を瞑る

マルス「…………… あれ?と、父さん!!!」

痛みが来ない事に違和感を覚えて目を開くと、ラーズがマルスを抱いて庇っていた

ラーズ「ガハッ!」ドサ

ラーズは肩を貫かれており、倒れ込んだ

ギージャ「ああ?何だこいつ、急に現れやがった」

マルス「父さん！父さん！！」

ラース「マ…… マルス…… 無事か」

マルス「うん！父さん！」

ルナ「お父さん！今助けるから！」

ルナはマルス達の元へ走っていく

ムジーナ「させるとでも思っているのですか？次はあなたの番ですよ」

ルナ「キヤア！！」

ムジーナがルナの前に立ちはだかる

ベロニカ「させないわよ！メラゾーマ！」

ムジーナ「むうっ！また新手ですか！」

しかし、ベロニカの魔法により助けられる

グレイグ「姫様！王様！な!?何という光景だ」

ロウ「お主達がこの襲撃の黒幕か！」

バン「お前ら！さつきはよくも俺の事を殺しやがったな！許さねえからな！」

全員がここに到着した

ギージャ「ちっ！どうやってここがわかったんだ」

ルナ「やった！マルス、私達の書いたやつわかってくれたよ！」

マルス「よかった！地図を勉強してて！」

ムジーナ「まあ私達には敵いませんよ。どれ、軽く一捻りしてあげましょう」

イレブン「セーニャ！ラーズ達の治療をお願い！ベロニカとシルビアは皆を助け出して！僕とカミュとグレイグとおじいちゃんはいつらと戦うよ！」

バン「イレブンさん！俺も助太刀します！」

イレブン「ありがとう、バン！頼もしいよ！皆、よろしく！」

全員「了解！」

セーニャ「ラーズ様！大丈夫ですか!?今治しますわ。……これは呪いですか!?ロウ様でないと、解けないですわ！」

セーニャはラーズの肩に回復魔法を使うが、受け付けない

ラーズの肩からは血がどんどん流れている

シルビア「ベロニカちゃん、下ろすの手伝ってね。マルティナちゃん、もう平気よ。はい」

シルビア達はマルティナを磔から降ろし、縄を解いた

ベロニカ「うんしょ。マルティナさん！大丈夫!?!」

マルティナ「う……」

シルビア「体の傷が多いわ。あまり動かさない方がいいわね。次は王様よ」

デルカダール王「わしはこの縄を解いてくれれば何とか動けそうじゃ。ルナがわしの体の毒を取り除いてくれたからな」

シルビア「え!?!すごいわ、ルナちゃん!それじゃあ少し待ってね、今解くわ」

その後

デルカダール王「マルティナ!!わしが不甲斐ないばかりに……。すまない」

デルカダール王はマルティナの手を握り、謝罪している

セーニヤ「マルティナ様は傷が多いですわ。さらに脇腹の傷は呪いがかかっています。そこ以外なら何とか治せます」

ベロニカ「レースには呪いがかかっていた。つまり、あの槍は呪いの力があるのね。さっきのマルティナさんの叫び声もきつとこの槍による攻撃を受けたのね」

シルビア「レースちゃんが猛スピードで走って行ってよかったわ。レースちゃんの血は取り敢えず布で縛っておきましょう。少しでも出血を抑えないと」

しばらくして

バン「氷結らんげき!」

ギージャ「グハアツ!な、何だこいつら強ええ!」

ムジーナ「中々できるようですね」

グレイグ「貴様らは生かしておけぬ!!王と姫様を傷つけ、民の者にも恐怖を与えた!その罪、死をもって償ってもらおう!!」

グレイグは鬼神の如く激しく攻めている

ムジーナ「ホホホ。どうやら本気を出さないといけないようですね。ハアア!」

ギージャ「おりやあああ!」

ギージャ達に力が与えられていく

カミュ「な!?!傷が回復していくぞ!!」

バン「それだけじゃないですよ!姿も変わっていきます!」

ロウ「何たる邪気じゃ。これほどの力を持つておるのか」

ギージャ「バツハツハツハ!これが闇のルビーの力!」

ムジーナ「もう私達には敵いませんよ!ハア!」

ムジーナが力を込めると五人は勝手に浮き上がった

イレブン「な、何これ！勝手に浮いてる!!」

ギージャ「地獄の始まりだぜ!!うりやああああ!!」

ギージャは浮いたイレブン達に槍でどんどん刺していく

五人「ぐわああああ!!」

ギージャ「最っ高だな!!!」

ムジーナ「これは堪りませんねえ」

ドサドサドサ

イレブン「痛たたた……」

バン「うぐっ……ハア、ハア」

グレイグ「ガハッ!……皆、平気か?」

カミュ「やべえな、こりやあ」

ロウ「ぬうつ……皆の者、ベホマラーじゃ」

ムジーナ「まだこんなものじゃ済みませんよ」

ギージャ「もっと楽しませてくれよな」

闇のルビーの力

ロウ「この力は呪いか！ならば、おはらい！」

五人の呪いが解けた

グレイグ「皆、俺が一先ず攻撃を引き受ける。その隙に頼んだぞ。ビッグシールド！におうだち！」

グレイグの盾ガード率が上がり、味方を庇っている

ギージャ「これでもくらいな！」闇の力を纏ったなぎはらい

ムジーナ「闇よ、高まりなさい！」魔力を高めている

バン「させない！ばくれつきやく！」

イレブン「僕も続くよ！ギガブレイク！」

バンとイレブンはムジーナに攻撃する

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ムジーナ「邪魔が入りますねえ」

その頃、シルビア達は

マルティナ「ん……ここは」

セーニヤ「マルティナ様！」

ベロニカ「大丈夫？皆で助けに来たわ！」

マルティナ「どういう状況かよくわからないけど助かったわ。ありがとう」

ルナ「お母さん！体大丈夫？」

マルス「ごめんね、母さん。僕守れなかった」

マルティナ「マルス、ルナ。怪我がないみたいでよかったわ。私も脇腹が痛いけど、何とか動けるわ」

デルカダール王「よかった、マルティナ。後はレースか」

マルティナ「!!?!レース!!どうしたの!?!」

マルティナは隣でレースが苦しんでいるのを見て驚いている

マルス「僕をあいつの攻撃から庇ってくれたの」

ルナ「お父さんが来てくれてなかったらマルスもルナも死んじやつてたの！」

マルティナ「そうだったの。ラーズ、本当にありがとう。でも大分苦しそうだわ」

セーニヤ「傷が深いのですが、呪いのせいで回復を受け付けないのです。ロウ様はあちらで戦っておりますし、今は様子を見ていますし、今はいないのです」

ベロニカ「何とかしてあげたいんだけどね」

しばらくして

ギージャ「切りがねえな!!オラア！」怒涛の八連撃！

五人「ぐうっ！」

カミュ「何でだよ！さつきから攻撃がまるで効いてねえぞ！」

グレイグ「まるで勝手に回復しているようだ！」

ムジーナ「おや、察しがいいですねえ。その通りです。」

私達は邪神様によりパワーを上げ、そこに闇のルビーの力でさらに回復能力までつき、無敵の力をてにいれたのです。あなた方がしている攻撃は私達にとっては全て無意味です！」

ロウ「何という事じゃ！まさかそんな力があつたとは！」

ギージャ「さあ、覚悟してもらおうぜ！」混沌の一突き！

バン「グアアアア！」痛恨の一撃！

シルビア「皆が苦戦してるわ！アタシ達も参戦しましょう！」

グレイグ「いや、そこで待っていてくれ。俺達は簡単には負けん！」

ベロニカ「でも……」

イレブン「僕が悪い状態は全部解除できる。まだ頑張れるから大丈夫だよ」

ムジーナ「まだ力の差がわからないようですね。ギージャ、行きま

すよー！」

ギージャ「ああ！行くぞ！」

カミュ「なにかくるぞ！」

ギージャはグレイグを思いつき突き刺し、後ろに飛ばした

グレイグ「ぐうっ！」

その後ろにムジーナが大地の針を作り出し、後ろから体に突き刺した

グレイグ「グハアアッ！」ドサ

ギージャ「まずは一人だな」

バン「グレイグ將軍!!」

ロウ「ザオリクじゃ」

グレイグ「ゴホッ！す、すみません、ロウ様」

イレブン「これは何回も使われるとまずいね。アルテマソード！」

バン「さみだれ突き！」

ムジーナ「食らっても回復するのがわからないんですかね」

その時、部屋の入り口から声がした

???「やっぱりあなた達だったのね」

全員「!？」

全員が見るとそこにはリーズレットがいた

リーズレット「こんな事はやめなさい。ムジーナ、ギージャ」

ムジーナ「リーズレット様!!？」

ギージャ「姐さん!!封印されたんじゃないのか!!」

イレブン「え？リーズレットの知り合い？」

リーズレット「久しぶりね、ムジーナ、ギージャ。私は数年前に本から封印が解かれたのよ。闇のルビーが現れた時まさかとは思っていたけど、本当にまだ力を狙っていたのね」

ムジーナ「当たり前です、リーズレット様！それに最初はリーズレット様が提案したんじゃないですか！」

ギージャ「見てくれよ、姐さん！俺達こんなに強くなったぜ！姐さんに見せてやるぜ！」

リーズレット「やめなさい！」

二人「!!？」

リーズレット「こんなの間違ってるのよ。この力は確かに私達魔物に膨大な力を与えてくれるわ。でも、これはその力と引き換えに体を代償にするのよ。」

その力も時間に制限がある。それが切れれば、あなた達の体は壊れてボロボロになり消滅するわ」

ムジーナ「何ですって!?!リーズレット様はそんな事言っていないかったですか!!」

リーズレット「悪かったわ、私が少し前に調べてわかった事なの。だからこんな力を使うのはやめてちょうだい」

ギージャ「だが俺達は！また姐さんと一緒に強くなるんだ！」

リーズレット「ごめんなさい、ギージャ。私はもうあの頃のような大きな魔力は残ってないわ」

ムジーナ「リーズレット様はどうして邪神様の影響を受けていないのですか？あの方から力を頂けるはずでは？」

リーズレット「私はもう、あの頃の私ではないの。邪な気持ちは無くなって、今はクレイモラン王国王女シャルの守り人なのよ」

ギージャ「何だって!!姐さんまさか！人間側に寝返ったのか!？」

ムジーナ「な、何という事を!!裏切ったのですか!!」

リーズレット「……ええ。だから私とあなた達はもう敵同士よ」

ギージャ「姐さん!!そんなの許さないぜ！」

ムジーナ「力を無くしたリーズレット様など、今の私達には到底敵いませんね!!私達を馬鹿にするなら散ってもらいます!!」

リーズレット「そうやって闇のルビーの力に頼らないで!!私はあるに苦しんでほしくないの!」

二人「ハアアア!!」

二人はリーズレットの静止も聞かずさらに力を込めていく

カミュ「おい、リーズレット!逃げないと危ないぞ!!」

リーズレット「くっ!なら、闇のルビーの力を壊させてもらおうわ!!」

そう言いリーズレットは闇のルビーを取り出し、その場で凍らせ粉々にした

ムジーナ「な!!?力が……」

ギージャ「そんな……」

二人を覆っていた闇の力は無くなり、凶悪な雰囲気も消えた

リーズレット「これでもう力は使えないわ」

グレイグ「そのルビーの形。デルカダール城にあるものと同じ!リーズレット、貴様!勝手にデルカダール城に入ったのか!」

リーズレット「ごめんなさい、グレイグ。デルカダール王様、マルティナ王女様。闇のルビーは私の元にもあったのだけど、それがさつき光り始めてこの力の事を思い出したの。」

すぐに粉々にしたのだけど、デルカダールにもう一つあるのを前にラスから聞いていて急いで向かったの。魔力を発しているルビーを見つけて、ここから強い力を感じて急いで持ってここに来たの。

勝手にお城に入って物色したのは本当にごめんなさい。緊急事態だったから何も無しにやったのだけど、後で罰は受けるわ」

マルティナ「いえ、気にしないでリーズレット。あなたがそうしてくれなかったらどうなっていたかわからないわ。ありがとう」

ムジーナ「そんな……。リーズレット様、私達を殺すのですか!？」

ギージャ「また……。前みたいに弱くなった。もう……。終わりだ」

リーズレット「ええ。こんな事をしでかしたんだもの。過去の仲間とは言え、死んでもらうわ」

全員「……………」

ムジーナ「……わかりました。リーズレット様、すみませんでした」

ギージャ「すまなかつた、姐さん。サヨナラだ」

リーズレット「……本当はこんな再会したくなかつたわ。また、いつか会いましょう」

ムジーナとギージャはリーズレットの手により、消滅していった

ロウ「ラーズ、遅くなりすまなかつた。姫もすまんのお。おはらいじゃ」

ロウはマルティナとラーズの呪いを解いた

マルティナ「ありがとうございます、ロウ様」

ベロニカ「ラーズも苦しそうなのがなくなったわね」

デルカダール王「リーズレット殿よ、助けてくれた事を心からお礼を言おう。本当にありがとうございます」

リーズレット「いえ、デルカダール王様、気になさらないでください。これは私の前の仲間がやらかした事件。私にも大きな責任があります。私を罰してもらって構いません」

デルカダール王「いや、そんな事はせん。恩人である事に変わりはないのだ。クレイモランには大きな借りができたな。何か困った事があれば何でも頼ってくれ。必ず助けになろう」

リーズレット「ありがとうございます」

その後、デルカダール城に戻り医療部屋にたくさんの人が運ばれた

デルカダール王「わしは大丈夫なんじゃが……」

医師「いえ、王様に何かあつては困ります。毒や怪我もされていたのですからぜひ安静にしてください」

セーニヤ「マルティナ様、お怪我は大丈夫ですか？」

マルティナも包帯をされている

マルティナ「ええ、数日休めば何とかかなりそうだわ」

イレブン「ラースもゆっくり寝てるからね。こっちも問題無さそう」

シルビア「一件落着ね。でもリーズレットちゃん、少し可哀想だったわ。仕方ない事とは言え、昔の仲間達を殺さないといけないなんて」

グレイグ「気持ちは分かんんでもないが、生かしてもおけなかったからな。あれでよかったと思っておこう」

ベロニカ「リーズレットさんには私とカミュでお礼しておくわ。リーズレットさんが駆けつけてくれなかったら全滅してたかもしれないし」

ロウ「バンや、動いて平気か?」

バン「はい!俺は王様達に比べれば平気です!」

バンは特に治療の跡もなく、ハキハキとしている

カミュ「元気なやつだな。思いっきり攻撃食らってたのにピンピンしてるぜ」

イレブン「あ、ベロニカ、カミュ。お礼を言うのはどうせなら皆で言いたいから日を合わせて行こう。ラーヌも目を覚ましてからさ」

ベロニカ「それもそうね。わかったわ、皆で行きましょう」

リーズレットの過去

数日後、クレイモラン城 玉座の間

イレブン「シャルル様、お久しぶりです」

シャルル「お久しぶりです、皆様。全員揃ってどうされたのですか？」

マルティナ「実は先日デルカダールが襲撃されて、私やお父様が殺されそうになったの」

グレイグ「そこをリーズレットに助けてもらってな。今日はそのお礼を言いに来たのだ」

リーズレット「皆で来なくても大丈夫だったのに」

シャルル「そんな事があつたのですか!?もしかして、リーズレットが急に用事があると言って飛び出していった日の事かしら?」

リーズレット「その日であつてるわ、シャルル。少し皆と話すから部屋に通してちょうだい」

シャルル「ええ、わかったわ。誰も入れないようにするわね」

リーズレット「ありがとう、シャルル。それじゃあ皆、ついてきて」

別室

リーズレット「まず、皆の傷はもう癒えたのかしら？特にラーズね」

ラーズ「ああ、もう平気だ。話は全部聞いた。俺が気絶してる間に皆を助けてくれてありがとうな、リーズレット。恩にきるぜ」

リーズレット「あら、よかったわ。ラーズが一番重傷みただったから心配してたの。王様もお元気で？」

マルティナ「ええ、無事よ。お父様からも心から感謝している。ありがとうと伝言を預かってるわ」

リーズレット「ふふ、本当優しいのね。さて、ムジーナ達のことと私の関係話すわね。私が何百年も前に本に封印されたのは知ってるわよね？」

ペロニカ「そりゃあもう一度封印しようとしたのは私達だもの」

リーズレット「その封印される時よりずっと前に、私はムジーナ達と世界を旅していたの。魔物同士で気が合ったのよ。魔物だからや

はり魔や邪の力を強くしたいと思ってたの。そのためにチームとして一時期は少し有名だったのよ」

カミュ「魔物でも強くなりたいとかあるんだな」

ロウ「わしらと会話できるレベルの魔物なら確かにそう考えてもおかしくはない」

リーズレット「流石ロウ様、博識ね。そうして私達は闇のルビーというものがこの世界のどこかにある、という事を知ったの。闇のルビーは魔物にとって邪気や魔力の塊。それを取り込んだり、力を浴びる事で信じられないくらいに強さを得られる」

セーニャ「確かにあのルビーからは邪な力を感じていました」

ベロニカ「でも何で今になって出てきたの？しかもバラバラになつて」

リーズレット「前どこにあったかを知らないから私の推測でしかないけど、おそらく何者かに持ち出されて壊されたのかもしれないわね。」

その欠片が、デルカダールとクレイモランに運ばれた。特にデルカダールの方はクレイモランより大きいサイズだったから、ムジーナ達が目をつけたのね。代償の事を知らずに」

シルビア「でもリーズレットちゃんは代償の事を知ってたのよね？」

リーズレット「このクレイモランでの闇のルビー騒動の後、私は古代図書館で調べていたの。そこで代償について書いてある本を見つけて真実を知ったの。その後、ムジーナ達を見つけられていたらあんな事には……」

グレイグ「つらい事をさせてすまなかった、リーズレット。仲間を手にかけてさせるなど、俺にはできん」

全員「ごめんなさい」

リーズレット「いいのよ、そんな謝らないで。仕方なかったと思っているの。私みたいに邪の力が無くなった魔物はこんな事はもうできないし、考えられない」

それに、あれは魔物としての本能なの。私がこの町を氷漬けにしたように、人の悲しみなんて全くわからないの。寧ろ、ムジーナ達は過剰な力により人間の絶望や叫び声を楽しんでいたわ。

昔はそんな事無かったのに、力により変わってしまった。ああなっ
てしまったらもう、死ぬしか魔物には道がないの」

ロウ「確かに残酷さを隠しもせず楽しんでおった。あれは闇のルビーによるものだったか」

リーズレット「他に知りたい事はあるかしら?」

ラーズ「知りたい事では無いがお願いをしてもいいか?」

リーズレット「構わないわよ。何かしら?」

ラーズ「マルスやルナがまたリーズレットに会いたがっついてな。お礼も本人に直接言いたいそうさ。またいつかお城に来てくれ」

リーズレット「あら、嬉しいお誘いね。それじゃあまたシャルルを連れて遊びに行くわ」

マルティナ「お父様も待ってるわ。いつでも来てちょうだい、歓迎するわ」

イレブン「それじゃありズレット、本当にありがとう。ムジーナ達も昔はいいやつらだったのも知れたよ。また来るね」

リーズレット「ええ、迷惑かけてごめんなさいね。いつでも来てちょうだい」

チョコレート

数ヶ月後、デルカダール城

キッチン

メイド「王女様、急にどうされたのですか？キッチンを貸してほしいなど」

マルティナ「うふふ。実はね、明日ってバレンタインっていう日なの。知ってる人も多いかしら？」

メイド「バレンタイン？私は知らないですね」

コック「私は聞いた事があります。確かチョコレートを想い人に贈る日でしたよね？」

マルティナ「ええ、その通りよ。私も最近知ったの。それでチョコレートを作ろうと思ったのよ」

メイド「素敵な日ですね。やはりラーズ様にですか？」

マルティナ「ええ。でも、バレンタインは何も好きな人だけに送らなくてもいいみたいよ。友達とか家族とかいろんな人に配って楽しむみたい。だからお父様とグレイグや他の皆にも作るわ」

コック「なるほど、流石王女様。お優しいですね、私もお手伝いたしますよ」

メイド「私もお邪魔してもいいですか?」

マルティナ「もちろんよ、皆で頑張ってたくさん作りましょう」

次の日、マルティナ親子の部屋

マルティナ「今日は早起しなきゃだったけど、かなり早く起きちゃったわね。まあ、ゆっくり抜け出しましょう」

マルティナは誰も起こさないようにこっそりと抜け出した

キッチン

マルティナ「よし、ライス用の綺麗にできたわ!でも何だか恥ずかしいわね。何て言って渡そうかしら。うーん……………考えていても仕方ないわね。」

取り敢えず、いつでも渡せるから後回し。お父様とグレイグとマルス達には先に朝食の時に渡しましょう」

しばらくして朝食時

ライス「おおマルティナ、おはよう。どこにいたんだ?姿が見えなかったから驚いたぞ」

マルス「おはよう、母さん」

ルナ「おはよう、お母さん」

マルティナ「おはよう、三人とも。少し早く目が覚めちゃったから散歩してたの。驚かせてごめんなさいね」

すぐにデルカダール王とグレイグもやってきた

デルカダール王「おお、もう先に座っておったか。待たせてすまなかった、おはよう皆」

グレイグ「おはようございます、姫様達。今日は何だか早いのですね」

マルティナ「おはようございます、お父様、グレイグ。これで皆揃ったわね。お父様達に渡したい物があるの」

デルカダール王「わし達にか？」

マルティナ「今日はバレンタインっていう記念日なの。今日はチョコレートを贈る日なのよ。だからはい、チョコレートです。昨日作ったの。美味しくないかもしれないけど、よかったら食べてね」

マルティナはライス以外全員に配っていく

デルカダール王「おお！そんな日だったのか。ありがとう、マルティナ。娘からの手作りなど不味いわけではない」

グレイグ「私にまで作ってくださるなんて……。ありがとうございます
います、姫様。大事に食べさせていただきます」

マルス「ありがとう！これ、チョコレート？わーい！」

ルナ「美味しそう！ありがとう、お母さん！」

ライス「……………。よ、よかったな、マルス、ルナ。だが朝ごはん食べ
てからだぞ？」

二人「はーい！」

その後、訓練場

ライス「お、やってるか。どれ、少し見物させてもらうかな」

ライスは上から兵士達を見ていた

ベグル「おお！ガク、お前斧の適正があるんだな！俺と特訓するか
？使い方教えてやるよ！」

ガク「本当ですか、ベグルさん！斧は自信なかったんです。ぜひお願いします！」

バン「くっそー！ガクに何でもかかとうの適正無いんだよ！俺も一緒に教えてやりたいのに。俺のかわいい後輩が皆に取られていく……」

ロベルト「うるさいぞ、バン。お前は周り全員を纏める役目なんだからしっかりしろよな」

ギバ「なら、バン。俺と槍の稽古しようぜ」

バン「おお、ギバ！いいな、それ！やるやる！」

ガザル「あれでいいのか、兵士長つてのは」

マーズ「バンは馬鹿だから思ったようにしか出来ないさ。だからリース將軍も各武器ごとに分けたんだろ。一人じゃあ崩壊するからな」

リース「……。ハア、たくっ！バンのやつ、少しは纏めてるかと思ったがやっぱり他の皆に頼ってやがる。仕方ないやつだよ、本当

に」

ラースも少し苦笑いしている

その後

バン「よし、訓練は終わりだ！各自練習したかったら残れよ！それと今日は俺の愛する妻、メグからお前達にプレゼントだ！今日はバレンタインだからな！」

俺はメグから愛情がこもったチョコレートを貰ったが、お前達はどうせ一つも貰えないだろうからメグがお情けで作ってくれたぞ！ありがたーく食えよ！」

バンはたくさんチョコレートを箱に入れて持ってきた

ガク「え!?!いいんですか、バンさん！ありがとうございます!!」

バン「おう、ガク。メグの作ったチョコは美味しいぞ！」

ロベルト「おい、お前ら。わかっているな？」

ダバン「言われなくても皆、心は一緒だぜ」

ギバ「どうやらあの馬鹿は調子に乗ってるな」

マーズ「いつちよやってやろうぜ」

全員がバンに近づいていく

バン「ん？な、何だよ、お前ら」

全員「ぶっ殺す!!バン!!!」

バン「うわああああ!!な、何しやがる、痛え、痛え!やめろ!!」

数分後

バン「ゴフツ……」

バンはボロボロになり、動かなくなった

ベグル「へっ!馬鹿なくせに調子乗りやがって!」

ガザル「いい気味だな。まあ、チョコレートは貰っていこう」

ラーズ「よお、ずっと見てたぜ」

ラーズが下にやってきた

ロベルト「あ!ラーズ將軍!す、すみません、騒がしくして」

ラーズ「ハハ、気にすんな。仲良くしてて何よりだな。この馬鹿には疲れるんじゃないか？まあ、お前達も全員頼りにしている。疲れなように頑張ってくれよな」

ギバ「ありがとうございます、ラーズ將軍！」

ガク「あ、あのー、バンさん？大丈夫ですか？生きてますか？」

ダバン「ガク、そいつは放っておけ。医療室でザオラル使ってもらえばまたうるさくなる。心配いらねえよ」

マーズ「あ、ラーズ將軍もメグさんからのチョコレート貰いますか？まだ余ってますよ」

ラーズ「お、そうなのか。それなら一つ貰うとするか。後でバンとメグにはお礼言っとくか」

その後、大広間

ベロニカとセーニヤとシルビアがやってきた

シルビア「ラーズちゃん！ハッピーバレンタインよー！」

ラーズ「お、おお。シルビア、来てくれたのか。ベロニカとセーニヤまで」

セーニャ「ラーズ様、ハッピーバレンタインですわ」

ベロニカ「折角だからラーズにも作ったわよ。ありがたく食べなさいよ」

三人からチョコレートを貰った

ラーズ「お？いいのか？やったぜ！ありがとな、三人とも」

シルビア「どういたしまして、三人で作ったの。グレイグはどこにいるかしら？」

ラーズ「グレイグなら自分の部屋にいるぜ。場所はわかるよな？」

ベロニカ「ええ、大丈夫よ。それじゃあ渡しに行きましょう」

セーニャ「それではラーズ様、失礼します」

ラーズ「まさかチョコレートを渡すためにきたのか。バレンタインとか言ってたな。よくわからない風習だ。だが、食い物を貰えるのは素晴らしいな。どうせなら城下町にも行ってみるか！メグにもお礼言に行かなきゃだしな」

レースは少し楽しみにしながら城下町へ行った

チョコレート2

デルカダール城下町

町はいつもよりも人が多く賑わっていた。甘い香りもどこからかしている

ラース「何だか人がいつもより多いな。カップルも増えているな。どういう関係だ？」

お菓子屋

女性「いらっしやいませ。あ！ラース様！お疲れ様です」

ラース「よお、何だか店の雰囲気変わったか？」

ラースは店を見渡しながら言った

女性「あら？知らないのですか？今日はバレンタインです！女性が意中の男性に想いを込めたチョコレートを贈る。そんなロマンチックな日なんですよ」

ラース「それは知っているのだが、店までそのために変えたのか？」

女性「もちろんです！可愛らしくしてみました。この時期はチョコレートもよく売れるんです！それに最近はお友チョコとも言っていて、女性同士、男性同士でチョコレートを贈る人も増えてるんですよ！」

ラース「ほう、そうだったのか。それは知らなかったな」

女性「実はラース様にはいつもお世話になってるので、私からチョコレートのプレゼントです！受け取ってください！あ！マルティナ様がいらっしやるのは知ってるので、本命なんかじゃありませんよ！」

ラース「お、おう。ありがたく貰うぜ。ありがとな」

女性「はい！お店に来た方にプレゼント用のチョコレートもあるのでこちらも食べてみてください。それではごゆっくり」

ラース「なるほど、この容器の中のやつ的事か。しかしそんなに知名度が高いのか、バレンタインというのは」

広場

女性「あ！ラース様！こんにちは！あの、これ受け取ってください！」

ラース「お、おう。ありがとな、えっとハッピーバレンタイン？」

女性「ふふ、ラース様それは渡す側が言うんですよ。ハッピーバレンタインです。チョコレートじゃなくてクッキーですけど食べてく

ださい」

ライス「あ、そうなのか。恥ずかしい事をしたな。ありがとう。チョコレートじゃなくてもいいんだな」

女の子「ライス様ー私からもあげるー。昨日ママと作ったの」

ライス「お、それは大事に食べないとな。美味そうじゃないか、よく作られてるな」

女性「私もハッピーバレンタインです！」

女性「私もライス様に食べて欲しくて！」

ライス「ま、待て。皆から受け取るから順番にな！」

ライスの周りには大勢の人が集まり始めた

その後、カフェ

メグ「いらっしやいませ！つて、ライス様！大丈夫ですか!?!」

ライス「多すぎだろ。こりゃあ夕飯前に食ったら飯が食えなくなる」

ラーズは腕に持ちきれない程の量のチョコレートを持っていた

メグ「あの、カゴに入れてどうぞ」

ラーズ「ありがとな、メグ。あ、バンから皆宛のチョコレート俺も貰ったぜ。メグが作ってくれたんだってな。兵士達の皆も喜んでたぞ。ありがとな」

メグ「いえ、気になさらないでください。バンのために作った余りなので。それより私、ラーズ様宛にチョコレート別に作っちゃったんです。でもそんなにあるなら渡せないですね」

ラーズ「え!?!いや、貰うぞ?俺用なら貰わないわけにはいかないかな。この大量のやつは何とかするから気にしないでくれ」

メグ「それでは、ハッピーバレンタインです。それとラーズ様、その量だと一月後大変じゃないですか?」

ラーズ「ん?何かあるのか?」

メグ「あら?..ご存知ないですか?バレンタインは女性が男性にチョコレートを贈る日ですけど、貰った男性は一月後の同じ日に贈った女性にお返しをするホワイトデーというものがあるんですよ」

ラース「な!?何だって!!?」

メグ「あ……。私はお返しはいらないますよ。バンから貰えるので」

ラース「チョコレートじゃないとダメなのか？俺、お菓子作りはあまり得意じゃないんだが」

メグ「いえ、別にチョコレートじゃないとダメではないですよ。物だったり花束だったり、人によって様々ですよ」

ラース「な、なるほど。しかし、この量は確かに大変な事になるな。教えてくれてありがとな。メグにもお返しを考えておくれ。折角くれたんだからな」

メグ「わかりました。ですが、無理はしないでくださいね」

ラース「ああ、ありがとな」

その後、マルティナ親子の部屋

ラース「ただいまー」

マルティナ「あらお帰りなさい、ラーズ。って、何その量！」

部屋に戻るとマルティナがベロニカ達と話していた

ラーズ「食い物が貰える日だと浮かれて町にいったらこれだけ。流石にまずいな。ゆっくり食べていくとしよう」

マルティナ「そ、そうした方がいいわ。(嘘……。まさかラーズがこんなに貰うなんて。これじゃあ私、自信無くなっちゃうわね)」

ベロニカ「あんた貰いすぎよ。断つてもよかつたんじゃないの？」

ラーズ「人からの好意を無碍にできるか！」

セーニヤ「流石ラーズ様ですわ。お優しいのですね」

シルビア「でもラーズちゃん。そんなに貰うとホワイトデーに地獄を見るんじゃないかしら？」

ラーズ「そうなんだよ。どうしたもんかな」

マルティナ「ホワイトデー？何かしら？」

ペロニカ「あら、マルティナさんは知らなかったのね」

セーニヤ「ホワイトデーというのは、バレンタインにチョコレートを買った男性がその女性にお返しをする日ですわ。丁度一月後の同じ日なんですよ」

シルビア「だからラースちゃんはこのチョコレート山の数だけお返しをしないといけないのよ」

マルティナ「ええ!?そんな日があるの!?!」

ペロニカ「まあこだわってる人は少ないと思うけど、私はラースからお返しとしてダーハルーネで最近出た服を買ってもらおうわ!」

ラース「おいおい、まさか指定もありなのかよ」

シルビア「そんな事ないけど、ほしい物をプレゼントした方がいいと思うわ」

セーニヤ「ラース様、私は無くて構いませんわ。どうか気になさらないでください」

ラース「いや、お返しは絶対全員にする。貰ったら返すのは当然だ。」

そんなのも出来ないなんてクズみたいじゃないか」

マルティナ「うふふ、素敵ねラース」

夕方、バルコニー

マルティナは一人で考え事をしていた

マルティナ「ハア……（どうしましょう。折角作ったけど何だか申し訳なくなってきたわ。あんなにあるのに更に増やすなんて。しかもお返しの量まで増やしちゃう）」

シルビア「お隣失礼してもいいでしょうか？王女様？」

マルティナ「え？何だ、シルビアじゃない。誰かと思ったわ」

シルビア「あら、ごめんなさい。何かお悩みのようなね。アタシに相談してみないかしら？」

マルティナ「わかったわ。実は、私も昨日ラースや皆にチョコレートを作ったの。ラースには特別頑張ったんだけど、何て言って渡したらいいかわからなくて後回しにしていたの。」

朝の時に父様やマルス達の分はあげただけど、その後渡さない

でいたらまさかあんなにレースが貰ってくるなんて。あれだけあるのに更に増やしたらレースには申し訳ないわ。

お返しなんて興味ないけど、レースの事だから絶対に渡してくるわ。たくさんあるんだから私一人にそんな手間かけさせたくないの。シルビア、チョコレート食べてくれないかしら？」

シルビア「なるほどね。マルティナちゃん、残念だけどそれは受け取れないわ。それはあなたの大切な想いがこもったチョコレートじゃない。そんな大切な物はレースちゃん以外ふさわしくないわ。

それにマルティナちゃん。いくらレースちゃんがたくさん貰ってきていたって、レースちゃんの顔は満足してなかったわ。きつとマルティナちゃんからのチョコレートを待ってるのよ。

何たって愛している奥さんからのチョコレートよ？それさえあればレースちゃんはきつと満足するわ。あれだけあったって、マルティナちゃんからのチョコレートが一つも無いならレースちゃんは困るのよ。

レースちゃんはマルティナちゃんからのチョコレートを迷惑に感じて絶対に思わないわ。絶対よ。これは騎士に誓うわ。どうやって伝えるかよりも、その作ってくれた想いが大切なの。

マルティナちゃん、勇気を出して渡してみましよう？」

シルビアはマルティナの肩に手を置いて優しく微笑んだ

マルティナ「シルビア……。ふふ、ありがとう。私、頑張ってみるわね」

シルビア「絶対いい結果になるわよ」

チョコレート3

その頃、バンの部屋

部屋ではラースとバンとダバンが話していた

ラース「バン、調子に乗るからそうやってボコボコにされるんだからな」

バン「だって俺はメグから貰えて嬉しかったんですよ。少しくらい自慢したっていいじゃないですか」

ダバン「それをするなって言ってるんだよ。そういう所直さないと、お前はずっと馬鹿呼ばわりだぞ」

バン「えー。悔しいなら皆だつて恋人くらい見つけろよな」

ダバン「うぜえ。もう一回殴つてやろうか」

ラース「あーあ、メグはバンにチョコレートくれたのに何でマルティナは俺の分だけ用意してないんだよ。流石に悲しいぞ」

バン「マルティナ様らしくないですよ。普段だったら絶対に渡しそうなんですけど」

ダバン「もしかして本当は用意してるんじゃないですか？ マルティナ様にはチョコレートが用意されてるか聞いたんですか？」

ラース「いや、聞いてないな。ただ俺には特に何もなし、普段通りだから本当に用意してない気がするんだ」

バン「思い切ってマルティナ様にチョコレートください！ってお願いしたらどうですか？」

ラース「うーん、それだと俺がチョコレートに飢えてるみたいじゃないか。まあ食い物としては好きだが、町の人から大量に貰ったからな」

バン「ダバン、師匠のこの自然と人気者アピールのこれにはイラつかないのか？」

ダバン「別にラース將軍が人気なのはずっと前からだろ。基本優しいし、人当たりもいい。貰えて当然だ。俺はバンみたいな馬鹿が貰えてる事にイラついてるんだ」

バン「師匠！聞きましたか!?俺の扱いが皆して酷いんです！兵士長に対する扱いじゃないですよね!？」

ラーズ「それならバンはもつと兵士長らしく指導しろ。今日見てたが、マーズ達に頼りっぱなしだったじゃないか。出来ない所や足りない所を補うのはいい事だが、頼りきったらダメだろうが」

バン「うぐっ……」

ダバン「正論だな。バン、わかったら明日はもう少し頑張れよな。見習い達からもバンさんは少し間抜けだって言われてたぞ」

バン「えー!? それマジかよ、ダバン!! 俺、明日から頑張る!!」

ラーズ「舐められるんじゃないぞ、バン。お前は戦いでは強いんだからな。ちゃんと言葉にして今まで俺が教えた事を伝えるんだ。それじゃあ俺は部屋に戻るぜ」

バン「あ、師匠! もし本当にマルティナ様からチョコレート貰えなかったら、俺の方が妻に愛されてるって事でいいですか?」

ラーズ「喋れなくしてやろうか?」

ラーズはバンを睨む

バン「あ! いえいえ、何でもありませんよ! へへ、気にしないでくださいね!」

ダバン「ハア、懲りないやつだよ、お前は」

マルティナ親子の部屋

ラーズが部屋に戻るとマルティナが待っていた

ラーズ「おお、マルティナ。子ども達は？」

マルティナ「マルス達はグレイグと訓練してるみたいよ」

ラーズ「なるほど。なあ、マルティナ。あの……その、何というか……今日ってバレンタインだよな？俺の分つてのは……？」

ラーズは少し言いにくそうにしている

マルティナ「ごめんなさい、ラーズ。ずっと渡そうと思っていたんだけど、何て言って渡したらいいかわからなくて困ってたの。」

だからその……はい。ラーズの方だけ特別なの。一番頑張ったやつよ。町の人達から貰ったチョコレートの方が美味しいと思うけど、よかったら食べてくれると嬉しいわ」

マルティナは少し照れながら箱を渡した

ラーズ「……」

マルティナ「ラ、ラーズ？どうしたの？」

ラース「ハアアア」

ラースはその場に座り込んだ

マルティナ「え？急に座り込んでどうしたのよ」

ラース「よかった……。俺、まさかマルティナから貰えないのかと思っただけで不安だったんだぜ。朝の時からずっとな。ありがとう、マルティナ。まさかそんな事で悩んでいたとはな。言葉なんかいらぬによ」

マルティナ「ごめんなさい、でも折角のプレゼントなもの。何か一言言いたかったのよ」

ラース「それならこの一言だけでいいよ。ラースの事が好きですつてな」

マルティナ「え、ええ!?……わかったわよ。コホン、ラースの事が好きよ。私の気持ち受け取って」

ラース「もちろんだ、マルティナ!!俺も大好きだぞ!!」

ラースは起き上がり、マルティナに抱きついた

マルティナ「キヤツ！急に抱きつかないでよ」

ラース「いやー、こんなに嬉しいチョコレートは生まれて初めてだからな。記念に飾ってもいいか？」

マルティナ「え!?!ダメよ、食べ物なんだから食べてちょうだい。味の感想も知りたいわ」

ラース「えー、でもこのチョコレートは世界に一つしかないんだぜ？勿体ないぜ」

マルティナ「町の人達からのチョコレートはさつき少し食べたのに、これはそんなに大事にするの？あまり変わらないわよ」

ラース「わかってないなー、マルティナ。これはマルティナが俺のために作ってくれたんだ。わぎわぎ」早起き」して頑張つてな。それに、愛する妻からのチョコレートだ。大事にしない理由なんてどこにもないぜ」

マルティナ「あ、ありがとう。つて、早起きした事気付いてたのね。でも！ちゃんと食べてね！長持ちはあまりしないんだから」

ラース「ああ、勿論だ。このチョコレートは俺の独り占めだ！」

ラーズは笑顔で喜んでいる

部屋の前では

シルビア「ウフフ、やっぱり大成功ね。幸せそうで何よりだわ。さて、アタシも帰ろうっと！」

シルビアが聞き耳を立てており、スキップをしながら帰っていった

その夜

ラーズ「ええつとこのチョコレートはビターで苦味もあつて美味しかった。このクッキーは中にオレンジが入っていて食べやすかった……」

ラーズは紙に感想を書いている

横には食べ終わったチョコレートやクッキーの残骸が積まれている

マルティナ「まだ食べてるの？そろそろやめた方がいいわ。明日に持ち越ししましょう」

ルナ「お父さんいいなー。あんなにたくさんあつて」

マルス「僕にも分けてよー」

ラーズ「へへ、悪いなマルス。これは俺への物だからな。分けてや

るわけにはいかないんだ」

マルティナ「わざわざ感想も考えてるのね。全部にそうやって考えるの？」

ラーズ「おう。気持ちにはまず言葉でお礼を言いたいからな。物はまた一月後だ。どうしたものかな。まあ、今日はこの辺にしておくか」

マルティナ「それじゃあ寝ましょう。また明日食べてちょうだい」

ラーズ「あと二日はかかるかな。甘いものはもうしばらくは控えな
いとな。おやすみ、マルティナ、マルス、ルナ」

マルティナ「おやすみなさい、ラーズ、マルス、ルナ」

マルス「父さん、母さん、おやすみ」

ルナ「お父さん、お母さん、おやすみなさい」

お返しを

一月後、マルティナ親子の部屋

バタン！

イレブン「助けて、ラース！明日のホワイトデーで町の皆にお返しなきやいけないんだけど、僕どうしたらいいかわかんないよ！」

イレブンが困り果てた様子で入ってきた

カミュ「やっぱりイレブンも来たな」

ロウ「わしもいるぞ。まあわしはそこまで困ってはおらんがの」

グレイグ「皆困っている事は同じという事か」

バン「勇者様でもこういう事には困るんですね」

部屋の中には既にカミュとグレイグとバンもいた

ラース「何で皆して俺に頼ってくるんだよ。俺は便利屋じゃねえぞ」

バン「師匠は料理できるじゃないですか。それで作ればすぐで楽ですよ。俺達は料理すらできないんです」

グレイグ「その通りだ、バン。俺達はお前のような器用さは持っていないのだ」

イレブン「僕も料理はそこまで得意じゃないから」

ラーズ「そんな事で誇るな。お菓子作りは俺も苦手だ。カミュはどうなんだよ」

カミュ「俺はそもそも甘い物がそこまで好きじゃねえ。だからやった事すらねえよ」

ロウ「わしもお菓子を作った事はないのう。カミュはどうして困っているのじゃ？甘い物が好きでないなら受け取らんのではないかの？」

カミュ「ベロニカ達から催促されたんだよ。宝石だのネックレスだのつてな。シルビアのおっさんなんてシヨコラとか言つてやがった。マヤからも送られてきたし、どうしたらいいかわからねえんだ」

バン「え？皆さんってたくさん貰うのが普通なんですか？」

グレイグ「安心しろ、バン。俺も少ないからな。宝石やネックレスはイレブンの鍛冶で作ってもらえばいいのではないか？」

イレブン「別に構わないけど、それって僕からのお返しにならない？僕もベロニカから催促されてるもん」

ラース「あの魔法使いはどれだけ欲張りなんだか。仲間達皆から貰う気だな」

ロウ「ふおっふおっ、ベロニカらしいのう。ラースはどれくらい貰ったんじゃ？」

バン「師匠は凄かったですよね。カゴ一杯だったじゃないですか」

グレイグ「あれを全部一人で食べたのか？」

ラース「ああ、三日かかったぜ。町の人達には俺からのクッキーで我慢してもらおうと思ってる。マルティナやマヤ、ベロニカ達には別の物だけだな」

イレブン「手作りクッキー!?ラース、それ僕もやる！僕も町の人達からたくさん貰って困ってたの！一緒に作ろう!!」

ロウ「わしもやろうかの。イレブンが返して、わしが返さないのは変じゃからの」

グレイグ「なら皆でやろうではないか。ラース、作り方を教えてほしい」

カミュ「まあ無難にいった方がいいよな。俺もやるぜ」

バン「師匠、お手伝いします！」

ラース「想像以上に増えたな。むさ苦しいったらありやしないぜ。なら、材料もたくさん必要になるな。まず買ってきて欲しいものをメモに書くから、買い物頼んだ」

その後、キッチン

コック「ラース様がここに来るのも久しぶりですが、グレイグ様までいらつしやるなんて私、初めてお目にかかりました。勇者様方も明日のホワイトデーにお返しをするんですね」

ラース「急に悪いな。後片付けや掃除も全部俺達がやるから、道具だけ貸してくれ」

コック「はい。ラース様はいつも綺麗に使ってくださいって私も嬉しい限りです。それでは型などあるだけ置いておきますね。では、頑張ってください」

バン「何だかいろいろ買いましたけど、こんなに使うんですか？」

ライス「まあ何百枚と作るからな。材料も必然的に多くなる。まずはこのバターを全部小さな四角形に切っていくぞ。俺がやってみせるな。このくらいの大きさだ」

カミュ「結構小さいな。まあそれくらいなら俺もすぐできるぜ」

ロウ「包丁を握るのは久しぶりじゃのう。キャンプでもあまり多くは握らなかつたからのう」

グレイグ「む、これくらいか？」

ライス「おお、それくらいで大丈夫だ。じいさんは終わったらナッツと粉と砂糖を合わせたから、ヒヤドで少しだけ凍らせてくれ」

バン「え？魔法なんて使って大丈夫ですか？」

ライス「あまり褒められた事ではないが時短になるなら俺は使うぞ。慣れて調整できれば一応できるからな。バターはそのボウルに全部入れてくれ。それも後で俺が冷やす」

その後

ライス「それじゃあ生地ができたからこの型で抜いていくぞ。好きなものを選んでどんどんやっていってくれ」

バン「スライム型とかドラキー型とかたくさんありますね。俺はおきづちにしよう」

グレイグ「これは子どもも喜ぶな。マルス達にも作ってやるか」

イレブン「あれ？うまく型から離れてくれないよ」

ライス「あまり力を入れすぎるとすぐに崩れるからな。型を回しながらゆっくり押していけば離れていくぞ。落としたり少し形を整えて大丈夫だ。だがあまりベタベタ触るとなよ？」

ロウ「なるほどのう。これは慣れてくると楽しいわい」

カミュ「全部同じ味なのか？」

ライス「いや違うぞ。これが終わったら今度はもう一度別の生地です、別の味も作るんだ。たくさんあった方が楽しいだろ？チョコとイチゴと抹茶とレモンだな。色も鮮やかにしようぜ」

グレイグ「ぎつきすぎいい量の生地を作ったのはそのためか。だが確かに沢山の味があれば飽きないな」

バン「もしかしてこれ、慣れてくると苦行になりませんか？後何個ぐらい作りますか？」

ラース「各味で150個ぐらいか。一人2〜30個作ってくれ」

イレブン「あ、確かに少し大変かも。まあ皆のためだもんね。頑張ろう」

その後

ラース「よし、全部できたな」

カミュ「こりやあすげえ。綺麗だな」

バン「レモンの皮だったり砂糖だったり付いてるのもいいですよ。ね。これ、このままでも美味しそうですよ」

ラース「これから全部焼くんだよ。オーブンだけだと時間がかかるから、俺がメラで調整しながらやっていこう」

グレイグ「魔法をこんな所で多用するとは。他の料理でもそうして

いるのか？」

ラース「流石に普通はそんな事しないさ。今だけだ。それとカミュ。シルビアからシヨコラを要求されてるんだろ？俺はこれからシヨコラを作るが、やるか？」

カミュ「いいのか、兄貴？なら頼らせてもらうぜ」

ラース「おう、俺もシルビア達やマヤにシヨコラをあげるからな」

イレブン「マルティナにはどうするの？」

ラース「へへ、マルティナにはとっておきをやるんだよ。まあ、初めて作るんだけどな」

ロウ「ほほう、それは気になるのう」

数分後

クッキーが焼き上がった

バン「わあ、すごくいい匂いです。美味しそうに焼き上がりましたね」

ラーズ「思ってたより温度調整難しかったな。次からはやめよう」

グレイグ「ほう。模様もすっかりと残るのだな。これなら姫様も喜んでくれるだろう」

カミュ「後は詰めるだけか？」

ラーズ「おう。好きなだけ詰めていけよ。まあ味が偏らないようにな。それが終わったら持ち帰っていいぞ。カミュはまだ続けるから残ってくれ」

カミュ「おう」

イレブン「ありがとう、ラーズ。おかげで何とかかなりそうだよ！」

ロウ「初めてじゃったが、随分楽しかったのう」

バン「流石師匠です！メグにも喜んでもらえます！」

グレイグ「最初は菓子作りは得意ではないと言っていたが、そんな事なかったではないか。すごくいい出来だ。もしよければ今度王とのお茶会でも作ってくれ」

ラース「おいおい、王様に出せるような品物ではねえぞ。喜んでくれそうだが、恥ずかしいからやめてくれ」

ホワイトデー

次の日、朝食時

デルカダール王「マルティナよ、バレンタインでは大変美味しいチョコレートをありがとう。これはわしからのお礼じゃ。ダーハルーネの新作のケーキじゃ。ぜひ食べてくれ。マルス達にもあるぞ」

マルティナ「お父様、ありがとうございます！実はこのケーキ気になってたんです」

グレイグ「姫様、私からもお礼です。昨日ラーズ達とクッキーを作りました。これは私が作った分です。美味しかったので、姫様の口にも合うと思われます。マルス達にもやろう」

マルティナ「グ、グレイグまで!?昨日何だか姿を見ないと思ったらそんな事してたのね。ありがとう、とっても綺麗で可愛いわね」

ラーズ「マルティナ、俺からはまだだ。とっておきを用意するから待っていてくれよな。絶対驚くぜ」

マルティナ「うふふ、ラーズはそうしてくると思ったわ。楽しみにしてるわね」

マルス「父さん！たくさん貰った！」

ルナ「私もー！どっちも美味しそう！」

ライス「俺からの分も後であるからな。ご飯の後に食べるんだぞ」

二人「はーい！」

その後、訓練場

ライス「皆、お疲れ様だ。頑張ってるお前達にプレゼントだ。食えない奴がいたら悪いが、チーズケーキを作ったんだ。味はわからないがぜひ食ってみてくれ」

バン「はい！貰います！！師匠、いつの間に作ってたんですか？昨日のカミュさんとの後ですか？」

ライス「ああ、そうだ。急いでたから形は気にしないでくれ」

ガク「ライス將軍って料理できるんですね！カッコイイなー！」

ロベルト「美味しい！！ライス將軍、めっちゃくちゃ美味しいですよ！」

ダバン「本当だ！結構サツパリしてるな！訓練後でも食いやすい

！」

マーズ「俺、ラーズ將軍の手料理初めて食べました！美味しいです！」

ラーズ「気に入ってくれて何よりだな。全部食ってくれていいからな。じゃあ、俺は町の人にも配ってくるからまた後でな」

バン「あ！師匠！クッキーありがとうございます！メグも大喜びしてました！」

ラーズ「おう！そりゃあよかつたな、バン！今度からはお前が作り方を教えてやれ！」

城下町 広場

ラーズ「よし、皆聞いてくれ！先月はチョコレートやクッキーをくれてありがとな！感想は後日言ったが、今日は俺からのお返しとしてクッキーを作ってきた。たくさん作ったから他の人も貰って行っていいぞ！欲しい人は並んでくれ！」

女性「ええ？！いいんですか、ラーズ様！感想だけで嬉しかったのに、わざわざお返しなんて……。ありがたくいただきますね」

ラーズ「おう。美味いかはわからないが毒ではないから大丈夫だ

ぞ」

その後、老若男女問わず長蛇の列となっていた

お菓子屋

ラース「よお、お疲れさん」

女性「あ！ラース様、いらっしやいませ！」

ラース「先月はチョコレートありがとな。感想は前に言ったが、今日はホワイトデーだからな。俺からのお返しだ。クッキーを作ったんだ。よかつたら食ってくれ」

女性「え!?そ、そんな。わざわざすみません!しかも手作りなんですか!?嬉しいです!わあ、とつても可愛い!一つ食べてもいいですか?」

ラース「おう。感想聞かせてくれ」

女性「……!この黄色いスライムナイトはレモン味なんですわ!すつごく爽やかです!レモンの皮がすごくいい味ですよ!しかも、レモン以外も何か入ってますわね」

ラース「さ、流石お菓子屋をやってるだけあるな。すぐに見抜いて

きた。レモン以外にもライムの汁を入れたんだ。少しだけなんだけどな。変だったか？」

女性「いえ全く！寧ろ、とつてもいいアイデアですよ。なるほど、爽やかにさせるのにこういう方法もあるんですね。勉強になります！ライス様って料理がお得意なんですね！」

ライス「喜んでもらえてよかったぜ。菓子作りはそこまで得意じゃないんだがな。それでも褒めてもらえるとやっぱり嬉しくなるな。ありがとうよ」

カフェ

メグ「いらつしやいませ！あ、ライス様！バンから聞きましたよ。あのクッキーはライス様や勇者様達と作ったんだって。可愛いしいし、カラフルで味もどれも美味しかったです！ありがとうございます！」

ライス「ハハ、気に入ってくれたならよかったぜ。バンがクッキーをメグに渡すのはわかってたからな。俺からは別のお返しを用意したんだ。シヨコラを作ったんだ。よかったら食べてくれ」

メグ「ええ!?いいのですか！私、大した物あげられなかったのに、こんな立派なものをくださるなんて」

ライス「ああ、勿論だ。バンにはいつも世話になってるからな。そ

のお礼とも取ってくれ。作り慣れてないから自信は無いんだがな」

メグ「ふふつ、ラーズ様だったら。パンを世話しているの間違いじゃないですか？では、少しだけ貰いますね……。ん。甘くて美味しいです！これなら私のお店でも出せそうですよ！」

ラーズ「いや、それは恥ずかしいからやめてくれ。メグが作った方が絶対に美味しくなるからな。それじゃあ俺はこれで」

メグ「はい！本当にありがとうございます！パンにも自慢しますね！」

マルティナ親子の部屋

ラーズが部屋に戻ると既にベロニカ達がラーズを待っていた

ベロニカ「ラーズ！帰ってきたわね！さあ、ダーハル―ネに行くわ！私に服を買ってもらおうわよ！」

ラーズ「少し待ってくれよ、ベロニカ。ほら、三人ともにやるよ。ベロニカにはシヨコラ。セーニヤとシルビアにはチーズケーキだ。俺からのバレンタインのお返しだ。食べてくれ」

シルビア「あら!?いいの、ラーズちゃん?ありがとうございます」

セーニヤ「私までよろしいのですか？ありがとうございます！？」

ベロニカ「まさかお菓子までくれるなんて。ありがとね、ラーズ。でも私だけ何でシヨコラなの？」

ラーズ「カミュからシルビアにシヨコラが来ただろ？あれは俺と作ったんだ。だからシルビアには代わりにチーズケーキ。」

ベロニカ達は姉妹なのに二人で同じのを与えてもつまらないかと思つて、セーニヤにチーズケーキを渡したんだ。二人で分けて食べてくれ」

セーニヤ「そんな心遣いまでしてくださっていたのですね！」

ベロニカ「ふふ、嬉しい事してくれるわね、ラーズ。ありがとうございます！」

シルビア「アタシもどっちも味わえるわ。楽しみね〜」

ラーズ「それじゃあダーハルーネに行くか。今日はお祭りみたいになつてるんじゃないか？」

シルビア「ええ、バレンタインもそうだったけど、ホワイトデーもすごいわよ。さあ、シヨッピングよ！」

ホワイトデー2

ダーハルレーネの町

ラース「おお、本当だ。すげえ賑わってるな」

町には大勢の男性や女性がお菓子屋に駆け寄っており、行列をなしていた。甘い香りもいつもよりもはつきりと伝わってくる

ベロニカ「さあ、早速服屋に行くわよ！」

ラース「どうせならシルビアとセーニヤも来いよ。奢るぜ？」

シルビア「アタシは平気よ。あのチーズケーキだけで充分だわ」

セーニヤ「私もついては行きますがお気になさらずに」

ラース「そうか。なら、ショッピングが終わったら俺の用事に付き合ってくれないか？」

ベロニカ「ダーハルレーネに用事なんてあったの？」

ラース「ああ。前にも行ったあのカフェの店長と一緒に、マルティナへのお返しをこれから作るんだ。かなり大きいから人手が欲しくてな」

セーニヤ「まあ！今から作るのですか？間に合いますかね？」

シルビア「なるほど。だからさつきアタシ達にも奢らせようとしたのね。それをお願いを聞いてもらえるように」

ラーズ「まあそういう事だ。予定では間に合うと聞いてるからな。それに、女性から見て俺が贈ろうとしてるお菓子をどう思うか判断してくれると嬉しいんだ。いいか？」

ベロニカ「まあそれくらい構わないわ。ラーズの事だからマルティナさんにビックリしてほしいんでしょ？」

セーニヤ「スイーツの事ならお任せください！」

シルビア「もちろんアタシも手伝うわ！ラーズちゃんの用意しようとしているものも気になるしね」

ラーズ「へへ、ありがとな。ビックリさせたいのもあるが、同時に喜んでもほしいからな。マルティナが驚きながらも笑ってくれるよなものを作るんだ」

その後

ベロニカ「やったわ！この服が欲しかったのよ！ラーズ、ありがとう！」

ラーズ「何だよ、あの値段。ぼったくりかと思ったぜ」

セーニヤ「あの服は高級な生地を使っているので、かなり高くて手が出せなかつたんです」

シルビア「まあ、ベロニカちゃんの笑顔のためと思って。ね？」

ラーズ「ハア、そういう事にしといてやるよ。なら、次はカフェだな」

カフェ

ラーズ「よお、邪魔するぜ」

店長「おお、来たなラーズ。準備は終わってるぜ。って、シルビアさん！それに、ベロニカさんにセーニヤさんも！」

シルビア「久しぶりね、店長ちゃん」

セーニヤ「大食いコンテスト以来ですわね」

ベロニカ「今日はラースに連れられて手伝いにきたの。私達も何を作るのが気になるしね」

ラース「というわけだ。人手は多い事に越した事はないだろ？」

店長「ナイスだ、ラース！お前なんかと二人つきりで作るなんてむさ苦しくて考えたくなかったんだ。女性の方がいれば捗るぜ！しかもシルビアさんまで来てくれたとありゃあ、俺はもう大興奮だぜ！」

シンジは大喜びしている

ラース「うるせえよ。なんかで悪かったな。早速始めるぞ」

その後

ベロニカ「店長さん、こっちのクリームはこのくらいでいいかしら？」

店長「ああ、それで大丈夫だ！ありがとな」

シルビア「果物も言われたサイズに切ったわよ」

店長「おお！想像よりずっと綺麗だな！流石シルビアさんだ。ナイフ使いまで美しい！」

ラース「本当に張り切ってるな。俺が贈るものなのに何でそんなに熱が入ってるんだよ」

店長「だってよ、奥さんへのプレゼントなんだろう？パティシエとしてはこの世に一つしかないものを作ってやりたくなるもんだぜ！」

セーニヤ「素敵な心遣いですわ！店長様はとつてもお優しいのですね！」

店長「セーニヤさん、よしてくれよ。照れるぜ」

シンジの顔は少し赤くなっている

ラース「うわ、鼻の下伸ばしやがって。きつたねえ顔だな」

店長「うるせえぞ、ラース!!お前には美女達に囲まれるのが当たり前かもしれないが、俺はこんな事一生にあるか無いかなんだよ!!少しくらい楽しませろ！」

夕方も過ぎた頃

店長「さあ！渾身の出来栄えだ！これで喜ばねえ女性はいないだろ！」

シルビア「キヤーツ！素晴らしいわ!!これは最高ね！」

セーニヤ「夢みたいですね。こんな風なスイーツがあるなんて」

ベロニカ「いいなー、マルティナさん。これは私も絶対欲しいわ。店長さん、売り出してはくれないの？」

店長「悪いな、ベロニカさん。これは今回が初めての試みなんだ。だが、これはいいな。結婚式とかには最高だろ。今度予約でパーティー専用で売り出してみるかな」

ラーズ「本当に最高だな！俺も早くマルティナに見せてやりたいぜ！」

店長「へへ、ラーズ。お前の案が無けりや、これは出来上がらなかつたんだ。さあ！奥さんの元に行きな！そして最高の思いをプレゼントしてやるんだ！」

シルビア「マルティナちゃんも絶対にとびっきりの笑顔をプレゼントしてくれるはずよ！」

セーニヤ「後片付けは私達でやりますわ。ラーズ様は一刻も早くマルティナ様の元に向かってください」

ペロニカ「私達も手伝った事伝えなさいよ！」

ラース「おう！皆、ありがとな!!行ってくるぜ！」

ラースは急いでキメラの翼で戻っていった

店長「さて、あいつも行った事だしシルビアさん達もわざわざあんな奴に付き合ってもらって悪かったな。俺からもお礼するぜ。

実は今日、あるチョコレートの試作品を作っている。いい物ができたから店に出す前に一足先に三人にやるよ。まだ俺以外誰も食べた事ない作品だ。ぜひ食べてみてくれ」

シンジは冷蔵庫からチョコレートを取り出した

セーニヤ「まあ!そんな物よろしいのですか?ありがとうございます!ます！」

シルビア「ええ〜!何これ!?クリスタルみたいに透き通ってるわ!本当にチョコレートなの?」

ペロニカ「あ!本当だ、チョコレートよ!すごい!」

透明なチョコレートに三人は驚いている

店長「へへ、驚いてくれたみたいだな。甘さを出すのに苦労したんだ。俺からのお礼はこんな物しかないが許してくれよな」

セーニヤ「いいえ！これは間違いなく芸術品ですわ!!食べるなんてできません！家に飾りたいくらいです！」

セーニヤはチョコレートを持ち上げ、まるで崇拜しているかのようだ

店長「ハハハ！ありがとな、セーニヤさん。セーニヤさんは毎回嬉しい反応をしてくれるな。パティシエとしての最高の褒め言葉だ。さあ、片付けを始めようぜ」

ホワイトデー3

その頃、デルカダール城 食事部屋

デルカダール王「おお、来たかマルティナ。む？ラースはおらんのか？」

マルティナ「そうなんです。昼過ぎにベロニカ達とダーハル―ネに行ってからまだ帰ってきてないんです」

グレイグ「珍しいな。あのラースが夕食に遅れるなど。明日は槍でも降るのではないか？」

マルス「父さん遅刻だー」

ルナ「お父さんからまだチョコレート貰ってない」

バタン！

その時、急いで扉が開かれた

ラース「ハア、ハア。遅くなって申し訳ございません」

デルカダール王「おお、戻ってきたかラース。今ちようどお主を心配しておった所じゃ」

グレイグ「ん？その手に持っているものは何だ？」

ラーズ「へへ、これを作ってたら遅れてしまつてな。マルティナ、君へのバレンタインのお返しだ。さあ、受け取ってくれ」

ラーズはマルティナの前にあのプレゼントを差し出す

マルティナ「これは、花束？……… あら!?違うわ、これ全部お菓子だわ!!」

ラーズ「驚いてくれたか？マルティナ。これはスイーツブーケ。花びらから葉っぱまで全部お菓子で出来てるんだぜ」

デルカダール王「なんと!?それは凄い!!とてもお菓子とは思えん出来じゃない！」

グレイグ「ここから見てるだけだと花束にしか見えない。こんなに精巧に作られているとは」

ルナ「これ本当にお菓子なの？」

マルズ「あ！甘い匂いだ！クリームの匂いだよ！」

マルズとルナも興味津々に花束を見ている

マルティナ「とっても素敵だわ！でも、私一人じゃ食べきれないわ」

ラーズ「大丈夫だ、マルティナ。これは皆で食べるものだからな。マルス達も王様もグレイグも皆で分け合って食べよう。きっと最高に美味しくなるぞ！」

マルティナ「最高じゃない、ラーズ！本当にありがとう！！期待以上の物だわ！」

ラーズ「いい笑顔だ、マルティナ！その顔が見たかったんだ。さあ、夕食にしようぜ！これはその後だな」

デルカダール王「わしらも食べていいとは。ラーズは優しいのう」

マルス「僕すっごく楽しみー！」

ルナ「ルナもー！」

グレイグ「流石だ、ラーズ。サプライズと同時に笑顔まで呼び込むとは」

夕食後

ラース「さあ、マルティナ。最初は君から食べてくれ。花を摘むとそのまま食べられるようになってるぜ」

マルティナ「いただきます。あら、この花は桃が入ってるわ!…:美味い!中にクリームも入っててパフェみたいね!」

ラース「これはマルティナやマルス達も知ってるあのダーハル―ネにあるカフェの店長とベロニカ、セーニヤ、シルビアの五人で作ったんだ」

マルティナ「そうだったの。後でお礼言わないと。最高のプレゼントだったわって」

ルナ「美味しい!全部お菓子だ」

マルス「茎がチョコレートだよ!」

マルス達も喜んで食べている

デルカダール王「これは確かに近くで見ないとお菓子の判断ができません。いい腕をしているのだな、これを作った店長とやらは」

グレイグ「話には聞いていたが凄いな。これだけの技術を持ちながら味も最高を保つ。流石ダーハル―ネのパティシエだ。」

ラース「マルティナ、どんどん食べてくれよ」

マルティナ「もちろんよ。手が止まらないもの」

その夜、マルティナ親子の部屋

マルス「花束美味しかったー」

ラース「ハハハ、マルス。間違っていないが何かおかしいぞ」

ルナ「お父さん、また作ってきてね」

マルティナ「確かにまた食べたいわね。今度はパーティーの時とかにぜひ用意しましょう。きつと盛り上がる事間違いなしよ」

ラース「いいな、それ。今度王様にも提案してみよう」

マルティナ「最高のホワイトデーだったわ。来年もやりましょう」

ラース「そうだな。俺は来年のバレンタインに町に行くのは控えた方がよさそうだな」

マルティナ「ラースの事だからまた絶対に町に行くわよ。私想像で
きるもの」

ラース「そう言われると俺もそうなる気がしてきたな。だが、断る
事も考えないとまたつらい事になるからな」

ラースは苦笑いしている

マルス「来年は僕も作る！」

ルナ「ルナもマルスやお父さんに作るー！」

マルスとルナも来年の話にはしゃいでいる

マルティナ「そうね。今度は家族皆で作しましょう。さあおやす
み、マルス、ルナ、ラース」

ラース「おやすみ、マルティナ、マルス、ルナ」

二人「おやすみなさーい」

ホワイトデー イレブンver

ユグノア王国 広場

イレブンとロウは広場でラーズ達と作ったクッキーを配っていた

イレブン「えつとね、今日はホワイトデーらしいのでバレンタインにチョコレートをくれた人にお返しとして、クッキーを作ってきました」

女性「イレブン様、ロウ様！いいのですか？ありがとうございます！」

男性「いいなく、俺達もイレブン様達の手作りクッキー食べてみた」

ロウ「よかったら他の皆も食べてくれ。わしらには美味しかったが、皆の口に合うかわからないがの。毒でない事は確かじゃ。たくさんあるんじゃ、欲しい者は並んでくれ」

男性「いいんですか!?やったー!」

その後商店街でも配り、百個ほどあったクッキーは全部なくなつた

ユグノア城

ロウ「ふおっふおっ、大人気じゃったな。皆に喜んでもらえてよ

かったのう」

イレブン「うん！ラースには感謝しなくちやね！それに作るのも楽しかったし、またおじいちゃんもやろう！」

ロウ「孫と二人で作るのもええのう。楽しみにしておくわい」

その時、二人に兵士とメイドが話しかけてきた

兵士「あ、イレブン様！ロウ様！町の人達が噂してましたよ。何でもお手製クッキーを配っていたとか」

ロウ「おお、もう耳にしておったか。伝わるのは早いのう」

メイド「私達の方はありますか？私達も食べてみたいです！」

イレブン「あ……。ごめん、全部配っちゃったよ」

兵士「あ、そうでしたか。それならまあ、仕方ないですよね」

メイド「うう、そうですね。諦めますね」

二人は少し残念そうにしている

イレブン「ごめんね!!少し待ってて。もう一回作るよ!」

ロウ「そうじゃな。ぜひ城の皆にも配らねば。イレブン、昨日の材料は覚えとるな?わしはキッチンに行つて道具の確認をしてくるから買つてきてくれ」

イレブン「任せて、おじいちゃん!」

イレブンはすぐに商店街へ戻つていった

兵士「ありがとうございます!!」

メイド「わざわざすみません!私達も出来る所はお手伝いします!」

二人も顔を明るくして喜んでいる

ロウ「ええんじや、わし達も皆に食べてほしいからのう。それではわしと一緒にキッチンに行こうかの」

その後、キッチン

コック「ロウ様!?一体どうされたのですか?」

ロウ「突然すまんのう。今からわしとイレブンでクッキーを作ろうと思つておつてな。道具があるか確認しに来たのじや」

コック「クッキーですか。それなら必要なものは揃ってますよ。ただ、型がそこまで多くないんですよ。作れて三種類程度しかないんです」

ロウ「ふむ……。なら、少し型を買っておこうかの」

兵士「俺、イレブン様の後追いかけて型の事も伝えますよ!」

ロウ「おお、すまんもう。頼んだぞ」

兵士は大急ぎで出ていった

コック「しかし、どうして突然クッキーを作ろうとしておられるのですか？」

メイド「私達が町の人達からイレブン様達の手作りのクッキーを貰ったと聞いて、私達も食べたいとわがままを言ってしまったらわざわざ作ってくれるそうで」

コック「ほお!そんな事をされていたのですね。今日はホワイトデーですからね。お返しというわけですか。流石イレブン様にロウ様。民達にも優しいですね!」

ロウ「ありがとのお。よければ手伝ってはくれんかの?城の皆に作

るんじや」

コック「お任せください！私もイレブン様達と料理できるなんて嬉しいですよ！」

しばらくしてイレブンが帰ってきた

イレブン「型も何個か買ってきたよ。見て！ドラゴン型！こんなのあるんだね！」

ロウ「ありがとうございます、イレブン。おお、ドラゴン型はラースの所には無かったやつじやな」

コック「作り方はラース様から教わったのですか？」

イレブン「うん！あれ？ラースの事知ってるの？」

メイド「はい。マルティナ様の騎士様ですからね。ラース様は結構有名になってきてますよ。ラース様って料理もできたんですね」

イレブン「そうだよ。ラースって料理も得意なんだ」

ロウ「そうじやな。旅をしていた頃もラースの料理は美味しかったから。クッキーも美味しそうに作れておつてな。簡単でわし達

でもできそうじゃからやってみようと思ったんじゃ」

イレブン「まず冷やしたバターを小さく四角に切るんだよね。おじいちゃんはナッツと粉と砂糖を合わせて」

ロウ「ああ、任せておくれ。冷やすならわしがヒヤドをしよう」

兵士「魔法を料理に使われるんですか!？」

イレブン「あまりやっちゃいけないんだけど、ラーズが時短になるから出来るならやってみてもいいって言うて。あまり言わないでね?」

メイド「ふふ、それでは私達の秘密ですね。これはお守りしなくては」

その後

ロウ「生地はこんな感じじゃったかのう」

コック「はい。これでいいと思われますよ。後は型抜きですね」

イレブン「あ、待ってね。いろんな味にしたいから、他の生地チョコレートとか抹茶を混ぜていくね」

メイド「私達も型抜きはやってみたいです。型を少し借りますね」

兵士「俺もやった事ないけど試してみようかな。お、ばくだん岩の型だ。面白そう」

ロウ「わしはスライムつむりにしようかの」

メイド「私はトマトマーレですね」

イレブン「よし！こっちの生地も完成したよー。どんどん型を作つていこう」

一時間後

コック「随分本格的ですね。抹茶を付けたり、チョコやナッツを乗せたりして」

ロウ「ソースは見た目にもこだわっておったからのう。確かにこうすれば味もよくなるし、美味しそうな見た目にもなる。よく考えられておるわい」

イレブン「僕はメラに自信がないからオーブンで焼こうか。昨日みたいに凄い量があるわけじゃないし」

その後、大広間

イレブン「皆ー、ホワイトデーとして今クッキーを作ったんだよ。ぜひ持って行って食べてねー！」

ロウ「できたてじゃぞー」

兵士「何だかイレブン様達、商売してるみたいですよ？」

メイド「でも私達も混ぜてもらってとっても楽しかったですよ。また料理する時は呼んでください」

コック「ハハ、王様達に自分で料理をさせたくはないんだが、まあたまにはいいだろうな」

その後、お城内でもイレブン達の手作りクッキーは大人気となり、すぐに皆の手に渡っていった

イレブン「よかった、全部無くなったよ。僕達でも作れたね」

ロウ「これはええのう。また作ろうと思えるわい。楽しかったぞ、イレブン」

イレブン「僕も楽しかったし、城の皆にも町の皆にも喜んでもらえ

た！嬉しいよ！あ！イシの村の皆にも持っていていこうっど！エマも喜ぶはず！」

ラーズの異変

ホワイトデーから数ヶ月後

聖地ラムダ ベロニカ達の家

セーニヤ「お姉様！マルティナ様からお手紙が届きましたわ！」

ベロニカ「あら、ありがとうセーニヤ。なんて書いてあったの？」

セーニヤ「何やら悩んでる事があるそうですわ。シルビア様やロウ様にも相談されているそうです。少し様子を見に行きませんか？」

ベロニカ「マルティナさんがそんなに悩むなんて珍しいわね。わかったわ、行ってみましょう」

デルカダール城 マルティナ親子の部屋

コンコン

ガチャ

マルティナ「あ、いらっしやい。ベロニカ、セーニヤ」

シルビア「ベロニカちゃん達も来たのね」

ペロニカ「ええ、手紙を見てすぐにきたの。悩みって何かしら？」

マルティナ「最近ラースが変なのよ。何だかボーツとしてるし、夜も寝るのが早くなつてしかも起きるのも遅くなつたの。時々ふつと倒れそうになる事もあるの」

ロウ「なるほど。それは確かにラースらしくないのう」

マルティナ「一番変なのは、ここ数日間ご飯をおかわりしなくなつたの！」

全員「ええ!？」

シルビア「あのラースちゃんか!？」

ペロニカ「お城のご飯は必ずおかわりしてるって言ってたのに」

セーニヤ「一体何があつたのですか？」

四人はそれを聞き、少し焦り始める

マルティナ「ここ最近から突然なのよ。私が聞いても偶に聞いてない時だつてあるし、返事も曖昧なの。医者に見せても何ともないって言われちゃつたし」

ロウ「確かにおかしい。ラーズは今どこにおるんじや?」

マルティナ「お父様もグレイグも心配して数日休ませてるの。今はいつもの場所で昼寝してると思うわ。これ以上おかしくならないように皆にも相談してみようと思ってたの。イレブンとカミュは来れるかしら?」

ロウ「イレブンは最近よく働いておつてのう。疲れとるだろうからと休ませておるんじや。だが、これは呼んだ方がよさそうじやのう。明日連れてくるわい」

ベロニカ「カミュも私が連れてくるわ。それに最近カミュとラーズは仲良くなったから来るでしょ」

マルティナ「ええ、お願いするわ。子ども達も不思議がつてるのよ。バン達も騒ついてるし、私達も気が気じゃない。お城は今少しだけパニックなの」

シルビア「そう言われると、この城でのラーズちゃんの影響力は大きいよね」

セーニヤ「ラーズ様、どうなされたんでしょうか」

次の日、マルティナ親子の部屋

レース以外全員揃って話していた

カミュ「兄貴がそんなんになっていたのか。確かに心配だ。何か手がかりはあるのか？」

グレイグ「俺達が見ている限りでは何ともなかったんだ。いきなりおかわりをしなくなってるな。おかしくなる前日の晩飯はしっかりおかわりしていたというのに」

コンコン！

部屋の扉を少し焦るように叩く音がした

バン「突然すみません、マルティナ様！バンです」

ガチャ

マルティナ「バン？どうしたの？」

バン「あ！勇者様達全員いらしてたのですね！あの、至急訓練場に来てくれませんか？師匠がまたおかしくなっちゃって、しかも倒れたんです！」

マルティナ「え!?わかったわ、すぐに行くわ」

イレブン「大丈夫かな、レース」

訓練場

レースは既に起き上がっていた

レース「あれ？すまないな。ブーツとしてたみたいだ」

マーズ「いえ、気にしないでください」

グレイグ「レース、どうしたのだ！」

レース「ん？グレイグか。あれ？皆、来てたのか。俺にも顔出してくれよな」

ロウ「ふむ。今は特段、変には見えんのう」

レース「俺も今そっちに行くぜ」

しかし、レースは向かう途中何も無い場所で急に倒れた

ドサ

全員「レース！」

バン「あ、師匠！」

全員がラースに駆け寄る

カミュ「おい、兄貴。どうした」

ラース「……ハッ！す、すまねえ。何だか眠くなつてな」

ラースはどうやら少し寝落ちしていたようだ

マルティナ「医療室に行く？大丈夫？」

ラース「流石にそこまでじゃないさ。怪我とかはしてないんだからよ。悪いけど、俺部屋で寝てるよ」

ラースはゆっくりとした足取りで部屋に戻っていった

シルビア「ラースちゃん……」

バン「師匠はどうされたんですか？ここ一週間くらいおかしいですよ」

ベロニカ「私達にもわからないわ。ラースがこんな事になるなんて思わなかったわ」

セーニャ「先程、何やらラース様から不思議な力を感じました。魔

法とは少し違うのですが、何とも言えないような不思議な力です」

マルティナ「そうなの？ラース、何で言ってくれないのかしら」

ロウ「少し様子を見てみよう。わし達もこれは放っておけん」

カミュ「おかしくなり始めたのは一週間前からなんだよな？遠征と
か行ったりしたか？」

グレイグ「いや、そういうのはもうラースには回ってこないのだ。
基本バン達に行っている。あいつには騎士の仕事があるからな」

バン「そうですね。師匠はここ最近用事もないみたいですし、見回
りなど以外でお城から出ていないはずです」

イレブン「じゃあ魔物とかは関係なさそうだね」

シルビア「どうしましょうか。あんな風に突然倒れたらこっちは
気が気じゃないわよね」

セーニャ「眠いとの事でしたので、眠気覚ましをしてみてもいいかが
でしょうか。カミュ様のザメハや目覚めの花を使ってみましょう」

マルティナ「なるほど。確かに効果はありそうね。ザメハは難しくても、目覚めの花なら頑張って飲み物とかにいれられるわ」

その後、マルティナ親子の部屋

ラーズは目を擦りながら目を覚ました

ラーズ「ふわあ……。何だか寝起きがよくないんだよな」

イレブン「ラーズ、おはよう。コーヒーいれたんだ。ラーズも飲まない？」

ラーズ「おお、ありがとなイレブン。貰うぜ」

ラーズはどんどん飲んでいく

イレブン「どう？喉乾いてたんじゃない？」

ラーズ「ふうっ！ありがとな、イレブン。確かに喉が乾いてたんだ。だが、眠気が取れないんだ。自分にザメハしても効かなくてよ。最近変なんだ」

イレブン「何があったの？」

ラーズ「特に何も無いんだよな。あの日が近いのはわかってたんだ

が、関係は無いしょ」

イレブン「あの日？」

ラーズ「そう、イレブン達と出会った……」ドサ

ラーズは突然目を閉じて倒れた

イレブン「え！ラーズ!?!ちよつと!!」

ラーズ「スウ……スウ」

ラーズは寝ているようだ

イレブン「嘘……会話の最中に寝るなんて。いいよ、皆入ってきて」

ベロニカ「これはただ事じゃないわ。最早寝るだけになってきてるじゃない」

カミュ「しかもあれはコーヒーなんかじゃなくて、目覚めの花をすり潰した飲み物だったんだぜ。目覚めの花以外入ってねえのに全く効果なかったな」

ロウ「想像より事態は深刻じゃ。このまま起きなくなるなんて事も

あるやもしれん」

バン「そんな!? 師匠がそんな風になるなんて!」

セーニヤ「先程、ラーズ様があの日が近いとおっしゃっていましたね。あの日は?」

グレイグ「イレブン達と出会った日と言っていたな。いつなんだ?」

シルビア「確か一週間後ね。その日にラーズちゃんとアタシ達は出会ったの」

マルティナ「でも関係は無いって言っていたわよね。あまり当てにはならなそうだけど」

イレブン「あ……。もしかしてさ、その日って僕達がラーズと出会った日でもあるけど、ラーズにとってはもう一つ意味があるよ」

カミュ「もう一つ? ……まさか」

マルティナ「!? ガラツシユの村の人達全員の命日だわ! 確かにラーズとは深い関係があるわね」

バン「その日があと一週間ですか。でも、師匠がこうなっている事と関係は確かに無さそうですね」

ベロニカ「そうなのよね。うーん……………でも、他に手がかりがないわ。一先ずガラツシユの村に行ってみましょう。何かが起こっているのかもしれないわ」

グレイグ「そうだな。何も無ければまた考え直してみよう。バン、悪いがラースを見ていてくれ。もし目を覚ましたら世話もしてやってくれ」

バン「わかりました。そちらの方はお願いします」

夢の中へ

ガラツシユの村

前までであった家の残骸や倒れた木などは全て無くなって草原のようになつてきていた

カミュ「久しぶりに来たな。瓦礫とか全部無くなつてるんだな」

シルビア「本当だわ。前まではあつたのに」

マルティナ「ラーズが一人で片付けたの。二年くらい前かしら」

グレイグ「俺達も手伝おうとしたのだが断られてな」

ロウ「ふむ……。じゃが、変な所も不思議な力も何も感じないのう」

イレブン「一度お墓まで行つてみよう。そこも確認してみないと」

ガラツシユの村奥地

セーニヤ「あら？お墓に何か張り付けられていますわ」

ベロニカ「ゴミかしら？あら、文字が書いてあるわね」

カミュ「ん？マルティナ様へってこれ！マルティナへのものだぞ」

マルティナ「ええ!?こんな所に？何かしら」

マルティナ様へ

いつもラースがお世話になっております。ラースの婆と爺です。あの子は今、夢の世界に落ちようとしています。このままでは二度と目覚めなくなってしまうでしょう。

その前にどうか、あの子を助けてあげてください。急にこんなものを残してしまいすみません。霊となってしまった今、できる力を振り絞ってもこれくらいしかできません。どうか、お願いします

グレイグ「霊からの手紙だと!?しかも、下の日付は一昨日のものだな」

マルティナ「夢の世界？そこにラースは向かおうとしてるのね」

ベロニカ「でも、もうほとんど眠りっぱなしだわ。このままじゃ本当に起きなくなるわよ」

セーニヤ「救い出す方法はないのでしょうか」

ロウ「夢の世界……。もしや、あの技が必要なのかもしれんおう」

ロウは何かを思い出したように呟いた

シルビア「ロウちゃん、何か知ってるの？」

ロウ「わしの師匠、ニマ大師が話しておった事があつてのう。人は稀に自身の夢の世界に誘われる。そこに行つてしまったものは二度と目覚めることのない夢を見続けるのじや。

幸せな夢か悪夢かはわからん。もしその人を目覚めさせたいのなら夢の世界に入る必要がある、と。そこまでしか言つてはくれんかつたが、今一度話を聞きに行つた方がいいのう」

イレブン「夢の世界に入るのか。そんな事できるんだね」

カミュ「全く。兄貴は何やつてるんだか。夢に負けそうになつてるなんて」

ドウルダ郷 大修練場

ニマ「おや、勇者様御一行じゃないか。久しぶりだねえ。元気にしているみたいで何よりだよ」

ロウ「お久しぶりです、大師様。実は今日は大師様にお話があつて

参りました」

ニマ「わざわざあたいかい？一体どうしたんだい」

イレブン「突然すみません、大師様。実は仲間の一人が夢の世界？に誘われてるんです。もうほとんど眠りっぱなしで、何とか助けていただけませんか？」

ニマ「何だつて!?!それは本当かい!?!それは大変だよ。すぐにあたいをその仲間の元に連れて行ってくれ!」

マルティナ「ありがとうございます。どうかお力をお貸しください」

デルカダール城

マルティナ親子の部屋

バン「あ！皆様、大変なんです。師匠がうなされてしまつて。しかも何しても起きないんです」

ニマ「…………。なるほどね、これは確かにかなり進行している。もう体は半分以上、夢の世界にいつているね」

ニマはラースを少し見つめた後、静かに言い放った

セーニヤ「何とかありますか？」

ニマ「頼ってもらってこんな事言うのも何だけど、あたいに出来る事はほとんどないんだ」

グレイグ「な!?!それではラーズはこのままなのか!?!」

ニマ「それはあんた達にかかっているよ。あたいが出来るのは、このラーズってやつの中の夢の中にあんた達を送り込むだけ。それ以外はどうしようもないね」

ベロニカ「夢の中に?そんな事できるの?」

セーニヤ「でも、入ったからといってもどうすればよろしいのですか?」

ニマ「ドウルダに伝わる秘術だね。もう何十年と使われなかった技さ。そこに行つて、夢の中にいるラーズを助け出してやるのさ。何にこの人が囚われているのかはわからない。中に入ってそれを断ち切つてやるんだ」

ロウ「なるほど。ならば行くしかあるまい」

ニマ「だが、これはとんでもなく危険な事だよ。なんせ夢の世界だ。現実では起こるはずのない事がいくつも起きる。しかも、見ている夢はどうやら悪夢のようだね。」

更に、もしもあんた達が夢に負けたら最後、全員揃って永遠の夢の中に落ちていく。そんな危険な場所だよ。それでも行くかい？」

マルティナ「そんなの決まってるわ。私は行く。私一人でもその世界に行つて、ラースを助け出してみせる」

全員「うん！」

全員迷いもせずはつきりと決意している

ニマ「アツハツハ。流石は勇者様達だねえ。聞くだけ無駄だったってわけかい」

バン「皆様！俺も行きます！前に師匠が俺を救ってくれたように、今度は俺が、師匠を救つて見せます！」

カミュ「流石バンだ、来いよ！また力を貸してくれ」

シルビア「頼もしいわ、バンちゃん！」

バン「よろしくお願いしますー！」

ニマ「さて、覚悟はいいかい？何があっても自分の心に負けるんじゃないよ。それじゃあ送りこむ。無事に帰ってくるんだよ」

グレイグ「むう……。急に眠くなってきた」

ニマ「こうやって眠らせて、魂を夢に送るのさ。さあ、頑張ってきてな」

夢の世界

夢の世界

イレブン「ん……ここは？」

イレブンが目覚めると草原にいた

バン「あ、イレブンさん、起きましたか。ここはガラツシユの村の前みたいです」

セーニヤ「この先にはまだガラツシユの村がありましたわ」

ロウ「ここはもうラーズの夢の中じやろう。行ってみようかの」

ガラツシユの村

そこはまだ村があり、人達も元気に走り回ったら生活をしている

広場の中心にはとても大きな木があり、優しく村を見守っている

マルティナ「ここがガラツシユの村。確かに広場に大きな木があったのね。それに、閉鎖的だけど子どももそれなりにいるじゃない」

グレイグ「自然に囲まれた綺麗な場所ですな……………今とは比べものにならない」

カミュ「俺達の姿は見てないみたいだぜ。兄貴もどこかにいるのか？」

ペロニカ「あ！あそこにラーズに似た子がいるわ！」

ペロニカが指差す方を見ると、お爺さんと一緒にラーズと思われる子どもがいた

祖父「ラーズよ、ここが村で一番大きな場所じゃ。これからはここで遊んでいるのじゃぞ」

子ラーズ「う、うん。でも、お勉強しなくていいのですか？」

子どものラーズはお爺さんの後ろにくつつきながら、不安そうにキョロキョロしている

祖父「なーに、そんな事はまだしなくていい。お主はもっと自由に遊んでいいのじゃぞ」

お爺さんは優しく子どものラーズの頭を撫でる

子ラーズ「え、えへへ。本当？僕、ずっと外で走り回って見たかったんだ」

祖父「おお、そうじゃったか。どれ、木の周りでも走ってみるといい」

子ラース「うん！やったー！」

子どものラースは元気にイレブン達の近くを走っている

イレブン「あれがラース？すごい痩せてるよ。ラースがガラツシユの村に来たばかりの頃なのかな」

ロウ「おそらくそうじゃろう。それに、腕や足に傷がたくさんついでおる。ラースのこれまでがどれだけ悲惨だったかが伝わってくるのう」

バン「師匠って過去に何かあったんですか？」

グレイグ「そうか。バンはラースの幼少期を知らないのだったな。あまり詳しくは教えてやれないが、ラースは子どもの頃、親から虐待を受けていてな。人として扱われていなかったのだ。

このガラツシユの村には親から捨てられて、魔物に殺されかけていた所を、今隣にいる爺さんに助けられて来たのだ」

バン「師匠にそんな事があつたんですか!?俺、何も知らなかったです」

マルティナ「あまり本人も話したがない事だもの。あんな事、思い出したくもないはずだわ」

バン「はい。でも、それでも師匠は師匠です！何があったってそれは変わりませんかからね！」

シルビア「バンちゃんったらカツコいいじゃない！その気持ちは大事よ！」

セーニヤ「あら？あちらの方でラーズ様と話されてる男の子は」

子ギルグード「ん？お前、誰だ？この村で見たことないぞ」

子どものギルグードがボールを持って現れた

子ラーズ「あ、初めましてだね。僕の名前はグラン。少し前にこの村に来たの。よろしくね」

子ギルグード「へえ、こんな所によく来たな。しかし、傷だらけじゃないか。痛くないのか？」

その時、お爺さんも話に入ってきた

祖父「おお、ギルグード。よかった、この子を紹介しておくぞ。この子の名前はラーズ。先日、魔物の群れに襲われておったラーズをわしが助けてきたんじや。仲良くしてやってくれ」

子ギルグード「え？ラーズ？あれ？でもさっきグランって言わな

かったか？」

子ラース「あ、間違えた。僕は親に捨てられたの。だからおじいちゃんに僕に新しく名前をくれたんだ。その名前がラースって言うの。早く慣れないとだね」

子ギルグード「……そつか。よろしくな、ラース。俺の名前はギルグードだ。俺の友達と一緒に遊ぼうぜ。ほら、来いよ、ラース」

子ラース「いいの？ありがとう、ギルグード！僕、誰かと遊ぶなんて初めてだよ！」

子どものギルグードはラースの手を取って走っていく

ラースも目をキラキラとさせている

ベロニカ「この子がギルグードね。確かに面影はあるわ。私達はほとんど彼を知らないけど、ラースにとって彼はとっても大切な人だったのよね」

イレブン「あ、あれ!?何だか世界が変わっていくよ!」

バン「何だか目まぐるしく回ってますね!」

イレブン達の周りはずんずん時が動いていく

シルビア「落ち着いたわね。場面は変わっているという事かしら」

ラーズ「皆……。やめてくれよ」

ガラツシユの村の広場があつた場所でラーズは小さくなっている

ロウ「ここは……。ガラツシユの村が無くなった後か。何が起こつておるんじや」

ラーズの周りにはよく見ると複数の人達がいる

女性A「あんたがシルバーオーブを持っていったせいで死んじやつたじゃない！」

男性A「そうだ！俺達はこれからもずっと幸せに生きていけるはずだったのに！」

男性B「勝手に村に来て勝手に村から出ていった。何て自分勝手なやつだ！」

女性B「私達がどれだけ痛い思いをして死んだと思ってるの!？」

女性C「あんたはこの村にとって死神よ！」

ラーズ「やめてくれ……。俺は、そんなつもりでやったんじゃないん

だ」

ラーズは耳を塞ぐようにしている

カミュ「これは……相当応えるぜ」

ギルグード「お前は俺より強くねえのに、村長からちよつとチャホヤされていい気になってんじやねえか？そんなんだから何も守れねえんだよ。俺との約束すら守れねえもんな、ラーズは」

婆「あんたにはずっと出て行ってもらいたかったの。さあ、出て行つて」

爺「わしの教えも守らんやつじゃ。こんなやつは息子としていらんわい。どこへなりとも行くがよい、グラン」

ラーズ「やめて……くれ。ギルグード、すまなかつた。婆ちゃん、わがまま言つてごめん。爺ちゃん、俺をラーズって呼んでくれたのは、爺ちゃんからだろ？グランとは呼ばないって言つてくれたのに……そんな……」

ラーズからは涙が流れている

カミュ「兄貴……。ちっ！嫌なもんだな！何もできねえのかよ！」

カミュはラーズに手を伸ばすが透けてしまう

マルティナ「これが… ラースの中にある、悪夢。見てられないわ」

イレブン「え!? 待って! 僕達まで出てきたよ!」

ベロニカ「本当だわ! しかも最強装備の時だわ!」

偽シルビア「ラースちゃんったらそうやってウジウジしてるのやめてほしいわ」

偽ロウ「お主はこのメンバーにはいらんのう。別にお主がやらんでもわしらで充分じゃ」

偽ベロニカ「魔法だつてちよつと扱いが上手いだけじゃない。魔物を倒しきれなきや意味ないのよ」

偽カミュ「格闘技も最初こそすごかったが、別に今はマルティナだつてできる。二人もいらないぜ」

偽グレイグ「姫様に無闇に近づきおつて! お前は基礎もなつてないやつなんだ。邪魔だ! どっかに行け!」

偽セーニャ「ラース様、私はもうあなたについて行くのは意味がな

いとわかりましたわ。私は皆様と行きます」

偽イレブン「ラース、皆が迷惑してるんだ。お願いだから、抜けてくれないかな？」

偽マルティナ「私にはあなたじゃあ釣り合わない。さようなら、つまらなかつたわ」

ラース「……」

ラースは何も言わなくなってしまった

マルティナ「何よ、あれ！私達はある事言わないわ！」

セーニヤ「また場面が変わっていきますわ！」

グレイグ「ここは何処だ？何も見えないぞ」

真っ暗で何も無い場所になった

ラース「……そこに誰がいるのか？」

遠くからラースがこつちに歩いてきた

カミュ「!?兄貴！」

ラーズ「何だ、お前達か。こんな所まで来てどうしたんだよ」

イレブン「僕達の姿が見えるんだね！ラーズ、目を覚ましてよ。僕達と一緒に帰ろう」

ラーズ「断固拒否だな。お前達とはいられねえ。俺は、皆といっても相応しくないんだ」

ラーズは皆から目を逸らす

ロウ「何を言っておるのじゃ、ラーズよ。お主はわし達の大事な仲間ではないか」

ラーズ「俺なんかは入れねえんだよ。元から周りとは違ってるからよ。自分の村や、育ててくれた皆を見殺しにしたやつが、こんな綺麗などころにいられるかよ」

マルティナ「ダメよ、ラーズ。あなたはそんな後ろ向きに考える人じゃないでしょ？さっきの私達や村の人は全部偽物よ。騙されちやダメ」

ラーズ「マルティナ、君はまだ、俺の本当の心を知らない。俺は、世界を皆と守って君と過ごしても、何も変われなかった。俺は、自分でどれだけ誤魔化しても意気地なしのままさ。ガラツシユの村が無くなったあの日からずっと……」

バン「師匠！弱気にならないでください！大丈夫です。皆師匠を待ってますよ！」

ラース「もう来ないでくれ。俺はこのままでいいんだ」

ラースがそういうと壁ができ、ラースの方へいけなくなつた

イレブン「あ！ラース、待ってよ！どこに行くの！」

ラースが歩いて行く先には魔物が見えた

魔物「グフフフフ」

魔物はまるで大きな鳥のような姿をしている

カミュ「あいつが元凶なのか？兄貴！！ラース！！そっちに行くんじゃないやねえ！」

セーニヤ「どうかお戻りください、ラース様！そちらは罠ですわ！」

マルティナ「ラース！この壁をどかして！！」

イレブン達は壁を叩きながらラースに叫んでいる

ラースには誰の声も届かず、魔物に食べられてしまった

全員「!？」

魔物「ハアア、最高じゃなあ。夢に誘い、絶望した人間の味は」

シルビア「やだ！ラーズちゃん!?嘘でしょ!？」

ベロニカ「魔物のやつ、何て事してくれてるのよ!」

魔物「ん？何やら呼んでおらんやつらがいるのう。どうやって入ったかわからんが、この世界はわしのもの。お主達が好きなようにできるわけなからう」

イレブン「さつきから魔法を打とうとしてるんだけど、全く発動しないよ!」

グレイグ「特技もできん!どうなっているんだ!」

魔物「あの男は実にいいやつじゃった。心の奥底に隠した闇は実に美味い。記憶を読み取り、あの男が最も嫌な事を目の前で大量にしてやる。」

「そうしたらどうだ?あんなに気丈だったやつも、今ではわしの掌で踊っておるわ。この空間は呪文も特技も使えん。わしに攻撃する事もできんぞ。」

さあ、次はお主達の番じゃ。ゆつくりと、ゆつくりと調理していつてやろう」

マルティナ「イレブン、勇者の剣で何とかならないかしら！」

イレブン「任せて、マルティナ！剣よ、悪を払え！」

剣は光り輝くが、何も起こらなかった

イレブン「ええ!? そんな！」

バン「あ！でも、壁は無くなりました！これで戦えますよ！」

魔物「グフフ。さあ、かかってくるがいい。夢の恐ろしさ、特と味わうがいい！」

夢の世界2

カミュ「特技が無くたって攻撃はできる！オラア！」

バン「俺もいきます！ハア！」

カミュとバンが一直線に魔物に向かって攻撃する

魔物「グフフフ。無駄じゃ」

セーニャ「びくともしてませんわ！」

マルティナ「私もいくわ！テイヤア！」

イレブン「僕も！えい！」

グレイグ「俺も行くぞ！ふんっ！」

魔物「何人来ようと無駄じゃ。わしには効かん」

全く動きもせず、魔物は嘲笑っている

ベロニカ「三人がかりでも駄目なの!?どうなってるのよ」

ロウ「やはりここは夢の中。いつもとは勝手が違いすぎるようじゃ」

シルビア「でも、あの中にはラースちゃんがいるわ！何とかして助け出さないと！」

魔物「鬱陶しいのう。それ、どこかに消えてしまえ」

魔物がそう言うところからか津波が襲ってきた

全員「ええええっ！」

バン「どうなってるんですか！水なんて何も無いのに!？」

カミュ「くっ！流されちまう!!」

全員は流されていった

魔物「グフフフ」

その後

マルティナ「ん……。ここは？」

マルティナが目を覚ますと、近くにはカミュ達もいた

カミュ「お、マルティナ。起きたみたいだな。仲間達と逸れちまつ

たみたいなんだ」

バン「ここにはマルティナ様とカミュさんとロウ様と俺しかいなかったんです」

ロウ「どこかに流されてしまったようじゃな。探しに行かなければ、大変な事になるぞ」

マルティナ「それは大変だわ。急いで探しましょう」

道中

バン「何も見えてきませんね。ずっと真っ暗ですよ」

カミュ「この道がどこに続いているかもわからないのにこれは不安だな」

ロウ「じゃが、今はこの道がどこかに繋がっておる事を信じるしかない」

マルティナ「あ！あそこに光が見えるわ！行ってみましょう！」
しばらくして

マルティナ「ここは…デルカダール城のご飯を食べている所だ

わ
」

バン「あ！師匠！」

マルティナ達の前にはテーブルの前に座るライスがいた

夢ライス「マルティナー！ご飯できたかー？」

夢マルティナ「ええ！ほら、ライスのためにたつくさん作ったわ！」

夢マルティナ「私もよ！ほら、ライス。一緒に食べましょう！」

夢マルティナ「ライス、食べすぎないようにね」

どンドンマルティナが料理を持って出てくる

マルティナ「キャーッ！な、何よ、これ!？」

ロウ「姫がたくさんおるのう。これはええのう」

夢ライス「最高だぜ、マルティナ！やっぱりマルティナの作る飯は
美味しいな！」

ライスは喜びながら料理を食べている

カミュ「呆れたぜ。ここはラースの夢の欲求の部分か？」

バン「ハ、ハハハ。つまり、師匠はマルティナ様にたくさん囲まれて、ご飯をたくさん食べたいという事ですかね？」

カミュとバンは苦笑いしている

マルティナ「は、恥ずかしすぎるわ！皆、見ちゃ駄目！」

マルティナが顔を赤くして皆の前に立ちはだかる

ロウ「ラースらしいのう。じゃが、ラースはこんな事を望んでおったのか。普段はそんな事あまり言わんというのに、やはり欲求では思っておるといふ事じゃな」

カミュ「何だかい弱味を握れた気がするぜ。もう少し見てもいいか？何か新しい発見があるかもしれないねえぞ」

マルティナ「駄目に決まってるでしょ!!ほら、さっさと次に行くわよ！こんな所、すぐに抜けるわ！」

ロウ「ああ、姫よ。あまり押さんでくれ」

その後

バン「あれ？次はさっきのガラツシユの村の広場ですね」

ロウ「おお、ラースがギルグードと戦っておるのう」

ラース「これでどうだ、ギルグード！」

ギルグード「くっそう！今日は俺の負けだ、ラース！無駄に知恵ばかり付けやがって！」

ラース「やったぜ！久しぶりにギルグードに勝てた！」

ギルグード「しかし強くなったな、ラース。初めは魔法以外できなかったくせによ」

ラース「へへ、いつまでも弱い俺じゃないからな。いつか絶対にギルグードを超えてみせるぞ！」

ギルグード「ふっ。なあ、ラース。俺と約束してくれないか？」

ラース「ん？どうしたんだよ、いきなり」

ギルグード「ラースは俺のライバルだ。他の友達や大人でも、俺とここまで張り合えるやつはお前の爺さんを除いていない。俺の夢は知ってるよな？」

ラース「ああ、この村の守人になるんだろ？父ちゃんの夢を継ぐって話だよな」

ギルグード「本当なら俺一人で充分だと思ってた。だが、ラース。お前は俺の足りない所をたくさん持つてる。俺は、お前も守人になるのに充分だと思ってる。さらに俺の親友でもある。なら、二人で守人にならないか？」

ラース「俺が…この村の守人に？」

ギルグード「ああ。俺達が二人で守れば、この村は何が来ても絶対に大丈夫だろ？一人では難しくても、二人なら何とかかなると思うんだ。どうだ？俺と一緒に守人になろうぜ」

ラース「ギルグード…。へへ。いいな、それ。乗った！俺もギルグードと一緒に守人になる！それでこの村や皆を守ってみせるんだ！」

ギルグード「よし！約束だぞ！俺達は最強になれる！」

ラース「ああ！約束だ！もっと俺は強くなってやる！見てろよ？」

ギルグード「楽しみにしてるぜ、ラーズ！」

ラーズとギルグードは互いに手を握っている

バン「師匠はこんな約束をしてたんですね」

マルティナ「でもこの数週間後に、ラーズは村長さんに一足先に村最強の戦士だと言われ、シルバオーブを勇者に授ける使命を持たされて、村を出て行くのよ。ギルグードやラーズのお爺様にも言わずにね。この約束は、叶わないのよ」

ロウ「ラーズにとってこの村の最後の思い出という事か。親友との約束を守れなかった事をラーズは悔やんでおるのじやな」

カミュ「先に行こうぜ。ここにいても、悲しい気持ちになるだけだ」

その後

またあの暗く何もない場所にやってきて

バン「あ！あそこにいるのは師匠ですよ！師匠ー！」

ラーズ「また来たのか。もう来るなど言っただろうが」

ロウ「あの魔物はおらんようじやな。あれも夢の世界だからかう」

カミュ「兄貴！俺達は簡単には諦めねえからな！」

ラース「もういいんだ。俺は何もできない」

ロウ「やはりラースは闇に飲まれておる。今のラースは簡単には話をさせてはくれんのか」

イレブン「あ！マルティナ達だ！」

ベロニカ「よかったわ、マルティナさん！カミュ達もいたのね！」

違う場所からイレブン達がやってきた

バン「あ！イレブンさん達も無事だったんですね！よかったです！」

カミュ「セーニャ達はどうした？」

ベロニカ「わからないわ。まだどこかを迷っているのかも」

マルティナ「皆、無事だといいいんだけど」

「ラース「諦めの悪い奴らだな。これでもうこつちには来れねえだろ」

「ラースがそういうとラースの前に壁があらわれた

「ロウ「またか。何とかできんものかのう」

「グレイグ「イレブン！皆も無事か!?!」

「シルビア「マルティナちゃん達もいるわ！よかったわ!」

「また別の場所からセーニヤ達がやってきた

「ベロニカ「セーニヤ！無事だったのね!」

「セーニヤ「はい！心配おかけしました!」

「カミュ「全員集合だな。さあ、ラース！お願いだ！目を覚ましてくれ!」

「マルティナ「ラース！思い出して！私達との思い出を！あなたのその腕につけたミサングも忘れてしまったの？私との、初めてのお揃いの物だったじゃない!」

シルビア「そうよ、レースちゃん！あなた、そのミサンガをずっと大事にしてたじゃない！それにまだ切れてないって事は何かお願い事があるんでしょ？思い出して！」

レース「……これか。もうどうでもいいんだ。こんな願いは叶わない。マルティナ、さようならだ」

ブチッ！

レースはそう言うのとミサンガを引っ張り、ちぎってしまった

マルティナ「!!!? そんな……」

マルティナは信じられない顔で座り込んだ

セーニヤ「あ！マルティナ様、しっかりしてください！」

グレイグ「貴様！何て事をする!!」

レース「これで諦めもついたんじゃないやねえか？もう構うな。俺はこのままでいいんだ。お前達と関わっても迷惑をかけるだけだ。さあ、出ていってくれ」

マルティナ「ううっ……。レース……。もう、もう知らないんだから!!!」

マルティナは涙を流して走り去っていった

イレブン「あ！マルティナ、待ってよ!!」

イレブンはマルティナを追いかける

ベロニカ「ラース！マルティナさんを泣かせるなんて何してんのよ！」

シルビア「ラースちゃん！あなたはマルティナちゃんの笑顔が好きだったんじゃないの!？」

ラース「……………」

バン「師匠！こんな事はやめてください！」

ロウ「いい加減素直になるんじゃない！まだ謝ればすむ！」

ラース「謝る？お前達がしつこいから、俺は諦めさせたただけだ。謝らなくてもいいだろ」

セーニヤ「ラース様……………」

グレイグ「何てやつだ！ラース、見損なつたぞ！一先ず、姫様を追いかけよう」

光

イレブン「マルティナ、泣かないでよ」

マルティナ「だって…… ラースが全く話を聞いてくれないじゃない。それに、あんな事して。私、ラースの事何もわかってなかった」

マルティナは少し離れた場所でイレブンと一緒にいた

シルビア「あ、よかった。見つけたわ、二人とも」

グレイグ「姫様、大丈夫ですか？ラースのやつ、姫様を泣かせるなどありえん！」

ベロニカ「本当よ！しかも何よ、あの態度。こっちの事勝手に決めつけちやつて！私、頭にきたわ！」

バン「俺、師匠が誰かを泣かせるなんて初めて見ました」

セーニヤ「私達も見たのは初めてですわ。あれは本当にラース様なのでしょう？ラース様はあんなに暗い空気を纏っているお方ではないのですが」

ロウ「親からの虐待や、村の壊滅による絶望はラースの中で密かに育っておったのじゃな。あの目は、何者も信用しない目じゃ。わしら

でさえ、信用しておらんかった。どうしたものかのう」

その時、どこかからニマ大師の声が聞こえてきた

ニマ「あんた達！聞こえるかい？聞こえたら返事しておくれ！」

カミュ「この声はニマ大師の声か？ああ！聞こえてるぜ！」

ニマ「よかった！全員無事かい？何だか随分と時間がかかってるみたいだから心配してたんだよ」

イレブン「僕達は全員無事です！心配かけてすみません！まだかかりそうなんです！」

ニマ「そうかい。その中は大半が悪夢で出来てるはずだよ！その中にこの男がいたとしても、きつとそいつは闇の部分さ。もしかしたら、本人とは思えないような事をしてくるかもしれない！攻撃的になっっているかもしれないね。」

でも、それは決して本心の行動ではないよ！騙されないようにね！自分達が信じているこの男を信じてやるんだよ！」

イレブン「わかりました！それはありがたい情報です！ありがとうございますー！」

マルティナ「そっか……。あれはレースに見えるけど、悪い部分のレースなのね」

グレイグ「なるほど。闇のレースか。それならあの異様な雰囲気も納得できる。行動もな」

ベロニカ「うっ……。私ったら騙されてたわ。そうよね、レースはマルティナさんを泣かせる事を嫌っていた。本心とは逆のことをしていたのね」

バン「よかった！あれが本心の師匠じゃなくて！」

ニマ「それと今、この男の周りをウロウロと沢山の光が飛んでいるんだよ。何か心当たりはあるかい？」

ロウ「光？はて、何じやろうか」

シルビア「何か関係があるのかしら？」

カミュ「すまねえ！俺達にはわからねえな！」

ニマ「どうやらレースに語りかけてるみたいだよ。悪い物ではないから、この光達も夢の中に送ってみるよ。後は自分達で何とかしてく

れるはずだ。それじゃあ、引き続き頑張るんだよ」

イレブン「少し整理してみようか。まず、レースの夢の中を見てわかったのは、レース自身は中に闇があつてそのせいでおかしくなっている」

カミュ「そうだな。あの魔物はよくわからないが、あいつが原因つてわけでも無さそうだ。関係してはいるのだろうが、根端にあるのはあいつ自身が持っている闇だろう。だから、あの闇の部分のレースを何とかしてやらないといけない」

バン「そうですね。あの師匠を改心させられれば、きっと本人も夢から覚めていくはずですよね」

セーニャ「ですがどうしましょうか。今私達の声は届いていないですわ」

シルビア「アタシ達じゃあレースちゃんの闇は消せないのかしら。何とか力になりたいのだけど」

マルティナ「あのレースに足りないのは自信や誇りだわ。幼少期や村の壊滅で、自信を持つ事を恐れているのね。レースがこれまでにしてくてくれた事を言えば少しは届いてくれるんじゃないかしら」

ペロニカ「確かにそうね。一先ずその作戦で行ってみましょう
!.....
あら?向こうから光が来るわ」

遠くからフヨフヨと光が漂ってきた

グレイグ「あれがニマ大師の言っていた光なのか?自我があるよう
だが」

イレブン「あ、こつちに気づいたみたい」

光がこつちに来た

光「ああ、貴方方が勇者様ですね?お探ししましたよ」

光から声が聞こえてきた

カミュ「あんた達は一体?」

光「少し姿を戻しましょう。ほいっ!」

光は形を変え、爺さんと婆さんの姿になった

爺さん「初めまして、勇者様。私はガラツシユの村のラーズの祖父
です。ずっとみておりましたよ」

婆さん「息子のラーズがお世話になっております。私はラーズの祖母
です。あなたがマルティナさんですね。いつも息子を支えてくださ
さつて、本当にありがとうございます」

二人は全員に深々とお辞儀している

グレイグ「あなた達がラーズが話していた祖父達でしたか。ここは危険な所です。どうして来てくださったのですか」

祖父「いえ、息子が夢の世界に誘われていたのに気づいたのですが、私達ではどうする事もできなかつたのです。ですが、夢の世界に入ってしまうばこうしてラーズが抱えている物と話す事ができる」

祖母「愛する息子の事です。ここがいかにも危険だろうと、親なら何だつてやってやりますよ。それにあの子の事です。私達の村や皆の事を苦しく思っているのでしょうか。勘違いを解いてやらなければなりませんね」

マルティナ「そうなんです。ラーズはずっと、村の事を気にしてるんです。どうかお力をお貸しください」

祖父「もちろんですよ、マルティナ様。そのために村の皆も連れてきました。ラーズにしつかりこの思いを届けましょう」

シルビア「ラーズちゃん、よかつたわ。二回目の親はしつかりラーズちゃんを愛してくれていて」

祖母「初めて来た時のラーズはよく覚えています。子どもとは思え

ない体、言葉、行動、態度。前の親による影響だったのでしょう。どれもが心を痛めるものでした」

バン「師匠は村の皆さんと出会えたおかげで、今の師匠があるんですね。お二人が愛情を持って師匠を育ててくれたので、優しい師匠になれたんだと思います。ありがとうございます」

祖父「弟子のバンさんでしたな。ラースが話しておりましたよ。自慢の弟子だと。ほほ、優しくも強い目をしておる。これはラースもいい弟子と巡り合えたものじゃな」

バン「ほ、本当ですか？ありがとうございます」

祖母「ラースは今どこにおりますか？」

ロウ「この先におるんじゃ。先ほど話をしようとしたのじゃが、嫌がられてのう。姫、マルティナとの思い出の品も壊されてしまったんじゃ」

祖母「まあまあ、それは本当にすみません。マルティナさん、その行動はあの子の本心ではないんです。ラースの事をどうか信じてあげてくださいね」

マルティナ「はい。私はもう大丈夫です。あのラースが本心でやつ

たわけじゃないと知りました。それなら、私が知っているレースを信じるだけです」

祖父「強いお方ですね、マルティナ様。それでは向かきましょう、案内をお願いします」

ベロニカ「わかったわ、こっちよ。おじいちゃん達が来てくれれば、きつとあのレースも心を開くかもしれないわ」

声

ラーズ「また来たのか、お前達。どれだけ諦めが悪いんだ」

セーニャ「ラーズ様！私達はあなたに自信を持ってもらうためなら、何度だって来ますわ！」

カミュ「そうだ。兄貴はもっと自信を持っていいんだ。俺達が教えてやるからな」

ラーズ「無駄だよ。俺に自信なんてつきはしない。俺は、村の皆を見殺しにした。約束も果たせてない。こんな俺が自信なんてつくはずがないだろう。この罪はどう足掻いたって消せはしないからな」

祖父「ラーズよ、それは間違っておるんじゃないぞ」

ラーズ「!!？」

祖母「ラーズ、私達はあなたにそんな思いを抱いてほしくはないよ」

イレブン達の後ろからラーズの祖父と祖母が現れる

ラーズ「爺ちゃん、婆ちゃん……」

祖父「わしらだけじゃないぞ。皆、出てくるんじゃない」

そう言うのと、祖父の後ろからたくさんの人が出てきた

ラーズ「皆!!」

ギルグード「よお、ラーズ。やっぱり変な捉え方してたな？全く、とんだ勘違いだな」

男性A「そうだぞ、ラーズ。俺達はお前を恨んでなんかいないぞ！」

女性A「そうよ。ラーズの中で勝手に歪んでしまっているだけ」

村長「わしはお主に使命を持たせて旅立たせた事。それをずっと後悔しておった。ギルグードとの大切な約束があったとは知らなかったのだ。どうか許してくれ」

ラーズ「村長！そんな……気にしないで。確かに約束を守れなかったけど、村長は何も悪くないよ！」

ギルグード「ほら、やっぱり言った通りだろ村長。ラーズはあんた

に責任を押し付けてはいないんだ。こいつは馬鹿だから、全部自分で背負ってるのさ」

ラーズ「うるさい！ギルグード！」

村長「ラーズよ。これだけは絶対に信じておくれ。お主は、ガラツシユの村の誇りじゃ」

ラーズ「!?な… やめてくれよ、村長。俺は… そんな資格なんて」

祖父「資格なんて必要ないんだよ、ラーズ。ラーズは実際に使命を果たしたのではないか。こちらのイレブンさんを見つけ、連れてきて力を試した。さらに勇者様の仲間として力の限りを尽くした。それが出来たのは、ラーズ。お主だったからじゃよ」

イレブン「そうだよ。僕がああ旅でどれだけラーズに救われてきたか。未来の僕も言ってた。ラーズにはずっと助けられてきた。ラーズに恩返しをするから、ここにきた。ラーズには、マルティナとずっと幸せになってほしいから頑張るんだって」

ラーズ「……………」

村長「お主は紛う事なきガラツシユの村一番の戦士じゃ。村の皆が

認めておる」

ギルグード「そうだけ。俺が使命を持つても、お前のように行かなかったはずだ。ラーズ、お前だったから使命を果たし、勇者様の力になれたんだ。その絶対の事実を見過ごすな」

ラーズ「俺だったから……？」

祖母「そうです。ラーズは優しい子。私がいつも言っていましたね？

誠に強き者は、心優しき者

ラーズの本当の強さは心の強さ。そして、優しさですよ」

祖父「そうじゃ。そしてそれをわかっている方達は多くいる。さあ、ギンさん、ミルさん、出番ですよ」

村の人達の中からギンが現れた

ギン「グラン。いや、ラーズよ。なんと大きくなった事か。私を覚えてるかな？」

ラーズ「お爺様!!俺……またお爺様に会えるなんて!」

ギン「私はラーズの心の強さや優しさをあの頃から感じていた。だからフォースの力を託したんだ。あの力は心が優しく、そして強くなければ扱う事はできん。」

あれは仲間や人を思う心が使える技なのだからな。ラーズよ、それをマスターしたのは凄い事なんじゃ。自信を持っていいのだ。よく、頑張った。そして、よく馬鹿息子のようにならんでくれたな」

ギンはラーズを抱きしめる

ラーズ「お爺様……。ありがとうございます」

そしてミルもラーズの元へやってきた

ミル「グラン坊っちゃん。お久しぶりです。私の最期があのような手紙となってしまい、大変申し訳ございませんでした。手紙にも書きましたが、グラン坊っちゃんは本当に優しいお方です。」

あの過酷な環境の中、私達に笑いかけてくれた事はどれだけ凄い事だったか。私でさえ、あの家にいる時は感情など無くなっていたというのに。グラン坊っちゃん、私とギン様はこちらのガラツシユの村の方達と共にいつも優しく見守っていますよ」

ラーズ「ミルさん、ごめんね。関係ないのに、巻き込んだじゃって」

ミル「仕方ないのです。あれはグラン坊っちゃまのせいなんかではありません。私ももっと早くにグラン坊っちゃまの言う通りにして、他の所で働くべきでした。」

ですが、後悔はしておりません。こうしてグラン坊っちゃまを見守っているのも楽しいのですよ？だから、安心してくださいね」

ミルは笑顔でラーズに笑いかけている

祖父「わかったかな、ラーズ。お主は誰にも恨まれてなどおらん。全員、お主の味方じゃ。姿が見えなくとも、わし達は必ずお主のそばにいる。信じる心は、強さ変わる。何度も教えた事じゃろう？」

ラーズ「じいちゃん……」

カミュ「兄貴！俺は、お前に愛を教わった！何もわからなかった俺やママをお前達が助けてくれたんだ。その時に俺は言ったはずだぜ。お前に愛を返してやるってな！俺は、ラーズを信じてる！必ず自分の中の闇なんかに負けねえってな！」

ベロニカ「ラーズ！そんなに下ばかり向いてたら何も見えないで

しよ？もつと周りをよく見てみなさい！あんたの周りには、あなたを必要としている人が沢山いるの！私だって、あんたともつと一緒にいたいんだからね！」

セーニヤ「ラーズ様、私も旅の中であなたの強さに何度も助けていただきました。道に迷った時、魔物に襲われそうになった時など数えきれませんわ。心から感謝しています。今度は私が、ラーズ様をお助けしますわ！」

シルビア「ラーズちゃん！あなたの笑顔ってとっても素晴らしいのよ！見ていてこつちも元気になってくるの。だ・か・ら、そんな顔してないでもつと笑いましょう！アタシはラーズちゃんに笑顔でいてほしいのよ！」

ロウ「お主にはわしも何度も世話になってきておる。仲間の事や、体調などいち早く勘付いておったな。わしもそれに助けられた。いつか恩を返さなければ、元王として示しがかんかったんじや。見ておるんじや、ラーズよ。このロウ、お主に精一杯の恩返しをしよう！」

グレイグ「ラーズ。お前はホメロスの事を憎く思っていたのだろう。だが、俺の話聞いてその考えを無くしてくれた。俺がお前の立場なら、絶対に変わる事など無かったというのに。」

俺はお前が強い事を知っている。実践的な強さだけではない、相手とのコミュニケーション能力や精神の強さ、心の強さも全てだ。お前は負けないはずだ。俺は信じているぞ」

バン「師匠！俺は馬鹿だから、真っ直ぐにしか考える事が出来ないんです。師匠もわかってますよね？だから俺、決めました！師匠が自分の闇なんかに負けないように、何度でも師匠を支えます！」

俺が一度道を諦めた時、師匠が励ましてくれたように、俺も俺なりのやり方で師匠を支えていきますよ！だから、絶対に負けないでくださいね！俺の知ってる師匠は、簡単に負ける人なんかじゃないです！」

マルティナ「ラーズ。私はあの旅でラーズからたくさんのものを貰ったわ。力、勇気、希望、愛情。どれもがかけがえのない大切なもの。だから、私からもラーズにお返しするわ。」

ラーズからもらった勇気をわけてあげる。自信がないのなら、私が自信をあげる。悲しいなら喜びを、嫌なことがあるのなら楽しみを。何でもわけてあげる。私はあなたの妻なんだから。だから、どうか一人で考えないで。ラーズは一人ぼっちじゃない。

これが私達の声よ。あなたを大切に思っている人達の声。きつと顔を上げればもつとあるわ。少しだけ、前を向いてみて。あなたを待っている人が見えるはずよ。さあ」

マルティナはラーズに近づき、手を伸ばす

ラーズ「マルティナ……」

ラーズはマルティナの手を握る

マルティナ「ふふ、やっと私の目を見てくれた。どう？皆が待っているのが見えるでしょ？」

ラーズ「ああ……。俺は、今のままでいいのか？こんな……。俺で」

祖父「ああ。そのままでもいい。お主は意気地なしでも弱虫でもない」

村の全員「ラーズはガラツシユの村一番の戦士だ」

祖父「お主は村の誰よりも勇敢で勇ましい。そして、誰よりも人の心の痛みがわかる子じゃ」

村長「誇りを持ちなさい、ラーズ。お前には村の全員の期待がある。それを自信に変えるんだ」

ギン「わしの息子は強くなった。胸を張るんじや。自分は強い。仲

間といれば何だってできるとな」

祖母「声に出してみましょうかね。ほら、言ってみなさい。自分は強い」

ラーズ「俺は……強い」

マルティナ「私達となら何だってできる」

ラーズ「皆となら……何だってできる」

イレブン「自分は負けない！」

ラーズ「俺は……負けない!!」

そう言うと、ラーズの体から光が溢れてきた

ラーズ「そうか……。俺、間違ってたんだな。自分で勝手に、皆の思いを悪い方へと考えてた。皆は、俺の事を信じてくれてたのに。皆、ありがとう！俺はもう大丈夫だ！俺は、ガラツシユの村一番の勇敢な戦士、ラーズ!!そして、勇者の仲間の一人だ！」

バン「師匠!!よかったです!その目はいつもの師匠の目ですよ!」

カミュ「やっと目を覚ましやがったか。全く、兄貴には困ったもんだぜ」

魔物「グオオオオ!!!」

全員「!?!」

突然ラースの体からあの魔物が出てきた

魔物「ぐううつ……眩しい。光が満ちてくる……」

シルビア「ラースちゃんはもうあなたの思い通りにはならないわよ!」

ベロニカ「こんな事をして許さないんだから!」

ラース「……………皆、こいつは俺が育てたんだ」

全員「え!?!」

ラース「この魔物は俺の心の中の闇そのもの。皆に隠しながら自分の心に隠した絶望感が大きくなって、いつしか自我を持ち始めた。そして、俺を飲み込んだ。だが、もう平気だ。俺は、皆にこの絶望は間違っている、俺はここに必要な人間だとわかった！」

自分を恥じない！皆がいる。俺を呼ぶ皆の音がする。その声がある限り、俺はもう迷わない！！」

魔物「グギャアアアア!!!」ジユワー

魔物はどんどん小さくなり、やがて消えていった

ラース「皆、こんな俺に、信じる心を教えてくれてありがとう！村の皆もお爺様もミルさんも本当にありがとう!!俺、もう心配なんてかけさせないよ！見てて、必ず幸せをもっともっと増やしてから、そっちに行く。それまではゆっくり見せて」

祖父「ほほ、自慢の息子の完全復活じゃな」

ギン「ラース、忘れてはならんぞ。わし達は全員お主の味方じゃ。必ず支えになろう」

ミル「私は大した力になれませんが、それでももし、少しでもグラン坊っちゃんあの力になれたならこのミル、最大の喜びです」

ギルグード「難しく考えすぎんじゃねえぞ、ラース！もつと世界は優しさに満ちている！それを体感してこい！」

祖母「勇気と愛情を心に、信じる仲間達と共に歩み続けなさい。あなたなら、絶対大丈夫ですよ。そして、あなたが偶に演奏してくれている安らぎの唄。私達にしっかりと届いていますよ。ありがとう」

ラース「そつか。届いてたのか。へへ、下手くそでも許してくれよな。皆、それじゃあ元の世界に戻ろう。本当にありがとう」

祖父「勇者様方、たいへんありがとうございます」

全員「ラースを、いつまでもよろしくお願いします」

村の人達とギン達がイレブン達にお辞儀した

仲間達「はい！」

そう言うのと、全員が眠くなっていた

夢から覚めて

その後、マルティナ親子の部屋

ラーズ「う……うくん。何だか寝起きがすごくいいな。スッキリした気分だ」

ニマ「お、起きたみたいだね。おはよう」

ラーズ「え!?!ニマ大師!?こんな所でどうしたんですか?」

ニマ「あんた、何も覚えてないのかい?周りも見てごらん」

ラーズ「え?って、皆!何してんだ、こんな所で寝て!」

ニマから説明を受ける

ラーズ「え。俺、かなり危ない状態だったんですね。助けてくださり、ありがとうございます」

ラーズは驚きながらもお礼を言う

ニマ「私はほとんど何もしてないよ。頑張ったのは、こいつらさ。あんたが目覚めたって事は無事に終わったって事だからね。その内目を覚ますよ。それじゃあ、あたいは先に帰らせてもらうよ。弟子達も気になるからね」

しばらくして、バンが目を覚ました

バン「ふわあく。あ、ここは……戻ってきたのか」

レース「よお、バン。お目覚めみたいだな」

バン「ハッ！師匠！おはようございます！お気分はどうですか!？」

バンはレースに駆け寄る

レース「そんな全力で気分を聞いてきたやつは初めてだぞ。事情はニマ大師からある程度聞いた。迷惑をかけてすまなかったな。ありがたい事に、眠気は嘘のように吹き飛んでるぜ」

バン「それはよかったです！あれ？でも、何も覚えてないんですか？」

レース「ん？何がだ？」

バン「いえ、俺達は夢の中で……。あ！そっか！夢の世界なのか！」

レース「??？」

バン「師匠、腕のミサンガまだありますか？」

ラース「おう。まだついてるぞ」

ラースは腕を確認する

バン「それなら大丈夫です！それでは他の皆さんが起きるまで待ってましようか」

一時間後、皆が起きた

マルティナ「ええ!?何も覚えてないの!?!」

ベロニカ「私達、あんなに頑張ったのに!?!」

ラース「わ、悪いな。皆がどうしていたかはわからねえんだ。ただ、すごく嫌な夢をずっと見ていたんだが段々と優しい光が溢れてきてな。久しぶりによく寝れたぜ」

ロウ「なるほど。所詮は夢の世界。本人も夢としか思えないのかもしれんな」

グレイグ「ううむ。何とも不思議な体験だったな」

カミュ「まあ、兄貴が無事で本当によかったぜ」

シルビア「そうね。アタシもあのままなんて絶対に嫌なもの」

イレブン「ラーズ、いい夢みれてよかったね」

ラーズ「お、おう。何だか悪いな、覚えてなくて」

カミュ「なあ、兄貴。兄貴はマルティナの手料理をたくさん食べさせて欲しいんだろ？」

ラーズ「ぶふっ!!? な、な、何で!!」

ラーズはいきなり凶星を言われて驚愕している

バン「本当に言うんですね。流石カミュさんです」

ロウ「ふおっふおっ、いい望みじゃな。やはり妻からの手料理は憧れるからかう」

マルティナ「ふふ、今度作ってあげるわ」

シルビア「そうだ、ラーズちゃん。ゴニョゴニョ」

シルビアはそつとラースの耳に話しかける

ラース「?!?!?な、誰も知らない事なのに！俺、話してないぞ?!」

ラースはまた驚愕している

シルビア「うふふ、あれは何とかした方がいいわ。見つかったら大変な事になるわよ」

グレイグ「ラース、あれは流石に処分しておけ。人の事言えんぞ」

ラース「すみません。どうか周りには言わないでください」

バン「師匠がものすごい速度で土下座した!？」

セーニヤ「何を言われたのでしょうか」

イレブン「皆、夢の中でラースの弱味みたいなのを見つけてたんだね」

ベロニカ「逸れた時かしら。私達なんて勉強してるラースしか見れなかったのに」

ラース「何なんだよ、皆して。俺、そんな事話してないぞ」

ぷつつ キラキラキラ

カミュ「あ、兄貴。ミサンガが切れたぞ」

マルティナ「あら、よかったじゃない。どう？夢は叶ったかしら？」

ラース「おかしいな。夢叶ったのか？俺はこのミサンガに本当の心をマルティナに見せるって願いのはずだったんだが」

全員「……………ふつつ」

ラース「え？何だよ、全員して顔合わせて」

マルティナ「それなら切れて当然ね。だって、私はあなたの本当の心を見せてもらったもの」

ラース「ええ!?!夢の中で皆、何してきたんだよ!!」

イレブン「いろんなラースが見れて楽しかったよ」

バン「ガラツシュの村、綺麗でしたね。自然いっぱい、人達も活気に溢れてました。特に広場にあるあの大きな木は立派でしたね」

ロウ「心地よい場所じゃったな。あれだけ自然に囲まれておるのも珍しいのう」

ラーズ「そうそう。自然に囲まれてよ、よく近くの森とかで……え？何でバンが知ってるんだ？イレブン達だって元のガラツシユの村は知らないだろ」

ロウ「夢の力じゃな。お主との祖父とも会って話してきたぞ」

グレイグ「お前の祖母やギルグード、村の皆ともな」

ラーズ「そういえば、夢の中で村の皆からお前は誇りだって言われた。よく思い返せば奥に皆もいた気がするぞ」

シルビア「ふふ、もしかしたら夢じゃないかもしれないわよ？」

マルティナ「ラーズ、忘れないでね？あなたの周りにはたくさん仲間がいるの。あなたはその仲間達を誇っていいのよ。自分を恥じないでいいんだからね」

ラーズ「……ふっ。そうだな、ありがとう、マルティナ」

ベロニカ「ちゃんと前見て歩くのよ！後ろばかり気にしちや駄目な
んだから」

セーニヤ「少しはラーズ様の助けになれたでしょうか？」

ラーズ「ああ、助かったぜ。皆が応援してくれたおかげだ
な。……あれ？いつ、俺は皆に応援されたっけ？」

ラーズは自分の発言に困惑している

イレブン「ふふ、さつきから困惑してるね。まあ無理もないよね。
夢の中だもん」

ラーズ「本当にお前達は俺の夢の中で何してきたんだよ」

マルティナ「秘密よ。ただ、とっても暖かいものを見れたわ。ガ
ラツシユの村の皆は誰もが暖かい人達ね」

ラーズ「さつきからの言いぶりだと本当に会ってきた感じだな。い
いなー！俺も久しぶりに皆に会いたかったぜ！」

バン「実は師匠も心の中で会ってたんですよ。今はそれに気付いて
ないだけです」

ラース「そうなのか？それなら俺だって覚えてていいのによ。全く、俺の記憶力も弱くなったものだな」

グレイグ「まあラースも完全に復活した事だし、起きるとするか」

セーニャ「そうでしたわ！今は何時なんでしょうか！」

ラース「あれから丸一日寝てたみたいだぜ。今はもう夜だな」

全員「ええ!?夜!?!」

バン「うわあ!!それまずいですよ！俺、朝の訓練行けてないじゃないですか！」

グレイグ「俺も王との仕事が!!」

シルビア「公演が明日になってるじゃない!」

ラース「お、おいおい。落ち着け、城の事は王様達が何とかしてくれたりしたい。シルビアは、まあ明日ならまだ大丈夫なんじゃないか?」

マルティナ「お父様達に感謝しないといけないわね」

カミュ「ただ変な時間に起きちゃったな。夜ならもう少し寝ていないとだな」

ベロニカ「でももう眠くないのよね」

ラース「なら朝まで時間がある。俺の夢の中での出来事を話してくれないか？」

イレブン「いいよ。まず、僕達が起きた時はね」

そうしてイレブン達は夜通し、夢の世界での話をした

その話が終わる頃には、ラースは毛布に包まっていた

ラース「何だよ、それ。恥ずかしすぎる。もう無理……。俺、皆の前に出れねえ」

全員「ハハハハハ！」

ラース「笑い事じゃないんだからな!!」

命日

それから五日後

ガラツシユの村 奥地

そこには勇者達とデルカダール王、城の兵士達が揃っていた

イレブン「さあ、ラーズ。花を」

ラーズ「ああ……」

ラーズは花束を墓の前に置く

ラーズ「皆、話は聞いた。俺の心の中にある闇を、勘違いを無くしてくれてありがとう。俺、自信なんて今まで持てなかったけど、これからはこの村の誇りとして、自信を持って生きていく。絶対に。また見守っててくれ。捧げ物はまた広場で焼いて届けるよ。宴会でも開いててくれ」

ラーズが墓に向かい祈り始めると全員頭を下げ、祈り始めた

数分後

イレブン「あ！」

デルカダール王「おお。何という事か」

祈っているラーズの周りには村の全員がこちらを笑顔で見て、祖父

と祖母はこちらに向けお辞儀をしているのが見えた

バン「師匠はこの村の全員からずっと思われている、という事がよくわかりますね」

マーズ「すげえ。あれがこの村の人達なのか」

ギバ「ラーズ將軍は幸せ者だな。こんなにたくさんの人から見守られてる」

ガク「皆、笑ってますね。俺も優しい気持ちになってきますよ」

ラーズが祈りを終えると皆の姿は見えなくなった

ラーズ「ハハ。どうやら周りに皆がいたみたいだな。少し懐かしい感じだった」

ベロニカ「あの中にギンさんとミルさんもいたわ。あの二人も村の人と一緒にいるのね」

ラーズ「皆、今日はこんな所に集まってくれてどうもありがとう。村の全員喜んでるだろうぜ。こんなにたくさんの人がこの村に来た事なんてなかったんだからよ」

デルカダール王「ガラツシュの村の方々、どうか安らかに」

ガラツシユの村 広場

グレイグ「ここにあの大きな木があつたんだな。焼け落ちて、今は何も残っていないが」

ラーズ「ああ、そうだ。ここに神木様があつたんだ。何も無いように見えるが、ここ見てみるよ」

ラーズは地面を指す

セーニヤ「あら?…:… これは芽ですか?」

ラーズ「ああ、そうだ。ここにも新しく植物ができようとしている。自然は時が流れるにつれ、こうやって新しいものへと変わっていく。俺も変わっていかないとな」

シルビア「そうね。もしかしたらこの芽が大きくなれば、また大きな木ができるかもしれないわ」

ロベルト「新しい木が変わって、またここに誰かが住み始めるんでしょうか」

ラーズ「そうかもしれないな。そしたらまたここも賑やかになる」

カミュ「これも命のサイクルなんだな。人間と自然の関係性によるものか」

ラース「さて、これを燃やしますか。皆、火はよろしく。イレブン達は曲の準備だ」

そうして捧げ物は燃やされ、煙はバギにより上にあがっていった

その間、ずっと安らぎの唄が流れていた

しばらくして

ロウ「全て燃え尽きたのう。これできつと届いた事じやろう。唄も一緒にな」

ダバン「今のがこの村の子守唄ですか。いい曲ですね」

ラース「ありがとな。さあ、これで墓参りは終わりだ。皆ありがとう。さあ、城に帰ろう」

そうして仲間達は元の場所へと帰っていった

それから一週間後

デルカダール城 王の私室

ラースとグレイグはデルカダール王に呼ばれていた

ラース「王様、お呼びですか」

デルカダール王「うむ。お主とグレイグに話があつてのう」

グレイグ「私達二人にですか。どうされたのですか」

デルカダール王「わしも旅行に行きたい」

グレイグ「……ん？」

ラース「え？」

デルカダール王「わしも旅行に行きたいんじや。家族ぐるみでどこかに行ってみたいんじや」

グレイグ「まだ諦めていなかったのですか。いくら王位から離れたと言つても、王は易々と人前に出れるお方ではないのですよ」

グレイグはため息混じりに呟く

デルカダール王「じやが、子ども達もわしとどこかに行きたがつて

おつてのう。どうか頼まれてはくれんか」

ラーズ「マルス達が……ですか。ですが王様。行くとしてもあまり人目につかない所になりますよ?」

グレイグ「おい、ラーズ。もっと反対するのだ」

デルカダール王「わしはそれでも構わん。可愛い孫達の願いは叶えてやりたいのだ。グレイグよ、お主は子ども達の願いを無碍にする気か?」

グレイグ「ぐつ……。ですが王よ。城はどうするのです。姫様も誰もいなくなるのは問題ではありませんか?」

デルカダール王「城はわしが他の国に行っている時のように封鎖すればよい。兵士やメイド達には休みだと言っておくのじゃ」

ラーズ「ですがどこに行くのですか?場所はほとんど選ばませんよ」

デルカダール王「いい機会でな。実はクレイモランに行こうと思っておるのだ」

グレイグ「な!?!何を言っておられるのですか!あそこは寒い上に、人も多いのですよ!それに寒さで体調を崩されたらどうするのです!」

ラーズ「おい、グレイグ。寒いと二回言ったぞ」

デルカダール王「リーズレット殿の恩を返そうと思っていな。困った事は特になさそうなので、とりあえずお礼の品だけでも持っていきたいのじゃ。子ども達からのお礼もまだだったからのう」

グレイグ「お城に用があるという事ですか。それなら確かに人目や理由づけには困りませんが」

デルカダール王「そうであろう?もうシャル殿には手紙を出してあるのじゃ」

ラーズ「仕事が早い!!俺達の意見なんて聞く気なかつたんですか!?!」

デルカダール王「ハツハツハ!お主達の事じゃ。無理に止める事はせんだろうと思っておったからな」

グレイグ「ハア。ラーズ、諦めろ。こうなつた王は止められん。周りにクレイモランへの用事で城を空けると伝えておけ」

ラーズ「そうみたいだな。まあ、元々止める気はさらさら無かったけどよ」

グレイグ「私は姫様に話をさせていただきます。それではお先に失礼します」

グレイグは部屋から出ていった

ラーズ「ハア。王様、策士ですね。そのお城の用事は偽装ですよね。本命は何ですか？」

ラーズは呆れたように言った

デルカダール王「ハツハツハ！流石はラーズじゃ。気づかれておったか。なに、心配はいらん。何やら最近、クレイモランに新しい人気のスイーツ店が出来たと聞いてな。わしも行ってみたいんじゃないや」

ラーズ「そんな事だと思いましたよ。グレイグに怒鳴られても知りませんからね」

ラーズもため息をついている

デルカダール王「それともう一つ用事があつてな。先日マヤ殿から手紙が届いて、学校が連休に入るらしい。期間が短いので城には行けない事を謝られてのう。それなら、わしらから向かえばよいだけの話じゃ」

ラース「完全に前のマヤとの旅行を根に持ってますね。わかりましたよ。何処か立派な宿を手配しておきます」

デルカダール王「頼んだぞ、ラース。楽しみにしておるぞ」

家族旅行

数日後、デルカダール城 大広間

「デルカダール王達は全員でクレイモランへ向かおうとしている

グレイグ「それでは王よ、準備はよろしいですか？」

「デルカダール王「うむ。これで完全体制じゃ」

「そう言うデルカダール王はブーツやコートを着て、そりの乗り物などたくさん持っている

「ラース「遊ぶ気満々じゃないですか。その荷物はまだ必要ないです。雪用の靴もまだ履かなくていいですよ」

「マルティナ「お父様ったら。久しぶりに外に出れて嬉しいのは分かりますけど、落ち着いてくださいね」

「マルス「じいじと旅行！」

「ルナ「何して遊ぼうかなー」

「デルカダール王「マルス達よ、楽しみにしておれ。わしもお主達と一緒に楽しもうではないか！」

二人「わーい！」

グレイグ「ハア。王は子どもに弱くて困ったものだ」

クレイモラン城 玉座の間

デルカダール王「シャルル殿よ、リーズレット殿よ。突然の来訪、すまなかつたな」

シャルル「いえ、デルカダール王様、お気になさらないでください。私達も喜んで歓迎いたします。どうか、このクレイモランを楽しんでいってください」

デルカダール王「リーズレット殿よ、これはお主へのプレゼントじゃ。わし達を救ってくれたお礼として、受け取ってほしい」

リーズレット「わざわざありがとうございます、デルカダール王様。それなら、ありがたくいただきますわ」

デルカダール王「子ども達もお主に会えるのを楽しみにしておったのだ。マルス、ルナ、おいで」

マルス「お姉さん！僕達を助けてくれてどうもありがとうございます！」

ルナ「お姉さんのおかげで皆、助かったよ。ありがとう！」

リースレット「あら、しっかりお礼を言えるなんていい子達ね。ふふ、どういたしまして」

その後、大広間

入り口からはロウが歩いてきた

ロウ「む？おお！デルカダール王ではないか!?こんな所で一体どうしたんじゃ」

デルカダール王「おお！ロウではないか！わし達は今、リースレット殿にお礼の品を渡した後、家族で旅行をしようと思っておつたのだ。ロウこそどうしたのだ。ユグノアにおけるではなかったのか」

ロウ「なるほど。そうであつたか。わしは今、ユグノアの商店街にジャンボウニの供給を頼もうと思つて来たんじゃ」

デルカダール王「ユグノアの商店街は世界の様々なものが並んでいと聞く。なるほど、ここのジャンボウニは名産品だからな。それを取り入れるわけか」

ロウ「そういうわけじゃ。それではわしはシャル殿と話してくるぞ」

カミュとマヤの家の前

デルカダール王「おお。ここがカミュとマヤの家か」

グレイグ「王は来るのは初めてでしたね。きっと二人も驚かれますよ」

マルティナ「ラース?どうしたの?」

ラースは隅で雪を集めている

ラース「へへ、カミュにいたずらしてやろうと思ってな。少し雪を集めて、ドアを開けた時に全部頭に落としてやるんだ」

マルティナ「また子どもみたいな事して。そうやってるからカミュも怒るのよ」

ラース「いいんだよ。あいつはからかい甲斐があるからな。反応が面白えんだ」

マルス「父さん、雪集めてるの?」

ルナ「ルナもやるー」

ラース「よし！どんどん集める！」

ラースは子ども達と一緒にどんどん雪を集め始めた

グレイグ「全く、困った父親だ」

デルカダール王「ハツハツハ！カミュと仲良しではないか
！」

その後

ラース「おーい！カミュー！いるかー？」

ガチャ

カミュ「突然どうしたんだよ、兄貴ぶっ」ドサ

カミュは大量の雪に埋もれてしまった

マヤ「え!?!兄貴!?!」

ラース「アハハハハ!!カミュだるまだ！アツハツハツハ！」

雪からはカミュの特徴的な髪の毛が少し見えていた

グレイグ「くっ…くく」

グレイグも笑いを堪えている

カミュ「だあつ!!てめえ、ラース!!ふぎけやがって!!」

ラース「やべえ、怒った、怒った。アツハツハツハ！」

二人は遠くへと走っていく

マヤ「また兄ちゃんの罠にかかてるよ。姉ちゃん達、久しぶり！急にどうしたの?って、王様!?ええっ!？」

マヤは王様の姿に驚いている

デルカダール王「驚いてくれたか、マヤ。わしからのサプライズじゃ」

マヤ「う、うん。とつてもビックリした。お城はどうしたの?」

グレイグ「今日はクレイモランの城に用事があったな。こっちに來ていたのだ」

デルカダール王「折角じゃから家族旅行をしようと思っいてな。マヤ達も誘いに來たのだ」

マルティナ「ふふ、マヤちゃんは前にお父様やグレイグとも一緒に旅行したいって言って言ったじゃない?場所はここになっちゃったけど、いいかしら?」

マヤ「全然構わないよ!!やった!!すっごく嬉しい!!早速あがってよ。お城みたいに綺麗なんかじゃないけどさ」

マルス「マヤねーちゃん!お邪魔します!」

ルナ「お邪魔します。マヤねーちゃんの家だー!」

その後

ラース「よお!戻ったぜ」

カミュ「てめえ、マジで俺にいたずらするの本当にやめろ」

グレイグ「邪魔してるぞ、カミュ。大勢ですまないな」

カミュ「王様!!?な、何でここに!!」

デルカダール王はカミュに説明した

カミュ「そつか。家族で旅行か。俺達も入れてくれたんですね。ありがとうございます」

デルカダール王「お主達もわしの息子、娘同然なのだ。当たり前で

あろう」

マヤ「王様、ありがとうございます！」

グレイグ「しかし、この後はどうするのですか？どこに行くかなど聞いておりませんが」

デルカダール王「場所はもう既に決まっておる。行き先は、ここに最近できたスイーツ店じゃ！連絡をいれ貸し切りにしてもらってあゝる。カミユ達も行くぞ！」

ラース以外全員「ええ!？」

ラース「ハア。全く」

マルティナ「お父様ったらそんなことで貸し切りにしないでください。お店にも迷惑じゃありませんか？」

デルカダール王「なに、連絡したらお店の方から貸し切りにすると
言われてのう。人目を気にせず食べれるのはいいことじゃからな」

カミユ「王様、行動力ありすぎですよ」

マヤ「それつてもしかしてあの超人気店の事!?嘘!私、凄い人気だからしばらく行けないと思ってたのに!」

グレイグ「王よ……。まさか、このために城の口実を作ったのですか……」

グレイグは少し震えている

デルカダール王「ハツハツハ!すまん、グレイグよ」

グレイグ「何を考えているのですか!!!」

グレイグは怒鳴り声を上げる

ラース「まあまあ落ち着け、グレイグ。気持ちはわかるがもう遅い。押さえてくれ」

マルス「じいじ優しい!」

ルナ「ケーキいっぱい食べるー!」

スイーツ店

店員「ようこそいらっしやいました!デルカダール王様、王女様方!ぜひ心ゆくまでお楽しみくださいませ」

店員達は入り口に綺麗に並んでお辞儀している

カミュ「マジか。皆して並んでやがる」

マヤ「いしし。私ずっと気になってたんだ。人混みでよく見えなかったけど、こんな風になってたんだ」

マルティナ「私も楽しみだわ。ベロニカ達にも何か買っていきましよう。セーニヤなんか絶対喜んでくれるわ」

グレイグ「ハア。胃が痛い」

ラース「堅くなりすぎるなよ、グレイグ。少しは諦めろ」

デルカダール王「何をしておるのだグレイグ、ラース。さあ、どんどん食べるぞ！」

グレイグ「王よ！私はまだ言いたい事があるんです！」

ラース「王様には振り回されるな。まあ、ありがたいけどよ」

家族旅行2

ルナ「すつごうい！私、こんな綺麗なゼリー初めて見た！」

マヤ「へえ。これは本当にすごいね。私も初めてだよ」

ルナとマヤはショーケースにあるゼリーを興味津々に見ている

デルカダール王「ケーキも実に綺麗だ。これは見ているだけでも楽しめるようだな」

グレイグ「王よ!!自分がどれだけの事をしているのかわかっているのですか!?!」

デルカダール王「グレイグよ、ここは店の中じゃ。あまり他の話は慎むべきではないか？」

グレイグ「ぐっ……」

デルカダール王「ハッハッハ！安心せい。後でお主の小言はしつかり聞くからな」

グレイグ「……わかりました。小言ではないですからね」

グレイグは少し落ち着いた

カミュ「おい、兄貴。またたくさん持ってきたな」

ラースはまた数十個とケーキなどを持ってきた

ラース「一人でも食べれるが、これはマルティナの分もあるぞ。カミュ、お前も欲しいのがあるばやろうか？このタルトなんか甘さは控えめだ」

カミュ「……兄貴って食い物を人に分け与えられたのか」

ラース「は？お前までそんな事言うのかよ」

マルティナ「ありがとう、ラース。カミュ、その気持ちわかるわよ。私も最初は驚いたもの」

カミュ「やっぱりそうだよな。だって兄貴は旅の時も俺達に分けてくれた事ねえじゃねえか」

ラース「あれは別に皆同じ料理が多かったからだろ。ほしかったら俺みたいにおかわりもできたしな。お、美味しいな」

マルティナ「言われてみればそうだったわね」

マルス「カミュ、見て！このケーキに乗ってる果物がカミュみたいになってる！」

カミュ「マルス、俺の髪は果物じゃないんだがな。マルスはもう直させる気はないのか？兄貴」

ラース「おう！マルスも気に入ったみたいだしよ」

マルティナ「仲良さそうでいいじゃない」

カミュ「ハア。たくっ！舐められてるみたいで嫌なんだがな」

ラース「お、予想通りだな。カミュなら何だかんだ言って許してくれると思うってたぜ！」

カミュ「ああ？何ならマルスを力づくでも言う事聞かせてやろうか？」

マルティナ「うふふ、そんな事しないのは今まででわかってるわよ、カミュ」

ラース「あまりそういうのは気が乗らねえんだろ？」

カミュ「ちっ！」

カミュは少し顔を赤くしている

マヤ「マルス！そのケーキ美味しそうだね。私のと交換しない？」

マルス「いいの？僕もマヤねーちゃんの食べてみたい！」

デルカダール王「マルスよ、わしのとも交換してみないか？」

マルス「するー」

ルナ「ルナもおじいちゃんの食べたーい」

その後

店長「ありがとうございます！ぜひ、またのご来店をお待ちしております!!」

マヤ「いしし。すっごく幸せだった！私、また来ようっと」

カミュ「よかったな、マヤ。俺もここのケーキは甘さが控えめなのが多くて助かったぜ」

マルティナ「お父様、この後はどこに行くのですか？」

デルカダール王「うむ。次はマルスもルナも雪で遊んだみたいのではないかと思つてな。カミュ達はどこかいい所を知らないか？」

マヤ「うーん、雪で遊べて安全な所か。やっぱり港の前とかかな？」

カミュ「あそこならいいんじゃないか？あのシケスピア雪原の入り口付近。あそこなら雪がたくさんあるし、魔物もそこまでよつてこない。よつてきても精々メイジももんじやかスノーベビーくらいだぜ」

マヤ「あーそこいいね。確か頑張ればそりもできたはずだよ」

マルス「そりつて何？」

グレイグ「そりは雪の上を滑つて移動するんだ。雪の滑り台みたいなものだぞ」

ルナ「ルナ、雪だるま作りたーい」

マルティナ「それじゃあそこに行きましょう」

ラース「王様の雪対策はそのためですか。まあ、マルス達は雪で遊んだ事ほぼ無いからな。いいと思うぞ」

シケスビア雪原

ルナ「雪がいつぱいだー！」

マルス「僕、雪の上で寝てみたかったの！えい！」

二人はほとんど見た事ない雪に大はしやぎである

マヤ「ふふ、二人ともわくわくしてるね」

ルナ「皆く、雪だるまってどうやって作るの？」

ラース「よし、それなら作り方を教えるぞ。カミュもグレイグも手伝ってくれ。デケエやつ作ろうぜ」

カミュ「いっちょ派手なやつ作ってやるか」

グレイグ「雪だるまなど作るのは何年ぶりだろうか」

デルカダール王「わしも手伝おう。四人で孫達を驚かせてみせよ

う」

マルティナ「何だかすごいのが出来上がりそうね。ルナ、私達は少し小さめを作りましょう」

マヤ「私も教えてあげるよ。小さな雪だるまをたくさん作ってみよう」

ルナ「うん！ありがとう」

マルス「僕、父さん達の所行ってくるね！」

しばらくして

グレイグ「ふんっ！……よし、ラーズ。それで最後だぞ」

ラーズ「おっしや、任せろ！うらあ！」

デルカダール王「おお！これは想像よりも立派に出来たものだな」

カミュ「こんなにでっけえ雪だるまは初めて見たぜ。どうだ？マルス」

マルス「すつご〜い!!父さん達カツコイイ!!」

マルティナ「ええ!?何この大きさ!三段でどれだけ大きくしたのよ!」

ルナ「えー!!ルナ、こんなに大きい初めて見た!」

マヤ「私も初めて見たよ。人より大きいじゃん。すごいね、王様達」

デルカダール王「喜んでくれたかな?マルス達よ」

ルナ「おじいちゃん、凄い!」

マルス「僕、顔書いてみたい!カミュ、持って!」

カミュ「へいへい。ほらよ、届いたか?」

マルス「うん!えつと〜ここに目を書いて」

ルナ「マルス、ずるーい!グレイグさん、ルナも持って!」

グレイグ「ああ、これで大丈夫か？」

ルナ「わー、高ーい！ありがとう、グレイグさん」

マルス「いいなー、ルナ。カミュ、もっと高くしてー！」

カミュ「無茶言うなよ、マルス。俺はこれが限界だ」

マルス「カミュ、小さい！」

カミュ「てめえ、そこから思いっきり落としてやろうか」

カミュは少し額をピクピクさせている

ラース「あ、あれは本気でやろうとしてる。まあ仕方ないか」

マヤ「兄貴、意外と背の事気にしてるから」

マルス「それじゃあルナ。眉毛よろしくね」

ルナ「うん！……あれ？ねえねえ、今その木の後ろで何か動いたよ！」

デルカダール王「ん？この木の事かの？」

ルナ「ううん！そのもう二本後ろの木だよ！」

マルティナ「魔物かしら。お父様、あまり近づいてはいけませんよ」

ラース「俺が行きますよ、王様。どれどれ」

木の後ろにはスノーベビーがおり、足に怪我をしていた

スノーベビー「グルルルツ！」

スノーベビーはラースに威嚇している

ラース「あー、人間の罠にやられたな。親に見捨てられた感じか」

グレイグ「ラース、何がいたのだ？その感じだと大したものではないようだが」

ラース「スノーベビーが足に怪我をしているんだ。血が出ていてな、歩けないみたいなんだ」

マルス「え!?父さん、本当？僕も見ろ！」

ルナ「かわいいそう。ルナも行く」

マヤ「あ、二人とも気をつけて。子どもでも爪や牙は痛いからね」

スノーベビー「グルルルツ！」

デルカダール王「おお、かわいいそうに。グレイグよ、何とか治してやれないか？」

グレイグ「ですが、興奮を抑えないと回復させた時に飛びつかれてしまいます。もう少しお待ちください」

マルティナ「あ！ルナ！近づいたら駄目よ！」

ルナが近寄るのをマルティナが引き留めた

ルナ「だって痛そうなんだもん」

カミュ「大勢で来たから興奮してるんだろう。そうだ、少しだけ乾燥肉がある。これを与えてみよう」

マヤ「あのカバンの中だよね？取ってくるよ」

リース「マルス、お前もあまり近づくなよ。爪で引っかかれるぞ」

マルス「う、うん。わかった」

マヤ「はい、これ」

カミュ「よし、これくらいでいいかな。マルス、ルナ。お前達で餌を置いてみるか？」

ルナ「いいの？」

デルカダール王「危なくないかの？」

カミュ「少し手前に置いてやれば警戒はしても肉だと気づいて、自分で食うはずだぜ」

マルス「これくらいでいいかな？」

マルスは肉をちぎり、スノーベビーの前に置いた

リース「そのくらいだな。お、反応してるじゃないか」

スノーベビー「クンクン……！ガツガツガツ」

スノーベビーは夢中でお肉を食べ始めた

ルナ「よかった、食べてくれてる」

スノーベビー「クーン？……」

マルティナ「あら、落ち着いたみたいね。敵意は無い事がわかったのかしら」

グレイグ「これなら大丈夫でしょう。私が回復魔法を使いますよ」

ルナ「待って、グレイグさん！私がやる！」

デルカダール王「そう言えばルナはホイミを使えたな。よし、やってみてくれ」

マヤ「気をつけるんだよ、ルナ」

グレイグ「俺が近くにしよう。ルナ、やってみてくれ」

ルナ「よしよし、痛いよね。すぐに治してあげるね。えつとこうやって、ホイミ！」

スノーベビーの傷は塞がった

スノーベビー「!!キャン!キャン!」

スノーベビーは動けるようになり、喜んでいる

マルス「あ!元気に駆け回ってる!可愛いね!」

ルナ「キヤア!あ、私の顔舐めてる!くすぐりたいよ」

スノーベビーはルナに飛びつき、顔を舐めている

マヤ「確か舐めるのって感謝とか信頼の証だっけ?」

カミュ「どうやら懐かれたみたいだな。少し心苦しいんじゃないか?」

マルティナ「そうね。ルナ、野生に返してあげて。その子の親も探してるはずだわ」

ルナ「えく、お母さんお願い。もう少しだけ撫でさせて」

マルス「僕ももう少しだけ撫でたい。駄目?」

デルカダール王「まあ、少しだけなら大丈夫ではないか？」

リース「……わかった。もう少しだけだからな」

二人「うん！」

家族旅行3

しばらくして

二人「わくい！」

スノーベビー「キャン！キャン！」

マルス達とスノーベビーはそりで何度も滑って楽しんでいる

デルカダール王「ハツハツハ！そりは楽しそうだな！」

グレイグ「確かにあれは頑張ったかいがあるな。まさか坂を作るのがあんなに大変だとは思わなかったが」

マヤ「もう一回行くの？二人とも」

マルス「うん！そりって楽しいね！」

ルナ「おいで、シロ。もう一回乗ろう！」

スノーベビー「クウーン」

スノーベビーも喜んで二人についていく

マルティナ「ねえ、ラース。あの子って」

ラース「わかってるさ、マルティナ。あの子は親に見捨てられた子だ」

カミュ「やっぱりそうだよな。さつき奥の方でホワイトパンサーがこつちを見ていた。だが、他の子と一緒に戻っていったからな」

マルティナ「このままでいいのかしら？野生に返しても、あの子は生き残れないんじゃないかしら」

ラース「そうだとしても、返さなきゃならない。デルカダールはあの子にとって気候が違いすぎる。暑くて死んでしまうだろう」

カミュ「だが、返した所で人間の優しさを知った魔物は毒牙が抜ける。ましてやまだ子どもだ。すぐに死ぬだろうな」

マヤ「ねえ、兄貴。私達で」

カミュ「駄目だ、マヤ。気持ちはわかるが世話ができない。家を空ける事が多いんだ」

マヤ「そっか……。ごめん、兄貴」

カミュ「謝る必要はない、マヤ。これが自然の流れだ」

ラース「ほら、マルス達。スノーベビーとお別れだ。野生に返してやるんだ」

デルカダール王「その子とたくさん遊んだであろう。つらいだろうが、返してやりなさい」

マルス「え……う、うん。わかった」

ルナ「お母さん、お父さん、お願い。お城に連れて行って」

マルティナ「ごめんね、ルナ。その子は寒い所でしか育てないの。デルカダールはここより暖かくて、その子にはつらいの。だから、返してあげて」

ルナ「……わかった。シロ、ほら、ありがとう」

スノーベビー「キューン？クウーン……」

スノーベビーは二人についてこようとする

マルス「来ちゃ駄目だよ。ほら、あつちに帰って」

スノーベビー「……………」

スノーベビーはトボトボと雪原の方へと歩いていった

二人「……………」

二人も悲しそうな顔で見つめていた

ラーズ「…………… さあ、城下町に戻るぞ」

クレイモラン城下町

デルカダール王「ラーズよ、宿は用意してくれたのだな？」

ラーズ「はい。よさそうな所を探しておきました」

マルティナ「ええ!? そんな事までしてたの?」

ラーズ「ああ。八人で予約してあるぜ」

カミュ「八人……………? おい、それってまさか」

マヤ「私達も入ってるじゃん!!」

デルカダール王「ああ、もちろんだ。これは家族旅行なのだからな。お主達も宿に来てほしいのだ」

カミュ「まさか俺達がクレイモランの宿に泊まるのか」

マヤ「私、初めてだよ。家があるからそんな機会あるわけないって思ってた」

グレイグ「王よ、そこで私とお話しさせていただきますからね」

デルカダール王「わかっておる。それではラースよ、案内してくれ」

ラース「はい。こっちです」

宿

主人「お待ちしております、デルカダール王様方！うちをご利用ください、誠にありがとうございます！それではお部屋へのご案内させていただきますね」

その夜

ラース「よし、皆で飲みに行こうぜ。折角クレイモランに来たんだ。お城の料理以外は久しぶりだろ？宿のご飯は王様と子ども達以外頼

まなかつたんだ。さあ、行こうぜ！」

グレイグ「な!?!いいのですか、王よ！」

デルカダール王「ああ、お主達でぜひ楽しんでくるといい。わしは子ども達と一緒に楽しもう。先ほどの件は少し宥めておいてやるからな」

マルティナ「ありがとうございます、お父様」

マヤ「ご飯も兼ねてるんだよね?それならあそこかな、兄貴」

カミュ「だな。いい店を知ってるんだぜ、兄貴。案内してやるよ」

ラース「流石だな、カミュ!任せた！」

酒場

カミュ「ここだ。奥に個室もあるからそこにしようぜ」

マヤ「私はここに来るの久しぶりだな。何かお祝い事がないと来ないんだよね」

グレイグ「む？あそこのカウンター席に座っている方は」

グレイグはカウンター席に座る特徴的な体格をした人に気付く

ラース「お！じいさんじゃないか！よお、じいさん！」

ロウ「ん？おお！ラース達じゃったか！こんな所でどうしたん
じゃ」

マルティナ「私達は今ここに夕ご飯を食べに来たんです」

マヤ「おじいちゃんも一緒に食べる？」

ロウ「どれ、わしも混ぜってもよいかの？」

グレイグ「ぜひ一緒に食べましょう、ロウ様」

その後

マルティナ「お城のご飯もいいけど、やっぱりこういう味も懐かし
くて好きだわ」

マヤ「そっか。姉ちゃん、昔はずっとこういうご飯だったんだもん
ね」

カミュ「それで兄貴？思惑は何だよ」

ラーズ「げ。マジか、気づいてやがった」

グレイグ「何か話があるんじゃないのか？わざわざお前が宿の美味いご飯を食べないなど、普通なら考えられん」

ロウ「何かあったのかの？」

ラーズ「少し真面目な話になってしまうんだが、俺があのお気に入りの場所で昼寝をするのを知ってるだろ？ここ最近、森の方から魔物の叫び声が聞こえてくるんだ。ナプガーナ密林より左のほうからだな」

マルティナ「魔物の叫び声ねえ。でも、ラーズならそれくらい何とかなるんじゃないかしら？」

マヤ「そうじゃん。兄ちゃんめちやくちや強いんだから何も悩む事ないんじゃないの？」

ラーズ「それがよ、何だか誰かと激しく争ってるみたいなんだ。何かはわからないんだが、かなり大きな音もするしな」

グレイグ「なるほど。それが魔物なら城下町に被害が出る恐れがあるな。話的にはかなり凶暴な魔物と予想できる」

カミュ「だが、可能性は魔物だけじゃねえな」

ロウ「そうじゃな。最近何やら物騒な話も耳にする。魔物を傷つけ、保護という名目で乱獲し、挙句そのまま殺す輩がおるらしいのう」

マルティナ「そんなやつらがいるのですか!？」

マヤ「ええ!?!めちやくちやヤバい奴らじゃん!」

ラース「そう。世界各地で活動が広がっているらしい。ベロニカ達から近くの山で一人捕まえたと聞いた。俺達も警戒しなければならぬからな。バン達にも見回りの範囲を広げてもらったんだ」

グレイグ「なるほど。それだけではなく、俺達で直に回り相手に警戒させる作戦だな?」

ラース「お、伝わったか。そうだ、そうすれば相手は手を出しにくくなる。俺達相手にするほど馬鹿ではないだろ。平和のために少し頼まれてくれないか?」

カミュ「俺は構わないぜ。実はクレイモランにも最近目撃情報があつたらしい。もうリースレットが捕まえたけどな」

グレイグ「俺も賛成だ。そんなやつらは放つてはおけないからな」

マルティナ「そうね。私は見回りは無理だけど援助はするわ。何かあつたらすぐに言つてちょうだい」

マヤ「兄ちゃん達はこうやって平和を守ってるのか。いしし、カッコいいよ！頑張つてね！私もそんなやつら許せないから応援してるよ」

ロウ「ユグノア周辺ではまだ話があるだけじゃが、いずれ出沒するやもしれん。警戒させておかんとな」

ラーズ「ありがとな、皆。それじゃあ真面目な話はここまでにして、折角の酒場だ！少し騒ごうぜ！」

ラーズ達はその後、お酒を飲んだりして騒いでいた

その後、宿

マルス「あ！父さん達お帰り！」

ルナ「お帰りなさい、お父さん達。あ！お酒飲んだでしょ！お父さんお酒臭い!!」

ルナは鼻を押さえている

マヤ「あ、兄ちゃんたくさん飲んだからね。バレちゃったよ」

マルス「うー、臭いよ父さん。僕、今日カミュと寝る」

ルナ「ルナはおじいちゃんと寝るー」

二人はラースから離れていく

ラース「ええ!?そ、そんなにかよマルス、ルナ！」

マルティナ「うふふ、嫌われちゃったわよラース」

マルス「カミュー、マヤねーちゃん、お部屋いこー」

カミュ「たくっ！仕方ねえな、来いよマルス」

カミュはマルスを抱っこした

マヤ「ふふ、一緒に寝るのは久しぶりだね。マルスがまだ小さかった頃以来かな」

ルナ「グレイグさーん、おじいちゃんはお部屋で待ってるよ。ルナも連れてって」

グレイグ「ああ、俺達の部屋はこつちだ。それじゃあな、ラース。姫様もおやすみなさいませ」

グレイグもルナを抱っこしていった

ルナ「お父さん、お母さん、おやすみなさい」

マルス「父さん、母さん、おやすみー」

マルスはカミユの腕の中で暴れている

カミユ「こら暴れんな、マルス。また明日な、ラース、マルティナ」

マヤ「じゃあねー。おやすみ、姉ちゃん、兄ちゃん」

マルティナ「皆、おやすみ」

ラース「また明日な、皆」

ラース達の部屋

マルティナ「ねえ、ラース。もしかしてお酒をたくさん飲んだのは、

こうやって私を甘えさせるためかしら？」

マルティナはラースに寄り添っている

ラース「何だか今日は俺の考えが皆にバレるな。その通りだぜ、マルティナ。前に約束しただろ？人目を隠せばマルティナは楽にしていいんだってな。この旅のどこかに作ろうと思っただけ」

マルティナ「ありがとう、ラース。嬉しいわ」

ラース「おう。俺もマルティナといられて嬉しいぜ」

二人はゆっくりとキスをして、眠りについた

森の異変

旅行から数日後、訓練場

ラーズ「という事で、バン達に森の調査をメインで頼みたい。城下の見回りは俺がするからそっちは頼んだぞ。魔物なら撤退、人なら罾などを見つけ次第破壊してくれ」

兵士達「はい！」

マルス「ねえねえ、バンさん。僕も行きたい！」

マルスはバンに同行を頼んでいる

ラーズ「どうした、マルス。兵士の仕事に興味があるのか？」

マルス「うん！だって父さんもグレイグさんも前はお城の兵士さんだったんでしょ？僕も兵士さんになって、父さんみたいに強くなりたいの！だからどんなお仕事してるのか気になるんだ」

バン「悪いな、マルス。今回は普通の見回りじゃなくて危険な仕事なんだ。マルスは連れていけないんだ」

バンは屈んでマルスと視線を近くした

マルス「えー！いいじゃん、連れてつてよ！大人しくしてるからさ！バンさん達から離れないから！」

バン「師匠……」

バンは少し困った顔でラースを見る

ラース「ハア。たくつ、マルス。今回ただぞ。少し待っててくれ。マルティナにマルスと俺と一緒にバン達の見回りについていく事を伝えてくる」

ラースも困ったように頭をかきながら渋々了承する

マルス「やった！流石父さん、わかってる！」

バン「師匠も来てくださるなら安心ですね！皆、師匠が久しぶりに一緒に行動してくれるぞ！張り切っていこう！」

兵士達「おー！」

ラース「俺はそんなに盛り上がるのか？」

その後、ナプガーナ密林付近

バン「それじゃあここからグループに分かれて行くぞ。マーズ、頼んだ」

マーズ「そうだな。三方向に分けて、大体5く6人で一グループに

しよう。……… って！バン！お前が考えやがれ！！兵士長だろうが！」

バン「俺は効率よくできる作戦はわからないからな！」

ロベルト「何誇ってんだよ。そんなんだからお前は馬鹿なんだよ」

ラーズ「バンがこうなのは元からだ。ほら、文句はわかるがさつきマーズが言った通りに別れる」

バン「流石師匠です！俺の事わかってますね！……… あれ？もしかして俺、今師匠にも馬鹿にされませんでした？」

ダバン「……… ハア。そんな事ねえだろ。ほら、バン。お前は突っ込むんだから俺が盾になってやるよ」

バン「頼りにしてるぜ、ダバン！」

ダバン「頭が痛くなりそうだ」

ベグル「ラーズ將軍とマルスはどこに入りますか？」

マルス「僕はどこでもいいよ！」

ラース「ならベグルの所に行くか。君は新入りだな、よろしくな。名前を教えてくださいませんか？」

ジール「俺の名前はジールと言います！皆を守れるようになりたいと思います、兵士になりました！」

ジールは少し緊張している様子で自己紹介した

ラース「いい心がけだな。知ってると思うが俺の名前はラースだ。前までは俺が兵士長として教えてたんだ。よろしくな。それと、ガクが斧を使うのを見るのは初めてだからな。どれくらい上手くなってるのか見てやろう」

ガク「俺っすか!?期待に添えられるかわからないですけど、頑張りますね！」

ベグル「ガク、力入りすぎるなよ。筋はいいんだからな」

その後

少し森の中を歩いていた

ベグル「特に変な感じはしませんがね」

マルス「探検みたいだね！少しワクワクしてきた！」

ガク「マルス君、あまりはしゃいで迷子にならないように気をつけるんだぞ」

マルス「はい！」

ラース「いや、魔物を一切見かけない。こんなはずないんだがな、どうなっているんだ」

ジール「!?端から何か走ってきます！」

ベグル「マルス！下がるんだ！」

マルス「うん！父さん、後ろにいるね！」

ガサガサツ！

キラーパンサー「ガルルルツ！」

草むらからキラーパンサーが出てきた

ガク「キラーパンサー!!」

ジール「かなり興奮しているようです！大人しくさせますか？」

兵士達は臨戦態勢を取っている

ラース「いや、待て。こいつ、牙が折れているな。口も何やら腫れている。誰か回復できるやつはいるか？」

ジール「俺が使えますよ」

ラース「よし、それならこれだ。夢見の花」

ラースは袋から夢見の花を取り出して、素早くキラーパンサーの前に出した

キラーパンサー「ガル!? スウ…」ドサ

匂いを嗅いだキラーパンサーは眠ってしまった

ベグル「なるほど。用意はされてたんですね」

ジール「それなら安心です。ベホイミ！」

ジールは口の怪我を治していく

マルス「この子も怪我してたのか。シロの時と同じだね」

ガク「このまま眠らせたままにしておきますか？」

ラース「それは流石にかわいそうだ。目を覚ませよ、ザメハ！」

キラールパンサー「ガッ!? グルル…:」クイツ

目を覚ましたキラールパンサーが自身に怪我が無く、完治している事がわかると、後ろを向いて顔で何か合図をこっちに送ってくる

マルス「あれ? 去っていくのかと思ったたらこっちを向いてる。こっちに来いって言ってるのかな?」

ベグル「行ってみるとするか。何かあるのかもしれないな」

キラールパンサーの住処

洞窟に入ると中には様々な魔物がいた

ジール「ここはキラールパンサーの巣ですか? あ、ベビーパンサー達や他の魔物達だ」

ガク「ビッグハットやリップス、きりかぶごぞうとか種類は問われないですね。これは魔物の集合場所でしょうか?」

マルス「何だか皆、僕達に怯えてるよ。怪我してる子も多いね」

キラールパンサー「ガウツ！ガウガウ！」ペコ

キラールパンサーは頭を下げて、何かお願いしている

ラース「なるほどな。どうやらこの犯人は密猟者で間違い無いな。ここには、そいつらのせいで怪我をしたやつらが集まっているんだ。このキラールパンサーはリーダー格みたいなやつだろう。他の仲間も治してほしいんだろうな」

ベグル「薬草とかでの治療なら俺達でもできます。重症のやつはジールに任せてもいいか？」

ジール「はい！任せてください！」

ガク「それじゃあ手分けして治療していきましょう！」

しばらくして

マルス「父さん、怖いよ。すぐく威嚇されてる」

マルスの前には興奮しているビッグハットがいた

ラース「仕方ないさ。なら、薬草をすり潰して食べられるようにしておこう。そうすれば自分で食べてくれると思うぞ」

マルス「う、うん。はい、これ。早くよくなってね」

ビッグハット「ブブウツ!!ブヒイ!!」

ラーズ「さあ、次にいくぞ」

キラーパンサー「ガウ！」ガブ

その時、キラーパンサーがラーズの手を軽く噛んで引つ張った

ラーズ「お、おう。おいキラーパンサー、あまり引つ張るな」

マルズ「あ、あの先にベビーパンサーがいる。このキラーパンサーの子どもかな？」

ベビーパンサー「きゆううう…」

キラーパンサー「ペロペロ」

ベビーパンサーは動けないようにで鳴き声も弱々しい。キラーパンサーも心配そうに舐めている

ラーズ「そのようだな。だが、随分と弱っているな。待ってる、少し水で肉を柔らかくして食わしてやろう。治療は栄養をつけさせてからだ」

マルス「お腹空いてるのかな？」

ラーズ「おそろく怪我や罨のせいで狩りができないんだろう。つらかっただろうな。何とかしてやらないと」

マルス「ほら、柔らかくしたお肉だよ。食べてくれると嬉しいな」

ベビーパンサー「クンクン……。パク……。パク」

マルス「何だかゆつくりだけど食べてくれるよ。少しは元気になるといいんだけど」

キラーパンサー「クウウン」

キラーパンサーも少し羨ましそうにお肉を見ている

ラーズ「お前にもやるさ。だが、待ってるあたり子どもを優先してるな。子ども思いだな、こいつは」

ジール「ラーズ将軍！こっちは全員終わりました。皆、治療をして元気が出てきたようです」

ベグル「残りはそのベビーパンサーだけです。一番奥にいて気づかなかったです」

ガク「何だか他の魔物より元気ないですね。かわいいそうですよ」

マルス「でもこのお肉全部食べてくれたよ！兵士さん！治療お願い！」

ジール「よし、ベホイミだ」

ジールは足や体についていた傷を治していく

少しして

ベビーパンサー「!!キャン！キャン！」

痛みが無くなったようで少し歩いている

ラーズ「お！元気出てきたな。走り回れはしないが多少動けるようになったな」

キラーパンサー「キャウウン。ペロペロ」

キラーパンサーも喜んでいる

ガク「親も喜んでますね。可愛いなー」

ベグル「しかし、こんな事をしているやつらがいるなんて許せない

ですね。俺達は畏の破壊をしましょう」

マルス「えへへ、元気になってよかったね。じゃあね！」

森の異変2

その後

森の奥付近には罾が多く、それらを全て壊していた

ベグル「想像以上に罾が多いですね。籠のものからトラバサミのよ
うなものまで様々ですよ」

ジール「これじゃあ魔物は外をうろつけませんね。生態系を壊す恐
れが高いですよ」

ガサガサツ！

近くの草むらが揺れた

ガク「そこにいるのは誰ですか!!」

男「やべっ！」ダツ！

怪しい男が逃げ出した

ラース「逃すか！シャインスコール！」

男「ぐふっ！」

ベグル「捕まえたぞ！お前がこの森に罾を置いた犯人か！」

攻撃が当たって転んだ男はベグルに捕まった

男「お、俺は関係ねえ！雇われてやってただけだ！」

ジール「雇われただって!？」

ラース「一先ず城に連れて行って吐かせるぞ。縄で縛っておけ」

マルス「うわー!!父さーん！」

マルスの叫び声が聞こえた

ラース「マルス!？」

男「へへへ、気を抜いたな。さあ、餓鬼の命が惜しかったら武器を下ろしてもらおうか」

マルス「ご、ごめん、父さん。後ろに気がつかなかった」

もう一人の男が刃物をマルスの首に当てていた

男は見せつけるように木や草むらを切って見せている

ガク「くっ……汚いぞ、お前」

ラーズ「わかった。全員武器を落とせ」

ガシヤン！

男「へへ、それでいいんだ。次は俺がいいと言うまで動くなよ」

ベグル「チツ！刃物で傷つける事に躊躇いがねえな。下手したら本気で刺されてしまう」

男「動くなよ、まだだからな」

男はどんどん離れていく

ジール「ラーズ將軍、どうしますか！このままではマルスが！」

ラーズ「今の俺達にはどうする事もできない。今は我慢だ」

ジール「ヒイツ！」

ラーズは物凄い形相と殺気で相手を睨んでいた

ガサガサ！

キラールパンサー「バウツツ!!!」

草むらからさっきのキラールパンサーが男に飛びかかった

全員「!?」

男「な、こいつは！怪我させたやつじゃねえか！」

キラーパンサー「ガルルツ!!!」ガブツ！

男「痛ってえ!!」

マルス「あ、助かった!!」

キラーパンサー「ガウ」パク

キラーパンサーは離されたマルスをすぐにくわえた

マルス「あ、ありがとう！」

キラーパンサーはレースにマルスを渡した

レース「お前、俺達についてきてたのか。ありがとな！助かった！」

男「くそっ！」ダッ！

男は走って逃げ出した

ガク「あ！あいつ、逃げますよ！」

ラース「逃さねえぞ！絶対許さねえ!!」ダツ！

ラースも走り出す

キラーパンサー「ガウ！」クイ

キラーパンサーもそれに並走し、ラースに合図を送る

ラース「ん？乗れって事か？よし、頼むぞ！キラーパンサー！」

ラースはキラーパンサーに飛び乗った

キラーパンサー「ガルルルツ！」ダダダツ！

キラーパンサーは慣れた様子で木々を避けながら猛スピードで駆けっていく

男「な!?!嘘だろ！」

ラース「オラア！」

その後、男も捕まえ他のグループの人とも合流した

キラーパンサー「ガウ！」タツタツタツ

キラーパンサーは森へと去っていった

「レース「ありがとな！キラールパンサー！」

「マルス「助かったよー！元気でねー！」

「ギバ「まさか魔物と仲良くなってくるなんて」

「バン「師匠！キラールパンサーに乗ってる姿とってもかっこよかったです！」

「ガザル「そんな事できたんですね！」

「レース「俺だつてキラールパンサーに乗るのは初めてだ。イレブンが乗ってるのは見た事あったけどよ」

「その後、デルカダール城 玉座の間

「レース「マルティナ、戻ったぞ」

「マルティナ「お帰りなさい、レース、バン達。どうだったかしら？」

「レース「バン、お前がまとめて報告してみろ」

「バン「はい！森の中は罠がとても多く、犯人は密猟者だと思われま

す！罾の破壊をし、さらに師匠達が犯人と思わしき男達を捕まえ
ました！」

マルティナ「あら！一気に話が進んだわね！わかったわ、その人達
は牢屋に入れましょう。連れて行って」

ベグル「魔物達が多数怪我をしており、森の中は罾だらけで外をう
ろつける状態ではありませんでした。魔物達の治療と罾の破壊、どち
らも終わらせてきました」

マルティナ「素晴らしい働きね。ありがとう、休んでいいわよ」

兵士達「はっ！」

グレイグ「しかし、やはり犯人は密猟者だったか。世界各地に出没
しているのは何か理由があるのだろうか」

ラース「大きな国の中でクレイモランとデルカダールで出没した。
サマディーやユグノアも無視できないだろうな。対策を考える必要
があるぞ」

マルティナ「そうね。お父様にも話してみるわ。ラース、他に報告
はあるかしら？」

リース「そうだな。大きな事ではないが、怪我を治した魔物達のリーダー格のキラパンサーと仲良くなってな。マルスが男達に襲われた時、そのお礼に助けてくれたんだ」

マルティナ「えええ!? マルスにそんな事が! キラパンサーは小さい子が好きだと聞くわ。マルスにもその感情が向けられたのかもしれないわね」

グレイグ「しかし、今回はお城に連れてこようとはしなかったのだな」

リース「そうみたいだ。やっぱり群れとして動いているのを見たからだと思うな。それか前回のスノーベビーで反省したか、だな」

マルティナ「まあ大事にならなくて本当によかったわ。リース、お疲れ様」

リース「おう。それじゃあ、一足先に休んでるな」

新たな家族

それから数日後

ナプガーナ密林前の川辺

ラーズはこの秘密の場所で昼寝をしていた

ラーズ「カー……………カー」

ペロペロ

ラーズ「……………ん？誰かに舐められてる？）ん……………」

ラーズがゆっくり目を覚ますと

ベビーパンサー「キャン！キャン！」

ベビーパンサーがラーズの目の前にいた

ラーズ「あれ？お前は確かあの時の」

キラーパンサー「ガウ！」

隣にはキラーパンサーもいる

ラーズ「おお、キラーパンサー。やっぱりお前達か。怪我はもういいみたいだな。お前の牙まで治してやれなくてすまないな」

キラーパンサー「ガウ、ガウ」クイ

キラーパンサーはまたラースに合図を送る

ラース「ん？またこつちに来いつてか？何かあったのか？」

森の中

ラース「ん？あそこにいるのは魔物達か？」

キラーパンサー「ガオオン！」

魔物達「ギャーギャー！」

キラーパンサーが吠えると魔物達は集まり、ラースの周りを回っている

ラース「え、ええ。何だ、何だ。俺の周りを回ってどうしたんだ。つて、あれ？お前達はもしかして、あの時の傷ついたやつらか？」

魔物達はラースに向かって一礼した

ラース「もしかして、俺にお礼を言いたかったのか？どうやら皆、元気になったみたいだな。お礼なら俺の兵士達にも言わないとだな」

キラーパンサー「ガウ。ガウ。ガオオオン！」

ベビーパンサー「キャン！ハッハッハ！」

キラーパンサーとベビーパンサーはラーズの前にやってきた

ラーズ「え？急に前に出てきてどうしたんだ？」

キラーパンサー「ガウ」

キラーパンサーはラーズに向かって伏せている

ラーズ「え？伏せしてるのか？え？どういう事だ？」

キラーパンサー「……ガウ」カプ

キラーパンサーはラーズの腕を軽く噛んで森から出て行く

ベビーパンサーもそれについてくるが、他の魔物達は見送っていた

ラーズ「お、おい！引つ張るなよ。森から出ていくのか？皆のリーダーだったんじゃないのかよ。いいのか？」

デルカダール城下町前

キラーパンサー「ガウ、ガウ」

ラーズ「送ってくれたのか？俺を城の人だと分かっているのかな？へへ、ありがとな、キラーパンサー」

ラーズはキラーパーンサーを撫でる

ベビーパンサー「ゴロゴロゴロ」

ラーズ「ハハ、喉鳴らして可愛いな、お前。また俺達はあの川辺にいるから見かけたらよろしくな。それじゃあな！」

それからさらに数日後

朝食時

マルス「父さん！僕、今日も遊んでくるね！」

ラーズ「またか、マルス。昨日も行ったじゃないか」

マルス「だってベビーパンサー可愛いんだ！それにキラーパーンサーも僕の事乗せてくれたの！すっごく速かったんだ」

マルスはここ数日ずっとキラーパーンサー達と遊んでいた

ルナ「ルナも行きたい」

マルス「皆もおいでよ！きつとキラーパーンサー達も喜ぶよ！」

マルスもキラーパーンサー達と遊べて喜んでいる

デルカダール王「ハツハツハ！随分と楽しんでおるようだな」

マルティナ「あまり遠くに行っちゃダメよ。ラーズ、今日行ってみたら？あなたのお気に入りのお場所の近くなんでしょ？」

デルカダール王「グレイグよ、お主も様子を見てくるのだ。わしもそのキラーパーンサーの親子が気になるのだ。よかつたらどういうやつらか教えてほしい」

グレイグ「わかりました。ラーズ、マルズ、ルナ、俺も行くぞ」

ラーズ「グレイグとルナは見るの初めてだよな。それじゃあ、ご飯後だな」

その後、ナプガーナ密林前の川辺

マルズ「あ！いたよ！おーい！」

ラーズ達が向かうと、既にキラーパーンサー達はそこで待っていた

ベビーパンサー「!!キャン！ハツハツハ！」

二人はラーズ達を見つけるとこっちに走ってきた

ルナ「えく、可愛い〜！」

キラールパンサー「ガウ、ガウガウ」

キラールパンサーもラースに挨拶しているようだ

ラース「よお、キラールパンサー。今日は他の人も来たんだ。マルスの双子のルナで、こいつも俺の子どもだ。よろしく頼んだぜ。こつちはグレイグ。俺と同じ城の騎士なんだ」

キラールパンサー「ガウ」ペコリ

グレイグにお辞儀している

グレイグ「こいつは人の言葉を理解しているのか？」

ラース「そうみたいなんだ。長い文章でも聞き取れるんだぜ。賢いよな」

ルナ「このキラールパンサー、牙が片方折れてる。かわいそう……」

マルス「これはあの密猟者達に付けられた傷なんだ。牙まで治してやれなくてさ、残ったままなんだよ。ごめんね、キラールパンサー」

グレイグ「なるほど。話に聞いたのと同じやつか。だが、他に特に怪我は子ども含めて無いようだな」

ベビーパンサー「キャン！キャン！」

ベビーパンサーは木の枝をくわえてやってきた

ラース「ん？木の枝？何だ、これ？」

マルス「あ、これはね、こうやって遠くに投げると取ってくるんだよ。この子はこれが好きみたいなんだ。ほら、行ってこーい！」

ベビーパンサー「キャン！」ダツ！

マルスが遠くに投げるとベビーパンサーは走って取りにいき、持ってきた

ルナ「すごーい！自分で持ってきてるよ！えらいね〜！」

二人でベビーパンサーを撫でている

ベビーパンサー「ゴロゴロ」

グレイグ「人に大分懐いているな。キラーパンサーは子どもに何かされると怒り出すと言うがそんな事も無いのだな。余程信頼されるのだろう」

ラース「人の優しさを知った魔物は毒牙が抜け、他の魔物とは違くなると思う。正にこれもいい例だな。そうだ皆、見てろよ。キラーパンサー、伏せしてみろ」

キラーパンサー「ガウガウ」

キラーパンサーは伏せをした

マルス「えええ！父さん、そんな事できたの？これなら僕でも頭撫でられるよ」

ルナ「頭の毛以外は結構固いのね。でもあつたかくい」

二人はキラーパンサーの頭を撫でる

ラーズ「キラーパンサー、ゴロンだ」

キラーパンサー「ガウ」

キラーパンサーはお腹を見せている

ラーズ「よしよし！」

ラーズも喜んでお腹を撫でている

グレイグ「な!?!弱点であるお腹まで見せるのか!?!しかも触っても怒りもしないのか!こいつは凄いな」

マルス「ねえ父さん。これだけ懐いてるならさ、お城に連れてつても……」

ルナ「あ、マルス、それはもう」

ラーズ「いいと思うぞ。俺はな」

二人「ええ!?!いいの!!?」

ラーズ「こいつらはもうあの群れには戻ってないみたいなんだ。前にお礼されたって言った日から様子を見てたが、ここでずっと俺達を待ってるみたいなんだ。もしかしたら、あの日から俺にくっ付いて来ようとしているのかもな」

グレイグ「なるほどな。待っているなら少しかわいそうだな。それに、ここまで懐いているならお城でも問題は無さそうだ。一度連れていってみるか。それで王達に話をして、試してみよう」

ルナ「やった!!マルス!父さん、グレイグさん!ありがとう!」

マルス「えへへ、試してみるものだね!よかったね、二人とも!」

ベビーパンサー「クウ?」

キラーパンサー「グルルル」スリスリ

キラーパンサーはラースに頭を当ててきた

ラース「おお、俺にすり寄ってきたな。よし、お城に行くか」

デルカダール城 玉座の間

ラース「マルティナー、デルカダール王様、大事なお話があります」

マルティナー「あらお帰りなさい、ラース。つて！ええ!!キラーパンサー！それにベビーパンサーまで！」

マルティナーはまさかの来客に驚いている

グレイグ「王を呼んでいただけませんか？姫様」

マルティナー「え、ええ。わかったわ、少し待っててね」

その後

デルカダール王「おお！何と可愛い事か。わしにも撫でさせてくれるか？」

ベビーパンサー「キャン！」

キラーパンサー「ガウ?.....!?クーン」コロソ

マルティナ「あら？お父様にお腹見せたわ。これって相手に負けを認めたって事かしら？」

デルカダール王「ハツハツハ！そんな事せんでもよい。どれ、少し触らせてもらうぞ」

デルカダール王はキラーパーンサーを撫でる

グレイグ「流石王です。何もせずとも上である事をわからせるとは」

ベビーパンサー「ゴロゴロ」

マルティナ「あら、この子ったら喉鳴らして可愛いわね。うふふ、見たことない場所で不思議がつてるわね」

マルティナも王様もベビーパンサーを撫でている

デルカダール王「おお、何といい肌触りだ。気持ちいいのう」

ラース「それでお城に居てもいいですか？」

デルカダール王「わしは構わんぞ。人にも噛まないようじゃのう」

マルティナ「私も平気よ。少し驚かれるかもしれないけど、本当に安全なら放し飼いでいいかもしれないわね」

グレイグ「俺達が見れない時にマルス達を守ってもらうのもありだな」

ラース「そうだな。前の襲われた時のようにはなりたくないしな。よし！ここはお前達の新しい家だ！そして、家族だ！よろしく頼むぞ！」

キラーパンサー「ガオオン！」

触れ合い

数日後、デルカダール城 訓練場

キラーパンサーはブレイブと名付けられ、ラースと手合わせしていた

ラース「おお！ここでガードクラッシュか！やるじゃないか、ブレイブ！」

ブレイブ「ガウ!!」

ラース「いいぞ、ブレイブ！もつとこい！」

ベグル「ラース將軍、最近ずっとブレイブとああやって稽古してるよな。楽しそうだ」

ジール「俺達にお礼言われた時は嬉しかったですよね。覚えててくれてたんだって」

ガク「俺にも懐いてて嬉しいです！」

ギバ「基本来る人拒まずだもんな。本当いいやつだな、ブレイブは」

兵士達にもブレイブは人気のようにだ

バン「ムス……」

バンは不満そうな顔をしてラース達を見ている

マーズ「どうしたんだよ、バン。そんなつまらなさそうにして」

バン「師匠が俺と稽古してくれなくなった……。ブレイブに全部取られた」

ロベルト「ああ、なるほどな。いいじゃねえか、お前が死ぬ可能性が低くなったんだぞ」

バン「そんなのはどうだっていいんだよ。俺は師匠を支えるって決めたのに、急に出てきたあいつに全部取られそうなんだよ！」

ダバン「いや死ぬ事をどうでもいいとか言うな、馬鹿」

ラース「よし、ここまでだブレイブ。疲れただろ？」

ブレイブ「バウツ！」ブルブル！

ブレイブは毛を震わせている

バン「おい、ブレイブ！お前師匠と仲良くし過ぎだぞ！師匠を支え

るのは俺なんだからな！」

ブレイブ「ガウツ！ガウガウ!!」

バン「何だとコラ！お前俺にだけ吠えやがって！俺だつて強いんだからな！」

ブレイブ「ガブツ！」

ブレイブはバンの腕に噛み付いた

バン「痛え!!こんにやろ、絶対許さないからな!!」

バンはブレイブと取っ組み合いになった

ラース「お、おい、お前ら」

ベグル「馬鹿が。なにブレイブと張り合つてんだよ」

ガザル「ブレイブはバンだけ仲悪いもんな。まあ、バンもよく思つてないみたいだけどよ」

バン「あ、あれ？意外と強い、こいつ！」

ブレイブ「ガウウツ！」

バン「痛え!!痛根出そうとしてやがる！」

ブレイブはバンの攻撃を素早く避け、背後から奇襲していく

ロベルト「あれ?もしかしてバンのやつ、ブレイブに負けるんじゃないか?」

マーズ「おいおい、それは笑い事じゃなくなるぞ」

ラーズ「可能性はあるぞ。ブレイブは普通のキラーパーンサーなんかよりよっぽど速いし力も強い。群れを治めてただけあつて頭もいいからな。簡単な戦法だと通用しないぞ」

ガク「ええ!?!ブレイブってそんなに強かったんですか!?!」

ベグル「それならバンが負けたら兵士長の座はブレイブのものだな」

ジール「え、いいんですか?それで?」

ラーズ「おい、バン。お前ブレイブに負けたら恥だぞ。だが、ブレイブをあまり傷つけるなよな」

バン「そ、それって俺、勝てないですか!？」

ガザル「お前が勝つにはブレイブを傷つけずに勝て。それだけだな」

バン「とんでもねえ無茶振りだ!!んなの無理に決まってるだろ！」

イレブン「ラーズ！来たよー！って、本当にキラーパーンサーがいるよ」

カミュ「マジだったのか。すげえ事するもんだな」

上からイレブンとカミュの声がした

ラーズ「おおイレブン、カミュ！よお！今そっちに行くぞ」

その後

バン「痛ってえ。くそ！あの爪めちやくちや痛えな！」

ブレイブ「ガオオン！」

ブレイブはバンに勝つてご機嫌のようだ

ベグル「こりやあ兵士長はブレイブだな。バン、お前はお役御免だな」

バン「まだ諦めねえからな！」

ガク「あ、ブレイブ、ラーズ達なら玉座の間に行ったよ。行っておいで」

ブレイブ「ガウ！」

玉座の間

イレブン「うわゝ、モフモフだよ。可愛い」

コロ「クウン？」

イレブンはベビーパンサー、コロを撫でていた

マルス「可愛いよね、コロ。イレブンさんも気に入った？」

イレブン「うん。僕もほしくなってきたよ」

カミュ「しかし、さっきのキラーパンサーといいこのベビーパンサーといい、人に慣れてるな。言葉も理解してるしすげえな」

マルティナ「そうなの。今の所何も困った事が無いのよ。前にお客さんが来た時も自分から隅に移動して、怖がらせないようにしてたの」

ラース「本当でできたやつらだよ。ブレイブもかなり強いしよ」

ブレイブ「ガウ！」

マルス「あ！ブレイブ、お帰り。特訓お疲れ様ー」

ブレイブ「ガウガウ」ペコ

ブレイブはイレブンとカミュにお辞儀した

カミュ「おお、もしかして挨拶してくれたのか？よろしくな」

イレブン「凄いね、本当に賢いよ。やっぱりキラーパンサーっていいよね。凛々しくてカッコイイ。僕も旅の時に乗ってて気に入ったもん」

マルティナ「そう言えばイレブン。何か用があったんじゃないかしら？」

イレブン「そうそう、今僕はイシの村に帰ってて、そこで母さんからカボチャをマルティナ達にあげるって言われて持ってきたんだ。よかったら食べてよ」

リース「おお、わざわざありがとな。ありがたく貰うぜ」

マルティナ「カミュは私からの手紙を見て来てくれたのかしら？」

カミュ「まあな。気になったし、こつちにもそろそろ帰らないといけないなって思ってたからちようどよかったんだ」

マルティナ「そうなの。それじゃあまた何日かいてくれるのね。お父様も喜ぶわ。他の皆も近々ブレイブ達を観に来るみたいなの。楽しみだわ」

マルス「母さん、皆にお手紙出したもんね」

イレブン「そういえばルナちゃんはどこにいるの？珍しくマルスと一緒にじゃないみたいだけど」

リース「ルナは最近、魔法の勉強を始めてな。お城にある書物庫で魔導書をよく読んでるんだ」

カミュ「マジか。勉強熱心だな。努力家なのはラースの血なのかな」

マルティナ「まあ、そこまで長く続かないの。一時間か二時間もしたら出てくるわ。まだそれくらいでいいのよ。ゆつくり覚えていけばいいの」

ラース「そういえばブレイブ。お前、バンと戦ってたがどうなったんだ？」

ブレイブ「ガウツ！」

マルス「あ、何か胸を張ってるよ」

ラース「この反応だとブレイブが勝ったな。全く、バンのやつめ。さてはキラーパーンサーだからって舐めてたな」

カミュ「げ。マジか。こいつ、バンに勝ったのかよ」

イレブン「え！下手すると僕より強いんじゃない？ブレイブって」

マルス「ブレイブ凄いだよ！シュツて動いて、思いっきり飛びつくの！」

ラース「賢いからよ、魔法の隙やガードの隙を縫って攻撃してくるんだぜ」

カミュ「こりやまたとんでもねえ戦力だな。やるな、ブレイブ」

ブレイブ「ガウ！」

カミュはブレイブを撫でている

コロ「… スウ」

コロが眠くなったようで丸くなった

ブレイブ「！」カプ

それを見たブレイブはコロをくわえて窓の方へ向かった

イレブン「あ、コロが寝始めた。窓辺に連れていってるね。日向ぼっこかな？」

マルティナ「コロが寝るとよくあそこに行くの。日が当たって暖かいんだと思うわ」

マルス「僕ものんびりしてこよーつと！」

夕食時

イレブン「ごめんね。わざわざ泊まらせてくれるなんて」

デルカダール王「気にするな、イレブン。お主はいつだって歓迎するぞ」

コロ「クウン？ハツハツ！」

コロはテーブルの上の料理に興味津々である

カミュ「あ、コロ。悪いがこれはやれねえんだ」

グレイグ「最近コロが俺達の食事に興味を持ってな。こうやって覗いて少し貰おうとしてくるんだ」

ルナ「あげちゃダメなの？」

マルス「お魚やお肉じゃないと駄目なんだっけ？」

マルティナ「ええ。それもほとんど味がないやつね。この子達には濃い味は毒になっちゃうの。気をつけてね」

ブレイブ「ガウ」カプ

ブレイブは椅子にしがみ付いているコロをくわえて戻っていった

ラース「あ、ブレイブがコロを啜えていったな。ありがとな、ブレイブ」

カミュ「やっぱり賢いな、ブレイブ。隅でしっかり待ってるしよ」

イレブン「また乗せてもらおうかな。久しぶりで僕も楽しかった」

デルカダール王「イレブン達もブレイブ達と仲良くしてくれてありがとう。この子達はわしらの大切な家族になりつつある。どうかこれからも仲良くしてやってくれ」

対策会議

数日後、デルカダール城 玉座の間

今日は最近急増している密猟者達の対策をするために、サマデー、ユグノア、クレイモランの王族の人達がデルカダール城に集まっていた

サマデー王「お久しぶりです、デルカダール王。って、うわああ！キ、キラーパーンサー!？」

フアーリス「な、何でこんな所に!?!父上、お下がりください!」

サマデー王は驚いて腰を落とし、フアーリスが急いで剣を抜きサマデー王の前に出た

デルカダール王「ハッハッハ！驚かせてすまないな、サマデー王。この子はわし達の新しい家族のブレイブだ。人によく慣れておるから噛んだり襲ったりはしないぞ。安心してくれたまえ」

ブレイブ「ガウ」ペコリ

ブレイブはサマデー王にお辞儀をした

サマデー王「そ、そうでしたか。早とちりして申し訳ない。ブレイブだったか。お辞儀してくれるとほいい子なんじゃない」

サマデー王はゆっくり立ち上がった

ラース「お久しぶりです、サマデー王、フアーリス王子。最近そちらに顔を出せてなくてすみませんでした」

フアーリス「そんな!? 気にしないでよ、ラースさん! あなたがあれからたくさん指導しにきてくれてとつても助かってるんだ。また予定があったらぜひ来てほしいよ」

マルティナ「あ、コロ。そのマントで遊んじゃ駄目よ。ごめんなさい、フアーリス王子」

フアーリスの足下ではコロが鎧についているマントを引っ張って遊んでいた

フアーリス「あ、ベビーパンサーまでいたんだ。ふふ、可愛いじゃないか」

サマデー王「おお、わしの手を舐めておる。これは可愛いのうち

二人はコロを撫でている

しばらくして

シャルル「お久しぶりです。デルカダール王様」

リーズレット「あら。魔物の気配がすると思ったらキラーパンサーの親子がいるじゃない。一体どうしたの?」

グレイグ「実は最近新しく家族になったキラーパンサーのブレイブとベビーパンサーのコロだ。人によく慣れてるから噛んだりしないぞ」

ブレイブ「ガルルルツ！」

ブレイブはリースレットに向かって腰を低くして威嚇している

リースレット「あら、威嚇されてるわね。臨戦態勢までとってるわ」

ラーズ「な!?!ブレイブ、何してたんだ!やめろ!」

ラーズはブレイブを抑える

ブレイブ「ガル…：ガウ!ガウ!」

ブレイブはラーズに抑えられながらもリースレットに吠えている

デルカダール王「どうしたというのだ、ブレイブ。お主がこんなに吠えたりする事は無かつたであろう」

リースレット「多分、私と同じように私の中の魔物の力を感じ取っているのね。魔物が王様達の前に現れたから、追ひ払おうとしているのよ」

グレイグ「そういう事か。確かにリースレットも、キラーパンサー

達の事を魔物の気配と言っていたな。だが、リーズレットは安全である事を教えなければ」

ラーズ「ブレイブ、落ち着け。こいつは味方だ。威嚇するんじゃない。俺を信じろ」

ラーズはブレイブの正面に立ち、目を合わせてしつかり言い聞かせている

ブレイブ「ガル……」

ラーズ「よし、伏せだ」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブは伏せをした

ラーズ「よしよし」

サマデー王「おお、宥めたか。完全にラーズ殿が上である事をわかっておるのだな」

リーズレット「驚かせてごめんなさいね、ブレイブ。私はあなたと同じで味方よ。よろしくね」

ブレイブ「ガウ」ペコリ

ブレイブはリースレットにお辞儀した

シャルル「よかったわ、リースレットの誤解が解けて。それにしても見て、リースレット。このコロちゃん、とってもふわふわよ」

コロ「クウーン」

シャルルはコロを抱っこしていた

リースレット「あら、可愛い。まだまだ子どもなのね。牙も爪も生え途中ね」

ガチャ

イレブン「遅れてごめんなさい、皆様！」

ロウ「この年じゃとやはり歩きは苦勞するのう。イレブンのルーラに頼ればよかったわい」

デルカダール王「よし。これで全員揃ったな。それでは会議を始めよう。ラーズ、あまりこの部屋に近づかせるなよ」

ラーズ「はっ！」

大広間

大広間ではコロが元気に走り回っている

それをバンとブレイブとラースは見ていた

コロ「キャン！キャン！」

バン「コロは可愛いなく。どこかのキラーパーンサーとは大違いだ」

ブレイブ「ガウ！」ガブ

ブレイブはバンの腕に噛み付いた

バン「痛え！お前とは言ってるねえだろ、ブレイブ！」

ラース「言ってたようなもんだろ。ほら、ブレイブ。こっちに来い」

ブレイブ「ガウ」

バン「俺、師匠に捨てられたんですか？」

ラース「何言ってるんだよ、バン。俺の弟子はお前だけだ」

バン「ありがとうございます！師匠!!見たか、ブレイブ！お前なん

かより、俺の方が頼りにされてるんだからな！」

ブレイブ「ガッルル」

ブレイブはバンを威嚇している

ラース「何でそんなにブレイブを敵視してるんだよ」

バン「俺のライバルですから！師匠の隣にふさわしいのはどっちかという勝負をしてるんですよ！」

ラース「んなの勝負にならねえだろ。俺の隣にはマルティナ以外ありえない」

バン「あ、そういう意味ではなくて戦闘の事ですよ」

ラース「ん？そっちもそうだが？」

ブレイブ「キャウン!!？」

バン「…………… え？そ、そんなー!？」

二人はショックを受けたような顔をしていた

その頃

マルティナ「やはりサマデーの方でも出役しましたか」

サマデー王「うむ。まだ犯人は見つかっていませんが、罨やサボテンボールなどの魔物の減少が見られるといいます。今、兵士達総出で何とかしようとしているところですよ」

シャルル「やはり各国の戦力を集め、情報の交換をした方がよろしいですね」

ロウ「そうじゃな。じゃが、出せる戦力は自ずと予想がつくがの」

デルカダール王「そうなるな。まあそれが一番いいのだ。サマデーはやはりファース王子か？」

サマデー王「はい。それと数人の選り抜いた兵士達です」

リーズレット「少し言いかしら？ 実は、私の独自の調査の結果犯人達のアジトと思わしき場所がわかったのよ」

全員「!？」

リーズレット「場所はクレイモランの北西にある山の中ね。あそこから、謎の荷物をのせた馬車が入り込んでいくのを見たの」

マルティナ「そんな所に。とてもありがたい情報だわ」

シャルル「もう、リーズレット！また危険な事して！」

リーズレット「ごめんなさい、シャルル。でも放っておけなかったのよ。許してちょうだい」

サマデー王「となると、そこに踏み込んで見たほうがよろしいですな」

リーズレット「人間の気配は多かつたように感じたわ。あまり少数だと逆にやられてしまう。こっちもそれなりの人数と戦力が必要ね」

デルカダール王「となると、やはり」

サマデー王、デルカダール王、シャルル王女は三人とも同じ方向を見た

イレブン「僕達の出番ですかね」

シャルル「やはりそれが一番の策になりますよね。ですが、イレブンさん達にはこれまでも様々な事をしてもらっています。あまり頼りすぎるのもどうかと思うのですが」

サマデイー王「そう言われると苦しいものがありますね」

ロウ「なーに、気にするでない。のう、イレブン、姫」

マルティナ「ええ。気にしないでください。私達は皆でまた集まるのが好きなんです。内容が何であれ」

イレブン「そうそう。あのメンバーなら何だってできるんだから。任せてください」

デルカダール王「では申し訳ないが頼んでもよいかな。何かあればすぐに報告してほしい」

シャルル「近くは私達の国があります。どうかご活用ください。私達で精一杯の援助をします」

イレブン「ありがとうございます、皆さん」

デルカダール王「サマデイーにも少し戦力を分けた方がいいか？わ

し達の兵士を向かわせて、援助をする事もできるぞ」

サマデー王「お気持ちは嬉しいですが、まだ大きな事態にはなっていないません。罾も砂嵐であまり設置されてないと聞きます。自分達で何とかありますよ」

マルティナ「わかりました。ですがもし何かありましたらご連絡をください。すぐに援助しますね」

デルカダール王「わざわざ集まってもらってすまなかった。各自、魔物の生態系を壊されないように今後も努めてほしい。イレブン達勇者のメンバーはアジトと思われる場所に向かってくれ。それでは解散じゃ」

アジト潜入

少し残酷な描写があります。苦手な方はお気をつけください

会議から四日後

デルカダール城 大広間

仲間達が全員集まっていた

ベロニカ「なるほどね。そいつらのアジトに乗り込むために私達が選ばれたのね」

セーニヤ「緊急の集まりと聞いて何が起こったのか不安でしたが、少し安心しました」

イレブン「心配させてごめんね。やっぱりこのメンバーが一番いいと思ってね」

マルティナ「大丈夫よ、イレブン。私も戦力やチームワーク的にも何も問題無いと思ったわ」

シルビア「それじゃあ悪い密猟者ちゃん達を懲らしめに行くわよ」

城門前

そこではバンとブレイブが言い合っていた

バン「だーかーらー、駄目だって言ってるだろ、ブレイブ！」

ブレイブ「ガウ！ガルルル！」

ラース「おい、何してんだよブレイブ、バン」

バン「あ、師匠！聞いてくださいよ。ブレイブが皆さんについて行きたいみたいで、ここから動かないんです」

ブレイブ「クウーン」

ブレイブはラースに擦り寄ってきた

ベロニカ「この子が手紙に書いてあったキラーパーサーね。結構可愛いじゃない」

カミュ「だが、危険だしこことは気温も違う。ブレイブには少し厳しいんじゃないか？」

ラース「悪いな、ブレイブ。お前はお城で待っていてくれ」

バン「ほら見ろ、ブレイブ。お前は今回は無理だ。俺も行きたいけ

ど我慢するんだから、お前も我慢だ。師匠、せめて見送りだけはさせてください」

ラース「それは全然構わないぜ」

ブレイブ「ガウ……」

ブレイブは残念そうにしている

ロウ「それでは向かおうかの。ブレイブよ、無事に帰ってくるから待っておるんじゃないぞ」

イレブン「それじゃあクレイモランまで行くね。皆、くっ付いたよね？ルーラ！」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブはマルティナに飛びついた

マルティナ「え!?ブレイブ!?!」

シユン!

バン「あー!?!ブレイブのやつ、何してんだよ！」

クレイモラン城下町

「ラス「おい、ブレイブ!!お前、わがまま言っついてきやがって
！」」

ブレイブ「クウーン……」

ブレイブはラスに怒られ、しよんぼりしている

シルビア「そこまでして付いてきたかったのね。ラスちゃんに忠誠心があつていいじゃない」

ラス「イレブン、悪いがもう一回ルーラを頼む。お城に戻ろう」

マルティナ「ねえラス。ここまで来たならもういいんじゃないかしら?」

「セーニャ」そうですわ。それにこのまま帰すのも何だか心苦しいです」

ロウ「ほほ、元気でいいではないか」

ラス「マジか……ハア。全く、ブレイブ。次からはこんな事するなよ?今回だけだからな」

ブレイブ「ガウ!!」

ブレイブはラースの了承が取れて顔が明るくなった

グレイグ「ハハ、喜んでいるようだな。尻尾を振っているではないか」

カミュ「ブレイブは寒くないのか？」

ブレイブ「ガウ」コク

イレブン「まあ毛皮あるもんね。それにラースの話通りならブレイブは普通のキラーパンサーより結構強いんだよね？戦力としても問題無いんじゃない？」

シルビア「あら、そうなの？ブレイブちゃん凄じじゃない」

ベロニカ「へー、あんた結構できるみたいね」

マルティナ「それじゃあアジトのある方に行きましょう」

山内

ガサガサ

山の中を雪や草を掻き分けて進んでいた

セーニヤ「結構草木が生い茂っています。人が踏み荒らしたような跡がありますわね」

グレイグ「この道を歩いていけばアジトに繋がっているのかもしれないな」

ブレイブ「!!ガウ！」

ブレイブは地面を見て吠え始めた

カミュ「ん?どうした、ブレイブ。何か見つけたか？」

シルビア「あ!これ、靴の跡よ。しかも周りより新しいわ」

マルティナ「凄いじゃない、ブレイブ!お手柄よ！」

イレブン「でも跡が多くてどれがそうなのか判断しにくいね」

ブレイブ「ガウ、ガウ！」クイ

ブレイブは一つの靴の跡を追い始める

ラース「流石ブレイブ。そこの判断はできるみたいだ。ついて行ってみよう」

しばらくして

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブは突然身を隠した

ベロニカ「え？身を伏せたけどどうしたのかしら」

カミュ「!?皆、身を隠せ！近くに人がいるぞ！」

全員「わかった！」

男「よし、合言葉は775、と」

男が岩の前でボタンを押すと岩は形を変え、大きな小屋になった

ラース「……入って行ったみたいだな」

ロウ「岩がこんな小屋になるとは。これは身を隠すのに持ってこい
じやな」

グレイグ「しかし、ここからどうしたものか。正面から行っても得
策ではないだろう」

シルビア「そうね。罨や侵入者対策はされていて当然のはずよ」

カミュ「ここは俺に任せな。気配を消して周りの様子を見てきてやるよ」

ラース「カミュ、俺も行くぞ。お前ほどではないが、俺も気配を消して行動するのは得意な方だ。二人でやった方が効率も上がる」

カミュ「そうだな。皆はここで待っていてくれ。兄貴、行くぞ」

セーニヤ「あまり無茶はなさらないでくださいね」

カミュ「(兄貴は右回りを頼む)」

ラース「(了解、十分後に建物の後ろで合流だ)」

カミュ達は指で合図を出していく

アジトの周り

ラース「(罨は特に無し。中の様子は確認できないか。窓はついてないしな。ん？この下から嫌な気配を感じるな)」

カミュ「(……人の話し声。壁越しだとよく聞き取れねえな。だ

が、三人は確定か」

十分後

カミュ「兄貴、どうだった？」

ラース「俺の方は特に何も無かったな。罨も見当たらなかった。中は確認できなかつたしな。ただ、下の方から嫌な気配を感じた。魔物とは違う変な気配だ」

カミュ「それは俺はわからなかったな。俺は人の話し声が聞こえた。内容は聞き取れなかったが、中に三人はいる事がわかった」

ラース「三人か。先程の男を入れると考えると四人かもしれないな。よし、報告に戻るぞ」

アジト前

イレブン「あ、よかった、二人とも無事で。どうだった？」

カミュは先程の報告をした

マルティナ「そう。なら、固まって動くのは得策じゃないかもしれないわね。四人同時に相手するのは狭い部屋内だと慣れている相手が有利だわ」

シルビア「そうね。それに中は確認できなかつたなら、どんな罨が

あるかわからない。分散しましょう」

グレイグ「二人が三つ。三人が一つだな。ブレイブは好きな所に入ってもらおう」

ベロニカ「それじゃあ、潜入開始よ！」

アジト内

ガチャ

扉を開けると、そこにはバラバラになった魔物の死体が至る所に落ちていた

血の匂いや、腐ったような匂いがあたりに広がっている

ラース「お前ら、女性陣の目を塞げ！」

マルティナ「ラ、ラース!？」

ベロニカ「ちよつと、カミュ!急にどうしたのよ！」

セーニヤ「イレブン様?どうされたのですか?」

シルビア「アタシは大丈夫。ただ、匂いはキツイわね」

ロウ「わしらもあまり直視できんろう。何と惨いものじゃ」

グレイグ「ブレイブ、お前は戻って待っている。ここはお前には無理だ」

ブレイブ「……ガウ」ダツ！

カミュ「とりあえず、これはこのまま進もう。分かれている場合はなくなつた」

イレブン「そうだね。皆、行こう」

マルティナ「ちよつとラース、私は大丈夫よ」

ラース「いや、駄目だマルティナ。我慢してくれ、刺激が強いものは見るべきじゃない」

セーニヤ「何があったのですか。足元が変な感じしますわ」

ロウ「扉は一つだけのようじゃな」

グレイグ「私が開けます。皆、準備はいいな！」

ガチャ！

男「な!?! どうしてここが！」

男達は部屋で作業をしていた

シルビア「ここに四人いたのね！こんな所で何してるのかしら」

男「誰が教えるものか！見られたからには生かしておけねえ！」

数分後、男達は全員縄で縛られていた

ベロニカ「さあ、教えてもらうわよ。ここで何してたの！」

男「くそっ！おい、お前ら。覚悟はできたな」

男「ああ！」

ラース「待て、まさかお前ら！」

男達は全員舌を噛み切った

セーニヤ「キヤアッ！」

「カミュ「チツ！自分から死に行きやがって」

「マルティナ「そこまでして喋らないと言うの？」

「グレイグ「先程の場所といいこいつらといい、やはり狂気じみている。何がそうさせているというのだ」

「イレブン「僕達は……こんな事していいのかな」

「ベロニカ「イレブン……でも、魔物達を無闇に殺す事は関係ないわ。こいつらがやってる事は明らかに悪い事よ。悩む必要はないわ」

「ロウ「そうじゃな。わしらは誰かの野望を止めねばならぬ。世界のためにもな」

「シルビア「先に進みましょう。まだ何かあるかもしれないわ」

真犯人

前回に引き続き残酷な描写があります。苦手な方はお気をつけください

イレブン達は大きな扉にたどり着いた

セーニヤ「この扉の先からとても嫌な気配を感じます」

ロウ「何じや、この禍々しい気配は」

グレイグ「人間では無さそうだ。皆、気を引き締めろ」

ガチャ

扉を開けると、そこには魔物のバラバラの部分などが瓶に入っている棚などで埋め尽くされていた

中には人間のものまである

イレブン「うっ……。気持ち悪い」

ペロニカ「気がおかしくなりそうよ。本当何なの、ここ」

シルビア「皆、あまり見ちゃ駄目よ！」

さらに進むと

??? 「おや、誰か入ってきたと思えば」

全員「!？」

ラーズ「な、お前は!!? ジルゴ!!」

そこにはラーズの父親、ジルゴがいた

ジルゴ「ふん。まさか貴様に会えるとは思わなかったぞ、グラン。勇者様方も一緒なのですな」

マルティナ「まさか、あなたがここでこんな事をしている犯人なの!？」

ジルゴ「ここは私の研究所。グラン、お前を殺すために私は様々な研究をしたのだ。そして私は気づいた。人間の力を持ちながら、魔物の力も扱える。そんな生物が最強なのだ」と

グレイグ「まさか……。そのための研究に魔物や人間を犠牲にしているというのか!？」

ジルゴ「そうに決まっているだろう。そのために欲に塗れた男どもを買収し、世界中の魔物を集め解剖していたのだ」

セーニヤ「な……何という事を。あなたは!!命を何だと思ってるのですか!!」

ジルゴ「そんなものはどうだっていい。私さえよければこの世界はどうなろうと構わん」

カミュ「こいつ……クズを通り越してやがる」

ジルゴ「グラン、私がこんな風になったのは貴様のせいだ。私だつてこんな研究したくはなかった。お前が私にたてつかなければ、これまでに死んでいった家族や魔物は助かっていたというのに」

ラーズ「ふざけた事言ってるじゃねえ!!俺は関係ねえだろうが!」

シルビア「ねえ、今家族って言ったかしら。それってどういう事?」

ジルゴ「私の妻や弟は私の研究の糧になってもらったのだよ。一番最初は、あのいらぬメイドだったがな」

全員「!!?」

全員がラーズのお世話係ミルの事だとわかった

ロウ「お主は……心を魔に変えたのじゃな」

ジルゴ「グラン！私はお前よりも強い！！さあ、かかってくるがいい！人間と魔物のハイブリッドの力、見せてやろう！」

ジルゴがあらわれた

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

イレブン「剣の舞！」

シルビア「カミュちゃん！バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

ロウ「ドルマドン！」

ジルゴの闇のブレス

ジルゴ「うがあああつ！」

ジルゴは自分に呪いをかけた

ジルゴの防御力があがった

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

イレブン「アルテマソード！」

シルビア「イレブンちゃん！バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

ロウ「ドルマドン！」

イルゴは突然シルビアの目の前に現れ、闇の刀を作り出して切り裂いた

シルビア「キャアアッ！」

イルゴのおぞましいおたけび！

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

イレブン「アルテマソード！」

シルビア「ほとばしるゝアモゝレ！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員は回復した

イルゴのドルマドン！

イルゴ「うがああっ！」

ジルゴは自分に呪いをかけた

ジルゴの攻撃力があがった

ジルゴの通常攻撃

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

イレブン「アルテマソード！」

シルビア「ほとばしるゝアモゝレ！」

ロウ「ベホマラー！」

全員は回復した

ジルゴは闇の刀で暴れるように切り裂いていく

ジルゴは空中に闇の球を打ち上げた

闇の球が降り注ぐ

全員に継続ダメージ

ジルゴの闇のブレス

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

イレブン「アルテマソード！」

シルビア「ほとぼしるゝアモゝレ！」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員は回復した

ジルゴ「うがああああっ！」

ジルゴは自分に呪いをかけた

ジルゴの防御力があがった

た
ジルゴは突然カミュの目の前に現れ、闇の刀を作り出して切り裂い

カミュ「ぐっ……」

ジルゴの通常攻撃

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ジルゴは倒れた

ジルゴ「グアアアッ！くっ！だが、負けん！！ウオオオッ！俺に、もつと力を！！」

その時、ジルゴの体が崩れていった

ジルゴ「な!?何だ、これは!!」

ベロニカ「当然よ。人間の体でありながら魔物の力を使うなんてありえないもの。力が体を凌駕したの」

グレイグ「力を求めすぎたあまり、貴様の体が耐えられなくなっているのだ」

ジルゴ「そ、そんな馬鹿な!?それなら、私は何のために!!」

ジルゴの体はどんどん崩れていく

ラーズ「……………」ザツザツ

ラーズはジルゴに静かに近づく

ジルゴ「た、助けてくれ、グラン！私はし、死にたくない！」

ジルゴはラーズに手を伸ばす

ラーズ「父上、さようなら」

ラーズはジルゴを切った

ジルゴ「ガッ……………」ジュワー

イレブン「とんでもないやつだったね」

マルティナ「こんな所さつさと出ましよう。ここ全てが存在してはいけない場所だわ」

アジト前

ブレイブ「ガウ!!ガウ！」

中から出てくるとブレイブが心配そうに飛びついてきた

ロウ「おお、しっかり待っておったかブレイブよ」

グレイグ「ここはシャルル達に頼んで爆破してもらおう。何も残してはならん」

ラース「………… そうだな。その方がいい」

マルティナ「ラース？」

マルティナはラースの一瞬の変化を僅かに感じ取った

ラース「これで黒幕はいなくなった。密猟者も減っていくだろう」

カミュ「そうだな。目的も無くなったんだしな」

セーニヤ「それではお城へ戻って報告しましょう」

ベロニカ「まずはシャルル様達かしらね」

イレブン「そうだね。それじゃあルーラ！」

クレイモラン城 玉座の間

シャルル「あ、イレブンさん達！ご無事でしたか！どうでしたか？」

イレブン「アジトの中には色々あったんだ。あまり説明したくないけど、おぞましいものだったよ。人間の所業とは考えたくなかったよ。中には黒幕もいて、そいつも倒してきたよ」

シャルル「まあ！そんな事が！その黒幕は牢屋にいられます。連れてきましたか？」

マルティナ「いえ、もうそいつは魔物に染まっていて、倒したら消えてしまったの。だから牢屋は必要ないわ」

ロウ「それとお願いがあるのじやが、そのアジトを残さず全て爆破してほしいのじや」

シャルル「爆破ですか？構いませんが、中のものは何も残りませんよ？」

グレイグ「それがいいのだ。あんな物、何も残す必要などない」

シルビア「そうね。もう見たくもないわ」

シャルル「わかりました。そこまで言うのならそうしますね。ありがとうございます！」

クレイモラン城下町

イレブン「一旦解散だね。皆、今日は精神的に疲れたよね。特に女性陣はごめんね。ゆっくり疲れを取ってほしい」

ベロニカ「そうね。あんな物を見るなんて思わなかったわ」

ラース「皆、俺の父上がとんでもない事をしてすまなかった」

シルビア「ラースちゃんは何も悪くないわよ。それに、もう決別したんでしょ？ラースちゃんは謝る事ないわ」

セーニャ「そうですね。それに目を塞いだ時はわからなかったです

が、帰りは足元の感覚的に何かの死体があったのですよね？配慮をしてくださってありがとうございますとございます」

ロウ「それじゃあ帰るとするかの」

デルカダール城 玉座の間

デルカダール王「おお、マルティナ達帰ったか。どうであつた？」

マルティナはこれまでであつた事を伝えた

デルカダール王「ふむ。黒幕は消えアジトは爆破されたか。ありがとう、これで驚異は無くなった。だが、三人とも顔色が優れんようだな。何があつたんじや」

三人「……………」

グレイグ「王よ、詳しい話は個別で致します」

デルカダール王「わかった。今は休んでくれ」

父親とは

その夜、バルコニー

ラーズ「……………」

ブレイブ「クウーン？」

ラーズは椅子に座り、遠くを見つめながらブレイブを撫でていた

ガチャ

デルカダール王「ここにおったか、ラーズ」

デルカダール王がやってきた

ラーズ「王様、こんな所まで来てくれたのですか。俺に用事ですか？」

デルカダール王「ああ。お主と少し話がしたくてな」

ラーズ「ここは冷えます。中に入りましょう」

デルカダール王「いや、ここで構わん。わしも冷たい夜風に当たりたいのじゃ」

ラース「わかりました。ブレイブ、王様のそばで少しでも暖めてやってくれ」

ブレイブ「ガウ」

デルカダール王「すまなかった、ラース。お主の事はグレイグとマルティナから聞いた。幼少期の事、これまでの事など全てな」

ラース「やはりそうでしたか。俺は別に構いませんよ。あまり、俺の口からは言いたくない事ですし」

デルカダール王「マルティナが心配しておったぞ。ラースが自らの手で父親を殺した事をな。グレイグもそれを聞いて心配しておった」

ラース「……………」

デルカダール王「わしはお主の人生はつらい事が多いように感じた。報われぬ事や苦しい事が、まだ若いのに余りにも多すぎる」

ラース「ハハハ！王様、同情なんかありませんよ。そんなもの、何の役にも立たないって思います。それに間違ってますよ、王様。いつ、俺が自分の人生はつらい事ばかりだと言いましたか？

俺の過去の傷や苦しみは確かにつらいです。俺を飲み込んでしま

う時もありました。でも、俺はまだ生きています。そして、誰かに必要とされています。それってとっても幸せだと思いませんか？こんな幸せ、普通に生きてたら味わえませんかよ。

俺は幸せ者です。どんなに過去が苦しくても、今この時はそれとは比べ物にならないほどの幸せに包まれています。俺はこれからもこの幸せを噛み締めていきますよ」

デルカダール王「ハツハツハツハ！これは恐れ入った。流石は勇者と共に世界を救った一人なだけある。何と逞しく、光り輝いておることか。わしの発言は忘れてくれ。だが、お願いをしてもいいかな？ラースよ」

ラース「はい。何でしょうか？」

デルカダール王「わしはお主に、本当の父親のあるべき姿を教えてくださいたいのだ。お主の父、ジルゴ殿のような姿では無い父親をな」

ラース「本当の父親……」

デルカダール王「わしはお主を息子として迎え入れた。それならば、わしはお主に一人の父親として教えられる事がある。

子を想い、慈しむ心じや。よく頑張っておるな、ラースよ」

ラース「王様……」

デルカダール王はラースを抱きしめた

デルカダール王「お主は知らないであろう本来の親とは、こうして自分の息子を抱きしめたくなるものじゃ。例えどんなに大きくなってもな」

ラース「俺…… 父親にこんな事してもらったのは初めてです。じいちゃんとは…… また違う温かさがありますね」

デルカダール王「わしがお主に教えられる事など数少ない。だが、これだけは教えておかねばならぬ。

親の愛を知らぬ子など、あつてはならんのだからな」

ラース「王様……。少しだけ……。このままでもいいですか？」

数分間、ラースは抱きしめられていた

ラース「ありがとうございます、王様。父親はいいものですね。王様のような父親は、俺にとって初めてですよ」

デルカダール王「少しでもお主に父親のあるべき姿を教えられたなら、わしはそれでいい。わしの姿を真似しなくてもよいが、子を想い、愛する事だけは決して忘れるでないぞ」

ラーズ「はい。俺の中にあのジルゴのような血が入っているのかと思うと、俺ももし道を間違えたらああなってしまうのかと思って怖かったんです」

デルカダール王「そんな事あるまい。わしはこれまでで確信しておるぞ。お主は決して命を無碍にする事などしない、とな。お主もそう思っておるだろう？」

ラーズ「そうですね。俺はああはなりません。絶対に。王様、励ましてくれてありがとうございます。そして、王様のような立派な父親を持った事。とても誇らしいです。どうか、俺の父親になってくださいませんか」

デルカダール王「何を言っておる、ラーズよ。前からずっと、わしはお主の父親じゃ」

ラーズ「へへ、そうでしたね。ですが、これからはデルカダール王の息子、ラーズと名乗ります。よろしいですか？」

デルカダール王「ハツハツハ！それはわしも嬉しい限りじゃ。ぜひ周りに自慢してやるんじや。自分はわしの自慢の息子の一人じやとな」

ラーズ「はい！」

バルコニー前

デルカダール王とラーズの姿をグレイグとマルティナはそつと見ていた

グレイグ「ズズツ…… ううつ、王よ、何と心の広い……」

マルティナ「グレイグ、気持ちはわかるけど泣きすぎよ。でも、私も耐えるだけで必死ね。ラーズ、お父さんの優しさがわかってよかったわね」

魔物との会話

それから半年後

デルカダール城 玉座の間

リーズレットがデルカダール城にやってきていた

リーズレット「急に訪れてしまい申し訳ございません、デルカダール王様、マルティナ王女様。私からお願いがあつてこちらに伺いました」

デルカダール王「気にせんでよい。わし達はいつでも歓迎するぞ」

マルティナ「そうよ、リーズレット。それにあまり堅苦しくしなくても大丈夫。ここには今は私達しかいないんだから」

リーズレット「じゃあ話し方は戻すわね。シャルルから失礼の無いようにってずっと言われてるから真面目な話し方になっちゃうけど、私はこの話し方の方が楽でいいのよね」

デルカダール王「お主の話しやすい口調で大丈夫だ。無理に敬語を使う必要はないからな」

ラーズ「俺達にはそっちの方が馴染みもある。それで、俺達にお願いって何だ？」

リーズレット「実は、クレイモランでの研究の一環である薬を開発したの。それがこれ。これを魔物に飲ませると、私のような元から喋れる魔物じゃなくても一時的に人間と会話できるようになるの」

リーズレットは小さな瓶を取り出した

グレイグ「何だど!?それは凄いな。しかし、どうしてそんなものを？」

リーズレット「少し前の密猟者の事件で、怪我をした魔物を治療しようとする時に会話ができないと色々困るといいう事がこつちでも多々あったの。」

それと、シャルルが望む魔物と人間との共存。その希望ともなれるかもしれないのよ。それで一度試作品を作ってみたの」

デルカダール王「ふむ。確かに魔物と喋れば魔物との共存も夢ではない。それでは試しにブレイブやコロで試してみようという事じゃな?」

リーズレット「話が早くて助かるわ。でも、最終判断はブレイブ達よ。ブレイブ、少しだけ協力してくれないかしら?」

ブレイブ「ガウ、ガウガウ」フルフル

マルティナ「あら、コロの方を見て首を振ってるわね。コロは駄目という事かしら」

ラース「自分はいいのか？ブレイブ」

ブレイブ「ガウ」コク

リースレット「ふふ、ありがとう。それじゃあ少し飲んでみて」

ブレイブ「ペロペロ」

リースレット「どうかしら？」

ブレイブ「何も味がしないな。おお!!？」

全員「おお!!」

リースレット「よかったわ。一段階は成功ね」

ブレイブ「私の言葉が伝わるのですね！氷の魔女よ、感謝する！」

ラース「お、おお、ブレイブってこんな話し方してたのか」

ブレイブ「ラース様！私はずっとあなたとお話ししたいと思っていたのです！」

ブレイブはラースに駆け寄ってきた

ラース「ハハハ！ブレイブ、俺に様なんて付けてたのかよ。別にいいぞ？」

ブレイブ「いえ！我が主を敬うためです！私達の群れを救っていただき大変感謝しております！」

マルティナ「あら、ラースに懐いてるんじゃないやなくて完全に主従関係になっていたのね」

デルカダール王「これはいいのう。この効果はいつまで続くのだ？」

リーズレット「まだ試作段階なので長くは持ちません。この瓶一本を使って二日ですね。もしよければ、経過を見て報告してもらえると今後の研究に助かるのですが」

グレイグ「ああ、任せてくれ。俺達もこれはとてもいい提案だと思

う。ぜひ世の中に普及させてみよう」

ブレイブ「氷の魔女よ。このような機会を与えてくれた事、大変感謝する。しかし、あまり多用するのは控えて欲しい」

リーズレット「あら。どうしてかしら？」

ブレイブ「確かに俺達もこれまで魔物と人間では会話が出来ず、苦しい思いをした。ラーズ様やマルス様に出会う前までは、あの怪我や病気だらけの群れに生きる希望などなかった。

だが、私達は話せずとも行動する事で人間と会話ができる。私達がやりたい事を行動に表せば、俺とラーズ様のように繋がる事ができる。この行動する事に、意味があるのだ。

話せれば確かに私達にとっても楽だ。だが、それは私達にとって大切な事を忘れさせてしまう。何かのたれに行動する。これこそが、私達魔物にとって生きる理由となっているのだ。だからあまりそれを周りの魔物に使わないでほしい。せめて、緊急時などの時限定で頼む」

ラーズ「ブレイブ……」

リーズレット「なるほどね。ふふ、賢い子だとは思ってたけどこんな事を考えてたのね。ありがとう。あなたの意見、とても参考になったわ。わかったわ、この薬は今後控える事を誓うわ。どうしても、と

いう時にしか使わないわ」

ブレイブ「この思いを伝えられたのはその薬のおかげだ。便利な事だけは認める。ありがとう」

デルカダール王「ブレイブよ、お主は魔物達の目線で考えてくれておったのだな。私達では考えられぬ目線だ。とてもいい意見が聞けそうじゃな」

ブレイブ「王様、ありがとうございます。私なんかの意見であればどうか聞いてくださるとありがたいです」

リースレット「それじゃあ私は帰るわね。二日経てば瓶の中身も全部無くなるからよかったら使って。それじゃあね」

ラース「ありがとな、リースレット。なあ、ブレイブ。俺達の事はどう思ってるんだ？」

ブレイブ「私の主はラース様です。我が子も同じく、ずっとあなたについて行くと誓いました。主が決めた事ならば、私達にとってそれは絶対です。」

そしてラース様が大事にされている方は、私達にとっても大事にしなければいけません。デルカダール王様、マルティナ王女様、マルス、ルナ、勇者様方に兵士の方々。他にもいるようですが、私が手を出せ

るのはこれくらいです。

私が出来るとは何でも致します。いつでもご指示をお願いします」

ラース「ハ、ハハハ。ここまで来ると何だか不思議な気分だな」

ラースは少し困ったような顔をしている

マルティナ「いいじゃない。とつても従順で。この子達はラースに感謝してるんだから」

デルカダール王「ブレイブよ、お主は半年前の魔物の密猟の事をどう思っておった」

ブレイブ「私は密猟者どもに群れごと壊滅させられそうになった身です。絶対にあいつらを許しはしません。今はもう話も聞かないので安心してますが、あのアジトでの光景は忘れられません。」

人間達には気づかなかったかもしれませんが、あの場所にはたくさんの怨恨がうごめいていました。魔物や人間の恨みの集合場所となっていたのです。

情けない事に私は恐怖で動けなくなってしまう、グレイグ様が声をかけてくださらなければ私はおかしくなっていたでしょう。グレイグ様、ありがとうございます」

ブレイブはグレイグに頭を下げた

グレイグ「いや、気にするな。それにあそこはそんな場所だったか。まあ、納得はいくがな」

デルカダール王「ふむ。そのアジトの光景とやらはわしは詳しい事はわからんが、グレイグ達からの話からしても相当狂気に満ちていたのだろう。相当つらい思いをさせたようだ。すまなかつた」

ブレイブ「いえ！お気になさらないでください！私が強くなればいだけの話です！」

デルカダール王「ブレイブよ、恐怖とはどれだけ強くなろうと訪れるのだ。それを乗り越えて、わし達は強くなるのだ。強くなれば恐怖を乗り越える、というわけでは無いのだぞ」

ブレイブ「……なるほど。大変心に響くお言葉でした。ありがとうございます」

ラーズ「しかし、何だかイメージが崩れていくな。もつとこう、わいとか抽象的な言葉を話していると思っていたんだが」

ブレイブ「それは私達を馬鹿にしておられますか？ラーズ様」

ラーズ「ああああ!!違う!違うんだ、ブレイブ!俺の中でそう捉え

ていただけだ。これからは改めるぞ！」

ブレイブ「そういう話し方は我が子のような時のみです。普通の魔物は皆私のように人間と変わらず、普通に話していますよ」

マルティナ「そうなのね。それじゃあ二日間よろしくね、ブレイブ」

ブレイブ「はい。私もこの貴重な体験を楽しみますよ」

ブレイブの一日

次の日、早朝 玉座の間

ブレイブ「ん…：朝か」

ブレイブの朝は遠くに寝転がっていたコロを連れ戻し、温め直す所から始まる

ブレイブ「ペロペロ」

コロ「クウーン…：」

ブレイブ「ハハハ、くすぐったいか？」

しばらくして

ブレイブ「朝ごはんの時間だ。ほら、乗りなさい」

コロ「キャン！」

廊下

ブレイブ達が歩いているとメイドの人とすれ違った

メイド「あらブレイブ達、おはよう。今日も撫でていいかしら？」

ブレイブ「ああ、好きにしていどうぞ」

メイド「やっぱり話せると聞いていてもいざ聞いてみると驚くわね。でもカッコいいわよ、ブレイブ」

ブレイブ「俺がカッコイイ？ハハハ、冗談はよしてくれ。そういう言葉は人間の男にいうものだろう？」

メイド「そんなことないわ。あなたもカッコいいのよ。ねえ、コロちゃん。パパはカッコいいわよね？」

コロ「ゴロゴロ」

コロは撫でられて嬉しそうにしている

メイド「可愛い。あら、ごめんなさい。時間取りすぎたわね。朝ごはんはできてるわよ」

朝食場

ガチャ

デルカダール王「おおブレイブ、コロ。おはよう」

グレイグ「おはよう、ブレイブ、コロ」

コロ「キャン！キャン！」

ブレイブ「おはようございます、王様、グレイグ様」

デルカダール王「どれ、わしも撫でさせてもらおうかの。朝と夜の時間しか触れないからの」

グレイグ「俺もいいか？ブレイブ」

ブレイブ「構いませんよ。ただ、あまり足の裏や尻尾は触らないでくださいね。ビツクリするので」

デルカダール王「気持ちいいのう。肌触りはいつも素晴らしいぞ」

コロ「ゴロゴロ」

グレイグ「お腹はいいのに尻尾は駄目であったか」

ブレイブ「私はお腹を鍛えてあるのでそこまで弱くありません。ただ、尻尾はどうしようもないのです」

ガチャ

マルティナ「皆、おはようございます」

ラース「おはようございます。おお、早速撫でられてたなブレイブ、コロ」

マルス「僕もブレイブ触るー」

ルナ「じゃあ私はコロを撫でるー」

ブレイブ「マルス、ルナ、朝の挨拶はどうしたのだ？」

二人「あ、おはよう！皆！」

ブレイブ「よし、おはよう。触っていいぞ」

ラース「ハハハ、ブレイブは流石だな。でも人間だといくつくらいなんだ？」

ブレイブ「人間でいうと、おそらく私は150歳くらいでしょうか」

全員「……え？」

ブレイブ「我が子は人間でいうと30歳あたりですね」

全員「えええ!!？」

ブレイブ「そ、そんなに驚かれますか？魔物と人間では時の歩みが違うのです。魔物の方がずっと長く生きるのですよ」

デルカダール王「そ、そういう事じゃったか。わしは何やら年上に失礼な事をしていたのではないか？」

ブレイブ「そんな事ありませんよ、王様。魔物で言えば私は30歳ほどで、我が子は6歳です。こちらが正しい年齢のはずですから、何も問題ありませんよ」

マルティナ「そうなのね。魔物でも年齢なんてあるのは初めて知ったわ」

ブレイブ「まあ知っても何も無いですが、どれだけ生きてきたかを知る上で必要になるくらいですかね」

ルナ「じゃあ、ブレイブのお誕生日はいつなの？」

ブレイブ「お誕生日？とは？」

マルス「えー、知らないの？ブレイブ。自分が生まれた日は皆で祝うんだよ！おめでとうって！」

ブレイブ「人間の風習ですか。私達にはありませんよ。私達は人間ではありません。だから考えなくて平気です」

グレイグ「だが、それは何だか寂しいな」

ラーズ「ブレイブ、俺達はお前達が生まれてきてくれた事を感謝したいんだ。少くらしい人間の風習を試してみないか？」

ブレイブ「そうですか。私達にそのような感情を向けてくれているとは。ありがとうございます。ですが、この日というのはわからないのです。日付という感覚がありませんからね」

マルティナ「確かに魔物にはいらないわね。時間や天候さえわかれば、自分で何とかするわよね」

ルナ「じゃあ私達が作ってあげればいいんだよ！」

マルス「僕と父さんがブレイブと初めて会った日にしようよ！」

ラーズ「お！いいな、それ！ブレイブ、いいか？」

ブレイブ「構いませんよ。私もラーズ様とマルスと出会った日の事はよく覚えています。忘れはしませんよ」

デルカダール王「それではその日を楽しみにしておるのだぞ、ブレイブ、コロ。その日はお主達にわしからの感謝が送られる日じゃ」

ブレイブ「わかりました。楽しみにしていますよ」

コロ「??？」

訓練場

ブレイブ「よお、今日も訓練しにきたぞ」

バン「あ！来やがったな、ブレイブ!!お前、ちよつと喋れるようになったからって調子のるなよ！」

ガザル「よお、ブレイブ。今日の相手は俺だ。よろしく頼むぜ、手は抜いてくれるなよ？」

ブレイブ「ガザル殿か。どれだけ出来るのか楽しみだ」

バン「あ、あれ？俺の事、無視かよ!!」

マーズ「完全に下に見られてんじゃねえか」

ベグル「ハハハハハ！こりやあ傑作だぜ、バン！」

バン「くっそおー！ブレイブのバーカ!!」

その後

ブレイブ「ほお、ブーメランは戦い慣れていなかったが避けられない事もないな」

ガザル「これはいい動き方だな！獣ならではの避け方ってやつか！なら、封じさせてもらうぞ！ボミオス！」

ブレイブの素早さが下がった

ブレイブ「ほお！魔法が使えたか！手を隠すのはいい事だな！」

ガザル「へへ、どこかの馬鹿とは違って簡単には負けられないんでね。手加減しないぜ！デュアルブレイカー！」

ブレイブ「キャイン!!」

ガザル「あ……悪い、ブレイブ。大丈夫か？」

ガザルがブレイブに手を伸ばそうとした時

ブレイブ「甘いんじゃないか!!?」ガブ!

ガザル「痛ってえ!!くそっ!フリだったか!」

ブレイブ「ガードクラツシュ!」

ガザル「痛え!くっ、舐めやがって!けもの突き!」

ブレイブ「ぐはっ!」ドサ

ガザル「よし!俺の勝ちだな!」

ブレイブ「くっ!攻撃の際に武器を入れ替えてきたか。やはりこの人間は強い者が多いな。俺も学べる事ばかりだ」

バン「やーい！ブレイブめ、ガザルのやつに負けてやんのー！昨日もベグルに負けてたし、二連敗じゃねえか！」

ガザル「バン？それは俺に喧嘩を売っているという事だよな？」

バン「あ……。違う、違うんだ！ガザル!!あの、ほんとに！謝るんで、その武器しまつて」

ガザル「医療部屋に連れてってやるよ」

ブレイブ「全く、あいつは本当に馬鹿なのだな」

ロベルト「よおブレイブ、見てたぜ。死んだフリとはやるじゃないか」

ブレイブ「魔物の生活ではたまにしていたのだ。有効な時は少ないのだがな。だが、ここでは今のよう効くのではと思っている。ラー様には効かなかったがな」

ギバ「ラーズ將軍にやったのか。あの人には効かないだろうな。手加減してるから大体わかるんだろ」

ブレイブ「それにしてもあのバンとかいうやつは何なのだ。私をラ

イバル視するのはいいが、頭が足りんのではないか？」

マーズ「バンはあれでいいのさ。あいつが思った通りにやって、それを俺達で支えるんだ。そうすればほとんど上手く回るんだよ」

ダバン「あいつは戦闘の事となれば俺達より圧倒的に抜き出てるからな。頭が弱くたっていいんだ。ブレイブ、お前が一回勝つたのは馬鹿が油断してたからだぞ。もう一回やればお前は勝てないだろうぜ」

ジール「あ、あの止めないんですか？ガザルさん、バンさんの事ボロボコにしますよ？」

ガク「あ、バンさんがついに倒れた」

ベグル「バンのやつも悪いと思ってるから抵抗しないんだ。あいつにはあのくらいの罰でいいんだよ」

ガザル「おら、誰かこの馬鹿連れてけ」

ガザルはボロボロになったバンを持ってきた

ガク「あ、ああ、バンさん！医療部屋行かないと！」

ブレイブ「……………ハア」

ブレイブの一日2

その後、玉座の間

ブレイブが戻るとシルビアがやってきていた

シルビア「あらお疲れ様、ブレイブちゃん。アタシの事わかるかしら?」

ブレイブ「これほどの強烈な方は中々いませんよ。ラース様の大切なお仲間の一人、シルビア様ですよね」

シルビア「ピンポーン！正解よ！流石ね、ブレイブちゃん！しかも結構渋い声してるのね！カッコイイわ！」

グレイグ「急に連絡も無くどうしたのだ、ゴリアテ。普段のお前なら連絡を先にいれるだろう?」

シルビア「そうなの。突然ごめんなさい。実はブレイブちゃんを今度借りたいんだけど、駄目かしら?」

ラース「ブレイブを?どうしたんだよ」

シルビア「実はパレードの新作のネタを考えてただけど、今度はグロッタの町でやる事になったの。あそこって結構情熱的な場所

じゃない？アタシも普通のとは違う事をやりたくて」

マルティナ「それでブレイブを借りようとしているの？どうするつもりなの？」

シルビア「実は！アタシも前からやってみたかったのよ！火の輪くぐり！」

ブレイブ「火の輪？」

ラーズ「おいおい、危ないか？」

シルビア「安心して！絶対大丈夫なようにするから！まだ公演は先なんだけど、話だけでもしておかなくちゃと思って来たのよ」

マルティナ「まあ危なくないなら構わないけど、本当に大丈夫かしら？」

グレイグ「あまり過激なものはよしてほしいのだがな」

シルビア「そこはわかってるわよ！ブレイブちゃんにそんな酷い事させられないもの！」

ブレイブ「私は何やら危険な事をさせられそうなのか？」

シルビア「安心して、ブレイブちゃん！しっかり教えてあげるから」

ラース「まあ……ブレイブ。他の人に慣れてこい」

ブレイブ「は、はあ。ラース様がそう言うのであれば」

その後、ブレイブは来る人を静かに監視していた

怪しい動き、挙動、魔物の匂いがするかどうかなどを判断していた
いざと言う時のために近づき、撫でてほしいといっているように見
せながら

夕方、バルコニー

マルティナ「ハア、今日も疲れたわ」

ブレイブ「お疲れ様です、マルティナ様。ごゆっくりお休みになっ
てください」

マルティナ「ねえ、ブレイブ。あまりああいう事はしないでほしい
わ」

ブレイブ「ん？何の事ですか？」

マルティナ「喋るようになってわかったわ。あなた、あの玉座の間にいる時はずっとお客さんの事を監視してるわよね？しかも、警戒されないように気を使いながら」

ブレイブ「まさか気づかれていたとは。上手く隠せていたはずなんです」

マルティナ「あなたの目よ。人間の言葉でこういう言葉があるのよ。目は口ほどに物を言うってね。あなたの目はあの時、ずっと疑いの目をしていた。シルビア以外の訪れた人全員ね。とてもありがたいけど私は平気よ。私だってあなたより強いんだから」

ブレイブ「流石です、マルティナ様。ですが、ラーズ様も仰っています。何かあってからでは遅い、と。私の用心に越した事はないんじゃないでしょうか」

マルティナ「でも私のそばにはラーズもグレイグもいるわ。あまり気を張りすぎないで。警戒するのはわかるけど、あなたにはあの部屋で休んでいていいんだから」

ブレイブ「わかりました。マルティナ様の言う通りかもしれません。これからは少し警戒を解きますね」

マルティナ「ありがとう、ブレイブ。ふふ、ザラザラしてるけど暖かいわね」

マルティナはブレイブを撫でていた

夕食時

ラース「バン達に遠征ですか」

デルカダール王「うむ。ユグノアとさらに交流を深めたくてな。わしからこのデルカダール産のワインを届けようと思っておる。さらに、何か困っていればそのまま助けになってほしいと頼んでくれ」

ラース「わかりました。バンにはこの後伝えます」

マルティナ「本当なら私達が行けばいいのだけど、そうも言ってもらえないからね。仕方ないわ」

コロ「ハツハツハ！」

コロはまたテーブルの上の料理に興味津々である

グレイグ「また来たのか、コロ。この肉はやれないと言っただろう？悪いがあのご飯で我慢してくれ」

ブレイブ「すみません、グレイグ様。ほら、お前も謝るんだ」

コロ「クウーン……」

ブレイブ「大体、人間の食べ物を貰うなど教えただろう？どっちにも迷惑になるからやめなさい」

ルナ「ブレイブ、お父さんみたーい！」

マルス「父さんに似てるね！やっぱり子どもがいると似てくるのかな？」

マルティナ「ふふ、よかつたじゃないラース。ブレイブに似てるらしいわよ」

ラース「どこがだよ！俺は人間だぞ！」

デルカダール王「そこではなく、おそらく口調の問題だろうな。前に子ども達に似た事を言い聞かせていたのではないか？」

ラース「ああ……それはあるかもしれません」

ブレイブ「ラーズ様に似ているなど……。何と嬉しき言葉」

ブレイブは嬉しそうにしている

ラーズ「あー、何だか面倒な事になったぞ？」

その後、大広間

ラーズ「なあ、ブレイブ」

ブレイブ「何でしょうか、ラーズ様」

ラーズ「お前も遠征についていくんだ」

ブレイブ「わ、私が!?ですが、主と離れるわけには」

ラーズ「そこは別に大丈夫さ。お前には学ばせてやりたい事もあるしな。兵士達の事、少しずつ気に入ってるんだろ？頼まれてくれないか？」

ブレイブ「……わかりました」

ラーズ「ありがとな。それとブレイブ。お前、バンの事甘く見てるな？」

ブレイブ「……と、言いますと?」

ラース「バンはお前が思っているよりずっと強い。馬鹿だからと甘く見てるだろうが、あいつは凄いやつだ。何せ、俺に勝つ事だってあるんだからな」

ブレイブ「バンがラース様に勝つですって!!? そんな事あるのですか!?!」

ラース「ああ、そうだ。勝率は結構いい勝負してるんだぜ。それに、あいつの強さはそれだけじゃない。遠征でしつかり見極めてきな、バンという俺の自慢の弟子をな」

ブレイブ「……はい。わかりました」

バンとブレイブ

次の日、訓練場

バン「という事で、ユグノアに行く事になった。まあお使いみたいなものだろ。気楽に行こうぜ」

マーズ「まあ簡単に捉えすぎな気はするが、バンの言う通りだ。すぐに終わらせるぞ」

ブレイブ「俺も行くぞ」

バン「なに!!?ブレイブ、何で来るんだよ!」

ブレイブ「いちいちうるさいやつだな。ラーズ様から俺も行けと言われたのだ。俺が好きで来たんじゃない」

ロベルト「ラーズ將軍が言ったならいいか。よろしくな、ブレイブ」

バン「今回ばかりは俺の言うことを聞いてもらうからな!!いいな、ブレイブ!」

ブレイブ「考えておこう」

ギバ「ほら、バン。騒いでないでさっさと行くぞ」

ユグノア城 玉座の間

イレブン「やあ、バン達！やっぱり君達だったんだね。あれ？ブレ
イブもいるじゃん」

バン「イレブンさん、ロウ様、お元気でしたか。こちら、デルカダー
ル王様からの贈り物です。どうぞ受け取ってください」

ロウ「おお、このワインを持ってきてくれたか。ありがとう。わ
しはこのワインがお気に入りでのう」

ブレイブ「お久しぶりです、イレブン様、ロウ様。私が喋るように
なったのはご存知でしたか？」

イレブン「うん。マルティナからの手紙で聞いてはいたよ。何だか
カッコいいよ、ブレイブ！」

ロウ「渋い声をしておるのだな。それに、そんな話し方でなくとも
よいぞ」

ブレイブ「いえ、我が主の大切なお仲間に下手な言葉使いはできま
せん。それに、勇者様ともあればなおさらです」

イレブン「あ、僕が勇者なものも知ってるんだっけ」

バン「何かお困りな事がありますか？デルカダール王様から何かあれば力になってくれと言われております」

ロウ「ふむ。イレブンよ、様子を見ていたあそこを頼むのはどうかな？」

イレブン「あー、あの屋敷の事ね。そうだね。お願いしようかな」

バン「何でしょうか？」

イレブン「実はね、ここに来る途中に山があつたと思うんだけど、その中に魔物が住んでる屋敷があるんだ。その調査をお願いしたくて」

ブレイブ「お言葉ですが、魔物の一人として意見をさせて頂きます。そこはもしや魔物の家となっているのではないですか？そうでしたら、あまり人間が近づいてはなりません。興奮させ、暴れだすやつらもいると思われます」

ロウ「ほ、ほほ。やはり賢い子じゃな。じゃが、それはわし達もわ

かっておる。問題なのは、そこが前の密猟者達の住処ともなっていた
ようなんじや。

今はもう捕まっておるのじやが、中の調査はまだしてなくてのう。
こんな事を他国に頼むのは気が引けるんじやが、頼まれてはくれんか
のう?。」

バン「はい！お任せください！」

ブレイブ「そういう事であれば私もお手伝いいたします」

イレブン「わざわざごめんよ。よろしくね」

大広間

バン「よし。屋敷とやらに潜入するぞ！マーズ、作戦は任せた」

マーズ「ハア。もういいや。えっと、あまり大人数ではいけないな。
森の中だし、屋敷がアジトなら何があるかわからないからな。もしも
のために控えも必要だ。行くのは数人だな。ふむ……。」

バンとロベルトとダバンとガザルだな。このメンバーなら屋敷内
で多少暴れても平気だろう。バンを除いて」

ギバ「だが、その屋敷はどうやって見つけるんだ？場所は聞いたん
だろうな？」

バン「山の中だ！」

ダバン「だから、山の何処だって言ってるだろうが！」

バン「ハツハツハ！悪いな、皆！」

バンは笑って誤魔化している

ベグル「おい、馬鹿。あまりにもふざけるとどうなるかわかってんのか？」

ベグルが大剣をバンの首筋に当てた

バン「すみませんでした」

ロベルト「たくっ！ブレイブ、お前は何かかなるか？」

ブレイブ「ああ。近くに行けば俺の鼻でわかると思うぞ」

バン「そう！俺はブレイブを信じてだな」

全員「ああ？」

ベグル達全員に睨まれてバンは縮こまる

バン「あ、あの……マジの殺気はやめてください。すみません」

ブレイブ「全く。なら、山の中に入ったら俺が先導しよう。それでいいか？」

ダバン「頼んだ、ブレイブ」

ガザル「おい、バン。俺は昨日の件まだ怒ってるからな？またふざけてみる？昨日よりもっと酷い目に合わせてやるからな」

バン「ええ!?俺をあんなにボコボコにしといてまだ怒ってるのかよ！今だってまだ傷があるんだぞ！」

ガザル「返事は？」

バン「はっ！必ずや、ガザル様のご機嫌を損ねないように致します！」

ギバ「あーあ、ガザルのスイッチが入ったよ。ありやあしばらくバンはガザルのおもちやだな」

ダバン「ほら、さっさと行くぞ。他の皆はここで待っていてくれ。何かあったらすぐに撤退する」

山の中

ブレイブ「それじゃあ匂いを嗅ぎ分けていくから俺についてこい」

ロベルト「バンよりよっぽとリーダーの素質あるじゃねえか、ブレイブは」

バン「俺はこういう事が苦手なだけだ！」

ダバン「誇るな、馬鹿」

しばらくして

バン「おい、ブレイブ。もしかして、あの少し遠くに見える家か？」

ブレイブ「む？バン、お前あの距離が見えているのか？」

ガザル「ん？どこだよ、バン。木ばっかりで何も見えねえぞ」

バン「ええ。ガザルの目がおかしいだけじゃ」

ガザル「ああ？」

バン「いえ！何でもありませんよ、ガザル様！」

ダバン「俺にもわからないな。バン、どの方角だ？」

バン「こつちだ。ほら、少し見えてるだろ？」

ロベルト「方角を言えって言ったのに。まあいいが。うーん、もしかして、あの小屋みたいなやつか？」

バン「そうそう！」

ブレイブ「しかしよく見えているな。バン、目は優れているのだな。まだかなり遠いぞ」

ガザル「頭の足りない所が目に入ったんだな」

バン「うるさいぞ！人の事を馬鹿にすんな！」

ガザル「それは昨日のお前にも言えるよな？あ？」

バン「そうでしたね！昨日の俺は本当、馬鹿でした！」

ダバン「ガザル、楽しいのはわかるがそろそろ許してやれ」

バン「ありがとうございます、ダバン！ガザル様、本当許してください！お願いします！」

ガザル「まあ、充分楽しめたからこれくらいで許してやるよ」

バン「やったー！！」

屋敷前

ロベルト「小屋、にしては大きいな」

バン「中からあまり気配を感じない。どうやら魔物すらもいなさそうだぞ。だが、危険だから俺が先行する。皆はついてきてくれ」

三人「了解！」

ブレイブ「(きて、そろそろ見極めさせてもらおうとしよう)」

バンとブレイブ2

屋敷内

バン「……………」

バンは足音や気配を殺し、中で警戒している

ブレイブ「なんだ、バンのやつ。今までとは別人のようだ。それにこの動き方、普通の兵士ではない」

バン「よし、大丈夫だ。ここは安全みたいだ」

ロベルト「わかった。結構ボロボロだな」

ガザル「中に何かいたか？」

バン「おそろしくこの気配は魔物だな。変な感じがする。一体だけみたいだけど」

ブレイブ「どうやって見抜いたのだ？私のように匂いというわけではあるまい」

バン「足跡や痕跡の残り方、後は気配だな。師匠からの教えだ」

ダバン「こいつはラーズ將軍からの教えをほぼ全部叩き込まれてるからな。俺達ができない事もできるんだ」

バン「まあここにいても何もなし、先に進んでみよう。床もボロボロだから気をつけろよ」

その後

バン「この注射器の中の液体は何だ？」

ブレイブ「嫌な匂いがする。いいものではないだろうな」

ガザル「こつちも怪しいものがたくさんある。全部持ち帰って処分してもらおう」

ロベルト「所々に罠もあるみたいだ。気を抜くなよ」

ダバン「この部屋で終わりなのか？随分少なかったが」

バン「いや、絶対にどこかに隠し部屋があるはずだ。例えばこの壁とか」

ブレイブ「おい、下手に触るな」

ガタン

バンが適当に触った壁が開いた

バン「おわああああ！」

ブレイブ「馬鹿ヤローがー!!」

バンと巻き込まれたブレイブは壁の向こうに落ちていった

三人「………… えええ!!」

ガザル「ど、どうするよ」

ロベルト「全く。注意しろと言っておいて自分が罠にはまるやつがあるかよ」

ダバン「俺がここに残る。二人は戻って少し人を増やしてくれ。救助作業になるかもしれない」

二人「了解！」

地下牢

ドスン！

ブレイブ「(ん?落ちたのに痛みが無い?)」

バン「重てえ。おいブレイブ、痛くなかったか?」

ブレイブ「な!?!バン、お前俺の事庇ったのか。何している!」

バン「何だよ、怒るなよな。俺は受け身を教えられてるから何とかなるけど、お前変な落ち方してたからな。あのままだと危なかったぞ」

ブレイブ「……感謝する」

バン「さて、何だここ。普通の屋敷なら牢屋なんて無いぞ」

ブレイブ「嫌な匂いで満ちているな。ここで研究をしていたのか?」

ダツダツ!

こちらに向かつてくる足音がする

二人「!?!」

男「誰か罫にかかったと思えば誰だお前ら。ここに何の用だ」

バン「お前こそここで何をしている！ここは魔物の巣だったはずだぞ！」

男「ふん！答える義理などあるものか！まあその牢屋の中で一生を終えるといい。もしくは、俺の実験台になってもらうかだな」

バン「実験だと!?!」

男「ふふ、楽しみだな」コツコツ

バン「何だあいつ。嫌な気配だな。魔物じゃなかったし、密猟者の仲間はまだいたのかよ。ブレイブ、もう喋っていいぞ」

ブレイブ「そのようだな。あいつからはアジトのやつらと同じ匂いがする。密猟者の仲間で間違いない。だが、ここからどうする？」

バン「ふむ、少し待ってろよ」

バンは牢屋の檻を調べている

ブレイブ「何をしているのだ？」

バン「物質には痛点がある。そこに一撃いければ大抵のものは壊せるからな。特に、こんなにボロボロならすぐだろ。よし、ここだな。ブレイブ、離れてろよ。せいけんづき！」

ガシャアアン！

檻はヒビが入り、曲がって飛んでいった

ブレイブ「な!?ボロボロとはいえ牢屋を一撃で吹き飛ばすのか！」

バン「へへ、上手くいったぜ！さあ、あの男を捕まえるぞ！」

男「な!?お前ら、牢屋を壊したというのか!?ありえん!!」

バン「さて、観念してもらおうか。抵抗しなければ俺達はお前を痛めつけないぞ」

男「くっ……。牢屋を壊したからっていい気になるなよ！ジバルンバー！」

バンとブレイブ達の足下の地面が浮き出した

ブレイブ「くっ！地面の魔法か！」

バン「効かないぜ！ばくれつきやく！」

バンは周囲の地面を壊していく

ブレイブ「ナイスだ、バン！うおおお！」

ブレイブは男に噛みつく

男「痛え！くっ！このキラーパンサー如きが！」

バン「余所見なんて余裕だな？せいけんづき！」

男「グフウ！」

ブレイブ「ガウツツ！」

ブレイブは追撃しようとする

男「くっ！ドルマドン！」

ブレイブ「!?」

バン「馬鹿野郎、ブレイブ!!」グイッ！

バンはブレイブを引っ張り、魔法の範囲から出した

ブレイブ「す、すまない。バン。隙だと思ったのだがどうやら罠だったようだ。助かった」

バン「あまりあいつを甘く見るな！あいつ、攻撃を食らいながらも何か準備している！警戒を怠るな！」

ブレイブ「よくわかるな。だが、ありがたい。頼りにしてるぞ、バン」

バン「おう！どんどん頼れ！戦闘なら負けねえ！」

ブレイブ「ハアア！」

ブレイブは男を警戒しながら爪で裂いた

男「くっ！すばしっこいキラーパンサーだな！」

バン「氷結らんげき！」

男「ガハッ！くっ！強いですね……。あまり派手にはいきたくないのですが、これで終わらせます！」

そう言うと男はスイッチを押した

すると、周りから粉が溢れてきた

二人「くっ！」

ブレイブ「目眩して逃げる気か！バン、俺はあの男が見えてる！攻撃するぞ！」

ブレイブは男に向かって駆け出した

男「粉塵爆発つてご存知ですかね？」

バン「!?ヤベエ！ブレイブ、下がれ!!」

男「耐えられますかね？イオナズン！」

ドオオオオン!!

ガラガラガラ!!

屋敷は激しい揺れと爆発による煙で崩れていく

ダバン「うおおおっ！な、何だ!?!」

屋敷の外では

ドオオオオン！

ロベルト「おい！何だ、急に！地震か!?!」

マーズ「一旦動くな！安全を確認するぞ！」

ジール「あ！皆さん、あの屋敷が崩れていきますよ！」

ダバン「何だって!？」

ガザル「バン達は無事なのか？」

地下牢

屋敷があつた場所は粉々になって何もなくなった

周りは凄い量の煙が巻き上がる

男「ハ、ハハ。俺の研究も台無しだが、邪魔者は消えたな」

ダバン「てめえが犯人か!!」

男「な!?!もう一人だと!?!ぐっ!」

男はダバンに取り押さえられる

ダバン「さあ、大人しくしろ！バン！ブレイブ！どこにいる！無事なのか!!」

ブレイブ「……バ、バン…… お前」

煙の中からブレイブの声がする

ダバン「!?そこにいるのか！おい、無事か!？」

煙が晴れると、そこにはブレイブを正面から抱き抱え黒くなったバンがいた

ダバン「な!!!?バン!!!」

ブレイブ「馬鹿者が!!お前、生きてるか!!」

バン「……… 無事……… か」

ダバン「俺の回復魔法じゃ意味がねえ!!急いでユグノアに戻らなければ!!」

ロベルト「お前ら、大丈夫か!!」

ガザル「バ、バン!!!?」

ギバ「おい生きてるのか、そいつ!!」

ダバン「誰かこの男を頼んだ！俺が走って連れて行くぞ！」

ブレイブ「お前達の速さでは間に合わん！俺が行く！」

マーズ「お前、足を挫いてるじゃねえか！腫れてるんだぞ！しかも、傷だらけで無茶すんな！」

ブレイブ「バンに比べたらこんなもの、痛みにも入らん!!」ダツ！

ブレイブは静止も聞かず走り出した

ガク「あ、ブレイブ!!俺達も急ぎましょう！」

ユグノア王国

ブレイブ「ぐっ……。誰か！誰か、この男を助けてやってくれ!!」

ブレイブは足を引きずりながら戻ってきた

男性「うわあああ！ま、魔物だ！しかも、喋るキラーパンサーだぞ!!」

女性「キヤアアア!!殺されるわ!!」

住人達はブレイブの姿を見て逃げていく

ブレイブ「な!? 待ってくれ! 逃げていかないでくれ! 俺は何もしない!! バンを、バンを助けてやってくれ!!」

ユグノア城前

ブレイブは歩くのも辛そうにしながら城までやってきた

兵士「キラールパンサーだ!? この町を襲いに来たのか!!」

ブレイブ「違う…… どうか、バンを、助けてくれ」

兵士「この城には入れません!!」

兵士に剣を向けられる

ブレイブ「俺では、こいつの力になれないというのか……。俺は、魔物。バンとは違うという事か」

兵士「覚悟!!」

イレブン「駄目!!!」

兵士が斬りかかろうとした時、イレブンとロウが前に出た

兵士「な!?! イレブン様、ロウ様!!」

ロウ「こやつは悪いやつではない。わしらとの同盟国、デルカダール王国のマルティナ王女一家の一人、ブレイブじや。絶対に傷つけてはならん。ブレイブや、その背中に乗っている人らしき者は誰じや」

ブレイブ「ロウ様!!お助けください!!バンが大爆発から私を守って黒こげになってしまったのです!私などどうなっても構いません!!どうか、バンを助けてやってください!」

イレブン「な!?!この人はバンなの!?!」

ロウ「何と!?!急いで手当てするぞい!!医療部屋に運び込むんじや!もう一刻も許されぬ!あと数分で大樹へと還ってしまう!!」

ロウは急いでバンを持って走っていく

イレブン「急いで医療部屋の準備を!回復できる人も大至急集めて!!」

兵士「はっ!」

イレブンと兵士も走っていった

ダツダツダ!

城門前からは誰もいなくなった

ブレイブ「お願いします……」ドサ

ブレイブは倒れた

バンとブレイブ3

数時間後、デルカダール城 玉座の間

ラース「何だって!? バンとブレイブが!？」

イレブン「そうなの! 急いで手当てしたんだけどまだどうなるかわからないんだ。特に、バンは生き返らない可能性もあるの!」

マルティナ「私達も急いで向かうわ!」

デルカダール王「急いで準備をするぞ、グレイグ!」

グレイグ「はっ! お城は一旦閉じます!」

ラース「四人は先に向かっていてくれ! 俺はバンの妻、メグを連れてくる!」

その後、ユグノア城 医療部屋

メグ「バン!!!」

メグは大焦りで部屋に入ってきた

ロベルト「あ、メグさん。それにマルティナ様方も来てくださいますか」

イレブン「どう？おじいちゃん、セーニャ」

セーニャ「私達はあらゆる手を尽くしたのですが、バン様がどうなるかはバンの様の気力次第となりました」

ロウ「今夜が峠じゃ。越えればよいがどうなるか。わし達は祈るだけじゃ」

メグ「ううっ……バン。こんなに火傷だらけになって」

メグはバンの姿を見て涙を流している

デルカダール王「ロウよ、わしはバン達にこんなに危険な任務は頼んでおらん。お主は一体何を頼んだのじゃ」

ロウ「誠にすまなかった、デルカダール王よ。わし達は山の中にある密猟者の隠れ屋敷の調査を頼んだのじゃ。犯人はもう捕まっておったから安全じゃと思っておったのだが、まだ一人いたとは思わなかった」

イレブン「そいつがバン達にバレて、全てをもみ消すためにバン達を屋敷ごと爆発させたんです。バンはどうやらブレイブを庇ったみたいなんです」

グレイグ「なるほど。だからバンとブレイブで傷にここまでの差があるのか」

メグ「ううっ……ううっ……」

マルティナ「メグさん……少し出ませんか？ここには暗くなるだけです」

メグ「マルティナ様……ありがとうございます」

ラーズ「……ほら、お前達も出るぞ。言いたい事とかあるだろうが、それは全部外で言え」

夕方過ぎ

兵士達からも話を聞いた後、ラーズとマルティナはメグと共にいたメグ「すみません、ラーズ様、マルティナ様。取り乱してしまいました」

マルティナ「気にしないで、メグさん。お話しするのはこれが初めましてよね。私もバンにはたくさん助けられてるのよ」

メグ「そうなのですか!?バンったら家ではいつも色々な報告をして

くれるんですけど、それは聞いた事無かったですよ。バンは迷惑かけたかもしれないと言っているのは聞きましたけど」

レース「バンらしいな。あいつは俺達にたくさん気を使ってるからな。まあ、その分訓練場では好き放題やってるみたいだけどな」

メグ「レース様の事は毎日聞いてますよ。今日は負けたとか、勝ったぞとか。そうそう、レース様が少しドジしたのも知ってるんですよ？」

レース「あの野郎何でも言いやがって。全く、起きたら言っただけやらないとな」

メグ「……私、レース様からバンの事を聞いた時、これは悪い夢だと思っただけです。まさか、そんなはずないって。でもここに来たら、あんな見てられないようなバンがいて、それで、夢じゃないんだって思っただけ……」

マルティナ「わかるわ、メグさん、その気持ち。私もいつも隣にいてくれる騎士さんにそんな気持ちにさせられた事あったもの」

レース「うぐっ……」

マルティナ「そういうのを見せられると、生きてる心地がしなくな

るのよね。不安や恐怖が強くなるのよ。でも、メグさん。忘れないで。バンはあなたを置いて一人で先にいなくなる人じゃないわ。

バンはお城でメグさんの事をいろんな人によく話してるのよ。今日はメグの作った弁当だ。とか、最近メグに元気が無いんだ、俺、何かしたかな？とか、ね。バンはメグさんの事が大好きよ。

メグさんもバンの事が好きなのよね？なら、信じてあげましょう。必ず戻ってくるって」

メグ「マルティナ様……。ありがとうございます。そうですね！私がバンの事を信じてれば、きっとバンは戻ってきますよね！」

ラース「そうだぞ、メグ。バンはメグがいなきやダメダメなんだ。信じてやってれば、あいつに絶対届くぜ」

メグ「はい！もし戻ってこなかったら、大樹で何としてでも会ってぶん殴ってやりますよ！」

マルティナ「いいわね、メグさん！私もラースに先に置いていかれたら、大樹で会ってボコボコにしてやるんだから！」

ラース「そ、それは恐ろしい限りだな。ハハ、こりやあ俺は簡単には死ねないな」

バタバタ！

ガク「あ！マルティナ様、ラース様！こちらでしたか！ブレイブが目を見ましたよ！」

マルティナ「わかったわ、すぐに行くわ！」

医療部屋

ブレイブ「バン……」

ブレイブはバンを見ている

ガチャ

マルティナ「よかった！ブレイブ！」

ラース「もう動いていいのか？」

ブレイブ「あ、ラース様まで来てくださっていたのですね。ご心配をおかけしました」

グレイグ「傷はもうほとんど無くなっている。足の腫れも引いたよ
うだ」

デルカダール王「ブレイブよ、何があったのか聞かせてはくれんかの？」

ロウ「あの場所で何があつたんじゃ」

ブレイブは皆に屋敷での出来事を教えた

ラース「なるほどな。そういう事だったか」

イレブン「あの男はとんでもない事をしたんだね」

ブレイブ「バン……」

ラース「皆、少し俺とブレイブだけにさせてくれ」

デルカダール王「わかった。なら、わし達は部屋の外で待っているぞ」

ラース「ありがとうございます」

ブレイブ「どうされたのですか、ラース様」

ラース「どうだった、ブレイブ。バンのやつは立派だっただろう？」

ブレイブ「……はい。私はこの男の事を甘く見過ぎていました。マーズ殿達が信頼し、ラーズ様達が認めるのも頷けました。バンの強さは、真つ直ぐである事。自分が決めた事を変えない強さです。」

そこにラーズ様が教えた武道の強さが組み合わさって、何事も成し遂げる強さへと変わっています。この男はラーズ様達のように、目に強い光があります。

真つ直ぐ、ただ真つ直ぐに信じる目です。私にはとても眩しい光です。ですが、とても心地よいとも感じました。普段は鳴りを潜めていましたが、いざとなった時この男の光は私達を守る光となっています」

ラーズ「流石ブレイブ。よく見ていたな。いや、体感したのか。変わった戦い方だっただろうか？」

ブレイブ「そうですね。私達は絶対に裏切らないと信じて背中を託し、自分は目の前に全力を尽くす。魔物の世界ではありえない戦い方です」

ラーズ「そうだろう。こいつは皆を信じている。俺の事を助けてくれるってな。その分、お返しとして自分ができる事を全力でやるんだ。だから、皆もこいつを信じるんだ。こいつなら任せられるってな」

ブレイブ「言葉にすると簡単ですが、相当難しい事です。戦いの時やピンチな時は、誰もが信じるなどできなくなります。でも、バンは

信じていた。私の事を。ですが、私はその信頼に……答えられなかった」

ラース「そんな事ないさ、ブレイブ。屋敷まではお前が導いてくれたらしいな。バンはお前を信じて、お前はそこまで全力でやってくれた。密猟者の仲間相手に怯まなかった。

ブレイブは充分、バンの信頼に答えてたはずだぜ。そうじゃないきゃ、バンはお前を庇ったりしないはずだからな。自分を責めるんじゃないぞ」

ブレイブ「ラース様……。ありがとうございます。私はバンという男には敵いません。例え頭が弱く、子どもっぽく、仲間にすぐ甘えるやつでも、この男は強い。もう馬鹿にする事はしませんよ」

ラース「今、充分だろってくらい言ってたけどな。なら、バンが目覚めるまで信じてやろうぜ」

ブレイブ「そうですね。この男は死ぬにはあまりにも惜しいです。必ず戻ってきます」

バンとブレイブ4

それから四日後

バン「ぐ……」

メグ「あ！バン！バン！！」

バン「俺は師匠に勝ったー！！」

バンはいきなりガッツポーズをとった

ブレイブ「ガウ!?ガウ、ガウ」

メグ「バ、バン？」

バン「あれ？ここ何処だ？って、メグ！どうしたんだ、久しぶりだな！あれ？久しぶり？何でだ？」

ガチャ

ラーズ「おお、騒がしいと思ったら煩いのが復活したな」

バン「あ！師匠!!お久しぶりです！俺、何だか皆と会うのが久しぶりに思えるんですよ！」

メグ「もう！体は大丈夫なの？火傷が酷いんだから」

バン「え？火傷？…うわ！何だよ、この体！カッコイイー！」

バンは自分の体を見て驚いている

ブレイブ「ガウ…」

ラース「ハア。ここまでくると尊敬に値するな。お前はブレイブを庇って死にかけてたんだぞ。あの日から今は四日目だ。久しぶりに感じるはそのせいだろうな」

バン「あ…：… そうだ。記憶が戻ってきましたよ。ブレイブ！無事か!!」

ブレイブ「ガウ」ペコ

ブレイブはバンに頭を下げている

バン「へへ、元気そうで何よりだな。お前もありがとな！」

ブレイブ「ガウガウ。ガウ」

バン「マジか!!俺の事をようやく認めてくれたか！ハツハツハ！ど

「んどん敬えよ、ブレイブ！」

バンは偉そうにしている

ブレイブ「ガウ！」ガブ

ブレイブはいつもより優しく腕に噛み付いた

バン「痛え！おい！さっきの話が違うぞ！何で噛むんだよ！」

ブレイブ「ガウガウ！ガルルル！」

バン「くっそー！俺は敬ってはもらえねえのかよ！」

ラース「もう突っ込むのはやめておこう。随分と元気だな、バン」

メグ「何だか拍子抜けしたわよ。バン、お帰りなさい。信じてたわ」

バン「当たり前だろ、メグ！俺はお前の元に必ず帰ってくるぞ！」

その後

ロウ「ふむ。火傷以外大きな問題は無さそうじゃな。よかったわい。一時は本当に死んでしまうのではないかと冷や冷やしたものだわ」

バン「ロウ様、俺は簡単には死にませんよ！師匠を支えるという役目がありますからね！」

イレブン「何だか久しぶりに元気なバンを見てこつちも元気になってきたよ。早くお城に帰って皆に姿を見せてあげてね」

バン「はい！看病してくださりありがとうございます！」

メグ「私もお礼を言わせてください。バンを助けてくださり、本当にありがとうございます。またこうしてバンと話せるのは皆様のおかげです」

ロウ「気にするでない、メグさんよ。バンにはわし達も世話になっておる。このくらいお安い御用じゃ」

イレブン「僕もバンと一緒に戦っていた時はとても頼もしかったんだ。またユグノアに来てね！」

バン「どうしよう、メグ。俺、勇者様達にこんなに褒められて明日、生きてるかな？」

メグ「もう、不吉な事言わないで」

その後、デルカダール城

ダダダダ!

バン「皆ー!!」ガツン!

バン「ゴフツ!」

ラース「おい、バン。はしやぐのはわかるが城を走るな、わかったな」

バン「す、すみません、師匠」

ブレイブ「ガウガウ……」

玉座の間

マルティナ「よかったわ、バン!全然元気そうね!」

グレイグ「うむ。一時は死んでいるかのようにだったのに、今ではすっかり元通りだな。その頭のコブは何なのだ?」

バン「あ、これは気にしないでください。ご心配をおかけしました!俺、復活しましたよ!」

コロ「キャン!!」

ブレイブ「グルルル。ペロペロ」

コロはブレイブに駆け寄ってきた

バン「ブレイブも悪かったな。俺の面倒を見てくれて子どもを見てなかったもんな。ゆっくり休んでくれ!」

ブレイブ「ガウ、ガウ」

バン「お、気が利くな!それじゃあな、ブレイブ!師匠、俺は訓練場で皆に会ってきますね!」

バンは出ていった

マルティナ「……前から気になっていたのだけど、バンってブレイブと話せるのかしら?」

グレイグ「確かに前から会話をしていますね。だが、本当に伝わっているのか?」

ラーズ「おそらくあれは伝わってるぜ。しかも前までブレイブが話してた時のようにはつきりとな。あいつは何となくで言ってる事を理解してるんだろう。不思議なやつだよ」

訓練場

バン「驚け、お前ら！俺は帰ってきた!!」

バンは上から叫んだ

マーズ「それで、魔法の詠唱を短くするのに省くものは決まっ
てな」

ベグル「ガク、斧は両手より片手で扱えた方が今後にも生かしやす
いぞ」

ロベルト「いい切り返しだな！その調子でどんどん来いよ！」

しかし、誰もバンを見ていない

バン「あ、あれ？あの、皆！俺、死にかけてたんだぞ！もつとこう、
何かないのかよ！」

全員「ああ、おかえり」

誰もバンを見ずに答えた

バン「薄い!!」

ガク「あの！バンさん！ご無事で俺、本当に嬉しいですよ！俺、ま

たバンさんと会えるのを待っていましたよ！」

ガクはバンを見て手を振っている

バン「ううっ……ガク！お前は本当にいいやつだ！」

ベグル「ほら、ガク。馬鹿に構ってないで続けるぞ」

バン「お前らなんか嫌いだー！！師匠ー！！」

セーニヤの夢

二ヶ月後、デルカダール城 大広間

セーニヤ「あ、ラース様！急にお呼びして申し訳ございません」

ラース「おう。どうしたんだよ、セーニヤ。ベロニカが一緒じゃないのは珍しいな」

セーニヤ「あの、ラース様！どうかお願いがあります！私の夢を叶えてくださいませんか！」

ラース「セーニヤの夢？俺が？」

セーニヤ「はい。お恥ずかしいのですが、私の夢はお菓子屋さんを開く事なんです！ラース様がホワイトデーに作ってくださいったチーズケーキやショコラ、クッキーまでどれもがとても美味しかったです。」

なので、ラース様にお菓子を作っていただけなんです！」

ラース「ええ!?待ってくれよ、セーニヤ。俺が作ったやつなんて店として出せるもんじゃねえ。悪いがそれはできないぞ」

セーニヤ「そんな事ありませんわ、ラース様。簡単なものでもいい

のです。どうか作ってくださいませんか？」

ラース「ううん。でもなあ……。あ！それなら、ダーハルーネのカフェの店長を頼ってくれ。あいつなら喜んでくれるぜ！」

セーニヤ「実はもう声をかけたのですが、お店を二つの掛け持ちは厳しいと言われてしまい、流石にそれは申し訳なくなってしまうって」

ラース「そ、それもそうだな。うーん……」

セーニヤ「お願いします！幼い頃からの夢なんです！」

セーニヤは頭を下げている

ラース「……わかった。俺なんかでよければ力になろう」

セーニヤ「本当ですか!?ありがとうございます!!」

ラース「だが、俺一人だと厳しいな。何人か助っ人が必要だ。それと、マルティナに言ってお休みをもらってくる。少し待っていてくれ」

セーニヤ「それなら私もマルティナ様をお願いしますわ。私のわがままですのうで」

ラーズ「わかった。それなら来てくれ」

玉座の間

マルティナ「あらセーニヤ。よかったわ、こっちにも顔出してくれて」

セーニヤ「マルティナ様、グレイグ様、デルカダール王様！ラーズ様をお借りしてもよろしいですか？私のわがままに付き合っていたきたいのです」

グレイグ「どうしたんだ、セーニヤ。そんな真剣な顔をして」

ラーズ「実はな」

ラーズはマルティナ達に先程の事を話した

デルカダール王「なるほど、セーニヤ殿の夢であるか。いい夢を持っておるな」

マルティナ「私も協力してあげたいけど私はここを離れられないのよ。ごめんなさい。ラーズは数日休みにするから、ラーズを頼つてね」

デルカダール王「ハツハツハ！マルティナよ、我慢しなくてもよい

のだぞ。今のお主の顔にはついて行きたいと書いてある。お主も
行ってくるのだ。わしが数日はかわろう」

ラース「ええ!?!」

マルティナ「お父様、よろしいのですか?」

デルカダール王「なに、仲間の夢を叶えてやるにはお主の力も必要
であろう。わしも最近退屈だったんじや。偶には代わってほしかつ
たからな。ちようどいいのだ」

グレイグ「王よ、そんな理由で簡単に代わらないでいただきたいの
ですが」

ラース「ありがとうございます、王様。マルティナ、手伝ってくれ
!」

セーニヤ「嬉しいですわ、デルカダール王様!お心遣い大変感謝い
たします」

マルティナ「わかったわ。準備してくるから待ってて」

デルカダール王「子ども達もわしやブレイブに任せるのじや」

ラーズ「ブレイブ、マルス達を頼んだぞ」

ブレイブ「ガウ」

その後

マルティナ「他には誰がいるの？」

セーニヤ「お姉様が準備してくださっています。シルビア様は最近公演準備で忙しそうでしたので声をおかけしてないんです」

ラーズ「となると、四人か。うーん、店を開くにはまだ足りないな。カミュにも声をかけてみよう」

クレイモラン城下町 カミュとマヤの家

ラーズ「という訳でよ、カミュにも手伝ってほしいんだ」

カミュ「俺は菓子作りはあのホワイトデー以来やってねえからな。あまり手伝えねえぞ」

マルティナ「それでも大丈夫よ。私達が教えるからそれをやってほしいの」

カミュ「だがよ……」

セーニヤ「お願いします、カミュ様！私の夢を叶えるため力をお貸しください！」

セーニヤはまた頭を下げている

ラース「ほら、セーニヤがここまで言ってるんだ。カミュ、お前は無視するのか？」

カミュ「……わかったよ。俺でいいなら力になるぜ」

セーニヤ「ありがとうございます、カミュ様！」

ラース「流石カミュだな。人手はまあ最低限集まったか？」

カミュ「お菓子作りだろ？それならイレブンがホワイトデー以来ハマってるらしくてよ、お城で作ってるみたいだぜ」

マルティナ「あら、それは知らなかったわ。イレブンが慣れてるなら力になりそうね。折角だし声をかけてみない？」

ユグノア城 玉座の間

イレブン「え!?やる!!」

カミュ「即答かよ。まあ、そうだろうとは思ったぜ」

セーニヤ「ありがとうございます、イレブン様!」

マルティナ「でも、お仕事は大丈夫?」

イレブン「あ、おじいちゃん。行ってもいいかな?」

ロウ「ふおつふおつ、イレブンは最近どんどん腕があがっておるからう。ぜひ行って力になってくるんじや。わしは平気じゃぞ」

ラース「ありがとな、じいさん、イレブン」

ユグノア王国 広場

イレブン「セーニヤの夢はお菓子屋さんだったんだね。ふふ、セーニヤらしくていいね」

セーニヤ「お恥ずかしいのですが憧れてまして」

ラース「だが人手はあっても、やっぱり俺の教えられるレベルじゃ

あ店には出せねえよな。やっぱりあいつを頼るか。お菓子の作り方くらいなら何とかしてくれるだろう」

マルティナ「あの店長さんの事かしら？」

カミュ「ん？俺は知らねえな。兄貴達の知り合いか？」

イレブン「僕も知らないや」

セーニヤ「ダーハルルーネにいるラーズ様のご友人の方でして、パティシエとして働いているんです。そこのお菓子はもうどれもが絶品なんです！」

イレブン「へー、そんな人がいたんだ。流石ラーズだね、顔が広い」

マルティナ「でも断られたんじゃないかかしら？」

ラーズ「それはお店としての話だろ？作り方を教えてもらうくらいなら何とかならねえかな、と思っただよ」

セーニヤ「確かに優しい方ですからそのお願いなら聞いてくれますわ。お姉様も連れて行ってみましょう」

その後、ダーハル―ネの町 カフェ

ガチャ

ラース「おーい、店長！いるかー？」

店長「おお、どうしたんだよラース。あ、セーニヤさん。お話の件、お断りして本当にごめんなさい」

シンジはセーニヤに頭を下げている

セーニヤ「いえ、大丈夫ですわ。こちらこそわがママを言っ
まっているの。お気になさらないでください」

店長「ん？初めての人もいるな。こんなに連れてどうしたんだ？」

イレブン「実は」

皆はシンジにこれまでの事を話した

店長「それくらいなら全然大丈夫だ！寧ろどんどん頼ってくれ！俺も色々教えてやるよ」

ベロニカ「ありがとう、店長さん！とつても助かるわ」

店長「昼過ぎになったらまた来てくれ。そこでいくつか教えるから

「よ」

「カミユ」「わざわざすみねえな。世話になるぜ」

セーニヤの夢2

その後

店長「おお、カミュは器用だな！なら、こっちの作業も頼んだぜ」

カミュ「おう、任せてくれ」

イレブン「店長さん、これでいい？」

店長「大丈夫だぜ、勇者様！勇者様は慣れてるんだな。お菓子作り好きなのか？」

イレブン「うん。最近ハマっててね、よく作ってるんだよ。皆が美味しそうに食べてくれるのが嬉しくてね。上手にはできないんだけど」

店長「いい事じゃないか！お菓子は上手よりも気持ちが一番なんだぞ。勇者様のその気持ちがあれば、すっげえ美味いお菓子ができるぜ！」

イレブン「そうかな？ありがとう」

ラース「待て、セーニヤ！何入れようとしてるんだ！」

セーニヤ「とろみを出した方がよろしいかと思ひまして片栗粉を混ぜてみようかと」

マルティナ「セーニヤ、今使ってるのは片栗粉ではなくてお塩よ。よく見て」

セーニヤ「まあ！本当ですわ！すみません、私ったら気づかなくて」

ラース「あー！ベロニカ！何、唐辛子切ってるんだ！」

ベロニカ「辛味って大事よ？甘いものにもアクセントは必要でしょ？」

ラース「今作ってるものわかってんのか!? ケーキだぞ！唐辛子なんて入ってたら罰ゲームだ！」

店長「た、大変そうだな、ラース。セーニヤさんやベロニカさんが意外とやらかすんだな」

マルティナ「ま、まあよく見てれば止められるわ。ごめんなさい、少し時間はかかるかもしれないわ」

店長「まあ急いでる訳じゃないから大丈夫だ。こっちは別で進めるな」

それからお菓子指導は三日続いた

三日後

ラース「ありがとな。おかげでかなりレベルが上がった気がするぜ」

セーニヤ「中々できない体験でした。わざわざ時間を縫ってお付き合ひしていただき、ありがとうございました」

店長「気にすんな、俺も皆とたくさん作れて楽しかったぜ。それと、店を開くんだろ？それなら俺の知り合いが前にやってた店があるんだが、今はもう空き家なんだ。そこを借りれると思うからそこで開いてみたらどうだ？期間限定としてよ」

イレブン「え！そんな事までしてくれるの？」

店長「おう！俺も勇者様達を作るお菓子に一役買えて嬉しいからな。宣伝すればお客なんてどんどん来るはずだぜ。何たって、勇者様達が作った物だ。皆食べてみたいだろうよ」

マルティナ「何だか話が大きくなってきたわね」

ベロニカ「でも、セーニヤの夢ならやってやるわ」

カミュ「ありがとな、色々してくれて助かるぜ」

しばらくして

店長「よし、ここだ。まだそんなに汚れてないから掃除すれば使えるぜ。器具とかは俺が貸してやるよ。まあ無理なものもあるから、そこは買い揃えてくれ。看板はどうする？あつた方がいいと思うが」

ベロニカ「どうせならインパクトが欲しいわよね。こう、気になるような感じのやつ」

イレブン「そうだよね。何かあるかな」

ラーズ「それこそイレブンだろ。勇者を名前に使えば客引きにもなるんじゃないか？」

カミュ「確かにそれはありだな」

イレブン「ええ!?僕を使うの!?そんなんでいいのかな?..」

店長「だがあまり長くない方がいいぞ。そういうのは宣伝で使った方がいいはずだ。看板は短く、覚えやすい方がいいかもな」

マルティナ「勇者を表すなら、ホープとかはどうかしら？」

店長「お！いいねえ、マルティナさん。ホープなら勇者様の店って思いやすいんじゃないか？」

イレブン「それなら僕も安心だよ。ホープ、いいんじゃないかな？」

ベロニカ「それにしましょうか！」

カミュ「じゃあ後は掃除だな。足りないものとかあったらまた聞いても大丈夫か？」

店長「おう！俺も応援してるからな！頑張ってくれよ！」

セーニヤ「何から何までありがとうございます！このご恩、いつかお返ししますわ！」

店長「ハハハ！そんな風に捉えるなよ、セーニヤさん！お菓子を愛する者同士、これからも仲良くしていこうぜ！じゃあな！」

その後

店内の掃除は分担してすぐに終わった

ベロニカ「ふう。掃除はこんな感じかしらね」

イレブン「ラハデイオさんに話をしてきたよ。応援してくれたし宣伝もしてくれるみたい。ほら、チラシまで作ってくれたよ」

ラース「おお、どれどれ。」

勇者様とその仲間達と出会える!?!しかも手作りのお菓子売り出す夢のお店!ダーハル―ネにて、期間限定オープン!!

うわ、すげえな。これは大変な事になりそうだ」

セーニヤ「ここまで来るには一人では絶対にありえませんでした。私はたくさんの人に支えられて、今!夢が叶おうとしています!皆様のためにも私、絶対にこのお店を成功させますわ!」

ベロニカ「やる気全開ね、セーニヤ。でもここまで来れるなんて私も正直思ってたわ。皆、セーニヤの夢を叶えてくれてありがとう。姉としてお礼を言うわ」

カミュ「おいおい、ベロニカ。それにはまだ気が早いんじゃないか?」

マルティナ「そうよ。まだ開店していないもの。これからが本番よ。私もこのお店を成功させるため頑張るわ。ラース、そのチラシをデルカダール王国全員に配りましょう」

ラース「そうだな。どんどん宣伝して人を呼ばないとな」

カミュ「なら、俺はクレイモランで配るぜ。シャルル達にも手伝ってもらおう」

イレブン「僕はユグノアの皆に配るよ！おじいちゃんにも声かけないと！」

セーニヤ「皆様、ありがとうございます！お姉様、私達はこのダーハルーネ周辺やサマディー王国などで宣伝しましょう！」

ベロニカ「そうね。なら、私はホムラの方にも行くわ。二人で手分けしましょう」

イレブン「それじゃあ開店日まで頑張ろう！」

五人「オー！」

セーニヤの夢3

一週間後、オープン当日

ダーハル―ネの町は人混みでとても賑わっていた

お店の前では長い行列が出来ている

店内

シルビア「凄いじゃない、皆！アタシ準備も何もしてないから、この四日間頑張るわ！セーニヤちゃんの素敵な夢、絶対に叶えてみせるわ！」

ロウ「わしも頑張るぞ。皆のようにテキパキできんが、わしの事もコキ使ってくれて大丈夫じゃ」

グレイグ「ここまで大きな話になっていたのだな。しかも店の前の混み具合は凄まじい。俺は怖がられたりしないだろうか」

ラーズ「ハハハ！グレイグはデカイけどまあ何とかなるだろ。一日目のキッチンは俺、カミュ、シルビアで回る。イレブンとマルティナはもしもの時は手伝いに来てくれ。ホールは皆に任せただぞ。お客さんとお喋りして和ませてくれ」

全員「了解！」

しばらくして

女性「あ！勇者様が出てきたわ！」

女性「キヤーツ！本当にお仲間達も全員いらっしやるわ！」

男性「すげえ！俺、グレイグ將軍を生で見られるなんて！」

イレブン「皆さん、今日は僕達が開くお店に集まっていたいただきありがとうございます。四日間という短い期間ですが、僕達の仲間の一人の夢を叶えるため精一杯頑張ります。」

お菓子の味に関しては周りのお店の方が美味しいと思いますが、僕達の気持ちが進められているのでよければ食べていってくださいと嬉しいです。それでは僕達のお店、ホープ開店します！」

その後、店内はすぐに満席になった

グレイグ「ラーズ達！タルトとチーズケーキ二人分とチョコレートケーキ、パフェ三人分だ」

ラーズ「おう！シルビア、ケーキは頼んだ！」

シルビア「ええ！任せてちょうだい！」

ロウ「こっちは飲み物じゃ。ホットコーヒーとオレンジジュース、紅茶にぶどうジュースじゃ」

カミュ「了解！」

ホールでは

イレブン達が注文を取ったり、話をしたりしていた

女性「まさか勇者様とお話できるなんて。あの、お腹の中に赤ちゃんがいるんです。よかったらお話ししてあげてください」

イレブン「本当!? えへへ、よしよし、元気に生まれてくるといいね」

男性「すみませーん、注文お願いします！」

マルティナ「はい! ご注文をお伺いします」

男性「え!?! マルティナ様!! いつも私達の事を考えてくださり、ありがとうございます!」

マルティナ「あら、もしかしてデルカダールから来てくれたのかしら?」

男性「はい！チラシを見てぜひ行ってみたいになって」

マルティナ「うふふ、わざわざありがとうございます。注文はどうされますか？」

男性「あ！えっと、パフエを一つとタルトを二つ、飲み物で紅茶をお願いします」

マルティナ「はい！ありがとうございます。楽しんでいてね」

男性「はい！」

女性「ロウ様！そんなに持たれて平気ですか？」

ロウ「ふおっふおっ、ありがとうございます。じゃが、わしはこれくらいへっちやらじやよ」

女の子「おじいちゃんすごーい！」

ロウ「ありがとうございます。可愛い子じやな。ケーキを食べに来てくれたのかの？」

女の子「うん。お母さんが絶対に行くって言ったの。私も楽しみにしてたんだ！」

ロウ「それは嬉しいのう。たくさん食べていっておくれ」

おば「まあ！グレイグ將軍ってやっぱり鍛えられてるのね！」

おば「あらあら、こんなに硬いのかい！いい男なのにこんなに体も立派なんて、いいわ〜！」

グレイグ「そ、そうなのか。ありがとう」

外では

ベロニカとセーニヤが列を整理していた

ベロニカ「皆さん、一列に並んでー！割り込みはしないでよね！」

セーニヤ「大変お待たせして申し訳ございません。お席が空き次第、すぐにご案内いたします。もうしばらくお待ちください」

数時間後

ラース「カミュ！悪いが、ぶんしんを頼む！」

カミュ「そうだな。任せてくれ、兄貴！ぶんしん！」

シルビア「流石カミュちゃん！これで少し早くなるわ！」

セーニヤ「全部で2400ゴールドになります……。はい、ちよūdお預かりいたします。またのご来店をお待ちしております。ありがとうございます！」

女性「グレイグ様だわ！グレイグ様、カツコイイ」

グレイグ「む？俺の事を呼んだか？」

女性「ちよつと！こつちに来てくれたわよ！」

グレイグ「何かあったか？俺に用事か？」

女性「あ、あああの、私グレイグ様の、ファンでして！あの、お手を握ってもらってもよろしいですか」

グレイグ「俺のファンなどいたのか。それはありがたいな。手を握るくらい構わない。これでいいか？」

女性「あああ！ありがとうございます！私、この手洗いしません」

グレイグ「そ、それはやめてくれ。あなたの手が汚れてしまったら申し訳ないからな」

女性「よかったじゃない！心配されたわよ！」

イレブン「え？雷を見たいの？危ないよ？」

男の子「でも出せるんでしょ？僕、見てみたい」

イレブン「じゃあ手に少しだけね。はい」

イレブンは手のひらに勇者の紋章の雷を出した

男の子「うわー！すごい！」

男性「ありがとうございます、勇者様。あ！あまり触ろうとしないの！」

イレブン「ふふ、気にしないで。子どもってかわいいですよね」

男の子「勇者様ー、他にはー？」

イレブン「ごめんね。危ないからもう駄目だよ」

おば「あら、ロウ様。これは私が頼んだやつではないですよ？」

ロウ「ほっ！そ、それはすまんかったのう」

ロウは驚いてタルトを下げた

おば「やだ、ロウ様ったら。ボケてきてらっしやるんじゃないですか？」

ロウ「そ、そんなはずないんじゃないか」

男性「ロウ様ー！そのタルトは俺のですよー！」

ロウ「おお！そうじゃったか！すまんのう」

ロウは安心したように持っていく

男性「いえ、気にしないでください。ロウ様も大変ですよ。あま
り無茶なさらないでくださいね」

女性「あら？子ども？頑張ってるのね」

ベロニカ「もう！私は子どもじゃないの！ほら、取って！パフエよ！」

女性「あらごめんなさい。ありがとう」

ベロニカ「ゆっくりして行ってね」

カミュ「セーニヤ！じいさん！どんどん持って行ってくれ！」

セーニヤ「はい！カミュ様！」

グレイグ「すまない、仕事に戻らねばな。ゆっくりして行ってくれ」

ラーズ「マルティナ！手伝い頼めるか？」

マルティナ「ちよつと待って、ラーズ。案内終わったら向かうわ！」

そして一日目は完売した

閉店後、全員はゆっくり休憩していた

ラーズ「ハア、ハア。めちやくちや疲れた」

シルビア「これは相当ハードね。明日はロウちゃんよね？大丈夫かしら？」

ロウ「これを見るとキツいかもしれんのう」

カミュ「なら俺が代わろうか、じいさん。俺はホールで客とうまく話せる自信ねえからよ」

ロウ「悪いのう、カミュよ。わしも出来る限り手伝おう」

マルティナ「少しドタバタしちやったわね。でも、これで大体の流れは掴めたわ。明日からはもう少しミスを減らしましょう」

グレイグ「俺はあまりうまく話せなかったな。皆みたいに言葉がうまく出てこない」

イレブン「そうかな？グレイグっぼくてよかったよ。そのままでもいいと思うな」

ベロニカ「そうよ。グレイグさんもいろんな人に話してもらえてたじゃない。皆楽しそうだったわよ」

グレイグ「ならいいのだが」

セーニャ「一日目は好調ですね！お客様も美味しかったと言っても
らえて嬉しかったですわ！」

ラーズ「明日はキッチンがイレブンとベロニカとじいさん、じやな
くてカミュか。ホールは俺とシルビアがイレブン達の代わりだ。明
日もこの調子で頑張るぞ！」

セーニヤの夢4

次の日、開店前 ホープ内

店長「よお！どうやら大賑わいみたいだな」

シンジがやってきた

ラース「おお！来てくれたか、シンジ！おかげでこっちは大変だぜ」

店長「そうだろうと思っただけ。だからよ、今日と明日は俺がキッチンに立ってやるよ」

シルビア「あら。とてもありがたいけどお店はいいのかしら？」

店長「ああ。今日は定休日でも明日もついでに休みにしたんだ。俺も手伝える事は多いだろ？ここを盛り上げるための助っ人だぜ」

カミュ「折角の休みなのに働こうなんて変わったやつだな」

ロウ「この店をそこまで思ってくれるとは素晴らしいのう」

店長「というわけで、キッチンは俺一人で大丈夫だ。皆はホールを担当してくれ」

ベロニカ「ええ!? 一人でって大丈夫なの？」

セーニヤ「昨日の感じですと、かなりの量があります。私達もお手伝いしますわ」

店長「おっと、俺を舐めてもらっちゃ困るぜ。パティシエとしての腕と作る速さには自信があるんだ。一人でも何とでもなるぜ」

グレイグ「そこまで自信があるのはいい事だが、無茶はするなよ」

マルティナ「そうよ。何かあれば私達にも声をかけてね。必ず手伝うわ」

店長「おう！それはもちろんだ。俺にも限界はあるからな」

イレブン「心強いよ、店長さん。それじゃあ今日も頑張ろう！」

全員「オー！」

昨日と同じく、数十分で店は満員となった

グレイグ「注文ありがとう。レモンティーは冷たいものと温かいものどっちにする？」

男性「冷たい方をお願いします！」

グレイグ「了解だ。少し待っていてくれ。シンジ！チョコレートケーキとアイスレモンティーだ！」

店長「アイスレモンティーならもう冷やしたのが置いてある。それを持っていってくれ」

グレイグ「な！すごいな。早速持っていこう」

店長「ああ待ってくれ、グレイグさん。ほら、チョコレートケーキだ」

グレイグ「何だと!?今頼んだばかりではないか!?!」

店長「前に注文された時に多めに作ったのを切っておいて、それを事前に用意してあるんだ。この方が早く回るだろ?」

グレイグ「な、なるほど。いい考えだな。ありがとう、待たせずに済むようだ」

セーニヤ「店長様！ホットコーヒーとクレープです！」

店長「それは今から作らないとな。待っててくれ」

ロウ「レッドベリータルト二つとマカロン四つじゃ」

店長「マカロンはそこに冷えてるぜ！持って行ってくれ！」

ロウ「これはすごいおう。昨日よりも回りが早いわい」

セーニヤ「これが本物のパティシエの力なのですな。私、感動しましたわ」

店長「よし！ロウさん、これが焼き上がったら持って行っていいぞ。セーニヤさん、クレープのクリームを混ぜててくれ。皮がそろそろ焼けるからな」

ホールでは

女性「あ、あの、カミュさんですよね」

カミュ「ん？ああ、そうだが俺の事知ってるのか？」

女性「私、デルカダールであなたを見かけてからファンになりました！よかったら握手していいですか？」

カミュ「俺なんかと握手なんてしても何もないぞ。まあ、それでもいいならほらよ」

女性「ありがとうございます！ここに連れてよかったです！あ、注文もお願いしてもいいですか？」

カミュ「おう。何がいいんだ？」

ラーズ「お待ちせしました。チーズケーキと苺のショートケーキ、オレンジジュースとレッドベリージュースになります」

女性「ありがとうございます、ラーズ様」

男性「美味しそうですね、ラーズ様！あの、少しお願いがあるのですが」

ラーズ「ん？どうしたんだ」

男性「今日、彼女の誕生日なんです。よかったら一緒にお祝いしてくれませんか？」

女性「ちよつ、ちよつと！何言ってるのよ！失礼じゃない！」

ラース「それはめでたいじゃないか！少し待ってな。おーい、皆！
この女性の方が今日誕生日だそうだ！皆で祝ってやろう！」

男性「え!?そ、そんな豪勢にしていたただかなくても」

イレブン「いいね！皆で祝おうよ」

ペロニカ「おめでたい日じゃない。お客さんも拍手してくれると嬉しいわ」

その机の周りには勇者達全員が集まり、周りでは拍手が起こっていた

仲間達「おめでとうございます」

女性「あ、ありがとう……ございます。私、絶対に忘れません！」

女性は嬉し泣きしている

男性「ありがとうございます、勇者様！皆様には感謝します！」

その後、外では

イレブンが列を整理して、シルビアが皆を少し盛り上げていた

イレブン「お待たせしてすみません。こちらメニューになります。もしお決まりになりましたら、次の方に回してください」

シルビア「皆々、綺麗に並んでね〜！」

男性「ああ！シルビアさん、握手お願いします！」

男性「おい、ズルイぞ！俺もお願いします！」

シルビア「ウッフ、喧嘩しないで。ほら、アタシはここにいるわ。いつも応援してくれてありがとね」

シルビアはお互いの男性の手を取って握った

女性「シルビアさん！サインくださいーい！」

シルビア「は〜い！」

マヤ「あ！勇者様！私も来たよ！」

列の中にはマヤ達の姿もあった

イレブン「あ！マヤちゃん！周りにいるのはお友達？」

マヤ「うん！私といつも勉強したり遊んだりしてるの。今日は三人できたんだ。こんなに混んでるなんてすごいよ！」

マイ「ちよ、ちよつとマヤちゃん。勇者様にはもう少しお上品に話した方が」

マヤ「アハハ！そんな事なくていいんだよ、マイ。ねえ、勇者様！」

イレブン「うん。全然気にしないよ。寧ろいつも通りに話してよ。そっちの方が嬉しいな」

ホカ「え、ええ！いいのですか、勇者様！私、ずっと勇者様に憧れてたんです！」

イレブン「ぼ、僕に？そんな。もつといい人がいるんじゃない？」

ホカ「いえ！そんな事ありません！勇者様はカッコいいです！私、ずっとお話してみたかったです」

マヤ「よかったね、ホカ。ここに行きたいって凄かったもんね」

ホカ「うん！」

イレブン「それじゃあ中でまた話そうか。少し待っててね」

その後

マヤ「兄ちゃん！兄貴！来たよー！」

ラース、カミュ「マヤ!？」

ラースとカミュはまさかマヤが来てくれた事に驚いている

マルティナ「あらマヤちゃん。友達と来てくれたの？嬉しいわ。席に案内するわね」

ホカ「わ、わあ。本物の勇者様の仲間達だ。緊張するよ〜」

マイ「私もドキドキしてきた」

マヤ「そんな固くならないでよ、二人とも。いつも通りで大丈夫だって」

カミュ「よお、マヤ。まさかお前まで来るとはな。隣はマヤの友達

か？いつもマヤが世話かけてるな」

ホカ「いえ、気にしないでくださいお兄様。マヤちゃんには私達もたくさん助けられてるんです」

ライス「マヤ、来てくれてありがとな」

マイ「ああ!!やっぱり貴方でしたか、ライス様!!」

マイはライスを見ると興奮した様子で席を立った

ライス「お、おう？俺の事知ってるのか？」

マイ「はい！あの、私の事覚えていますか？」

ライス「え？……いや、悪い、覚えてないな」

マヤ「え？マイって兄ちゃんと知り合いだったの？」

マイ「うん。何年も前なんだけど、家族で旅行に出かけた時の帰りに護衛してくれたの。その時に病気になった女の子です。思い出していただけましたか？」

ライス「ええええっ!?!あの時の女の子か!!今でも覚えてるぜ!無事だったんだな。よかった……。俺が簡単な処置しかできなくて、つらい思いさせたな。よくなって本当によかったよ!」

ライスもまさかの再会に驚いている

マイ「はい!私はあの後、お医者様にあの者の処置が無ければどうなっていたかわからないと言われ、その感謝をしたくてあなたを探していたんです。」

ライスという名前を聞いてどことなく聞き覚えがあつて、それでここに来たんです。まさか、本当に会えるなんて!ライス様は私の命の恩人です!」

ライス「そうだったのか。俺も君が無事なのか気がなつていたんだ。元気でよかった。しかもマヤと友達なんだな。マヤの兄としても嬉しい限りだ!」

ホカ「え?ライス様もマヤちゃんのお兄様なんですか?」

マヤ「うん!血は繋がつてないんだけど家族なんだ!兄貴より年上で、兄貴より強いんだ!」

マイ「マヤちゃんと義理のお兄様だったんですね!」

ライス「まあ色々あつてな。ああ、忘れる所だった。注文はどうす

る？」

マヤ「あーごめん、まだ決まってないや。決まったら呼ぶね」

ラース「おう。じゃあまた後でな」

セーニヤの夢5

その後

ラーズ「お待たせしました。レッドベリータルトとシヨコラとクレープ、アイスレモンティー三つになります」

マヤ「え。凄いじゃん！かなり本格的だよ！」

ホカ「そうですね。勇者様達ってお菓子まで作れたんですね！」

ラーズ「練習したんだぜ。あと、俺の事を覚えててくれたマイちゃんにはおまけだ。俺が作ったシフォンケーキだ。よかつたら食べてくれ。あ、他のお客さんにはバレないようにな」

マイ「ありがとうございます！さつきマヤちゃんから聞いたんですけど、ラーズ様って今デルカダール城にいらっしやるんですね！」

ラーズ「おう。マルティナを守る騎士として働いてんだ」

マイ「私達もう少して卒業なんです。そしたらデルカダールに引越す事になってるんです！今度お手紙でお父様やお母様にラーズ様と出会えた事と、ラーズ様がデルカダールで働いている事をお伝えします！」

ラース「おお！それは凄いな！ここまで重なると偶然とは思えないな。俺はよく城下町に行くから見かけたら声かけてくれよな」

マイ「はい！」

その後、二日目も完売した

閉店後もマヤ達は少し残っていた

マヤ「ねえ、皆！私達も手伝いたい！折角の連休使ってここまで来たし、皆と楽しくお店をやってみたい」

ベロニカ「あら、申し出はありがとう。でも、連休ならそれこそもつと楽しい事に使わないと駄目よ。ここはかなり忙しいんだから」

シルビア「そうね。気持ちはとてもありがたいんだけど、ここはアタシ達だけで平気よ。マヤちゃん達はダーハルーネでもっと楽しんできて」

ホカ「そうですね。ほら、マヤちゃん。言ってみただけどやっぱり駄目だよ。予定通り買い物しようよ」

マヤ「う、うん。ごめんね、皆。でも、ケーキとかタルトはすっごく美味しかったよ！」

ロウ「ほほ、ありがとう」

カミュ「マヤの友達もありがとな。これからもマヤと仲良くしてやってくれ」

マイ「はい！マヤちゃんは私達の大切なお友達です。これからはずっと一緒です」

グレイグ「マヤ……。入学する前は不安がっていたのに……」

ラース「おいおい、グレイグ。涙が出てきてるぞ」

マルティナ「じゃあね、マヤちゃん達。食べにきてくれてありがとう」

その後、三日目と四日目も無事に完売した

四日目の夜 ホープ内

全員「かんぱーい!!」

全員で大成功を祝っていた

イレブン「大成功だね！まさかここまでお金が増えるなんて！」

グレイグ「シンジには多めに渡しても問題無さそうだ。余ったお金はどうする?」

イレブン「大きな使い道はこの町に寄付するのと、グロッタの町の孤児院に寄付の二つかな。他に何かあれば言つてよ」

ロウ「孤児院は確かにいい使い道じゃな。ハンフリーも喜んでくれるじゃろうて」

マルティナ「後はセーニヤに全部任せていいんじゃないかしら?」

カミュ「それもそうだな。セーニヤの夢だったんだもんな」

シルビア「セーニヤちゃん、四日間ともとってもよく動いてたわ。誰よりもやる気に満ちていたわね」

セーニヤ「はい!ここまで大きな形で、しかも皆様と一緒にお店を開けてとっても嬉しかったです!私の夢を笑う事もせず、皆様が必死になって頑張ってくださって私、再確認しました。皆様は本当にお優しい方達です!!私、皆様と出会えて本当によかったです!」

ペロニカ「本当ね。ここまで必死にやってくれる人なんてそうそういないわ。私達は素敵な人達と出会えたんだわ。ありがとう。姉と

しても、私自身としてもお礼を言うわ」

ラーズ「ハハハ！固いなー。もつと楽にいこうぜ！俺達は何か困ってたら必ず力になる。それがどんなに小さくてもな」

イレブン「うん！ラーズの言う通りだよ。僕も皆が少しでも困ったら助けてあげたい。だって！僕のかげがえのない仲間達だもの！何だってやるよ！」

セーニヤ「ありがとうございます、ラーズ様、イレブン様。私、とっても幸せですわ！」

シルビアの新たな芸

それから一ヶ月後、デルカダール城

コロ「キャン！キャン！クウーン」

コロは窓から遠くに向かって吠えている

ルナ「何だかブレイブがいなくなってから、コロが少し寂しそうな
の。遠くに向かって吠えたりしてるの」

マルティナ「少しだけ我慢してもらいましょう。ブレイブも頑張っ
てるんだから」

ラーズ「全くシルビアのやつ。芸を覚えさせるためとは言え、本番
より二週間も早いぞ。そんなに難しいやつなのか？」

マルス「ねえ父さん。この期間だけ、僕達の部屋でコロを休ませて
あげようよ。夜に一人ぼっちでここにいるのはかわいそう」

ラーズ「それもそうだな。マルティナ、いいか？」

マルティナ「私も大丈夫よ。コロも誰かいた方が寂しくないと思う
わ」

グレイグ「ゴリアテからの招待状は何人で行く？その返事は早いうちにしておこう」

マルティナ「そうね。ラースとグレイグで行ってきたらどうかしら？折角くれたのに行かないのも変だし、一人だけなのも少し寂しいわ」

グレイグ「私は王に予定を聞いてみます」

ラース「なら、その日は夜にいなくなるぜ。他にも誘った方がいいか？」

マルティナ「そうね。特等席だし、行きたい人がいたら誘ってもいいと思うわよ」

マルス「父さん、僕も行く！」

ルナ「私もシルビアさんの芸見たい！」

ラース「元々二人は行く予定だったぞ？大丈夫だ。楽しみにしてろよ？」

二人「わーい！」

その後、ラースは思いつく限りの人に聞いていた

バン「え!?シルビアさんのサーカスですか!行きたいです!俺とメグは前に見れなかったんですよ。そのリベンジしたいです!メグも連れて行っていいですか?」

ガク「俺も行きたいです!シルビアさんのサーカスついていいですよ。元気が出るっていうか、励ましてくれる感じがするんですよ」

店長「マジか!!行くに決まってるだろ!!ラース、お前と友人で本当によかった!」

ラース「まあ、こんな所か。子どもも入れて八人か。結構大所帯になったが、まあシルビアなら喜んでくれるだろうな」

その頃、シルビアとブレイブは

芸を覚えるために練習していた。ブレイブはマルティナ達からコミュニケーションが取れるようにと喋れるようになる薬を使っている

シルビア「それでね、ブレイブちゃん。私が火吹き芸でこの大きな輪っかに火を付けるから、その中を飛んでほしいの。危なくないように台もあるし、輪っかも固定される予定よ」

ブレイブ「了解しました、シルビア様。これくらいなら簡単です。

ハア！」

ブレイブは火を怖がりもせず飛んでみせた

シルビア「あら！凄いいじゃない、ブレイブちゃん！何回かやってみていいかしら？」

ブレイブ「はい。構いませんよ」

その後

シルビア「じゃあ、じゃあ！空中で何て出来るかしら？」

シルビアは少し興奮している

ブレイブ「大丈夫ですよ」

シルビア「本当く!?それじゃあいくわよ、せーのっ！」

シルビアは火をつけた輪っかを空中へ投げた

ブレイブ「ハア！」

ブレイブはその輪っかを問題なく潜った

シルビア「キャーッ！カッコイいわ、ブレイブちゃん！これが出来るならきつと大盛り上がりよ！流石ね！本番もよろしく頼むわ！」

ブレイブ「この程度ならいくらでも申し付けください。力になりま
すよ」

サーカス本番前日　グロツタの町

マルス「ここがグロツタの町なんだね。初めて来た」

ルナ「あ！あれがカジノ？ソルティコのやつと違うんだね」

マルスとルナはキョロキョロとしている

ガク「あ！マルス君、ルナちゃん。あまり離れないで。ああ！下に
行っちゃう！追いかけないと」

店長「しかし、俺このメンバーに入ってよかったのかよ。浮いてな
いか？」

ラーズ「まあ、お前なら平気だろ。この前の件でグレイグとも話せ
るだろ？」

グレイグ「急に呼んですまなかったな。先日のお礼だと思ってく
れ」

店長「あれならお金も想像より多かったからこっちも感謝しないと
なんだがな」

メグ「ラーズ様、私までお呼びいただきありがとうございます。シルビアさんのサーカスは私も楽しみだったんです」

ラーズ「おう。気になってるかと思つて声かけたんだが、どうやら正解みたいだな」

バン「あなたが師匠が話してたダーハル―ネの店長さんだよな。よろしくな！」

店長「おう。よろしくな、バン」

メグ「あの！私もデルカダールでカフェを営んでるんです。よかつたら、何か技とかあれば教えていただけませんか」

店長「お、それじゃあ同業者だな。技……ねえ。俺はこれといったものはないが、やっぱりお菓子には心だよな。それさえあれば、どんなお菓子も美味しくなると思つてるぜ」

メグ「心、ですか。名言ですね！私も心をこめて作つてるんです。美味しくできてるんでしょうか」

店長「それが出来てるならメグさんも一流だぜ」

バン「メグ、安心しろ！お前の料理は全部美味しい！」

メグ「もう、バンったら毎回それしか言わないじゃない。嬉しいけど、新作とか出す時に少し困っちゃうのよ」

バン「え……。だ、だってよ、美味しいものは美味しいんだ！」

ラース「メグ、諦めな。バンにはそんなたくさん言葉は出てこねえんだからな」

店長「なら、よかつたら今度俺が味見してみようか？」

メグ「え!?!?よろしいんですか!?!ぜひ、お願いします！」

バン「あー!?!お前!!なに、メグの料理貰おうとしてるんだ!!」

バンは聞き捨てならないとシンジに詰め寄った

店長「え?おいおい、バン。落ち着け、誤解してないか？」

バン「メグは俺のだ!!お前にはやらないからな!いくらパティシエだからって調子に乗って」ガツン!!

ラーズ「うるせえぞ、バン。それと勘違いして暴れんな」

店長「……だ、大丈夫か？バン。頭にたんこぶできてるぞ」

バン「うう……痛い……。すみません、師匠」

グレイグ「いつものやり取りなんだ。シンジ、慣れてくれ。さて、ガクと子ども達を追いかけねばな」

その後、サーカステント内 裏口

シルビア「ええ!?体調を崩して来れないですって!？」

関係者「はい。先程そう連絡が入りました。どうされますか？シルビアさん」

シルビア「ここまで来たのにキャンセルなんて出来ないわ。サーカスは続行よ。ただ、どうしようかしら」

ラーズ「よお、シルビア。さつき大きな声が聞こえたが何かあったのか？」

子ども達「シルビアさん、こんにちは!」

シルビア「あー！ラースちゃん！グレイグやマルスちゃん達も来てくれたの。それに店長ちゃんやバンちゃんまで。嬉しいわ〜」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブも中にいて、煌びやかな服を着ていた

バン「よお、ブレイブ！綺麗な格好してるな！似合ってるぜ！」

店長「ええ!?キラーパーンサー!?何でこんな所に」

シンジはブレイブを初めて見て驚いている

メグ「やっぱり驚かれますよね。私も見たのは多くないんですけど、この子はラース様の家族なんだそうです。だから人は襲わないんです」

店長「そ、そうだったのか。ラースのやつ、すげえな」

シルビア「ねえ、ラースちゃん、グレイグ。お願いがあるの。私と一緒にサーカスに出てくれないかしら?」

全員「ええ!?!」

シルビア「さつきアタシとショーをやる人が急遽お休みする事になったの。ショー自体は内容を変えてもいいから、どうしてもやらなきゃいけないのよ。手伝ってくれないかしら？」

グレイグ「そ、それは俺には無理だ。そんな人前であんなに軽やかに動けん」

ラース「シルビアが困ってるなら仕方ねえか。だが、俺も経験がねえからな。どんな事したらいいかわからねえよ」

シルビア「このショーには三人必要なのよ。グレイグ、どうしても無理かしら？」

グレイグ「ぐっ……」

バン「あ、あの、シルビアさん。俺、出てみてもいいですか？」

シルビア「え!?!いいの、バンちゃん!」

バン「はい。興味ありますし、シルビアさんには前から元気をもらってたのでお返しになれば」

シルビア「ありがとう、バンちゃん！それじゃあ少し内容を考えましょう。決まったらすぐに練習しないと間に合わないわ」

グレイグ「すまない、ゴリアテ。俺達は宿でゆっくりしている。ラース、バン。終わったら宿に戻ってきてくれ」

二人「はい！」

メグ「それじゃあマルス君、ルナちゃん、行きましょう」

ガク「シンジさん！戻りましょうー」

店長「ラース！頑張れよな！」

シンジはニヤニヤして出ていった

ラース「くっ……。あいつ、面白がってやがるな」

シルビアの新たな芸2

次の日、グロッタの町 宿

グレイグ「今日も朝から練習か。大変だな」

バン「俺、勢いでやつちやいましたけど何だか緊張してきました」

ラーズ「まあ、もうここまで来たんだ。引けないんだったら進むしかないよな」

ガク「バンさん、ラーズ將軍！俺、応援してますよ！」

メグ「バン、気をつけてね」

店長「そうだけ、バン、ラーズ。成功しても失敗しても観客は笑ってくれるぜ」

バン「店長さんのそれは励ましなんですか？」

店長「さあ、どっちだろうな？」

シンジはニヤニヤしている

バン「うわ、師匠みたいに性格が悪い」

ラース「ん？バン？何か言ったか？」

バン「師匠っていつつもカツコイイって話ですよ!!」

バンは焦りながら笑っている

店長「……お前、完全に脅してんだろ」

ラース「面白いからな。これでいいんだよ」

店長「ハア。(こりやあバンの言う通りだな)」

その後、サーカス内

シルビア「それじゃあ、昨日の続きと通しでやっていきましよう!」

バン「俺、あまり手伝えてないんですけどあれでいいんですか？」

ラース「まあ、結局は俺達はお手伝いだからな。経験も無いし、その方がありがたいだろ」

シルビア「それと、昨日思いついたんだけどこんなのもやってみま

しよう」

夕方 サークাস会場前

マルス「うわゝ、凄い人だね」

会場の前には始まるのを心待ちにしている人達が長い行列を作っていた

ルナ「私達はこっちに並ばなくていいの?」

店長「そうだぜ、グレイグさん。どうして入場口に向かってるんだ? まだ開場もしてないぞ」

グレイグ「ああ、俺達は特別なんだ。しかも、眺めがいい場所から見られるんだ」

ガク「ええ!? そんないいものだったんですか!?!」

メグ「私、そんな所で見てていいんですか? シルビアさんとは何の関係もないのに」

グレイグ「ゴリ……シルビアのくれたチケットは団体向けでな。人が少ないと申し訳なかったんだ。だから、それなら行きたい人と行こうと言う話になってラースが誘ったんだ」

店長「ラーズのやつ、いい事してくれるじゃねえか！」

スタッフ「すみません。まだ会場は開いていなくて」

会場前につくとスタッフに止められた

グレイグ「すまない。ゴリ：：シルビアからこのチケットを買っているのだ。開いてなくても入れるらしいんだが」

スタッフ「あ、ああ!? 特別優待券ですね! わかりました。お先にご案内します。シルビアさんのお知り合いの方達でしたか」

スタッフは中に案内した

ガク「うわあ、本当に何もせずに入れた。俺、こんな事やったことない」

店長「これはテンション上がるな! もしかしたら、ラーズ達の練習風景も見られるかもな!」

スタッフ「こちらがお席の方になります。飲み物は私達に頼んでいただければ、すぐにお持ちいたします」

メグ「結構上からなんですね。あれってもしかして、登場口かしら」

グレイグ「なるほど。全て見渡せるという事か」

マルス「あ、ブレイブが走ってるよ」

ルナ「私、シルビアさんとお話ししたい」

店長「下に行って話しかけてみるか」

ステージ

ガク「ブレイブ、シルビアさん、お疲れ様です！調子はよさそうです
すね」

ブレイブ「ガウガウ」

グレイグ「そういえば、あの喋る事ができる薬はどうした？・コミュニケーションが取れるように渡しただろうか？」

シルビア「ああ、それね。アタシとブレイブちゃんはもうそんなのが無くても気持ちは一緒よ。ねえ、ブレイブちゃん」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

シルビア「もう！照れないの！」

店長「喋る薬？まさかキラールパンサーが喋るのか？」

メグ「私も知らないですね。何なんですか？」

マルス「えつとね、リーズレットさんって言うクレイモランの人が魔物と一緒に住めるように、魔物が喋れるようになるお薬を作ってくれたの」

ルナ「それを使うとブレイブが私達と同じ言葉で喋るの」

店長「ほうく。そんな事ができるようになっているのか」

メグ「魔物と喋れるんですか……私、魔物にはあまりいい思い出無いんですよね」

店長「俺も魔物と仲良くなろうとは思った事ないんだよな」

ルナ「えく。勿体ないよ、それ。ブレイブもコロもかわいいんだから」

マルス「怖い魔物もたくさんいるけど、優しい魔物だつてたくさんいるんだよ！魔物だからって全員同じにしちゃ駄目！」

ブレイブ「クウ〜ン」

ブレイブは嬉しそうにしている

ガク「マルス君とってもいい事言うね。確かにブレイブやコロは悪い魔物とは全然違うもんね」

シルビア「素敵な考えじゃない、マルスちゃん！アタシ、感動しちゃったわ！」

店長「…… 確かに、魔物が皆悪いやつとは限らねえな。俺も考えを改める必要があるな」

メグ「ごめんね、マルス君、ルナちゃん。私はどうやら間違つてたみたい。流石ラーズ様とマルティナ様の子ね。とっても優しいのね」

グレイグ「マルス、ルナ、よかつたな。ラーズ達にも報告しておいてやろう。きつと褒めてもらえるぞ」

全員がマルス達を褒めている

二人「やつた〜！」

グレイグ「もう練習はしないのか？ゴリアテ」

シルビア「ええ、もうリハーサルは終わらせたわ。アタシはあなた達にも驚いて貰いたいから早めに終わらせたの！ぜひ楽しんでいてね！絶対笑顔にしてみせるわ」

店長「シルビアさんのショーをあんなにいい席で見られるなんて、俺、生きててよかった」

ガク「シンジさん、それはいいすぎじゃないですか？でも、嬉しいのは俺も同じです」

メグ「楽しみにしてますね、シルビアさん！バンとラーズ様にも頑張ってお伝えください」

グレイグ「そうだな。三人のショーがどうなるか、俺も楽しみだ」

マルス「父さんもバンさんも、シルビアさんもブレイブも頑張ってる！」

ルナ「私、楽しみにしてる！」

シルビア「まっかせて。アタシ、皆の笑顔のために張り切っちゃ
うんだから！」

サーカス開演

夜

サーカス会場内では大勢の人が集まり、熱気に包まれていた

ステージでは様々な人が音楽に乗り、松明ジャグリングや炎の玉乗りをしていた

グレイグ「おお。これは凄いな」

ガク「へへ、音楽も陽気な感じで楽しくなりますね」

ルナ「あの火つて熱くないのかな」

しばらくすると、シルビアとブレイブが出てきた

マルス「あ！シルビアさんとブレイブが出番みたい！」

シルビア「皆々、今日はアタシのサーカスに集まってくれてどうもありがとうございます！今回は情熱溢れるコロシアムの町、グロツタにちなんで燃え上がるようなショーをお見せするわ！」

今からやるのはアタシの新しい技の一つなの。この子はアタシの大切なパートナー、ブレイブちゃん！ブレイブちゃん、皆にご挨拶よ」

ブレイブ「ガオオン！」

ブレイブは大きく吠えた

シルビア「ありがとう！この子はとっても優しいキラールパンサーなの。皆を襲う事は絶対に無いわ。皆、安心してね。」

それじゃあブレイブちゃん。まずは簡単なものからいきましよう」

そう言うと、シルビアはフリスビーを三つ取り出し三方向に投げた

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブは三つとも素早い動きですぐに取ってみせた

メグ「あら！全部取ったわ！流石キラールパンサー、とっても早いからね」

シルビア「ありがとう、ブレイブちゃん。それじゃあ次はこれよ！」

シルビアは大きな輪っかを取り出し、ブレイブはくぐっていく

それはどんどん激しくなっていく

シルビア「よし、ブレイブちゃん！最後はこの燃え上がる輪っかをアタシがジャグリングするから、そこに飛び込んで！」

シルビアは燃える輪っかを三つジャグリングし始めた

店長「おいおい、あんなのできるのかよ」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブは三つとも全て通り抜けた

ワアー、パチパチパチ

大きな拍手が起こった

シルビア「ありがとう、ブレイブちゃん！皆も拍手をありがとう！さあ、ブレイブちゃん。助っ人を呼んできてちょうだい」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブは奥へ走っていった

シルビア「今日は特別な助っ人が来てくれるの！ショーは初めてだから、失敗しても許してあげてね」

マルス「あ！父さん達の事だね」

店長「何するんだろうな。楽しみだぜ」

メグ「あ！バンが出てきたわ。持ってるのは大きな氷？」

綺麗な衣装を着たバンが氷を持ってやってきた

シルビア「ありがとう、バンちゃん。皆々、ここまで皆とアタシ達の熱気でとつても暑くなってるんじゃないかしら？ここは、少しクールに行きましょう！この氷を皆にプレゼントよ！」

ガク「氷を？でも、あれ一つしかないですよね」

シルビア「とつておきよ！アタシの皆への愛を受け取って！ほとばしるゝアモゝレ！」

アモーレショットを氷に打つと、氷は巨大なハートの形になった

バン「行きますよ、シルビアさん！」

シルビア「ラースちゃん！準備はいいわね？始まるわ！アタシはオツケーよ、バンちゃん！」

バン「さみだれ突き！」

バンは氷のハートを削って、シルビアに飛ばしていく

シルビア「キラージャグリング！」

シルビアは飛ばされる氷を受け取りながら、どンドン上に投げつけていく

すると

ラーズ「いくぞ、皆！シルビアからの愛の欠片だけ！ばくれつきやく！」

ラーズが空中ブランコをしながら、上がってきた氷の破片を次々と客席へ蹴り飛ばしていく

ルナ「えー！お父さん凄くいい！」

ガク「あんな動く棒に捕まって移動するなんて！」

店長「おいおい、すげえな、ラーズ」

マルス「あ！こつちにも来た。……あ、来る前に消えちゃった。でも、少しヒンヤリした」

氷の破片はお客に当たる前に溶けきり、全て消えていった

パチパチパチ！

拍手が沸いている

ラーズ「よっと！」

シルビア「皆く、少しヒンヤリできたかしら？絶対に破片は当たらなかったはずよ！さあ、皆とお別れするのは悲しいけど、次で最後よ。

ラースちゃん、バンちゃん、頼んだわ」

ラース「行くぜ、マヒヤド！」

バン「ぼくれつきやく！」

ステージに現れた氷は全てバンにより、砕かれていく

メグ「バン、凄いわ！あんな事できたのね」

ラース「メラガイアー！」

バン「天地の構え！ハア！」

バンは炎を槍に受け止め、地面へと受け流した

ラース「バギクロス！」

強い風がステージを襲い、風が止むとステージには誰もいなくなっていた

ザワザワ

観客も騒然としている

店長「あれ？三人とも突然いなくなった。どこにいったんだ？」

グレイグ「まさか、これは」

マルス「あ！あそこにシルビアさんがいるよ！」

シルビア「皆々、今日の最後は不思議な世界へご案内するわ」

シルビア「アタシが皆にご挨拶して回るわ」

シルビア「アタシは返事できないけど、皆の声はしっかり届いてるわ」

シルビア「挨拶が終わったら、夢の世界は終わり。また今度会いましょう」

シルビアが色んなところに現れた

キヤーツ！ええーっ！

観客達も自分達のすぐ近くにシルビアがたくさん現れて驚いている

ガク「え!?!あれ、どうなってるんですか!?!シルビアさんってあんなにたくさんいたんですか!?!」

店長「そんな訳ねえだろ！ガク！シルビアさんは世界に一人だけだ！だが、どうなってるんだ」

メグ「でも、何だか遠くから見ると少し変なような？」

シルビア達は観客の席に行き、皆の感想を聞いている

閉園後、テント内

店長「シルビアさん!!最後のやつってどうやったんだ!?!」

ガク「まさかぶんしんでも出来るんですか!?!」

シンジとガクはシルビアに興奮しながら聞きにきた

バン「やつぱり驚くよな!?!俺も聞いた時、何言ってるのかわからなかったんだ」

グレイグ「お疲れだな、バン、ラース、ブレイブ、ゴリアテ。あの心綺楼の作戦をここでも使ってきたか」

ラース「そういう事だ、グレイグ。流石にグレイグはもう騙せないからな。だが、完成度は高かっただろ？」

グレイグ「ああ。いつもの歪さはどこにも無かったな。あれは完成度が高いとあんな風になるのだな。あれは騙されるな」

メグ「えっと、私達にも教えてもらってもいいですか？」

シルビア「本当は教えちゃいけないんだけど、ラースちゃんがいなきやアタシには出来ないから大丈夫ね。あれはね」

シルビアはネタバラシをした

店長「あれが心綺楼だったのか。あんな風に見える事もあるんだな」

マルス「よくわかんないや」

ルナ「私も」

バン「俺もやっぱりよくわからないです！」

ラース「お前は何回も聞いてるんだから理解しろ」

メグ「気温の変化と目の錯覚による現象。凄いです！シルビアさんってそんな事まで使うんですね！」

シルビア「うふふ、ありがとうメグちゃん。ブレイブちゃんも今日

はありがとう」

ブレイブ「ガウ」

マルス「ブレイブ、とってもかっこよかったよ！」

マルスはブレイブを撫でている

ブレイブ「ゴロゴロ」

シルビア「ラーズちゃん、バンちゃん、突然だったのに手伝ってくれて本当にありがとう。一つしかなくて申し訳ないんだけど、これはアタシからのお礼よ。」

ソルティコにオープンする前の新しいリゾートホテルのチケット。これを見せれば、誰よりも早くそのホテルに泊まれるわ。誰か誘って行ってみて」

バン「ええ!?!これって、めちやくちや話題になってる最新のホテルですよね!?!」

ラーズ「本当だ!!これってジエーゴさんがバックにいたのか!」

シルビア「そうなのよ。しかも世界にたった一枚しかないの。折角だし、あなた達にプレゼントよ」

グレイグ「何だと!?そんなに貴重なものなのか!俺達も行きたいが、あまりわがままは言えんな」

バン「ありがとうございます、シルビアさん!師匠!全員で行きましようよ!」

ラース「いいな、それ!って、これよく見たら最大人数は指定されてるんだな。10人までか。お城全員は無理だな」

ガク「よかったですね、ラース將軍、バンさん!」

店長「くうっ!羨ましいと思ったらありやしないな、ラースめ!」

マルス「いいなあ、父さん達ばかり」

ルナ「私も行きたーい」

メグ「ラース様、もし行くようでしたらお土産話を期待してますね。またカフェにいらした時に聞かせてください」

シルビア「それじゃあ今日は本当にありがとうございます!ブレイブちゃんも

ありがとうね！またやりましょう！」

兵士達の休日

数日後、デルカダール城 訓練場

ラースは兵士達を集めてこの前もらったホテルのチケットを渡していた

ラース「ここ数週間仕事が多くて、俺達はどうやらオープンまでに行く機会はないそうなんだ。だからバン達で行ってこいよ」

全員「ええ!？」

まさか自分達が行けるようになるとは思っておらず、全員が驚きを隠せない

バン「し、師匠、いいんですか？」

ラース「折角シルビアから貰ったんだ。しかも、世界一つのとんでもなく貴重な機会だぞ。無駄にできるわけないだろ。行く日が決まったら教えてくれ。三日ほど休暇を与えるからな。はしゃいでこい」

全員「ありがとうございます!!」

その後

バン「どうする?見習い達をいれると人数が足りないんだよな」

見習い「リーダー達で行ってきてください！お話を聞かせてもらえればいいですよ！」

見習い「そうですよ！気にしないでください」

ガク「俺もそう思います。バンさん達はいつも頑張ってくれてるんで、休みも必要ですから」

ジール「お土産期待してますね！」

ギバ「いいやつだな、お前ら。よし！行こうぜ、皆！」

マーズ「土産は必ず買ってくるからな」

ベグル「俺、海なんて何年ぶりだ？」

それから二日後

ソルティコの町

ガザル「来たな、ソルティコへ！」

バン「早速海岸へ行こうぜ！遊びまくるんだ！」

ダバン「はしやぎすぎだぞ、バン。まあ今日ばかりは仕方ないな」
全員久しぶりの大きな休暇にワクワクしている

海岸

ロベルト「青い海！照らす太陽！そして、綺麗な美人達！最高かよ！」

ギバ「お前ら！ナンパするぞ！」

全員「オー！」

水着となった兵士達は、周りにいるたくさんの人達に走っていく

バンは呆れてそれを見ている

バン「おいおい、お前ら。ナンパとかみつともねえだろ。俺を見習えよな。そんな事してるから彼女の一人もできねえで、いつつも悲しい思いを」

全員「うるせえ!!」

バン「痛え!!殴るなよ!!馬鹿になるだろうが！」

その後

バン「全く、師匠に見せてやりたいぜ。師匠の自慢の兵士達はこんな事してるんだって」

ほとんど全員がナンパへ行っちゃってしまい、バンは取り残されていた

ガザル「くっ！意外と難しいな」

ベグル「だな。どいつも男がいやがる。くそっ！」

ガザルとベグルは早くも失敗したようでイライラしながら戻ってきた

バン「へっへーん！失敗してんじゃねえか！大体、二人は性格悪そうな顔してんだよ。そんなんじやいつまでたっても」

二人「ああん？」

バン「彼女でき……。え、あの、何で臨戦態勢取って」

二人「殺す！」

離れた場所では

ダバン「あーあ、またバンが心に思った事正直に言ったよ」

ギバ「しかも相手はあの二人じゃねえか。ありやあ助けられねえな。バン、お前はいい馬鹿だったよ」

しばらくして

マーズ「バン……。何やらかしたんだよ」

バンは首以外が砂に埋れていた

バン「ガザル様とベグル様のご機嫌を損ねた罰として、俺はこれから砂に埋もれさせられるみたいだ」

ロベルト「砂風呂ってやつじゃないか？気持ちいいらしいぞ」

ガザル「おいおい、ロベルト。まさかこんなやつにそんないい事してやるはずねえだろ」

ベグル「そうだけ。こいつには砂の重さに耐えてもらわねえとな。何せ兵士長なんだから。それに、俺達の遊び道具になってくれるみたいだ」

一時間後

バン「あ……の……息が……」

バンの体には信じられない量の砂が乗せられている

ガザル「ほらほら、頑張れよ、バン」

ベグル「お、まだいけるんじゃないか？バン。なら、最後に俺達が乗ってやろう」

ガザル「おお、いいなそれ。ほらよ」

二人は最後に同時に砂の上に飛び乗った

バン「ぐえっ……。許し……て……くだ……」ガク

バンは気を失った

ベグル「ちっ！気絶しやがったか。だらしねえやつだ」

マーズ「えっと……。ロベルト？砂風呂は何だった？」

ロベルト「悪い。あれは砂風呂じゃない。最早処刑だ」

ギバ「相変わらずエグい事するな。俺、あの二人とラーズ將軍だけは絶対に怒らせたくねえ」

ダバン「まあ基本はバンの自業自得だし、それを見て俺らも学べる。バンの死は無駄じゃねえよ」

その後

バン「……………ハッ！ゲホッ！ゲホッ！ゴホッ！酷い目にあった」

バンが目を覚ますと砂からは出されていた

ロベルト「よお、バン。目覚めたか。また馬鹿やったな。あの二人を馬鹿にできんのはお前くらいだよ」

バン「マジで失敗した。また思った事がすぐに出たんだよな」

マーズ「いい加減学べよ。レース將軍にもやらかしてボコボコにされてんだからよ」

バン「どうしても治らねえんだよ」

ダバン「これから覚悟した方がいいぞ、バン。今日はあの二人のおもちやだ。前みたいに助けてやれないからな。乗り越えるんだ」

バン「嫌だあー！！あいつら、俺が死なねえギリギリを責めてくんだよ！師匠よりタチ悪い！！」

ギバ「ハ、ハハ。まあ自業自得だ。頑張れよ」

ダバン「よし。バンは放っておいて、四人でビーチバレーしようぜ」

三人「おう！」

バンはまた置いてかれる

バン「お、俺もそっちに」

バンもなんとか体を起き上がらせて、ロベルト達に向かおうとする

ベグル「お！バン、起きたな！」

バン「ヒツ!!」

ガザル「ほらバン、来いよ。俺達と目一杯遊ぶぞ」

バン「誰か助けてー!! 師匠ー!!」

バンは二人に引きずられていく

夕方

ベグル「いやー、海って楽しいな！」

ガザル「そうだな！俺も何年ぶりに来たかわからねえけどすげえ楽しかったぜ！」

二人はニコニコしながらホテルにやってきた

ギバ「よ、よお、ベグル、ガザル。バンはどうした？」

ベグル「あいつ情けねえんだぜ。歩けなくなりやがったんだ」

ガザル「全くだな。ちよつと弄つてやっただけなのにすぐに根を上げやがった」

ロベルト「へ、へえ。バンはどこにいるんだ？」

ガザル「砂浜にいると思うぜ」

マーズ「急いで助けにいくぞ！」

海岸

ダバン「バン！無事か!!」

そこには傷だらけになったバンがいた

バン「ガザル様、ベグル様、お許しください…。」

バンは土下座のまま同じ言葉を言い続けている

ギバ「土下座して動かねえ。何したんだよ、あいつら」

ロベルト「おい、バン！目を覚ませ！」

ロベルトはバンを揺らす

バン「ハッ！俺、ずっと悪夢を見て……。ぐっ！身体中痛え。腕も足も上がらねえ」

気づいたバンは体の痛みで砂浜に倒れた

マーズ「よく耐えた。お前は勇者だよ。ほら、肩に乗れ。ホテルに行くぞ」

バン「ううっ……。お前ら、優しいなあ……。ベグルやガザルなんて、悪魔みてえだったんだ」

バンは涙を流している

ダバン「元は自分が悪いんだからな。あの鬼畜達を馬鹿にしたんだから」

兵士達の休日2

その夜、大浴場

バン「すっげー！広いな!!しかも、海が一望できるぜ」

マーズ「ほう。これはすごいな。夜の海も星空が見えていいもんだな」

ベグル「風呂は気持ちいいぜ。周りがお前らだっというのは残念だが、それでも知らないやつよりマシかな」

ロベルト「しかし、改めて近くでバンのその火傷の跡を見ると痛々しいな」

ダバン「もう何ともねえんだよな」

バン「おう！この跡は俺がブレイブを守った証だ！どうだ？羨ましいだろ？」

ガザル「別にほぼ死にかける思いまでしたくねえよ」

ギバ「バンはポジティブだからな。いいんじゃないか？勲章みたいでカッコいいぜ」

バン「やっぱりギバはわかってんなー！」

バンはギバに寄っていく

ギバ「あ、こっちくん。むき苦しくなる」

バン「いいじゃねえか、別によ！減るもんじゃねえだろ。ん？ギバ、お前知らない間に筋肉増えたか？」

ギバ「お、気づいたのか。最近筋トレの量を増やしたんだ。もつと槍を極めてやろうと思ってな。バンみたいには思わないが、雷光一閃突きの命中率もあげたいしよ」

バン「おお！いいじゃねえか！俺も帰ったらギバに混じるかな！」

ロベルト「俺達、強くなったよな。前とは大違いだ」

ベグル「そうだな。グレイグ將軍に教わった基礎、ラーズ將軍から教わった実践の戦い。懐かしいな」

マーズ「俺、ここに入った頃なんてこんな風になるとは思ってたな
かったぜ」

ガザル「それは俺もだ。普通の兵士で終わるもんだと思ってたんだがな。まさか誰かに教える立場になるとは」

ダバン「俺はここに入って人生が変わったな。グレイグ將軍やラーズ將軍からたくさんの事も学べた」

バン「俺も！俺も！グレイグ將軍から教わった事もたくさんあるけど、師匠からはもう一生分教えられたんじゃないかってくらいあるぜ！」

ギバ「ハハハ！お前はそうだろうな。ラーズ將軍の弟子なんだからな。俺もあのお二人には感謝してる。なあ、俺達で何か恩返ししてみないか？」

バン「いいな、ギバ！皆でやろうぜ、恩返し！」

マーズ「いいじゃないか。だが長くなりそうだな。あがつて部屋で相談しよう」

しばらくして、 部屋内

ガザル「俺も賛成だが、何する？二人の共通点って何かあるか？」

ロベルト「うーん……。あまり思いつかないな」

ダバン「別に二人一緒じゃなくても、別々に恩返ししてもいいんじゃないか？」

ギバ「そうだな。グレイグ將軍とラーズ將軍にはそれぞれ別にしようか」

ベグル「ラーズ將軍の事と言えばやっぱりバン、お前が知ってるだろう」

バン「おう！師匠の事なら任せてくれ！意外と師匠はな、見た目に似合わず花が好きみたいだぜ」

マーズ「お前、それラーズ將軍に言うなよ？また殴られるぞ。だが、それは意外だな。どうやって知ったんだ？」

バン「大広間から玉座の間に行く階段に、白い小さな花が飾られるだろ？マルティナ様が言ってたんだが、あれって師匠が世話してるらしいんだ」

ガザル「あー、あの雲みたいな葉っぱがあるやつか。いつも綺麗だとは思ってたが、ラーズ將軍そんな事してたのか」

ギバ「確かに想像したら少し面白いな。もしその場で見て笑ったらどうなるかわからねえが」

ロベルト「俺達で花束を贈るか？あまり似合わないが、その話通りなら喜んでくれそうだけどな」

ダバン「他には無いか？バン」

バン「後は……楽しい事が好きだな。師匠が楽しいって思えるなら何でもやってるみたいだぜ。料理とかイタズラとか、町に行つて休んでたりとか。あ！俺、師匠の秘密の場所っていう所行つた事ねえな」

ギバ「秘密の場所？そんなのあるのか？」

バン「ああ。そこで師匠は昼寝してるんだってよ。カミュさんが前に話してくれたんだ。マルス曰くブレイブとコロで偶に遊んでるらしい」

マーズ「レース將軍つて動物も似合うよな。ブレイブで慣れたせいかな？でもなんとなく犬が似合うんだよな、レース將軍つて」

ベグル「アツハツハツハ！そりやあそうだろ。だつてレース將軍は前からバンつていう犬を飼つてるじゃないか」

ガザル「そりゃあそうだ！師匠！って言って喜んでる姿なんて、まさに犬そのものだぜ」

バン「な、何だと!!俺は犬じゃねえ！人だ！」

ダバン「バン、知らねえだろうから言つといてやるけどよ。ラーズ將軍もバンの事を大きな犬がいるみてえだつて前に言つてたんだぜ」

バン「ええ!?師匠まで!?そ、そんなー」

バンはまさかのラーズ公認にショックを受けている

ロベルト「ま、まあ話を戻そう。動物はもう難しいから無理だな。そう言えば、ラーズ將軍の故郷の村つてかなり自然に囲まれてたよな。あそこで育つたなら、自然が好きなんじゃないか？」

ギバ「確かにそうだな。だが、自然をプレゼントはできねえだろ」

バン「そうだ！山を買いえばいいんじゃないか!?!」

マーズ「そんな金がどこから出てくるんだよ。一生かけて働いた金を全部使わないと無理だろ」

バン「師匠ってお金持ちだから払ってもらおう！」

ダバン「それは最悪だろ!!そんな事したら俺達殺されるぞ！」

ガザル「流石に何も考えなさすぎだ、馬鹿。もつと考えろよ」

ロベルト「これも無理だな。他は食べる事じゃないか？」

バン「は!!思いついた!皆、出身ってどこだっけ!？」

ロベルト「俺はデルカダールだな」

ギバ「俺はクレイモランだ」

ガザル「俺もデルカダールだな」

ダバン「俺はグロツタだ」

ベグル「俺はダーハルーネ」

マーズ「俺はここ、ソルティコだ」

バン「そうだよな！なら、各地の名産品を集めて皆で何か料理を作ろうぜ！国ごとの物でもいいし、有名なやつでもいいからよ。それを師匠にプレゼントして、食べてもらおうぜ！」

ロベルト「バン……天才か？」

ガザル「普段の馬鹿はどこにいったんだよ」

ダバン「いいな、バン！皆、そうしようぜ！」

全員「おう！」

ギバ「ラーズ將軍は決まったな。次はグレイグ將軍だ」

ベグル「へへ、グレイグ將軍ならいい情報持つてるんだぜ。ラーズ將軍からの超秘密事項だ。お前ら、他のやつらに絶対に喋るなよ。喋ったらラーズ將軍からの処刑が待ってるからな」

マーズ「それは喋るやっぴいな。死に急ぎたくはないからな」

ベグル「グレイグ將軍はな、ムッフ本が大好きみたいなんだぜ」

全員「……………アハハハ!!」

全員が大声を上げて笑っている

ベグル「くくつ……………どうだ？傑作だろ？」

ガザル「に、似合わずそういうのが好きだったんだな」

ロベルト「これは笑うな。だが、いい情報とは？」

ベグル「お前ら、ムッフ本は持つてるな？それをグレイグ將軍にプレゼントだ！」

ダバン「な!?!何言ってんだよ!?!そんな事したら俺達、ラーズ將軍の前にグレイグ將軍に殺されるぞ！もしかしたらグレイグ將軍のザオリクで復活させられて、ラーズ將軍からもう一度殺されるかもしれないぞ！」

ギバ「そ、そんなの考えただけで恐ろしい。満足に死ぬ事も許されないのか」

バン「それは危険すぎる!!やめよう！」

ベグル「じゃあどうするんだよ」

ガザル「俺もグレイグ將軍についてなら少し知ってるぜ。グレイグ將軍は読書が趣味なんだ。休日はよく読んでいるみたいだぜ」

ベグル「ムッフ本をか？」

全員「ぶふっ！」

また全員が笑いそうになる

ガザル「そ、それはわからん。だが、部屋の中の本棚にはいろんな本があったのは覚えてるな」

ベグル「まさかその本全部、実はムッフ本なんじゃ」

ガザル「ベグル！何でも全部ムッフ本に持っていくな！イメージが崩れるだろうが！」

ロベルト「何だか本はやめた方がよさそうだな。他には無いか？」

バン「グレイグ將軍といえバリタリフォンだろ！すげえ懐いてる

じゃん。よく外で散歩してるみたいだぜ」

ダバン「そうだがグレイグ將軍は馬の手入れの道具は全て取り揃えてあるからな。俺達がしてやれる事ってあるか？」

ギバ「あ！リタリフォンって、デルカコスタ地方の草が大好きだったよな。昔それでリタリフォンが動かなくて困った事があったな」

マーズ「そうだな。それならその草を大量に渡せば喜んでくれそうだ。しかし、草だけなんて馬鹿みたいだな。他にも無いか？」

ベグル「うーん…… お！そう言えば、数日前に新しい砥石が欲しいって言ってたな。研ぎが悪いらしいぞ。それに、ここ数週間忙しいうって事はしばらく買いに行けないはずだ」

ガザル「いいじゃねえか！じゃあ立派な砥石買っていこうぜ！」

ギバ「どうせなら武器関連用品も買っていこうぜ！」

ロベルト「これで二人へのプレゼントは決まったな。いいものが浮かんだんじゃないか？」

ダバン「だな！明日はここをまた楽しんで、最後の一日は準備をし

よう
「

バン「よし、お前ら！師匠達に感謝の思いを届けるぞ！」

全員「おお！」

恋の予感？

次の日、海岸

バン「今日は目一杯遊ぶぞー！」

バンは張り切っている

ロベルト「バンは昨日散々だったもんな。なら、バン。泳ぎの競争するか？」

バン「お、やるやる！他の皆もやろうぜ！」

ダバン「俺とベグルはパスだ。少しナンパしてくる」

ガザル「どうせ男がいるに決まってるぞ。さっさと諦めた方がいいぜ」

マーズ「まあ、好きにしろよ」

ギバ「俺もバン達に混じるか！」

海

ギバ「うりゃあああ！」

ギバはスイスイと泳いでいく

ロベルト「マジか、ギバのやつあんなに泳ぐの早かったのかよ！」

バン「負けねえぞ、ギバ！うおおお！」

バンも負けじとスピードを上げる

ガザル「こりやあギバとバンの争いだな」

「！」
マーズ「くっ！俺だつてこの町の出身として簡単に負けられるかよ！」

マーズも本気を出し始めた

その後

ギバ「つしやあああつ!!」

最後はマーズとギバの接戦となったが、一位はギバだった

マーズ「ゼエ、ゼエ。序盤に離されすぎたか」

マーズは惜しくも二位となった

ガザル「マーズも早かったな！やっぱり泳ぎ慣れてんのか？」

バン「ゲホッ！ゲホッ！水飲んじまった」

バンは三位となってしまった

ロベルト「お前ら熱くなりすぎだろ」

ギバ「いきなり全力出しすぎたな。休憩しながら、どうせだし体焼いてみるかな」

バン「あ、そうだ、ロベルト。昨日の砂風呂ってやつ教えてくれよ」

ロベルト「お、いいぜ。結構気持ちいいんだ」

マーズ「俺も知ってるぜ。やってみようか」

ガザル「ギバ、俺も体焼いてみるぜ」

その頃、ダバン達

ダバン「しかし、本当に彼氏連ればかりだな。俺達の場合違い感半端ないだろ」

ダバン達の周りにはカップルが多い

ベグル「いや、諦めたら駄目だ。ここで女性の一人にでも声かけないと、馬鹿にこれからもまた何か言われ続けるぞ。そんなの俺はごめんだぜ」

ダバン「……ん？おい、ベグル。あの海の家の近くにいる、女性二人組と男達何か様子がおかしくないか？」

ダバンは海の家の方にいるある人達を気にし始めた

ベグル「確かにいい雰囲気ではないな……あ、裏手に連れて行きやがった。おい、追いかけるぞ」

裏手

女性1「キャアツ！」ドサ

女性2「ちよつと！さつきからしつこいのよ！離して!!」

男「おいおい、まだ強気でいられんのか？大人しくしてろよ。そうすればすぐに終わるからな」

そう言い、男達カバンから布や薬を取り出した

女性2「な、何それ。私達をどうするつもり！」

男「いやー、君達が結構可愛いからね。商品にしてあげようかと思っただけ」

女性1「や……やだ……。誰か！誰か助けてー！」

男「人なんか来ねえよ。皆、海に夢中さ」

ダバン「と、思ってたのか？」

全員「!？」

全員がダバン達に振り向く

ベグル「お前ら、人身売買のやつらだな。こんな所でも悪事働こうなんざ見上げた根性だ。だが、そんな事はさせねえよ」

男「くっ！お前ら二人だけなんざ何もできねえだろ！お前ら、やっちまうぞ！」

男達「ああ！」

そう言い、男達はそれぞれ武器などを取り出した

ダバン「ハァー。おいどうするよ、ベグル」

ダバンは困ったような顔をしている

ベグル「お？どうした、ダバン。怖気付いたのか？なら、俺一人で片付けるぞ」

ベグルは指を鳴らしている

ダバン「チツ！そういう事じゃねえよ。だが、話はいつらを片付けてからだな」

男達「舐めやがって!!」

数分後

男達「ごふう…」

全員気絶、もしくはボコボコにされて動けなくなっていた

ベグル「何だよ、口ほどにも無えな。さて、怪我はないですか？」

女性「あ、ありがとう。助かったわ」

黒髪の女性の人と茶髪の女性はベグル達にお礼を言った

ミラ「本当にありがとう。私の名前はミラ。こっちは友達のジエーン。ここには遊びに来ただけど、こいつらにずっとつけまわされて困ってたの」

ジエーン「無視してたら集団で取り囲んできてここに連れてこられたんです。お二人はとっても強いんですね。体も立派ですし、傭兵さんとかですか？」

ダバン「俺の名前はダバン。こっちは同じ仲間のベグルだ。俺達は他の仲間達と一緒にここに遊びにきたんだ」

ベグル「俺達はデルカダール城で兵士をやってんだ。こんなやつらよりは強いと思うぜ」

ベグルは首で倒れている男達を指す

ミラ「ええ!?兵士さんなの!?!しかも、デルカダールってめちゃくちゃ強い所じゃない!」

ダバン「ん?ミラさんの手首に跡がついてるね。こいつらに付けられたのか?治してやるよ。ホイミ」

ミラ「あ…:。ありがとう。ダバンさんだったわよね?」

ダバン「ああ。礼には及ばないぜ」

ベグル「他に傷は無さそうだな。無事で本当によかったぜ」

ジェーン「あ…:。あの、よかったら私達と一緒に遊びませんか?私達ここに来てから、こいつらに追いかけて回されてて全然遊べてないんです」

ミラ「ちよつと、ジエーン！兵士さん達に迷惑よ！しかも他の仲間の方もいるみたいじゃない。やめましょう」

ベグル「いや、大歓迎だぜ。俺も女性の方がいてくれた方が楽しいからな」

ダバン「ああ。仲間達は気にしなくていいぜ。あいつらとはいっだって会えるんだ」

二人「ありがとうございます！」

海岸

ミラ「私達、ここに来たの初めてなの。ベグルさん達も初めてかしら？」

ベグル「いや、俺達は初めてではないな。ただ、職業柄遊べたわけじゃなくてな。今こんな自由なのは俺達のトップが優しい方だからだ」

ジエーン「私、ビーチフラッグというのをやってみたかったです。知ってますか？」

ダバン「おお、いいじゃないか。海に来たらやってみたくなるよな。俺達もやろうぜ」

その後

ジェーン「楽しいーい！邪魔されないだけで、海ってこんなに楽しいんですね！」

ジェーンとミラはビーチフラッグを楽しんだ後、思いっきり砂浜に横になっていた

ミラ「そうね！海も冷たくて気持ちいいし綺麗だわ！そうだ。ベグルさん、ダバンさん。先程のお礼をさせて。何か食べたい物とか、飲みたい物ありませんか？私達が払うわよ」

ジェーン「そうですよ！私達、こんな事でしかお礼できませんけど」

ダバン「俺としては気にしなくていいんだがな」

ベグル「俺も同意見だな。困ってる人を助けるのが兵士だ。それに做ったまで。それと、お礼をしたと言って言うなら一緒に飯食おうぜ！」

ダバン「お、いい事言うなベグル。折角ここに来たんだから、もつと楽しんでいこうぜ」

ジェーン「ありがとうございます。優しいんですね」

ミラ「素敵だわ。ふふ、散々だなんて思ってたけどこの出会いは感謝しないかね」

海の家

ミラ「たこ焼き？おこのみ焼き？ジエーン、知ってる？」

ミラは看板に書かれてある商品に頭を傾げている

ジエーン「私もわからないよ。ダバンさん、ベグルさん。ここの料理を知らないんですけど、どれが美味しいんですか？」

ダバン「俺はおこのみ焼きかな。中に海鮮が入ってるんだ。味も結構いいんだぜ」

ベグル「俺は焼きそばだな。麺の噛み応えとソースが美味しいんだぜ」

ジエーン「じゃあそれに見えますね。ありがとうございます」

ミラ「私、水持ってくるわ。ベグルさん達は席を取っていてももらえると嬉しいわ」

ベグル「いや、女性一人にするとまた危ないかもしれないだろ？俺もついていくさ。ボディガードにはなるぜ」

ダバン「ミラさんは任せた。ジエーンさんは俺がついていよう」

ミラ「あら、それじゃあお願いするわ。ふふ、兵士さんに守ってもらうなんてついてるわね」

ジエーン「ダバンさん、ありがとうございます。いい匂いがしてとっても美味しそうです」

その頃、バン達の海岸では

ギバ「ん……よく寝たな。おお、皆も寝てるじゃねえか。ん？ダバン達はまだナンパしてんのか？」

ギバは周りにダバンとベグルがまだいない事に気付き探しにいくとする

バン「ん？おお、ギバ。どこか行くのか？」

ギバ「バン、起こしたか？悪いな。砂風呂気持ち良さそうだな。俺は今からダバン達がどこにいるのか探してこようと思ってな。バンも来るか？」

バン「確かに。あいつらまだナンパしてんのか？遅いな。俺も行く」

バンも砂から出てきた

ギバ「しかし、腹空いたな。何か海の家で食べたい物見つけるか」

バン「俺、師匠からたこ焼きが美味いって聞いたんだ！俺、それにする。…… って、えええ!!?」

バンは屋台が出ている場所を見て大声を上げる

ギバ「何だよ、うるせえな、バン。何指差して……。ええええ!!」

二人「ダバンとベグルが美女とご飯食べてる!!」

バン「う、嘘だろ。あいつら、マジでナンパに成功したのかよ」

ギバ「そんなわけねえだろ！特にベグルなんて扱いが壊滅的なんだからな！何したんだ？しかも仲良さそうじゃないか」

バン「俺、すげえ気になる。ギバ、追いかけて様子見てみようぜ」

ギバ「そうだな。だが、ベグルにバレたら俺達に明日は無え。一生ベグルの奴隷にされるか、訓練場で毎日サンドバッグの刑だ」

バン「そんなのどっちも先にこつちが死ぬに決まってるだろ。絶対

気配を殺すぞ。欠片も出すなよ！」

ギバ「当たり前だ。他のやつらにも黙ってろよな」

恋の予感？・2

その頃

ジェーン「本当美味しい！このおこのみ焼き、とつても美味しいです！」

ダバン「そうだろ？ジェーンさん。結構豪快に食べるんだな」

ジェーン「あ……、私つたらはしゃいじやつてごめんなさい。美味しいものに目がなくて」

ジェーンは少し照れ始めた

ダバン「ハハハ！気にしてないさ。むしろ、気に入ってくれたみたいで俺も嬉しいぜ」

ベグル「焼きそばはどうだ？ミラさん」

ミラ「美味しい！この麺とソースが最高だわ！この量は多いかもと思ってたけど、全部食べれそう！」

ベグル「ああ、そんな焦らなくても大丈夫だぞ。ほら、水もあるんだから落ち着いて食べようぜ」

近くの場所ではその会話を気配を消したギバとバンが聞いていた

ギバ「(な、何だよこれ。本当にナンパしたのか？それにしても仲良すぎだろ)」

バン「(ヤベエ……。笑いが……)」

バンは笑いを必死に堪えている

ギバ「(?!馬鹿野郎、バン！一先ず離れるぞ！)」

少し離れて海岸に戻ってきた

バン「アツハツハツハ！ヒイ、ヒイ！」

バンは我慢していた分、腹を押さえて大笑いしている

ギバ「ハハハハハ！見たか、バン。ベグルのやつ、別人みてえだったぞ。誰だよあれ！ダバンも緊張してるみたいだったぜ」

バン「マジで傑作だ！昨日のベグルを見せてやりたいたいぜ！」

二人「アハハハハハ！」

二人は大声で笑い続けている

海の家

ダバン「ん？聞き覚えのある笑い声だな」

ベグル「…………… あそこにいるのはバンとギバか？何やってんだ？」

ジェーン「どうしたの？二人とも」

ミラ「あそこで大声で笑ってる人、二人の知り合い？もしかしてお仲間の兵士さん？」

ダバン「ああ、そうなんだ。まあ気にしないでくれ」

ベグル「まさか、あいつらに見られたか？」

ミラ「ねえ、ジェーン。海に潜ってみましようよ。どんな景色なのか気になるわ！」

ジェーン「私も気になるけど危なくない？溺れる人もいるって聞いた事あるよ」

ミラ「確かに…………… 私達、泳ぐのは慣れてないからね」

ダバン「それなら、この浜辺にはそんな人用にうきわとか大きな板

があるんだ。それを使えば安全に泳げるぞ」

ベグル「いざって時は俺達に任せてくれよ。近くにいるから助けてみせるさ」

ミラ「え!?!いいの!?!ベグルさん、ダバンさん!」

ジェーン「何だか助けてもらってばかりですね。でも、お世話になってもいいですか?」

二人「ああ!」

ミラ「やったわ!それじゃあ早速そのうきわとかを借りに行きましよう!」

しばらくして、海

ジェーンは大きな板に乗って海に浮いていた

ミラもうきわをして海に浮いている

ジェーン「凄い。この板に乗ってれば沈まないし、海の様子も見れるわ」

ミラ「うきわをつけてれば沈まないのね。楽しい!」

ベグル「あ、ジエーンさん。板は潮の流れで動くからあまり岸から離れすぎないようにだけ気をつけてくれよ」

ジエーン「あ、そうですね！確かに岸から離れるともしもの時、助けられませんよね」

ミラ「ベグルさんやダバンさんは何も無くても平気なんですね」

ダバン「慣れればミラさん達もこうやって海に浮く事は出来るはずだぜ。泳ぐのは楽しいぞ」

ジエーン「それならまずは私達は水に慣れないとですね。この板で色々やってみます」

数時間後

ベグルはジエーンの手を掴んで海をゆつくりと泳いでいた

ベグル「どうだ？ジエーンさん。海に浮かんでみた感想は」

ジエーン「わ……わあ。プカプカしてる。不思議な感じですよ。これが海に浮くという事なんですね」

ベグル「じゃあ俺がこのまま手を引くからゆっくりついてきてくれ」

ジエーン「はい」

ザバア！

ダバン「ほら！貝とかヒトデだ。触ってみろよ、ミラさん」

ダバンはミラに潜って海の生き物を見せていた

ミラ「こ、これがヒトデ！本でしか見た事ない、どれどれ……キヤツ！少しヌメヌメしてるけど、ザラザラしてて石みたい。本当に動くの？」

ダバン「そうだけ。ゆっくりとだけだな。この貝も生きてるから動くぞ」

ミラ「そうなのね。海の生き物ってすっごく深い所にいると思ってたけど、意外と近くにもいるのね」

ダバン「ミラさんも海の中に潜れるようになれば他にもたくさん見れるぞ。海の中って凄い綺麗なんだ」

ベグル「おーい、ダバン！ミラさん！そろそろ上がろうぜ。ずっと海にいるのも危ないからな！」

ダバン「そうだな！ミラさん、俺の手に捕まって。引っ張っていきからよ」

ミラ「ありがとう、ダバンさん」

夕方

！
ジエーン「長い間、一緒に遊んでくださりありがとうございます！」

ミラ「本当ね。とっても楽しかったわ。素敵な思い出よ、どうもありがとう」

ベグル「そう言ってくれると俺達も嬉しいぜ。俺達もすげえ楽しかった」

ダバン「そうだな。……ベグル、帰り道も送った方がよさそうだ」

ベグル「ハア。何で逃げないんだろうな」

二人は少し後ろを気にしていた

ミラ「え？…どういう事？」

ベグル「あまり不安にさせたくないから言わなかったんだが、ジエーンさん達、狙われてるな。ウロチヨロしてる奴らがいる。さっきの奴らの仲間かもな。」

中々諦めねえから睨んでいたが、あっちも俺達がいるせいかな近づけないみたいだ。ホテルはどこだ？そこに入れば安全だからな。送っていくぜ」

ジエーン「え!?嘘、全然わからなかった。やだ……」

ダバン「安心して。俺達といれば大丈夫だから」

ミラ「本当にありがとう。ホテルはあそこに見えてるリゾートホテルよ。お願いしてもいい?」

ベグル「当たり前だろ。危険な目にあっただから、これ以上怖い思いさせないからな」

ジエーン「ありがとうございます」

ホテル前

ダバン「どうやら諦めたみたいだ。さあ、ゆっくり休んでくれ」

ベグル「楽しかった！またどこかで会えるといいな」

ジエーン「はい！このご恩、絶対忘れません！何から何まで本当にありがとうございました」

ミラ「私も最高の思い出だわ。今度デルカダールに行くわ。見かけたら声かけてもいい？」

ダバン「ああ。いつでも来てくれ。待っているぞ」

ベグル「何ならお城に来てもいいんだぞ。そうすれば確実に会えるさ」

ジエーン「ふふ、それじゃあそうしますね」

ミラ「じゃあねー！」

二人「おう！」

ベグルとダバンは去っていった

ジエーン「行っちゃいましたね。ミラ、私あのベグルさんって人すごくカッコイイ人だと思っちゃった」

ミラ「私も。ダバンさん素敵な人だった。また会いに行きましよう」

その後

ダバン「さて、ベグル。バン達への処刑はどうする?」

ベグル「へっへっへ。バン、ギバ、お前らコソコソ見ていやがって。どうやら相当俺に遊んでほしいみたいだな」

ダバン「俺も手を貸すぜ、ベグル。あの二人には少し地獄を見せてやろう」

ベグル「少し? 甘いな、ダバン。生きてる事を後悔させてやろう」

ベグルからは殺気が溢れている

ダバン「(あ、ベグルのやつかなりキレてるな。まあ、俺もだが)」

その頃、バン達

バン「!!! ヤベエ、ギバ! 逃げるぞ!」

バンは突然何かを感じ取ったようにギバの手を取って逃げ始めた

ギバ「ええ!!? な、何だよ、急に!」

バン「俺の感覚が、このままだとヤベエって言ってる。この感覚は、師匠をガチギレさせた時と似た感覚だ！」

ギバ「……ま、まさか、ベグル達にバレたのか？」

バン「何が何でも逃げるぞ、ギバ！キメラの翼でも何でも使うぞ！」

二人は凄いスピードで見えなくなった

ロベルト「あの二人、急に走り出してどこに行くんだ？」

ガザル「さあ？まあ大した所まで行かないだろ。放つとこうぜ」

マーズ「俺達、今日はかなりゆっくりしてたな。まあ、こんな日も大事だな」

ダバン「お、こんな所にいたのか、お前ら」

ベグル「なあ、バンとギバはどこに行った？」

二人からは黒い雰囲気が出ている

ロベルト「な、何だよお前ら。怖いぞ。何があったか知らないが殺気をしまえ」

マーズ「ダバン、お前までそんなに殺気を出すなんて珍しいじゃないか」

ガザル「あの二人なら少し前に急にどこかに行ったぜ。ヤベエ、逃げないと言って言ってな」

ベグル「チツ！バンのやつ、感じ取りやがったな。野生の勘ってやつか？まあいい。お楽しみが長引いただけだ」

ダバン「城には必ず帰らないといけない。そこがあいつらの墓標だ。今は精々逃げ回るといい。人生最後の冒険になるんだからな」

感謝の気持ち

次の日、ソルティコ ホテル

ロベルト「バンとギバは帰ってこなかったな。全く、どこにいるんだか。まあ今日は各自の出身地に帰って、食べ物調達をしよう」

ダバン「俺はグロツタでグレイグ將軍用の武器手入れ用品も揃えておくぜ」

マーズ「助かる。それじゃあ明日、お城の前で集合だ。ロベルトとガザルはデルカダールだよな？バンに伝えておいてくれ」

ベグル「ああ、俺とダバンがお前達に会いたがっついているとも伝えてくれ」

ベグルは少し殺気が出ている

ガザル「わ、わかった」

次の日、デルカダール城前

バン「ガタガタガタガタ」

ギバ「……………」

二人はこの世の終わりのような顔をしていた

マーズ「この二人は何で今にも死にそうな顔してるんだよ」

ロベルト「まあ、ギバはクレイモランのジャンボウニを持ってきてくれたみたいだ。何も喋ってはくれないが」

ダバン「お！バン、ギバ！会いたかったぜ！」

二人「ヒ、ヒイイ」ガシ

ダバンがギバとバンを後ろから捕まえた

ダバン「まだ何もしねえから安心しろよな」

ダバンから濃い殺気が二人にぶつけられる

ギバ「あ……」ドサ

ギバは気絶した

バン「ギ、ギバ!!」

ガザル「今、ダバンのやつからすげえ恐ろしい殺気を感じた。あんな事できたのかよ。殺気だけで気絶させるとか相手が怯えてるとはいえ、凄すぎるだろ」

ベグル「あー！ダバン！こいつらで先に遊んでたのかよ！ずるいぞ！ん？何だよ、ギバのやつもう気絶してるじゃねえか。ダバン、まだ遊びはやらないって行っただろ。守れよな」

ダバン「いや、ほんの少しイタズラしただけでこれだ。まあ、二人とも怖がつてるみたいだぜ。ベグルの好きに出来るぜ」

バン「ガタガタガタ」

バンは顔が青ざめて、体の震えも激しくなっている

ベグル「へへ、そりやあ嬉しいな。まあとっておきが残ってるみたいだし、楽しみにしておくか！」

ロベルト「まあ、これで全部揃ったな。コックに言って料理を作るのを手伝ってもらおう事になってる。さあ、行こうぜ」

キッチン

コック「兵士達でライス様にご飯を作るなんて素晴らしいですね。絶対お喜びになりますよ。私も力になりますね」

ベグル「一応俺も料理はできます。こいつらには教えてやってください」

その後

コック「これでオードブルの出来上がりです。いい食材が多くて私もとても嬉しかったですよ」

マーズ「ありがとな、コック長。世話になった」

ダバン「それじゃあレース將軍とグレイグ將軍を呼ぼうぜ」

食事場

レース「何だよ、お前ら。今日はまだ休みだろ？お城に来なくてもよかつたんだぜ」

グレイグ「俺達に話など珍しいな。どうしたのだ？」

バン「師匠！グレイグ將軍！俺達はお二人に出会えて、ここまで成長できました！その感謝を込めて、プレゼントを用意させていただきました！」

レース「え……」

グレイグ「プレゼント？俺達にか？」

ロベルト「レース將軍には、俺達の出身の国で採れた食材で作ったオードブルです！俺達全員で作ったのでぜひ食べてください！」

ラーズ「すげえ!!! いいのか!」

ダバン「はい! ぜひ食べてください!」

ベグル「グレイグ將軍には、この武器の手入れグッズとリタリフォン用のデルカコスタ地方の草です」

グレイグ「な!?! この前砒石の話をしたのを覚えていてくれたのか! しかもリタリフォンの事まで考えてくれているとは……。ありがとう、俺もお前達に出会えて本当によかった」

ギバ「グレイグ將軍、早速試してみてくださいいね」

マーズ「ラーズ將軍、どうですか?」

ラーズ「美味いぞ! お前ら! 最高だぞ、皆! ありがとう!!」

ラーズは喜んでオードブルをバクバクと食べている

ガザル「こちらこそ、お二人には大変お世話になっています。少しでも感謝の気持ちを伝えたくて、全員で考えたんです」

グレイグ「ありがとう。お前達の気持ち、しっかり届いたぞ。これからも応援している。どんどん励んでくれ。それでは早速使わせてもらう。草もリタリフォンに存分にあげてこよう」

ロベルト「それでは俺達はこれで！また明日からお願いします！」

大広間

マーズ「めちやくちや喜んでもらえたな。何だか想像以上だ」

ガザル「グレイグ將軍なんて目に涙溜まってたぜ。へへ、涙もろいなく」

バン「そ、そうだな！それじゃあ俺はここで」ガシ

ギバ「俺も急用が」ガシ

二人は肩を力強く掴まれる

ダバン「どこに行くんだ？バン、ギバ？」

ベグル「お前達の向かう先はこつちだよなあ」

二人「………はい」

二人は抵抗を諦めて、引きずられていった

ロベルト「あの感じだとあの二人は生きて帰ってこないな。何があつたのか知らないが、合掌しておくぞ」

訓練場

ギバとバンは二人に正座させられていた

ベグル「きて、ギバ、バン。一昨日は俺達の事をずっとコソコソ見てたよな？」

二人「はい……」

ダバン「しかも途中笑っていやがったな？人が折角頑張っている雰囲気にしようとしていたのを笑っていたな？」

ベグル「それはつまり、俺達を馬鹿にしていたという事だな？」

二人「……」

バン「だ、だが！最初発案したのは、俺だ！ギバは俺が巻き込んだんだ！ギバは殺さないでくれ！殺すなら、俺だけにしろ！あ、いや、してください！覚悟はできてる！」

ギバ「バ、バン……。お前、何てやつだ」

ダバン「ほう？バン、お前が真犯人か」

ベグル「それならお前の願いは叶えてやろう。ギバ、お前は軽い罰で済ませてやる。バンに感謝しろよ。こいつには人生を後悔させるレベルの処刑が待ってるからよ」

バン「え……。そ、それだけは……。やめて……。ただけませんか？」

ダバン「お前に選択権があると思ってるのか？」

ベグル「覚悟はできてるんだろ？なら、どんな事にも耐えないとな？」

ギバ「くっ……」

バン「……」

二人「さあ、地獄を見せてやるよ」

その後数時間でギバは解放されたが、バン達は一日訓練場から出てくる事は無かった。

それを体験したバンは後にこう語った。

地獄なんて、あれに比べたら優しいに決まってる、と

子ども達の日常

一ヶ月後、デルカダール城

朝食時

マルス「父さん、母さん。今日友達と遊んでくる！」

ルナ「私も！夕方までには帰ってくるね！あ、コロも行くこう！」

コロ「キャン！」

マルティナ「ふふ、わかったわ。あまり遠くまでいかないでね」

デルカダール王「ハハハ！元気があつていい事だな。たくさん遊んでくるんだぞ」

二人「はい！」

その後

二人「行つてきまーす！」

コロ「キャン！キャン！」

二人とコロは玉座の間から出ていった

ブレイブ「……………」スツ

ブレイブは立ち上がり、後ろから歩いていった

ラース「へへ、やっぱりブレイブは追いかけるよな」

グレイグ「子どもが心配なのだろう。おかげで俺達も安心していられるな」

デルカダール王「ブレイブはいい子じやな。守るべき者をしっかりとわかってくれておる」

マルティナ「ブレイブも子ども達と遊んでるのかしら？」

ラース「いや、遠くから見守ってるだけみたいだぜ。絡まれたら遊ぶみただけだよ」

デルカダール王「民達もブレイブやコロに馴染んできてもらえてい
るそうだな。魔物にも、優しき者がいる事をわかってきてもらえるか
もしれんな」

噴水前

男の子「あ！マルス君だ！」

女の子「待ってたよ〜！」

マルス「ごめんね、少し遅れたかな？」

男の子「大丈夫だよ！」

ルナ「コロも連れてきたの！一緒に遊ぼう」

コロ「キャン！」

女の子「あ、コロちゃん。久しぶりだね。わく、ふわふわ」

男の子「僕も触る！可愛いな〜」

コロは二人に撫でられている

コロ「ゴロゴロ」

マルス「今日は何する？かくれんぼ？」

女の子「あ、少し待ってて。ママに言ってくるね。ママー」

女の子は近くにいた自分の母に向かっていく

男の子「今日は城の前の草原で鬼ごっこしようよ！あまり遠くに
行っちゃ駄目だから狭いエリアだけど」

ルナ「それならいいよ。コロもやろうねー」

女の子の母親「マルス様、ルナ様。またこの子と遊んであげてね。
危険な事したら駄目よ」

女の子「駄目だよ、ママ。マルス君もルナちゃんも様って付けられ
るの嫌いなんだよ！」

女の子の母親「あら、ごめんなさい。マルス君、ルナちゃん、よろ
しくね」

二人「はい！」

男の子「よし、行こう！」

四人「オー！」

コロ「キャン！キャン！」

四人とコロは走っていった

離れた場所では

ブレイブ「……」

ブレイブが少し離れた所で見ており、四人の後ろをついて行った

女の子の母親「あら、ブレイブ君。また見守ってくれてるのね。ふふ、頼もしいわ。またよろしくね」

ブレイブ「ガウガウ」

ブレイブは撫でられている

女性「ザラザラしてるけど気持ちいいわ。あの子達は門の前みたいよ」

ブレイブ「ガウ」

デルカダール地方

男の子「ここの景色って結構いいよね」

女の子「そうよね。いろんな山が見えるし、風も気持ちいい」

ルナ「あ、見て。この黄色い花、可愛い」

コロ「??」

コロは花を口に入れた

マルス「あ、コロ。食べちゃ駄目だよ、美味しくないよ」

男の子「じゃあここから、あの少しだけ木が生えてる場所までだよ。じゃんけんで鬼を決めよう。あ、コロはどうする?」

コロ「キャン!」

コロは名前を呼ばれて元気に返事をした

女の子「まあ、コロちゃんは仕方ないね。ずっと逃げる側でお願いね」

マルス「じゃあ、最初はグー!じゃんけん」

四人「ポン!」

女の子「あ、私だ!じゃあ、十秒たったら始めるよ」

三人「逃げろー！」

しばらくして

女の子「待てー！」

男の子「わー、逃げろ、コロ！」

コロ「キャン！キャン！」

女の子「ふう、ふう、コロちゃん速ーい」

コロ「キャン！」

コロは女の子を見ると戻ってきた

女の子「あ、こっちに来てくれた。えへへ、捕まえた！」

女の子はコロに抱きついた

コロ「??ゴロゴロ」

コロはよくわからないが、嬉しそうにしている

マルス「あー、コロ。自分から行つちや駄目だよー」

ルナ「コロは撫でてほしかったのかもしれないね」

男子「残りは僕とマルス君だけだね」

女子「よし、頑張るよ！」

数時間後

ガサ

近くの草むらが揺れた

コロ「??キャン！」

コロはそれに気づき、近づいていく

男子「コロ?どこに行くの?あまり離れたら駄目なんだよ」

コロ「キャン！」

ももんじや「ぐわああ...」

コロが吠えると、草むらからはももんじやが出てきた

男子「あ、ももんじやだ。コロ、危ないから離れて！」

コロ「???'」

ももんじや「キュー…」チラッ

ももんじやはこっちをチラチラと見ている

男の子「あれ？襲ってこないのかな？」

ももんじや「ぐわ、ぐわぐわ」

コロ「キャン！」

ももんじや「ぐー！ぐわあ！」

ももんじやとコロは楽しそうに話している

男の子「あれ？コロと仲良くなってる。もしかして、遊ぼうとしてるのかな？」

女の子「どうしたのー？」

マルス「あ！ももんじや！」

ルナ「コロと踊ってる。かわいいー」

男の子「何かこのももんじゃ、仲良くしたいみたいだよ。話しかけてみようよ」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブが走ってやってきた

女の子「あ、ブレイブ君だ！いつの間に来たの？」

ブレイブ「グルル…」

ブレイブはももんじゃを少し警戒している

ももんじゃ「ぐ、ぐうう…」

ももんじゃは怖がって木の後ろに隠れた

コロ「クウ？キャン！」

コロはまたももんじゃに向かっていく

ルナ「ブレイブ、威嚇しないで。あの子はいい子みたいなんだよ」

ブレイブ「ガウウ…」

ブレイブは少し困った顔をする

男の子「ほら、おいでよももんじゃ。怖くないよ、一緒に遊ぼう」

ももんじゃ「ぐわあ！」

ももんじゃは男の子に飛びついた

男の子「わあ！抱きついてきた。結構小さいね。まだ子どもかな？」

マルス「そうだと思うよ。大人のももんじゃって僕達より少し大きいもん」

女の子「じゃあその子もいれて遊ぼう」

ブレイブ「……」

夕方

男の子「じゃあねー！ももんじゃー！」

女の子「楽しかったよー！」

ももんじゃ「ぐううー！」

ももんじやは帰っていった

マルス「ねえ、あのももんじや触った？結構ゴワゴワしてた」

ルナ「私、くちばしにも触っちゃった。湿ってたー」

男の子「じゃあまた今度遊ぼう！」

女の子「私達も帰るねー！じゃあねー！」

コロ「キャン！」

デルカダール城 大広間

二人「ただいまー！」

コロ「キャン！キャン！」

ギバ「お、マルス、ルナ。それにコロもブレイブも今帰って来たのか。楽しかったか？」

マルス「あ、ギバさん！うん！友達と遊んできた！」

ルナ「ギバさん、聞いて！ももんじやお友達になったの！」

ギバ「え？また新しく友達が出来たのか？しかも、ももんじやか。危なくなかったか？」

ルナ「全然！最初はブレイブが威嚇して怖がらせてたけど、とっても可愛かったの！」

ギバ「そうか。ブレイブ、流石だな。だが、友達になれたならよかったな」

ブレイブ「ガウ」

マルス「うん！まだ子どものももんじやだと思うんだ。少し小さめだったの」

ギバ「よく手を洗うんだぞ。ラーズ將軍は今は訓練場にいるから部屋に先に戻っているんだ」

二人「はい！」

夕食時

デルカダール王「今日は楽しかったか？マルス、ルナ、コロ」

マルス「皆、聞いて！ももんじやの子どもと友達になったんだ！」

ライス「ももんじやの子ども？また魔物と遊んだのか」

グレイグ「まさか森に行ったのか？」

ルナ「違うの！門の前にある、木が少しだけ生えてる場所でコロが見つけたの。襲ってこなかったし可愛かったんだよ」

コロ「クウーン」

マルティナ「それならよかったわ。新しく友達が出来てよかったわね」

ライス「ブレイブ、お前も見てたんだろ？大丈夫だったって事だよな？」

ブレイブ「ガウ」コク

ライス「なら問題無いな。しかし、人に近づいてくる魔物なんてあ

まりいないはずなのにどうしたんだろうか」

デルカダール王「もしかしたら、魔物もこれが本来の生態なのかもしれないな。前までは魔王や邪神の影響を受け、世界中の魔物が凶暴になっていた。それを見たわし達が少しでもだけ誤解しておるのかもしれない」

グレイグ「なるほど。それは確かに考えられますね。少し調査の範囲を広げてみましょうか」

マルティナ「ブレイブ、あなたも協力してくれると嬉しいわ。またあの薬も使うかもしれないけど、いいかしら？」

ブレイブ「ガウ」ペコ

マルティナ「ありがとう、ブレイブ」

マルス「また遊ぶ約束もしたんだ！また行こうね、コロ」

コロ「キャン！」

ラーズ「それじゃあまた少しだけ訓練してからだな。そしたら遊んでいこう」

ルナ「最近私、ヒヤドが出来そうなの！」

デルカダール王「おお！新しく覚えそうなのか。魔導書を読んだ成果が出てきたな」

マルス「すごいじゃん、ルナ！僕も頑張らないと！」

グレイグ「マルスも最近いい動きになってきているぞ。剣に慣れてきたな」

マルス「本当!?!グレイグさん、ありがとう！」

マルティナ「私も気になるわ。今度見に行くわね」

ラース「お、これは頑張らないといけないぞ、マルス、ルナ。母さんにすごい所を見せてやろうな」

二人「うん！」

マルティナ「うふふ、楽しみにしてるわね」

初めてのデート

二ヶ月後、デルカダール城 大広間

ジェーンとミラがお城へとやってきていた

ジェーン「ど、どうしよう、ミラ。来たのはいいけどどうやって探そう」

ミラ「私も困ったわ。こんな広くて立派な所、慣れてないから誰か来てくれるといいんだけど」

二人は立派な城に少しオロオロしていた

ジェーン「あ！丁度いい所に人が来てくれた。あの人に聞いてみようよ」

ミラ「すみませーん！」

ラーズ「ん？おや、お客さんか。デルカダール城へようこそ。何かお城に用事か？」

ミラ「実は会いたい人がいて、その人達を呼んできてくれませんか？」

ジェーン「ダバンさんって人とベグルさんって人なんです。知って

「まさか？お城の兵士だと聞いたのですが」

「ラース「おお、あの二人に用事なのか。なら訓練場に来るか？案内するぞ。他の兵士もいるぞ」

「二人「ありがとうございます！」

「その頃、訓練場」

「バンとベグルが組み手をしていた」

「バン「せいけんづき！」

「ベグル「ぐっ！」

「バン「おい、どうしたんだよ、ベグル。動きがいつもより鈍いぞ」

「ベグル「悪い、少しブーツとしていた」

「バン「大丈夫か？体調でも悪いのか？」

「ベグル「いや、違う事を考えていただけだ。すまなかつたな。バンとの組手で考え事なんて甘く見過ぎてるな。気を引き締めるぜ」

バン「よし！どんどん来いよ！」

ベグル「おう！覚悟しろよ、バン！」

ロベルト「ベグルのやつ、どうしたんだ？」

マーズ「最近考え事多いよな。ダバンも少し気が抜けてるみたいだしな」

数分後、訓練場 二階

ラース「着いたぜ。ここが訓練場だ。少しここで待っていてくれ。ダバンとベグルを呼んでこよう」

二人「はい！」

ミラ「へー、こうやって訓練してるんだ。結構広いし、人も多いわね」

ジェーン「皆、いろんな武器で頑張ってるね。どの人も強そう」

二人は上から兵士達を眺めていた

訓練場

ラーズ「よお、お疲れ様。ベグルとダバン、少しいいか？お前達に会いたい人達が来ているぞ」

ベグル「え？グハア！」ドサ！

ベグルはそれを聞いてよそ見をし、バンの攻撃が直撃する

バン「あ、わ、悪い、ベグル。大丈夫か？」

ベグル「い、いや、急によそ見した俺が悪い。ラーズ將軍、それっ
てもしかして」

ダバン「あ！やっぱりミラさん達！おーい！」

二人が手を振ると、ミラ達も振り返してくれた

バン「あ、あの時の二人じゃん。わざわざ来てくれたのか。何だよ、
ベグル、ダバン。かなりいい感じなんだな」

ダバン「うるせえぞ、バン。ラーズ將軍、教えてくれてありがとう
ございます。すぐ向かいますね」

ラーズ「おう。急に悪かったな。それにしても、いつの間に関り
合ってたんだよあんな美人達と。女がいなくて嘆いてたくせにや
るじゃねえか」

ベグル「へ、へへ。前のソルティコでの休みで少し縁が出来たんです」

三人はミラ達の元へ向かっていった

マーズ「お、おい。ベグルのあの顔見たか？あんな顔するんだな」

ロベルト「いつもはあんな顔など絶対にしないのにな。あれは、恋をしているんじゃないか？」

バン「絶対そうだぜ！ベグルのあんな気持ち悪い顔見た事ねえからな！ダバンも口元上がってたし、どうやら春がきたみたいだな」

ギバ「おい、バン。最初のやつは絶対言うなよ。また奴隷みたいにされるのはごめんだ」

バン「お、俺だってあんな思い二度とするか！」

その頃

ミラ「久しぶりね、ダバンさん、ベグルさん」

ジェーン「見てたわ、ベグルさん。大丈夫？吹っ飛ばされてたけど」

ダバン「久しぶりだな、ミラさん、ジェーンさん」

ベグル「恥ずかしい所を見られたな。俺は平気だぜ。ラーズ將軍に案内されたんだな。ラーズ將軍、こんな所に呼ばなくても客室でよかったですよ」

ラーズ「いや、この二人がお前達に会いたって言ってたからな。どうせならここでいいかと思ったんだ。悪かったな」

ジェーン「將軍？もしかして、偉い方でしたか？」

ダバン「この人はラーズ將軍。マルティナ王女様を守る騎士様だ。少し前までは俺達を指導してくれる兵士長だったんだ」

ラーズ「よろしくな」

ミラ「ええ!?ごめんなさい、そんな方に案内なんて頼んでしまつて！」

ラーズ「いやいや、気にすんなよ。俺は別に偉くなんかないさ。城の事なら頼ってくれよな。ベグル、ダバン、休みがほしかったら言えよ。一日くらいなら大丈夫だからな。じゃあな」

二人「ありがとうございます！」

ジェーン「突然ごめんなさい。デルカダールに来たから顔を見せようと思って。迷惑でしたか？」

ベグル「全然大丈夫だ！いつ頃ここに来たんだ？」

ミラ「私達は昨日の夜にデルカダールに着いたの。結構長かったわ」

ダバン「そういえば出身を聞いていなかったな。どこから来てくれたんだ？」

ジェーン「私達はラムダに住んでいるんです」

ミラ「そ！ジェーンとは幼なじみの」

ベグル「ラムダ!?すごい遠くから来てくれたんだな。わざわざありがとな」

ダバン「なるほど。あの場所なら海を知らなくて当然だな。旅行が好きなのか？」

ジェーン「はい。知らない場所やいろんな人、文化などに触れ合うのがとっても興味があるんです」

ミラ「私はジェーンほどではないけど、それでも楽しいわ!」

ベグル「そうだったのか。なら、俺達がデルカダールを案内しようか?」

ミラ「あら! いいの? それは助かるわ」

ジェーン「城下町がとっても大きくて、二人ですつとキョロキョロしてたんです。迷いそうでしたしありがたいです」

ダバン「そうだよな。初めてここを見ると広すぎて何がどこにあるとかわからないもんな。ただ、明日まで待つてくれると嬉しい。俺達はこれから調査で町から出なきやいけないんだ」

ベグル「そうだった。悪い、ジェーンさん、ミラさん」

ミラ「いいのよ、気にしないで。兵士さんだもの。忙しいなんて当たり前じゃない」

ジェーン「数日は滞在していますので、明日も大丈夫です。楽しみにしてますね」

その夜、バンの部屋

バン「何だよ、突然押しかけてきて」

ベグルとダバンが部屋にやってきていた

ベグル「お前に頼るのは恥だが仕方ないんだ」

バン「恥って馬鹿にしてんだろ、ベグル！」

ダバン「頼む、バン！俺達にデートのやり方を教えてくれないか？」

ベグル「ラーズ將軍に頼るのは少し違うし、兵士達の中で奥さんがいるのはお前だけだろ？なあ、頼む！」

バン「やっぱりそういう事かよ。俺だってあまり教える事なんてないぞ？」

ダバン「バンはメグと付き合ってる時どうやってデートしてたんだ？」

バン「どうやってって……俺から誘って、普通にいろんな事話して、手を繋いだりしてたくらいだな」

ベグル「手を繋ぐ……か。まだ早いな。他には？」

バン「手を繋ぐのがまだ早いのか。なら、もっと仲良くならないとなんじゃないのか？相手の事を知った方がいいと思うぞ」

ダバン「そうだな。まずはそこからか」

ベグル「やっぱり女性は甘い物とかアクセサリーとか好きなんだよな？」

バン「メグは甘いものは確かに好きだけど、アクセサリーにはあまり興味ないんだよな。買えば喜んでくれるが自分から買おうとはしないな。人それぞれだと思っぜ。お互いどっちの人を気になってるんだ？」

ベグル「俺は茶髪のジェーンさんって人だ」

ダバン「俺は黒髪のミラさんだ」

バン「へえ、互いに分かれてるんだな。デートは四人で行くのか？」

ベグル「そこなんだよな。あの二人は友達だから一緒にいた方がいいと思うんだ」

ダバン「まだ別々に動くには早すぎるんだ」

バン「まあ、知り合ったのはあの海が初めてなんだろう？それなら仕方ないな。教えられるのはこれくらいか？」

ベグル「ありがとな、バン。明日頑張ってくるぜ」

ダバン「バンがまともに見えてきたぜ。あと、もうついてくるなよ」

バン「絶対行かねえ！それと俺はいつもまともだろうが！ただ応援はしてもいいだろ？頑張れよな」

二人「おう！」

初めてのデート2

次の日、デルカダール城 大広間

ジェーン「あ！ベグルさん、ダバンさん！お待ちせしました」

ミラ「まだ道に慣れてなくて、少し人に聞きながら来たから遅れちゃったの。ごめんなさい」

ベグル「気にすんなよ。ここに初めて来た旅人は皆そうだからな。町の人も案内には慣れてるんだ」

ミラ「やっぱりそうだったのね。皆優しく教えてくれて助かったの」

ダバン「それじゃあ色々案内するぜ。どこか行きたい所や食べたい物とかあるか？」

ジェーン「私達、デルカダール地方のご飯が気になってるんです。ワインとかじゃがいもの料理が有名なんですよね？」

ベグル「おお、そうだな。それじゃあ少し早いがご飯にするか。ダバン、あの店でいいよな？」

ダバン「おう。たくさんあるし大丈夫だろ」

ミラ「それじゃあベグルさん、ダバンさん。案内お願いするわ」

デルカダール城下町 酒場

ジエーン「あら？ここって酒場ですか？」

ダバン「ここは少し変わってな。昼は食事処として、夜は酒場としてやってるんだ。今はランチが始まったばかりだと思うぜ」

ミラ「へー、確かに変わってるわね。少し裏道にあるのも通な感じがするわ。ここにはよく来るの？」

ベグル「夜は酒場だからよく皆で騒いでるんだが、昼は来たこと無かったんだ。どんな感じかは俺達も少し楽しみだ」

ガチャ

マスター「いらつしやいませ。おや、ベグルさんとダバンさんじゃないですか。まだお昼ですのでお酒はあまり提供できないんです」

ダバン「いや、そうじゃないぞマスター。今回はここでお昼にしようと思ってたんだ」

マスター「おお、そうでしたか。おや？見慣れない女性の方達ですね。いらつしやいませ。ごゆつくりしていつてください」

ジエーン「素敵な空間ですね。少し大人な雰囲気です」

ミラ「個部屋もあるのね。結構オシャレじゃない」

ベグル「マスター！この二人にデルカダール地方の特別セットを頼む」

マスター「はい、承りました。ベグルさん達はどうぞされますか？」

ベグル「俺達はこの季節の Pasta セットでいいよな？」

ダバン「ん？なるほどな。ああ、俺も構わないぜ。あ、二つとも大盛りで頼むぜ」

マスター「承りました。少々お待ちください」

ミラ「ねえ、ベグルさん。私達、この国の歴史も少し知りたいの。知ってたら教えてくれないかしら？」

ベグル「歴史か。申し訳ないんだが、俺達はあまり詳しくないんだよな。詳しく知りたいなら図書館に行くか、デルカダール神殿に行くかだよな」

ジェーン「あ、デルカダール神殿は私達も気になっていたんです。どこにあるんですか？」

ダバン「ここから少し離れたデルカコスタ地方にあるんだ。ただ、神殿の周りや中には穏やかなやつらとはいえ魔物がいる。俺達がいれば大丈夫だと思うが、どうする？」

ミラ「うーん……。本当に危ないと感じたらすぐに出ていくわ。それまでは護衛してもらってもいいかしら？」

ベグル「よし、任せな！絶対守ってやるよ。まあ、そうそう襲われはしないはずだけどな」

ジェーン「何だか頼りにしてばかりですが、お願いします」

ダバン「へへ、気にすんなよ。俺達は兵士だ。誰かを守る事が仕事なんだ。それに、女性二人は危ないからな。なおさら守ってやらないとな」

その後

ジエーン「わあ！美味しそうです。この料理は何というんですか？」

ベグル「これはデルカダール地方の郷土料理、フォツチャ。中に蒸したじゃがいもが入ってるんだ。周りはグラタンみたいなものだ。一緒に食べると美味しいんだぜ」

ミラ「あら！丸々一個入ってるのね。食べ応えもありそうだわ」

ダバン「実はあまり知られてないが、デルカダールはこのアップルパイも有名なんだぜ。よかったら食べてくれ」

ジエーン「え？でも、それはダバンさん達のデザートじゃないですか。いいんですか？」

ダバン「俺達はいい。よく食べてるからな」

ベグル「まあ実を言うと、このデザートがついてくるからこのセットにしたんだよな。ジエーンさん達に食べてほしくてよ」

ミラ「ありがとうございます。それじゃあ貰うわ。お礼に、私達のも少し分けてあげるわ」

ダバン「え……。へへ、ありがとな」

ベグル「あ、ありがとな！」

ベグル「(やべえ！嬉しすぎるだろ！)」

ダバン「おい、表情に出てきてるぞ！気持ちは分かるがやめろ！変に思われるぞ」

その後

ダバン「それじゃあデルカダール神殿に向かおう。魔物は少ないが、警戒するに越した事はないな」

ベグル「任せてくれ、ジエーンさん、ミラさん！ここらの魔物なんて俺らにかかれば、武器すらいらさないからよ！」

ジエーン「まあ！それは頼もしいです！離れないようにしますね！」

ミラ「ふふ、ありがとう。どれくらいかかるのかしら？」

ダバン「歩いてだから三十分くらいかな。往復だと一時間程度だ」

ミラ「なるほど。確かに少し離れてるのね。よかつたら魔物の事も教えてくれると勉強になるわ」

ベグル「二人とも勉強熱心なんだな。学者になりたいのか？」

ジェーン「私は世界各地の場所を訪れて、世界の歴史や文化などが載った資料を作るのが夢なんです！」

ミラ「私は夢ではないけど、ジェーンの手助けになればと思って来てるの」

ダバン「へへ、立派な夢だな。ミラさんも友達を手伝うなんて優しいんだな」

ミラ「そ、そうかしら？大した事じゃないわよ。照れるわ」

ジェーン「あ！あの魔物つてももんじゃですよ？うわー、二人で寝てる。可愛い！」

ベグル「凶暴では無いから大丈夫だが、あまり近づいて驚かせないでくれよ。引っ搔かれたりするぞ」

ジェーン「はい！それは大丈夫ですよ」

ミラ「こつちには青いメイジももんじやが当たり前なの。この白いももんじやも可愛いわ」

しばらくして

ダバン「大丈夫か？ミラさん、ジェーンさん。この近くに綺麗な湧水があるんだ。そこで少し休憩するか？」

ミラ「あら、そうなの？それなら少し飲んでみようかしら」

ジェーン「そういえば喉が渴きました！」

ベグル「ジェーンさん、色んな事にはしやいでたもんな。喉も渴く
さ」

イシの大滝

ミラ「へー、ここは心地いい場所ね。どこか神秘的でもあるわね」

ダバン「ここには魔物も水を飲みによく来るんだ。襲いはしないから、観察もできるぜ」

ジェーン「えーそれはいい情報です！私、少しここで待ってますね」

ベグル「お、そんな事言ったら来たみたいだぜ。ズツキーニヤと……スライムか？」

ダバン「ん？ズツキーニヤがスライムを抱き抱えてるな。あ！あのスライム、怪我してるみたいだ。血が出てるぞ」

ミラ「本当だわ！ズツキーニヤがこの水で傷を洗ってるわ。結構賢いのね」

ジェーン「ダバンさん、あのスライムを助けてあげられませんか？」

ダバン「任せろ。まずは敵意が無い事をわかってもらわないとな」

ミラ「私もいく。手伝うわ、ダバンさん」

ダバン「ありがとう、ミラさん」

ベグル「手を上げて、ゆっくり近づくんだけぞ」

ダバン「おう」

ズッキーニヤ「!?ブルブル」

ズッキーニヤはダバン達に気付き、怖がりながらもスライムを隠している

ダバン「震えなくて大丈夫だ。俺達は何もしない。そのスライムを治してやりたいだけなんだ」

ミラ「お願い！私達を信じて。大丈夫だから」

ズッキーニヤ「……」

ズッキーニヤは恐る恐るスライムを近づけた

ダバン「ありがとな。怖いなら、槍でいつでも応戦できるようにしていいからな。傷は……ここだな」

ミラ「私が支えてるわ。早く治してあげましょう」

ダバン「ああ、そうだな。ホイミ」

ゆつくりと傷が無くなっていく

スライム「!!ピキーン！」

スライムは痛みが無くなり、元気よく飛び跳ねた

ズツキーニヤ「!?ギャ!キヤツ!」

スライム「ピキ、ピキー!」

ズツキーニヤもスライムが元気になって喜んでいる

ミラ「ふふ、二人で喜んでるみたい。よかったわ」

スライム「ピキー?」

スライムは二人に近づいてきた

ダバン「お、何だ。ありがとうってか?」

ミラ「可愛い。触ってもいい?」

スライム「ピキ、ピキ」

ミラ「あら、ヒンヤリしてるしぷるぷるしてて気持ちいいわ」

ジエーン「何とかなったみたいね、ミラ」

ミラ「ええ。あら、どんどん擦り寄ってくるわ、このスライム」

ベグル「元気になってよかったな、スライム」

スライム「ピキーン！」

スライムとズツキーンは仲良く戻っていった

ダバン「さて、俺達もデルカダール神殿に行かないとな」

初めてのデート3

デルカダール神殿前

ミラ「うわー……。近くで見ると結構迫力あるわね」

ジエーン「凄いです！厳かな感じがあって、いかにも神殿！って感じですね！」

ベグル「そうなのか？見慣れてる俺らにはよくわからないな」

ジエーン「早く行きましょう、ベグルさん！私、すつごく中が楽しみです！」

ジエーンはベグルの手を掴んで、ウキウキした様子で走っていく

ベグル「え……手、握ってくれた……」

ベグルは顔が緩んでいる

ダバン「おー、おー、羨ましい事だな。顔がとんでもねえ事になってるぜ」

ミラ「もう！ジエーン！あまりはしゃがないでよ！子どもみたいだと思われるわよ！」

ミラははしゃぐジエーンに声をかけているが、ジエーンとベグルは

どンドン先に進んでいく

ダバン「ハ、ハハ。相当楽しみなんだな。いいじゃないか、元気で。ベグルがいれば安心だからな。俺達はゆっくり行こうか」

ミラ「ジェーンがごめんなさいね。あの子、こういう所に来るといつもああなっちゃうの。」

いつもは私が振り回されてるけど、今回は私もゆっくりできそうね。ベグルさんには申し訳ないけど頼っちゃうおうかしら」

ダバン「おう、それがいいと思うぜ。階段はかなり多いから足元に気をつけろよ？もしよかったら、俺の手を握ってくれ」

ミラ「あら。手を出してくれるの？やっぱり優しいのね、ダバンさん。悪いけど支えてくれると嬉しいわ」

ダバンはさり気なくミラと手を握った

デルカダール神殿内部

ミラ「中はこんな感じなのね。壁画に文字とか書かれてるのね。あら、下には訳もあるじゃない。助かるわ」

ジェーン「あ！ミラー！見て見て！ここの文章、デルカダールが出来た最初の事が書いてあるよー！」

ジェーンはベグルに肩車をしてもらっていた

ミラ「ちよつと、ジェーン!! 肩車なんてはしたないわよ! 早く降りなさい!」

ジェーン「あ、ご、ごめんなさい! ベグルさん! 私、そこまで重くないと思うんですけど大丈夫でしたか?」

ジェーンは流石に悪いと思ったのかミラの言葉でベグルから降りた

ベグル「い、いやいや、へへ平気だぜ。兵士はこれくらいな、なんて事ないぜ!」

ベグルは少し顔が赤くなっている

ダバン「ハァー。(焦りすぎだ、馬鹿。全く、羨ましいぜ)」

ミラ「ベグルさん、ジェーンのがままが過ぎてごめんなさい。ほら! ジェーンもちゃんと謝るのよ」

ジェーン「う、うん。ごめんなさい、ベグルさん」

ベグル「大丈夫だ。ここは高い所の文章も多いからな。見えなかったら、また頼ってくれていいからな」

ジェーン「ありがとう、ベグルさん！私、とっても嬉しいです！」

ミラ「あまりこの子を甘やかさないでいいのよ？ベグルさん」

ダバン「まあまあ、ミラさん。ジェーンさんがこういう場所が好きなら全部くまなく見てみたくなるはずだ。なら、俺達はそれに協力するだけだぜ」

ミラ「もう！ダバンさんまでそんな事言っちゃって。まあ、いいわ。ジェーン、あまり一人になっちゃ駄目なんだからね！」

ジェーン「わかってるよ、ミラ！えへへ、ベグルさん、下の階も行きましよう！」

ベグル「おう！」

ミラ「私もここを見終わったら下に行くわ」

ジェーン「先に行ってるね、ミラー！」

ジェーンとベグルは先に進んでいった

ダバン「ハハハ！ミラさんは何だかジェーンさんの保護者みたいだな。ミラさんは優しいし、面倒見もいいから似合ってるんじゃないか

？」

ミラ「そうかしら？あの子が子どもっぽいだけかもしれないわよ？でも、私はジェーンに何度も助けられてるわ。あの子の少し強引な所に、私は救われたの」

ダバン「……そっか。ミラさんはその恩返しをしたいんだな」

ミラ「ふふ、そんな大層な事私には出来ないんだけど、ジェーンが頼ってくれるのが嬉しいのよ。ジェーンが笑っていてくれれば、私はそれでいいの」

ダバン「やっぱりミラさんは優しい人だ。そういう思いがある人は、俺は凄く素敵だと思うぜ」

ミラ「え……。も、もう！ダバンさんったら！恥ずかしいわ。ほ、ほら。私もそろそろ読み終わるわ。早く下に行きましょう」

ダバン「お、おう。そんな焦るなよ、危ないからな」

ミラ「(やだ！私ったら一人で照れて何してるのかしら。ダバンさんにそんな気があるわけないのに)」

ダバン「今の照れてる顔、可愛かったな。しかし、恥ずかしいセリフだったな。あまり言えないな」

二人は少し顔や耳が赤くなっている

その頃、ベグルの方は

ジェーン「少し魔物が増えましたね。でも、隅にいる程度ですし問題なさそうですね」

ベグル「そうだな。あ、ジェーンさん。足下の機械みたいなのは、メタッピーという魔物が寝てる姿なんだ。踏んで驚かせないように頼んだぜ」

ジェーン「あ、そうだったんですね。何だろうとは気になっていたのですが、魔物だったんですか。忠告ありがとうございます」

ベグル「ジェーンさんは古代文字が読めるのか？」

ジェーン「え？ああ、私は流石に読めません。でも、ミラが少し読めるんですよ。ただ、どうしても読めなかったり気になる物は紙に写して、里の長老に見せて要約してもらおうですよ」

ベグル「なるほどな。だからその紙とペンがあるのか。叶えたい夢を真っ直ぐ追いかけるのはいい事だよな…… やりたい事をやれるってのはいい事だもんな」

ベグルは最後の方をボソボソと呟くように言った

ジェーン「ベグルさん？」

ベグル「ん？どうした？」

ジェーン「あ、いえ、何でもありません。あ！この文、命の大樹の事について書かれてるのね（何だか暗い雰囲気を感じた。私の気のせいかな？）」

ベグル「俺達は探索では壁画なんて見てられなかったからな。こうやってまじまじと見るのは初めてだな。色んなことが書かれてるんだな」

ジェーン「そう言えば、命の大樹で思い出したんですけど、最近命の大樹がおかしいんです。元気がないというか、少ししおれてるような感じがするんです。長老様も違和感を感じてるみたいなんですよ。何か知ってますか？」

ベグル「命の大樹が？そうだったのか。俺達からは離れてて、いつもと変わらないように見えてるけどな。その事は初めて聞いた。情報ありがとな。ラース将軍やマルティナ様に伝えておくれ」

ジェーン「はい。まあ、ベロニカさん達がこれから調べに行くみた

いなので安心なんですけどね」

ベグル「そう言えば、ベロニカさんもセーニヤさんもラムダの出身だったな。その二人なら安心だな」

ジェーン「え？ベロニカさんとセーニヤさんをご存知なんですか？あ！そう言えば、ラーズ様もマルティナ様もグレイグ様も勇者様の仲間の方でしたね！なら、ご存知ですよね」

ベグル「そういう事だ。偶にお城に来た時に話した事や、数年前に模擬戦もやった事あるんだ。その時は敵わなかったけどな」

ジェーン「凄い！勇者様のお仲間鍛えられているなんて！それなら最強と謳われるのも当然ですね」

ベグル「へへ、よしてくれよジェーンさん。照れるぜ」

ジェーン「あら？あの隅の魔物は？」

ベグル「ん？ああ、あの魔物の名前はインプ。少しイタズラ好きだが、臆病だからな。威嚇しておいてやろうか？」

ジェーン「いえ、何だかあの子、周り少し変じやないですか？」

ベグル「変？んー……。おお！よく見たら頭にある触覚が無えな。あの部分でイタズラできるのに、どうなってるんだ？」

ジェーン「怪我で取れたんでしょうか？かわいいそう……」

ジェーンはインプに近づく

ベグル「あ、ジェーンさん。いくら何でも近づくのは危険だぞ」

インプ「!?キ、キキツ！」

インプはジェーンとベグルに気付き、震えている

ジェーン「え？私達に怯えているんでしょうか？」

ベグル「……。まさか、こいつの触覚が無い原因は人間によるものか？」

ジェーン「ええ!?そんな！酷い！」

ベグル「だが、どうしたものか。このままだとこいつは、ずっと群れから遠ざかって生きていかなきゃいけない。俺達はこの触覚は治してやれねえんだよな」

ジエーン「……ごめんなさい、インプちゃん。驚かせちゃったわね。その触覚を何とかしてあげたいけど、私達にできる事……何も無いの」

ベグル「……行こう、ジエーンさん。このままにして、自然の成りに任せるんだ」

ジエーン「うっ……うう……ごめんね、ごめんね、インプちゃん」

ジエーンは涙ぐんでインプを見ていた

ベグル「泣かないでくれ、ジエーンさん。ほら、ハンカチで拭いていいぜ」

ジエーン「あ……ありがとうございます……」

インプ「?……」

ベグル達はインプから離れていった

初めてのデート4

その後、最下層

ダバンとミラが着くとベグルとジェーンも待っていた

ベグル「お、ダバン達も着いたか」

ミラ「ごめんなさい、ゆっくりし過ぎたかしら?」

ジェーン「全然そんな事ないよ。ミラもいつもゆっくり見えていたって言うてたし、よかったでしょ?」

ダバン「そうだな。ミラさんもゆっくり見えていたからな。興味はかなりあるんだな」

ミラ「まあ、ジェーンに付き合ってたらしいの間にかね」

ジェーン「ここには何があったんですか?何か飾られていたみたいですけど」

ベグル「ここにはデルカダール王国の国宝、レッドオーブが飾られていたんだ。だが、勇者に必要なものだったらしくてな。仲間の一人が盗んでいったんだ」

ミラ「え……。それって盗む必要あったの？普通に取りに来たらよかつたんじゃないの？」

ダバン「その頃の俺達は魔王に騙されて、勇者を悪魔の子と信じて捕らえようとしていたんだ。だから普通にはここに来れなかったんだ。それで盗んだ。今となっては恥ずかしい話なんだがな」

ジェーン「そんな事があったんですね。でも、勘違いは誰でもしますし、騙されていたなら気付かないですよ。ダバンさん達は悪くないです。」

盗むのは悪い事だけど、それが結果的に世界の平和に繋がったなら私はいい事だったと思いますよ」

ベグル「へへ、そう言ってくれると嬉しいぜ。さあ、ここでデルカダール神殿は終わりだ。城下町に帰ろうぜ」

神殿入り口

ミラ「あら？入り口近くにインプの群れがいるわ」

ジェーン「そこ、通りたいんだけどな」

ダバン「追い払うか。おい、ベグル」

ベグル「へへ、任せておけ。おい、そのインプ達、どいてくれねえか？」

インプ「キキっ!! キーッ！」

インプの群れはベグルに向かっていった

ジェーン「あ! ベグルさん! 危ないですよ！」

ベグル「ああん？」

ベグルはインプ達を睨みつけた

インプ「キッ……。キッ、キキッ」

インプ達は怯え、柱の後ろにまとめて隠れた

ミラ「え……。すごい。何もしてないのに怯えていったわ」

ダバン「ベグルは顔が怖いからな。少し威嚇すれば簡単に逃げていくのさ」

ベグル「うるせえ、ダバン! 人が気にしてる事言ってるじゃねえ！」

インプ「キー!!」

一匹のインプがベグルに向かっていく

ベグル「チツ！素直に逃げてればよかったのによ」

ベグルが大剣を構えようとしたその時

怪我インプ「キー!!」

全員「!？」

触覚の無いインプがベグルを庇った

インプ「キキツ!?キキキキツ！」

怪我インプ「キツ……キキー！」

インプ達は何か言い合っている

ジエーン「さっきのインプちゃん!どうしてここに」

ダバン「何か話してるのか？」

怪我インプ「キー!!」

インプ「キキツ!？」

怪我をしているインプはドルマをインプに当てた

ベグル「お、おいおい。ドルマかよ！普通のインプより強いのか、こいつ」

インプ「キキキツ！キー！」

インプ達は逃げていった

怪我インプ「キキ！」

怪我をしているインプは少し偉そうにしている

ミラ「助けてくれたのかしら？ふふ、頼もしいのね。ありがとう」

ベグル「お前、強かったんだな。へへ、勇敢だったぜ」

ダバン「ん？よく見たらこいつ触覚が無いのか……いや、この跡を見ると人間から千切られたな」

ジエーン「そうなんです。かわいそうで何かしてあげたいのに何もしてあげられないのが、私情けなくて。」

でも、そんなに強いなら心配いらなそうだね。助けてくれてありがとう。これはお礼よ。私のハンカチを首に巻いてあげる」

怪我インプ「キキ？」

ジエーン「うふふ、とっても似合ってるわ。皆にも見せてあげてね」

怪我インプ「キー！キーキー！」

インプは手を振りながら戻っていった

ジエーン「よかったわ。あの子が人間に少しでも慣れてくれて」

ミラ「可愛いじゃない、あのインプ」

ダバン「何だか魔物とよく触れ合う一日だったな」

ベグル「やつぱりリース将軍が言ってたみたいに、魔物も本来は皆優しいやつらなのかもな」

夕方、デルカダール城下町

ミラ「わざわざ宿屋の前まで送ってくれてありがとう。デルカダール観光、凄く楽しかったわ」

ダバン「俺もとっても楽しかった。ぜひまたデルカダールに来てくれ。いつでも歓迎するぜ」

ベグル「ジエーンさん、俺また会えるの待ってます！」

ジエーン「はい！私もベグルさんにまた会いに来ます！その時はまた一緒にデルカダールを案内してほしいです」

ベグル「ああ！いつでも待ってるな！」

ミラ「じゃあ、また今度会いましょう！」

ジエーン「じゃあねー！」

ベグル「またなー！」

ダバン「体調には気をつけるんだぞ！」

ベグル達は城に戻っていく

ベグル「ハー……。最高……。」

ダバン「そうだな。ベグル、途中で顔がすげえ事になってたぞ。あんな顔するんだな、お前」

ベグル「うるせえ、ダバン！だが、思い出すだけで……へへ」

ダバン「ハア。その顔だよ。ん？バン？」

帰り道、バンもちょうどやってきた

バン「ん？おお、お前ら！今帰りか？つて、ベグルの顔気持ち悪すぎだろ！ングツ！」パシツ！

バンはベグルに顔を握られ、持ち上げられる

ベグル「肉塊にされなくなかったら今すぐその口を閉じろ」

ベグルは殺気を出してバンを威嚇する

バン「ンー！！うん！うん！」ギリギリギリ

バンの顔からは変な音が聞こえる

ベグル「チツ！嫌なやつに見られたぜ」

ベグルはバンを離した

バン「痛え……。頭が割れるかと思ったぜ。まあ、成功したみたいだな」

ダバン「おう。何とかな。そう言えば、確かにバンの言う通りアクセサリーとかに興味無かったみたいだ。人それぞれなんだな」

バン「だろ？少しは相手が好きなものとかわかったか？」

ベグル「おう。まあ、バンの意見も少しは役に立ったぜ」

バン「へへ！そのまま俺の意見をこれからもずっと聞いてくれよな」

二人「それは無理」

バン「な!?何でだよ、いいじゃねえか！俺、兵士長だぞ！少しは言う事聞けよな！」

ベグル「なら、そうやって馬鹿のくせに威張り散らすな」

バン「人の事、馬鹿馬鹿言いやがって！兵士長に対する扱いじゃないんだぞ！」

ダバン「なら、兵士長らしくしろ。ラーズ將軍はそうやって俺は兵士長だ。言う事を聞け、なんて一度でも言った事あったか？」

バン「ぐっ……。ない……。」

ベグル「わかったか。それが馬鹿とラーズ將軍の圧倒的な差だ。敬うべき対象ははっきりしてるんだよ」

バン「くっ……。師匠には程遠いか！だが、俺はもっと頑張るからな！そうしたら、お前達だって俺の事尊敬するようになるぞ！」

二人「どうだか」

バン「くっそー！見てろよ!!」

シロと流星群

それから三日後、デルカダール城

マルティナ親子の部屋

コンコン

カミュ「おーい、兄貴、マルティナ、いるか？カミュだ」

マルス「あ！カミュ！今開けるね」

ガチャ

マルス「カミュ、どうしたの？」

カミュ「おお、マルス。俺は兄貴とマルティナに言いたい事があつてよ。お前一人か？」

マルス「うん。今は僕一人だよ。父さんは外にお仕事で、母さんはじいじと大事なお話なんだから。ルナは図書館で勉強してるよ」

カミュ「そうだったか。タイミングが悪かったな。グレイグのおっさんは王様の側だろうしな。うーん・・・」

マルス「何かあれば入ってもいいって母さん言ってたから、僕が伝

えてこようか？」

カミュ「あー、悪いがそうしてくれるか？実はマルスとルナを借りたくてよ」

マルス「え？僕とルナを？わかった、伝えてくる。部屋で待っていてね！」

その後

マルス「母さんが来てくれたよ、カミュ！」

マルティナ「ごめんなさい、カミュ。少し忙しくて。マルス達なら借りてもいいけど、どうするの？」

カミュ「忙しいのに悪かったな。変な事はしないさ。一日俺の家に連れて行ってもいいか？二人に見せてやりたいものがあったさ」

マルティナ「わかったわ。マルス、ルナに伝えてきてくれる？私は少し準備してるから」

マルス「わかった！カミュとお出かけだー！」

マルスは出ていった

マルティナ「きて、これで話してくれる気になったかしら？」

カミュ「見抜かれてたか、流石だな。シロって言って覚えてるか？」

マルティナ「シロ？えっと……。ああ！あのスノーベビーの事ね！あの子がどうかしたの？」

カミュ「俺も最近まで死んだと勝手に思ってたんだが、あいつ大きくなってホワイトパンサーになって戻ってきたんだ」

マルティナ「ええ!?あの後一人で生き抜いたのね！凄いわ、それを見せるのね。それなら全然構わないわ。迷惑かけるだろうけど、よろしくね」

カミュ「おう。まあ、偶には子守りも悪くねえかと思つてよ」

マルティナ「ふふ、似合ってるわよカミュ」

カミュ「褒められてるのか？それは。嬉しくねえからな」

その後

マルティナ「じゃあマルス、ルナ。私は仕事に戻るから、今日一日カミュの言う事ちゃんと聞くのよ」

二人「はーい！」

カミュ「悪かったな。大事な話してたんだろ？すぐに戻っていいぜ。じゃあ、また明日な」

二人「いつてきまーす！」

マルティナ「ええ、いつてらっしやい」

クレイモラン城下町

カミュ「久しぶりだろ？あれから雪がまた積もったんだぜ」

マルス達が前に家族旅行で来た時より雪が増えている

ルナ「雪がいつぱーい！すごーい！」

マルス「ねえねえ、カミュ。僕達に見せたいものって何？」

カミュ「へへ、気になるか？マルス。なら、俺の家に行くか」

カミュとマヤの家

カミュ「ほら、あいつだ。覚えてるか？」

ホワイトパンサー「……」

ホワイトパンサーが入り口の前で寝ていた

ルナ「え？ホワイトパンサー……だよ？何で町の中にいるの？」

マルス「僕達ホワイトパンサーは初めて見たよ。カミュ、どういう事？」

ホワイトパンサー「ピクツ……ガウ！」ダツ！

ホワイトパンサーは声に反応すると、こっちに駆けてきた

マルス「わ！こっちに来た！」

ルナ「えー。ちよつと怖いかも」

ルナはカミュの後ろに隠れ、マルスも少し怖がつている

ホワイトパンサー「ワフ！ガウ！」

ホワイトパンサーは二人の近くにくると尻尾を振って喜んでいる

カミュ「大丈夫だ、マルス、ルナ。こいつは襲ったりしないぜ。それと、こいつの名前はお前達がつけたんだぜ」

ルナ「私達が？」

カミュ「ああ。シロって言って覚えてるか？」

マルス「シロ……。え？シロって！」

ルナ「スノーベビーのはずだわ。え？もしかして、シロなの？」

シロ「ガウ！ハツハツ！」

シロは名前を呼ばれて元気よく返事をする

カミュ「そうだ。こいつは間違いなくシロだぜ。成長してホワイトパンサーになったんだ。まあ、ホワイトパンサーとしてはまだまだ子どもだけどな」

二人「シロ〜！」

二人はシロに飛びつく

シロ「クウーン。ペロペロ」

シロも嬉しそうに二人を舐めている

マルス「大きくなったんだね、シロ。会いたかったよ」

ルナ「えへへ、私達の方が少し大きかったのにもうこんなに大きくなったのね。暖かい」

カミュ「こいつはな、数週間前にあの雪だるまを作った場所ですつと何かを待ってるホワイトパンサーがいるって報告を受けて、見に行ったらこいつがいたんだ。」

シロは俺を見た途端抱きついてきてよ。俺も驚いたぜ。まさか大きくなつてるとは思わなかった」

ルナ「カミュさん、ありがとう！私、すつごく嬉しい！」

カミュ「へへ、どういたしましてだな。だが、お城には連れて行けねえぞ。前にも言ったが、こいつは寒い所でしか育てない。」

デルカダールはここに比べたら暖かくてシロには苦しいんだ。だが、俺がこうやって保護してるから会いたくなつたら来るといいぜ」

マルス「カミュ、優しい！父さんがカミュはよく騙してくるから嘘には気をつけろって言ってたけど、全然そんな事ないじゃん」

カミュ「よし、マルス。その話詳しく教えろ。他にも俺の事があつたらどんどん言っていぞ」

マルス「えつとね、他にはカミュはジャンボウニみたいだっってお城の皆と笑ってたよ。バンさんも大笑いしてた」

カミュ「（よし、兄貴、バン。次会ったら覚えてろよ）」

カミュは心の中でラースとバンに殺意を向けた

その頃、ラースとバン

ゾワゾワツツ！

バン「し、師匠！誰かが俺に殺意を向けてますよ！」

ラース「奇遇だな、バン。俺も感じた。何だ？」

その後、シケスピア雪原

シロ「バウ！」

二人「シロ速くい！」

二人はシロの背中にのり、雪の中を走っていた

カミュ「あまり遠くまで行くんじゃないぞー」

二人「はい！」

カミュ「さて、俺は兄貴達へどうしてやろうか考えておくか」

夕方、カミュとマヤの家

カミュ「俺の料理で悪いが我慢してくれよな。何か食えない物とかあるか？」

ルナ「無いよ。お母さんが好き嫌いは駄目って言ってるの」

カミュ「へへ、そうだったか。それは偉いな。何が食べたい？食料を買いに行くからよ」

マルス「何でもいいよ。カミュの料理食べてみたい！」

カミュ「マルス、お前はいいやつだな。お前の父さんなんかとは違うな」

マルス「父さんは強いんだよ！カミュより強いんだから！」

カミュ「まあそうだな。だが、偶には俺だってお前の父さんに勝てるんだからな。今度見せてやるよ」

夕食時

二人「いただきますーす！」

シロ「バウ！」

カミュ「お城のような立派なご飯は無理だが、俺なりに頑張ってみ
たぜ。美味いか？」

ルナ「美味しい！カミュさんって料理上手なんだね」

マルス「前に父さんが失敗した料理よりずっと美味しいよ！」

カミュ「失敗した料理なんかと比べんなよ、マルス。それと、二人
を呼んだのはもう一つ用があるんだ。この後また外に出るぞ」

マルス「え？カミュ、知らないの？夜はあまり出歩いちゃ駄目なん
だよ」

ルナ「どこに行くの？」

カミュ「今の時期にしか見れない、とっておきの景色だ。マルス達
の父さんや母さんだって見た事ないと思うぜ？」

ルナ「何それ！すごい！」

マルス「僕も気になる！」

カミュ「なら、しっかり寒さ対策していけよ。昼よりもずっと寒いからな。シロも行こうな」

シロ「バウ！」

その後、シケスピア雪原

マルス「シロに抱きついてないと寒くて震えそう」

ルナ「私も。シロ暖かい」

二人はシロにくっつきながら歩いている

カミュ「さあ着いたぜ。上を見てみるよ」

二人「わあ〜！星がたくさん出てる！」

二人が夜空を見ると星がたくさん出ており、一つ一つが綺麗に見える
ている

カミュ「凄いだろ？この時期のクレイモランは空気が綺麗だよ、空が凄くよく見えるんだ。しかも、今なら流星群が見えると思うぜ」

ルナ「流星群？」

カミュ「流れ星がたくさん落ちてくるんだ。しばらく待っているよ」

数分後

空にはいくつも流れ星が落ちている

ルナ「ああ！星がたくさん流れてる！綺麗〜」

マルス「凄い、凄い！僕、こんなの見た事ない！お願いたくさんしなきゃ」

シロ「ガウ…」

シロも星空を見て感動している

カミュ「この景色をお前達に見せてやりたかったんだ。どうだ？夜もいいもんだろ？」

ルナ「カミュさん、素敵！」

マルス「カミュ、ありがとう！すっごくいい思い出だよ！」

カミュ「喜んでもらえてよかったぜ。そうだ、この花も今の時期限定なんだぜ。この花は夜に雪がいつぱい降った時にしか咲かないんだ。雪の花だぜ」

カミュは近くに生えている花を持って見せた

ルナ「え！お花が凍ってる！冷たい！」

マルス「これ……よく見たら花の周りの氷が雪の結晶の形になっている。こんな風になる花なんてあるんだ」

ルナ「これ欲しい、カミュさん！」

カミュ「悪いな、これは朝や暖かい所にいくと普通の花になっちゃうんだ。だからこの状態を見られるのは今だけなんだぜ」

マルス「そうだったんだ。でも凄いな。珍しいものがいっぱいだ」

ルナ「よく見たら、周りにも結構同じ花が咲いてるわ」

カミュ「もうしばらくしたら家に帰るか。風邪ひかないようにしな

いとな」

ルナ「私、クレイモラン大好き！綺麗なものがいっぱいあるもん」

カミュ「ありがとな、ルナ。また遊びに来てくれよな」

次の日、デルカダール城 玉座の間

二人「ただいまー」

カミュ「ただいま。今戻ったぜ」

マルティナ「あらおかえりなさい。どう？楽しかった？」

マルス「シロが大きくなつてホワイトパンサーになつてたの！モフモフで暖かくて、可愛かったんだ！」

ルナ「流星群を見たの！流れ星がどんどん落ちてきて綺麗だったんだよ！あと氷の花っていうのを見せてくれて、氷が花の周りにたくさんついてて綺麗だったんだよ！」

グレイグ「何やらたくさんあったようだな。カミュ、一人で大変だっただろう？」

カミュ「いや、そんな事ないぜ。流石はマルティナと兄貴の子だな。礼儀正しいし、しっかり教育してるんだな」

マルティナ「たくさん遊んできたのね。カミュ、ありがとう」

カミュ「礼には及ばないぜ。俺も子ども達と触れ合えて楽しかったしな。ああ、兄貴とバンはどこにいるんだ？少し用事があったよ」

マルティナ「そういえばラースとバンを見ないわね。朝に慌ててどこかに行ったけど、どうしたのかしら？」

カミュ「(チツ！勘が鋭いと困ったもんだな！)」

グレイグ「悪いな、俺達はわからないんだ。まあ、急がないのであればまたの機会にしてくれ」

カミュ「ああ、これは別に今じゃなくてもいつでもできるからな。それじゃ俺は帰るぜ」

マルス「カミュ！楽しかったよー！またシロを見に行くね！」

ルナ「カミュさん、ありがとう！」

マルティナ「また来てね、カミュ」

グレイグ「待っているからな」

カミュ「おう、またここに帰ってくるぜ。じゃあな」

命の大樹の異変

三日後、聖地ラムダ

長老「それでは調査を頼みましたよ。ベロニカ、セーニヤ」

ベロニカ「任せてちょうだい。しっかり調べてきてあげる」

セーニヤ「命の大樹に違和感は私も感じていました。何が起こったのか気になりますわ」

ベロニカ「それじゃあ行きましょう、セーニヤ」

始祖の森

ベロニカ「ここに来たのも久しぶりだけど、特に森に変化は無さそうね」

セーニヤ「最後に大樹に行ったのはイレブン様が勇者の剣を返しに来た時でしたね」

ベロニカ「まあそれからも戦いがある度にイレブンはここから剣を持っていったから、イレブンの方がよく知ってそうよね」

セーニヤ「しかし、イレブン様からは特に違和感を感じていないと

お返事をいただいたので、関係は薄いと思えますわ」

ベロニカ「それもそうよね。まあ、さつさと虹の橋を渡っちゃいましょう」

命の大樹

ベロニカ「うーん……。何か変わったかしら？」

セーニヤ「そうですね。前と大きく変わった所は無いように感じます」

ベロニカ「長老様の勘違い？でも、セーニヤも違和感があるって言ってるし……」

セーニヤ「もう少し奥まで調べてみましょう。大樹の魂の所も見てみましょう」

大樹の神域

二人「ああ!!」

二人が着くと床には大きな傷跡がはつきり残っていた

ベロニカ「何よ、この大きな傷！」

セーニヤ「魂は無事なようですが、大きな切り傷のようなものですわ」

ベロニカ「これが原因ね。でも、流石命の大樹だわ。自分で修復しようとしてるわ」

セーニヤ「私も回復魔法で援助します。効くかはわかりませんが」

その後

セーニヤ「少し塞がりましたね。よかったですわ」

ベロニカ「傷の大きさ的にも、犯人は魔物で間違い無いわね。長老様に報告に行きましょう」

聖地ラムダ

セーニヤ「え……こ、これは……」

ベロニカ「嘘でしょ!?!皆!!」

そこにはさつきまでいた人達が全員石になっていた

ベロニカ「何があったの!?!私達、そんなに時間かかってないはずよ!半日も経ってないわ!」

セーニヤ「私達が向かった後、すぐに襲われたのでしようか。石の皆様はご無事なんでしょうか？」

ベロニカ「セーニヤ、警戒しましょう！まだ近くに犯人の魔物はいるかもしれないわ」

セーニヤ「はい！お姉様！」

数分後

ベロニカ達は里を回っていたが、全員石になっていた

ベロニカ「駄目ね。全員石にされてるわ。くっ……なんて事を」

セーニヤ「あ！お姉様、あの大聖堂の近くに魔物が！」

???「あら？まだ生き残りがいたのね。よかったわ、楽しみが残って」

ベロニカ「あんたがこんな事をしてくれた犯人ね！絶対許さないんだから！」

セーニヤ「どうか皆様を石の姿から戻してください！」

??? 「それは無理なお願いな。私、人間が石になる瞬間が大好きなの。それに命の大樹から奪った力はすごいわ。体中から力が溢れてくる」

セーニヤ 「あの傷はあなたが付けたのですか!？」

ベロニカ 「これでも食らいなさい!メラガイ」

シュン!

魔物は突然姿を消した

ベロニカ 「ア… え!?消えた!？」

??? 「うふふ、後ろよ。おちびちゃん」

ベロニカ 「いつの間に!？」

セーニヤ 「お姉様!!危ないですわ!」

??? 「さあ、あなたも石にしてあげるわ!」

魔物の目が怪しく光った

ベロニカ 「うつ…………… あれ?ハッ!セ、セーニヤ!!」

ベロニカが目を開けると、セーニヤがベロニカを庇い石の姿になっていた

??? 「あら、庇ったのね。ふふ、美しいわ。守ろうとしたのに自分が無様な姿に変えられた人間の愚かさは、実に愉快だわ」

ベロニカ「くっ…… 私一人じゃ勝ち目が無いわ。ここで私まで石にされたら、皆にこの事態が伝わるのが遅くなる…… 逃げなきゃ!」

??? 「さあ、次はおちびちゃんの番よ。最後の一人なんだから楽しませてね」

ベロニカ「ルーラ!」

シユン!

??? 「あら、逃げちゃった。意気地なしなのね」

デルカダール城 玉座の間

バタン!

ベロニカ「マルティナさん! グレイグさん! ラース! 助けて!!」

マルティナ「べ、ベロニカ!? 一体どうしたの!」

ベロニカ「ハア、ハア。皆が……」

グレイグ「落ち着くのだ、ベロニカ。ゆっくり話してくれ」

ベロニカ「ハア。里の皆が魔物に石にされちゃったの!!」

二人「な!？」

ベロニカ「私とセーニヤは犯人の魔物を見つけて戦おうとしたんだけど、あいつ瞬間移動して私の背後に回ったの。その後、私が石にされそうになったのをセーニヤが庇ったの。セーニヤは、私の代わりに石にされてしまっ……」

マルティナ「それで私達に助けを求めに逃げてきたのね」

ベロニカ「私、里の皆やセーニヤが心配だわ！早く戻らないと！」

グレイグ「焦るな、ベロニカ。普段のベロニカらしくないぞ。まずは、その魔物に対抗する手段が必要だ。イレブン達に連絡してすぐに集まってもらおう。緊急事態だ、と言えはすぐに来てくれるはずだ」

ベロニカ「そ、そうね。ごめんなさい、グレイグさん。私、焦って

判断がおかしくなっていたわ。皆に連絡しましょう、レースはどこにいるの？」

マルティナ「レースは今訓練場にいるわ。私達は皆に連絡するから、ベロニカはレースに伝えてきて」

ベロニカ「わかったわ！」

訓練場

ベロニカ「レース!!お願い!里の皆やセーニヤを助けるのに協力して!」

レース「ど、どうしたんだ、ベロニカ。何があった」

ベロニカはレースに説明した

レース「それはまずいな!俺も急いで向かう!」

ダバン「あの、ベロニカさん!皆って言うのは、もしかしてミラさんやジェーンさんも石にされたんですか?」

ベロニカ「え?ダバンはミラとジェーンを知ってるの?」

ベグル「俺達、ジェーンさん達と友達になったんだ。その話、本当

か？」

ベロニカ「そうだったの。ええ、本当よ！里の皆は私以外、一人残らず石にされたの。ミラとジェーンも石にされてたわ」

ダバン「そんな!?あの！無理を承知でお願いがあるんですけど、俺も連れて行つてください！」

ベグル「俺も連れていってくれ！ジェーンさん達をそんな姿にした魔物が許さねえんだ！」

ベロニカ「……わかったわ。ラースが一生懸命育てた兵士達だもんね。バンみたいに戦力としてもありがたいと思うわ！私こそお願いするわ！力を貸して！」

二人「はい！」

数時間後

イレブン「これで全員揃ったね。ただ、僕今回は勇者の剣が大樹の中なんだ。

本当なら取りに行きたいんだけど、その魔物のせいで通れなさそうだし大樹も傷ついてるならまだそっとしておきたいや。少し攻撃力落ちるけど、ごめんね」

カミュ「それくらい大丈夫だ。こつちにはその分ダバンとベグルがいる。攻撃役が増えたんだから問題ないはずだぜ」

二人「よろしくお願いします！」

シルビア「ダバンちゃん、ベグルちゃん、よろしくね〜！二人と話すのも久しぶりかしら」

ロウ「そうじゃな。わしなんてまだラースが兵士長の時が最後だったはずじゃ。どれだけ強くなっておるか気になるわい」

ダバン「や、やばい。緊張してきた」

ベグル「バン、こんな中に混じってたのか」

マルティナ「ふふ、最初はバンも同じ事言ってたわ」

グレイグ「力む事などないぞ。いつも通りでお前達は十分強い。楽にしていくんだけぞ」

二人「は、はい！」

ライス「女のため、ねえ。へへ、カッコいい所、見せてやるんだぜ」

ペロニカ「それじゃあ行きましょう！」

ラムダを救え

聖地ラムダ 広場

広場の周りには石となった人達が集められていた

??? 「ふふ、いいわあ。こうやって石となった人間を眺めるのは。こんなにも美しいコレクションができるなんて」

ベロニカ 「皆を解放しなさい！」

??? 「あら、逃げた意気地なしのおちびちゃんじゃない。新しいコレクションを連れてきてくれたのね。嬉しいわ」

シルビア 「あなたが里の皆を石にした悪い魔物ちゃんね！絶対に許さないわよ！」

メーザ 「魔物ちゃん？うふふ、私はメーザ。そんな変な名前では呼ばないでほしいわ」

人間の姿をした魔物は自身の名前を答えた

ラース 「なぜこんな事をするんだ！」

メーザ 「なぜって私、石になった人間が大好きなの。見た目、肌触り、そしてその石を食べた時の満腹感。どれもが至福の一時なの。あ

なた達も私のコレクションにしてあげるわ！」

イレブン「くるよ、皆！僕とカミュとラースとおじいちゃんて立ち向かうから、他の皆は周りの石になった人達を広場からどかしていつて！」

全員「了解！」

メーザ「あまり舐めてると痛い目にあうわよ？ハア！」

メーザは人間のような姿から巨大な蛇のような魔物に変わった

全員「!？」

メーザがあらわれた

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

ラース「カミュ、バイキルトだ！」

カミュの攻撃力が二段階上がった

イレブン「アルテマソード！」

シュン！

メーザ「残念、無駄よ」

メーザは瞬間移動して避けた

ロウ「そこか、ドルマドン！」

シユン！

メーザ「うふふ。ほら、もつと頑張つて」

メーザは瞬間移動をした

メーザ「イオグランデ！」

メーザは尻尾でなぎはらってきた

カミュ「デュアルブレイカー！」

シユン！

メーザ「学ばないのね。あなたも石にしてあげる」

メーザは瞬間移動して避けた後、カミュの背後をとつた

メーザの目が怪しく光った

カミュ「な!？」バキバキバキバキ

振り向いたカミュは石になってしまった

全員「カミュ!!」

メーザ「まずは一人ね」

ラース「てめえ！ばくれつきやく！」

シュン！

メーザ「油断してると思ったのかしら？」

メーザは瞬間移動して避けた

イレブン「そっちこそ！アルテマソード！」

イレブンは瞬間移動先を読んで攻撃する

メーザ「キャツ！読まれてたのね。いいじゃない」

ロウ「ベホマラーじゃ！」

全員は回復した

メーザのおぞましいおたけび！

ラース「フォースブレイク！」

シュン！

メーザ「次はおじいちゃんの番」

メーザは瞬間移動して、ロウの目の前に現れた

ロウ「まずい！」

ロウは咄嗟に下を向く

メーザ「あら、下を向いたって無駄よ。はい、さようなら」

ロウ「ぬう!!」バキバキバキバキ

メーザはロウの頭を上げ、目を怪しく光らせた

ロウは石にされてしまった

イレブン「おじいちゃん!! 剣の舞！」

ラーズ「これはまずい！イレブン、俺は二人をどかす！マルティナ、ダバン、シルビア！交代だ！」

三人「了解！」

ラーズは近くのロウを持って避難する

メーザ「あら？持っていないでちようだい」

ラーズ「こつちに来るか！メラガイアー！」

シユン！

ラーズ「はっ！」

メーザはラーズの背後に回り、尻尾でなぎはらつてきた

ラーズ「ぐああ！」

メーザ「そのままお仲間を砕いてしまいなさい！」

グレイグ「ラーズ！まずいぞ！その先にはカミユの石像がある！」

マルティナ「ラーズ!!何とか立て直して！」

ラーズ「ぐうううっ！おりゃああ！」

ズキン！

ラーズは飛ばされながら体を捻り、カミユから僅かに離れた

ラーズ「ぐあっ！」ドサ！

ベグル「ラーズ將軍！流石です！」

ラース「ぐっ……足が……折れたか？」

ベロニカ「メラガイアー！」

シュン！

メーザは瞬間移動した

イレブン「ラース！無事!?無理しないでいいからね！剣の舞！」

シュン！

メーザは瞬間移動した

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上がった

ダバン「はやぶさ斬り！」

シュン！

メーザは瞬間移動して避けた

ラース「あ、ああ。足を挫いたみたいだ。悪い、二人は連れていくから後は頼んだ」

ラースは何とか立ち上がり、カミユの石像も持っていく

メーザ「そんな事させるわけないわよね？」

メーザはラースの前に現れた

ラース「くっ！」

全員「ラース!!」

メーザ「さあ、あなたもお隣のお仲間さんと同じにしてあげる」

ラース「ぐっ……」

マルティナ「駄目！ラース!!」ダツ！

メーザ「あら？目を瞑つても無駄よ。それ」

ラース「な!?……ジバルン」バキバキバキバキ

メーザが手を触れると、ラースは石になった

メーザ「はい、三人目」

マルティナ「ハア！さみだれ突き！」

メーザ「くうっ！」

マルティナ「間に合わなかった！」

メーザ「うふふ、焦らないで。あなたも必ず石にしてあげる」

メーザ「イオグランデ！」

ダバン「くっ！舐めるな！はやぶさ斬り！」

グレイグ「俺も行くぞ！天下無双！」

メーザ「キヤツ！あら？あなた達、いい男じゃない。それ、捕まえた」

ダバン「ぐうっ！」

グレイグ「な!?!くそっ…」

ベグル「くっ！ダバンとグレイグ將軍を離せ！アイスブレード！」

メーザ「あら、嫌だわ。そうれ！」

掴まれたダバンとグレイグ、目があったベグルは全員石になった

全員「!？」

メーザ「さて、お次は誰にしようかしら」

シルビア「やだ！アタシ達以外石にされた！もう……許さないんだから！」シルビアはゾーンに入った　ちから　魅力　身かわし率があがった

ベロニカ「里の皆を早く元に戻さない！」ベロニカはゾーンに入った　みのまもり　呪文の威力　暴走率があがった

マルティナ「ラース達を返して！」マルティナはゾーンに入った　素早さ　魅力　会心率があがった

イレブン「皆！必ず助けるからね！」イレブンはゾーンに入った　ちから　みのまもり　会心率があがった

イレブン「皆、いくよー！」

三人「えええ！」

四人の足元と上空に巨大な魔法陣があらわれ、全員で空にある魔法陣に魔力を使い雷を放つ！

四人「ミナデイン！」

メーザ「あら、凄い。でも、避けちゃえばなんて事…… え？ど、どうして!?は!!何よ、この地面！私の尻尾に絡んで…… 動けない！」

四人「ハアア!!」

メーザ「ギャアアアツ!!まだ…… やれ…… るわよ」

メーザは黒こげになりながらもまだ息をしている

ベロニカ「これでも駄目なの!？」

シルビア「イレブンちゃん、相手は虫の息よ！とどめを刺しましょう！」

イレブン「うん！ハア！」

ザシユ！

メーザ「あ、ああああ」ジュワー

メーザは倒れた

マルティナ「何とかなったわね。しかし、瞬間移動なんてどうやってそんな力を」

ベロニカ「あいつは命の大樹から力を奪っていたわ。その力の可能性があるわね」

メーザがいた所には輝く光があり、しばらく浮いていると命の大樹に向かって飛んでいった

シルビア「今のが、大樹ちゃん力なのかしら？」

イレブン「きつとそうだと思う。皆はいつ戻ってくれるのかな？」

数十分後

ベロニカ「皆！セーニャ！」

全員が石の姿から割れて元に戻った

セーニャ「お姉様！よかったですわ！」

長老「勇者様方、助かりました。石にされても私達には感覚はそのままでした。戦いの光景も見ておりましたよ。強敵相手でしたが、よく倒してくれました。お礼を言わせてください。本当にありがとう

「ごぞいました」

イレブン「いえ、この里の皆にはずっと助けられてたんで助けるなんて当たり前ですよ」

カミュ「悪いな。真つ先に石にされて足引つ張つちまったな」

シルビア「そんな事ないわ。あれは仕方ないの。皆も石にされてたの見てたんでしょ？」

ロウ「ラーズよ、石にされる直前のお主のジバルンバ。あれが無ければどうなっていたか。流石としか言いようがないのう」

グレイグ「そうだな。あれのおかげでイレブン達も倒せたようなものだ」

ラーズ「そんな持ち上げんなよ。俺もまさかあそこまで上手くいくとは思わなかったんだ。相手が油断してるのを突いただけさ」

マルティナ「ラーズ、足は大丈夫？」

カミュ「そうだぞ、兄貴。俺を無理に避けて足挫いたんだろ？」

セーニヤ「皆様！助かりましたわ。助けに来てくれてありがとうございます。ございます。ラーズ様、その足腫れてますわ。すぐに治しますね」

ロウ「わしも手伝うぞ」

ラーズ「悪いな、セーニヤ、じいさん。助かるぜ」

ミラ「ダバンさん！助かったわ！ありがとうございます！」

ダバン「いや、俺も石にされて情けなかったよな。助けに来たつもりが邪魔になっちまったかもな」

ミラ「そんな事ないわ。とつても勇敢だったわよ。それに、勇者様達と一緒に来たって事は実力を認められたって事でしょ？もつと胸を張っていいと思うわ！何にしてもありがとう！」

ダバン「へへ、ありがとな。俺も皆やミラさん達が無事で本当によかったぜ」

ベグル「ジェーンさん！怪我はないか!？」

ジェーン「あ、ベグルさん！はい！石にされただけで、特に怪我は

無いですよ！里の皆を安全な所まで運んでくれてありがとうございます！
ますー！」

ベグル「よかった……。俺、皆みたいにかかしたわけじゃないんだ。
付いてきただけみたいになっちまったな」

ジェーン「そんな事ないですよ！ベグルさんがいなかったら、私達
は戦闘に巻き込まれて粉々になってたかもしれません！

他の方達も大変そうでしたし、お仲間の方が思いっきり戦闘できた
のはベグルさんやグレイグさんが必死に皆を運んだからです！サ
ポートはすつごく大事なんですよ！」

ベグル「ジェーンさん……。へへ、ありがとな！そう言ってくれる
と嬉しいぜ！無事でよかった！」

ラース「おーい、ダバン、ベグル。帰るぞー」

二人「はい！」

ダバン「またお城で待ってるから！」

ベグル「また会いに来てくれよな！じゃあな！」

ミラ「ええ、ありがとう！」

ジエーン「また行きますね！」

ベロニカ「皆！ダバン、ベグル。里の皆を助けてくれて本当にありがとう！最初はどうなるかと思ったけど、やっぱり皆が合わされば何とかなるわね！」

セーニヤ「今回は何のお力にもなれず迷惑をかけてしまいました。ですが、石になっても必死に皆様を応援していました。またこの里にも来てくださいいね！」

イレブン「セーニヤ、気にしないで。僕も皆がいれば何だって大丈夫だと思うな」

ダバン「あれが勇者様達の戦い方なんですな！勉強になりましたよ！」

ベグル「そうだな！また帰って訓練して、皆さんに近づけるようになりたいですよ！」

カミュ「おいおい、まだ強くなるのか？兄貴の所の兵士達は皆どうなってんだよ。揃いも揃って化け物みたいな兵士がたくさん出てく

るぞ」

ラーズ「俺の自慢の兵士達だからな！どンドン強くなれよな！」

グレイグ「ハハ、頼もしいな。これならこの先も安心だな」

ロウ「ほほ。ええのう、若き者が強くなっていく姿は」

シルビア「ダバンちゃん、ベグルちゃん、立派だったわよ！あんな怖い魔物ちゃんにも怯まなかったじゃない！」

マルティナ「そうね。一緒に戦ったダバンも、仲間を助けようとしたベグルも勇敢だったわよ」

ベグル「ありがとうございます、シルビアさん、マルティナ様」

ダバン「勇者様の仲間に褒められると照れますね」

ラーズ「なら、俺の時ももっと照れろよな」

ダバン「ラーズ將軍はこう、慣れてしまつて」

ラーズ「なら、次から褒めないようにしよう」

ダバン「あああ！それは駄目です、ラーズ將軍！俺は褒められて伸びるタイプですの！」

ベグル「ラーズ將軍の指導で褒める部分を取ると残りは全部地獄ですよ！俺も褒められた方が嬉しいです！」

ラーズ「はいはい。そういう事にしといてやるよ」

全員「ハハハハハ！」

酒飲み

次の日、デルカダール城 大広間

ラーズが大広間に来るとカミュがいた

ラーズ「お、カミュ。泊まったのは知ってたがまだいたのか。今日も泊まってくれるのか？」

カミュ「なあ、兄貴。すげえ大事な話があるんだがバンも呼んでくれよ」

カミュは凄く機嫌がよさそうにしている

ラーズ「…… あー、何だ。俺、急用が」ガシ

ラーズの肩をカミュは思いつきり掴む

カミュ「呼んできてくれよな？」

カミュはラーズに殺気を出す

ラーズ「は、はい……」

訓練場

二人はカミュに正座させられていた

バン「えつとー…… 師匠に話ならわかるんですけど、俺にもなんですか？逃げたりとかしても」

カミュ「駄目に決まってるんだろ。なあ？何の話かわかってんだろ？」

ラース「少しイタズラしただけだ。まあ、そんな怒るなよな」

カミュ「反省ゼロか、てめえ。いい度胸だ。弟を怒らせるとどうなるか思い知らせてやるよ」

ラース「（あ、やべえ。これガチギレのやつだ）」

数分後

ラース「ぐふ……」

ラースはボコボコにされて倒れていた

カミュ「これで少しは反省しやがれ」

バン「し、師匠がボロボロに……」

カミュ「さて、次はてめえだ。バン」

バン「ま、待ってください、カミュさん！師匠はわかりますけど、俺

何もしてないじゃないですか！」

カミュ「マルスから聞いたぞ？誰がジャンボウニだったって？」

二人「ぶふっ……！」

二人は少し笑いかける

カミュ「心眼一閃！」

ラーズ「ガハ!!」ドサ

カミュはラーズを思いつきり斬り裂いた

バン「あ……。い、いや、それは師匠が言ったのが面白かっただけで、確かにそっくりだとは思いましたが、そんな事で」

カミュ「さあ、お仕置きの時間だぜ」

その後、医療部屋

ラーズ「痛つて、カミュのやつ、本気でやってきやがってよ」

バン「俺、悪くないのに……」

ラーズ「短気だな、あいつも。少しくらい大目にみるよな」

カミュ「兄貴のは大目に見切れねえんだよ」

バン「カミュさん！俺、ここまでされる必要ありましたか!？」

カミュ「兄貴の分のオマケだ」

バン「酷い!!」

ラーズ「怖い弟だな、全く。冗談も通じねえのかよ」

カミュ「兄貴のはどこまでが冗談なのかわからねえだろうが。マルティナから聞いたが、今日は兵士達も休みにしたんだってな。なら、俺に付き合ってくれよ」

バン「え？いいですけど、どこに行くんですか？」

ラーズ「デルカダールに用事があったのか？」

カミュ「いや、特に無いが酒を飲んでから帰ろうかと思っててよ」

ラース「お、行く行く。バンも行くぞぜ」

バン「はい!..... あ、待つてください!ギバも連れてきますね!
二人は俺一人だとキツイので!」

カミュ「ならこつちも増やすか。グレイグのおっさんはどうだ?」

ラース「いいねえ。声かけてみようぜ」

酒場前

ギバとバンは言い争っていた

ギバ「馬鹿野郎、バン!!俺を巻き込むんじゃねえよ!前みたいに酔い潰されるだろうが!!」

バン「俺一人が犠牲になってたまるか!!ギバも俺の負担を受け持つてくれよ!」

ギバ「嫌だ!!兵士長ならそこもしっかりしろよ!!」

バン「兵士長関係ねえだろ!!」

ガチャ

ラース「何騒いでんだ、お前ら。ほら、グレイグもいるぞ。早く来いよ」

バン「え？グレイグ將軍もいらっしやるんですか？」

ギバ「あ、それなら大丈夫かもしれねえ」

バン「何だよ！急に手のひら返しやがって！」

酒場

カミュ「お、バンとギバも来たか。じゃあ、乾杯といくか」

グレイグ「何もこんな昼前から飲む必要無かっただろう」

ラース「わかってねえな、グレイグ。飲みたい時に飲むのが最高なんだ、なあ？弟よ」

カミュ「だな。流石兄貴、よくわかってるな！」

グレイグ「言っておくが、お前達のペースでは絶対に飲まないからな。付き合っていたら俺まで明日二日酔いになる」

バン「俺もグレイグ將軍と一緒に飲みますよ！」

ギバ「俺も！」

ラーズ「何だよ、ノリ悪いな。まあいいけどよ。ほら、つまみもた
くさん頼んだから乾杯だな」

四人「乾杯！」

ラーズ「で？話は何だよ、カミュ」

バン「え？話なんてあったんですか？」

カミュ「流石にわかってたか。そろそろマヤが卒業なんだな。何か
お祝いしてやろうと考えてるんだ」

グレイグ「おお！もうそんなに経っていたか！早いな。この前入学
したばかりだったというのに」

ラーズ「確かにそろそろだったな。なら、何かパーティーを開こう
か！」

ギバ「いいですね！マヤもお城にきつと来てくれますし、お城で開きましようよ！」

バン「マヤちゃんって確か首席なんですよね？すげえなー」

カミュ「そうなんだよ。最初なんて字もまともに書けなかったからよ、凄い努力したんだぜ。王様に自慢するんだって言ってな」

グレイグ「マヤ……。なんていい子なんだ」

ライス「グレイグ、涙が出そうだぞ。まだ早いぞ。俺もお城でのパーティーは賛成だ。マルティナや王様にも声かけておこう。きつと喜んで開いてくれるはずだ」

グレイグ「そうだな。王は必ず開いてくれるはずだ」

カミュ「へへ、ありがとよ」

その後

グレイグ「この前、久しぶりにギバと戦ったが大分腕を上げていたな。特に、雷光一閃突きの狙い方が恐ろしいの一言だったな」

ギバ「本当ですか!? やったぜ!!」

バン「やったな、ギバ! 命中率上げたって言ってたもんな!」

ギバ「おう! バンも付き合ってくれてありがとよ!」

カミュ「相変わらず特訓しまくってるんだな。俺じゃあきつと敵わねえんじやねえか?」

ラース「カミュ、そんな事ねえはずだぜ。お前も最近旅の頃の間取り戻してるみたいじゃねえか。今度、ガザルと戦ってみたらどうだ? 同じブーメラン使いとしてよ」

グレイグ「おお! それはぜひ見てみたいな。カミュ、やってみてくれないか?」

バン「俺も気になります! カミュさん、お願いします!」

ギバ「カミュさんのブーメラン捌き見せてくださいよ!」

カミュ「兄貴……てめえ、断りにくい状況にしがたって」

ラーズ「へへ、いいだろ別に。だって、まさか勇者様の相棒ともあろう方がまさか普通の兵士に負けるはずないよなあ？」

カミュ「この兵士達は普通の枠組みには入らねえよ……………ハア。わかったよ。今度やってやるよ」

三人「おお！」

カミュ「偶には本気出してやりますかね」

ラーズ「やってやれよ、カミュ！バン達に俺は強いんだって所見せてやれよ」

バン「いえ、俺はさっきので十分身にしてみましたよ」

ギバ「何かあったのか？」

カミュ「こいつらが俺の事を馬鹿にしてるみたいだったんでな。少しばかりお仕置きしてやったんだ」

グレイグ「先程の訓練場からの激しい音はそれか。全く、ラーズもカミュを虐めるのはやめておけよ」

ラース「しばらくは控えよう」

カミュ「金輪際止めろ！」

バン「師匠！もう巻き込まないでくださいね！」

ラース「いいじゃねえかよ、バン。死なば諸共っていうだろ？」

バン「俺は死にたくないです!!」

バン達の出会

グレイグ「そういえば、ギバ達に聞きたい事があったのだ」

ギバ「え？俺達ですか？」

グレイグ「前に、俺とラースに感謝の意を込めてプレゼントをしてくれただろう？あれは急にどうしたのだ？」

ラース「それは俺も気になるな。ありがたかったが、何でだ？」

カミュ「そんな事あったのか」

バン「あれは、俺達が新入りの時からここまで強くなったのは二人のおかげだよなって話になって」

ギバ「そう。お二人は俺達の人生も変えてくれたんですよ。それで、俺が感謝としてプレゼントを考えてみないか？ってなったんですよ」

ラース「なるほどな。だが、俺は一番最初のお前達を知らないからな。グレイグ、バン達が新入りだった時はどんな感じだったんだよ」

グレイグ「随分と懐かしいな。バン達も覚えているか？」

バン「そりやあ忘れませんよ。初めてここにきて指導してくれる方がグレイグ將軍だと知って大興奮だったんですから」

ギバ「そうだよな。そういえば、初めての指導の時に俺はバンやダバンと知り合ったんだよな」

バン「ああ、そうだったな。偶然一緒になって話が合ったんだよな」

カミュ「へえ、中々興味深いな。他のマーズやベグルとはどうやって知り合ったんだ？」

グレイグ「マーズとガザルは確かその時はまだ入ってきていなかったはずだな。ロベルトはバン達より一つ上だったから新入りの所にはいなかったな」

ラース「ん？じゃあベグルは？」

ギバ「ベグルって確か、あの頃は今とは大違いな性格だったよな」

バン「だよな。隅で一人で練習してた記憶があるな」

グレイグ「そうだったな。俺もそれはよく覚えている。ベグルは他の者とするもうとせず、一人で黙々と練習していた。その分、あの頃のお前達より上手かったのだ。」

俺はなんとか周りど馴染ませたかったんだが、口下手なせいであまり助けになれなかったんだ」

ラース「へえ……。今とは考えられねえな」

カミュ「ベグルは何かあったのか？」

バン「俺達はそういう所、踏み込まないですよ。知られたくないならそれでいいって感じで」

ギバ「まあ、しばらくしてバンが確か無理やりこつちに連れてきました。ベグルが嫌がってバンの事殴ってるのに、こいつは全く構いなしで」

バン「あ、あれ？そうだったか？覚えてねえな！」

グレイグ「なるほど。急になじみ始めたからどうしたのだと思っていたが、バンのおかげだったか。ありがたい限りだな」

ギバ「ベグルはそれからバンの事を馬鹿呼ばわりしながら、俺達と一緒に訓練するようになったんだったな」

ラーズ「なるほど。今みたいな形になったのはそれが始まりか。流石バンといったところか」

カミュ「バンの性格のいいところが出てるな」

バン「へへ、ありがとうございます！」

その後

ラーズ「すまねえ、もう一本追加してくれ」

グレイグ「お、おい、ラーズ、カミュ。かなりのペースだが本当に大丈夫なのか？」

カミュ「俺達はいつもこんな感じだぜ」

バン「見てるこっちが胸焼けしてきそうですよ」

ギバ「ラーズ將軍なんて普通に料理頼んでるし」

グレイグ「全く、姫様から見張りを頼まれたのにこれじゃあ申し訳ないな。おい、ラーズ。姫様からも食べすぎ、飲みすぎはやめてほしいと言われているのだ。少し水でも飲んで休んでくれ」

ラーズ「マルティナから言われてるのか。なら、仕方ねえな。少し休んでますかね」

カミュ「じゃあその分俺が貰うぜ、兄貴」

ギバ「カミュさんもそろそろ休んでもいいと思いますよ」

ラーズ「いや、カミュには食わせてやれ。ほら、食べばもしかしたら身長がのび」バキッ！

カミュがラーズの顔を殴った

ラーズ「うぐっ……」

カミュ「ぶっ飛ばすぞ、てめえ！」

バン「ああ、カミュさん、落ち着いてください。お店では暴れないでくださいね！」

ラーズ「怖え、怖え。口が滑ったな」

カミュ「わざとだろうが！さっきのでも懲りてねえようだな」

グレイグ「ラーズ、あまりカミュをおちよくるなよ」

ラーズ「わかってるよ。俺だつてカミュにまたボコボコにされたくないんでね。悪かったな、カミュ。最近背が伸びたもんな」

カミュ「ハア？あからさまにおだててんじやねえよ。伸びてるわけねえだろ」

ラーズ「何だよ、伸びてるのは本当だぞ。武闘家でもある俺の間合いが間違つてるっていうのか？」

カミュ「……………いや、兄貴のその間合いの計り方は正確だもんな。わかったよ、伸びてるんだろうな」

バン「なら、俺と測ってみますか？結構身長は近かったですよね」

カミュ「そーいやそーうだな。バンは身長いくつなんだ？」

バン「俺は大体170くらいです」

カミュ「ならいい感じだな。立ってみようぜ」

ラース「お？カミュはバンより高かったがこんなに差あったか？」

ギバ「バン、お前カミュさんに結構負けてるぞ」

グレイグ「確かに、明らかカミュの方が高いな」

バン「えええ!?あれ?そんなに差ありましたっけ?」

カミュ「おお!やったぜ!本当に伸びてるみてえだな!」

ラース「遅めの成長期か?よかったな、カミュ」

昼過ぎ

カミュ「いやー、いっぱい飲んだな。楽しかったぜ!」

ラース「だな!カミュと飲むのも久しぶりだったもんな!」

グレイグ「ほぼお前達が飲んでいたようなものだろう」

バン「俺も楽しかったです！よかったらまた誘ってください」

ギバ「俺も他の仲間と行く時あったらラース將軍を誘いますね！」

ラース「おう！誘え、誘え！頑張って行くからな」

グレイグ「じゃあカミュ、マヤのパーティーの話はつけておくからな」

カミュ「ああ、頼んだぜ。じゃあな」

シヨツピング

二ヶ月後、ユグノア城 玉座の間

マルティナとラーズがお城にやってきていた

イレブン「待ってたよ、マルティナ、ラーズ。いらっしやい。色々お話しようよ」

ロウ「来させてしまつてすまんかつたのう」

マルティナ「いいのよ、イレブン、ロウ様。名目は魔物の調査報告と協力の申請だけど、少しくらいお話ししましょう」

ラーズ「そうだぜ。少し楽にして色々話そうぜ。互いの近況とかさ」

ロウ「グレイグやデルカダール王も呼んでよかつたのじゃぞ」

イレブン「そうそう。子ども達やブレイブとかもさ」

マルティナ「まあ、そうなんだけど……」

二人「？」

リース「俺がマルティナと二人がいいって言って断ってきたんだ！」

ロウ「ほほ、相変わらず仲良しじゃのう」

イレブン「本当だね。でもそういう時間も大切だもんね」

イレブンとロウも優しそうに笑っている

マルティナ「も、もう！お父様やグレイグも暖かい目になって送ってくれたけど恥ずかしいっいたらないわ。あんなに堂々と断らないでほしいわよ」

リース「えー、いいじゃんかよマルティナ」

マルティナ「ほら！この話はおしまい！すぐに本題は終わらせて、またユグノアの観光したいわ」

イレブン「そうだね。それじゃあ報告だっけ？お願い」

リース「おう。俺達、デルカダール地方やデルカコスタ地方、さらにダーハル―ネ近辺で調査した所、昔とは魔物の性格が変わってきているのが明らかになったんだ」

ロウ「ほう。なぜそんな事を調べたんじゃ？」

マルティナ「ブレイブの件もそうだけど、ブレイブの群れの魔物達やダバン達やマルス達の話からも、魔物は優しい者達が多いんじゃないかと思ったの」

ラース「前までは、魔王や邪神の影響を受けて世界中の魔物が凶暴になっていただろ？そいつらがいなくなつて、凶暴になつていたやつらも本来は優しい魔物だったんじゃないかと思ってるんだ」

イレブン「なるほどね。その仮説を本当か確かめるために調査をしたのか。そして、それは本当である可能性が出てきた、と」

ロウ「その仮説を広げるために、わしらにも協力をお願いしに来たというわけか」

マルティナ「はい。いきなり各地で調査するよりも、まずは一部の国から始めていったほうがいいかと思ひまして」

イレブン「確かに僕達がいるユグノア地方でも魔物によって怪我したつていう知らせは少ないね。僕は賛成だけど、おじいちゃんはどう？」

ロウ「イレブンが賛成ならわしも問題ないぞ。わしも興味あるのう。それがわかれば、民達にも魔物をそこまで怖がらなくてもいいという考えを持つてくれるやもしれん」

ラース「ありがとな、じいさん、イレブン。ただ、元々凶暴なやつだっているのは確かだ。そこは間違わないでほしい」

ロウ「そうじゃな。そこはわかっておる。ただ、安全な魔物とそうでない魔物で分ければ旅人にも判断しやすくなるじやろう」

マルティナ「よろしくお願いします、ロウ様」

その後

イレブン達は話に盛り上がっていた

イレブン「それでね、その時にカミュが」

ぐうううう

大きな音が響いた

全員「……………」

全員がある人を見た

ラース「……………わ、悪かったから皆でこっち見るな。流石に恥ずか

しくなるだろうが」

ラーズは少し耳が赤くなっている

ロウ「ふおつふおつ、少し長く話しすぎたようじゃな。どれ、お昼にしようかの」

マルティナ「ごめんね、ラーズ。盛り上がりすぎたわね」

イレブン「大きな音だったね。いつから我慢してたの？」

ラーズ「うるせえ……。あまり弄らないでくれ」

ロウ「城のご飯と城下町のご飯、どっちがいいかの？」

ラーズ「城下町で食べようぜ！」

マルティナ「急に元気になったわね。私もそれがいいわ。折角ユグノアに来たんだもの」

イレブン「じゃあコックさんにご飯はいらないうって伝えてくるね。下で待ってて」

酒場

ラーズ「おお！ユグノアの料理つてのは食べた事があまり無いんだ！少し珍しいのがあるな！」

マルティナ「お肉がメインなのね。そういえば、ユグノア牛ってブランド物よね」

ロウ「そうじゃな。ユグノアの広い草原で育てておるのじゃ」

ラーズ「じゃあ、取り敢えずこのメニューの右から左まで全部頼むぜ！」

イレブン「えっと……ラーズ？それはまさか一人で食べるの？」

ラーズ「腹が減っては何とやらってな！」

マルティナ「ハア。まあ、今日は許すわ。朝は少し忙しくておかわりできなかったものね」

ロウ「なんと。ラーズがおかわりできんとは。ならば、先程の大きな音も納得じゃな」

イレブン「僕はラーズから少し貰おうかな。見てるだけでお腹いっ

ばいになる気がするよ」

ラーズ「まあ、一品くらいならやるよ」

しばらくして

ラーズ「おお！美味え!!」

ラーズの所にある料理はあつという間に無くなっていく

マルティナ「つくづくラーズの胃袋ってどうなってるのか不思議に思うわ」

イレブン「ふふ、幸せそうだね。そういえば、大食いコンテスト的なものは各地で行われてるけどラーズはそういうのには興味あるの？」

ロウ「イレブンから聞いたが、数年前にダーハル―ネでの大食いコンテストとやらで優勝していたらしいのう」

ラーズ「一人旅の頃はお金集めで出場したこともあったが、今はさっぱりだな。まあ興味はあるから出れるならまた出てみたいけどな」

マルティナ「まあ、そうしたらまた体を動かす時間を増やさないとね」

ラース「それはもちろんわかってるぜ、マルティナ！」

イレブン「それなら丁度いいや。実はね、ユグノアでも僕らが主催で大食い大会を開こうと思ってるぜ」

ラース「よっしゃ！俺は出るぜ！」

マルティナ「返事早いわよ。もつと予定とか考えて」

ロウ「目的は旅人や民達に盛り上がりつてもらおうというものじゃから、大勢いてくれると助かるんじや。それに、ラースの食いつぶりなら見てる方も盛り上がるじやろう？」

イレブン「時期は三ヶ月後くらいなんだ。どうかな？」

マルティナ「まだ確実な予定はわからないけど、出たいなら行ってもいいわよ、ラース」

ラース「よし！マルティナからの許しも出た！後は仕事が少ないければいいんだが」

イレブン「どうせなら僕達でグループで出てみる？最大四人までなんだ」

マルティナ「ええ!?!私は流石にもう難しいわ。あまりお城から離れられないの」

ラース「そうだよな。残念だ」

ロウ「わしも大食いができる年ではないからのう。じゃが、イレブンが出たければ他の皆を誘ってみてはどうかの?」

イレブン「そつか。グレイグとかラースクラスではないけどたくさん食べる方だよな」

ラース「人を段階分けみたいにするなよな」

マルティナ「でも、スイーツじゃないからセーニヤ達は無理だし、シルビアやカミュもあなた達ほどじゃないものね」

ラース「カミュにこの前の仕返しとして、無理に食わせるのも……。いや、やめておこう」

マルティナ「何かくだらない事考えてるでしょ。駄目よ」

ラーズ「ぐっ……。最近マルティナが俺の思考回路を読み取ってるんだぜ、すごくないか？」

ロウ「ふおっふおっ、妻だからこそ為せる技じゃな。よい事ではないか」

イレブン「じゃあ一先ず三人にしておこうか。また予定変わったら教えて」

ラーズ「おう！」

その後

イレブン「そういえばね！商店街の店の一つに、ダーハル―ネからの支店を入れたの！すごく人気だからマルティナ達も買っていきなよ」

ラーズ「お！それはいいな。ダーハル―ネに行かなくてもそこのお菓子を食べられるなんて凄いいじゃないか！」

マルティナ「それはいい考えね、イレブン。私達もやってみましよう」

ロウ「ぜひデルカダール王にお土産として買っていってくれ」

ラース「じゃあ早速行ってみるか」

お菓子屋

店員「いらつしやいませー！つて、ああ！イレブン様、ロウ様！それにマルティナ様にラース様!?よ、ようこそ！狭い場所ですがぜひ見ていってください！」

イレブン「アハハ、突然でびっくりしたよね。お客さんの皆もごめんね。気にしないで」

ロウ「わしらがどの店に入っても似た対応じゃのう。気にせんでいいのに」

マルティナ「まあ、仕方ないのかもしれないわね。私達もデルカダールでは似た対応だわ」

ラース「俺はもう皆に慣れてもらったけどな」

マルティナ「ラースはこういう対応苦手なものね」

店員「もしよかったらこのユグノア店限定のモンブランを買ってみ

てください！私達の自慢の一品なんですよ！」

ラーズ「ほう。栗か、いいな。美味しそうだ」

店員「ラーズ様、ありがとうございます！」

マルティナ「子ども達にも買っていきましょう。甘いケーキとかはあるかしら？」

店員「それでしたら、こちらの動物を真似たケーキや食べやすいマカロンなどがオススメです！」

マルティナ「あら、動物のは可愛いわね。これにしようかしら」

イレブン「おじいちゃん、マカロンだって！前に僕が失敗したやつ！」

ロウ「ほほ、あれはあれで美味しかったぞ。わし達も買っていくかのう。マカロンとモンブランをお願いできるかの」

店員「ありがとうございます！すぐにをご用意いたします！」

その後

ラーズ「そういえば、コロが最近色々噛むようになってきたよな。何か固いものとかで代用できないだろうか」

マルティナ「そうよね。前は机の足がボロボロになっててブレイブが怒ってたわよね」

ロウ「大きくなっている証じゃな。固いものか……」

イレブン「あ！固いロープなんてどうかな？遊び道具としても使えそうだよ」

ラーズ「なるほど、それはいい案だな。ロープも買っていくか」

夕方

マルティナ「最後はショッピングみたいになっちゃったわね。でも、ユグノアも大分大きくなって何でも揃うようになったのね」

ロウ「民達に不便な思いはあまりしないでほしいからのう。わし達が皆の声を聞いているんじゃない」

ラーズ「流石じいさんだな。俺達も学べる事が多い。俺も今度町に言って聞いてみるとするぜ」

イレブン「結構好評なんだよ。ぜひやってみなよ。また遊びに来て。待ってるから」

マルティナ「ええ。イレブン達もいつでもデルカダールに来て。歓迎するわ」

民達の要望

二日後、デルカダール城下町 広場

ラースは周りの皆に集まってもらっていた

ラース「皆ー！少し聞いてくれるか？俺達はこれからこの町をよりよくしていこうと思っっている。

だが、俺達だけの目線では限界を感じたんだ。だから、皆の意見がほしい。

例えばここをこうしてほしいとか、直してほしい場所とかだな。何でも構わないぜ。

何か意見があつたらこの要望書に書いて、城の大広間にある要望箱にに入れてくれ。

書き方の例としてはこんな感じだ。例えば俺の意見。デルカダールにいてもダーハル―ネのスイーツが食べたい。

この意見に対してのマルティナと王様からの回答は、ダーハル―ネと相談して支店を用意してもらおう。ただ、多くはできない。との事だ。

これは一例だから実際には無いが、もし皆からこの意見が多ければ採用して本当に町に支店を作ってもらおうつもりだ。

採用された意見は決まり次第、町に張り出すからな。それで決定するかどうか判断してくれ。何でもいいからなー！」

女性「え？じゃ、じゃあ、お店を増やしてもらえたりとかも考えてもらえるんですね!？」

ラース「おう。どんな意見も検討は必ずするぞ。どうなるかはわからないけどな。ただ、極力叶えてやりたいからな。

箱は早速城に置かれてるぞ。用紙もそこにあるし、お城の前にもあるしこの広場にも置く。皆、頼んだぜ」

次の日、デルカダール城 大広間

ラース「うわ。もう結構あるな。マルティナ達に持っていかない」と

玉座の間

ラース「マルティナー、もうこんなにあつたぞ」

マルティナ「あら！かなりあるわね。十枚どころじゃないわね。それじゃあ少し話してお父様にも連絡しましょう」

ラース「まずはこれだな。えっと、ダーハルルーネの支店がほしい。これは大丈夫だもんな。同じ意見は飛ばしていくぞ。

次、忙しい日に子どもを見てほしい。どうする?。」

マルティナ「子どもを見ていたい気持ちはよくわかるわ。危ない事とかしてないか不安なもの。でも、私達に何かできるかしら？」

ラーズ「兵士達に頼むのも違うしな。うーん……。」

一部屋に集めて、そこでマルス達やコロと遊ぶって感じでブレイブが監視役としているってのはどうだ？」

マルティナ「悪くはないけど、毎日は無理よ。私達にだって都合があるわ。ただ、一月に何回かなら大丈夫だわ」

ラーズ「じゃあその日を決めて、その日に預かってほしい子がいたら、そうしてみるか？お試しも兼ねてやってみてもいいかもな」

マルティナ「ええ。大事な意見なもの。そのまま反映は出来ないけど、少しでも力になればいいと思うわ」

ラーズ「じゃあ次だな。案内板とかがあると旅人にも便利だと思う。なるほど。それもそうだな」

マルティナ「これはいい意見ね。早速取り掛かりましょう」

ラーズ「よし、次だな。周辺の魔物の事を教えてほしい。旅人や私達が外に出る時に今日はどんな魔物がいるのか、などがわかると凄く

いいと思う。ほー、これもいい意見だな」

マルティナ「でも、どうやるの？口では無理じゃない？」

ラーズ「そうだな………。よし。これも掲示板みたいにして広場前に置こう。

俺達が毎日やってる見回り時の魔物チェックに、どんな魔物が多いかを同時に調べるんだ。それを帰り際に記せばいいんじゃないか？」

マルティナ「なるほど。それはいいわね。ただ、雨とか降ったらどうするの？紙だと濡れて見えなくなっちゃうわ。

それに、毎日書くのも大変じゃない？忙しい時もあるでしょ？」

ラーズ「それはどうでしょうか。濡れても問題なければいいんだよな」

マルティナ「あ！じゃあ、ここら近辺の魔物の絵を板に書いてそれを切り替えていきましよう！

そうすればわかりやすいし濡れても平気だし、すぐに変えられるわ！」

ラーズ「おお！名案だな！採用しようか。次は俺達や子どもにも剣

や魔法を教えてほしい。お、いいねえ。強くなろうとするのは歓迎だな」

マルティナ「でも、相手は一般人や子どもよ？そんなすぐに教えられないわよ」

ラーズ「これは月に一度程度で、兵士達が町に教えに行くんだ。教える内容は護身術や魔法の基礎だ。

その程度なら普通の人達でも出来るからな。どうだ？」

マルティナ「私はそれでもいいと思うけど、バン達にも相談してみないと」

ラーズ「兵士達が町の人と交流ができるいい機会でもある。悪い話じゃないと思うけどな。

まあ、次だな。酒場を増やしてほしいです。それはどうだろうか」

マルティナ「これは少し難しいわね。私達で作っても、お店を営む人って意外と見つからないのよね。

スイーツ店もそうだけどアテが無いと難しいのよね。少し保留にしておきましょう」

ラーズ「これで最後だな。ブレイブ君やコロと遊んでみたい。これなら大丈夫だろ」

マルティナ「何も問題ないわね。町の人もブレイブ達に慣れてきたみたいだし、町を前よりも多めに歩かせてみましょう」

ラーズ「結構あつたな。まあ、これが続けていこうぜ。きつと皆喜ぶはずだ」

マルティナ「そうね。民達の声は大事だわ。お父様に内容を伝えてくるわ」

ラーズ「じゃあ、俺はバン達に護身術指導の件を聞いてくるな」

その後

マルティナ「お父様も納得してくれたわ。それで試してみただって。掲示板と案内板はすぐに作ってくれるように頼んだそうよ」

ラーズ「俺もバン達が交代で行く事になった。問題無さそうだな」

マルティナ「少し忙しくなるわね。でも、皆が喜んでくれるならこの努力は惜しまないわ」

レース「ああ、頑張ろうな」

友達だから

一ヶ月後、デルカダール城下町

ミラとジェーンがやってきていた

ミラ「また来れたわね。ダバンさん達は元気かしら？」

ジェーン「きつと元気に訓練してると思う。宿をとったらお城に向かってみよう」

その後、デルカダール城

ジェーン「案内板なんてできたんだね。おかげで助かっちゃった！」

ミラ「そうね。魔物の掲示板なんてのもあったし、どんどん新しくなってるみたいね」

ジェーン達が城に入ると、丁度バンが大広間にいた

バン「ん？あんた達は確か、ダバンとベグルの友達の……」

ジェーン「あ！前に訓練場で見た兵士さん。こんにちは。ベグルさんとダバンさんはいますか？」

バン「あー、ダバンはいるんだが、ベグルは今調査の関係で故郷の

ダーハルーネに行ってるんだ。とりあえず、ダバンを呼んでくるな」

しばらくして

ダバン「ジエーンさん！ミラさん！来てくれたのか！」

ミラ「あ、ダバンさん！久しぶりね」

ジエーン「また突然すみません。ベグルさんはダーハルーネに行ってるみたいですね」

ダバン「いや、気にすんなよな。顔を見れて嬉しいぜ。ベグルのやつはそうなんだ。すまないな。また案内しようか？」

ミラ「今日はお休みなの？」

ダバン「特に大きな仕事は俺は無いからな。平気だぜ」

ジエーン「じゃあお願いします！今度は買い物したくて！」

ダバン「おお、いいぜ。なら、こつちだな」

服屋

ジェーン「凄いわよ、ミラ！こんなにいい質なのになんか安いの！」

ミラ「あら！本当ね！折角だし買いましよう！これならあのバッグとも似合うわ！」

ダバン「(服などに興味あり……と)」

アクセサリーショップ

ミラ「う、うーん……。綺麗なんだけど、やっぱり私達じゃあ手が出せないわね」

ジェーン「お金もつと貯めないとだね。諦めよう。アクセサリーはそこまではいいわけじゃないし」

ダバン「(アクセサリーはプレゼントとしてなら喜びそう……)」
「しばらくして

ダバン「ジェーンさん。その服も持つぜ。宿屋に持っていくよ」

ジェーン「え!?そ、そんな悪いですよ、ダバンさん。もう片手埋まってるじゃないですか！」

ダバン「いやいや、力はこういう所でも使わないとな。よつと」

ミラ「流石兵士さんね。私達なんかよりずっと力持ちだわ。カッコイイわ」

ダバン「へ、へへ。ありがとな」

ジェーン「なら、宿屋に来てください！お礼もしますよ！あ、お茶を出す程度ですけど」

ダバン「それならもらっていいのかな。案内頼むぜ」

宿屋 部屋

ダバン「俺まで部屋に入っているのか？」

ジェーン「はい！寧ろ一緒に休憩しましょうよ！私、下でお茶入れてきますね！」

ミラ「あ、ジェーン！一人で平気!?火傷に気をつけて！」

ジェーン「わかってるよー、ミラ！」

ダバン「ハハハ！相変わらず仲良しなんだな、ミラさんとジェーン

さんは。幼なじみなんだもんな。昔から仲良しだったんだろ」

ミラ「あら。そう見える？」

ダバン「ん？違ったのか？」

ミラ「……あまり言いたくないけど、実は私は昔、あの子をいじめてたの」

ミラが少し言いにくそうにしている

ダバン「え？ミラさんが？」

ミラ「ええ、そうよ。子どもの頃の私はお馬鹿さんでね。ジエーンってよく笑ってるでしょ？ジエーンは昔からよく笑ってたの。私、ジエーンがいつも笑顔なのが怖かったの。」

だから、私はあの子の無い事をたくさん言って周りの子をあの子から遠ざけてたの。そうすれば悲しむんじゃないかなんて馬鹿な事を考えて」

ミラは椅子に座り、下を向きながら話している

ダバン「……」

ミラ「でもね、ジエーンはそれでも笑ってたの。一人で森で遊んで

る時も、本を読んでもる時も。怖かった私は……あの子に暴力を振るったわ。化け物って言うてね。

ジェーンは悲しそうな顔をしていたし、私を怖がっていた。でも、歪でも笑顔は絶やさなかったわ。それから少し経って、私の父が浮気で離婚したの。

その時の親同士の喧嘩は怖くてね。家に一日中帰れなかったのよ。それで雨の中、外で一人で泣いてる時ジェーンが来たの。

ジェーンを殴ったり、暴言を吐いていた私を馬鹿にしに来たと思っ
ていたら、ジェーンは私を傘に入れて自分の家に招いてくれたの」

ダバン「……………」

ミラ「ジェーンの行動がわからなかった私は「どうして優しくしてくれるの？私にはあなたをいじめたのよ」って聞いたわ。その時の答えは、今でもはつきりと覚えてるわ。絶対に忘れない。ジェーンは、「泣いていたから。ミラが悲しそうだったから」って言ったの。

その後、「何か嫌な事があつたんだよね？私もつらい事があつたら泣きたくなる。でもね、死んじゃったおばあちゃんが、つらい時こそ笑いなさい。そうすれば力が湧いてくるって言った。

だから、私はつらい時こそ笑うの。ミラもつらいなら少しでも笑ってみてよ」って言われたの」

ダバン「なるほど。ジェーンさんの笑顔にはそんな意味もあつたの

か」

ミラ「それを聞いた私は、自分がどれだけ愚かな事をしていたか思
い知ったの。あの子の笑顔は強さの証。それを怖がっていた自分は
何て馬鹿なの、ってね。それから私はジェーンに謝って友達になっ
たの」

ダバン「そうだったのか。昔は今と真逆だったんだな。何だか聞い
て悪かった」

ミラ「ううん。私こそ変な話したわね。私の事、嫌いになったん
じゃないかしら？ジェーンだって、内心はどう思っているのかしら。
きつと、昔の事を憎んでいるかもしれないわね」

ダバン「ミラさん、安心するんだ。俺はミラさんを嫌いになんて
なっていない。ジェーンさんだって、ミラさんを嫌いになんて思っ
てないはずだぜ」

ミラ「お世辞をありがとう。正直に言ってよかったのに、ダバンさ
んだったら本当に優しいのね」

ダバン「お世辞なんかじゃない!!」

ダバンははつきりと言った

ミラ「え……。そ、そんなわけないでしょ、ダバンさん。だって……私……最低な事したのよ。人をいじめて……暴力を振るった。こんな最低女を、嫌いにならない人なんて」

ダバン「ミラさん!!」

ダバンはミラの言葉を遮った

ミラ「!!」

ダバン「自分の事を最低女なんて言うな!!ミラさんは最低なんかじゃない!!自分の悪い所を理解して、それを謝罪してジエーンさんの助けになり続けている!そんな事ができる人は多くないんだ!」

そんな優しいミラさんを、嫌いになんてなるわけないだろう!!」

ダバンはミラの肩に両手を置き、強く言い放った

ミラ「ダバンさん……。でも、私は何も無いあの子を傷つけた!!それは揺るがないわ!私はそんな自分が……許せないのよ!この罪は、あの子が幸せになるまでずっと背負い続けるの!そう誓ったわ!!

私は!!ジエーンが幸せになればそれでいいの!!自分なんて後回しよ!あの子には、それだけの事をした!!夢も目標も全部捨てた!ジエーンの幸せのためなら、私は何だってやってやるんだから!」

パライイン!!

部屋の前から何かが割れる音がした

二人「!？」

ジェーン「ミ……ミラ。何で……そんな事言うのよ……」

ミラ「ジェーン!!大丈夫!?怪我は!？」

ミラはジェーンに駆け寄った

ジェーン「そんなのどうだっていいの!!ミラ!!あなたの小さい頃の夢を、私のために捨てたって本当なの!!？」

ミラ「そ、そうよ。私はあなたに救われたあの雨の日から、考古学者の夢を捨てたわ」

ジェーン「何ですよ!!私……そんな事ミラに頼んでない!!私は……確かにミラがいないと何もできないけど、そのためにミラが犠牲になるなら!私は大丈夫!!ミラがいなくても何とかかなるわよ!」

ジェーンは泣きそうになっている

ミラ「でも、私はジェーンのためを思って」

ダバン「ミラさん。その行動は間違っている。誰かの為を思って行動するのはとても素晴らしい事だ。だが、誰かの思いを踏みにじってまで行動するのは違う」

ミラ「え？私は…… 誰の思いも踏みにじってなんて」

ジェーン「ミラの馬鹿!!馬鹿!!馬鹿!!私、そんな事されたって全然嬉しくない!!寧ろ最悪よ!!私は、ミラに幸せになってほしいの!!夢を叶えてほしかったの!!この旅は私の夢だけじゃなくて、ミラの夢のためでもあると思ってた。ずっと…… そう思ってたんだよ……」

ミラ「嘘……。だって…… 私は、あなたを傷つけたのよ。心にも、体にも傷をつけた。何で…… そんな事を思ってくれるのよ」

ジェーン「何で？そんなのもわからないの、ミラ！私達、友達じゃないの!？友達の幸せを、どうして願っちゃ駄目なのよ!!」

ミラ「友達……」

ダバン「ジェーンさんはずっと、ミラさんを嫌いになってなんかいないんだ。寧ろ逆だ。ジェーンさんはミラさんの事が大好きなんだぞ」

ジェーン「そうだよ！私はミラの事が大好き!!真面目で、しっかりしてて、私を守ってくれる大事な、大事な友達！嫌いになんて絶対にならないんだから！」

ミラ「ジエーン……私、ずっと間違ってた。あなたを守り続けていれば、それでいいと思ってた。私、馬鹿ね。ずっと隣にいたあなたの思いすら気づかないなんて。本当に、馬鹿」

ジエーン「本当だよ！もう、勝手に勘違いしたら駄目だからね！私、すっごく悲しかったんだから！はい！仲直り！」

ミラ「ええ。仲直りね。私も大好きよ、ジエーン」

二人は泣きながらも抱き合っている

二人とも顔は少し笑っている

ダバン「ミラさん、やっといつもの笑顔になってくれたな。俺はミラさんのどんな顔も好きだが、笑顔が一番好きだぜ」

ミラ「え……。あ……ありがとう」

ミラは顔が赤くなっている

ダバン「あ……。い、いや、これはその、変な意味じゃなくてだな……」

ダバンも自分の発言に気付き、顔が赤くなっている

ミラ「え？……ち、違うんですか？ダバンさん」

ダバン「……………。いや、もう正直に言おう。ミラさん。俺はミラさんが好きです」

ミラ「ダバンさん……………。何となく、そんな気はしてました。でも、私なんかでいいんですか？」

ジェーン「あー！駄目だよ、ミラ！また卑屈になってる！」

ダバン「そうだと、ミラさん。俺はミラさんじゃないと嫌だ。ミラさんのその優しい心が、俺は何よりも好きなんだからな」

ミラ「私も…………。ダバンさんが好きです。ソルティコで助けてくれたあの日から、ずっと気になっていました」

ダバン「ほ、本当か!?じゃ、じゃあ！付き合ってもらっても…………」

ミラ「はい。よろしくお願いします」

ダバン「よっし!!!しゃあ!!!」

ダバンはガッツポーズを取っている

ジェーン「やったね、ミラ!!私、めっちゃくちゃ嬉しいよー！」

ミラ「も、もう!どうしてジェーンがそんなに喜ぶのよ!」

ジェーン「だって、ずっと気になってるって前かモゴモゴ」

ジェーン「言葉をミラが口を押さえて遮ろうとした」

ダバン「え……。へへ、嬉しいぜ、ミラさん」

ミラ「もう!付き合っただから、そのよそよそしい呼び方お互いにやめましょう!ミラって呼んで。私もダバンって呼ぶわ」

ダバン「へへ、そうだな!これからよろしくな、ミラ!」

ミラ「ごっちこそよろしく、ダバン」

バン対ベグル

それから一週間後、デルカダール城

訓練場

ダバン「盾は構えるだけよりも、少し手首の力を抜いてもっと軽く動かせるようにした方がとっさな時にも反応しやすくなるぞ」

見習い達「はい！」

ロベルト「ダバンのやつ、張り切ってるな」

ギバ「あの姉ちゃんと結ばれたらしい。くっそ！羨ましいぜ！」

マーズ「それに比べて、あつちといたら」

別の場所ではベグルとガザルが模擬戦をしていた

ガザル「おい、ベグル！お前やる気あるのかよ！」

ベグル「……悪かったな。少し、気が抜けてた」

ガザル「少し!?俺の攻撃を避けもしないで突っ込んでくるなんて、何考えてんだよ！」

ベグル「悪かったってば」

ギバ「ダーハル―ネから戻ってきたらあれだぜ。また酷くなってるな」

マーズ「そんなにダバンが悔しいのか、あの美人さんとすれ違ってしまったのが相当きてるのか。はたまた、関係ない事か」

ロベルト「おい、バン。兵士長としてもこれ以上は流石に見過ごせないんじゃないか？」

バン「…… そうだよな。わかった。後で少し話してみる」

夕方 訓練場

ベグル「……」

ベグルは一人で立っていた

バン「やっぱりここにいたな、ベグル」

ベグル「…… バンか。何だよ」

ベグルはバンを見ないで反応した

バン「その位置だよな。初めてお前と俺が喋った場所はよ」

ベグル「…… そうだったな。今も昔も、馬鹿なのは変わらねえな」

バン「どうしたんだよ、最近。おかしかったのがさらに酷くなって
るぞ。まるで、初めて会ったあの時のベグルを見てるみてえだ」

ベグル「本当にそうだと言ったら？」

バン「は？何言ってるんだよ、お前。ベグルはいつものベグルだろ」

ベグル「俺はここで甘い空気を吸いすぎたみたいだ。元はそんなつ
もりなかったのによ。だが、もう入れ替えてきた。悪いが、俺はお前
達とはいれねえ。そろそろここを辞めさせてもらおうと思ってるん
だ」

バン「何言ってるんだよ、ベグル。勝手に話進めんなよな。辞めるの
も俺が納得して、師匠が許してからだ」

ベグル「前のお前みたいに、突然辞めてもいいんだろ？」

ベグルはバンを見た

バン「……………本気か？ベグル」

ベグル「この目が嘘に見えるか？」

バン「見えねえ。だが、何でだよ！何があったんだ！」

ベグル「お前らには関係ねえ事だ。さあ、この話は終わりだ」

ベグルは去っていくようにする

バツ！

バンはベグルの前に出た

ベグル「……………何のつもりだ、バン。どけよ」

バン「どかねえ！お前から理由を聞いて納得するまで絶対にどかねえ！」

ベグル「どかねえ……………だと？いつから俺のおもちやは俺に楯突くようになったんだ？ああ？」

バン「お、俺はお前のおもちやじゃねえ！少し弄るくらいなら気にしねえが、今回はその話は無しだ！さあ！理由を話せ！どうしても言わねえんなら力づくでも言わせて見せるぞ！」

ベグル「忘れたのか？初めてここでお前と戦った時の結果をよ。俺にポッコボコにされて地に這いつくばって動けなくなってただろうが。そんなお前が俺に敵うと思ってるのか？」

バン「それは昔の話だ！今は、俺だってベグルに負けねえくらい強くなった！戦うってんなら相手になるぞ！ベグル！」

バンは戦闘態勢に入った

ベグル「ハア。まあ、お前はそうでもしねえと退かねえよな。なら、昔と同じようにしてやるよ！」

ベグルも大剣を向けた

バン「せいけんづき！」

バンはベグルに向かっていく

ベグル「渾身斬り！オノ無双！」

ベグルはバンに近寄せない

バン「危ねえ！しんくうげり！」

ベグル「ソードガード」

ベグルは攻撃を防いだ

バン「なら、ばくれつきやく！」

ベグル「全身全霊斬り！」

ベグルは攻撃を防ぎながら大剣で足ごと斬ろうとする

バン「マ、マジかよ！足、叩き切る気かよ！」

ベグル「隙を見せるなんて随分舐められたな。アイスブレード！」

ベグルの攻撃がバンに直撃する

バン「ガアアアッ！なっ!?し、真剣!？」

バンの体からは本当に血が出ている

ベグル「何だ、気付いてなかったのかよ。俺は本気だ」

バン「ぐっ……。何でこんな事を」

ベグル「お前は終わりか？なら、もっといかせてもらうぜ。渾身斬り！」

バンを狙って大剣が振り落とされる

バン「危ねえ!!おい！それはシャレにならねえ！真剣なんて聞いて

ねえぞー！」

バンは必死に避ける

ベグル「兵士たる者、常に戦えるようにしておくべきだろうが。な
ぎはらい！」

バン「くっ！ばくれつきやくー！」

ベグル「ふん！覚悟決めたか！オラ、来いよバン！ボッコボッコ
ろかバツキバキにしてやるよ！」

バン「(どうしたんだよ、ベグル！さつきから一撃で俺を殺そうとし
てやがる！俺が何かしたのか!?)」

その後

バン「ぐうっ……。ハア、ハア」

バンはあれから攻められず避けてばかりいた

何回か攻撃がかすったりして傷も増えている

ベグル「チツ！逃げてばっかりでつまらねえなあ！兵士長はそんな
もんかよ！」

バン「(大剣や斧はリーチが違いすぎて攻めに回れねえ！武器は無

いし、かくとう技じゃあ当たる前にこっちが危なくなる。どうしたもんか！師匠がかくとう技は大剣や斧の相手に使うなって言うのはこういう事か！」

バン「ベグル！ダーハルーネで何があった！お前が、昔から何か抱えてんのは知ってんだよ！何かあるなら話してくれよ！力になるからよ！」

ベグル「言っただろうが。バンには関係ねえってな」

バン「ジエーンさんの事か!？」

ベグル「ジエーンさんか……。俺には、あの人は眩しすぎる。強すぎる光は、人を拒むのさ。さあ、覚悟はいいな」

バンの前にベグルが立ちはだかる

バン「ぐっ！ベグル！お前、どうして兵士になったんだよ！誰かを守るためなんじゃないのか!？」

ベグル「……………」

ベグルは一瞬動きを止めた

バン「(今だ!) しんくうげり！」

ベグル「ぐっ！」

ガシヤン！

ベグルの手から大剣が落ちた

バン「ばくれつきやく！」

ベグル「グハツ！」

ベグルは吹っ飛ばされる

ベグル「チツ！てめえ！」

バン「俺は、俺を馬鹿にしてきたやつらを見返すために兵士になった！ベグル！お前は何で兵士になったんだよ！」

ベグル「……自分への戒めだよ。あの出来事を忘れないようにするために！」

バン「それが何で急に今になって出てきたんだ！」

ベグル「チツ！煩えやつだなあ、本当によお!!お前が始まりなんだろうが!!」

バン「俺が!？」

ベグル「お前が一人になろうとしてる俺を引っ張り出してきたんだろうが！俺は一人で平気だった！それを、お前が馬鹿みてえに必死になって仲間に入れてきたんだろうが！」

バン「そ、その記憶は曖昧だけど、それと何の関係があるんだよ！」

ベグル「お前達といると、全て忘れそうになる!!あの人の事を、あの日の事も、全て!!お前達といると……俺は、弱くなる」

ベグルはその場で動かなくなった

バン「ベグル……」グイッ!

ベグルは近づいてきたバンを掴み、馬乗りになった

バン「お、重てえ……」

ベグル「お前が……あまりにも馬鹿で、眩しくて……俺の罪すら許してくれそうな光が……暖かくて……ここは居心地がよすぎるんだよ!!俺は、こんな所にいいいわけねえのに！皆が俺を呼んでくれる……。その声に引っ張られて、忘れてたんだ。

俺が兵士になった理由を！兵士にならなければいけない事を！強

くなくて、あの人に見せてやらなきやいけなかったのに!!お前のせいで!!」

しばらくベグルはバンを殴り続ける

ベグルは涙を流していた

ベグル「もう……俺と関わるな。お前達は、もっと暖かい所にいるんだ。俺は一人で平気だ」

バン「なに……嘘ついてんだよ……ゲフツ……平気なやつは……涙流しながら……そんな事言うわけねえだろ」

ベグル「それをやめろって言うてんだよ!!俺を止めるな!優しい言葉をかけるんじゃない!!」

バン「よく……聞きやがれ、ベグル……師匠が……言つた……兵士は……誰かを守るだけじゃない……己の信念を武器に変えて……戦える者も兵士として……大事な事だ……お前の信念は……何だ?」

ベグル「もう……喋るな」

ベグルはバンの首を締め上げた

バン「ガッ……それを……見つけ……必ず……変われ」
ガク

バンは気絶した

ベグル「……………馬鹿が」

泣きながらベグルは訓練場から出て行った

その夜、ベグルは城から去っていった

ベグルの守りたいもの

次の日、医療部屋

バン「ん？ここは……」

ラース「よお、バン。目が覚めたみたいだな。体は大丈夫か？」

バン「あ！師匠！情けない姿見せましたね。へへ、俺、負けちゃいました」

ラース「……ベグルと何があったんだよ。あいつ、前のお前みたくに出ていったぞ」

バン「ハ、ハハ。俺、兵士長なのに何してるんでしようね。ベグルに何かあるのは昔からわかってたんですが、何も言わないから気にしていなかったんです。でも、どうやら無視できないみたいです」

ラース「お前はとうするんだ？ベグルをこのままにしておくのか？」

バン「師匠、わかってて聞いてますよね？俺の性格、忘れたわけないですよね」

ラーズ「ああ。お前はそういうやつだもんな。決めたんだな」

バン「はい！俺、ベグルが何抱えていても大丈夫です！あいつがないと、俺はあの場所が楽しくありません。だから、這つてでも連れて帰ってきます」

ラーズ「おう！行つてこい！」

バン「はい！」

ダーハル―ネの町 裏道の外れの墓地

ベグルはそこで一つの墓に手を合わせていた

ベグル「……姉ちゃん。俺、デルカダールの兵士になったんだ。かなり強くなったんだぜ。もう、あの男とは違う。見てて、必ず仇を取るから」

ザツザツザツ

誰かがやってきた

ベグル「？」

バン「何だか物騒な話が聞こえたぞ。仇つて何だよ」

ベグル「何でここが。それに相変わらず馬鹿だな。その怪我でまだ動く気かよ。関わるなど言ったのが聞こえなかったのか？」

バン「昨日の話から何となくダーハル―ネにいる気がした。後は気配だな。よいしょっと」

バンはベグルの隣に座って手を合わせた

ベグル「何してんだよ」

バン「お参りだよ。ベグルは俺の仲間で、皆と楽しくやってるって報告してやらないとな」

ベグル「そんなのはいらねえ。姉ちゃんの墓にデルカダール兵が近づくな」

バン「何だよ。ベグルだってデルカダール兵だろ」

ベグル「ハア。何でそんなにしつこいんだよ。俺は傷だらけの人間をまた悪化させるような事はしたくないんだが」

バン「ベグルは俺が馬鹿なのは昔から知ってるだろ？俺は決めた事に、真っ直ぐにいきたいんだ。だから、何度だってベグルの元にくるぜ。俺はこれからもベグルと一緒に強くなりたいからな」

ベグル「……たくっ！バンのそういう所、昔から大嫌いだったぜ！家に来いよ。話してやる」

バン「おう！そうでもしねえと俺は帰らねえからな」

ベグル「面倒くせえつたらありやしねえな」

ベグルの家

バン「お邪魔しまーす」

ベグル「そんな事いう性格してねえだろ。この家は俺しかいねえ。気なんか使うな」

家の中は埃があり、生活感はあまり感じられなかった

バン「言っちゃ悪いが、あまり使われてない感じだな」

ベグル「当たり前だろ。ずっとデルカダールにいたんだからな。前にここに帰ってきたのは十年以上前だからな」

バン「ここで姉ちゃんと暮らしてたのか？」

ベグル「いや、違う。姉ちゃんは俺とは何の関係も無かったんだ。

家族とかじゃねえんだ。この家は、俺の母親の実家だ。母親が死んで、俺にこの家の管理が任されたのさ」

バン「そうだったか」

ベグル「姉ちゃんは俺がガキの時、この家の近くに住んでた人でな。まだガキの俺にすごく仲良くしてくれたんだ。俺の初恋の相手でもあったんだ。もう二十年前の話だな。

俺が恋と認識するのにかなり時間がかかってよ。姉ちゃんはもう男ができてた。でも、それはそれでよかった。姉ちゃんが幸せなら、俺はそれでよかったんだ。

でも、それは長く続かなかった。姉ちゃんの体や顔には痣や傷跡ができるようになったんだ。姉ちゃんは必死に隠してたけど、俺は苦しんでる姉ちゃんなんか見たくなくてよ。姉ちゃんを守りたくて、よく相手の男に喧嘩を売りに行ってたんだ。

でも、相手はお城の兵士だった。俺なんか敵わず、毎日ボコボコにされてたんだ。弱い自分が嫌だった。そんな日々が数年続いたある日、姉ちゃんが家に助けを求めに来た。

俺はその時は母親に騙されて、姉ちゃんが遊びに来たんだと思ってた。姉ちゃんと小さい頃のように遊ぶのは久しぶりでよ。すっげえ楽しかった。姉ちゃんも昔みたいに笑っててくれてよ。幸せそうだった。

俺のやりたい事は、姉ちゃんをこうやって笑わせる事だと思ったんだ。あの男が姉ちゃんを泣かせるなら、俺がその分笑顔にしてやる

うってな。

その夜に、姉ちゃんは俺に言ってくれたんだ。きつと強い人になって、と。その力を、あの人に見せてあげて、ってな。俺は普通に返事をしたが、俺が姉ちゃんと喋ったのはそれが最後だった」

バン「という事は、その姉ちゃんは」

ベグル「次の日、あの男に殺されたのさ。俺はシヨックでよ、悲しくてよ、悔しくてよ。やりたい事すらできない事にムカついてよ。それから、荒れに荒れた。腐り尽くしたんだ。この町で悪さをたくさんした。盗みや弱そうなやつからサイフを奪ったり、喧嘩に明け暮れていた」

バン「……」

ベグル「でも、母親が死んでからめつきりしなくなった。この家自体が嫌になったんだ。一人でこの家にいるのが苦しかった。その時、姉ちゃんとの約束を思い出して、あの男と同じデルカダールの兵士になる事を決めた。

俺はそこであの男より強くなって、絶対に姉ちゃんの仇をとる。何を犠牲にしようとも、それだけは必ず守ってみせると誓ったんだ」

バン「ベグル……」

ベグル「俺自身、最もなりたくなかったデルカダールの兵士になる事で、あの出来事を忘れない。これは、俺自身への戒めとしていた！そのためなら、俺は一人でよかった！強くなって、強くなって、強くなって！あの男を超えるために！」

それなのに…… お前は！何も知らねえくせに、初めからズカズカと入り込んできやがって!!」

バン「だが、ベグル……」

ベグル「何だよ」

バン「一つ間違ってるんじゃないのか？」

ベグル「あ？」

バン「その姉ちゃんがベグルに言った力つてのは、仇の事なんかじゃねえはずだぞ。優しい姉ちゃんだったんだろ？そんな人が、お前に人殺しなんて願うわけねえ！」

ベグル「そうだろうな！そんなの、俺だつてわかってる！だが、あの男に他にどうやって力を見せればいいんだよ！」

バン「その野郎と関わろうとするのをやめたらどうなんだよ」

ベグル「それは何の解決にもならねえだろうが！俺のこの後悔や苦しみは、どうすればいいんだよ！」

バン「力なんてものは、それを証明するのに拳や武器で語り合うものじゃない。本当に必要な時こそ出せるのが、力だ！守りたいものを守るのが、力だ！ベグルは力を間違ってるぞ！」

ベグル「守りたいものを……守る……」

バン「姉ちゃんを守れなかった悔しさとかは、全部これから繋げるんだ。他の誰かを守れる力に変えるんだよ」

ベグル「なら俺は……この数年間、何してきたんだよ！姉ちゃん
の仇のために努力してきた！それを今さら否定されて……無駄に
した数年間だったのかよ！」

バン「俺達と出会えただろ」

ベグル「!？」

バン「一人になってるベグルを、俺が殴られながらも無理やり俺ら

のグループにいれただろ。それは最初こそベグルにとって嫌だったんだろうが、最後は今まで俺達とずっと一緒にいてくれた。それは何でだ？」

ベグル「………… お前達は、眩しかった。俺には似合わねえのに、バンが無理矢理入れて、その光に俺を馴染ませてきた。俺は………… お前達が気に入ったんだよ。馬鹿で真っ直ぐで努力家で、そんなやつらの集まりだ。

俺も………… お前達のように、なりたかったんだ。夢とかを追い続ける皆が、羨ましくて、俺も優しくなりたかった」

バン「ベグルは優しくはなれねえけど、俺達もお前の努力家な所に憧れてた！今だってそうだ！皆、待ってるんだぞ！」

ベグル「そ、そうか。俺………… また守りたいものができた。でも、無理かもな。俺には身に余る」

バン「そんな事ねえよ！応援するぞ！何だよ？」

ベグル「ジーンさんを守ってあげたい………… それに、結ばれたって言うか………… そういう…………」

バン「うわ、気持ち悪い顔だ。でも、そういうのは大事だぞ！いい事やないか！何も身に余る事じゃねえ！俺だって、メグと付き合う前

は、付き合う事が夢だったからな！」

ベグル「でも、ジエーンさん、こんな俺でもいいのだろうか。こんな汚い俺でも」

バン「確かにベグルは汚ねえかもしれねえけど、ジエーンさんは優しいんだろ？前に言ってたもんな！なら、まずはぶつかってみようぜ！話はそこからだ！」

ベグル「俺、あの人のためなら何だってできる気がしてる。守ってやりたいって思えるんだ」

バン「そうだよな！俺もメグのためなら何だってできるぜ！その気持ち伝えるんだ！ベグルならいける！俺は信じてるからな！」

ベグル「お前は本当、馬鹿だな。なあ…… また俺は、あそこに戻ってもいいのか？強くなり…… 誰かを守る強さを求めに戻っていいのか？」

バン「当たり前だろ！俺も皆もベグルを待ってるんだ！帰ろうぜ！俺達の場所に！」

バンはベグルに手を差し出す

ベグル「ああ。バン、ありがとよ！お前は最高だな。これから頼む

ぜ、兵士長！」

ベグルはバンの目を見て手を握り立ち上がる

バン「おう！兵士長だからな！兵士の悩みくらい、パパツと解決してやるよ！何でも頼ってくれよな」

ベグル「へへ、頼もしいな。なら、もう一つお願いを聞いてくれるか？」

バン「おう！どんどん来いよ！」

ベグル「誰が優しくなれなくて汚くて気持ち悪い顔だつて？」

ベグルの顔には怒りが現れていた

バン「……………へ、へへへ、いやー、ベグルさん。あの、その、それは何と言うか」

バンは頭をかいてベグルの顔から目を逸らしている

ベグル「随分と言いたい放題言ってくれたな、バン。ありがとよ。たっぷりお礼をさせてくれよ」

ベグルからはどんどん殺気が出てくる

バン「ええつと……………それは、お断りしたい……………な」

ベグル「兵士長だもんな？なら、兵士の願いくらい聞いてくれよ」

ベグルは指を鳴らしている

バン「そ、それは…… お願いじゃなくて……」

ベグルはバンの首をガツチリと掴んだ

ベグル「さあ、たっぷり楽しもうな」

バン「(あ、死んだ)」

その夜、デルカダール城 大広間

ベグルはボロボロになり動かなくなったバンを持って帰ってきた

ラーズ「お！ベグル、帰ったか！…… えつと、バン？だよな？
生きてるか？怪我どころの騒ぎじゃないが」

ラーズはバンと思われる姿を見て冷や汗をかいている

ベグル「急にいなくなりすいませんでした、ラーズ將軍。この馬鹿
に説得され戻ってきました」

ラーズ「おう。バンは役に立っただろ？」

ベグル「はい。馬鹿は馬鹿なりに元気つけてくれました。これはこいつが俺の事を散々言ってきたので少し制裁をしただけです。なので心配しないでください。この後、医療部屋でザオラルしてもらいます」

ラース「なら大丈夫だな。ふっ、どうしたベグル。いい目つきになっただぞ。何か覚悟を決めたな」

ベグル「はい！俺、守るべきもののために頑張りますよ！」

ラース「お！いい事だな。なら、楽しみにしてるからな。頑張れよ！（バン、お前が連れて帰ってこさせられてどうするんだよ）」

ベグル、副長へ

次の日、デルカダール城 訓練場

訓練前にベグルは皆に謝っていた

ベグル「皆、迷惑かけてすまなかった。今まで、俺は大切な人の仇を取るために強くなってきた。でも、バンにそれは違うと教えられた。

俺、これからは大切な人を守るために強くなる。そのために戻ってきた。ここにいれば、俺はまだまだ強くなれる。

皆、改めてよろしくな！」

ロベルト「ハツハツハ！どうしたんだよ、ベグル。俺達、そんな真面目なお前は中々見た事ないぞ」

ガザル「そうだよな。だが、ベグルなら戻ってくると思ってたぜ」

マーズ「そうだな。まず、おかえりと言わせてくれよ」

ベグル「ああ！ただいま！」

ダバン「ベグル！目つきが変わったな！」

ギバ「いい顔してるぞ！バンのやつ、いい仕事するじゃねえか！」

ロベルト「そのバンはどこにいるんだ？」

ベグル「あいつならまだ医療部屋だ。安静にしてろって医者に言われたらしい」

ガザル「まさか、あいつまだ一昨日の怪我治ってねえのか？確かに酷かったがそんなに時間かかるのかよ」

ロベルト「ん？ラース將軍の話なら昨日の朝にはバンは動けるようになっていたんだろ？」

ダバン「……まさか、ベグル、お前」

ベグル「馬鹿に散々言われたんでね。少し後悔させてやったただけだ。俺は悪くねえ」

マーズ「やつぱりか。まあ、そのやりとりにはもう慣れたけどよ」

ギバ「バンのやつ、本当学習能力ねえよな」

ベグル「だが、俺はあの馬鹿を見直した。バンには借りができた」

バン「だつろく!! やつぱりベグルは俺の事見直してくれたと思つてたぜ！」

上からバンの声がした

全員「バン!!」

上にはまだ包帯などをしたバンが見ていた

ラース「おい。まだ怪我治つてねえのに走るな。それと、皆と話すだけだからな。動かそうとすんなよ？」

バン「はい！ありがとうございます、師匠！」

ベグル「チツ！嫌な所を聞かれたぜ」

バン「これから新たに頑張っていくんだろ？カツコイイぜ、ベグル！」

ベグル「……ふっ、ああ。ありがとうよ、兵士長」

ラース「まあ、俺が来た理由はバンの監視の他にもう一つある。ベ

グルお前、勝手に城を抜けてまさかお咎め無しと思ってるのか？」

ベグル以外全員「!?」

ベグル「いえ、そんな事は思っていないません。罰は何でも受けます」

レース「よし！いい覚悟だ」

バン「ま、待ってください、師匠！ベグルは確かに勝手に城を抜きましたけど、俺はそれを認めました！罰は俺も受けるべきですよ！」

レース「ん？そんな事言ったか？お前」

バン「あ、言い忘れてましたかね？ここで俺が倒れてたのは、俺を倒したら出て行っていいって事で勝負してたんです」

レース「なるほどな。勝手にそんな事しやがったのか。なら、同罪だ。バン、ベグル、明日は俺からの罰がくるからな。覚悟しておけよ」

レースは去っていった

バン「……………ふう。何とかなった」

ベグル「お前、馬鹿か。何で庇うんだよ。わざわざ嘘までつきやがって」

バン「俺は兵士長だ！兵士を纏める立場だ。一人の兵士の誤りは俺の誤り。罰を受けて然るべきだろ」

マーズ「バ、バンがまともな事言つてやがる」

バン「ああ!?!何だと、マーズ!」

ガザル「俺なんてこいつはマゾなのかと思ったぞ」

バン「んなわけねえだろ！ベグルやガザルみたいな奴らからいじめられたって嬉しくねえ!」

ギバ「バン、カツコいいじゃねえか！兵士長らしさが僅かにあったぞ」

ダバン「いい調子だな、バン。そうやって俺らの尻拭い頼んだぜ」

バン「あまり問題起こすなよ！俺も怒られなきゃならないんだからな!」

その後、バルコニー

ダバン「ベグル、何があったのか、とかは聞かねえ。だが、一つ確認したい。ジェーンさんの事、好きなんだよな？」

ベグル「ああ、俺はジェーンさんが好きだ。ダバンとミラさんよりは似合わねえかもしれないけど、それでもジェーンさんを守ってやりたいんだ」

ダバン「へへ、そうだよな。ベグルならそう言ってくれると思ったぜ。きっと、それもバンに教えられたんだろ？」

ベグル「何だよ、お見通しなのか？」

ダバン「気付いてねえんだろうが、今のベグルはこれまでのベグルよりも雰囲気が違うんだぜ。」

暖かくなったというか、前までであった暗い雰囲気が消えたんだ。バンに変えられたんだろ。あいつに絆されたな？」

ベグル「ああ。俺の負けだったんだ。あの光には勝てねえよ。俺の間違いを教えてくれた。しかも、俺を応援してくれるときたもんだ。なら、俺もバンを少しでも支えてやらねえとな」

ダバン「いいんじゃないか？兵士長を支える役目。副長つてところ

か。ベグルにピツタリだろ」

ベグル「あの馬鹿を手懐けるのは苦労しそうだな。だが、悪くねえ」

ダバン「お前ならいざって時はバンを殴って黙らせられるからな。俺達もこれまで通りいくさ。大変な時は頼ってくれよな」

ベグル「おう。頼らせてもらうぜ」

その後

ラーズ「え？お前が副長？別にそういうのは自由にして構わねえが、どうしたんだ？」

ベグル「いえ！バンにはこれからも支えてやる人が必要なんで、それを俺が担おうと思っただんです」

バン「いいのか、ベグル！へへ、嬉しいぞ！」

ラーズ「まあ、バンもこう言ってるしいいんじゃないか？バンには苦労すると思うが、頑張れよ」

ベグル「はい！」

バン「よろしくな、ベグル！俺のサポートだけじゃなくもし道を間違えそうな時は戻してくれよな！」

ベグル「ああ、任せな。お前が上手く仕事が出来る様に俺が何とかしてやるよ。道を間違えそうなら、俺がぶん殴って止めさせてやるよ」

バン「そ、それは、止まるのは俺の心臓じゃないか？」

ベグル「嫌なら間違わない事だな」

バン「あれ？急に怖くなってきたぞ、大丈夫かな？これ」

ラース「(ふっ、いい関係になりそうだな)」

マヤの卒業式

一ヶ月後、デルカダール城

マルティナ親子の部屋

コンコン

カミュ「兄貴、来たぜー」

ガチャ

ラース「おお、来たか、カミュ。うわ、相変わらず何着ても似合うな。憎たらしいぜ」

カミュ「何だよ、俺は好きで着てるわけじゃねえんだ。動きづらかったらありやしねえ。まあ、マヤのためだからな。我慢するけどよ」

二人はいつもの服装や鎧ではなく、スーツに身を包んでいた

ラース「俺も苦しい。だからスーツは嫌なんだよ。まだ鎧の方がいいぜ」

カミュ「兄貴は筋肉で厚いからな。確かに苦しそうだな。それと、兄貴だけの出席で本当にいいのかよ？王様とか、いかにも出たがりそうなんだが」

ラース「最初はそうだったさ。だが、デルカダール王がそんな所に行ってみろ？ マヤを不思議がる人で溢れ返るぞ。」

同じ理由で有名なグレイグ、マルティナも無理でな。ギリギリ許せる範囲の俺だけが行くってなったんだ」

カミュ「兄貴も十分名は知られてるが、兄貴まで無理になると俺以外誰も来ないのはマヤがかわいそうだもんな。苦しい選択だったんだな」

ラース「まだそれだけならいいんだ。王様は行けない事に物凄いショック受けてよ。ずーっと暗い雰囲気になったんだ。話しかける度に、行きたいのう、行きたいのう、って言い続けるんだぞ。どれだけ大変だったと思ってるんだ」

ラースからは疲労の色が顔に出ている

カミュ「ハ、ハハハ。すげえリアルに脳内で再生された。それは……お疲れ様だな」

カミュも少し苦笑いしている

ラース「まあ、お城にすぐに連れて帰るのが条件で許してくれたさ。さて、そろそろ行くか」

カミュ「おう。妹の晴れ舞台だ。しっかり目に焼き付けてやろうぜ」

メダル女学園

会場には桜の花びらが舞い、ステージの上には何人もの卒業生が座っていた

ゆつくりとしたメロディの中、卒業生達は校長から卒業証書を渡される

カミュ「くあ……。これだけゆつくりしてると、何だか眠くなってきたぜ」

カミュは眠そうに大きなあくびをしている

ラース「ん？大丈夫か、カミュ？顔にパンチほしいのか？」

カミュ「お！眠気無くなっただけだ。スッキリだぜ」

カミュは冷や汗を出している

ラース「お、マヤの番だな。マヤ、いい表情してるな」

カミュ「学年主席での卒業だ。兄として誇らしいぜ」

マヤ「皆様、この度は私達の卒業式にお集まりいただき、誠にありがとうございます。私達は、幾度の季節を乗り越えてきました。

ここでは、楽しい事やつらい事などの様々な思い出ができ、かげかえのない友達もできました。これからの人生の教えも受けました。

失敗、後悔などを力に変えていく事ができると教わりました。
それが出来たのは、私達をこれまで育ててきてくれた皆の力があつたからです。

本当に心から感謝しています。私達は、この誇りを胸に世界へ羽ばたきます」

ザツ！

卒業生達が一斉に立ち上がった

マヤ「私達！メダル女学園、レディー同！」

卒業生「今、卒業します！」

パチパチパチパチ！

大きな拍手が起こった

卒業式後

ラース「マヤ！見てたぞ！カツコイイじゃねえか！」

カミュ「へっ！すっかり大人になったな！」

マヤ「いしし。実はね、あの最後の皆で卒業するって言ったのは今日私が突然決めたの！先生達にも驚いてもらおうと思ってさ」

ラーズ「なるほど。先生達が驚いていたのはそのためだったのか。いい事するじゃねえか、マヤ！先生達にも感謝を伝えたいんだな！」

マヤ「うん！あ、先生達にも伝えてくるね！待ってて」

カミュ「忙しいな、学年主席は。まあ、しかたねえか」

マイ「あの……ラーズ様」

ラーズ「ん？おお！マイちゃん。卒業おめでとう！すっかり素敵なレディの仲間入りだな」

マイ「はい。ありがとうございます」

マイの母「ああ……。ラーズ様、再び会える日をお待ちしておりました。娘を助けてくださって本当にありがとうございます」

マイの父「娘とこうしていられるのもラーズ様のおかげです。感謝してもしつくせません」

ラーズ「お、おいおい。そこまで大袈裟にしないでくれ。マイちゃんを救ったのは俺じゃない。あの村の医者だ。そこん所間違えてるぞ」

マイの父「ですが、医者の方にもラーズ様の治療が無ければ助けるのは無理だったと言われました。それはつまり、ラーズ様もマイの命を助けてくださったのと同義です」

マイの母「ラーズ様はデルカダールにいらっしやると聞きました。これは最早運命です。私達もこれからデルカダールに引っ越します。ぜひ、よろしくお願いします」

ラーズ「そういえばそうだったな。俺はよく城下町にいるからよ。見かけたら声かけてくれよ」

マヤ「マイー、写真撮ろうよ！」

マイ「うん！今行く、マヤちゃん！」

その後、デルカダール城 玉座の間

マヤ「ただいま、皆！卒業してきた！」

パン！パン！

マヤが玉座の間にくるとクラッカーが鳴らされた

マヤ「おおっ!!」

デルカダール王「我が娘マヤよ、卒業おめでとう」

全員「卒業おめでとう!」

マヤ「いしし。皆、ありがとう!このケーキ、私の?」

マルティナ達の近くには大きなケーキが用意されている

マルティナ「ええ。特別に用意したの。ぜひ食べてちょうだい」

グレイグ「他にも様々な料理を用意している。皆でマヤを祝おうではないか」

マヤ「皆!ありがとう!私、皆が大好き!」

カミュ「俺からもお礼を言わせてください。マヤや俺を家族に入れてくれ、愛してくれている事本当に感謝します。ありがとうございます」

デルカダール王「そう固くならんでよい、カミュよ。お主も騒ぐのだ。何せ、実の妹の晴れ舞台じゃ。喜ばしい限りではないか」

カミュ「はい！兄貴、飲むぞ！」

ラース「もちろんだ、飲むぞ！」

その後、宴はお城中で騒がれた。歌やダンスはあちこちで披露された。その間、マヤはずっと笑顔を絶やさなかった

その夜、カミュとマヤの部屋

ラース「少し騒ぎすぎだな。明日の掃除が大変だぜ」

カミュ「そうだな。流石に申し訳ない、俺も手伝うぜ」

マヤ「私もやる！皆が私のために開いてくれたんだもの。少しくらいお礼をさせて」

ラース「マヤはやらなくていいんだ。マルティナや王様に見られたら俺達が怒られる」

マヤ「そ、それならやめておくね。そうだ！私、最近の目標があるの」

カミュ「お？どんな目標なんだ？」

マヤ「私、兄ちゃんみたいな人と付き合いたい！強くて、優しい人！」

カミュ「……………」

カミュはそれを聞いて固まっている

ラース「マ、マヤちゃん。そう言ってくれるのは嬉しいが、本気なのか？」

ラースも冷や汗が出ている

マヤ「うん！私も姉ちゃんみたいに幸せになりたい」

カミュ「マヤが…… 兄貴みたいなやつに…… 取られる？」

カミュは頭を押さえている

ラース「失礼な事言うな、カミュ。今カミュの頭の中でそれ、俺になってるだろ。違うからな」

カミュ「あ、ああ。そうだったな。マヤ、もし気になるやつがいたら俺か兄貴に教えるんだぞ」

マヤ「うん！わかってるよ」

ラース「マヤ、それは本当の意味をわかってない。俺達はその男を
審査するからな」

カミュ「変なやつがマヤに付かねえようにしねえとな。少し用心
しておくか」

マヤに彼氏ができる日は遠い

ユグノア大食い大会

数日後、デルカダール城

訓練場

ラース「休憩時間に悪いな。この中で、明日開催されるユグノア大食い大会に俺達と出たいやつはいないか？参加賞もあるし、一位になれば賞金も貰えるんだ」

バン「大食い大会ですか……。師匠は確かに好きそうですね」

マーズ「ラース將軍みたいに凄い量は食べれませんよ」

ロベルト「そうだよな。見てるこっちがお腹いっぱいになってくるんですよ」

ダバン「兵士達の中で大食いならベグルだろ」

ギバ「そうだよな。ベグルは体大きいから結構食べるもんな」

ベグル「俺は興味ありますけど、メンバーに入ってもいいんですか？」

ラーズ「もちろんだ。最大四人までなんだが一人足りなくてな。三人でもいいんだが、どうせなら誰か誘おうと思っただけな」

ガザル「メンバーは勇者様達ですか？」

ラーズ「そうだ。俺とグレイグとイレブんだ」

ベグル「ええ!?俺、流石にその中に入れないですよ！」

ラーズ「ハハハ！そんなの気にするな。俺達は歓迎だぞ。寧ろ、お願いしたいくらいだ。なあベグル、頼むよ。どうせなら一位取りたいんだ。いいだろ？」

バン「ベグル！師匠が頼んでるんだ！断るなんて失礼な事すんなよ！」

ベグル「俺に選択肢は無いのかよ！」

ラーズ「変な事言うな、バン。そんなわけねえだろ」

ベグル「ま、まあ、そこまで言われて断るのも変ですよ。いいですよ。ラーズ將軍ほどは食べられません、普通よりは多く食べる自信

あります。俺も行きますよ」

ラーズ「よし！ありがとな、ベグル！それじゃあ明日の朝に出発するから準備してくれ」

ベグル「はい！」

次の日、ユグノア王国

ユグノア王国は大食い大会だけでなく、お祭りも開かれており多くの人ユグノアに集まっていた

グレイグ「おお。凄い人ばかりだな。出店や旗などでお祭り騒ぎだ」

ベグル「そうですね。この感じ、ダーハル―ネと似てますよ。見慣れた光景です」

ラーズ「イレブンがお城で待ってるからお城に向かおうぜ」

広場

人混みの中にミラとジェーンの姿もあった

ミラ「あら？ラーズ様!?グレイグ様まで！それに、ベグルさん！」

ジエーン「本当だ！お久しぶりですね！」

ベグル「ジエ、ジエーンさん、ミラさん!?こんな所で会うなんて！」

ラース「おお。君達も来ていたのか。久しぶりだな」

グレイグ「ベグルの知り合いか？俺とは初めましてだ」

ベグル「どうしてここに？もしかして大会に出るのか？」

ミラ「まさか！私達、大食いなんでできないわ！お祭りが開かれるって聞いて来てみたの。私達は観客よ」

ジエーン「ベグルさん達はもしかして大会に出るんですか？」

ベグル「そうなんだ」

ラース「よかったら応援してくれ。他にももう一人いるからよ」

グレイグ「うむ。こんな美女達に応援されれば俺達も頑張れるからな」

ジエーン「そうだったんですね！なら、絶対に応援しますよ！」

ミラ「ええ。叫んであげるから一位狙ってね！」

ベグル「ああ！任せてくれ！」

ユグノア城

ラーズ「よかったな、ベグル。まさかあの二人がいるとはな。やる気が違うだろ？」

ベグル「本当ですよ！これはかつこ悪い所見せられませんね！」

グレイグ「あの二人はベグルと関係があるのか」

ラーズ「実はな、あの二人は」

ラーズはグレイグに説明した

グレイグ「な!? そうだったのか！なら頑張るぞ、ベグル」

ベグル「はい！……あれ、待ってください、ラーズ將軍。何で知ってるんですか？」

ラース「ダバンがミラさんと付き合いはじめたんだろ？なら、ベグルはジエーンさんを狙ってるのがまるわかりだぜ」

ベグル「そ、そんなわかりやすかったですか」

ラース「本当はバンから聞いたんだが、言ったらバンが殺されるだけじゃ済まないだろうから黙っておこう」

イレブン「皆！待たせてごめんね！準備で少し手間取っててさ。手伝ってきたんだ」

グレイグ「なに、気にするな。手伝うのはいい事だ。俺達もやれる事はあるか？」

イレブン「ううん！もう何とかなったよ。ありがとう！あと、ベグルもわざわざありがとう」

ベグル「気にしないでください、イレブンさん。俺、今日の大会は頑張りますよ！」

イレブン「な、何だかやる気が違うね。僕も頑張るね！」

ラース「大会の場所はあの噴水広場みたいだな」

イレブン「そうそう。それじゃあ行こうか」

広場

イレブン「出る人はこっちで待機するんだ」

広場にはステージがあり、そこに受付もあった

ベグル「やっぱり大食いなだけあつて皆、体大きいですね」

グレイグ「そうだな。ラース、何か作戦はあるのか？」

ラース「とにかく食う！終わりだ！」

イレブン「そんなの僕でもわかるよ。いつもの頭のキレはどこにいったの」

イレブンはため息をついている

ラース「そうは言ってもよ、俺は皆の限界を知らない。どんな食べ物があるかもわからない。これじゃあ作戦なんてたてられないぜ」

ベグル「た、確かに。周りとの兼ね合いもありますもんね」

グレイグ「ふむ。だが、順番くらいなら大丈夫なんじゃないか？こ
の中で最も重要なのはラースだろう」

イレブン「そうだね。絶対一番多く食べるもんね。なら、温存させ
た方がいいか」

ラース「そうだな。なら、俺は最初は手をつけない。三人で食べて
くれよ」

ベグル「はい！出来るだけ頑張りますよ！」

その後

ロウ「皆！この大食い大会によく集まってくれた。参加者や観客の
方に誠に感謝しよう。ぜひ、わしと楽しんでいってもらえると嬉しい
のう。」

解説はわしが担当じゃ。参加者はステージに上がってきてくれ」

参加者は全員ステージに上がっていく

グレイグ「俺達は最後なのか？」

イレブン「うん。サプライズとして、皆に驚いてもらおうと思って
ね。もう少し待ってて。おじいちゃんが呼ぶからさ」

ロウ「さあ、実はサプライズでもう一組おるんじや。きっと皆も驚くじやろう。さあ、上がって」

男性「待ちな！」

ロウ「な、何じゃ!？」

突然観客の中にいた男性が大声を出した

男性「この観客と参加者は俺がいただくぜ！ハア！」

男性の姿から魔物の姿へと変わっていった

全員「キヤーーっ！」

ロウ「何じゃと!?!そんな事させんぞい！」

魔物「こつちこそ自由にさせるかよ！ベタン！」

ロウ「な!?!重力魔法じゃと!?!う…動けん」

その場にいる全員は重力で地面に倒れ込んだ

魔物「あばよ！」

魔物は観客と選手達を縄で縛り袋に詰め、連れていった

ロウ「ぐうっ……。何という事じゃ！」

魔物が見えなくなると重力もなくなった

待機していたイレブン達も驚いて出てきた

イレブン「おじいちゃん!!今の重力はなに!？」

ラース「今のはベタンか!?使えるやつがいたのかよ！」

グレイグ「周りの皆はどこに！」

ロウ「すまぬ。連れ去られてしまった。逃げた先には壊れかかった遺跡がある。おそらくそこじゃろう」

ベグル「くそ！魔物のやつ、堂々とこんな事しやがって！」

イレブン「助けにいこう！おじいちゃんはここで皆の混乱を抑えて」

ロウ「わかった。気をつけるんじゃぞ！何かあれば、すぐに連絡するんじゃ。無茶は禁物じゃ」

ラース「わかった！イレブン、遺跡への案内は頼んだぞ！」

イレブン「任せて！こっちだよ！」

グレイグ「魔物め！絶対に許さん！」

ベグル「ミラさん、ジエーンさん。助けにいくから無事でいてくれ」

人質救出

ユグノア地方 遺跡内部

遺跡の中はかなり入り組んでおり、複数の部屋や階段まである

イレブン「中には初めて入ったけど、光があまり無くてよく見えな
いね」

ベグル「幸いにも魔物達はいつに怯えて逃げたみたいですね。周
りに全然いないです」

グレイグ「だが、どこにいった。分かれ道が多くどこにいったかわ
からないぞ」

ラース「手分けして探すしか無さそうだな。ベグル！俺と来い！右
方向を全般的に探すぞ！」

ベグル「はい！」

イレブン「じゃあ、グレイグ！僕と左を探して行こう！」

グレイグ「ああ！」

その頃、魔物は

魔物「さて、ここまで来たならもう問題ねえな。ふうう、ベタンつてやつ、物凄い力使うな。疲れちまったぞ」

魔物は疲れたように休憩していた

女性「わ、私達をどうするつもり!」

男性「皆!イレブン様が必ず助けに来てくれるぞ!耐えて待つんだ」

魔物「チツ!ギャーギャーうるせえなあ。あまり騒がれるのも困るんでな。人質だが、少しくらい黙らせるためには犠牲も仕方ないよなあ?」

魔物は観客達を睨みつける

全員「!?!」

魔物「さて、誰にしようか。フッフッフ……」

その頃、ラース達は部屋という部屋をくまなく探していた

ガタン!

ラース「ここでもねえか!ベグルは!?!」

ベグル「こつちも違います！くっ！早く助けないとなのに！」

ラース「気持ちはわかる。だが、少し冷静になろう。じいさん曰く、魔物は翼が生えていたそうだ。なら、こんな閉鎖空間に入るには少し小さくなる必要がある。または、かなり広い空間があるかだ」

ベグル「人質達もいるんですよね。なら、狭い空間はありえない。小部屋は無視した方がよさそうですね」

ラース「この道は大きな部屋が少ない。もしかしたら、イレブン達の方か？」

その頃、イレブン達は

イレブン「ここは……何の部屋？」

何もないただっぴろい空間にきていた

グレイグ「広いが何もないな。階段が上と下にある。どっちに行く？」

イレブン「上に行ってみよう。翼があったなら上の方にいるかもしれない」

グレイグ「了解だ」

その頃、魔物は

魔物「ん？君……よく見たら人間にしては可愛いじゃないか」

魔物はジェーンの顔を触って自分に向けさせる

ジェーン「え……。や、やめてください」

ミラ「ちよつと！あんた、汚い手でジェーンに触んないで！」

魔物「なに、君？俺は今この子に話しかけてるの。黙ってて」

魔物の目が怪しく光った

ミラ「え……。」ドサ

ミラは倒れた

ジェーン「え!?!ミラ！ミラ!!何したの!?!」

魔物「いやー、気が強そうだったからちよつと黙ってもらおうと思つて。少しだけ眠ってもらってるよ。これで邪魔者はいなくなつたな」

ジェーン「やだ！やめて！誰か助けて！」

男性「や、やめろよ！その子嫌がつてるだろうが！」

近くにいた男性が声をあげた

魔物「ハア。なあ、死にたいの？」

魔物が睨みつけた

男性「!？」

魔物「そろそろキレるよ？なあ？」

全員「……………」

魔物「次反抗したやつから、問答無用で殺すからな」

全員が恐怖により動けなくなった

その頃、イレブン達は

グレイグ「駄目だ。部屋は多いがどれも小さすぎる。先程の場所に
戻り下に降りた方がよさそうだぞ」

イレブン「そうみたいだね。急いで戻ろう」

数分後

イレブン「下に来たね。結構暗いけど、部屋は多くない」

グレイグ「特に音もしないな。どうなっている。大人しくしている
というのか？」

イレブン「このまま奥まで行ってみよう」

その頃、ラース達は

ベグル「ジエーンさーん！ミラさーん！いたら音をたててくれ！」

ラース「この近くにはいないかもしれない。ん？あれは下への階
段。行ってみるぞ」

ベグル「はい！」

数分後

ラース「……!?ベグル、感じたか？」

ベグル「はい！あの扉の先みたいですわね！」

ラース「よし。まずは慎重になって」

ベグル「てめえー！攫ったやつらを返しやがれー！」

ベグルは扉に突っ込んでいく

！」
ラース「な!?馬鹿野郎、ベグル！バンみたいな事してんじゃねえぞ
！」

バタン！

ベグル「な!?」

魔物「あん？チツ！ついにバレたか」

ラース「大丈夫か!?な!?」

そこには、ほぼ裸で魔物の前に泣きながら座らされているジエーン
がいた

ベグル「貴様…… 何をしている!!!」

ベグルからはどんどん殺気が溢れてくる

魔物「な、何だ…… こいつ」

ベグル「貴様…… 楽には死なせねえぞ！絶対に後悔させてやる
からな!!ウオオオ!!」

ベグルは凄まじい形相で魔物に斬りかかった

魔物「な!?!グアアア!!」

ドガアン!

ベグル「吹っ飛んでんじゃねえぞ! 渾身斬り!」

ベグルは追い討ちをやめない

ラーズ「ベグル…… 何かに変身するのか? 凄い怒気だな。こつちまで怖くなってきたぞ。ま、まずは皆を助けないと。」

イレブン達には、この騒ぎで気づいてもらおう。ジエーンさんだったな。大丈夫か? ほら、服を着るんだ。怖かっただろう」

ラーズはベグルの姿に恐怖を抱きながら、ジエーンへと駆け寄った

ジエーン「……!……!」パクパク

ジエーンは何かを喋っているが全く声が出ていない

ラーズ「これは、喉が潰れる呪い! こんな事までしていたのか! なんてやつだ。待ってる、後で呪いを解いてやるからな。皆、ロープを切るから動くなよ! ハッ!」

ラーズは人質達の縄を切った

男性「あ! ありがとうございます! よかった! 出れた!」

ラーズ「さあ、ここから逃げるんだ。他に怪我している人はいるか

？」

女性「あ、あの！そのジエーンさんっていう人の友達のミラさんが眠らされて、起きないんです」

ラース「そうか！なら、目覚めよ、ザメハ！」

ラースがミラに近づいて魔法を唱えた

ミラ「う……。あ！ラース様！ありがとうございます！ジエーンは!?!」

ジエーン「……!!……！」パクパク

ミラ「ジエ、ジエーン！どうしたの!?!何で喋れないの!?!」

ラース「魔物に喉が潰れる呪いをかけられている。今は治せないから、ユグノアに戻ってからだ。必ず治すから、安全な所まで逃げてくれ」

ミラ「わかりました！ジエーン！逃げましょう！」

ミラはジエーンと共に走っていく

同時にイレブン達もやってきた

イレブン「ラーズ!!皆が逃げていく!助かったよ!」

グレイグ「魔物はどうな…… あれは、ベグルか?」

魔物「グフウ……。待て、俺が悪かった……。それ以上は」

ベグル「アイスブレード!」

魔物「ギャアアア!」

端ではベグルが魔物を切り刻んでいる

イレブン「ベグルだね?凄く怖いんだけど、何があったの?というか、ベグルもあんなに強かったんだね」

ラーズ「今のあいつは俺も恐らく敵わないぞ。実は」

ラーズはイレブン達に先程の事を説明した

グレイグ「なるほど。それで激しく怒り狂っている、と。恐ろしいな。人間は怒りによってあそこまで強くなれるのだな」

ベグル「おい、この程度かよ。オラア!」

魔物「ず……ずみません。あの……急所をスレスレで外すの……やめて。もう……無理です」

魔物はボロボロになっている

ベグル「あ？そんなん断るに決まってるだろ。全身全霊斬り」

ブチっ！

魔物「ギヤアアア!!っ……翼が……」

魔物から翼が切り取られた

ベグル「さつき言ったよな？楽には殺さん、と。さあ、もつと後悔してもらおうか」

魔物「ヒイイイイ。どうか……お許しを」

ベグル「嫌だ」

ベグルは笑顔で魔物の要求を断った

イレブン「えっと……僕達が出る幕無さそうだね」

ラース「そうだな。イレブン達はユグノアに戻って皆の安全を守ってくれ。ベグルの悪魔は俺が連れて戻る」

グレイグ「そ、それがいいな。任せたぞ」

イレブンとグレイグは冷や汗をかきながら遺跡から出て行った

ラース「(ベグルってこんなに怖かったのか。バン達が恐れるのも頷けるな)」

魔物「ヒュ……………」

ベグル「虫の息かよ。つまらねえなあ。なあ？そろそろ楽になりた
いか？」

魔物「は……………はい……………」

ベグル「へへ、駄目だ」

ラース「(楽しそうだな、ベグルのやつ。少し……………わからなくもな
い)」

その後、ユグノア王国

ジェーンとミラはロウに呪いを見せていた

ロウ「どれ、おはらいじや」

ジエーン「あー。ああ!! やった! 声が出せる!」

ミラ「よかったわ、ジエーン! ロウ様、ありがとうございます!」

ロウ「なに、不安にさせたんじゃない。これくらい当然じゃよ」

ジエーン「私……あの魔物に服を取られて……反抗したら、喉に呪いをかけられて……。周りの人達も助けようとしてくれたけど、殺すぞつて脅されて、本当に怖かった」

グレイグ「女性に何という事を……。俺もベグルに混じってやればよかったか」

ジエーン「ベグルさんとラーズ様が来てくれた時、本当に安心しました。助かったって……。少しでも遅れてたらどうなっていたか」

イレブン「そうだったんだ。本当にごめんなさい。僕達が気づけなくて」

ミラ「あれは誰もわからないわ。人間だと思ってたんだもの。勇者様達だって悪くないわ」

ロウ「ありがたのう。じゃが、次からは無いようにもつと警戒を強
めんとな」

不穩

その頃、遺跡前

魔物は原形を無くした後、楽になれたとばかりに消えていった

それを見たベグルは少しつまらなそうに遺跡から出てきた

ラーズ「ベグル、少しはしやぎすぎたんじやないか？最後あたりは楽しんでただろ」

ベグル「まあ……楽しんではいましたけど、まだ俺の怒りは消えてませんよ。もっと頑丈だったらよかつたんですけど」

ラーズ「気持ちはわかるが落ち着けよ。ユグノアに戻ってジエーンさん達に会いに行けばいい」

ベグル「そうですね」

ザツザツ

誰かがこちらに歩いてくる

ラーズ「ん？誰だ、こんな所に」

男性「やはりお前だな、ベグル。まさか生きているなんてよお」

ベグル「!!? 貴様…… リユウ!! なぜここに！」

リユウ「さつきの捕まつてた人の中にいたのさ。何十年振りだ？あの女が死んで以来だなあ？まさか、てめえが俺と同じデルカダールの兵士になるなんて笑いが止まらねえぜ。ギャハハハハ！」

ベグル「何とでも言えればいい」

リユウ「じやあ言わせてもらうぜ。お前、似合わねえ事してんじやねえよ。今更いい子になろうとしたっててめえには不可能だ。それに何だ？兵士になって俺を倒すつもりだったか？無駄だな！

弱つちいお前がどれだけ強くなつても！俺に勝てねえだろ！昔、散々いじめてやったもんなあ？俺が怖いだろ？足が震えてるぜ？

お前みたいなのやつは何も守れない！弱い奴がどれだけ頑張つたつて弱いまま。守るなんて大層な事はてめえには絶対できねえよ!!」

ベグル「……………」

ベグルは下を向いて黙っている

その体は少し震えている

ラース「こんな事を言うのもなんだが、俺は兵士達を纏める仕事をしていたんでね。ベグルの事を少し知る人の一人として反対させて

もらおう。ベグルは強いぞ」

ラーズはベグルの前に出た

ベグル「ラーズ將軍……」

ラーズ「ベグルの昔は知らねえ。何があつたかとか興味ねえ。大事なのは自分を見つめ、ゆっくりでも己の弱い所を認めて前に進む事だ。それをベグルは成し遂げようとしている。

それは弱い人間には絶対にできない。途中で心が折れ、諦めてしまふからだ。だが、ベグルは違う。毎日目標や夢に向かい強くなろうと努力している。

これまで見てきた俺が保証する。ベグルは強い。少なくとも、昔や見た目なんかで判断しているような人より、ずつとな。

ベグル、行くぞ」

ベグル「……はい」

ザツザツザツ

ラーズとベグルは足早に去っていった

リュウ「……… チツ！何だ、あいつ。ベグルのやつが強い？ありえるわけねえ。まあ、またあいつのお気に入りを壊せばあいつは立ち直れなくなるだろ。あの脱がされてた女…… ベグルの野郎、あの女を見て怒ってたな」

しばらくして、ユグノア王国

ベグル「ラーズ將軍……すみませんでした」

ベグルはラーズに謝り始めた

ラーズ「気にするな。あんなやつ言う事なんか聞く耳を持つな。ほら、ジェーンさん達に会いに行こうぜ」

ベグル「ラーズ將軍の言葉、凄くありがたかったです。ありがとうございます」

宿屋

ジェーン「ベグルさん！助けてくださってありがとうございます！」

ミラ「私は見れなかったけど、一人で魔物を倒したそうじゃない。凄いわ」

ベグル「あれはまあ、俺の中で、こう、暴れてしまっただけな。怖かっただろ？」

ジェーン「いいえ！魔物に迫られた時に比べたら、陽だまりのようでした！助かった……って思って安心しました」

ベグル「ひ、陽だまりは言い過ぎじゃないか？まあ、喋れるようになったみたいだし怪我也無さそうだ。本当によかった」

ミラ「大会は残念だったわね。折角意気込んでたのに中止になっちゃったわね」

ベグル「それは仕方ないさ。俺は助っ人で呼ばれただけだったからな。おそらく、ラーズ将軍が一番落ち込んでるさ。それじゃあ、またな」

ジエーン「はい！ありがとうございます！」

ミラ「今度はラムダにも来てね。忙しいと思うけど」

ベグル「おう！そっちも困ったらいつでも頼ってくれよな」

ユグノア城

ラーズ「ハアア。マジかよ……」

ラーズは中止と聞き、落ち込んでいた

イレブン「ご、ごめんね、ラーズ。流石に中止にしないでだからさ」

ロウ「またいつか開くから楽しみにしてくれ」

グレイグ「しかたあるまい。ラーズの朝を少なくしたのに意味がなくなってしまうが、こればかりはな」

ラーズ「くっ。わかつてはいるが腹空いたな。気も落ちて、一層強く感じるぞ」

ラーズのお腹が鳴っている

ベグル「まあ、俺達もこの後帰りますのでその後お城で食べましよう」

ロウ「助けられてくれてありがとう。大会はすまなかったが、お主達のおかげで犠牲者は出なかった」

イレブン「そうだよ。ベグル、ラーズ、グレイグ、ありがとう」

ラーズ「まあ、それもそうだな」

グレイグ「民達を助けるのは当然だ」

ベグル「力になれてよかったです」

その後、デルカダール城 玉座の間

マルティナ「なるほどね。そんな事があったの。お疲れ様、ラース、急いでコックに頼んでね。お腹が鳴り止まないわよ」

ラース「すまない、マルティナ。俺、もう行くな。他の報告は頼んだ」

ラースは我慢できないとばかりにキッチンへ駆けていった

ベグル「ハ、ハハハ。あんなにお腹が連続でなってる人初めて見ました」

グレイグ「確か旅の頃に一度見かけたくらいか。ラースには少しづらかっただろう」

マルティナ「二人もお腹空いてるでしょ？ラースと一緒に食べていわ。他に何か報告はあるかしら？」

グレイグ「いえ。後は特にございません」

ベグル「俺は兵士達と食べてますね。それでは失礼します」

マルティナ「ええ。ベグル、お疲れ様」

その頃、ジエーン達は

ジェーン「よし、この便でクレイモランに行こっか。ミラはクレイモランに用事があるんだよね？私も行こうか？」

ミラ「それは別に大丈夫よ。そのまま先にラムダに帰ってて。私は少し買い物したら帰るわ」

ジェーン「はい。……それにしても、ベグルさん私のためにあんなに怒ってくれたのかな？」

ミラ「きつとそうよ。ベグルさんがあんなに怒ってるのは私達初めて見たじゃない。ラス様達も少し戸惑ってたし、少しでも私達にいいように捉えておきましょう」

ジェーン「えへへ、とつても怖かったけど、そう考えると少し嬉しいな」

ミラ「応援してるからね、ジェーン！」

ジェーン「う、うん。私、頑張る」

その影では

リュウ「へッへッへ、いい事聞いた」

ジエーン、捕まる

二日後、デルカダール城

大広間

ミラ「すみません！誰かいますか!!」

ミラが大慌てでやってきた

ダバン「ん？ミラじゃないか。どうした、そんなに慌てて」

ミラ「あ！よかった、ダバン。大変なの！ベグルさんをお呼びできて！ジエーンが捕まったのよ!!」

ダバン「何だって!?!わかった！すぐに呼んでくる」

その後

ベグル「ジエーンさんが捕まったって!!」

ミラ「ごめんなさい、ベグルさん。私達はあの後、ラムダに帰るためにクレイモラン行き便に乗ってクレイモランについたの。でも、私はクレイモランで買い物しなくちゃならなくて、ジエーンを先に帰らせたの。」

その後、私も少し経って帰ったんだけど、ジエーンが帰っていないって言われて不安がっていたら、今朝こんな手紙が届いたの」

ベグル「手紙か。差出人は無し」

ジエーンは預かった。もし助けてほしければ、3000万Gを持ってこい。それを持つてくる人はデルカダール城にいるベグルという人間だ。それ以外連れてきたのがわかればこの女の命は無い。場所はミルレアンの森の近くにある洞窟だ。

その内容とともに、写真に縄で縛られたジエーンが写されていた

ベグル「……………」

ダバン「これは……………かなりまずいぞ」

ミラ「私、どうしたらいいかわからなくて。3000万Gなんて持ってないし、ジエーンの親も用意できないって泣きつかれて」

ダバン「ベグル、これは王様にも相談してみた方が……………。ベグル、殺気を抑えてくれ」

ベグルは殺気が隠しきれず、写真を握りつぶそうとしている

ベグル「そうだな……………王様には俺から話してくる。ミラさんも待っていてくれ」

ミラ「ご、ごめんなさい!!」

玉座の間

デルカダール王「なんと……。これは助けてやらねばならん。だが、この女性の方とベグルはどういう関係なのだ?」

ベグル「……………俺の女です」

ラース「!?」

マルティナ「わかったわ。お父様、まずはお金を用意しましょう。作戦はそこからでも遅くないかと」

デルカダール王「そうじゃな。少し待ってくれ」

ベグル「本当にありがとうございます!!」

ベグルは王様とマルティナに土下座している

グレイグ「しかし、これは間違いなく罠だ。ベグルが一人で行っても、金を取られるだけか、二人とも殺されるかのどちらかである可能性が高い」

ラーズ「…………… ベグルはどうしたい」

ベグル「俺は助けに行きます！それに、こんな事をしてくる奴はきつと…………… あいつだ。これは俺の問題でもあります！だから、俺一人で行かせてください!!」

マルティナ「…………… でも、危険すぎるわ」

グレイグ「賛成はできん。気持ちはわかるがこれは大事だ。誰か援助する人がいた方がいい」

ラーズ「ベグル、本気で救う覚悟はあるな？命をかけられるんだな？」

ベグル「はい!!俺の命でジェーンさんが助かるなら、俺は迷いません!!」

ラーズ「よく言った！その覚悟、信じてるぞ！一人で行ってくるんだ」

マルティナ「ちよつとラーズ!!何考えてるの！これは罠なのよ!!」

マルティナはラーズに猛反対する

ラーズ「マルティナ、それはわかっている。だが、ベグル一人で来いと言われている以上、俺達の援助も僅かしかできない。その援助だって、もしもバレてしまえば終わりなら、救出の足枷にしかならない。」

しかも隠密が出来る兵士なんてこの城には数えられるくらいしかない。それなら、俺はベグル一人に賭ける方が確実だと思う。それに、ベグルが命をかけて守ると言ったんだからよ」

グレイグ「……なるほど。ベグルの意地がどこまで通用するかにかかっているわけか」

マルティナ「それはラーズの言う通りだけど……」

ラーズ「(安心しろ、マルティナ。後でお願いがある)」

ラーズはマルティナにサインを出す

マルティナ「!?わかったわ、少し待ってて。明日には用意するわ」

ベグル「ありがとうございます！待っていてください！俺が何とかしてでも助けて見せます！」

次の日、シケスピア雪原 洞窟前

ベグル「ここか。ふぎけた事しやがって、リュウのやつ」

その近くでは

カミュ「おい、何で俺までこんな事しなくちやならないんだ」

バン「すみません、カミュさん。でも、師匠からカミュさんはこういう隠密が得意と聞いたので」

ラース「だが、断らなかったんだから少しは協力してくれるんだろ？ 後で礼はするからよ。頼むぜ、弟よ」

カミュ「チツ！ 後で高い酒奢ってもらうからな！」

遠くから気配を消した三人がベグルを見ていた

その頃、ジェーンとリュウは

ジェーン「あの…… 少し縄を緩めてもらえませんか？ 痛くて」

リュウ「駄目だな。そうやって油断させようたってそうはいかないぞ」

ジェーン「なら、少し教えてください。何でベグルさんに拘るんですか」

リュウ「そんなの決まってる。あいつ、昔から俺に生意気な態度しか取らねえからよ。弱いあいつには力でわからせてやらないといけねえだろ」

ジェーン「べ、ベグルさんは弱くないです!!」パシイン!

リュウはジェーンの頬を思いつき叩いた

ジェーン「うう……」

リュウ「うるせえ女だ。少し黙っている。喋る気が起きねえようにしてやるよ」

ジェーン「や……やだ。やめて」

その頃、ベグルは

ベグル「前の遺跡よりは道が単純だな。上下に階が分かれてるだけか。上の階はこれで終わりか。なら、下だな」

周辺では

バン「(ベグル! 頑張れよな!)」

カミュ「(兄貴、その捕まってる人達の居場所だが、おそらくあの部分だろ?)」

ライス「(そうだろうな。あの場所の周囲で警戒しておこう)」

けじめ

ベグル「……………この奥に人の気配。よし！」

ダツダツダ！

ベグル「おい、リユウ！言われた通り一人で来たぞ！」

広い空間にやってくると、リユウが待っていた

リユウ「んだよ、遅かったじゃねえか。こっちは退屈してたんだ」

ジエーン「ベグル……………さん……………」

ベグル「な!？」

そこには柱に結ばれ、顔が腫れているジエーンがいた

目からは血も流れている

ベグル「てめえ!!!」

リユウ「おおっと、怖えなあ」

ベグル「ぐっ……………」

リュウはナイフをジェーンの首元に当て、ベグルの動きをとめる

リュウ「お前が少しでも俺様の気を損ねればこの女は死ぬ。いいな？こいつの命はお前にかかっているんだぞ」

ベグル「……………こんな事して、何が目的だ」

リュウ「目的なんかねえよ。ただ、てめえがノコノコと幸せそうに生きてるのが憎たらしくて堪らねえんだよ！

こっちは仕事も無くなって散々だつていうのに、てめえだけ平和に生きようとしているのがムカつくんだよ！」

ベグル「んなの知つたこつちやねえだろうが!!俺の人生だ!てめえなんかに指図される筋合いはねえんだよ!」

その上の階では

ラーズ「おい、カミュ、バン。念のため、ここの足場に切り込みをいれておけ」

二人「了解」

リュウ「お前、今俺にそんな口聞いていいのかよ。このまま刺してやろうか?」

ベグル「くっ……」

ベグルは顔を歪ませる

リュウ「そうそう、その顔だよ。昔から俺はその顔が大好きだったんだよ！俺を許せないのに、自分が弱いから守れない事実にも苦しみに歪んだ顔がよ!!」

リュウはベグルを嘲笑っている

ベグル「……金なら用意した。俺の事も好きにしろ。だが！
ジーンさんは返してもらおうぞ！」

リュウ「ああ。俺はてめえさえ殺せばこんな女、何の価値も無い。どっか適当に捨ててきてやるよ」

ベグル「今すぐ解放するんだ！」

リュウ「解放してくださいだろうが!!! ああ!？」

ベグル「くっ……。解放してください。お願いします」

リュウ「土下座に決まってるだろうが!!」

ベグル「解放してください。お願いします」

ベグルは土下座をする

リュウ「てめえが抵抗せずに俺にボコボコにされてくれたら考えてやるよ。オラァ！」

バキッ！

ベグル「ぐっ！」

リュウ「オリヤ、オリヤ、オリヤ！」

ベグル「ぐはっ!!」

三十分後

リュウ「ハア……ハア。へへ、大分いい気分だぜ」

ベグルは体中痣だらけになっており、傷や怪我で血だらけになっていた

リュウ「それじゃあこの女、殺しますか」

ベグル「な……話……違……」

リュウ「あ？何でてめえなんかの言う通りにしないとなんだよ。そ

れに、こうすればてめえは二度と俺に逆らえねえだろ。最高じゃねえか」

ベグル「やめ……ろ」

リュウ「さあ、死ねえ!!」

リュウがジエーンに向かって刃物を刺そうとした時、

ガラガラガラ!

突然リュウの頭上から地面が落ちてきた

リュウ「なに!?!ぐわああ!!」

リュウは落ちてきた地面に巻き込まれた

ベグル「え……」

スタツ!

カミュ「さて、こんなもんだな」

ラース「酷い怪我だ。急いで城に戻るぞ」

ラースはジエーンの縄を切った

バン「ベグル!無事か!!うわ!顔、怖っ!誰だよ!」

ベグル「いつの間に…… どうして」

ラース「上手くいけばベグルに全て任せたさ。だが、保険は必要だろ？俺はベグルもジエーンさんも失いたくない。なら、少しの手助けだ。リュウのやつはまだ生きてるぞ。どうする？」

リュウ「ぐ……。ベグル、てめえ!!俺を騙していやがったな!!くそっ!これをどかせ!!その女、ぶっ殺してやる!!」

バン「俺達がそんな事させると思ってるのかよ」

カミュ「おい、ベグル、大丈夫か？肩貸すぜ」

ベグル「ありがとうございます、カミュさん。つらいですけど、立てますよ」

ベグルはそう言うと、大剣を支えに何とか立ち上がり、ゆつくりとリュウの方に近づいていった

リュウ「な……なんだよ。てめえが!俺に反抗してきやがったから!」

ベグル「リュウ……。俺は、お前が許せない。姉ちゃんを殺し、俺

の大事な人をここまで傷つけた。俺がお前を殺してやるよ」

ベグルはリュウに大剣を振りかぶる

リュウ「な!?!や、やめろ!お前、誰に向かって刃を向けてやがる!!」

カミュ「待て、ベグル。兵士が人を殺していいのかよ」

その言葉にベグルは動きを止める

ベグル「ですが……………これは俺のけじめでもあります」

バン「気持ちはわかる。だが、そんな事をする必要は無いだろ。剣とベグルが汚れるだけだ。どうか、しないでほしい」

バンが真剣な表情でベグルを止める

ベグル「……………そうだな。この男には俺が殺す価値もない。このまま死ぬといい」

ベグルは大剣を下ろした

ラース「それが正しいさ。ほら、金は持ったな?帰るぞ。バン、ベグルを支えるんだ」

バン「大丈夫か?ベグルもどき」

ベグル「もどきって何だ。俺は本物のベグルだ」

バン「そんな顔で言われたって説得力ねえよ」

リュウ「くそ!!!くそ!!!ベグル!!俺は必ず諦めねえからな!!」

リュウの悔しがる声が洞窟にこだましていた

洞窟前

カミュ「さて、やるか。兄貴」

ライス「おう。トラップ発動だな」

二人「ジバルンバ!」

ガラガラガラ!

洞窟は全て崩れ去っていった

バン「えええ!!いつの間に!!」

ベグル「!!?ライス將軍……カミュさん。これって……」

ライス「ん?どうした?」事故による”地盤の緩みで、洞窟が崩れ

去っただけだ」

カミュ「犠牲者は、偶然中にいたトレジャーハンター一人だ。”自然による事故”は仕方ねえよな」

バン「…………… えげつねえ」

ベグル「ハ、ハハ。感謝しても、しきれないですよ。本当に……………」ガク

ベグルはそのまま気絶した

バン「うおつ！重てえ！つて、ベグル！雪の中で寝ると死ぬんだぞ！！おい！起きろ！駄目なんだぞ！」

バンはベグルの顔を何度も殴っている

カミュ「いや、急いで運べば大丈夫だ。だからそんなに殴ってやるな」

カミュは少し苦笑いしている

バン「あ、そつか。まあ、これは日頃のお返しって事にしておきましよう！」

ラース「なにカミュみたいな事してんだよ」

カミュ「うるせえぞ、兄貴。ほら、帰るぞ」

デルカダール城 医療部屋

医者「ふむ。女性の方もそうだけどベグル君も酷いね。腫れとかは数えられないから含めないとして、肋骨五本の骨折、両腕と右足もヒビが入ってるよ。よくこれで歩いてたね。」

それと、この女性の方の片目はどうなるかね。失明にはならないけど、視力は大分落ちるかもね」

ラース「そうですか。わかりました」

玉座の間

マルティナ「あ！よかったわ、どうだった？」

ラース「一件落着だ。マルティナ、認めてくれてありがとな」

マルティナ「ラースからお願いされた時はどうしようか悩んだけど、思い切ってみて正解だったみたいね。あら、お金まで持ち帰ってきたのね」

カミュ「おう。まあ作戦通りに洞窟も埋めてきたぜ」

グレイグ「全く。別にそうしなくてもこちらで隠す事もできたというのに」

バン「何だか凄い話になってたんですね。ベグルとジエーンさんは医療部屋に運びました。お互い酷い怪我で、一週間は起きないかと」

マルティナ「そう。まあ、命があるだけよかったわ。三人ともお疲れ様」

カミュ「よし、兄貴。お礼はしっかりしてくれよな」

ラーズ「はいはい。今日は泊まっていくだろ？」

カミュ「まあな。あ、マヤにも言っておかねえと」

グレイグ「王には全て無事に終わった事を伝えておく。ゆっくり休んでくれ」

バン「はい！それでは失礼します！」

あなたへの想い

それから四日後、医療部屋

ベグル「ん……。ここは、デルカダール城の」

ガチャ

バン「おお！もう起きたのか、ベグル！あの怪我でもう起きるとか化け物だな！」

バンがご飯を持ってやってきた

ベグル「うるせえぞ、馬鹿。どうなったんだ？」

バン「あれから四日経ったんだ。ジエーンさんはまだ寝てる。怪我は多いけど、ベグルみたいに大怪我はほぼ無い。」

ただ、刃物で左目を切られていたみたいでな。その目は失明こそしないけど、視力は落ちるだろうって」

ベグル「チツ！リュウのやつ、そんな事までしていたのか。まあ、失明していないなら幸運だ」

バン「俺はベグルの方が大怪我だと思うけどな。肋骨五本の骨折。両腕と右足にヒビだってよ。まだ痛いのか？」

ベグル「わかんねえな。普通に動くみたいだが」

ベグルはベッドの上で少し動かしている

バン「え〜。気持ち悪。たった四日で治るわけねえのに。少し力いれてみるぞ?」

ベグル「痛え!!!」ゴン!!

バン「痛え!!!殴る事ねえだろ!!」

バンの頭にはたんこぶが出来ている

ベグル「うるせえ、馬鹿!加減つてももの考えやがれ!」

ガチャ

ライス「お、騒がしいと思えばバンの仕業か。ベグル、起きるのが早いな。大丈夫か?」

ベグル「ライス將軍、ありがとうございます。俺、結局守られてばかりですね」

ライス「そんな事ない。お前の覚悟は本物だっただろう。そうじゃなきゃ、あいつに俺は好きにしているなんて言わないからな」

バン「師匠はベグルに任せてたけど、どうしても心配だからマルティナ様に頼んでついていったんだ」

ベグル「それのおかげで助かりました。バンとカミュさんにも声をかけたんですね」

ラース「本来なら俺とカミュだけだったんだが」

バン「俺が兵士長だからベグルも守らないとおかしいって言って無理矢理ついていったんだ」

ベグル「……ハア。全く、馬鹿には困るぜ」

ベグルは少しだけ嬉しそうにしている

バン「な、何でだよ!!感謝しろよな!」

ラース「バンには苦勞するだろ?お疲れだな」

ベグル「本当世話がかかりますよ」

バン「師匠まで何言ってるんですか!!」

ベグル「そうだ、バン。感謝としてさっき俺の事を化け物と呼んでいたのは無視してやる。次は無いぞ」

バン「あ……。へへ、ベグルさんは優しいですね！助かります！」

バンはヘラヘラしている

ラーズ「その癖いい加減直せよな」

ベグル「だが、あの時俺を何回も殴っていたのは別だ」

バン「あ、あれは仕方ないだろ！死ぬと思ったんだからよ！というか起きてたのかよ！」

ベグル「バツチリ聴こえてたぜ。日頃のお返しってなあ？どういう事だろうな」

ベグルはバンを睨みつける

バン「ア、アハ、アハハ。えーっと、言葉の綾というか」

バンは焦っている

ベグル「完全復活したら楽しみにしているよ？」

バン「師匠！俺、しばらくお休みもらえませんか!？」

ラース「兵士長が簡単に休み取れるわけねえだろ」

バン「ベグルさん！すいませんでした!!」

ベグル「この復讐を糧に回復に努めますかね」

バン「そんなのを糧にしないでください!!」

二日後

ジェーン「ここは……?」

ベグル「ジェーンさん、起きたか?ここはデルカダール城の医療部
屋だ」

ジェーン「あ……ベグルさん。私、助かったのね。また、助けら
れましたね」

ベグル「覚えているか?」

ジェーン「はい……。男の人に暴力を振るわれて、ベグルさんが来
てくれた所で気を失いました。あの後、男の人はどうなったんですか

？」

ベグル「その人は洞窟に埋まったさ。あの洞窟は崩れていったんだ。左目はどうだ？」

ジェーン「少し見えづらいですけど、大丈夫です。傷つけられた時、失明するんじゃないかと思ってました。今まで見ていた景色や、ベグルさん達が見れなくなるんじゃないかと思って、凄く怖かったです」

ベグル「すまなかつた……。俺の問題に、ジェーンさんが意味もなく巻き込まれた……。どれだけ謝罪しても足りないよな」

ベグルはジェーンに深く頭を下げる

ジェーン「そ、そんな事ありません！ベグルさんが来なければ、間違いなく殺されていました。片目が見えにくくなっただけで済んだのは奇跡です。」

生きて、また皆やベグルさんを見る事ができているんです。これは間違いなくベグルさんのおかげです。本当にありがとうございます」

ベグル「ジェーンさん……。ありがとう。こんな所で言うのも何だけど、ずっと前から言おうと思っていた事がある」

ベグルは顔が赤くなっている

ジェーン「はい。なんででしょう？」

ベグル「俺と付き合ってもらえませんか？」

ジエーン「え？」

ベグル「俺は、ジエーンさんの明るい所や、夢を必死に追いかける姿がとつても素敵で眩しかった。その光は、俺に力をくれたんだ。

だから！俺はジエーンさんの隣で君を護りたい！もう怖くないよ
うに。どこにだってジエーンさんが行っても、俺が守ってやる！世界の
どんなやつからも守ってやる！」

ジエーン「ベグルさん……。はい、私もずっと好きでした。よろ

しくお願いします」

ベグル「え？や……やった……。いいのか？」

ジェーン「ふふ、私も好きだったんですよ？いいに決まってるじゃないですか」

ベグル「俺……過去の事とか、全然話してないんだぞ？気にならないの？」

ジェーン「ベグルさんが話したくないなら、話さなくていいです。私は全然気にしません。昔に何があっても、何をしていても、今のベグルさんになるために必要な時だったんです。なら、全く気になりません」

ジェーンは優しく答えた

ベグル「ハハハ！立派だな、ジェーンさん。ありがとうよ。もう動けるか？」

ジェーン「すみません、まだあまり動けなくて。ベグルさんは動け

るんですね」

ベグル「まあ、少し前からな。俺も激しくは動けないさ。そうだ。折角付き合っただし、呼び方も変えようか。さんはもういららないな。ジェーン。こう、呼んでもいいか？」

ジェーン「はい、喜んで。ベグル君」

ベグル「ハハ。君か。少し慣れないが大丈夫だぜ」

ガチャ

バン「あ！ジェーンさんも起きたのか！げ！！ベグルが立ってる！ヤベエ！」

ベグル「チツ！うるせえのが来たよ」

ジェーン「えつと、確かバンさんでしたよね。お世話になりました」

バン「いやいや、気にしないで。無事で本当によかった！目も大丈夫みたいだな」

ジェーン「はい。少し見えづらいですけど大丈夫です」

ベグル「おい、もう帰れ。邪魔すんな」

バン「何だよ、今来たばかりじゃねえか。ベグル、立って大丈夫なのか？」

ベグル「少し歩けるようになったただけだ。まだてめえの処刑は無理だ」

バン「それはずっと無理でお願いします！あ！ジーンさんの分のご飯持ってくるな」

ベグル「お、馬鹿のくせに気が利くじゃねえか。普段もそうしていろ」

バン「うるせえぞ、化け物！」

ベグル「その呼び名を許した覚えは無いが？次は無いとも言ったよな？」

ベグルは間髪入れずにバンを睨みつける

バン「ベグル様!!聞き間違いですよ！へへ、それでは失礼します」

バンは逃げるように出ていった

ベグル「チツ！」

ジェーン「ふふ、楽しそうだよ。ベグル君」

ベグル「まあずっとここにいとつまらないが、バンが来れば賑やかなるからな。少しは紛らわせるんだ。あいつもそれをわかつてるんだろうな。ありがたいぜ」

ジェーン「私も早く治してラムダに帰らないと。皆心配してるよね」

ベグル「多分バンから連絡行くと思うぜ。ミラさんあたりは飛んでくるんじゃないか？」

ジェーン「ふふ、多分そうね。ミラはすぐに来ると思う」

ベグル「急いで治そうな。そうしたら、俺もラムダに行ってジェーンさんの親に謝罪しないとだしな」

ジェーン「もう！気にしなくていいって言ったのに！」

ベグル「まあ、少しだけでもだ。それと、付き合っている報告もな」

ジエーン「そ、そうね。それはするわ」

ベグル「数日はゆっくりしてるか」

ジエーン「うん、ベグル君」

ラーズの暇な一日

それから、三ヶ月後

デルカダール城 玉座の間

ラーズ「マルティナ、どうしたんだ？ドレスじゃないなんて」

ラーズが鎧を着てくると、マルティナはどこかに出かけるような服装になっていた

マルティナ「ごめんなさい、ラーズ。私、今日はベロニカ達と女子会なの」

ラーズ「え？そうだったのか？」

マルティナ「ええ。前から手紙で知らされてて、お休みをお父様からいただいたの」

グレイグ「ラーズはまだ知らなかったのだな。ラーズも休んでいてもいいのだぞ」

マルティナ「うっかりしてたわ。連絡するのが突然でごめんなさい」

ラーズ「いや、構わないさ。マルティナも王女としての仕事ばかり

でストレス溜まるもんな。ペロニカ達とたくさん楽しんでこいよ。俺は、どうしようか。バン達に久しぶりに指導しに行くか」

グレイグ「ラース、もし予定が無いならブレイブ達と城下町で見回りをしてくてくれ。ブレイブ達と触れ合いたい人もたくさんいるよ
うだ」

ラース「そうだな。わかった、任せてくれ」

マルティナ「それじゃあ行ってくるわね」

その後、訓練場

ラース「というわけで、久しぶりに俺が指導しよう」

兵士達「はい！」

ラース「皆がどれくらい強くなってるか見てやるぞ。久しぶりに最後はあの組手をやるか。流石にバン達は一人できてくれ。もうお前は二人でもキツイからよ」

バン「えー、いいじゃないですか、師匠！俺達に奢ってくださいよ
！」

ラーズ「あ？これは指導だ。奢るのはお前らのやる気を出させるためであって、別に奢りたいわけじゃねえんだぞ」

ベグル「すみません、ラーズ將軍。馬鹿の言う事は無視していいですよ」

バン「酷え！」

ラーズ「それじゃあ、まずはいつも通りやっていてくれ」

しばらくして

ラーズ「おお！ダバン、いい捌き方だ！岩石落とし！」

ダバン「ありがとうございます！はやぶさ斬り！」

ラーズ「お？油断したんじゃないか？心眼一閃！」

ダバン「受け流しの構え！」

ラーズ「わかってきたな、どんどんいくぞ！」

数時間後

ラース「よし！皆、強くなってるじゃないか！いいぞ！」

バン「はい！師匠も変わらずのようでよかったです！」

ベグル「……お前ら、少し疲れすぎだ。もっとしつかりしろよ」

組み手が終わるとバンとベグル以外は少し疲れていた

ガザル「ハア、ハア、お前らが体力おかしいんだろうが」

ロベルト「そうだぞ。何で多少息が乱れてる程度なんだよ」

ギバ「皆、休憩だ。この人達にはついていけんぞ」

兵士達「はい……」

ラース「それじゃあ訓練は終わりだ。偶にはこっちに来れるようにしようか」

玉座の間

ラース「ブレイブ、コロ。俺と城下町に行くぞ」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン！」

デルカダール城下町

ラーズ「ブレイブ達と外に出るのは久しぶりだな。またこうやってのんびりとするのもいいよな」

ブレイブ「ガウ」

歩いていると、前から来た男性がラーズ達に気づいた

男性「あ、ラーズ様！ブレイブ達とお散歩ですか？」

ラーズ「おう。触ってもいいぞ」

男性「いいんですか？なら、コロを触らせてもらいますね」

コロ「ゴロゴロ」

コロは撫でられて喜んでいる

男性「皆が言ってる通りもふもふで可愛いですね。癒されます」

ラーズ「怖くは無くなっているみたいだな。嬉しい限りだぜ」

男性「最初は凄く怖かったですけど、子ども達と遊んでいるのを見てどんどん慣れていったんです。最近だと、街の人達が魔物掲示板をブレイブと一緒に変えてるんですよ」

ラース「え？それは兵士達の仕事だろ？あいつら、サボってやがるな」

男性「いえ、違うんです。俺達がそれを变えるくらい手伝おうと思つてバンさんに頼んだんです。そしたら、ブレイブが見回りに来た時は是非やってくれと言われて」

ラース「ほう。ただ、ブレイブは喋れないぞ。どうやってるんだ？」

男性「ブレイブは喋れなくても返事はできます。だから順番に板を見せて、こいつ？こいつ？という感じでやるんですよ」

ラース「な、なるほど。それならブレイブも街の人と交流できるしいいかもな」

女性「あ、ラース様にブレイブちゃんだ！こんにちは」

奥からは女性もやってきた

ラース「よう。よかつたら触っていつてくれ」

女性「ブレイブちゃんは朝も私とお仕事したもんね」

ブレイブ「ガウ」

ラース「お仕事？朝の見回りか？」

女性「いえ！実は私飲食店やつてるんですけど、前にブレイブちゃんに手伝ってもらったらお客さんにも大好評で、それから偶にブレイブちゃんに料理を運んでもらっているんです」

ラース「ブレイブ、そんな事してたのか!？」

ブレイブ「ガウガウ」

女性「カツコイイし可愛いし、すつごく言う事聞いてくれるしでもう大助かりなんですよ。ありがとう」

女性はブレイブを慣れた手つきで撫でている

男性「あ！もしかして、あの広場横にある新しいお店の事か!？」

女性「はい！よかったら、ラース様も来てくださいいね」

ブレイブ「ガウ」

ラース「知らない間に何だかブレイブが街の人気者になってるな」

しばらくして、広場

女の子とその母親が話しかけてきた

女性「あら、ラース様にブレイブ君、コロちゃんも。お散歩ですか？」

ラース「今日は少し暇だな。ブレイブ達と遊びにきたんだ」

女性「ブレイブ君可愛い。最近、ブレイブ君をよく見るようになって嬉しいですよ」

ラース「前の要望で、ブレイブ達と触れ合いたいって声があったかな。ブレイブ達だけで町を出歩かせているんだ」

女の子「あ！コロちゃん！」

コロ「キャン！ハッハ！」

コロは女の子の方へ走っていく

女の子「お散歩？今日も可愛いね」

コロ「ゴロゴロ」

コロは撫でられている

女性「あ、ラース様。いつも娘がお世話になってます。あの、よかつたらいつものお礼です。受け取ってください」

ラース「おお。美味しそうなお菓子だな。ありがたくもらうな。ありがとうだよ」

その後、カフェ前

店の前にはcloseの看板が出ていた

ラース「あれ？やってないのか？おかしいな。いつも休みの日なんて無いのに」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブがメニュー表を指している

ラース「ん？メニュー表に張り紙」

すみませんが子どもができそうな為、お店はしばらくお休みさせていただきます

ラース「ハアア!? バンのやつ、こんな事言っただけでなかったぞ! マジかよ!」

ガチャ

メグ「あ! やつぱりラース様でしたか! しかもブレイブ君達も!」

ラース「おお、メグ。子どもができるのか。おめでとう! 確かに少しお腹大きいな」

メグ「バンから聞いてなかったんですね。結構前にわかっていたのですが、忘れてるんでしょうね」

ブレイブ「ガウ……」

ブレイブはメグを見て少し警戒している

メグ「ふふ、怖がらなくても破裂とかしないから大丈夫よ」

コロ「キャン! キャン!」

コロはメグに飛びついた

メグ「あら、飛びついてきたわ。可愛い。もふもふね」

ラース「急に悪かったな。ゆっくりしていてくれ」

メグ「暇だったんで平気ですよ。また来てくれると嬉しいです」

デルカダール城 大広間

バン「あ、師匠！ブレイブ達と散歩に行ってたんですね！」

ラース「おい、バン！お前、メグが子どもできそうなら伝えろよ！メグが暇そうにしてたぞ！」

バン「ああ!!伝えるの忘れてました！メグに会ったんですか？」

ラース「おう。全く、大事な時なんだぞ。明日からお前、城に来るな。メグと一緒にいてやれ」

バン「ええ!?!確かにそうですね、メグが大丈夫って言うてるんですよ。それに、師匠を支える役目は!?!」

ラース「今優先するのはメグの事だ。マルティナ達には言うておくから休め」

ブレイブ「ガウガウ」

バン「ブ、ブレイブまで！ブレイブ、俺がないからって調子に乗るなよ！」

ブレイブ「ガブ！」

ブレイブはバンの腕を噛んだ

バン「痛い！！だから噛むなっ！いつも言ってるだろ！」

ブレイブ「ガウ！」

バン「何だよ！ブレイブまで馬鹿にしてきやがって！」

ラース「はいはい、ブレイブと会話してて羨ましいがさっさと帰れ」

バン「雑じやありませんか？まあ、わかりました」

その夜、マルティナ親子の部屋

マルティナ「バン達に子どもねえ。おめでたいわ。それなら休みは必要ね。わかったわ」

ラーズ「あいつも何でもっと早く言わないんだか」

マルス「父さん、バンさんに子どもでできるの？」

ルナ「男の子？女の子？」

ラーズ「まだわからないぞ。もっと時間が経ってからだな」

ルナ「楽しみー！私、いっぱい遊んであげる！」

マルティナ「ふふ、ぜひそうしてあげて。きつと喜ぶわ」

マルス「そういえば父さん。ブレイブ達の誕生日が近いよ。なにする？」

ラーズ「お、そういえばもうそんな時期だな」

マルティナ「城下町の皆もブレイブ達を気に入ってくれてたんでしょ？なら、街全部でパーティーにしましょう」

ラーズ「おいおい。やたらと規模が大きくないか？大丈夫なのか？」

マルティナ「私達も民達と一緒に騒いで交流を深めたいわ。ユグノアみたいだね」

ラース「なるほどな。まあ、王様にも話してみよう」

マルス「パーティー！やったー！」

ルナ「ルナ、前のドレス着たーい！」

マルティナ「楽しみにしてましょね」

ラース、未来へ

一週間後、デルカダール地方

ラースは一人で見回りをしていた

ラース「よし、見回りはこんな感じで大丈夫だな。魔物掲示板にも書いておかないと。あと、ブレイブ達のプレゼントどうするかな」

その時、突然近くに裂け目が現れる

ブワッ！

ラース「え!? な、何だこれ!? 吸い込まれる! うわあああ!!」

シユン!

裂け目は消えていった

デルカダール地方

ラースは気を失っていた

ラース「……………あれ? ここ、は? デルカダール地方… だよな? でも、何となく雰囲気が違う? 城に行ってみるか」

デルカダール城

ラース「おかしいな。掲示板が無くなってるとし、街も変わった? お城も何だか違うしな。どうなっているんだ?」

玉座の間

ガチャ

ラーズ「おーい、マルティナー」

マルティナ「……………」

玉座にいるマルティナは髪が短くなっている

ラーズ「え？マルティナ？だよな？髪が短い……………」

グレイグ「……………」

ラーズ「グレイグはそこまで変わってないな。あれ？マルティナ、いつの間に髪の毛切ったんだよ」

マルティナ「嘘…………… ラーズ、なの？」

マルティナはずっと驚いた表情から動かない

ラーズ「ん？俺がラーズ以外に見えるのか？」

マルティナ「何で…………… だって、あなたは……………」

グレイグ「貴様……本物か？魔物ではなさそうだが」

グレイグからは疑心の目を向けられている

ラーズ「な、何だよ、失礼だな。何だか全部おかしいぞ。街も兵士も人も、グレイグもマルティナもどうしたんだ。俺の知ってる状況じゃないんだが、ここはどこだ？」

マルティナ「もしかして……過去のラーズ？」

マルティナはラーズの発言にハツとしたように呟いた

ラーズ「え？過去？……まさか！君は未来のマルティナか!?俺の死んだ世界のマルティナか!？」

マルティナ「ええ！私は未来の世界のマルティナ。あなたの世界とは違うマルティナよ」

合わなかった話が噛み合った

ラーズ「嘘だろ!!え？じゃあここは、俺の死んだ世界!?どうしてだ!？」

グレイグ「何があったのだ。落ち着いて話してみてくれ」

ラーズ「おう。今日は俺、いつもの見回りをしていてな。デルカダール地方の魔物の様子を見ていたんだ。それも終わって城に帰ろ

うとしている時に、変な裂け目が現れてな。それに飲み込まれてここに来たんだ」

マルティナ「そつか。ラーズはあつちでは私と一緒にお城にいるのよね。その裂け目が怪しいわね。イレブン達に連絡してみましよう」

グレイグ「お任せください、姫様」

ラーズ「何だかすまない。皆を混乱させるよな」

マルティナ「ふふ、気にしないの。私はこうやって、またあなたと話せるだけで嬉しいのよ。だって、代わりでもラーズはラーズ。ずっと……会いたかったんだから」

マルティナはとても嬉しそうに目を細めている

ラーズ「マルティナ……」

数時間後、全員が集まっていた

イレブン「ほ、本当だ！ラーズだ!!」

カミュ「マジかよ。化けてるんじゃないか?」

ベロニカ「魔力も昔のラーズとそっくりだわ。成長しているけど」

セーニヤ「ラーズ様…… また会えるなんて」

シルビア「過去から来たって言ってたわよね。大丈夫なの？」

ロウ「お主の世界に早く戻してやらんとな」

ラーズ「よう、こつちの世界の皆。話すのは初めてになるのか？ イレブンは久しぶりだな。懐かしいぜ」

イレブン「やっぱりわかるんだ。どう？ あつちの僕は元気？」

ラーズ「おう。今はユグノアの王だ。たくさん頑張っているぞ」

グレイグ「……」

グレイグは少し離れてこつちを見ている

ラーズ「な、何だよ、グレイグ。険しい顔して。ほら、そんな顔してるから表情固いんだろ。もっと笑えよ。ほら、ここをこうして」

ラーズはグレイグに近づき、グレイグの顔や口を引っ張る

グレイグ「な、何をする！ ひやめろ、貴様！」

ラーズ「ハハハハ！いい顔してるじゃねえか！」

マルティナ「うふふ、グレイグ、あなた今凄い顔してるわよ」

カミュ「おっさんらしくねえ顔だな。いいじゃねえか」

イレブン「あ、このやり取り懐かしい。あっちの世界でもやったよ」

グレイグ「貴様！人がどう話したらいいか悩んでいたら遊びおつて！」

ラーズ「何だよ、俺とグレイグは前からよく話してただろ。つて、そうか。俺が死んだ世界だから、グレイグと俺の関わりはほぼ無いのか」

グレイグ「そうだ。ラーズと話した事は数回しかないのだ。それなのに、貴様は馴れ馴れしく」

ラーズ「いいじゃねえか、楽しかったぜ」

グレイグ「ぐぬぬ、反省のかけらもなしか」

ラース「面白い事はどんどんやっていけないとな。あ、そうだった。イレブン、前は色々あって言えてなかった事があるんだ」

イレブン「え？僕に？どうしたの、ラース」

ラースは突然イレブンに向かって土下座をした

全員「!？」

ラース「俺を、いや、俺達の世界を救ってくれて、ありがとうごさいます。イレブンがいなかったら、きっと俺はこの世界のように死んでいただろうし、世界も崩壊していたはずだ。こっちの世界のイレブンから聞いた。俺とマルティナに幸せになってほしいって言ってたっとな」

イレブン「それは…… うん。言った。僕は世界もそうだけど、ラースに何回も救われた。それなのに僕は何も出来ないまま、ラースは死んでしまった。だから、僕は君に必ず幸せになってほしかった。そうすれば、これまでのお礼に少しはなるんじゃないかと思つて」

ラース「ハハ、そうか。俺はイレブンの助けになれていたのか…… 全く、俺は馬鹿だったな」

イレブン「どうしたの？」

ラーズ「俺はずっと皆と共にいるには相応しくないと思っていたんだ。大した助けにもなれず、皆みたいにはなれないと考えていた。恐らくこっちの世界の俺も同じ考えを持っていたはずだ」

全員「そんな事ない!!」

ラーズ「そうだよな。俺達の世界の皆にも同じ事言われた。昔はよく自分を責めてたけど、もうそれは大丈夫だ。俺は、皆の仲間だもんな」

イレブン「うん！ラーズは絶対に僕達の大事な仲間だよ。間違えたら駄目だからね！」

未来での生活

ベロニカ「さて、少し真面目に考えましょう。時の裂け目って考えると、イレブンが前に戻ってきたやつと似てるのかしら？」

ロウ「おそらくその類じゃな。呪文も無しに突然開いたとなると、時が一時的に乱れたのかもしれないのう」

ラース「なら、もう一度その裂け目を見つけないとなのか」

セーニャ「ですが、それはかなり難しい事ですわ」

シルビア「そうよね。前は偶然時の祭壇にあったけど、今回もそういうわけにはいかないわよね」

カミュ「ラースは帰りたいんだろ？俺達で世界中回ろうぜ」

ラース「悪い。助かるぜ、弟よ。皆も面倒かけてすまねえ」

カミュ「は？弟？俺が？」

ラース「ああ、そうだった。気にしないでくれ」

カミュ「お、おう」

イレブン「でも、僕もマルティナももう簡単には動けなくなっただから、頼るのは他の皆になるんだ」

ラーズ「俺も久しぶりに世界を回ろうか。過去の世界だと、俺はマルティナの騎士だから旅なんて出来てねえからよ」

マルティナ「えっと、ラーズ。よかつたらなんだけど、ここにおいてくれない？」

ラーズ「ん？どうしたんだ？」

マルティナ「その……何というか」

マルティナは少し言いくさそうにしている

ラーズ「……………へへ、いいぜ。悪いな、皆。俺はここにいる。世界を飛び回るのも魅力的だが、そのせいで周りを乱したら問題だからな。時の流れが周りとは違うやつは大人しくしてるさ」

ロウ「そうじゃな。あまり激しく動くのも問題かもしれんの」

シルビア「情報はアタシ達に任せてちょうだい！」

ベロニカ「私達で色々調べてみるわ」

カミュ「ラーズはマルティナの隣にいてやれよ。時が違うとは言っても、恋人同士なんだからよ」

イレブン「よし！皆、ラーズを元の世界に戻すために頑張ろう！」

イレブン達はバラバラになっていた

グレイグ「ラーズ、お前は普段どうやってお城で生活しているの？それを教えてくれればこつちも準備しよう」

ラーズ「俺は子ども達と一緒にマルティナと同じ部屋にいるんだ。まあ夫婦だから当然なんだが、こつちではそうもいかないだろう？別の部屋でいいぜ」

グレイグ「どうされますか、姫様」

マルティナ「わ、私は構わないわ。ラーズが生活しやすいようにしましょう」

ラーズ「いいのか？悪いな、マルティナ」

マルティナ「いいのよ。それと、きつとお城も違うわよね？案内するわ」

ラーズ「そうなんだよ。どこがどうとかわからねえ。何でこんなに変わってるんだ」

グレイグ「デルカダールは大樹が落ちて崩壊したんだ。だから、城下町とお城を全て建て替えたのだ。だから、前の城や街とは違いがあるんだ」

ラーズ「なるほど。こつちの世界ではそういう影響もあるのか。色々考えないとだな」

訓練場

マルティナ「ここが訓練場よ。私も偶に体を動かしに来てるの」

グレイグ「兵士達は俺が教えている。ラーズも少し戦ってみたらどうだ？」

ラーズ「いいねえ。俺は過去の世界だと兵士長だったんだ。だから、兵士達の名前も戦い方も知ってるぜ。何も知らねえあいつらを驚かせてやろう」

ラースは少しニヤニヤしている

マルティナ「あら、イタズラ好きだったのが加速してないかしら？」

ラース「へへ、こっちではイタズラする機会が多くてよ。楽しいんだぜ」

グレイグ「イタズラ好きだったのか。全く、子どもっぽいのでは」

ラース「グレイグの部屋のベッドの下には、実は」

グレイグ「何を言おうとしている、貴様!!!!」

グレイグはいきなりラースから告げられそうになった事に大焦りしている

ラース「こんな感じだよ」

マルティナ「……………グレイグ？」

グレイグ「ぐっ……………。何ででしょうか」

マルティナ「処分しなさい」

グレイグ「……………はい」

グレイグは項垂れている

ラース「ハハハハ!!最高!」

グレイグ「過去の俺……。何てかわいそうなんだ。こんなやつに
いようにされるなど」

バン「グレイグ將軍!マルティナ様!そちらの方はどなたですか
?」

ラース「よお、バン!いつもより踏み込みが十五度浅いぞ!斬り方
も少し雑なんじゃないか?」

バン「え?どうして俺の名前を」

マルティナ「もう、ラース!あまり兵士達を混乱させないで」

ラース「へへ、悪いな、マルティナ。少しからかいたくなつてよ」

グレイグ「こいつはラース。俺達の仲間の一人だ。今日から少しこ
いつに指導してもらう。頼んだぞ」

ラース「よろしくな！」

バン「は、はい。お願いします」

ギバ「グレイグ將軍の仲間って事は……」

ダバン「勇者様のお仲間ですか!？」

ラース「おう。イレブン達と一緒に旅してたんだぜ」

ガザル「まだいらっしやっただんですね。俺、八人だと思ってました」

ラース「まあ、少し事情があつてな。教えるのはグレイグほど上手くないが、明日からよろしくな」

未来での生活2

夕食時

デルカダール王「おお、そなたがラーズ殿か。話は聞いている。イレブンが救った過去の世界のラーズなのだな」

ラーズ「王様。どこの世界も変わりませんね。一応初めましてになるんでしょうか？」

デルカダール王「まあ、厳密にはそうなるな。ただ、お主を見ると、やはりガラツシュの村を思い出す。我が息子、ホメロスがそなた達の村に取り返しをつかない事をした。この世界のラーズに代わって、そなたに謝罪する」

デルカダール王は深く頭を下げている

ラーズ「い、いえ！王様、気にしないでください！俺はもうグレイグに恨むのは相手が間違っている事を教わりました」

グレイグ「俺に？過去の世界の俺はラーズに謝罪しなかったのか？」

ラーズ「いや、したさ。もううんざりするくらいにな。だが、俺は皆がわかっている通りホメロスを憎んでいた。それこそ、刺し違えても、と思うほどに。」

でも、グレイグとマルティナから魔王に取り憑かれる前のホメロスの事を聞いた。ホメロスもきつと、いいやつだったんだろ？弱い所をつけこんだウルノーガが悪いんだ。ホメロスは悪くない。そう、思い直したんだ」

マルティナ「ラース……。そうよ。ホメロスは嫌々ながらも、小さい頃の私と遊んでくれたもの。その時の手や表情は優しかった。あの非道な行いなんてするはずなかったの」

グレイグ「ラース……。ありがとう。俺の大切な友を、誤解しないでくれて心の底から思う。お前は優しいし、心が強いのだな」

デルカダール王「わしからもお礼を言おう。どうか、ホメロスを憎まないでやってくれ。あの子は本当は優しいんじゃない」

ラース「はい！俺はもう誰も憎んでいません。だからこそ、俺は兵士長になったんです」

マルティナ「どういう事？」

ラース「俺達が邪神を倒してマルティナ達と共にデルカダール城に帰った後、城内での俺の役職の話になってな。その時にグレイグとマルティナから軍師になればいいと言われてよ」

マルティナ「あら、いいじゃない。ラーズの頭の回りのよきなら軍師でもやっつけていけるわ」

ラーズ「それを俺は絶対に認めなかった」

グレイグ「何故だ？自分の事だからわかるが、きっと姫様とラーズを共にいさせたかったのだろう？」

ラーズ「その軍師の席はもう埋まっているからだ」

デルカダール王「……なるほど。ホメロスの事か。確かにホメロスも軍師だった。だが、この世界もそうだがもういないのだぞ」

ラーズ「それでも、ホメロスは王にとって息子のような存在。そんな男が、必死に努力して就いた地位を奪う事は俺にはできない。だからその役職は断って、兵士長になったんだ」

グレイグ「そこまでホメロスの事、王の事を考えてくれていたのだな。ありがとう」

ラーズ「話が長くなったな。早く食べないとな」

その後、マルティナの部屋

ラーズ「懐かしい。俺がまだこの城に来たばかりの頃の部屋と似ている」

マルティナ「あら、そうなの？置いてある物も大体変わってるんだけどね。それにしても、よく食べるのは変わらないのね。お父様やグレイグが驚いてたわ」

ラーズ「城の飯は美味いからな！毎食おかわりしてるんだぜ！」

マルティナ「うふふ、ラーズらしいわ……………ねえ、ラーズ」

ラーズ「わかってるさ、マルティナ。ずっとこうしたかったんだろ？」

ラーズはマルティナを抱きしめた

マルティナ「うっ……………うう……………うん！あの日、ラーズが死んだとわかった日が、私がラーズに抱きしめられた最後の日。また……………こうしてほしかった」

マルティナは我慢していたかのように泣き始めた

ラーズ「そうなんだな。よく……………頑張っているな。姿は見えなくとも、俺はマルティナのそばにいる。絶対だ。いつも、見ているんだ」

マルティナ「ごめんなさい。過去の世界のラーズには、関係ない事

なのに」

ラーズ「そんな事ないさ。世界とか難しい事は無視だ。マルティナはマルティナだろう？俺が愛してやまないマルティナなんだ。未来とか過去とか関係ない。俺は、マルティナを愛しているぞ」

マルティナ「ラーズ……私もずっと愛しているわ。もう少しだけ……このままでいい？」

ラーズ「そんなの構わないさ。今まで頑張ってきたマルティナへのご褒美だ。たくさん楽しんでくれ」

マルティナ「うん。ねえ、私がラーズをこの城に残した理由、わかってるんでしょ？」

ラーズ「ああ、わかってるぜ。俺は、マルティナが独り占めできるぜ。お願いがあれば何でも言ってくれ。出来る限り叶えてやるよ。この世界の俺の分までな」

マルティナ「ラーズ、ありがとう。それじゃあ、明日からよろしくね」

ラーズ「おう、任せてくれよな」

次の日から、マルティナは王女を休んだ。デルカダール王とグレイグからも、行きたい所ややりたい事をしてこいと言われ旅行やお祭りなど様々な事を二人で楽しんだ。

偶に仲間達と報告をして情報を交換していたが、一向に時に変化は現れなかった

一方、過去の世界では

デルカダール城 玉座の間

マルティナ「本当に見つからないの!？」

マルティナの驚きの声が上がっていた

グレイグ「すみません、姫様。草の根をかき分けて探しましたが、もうデルカダール地方にはいないかと」

ブレイブ「申し訳ございません。私も魔物達に聞いたのですが、誰も見ていないそうです」

デルカダール王「どこに行ってしまったのだ、ラースよ。こんな突然いなくなる事など、今まで絶対にあり得なかったというのに」

マルティナ「皆にも連絡しましょう。世界から情報を集めるわよ」

数時間後

カミュ「兄貴がいなくなっただってマジか!？」

マヤ「本当に兄ちゃん、消えちゃったの!？」

イレブン「そうみたいなんだよ、カミュ、マヤちゃん。その反応って事は何も知らないんだよね」

カミュ「そうだな。俺達は何も知らねえな」

シルビア「困ったわね。ラーズちゃんはイレブンちゃんやベロニカちゃんみたいに移動呪文は使えないからキメラの翼くらいだけど、そんな連絡も無くなってる」

セーニヤ「何か異変はあったのですか？」

グレイグ「いや、何も無いな。普段通りに見回りに行くと出ていった。町の人も町から出て、魔物の調査をしているのを確認している」

ベロニカ「でも、そこからラーズは帰ってこなかった」

ロウ「となると、デルカダール城前が怪しいのかの」

マルティナ「でも全兵士とグレイグが探して、ブレイブも魔物達に聞いてまわっても、なんの痕跡も無かったみたい」

マヤ「そ、そんな……」

バン「すみません、お力になれず。まさか師匠がそんな煙のように消えるなんて」

イレブン「気にしないで、バン。あのラースがどこかに連れ去られるほど弱いわけではないし」

カミュ「兄貴を連れ去れるやつがいたらそれはもう魔王とかだろ」

マヤ「マルス達は？何か言ってた？」

グレイグ「いや、特に何も知らなかった」

全員「うーん……」

バン「考えてても仕方ないですよ！皆で探した方がいいですよ

！
」

マルティナ「そうね。私はここでレースが帰ってこないか待ってるわ。グレイグもバンもブレイブも皆と協力して、世界中探して。お願い！」

全員「了解！」

未来での生活3

それから一月後、未来世界のデルカダール城

玉座の間

ラーズ「今日も報告は無し……か」

ベロニカ「ええ、ごめんね、ラーズ。そうそう現れないのはわかってたけど、もう一月が経つのね」

マルティナ「……元の世界の皆が心配よね。何も言わずに来てちゃったんでしょ？」

ラーズ「ああ。心配しているはずだ。早く帰ってあげたいが、今はまだどうしようもできないな」

グレイグ「耐えるしかあるまい。互いにな」

ラーズ「そうだよな。報告ありがとう、ベロニカ。またよろしくな」

ベロニカ「いいのよ、気にしないで。私もラーズと久しぶりに話せて嬉しいんだから」

レース「そういえば、こっちのベロニカは元の姿に戻れないのか？」

ベロニカ「え!?!そっちの私、元の姿に戻れるの?」

レース「一時的にな。特殊な首飾りをつけて魔力を込めると戻れるんだ」

ベロニカ「ええー!いいなー!私も戻りたい!」

レース「俺に言われても困るんだがな。だが、その姿でかなり時が経っただろ?もう慣れたんじゃないか?」

ベロニカ「そりゃあそうだけど、困る事はまだまだ多いんだから!少しでも戻りたいわ!私、その首飾り見つけるわ!」

レース「お、おう。頑張れよな」

その後、訓練場

マルティナ「ハア!テヤア!」

レース「よっ!ハア!」

マルティナ「やっぱり腕が上がってるわ。私じゃ敵わないじゃない。そっちの世界で大分強くなったのね」

ラーズ「まあ、邪神と戦うためにはかなり強くないとだつたらな。今となつたらこの強さはあまり必要ないんだ。衰えも感じてきたしな」

グレイグ「おっさんみたいなお仕事を言うようになったのだな」

ラーズ「俺はまだおっさんじゃねえ！」

バン「あ、ラーズ將軍！また指導お願いしてもいいですか？」

ラーズ「おお、バン！いいぜ、どんどん教えてやるよ」

グレイグ「やはり前の世界で皆と仲良くしていただけあって、馴染むのが速いですね」

マルティナ「元からよ。皆と仲良くしていつてすぐに馴染んでいたの。性格や人柄も関係あるのかしら。いい人でしょう？ラーズは」

グレイグ「……………はい。私をおもちやにしてくるのを除けば」

マルティナ「ふふ、それも彼のいい所だから。本当に嫌な事はしてこないのよ……………」でも、彼は私の知ってるラースより大人だわ」

グレイグ「そうですか。ですが、ラースも本来生きていけば、ああなっていたという事じゃないでしょうか」

マルティナ「そうね。多分そうなんだと思うわ。でも、いきなりその姿を見せられても、何だか違和感あるわ」

グレイグ「私には、深く言う事ができません。まだ、姫様ほどあの男を知らないのです」

マルティナ「ええ、ごめんなさい。わかっているわ。こんな事を思っているのは私だけなのも。私が、彼にわがままを言っている事も」

グレイグ「姫様、それはわがままではございません。当然の事です。愛する者が生きて目の前に現れたら、人は誰でもこうなります」

マルティナ「……………」ありがとう、グレイグ」

その夜、マルティナの部屋

ラース「なあ、どうしたんだ、マルティナ。少しブーツとしてるぞ。

悩み事か？」

マルティナ「少しだけね。ラースは私の知るラースより、遠く離れた気がして」

ラース「まあ、世界が違ふとそれまでの自分とは変わっているものもあるかもな。年とつたからかもしれないけどな」

マルティナ「それは私もそうよ。でも、私は今のラースとの思い出はほぼ無いわ」

ラース「……………それは間違ってるぜ、マルティナ。確かに思い出は無いかもしれないが、俺は俺だ。マルティナが知るラースに重ねていいんだ」

マルティナ「でも、今の私じゃああなたには」

ラースはマルティナの口を指で塞いだ

ラース「おっと。それ以上言うなよ。そんな言葉がほしいんじゃない。俺は、今のマルティナも大好きだ。マルティナは俺の事、嫌いかな？」

マルティナ「そ、そんな事ないわ。私も好き。だって、ラースだもの。少し変わっていたってラースだわ」

ラーズ「そう。俺は俺。世界とかどうでもいいんだ。マルティナはマルティナだ。少し変わったくらいじゃ離れないし、嫌いにもならない。だから、俺と一緒に重ねてもいいんだぜ」

マルティナ「……………ふふ。ありがとう、ラーズ。そうね。少し難しく考え過ぎてたかしら」

ラーズ「そう。笑え、マルティナ。俺はその笑顔が一番好きなんだぜ」

マルティナ「ええ、そうだったわ。私、ラーズにこれからもたくさん笑って生きる事を誓ったんだ。だって、私の笑顔はラーズのお気に入りなんですよ？」

ラーズ「お気に入りなんてもんじゃないさ。俺の宝物だ」

マルティナ「ええ、ありがとう。明日はまた少し旅行しましょう。私、ずっとラーズと海に行きたかったの」

ラーズ「へへ、いいじゃねえか。たくさん遊ぼうぜ」

それから報告は無く、時はどんどん過ぎ去っていった

ラースはそれでも待ち続けた。いつか、戻れる時が来ると。

それまではこの世界の皆と過ごして、自分が皆につけた心の傷を癒していく、と。

そして、ラースが未来に来てから二年の月日が流れた

元の世界へ

二年後のある日

デルカダール城 玉座の間

バタン！

ロウ「レースよ！ついに時の裂け目を見つけたぞ！」

ロウが焦った様子で入ってきた

レース「本当か、じいさん！やっど……… 帰れる」

マルティナ「よかったわ、レース！ずっと心配してたものね」

グレイグ「気がつけば二年か。決して短くは無かったが、なぜか二年以上お前と一緒に過ごしていた気がするな」

ロウ「場所はドゥーランダ山の山頂じゃ。準備が終わったらすぐに来てくれ。いつ消えてしまうかもわからんからの」

レース「わかった。すぐに準備する。なあマルティナ、グレイグ。頼みがある」

二人「？」

数時間後、ドゥーランダ山山頂

ラース「悪い、待たせたな」

イレブン「よかった、間に合ったね」

カミュ「これでお別れだな」

ベロニカ「本来なら会う事や過ごす事は無かったのに、何の因果かこうしてまた一緒に時を過ごせたわね」

セーニャ「ラース様、お元気な姿が見られて感激しましたわ。これからもどうかお元気で」

シルビア「ラースちゃん！アタシ、またあなたの変わらない素敵な笑顔が見れて嬉しかったわ！」

ロウ「ほほ。またお主と話せる事ができてわし達は幸せじゃったぞ」

ラース「へへ、随分長い間この世界にいたけど、皆は俺の世界とそう変わらないな。この世界の俺に代わって言わせてもらうぜ。皆、大好きだぜ！

それと、お願いがあるんだ。この紙に俺の世界の自分達に向けて何かメッセージを残してほしい。皆に見せるのと俺の思い出にするんだ。皆が確かに存在している事を忘れないために」

数分後

ラーズ「それじゃあ、俺は帰るな。皆、今までありがとう」

マルティナ「こっちこそ、私とっても嬉しかったわ。ラーズとの果たせなかった約束も果たす事ができた。やっぱりラーズはラーズね」

グレイグ「そっちの世界でも元気にしているんだぞ。姫様や子ども達と仲良く過ごすんだ」

ラーズ「ああ、そうするぜ。マルティナ、最後に一つ言わせてくれ。

俺は必ず君の側にいる。姿が見えなくとも、声がしなくとも、絶対にな。だから、マルティナは一人なんかじゃない。もう、あのベッドで寂しいと泣かなくていいんだからな」

マルティナ「!?.....ふふ、ラーズが言うならそうよね。もう大丈夫。あなたとの思い出もすっかり残ってるもの。寂しくないわ」

ラーズ「それじゃあ、さよならだ」

そうして、ラーズは元の世界へ帰っていった

シルビア「…… 行っちゃったわね。少し…… 寂しくなるわ」

イレブン「これでいいんだよ。ラーズには、これからも元の世界で幸せになってもらうんだ」

カミュ「ラーズのやつ、年をとつても大して変わらなかったな」

ベロニカ「本当ね。私達の記憶のラーズとそこまで変わっていないかったわ」

セーニャ「とても嬉しくて、涙がでるような体験でした」

ロウ「そうじゃな。まさか、生きてラーズともう一度会えるとはの」

グレイグ「ラーズという男がどんなやつなのか。俺もよくわかりました。賢く、周りをよく見て判断し、俺達とよく笑って過ごす。とても、気持ちのいいやつでした」

マルティナ「さあ、帰りましょう。ここは…… 冷えるわ」

デルカダール地方

ラース「…………… おお、戻ってきたのか。もしかして、これ相当ま
ずいか？マルティナ達、どうしてるかな」

デルカダール城 玉座の間

ガチャ

ラース「…………… へ、へへ」

ラースは少し苦笑いしながら入ってきた

マルティナ「…………… ラ、ラース？」

ラース「よ、よう、マルティナ。た、ただいま」

マルティナ「よかった……………」

マルティナは力が抜けたように顔を手で覆った

グレイグ「貴様…………… この二年、どこで何していた!!!」

グレイグが大声で怒り出した

ブレイブ「ガウ……………」

ブレイブも少し感動している

ラース「ブレイブも久しぶりだな。えつと、信じられないと思うん
だが、俺は時の裂け目に吸い込まれて未来の世界に行ってたんだ」

グレイグ「未来の世界だと？」

マルティナ「それって、イレブンが前に帰っていったあの世界？」

ラーズ「そうそう。俺が死んだ世界だ。そこで俺は二年を過ごして、新たにできた時の裂け目でこっちに帰ってきたんだ」

マルティナ「そう……。ラーズ、ずっと心配してたのよ」スタスタ

マルティナはラーズに近寄っていく

ラーズ「マルティナ、俺もずっと心配して、ぶへえ!!!」ドサ！

ラーズもマルティナに寄っていき抱きつこうとすると、マルティナはラーズを思いつき蹴飛ばした

ブレイブ「キャイン!!？」

ブレイブの側までラーズは飛ばされてきた

マルティナ「だからといって、許されるわけないでしょう」

ラーズ「ま、待て、マルティナ！俺だっけずっと心配だったんだ。そっちに連絡もできなくて、ずっと困って、グフウ！」

マルティナはラースを殴っている

マルティナ「どれだけ寂しかったと思ってるのよ!!世界のどこにもいないし、生きてるかもわからなくて!私は、本当に!!本当に!!」

グレイグ「ひ、姫様、気持ちはわかりますが少し落ち着いてください!」

マルティナ「……………そうね。この話の続きは皆にも連絡してからにしましょう。他の仲間達も、ラースにたっぷりお話したいはずだわ」

ラース「待ってくれ、マルティナ!その話は俺の言い訳は通るのか!?!」

マルティナ「それは皆次第ね。少なくとも、私には通らないわ」

ラース「(まずい……………カミュとベロニカなんてもつと酷いんじゃないか?)」

数時間後

ラース「よ、よう、皆。久しぶ、ゲフウ!」ドサ!

会うなり速攻でカミュはラースを殴り飛ばした

カミュ「てめえは今までどこにいやがった!!!」

グレイグ「…… 先程も見たな」

ベロニカ「あんた…… どれだけ私達が探し回って心配したと思ってるのよ!!」

ラーズ「こ、これには深いわけがあるんだ!」

ラーズは先程の説明を皆にした

イレブン「未来の世界か。凄い所にいったんだね」

シルビア「それならこの世界にはいないはずだわ」

セーニヤ「聖龍様も生きてはいるが、干渉できないと仰っていますね
たがそういう意味だったのですね」

ラーズ「そうそう。それに、証拠だってあるぜ。ほら、未来の皆が
自分達に向けたメッセージだ」

ロウ「これは…… どう見てもわしの字じゃ。確かに確実な証拠
じゃな」

グレイグ「ふむ。(な?!ベッドの下のあの本をラースのせいで燃やされたのか!?何と、かわいそうに)」

ラース「だからよ、俺は悪くないよな?」

ベロニカ「メラガイアー!」

ベロニカは巨大な炎の塊をラースにぶつけた

ラース「ギャアアア!!熱い!!何でだよ!」

ラースは少し焦げている

ベロニカ「だからといって、心配させた事実は変わらないわ。私、前に言ったわよね?マルティナさんを泣かせたら焼き尽くすって」

カミュ「マヤも散々泣いてたんだぞ。その反省は、しっかりと体で受けるべきだよな」

マルティナ「マルス達もずっと寂しがってたのよ。この二年、私達が心配した分返させてもらおうわ」

ラース「え、いや、それは」

カミュ「イレブン達もこのクソ兄貴に一発ぶん殴っていいぜ。皆も心配したんだからよ」

ラース「え!!?カミュさん、何を勝手に」

グレイグ「なら、一発だけな。確かに心配したのは変わらないからな」

ラース「待ってくれ!!そんな事したら俺、何回死ねば」

その後、ラースが目を再び覚ましたのは帰ってきてから三日後だったという

変化

ラーズが目を覚ました次の日

訓練場

ラーズ「久しぶりだな、皆！」

バン「俺…………… 信じてました!! 師匠は必ず帰ってくるって!」

バンは喜びで涙を流し、鼻水まで出ている

ベグル「本当によかったです、ラーズ将軍。これでバンの泣き言も聞かなくてすみますよ」

バン「馬鹿! それは言うな!」

マーズ「俺達も心配してましたけど、一番心配してたのは勇者様達ですよ。大丈夫でしたか?」

ラーズ「お前達にも心配かけたな。イレブン達にはまあ、しっかり反省させられたさ。全身火傷に全身複雑骨折だぜ? 普通ここまでするか? 信じられねえよな」

ロベルト「さ、流石は勇者様達ですね。反省のさせ方も、中々」

ギバ「そういえば、ラース将軍がいなくなつてからマルス達が毎日特訓に来ていたんです。かなり強くなりましたよ」

ラース「おお！本当か！」

ガザル「はい。マルスとルナが二人で同時にくると結構強いんです」

ダバン「流石ずっと一緒にいるだけあって、相性はかなりいいんですよ」

ラース「そんなに言うなら戦ってみるか。呼んでくるな」

しばらくして

マルス「見てて、父さん！この二年ですごく強くなったんだから！」

ルナ「私もただ魔法が使えるだけじゃなくなったの！」

ラース「よし、来い！マルス、ルナ！」

マルス「ハア！」

マルスは早速斬りかかった

レース「スピードとパワーが上がったな、マルス！いいぞ！」

ルナ「イオ！」

レース「おっと！あぶねえ。!?」

爆発を避けると、レースの目の前には既にマルスが来ていた

マルス「父さん、よそ見はダメなんだよ！ハア！」

レース「おっと！中々いい動きだな！」

レースはギリギリで防ぐ

ルナ「はああ！」

ルナが走り込んで蹴りを出してきた

レース「!?体術！ルナもマルティナみたいになってきたのか！」

ルナ「私も体を動かせるの！」

ルナはそのまま蹴りやパンチをしている

マルス「その調子だよ、ルナ！かえん斬り！」

ラーズ「ついに技を使うか！ハア！」

ルナ「マルス、行くよ！メラと」

マルス「メラを合わせて」

二人「メラミ！」

二人のピッタリのメラが途中で合わさり、大きな炎となった

ラーズ「マルスまでメラを使えるのか!?ハア！」

ラーズは炎を斬った

マルス「ルナ、交互にいくよ！」

ルナ「うん！挟むんだね！」

ラーズ「おお、凄いぞ、二人とも！」

その後

マルス「ハア、ハア。流石父さん。まだまだ敵わないや」

ルナ「でも、驚いたでしょ?」

ラース「ああ、こんなに強くなっているとはな」

マルス「僕、父さんがいなくなつてから、ずっと寂しかった。ルナもずっと寂しそうだった」

ルナ「でも、前にお母さんが夜に一人でお父さんの名前を呼んで泣いてるのを見て、一番寂しいのはお母さんなんだって気づいたの」

マルス「だから、僕達で父さんの分まで母さんを守るために強くなつたんだ!」

ラース「…… そうだったのか。悪かったな、寂しい思いをさせて。そりゃあそうだよな。お前達ももう8歳。二歳も、俺がいない間に年を迎えたんだもんな。祝つてやれず、すまなかつた」

ラースは二人を抱きしめる

マルス「いいんだよ、父さん! だって、帰ってきてくれたから!」

ルナ「お母さんもじいちゃんも喜んでた! 私達も嬉しいよ!」

ライス「ああ。俺もまた、お前達と一緒にいれて嬉しいぞ」

その後、大広間

メグ「ああ!!ライス様、本当に戻ってきていたんですね!」

メグがライスの顔を見にやってきた

ライス「久しぶりだな、メグ。あ!?!その赤ちゃんは!!」

メグの腕には赤ちゃんがいた

メグ「ふふ、去年産まれたんです。まさる、ご挨拶よ。一歳ですつて」

ライス「まだ寝てるな。へへ、可愛いな。バンなんてメロメロだろ?」

メグ「そうなんですよ。帰ってくる度、撫でたり遊んだりしてるんです」

ライス「いい父親になりそうだな。カフェの方はどうしているんだ?」

メグ「もう再開してますよ。この子の育児にもお金が必要ですから、私も稼がないとなんで」

ラーズ「困ったらバンを通じて頼ってくれよ。少しは力になるからな」

メグ「何だか申し訳ないですよ。でも、バンの事だから頼っちゃいそうですね。その時はよろしくお願いします」

ラーズ「ああ、任せてくれ」

しばらくして

マヤ「兄ちゃん!!」

マヤがラーズに抱きついてきた

カミュ「兄貴、マヤを連れてきたぞ」

ラーズ「マヤ、久しぶりだな。泣いてたんだって？悪かったな」

マヤ「だって、兄ちゃんが世界中どこにもいないって聞いてショックだったんだよ！私、もしかして死んじゃったんじゃないかって思ったんだから！」

ラーズ「俺はそう簡単に死なないさ」

カミュ「この前は俺達に散々な目にあつたもんな」

カミュはニヤニヤしている

ラース「お前、最後の方楽しんでただろ？助けるよな」

カミュ「二年もいなかったんだ。あれくらいがちようどいいだろ」

ラース「いや、明らか過剰だっただろ」

マヤ「今日からまたお城に泊まるね！」

ラース「ああ、いいぞ。たくさん喋ろうぜ」

さらにその後、ジェーンとミラもやってきた

ジェーン「あ、ラース様！ベグル君から聞きました！ご無事で本当に何よりです」

ミラ「世界中どこにもいなかったんですよね？どこにいたんですか？」

ラース「少し、遠いところにな。二人はあれからどうなったんだ？」

ミラ「私は先日、ダバンと結婚したんです。もうこっちに引越そうとしてるんですよ」

ラース「おお!!結婚までいったのか!おめでとう!!くっ……俺も結婚式見たかった……」

ジェーン「わ、私はまだです。夢を叶えてからにしようってベグル君と話し合って、よく二人で世界を巡ってるんです」

ミラ「バンさんがベグル君をよく休ませてくれるんです」

ラース「へえー。バンのやつ、気がきくな。じゃあ、ジェーンさん達は俺も祝えるな。楽しみにしてるぞ!夢を叶えるまで頑張れよ!」

夕食時

ラース「あつちでも王様達とご飯を食べていたが、それでも久しぶりに感じるな」

マルティナ「あら、そうだったの。そつちでもおかわりしてたのかしら?」

ラース「もちろんだ!マルティナも俺らしいって言ってたぜ」

デルカダール王「未来のわしはどうかであった？年で動けなくなっているような事は無いと思うが」

ラーズ「驚くくらい変わってなかったです。未来も過去も、王様は全く同じに感じましたよ」

マヤ「私は!?変わってた？」

ラーズ「マヤちゃんはおつちの世界では俺と関わってなくてよ。ほら、俺がいないから、そもそもカミュ達と家族になってないんだ」

マヤ「あ、そっか。それは未来の私、かわいそう。こんなに心地いいのに」

カミュ「という事は、俺は前みたいに兄貴の事をラーズって呼んでるんだな」

ラーズ「そうなんだ。少し寂しかったぞ。前に弟って呼んで、は？って言われたしよ」

カミュ「そりゃあ、いきなり弟なんて呼ばれたら驚くだろ」

グレイグ「ラーズがいなかったから俺と関わりは無かったのだな。手紙に未来の俺から、気持ちのいいやつだったと書かれていた。未来の俺に少しでもラーズを知ってもらえたのは喜ばしい事だな」

マルス「僕はー？」

マルティナ「あつちの世界にマルス達やブレイブ達はいないのよね。カミュ達もいないとなると、少しこの場所も広く感じると思うわ」

ラーズ「そうなんだよ。前みたいに四人で食べてて、俺もこの食事場を広すぎるって感じてたんだ」

デルカダール王「お主がいない時はブレイブ達を除くと五人だったのだ。凄く久しぶりだったが、こんなに寂しいとは思わなかった」

グレイグ「そうでしたね。いつのまにか大勢で食べるのが当たり前になっていて、少人数を静かに感じました」

カミュ「確かに未来の世界で俺達もいない、マルス達もいない、ブレイブ達もいないだと相当寂しいな」

マヤ「でも、今は私達もいるよ！寂しくなんかないでしょ？」

ラース「ああ！皆で食べるご飯は最高だからな！寂しいなんてありえないぜ！」

マルス「僕もいっぱい食べる！おかわり！」

ルナ「私はこのお肉食べる！」

ラース「よし！どんどん食べるぞ！」

マルティナ「最近、子ども達もラースに似てよく食べるようになってきたの。困ったわ」

デルカダール王「またコックが消費量に驚くかの」

グレイグ「コックも久しぶりで今日はあまり作ってないと思います。ラース！おかわりはほどほどにしておけ！」

ラース「えー！これしか残ってないのか!?明日からまた頼む!!」

カミュ「少し遅かったみたいだな。まあ、賑やかでいいんじゃないか？」

マヤ「ふふ。私、ここでご飯食べるのが一番楽しい！」

その夜、マルティナとラーズの部屋

ラーズ「ええ!?! マルス達ってもう別部屋なのか!?!」

マルティナ「そうなの。少し前にもう平気って言って二人で違う部屋にいったの」

ラーズ「なら、マルティナは夜この部屋に一人だったのか。すまなかったな」

マルティナ「いいのよ。無事で帰ってきたんだから。あの時の願いが届いたんだわ。それに、手紙に書いてあったわよ。ラーズが来てくれて、本当に救われたって。時が経って、少しずつ忘れていきそうなのが怖かったらしいわ。」

ラーズは、あっちの私も助けてくれたのね。ラーズは私にとって、本物の騎士様かもしれないわね。なーんて」

ラーズ「俺はそれで構わないぜ。マルティナを守れるなら本望だ。それが過去の世界だろうと、未来の世界だろうと、な」

マルティナ「ありがとう、ラーズ。久しぶりに一緒に寝ましょう。二人で寝るなんて何年振りかしらね」

ラース「確かにそうだな。八年振りくらいか？懐かしいな」

マルティナ「おやすみ、ラース」

ラース「ああ、おやすみ、マルティナ」

追加キャラ設定

番外編で出てきたキャラの設定です

ガク

身長 164cm

体重 63kg

性格 真面目、努力家

年齢 初登場時 19歳

スキル 片手剣、斧、盾、ブーメラン

新米兵士。ラースとバンに憧れて兵士になる。バンのように努力して、いつか誰かを守るように強くなりたいと思っている。バン達にとっても可愛がられている。シルビアの隠れファン

ダバン

身長 176cm

体重 78kg

性格 穏やか、攻撃的

年齢 初登場時 20歳（バンと同年齢）

スキル 片手剣、盾、槍、かくとう

バンと同期の兵士。得意な戦い方は、盾で防いだ瞬間に反撃を叩き込む戦い方。また片手剣もかなりの腕前であり、片手剣を任されているロベルトといい勝負をする。性格は基本穏やかで皆を守ろうとするが、素の性格は攻撃的。特にバンに対してよく現れる。

ラムダに住むミラと出会い、互いに好きな事がわかり付き合い始め二年で結婚する。まだ家は無いがいつか建てたいと思っている。ミラの前では多少甘える。

ベグル

身長 197cm

体重 92kg

性格 鬼畜、努力家

年齢 初登場時 20歳（バンと同年齢）

スキル 大剣、盾、斧、槍

バンと同期の兵士。得意な戦い方は、僅かな隙に大剣などで一撃で斬り伏せる戦い方。兵士になったのは、昔世話になった姉ちゃんの仇をとるため。そのためなら一人で強くなると誓っていたが、バンに無理矢理誘われてバン達のグループに入る。それ以降、バン達を気に入りに共に行動する。

また、目標に対して努力する事を決して怠らず、強さに真つ直ぐ向き合っている。その努力もあり、兵士達の中でも相当の強さ。バンと戦えば武器や性格の相性の良さから勝つ事もしばしば。

また性格ゆえに兵士達の間では大魔王の如く恐れられている。ガザルも合わせて鬼畜コンビと呼ばれている。ベグルを怒らせたなら、ベグルの気が済むまでおもちやにされる事で見習い達にも恐れられている。

ただバンの性格上よく被害に遭うのはバンのため、それを反面教師にされている。本人も、好きな事はバンをいじめる事と豪語するほどである。副長となり、バンを良くも悪くも支える立場となり忙しさは増した。心の中ではバンを素直に兵士長として認めている。

ジェーンと出会い一度は好きな気持ちを封印しようとするが、バン達の手助けにより付き合う事になる。ジェーンの夢が叶うまでは結婚しない、と決めジェーンと共に世界各地を回っている。信念は守りたいものは、死んでも守る。

シロ

種族 ホワイトパンサー

性別 オス

まだベビースノーの頃に、デルカダール王達とクレイモランに旅行に来た時に密猟者の罠のせいで怪我をして動けなくなっていた。その時にマルス達に助けられて仲良くなるが、一緒にいられないため野生に返した。

その後、成長してホワイトパンサーとなりつつある時にカミュと再会して、マルス達とも再会する。それ以降はカミュがなんとか世話をしているらしい。マルス達もちよくちよく会いに来ている。まだ子どもな部分が強く、よく一人で遊んでいる事が多い。好きな事は雪玉を転がして遊ぶ事。嫌いなものは強い匂いがするもの

ブレイブ

種族 キラーパンサー

性別 オス

年齢 魔物では30歳 人間にすると150歳

特徴 片方の牙が折れている

ナプガーナ密林の近くを縄張りとする魔物達の元リーダー。密猟者達に群れの皆を怪我させられ、また自分自身も牙を折られる。森の中が罠だらけで満足に狩猟もできず群れが壊滅していきそうだったが、ラーズ達に回復してもらい自分の子どもと共に命を救われる。その事をとても恩に感じ、ラーズ達についていく。

得意な戦い方は、素早く動き背後や奇襲を仕掛ける事。また、相手に応じて戦い方を変えるなど賢く立ち回る。ラーズ曰く普通のキラパンサーより力も頭脳も凄いらしく、実際に兵士達が相手でもいい勝負を繰り広げる。

ラーズの事を主人とし、絶対の忠義をみせる。ラーズ達の周りの人達も大切にし、ラーズの助けになる事を心から望んでいる。コロは亡き母が産んでくれた形見であるため、とても大切にしている。最近の悩みは、マルス達が遊んでくれなくなってきた事。

コロ

種族 ベビーパンサー

性別 オス

年齢 魔物では6歳 人間にすると30歳

ブレイブとその母親の間に産まれた子ども。母親は産んですぐに死んでしまったため、母親の事を知らない。群れの中で皆から可愛がられていたが、誰よりも早く密猟者の罠にかかり日に日に衰弱していった。

そこをラーズ達に救われる。本人は嬉しい気持ちが強くと、ブレイブほどの忠義は無いが、ラーズとマルスには感謝しているためよく懐いている。まだまだ子どもでマルス達とよく遊ぶ。人懐っこく、撫でられる事を喜ぶ。追いかけてこいや取ってこいが大好き。

ジール

身長 182cm

体重 78kg

性格 面倒見がいい優しい兄貴肌

年齢 初登場時 21歳

スキル 片手剣、ブーメラン、盾、かくとう

見習い兵士。兵士に子どもの頃から憧れており、なるんだったらデルカダールの兵士と決めていた。家族や友達を守りたくて兵士になる。兵士では珍しく回復魔法が使えるため、周りから重宝されている。性格も優しく頼まれたら断れないため、皆に頼られる。

ホカ

マヤの友達。イレブンの事を尊敬しており、王子様としてとっても魅力的に感じている。マヤとは自分から友達になり、字の練習などをたくさんつきあっていた。

マイ

マヤの友達。ラースに昔、命を救われ家族共々とても感謝していた。自分もお礼をしたかったが名前もわからずにいた。マヤからラースの事を聞き、とても似ていると思いついてみて確信する。最初にマヤに引つ張られて一緒に遊んだのを境に、友達になるようになった。

ミラ

ダバンの妻。初めての出会いは、ソルティコで人身売買のやつらに幼なじみのジェーンと絡まれていた所をダバンとベグルに救わ

れる。そこから段々と交流をし、ダバンに惹かれていく。

しかし、過去の自分が犯したジエーンに対する罪悪感から自分の気持ちを出せずにいた。ジエーンとダバンによりその思いを打ち明け、ダバンと付き合う事になる。また、ジエーンとはそれを機会により一層仲がよくなった。

ジエーンの事をとにかく心配しており、お姉さんのような気分である。また、本人もジエーンに頼られる事を喜んでいる。ダバンと結婚式の時に、ジエーンにあの日からずっとずっと大好きと言われ大号泣する。

ダバンが疲れて帰ってくる時に、少しでも楽になつてもらおうと料理やマツサージなど色々励んでいる。

ジエーン

ベグルと付き合っている。ミラとはラムダで育った幼なじみで大親友。夢は世界の様々な場所の文化や歴史を自分の目で見て感じた事を記した本を出す事。ミラと一緒に世界各地を巡っていたが、ソルティコでの出会いからベグル達とも一緒にいるようになる。

ベグルの頼もしさに惹かれていき、本人はいつでも告白を待っていたが、ベグル自身の過去の問題に巻き込まれる。その時に片目の視力を落とす大怪我をする。ベグルの過去は何も知らないが、本人は全く気にせずいつも通りでいる。

ベグルから無事付き合う事を言われた承する。親にも賛成され、夢

を叶える事を目標にしていたのを結婚する事を目標に変えていく。世界各地に行くたびに、ベグルを振り回しがちになるのを申し訳なく思っている。

ムジーナ

リーズレットの昔の仲間の一人。邪神によりパワーアップし、それをさらに闇のルビーの力でさらに力をつけデルカダールを襲った。強力な魔法を使い念力なども使いこなす。リーズレットの事はとても慕っていたが、闇のルビーなどの過剰な力によりとても凶暴な魔物となった。

ギージャ

リーズレットの昔の仲間の一人。邪神によりパワーアップし、それをさらに闇のルビーの力でさらに力をつけデルカダールを襲った。呪いのついた槍で連撃をくりだす。リーズレットの事を目標としていたが、闇のルビーなどの過剰な力によりとても凶暴な魔物になった。

リユウ

ベグルが子どもの頃好きだった人の彼氏。その時はデルカダールの兵士であった。加虐性が濃く、相手を傷つける事で喜ぶ。ベグルの好きだった人はその被害により傷だらけになっており、ベグルはそれを許せなく思っていた。

しかしベグルは敵わず、いつもボコボコにされていた。ある日、その女性を殺し兵士を辞めさせられ、仕事もそれ以降何もせず過ごしていた。ある日ベグルの事を聞き、幸せにしているのを恨んでいた。その憂さ晴らしとしてジェーンを拐い、ベグルと共に殺そうとする。ラーズ達により食い止められ、最後は生き埋めにされる

虹祭り

ラースが帰ってきてから二ヶ月後

デルカダール城 王の私室

コンコン

ラーズ「王様、ラーズです。失礼します」

デルカダール王「どうしたのだ。入っていないぞ」

ガチャ

ラーズ「王様、ベロニカ達から手紙が届いて、王様にもぜひ読んでいただこうと思ってお持ちしました」

デルカダール王「おお、そうであったか。どれ、読ませてもらおう」

デルカダール王様御家族へ

マルティナさん、グレイグさん、ラーズ、元気かしら？実はお祭りのお誘いがあったて手紙を出したの。実は、ここ数年開かれてなかったんだけど、ラムダでは天候の条件が重なると数日間虹がとても近くでよく見えるの。

その数日間を虹祭りとして、旅人やいろんな人を招いて騒いでいるの。長老様があと数日で開催できそうって言ってたから、よかったら

皆で来てください。

王様も子ども達もブレイブもどんどん来て。他の皆にもこの手紙を送ったの。楽しみにしてるわ。

ベロニカより

デルカダール王「ほう、虹祭り。噂には聞いた事があるぞ。とても絶景が広がっておるそうじゃ。わしも行ってもいいのの?」

ラーズ「はい。マルティナからも誘ってきてと言われました。皆で行きましょう」

デルカダール王「それは楽しみじゃ。どれ、グレイグにも話してこう」

ラーズ「王様、甘く見ないでください。グレイグにはもう話はしてありますよ。無理矢理、承諾を得ましたから」

ラーズは少し誇らしそうにしている

デルカダール王「ハッハッハ！流石はラーズだ！あのグレイグから許しを取ってくるとは。助かったぞ。なら、その日を待っただけじゃな」

ラーズ「はい。それでは、失礼しました」

玉座の間

ラース「マルティナー、王様にも話をしてきたぞ。楽しみにしているってよ。皆でお花見だな」

マルティナー「ありがとう、ラース。ふふ、楽しみね」

グレイグ「……………ハア」

グレイグは深いため息をついている

ラース「お?どうした、グレイグ。楽しみじゃないのか?」

グレイグ「あんな脅しみたいなき事しないと俺から許しを貰えないと思っているのか?」

ラース「へへ、悪かったな。まあいいだろ?別にさ。楽しい事はどんどんやっていかないとな」

グレイグ「貴様、いつか覚えている(あの最新刊の事まで知っているとは……………くそっ!)」

マルティナー「何の話?」

グレイグ「いえ、何でもありません、姫様。こちらのどうでもいい事です」

ラース「ブレイブ、コロ、花見だぜ。楽しもうな」

ブレイブ「ガウ」

コロ「クウーン？」

マルティナ「マルス達にも話してきて。今訓練してるから」

ラース「わかった。ダバンやベグルも行くだろうな」

訓練場

マルス「いいの、父さん!?わーい!皆でお出かけ!」

ルナ「お父さんと一緒なんて久しぶり!」

バン「二年ぶりだもんな。よかったな、マルス、ルナ」

ラース「うぐっ……。二年……。すまねえ」

ラーズは胸を押さえて謝っている

ロベルト「おい、バン。あまりその話題はするなど言っただろ」

マーズ「そうだぞ。ラーズ將軍めちやくちや気にしてるんだから」

バン「す、すみません！師匠！悪気があつたわけじゃないんです！」

ラーズ「いや、大丈夫だ。ただ、やはりグツときてしまうな。子どもにとっての二年なんて長いからよ。なおさらだ」

ギバ「駄目ですよ。マルティナ様達からも気にしすぎてるって言われてたじゃないですか」

ガザル「マルティナ様がうんざりしてましたよ。思い出しては謝ってくるって。グレイグ將軍みたいな事やめてほしいって言ってました」

ラーズ「そ、そんな事言ってたのか、マルティナ。わかった。忘れるようにしよう。ダバンとベグルはもちろん来るだろ？」

ダバン「俺、もうミラから誘われているんです。だから行きますよ」

ベグル「俺もジエーンさんから誘われてます。綺麗なんだそうですね」

マーズ「しかし、婚約者が三人か。俺達もうかうかしてられないな」

ベグル「おい、俺はまだだぞ」

ロベルト「もうしてるようなもんだろ。時間の問題だ」

ギバ「時折幸せそうな顔してるのわかってるんだぞ」

バン「幸せそうな顔っていうより、気持ち悪い、ヒツ……………殺気が飛んできた」

バンの後ろではベグルがバンを睨んでいた

ラース「おお、よく滑る口が少し止まるようになったんだな。いい事じゃないか」

ベグル「俺のおかげだな、バン？」

ベグルがニコニコしながらバンの肩に手を置いた

バン「いやー本当ですよ、ベグルさん。どれだけボコボコにされたかわからないですね」

バンも冷や汗をかきながら笑っている

ダバン「こっちはもうそれがいつも通りになってたけどな」

ギバ「最近無くなったな。前までは一日に一回はあったのに」

ラース「それじゃあまた日が決まったら連絡する。その日は城が開いてないから、お前達も休みだ。自由になっているよ」

兵士達「はい！」

春の山

数日後、聖地ラムダ

ラーズ「おお、ラムダとは思えねえ賑わいだな」

いつもの神聖な雰囲気は少し鳴りを潜め、お祝いムードとなっている。広場の真ん中にはたくさんの料理、隅には楽器を演奏している人達もいる。

マルス「ラムダは初めて来た。綺麗な場所なんだね」

ルナ「立派な神殿があるわ。でも、お祭りで皆楽しそう」

デルカダール王「ほう。ラムダは話に聞くだけだったが、来てみると何だか神聖な雰囲気を感じるな」

ベロニカ「あ！ラーズ達、ありがとう！王様もようこそ、聖地ラムダへ」

セーニヤ「皆様、お久しぶりです。お変わりないようですね」

ベロニカとセーニヤもやってきた。服装はいつもの赤と緑ではなく、明るいピンクと黄緑の服装になっている。背中には小さな羽もある。

グレイグ「随分と華やかな服ではないか。いつもの衣装はどうした

のだ？」

ベロニカ「折角のお祭りよ。しかも久しぶりのね。少しくらいムードを出したいじゃない」

セーニヤ「似合いませんでしたか？」

マルティナ「そんな事ないわ、ベロニカ、セーニヤ。とっても素敵よ。ピンクと黄緑でまるでお花みたいよ」

デルカダール王「確か、この色の花の木がこの山にも生えていたはずだ。名は桜だな」

ベロニカ「流石デルカダール王様ね。物知りだわ。そう、この山に生えている桜の木に似せてみたの」

セーニヤ「メダル女学園にもありましたね。懐かしいですわ」

ラース「それで、あそこに並んでる料理は食べていいんだよな？」

カミュ「おいおい、相変わらず兄貴は食い意地はってんな」

違う場所からカミュとマヤもやってきた

マルス「あ！カミュ、マヤ姉ちゃん！久しぶり！」

マヤ「久しぶりだね、皆。やっぱりベロニカさん達に誘われたの？」

ルナ「そうなの。マヤお姉ちゃん達もなんだね」

ラース「いいだろ、別に。いい景色の中美味しいご飯を食べ、酒を飲む。最高だろ」

グレイグ「他の皆もいるのか？」

カミュ「ああ。全員ってわけじゃねえがシルビアが来てるぜ。イレブン達はまだみてえだな」

デルカダール王「この祭りの醍醐味の虹はどこから見えるのだ？」

セーニヤ「こちらに高台があるので、そちらから見るとよく見えませわ」

マルティナ「ラース、虹を見てからにしましょう。食べるのは後でね」

ラース「わかった。じゃあ皆で見にいこうぜ」

高台

デルカダール王「おお！これは絶景じゃな」

高台から上を見ると、山の上だけあつて虹がとても近くでくつきりで見えている

グレイグ「本当ですね。青い空にかかる虹がこんな近くにはつきりと見えるとは」

ルナ「凄い、綺麗だわ」

マルス「ねえねえ、見て！あっちにも虹だよ！何個もできるものなの？」

マルスが遠くを指すと、そこにも少し小さいが虹があつた

マルティナ「あら、本当だわ。どうなの？ラース」

ラース「別に俺は俺は天気詳しいわけじゃないんだがな。まあ、知ってるぜ。条件が重なれば複数できるさ。ただ、低い所からじゃなくてここみたいに高い所から見ないとだけどな。恐らく周りにもまだあると思うぜ」

ルナ「そうなんだ。お父さん、物知りだね」

グレイグ「流石ラースだな。ん？イレブン達が来たみたいだぞ」

デルカダール王「そうか。なら、わしらも行こうか」

その後、皆でバラバラに祭りを回ろうとしていた

ラース「マルティナ、一緒に回ろうぜ」

マルティナ「あ、ごめんなさいラース。私、先にベロニカ達と約束してて。カミュ達と回ってて」

ラース「そ、そうか。悪かったな。えっと、カミュは……、マヤと回るよな。マルスもいるのか。王様は……じいさんとか。なら、グレイグと回るか。おーい、グレイグ。俺と回ろうぜ」

グレイグ「む？ラース、お前は姫様と回るのではないのか？」

ラース「それがよ、女子達で回るみてえで断られたんだ。ルナもそこに入っているんだ」

グレイグ「そうだったか。なら、一緒に回ろう」

イレブン「あ、ラース、グレイグ、僕もいれて」

ラース「おお、イレブン。いいぜ、一緒に回ろうぜ」

イレブン「そういえばブレイブ達は？」

グレイグ「それが数日前にコロが勢い余って階段から転げ落ちて怪我したのだ。まあ大した事ないしコロ自身も元気なのだが、一応城に残したのだ」

イレブン「そうなんだ。コロ、最近やんちゃになつてきたんでしょ？マルティナが手紙に書いてたよ。いたずらしてる時もあるみたいだね。誰かさんみたいだよ」

グレイグ「ふっ、本当だな」

二人はラースを見ている

ラース「な、何だよ、俺の方みて。あ！餓鬼っぽいつて思ったな！いいじゃねえかよ！いたずら楽しいだろ！」

グレイグ「コロもおそらく同じ気持ちなのだろう。ブレイブに怒られてもあまり反省しなくなったようだからな」

イレブン「うわ、筋金入りじゃん。ラーズ二号だね」

ラーズ「くそ、餓鬼扱いしやがって」

数時間後

イレブン達が話しながら祭りを回っていると、広場には他の皆が集まっていた

イレブン「あ、皆が集まってご飯食べてる。僕らも行こう」

ラーズ「少し話しすぎたな。皆のところに行こうか」

マルティナ「あら、ラーズ達も戻ってきたのね。今丁度ご飯食べようとしてたの」

シルビア「こうやって綺麗な天気の下でお食事なんてステキだね」

マヤ「私もそう思う！それに気分もよくなるよね」

グレイグ「そうだ、ラーズ。さっき言っていた山の話をしてやるといい」

イレブン「あ、そうだね。どうせなら今から皆で行こうよ」

ロウ「山の話？ラースよ、何の事じゃ？」

ラース「実はよ、今の時期なら山にいけば食べられるものがたくさんあるんだぜ。この料理もいいけど、どうせなら花見しながら少し山を降りてみないか？」

ベロニカ「あら、いいじゃない。私達もこの山なら案内できるわ」

カミュ「しかし、食べられるものか。そういえば兄貴は自然に囲まれて育ったもんな。そういう知識もあるんだな」

セーニヤ「春の山は恵の山とも言われていますわ。楽しみです」

その後、山のふもと

ラース「おお、ここまで来ると虹も遠いな」

先程まで近くに見えていた虹も遠くに見えている

ロウ「じゃが、桜がよく見える。虹が背景になってこれもいい景色じゃな」

シルビア「あら、本当ね。いいじゃない、中々お目にかかれないわ」

近くには桜の木がいくつか生えている

ラース「それじゃあ一つ目だな。桜って食べられるんだぜ」

全員「ええ!？」

グレイグ「桜を……食べる?……どういう事だ?」

ラース「まあこの桜は、だけどな。美味しい桜とそうでない桜があるんだ。これは美味しい桜だからこのまま取って花ごと食べてもいいし、料理に使う事もできる」

イレブン「え、ええ……。本当に?お腹壊さない?」

ペロニカ「私も知らないわ。本当に大丈夫なの、ラース?」

殆ど全員が疑いの目を向けている

ラース「物は試しだろ?食べてみるよ」

ラースは全員に花びらを渡した

マヤ「じゃ、じゃあ兄ちゃんを信じて……。うーん、美味しいの

かな？私はそこまでわかんないや」

マルティナ「かすかに味はするけど、なんとも言えないわね。まあ、毒ではないのね」

セーニヤ「もっと甘い味がするのかと思いましたわ」

ラーズ「だろうな。本来なら、料理してからが一番美味しいからな」

全員「ええ!？」

ラーズ「へへ、悪いな、皆。でも、毒はないからそのまま食べて大丈夫だぜ」

ラーズは少し笑っている

カミュ「てめえ、遊んでるだろ」

ロウ「ほほ、騙されてしまったわい」

イレブン「先に言ってよ、ラーズ！」

ラーズ「ハハハ！悪い、悪い。ついでに心が働いてな。次はも

う大丈夫だぜ」

シルビア「ま、まあいいじゃない、皆。ラースちゃんだって少しふざけただけじゃない。それに、料理すれば食べられるっていう知識も貰ったわ」

マヤ「いしし、そうだね。今度友達に教えようつと」

グレイグ「次からはちゃんとやるんだぞ」

ラース「おう、任せておけ」

春の山2

マルティナ「次はもっと美味しいのがいいわ。お願いね、ラース」

ラース「ああ、わかってるぜ。お、ここなんてたくさん咲いてるな。次はこの小さな黄色い花、たんぽぽだ」

ラースはしやがんで足下に生えている黄色い花を指した

セーニャ「こ、こんなお花まで食べるのですか!? お花の部分ですか？」

ラース「驚くなよ? たんぽぽは全部食べれる。花、茎、葉っぱ、根っこに至るまでな。まあ、根っこは漢方薬として使われる事が多いけどよ」

ロウ「確かに根っこは昔に薬として使われておった。じゃが、食べれるとは知らなかったの」

シルビア「何だか少しかわいそうだわ。こんなに可愛く咲いてるのに」

イレブン「…… 本当に食べれるの?」

ラース「まあ、これも料理する場合もあるがそれでもひたす程度だ

からな。このままでもいいぞ」

「ラースは取って土を取ると実際に口に入れた

マルティナ「じゃあ……ごめんなさい、少し食べさせてもらうわね。……！そうね。さっきの花びらよりは美味しいわ。独特の苦味ね」

グレイグ「これは……悪くない」

ベロニカ「ええー!?!どこが!?!全然美味しくないわよ!!」

マヤ「私も……。苦いだけじゃん」

意見は分かれるようだ

カミュ「まあ、まだ舌が子どもなんだろ。大人になればこの苦みが美味しく感じるさ」

イレブン「うう……。本当?そんな日が来るなんて思えないんだけど」

シルビア「アタシも好きではないけれど、まあ食べれなくはないわ」

ラース「この味がいいんだろ。春って感じじゃないか」

セーニヤ「甘いものは無いのですか、ラーズ様！」

ラーズ「甘いもの……ねえ。山には難しいかな。糖分は自然界にはあまり多くないんだ」

ラーズは少し苦笑いしている

ベロニカ「まあ、それは何となくわかるわ。甘い植物なんてあまり聞かないもの」

ロウ「まあよいではないか。こうやって苦みにも慣れていけば、いつか美味しいと感じるやもしれんぞ」

イレブン「そっか。じゃあ、我慢しようかな」

ラーズ「まあ、僅かでもいいなら花の蜜でも吸ってみたらどうだ？」

イレブン「それって、素材のやつ？」

ラーズ「それは素材用だ。自然にあるやつな。この紫の花のムラサキツメクサとか、奥の白い花のスイカズラ、足下のホトケノザなんて毒もないし、どうだ？」

ラースは周りにある植物の名前をどんどん言っていく

グレイグ「そ、そんなにあったのか。花を取ればいいのか？」

ラース「おう。摘んでそれを口に半分ほど含んで吸うんだ。そうすれば蜜を食べられるぜ。昔はよく食べまくってたな」

ベロニカ「何だか美味しそうね。どれどれ……。あら！確かに甘いわ！美味しい！」

セーニヤ「本当ですか！それでは、私も……。まあ！美味しいです！もう一つ……」

マヤ「私もこれなら食べられる！美味しいね！」

イレブン「最初からこういうのを教えてよ、ラース」

花の蜜は好評なようで、どんどん食べていく

ラース「え、ええ。そんなのでよかったのかよ。折角山の恵を教えたりやりましたのに」

マルティナ「ふふ、でもこれだけ咲いてると少しくらい食べても問題なさそうね」

カミュ「こんな少しの甘さでそんなに人気になるとはな」

シルビア「何だか不思議な光景になっちゃったわね。皆して地面と睨めっこしてるわ」

ロウ「ほほ。他の花ももらおうかの」

グレイグ「ライス、姫様にこんなものを食べさせていいのか？」

グレイグは少し困っている

ライス「こんなものとか言うな、グレイグ。まあ……言いたい事はわかる。ほら、皆。そろそろ戻ろうぜ。戻ったらたんぽぼともう一つを使って、俺が料理作ってやるよ」

イレブン「本当？ライスの手料理なんて久しぶりだな」

ベロニカ「私達の家キッチン使っていいわよ。材料もおそらくあるはずだわ」

その後、聖地ラムダ

ライス「待たせたな。ほら、できたぜ。たんぽぼとつゆくさのおひたし、よもぎの天ぷら、さらにサラダだ。俺の村で春になると偶に出されてたんだ。食べてみてくれ」

イレブン「見事に緑だね。でも、何だか美味しそうかも」

カミュ「つゆくさは？それも生えてたのか？」

ベロニカ「よもぎとも言ってたわね」

ラース「おう。つゆくさは青い花が咲くんだ。花が咲く前が食べごろだぜ。よもぎは、まあ草だな。だが、苦みが少なくて美味しいぞ」

セーニヤ「あ！おひたしは苦みが少ないですし、お醤油などでそれもほとんど感じませんわ」

シルビア「美味しいじゃない！サラダも苦みがあまりないわ」

マルティナ「天ぷらも美味しい。何だか不思議な味だわ」

ロウ「ええのう。これぞ、自然が作る味。大人の味でもあるが、味つけのおかげで皆が食べやすくなっておる」

グレイグ「うむ。これなら食べやすい。他のものも食べてみたくなるな」

マヤ「でも、甘いものも欲しかったな」

ラース「へへ、そう言うだろうと思ってよ。甘いものも作ったぜ。もちろん、さつきの草でな」

イレブン「あの苦い草で甘いもの？」

ラース「それがこれ、草だんごだ！」

ラースが自信ありげに皿を出した

全員「……………」

全員がそれを見て少し固まっている

ラース「あ、あれ？反応悪くないか？結構作るの大変だったんだぞ」

マルティナ「ご、ごめんなさい、何だか思ってたよりも緑で……………」

ベロニカ「そうよね。というか、それそのまんま草を丸めただけじゃないの？」

ラース「失礼だな！ちゃんと甘くなってるぜ！ほら、あんこも用意

したんだ。これもつけて食べてみてくれ」

ラースは全員に渡した

イレブン「よし、皆でいっせーのでいこう」

全員「うん」

ラース「お前ら、失礼すぎるぞ！」

イレブン「せーのっ！」

パクツ！

全員「美味しい!!」

イレブン「え!?!全然苦くない！」

カミュ「いいじゃねえか、甘さも控えめで俺も食べやすいぜ！」

ベロニカ「見た目よりずっと美味しい！」

セーニヤ「この味、ホムラの方にあるお団子に似てますわ」

シルビア「アタシ、この草だんご気に入ったわ！」

マルティナ「私もいいと思うわ。とつても美味しい」

ロウ「なるほど、こんな味にする事もできるのじやな」

グレイグ「どれ、俺ももう一つもらおう」

マヤ「兄ちゃん、ありがとう！文句言ってごめんね！」

ラース「だろ？わかってくれたか。手間暇かければ美味しくなるんだぜ」

長老「あ、あのく、勇者様方」

少しワイワイしていた所に長老が少し困ったように話しかけてきた

イレブン「あ、長老様！どうしたんですか？」

長老「いえ、何やら勇者様達が草を食べていると言われました。そんなものを皆様に食べさせるわけにはいかないのですが……」

マルティナ「あ、ごめんなさい！これは私達が勝手にやった事ですので、お気になさらないでください」

ベロニカ「長老様！この草だんご、美味しいのよ！食べてみて！」

ベロニカが長老に草だんごを持っていく

長老「わ、私か!?ベロニカよ、本当にこれは美味しいのかの？」

セーニャ「大丈夫ですわ、長老様。私達が全員美味しいと思ったものです」

長老「ど、どれ…………… おお、これは美味しい。優しい甘みが広がるのう。これが…………… 草なのですか？」

ラーズ「はい。このゼーランダ山に生えてた草を使っています。さつき採ってきたばかりなので新鮮ですよ」

長老「そうでしたか。これは素晴らしい。皆にも食べてもらいましょう。料理の所に並べさせてもらいますね」

シルビア「いいじゃない、皆にも食べてもらいましょう！」

ライス「そんなに個数作ってないぞ。まだ草はあるが、まさか……」

グレイグ「ライス、頑張るのだ」

ライス「だよな!!マジかよ、誰か手伝ってくれ」

マルティナ「私も手伝うわ。作り方教えて」

イレブン「僕もやるよ。大変そうだもんね」

マヤ「私もやるー!」

ロウ「それじゃあわしらは少し残ったものを食べていようかの」

カミュ「そうだな。この天ぷらもらうぜ」

シルビア「じゃあ、アタシはおひたしもらうわ」

ベロニカ「あ!私も!」

ラース「何だよ、そっちも好評だったんじゃないか」

マルティナ「ふふ、まあ山の恵を知ってもらえてよかったじゃない」

グレイグ「そうだな。最初はどうかと思っただが中々よかったぞ」

セーニャ「私達も勉強になりました。ありがとうございます」

ラース「それなら俺としても嬉しいぜ」

夜の虹

夕方

マルティナ「ここのお祭りも楽しいわね。綺麗だし、食べ物も美味しいし、人達も表情が豊かで素敵な場所だわ」

ラーズ「そうだよな。明日も祭りは続くみたいだな。ベロニカ達が数日はおこなっているって言ってたし、シルビアやマヤは明日も残るみたいだ」

マルティナ「私達は明日帰っちゃうけど、また来たいわね。皆とも久しぶりに会えたし、これもいい思い出ね」

ラーズ「ならよ。もう一つ頑張っと思いい出作らないか？」

マルティナ「あら、いいわね。まだ何かあるの？」

ラーズ「ああ。まあ俺も話にしか聞いた事無いんだが、実は条件が重なれば夜でも虹って見えるらしいんだぜ」

マルティナ「ええ!? そうだったの? でも、条件が難しいのかしら?」

ラーズ「満月の夜で、高い場所から見えやすくなるらしいぜ。今日、

丁度満月の夜だ」

マルティナ「それだけでよかったのね。確かに見れるかもしれないわね。夜、皆で一緒に探してみましよう」

ラース「…………… そうだな」

ラースはマルティナの発言に少し固まった後、返事をした

マルティナ「？」

その夜

マルティナ「ねえ、皆。ラースから教えてもらったんだけど、今日つて夜でも虹が見えるかもしれないのよ。皆で探してみましよう」

セーニヤ「まあ！夜は暗いですが、本当に見えるのですか？」

シルビア「今夜って確か満月だわ。夜でも少し明るいはずね」

ロウ「ほほう、夜の虹か」

マヤ「そんなのがあるんだ！私も見たい！」

ラース「まあ、確率の話だから見えない可能性もあるんだけどな。皆が知らない通り、これはかなり珍しい現象なんだ。ただ、条件は揃ってるから見えたらいいなと思つてよ」

カミュ「いいじゃねえか。俺、そういうものは一度拝んでみたくなるぜ」

ベロニカ「そうね。条件が揃ってるならいいチャンスだわ」

イレブン「僕も見たいな！皆で探そう！」

グレイグ「寒くなるから暖かくしていくぞ」

夕食後

全員が少し暖かい服装をして集まっていた

イレブン「後はマルティナとグレイグの支度を待つだけだね」

ベロニカ「きつとグレイグさんの事だから、マルティナさんに暖かくさせようとしてるのね。それをきつと少し嫌がつてるんだわ」

ラース「……………な、なあ、皆。お願いがあるんだが」

ラースは少し言いくそうに話しかけた

ロウ「ラースからわしらにか？珍しいのう」

セーニヤ「どうかされたのですか？ラース様」

ラース「あまり言いたくなかったんだが…… 探す時は、俺とマル
テイナの二人がいいと思つて……よ」

ラースは目をあまり合わせずに言っている

全員「……………」

ラース「あ…… いや、わがままだったな。すまない。聞かなかつた
事にしてくれ」

シルビア「全然構わないわよ!!むしろ、そうした方がいいわ!」

ベロニカ「そうよ!私達、協力するわ!」

シルビアとベロニカが強く賛成した

カミュ「兄貴から言い出した事なんだろう?何か考えがあつたんだよ
な?」

ラース「そ、そうなんだ。夜に見える虹の事は月虹と書いて、げっ

こうと読むんだ。こ……これは男女で見ると、幸せになれるって言われてて……よ。それで……マルティナと……すまねえ、恥ずかしいな」

ラーズは珍しく顔が赤くなっている

ロウ「ほほ。そんな恥ずかしがらんでもよい。言いたい事はわかったぞ」

イレブン「そうだよ。それなら尚更協力するよ。絶対見つけようね」

マヤ「そうそう！兄ちゃんが恥ずかしがってるのは珍しいけど、そんな恥ずかしがるような事じゃないよ！私も兄ちゃんと姉ちゃんには仲良くしてほしい。協力するに決まってるじゃん」

ラーズ「悪いな、皆。最初は二人で探そうとしたんだが、マルティナが皆と探そうと言ってな。俺もそれには否定できなかったんだ」

シルビア「なるほどね。事情はよくわかったし、ラーズちゃんの素敵な気持ちも伝わったわ」

セーニヤ「夫婦で夜に現れる幸せになるという珍しい虹を見る。とっつてもロマンチックですわ。ラーズ様、ぜひ叶えましょう！」

ペロニカ「それじゃあ、怪しまれないように二人組になりましょう。そうすれば自然だわ」

ラース「皆、ありがとうよ。感謝するぜ」

その後

マルティナ「もう！どれだけ着させるつもりなの！これでもう大丈夫よ」

マルティナが少し怒りながら出てきた

グレイグ「で、ですが姫様。もしもの事があつては」

シルビア「あ、来たわね、二人とも。今、二人組になって虹を探そうとしてたのよ」

ロウ「お主達がおらんかったから、こちらで勝手に決めさせてもらったぞ」

カミュ「つてマルティナ、随分と着込んできたな。暖かそうだぜ」

セーニヤ「もこもこしてて可愛らしいですわ」

マヤ「おつちゃん、まだ着せようとしてるの？それ以上は動きにく

くならないかな？」

マルティナ「ほら！マヤちゃん達も言ってるじゃない！もう大丈夫なの！」

グレイグ「ぐ……。わ、わかりました」

グレイグも流石に引き下がった

ベロニカ「グレイグさんのそういう所は相変わらずね」

シルビア「グレイグはアタシとペアになりましょう」

グレイグ「わかった」

ラース「マルティナは俺とだけ」

マルティナ「ええ、見つけられるといいわね」

イレブン「それじゃあ皆で頑張って探そう！」

全員「おー！」

月虹

イレブン「それじゃあ手分けしようか。ベロニカとセーニャはゼーランダ山から探して。僕とおじいちゃんもそっちに行くよ。」

カミュとマヤちゃんは始祖の森。シルビアとグレイグはここ、ラムだから探してみて。マルティナとラースはどうする？」

ラース「それなら、俺達はもつと上に行こう。天空の祭壇付近から探してみる」

マルティナ「それがいいわね」

イレブン「わかった。それじゃあ皆、頑張ろう！」

全員「オー！」

グレイグ「ひ、姫様、あまり冷やさないようにお願いします！ラース！貴様、しっかり姫様を守るのだぞ！」

ラース「そんなの当たり前だろうが！任せておけ！」

マルティナ「ラース、グレイグみたいに過保護を通り越さないでね。いつも通りで大丈夫だから」

マルティナは少しうんざりした様子で伝えた

シルビア「ほら、グレイグ。いつまでもマルティナちゃんを追いかけてないで少し探すわよ」

カミュ「マルティナも大変だな。あそこまでくると騎士じゃなくてメイドかなんかじゃねえのか？」

マヤ「おつちゃんには悪いんだけど、鬱陶しそうだよね。王女様だから守らなきゃなのはわかるんだけど、それでも……ね？」

マヤも少し苦笑いしている

マルティナ「本当よ。はつきり言ってしつこいのよ。ありがたいんだけど、どうしても少し面倒だわ」

ラーズ「俺、騎士の勉強してる時にグレイグから散々言われたけど、どうもマルティナには合わねえ気がしててよ。そんな事しなくたってマルティナは平気だろうし、俺がさせるわけねえのによ」

マヤ「おお、兄ちゃんカッコいい。兄ちゃんの方が姉ちゃんには合ってるんだよね。まあ、夫だもんね！当たり前前だったね」

マルティナ「そうね。ラーズは私の気持ちを重視してくれる事も多いから助かってるわ」

カミュ「おう、おう。これ以上はやめておくぜ。マヤ、ここの始祖の森の道から探してみるぞ。マルティナ達はもつと上だな」

マヤ「気をつけてね！」

ラース「おう。さあ、行こうか、マルティナ」

マルティナ「ええ」

二人は上へ向かっていった

カミュ「……さて、おそらく兄貴は見当がついてて祭壇を指定したんだろうな。なら、俺達は少し違う所から見ますか」

マヤ「いしし、やっぱりそうだよね」

イレブン達は

ベロニカ「ねえ、イレブン。思ったんだけど、ラースの事だからもしかして見当ついてるんじゃない？」

ロウ「それもそうじゃな。そうでなければ祭壇など思いつかん。むしろ違う所で見たいのう」

セーニヤ「でも、お邪魔になりませんか？」

イレブン「そうだよね。なんだか僕もそんな気がしてきた。でも、セーニヤの言い分も最もだし……。よし！高い所から見ただ方がいいからやっぱ戻って、少しでもいい所から見ようか。もちろん、祭壇には近づかないでさ。森の入り口あたりならバレないよね」

ロウ「そうするかの。わしらも押してみたいからのう」

ベロニカ「それにしても、ラースったら結構ロマンチストだったのね。意外とムードとか気にするのね。前にも何度かそういう現場を見た時は中々いい感じの雰囲気だったわ」

セーニヤ「お姉様、そんな所を見ていたのですか!? 私も見なかったのですのに」

イレブン「ええ……。ラースに怒られなかった？」

ベロニカ「怒られたわ。まあ本気ではなかったけど、迷惑そうにはしてたわね。というか、何でいつも気付かれてたのかしら？ 頑張ってる身を隠してたのに」

ロウ「ラースは気配に敏感じゃからのう。カミユくらい上手く隠さ

ないと、すぐにバレてしまうんじゃない」

ベロニカ「そんなの無理よ。私、盗賊じゃないもの」

セーニャ「盗賊のお姉様……。カツコイイです！とつてもお似合いですわ！」

ベロニカ「想像しないでよ、セーニャ！」

イレブン「まあ、ラーズが本気で怒らないのは女性だからってのもありそうだよな。多分、見たのが僕とかカミュだったら速攻でボコボコだよ」

ロウ「わしもそんな気がするのう。ラーズは恐ろしいからのう。わしも何度死にかけた事か」

ベロニカ「おじいちゃんのはどうせ自業自得でしょ。ラーズの反応は正解よ」

その頃、ラーズ達は

ラーズ「そろそろ祭壇の近くだな。ここらへんから探しはじめよう」

マルティナ「わかったわ。色とかは変化ないの？」

ラーズ「まあ、夜だから黒く見えるぜ。それでも7色だ。見えるといいんだが」

マルティナ「星は綺麗なんだけど、虹は……どこかしら」

ラーズ「もう少し待ちながら探してみよう。絶好のチャンスだから一目見たいんだ」

マルティナ「何だか随分必死じゃないかしら？確かに見たいけど、何だか普段と少し違う気がするんだけど」

ラーズ「そうか？珍しいから少し興味あるんだ。宝探しみたいでなんだかワクワクしないか？」

マルティナ「ああ、そういう感じなのね。それならラーズらしいわ。ふふ、宝探しなんて子ども以来ね。懐かしいわ」

ラーズ「お、この木なんてよさそうだな。よつと！」

ラーズは木を掴み、足を引っ掛け上の枝に飛び乗った

マルティナ「あら、ラーズったら木登りうまいのね。流石山の近く

で育っただけあるかしら」

レース「まあな。木なんて登れて当たり前だったからな。動物みた
いだったか？」

マルティナ「少しね。でも、よく折れないわね。レース結構重そう
なのに」

レース「体重のかけ方だな。まあ、慣れだ。それよりも虹は……
おお!! あったぞ、マルティナ!!」

マルティナ「ええ! 本当!? どこ!？」

レース「上からよく見えるぞ。ほら、手を出すんだ。引っ張ってや
るよ」

マルティナ「ええ、お願い」

レース「よつと!」

マルティナ「はあつ! ふう。あら、いい景色。って、本当だわ!! 虹
が見える!! 少し黒いけど、あれは間違いなく虹ね。それに明るい方に
あるわね。あれは、太陽かしら?」

ラース「なるほど。日が沈んだ方向に見えるのか。しかし、マルティナと見れてよかったよ」

マルティナ「え?」

ラース「実はこの虹は月虹と呼ばれていて、男女で見ると幸せが訪れるって言われてるんだ」

マルティナ「ええ!?初めて聞いたわよ。どうして最初に言ってくれなかったの?」

ラース「マルティナに言おうとしたら、皆と探そうって言われてよ。俺もそう言われたら反論できないさ」

マルティナ「あ……。ごめんなさい。私と見たかったのはそのためだったのね。ふふ、ありがとうラース。とっても嬉しいわ」

ラース「どういたしまして。それにしても幻想的だな」

マルティナ「ええ、本当。またこうやって二人で過ごす事ができて嬉しいわ。もしかしたら、なんて思っていた少し前じゃあ想像できなかったわ」

ラーズ「……悪かった。それは、ムグ」

マルティナはラーズの口を閉じさせた

マルティナ「それはいいの。過去は過去。私は今を真っ直ぐみつめてるの。たまに後ろを向くけど、それでも決して迷わないわ。だって、今隣にはこうやってあなたがいてくれるでしょ？それなら、何だって怖くないわ」

ラーズ「マルティナ……。へへ、そうだな。俺も、隣にはいつもマルティナがいてくれる。もう二度と迷わないし、下も向かない。皆が俺を必要としてくれている。あの日、マルティナ達からわけもなかった勇気と村の皆の誇りがある。」

俺は、ガラツシユの村の誇り高き戦士。マルティナ、これからも頼むぜ。君がいてくれれば、俺は無敵だ」

マルティナ「もちろんよ。私達はずっと一緒」

マルティナとラーズはゆっくりとキスをした

その頃、イレブン達は始祖の森の入り口付近に集まっていた

イレブン「ああ!!あれじゃない?ほら、あの少し明るい所にあるやつ!虹だよ!」

カミュ「おお！しっかり見えてるな！」

マヤ「凄い！！本当に虹だ！少し黒いけどはつきりしてるね！」

ベロニカ「これが月虹。想像より綺麗だわ」

セーニヤ「星々の中、少し輝く夜の虹。素晴らしいですわ」

シルビア「ロマンチックね。アタシ、こういう風景大好き」

ロウ「こんな現象が起こるのじゃな。やはり世界は、自然は美しい。ずっと大事にしていかなとな」

グレイグ「姫様達もご覧になつているでしょうか。俺達だけ見てしまったなら非常に申し訳ないのですが」

全員「ふふ……」

グレイグの発言に全員が少し笑っている

グレイグ「む？なぜ皆して少し笑っているのだ？」

イレブン「グレイグ、多分ラーズ達は僕らより先に見つけてるよ」

カミュ「ああ、違いねえ」

グレイグ「そ、そうなのか？俺にはわからなかったな」

シルビア「うふふ、あの二人なら心配ご無用よ、グレイグ。ほら、月と星と虹っていうとても珍しい組み合わせよ。もっこの星空の下、楽しみましょう！」

シルビアは少し楽しそうに踊り始めた

セーニャ「そうですわね！幸せになれるかもしれません！」

ベロニカ「私も！どうせなら少しお願い事してみようかしら」

マヤ「あ！私もする！」

ロウ「ほほ、楽しそうじゃな。どれ、わしも少し踊ろうかの」

イレブン「僕も踊る！カミュもあのカッコいいダンスやって！」

カミュ「俺は別にいいだろ」

シルビア「んもう！カミュちゃん、折角楽しい雰囲気か台無しになっちゃうわ！ほら、グレイグも！皆で踊るわよ〜！」

グレイグ「お、おい、ゴリアテ！引つ張るな！俺はバンデルフォン音頭しかできんぞ！」

そうして、皆で踊り楽しんでた

人身売買

虹祭りから三ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

シルビアがやってきていた

シルビア「皆々、虹祭り以来ね。元気だったかしら？」

マルティナ「あら、シルビア。近々来るとは聞いてたけど今日だったのね」

ラース「こっちは相変わらずだぜ。シルビアも元気そうだな」

シルビア「ブレイブちゃんもコロちゃんもお久しぶり。コロちゃん
の怪我は治ったみたいね。少し大きくなったんじゃない？」

シルビアはブレイブとコロを撫でている

ブレイブ「ガウ」

コロ「グルグル」

グレイグ「どうしたのだ、ゴリアテ。顔を見せに来てくれたのか？
それとも何か用事か？」

シルビア「ええ。実はパパからお願いというか、少し困った事があってね。ここ一ヶ月ほど前から、ソルティアナ海岸の近くに謎の船が停まってるの。そこを調査してほしいのよ」

ラース「ジエーゴさんの見習い達じゃダメなのか？」

シルビア「アタシ達もそうしようとしたんだけど、門前払いされちゃってね。パパの権力で何とかなるかもしれないけど、あまりそういう事をして嫌なイメージを持たれたくないのよ。だから、デルカダール王国の兵士ちゃん達の力なら何とかなるかと思ってね」

マルティナ「うーん……。あまり問題も無さそうなのに兵士達を送り込むのもどうかしら」

グレイグ「そうですね。何か問題があるのか？」

シルビア「アタシ達も確証は持てて無いんだけど、あれはおそらく奴隷船よ」

三人「奴隷船!?!」

シルビア「そう。各地でたまにいるじゃない？人身売買してる悪」

い子が。その売買する人達を集める船だと睨んでるの。前に、その船に手錠みたいなのをつけた人達が何人も乗っていくのを見たついでう人がいて、それで怪しまれてるのよ」

マルティナ「それが本当なら大問題ね。それならこっちも心置きなく兵士達を出すわ」

ラーズ「しかし、まだ証拠が弱い。こっちもそう強くは出れないな。何か尻尾を掴めればいいんだが」

シルビア「そうね。だから少しでも調査するだけでいいの。何か出てこないかしら？」

グレイグ「ふむ。まだ捕まえられなくても、それに値する証拠をその船を調べて探すという事か」

マルティナ「わかったわ。ラーズ、数人兵士達を出す事を許可するわ。伝えてきて」

ラーズ「了解」

ラーズは出ていった

シルビア「ありがとう。パパはグレイグ達に頼るのを嫌がってたから、アタシからのお願いって事にしておいてね」

グレイグ「師匠らしい。ソルティコや師匠の大事な町を救えるなら、私は何でも力を貸すというのに」

マルティナ「そこをわかっているのね。気を使われてるのよ。ジエーゴさんらしいじゃない」

訓練場

ラース「という事で、数人調査を頼む。俺が決めてもいいがどうする？」

バン「師匠は来ていただけじゃないんですか？」

ラース「いきなり俺が行って怪しまれるのも問題だ。だから俺は行けない。それに捕まえてこいってわけでもないから、何か尻尾を掴めればいいんだ。行くのは明日か明後日だ」

ベグル「ふむ、少し考えておきます。連絡ありがとうございます」

ラース「おう。決まったら知らせてくれ」

バン「調査か……。どうする？俺が適任か？」

ベグル「マーズ、ロベルト、少し考えるぞ」

ロベルト「奴隷船らしき船だろ？証拠を見つけろって少し難しいな」

マーズ「まあ、何かあった時に船の上でも対処できるやつがいい。そういう意味でも、潜伏という意味でもバンは適任だな」

バン「じゃあ俺は確定だな。残りはどうする」

ベグル「後はバンの御守りと頭脳役と戦える人もほしいな」

バン「御守り!?!おい、ベグル！俺を何だと思ってやがる！」

ベグル「馬鹿」

バン「はつきり言ってくるな、こいつ」

ロベルト「なら、俺も行こう。状況判断は得意だ」

マーズ「そうだな。船だから俺よりも武器で戦いやすいしな。あと

は、ギバだな。バンと一緒に戦える役だ」

ベグル「なら、バンの御守りは……………」

バン「だから、そんなのいらねえだろ！」

ロベルト「ベグルだな」

マーズ「任せたぞ、副長」

ベグル「チツ！やっぱりそうなるのかよ」

バン「何で嫌そうなんだよ！喜べよ！」

ベグル「お前は止めるのが面倒なんだよ！少しは落ち着いている
！」

バン「これが俺らしさだ」

マーズ「うるさいぞ、バン。よし、この四人だな。ラーズ將軍に伝えてこよう」

ロベルト「待ってくれ、ジールも入れていいか？」

ベグル「ジールを？まだ見習いだぞ。大丈夫か？」

ロベルト「そうなんだが、あいつは片手剣の扱いは中々だからな。それにダバンによれば盾も周りよりうまいらしい。実践という意味でも連れていってくれないか？」

バン「ジールはかくとうの適正もあって俺もよく教えてるぜ。でも、武器の時よりはひかえめだけだな」

マーズ「ダバン以外で回復魔法を使えるのもジールだけだからな。ありなんじゃないか？」

ベグル「なるほど。なら、連れていこうか。おら、馬鹿。ラーズ将軍に伝えてこい」

バン「馬鹿って言うんじゃないやねえ、ベグル！」

バンは訓練場から出ていった

ロベルト「文句は言いつつも行くんだな」

マーズ「前までは食いかかってきてたのにすっかりいいなりじゃねえか。流石にベグルに反抗するのは馬鹿だと学んだか」

ベグル「まあ、来た所で前みたいに戻り討ちにしてやればいいだけだ。そうすりゃあ誰が上かわかるだろ」

ロベルト「完全に犬みたいな事言ってるぞ。ベグルらしいな」

マーズ「ジールにも声をかけてくる。ベグル、ロベルト、明日は頼んだぞ」

二人「おう」

次の日

ジール「よ、よろしくお願いします！足を引っ張らないようにします！」

バン「そんな固くならなくて大丈夫だぜ、ジール。もっと気楽にいきましょう！」

ベグル「バンの言う通りだぜ。あまり力んでもと反応も遅れる。適度にリラックスしてろよ」

ジール「わかりました」

ギバ「調査かー。そんなに怪しいならさっさと捕まえればいいのによ」

ギバは少しつまらなそうにしている

バン「それは俺も思う」

ロベルト「駄目だ。そんな横暴な兵士がいてたまるか。しつかり証拠を掴んでからじゃないと、もし仮にも怪しくなかった時こっちが大変な目にあうんだからな」

ベグル「そういうこった。だからあまり暴れるなよ、二人とも。暴れたら作戦が台無しだからな。そうなったら、俺達ラーズ將軍から何されるかわかったもんじゃねえぞ」

バン「うわ……。想像できねえけど俺達が酷い結末を迎える未来なのはわかった」

ジール「結構重要ですね。慎重にいきましょう」

ロベルト「よし、まずはソルティアナ海岸だな。行くぞ」

潜入調査

ソルティアナ海岸

バン「あれがその怪しい船か」

船着場には一見普通の船が停まっていた

ジール「見たところは変な感じがしませんね」

ギバ「そうだな。だが、話通りなら偽装工作がされている船なのかもしれないぞ」

ロベルト「まずは俺が言つて調査の許可を得てこよう。流石に王国相手に門前払いは無いだろう」

ベグル「それがいいな。その後、バンが船の中の気配を感じてもらえばいい。俺達も周りの調査だ」

ロベルトが船の近くにいた男性に声をかける

ロベルト「あの一、すみません」

男性「ん？何だ、兵士さんか。こんなところでどうしたんだ？」

ロベルト「実はこの近くで怪しい船を見たという情報が出てまして、少し調査をしに来たんです。それで、そちらの船を調査させていたいただきたいのですがよろしいですか？」

男性「…………… ああ、わかった。少し待っていてくれ。仲間に伝えてくる」

男性は船に戻っていった

ベグル「まずは一段階目がオーケーだな」

ロベルト「ここからだな。バン、感覚を研ぎ澄まさせておいてくれよ」

バン「おう！」

男性「来ていいぞ。特に何も無いんだがな。あまり荒らさないでくれよ」

ロベルト「ありがとうございます」

ギバ「何もないとわかればこちらも何もしない。少し部屋も見ていかか？」

男性「ああ。好きにしているが、駄目な部屋もある。俺にいつてく

れ」

ジール「はい。それでは、少し調べさせてもらいますね」

バン「……………」

バンは隅で警戒を始めた

ベグル「俺達は周りの部屋を調べるぞ。バンは放っておいた方がいい。バン、あまり離れるなよ」

バン「ああ」

しばらくして

ジール「(特に変な部屋とかはなし。物も怪しいものはないな)」

ベグル「(こういう時ブレイブがいれば匂いとかで役に立つんだが、今は無理か)」

ギバ「(部屋の作りが不思議だな。外から見えた部屋の大きさと合っていない?)」

ロベルト「これは、どこか別に部屋があるな。音の響きが変わっている。ここら辺に空洞があるようだ)」

一時間後

男性「何もなかっただろ？さっさと出ていってくれ」

ロベルト「ありがとうございます。少し考えさせてください」

男性「全く、何だっただよ」

ギバ「バン、一旦戻るぞー」

ソルティコの町前

ベグル「……はっ！バンはどこにいやがる!!」

ベグルはバンがない事に気づき、焦り始める

ギバ「なに!? あ、バンがいねえ！俺の声が聞こえてなかったのか!？」

ロベルト「しまった！船に置いてきたか!!」

ジール「急いで戻りましょう！」

ソルティアナ海岸

戻るとそこに船は無くなっていた

ベグル「くそ!!もう逃げたか！」

ギバ「これはまずいぞ。どこにいったかわからねえ」

ジール「ど、どうしましょう!!」

ロベルト「いや、落ち着け。ジエーゴさんに話して外海に出る道を封鎖してもらおう。そうすれば行き先は少し絞られる」

ベグル「なるほど、そうだな。よし、ジエーゴさんの屋敷に行くぞ！」

その頃、船内では

バン「この部屋か。どこかに仕掛けがありそうなんだが。!?誰か来るな。隠れねえと！」

バンは気配を消した

ガチャ

男性「危ねえな、全く。まさかデルカダールの兵士どもが来るとは。しかし、気づかれなかったみたいだな。なんとかなかったぜ」

バンがいた部屋に二人の男達が入ってきた

バン「ふう、身は隠せたか。師匠とカミュさんに気配の消し方を教えておいてよかった。この部屋の下から何人もの人の気配だ。

普通の船にはありえないな。ベグルには悪いが救い出してしまおう。その後でこれからを考えよう」

男性「おい、あいつらこの部屋をやたらと念入りに調べてたぞ。大丈夫なのか？」

男性「偶然だろ。たかが兵士に気づかれるような構造してねえよ」

男性「なら、いいんだけどよ。折角の品物がバレたら今までの努力が台無しだぜ」

男性「もうあの海岸にはいかねえ。もっと集めたかったが仕方ねえ」

男性は本棚を横に押し、隠し階段を降りていった

バン「(やっぱりな。さて、このままゆつくりと音を立てずに動こう)」

その頃、ジエーゴの屋敷

ジエーゴ「何だって!?!おい、ゴリアテ!!てめえ何勝手な事してくれてんだ!」

シルビア「んもう！恥ずかしがらないの、パパ。それに、アタシからのお願いだからパパは関係ないのよ。とりあえず協力してあげて」

ジエーゴ「チツ！そういう事かよ。まあいい。わかった、門は閉めておく。これで外海には出られねえ。行くならデルカコスタ地方かダーハル―ネの町、またはユグノア地方だ。

ダーハル―ネは船を停めるには少々難ありだからな。残り二つが大体の目安だ。そこでなんとかしてくれ」

ロベルト「ありがとうございます、ジエーゴさん！」

シルビア「だけど、バンちゃんが残されちゃったのね。まあ心配いらないんだろうけど、彼の事だから大人しくしてるなんて思えないわね。少し問題はおこしそうな気がするわ」

ベグル「そうなんですよ。ラーズ將軍からは調査を頼まれたのに、これじゃあどうなるか」

ベグルは頭を抱えている

シルビア「悪いけど、少しラーズちゃんに連絡いれるわね。この後の対処をどうするか考えてもらいましょう」

ギバ「お願いします。すみませんと伝えておいてください」

ジール「ありがとうございます！」

ソルティコの町

ロベルト「ハア。気が遠くなりそうだ」

ベグル「くそ……。あの馬鹿が。ちよつと目を離れた隙にコソコソしやがって」

ギバ「俺達、ラーズ將軍に怒られるな。何してんだって」

ジール「うう、少し怖いです」

ベグル「あんの野郎、戻ってきたら覚悟しとけよ。泣いて詫びても許さねえからな」

ロベルト「勝手な事しやがって。ベグル、バンを懲らしめておけよ」

その後

ラーズがソルティコへやってきた

ラーズ「全く……。バンもそうだが、お前達も少し甘かったんじゃないか？船を調べたら怪しかったんだろ？なら、なぜそこで相手に隙

を与えた。そんなのは必要ないはずだ。そこをまずしつかり反省しろ。戦えるようにもなっていたのに、それじゃあ剣が無駄だろうが」

全員「はい……」

ライス「ここでこれ以上言っても仕方ない。兵士達が来たのにわざわざデルカコス地方に行って、デルカダール王国に行くとは考えにくい。向かうならおそらくユグノア地方だ。そこで捕まえる、行くぞ」

全員「はい！」

潜入調査2

その頃、船内 牢屋

そこには手錠をされた女性や子ども達がたくさん捕まっていた

女性「ヒツ……………」

男性B「ほら、商品は全部無事ですよ。心配いりませんって」

男性A「そのようだな。まあ警戒するに越した事はない。さあ、さっさと戻るぞ。船長に何も変化はないと報告だ」

ザツザツザツ

男達は戻ってきた

バン「(やべ、戻ってきた。急いで隠れないと)」

男性A「ん？今何か見えなかったか？」

男性B「え？何も見えなかったですよ」

男性A「……………気のせいか」

甲板

男性 B 「あ、船長。何も変化はありませんでしたよ」

船長 「…………… いや、そんなはずはない。あいつらは確か5人。それが帰る時は4人になっていた。これで言いたい事はわかるな？」

全員 「!?」

船長 「一人兵士が紛れている!!! 掻き分けて捕まえろ!!!」

船長は大声で全員に指示を出した

牢屋のある部屋内

バンにも声が聞こえていた

バン 「やべ、バレたか。これはここにいるのは得策じゃないか。悪いけど、ここの人達を救うためだ。少し暴れさせてもらおう」

バンは調べていた柵を閉じると部屋を飛び出した

バタン!

全員 「!?」

バン 「さあ、俺はここだ! 奴隷の人達は解放させてもらおう! かかってこいよー!」

船長「飛んで火に入るなんとやらだな。一人で何ができる。てめえは見てはならねえものを見た。生かして帰すものか！」

周りの人達も武器を持ち、戦闘態勢にはいった

バン「(ざつと2、30人か。少し骨が折れそうだな)」

船長「やれえー!!てめえらー！」

その頃、ユグノア地方 船着場

ラーズ「ベグル達はここで待っていてくれ。俺はユグノア城へ行ってイレブン達にここ以外の小さな港は封鎖してもらおうようにする」

ベグル「はっ！」

ロベルト「もしラーズ將軍が来る前に船が来たら捕まえていいですよね？」

ラーズ「もちろんだ。だが、相手にお前達は顔がバレている。おそろく戦闘になる、気をつけてかかれよ」

ギバ「よし！暴れてやろうか！」

ジール「サポートしますよ、ギバさん！」

ベグル「わかりました。ラーズ將軍もお気をつけて」

ラーズ「ああ、すぐに戻る」

その後、ユグノア城 玉座の間

イレブン「なるほど、奴隷船ね。わかったよ。急いで他の港は閉める。僕達もその船着場に連れてって」

ラーズ「別にいいが、これはこつちの問題だ。ユグノアとしてあまり関わらない方がいいぞ」

ロウ「もしもの戦力じゃよ。わしでも構わんが、イレブンの方がどんな事も万能にこなせる。こつちの事は気にせんでよい」

ラーズ「わかった、感謝する。なら急ぐぞ、イレブン。ルーラを頼む」

イレブン「うん！任せて」

その頃、船内では

バン「せいけんづき！」

男性「グハア！」ドサ

男性「な、何だこいつ。馬鹿みたいに強いぞ！」

甲板には船の男達が10人ほど倒れていた

バン「やっぱりどうって事ないな。どんどん行くぞ！さみだれ突き！」

男性達「ぐわああ！」ドサドサ

船長「チツ！何だこいつ！てめえら、どきやがれ！俺が相手になる」

船長がバンの前に出た

バン「お、親分の登場か。俺が勝ったらこの船、自由にしていいか？」

船長「そんな事させるわけねえだろうが！それになにをもう勝った気でいやがる」

バン「じゃあ仕方ねえな。こっちが勝手にさせてもらおう。ばくれつきやくー！」

船長「ソードガード！」

大剣でバンの攻撃を全て防いだ

バン「おととつと、防がれたか」

その時、バンの背後から敵が忍び寄ってきた

男性「死ねえ!!」

バン「気付いてるぜ、しんくうげり！」

男性「グハア!!」ドサ

船長「オラア!!」

大剣を振りかぶってきた

バン「よつと！おい、流石に汚いだろ。正々堂々勝負しろよ」

バンは軽く避けると相手に文句を言っている

船長「なに綺麗事言つてやがる！正々堂々だあ？俺達がそんな事するわけねえだろ！やっちまえ！」

男性「オラア！」

一人が瓶をバンに向かって投げつけた

バン「ハア！」パリリン！

ビシヤ！

瓶の中から液体が出て、バンにかかった

バン「何だこの液体………うぐっ！」

バンは突然膝をついた

船長「ガハハハハ！馬鹿が！正直に割りやがるとはな！それは即効性の麻痺薬。てめえの体はもう自由に動けねえよ！」

バン「げ、そんなものだったのかよ。痺れる………」

バンは動けなくなっている

船長「てめえら！今がチャンスだ！こいつをボコボコにしろ！」

その後 牢屋

船長「おら、ここで這いつくばってな。餓死するまでよ。ガハハハ！」

少しボロボロになったバンが手錠をかけられ、先程の牢屋に運ばれてきた

男性「手こずらせやがって！馬鹿で助かったぜ」

船長達は戻っていった

バン「痛てて。まあ、師匠やベグルの時に比べたらだいぶマシか」

女性「あの、大丈夫ですか？先程の激しい音はあなたが？」

バン「皆、大丈夫か？助けに来たぜ！」

女性「いや…… 捕まってますけど」

バン「少し待っててくれよな。痺れが取れるまで体が思うように動けねえんだ。まあ、多少は何とかなるけどよ」

女の子「お兄さん、どうしてそんなに明るいのです？どうなるか知らないの？」

バン「ん？知ってるぞ。ここは奴隷船で、君達はあるやつらに捕まった人達。ここは君達を捕らえるための牢屋で、俺はここで餓死させられる予定だな」

女性「そ、そこまで知っててどうして助けると？」

バン「俺はデルカダールの兵士。君達を助けに来た。だから、絶対に助けてみせる」

女の子「お兄さんも捕まってるんだよ？」

バン「俺はただでは捕まってないぜ？ほら、ここにこんなものがある」

バンのポケットから鍵が出てきた

女性「も、もしかしてその鍵って！」

バン「この手錠の鍵だ。これさえあれば皆助かるぜ」

女性「や、やった!!ありがとうございます!!」

バン「そろそろ動かせそうだな。えつと、カミユさん曰く手をこらやって……」

バンはゆっくりと自分の手錠の鍵をはずそうとしている

バン「んん、難しいな。こうして……」

バンは何とか体を捻らせている

一分後

ガチャ

バン「おっしや！取れた！よし、皆並ぶんだ。俺が順番に取って行くからな」

女の子「ありがとう、お兄さん!!」

潜入調査3

その後、船着場

ジール「あ！皆さん、あの船って！」

ギバ「おお！あれはさっきの船だな。間違いないぞ！」

ベグル「ラーズ將軍はまだか。なら、俺達で捕まえて少しでも名誉挽回しなければ」

ロベルト「だが、一先ずは隠れるぞ。俺達の姿を見て停まるのをやめられたら敵わない」

三人「了解！」

数分後

男性が船を止め、イカリを下ろしにきた

ロベルト「ハア！」ドガ！

男性「グツ……」ドサ

ロベルトが男性を気絶させた

ギバ「これでよしだな。乗り込むぞ！」

ベグル「てめえら！覚悟しやがれ！」

男性C「な!?お前達はさっきの兵士ども！」

ジール「皆さんを捕まえさせていただきます！ご覚悟を！」

船長「ふっふっふ、やはり来やがったか。だが、お前達の仲間の一
人はいいのか？こっちはあの男を好きにできるんだぞ？」

船長は予想通りと余裕のある顔をしている

ロベルト「なに!?バンがお前らなんかに負けたとでもいうのか!？」

男性「あの馬鹿は今頃麻痺して動けねえぜ。まあ、たくさんいた
ぶってやったけどよ」

ベグル「だからどうした。お前らを捕まえる事になにも変わりはない
い」

ベグルは臆する事なく言い放つ

船長「な……。仲間をこっちは捕らえてるんだぞ。殺してもい
いつてのか!？」

ギバ「バンを殺す？ハハ、面白い冗談だな。あいつは簡単には死なねえよ。特に、今みたいにするべき事が残ってる時なんかはよ」

ギバは少し笑っている

ジール「バンさんの事をあまり舐めないでください！彼は凄い人です！捕まったのも何か考えがあるはずです！」

ロベルト「すまん、ジール。それはもしかしたら馬鹿がやらかしただけかもしれん」

ジール「え……」

ベグル「とにかく、俺達にはそんな何の脅しにもならねえ。さあ、覚悟してもらおう」

四人は戦闘態勢に入った

船長「けっ！なら、てめえらも同じ道を辿ってもらうまでだ！てめえら、かかれー！」

その頃、船着場

隅ではイレブンとラーズが隠れながら様子を伺っていた

イレブン「ねえ、ラーズ。騒がしくなってきたよ。きつと戦ってる

んだと思う。僕らも参戦しようよ」

ラーズ「悪いな、イレブン。いい所みたいだから、俺達は一先ず様子見だ。元はあいつらの仕事。トラブルがあっても、どこまでしっかりこなしてくれるかを見てやらないとな」

イレブン「そっか。ふふ、ラーズはやっぱり変わらないね」

ラーズ「なんだよ、そんなに変な事したか？」

イレブン「ううん。でも昔からずっと厳しそうに見えて、こうやって優しく教えてくれたのを思い出してね」

イレブンは旅の頃を思い出していた

ラーズ「…………… なんだか恥ずかしいな」

イレブン「そんな恥ずかしがらなくてもいいよ。ラーズらしくてとつてもいいと思うし、ベグル達もきつと助かっと思ってるとは思ってるはずだよ」

ラーズ「そ、そうなのか？」

その頃、牢屋では

バン「よし、これで全員外れたな」

女性「上が騒がしいですね。また何かあったのでしょうか」

女の子「牢屋はどうやって出るの？」

バン「俺がぶっ壊してやるよ。少し離れてな」

そう言い、バンは檻を少し調べた

バン「よし、ここら辺に何回か打ち込めば。ぼくれつきやく！」

ガガガガガ！

バキン！

女性「す、凄い。牢屋が簡単に曲がっていく」

バン「よし、もう一押しだな！ぼくれつきやく！」

ガシヤアアン！！

女性「出れるわ！！やった！！」

バン「よし、皆！俺についてきてくれ！」

全員「はい！」

少しして、部屋から甲板に出ていくと

バン「あ、皆！やっぱりお前らだったか！」

ベグル「てめえ、バン!!勝手な事しやがって!!絶対許さねえからな
!って、お前その後ろの人達は」

バン「ここの奴隷になってた人達だ!救い出してきたぜ！」

ジール「流石バンさんです!!」

船長「余所見してんじゃねえ！」

船長はジールに大剣を振りかぶってきた

ジール「あ……」

バン「ジール!半歩下がれ!!ばくれつきやく！」

バンはジールに向かってばくれつきやくを打ち込んだ

船長「グハアアア!!」ドサ

ジールはギリギリでかわした

ジール「すみません、助かりました!!」

ロベルト「これで全員終わりだな。縄で捕らえておくぞ」

ギバ「ふう〜。久しぶりに暴れてスッキリだぜ」

ベグル「皆さん怪我はありませんか？」

女性「あ、ありがとうございます!!私達は全員大丈夫です!こちらの方が助けてくださいました!」

女の子「お兄さん達ありがとう!!」

バン「へへ、いいって事よ!兵士として人々を救うのは当たり前だからな!」

ラース「一件落着きたいだな。バン、この人達を救出したのはお手柄だな」

バン「し、師匠!?!どうしてここに!」

イレブン「バンが勝手な事したって怒ってやってきたんだよ」

バン「え……」

バンはそれを聞いて固まった

ラーズ「その話は城に戻ってからだ。全員捕まえたな？城に連れていくぞ。イレブン、この奴隷にされていた人達は任せてもいいか？」

イレブン「もちろん。全員ちゃんと故郷まで送り届けるよ」

ラーズ「助かるぜ」

女性「本当にありがとうございます!!もう普通の人生なんて無理だと諦めていましたが、まさか助かるなんて……」

女性「本当ですよ！皆様は命の恩人です！なんとお礼を言ったらいいか」

バン「お礼はいらないぜ！皆がまたいつも通り暮らせればそれでいいんだからな！」

夕方、デルカダール城 玉座の間

マルティナ「よかったわ。しっかり全員捕まえてきてくれたのね」

グレイグ「全員牢屋に連れ込んでおいた。処罰は後々決めようと思う。バン、お疲れだったな。ベグル達にも休んでくれと伝えてくれ」

バン「はい！それでは失礼します！」

ラーズ「待て、バン。少し話がある」

バン「うぐつ……。師匠、勝手な事してすみませんでした……。……で、でも！俺はあそこの人達を救いたくて！」

ラーズ「わかっている。お前の事だからな。少し調べた時に、確実に人が囚われている事に気付いたんだろ？だから行動をおこした。また、それのおかげで皆助かった。結果は全てよくなったな」

バン「流石師匠！そうなんですよ！」

ラーズ「だが、だからといって別行動を許すわけにはいかない。それを許してしまえば、お前にまた勝手に動かれると厄介だからな。次からは必ず誰かに報告しろ。絶対だぞ、いいな？」

ラーズは強く言い聞かせる

バン「は、はい!!ありがとうございます、師匠!俺、師匠に殴られるかと思っていました」

ラース「もし結果もお前の考えも浅はかだったらそうしてただろうな。だが、今回はお手柄だったからな。言葉だけだ。それに、俺が手を下す必要はないからな」

バン「ふえっ?というど?」

ラース「どこかの副長が泣いて詫びても許さねえって怒ってるぞ。今頃、訓練場で準備してるはずだぜ」

バン「……………」ガタガタガタ

バンの顔はどんどん青ざめていく

ラース「あの様子なら、俺が何もしなくても必ずバンに罰が落ちるからな。俺の分も任せておいた」

バン「師匠!!俺、急にマサルに会いたくなってきました!帰っていいですよね!」

ラース「別に構わねえが、逃げたらどうなるかわかってるな?との伝言もあるぞ?」

バン「……………ありがとうございます、師匠。俺、逝ってきます」

バンはトボトボと出ていった

ラース「おう。頑張ってこいよ」

大広間

バン「しばらく城に戻るものか!!」ガシ

バンが走って逃げようとする、ロベルトとギバが待ち構えており、捕らえられた

ロベルト「悪いな、バン」

ギバ「お前の行く場所はこっちだ」

二人はバンを訓練場へ連れて行く

バン「な、何すんだよ、ギバ、ロベルト！離せ！そっちには行きたくねえ！」

ギバ「副長が人形相手に体温めてるぞ。切り刻まれてくるんだ」

バン「やだ!!絶対死ぬ!!何でお前らまで手を組んでるんだよ！」

ロベルト「すまない、バン。断ったら俺達が人形の代わりにさせられそうだったんだ。それなら、お前一人の犠牲の方がいいと判断した」

バン「酷え!!やめてくれー!!俺は、死にたくねえー!!」

数分後、訓練場から悲痛な叫び声が上がったという

夜には医療部屋に一つの棺桶が送り込まれた

マヤの一週間

それから二週間後、デルカダール城

玉座の間

マヤ「ただいま、皆！」

カミュ「今帰ったぜ。ただいま」

マヤとカミュが帰ってきた

マルティナ「お帰り、カミュ、マヤちゃん」

グレイグ「お帰り、二人とも。また数日泊まっていくか？」

マヤ「うん！今回は一週間くらいかな。兄貴は仕事で戻ったりもするけど、私はずっといるよ」

カミュ「シャルル達に魔物の様子見を頼まれてな。まあ、行ったり戻ったりするが気にしないでくれ」

マルティナ「そう、わかったわ。いつものお部屋は綺麗にしておいてあるからゆっくりしててね」

カミュ「兄貴はどこにいるんだ？また仕事か？」

グレイグ「…… ラースは今、運動中だ。どうしても動かしたいらしくてな。今日は一日暴れさせているのだ」

マルティナ「一週間くらいずっと会議とかで動いてなかったからストレスが溜まつてるみたい。私もまた時間があったら動かしたいのだけど」

マヤ「じゃあ兄ちゃんは訓練場なんだね。後で顔出しにしようよ」

カミュ「…… いや、行くならマヤだけで行ってこい。俺はパスだ」

カミュは嫌な顔をしている

グレイグ「ああ。それが賢明だな。おそらく巻き込まれるぞ」

カミュ「だよな。流石にもう学んだぜ。そんな時に兄貴に会ったら、こつちが倒れるまで付き合わされるからな。コリゴリだぜ」

マヤ「でも、私が行くと兄貴もいるってわかるんじゃない？」

カミュ「…… よし、マヤ。今からデルカダール城下町の観光だな」

カミュは計画を切り替えた

マルティナ「ふふ。必死ね、カミュ。城下町にも最近いろいろ新しいお店を出したの。是非みて行ってね」

マヤ「本当!?行ってみたい!それじゃあ兄ちゃんにはその後にしよ
うか。兄貴もその方がいいみたいだし」

カミュ「本当気を使えるようになったな、マヤ」

マヤ「いしし、でしょ?」

グレイグ「王には帰ってきた事を伝えておく。夕飯までには戻って
きてくれ」

カミュ「おう、じゃあまた後でな」

マヤ「行ってきまーす!」

マルティナ「行ってらっしやい」

大広間

マヤ「どこ行こうか、兄貴」

カミュ「そうだな……」

ギャアアアア!!

訓練場から誰かの叫び声が聞こえてきた

カミュ「…………… この声はバンか。また何かやらかしたか？」

マヤ「訓練場から凄い音がしてるね。兄ちゃんがいるから一層激しいんだろうね」

カミュ「そ、そうだな。そういえば街の案内板があったな。そこを見れば何かわかるかもしれないぞ」

マヤ「そうだね。まず広場に行ってみようか」

その時、訓練場から怪我だらけのバンを連れたレースがやってきた

レース「お!?カミュ、マヤ!来ていたのか!」

マヤ「あ、兄ちゃん!ただいま!と、バンさん?生きてる?」

カミュ「やつぱりバンがやられてたか。誰がやったんだ?」

ラーズ「ベグルだな。またおもちゃにされてたんだ。全く。学ばないよな、こいつも。なあ、カミュ。どうせな」

カミュ「逃げるぞ、マヤ！」

カミュはラーズの言葉を聞く前にマヤの手を持って、猛スピードで出ていった

マヤ「ええ!?! 兄貴!?!」

ラーズ「チツ！逃げられたか！まあいいか」

デルカダール城下町 広場

マヤ「あ！隣の掲示板に新しくできたお店が載ってるよ！姉ちゃんが言ってたのはここの事だね」

カミュ「ハア、ハア。そうみたいだな」

カミュは息を切らしている

マヤ「全力疾走しすぎでしょ、兄貴。ほら、そこのベンチで休んでよ。私が水買ってくるから」

カミュ「いや、もう大丈夫だ、マヤ。ただ喉は乾いたな。最初にそ

の新しいカフェに行ってみるか？」

マヤ「わかった、いってみよう！」

カフェ

店員「いらっしゃいませ！二名様ですか？」

マヤ「はい。席あいてますか？」

店員「はい！ご案内はこの子がしますのでついていってくださいね、ブレイブちゃん、お客様ご案内よー」

カミュ「なに!?ブレイブ!？」

ブレイブ「ガウ……ガウ!?ガウガウ！」

奥からはエプロンをつけたブレイブがやってきた

マヤ「ええ!?ブレイブじゃん、何してるの!？」

店員「あら?お客様ブレイブちゃんと知り合いましたか?この子は最近うちで働いてくれているんですよ」

カミュ「そ、そうだったのかよ。ブレイブ、お前凄いな」

ブレイブ「ガ、ガウ」

マヤ「あ、ついていくんだよね？待って、ブレイブ」

店員「ブレイブちゃん、よろしくねー」

ブレイブが案内した先には二人用の席があった

ブレイブ「ガウガウ」

カミュ「ここで働いてるとはな。そのエプロン似合ってるぜ」

マヤ「兄ちゃん達も知ってるんだよね？偉いじゃん、ブレイブ」

ブレイブ「ガウガウ」

ブレイブはメニューを置いた

マヤ「完全に理解してるんだ。賢いだけあるね」

その後

ブレイブ「ガウ」

ブレイブは背中に頼まれたものに乗せてきた

カミュ「おお、よく落とさないな。ありがとうよ」

マヤ「凄い斬新な発想だね。これは初見の人驚くんじやないかな？」

カミュ「だろうな。まさかキラールパンサーが働いて襲いもしないなんて驚くだろうな」

数時間後

マヤ「ショッピングもしたし、もう戻る？」

カミュ「酒場に行つていいか？新しくできたつてやつが気になつてよ」

マヤ「わかった。そこが最後だね。ただ、兄貴。夕飯があるから飲み過ぎや食べ過ぎはやめてよ？」

カミュ「ああ、わかつてるぜ。流石に控えるさ」

酒場

マヤ「結構雰囲気いいね。私、こういう感じオシヤレだと思う」

カミュ「お酒は……ほう、中々いいものあるな。今度兄貴と来るか」

マスター「おーい、グリーン。ここのお客様に対応してやってくれ」

グリーン「は、はい、ただいま向かいます!」

マヤ「あの赤い髪の人少し目立つね」

カミュ「まあ、俺達の青い髪も目立つだろ。それと同じだろうな」

グリーン「お待たせしました。ご注文はございますか?」

マヤ「えっと、フオツチャニつとレモンティーとブラックコーヒーのアイスを一つお願いします」

グリーン「はい。少々お待ち下さい」

カミュ「少し伝票の書き方や目線が慌ただしかったな。まだ若そうだし、働き始めたばかりか?」

マヤ「兄貴ったらどこ見てるの。失礼だからやめてよ」

カミュ「悪い、前から癖になっててな。どうしてもやめられなくてよ」

その後

マヤ「フオツチャ美味しい！ここのお店の味好きだなー！」

カミュ「マヤはフオツチャ好きだよな。名物料理だからデルカダールのどこでも食えるじゃないか」

マヤ「わかってないな、兄貴。各お店で少し味が違うんだよ。あっさりした味だったり、濃厚な味だったりしてさ。いろんな味を楽しみたいんだ」

カミュ「そうだったのか。各店の味の違いは知らなかったな。それでマヤの気に入った味はこの店だったのか。確かにいい味してるな。グラタンみたいなものだと思ってたが、少し辛い味だな」

マヤ「美味しい！この少しの辛さがいいよね。もう一口食べたくなる感じだよ」

夕方、大広間

二人が戻るとマルスとルナがいた

マルス「あ！カミュ、マヤ姉ちゃん！」

ルナ「久しぶりー！来てたんだね」

カミュ「よう、久しぶりだな」

マヤ「マルス、ルナ。久しぶり！今日は遊んでたの？」

マルス「ううん！街の子ども達に剣を教えたの！ロベルトさんと一緒だったんだ！」

ルナ「私は魔法を教えたの。マーズさんと一緒よ」

カミュ「ああ、何回かある街の人達の指導か。お前達もやってたんだな」

マルス「子ども達は僕達が教えてるんだ。子ども同士の方がいいって言われてね」

ルナ「うまく教えられないんだけどね」

マヤ「偉いなー。頑張ってるんだね」

ルナ「もう夕食だよ、マヤお姉ちゃん達も食べるんでしょ？」

マルス「僕達も今から行く所だったの！一緒に行きこう」

カミュ「おう。なら向かおうか」

夕食時

デルカダール王「カミュ、マヤ。久しぶりだな。元気だったよう
で何よりだ。またゆつくりしていくんだぞ」

カミュ「ありがとうございます、王様」

マヤ「うん！ゆつくりさせてもらうね」

ラース「ハア……」

ラースはため息をついている

カミュ「どうしたんだよ、兄貴。暗そうな雰囲気だぞ」

グレイグ「ラースは今日訓練場の壁に穴を空けてな。その衝撃で壁が崩れて訓練場が使いにくくなったのだ。だから直すために修理中で、ラースには罰として一週間の禁止令が出たのだ」

マヤ「なんか数年前にも似たような事あったよね。またやっちゃったんだ」

ラース「張り切りすぎてしまった。俺が悪いから仕方ないんだ」

マルティナ「まあ、張り切りすぎるのはわかるわ。もっと強くしておくから安心してね、ラース」

グレイグ「姫様、あまり甘やかさないてください。ラースの馬鹿力だと何回壊されるかわかりませんよ」

マルティナ「そ、そうだけどラースだってわざとじゃないからいいのよ。うっかりしちやっただけ」

ラース「以後気を付けます……」

カミュ「しおれてんな、兄貴。まあ、好きな事が自分のせいできなくなったらそりやそうなるか」

マルス「父さん、元気だして。バンさん達も訓練には支障ないって
言ってたよ」

ラース「そうだったか。それはよかった」

デルカダール王「ブレイブよ。今日の仕事はどうだった？またたくさん声をかけてもらったかの？」

ブレイブ「ガウ」

マヤ「そうだ！私達、今日ブレイブが働いてるお店に偶然行ったの！ブレイブがいる事知らなくて凄く驚いた！」

ルナ「ええ！マヤお姉ちゃんお店に行ったの！いいなー、私も行き
たかった。ブレイブの働く姿見たーい！」

ブレイブ「ガウ……」

ブレイブは少し困ったような顔をしている

コロ「クウーン？」

コロがブレイブを舐めている

ブレイブ「ガウ」

ブレイブもコロを舐めている

デルカダール王「やはり可愛いものだな。どうであった、ブレイブの働く姿は」

カミュ「エプロンをしてて、客を席に案内して商品を持ってくるんです。しっかり働いていました」

グレイグ「ほう。そんな事をしているのか。それは見てみたいものだ」

マルティナ「エプロン姿いいじゃない。ブレイブも少し可愛くなるんじゃない？」

マルス「ブレイブにエプロン？なんか変な感じしそう」

ラース「今度やってみてもらおうといい。俺達も見てみたいからな」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

ブレイブは困り果てている

マヤの一週間2

次の日、朝食時

カミュ「この後クレイモランに戻って仕事をしてくる。だから、今日は夕方までいないからよろしくな」

マヤ「魔物の様子見だよな？頑張ってきてね」

グレイグ「了解した。カミュなら心配いらないが、一応気をつけるんだぞ」

カミュ「おう。ありがとな、グレイグ」

デルカダール王「仕事熱心でいいではないか、カミュよ」

マルティナ「マヤちゃんは今日どうするの？」

マヤ「うーん……特に考えてないよ」

マルス「じゃあ、ブレイブやコロと遊んでたら？最近外で駆け回る事少ないから」

ラース「おお、確かにそうだな。ブレイブ、コロ、たまには思いつきり走りたいよな？」

コロ「キャン！」

ブレイブ「ガウ」

マヤ「私で大丈夫？マルス達に比べたら慣れてないよ？」

ルナ「私達も訓練が終わったら行くわ。マヤお姉ちゃんは先に行つててね」

マヤ「わかった。ブレイブ、コロよろしくね」

朝食後

マルティナ「あー！そうだったわ、ブレイブ。リーズレットからまた研究としてあの薬を飲んで欲しいんですって。今日飲んでくれない？」

ブレイブ「ガウ」

マヤ「それって話に聞いた魔物が喋れるようになる薬の事？」

グレイグ「ああ、その通りだ。ブレイブはたまに協力しているのだ。まあ、頻度はそう多くはないのだがな」

ラース「これが最終調整だったな。これで何もなければお城に緊急用として置くらしいぞ」

デルカダール王「ついにあの薬が出来上がるのじゃな。わしらも緊急用としてはほしいのう」

マルティナ「それじゃあブレイブ、はい」

ブレイブはマルティナの手にある薬を舐めた

ブレイブ「…… あー、あー、これでよろしいですか？」

マヤ「凄い！本当に喋ってる！ブレイブ、私の事わかる？」

ブレイブ「勿論ですよ。デルカダール王様の娘マヤ様ですね。カミュ様の実の妹さんでしたよね」

マヤ「な、なんか固い話し方だね。真面目って感じ」

ラース「体に異変とかはあるか？」

ブレイブ「いえ、特に何も感じませんね。今回は何日ほど続きますか？」

グレイグ「今回は最終調整だからな。軽くて大丈夫らしいぞ。効果は三日程度らしいな」

ブレイブ「了解しました」

デルカダール王「それではマヤ、ブレイブ達と遊んできてくれ」

マヤ「うん！場所はブレイブが案内してくれる？」

ブレイブ「はい。こっちになります」

その後、ナプガーナ密林前の滝

コロ「キャンキャン！」

コロは元気に走り回っている

マヤ「可愛いなく、コロ。でも、昔よりかなり大きくなったよね。ブレイブみたいにはならなくても、キラーパンサーになるのはあとどれくらいなんだろう？」

ブレイブ「そうですね……。あと2、3年ほど経てばキラーパーンサーの姿が変わっていきます。今は足がだんだん大きくなってきているんです」

マヤ「そうなんだ。それにしても……。その喋り方なんか嫌だなー」

ブレイブ「そ、そうでしたか。ラーズ様や皆様にとって大切な方にはこのように話しているのですが、気分を損ねましたか？」

マヤ「そこまでじゃないけど、私が偉くなつたみたいじゃん。そんな事ないんだからもっと軽い話し方にしようよ。友達くらいにさ」

ブレイブ「それでは、兵士達に対する感じでいきますね。マヤは最初から俺達を見ても怖がらなかったな。魔物に慣れていたのか？」

マヤ「あ、それくらいがいいな。それで質問の方はね、そんな事ないよ。やっぱりキラーパーンサーだから怖かったよ。それでも、兄ちゃんや兄貴が平気にしてたから大丈夫なんだろうなって思ってただけ」

ブレイブ「カミュ様もラーズ様ほどではなくとも、それに匹敵するだけの強さを持っているな。人間であれだけの強さは凄い事だ。流石は勇者様の仲間だけある。マヤも戦えるのか？」

マヤ「私は無理だよ。多少短剣なら扱えるけど、それも素人レベル。私は魔物と戦ったら負けちゃうよ」

ブレイブ「まあ、あの兄がついていればそれでいいか」

マヤ「ブレイブはコロみたいにはしやがないの？」

ブレイブ「うーん、あそこまでとはいかなくとも走ったりはしたいな。訓練場だと動ける場所が限られていて思いつきは無理だからな。どうせなら俺の背中に乗るか？マヤ」

マヤ「え!?!いいの!!乗りたい!」

ブレイブ「ああ、乗るといい」

マヤ「兄貴が前に乗ってみたいって言った。兄貴に自慢しちゃおうつと!」

ブレイブ「俺に乗る人は少ないんだ。我が子とラーズ様とマルス、ルナくらいだ。グレイグ様も乗せようとしたのだが、なぜかくしやみが止まらなくなってしまった。断念したのだ。マルティナ様は羨ましがっているから、今度機会があれば乗せてさしあげたいのだが」

マヤ「おっちゃんって確か軽度の猫アレルギーだっけ？残念だなー」

ブレイブ「ただかなり速いからな。しっかり掴まっているんだぞ」

マヤ「うん！これでいい？痛くない？」

ブレイブ「平気だ。それじゃあ行くぞ！」ダツ！

マヤ「キャアツ！は、はや!!」

マヤはスピードに驚き、掴む力を更に強くした

ブレイブ「やはりこの速度が一番気持ちがいい。マヤ、平気か？」

マヤ「う、うん。少し驚いたけど、こんな速いと景色が全然違う。風もはつきりと感じるね」

マヤは少し周りの景色を楽しんでいる

ブレイブ「慣れるのが早いな。マルス達は最初は怖がっていたというのに。よし、森にも入るぞ」

マヤ「うん！」

その後

ブレイブ「ふう………楽しかった。マヤ、大丈夫だったか？」

マヤ「うん！すつごく楽しかったよ！ブレイブはいつもあんな景色を見てたんだ！また乗せてね！」

ブレイブ「ああ、また今度だな………お、訓練が終わったようだな」

ブレイブは遠くを見た

マヤ「え？あ、遠くからマルス達が来る。流石キラールパンサーだね」

マルス「ブレイブー、マヤ姉ちゃん！訓練終わったー！」

ルナ「あれ？コロは？」

ブレイブ「コロならおそろくあの木の下だな」

マルス「あれ？ブレイブ、また喋れるようになったの？よかったね！」

ルナ「あ、お昼寝かー。気持ちよさそうだもんね」

マヤ「お昼寝？」

ブレイブ「きりかぶごぞうの上でよく寝ているんだ。最初は本物のきりかぶだと思っていたようだが、魔物だとわかり友達になったようだ。二人でよく寝ているんだ」

マヤ「へー、可愛い。見てもいいかな？」

マルス「大丈夫だと思うよ。いつもぐっすりだもん」

ルナ「こつちだよー」

数分後

マヤ「あれ？起きてるよ」

ルナ「本当だ、珍しい。お絵かきしてるのかな？」

コロ「グルグル」

きりかぶごぞう「ギツ！ギギ！」

コロ「クウーン」

マルス「何か喋ってるね。ねえブレイブ、なんて言ってるの？」

ブレイブ「……………ち、父親自慢のようだ。恥ずかしい…………」

ブレイブは少し下を向いている

マヤ「ああ、なるほど。ブレイブは恥ずかしいだろうね。でも、可愛いな。コロにとって、ブレイブはカッコいいパパなんだろうね」

マルス「コロの自慢したくなる気持ちわかるよ。僕も父さんの事、皆に自慢したいもん」

ブレイブ「悪いが戻ろう。俺にはあまりいい場所ではない」

ルナ「恥ずかしくないですよ、ブレイブ。コロのお話聞かせてよ」

ブレイブ「自分の口からは言えない」

数時間後

マルスとルナはブレイブと戦っていた

マルス「ブレイブ強い。僕の攻撃全部よけた！」

ルナ「魔法もあまり当たらなかった。狙ったんだけどな」

ブレイブ「いや、偶然もある。お前達も十分強いぞ。二人で息がピッタリだな。双子ならではだ」

マヤ「そうだよ。ブレイブも凄かったけど、マルス達も驚くくらい強いじゃん！私なんて見てるだけで凄いつて思ったもん」

マルス「本当？前にバンさん達にも褒められたんだ」

ルナ「でも私魔力使い過ぎだったかも。少し疲れてきちゃった」

ルナはその場で座り込んだ

マヤ「そうかもね。魔法色々使ってたじゃん。お城に戻って休もう」

夕食時

デルカダール王「なるほど。ブレイブも楽しめたようだな。息抜きになってよかっただろう」

ブレイブ「はい。久しぶりにとても楽しめました」

カミュ「しかしマヤ、羨ましいな。ブレイブに乗ったとは。落とされなかったか？」

マヤ「しっかり掴まってたからね。兄貴も今度乗せてもらいなよ。凄く速いし、楽しいんだよ」

マルティナ「私も羨ましいわ。いつか乗って移動してみたいのだけど」

グレイグ「ブレイブは大人気だな。だが、確かに気持ちよさそうだからな。俺には無理だったが」

ラース「カミュはどうだった？仕事のほうは」

カミュ「なんともなかったぜ。陸の方と海の方でどっちも調べてきたんだ」

ラース「お、海で思い出した。カミュ、お前いつからあんな呼び名についてたんだよ。笑っちゃまったぞ」

カミュ「げ、兄貴に知られてたのかよ。しかも笑うんじゃないよ。」

俺だって勝手に呼ばれて困ってんだ」

マルス「カミュ、なんて呼ばれてるの？」

ラーズ「歩くジャンボウニ」ヒュン！

カアン！

ラーズの頬を掠めてナイフが飛んできて、後ろの壁に突き刺さった

カミュ「それはてめえだけだろうが」

ラーズ「…………… カミュさん、シヤレにならないです。海賊王だつてよ」

デルカダール王「ほう、随分といい呼び名ではないか。カツコイイぞ、カミュ」

ルナ「海賊？カミュさんって海賊だったの？」

カミュ「違えよ、ルナ。別にそんな事はしてねえ。見た目に似せたんじゃないか？」

マルス「カミュはツンツンがあるもんね」

カミュ「それも関係ねえからな」

マルティナ「確かカミュの装備の名前も海賊王って名前だったじゃない。なら、そう呼ばれても不思議じゃないわ」

グレイグ「そういえばそうだったな。いいではないか」

カミュ「あまりいい気はしねえんだがな」

マヤ、働く

次の日の昼、デルカダール城下町

マヤは一人で城下町に来ていた

マヤ「ブラブラしてくるとは言ったけどどうしようかな。買いたい物も多くないし、うーん……。もうお昼だし、またあの酒場についてフォツチャ食べようつと」

酒場

カラン

グリー「いらつしやいませ！あれ？確かこの前来てくれた方ですね？また来てくださったんですね」

マヤ「あ、この前注文とつてくれた人だね。覚えててくれたの？」

グリー「はい。青い髪をした兄妹で特徴的でしたから。今日はお一人ですか？」

マヤ「うん。特にやる事なくて、とりあえずお腹満たそうかなって。ここのフォツチャ、凄く私好みで美味しかったから」

グリー「そうだったんですか。ありがとうございます。今、丁度お客が少ないんです。カウンター席へどうぞ」

マヤ「ありがとう」

数十分後

グリーン「はい、ご注文のフオツチャです」

マヤ「ありがとう……… うーん、これこれ！やっぱり美味しい！」

グリーン「美味しそうに食べてくれますね。こっちも嬉しいです」

マヤ「そう？あ、お兄さんってさ、最近この店に来たの？」

グリーン「え？わかりますか？少し慣れてきたと思ってたんですけど」

マヤ「前来た時にいた私の兄が言ってたんだけど、少し落ち着きがないってさ。だから新入りなんじゃないか？って。今も少し変な感じするよ」

グリーン「凄いな。よく見てたんだ。僕、このお店に一ヶ月くらい前に来てさ。まだ20になったばかりだから、働き方とかわからなくて」

マヤ「あ、話し方変わったね。それが普通なのかな？というか、20なら私と近いじゃん。その話し方の方がいいな」

グリーン「あ……。話し方はうっかり戻っちゃったけど、それなら大丈夫だね。よく先輩からは怒られるんだけど」

マヤ「働いてるなんて偉いと思うよ。凄く立派に感じるな。私もどこか働こうかな」

グリーン「えっと……君は働いてないんだね。働きたいの？」

マヤ「あ、私の名前はマヤっていうの。よろしく、お兄さん。働きたいとは少し思うかな。でも、まだ自分がなにやりたいとかわからないからさ。どうしようか考えてるんだよね」

グリーン「マヤさんっていうんだ。僕の名前はグリーン。よろしく。働くのも自分が好きな事の方がいいもんね。ゆっくり考えるといいと思うよ」

マヤ「お兄さんはどうしてここにしたの？店員の仕事やってみたかったの？」

グリー「いやいや、そんな事ないよ。僕はお金が必要だね。僕は孤児院で育つてそこに感謝としてお金を寄付したいんだ。だからお金を稼いでるんだよ」

マヤ「孤児院……。凄い!!それってとっても素敵だよ!自分の育った場所に感謝の意を込めるなんて、孤児院の人達も絶対大喜びだよ!」

グリー「そ、そうかな?そんな持ち上げないで。僕はただ孤児院の子ども達が苦しい思いをしてほしくないからって思っただけだよ」

マヤ「それもいいじゃん!私、やるならそういう誰かの役にたつ事がやりたいな!まあ、グリーさんみたいにしつかり考えていないと駄目なんだけど」

グリー「マヤさんも興味あるの?」

マヤ「そうだね。孤児院つて聞くと私自身思う所があるからね。その子ども達は元気に育ってほしいよね」

グリー「マヤさんは優しいんだね。僕の事を褒めてくれたし、知らない子ども達の事を考えてくれるんだ」

マヤ「そ、そう?いしし、嬉しいな」

店長「おい、グリーン！いつまで喋ってるんだ！洗い物が溜まってきてるぞ！戻ってこい！」

グリーン「あ、すみません！今行きます！ごめんね、マヤさん。話せて楽しかったよ。またお店に来てくれると嬉しいな」

マヤ「うん。私も楽しかったよ。お仕事頑張った」

その後、デルカダール城

マルティナとラーズの部屋

コンコン

ラーズ「ん？入っていいぞ」

マヤ「兄ちゃん、今なにしてた？」

ラーズ「おお、マヤか。今は久しぶりに魔導書を読んだ所だ」

マヤ「兄ちゃんが魔導書？そっか、兄ちゃんは魔法が使えるもんね。私の中であまりイメージ無かったけど、兄貴も兄ちゃんは魔法がうまいって言った」

ラース「マヤの前で魔法を使う機会も少なかったからな。ある程度は使えるぞ」

マヤ「魔導書なんて、兄貴もおっちゃんも姉ちゃんも読んでるの見ないから見慣れないな。私でも読めるの?」

ラース「魔力があればある程度は読めるぞ。マヤは…… うん。カミュと似た魔力を感じる。読めるはずだ、見るか?」

マヤ「うん。どれどれ…… これって式?それと、構造?あ、魔法を唱えるために必要なやつだっけ」

ラース「そうだ。今見てるのはジバルンバ。カミュも使える魔法だ。マヤも初級呪文のジバリアならできそうじゃないか?書いてあるのはこの場所だ」

マヤ「うーん……。魔力を込めるんだよね?えいつ!……。で きかないな」

ラース「魔力の込め方は正しいぞ。後は、構造と想像力だな。地面の形を好きないように思い浮かべて、その形になるように強く念じてみるんだ。そうすれば少し出来るはずだ」

マヤ「じゃあ……………えいっ！」

マヤの両手の間には、小さな丸い岩ができた

マヤ「わわっ！出来た！出来たよ！」

ポロツ！

小さな岩は消えていった

ラース「おお、想像よりずっと早くできたな。流石メダ女主席でカミュの妹。才能の塊だな」

ラースも少し驚いている

マヤ「やったー！！後で皆に自慢しよ！」

ラース「そういえば、話が逸れたが何か用事だったのか？」

マヤ「あ、そうだった。ねえ兄ちゃん。私、働きたい！」

ラース「働く？というと、仕事をやりたいのか？」

マヤ「うん！それでお金を稼いで、そのお金を困ってる人達に寄付するの！そうすればその人は助かるし、私もそれが嬉しいの。だから働ける場所ない？」

ラース「随分立派な考えじゃないか。俺は賛成だが、これは俺一人で承認はできないな。王様達にも話さないと。特にカミュには絶対だな」

マヤ「まあ、そうだよ。夕飯の時に皆に伝えるね」

ラース「急にどうしたんだ？前から考えてたのか？」

マヤ「まあ少し考えてたのはあったけど、今日酒場で会ったグリーンさんって人が孤児院のためにお金を稼いでて、それを凄く素敵だと思ったんだ」

ラース「……………なるほど。それに少し影響されたのか。それはそうと、マヤ。グリーンさんって男だよな？」

マヤ「ん？そうだよ。私とほぼ歳が同じなのに立派なんだ。あの人手つても優しそうでいい人だった。また明日会いにいかうかな」

ラース「……………（大事件だ。カミュに急いで知らせなければ）」

夕食時

デルカダール王「素晴らしいじゃないか、マヤ。わしもその意見には賛成じゃ」

グレイグ「マヤ、なんて優しい……………」

マルティナ「グレイグ、あまり泣かないで。マヤちゃん、素敵な考えね。私も応援するわ」

カミュ「……………なあ、マヤ。グリーさんって男だよな？」

マヤ「兄貴も兄ちゃんと同じ事聞いている。そんなに気になるの？」

カミュ「あ、ああ。まあな（おい、兄貴。後で作戦会議だ）」

ラース「（当たり前前だ、大事件だぞ）」

ブレイブ「働きたいのなら、俺が働いている店で働くのはどうだ？あそこは中々いいぞ」

マヤ「カフェもいいよね。でも、なにしようかなー。特にやりたい仕事の内容は決まってないんだよね」

デルカダール王「わしらがなんとかするよりも、お店で雇ってもらうのが一番早いだろうな」

グレイグ「やりたくない事はあるのか？傭兵などはできないだろうが、その他苦手な事とか」

マヤ「確かにそういうのはできないな。でも、苦手はそこまでないよ。何事もまずはやってみる事が大事なのを学校で学んだからね」

マルティナ「それじゃあ、まずはその酒場で働いてみたらどうかしら？グリーさんって人もマヤちゃんに似た考えなら話も合うし、色々考えられると思うわよ」

マヤ「なるほど。そうだね！姉ちゃん、ありがとう！明日話してみる！」

ラース「マ、マヤ。そんな急に決めなくていいんじゃないか？」

カミュ「そうだぞ。それに、やりたい事は決まってる？俺とまた世界を回ってみようぜ。そうすればあの頃とは違った目線で街を楽しめるし、やりたい事も見つかるかもしれないぜ？」

マヤ「うーん。それも魅力的だけど、元から私は働くならデルカダールかクレイモランって考えてたんだよね。どっちも家があるから楽だし、どっちにも友達がいるもん。それに、グリーさんに色々話を聞いてみて、私も協力できるならしてみたいからさ」

デルカダール王「マヤの言う通りじゃな。わしらの代わりに相談できる相手が増えるのはいい事じゃ。明日、話してくるといい」

その後、カミュとマヤの部屋

マヤ「じゃあ兄ちゃん、私姉ちゃんの所に行くね」

ラース「おう。おやすみ、マヤ」

カミュ「また明日な、マヤ」

マヤは出ていった

ラース「さて、どうする？カミュ。これは相当まずいぞ」

カミュ「ああ、想定外だ。マヤ自身まだ気付いてねえが、ありやあグリーンって奴を気になってるな。怪しいやつじゃねえのはわかってるが、どうしたもんか」

ラース「ん？カミュはグリーンを知ってるのか？」

カミュ「さっきマヤが言った酒場ってのは一昨日マヤと二人で行った場所なんだ。その店員にいたグリーンってやつは赤い髪をしたやつで少し目立ってたからな。覚えてるさ」

ラース「なるほど。変な輩ではないようだな。明日、マヤについて
いくか？グリーってやつ情報を集めに」

カミュ「マヤと一緒にいないほうがいい。その方がグリーってやつ
も素を出すだろう」

ラース「よし、それでいこう。変なやつだったら、わかってるよな
？カミュ」

カミュ「もちろんだぜ、兄貴。そんなやつだったら即行マヤから引
き離す。マヤに悪影響を与えるやつは必要ねえからな」

マヤ、働く2

次の日の昼、玉座の間

マヤ「それじゃあ、また何かあったら夜に報告するね」

マルティナ「ええ、わかったわ。気をつけてね」

グレイグ「ゆっくり楽しんでくるといい」

マヤ「兄貴と兄ちゃんどこ行ったんだろ？もし見かけたら、二人にも私はもう出発したって伝えておいて」

マルティナ「そうね。本当どうしたのかしら？」

グレイグ「俺達も居場所はわからんからな。まあ、了解した。見かけたら伝えておく」

マヤ「じゃあ行ってきまーす」

その頃、酒場周辺

カミュ「ここがそのグリーってやつがいる酒場だ」

ラース「ふむ、新しくできたって聞く店だったか。俺もまだ入った事無かったんだよな。だが、入りはしないんだろ？」

カミュ「ああ。兄貴はここではもう全員に顔が知られてるし、俺も一度来たから覚えられてると思うからな。もうしばらくしたらマヤも来る。その時に窓の近くから様子を伺うんだ」

ラース「怪しいやつらだと思われないようにしないとだな。それにしても、赤髪か。少し見ただけでもどこにいるのかわかるな。カミュ達みたいを探すのは苦勞しなさそうだ」

カミュ「そうだよな。まだマヤが来るまで時間があるし、少しどんな働き方してるのかわかってみるか。まあ、俺の予想では若いし、初心者だと思うけどな」

カミュとラースは窓から少し顔を覗かせている

ラース「確かに年齢はマヤと同じくらいか？それより少し上かそのくらいだよな。歳はマヤ自身気にしてなさそうだが、真面目であってほしいぜ」

カミュ「お、あれは料理を少し教わってるのか？」

ラース「だろうな。何を作ってるかは見えないが、流石酒場だ。いろんな人が料理を作れるようになっていたほうがいいという事だな。しつかり話を聞いてるようだし、変なやつではなさそうだ」

カミュ「ん？兄貴、マヤが近くにきた。少し隠れるぞ」

ラース「了解」

マヤ「今日はお客さんたくさんいるかな？お店には悪いけど、少ないほうがグリーンさんと話せて嬉しいんだけどな。まあ、少しでも話せればいいか」

カラン

女性「いらっしやいませ！お一人様ですか？」

マヤ「あ、はい。カウンター席って空いてますか？」

女性「カウンター席ですね、ご案内いたします。こちらにどうぞ」

マヤ「ありがとうございます。あとグリーンさんって今日いらっしやいますか？」

女性「え？グリーン君ですか？いらっしやいますよ。お知り合いの方でしたか。少々お待ちください」

マヤ「お知り合い……。なんだか恥ずかしいな」

数分後

グリー「マヤさん、ごめんなさい！僕、店長に料理を教わって少し向かうのが遅れました」

マヤ「え、ごめんね、グリーさん。お仕事の邪魔するつもりは無かったんだ」

グリー「いえ、もう終わったので僕も平気ですよ」

女性「グリー君、彼女さんとお話したいのはわかるけど、先に注文聞くの」

マヤ「え……」

グリー「か、かか彼女じゃないですよ!!ご、ごめんなさい、マヤさん。ご注文の方お聞きします」

グリーは顔が赤くなっている

マヤ「あ、うん。このランチのフォッチャセットにしようかな」

グリー「ランチの方ですね。えっと……」

グリーは少し戸惑っている

女性「サラダとスープの片方が付けられますが、どちらにいたしま
すか？」

隣にいた女性がサポートした

マヤ「じゃあサラダの方でお願いします」

女性「わかりました。それと、飲み物の方はどうされますか？」

マヤ「レモンティーをお願いします」

女性「わかりました。それではお待ちください」

グリー「ありがとうございます、マドリーさん」

マドリー「いいのよ、私も茶化してごめんなさい。でもグリー君、ラ
ンチの時の注文の取り方覚えておいてね」

グリー「は、はい」

その頃、外では

ラース「何だか焦ってたな。恐らくあの女性の方に何か言われたのかもしれないな」

カミュ「グリーってやつも赤面してたしそうなんだろうな。それに、やっぱり初心者みたいだ。まあ真面目なようだし問題なさそうだ」

ラース「……………美味そうだな」

グウウウウ

ラースのお腹から大きな音が鳴った

カミュ「おいおい、兄貴。食い意地張りすぎだろ。もうしばらく耐えてくれよな」

ラース「わ、悪い。見ていたら腹空いてきてよ……………は！いい事思いついたぞ！」

カミュ「……………嫌な予感がするが、一応聞こう。何だよ？」

ラース「俺が変装してこの店に入ってマヤの近くに座るんだ。そうすればどんなやつかより詳しくわかるぞ」

カミュ「本音はこの飯が食べたいだろうが！まあ、思ってるより

悪くはないな。だが、兄貴は変装道具なんて持ってたのかよ？」

ラーズ「サングラスでどうだ！」

カミュ「ハア……そんな事だと思っただぜ。グレイグから服借りてこいよ。そこにサングラスをつければ、兄貴ってわかりにくくなると思っただぜ」

ラーズ「おう！」ダツ！

ラーズは少し嬉しそうに城へ走っていく

カミュ「ハア。兄貴にも困ったもんだぜ」

数十分後

カラン

グリー「いらっしやいませ！お一人様ですか？」

変装ラーズ「ああ、カウンター席で頼む」

グリー「わかりました。それではこちらの席へお願いします。注文の方決まりましたらまたお呼びください」

変装ラース「よし、マヤの近くにこれた。これで様子がわかるぞ」

グリー「お待たせしました。ランチのフオツチャ、サラダセットです。それと、飲み物のレモンティーです」

マヤ「ありがとう、グリーさん。ここのホールはグリーさんの仕事なの？」

グリー「うん。僕だけじゃなくて、さっきのマドリーさんも担当してるんだ。後は夜の時間帯にもう二人いるんだけど、僕は夜は働いてないからわからないんだけどね」

マヤ「やっぱり大変じゃない？接客とかさっきの注文の事とか」

グリー「まあ、慣れないと大変かな。でも、まだ簡単な方だからね。少し覚えてきたから頑張れるよ」

変装ラース「すみません」

グリー「はい、ご注文お伺いします」

変装ラース「このメインメニュー、全部でお願いします」

グリー「え……。は、はい、ありがとうございます。かなりお時間貰いますが、よろしいですか？」

変装ラース「ああ、大丈夫だ」

グリー「わかりました。しばらくお待ちください」

マヤ「(ええ……。全部つて凄いな、あの人。兄ちゃんみたいな事する人本当にいるんだ。あれ？何処となく兄ちゃんに似てる?)」

数分後

グリー「さっきの人驚いたな。まさかあんな注文受けるなんて」

マヤ「そうだよね。私も驚いちゃった。私の知り合いにも似たような事する人いるんだけど、その人みたいって思っちゃった」

変装ラース「(やべっ！うっかり食べたいがあまりにいつもの感覚でやっちゃった！バレてないよな?)」

マヤ「あ、そうだ！グリーさん、昨日話してた事覚えてる？」

グリー「ん？確かマヤさんもどこかで働きたいって話の事？」

マヤ「そうそう！それで、初めてだから私もここで働こうかなって思ってた。このお店ってまだ雇ってくれてる？」

グリー「本当!?まだ人手不足みたいだから大丈夫だと思うよ。僕もマドリーさんもホール以外もしないといけなくて困ってたんだ。待たせるように申し訳ないけど、この後閉店したら店長に聞いてみるね」

マヤ「忙しいもんね、わかった。じゃあ何かあったらデルカダール城に来て。私はそこにいるから」

グリー「えええ!!?お城!?!」

ザワザワ

グリーの声に周りの客も驚き始めた

グリー「あ……す、すみません、お客様」

マヤ「ご、ごめん。そんなに驚くとは思わなくて」

グリー「えっと……マヤ様はどのようなお方が聞いてもよろしいでしょうか？」

グリーは少し緊張している

マヤ「ええ!?そ、そんな偉い身分とかじゃないよ!ただの一般市民だから。少し特殊なだけで何も変わらないから!だからそんな敬語を使おうとしないで大丈夫!」

グリー「ほ、本当?よかった……。僕、相当失礼な事してたんじゃないかと思ったよ。勘違いしてごめんね」

マヤ「私の方こそごめんなさい。確かにお城にいるなんて言ったら驚いちやうよね。まあ、大広間で誰かに声かければ私、絶対に行くから何かあればきてね」

グリー「う、うん。わかった」

マヤ「お仕事の邪魔してごめんね。それじゃあごちそうさまでした。今日も美味しかったよ!またね!」

グリー「ふふ、ありがとうございます。こちらこそまたよろしくね」

変装ラース「(やべ、もう終わっちゃった。早く食べ終わらねえと……)あ、話よく聞いてねえや。カミュ、すまん」

マヤ、働く3

その日の夕方、酒場では

グリー「ビルさん、少しお願いがあるんですけど」

ビル「何だ？グリーからお願いなんで珍しいな」

グリー「実は僕の知り合いがここで働きたいらしくて。いいですか？」

ビル「…………… おお！それは大歓迎だ。どんどん働き手はほしいからな。嬉しいじゃないか！」

マドリー「ええ!?グリー君、もしかしてさっきの青い髪の女の子の事？」

グリー「あ、はい。そうなんです。マヤさんって方で働くのが初めてみたいです」

ビル「初めてでも構わないさ。グリーみたいにどんどん覚えていってもらえばいいだけだからな。それに、何だ？グリーの彼女なのか？」

グリー「ええ!?ち、違いますよ!ただの友達みたいな方です」

マドリー「本当かしら?ここ数日お昼によく来てるじゃない。可愛いし、優しそうよ。それとも、グリー君つてもしかしてもう彼女さんがいるのかしら?」

グリー「い、いや、それはまだ……。でも、マヤさんは綺麗な方ですから、きっと彼氏さんとかいるに決まっていますよ!」

マドリー「ふーん、好意は否定しないのね」

グリー「あ……」

グリーの顔は赤くなっている

ビル「そこらでやめておけ、マドリー。グリーのやつ、どんどん赤くなってきたぞ。まあ今後の予定とかを聞いて、いつから働きに来てもらえそうか聞いてくれ。俺達は歓迎するとその子に伝えておいてくれ」

マドリー「私も!あの子と仲良くなって恋バナとかしたいもの!」

グリー「は、はは。わかりました。それではお疲れ様でした!」

二人「お疲れ様ー」

その頃、デルカダール城 訓練場

カミュ「で？反省したか？クソ兄貴よお」

ラーズ「申し訳ございませんでした、カミュ様」

ラーズは訓練場の隅にある柱に逆さまに吊られていた

バン「師匠、何やったんですか？凄く情けないですよ」

カミュ「こいつは食欲で本来の目的を忘れていやがつてな。仕事の
一つもせずに呑気に帰ってきやがったんだよ」

ガザル「ラーズ將軍もそんなバンみたいな事するんですね」

バン「いや、ガザル！俺だってやった事ねえだろ！」

ガザル「いつかやりそうだよ、お前は」

バン「そんな事ないからな！なあ、ジール！」

ジール「ひ、否定できません……」

バン「なに!？」ガーン!

ラース「早く助けてくれ。頭に血が上り過ぎそうだ」

カミュ「仕方ねえな、ほらよ」

カミュは縄を解いた

ラース「あああ……。楽になった」

カミュ「ほら、部屋に戻るぞ。また話し合いするんだからな」

ラース「へいへい。バン達も訓練するのはいいが、やりすぎるなよ。休む事も大事なんだからな!」

バン「はい!」

ジール「お疲れ様でした!」

二人は出ていった

ガザル「……話し合いつてなんだろうな?グレイグ將軍はあの二人が合わさるとろくな事無いって言ってたけど」

バン「グレイグ將軍の気持ちにはわかる。まあ、師匠の事だしきつと大事な事も含んでるんだと思うぞ！」

ガザル「だといいいけどな。俺、たまにラーズ將軍って実は少し抜けてるんじゃないかって思ってるんだ」

ジール「そ、そうですか？俺にはすっかりした人にしか見えないですけど」

バン「師匠は意外と間抜けな所多いぞ？前に馬鹿にしたら半殺しにされたけど」

ガザル「そりゃあそうだろうな。まあ、今回は大丈夫だと信じておくか」

その頃、大広間

グリー「お城なんて初めて入った。えっと、誰かいないかな？」

グリーは緊張した様子でキョロキョロしている

カミュ「ん？お前は確か、あの酒場の」

ラーズ「おお、さっきの。じゃなかった。君は？」

グリーン「あ、えっと、僕、グリーンっていいいます。あれ？その青い髪のお兄さんってもしかして」

カミュ「あの酒場の店員だよな？どうしたんだ？」

グリーン「あ、はい。覚えていましたか。あの、マヤさんに用事があった来たんです。いらっしやいますか？」

ラース「…… マヤに何の用事だ？」

グリーン「えっと、僕の仕事先で働くのを店長からお許しが出たので、その報告に来ました」

カミュ「マヤは働くの初めてなのによく許してくれたな」

グリーン「人手不足で新人でも構わないからほしかつたんです。僕も同じようなものですし」

ラース「わかった。マヤを呼んでこよう。待っていてくれ」

グリーン「ありがとうございます！」

数分後

マヤ「本当!? やった! 私はこのお城にいるから、いつでも大丈夫だよ。お店の都合に合わせる」

グリー「そっか、わかったよ。店長に伝えておくね。あ、それと店長さんもマドリーさんも歓迎するってさ」

マヤ「いしし、なんだか優しそうな感じだね。私、楽しみにしてるね!」

グリー「うん。僕もこれからが楽しみだよ。一緒に頑張ろうね」

夕食時

マルティナ「へえ、雇ってくれたのね! よかったじゃない、マヤちゃん!」

グレイグ「これから頑張るのだぞ。初めてだからといって、頑張るすぎるのもよくないからな」

マヤ「うん! 楽しみだなー!」

デルカダール王「という事は、働いている間はお城にいてくれるの

かの？」

マヤ「うん。これからずっといるよ」

デルカダール王「ハツハツハ！また夕食が賑やかになって嬉しいのう」

ルナ「マヤお姉ちゃんお仕事するの？」

マルス「がんばってね！」

マヤ「そうなんだ、ルナ。応援ありがとう、マルス」

マルティナ「リースとカミュは今日どこにいたの？夕方まで見なかったけど」

カミュ「ちよつと野暮用でな。兄貴と一緒にだったんだ。悪かったな」

リース「まあな。弟と一緒に少し探索してたんだ」

グレイグ「そうだったか。仲がよくなっている事だな」

マヤ「あ！聞いて！今日、酒場に兄ちゃんみたいな頼み方する人がいたんだ！メニニューの品物全部注文しててびっくりした」

ラース「ゴホッ！ゴホッ！」

カミュ「……………」

カミュはラースをジト目で見ている

デルカダール王「ほう、それは確かにラースに似ておるな。大食いな人もいるものじやな」

マルティナ「頼み方までそっくりね。ラースではなかったのね？」

マヤ「似てるなーとは思ったけど顔よく見えなかったんだ。サングラスしてたし、服もなんだか兄ちゃんとは違うし」

グレイグ「そういえば、さっき俺の服がいつもと違う場所にあったな。出した覚えはないんだが」

カミュ「おっさん、知らない間に出したんじゃないか？すぐ忘れるのはもう歳だぜ？」

グレイグ「な！お、俺はまだ歳じゃない！」

ラース「最近白髪が増えたもんな、グレイグ」

グレイグ「うるさいぞ、ラース！人が気にしてる事をはっきりと言
うな！」

ブレイブ「そういえば夕方ごろ、大広間の方に知らない気配があり
ました。あれはどなただったんですか？私は初めて感じたのですが」

マルティナ「え？そうだったの？玉座のほうには来てないし、私達
はわからないわ」

ラース「ああ、それはグリーだな。さつきマヤに報告するために訪
れたんだ」

ブレイブ「グリーさんですか。確かマヤの話に出てきた方でした
ね」

グレイグ「お城に来ていたのか。マヤが城にいる事をよく知ってい
たな。マヤが話したのか？」

マヤ「うん。かなり驚かれたけどまあ仕方ないよね」

カミュ「変なやつには見えなかったな。しっかりしてそうだったぜ」

マルティナ「あら、そんな分析なんてしてたのね。やっぱり気になるのかしら？」

カミュ「別にそういうわけじゃねえよ」

デルカダール王「マヤはそのグリーという人が気になっておるのか？」

マヤ「え！私が!? うーん……。よくわかんないや。でも、悪くなさそうとは思うな」

マルティナ「最初はそんなものよ。私も初めはラースに対してそんなものだったわ」

ラース「え、その程度だったのかよ」

マルティナ「本当に最初の頃よ。プチャラオ村での頃の時くらいね」

ラーズ「その頃か。それなら俺もまあ確かにそうだな」

ルナ「それってお母さん達の出会いの事？」

マルティナ「ええ、そうよ」

マルス「僕達知らないよ。聞きたい！」

ラーズ「まあそれは今度な」

マヤ「でも、そこから発展していったんだよね。じゃあ私もいつかそうなるのかな？」

デルカダール王「まあ、それはマヤがゆつくりと判断するといい。なにも焦る事などないのだからな」

グレイグ「ああ、王の言う通りだぞ、マヤ。まだ若いんだ。ゆつくりで大丈夫だ」

マヤ「うん」

ブレイブ「人間の恋というやつですね。なんだか難しいんですね」

ラース「ブレイブ達にはかなり難しいだろうな。まあ、人間はこんなもんだって思っていてくれ」

その夜、カミュとマヤの部屋

カミュ「なあ、マヤ」

マヤ「ん？何？兄貴。あ、明日のクレイモランでの仕事の事はわかってるよ」

カミュ「あ、ああ。それはそうなんだが本当に働くのか？」

マヤ「え？う、うん。駄目だったの？」

カミュ「いや、反対とかじゃなくてだな。グリーつてやつが気になるんだろ？何か変な事されるんじゃないかと思ってるな」

マヤ「ええ!?!兄貴何の心配してるの!?!しかも、グリーさんと話したんでしょ？そんな事してくる人じゃないって!」

カミュ「いや、もしかしたら本性を隠してるかもしれないねえだろ？」

マヤ「まさかー！あんなに優しそうな人がそんなわけないよ！兄貴の考えすぎだよ」

カミュ「まあそれならいいんだが、何かあったら俺じゃなくてもラースでもマルティナにでも相談するんだぞ」

マヤ「いしし、兄貴ったらなに不安になってんの。当たり前でしょ」

カミュ「それならよかった。おやすみ、マヤ」

マヤ「おやすみ、兄貴」

初めての仕事

次の日、朝食時

カミュ「皆、言うの遅くなつたが俺、今日もクレイモランで仕事があるんだ。そこまで遅くはならないと思うけどな」

マルティナ「あら、そうだったの。わかったわ」

グレイグ「また魔物調査か？」

カミュ「いや、今日は交易船の荷物や経路の確認、それと城に運ばれる食料を調達する船の護衛だな」

ラース「ほう、そんな事もやってたのか。大変そうなんだな」

カミュ「リーズレットにいいように使われてるだけだぜ。まあ、金は中々いいからな」

デルカダール王「カミュなら心配いらんと思うが気をつけるのだぞ」

その後、大広間

グリー「あ！マヤさんのお兄さん、丁度よかったです」

カミュが大広間に来ると、グリーンがいた

カミュ「ん？グリーンじゃないか。どうしたんだ？」

グリーン「さつき店長から今日から早速来ていって言われたので、マヤさんに伝えに来たんです。マヤさんと呼んでいただけませんか？」

カミュ「おお、早速だな。わかった、今呼んでくるぜ」

数分後

マヤ「そんな突然で大丈夫かな？私、何もわかんないよ？」

グリーン「大丈夫だよ。慣れるのも大切だからね。僕も最初何もわからなかったしさ」

ラース「初めての仕事だな。頑張れよ、マヤ」

マヤ「う、うん。よし、頑張ろう！」

グリーン「それじゃあ突然すみませんでした」

ラース「あ、少し待ってくれ。仕事はいつ頃終わる予定なんだ？」

グリー「そうでしたね。マヤさんは昼過ぎまでなので、夜になるまでには帰れますよ」

ラース「わかった。それじゃあよろしく頼んだぞ」

マヤ「行ってきまーす」

酒場

カラン

グリー「ビルさん、マヤさんを連れてきました」

ビル「おお、いらっしやい。初めましてだな。俺はこの酒場の店長のビルって言うんだ。よろしくな、マヤ」

マヤ「はい！私、マヤといいます。もうご存知だと思っんですけど、働く事は初めてなので、色々教えていただきたいと思っています。よろしくお願いします！」

ビル「ああ。まあ、最初は覚える事が仕事だからな。まずはそこから頼んだぞ」

マドリー「あら！あなたがマヤちゃんよね！昨日は来てくれてありがとう。私はマドリーって言うの。よろしく」

マヤ「あ、昨日の店員さん。マヤといいます。よろしくお願いします」

グリー「午前の仕事はこの四人だよ。まず、ここの掃除からだね。座席とカウンター席の床をモップで洗う所から始めるよ」

マヤ「はい！」

マドリー「私も手伝った方がいいかしら？」

グリー「いえ、大丈夫ですよ、マドリーさん。僕が教えるんで、マドリーさんは料理の方手伝ってもらえるとありがたいです」

マドリー「そう、わかったわ。でも、グリー君も大変だったら声かけてね。すぐに向かうわ。マヤちゃんもわからなかったら私にもビルさんにも聞いて大丈夫だからね」

二人「はい！」

ビル「よし、今日も頑張るぞ」

その後

マヤ「なるほど。しっかり机の上や下やソファーまで拭くんだね」

グリーン「うん。綺麗にしておかないとだからね。こんな感じで他の机や椅子もやってみてもらえるかな?」

マヤ「任せて!これくらいならいつもやってたから」

グリーン「終わったら声かけてね」

マヤ「(どんな事するのか気になってたけど、まさか掃除をするなんて。まあ、この後が本番だもんね。しっかりやらないと)」

数分後

マヤ「グリーンさん、終わったよ」

グリーン「あ、ありがとう。それじゃあ後は僕が床を掃除するだけだから、マドリーさん達の所に行ってきてもらえる?」

マヤ「わかった」

厨房

マヤ「すみませーん」

マドリー「あら、マヤちゃん。丁度よかったわ。これからマヤちゃんに、お客様への挨拶やメニューの取り方を教えようと思ってたの。私と一緒に練習しましょう」

マヤ「わかりました」

マドリー「まず、わかると思うけどお客様が入ってきた時はいらっしやいませって言うの。その反対で出て行った時はありがとうございましてって言うてね」

マヤ「それは確かに他の店も全部そうですよね」

マドリー「ここは大丈夫よね。それで、その時に確認する事があってお客様の人数を聞いてほしいの。その人数によって席が変わるわ。一人ならカウンター席、二人以上ならテーブル席ね。」

案内するのは空いてる席ならどこでもいいんだけど、そこをしっかりと確認する事を忘れないでね」

マヤ「なるほど。わかりました！」

しばらくして

マドリー「どう？メニューの聞き方、簡単に説明したけどわかったかしら？」

マヤ「少しはわかったんですけど、言えるかはわかりません」

マドリー「そうよね。それじゃあ、私がお客様のつもりで少し練習してみましょう。入る所からやってみるわね」

マヤ「お願いします！」

マドリー「ガラガラ」

マヤ「いらっしやいませ！お客様は一名様ですか？」

マドリー「はい」

マヤ「わかりました。カウンター席にご案内します。こちらでよろしいですか？」

マドリー「ありがとうございます。いいじゃない。ここまでにはバツチリよ。それじゃあ、メニューが決まったって事にするわね。すみま

せーん」

マヤ「ご注文をお伺いします」

マドリー「アップルパイとショートケーキ、それにアイスコーヒーを一つお願いします」

マヤ「はい……………ご注文の方繰り返し返します。アップルパイが一つ、ショートケーキが一つ、アイスコーヒーが一つでよろしかったでしょうか？」

マドリー「大丈夫です」

マヤ「ありがとうございます。少々お待ちください」

マドリー「完璧じゃない！凄いわ、マヤちゃん！グリーン君なんてたどたどしてたのに」

マヤ「ありがとうございます。思ってるよりもできたみたいでよかったです」

グリーン「うう……………マヤさん、凄い」

ビル「ハハハ！追い抜かれちゃうかもしれないねえぞ、グリーン」

マドリー「まあメニューはたくさんあるけど、まずは言われた物をしっかり書いて、私達に伝えてくれればこっちで何とかするわ」

ビル「注文は必ず俺達に伝えにきてくれ。そうじゃないとわからないくなるからな」

マヤ「はい！わかりました」

グリーン「もし質問とかされたら、マドリーさん達に聞いてくれれば大丈夫だから」

マドリー「そろそろ開店準備ね。最初は私もホールにいるけど、途中でこっちに来ちゃうからそこからはグリーン君と一緒に頑張ってる」

マヤ「はい！ついに開店しちゃう。ドキドキしてきた」

ビル「ハハハ！あまり緊張しすぎるなよ？まあ、グリーンみたいに真っ青になるよりはいいけどな」

グリーン「ちよつ、ちよつとビルさん！やめてくださいよー！」

マヤ「いしし、グリーンさんも最初は緊張してたんだね」

グリーン「そ、そりやあね。まあ、ビルさんも言ってたみたいだに僕に
比べればマヤさんはまだ大丈夫そうだよ。頑張ろうね」

初めての仕事2

開店後

グリーン「まあ開店して最初の方はお客さんも多くないから、僕やマドリーさんがやってみるのを見てそれで確認してみるといいと思うよ」

マヤ「わかった!」

マドリー「少し時間があつて特に何もする事無かったら、邪魔にならない程度でお喋りしてて大丈夫よ」

マヤ「はい!」

カラン

三人「いらっしやいませ!」

グリーンがお客達の前に出た

グリーン「何名様でしょうか?」

男性「二人なんですけど」

グリーン「二名様ですね。テーブル席の方へご案内します」

男性「はい」

マドリー「あんな感じでよろしく頼むわね。グリーン君がどんな風に
してるか見てて学んでね」

マヤ「はい」

グリーン「ご注文決まりましたらまたお呼びください」

その後

酒場には数人お客が入っていた

グリーン「それじゃあ次はマヤさんがやってみようか。大丈夫だよ
ね？」

マヤ「うん。もう大丈夫だと思う。緊張も取れてきたし」

グリーン「ふふ、よかった。あ、来るみたいだよ」

カラン

マヤ「いらっしやいませ。何名様でしょうか？」

女性「えっと、四人です」

マヤ「四名様ですね。テーブル席にご案内します」

女性「ありがとうございます」

マヤ「こちらでよろしかったでしょうか？」

女性「大丈夫です」

マヤ「それでは注文が決まりましたらまたお呼びください」スタスタ

マヤはカウンターに戻っていく

グリー「成功だよ、マヤさん！やったね！」

マヤ「うん！自分でもうまくいったと思ってる。注文もこの調子でいこう」

グリーとマヤは小さくハイタッチをした

しばらくして

女性「すみませーん」

マヤ「はい。ご注文お伺いします」

女性「フオツチャ二つと卵サンドイッチ、あとカルボナーラ。飲み物がアイスコーヒー四つでお願いします」

マヤ「はい。……ご注文繰り返します。フオツチャが二つと卵サンドイッチ、カルボナーラとアイスコーヒーが四つでよろしかったですでしょうか？」

女性「大丈夫です」

マヤ「ありがとうございます。ごゆっくりどうぞ」

グリー「あ、大丈夫だった？ 厨房に行って伝えてきてね」

マヤ「うん。少し多かったけど大丈夫」

厨房

マヤ「フオツチャ二つと卵サンドイッチ、カルボナーラにアイスコーヒー四つお願いします」

ビル「おう。どうやら問題なかったようだな」

マドリー「緊張しなかった？最初にしては頼まれた数も多いじゃない」

マヤ「大丈夫でした。間違えないか不安でしたけど、確認して大丈夫と言われて安心しました」

ビル「それならよかったぜ。それじゃあ引き続き頑張ってくれよ。これから昼になるからな。客も注文も多くなる。疲れたらすぐに伝えてくれよ」

マドリー「そうね、初日だもの。無理は駄目だからね」

マヤ「はい。ありがとうございます」

その後、お昼になりお客がますます増えていった

後片付けが終わった夕方ごろ、厨房で

マヤ「すみません。二回持っていく所を間違えてしまっ

マドリー「いいのよ。全然気にしないで」

グリー「そうだよ。最終的にはしつかり届いたんだからさ」

マヤ「だって、それはグリーさんが間違ってる事を伝えてくれてお客様に謝ってくれたから」

ビル「そう落ち込むな。失敗は成功のもと。次はしつかりしようって思ってるなら次からはきつと大丈夫だ。寧ろ、失敗してくれて俺は安心したぜ。初心者なのに失敗の一つもないなんて、それはそれで少し怖いからよ」

マドリー「ビルさん、最後はあまりいい励ましになってません。マヤちゃん、それでも私達から見たらとってもいい働きだったわよ」

グリー「そうそう。案内もメニューを聞くのも間違えなかったじゃん。僕は何回も間違えてたのに」

マドリー「噛んだり違うメニューが書かれたりしてたわよね」

グリー「あ、あまり詳しく言わないでくださいよ」

マヤ「いしし。皆さんありがとうございます。これから頑張ってくださいませね」

ビル「ああ、こつちも頼りにしてるぞ。それじゃあまた明日だな。グリー、送って行ってやるんだ」

グリー「わかりました」

マヤ「え？私は大丈夫だよ。グリーさんも気にしないで」

マドリー「あら、駄目よマヤちゃん。まだ少し明るいと言っててももうすぐで夜だわ。そんな時間に女の子一人は危険よ。グリー君を頼っちゃいなさい」

グリー「そうだよ、マヤさん」

マヤ「そう？じゃあそうしてもらうね。ありがとう、グリーさん」

その後、帰り道

グリー「よかったね、マヤさん。大成功じゃん」

マヤ「グリーさんのフォローがあつたからだよ。それにしても、失敗したって思うと焦っちゃうね」

グリー「そうそう。僕も何度ドキドキしたかわかんないよ」

マヤ「明日も同じ時間で大丈夫かな？」

グリー「うん。また僕が迎えに行くよ」

マヤ「ええ!? 申し訳ないよ。私一人でもいけるよ」

グリー「大丈夫、大丈夫。僕がそうしたいだけだから」

マヤ「そうなの? いしし、ありがとね」

デルカダール城 大広間

マヤ「わざわざありがとね、グリーさん」

グリー「うん。これからよろしくね」

ルナ「あ! マヤお姉ちゃんだ! おかえり!」

マヤ「あ、ルナ! それにマーズさんも」

マーズ「マヤちゃん、おかえりだな。ん? その君は?」

グリー「あ、兵士さん。こんばんは。僕は今日からマヤさんが働く事になった店の者です」

ルナ「もしかして、グリーさんって人ですか？」

グリー「え？そ、そうだよ。どうして知ってるの？」

ルナ「だってマヤお姉ちゃんがご飯の時に前に話しモゴモゴ」

マヤはルナの口を塞いだ

マヤ「ル、ルナ！恥ずかしいから駄目！そ、それじゃあね、グリーさん！また明日！」

マーズ「わざわざ送ってくれたのか。ありがとう」

グリー「そんな。お礼言われるような事じゃないですよ。それじゃあ、僕もこれで」

夕食時

マヤは今日の事を色々話していた

マヤ「それでね、お昼になってお客さんがたくさん来たんだけど、そ

の時にできたメニューを運ぶ先を間違えてたんだよ」

グレイグ「ほう。それは少しまずいのではないか？」

マヤ「そうなんだよ。グリーンさんも注文とってたし、マドリーさん達も忙しそうでその人達に違うって言われるまで気づかなかったんだよ。」

その時に私がかかなり焦っちゃってたんだけど、グリーンさんが気付いてくれてすぐに謝った後、正しい場所に運んでいってくれたんだ」

デルカダール王「なるほど。しかし、ミスなどして当たり前だ。始めは間違ってもしばらくすれば治るはずだ」

マヤ「ありがとう、王様」

ラース「それ以外のミスはなかったのか？」

マヤ「まあ、特に目立った事はなかった……はず」

ラース「へえ、やるじゃないか、マヤ。そんな小さなミスしかしなかったなんて」

「マルティナ「本当ね。偉いわ、マヤちゃん」

カミュ「それで？楽しかったか？マヤ」

マヤ「大変だったけど、ああいうのはやりがいがあるっていうんだよね。しっかり終わった後、達成感があつてさ。こう、できたーって感じで」

マルティナ「そうよね。それは大事な気持ちだわ。続けられそうね」

ルナ「そういえば、私さつきグリーンさんに会ったんだよ」

マルス「本当!?!いいなー、どんな人だった？かつこよかった？」

ルナ「優しそうな赤い髪の人だった。マヤお姉ちゃんと色が反対で綺麗だった」

グレイグ「優しそう、か。羨ましいセリフだ」

ラース「グレイグや俺には初対面じゃ絶対に言われない言葉だな」

ルナ「あ！ねえマヤお姉ちゃん、何でさつき私の口塞いじやったの？」

カミュ「塞いだ？なにしてんだよ、マヤ」

マヤ「だって！グリーンさんの前で、私がグリーンさんの話を前にしたって言おうとするから恥ずかしいって思ってたさ。ごめんね、ルナ」

デルカダール王「ハツハツハ！なるほど。確かに本人に聞かれるのは少しばかり恥ずかしいかもしれんな」

ルナ「よくわかんないけど、いいよー」

ラース「明日からずっと働くのか？」

マヤ「うん。どんどん慣れていかないとね」

グレイグ「カミュはどうするのだ？城にずっといても構わないが」

カミュ「いや、仕事が続いてる時もあるからな。流石に俺はクレイモランに戻るさ。だが、様子を見に頻繁に帰ってはくるけどな」

リース「わかった。マヤ、がんばれよな」

マヤ「うん！これからお金を稼いでそのお金で誰かを救ってみせるよ」

動き出す影

それから一ヶ月後、とある場所

??? 「おい、ここ最近お前達の所から養分が来てないぞ。一体どうなっている」

??? 「すみません。少してこずってまして」

??? 「なにをてこずっている。装置に養分が溜まっているのはわかっているんだぞ。あとはここへ送るだけだろう」

??? 「……………」

??? 「ふん、口数の少ないやつだ。わざわざデルカダールに潜入できただんぞ。そこからしっかりと集めれば私の力が集まるのも早くなる。人間を早く集めるのだ」

??? 「……………は！」

デルカダール城

朝食時

マヤ「まずい、まずい！少し寝過ぎちゃった！朝ごはん少しだけになっちゃう！ごめんね！」

マヤが焦りながら入ってきた

グレイグ「それなら少しでも持つようにパンやお肉を食べていくんだ。お腹に残りやすいからお昼まで持つはずだ」

マヤ「うん！ありがとうございます！」

マルティナ「忘れ物しないでね。お弁当もあるから」

マヤ「それは持ったよ。流石に忘れられないからね」

デルカダール王「気持ちはわかるがそう焦らなくてもいい。食べる時はもつと落ち着いて食べた方がよいぞ」

マヤ「あ……そうだったね。ごめん、忘れてた。うん。少し落ち着こう」

その後、大広間

グリー「マヤさん、ラーズさん、おはようございます」

マヤ「グリーさん、おはよう。いつもありがとうございます。じゃあ行こうか」

ライス「おはよう。なあ、グリー」

グリー「ん？僕に何か用事ですか？ライスさん」

ライス「…………… いや、なんでもない。今日もマヤをよろしく頼んだぞ」

ライスは少し固まった後、何事も無かったように送り出した

グリー「??はい、任せてください」

ライス「……………」

数日前

バン「あの、師匠。少し気になった事がありました」

ライス「ん？俺に相談なんて珍しいな。どうした？」

バン「最近、街の人達が噂してるんですけど神隠しって知ってますか？」

ライス「神隠し？確か、突然人がいなくなるってやつだったか？だ

が、あれは迷信だろ。それがどうした?」

バン「実はここ最近、街の人達が突然消えていつてるらしいんです。時間帯は夕方と夜中の二つ。メグの所によく来ていた常連さんもいなくなつたみたいなんです」

ラーズ「そんな事が……。だが、どうして俺に相談しているんだ?」

バン「言いづらいんですけど、俺達で少し調べた結果、いなくなつた人の大半がマヤちゃんが働いているあの酒場に行った後、姿を見なくなつてるみたいなんです」

ラーズ「何だつて!!?」

バン「それで、これ以上被害が出るのも困るので調査が必要かと思ひまして」

ラーズ「そうか……」

ラーズ「(グリー、お前この事を知っているのか?)」

ラーズはグリーの背中を疑うように見ていた

その後、玉座の間

マルティナ「ええ!?それ本当なの、ラース？」

ラース「ああ、バンが言っていたんだ。こんな嘘、あいつがつけるわけない」

グレイグ「だとしたらマヤが危ない。なぜ仕事に行かせたのだ」

ラース「…………… マヤはまだ何も知らなくていい。俺は、もしかしたらグリーが怪しいのではと考えている」

マルティナ「グリーが?あんな優しそうな人がそんな事できるかしら?」

グレイグ「それにはつきりいつて強そうには見えない普通の一般人だ。そんな何人もどうやって姿を消させているというのだ」

ラース「それはわからない。だが、少なくとも調査は必要だと判断した。マルティナ、夜俺に時間をくれ。今夜、あの酒場に行つて調べてくる」

マルティナ「わかったわ。ただ、調べるだけよ。あまり不審がられ

ない程度でお願いね」

ラーズ「ああ、わかった」

グレイグ「カミュにも連絡を入れたほうがいいと思うぞ。マヤが危ないのでな」

ラーズ「そうだな」

しばらくして

カミュ「マジか!?それ本当なのかよ、兄貴!」

ラーズ「ああ。だから俺とバンが夜、あの酒場に調査に行つて調べてくる」

カミュ「なら、俺も行くぜ。数人で騒いでいるフリをしよう」

ラーズ「そうだな。カミュがいてくれると助かる」

カミュ「神隠しだかなんだか知らねえが、人の妹を狙うようなやつは許さねえぞ」

夕方過ぎ、玉座の間

グリーンとマヤが帰ってきた

グリーン「すみませーん」

マヤ「ただいまー！」

バン「あ、マヤちゃん、グリーンさん。お疲れ様。今日はどうだった？」

バンはわかっていたように話しかけた

マヤ「え？バンさんどうしたの？急に。特に何もなかったかな。いつも通りだったよ」

グリーン「そうだね。あ、マヤさんが今日料理が少しできるようになった事くらいですかね」

マヤ「あれは本当少しじゃん。そんな報告するような事じゃないよ」

バン「そっか。よかったじゃん、マヤちゃん。俺、料理なんてからっきしだからな」

グリーン「ああ、そういえば」

バン「ん？」

グリーン「こんな事言うのも変なんですけど、最近店長とマドリーさん……あ、もう一人の店員さんの様子がおかしいような気がするんですよね。何かそわそわしてるような」

マヤ「え？ そうなの？ 私にはいつも通りに見えたよ？」

グリーン「あれ？ そう？ じゃあ気のせいかな？ すみません、バンさん」

バン「……いや、大丈夫だ。教えてくれてありがとな」

グリーン「いえいえ、それでは。マヤさん、また明日」

マヤ「うん。じゃあね！」

その夜、酒場前

ラース「店長と女の店員がおかしい……ねえ」

カミュ「何かヒントになりそうだな」

バン「お二人はマヤちゃんになんて言ってきたんですか？」

二人「酒飲みに行く」

バン「あ、凄く簡単だし疑いもないやつですね」

カミュ「間違っていないしな。向かう場所は酒場なんだからよ」

ラース「夜はグリーンとマヤの分が違う人なんだったな。となると、グリーンは怪しくはないかもな」

バン「まあ、まず入ってみましょうか」

カラン

女性「いらっしやいませ、三名様ですね。テーブル席へどうぞー」

ラース「テーブルなら自由か。なら、あそこにしよう」

ラース達は隅にあるテーブル席に座った

バン「先輩！今日は騒ぎますよー！」

ラース「おー！」

カミュ「お、おー（こいつら、隠すために呼び方とかを多少変えたとはいえ普段とそう変わらねえじゃねえか）」

二時間後

カミュ「悪いな、少しトイレだ」

ラース「おう」

カミュ「（きて、調べますか）おっと、酔いすぎたか。少しフラフラする。トイレはここか？」コンコン

マドリー「すみません、お客様。そちらは従業員の着替え部屋となっております。お手洗いはあちらの方になります」

カミュ「おう、そうだったか。すまねえな（着替え部屋？その割には中に広い空間を感じたがな）」

ラース「カミュは流石だよな。酔ったフリなんて俺できねえぞ」

バン「ですよね。顔も少し赤くするなんてそんな器用な事できませんよ」

ラーズ「なあ、バン。気づいたか？厨房の方にいるのが店長なんだろうが、そいつから少しだけ怪しい魔力を感じるぞ」

バン「うう、俺、魔法使えないからよくわからないです。ただ、ここより下の方に人の気配を感じます」

ラーズ「そうだな。この店、最初は全く警戒してなかったが、少しどころかかなり怪しいぞ」

その後、デルカダール城 大広間

マルティナ「そう。怪しい部屋に店長や店員の異変。それなら兵士達を少し出してみましようか」

グレイグ「しかし、マヤに害はあったのだろうか？一月ほどそこにいただろうか？」

カミュ「そこはわからねえ。俺達としてはない事を願うばかりだな」

バン「兵士達を出すのはいつにしますか？」

ラーズ「マヤには知られたくない。あの店や店員達を気に入ってる

からな。だから、マヤが今度休みとなる来週にしよう。その休みの日にバン達がいつてあの部屋を見てきてくれ」

バン「わかりました」

マルティナ「少し間隔が開くわね。その間、何も無いといいのだけど」

バン「俺達の間で警戒させておくように言っておきます。何かあればすぐに動けるようにしておきますね」

グレイグ「それがいいだろう。あとは、なるべくマヤに悟られないようにしなければな」

酒場の真実

数日後、夕方頃の酒場内 厨房

ビル「マヤ、よく頑張ったな。ほら、初めての給料だ」

マドリー「マヤちゃん覚えるの早いし、いつも頑張ってたから少しだけ褒美に増やしたわよ」

ビルはマヤにお金が入った封筒を渡した

マヤ「ええ!?!ありがとうございます!やった!凄く嬉しい!」

グリー「よかったね、マヤさん!初めての給料って嬉しくなるよね」

マヤ「うん。いしし、こんなに嬉しいのは中々ないよ」

ビル「これからも頑張ってほしいからな。これからはキッチンとかの」

ブウン!

デルカダール王国に魔物の気配が現れた

ビル「な!?!こゝこの気配は!?!」

マドリー「やだ!!嘘でしょ!？」

二人は突然何かを感じて焦り始めた

マヤ「え?え?何?どうしたんですか?」

グリー「そんな慌ててなにかありましたか?」

ビル「話は後だ!急いで逃げるぞ!」

マドリー「お願い!私達についてきて!」

二人「は、はい!」

その頃、デルカダール城 玉座の間

ブウン!

三人「!？」

三人は魔物の気配が現れた事に気付いた

ブレイブ「グルルルル…」

ブレイブは外に向かって威嚇している

グレイグ「なんだ!?!魔物の気配!？」

マルティナ「街の方よ！しかもかなり強い気配だわ!!」

ラース「こないきなり現れるなんて一体どうなってんだ!？」

バタン！

ギバ「失礼します！マルティナ様、広場周辺に突如魔物が現れました！今、兵士達に市民の避難をさせるように指示を出しました！」

マルティナ「わかったわ！ラース、グレイグ、あなた達も向かって！被害者を絶対に出させないで！」

二人「は！」

ラース「ブレイブ、ここを守っている！ギバ、行くぞ！」

ブレイブ「ガウ！」

ギバ「はい！失礼しました！」

グレイグ「魔物は何体いるのだ」

ギバ「確認できたのは一体のみです！しかし、かなりの強敵と予想されます！」

ラース「(悪い予想なんてするもんじゃねえな。一体どうなってるだ)」

その頃、酒場内では

ビル「なぜ、あなたがここへ！ドルグ様！」

マドリー「まだドルグ様にそこまでの力はなかったはずです。一体どうやって」

酒場の入り口前には巨大な斧を構えた魔物が立ち塞がっていた

ドルグ「よお、てめえらがあまりにも遅いからこつちから出向いてやったんだ。しかし、なんだ？この店はよお。俺が指示した店とはだいぶ違うようだな」

グリー「嘘……魔物……。なんでこんな街中に」

マヤ「ど、どうしよう。入り口が塞がれて出られなくなっちゃった」

ビル「喋るな、二人とも！」

ドルグ「ん？てめえらは知らねえ顔だな。まさか、人間か？ハッ
ハッハ！おいおい、こんな近くに人間を連れてなにしてたんだ？俺の
指示は人間を拐い、その生気を吸い取ってよこせだよな？まさか裏
切ったのか？なあ、ビル？マドリー？」

ドルグはビルとマドリーの背中にいるマヤとグリーンに気付いて、疑
いの目をビル達に向けている

マヤ「え？……」

グリーン「ビルさんとマドリーさんが、こいつの仲間？」

二人「……」

ビルとマドリーは下を向いている

ドルグ「ご名答だぜ、人間。こいつらは俺の仲間。人間に姿を変え
られるからうまく使ってやってたのによう」

マヤ「嘘……」

グリーン「そ、そんなわけじゃないですか！だって、お二人はずつ
と」

ビル「すまねえ、マヤ、グリーン」

グリー「え？」

マドリー「ずっと騙してたの。私達の本当の姿を見せてあげる」

シユン！

二人の姿は変わり、人間とはかけ離れた肌の色、長い爪、二本の角に牙。その姿はまさに魔物だった

ビル「これが俺達の本当の姿だ。こんな事になるとは思っていなかったんだ」

二人「……………」

二人は固まっている

ドルグ「何を謝ってんだ？俺は早く養分の生気がほしくて仕方ねえんだよ。まずはその二人から取り込ませてもらうぜ！」

ガン！

突然ドルグの後ろのドアが切り開かれた

ドルグ「ぐうっ！誰だ！」

ラーズ「ここにいたか！」

グレイグ「貴様、いきなり現れるとは何者だ！」

バン「魔物が増えてる!? 一体なはずが三体に！」

ギバ「マヤちゃん、グリー！そこは危ない!! 早く逃げるんだ！」

グリー「は、はい！行こう、マヤさん！」

グリーはマヤの手を握る

マヤ「でも、ビルさんとマドリーさんが！」

マヤは残ろうとしている

グリー「後で必ず説明しよう！そうすればきつとわかってもらえる。まずは自分達が助からなきゃ！」

グリーはマヤに強く言いかけた

マヤ「わ、わかった！」

マヤもグリーの気迫に押されて走り出した

グレイグ「そのまま避難していてくれ！さあ、来い！成敗してくれ
る！」

ドルグ「面倒なやつらだ！いくぞ、お前ら！」

ドルグとビルとマドリーがあらわれた

ラース「バン、バイキルト！」

バンの攻撃力が二段階上がった

バン「ばくれつきやく！」

ドルグは持っていた斧で大地を揺らした

ギバ「うおっ！」

ギバは転んでしまった

ドルグのしゃくねつの炎

グレイグ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

ギバは転んで動けない

ビルは動かない

マドリーは動かない

ラース「フォースブレイク！」

ドルグの全属性耐性を下げた

バン「雷光一閃突き！」

ドルグ「ハア！」通常攻撃

ドルグ「うおおお！」さみだれ攻撃

グレイグ「スクルト！」

全員の守備力が更に一段階上がった

ギバ「さみだれ突き！」

ビルは動かない

マドリーは動かない

ラース「メラガイアー！」

バン「雷光一閃突き！」

ドルグ「貴様らー!!なぜ動かねえ!俺の仲間だろうが!俺を守りやがれ！」

ビル「嫌です！」

マドリー「すみません、ドルグ様。私達はもうあなたの命令に従い

たくありません」

ドルグ「な!?何言ってやがる!誰がてめえらみてえな雑魚の魔物を助けたと思っやがる!その恩を忘れたってのか!!」

ビル「もうやめましょう、ドルグ様。こんな事しても何もなりません」

マドリー「私達はもう魔物としてではなく、人間になって過ごしたいのです」

ドルグ「ハア!?人間になるだど!?ふざけた事抜かしたんじゃねえぞ!てめえらはどう足掻いたって魔物なんだよ!わかつたらさっさとこいつらを殺せ!」

ラース「なんだ?どうなっているんだ?」

バン「仲間割れ?ですかね」

グレイグ「なら、あの大きいドルグとやらを優先して倒すべきか」

ギバ「それがいいかもしれませんね」

ドルグ「使えねえやつらが！まとめて死にやがれ！！」

ドルグは斧を二人目掛けて振りかぶった

二人「!？」

ビル「グアアア！」ドサ

マドリー「キヤアア！」ドサ

バン「な!?!あいつ、自分の仲間を！」

ドルグ「ここに来るまでに少しばかり人間から生気を貰ってるんだ。おかげで短距離ならワープも出来る。てめえらが知ってるよりもずっと俺は強いぞ。さあ、次はてめえらの番だ！」

ラース「ばくれつきやく！」

バン「俺もいきます！ばくれつきやく！」

ドルグ「うおおお！」さみだれ攻撃

ドルグのしゃくねつの炎

グレイグ「蒼天魔斬！」

ギバ「雷光一閃突き！」

ドルグ「ぐそっ！てめえら、許さねえ!!」

ドルグは斧を思いっきり振りかぶった

ラーズ「させない！」

グレイグ「俺もいくぞ、ラーズ！ハア！」

ラーズとグレイグの剣がドルグの腕を切り裂いた

ドルグ「グアアアア!!」

バン「ギバ、一気に畳み掛けるぞ！」

ギバ「任せろよ！」

二人「雷光一閃突き！」

二人の雷を帯びて狙いすました一突きがドルグの体を貫いた

ドルグ「ガハ……こんな……馬鹿……な」ジュワー

ラーズ「ナイスだ、バン、ギバ」

グレイグ「いいコンビネーションだったぞ」

バン 「ありがとうございます！」

ギバ 「やっぱこれが決まると気持ちいいな！」

幻の店

バン「お、おい。大丈夫か？生きてるか？」

ビル「ぐっ……」

マドリー「ううっ……」

ラーズ「なんとか息はあるか。グレイグ、回復できるか？」

グレイグ「構わないがいいのか？こいつらはさっきの仲間なのぞ」

ラーズ「仲間割れしてたんだ。おそらく敵ではないと信じている。まあ、敵なら斬るまでだ」

グレイグ「わかった。ベホイム」

ビル「傷が……ありがとうございます」

マドリー「ありがとうございます」

バン「さつきはなんで仲間割れしてたんだ？よかつたらわけを聞かせ」

バタン！

扉が開かれて誰かが入ってきた

マヤ「ビルさん！マドリーさん！大丈夫!？」

グリーン「さつきのやつがいなくなったみたいなので助けにきました！」

マヤとグリーンが戻ってきた

ギバ「え!?!マヤちゃん、グリーン！避難していろって言っただろ！」

マヤ「だって、仕方なくって近くで待ってて」

ラーズ「マヤ!!危ない事はするなど言っているだろう!!あんな緊急事態に何を考えているんだ!!」

マヤ「!!ご、ごめんなさい、兄ちゃん」

グリーン「皆さん、信じられないと思うんですけど、このお二人はこの店の店長さんと店員のマドリーさんなんです」

バン「ええ!!？」

ギバ「どう見たって魔物だぞ！」

グレイグ「それは本当か？」

マヤ「うん。だからこの二人は悪い魔物なんかじゃないの！お願い、信じて！」

ラーズ「……………なぜ魔物がここで店を開いていた。何が目的だ？しかも、あんな悪いやつがいいなりになっていたようだが」

ビルとマドリーは少しずつ話を始めた

ビル「昔から俺達は人間に憧れてたんです。魔物の世界ではうまくやっついていけず、いつも死にかけながら生きていたんです」

マドリー「百年ほど前に偶然ドルグ様にそこを助けられ、私達に力を与えてくださいました。その力は変身能力。私達にとってとてもありがたく、ずっとついていこうと思っていたんです」

ビル「ですがドルグ様はどんどん凶暴になり、邪神様が復活してからなおのこと手がつけられなくなり、人間を襲うようになりました。それを私達も仕方なくやっていたのです」

マドリー「邪神様が倒された後は少し落ち着きを取り戻してくださいましたが、それでも襲う事はやめませんでした。しかし、ある日突然力を蓄えると言い始め、人間の生気を食べるようになりました。それを食べ、ドルグ様はどんどんパワーアップしていったのです」

ビル「それから人間から生気を求めるために、人間から生気を吸い取る機械も作りました。その機械を使い、俺達に生気をより多く集めるためにデルカダールに幻の店を構え、人間を襲えと指示が出されました」

マヤ「え？幻？」

マドリー「最初こそ渋々やっていたのですが、やはりこんな事は間違っていると日頃から思っており、何度もドルグ様に人間と魔物の共存を願ったのですが相手にされず。なら、私達も既に力がある。もうドルグ様についていくのはやめようと思っただけです」

ビル「俺達は昔から思っていた人間への憧れから、この店で本物の商売をしたかったんです。魔物という事を忘れて、人間のように。明るく、優しく、楽しく。ここにいる間だけはドルグ様の事や嫌な事も忘れていたんです」

マドリー「そんな時にね。グリーン君がやってきて、ここで働きたいって言い出してくれたの。私達は人間の仲間ができて嬉しくて。

本当に私達は人間なんじゃないかって錯覚するほどに」

グリー「マドリーさん……」

ビル「しかし、生気が送られない事を疑問に思ったドルグ様から何度も通信が来ました。装置に生気が溜まっているかどうかも判断できたので、とても怒られました。しまいには、私達の任務を取り消しにしようとしています。」

それだけは絶対にやめてほしかったので仕方なく、店に来た人々を騙して、少しだけ生気を吸い取るために地下へ連れていったのです」

マヤ「え？そ、そんな事してたの!？」

ラース「その街の人達はどこだ？無事なのか？」

マドリー「もちろんです。体力こそ少なくなってますが、命までは取っていません。あの扉が地下への入り口になります」

グリー「あの……幻のって、どういう事ですか？」

ビル「すまなかった、グリー、マヤ。この店は俺達の手で作り上げた偽物。全て偽物なんだ。看板もメニューも厨房もホールも」

そう言うと、周りにあったテーブルやカウンターなどがどんどん消えていった

ギバ「ええ!?お、おいおい、嘘だろー!どんどん無くなっていくぞー!」

マドリー「これが真実なの。私達は純粋なあなた達を……騙していたんです」

マヤ「もしかして……」ゴソゴソ

マヤのポケットにあった先程の給料は残っていた

マヤ「あ、これは残ってた……」

グリー「そ、それじゃあ僕が今まで貰っていたお金も……」

ビル「グリー、本当にすまなかった。お前の給料の少しは魔物のお金だ。魔物の世界には人間のお金はないんだ。だから、少し消えちまってる」

店は全て消え、周りには何も無く、地下への階段だけが残っていた
グレイグ「話はわかった。お前達が悪い魔物ではない事もな」

ラース「だが、街の人々を危険に晒した事は罪だ。いくら生きているといってもそれは変わらない」

ビル「はい。わかっています」

マドリー「私達は間違いを犯しました。どうか斬り伏せるなりなんでもどうぞ。覚悟はできています」

バン「ちよつ、ちよつと師匠！まさか本当に殺してしまうつもりですか!？」

ラース「……………」

ラースは黙って二人を見ている

マヤ「兄ちゃん、殺さないで。この二人は悪くないじゃん。さっきのやつが全部悪いんでしょ？なら、あいつは倒したしもう大丈夫だよ」

マヤはラースの腕を掴んでいる

グリー「…………… ビルさんとマドリーさんには、仕事の楽しさや経験を貰いました。お店も道具も全て無くなってしまいましたけど、あの時の思い出は消えていません。ラースさん、どうか助けてあげてください」

グリーもマヤに続いてラースを止める

ビル「グリー…………… マヤ……………」

マドリー「許してくれるの？だって、ずっとずっと騙してたのに」

マヤ「確かに騙されちゃったけどさ、私はこの一ヶ月とっても楽しかった。これからもずっと続くといいなって思ってたんだ。

お店は無くなっちゃったけど、ビルさんとマドリーさんがいればまだどこかで一緒に働きたい。楽しいって思いをずっと続けていきたい。だからお願い、兄ちゃん！反省してるんだし、許してあげて」

ラース「わかった。この二人の事は許そう」

グレイグ「それがいいだろう。まあ、城には連れて行くぞ」

バン「よかった！師匠の事だからもしかしたら許さないんじゃないかって思ってたけど、安心しました」

ギバ「バン、俺達は先に地下の人達を助けに行くぞ」

バン「おう！」

二人は地下へ向かった

マヤ「ありがとう、兄ちゃん」

ビル「本当にありがとうございます。もうこんな事はしません」

マドリー「マヤちゃんもグリーン君も本当にありがとう」

グリーン「ビルさん、マドリーさん。どうして、僕を雇ってくれたんですか？偽物なのに、どうしてそこまでやってたんですか？」

ビル「最初は断ろうと思ってたさ。だがよ、初めて来たお前が言った言葉が響いてよ」

マドリー「覚えてるかしら？グリーン君、真剣な目で僕はどうしても自分の家族を助けてあげたいんです。そのためならなんでもします。って言ったのよ。しかも、もう何件も失敗してたんでしょ？私達、助けたくなくなっちゃってね。でも、騙してるのは本当に申し訳なかったわ」

グリーン「……………あの時は僕も必死で。そんな事言っていましたっけ？」

ビル「そうだぞ。だから、人間らしく雇った。幸い、人間の真似事なら何度もしてたんでな。料理なんかは普通にできたんだ。その基礎だけでもグリーンに教えてとつとやめさせれば、他の所でも仕事できらるだろうって踏んでな」

マドリー「まあ、それも最初だけだったんだけどね。私達、お店が楽しくなっちゃったのよ。酒場にいろんな人が来て、美味しいって言ってくれてお金をくれる。そんな人間みたいな事が、私達でもできるって知って嬉しかったの」

マヤ「もしかしてこのお金ってその時の？」

ビル「ああ。俺達の幻の店に金なんていらねえ。だから、少しずつ貯めてそれを分けてグリーンやマヤにあげていたんだ。グリーの最初の頃はどうしようもなく魔物のお金を渡してしまったがな」

グリーン「そうだったんですね。気にかけていただきありがとうございます。あの、人間みたいになりたいならこれまでみたい人間でいいんじゃないですか？」

マドリー「そうだけど、今回の件があるから。私達はしばらく外には出ないわ。きっと怖がらせちゃうから」

ラース「いや、問題ないはずだ。今街の人達はいない。お前達が望むなら、多少の融通はきくぞ」

グレイグ「魔物の姿になり、暴れたりさえしなければ問題はない。マヤ達もお前達に感謝しているようだしな」

ビル「そんな……。いいのですか？また、人間のようになっても許していただけるのですか？」

ラーズ「憧れてたんだろ？なら、それを叶えるチャンスだな。お前達次第だはどうするんだ？」

二人「ぜひお願いします!!」

マヤ「兄ちゃん、今度は本物のお店で働かせてあげて！できないかな？」

ラーズ「それは要相談だな。まあ、バン達を手伝ってからだ」

マドリー「人間達には鎖とか何もしてないので運ぶだけです。私達も手伝いますよ。魔物の姿なら人間の姿より力もありますので」

グレイグ「それなりの人数がいるという事か。なら、手伝ってもらおうか」

グリーの変化

その後、デルカダール城

バン「それじゃあこの人達は部屋で休ませておきますね」

グレイグ「ああ、そうしてくれ。ビルとマドリーだったか。お前達は医療部屋に行くんだ。さっきのは応急処置に過ぎん。傷をしっかりと見てもらったほうがいい」

二人「ありがとうございます」

ラーズ「グリー、今日は突然色々あって大変だろ？よかったらお前も城に泊まって行って大丈夫だぞ」

グリー「え？僕までいいんですか？」

ラーズ「ああ、部屋は余ってるからな。まあ、自分の家がいいってなら止めはしないが」

グリー「いえ、そんな事ありません。では、お言葉に甘えて一日お世話になります」

マヤ「よかったね、グリーさん。あと、言い忘れてたんだけどさ。あ

の時、私がビルさん達が魔物だと知って兄ちゃん達が乗り込んできた時に私を引っ張ってくれてありがとう。

私だけだったら、あの場に残ってビルさん達とドルグを離そうとしたかもしれない。でも、きつとそれは叶わなかったし、兄ちゃん達にも迷惑になってたと思う。グリーンさんが私の手を握って正しい道を教えてくれたから、こうやって皆無事だったんだと思う。本当にありがとう」

グリーン「マヤ……さん。そんな……大袈裟だよ。僕はがむしやらになってただけで、あれが最善策とか考えてなかったんだよ。ただ、様子がおかしくなったマヤさんをどうにかしなきゃって思っただけ」

マヤ「それでも結果は大成功だよ。ありがとう！」

グリーン「……ふふ、そうだね。どういたしまして」

二人は笑顔で笑っている

その夜、大広間 二階

グリーン「……ハア」

グリーンが一人でため息をついていた

ラース「こんな所で何してんだ？グリーン」

グリー「あ、ラースさん。こんばんは」

ラース「ああ、こんばんは。何か悩みか？これからどうしようとか？」

グリー「それはまたなんとかするんですけど、実は……。いや、マヤさんのお兄さんにこんな話してもなあ」

ラース「心の声のつもりか？全部出てるぞ。俺じゃあ役不足のようだな」

グリー「ええ!?!いい、いや、そんな事ないです！実は、マヤさんの事で悩んでまして」

ラース「……マヤの事？何かあったのか？」

グリー「最近、マヤさんと話すと僕、変なんです。ドキドキするっというか、恥ずかしいような気持ちになるんです。前までそんな事なかったんですけど、どうしたんだと思いますか？」

ラース「グリー、お前……。それが何かわからないのか？」

グリー「え？ラースさんはわかるんですか？僕、困ってて。マヤさんの顔を見て話すのも少し難しくなってきましたし、これじゃあマヤさんにも失礼なんですよ。どうにかありませんか？」

ラース「……………悪いが、俺にはどうする事もできないな。それは自分がなんとかする事だからだ」

グリー「ええ!?そ、そんな……………」

ラース「まあ少しだけ言うなら、自分の心に素直になればいい。そうすればきつと治っていくぞ」

グリー「自分の心に素直に、ですか。わかりました。少し向き合ってみますね。ありがとうございます」

ラース「おう、それじゃあな」

グリーは去っていった

マルティナ「自分の心に素直に、ねえ。私の記憶では確かラースも同じ事言われてたわよね？セレン様に」

近くにはマルティナが来て話を聞いていた

ラース「いつの間に。というか聞いてたのか、マルティナ。まあ、そんな事もあったな。懐かしいぜ」

マルティナ「意外だったわ、ラースがあんな冷静にアドバイスするなんて。マヤちゃんを取られないようにしてたんじゃないの？」

ラース「お見通しか。まあ、最初はそうだったんだがな。俺はグリーなら悪くないかもしれないと思ってきていてな。カミュはどうか知らないが、俺はもう強く反対はしないさ」

マルティナ「そう。グリーはまだ恋を知らないのね。初々しくて可愛いじゃない」

ラース「鈍いだけなんじゃないか？一月一緒にいてやつとか、つて俺は思ったけどな」

マルティナ「知らないうちはそんなものよ。ここからどうなるかはグリーとマヤちゃん次第ね」

ラース「そうだな。まあ、極力出来る事はしてやろう」

来客部屋

グリー「うーん、自分の心に素直に、か……。きっと僕がどうしたいと思ってるかって事だよな。僕はどうしたいんだろう」

コンコン

マヤ「グリーンさん、いる？マヤです」

グリーン「!?マ、マヤさん!!今開けるね」

ガチャ

グリーン「どうしたの？」

マヤ「実は少しおつちや... グレイグさんに言われたんだけど、お店を開くのは少し先になるんだって。空き店舗があるんだけど、その管理とかなんか手続きがあるみたい。だから、二週間ほど間隔が開くけど大丈夫か？だってさ」

グリーン「そうなんだ。僕は特に予定もないし大丈夫かな。お金はまあ少しだけあるからそれで何とかするからね。マヤさんは？」

マヤ「私？私も特に何もないかな。また皆で仕事ができるようになるなら、二週間くらいすぐだから」

グリーン「そうだね。ビルさん達も早く元通りになってほしいね」

マヤ「グリーンさんも予定ないならさ、今度グリーンさんが育ったっていう孤児院に行ってみたいな。私、結構気になってるんだ」

グリー「孤児院に？でも子どももばつかりだし、綺麗じゃないし世話もしなきゃだからかなり大変だよ？あまりいい事ないと思うけど」

マヤ「そんなの全然大丈夫。私、いろいろな事やってみたいからさ。駄目かな？」

グリー「わかったよ。じゃあ今度一緒に行こうか」

マヤ「やった！ありがとう、グリーさん。それじゃあ、おやすみなさい」

グリー「うん。おやすみ、マヤさん（マヤさんとお出かけか。……あれ？もしかして、デートってやつじゃないか!?ど、どうしよう……）」

仲間達の休日

数日後、デルカダール城 朝食時

デルカダール王「マルティナ、今日と明日はわしがお主の代わりになろう。ゆっくりしているといい」

マルティナ「え？ど、どうされたのですか？お父様」

グレイグ「そうですぞ、王よ。いきなり何を言い出すのです」

デルカダール「実は、今日と明日は城に久しぶりにサマディー王が来てくれるそうなのじゃ。わしも久しぶりの友人と会うので年柄にもなくわくわくしているんじゃ。だから、サマディー王がいる二日間、はわしが玉座にいてもよいかの？」

マルティナ「ですが……」

ラーズ「王よ、ご自身のお部屋では……。サマディー王に失礼ですかね？」

デルカダール王「わしもそれを考えたのだ。友人だけならそれでもよいのだが、相手は一国の王でもある。それはいくらなんでも失礼であるかわしも思ってたな」

マルティナ「わかりました。お言葉に甘えさせてもらいますね。ありがとうございます、お父様」

グレイグ「姫様も久しぶりの休日になります。ラースとどこかお出かけになってもいいのでは？」

マルティナ「そうね。ラース、いいかしら？」

ラース「いいねえ、そうだなあ……」

デルカダール王「すまぬが、ラースはここに残ってくれ。サマデー王からお主とも話がしたいと言っておるんじや。王子も会いたがっておるそうじや」

ラース「え……」

マルティナ「それなら仕方ないわね。ラース、頑張つてね」

ラース「う……。マジかよ……。折角久しぶりにマルティナと軽くでもどこかに行けると思ってたのに」

デルカダール王「すまぬのう。グレイグ、お主の代わりはラースに

務めさせる。お主もマルティナ同様休んでいてくれ。お主も休日は多くないであろう?」

グレイグ「わ、私もですか? 私は休日など別に構わないのですが」

デルカダール王「なあに、遠慮するでない。お主も普段からよく働いてくれておる。たまには自分を休ませるのも大切じゃ」

グレイグ「……………ありがとうございます、王よ」

その後、マルティナとラーズの部屋

グレイグ「突然ですと何をしたらいいのかわからなくなりますな」

マルティナ「本当ね。どうしようかしら……………」

コンコン

シルビア「マルティナちゃん、いるかしら? アタシ、シルビアよ」

マルティナ「あら、シルビア。どうぞ」

ガチャ

シルビア「マルティナちゃん、お久しぶり〜。って、グレイグもいたのね。久しぶりね〜。あら? ラースちゃんはいないのかしら?」

グレイグ「ゴリアテ。実はだな」

グレイグはシルビアに事情を説明した

シルビア「へえ、王様ちゃん優しいじゃない。ラースちゃんは残念だけどね。まあ、それなら丁度よかったわ。マルティナちゃんを誘おうと思ってたの。グレイグもどうせなら一緒に行きましょう」

マルティナ「私を？どこに行くのかしら？」

シルビア「アタシ、これからユグノア城に行って久しぶりにイレブンちゃんとロウちゃんに会いに行こうとしてたのよ。でもアタシ一人だけだと寂しくて、誰か一緒に来る人探してたの。どうかしら？」

グレイグ「イレブンとロウ様にか。確かに俺も久しく会っていない。こちらに来てくれるばかりで悪いと思っていたのだ。俺もぜひ一緒に行こう」

マルティナ「私ももちろんいいわよ。それじゃあ少し待ってて。支度するわ」

シルビア「わかったわ。ありがとう」

しばらくして

グレイグ「ラーズがとても羨ましそうに見ていたな。俺も行きたいと目がはつきりと伝えていた」

シルビア「まあ、ラーズちゃんにはお土産話で我慢してもらいましょう。それじゃあ、ユグノアにしゅっぱーつ！」

マルティナ「歩いていくのかしら？時間かかりそうだけど」

シルビア「流石にそんな事しないわ。アタシの船ちゃんに乗って行きましょう。久しぶりでしょ？」

グレイグ「ゴリアテの船か。確かに久しぶりだ。最後に乗ったのはいつだろうか」

マルティナ「ふふ、本当久しぶり。楽しみだわ」

ユグノア地方

シルビア「さあ、ここからユグノアまで歩いて行きましょう」

グレイグ「ふと思ったのだが、この三人で行動するなど初めてではないか？あの旅の頃も無かったと思うが」

マルティナ「そうね。確かにその通りだわ。ふふ、まさかこんな風になるなんて思わなかったけどね」

シルビア「いいじゃない、アタシはこの三人でも楽しいと思うわ。もちろん、皆がいた方がもっともっと楽しいけどね」

マルティナ「ラーズがいつも側にいたけど、近くにいないだけで違和感が凄いわね。どうしてもラーズに話しかけそうになるわ」

グレイグ「そうですね。私も姫様の側にラーズがいないだけでかなりの違和感を覚えます。姫様とラーズがここまで離れた事も珍しいのではないですか？」

マルティナ「お仕事じゃないのにこうなるのは確かにそうかもしれないわ。まあ、ラーズは一応仕事なんだろうけど」

シルビア「ふふ、きっとイレブンちゃんやロウちゃんもラーズちゃんがいなくて知ると驚くわ」

ユグノア城 玉座の間

シルビア「イレブンちゃん、ロウちゃん、お久しぶり〜！」

マルティナ「イレブン、ロウ様、お久しぶりです」

グレイグ「イレブンもロウ様もお元気そうですね」

イレブン「シルビア、マルティナ、グレイグ！久しぶりだね」

ロウ「ふおつふおつ、突然驚いたわい。まさかお主達まで来るとはな」

シルビア「あら？他に誰がいるのかしら？」

イレブン「今ね、丁度ベロニカとセーニヤも来てるんだ。呼んでくるね」

マルティナ「ベロニカとセーニヤまで!?!本当偶然ね」

ロウ「む？ラーズはどうしたんじゃ？姿が見えんが」

グレイグ「ラーズは王から仕事を任されてしまい、ラーズだけ城に残っているんです」

ロウ「ほほ、それはかわいそうじやのう。姫に違和感があると思っただがそのせいかな」

シルビア「やっぱりロウちゃんも、ラーズちゃんが近くにいないマルティナちゃんって少し違和感よね。アタシの中では完全にセツトだもの。マルティナちゃんの近くにラーズちゃんありって感じで」

マルティナ「そ、そんなにかしら？ラーズはそんなに私にべったりじゃないんだけど」

グレイグ「同じ城で同じ部屋にいますからね。あながち間違いではないでしょう」

数分後

ベロニカ「嘘！まさかマルティナさん達まで来るなんて！」

セーニヤ「皆様、お久しぶりですわ。凄い偶然ですわね」

シルビア「ベロニカちゃん、セーニヤちゃんお久しぶり〜！」

グレイグ「ゴリアテに誘われて来てみたら、まさかベロニカ達までいるとは思わなかったぞ」

セーニヤ「あら？ラーズ様はどちらにおられるのですか？」

ベロニカ「本当ね。レースだったらマルティナさんに置いてかれてるじゃない」

マルティナ「ふふ、違うのよ。これはね」

マルティナはベロニカ達に説明した

セーニャ「まあ！レース様だけお仕事だったのですね」

ベロニカ「レースの事だから絶対羨ましがってるに決まってるわ」

イレブン「マルティナ達はどうしたの？ベロニカ達みたいに顔出しに来てくれたの？」

シルビア「ええ。アタシ達もそのつもりだったの。後はカミュちゃん揃えば文句ないんだけど」

ベロニカ「イレブン、あいつさつさと呼んできなさいよ。カミュも折角だから久しぶりに会いましょう」

イレブン「そうだね。わかった。ルーラで行ってくるね」

グレイグ「レース以外全員揃いそうですね。レースのやつ、これは相当悔しいと思いますね」

ロウ「ほほ、折角の日だったというのにのう」

しばらくして

カミュ「おお、本当に兄貴以外全員揃ってんだな」

ロウ「カミュよ、久しぶりじゃのう。変わらんようでよかったわい」

セーニヤ「お久しぶりですわ、カミュ様」

マルティナ「私達とはよく会うから久しぶりの感覚は無いわね」

イレブン「ねえねえ、こんな事ほとんど無いからさ。どうせならどこか出かけようよ」

ベロニカ「え？でも、お城はいいの？」

ロウ「イレブン、少し待ってておるんじや。わしが少し話してこよう」

イレブン「やった！ありがとう、おじいちゃん」

グレイグ「なかなか凄い話になってきたな。だが、行くならどこに行くのだ？」

シルビア「そうだわ！アタシいい事思いだしちやった！」

仲間達の休日2

カミュ「いい事って何だよ、シルビアのおっさん」

シルビア「最近聞いたんだけど、今プチャラオ村で感謝祭りってのをやってるらしいわ。それに、お祭りだからいろんな食べ物や料理も並んでるんですって。今から行ってみましょうよ」

ベロニカ「へえ、面白そうね。私は賛成だわ」

セーニヤ「私も楽しみですわ」

マルティナ「お祭り……。ふふ、久しぶりだわ。ラースが好きそうだけどとことん彼は今日運がないみたいね」

グレイグ「そうですね。ラースは今日は厄日に違いありませんな。ラースの分まで楽しんできましょう」

イレブン「皆でお祭り！いいじゃん！僕もお祭りなんて久しぶりだよ」

カミュ「このメンバーで祭りなんて中々ねえからな。俺も賛成だぜ」

シルビア「それじゃあロウちゃんが戻ってきたら早速出発しましよ
う」

数分後

ロウ「今日はお城はこれで閉める事にしたぞい。特に何も用事はな
いからの。それにしてもお祭りとはまた楽しみじゃのう」

イレブン「それじゃあルーラでプチャラオ村まで行くね。皆、搦
まってるね」

シルビア「ルーラなんて久しぶりだわ」

ベロニカ「私も最近を使う側ばかりだったからこっちは久しぶり
ね」

カミュ「旅の頃を思い出すな」

イレブン「ルーラ！」

プチャラオ村

全員「うわあ」

村はいろんなところに花が飾られており、雰囲気も変わっていた。

また、お祭りという事もあり多くの人や出店が出回っていた

グレイグ「ほう。これはまた立派なものだな」

カミュ「前来た時とは随分と雰囲気が変わったな」

女性「こんにちは。プチャラオ村へようこそ。今、感謝のお祭りをやっています、これは村に来てくれたお客様へのプレゼントなんです。よかったら、お一人様一つずつどうぞ」

ロウ「赤い花。綺麗じゃのう。しかし、どうして花をプレゼントしておるんじゃない？」

女性「こちらの花々の花言葉は感謝。相手にありがとうの気持ちを込めて贈ったのがこのお祭りの始まりなんです。今でもこの時期に、こちらのバラやガーベラの花を贈る方が村には多いんですよ。」

よかったら、旅人さん達も誰かに感謝の気持ちをお伝えしてみてくださいですか？では、楽しんできてください」

女性は去っていった

シルビア「そんな意味があったのね。とっても素敵だわ！」

ベロニカ「私の花はガーベラね。感謝……。少し恥ずかしいわね」

セーニヤ「お姉様！いつもありがとうございます！」

ペロニカ「え、私に？……ふふ、ありがとう、セーニヤ。私もセーニヤにはいつも感謝してるわ。ありがとう」

セーニヤ「ありがとうございます！お姉様！」

イレブン「二人はいつも仲よしだね」

マルティナ「花にのせて感謝を伝える。レースに渡してあげないと」

グレイグ「少々恥ずかしいですな」

カミュ「感謝ねえ……。柄じゃねえしなくてもいいか」

シルビア「駄目よ、カミュちゃん！相手に気持ちを伝えるのって凄く大事な事なのよ！ちゃんとしっかり伝えましょう」

カミュ「まあ……わかったよ」

ロウ「イレブンや、いつもユグノアのために働いてくれてありがとう。わしからの気持ちじゃ」

イレブン「おじいちゃん……。ううん、僕はそんな大した事できてないよ。おじいちゃんや皆が支えてくれたからだよ。僕こそいつも助けてくれてありがとう、おじいちゃん」

ロウ「ほほ、孫から貰った感謝の花。一生大事にせんとな」

ベロニカ「そろそろお祭りの方も見に行きましょう」

セーニヤ「あちらに限定スイーツと書かれていますわ！早速行きましょう、お姉様！」

マルティナ「それは私も気になるわね。セーニヤ、ベロニカ、一緒に行きましょう」

グレイグ「姫様、私もついていきます」

シルビア「あら、駄目よグレイグ。ここはアタシに任せて。三人ともしっかり守ってみせるから」

グレイグ「だ、だが、ゴリアテ。俺は姫様をお守りせねば」

シルビア「マルティナちゃんだって久しぶりのお休みなんですよ？
それなら、普段の事だって少しは忘れさせないと。グレイグがいたら
マルティナちゃんだって休みにくくなっちゃうわ。グレイグもお祭
り楽しんできなさいよ」

グレイグ「む、むう……………。わかった。頼んだぞ、ゴリアテ」

イレブン「カミュ、おじいちゃん、グレイグ、皆で回ろう。あつち
に的当てがあるみたいだよ。皆で勝負しよう」

カミュ「お、勝負か。なら負けられねえな」

ロウ「ボールを的に当ててるのか。これならわしでもできそうじゃ
な。わしは負けんぞ」

夕方ごろ

マルティナ「…………… あら、綺麗ね」

セーニヤ「どうかされましたか？マルティナ様」

マルティナ「ここの並んでる花達が綺麗だなと思って」

シルビア「あら、本当ね。いろんな種類があつていいじゃない」

女性「ありがとうございます。こちらはお祭りにちなんだ花を飾っているんです。他にも色々ありますので、よければご覧になって行ってください」

ベロニカ「お祭りについて事は花言葉がこれも感謝だったりするのかしら？」

女性「そうですね。また、花言葉は一つだけではないので似た意味を持つ花なども置いてあります。愛や信頼などもありますよ」

セーニャ「素敵ですわ。お父様達にお土産に買っていきましよう」

ベロニカ「いいわね。お母さん達きつと喜ぶわ」

シルビア「アタシも見ていくわ」

マルティナ「このお花はなんていう花なのかしら？」

女性「そちらはキキョウという花になります。花言葉は永遠の愛。お気に召されましたか？」

マルティナ「そうね。なんだかとても気に入ったわ。おひとつ貰ってもいいかしら？」

女性「はい、ありがとうございます。花束にする事や植木鉢に多少加える事もできますがどうなさいますか？」

マルティナ「いえ、このままで大丈夫よ」

女性「わかりました。少々お待ちください」

シルビア「あのお花ちゃん、なんだかマルティナちゃんに似てたわ。凛と咲いてる感じがね」

マルティナ「そうかしら？ふふ、ありがとう、シルビア」

数分後

女性「お待たせしました」

マルティナ「あら？この小さなお花達は？」

女性「少しサービスです。そちらはカスミソウ。花言葉は幸福や清

き心。そして、感謝。キキヨウを飾るお花になっておりますのでよかったですらご一緒にどうぞ」

マルティナ「ふふ、ありがとう。ありがたく貰うわね」

その後

イレブン「あ、シルビア達も来た」

シルビア「あら、イレブンちゃん。ここでなにしてるのかしら？」

ベロニカ「なにか看板に書いてあるわね。瓦割り大会？」

イレブン「うん。夜になってからここで瓦割り大会があるんだって。一番多く瓦を割った人が優勝で、いろんな商品が貰えるんだよ」

セーニヤ「武器など禁止で素手のみと書いてありますね。あら、商品は思っているより色々あるんですね。まあ！お姉様、スイーツの盛り合わせまでありますわ！」

ベロニカ「甘いもの好きな男も多いものね。内容は男達が喜びそうなものが多いわね。あら？ホムラのお酒ってラーズが好きなやつだったわよね？」

イレブン「うん。だからそれ狙いで僕達が出場してみようかなって。ラースのお土産になるでしょ？」

マルティナ「いいわね。それに、武器なしなら私も出たいわ」

イレブン「マルティナも出てくれるの？助かるよ。少し待ってて。受付にいるカミュ達に伝えてくるから」

しばらくして

シルビア「ロウちゃんは出るのかしら？大丈夫？」

ロウ「それがわしも出ようとしたんじやが、イレブンに止められてしまつてのう」

ベロニカ「おじいちゃんはもう歳だし仕方ないわよ。私達と一緒に応援してましよう」

セーニャ「ステージに瓦が置かれていきますわね。あれを素手で割るなんてとても痛そうです。大丈夫なんでしょうか？」

ロウ「普通にやってしまえば痛い、上手くやれば痛みはそこまでないんじや。まあ、瓦自体も脆いから力任せにやっても大丈夫じやかな」

シルビア「ラースちゃんもいればよかったのに。あの子こういう事得意よね？」

ベロニカ「そうね。ラースならかなりいい所までいけそうだったわよね」

セーニヤ「ですが、イレブン様もカミュ様もグレイグ様もマルテナ様も力はお強いです。きつと優勝してくれると思いますわ」

仲間達の休日3

しばらくして

ステージには出場者が全員集まっていた

審判「これより瓦割り大会を始めます。ルールは簡単です。目の前にある瓦を素手で叩き割り、その割れた数で競ってもらいます。数は私が数えますので終わりましたらその場で待っていてください。それでは皆様一斉にお願いします」

全員「ハア！」

パライイイン!!

審判「はい、ありがとうございます。それでは数えていきますのでしばらくお待ちください。終わり次第結果発表となります」

シルビア「見て、マルティナちゃんの瓦。全部割れてるわ」

ベロニカ「流石マルティナさんね。グレイグさんもほぼ全部割れてるわ」

ロウ「イレブンとカミュは同じくらいのようにやな。じゃが、二人も周りの人と比べれば多く割れておるのう」

セーニヤ「結果が気になりますわね。ラーズ様へのいいお土産になるといいのですが」

その後

イレブン「一位おめでとう、マルティナ。やっぱりマルティナはすごいね」

マルティナ「ふふ、ありがとう、イレブン。ラーズのお土産だけじゃなくて、皆も何か商品もらってもよかったんじゃないかしら？」

カミュ「俺は特に興味はなかったからな。まあ、一番あるならその酒だったただけだ」

ロウ「グレイグ、お主もよかったのか？景品にあったあの本はお主が気に入っていた作品だったはずじゃが」

グレイグ「それは……。いえ、今はいいです。私はまた後日あの本を買いますので」

シルビア「それじゃあ、お城に戻りましょう。きつとラーズちゃんが待ってるわ」

セーニヤ「マルティナ様の買ったお花もきつと喜んでもらえますわ」

ベロニカ「ラーズに色々自慢しましょう。久しぶりに皆で楽しく過ごしたって」

その後、デルカダール城　マルティナとラーズの部屋

ラーズ「えええ!!?そんな羨ましい事してたのかよ!!」

ベロニカ「ええ、とつても楽しかったわ。ラーズがいないのが本当残念だったわ」

シルビア「また今度機会があったら皆でどこか行きましょう」

イレブン「うん。僕も楽しみにしてる」

セーニヤ「ラーズ様、大丈夫ですか？」

ラーズ「くそ……。いいなあ、俺も行きたかったぜ」

ラーズは大げさな程落ち込んでいる

グレイグ「まあそう落ち込むな。ラーズにお土産もあるのだぞ」

ロウ「そうじゃよ。お主だけ何も無いのはかわいそうじゃからの

う」

「レース「え？本当か？」

カミュ「俺達で少し大会に出てな。その景品を貰ってきたんだ」

マルティナ「はい。レースの好きなホムラのお酒よ。それに、お酒のおつまみも一緒だったの」

レース「おおお!!これは嬉しいな!最近買いに行けなくて困ってたんだ。皆、ありがとな!大事に飲ませてもらうぜ!」

マルティナ「あと、私からこれも。キキョウの花よ」

レース「お?キキョウの花か。いいねえ、ガラツシユの村の近くにあった山にもよく咲いてたぜ。この周りに飾られてるのは確か……カスミソウか」

マルティナ「流石レースね、物知りだわ。レース、いつも私の事を考えてくれてありがとう。レースがいるから私はずっと頑張っていられるわ。これは私からの気持ちよ」

レース「お、おう。これは、バラか……… 恥ずかしいな。ありが

たいが、どうしたんだ？急に」

イレブン「実はね、今日のお祭りは感謝祭りって言って、いつもお世話になってる人に感謝を伝えるお祭りだったんだ。そのバラは花言葉で感謝。だから、感謝の気持ちを花に込めて伝えたいんだよ」

ラース「感謝……。へへ、なるほどな。ありがとな、マルティナ！俺もマルティナにはずっと前から助けてもらっている。もちろん皆にもな。俺は今花は持ち合わせてねえが、気持ちなら伝えられる。皆、いつもありがとな！これからも頼りにしてるぜ！」

ロウ「ほほ、こちらこそこれからも頼りにしておるぞ」

ベロニカ「ラースに真っ直ぐに褒められるとなんだかくすぐったいわね」

セーニヤ「私達に出来る事でしたらなんでもいたしますわ」

シルビア「やっぱり感謝の気持ちって大事ね。アタシもこれから帰ったらパパに感謝の気持ちを伝えなきゃ」

グレイグ「俺もこの後、王に感謝を伝えてこよう」

カミュ「なら、俺もマヤに伝えてくるとするか」

マルティナ「それじゃあ、皆今日はありがとう。久しぶりにとつても楽しかったわ」

リース「今度は俺もいれてくれよな。俺も皆と楽しみたいからよ」

孤児院

数日後の夜、デルカダール城

バンの部屋

「そこではラースとバンが話していた

ラース「で？悩みって何だよ。バンが悩むなんてらしくないな」

バン「師匠、俺つてもしかして教えるの下手ですか？」

ラース「ああ、なるほど。まあ、お世辞にも上手いとは言えないよな。感情的になるし、説明もうまくいかないもんな。仲間達に言われたのか？」

バン「うう、師匠も思ってたんですね。はい、自分でも薄々わかってたんです。あまり伝わってないなって。師匠の言葉通りの事を言えると伝わるんですけど、俺が思った事を伝えようとすると新入り達とかはよくわからないみたいなんです。どうしたらいいですかね？」

ラース「うーん……。俺のイメージだが、バンは考えるより行動する方が好きだろ？」

バン「はい！もうそりゃあ仲間達に注意されるレベルでそうですよ」

ラース「それはそれで問題だが、今はいい。なら、そうすればいいじゃないか」

バン「でも、それだと師匠が教えてくれたようにならないですよ。見てるだけだとよくわからないよなって言つて、言葉で俺達に教えてくれたじゃないですか」

ラース「よく覚えてたな。何年前の話だよ。確か俺が兵士長になつてすぐぐらいの時じゃないか。それは俺の教え方だからだ。この方が自分にとつても周りにとつてもわかりやすいと判断したからそうしたんだ。」

だが、それはバンにとつては少し難しいんだろ？なら、俺には無理だと割り切つて簡単にしてしまえ。自分はうまく説明は出来ないけど、こうやるんだつて言つて動いて見せる。」

その後、一人一人にその動かし方を相手の体を動かして教える。そうすれば、言葉での説明は今よりも減るだろ？それに、バンにとつても相手にとつてもこの方がわかりやすいと思うぞ？習うより慣れろなんて言葉があるくらいなんだからな」

バン「俺にはもうその言葉は恐怖でしかないですけどね」

ラース「いや、なんでだよ」

バン「師匠がその言葉を使って俺の事ボコボコにしてたからですよ。技とか技術とかを盗めって言って思いつきり楽しんでたじゃないですか。俺にとってその言葉はもう嫌な思い出が多いですよ」

ラース「む……。だが、もうすっかり盗んだじゃないか。なら、あれはあれで正しかったという事だろ」

バン「それはそうですけど、もう少し痛くない方法がよかったですよ。まあ今更ですけどね。教え方って皆は言葉で説明する事が多くて、それで俺もそうしてたんですけど変えていいんですかね？」

ラース「教え方なんて人それぞれだ。お前なりの教え方だつて存在するはずだ」

バン「そっか、ありがとうございます、師匠。明日からやってみますね」

コンコン

バン「ん？誰だろ。入っていいぞー」

ガチャ

グリーン「あの、失礼します。ラースさんがここにいるって聞いたんですが」

グリーンが顔を覗かせた

バン「お、グリーンか。師匠に用事だったんだな」

ラース「どうした？」

グリーン「少し相談したい事がありました。よかつたら、バンさんも聞いていただけませんか？」

バン「俺もいいのか？アドバイスできるわからねえけどいいぞ」

ラース「最近よく悩んでるもんな。お年頃ってやつだな」

グリーン「明日、実は俺の育った孤児院にマヤさんと行くんですよ」

ラース「孤児院……」

バン「グリーンって孤児院の出だったんだな。マヤちゃんも行くのか」

グリーン「マヤさんって孤児院の話をする、少し遠いような目をするんですよ。違う事を考えてるような感じで。それで、もしかしたらマヤさんには孤児院に嫌な思い出でもあるんじゃないかって思っ

て。

「マヤさんから誘われたとはいえ、俺が育ったからってそんな場所に連れてくのはどうかと思ひまして」

バン「…………… グリーってマヤちゃんの事よく見てたんだな。俺、全くそういうの気づかないからよ。俺はマヤちゃんの昔とか知らないんだよな」

「ラース」グリー、それは思い違いだ。マヤは孤児院の出ではないぞ。だが、思う所はあるだろうな。まあ、マヤは孤児院に思い出は無いから安心していいぞ」

グリー「そうだったんですね。なら、安心しました。でも、どうして遠いような感じになるんですか？」

「ラース」あまり詮索するのはよくないぞ。人には秘密な事なんて皆あるもんだろ。無いのはここに居るバンくらいだ」

バン「し、師匠!?いきなり何言うんですか!というか、俺にだって秘密な事くらい…………… 無い…………… です」

グリー「ふふ、でもバンさんは確かにそんな感じしますよ。確かに詮索はよくなかったですね。僕もあまり言いたくない事はあります。気にしないようにしてますね」

ラース「ああ、そうしておけ。マヤの事だ。きつといつかグリーンに話すんじゃないかと思うぞ」

グリーン「そうですね？そうだと嬉しいんですが。夜遅くにすみませんでした。ありがとうございます」

ラース「おう、それじゃあな。おやすみ、グリーン」

バン「じゃあなー」

グリーン「はい。おやすみなさい」

グリーンは出ていった

ラース「孤児院…… ねえ」

バン「グリーンが孤児院にいたなんてちよつと意外でしたね。そんな感じしないんですけど」

ラース「まあ、あまり言いたくない事だ。孤児院はきつと大変な事が多いだろうからな。マヤにはあまり嫌な思い出を思い出してほしくないが、こうなった以上少しは仕方ないんだろうな」

バン「…………… あ！ そうだ、見てくださいよ、師匠。俺、最近こ
んなの書き始めたんです」

ラース「ん？ ノート？ 何書いてるんだ？」

バン「これはベグル達の弱点とか技術を俺が探して気づいた所を書
いてるんです。そこを補強するための訓練とか、新入り達の教えな
きやいけない所とかも書いてるんですよ」

ラース「ほう、それは凄いいじゃないか。とてもいい事だと思うぞ。
ただ、誰の入れ知恵だ？ バンが思いついたわけじゃないんだろ？」

バン「うぐ…………。流石師匠、よくわかってますね。ロベルトからこ
うしてみたらどうだって言われて少し前からやり始めたんです」

ラース「流石ロベルトだな。少し見てもいいか？」

バン「はい！ いいですよ。汚い字ですけど、読めますか？」

ラース「いや、結構綺麗だぞ。カミユなんかよりずっと綺麗だ
な…………… なるほど。いい所も書いてあるのか。なんだか人に
よって書いてある量が違うな」

バン「まだ全員分見れたわけじゃないので。これからどんどん書いていきますよ」

ラーズ「いや、ベグルの所だけ書きすぎだろ。もう一ページ埋まりそうじゃないか。しかも、少しだけ関係ない事書いてあるぞ。魔王は関係ないだろ」

バン「そ、それは気にしないでください。いつも馬鹿にされてるんですけど、力じゃ勝てないのでここでしかベグルの事馬鹿にできないんです。あ、師匠のページもありますよ」

ラーズ「それは俺が見てもいいのか？まあ、気にはなるが」

バン「実は師匠の弱点が思いつかなくて、まだそこは書けてないんですよ。あ！マルチナ様は弱点ですよね！」

ラーズ「それは、まあ……いや、書く必要はねえだろ。って、本当に弱点書いてねえな。いい所とか技術とかばっかりだぞ」

バン「そりゃあ師匠ですから！」

ラーズ「まあありがたい限りだが、バンなら俺の弱点も知ってるだろ」

バン「うーん……。やっぱりわかんないですよ。今度カミユさんとかに聞いてみてもいいですか？」

ラース「構わねえが、カミユか……。ろくでもねえ事言いそうだな」

バン「それはそれで面白いので大丈夫ですよ」

ラース「そうかよ。まあ、そのノートは大事にしておけよ。兵士長としてこれからどんどん役に立つはずだ」

バン「はい！師匠みたいになれるように頑張りますよー！」

孤児院2

次の日、デルカダール城下町 広場

グリー「マヤさん、早いね。もしかして待たせたかな？」

マヤ「あ！グリーさん、おはよう。ううん、大丈夫。たった今来たばかりだから」

グリー「そっか、よかった。早速向かうけど大丈夫？」

マヤ「うん。あ、でもどこにその孤児院があるのか聞いてなくて。何か準備必要だったかな？」

グリー「そういえば言っけなかったね。場所は知ってるかな？ナギムナー村って所なんだ。特に必要なものはないかな。これから僕がキメラの翼でいくよ」

マヤ「ナギムナー村かー。前に兄貴と一度行った事あるよ。海がすっごく綺麗で暖かかったよね」

グリー「そうだね。かなり温暖な土地だから。さ、掴まってね」

ナギムナー村

マヤ「うわー！やっぱり海が綺麗だね！青い空、透明な海、白い砂浜。最高だよ」

グリー「そう？僕はここで育ったからそこまで感動するものはないけど、それでも故郷が褒められると嬉しいな」

マヤ「あ！いけない、このまま海で遊びそうになっちゃった。孤児院は？」

グリー「こっちの高台を登った先にあるよ。ついてきて」

その時

おばさん「まあ、グリー君だね。まだ生きてたのかい」

おばさん「本当ね。私はてつきりもう呪いで親の後を追ったものだと」

コソコソとこちらを見て話す人達

マヤ「……………」

グリー「…………… マヤさん、気にしないで。あんなの僕は気にしてないから」

グリーは少し苦しそうな顔で笑っている

マヤ「……うん。わかった」

孤児院前

そこには周りの家より少し小さめな小屋があった

マヤ「これが、孤児院なの？どう見ても小屋みたいだよ」

グリー「ここが僕が育った孤児院だよ。孤児院なんてのは名前だけで見た目はこの通りボロ小屋。お金を稼ぐ事が厳しくてね。この村では漁業でお金を稼ぐんだけど、子どもを世話しながらなんてとても難しい事なんだ。でも、中には自分みたいな子ども達がそれなりにいるんだよ」

マヤ「………そっか、入ってみよう」

孤児院内

グリー「ただいまー」

???'「まあ、グリー君じゃない。久しぶりね。元気そうで何よりだわ」

グリー「あ、ステラさん。久しぶりだね。今日はお手伝いしてくれ
るって言ってくれたマヤさんを連れてきたんだ」

マヤ「マヤといます。よろしくお願ひします」

ステラ「あらまあ可愛い子ねえ。私はここで子ども達を世話してるステラといます。おばさんだけどよろしくね」

男の子A「あ！グリーン兄ちゃんだ！皆々、グリーン兄ちゃんが帰ってきたよー」

女の子A「ええ!?本当！行くー!」

男の子B「僕も僕も！また一緒に遊ぶ約束したんだもん」

奥からは子ども達がやってきた

女の子B「あれ？このお姉ちゃんは？初めて見た」

グリーン「やあ、皆。ただいま。このお姉ちゃんは僕の友達のマヤさんっていうんだよ」

マヤ「皆、初めまして。私はマヤっていうの。よろしくね」

女の子B「マヤお姉ちゃんか。よろしくー」

男の子A「マヤ姉ちゃん！あつちで一緒に遊ぼう！俺、キャッチボールしたい！」

ステラ「はいはい。ちよつと待つてなさい。今二人は来たばかりだから、少しゆつくりさせてあげなさい。グリーン君、マヤちゃんに空いてるお部屋貸してあげて」

グリーン「わかった。マヤさん、こつちだよ」

マヤ「いいの？ありがとう」

グリーン「ありがとうはこつちのセリフかな。まあ見て分かったと思うけど、遊びたい盛りの子ども達ばかりだからその子達と一緒に遊んでほしいんだ。僕一人だといつも大変で」

マヤ「元気いっぱいだったもんね。私も頑張るね」

グリーン「この部屋だね。荷物はここに置いて大丈夫だから」

マヤ「わかった。あの子達は孤児って事だから、やっぱり皆親がないの？」

グリーン「まあ、そうなるね。僕もそうだったけど、基本親に捨てら

れたか見放されて育てて貰えなかった子とか、そんな子の集まりだよ」

マヤ「そつか……。どこもそういう事はあるんだね」

グリー「まあ仕方ないよね。親だって人間だもの。嫌になる事だつてあるから」

マヤ「よし、暗い話はやめよつか。これから遊んでくるね」

グリー「そうだね。ごめんね、こんな話して。僕も遊びにいこうかな」

マヤ「遊び場はどこなの？」

グリー「大体はこの裏手に外に繋がってる広い空間があつてそこで遊ぶかな。でも、外に出て海で遊んだりもするよ。僕達がしつかり見ておかないとだけどね」

マヤ「じゃあ、私は外に出て海で遊んでこようかな」

グリー「いいと思うよ。皆も外は好きだからね。行きたい人を聞いてみようか」

裏手

グリー「皆！今からここにいるマヤ姉ちゃんと海に行きたい人ー」

女の子B「海!?!行く!」

男の子C「僕も!」

数人手があがっている

マヤ「じゃあこれから海に行こっか!私、この村ほぼ初めてだからいろいろ教えてくれると嬉しいな」

女の子B「いいよ!案内してあげる」

男の子C「僕に任せて」

グリー「それじゃあ悪いけど、よろしくね。ある程度遊んだら帰ってきてね」

マヤ「うん。じゃあまた後でね」

男の子B「マヤ姉ちゃん、早くー」

マヤ「はい」

マヤは子ども達と元気に出ていった

グリー「…… ハア。なんだか申し訳なくなってきたな」

男の子A「ねえねえ、兄ちゃん。マヤ姉ちゃんって兄ちゃんの彼女？」

グリー「か、かか彼女!? 違うよ!! 急に何言い出すんだ」

グリーは赤くなっている

男の子A「あれ? 違うの? だって仲良さそうじゃん」

グリー「マヤさんは僕が働いてる所で知り合ったんだよ。それに仕事仲間でもあるしね。だから関係ないの」

女の子A「グリーお兄ちゃん、絵本読んで」

グリー「あ、いいよ。これかい?」

男の子A「あ! 兄ちゃん、それ終わったら僕とキャッチボールね!」

グリー「うん、わかったよ」

その頃、マヤ達は

女の子B「ここが海！とつても気持ちいいんだよ」

マヤ「じゃあ一緒に入ろうよ。足だけこうやってさ」

男の子C「いいの!?僕達いつも駄目って言われてたんだよ」

マヤ「え？そうだったの？じゃあ少しだけね。乾かしてから戻ろうか」

女の子B「やったー！」

マヤ「危ないからあまり海の中で走ったら駄目だよ」

男の子B「ねえ、マヤ姉ちゃん。どうしてここに来てくれたの？」

マヤ「どうして……か。グリーさんは仕事の先輩でね。一緒に働いてたんだ。偶然グリーさんが孤児院のために働いてるって知って私も協力したくなっちゃったんだ」

男の子B「やっぱりグリーン兄ちゃんは僕達のために働いてたんだ」

マヤ「あ、知ってたの？」

男の子B「なんとなくだよ。数年前まではグリーン兄ちゃんは毎日ここにいてくれたのに、急に何処か行っちゃったからどうしたのかなって」

マヤ「そうだったんだ。グリーンさんいないと寂しい？」

男の子B「うん。僕達といつも遊んでくれたから。それに優しいもん。でも、グリーン兄ちゃんは村の人達に嫌われてるからあまりこうやって外に出てはくれなかったんだ」

マヤ「そう……」

女の子B「マヤお姉ちゃん！見て、ヒトデー」

マヤ「ええ!?ちよつ、ちよつと持ってこないで！海に返してあげて！」

男の子C「マヤ姉ちゃん触らないの？僕のナマコは？」

マヤ「それも駄目!!返して！」

海の呪い

その夜、孤児院

ステラ「マヤちゃん、ちよつと聞いてもいいかしら?」

マヤ「はい。何ですか?」

ステラ「マヤちゃんとグリーン君はお仕事仲間なのよね。グリーン君はお仕事はどう? 頑張ってる?」

マヤ「それはもちろん頑張ってますよ。グリーンさんは私より働いている期間が少し長いんです。私もグリーンさんと同じで働くのは初めてだったんですよ。でも、先輩達も優しいしグリーンさんもよく教えてくれます」

ステラ「そう。。。よかったわ。あの子都会慣れしてないからどうしてるか不安だったのだけど、うまくやっていけてるみたいね」

マヤ「ステラさんはグリーンさんの義理の親みみたいな感じなんです
ね」

ステラ「そうね。私はそう思っているけど、グリーン君は。。。どうかしら。もう立派な大人なんだからこの孤児院の事を気にしなくてもいいのだけど」

マヤ「グリーンさんは優しいからステラさんの事をきつと忘れませんよ。働いたお金をこの孤児院のために使おうとしてるくらいですから」

ステラ「やっぱり……。少し前にたくさんのお金が送られてきたの。ありがたいのだけど、グリーン君の生活は大丈夫かしら？」

マヤ「きつとなんとかしてると思いますよ」

ステラ「マヤちゃん、もしグリーン君が困っていたら力になってあげてください。あの子には昔から辛い思いしかさせてこなかったから。あの子を守りたい……。」

そう思つてこの孤児院を建てたのですが、結局私は何も守れなかったわ。貧乏な暮らし、グリーン君の先代の親からの理不尽な呪い、同年代の友達も出来なかった」

マヤ「呪い……。来る時に村の人達も言っていました。何なんですか？それ」

ステラ「あまり気にしないでいいのだけど、この村にとってはかなり恐れられているの。海の呪い。グリーン君の先代から続く不思議な現象の事をそう呼んでいるのよ。私は全く気にしてないんだけど、グリーン君は昔からそのせいで周りから嫌われていたわ。」

呪いはどうしてなのかわからないけど、先代の親からずっと海で死んでいつているの。グリーン君の両親も海で死んじゃったわ。この村は漁業で成り立つ村。なので、必然的に村の男子は必ず漁師になるという決まりがあったの。漁師である以上海で遭難し、帰ってこないというのは珍しくないわ。

でも、グリーン君の曾祖父の頃から続くというのあまりにも不自然なの。帰りを待つ妻達も謎の波に吞まれ、そのまま命を落としていったそうだから。村の人達は海に嫌われたと言ひ、海の呪いと呼び始め生き残りのグリーン君を遠ざけるようになっていったの」

マヤ「海に嫌われた海の呪い……。呪いは実在するけどさ、偶然じゃないの？確かに変だけど、グリーンさんは今も生きてるじゃん」

ステラ「それはグリーン君も海に近づこうとしなかったからだと思うわ。でも、ふと近づけば何が起きるかわからない。私自身も信じてないけど、もし何かあってからでは遅いと思ひ海には行かせないの。」

昔からグリーン君は我慢して我慢して成長してきたわ。きっと彼の中で我慢する事は当たり前前のようになっていると思うの。でも、もうグリーン君には我慢してほしくないのよ。この村に無理に帰ってこないでいいの。グリーン君にとってこの村は故郷だけど、決していい思い出は多くない。

私はデルカダール王国でこれまでの事を全て忘れて、楽しく過ごしてほしいのよ」

マヤ「でも…… グリーさんはこの孤児院のためについていてるんだよ？そのグリーさんの気持ちは？それも忘れていいの？」

ステラ「実はまだグリー君に話していないんだけど、もうこの孤児院は取り壊しが決まったの。前からお金も厳しく、周りからの批判もあつたから」

マヤ「そんな……。それじゃあ子ども達は？どうなっちゃうんですか？」

ステラ「遠く離れたグロツタの街にも孤児院があるそうなの。そちらの方に移ってもらおうと考えているわ」

マヤ「ここは…… グリーさんの家も同然だったんでしょ？いいの？」

ステラ「それは……。でも、ここには辛い思い出しかないわ。辛い事など忘れていいの」

グリー「よくない!!!」

二人「!!？」

グリーが叫びながら出てきた

マヤ「グリーさん!?いつから」

グリー「ごめんなさい。途中から聞いてました。海の呪いの説明あたりから。ステラさん!ここは僕にとって一番暖かい場所なんだよ!取り壊しなんてやめてよ!!辛い思い出は確かに多いけど、それでもここは僕の家だもの!これ以上……………僕から大切なものを無くさせないで……………」

グリーは最後を小さな声で言った

ステラ「グリー君……………。ごめんなさい、私が悪かったわ。そうよね、やっぱり取り壊しは嫌よね。わかったわ。明日村長にまた掛け合ってくるわ。せめて残しておいてほしい、と」

グリー「うん。お願い……………。マヤさん、呪いの事聞いたよね?僕は、僕ら一家は海に嫌われてる。気持ち悪いでしょ?だからさ、もう僕は気にしな」

マヤ「何言ってるの、グリーさん!!」

グリー「え……………」

マヤはグリーの言葉を遮る

マヤ「確かにグリーさんの親達は海で死んじゃったかもしれないけ

ど、まだグリーンさんは生きてる！呪いがグリーンさんにかかっているかなんてわからない！なら、諦めないで！グリーンさんに呪いがかかってない可能性を捨てないで！

私は、呪いが大っ嫌いだしもう関わりたくもないけど、それでもグリーンさんと一緒にいるよ！ちよつとやそつとの呪いじゃあもう驚かないんだから！」

グリーン「マヤさんも…… 呪いにかかった事…… あるの？」

マヤ「そうだよ。私は黄金の呪いっていうのにかかって、自分が黄金の姿に変えられた。そのせいで五年間もずっと黄金のままだったんだ。だからもう呪いなんて大っ嫌い。でも、グリーンさんはまだ呪われていない可能性を信じてる」

ステラ「黄金の呪い……」

グリーン「…… そんな事が。でも、それなら尚更だよ。僕が呪いにかかっていたら、マヤさんにも移ってしまうかもしれない。呪いはいも嫌でしょ？ だったらさ、僕とは」

マヤ「それでも関係ない！もう呪いなんて怖くないから。グリーンさんがいなくなる方がずっと怖い！だから、そんな悲しい事言おうとしないで。」

この村の皆はグリーンさんが嫌いかもしれないけど、私達は違う。私

もビルさんもマドリーさんも、兄ちゃん達だつて呪いがあるからつてグリーさんの事嫌いにならない！だからさ、安心していいんだよ」

グリー「マヤさん……」

ステラ「マヤちゃん、ありがとう。ほら、グリー君。あなたの味方はここにいるわ。絶対に見捨てようとしちゃ駄目よ。マヤちゃんはあなたの事をとつても大切に考えてくれてるわ」

マヤ「え……。なんだかそう言われると恥ずかしい……」

ステラ「あらあら、照れなくていいのよ。グリー君、明日にはもう帰りなさい。マヤちゃんと一緒にデルカダールへ。この事は私に任せて。グリー君はこれまで我慢してきた分、目一杯楽しんできなさい」

グリー「ステラさん。うん、ありがとう。ふふ、帰ろっか、マヤさん。デルカダールに」

マヤ「うん。でも何かあったらまた教えてね。私、力になるから。ステラさんも」

ステラ「あら、ありがとう。それじゃあおやすみなさい」

グリー「うん。おやすみ」

マヤ「おやすみなさい。また明日」

グリー「(マヤさん、かつこよかった。呪いなんて怖くない……か。ありがとう、マヤさん)」

問題児？バン

次の日の夕方、デルカダール城

訓練場

ラース「よう、お疲れ様。バンとベグルいるか？少し頼みがあるんだが」

ガク「あ、お疲れ様です、ラース將軍。バンさんとベグルさんなら先程城下町に見回りに行かれましたよ」

ジール「俺達が後で伝えましょうか？」

ラース「あー、そうだな。お願いしてもいいか？大したお願いじゃないんだが、ダーハルルーネに用事があったな。そこでスイーツの調達と周辺の魔物の様子を確認してきてほしいんだ。より詳しい事は夜俺達の部屋に来てと伝えてくれ」

ガク「わかりました。伝えておきますね」

ラース「ああ、頼んだぞ。それとジール、せいけんづきの足の踏み込みはもつと深く大胆に進んで大丈夫だぞ。今より二歩分くらいな」

ジール「は、はい！ありがとうございます！」

ラーズ「じゃあ練習頑張れよな」

その夜、マルティナとラーズの部屋

コンコン

バン「師匠、いらっしやいますか？バンとベグルです」

ガチャ

マルティナ「あら？バンとベグルじゃない。どうしたの？」

ベグル「あ、マルティナ様、夜遅くにすみません。ラーズ將軍に用事の事を聞こうと思っていて。ラーズ將軍はいらっしやいますか？」

マルティナ「ああ、そうだったの。入っていいわよ。ラーズは今トイレに行ってるの。すぐ戻ってくるわ……なんて言ったら、ね」

ガチャ

ラーズ「ああ、二人とも来てくれたか。呼び出してすまないな」

マルティナ「私は一度いなくなった方がいいかしら？多分お父様のスイーツの事よね？」

ライス「そう、その話だ。別にここについて大丈夫だぞ。話はすぐだからな」

バン「スイーツ店は前にも何度か行った事あるあの店でいいんですか？」

ベグル「あの店、ダーハルーネでも結構な人気店ですよ。俺も一度食べた事ありますよ」

マルティナ「あそのケーキも美味しいわよね。でも、今回は違うお店なの」

ライス「バンは一度会った事あるよな。俺の友人がやってる店に頼もうと考えていてな」

バン「ああ！あの店長さんのお店ですか。でも、俺行った事はありませんよ」

ベグル「俺は知りませんね。ライス将軍、ダーハルーネに友人がいたんですね」

マルティナ「なにかと私達は彼にお世話になってるのよ。だから、これからはそこのお店のケーキを買おうかと思ってるの。かなり美味しいから私も気に入ってるの」

ラーズ「店長にはこれから連絡するから案内も頼もうと思ってる。バン達はダーハル―ネの入り口で待っていていけば大丈夫だ。あと魔物の事だが、ダーハラ湿原の魔物の様子や変化があったら見てきてくれ。余裕があったら霊水の洞窟も頼む。明日お願いしてもいいか？」

バン「あ。師匠、明日はちよつと……」

ラーズ「ん？何か用事だったか？」

ベグル「俺が明日休むんです。ジエーンが祠を見に行くのでその護衛なんです。バン、休み取ってくれたんじゃないのかよ」

バン「い、いや、今出そうと思っててよ。師匠、これベグルの休み申請票です」

ラーズ「なるほどな。わかったぞ」

マルティナ「ジエーンの夢は確か本を出すんだったわよね。どんな感じなの？」

ベグル「もうかなり出来上がってきているんです。明日で観に行く

のは終わりになりますね」

ラース「おお！そこまで進んでいたのか。なら、夢ももう少しで終わりだな。ベグル、よかったじゃないか」

バン「となると、もう少しで結婚もするんだな。花嫁の姿ってのはいいものだもんな。別人かってくらい綺麗になるしよ」

ラース「そうだよな。マルティナもあの姿が一番綺麗だったもんな。懐かしいな」

マルティナ「ふふ、ありがとう。ラースもカッコよかったわよ」

ベグル「まだ実感湧きませんね。ジエーンともまだ話はそこまであがってないんですよ。まあ、話が少し逸れましたね。急な連絡になつてすみません」

バン「あ、俺も。遅れてすみません。俺一人でも行った方がいいですか？」

ラース「…… バン一人…… ねえ」

ラースは目を閉じて、少し考えている

マルティナ「ふふ、それはどうかしらね。あまりいいとは思わないけど」

マルティナも少し苦笑いしている

ベグル「無理だな」

ベグルは即座に断言する

バン「み、皆して!?なんでですか!?俺、別に大丈夫ですよ!というか、ベグルは決定が早過ぎるだろ!」

ライス「何か問題を起こされても困るんだよな。放つとくと何するかわからねえし」

バン「俺、そんなに問題児ですか!?!」

ベグル「勝手にフラフラどっか行くしよ。それで前に違う物見つけて、はしゃいで周辺の魔物が騒ぎ始めた事もあっただろうが」

バン「うぐっ……」

ライス「魔物の様子見だったのに、そのせいで暴れた魔物を仕方なく大人しくさせる羽目になったもんな。報告書によれば、それで無駄な薬草とかが消費されたらしいな」

バン「うぐっ……」

マルティナ「まあそんな責めないであげて。バン、今回は別に急ぎじゃないから平気よ。数日後で大丈夫だから、ベグルの休みの後にお願いできるかしら？」

バン「は、はい。マルティナ様、ありがとうございます……。二人がいつも俺の事虐めてくるんですよ」

ラーズ「マルティナに甘えんな。変わりのない事実だろうが」

ベグル「ラーズ將軍の言う通りだな。もっとしっかりしてほしいものだ」

マルティナ「まあ、バンは大事な所ではしっかりしてるから今のままでも私は大丈夫よ。もう少し頑張ってもいいとは思うけど、ベグル達がしっかりしてるから甘えちやうのよね」

バン「そう!!そうなんですよ、マルティナ様! わかってくれますか!!」

ラーズ「マルティナ、バンを甘えさせなくていいんだぞ。こいつ、すぐ調子にのるからな」

ベグル「あ、ありがとうございます。マルティナ様」

ベグルもマルティナの言葉に嬉しそうにしている

ラーズ「あー、ベグルまで照れ始めた。ほら、話は終わりだ。また数日後頼んだぞ」

ラーズは面倒になり、二人を押ししていく

バン「あー、師匠。俺、もっとマルティナ様とお話ししたいです！」

ラーズ「駄目だ。もう用事は済んだだろうが。さっさと帰れ」

ベグル「ほら、バン。帰るぞ。ラーズ將軍、マルティナ様、失礼しました」

バン「……失礼しました」

マルティナ「大丈夫よ。明日もよろしくね。ベグルは明日頑張つて」

壺から出てきた神様？

次の日、デルカダール城 大広間

ジェーンは一人でデルカダール城へ来ていた

ジェーン「一人でここに来るのも久しぶりだな。ベグル君は元気かな。訓練場にいるかな？こっちだったはず」

訓練場

ジェーン「うーんと……あれ？ベグル君いないなあ。聞いてみた方がいいかな。あのー、すみません」

バン「ん？あ！ジェーンさん、こんにちは。ベグルならここにはいないぜ。まだ支度してんだと思うからもう少し待っててくれ」

ジェーン「なるほど。わかりました」

バン「夢がもう少しで叶うんだってな。頑張れよなー！」

バンはジェーンに手を振った

ジェーン「はい！ありがとうございます、バンさん！」

その後

ベグル「あ！ジェーン、早かったな。待たせたか？」

ジエーン「ううん、大丈夫だよ」

ベグル「そうか。今日はメダチャット地方だったな。俺はあの辺は詳しくねえんだよな」

ジエーン「私もそんな土地勘みたいなのがあるわけじゃないよ。でも、プチャラオ村の人が教えてくれたから多分合ってるはず。早速行ってみよう」

メダチャット地方 山の中

ベグル「ジエーン、祠つてのはあれの事か？」

ベグルの先には小さな祠がある

ジエーン「あ！そうそう、それだよ、ベグル君。…… 思ってたより汚れてるね。少し綺麗にしないと」

祠には今にも壊れそうなほどボロボロな壺が置かれている

ベグル「これは…… 壺？何でこんな所に。それにこの壺だけ汚れ方が普通じゃねえ。もう割れそうだぞ」

ジエーン「なんだろうね、これ。取り敢えず汚れは取っておこうかな」

ジェーンがハンカチで汚れを取ろうと壺に触れると

パリン!

壺が割れてしまった

ジェーン「え、嘘。触っただけなのに」

壺からは中身の水のようなものが出てきた

ベグル「なんだこれ。水……にしては固形物みたいだよな」

水? 「やっと出れたわい!」

ジェーン「え? ベグル君、どうしたの?」

ベグル「ん? 俺は今何も言っていないぞ。ジェーンじゃないのか?」

ジェーン「え? 私も何も言っていないよ」

水? 「その者。ここから出してくれた事に感謝する」

ベグル「まただ。どこからだ?」

水? 「何をキョロキョロしておる。我はここじゃ、ここ!」

ジェーン「え…………。もしかして、この水みたいなのが」

二人「喋ってる!!!」

水? 「やつとこつちを向いたのう。この忌々しき壺から出してくれた事感謝する。何か褒美をやろう。我に何か望む事はあるかの?」

ベグル「………… 望む事? そんな事より、てめえは何者だ」

水? 「我はもはや名も無き者じゃ。遙か昔にこの壺に入れられてから何百年と経っておる」

ジェーン「そんなに…………。かわいそう」

水? 「それで望む事は無いのかの?」

ジェーン「別に望む事なんて私は無いわ。自分で何とかしたいもの」

ベグル「俺もねえな。大体こんなわけわからねえやつに何ができ

るってんだよ」

水? 「失礼なやつだな、貴様。我の事を馬鹿にする気か」

ジエーン「ちよつ、ちよつとベグル君。あまり乱暴な言葉使いしちゃ駄目だよ。もしかしたら凄い人かもしれないじゃん」

ベグル「凄い人……ねえ。いや、そもそも人ではねえな。まあ、馬鹿にしたわけじゃねえんだ。悪かったな」

水? 「まあよい。本来なら許さんがここから出してくれた恩もある。水に流してやろう。それで、望む事がないなら我が勝手に礼をしてもいいかの?」

ジエーン「まあ、それならありがたいですけど」

ベグル「大した事じゃねえんだろうが、変な事すんなよな?」

水? 「まあ、どうなるかの。ううむ………。どうも我の力が弱まっておるな。二人にすら力がかけられんようじゃ。どちらか一人になるがいいかの?」

ジエーン「じゃあベグル君にしなよ。私は大丈夫だから」

ベグル「…………… まあ、ジェーンを変な目に合わせたくねえからな。いいぜ、俺にかけてみるよ」

水? 「承った。お主に力を貸そう。ほい!!」

ベグル「……………」

ジェーン「ど、どう? ベグル君。何か変わった?」

ベグル「いや、特に。おいお前。何も変化ねえぞ」

水? 「そう焦るでない。必ず効果があるはずじゃ。お主に一番縁がある場所だな。それとお主らはここに何の用じゃ?」

ジェーン「私、実はこここの祠が昔からこの周辺で崇められてたつて聞いて少し見に来てみたんです。昔の情報とかを集めて本にするのが私の夢なんです。この祠の事も載せようかと思っていて」

水? 「なるほどのう。それはありがたい事じゃ。ここ何百年はめつきり人も来なくなつてのう。また人が来てくれるようになれば、我にも力が蘇るといふものじゃ」

ベグル「この祠は何で出来あがったんだ？」

水？「元よりここは山ではなく海の中じゃった。海底火山の噴火で今のような山になったがの。それから時が経ち近くに王国ができ、人間達が自然災害から守ろうとこの祠を建てた。」

その時に我が力を貸したのだ。その力のおかげで王国はしばらくは安泰じゃった。また、そのおかげが人間達も我に物をよくくれてな。我も気分をよくしていたものじゃ。まあ、圧倒的な力を持つ者の手により滅んでしまったがな」

ジェーン「なるほど。とつてもありがたいお話ですね。ありがとうございます！」

ベグル「となると、お前は神様か何かなのか？ここら一帯の」

神様「昔はな。今はもう見る影も力も無い。人間からの信仰心が無ければ我などただの物と同じよ」

ジェーン「もしかしてその王国って、古代プワチャット王国の事？」

神様「何じゃ、知っておったか。確かそんな名前じゃったのう」

ベグル「ほう。古代ここにあって言われてる王国の事か。あんな凄えやつだったんだな」

神様「どうじゃ？崇める気になったかの？」

ジェーン「はい！そんな凄い方とお話できるなんて私、とっても嬉しいです！ありがとうございます、神様！」

ベグル「まあ、少しはな」

神様「ほほ、懐かしい気分じゃのう。どれ、もう少し昔の話もしてやろう」

ジェーン「お願いします！」

数時間後

ジェーン「大変お世話になりました！色々知れてよかったです！」

神様「うむ。また来るがよい。我はここから動けんのでな」

ベグル「なるほどな。まあジェーン、また来たかったら来るか」

ジエーン「うん。何か昔の事でわからなかったら聞きにきますね。では！」

ベグル「ジエーンはすぐ帰るか？キメラの翼やるぞ？」

ジエーン「うん。今の話早く纏めたいからそうしようかな」

ベグル「わかった。ほら、キメラの翼だ。俺もデルカダール城に戻る。纏まったら連絡してくれ。また俺も手伝うからな」

ジエーン「ありがとう、ベグル君。それじゃあまた今度ね」

ベグル「おう、またな」

久しぶりのデート

次の日の昼過ぎ、デルカダール城 大広間

ラースとマルティナはバンとベグルと話していた

バン「え？俺達が行かなくてよくなったんですか？」

ラース「ああ。王様がどうせなら二人で行って来るといって言ってな。休みをくれたんだ。だから俺とマルティナで行って来るからあの件は大丈夫だ」

ベグル「なるほど、わかりました。それでは俺達は訓練場にいますね」

マルティナ「ええ。また何かあったらよろしくね」

バンとベグルは訓練場へ向かっていった

ラース「さて、久しぶりのデートだな！マルティナ」

マルティナ「もう！またそういう事いつて。まあ、間違っではないなのだけだ」

ラース「この前の時は惜しくも出来なかったからな。今回はそのリベンジだ」

マルティナ「まあ私も久しぶりにあのお店ケーキ食べたいわ。早速行きましょう」

ラース「そうだな」

ダーハル―ネの町 カフェ

カラシ

店長「いらつしやいませー。つて、来たか。久しぶりだな、ラース、マルティナさん」

ラース「よう、久しぶりだな」

マルティナ「また食べに来たわ」

店長「お、食べてつてもくれるのか。ありがたいな。パフエとケーキどつちがいい？」

マルティナ「私は久しぶりにパフエにしようかしら」

ラース「俺はメニューのここからここまで頼むぜ」

店長「…………… 営業妨害か？ライス」

ライス「な、何でだよ！違えよ！」

店長「全く……………。見ねえ間にまた食べる量増えたんじやねえか？
マルティナさんもこんな大食い野郎が一緒だと大変だろ？」

シンジは呆れている

マルティナ「食費はまあかかるわね。でも、ライスらしくていいのよ」

ライス「マルティナ、食費の事は他のやつに言わないでくれよ」

店長「ライスは時間かかるぞ。それでもいいんだな？」

ライス「おう。出来たら持ってきてくれ」

店長「チツ！こいつだけ腹下しちまえばいいのに」

シンジは渋々戻っていく

ライス「飯にもパティシエが言っているセリフじゃねえだろ」

マルティナ「それにしてもここは久しぶりだわ」

ラーズ「だな。またマルス達も連れてきてやろうぜ」

しばらくして

店長「お待ちせしました。マルティナさんの分のパフエだ。トツピングも自由にどうぞ。ほら、てめえの分だ。味わって食え」

マルティナ「ありがとう。お土産の分もよろしくね」

店長「ああ。それはもう出来てるから帰りに持って帰ってくれよな。マルティナさんはゆっくりしていつてくれ」

ラーズ「久しぶりに来たつてのに雑な対応だな。これが友人に対する態度かよ」

ラーズは少し文句ありげに言った

店長「ならもつと俺の事考えて注文しろ。他の注文もあるつてのに何でお前のためだけにあんな時間かけなきゃならねえんだよ」

ラーズ「嬉しくなかったか？」

店長「わかってやってるって知ってるのに腹立つな、こいつ！マルティナさんを見習え！」

マルティナ「ラーズ、遊ぶのはもうやめてあげて」

ラーズ「まあそうだな。それなりに楽しめたぜ」

店長「こいつ……ぶっ飛ばしてやりてえ」

その後

ラーズ「さて、後は魔物の調査だな」

マルティナ「そうね。ラーズが普段どうやって調査してるのか気になるわね」

ラーズ「大した事してねえんだけどな。まあ、ダーハラ湿原に行くか」

その頃、デルカダール城 訓練場

バン「なあ、ベグル。さつき気づいたんだが、少しいいか？」

ベグル「あ？なんだよ」

バン「ジツとしてろよ。おらー！」

バンはベグルに蹴りを出した

ベグル「は？……… 痛え!!」ドサ

ベグルは突然の事に反応出来ず、そのまま蹴り飛ばされた

バン「あ、あれ？おかしいな、さつき」

ベグル「おい………。兵士長さんよ、これはどういう事かな？」

ベグルは怒りを露わにしてバンに詰め寄った

バン「い、いや、これはさつき攻撃が弾かれたように見えてだな！別にベグル様を攻撃しようと思ったわけじゃなくて！」

ベグル「何訳の分からねえ事言ってるんだ？そんなに俺に遊んでほしかったなら早く言ってくれりゃよかったのによろ」

ベグルは大剣を構える

バン「ち、違。それは、ベグル様の勘違いでして、あの、俺の話を」

バンの顔は青ざめている

ベグル「覚悟しろよ」

ギャアアア!!

「バンの叫び声が上がっている

ダバン「……………何やってんだ、あいつら?」

ガザル「バンがまた馬鹿やったか。懲りねえやつだな」

ロベルト「だが、バンの言っていた事は俺も気づいていた」

「マーズ「そうなのか?それなら本当にベグルに攻撃当たらねえのか?」

「ギバ「ええ!?だとすると、ベグル最強じゃねえか!ただでさえ最恐なのによ!」

「ロベルト「いや、今のバンの攻撃は通っていたからな。何が条件だ?」

「ダバン「まあいいか。お前ら、ベグルをキレさせるとバンみたいに
なるからな。気をつけるんだぞ」

「新入り達「は、はあくい(助けないんだ)」

バン「ぼばえら……………だずげ……………」

バンは這いずりながらそつちに行こうとする

ベグル「お？余裕そうだな。なら、もっと激しくいかせてもらうぜ」

しかし、ベグルに引き戻されていった

ダバン「見たら駄目だぞ。ああなったら止められねえからな」

新入り達「見たら駄目。見たら駄目」

隣からは楽しそうなベグルの声とバンがどんどん斬られていく音がしていた

その頃、ダーハラ湿原

ラース「久しぶりに来るとジメジメしてんな。あまり好きじゃねえんだが」

マルティナ「そうね、私も長居はしたくないわ」

ラース「さっさと終わらせよう。まあ、まずは普通に道を歩いて
いって魔物の様子を見るんだ。数とかも数えていこう」

マルティナ「わかったわ」

少しして

マルティナ「見て、ラーズ。鳥の巣があるわ。雛もいるみたいよ」

ラーズ「おお、本当だ。よく見つけたな。可愛らしい。それにしてもはしゃいでるな、マルティナ。楽しいか？」

マルティナ「ええ。久しぶりにラーズと外に出れてるからかしら？ 普段あまり来ない場所だと少しはしゃじやうわ。大人気なかったわね」

ラーズ「別に気にしないさ。ここには俺しかいないからな。マルティナらしくしてればいいんだぜ」

マルティナ「ええ、ありがとう」

その頃、デルカダール地方

魔物「ギイイイ!!」

一匹の魔物がデルカダール城目掛けて魔法を放った

パアアア!

デルカダール城と魔物が赤色に光り始めた

魔物「♪♪♪」

その頃、ダーハラ湿原

ラーズ「さて、ここら辺までだな。魔物の数はやっぱり減ってるな。住処を変えたか、消失したかだな」

マルティナ「邪神が消えてから魔物も見なくなった種類もいるわよね。あの頃いたのは何でだったのかしら？」

ラーズ「わからねえな。その原因は不明だな。まあ、元から大人しいやつは残ってるし、凶暴なやつがいなくなってくれるなら俺達は助かるからいいんだけどよ」

マルティナ「まあそれはそうだけど」

ラーズ「思ってたより時間くつたな。霊水の洞窟は今度だな」

マルティナ「ふふ、どこかの誰かさんがたくさん食べたもんね」

ラーズ「お？そうだったのか？それは誰だろうな。困ったもんだ」

マルティナ「もう！とぼけないの。さあ、帰りましょう」

ラース「ハハハ！そうだな」

操られし者達

その頃、デルカダール城 大広間

ベグルとロベルトが話していた

ベグル「たくっ！楽しめたからよかったものいきなり何すんだ、バンのやつ。攻撃が弾かれた、だったか？そんな事あるわけねえだろ」

ロベルト「今日はまた一段と暴れてたな、ベグル。バンがいつもより酷い有様になってたぞ」

ベグル「俺を急襲してこようなんざ舐められたもんだな。そのお返しを重ねてやっただけだ」

ロベルト「だが、俺もバンと意見は同じだ。攻撃が弾かれたように見えていたぞ」

ベグル「ロベルトまでそんな事言ってるのかよ。疲れてんのか？」

ロベルト「俺は普通だぞ。ベグルこそ何か変化があつたんじやないのか？」

ベグル「俺に？……まじか」

ロベルト「お？やっぱり何かあったの……………」

ロベルトが突然黙り込んだ

ベグル「ん？どうした、ロベルト？」

ロベルト「……………」

ロベルトは黙り込んでいる

ベグル「ど、どうした？大丈夫か？」

ロベルトは片手剣をベグルに向けた

ベグル「お、おい！どうした！」

ヒュッ！

ベグルの頬に切り傷がついた

ベグル「な……………」

ロベルト「……………」

ロベルトはどんどんベグルに向かって攻撃していく

ベグル「急になんだ!?何が起こりやがった！」

ベグルは避けながら逃げていく

訓練場

ベグル「お前ら！大変だ！！ロベルトがおかしくなりやがった！」

ギバ「……………」

ギバが槍でベグルを攻撃してくる

ベグル「ギバまで！！くっ！危ねえ！」

マーズ「……………」

マーズがベグルに魔法を唱える

ベグル「うおっ！マヒヤド！！マーズ！訓練場で広範囲魔法は危ねえだろうが！」

ザク！

ベグル「ぐっ！今のは、ブーメラン。という事は！」

ガザル「……………」

ガザルがベグルに向かってブーメランを投げってくる

ベグル「チツ！ここは全滅か！逃げねえと！」

その頃、大広間

ラース「さて、王様に報告しようか」

マルティナ「ええ。お土産もきつと喜んでくださるわ」

ラース「ただ、城が光ってるように見えただが気のせいかな？」

マルティナ「夕焼けのせいかしらね？」

玉座の間

マルティナ「お父様、グレイグ。今帰りました」

ラース「お休みありがとうございます、王様」

デルカダール王「……………」

グレイグ「……………」

二人は黙っている

マルティナ「お父様？どうされたのですか？」

ラース「グレイグ？黙り込んでどうしたんだよ」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブがラースに向かってきた

ラース「お、ブレイブ。ただいま。急に飛びついてきてどうし、痛え!!」

ブレイブがラースに噛み付いた

ラース「ブレイブ!!何するんだ！離せ！」

マルティナ「ブレイブ!?どうしたのよ！」

マルティナの側にデルカダール王がやってくる

マルティナ「お父様？キヤツ!!」

デルカダール王が剣でマルティナに斬りかかった

マルティナ「お父様、本当にどうされたのですか!？」

ラース「痛えぞ、ブレイブ。牙を深く食い込ませやがって。一体どうし………ブレイブ？」

ブレイブ「ガウ!!ガウウ!!」

ブレイブの目から涙が流れている

ラース「……………そうか。本当はこんな事したくねえんだろ？
誰かに操られてんだな。体がいう事聞かねえんだろ？お前がこんな
事するはずねえもんな。待つてな、必ず仇は取ってきてやる」

グレイグ「……………」

ラースの後ろからグレイグが斬りかかる

ラース「しんくうげり！」

ガン！

ラースは斧を蹴り飛ばした

ラース「マルティナ！一旦逃げるぞ！」

マルティナ「ええ！そうした方がいいみたいね！」

マルティナとラースは部屋から走って出ていった

階段前

マルティナ「!?マルス、ルナ！まさかあなた達も！」

階段前にはマルスとルナが通せんぼしていた

マルス「……………」

マルスは剣を持ち、向かってきた

リース「くっ！子ども達に手は出せねえ。マルス、その剣を離すんだ！」

マルスの攻撃をリースが受け止めた

ルナ「……………」

ルナはヒヤドを唱えてきた

マルティナ「ルナ！やめて！」

リース「くっ！逃げるぞ、マルティナ！話は通じないようだ」

マルティナ「えええ！」

マルスとルナは追いかけてくる

リース「ついてくるか。すまない、マルス、ルナ」

リースはマルスに足をかけて転ばせた

倒れたマルスにつまづき、ルナも倒れ込む

ラーズ「今のうちに！」

マルティナ「ごめんね、マルス、ルナ！」

大広間

ラーズ「何が起こりやがった。皆を操りやがって！絶対許さねえ」

ベグル「ラーズ將軍！マルティナ様！お二人はご無事でしたか！！」

マルティナ「ベグル！あなたは普通なのね！よかったわ！」

ベグル「はい！まずは城から出ましょう！ここは全滅です！」

ラーズ「そのようだな。ブレイブも王様もグレイグも子ども達もおかしくなっている」

デルカダール城下町 広場

ラーズ「住民はいつも通りか。城だけ、という事なのか」

マルティナ「ベグル、何があったの？」

ベグル「俺にもわからないんです。急に皆がおかしくなって俺に襲

いかかってきたんです」

ラーズ「ベグルだけ助かった理由もわからねえな。…… やっぱり城が光ってるな。夕焼けのせいじゃねえ」

ベグル「城が？…… 本当だ。いつの間に」

マルティナ「きつと魔物の仕業よね。ラーズ、肩から血が止まってるわ。大丈夫？」

ラーズ「かなり痛いが今は我慢だ。早く犯人を見つけねえと」

女性「マルティナ様！ラーズ様！どうされたのですか？お二人揃ってここにいるのは珍しいですね」

マルティナ「丁度よかったわ。お城が光ってて様子がおかしいの。何か知らないかしら？」

女性「そういえばそうですね。少し前に急に城が光りだしたんです。…… あーそういえば、うちの息子が外にも光ってる珍しい魔物がいたと言っていました。何か関係あるんですかね？」

ベグル「それはいい情報だ。ありがたい」

その時

ヒュツ！

ラーズ「危ねえ!!」

女性「キヤア！」

ブーメランが女性に向かって飛んできて、ラーズが庇った

ザク！

ラーズ「ぐっ！今のうちに逃げるんだ！」

女性「あ、ありがとうございます！」

マルティナ「ブーメラン!?… ガザルね！」

兵士達が全員こちらに向かってきた

ベグル「てめえら！いい加減目を覚ましやがれ！」

ベグルが相手になろうと大剣を構える

マルティナ「待って、ベグル！あなたは原因と思われる魔物の方に向かって！そいつなら何か知ってるはずよ！…ここは私達に任せて！」

ベグル「わかりました！お気をつけて！」

ベグルは外に向かっていく

ラース「マルティナ、君もベグルについて行くんだ」

マルティナ「駄目よ！ラースは今手負いななのよ。その体で満足に戦えるの？特にバン相手に」

ラース「それは…… 厳しいものがある。わかった。マルティナ、手伝ってくれ」

マルティナ「もちろんよ！」

バンが突撃してくる

ラース「バンの姿怖えな!!血だらけに傷だらけじゃねえか!その体でよく動けるな!」

バンのばくれつきやく!

マルティナ「くっ!流石ね。素早いわ。でも、ミラクルムーン!」

バン「……………」

バンが後ろに下がる

ダバン「……………」

ダバンがラースに向かって攻撃する

ラース「よつと！せいけんづき！」

ギバ「……………」

ギバが間髪入れずに攻撃する

ラース「ぐっ！ハアアア!!」ゾーンに入った　ちから　すばやさ
呪文の威力があがった

ラース「マルティナ、久しぶりに行くぞ！」

マルティナ「任せてちょうだい！さあ、避けれるかしら!!」

ラース「バギクロス！」

ラースが作り出した竜巻がバン達を囲む

マルティナ「ハアアア!!」

マルティナが竜巻に入り込み、風の力を纏った足で蹴りかかる

二人「竜巻旋風脚!!」

ドサドサドサ

バン達は吹き飛ばされ倒れていく

ラーズ「よし、悪いが気絶しててもらおう」

マルティナ「!?まだだわ!」

バンがラーズに向かって雷光一閃突きを繰り出した

ラーズ「グハア!!!」

マルティナ「ラーズ!!」

バンはマルティナに向かって氷結らんげきを繰り出した

マルティナ「キヤアツ!くつ、ハアアアア!!」マルティナはゾーンに入った すばやさ 魅力 会心率があがった

ラーズ「ぐつ……。けど、チャンスだ。よし!もういつちよ決めるか!」

ラーズは何とか立ち上がる

マルティナ「ええ!終わりにしましょう!」

マルティナがバンに向かい突撃し、攻撃を繰り出す

バン「……………」

バンはガードや回避をしていく

ライス「なら、これはどうだ？」

バンの後ろにライスが回り込み、攻撃をしていく

バン「……………」

バンは防ぎきれずどんどん攻撃に当たっていく

マルティナ「ライス、行くわよ！」

ライス「おう！」

二人「疾風双脚乱舞！」

バンを挟んで二人で息ぴったりに脚や腕で攻撃をする

二人「終わり！」

バンは倒れた

マルティナ「ふう、なんとかあったわね。ライス、大丈夫？」

ライス「ハア、ハア。きつつ……………。体力を削られすぎてる。休ま

せてくれ」

ラースは大の字でそのまま倒れ込んだ

マルティナ「肩の血もいい加減止めないと。応急処置だけど、服の切れ端使って。これで腕と結んで止めておくわ」

ラース「ありがとう、マルティナ。助かる」

マルティナ「ベグルは魔物を見つけたかしら？」

ラースとブレイブ

デルカダール地方

ベグル「光ってる魔物、か。今は夜になりかけている。見つけやすそうだが……。ん？あいつか!!確かに光ってやがる。しかも城と同じ光!」

ベグルはその魔物に向かっていく

魔物「♪♪……?ギツ!?ギイイー!」

魔物はベグルを見ると逃げていく

ベグル「あ!!あんにやろう、逃げる気か!待ちやがれ!」

デルカコスタ地方

ベグル「ハア、ハア。やっと追い詰めたぞ!」

魔物の後ろには山しかなく、逃げ場が無くなっていた

魔物「ギイイ……。ギイ〜」

ベグル「おい!その光ってるやつを止めろ!城の皆が大変な事になっただ!」

魔物「ギイ?」

シユン!

魔物の光は無くなった

ベグル「お、おお。思ってたより聞き分けがいいじゃねえか。これでもうその変なやつは効果が切れたんだよな?」

魔物「ギイ」コク

ベグル「よし。なら、もうすんなよ。こっちは大変だったんだからな。いいな?」

魔物「ギギイ!」

魔物は去っていった

ベグル「何だったんだ、あいつ。何がしたかったのかもわからねえ」

その頃、デルカダール城下町 広場

マルティナ「あ!見て、ラーズ!城が光らなくなったわ!きつとベグルが原因を見つけたのね」

ラーズ「おお、よかった。なら、皆も元に戻るだろうな」

兵士達「痛えー!!」

倒れていた兵士達から叫び声上がる

ラーズ「なんて言ったら起きたか。しかも何で痛がってんだよ」

ダバン「い、痛え。全身蹴られたみてえだ」

ロベルト「お、俺もだ」

ギバ「ラーズ將軍、マルティナ様！いくらなんでもやり過ぎですよ！」

マルティナ「あら？何があったか覚えてるの？」

マーズ「は、はい。意識はあつたんですけど、体だけ乗っ取られて言う事聞かなかったんです」

ガザル「だから俺達がラーズ將軍達を襲ったのはわかりますよ。ボコボコにされたのも」

ラーズ「そうだったのか。ま、まあやり過ぎたかもしれないが、正当防衛だと思ってくれ」

マルティナ「ごめんなさいね。帰ったら医療部屋に行きましよう」

ロベルト「お、おい、バン。生きてるか？ベグルにボコボコにされた上に、さらにマルティナ様達にまでボコボコにされたら？大丈夫か？」

バン「……………」

バンは白目を向いている

ギバ「あ！こいつ、死んでます！急いでザオラルかけてもらわないと！」

ラース「なるほど。バンが最初から傷だらけだったのはベグルによるものだったか。バンは俺が運ぼう」

デルカダール城 大広間

マルティナ達が戻ると、デルカダール王が飛び出してきた

デルカダール王「マルティナ!!すまなかつた!!体が言う事を聞かず、お主に斬りかかるとは。親としてあるまじき行為。誠に申し訳なかつた」

デルカダール王は土下座する勢いでマルティナに謝罪する

マルティナ「い、いいんですよ、お父様。私は平気でしたから顔を上げてください」

グレイグ「ラーズ、すまなかつた。よく避けてくれた。姫様に比べ
ると怪我が多いが、大丈夫か？」

ラーズ「少しキツいな。兵士達との戦闘で体力が削られ過ぎてな。
ブレイブはどうした？」

グレイグ「ブレイブなら………む？先程までいたのだがどこに
いった？」

ラーズ「真っ先に謝ってくると思つてたがどうしたんだろうな」

マルス「母さん!!ごめんなさい!当たってないよね？」

ルナ「お父さんも!ごめんなさい!」

マルティナ「大丈夫よ、マルス、ルナ」

ラーズ「そうだ、気にするなよ。お前達のせいじゃないからな」

ベグル「あ!皆!!元に戻ったのか!」

ベグルも城に戻ってきた

ガザル「おお！ベグル！お前も無事だったか！」

ギバ「ベグル、悪い！操られてたとはいえお前に攻撃しちまって！」

ロベルト「まさかお前に斬りかかる事になるとはな。避けてくれてよかった」

ベグル「お前ら覚えてるのか。体だけ操られてたんだな」

マルティナ「ベグル、お手柄ね。魔物は倒したのかしら？」

ベグル「いや、それがよくわからないんですよ。光ってる魔物はこの光を解いてくれた後、逃げていつて。悪い事しようとしてたようには見えなかったです」

リース「ふむ、そうなのか。まあ、今後調べていくとしよう。まずはお疲れ様だな」

ベグル「そうですね。ありがとうございます！お前ら、訓練場に来まってくれ。話がある」

マーズ「ベグルから？珍しいな」

ラース「ブレイブはどこにいったんだ？探さねえと」

玉座の間

ブレイブは隅で小さくなっていた

ラース「あ！見つけたぞ、ブレイブ！元に戻れたぞ。よかったな」

ブレイブ「ガ、ガウウウウ……」

ラース「お、おいおい、ブレイブ。どうしたんだよ、そんな泣きそ
うな声して」

マルティナ「ブレイブ？大丈夫？」

ブレイブ「ガウ！ガウ、ガウ！ガウウ!!」

ラース「…… あー、悪い。何言ってるのかわからねえ。マルティ
ナ、あの薬貸してくれ」

マルティナ「まあ、少しだけなら使いましょう」

ラース「ありがとな。ほら、ブレイブ、舐めるんだ」

ブレイブは急いで舐めた後、早口で喋り始めた

ブレイブ「…… ラース様!!この度は誠に申し訳ございませんでした!!我が主に本気で噛みつき、しかも怪我まで負わせるとは……。私はもうラース様に顔をお見せできません」

ブレイブは項垂れている

ラース「そ、そんなに落ち込んだのか。ブレイブ、大丈夫だぞ。このくらいの怪我、昔はよく作ってたさ。気にすんなよ。俺は平気だからな」

ブレイブ「で、ですが!!私は私自身を許せません!どうか罰でも指示でも何なりと!」

ラース「じゃあブレイブ、よく聞けよ。これは命令だからな」

ブレイブ「は!!」

ラース「この事は気にせず、前までと同じく過ごせ。俺達と一緒にな」

ブレイブ「……。そ、それではいけません!!そんな事で許されて

は

「ラース「ん？どうした、ブレイブ。俺の命令だぞ？従わなくていいのか？」」

ブレイブ「…………… わかりました。ありがとうございます」

ラース「よし」

マルティナ「ふふ、よかったわね、ブレイブ。そういえば、コロはどこにいったの？あの時から姿が見えないけど」

ブレイブ「息子は城がおかしくなったのを確認した時に、私がこちらのタンスに突っ込みました。被害を減らそうとしたのですが、あまり効果はありませんでしたね」

タンスを開けると

コロ「クア〜」

コロはあくびをしていた

マルティナ「あら、コロ。おはよう。寝てたの？」

コロ「グルグル」

マルティナはコロを撫でている

ラーズ「お前は平和そうだな。ハハ、よかったな。父ちゃんが守ってくれたもんな」

ブレイブ「ラーズ様、私は大した事はしてはけませんよ。それにしても、ラーズ様は私が噛み付いた時、よく私の言葉がわかりましたね」

マルティナ「え？何か言ってたの？」

ラーズ「いや、直接聞こえたわけじゃないさ。ただ、ブレイブが泣きながら俺に噛み付いていたからな。ブレイブが俺に噛みつくっただけでありえないからよ。それなら、操られてるって考えた方がいいだろ？王様もマルティナに斬りかかるっていうありえない事したみたいだしな」

マルティナ「そうね。私もそこで操られてるって考えたわ」

ラーズ「ブレイブは俺に噛みつきたくなくて必死に抵抗していたのに、噛み付いてしまって悔しかったんだろ？その気持ち、あの時涙となって現れた。お前の忠誠心が見れて俺は嬉しかったぞ」

ブレイブ「ラーズ様……。ありがとうございます。私の気持ちまで見透かされているとは」

ブレイブはラースに撫でられて少し嬉しそうにしている

ラース「さて、俺は腹減ったな。今日はいつもより多く食べようかな」

マルティナ「あれよりも多く食べるの!?!偶には控えてくれないのよ?」

ラース「それはまた今度からだな。思ってたよりも大変で疲れたんだ」

マルティナ「まあ、それはわかるわ。精神的に疲れたわよね。さて、夕食に行きましょう。ブレイブ、コロ、おいで」

ブレイブ「はい!」

コロ「キャン!」

その頃、訓練場

ロベルト「ベグル、話って何だ?」

ベグル「いいから。少し並べ」

全員「??」

ベグル「さて、まずは誰でもいいからこの事態に気づくべきだったんじゃないのか？」

マーズ「ぐ……。だが、かなり突然だったんだぞ。わかつたとしても難しかったと思うぞ」

ギバ「そうだけ。大体ベグルは何で普通だったんだよ。お前だって俺らと同じ条件だっただろ」

ベグル「俺はおそらく加護的なものがあつたからだな。まあ、この点は俺も深く言わねえ。俺自身も気づかなかつたからな。次だ。これが重要だ。ちよつとしたお願いがある」

ガザル「何だよ」

ダバン「な、なんだか嫌な予感が」

ベグル「お前ら、俺のサンドバッグになれ」

ベグルは笑顔で言った

全員「え……………」

ギバ「な、何言ってるんすか？ベグルさん。冗談キツイぞ」

マーズ「そ、その役目はバンだろ？俺達関係ないぞ」

ベグル「ああ？誰のせいでこんな傷負わなきゃならなかったんだ？」

ベグルは自分の体についている傷を指した

ダバン「それは俺達だけど、俺達の意味じゃねえ！」

ベグル「痛かったんだぞ。なあ？剣も槍もブーメランも魔法も飛んできて大変だったんだぜ」

ロベルト「そ、それは悪かった。だが、見逃してはくれないか？」

ベグル「悪いと思ってるなら俺のお願い聞けるよな？」

ガザル「ベグル、落ち着け。バンが怪我から治ったらバンにぶつけるんだ。な？駄目か？」

ベグル「それも悪くない。だが、今回はバンに傷付けられたのは最初だけだからな。他は全部お前らだ。こんな言葉があるよな？ やられたらやり返せってな」

ベグルは大剣を構える

全員「マジかよ……」

ギバ「お、俺達マルティナ様達にもうボコボコにされていて。あの、ベグル様。別の日にしてもらえませんか？」

マーズ「そう！俺なんてもう体が痛くてよう」

ベグル「ほう？それは大変だったな。なら、俺が今すぐ楽にしてやるよ」

マーズ「え……。いや、そういう意味じゃ」

ダバン「……皆、諦めろ。もうベグルは止まらねえ。腹括るぞ」

ベグル「さ、楽しませてもらうとするかな」

数時間後、ベグルにより訓練場は死屍累々となっていた

ベグル「ハア、スッキリした。さて、こいつら運んで帰るとする

か」

医療部屋

バン「何でベグル以外全員がここにいるんだよ」

全員「バン!!お前のせいで酷い目に遭ったんだぞ!!」

バン「何でだよ!!俺関係ねえだろ!」

コロの成長

数日後、デルカダール城下町

ラースはビル、マドリー、グリー、マヤと共に新しくお店となる場所へ来ていた

ラース「ここは前に店として開いていた場所だ。少し狭いかもしれんが、使えるようにしておいたからな。ここをお店として構えるといい」

ビル「おお！夢にまで見た本物の店……」

マドリー「本当にいいんですか？私達が……こんな人間みたいにしても」

ラース「魔物の姿になって襲ったりしない限りな。それをされたら流石にこつちもどうもできない。それが条件だ」

ビル「はい！絶対そんな事はしません。ラース様、本当にありがとうございます！」

マドリー「マルティナ様達にも感謝しきれません。本当にありがとうございます」

マヤ「いしし。よかったね、ビルさん、マドリーさん」

グリー「これから準備とか大変ですよ。僕も手伝います」

マヤ「あ！私も！」

ビル「ああ、二人もありがとな。これからもよろしく頼む」

マドリー「私達を嫌わなくてくれてありがとう。また一緒に頑張りますしょう」

マヤ「当たり前だよ。ビルさんもマドリーさんもめっちゃくちゃいい人だもん。協力しないわけないじゃん」

グリー「マヤさんの言う通りです。僕はお二人にたくさんお世話になりました。少しでもそのお礼ができれば嬉しいです」

ラース「それじゃあ、俺はこれで。何かあったら教えてくれ。マヤに伝えても大丈夫だぞ。じゃあな」

ビル「お店が開けるようになったら王様達に一番に連絡します！」

マドリー「楽しみにしててくださいねー」

ラース「ああ。待ってるぞ！」

その頃、デルカダール城 玉座の間

ルナ「お母さん、コロと遊んできていい？」

マルティナ「ええ、いいわよ。遠くに行かないでね」

ルナ「やった！コロ、行こう！」

コロ「キャン！」

グレイグ「マルスはどうしたのだ？一緒に行かないのか？」

ルナ「マルスは今日ロベルトさん達と特訓するんだって。だから今は訓練場でずっと剣振ってるよ」

グレイグ「ほう、そんな事を。わかった。気をつけて行くんだぞ」

ルナ「はい。行ってきますーす」

ブレイブ「……………」

ブレイブはルナを見ていたが、ついていこうとはしなかった

マルティナ「あらブレイブ、行かないの？前までならついて行つたのに」

ブレイブ「ガウ、ガウ」

グレイグ「………… よくわからないが大丈夫という事なのか」

ブレイブ「ガウ」コク

マルティナ「そう？まあ、ブレイブがそういうなら大丈夫かしら」

導きの教会周辺

コロ「キャン！キャン！」

コロは走り回っている

ルナ「アハハ！コロ、楽しい？」

コロ「キャン！」ペロペロ

コロはルナを舐めている

ルナ「アハハハ！くすぐったいよ、コロ」

数時間後

ルナ「コロー。そろそろ帰る？」

コロ「キャン！……！！?グルルル」

コロは突然威嚇し始めた

ルナ「え？コロ、どうしたの？そっちに何かいるの？」

コロが威嚇する先には遠いがスモーク達の姿があった

ルナ「あれって、スモークだっけ？ここら辺だと危ない魔物の種類
なはず。こんな近くまで来る事ってあったんだ」

コロ「ギャウ！ギャウ！」

コロはスモーク達に向かっていった

ルナ「え!?!コロ、駄目だよ！危ないよ！」

ルナも追いかける

ナプガーナ密林前

スモーク達は一匹の魔物に集まっていた

スモーク達「シユ〜」

きりかぶごぞう「ギユ………ギユ」

コロ「ギャウ!!」

スモーク達「!?!」

コロが一匹のスモークに噛み付いた

きりかぶごぞう「ギユ!!」

コロ「ガウ!!」

コロはスモークに引つかかるが、スモークに避けられてしまう

スモーク「シユー!」

スモーク達の煙がコロを包む

コロ「クウウ………」

ルナ「メラ！」

ボツ！

スモーク達「シュー！！」

スモーク達がコロから離れていく

コロ「キャン！」

ルナ「もう、コロ!!スモーク達は危ないのよ!襲ったりしたら駄目じゃない！」

コロ「ク、クウ〜ン」

きりかぶごぞう「ギユ!ギユギユ」

コロ「キャン！」

ルナ「あ、このきりかぶごぞうってたしかコロのお友達。………
そっか。友達を助けたの?ふふ、優しいじゃない、コロ。それなら仕方ないね」

スモーク達「シュー〜！」

スモーク達はまた向かってくる

コロ「ガウ!!」

ルナ「コロ!私も援助するから頑張って追い払おう!メラ!」

スモーク「シュー!」ジュワー

コロ「ガウ!」ガブ!

スモーク「シュー!」ジュワー

スモーク達「シュ……。シュ〜!」

スモーク達は森へ逃げていった

コロ「ギャン!ギャン!」

ルナ「やった!コロ、追い払えたよ!」

きりかぶこそぞう「ギユ!」

コロ「クウ?」

きりかぶごぞうはコロに自分のやくそくをあげた

コロ「キャン！」

ルナ「うふふ、きりかぶごぞうがお礼してるんだね。可愛い」

きりかぶごぞう「ギィ！」

きりかぶごぞうは手を振りながら去っていった

コロ「キャン！キャン！」

ルナ「よかったね、コロ。お友達助けられて。私達も帰ろっか」

その後、デルカダール城 玉座の間

ルナ「ただいま」

コロ「キャン！」

マルティナ「お帰りなさい、ルナ、コロ。楽しかった？」

ルナ「うん！今日、コロとスモーク達を追い払ったの！」

リース「スモーク達だと？危険な魔物だぞ。一体何をしていたんだ？」

ルナ「コロのお友達のきりかぶこそうがスモーク達に襲われてるのをコロが見つけて、コロが助けに行ったの。それを私もメラで助けたんだよ。危険な事してごめんなさい」

グレイグ「そういう事か。怪我はなかったか？」

ルナ「コロが少し煙に包まれてたけど、きりかぶこそうがお礼に自分のやくそうをあげてたから大丈夫だと思う」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブはコロの頭に手を置いた

コロ「クウ〜」

ブレイブ「ガウガウ」ペロペロ

コロ「グルグル」

その後、優しく舐めていた

ラーズ「ブレイブも心配したようだな」

マルティナ「問題なさそうね。よかったわ」

ルナ「コロ凄かったんだよ。いつもよりずっと早く走ってたし、毛も逆立って爪も伸びてたの！威嚇の仕方や鳴き方もブレイブみたいな感じだったよ」

グレイグ「ほう。確かに俺達はコロが戦う姿を見た事がないな。やはり、もうキラーパーンサーになりつつあるという事か」

ラーズ「出会った頃はあんなに小さかったのが随分大きくなったかな。ブレイブがいるからまだ小さく見えるが、ブレイブが大きいだけで普通のキラーパーンサーより小さいくらいな大きさだもんな」

マルティナ「コロ、今日は頑張ったみたいね。立派に成長しているみたいで素敵ね」

コロ「グルグル」

ルナ「コロはいつか今より大きくなったらどうするの？ブレイブと一緒にここには住れないの？」

ラース「まさか。そんな事したくないさ。コロも俺達の大事な家族の一人だからな」

グレイグ「ああ。だが、魔物の性としてはどうなのだ？コロは一度野生に戻した方がいいのか？」

ブレイブ「ガウ」フルフル

マルティナ「その必要はないみたいね。それなら安心だわ」

ルナ「よかったー。コロだけ離れ離れになっちゃったらどうしようと思っちゃった。コロ、これからも一緒だよ」

コロ「キャン！」

ラーズ、ダイエツト

二日後の夜、デルカダール城

マルティナとラーズの部屋

マルティナとラーズは寝る準備も終わり、寝ようとしていた

ラーズ「さて、そろそろ寝ようぜ」

マルティナ「うーん……………」

マルティナは首を傾げて悩んでいる

ラーズ「どうしたんだよ、マルティナ。何か悩み事か？」

マルティナ「……………。ねえ、ラーズ。鏡の前に立ってくれる？」

ラーズ「？別に構わないが」

ラーズは部屋にある姿見の前に立った

マルティナ「やっぱり見間違いではなさそうね」

ラーズ「どうしたんだよ、マルティナ。俺、何か変わったか？」

マルティナ「最近ラースに違和感を覚えてたのよ。性格とかじゃなくて、見た目にね。でも、多分間違いないわ。ラース、あなた太ったわよ」

ラース「ええ!? そ、そうか!? 特に変わってないと思うんだが」

マルティナ「私も気のせいだと思ってたんだけど、ほらここ」

マルティナはラースの脇腹を触る

すると、少し肉がつまめるようになっていた

ラース「げ……。マ、マジかよ。こんな事になったの初めてだぞ」

マルティナ「体重も増えてるはずよ。最後に測ったのはいつなの？」

ラース「…………… 二月ほど前」

ラースは少し目を逸らしている

マルティナ「ハア。ラース、ダイエットしましょう」

ラース「ああ。そうだな。また体動かす時間をくれないか? どこかでその分の埋め合わせするからよ」

マルティナ「そうね……でも、手っ取り早い方法があるわよ？」

ラース「そうなのか？」

マルティナ「食べる量を減ら」

ラース「嫌だ!!」

ラースはマルティナの言葉を遮る

マルティナ「でも、それが一番よ。少しの間我慢するだけ。どう？
少しだけやってみない？」

ラース「嫌だ!!」

ラースは考えるそぶりも見せなかった

マルティナ「わ、わかったわ。そこまで言うなら仕方ないわ。まあ、
ラースの楽しみだもんね。あまり強く言うのはかわいそうよね。明
日以降、夕方に少し自由時間あげるから訓練場で誰かと体動かしてい
て」

ラース「ああ。それがありがたい。早い所戻さないとな」

次の日の朝、キッチン

キッチンにはマルティナと数人のコック達がいた

マルティナ「おはよう。朝早くからお仕事ありがとうございます」

コック「おや？マルティナ様、おはようございます。どうかさされましたか？」

マルティナ「少しお願いがあるのだけどいいかしら」

コック「我々にですか。珍しいですね」

マルティナ「実は、ラーズが最近太ったから食事の内容を少し変えてほしくて」

コック「ほう！ついにラーズ様も太られましたか！あれだけ食べてずっとあの体型を維持してるのは圧巻の一言に尽きましたが、流石に厳しくなってきましたか。」

わかりました。今日の夜から早速ヘルシーな物に変えさせていただきます。ラーズ様専用で作った方がよろしいですか？」

マルティナ「いえ、私達も同じで大丈夫よ。違うのを食べてたら怪しまれちゃうわ。ラーズにこの事は秘密なの。きつと拗ねちゃうから」

コック「了解しました。ラーズ様は思われてて幸せ者ですね」

マルティナ「あら、ありがとう（ラーズ、ごめんなさいね。でも、あなたのためなの）」

朝食時

デルカダール王「何と!?ラーズが太ったのか!」

ラーズ「そ、そのようなんです。恥ずかしい限りですよ」

グレイグ「いや、寧ろ今までよく太らなかつたといった所だ。あれだけ食べているのにどうして太らないのか、と昔からずっと疑問に思っていたのだ」

マルス「父さん太ったの?変わってないと思うよ」

ルナ「私もそう思う。いつも通りじゃない?」

マルティナ「それがね、お腹に肉が付いてきたの。昨晚少し見たらそうだったのよ」

デルカダール王「なるほど。だが、その程度ならラースの食べる量からしても仕方ないのではないかの？」

ラース「ですが、前まではそんな事も無かったんですよ」

グレイグ「本当にどうなっているのだ、お前は。まあ、それなら夕方以降は俺が変わろう」

ラース「頼んだ、グレイグ」

その後、昼 玉座の間

カミュ「よう、ただいま」

カミュが帰ってきた

マルティナ「あら、カミュ。お帰りなさい」

カミュ「ん？マヤはどうしたんだ？」

ラース「マヤは最近ビル達のお店の開店に向けて手伝ってるんだ。そのまま店に泊まってるみたいだぜ」

カミュ「へえ。そこまで話が進んだのか。なら、後で少し顔出してくるかな」

グレイグ「カミュ、聞いてくれ。驚くべき事が起こったのだ」

カミュ「なんだよ、何かあったのか？」

グレイグ「何とついにラーズが太ったのだ」

カミュ「兄貴が……太った!!?マジかよ!!」

ラーズ「ぐ……。ああ、そうだよ」

カミュ「アハハハハハ!!」

カミュは腹を押さえて笑っている

ラーズ「何で笑ってんだよ!!」

カミュ「ハハハ!だ、だってよう。兄貴、いつも馬鹿みたいに食ってるからだろ。それがついに効果が出たかと思ってるな」

マルティナ「まあ、その通りよね」

ラース「くそ。馬鹿にしゃがって」

グレイグ「だから、ダイエツトを兼ねて夕方以降ラースには訓練場で少し動いてもらう事にしたのだ」

ラース「そうだ。いい所に帰ってきたな、カミュ。夕方付き合えよ」

カミュ「……………俺に拒否権はあるのか？」

ラース「ねえよ」

カミュ「早いけど俺、もう帰らせてもらうわ」

カミュは後ろを向いて出て行こうとする

ラース「ブレイブ、カミュを出させるなよ」

ブレイブ「……………ガウ」

ブレイブが扉の前に立ち塞がった

カミュ「チツ！そういうのはズルいだろうが！」

ラース「盗賊にズルいも何もねえだろ」

カミュ「何で俺なんだよ。バンとかでいいじゃねえか」

ラーズ「……………」

ラーズは少し黙っている

カミュ「どうしたんだよ。黙り込んで」

ラーズ「バンにはバレたくねえ」

マルティナ「あら。どうして？」

ラーズ「仮にも師匠だろ？面子がたたねえんだ」

カミュ「んなの最初からねえよ」

ラーズ「ほほう。カミュ、覚えてろよ」

カミュ「げ…………。マヤの所に行くとするか。ブレイブ、もうどいてくれ」

ブレイブ「ガウ」

その日の夕方 訓練場

ラースはカミュを引きずってやってきた

カミュ「やめろ!!俺は行きたくねえ!」

ラース「はいはい。お前に拒否権はないからな」

ギバ「ど、どうしたんですか?ラース將軍、カミュさん」

カミュ「ギバ!こいつから俺を離してくれ!」

ラース「少し体を動かしてきた。邪魔はしないからそっちでやって大丈夫だぞ」

ギバ「……………なるほど。大体はわかりました」

マーズ「カミュさん何かやらかしたんですか?」

カミュ「違え!こいつはダイ」ゴン!

カミュ「ガッ……」

「ラースはカミュを殴って黙らせた

ラース「さて、始めるぞ。カミュ」

ジール「今、カミュさん何て言おうとしてみましたか？」

マーズ「よくわからなかったな。まあ大した事じゃないんだろう」

一時間後

カミュ「ハッ……ハッ……。くそ……相変わらずやりにく
いっただらありやしねえ」

ラース「まあ、こんなもんか。カミュ、ジバリアもよく使うようにな
ってきたな。戦い方の幅が広がっていいじゃないか」

カミュ「全然通用しなかったくせに言われると腹立つな」

バン「あー!!師匠、いたんですか!?カミュさんも!」

バンが訓練場にやってきた

ラース「よう、バン。少しここ使ってたぞ」

バン「全然どうぞ！俺と久しぶりに手合わせしましょうよ！」

ラース「お、やるか？久しぶりだな」

カミュ「そーいや俺は見るの初めてだな。勝敗はいい勝負なんだっ
たか？」

バン「前は俺の負けでしたからね。今回は是非とも勝ちたいですよ
！」

ラース「本気出さないといけないからな。こつちも疲れるんだ。ま
あ、いい機会だ。やろうか」

カミュ「なら、俺はバンを応援するぜ。バン、兄貴なんかぶっ飛ば
してやれよ」

ラース「いや兄を応援しろよ」

カミュ「こんな横暴なやつ応援できるか」

バン「おーい、お前ら危ないから避難してろよ」

ギバ「お前ら、さっさと片付けろ。俺達も巻き添え喰らうぞ」

新入り達「えええ！」

新入り達は離れているからと安心していたが、巻き添えと聞き驚いている

マーズ「訓練場全体使うんだ。上に避難するぞ」

カミュ「結構大変なんだな。こりゃあ何度も出来ねえわけか」

ダイエツト2

一時間後

バン「はあっ！ふんっ！」

シャン！シャン！

バンの攻撃をラーズが剣で受け流す度に鈴のような音が鳴っている

ラーズ「……………んんん！」

ラーズはバンの僅かな隙を突く

バン「ぐうっ！ミラクルソード！」

シャン！

バンの抵抗の攻撃もラーズに受け流される

ラーズ「少し大振りだったんじゃないか？しんくうげり！」

バン「ぐわあっ!!」ドサ

バンは横に吹っ飛んでいった

ラーズ「よし！今回も俺の勝ちだな」

バン「くっそー！欲張りすぎた！」

カミュ「いや普通に凄いぞ、バン。俺はこいつになんとか流使う所までいかないからな」

ロベルト「鈴鳴流でしたっけ。久しぶりに見ましたけど、あれって対処どうすればいいんですか？」

ラース「バン、お前はどうしてるんだ？」

バン「あれって俺もどうしようもないから、師匠の集中が切れるまで攻撃し続けるしかないって俺は考えてます」

ラース「それもあるな。もう一ついい方法があるぞ」

ギバ「それって言うていいんですか？バンに使われますよ」

ラース「大丈夫だ。魔法相手にはほぼ使えないっていう弱点がある」

バン「魔法……って、俺魔法使えないですよー！」

ラース「だから大丈夫だって言っただろ。バンには無理だからな」

バン「くっそー！師匠の意地悪！カミュさん！師匠の弱点教えてく
ださい！」

カミュ「兄貴の弱点？……海か？」

ラース「それはそうだが、そういう事じゃないだろ。バンの言っ
てる事は」

バン「他にはありませんか！」

カミュ「あー……。兄貴が予想出来ない事とか、意表を突いた
事とかじゃないか？」

バン「前にグレイグ將軍も似た事言っていました。師匠って隙ないん
ですか？」

カミュ「お！あるじゃないか！決定的なものが！」

ラース「おい、何思いついた。変な事言うなよ」

バン「カミュさん、教えてください」

カミュ「兄貴はこう見えてくすぐりに弱」

ラース「メラガイアー！」

巨大な炎の塊をカミュにぶつけた

カミュ「ギャアアア!! 熱い!! 燃えてる!!」

バン「うわあああ!! 俺にまで引火した！」

隣にいたバンまで火がついた

ジール「お二人ともお水です！」

それを見たジールが急いで水を持ってきた

バシヤアア!

バン「ジール、助かった。ありがとな」

バンは大した事なかったが、カミュは全体的に黒くなっている

カミュ「何しやがる、ラース! って、あ……………」

ラース「カミュ? 旅の時にそれは絶対に言うなと言ったよな? 覚悟

はいいな」

ラースはカミュに殺気を出している

カミュ「待て、兄貴！謝る！謝るから……ギヤアアア!!」

バン「き、聞かなかった事にしようかな」

マーズ「まあ、忘れた方がよさそうだな」

バン「（一応ノートに書いておこう）」

夕食時

マルティナ「あら？カミュはどうしたの？」

ラース「今蘇生してもらってるぜ。人の約束破って秘密を喋ったからな」

グレイグ「なるほど。先程の絶叫はそれだったか」

デルカダール王「気のせいかな。いつもと味が違うような気がするのだが」

ラース「そうですか？まあ、言われてみれば薄い気がしますけど」

マルティナ「いいじゃない、健康的で。丁度ラースのためにもなるわ」

グレイグ「それなら量を減らした方が早いのでは？」

ラース「それは絶対嫌だ。美味しいものをたくさん食べれないなんて、俺にとって最悪な出来事だからな」

デルカダール王「ここのご飯はコック達のおかげでいつも美味しいからな。わしもその気持ちはよくわかるぞ」

マルティナ「という感じでラースが嫌がるからそれはしてないの」

グレイグ「しかし、見た目は大して変わっていないのだがな」

ラース「まあ、それは体質的な問題かもしれないな」

その後、浴場

マルス「カミュ、大丈夫？」

カミュ「酷え目にあつた……」

ラース「人の秘密話すからだ。自業自得だ。ほら、グレイグ見ろよ。ここ」

グレイグ「む、確かに肉がついているな。だが、これくらいなら気にする事ないので？」

カミュ「本当だぜ。太つたに入らないんじやねえのか？」

マルス「父さんほぼ変わらないよ。気にしすぎじやない？」

ラース「油断してるとすぐ太るってマルティナに言われたからな。これくらいの時から始めた方がいいらしい。そのおかげで量も減らしてないしな」

グレイグ「なるほど。確かに大掛かりでやる必要はなさそうだな」

カミュ「訓練場以外では何かやってんのか？」

ラース「筋トレはいつもしてたんだが、最近は魔導書読んで二週間ほどしてなかったんだ。その怠けもあるかもしれないな」

マルス「あ、ルナと一緒に読んでたもんね。僕も偶には読もうかな」

グレイグ「どうせなら、少しいつもと違う事をしてみてはどうだ？」

ラーズ「というと？」

グレイグ「ラーズは前に馬にも乗っていただろう？最近ブレイブになったが、偶には乗馬をやってみたらどうだ？」

カミュ「旅の頃は確かにそうだったな。ブラック杯でビリだったのも覚えてるぜ」

ラーズ「余計な事思い出すな。だが、確かに久しく馬には乗ってないな。やってみるか」

グレイグ「なら、リタリフォンを貸そう。大人しいから久しぶりでも大丈夫なはずだ」

ラーズ「リタリフォンか。いいの？グレイグのお気に入りだろ？」

グレイグ「別に下手に扱わなきゃ構わない。それは心配いらないだ

ろうしな」

ラーズ「流石にな。なら、ありがたく借りるぜ」

マルス「あ！父さん、僕もバンさん達に馬の乗り方教わったの！見せてあげる！」

ラーズ「おお、それは楽しみだな。一緒にやろうか」

マルティナとラーズの部屋

ラーズ「先にあがってたか、マルティナ。長風呂しすぎたか」

マルティナ「私もたった今戻った所よ。マルスは寝た？」

ラーズ「まだ少し元気だったからな。もう少し部屋で起きてるんじゃないか？」

マルティナ「また筋トレするのかしら？二週間くらい前はやってたわよね？最近は魔道書だったけど」

ラーズ「ああ、怠けていたらこの様だったからな。それとマルティナ。俺に隠してる事あるだろ」

マルティナ「あら何かしら、突然」

ライス「隠したって無駄だぞ。こっちは気づいてんだ、食事が変わった事に」

マルティナ「……ふう。ライスに隠し事って難しいわね。どうしてわかったの？」

ライス「王様も言ってたな。味が薄い気がするって。食事の中身は日替わりといえど、味付けが変わる事はほとんどない。それなのに肉やスープにたれや塩分が抑えられていた。

タイミングも偶然が過ぎるな。ご飯も穀物が混ざっているやつでデザートも野菜のゼリー。前に一度出た事あったくらいで数年出ていなかったものだ」

マルティナ「ライスって思ってたより食事内容見てるのね。恐れ入ったわ。ごめんね、ライス。でも、栄養があるのは事実だしたくさん食べれて美味しかったでしょ？」

ライス「まあな。これでマルティナが俺に事前に言ってくれていたら文句なしだったんだがな」

マルティナ「あら、それはごめんなさい。ライスは拗ねちゃうかと

思っ

「ラース「そこまで子どもだと思われてたのかよ」

マルティナ「子どもだと思ってるわけじゃないけど、偶に可愛いとは思わね」

「ラース「また……。男に可愛いって言われても嬉しくないからな」

マルティナ「うふふ、ごめんなさい。でも、どうしてもそう思っちゃうの。我慢してね」

「ラース「まあいいけどよ。あまり人前で言わないでくれよ」

マルティナ「それはわかってるわ。それと、バンがラースの弱点教えてくださって聞きに来たわ。今日勝負して勝ったんですってね。よかったじゃない、二連勝よ」

「ラース「バンのやつ誰彼構わず聞いてるな。そんなに勝ちたいのかよ」

「マルティナ「だから少しだけ教えてあげたわ」

ラース「げ、マジかよ。何言っただ？」

マルティナ「秘密よ。バンが次こそ勝つって意気込んでたわ」

ラース「怖いな。なあ、何教えただよ。くすぐりの事か？」

マルティナ「いいえ、それじゃないわ。戦闘面での事よ」

ラース「な、なんだ……？自分じゃ気づいていない事か？マルティナ、教えてくれよー」

マルティナ「駄目。筋トレも終わったみたいね。さあ、寝ましょう」

ラース「うぐぐ……。気になる」

乗馬

次の日の昼 デルカダール地方

ラーズはリタリフォンに乗り、乗馬の練習をしていた

ラーズ「よろしくな、リタリフォン」

リタリフォン「ブルルウ」

近くではカミュとブレイブがそれを見ていた

カミュ「リタリフォンといえはおっさんのイメージがあるからな。兄貴が乗っていると違和感あるぜ」

ラーズ「確かにそうだろうな。まあ今だけだ。リタリフォン、少し歩いてみようか」

リタリフォン「ブルウ」

ブレイブ「……ガウ」

カミュ「で？ブレイブはどうして来たんだよ」

ブレイブ「……ガウ」

ブレイブはラーズ達から目をそらす

カミュ「……………ハハーン、さてはお前。兄貴が自分に乗ってくれないのが嫌なんだな？」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブはカミュに吠えた

カミュ「はいはい、怒るなよ。事実って認めてるもんだぞ。安心しろよ。兄貴はお前に乗りたくなくなったわけじゃないからな。偶にはああやっておかないと体が忘れてしまうんだ。人間ってのは忘れやすいからな。」

それでも馬よりお前に乗るはずだぜ。兄貴は随分気に入ってるみたいだからな。なあ、俺も乗ってみてもいいか？」

ブレイブ「……………ガウ」

ブレイブは伏せて、カミュを乗せた

カミュ「よつと、ありがとよ。結構速いらしいな。掴まっただけいいんだな」

ブレイブ「ガウ！」ダツ！

カミュ「うお!!思ってたより速え!でも、馬よりバランス取りやすいな。こりやあいいぜ!」

ラース「お、カミュ、ブレイブに乗せてもらったのか。どうだ?ブレイブの乗り心地は。かなりいいだろ?」

カミュ「ああ、疾走感もあつて気持ちいいな。ブレイブ、もう少し走って大丈夫だぜ。俺の事は心配しないでいいから、お前の好きなように走れよ」

ブレイブ「ガウ!」ダツ!

ブレイブはスピードを上げて走っていった

ラース「森に入る事もあるから木に気を付けろよー……聞こえてないか。リタリフォン、俺達も少し走ってみるか。俺も感覚取り戻して来たからよ」

リタリフォン「ブルルウ!」タツ!

夕方、デルカダール城下町

カミュ「ありがとな、ブレイブ。シロとはまた違う乗り心地だったぜ」

ブレイブ「ガウ」

ラーズ「そうか。やたら慣れていると思ったがシロがいたからか。久しく顔見てないな。時間取ればまた見たいんだがな」

カミュ「マルス達も最近来てないからな。こっちに連れて来れりゃあいいんだが、そうもいかないからよ。また誘っても大丈夫か？」

ラーズ「そうしてくれるとありがたい。マルス達も喜ぶからな」

城に戻ろうとしていると、マヤとグリーがやってきた

マヤ「あ！兄貴、兄ちゃん！二人とも今戻ってる所？」

グリー「こんばんは、ラーズさん、カミュさん」

カミュ「おお、マヤ、グリー。どうした？」

マヤ「私も今城に戻ろうとしてたの。兄貴が帰ってきたなら、私もお城にいた方がいいかなって思ってたさ」

カミュ「んな事気にしなくてもいいぜ。お店の準備大変なんだろう？」

グリー「今日はそこまで忙しくなかったですし、明日も床やテーブルの色塗りなので楽ですよ」

ラース「なるほど。だが、見た目や色合いは第一印象として重要だからな。楽とはいえ気は抜けないな」

マヤ「あ！兄ちゃん、兄貴から聞いたよ。太ったんだって？兄ちゃんは太らないと思ってたのについて太っちゃったんだね。見た目は…… 変わってないけど」

グリー「え？そうだったんですか。太ったようには見えませんがね」

カミュ「太ったっていつでも少し腹に肉がついた程度だったぜ。まあ、油断大敵らしいから少しダイエットしてるらしいぜ」

マヤ「確かに…… 私もメダ女で太った時あったけど凄い速度で体重増えたもん」

グリー「マヤさん、それって言って大丈夫なの？」

グリーは少し苦笑いしている

マヤ「あ……。今の忘れて！別に昔の事だから！今は大丈夫だから！」

マヤは少し焦って訂正している

ラース「マヤは今くらいでちょうどいいんじゃないか？」

カミュ「そうだな。子どもの頃に比べれば充分だ」

マヤ「あ、グリーンさん。私はここで兄貴達と帰るから大丈夫。いつもありがとう」

グリーン「そうだね。それじゃあマヤさん、また明日」

マヤ「じゃあねー」

夕食時

マヤ「え！兄貴もブレイブに乗ったの!?!どうだった？気持ちよかったですよね！」

カミュ「ああ、兄貴がハマる理由もわかったぜ。シロよりガツシリしてて最高だったな」

デルカダール王「シロか。懐かしいのう。わしも会いに行きたいのじゃが」

グレイグ「写真とかはあるのか？カミュ」

カミュ「少しだけならあるぜ。前に近くのメイジももんじやと遊んでた時のやつだ。ベロニカが撮ってくれたんだ」

カミュは一枚の写真を見せる

そこにはシロとメイジももんじやがお互い雪の中で転がっているのが写っていた

ルナ「可愛い！じゃれてるのかな？」

マルス「シロ大きくなった？」

カミュ「マルス達も久しく会ってないもんな。前より大きくなったぜ。もう大人のホワイトパンサーも変わらないな」

ルナ「私また行きたい！カミュさん、連れてって！」

マルス「僕も！また乗せてもらいたい！」

カミュ「マルティナ、王様、大丈夫ですか？」

デルカダール王「わしは構わんぞ」

マルティナ「私も大丈夫よ。二人ともカミュの言う事ちゃんと聞いてね」

二人「うん！」

デルカダール王「そういえばラースよ、あの件はどうなった？」

ラース「予約は取れましたよ。本人も張り切っているみたいです」

マヤ「あの件？何かあるの？」

グレイグ「そういえばマヤとカミュは知らなかったな。あと一月後にはデルカダール王国生誕祭が開催されるのだ。国を挙げての大きな祭りになるんだ」

カミュ「ああ。五年周期で開かれるやつか。毎回人が物凄い集まるもんな」

ラース「こつちももう色々と準備は進めてるんだ。マヤ達も楽しんでいってくれよな」

マルティナ「マルス達も久しぶりよね。前の時の事は覚えてるかしら？」

マルス「うーん、何となくかな」

ルナ「私は忘れたかも。何したっけ？」

デルカダール王「わしも毎回楽しみにしておるんじや。民達も目一杯はしゃいでもらいたい」

マヤ「いしし。とっても楽しそう。楽しみにしてるね」

ジェーンの夢、完成

それから二週間後、聖地ラムダ 広場

ジェーン「どうですか？長老様」

ジェーンは初めて自分で作った世界の遺跡や歴史などが載った本を長老フアナードに見せていた

長老「ふむふむ……。実によく纏まっていると思いますよ。各地の歴史などを、写真や文章でわかりやすく説明してあり大変読みやすいです。ジェーン、よく頑張りましたね」

ジェーン「やったー！じゃあこの本出していいですか？」

長老「はい。ジェーンの好きにしていきたいと思いますよ」

ジェーン「ありがとうございます、長老様！ここまでできたのも長老様が手伝ってくれたおかげです！」

長老「いやいや、私はほんのお手伝いに過ぎないですよ。ジェーンが諦めなかったから成し得たのです」

ジェーン「早速皆に報告しなきゃ！ミラとダバンさん、ベグル君にお母さん達にも！長老様、それではー」

長老「これこれ、そう急がんでもええじやろ。ほれ、キメラの翼じゃ。わしのをあげるからこれでデルカダールに行くといい。気を付けるんじやぞ」

ジェーン「わあ！ありがとうございますー！」

デルカダール城下町　ダバンとミラの家

コンコン

ミラ「あら？誰かしら。はい」

ガチャ

ジェーン「ミラ！」

ミラ「ジェーン！どうしたの？急に。あら？その手に持つてるのは」

ジェーン「ふふふ、ついに完成したの！私の夢の本!!さつき長老様にも見てもらってお墨付きなんだよー！」

ミラ「へえ！やったじやない、ジェーン！私にも読ませて」

ジェーン「もちろん！ミラと見た場所だつてたくさんあるんだか

ら。ほら、クレイモランの事とかユグノア周辺の事とか」

ミラ「懐かしいわね。二人で何とか頑張ってた頃よね。魔物とかに出会わないように細心の注意を払ってたわよね」

ジェーン「確かに。私が転んで、その音で魔物が向かってきて大変だった事もあったよね」

ミラ「ふふ、そうそう。その後二人で全力で逃げたわよね。あの頃はダバン達がいなくて本当大変だったけど、あれはあれで楽しかったわ。」

でも、ダバン達に出会ってからは魔物がいても守ってくれるからありがたかったわよね」

ジェーン「ベグル君達はお城にいるかな」

ミラ「ダバンは特に遠征とかは無いつて言ってたわ。ベグルさんは副長だし、忙しいからどうかしら。ジェーンが来たつて言えばベグルさんならすぐ飛んできそうだけど」

ジェーン「それはミラもでしょ。私に何かあるとすぐに来てくれるじゃない」

ミラ「当たり前じゃない。ジェーンは目が離せないんだから」

ジェーン「ふふ、ありがとう」

ミラ「褒めてないのよ？それにしても中々いい出来じゃない。各地の料理の事も書かれててガイドブックにもなりそうね」

ジェーン「そう！そこ載せようか悩んだんだけど、文化的な料理もあつたから載せてみたの。一応こだわってみたよ」

ミラ「ドウルダ郷の精進料理とかナギムナー村の魚の頭とかかなり個性的だったわよね。さて、そろそろベグルさんに見せてきたら？」

ジェーン「うん、そうだね。お城に行ってくる」

デルカダール城 大広間

ジェーンがお城に行くと、大広間にはマルスとルナが遊んでいた

マルス「あれ？お客さん？お姉さん、お城に用事？」

ルナ「見た事あるような……」

ジェーン「わわ、子どもがいる。もしかして、話に聞いているラーズ

様達の子？」

マルス「父さんの知り合いなの？父さんは今お仕事してるよ」

ジェーン「ううん、ラーズ様は違うの。兵士さんに用事があったのよ。ベグルさんって知ってる？」

ルナ「ベグルさんなら訓練場だよ。今は個人練習だっけ？」

マルス「そうそう。ベグルさんはよく残って夕方くらいまで練習してる」

ジェーン「そうなんだ。ふふ、ベグル君は頑張り屋さんだからね。教えてくれてありがとう。じゃあね〜」

ルナ「ばいばい」

訓練場

ベグル「はあっ！おりゃあ！」

ベグルは槍を使い、人形相手に立ち回っていた

ジェーン「あ、頑張ってる。まだ気付いてない。ふふ、少し驚かせちゃおうかな」

ジェーンは静かに階段を降りて広場に出た

ギバ「……ん?……!？」

近くにいたギバとジェーンの目が合った

ジェーン「あ!見つかっちゃった!シート!シート!」

ジェーンは口到人差し指を当て、ギバに驚かないようお願いした

ギバ「(ジェーンさん、駄目だ!)」

ギバは顔を振って止めさせようとするが、ジェーンに伝わらない

ジェーンはベグルの背後の近くまで来た

ベグル「はあっ!……いや、これだと槍より斧の立ち回りか。もう少し距離詰めないとな」

ジェーン「よし、そろそろ」

ブン!

チャキ

ベグルは突然後ろに槍を振り回し、首筋に当てた

ベグル「誰だ」

ジェーン「ひえっ……」

ベグル「!!!ジエ、ジェーン!!?わ、悪い!!」

ベグルは急いで槍を離す

ジェーン「びっ、びつくりした……」

ベグル「背後にゆつくりと近づいてくるから誰だと思ったらジェーンだったとは……。怪我してないか?怖かったか?」

ジェーン「う、うん。怪我はしてないよ。少し怖かったけど」

ベグル「すまない!ジェーン!おい、ギバ!てめえ、ジェーンが来てたなら言えよ!」

ギバ「いや止めようとしたんだが、ジェーンさんに止められたんだ。ベグルには効かないからやめとけてって意味で首振ってたんだがよ」

ジェーン「あ、そういう事だったんですか。私に驚いてるのかと思いました」

ベグル「ジェーン、心臓に悪いから次はあまりしないでくれ」

ジェーン「う、うん。私も驚かされちゃったからやめとくよ。それより見てこれ！私の夢の本がっいに出来上がったの！」

ベグル「おお！ついに！やったじゃないか、ジェーン！見てもいいか？」

ジェーン「もちろん。そのために来たんだよ。ギバさんもよかったら見てください。クレイモランの事も書いてありますよ」

ギバ「おお、そうなのか。興味あるな。見させてもらおうかな」

ベグル「クレイモランやユグノアは俺とは行ってないよな。ミラさんと行ってた頃の事か」

ジェーン「そうそう。さつきミラにも見せて、あの頃は大変だったけど楽しかったねって話してたんだ」

ギバ「お、料理についても書かれてんのか。クレイモラン海鮮盛り食べたのか。美味かっただろ」

ジェーン「はい！いろんな種類が乗ってて味も飽きないし、食べ応えもあって美味しかったですよ。特にあの大きなウニが美味しかった

たです。ジャンボウニですよね」

ギバ「そうだろう？あれはクレイモランの特産品だからな。他の国からも大人気なんだぜ」

ベグル「国周辺事にページが分かれてて見やすいな。どの国を見たのかすぐに調べられるな」

ジェーン「やっぱりその方がいいよね！私も一度作った時ごちゃごちゃしてたから、やり直してこの形にしたの。見やすくなったよね」

ギバ「結構考えられてるんだな。いいじゃないか。俺も勉強になるぜ」

ジェーン「ありがとうございますー！」

ベグル「俺もとってもいい出来だと思うぞ。ジェーン、よく頑張ったな」

ジェーン「うん。後は出版するだけだね。ベグル君、お待たせしてごめんね」

ベグル「いや、これでいいんだ。すっきりした気持ちで先に進める

だろ」

ジエーン「うん！」

ギバ「わざわざ来てくれたんだ。少しゆっくりしていつてくれ。お、ベグル！お前の部屋に案内してやれよ。そこならゆっくりできるだろ」

ジエーン「え!?!ベグル君の部屋があるの！凄い！」

ベグル「副長になってから馬鹿のせいもあって仕事が多くなってな。それで作ってもらったんだ。俺の部屋か。まあ、そこなら……!!いや、待ってくれ。少し片付ける」

ジエーン「散らかってても気にしないよう？」

ギバ「いや、こいつの部屋は散らかっては……。お前、まさか!!」

ベグル「うるせえ!!ギバ、取り敢えず大広間で待たせていてくれ！」

ベグルは走って訓練場から出ていった

ジエーン「え?どういう事?」

ギバ「気にしないでくれ、ジエーンさん。大広間にマルス達がいるはずだ。一緒に遊んでようぜ」

ジエーン「あ、ここに来た時訓練場にベグル君がいる事教えてもらったんです。可愛くていい子達でしたね」

ベグルの部屋

ベグル「やべえ、やべえ。急いで昨日の飲みの跡とかその他もろもろを隠さないと。くっ！この書類は後でバンに押し付けておくか」

ベグルは大急ぎで部屋の掃除をしていた

ジェーンの夢2

数十分後、ベグルの部屋

ジェーン「ここがベグル君の部屋なんだ。こんなに綺麗なら掃除しなくてもよかつたんじゃないの？」

ベグル「い、いや、それはあれだ。内部機密な書類とかあつてな。部外者に見られるのはまずいと思つてよ」

ベグルは少し焦つたように言っている

ジェーン「そつか。それは確かにそうだね。私が見てもわかんないだろうけど見られたつて知られたらベグル君が大変だもんね。あ、本が結構色々あるんだね」

ジェーンは本棚にある本を見ている

ベグル「多少はな。最近忙しいからあまり読む時間もないんだけどよ」

ジェーン「流石兵士さんだね。剣とか戦術の本ばかりだ」

ベグル「数年前に読んでたんだ。知識もある程度はないとやっていけないからな。何か飲み物持つてくるから椅子に座つててくれ。気になるなら読んでもいいぞ？」

ジェーン「ありがとう。じゃあ少し読んでみようかな」

ボタン

ジェーン「…………… あら？ここに本って結婚式のやつ？もしかしてベグル君、調べてくれてたのかな」

数分後

ベグル「待たせたな。クッキーもあつたからそれも持ってきた。コーヒーと紅茶どっちがいい？」

ジェーン「じゃあ紅茶にしようかな。ねえ、ベグル君。この結婚式のやつって調べてたの？」

ベグル「あ!!見つけたのか。恥ずかしいな」

ジェーン「やっぱり。少しフセンもあつたからもしかしてって思ったの。この式場素敵ね。ソルティコ海が一望できてとっても綺麗」

ベグル「気に入ってくれたか？そこが俺も綺麗だなんて気に入ってたんだ。事前に調べて色々知っておいた方が今後に役立つと思ってるな」

ジェーン「ドレスとかも載ってるわ…………… 私に似合うかな」

ベグル「大丈夫だ。何だってジエーンなら似合うさ」

ジエーン「そうかな？ありがとう。私、本もこうやって出せだし、後はベグル君と結婚するだけ。そうしたら私の夢は全部叶うわ。もうこんなすぐ近くまで来てたのね」

ベグル「だな。もうここまで来たなら全部叶うのはあつという間だな。準備は任せろよ。俺がジエーンを一番綺麗にするからな」

ジエーン「ベグル君、恥ずかしいよ。それに準備は私も手伝うわ。ベグル君は忙しいのにそんな面倒かけられないもの」

ベグル「面倒？ハハハ！ジエーン、こんなの面倒なわけあるものか。寧ろ俺もとっても楽しみにしてるんだ。どんな忙しくても必ず俺も手伝うぜ」

ジエーン「ベグル君…」

ベグル「ジエーンからなんて珍しいな」

ジエーンとベグルがキスをしようとした瞬間

バタン！

バン「おーい、ベグル！暇なら俺と組み手……」

ベグル「……………」

ジエーン「キヤアツ！ビ、ビックリした」

バンが突然入ってきて二人の顔が離れた

バン「あ…………。す、すみません…………」

バンも流石に間が悪かったと思って謝っている

ベグル「ジエーン、馬鹿が驚かせてすまない。俺はこいつと少し話があるからクツキー食べて待っててくれ。俺の分も食べて大丈夫だからな」

ジエーン「そ、そうなの？わかった。ドレスとか見てるわね」

バン「やべ！死神が来る！逃げなきゃ!!」ダツ！

バンは猛スピードで逃げていった

ベグル「逃すか!!」ダツ！

ベグルも負けじと追いかける

大広間

ギバ「コロ、取ってこーい！」

コロ「キャン！」

マルス「ギバさん、次僕ね！」

ルナ「あ！ちゃんとボール持ってきた。コロ偉ーい」

バン「死ぬーー!!!」ダツ！

バンが階段から凄いスピードで駆け下りてきた

ギバ「ん？バン、どうした？」

ベグル「ギバ!!そいつ取り押さえろ!!さもないとてめえも殺すぞ!!」

バンの後ろにはベグルが鬼のような形相で迫っている

ギバ「ええ!!?理不尽すぎるだろ!!バン、止まれ!!」

ギバはバンに足払いをかけた

バン「ギャツ！ギバ！今は本気で冗談やってる場合じゃねえんだ！俺の命がかかって」ガシ

バンの肩をベグルが掴む

ベグル「おい、バン」

バン「ヒイツ!!」

ギバ「悪い、バン。コロ達連れて先に逃げておこう」

ギバはコロ達と共に外に出ていった

ベグル「てめえ、よくもジェーンとのキスを邪魔してくれたな。前々からノックも無しに入るなどあれほど注意していたというのに」

バン「申し訳ございません!!まさかジェーンさんがいるとは思ってなかったんです!!どうか!どうかお慈悲を!!」

バンは泣きそうになりながら土下座をしている

ベグル「この際丁度いい。そんなに物事が覚えられねえなら、二度と忘れられねえように骨に刻んでやるよ。どうやら俺と組み手がしたかったようだしなあ?」

ベグルはバンを引きずっていく

バン「い、嫌だ!!ギバ!た、助け……………いねえ!」

ベグル「ジェーンが待ってるんでな。手っ取り早く終わらせてやろう」

一時間後、ベグルの部屋

ベグル「悪い、時間かかった。あ……………」

ジェーン「スウ………… スウ…………」

ジェーンはベグルのベッドで寝ていた

ベグル「待たせすぎだな。仕方ないか…………… この状況どうすればいいんだ？ 起こすのも…………… 可愛い。ハッ！ 違い、違い。まあ、このままにしておくか」

夕方

ジェーン「ん…………… あれ…………… ここって」

ベグル「お、起きたかジェーン。おはよう」

ジェーン「あ!!ご、ごめんね、ベグル君！ ちょっとウトウトしちゃって！」

ジェーンは焦ったように飛び起きた

ベグル「ハハ、気にすんな。疲れたんだもんな。待たせて悪かった」

ジエーン「お話はしてきたんだね。あれ？今何時？」

ベグル「夕方過ぎそうだな。夕飯はどうする？どうせなら城で食べていっても大丈夫だぞ」

ジエーン「お城のご飯!?興味あるけど流石にそこまでお世話になるわけにはいかないよ。ラムダに帰って食べるよ。ごめんね、ベグル君。寝ちやって落ち着かなかったよね」

ベグル「そんな事ないさ。ジエーンが休めたんなら俺はそれで充分だ。またいつでも来てくれよな」

ジエーン「ありがとう」

その頃、医療部屋

ラーズ「バンが大怪我!?しかも魔物に襲われたのかもしれない!」

医者「はい。酷いやられ方でしたよ。切り傷だらけでしたので刀のような魔物かと。バンさんが魔物にここまでやられるのも珍しいですな」

ラーズ「……………切り傷?少し見てもいいか?」

医者「は、はい。構いませんよ。血がつくかもしれませんがラース様なら大丈夫ですね」

運ばれたバンをラースが確認すると

ラース「……………いや、魔物では無さそうですね。また恒例のじゃれあいみたいです」

医者「ふえ。そうでしたか？いつもとは違うやられ方ですし、あまりにも傷が酷いので私はてっきり魔物との戦闘のものかと」

ラース「まあ確かに。中々凄惨だもんな」

ラースもバンの姿に冷や汗をかいている

医者「どちらにせよこの怪我ですと蘇生した後も数日安静にしてない事です。骨も折れているので」

ラース「わかった。いつもすまないな、ドクター」

医者「いえいえ、お気になさらないでください」

ラース「(全く、副長は怖いもんだな。何があったのか聞いておくか)」

その後、ベグルの部屋

ベグル「え？あの馬鹿ですか？聞いてください、レース將軍！今日ここで俺とジェーンが折角キスしようとしたのに、そこにあいつが突然入ってきて台無しになったんです！」

レース「ハ、ハハ。なるほど、そういう事か。それで後はいつも通りと」

ベグル「周りに止められたのであの程度で止めましたが、俺としてはまだまだ足りなかったです」

レース「あれでまだ足りないのかよ。バンの体いくつあっても足りないぞ。まあ事情はわかった。そんな事されたら俺もおそらく同じ事するだろうからな。ジェーンさんは何でここに？」

ベグル「今日ジェーンが夢である本が遂に完成して、それを見せて来てくれたんです。後は出版するだけみたいです」

レース「おお！ついにか！という事は、ベグルも結婚だなー！」

レースは嬉しそうにベグルの背中を叩いている

ベグル「へへ、そういう事です。少し式場とかの話もしたんですよ」

ラース「いやーよかったな、ベグル。スーツ姿期待してるからな。
ジェーンさんの事幸せにしてやれよ」

ベグル「もちろんですよ、ラース將軍」

生誕祭

一月後、デルカダール城下町

城下町は至る所に飾り付けがされており、国全体が華やかな雰囲気となっていた。屋根の間には旗が重なっていたり、道には花がたくさん咲いている

出店も数え切れないほどあり、風船を子ども達に配っていたり、ピエロのような人が行き交う人達を楽しませていた。住民達も綺麗な格好をして踊ったりして楽しんでいる

ジェーンとベロニカとセーニヤもまた、ドレスを着て街を歩いていた。ジェーンは黄色を基調としながら所々にオレンジ色の線が入ったドレス。ベロニカは赤と白のドレス、セーニヤは緑と白のドレスで二人で色違いとなっている

ジェーン「わり、凄い!! 雰囲気全然違う。凄く楽しそう。セーニヤ達は前にも来た事あるんだっけ?」

セーニヤ「私達もこのお祭りは久しぶりですわ。前は五年前ですからね。ジェーン様は初めてなんですよね」

ジェーン「そうなの。お祭り自体は知ってたんだけど、どうしても行く機会が無くて」

ベロニカ「普通ラムダからここまで来るなんて考えにくいからね。仕方ないわよ。ミラはどこにいるのかしら?」

ジエーン「ミラとはお城で待ち合わせしてるの。ベグル君ともそこで落ち合おうと思ってて」

セーニヤ「それではまずお城へ行きましょう。マルティナ様達にも会えますわ」

ベロニカ「そうね。きつとイレブンやシルビアさんも来てるわ。皆で騒ぎましょう」

デルカダール城 大広間

そこには黒のドレスを着たミラと、いつもの兵士の格好では無くスーツを着たベグルとダバンがいた。

ベグル「お！ミラ、ジエーンが来たぞ。ベロニカさんとセーニヤさんも一緒にみたいだ」

ミラ「あら、本当ね。おーい、ジエーン。こっちよー」

ジエーン「あ！ミラー、来たよー」

セーニヤ「ベグル様もダバン様も兵士の格好では無いのですね。なんだかとても新鮮ですわ」

ダバン「そうなんです。実はマルティナ様が、その格好だと楽しめないだろうし皆に楽しんで欲しいから、その格好しないでお洒落な格好で大丈夫。と言ってくださったんです」

ベロニカ「なるほどね。マルティナさんらしいわ。そのマルティナさん達は？玉座にいるの？」

ミラ「さつき玉座の間でラーズ將軍と一緒にだつたんですが、グレイグ將軍にマルティナ様がどこかに連れて行かれたんですよね」

ジェーン「どこかに？どうしたんだろ」

ベグル「ベロニカさん、多分いつものです」

ベロニカ「なるほど。察しがついたわ」

セーニヤ「もしかしてお直しですか？」

ダバン「正解です、セーニヤさん。マルティナ様も大変ですよね」

ベグル「なので今は自分の部屋にいると思います。お二人なら入れると思いますよ」

ダバン「あと、イレブンさん達も来てます。玉座の間で王様達と喋ってると思いますので向かってみてください」

ベロニカ「あら、そうだったの。ありがとう、早速行ってみるわ」

セーニヤ「ジェーン様、それでは」

ジェーン「うん。お祭りでまた会おうねー」

玉座の間

ロウ「おお、ベロニカ達も来たようじゃな」

ベロニカ「皆！私達も来たわよ」

イレブン「ベロニカ達もドレス着てきたんだね。前に僕が作ったやつじゃん。嬉しいな」

ベロニカ「まあ結構可愛いし、セーニヤとお揃いだから気に入ってるわ」

セーニヤ「皆様素敵な格好ですわ。とてもお似合いです」

仲間達は全員ドレスやタキシード、スーツなどを着ていた

カミュ「そうか？俺としては普段の方が気に入ってるんだがな」

マヤ「あー！また崩してる！駄目だって言ったじゃん、兄貴！」

カミュ「仕方ねえだろ。動きにくくて嫌なんだよ。どうせ誰も見てねえよ」

マヤ「そういう問題じゃないの！ほら、ネクタイかっこいいんだからしつかりしてよ」

ルナ「ベロニカさん、セーニヤさんこんにちは」

ベロニカ「あら、ルナ。可愛いドレスじゃない、どうしたの？それ」

ルナ「おじいちゃんが今日のためにつけてくれたの。私、気に入っちゃった」

デルカダール王「そうであろう。ルナには絶対似合うと思ったから
のう。マルスもよく似合っておるぞ」

マルス「本当？かつこいい？」

イレブン「うん。マルス君にぴったりだよ」

ベロニカ「あら？シルビアさんはどこかしら」

ロウ「シルビアなら今日の特別ショーで出演するらしいから準備で忙しいようじゃ。後で皆で見に行こうかの」

セーニヤ「まあ、そうだったのですか。それなら仕方ありませんね」

イレブン「それにしてもマルティナ達まだかな？レースもいるのに随分長くない？」

デルカダール王「わしとしてはあの格好がよかったのじゃが」

カミュ「おっさんは面倒くせえからな。前からああなると止まらねえし、仕方ねえよ」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン！」

ブレイブとコロも服を着ており、ブレイブは黒いスーツのような服に黒い帽子。コロは赤、黄、緑、青など様々な色の線が入った服を着ている

ベロニカ「あら、ブレイブとコロまで服着てるのね。ハットまでつけてマジシャンみたいじゃない、ブレイブ」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

セーニヤ「コロちゃんは様々な色が入った服着てますわ。可愛いですわコロちゃん」

コロ「グルグル」

セーニヤはコロを撫でている

マルス「父さんと母さんが作ったんだよ。似合うよね」

ルナ「ああコロ、あまり寝転がらないで。服汚れちゃうよ」

イレブン「へえ、ラースとマルティナが。結構器用だもんね」

その頃、マルティナとラースの部屋

グレイグとマルティナはドレスについて文句を言い合っていた

グレイグ「それも駄目です、姫様！引つかかって転んだらどうされるのですか！」

マルティナ「もう！大丈夫って言うてるでしょ！別にもう慣れたわよ。第一、折角の大事なお祭りなのにどうしてそんないつものドレスじゃないと駄目なのよ！もっと華やかなやつが皆の前にも出るしいわよ！」

グレイグ「ですが、あまり露出しすぎるのも王女としてどうかと思われませう！」

ラーズ「クアゝ。おーい、まだか？何回そのやり取りするんだよ」

隣では、椅子に座ったラーズが暇そうにあくびをしながら待っていた

マルティナ「ラーズ、見てないで助けて！グレイグが認めてくれないのよ！」

グレイグ「ラーズに頼つても無駄ですぞ、姫様！こいつも姫様の露出には異を唱えておりましたからね」

マルティナ「ええ!?嘘でしょ、ラーズ！」

ラース「グレイグ、それは少し語弊だ。俺はただ肌を出しすぎるのを控えて欲しいと言っただけで、少しなら別に」

グレイグ「黙れ、ラース!!」

マルティナ「もう!これでどう!?!文句ないでしょ!」

グレイグ「そ、それくらいでしたら...」

マルティナ「じゃあ早く着替えるからあっち向いてて」

グレイグ「しかし.....」

グレイグがマルティナに近寄った時

ズルツ!

足下のドレスを踏み、グレイグが滑ってしまった

グレイグ「うおっ!」

マルティナ「え?キヤア!」

ドサ!

グレイグはマルティナを巻き込んで倒れた

ラース「おいおい、グレイグ何やって……………」

グレイグの顔はマルティナの胸に当たっていた

グレイグ「……………!!!?」

マルティナ「キヤアアアツ!!!」

ラース「何やってんだ貴様……!!!」

ドガアアン!!

グレイグ「グハアツツ!!!」

グレイグは部屋から扉を突き破る勢いで蹴飛ばされた

その頃、玉座の間

キヤアアアツ!!!

何やってんだ貴様……!!!

ドガアアン!!

ラース達の部屋からの音が丸聞こえになっていた

全員「!?!」

デルカダール王「何事じゃ!!」

イレブン「随分騒がしくなったね。どうしたんだろ」

カミュ「まあ…… 大体予想ついたがな」

ベロニカ「そうね。グレイグさんが何かやらかしたんじゃないかしら」

ロウ「一先ず様子を見に行こう」

マルティナとラースの部屋前

床には粉々になって飛び散った扉や壁の破片と一緒にグレイグが倒れていた

デルカダール王「グレイグ!? どうしたのだ!」

セーニャ「大変ですわ! すぐにお怪我を治します!」

ラース「いや、その必要無いぞ、セーニャ。しばらく放っておけ」

マルティナ「ええ、怪我するなんてグレイグからしたら普通の事だもの。そこに置いておいて。それよりこの扉と壁壊しちゃったわね。後で直しておかないと」

マヤ「おっちゃん大丈夫？」

ロウ「駄目じゃな。気絶しておる。あの大きな音はこのせいじゃったか。何があつたんじゃ？」

マルティナ「別に気になさらないでください、ロウ様」

ラース「大した事は……あるんだが、まあじいさん達には関係ない事だ。安心してくれ」

カミュ「大体予想は出来てるぜ。というか兄貴、いつもと格好違うな。新しいスーツなんだな」

ラース「そうなんだ。これ新品でキツいんだよな。着慣れてないつてのはあるが、一応見れる姿にはなってるだろ？」

イレブン「うん。よく似合ってるよ。でも太つたんじゃなかったっけ？」

ペロニカ「そういえばそうだったわね。ラース、ようやく食べる量減らしたの？」

ラース「何で知ってんだよ。もう元通りだ。少しだけだったからな」

セーニヤ「マルティナ様からのお手紙に書いてありましたわ。お姉様は読んだ時大笑いしてましたわ」

ラース「おい」

ペロニカ「ごめんなさい、ラース。でも、あんたがまさか太るなんて思わなかったからどんな姿してるのか想像したら面白くて」

イレブン「それはわかるよ。僕も笑っちゃったもの」

ラース「全く。いつの間に笑い者にされてたんだ、俺は」

マヤ「マルス達とブレイブ達は玉座の間で待ってるよ。早くお祭り行こう」

マルティナ「そうね。向かいますようか」

生誕祭2

デルカダール城下町 広場

広場にはシルビアのショーをするための専用テントが建てられていた。テントの周りには、既にシルビアのファンの人達がまだかと言わんばかりに並んでいた

ベロニカ「流石シルビアさんね。相変わらず凄い人気じゃない」

イレブン「いつもならテントだけじゃなくて会場もあるよね。会場はどこだろう？」

マルティナ「シルビアは今回屋内じゃなくて、外で披露してくれるらしいのよ」

グレイグ「ゴリアテなら今頃テントで待機しているのではないだろうか。行ってみるか？」

マヤ「行ってみたいけど邪魔にならないかな？」

カミュ「シルビアの事だ。きっと大丈夫だと思うぜ」

その時、広場の近くからサマデュー王がやってきた

サマデュー王「おお！デルカダール王様！この度はデルカダール王

国生誕祭が無事に開催された事、大変喜ばしく思います」

デルカダール王「サマデー王か！お主も来てくれたのじゃな。感謝するぞ」

サマデー王「このお祭りはデルカダール王国ができた記念日ですからな。参加しないわけにはいきません。それに、とても楽しそうな雰囲気ですな。街の人達もはしゃいでいる様子。私も楽しみにしていますよ」

デルカダール王「ハハハ！そうであろう？民達もこの祭りを毎回楽しみにしてくれている。わし達もその期待に応えなければならんからな。マルティナ達よ、わしはサマデー王と一緒に行動する。お主達も普段の事を忘れて楽しむんじや」

グレイグ「わかりました、王よ」

マルティナ「お父様、食べ過ぎには注意してくださいね」

サマデー王「そうだ、ラーズよ。先程ファアリスがお主の兵士達を見つけ、話に行つたぞ。ファアリスもどこかで楽しんでおるだろうから、見かけたらぜひ声をかけてやってくれ」

ラーズ「ファアリス王子がですか。わかりました」

デルカダール王とサマデュー王は去っていった

セーニャ「デルカダール王様も大変嬉しそうでしたわ。やはり王様も今日を待ち望んでいたんですね」

ロウ「そうじゃな。あんなに楽しそうなデルカダール王も久しぶりに見たわい」

グレイグ「そうなのだ。数日前から王はずっとソワソワした様子で落ち着きがなかったんだ」

ライス「今日のために色々な案を出してくれたからな。いい王様だよ、本当に」

ルナ「おじいちゃんは優しいもんね」

マヤ「ふふ、そうだよ。王様はいい人だよ」

ベロニカ「さて、私達はテントの方に行ってみましょう」

マルス「シルビアさんのショー、久しぶりだな。前のグロツタ以来だよ」

カミュ「ブレイブと兄貴とバンが出演したってやつか。それは俺も一度見てみたかったな」

ラース「俺とバンは大した事してねえよ。ほんのお手伝い程度だ。ブレイブの方が注目集めてたしな」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

マルティナ「ふふ、恥ずかしがらなくていいのよ、ブレイブ。カッコよかったらしいじゃない」

テント内

シルビア「あら！皆来てくれたの？とってもステキな格好だわ！コロちゃんにブレイブちゃんまで服着てるの？可愛いわ」

ブレイブ「ガウ」

イレブン「少し様子を見に来たんだ。シルビアはどんな感じ？」

シルビア「そうだったのね。ありがとう、イレブンちゃん。アタシはいつも通り絶好調よ！」

シルビアはポーズを決めてそう言った

ベロニカ「シルビアさんらしいわね。楽しみにしてるわ、シルビアさん」

マルティナ「私もシルビアのショーは久しぶりね。皆をぜひ盛り上げてちょうだい」

マヤ「私もシルビアさんのショー見たかったの！初めてだからどんなのかワクワクしてるの！頑張ってるね！」

シルビア「まっかせて〜！アタシが皆を笑顔でいっぱいにしてあげるわ！も・ち・ろ・ん、あなた達もね！」

ラース「ハハハ、楽しみにしてるぜ」

一時間後、広場ではシルビアのショーが始まった。広場の中央には円状に線が張られ、シルビアが自由にショーが出来るようになっていた

ガヤガヤ、ザワザワ

観客がどんどん集まり、人でギューギューになっている

マルス「す、凄い数の人だね。こんなに集まる事なんてあるんだ」

カミュ「マルス、手離すなよ。迷子になっちゃうからな」

ルナ「よく見えないよ〜」

グレイグ「どれ、俺が肩車してやろう」

マルス「あ！ルナばかりズルい！グレイグさん、僕も！」

グレイグ「わかった。少し待つのだ、マルス」

ロウ「ブレイブ、コロよ、大丈夫かの？」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

コロ「クウ〜ン」

ブレイブとコロは周りの人との距離に慣れずに悩んでいた

ラース「あー、ブレイブは大変だよな。皆、俺はブレイブとコロを連れて外側に行ってるさ。ブレイブ、コロ、こっちだ」

マルティナ「じゃあ私もそっちに行くわ。遠くから見てください。皆、マルスとルナを見てくれる？」

ベロニカ「大丈夫よ。任せてちょうだい」

セーニヤ「ブレイブ様もコロ様もこの人混みでは思うように動けないですからね」

マヤ「後でまたテントで会おう」

ラース「ああ、わかった」

ラースとマルティナはブレイブとコロを連れて人混みから出た

広場より少し離れた住宅地

ブレイブ「ガウウ……」

ブレイブは疲れたようにその場に座り込んだ

コロ「ペロペロ」

コロはブレイブを舐めている

ラース「あんなに人がいる所は慣れてないよな。悪かったな、二人とも」

マルティナ「さて、私達はどこで見ましようか。ここからだと思えないし」

ラース「少し高い所からなら見えると思うが……マルティナ、平気か？」

マルティナ「高さによるわね。あまりにも高いとちよつと無理があるわ」

ラース「貴族達が住んでる所からなら見えると思うぞ。試しに行つてみるか」

住宅地 貴族層

マルティナ「ここならなんとか大丈夫よ。確かに小さいけど真ん中の所まで見えるわね」

ラース「人もあまりいないな。皆ここに気付いてないか」

マルティナ「ここならブレイブ達もゆつくりできるわね」

ブレイブ「ガウ！」

???「お！やっぱりここならよく見えるぞー！」

横から誰かがやってきた

ラーズ「ん？」

メグ「待つてよ、バン！つて、あら？ラーズ様！マルティナ様！」

バン「あ！師匠とマルティナ様!?ブレイブとコロまで！」

そこには、バンとマサルを抱っこしたメグがやってきた

コロ「キャン！」

マルティナ「あら、バンにメグさん。それにマサル君も。どうしてこんな所に？」

バン「俺達シルビアさんの特別ショーが見たくてメグの店を一旦お昼休みにしたんですけど、人が凄くつて全然見えなかつたんですよ」

メグ「もしたらバンがいい所があるつて言つてここに來たんです。ラーズ様達は？」

ラーズ「なるほどな。バンが今日城にいねえと思つたらメグの手伝いか。俺達も似た理由だな。ブレイブ達が人混みに慣れてなくてな。かわいそうだったから違う所を探してたらここにたどり着いたんだ」

マサル「お犬さん？カツコイイ」

ブレイブ「ガウ」

マサルはブレイブを見て目をキラキラさせている

バン「ブレイブは犬じゃないが、まあ犬みたいなもんだしいつか」

ブレイブ「……ガウ」ブス！

バン「いっつ！」

ブレイブは爪でバンの足を刺した

ラース「今のはお前が悪いぞ。それにしても、マサル君喋れるようになってたのか。俺の事覚えてないよな。前はまだ喋れなかったもんな」

マルティナ「何歳になるの？」

メグ「マサル、歳は？」

マサル「……さんっ！」

マサルは指を三本立てて元気に言った

マルティナ「可愛い!!」

バン「可愛いですよ。俺も初めて見た時、倒れるかと思いました」

ライス「マサル君、三歳か。俺はライスだ、よろしくな」

ライスはマサルと目を合わせて自己紹介している

マサル「あーす?」

ライス「ライス」

マサル「あーす!」

マサルは喜んでいる

バン「ぷっ……。し、師匠。笑わせないてくださいよ」

バンは口を押さえている

ライス「別にふざけてるわけじゃねえよ」

マルティナ「まだ上手く喋れないわよね。これからどんどん喋れるようになりましょうね」

メグ「そういえば、ブレイブ君もコロ君も服着てるなんて珍しいですね。初めて見ましたよ」

バン「俺も初めて見た。ブレイブ、コロ、中々似合ってるぞ」

コロ「キャン！」

ブレイブ「ガウ……」

マルティナ「私達の手作りなの。いつもの格好だとデルカダール以外の人が驚かれるから服着てれば多少は馴染んでくれると思って。ブレイブは少し動きにくそうにしてるけど我慢してもらってるわ」

メグ「手作り!? 凄いですね！」

マサル「お犬さん、乗る」

マサルはブレイブに手を伸ばしている

バン「ブレイブに興味津々だな。ブレイブ、大丈夫だよな？」

ブレイブ「ガウ！」

バン「ハハ、そうだよな。マサル、ブレイブの背中だぞ。俺も乗った事ねえんだ。羨ましいぜ」

マサル「キャツ！キャツ！」

マサルはブレイブの背中に乗れて喜んでいる

メグ「本当に大人しいですね。キラールパンサーは子どもに優しいと聞きますけど、人間でもそうなんです」

ラース「それもあるんだろうが、ブレイブ自身もう慣れたんだろうな。マルスとルナに散々遊ばれたからな」

バン「確かに。一時期背中の赤い毛が結構無くなってビックリしましたよね」

マルティナ「二人がブレイブの背中の毛を筆ってたのよね。流石に可愛いそうだったから怒ったけど、ブレイブは大した事なさそうにしてたわよね」

メグ「そんな事があつたんですね。それなら確かに慣れちゃいそうですね。あ！シルビアさんが出てきました！」

バン「本当だ！やった！小さいけど特等席！」

ラース「さて、俺もシルビアのショーを見るのは久しぶりだ」

マルティナ「あら、流石シルビアね。人混みを分けて二つ丸いステージを作ったわ。あれならよりたくさんの人が見れるわね」

生誕祭3

シルビアのショーは無事閉幕した。シルビアがステージからいなくなっても、未だ観客やファンからの拍手は鳴り止まなかった。

居住地 貴族層

メグ「流石シルビアさんですよ。今回も凄くワクワクさせられました」

バン「だよな！俺、あの大きな風船からスライム達が出てきたのすげーって思った！」

マルティナ「私もとっても楽しかったわ。もっとシルビアの色んな技見てみたくなったわよ」

ラース「シルビアも見ない間に随分色んな技使うようになってたんだな。旅の頃とはまた格段に技術が上がってんな」

マサル「あの人、しゅごい！」

コロ「キャン！キャン！」

ブレイブ「ガウウ……」

ブレイブの上ではマサルが跳ねていた。横ではコロもはしゃいでいる

メグ「あら、マサルもシルビアさんの事気に入ったみたい」

マルティナ「そうみたいね。マサル君もショーの間ずっとシルビアの方見てたものね」

ラース「二人はこの後店に戻るのか？」

バン「いえ、この後王様達の例のあれ、あるじゃないですか。あれも見ようかなって思ってますよ」

メグ「あれって？この後何かあるの？」

マルティナ「まだ秘密なの。メグさんも楽しみにしててね」

ラース「バン、口滑らすんじゃないぞ」

バン「はい！大丈夫ですよ！」

メグ「気になるけど、楽しい事なのかな？期待してますね！」

その後、テント内

セーニャ「あ、ラース様達も戻ってきましたね」

マルティナ「よかった。皆ここにいたのね。シルビア、お疲れ様。とっっても楽しかったわ」

マヤ「あ、兄ちゃん達も見れたんだ。よかった。凄く面白かったよね！私、火の玉のジャグリングハラハラした！」

マルス「僕も！後、あの笛から紙吹雪が出てきたの凄く面白かった！」

ルナ「私はナイフがお花になったやつが好き！」

シルビア「ウフフ、楽しんでくれたようで何よりだわ！」

ラース「また腕をあげたな、シルビア。よく一人であんなに多彩にできるもんだな」

グレイグ「そうだな。準備なども大変ではなかったのか？」

シルビア「そんなの全然大丈夫よ。だって、それで皆が笑顔にな

れるんだっいたらアタシは何だっって惜しまないわ！」

ベロニカ「シルビアさん、素敵だわ！」

ロウ「ほほ、シルビアは流石じゃのう。努力無くしてあの盛大なシヨールは生まれんという事じゃな」

イレブン「スターはやっぱり違うね。あ、そうだ。シルビア、この後時間ある？これから祭りを自由に回ろうと思ってるんだ」

セーニヤ「先程ここに来る際スイーツ店の宣伝がありましたわ。私、とっても気になってるんです」

シルビア「アタシは少し片付けが残ってるけどその後なら大丈夫よ」

カミュ「じゃあ一旦解散だな。マヤ、俺達は昼食に行こうぜ」

マヤ「わかった！」

マルス「あ、待ってカミュ、マヤ姉ちゃん！僕も連れてって！」

ルナ「ルナもー！カミユさん、いいでしょ？」

カミユ「何だ？腹減ったのか？二人とも」

マルス「うん！カミユ、僕あのステーキ食べたい」

カミユ「また高いやつねだりやがって」

カミユはマルスに引つ張られる

マヤ「ふふ、それじゃあ一緒にお祭り回ろうか」

ルナ「うん！お父さん、お母さん、行ってくるねー」

マヤはルナと手を繋いで出ていった

リース「マルス、カミユからどんどん奢ってもらえよー」

カミユ「てめえの仕業か！マルス、お前もあんなやつ言う事聞かなくていいからな！」

マルティナ「迷惑かけないでね」

イレブン「お昼なら僕達も食べようか。シルビア達はどうする？」

ベロニカ「私達はここでシルビアさんを待つてからにするわ」

セーニャ「色んなところにケーキやチョコレートなどが置いてあったので、そちらも食べようかと考えていたんです」

グレイグ「わかった。では、俺達は七人でどこか行くとするか」

ラース「よし！なら、まず出店全部食べ歩くか！」

イレブン「は、はは……。ラースは相変わらずだね」

しばらくして、広場に用意されたテーブルに座つて各々がご飯を食べていた

マルティナ「ちよつとラース。買いすぎじゃない？テーブルほとんど埋まつてるじゃない」

マルティナが戻つてくると、ラースの料理で一つのテーブルがほとんど埋められていた

ラース「そ、それもそうだな。待つてろ、今空けるからな」

ブレイブ「ガウ！」

テーブルの近くではブレイブ達もご飯を食べている

グレイグ「む？ブレイブ達のご飯などあったのか？」

マルティナ「これはお城でいつも食べてるやつよ。ブレイブ達も外で食べた方がいいかと思って少し持ってきてたの」

コロ「ガツガツ！」

ロウ「ほほ、コロよ。そんな焦らんでもご飯は無くならんぞい」

イレブン「あ、おじいちゃんの持つてるやつ焼き鳥じゃん。どこにあったの？僕も食べたい」

ロウ「そうじゃったか。お店はあそこに見える赤い旗が立ってる所じゃ」

グレイグ「焼き鳥ですか。美味しそうですね。前にラーズが作ってくれた以来私も好きになりました。イレブン、俺も買いに行くぞ」

イレブンとグレイグは出店に向かっていった

マルティナ「ロウ様、見てください。これ、懐かしくありませんか？」

マルティナはそう言つて、パエリアを持ってきた

ロウ「おお！このパエリアは……。姫と二人で旅していた頃、姫の誕生日にわしがいつも買っていたやつじやのう。何とも懐かしいものじや」

ラーズ「へえ。いつもこれだったのか」

マルティナ「そうなの。あの頃はお金なんてそんな多く使えなかったから大した物は買えなかったんだけど、ロウ様は毎年私の誕生日にはこれを買ってきてくれて少し贅沢な気分を楽しんでいたの」

ロウ「あの頃は姫には辛い思いしかさせられんかった。本来なら姫としてもっと華やかな誕生日になるはずじゃったのに……」

マルティナ「ロウ様、それは思い違いですよ。私はあの頃は確かに辛い思い出が多いですが、楽しかった思い出だってあります。ロウ様がいってくださらなければ、私はどうなっていたか……」

ロウ様、本当に心から感謝しています。ロウ様は私の、もう一人のお父様です」

ロウ「ううっ…… 姫よ……」

ロウは涙が溢れている

イレブン「あ、あれ!?おじいちゃんが泣いてる!どうしたの!?!」

グレイグ「ど、どうされたのですかロウ様」

ラース「少し懐かしい話題をしてたらこうなっちまってな。まあ、嬉し泣きってやつだ。変な事があったわけじゃないんだ。って、イレブン達焼き鳥たくさん買ってきたな」

イレブン達の手には様々な種類の焼き鳥があった

イレブン「そう。見たら色んなのあったから、どうせなら皆で食べようかってなってさ」

グレイグ「どれにしますか?」

マルティナ「あら、ありがとう。私はこの塩がついてるやつもらおうわ」

ロウ「わ、わしは……皿に置いておいてくれ……」

イレブン「ほら、おじいちゃん。涙拭いて」

その時、近くから女性がやってきた

女性「あ!ブレイブちゃんにコロちゃん!どうしちゃったの!?!服な

んて着て！とっても可愛い!!」

ブレイブ「ガウ」

ラース「ん？ああ、君は確かブレイブが働いてるカフェの人だな」

女性「あ、ラース様、マルティナ様。グレイグ將軍に勇者様、ロウ様まで。こんにちは。ブレイブちゃん達の服どうしたんですか？」

マルティナ「その服私とラースの手作りなの。折角のお祭りだからブレイブ達にも素敵な格好してもらおうと思ってね。」

ブレイブは動きにくそうだけど、こうしてればデルカダール以外の人もブレイブ達を怖がりにくくなるかと思って」

女性「これマルティナ様達の手作りですか！凄いですね！とっても似合ってますよ！あの、ブレイブちゃん達借りてもいいですか？」

グレイグ「構わないがどうしたのだ？」

女性「私達のお店で少しだけこの格好で、お客さん達に触れ合ってる人多いんですよ」

イレブン「へえ、それは凄いな。ブレイブ大人気じゃん」

ブレイブ「ガウ！」

女性「コロちゃんもいれば尚更触ってくれる人いそうですし、いいですか？」

コロ「クウ？」

ラース「大丈夫だぜ。ブレイブ、コロ、ご指名だぜ。少しの間頑張つて来いよな」

ロウ「他の人も怖くない魔物がいるという認識が広まるきっかけにもなるのう。いい事だと思うわい」

女性「じゃあブレイブちゃん、コロちゃん、おいで！」

ブレイブ「ガウ！」

コロ「キャン！」

ブレイブとコロは去っていった

その後、ご飯は食べ終わり五人で街を回っていた

ラース「ブレイブがそんなに人気だったなんてな。知らなかったぜ」

マルティナ「でもいいじゃない。実際ブレイブを見て怖がってる人はほとんどいないみたいだったわ」

ラース「あれ？イレブン達はどこいった？後ろについてきてただけ」

マルティナ「あら？本当ね。いつの間に」

見渡すとイレブン達は本屋の前で固まっていた

ラース「おい、イレブン達。何やってんだよ。そんな気になるものでもあったのか？」

グレイグ「うおっ!?ラ、ラースか。俺達はここで少し買いたい物がある。先に姫様と一緒に回っていていいぞ」

グレイグは何かを隠して焦ったように言っている

イレブン「ラース、君も見なよ。おじいちゃんが凄いの見つけてくれたんだよ。これ見ればこの先凄い人になれるんだって」

ロウ「い、いかん、イレブン！レースに見せては」

イレブンはレースに読んでいたムフフ本を見せた

レース「……………」

レースは凍えるような眼差しでロウとグレイグを見ている

二人「……………」

ロウとグレイグはレースから目を逸らしている

イレブン「あ、あれ？レース怒ってる？」

レース「ハア。先行ってるからな」

二人「ホツ……………」

レース「(あの馬鹿共、後でよーく話しておかないとな)」

マルティナ「あら？レース、イレブン達はなんて言ってたの？」

レース「イレブンは馬鹿共の手に落ちた。まあ、祭りだからな。夢を見させておいてやろう」

マルティナ「何となくわかったわ。ロウ様だったらいつまで経っても癖が治らないんだから」

生誕祭4

マルティナ「二人になっちゃったわね。まあ、皆が自由に楽しめれば私はそれでいいのだけど」

ラース「そうだな。それにもう少しであれが始まる。俺達も準備に城に戻るか」

マルティナ「わかったわ。大変だもんね」

デルカダール城 大広間

大広間には人よりも大きい巨大なケーキがあつた。近くにはダーハル―ネにいるラースの友人の店長、シンジがいた

店長「おお、やっと見つけたぜ、ラース、マルティナさん。相変わらずデルカダールは広いな。何回か迷いかけたぜ」

ラース「よう。迷つたとか言ってるが本当か？その手に持つてるやつとか見るに祭りを楽しんでたんじゃないのか？」

店長の手には食べ物の袋やお菓子、おもちゃなどがあつた

店長「こ、これは……あれだ。つい浮かれてよ……。つて別にいいだろ！」

マルティナ「ふふ、こつちとしても楽しんでくれた方が嬉しいわ。

それに、今日のためにこんな立派なものわざわざ用意してくれたんだもの。ありがとう」

店長「いやー、まさか俺に依頼が来るとは思わなかったぜ。味には確かに自信あるけどよ、別に俺よりいいケーキ職人はダーハルーネにたくさんいるぜ？」

ラーズ「何言ってるんだよ。顔も知らねえ職人よりも慣れ親しんだやつの方が圧倒的に信頼できるし……俺の中では菓子作りに関してお前が一番だよ」

ラーズは最後に少し恥ずかしそうに言った

店長「ラ、ラーズ……」

マルティナ「ラーズの言う通りね。これからたくさんの人に出す分、安全には細心の注意を払わないといけないの。だから信頼できる人に頼むってのはとっても大事な事だったのよ。こんな事、店長さんにしか任せられなかったわ」

店長「マルティナさん……。へへ、二人ともありがとな!!俺、二人と出会えて本当によかったぜ!」

店長は目に涙を浮かべ、腕で拭いながら感謝を告げた

ラーズ「おいおい、泣くなよ。よりブサイクが際立つぞ」

店長「てんめえ……。そこはお世辞でも慰めろよ!!人が折角感動してゐるって時に何冷めるような事言ってるんだ!!」

ラース「へいへい、悪うござんした」

店長「次お前のケーキに毒入っても知らねえからな」

ラース「お前はそんな事するやつじゃねえだろ?」

店長「ぐぐぐ……。マルティナさん!こいつ、マジでウザいんです!!止めてくださいよ!」

マルティナ「ラースは面白がってるだけよ。気にしないでね。見てる方としては仲良さそうで少し羨ましいわ」

店長「こんなやつと知り合はんじゃなかった!!」

ラース「さっきと言ってる事真逆じゃねえか。さて、王様も外で待ってるようだし、皆に届けますか」

その後、広場

ザワザワ

周りの人達は王様達が持ってきた巨大なケーキに興味津々となっている

デルカダール王「さて、皆のもの！今日の祭りは楽しんでくれるかな？」

ワアー！パチパチ！楽しいです！

周りからは歓声が上がった

デルカダール王「うむうむ、喜んでくれているようで何よりだ。わたし達から皆にもっと楽しんでもらおうと思っとな。今回はこの巨大なケーキを用意した。」

皆、好きなように食べてくれ。これは少しじやが、日頃この国を支えてくれている皆にわたし達からの感謝の気持ちじや」

ワアー!!!王様サイコー!!

デルカダール王「さあ皆のもの!!祭りはまだまだ終わらんぞ!もつと騒ぎ、楽しむのじや!この日はデルカダール王国が出来た記念すべき周年日!デルカダール王国に栄光あれ!」

パチパチパチパチ!!

その後ケーキはどんどん切り分けられていき、様々な人達へケーキが渡った

デルカダール王「皆のもの!ケーキは行き渡っただろうか?もしまだの者がいたらこの後取っていくんじやぞ。また、おかわりも好きに

受け付けておる。どんどん食べてくれ。では、この国が出来た日に感謝を込めて、乾杯じゃ!!」

乾杯!!!

その場にいた全員が乾杯をして、グラスやジョッキがふつかる大きな音が響いた

しばらくして、周りの人達もまた先程のように騒ぎ始めた

ラーズ達はイレブン達と合流し喋っていた

ロウ「ふおつふおつ、流星はデルカダール王じゃ。皆を上手く盛り上げてくれるのう」

シルビア「本当ね。しかもあんな立派なケーキアタシ初めて見たわ。それを皆に配るなんて太っ腹だわ」

セーニヤ「とっても美味しいですわ!私、もう一つ貰ってきます!」

ルナ「セーニヤさん、私も!」

マルス「僕ももう一個貰う!」

マヤ「あれ?兄ちゃん、ケーキは?貰わなかったの?」

ラーズ「俺…………一口で食べてしまった。おかわりができるって聞いてたのに…………なんで」

ラーズはケーキがおかわりできずに落ち込んでいる

マルティナ「ラーズはおかわり禁止よ」

グレイグ「お前がおかわりしていると皆の分が無くなってしまいうからな。我慢してくれ」

店長、カミュ「アハハハハ!!」

シンジとカミュはラーズを見て、指を指して笑っている

ベロニカ「二人とも笑いすぎでしょ。まあ、私もマルティナさん達の意見に賛成だけど」

イレブン「店長さんもカミュもラーズがかわいそうじゃん。ほら、ラーズ。僕の分少しあげるからさ」

ラーズ「い、いや。それはイレブンの分だ。俺は…………別に…………」

ラーズはイレブンのケーキをチラチラ見ている

店長「動作と言動が合ってねえぞ、ラーズ。まあ、自分の大食いを恨むんだな」

セーニヤ「今戻りましたわ」

セーニヤとルナ達の皿には先程より少し大きめのケーキが乗っていた

マルス「はい、父さん。僕と半分こしよう」

マルスはラーズの隣に座り、自分の皿に乗ったケーキを分けた

ラーズ「マ、マルス……。お前は本当いい子だなあ。ありがとう、マルス！一緒に食べよう！」

ルナ「セーニヤさんがね、お父さんがかわいそうだからって少し大きめに切って貰うようにお願いしたんだよ」

ラーズ「セーニヤ!!ありがとう!!」

ラーズは誠意を込めて頭を下げる

セーニヤ「そんな、ラーズ様。私は大した事はしていません」

マヤ「兄ちゃんって食べ物になると必死だよね」

マヤはその光景に苦笑いしている

グレイグ「そうだな。見ていて少し恥ずかしいぞ」

ロウ「まあよいではないか。あれもラースらしさの一つじゃよ」

ベロニカ「セーニヤ、あんたもおかわりはそこまでにしておきなさい。皆のケーキなんだから」

セーニヤ「うう……。そうですよね。我慢します」

シルビア「店長ちゃん、あんなケーキ作れたのね。それにいつも通りとっても美味しいわ。大きくしても味が落ちないなんて流石ね」

店長「やった！シルビアさんに褒められた！数日かけて何とか作っただんです。前に巨大なパフェとかで大きなスイーツ作りは経験あったんで、それを少し応用させてみたんです」

カミュ「なるほどな。シンジの所のスイーツは甘さがしつこくなくて、苦手な俺でも食いやすいぜ」

店長「カミュ、甘いもの苦手だったのか。なら、今度ビターなケーキとかもあるから今度店に来てくれよな」

マヤ「あ！私もまた行きたい！」

カミュ「久しく行ってないしな。今度行くか」

店長「それじゃあ俺はこの辺で。一日祭りにいるから、また声かけてくれよな。じゃあな！」

シンジは去っていった

ラース「またな！」

イレブン「ラース達はその後まだ何か予定あるの？」

マルティナ「後は夜の舞踏会だけね。皆は自由参加だし、見てるだけでも大丈夫よ」

シルビア「でも皆こんなステキな格好してるんだし、どうせなら舞踏会に皆で出ましようよ」

カミュ「俺は踊りなんて出来ないんだが」

グレイグ「俺も出来ん」

イレブン「僕もあまり得意じゃないなあ」

ラーズ「大丈夫だぜ。舞踏会なんて言ってるが、結局はドンチャン騒ぎと変わらん。痛え!!」

ラーズは隣のマルティナに脇腹を殴られた

マルティナ「ラーズ?あまりそう言う事言わないでちょうだい?」

ラーズ「は、はい。すみませんでした……」

マヤ「(姉ちゃん、怖……)」

マルティナ「コホン、まあ踊れなくてもいいのよ。皆自由にしてるんだから。音楽に合わせて体を動かしてればいいのよ。色んな動きがあった方がきつと皆も楽しめるわ」

シルビア「そうよ!皆も出ましょう」

ベロニカ「まあ、別に私は構わないわ。ダンスは確かに出来ないけど、まあ皆がいるなら平気よ」

セーニヤ「お姉様、一緒に踊りましょう!」

ラーズ「い、言い忘れてたが踊りは男女ペアなんだ」

ベロニカ「あら、そうだったの。セーニヤ、しょうがないわね」

シルビア「踊りは身長に近い者同士だとやりやすいわよ」

マルス「ルナ、一緒にやろうね」

ルナ「うん！」

マヤ「私、誰と組もうかな」

ロウ「マヤちゃん、わしとは嫌かの？身長もそこまで離れておらんぞ？」

マヤ「おじいちゃん。全然構わないよ！寧ろ、嬉しいもん」

ロウ「ほほ、それはよかった」

イレブン「夜までまた街を回ってようか」

グレイグ「そうだな。まだ行ってない店もある」

セーニヤ「シルビア様、お姉様！他のお店に行ってみましょう！」

シルビア「そうね。楽しみましょう！」

仲間達はそれぞれ去っていった

ラーズ「マルティナはシルビア達について行かなくてよかったのか？」

マルティナ「ええ。シルビア達からもラーズと一緒にいた方がいいって言われてるの」

ラーズ「気遣いなんてしなくてもいいのによ。じゃあ、この後メグの店に顔出しに行くつもりだったんだが来るか？」

マルティナ「ええ、行きましょう。私、メグさんのお店初めてだわ」

ベグルの過去

メグのカフェ

カラン

メグ「いらっしやいませー。あー！ラース様、マルティナ様！」

ラース「よう、顔出しに来たぜ」

マルティナ「へえ、ここがメグさんのお店なのね。綺麗だし、結構可愛い装飾もされてるのね」

メグ「ありがとうございます、マルティナ様。こちらのお席へどうぞ」

ラース「バンはどうしたんだ？いると思ってたんだが」

メグ「バンなら先程マサルが泣き始めてしまったので、外であやしてますよ」

ラース「バンがあやす!?そんな事できるのか?」

ラースは想像出来ず驚いている

マルティナ「バンには悪いけど少し想像できないわね」

メグ「私も最初不安だったんですけど、意外と得意みたいですよ。最近だと私よりあやすのが上手いんですよ。母親がそんなのもおかしいんですけどね」

マルティナ「そんな事ないわよ。私だってマルスやルナをあやすのは大変だったし、お父様の方があやすのはお上手だったもの」

ラース「それにしても意外だな。バンがそんな事できるとは」

その時、バンがマサルを抱いて帰ってきた

バン「ただいまー。メグ、お客さん連れてきたぞ」

店長「よう、メグさん。覚えてるか？」

メグ「あ！シンジさん！お久しぶりです！」

バン「あ！師匠にマルティナ様！来てくれたんですか！メグ、マサルを奥の部屋に戻してくる」

バンは寝たマサルをベッドに寝かしにいった

店長「また会ったな。こんなにすぐ会うとは思わなかったけど」

マルティナ「店長さんはメグさんとも面識があったのね」

ラース「グロッタでのシルビアのサーカスの時だな」

店長「そうそう。その時にメグさんに料理の味見のお願いされたのを思い出してな。ちょうどいい機会だから来てみたんだ」

メグ「え!?!いいんですか!?!」

店長「ああ。俺でよければ」

メグ「ぜひお願いします!シンジさんほどの方に味見してもらえなんて!」

メグは嬉しそうにしている

バン「むう……。メグがあんなに嬉しそうにするなんて」

戻ってきたバンはそれを見てつまらなさそうにしている

マルティナ「バンはメグさんの料理を味見はしないの?」

ラース「美味しいと言わなくて困るんだってよ。メグによると、も

う少し正確なアドバイスとかが欲しかったみたいなんだ」

バン「俺料理しないからわからないんですよ」

マルティナ「まあ、それは仕方ないわね。料理ができる男ってのも少ないものね」

ラース「確かにな。兵士の中にもいなかった気がするぞ」

バン「いえ、実は意外な事にベグルが料理出来るんですよ。前に少しだけ見たことがあります」

ラース「へえ、ベグルが料理か。それも想像できないな。確かに意外だな」

店長「ベグル？」

キッチンにいるシンジがベグルの名前に反応する

店長「今ベグルって言ったか？」

マルティナ「え？ええ、そうよ。店長さんもベグルの事知ってるの？」

ラース「お前とベグルは知り合いだったのか？」

店長「いや、そうじゃなくて。ベグルって名前をダーハル―ネで聞いた事あつてな。何だったかな」

シンジは少し考えている

ラース「そういえばベグルもダーハル―ネの出身だったな」

バン「もしかしてベグルってダーハル―ネだと有名人なのか？でも、ベグルがそんなわけないか。どっちかって言ったら有名ってよりは魔王とか鬼として恐れられてそうだもんな。あの性格的に」

ラース「ベグルがいないのをいい事に言いたい放題だな。お前、今ベグルがいたらただじゃ済まないぞ」

店長「それだ！」

シンジはバンの言葉を聞いて思い出したようだ

三人「え？」

店長「ベグルっていえば、ダーハル―ネでは知らないやつはいない
暴走族の元リーダーじゃねえか！」

マルティナ「ベグルが暴走族!? どういう事？」

バン「え? え? 嘘だろ……?」

店長「ダーハル―ネに昔からいる暴走族、レッドボーン。最近だと大した事してないみたいなんだが、何年も前はかなり悪名高いグループだよ。ダーハル―ネに裏町があるのは知ってるか？」

ラース「俺は知ってるぞ。表とは随分雰囲気が違うよな。怪しい取引とかやってるな」

マルティナ「あの街にそんな場所があるのね。知らなかったわ」

店長「その裏町を取り締まってる…… というか、支配していたやつらでな。悪尽のベグル。何も知らない旅人や迷った人達を襲って身ぐるみを剥いだり、ボコボコにして金目の物を奪ってたりしてたんだ。噂によると、人殺しもやったとかどうとか」

ラース「…………… それは本当か？」

店長「いや、真偽は知らねえ。俺も噂でしか聞いてねえからよ。でも、かなりイカれてる連中だったからな。それを纏めているリーダーも相当やばいやつだろ。まさか、ベグルも兵士なのか？」

マルティナ「ええ、そうよ。他人の過去は気にしないけど、それは無視できないわね」

ラーズ「そうだな。それが本当なら、ベグルの事は少し検討する必要がある」

バン「何言ってるんですか、師匠！マルティナ様！ベグルがそんな事するわけないじゃないですか！あいつは確かに怖いし、容赦ないし情けなんて知らないようなやつだけど、人の道までは外してません！」

マルティナ「……そうね。例えその話が本当だとしても、今の彼はそんな事する人じゃないものね」

ラーズ「ベグルには一応聞いてみる。バンもその時は来るだろ？」

バン「はい。流石に気になりますから」

店長「悪い、変な話して。ラーズの仲間を悪く言ったわけじゃないんだが、ダーハル―ネに住んでる身としては知ってないといけない事だったからよ」

ライス「別にシンジは悪くないさ。気にしてねえよ」

メグ「あ、シンジさん、いくつか出来ました。味見お願いします！」

店長「お、いいねえ。それじゃあ食べてみるか」

メグ「ライス様もマルティナ様もよかったですらどうぞ」

ライス「俺達の間もあるのか。それなら貰おうかな」

マルティナ「ありがとう、メグさん」

バン「メグ、俺のは!?!」

バンは自分だけ無い事に驚いている

メグ「バンは前に食べた事あるでしょ」

バン「ええ！いいじゃん、俺にもくれよ」

メグ「もう……。はい」

マルティナ「あら！このチョコレート美味しいわね」

ラース「スコーンも美味しいな！」

店長「ふむふむ、このスコーンはハチミツが隠し味か。こっちのチョコレートも中のソースが凝ってるな」

メグ「ちよつとしかハチミツ入れなかったのに気づいちやうんですね」

店長「まあな。スコーンはこれでいいと思うが、チョコレートの方はソースの味をメインにするのか、チョコレートの甘さをメインにするのかどっちかにした方がいいな」

バン「メグの料理にケチつけんなよ！」

メグ「なるほど。勉強になります」

店長「別にケチつけてるわけじゃねえよ。アドバイスしてるだけだ」

シンジは怒っているバンに苦笑いしている

メグ「カップケーキもあるんです。そちらもお願いします」

店長「了解だ。だが、自信なさそうだった割には結構美味しいじゃないか、メグさん」

メグ「本当ですか？ありがとうございました」

その後

メグ「ありがとうございました！」

店長「おう。頑張れよな」

シンジは去っていった

バン「なあ、メグ。まあまあアドバイスされてたけど、俺は今のままでもいいと思うんだが」

メグ「駄目よ。もっと美味しくできるならそれに従った方がいいじゃない。お客さんにも出すんだから」

バン「でもよ………こう、何というか」

バンは言葉に詰まっている

ラーズ「バン、多分メグの手料理じゃなくなった気がして嫌なんだろう？」

バン「そう!!それです、師匠!!」

メグ「そ、そんな事ないよ、バン。少し変わるかもしれないけど、私の料理である事には変わりないもの」

マルティナ「可愛いわね、バン。店長さんに嫉妬?」

バン「うーん、そういう感情なんですかね?」

ラース「さて、俺達もそろそろ行くか」

マルティナ「そうね。ちよつと長く居すぎたかもしれないわね」

メグ「そんな事ありませんよ。ぜひまた来てください」

バン「また明日お願いします」

ラース「ああ、またな」

舞踏会

夜、デルカダール城下町 広場

夜になつても祭りは賑わっており、外ではまだ騒いでいる人達も多く見られた。お城や周りの広場はライトアップされ明るくなっていた。広場にあつた大量のテーブルや椅子は隅に行き、中央で舞踏会の準備が進められていた

カミュ「しかし、本当に俺らも踊らねえとなのか？俺、こういうの苦手なんだが」

グレイグ「俺も同じだ。俺は笑われそうで乗り気ではないんだがな」

ベロニカ「駄目よ、二人とも。もう出るって決めただからさつきと腹括りなさい」

マルティナ「音楽が流れるし、適当でも相手に合わせてればそれほどなくなるわ」

カミュ「大体男女ペアって俺の相手はどうすんだよ。イレブンが一番近いのに、イレブンはセーニャとなんだろ？」

ベロニカ「あら、カミュのペアは私よ」

カミュ「ハア？お子さまと俺の身長が近いって？笑わせんなよな」

ベロニカ「それでもそう言えるかしら？えいっ！」

ベロニカは首にかけたペンダントに魔力を込めて、大人の姿へと戻った

ベロニカ「どう？」

元の姿に戻ったベロニカはカミュより少し小さい程度だった

カミュ「……マジかよ」

シルビア「グレイグ、あなたのペアはアタシ。アタシに合わせてれば大丈夫よ」

グレイグ「ゴリアテか。合わせるだけでも自信ないが、やってみよう」

周りの人達も続々とペアになっていき、周りは踊る人達だけになっていた。隅にあるテーブルや周りの地面にはたくさんの人達が座りながらそれを見て、お酒や料理を楽しんでいた

マルティナ「レース、ダンスなんて久しぶりなんじゃない？大丈夫？」

ラーズ「大丈夫だと言いたいんだがな……。まあ、努力はする」

ミラ「あら、ラーズ將軍、マルティナ様。こんばんは」

ダバン「やっぱりお二人も出ますよね」

隣には黒のドレスを着たミラとスーツを着たダバンがペアになっていた

マルティナ「あら、ミラさんにダバン。あなた達も舞踏会に出てるのね。嬉しいわ」

ミラ「この街に住んで初めての大きなお祭りですからね。全部楽しんでおきたいんですよ」

ラーズ「ダバン、お前踊れたのか？」

ダバン「それなりには。まあ、社交ダンスは初めてなんで全く違うものなんですけどね」

ラーズ「なるほど。それは知らなかったな。じゃあダバンの踊り楽しみにしてるからな」

ダバン「え!? そんな大したものじゃないですよ。それに、ラーズ將軍だって踊るんですよね? 見れないじゃないですか」

ラーズ「いやいや、踊りながら見る事できるだろ」

ミラ「そんな事もできるんですね」

マルティナ「踊る時つて周りに気をつけてないとぶつかったりするからね。だから周りを見ながらってのはいい事なのよ」

ダバン「ミラ、俺達はマルティナ様達から離れようか」

ラーズ「おい!」

ミラ「え? ダバン、ちよつと! す、すみません、ラーズ將軍、マルティナ様!」

ダバンはミラを連れていってしまった

マルティナ「あらあら、ダバンったら耳が赤くなつてたわ。結構恥ずかしがり屋なのね」

ラーズ「そうみたいだな」

その後、音楽が流れ皆がゆつくりと踊り始めた

イレブン「セーニヤ、大丈夫？」

セーニヤ「な、何とか。イレブン様は苦手だと仰ってましたが、慣れてるみたいですね」

イレブン「ほんの少しだけね。一応習ったんだけど、どうしてもできなくて。だから出来るのは一部だけなんだ、ごめんね」

セーニヤ「いえ、私も不慣れですので大丈夫ですわ」

ロウ「どうかの？マヤちゃん。社交ダンスとはこんな感じじゃないか」

マヤ「この踊り方なら私も学校で習った。そこまで得意じゃなかったけど出来るよ。おじいちゃんも上手いね」

ロウ「わしは昔から踊ってたからのう。なら、少し大きめに動いてみてもいいかの？」

マヤ「私は大丈夫！まだどうやるのか覚えてるから」

ロウ「ほほ、それは頼もしいのう」

マルス「ルナ、こんな感じだよね？」

ルナ「そうそう。マルスカッコいいよ。私ももっと激しくやる！」

マルス「うわあ！ルナ一旦ストップ！ストップ！」

カミュ「あー、ここはこうか？」

ベロニカ「そうね。次は少し横に手を合わせて、足を踏み出して見ましよう」

カミュ「あー……。慣れねえ」

ベロニカ「ほら、足が合っていないわよ。もっと前に出して」

カミュ「意外と出来るんだな、ベロニカ。知ってたのか？」

ベロニカ「基本的な事だけよ。手を合わせてステップを踏むだけ。それ以外は知らないわ。まあこれくらいでも様にはなるでしょ」

シルビア「そうそう、ゆっくりで大丈夫よ」

グレイグ「む、むう……。感覚がわからん」

シルビア「足の次は手を動かして、また足を動かす。どう？」

グレイグ「こ、こうか？」

シルビア「そうね。そんな感じよ。後はアタシが合わせるわ」

ミラ「な、なるほど。ステップがあるのね。色んなのがあるみたいよ」

ダバン「へえ、なるほどね。なら、俺達も勝手にやってもいいのか」

ミラ「自由に面白いわね」

ダバン「ミラ、俺についてこいよっ」

ミラ「ふふ、わかったわ。頑張るわね」

マルティナ「皆、思い思いにやってるわね。どう？ラース。不安がってたけど、結構出来るじゃない」

ラース「そうみたいだな。体が覚えていたみたいだ。何回も練習させられた成果だな。マルティナ、どんどん行こうぜ」

マルティナ「ええ、任せて。踊るのも久しぶりで楽しいわ」

三十分ほど曲が続き、終わる頃には周りの人達は疲れてテーブルなどで休んでいた

ラース「よし、曲が終わるみたいだぜ」

マルティナ「そうみたいね。なら、カッコよく終わらしましょう」

二人「はあっ！」

曲が終わると同時にマルティナとラースは同時に手を合わせてダンスを止めた

パチパチパチ！

見ていた人達から拍手が送られる

遠くのテーブルにはイレブン達が集まっていた

マルティナ「皆ここにいたのね。どうだった？ダンスは楽しめたかしら？」

イレブン「皆が自由に踊ってたから僕達も気が楽だったよ。セーニヤも途中から上手だったんだよ」

セーニヤ「ありがとうございます、イレブン様。イレブン様のリードや教えがあったからですわ」

ロウ「マヤちゃんも随分と上手になったのう。身のこなしが軽やかで羨ましかったわい」

マヤ「本当？いしし、ありがとうございます、おじいちゃん」

カミュ「まあまあ楽しめたぜ。最初はどうなるかと思ったけどな」

ベロニカ「本当ね。でも流石カミュね。飲み込みが早いし、周りの人達の踊りを真似するなんて凄かったわ」

マルス「ハア……ハア……」

ラース「どうした？マルス。随分疲れてるな」

ルナ「私がマルスの事振り回しちゃったの。自由にやってたらマルスが目を回しちゃって」

マルティナ「あら、そうだったの。大丈夫？マルス」

マルス「めちやくちや疲れた……」

シルビア「皆最後の方は上手になってたわよね。どこかの誰かさんは最後まで感覚掴めなかったみたいだけど」

グレイグ「ぐっ……。人には誰も苦手なものがあるのだ」

シルビア「それはそうだけど、もう少し頑張りましたよ。マルティナちゃんとラースちゃんなんて凄く息もあってたし、綺麗だったわよ」

イレブン「そうだよ。ラースってあんなに踊れたんだ。知らなかったよ」

ラース「まあな。この城に来てから教わってた。後は……マルティナに見劣りされなくなかったからだな」

マルティナ「あら、そんな事思ってたの？」

カミュ「まあ確かにマルティナは踊りが上手いから、ペアになる可能性の高い兄貴が下手だと余計目立つよな」

ラース「そういう事だ。結構頑張ったんだぜ？」

セーニヤ「最後まで踊り切るのも凄いですわ。最後のポーズもピツタリでした」

マルティナ「ありがとう、皆。これでお祭りは終わりなの。お城に各自の部屋を用意したから泊まって行って」

ベロニカ「ありがとう、マルティナさん。お城に泊まるなんて久しぶりだわ」

シルビア「そうね。アタシも久々」

マヤ「兄貴は私と同じ部屋？」

マルティナ「ええ。そうしてあるけど、何か問題あれば別々にもできるわよ」

マヤ「ううん。大丈夫、聞いただけだよ」

グレイグ「周りはまだ騒いでいるな。問題を起こさないといいのだが」

ラーズ「そればかりは本当にやめてほしいな。こんな時にまで面倒な事はごめんだ」

ロウ「まあそれは皆わかっておるじやろう。イレブン、カミュ、ラーズ、グレイグ、よかったらこの後わしと飲まんかのう？」

カミュ「おお、いいなじいさん。久しぶりに飲み明かそうぜ」

イレブン「僕も？いいけど、最近飲んでないからなあ。少しだけどいい？」

グレイグ「ロウ様とは久しぶりですな。またゆっくり語り合いましよう」

ラーズ「酒のつまみはたくさんあるからな。グレイグの部屋にある酒も持ってこいよな」

シルビア「えく、何よ。アタシも混ぜてほしいわく」

マルティナ「男達で集まるならこっちは女子だけで集まりましたよ。シルビア、ベロニカ、セーニヤ、マヤちゃん、私達で少し飲みましょう?」

シルビア「もっちりんよく、マルティナちゃん! たつくさんお話ししましょう」

ベロニカ「私もお酒なんて久しぶりだわ。大人に戻ってるし、何とかなるかしら?」

マヤ「私もいいの?」

セーニヤ「もちろんですわ、マヤ様。色んなお話しましょうね」

マヤ「うん!」

レッドボーン

お祭りから三日後の早朝

デルカダール城 訓練場

ラース「悪いな、ベグル。こんな朝早くに呼び出して」

ベグル「いえ、いつもこのくらいに起きてたんで大丈夫です。バンまで連れてどうしたんですか？」

ラース「実はだな」

バン「待つてください、師匠。俺が聞きますよ」

ラース「わかった、任せたぞ」

ベグル「??」

バン「なあ、ベグル。正直に答えてくれ。レッドボーンって暴走族知ってるか？」

ベグル「!!?な、なんでそれを……」

ベグルはかなり驚いている

バン「ダーハル―ネに住んでる人から聞いたんだ。ベグルが……そのリーダーだった事も……」

ベグル「……………」

バン「それでそのグループが人殺しをしたって噂があるようで、それにベグルが関わってるのかどうかを知りたいんだ」

ベグル「……………」。俺は、確かにレッドボーンの前リーダーでした。バンには少し話したけど、荒れていた時期に勧められて入ったんです」

バン「喧嘩とかをしていたってやつだよな」

ベグル「そうだ。あの頃は自分がどうでもよくなって、他人が羨ましくて、誰かと一緒に自分の行動を正当化したかったです。そのグループに入って二年ほど経った時、今までのリーダーが辞めて次に俺が選ばれたんです。」

でも、俺はそんなの興味なかったし、纏める気もありませんでした。ただ暴れたい時に暴れてただけだったので」

ラーズ「それで？人殺しの件はどうしたんだ？」

ベグル「俺がリーダーになってから、纏め役がいなくなりグルーヴがバラバラになったんです。その時に過激な奴らが集まって、旅人を殺したと聞きました」

バン「そっか。やっぱりベグルは関係なかったんだな！」

ベグル「まあ、結果的にはそうだ。その後俺はそいつらを徹底的に殴ってそんな事をさせないようにしましたけど、結局俺はその後すぐに辞めたので今どうなってるかは知りません」

ラーズ「ふむ。大体の話はわかった。前にも言ったが、俺はベグルの過去がどうであろうとあまり気にしない。だが、こればかりは目を瞑るわけにはいかなかったからな。ベグル、お前が過ちを犯してなくてよかった」

バン「言ったじゃないですか、師匠！ベグルはそんな事するやつじゃないって！」

ラーズ「確認だよ。俺だってあまり信じていなかったさ」

ベグル「ですが暴走族に入ってたのは本当ですし、知りもしない人を襲って金目の物を取っていった事は数えきれないくらいありますよ。そんなやつが兵士なのは…… やっぱり」

バン「何言つてんだ？ベグル。お前はそんな事気にする人じゃないだろ」

ベグル「……………だが、周りからしたらそれはどうしても気になる事だろ！」

ラース「確かに。だが、ベグルはそれを悪い事だったと判断してるんだろ？なら、いいんじゃないか？その分、知りもしない人をお前が助けてやればいい。それでおいこだ。そういう考え方していいぜ」

ベグル「ラース將軍……………」

バン「そうそう、少しくらい悪い事してたって平気だぜ！前向きに考えようぜ」

ベグル「ああ、そうだな。ありがとう」

バン「それにしてもベグルにまさかあんな通り名があるなんてな。何だっけ？悪尽のベグル？」

ベグル「げっ!?!そんな事まで聞いているのか！」

ラース「ま、まあな。か、カッコいいじゃない、か」

ラースは口を押さえながら言っている

バン「し、師匠！面白いのは…… わかりますけど…… 笑いは堪えて……。ププツ……」

二人「ハハハハハ!!」

二人は堪えきれずに大笑いし始めた

ベグル「……………」

ベグルは顔が赤くなりながら震えている

ベグル「ラース將軍…… バン…… それ以上は俺も怒りますよ……」

バン「ヒ、ヒイ……。悪い、ベグル。似合ってると思うぜ！」

ラース「今となつては恥ずかしい限りだな。まあ、そんなわけでこれからも頑張ってくれ」

ベグル「…………… はい」

その後、朝の訓練が終わり

ロベルト達「悪尽のベグル!!アハハハハ!!」

バン「面白いよな!!」

ベグル「てめえら笑ってんじやねえ!!ぶん殴るぞ!!」

しばらくベグルは異名をいじられ続けたという

バンの悩み

それから二ヶ月後、デルカダール城

ラースとマルティナの部屋

城にメグがやってきており、ラースに相談があるようだった

メグ「すみません、ラース様。突然押しかけてしまって」

ラース「いや、気にするな。それにメグが城に来るなんて珍しいしな。バンじゃなくて俺に用事なんてどうしたんだ？」

メグ「実はバンの事で相談がありました」

ラース「バンについて？何かあったのか？」

メグ「あまり確証がなくて申し訳ないんですが、最近バンがおかしくありませんか？」

ラース「うーん……。特段そういったようには思えないけどなあ」

メグ「やっぱり私の勘違いでしょうか……。最近家で考え事が多いみたいで、私が話してる時もボーッとしてるんです。食事の時もま

るで無心で食べてるみたいで……。前までは必ず美味しいと言ってくれていたんですが」

ラース「なるほど。それはバンらしくないな。わかった、俺も様子を見てみよう。何かあったらまた連絡する。メグはバンの体調の方にも気を配っていてくれるとありがたい」

メグ「はい。そこはお任せください。私一人だけだとあまり自信なくて」

ラース「まあ、そうだろうな。バンは城にいる時間も長い。なら、俺も様子を見た方が確証は取れるもんな」

メグ「ご協力ありがとうございます。迷惑かけるようですみません」

ラース「何言ってるんだよ。バンらしくないのは俺達にとっても問題だからな。あの無鉄砲さがいいんだ。今の変なバンの方が迷惑だからな」

メグ「ふふ、そうですね。それではよろしくお願いします」

ラース「ああ、それじゃあな」

その後、ラースは兵士達に聞き込んでいた

ベグル「え？バンですか？特に変化は無いと思いますけど」

ダバン「特に変化とかはないと思いますよ。バンなら何かあればわかりやすいですし」

ロベルト「バンが？俺はわかりませんね。今日もいつも通りに見えましたが」

ガザル「本当ですか？それ。今日も元気でしたよ」

ギバ「バンに限ってそんな事。朝も残って練習してたんですよ」

マーズ「わからないですね……。最近ノートを片手によく全員を観察してますが、変化と言えばそれくらいですかね」

ガク「バンさんですか？うーん……。俺には普通に見えました」

ジール「俺もガクと同じです。体術を教える時も普通でしたね」

大広間

ラースは聞き込んで全員同じ結果で少し驚いていた

ラーズ「駄目かあ。まさか全員わからないとは思わなかった。城だと気を配ってんのか？家だから気を抜いているのかなのか？」

その時、バンが話しかけてきた

バン「あ、師匠！見回り行ってきましたね！」

ラーズ「お、おう、頼む。あ、そうだ。バン、見回りなんだがデルカコスタ地方の方まで頼む。魔物の生態を確認しておきたいんだ」

バン「デルカコスタ地方ですね、わかりました！」

バンは元気よく出ていった

ラーズ「……いつも通りだよな。うーん、わからん！」

玉座の間

ラーズはマルティナとグレイグにも相談していた

マルティナ「へえ、バンが少しおかしいのね。それなのに、メグさん以外変化に気づかない……。と。バンが隠し事が上手には見えな
いんだけど」

グレイグ「確かにそうですね。昔からバンは嘘が下手だったからな。それと、よく周りを賑やかにさせていた。中心になっていたとも言えるな」

ラーズ「そこは今でも大して変わらないよな。バンの性格上そうなるんだろう。バンのやつ、何か変な思い違いをしていないといいが」

マルティナ「きつと大丈夫よ。バンはラーズの事をとつても慕つてるもの。何かあったら自分から相談に来るわ。前もよく来てたじゃない」

グレイグ「そうだな。よくラーズとバンは話しているからな。兵士と騎士であそこまで仲がいいのも珍しいな。いい事ではないか」

ラーズ「まあ、あいつは放っておけないからな」

その頃、デルカコスタ地方

バン「ふう……。魔物調査はこんなものかな。きりかぶこぞうが少し見られなくなってきたのか？偶然の可能性もあるけど。さて……」

バンは岩に座り込んだ

バン「俺、兵士長に向いてないのかな……。師匠みたいにまとめられないし、リーダーっぽくなれないしな。師匠に近づくにはどうしたらいいんだろうか」

バンが遠くを見ながら考え事をしていると、背後から魔物が寄ってきていた

魔物「お前、悩み事か？」

バン「へ？うおっ!!? な、何だお前！」

バンの背後にはインプがいた

魔物「すまない、驚かせたな。お前の心の声が聞こえてきてな」

バン「お、俺の心の声が？」

魔物「ああ。師匠という男に憧れているのだな」

バン「そ、そうなんだ。師匠は俺にいろんな事を教えてくれたんだが、どうしても近づけなくて…… どうしたらいいのかわかんねえんだ」

魔物「ふむ。なら、これを使ってみろ」

そう言い、魔物はネックレスを取り出した

バン「これは？」

魔物「最近魔物界の中で出てきた望みのネックレス。これを付けて一つ願うとその願いは叶うと言われている物だ」

バン「うさんくせえなあ。それに代償がいるんだろ？」

魔物「それが何もいらぬ。自分だつて人間の言葉が喋れるようになりたいと願つてこれを付けたら今のようになってゐるのだ」

バン「マ、マジか……」

魔物「だが、一つだけだぞ。複数すればその分代償が必要となるらしいからな」

バン「あ、ああ。いいのか？貰つても」

魔物「ああ。自分はまだ代わりがあるからな」

バン「ありがとな」

バンはネックレスを受け取つた

魔物「それじゃあな。師匠に近づけるように頑張れよな」ニヤ

魔物は去つていった

バン「まあ早速つけてみるか。願いはそうだな……。兵士長らし

くなれますように！」

キラ

ネツクレスは光った

バン「……何か変わったのか？まあ、いいか。城に戻って急いで報告しないと。師匠に迷惑かけちまう」

デルカダール城 大広間

ラース「おお、バン。お帰り、どうだった？」

バン「魔物は大きな変化は見られませんでした。少し数が増えたり減少していたりしますが、そこまで気憂するほどでもないかと」

ラース「わかった。お疲れ様だな。ありがとな」

バン「いえ、大丈夫です！では！」

優秀なバン

次の日、???

バン「ふああ、そろそろ朝だよな。って、何だこの部屋？どこだよここ。どうなってんだ？」

バンが目覚めると知らない部屋におり、周囲にはベットとトイレ、お風呂しかない狭い部屋だった

バン「なんか不思議な感じがする。なんだここ」

その時、バンの背後から声がした

??? 「よう、俺。やっとお目覚めか」

バン「誰だっ!!」

バンが振り返ると、そこには自分と全く同じ姿が立っていた

偽物バン「だから俺だよ。お前が願った姿の俺だよ」

バン「は？お、俺が……もう一人？しかも願ったって……。あのネットワークスの事か!!」

偽物バン「そういう事だ。お前が願ってくれたおかげで俺ができた。お前には感謝しているよ」

バン「だからなんだよ。ここから早く出しやがれ！」

偽物バン「それは無理なお願いつてやつだな。俺は自由になりたいんでね。こんな狭い場所に閉じ込められてずっと退屈してたんだ。だが、お前が俺に力を与えてくれた。

これから俺はお前として生きていく。お前がなれなかった優秀な兵士長のバンとして、な」

偽物のバンはバンに向かって指を指した

バン「な、何だと!!ふざけんな!!俺はこれから頑張っていくんだ!」

偽物バン「頑張る?こんな物に頼ろうとしてたやつが何を言ってるだか」

バン「ぐっ…………。それは…………」

偽物バン「お前はもう用済みだ。俺の代わりにこの世界で俺の活躍を見ているといい。優秀なお前を見た周りはどうな反応をするだろうなあ?」

バン「そんな事させねえ!!せいけんづきー!」

バンは攻撃をするが、偽物のバンは煙のように消えていった

バン「どこに消えやがった!!ふざけんじゃねえ!」

部屋全体から偽物のバンの声が聞こえてくる

偽物バン「やれやれ、怖いやつだな。ほら、これでどうなっているかわかるだろ?」

バンの目の前には映像が流された

映像には目の前でメグがご飯を食べており、横にはマサルの姿も見える

バン「な、なんだよこの映像。誰の目線だ、これ」

偽物バン「これは俺の目線。もうお前はネックレスの中にいて、俺がお前として動き始めたのさ」

バン「なに!?!おい、メグ!!メグ!!そいつは俺じゃない!!聞こえねえのか!」

メグは全く反応を示さない

偽物バン「俺はお前の記憶を全て持っている。今までどうやって過ごしてきたかもな。ここから俺が変えてやるよ。お前の望んだ姿にな。

誰にもネックレスの中にいるなんてわかるわけもねえ。声も聞かないし、姿も見えないからな。さて、そこで静かに見ているといい

さ」

偽物のバンの声は聞こえなくなった

バン「そんな……」

その頃、メグのカフェでは

偽物バン「いやー、メグの朝飯はいつ食べても美味しいな！」

メグ「ふふ、ありがとうバン。今日は元気なのね。よかったわ。最近考え事が多いみたいだったから。仕事大変なの？あまり無理しないでね」

偽物バン「ああ、心配かけて悪かったな。俺はもう平気だ」

マサル「パパ、頑張つて！」

偽物バン「おう、マサル。ありがとな！父ちゃん、頑張つてくるぞ！」

その後、デルカダール城 訓練場

マーズ「おはよう、バン。今日は体術の訓練から始めるからな。お前が率先して教えるんだぞ。ダバンもいるが、あまり頼ってばかりいるなよな」

偽物バン「おう！今日はバツチり考えてきたからな！任せておけ！」

マーズ「それならいいが、前みたいいきなり難しい事をさせようとするなよ？何事も基本が大事なんだからな。それを踏まえておけよ」

偽物バン「当たり前だろ！マーズはいつも心配性だな！」

マーズ「お前が馬鹿ばかりやってるからだだろうが」

ギバ「よう、マーズ、バン、おはようさん！」

ギバとガザルがやってきた

偽物バン「おう、ギバとガザルか。おはよう」

ガザル「今日のメニューの話か？」

マーズ「ああ。まあ、バンに注意してた所だ」

ギバ「それ何回やってんだよ。もうバンには無理だって」

ガザル「そうそう。頭の容量が足りねえんだよ」

偽物バン「うるせえ!!今に見てろよ!」

そして、訓練が始まり

偽物バン「この前は踏み込みが甘いやつらが多かったからな。今日はそこを重点的にやっていくぞ。踏み込みを重くしないと、一撃を決めたい時に決められないからな。」

それに、足でしつかり体を支える事で踏んばる事もできる。基礎の大事な所だからな。何日かにわけてやっていくぞ」

新入り達「は、はい!」

偽物バン「まずは俺がやってみせる。その後は一人ずつ俺が見ていくからな」

それを見ていたベグル達は

ベグル「……………は?」

ダバン「おい、あれは誰だ?」

ダバンは自分の教える事がなくなり、困惑している

ロベルト「本当にバンなのか？随分と教え方が上手くなってるじゃないか」

ギバ「マジかよ……」

ガザル「誰の入れ知恵だ？レース將軍か？」

マーズ「まさか。レース將軍はバンに自分が思うようにやれと言っていた。それに、バンも今日はよく考えてきたと言っていたな。まさか、本当にバンが？」

訓練が終わると

ダバン「バン!!急いで医療部屋に行くぞ!!」

ダバンは偽物のバンの手を取って走り始めた

偽物バン「え？な、何でだよ！」

ダバン「お前があんなトラブルも何もなく訓練が終わるなんてありえねえだろ!!どっか頭に怪我してんだろ！」

偽物バン「失礼だな!!健康だぞ!!」

偽物のバンは踏みとどまった

ベグル「お前……本当にバンか？」

ベグルは恐る恐るバンに触っている

偽物バン「ベグルまで！何でこんな反応するんだよ！俺だつてやればできるんだぞ!!」

マーズ「いや恐れ入ったぞ、バン。これからもあの調子で頑張ってくれ」

ロベルト「そうだな。新入り達も随分と熱心な顔して取り組んでいたじゃないか」

ギバ「あんな事もできたんだな。また兵士長らしくなったんじゃないか？」

偽物バン「だろ？やっぱり兵士長ならこうでなくっちゃな！」

その頃、ネックレスの中では

バンはその訓練の光景を見ていた

バン「何だよ、皆して。俺だつてあれくらい……。できたかもしれないんだぞ……。そいつは偽物なんだよ。誰か一人でも気付けよ。ベグル、ガザル、ギバ、ダバン、マーズ、ロベルト……。嬉しそうな顔しやがって」

バンはふて腐れていた

その後、ベグルの部屋

コンコン

偽物バン「ベグル、いるかー？」

ベグル「あ、ああ。今開ける」

ガチャ

ベグル「どうしたんだよ、バン。やっとノックするようになったんだな。前に骨に刻んだ甲斐があったってもんだな」

偽物バン「ハ、ハハ。そりやああそこまでされたら次何されるかわかんねえからよ」

ベグル「それは何よりだな。で？用件は何だよ」

偽物バン「師匠に提出する書類あるだろ？終わったか？」

ベグル「ああ、あれの事か。まだ途中だが、締め切りは一週間後だぞ。早くないか？お前なんて前日まで手をつけねえじゃねえか」

偽物バン「ほら、見ろ！偶には早く終わらせて師匠に楽しませてあげたいからな！ベグルも早く終わらせて師匠を驚かせてやろうぜ！」

偽物のバンは書類をベグルに自慢気に見せた

ベグル「な!?!あのいつも締め切りギリギリでラーズ將軍に怒られてたお前が……。本当にどうしたんだ？頭でも打ったか？」

偽物バン「何でそうなるんだよ。俺だってやればできるんだぞ！」

ベグル「へいへい、少し待つてな。俺も終わらせるからよ」

偽物バン「なら、ベグルの部屋の本読んでいいか？勉強するからよ」

ベグル「ハア!?!お前が勉強だつて!?!……おい、バン。こつちこい」

偽物バン「??何だよ」

ベグル「ふんっ!!」

ガツン！

ベグルは偽物のバンの頭を思いつきり殴った

偽物バン「いつつだあああ!!何しやがる!!たんこぶ出来ただろ!!」

偽物のバンは涙目になっており、その頭には大きなたんこぶが出来上がった

ベグル「これで元通りか?全く。突然どうしたってんだよ」

偽物バン「殴る理由が酷え!!元通りも何も、生まれた時からこの頭だからな!」

しばらくして、玉座の間

偽物バン「マルティナ様、失礼します。師匠、今日はサプライズがあります!」

ラーズ「おう、何だよ」

偽物のバンが玉座の間に入ると同時に、隅にいたブレイブが立ち上がった

寝ていたコロも目を覚まし、辺りを見回し始めた

ラーズ「(ん?突然どうしたんだ?)」

偽物バン「師匠、見てください。これ!」

グレイグ「これは……一昨日出した書類か。随分持ってくるのが早いな」

ラーズ「締め切りは一週間後だぞ。もう終わったのか?」

偽物バン「はい!いつも締め切りギリギリで申し訳なかったので、今回から早く出すようにします!」

マルティナ「あらよかつたわね、ラーズ。これで寝る時間が増えるわよ」

ラーズ「あ、ああ。助かる。だが、どうした?急に」

偽物バン「言ったじゃないですか、サプライズだって。驚いてくれました?」

ラーズ「そりやあ……言葉に表せないくらいにはな。まあ、ありがとう。預かるな」

偽物バン「やった!作戦成功!それでは失礼しました!」

偽物のバンは喜んだ様子で出ていった

ラーズ「マジか……。何があったんだ?」

マルティナ「私も驚いたわ。バンがこんな早く書類を終わるなんて。ベグルとは違って存在すら忘れてる事も多かったのに」

グレイグ「確かにそうですね。バンはこういう書類関係は相当苦手ですからね」

ラース「……………」

違和感

それから、偽物のバンは周りに驚かれながらもしつかりと仕事をこなしていった。周りもそれにだんだんと慣れていき、驚く事も少なくなっていくた

一週間の過ぎた頃、デルカダール城

訓練場

偽物バン「よし、お前ら並べ！今日の訓練だぞー」

ガク「あれ？今日はもう訓練したじゃないですか。まだやるんですか？」

偽物バン「ああ。強くなるには時間がかかるからな。ガク、全員集めてきてくれ」

ガク「は、はい。わかりました」

その後

偽物バン「ほら！バランスが取れてないぞ！もっと体幹に力をいれろ！」

新入り達「はい！」

偽物バン「違う！もっと強く拳を打つんだ！それじゃあただのパンチだぞ！」

指導はどんどん激しくなっていく

ダバン「なあギバ、ガザル。バンってあんなに熱血だったか？」

ギバ「そんなはずねえんだがな。バンとは付き合いは長いが、あんなに熱血なバンは初めてだ」

ガザル「最近やる気があるのはいいんだが、ちよつと厳し過ぎねえか？」

ダバン「だよなあ。前まではこんな事なかったのに。個人のペースに合わせてやっていたはずなんだが」

その頃、ラースとマルティナの部屋

部屋にはラースとブレイブがおり、魔物が喋れるようになる薬をブレイブに舐めさせていた

ラース「さて、ブレイブ。これで話せるだろ？何か言いたい事あるんだよな」

ブレイブ「…… あー、あー。ラース様、一週間ほど前から城の中

「にほぼずっと魔物のような気配を感じます」

「ラース「魔物のような？しかもほぼずっとなのか」

「ブレイブ「はい。私にもはっきりとはわからないのですが、どことなく魔物のような……。そんな不思議な気配です。息子も僅かながら感じているようで」

「ラース「ふむ……。城のどこから感じる？」

「ブレイブ「それもわからないんです。ですが、バンが玉座の間に来ると気配は濃くなりますね。後はなんとも……」

「ラース「……。ブレイブ、バンをどう思う？」

「ブレイブ「最近からまるで別人のようになりましたよね。何かあったのでしょうか」

「ラース「これは俺の勘なんだが、あれはバンじゃない気がしていな」

「ブレイブ「バンじゃない？ですが、見た目も性格も気配まで変わってません。それなのにバンじゃないんですか？」

ラース「ああ。俺も確証はないんだが、あいつを見ていると違和感があつてな」

ブレイブ「そうですか……。私にはわかりませんね」

ラース「まあそうだよな。マルティナもグレイグもわかってくれなくてな。まあ、俺自身これに絶対の自信があるわけじゃねえからよ。一応警戒だけしておいてくれ」

ブレイブ「話わかりました。警戒しておきますね」

その頃、訓練場

偽物バン「よし、一旦ここまで！明日からはもう少ししっかりやっていくからな」

新入り達「は……。はい……」

新入り達はヘトヘトになっていた。疲れて座っている人もいる

ベグル「おい、バン。少し頑張りすぎだぞ。こいつらの体力の事も考えろ」

偽物バン「何言つてんだよベグル。兵士長として皆を強くしないと

いけない。強くなるにはこれくらいやっていけないとこの先大変だぞ」

マーズ「それはわかるが、もう少しゆっくりでもいいじゃないか」

ロベルト「まあまあ。バン、明日はもう少しゆっくりにしてみてもいい。俺達も様子を見て先に進めそうか判断する。それで今後の進行度を決めよう」

偽物バン「わかった」

偽物のバンは去っていった

ベグル「……………おかしい」

マーズ「真面目になったし、馬鹿をやる事もなくなったよな」

ロベルト「いい事なはずなんだがなあ……………。俺は少し前の方が楽しかったな」

ベグル「俺もだ。あいつには散々迷惑かけられてたが、それでも楽しかったんだがよ。虐める理由もなくなっちゃったしなあ。あーあ、楽しみが一つ消えてつまんねえの」

ダバン「お前らもバンに違和感覚えてるのか」

ギバ「どこか冷めたよな。もっと暖かいやつだったはずなんだが」

ガザル「そういえば、あいつラーズ將軍を見ても喜ばなくなったよな」

ロベルト「言われてみればそうだ。今までそんな事なかったのに」

ベグル「今夜バンに話をしてみるか。何か嫌な事とかがあったのかもしれねえ」

その後、バルコニー

偽物バン「さて、誰もいないな。おい、俺。見てただろ？この数日でもう俺はすっかりお前になったぞ」

ネックレスを取り出して話しかけると、ネックレスの世界にいるバンにその声は響いていた

バン「…………… ああ。そうだな。お前は俺に出来ないような事もできた。皆、お前に感謝していた。誰にも気づかれず、偽物だと疑いもしねえんだ。俺は…………… 皆にとってその程度だったんだな」

偽物バン「ああ。優秀な兵士長になった俺はこんなにも周りに必要とされている。出来の悪いお前はいらないうって事だ」

バン「…………… そうだな。 どうやら…………… 俺は本当に役に立って
いねえみてえだ」

偽物バン「へへへへ、いいぞ、言え。 その先の自分を諦めるセリフ
を言え！ そうすれば俺はもっと力が手に入る」

バン「もう…………… お前が…………… 俺の代わ」

ラース「何してるんだ？ バン」

偽物バン「(チッ!) あ、師匠。 お疲れ様です。 師匠こそどうしたんですか？」

ラース「…………… 少し外の空気を吸いにな。 まあ、休憩だ」

偽物バン「師匠もでしたか。 俺もなんです」

ラース「そうか。 最近頑張っているみたいだな」

偽物バン「そりゃあそうですよ！ 何たって俺は兵士長ですから。 これくらいやらないといけませんよね」

ラース「別に兵士長だから頑張るとかそんなのはいらねえよ。バンはバンらしくいればいいだけだ。前にもそう言っただろ」

偽物バン「あ、あれ？そうでしたっけ？師匠は今の俺はどう思いますか？」

ラース「変わったな、とは思うぞ。まるで別人のようにな」

偽物バン「まだそんな事思ってるんですか？皆にも散々言われましたけど、俺の本気なだけですって！そろそろ休憩終わりますね。それでは師匠、お疲れ様でした」

ラース「……………一つだけ聞いてもいいか？」

偽物バン「はい？どうしました？」

ラース「兵士長、楽しいか？」

偽物バン「これは仕事ですよ。楽しむなんて必要ないじゃないですか。それでは！」

ラース「バンはそんな答え方しないよな。やはり別人か。だとしたら、本物のバンはどこに?..... さつきチラリと見えたネットワークス。あんなの、あいつ着けてたか?」

正体

その夜、訓練場

偽物バン「なんだよお前ら。急に呼び出して」

ベグル「なあ、お前最近どうしたんだ？」

ギバ「最近のお前、変だぞ。俺達の知ってるバンがどこにもいなくなっただみてえだ」

マーズ「前までのバンはどこいったんだよ。変わったのはいい事だが、お前はそんなやつじゃなかっただろ」

偽物バン「俺はどこにもいってねえよ。それに、お前らが俺にもっとしつかりしろって言ったんだろ？ 変わって何が悪いんだよ」

ガザル「そりゃあそうだが、何もここまで変われとは言っていない。前までであった優しさや俺達への信頼はどこいった。それは無くしちゃいけないものだぞ」

偽物バン「優しさ……信頼……ねえ。別にそんなのいらねえだろ。立派な兵士長になるには必要ねえ」

全員「!？」

ロベルト「……………変わったな、お前。いや、もうお前はバンじゃねえのかもしれないな」

ダバン「バンは絶対にそんな事は言わねえ。あいつは他人や仲間の俺達に対して絶対の信頼を置いてくれた。お前は誰だ」

全員が武器を取り出して、偽物のバンに向けている

偽物バン「……………マジか。お前ら、俺とやりあう気か？」

ベグル「当たり前だ。さあ！本物のバンを出せ！」

偽物バン「面倒だなあ。折角いい調子だったのによ……………」
ハアア！」

キラン！

偽物のバンは力を込めると、ネックレスが光り出し目が赤くなった

マーズ「この気配……………。人間ですら無かったか!!」

ギバ「てめえ、バンをどこにやりやがった！」

偽物バン「勘違いするな。俺はバンとやらの願いを叶えただけに過ぎない。優秀な兵士長になりたい……。あいつはそう願い、俺に力を与えた。お前らも喜んでいたじゃないか。こいつが立派になったと」

ロベルト「バンが願った、だと」

ガザル「……確かに喜んださ。馬鹿やらなくなって驚いたしな。だがよ、それを求めるあまり間違った方向に進んでほしくは無かった！」

ダバン「バンはバンの良さがある！お前にはわからねえだろうけどな！それを捨ててまで優秀になったってこっちは何にも嬉しくねえんだ!!」

偽物バン「ごちやごちやとうるさい奴らだ。来いよ、兵士長に逆らうやつらは許さねえぞ！」

ギバ「雷光一閃突き！」

偽物バン「ギバはまず足を狙ってくる。そして右側が甘くなりやすい。しんくうげり！」

偽物のバンは軽く避けた後、回避を攻撃として利用した

ギバ「ぐっ！」

マーズ「イオナズン！」

偽物バン「マーズは魔法を放つより早く呪文名を言う癖がある。魔法の位置がわかれば簡単に避けられる。ばくれつきやく！」

爆発の範囲から離れると、マーズに向かってすぐに攻撃に移る

ダバン「危ねえぞ、マーズ！」

ダバンはマーズを庇い、偽物のバンの攻撃を盾で防ぐ

偽物バン「防御中はまともに動けねえよな。はあっ！」

偽物バンはダバンに足払いをかける

ダバン「うおっ！」

ダバンが転び、地面に倒れそうな瞬間偽物のバンが攻撃を繰り出した

偽物バン「せいけんづき！」

ダバン「ぐわあっ!!」

ダバンは攻撃に直撃し、飛ばされていく

ガザル「ダバン！デュアルブレイカー！」

ベグル「逃げられなければいいんだろ！全身全霊斬り！」

横からガザルのブーメラン、正面からベグルの攻撃が同時にやってくる

偽物バン「甘いな。天地の構え！」

偽物バンは少し後ろに下がりベグルの攻撃を避けた後、ブーメランを槍で受け流し、ガザルへと飛ばした

ガザル「!?マジか！」

ザク！

ガザルは自分の攻撃が返ってきた事に驚き、避けられなかった

ベグル「俺がああの程度だと思ふなよ！後ろはもう壁だぜ！アイズブレード！」

偽物バン「お前は隙が少なく厄介だ。先に決着をつけさせてもらおう。天地の構え！ハアッ！」

槍で攻撃を受け流し、大剣についた氷を槍に付けて反撃した

ベグル「あつぶねっ!!」

ベグルの顔に当たりそうになるが、間一髪で避ける

偽物バン「氷結らんげき！」

ベグル「な!?!ぐはっ！」

手に攻撃が当たり大剣を離れた後、胴体に攻撃を入れられて吹っ飛んでいく

ロベルト「さみだれ斬り！」

マーズ「メラゾーマ！」

偽物バン「さみだれ突き！天地の構え！」

ロベルトの攻撃を全て相殺しながら、炎の塊を地面へ受け流した

ギバ「お前ら、離れてろよ！ジゴスパーク！」

ギバの槍に纏わせた雷が偽物のバンを中心に炸裂する

ダバン「おお！マルティナ様の技じゃないか！ギバ、いつの間にも！」

ギバ「ちよつと前にな！これなら逃げられなかっただろ！」

煙が晴れると

偽物バン「雷は大地へと。俺には効かない」

槍を地面に突き刺した偽物のバンがおり、ほぼ無傷だった

ギバ「嘘だろ！くそ！」

ベグル「あいつ、あんなに強かったか？俺達をほぼ完全に理解してやがるぞ」

偽物バン「あいつの記憶だ。それを俺が読み取り、利用している。お前達も師匠とやらも俺には勝てない。俺ならありとあらゆる選択肢に対応できるからだ」

ガザル「くっ！こっちはやりにくいってのに」

その時、訓練場の入り口から猛スピードで誰かが入ってきてきて偽物のバンに突撃してきた

ブレイブ「うおおっ！やいばください！」

偽物バン「何!?ぐっ！」チャリン！

ネックレスがブレイブの爪により切り裂かれ、その場に落ちた

ギバ「ブレイブ！」

マーズ「どうしてここに！」

ブレイブ「ラーズ様からバンを警戒しておけと言われていてな。俺自身バンから魔物のような気配を感じていた。そしたら今魔物の気配が明らか強くなった。やはりお前はバンではなかったのだな」

偽物バン「人間に味方するなど魔物の風上にも置けんやつだな、貴様。たかがトラ風情が！人間の力を手にした俺に敵うと思うなよ！」

ロベルト「ブレイブ、こいつは何て魔物なんだ！」

ブレイブ「俺も話でしか聞いた事がなかったが、二百年以上前にこの地方に凶暴で残忍なマネマネという魔物がいたらしい。封印されたと聞いていたが……」

マネマネ「俺からネックレスを奪うとは……！許さん！うおおおっ!!」

マネマネを中心に闇の力が放出される

全員「グアアアア!!」

衝撃波に直撃した全員は訓練場の隅まで飛ばされる

ベグル「ぐっ……。お前ら、無事か？」

ダバン「いてて、何とかな」

マネマネ「もう許さんぞ！全員生かしておけん！今すぐこの槍で貫いてやる!!」

その時、落ちたネックレスが光り始める

バン「皆!!逃げろ!!」

全員「バン!!」

マネマネ「チツ！俺から離れたから力が弱まったか！」

ロベルト「ブレイブ、あのネックレスを取りにいけるか!？」

ブレイブ「だが、あいつがいては取る事はできん！」

ベグル「俺に任せろ。まだお前らよりは動ける」

ロベルト「俺も行こう。一人で敵う相手じゃない」

マーズ「ダバン、怪我を治しておけ」

マネマネ「さあ、来い!!」

ロベルト「うおおお!」

マネマネ「ロベルトは2、3回避けると攻撃が単調になる。おらあ!」

ロベルトの攻撃を避けた後、槍で薙ぎ払われる

ロベルト「ぐっ!!」

ベグル「行け、ブレイブ!オノ無双!」

ブレイブ「ああ!」ダツ!

ブレイブはネックレスに向かい走り、ベグルはマネマネへと攻撃する

マネマネ「欲張ったな!」

マネマネは姿勢を低くし、ベグルの視界から消えた

ベグル「しまった!」

マネマネ「ばくれつきやく!」

ベグル「ぐあああ!!」

ベグルは下から攻撃に直撃し、上に飛ばされる

マネマネ「貴様は厄介だ。死ね！」

落ちてくるベグルの下には槍を構えたマネマネがいた

ガザル「させねえぞ！ボミオス！行け、ギバ！」

マネマネ「小賢しい真似を！」

ガザルにより、マネマネの素早さが一段階下げられた

ギバ「さみだれ突き！」

マネマネ「チツ！」

マネマネは後方へと避けた

ベグル「ぐっ！」ドサ

ベグルは落ちてきた

ロベルト「ぐっ……。ベグルはこれ以上は危ねえ。マーズ、ガザル、ギバ、交代だ！」

ブレイブ「もう少しだ！」

マネマネ「させねえよ！なぎはらい！」

ブレイブ「ぐはっ！」

ブレイブはネックレスに届きそうだったが、マネマネにより邪魔される

マネマネ「氷結らんげき！」

ブレイブ「くっ！危ない！」

マネマネ「すばしっこく避けやがって」

バン、覚醒

ガザル「シャインスコール！」

マネマネ「効かねえよ！」

マネマネは槍で防いでいく

マーズ「マヒャド！」

マネマネ「ばくれつきやく！」

頭上の氷を全て砕いていく

ギバ「雷光一閃突き！」

しかしギバの攻撃はマネマネには簡単に避けられてしまった

マネマネ「ハッ！惜しかったな」

ギバ「これはオトリだぜ！ブレイブ！」

ブレイブ「ああ！」

ブレイブは隙を突き、落ちているネックレスを回収した

マネマネ「チツ！狙いはそっちだったか。だが、それを取ったから

と言って俺が弱くなるわけじゃねえ」

ブレイブ「ここにいるのだな、バン！早く出てくるんだ！」

バン「ブレイブ……。だが、俺は…… ここにはいらねえんだろ」

ブレイブ「何を言っている！そんなはずないだろうが！」

マネマネ「ハハハハ!!この数日間そいつは俺と自分を比べていたのさ。自分が出来ない事を当然のようにできる俺と、それに喜ぶお前達。それがこいつにとってどれだけ辛い事だっただろうなあ。お前達のせいでこいつはもう自分がいらなと思うてるんだぞ？」

ダバン「くっ……。汚えやつだな！」

マネマネ「汚い？どこがだ。俺はこいつの願いを叶え、こいつは俺の代わりになったただけだ。願いに代償は付き物だろうが」

ロベルト「ブレイブ、一先ずこっちに来い！」

ブレイブ「ああ！」

マネマネ「無駄だ。ネックレスからは出る事なんて出来ねえ。そいつは永遠にそこに居続けるのさ。だから代わりに俺がそいつになつてやるんだ。喜べ、お前達も馬鹿がいなくなつて清々しただろ？」

ベグル「ふざけてんじゃねえぞ!!!」

ベグルの怒鳴り声が訓練場に響いた

ベグル「確かにうちの兵士長は馬鹿だし、間抜けでこつちがどれだけ心配しても気にしねえ。教えるのも下手だし、作戦の一つも考えられねえし、感情だけで動くでしょうもねえやつだ！だがな!!」

お前なんかはバンにはなれねえ!!見た目や喋り方、気配を同じにしたつてなあ!バンは世界に一人だけだ!お前はバンみてえだが、全く違う!

バンは困ってるやつを絶対に見捨てねえ!努力してるやつを応援するし、落ち込んでる時は励ましてくれる。悲しい時は近くにいてくれる、嬉しい時は一緒に喜んでくれる、そんなやつだ!優しいし、俺達を信頼して疑わねえ!

これはバンだからこそ出来る事だ!俺達が信じる兵士長だから出来る事だ!お前はそんな事ができるやつじゃねえ!!」

ベグルの体からは先程の怪我が開き血が流れているが、お構いなく叫び続ける

バン「ベグル……………お前……………」

ダバン「ベグル、落ち着け。傷が……」

ベグル「うちの兵士長舐めるんじゃないぞ!!」

ギバ「そうだ！俺達のバンはお前とは別人なんだよ！お前なんかをバンを語るんじゃないぞ！」

ガザル「馬鹿だがよ、それがあいつらしさだ。それがなきやバンはらしくない。お前みたいにな」

ロベルト「誰かを傷つける事はしない。少なくとも今のお前みたいに俺達を本気で殺そうなど考えたりしないんだ」

ダバン「優秀なバンなんかいらねえんだ。いつもの、俺達が慣れ親しんだバンでいい。お前に兵士長は務まらねえよ」

マーズ「バンはいつも無意識で俺達を助けてくれる。あいつがする事は馬鹿な事が多いが、それでも助けられる事が多い。リーダーらしさとかそんなのいらない。」

バンは周りを纏められなくても、引っ張る力があるからだ。それさえあれば、自然と人は集まる。俺達が支えてやればいいだけだ」

ブレイブ「バンは強い。仲間を信じ、己のすべき事を必ず成し遂げる。簡単な事ではない。自分がすべき事をわかつていなければならぬ。こいつはどんな状況でもその判断ができる。リーダーには必要不可欠な要素だ。これがあるだけでリーダーとして十分だ」

マネマネ「ハア……………。黙れよお前ら。そういうの、マジでうぜえ。そんなに認めねえのなら、無理矢理でも認めさせてやるよ。圧倒的な力の差でな!!ハアア!!」

マネマネが両手を前に突き出し力を溜めると、手から闇の力が集まっていた

ギバ「おいおい、これはまずいんじゃないか…………？」

ロベルト「耐え抜くぞ!!意地でも!!」

ベグル「負けられねえ!こんなやつに!大事な仲間を馬鹿にしたやつなんか!!」

マネマネ「死ねええええ!!」

ドオオオオン!!

訓練場は激しい音と煙に包まれた

城は少し揺れている

煙が晴れるとベグル達は全員倒れていた

マネマネ「ハア……ハア……。ざまあみやがれ……。これで俺がトツプだ。誰にも邪魔されねえ」

その時

ベグル「まだ……。だ……。まけて……。ねえぞ」

マネマネ「こ、こいつ!!」

ベグルは白眼を向きながらも斧を支えに立ち上がった

ベグル「ゼエ……。くっそ……。体が言う事聞かねえ……。バン、後は……。たの……。む……。」ドサ

ベグルは倒れてしまった

マネマネ「何？まさか……」

ベグルの斧はネックレスに刺さっていた

割れたネックレスは光を放ち、バンが出てきた

マネマネ「貴様!!出たいと強く願ったのか!俺が代わりになってほしいんじゃないのか!」

バン「皆……。すまねえ。俺が情けないあまりに、こんな事になっちまって」

バンは倒れている仲間達を見て謝っている

マネマネ「人の話を聞け！」

バン「皆、俺の事をそんな風に思ってくれてたんだな。ありがとう……」

マネマネ「舐めやがって!!」

マネマネはバンに向かって槍を投げる

パシツ!

バンは後ろから飛んできた槍を見ないで掴んだ

マネマネ「!!」

バン「お前……俺の大事な仲間達を傷つけやがって!!絶対に許さねえからな!!」

バキイツ!!

バンは槍を砕いた

マネマネ「ふっ……だからどうした!お前がまさか俺に勝てるっても!?馬鹿なお前が!頭のいい俺に!」

バン「確かに俺は馬鹿だ。大馬鹿野郎だ。お前の方が頭もいいし、作戦や計画もたてられる。俺はこいつらがいないと何もできない兵士長だ。だが、一つだけ言える事がある。俺はお前に勝てる」

バンはゾーンに入った。みのまもり。回避率。会心率があがった

マネマネ「口先だけならどうとでも言える!!ばくれつきやく!」

バン「はっ!」

バンは全て腕でガードした

マネマネ「なら、せいけんづき!」

バンの背後に瞬時に回り込んだ

バン「しんくうげり!」

それを即座に反応して、顔に蹴りを当てる

マネマネ「ぐっ!雷光一閃突き!」

バン「ビッグシールド!」

バンは攻撃を見極めてガードする

マネマネ「馬鹿め!隙だらけになるぞ!氷結らんげき!」

マネマネは盾の横から攻撃してくる

バン「それを待っていた。ハッ！」

バンは氷の槍を素手で掴み、反対の片手でマネマネの手を握った

マネマネ「何!？」

バン「捕まえた。これで存分にお返しができる」

普段のバンからは想像も出来ないほど、殺気に溢れている

マネマネ「くっっ！」

マネマネは危険と判断し、離れようとする

バン「逃がさない!ばくれつきやく！」

マネマネ「ぐはっ！」

マネマネは壁に追いやられる

バン「まだまだあ!!」

マネマネ「ぶはっ!ぐふっ!ごふっ!」

バンは会心のばくれつきやくを全身に浴びせていく

マネマネは壁と蹴りに挟まれ避ける事もままならない

バン「うおおお!!」

マネマネ「がはっ……………」

バン「これが仲間達に分だ！そして、これで終わりだ!!超さみだれ突き!!」

バンの強力な5連撃がマネマネの体を貫いた

マネマネ「馬鹿な……………」ジュワー

バン「……………ふう。終わったか……………。練習してた技なのに、そんなに上手く出来るとは思わなかった。あ!!全員医療部屋に運ばねえと!!」

師匠として、弟子として

その後、ベグル達を医療部屋に運んだ後

バルコニー

バンが入るとラースがいた

ラース「ようバン。全て終わったみたいだな」

バン「あ……………。師匠……………」

ラース「一件落着かな。それにしてもさっきの爆音は凄かったな。マルティナ達を宥めるの大変だったんだぞ」

ラースは苦笑いしている

バン「……………あの、怒らないんですか？俺、大変な事やらかしたのに」

ラース「怒る？何をだよ。悪いのはあのネックレスだろ」

バン「き、気付いてたんですか!?!」

ラース「あのバンが偽物なのは何となくわかっていた。だからそれまでの違いを考えていたらあのネックレスに気付いてな。おそらく

そういう類の物なんだろうなと思っていたさ」

バン「流石師匠です！じゃあ訓練場での戦闘もわかってたんですね」

ラース「あんなド派手にやってくれるとは思わなかったけどな」

バン「アハハ……。俺……。自信がなかったんです。兵士長として上手くやっていけてなくて。ベグル達に頼ってばかりだし、師匠みたいに兵士長らしくできないし、迷惑かける事も多くて向いてないんじゃないかって」

バンは下を向き、ポツポツと話し始めた

ラース「……………」

バン「師匠みたいになりたいのに、頑張っても空回りしてる気がして……………。これじゃ俺は師匠の弟子なのに、何してんだろうって。期待してくれてるのに、何も残せてないって……………」

ラース「ハア……………。おい、バン!!」

バン「は、はい!!」

バンはラースに強く呼びかけられ、思わず顔を上げる

ピシッ!

バン「痛っ!」

ラースはバンにデコピンをした

ラース「またらしくもなくウジウジ考えやがって。もつと相談しろよな。そんなんだからメグにも心配かけさせるんだぞ」

バン「メグも?」

ラース「ああ。まず第一に様子がおかしいのに気づいたのはメグだ。それを少し前に相談しに来てくれたんだ」

バン「そうだったんですか。帰ったらお礼言わないと!」

ラース「それでお前の悩みに答えるとするなら、やっぱりバンは馬鹿だな」

バン「悩んでる人にそんなハッキリと言いますか!」

ラース「ああ。お前、当たり前な事に気づいてねえんだぞ」

バン「むう……。何ですか？」

ラース「バンはどんなに頑張ったって俺みたくにはなれねえって事だ」

バン「!!そんな……。俺、師匠みたいになりたいのに……」

ラース「諦めるんだな。なぜなら、バンは俺じゃない。バンはバンだ」

バン「!!!?」

ラース「逆も言えるぞ。俺はバンみたくにはなれない。どんなに頑張ってもな」

バン「俺は……世界に一人だけだから……」

ラース「お、理解したな。そういう事だ」

バン「で、でも！それじゃあ師匠のために俺が出来る事は何ですか！師匠が安心できるように、師匠みたいに兵士長としてもっと頑張らないといけないって思ってたのに」

ラーズ「俺のため……か。まあ、師匠としての観点から言わせてもらおうとだな」

バン「はい！何でもやりますよ！」

ラーズ「俺の教えがこれからも守れていればよし、だな」

バン「ふえっ？そんなの当然じゃないですか！」

ラーズ「ならそれで大丈夫だ。お前は十分出来ているさ」

バン「何でそんなのでいいんですか？もっとうこう、弟子にやってほしい事とかないんですか？」

ラーズ「そう言われてもなあ。バン、俺はお前より歳が上だろ？」

バン「そうですね。師匠の方が8歳上です」

ラーズ「つまり、俺の方が先に引退するわけだ」

バン「それは……そうですけど、何でそんな話を？随分と先じや

ないですか」

ラーズ「まあな。だが、そうである以上俺が残しておきたいものだってある。それが俺の教えだ。別に訓練のやり方とか教え方や技なんてのはどうだっていい。変わっていくのが常だからな。」

だが、俺が教えた心構えだけは忘れないでほしい。信念を持ち、己が守るべき物を見失わない。それが俺の弟子に願う事だ」

バン「師匠……………」

ラーズ「あとは元兵士長として言わせてもらうなら、今のままでいいと思うぞ」

バン「……………今のまま、ですか？皆に、師匠に迷惑かけてばっかりな兵士長でいいんですか？」

ラーズ「迷惑……………ねえ。お前は迷惑をかけてると思ってるのかもしれないねえが、実際はそんな事ないはずだぞ」

バン「え？だって、ベグル達はもつとしっかりしろって……………」

ラーズ「あれは鼓舞みたいなものだろ。それにあいっらだってお前に頼られるのを待ってるんだぜ」

バン「そう……なんですか？俺にはそうは見えないですけど」

ラース「隠してるからな。あいつら、お前の事気に入ってるんだぜ」

バン「でも、兵士長なのに……師匠は一人で全部やってたのに……俺は頼ってばかり……」

ラース「まったく。だから言っただろ？バンは俺みたいにはなれない。だから、俺みたいに一人で全部なんて出来るわけないだろ。その代わり、お前の側にはあるものがあるだろ。俺の時とは違ってよ」

バン「俺の側？」

ラース「お前の周りにはいつも誰がいる？」

バン「………ベグルが、ロベルトが、ガザルが、ギバが、マーズが、ダバンが、見習い達が……師匠がいます」

ラース「そうだろ？お前の側には仲間達がいる。支えてくれる仲間がな。仲間達と共にある兵士長だ。俺とは全く違う兵士長だ。それはお前にしか出来ない事だぜ」

バン「仲間達と共に……。そんな兵士長でもいいんですか？」

ラース「悪いわけないだろ。寧ろ、最高なんじゃないか？皆に愛されてるな」

バン「師匠……。じじょうー！」

バンは泣きついてきた

ラース「うおっ！お前、泣くなよ。まったく……。そんなに悩んでたのなら少しは相談しろよな。怒らねえから」

バン「お、おれ……。間違ってた……。立派な兵士長になるために……。頑張つて、大事な事……。見えてなかった。ベグル達がいねえと、駄目なのに……。一人になろうとして、失敗して……。らしくなかった。ベグル達は俺を支えようとしてくれてたのに……。気づかないで、無茶してた……。」

ラース「ああ、そうだよな。何でも一人でやろうとするな。俺だつてマルティナやイレブン達に頼る事ばかりだ。一人で出来る事なんて、たかが知れてる。もっと頼れ、仲間達をさ。お前もベグル達を気に入ってるんだろ」

バン「はい……。！」

数分後、バンの涙も引き

バン「……………。師匠、俺、決めました。師匠の教えを新入り達に広めていきます！そうすれば、弟子として師匠のためになります！それが師匠の望みとあらば！俺はやってやりますよ！」

ラース「ああ、そうだ。弟子なんだからな。師匠に悔いを残させねえようにしてくれよ」

バン「はい！師匠、俺また頑張ります！弟子として、兵士長として、ベグル達とこれからもっと、もっと頑張ります！マルティナ様や国の人達が笑顔で過ごせるように守っていきます！応援してくださいね！」

ラース「いいぞ！その調子だ！見守ってやるからな」

バン「俺は馬鹿で、師匠やベグル達がいないと何もできないですけど、俺は師匠の弟子の兵士長、バンです！ベグル達と共に兵士長として頑張ります！俺はもう迷いませんよ！」

いつも通りへと

その後、医療部屋

ベグル達とブレイブは意識を取り戻していた

バンはどうしてこうなったのかを皆に説明していた

バン「というわけで……あのネックレスがそんなものだとは思ってなくて、ほんの軽はずみだったんだ。皆には……迷惑をかけた。すまない!!」

バンは全員に土下座をしている

マーズ「事情はわかった。取り敢えず姿勢を戻せよ」

ベグル「いや、このままにしておこうぜ。面白えし」

ガザル「賛成だな。バンが俺らに本気で土下座するなんて中々見れねえしな」

ダバン「面白がってるなよ。まあ、一件落ち着いたのは良かった」

ブレイブ「しかし、よくあいつを一人で倒せたな。自分より強いのではなかったのか？」

ギバ「確かに。バンより頭も反応速度も圧倒的だったぞ」

バン「あの時は俺も必死でよく覚えてねえな。もう……こう、お前達を傷つけられた事で頭が一杯だよ。ブワーって感じだったんだ」

ロベルト「そうそう、こんな感じだな、バンは。ほんの数日だけだったのに少し懐かしく思えるな」

ロベルトはバンの説明に苦笑いしている

バン「でもよ、俺めちやくちや嬉しかったぞ。皆が俺をそんな風に見てくれてたってわかってよ！」

ブレイブ「何だ、バン。お前わかってなかったのか。こいつらはいつもお前の事しんモゴモゴ」

ダバンはブレイブの口を塞いだ

ダバン「ブレイブ、少し黙っててくれ。そういうのは言わなくていいんだ」

バン「な、何だよ気になるだろ！いつも俺の事の後は何なんだよ！」

ガザル「馬鹿にしてるって事だよ。お前は馬鹿だからな」

バン「何だよ！結局馬鹿にするんじやねえか！」

ロベルト「まあ事実だから仕方ない。だが、あの時ベグルが偽物のお前に対してブチ切れてたのはかなり意外だと思ったな」

マーズ「確かにな。一番お前の事馬鹿にしてたのによ」

ベグル「う、うるせえ!!」

ギバ「なんだかんだ言つて副長だもんな。バンの事はよく見てるって事か」

バン「それはわかる！皆もだけど、ベグルの言葉すっげえ嬉しかった!!やっぱりベグルは俺がいないと駄目だもんなー！」

ベグル「おい、馬鹿。それ以上調子に乗っていると粉々にするぞ」

ベグルはバンを殺気を込めて睨みつけた

バン「は……はい。すみませんでした」

ベグル「大体魔物から物を貰う時点でもう兵士長としてどうなんだよ。少しはもっと危機感を持ってほしいもんだ」

バン「はい……」

ダバン「結局いつもの光景になったな。まあ、久しぶりに見たけどな」

ガザル「これがもう当たり前だもんな」

ベグル「ああ、言い忘れてた。バン、お前ちよつとごつちこい」

バン「え？な、何ですか？」

近づいてきたバンの肩にベグルは手を置き、ため息をつきながら言った

ベグル「お前、本当馬鹿だな」

バン「………ハア!？」

ベグル「何勝手に変な風にねじ曲げてんだよ。お前は馬鹿なんだから考えたつていい考えが出てくるわけねえだろ。まあ………俺達もしっかりしろつて言つて負担を与えてたのは悪かった」

バン「お、おう………。相談しなかつた俺も悪かった」

ベグル「それとな、お前はもう十分頑張ってる。これ以上頑張ったって体が持たなくなるぞ。お前はそのままでもいいんだ。お前の今までの努力は俺が、俺達が誰よりもわかっている。自分をもっと大事にしろ」

バン「ベグル……………。俺……………変わりたかったんだ。師匠みたいな兵士長になるんだって、昔から思ってた……………。でも、現実はその事できなくて……………。焦り始めて、昔できたような事も出来ないように思えてきて……………。退化してるって思ってたさらに焦って、無茶してた」

ベグル「ハァ……………。バン、お前は変わった。ラーズ將軍を師匠にしてからも、ラーズ將軍といい勝負をするようになってからも、兵士長となった今もずっとだ！変わり続けている！それはお前が変わろうと必死になって努力していたからだ。

変化してないから退化してるじゃねえぞ。変化の反対は何もしないで動かず立ち止まってる事だ!!お前は動いただろ！変わろうとしただろ！例え失敗だったとしても、それは必ずお前の力になっている！立派な兵士長になるための力になっている！いい加減認めるんだ、兵士長。お前はもうそれで十分だってよ」

バン「そ、そうか。俺……………変わってたんだな。ベグル、すっげえかつこよかったぞ！」

ベグル「ハッ！当然だろうが！」

ギバ「いや、俺もベグルがカッコいいって思ったぞ」

ロベルト「いい事言うじゃないか、ベグル」

ダバン「バンをよく見てるんだな。流石副長」

ガザル「やっぱり二人はなんだかんだいいコンビじゃないか」

マーズ「バン、副長はお前の事を心配しているそうぞ」

ブレイブ「お互いが信頼し合っているのだな。とてもいいではないか」

バン「ベグル、仲よしだつてよ！」

ベグル「てめえら、さつきからうるせえ!!誰がこんな馬鹿心配するか!」

バン「本当はそんな事言つて〜」

ベグル「死ね」

ベグルはバンの頭に思いっきり拳骨をした

ゴスツ！

バン「アガツ……………」ドガン！

バンは地面に顔が埋まって動かなくなった

ギバ「……………恐ろしい」

ロベルト「ワンパンかよ」

ベグル「ああ、そうだ。もう一つ言わなきゃならねえ事があった。おら、バン。寝てねえで起きろ」

ベグルはバンを地面から掴んで起こし、顔を叩きながらおこしている

バン「ハッ！ブツッ！い、痛え!!な、何だよベグル！顔を叩くな！」

ベグル「お前は忘れただろうが、俺が副長になった時お前に言ったセリフ覚えてるか？」

バン「え……………が、頑張る……………とか？」

ベグル「んな事お前に言うわけねえだろ。俺はこう言ったんだ。お前をサポートしてやるってな。それでお前が道を踏み外しそうな時は俺がぶん殴ってでも止めてやるって」

バン「あ、ああ……………。言われてみれば……………」

ベグル「そんじゃ歯食いしばれよな」

バン「……………へ？」

ベグル「思いつきり道を踏み外したもんな。これは副長として俺がぶん殴って止めてやらねえとだなあ」

ベグルはニコニコしている

バン「い、いやいや!!俺、戻ってきたじゃんか!自分でしつかりここにいたいと思ってネックレスから出てきたんだぞ!」

ベグル「そこに入る事になった理由はお前の心の弱さが招いたんだろ?俺が強くしてやるよ」

バン「全力でご遠慮します!!」

ベグル「ハア、面倒だな。ここ最近お前を虐められなくてムズムズしてたんだ。元に戻ったんなら景気よくしろよ」

バン「絶対それが本音だ!!というか、もう既に頭が凹むかと思うくらい殴られたのに!嫌だ!誰か助けてー!」

マーズ「…………… どうする?あれ」

ブレイブ「あれは嫌がつているのか?バンなら本気で抵抗すればおそらくなんて事ないだろう」

ダバン「まあそうだろうけど、本人も悪気はあるみたいだから抵抗は少ないんじゃないか?」

バン「お前ら!!何で見てるだけなんだよ!」

ベグル「おーい、こいつ取り押さえろ」

ガザル「おっしや、バン大人しくしろ!」

ガザルは嬉々としてバンに飛び乗った

バン「ギャツ!ガザル、やめろ!」

ベグル「ナイスだ、ガザル。さあバン。久しぶりの躑の時間だ」

バンが殴られる音が響き始めた

ロベルト「また騒がしくなるな。明日からいつも通りだ」

ブレイブ「あれは放っていいのか？」

ギバ「ああ、気にすんなブレイブ。じゃれあってるだけだからよ。仲がいい証拠だ」

ブレイブ「……一方的とは変わったじゃれ合いだな。まあ、気にしないでおこう」

バン「ぐふっ……」

バンは耐えきれずに気絶した

ベグル「まあ、久しぶりだったし軽くしておくか。明日からまたよろしくな、バン」

その後、メグのカフェ

バン「痛て……。ベグルのやつ、何が軽くだよ。普通に全身痛かったぞ」

バンは怪我の手当てをしていた

メグ「バンー、ご飯できたから降りてきてー」

バン「おう！久しぶりのメグの飯だ！」

メグ「すっかり元通りね。よかったわ、バン。ここ最近バンじゃなくなっただけでとっても不安だったの」

バン「本当心配かけたな。ありがとう、メグ。うん!!メグのご飯はやっぱり美味しいな！」

メグ「ふふ、ありがとう。そういえばいつも言ってたそのセリフも何だか久しぶりだね。慣れたと思ってたけど、言われないとやっぱり少し寂しいわね」

バン「美味しい物にはしっかりと美味しいって言わないとな！作ってくれたのにも感謝しないと！」

メグ「どういたしまして。また明日からも頑張ってるからね。でも、何かあったら教えてちょうだい。大した事できないかもしれないけど、私だってバンを支えたいんだからね」

バン「ああ！メグがいる事は俺にとって最高の支えだ！これからも頼む！」

兄貴とお酒

バンが元通りになってから一ヶ月後

夜、デルカダール城下町 酒場

そこではラースとカミュとバンが酒を飲みながら話していた

カミュ「へえ、バンが偽物にねえ。また面白い事起こってんな。少し見てみたかったぜ」

ラース「まあ面白いかはよくわからねえけど、結構大変だったんだぜ？」

バン「本当ですよ。他人事みたいにしないでください」

カミュ「他人事だから仕方ねえだろ。で？偽物は何したんだよ」

ラース「頭がいいバンになってな。兵士長としてバンの代わりになろうとしてたみてえだ」

カミュ「バンが？頑張ったってその頭はよくならねえだろ」

バン「カミュさんまで！もつと優しく言ってくださいよ。流石に傷つきますよ」

ラーズ「あ、酒が無くなったな。マスター、おかわり頼む」

カミュ「……………」

バン「カミュさん？」

数時間後、酒場から三人で城に帰る途中

ラーズ「いやー、やっぱり一人で飲むよりもこうやって誰かと話しながらの方が酒も美味しいよな」

バン「師匠はいつも飲み過ぎですよ。見ててこっちが酔ってきそうです」

カミュ「なあ、兄貴。気になったんだが兄貴って酔った事あんのかな？」

ラーズ「俺？うーん……………。ある事はあるが、数回くらいだな」

バン「師匠が酔ってる姿なんて見たことないですね。どんな感じになるんですか？」

ラース「悪いが記憶も飛んでてな。何をしていたかは覚えてねえんだ。飲んだ場所とかは覚えてるんだがな」

カミュ「何だか気になるな。今度酔ってる姿見せてくれよ」

バン「あ、俺も見たいです！気になりますよ」

ラース「ハア!? 嫌だぜ、そんなの。何するかわからねえし、第一そんな事して俺に何のメリットがあるんだよ!」

カミュ「見てる俺達が楽しめるだろ」

ラース「こいつ……」

バン「カミュさんって本当いい性格してますよね……」

次の日、玉座の間

ラースは久しぶりに訓練場に行っており、いなかった

カミュは昨日の夜の帰りに出た話をマルティナとグレイグに話していた

マルティナ「ふくん、昨日そんな話になったの。確かに私もラースが酔ってる姿は見た事ないわ」

グレイグ「顔が赤くなる事すらありませんからな。そうそう酔うなんて事もないんでしよう」

カミュ「だよな。気にならねえか？ 兄貴の酔った所。どんな感じになるのかとかよ」

マルティナ「……まあ、気にならないと言ったら嘘になるわね」

グレイグ「だが、レースの事だ。普段は鳴りを潜めてる悪戯心などが抑えられなくなるだけかもしれないぞ。そうなれば、厄介な事になるのが想像できる」

カミュ「まあ、それもそうだよな。兄貴は無自覚でやらかす事もあ
るしな」

マルティナ「暴れるなんて事はしないとと思うけど、実際どうなるのかしら？」

グレイグ「第一、どうやってあんな酒豪を酔わせるといふのだ。普通に飲んでるだけじゃ何も変わらんぞ」

カミュ「度数が高い酒を飲ませるしかない……か？」

マルティナ「でも度数が高いお酒っていったらラースが好きなの
ホムラのお酒じゃない」

グレイグ「そうですね。そういえば……最近ホムラの方に新しい酒が出来たと聞いたな。なんでも今までより更に度数が高いとか」

カミュ「へー、そりやあい事聞いた。なら、俺がそれ持って兄貴にプレゼントしてやろう。それいつもの酒も合わせりやあ多少は変化あるんじゃないか?」

マルティナ「ラースも喜びそうだけど、本当に酔わせるの?」

カミュ「まあな。どうせなら飲み会みたいな感じで賑やかにした方が兄貴も楽なんじゃないか? 兄貴、そういうの好きだろ」

マルティナ「それもよさそうね。私もお酒は最近飲めてないし」

グレイグ「数年前に兵士達と飲み会をしてみたいとラースも言っていたな。姫様、どうされますか?」

マルティナ「じゃあ明後日には仕事も一段落つけられるし、その日の夜少し考えてみましょう。自由参加にして大広間で皆で騒ぎま

しよう。あ！皆にも声かけてみましょう」

グレイグ「了解しました。王に話をしてきますね」

マルティナ「ええ、お願いするわ。カミュはそのお酒があったら持ってきて」

カミュ「ああ、任せろよな。仲間達への連絡は俺がやろうか？」

マルティナ「あら、助かるわ。お願いしてもいい？」

カミュ「おう。任せておけ」

その後、ユグノア城 玉座の間

カミュ「つてわけでよ。イレブン達は明後日空いてるか？」

イレブン「うん、行く行く！久しぶりにバン達とも話したいし」

ロウ「そうじゃな。その日の夜、お邪魔させて貰おうかの。そういえば、ホムラの酒といえば住民からホムラの酒をユグノアに置いてほしいとの要望があったの」

イレブン「あ、確かに。カミュ、ホムラに行く時は僕に連絡して。僕もついていくよ」

カミュ「なるほど。いいぜ、じゃあ明日になるな」

イレブン「うん。わかった」

ソルテイコ ジエーゴの屋敷

シルビア「そうなの!? そんな楽しそうなのアタシも行くに決まってるじゃない!」

カミュ「まあ、シルビアのおっさんはそうだろうと思ったぜ。それと、いいワインとかあるか? あったら持ってきてほしいんだが」

シルビア「そうね! 折角だし、持って行って皆で飲みましょう。とっておきのやつ持っていくわ」

カミュ「ああ、よろしく頼むぜ」

聖地ラムダ ベロニカとセーニヤの家

ベロニカ「へえ、皆も来るのね! 私達もいくわ!」

セーニヤ「お酒はそこまで強くありませんが、皆様と楽しくお喋り

したいですわ」

カミュ「まあ、酒だけじゃねえだろうからな。全然大丈夫だと思うぜ。あ、何か食べたい物とか酒とかあつたら持つてきても大丈夫だぜ」

ベロニカ「そうなの？じゃあお父さん達が前に持つてきたんだけど、度数が強すぎて誰も飲めなかったお酒があるの。持つていった方がいい？」

セーニヤ「そういえばそうでしたね。どうしようか困ってたんです」

カミュ「おお、そうだったか。こっちは俺も兄貴もいるからな。どンドン持つてきてくれ」

セーニヤ「ありがとうございます。それでは明後日の夜、楽しみにしてますわ」

ベロニカ「マルティナさん達にもお礼として何か持つていきましよう。王様も喜んでもらえるように甘いものもいいかしら」

カミュ「それじゃあな。明後日にまた会おうぜ」

デルカダール城下町 ビル達の店

マヤ「へー、明後日ね。わかった、私も参加する」

カミュ「おう。それにしても中々出来上がってきたな」

店は外装も変わり、中も黒を基調としたオシャレな雰囲気になっていた

グリー「そうなんです。もうそろそろ開店できるかもしれないんですよ」

マドリー「二人が本当よく手伝ってくれて助かってるんです」

ビル「全くだ。グリーとマヤがいなければこんな早くはならなかっただろうな」

カミュ「だってよ。頑張ってたんだな、二人とも」

グリー「へ、へへ、何だか照れますね」

マヤ「いしし、だね。あ、グリーさんも来なよ。皆とも顔見知りだしさ。少しくらい騒さわごう」

グリー「いいのかな？僕も行って。あまり関係ないんだけど」

カミュ「そんなの気にすんなよ。こっちだっているんな人がいた方が楽しめるからよ。それに兄貴、ラースやマルティナ達に店の事とか教えてやれよ」

グリー「そ、そうですかね。じゃあお言葉に甘えて」

マドリー「楽しそうね。あ、でも飲むんだったらその次の日は手伝わなくて平気よ。ゆっくりしてて」

マヤ「え？大丈夫だよ」

ビル「なに、折角の飲み会とやらなんだろう？人間は夜、それをいつも楽しそうにしてるもんな。明日仕事があると思えばあまり楽しめなくなるだろ？若いんだからもっと騒げ。こっちは一日くらいどうだってなる」

マドリー「つまり、二人を休ませる口実がほしいの。ね？働き詰めはよくないわ」

グリー「そ、そうですか。心遣い感謝します」

マヤ「そこまで言うなら……。ありがとう、マドリーさん、ビルさん」

カミュ「そんなじゃマルティナ達に参加だつて伝えておくな」

その頃、デルカダール城 玉座の間

ラーズ「俺がちよつと離れた間に知らない話が進んでたんだな」

マルティナ「まあね。でも、反対はないんでしょ？」

ラーズ「当たり前だろ。そんな楽しそうなの反対する理由なんかねえよ。むしろ、どんどんやっていこうぜ」

グレイグ「まあ、ラーズならそうだろうと思っていた。王も喜んで許可してくれたぞ」

マルティナ「それじゃあ兵士達にも声かけておいて。ラーズ、よろしくね。明後日までに仕事片付けてね」

ラーズ「おう。あ、そのついでにバンから書類もらつておかねえと」

訓練場

ラーズ「急に集まつてもらつて悪かったな」

バン「いえ、大丈夫ですよ。大事な話なんですよね？」

ラース「い、いや。期待させて申し訳ないが、大事な話ってわけじゃねえんだ。明後日の夜、大広間で少し飲み会を開こうと思っ
ていな。

最近あまり騒げていなかったら？皆もたまには気休めとして参加してみないか？俺もマルティナも楽しみにしてるんだ」

バン「飲み会ですか。俺は大丈夫ですよ！」

ベグル「また随分急な話ですね。まあ、構いませんが」

ダバン「マルティナ様達と飲む機会なんて滅多にないですからね。俺も行きますよ」

ギバ「だな！楽しそうだよな。俺も参加しますね！」

ガザル「酒を飲むのは久しぶりですね。酔わないといいんですが」

マーズ「新入り達にはまだ未成年もいますからね。その人達は出れないからな」

ロベルト「ですがラーズ將軍、かなり前ですけど俺達はラーズ將軍ほどお酒強くないんで、鍛えようとしなくてくださいね？」

ラーズ「わ、わかってるよ。あれはまあ……ほんの出来心だ」

バン「（そういえば、昨日カミュさんが師匠の酔った姿を気にしてたな。もしかしたら見れるかもしれない！）」

ラーズ「ああ、それとバン。書類がまだ出てないぞ。明日までなんだから早いとこ片付けてくれ」

バン「うぐっ……。は、はい。師匠、皆の前で言わないでくださいよ」

ラーズ「何言ってるんだ。早く出さないお前が悪いんだろ。バレたくないなら頑張って早く終わらせろ」

ベグル「全くの正論だな」

バン「ううっ……。ベグル、また手伝ってくれー！」

ベグル「ハア……。困った兵士長だぜ」

ホムラの秘蔵酒

次の日、ホムラの里

カミュ「久しぶりに来たが、相変わらずここは暑いな。やっぱり苦手だぜ」

イレブン「僕も久しぶりだな。それにしても、お酒を作ってる場所ってどこなんだろう」

カミュ「確かにな。兄貴に聞けばもしかしたら知ってたかもしれないねえけど、今回はそういうわけにはいかないしな」

イレブン「本当にラースを酔わせるの？先に僕達がダウンするでしよ」

カミュ「まあ、そこは俺が気合いで乗り切るぜ。フラフラしてても時間の無駄だし、確かヤヤクだっけか？治めてた人がいたよな。そいつに聞きに行こうぜ」

イレブン「ああ、ヤヤク様か。そうだね。あの人なら何か知ってる」

神社内

ヤヤク「ん？おお！そなたは勇者イレブンではないか。久しいの

う。お仲間の一人も連れてどうしたのだ？」

イレブン「お久しぶりです、ヤヤク様。お元気そうで何よりです。実はホムラの里でとある場所を探してまして、どこにあるのか教えてほしいんです」

ヤヤク「ほう。なるほど。私ならこの里の事は大抵知っておる。どこを探しているのだ？」

イレブン「ホムラのお酒があるじゃないですか。あれを作ってる場所を教えてほしくて。僕の王国、ユグノアにぜひそのお酒を置いてほしいと住民にお願いされたんです」

ヤヤク「おお、ユグノアにか。確かにあのお酒はホムラの名産品。人気なものも肯ける。場所は里を出て真っ直ぐ進んだ先に倉があつてな。そこで管理、製造をしておる。ぜひその話を管理者である人に話してほしい。私も賛成していると伝えれば大丈夫だろう」

イレブン「ありがとうございます、ヤヤク様。それでは失礼しました」

ヤヤク「うむ。またいつでも来てくれ。そなた達ならいつでも歓迎しよう」

管理人「なるほど。まさかユグノアの王様に気に入られるなんて何という幸せ。今すぐにでもお出ししたいのですが……」

カミュ「ん？何かあったのか？」

管理人「実は製造するのに必要な水が来ないんです。このお酒を作るのに使う水は、サマデー地方からの綺麗な水を蒸留させた特別なものなのですが、それを運んでくる馬車が予定を過ぎたのに来ないんです。もう水が来れば作る準備も出来ているというのに……」

イレブン「僕達が見てくるよ。どこのルートで来るの？」

管理人「あ、ありがとうございます。ルートはサマデー地方のオアシスからホムスビ山地に入る道を通って、後は道なりに沿えば大丈夫だと思えます。こんな事頼むのは気が引けますが、よろしくお願います！」

イレブン「大丈夫だよ。それじゃあ様子見てくるね」

ホムスビ山地

カミュ「なんだか懐かしかったぜ、さっきの。旅してた時もクエストを受ける時あんな感じだったよな」

イレブン「そうだよね。僕も久しぶりだったな。えへへ、クエストはやっぱり楽しいや」

カミュ「ご機嫌だな。まあ、大事な酒のためだ。ちよいと頑張りますかね」

しばらくして

カミュ「そろそろサマデー地方に入るな。ここまでで変な所は無かったよな」

イレブン「だね。何かに襲われたとかの跡も無かったし、どうしたんだろ」

その時、カミュが遠くをじっと見つめる

カミュ「……………ん？イレブン、あれ……………馬車だ！魔物に追われてんぞ!!」

遠くからは追いかけてくるサボテンボールの群れから必死に逃げている馬車が見えた

イレブン「本当だ！急いで助けないと！」

二人は馬車に向かって走る

カミュ「その馬車、大丈夫か!!俺達が魔物の相手をする！あんたは逃げるんだ！」

運転手「あ、ありがとうございます!!助かりました!」

イレブン「カミュ!見てあれ!」

サボテンボールの群れの中には金色に輝くサボテンボールがいた

カミュ「あれは!!ゴールドサボテンじゃねえか!」

イレブン「かなり珍しいね。まあ、倒さないといけないみたいだけど」

サボテンボール達とゴールドサボテンがあらわれた

カミュ「ぶんしん!」カミュは三人になった

イレブン「ギガブレイク!」

サボテンボール達は倒れた

ゴールドサボテンは回りながら突撃してきた

ゴールドサボテンはイレブンに攻撃した

イレブン「全然痛くないよ!」

カミュ達「デュアルブレイカー!」

ゴールドサボテンは倒れた

カミュ「ま、こんな楽勝だな」

イレブン「カミュ、やりすぎだよ。ぶんしんしなくても倒せたのに」

カミュ「たまには体動かさねえとな。いつ兄貴に訓練場に無理やり行かされるかわからねえからよ」

イレブン「なるほど……。カミュも大変だね。まあ、これである馬車も大丈夫かな。一旦戻ろうか」

ホームズビ山地 倉庫

管理者「あ、イレブンさん！カミュさん！ありがとうございます！馬車の方を助けていただいたそうで！凄く感謝してましたよ」

イレブン「偶然だったんだよ。無事でよかった」

管理者「これですぐにでもお酒が出来ます。今お礼に無料で出来立てをご用意させていただきましたね」

カミュ「あ、ちよつといいか？」

管理者「はい。何でしょう」

カミュ「最近できたっていう新しい酒もここで作ってんのか？度数が更に高いとか」

管理者「あ!!秘蔵酒の事ですね!..ございますよ!ですが、大丈夫ですか?こちらは本当に度数が高いですよ」

カミュ「大丈夫だぜ。高けりや高いほどいいんだ」

管理者「そうでしたか。お礼に差し上げたい所なのですが、こちらはあいにく作るのに時間と手間がかなりかかるので、どうしてもゴールドでお支払いしていただきたいのですが」

カミュ「そんなのハナからその気だったぜ。いくらするんだ?」

管理者「8万ゴールド...なのですが、少しまけます!6万ゴールド、お支払いの方お願いします」

カミュ「おお、そりやありがてえ。なら、ほらよ」

管理者「ありがとうございます!それでは今お待ちしますね」

数分後

管理者「それではイレブンさんにはこちら、ホムラのお酒と契約書の方になります。また買われる時はそちらを持ってきてください。カミュさんにはこちら、ホムラの秘蔵酒になります。お買い上げありがとうございました」

イレブン「これで大丈夫つと。それじゃあまた明日の夜だね」

カミュ「だな。明日、兄貴の酔っ払う姿楽しみにしとけよ？」

イレブン「ふふ、わかったよ。それじゃあね」

デルカダール城 大広間

カミュ「さて、これはどうしたもんかな……俺の部屋に隠しとくか」

バン「あ、カミュさん。あれ？そのお酒何ですか？」

カミュ「ん？ああ、バンとベグルか。これはホムラの秘蔵酒つてやつでな。最近出ためちやくちや度数が高い酒らしいぜ。明日の夜、兄貴にこれ飲ませるんだ」

ベグル「あ、聞いた事あります。何でも相当高くて飲める人は限りなく少ないとか」

バン「そ、そんなものなのか。師匠でも流石に飲めないんじゃないですか？」

カミュ「いやいや、あの兄貴なら問題ないだろ。なんなら俺だって少し飲んでみたいしな」

ベグル「カミュさんも相当強いですもんね」

カミュ「お前らはどうしたんだ？その手にある紙は」

バン「あ、これは今日までに師匠に提出しなきゃいけない書類なんです」

ベグル「この馬鹿がまた提出ギリギリなんですよ。俺も毎回一緒に頭下げないといけなくて困るんですよ」

バキッ！

ベグルはバンの頭を殴った

バン「痛っ！」

カミュ「ああ……。兄貴がよく文句言ってるぜ。仕事が止まるだ

のつてな。あんま困らせてんなよ」

バン「そ、そうですよね」

ベグル「そういうところは偽物を見習え。しっかり終わらせてたんだからな」

バン「はい……」

カミュ「まあ、それじゃあな。あ、この酒の事は兄貴には内緒な。サプライズなんだ」

ベグル「わかりました。黙ってますね」

バン「あ！もしかして、一昨日気にした師匠の酔った姿が気になるからそれを？」

カミュ「なんだ、バンにしては鋭いな。当たりだぜ。楽しみにしてろよな」

バン「それは楽しみです！明日の夜、楽しみましょうー」

ベグル「の前に、お前はこれからラーズ將軍に怒られに行くんだよ」

バン「あー！嫌な時間が目の前にー！師匠怖いから嫌だ！」

ベグル「それを何回も味わされてる俺の身にもなれ、馬鹿！」

バンはベグルに引きずられていった

カミュ「やれやれ、バンは学ばねえな。兄貴もベグルも苦労してんな」

城での飲み会

次の日、夕方　デルカダール城　大広間

ここではラーズと兵士達が夜の宴会に向け、テーブルなどを準備していた

ラーズ「さて、こんなもんだろ」

ロベルト「ですね。椅子も余分にありますし、テーブルも余ったら空いたお酒などを置くのに使いましょう」

マーズ「後はテーブルクロスとか外した方がいいですよね。大変な事になるかもしれないですし」

ラーズ「あー、確かに。うっかりこぼしたとかなったら面倒だもんな。全部外すか」

バン「マーズー、氷はこのくらい砕けばいいか？」

バンとベグルなどの一部の人達は氷を準備していた

マーズ「あー、どうですか？ラーズ將軍。もう少しいりますか？」

ラーズ「ふむ……まあこれでいいんじゃないか？足りなくなったらベロニカだったり俺だったりじいさんだったりヒヤドで追加

してくれるさ」

バン「じゃあ冷凍庫に冷やしておきますね」

ベグル「準備大体終わりましたね。そろそろ皆さん来ますよね」

ラース「ん？知らなかったか？シルビアはもう到着してたぞ」

ベグル「あ、そうだったんですか。全く気づかなかったですね」

ラース「まあ、本人も早く来すぎたかもしれないって言ってたけどな。そんじゃあ解散だ。飲みたい物、食べたい物何でも持ってこいよー」

ロベルト「はい！」

玉座の間

ラース「マルティナ、準備終わったぜ」

マルティナ「あら、早かったわね。お疲れ様。手伝えなくてごめんなさい」

ラース「いやいや、これくらい大丈夫だぜ」

シルビア「ちよつとウキウキしちゃって早く来すぎたわね。それとラースちゃん、あなたが好きそうな料理持ってきたの。楽しみにしててね」

ラース「お、それは気になるな。シルビアがおすすめるのはどれも美味しいからな。楽しみだぜ」

その時、入り口近くにいたブレイブが耳をたてた後、こちらに向かって軽く吠えた

ブレイブ「ガウ」

グレイグ「む？どうやら知ってる人が来たようだぞ」

シルビア「え？今のブレイブちゃんの合図だったの？」

マルティナ「ええ。ブレイブが知ってる気配だと教えてくれるの」

ガチャ

イレブン「マルティナ、グレイグ、ラース来たよ」

ロウ「ほほ、呼んでくれてありがとう」

カミュ「そこでバツタリ会ったんだ」

グリー「わ、わく……。ここが玉座の間か」

マヤ「グリーさん緊張してない？大丈夫だよ」

マルティナ「あら、たくさん来たわね。ふふ、いらっしやい」

グレイグ「グリー、久しぶりだな。マヤから話は聞いていたぞ」

シルビア「皆く、久しぶり」

グリー「お久しぶりです、グレイグ様、マルティナ様。ビルさんとマドリーさんからお礼に渡して欲しいと言われました」

グリーはマルティナに袋を渡した

マルティナ「あら、ありがとう。これは……。あら！お酒だわ。見覚えあるけど、どこのかしら」

グレイグ「おお、これはサマデーのサボテン酒。かなり飲みやすいと言われている酒ですな」

マヤ「なにかと思つてたらお酒だったんだ。今度お店として開いたら入荷するんだって」

ラース「へへ、デルカダールでサマデーの酒が飲めるのか。いいじゃないか」

イレブン「そういえばブレイブとかマルス達はどうするの?」

マルティナ「ああ、マルス達は悪いんだけど友達の家泊まりにいったわ。二人にどうするか聞いたらお酒の匂いが嫌だからって言つて逃げるように城から出ていったの」

ラース「ちよつとショックだよな……」

グレイグ「コロはマルス達が連れていって、ブレイブはここに残っているそうだ。一応呼べば来るぞ。まあ、ブレイブも鼻が効いて酒の匂いが強い所は苦手らしいがな」

カミュ「へえ、酒の匂いはやっぱり慣れてないとキツイか」

ロウ「ほほ、まあそれは仕方あるまい。苦手な者は苦手じゃからのう」

グリー「さ、触って大丈夫？ 噛まない？」

グリーは恐る恐るブレイブに触ろうとしている

ブレイブ「……………ガウ」

ブレイブは待ちきれず、自分から手に擦り寄った

グリー「わわっ!!び、びっくりした！」

マヤ「あははは！グリーさん驚きすぎだよ」

その後全員が集まり、大広間で宴会が行われた

マルティナ「それじゃあラース、乾杯の合図よろしくね」

ラース「え？お、俺なのか？普通マルティナとか王様じゃないのか？」

デルカダール王「なに、この宴会はラースが以前やりたいたいと言っていたのだろう？それなら、今回の立案者が乾杯をするのが定石である」

ラース「ああ、何年か前のやつか。まあ、それじゃあ……………。皆、酒は持ったか！」

全員「オー！」

ラース「それじゃあ景気よくいこうか！かんぱーい！」

全員「かんぱーい！！」

カーン！

ラース「……………クウ、最高！やっぱりこういうのはいいよな！」

デルカダール王「ハツハツハ！相変わらずいい飲みっぷりだな、ラースよ。どれ、わしのお気に入りのお酒を持ってきたのだ。皆で飲むといい」

ロウ「ほほう！これはデルカダールの珍酒、蜂蜜酒。あまり飲める機会が無く、量も限られておるものじゃな。流石デルカダール王、いい物を持つてくるのう」

マルティナ「蜂蜜酒。話には聞いた事ありますが、私は飲んだ事ありませんでしたね。甘いんですか？」

デルカダール王「うむ。ほのかに甘く、度数もそこまで高くないか

ら誰でも飲みやすいのだ。いくつか候補があつて悩んだが酒が弱い者もいるかと思ひ、こちらにした」

グレイグ「流石は我が王。配慮が素晴らしい」

マヤ「甘いんだ。私でも安心して飲めそう」

シルビア「じゃあじゃあ、次はアタシ！知ってる人も多いんじゃないかしら？ジャー！グランプよ！しかも、熟成させた特別物よ！」

数人「おおー！」

ラース「それも美味そうだな。しかも熟成なんて中々されないじゃないか」

カミュ「いいな、流石シルビアのおっさん。とっておきと言つてただけあるな」

ベロニカ「ねえシルビアさん。グランプって？」

セーニヤ「私も初めて聞きましたわ。どんなお酒なんですか？」

シルビア「知らない人に教えると、グラッパってのは簡単に言うてぶどうのお酒よ。かなり飲みやすいし、ぶどうの甘さがしっかり口に残るの。ただ、度数はちよつと高めなの。だからお酒が苦手な子はあんまりたくさん飲まない方がいいわ」

グリー「へー、世界にはいろんなお酒があるなあ」

ベグル「ソルティコでは有名なのか？」

マーズ「そうだな。だが、基本は度数が低い熟成されてないものばかりだ。度数が低いから弱くても飲めるが、ぶどうの味が薄くなる。でも、あれは熟成させる事でぶどうの味を濃くしてるのさ」

バン「流石マーズ！ソルティコ出身だとよく知ってるな」

シルビア「マーズちゃんも知ってたのね。まあ、そんな感じのお酒なの。少しだけなら全員飲めると思うわ」

ロウ「ほほ、それじゃあ次はわし達じゃな。わし達はこれじゃ。クレイモランの雪溶け酒じゃ」

ギバ「さ、流石ロウ様。入手困難なはずなのに……」

マルティナ「あのお酒イレブンも知ってるの？」

イレブン「ううん。おじいちゃんが自分の部屋から持ってきたんだ。何のお酒なの？」

カミュ「あれは米の酒だ。ホムラの酒と同じだな。ただ、作り方が特殊で雪の中に突っ込んでおくんだ。クレイモランといえば雪だからな」

ギバ「後で凍ってしまいうんですけど、それを解凍させたのがこの雪溶け酒なんです。かなり高価な上に一年の決まった季節に数回しかお店に並ばないんですよ」

セーニャ「そ、そんな珍しいお酒なんですか！凄いですわ！」

デルカダール王「ロウよ、お主も中々な物を持ってきたではないか」

ロウ「ほほ、皆物知りじやのう。本来ならわしが説明しようと思っ
とったのに」

ベロニカ「あ、じゃあ次はあたし達ね。といっても、これがどこのお酒とか何も知らないの。ごめんなさい」

セーニヤ「お父様達も美味しそうだからとしか言っておらず、わか
らずじまいだったんです。どなたかわかりますか？」

グレイグ「うーん……。見覚えはある。だが……。思い出せん
な」

ラーズ「俺はわかったな。ダバン、お前も知ってるんじゃないか？」

ダバン「え？俺ですか？うーん……。ええ、わかんないですよ」

ロベルト「見覚えはないのか？」

ダバン「あ、ああ」

シルビア「アタシは初めて見たわね。ラーズちゃん、どこの国？」

ラーズ「これはグロツタの酒だな。ラガーと呼ばれるやつだな」

デルカダール王「おお！ラガーであったか！そういえば確かに黒い
瓶だったのう！」

ベロニカ「あら、ラガーなら私達もお父さんも知ってるはずだわ。

でも違うって言ってたわよ」

ラース「あ、あれ？じゃあ何だ？」

カミュ「ぷっ……。兄貴、得意げになってた癖に恥かいたな」

ラース「うるせえ！掘り返すな！」

マヤ「ねえ、兄貴。これ私見覚えあるよ」

グリー「え!?!マヤさん、凄い！」

セーニヤ「まあ！素晴らしいですわ、マヤ様！」

カミュ「マヤの言う通りだな。こりやあボツクだ」

全員「ボツク？」

マヤ「あー、そうそう。そんな名前！でも凄く苦いんだよね」

カミュ「だな。度数もそれなりにあるやつだ。俺は飲めるが苦手な

やつは無理だろうな」

ベロニカ「へえー、そうだったんだ。何か変なの持つてきちやっ
たみたいね。ごめんなさい、皆」

マルティナ「そんなのいいのよ。自由にしてたんだから。それにこ
こには酒豪が二人いるから平気よ」

ロベルト「確かに。ラーズ將軍とカミュさんなら余裕そうですよ
ね」

ラーズ「まあ、飲んだ事ないからわからねえが大抵は大丈夫だろ」

ガザル「あ、次は俺ですね。俺は大したやつじゃないですけどこれ
です。エール！」

イレブン「あ、エールなら僕も知ってる！美味しいよねー」

グレイグ「やっとメジャーな物が出てきたな」

バン「ん？このエール、高いやつじゃん！ガザル、いつのまにこん
なやつ！」

ガザル「いいだろ？この場には持ってこいだと思つてな。俺のお楽しみの一つだったんだが、皆で飲む方がいいだろと思つてよ」

ラース「いいぞー、ガザル！弱い人達も飲めるもんな！」

ダバン「ラース將軍は何かないんですか？」

ラース「お、それじゃあ次は俺だな。俺はこれだ。酒が飲めない人にはぜひ飲んでほしい！特に！セーニャ！」

セーニャ「わ、私ですか!？」

ラース「見て驚け！チョコレート酒だ！」

全員「ええ!!？」

ラース「凄いだろ？」

セーニャ「ぜひ飲んでみたいですよわ！甘いんですよね!？」

ラース「もちろん。度数も高くないし、かなり飲みやすかつたぞ」

デルカダール王「初めて聞いた。どこで手に入れたのだ」

ラース「ベグル、知ってるか？」

ベグル「は、はい。ダーハルーネの一部のパーティシエのみに作られる事が許されたお酒ですよ。ただ、製作難易度が高くて美味しくなりにくいとか」

マヤ「そうなんだ。流石ダーハルーネ」

グリー「でも大丈夫なんですか？それ」

ラース「実飲済だ！味は保証するぜ！」

ベロニカ「もう飲んでたのね」

マルティナ「本当ラースは驚かせるのが好きよね」

カミュ「それじゃあ最後は俺だな。といつても、皆には悪いが俺は兄貴用に買ってきた。皆は飲まない方がいいと思うぜ」

ラース「お、俺用？何買ったんだよ」

マーズ「かなり度数が高いってことですよね」

カミュ「兄貴なら知ってるだろ！ホムラの秘蔵酒だぜ！」

ラース「えええ!!? 凄え!! 度数が物凄い高い事で有名な最新作じゃねえか！しかも、高いだろ？これ！」

カミュ「まあ値段は気にすんなよな」

グレイグ「本当に手に入れていたのだな」

グリーン「あの一、秘蔵酒って？」

シルビア「秘蔵酒はホムラのお酒よりずっと度数が高いお酒なの。でも、その分味がさらにしつかりしてるって聞いたわ。少しなら飲んでみようかしら」

グリーン「あのホムラのお酒でさえ高いのに、それよりも更に……って凄くないですか？」

デルカダール王「確かにのう。ラース用だというのは肯ける」

ロベルト「ラース將軍かカミュさんしか飲めない気がします」

ラース「それじゃあ、皆で飲みたいやつからどんどん飲んでいこうぜ！」

城での飲み会2

ベロニカ「というより……」

テーブルの上には蜂蜜酒、グラツパ、雪溶け酒、ボツク、エール、チョコレート酒、ホムラの秘蔵酒、サボテン酒に加え、ワインやビールなど様々な酒が並んでおりどれがどれだかわかりにくくなっていた

ベロニカ「こんなにあつたらわかりにくいわ。飲めない人とか私みたいにお酒に詳しくない人は混乱するから、度数が低いやつはバン達の方に、高いやつはラースの方に持って行って混乱しないようにしましょう」

デルカダール王「うむ。それもそうだな。どれ、蜂蜜酒は兵士達の方に持っていくといい」

シルビア「後、このワインやビールもそっちね」

ラース「ほい、チョコレート酒。後はサボテン酒もそっちだな」

グリー「こうやって見ると世界中のお酒が集まった感じですね」

バン「だよな。中々こんな機会ないぞ」

ギバ「貴重なお酒ばかりだからありがたく飲まない」と

ベグル「だな。こんな機会じゃないときつと飲めない物もあると思うぜ」

マヤ「私、飲んだ事ないお酒多いな。いろいろ飲んでみようつと」

カミュ「兄貴の方には秘蔵酒、グラツパ、雪溶け酒、ボツクだな」

ロウ「ほほ、何とも豪華な並びじゃ。どれから楽しもうかの」

マルティナ「お父様、お酒お注ぎますよ」

デルカダール王「おお、ありがとう、マルティナ。それではまずグラツパから貰おうかの」

マルティナ「わかりました」

セーニヤ「お姉様、チョコレート酒飲みにいきましょう」

ペロニカ「そうね。あたしも気になったの」

イレブン「僕もバン達の方にいこうかな。でも、たまにこっちのやつも飲ませてね」

シルビア「ええ、言ってくれたら持っていくわ」

ラーズ「雪溶け酒、美味っ！スツと入っていくな」

グレイグ「どれ、俺も飲んでみよう。……… おお。これは美味しい。ほのかに甘みもありますな」

マルティナ「シルビア、私にはボツクを取ってくれる？ 気になったの」

シルビア「それじゃあアタシも。苦いと言ってたけど、どんなものかしら」

マルティナ「…… あ、確かにかなり苦いわね。でも、私はそこま
で気にならないわ」

シルビア「苦いけど、これもまたお酒の醍醐味じゃないかしら」

ラーズ「それじゃあ、秘蔵酒いってみますか」

カミュ「お、どんななのか頼むぜ、兄貴」

ロウ「わしも気になるのう」

ラーズ「…………… おお!!強い!!これはガツンとくるな!もう少し冷やしてみるか。冷やしても美味しそうだ」

カミュ「どれどれ、俺も飲んでみますか…………… うおっ!こりやあ凄えな!ホムラのお酒とは比べ物にならねえ!」

デルカダール王「そんなにか。どれ、わしも貰おう」

ロウ「デルカダール王よ、わしにも注いでくれ」

デルカダール王「うむ。では…………… おお!!これは…………… 強い…………… !
少々くらつときたぞ」

ロウ「これはこれは……………。わし達もあまりたくさんは飲めんのう」

グレイグ「ロウ様に王までも、ですか。秘蔵酒…………… なんと恐ろしい」

シルビア「アタシも飲もうかと思ってたけど少し怖いわね」

マルティナ「私は流石に遠慮しとくわ。雪溶け酒、貰いますね」

バン達の方では

セーニヤ「はく……。幸せですわ。まさかこんな素晴らしいお酒があるなんて」

マーズ「セーニヤさん、かなり気に入ったみたいですね」

セーニヤ「はい！ラーズ様にはお礼を申し上げておかなければ」

グリー「そんなに美味しかったですね。僕も貰っていいですか？」

セーニヤ「はい。グリー様、どうぞ」

グリー「さ、様？そんな風に言わなくても大丈夫ですよ、セーニヤさん。むしろ僕が様をつけるべきなんですから」

ベロニカ「ああ、気にしないでグリー。この子ったら昔からの癖な

の。どうしても嫌なら変えられるけど」

グリー「あ、そうだったんですね。それなら仕方ないですよ。慣れるよう努力します」

イレブン「あ、バン。蜂蜜酒取ってくれる？」

バン「わかりました。はい、イレブンさん。これ結構甘いのにすつきりしてましたよ。あ、どうせなら注ぎますよ」

イレブン「本当？ふふ、ありがとう。じゃあお願いするね」

ロベルト「勇者様、その後サボテン酒取ってもらえますか？飲んでみたいんです」

ダバン「俺も貰おうかな」

イレブン「わかったー。これもね、凄くあっさりしてて飲みやすいよ。あまりお酒っぽくなくて水みたいに飲めそうだった」

ダバン「へえー、それは凄いですね。俺達でも安心できますね」

ペロニカ「このエール美味しいわね！いつも飲んでたエールとは違うみたいだわ」

ガザル「ペロニカさん、わかりますか？この作ってる所のやつ、かなりこだわってるみたいで味が違うんですよ」

ベグル「果実の香りもしっかりしてるな。いいもんだな」

マヤ「美味しそう。私もほしい」

ギバ「いいぞ、マヤちゃん。ほら」

マヤ「いしし、ありがとう、ギバさん」

宴会から一時間後

ロベルト「あ、セーニヤさん。蜂蜜酒まだありますか？俺、もう一回ほしいんですが」

セーニヤ「あ……。すみません、ロベルト様。蜂蜜酒はもう空みたいですわ」

ロベルト「あ、残念。それじゃあチョコレート酒貫いますね」

セーニャ「はい。どうぞ」

グリー「はあ……。なんかこんなにお酒飲んだの初めてかも」

ベグル「グリーはまだ20になったばかりだもんな。仕方ないさ」

グリー「そうなんです。まだまだ皆さんより経験がないんですね」

バン「大丈夫だぜ。お酒も楽しめる量ならどんどん飲んでいけるからよ。まだいけるか？それとも休むか？」

グリー「じゃあ少しお水と料理食べて気分転換してますね」

ベグル「おう。そういうバランスも大事だからな」

ベロニカ「あら、グリーも来たの。このカルパッチョ美味しいわよ。シルビアさんが持ってきてくれたんだって」

ギバ「確かに。流石ソルティコの有名料理なだけあって美味しいですね」

グリー「僕、ほとんど食べた事ないんですよ。昔に一回だけ」

ガザル「そりやあ勿体ない。なら、今がチャンスだぜ。まだラース
將軍は酒を楽しんでるからな。無くなる前に食べとけよ」

グリー「マヤさんから聞いてます。相当な大食いだとか」

ベロニカ「本当よ！大食いというより最早化け物みたいにたくさん
食べるんだから。同じ人間とは思えないわ」

ギバ「凄い言い方しますね、ベロニカさん。まあ、気持ちはわかり
ます」

イレブン「へく、バンの偽物がそんな暴れてたんだ。お疲れ様だっ
たね」

マヤ「私も知らなかった。といっても、バンさんの偽物つてすぐわ
かりそうだけど」

ダバン「それが本当バンそっくりで、性格や喋り方まで同じだから
俺達には判断出来なかったんですよね」

イレブン「そんなにだったんだ。それは僕もわからなそうだな」

マヤ「あ、ダバンさんエール取ってくれる？」

ダバン「空になったか。どれ、注ぐぞ」

マヤ「ありがとう」

イレブン「あつちはまだ騒がしいね。ラーズはまだ酔ってないのかな」

ダバン「ラーズ將軍は早々酔わないですからね。あの秘蔵酒がどれくらいかわからないですけど」

マヤ「先に兄貴がダウンしそうで怖いな」

ラーズ達の方は

マルティナ「お父様、少々飲みすぎです。お食事の方もしっかり食べてください」

デルカダール王「う、うむ。それもそうだな。すまん、マルティナ」

ラース「そしたらバンが魔物の群れ引き連れてきてよ。何してんだってなったんだ」

シルビア「あらあら、バンちゃんったら相変わらずね」

グレイグ「それだけ騒いでいたなら当然だろう。まあ、大丈夫だったのだろう？」

ラース「いやいや、話は続きがあつてな。戦闘の途中にギバが地面の穴に落ちてよ。それを見たバンが追いかけて自分も落ちてつたんだ」

カミュ「そりやあまた大変だな。二人は怪我したのか？」

ラース「バンがギバのクッションになったみたいで、怪我はバンだけだった。だが、あいつの突っ走る所は何とかしないとして昔から思ってたんだがな」

ロウ「ほほ、まあバンのよい所でもあるからの。あまり責めるものもあるまい。ラースよ、ボツクをもらってよいかの」

ラース「おう。グレイグはどうする？空になってんぞ」

グレイグ「そうだな。俺は雪溶け酒を貰おうか」

カミュ「秘蔵酒、また少し飲むとするか」

マルティナ「ラーズ、あれからずっと飲んでるけど大丈夫？お水や料理何か持つてきましようか？」

ラーズ「あー、そうだな。少し料理持ってくるか。マルティナも料理取りに行くのか？俺もいくぜ」

カミュ「……まあ、まだ流石に酔わねえよな」

グレイグ「秘蔵酒はどれだけ残っているのだ？」

カミュ「大体六割くらいか。って、もう四割飲んだのか！兄貴のやつ、どんだけハイペースで飲むんだ？」

シルビア「アタシそこまで強いお酒初めて飲んだわ。胸が焼けるかと思っただわよ」

グレイグ「俺も進んでは飲みたくないな。お前達はやはりレベルが違うな」

シルビア「あ、料理の所でラーズちゃんの量にグリーンちゃんが驚いてるわ。グリーンちゃん、ラーズちゃんの食べる量初めて見たの？」

カミュ「だろうな。まあ、俺達も最初はあんな感じだったよな。マルティナなんて止めてたもんな」

グレイグ「そうだったのか。俺も初めて見た時は驚いたものだ。大食いが得意な人がいるのは知っていたが、目にするとやはり量に驚かされる」

シルビア「イレブンちゃん達の方のお酒も美味しかったわね。蜂蜜酒にチョコレート酒。飲みやすかったわ」

カミュ「俺は甘いのはちよつとな。まあ、エールは美味かったな。サボテン酒は酒なのかわからねえくらいだったけど」

グレイグ「あれもちゃんとした酒だ。お前達レベルだと水と同じなのだろうが」

ロウ「わしは少しバン達と話してこようかの。グリーンとも話してみたいのう」

カミュ「おう。グリーのやつ、人気だな」

グレイグ「まあそうだろうな。あまり我々と関わりが無かったからな。新しい交流が出来ていいではないか」

城での飲み会3

それから更に二時間が経ち、夜も遅くなってきた

ベロニカ「私、そろそろ限界だわ。お腹いっぱいだし、酔っちゃいそう」

セーニヤ「お姉様もですか。私もそろそろ限界ですわ」

グリー「僕も流石にキツくなってきたかな」

マヤ「じゃあ姉ちゃんに部屋に戻るって伝えてこよう。部屋は用意してあるんだって」

グリー「僕の分もあるの？」

マヤ「うん。参加するって決まってたからね」

グリー「なんだか申し訳ないな。僕も小さいけど家借りてるのに」

ベロニカ「でも、酔った状態でちゃんと帰れるの？鍵閉めとか明日の準備とか出来る？この状態でやれって言われたら私だったら無理だわ」

グリー「そ、そう言われると…… 僕も出来ないと思います」

セーニヤ「ふふ、大丈夫ですわ。マルティナ様はお優しいですから
迷惑なんてかかりません。グリー様も一緒にマルティナ様の元へ行
きましょう」

グリー「はい、わかりました」

マヤ「姉ちゃん、私達そろそろ限界だから部屋に戻ってていい？」

マルティナ「あら、そうだったの。大丈夫よ。部屋はいつもの場所
だけどわかる？あ、グリーの分もあるわよ。ぜひ泊まっていつて。こ
んなにお酒飲んだ後は危ないから」

ベロニカ「ほら、言った通りでしょ、グリー」

グリー「そうみたいです。ありがとうございます」

セーニヤ「ラーズ様はまだ酔わないのですか？」

マルティナ「そうみたいね。私もいい気分になってきたから少し控

えないと。あ、グリーの部屋はこの階段を上がって左手の奥よ。皆はいつも通りね」

ベロニカ「ありがとう、マルティナさん。それじゃあおやすみなさい」

グリー「おやすみなさい、皆さん」

マルティナ「ええ、また明日ね」

デルカダール王「む？ベロニカ殿達も休まれるか。どれ、わしもそろそろ休もうかの」

マルティナ「お父様も楽しいのはわかりますが、無理はしないでくださいね」

デルカダール王「ああ、そうだな。あの秘蔵酒はかなりの物だったからの。普段より酔いが早いようだ」

グレイグ「王よ、休まれますか？」

デルカダール王「ああ、楽しかったぞ。ぜひまた機会があれば開こうではないか」

ロウ「そうじゃの。またこうやって皆で飲むのも楽しいのう」

デルカダール王「それではわしは早いが休ませてもらおう」

グレイグ「王よ、部屋までお送りします」

デルカダール王「ああ、助かる。ありがとう、グレイグ」

イレブン「バン、大丈夫？兵士達大分皆参ってるみたいだけど」

バン「ああ……イレブンさんですか。そうですね。結構……きてますね」

バンやベグル達は机などに突っ伏している

ベグル「といつても……兵士達は俺とバン以外部屋がないんです。基本俺達以外は帰るんで。でも、ギバとかダウンしてますし、どうしましょうか」

シルビア「ちょっと待ってて。毛布持ってくるわ」

イレブン「お願い、シルビア。キツイなら床に寝る？少しくらい楽

になると思うよ」

ロベルト「ああ、そうさせてもらいますね。ラーズ將軍に怒られないといいけど」

イレブン「水も近くに置いておくね。どんどん飲んでいいから」

ダバン「ありがとうございます、イレブンさん」

カミュ「兄貴……まさか、秘蔵酒全部飲んだのか？空っぽだぜ」

ラーズ「おお、そうだぜー。美味かったな、これ」

マルティナ「ちよつと大丈夫なの？酔ってない？」

ラーズ「ん、これくらいなんて事ないだろ！まだボツクは余ってたよな。それ飲むぜ」

カミュ「あー、これだつてもうほとんど残つてねえよ。兄貴は飲み過ぎなんだからよー」

ラーズ「ん、マジか。少し食い足りないんだがな」

マルティナ「それなら余ってる物食べていいわよ。サラダとかお肉も少し残ってるわ」

ラース「よし、食うぞー！」

イレブン「……………酔ってない？ラース」

カミュ「そうかあ？いつも通りに見えるぞ」

マルティナ「カミュ、あなたも酔ってるんじゃない？少し変よ」

カミュ「あー……………懐かしい感覚はするな。まあ、少しクラクラするかな」

イレブン「やっぱり。カミュも部屋戻って休んだら？」

カミュ「いやいや、この程度なんて事ないぜ。まだ兄貴の酔った姿見てねえんだからよ。それ見るまでは戻らねえぜ」

パリン！

マルティナ「え!?!何!!」

レース「やっべ。割っちゃまったぜ」

レースの持っていた皿が碎けていた

シルビア「レースちゃん大丈夫？手、傷ついてない？」

レース「なんとかなー。おつかしいなく、割れない力加減だったはずなんだが」

マルティナ「力入れすぎよ。レースが力入れると物は壊れやすいんだからしっかりしてね」

レース「悪いなー、マルティナ。おっと」

レースが机の足よろけてテーブルに手をつく

バキイツ！

パリン！！

テーブルは二つに折れて、上に乗っている料理やコップなどが割れていった

レース「おわっ！な、なんでだ？」

シルビア「んもうっ！ラーズちゃん何してるのよ！」

イレブン「ちよつと大丈夫？ラーズ、本当危ないから落ち着いて座って待っててよ」

ラーズ「あ、ああ。すまん……」

カミュ「兄貴、大丈夫か？力加減出来なくなってるじゃねえか？」

ラーズ「おかしいなー、いつもと同じはずなんだが」

ロウ「感覚が違うのかもしれないな。ラーズほどの力だと物を壊すのは簡単なのじゃな」

グレイグ「さつきから何事だ。色々割れたような音がしたぞ」

ベロニカ「大丈夫なの？心配で来ちやったわ」

セーニヤ「皆さんお怪我はありませんか？」

マルティナ「あ、ベロニカとセーニヤまで。騒がしくしてごめんなさい。ラーズが少し酔ってるみたいなの」

シルビア「ラースちゃんが力加減が出来なくなってるのよ」

パリン！

イレブン「ま、また割れた音が」

ラース「……あれ？」

ラースが飲んでいたコップが割れていた

ロウ「……ラースよ、お主少し兵士達と休んでおれ。少し休憩じゃ」

カミュ「だな。こっちはなんとかしとくからよ」

ラースはロウとカミュに押されて兵士達の元へ行った

ラース「すまん……」

ベロニカ「全く！ラースったらこんな散らかして！」

グレイグ「まあ、暴れないだけマシだろう。今の状態で暴れられたらそれこそ城が壊れてもおかしくない」

セーニヤ「ラーズ様に酔い覚ましの薬お作りしますわ」

ロウ「それがよいな。どれ、わしも手伝おう」

シルビア「カミュちゃん、そっちは大丈夫？」

カミュ「ああ。割れたやつは集めといたぜ」

ラーズ「お前ら全員参ってんなー。酔ったか？前みたいに吐いたりすんなよ」

バン「あ、師匠。何やら騒がしいですけどどうしましたか？」

ラーズ「それがよ、勝手に物が壊れてくんだぜ。不思議だよな」

バン「た、大変じゃないですか。俺も手伝わないと」

バンはゆっくりと立ち上がろうとする

ラーズ「まあまあ。イレブン達が対処してるからバンは座つてろよ」

ラーズはバンの腕を掴んで座らせようとした

ゴキツ！

バン「痛ったー！！」

ラース「あ、あれ？」

グレイグ「こ、今度は何をした、ラース！！」

ラース「い、いや、バンが立とうとしてるから座らせようとしたらよ」

マルティナ「ちよつと！肩外れてるじゃない！！」

イレブン「バン、大丈夫!?今戻すから」

シルビア「こっち押さえてるわね」

イレブン「うん、お願い。えいっ！」

ゴキツ！

バン「うう……。ありがとうございます」

ラーズ「す、すまん、バン」

ベロニカ「もう！あっちこっちで問題起こして！酔っ払いはさつさと寝なさい！」

ラーズ「ええー、俺が悪いのかよ。まだ食い足りないんだが」

ベロニカ「あんた以外何も悪くないわよ！食い足りないのも知らないわ！ほーら、歩きなさい！」

ラーズはベロニカに押されて渋々部屋に戻っていった

カミュ「……………こりやあタチ悪いな。自覚なしで暴れてやがる」

マルティナ「本当ね。カミュ、もうラーズを酔わせないでね」

イレブン「本当だよ。対処出来なくなっちゃうから」

カミュ「そうだな。皆もすまねえな。俺の興味でこんな事になっちゃった」

グレイグ「まあ俺達も興味はあった。止めなかった俺達も同罪だろう。次はもうやめさせればいいだけだ」

シルビア「そうよ。ほら、割れた物とか片付けちゃいましょう」

セーニヤ「あら？ ラース様はどうされましたか？」

ロウ「今薬を作ったんじやが」

イレブン「ラースならもう部屋に戻したよ。これ以上被害出されても困るからね」

セーニヤ「わかりました。それでは、こちらの薬だけでも渡しに行きますね」

シルビア「アタシも念のためついていくわ。今のラースちゃんは本当危ないから」

マルティナとラースの部屋前

ベロニカ「ふう〜。眠りの花がこんな所で役に立つなんて」

セーニヤ「あ、お姉様。ラース様はもう寝ちゃいましたか？」

ベロニカ「ええ、そうよ。って、手に持ってるの薬ね。それ置いてきなさい。ラースに近づいたら駄目よ」

セーニヤ「はい。わかりましたわ」

シルビア「アタシもいるから何かあっても何とかかなると思うわ」

ペロニカ「そうね。シルビアさんがいれば安心だわ」

セーニヤ「失礼します、ラーズ様。お薬置いておきますね」

セーニヤはベットの側にある机に薬を置いた

戻ろうとした時

パシツ!

シルビア「キャツ!」

シルビアの手をラーズが掴んだ

シルビア「ちよつとラーズちゃん。離してちょうだい」

ラーズ「グウ……グウ……」

セーニヤ「ね、寝てますわ。シルビア様大丈夫ですか?」

シルビア「んん！力強い！もうちよつと！」

シルビアは思いつきり腕からレースの指を離した

シルビア「ふうっ……。レースちゃんったら怖いわね。さ、戻りましよう」

セーニャ「は、はい。お休みなさいませ、レース様」

酔いは冷め

次の日、朝食を仲間達で大広間で食べていた

ラース「いやー、昨日は途中からすっかり記憶なくてよ。あの秘蔵酒相当強かったもんな。何年振りかに酔ったな。ハツハツハ！」

マルティナ「笑い事じゃないわよ。こっちは大変だったんだから」

ベロニカ「本当よ！あつちこつちで問題起こして！」

ラース「え？わ、悪い……。何かやらかしたのか？」

セーニャ「やはり覚えてませんか」

グレイグ「普段お前は力加減しているだろう？それが無くなっていな。皿やらコップやらテーブルやらを壊していたのだ」

ラース「げ……。それはすまない。皆、怪我はしてないか？」

ロウ「わし達は何ともなかったがの」

シルビア「二人怪我人も出たんだから。バンちゃんの肩外したのよ

？それも覚えてない？」

ラーズ「ええ!!そんな事もしてたのかよ！俺ヤバイやつだな！」

カミュ「放つといったら何しでかすかわかんなかったからな。その後は強制的に部屋に戻したってわけだ」

イレブン「バンにも謝っておいた方がいいよ。バンの事だから気にしてないと思うけど」

ラーズ「そ、そうだな。それにしても、皆には迷惑かけたな。今度からは酔わない程度にするさ」

マルティナ「それって前とあまり変わらないじゃない」

ラーズ「まあ、酔わない量だからな。飲んでても正常だったら大丈夫だろ？」

グレイグ「それはそうだが……いつ酔ってしまうかわからんぞ」

ラーズ「一応こつちも酔いそうだなって感覚はあるからよ。そこま
でだな」

カミュ「あの秘蔵酒全部飲んでから酔ったのか？」

ラース「え!?!俺、あれ全部飲んだのか!?!」

ロウ「そこからじゃったか。どこまで記憶はあるんじや？」

ラース「じいさんがグリーンと話に行ってしばらくしてからだな」

マルティナ「となると、最後の一時間半くらいは全部記憶がないのね」

セーニャ「二日酔いとかは大丈夫ですか？昨日お薬置いておきましたけど」

ラース「それならしつかり飲んだぜ。流石セーニャの薬だな。効果的面だ」

グレイグ「ロウ様もお作りしていたのだぞ。感謝しておくのだぞ」

ラース「ありがとな、セーニャ、じいさん」

ロウ「ほほ、どういたしましてじゃな」

セーニヤ「元通りになってよかったですわ」

その後、昨日の片付けも終わり仲間達もそれぞれ帰っていった

マルティナは兵士達に一日休むように指示を出していた

バルコニー

グリー「うう……頭がガンガンする」

マヤ「グリーさん、大丈夫？二日酔いしたんだね」

グリー「そうみたい。初めてなったけどこんなにキツいんだね」

ガザル「グリーもか。俺達も二日酔いだ。途中で床で寝てたしな」

ギバ「飲み過ぎたー。いつも後悔してんのにまたやっちゃったよ」

ガチャ

ラース「お、やっぱり何人かここにいたか。二日酔い組か？」

マヤ「あ、兄ちゃん。兄貴から聞いたよ。酔っ払ってたんだってね」

ラーズ「そ、そうなんだ。やらかしたみたいでな。少し怒られたさ」

ギバ「ああ、バンが言っていましたよ。肩外されたって」

ラーズ「あまり言わないでほしいんだがな。バンにはさつき謝ってきた」

グリー「でも二日酔いにはなっていないんですか？僕、今結構キツいですけど」

ガザル「確かに。普通そうですよね」

ラーズ「セーニヤとじいさんが薬作ってくれてな。おかげでバツチりってわけだ」

ギバ「いいなー、ラーズ將軍。俺なんていつも二日酔いになるんですよ。羨ましいです」

マヤ「でも、昨日は楽しかったな。いろんなお酒飲めたし、皆ともたくさん話せた！」

グリー「確かにそうだよ。兵士さん達も皆、話しやすく助かりました」

ガザル「そんな事ないだろ。俺達は話したい事勝手に話してただけだぜ。グリーこそ最初緊張してるみたいだったけど、最後はいい感じになってたと思うぜ」

ラース「それはお前達も酔ってたんじゃないか？」

ガザル「それは……否定できないですね」

ギバ「まあ、グリーが楽しかったって言ってくれてるし大丈夫だろう！」

グリー「はい。あ、あのサボテン酒なんですけど僕達のお店で出さんです。もうすぐ出来そうなんでよかったですらぜひ飲みに来てください」

マヤ「私達も待ってるね！」

ラース「そういえばそんな事言ってたな。他にも色々あるのか？」

グリー「はい。高い物は無理なんですけど、各地のお酒も用意でき

たらしいなってビルさんが話してました」

マヤ「あと料理も！マドリーさんが料理本で各地の料理勉強してるんだって！」

ガザル「へえ、それは楽しみだな」

ギバ「出来たら連絡くれよな！必ず行くぜ！」

竜の宴

飲み会から二週間後、ソルティアナ海岸

丘の上には真っ白な結婚式場が建っており、海を一望できるようになっていた

今日、ここで一組の男女が愛を誓う日となっている。式場の周りには兵士達やイレブン達なども集まっている

着替え部屋

男全員「おおく……」

ベグル「あ、あんまジロジロ見ないでください……」

ベグルは白いスーツに身を包み、赤いハイビスカスが胸のポケットを飾っている

ラース「いやー、やっぱり一生に一度の服だろ？人生の晴れ舞台の姿くらいよく見ておきたいよな」

イレブン「うんうん。ラースの服もかっこよかったけど、ベグルのもカッコいいよ！」

カミュ「いつも兵士の鎧姿だったからよ。それが急にこんな服になって見慣れてねえんだ」

ベグル「俺もこんな凄い服、一生に着るのなんてこの日くらいですよ」

ロウ「じやが、少しネクタイやスーツがずれておるぞ。どれ、しゃがんでくれんかの。わしが直そう」

グレイグ「折角の記念すべき日だ。服装もしっかりしておかんな」

ベグル「ロウ様、ありがとうございます」

バン「こういうのって何て言うんだっけ？えっと……シルバーデビル（猿）にも衣装？」

ギバ「それだと褒めてねえぞ。黒竜丸（馬子）にも衣装の方だろ」

ロベルト「お前ら、意味は変わらねえぞ」

ベグル「その二人は後で覚えてろよ」

ガザル「まあバン達は放っておいて、ベグル似合ってるな」

マーズ「後はジェーンさんだけだな」

ダバン「どんな見た目にしたんだ？一緒に決めたんדר？」

ベグル「それは見てからの楽しみみてやつだな」

カミュ「そう言われると気になるな。まあ、あっちにはマルティナ達がいるし、何も問題ないだろ」

ロウ「こんなもんじゃな。少々苦しいかもしれぬが我慢するのじやぞ」

ベグル「んゝ、これは確かに少し苦しいかもしれないですね」

ラーズ「やっぱりそうだよな。俺も何度緩めようと思った事か」

グレイグ「思ったではなく、目を離すとすぐに緩めていただろう。直すこちらの事も考えてほしいものだ」

ベグル「まあ、我慢ですからね。これくらいなんて事ないです」

その頃、女性達の方は

ジェーン「ど、どうですかね？」

女性達「素敵！」

ジェーンは白いウエディングドレスに淡い黄色のレースがかかり、頭には赤いハイビスカスの形をした宝石がついていた

ミラ「ジェーン、とっても素敵!!あなたにぴったりだわ！」

シルビア「ミラちゃんの言う通りよ!もつと胸張っていいのよ」

マルティナ「ベグルと二人で選んだんでしょ?とってもお似合いだね。ベグルつたらしいセンスしてるわ」

ジェーン「えへへ、ありがとうございます。まさかこんな綺麗なドレスを着れる日がくるなんて……夢みたい」

セーニヤ「ジェーン様、そのお気持ちよくわかりますわ。何たってこのウエディングドレスは一度きり。私達女性なら誰もが憧れますもの」

ベロニカ「ベグルもきつとジェーンに驚くと思うわ。もう外で待つてると思うし、ビックリさせに行きましょう！」

外

テーブルには立派な料理が並び、周りにはラムダからの人達も来ている

中央には神父が立ち、二人の登場を待っていた

ジエーン「あ…………… ベグル君」

ベグル「…………… ジエ、ジエーン…………… か。凄く似合っているぞ」

ジエーン「ありがとう。ベグル君こそカッコいいよ」

ベグル「そうか？ロウ様や皆に厳しくチエツクされたからな。それじゃあ、行こうか」

ジエーン「ええ。お父さん達にもこの姿しつかりと見てもらわないと」

神父「新郎ベグル、あなたはここにいる新婦ジエーンを健やかなる時も病める時も、富める時も貧しい時も、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

ベグル「ああ、誓います」

神父「新婦ジエーン、あなたはここにいる新郎ベグルを健やかなる時も病める時も、富める時も貧しい時も、夫として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

ジエーン「はい。誓います」

神父「それでは誓いのキスを」

二人「……………」

二人は少しの間見つめあっている

ベグル「……………俺は口下手な方だからよ。こういう時、何て言ったらいいかわからねえけど、今日まで俺を信じてきてくれてありがとう。ジエーンには話せてない事だってまだたくさんある。」

それでも！俺は、ジエーンが好きだ。この気持ちだけは隠さない。これからも俺と共に過すごしてくれ」

ジエーン「うん。わかってる。私はベグル君をいつまでも信じてる。どんなベグル君だって、愛してみせる。隣で過すごし続けるよ」

二人はゆっくりとキスをした

神父「ここに新たな夫婦ができた事を祝福いたします。どうかこの二人に、いつまでも神の御加護がありますように」

パチパチパチ!!

ジェーンの母「うう…… ジェーン…… こんなに綺麗になって」

ジェーンの父「駄目だよ母さん。今日は笑って過ごすんだらう？
ジェーンとの約束じゃないか」

ジェーンの母「ええ……。感動しちゃって……」

その時

グラグラグラ!!

全員「!!？」

強い揺れが式場全体を襲った

ジェーン「キャツ！」

ベグル「ジェーン！何だよ、この揺れ！」

ラース「おいおい！かなり長いぞ！」

マルティナ「こんな場所で地震なんてあるの!？」

シルビア「そんなはずないわ！アタシこんな強い揺れ初めてよ！」

カミュ「お、おい！見ろ、海の方！」

海からは建物のような物が出てきていた

イレブン「何あれ!?塔だよ！」

ペロニカ「この揺れはあの塔のせいなの!?!」

しばらくすると揺れが収まった

グレイグ「皆！怪我のある者はいるか！」

セーニャ「お怪我された方は私のほうまで来てください！すぐに手当ていたします！」

転んだり、割れた食器などでの数人の怪我人が集まった

ザワザワ

辺りはざわついている

ラース「ベグル、ジェーン、無事か!?怪我はないな？」

二人「……………」

二人は黙って塔の方を見つめている

ラーズ「お、おい？二人ともどうした？」

マルティナ「ベグル？ジェーン？どうしたの？」

ベグル「…………… 呼ん…… てる……」

マルティナ「え？」

ジェーン「私達…………… 呼ばれてる……………」

ラーズ「呼ばれてる？誰に？」

二人はそう言うのと、海に向かって歩き始めた

マルティナ「ちよつと!?そっちは崖よ！落ちちやうわよ！」

ラーズ「どうした、ベグル！ジェーン！」

バン「師匠、マルティナ様！塔の方に異変が！」

ラース「何!？」

塔の方を見ると、塔から何かがたくさん飛んできている

マルティナ「今度は何なの!？」

ロウ「この場所…… 式場……。あの塔……。どこかで覚えが」

ロウは考え込んでいる

イレブン「おじいちゃん？」

カミュ「お、おい!あの飛んできてるの全部魔物だ!!」

飛んできているのは全てドラゴンの魔物だった

ベロニカ「まずいわ!急いで避難させないと!」

マルティナ「兵士達!!グレイグ、シルビア、セーニャ!戦えない者達を守りながら避難させて!!他の人達はここで食い止めるわよ!」

全員「了解!」

周りの人達「逃げろー!!」

グレイグ「ゴリアテ、俺が先導する。後ろは任せたぞ」

シルビア「任せてちょうだい！傷一つつけさせないわ！」

セーニャ「皆さん落ち着いて逃げてください！私達が必ずお守りいたします！」

バン「ギバ、マーズ、ロベルト！お前達はここで戦っている！俺とダバン、ガザルがシルビアさん達に近づかせない！」

兵士達「了解！」

ラーズ「ジェーン！ベグル！お前達も逃げろ！」

ジェーンとベグルはどんどん崖へと進んでいく

ラーズ「くそっ！どうなっている！」ダツ！

ラーズは二人に向かって走り出す

その時

カイザードラゴン「ギシャアアア!!」

ラーズ「チツ！」

カイザードラゴンがラースとベグル達の間には立ちほだかった

ラース「このデカブツが。邪魔してくれてんじゃねえぞ」

空からは続々とドラゴンの魔物が降り立っている

周りはレジエンドウルフ、ハデスナイト、グランシーザーなど様々な竜が飛んでいる

イレブン「ラース！魔物が多すぎる！ここは纏まって戦った方がいい！」

ラース「わかってる！だが、ベグル達が！」

カミュ「一先ず何とか蹴散らすぞ！」

ベロニカ「飛んでる奴らは任せてちょうだい！」

ロウ「わしも手伝うぞ。地上はすまんが任せたぞ」

ギバ「イレブンさん達大丈夫ですか！」

マーズ「僅かながらお力になります！」

ロベルト「マーズはロウ様達を守りながら魔法を使っていけ！ギバと俺はイレブンさん達のサポートだ！」

マルティナ「助かるわ、ギバ、ロベルト、マーズ！」

ラース「オラア!!どけえ!!」

カイザードラゴン「キシヤアア……」ジユワー

ラース「よし！ベグル！ジェーン！」

二人の側には緑色の竜が空から舞い降りていた

ラース「な、何だこの竜！見た事ねえぞ！」

するとその竜の背中に乗り、ベグルとジェーンは飛んで行ってしまった

ラース「お、おい！嘘だろ!!」

緑色の竜は塔へと戻っていった

ラース「くそっ!……… まずは周りを片付けねえとか」

しばらくして魔物は全滅した

祝福の竜

ソルティコの街

ラースはイレブン達や兵士達に先程見た光景を説明していた

全員「竜に連れ去られた!？」

ラース「そうなんだ。見た事もない緑色の竜だよ。かなり大きかったぞ」

マルティナ「じゃああの塔にベグル達がいるのね」

ミラ「そんな……。もし食べられたなんて事になったら……」

ダバン「大丈夫だ、ミラ。ベグルがいるんだ。絶対守ってくれるはずだからよ」

カミュ「だが、ベグルもジェーンも様子がおかしかったんだろ？」

ラース「ああ。何かに夢中になっているようだったぞ」

バン「となると、ベグルもジェーンさんも生きてるかどうか……」

シルビア「駄目よ、バンちゃん！あまり不吉な事は言うものじゃないわ！」

ベロニカ「そうよ！不安になっちゃうでしょ！二人なら絶対大丈夫だわ」

バン「そ、そうですよね！水を差すのはよくないですもんね！」

ロベルト「助けに行くのは当然として、あんな海のと真ん中にどうやっていきますか？」

マーズ「船を出そうにも停まれるような場所は見当たらないですよ」

グレイグ「そうか。それはまずいな。どうやって向かえばいいか……」

セーニヤ「海からが駄目なら空から向かえばいいのではないでしょうか？」

ダバン「そ、空から？でも、あそこはカメラの翼の範囲外ですよ」

ラーズ「なるほど。その手があったな。久しぶりじゃないか」

ギバ「え？ラーズ將軍って空飛べたんですか？」

イレブン「ううん、そういう事じゃないんだ。僕達には伝説の乗り物があつてね。それを使えばあそこに降りれると思うよ」

マルティナ「ケトスの事ね。随分と懐かしいわ」

ミラ「ケトス……。確かラムダの古文書には勇者が乗っていた物だつて。あ！なるほど！」

バン「そんなのあるんですか！イレブンさん凄え！」

カミュ「ケトスで向かうのはいいとして、メンバーはどうする？いつものメンバーでいいか？」

ロウ「すまんが…… わしは少しあの塔について気になる事があつてのう。少し調べさせてほしい。わしは共に行けんのう。どうしてもというならどうにかするが」

ベロニカ「わかつたわ、おじいちゃん。じゃあ何かわかつたら教えてちょうだい」

グレイグ「だが、また先程のように魔物達が来たらどうする」

バン「グレイグ將軍、そこは俺達にお任せください。必ずこの街を守ってみせますよ!」

グレイグ「そうか。バン達も残ってくれるならありがたい」

ラース「それじゃああの塔に向かうか。急いで二人を救出しないと」

謎の塔 入り口

セーニャ「ここがああ塔ですか。丘から思っていたより離れていましたね」

シルビア「本当ね。しかも遠くだとわからなかったけど、かなり高いわ。頂上にベグルちゃん達がいるのかしら? 登るだけでも一苦勞しそうよ」

イレブン「でも、何とかしないと。中は階段を上るだけみたいだし、変な仕組みとかはないみたいだよ」

ラース「マルティナ、高いが平気か?」

マルティナ「……………この高さはまずいけど、隅にいくのを控えれば何とかなる……………と信じてるわ」

グレイグ「無理しないでくださいね、姫様。何かあればすぐにお知らせください」

一時間後、謎の塔 中心部

ペロニカ「ふう……………結構上ったわね。あとどれくらいあるのかしら?」

カミュ「そうだな……………。高さから見て大体半分くらいじゃねえか?」

カミュは上と下を見比べて推測している

マルティナ「これで半分!!?嘘でしょ!」

マルティナは想像以上の高さに驚いている

ラース「ああ、マルティナ。落ち着け。気持ちはわかるが、堪えてくれ」

マルティナ「私もロウ様と一緒に……………。いや、弱音は駄目よね。頑張らないと」

イレブン「でも、魔物達は全然いないね。最初はあんなに出てきたのに」

セーニヤ「丘に向かってきた魔物達で全部だったのでしょうか」

シルビア「そうみたいね。でも、この先にはその謎の竜ちゃんがいるのよね。戦闘には備えておかないと」

それから二時間後、謎の塔 頂上

マルティナ「やっと……頂上ね。うう……気圧が違うわ」

ベロニカ「そうね。少しだけ空気が薄い気がするわ」

頂上の真ん中にはたくさんのお花が飾られており、中心の台には大きな鐘があり、その前にベグルとジェーンの姿があった

グレイグ「イレブン！二人ともいたぞ！」

イレブン「本当だ！でも、何してるんだろう？」

セーニヤ「あ、ベグル様がジェーン様に屈みましたわ」

ベグルはジェーンに向かって膝を折り、頭を下げている

ラース「あれは…… 忠誠のポーズ。だが、なぜここぞ？」

ゴォーン！ゴォーン！ゴォーン！

ベグル達の近くにあつた大きなベルが一人でに鳴り出した

それと同時に周りのたくさんの花達が光り始め、七色のアーチを作り出した

シルビア「す、凄いわ……。お花ちゃん達が輝いて……。虹みたいになってる」

グレイグ「幻想的ですね。まるで二人を祝福しているようだ」

セーニャ「この鐘の音。とても聖なる力を感じます。まるで心が洗われていくような……」

カミュ「だが、その謎の竜はどこだ？」

ベグル「…… あ、あれ？俺は…… 何を？」

ジエーン「…… え？…… どこ、ここ！！？ベグル君までいるけど」

ラース「二人とも元に戻ったか！無事みたいだな」

ベグル「あ、ラース將軍。それに皆さんも。ここどこですか？俺達途中で記憶が無くて」

ジェーン「花達が凄く綺麗……」

マルティナ「二人は謎の竜に連れられてここに来たのよ。あの竜の事知らない？」

ベグル「竜？わかんないですね。今正気を取り取り戻したばかりなんて」

その時、後ろから声が聞こえてきた

???「伝統の儀、見せてもらったぞ」

全員「!？」

振り返るとそこには緑色の大きな竜が見下ろしていた

ラース「こいつだ！ベグルとジェーンを連れ去ったやつは！」

シルビア「どうしてこんな事したの？それに伝統の儀って？」

バース「我の名はバース。お前達を待っていた」

イレブン「待っていた?」

バース「うむ。遙か昔、我がまだ悪の心を持っていた魔物だった頃、一組の男女がこの塔で愛を誓い合った。その時の鐘の音に我は心を奪われた。」

それにより我の中にある悪の心は消え、我はその一組の男女を盛大に祝い、感謝をした。その者達も我に感謝を示し、我が再び姿を現した時、自分達と同じ物をつけた男女がここで愛を誓い合うようにしようとして約束してくれた」

セーニヤ「まあ……なんて素敵なお話なんでしょう」

ベロニカ「その男女がつけてた物って?」

バース「赤い花だ。種類まではわからんが、互いに同じ物を付けていた」

ベグル「それって!」

ジェーン「これの事!」

ベグルとジェーンには互いに赤いハイビスカスが付いていた

グレイグ「何と。そんな事が……」

バース「我は400年の眠りから覚めたが、塔には魔物が住み着いておった。先程追い払ったが、まさか目覚めた日に本当に同じ物を付けた男女がいるとは思わなかった。あの者達が伝統として残してくれたのではないのか？」

イレブン「僕達はそれ初めて聞いたよ。今日あの場所で結婚式をしたのはほんの偶然だったんだ」

バース「なんと……。我の勘違いであったか。すまなかった、お前達」

バースは少し弱々しそうに謝った

ベグル「……いや、別に構わねえけどよ。何でわざわざ操ったりしたんだ？」

バース「実はお前達を操ったわけではなく、我が追い払った魔物達がお前達に向かっていくのが見えてな。それを我が再び別の場所に払おうとしたのだが、範囲内にお前達も入ってしまったというわけだ」

ジエーン「そ、そうだったんですか。じゃあさっきの鐘の音も、この綺麗な花達も、あなたが私達を祝福してくれたんですか？」

バース「ああ。あの者達と同じようにした。人間はこうやった祝福が好きなのだろうか？」

ベグル「まあ……… ありがとうよ」

ラース「話を纏めると、ベグル達が連れ去られたのはこの竜の勘違いで、ここに来たのは昔の伝統に倣って赤い花を付けた男女を祝うため。魔物はただ塔から追い払ったから来てしまった、と」

マルティナ「悪意があったわけじゃないし、寧ろ好意的に接しようとしてくれてたのね」

バース「ああ。だが、どうやら長い眠りにつきすぎたようだ。世界も人間も変わりすぎてているようだ。我の事は忘れてくれ。我はまた……… あの時と同じく、この鐘の音が聞けただけで満足だ」

ジェーン「……… バース……… 様といたしましたね。私達を祝ってください、本当にありがとうございます。心から感謝いたします」

ジェーンはバースに向かって頭を下げた

ベグル「ジェーンの言う通りだな。あんたの勘違いに巻き込まれたようだが、それでも迷惑とは思わねえ。俺達を祝ってくれたんだ。寧ろ、感謝しねえとだな。ありがとうよ、バースさん」

バース「お主達……。懐かしい……あの者達もこうして我に感謝してくれた。お主達も同じ事をしてくれるのだな」

シルビア「ねえ、ベグルちゃん、ジエーンちゃん。このバースちゃんも悪い子じゃないし、皆をここに呼んでもう一度祝うってのはどうかしら？」

カミュ「おいおい、それはいくらなんでも危ないんじゃないか？戦えないやつらだっているんだぞ」

ベグル「俺は構いませんよ。魔物達に水を差されてたのでちよつと不服だったんです」

ジエーン「私もいいよ。バース様も私達の事、また祝ってくれませんか？」

バース「ここに人間を？我は構わぬ。お主達を祝う者がいるなら、ぜひ連れてくるといい」

ラース「だが、ここまでどうやって？」

バース「ならば、我が乗せよう。人間程度ならいくらでも運ぼう」

マルティナ「うーん…… とっても素敵なんだけど、大丈夫かしら？」

イレブン「敵意は無いし、友好的だよ。それに、どうしても無理なら一部の人間だけとか」

カミュ「まあ、それならありだろうが……」

グレイグ「バース、お前は襲ったりはしないのだな？」

バース「我は争いなど好まぬ。我はこの塔と鐘を守るだけだ」

ベロニカ「大丈夫そうね。じゃあ戻って皆に少し話をしましょう」

セーニヤ「そうですわね。ロウ様にもお伝えしなければ」

バース「なら、我に乗るといい。我が先程の丘まで送り届けよう」

ベグル「りゅ、竜に乗るなんて……。こんな事初めてだ」

ジエーン「意外としっかりしてて落ちなさそう」

バース「それでは行くぞ」

祝福の鐘を再び

ソルティコの街

ロウ「おお！皆も戻ってきたか！丁度よい所じやった。あの塔についてジエーゴ殿と調べたのじゃが色々わかったぞ」

カミュ「じいさんの方もわかったか。俺達も色々進展があつたんだ」

その後、兵士達とロウに塔での出来事を説明した

バン「竜が祝福……ですか。何だか凄い話になったんですね」

ミラ「その竜さんがジエーン達をお祝いしてくれたのね。何だか不思議な出来事だわ」

ロウ「ふむ。伝承の通りじゃな。遙か昔にここで王女と兵士が結婚をしたらしい。その時の二人を緑色の竜が塔から巨大な鐘を鳴らし、祝福していたという」

グレイグ「なるほど。王女と兵士の結婚。だからベグルはジエーンに忠誠のポーズをしていたのか。バースがその者達と同じ事をしたと言っていたしな」

ラーズ「それで本題なんだが」

ラースは竜と共にもう一度祝わないかと提案した

ミラ「だ、大丈夫なんですか？騙してるとか」

ジェーン「多分大丈夫だよ。帰る時も私達をここまで乗せてくれたの」

ダバン「だけどよ、念のためってのもある。人数とかは限った方がいいんじゃないですか？」

ベグル「まあな。ジェーン、誰を呼びたい？兵士達も全員向かうか？イレブンさん達がいればもしもの時も十分何とかかなりそうだが」

ジェーン「私のお父さん達は大変だろうから呼べなくても仕方ないけど、兵士さん達は全員来てほしいかな。もちろん、ミラもね。」

それに私ね、あのバース様の気持ち少しわかったかもしれないの。多分バース様は、鐘の音もそうだけどそこで私達が愛を誓い合う瞬間も好きなんだって」

シルビア「そうね。確かにそうじゃないとわざわざあそこでベグルちゃん達にあんなポーズまでさせる必要ないものね」

ベロニカ「バースってやつも中々ロマンチストじゃない。素敵だし

いいんじゃないかしら」

ロベルト「俺達はどうかやってあの塔に行けばいいんですか？」

セーニヤ「それはバース様が乗せていってくれるそうです」

ガザル「え!?!りゅ、竜に乗るんですか!?!」

マーズ「落とされたら敵わないですよ!」

ベグル「それが意外とガツシリしてて落ちなかったぜ。まあ暴れたらどうなるか知らねえけど」

イレブン「今あの丘で待つてくれてるんだ。行くのは兵士達とミラさんだけでいいかな？」

ジエーン「そうですね。あまり大勢でもバース様が大変ですし、混乱を防ぐためにもなります」

ギバ「確かに竜に乗って、なんて俺達でさえ信じられねえからな。普通の人からしたら倒れるんじゃないか?」

ロウ「おそろくそうじやろうな。ミラさんは大丈夫かの？」

ミラ「ちよつと現実離れしすぎてて実感わかないけど、ジエーン達が行くなら私もいきます」

ジエーン「ありがとう、ミラ！」

謎の塔 頂上

ミラ「ほ、本当に乗れちゃった…。」

ガザル「なんか夢見てるみてえだったな」

バン「俺、勇者様になったかと思った！」

イレブン「ふふ、バンなら似合いそうだけどね」

ベグル「駄目ですよ、イレブンさん。こんな馬鹿に勇者なんて称号あげたら世界が滅びます」

バン「そこまでかよー！」

ジエーン「バース様、今度は私達が自分の意思で愛を誓います。ど

うかが覧になっていてください」

バース「ああ。祝福はもう一度した方がいいか？」

ジエーン「出来たらお願いします。どうかこの人達にも見てほしいのです」

バース「承った。この者達はお主達にとって大切な人達なのだ。なら、今我が出来る最高のもてなしをしてやろう」

ジエーン「ありがとうございます！」

ロウ「お主の事は伝承として残っておった。わしらがよく調べなかったせいで混乱を招いたようじゃ。すまなかつたのう」

バース「気にするな。元より我は魔物。その中でも力は上の方だ。人間から怖がられても何もおかしくなどない」

カミュ「だが、あんたはいい魔物だ。優しい魔物を怖がる理由なんてねえよ」

ギバ「そうですね。俺達はあなたを怖がるなんてしませんよ」

バース「…………… 変わっておるのだな。人間など我らからすればほんの粒に過ぎん。それはお主達もわかっておろう。なぜ、それでもこうして近づこうとする」

イレブン「なぜ…………… って言われても。バースさんは僕達を襲わないじゃん。それに、魔物だからって人間と仲良くなれないなんて決まっらないじゃん」

ラース「イレブンの言う通りだな。俺達は特に魔物とは縁があつてな。悪いやつともいいやつともたくさん関わってきた。だからこそ少しわかる事がある。魔物と人間はわかりあえる。種族や言葉、生態が違くとも心を通わせる事ができる」

バース「…………… そうか。やはり人間も変わったな。我らと心を通わせるなど、我が眠る前はそんな事考えもしていなかったはずだ。だが…………… 悪くない」

ロベルト「皆さん、準備は終わったみたいですよ」

グレイグ「そうか。では、もう一度見させてもらおうとしよう」

大きな鐘の前ではベグルとジェーンが向き合っている

ベグル「ジェーン、不思議な事になったがもう一度ここで約束しよう。俺はこれからも君と共に過ごす。世界のどんなやつからも必ず

ジエーンを守ってみせる。何も怖がらなくて平気だからな」

ジエーン「うん、大丈夫。それ、告白してくれた時も言ってくれたよね。私はベグル君の隣なら何も怖くないよ」

二人はゆっくりとキスをした

ゴオーン！ゴオーン！ゴオーン！

鐘がひとりでに鳴り始め、同時に周りの花達も光り輝き、七色のアーチを作り出した

ミラ「わあ………綺麗………」

バース「ギャオオオ!!」

バースが咆哮を上げると空から眩い白い光が二人を覆った

光が無くなると二人の着ていたドレスとスーツはキラキラと輝いていた

ジエーン「綺麗だね、ベグル君。バース様のおかげだね」

ベグル「だな。ジエーンも綺麗だ。ジエーンみたいにドレスも輝いているぞ」

バン「凄え………。二人とも最高だぞー!」

ギバ「お似合いだぜー！」

マルティナ「ふふ、これは私達も忘れられないわね」

ロウ「うむ。こんな体験などありえんからの」

その後、皆は騒ぎベグル達を祝っていた。それをバースを目を細めて優しく見ていた

夕方 ソルティアナ海岸

ジェーン「バース様、本日は本当にありがとうございました。私、あなたの事を忘れません。必ず後世に残していきます」

バース「こちらこそ勘違いをしてすまなかつた。それなのに許しを貰えただけでなく、またあのように鐘の音や人間が愛し合う光景を見た。こちらこそ礼を言わねばならん。恩にきる」

ベグル「バースさんはこれからどうするんだ？」

バース「また我は眠りにつく。次に目を覚ますのはいつかわからぬが、その時はまたあの塔でお主達のような人間を待っておる」

ジエーン「わかりました。それではまたいつかお会いしましょう」
バースはベグルとジエーンが去っていくのを最後まで見届けていた

バース「……………」

バースの回想

兵士「バースさんだったか。俺は兵士として誓う。あなたにまたあのような光景を見せるとな」

王女「私も誓わせていただきます。バース様、私達はあなたの事を忘れません。どうかまたバース様にあの祝福の鐘が届きますように」

バース「我にまた聞かせてくれるというのか？」

王女「もちろんです。この赤い花が目印ですよ。この場所で再びこれをつけた男女がいたら、あの塔で儀式を行なってください」

兵士「これが俺達に出来るあんたへの感謝だ。何百年先までも残るんだ。人間にしたら頑張ってるだろ？」

バース「赤い花か。覚えておこう。我もお主達の事、いつまでも覚えていよう」

王女「ありがとうございます。それではまたいつかお会いしましょう」

バース「懐かしい……。やはりあの二人と今回の二人はどこか似ている。人間の血は争えぬのかもしれない。さて……。次の鐘はいつ聞けるのだろうか」

バースは塔へと戻っていった

シロとブレイブ

ベグルの結婚式から一週間後

デルカダール城 玉座の間

カミュ「よう。今帰ったぜ」

カミュが帰ってきた

マルティナ「あら、カミュ。お帰りなさい。お仕事は終わったの？」

カミュ「ああ。だが明日からまた仕事なんだけどな」

グレイグ「む？それなら帰ってこない方がよかったのではないかな？」

カミュ「いや、前に約束してた事あっただろ。明日の仕事は簡単な方だし、その約束を先に守っておこうと思ってるな」

マルティナ「約束？何かあったかしら？」

カミュ「マルスとルナをまたクレイモランに連れて行くってやつだ。前にしただろ？だから二人を借りようかと思ってな」

グレイグ「ああ、前にしたな。構いませんよね？姫様」

マルティナ「私は問題ないわ。一応マルス達に予定とか聞いてみて。今どこにいるのかしら？お城のどこかにはいると思うのだけど」

カミュ「兄貴の姿も見えねえな。どこだ？」

グレイグ「ラーズならつい先程ブレイブとコロを連れて訓練場の方へ向かった。バン達に用事もあったようだからな」

カミュ「わかったぜ。まずは兄貴に聞いてみるか。それじゃあな」

訓練場

そこではラーズとマルスがブレイブ達の毛並みを整えていた

ラーズ「どうだ？ブレイブ。少しは気持ちいいか？」

ブレイブ「ガウ」

カミュ「何やってんだ？兄貴」

マルス「あ！カミュだ！よ！」

リース「カミュか、お帰り。今毛並みを整えてたんだ。偶にはやってやらんとな」

カミュ「そうか。マルス見つけたぜ。お前とルナを探してたんだ」

リース「二人を？何だ、突然」

カミュ「約束の件を守りにきたんだ」

マルス「約束？……… あーもしかして！」

カミュ「そう、それだ。ルナはどこだ？」

マルス「ルナなら図書館だよ。僕呼んでくる！」

マルスは嬉しそうに出ていった

リース「何の話かわからねえうちにどんどん進んでやがる」

カミュ「兄貴、歳で記憶力落ちたんじゃねえか？」

リース「お？カミュから喧嘩売るなんて久しぶりだな。買う準備は

できてるぞ?。」

ラースは立ち上がり、ストレッチを始めた

カミュ「や……冗談。それは勘弁だ。前にマルス達をまたクレイモランに連れていくつてやつだ。それに、マヤも今日だけ帰ってきてんだ」

ラース「ああ、それか。マルス達は予定ないはずだから大丈夫だぜ。それにしても、シロともまた会いてえな」

ブレイブ「ガウ?。」

カミュ「そういや、ブレイブはシロと会った事ねえもんな。似た者同士会わせてみても面白いかもな」

ラース「前にブレイブが無理矢理クレイモランに行った時、寒くしてはなさそうだったよな。シロはこっちは無理だが、ブレイブならクレイモランに行っても問題ないかもしれねえぞ」

カミュ「ならブレイブも来るか? コロも連れて俺とマルス達と一緒によ」

ブレイブ「ガウウ……」

ブレイブはラーズを見ている

ラーズ「俺達の事なら気にすんなよな。カミュの所にはシロっていうスノーパンサーがいるんだ。コロより少し年上くらいのやつだ。そいつと会ってみろよ」

ブレイブ「……ガウ！」

奥ではバン達とコロが騒いでいる

コロ「キャン！」

バン「あ、こらコロ！それいじるな、あー!!」

ガシヤアアン！

置いてあつた鎧や武器などが散乱した

コロ「キャン！キャン！」

ベグル「まったく。ブレイブみたいに大人しくしてろよな」

ベグルがコロの首元を掴み持ち上げた

コロ「クウウ〜」

ギバ「可愛い声出しやがって。悪戯した事実は消えねえんだから

な」

ロベルト「まあ、一旦片付けるぞ」

カミュ「コロも大きくなったのにまだ悪戯とか好きなんだな。一体誰に似たのやら」

ラース「困った話だよな。まあ、客に対しては何もしないからまだいいが」

カミュ「そーいや兄貴はバン達に用事があったんじゃないのか？」

ラース「ああ、そうだった。おーい、バン、ベグル。少し来れるか？」

バン「ちよつ、ちよつと待ってください！」

ベグル「一先ず俺だけです」

ラース「ベグルだけでもいいか。明日の夕方、ジエーゴさんが来てくれる事になった。準備とかしておいてくれ」

ベグル「わかりました。バンにも伝えておきますね。その後はいつものですか？」

ラース「ああ。無理か？」

ベグル「いえ、確認です。またいつもの酒場ですね」

ラース「おう。それじゃあ呼んで悪かったな」

カミュ「いつもの？何だ、それ？」

ラース「ジエーゴさんが来た後は大抵その後には兵士達と飲みに行ってるんだ。まあ、俺の奢りなんだがな」

カミュ「お、いいじゃねえか。兄貴の奢りなら俺も行くぜ」

ラース「お前は自分で払え」

カミュ「何だよ、一人くらい増えたっていいだろ」

ラース「お前は兵士と比べて圧倒的に飲む量が違うんだから金がかんだよ」

カミュ「それは兄貴もだろ。まあ、奢りは冗談だ。来る事は否定しないんだろ？」

ラース「まあな」

カミュ「じゃあ決まりだな」

その後、大広間

マルス「母さん、父さんいつてきまーす」

ルナ「明日に帰るね」

カミュ「そんじゃ急に悪かったな。また明日な」

マルティナ「ええ、カミュに迷惑かけないでね」

ラース「マルス、カミュにどんどん甘えておけよ」

マルス「わかった！」

カミュ「わかるな！あんな親父の言う事なんか聞かなくていいからな、マルス！」

ブレイブ「ガウ！」

コロ「キャン！」

ブレイブとコロもついて行った

マルティナ「今日は少し夕食が寂しくなるわね」

ラーズ「だな。まあ偶にはそれも仕方ないだろ」

クレイモラン王国 カミュとマヤの家

ガチャ

カミュ「マヤ、シロ、帰ったぞ」

マルス「カミュ達の家だ、久しぶりー」

ルナ「お邪魔しまーす」

シロ「ギャウ！」

シロがカミュに突撃してきた

カミュ「おっと。シロ、ただいまだな。待ってたのか」

シロ「ギャウ！……！？グルルル」

シロはブレイブとコロを見ると威嚇し始めた

コロ「クウ〜ン？」

シロ「バウ!!バウ!!」

カミュ「こら、シロ。そいつらは俺の仲間だ。俺達に危害は加えないぞ」

シロ「グウウ……」

マルス「シロ、紹介するね。大きいのがブレイブで、シロと同じくらいなのがコロ。どっちも僕達の家族なんだ」

ブレイブ「ガウ」

ルナ「仲良くしてほしいな。コロとシロって同じくらいじゃない」

コロ「キャン！」

コロはシロに近づき顔を舐めている

シロ「……………」

シロは黙って中に入っていた

カミュ「まあ、いきなりは無理だよな。慣れてもらわねえとな」

リビング

マヤ「あ、兄貴お帰り。マルス、ルナいらっしやい。って、あれ!?
ブレイブとコロじゃん！」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン！」

マルス「マヤ姉ちゃん、来たよー」

ルナ「呼んでくれてありがとう」

カミュ「ブレイブ達とシロって会った事なかっただろ？少し会わせてみようってなってな」

マヤ「そうだったんだ。でも、私達の家だと狭くない?」

カミュ「……………そこは我慢してもらおうしかねえな。シロは前みたいに外でもいいが」

マルス「ええ!?!かわいそうじゃん!」

マヤ「でもシロは元々寒さになんかなり強いし、雪で遊ぶのが好きなんだ。家からそこまで離れないから何とかなってるんだ」

ルナ「でも、一人だけ外つても……………」

カミュ「まあな。マルス達は狭いと思うが平気か?」

マルス「うん。皆で仲良しみたいで好きだよ」

ルナ「私も。シロとも近くにられるし」

マヤ「それじゃあ大丈夫そうだね。ご飯作っておいたよ。あ、ブレイブ達のは?」

カミュ「貰ってきたぜ。まあシロのやつでもいいんだろうが、食い慣れたやつの方がいいだろ」

シロ「……………」

シロは隅でブレイブ達をずっと見つめている

コロ「キャン！」

マヤ「さつきからシロが静かなんだよね。まあ、ブレイブ達を警戒してるのかもね」

シロとブレイブ2

その夜

ルナ「ねえカミュさん。今日ってまた氷の花見れる？」

カミュ「あー……すまねえな、ルナ。あれはもつと寒くならねえと見れねえんだ」

マルス「じゃああのたくさんの流れ星は？」

マヤ「流星群も同じ時季なんだ。冬にならないとだね」

ルナ「そっかー。じゃあ、私明日クレイモランでお買い物したい！お母さん達や友達にプレゼントするの！」

マヤ「ふふ、ルナは優しいからね。いいよ。明日はそうしょっか」

マルス「えー、僕はシロとたくさん遊びたいんだけど」

カミュ「じゃあ、マルスは明日俺と外に出るか。シロとブレイブ達連れてよ」

マルス「本当!?わーい、カミュありがとう！」

マヤ「あれ？兄貴明日仕事じゃなかったの？」

カミュ「すぐ終わらせるさ。それまでは家で待っていてくれよな。マヤと一緒にいてもいいからよ」

マルス「わかった！」

深夜

ゴソゴソ

カミュ「(ん?.....何か音したか?)」

シロ「クン.....」

ブレイブ「ガウ?」

カミュ「(お、シロが自分からブレイブに話しかけにいったか。まあ、俺は寝るとするか)」

ここからはブレイブ達の会話になります

ブレイブ「どうした?こんな夜中に」

シロ「まだ寝れないんだ。ちよつとお話しよ」

ブレイブ「息子でなくていいのか？」

シロ「あの子もう寝たんだもん」

ブレイブ「で？話とはなんだ？」

シロ「どうやってカミュ君やマルス君達と出会ったの？」

ブレイブ「そういう話か。それなら俺もお前がどうやって知り合ったのか興味あるな。俺は元は森の近くの群れで暮らしていた。息子と共に。ある時、密猟者どもに森を罨だらけにされてな。

狩猟どころか出歩く事すら出来なくなったのだ。息子も罨にかかり、群れの皆もどんどん罨や魔法などで痛めつけられ、壊滅寸前だった」

シロ「そんなだったんだ」

ブレイブ「ああ。俺のこの片方の牙もあいつらに抵抗した際に折られたのだ。もはや餓死するのを待つだけだった我々に生きる希望な

どなかった。だが、そこにラーズ様とマルス様にデルカダール城の兵士達がやってきた。

ラーズ様達は群れの皆の怪我を治し、空腹のものには肉などを食わせてくれた。さらに森の罾も全て取り払ってくれたのだ。おかげで我々はまた狩猟ができ、生き残る事が出来た。そんな心優しいラーズ様に一生お仕えしようと思え、今現在に至るのだ」

シロ「そうだったんだ……君もあの子も密猟者にやられたんだね」

ブレイブ「も?というとお前もなのか?」

シロ「うん。僕はまだずっと子どもだった時に密猟者の罾にかかってね。痛くて動けなかったんだけど、お母さんや兄弟に見捨てられて数日そのままだったの」

ブレイブ「見捨てたのか。息子にするべき態度ではないのでは?」

シロ「僕もどうして見捨てられたのかわかんない。もしかしたら当たり前だったのかも。ここは雪国。寒いし、獲物も満足にいない。足手まといは置いていくのがよかったのかも。そこをマルス君やラーズさんに助けられたんだ。そこから助けてくれたのが嬉しくて一緒に遊んだんだ」

ブレイブ「優しいマルス達の事だ。お前の事をその時点で気に入ったのではないか？」

シロ「そうなのかな？でも、僕は追い返されちゃった。たった一人で、雪原に」

ブレイブ「意外だな。なぜだろうな」

シロ「凄く悲しそうな顔してたんだけどね。でも、僕はまたマルス君達に会いたくて必死に必死に生き残ったんだ。大きくなれば今度こそ自分を迎えてくれるかなって」

ブレイブ「その結果、再び出会ったと。お前も苦労していたのだな」

シロ「そうかな？でも、今はとっても幸せだから嬉しいよ」

ブレイブ「それなら何よりだな。俺も今の暮らしにとっても満足している」

シロ「ふふ、最初は凄く怖かったけど、顔に似合わないで優しいんだね」

ブレイブ「顔が怖い。群れのやつら以来言われなかったな。そん

なに怖いか？」

シロ「うん。牙が欠けてるのもあって殺し屋みたいだよ」

ブレイブ「そんなにか。まあ構わないが……。そろそろ寝るぞ。長く話しすぎたな」

シロ「うん。くっついてもいい？」

ブレイブ「勝手にしろ」

シロ「わかった」

次の日、朝食時

シロ「ギャウ。ペロペロ」

コロ「クウゥン。ハツハツ！」

シロ「ギャウギャウ」

マルス「あ、シロとコロが遊んでる。もう仲良くなったんだね」

ルナ「可愛いー」

マヤ「昨日の夜はあんなに静かにしてたのに急にどうしたんだらう」

カミュ「(夜中で仲良くなれたみたいだな)俺はこの後仕事に行く。昼には戻るからマルスはそれまで家にいるかマヤ達についていてくれ」

マルス「じゃあ家で待ってる」

マヤ「私達もこの後お買い物だから、シロ達もいるけどマルスお留守番よろしくね」

マルス「いいよー」

シロ「ギャウ！」

シロとブレイブ3

次の日の昼、シケスピア雪原

シロ「バウ！」

マルス「わく、シロも速ーい！」

マルスはシロに乗り、周りを走っていた

カミュ「あんま遠くに行くなよー」

マルス「わかってるよー」

コロ「キャン！キャン！」

コロは雪を珍しがっており、食べたり転んだりしている

カミュ「コロにとって雪は珍しいもんな。たくさん遊んでおけよ」

ブレイブ「ガウ」

少しして、マルス達は

マルス「結構奥まで来ちゃったね。早い所戻らないとカミュに怒られちゃうよ。シロ、戻ろう」

シロ「バウ!.....?」

シロは壁の横に小さな穴があるのを見つけた

マルス「どうしたの?シロ。って、これ穴?何の穴だろうね」

シロ「バウウ?バウ!」

シロは穴に向かって吠えた

マルス「..... 何もないね。気になるけど戻ろう、シロ」

その時

??? 「ブウツ!!」

二人「!?!」

ドドドド!

マルス「な、何?」

シロ「グルルル」

マジカルハット達「ブウー!!」

穴からはたくさんマジカルハットの群れが出てきた

マルス「わあっ！み、見た事ない魔物だ！」

シロ「バウ！」

シロはマルスを啜えるとそのまま走っていった

マルス「あ、ありがとう、シロ。って、追ってきてる！」

マジカルハット達「ブウツ！」

マルス「シロ、逃げてー！」

その頃カミュは

カミュ「なあ、ブレイブ。マルス達遅くないか？まさか遠くにいったとかないよな？」

ブレイブ「ガウ…………。ガウ？」

コロ「クウーン？」

ブレイブとコロはいきなり遠くを見つめ始めた

カミュ「ん？どうした、二人とも」

ブレイブ「……………！ガウ！！」

ブレイブは突然カミユを突き上げ、自分の上に乗せた

カミユ「痛え！な、なにしやがるブレイブ！」

ブレイブ「ガウ！」ダツ！

コロ「ギャウ！」ダツ！

カミユ「お、おい。走り出してどうした。何か見つけたのか？……………ん？」

遠くからはこちらに走ってくる何かの姿が見えた

カミユ「あれは…………… マルスとシロ!? しかもマジカルハット達に追われてやがる!!」

ブレイブ「ガウ！」

コロ「ギャウ！」

マルス「あ！カミユ、ブレイブ、コロ！よかった!!」

マルスがシロに乗りかかった時

マジカルハット「ブウ！」

マジカルハットがイオを繰り出した

シロ「バウ!？」

マルス「うわっ！」ドサ

マルスはシロから落ちてしまった

マジカルハット達「ブウツ！」

マルス「囲まれちゃった……。剣もないけど、負けない！メラ！」

ブレイブ「ガウ!!」

コロ「ギャウ！」

ブレイブとコロが一匹ずつ噛み付いた

カミュ「ブレイブ、コロ、マルス、伏せてろよ！デュアルブレイカー
！」

マジカルハット達「ブウウ……」ジユワー

カミュ「よし、終わりだな。マルス、シロ大丈夫か？」

マルス「カミュ、かつこいい……」

シロ「クウウ……」

カミュ「かつこいいじゃねえよ。おら」

ペシツ

カミュはマルスの頭を軽く叩いた

マルス「あ……ごめんなさい。ちよつと遠くに行っちゃって戻ろうとしたら小さな穴があつて、シロと気にしてたら出てきちゃったんだ」

カミュ「まつたく……。あんま離れんなって行つただろ。楽しいのはわかるが、魔物だっているんだ。危ない所には変わりないんだからそういう事はもうすんなよ」

マルス「うん、ごめんなさい。あと、助けてくれてありがとう。ブレイブもコロももちろんシロも」

ブレイブ「ガウ」

シロ「バウ」

コロ「キャン！」

カミュ「さて、一旦家に戻るぞ。そろそろお前達を城に連れて帰らないとだからな。マヤ達も戻ってくるだろう」

その後、デルカダール城 玉座の間

カミュ「帰ったぜ」

二人「ただいまー！」

ブレイブ「ガウ！」

コロ「キャン！」

マルティナ「あら、お帰りなさい。そろそろじゃないかと思ってたわ」

ルナ「お母さん、おみやげー」

マルティナ「あら、可愛い人形がついたストラップ。ありがとう、大事にするわね」

マヤ「あれ？兄ちゃんとおっちゃんは？」

マルティナ「今ジエーゴさんっていう人が兵士達の指導に来てくれるの。たまに来てくれるのよ。ジエーゴさんはグレイグの師匠でもあるし、ラーズもジエーゴさんに色々教わってるみたい」

カミュ「じゃあ二人は訓練場か。終わったらマルスの事報告しておかねえとな」

マルティナ「何か報告する事あったの？」

マルス「あ、えつとね、僕がシロと一緒にになってカミュの言う事守らないで遠くに行っちゃって魔物に襲われたの」

マヤ「え!?!そんな事あったの!?!」

カミュ「まあな。こつちもすぐ気づいたし怪我もしてねえから大した事ないが、一応な」

マルティナ「そう。マルス、その顔は反省してるんでしょ？カミュには謝ったの？」

マルス「うん。助けてくれたのもお礼言ったよ。ブレイブとコロも助けてくれたの。シロも僕を連れてカミュの元まで走ってくれたの」

マルティナ「それならよかったわ。カミュ、こっちからもお礼言わせて。マルスを助けてくれてありがとう。ブレイブとコロもね。シロにもありがとうって伝えておいて」

カミュ「ああ、わかった」

マヤ「私、またしばらくこっちにいるね。お店がもう開店間近だからさ」

カミュ「なら、俺もそれまでこっちにいるとするかな」

マルティナ「わかったわ。部屋は好きに使ってね」

バンとベグルの出会い

その夜、酒場

バン「それじゃあお疲れ様だー！かんぱーい！」

全員「かんぱーい！」

ジエーゴの指導も終わり、兵士達とラースとグレイグとカミュは飲みに来ていた

グレイグ「俺までよかったのか？今回は師匠とお話しただけだぞ」

ラース「人数いた方が楽しいし大丈夫だぜ」

カミュ「そうそう。それに兄貴の奢りなんだ。遠慮すんなよ」

ラース「お前は奢らねえからな。しっかり払えよ」

グレイグ「まあ、それなら甘えさせてもらおう」

ギバ「今日はダバンが褒められてたな！こっちも見てて凄えって思ってたぜ」

ベグル「だな。中々いい動きしてたよな」

ラーズ「素早い攻撃と相手の攻撃への引き際もバツチリだったな」

グレイグ「盾の使い方も上手かったぞ。隙が少なく尚且つ次の行動にすぐに移れるようになっていたな」

ダバン「み、皆して褒めると流石に照れますね」

カミュ「へー、そんなによかったのか。それなら少しくらい覗いておくんだったな」

バン「俺としてはもう少し相手に負担与えるやり方でもよかった気がするけどな」

ロベルト「相手はジエーゴさんだからな。そう簡単にはいかないんだ」

グレイグ「うむ。師匠も手加減しているとはいえ、簡単に色々させてもらえる人じゃない。あまり欲張ると手痛い反撃が飛んでくるぞ」

マーズ「前回俺がそうになりましたね。魔法を唱えて逃げ場を失くそ

うとしたら、その範囲内に俺ごと巻き込んできましたからね」

ラース「ジエーゴさんなら簡単にやってきそうだな」

それからしばらくして

ラース「そういや、前にバンとギバと飲んだ時にお前達の最初の頃の話聞いたんだっただな」

グレイグ「そうだったな。ロベルトとマーズとガザルは知らないだろう。バン達が兵士として入ってきたばかりの頃だ」

ガザル「何だそれ！凄え気になる！」

マーズ「あれ？ロベルトもなのか？バン達より兵士になったのは早かったんじゃないか？」

ロベルト「俺はあの頃は兵士になって一年経過していたからな。バン達とは違うグループだったんだ」

カミュ「ベグルが今とは大違いな性格だったって話だな」

ベグル「あー……。そうですね。一人でずっと練習してた時ですもんね」

ラース「ベグルはバンに無理矢理グループに入れられたって聞いたが、何て言われて入ったんだ？」

ベグル「え……………。それは……………バン、お前が話せ。当事者なんだからよ」

バン「いやー、それがよ。全く覚えてねえんだ。ベグルにボコボコにされたのは覚えてんだけど、そこからどうやって引き込んだのか忘れちゃってよ」

ベグル「ハア!?!お前、あんなにしつこかったくせに忘れたのかよ!?!」

バン「ああ、そうだ!」

ベグル「開き直んな!」

グレイグ「ギバ達は覚えているか?」

ギバ「いや、多分ですけどベグルとバンしか知らないんですよね」

ダバン「だな。俺達は気づいたらベグルがバンを引きずってやって

きたってのが最初なんで」

ラース「……今と大して変わってないな」

ロベルト「確かに……」

ベグル「じゃあ俺しか知らないんですね。話しますよ」

バン「お前、さっきの動きめちやくちや凄かったぞ！俺にも教えてくれよ！」

ベグル「あ？んなの自分で何とかしろ。俺に構うな」

バン「なんだよ、冷たいやつだな。じゃあ隣で練習してもいいか？」

ベグル「気が散る。いつものやつらの所いけよ」

バン「今、自由時間だろ？あいつらいねえんだよ」

ベグル「だから何だ。俺以外にたくさんいるじゃねえか」

バン「でも、俺はお前に興味がわいた！なあー、いいじゃんかよー」

ベグル「うぜえ。こつちくんな」

バキツ！

ベグルはバンを殴った

バン「痛っ！な、殴る事ねえだろ！」

ベグル「うるせえ。どっか行けって言うてんだ」

バン「くっそー！もう怒った！おい、俺と勝負だ！俺が勝ったら俺と一緒にグループで練習しろ。お前が勝ったら俺は諦める。これでどうだ！」

ベグル「……ハア。とことん面倒なやつだ。仕方ねえな。その勝負乗ってやるよ。要はお前を捻り潰せば何も問題ないって事だろ？」

ベグルはバンを睨みつけている

バン「こ、怖っ！！顔、怖すぎだろ！だ、だが俺だって訓練を怠けるわけじゃねえんだ！あまり舐めるなよ！」

しばらくして

ベグル「おら、こんなもんかよ。さっきの意気込みはどこいったん

だ？ああ？」

バンはボロボロになって倒れており、ベグルは体を蹴っている

バン「ぐぞお………こんなにボコボコにする必要ねえだろ。体中痛くて動けねえ」

ベグル「ふん、これで俺の勝ちだ。懲りたらもう話しかけてくんなよ」

バン「それは俺もよく覚えてるぞ！あんなに怪我したの兵士になって初めてだったからな！」

カミュ「………今と何が違うんだ？」

グレイグ「………勝負という点くらいか？今と驚くくらい変わらないな」

ガザル「何で昔の話なのにこんなに既視感あるんだよ」

ベグル「それは昔からこいつが変わらねえって事だろ」

ラース「それを言うならおそらくベグル、お前も変わってないんだと思うぞ」

ベグル「……………ゴホン。それじゃあ続きですネ」

ギバ「あ、逃げた」

次の日

バン「お前、昨日のリベンジだ！」

ベグル「……………勝負は終わっただろうが」

バン「あんな結果俺は認めねえ！一方的だったじゃねえか！」

ベグル「んなもんお前が弱いからだろ。責任なすり付けてくんない」

バン「とにかく！もう一回だ！」

ベグル「断る。何の意味もねえだろうが」

バン「ぐぐぐ……………ふうくん、じゃあお前の不戦敗で俺の勝ちって事でいいよな？」

ベグル「ああ？てめえ、何わけわからねえ事言ってるんだ？」

ベグルは青筋を浮かべている

バン「ヒイツーこ、こわ……。じゃなくて、俺に負けるのが嫌なら
そう言えよ。ほら、グループにいくぞ。ギバ達に新しい仲間だつて紹
介してやらねえと」

バンはベグルの手を掴んだ

ベグル「……………ふぎけんな!!」

バキイツ!!

ベグルはバンを思いつきり殴った

バン「グボアツ!!」

バンは壁まで飛んでいった

ベグル「俺がためえなんかに負けるだど?そんな事言うようなら二
度とそんな事喋れねえようにしてやるよ」

バン「キュウ……」

バンは目を回している

ベグル「何目回してんだ!起きやがれ!」

バン「グフツ!!」

ベグル「リベンジなんだろう？だったら成長した所見せてみやがれ！」

バン「ギヤアアア!!!」

それから一週間バンのリベンジは続いた

ダバン「一週間も続いたのかよ。よくやったもんだな」

バン「そ、そうだったっけ？」

ラース「バンの悪い所が出てんなあ。決めたら曲げないからこうなると終わらねえんだ」

ギバ「そーいやバンの怪我が知らない間に増えてた記憶が……」

グレイグ「結果はベグルの全勝か？」

ベグル「そうですね。でも、バンも俺のパターンがわかってきたみたいだったんですね」

カミュ「そりゃあ一週間も毎日やってたらわかるわな」

一週間後

ベグル「てめえ!!しつこいにも程があんだろうが!!どんだけリベンジにくるつもりだ!」

バン「うるせえ!!俺はお前を気に入ったんだよ!俺達と一緒に訓練しようぜ!絶対楽しいからよ!」

ベグル「毎回毎回同じ事言いやがって!てめえはそれしか言えねえのか!」

バン「だっていつもお前一人じゃんか!寂しくねえのかよ!周りに誰かいた方が今後のためにも絶対役立つからよ!」

ベグル「そんなの弱いやつが言う事だ!俺は一人で強くなる!一人でだって何だってできる!」

バン「強情なやつだなー!だが、俺も同じやり取りばかりは嫌だ。早い所お前を認めさせて、一緒に訓練するんだ」

ベグル「こつちも同じやり取りばかりで飽きてきた。今日で本当に最後だ。これで俺が勝ったら二度とてめえとは話さねえ」

バン「…………… なら、俺が勝ったら絶対に俺達と一緒に訓練しろよ？」

ベグル「そんな未来ありえねえよ。これまでの結果が述べてんだろ
うが！」

その後

バン「ハア………… ハア…………」

ベグル「(チツ！何だこいつ。今日は随分粘り強いじゃねえか。こつちも読まれてきてる。くそっ！思い通りになってたまるか！)う
おおおおっ!!」

バン「ぐっ！今日は………… 負けねえ!!」

バンはギリギリでベグルの攻撃を避け、渾身の一撃をベグルに加えた

ベグル「ぐはっ…………」

ベグルは膝をついた

バン「ハア…………… ど、どうだ！俺だつて弱いわけじゃねえ！」

ベグル「…………… だあーっ!!やってられねえ!!…………… 負けだよ。好きにしろ」

ベグルはそのまま大の字になって倒れた

バン「へ……………。いよっしやあー!!」

ベグル「何でそんなに喜んでんだよ」

バン「へへっ!だつてよ、お前みたいな強いやつがいてくれた方が俺達のためにもなるだろ!それに新しく友達、じゃねえや。仲間が出来たんだ。嬉しいだろ!でも見てろよな、俺だつていつかお前みたいに強くなってやるからよ!」

ベグル「……………へいへい。全く馬鹿な男に気に入られたもんだな」

次の日

ベグル「おい、お前のグループに連れてけよ」

バン「お、来たな!ずっと一人ぼっちだったからわかんねえんだろ?俺についてこい!」

ベグル「調子のんな、馬鹿!」

バキッ!

ベグルはバンを殴った

バン「グハツ！」ドサ

バンは気絶した

ベグル「何一発で気絶してんだ。たくっ！」

ベグルはズリズリと引きずってダバン達の所へ向かった

ギバ「あ、あれ？お前って確か……」

ベグル「ここがこの馬鹿のグループだろ。今日から俺も一緒にやる事になった。よろしく頼む」

ダバン「お、おう。よろしくな。バンは何で気絶してんだ？」

ベグル「って感じですよ」

ライス「二人とも、ずっとお前呼びしてたのかよ。名前互いに知らなかったのか？」

バン「あー、そう言えばベグルって名前を知ったのそれから随分先ですね」

ベグル「お互い気にしてなかったですからね。ギバとダバンより後に知りましたよ」

ロベルト「それでいいのかよ」

グレイグ「ベグルがバン達のグループに入った日は覚えていたが、それまでにそんな事があつたのだな」

バン「なんとなく思い出したかも。とにかく夢中になってベグルを引き込もうとしてたな」

カミュ「それは話を聞けばわかるぜ。しかし、バンは折れねえよな」

バン「へへ、ありがとうございます」

ギバ「褒められたわけじゃねえと思うぞ」

ガザル「俺やマーズが入った時にはもうベグルがいて、バンを馬鹿呼びしてましたね」

マーズ「最初は馬鹿って呼ばれて何で反応してんだよって思いましてけどね」

ベグル「事実だからな。当然だ」

ダバン「だが、バンの宣言通りになったな。バンについてきてよかっただろ？」

ベグル「どうだか。面倒事ばかりな気もするが？それに俺より強くなるってのはいつになるんだろうな」

バン「え？もう俺の方がベグルより強いだろ」

ベグル「ハ？この馬鹿は何調子に乗ってんだか。いつ俺がお前にそんな差をつけられたよ」

バン「いやいや、俺の方がベグルより戦闘経験多くなっただろ」

ベグル「そんな事で俺に勝ただと？全く……。力の差ってやつがわかってねえようだな、この馬鹿は」

バン「そりゃあ力じゃ敵わねえけど、それ以外なら負けねえぞ！」

ベグル「ほほう？随分生意気になったな？バン。誰が今までお前を躰けてきたと思ってたんだ。主人に逆らうんじゃないやねえよ」

バン「また俺の事犬扱いしてるだろ！俺は犬じゃねえって言うてん
だろうが！」

ベグル「なら、どっちが上かわからせてやろうか。おら、表出る。またボコボコにしてやるよ」

バン「あ、いや、ちよつと待って！ぐえっ！ごめんなさい、ベグル様！調子乗りました！やめっ、お許しをー!!」

バンはベグルに引きずられていった

カミュ「……さつき話に聞いてた時と変わらねえじゃねえか」

ギバ「俺達と一緒になって訓練始めた頃からあんな感じですよ。バンはもう少しベグルを挑発気味でしたけど」

ラーズ「十年以上同じ事続いてるってわかってねえのか？」

グレイグ「まあ、いいのではないか？気が合うという事だろう。お前達ともな」

ガザル「まあ、気が合うってのは本当ですね」

ダバン「あーあ、面倒なやつとこれからも一緒か」

ロベルト「今更だろう。これからも変わらないさ」

マーズ「そうだな。あの二人もなんだかんだでいいコンビだからな。そういえば、ラーズ將軍知ってますか？バンのやつ、最近俺達に對して指導できるようになってきたんですよ」

ラーズ「お前達を指導？バンが？」

ガザル「はい。俺達が癖になつてる動きとか、弱点を見つけてくれてそれを踏まえた特訓内容を教えてくれるんです」

グレイグ「ほう、それは素晴らしい。確かに自分では気づきにくい所も他人から見ればわかる所もある。そこを補うのはいい事だ」

ダバン「少し前からノート片手に皆を観察してたのはそれだったんですよ」

ロベルト「俺が言ったノートをそんな風に使ってくれるとは思わなかったけどな」

ギバ「ただ、ベグルはバンに指摘されるのが嫌みたいでいつも喧嘩みたいになってるんですよね」

マーズ「言ってる事はバンの方が珍しく正しいんですけどね。ベグルのプライドが許さないんですかね？」

カミュ「昔はベグルの方が上だったんだろ？納得いつてねえんじやねえのか？」

ラース「少し面白そうだな。今度見にいつてみるか」

マヤ達の店、開店

それから三日後、夕方

デルカダール城下町

デルカダール王達はビルのお店が開店するという事で、案内されていた

マヤ「やっと出来たんだ。この日を待ってたの」

ラース「本当にいいのか？開店は明日なんだろう？」

ビル「気にしないでください。約束したじゃないですか。開店したら一番始めに教えると」

デルカダール王「夕方に町に降りるのは久しぶりだな」

マドリー「わざわざすみません。お城を閉めさせてしまって」

マルティナ「気にしないで。私もお父様もずっと楽しみにしてたし、今日はもう何もなかったから丁度よかったの」

カミュ「しかし、酒とか料理とか各地のがあるんだろ？楽しみだな、兄貴」

ラーズ「ああ！少し多めに食べてもいいよな！」

グリー「ラーズさんの多めってどれくらいになるかわからないですね」

グリーはラーズの発言に苦笑いしている

グレイグ「ラーズ、あくまで特別に開店しているのだ。明日の分の事も考えてやれ」

ラーズ「それは流石にわかってるさ。俺ってそんな見境ないように見えるのか？」

カミュ、グレイグ「ああ」

カミュとグレイグは同時に答えた

ラーズ「…………… 即答かよ」

マヤ達の店 グラジー

グリー「到着ですよ」

ビル「ここが俺達の店、グラジーです」

赤い屋根とレンガでできた壁に所々黒い線が入っており、看板には黄色い文字で「グラジ」と書かれている

デルカダール王「ほう。周りとは少し違う見た目だな。中々お洒落ではないか」

グレイグ「このグラジとは何か意味があるのか？」

マドリー「流石グレイグ様！いい所に気づいてくれました。マヤちゃん、教えてあげて」

マヤ「ちよつ、ちよつと恥ずかしいかな」

マルティナ「マヤちゃんが考えたの？」

ビル「そうなんです。いくつか考えていた時にマヤが閃いてくれました」

カミュ「別に笑わないぜ、マヤ」

マヤ「えっとね、ありがとうって意味の言葉を少し変えてみたの。ほら、お客さんにむけてありがとうごございますって言うし、お客さんが私達に向けて言ってくれる時もあるから、そういうありがとうを大事にする場所に出来たらいいよねって思ってたさ」

デルカダール王「素晴らしいな、マヤ。わしもとてもいい考えだと思うぞ」

グレイグ「マヤ、なんていい子なんだ」

ラース「グレイグ、涙出てきてんぞ。マヤ、とってもいいじゃないか。そんな大事な思いがこもったお店はきつといい店になるぞ」

グリー「よかったね、マヤさん。やっぱりマヤさんのが一番よかったね」

店内

黒を基調とした壁やテーブルにオレンジの床が映えている

グレイグ「ほう。クラシックな雰囲気だな。落ち着くではないか」

マルティナ「暖かい感じがするわ。酒場っぽくはないわね」

マドリー「昼は酒場ではなくランチなどをメインにしようと思ってるので、あまり酒場っぽくするのもどうかかなと思って」

ビル「実は照明の具合で雰囲気が変わるんです。見ててください」

ビルは照明のスイッチを押した

照明は白い光から暗いオレンジの光になった

デルカダール王「ほう。確かにこうなるとまた雰囲気が変わるな。酒場によくみられる大人な雰囲気が出ておる」

グリー「凄いですよね。光だけでこんなに変わるなんて」

カミュ「面白えな。これなら酒場らしくていいんじゃないか?」

マヤ「あ、折角呼んだのにこれじゃあ紹介しかしてないね。王様も姉ちゃんも座って。料理とかお酒とか持ってくるから」

ラース「お!それも楽しみにしてたんだ!ワクワクするな!」

デルカダール王「まあ、まずはこの店が無事に完成した事を祝って乾杯しようではないか」

ビル「そうですね。マヤ、ジュースでいいから持ってきてくれ」

グリー「あ、僕も手伝いにいかないと。大変だろうから」

マルティナ「私達も手伝いましょうか？」

マドリー「いいんですよ、マルティナ様。今日はお客様ですので、座って待っていてください」

マルティナ「そ、そう？それじゃあ待つてるわね」

しばらくして

ビル「それではこのお店、グラジューが完成し、繁盛する事を願うと同時にそのために機会やお力を貸してくれたデルカダール王様、マルティナ様、グレイグ様、ラーズ様、カミュ様、お城の兵士様、そして、マヤにグリーに最大の感謝を込めてかんぱい！」

全員「かんぱい!!」

その後、料理やお酒などが振る舞われていった

デルカダール王「これは確かグロツタにあるチャルケという肉だったな。酒に合うんで、昔よくロウと食べていたのう。久しく食べておらんかったが、懐かしい」

グレイグ「私もこれは好きですね。グロツタなどに行った際には必ず食べておりました。まさかデルカダールで食べれるようになるとは」

グリー「ラーズさん、カミュさん、ホムラのお酒もあるんですよ」

ラーズ「マジか!!買いに行かなくてもよくなったって事か!!」

カミュ「よかったじゃねえか、兄貴。これからは通い詰めるんじゃないか?」

ラーズ「もちろんだ!毎日でも行きたくなったな!」

ラーズはかなり喜んでいる

マドリー「ホムラのお酒が好きなんですか?」

ラーズ「ああ。昔から俺のお気に入りだな。だが、毎回ホムラに買いに行くのが少々面倒だったんだ。これはありがたい」

マヤ「兄貴、ほら。値段はするけどクレイモランの五年物ならあるよ」

カミュ「お!いいじゃねえか。本当に各地の酒を用意してんだな。大変だっただろ?」

ビル「いえ、実は私もお酒は大好きでして、私の趣味みたいなもの

なんです」

ラーズ「お！話がわかりそうなやつが増えたぞ、カミュ！」

カミュ「だな。ビル、今度語り合おうぜ」

マルティナ「これは確かソルティコのライム貝。前にシルビアの家で食べたわね。これだけでも美味しいわよね」

グリー「僕もそれ食べたんですけど、爽やかでちよつと甘くて美味しいですよね」

マドリー「ビルがお酒を集めるから、それに合う物を私が集めてたんです。これはワインとよく合いますよね。ハムもとつてもいいんですけど、私はこの貝が大好きなんです」

グレイグ「む？お、おい……このブヨブヨした物は何だ？」

デルカダール王「わしも見た事ないな。どこかの料理なのか？」

グリー「あ……これは僕の故郷のナギムナー村の料理で魚の白子なんです。見た目は変ですけど、お醤油などで味付けするとお酒に合うんです。ぜひ食べてみてください」

グレイグ「なるほど。魚だったか。どれ、食べてみよう」

デルカダール王「おお！中々いけるではないか！」

ラース「へえ、白子か。あれはホムラの酒にピッタリなんだよな」

カミュ「ラガーとかにも合うぜ。俺も昔からよく食べてたな」

マドリー「二人とも詳しいですね。あの食感が苦手な方も多いんですよね。そうだ。お二人にはあれもお出ししましょう」

ビル「おお、マドリーのつまみ特選が始まったな」

マルティナ「つまみ特選？」

マヤ「お酒のおつまみを出してくれるんだけど、私はちよつと苦手かな」

グリー「僕も。聞いた事ないのだったり、味が独特でちよつと……」

グレイグ「ほう。気になるな」

マドリー「これなんてどうですか？」

マドリーは魚の料理を出してきた

マヤ「わわっ！それめちゃうちやしよっばいやっ！」

カミュ「へしこか。確かにかなりしよっばいやな。俺も苦手だ」

ラース「へしこ？食べたことねえな。魚料理か」

マドリー「はい。へしこっていいまして、魚を長く漬けたんです。クレイモランやナギムナー村、ソルティコなどで見られますね」

マヤ「兄ちゃん、気をつけて。凄くしよっばいから」

デルカダール王「どれ、わしももらおうかの」

グレイグ「俺も一つもらおうか」

マルティナ「ラースの反応で私は決めようかしら。カミュもマヤちゃんも警戒してるみたいだし」

ラース「どれ…… おお!!しょっぱいな!だが、これなら……
やっぱり!ホムラの酒と合うぞ!五年物とも合うんじゃないかねえか?」

デルカダール王「おお、味が濃いとう。じゃが、悪くない。つまみ
としては面白いではないか」

グレイグ「ほつ、ほつ。姫様、食べるならお気をつけください。
冗談抜きでしょっぱいですよ」

マルティナ「じゃ、じゃあ少しだけ…… んん!結構濃いわね」

カミュ「濃い味は苦手なんだ」

マドリー「まだまだありますよー」

ビル「マドリーが止まらなくなってきたな」

グリー「いいんですかね?」

マヤ「まあ、兄貴も兄ちゃんも酔う事はほとんどないし、大丈夫だ
と思うよ」

ビル「様子を見てマドリーを止めるぞ」

マヤ達の店2

マドリー「では、お次はこんなのはいかがでしょう」

マドリーは貝を持ってきた

マルティナ「これは…： 貝？結構大きいわね。なんて言うの？」

カミュ「お！ほやじゃねえか！」

カミュはその貝を見て少し喜んでいる

デルカダール王「ほう、ほやか。確かクレイモランの珍味の一つじゃな」

マヤ「私、それ見た目が苦手。味は美味しいんだけどね」

グリー「初めて見た。もしかして、そのまま食べるんですか？」

マドリー「まさか！この後しっかり調理するわ。待っててね」

グレイグ「あのほやとやらはどんな味がするのだ？」

ラース「俺は話でしか聞いたことなかったな」

カミュ「少ししよっぱくて酸味もあるな。俺はかなり好物だぜ。クレイモランでしか見たことなかったが、あつたら必ず頼んでたな」

マヤ「甘さと苦さもあるよ。初めて食べると不思議な感じになると思うな」

マルティナ「甘くてしよっぱくて、すっぱくて苦いなんて不思議ね。本当にそんないろんな味がするの?」

グリー「舌が大変な事になりそう」

デルカダール王「ロウが前に話していた事があつたな。随分気に入っていた様子だったがな」

数分後

マドリー「お待たせしましたー。こちらがさっきのほやですよー」

グレイグ「ほう。中身は綺麗なのだな。貝の時は中々な見た目をしていたが」

ラース「早速食べてみるか!..... おお!柔らかいな」

デルカダール王「確かにしょっぱく、苦味もある。あまり甘みは感じられんな」

マルティナ「少々酸っぱいですね。甘みもわずかにあると思いますよ」

グレイグ「いろんな味がするな。これは面白い」

グリー「酸っぱさと苦味が強いかも。変な感じ」

マヤ「久しぶりに食べた。やっぱり美味しい」

カミュ「だな。マドリー、店には置いてあるのか？」

マドリー「はい。時期や状況によって変わりますが仕入れておこうと思ってます」

カミュ「こりやあいいな。ほやのためだけに来るつてのもありだな」

マドリー「お気に召していただけでよかったです。あ、お次のも出しますね」

ビル「待て、マドリー。これ以上は止めておけ。明日からに響くだろう」

マルティナ「そうね。私達ばかりに構ってたら明日困っちゃうかもしれないわ」

グレイグ「そうですね。それに、こっちには大食男がいるのでな。こちらに付き合おうと大変な事になるぞ」

ラーズ「誰のことだか」

カミュ「お前だよ」

グリー「あ、あはは……。ラーズさん、飲み会の時もたくさん食べてましたもんね」

マドリー「それもそうね。すみません、少し楽しくなっちゃって」

デルカダール王「なに、気にするな。いろんな物が楽しめてこちらもよかった」

マルティナ「また今度来るわ。その時はまたよろしくね」

ラース「マヤ、グリー、これから頑張れよ」

マヤ「うん！頑張るね！」

グリー「これからもよろしくお願いします」

それから二週間後の夕方、訓練場

ベグル「おーい、誰かこの後飲みに行くか？」

マーズ「お、じゃあ行こうかな」

ダバン「いいな、行こうぜ」

ギバ「グリーの店でいいよな？」

ベグル「だな。すっかり常連になりつつあるよな」

グラジ

カーン

グリー「いらっしやいませー。こんばんは、ベグルさん、マーズさ

ん、ダバンさん、ギバさん。カウンターと座席どちらにしますか？」

ベグル「毎回悪いな、グリー。カウンターで頼む」

グリー「こちらこそいつもありがとうございます。それではこちら
でお願いします」

マヤ「あ！ベグルさん達また来てくれた。いしし、いつもありがとう
ございます」

マーズ「よう、マヤちゃん。頑張ってるな」

ダバン「兵士達の溜まり場みたいになっちゃってるな。大丈夫か
？」

グリー「そんな事ないですよ。お昼は普通にお客さん来てくれます
し、夜だつて来てくれる人も多いです」

ギバ「それならよかった。俺達だけで結構な頻度だったからな」

お客「すみませーん」

グリー「あ、マヤさん。僕がいくね。はい」

マヤ「うん、わかった」

マドリー「料理できたわよー、運んでちょうだい」

マヤ「はい！ベグルさん達ごゆっくり」

ベグル「しかし、ここはいいよな。酒や料理の種類も多いし、飲みやすいものばかりだ」

ギバ「だよな！しかも各国の物まであるんだぜ、最高だよな！」

ダバン「今度ミラを連れてこようと思ってるんだ。とうもろこしのお酒ってラムダの物らしいぜ」

ベグル「ほう、そうだったのか。それならジェーンも連れてきてやりたいな」

マーズ「今度は新入り達とも来ようぜ。酒に慣れるにはいい場所だろ」

カラン

マヤ「いらっしやいませー、あ！兄貴！」

カミュ「よ、中々繁盛してんな。って、ベグル達もいたのか。隣い
いか？」

ベグル「あ、カミュさん。どうぞ」

マーズ「カミュさんもよく来ますよね。やっぱり妹さんが気になる
んですか？」

カミュ「別にそんなんじゃないよ。全く心配してないって言ったら
嘘になるが、そのためだけに来るほどじゃないさ。マヤ、ほや頼むぜ」

マヤ「だよね。もう頼んであるよ」

ダバン「ほや？」

ギバ「あの貝ですか。俺、あまり得意じゃないんですよね」

カミュ「まあ人それぞれだよな。お前らも食べたことないなら食っ
てみるか？」

ダバン「興味ありますね。いいですか？」

カミュ「おう、俺はこれが好物なんだ。クレイモランにしかなかったんだが、デルカダールでも食べれるようになってな。このために来てるっていいんでもいいんだぜ」

マヤ「はい、兄貴。ほやだよ」

カミュ「ギバはクレイモラン出身だからわかるもんな。ベグル達は取ってみろよ」

ギバ「いろんな味するぞ。一応気をつけておけ」

ベグル「どれ……うお！確かになんかいろんな味するな！」

ダバン「驚いたが、美味しいじゃないか。お酒にも合いそうですよ」

カミュ「お！ダバンわかってんな！」

マーズ「貝とは思えないですね。甘いようなしょっぱいような苦いような不思議な感じです」

カミュ「そこが慣れてくると美味しく感じるんだぜ」

マーズ「そうだ。カミュさん、一つ相談したい事があるんです」

カミュ「俺に？どうしたんだよ」

マーズ「実は二ヶ月後、ブレイブ達の誕生日なんです。毎年兵士一同としてプレゼントしてたんですけど、今年はどうしようかと思つて」

ギバ「あー、確かに。いつも悩むよな」

カミュ「へえ、ブレイブ達に誕生日なんてあったのか。でも何で俺なんだ？」

マーズ「シロつていうホワイトパンサーがいるんですよ？それなら何かいいアドバイスがあればと思つて」

カミュ「そういう事か。前は何かあげてたんだ？」

ベグル「去年が食い物で、一昨年が首輪ですね。消耗品の方が後腐れないと思つて」

ダバン「今年も食い物にするか？中々喜んでたみたいだぜ」

カミュ「そうだな。シロも食い物にはよく反応するからな。シロやコロみたいなまだ大人になりかけてるやつらなら遊び道具でもいいんだろうが、ブレイブは大人だから無理だもんな」

ギバ「前にふさげたバンがコロにお手を覚えさせていて、ブレイブに思いつきり怒られてましたね。頭に本気で噛み付いてましたよ」

マーズ「あつたな、そういえば。容赦なかったよな。爪で裂いたり、牙で噛みちぎってたな。あの時の怒ってるブレイブは今までで一番強かったんじゃないか？」

カミュ「兄貴によるとブレイブって結構強いんだろ？バンには厳しいんだな」

ベグル「自業自得ですけどね。キラーパンサー自体子どもに変なこ」とされると怒りだすと言われていますし、本能によるものですよ」

ダバン「ブレイブも喜ぶようなプレゼントがよくて。少し前にバンの偽物騒動の時に助けてもらったんでそのお礼もしたいなと思ってるんです」

カミュ「そうか。うーん…… お！確かサマデイーって猫を城で飼ってるんだ」

ギバ「え？そうなんですか？」

マーズ「そうですね。前に行った時に中々な数がいました。ですが、それと何の関係が？」

カミュ「キラーパーンサーって種族は元を辿れば一応猫だろ？サマデイーには猫用のグッズもあるし、探してみたらどうだ？」

ベグル「なるほど。ブレイブにあまり猫らしさはないですけどね。コロの方がそれっぽいですよ」

カミュ「まあそこは仕方ないだろ」

ダバン「サマデイーならミラと今度行くんですよ。その時に何か見つけてくるさ」

ベグル「え？そうなのか？知らなかったな」

ギバ「お！新婚旅行行ってやつか？前にラーズ將軍達も行ったもん

な」

ダバン「うるせえ、茶化すな」

マーズ「じゃあダバンに頼もうか。金はまた俺達で分割するからよ」

カミュ「二ヶ月後か、俺も何か用意しとくかな」

夫婦喧嘩

一月後の夜、マルティナとラーズの部屋

ラーズ「え？マルティナが遠征？」

マルティナ「ええ。少しの間だけね。シャルルに誘われてクレイモランで数日過ごすの。他の国ではどんな政策や活動してるのかも見てきてデルカダールにも学ぶべき場所があれば、と思ってね。一週間後よ」

ラーズ「……………俺知らなかったぞ」

マルティナ「そうだと思うわ。ラーズと私は別行動なもの」

ラーズ「なんだって!？」

マルティナ「デルカダールには代わりにリーズレットが来るの。それでお互いの国のいい所や政策などを見て成長していこうって話なの。ラーズはその時のリーズレットの護衛役なのよ」

ラーズ「そ、そんな……………。マルティナは誰が守るんだ？」

マルティナ「私は特にいないけど、シャルルが側にいてくれるし、

エツケハルトさんもいるみたい。お城の守りも固くしてくれるようだから平気よ」

ラーズ「それでも危ないだろ。グレイグを連れていけよ」

マルティナ「グレイグはお父様についてるし、私がお城にいない間の役割も少し担ってもらおうの」

ラーズ「じゃ、じゃあ俺がそっちに」

マルティナ「ラーズはリーズレットの護衛役だし、色々この国の事を教えてあげないとなのよ」

ラーズ「……………」 「反対だ」

マルティナ「え？」

ラーズ「俺はそんなの認めない!!マルティナ、少し危機感が薄いんじゃないか!？」

ラーズは立ち上がり、強く反対する

マルティナ「は、反対って……………。それにもう決まった事なのよ?あまり変更も難しいわ。私だって一人でも大丈夫よ」

ラース「一人でも、なんて思わないでくれよ。もしマルティナの身に何かあつたらどうする」

マルティナ「そうならないようにしっかりと動くわ。シャルル達もちゃんと警備してくれるのよ?」

ラース「保険は必要だろうか?」

マルティナ「行動で危険は減らせるわ。それに、まるでシャルル達を信用してないみたいじゃない」

ラース「それでもだ!何かあつてからでは遅いんだよ!」

マルティナ「…………… どうしてわかってくれないの?」

ラース「わかってくれないのはマルティナだろ?」

二人「……………」

マルティナ「もういいわ。とにかく寝ましょう」

ラーズ「そうだな。もう一度明日話し合うぞ」

次の日、朝食時

マルティナ「だから！私は平気なの!!」

ラーズ「平気なわけあるか！マルティナを心配してるんだ！」

二人は周りを気にせず強く言い争っている

ブレイブ「ガウウ……」

コロ「クウ……」

ブレイブとコロは見た事ない二人の様子に怖がっている

デルカダール王「マルティナ、ラーズ。今は朝食の時。どうかその
険悪な空気は沈めてくれんだろうか？」

マルティナ「あ……。。す、すみませんお父様」

ラーズ「すみませんでした、王様」

グレイグ「一週間後の話か。また後で話そう」

マルス「どうしよう、ルナ。母さんと父さんが喧嘩してる」

ルナ「ちよつと怖い……。喧嘩してるのなんて初めて見た」

二人はコソコソと話している

その後、玉座の間

マルティナ「……………」

ラース「……………」

二人は何も言わずにいるが、一触即発の空気が周りに流れている

グレイグ「(ううむ……。まずい、かなり穏やかではない。どうすればよいか。俺はラースの意見に賛成だが、姫様の意見もわかる……。誰か助けてくれんだろうか)」

グレイグは心の中で困っていた

バタン

ベロニカ「マルティナさーん、グレイグさーん、ラース、久しぶりね！」

セーニヤ「シルビア様とデルカダールへお買い物に来たのでお顔を出しておこうかと」

シルビア「あ、あら……？なに、この空気？すつごくピリピリしてる」

マルティナ「ベロニカ、セーニヤ、シルビア。来てくれてありがとう」

ベロニカ「ね、ねえ？何かあったの？」

セーニヤ「マルティナ様とラース様がいつもより離れているように見えますわ」

ラース「心配してるのにわかってもらえなくてな」

マルティナ「あら、わかってくれないのはそっちじゃない」

ラース「……………」

マルティナ「……………」

二人は静かに睨み合っている

ベロニカ「う、嘘……。あのマルティナさんとラースが喧嘩するな

んて」

グレイグ「そうなのだ。俺ではどうしようもなくてな。こんな時に来てもらって悪かったが、助かった。何とか二人を宥めてやってはくれんだらうか？」

グレイグはシルビア達の近くでラーズ達に聞こえないように頼んでいる

シルビア「まず、ラーズちゃんから話を聞いてみましょう。マルティナちゃんはその後。二人の意見を聞いて出来る事はないか探してみましょう」

セーニヤ「ラーズ様、少しお時間いただいてもよろしいですか？」

ラーズ「ん？俺に？構わないが、グレイグ少し頼む」

グレイグ「任せろ！しっかり話してくるのだぞ」

ラーズ「??」

マルティナとラーズの部屋

ベロニカ「で？何であんなにマルティナさんに突っかかっているの？」

ラース「昨日の夜にな」

ラースはあらかたの事情を説明した

ラース「だから俺はマルティナを守ってくれる人もいないのが心配なんだ。警備や行動の制限だけじゃあどうしようもない事だってある。それをマルティナにもわかってほしいんだが、どうしてかマルティナは大丈夫だと言うんだ」

シルビア「なるほどね。確かに一国の王女の警備としては少し不安かもしれないわね。でも、マルティナちゃんは強い子よ。ちよつとの魔物くらいじゃあ相手にもならないじゃない」

ラース「だろうな。だが、一度デルカダールが襲撃されてから警戒はしておくべきだと痛感した。もうあんな恐ろしい思いはしたくないからな」

セーニャ「それは……そうですわね」

ベロニカ「でも、そうそうないわよ。あんな事態。数日だけなら大丈夫じゃない？」

ラース「甘いんじゃないか？いくら世界が元通りになって、優しい魔物が増えたからって悪い魔物がいなくなったわけじゃない。邪悪な考えを持つ魔物はまだごまんという。そいつらからしたら、今回の

王女の交換は格好の餌だ。王女が二人も城にいるとわかれば、攻め込もうと考えられて当然の事。それを何故そんな甘く考える？」

ペロニカ「そ、そうだけど……」

ラーズ「マルティナはもうあの旅の頃のような扱いじゃないんだ。一国の王女、マルティナだ。マルティナを失くしては国として色々終わってしまう。俺は、そんな最悪の事態を避けたいだけなんだ」

シルビア「……… ラースちゃんの言いたい事はわかったわ。マルティナちゃんにも話を聞いてみるわ。呼んできてくれる？」

その後

マルティナ「どうしたの？話なんて改まって」

ペロニカ「ラーズから話は聞いたわ。一週間後の王女の交換の事で揉めてるんでしょ？」

マルティナ「……… ええ。でも、これはペロニカ達には関係ない事だわ。ラーズが少し頑固になってるだけなの。心配させてごめんなさい」

セーニヤ「ですが、私達としてはお二人のそんな険悪な姿は見たくありません。少しだけでもお力になれませんか？」

シルビア「そうよく。これはアタシ達が勝手にやってる事。今の状況からもしかしたら、何か変わるかもしれないわ。ね？だから、少しだけマルティナちゃんが思ってる事を言ってみて？」

マルティナ「……わかったわ。私は一人の王女として、もつこの国を豊かにしたいの。そのためにいろんな事をやって、国民達に安心して過ごしてほしいの。今回はその大事な勉強。」

自分の国だけでなく、周りの国々もみてよい所や歴史、文化などに触れて取り入れられそうな部分を探す。シャルもとつても喜んでたの。でも、ラースだったらそれを反対して誰かついていかせようしてるの。私は確かに王女だから守られなきゃいけないけど、私だつて弱くないわ。それに、シャル達もお城に誰もいれないようにしてくれるの。

本当なら誰かがいた方がいいかもしれないだろうけど、今回は全員役割があるわ。それを無視してまで側にいたつて、私にもシャル達にも失礼だわ。仕事はしっかりしてもらわないと困るもの。それなら、私が気をつければいいだけ。

ラースはシャル達を信用してないのよ。それに、勉強だから基本はお城の中。外に出るのもそんな多くない。だから安心してもらつて大丈夫なのよ」

シルビア「……そうね。マルティナちゃんの意見も最もだわ。お話してくれてありがとう。戻ってもらつて大丈夫よ」

その後

ベロニカ「思ったより難しいわね。どっちの言いたい事もわかるわ。ラーズの最悪の事態を避けたらいいのもわかるし、マルティナさんの勉強だし、他国との交流の気持ちもわかる」

セーニャ「どうしたらよろしいでしょうか。おそらくこのままでは平行線ですわね」

シルビア「うーん…… そうねえ…… 中々厄介だわ」

夫婦喧嘩2

それから一週間後、デルカダール城

大広間

クレイモランに向かうマルティナはデルカダール王に見送られていた

マルティナ「それでは行ってきます、お父様。数日よろしくお願ひします」

デルカダール王「うむ、任せてくれ。だが……」

マルティナ「？」

デルカダール王「レースと仲直りはしたのかの？見た所変わっておらんようだ」

マルティナ「いいんですよ。レースもこれで諦めるはずですよ。レースにも仕事があるんですから、そっちに専念してもらわないと」

デルカダール王「ううむ……。まあ、そうだな。気をつけるのだぞ」

クレイモラン城 玉座の間

シャルル「ご無沙汰してます、マルティナ様。数日の間よろしくお
願います」

マルティナ「こちらこそよろしくね。互いに自分の国以外の事も学
びましょう」

シャルル「はい。あの、実は……とある方達が来てまして、どう
してもマルティナ様の側につきたい、と言っています」

シャルルは少し苦笑いしている

マルティナ「え？ そうなの？」

シャルル「はい。あ、はいつてきてください」

シャルルがそう言うと、玉座の扉が開いて二人組が現れた

マツシブ「私の名はレディ・マツシブ！」

グレイス「わ、私はレッド・グレイス！」

仮面や髪型、口調が違うがどこからどう見てもシルビアとベロニカ
である。

マルティナ「……………え？」

マルティナも少し呆然としている

マツシブ「お初にお目にかかります、マルティナ王女様。突然のお願い、誠に申し訳ございません。今回マルティナ王女様に護衛がないと聞いたのでそれなら私達が護衛させていただけようと思い、志願させていただきました」

グレイス「そう！私達にかかれれば怪しいやつらなんて絶対近づかせないわ、です！大船に乗った気分です！安心してください！」

マルティナ「……………　　そう。ありがとうございます。それじゃお願いしまするわね」

シャルル「そ、それではまず街の見学や紹介から始めますね」

マルティナ「ええ、お願いするわ。えつと……………　　あなた達はどうするの？」

マツシブ「私達の事はお気になさらずに。マルティナ王女様のお邪魔になるような事は致しませんので」

グレイス「何かあった時にすぐに動けるくらいの距離にはいるわ」

マルティナ「わかったわ」

その頃、デルカダール城では

リースレット「お久しぶりです、デルカダール王様。今回はこのよ
うな交流の機会を設けていただきありがとうございます」

デルカダール王「なに、わし達も勉強になる。互いによりよい国へ
と発展させていこうではないか」

グレイグ「リースレット、お前にはレースが護衛役としてつく。わ
からない事などは何でもレースに聞いてくれ」

リースレット「あら、そうだったの。レースとマルティナが別々な
んて珍しい事もあるのね」

デルカダール王「そうじゃな。そのせいで、少し問題も起こって
るのだがな」

リースレット「そ、そうだったんですか。大丈夫ですか？」

グレイグ「まあ…… 何とかなると信じている。レースは大広間で
待機している。これから国の説明をもらう事になっているから
な。大広間に向かってくれ」

リーズレット「わかったわ。それでは数日よろしくお願いします」

大広間

ラーズ「よ、リーズレット。久しぶりだな」

リーズレット「ええ、久しぶりね、ラーズ。これから数日よろしくね」

ラーズ「ああ。まあ勉強って言うのと固くなりそうだから、観光程度に捉えておいた方がいいかもな。マルティナにはそう言ったら少し怒られたけど」

ラーズは少し笑っている

リーズレット「ふふ、そうよね。私もシャルルにそう言ったら怒られたわ」

ラーズ「何だ、考え方は同じだったんだな。まあ、まずは街に行くぞ。どんな風なのか見てもらうのが早いからな」

その時

??? 「しよ、少々お待ちいただいてもよろしいですか!」

二人「え?」

入り口にはある一人の女性が立っていた

ステイロ「わ、私の名前はグリーン・ステイロ！ラーズ様の不安の種を取り除きにきましたわ！」

仮面をして、髪型も変わっているがどこからどう見てもセーニヤである

二人「……………」

ラーズ「セ、セーニヤ？何してんだ？」

ステイロ「わ、わわ私はセーニヤではございません！グリーン・ステイロですわ！ラーズ様がマルティナ様お一人でクレイモランへと行ってしまわれた事を不安に思っていると思います、私達で少し援助をいたしました」

ラーズ「援助？」

ステイロ「はい！お姉様とシルビ……レディ・マツシブ様にマルティナ様を護衛してもらいました。なので、ラーズ様はどうかご安心なさってください」

ラーズ「（またあの二人が関わってんのか。本当こういうの大好きだよな、あいつら）そ、そうか。それなら少しは安心だ。連絡ありがとな、セーニヤ」

ラーズはベロニカとシルビアに呆れていた

ステイロ「グリーン・ステイロですわ！」

ラーズ「……………お、そういや部屋にまだチョコレート酒があつてな。お礼にセーニャにプレゼントしようかと思つてたんだつたな」

ステイロ「ほ、本当ですか、ラーズ様!!」

ラーズ「……………」

ステイロ「……………あ」

リーズレット「自分でバラしちゃつたじゃない」

ステイロ「そ、それでは私はこれでオサラバですわ」

ステイロは小走りに去つていこうとするが

ステイロ「ふにやつ！」

速く走りすぎたせいか転んでしまい、仮面が外れてしまった

ラーズ「おいおい、大丈夫か、セーニャ。勢いよく転んだな」

セーニヤ「うう、申し訳ございません、ラース様」

ラース「ほら、仮面」

セーニヤ「あ、ありがとうございます。はっ！わ、私の素顔は秘密なんです！私をこれ以上いじめないでくださいー！」

セーニヤは走っていき、どこかへ行ってしまった

ラース「……………な、何だったんだ、一体」

リーズレット「ふふ、相変わらず面白いことしてるのね。見てるだけでも楽しくて仕方ないわ」

ラース「こつちは楽しくないぞ。まあ、ベロニカとシルビアの目論見なのはわかってる。セーニヤはベロニカに釣られてやってるか、前に言ってたヒーローに憧れてるだけだろう。助けてくれるようだし、放っておいて大丈夫だろ」

リーズレット「きつとそうね。この様子だとマルティナの元にはベロニカとシルビアがいるはずね」

ラース「まあ、不思議なことがおこったが、まず街の見学だ。ぎっ

と説明していくからな」

リーズレット「ええ、お願いするわ」

夫婦喧嘩3

その頃、クレイモラン城下町

城下町はくす玉や木の部分や家の周りなどに綺麗な装飾がされている。周りも人やお店が多く並んでいる

マルティナ「随分と華やかね。何かお祭りでもやってるの？」

シャルル「そうなんです。七夕が近いのでこの数日間、丁度クレイモランでは星祭りというものをやっています。ずっと前からある伝統的なお祭りなんですよ」

マルティナ「七夕……？聞き慣れない言葉ね。何なのかしら」

シャルル「七夕はクレイモランに伝わるお伽話の一つなんです。空の世界のお話なんですよ。その昔、織姫という国王の娘がいました。織姫は大層働き者で、織物をたくさん作っていたそうです。その仕事ぶりに感謝した国王が彦星という方に嫁がせて幸せに暮らすようにしました。

その後、二人は恋人同士になったのですが、仕事もせず二人で遊んでばかりだったそうです。それに怒った国王が二人を引き剥がし、一年に一度、天の川が出る夜にしか会えなくさせてしまいました。それから二人はその日を待ちわびながら過ごし、それから何百年と経った今でも天の川が出ると、二人が会える光景が星空になって見えるみたいです」

マルティナ「素敵なお話ね。だけど、一年に一回だけ。しかもその天の川？ってやつが出ないといけないなんてかわいいそうね」

シャルル「そうですよね。私もこのお話は好きなんですけど、どうしても幸せになれない二人がかわいそうだなって思います。あ、天の川というのは夜になると、夜空に大量の星達が集まってまるで川のようになるんです。

その川を挟んで反対側に織姫と彦星それぞれの星座もあるので、もしよかったら今夜でも見てみてください。クレイモランでも一年に一度見れるか見れないかなんですよ」

マルティナ「へえ、それは見てみたいわね。ぜひ見てみるわ」

少し離れた所では

マツシブ「聞いた？ベロニカちゃん。星祭りに天の川、とつてもロマンチックじゃない？」

グレイス「ええ、これは楽しみだわ。お祭りをやってるなんてよかったわ。このままずっとマルティナさんについてるだけだと本当に暇なんじゃないかと思ってたもの」

マツシブ「ウフフ、アタシいい事思いついちゃった」

グレイス「なーに？シルビアさん。私にも教えて」

その頃、デルカダール城下町

ラース「まあ、こんな感じだな。わからなかった所はあるか？」

リーズレット「いいえ、大丈夫よ。寧ろわかりやすかったわ。色々頑張ってるのね。特にこの魔物の掲示板なんていいわ。帰ったらシャールにも教えてあげないと」

ラース「クレイモランも旅人多いもんな。よくここでチェックしてる人多いんだぜ」

リーズレット「そうなの。それに、ここ数日はお祭りで旅人も凄多いのよ」

ラース「お祭り？」

リーズレット「そう。昔からあるお祭りで星祭りっていうのをやってるの。詳しいことはシャールが知ってるから私はあまり説明できないけど、天の川とか言ってたわね」

ラース「へえ、そんなのやってるのか。そんな時期にお城閉めちやっついていいのか？」

リーズレット「まあ、普段からお城は人をあまり入れてないからそこまで問題は無いと思うわ。でも、ラーズ達を見てると開けてもメリットは多そうよね。私達も検討してみようかしら」

ラーズ「城下町にはあまり行かないのか？」

リーズレット「そうね。たまーに私が酒場に行くくらいでほとんど出ないわ。ラーズは周りの人達からたくさん話しかけられてるけど、そんなに城下町に来てるの？」

ラーズ「まあな。マルティナ達には悪いんだが、俺はお城の中でずっと生活してたら気持ちが悪くなるんだよな。そのの発散つてのもあるが、国民達の様子を見てどんな感じかとかを報告して、王様達にも城下町の現状を知った方が話し合いもしやすくなると思っとな。」

それに、デルカダールも今まではあまり王族の人達は城下町に来なかつたみたいで少し距離があつたんだ。そんな距離を開けられてたら、いい国にするには連携が取りにくいだろ？だから、俺が橋渡し役だ。何かしてほしい事とか他愛もない話とかして国民達に寄り添っていつてるんだ」

リーズレット「へえ、とつても興味深いわ。私達も確かに国民達とで距離は感じてるわ。でも、ラーズ達にはあまり感じられなかったの。それが理由だったのね。よりよい国にするためには、国民達に寄り添う事も大切。メモしておくわね」

ラーズ「こんな事でいいなら色々あるぜ。だが、王族らしさはなくなったかもしれないけどな。王族らしさが必要ならあまりするべきではないかもな」

リーズレット「王族らしさねえ。シャルルがそんなのを求めてたら、私達の国が掲げている魔物との共存なんてまず無理だと思うけど」

ラーズ「それは確かに。まあ、少しでも参考になれたらよかったぜ」

その後、デルカダール城

リーズレット「一つ聞いてもいい?」

ラーズ「ん?なんだ?」

リーズレット「マルティナと何かあったんでしょ?どうしたの?」

ラーズ「ああ……。ちよつと喧嘩してな。解決もせずこの日になつたってわけだ」

リーズレット「そうだったの。ラーズとマルティナも喧嘩なんでするのね」

ラース「初めてなんだよな。こんなにマルティナと意見が割れたのは」

リーズレット「あら、仲良しさんね。それで、初めてだからどうしたらいいかわからないって感じかしら？」

ラース「……………ま、まあそんな感じだ。よくわかったな」

リーズレット「ふふ、あまり舐めないでほしいわね。相談なら乗るわよ」

ラース「うーん……………。ありがたいが、こつちの問題に付き合わせるわけにもいかない。何とかするさ」

リーズレット「そう、わかったわ。ただ、困ったら頼っていいのよ。協力してあげるから」

ラース「まあ、そうだな。ありがとな、リーズレット」

油断

それから二日後、クレイモラン城

マルティナ用の部屋

城内にあるような普通の部屋ではなく、王族が泊まる用の豪華な部屋にマルティナの部屋が当てられていた

マルティナは机に座り、今日までに学んだ事などをまとめていた

マルティナ「……………さて、こんなものかしら。クレイモランでは文化や歴史に則っている政策が多いのね」

コンコン

シャルル「あ、マルティナ様。入ってもよろしいですか？」

マルティナ「シャルルだったのね。いいわよ」

ガチャ

マルティナ「どうしたの？」

シャルル「いえ、今空を見たら満点の星空になっていて、天の川もとてもよく見えるんです。マルティナ様も休憩などによかったらぜひ見てください。貴重な瞬間ですよ」

マルティナ「あら、そうなの？それならまとめも一段落ついたら、一緒に見ましよう」

シャルル「はい。あ、外は寒いので防寒対策はしっかりとお願いしますね」

マルティナ「ふふ、わかってるわ。クレイモランだもの。当然よね」

シャルル「シルビアさんとベロニカさんにもお声がけしたらシルビアさんがどこかへ向かわれてしまつて。どうされたんでしょうか」

マルティナ「やっぱりシャルルも気付いてるわよね。急にどうしたのかしら、二人とも。まあ、あの二人なら大きな心配はいらないと思うわ」

数分後、城内の廊下

グレイス「あ、マルティナさん……様。シャルル様も外に出るの？」

マルティナ「あら、ベロニ……グレイス。ええ、二人で天の川を見てみようかしらと思つて。あなたもどう？」

グレイス「もちろんついていくわ。だって私達はマルティナ様の護衛役だもの」

シャルル「レディ・マツシブ様はどちらへ？」

グレイス「少し用事があるみたい。でも、すぐに戻ってくるそうよ。ちよつとくらいなら私一人でも大丈夫だわ」

マルティナ「そう。じゃあ外に出ましょう」

クレイモラン城下町

シャルル「あ……。少し雲が出てきてしまいましたね。見えにくくなってしまいました」

夜空には少し雲がかかり、星の光が見えにくくなっている

マルティナ「そうね。でも、凄い数の星だわ」

グレイス「あ！城下町の外はまだ雲がないわ。そっちに行きましようよ」

シャルル「ええ!?ですが、危険ではありませんか？」

グレイス「ちよつとやそつとの魔物なら平気よ。ねえ、こんなに綺麗なのは一年に見れるかどうかかわらないでしょ？」

シャルル「それはそうですが……」

マルティナ「まあ、長時間滞在しなければ問題ないと思うわ。いざとなったら私も戦えるんだし。少しだけ行ってみましょう」

グレイス「私にかかれば大丈夫よ。絶対守ってあげるんだから」

シケスビア雪原の高台

三人「うわあ……」

三人の真上には夜空を覆うほどの星が出ており、それが集まって大きな天の川が出来ていた

マルティナ「これは凄いわ……。こんな綺麗な景色が見れるなんて」

シャルル「私も長くここに住んでいますが、これほどの大きな天の川は初めてです。すっごく綺麗……」

グレイス「外に出てみて正解だったわね。これは必見だわ」

マルティナ「あ……そういえば私、前にもこうやってレースと星空を見た事が何回かあったわ……強情になってたのは私もだったかもしれないわね」

マルティナは自分の隣にラーズがいない事を少し寂しく思っていた

その時

バヒユン!

ドス!

グレイス「ぐっ……」ドサ

二人「!!?」

どこからか弓矢が飛んできて、空を見ていたグレイスの脇腹に当たり、グレイスは倒れ込んだ

シャルル「キヤアア!!べ、ベロニカさん!!」

マルティナ「何なの!?!一体!」

すると周りから数人の男達がやってきた

盗賊親分「へっへっへ、腹をぶちぬいてやろうと思ったが、風で少し逸れたか。まさかこんな所に王族の方達がいるとは。しかも、護衛がこんな女一人とは。俺達は運がいいぜ」

マルティナ達は囲まれている

マルティナ「くっ……。夢中になって囲まれているのに気づかないなんて……」

シャルル「あ、あな、あなた達は私達をどうされるつもりですか！」

盗賊親分「大人しく金目の物を置いてつてくれりやありがたいなあ。その高そうな服とかよ」

マルティナ「シャルル、私から離れないで。十人くらいなら何とかなるわ」

ベロニカ「待ちなさい！その盗賊達！」

全員「!!」

盗賊「お、お前！さっき倒れてたはずじゃあ」

ベロニカ「このベロニカ様を奇襲しようなんていい度胸じゃない！しゆくふくの杖で傷は治させてもらったわ！マルティナさん、シャルルさん連れて逃げて！二人は何としてでも逃げない！」

マルティナ「で、でもベロニカが危ないわ！私も加勢するわよ！」

ベロニカ「私は今、マルティナさんの護衛役！マルティナさんを守る事がお仕事なの！マルティナさんに危険な事はさせないわ！メラガイアー！」

盗賊「危ねえっ!!ま、魔法だと!？」

盗賊親分「このアマ、魔法使いか!!」

ベロニカ「今のうちに！」

マルティナ「くっ…… 逃げるわよ、シャルル！走って！」

シャルル「は、はい!!ベロニカさん、どうかご無事で！」

シャルルの後ろにマルティナがつきながら城下町へ走っていく

盗賊「あ!!親分、獲物が逃げます！」

盗賊親分「チツ！この女のせいで逃しちまった。てめえ、覚悟はできてるな？」

ベロニカ「何が覚悟よ！そっちこそ燃やし尽くされる覚悟はできてるんでしょね?!ベギラゴン！」

盗賊達「ギャアアア!!」

ベロニカ「どんどんいくわよ!」

盗賊親分「魔法は厄介だが、詠唱とやらの時間があるもんな?」

親分はベロニカに距離を詰めた

ベロニカ「くっ!」

盗賊親分「オラア!」

ベロニカ「それくらい!」

ベロニカは親分が殴ってくるのに合わせて杖でガードする

盗賊親分「ガードしてたら詠唱はできねえよな!」

ベロニカ「それが目的なのね!ムチも持ってくればよかつた……)」

盗賊親分「オラア!!」

ベロニカ「ここ!!」

ベロニカは攻撃の隙を突き、杖で殴り飛ばした

盗賊親分「ぐうっ! 痛えじゃねえか、クソが!」

ベロニカ「…………… さあ、詠唱終わりよ! メラゾーマ!」

盗賊親分「ギャアアアア!!!」

ベロニカ「ふう…………… こんなもんかしら」

盗賊「親分!! てめえ、よくも親分を!! これでも食らえ!!」

バヒュン!

盗賊の一人がベロニカに向かってボウガンを打ち込んだ

ベロニカ「どこ狙ってんのよ! 当たらないわ!」

バキバキバキ!!

ベロニカ「え?」

ベロニカの後ろにあった大木が倒れてきた

盗賊「馬鹿め!!狙いは木だ!潰れてしまえ!」

ベロニカ「やば……………」

ドオオン!!

時は少し遡り、デルカダール城

マルティナとラースの部屋

コンコン

ラース「ん?誰だ?」

ガチャ

マツシブ「アタシの名前はレディ・マツシブ!ラース様にある報告」

ラース「シルビア、お前か。ベロニカにも伝えといてくれ。セーニヤを巻き込むなってよ」

ラースはシルビアの言葉を遮り、呆れたようにしている

シルビア「あくん、んもうっ!ノリが悪いわよ、ラースちゃん!今回はある作戦のもと、こうやって動いてるんだから!」

ラース「作戦?遊んでるんじゃない?」

ラーズは頭をかいて興味なさそうにしている

シルビア「酷いわく。作戦、その名もマルティナちゃんとラーズちゃん仲直り大作戦よ」

ラーズ「そのままじゃねえか」

シルビア「うふふ、まあいいのよ。ラーズちゃんの不安点である護衛をアタシ達が受け持っていれば大丈夫だし、そうすればラーズちゃんは安心してこっちでお仕事ができて、マルティナちゃんの不安点も解決。そうすれば今回は何も問題ないわ」

ラーズ「その護衛が何で今ここにいるんだよ」

シルビア「もう夜だから何もしてないのよ。だから特に問題ないわ。それに明日でこの交換も終わりでしょ？ちよつとラーズちゃんに手伝ってほしい事があって」

ラーズ「何だよ」

シルビア「アタシ達の頼みごと聞いてくれない？」

ラーズ「……………」

ラーズは顔を歪ませている

シルビア「あら、やだ。そんな嫌な顔しないで。それに変な事じゃないから。ちよつとアタシ達についてきてほしいだけ」

ラーズ「それでも怪しい。また何か奢らされたりすんのか?」

シルビア「まっさかく!お財布とかはいらないわ。ほくら、準備して!」

ラーズ「あ、おい!押すなよ、俺は了承してねえぞ!」

作戦失敗

その後、リーズレットの部屋

コンコン

リーズレット「はい」

シルビア「リーズレットちゃん、ちよつといいかしら?」

ガチャ

リーズレット「あら、シルビアじゃない。どうしたの?こんな夜に」

シルビア「実はね、ちよつと協力してほしい事があって」

リーズレット「協力?..... ああ、もしかしてレースとマルティナの事?」

シルビア「あら、リーズレットちゃんも気付いてたのね。そうなのよ。今だけレースちゃんお借りしてもいいかしら?」

リーズレット「別に問題ないわ。私より王様に話した方がいいと思うけど」

シルビア「グレイグに話をしたからきつと大丈夫よ。リーズレットちゃんにも伝えておかないとつて思つて。それじゃあ、ありがとう」

リーズレット「わかつたわ。……ふふ、勇者の仲間達は変わらず仲良しなのね」

クレイモラン城下町

ラーズ「……………何で俺まで」

シルビア「まあまあ、お城にベロニカちゃんもいるから一緒にお祭り回りましょう。お祭り好きでしょ？ラーズちゃん」

ラーズ「それはそうだが……………」

クレイモラン城内

シルビア「あら〜？おかしいわね、ベロニカちゃんがないわ」

ラーズ「お、エツケハルトさんがいる。少し聞いてみるか。エツケハルトさん、お久しぶりです」

エツケハルト「ん？おお、ラーズ君ではないか。久しぶりだな。どうしたのだ？」

シルビア「ここにベロニカちゃんがいちたと思っただけ、どこに
いったか知らないかしら？」

エツケハルト「ベロニカさんなら結構前にシャル様とマルティナ
様を連れて外へ出ていった。何やら天の川を見に行くと話してい
たな」

ラース「天の川……？まあ、外なんですね。わかりました」

シルビア「ありがとう」

クレイモラン城下町

シルビア「どこにいるのかしら？三人とも」

ラース「……………ん？こつちに誰か向かってくるぞ」

シルビア「え？あれは……………シャルちゃんにマルティナちや
んだわ。何やら様子が変だけど」

シャル「ハア……………ハア……………」

マルティナ「ここまで来れば大丈夫ね。シャル、大丈夫？」

シャルル「な……… なんとか………」

シルビア「マルティナちゃん、シャルルちゃん、大丈夫？何があったの？」

マルティナ「あ、シルビア。って、ラース!!？」

マルティナはシルビアの隣にラースがいる事に驚いた

ラース「走ってきていたな。何があった」

マルティナ「えっと………」

マルティナは少し言いにくそうにしている

ラース「??」

シャルル「私達、ちよつと天の川を見にシケスビア雪原に行ったのですがそこで盗賊達に襲われて、逃げてきたんです。ベロニカさんが私達の代わりになってくださって、今戦っていると思われます。ラースさん、シルビアさん、どうか救援をお願いします！」

二人「!!？」

シルビア「それは大変！急いで向かわなくちゃ！」

マルティナ「あの……」

ラーズ「すぐに向かうぞ。マルティナ、シャルルを頼む。それと後で言いたい事がある」

マルティナ「…… わかったわ」

シケスビア雪原

「周囲には誰も見当たらない

シルビア「おかしいわね。ベロニカちゃんが戦ってるなら音でわかりそうなのに」

ラーズ「…… 雪が踏み荒らされた跡。魔法の痕跡……。魔力もベロニカの物だ。ここら辺で戦ったのは間違いないみたいだな」

シルビア「じゃあどこにいったのかしら。もしかして、拐われちゃったとか」

ラーズ「ベロニカの魔法を凌ぐ方法があれば可能性はある。ただの盗賊がそんな事できるとは思えないが」

シルビア「あ!!あの木の下!赤い帽子よ!」

ラーズ「何!?!ベロニカ、無事か!?!」

ベロニカ「ラ… ラース、シルビアさん。ごめんなさい、不覚だったわ」

シルビア「そんなの気にしないの!今どかさわ」

ラーズ「俺がどうかそう。シルビアはベロニカの体に負担がないようにしていてくれ」

シルビア「わかったわ。お願いね、ラーズちゃん」

ラーズ「ふんっ!」

ドスウン

シルビア「怪我はない?どこか折れたりしてない?」

ベロニカ「折れてはないと思うわ。ただ、体力が少なくなってるから回復しないと」

ラース「それならまずは何とかかなりそうだな。持ち前の物で悪いが、特薬草だ」

ベロニカ「十分よ、助かるわ。ありがとう」

ベロニカは特薬草を口にした

シルビア「はい、杖。盗賊ちゃん達はどこにいったの？」

ベロニカ「盗賊達は私が木に巻き込まれた後、静かにしてたら死んだと思ってどこかにいっちゃったわ」

ラース「なるほど。そうすれば余計なダメージが無くて済むってわけか。考えたな」

シルビア「それじゃあお城に戻りましょう。ドクターちゃんに一応見てもらわないと」

クレイモラン城内

ラース「よかったな、何も問題なくて」

ベロニカ「ええ、薬草で回復もできたし、もう何ともないわ」

シャルル「よかったです、ベロニカさん。お助けいただき本当にありがとうございます」

マルティナ「ごめんなさい、ベロニカ。あなたに任せてしまって」

ベロニカ「いいの、私は今回は護衛役なんだから当然よ」

ラーズ「どうして危険とわかってる夜の雪原に行った？天の川……とやらを見に行くと言いたが、わざわざ雪原に行かないといけなかったのか？」

ラーズは少し怒っているように言った

マルティナ「そ、それはね。クレイモランで一年に一度見れるかどうかの星空でちょうど満点の星空だからって事で」

マルティナは申し訳なさそうにしている

シャルル「すみません、ラーズさん！私がマルティナ様とベロニカさんを誘ったのが始まりなんです」

ベロニカ「シャルルさんは悪くないわよ。私が雪原に行けばいいって言ったのが悪かったんだわ。ちよつとなら平気って舐めてたから」

マルティナ「待って、ベロニカ。私もそれに賛成したもの。私だっ

て油断してたわ」

三人の謝り合いが始まった

シルビア「大体はわかったわ。それに、誰が悪いなんてないのよ。そんな気にしないで」

ラーズ「……………」

ラーズは外に出ていった

マルティナ「あ、ラーズ……………」

マルティナはラーズを追いかけようとしたが、足が動かなかった

シャルル「何かあったのですか？ラーズさん、マルティナ様に随分怒っているように感じたのですが」

ベロニカ「ちよつと喧嘩してる最中だったの。そんな時にこんな事起こしちやつた…………。お祭りで仲直りさせようと思つてたのに……………」

シルビア「これは…………。どうしましょう。作戦失敗かしら」

マルティナ「…………。迷惑かけてごめんなさい、ベロニカ、シルビア、シャルル。私がちよつとラーズに強情になり過ぎたのが原因なの。ラーズも…………。失望したかもしれないわ」

シャルル「…………… マルティナ様、ラースさんと喧嘩されたのは初めてですか？」

マルティナ「え？ええ、そうなの」

シャルル「それでしたら、よくリーズレットと喧嘩になる私から少しアドバイスを。お互いの意見が合わない時はまず、お互いに落ち着いてください。ゆっくり互いの言い分を聞いて、納得できる箇所を探してみてください。きっと相手の気持ちもわかってくると思います」

シルビア「そうね。私達が話を聞いて伝えるより、マルティナちゃん達が互いに素直になって話すのが一番解決になると思うわ」

ベロニカ「マルティナさん、ラースの事追いかけてみたら？」

マルティナ「でも…………… 怒らせちゃったわ。話を聞いてくれるかしら」

シルビア「大丈夫よ、マルティナちゃん。ラースちゃんは相手の話を聞かない人じゃないわ。きっと耳は傾けてくれるはず。仲直りの気持ちを伝えてみましょう。絶対伝わるわ」

マルティナ「……………そうね。少し話してくるわ。皆、面倒な事をしてごめんなさい」

ベロニカ「いいのよ、気にしないで。私達は早く仲直りしてほしくて行動してたんだから」

シャルル「一刻も早く仲直りできるといいですね。きっとレースさんもマルティナ様と仲直りしたいと思っっているはずですよ」

シルビア「ファイトよ、マルティナちゃん！」

マルティナはレースを追いかけた

天の川の下で

クレイモラン城下町 港

ラーズは一人で星空を眺めている

ラーズ「……………」

ザツザツ

ラーズ「…………… マルティナか」

ラーズはマルティナの方を見ずに言った

マルティナ「ラーズ、怒ってる？」

ラーズ「そりやあ怒っていないと言ったら嘘になるな」

マルティナ「そ、そうよね。あの…」

ラーズ「マルティナ、話すのはいいが離れ過ぎだ。冷えるのはよくない。ほら、隣にこいよ」

ラーズは自分の隣を指す

マルティナ「え……………。あ、ありがとう」

ラース「ベロニカ達に何か言われたか？」

マルティナ「…………… ううん、違うわ。ラースに謝らないといけないって」

ラース「そうか。だがな、別に俺は謝罪なんていらなぞ」

マルティナ「え？そ、そうなの？だって、怒ってるんでしょ？」

ラース「まあな。だが、怒ってる気持ちなんてほとんど無いさ」

マルティナ「怒ってないの？だって、さっき怖い顔して出ていったわ」

ラース「怖い顔してたのか。それはわからなかったな」

マルティナ「無意識だったのね」

ラース「ああ、取り敢えずマルティナに言いたい事があるんだ」

マルティナ「…………… な、何かしら」

ラーズ「怪我は無いか？」

マルティナ「……………え？」

マルティナは想像とは違う事を言われ、思わず聞き返した

ラーズ「ん？聞こえなかったか？怪我はあるか？」

マルティナ「い、いや聞こえてたわ。怪我はしてないわよ。でも何で？」

ラーズ「な、何でって言われてもだな……。マルティナをずっと心配してたんだ。盗賊に襲われたって聞いてからな。マルティナは見た目は何ともなさそうだったが、マルティナは隠すからよ。どこか怪我してたりしてないか不安だったんだ」

マルティナ「それをずっと気にしてたの？」

ラーズ「当たり前前だろ。俺はマルティナを守るって決めてるのに、それを守らなかつたら何のために俺がいるんだよってなるじゃねえか。まあ、何も無いように安心した」

ラーズはマルティナの頭を撫でている

マルティナ「……………ごめんなさい、ラーズ。もしもが起こらない

ようにするなんて言っておきながら、こんな事起こしちゃった。ラーズの言う通りだったわね」

ラーズ「ああ、それか。それなら俺が謝らないとだ。あれは俺が悪かった。マルティナの勉強したい気持ちを気にしないで俺の気持ちを押し付けてたからな。別にマルティナは悪くないさ。まあ、誰が悪いとか無いんだろうけどよ」

マルティナ「ラーズも謝ろうとしてたの？」

ラーズ「ああ。だが、どうやって仲直りしようかと考えててな。こんな事初めてだったからよ。どうしたらいいかわからなかったんだ」

マルティナ「ふふ、私もよ」

ラーズ「なーんだ、結局気持ちは同じだったのか」

マルティナ「そうね。もう少し早く仲直りすればよかったわ」

二人は少しわらいあっている

ラーズ「だな。そういや、天の川ってやつを見に行ってたんだろ？
そもそも天の川って何だ？」

マルティナ「それはね、この国に伝わる御伽噺で」

少し離れたところでは

シルビア「見て、ペロニカちゃん。すっかり仲直りだわ」

ペロニカ「ええ、本当ね。修羅場になるんじゃないかって不安だったけど、すぐに元通りね。心配無用だったって事ね」

シルビア「うふふ、作戦失敗かと思ったけどこれはもう成功よね」

ペロニカ「ええ、間違いないわ。でも、途中からグレイスもマツシブも関係なくなっちゃったわね。バレないように頑張ってたのに」

シルビア「仕方ないわ。ちよつと緊急事態だったもの。そんな余裕なくて当然よ」

ペロニカ「セーニヤも張り切ってたのにすぐに終わって残念ね。結構楽しかったのに」

シルビア「じゃーあ、また今度三人でやりましょう」

ペロニカ「ええ、楽しみにしてるわ」

ラース V S バン

仲直りしてから一週間後

デルカダール城 玉座の間

マヤ「皆、ただいまー」

マヤが店から帰ってきた

マルティナ「あら、マヤちゃん。お帰りなさい」

グリー「し、失礼します…」

後ろからはグリーも少し申し訳なさそうにしながらやってきた

ラース「お、グリーも来たのか。珍しいな」

マヤ「どうせならと思って呼んでみたの。グリーさんも泊まるって
さ」

グリー「いいですか？」

グレイグ「ああ、構わないぞ。姫様もよろしいですか？」

マルティナ「ええ、もちろん。お父様にも伝えておくわね」

「ラース「カミュと会わなかったか？ 迎えに行くって言ったはずだが」

「マヤ「兄貴なら訓練場の所でバンさんに連れて行かれたよ。何か兄貴に用事があったみたい」

「グリー「カミュさんも少し意外そうな顔してたよね」

「バタン

「その時、ちょうどバンが入ってきた

「バン「失礼します、マルティナ様。提出する書類を出してきました」

「マルティナ「あら、ありがとう。期限に間に合うなんて珍しいわね」

「バン「いやー、ベグルに怒られました。これからはこのくらいまでに提出しておかないと次、俺に鉄拳が……」

「ラース「ああ、そういう感じか。って、それなら俺が毎回注意してたのは気にしてなかったって事か？」

「ラースは少し不満そうにしている

バン「え？い、いや！そんな事ないですよ！！ただ、ちょっと忘れてしまうというか、頭から無くなっちゃうというか……」

バンは焦りながら訂正しているが、どんどん声が小さくなっていく
グリー「それって結局気にしてないのと同じになるんじゃない？」

マヤ「バンさんはそういうの苦手だもんね」

二人もバンの様子に苦笑いしている

ラース「ハア……。まあこれからはこのくらいに提出してくれればいいさ。それと、カミュに用事があったんじゃないのか？」

バン「あ……。それは終わったんで大丈夫です。あと、この書類ともう一つ師匠に用事がありました」

ラース「ん？何だ？」

バン「明日の夕方、お時間ありますか？」

ラース「明日の夕方か。マルティナ、どうだ？」

マルティナ「少しだけなら平気よ。内容によるけどね」

バン「それならよかったです！俺、師匠にリベンジしたくて！」

グレイグ「リベンジ？というと、組手の事か？」

バン「はい！前に二連敗してたので、今回はマルティナ様から教わった師匠の弱点を突いて俺が勝ってみせます！」

ラーズ「うわあ………。ついに来たか。忘れていると思ってたんだがな」

ラーズは嫌そうな顔をしている

マルティナ「ふふ、それなら期待してるわね。バン、頑張つて。ラーズ、負けないようにね」

グリー「マヤさん、バンさんって強いのか？あのラーズさんに勝負を挑むなんて凄くない？」

マヤ「そっか、グリーさんはわからないもんね。バンさんって凄く強くて兄ちゃんと同角の戦いをするんだって。私もしっかりと見た事ないけど、勝率はお互い引き分けみたいだよ」

グリー「えええ!!す、凄いじゃん！だってラーズさんって勇者様のお仲間だよ!?!その人と互角って……」

グリーンはかなり驚いている

バン「ふっふっふ、凄いだろ、グリーン！こう見えて結構強いんだぜ！」

バンもグリーの反応に胸を張っている

グレイグ「バンとは久しく戦ってないが見ていると俺も負ける可能性はある。技や判断力はラース譲りだな」

グリーン「そんな凄い戦いが明日見れるんだ。僕も明日訓練場行ってみよう」

マヤ「じゃあ一緒に行こう」

ラース「おいおい、何だか負けられなくなってきたな」

夕食時

デルカダール王「グリーンよ、よく来てくれたな。マヤがいつも世話になっておる。マヤ同様いつでも泊まりにきてくれ」

グリーン「そ、そんな。僕はマヤさんに大した事してないのでそんなお気になさらないください」

マヤ「そんな事ないよ！グリーさんのサポートいつもありがたいもん。ありがとう、グリーさん」

マルティナ「こつちとしても大勢の方が楽しいわ。敬語とかは気にしないから気楽にまたきてね」

グリー「は、はい。ありがとうございます」

カミュ「兄貴、明日の夕方楽しみだな？」

カミュはレースにニヤニヤしている

レース「楽しみなわけあるか。バンのやつ、何してくる気なんだ…」

マルス「父さん、明日バンさんと何かするの？」

デルカダール王「わしも初めて聞いたな。何の事だ？」

グレイグ「明日の夕方に訓練場でバンとレースが戦うんです。恒例の相手ですね」

デルカダール王「おお、そうであったか。レースが勝つのか兵士のバンが勝つのかはいつもわしも楽しみにしておるぞ。今回はどうな

るのかのう」

ルナ「お父さん、頑張つてね」

マヤ「ふふ、子どもに応援されちゃったよ。これは負けられないね」

グリー「期待してますね！」

ラース「うわあ…………。プレッシャーだ…………」

カミュ「へへ、こりやあ面白くなってきたな」

その後、マルティナとラースの部屋

ラース「うーん……………」

ラースは悩みながらノートに何かを書いている

マルティナ「明日の作戦？」

ラース「まあな。ちょっと何もなしだとキツイ。バンには悪いが、少し対策していこうと思つてな」

マルティナ「バンも三敗したくないようで本気みたいだし、ラース

もラースで本気なのね。これはいつもより白熱しそうね」

ラース「全く。皆して面白がって。そんなに俺が負けるのがみたくないのかよ」

マルティナ「カミュはそうかもしれないけど、私達は似た実力の二人がぶつかってどっちが勝つのかに興味があるの。どっちかが負けてほしいなんて思ってないわ」

ラース「そうかよ。あー、いい作戦思いつかねえな。どうしたもんか」

その頃、バンの部屋

バンはカミュと相談していた

バン「これがマルティナ様が言った事なんです」

カミュ「へへ、なるほどな。これは確かに知らなかった。なら、作戦は俺に任せろよ。こんな感じでやってみたらどうだ？出来るだろうか？」

バン「あ！なるほど！じゃあ、その後はこういう感じで攻めていけばいいですか？」

カミュ「いいと思うぜ。それにしても、流石マルティナだな。兄貴の事よく見てるぜ」

バン「本当ですよ。俺も教えられた時、え？そうだっけ？と思いましたから」

カミュ「それが上手くいけば兄貴の一番の長所が生きにくくなる。そこをボコボコにしてやれ、バン！俺の分までやってやれよ！何なら医療部屋送りにしてやってもいいぜ！俺が許可する」

バン「そ、そんなには無理ですよ。師匠だってそこまで食らい続けるとは考えにくいですし。というか、そんなに師匠に酷い事されたんですか？」

カミュ「いや？いつも余裕そうなのがムカつくからだぜ」

バン「これは酷い理由ですね。でも、カミュさんだってお強いんですから師匠と戦えばいいじゃないですか」

カミュ「兄貴と俺が本気でぶつかっても兄貴の方が大抵勝ちますから。兄貴が無抵抗なら文句なくボコボコにしてやるんだが」

バン「前みたいですか。カミュさんって本当師匠には喧嘩スタイルですよ」

カミュ「悪友みたいな感覚だな」

バン「友達はその互いに殴りあったりしませんよ」

カミュ「少し違いかもしれねえが、お前とベグルみたいな感じかもしれねえな」

バン「あー……………少し気持ちはわかったかもしれない。まあ、仲良しなのはわかってますから大丈夫なんですけどね」

カミュ「とりあえず明日頑張れよ！俺はバンを応援してるからな！」

バン「はい！ありがとうございます！」

レース V S バン 2

次の日、デルカダール城 訓練場

バン「よし、今日の訓練はこれで終わりだ！各自反省点とかを練習して明日までに備えておけよな！何か聞きたいことがあるやつはいるか？」

ジール「あ、バンさん少しいいですか？」

バン「お、ジールが質問なんて珍しいな。どうした？」

ジール「いえ、先程ガザルさん達が話してるのを聞いたんですけど、今日ってレース將軍と戦うんですか？」

バン「その事か。おう、そうだ！夕方にここでやるからもし見たかったら来て大丈夫だぜ」

ジール「じゃあ俺は行ってみますね。動き方とかかなり勉強になるので」

ガク「あ、ジール、俺も行くよ」

バン「後はあるか？……………ないみたいだな。それじゃあ解散

だ！」

訓練場の違う所では

ダバン「へえ、今日レース將軍とバンが戦うのか」

ベグル「こりやあレース將軍にはまた勝ってほしい所だな。バンが勝ってるのは少々気分が悪いからな」

ギバ「また賭けでもするか？」

ガザル「じゃあ俺はバンが負けるに一票！」

ベグル「ガザルに同じく」

ロベルト「だが、どうやらバンは策があるみたいだ。昨日カミュさんと話していたし、マルティナ様からレース將軍の弱点を教わったそうだ」

マーズ「あの人の弱点か。それは少し気になるな」

ダバン「まあ、策があってもそれが活かせなきや駄目だろ。バンには難しいな。という事で、俺もバンが負けるに一票」

ギバ「最近バンは頑張ってるし、もしかしたら何か起こるかもしれないから俺はバンが勝つに一票」

マーズ「俺もそっちにするかな」

ロベルト「俺もだ。負けず嫌いなバンがこのまま三連敗するとも思えないからな」

ガザル「割れたな。内容はどうする？」

ベグル「外れた方は…… ラース將軍に奇襲で頭を殴るでどうだ？」

ギバ「な!?!ば、馬鹿かよ、ベグル! そんな事したら、俺達返り討ちにあっただけじゃなく絶対バンみたいな目に合うじゃねえか!」

ベグル「スリルあるだろ？」

ロベルト「そんな所で命のスリルなんて味わいたくない。流石にやめた方がいいだろ。もっと安全な物にしよう」

マーズ「じゃあ、兵士達全員の武器と鎧磨きでどうだ?」

ガザル「げっ！それは面倒すぎる。まあ、罰ならそれくらいの方がいいのか？」

ベグル「チツ！つまんねえな」

ダバン「ベグルのは鬼すぎるからやめろ。俺はそれでいいぜ」

バン「おーい！皆で集まって何の話してんだ？」

ガザル「お前がラーズ將軍に負けるように祈ってたんだよ」

バン「なんだと!?今日は俺が勝つからな！」

マーズ「俺達はそっちに賭けたさ。言ったからには勝てよ？バン。俺達の武器と鎧磨きがかかってんだ」

ベグル「絶対負けろ。そんな面倒な事やってたまるか」

バン「なに人の本気勝負を面白半分で賭け事してんだよ！」

バンは少し怒っている

ギバ「まあ落ち着けて。ちよつとしたノリだぜ」

バン「そうか。なら仕方ないな」

バンはそう聞くと落ち着きを取り戻した

ロベルト「納得してくれたならいいか（何故それでいつも許してくれるんだか）」

ベグル「お！いい事思いついた。ここでお前を一旦再起不能にすれば夕方に支障出るだろ。よしガザル、やるぞ」

ガザル「それは名案だな、ベグル！へへ、やるか」

ベグルとガザルは指を鳴らしながらバンに詰め寄っていく

バン「ヒイツ！お、おお俺用事あるんだった！じゃあな!!」

バンは猛スピードで訓練場から逃げて行った

ベグル「ちよつと脅しただけなのにビビりやがって。情けねえやつだな」

ダバン「いや、そんなわけないだろ。目が本気だったぞ、ガザルもな」

ガザル「バレたか。まあ二割は冗談だ」

ギバ「力づくは禁止だからな！」

夕方、訓練場

訓練場の二階にはそれなりの人が集まっていた。一階の訓練する場にはもう既にラースとバンが準備運動をしている

グリー「あ、よかった！まだ始まってなかった」

マヤ「本当だ。走って来たかいがあったね」

カミュ「お、グリーとマヤも来たか。もう少しで始まるみたいだぜ」

ダバン「グリーとマヤちゃんも来るなんて珍しいな。気になったのか？」

グリー「はい。僕今回見るのが初めてなんで、バンさんやラースさんがどんな戦いするのか興味がわいたんですよ」

ロベルト「そうだったか。だが、慣れてないと動きとかかなり早いからわからないかもな」

マヤ「それは確かに。前に訓練は見た事あるけど何してるかわからない事あったから」

グリー「そ、そんなに凄いですか」

ガク「俺達新入りもわからない時あるんですよ」

カミュ「まあそこは俺やダバンやロベルトに聞けば教えるさ。兄貴はたまに何してるかわからねえのはあるけど」

その時、グレイグも訓練場にやってきた

グレイグ「お、まだ始まっていないな。間に合ったみたいだな」

ロベルト「あ、グレイグ將軍！お疲れ様です」

ジール「まさかグレイグ將軍まで来るなんて！」

カミュ「おっさんまでどうしたんだよ。仕事はどうしたんだ？」

グレイグ「王に少し見てきてほしいと言われてな。結果報告も兼ねている。俺も興味はあったからな」

ダバン「王様まで注目してたんですか。結構大事になってたんですね」

マーズ「バンは知らないですよね、この事。変に緊張とかしないといいけど」

マヤ「じゃあ何が起こったかわからなかったら、おっちゃんにも聞けばわかりそうだね」

グレイグ「ああ、そうか。マヤとグリーは見慣れてないから、動きに目がついていかないだろうな。多少の解説なら出来るはずだ」

グリー「どっちが勝つんだろう。気になるな」

マヤ「私はやっぱり兄ちゃんかな。バンさんも凄いいけど、兄ちゃんの方が魔法も使えるし多彩だからね」

カミュ「いやいや、ここはバンに兄貴をぶつとばしてもらわねえと」

ロベルト「ぶつとばすかはわかりませんが、俺もカミュさんと同じですね。マーズとギバも同じ意見なんですよ」

ガク「俺もバンさんに頑張っしてほしいです！」

ダバン「俺とベグルとガザルはマヤちゃんと同じだな」

ジール「俺もラース將軍の方が勝つと思いますね。ラース將軍ってお強いですし」

マーズ「グレイグ將軍はどっちが勝つと思いますか？」

グレイグ「そうだな……。バンの実力が高いのはわかるし、戦い方もラース譲りだ。だが、俺自身ラースには散々奇抜な作戦や戦い方に苦しめられてきた。それはラースだからこそ出来る事だ。俺はラースが勝つと予想しているな」

カミュ「おっさんまで兄貴が勝つほうか。まあ奇抜な作戦つてのはよくわかる。俺も何度も見てきたからな。だが、今回バンには兄貴を倒すための秘策があるからな。さて、どうなるか」

訓練場

ラースとバンは人が大勢集まっているのを不思議に見ていた

ラース「何でこんなに人がいるんだよ。見せ物じゃないんだがな」

バン「こんなに集まった事ってなかったですからね。少し不思議な

感覚ですね」

ラース「まあ、やる事は変わらねえけどな」

バン「そうですね！師匠、今回は負けませんよ！」

ラース「俺だつて負けるつもりはさらさら無い。来いよ、バン。今回は師匠の壁を越えられるか？」

ラース V S バン 3

ラース「行くぞ、バン！マヒヤド！」

バンの頭上から大きな氷が降り注ぐ

バン「これくらい！ばくれつきやく！」

バンは足で砕いていく

ラース「読んでるぜ！イオナズン！」

バンを中心に爆発が起こる

バン「あ、危なかった…！」

バンは槍を棒のように使いジャンプして、別の場所へ逃げている

バン「いきなり魔法を使うって本気じゃないですか！」

ラース「当たり前だ。何やら弱点を知ったようなんだろう？そんなやつに好き勝手されてたまるか」

バン「師匠って意地悪ですよね！」

バンはかなりの速さでラースに向かっていく

バン「氷結らんげき！」

ラース「しんくうげり！」

ラースは足で槍の連撃を捌いていく

バン「さみだれ突き！」

バンは攻撃の方法を変えた

ラース「ハア！ジバルンバ！」

ラースは剣で防いだ後、ジバルンバで自身の足下から地面を盛り上げ壁を作り出した

バン「くっ！」

バンは即座に離れる

ラース「ばくれつきやく！」

ガガガガガ！

足で地面を削りながらバンに飛ばしていく

バン「天地の構え！」

槍のカウンターで全て防いでいく

二階では

ガク「ジバルンバってあんな使い方あったんですね」

マヤ「なんか相当古典的だね」

グリー「ふ、ふわぁー、もうどうなってるのかよくわかんない。二人とも凄いや」

カミュ「あれってされた事ないけど実際厄介なのか？」

ダバン「少し厄介ですね。的確に飛ばしてくるので、あれを防ぎつつ攻撃は難しい事なので。近くにいれば怖くないんですけど」

グレイグ「だが、近くにいればラースは岩ごと切ってくるか、イオナズンで爆発させてくる。それを警戒して離れるとああやって破片を飛ばしてくる。遠近両方ともに対応しているわけだ」

訓練場

ラース「マヒヤド！」

バンの頭上から氷が降り注ぐ

バン「その手は……!!?やべっ！」

バンは驚いて急に氷を砕くのをやめた

氷が床に落ちると

パライン！ドオン！

氷が砕かれると同時に爆発した

ラーズ「へっ！気づいたか。氷爆弾」

バン「それ魔物に対して使ってた技じゃないですか!! って、危なああ!!」

どンドン氷爆弾は降ってきて、バンは必死に避けている

二階

全員「うわあ……」

グレイグ「あれは初めて見た。かなり嫌な技だな。砕いて対処する事もガードする事も厳しそうだ」

マーズ「ヒヤドの中にイオの魔力ですか。器用ですね」

カミュ「兄貴のやつ、本気で勝ちにきてやがるな。大人気ねえやつだぜ」

訓練場

バン「くっそー！師匠の性悪！」

バンは避けながらラーズに向かっていく

ラーズ「心眼一閃！」

バン「ここ！」

バンは盾で防いだ

ラース「なに!？」

バン「チャンス！超さみだれ突き！」

攻撃を防がれ、動きを止めた瞬間にバンは槍で空中へと飛び、五連撃をラースに繰り出す

ラース「ぐっ！グハア！」

バンの強力な五連撃を防ぎきれずに飛ばされる

ラース「痛ってえ。何だよ、その技。初めて見たぞ！」

バン「努力の成果です！ばくれつきやく！」

ラース「負けられるか！ばくれつきやく！」

バン「(来た！)と見せかけて、かえん斬り！」

ラース「何!?! 痛え！」

ばくれつきやくの構えをしたラースの右足にかえん斬りが当たる

バン「さみだれ突き！」

バンは右足を狙う

ラーズ「うおっ！あ、足狙ってるな！」

ラーズは剣や盾で捌いていく

ラーズ「しんくうげり！」

バン「雷光一閃突き！」

バンは支えになっている右足を目掛けて突きをくりだす

ラーズ「(マ、マジかこいつ！)ぐうっ!!」ドサ

ラーズはバランスを崩され倒れ込む

バン「超さみだれ突き！」

ラーズ「調子に乗るな！ばくれつきやく！」

ラーズは倒れた態勢から足で槍の攻撃を捌いていく

二階

ジール「ラーズ將軍が転んだ！」

ロベルト「バンのやつ、これを狙ってたのか!?!」

カミュ「そうだ。兄貴の弱点は右足。兄貴の利き足は右だから、格闘技の基本の支え、攻撃になるのは全て右足だ。そこを突く事で格闘

技やガードなどの耐える動作、攻撃に支障をきたすんだ。それが俺が教えた作戦だぜ」

ダバン「す、凄え！バンのやつ、本気で勝ちを狙ってるのか！」

グレイグ「そうだったのか。確かにあいつの利き足を負傷させれば動きは鈍くなり、格闘技も出しにくくなる。ラースから一つ戦術を奪うだけで相当戦いやすくなるはずだ」

マヤ「兄ちゃんピンチって事じゃん。頑張って」

グリー「こんな動きがあるのか。僕の知らなかった世界だな……」

訓練場

ラース「くそっ！右足ばかり狙ってきやがって！まさかマルティナが教えたのって」

バン「そうです。利き足を教えてもらったんですよ。作戦はカミユさんですけどね。さあ、どんどんいきますよ！氷結らんげき！」

バンの攻撃が右側を狙ってくる

ラース「チツ！岩石おとし！」

岩に阻まれバンの攻撃は当たらなかった

バン「なら！」

バンは槍を使って飛び上がり、岩の上に立った

バン「つて、いない!？」

岩の反対側にはラースの姿は無かった

ラース「後ろだぜ！」

バン「!!」

バンが振り向くとラースの手が目の前にあった

ラース「マヌーサ」

バン「あ……」

バンは幻惑になった

バンは岩から落ち、何も無い所を攻撃している

ラース「さて……」

ラースはゆっくりとバンの背後に近づく

ラース「心眼一閃！」

バン「ガハッ!!」ドガアン！

バンは思いっきり壁に飛ばされていった

二階

グリー「え？急にバンさんどうしちゃったんですか？」

ロベルト「あれはマヌーサって言う幻を見せる魔法だ。だから今バンには幻が見えていたんだ」

マヤ「マヌーサ。聞いた事はあったけど、そんな魔法だったんだ」

グレイグ「あんなゼロ距離でマヌーサを食らえば必ずかかってしまうだろうな。俺もコロシウムでされたな」

カミュ「絶対に外さないタイミングでのマヌーサか。バンみたいな魔法が使えないやつには効果的だな」

訓練場

バン「痛てて、幻だったか」

ラーズ「降参するか？」

バン「すると思ってます？」

ラーズ「だろうな。わかってて聞いたんだ！フォースブレイク！」

全てのフォースの力を纏った拳で殴りかかる

バン「それだけは食らったらいけないやつです！ビツクシールド
！」

ラーズ「なんてな」

ラーズは盾に当たる直前で回り込み、バンの背後を取った

ラーズ「!?」

と思われたが

バン「読んでましたよ！」

バンに読まれ、既に槍を構えたバンがこちらを向いていた

バン「超さみだれ突き！」

ラーズ「グアアア!!」

バンの強力な五連撃がラーズの右足、両腕、胴体に当たる

ラーズ「くっ……」

ラース VS バン 4

バン「ぼくれつきやく！」

ラース「くっ！」

ラースは盾と剣で捌いて、距離を離す

ラース「イオグランデ！」

バンを中心に大爆発が起きる

バン「くっ、は、範囲が広い……」

ラース「デュアルブレイカー！」

バン「痛え！」

ラース「メラガイアー！」

バン「天地の構え！」

バンは槍で炎を受け流した

ラース「バギクロス！」

バン「えっと、ここだ！」

バンは風の範囲から少し離れ、自身に追い風となる位置から走り出した

ラース「心眼一閃！」

バン「ハア！」

バンはわかっていたかのように避けた

バン「しんくうげり！」

ラース「ふっ！」

ラースは盾で防いだ

ラース「ばくれつきやく！」

バン「天地の構え！」

ラース「ぐっ……………。つて、やべっ!!」

反撃をくらい、ラースが右足を地面につくと痛みでバランスを崩した

バン「今日は勝ちます!!雷光一閃突き！」

ラース「グハアツツ!!」ドサ

ラースは倒れた

バン「あ……………。やったー!!師匠に勝ったぞー!!」

ラース「痛てて。ハア、負けたか。しかも鈴鳴流を使う余裕す

らなかったな」

二階からカミュ達が降りてきた

カミュ「ナイスだったぜ、バン！最後綺麗に決まったな！」

バン「はい！ありがとうございます、カミュさん！」

バンとカミュはハイタッチをしている

グリー「大丈夫ですか？ラーズさん」

ガク「思いつきり最後入ってましたね。立てますか？」

ラーズ「まあ何とかな。かつこ悪い所見せたな」

ジール「いえ、そんな！お互いいい動きでしたし、勉強になりますよ！」

ロベルト「残念でしたね、ラーズ將軍」

ダバン「俺達のハズレかー。ベグル達怒るだろうな」

グレイグ「カミュの作戦勝ちだったな。一点を狙っていく戦いか。

格闘技を使うとなると足の動きは確かに重要だ。痛い所を突かれたな、レース」

レース「本当だぜ。まさかマルティナがそんな事教えてるとは思わなかった。って、作戦はカミュがたてたとか言ってたな！」

カミュ「ああ、そうだぜ。ざまあみやがれ、兄貴」

カミュはニヤニヤしながらレースを見ている

マヤ「うわ、兄貴の顔すつごく馬鹿にしてるじゃん」

レース「……………」

レースはカミュに近づく

カミュ「な、何だよ。俺に怒るなよ？バンがやったんだからな」

レース「怒らねえよ。ただ、その顔にちよつとムカツてきたからこれだけ言わせてくれ」

レースは自分の頭に手を当て、カミュの頭上まで持っていく、ニヤニヤしながら言った

レース「チビ」

ブチッ！

何かが切れた音がした

カミュ「……………」

カミュは僅かに震えている

ラーズ「さて、これでガツ!!!」

カミュがラーズの股間に足を振り上げた

ラーズは思わず倒れ込み、カミュは倒れてきたラーズを思いっきり足でなぎ払った

ドガアアン!!

ラーズは壁まで物凄いスピードで飛んでいき、大きな音をたて激突した

バン「ヒ、ヒイツ!!」

カミュ「そうだな。お陰でこういう奇襲がやりやすくてたまらねえわ。さて、まさかこんなヤワな攻撃で沈むわけねえよなあ？ 兄貴？」

ラーズはうずくまっている

ラーズ「お………… おまえ………… げがにんに………… なんでごどを………… そんな短気だから………… 身長だつて大きく」

カミュ「会心必中！」

ドガアアン!!

ラーズ「ガッ……………」

ラーズは死んでしまった

カミュ「ふう……………。スッキリしたぜ。全く、クソ兄貴には困ったもんだな」

グレイグ「…………… これはラーズが悪い。必要以上に煽ったせいだな」

バン「いくらなんでも容赦なさすぎませんか……………」

ロベルト「恐ろしい……………」

ダバン「見てるこっちも痛くなってきた」

カミュ「さて、こんな置いて戻ろうぜ。マルティナ達にはクソ兄貴は死んだって報告すりゃあいいだろ」

グリー「マ、マヤさん。カミュさんって怒ると怖いんだね」

マヤ「あれは兄ちゃんに対してだけだよ。普段はそんな事ないから。まあ、こういう時はどっちもどっちなんだけどね」

その後、夕食時

ラース「痛ててて。傷が……」

マルティナ「大丈夫なの？ラース。そんなボロボロになるまで戦うなんて珍しいわね。しかも負けちゃったのね」

ラース「この怪我の大半はバンじやねえやつのおかげ、まあ俺が悪いようだから仕方ない」

デルカダール王「しかし、秘策とやりに負けてしまったか。ラースよ、残念だったのう」

ルナ「お父さん大丈夫？ホイミする？」

マルス「父さん食べるのも少し辛そうだよ」

カミュ「放っておけ、マルス、ルナ。自業自得だからな」

マヤ「ま、まあそうだね。今回は兄貴の言う通りかな」

グリー「まだ医療部屋で安静にしていた方がよかつたんじゃないですか？」

ラーズ「飯は皆で食べた方が美味しいだろ。おかわりもできるしな」

マルティナ「そこは変わらないのね」

グレイグ「療養も大事だと言うのに……。全く、食い物への執着は凄いのだな」

次の日

ラーズは昼まで傷の手当てで休んでいた

廊下

ラーズ「な、何やってんだ？お前ら」

廊下ではダバンとベグルとガザルとバンが大量の武器と鎧を前にしていた

ガザル「あ、ラーズ將軍。これ、今から磨くんですよ。賭けに負けたんで」

バン「聞いてくださいよ、師匠！勝手に人の本気勝負を賭け事にし

ただけでなく、こいつら俺が勝ったって事信じなかったんですよ！」

ラーズ「賭け事？昨日の俺とバンのやつか。そんな事してたのかよ」

ベグル「ぐっ……。す、すみません、ラーズ將軍」

バン「ベグル、俺には謝らねえのに師匠には謝るのかよ！おかしいだろ！俺にも謝れ！ベグルの謝罪が見てぶふっ！」

ベグル「うるせえっ！」

ベグルは横で喚くバンの顔を殴った

バン「ギャアア！鼻血が出た！！」

ラーズ「これはちよつと人数に対して量が多すぎるだろ。俺も手伝うぞ」

ダバン「いえ、乗ったのは俺達なんでラーズ將軍はこんな事しないで大丈夫ですよ」

バン「そうですよ！こいつらに全部任せちゃいましょうよ！」

バンは鼻を押さえながら言っている

ガザル「調子に乗んな、馬鹿！」

バン「誰が馬鹿だ！」

ラーズ「まあ、暇してたし城にいるのにこういう事やった事なかったんだよな。グレイグも昔やった事あったみたいで興味あるんだ。少しならやっていいだろう？」

ベグル「ありがとうございます、ラーズ將軍。おい、馬鹿！お前もこういう優しさ身につけやがれ！」

バン「ぐうう……。師匠がやるなら俺もやります！」

ダバン「ラーズ將軍、やり方わかりますか？」

ラーズ「全くわからん。教えてくれ」

バン「師匠でも知らない事があるとは！これは弟子として俺が教えなければ！」

ラーズ「あ、バンはやってて大丈夫だ。ベグル達に聞くからな」

バン「なんで!？」

ラース「わかりやすい方に聞いた方が早いだろ？」

バン「…………… 師匠の意地悪!!」

ガザル「アハハハハ!!ハッキリ言われてんな、バン！」

こうして五人でどんどん武器と鎧を綺麗にしていった

砂漠の遺跡

それから二週間後、デルカダール城

訓練場

ラーズが兵士達を集めていた

ラーズ「明日、サマデイー王国に指導に行くんだ。だが、今回俺が用事で行けなくてな。悪いがお前達に任せる。メンバーはお前達で決めていいから、決めたら連絡してくれ。極力失礼のないようにな」

兵士達「はい！」

バン「だってよ、どうする？俺は確定だろ？」

ロベルト「まあそうだな。サマデイー王国の兵士達は剣を扱う人ばかりだから俺も行くか」

マーズ「だが、こっちにもまとめられる人は残してくれ。俺かベグルは残った方がいい」

ベグル「っしやあ!! やつと馬鹿の御守りから離れられる！」

ベグルはガッツポーズを取っている

バン「御守りってまだ言ってたのかよ！必要ねえだろ！」

ロベルト「となると、バンを止める役として」

バン「ロベルト、話聞いてんのか!？」

マーズ「ガザルかな。ベグルと同じでいざとなったらバンを殴って止めてくれるだろ」

バン「え……。いやー、ガザルもちよつと……」

マーズ「じゃあベグルとどっちがいい？」

バン「悪魔のような選択じゃねえか！どっちも嫌だわ！」

ベグル「俺もてめえみてえな馬鹿とずっと一緒は嫌に決まってる！」

バン「人の事、馬鹿馬鹿言い過ぎだろ！」

ロベルト「あ、そういえば明日からダバンが休むんだよな。確かサマディーに行くとか」

バン「そうなのか？なら、ダバンにしようぜ！剣も強えしよ！」

バンはダバンを推している

ダバン「残念だが無理だな」

ダバンはそれを聞いてやってきた

マーズ「お、ダバン。ちょうどいい所に。何で駄目なんだ？」

ダバン「ミラと一緒に旅行なんだ。バンに構ってられないさ」

ベグル「あー、そういや前に言ってたな。それなら仕方ねえな」

バン「楽しんでこいよな！」

ダバン「もちろんだ。だから、邪魔するなよ？バン。もし何か邪魔してきたらお前を切り刻むからな」

ダバンはバンに向かって凄んでいる

バン「は、はい!!」

ベグル「となると、メンバーは馬鹿とロベルトとガザルだな」

マーズ「四人じゃなくて大丈夫か？」

ロベルト「ラーズ將軍がいらないんだ。三人でも仕方ないだろ」

ベグル「おら、馬鹿。ラーズ將軍に報告してこい」

バン「人の事そうやって馬鹿馬鹿言いやがって！そう言ってるベグルの方が馬鹿なんだからな！バーカ、バーカ！」

ベグル「ああん？何か聞こえたなあ？俺に遊んでほしいって？」

ベグルは大剣を構え始めた

バン「何でもございません、ベグル様ー!!!」

バンは猛スピードで訓練場から出て行った

マーズ「前も見たぞ、これ」

ベグル「たくつ！最近生意気になってきたな。ちよつとここら辺で激しく騾とかねえといけねえな」

ロベルト「騾はどうでもいいがガザルに伝えといってくれよ、ベグル」

ベグル「おう、わかってるぜ」

次の日、サマデー王国

ミラ「久しぶりに来たわ、サマデー王国。いつ来ても暑いわね」

ミラは薄いピンクの服に帽子などをつけている

ダバン「俺もかなり久しぶりだ。まずは腹ごしらえでもするか？」

ミラ「そうね！ちょうどいい時間だし、どこかで食べましょう。あ！サマデーといえばサボテンの料理よね！また食べたかったの！」

ダバン「サボテンステーキとかな。俺も食ってみたかったんだ。お、あの旗が出てる店とかいいんじゃないか？」

ダバンが指す場所は黄色い旗でサボテン料理大人気！と書かれている

ミラ「あら、いいわね。入ってみましょう」

酒場

ダバン「げ!!」

バン「あれ!?ダバンじゃねえか！」

ロベルト「偶然だな。まさかダバン達までここで昼飯にするとは」
中に入ると、バン達が料理を食べていた

ミラ「あら、バンさんにロベルトさんにガザルさん。久しぶりね。
どうしてここに？」

ガザル「俺達は今日サマデー王国の兵士達の指導に来てたんだ。
だが、予定より早く着いてな。それならご飯食べてから行こうとなっ
て、目についた場所に入ったらこうなっただけだ」

ダバン「ミラ…… 別の場所にするか？」

ミラ「え？どうして？折角ならダバンもバンさん達と食べた方がい
いんじゃない？」

ダバン「まあ…… ミラが気にしていないならいいか。ハア」

ダバンは少し嫌そうにため息をついた

バン「まあまあ…… モグモグ…… ぎにずんなよ、ダバン！モグモ
グ」

バンは食べながら話している

ロベルト「喋りながら食べるな、汚い。どっちかにしろ」

ミラ「三人は何を頼んだんですか？」

ガザル「俺達はサボテンステーキとケバブだな。ここはお肉料理が美味しいので」

ミラ「サボテンステーキは私も前に食べた事あるんです。美味しいですよ」

バン「ミラさんも食べた事あったのか！」

ダバン「ミラ、お肉もいいが野菜の料理もあるみたいだぜ。豆のスープなんて珍しいぞ」

ミラ「あら、本当ね。どれも美味しそう」

その後

ミラ「美味しい！この野菜の炒め物美味しいわ！お米とよく合うわね。ダバンも食べてみる？」

ダバン「お、いいのか？なら貰おうか。俺もお礼にこっちの煮込み料理やるよ」

バン「……………」ジー

バンは二人の料理を見つめている

ミラ「?ふふ、どうしたの?バンさん」

ダバン「こっち見んな、気色悪い」

バン「いや……美味そうだなと思って」

ロベルト「おい、食い意地張ってんな。失礼だろうが」

ガザル「そうだぞ。ミラさん、こんな馬鹿気にしないでいいですよ」

ミラ「それならバンさんにもプレゼントです。はい、どうぞ」

ダバン「!?」

バン「え!?!いいのか、ミラさん!!ありがとな!」

バンはまさか貰えると思っておらず、喜んでいる

ミラ「これくらい平気ですよ。皆で分け合った方が美味しいですからね。ロベルトさんとガザルさんもどうぞ」

ロベルト「へ…………。あ、ありがとうございます」

ガザル「サ、サンキューな…………。ハ、ハハハ…………」

ダバン「……………」ゴゴゴゴ

ダバンはもの凄い殺気で三人を見つめている

三人「や………… やべえ…………。殺される…………」

ミラ「美味しいですよ。また食べたいです」

バン「あ、ああ！美味しいな！（ダバンが怖すぎる…………）」

ロベルト「俺も好きだなー、この味（やめろ、そんな殺気立つな。俺は悪くない！）」

ガザル「こんな料理もあつたんだな！（バンの馬鹿野郎が！俺達まで巻き込みやがって！）」

ダバン「(あいつら……明日覚えてろよ)」

その後

バン達は城に行くためダバン達と別れた

ミラ「何だか三人とも汗が凄かったように見えただけど大丈夫かしら？こんなに暑いから仕方ないとは思うけど」

ダバン「さあな、何でだろうな。さて、遺跡だったか？見に行きた
いって所は」

ミラ「そうなの。ジェーンにも応援されちゃったし、やっぱり子ども頃の夢だった考古学者をまた目指してみようかなって思ってる」

ダバン「そうみたいだな。そのための本も買って読んでるみたいだしな」

ミラ「流石に気づかれてたわね。そうなの。それで、ここにある遺跡が古代からあるみたいだから何かいい研究が出来たらいいなって」

ダバン「了解だ。それじゃあ向かおうか」

ハクラバ砂丘 遺跡

ミラ「不思議な場所ね。砂の上にこんな柱が立ってるなんて。どう

やって立てたのかしら」

ダバン「前にジェーンさんとは来なかったのか？」

ミラ「一度来たんだけど、周りに魔物が多くて当時はベグルさん達と出会ってなかったからあまり時間かけられなかったの。もうそんな心配は要らないんだけどね」

ダバン「当然。ミラには俺がついてるからな」

ミラ「ふふ、私の旦那さんは本当頼りになるわ。少し調べているわね」

ダバン「おう、俺は少し周りを警戒しておくから何かあったら声かけてくれよな」

二時間後

ミラ「大体終わったわ。ここは何かの儀式をする場所だったみたい。それも強い何かを封印するためのね。何かまではわからなかったけど、どうやらこれが出来たのはあのローシユ様の伝説の時代みたい」

ダバン「へえ、よくわかったな。柱の小さい文字を読めたのか？
古代文字だぜ」

ミラ「そのための勉強だもの。小さい頃もよく勉強してたのよ。ラムダに伊達に住んでたわけじゃないわ」

ミラは誇らしそうにしている

ダバン「はは、そうだったな。恐れ入るぜ。砂漠は夜になるとクレイモラン並みに冷え込むという。暗くならないうちに早めに戻るか」

ミラ「そうね。寒暖差の激しさは私も身を持って味わってるわ。厳しい環境よね」

迷い猫

サマデイー王国

ダバン「少し商店街で買い物していかないか？俺も買いたい物があるんだ」

ミラ「あら、そうだったの。私もちょうどお土産を買おうと思つたの。夜までまだ時間あるし行きましようか」

商店街

ミラ「何だか普通の商店街にはない物があるわね。紐とかロープ、変な置物もあるわ」

ダバン「俺はそういうのを探してたんだ。何かいいのがないだろうか」

ミラ「え？これって何かに使うの？兵士で必要なものなの？」

ダバン「いや、これは猫とかを飼う人のものらしい。ここって城とかに猫がよく飼われてて、普通の家にも多くいるらしいんだ」

ミラ「へー、猫ちゃんのためなのね。でも、ダバンには必要ないんじゃない？」

ダバン「少し目的は違うが、ブレイブ達の誕生日プレゼントにならないかと思ってな。ほら、キラーパンサーって元を辿れば猫だろ？だから何かいいのがあればそれをプレゼントしようかと考えててな」

ミラ「なるほど。ブレイブへのプレゼントなのね。でも、猫ちゃんなんかよりずっと大きいわよ」

ダバン「まあな。そこは考えないとだよな。お、これなんかどうだ？」

ミラ「あら、可愛い首輪。でも小さくないかしら？」

ダバン「これ以上大きくできないかな」

ダバンは首輪をいじっている

ミラ「難しそうね。あ！このブラシなんかどうかしら？ブレイブもコロちゃんも毛が多いでしょ？」

ダバン「新しいブラシも悪くないな。ラーズ将軍が一本持つてるが、予備があつたっておかしくないもんな」

ミラ「他だと…… あら？このふさふさしたやつは何に使うのかしら」

商人「お姉さん、猫ちゃんを飼ってるんですか？」

ミラ「あ、いえ、そうじゃなく…… そうなんです！」

商人「これは猫ちゃんの本能を刺激するための遊び道具で、こうやってパタパタと動かすだけで追いかけてたり捕まえたくなるんですよ」

ダバン「へえ、本能か。これより大きいものはあるか？」

商人「これより大きいとなると、このベビーパンサー用程度しかありませんね。しかし、買う方もほとんどいないのでこれ一点のみとなりますね」

商人は人の腕の長さほどの猫じやしを持ってきた

ダバン「おお！それくらいなら大丈夫そうだ！これ一つもらえるか？」

商人「へ、あ、ありがとうございます！それでは料金はこちらの方になります」

ダバン「それとこのブラシも一つくれないか」

商人「わかりました」

その後

ミラ「よかったじゃない、ダバン。ちょうどいいものがあった」

ダバン「本当だな。まさかベビーパンサー用なんてものがあんなんでな。探しにきたかいがあったぜ」

その時

ニヤゝ

ミラ「あら？今、この建物の隙間から何か声が……」

ニヤゝ、ニヤゝ

ダバン「あ、俺にも聞こえた。猫がこの中にいるのか？」

二人が家の隙間を覗き込むと、中には二匹の猫が鳴いていた

ニヤゝ、ニヤゝ

ミラ「大変！出れなくなってるみたいよ！」

ダバン「こんな狭い所から入ったのか？……いや、違うな。上に少し隙間がある。そこから落ちたのか」

ダバンが上を見ると屋根の方に小さい隙間があった

ミラ「何とか助けてあげたいんだけど、どうしましょう」

ダバン「この屋根の上に行こう。そこから助けだせないか見てみよう」

屋根の上

ミラ「ここが家じゃなくてよかつたわね。人の家の屋根の上に勝手に上がりたくないもの」

ダバン「さて、この隙間だな……………お、頭が入るくらいか。なら、手を伸ばせばいけるか？」

ダバンは隙間に体をどんどんいれていく

ミラ「大丈夫？ダバン」

ダバン「まあな。ほら、こつちにこい。飛んでくるんだ」

ダバンは腕を広げている

猫「ニャ〜……………」

ダバン「うーん、来ないな。どうしたもんか」

ミラ「あ！こんな時こそあの猫じゃらしよ！それでジャンプしてもらってそこをダバンが捕まえましょう！」

ダバン「なるほど！それはいい手段だな！」

ミラ「取れる？ダバン。猫じゃらしよ」

ダバン「よし、オツケーだ！ほれ、猫、来い！」

猫「ニャー！」

一匹の猫がじゃらしに向かってジャンプしてきた

ダバン「よっし！一匹確保！ミラ、頼んだ」

ミラ「ええ。もう大丈夫よ」

ダバン「さ、次はお前だぜ」

猫「ニャー！」

ダバン「よし！こつちも捕まえた！」

ミラ「何とかなつたわね。猫じゃらし凄いわ」

ダバン「だな。それにしても、誰かに飼われてたのか？随分と綺麗な猫だな」

ミラ「商店街で誰か心当たりないか探してみましよう」

商店街

ダバン「すみませーん、誰かこの猫の飼い主知りませんか？」

ミラ「白と灰色の猫ちゃんなんです。知りませんか？」

女性「あら！この子達はお城にいる猫よ！いつも二人で仲良しなのよ」

ミラ「本当ですか！教えてくださいださりありがとうございます！」

ダバン「なら、サマデュー城に届けに行くか」

サマデュー城

猫「ニャー」

城につくやいなや二匹とも腕から飛び降りた

ミラ「あら、よかったわね。お家に帰れて」

ダバン「しかし、周りに結構な猫がいるんだな」

ミラ「ふふ、いいじゃない、かわいくて。私は猫ちゃん好きよ」

その時

ロベルト「ん？ダバン達？」

階段からロベルトとガザルが降りてきた

ミラ「あ、ロベルトさんにガザルさん。お疲れ様です」

ダバン「ん？バンはどうした？」

ガザル「バンなら今サマデー王様に報告してる所だ」

ミラ「そうだったんですね。今からお帰りですか？」

ロベルト「はい。もう指導は終わったんで。ダバン達は明日の朝

だったか」

ダバン「ああ、そうだ。昼の訓練には間に合うぜ」

ガザル「わかった。それじゃあまた明日な」

ロベルトとガザルが通り過ぎようとしていく時

ダバン「覚悟しておけよ」

ロベルトとガザルにこっそりと呟いた

二人「!!？」

ダバン「明日が楽しみだな」

ガザル「お、俺は関係ねえ！馬鹿に巻き込まれただけだ！」

ロベルト「そうだ！ダバンも見えていただろう？」

ダバン「……………それもそうだな。バンには三人分罰を受け
てもらおうとするか」

二人「ホッ……………」

ミラ「??？」

ホテル

ミラ「見て、ダバン！マツサージがあるわよ！」

ダバン「へえ、マツサージってやつてもらった事ないが気持ちいいの？」

ミラ「え!? そうなの!? 気持ちいいわよ。体の疲れが取れていくの。私もラムダから出て初めて知ったんだけど、もう最高なの。ダバンもやってみましょう」

ダバン「そんなにか。なら、少し受けてみるとしよつか」

その後

ミラ「どうだった？ダバン。気持ちよかったわよね」

ダバン「ああ！こりやあ凄えな。今まで凝ってたのが無くなったみてえだ」

ダバンは肩や首を鳴らしている

ダバン「大分固くなってるって言われて随分念入りにやってくれた

からな」

ミラ「仕事上仕方ないわよね。私が普段やってるのは全く違うわよね」

ダバン「俺は別にミラがやってくれるやつでも全然構わねえし、気持ちいいけどな」

ミラ「あら、ありがとう。明日からまた頑張ってるね」

ダバン「おう！」

ブレイブ達の誕生日

それから一週間後の早朝、デルカダール城

玉座の間

ブレイブ「クワア〜……………」

ブレイブが目を覚ました

コロ「クウ……………クウ……………」

ブレイブの側ではコロが丸くなって寝ている

ブレイブ「……………ペロペロ」

ブレイブはコロを舐めている

それから数時間後

ブレイブ「ガウ？」

ブレイブはとある人が近づいてくるのに気づいた

ガチャ

ラース「よう、ブレイブ、コロ。おはようだな」

ラースが部屋に入ってきた

ブレイブ「ガウ！」

コロ「キャン！」

二人もラースに駆け寄る

ラース「やつぱり起きてたな。さて、朝ごはんだ。今日は特別だぜ？」

二匹「??」

朝食場

ラース「王様、二人とも連れてきましたよ」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン！」

デルカダール王「おお、来たか。おはよう、ブレイブ、コロ」

グレイグ「ブレイブ、コロあれを見るといい」

ブレイブとコロがいつもご飯を食べる場所にはいつもよりも豪華な餌が置いてある

ブレイブ「ガウ!?ガウ?」

コロ「キャン!!キャン!!」

ブレイブは驚いて周りを見ており、コロは大喜びで餌に駆けていく
マルティナ「ふふ、驚いた?今日はあなた達の誕生日。ラースとマルスが二人に出会った日よ。いつもよりもたくさん種類の肉を使ってるの。どんどん食べてね」

コロ「キャン!!」

コロは夢中で餌を食べている

ルナ「ふふ、コロったらそんなに急いで食べなくてもいいのに」

マルス「ほら、ブレイブの分もあるよ!」

ブレイブ「ガウ!」

ブレイブも喜んで食べ始めた

デルカダール王「ハツハツハ!喜んでくれて何よりだな」

グレイグ「毎年恒例となりつつありますからね。ブレイブ達もそろそろ今日がという日なのかわかってきたのでしよう」

ラーズ「俺は今回が初めてなんだよな。二年間……いなかっただからよ」

ラーズは少し申し訳なさそうにしていた

マルティナ「もう。それはいいのよ。今年はラーズもいるし、ブレイブにとってもコロにとっても嬉しいはずだわ。何かしてあげたら？」

ラーズ「そうだな。といつても俺がしてやれる事か……。マルズ達は何かしてたのか？」

ルナ「いっぱい遊んでたよ！」

マルズ「コロとブレイブでたくさん駆け回ったりしてたんだ。外に出た方がブレイブ達にもいいからさ」

ラーズ「そうだよな。どうすつかな」

デルカダール王「折角ならあの薬を使ってみてもよいのではないかな？」

グレイグ「しかし、あまり緊急でもないのによろしいのでしょうか」

ルナ「私も久しぶりにブレイブと話したい。ブレイブ、駄目？」

ブレイブ「ガウ、ガウガウ」コク

マルティナ「あら、頷いたって事はいいって事かしら」

ブレイブ「ガウ」コク

マルス「やった！それじゃあご飯の後だね。僕も楽しみ！」

ラース「まあ今日だけな。長くさせる気はこっちもないからよ」

その後、玉座の間

ブレイブは薬を舐め、話せるようになった

ブレイブ「あー、あー。これでよろしいですか？」

マルス「わーい！ブレイブの声久しぶり！」

ブレイブ「そうか。前のバンの偽物の時はマルス達とは話さなかつたな」

グレイグ「何だ。あの時もブレイブに使っていたのか」

ラース「少しな。ブレイブが何か言いたそうにしていたんだ」

マルティナ「そうだったの。よくブレイブの事がわかるわね」

ラース「まあな。ブレイブがわかりやすく伝えてくれるからこっちも察しやすいんだ」

ブレイブ「ありがとうございます、ラース様。それと、私から少し試してみたい事がありました」

ラース「ブレイブからなんて珍しいな。どうした？」

ブレイブ「息子にも薬を使ってやってほしいのです。そろそろ息子も大人になってきているので、会話はできると思われます」

ルナ「コロとも話せるの!？」

マルス「いいの!?!コロが何て言ってるのか気になってたんだ!」

ラース「しかし、大丈夫なのか？前は止めてただろ？」

ブレイブ「前より成長しましたし、おそらくもう問題はないかと。それに、息子も前から皆様と話したがっていたのでちょうどいい機会かと思ひまして」

マルティナ「そんな事言ってたのね。ふふ、それならぜひ使ってみましょう」

グレイグ「コロ、これを舐めてみてくれ」

コロ「??ペロペロ」

グレイグ「どうだ？」

コロ「あれ？美味しくない。って、ああ!?!喋れてる！」

ルナ「コロが喋ったー！」

コロ「やったー！俺も皆と話せる！マルス、ルナ、いっぱいお話しよー！」

コロは喜びながらマルスとルナの周りを走っている

マルス「うん！コロ、皆に見せにいかうよ！」

コロ「いいじゃん！皆を驚かせちゃえ！」

三人ははしやぎながら出ていった

ブレイブ「まあ…… あんな感じですよ。私の息子は」

ブレイブは少し申し訳なさそうにしている

ラース「予想を裏切らなかつたな。まあ可愛らしくていいじゃないか」

マルティナ「そうね。性格からしてもコロらしいわ」

グレイグ「ブレイブも子どもの頃はあんな感じだったのか？」

ブレイブ「わ、私ですか!? そうですね……。いや、流石にあそこまで人に懐いてはいませんでした。走り回るのは好きでしたが、どちらかという戦いも多かったですからね」

ラース「なるほど。コロとは少し違うのか。まあ環境が違うからな。当然といえばそうか」

グレイグ「ブレイブもあのような子ども時代があつたのかと思つたが違つたか」

マルティナ「あ、そういえば毎年バン達もブレイブとコロにプレゼント渡してたわよね。今年は何をくれるのかしら」

ブレイブ「去年の料理も美味しかったです。ですが、もう腹は先程ので満たされているので、できれば別の物がいいのですが」

グレイグ「コロもどこかに行つてしまつたからな。訓練場に行つてみてはどうだ？」

ブレイブ「いいのですか？」

ラース「そりやあ今日は記念日だ。ブレイブとコロの好きなようにしていいぞ」

ブレイブ「ありがとうございます。ラース様も来ていただけませんか？」

ラース「ん？俺か？構わないぜ」

ブレイブ「ありがとうございます」

ブレイブは嬉しそうにしている

二人は出ていった

マルティナ「グレイグ、もしかしてなんだけどブレイブにとって一番のプレゼントって」

グレイグ「姫様も同じ事を考えていましたか。私もそう思います」

マルティナ「やっぱりそうよね。まあブレイブらしいわ。ちよつと羨ましいけど」

訓練場 二階

ラース「お、やってるな。少し見てもいいか？」

ブレイブ「はい。構いませんよ」

訓練場

バンはかくとう技を教え、動きを見ていた

バン「お！回避の仕方がよくなってきたな！体幹が鍛えられてきた証拠だな！もっと足に力をいれて、ガツンと繰り出せ！」

ジール「はい！」

他の見習い達は槍をギバから教わっている

ギバ「ここまででは槍が戦いやすい間合いだ。この距離感つてのを覚えてもらう。有利な距離感で戦えばそれだけ相手に負担をかけられるからな。槍の先端と相手の武器が触れるくらいの距離だ」

見習い達「はい！」

二階

ブレイブ「まとまってきてますね。随分前に見た時はまだバラバラだったように見えていたのですが」

ラース「そうだな。それだけ慣れてきたって所だ。バンもようやく自分のあり方に気づいたようだしな」

ラースは少し嬉しそうにバンを見ている

バンを見ているラースをブレイブは見つめている

ブレイブ「ラース様……………」

ラース「ん？どうした？」

ブレイブ「……………いえ、何でもありません」

ラース「?そ、そうか」

訓練後

ラース「よう、お疲れ様。見てたぜ」

バン「あ、師匠!と、ブレイブ。誕生日だな!おめでとう!」

ブレイブ「ああ、おまえ達も覚えているのだな。日付というものの感覚か。俺にはわからんな」

マーズ「それじゃあ毎年恒例のプレゼントだな」

ダバン「今回は少し違うやつだ。ブレイブも反応してくれるんじゃないか?」

ラース「(バン達まで毎年あげていたのか。俺は……………何がしてあげられる?)」

ダバン「これだ!」

ダバンは袋から猫じやしを出した

ブレイブ「何だこれは。棒……？」

バン「これでこうやってパタパタすると……」

ブレイブ「むむ!？」

ブレイブは猫じやらしに向かっていった

ブレイブ「な、何だ!?体が勝手に…… あれを捕まえろと言っている」

バン「アハハハハ!!ブレイブが可愛い!!」

バンは壁などのいろんなところで猫じやらしを動かし、ブレイブもそれを追いかける

ベグル「へえ、こりやあ凄え。あんな大きなブレイブでも反応するんだな」

ライス「あれってただの猫じやらしだろ。少し大きいがブレイブにしたらまだ小さいな。あんなものであそこまでの反応をするとは」

ダバン「ベビーパンサー用なんです。サマデー王国に売られていてそれを買ってきたんですよ」

ガザル「コロにも試してみたいな。ブレイブであれならこれは期待できるぞ」

ロベルト「面白そうだな。ダバン、いいものを見つけてきてくれたな」

ギバ「バン、次は俺だー！」

バン「アツハツハツハ!!最高!!あのブレイブが俺の手に踊らされる!!」

ブレイブ「ぐ、ぐうつ……。何故だ。何故ここまで反応する」

バン「ほれほれ、ブレイブちゃん。こっちですよー」

ブレイブ「貴様……俺を馬鹿にするな!!」ブチッ!

ブレイブは猫じやらしを持つバンの手ごと思いつきり噛み付いた

バン「ギャアアア!!痛ええ!!」

バンの手は血まみれになっている

ブレイブの口にはバンの血がついている

ブレイブ「ぶつ。全く、こんな……………ふざけたやつに…………遊ばれるとは」

ブレイブは床に落ちている猫じやらしを度々いじっている

バン「手が千切られたかと思った……………」

ダバン「流石に調子に乗りすぎたな。ほら、ベホイミだ」

ギバ「次は俺だぜ、ブレイブ！それ！」

ブレイブ「むう！またか！」

ブレイブはまた猫じやらしを追いかける

ギバ「こりやあ面白え！」

ラーズ「楽しそうだな。噛みつかれたりしなければ安全そうだな」

バン「結構危ないですよ、師匠！」

ガザル「あれはお前がブレイブを馬鹿にしたからだろ。自業自得だ」

ダバン「あ、それとブラシも買ったんです。今度使ってみてください」

ラース「お、それはありがたい。ブレイブ達の毛って結構固くてすぐボロボロになるんだ」

ベグル「やっぱり身を守るためのものだからですかね」

ラース「だろうな。定期的にブラシをかけないと触ろうとした時固まって大変なんだ」

マーズ「そうだったんですか。知らなかった」

ギバ「そーれ！ジャンプだ！」

ブレイブ「くっ……」

ギバ「いやー、俺達も楽しめてブレイブも思わぬ運動になっていいな、これ！」

ブレイブ「貴様ら……俺を面白がっているな！ふざけるなー!!」

ブレイブはギバの手を狙って爪で引っ搔こうとする

ギバ「うおおっ!!危ねえ!!!」

ブレイブ「チツ!」

ラース「…………… やっぱりブレイブには危ないんじゃないか? 怪我じゃすまない一撃が飛んでくるぞ」

ロベルト「そ、そうかもしれませんね」

ブレイブ達の誕生日2

その後、玉座の間

カミュ「よう、ただいま」

カミュが荷物を持ってやってきていた

マルティナ「カミュ、お帰りなさい。またマヤちゃんのお店に行くの？」

カミュ「それもあるが、今日はブレイブの誕生日なんだってな。俺も少し祝ってやろうかと思ってよ」

グレイグ「ほう、よく知っていたな。ラースから聞いたのか？」

カミュ「いや、兄貴じゃなくて兵士達から聞いたんだ。確認なんだがブレイブってこれ食べれるか？」

カミュは魚を取り出した

マルティナ「あら！ホツカイマグロ！クレイモランの特産品じゃない！」

グレイグ「これは立派なものだな。ブレイブ達は魚も食べるから問題ない。しかし、肝心の本人が訓練場に行ったり帰ってこない。どこかに出かけたのだろうか」

カミュ「食べれるならひとまず安心だ。キッチンにはコックに話せば貸してくれるか？」

マルティナ「そうね。って、わざわざカミュが作るの？」

カミュ「大したものじゃねえけどな。余るだろうから皆で食べてくれ。兄貴に全部取られるなよ？」

グレイグ「ふっ、そうだな。気を付けねば」

その頃、ナプガーナ密林前の川辺

ブレイブの要望で、ラーズはここに来ていた

ラーズ「どうした？ここに来たいなんて」

ブレイブ「本当なら森の中に入りたいのですが、流石にラーズ様と出会った場所に行くには少々危険ですので、ラーズ様が私達をお誘いしてくださった場所にどうしても行きたくて」

ラーズ「なるほどな。もうお前と出会って四年目か。早いものだな」

ブレイブ「私にしてみれば一瞬でした。ただ、その一瞬でもとても濃い内容でした。群れの中で暮らしていた時と比べれば毎日が輝いているようです」

ラース「……………」

二人は静かに風の音を感じている

ガサガサ

ラース「ん？」

ビッグハット「ブウ？」

草むらからはビッグハットが出てきた

ブレイブ「ん？おお、久々だな。元気にしていたか？」

ビッグハット「ブブウ!!ブウ」

ビッグハットはブレイブと仲良く話している

ブレイブ「ハハハハ、そうか。それはよかった。皆も元気なら俺も嬉しい。皆に伝えてくれ。俺と息子は変わらず元気でやっているとな」

ビッグハット「ブウ！」

ビッグハットは嬉しそうに去っていった

ラース「……………あのビッグハット、確か足を怪我していたやつだな。マルスを威嚇していた記憶があるぞ」

ブレイブ「まさか覚えていられたとは。はい、その子で間違いありません。久しぶりに群れの仲間と会いましたが、元気そうでした」

ラース「……………なあ、ブレイブ。少し考えている事があるんだ」

ラースはブレイブを見つめている

ブレイブ「はい。何でしょうか」

ラース「群れに戻りたいか？」

ブレイブ「……………え？」

ラース「俺についてきてくれるのは嬉しい。お前は頼りになるし、心強い。だが、魔物としてはそれでいいのか？前にこう言っていたな。魔物は何かのために行動する。行動こそがお前達魔物にとって生きる理由となっている、と」

ブレイブ「そうですね。間違いなくそう言いました。私達はラース様のために行動しております」

ラース「前にこう言われた事がある。魔物らしくないキラーパーンサーだ、とな。それを聞いた時は俺はかなりショックだったんだ」

ブレイブ「ど、どうしてですか?」

ラース「元は魔物であつたはずのキラーパーンサーとベビーパーンサーが、ブレイブとコロと名付けられ、人間の支配下に置かれている。他の魔物からすればお前達は異端なのか、と思つたんだ。」

ブレイブも魔物としてのプライドがあるだろう。それを俺は考えもせず、自身の気持ちだけで勝手に人間の世界に引き込んだ」

ブレイブ「ラース様……………」

ラース「なあ、ブレイブ。お前はこれでいいのか?魔物らしさが抜けて人間の言いなりになってよ。人間の世界は魔物のお前達にとつて生きにくい環境ばかりだ。嫌な事も多いだろう。」

俺はお前達に生きてほしい。そのためなら出来る限りの事をする。だからもし、前の魔物としての生活を望むなら俺はあの群れに帰すのも仕方ないと考えている」

ブレイブ「…………… 私達の事、そこまで深く考えてくださっていた事誠に感謝いたします。私から一つ言わせていただきます」

ラーズ「おう」

ブレイブ「ラーズ様は勘違いをなされています。確かに魔物らしさは抜けているでしょう。他のキラーパーンサー、ベビーパンサーと比べるまでもないくらいには。

しかしそんなもの、私達からすれば気にもなりません。私達は異端な魔物に見えるかもしれませんが、ですが、これは私達が自ら選んだ道。後悔など微塵もありません」

ラーズ「そ、そうか」

ブレイブ「もう私達はただのキラーパーンサー、ベビーパンサーではありません。ラーズ將軍に仕えるキラーパーンサー、ブレイブとベビーパンサー、コロなのです。この場所が私達の住む場所であり、生きるための場所なのです。」

あの群れを懐かしむ事こそあれど、この場所が嫌になるなどありません」

ラーズ「…………… ハハハ、ハハハハ!!」

ラーズは笑い始めた

ブレイブ「ど、どうして笑われるのですか!」

ラーズ「いや、カッコいいなと思ってな。俺が間違っていた。いらない心配だったみたいだな。しかし、ありがとう。そこまで大切に考えてくれてよ」

ブレイブ「当然です。ラーズ様にはたくさん助けられただけでなく、あの城に行き、様々な事を教わりました。お礼を申し上げるのはこちらの方です。ラーズ様、これまでありがとうございました。これから先もずっと私はあなたについていきます」

ラーズ「ああ、これからもよろしく頼むぞ。ブレイブ」

ブレイブ「お任せください」

ブレイブ達の誕生日3

夕方、デルカダール城下町

コロ「あ！父ちゃんにラース様！」

コロが遠くから駆けてきた

ブレイブ「おお、お前もこれから帰る所だったか」

コロ「そう！聞いて、父ちゃん！俺、皆と今まで話せなかった事いっぱい話した！」

ブレイブ「そうか。喜んでいたか？」

コロ「うん！可愛いつて言われた！」

ラース「それはまた少し違うがまあいいか」

コロ「父ちゃんは何してたの？ラース様とお散歩？」

ブレイブ「ああ、そうだ。楽しかったぞ」

ラース「コロ、マルスとルナはどうした？一緒じゃなかったのか？」

コロ「え?..... あ、置いてきちゃった。でも、お城に帰ろうとしてたからお城に行けば会えると思う!」

ブレイブ「全く。マルス達に合わせると前にも言っただろう」

コロ「えへ、ごめんなさい」

ラース「まあそれなら城に戻ってマルス達がいるか見てみようか」

デルカダール城 大広間

マルス「あ!コロ戻ってきた!ブレイブも父さんも一緒だったんだね」

コロ「ごめんね、マルス、ルナ。俺、父ちゃんの気配がしたから走っちゃった」

ルナ「大丈夫だよ。コロはブレイブの事大好きだもんね」

コロ「うん!俺の自慢の父ちゃんだもん!」

ブレイブ「..... 恥ずかしいからやめなさい」

カミュ「お、話し声がすると思ったら今帰ってきたのか」

ラース「カミュ、帰ってきてきたのか」

マルス「カミュお帰りー」

ルナ「カミュさんもこの後ご飯一緒に食べる？」

カミュ「ああ、そうするつもりだぜ」

コロ「カミュだー！えーい！」

コロはカミュに突撃していった

カミュ「ハア!?コ、コロまで喋ってやがる！」

コロ「ビックリした？」

カミュ「あ、ああ。凄え驚いたぜ」

コロ「やったー！作戦成功！」

ブレイブ「すみません、カミュ様。こちら、あまり人に突撃するんじゃない。驚かせてしまうだろう」

ブレイブはコロの頭を軽く叩いた

コロ「驚かせるのが目的なのに……」

カミュ「なんだかコロらしいな。喋っているのには驚いたが、予想通りの性格してんだな」

ラース「やっぱりそう思うよな」

カミュ「そうだ。今日はブレイブ達の誕生日だろ？夕飯は俺が作ったやつだ。クレイモランで取れたホツカイマグロを使ってんだ。味わって食べてくれよな」

マルス「え!?!カミュの料理!?!」

ルナ「楽しみー！ありがとう、カミュさん！」

コロ「マグロ？」

ブレイブ「魚の事ですよね。魚は久々です。ありがとうございます。す、カミュ様」

ラース「ブレイブ達にホツカイマグロは大きすぎるだろ。という事はつまり……………」

カミュ「全員分あるぜ。兄貴、”全員”用だからな。てめえ一人で食べるんじゃねえぞ」

カミュは全員を強調して言った

ラース「わ、わかってるよ。流石に一人占めはしねえよ」

カミュ「ならいいんだがな」

ラース「(そーいや俺、ブレイブ達に何もしてやれなかったな)」

ブレイブ「ラース様？」

マルス「父さーん、ブレイブー、早くいこー」

ラース「ああ、今行く」

夕食後、バルコニー

マルティナはとラースはお酒を飲みながら少し話していた

マルティナ「え？ブレイブ達へのプレゼント？」

ラース「そ、そうなんだ。もう遅すぎるが何もしてやれてなくてよ。折角俺に仕えてるのに本人が何もしないなんておかしいだろ？何かいいものないか？」

マルティナ「…………… ラース、気付いてないの？」

ラース「何がだ？」

マルティナ「コロはずっとマルス達と遊んでたから仕方ないけど、ブレイブにはもうプレゼントをしたじゃない」

ラース「??？」

ラースはマルティナの発言に頭を傾げている

マルティナ「わかってないようね。それじゃあブレイブに直接聞いてみましょう」

ラース「プレゼントをか!?それは違うんじゃないか？」

マルティナ「ふふ、大丈夫よ。ラースが心配してるような事はおきないから」

ラース「な、なんでマルティナは全て知ってるみたいになってるんだ？」

しばらくして、マルティナはブレイブを呼んできた

ブレイブ「どうされましたか？マルティナ様」

マルティナ「ラースがね、ブレイブに聞きたい事があるんですって」

ブレイブ「ラース様ですか？何でしょうか」

ラース「い、いや、その……今日はブレイブ達が俺とマルスと出会った日だろ？それなのに俺は何もしてやれなかったな、って。それでいくらなんでも申し訳ないから、何かほしいものとかあれば言うてくれ。用意するぞ」

ブレイブ「……………ラース様、私はもうラース様にプレゼントをいただきましたが？」

ブレイブはキョトンとした顔をしている

ラース「え？俺は何もあげてないぞ？」

ブレイブ「お気付きではなかったのですか。今日一日、私と一緒にいてくれたではありませんか。普段は仕事であまり一緒にいる事も少なかったはずですよ」

ラーズ「…………… そ、そんなんでよかったのか？」

ブレイブ「そんなではありませんよ。私にとってラーズ様と共にいる時間は何よりも大切です。私はラーズ様と共にいるだけで幸せなのです」

ラーズ「そ、そうだったのか。しかし、もつとこうしてほしいとかはないのか？」

マルティナ「そんな無理矢理は駄目よ、ラーズ。ブレイブと一緒にいるだけでいいって言ってるんだしいいじゃない」

ラーズ「そ、そうだな……………」

ブレイブ「強いてあげるならば」

ラーズ「お、いいぞ。聞かせてくれ」

ブレイブ「私もバンのような目線で見てほしいです」

マルティナ「え？それってラースの弟子としてって事？」

ブレイブ「いえ、その弟子？というのはわかりませんが、ラース様がバンによく見せているような目線を私にも向けてほしいのです」

ラース「あー………。言いたい事はわかった。今日のバンの成長を見ているような時のやつだな？」

ブレイブ「そうです！あの優しい目線を私にも向けてほしいのです。前からその目線に向けられるバンが少々羨ましかったです」

マルティナ「言われてみれば、確かにラースってバンの話をしてる時は大抵優しいような表情してるわよね」

ラース「そんな頻繁にしてたか？自分じゃわからねえや」

ブレイブ「む、難しかったでしょうか。魔物と人間という差がありますから少し諦めてはいるのですが……」

ラース「いや、そんな事はない。そうだな………ゴホン」

ラースはブレイブの目線に合わせてしゃがんだ

ラース「ブレイブ、よく頑張っているな」

ブレイブ「!!!こ、これです!!私が羨ましかった目線はこれです!!
ラース様、ありがとうございます!!」

ブレイブはとても嬉しそうにしている

ラース「お、おう。これだけでそこまで喜ぶなんてな」

マルティナ「なるほどね。でも、ブレイブの気持ちはわかるわ。
ラースのその顔は私も好きよ」

ラース「へ……?お、俺一体どんな顔してるんだ?」

ブレイブ「マルティナ様も同じだったとは」

マルティナ「ええ、そうみたいね。ラースにそうやって見られると
落ち着くのよね」

ラース「そ、そうなのか?」

ブレイブ「私は大変満足しました！ラーズ様、ありがとうございます！
しました！」

ブレイブは去っていった

ラーズ「な、なんか思ってたのと違ったな」

マルティナ「でも喜んでいたわよ。いいプレゼントになったじゃない」

ラーズ「まあ、そうだが……。というかマルティナはブレイブが俺と一緒にいるのが好きだって気付いてたのか？」

マルティナ「ええ。だって今日のブレイブはラーズと離れたくないみたいだったから。結構わかりやすかったわ。グレイグも気付いてたわよ」

ラーズ「嘘だろ!?あのグレイグでさえ気付くレベルだったか！何で気付かねえんだよ、俺」

マルティナ「仕方ないわよ。当事者だとわかりにくいと思うわ。ブレイブもあまり欲求とか感情を出す子じゃないから」

ラーズ「そうだよな。今度からもつとわがまま言っていていいぞって教えておこう」

マルチイナ「それでもブレイブの事だから、きっと大した事ないも
んでもラースがすればなんでも喜びそうね」

ラース「…………… いいのか？それで」

合宿

それから三ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

ラーズとマルティナは次のマルティナの勉強の場所について話していた

ラーズ「へえ、今度はユグノアか」

マルティナ「ええ。私の代わりにロウ様がこつちに来てくれるみたい。といっても、ロウ様はデルカダールの事に詳しいからあまり教えられる事も少ないのだけど」

ラーズ「確かに。じいさんは昔から王様と仲良しだもんな」

マルティナ「それでお父様と話し合ったらロウ様にはお父様が一緒にいてくれるそうだから、ラーズも数日休んでいいわよ」

ラーズ「それはまたありがたいが、マルティナが頑張ってるのに俺だけ休むってのもなあ……」

マルティナ「そんなの気にしなくていいのに。それに勉強といってもずっと学んでるわけじゃないし、街の観光やイレブンとお話する事だっただくさんあるから私もお休みの感覚と同じよ」

ラース「まあわかった。その数日は何か考えておく」

マルティナ「よろしくね。あと、夕方にシルビアが来るそうなの。何だか兵士達に用事って手紙に書いてあったわ」

ラース「兵士達に？何か困った事でもあったのだろうか」

夕方 訓練場

シルビア「ラースちゃん、わざわざ集めてくれてありがとう」

ラース「構わねえよ。シルビアが兵士達に用事なんて初めてじゃないか？」

バン「どうしたんですか？」

シルビア「実はアタシ達が持つてるプライベートビーチがあるんだけど、ここ何十年ずっと使ってなかったのよ。それで今後使う機会も無いからどうせならお譲りしようかしらって思ったの」

全員「プライベートビーチ!？」

ラース「随分と凄い話だな。いいのか？そんなものを」

シルビア「パパもそれでいいって言ってるし、アタシも特に困らないわ。デルカダール王国のものってわけじゃないけど、連絡とかいれてくれればいつでも使えるようにしておくわよ。」

バカンス気分を楽しんでもらってもいいし、兵士ちゃんなら砂で足腰のトレーニングをしてみてもいいんじゃないかしら？」

バン「凄え!!シルビアさん、本当にいいんですか!？」

シルビア「もっしろくん。こっちも困ってたし、ちょうどいいの」

ロベルト「砂の上なら確かに普段と違うから足にかける力も必要だ。新入り達の基礎固めにもなるし、俺達にとってもいいトレーニン
グになりそうだな」

シルビア「使いたい日があったら連絡ちょうだいね」

その後

ラース「突然だったがどうする？」

バン「俺達は使ってみたって意見で固まりました。後は日程なんですけど……どうしましょうか」

ラーズ「それなら一週間後に見てみないか？その数日は俺も空いてる。久しぶりに俺が指導しようか」

バン「本当ですか!?やったー！久しぶりに師匠に教えてもらえる！ハッ!!……………これってあれですね！合宿ってやつですね！」

ラーズ「そ、そういうものか？特別特訓とかでもいいんじゃないか？」

バン「まあそうですね！それでは皆に一週間後と伝えておきます！」

ラーズ「おう。シルビアには連絡いれておくからな」

バン「はい！お願いします！」

一週間後、シルビアのプライベートビーチ

全員「おおく……………」

そこは白い砂浜、青い海、澄み渡る空、照りつける太陽とまさに海にピッタリな場所になっている

ラーズ「いやー、これぞ海!!って感じだな」

ダバン「綺麗な海ですね。流石ソルティコ」

マーズ「有名人って凄いな。こんな綺麗なビーチを持ってたなんて。ソルティコ周辺でも中々ないくらいですよ」

ガザル「これは楽しみになってきたな！」

バン「早速泳ぐぞー!!」

ラース「待て」

ラースは駆け出していったバンの首を掴んだ

バン「ぐえっ!!」

ラース「目的はトレーニングだ。遊ぶのは構わねえがそれはトレーニングが終わってからだ」

バン「げほっ！げほっ！そ、そうでしたね。ちよつと浮かれちゃいました」

ギバ「全く。いい景色なのはわかるが目的を忘れんなよな、兵士長」

ベグル「……………ギバのその格好は何だ？」

ギバは水着になっており、手にはサーフボードを持っている

ギバ「……………これはあれだ。プライベートビーチって事は好き
なだけ泳げるって事だろ。そういう事だ！」

バン「やっぱりこんなテンションあがるよな！この景色を前にし
てお預けなんて無理に決まってるよな！」

ギバ「当然だ！」

ガツン！ガツン！

ラース「さて、これからのトレーニングだがまずは砂の上での動き
に慣れてもらう。いつもとは違うからな。よりしつかり足を地面に
つけてないとすぐに転ぶぞ。しばらくはここを走るからな。それで
どういう加減で地面を踏まないといけないかを覚えさせるんだ。い
いな？」

兵士達「はい！」

バンとギバの頭には大きなたんこぶが出来ている

バン「何もこんな思いっきり殴る事ないじゃないですか、師
匠……………」

ラース「ちゃんと遊ぶ時間はある。ただ、順番を間違えるなどというだけだ。ほら、とっとと走るぞ」

走り始めると

ガザル「これは……結構力がいらいますね」

マーズ「そうだな。力のバランスも大事だな」

ジール「うおっ！」ドサ

ガク「わわっ！ジール、大丈夫か？」

ジール「悪い、ガク。転んだ」

ラース「最初は転んでも仕方ないからな。ただどうして転んだのかは大抵力が入る方向が合っていないからだ。地面に向かってしっかり力を向けておけよ」

全員「はい！」

ベグル「結構広いですね。どこまで続いてるんですか？」

ライス「小さな洞窟がある場所までらしい。それがどこかはわからないけどな。今のところ洞窟は見えないな」

バン「もしかして相当奥なんじゃ……」

ダバン「可能性は高そうだな。もう流石としか言いようがないな」
しばらくして

新入り達「ハア…… ハア……」

ギバ「ライス将軍、新入り達が疲れてきたようです」

ロベルト「といっても俺達も結構疲れたな。いつもより早く感じるぞ。何でだ？」

ライス「固い地面とは違って砂だけだからな。衝撃が砂で吸収されて走るだけで普段よりずっと力を使う。それを維持し続けてるんだから早く疲れが来るのは当然だ。まあ、少し休むか」

バン「という事は!!」

ラース「わかった、わかった。離れすぎない程度に遊んでこい」

バン「やったー!!行くぞ、ギバ!!」

ギバ「待ってたぜ!!」

バンとギバは一目散に海へと駆け出していった

ガザル「餓鬼かあいつらは」

マーズ「まあいいじゃないか。こんな場所で楽しむるのが無理な話だ」

ラース「そうだな。お前達も海に入って汗でも流したり涼んだりしてこい。気持ちいいぞ」

新入り達「はい!」

ガク「俺、海で泳ぐの得意なんだ!」

ガクに続いてどんどん海に向かっていく

ダバン「あれ?ラース將軍は行かないんですか?」

ラーズ「ああ、俺はここで待ってるさ」

ベグル「…………… わかりました。カミュさんが前にラーズ將軍が苦手って言ったのって泳げないからなんですね？」

ラーズ「…………… 悪かったな。そういう事だ。ほら、行ってこいよ」

ベグル「いやいや、ラーズ將軍も行きましょうよ。楽しいですよ」

ベグルは笑顔でラーズ將軍の手を引っ張る

ラーズ「は？いやいや、だから俺は泳げねえんだってば」

ベグル「もしかしたら泳げるかもしれないですよ？試してみましようよ」

ラーズ「おいこら、ベグル。てめえ楽しんでるな？」

ベグル「そんな事ありませんよ。別に前から悪尽の事で弄られてたとか気にしてませんから」

ラーズ「それが原因か！いや、待て。本当に！そろそろ深くなってきたじゃねえか!!」

ラーズの腰近くまで水がきている

ラーズはベグルの手を無理矢理離そうとしている

ラーズとベグルはお互い引つ張りあつて動かなくなっている

ベグル「ね、粘りますね、ラーズ將軍。流石力強いですね。おい、バン!!お前の師匠が海に入って楽しもうとしてくれねえんだ!手伝つてくれ!」

バン「え?あ!師匠!ベグルなんかと何してるんですか!一緒に泳ぎましょうよ!」

ラーズ「バン、助けろ!副長が意地でも俺を海に入れる気だ!」

バン「な、何か問題でもあるんですか?少しなら大丈夫ですよ!ほら、行きましょう!」

バンがラーズの背中を押していく

ベグル「ナイスだ、バン!」

ラーズ「馬鹿野郎!!」

しばらくして

ラーズ「ゲホゲホゲホ!!!」

バン「し、師匠大丈夫ですか？まさか師匠があんな近くに足が着くようなところでも泳げないなんて思わなくて……」

ラース「ゴホッ！あ、ああ、助かった。全く、ベグルのやつ大笑いしていやがったな」

バン「ベグルは知ってて師匠を海に連れて行ってたんですね。流石ベグル。師匠ですらもおもちやにするなんて」

ラース「ハアー、無駄に疲れた」

バン「あ、それなら俺が泳ぎ方教えましょうか？」

ラース「いや、いい。練習中にどうせベグルにまた笑われるだろ」

バン「そ、そしたら俺がガツンと言ってやりますよ！」

ラース「いらぬ事言ってお前がガツンとやられるだろ」

バン「……………何だかそんな気がしてきました。それじゃあ俺はまたギバ達と泳いでくるんで、師匠は休憩が終わったら全員集めて

ください」

レース「おう、楽しめよな」

合宿2

その後、シルビアがやってきた

シルビア「ラーズちゃん、お疲れ様。って、どうしてそんなに濡れてるの？ラーズちゃん泳げないんじゃないかなかったかしら？」

ラーズ「おお、シルビアか。これはベグルとかいうやつに泳げないって知ってるのに無理矢理海に入れられたんだ。まあ気にしないでくれ」

シルビア「あらあら、大変ねえ。それにしても皆はしゃいでるわね。こうやって誰かに楽しそうに使ってもらえるならアタシも嬉しいわ」

ラーズ「男ばかりだ。むさ苦しいったらありやしないぜ」

シルビア「夜はどうするの？」

ラーズ「ソルティコで宿を取ろうと思ってる。かなりの人数だから安い場所にしないとな」

シルビア「そうだろうと思ったの。という事で、ジャーン！お疲れの兵士ちゃんとラーズちゃんにこれをプレゼントよ」

シルビアはチケットを出した

ラース「何だ？このチケット」

シルビア「また新しくホテルを作るの。まだ完成してないんだけど、大部屋は使えるからそこでぜひゆつくり体を休めてちょうだい」

ラース「お、おいおい。いいのか？こんな所まで使わせてるだけじゃなくてそんなホテルまで」

シルビア「ええ。それにホテルはお試し運用だから、実験として料理とかお風呂とかがどうだったかを教えてほしいからこっちにもメリットはあるの。それに何部屋もお金を払って取るよりも、大部屋の方がいいんじゃないかしら？」

ラース「まあ……そうだな。それならありがたく使わせてもらおう」

シルビア「三日だったわよね？頑張ってたね」

シルビアは去っていった

その後

ラース「この後は各自の得意な武器を使っていく。武器を持ってここで素振りや模擬戦をやってみろ」

兵士達「はい！」

しばらくして

ベグル「ぐ……。動きにくい……。」

バン「おわあっ！」ドサ

ギバ「よ、避けられねえ！」

様々な場所で全員が苦戦していた

ラース「わかったか？足下が常に不安定だから攻撃しにくいし、防御や避ける事もしにくい。だが砂に慣れていけば少しずつ戦いやすくなるはずだ。まずは砂の足場でどうやって普段通りの動き方ができるかを考えてみるんだ。さあ続けていくぞ」

夕方

ラース「今日はここまでだ。砂がどれだけ厄介かわかっただろう。だが、そろそろ慣れてきたやつもいるだろう。明日は少し実戦もしていくぞ」

バン「はい！」

バンとベグル以外は息切れを起こしたり床に倒れたりしている

ベグル「お前ら体力ねえなあ」

ロベルト「ハア……………ハア……………お前らが化け物すぎるんだよ」

ギバ「ゼエ……………何でそんな立ってられるんだよ」

ラース「ソルテイコに戻るぞ。シルビアがさつきとつてもいいものをくれたんだ。これでゆつくり休むぞ」

ラースは全員にチケットを見せた

ガザル「な、何ですか？そのチケット」

ラース「まずは行ってみてからだな。水分補給はしっかりしろよ」

その後

全員「でつか!!」

着いたホテルは建設途中だったが、半分ほど完成しておりその高さだけでも周りのホテルよりも大きいホテルだった

ダバン「え？ラ、ラース將軍、間違ってますんか？建設途中ですし、こんな場所……………俺達には場違いですよ」

ラーズ「い、いや、場所は合ってるし完成はしてないってシルビアも言ってた。だが、こんな大きいとは……」

マーズ「ほ、本当ですか!?ここっってお金持ちの貴族とか王族の人達がソルティコで快適に過ごせるようになって作られてる超リッチなホテルですよ!!!」

全員「ええ!!」

ガク「ラーズ將軍、俺達そんな金無いですよ!」

バン「こ、これはつまり、師匠が俺達の間まで払ってくれるって事ですか!」

ベグル「マジですか!?ラーズ將軍ありがとうございます!!」

ラーズ「勝手に話進めんな!チケットだからタダに決まってるんだろ!」

ギバ「と、とりあえず入ってみますか?場所は合ってるんですよね?」

ラーズ「そ、そうだな」

エントランス

スタッフ一同「お待ちしております、デルカダール兵士様ご一行。シルビア様からのご依頼を受けてくださったとお聞きしております」

入り口にはホテルの従業員達が全員で出迎えてくれた

ラーズ「い、いや、こつちこそまさかこんな立派なホテルだとは聞いてなくて驚いた。大部屋を貸してくれるそうだがいいのか？」

従業員「はい、もちろんです。どうか厳しい判断をしていただいて構いませんので何か不備や足りない点などがあれば何なりとお申し付けください。大部屋へ案内させていただきます」

大部屋

従業員「こちらになります。全員分の布団とお食事はご用意してありますが、何かあればすぐにお知らせください。それでは」

ラーズ「お、おう。ありがとう」

バン「もしかして……… 夢？」

ベグル「可能性あるな」

バキツ！

ベグルはバンを殴った

バン「痛え!!いや、何で俺!？」

ベグル「痛いのか。じゃあ夢じゃねえな」

バン「話聞けよ!!」

ジール「大部屋が訓練場くらいありますよ」

ガク「訓練場より広いかもしれないぞ」

ロベルト「まだ完成してないけど、お試しとしてって事だったんですね。だからって何も俺達じゃなくてもよかったと思うのですが」

ガザル「確かに。なんかこうも広いと落ちつかねえな」

ラース「まあこれも慣れていくしかないな。思う存分体を休められると思えばいいか」

夕食後

従業員「お風呂の方も準備はできております。この部屋を出て右手

を進んでいくとございます。それではござゆつくり」

ギバ「いやー食った、食った。全部美味すぎるぜ。大満足だ」

ダバン「食事まで豪華だった。あんな貝なんて食べる機会ほとんど無いぞ」

マーズ「ソルテイコにいても食べれる事はほぼないからな。まさかこんな機会に巡り合うとは」

バン「師匠ならお城のご飯でああいうのは食べた事あるんですか？」

ラース「そりゃあ何回かあるが多くはないぞ。それに料理人の腕もかなりのものだったな。鮮度や味の引き立て方が全然違う」

バン「……………し、師匠って味わって食べれたんですか？」

ラース「どういう意味だ、こら。馬鹿にしてんのか？」

バン「そ、そんな事ないですよ！ただ、あんなにたくさん食べるから味を気にするような繊細な舌なんてないのかと思ってました」

ラーズ「よくわかった。お前は後で海に沈めてやる」

バン「何で!？」

ベグル「またそうやって思った事すぐ口にするからだろ」

風呂も終わり、全員が好きないように過ごしていた

ラーズ「そうだな……」

ラーズはノートに何か書いている

ロベルト「ラーズ將軍、何してるんですか？」

ラーズ「ん？ロベルトか。いや、今日の様子を見て明日の訓練の内容を変えてたんだ。まだまだ砂に慣れてない人ばかりだからな。もう少し時間が必要だと判断したんだ」

ロベルト「確かにそうですね。俺もまだまだ砂に足を取られてばかりです」

ラーズ「今日走っただろ？あれを少し形を変えてやってみようかと考えたんだ。往復するように走れば切り返す時に力をかけないといけない。その時の感覚は砂に慣れる上で大切だからな。これをやっていこうと思う」

ロベルト「少し気になったんですけど、ラーズ將軍のその教えってどうやって知ったんですか？本とかに書いてあるんですか？俺が探した限りじゃあ無かったんですが」

ラーズ「俺のこの指導は大抵俺を鍛えてくれた人、ガラツシユの村の俺のじいちゃんからの教えだ。基本、型、応用から奇抜な作戦まで全てな。俺の今までの経験もあるが、そのじいちゃんの教えを俺が受けた時のものをお前達に教えてるんだ」

ロベルト「ラーズ將軍のお爺様ですか。凄くお強い方だったんですね」

ラーズ「そうだな。若い頃は世界を冒険していたそうだったから戦いの経験は凄かったな」

ロベルト「基本俺とマーズとベグルで作戦とか指導を考えてるんですよ。ただどうしてもラーズ將軍みたいに効率的なものの中々考えられないんですよ」

ラーズ「そんな事ないさ。俺のものだって効率的とは限らない。理解しやすいようにわざと遠回りをさせている事だってある。大事なのは効率じゃない。教わる人にどれだけわかりやすく伝えるかだ。そのためなら遠回りしたっていいし、体に叩き込んでやってもいい」

ベグル「なるほど。いい事を聞きました」

ロベルト「ベグル、いつのまに」

ラーズの後ろにはベグルがいた

ラーズ「いい事？」

ベグル「教わる人にわかりやすく伝えるためなら、どれだけ体に叩き込んでやっても悪くないって事ですよね？」

ラーズ「……………何を考えている？」

ベグル「つまり、俺があゝの馬鹿に騾という名目でストレス発散してたのは何も間違ってたって事です！」

ロベルト「それは少し変だろ。本当の目的はお前のストレス発散じゃねえか」

ベグル「じゃあこれからは騾という目的にしよう」

ラーズ「……………その騾はどうやるんだ？」

ベグル「動けなくなるまで痛めつけます！」

ラーズ「躰になってねえだろ。そんな事ばかりしてるからベグルは新入り達にも怖がられて」

ベグル「バンが前にラーズ將軍の愚痴を言ってた事があって」

ラーズ「よし、ベグル。どんどんバンをしつけていくんだ。そのためならどれだけ体に叩き込んでも仕方ないからな」

ベグル「ですよね！ありがとうございます！」

ロベルト「ハア………」

合宿3

次の日、プライベートビーチ

ライス「今日は往復の走り込みをやる。その後は新入り達を見るからお前達はその間好きに訓練してくれ」

バン「という事は泳いでも！」

ライス「訓練って言っただろうが。多少なら遊んでもいいが、訓練を兼ねてくれよ。ベグル、バンを見張ってるよ」

ベグル「もちろんです。遊んでいるようだったら俺の訓練のサンドバッグにします」

ライス「それなら安心だな」

バン「何も安心できない!!」

ダバン「要はお前がちやんと訓練してればいいってだけだ。普段通りにいくぞ」

ギバ「俺は安心だな。バンには悪いが、こっそり」

ガザル「ギバ、自分は何も無いと思ってるようだがお前は俺が見張ってるからな」

ギバ「……………はい」

その後、ラースは新入り達を見ていた

ラース「基礎はあらかた固まってきたようだな。まだ甘い箇所が多いやつが大半だから少し基礎訓練としようか」

新入り達「はい！」

少し離れた所では

マーズ「メラゾーマ！」

ベグル「チツ！」

マーズとベグルが模擬戦をやっていた

マーズ「俺とベグルでなんて久しぶりだな。魔法が苦手だったもんな」

ベグル「それだけならまだいい。近づいてもお前は剣と体術で対応できるのが厄介なんだ」

マーズ「まさかベグルに褒められるとは。これはかなり嬉しいな。
イオナズン！」

バン「ロベルト、また斬り返しが単調だぞ！それだと読まれるぞ！
こんな感じでな！」

バンはロベルトの剣を避け、懐に入り込んだ

ロベルト「!?」

バン「せいけんづき！」

ロベルト「痛え!!」

バン「わ、悪い。鎧がある感覚でやっちゃった。肋骨折れてねえよ
な？」

ロベルト「ぐ……。何とかな。だが、もう少しソフトに頼む」

ダバン「ロベルト、単調になりやすいのは相手に集中しすぎてるか
らじゃないか？もう少し思考に余裕を持ってみる」

ロベルト「そうだな。ありがとう、ダバン」

バン「それが言いたかったんだ、俺は！」

ダバン「はいはい、わかったから次は俺な。アドバイス頼むぞ」

ラース「(ふむ、なんだかんだ真面目にやっているな)」

数時間後

ラース「集合ー！」

バン「はい！皆、師匠が呼んでるぞ！集まれー！」

ラース「さて、今日は少し早いがこれで訓練終わりだ。それと明日で最終日だが、明日は訓練は無しだ。自由に遊んで過ごせ」

全員「おお!!」

バン「師匠、もしかして昨日遊ぶ時間があるって言ったのはこの事！」

ラース「そういう事だ。何も三日間ずっと訓練漬けはかわいそうだからな。休憩も大事な事だ。思う存分遊べ」

全員「よっしやー！」

それから兵士達は泳いだり、奥まで探検したりなどして次の日の夕方まで楽しんでいた

次の日の夕方、デルカダール城

玉座の間

ラーズ「今帰りました」

マルティナ「あ、ラーズも来たのね。お帰りなさい」

デルカダール王「おお、随分黒くなったな。楽しんできたか？」

ラーズ「はい。兵士達も全員黒くなりましたよ」

グレイグ「訓練もしてきたのだろう？成果はあったか？」

ラーズ「それは明日になってからのお楽しみだな。まあ、バン達くらいならもう既に変化に気付いてるんじゃないか？」

ロウ「砂だと普段の地面とは違うからの。足にかけられる力が増

え、より素早く力強くなる。明日が楽しみじゃのう」

ラーズ「じいさんはまだ帰らなくていいのか？」

ロウ「夕飯を共に食べてから帰ろうと思ってな。イレブンには連絡しておいてあるんじゃない」

デルカダール王「それならよかった。また話の続きをしようではないか」

ロウ「ほほ、そうじゃな」

夕食後、ラーズとマルティナの部屋

ロウ「すまんもう、集まってもらって」

グレイグ「構いません。しかし、どうなされたのですか？」

マルティナ「ロウ様からお話という事は何か大事な事ですか？」

ロウ「実はなにぶん情報が少なくてすまんのだが、白の入り江を覚えておるかの？」

ラーズ「ロミアがいる場所だな。そこがどうかしたのか？」

ロウ「その周辺に何やら霊の噂が出ておるんじや。それも船が沈んだり、船員が溺死したりなどの実害付きでの」

グレイグ「霊ですか。あまり信じられませんが、その実害は放っておけませんね」

マルティナ「しかし、どうしてそのお話を？」

ロウ「うむ。後々皆にも話そうと思っておるのだが、その霊の特徴がわしらには見覚えがあつての。赤い髪をした男性らしいのじや」

ラーズ「赤い髪と言えは、グリーが思い浮かぶな」

ロウ「そうじや。赤い髪なんてのはほとんど見かけん。グリーと何か関係があるやもしれんとわしは睨んでおるんじや」

マルティナ「グリーに協力を依頼するという事ですか？」

グレイグ「危ないのではありませんか？」

ロウ「何も一緒にきてほしいというわけではなく、何か知らないかと聞いただけでもよい。お願いできんかの？」

マルティナ「わかりました。グリーに明日聞いてみます」

ロウ「うむ。頼んだぞ」

幽霊騒動

次の日の夕方、グラジー内

ラーズは店にやってきていた

グリー「え？マヤさんじゃなくて僕に用事ですか？」

ラーズ「ああ。少し聞きたいことがあってな。マヤと一緒に城にいか？」

グリー「構いませんよ」

マヤ「兄ちゃんがグリーさんに用事って珍しいね」

デルカダール城 玉座の間

グリー「し、失礼します」

マルティナ「あ、来てくれたのね。急にごめんなさい、グリー」

グリー「いえ、少し驚きましたが大丈夫です。聞きたい事って何ですか？」

グレイグ「実は最近外海の方で幽霊が出ているそうなのだ」

グリーン「ゆ、幽霊……ですか。見た事ないですけど、怖いですね」

マルティナ「それでね、その幽霊の見た目が赤い髪をした男性らしいの。赤い髪なんて言ったらグリーンを思い浮かべてしまったね。ほら、珍しいじゃない？それで何か知ってたらと思ったの」

ラース「別に怪しんだりしてるわけじゃないし、情報を集めていてな。どうだ？」

グリーン「うーん……すみません。僕はわかりませんね。でも赤い髪なんて確かに僕も自分以外見た事ないです」

グレイグ「自分以外？グリーの両親は赤い髪ではなかったのか？」

グリーン「実は僕、親の顔覚えてないんです。小さかった頃に死んじゃったので」

マルティナ「そう。嫌な事聞いてごめんなさい」

グリーン「いえ、大丈夫です！こっちこそお力になれずすみません」

ラーズ「仕方ないさ。知らないものは知らないからな」

グリー「ですが、赤い髪って言われると少し僕も気になりますね。あ、そうだ。僕の親を知ってるのはステラさん。えっと、僕の故郷のナギムナー村にいるおばさんが僕を育ててくれたんですけど、ステラさんなら何か知ってるかもしれない」

グレイグ「ナギムナー村か。わかった。今度伺ってみるとする」

グリー「マヤさんも一度会った事あるんでわかると思います」

マルティナ「前にそういえば孤児院に行くって話してたわね。情報ありがとう」

その夜、マルティナとラーズの部屋

ラーズ「どうする？ナギムナー村まで行くか？」

マルティナ「いや、まずはロウ様にお話してみるのが先ね。それでどうしても被害が出続けるようなら行って調べてみましょう」

ラーズ「わかった。マヤにも少し聞いてみるか？何も知らないと思うが」

マルティナ「マヤちゃんはいいわ。グリーと関係はあるけど、その赤い髪の幽霊がグリーの関係者と決まったわけじゃない。そこまで念入りにしなくてもいいと思うわ」

ラース「まあそうだな」

それから一週間以上が経ったある日

クレイモラン城 大広間

そこにはずぶ濡れになったカミュがやってきた

シャルル「大丈夫ですか！カミュさん！」

カミュ「さ……。寒すぎる……。凍え死にそうだ……。」

リーズレット「でも本当にありがとう。船員を守ってくれて」

カミュ「い、いや、こつちこそ積荷が無駄になってすまなかった。まさか噂の霊に本当に転覆させられるとは」

シャルル「船員の命が最優先ですから気にしないでください。それにしても、本当に霊によるものだったのですね」

リーズレット「ロウ様から警戒しておいた方がいいと言われていた

けど、確かに危険ね」

カミュ「ユグノアだけじゃなくて、ソルティコやダーハル―ネにも被害が出てきているようです。少し調べた方がいいと思います」

シャルル「そうですね。その間はしばらくその運路を使わないようにしましょう」

その後、デルカダール城 玉座の間

カミュ「つてわけなんだ。全員とはいかなくても誰か戦力を貸してくれないか？バンでもいいぜ」

マルティナ「ロウ様からも明日対策の会議をするつて連絡が来たわ。調査するなら協力するし、カミュも明日ユグノアに行きましよう」

カミュ「そうだったのか。なら、明日は俺もついていくぜ」

ラース「しかし、これで一体何十件目なんだ？そこまで暴れ続けるなんて中々強力な霊だな」

グレイグ「恨みや怨念などがあるのかもしれないな。無闇に近づかないのが一番なのだろうか」

カミュ「そうなんだろうが、あのルートは全員が通る可能性が高い場所だ。そこを通らないようにすると被害も大きいぞ」

マルティナ「そうよね。根本を断てれば早いんだけど」

カミュ「そういやあの幽霊、赤い髪をしたおっさんだったぞ。赤い髪といえばグリーだよな。グリーは何か知らないのか？」

ラース「既にグリーには聞いたんだが、何も知らないみたいだっただぜ。血縁者の可能性は否定できないけどな。グリー自身親の顔は知らないって言ってたから」

カミュ「そうか。あまり遠くて見えにくかったが顔もどことなくグリーに似てたと思ったけどな」

グレイグ「まあ明日にロウ様とイレブンで話し合おう」

幽霊騒動2

次の日、ユグノア城 玉座の間

マルティナ「ロウ様、イレブン、グレイグとラースとカミュも連れてきたわ」

マルティナ達がやってくると、ベロニカとセーニヤとシルビアもいた

グレイグ「む？ベロニカにセーニヤにゴリアテ。お前達も来ていたのか」

イレブン「そう。ベロニカとセーニヤは僕が呼んだんだ。この後そのまま調査に行ってもし戦闘になった時のために備えてね」

シルビア「アタシはロウちゃんとイレブンちゃんにソルティコでの幽霊ちゃんによる被害を報告してたの」

ロウ「様子を見ておったが、被害は収まらんなのでな。対策も考えて試行したのだが、どうやらそれも無駄じゃったようだな。わし達の他国に届けるはずだった積荷も海に流されてしまった」

ベロニカ「話には聞いてたけど相当被害が出てるみたいね」

セーニヤ「通りかかった船を見境なく襲っているんでしたよね。ど

うしてそのような事を……」

ラーズ「考えていても仕方ない。このまま船に乗ってその場所にまで行ってみるか？」

ロウ「いや、船はやめた方がいい。これまでを見る限り船が無事だった事はほとんど無いんじゃない？」

カミュ「それに兄貴は海に落ちたら溺れるだろ？俺達も落ちてたら拾う余裕があるかもわからないぜ？」

ラーズ「そ、それは……… 確かに」

マルティナ「ですが、船以外となるとどうするのですか？」

グレイグ「あそこは海のだ真ん中。ケトスでも不可能です」

イレブン「そう。それを昨日おじいちゃんと話し合ったんだけど、セレン様なら何とかならないかな？と思ってさ」

セーニャ「そうですわね！セレン様なら海の全てを知っているはずですよわね！」

シルビア「協力してもらおうって事でいいのかしら？」

ロウ「そうじゃ。頼んでみて無理じゃつたらまた考えてみるとしよう。これからまず向かうのは海底王国ムウレアじゃ」

ラース「久しぶりだな。あの旅の時以来だ。あの景色は俺かなり好きなんだよな」

ベロニカ「綺麗だし、不思議な光景だもんね。私もあの景色好きよ」

二人は景色を思い浮かべて楽しんでいる

カミュ「何お気楽な事言ってたよ。観光じゃねえんだぞ」

ベロニカ「わかってるわよ！いいじゃない、別に景色がどうこう言ってたって！」

イレブン「まあまあ落ち着いて、ベロニカ。それじゃあルーラで向かうか」

海底王国ムウレア 玉座の間

セレン「やはり来てくださいましたね。お久しぶりです、勇者イレブン、勇者の仲間の皆さん。話はわかっていますよ」

ベロニカ「さ、流石セレン様ね。こっちの事はお見通しってわけね」

ロウ「それなら話が早い。その幽霊の事を何か知ってたりしないか
のう？」

セレン「あの幽霊は海に対して強い恨みを感じます。おそらく波に
飲み込まれたか、嵐にやられたかで死んでしまった者でしょう。そし
て、恨みと同時に人間に対して強い怨念も感じます。あの者を払うに
はその怨念を無くしてやる必要があるでしょう」

グレイグ「怨念……か。しかも人間に向けられているとなると
俺達も例外ではないという事か」

セレン「しかし、何やらとある人物には特に大きな怨念があるよう
です。その人物まではわからないのですが……」

カミュ「その幽霊にはどうやって近づいたらいい。船だとこれまで
みたいに破壊されたり転覆させられるんだ」

セレン「私が力を貸しましょう。海の中から近づけば何とかかなると
思います。ですが、その後は任せましたよ。どうかあの幽霊を正しき
命の流れに戻してあげてください」

イレブン「わかりました。ありがとうございます、セレン様」

しばらくして、海中

セレン「着きました。ここがその幽霊のいる真下となっています。しばらくは海に立つ事ができますが、長くは持ちません。早い段階で幽霊との交渉を試みてください」

ロウ「うむ、わかった。お力添え感謝する」

イレブン達はゆっくり海上に上がっていき

ザバアン！

幽霊「!？」

イレブン「いた！この人がその幽霊だね！」

ラース「ほ、本当に幽霊がいるんだな」

幽霊は赤い髪をしており、目には十字の傷跡がついている

幽霊「何だ貴様ら！どこから現れやがった！人間め、許さん！」

幽霊がそう言うと、周囲の海から水柱が起こっていく

ベロニカ「こ、こんな事できるのね。確かにこれは船だったらひとたまりもないわ」

しかし、イレブン達の周囲の海は何ともなかった

幽霊「何故だ！何故私の力が及ばぬ！貴様らも海を憎めばよいものを！」

マルティナ「どうか落ち着いて。私達はあなたに危害を加えにきたわけじゃないの」

セーニャ「どうしてそこまで海を恨んでおられるのですか？」

幽霊「私は海に全てを奪われた。友も妻も、何より大事にしていた船も。そして、残された子どもからは呪われていると恐れられた。村の者も私を化け物と同じ扱いをする。何故だ！何故私だけがこんな目に合わなければならぬ!!」

ロウ「それが…… お主が海を恨む理由か」

幽霊「海が悪いというのに！なぜ海は恨まれぬ！周りからは私が恨まれ、恐れられる。理不尽だろう！特に私を呪われていると蔑んだ息子だけは許さぬ!!あの息子の家族には本物の呪いをかけてやった！海に一度でも近づけば私が引き摺り込んでやる！」

グレイグ「貴様、自身の家族に呪いをかけたというのか！」

幽霊「そうだ！一生海に近づけぬようにしてやった！海を恐れるがいい！私と同じ道を辿るがいい！私を化け物扱いした人間も許さん！全員私が海に沈めてやる!!」

幽霊の周りでは水柱がどんどん上がっていく

カミュ「こりゃあ……… 厳しそうだな」

シルビア「一度撤退した方がいいわ。この海に立っていられるのも短いつてセレンちゃんは言ってたんだし」

イレブン「そうだね。セレン様、戻していただけますか？」

イレブン達はゆっくり海に潜っていった

その後、ムウレア城 玉座の間

セレン「原因は解明されましたが、解決には至らなかったようですね」

ラース「だが、色々とわかったことはある。それだけでも次にどうすべきかを考えられる。ありがとな、セレン様」

セレン「いえ、これくらいなんて事ありません。しかし、私達としても海に様々な物が落ちてきて汚れてしまうのは困るのです。どうか早めに対処していただけますか？」

ベロニカ「ええ、それはわかってるわ。こつちも無視できないから」

セレン「また何かあればご協力します。それでは」

ユグノア城 玉座の間

イレブン「あの幽霊はかわいそうだとは思ったけど、流石にやりすぎだよね」

セーニャ「そうですよね。全てを失って家族や周りからも蔑まれたのは心中お察ししますが、呪いまでかけてしまうのは……」

グレイグ「自分の息子に呪いをかけて、息子の家族は海に引き摺り込むと言っていたな。やはりグリーンはあの幽霊の遠い祖先なのではないか？」

シルビア「可能性は高いと思うわ。あの赤い髪もそうだけど、目だってほとんど同じだったもの」

マルティナ「ねえ、ラーズ。グリーンはナギムナー村で育ったって言ってたわよね。ステラさんだったかしら？グリーの育て親なら何か知ってるかもしれないわ」

「ラース」だ。話を聞きにいつてみるか」

ベロニカ「へえ、グリーってナギムナー村の出身だったの。となると、あの幽霊もナギムナー村の出身の可能性が高いわね」

カミュ「あの人魚の呪いとか言ってる村だ。他にも呪いとかで恐れられている人がいても不思議じゃなさそうだな」

幽霊騒動3

ナギムナー村 元孤児院

ステラ「まさかグリーン君にこんなにたくさん知り合いがいたなんて」

ステラは全員にお茶を出している

ロウ「グリーの育て親と聞いたのじゃが、少しその事について尋ねてもよいかの？」

ステラ「はい。私に答えられる事であれば」

ロウ「グリーの家族についてなのじゃが、過去に村の皆から恐れられていたという話はあったかの？」

ステラ「……………呪いの事でしょうか」

ベロニカ「そう！呪い！何か知ってるの？」

ステラ「グリーン君の先代の親から続く呪いです。海の呪い。不思議な事にグリーン君の曾祖父から全員海で死んでしまっているのです。例えば砂浜にいたとしても、何故か波に吞まれてそのまま亡くなってしまうのです」

ラーズ「話と一緒だ。となると、グリーの祖先はあの幽霊って事か」

マルティナ「グリーもその呪いに？」

ステラ「おそらくは。私が幼い頃から海には近づけなかったのも、グリー君自身も怖がって海には近づかなかったようです。ですが、そんな呪いのせいでグリー君はこの村から常に邪魔者扱いされてきました。親もグリー君が一歳の時に海で亡くなり、孤児となったグリー君をここで私が育てていました」

イレブン「グリーにそんな過去が……」

ロウ「じやが、それよりもっと前の話は知らんかの？赤い髪をして目に十字の傷痕があるやつがこの村に昔おらんかったかの？」

ステラ「その特徴はわかりませんが、グリー君のお父さんが一度話していた事があります。自分のおじいちゃん、つまりグリー君の曾祖父の方が自身の父を村から除け者にしたそうなんです。その父が亡くなってから海の呪いは始まったとされています」

シルビア「それよ！今、実はその除け者にされたグリーちゃんの高祖父の方が幽霊ちゃんになって暴れまわってるの」

ステラ「ゆ、幽霊!？」

セーニヤ「はい。信じ難いかもしれませんが、実際に暴れているんです。そして、その幽霊が言うには自分の息子から呪われていると恐れられた事を根に持ち、自身の家族に本物の呪いをかけて海に引き摺り込んでいるそうなんです」

ステラ「それが……………あの呪いの始まり。そうだったんですね……………お渡ししたい物があります」

ステラは奥に向かっていき、ある古い本のような物を持ってきた

カミュ「これは？」

ステラ「これはグリー君の曾祖父の方が書いたと言われている物です。中身には自身の父に対しての深い謝罪と後悔が綴られています。これを見せれば、もしかしたら収まってくれるかもしれません」

ロウ「なるほど。そんな物があったか。ありがたい。大切に使用せてもらおうでしょう」

夕方、デルカダール城 大広間

マルティナ「今日はもう遅くなっちゃったし、皆泊まっていつて。お父様には話しておくし、明日はその本を見せにいかない」と

ペロニカ「ありがとう、マルティナさん」

シルビア「また集まるより同じ場所にいた方がいいものね」

その時、グリーとマヤが帰ってきた

マヤ「あ、イレブン達全員揃ってる！兄ちゃん、姉ちゃん、おっちゃんただいま！」

グリー「お疲れ様です、皆様」

ロウ「グリーよ、お主の呪いの原因がわかったんじや」

グリー「……………え……………そ、それって海の呪いの事ですか？」

マヤ「え？な、何でおじいちゃんがその事知ってるの？」

カミュ「実はな」

カミュはマヤとグリーに今までの事を話した

グリー「……………僕が生まれる前にそんな事が……………」

マヤ「でも、だとしたらグリーさんは全く関係ないじゃん！何でそ

の人が悪いのに遠い家族だからってずっとそんな呪いにかからな
きやいけないの！」

セーニヤ「ママ様の言う通りですわ。あの方は少しやり過ぎていま
すわね」

グリー「あの…… 明日僕も連れていってくれませんか？自分の家
族が間違ったのなら、僕も同じ血を持つ家族として謝らなきゃいま
せん。危険なのはわかってはいるのですが、僕が何とかしなくちゃいけ
ない気がするんです」

グリーは全員に頭を下げている

ラーズ「実はステラさんからグリーの曾祖父が書いたと言われてい
る謝罪の本を借りた。明日はこれを見せてみて変化を見てみよう
と
思っていたんだ」

グリー「僕がやります。この呪いはもう終わりにしたいんです。こ
れから先、こんな事で苦しむ人が生まれてこないようにするんです。
どうか、僕自身の家族の呪いに終止符を打たせてください！」

グレイグ「…… どうする？イレブン」

イレブン「…… わかった。明日はグリーも来て。それでグリー
の高祖父の人にこの本を読んであげて。でも、危ないと思っただらすぐ
に引き上げるからね」

グリー「ありがとうございます！」

マヤ「グリーさん、大丈夫？」

グリー「少し怖いけど、ちよつとの勇気で長かった呪いが終わるか
もしれないなら、僕頑張るよ！」

マヤ「応援してるからね！」

グリー「ありがとう、マヤさん」

幽霊騒動4

次の日、海底王国ムウレア

グリー「わあ〜……………。凄い……………。海つてこんな景色だったんだ」

グリーは周りをキョロキョロと目を輝かせながら見渡している

シルビア「ここは特に綺麗なものね〜。本当見惚れちゃうわ」

ラース「グリーは昔から海に近づく事すら無かったんだよな。だから海の景色は知らなかったのか」

グリー「はい。今も自分が海の中にいるなんて考えられないですけど、特に異変もないですし安心しました」

マルティナ「人魚や魚人もいるのよ。人間には興味があるみたいだから話しかけるといろんな話を聞かせてくれるの」

グリー「人魚は呪いの話でしか聞いたことないから少し怖いなあ」

イレブン「あまりその呪いの話はしないでね。それに、お話に出てくるような悪い人魚はいないから大丈夫」

グリー「そうなんですか？イレブンさんが言うなら安心できます」

ムウレア城 玉座の間

セレン「また来てくださいましたか。そしてグリー、あなたも一緒とは」

グリー「へ？ど、どうして僕の名前を？」

セレン「ふふ、あなたが小さい頃から知っていましたよ。海を遠くから羨ましそうに見つめるあなたを。誰よりも海に憧れるような視線はとても印象的でしたから」

グリー「あ……。は、恥ずかしいな……。子どもの頃ですよ」

セレン「そして、その赤い髪に目元。あの幽霊の血筋でもありませんか。呪いはしっかりとあなたにもかかっているようですね。今は私の結界で守られています、この国から離れば即座にあの幽霊に引き摺り込まれるでしょう」

グリー「やつぱり……。僕、それでもその幽霊に話をしたいんです。どうか許してくれないかと思つて……。あの人の悲しみを少しでも和らげてあげたいんです」

セーニヤ「セレン様、どうかグリー様をお守りしてはいただけけない

でしょうか」

ロウ「グリーの思いを無下にしたくはないんじゃない」

セレン「わかりました。グリー、これからこの国を離れてあの幽霊の元へ行きます。ですが、あなたは私の側から離れないでください。離れればすぐにでもあの幽霊によつて海に沈められます」

グリー「はい！ありがとうございます！」

海中

カミュ「昨日と同じ場所まで来たな。上に上がればいいのか？」

セレン「はい。どうやら白の入り江に近いようですね。そこに上がった方が安全だと思います」

グレイグ「了解した。このまま上がっていこう」

白の入り江

ロミア「あら？イレブンさん。お久しぶりです、それに皆様まで」

ペロニカ「ロミア、久しぶり。少しお邪魔してもいい？」

ロミア「はい。実はここ最近怖い幽霊のような方が近くで暴れてて怖かったんです」

グリー「こ、ここにも人魚がいるなんて」

ロミア「あら？初めての方ですね。こんにちは」

グリー「こんにちは」

イレブン「グリー、挨拶はその辺にした方がいい。来たよ！」

遠くから幽霊が猛スピードでこっちに向かってきた

幽霊「貴様の気配は……！我が息子の血筋!!許さん……、許さん!!」

ロミア「キャアツ！」

マルティナ「ロミア、あなたは隠れてて！ここは危ないわ！」

ロミア「は、はい！」

グリー「あなたが、僕の……高祖父ですか」

グリーは幽霊に近づいていく

ラース「おい、グリー！それ以上は危ないぞ！」

幽霊「もつとこつちへこい。その体、海に沈めてやる!!」

ロウ「グリー、それ以上進んではならん!!」

ロウはグリーの手を引っ張る

グリー「はっ!!あ、あれ、僕、一瞬気を失って……。ロウ様、ありがとうございます」

幽霊「チツ！」

グリー「あなたが操っていた……んですか？」

カミュ「やっぱりグリーだと危ないかもしれねえぞ。足も震えてる。怖いのはわかる。俺達が代わった方が」

グリー「いえ、カミュさん、もう大丈夫です。スウ……」

グリーは深呼吸している

パチン！

グリーは自分の頬を叩いた

グリー「僕の名前はグリーと言います。僕の御先祖様、お名前を聞いてもいいですか？」

幽霊「そんな事などどうでもよい！私を蔑んだ息子の血筋を引くお前を殺してやる！」

グリー「……………そうですよ。僕の家族がこれまでにあなたにしてきた酷い所業の事は知っています。この本に全て書いてありました。とても許されるべきものではありません。ですが!!どうか、もう許していただきたいのです！」

あなたの息子は自分の父親に対しての所業の事をとても悔やんでいました！もちろん、謝っていました。きつとこれだけじゃあ、あなたの怒りは到底解けないと思います。だから僕も、あなたに心からの謝罪をします！本当にすみませんでした!!」

グリーは地面に頭を擦り付けて土下座をしている

幽霊「……………」

グリー「もうこんな事は二度としません！家族だけでなく、周りの人達も大切にしていきます。あなたのような、悲しんだまま死んでいく事がないように！あなたの事も忘れません。お墓も立てて、僕の家

族がこれからもずっとあなたに謝り続けるようにしていきます。

だからどうか、許してくれませんか。僕に!!これからの人生を楽しませてください!!」

幽霊「……………」

幽霊は黙ってグリーに近づいていく

シルビア「グ、グリーちゃん!幽霊ちゃんが来てるわよ!」

ベロニカ「私達で守らないと!」

ベロニカ達はグリーに向かって走り始める

幽霊「グウウウ、ウアアア!!」ジュワー

陸に上がると幽霊から黒い煙が出ている

全員「!?!」

幽霊「う……………」

魔物「くそ!!何だ!どうしてこいつから離れんだ!?!」

全員「魔物!?!」

グレイグ 「貴様が真の黒幕か！」

魔物「バレちまつたら仕方ねえ。そうさ！こいつがあまりにも邪な気持ちを持っていたからな。利用させてもらったのさ」

セーニヤ 「死者を弄ぶ邪なる魔物！許せませんわ！」

グリー「イレブンさん、皆さん、僕もこんなふざけた魔物許せません。僕の家族も全員馬鹿にしたこいつをどうかやつつけてください！」

ラーズ「ああ、任せろグリー！こんなやつ、すぐにぶっ飛ばしてやる！」

死者の遣いがあらわれた

ラーズ「イレブン、バイキルト！」

イレブンの攻撃力が二段階上がった

イレブン「つるぎのまい！」

シルビア「ラーズちゃん、バイキルト！」

ラーズの攻撃力が二段階上がった

セーニャ「スクルト！」

全員の守備力が一段階上がった

魔物「眠れ！」

シルビア「あ……スウ」

シルビアは眠ってしまった

魔物「暗黒の吐息！」

イレブン達の呪文の威力が低下した

ラーズ「目覚めよ！ザメハ！」

シルビア「ハッ！ありがとう、ラーズちゃん！」

シルビアは目を覚ました

イレブン「つるぎのまい！」

セーニャ「ベホマラー！」

全員が回復した

魔物「ネイルスクラッチ！」

魔物「へへ〜ん！」

魔物はラースを挑発している

ラース「ちよつと気に触るが無視だな」

ラースには効かなかった

ラース「ばくれつきやく！」

会心のばくれつきやく

イレブン「つるぎのまい！」

シルビア「ほどばしる〜、アモ〜レ！」

セーニャ「氷結らんげき！」

死者の遣いを倒した

幽霊騒動5

幽霊「わ、私は何を……………?」

グリー「あ、お気づきになりましたか?」

幽霊「お前は、先程の……………。助かった、礼を言う。あの魔物に取り憑かれてから私の中の憎む気持ちを抑えられなくなっただけ。あの魔物に半分意識を持っていかれていたのだ」

カミュ「そうだったのか。じゃあ、あんたはグリーを恨んではいないのか?」

幽霊「……………。私の息子と同じ血筋の者を恨んでいたのは変わりない。だが、先程のグリーの言葉。しっかりと届いたぞ。お主は優しい心を持っておるのだな。自分には関係ない親の失態をあそこまで本気で謝ってくれるとは」

グリー「そ、そんな事ないです。それに、僕この本を読んで自分も除け者にされていたから、あなたの気持ちが少しわかる気がして。だから、誰かを許せなくなる気持ちもわかるんです」

幽霊「そうか……………。グリーよ、どうかそのままにいるのだ。誰かの痛みをわかる人であるのだ。そうすれば、私のような人でもない。呪いも生まれえない。もし私がグリーのようなであれば……………。こん

な事にはならなかった」

「幽霊はグリーに近づいて抱きしめた

グリー「!?!」

幽霊「私の大切な息子……………すまなかった……………。お前を憎んで
しまった父を……………許してくれ……………」

グリー「……………大丈夫ですよ。きっとあなたを待っています」

幽霊「ああ……………ありがとう。グリー、お主はもう自由だ。呪いは
解こう。親の事に巻き込んですまなかった。これからは幸せに生き
るんだぞ」

グリー「はい!」

幽霊はグリーを優しく見つめた後、静かに消えていった

イレブン「……………グリー、よかったね。呪いも解けて、親のしが
らみもなくなってる」

グリー「はい!皆さんののおかげです!本当にありがとうございますいまし
た!」

グリーは頭を下げている

グレイグ「気にするな。それに、グリーこそしつかりと思いを届けたではないか。それが無ければきつと解決にはならなかっただろう」

シルビア「グリーちゃんの心が伝わって本当によかったわね！話し合えばわかりあえるのね！」

ラース「さて、解決したし帰るとするか」

マルティナ「そうね。マヤちゃんやステラさんにも報告しておかないと」

グリー「ステラさんには僕から伝えておきますよ」

その後、仲間達もそれぞれの場所へ戻った後

デルカダール城 大広間

マヤ「よかった。本当によかったよ、グリーさん！」

グリー「うん。僕も平和に終わって安心した」

マヤ「呪いにもう苦しめられなくてよくなったんだもんね」

グリー「そう。だからさ、ちよつと僕の用事に付き合ってくれない？」

マヤ「いいよ！」

グリー「ありがとう、マヤさん」

デルカコスタ地方 海岸

グリー「……………」

マヤ「グリーさん、頑張れ！」

グリーは裸足で恐る恐る海へ歩いていく

グリー「あ…………… 冷たい。えへへ、う、海に入れてる…………… やった!!」

マヤ「やったじゃん、グリーさん！本当に海にいても平気になったんだね！」

グリー「うん！これが、海の実感……………。冷たくて気持ちいい……………」

マヤ「じゃあさ、このまま遊んじゃおうー！こっちはやっつてさー！」

バシヤツ!

マヤはグリーに水をかけた

グリー「わあっ!! ビ、ビックリしたじゃん! もう!

マヤ「いしし、ごめん。ほら、グリーさんもやってみて!

グリー「こ、こうだよね? えいっ!

バシヤツ!

マヤ「そうそう! 私も!

グリー「あ! そんなにかけるのズルい! それなら僕だっ!

しばらく二人で水をかけあっていた

その後

二人「ハア…… ハア……」

二人は海岸で倒れている

マヤ「ちよっと、はしやぎすぎちやったかな」

グリー「そ、そうみたいだね。服とか完全にびしょ濡れだもん」

マヤ「でも、楽しかったでしょ？」

グリー「うん！海ってこんなに綺麗で気持ち良くて楽しかったんだね！」

マヤ「だよねー。私も海が楽しいって知ってからは海が好きになっ
たもん」

グリー「ねえ、マヤさん。僕はさ、マヤさんといるといつも楽しいっ
て思えるんだ。これからもさ、ずっと一緒にいてくれる？」

マヤ「もちろん！グリーさんと一緒に私も楽しいから！」

グリー「ほ、本当!? えへへ、嬉しいなあ」

その夜、デルカダール城

マルティナ「で、そうやって二人ではしゃいでたら仲良く風邪引い
たってわけね」

マヤ「ズズ……. そ、そうみたい」

グリー「すみません……。まさかこんな事になるとは」

ラース「全く。子どもみたいにはしゃいでよう。楽しかったか？」

二人「うん！」

ラース「それならよし！」

カミュ「よしなわけあるか。今度からは冷やさないようにするんだぞ」

マヤ「わく、兄貴が二人いる……」

グリー「マ、マヤさん、大丈夫？」

グレイグ「おいグリー、それは俺だ。マヤは右だぞ」

マルティナ「思ってるより重症ね。熱も高いし、しばらくはここで看病しておきましょう」

ロウの異変

自分の勝手な解釈を入れてみました。ロウはどうして王様だったのだろうかと気になったので。

幽霊騒動から一ヶ月後、ユグノア王国

ユグノア城　ロウの部屋

ロウはカレンダーを前にして考え事をしていた

ロウ「(そういえば今日は……………。またこの日がやってきたか……………。話し合えばわかりあえる……………。わしも変わらねばならん(う)」

ロウはゆつくりと窓から外に出ていった

ユグノア城下町　町の外れ

ロウはそこに一つの小さなピンクの花束を置き、手を添えた

ロウ「……………」

ザツザツ

誰かが走ってきた

兵士「ロウ様！やはり外に出ておられたのですね！」

ロウ「ん？ほほ、バレてしまったか」

兵士「全く。イレブン様もあまり頻繁に抜け出すのを心配なさっているんですよ。そこで何してたんですか？何もありませんよ？」

ロウ「なに、少し花を見つけてのう。それを見ておったんじや」

兵士「花？あんな所にも咲いてたんですか。あ、イレブン様がロウ様を探しておりましたよ。戻りましょう、ロウ様」

ロウ「そうか。それは早く戻らねばな」

ユグノア城 玉座の間

兵士「イレブン様、やはりロウ様は外におられましたよ」

ロウ「ほほ、すまんのう。イレブン」

イレブン「あ、よかったー。部屋にいなくて驚いたけど、もしかしてとは思ってたよ。おじいちゃんに頼みたいお仕事があったよ」

ロウ「そうか。今日も一日頑張ろうかの」

夕方

ロウ「これでどうかの？イレブン」

イレブン「ありがとう、おじいちゃん！やっぱり王様やってるところ
ういうお仕事多くなるよね。僕も早くおじいちゃんくらいに得意に
ならないと」

ロウ「……………」

イレブン「おじいちゃん？」

ロウ「ん？どうしたんじや？イレブン」

イレブン「…………… ううん。何でもない。ありがとう、助かった
よ」

次の日、デルカダール城 玉座の間

マルティナ「え？ロウ様が？」

イレブン「うん。少し変なんだよね。考え事が多いっていうか、兵
士達が言うにはよく遠くを見つめてるんだって」

ラース「ついに年か？」

グレイグ「ラーズ、あまりふざけるんじゃない。ロウ様にしては確かにおかしいな。何か考えているとしても、あまり表に出る方ではないのに」

イレブン「僕じゃあよくわからなくてさ。マルティナやデルカダール王様ならおじいちゃんの事もっと詳しいから何か知らないかなって思ってる」

マルティナ「うーん……。私もロウ様が何を考えてるかはよくわからないの。昔から隠してる事は多かつたし、それを表情とかで探るのも難しかったもの。実際に見てみたら変わるかしら」

ラーズ「王様なら何か知ってるかもな。聞いてみるか？」

イレブン「じゃあそうしてみようかな」

王の私室

デルカダール王「ふむ。ロウの様子がおかしい……。とな」

イレブン「はい。僕の勘違いの可能性もあるんですけど、違和感があつて」

デルカダール王「いや、イレブンがそう言うのならおそろく間違っ

てはおらんだろう。ふむ………。もしや………。イレブンよ、今日の日付を教えてくださいませんか？」

イレブン「え？二十五日ですよ」

デルカダール王「やはりか。イレブンはロウはアーウィンが王を務める前のユグノア王だった事は知っているな？」

イレブン「は、はい」

デルカダール王「ロウの家族は知っておるかの？」

イレブン「おじいちゃんの家族？それって、僕やお母さん以外って事ですか？」

デルカダール王「うむ。そうだ」

イレブン「言われてみると………。誰も知らないです」

デルカダール王「そうであったか。ロウは三人兄弟の末っ子だったんじゃない」

イレブン「おじいちゃんに兄弟が!?初耳です」

デルカダール王「ここでイレブンに質問だ。普通三人兄弟となれば、王位は誰が貰う?」

イレブン「えっと、長男の人が貰います。……あれ?何でおじいちゃんが?」

デルカダール王「わしが言えるのはここまでじゃ。後は調べてみるか本人に聞いてみるとよい」

イレブン「わかりました。ありがとうございます、王様」

デルカダール王「なに、これくらい気にするな。またいつでも来てくれ」

ユグノア城 資料室

イレブン「あつた、ユグノアの歴史。ここに書いてあるかな?」

一時間後

イレブン「駄目だなー。賢王って呼ばれてたのは知ってるし、人柄がいいってのもわかるしなー。もう少し調べてみよう」

その夜、イレブンの部屋

イレブン「やっぱりあの悲劇のせいでそれより前のユグノアの情報が少ないや。おじいちゃんに直接聞くしかないかな」

ロウの部屋

コンコン

イレブン「おじいちゃん、イレブンです。起きてる?」

シーン

返事はない

イレブン「(寝ちやったかな?) おじいちゃん?」

ゴニヨゴニヨ……

イレブン「(何か聞こえる……) 入るね」

ガチャ

イレブンが部屋に入るとロウはベッドに横になっていた

イレブン「あ、寝てたんだ。悪い事したな」

ロウ「うう………」

ロウはうなされている

イレブン「!?お、おじいちゃん?大丈夫?」

ロウ「すまん…………… すまん…………… 兄上……………」

イレブン「!?おじいちゃん!!」

ロウ「む?…………… おお、イレブン。一体どうしたんじや?」

イレブン「ちよつと聞きたい事があつて部屋に来たらおじいちゃんがうなされてたから」

ロウ「お、おお、そうであつたか。すまんかつたのう」

イレブン「ううん、大丈夫。あのさ、おじいちゃんつてさ、兄弟がいたんだよね?」

ロウ「!?な、なぜその事を……………」

イレブン「あ……………。今うなされてる時に兄上つて言つてたからや」

ロウ「…………… そうだったか。イレブンの言う通りじや。わし

には兄上が二人おってな。わしは三人兄弟だったんじや。長男のタキ兄上、次男のチョウ兄上、そして末っ子がわしだったんじや」

イレブン「どうしてさ、おじいちゃんはその二人がいたのに王様になれたの？」

ロウ「……………すまない、イレブンや。わしには、少々辛い思い出なんじや。あまり話したくないんじや」

イレブン「あ、そ、そうだよな。ごめんね、突然そんな聞いちゃって」

ロウ「いや、気にせんでよい。うなされておったわしを起こしてくれてありがとう」

イレブン「うん。おじいちゃんもいい夢見れるといいね。おやすみなさい」

ロウ「ああ、おやすみ」

ロウの後悔

それから三日後、ユグノア城

イレブン「おじいちゃん、大丈夫なの？」

ロウ「このくらい…… 何という事はない……」

ロウは顔色が悪く、足もおぼつかない様子で歩いている

大臣「ロウ様、無理をなさらずに。今日はゆっくり休んでいてください」

ロウ「じゃが…… わしにも、何か出来る事が」

イレブン「おじいちゃん、僕は大丈夫だから。おじいちゃんの今の仕事はゆっくり体を休める事だよ」

大臣「イレブン様の言う通りです。ほら、部屋に戻りましょう」

ロウ「むう、すまんもう、イレブン」

夕方 ロウの部屋

イレブン「おじいちゃん、ここ数日無理してない？」

ロウ「そんなはずはないんじゃないか？」

イレブン「本当？だって、仕事も頼んでない事も先にやってくれるし、確認してない書類とかも全部目を通してってくれるじゃん。そんなにたくさん働いてたらまた今日みたいに体調悪くなっちゃうよ」

ロウ「ユグノアが皆にとっていい国となってきたのが嬉しいだけじゃよ」

イレブン「それは僕も嬉しいけどさ、おじいちゃんもいてくれないと僕は困るよ。何かあるなら教えてね。協力するから」

ロウ「……………」

イレブン「おじいちゃん？聞いてた？」

ロウ「ああ、聞いておったよ。イレブンや、少し爺のわがままを聞いてはくれんか？」

イレブン「うん！何でも聞くよ！」

ロウ「ほほ、ありがとう。実は少し調べてた事があるんじゃない」

ロウは自分の部屋にある本棚から一冊の厚い本を取り出した

イレブン「なに？この本」

ロウ「これは世界の奇妙な出来事を纏めた本じゃ。その中の一つにとある出来事があつてな。これじゃ」

イレブン「えっと、ドウーランダ山の山頂で太陽が沈む時、周りが見えなくなった。近くにいた人でさえ、見えにくくなり目の前の世界が現実かどうかすらも判断出来なくなった。その時、私の近くに人影が現れた。」

こちらに何か話しかけてきたので、その人影の方へ向かおうとする
と周りが鮮明になり、はつきりと見えるようになった。私の足下は崖
の一步手前だったのだ。もしかやあれは死者の呼び声だったのだろうか。
現実と死者を交わらせる時間。これを黄昏時と呼ぶ事にした」

ロウ「これをわしもやってみたいのじゃ」

イレブン「…………… どうして？だって、どう考えても危ないじゃ
ん。そこまでして、死者に会いたいのか？」

ロウ「そうじゃ」

イレブン「……………そのおじいちゃんのお兄さん？」

ロウ「そうじゃ」

イレブン「理由は……………話せない？」

ロウ「……………いや、話そう。わしに二人の兄上がいたのは話したじやろ？二人の兄上がおったのに、なぜ末っ子であったわしが王となったのか気になるかの？」

イレブン「うん。どうして？」

ロウ「わしは幼き頃から本が好きでの。色々と読み漁り、様々な知識を持っておった。二人の兄上もわしにたくさんの本を買ってきてくれた。長男のタキ兄上は武道に優れた方だな。体術や武器を使えばかなりの強さじゃった。

次男のチョウ兄上は魔導に深く精通した方だな。魔法の知識では誰も敵わなかった。多少性格は違えどどちらも優しいお方で、誰にでも優しくかった。わしも二人の兄上を尊敬し、追いつこうと毎日必死じゃった」

イレブン「おじいちゃんが武道も魔法も出来るのはその二人のおかげでもあるんだね」

ロウ「そうじゃ。じゃが、ある日長男のタキ兄上が魔物との戦闘に駆り出された際、深い傷を負いそのまま戦場で亡くなった。そこで王位は次男であるチョウ兄上に渡ったのじゃが、既にチョウ兄上は結婚していてな。ユグノアから離れていこうとしておったんじゃ」

イレブン「それでおじいちゃんが？」

ロウ「実はそういう訳でもない。チョウ兄上与王様は激しく喧嘩となつてな。チョウ兄上はわしに相談しに来たんじゃ。若いわしは何を思ったか、その時にチョウ兄上なら王様としてもやっていけると王様の味方をして、チョウ兄上を引き留めたんじゃ。」

チョウ兄上はわしを見て失望した、と言つたんじゃ。わしはなぜそんな事を言われなければならんのかわからなくてな。ここで初めてチョウ兄上与喧嘩になつたんじゃ。お互いの意見が解決せぬまま、次の日チョウ兄上はユグノアから出て行つた。

それで仕方なく残つたわしが王位を継いだ、という訳じゃ。わしは望まれぬ王じやったという事じゃよ」

イレブン「そんな事が……。でも、おじいちゃんはそう言うけど、おじいちゃんは望まれぬ王なんかじゃないよ。だって、おじいちゃんは皆に優しいじゃん。」

皆からおじいちゃんは愛されてる。それは今も昔も変わらない。おじいちゃんは人望があるって言われてたもの。だからそんな事ないよ。僕もおじいちゃんが大好きだから」

ロウ「ほほほ……。イレブンは優しいのう」

イレブン「それで、その話と黄昏時の話はどう関係してるの？」

ロウ「そこも話さねばな。長男のタキ兄上とわしは最期の会話をする事はなかったんじや。次男のチョウ兄上とも喧嘩した日以来音信不通で。風の便りで病気で亡くなったとは聞いておった。

わしは二人がいなくなつてから、ユグノアはわしが守つてみせると意気込んでおつたのじやが……あの悲劇が起こつた。国は無くなり数えきれん程の死者が出た。わしは、国を任されたはずなのに何をしておろうか。

その後悔はこれからも消える事はない。そう思つておつたのだが、先日のグリーとの件で幽霊とも話し合えば分かり合えると知つた。グリーも勇気を出して自身の恐怖や家族との問題を解決した。それなら、わしもこのままではいかんと思つたんじや。

チョウ兄上がユグノアを出ていった日が数日前での。墓も何もなかったが、大樹に向けて祈りを捧げたがやはりそれだけではわしもやりきれぬ。だから兄上達と会つて謝罪し、チョウ兄上には喧嘩したままだった事も謝りたい。新しくできたユグノア王国で再びあの日の栄光を取り戻すようにして、と報告したい。

そしてもし、もし叶うのであればもう一度、あの二人と一緒に笑いたいんじや。わしが幼かった頃のように」

イレブン「…………… そっか。うん！わかった！協力するよ、お
じいちゃん！おじいちゃんの兄弟に会いに行こう！」

ロウ「おお、ありがとう、イレブン！」

イレブン「おじいちゃんの大事なやりたい事だもん。どんどんやつ
ていって後悔なんてないようにしたいもんね！」

ロウ「そうじゃの。それでは明日の昼に出発しようかの。場所は
ドゥーランダ山の山頂にある祠じゃ」

黄昏時の再会

次の日の夕方、ドゥーランド山 山頂

イレブン「ついたよ、おじいちゃん」

ロウ「やはりルーラはええのう。どこにでも一瞬じゃな」

イレブン「夕日がすごく綺麗だけど、まだその黄昏時？じゃないんだよね」

ロウ「そうじゃな。本には夕日が沈む時と書いてあった。まだ沈むには少々早いようじゃ」

イレブン「じゃあ少し夕日を見てよつか。ここって不思議な事がいっぱい起こる場所なんだっけ？」

ロウ「ここは生と死を結ぶ靈感あらかな場所。いわばあの世と最も近い場所じゃ。確かにここでなら死者と出会っても不思議ではなからう」

イレブン「やっぱり危ない気もするんだよね。おじいちゃん、あんまり離れないでね」

ロウ「わかつておる。わしも自ら進んであの世に行こうなどは思わんよ」

数十分後

イレブン「あ！おじいちゃん、夕日が……」

ロウ「沈み始めたの。ここからがその黄昏時とやらの始まりじやな」

イレブン「おじいちゃん、一応手を繋いでおこう」

ロウ「ああ、そうじやな」

イレブン「まだ周りにはつきり見えるよね。変化は特に無さそう」

ロウ「うむ。半分ほど沈んだら変わるかもしれんの」

数分後

二人の周囲はどんどん暗くなっていった

二人「!!?」

イレブン「こ、これって………」

ロウ「なるほど。周りが真っ暗になっていく。これは確かに周りが見えにくいとう。今までが明るかった分余計に暗く感じるとう」

イレブン「じゃあ、始まったんだ。黄昏時が」

ロウ「イレブン？」

イレブン「あ、あれ？おじいちゃん？どこ？」

ロウとイレブンはいつのまにか手が離れてしまっていた

暗くなる速度はとてつもなく速く、もうロウとイレブンにはお互いの距離も測れなくなっていた

イレブン「おじいちゃん！危ない事はしたら駄目だからね！その場所から絶対に動かないでね！」

イレブンの声だけが聞こえる

ロウ「ああ、約束しよう！」

??? 「ロウ…………… ロウ……………」

ロウ「!?こゝこの声はまさか……………」

ロウが声に反応して振り返ると

タキ「ロウ、まさかお主と再び会えるとは」

ロウ「!!お……… おお……… どれだけ夢見た事か………。タキ
兄上……… 間違いないのですか？」

タキ「ああ、そうだ。ロウよ、随分と歳を取ったな」

チョウ「ロウ、俺もいるぞ」

ロウ「チョ、チョウ兄上まで！う、うう……… わしは……… 二人にずっと会いたかった………」

タキ「そうだろう。わざわざこんな所まで来たのだ」

チョウ「ロウ、すまなかった！俺はあの日、お前に八つ当たりをしてしまった。今思えば何を馬鹿な事を。俺がもう少し心に余裕があれば、お前との最後が喧嘩したままで終わる事などなかったはずだろうに」

ロウ「チョウ兄上は悪くありませんぞ！わしが、兄上の事を考えず自分の考えを押し付けたのです。わしもずっと謝りたかった。本当

にすまない事をした。どうか許してほしい、チョウ兄上」

チョウ「ロウもまさか謝ろうとしていたのか。どうやらお互い様だったようだな」

ロウ「そんな事ありません！それに、わしは二人にユグノアを任せられたというのに……あの悲劇を起こしてしまった。二人が大好きであられた王国は見る影も形もなくなってしまった」

タキ「ロウ、あれはお主のせいではない。誰もお主を責めてなどおらん」

チョウ「そうだ。お前はよく頑張っていただろう。俺が去った後もユグノアの話は聞いていた。とてもよい国だ、とな。お前はよく頑張った。誇るんだ」

タキ「お父様もロウを褒めていた。お主は本当によくやってくれた。もちろん今もずっと頑張っているのを知っている。新しくユグノアを作り、また大きな国としてイレブンと共に支えておる」

ロウ「兄上………ありがとうございます………ありがとうございます………います」

ロウは泣きながら二人に近づこうとする

チヨウ「ストップだ、ロウ。それ以上はいけない。こつちと交わるにはまだお前は早いだろう」

ロウ「そ、そうでした。うつかりする所でした。こんな所でまだ死ぬわけにはいかないんです。大切な孫との約束ですので」

タキ「イレブンは本当に優しい孫だ。お前の娘、エレノアによく似ている」

チヨウ「アーウィンとエレノアだったな。よく話してるんだ。いつもイレブン、イレブンって言ってるんだぞ」

ロウ「ほほ、二人とも仲良くやっておるようでわしも嬉しいのう」

タキ「エレノアからはロウの話も耳にする。ロウ、部屋にそういう本を置くのはやめておきなさい。気持ちはわかるが、一国の王としては少々考えものだ」

チヨウ「出た、タキ兄上の真面目すぎる一言。ロウ、今のままでいいと思うぞ。少しくらいそういう所があった方が国民達に好まれるんだからな」

タキ「チヨウ、お前はまたそうやってロウを甘やかすのだな」

ロウ「ほほ、懐かしいのう。わしは、またこのやり取りをしたかったんじゃ」

チョウ「だろうな。ロウは俺達大好きだったもんな」

タキ「先程のロウの泣いている姿で思い出した事がある。昔、ロウが幼い頃に夜中城のトイレにうっかり閉じ込められて、一晩中泣いていた事があったな」

ロウ「そ、そのような昔は早くお忘れください、タキ兄上!!」

全員「ハハハハハ!!」

辺りから夕日の光が無くなってきた

タキ「おっと、どうやらここまでのようだな。ロウ、久しぶりにお主と会えて嬉しかったぞ」

チョウ「ロウ、まだこっちは早いぞ。もっとゆっくりそっちで過ごしてくるんだ。俺達はいつでも待ってるからな。お土産話たっくさん聞かせてくれ」

ロウ「はい。次会う時までの約束ですね。ロウ、必ずや兄上達が満足するようなお土産話を持っていきましよう」

三人は静かに見つめ合うと二人の姿は消えていった

それと同時に夕日が全て姿を隠してしまった

イレブン「あ！おじいちゃん！よかった、お兄さん達には会えた？」

ロウ「……………」

イレブン「おじいちゃん？」

ロウ「イレブンや、わしは兄上達と新しく約束をしたぞ。皆が満足するようなどっておきのお土産話を作ってくるとな」

イレブン「！ふふ、そっか。お兄さん達には無事に会えたんだね。僕も会ってみたかったな」

ロウ「二人とも変わっておらんかった。夢のような楽しい時間じゃった。さあ、イレブンよ！明日からまたユグノアのために頑張るぞ！」

イレブン「うん！おじいちゃん、頼りにしてるね！」

ロウ「任せておくのじゃ！このロウ、孫のためなら何でも力を貸す

ぞ
」

遺跡泥棒

それから一ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

カミュ「遺跡泥棒？」

マルティナ「ええ、そうなの。ここ一ヶ月近くで様々な場所の遺跡に納めてあるお宝が盗まれてるのよ」

ラース「大した事ないものもあるんだが、中には結構重大なものもあってな。しかも犯行も手早くて、証拠も少ない。捕らえるのにかなり手を焼いていてな」

カミュ「だからって俺に何とかしろってか？」

グレイグ「捕らえられるのならばいいが、カミュに頼むのはそういった情報収集だ。我々だけだといいい情報が掴めなくてな」

マルティナ「ラースにお願いしたのだけど、どうも失敗に終わったみたいなの」

カミュ「兄貴も一応そういうのには慣れていただろ。結構難敵なんだな」

ラース「全くだ。それに俺も有名になりすぎたみたいでな。どこかで俺の情報が出て警戒されたようで、情報も適当なものが多かった」

カミュ「だが、俺だってここ数年以上あつちの世界とは関わってねえぞ」

ラース「だろうな。怪しい気配がしなくなったもんな。いいやつのが心配だぞ」

カミュ「う、うるせえ！お前らお人好し共のせいだろうが！」

マルティナ「まあまあ。それでお願ひしたいのだけどいい？もちろん報酬は出すわ」

カミュ「わかったよ。ただ、俺も勇者の仲間として有名になってきてる。兄貴と同じ結果になる可能性もあるって事も考えておけよ」

グレイグ「それはわかっている。だが、あの世界に慣れているのはラースを除けばカミュだけなのだ。任せたぞ」

その後、カミュとマヤの部屋

カミュ「つつたつてなあ……………どうしろってんだよ。ま

あ………少し潜ってみるとするか。有名な場所だと下町だったがもう無くなっちゃったからな。それなら残りは………」

カミュは支度を始めた

ダーハルーネの街 裏道

街の外れにある通りは正面にある綺麗な街並みとは違い、少し暗く薄汚れた雰囲気となっている。地べたで横になる者やいかにもな雰囲気のお店、怪しい取引などが隠れもせず行われている

カミュ「久しぶりの雰囲気だな。さて、知ってるやつはどこに行くか」

カミュは迷わず歩いていく

バニーや怪しい商人からの誘いには軽く断りなどを入れてどんどん奥へと進んでいく

店内

カミュ「おやっさん、いるか？俺だ、カミュだ」

カミュがある店に入り、声をかけると奥から大柄な男性が現れた

親父「そ、その声カミュか!!お前今まで何してたんだ!姿も話も聞かなくなっちゃまって心配してたんだぜ!」

カミュ「ちよつとな。少し聞きたい事があるんだがいいか?」

「カミュは金を見せながら言った

親父「カミュが情報をほしがるなんて珍しいな。んで？何だったんだ？」

カミュ「ここ最近遺跡の宝をどんどん取っていくやつがいるって聞いてな。同業者の話くらい少しは知っておかねえとな」

親父「あー、あいつか。ブダンだろ？結束のブダン。数多くの仲間がいてな。その仲間と連携を取って遺跡を進んでいくみてえだ」

カミュ「ほう。そのブダン本人の特徴は？」

「カミュは袋から金貨を渡した

親父「へへ、ありがとよ。特徴は紫の髪に大きな葉巻きをいつも口にしてるな。まあまあ大柄だぜ。俺くらいじゃねえかな」

「カミュ」なるほどな。わかった。サンキュー、おやっさん」

親父「しかし、どうしてブダンの情報を？また再開すんのか？」

カミュ「……まあな。獲物は邪魔されたくねえだろ？」

親父「お前さんから獲物を横取りするほど命知らずとは思えんがな。ただ、最近出てきたやつだからな。お前を知らない可能性もあるか」

カミュ「おやつさんも体には気を付けろよ、じゃあまたくるぜ」

グロツタの街

女店主「へえ、ブダンを知りたいのね。いいわよ、少しなら教えてあげる。ブダンはね、とつても作戦を立てるのがうまいの。遺跡でどんな事が起こっても対策しているそうよ。そのおかげか仲間からの信頼も厚い。ブダンも仲間を見捨てる事はないそうよ」

カミュ「なるほどな。情に熱いとは珍しいな」

カミュは袋から金貨を出した

女店主「あら、ありがとう」

カミュ「他に情報はあるか？」

女店主「うーん、どうしようかしら」

カミュ「これでどうだ？」

カミュは更に二枚金貨を出した

女店主「!?あら、それじゃあ教えてあげる。次のブダンの獲物はデルカコスタ地方の遺跡よ。名前は確か……………満月の石だったかしら」

カミュ「(満月の石……………大きな宝石の一種だったな) ありがとう、また来るぜ」

それからもカミュは様々な場所でブダンについて情報を集めた

カミュ「(ブダンってやつは遺跡の情報をほしがる……………か。事前準備はしっかりするタイプなのか。だとしても……………変だな。まあ、一旦デルカダールに帰るか)」

その後、デルカダール城 玉座の間

カミュ「集まった情報を審議したらこれらが有力だと思うぜ」

マルティナ「ラース、あなたよりよっぽど色々集めてきてくれたわよ?」

ラース「い、いいだろ別に!俺はカミュみてえに盗賊やってたわけじゃねえんだからよ!」

グレイグ「ありがとう、カミュ。報酬は金と物どれがいい?」

カミュ「あー、それなんだがよ。もう少し調査してもいいか？」

マルティナ「え？いいけど、どうしたの？」

カミュ「少しそのブダンってやつが気になる。遺跡を進む上で仲間なんてのは本来必要ない。足を引っ張られたり折角の宝を横取りされたりするからな。だから遺跡を進むのには基本一人でいくのが常識なんだ」

ラース「確かにその方が合理的だな。だが、ブダンは違うと」

カミュ「ああ、もしかしたらこの情報が間違ってる可能性はあるが少し気になってな。次の目的は満月の石って言った。その遺跡に貼ってもいいか？」

マルティナ「自分の目で確かめるって事ね。いいわよ」

グレイグ「最悪満月の石は取られてもいいが、カミュくれぐれも危なくなったら逃げるのだぞ」

ラース「そうだな。本当に仲間達がたくさんいるとなると遺跡みたくない狭い場所では敵わない。そういう判断は得意だろうが、念のためな」

カミユ「ああ、わかつてるぜ」

ブダン

その後、森の遺跡

カミュ「よつと。ここか、その満月の石がある遺跡は……………魔物の気配もありか。まあまずは少し中を調べておくか」

遺跡内

カミュ「結構ボロいんだな。こことか抜けそうじゃねえか。道が複雑じゃねえといいんだが……………）そんなわけない、か」

カミュの前には三つの分かれ道があった

カミュ「(さて、どうしたもんか。様子見だから適当でも構わねえが、大抵こういうのは…………… この道は魔物の気配が奥からするな。残り二つか)」

カミュは右端の道を選び、左の道に入ってしまった

カミュ「!?よつと」

バタン！

カミュの足下が突然抜けた

カミュ「危ねえ、危ねえ。少し気付くのが遅かったな。早いとこ感覚取り戻さねえと」

その後、いくつかの罫を回避しながら進むと大きな扉が現れた

カミュ「この先にあるのか？まあ、一旦ここまでだな。ブダンに見られたらまずい。戻るとするか」

その後、夜 森の遺跡前

ガサ

カミュ「きたか」

ブダン「着いたぞ、てめえら。ここがその満月の石がある遺跡だ」

少し大柄な紫の髪をして葉巻きを口にした男が三人ほど仲間を連れてやってきた

子分A「へえ、森と一体化しててわかりにくいんすね」

子分B「今回もお宝取れますよね!？」

ブダン「たりめえだろ。まあ、お前らの力も借りるがな」

ブダン達が遺跡に進もうとした時

カミュ「ちよつといいか？」

ブダン達「!？」

ブダン「だ、誰だてめえ！」

カミュ「急に悪いな。だが、俺もこの満月の石を狙っててな。獲物を横取りされたくはねえんだ」

ブダン「ほう……お前もこの宝を狙ってたのか。一人のようだが、腕はたつのか？」

カミュ「まあ多少はな」

子分C「!!?ブ、ブダンさん、こいつあの盗賊カミュです！狙ったお宝は逃がさないって言われてたやつですよ！」

ブダン「な、なに!？」

カミュ「俺の事知ってたのか」

ブダン「……カミュとか言ったな。俺はブダン。お前と同じ盗賊だ。どうだ？同じ宝を狙うなら手を組まないか？」

カミュ「俺とお前が？宝を横取りする気なんじゃねえのか？」

ブダン「横取りはしねえよ。少し調べたい事があるだけだ。それさえ終われば宝に用はねえ。カミュの好きにしな。どうだ？」

カミュ「…………… 本当だろうな？」

ブダン「ああ、本当だ。今までの宝も調べ終わったら他の人に渡してるしな。今回も同じようにするつもりだったが、必要ならお前に渡すさ」

カミュ「…………… わかった。一旦手を組もう。ただ、裏切ったらその場で死んでもらうからな」

ブダン「怖えなあ。まあ、よろしくなカミュ」

カミュ「んで？ブダンはこの遺跡は何か知ってるのか？」

ブダン「多少はな。罨が多めでボロボロになっている床や壁ばかりってところだな」

カミュ「魔物もいるからな。戦闘はできるだろ？」

ブダン「任せな。カミュこそ慣れてそうだな」

カミュ「まあな。俺が戦闘出来なかったらこんな所これねえよ」

ブダン「ん？この床、朽ちてるから落ちやすい。お前ら気を付けろよ」

子分達「へい！」

カミュ「いつもこんな仲間連れてんのか？」

ブダン「そうだ。こんな世界でも多少話のわかるやつはいる。他にも数人いるが、今日はこいつらだけだ」

カミュ「！奥から魔物が来てるぞ」

ブダン「そのようだな。カミュ、お手前を見せてもらおうか」

カミュ「人使いが荒いやつだぜ」

その後

ブダン「つ、強えな、カミュ。一瞬だったじゃねえか」

カミュ「無駄な事してられねえからな。ほら、さっさといくぞ」

子分A「こ、こんなに強い人がいるなんて…」

しばらくするとあの三つの分かれ道に着いた

子分B「どれが本物ですか？」

子分C「こういう時は大抵どれかが罠なんですよね」

ブダン「だな。罠は……あの左の道か。真ん中にいくぞ」

カミュ「ちよつと待てよ。もつとよく調べろ。この左の道の端は罠の範囲外だ。進む価値はあるんじゃないか？」

子分A「あ、本当だ。よく見ると罠の跡が見える」

ブダン「そ、そうだったか！流石大盗賊だな！」

カミュ「(こいつ、実力自体は大した事なさそうだな)」

ブダン「かつこ悪い所見せてばかりは嫌だな。ここから見てるよ」

カミュ「わかったから注意してろよ」

その後

ブダン「ここは罠だな。真ん中を真っ直ぐ通るぞ」

子分達「へい！」

ブダン「伏せて進め。その方が安全だ」

子分達「へい！」

カミュ「(流石に罠の対処方法は知ってるか。まあ、避けた方が早い
が)」

そして大きな扉の前に辿りついた

カミュ「ここがその満月の石がある場所か？」

ブダン「だろうな。お前ら、警戒はしておけよ。前みたいに大騒ぎ
になるのはごめんだ」

子分達「へい！」

ブダンがゆっくりと扉を開けると

ブダン達「おお！」

中には穴が吹き抜けになっており、月の光が差し込んでいた

光のある場所にはキラキラと輝く黄色い満月の石が飾られている

子分B「ブダンさん、やりましたね！あれが絶対満月の石ですよ！」

ブダン「いや待て！罨の可能性もある！」

カミュ「んなのねえよ」

カミュはスタスタと宝石に向かって行き、宝石を手を取った

子分C「ほ、本当に無かった」

カミュ「床の変化もない。魔物の気配もない。残るはこの宝石そのものが偽物の可能性だが……………」

カミュは握ったり、軽く叩いたり光に照らしたりしている

カミュ「本物みたいだぜ」

ブダン「お、おお！だが……………黄色か。俺の探してる物とは違ってみてえだな。約束通りそれはカミュの好きにしな」

カミュ「いいのか？そんな色の違いだけで判断して」

ブダン「ああ、その色で間違いない宝石だからな。赤い宝石を探してるんだ。デルカダールの国宝だと聞いているが、一体どこに……………」

カミュ「!?お、おいおい！それはもしかしてレッドオーブの事か!」

ブダン「し、知ってるのか、カミュ！」

カミュ「まあな。何でレッドオーブを探してんだ？」

ブダン「それは……………。いや、折角レッドオーブを知ってるやつに出会えたんだ。話してもいいか。誰にも言うなよ？実は、俺の兄が重い病気になってな。医者も治そうとしてるんだが、ベッドから動けなくなってるんだ。」

俺は兄を助けてやりたいが、どうにもできなくてな。そんな時、商人からレッドオーブが万病に効くと聞いた。それがあれば兄は元気になれる。俺が兄を助けてやれると思つてな。だから探してんだ。なあ、カミュ！レッドオーブの場所を知っているなら教えてくれ！頼む！」

カミュ「…………… わかった。お前が悪いやつじゃない事もな。場所なら教えてやる」

ブダン「ほ、本当か!? 恩に着る!!」

カミュ「場所はデルカダール神殿。一番奥にあるはずだ。だが、俺も行く。辿り着くには魔物との戦闘が不可欠だからな」

ブダン「…………… 取らないでくれよ? それさえあれば俺は他の宝なんかいらねえ。レッドオーブさえあればカミュに残りの宝は全部やるから、頼む」

カミュ「流石にあそこまで言われて横取りするほど腐ってねえよ」

ブダン「ありがとう!」

カミュ「じゃあ今日から二週間後、またこの遺跡で落ち合うぞ」

ブダン「わかった!」

次の日、デルカダール城

玉座の間

カミュ「ブダンと会ってきたぜ。ほら、満月の石だ」

マルティナ「あら、本当に持ってきたのね。後で戻しておくわ。それでどうだったかしら？ブダンは」

カミュ「……………」

ラース「カミュ？どうした？」

カミュ「いや、何でもねえ。二週間後にデルカダール神殿でまた会う事にした」

グレイグ「おお！それなら捕らえるチャンスだな。よくやってくれた、カミュ！」

カミュ「…………… そうだな」

ラース「どうした、カミュ。歯切れが悪いぞ」

カミュ「思ってたよりいいやつだな。それだけだ」

マルティナ「そうだとってもやってる事は犯罪よ。同情はしても許

してはいけないわ」

グレイグ「早速作戦を考えよう。カミュ、どうしてデルカダール神殿にしたのだ？」

カミュ「ブダンはレッドオーブを欲しがってな。それでデルカダール神殿にあるって俺が言ったんだ」

ラーズ「レッドオーブを？だが、もうあそこには無いだろ」

グレイグ「そうだな。だが、そんなのは普通知らない事だ。それわかっててそこを指定してくれたのか。ありがたい」

カミュ「偽物って作れるか？それがあればこっちも動きやすいんだが」

マルティナ「あそこまで綺麗ではないけどレプリカならあるわよ。それでもいいかしら？」

カミュ「ああ、それでいい。それを二週間後までに置いておいてくれ」

ラーズ「兵士達はいるか？元々多くは連れて行かないが」

グレイグ 「ブダンの強さによる。どうだった？カミュ」

カミュ 「一般兵士よりかはできると思うが、この兵士に敵うとは思えねえ。ましてや兄貴やグレイグには到底敵わねえよ」

ラース 「なら大丈夫そうだな。バンかベグルともう一人くらいでいいだろう」

グレイグ 「そうだな。それじゃあカミュ、二週間後頼んだぞ」

救いの手を

二週間後の夜 森の遺跡

カミュ「来たな、ブダン。つて、お前一人か」

ブダン「ああ、カミュこそ本当に来てくれてありがとよ。仲間達は置いてきた。俺の私情に付き合わせる訳にはいかねえからな」

カミュ「……そうか。デルカダール神殿はこつちだ。いくぞ」

デルカダール神殿

ブダン「遠目にはよく見てたが近くで見るとやっぱりでけえな。こんな凄え所にあんのか。流石国宝ってわけか」

カミュ「行くぞ。罨こそないが、魔物が多い。朝になるまでには辿りつかねえとな」

ブダン「ま、待てよカミュ。そう急かすな」

道中

ブダン「しかし、カミュは本当に慣れてるな。一体どれだけ戦闘したんだよ」

カミュ「それだけこういう場所を潜ってきたって事さ。ブダンこそ
まあまあやるじゃねえか」

ブダン「俺にはお前の身のこなしが羨ましいがな」

一時間後、奥地

ブダン「この扉の奥か？」

カミュ「ああ、そのはずだ。開けるぞ」

ガチャ

ブダン「!!おお!あ、あれは!」

祭壇には赤い宝石が置かれている

カミュ「やっぱり噂は本当だったみてえだな」

ブダン「ついに見つけた!レッドオーブだ!これで兄の病気が治る
!」

バタン!

扉が閉められた

ブダン「!?!」

バン「ハア！」

バンが突然現れて、ブダンの腕を捕らえた

ブダン「ギャアツ！な、何だこいつ！」

マーズ「盗賊ブダン、これまでの窃盗でお前を捕まえる！」

グレイグ「大人しくしてもらおうぞ」

ブダン「な、何だど!?てめえら兵士か！カ、カミュてめえ!!裏切りやがったな!!!」

カミュ「悪いな、ブダン。そういう事だ」

マーズ「協力ありがとうございました、カミュさん」

ブダン「ゆ、許さねえ……。俺の目的を知っておきながらこんな事しやがって!!てめえだけは絶対に許せねえ!!」

グレイグ「暴れるな。話は牢屋で聞く」

グレイグ達がブダンを連れて行こうとした時

カミュ「ブダン、ちよつといいか？」

ブダン「んだよ!!裏切り者のためえに話す事なんかねえよ!!」

カミュ「お前の兄の病氣の話は本当だろ？それとお前は商人に騙されたんだ。レッドオーブに万病を治す効果なんて存在しない」

ブダン「!!?」じゃ、じゃあ……………俺は、ありもしない効果を求めて……………。俺は、馬鹿かよ……………」

グレイグ「すまない、カミュ。後は牢屋で話してくれ」

カミュ「わかった」

その後、デルカダール城 牢屋

事情を全て話したブダンは牢屋に入れられた

ブダン「……………」

ブダンは静かに俯いている

ザツザツ

誰かが歩いてくる音に顔をあげる

カミュ「ブダン、話の続きがある」

ブダン「……………聞きたかねえよ。俺は全員から騙されたんだ。てめえだってそうだろ？俺の事を馬鹿にして掌で操ってたんだ」

ブダンはまた顔を下に向けた

カミュ「んな事思つてねえ。聞く気がねえならこつちから勝手に話させてもらおう。お前の兄の事だが、治してやれるかもしれねえぞ」

ブダン「!!?……………またでまかせか？」

ブダンは驚いてカミュの顔を見るが、すぐに疑いの顔になった

カミュ「違えよ。断定はできないが、俺の仲間に病気に詳しくて回復魔法を使えるやつがいる。そいつに見せるんだ。そうすれば医者よりかは詳しく判断できると思うぜ」

ブダン「……………そんな面白い話があるものか」

カミュ「俺は知つての通りこの王女や將軍と深い繋がりがあつてな。その仲間つてのも王女と深い関わりがあるやつだ。俺は信用してもらわなくて構わねえが、仲間の事は信じてやってくれ。だから、その兄の場所を教えてくれないか？」

ブダン「……………何でだよ。何で、そこまでの。お前に
とって、俺はただの犯罪者だろうが」

カミュ「そうだな……………少し昔の話になる。ある大盗賊はデ
ルカダールの国宝、レッドオーブを盗んだ。それはある……………絶対に
治らないと言われている病気になった自分の妹のために必要だと
思ったからだ。上手く盗んだのはいいが、本人が将軍に捕まり、牢屋
に入れられた。」

そこから脱獄し、その大盗賊は勇者と共に旅に出た。そしてその旅
の途中で諦めかけていた妹は助かった」

ブダン「……………！まさか、その大盗賊ってのは……………カミュ、お
前の事か？」

カミュ「さあ？どうか。そんな話を聞いた俺はお前の気持ちがよく
わかる。だから少しの手助けだ。乗るか乗らないかはブダン次第
だぜ」

ブダン「……………ダーハル―ネだ。ダーハル―ネの街にある小さ
な風見鶏が目印の緑の屋根の家だ。そこに俺の兄がいる。もし出来
るのならどうか、治してやってほしい」

カミュ「わかった。手は尽くすさ。必ず約束する」

次の日、ダーハル―ネの街　ブダンの家

コンコン

ブダンの兄「ゴホツ、ゴホツ、すみません……。出れないので、入り口に置いておいてください」

ガチャ

ロウ「突然失礼するぞ。お主の弟ブダンから話を聞いた。重い病気の兄を救ってほしいとな。お主がブダンの兄で間違いないかの？」

ブダンの兄「ブダン……。が？はい。私がブダンの兄です。ワンスと言います」

セーニヤ「ワンス様、病気の方を調べに参りました。セーニヤと言います」

ロウ「わしはロウと言う。ふむ……。呪いか。どれ、わしが払ってやろう。おはらいじや」

ワンス「!!?あ、体が、軽く」

セーニヤ「まだ体そのものは弱っているようですね。ワンス様は病気ではなく、体が呪いのせいでは動かなくなっていたのですわ。しばらくは動きにくいでしょうが、これからは段々とよくなっていくと思います。こちらはお薬になります」

ワンス「ありがとうございます!! 医者の方にも頭を抱えられて、どうしようかと……。ブダンはいっ帰ってきますか? ブダンにもお礼を言わなければ。私を治してくれると約束してくれたんです。まさか本当にこんな約束を守ってくれるなんて」

ロウ「……………今はまだブダンとは会えんのう。じゃが、しばらくすれば自分から帰ってくるはずじゃ」

ワンス「わかりました。私はここでブダンを待ち続けます。よろしければ、ブダンに伝言をお願いしてもよろしいですか?」

セーニヤ「はい。お伝えしておきますわ」

ワンス「早くお前の顔が見たい。俺の事で長い間随分と心配をかけたてすまなかった。また子どもの頃のように二人で外を走り回りたい、と」

ロウ「うむ、承知した。必ずブダンに伝えよう」

セーニヤ「それでは失礼します。お体大事になさってくださいね」

その後、デルカダール城 牢屋

カミュ「ブダン、お前の兄は無事に治ったそうさ。病気じゃなくて、呪いだつたみたいだ。しばらくすれば元通り動けるようになるそうだけ」

ブダン「!!?ほ、本当か!カミュ、本当なんだな!!」

ブダンは驚きと喜びが混じったような表情で牢の手前まで駆け寄った

カミュ「ああ、そうさ。それと、お前の兄ワズから伝言を預かってるぜ」

ブダン「伝言……?俺に?」

カミュ「早くお前の顔が見たい。俺の事で長い間随分と心配をさせてすまなかつた。また子どもの頃のように二人で外を走り回りたい、だつてよ」

ブダン「……………う、ううっ……………ううっ」

ブダンは涙を流している

ブダン「兄は……………こんな事をした俺を……………待っていてくれるのか……………」

カミュ「お前が盗みをした事は話してない。牢屋にいる事もな。そ

れに、ここにはそこまで長くいる必要はないと王女達に言っておいた。さっさと反省して兄に顔を見せに行くんだな」

ブダン「ああ……… ああ……… ありがとう、ありがとう、カミュ。裏切り者と罵って悪かった」

ブダンは泣きながら土下座をしている

カミュ「俺はお前を裏切った。そこは変わらねえよ。裏切り者を許したら駄目なのはあの世界の約束だろ」

ブダン「だが!!俺の兄は、お前がいなければ救われなかった!それだけは絶対に言える。もう一度礼を言わせてくれ、カミュ。本当にありがとう!」

ブダンは満面の笑顔でお礼を言う

カミュ「わかった、わかった。一月はここにいるんだからな。今までの盗みはワケありだったが、それでも犯罪だ。反省しろよ、じゃあな」

大広間

カミュが牢屋から出て大広間に出るとレースが待っていた

レース「らしくもない事したじゃねえか、カミュ。人助けなんて珍しい」

カミュ「チツ！面倒なやつに聞かれたな。ちよつと情が移っただけだ」

ラーズ「ほく、の割には自分は汚れ役になろうとしてたみてえだが？」

カミュ「このクソ兄貴はどこから聞いていやがった」

ラーズ「ブダン、お前の兄は無事に治ったそうだ。からだな」

カミュ「最初からじゃねえか！ふざけんな!!」

ラーズ「おっと、怖え、怖え。昔話の大盗賊は怖えなあ」

カミュ「……それまで。何で知ってやがる」

ラーズ「どんな話してるのか気になって近くまでいったらそんな話が聞こえてな。いやー、面白いもん聞けた。自分を……大盗賊つて……くく」

ラーズは笑いを堪えている

カミュ「てめえ、マジでぶっ飛ばしてやる!!」

カミュは顔を赤くしている

ラース「やべ、ガチギレした。逃げろ！」ダツ！

カミュ「素早さで俺に敵うと思うなよ!!」

グレイグとマルス

それから二ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

バタン

マルス「父さん、僕決めた！」

マルスが突然入ってきた

ラーズ「どうした？マルス。訓練は終わったみたいだが」

マルス「そう。今日その訓練でね、バンさんにマルスも誰みたいな戦い方をしてみたいか考えてみてもいいかもなって言われたの」

ラーズ「へえ、まあいいんじゃないか？」

マルティナ「それでマルスは誰にしたの？」

マルス「僕なりに考えたらやっぱり敵をバンバン倒していく方がカッコいいよね！って思ったの。だから、僕グレイグさんみたいになりたい！」

グレイグ「お、俺のように……？」

マルティナ「…………… ラース？大丈夫？」

ラース「…………… ハッ！ちよつと驚きすぎて呆然としてた。マ、マルス、俺じゃないのか？」

マルス「父さんも武器なしでカツコいいんだけど、やっぱり武器持ってた方がカツコいいもん」

ラース「ほら、俺だつて剣使えるぞ？」

マルス「でも、斧とか大剣とかの方が強そう」

ラース「……………」

ラースはグレイグを恨めしそうに見ている

グレイグ「………… やめろ、ラース。こつちを見るな。マルス、他には誰か思い浮かばなかったのか？」

マルス「あとはねー、カミユもカツコいいよね。こう一瞬でズバツて感じでき。でも僕ブーメラン使えないし、短剣なら使えそうだけど難しそうなんだよね」

マルティナ「確かに私もカミュの素早く敵を片付けるのは見てて少し爽快な気分にはなるわ」

ラース「弟にすら負けたのか、俺は……………」

マルス「それでね！グレイグさん、どうやったらグレイグさんみたいにカッコよくて強くなれますか？僕もグレイグさんみたいになりたい！です！」

マルスはグレイグの前に来て頼み込んでいる

グレイグ「カッコよくなれるかはわからないが、俺の武器の扱いは俺の師匠、ジエーゴさんに教わった影響が大きい。マルスも何回か会った事はあるだろう？」

マルス「うん。ソルティコから来るおじさんだよね」

グレイグ「そういえば、マルスもジエーゴ師匠の下に預けてみてもいいのではないか？」

ラース「それは前に考えたんだが、まだ預けるには子どもかなと思っただけ」

マルティナ「もう三〜四年経てばいいとは思うけどまだ早いかしら」

ね」

グレイグ「そうでしたか。まあ、確かに」

マルス「グレイグさんは教えてくれないの？」

グレイグ「む？いや、そんな事はないぞ。俺に出来るならマルスに教えてやろう」

マルス「やった！じゃあさ、明日から訓練場でお願いしてもいい？」

グレイグ「夕方ごろでもいいか？普段の訓練の時間だと俺は仕事があつてな」

マルティナ「あらいいじゃない、グレイグ。私がお父様に伝えておくわよ。きつとお父様も許してくれると思うわ」

ラーズ「まあどうしてもって時は呼ぶだろうが、普段通りなら俺が代わってやるよ」

グレイグ「で、ですが…」

マルス「やっぱり忙しい？」

マルティナ「ううん、違うわ、マルス。グレイグもとっても喜んでるから、明日の朝の訓練の時間から教えてくれるそうよ」

グレイグ「姫様!？」

マルス「本当!?!やった!グレイグさん、ありがとう！」

グレイグ「…………… わかった。明日から俺も訓練場に行こう」

マルス「バンさん達にも伝えてくるね!じゃあね！」

マルスは出ていった

グレイグ「いいのですか?まだ王からも何も聞いてませんが勝手に決めてしまっ」

マルティナ「大丈夫よ。絶対お父様なら許してくれるもの」

ラース「ハア……………。ほんのちよつと前までは父さんみたいになる!って言ったのに……………。何でこんなデカブツで頭固くてむつつりなやつに……………」

グレイグ「おい貴様、聞こえてるぞ」

マルティナ「まあいいじゃない。強くなるうとするのには賛成だわ。でも、マルスは大剣や斧って使えたかしら？」

ラーズ「一応大剣に適正があるみたいだぜ。どこから遺伝したのかわからねえがな。マルスが使えるのは片手剣、大剣、盾、短剣だ。ルナは片手剣、かくとう、杖、槍みたいだ」

グレイグ「調べていたのか。しかし、確かに大剣や短剣や杖はどこから遺伝したのか気になるな。ラーズと姫様に適正は無かったと思うが」

マルティナ「まあ、ルナの回復魔力もどこからきたのかわからないのよね」

ラーズ「魔力つてのは元々一つなんだ。それが自分が得意となる方に分かれて攻撃魔力と回復魔力になる。一応推測だが、俺の攻撃魔力がルナの中で回復魔力に分かれたんじゃないか？」

グレイグ「なるほど。まあマルスは思ってるよりも俺と使える武器は似ているのだな」

ラーズ「誠に遺憾だがそうなるな」

グレイグ「なんでそんな反応をする」

ラーズ「自分の息子くらい自由に育てたいだろ！それなのに、何で、何で俺に教えてもらおうとしないんだか……」

マルティナ「まあ仕方ないわよ。マルズだって思う事は色々あるし、これからまだまだ変わっていくだろうから、そうしたらラーズが教える事も出てくるはずよ」

次の日、訓練場

マルズ「よろしくお願いします、グレイグさん！」

グレイグ「よろしくな。まずマルズの大剣の慣れ具合だが、使った事はどれくらいあるのだ？」

マルズ「ほとんど無いよ。片手剣ばかりだったから、大剣はベグルさんのを見てたくらい」

グレイグ「そうか、わかった。なら、まずは片手剣との違いからいこうか。マルズ、片手剣と大剣では何が違うと思う？」

マルス「大きい！重たい！カッコイイ！強そう！」

グレイグ「カ、カッコいいと強そうは外すが、大きいと重たいはまさにその通りだな。片手剣は持ちやすく攻撃が素早く出来るのに対し、大剣は重く持ちにくい。攻撃も素早くは出来ず当てるのにもコツが必要だ」

マルス「そう聞くと片手剣の方がよさそうだね」

グレイグ「だが、片手剣には無いものも多い。まずは片手剣よりも長い事だ。大剣と片手剣を隣に並べてみよう」

グレイグは木の片手剣と大剣を床に置いた

マルス「本当だ！片手剣よりもずっと長い！」

グレイグ「そうだろう？マルス、武器が長いと戦ってる時はどうなる？」

マルス「流石にわかるよ！間合いが広くなって、相手に攻撃が当たりやすくなるんだよ」

グレイグ「うむ、正解だ。片手剣よりも間合いが広く相手が詰めなければ当たらない攻撃もこっちは相手の範囲外から攻撃できる。これは相当大きなメリツトだ。」

さつき素早く攻撃はできないと言ったが、片手剣よりも大剣が重いのは知ってるだろう？重いものを相手にぶつけた時と軽いものをぶつけた時。マルスはどっちが痛いと思う？」

マルス「重いものの方が痛いよ。ベグルさんの攻撃でバンさんがいつも痛そうにしてるもん」

グレイグ「そ、そうだな。つまり一撃で大剣は相手に大きなダメージを与える。だから素早く攻撃を当てる必要はない、という事だ」

マルス「グレイグさんが大剣を振り回して敵をバツバツサと倒していくのは僕も知ってる！母さんとかイレブンさんが前に話してくれた。旅の頃に助かってたって言ってたよ」

グレイグ「そうか。ありがたい話だ。それじゃあ話はここら辺にして大剣を実際に持ってみるか」

マルス「う、うん。よいしょっと」

グレイグ「そうだな。片手では持てないし、危険だから両手で持つのが正解だ。辛くはないか？」

マルス「片手剣で慣れてたから違和感が凄いけど、動けないって程

じゃないかな」

グレイグ「ほう、そうか。想像より体はしっかりしていたのだな。持ち方は合っているから、そこから素振りを試してみようか」

マルス「うん！」

少し離れた場所では

バン「グレイグ將軍が朝から来るって聞いてたけど、まさかマルスを指導してるなんてな」

ベグル「大剣つてマルスも使えたのか。知らなかったな。もっと教えてやればよかった」

ロベルト「しかし、何で急に大剣を？」

マーズ「昨日のバンのやつじゃないか？戦い方って言ってただろ」

ダバン「ああ、そういうことか。新しい戦い方を見つけようとしてんのか？」

ギバ「でもよ、マルスってラーズ將軍みたいになりたいって言ってなかったか？」

ガザル「何か変化があったのかもな。ラース將軍、悲しんでそうだな」

グレイグとマルス2

それから数十分後

マルス「へエ、へエ、疲れたー」

グレイグ「そうだろう。片手剣とはわけが違うからな。少し休もう」

マルス「グレイグさんやベグルさんってこんな重い振り回してたんだ。凄く力持ちなんだね」

グレイグ「この武器を使うと決めるなら筋力は必須となる。それがないければ振り回す事すら出来ないからな。それに、これは練習用だが本物をもっと重いぞ」

マルス「これより重たいの!?!じゃあ、もっともつと筋肉鍛えないとなんだね」

グレイグ「マルスが使う武器は大剣にするのか?」

マルス「出来ればそうしたいかな。僕もドーンツてやりたいもん」

グレイグ「そうか。なら、少しトレーニングを教えてやろう。部屋

でも出来るやつだ」

マルス「本当!?!教えて!」

しばらくして

バン「あ、あのーグレイグ將軍」

グレイグ「む?バンか。どうした?」

バン「いえ、こっちは訓練もう終わったんですけど、グレイグ將軍とマルスはどうするのかなと思って」

グレイグ「そうだったか。なら俺達も終わろうか、マルス」

マルス「わかった!ありがとうございました、グレイグさん!」

グレイグ「ああ、お疲れ様だ。ゆっくり休むんだぞ」

マルス「はーい!」

マルスは走っていった

バン「もしかしてなんですけど、昨日の俺の発言ですか?」

グレイグ「そのようだ。マルスが自分で考えた結果、俺のようになりたいと言ってきたな。大剣の扱い方を教えていたのだ。これから数日教えていこうと思っている」

バン「まさかマルスが師匠を目指さないなんて思わなかったです。あんなに師匠の事褒めてたのに」

グレイグ「俺も驚いた。ラースは相当ショックを受けていたがな。バンはこれから自主練か？」

バン「はい！少し見直そうかなって思って。グレイグ將軍は？」

グレイグ「俺もわざわざここまで来たのに何もせず教えるだけなのはもったいないからな。バン、よかったら相手してくれないか？」

バン「え！いいんですか!？」

グレイグ「俺がどれだけバンに敵うかわからないがな。だが、負ける気はないぞ。本気でいかせてもらう」

バン「はい！グレイグ將軍とは久しぶりですよね！俺も負けませんよ！」

その頃、玉座の間

マルス「父さーん、母さーん、訓練終わったー」

ラーズ「お、そろそろだと思ってたぞ。お疲れ、マルス」

マルティナ「グレイグとはどうだった？」

マルス「やっぱりグレイグさんって凄い！大剣ってあんなに重くて振るだけでもすぐに疲れたのに、それで敵をどんどん倒してたなんて！」

ラーズ「まあそこはグレイグの頼りになる所の一つだよな。いざとなったら守りも攻撃もできる。俺もそうだがイレブン達も助けられてきたからな」

マルティナ「ふふ、そうね。グレイグがこの事聞いたら恥ずかしくてそうね。グレイグはどうしたの？」

マルス「あ、置いてきちやった。でも、剣も片付けたしお礼も言っただよ」

ラーズ「まあグレイグも久しぶりに体動かしてるんじゃないか？」

マルティナ「私も久しぶりに訓練場で思いっきり動かしたいんだけどね」

夕方 マルスとルナの部屋

マルス「ふんっ！ふんっ！」

ルナ「マルスー、何してるの？」

マルス「これはね、グレイグさんが教えてくれた部屋でも出来るトレーニングなんだって。こーやって僕も早く大剣を使えるようになりたいんだ」

ルナ「私もやりたい。マルス、教えて」

マルス「いいよー、一緒にやろう」

夕食前

ラース「……………遅いな、マルスとルナ」

デルカダール王「珍しいのう。二人して来ないとは」

コロ「クウーン？」

マルティナ「グレイグ、見てきてくれる？」

グレイグ「わ、私がですか？わかりました」

ブレイブ「ガウ」

グレイグ「む？ブレイブも来るか？」

ブレイブ「ガウ」コク

マルスとルナの部屋前

コンコン

グレイグ「マルス、ルナ？いるか？」

ブレイブ「ガウー？」

返事は返ってこない

グレイグとブレイブは顔を見合わせる

グレイグ「入るぞ」

ガチャ

部屋に入るとマルスとルナは二人でベッドに寝ていた

二人「スウ…… スウ……」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

グレイグ「寝てしまったか。マルス、ルナ。ご飯だぞ」

グレイグが声をかけるが起きる気配はない

グレイグ「駄目か。ひとまず王達に知らせてこよう。ブレイブ、一旦戻るぞ」

ブレイブ「ガウ」

食事場

デルカダール王「そうだったか。眠っておったか。それなら仕方あるまい。寝させておいてやっていいのではないか？」

マルティナ「駄目ですよ、お父様。変な時間にご飯食べてリズムを崩しても子ども達のためになりません。ラース、起こしにいきましょう」

ライス「まあそれもそうだな。グレイグ、次からは起こしてくれて構わないからな」

グレイグ「わ、わかった」

その後

マルス「ごめんね、おじいちゃん、グレイグさん。ちよつと眠っちゃって」

ルナ「まだウトウトする」

グレイグ「構わないさ。さあ皆で食べよう」

夕食後、ベグルの部屋

コンコン

ベグル「ん？誰だー？」

マルス「あ、ベグルさんいた。僕だよ、マルス。入ってもいい？」

ベグル「マルスか。待ってな、今開ける」

ガチャ

ベグル「どうしたんだよ、マルス」

マルス「あのね、ベグルさんの部屋に本たくさんあるでしょ？大剣の本ってある？」

ベグル「そりゃああるぞ。だが、グレイグ將軍も持つてるはずだぜ？」

マルス「それがさ、グレイグさんから借りようとしたら急に焦り出して、俺よりベグルの方から借りるといって言われたんだ。明日には貸してくれるみたいなんだけどどうしてだろうね？」

ベグル「…………… マルス、気にしないでいいぞ。やっぱり大剣の扱い方か？」

マルス「そう！自分でもそういうの読んでおこうかなって思ったださ。いい？」

ベグル「勉強熱心だな。持ってきてやるよ」

一分後

ベグル「これならわかりやすいと思うぜ。俺が大剣を使いたての頃に読んでたやつだ」

マルス「本当？ありがとう！ベグルさんにもやっぱりそんな時期があったんだね」

ベグル「そりゃあそうさ。俺だって何度も練習してここまで来たからな。今日の訓練見てたぞ。マルスが大剣が使えるなんて知らなかったな。教えてやれずすまなかった」

マルス「ううん！そんなのいいよ！あ、でもこれからはグレイグさんが忙しかったら教えてもらってもいい？」

ベグル「もちろんだ。頑張れよな」

ベグルはマルスの頭を撫でた

マルス「えへへ、ありがとう」

それから三日後の朝

マルス「(あれ？何だか体が痛いような……)」

ルナ「マルス？どうしたの？」

マルス「ううん、何でもない」

朝食時

マルス「…………… 御馳走様でした」

ラーズ「ん？残すなんて珍しいな。お腹いっぱいになったのか？」

マルス「うん。多分もういいかなって」

マルティナ「そう、わかったわ。無理しないでいいわよ」

デルカダール王「どこか体調が悪いわけではないのか？」

マルス「うーん…………… そんな感じじゃないかも」

デルカダール王「そうか。それなら安心だな」

グレイグ「(マルスのやつ、どうしたのだ？どこか元気がないようだが)」

訓練終了後

ラーズ「グレイグ、すまない。少し聞きたい仕事があつてな。いいか？」

グレイグ「わかった、今行こう。マルス、区切りもいいしここまでだ。また明日な」

マルス「う…………… うん」

その後、マルスとルナの部屋

ルナ「マルス、私今日これから遊びに行くんだけどマルスもおいでよ」

マルス「僕は今日はいいかな。部屋で本読んでるね」

ルナ「わかった。じゃあ行ってくるねー」

マルス「はーい」

数分後

マルス「ハア…………… ハア…………… (あれ…………… 体が…………… 熱い)」「ドサ

マルスは部屋で倒れた

玉座の間

ブレイブ「…………… !」

ブレイブは何かに反応した

マルティナ「ブレイブ？誰か来たの？」

ブレイブ「ガウガウ」

マルティナ「ん？違うの？」

ブレイブ「ガウ！ガウガウ！」

マルティナ「ご、ごめんなさい、わからないわ」

ブレイブ「ガウ」クイ

ブレイブはマルティナを軽く押している

マルティナ「ええ？ど、どうしたのよブレイブ。私、ここにいないとただけど」

ブレイブ「ガウ！」

マルスとルナの部屋前

ブレイブ「ガウガウ」ガリガリ

マルティナ「マルスとルナの部屋よ?もしかして…………… マルス
!ルナ!何かあったの!?!」

返事は返ってこない

マルティナ「開けるわよ!」

ガチャ

ブレイブ「ガウ!」

マルティナ「マルス!大丈夫!?!…………… 熱いわね。熱があるわ。ブ
レイブ、医療部屋から医者を呼んできて!」

ブレイブ「ガウ!」ダツ!

グレイグとマルス3

その後

医者「風邪だと思いますが、原因はおそらく本人の成長かと思われる。マルス様の体は今成長時期。その時に体に強い負担をかけてしまった事でバランスが崩れたのだと思います」

マルティナ「強い負担……。わかりました。このまま休ませれば治るとい事ですよね？」

医者「はい、それで間違いありません。体が十分に休まれば体調も良くなつていきます」

マルティナ「ありがとうございました」

医者「いえいえ。でも、まさかブレイブ君に連れてこられるとは思いませんでした。椅子からひっくり返るかと思いましたが」

マルティナ「そ、そうだったんですか？ブレイブ、急いでたのは仕方ないけど驚かせちゃ駄目じゃない」

ブレイブ「ガウウ……」

医者「マルティナ様、大丈夫ですよ。ブレイブ君はマルス様を心配していたんだよね？私は大丈夫だからこれからも頼ってね」

ブレイブ「ガウ！」

その後

ラーズ「え!?マルスが熱!？」

グレイグ「そ、そんな変化などわからなかった……。最近は私が一番近くにいたというのに」

マルティナ「原因がね、成長時期の体に強い負担をかけたせいらしいから、まさかとは思うけどグレイグ、訓練やり過ぎたとかは無いわよね？」

グレイグ「いえ！しっかり休むようにしていましたし、本人にも休むように言っていました」

ラーズ「……………となると、マルスが無茶したか？」

マルティナ「考えられなくはないわね。取り敢えずどっちかマルスについていてほしいの」

ライス「グレイグ、教えてくれてありがとな。もう大丈夫だからグレイグにマルスを見ていてほしい」

グレイグ「わかった」

マルスとルナの部屋

グレイグ「マルス、大丈夫か？」

ガチャ

マルス「う、うん……………」

グレイグ「うなされているか。どれ……………確かに熱いな。やはり俺の訓練も悪かっただろうか。濡れたタオルを替えておこう」

グレイグがマルスの額にタオルを置くと

ギョツ

グレイグ「マルス……………」

マルスがグレイグの手を掴んだ

マルス「父……………さん……………」

グレイグ「……………」

その時、グレイグは昔の記憶が蘇ってきた

子グレイグ「ゴホツ……」

デルカダール王「辛いか？グレイグよ。タオルを替えてやろう」

子グレイグ「王様…… 移りますよ……」

デルカダール王「なに、そんなのは平気だ。私は大丈夫だからゆっくり寝るといい」

子グレイグ「ゴホツゴホツ！でも…… 苦しくて、あまり寝たくない」

デルカダール王「そうだったか。どれ、あまり得意ではないが子守唄を歌おうかの。く♪くくく」

王様の子守唄を聞いていると、グレイグはゆっくりと目蓋が落ちてきた

子グレイグ「王…… 様…… 父…… さん……」

グレイグ「あの時は王の歌声に安心したな。俺も歌えるだろうか。あまり聞き苦しそうだったらやめよう。んんっ！く♪くくく♪」

マルス「うく…………… スウ…………… スウ……………」

グレイグ「（どうやら下手ではないようだな。真似事だが、流石我が王。子どもの扱いには慣れていたという事か）」

その後、夕食時になり

コンコン

ラーズ「グレイグー、マルスとグレイグのご飯だ。持ってきたぞ」
返事は返ってこない

ラーズ「ん？グレイグ？入るぞ」

ガチャ

ラーズ「あ……………。全く、何してんだか」

ラーズが部屋に入るとマルスとグレイグが片手を繋いだ状態で眠っていた

ラーズ「自分が寝るやつがあるかよ。まあいいけどよ）寝るなら毛布くらい被れよ、グレイグ」

ラーズはグレイグに毛布をかけた

ラーズ「さて、本当なら食べてほしかったがこうも仲良く寝てると流石に俺には起こせないな。おやすみ、二人とも」

しばらくして

グレイグ「……………ハッ！お、俺まで寝てしまっていたか。む？毛布？誰が……………」

マルス「う、うくん……………」

グレイグ「マルス、大丈夫か？」

マルス「あれ……………？グレイグさん？僕、どうしたんだっけ」

グレイグ「マルスは風邪を引いたのだ。熱があつたのだぞ」

マルス「あ、そうだった。何だか熱くなってきたんだった」

グレイグ「どうやら原因はマルスの体は成長時期でな。その時に強い負担をかけたせいでバランスが崩れたようなのだ。俺の訓練も悪影響だったのかもしれない。すまなかつた」

マルス「そ、そんな事ないよ。多分……………僕があまり休まなかつたせいだから。グレイグさんはゆっくり休めって言ってたけど、部屋でトレーニングしてたし、ずっと本の内容をやってたもん」

グレイグ「そ、そうだったのか。コツを掴むのが早いような気はしていたが、そんな事を」

マルス「ごめんなさい、グレイグさん。心配かけちゃったもんね」

グレイグ「ああ、心配したぞ。次からはするんじゃないぞ？ゆつくりでいいんだからな」

マルス「うん。僕もこんな事になりたくないもん」

グレイグ「約束だ」

マルス「うん。約束する……ふふつ、グレイグさんって父さんとは違うけどお父さんみたいだね」

グレイグ「そ、そうか？俺はあまりこういう事は得意ではないぞ」

マルス「そんな事ないよ。僕、グレイグさんの近くにいると安心する。父さんの側も安心するからきつと同じだよ。グレイグさんは僕のもう一人のお父さんかな」

グレイグ「そ、そうか。嬉しいぞ、マルス」

マルス「あれ？何か匂いがする。…… あ！机の上にご飯あるよ」

グレイグ「む？やはり誰かが来てくれていたか。少し冷めてしまっ
たが一緒に食べようか、マルス。食欲はあるか？」

マルス「少しなら何か食べたいかな」

グレイグ「わかった。少し起き上がれるか？食べさせてやろう」

マルス「うん。あーん」

グレイグ「これくらいでいいか？」

マルス「…… うん、大丈夫。えへへ、こんな事してもらったの久
しぶり。僕がもっと小さい頃に父さんにしてもらった気がする」

グレイグ「そういえば数年前にもマルスとルナが揃って風邪をひい
た事があったな」

マルス「多分それかな。何だか誰かに食べさせてもらうって少し嬉
しいね」

グレイグ「俺も幼い頃、風邪を引いた時王に食べさせてもらった事がある。少し恥ずかしかったが、嬉しくもあったな」

マルス「グレイグさんもなんだ。一緒だね。僕、最初の方に怖い夢を見てただけど、途中で誰かの歌が聞こえてきたの。聞いた事ない歌だったんだけど、その声聞いたら周りが段々明るくなっていったんだ」

グレイグ「……………。そ、そうだったか」

マルス「?何でグレイグさんは赤くなってるの?」

グレイグ「な、なんでもないぞ」

次の日の昼、マルスとルナの部屋

医者「うん。熱も下がったみたいですし、後は走り回ったりしなければ大丈夫ですね」

グレイグ「わかりました。よかったな、マルス」

マルス「うん!医者さん、ありがとうございました」

医者「はい。これからも元気でいて下さい」

その後、玉座の間

マルティナ「そう。それじゃあ訓練はまだ駄目だけど、後はここに
いれば大丈夫そうね」

グレイグ「はい。マルス、あまりはしゃいだりはするんじゃないぞ」

マルス「うん！お父さん！」

ラーズ「え？お、俺？」

マルス「父さんじゃないよ！グレイグさんは僕のもう一人のお父さんなの」

グレイグ「マ、マルス、恥ずかしいから周りには言わないでくれ」

マルティナ「ど、どういう事？」

ラーズ「詳しく説明してほしいなあ？」

ラーズはグレイグを少し睨んでいる

グレイグ「ラ、ラース、そんな顔をするな。ただ昨日の看病でマルスがそう言ってきたくれただけなのだ」

ラース「看病？仲良く一緒に寝てただろ」

グレイグ「ぐっ……」

マルティナ「まあまあ。グレイグ、マルスと仲良くなれてよかったわね」

グレイグ「それは……そうですね。少し親の気持ちがわかった気がしました」

ラース「まあ変な事してないならいいけどな。マルスに懐かれるとカミユみたいになるぞ」

グレイグ「あれはお前が仕向けたのだろう」

マルス「ブレイブー、たまにはここで走ってよー」

ブレイブ「ガウ、ガウ」

ラース「マルス、ブレイブはここじゃ狭いから無理だ。今度外に行った時走らせてやれ」

マルス「はい。あ、グレイグさん。明日からはまた訓練する？」

グレイグ「マルス、今度は夕方からなら俺が教える事ができる。俺でよければこれからも教えるし、いつもの訓練の時間がよかつたらベグルに交代してもいいぞ」

マルス「うーん……。じゃあ夕方になったらグレイグさん、教えてください」

グレイグ「わかった。それじゃあまたこれからもよろしくな」

マルス「うん！こつちこそ指導お願いします！」

素敵な女性

それから一週間後の夕方、ダーハルーネの街

カフェ

店長「ありがとうございますー。さて……そろそろいい時間になるし、いつもより少し早い今日は閉店にするか」

そう言い、シンジが店先の看板を片付けようとする

女性「あ、あの、もう閉めてしまいますか？」

そこには長い緑色の髪をした美しい女性が立っていた

店長「へ？あ、もしかしてうちに用事ですか？」

女性「はい。ぜひ一度この有名なパフェを食べてみたくて」

店長「それなら大丈夫です。どうぞお入りください」

店内

女性「すみません。こんな遅くになってしまって」

店長「いえ、お気になさらず。ご注文は先程のパフェ一つでよろしいでしょうか？」

女性「はい。それで大丈夫です」

店長「かしこまりました。それではごゆっくり」

キッチン

店長「(いやー……綺麗な方だなー。マルティナさんやセーニヤさんも美しい方だけど、この方は少し別格な感じがするなあ。座ってるだけで絵になるって感じか?)」

シンジはパフェを作りながら先程の女性を見ていた

女性「……………」ニコツ

女性はシンジに気づき、笑顔を見せた

店長「ドキッ……………(き、綺麗だー!というか、目が合っちゃまった!恥ずかしい…………)」

その後

店長「お待たせしました。こちらフルーツパフェになります」

女性「わあ……………!凄く綺麗ですね。食べるのがもったいなくらいです」

店長「ありがとうございます。先程はジロジロ見てしまいすみませ

ん」

女性「いいえ、気にしないでください。それにしても、男性なのにこんなに繊細にスイーツを作るなんて本当に凄いんですね」

店長「そ、そうですか？少し照れますね」

女性「ああ……美味しい!!フルーツの甘さとクリームのがんがが合わさつてとつてもバランスがいいです!見た目だけじゃなくて、味までこんなに美味しいなんて。私、感動しました!」

店長「へへ、そこまで言ってくれる人は中々いませんよ。パティシエとして最高の褒め言葉です」

女性「また来てもよろしいですか?ぜひ他のメニューも食べてみたいです」

店長「はい。ぜひお待ちしておりますね」

しばらくして、パフェを食べ終わった女性は会計を済ませた

女性「もう閉店間際だったんですね。こんなギリギリなのに対応してくださって本当にありがとうございます」

店長「いえいえ、こちらも本当に美味しそうに食べてくださって嬉しかったですよ」

女性「あ、えつとお名前お聞きしてもよろしいですか？」

店長「はい。俺の名前はシンジと言います。よろしくお願ひします」

女性「私はスーナと言います。それではシンジさん、また後日ご来店いたしますね」

店長「はい。ありがとうございます」

スーナは出ていった

店長「……………名前聞けちゃった……………。いや、やっぱりあそこまで褒められると嬉しいよなー！セーニヤさんの時もそうだけど、俺褒められるのやっぱり慣れてねえなー！へへへへ」

シンジは嬉しそうにしながら、後片付けを始めた

それから数日間、スーナはお店に連続で来店していた

四日後

セーニヤとベロニカは甘いものを食べるにダーハルーネに来ていた

セーニヤ「スウ……。やはりダーハルーネ全体はいつも甘い香りがしていますわ。幸せです」

ベロニカ「確かにね。まあ、これだけいろんなお店があれば当然だ
と思うわ」

セーニヤ「店長様はお元気でしょうか。お姉様、またパフエを食べ
に行ってもよろしいですか？」

ベロニカ「ええ、もちろんいいわ。私もあそこのオレンジケーキが
食べたかったのよ」

セーニヤ「それも魅力的ですわね。店長様の作るケーキはどれも絶
品ですのでいつも悩んでしまうんです。それでは早速向かいましょ
う」

カフエ

カラン

セーニヤ「すみません。お二人でお願いしたいのですが」

店内からは店長が出てこない

ベロニカ「どうしたのかしら？いつもなら店長さんがすぐに来てく
れるのに」

ガタガタ！

店長「す、すみません！少し反応に遅れました！って、セーニヤさんにベロニカさん。いらっしやいませ」

セーニヤ「店長様、よかったですわ。少し反応が無くて心配しました」

店長「すまないな。早速席にご案内します」

二人を席に案内すると

スーナ「あ、シンジさん。お客様だったんですね。急に動き始めて驚きました」

店長「ああ、そうだ。セーニヤさんとベロニカさんはこの席でいいか？」

ベロニカ「ええ、大丈夫よ。ありがとう。こちらの女性は？」

スーナ「あ、突然すみません。私、スーナと言います。最近こちらのカフェのお菓子里に夢中になっていて、連日通わせていただいでるんです」

セーニヤ「スーナ様ですか。私はセーニヤといいます。ここのス

イーツは本当どれも美味しいですね」

ベロニカ「…… 私はベロニカよ。よろしくね、スーナさん」

店長「ご注文はどうされますか？」

ベロニカ「えっと、フルーツパフェが一つとオレンジケーキ。飲み物は紅茶を二つでお願い」

店長「かしこまりました。それではお待ち下さい」

しばらくして

店長「お待たせしてしまいすみません。フルーツパフェとオレンジケーキ、紅茶が二つになります」

ベロニカ「ありがとうございます。でもどうしたの？少し元気ないんじゃない？」

店長「あー……。わかるか？実はここ数日何だか寝不足な感じが出てな。仕事で少しウトウトしちゃうんだ」

セーニヤ「そうだったんですか。大変なのはわかりますが、どうかごゆっくりお体を休めてください」

ベロニカ「そうよ。体調が悪いならお店だって開かなくてもいいんじゃない？」

店長「ハハ、これくらいならまだ大丈夫だ。心配してくれてありがたいな。本当に危なかったら流石に店を休むさ」

その後、ケーキとパフェを食べ終わった二人は外で少し話していた

セーニヤ「店長様、大丈夫でしょうか？あまり無理をなさらないといいのですが」

ベロニカ「ねえ、セーニヤ。あんた気付いた？あのスーナって人」

セーニヤ「え？何がですか？あ、とっても綺麗な方でしたね」

ベロニカ「それはそうだけど、あの人、少し変な感じがしたのよね。魔力があるのはいいとしても…… 邪悪な魔力だったわ」

セーニヤ「そ、そうだったのですか？私全く気付きませんでした」

ベロニカ「もしかしたら店長さん、危ないかも」

セーニヤ「…… ラース様にご連絡しますか？」

ベロニカ「いや、まだ確証もないのに心配させても悪いわ。あつちも忙しいしね。数日泊まって様子を見てみましょう」

セーニヤ「という事は！毎日ダーハルーネのスイーツが食べられるのですか!？」

ベロニカ「ま、まあそうなるけど、目的は違うわよ！」

セーニヤ「ありがとうございます、お姉様！他のお店のものもたくさん食べたかったです。ああ…… どこから回りましょうか」

ベロニカ「全く……」

スーナの思惑

それから三日後、カフェ

シンジはベロニカ達に看病されていた

ベロニカ「駄目よ！」

店長「ど、どうしてだよ、ベロニカさん。俺、スーナさんに会いに行く約束しちゃったよ」

シンジは原因不明の病気になっていた

セーニヤ「原因がわからないので、安静にしているのが一番です。そんな病気になった状態で動き回るのはいけません」

店長「こ、これくらいなんて事……」

シンジはそう言ってベッドから立ち上がろうとするが

店長「うおっ！」

セーニヤ「店長様！」

シンジは倒れそうになり、セーニヤに支えられた

ベロニカ「んもうっ！だから言ってるじゃない！大人しくしてなさいー！」

店長「だがよ……」

ベロニカ「スーナさんは私達が代わりに行って店長さんの事伝えてくるから」

セーニヤ「そうですね。また後日という事にしておきましょう」

店長「わ、わかったよ。場所はダーハラ湿原の所にある高台だ。すまないが、よろしくお願いします」

ベロニカ「最初からそうしてればいいのよ」

セーニヤ「お薬と簡単な料理は置いておくので、ごゆっくりお体を休めてください」

ダーハル―ネの街

ベロニカ「どう思う？セーニヤ。いくらなんでも偶然が過ぎないかしら？」

セーニヤ「そうですね。日に日に弱っていく店長様、毎日会いに来ているスーナ様、そして原因不明の病気。関係がないとは思えませんわ」

ベロニカ「店長さん、喋れてはいたけど様子がおかしかったわよね。まるでスーナさんに夢中になってるみたいだった」

セーニヤ「あの現象は似たような状態ですと、魅了の可能性があり
ますわ」

ベロニカ「……… 考えてても仕方ないわね。スーナさんに直接聞きにいきましょう」

セーニヤ「はい！」

ダーハラ湿原

二人は高台を登っていると

セーニヤ「今日は少し霧が濃いですわね。いつもより周りが見えませんが」

ベロニカ「シッ！セーニヤ、上から誰かの声が聞こえるわ」

セーニヤ「！……… この話し声は、スーナ様？」

ベロニカ達の上の高台ではスーナが誰かと話していた

スーナ「本当男ってどいつもこいつも単純だわ〜！ちよつと優しくして、褒めちやえばすぐ私の虜」

魔物「流石スーナ様。また男を捕まえたのですね」

スーナ「ええ、そうなの。しかも聞いて。今回の男に昨日こんな事言われたの。俺、君の事が好きなのかもしれない。スーナさんも俺の事、どう思ってるか知りたい。だって〜！

キヤハハハハ!!笑いを堪えるだけで大変だったわ！何を寝ぼけているのかしら。あんたは私の養分。好きとかいう感情なんて持つてゐるわけじゃない！」

魔物「ケケケケ。それは愉快極まりない」

ベロニカ「……………最つつ低!!あいつ、店長さんで遊んでたんだわ！しかも養分って事は店長さんは今日来てたら死んじやった可能性が高いって事だったのね」

セーニヤ「人の感情を弄ぶなんて許せませんわ！」

ベロニカ「もう怒った！セーニヤ、突撃してスーナさんを倒すわよ！これ以上の被害が出る前に！」

セーニヤ「はい！お姉様！」

二人は上にいるスーナ達の所へ走っていく

スーナ「ん？誰？」

ベロニカ「話は聞こえたわ！スーナ！あんた、とんでもない最低女じゃない！」

セーニヤ「店長様のご病気もあなたが原因なのですか!？」

スーナ「やっぱりあんた達よね。折角邪魔されないように店に人を入れないようにしてたのに、あんた達は私の力を無視していた。つまり、それだけの魔力があるって事よね。私の完璧な計画の中であんた達は邪魔でしかなかったのよ。」

だからあのシンジとかいう男にゆつくりと魅了をかけてここに来させようとしていたのに、それすらも抑えられてしまうなんて。本当！邪魔！」

ベロニカ「何が邪魔よ！あの人は私達の大事な知り合いなの！あんたみたいなやつに好き勝手させるわけないじゃない！」

セーニヤ「店長様の魅了状態をお治してください！」

スーナ「えー。そんなの無理よ。私、あいつを養分にするって決めたんだから」

ベロニカ「させないわよ！」

スーナ「うるさいわね。いいわ、邪魔ばかりされて嫌だったの。ここで邪魔虫を払えば私の計画は元通り。消えちやいなさい！」

スーナがあらわれた

ベロニカ「魔力覚醒！」

ベロニカの攻撃魔力が二段階上がった

セーニヤ「スクルト！」

ベロニカとセーニヤの守備力が一段階上がった

スーナ「そーれっ！」

スーナは爪を伸ばして切り裂いてきた

スーナ「虜になっちゃいなさい！」

スーナはベロニカに誘惑する

ベロニカ「効かないわよ！」

ベロニカには効かなかった

ベロニカ「メラガイアー！」

セーニヤ「お姉様、キラキラポーン！」

ベロニカは嫌な効果から守られている

スーナ「貰っちゃうわね！」

スーナはセーニヤの体力を吸収した

スーナ「私の色気、爆発！」

スーナのピンクサイクロン

ベロニカ「メラガイアー！」

セーニヤ「ベホマラー！」

ベロニカとセーニヤは回復した

スーナ「えいつ！」通常攻撃

スーナ「ギラグレイド！」

ベロニカ「メラガイアー！」

山彦により、もう一度メラガイアーが繰り出された

スーナ「キヤアアア!!」ジュワー

ベロニカ「人の大事な感情を弄んだんだもの。当然の結果よ」

セーニヤ「店長様の状態はどうになりましたでしょうか。戻ってみましょう」

カフエ

店長「いやー、ベロニカさん、セーニヤさん。すまなかつたな。何だかよくわからないが、さつきまであつたボンヤリしていた気持ちちがどこか消えていったんだ。迷惑かけたな」

セーニヤ「いえ、よかつたですわ。店長様がお元気になられて」

店長「スーナさんは何か言つてたか？」

ベロニカ「それがね、スーナさんは魔物で店長さんを養分にしようとして店長さんを誘惑してたみたいなの。さつきまでの店長さんの病気はあいつのせいだったのよ」

店長「……………え?……………な、何言つてるんだよ、ベロニカさ

ん。スーナさんが魔物？まさか……。だって、彼女は人間で、優しく、綺麗で……。俺の作るお菓子が好きって……。」

セーニヤ「それらは全てスーナ様の作戦だったんです。真の狙いである養分にするために店長様を騙していたんですわ」

ベロニカ「信じられないかもしれないけど、本当よ。さつきまで店長さんが変だったのもスーナさんがそういう風にさせたから。スーナさんを倒したから店長さんも元通りになったのよ」

店長「……………マジかよ。ハァー……………」

店長はガツクリと項垂れてしまった

セーニヤ「ショックなのはわかりますが、どうか落ち込まないてください」

店長「いや……………確かに人間にしては綺麗すぎるとは思ってた。俺、単純だからなー。褒められて嬉しくなっちゃってたんだな。改めて礼を言わせてくれ。ベロニカさん、セーニヤさん、助かった！」

シンジは頭を下げている

ベロニカ「いいのよ。店長さんは仕方ないんだから。助かってよかったわ」

店長「そう言ってくれと助かる。俺は昔から女運は無いからな。変なのばかりだぜ。そうだ！セーニヤさん、ベロニカさん。お礼には少し変だけど、ある物をやるよ」

シンジは歩き出してキッチンに入っていた

少しして

店長「これだ」

シンジは二人に色違いのブレスレットを渡した

セーニヤ「綺麗なブレスレットですわ。ですが、よろしいのですか？」

店長「ああ。これ、俺の趣味みたいなものでな。霊水の洞窟で取れる石で手作りしてあるんだ。緑の石と赤い石のそれぞれで前に作ってたんだが、セーニヤさんとベロニカさんにピッタリじゃないかと思つてな」

ベロニカ「ありがとう、店長さん！セーニヤ、お揃いね」

セーニヤ「はい！とっても嬉しいです！」

店長「こんなん喜んでくれるとこっちも作ったかいがあるぜ。それじゃあまたよかったら食べに来てくれ。今度はしつかりやつてるからよ」

ベロニカ「ええ、わかったわ。でも無理したら駄目だからね！」

セーニヤ「ぜひまた伺いますわ。また新作が出たらお知らせしてくださると嬉しいです。それでは」

店長「おう！じゃあなー！ありがとうございます！」

バンの特訓

それから一ヶ月後、デルカダール城

朝食前

マルティナ「うーん……」

マルティナは皆が来る前に、そこで体を回してストレッチをしていた

マルス「母さん、何してるの？」

ルナ「体操？」

マルティナ「あら、マルス、ルナ。おはよう。ちよつと最近体を動かしていないせいか少し体が痛くてね」

ルナ「大丈夫？お父さんは？」

マルティナ「それが私を気にしてお父様に休ませるように行っちゃったのよ。そこまで大変ではないんだけどね」

マルス「でも痛いならゆっくり休んだ方がいいよ」

その時、王様達が入ってきた

デルカダール王「おはよう、皆。マルティナ、レースから話は聞いた。この一週間休んでおるんじや。体を壊してしまつては王女の仕事はできんからな」

グレイグ「姫様、お気付きになれずすみません」

マルティナ「でも、そんな大事にするほどじゃないですよ」

レース「それでもだ。マルティナは頑張りすぎる事が多いからな。折角の休みだ。久しぶりに体でも動かそうぜ」

デルカダール王「レースの言う通りじや。マルティナよ、無茶してはいかんぞ」

マルティナ「もう……。わかりました。それではありがたく休ませてもらいますね」

その後、訓練場

兵士達「マルティナ様!?!」

マルティナ「ごめんなさい、急に。私も久しぶりに体を動かそうと思つて来たの」

ロベルト「そ、そうだったんですか。確かにずっと来てませんでしたね」

マーズ「最後に来たのってもしかして何年も前じゃありませんか？」

マルティナ「多分そうね。誰か私と組み手してくれるとありがたいんだけど」

ギバ「マルティナ様、俺でよければ相手になります！前にマルティナ様から教わったジゴスパーク出来るようになったんですよ！」

マルティナ「あら！凄いじゃない、ギバ。それじゃあ見せてもらおうかしら」

ギバ「はい！」

少しして、ジール達新入りはベグル達と話していた

ジール「マルティナ様、凄い。本当に久しぶりなんですか？」

ベグル「確かにそうとは感じさせないよな。あれで衰えたとか言ってるんだから本当強い方だ」

ダバン「かくとう技もそうだけど、槍捌きも凄いな。ギバも苦戦してるんじゃないか？」

ジール「俺、マルティナ様がこうやって訓練場で動いているのを見るのは初めてですよ」

ガザル「前まではよく来てたんだ。王女になってからは忙しくて殆ど来れてなかったみたいだけどな」

その後、ギバとの組み手も終わった

マルティナ「ふう。ギバ、やるじゃない。前よりもずっと早く重くなってるわね」

ギバ「ありがとうございます！マルティナ様も久しぶりとは思えなかったですよ」

マルティナ「ふふ、ありがとう。そういえばバンはどうしたの？見当たらないけど」

ギバ「実はあいつ、最近部屋でノートと睨みっこしてるんです。新技を掴むとかどうか……」

マルティナ「そうだったの。少し様子を見てみようかしら」

バンの部屋

コンコン

バン「はい」

マルティナ「あ、バン？入ってもいいかしら？」

バン「マ、マルティナ様!?は、はい!あ!..... や、やっぱり少し待ってください!!」

ガサガサ!ドスン!

部屋の中から音がする

マルティナ「(か、片付けてるのかしら?気にしないのに)」

ガチャ

バン「入って大丈夫ですよ」

バンはマルティナを中に入れ、椅子を出した

マルティナ「ありがとう。片付けてたの？」

バン「へ、へへへ。少しだけ。それにどうしましたか?マルティナ様。俺に用事ですか？」

マルティナ「いえ、そんな大した事じゃないの。少しバンが気になってね」

バン「へ？お、俺が？」

マルティナ「ええ。ギバから聞いたわ。新技ですってね。悩んでるの？」

バン「あ…… そうなんです。師匠に技を覚えられてしまってるので、すぐに対策されてるんですよ。それなのに俺は師匠の手が広すぎて対策も取りにくくて……」

「だから悔しいので、俺も何か新技を覚えて師匠を驚かせたいんです！」

マルティナ「なるほど。バンは負けず嫌いだものね。いいと思うわ。私も付き合おうかしら？」

バン「い、いいんですか？でも、お仕事が」

マルティナ「それがね、私もずっと体動かしてなかったせいかな少し体が痛くなってきたの。それを言ったら一週間休んで体を動かしてくるといって言われたの。だからバンの特訓に付き合うのは私

にとっても好都合なのよ」

バン「そうだったんですか。お体大丈夫ですか？」

マルティナ「ええ、痛いといっても本当大したことないの。それで新技はかくとう技？それとも槍？剣とか盾もあるわね」

バン「まだ思いつかなくて。でも、槍やかくとう技をよく使うのでその二つがいいかなとは思ってます」

マルティナ「それなら私も力になれそうね。少し体を動かしながら考えてみましょう」

バン「わかりました！」

訓練場

バンとマルティナは組み手をして、バンの動きを見ていた

マルティナ「やっぱりラースに似てきたわね。教えられてるだけあって動き方がラースそっくりよ」

バン「そうですか？俺としては結構違うと思ってるんですけど」

マルティナ「私としては合わせやすくもいいけどね。それで見て思ったんだけど、バンの槍の使い方って私とは少し違うわね」

バン「そうですね。マルティナ様みたいに攻めの姿勢で使う事は少ないです」

マルティナ「ギバがまさに私と同じ使い方なのよね。バンはセーニヤと凄く使い方が似てるわ」

バン「そういえばセーニヤさんも槍を使いましたね。見た事は殆どないんですけど」

マルティナ「そうだわ！今からラムダに行つてセーニヤにもバンの槍の動きを見てもらいましょう！同じ使い方なら私よりよっぽどいいアドバイスが出来ると思うわ！」

バン「へ。そ、そこまでしてもらうとなんだか申し訳なくなっちゃいますね」

マルティナ「いいのよ。思い立ったらやってみましょう。ほら」

バン「わ、わかりました！」

聖地ラムダ

バン「そういえば俺、ラムダに来たのは初めてかもしれないです」

マルティナ「あら、そうだったの？でもまあ、普通ここに來ることは無いわよね」

バン「話には聞いてましたけど、綺麗な場所ですね。おお！命の大樹がこんなに近くに！凄え！」

マルティナ「あ、バン。セーニヤ達の家はこっちよ」

バン「あ……。へへ、俺よくこうやって違う所に行っちゃうんですよ」

セーニヤ達の家

コンコン

セーニヤ「はい」

ガチャ

セーニヤ「まあ！マルティナ様！それにバン様!?どうされたのですか?」

マルティナ「セーニヤ、丁度よかったわ。今日って予定あるかしら」

セーニヤ「いえ、特にございませんが……」

バン「あの、俺にセーニヤさんの槍の使い方を教えてくれませんか？」

マルティナ「バンがね、ラースを驚かせる新技を覚えたいんですつて。それで、バンの槍使いつてセーニヤと凄く似てるのよ。何かアドバイスできないかしら？」

セーニヤ「な、なるほど。ですが、バン様ほどの方に私が教えらる事などあるのでしょうか」

ベロニカ「セーニヤ、誰が来たの？つて、マルティナさん！バンまでいるじゃない！不思議な組み合わせね」

バン「あ、ベロニカさん。お久しぶりです」

セーニヤ「バン様が私に槍のアドバイスをしてほしいそうで」

マルティナ「ラースを驚かせる新技のためなのよ」

ベロニカ「ふーん、何だか面白そうじゃない。セーニヤ、折角ならバンの動き方見てみたら？」

セーニヤ「確かに見てから判断してもよさそうですね。バン様、マルティナ様、広場の方へ向かいましょう」

バン「ありがとうございます！」

広場

マルティナ「まずバンの槍使いを見てもらわないとね。私がまた相手になりましょうか？」

ベロニカ「どうせなら私がやるわ。バンとは前から少し戦ってみたかったの」

バン「ベロニカさんが相手は初めてですね。魔法……苦手なんだよなあ」

バンは少し困っている

ベロニカ「じゃあ私はムチでいくわ。それなら魔法もあまり使わない方がいいかしら？」

バン「ムチとは戦った事なかったので初めてです！よろしくお願いします！」

その後

バン「け、結構やりにくい。ムチってこんなにしなるのか」

ベロニカ「まあこんなものかしら。どうだった？セーニヤ。私は確かにセーニヤの槍とそっくりに感じたわ。特にカウンターなんかね」

マルティナ「やっぱりそうよね。私もカウンターがセーニヤとそっくりに思ったの」

セーニヤ「はい。非常に似ていると思います。バン様はどうやってこの技術を？ラーズ様は槍を使えなかったはずですが」

バン「師匠から槍は教わったんですけど、これは俺の感覚が近いですね。こうした方が俺にしっくりくる、って感じで。だから誰に教わったとかではないです。独学ってやつです」

ベロニカ「セーニヤは確か本だったわよね」

セーニヤ「はい。後は実戦でしたが。それでしたら、バン様がその槍で攻める時はどうされていますか？」

バン「えっと、さみだれ突きの時はこう構えて、姿勢を低くして狙

「澄ますように攻撃してます」

セーニヤ「私もさみだれ突きはそのやり方ですわ。一閃突きはどうでしょうか？実は、私には難しいのですが本には一閃突きの極意のようなものが書いてあります」

マルティナ「それは気になるわね。私も聞いていい？」

ペロニカ「あの本まだあるわよね？私持ってくるわ」

セーニヤ「ありがとうございます、お姉様」

バンの特訓2

その後

一閃突き・改

狙わずに相手に会心を与える技。相手の事を読み切る時、攻撃は成功する。また、相手と呼吸を合わせるのも成功しやすい。

本にはこう書かれていた

バン「ハアツ!..... うーん?こんな感じですか?」

セーニヤ「どうなんでしょう。私もここは習得できず終いなので、正しい事はわからないんです。すみません」

マルティナ「少しボンヤリした表現よね。相手の事を読み切る時つてつまり、完全に相手の行動をわかっていないと成功しないって事よね」

ベロニカ「戦う相手を知らないといけないなんて実践向きじゃないんじゃない?だって、そんなの無理じゃない。人間が相手とは限らないわ」

バン「俺、難しい話よくわかんないです!」

ベロニカ「これで難しいってあんたね……」

ベロニカは呆れている

バン「へへ、すみません。でも、俺もしかしたらわかりそうな気がするんです。こう…… 狙うんじゃないくて、相手にピッタリして、ドンって感じですよ!」

バンは身振り手振りで説明しようとしている

セーニヤ「なるほど。ピッタリしてドンですか。確かにそうかもしれないですね」

マルティナ「い、今のでわかったの?セーニヤ」

ベロニカ「嘘でしょ。意味わかんなかったわよ」

バン「セーニヤさん、わかってくれますか?」

セーニヤ「はい!相手と呼吸を合わせるとも本にありますし、きっとこれは連携技ですわ!」

バン「あ、あれ?」

セーニヤ「あら?違いましたか?」

マルティナ「セーニヤ、この本に連携技は載ってないわよ。どれも個人技だわ」

セーニヤ「まあ！そういうええばそうでしたわ！」

ベロニカ「何で読み漁ったあんたが忘れてんのよ」

バン「マルティナ様、少し立って戦うフリしてもらっていいですか？」

マルティナ「？ええ、わかったわ。これでいい？」

バン「はい！俺の感覚としては、こうやって戦う時にマルティナ様なら右足が出るので、それをこうやって受け流しながら一閃突きを当てる。どうですか!？」

バンはマルティナに動いてもらいながら説明してみた

ベロニカ「なるほど。息を合わせるってのもそうだし、この動きは相手の動きを知らないと出来ないわね」

セーニヤ「難しそうですわね」

マルティナ「ど、どうして私が右足が出るって……」

バン「あれ？マルティナ様の利き足は右でしたよね？」

マルティナ「…… ええ、そうよ。もしかして、気にしてるの？」

バン「はい！俺も師匠にこの前利き足ばかり攻撃されてかくとう技できなかったんです。仕返しされちゃったので、気にしてるんです」

マルティナ「ラーズったら。あの負けの理由相当気にしてたのね」

セーニヤ「バン様、私にも今の動きもう一度見せてくださいませんか？私もこの技を習得してみたいですわ！」

バン「はい！俺もこの技、頑張ってみます！」

その夜、デルカダール城

バンの部屋

バン「うーん……」

バンはあれからセーニヤに本を借りて自分で読んでいた

コンコン

ベグル「バン、いるか？」

バン「おう、ベグルか。入っていいぞー」

ガチャ

ベグル「少し邪魔するぜ。って、何だか片付いてんな。この前まで少し汚かったたつてのに」

バン「ま、まあな。それで何だよ。俺に用事か？」

ベグル「少しな。明後日に提出する書類、出来てるか聞きにきたんだ」

バン「……………あ」

ベグル「ハァー……………」

ベグルは顔に手を当てて、呆れている

バン「わ、忘れてたわけじゃねえぞ！」

ベグル「さっさと終わらせとけよ。この前の約束覚えてるよな？」

バン「……………締め切りギリギリになった回数分、ベグル様からげんこつがきます」

ベグル「そうだ。今二回溜まってるぞ。今回もギリギリなら三回だ。俺としてはバンをぶん殴れるから構わねえが」

バン「絶対嫌だ！でも、ちょっと待ってくれ！新技をマルティナ様とセーニヤさん達で練習してて、その勉強してるんだ」

ベグル「ほう。お前の口から勉強なんて言葉が出るとは思わなかった。槍の本……………頑張ってるじゃねえか」

バン「まあな！マルティナ様達もわざわざ付き合ってくれてるんだ。覚えないと申し訳ないだろ？」

ベグル「確かに。まあ今回は本当に頑張ってるようだし、助けてやるか。お前の書類、俺が書いてやるよ」

バン「え!?!いいのか!?!ハッ!……………ベグルが優しくするなんて裏があるな！騙されないぞ！」

ベグル「……………」

数分後

ベグル「いいか？今回は”特別に”俺様が書いてやる。その代わり、お前は絶対に新技を覚えろよ？もし覚えられなかったら次は大剣で二つにぶったぎるからな。わかったな？」

バンの顔はボコボコになっており、本人かどうかの判別が難しくなっていた

バン「うう……………。痛え……………」

ベグル「返事！」

バン「はっ!!申し訳ございませんでした！ベグル様！必ずや習得してみせます！」

それから四日後 訓練場

マルティナとバンは新技を交えた組み手をしていた

マルティナ「ミラクルムーン！」

バン「天地の構え！ハアツ！」

マルティナ「しんくうげり！」

バン「ここ！一閃突き・改！」

マルティナ「キヤアツ！」

バン「あ！今のつてもしかして！」

マルティナ「ふふ、完全に読まれてたわね。いい調子なんじゃないかしら？」

バン「ですよね！やった！」

バンは初めて技が決まって大喜びしている

マルティナ「セーニヤにも報告に行きましょう。セーニヤももしかしたら練習で何か掴んでるかもしれないわ」

バン「はい！」

聖地ラムダ

マルティナ達が来ると、広場にはベロニカがいた

ベロニカ「あ、マルティナさん、バン。どう？新技は」

バン「ベロニカさん、聞いてください！さつき、あの技が出来たんです！」

ベロニカ「本当!?!やるじゃない、バン！」

マルティナ「セーニヤはいるかしら？セーニヤもどうなったか聞きたくて」

ベロニカ「今長老様とお話ししてるわ。何か用事があったみたいなの」

少しして

セーニヤ「大変ですわ、お姉様！祭壇に魔物の群れが湧いているそうです！このままでは命の大樹に魔物が！」

三人「え!?!」

マルティナ「それは大変！私達もいくわ！」

バン「そうですね！食い止めましょう！」

セーニヤ「ありがとうございます、マルティナ様、バン様！」

天空の祭壇

バン「こんな所初めて来た」

ベロニカ「そりやあそうよ。こんな所まで来れるのは一部の人だけだから」

セーニヤ「あ！魔物の群れがいましたわ！」

マルティナ「まあまあいるわね！手分けしましょう！」

セーニヤ「マルティナ様、サポートいたします！」

ベロニカ「バン、私が支えるからあなたの強さを見せてやりなさい！」

バン「はい！ありがとうございます！」

マルティナ「セーニヤ！この群れはバン達に任せて、私達は下から来るのを引き止めましょう！」

セーニヤ「はい！」

魔物達「ギイイツ！」

バン「さみだれ突き！」

ベロニカ「メラガイアー！」

魔物達「ギイィ…」ジユワー

バン「マルティナ様、セーニヤさん！通つてどうぞ！」

マルティナ「ありがとう！バン、セーニヤ！」

セーニヤ「お怪我なさらぬようお願いします！」

バン「超さみだれ突き！」

バンは飛び上がり、空中から強力な五連撃を打ち込んだ

ベロニカ「凄いじゃない、バン！そんな技初めて見たわ！」

しかし、着地したバンに魔物が群がった

ベロニカ「あ！バン！」

バン「くっ……（落ち着け、俺！焦ったら駄目だ。落ち着いて……）」

バンは避けながら目を閉じた

バン「あ………。こうすると、気配がよくわかる。呼吸や音、声だけでも判断できる。相手がどうしようとしてるのかさえ！わかるぞ！」

バンは目を閉じながら相手を避け、一撃で倒していく

ベロニカ「バン！す、凄い……。あいつ、目を閉じながら倒してる。全部相手の行動がわかってるみたい……」

少しして、魔物達がいなくなった

ベロニカ「凄いじゃない、バン！見直したわ！」

バン「ありがとうございます、ベロニカさん。俺、完全にあの一閃突き・改を理解しました。読もうとしたり、相手をわからなきやいけないわけじゃないんです。

自分が相手を感じるんです。気配、動き、呼吸。それを見極めれば、狙い澄ます必要はありません。相手に合わせれば、もうそれだけで相手に大きな一撃になります」

ベロニカ「うーん……。私にはまだわからないわね。でも、スッキリした顔してるし、多分それが正解なのかもね。マルティナさん達は

どうなったかしら」

その後、聖地ラムダ

長老「ありがとうございます。これで安全になった事でしょう」

マルティナ「お力になれてよかったです」

セーニヤ「バン様、何やらとても嬉しそうですね。どうしましたか？」

バン「へへ、セーニヤさん。俺、習得しちやった！あの一闪突き・改」

セーニヤ「まあ！本当ですか!？」

マルティナ「え？習得までいったの？」

ベロニカ「さっきの魔物との戦闘で閃いたみたいなのよ。でも、本当に凄かったわ。目を閉じてるのに魔物の攻撃をかわして、どんどん倒していったの」

セーニヤ「今度は私がお相手になりますわ。バン様の一闪突き・改、見てみたいです！」

バン「はい！いきますよ！」

バンは目を閉じた

セーニヤ「氷結らんげき！」

バン「……………」

バンは攻撃をギリギリで避けると

バン「一閃突き・改！」

バンは見えているようにセーニヤに攻撃を当てる

セーニヤ「キヤアツ！」

バン「こんな感じですよ！カウンターに近いかもしれませんが！」

マルティナ「カウンターは相手の攻撃を受けないとただけど、それはもう受けてすらないわ。まるでわかっているみたいだったわね」

ベロニカ「気配とかだけでそこまで読めるものなの？」

バン「俺はわかりますね。どうしてですかね？」

セーニヤ「それはわかりませんが、バン様が新しく技を覚えられて
よかったですわ」

故郷帰り

それから一ヶ月後、ユグノア城

玉座の間

イレブン「え？イシの村に？」

ロウ「うむ。長らくそっちには帰っておらんかっただろう？何度もペルラさんやエマちゃんに来てくれておったが、村には行っておらん。どうせなら、今日から五日休みにするから故郷でゆっくりしてるといい」

イレブン「そ、それは嬉しいけど、お城は？」

ロウ「ほほ、心配せんでもよい。前にイレブンはわしのわがままに付き合ってくれたじゃろう？その恩返しじゃ。それとも、わしでは大事な孫の力になれんかの？」

イレブン「う、ううん！そんな事ないよ！じゃあ、ゆっくりしてこようかな。確かにかなり久しぶりだからさ」

ロウ「それはよかった。イシの村はイレブンにとっての第二の故郷。ここだけではなく、そっちも大切にしてやらねばな」

その後、イシの村

イレブン「うわー、本当久しぶりに帰ってきた。何だかまた少し人が増えたのかな？家が多くなってるや」

ワンワン！

エマの飼っている犬、ルキがイレブンに向かってきた

イレブン「あ！ルキー！久しぶり！」

ダン「おお？イレブンではないか!?久々に顔を見れたぞ！」

イレブン「あ、村長。うん、本当にね。ずっとユグノアで王として頑張ってたからさ。村長も元気そうでよかったよ」

ダン「ペルラさんも必ず喜んでくれるはずだ。元気な姿を見せてやるんだ」

イレブン「うん！」

イレブンの家

ガチャ

イレブン「母さん、ただいま」

ペルラ「!まあ!イレブン!いきなり帰ってくるなんてどうしたんだい?」

イレブン「おじいちゃ…… あ、ロウさんに母さん達に元気な顔を出してきなさいって言われて、王様お休みなんだ」

ペルラ「そうかい、そうかい。ロウ様には感謝しなくちゃならないねえ。ああ、言い忘れる所だったよ。お帰り、イレブン」

イレブン「うん!」

その後、イレブンは自分の部屋に荷物を置いてペルラと共にお昼を食べていた

ペルラ「仕事が大変だろうけど、元気なようで安心したよ。ロウ様に迷惑かけてないかい?」

イレブン「ど、どうだろ。かけてる自覚は無いけど、もしかしたらかけてるかも」

ペルラ「まあ、ロウ様はお優しい方だから迷惑とは思ってないかもね。でも!大事なおじいちゃんなんだから、しっかり支えてやるんだよ?」

イレブン「うん。もちろん!」

コンコン

エマ「おばさま、いますか？エマです」

ペルラ「あら、エマちゃん！」

ガチャ

エマ「おばさま、よかった。少し相談したい事が…… って、イレブン!？」

エマは家にイレブンがいる事に驚いている

イレブン「あ、エマ。久しぶり。元気にしてた？」

エマ「う、うん。どうしたの？ユグノア王国は？」

ペルラ「それがね、ロウ様が私達にイレブンが元気な姿を見せてくれたのよ！」

エマ「そうだったんですか。じゃあ、イレブンはしばらくここにいろの？」

イレブン「うん。五日は休みあるからしばらくゆっくりしてるよ」

エマ「そ、そっか」

ペルラ「あ、それでエマちゃん。相談ってどうしたんだい？」

エマ「あ、えっと……」

エマはイレブンをチラチラ見ている

ペルラ「……イレブン、少し広場に行っておいで。新しい村の人もいるし、剣の練習しててもいいよ」

イレブン「そうみたいだね。エマ、ごめんね」

エマ「う、ううん。イレブンは悪くないわ」

その後、村の広場

イレブンは剣の素振りをしながら少し考えていた

イレブン「(エマ、どうしたんだろ。数年前にお城に来た時は悩んでる感じもなかったのに……)」

男性「あ!!本物のイレブンさんだ!」

イレブンは知らない男性に話しかけられた

イレブン「あれ？村で見た事ない人だね。新しくやってきてくれた人？」

男性「はい！勇者様が育った村と聞いて訪れたんですが、平和で緑が豊かで空気も綺麗。俺、ここが気に入って住む事にしましたんです」

イレブン「ふふ、そっか。この村を気に入ってくれて嬉しいよ」

男性「イレブンさんはユグノアで王様のはずでは？どうしてこちらへ？あ！実家帰りですか？」

イレブン「そうなんだ。久しぶりに帰ってきたんだよ」

男性「勇者様でもやっぱり実家はいいですよね。あ！突然失礼しました！」

イレブン「ううん、大丈夫だよ。じゃあね」

その夜、イレブンの家

ペルラ「イレブン、少し大事な話があるんだ」

ペルラは真剣な表情でイレブンに話し始めた

イレブン「う、うん。何？」

ペルラ「今日エマちゃんが来てくれただろ？その時に報告されたんだけどね……………」

イレブン「エマが……………どうしたの？」

ペルラ「あの子、結婚する事を決めたらしいよ」

イレブン「……………え？」

イレブンはそれを聞いて固まった

ペルラ「もうエマちゃんもいい年になっちゃったからねえ。いい加減、将来を考えての事だったよ」

イレブン「エマが……………結婚……………？だ、誰と!？」

ペルラ「前に村に新しく来た男性よ。明るいし、皆と楽しく話せるし、気も使えて、いざとなれば戦闘も出来るいい子なんだ。エマちゃんは二年前にその人にプロポーズされて、付き合っていたみたいだよ」

イレブン「……………」

ペルラ「まあ、見習えとは言わない。結婚するかは自由なもの。イレブンの人生はあんただけのものだ。でも、王様としてはこれからユグノアのために自分の子どもを、って考えるべきじゃないかい？」

イレブン「……………そう、だね。少し考えておくね」

ペルラ「突然すまなかつたね。ゆつくり考えなさい。自分がどうしたいかをさ」

叶わぬ願い

次の日の昼 イシの村 広場

イレブンは悩んでいた

イレブン「(エマが……結婚するなんて。付き合ってる人がいた事すら知らなかった……。僕……。どうしたらいいんだろう)」

おばさん「おや？イレブンじゃないかい!?村に帰ってきてたのかい？」

イレブンが子どもの頃からお世話になっているおばさんが話しかけてきた

イレブン「あ、おばさん。久しぶり。元気なようで嬉しいな」

おばさん「そりやあまだ私だって元気でいたいよ。どうしたんだい？何か悩んでるのかい？」

イレブン「う、うん。エマが結婚するって聞いてさ……。複雑な気持ちになっちゃって。幼なじみなんだからちゃんと言葉を聞きやいけないのに」

おばさん「イレブンは知らなかったんだね。あの付き合ってる男性の事かい」

イレブン「僕も王様なんだから、結婚して子どもを残していかないといけないのはわかってた。でも………自分にはよくわからないや」

おばさん「恋ってのは難しいものだからねえ………イレブン、ちよつとこつちに来てくれるかい？」

イレブン「?いいよ」

おばさんの後ろをついていく

おばさん「この木、覚えてるかい？」

おばさんは村にある一本の少し大きな木についた

イレブン「覚えてるよ。昔、よくエマと登ったりして遊んだもの」

おばさん「それもそうだね。あんた、ここでした約束忘れたのかい？」

イレブン「え？」

おばさん「エマちゃんとだよ。昔、村でその約束が願う事を祝ったじゃないか」

イレブン「えつと…………… お祭りの記憶は少しあるけど、エマと何か約束したっけ？」

おばさん「本当に忘れちゃったんだねえ。エマちゃんはずっと待ってたっていうのに」

イレブン「う、嘘…………… え？何したんだっけ？教えて、おばさん」

おばさん「駄目だよ。これは自分で思い出さなきゃいけない事だからね。少しヒントを出すなら、イレブンもエマちゃんもどっちにとっても大事な約束だったはずだよ」

イレブン「うーん……………」

おばさん「あとね、イレブン。恋は考えるのは難しいけど、わかる事は出来るよ。自分が一番安心するような人を想像してみなさい。自分が自分らしくいられる人。それが一体誰なのか、をね」

イレブン「自分が自分らしくいられる人……………」

おばさん「それじゃあまたね。これからも頑張るんだよ」

おばさんは去っていった

その夜、イレブンの家

ペルラ「イレブン、ごめんよ。私が焦らせるような事言って悩んでるのかい?」

イレブン「焦ってるとは違うんだけど、エマも結婚するって聞いてさ。ちよつと変な気持ちになっちゃってて…」

ペルラ「あまり考えすぎるんじゃないよ?」

イレブン「うん……。ちよつと外で夜風に当たってくる」

ペルラ「風邪引かない程度にしておくんだよ」

イシの村

イレブン「(約束……。か。なんだか確かにあそこでしたのは思い出してきたけど……。何を約束したんだっけ)」

イレブンは考えながら自然とその木の場所に来ていた

エマ「……………」

イレブンが木の場所にやってくるとエマが立って木を見ていた

イレブン「エマ?」

エマ「!あ、イレブン。どうしたの?こんな夜に」

イレブン「ちよつと考えてる事があってさ」

エマ「そう…………… ねえ、イレブン」

イレブン「何?エマ」

エマ「私達がまだ子どもの頃にここで約束した事、覚えてる?」

イレブン「…………… 約束したのは、覚えてる。でも、内容までは……………」

エマ「…………… ふふ、そっか。仕方ないよね!もう何十年も前だもん。私もあまり覚えてないや」

エマは少し下を向いた後、イレブンに笑いかけた

イレブン「エマ?」

イレブンはエマに少し違和感を感じた

エマ「おばさまから連絡された?私、結婚するの。イレブンは知ら

ない人だと思うけど、相手は新しくこの村に来てくれたイーブって人。誰にでも優しくして、一応剣も使えるんだよ。前に私の事も助けてくれたの」

イレブン「それは知ってたよ。いい人らしいね」

エマ「ええ、本当。私にはもつたないくらいだわ。………夜も遅くなってきて少し冷えてきたわ。私、戻るわ。じゃあね、イレブン」

エマは少し駆け足で戻っていった

イレブン「エマ………どうしたんだろ。やっぱりエマらしくないよ」

あの日の約束

次の日の朝 イレブンの家

イレブン「うーん……」

イレブンはあれからずっと考えていて、寝不足気味に起きてきた

ペルラ「眠そうだね、イレブン。大丈夫かい？」

イレブン「ねえ、母さん。僕が昔、大きな木の下でエマと約束した内容って覚えてる？」

ペルラ「…………… ああ、懐かしいねえ。そりゃあ覚えてるよ。エマちゃんが必死になってたからねえ」

イレブン「そっかー……………」

ペルラ「忘れたのかい？あんたも喜んでたじゃないか」

イレブン「どうも思い出せなくてさ」

その後、村の広場

イレブン「あー！そうだ！命の大樹の根っこがあつたはず。それを見れば！」

イレブンは命の大樹の根っこが巻きついていて木の下にやってきた

イレブン「もう見れないかな?..... あ、少しならいけそう」

あの木の下で遊ぶ子どものイレブンとエマの姿が見えてきた

子イレブン「エマー、早く登っておいでよー」

子エマ「無理よく、イレブンみたいに私登れないもん」

子イレブン「えく。折角高くていい景色なのにー」

子エマ「それに危ないよ。落ちちゃったら怪我しちゃう」

子イレブン「大丈夫だよ。ほら、手を出すからさ」

子エマ「もう..... よいしょっ!あ、登れちゃった」

子イレブン「ほら!エマも登れたでしょ?見て!村が少し遠く見えるよね」

子エマ「う、うん。少し不思議な感じがするわ。木の上ってこんな景色だったのね」

子イレブン「エマも木登りしてみたくなった？」

子エマ「イレブンの気持ちはわかったわ。でも、やっぱり少し怖いかも」

エマは下を見ていた

子イレブン「あ、下見ると危ないよ。ここはね、思いっきり飛び降りちゃえばいいんだよ」

そう言っつてイレブンは飛び降りた

子エマ「ええ!?!ま、待ってよ、イレブン。私、怖くて無理」

エマは少し泣き出しそうになっている

子イレブン「な、泣かないですよ、エマ。ほら、僕が下で支えるから」

子エマ「ううっ………怖いよう………」

子イレブン「おいでー!エマー!」

子エマ「ううっ……っ　くっつっ！」

エマは勇気を出して目を瞑りながら飛び降りた

子イレブン「えいっ！」

イレブンはエマをしつかりとキャッチした

子イレブン「よかった。エマ、ごめんね？大丈夫？」

子エマ「怖かった……　怖かったよ、イレブン」

エマはイレブンに泣きついてる

子イレブン「ご、ごめんね、エマ」

少ししてエマが泣き止むと

子エマ「ありがとう、イレブン。私を支えてくれて」

子イレブン「だって、僕が無理にエマを連れていったからだもん。エマを支えないと駄目じゃん」

子エマ「私さつきね、イレブンに支えられた時すっごく嬉しかったの。怖かった気持ちが無くなって、安心したの。イレブンに守って貰っちゃったみたいだった」

子イレブン「そうなの？でも、それならよかった」

子エマ「ねえ、イレブン。もし大きくなっても、私を支えてほしいの。イレブンとならずっと一緒だと思うの」

子イレブン「うん！僕もずっとエマと一緒にがいい。ずっと遊ぼう」

子エマ「約束してくれるの？」

子イレブン「うん！約束！」

イレブンはエマと指切りをしている

子エマ「！イレブン、大好き！」

エマはイレブンに抱きついた

それを見ていた大人達がイレブンとエマの事を応援して、少しお祭りのようになっていった

それから時は経ち、エマが大人になりあの木の下で待ち続けている姿が見えていた。しかし、次第に顔も暗くなっていき、どんどん歳を重ねていった。そうして、隣に男の人が出来ても待っている姿があったが、最後に悲しそうな顔をした後、その男の人と歩いていった。

イレブン「…………… 思い出した。そうだ。僕はあそこで、エマとずっと一緒にいて、エマを支えるって約束したんだ。…………… エマは、それを覚えて…………… 僕は忘れてしまった。まさかエマは、あの木の下でずっと、僕がユグノアにいる時もずっと、待ってた？

何年も…………… 何年も。でも僕がいつまでも来なくて…………… 諦めた。僕は…………… なんて馬鹿な事を……………」

イレブンを強い後悔が襲い、その場に座り込んだ

イレブン「いや…………… こんな事してる場合じゃない。エマに会いに行かないや。まだ…………… 間に合うかもしれない！」

村長の家

ダン「エマなら昨日の夜、準備をして出て行ったぞ。これからイレブ君の家に行って同居生活を始めるんだ」

イレブン「そ、そんな……………。村長、イーブさんの家はどこ？」

ダン「ソルティコだと聞いているぞ」

イレブン「わかった！ありがとう、村長！」

イレブンは急いで出て行った

ソルティコの街

イレブン「すみません。イーブって人、知りませんか？」

男性「え？知らないなあ」

女性「私もわからないわ。この街に住んでる人に聞いてみて」

イレブンはいろんな人に聞き回っていた

イレブン「(観光客が多くて、知らない人ばかりだ。でも、諦めてたまるか!)すみません、イーブって人探してるんですけど」

おばさん「イーブ？確か、あの家の息子さんだったかしら。ほら、あの茶色の屋根の家よ」

イレブン「！ありがとうございます！」

イーブの家

コンコン

エマ「はい」

ガチャ

イレブン「エマ！」

エマ「…………… イレブン」

イレブン「ごめん！エマ！あの日の約束、思い出したんだ！君とずっと一緒について」

エマ「もういいのよ」

エマはイレブンの言葉を遮った

イレブン「…………… え？」

エマ「やつと思いで出してくれたんだ。でもね…………… もう遅いのよ。私はもういいのよ。あんな子どもの頃の約束に囚われすぎてた。あの頃はただの村人だったのに、もう私とあなたでは越えられない壁がある。」

あなたは世界を救った勇者様で、ユグノアの王様。それに対して、私は何かしら…………… もうあの頃には戻れない。昨日の夜、言ったでしょ？じゃあねって」

イレブン「!!?そ、そんな事ないよ！遅すぎるのは本当に謝る！でも、そんな壁なんて」

エマ「帰って」

イレブン「エマ……」

エマ「帰って!!イレブン!」

イレブン「……………ごめん」

僕の隣

夕方 ソルティコの街 海岸

シルビアは友人の結婚式の帰りだった

シルビア「やっぱり結婚式っていいわね。まさかアタシのお友達もついに結婚しちゃうなんて……。しっかりとサポート出来てよかったわ。二人とも見た事ないくらい幸せそうな笑顔だったわ。あら？あそこにいるのは……」

イレブン「……………」

イレブンは一人で海を見ていた

シルビア「やっぱり。おい、イレブンちゃん！」

シルビアはイレブんに手を振りながら向かっていく

イレブン「あ……………シルビア……………」

シルビア「あ、あら？どうしたの？イレブンちゃん。元気ないじゃない」

イレブン「実はね」

イレブンはこれまでの事を話した

シルビア「そう……………。折角思い出したけど、エマちゃんに追い払われちゃったのね」

イレブン「でも、当然かなって。だって、僕はエマを待たせ続けた。最後まで諦めずに…………。ずっと。でも、僕は行かなかった。そりゃあエマも呆れちゃって当然だよ」

シルビア「ねえ、イレブンちゃん。一つ聞いてもいい？」

イレブン「なに？」

シルビア「どうしてエマちゃんを追いかけたの？」

イレブン「…………。え？そりゃあ……………。僕がずっと待たせてたから……………」

シルビア「その約束を守るため？」

イレブン「うん」

シルビア「約束があるから仕方なくエマちゃんと一緒になろうとしてるの？」

イレブン「!?仕方なくなんかない!昔からずっと僕にはエマが………あ」

シルビア「うふふ、それを聞いてよかったわ」

イレブン「そつか……。ずっと結婚つて聞いてモヤモヤしてたのは……どこかで僕がそれを嫌がつてたからなんだ。僕は……エマが好き。僕の隣で昔みたい一緒にいてほしい」

シルビア「イレブンちゃんも大事な気持ちに気付いたみたいね」

イレブン「でも……。叶わないよね。もう遅すぎる。エマはもう……。別の人と結婚するんだから」

シルビア「ねえ、イレブンちゃん。命の大樹の根っこには、最後まで諦めずに待ってるエマちゃんの姿があったんでしょ?それってつまり、まだイレブンちゃんへの想いが消えたわけじゃないと思うの。」

だって、何年も待ち続けた人への想いがそんなすぐに消えるなんてありえないわ。イレブンちゃんのその気持ちを告白して、エマちゃんに伝えてみましょう。もしかしたら何か変わるかもしれないわよ?」

イレブン「な、なるほど。でも……。何も変わらないかもしれないわい」

シルビア「イレブンちゃん！しっかりと！アタシ達と旅をした時に、ラーズちゃんはよく言ってたじゃない！ほら！勇者は何て表すの？」

イレブン「…… 勇気を持つ者の事」

シルビア「そうよ！イレブンちゃんは勇者。あなたの素敵な心にはとつても大きな勇気があるの。その勇気を出してみましよう！勇者イレブンちゃん！」

イレブン「…… ふふ、そうだね。僕、また勇気を出してみるよ！」

シルビア「ええ！応援してるからね！」

イレブンは走っていった

シルビア「イレブンちゃん。ここ一ヶ月までのソルティコでの結婚式の予約は…… ないのよ。つまりそれがどういう事か……。ふふ、お幸せにね」

イーブの家

コンコン

ガチャ

エマ「…………… 何でまた来たの、イレブン」

イレブン「エマ！僕、気付いたんだ！約束を守るためにここに来たんじゃない！僕は、これからもエマと一緒にいたいからここに来た！僕がこれまでで一番安心して、楽しくて、僕らしくいれた場所はエマと一緒にいた時だよ！僕は、エマが好き!!昔からずっと、イシの村で育った時からずっと！エマが好きなんだ！

これが…………… 僕がさつき気づいて、君にどうしても伝えたかった想い。君はもう僕を許さないかもしれないし、今更って思うかもしれない。でも、これだけは言わせて。

どうか…………… 幸せになってね」

エマ「…………… イレブン……………」

エマはイレブンをしっかりと見て、イレブンの手を握った

エマ「…………… ふふ、ありがとう、イレブン。私、とっても嬉しい」

パァン！パァン！

突然クラツカーの音が家のあちこちで鳴り始めた

イレブン「!!?な、なに!?!」

家のあちこちからはペルラやダン村長、おばさんなど続々と現れた

イレブン「え!?あれ!?何で!？」

ペルラ「イレブン!あんた、カッコいい事言うようになったじゃないか!おじいちゃんもきつと喜んでるよ!」

おばさん「ようやく気持ちに気付いたようだねえ。あんたは本当昔から鈍いのねえ」

イレブン「ど、どういう事なの?」

エマ「ごめんね、イレブン。結婚は嘘なのよ」

イレブン「ええ!?嘘!？」

エマ「前からおばさまと、イレブンがもうあの約束を忘れてるに違いないって話してたの。だからどうにかしておばさまが思い出させようとしてくれたのよ。本当ならユグノアに行つてやるはずだったんだけど、まさかイレブンがこっちに帰つてくるとは思わなかったの。」

ごめんなさい、イレブン」

イレブン「じゃ、じゃあ、イーブって人は?」

ダン「前にエマにプロポーズした人だ。だが、エマははっきりと断ったんだがな。彼にも少しだけ協力してもらったんだ」

イーブ「へへ、すみません。勇者様、広場で会いましたよね」

イレブン「あ！この前話しかけてくれた人！」

イーブ「エマさんが幸せになればそれでいいと思って協力したんです。さっきの勇者様の言葉、かっこよかったです」

イレブン「み、皆に聞かれてたの……。流石に恥ずかしいよ」

イレブンは少し顔が赤くなっている

ペルラ「でもね、イレブン。エマちゃんがあのお木で待ち続けていたのは本当だよ。ずーっと、あんたを待ってたんだよ」

イレブン「そう……。だよね。エマ、ごめんね」

エマ「本当、忘れられたのは悲しかったけど、こうしてイレブンの本当の気持ちも知れたし、素敵な事を言ってもらえた。私、とっても嬉しいわ」

イレブン「エマ……」

おばさん「さあ、それじゃあ二人が無事に付き合う事になったという事で、村に帰りましょうかね」

ダン「皆にも教えてやらねばな！」

エマ「お父さん、恥ずかしいからあまり言いふらさないで！」

全員「アハハハハ!!」

挑戦者

それから三ヶ月後、デルカダール城

大広間

??? 「たのもー!」

青年が元気よく入ってきた

バン 「ん?」

??? 「誰かいないのか?」

バン 「何だ?この城に用事か?」

??? 「おお、兵士じゃん。俺、この城にいるラースって人に話があるんだ。会わせてくれないか?」

バン 「ししょ…… ラース將軍に?まあ、いいけどよ。ここから真っ直ぐ進んだ玉座の間にいるぞ。マルティナ様っていう王女様もいるから失礼のない」

??? 「おっしや!ありがとな、お前!」

青年はバンの言葉を最後まで聞かず走っていった

バン「あ、おい。……まったく、話くらい聞けよな」

玉座の間

バタン！

??? 「たのもー！」

全員「??」

マルティナ「えっと……いらっしやい。何か用事かしら？」

??? 「ここにラースという男がいると聞いた。会わせてくれないか？」

ラース「？俺がラースだが……」

??? 「おお！あんたがラースって人なのか！俺、エド！あんたってめちゃくちゃ強いんだろ？俺と戦ってくれよ！」

エドというまだ若い青年は元気よくハキハキとしている

ラース「エドっていうのか。俺がめちゃくちゃ強いってのはまあわからんが、そのためだけにここに？」

エド「おう！俺、強いやつと戦ってみたいんだ！なあ、いいだろ？」

グレイグ「お前、もう少し礼儀というものがあるだろう。いきなり来て人に頼む態度ではないぞ」

エド「いいじゃんかよ、おっさん！俺はこういう話し方しか出来ねえの！」

グレイグ「ハア……」

ラース「マルティナ」

マルティナ「まあ、少しだけならね。訓練場でいいかしら？」

エド「おお！お姉さん、ありがとう！ラース、俺の力見せてやるよ！」

ラース「はいはい。訓練場はこっちだ」

二人は出ていった

マルティナ「な、何だか嵐みたいな子ね。感情がとっても豊かだわ」

グレイグ「あまりマナーがなっていないようなやつですな。ラースも面倒なやつに目をつけられたものだな」

マルティナ「…………… 彼、エドつて言ったわね。エドからはそこま
で強い雰囲気を感じなかったわ」

グレイグ「私も同意見です。村や街で少々強い若者と行った所で
しょう。まあ、世界を知るいい機会になるでしょう」

訓練場

エド「おお！でっけえ！」

エドは広い訓練場を見渡してはしゃいでいる

周りには数人兵士達が自主練していた

バン「あ！さっきの」

エド「おお！入り口にいた兵士か。ラースに会えたんだ。教えてく
れてありがとな！」

ラース「自主練中すまないな。少しだけスペース使わせてもら
うぞ。すぐに終わる」

ベグル「は、はあ……。その人は？」

ラーズ「エドというらしい。俺と戦ってみたかったらしいぞ」

エド「俺、強いやつと戦ってみたかったんだ！」

バン「…………… 待ってください、師匠」

ラーズ「何だ？バン」

エド「師匠？兵士が？」

バン「師匠が出るまでもないですよ。俺で充分です」

バンはラーズとエドの間に入った

エド「！そっか。あんたはラーズの弟子か。こいつを倒さないとラーズにはたどり着かねえって事か！面白いじゃん！」

ラーズ「まあ…………… っか。じゃあ、一応見てるが頼んだぞ」

バン「はい！おい、エドとか言ったな。お前、師匠といきなり戦わせるわけないだろ！」

エド「そんなのあんたの勝手じゃん！気に食わないならかかってこいよ！」

バン「イラッ……。ふーん、じゃあ遠慮なく」

バンは思いつきりエドに踏み込んで、一瞬で距離を詰める

エド「!？」

バン「せいけんづき！」

エド「やば……」

エドは避けられないと判断し、腕で防ごうとする

ピタッ！

エド「……………あ、あれ？」

エドが目を開けると、顔に当たるギリギリで攻撃は止まっていた

ブウン！

拳の風圧がかかってきた

エド「……………は、ははは」

エドは冷や汗を流している

バン「わかったか？これで動けないんじゃない、師匠には程遠いぜ」

エド「あんた……… すぎえじゃん。兵士だからとか思ってたけど、全然そんな事なかった。でも！俺だって何も見せねえわけにはいかねえ！」

エドは力を貯め始めた

エド「借りるぞ！父ちゃん！」

エドの目は赤くなり、爪や牙が生えて尻尾も現れた

辺りが魔物の気配に包まれる

全員「!？」

ラース「何だと!？」

その場にいた全員が武器をエドに向けた

玉座の間

全員「!？」

ブレイブ「グルルル」

コロ「グウウウウ…」

二匹は訓練場の方を威嚇している

マルティナ「何！この不思議な気配は！」

グレイグ「魔物ではあるようですが、普段とは明らかに違います。姫様、訓練場の方へ向かいますよう！何かが起こっております！」

マルティナ「そうね！」

訓練場

エド「あれ？皆して何でそんな警戒してんの？」

バン「お前、何者だ！」

ベグル「魔物に化けてたのか！」

マーズ「油断した。だが、自分から姿を現してくれるとはな！」

エド「ちよつ、ちよつと待ってよ！俺、少し違うけど人間だから！」

ラーズ「人間？だが、その気配や姿は人間とはかけ離れているぞ」

エド「あー…… やつぱり駄目？この姿。感情が昂ぶるとこうなりやすいんだよな」

ダダダツ！

グレイグとマルティナが走ってきた

グレイグ「ラーズ！何事だ！」

マルティナ「ラーズ！大丈夫!? つ、ま、魔物!？」

エド「おー、さっきの姉ちゃん、おっさん」

エドは二人に手を振っている

グレイグ「どういう事だ？」

ロベルト「エド、敵意は無いのか？」

エド「え？そんなのあるわけねえじゃん。俺は強いやつと戦いたいだけ。お前、もう一回だ！今度は俺から行くぞ！」

バン「！来い！」

エド「っしやあっ！」

エドはかなり速いスピードでバンの目の前に向かう

エド「ダークパンチ！」

エドの拳に闇の力が纏う

バン「!?しんくうげり！」

エドの攻撃が当たる前に、バンの足がエドに当たる

エド「ぐへっ！」

ドガアン！

エドは壁まで飛ばされていった

バン「あ……………やべ」

ラース「おい……………今手加減したか？」

バン「い、いや……………ちょっとビックリしちゃって」

壁には気絶したエドが倒れていた

エドの姿は元に戻っている

ベグル「よつと。マルティナ様、グレイグ將軍、ラース將軍、どうしますか？こいつ」

ベグルはエドを抱えた

マルティナ「先ず医療部屋に運びましょう。話は本人に聞いてみましょう。敵意は無かったんだし。ただ、警戒はしておいて。強くないといっても、脅威になるかもしれないわ」

グレイグ「そうですね。ラース、警戒は任せていいか？」

ラース「ああ、任せておけ」

ロベルト「グレイグ將軍、俺達兵士も基本一人は付いておくようになりますね」

グレイグ「ああ、頼むぞ」

ラース「(魔物のような人間。何なんだ？こいつ。借りるぞ、とか言ってたな。そんな事がありえるのか?)」

半魔人

数分後、医療部屋

エド「はっ！こ、ここは……？」

医者「おや、起きたのかい。随分早いねえ」

エド「クンクン……この匂い。あんた、医者か。気絶しちゃうなんて俺もまだまだだ。ありがとよ！」

医者「鼻で判断するなんて変わってるんだねえ。どれ、少し待ってね。ラース様を連れてくるよ」

エド「いや、もう大丈夫だぜ！さっきの綺麗な部屋にいるんだろ？俺が向かえば早いって！」

エドはベッドから飛び降りた

医者「ま、まあ大した怪我もしてないから大丈夫だとは思うけど」

エド「そんじゃ、ありがとな！」

エドは走って出て行った

医者「随分元気な子だねー」

玉座の間

バタン！

エド「ラース、起きたぞー！」

ラース「早いな、おい。まあいいや、聞きたい事があるんだ」

エド「流石にわかってるぜ！あの父ちゃんの力の事だろ？」

グレイグ「そうだ。魔物の姿になっていたが、どういう事だ？」

エド「俺、生まれたばかりの頃に親に捨てられたんだ。その時に魔物が俺を見つけたみたいだな。俺を巣に持って行って世話してくれたんだ！それが俺の父ちゃん！厳しいけど、優しくったんだぜ！」

マルティナ「ま、魔物が赤ちゃんを世話する!?そんなの見た事もないわ」

ラース「一応ブレイブもそれと似たような事になってるが、これはある意味特殊だよな。不思議な事もあるもんだな」

ブレイブ「……………」

ブレイブとコロは隅でエドを観察している

エド「ん？おおつ!!キラールパンサーにベビーパンサー!こんな所にいるのか!凄えな!!」

エドは二匹に気付き走って近寄る

ブレイブ「グウウ……」

ブレイブは姿勢を低くして威嚇している

コロ「ク、クウ……」

コロは少し不気味がっている

エド「何だよ、そんな威嚇すんなって。俺に悪意はねえぞ!な!」

エドは腕を大きく開いている

ラース「おい、話の途中だ。それと魔物の姿になったのはどう関係があるんだ」

エド「おっと、そうだったな。俺、そんな事があつたから今までずっと魔物と暮らしてたんだ。群れの一人としてな。それで数年前に父ちゃんが死んじやつてよ。俺達はめちやくちや悲しんだんだけど、その時に父ちゃんの体から光が出てきて、俺の中に入っていったんだ。

そしたらあの姿になれるようになった。父ちゃんと似た姿になれるんだぜ!きつと父ちゃんが俺に自分の力をくれたんだ!だから

あの姿の時はいつもより速く動けるし、強い力も使えるんだ！」

グレイグ「なるほど。自我をしつかり持ちながらどうやって魔物の姿になっているのか疑問だったが、そんな不思議な出来事があったのか」

エド「そうそう！意味わかんない力だけど、俺は気に入ってるんだ！俺もやっと群れの皆みたいに魔物っぽくなれたかなって！俺の事は半魔人とも思ってくれよな！」

マルティナ「人間でありながら魔物の姿になって力を使う……。確かに半魔人なのかもしれないわね」

ラース「どうやってあの姿になるんだ？エドの意味か？」

エド「大体はそうだよ。こう、力をぐわーっ！ってやると、ほら！」

エドはまた魔物の姿になった

ラース「！きゅ、急にその姿になるな。こっちは驚くからよ」

エド「あ、そっか。ごめん、ごめん」

エドは人間の姿に戻った

グレイグ「戻る事も意思次第なのだな」

ブレイブが隅からエドに近づいてきた

ブレイブ「ガウガウ」

エド「え？そうだぜ！カツコイイだろ！」

ブレイブ「ガウ……ガウ」

エド「危なくはないぜ！あまり人前でやっちゃいけないのもわかってるしよ！」

マルティナ「エド。もしかして、ブレイブの言葉わかるの？」

エド「そうだよ。だってずっと魔物と暮らしてたからな」

ラース「そ、そりゃあ凄いな。バン以外に初めて見た」

グレイグ「因みに何と言っていたのだ？」

エド「俺の父ちゃんらの魔物の種族を知ってたみたい。ベンガルっていう名前の種族。知ってる？」

マルティナ「確かプチャラオ村周辺にいた魔物ね。知ってるわよ」

エド「おお！知っててくれると嬉しいな！あとはホイホイ変身して危ないだろって注意された」

ラーズ「それは言われて当然だな」

エド「それにしても、まさかラーズと戦う前にあの兵士……名前なんつってたかな。あいつにやられるとは思わなかった。この兵士強いな！」

ラーズ「まあそうだろうな。だが、あいつらに勝たないと俺に勝つのは難しいはずだぜ」

エド「そっか。あ！ならよ！ラーズ、もう一つ頼みたい事があるんだ！」

ラーズ「何だよ」

エド「俺の群れに来てくれよ。皆にも紹介してやりたいんだ」

ラーズ「お前の？それってつまり、魔物の家だろ？そんな所にただの人間がいつていいのか？」

エド「俺、群れの長からあんたの事を聞いたんだ。デルカダールって場所にラーズという強いやつがいるって。実際あんたとは戦ってねえけど、それでも強さはわかった！皆に少しだけ顔を見せてやってくれよ」

ラーズ「だが、俺はあまり城を離れられないんだ」

エド「ええ!?ま、まあ……仕方ねえか」

エドは暗い雰囲気になった

マルティナ「ラーズ、明日の半日だけならいいわよ。顔を出してきてあげたら？」

ラーズ「いいのか？マルティナ」

エド「ほ、本当!?姉ちゃん！」

マルティナ「ラーズにもお仕事があるから早めに帰れるようにしてくれれば大丈夫よ」

エド「わかった！約束する！俺、約束は絶対守れて父ちゃんからキツく教えられてるから絶対大丈夫！ありがとう！」

グレイグ「あまり変な事はするなよ？」

エド「別に何もしねえよ！じゃあ、明日また来るな！」

ラース「わかった」

次の日、メダチャット地方 森の中

二人は森の中を草をかき分けて進んでいた

エド「ラースー、遅ーい！」

ラース「ちよつと待てよ！俺はお前みたいにヒョイヒョイ動けねえんだ」

エドは慣れた動きで木から木へ飛び移ったり、草をまるで無いかのように走っている

エド「もうちよつとだぜー！頑張れよなー！」

ラース「（たくっ！魔物との生活はこんな所にまで影響が出てんのか。野生児かっての！）」

三十分後、エドの故郷

エド「とうちやーく！ここが俺達の村みたいな場所だ。ここで皆よく集まってるんだ」

そこは少し草がなく開けていた。周りには大きな木が生えているが、太陽の光が差し込み、明るくなっている

ラース「ほう。中々いい場所だな。来るまでの道のりを気にしなければ」

エド「あれくらいしなないとすぐにバレちゃうからな。少し案内するぜ。この大きな木が長の家。そんでこの道を進むと洞窟があって、そこが皆の家だ。俺の部屋もあるぜ。反対のこの道は川に続いている。一部こつちに住んでるやつもいるぞ」

ラース「な、なるほど……（道？……どれがだ？）」

エドは道といているが、草木が生い茂っており道とは呼べないよ
うな道だった

エド「それじゃあ長に会おうぜ！あ！通訳は俺がするから安心しろよ」

ラース「それは助かる。俺じゃあ何言ってるのかわからねえからな」

二人は大きな木の家に入っていた

暴走

長の家

エド「じじーい！帰ったぜー！」

ブン！

ガン！

エド「痛っ!!」

エドに向かって杖が飛んできた

長「ギギイツツ!!ギイ！」

奥からはげんじゅつしがやってきた

ラース「ほ、本当に魔物なんだな。何言ってるのかわからねえや」

エド「痛って〜。いいじゃん！じじいなのは本当だろ！それよりさ、ほら！じじいが話してくれたラースってやつ連れてきたんだ！しかもラース以外にも兵士がめちやくちや強くてよ！俺、瞬殺されてきた！」

長「ギギギ」ペコ

長はラースに向かって軽くお辞儀をした

ラース「お、おう……。よろしくな」

エド「今じじいが初めましてって言ったのわかったの？」

ラース「まさか。挨拶か？と思ったただけだ」

長「ギイー」

エド「あ、じじいが少し話したい事があるって。ラース、こっちに
こいよ」

ラース「わかった」

部屋

エド「じじい、話って何だよ」

長「……。ギイ。ギギ」

長は少し考えた後、エドを部屋から出そうとしている

エド「は？俺はいちやダメなのかよ。でも、俺がいないとラースが
じじいの言ってる事わからねえぞ」

長「ギイー。ギギギ」

エド「何が大丈夫なんだよ！あー、もう！わかったから！外で見回りしてくる！」

エドは渋々出ていった

ラーズ「えっと、エドの言う通り、俺はあんたの言う事わからねえんだが」

長「ギギ…………… 言葉、話せる。少し」

長は言葉の表が書かれたものを見ながら話し始めた

ラーズ「おお、マジか。それならわかりそうだ。で？魔物から俺に話って？」

長「ありがとう。エドを嫌わなideいた。あの子、人間。自分、魔物」

ラーズ「お礼なんかいらねえよ。どこで過ごそうがあいつが人間なのはわかった。多少不思議な力があるだけだ」

長「勇者の仲間、優しい。お願い、ある。いいか？」

ラース「いいぞ。困りごとか？」

長「ここ数年、人間達にここがバレた。何回か襲われた。皆、危ない。守ってほしい」

ラース「なるほど。誰かの大事な故郷を滅ぼそうとするのは俺は大嫌いだからな。もちろんそんなやつらぶつ飛ばしてやるさ」

長「助かる。エド、この事知らない。エド、まだまだ弱い。それに、信用ならない人間達に、見られたくない。黒い服を着た男達、十人。どうか頼む」

ラース「わかったぜ。エドにバレないようにする」

長「よく男達来る場所教える。こつち」

ラース「おう」

その頃、エド

エド「なんだよ、なんだよ。じじいのやつ、俺の事扱い適当すぎんだろ。俺だっていつか父ちゃんみたいに強くなるんだからな！今に見てろよ」

エドは木々を慣れた手つきで移動しながら、周りを探っていた

エド「!?人間の気配。こんな所になんでだ」

エドは移動をやめ、その気配がした場所を警戒していると

ガサガサ

手下A「ラージさん。本当にこんな何もない山の中に魔物の群れが？」

ラージ「ああ、そうだ。しかも中々でけえぞ。ありやあ魔物共の集合場所だな。きつとお宝とかがあるはずだぜ」

手下B「そういう場所つて大抵何かありますからね。もしかしたら珍しい武器とか鎧もあるかもですね！」

手下C「そうしたらまた大儲けですね！」

黒い服を着て、武器を持った男達が団体でどんどん進んでいく

エド「何だよ、あいつら。初めて見たけど、この先の村まで知ってるなんて。皆が危ない。俺が止めなきゃ！」

エドは木から飛び降りて男達の前に出た

ガサ!

ラージ達「!?」

エド「てめえら、こつから先にはいかせねえぞ！」

ラージ「人間だと!?こんな所になぜ！」

エド「うるせえ！俺が倒してやる！」

エドは魔物の姿になった

ラージ「魔物だと!?なんだ、こいつ!!化け物か！」

手下B「何かヤバそうです。でも、一体だけなら！」

全員が武器を構えた

エド「人間、かかってこいよ」

その頃、ラーズと長は

長「今日、来ない。いつもはこつちから来る」

エドとは遠く離れた正反対の方向に来ていた

ラーズ「そうか。まあ、来るか来ないかはわからないもんな。少し警戒しておく。エドはどうしたんだ？」

長「あの子は見回り。安全な場所、任せている。危ない事、させられない」

ラース「そうか。まあ、まだ若いもんな。力もまだ上手く使いこなせないようだし、それがいいだろうな」

長「自分、皆にラース伝える。警戒されないように」

ラース「そんな事しなくていいぞ。俺はここにいたらダメなやつだからな。隅っこで大人しくしてるさ」

長「すまない。では」

長は家へ戻っていった

ラース「さて、木の上で警戒しておくか。懐かしいな、この感覚」

ラースは軽々と木の上に登り、遠くまで見ている

その頃、エドは

エド「くっそ……」

エドは傷だらけになっている

ラージ「何だよ、魔物みたいだと思ったら全然弱っちいじゃねえか」

手下D「この程度で威張ってるなんて、たかが知れていますね。ラージさんが出る必要ないですよ。俺達で大丈夫です」

手下達にはエドは囲まれており、逃げ場は無くなっていた

手下C「安心しろよ、ガキ。お前の村は俺達が支配してやるよ」

手下E「魔物を従える人間。面白そうだな」

エド「誰がためえらなんかに！」

ラージ「うるせえよ。弱いお前が悪いんだぜ。さて、これ以上時間かけたくないんでね。終わりにさせてもらおう」

ラージはエドに剣を突き刺した

エド「ガアアアア!!」

手下A「うわ、容赦ないですね。そこまでしなくても、勝手に死んだと思いますよ」

ラージ「弱肉強食。弱いやつは強いやつに殺されるしかない。こいつは俺達より弱かった。だから殺した。それだけだ」

ラージ達は村に進んでいく

ガシ

ラージ「あ？」

エド「ま……………て……………。そっちは……………」

血だらけのエドがラージの足を弱々しく掴んだ

ラージ「まだ生きてたか。なら、楽にしてやるよ」

ラージはもう一度エドに剣を振りかぶる

エド「俺……………死ぬのか。父ちゃん……………弱くて……………ごめん。俺に……………力があれば」

エドは振り落とされる剣が走馬灯のように見えていたその時

カツツツ!!

エドが突然赤い光に包まれる

全員「!？」

ラージ「な、何だ!？」

その赤い光は遠くにいたラーズにも見えた

ラーズ「!?!?何だ、あれ!しかもこの凶悪な気配は!まさか、エド!?!」

ラースは光の方に全速力で向かっていく

エド「グオオオオ!!」

エドからは青い毛が生え、釣り上がった鋭い目、長い牙と爪を持ち、体全体から赤い光を纏っている

ラージ「な、何だ、こいつ。さっきまでと姿がなんだか違うぞ!」

手下B「雰囲気も別物です。まずいですよ、ラージさん!」

エド「ギャオオ!」

エドは手下の背後に回り、爪で切り裂いた

手下E「ガッ……」ドサ

全員「な!?!」

ラージ「は、はええ! さっきよりもずっと速いぞ!」

手下C「撤退しましょう!」

ラース「エド!!」

逃げようとする手下達の近くからラーズがやってきた

全員「また人間!？」

ラーズ「こいつら、あの長が話してたやつか!まさかこっちにいるとはな! って……」 エド? 「

エド「グオオオオ!!」

ラーズ「あ、あんた助けてくれ!こいつ、人間みたいなくせに魔物になりやがったんだ!」

ラーズ「エド!俺がわかるか!」

エド「ギャオオオ!」

エドはラーズを切り裂こうとする

ラーズ「くっ!」

ラーズは避けた

エド「ガアアア!」

エドはラーズをどんどん攻撃する

ラース「チツ！大人しくさせるしかなさそうだな！」

ラースは避けながら攻撃体制に移った

ラース「ばくれつきやく！」

エド「ガッ！」

バキイ！

エドは木を折るほどの威力で吹き飛ばされる

ラース「ハアッ！」

ドガアン!!

ラースはエドを追いかけ、頭を掴んだ後地面に叩きつけた

エド「……………」

エドは地面に埋め込まれた後、動かなくなり元の姿に戻った

ラース「ふう…………。手荒だったが、息はしてるな」

ラージ「あんた…………。すげえな。何者だ」

ラース「お前ら、エドに何をした。こんな風になるまで痛めつけた

のか」

ラーズは殺気を出しながらラーズ達に問い詰める

ラーズ「い、いや、こいつがしつこいから」

ラーズ「エドは何もしなければ襲う事はないはずだ。つまり、お前はそれ相応の事をしていたんだろ。お前ら、村を襲うやつらだろ」

ラーズ「でも、お宝が」

ラーズ「んなのねえよ。これ以上引き下がるなら俺が相手になるぞ。お前らの命は保証できないからな」

ラーズ「お、お前らここはやめだ！こんな所来てたまるか！」

ラーズは手下を連れて逃げていった

ラーズ「さて、エドを連れていかないと」

目標

その後、長の家

エドは治療された後、寝かされていた

長「助かった。エドが巻き込まれるなんて」

ラース「こっちこそ手荒ですまないな。あの力はなんなんだ？」

長「わからない。エドの親が死んだ時、突然変身した」

ラース「そうか。まあ男達も追い払ったし、エド以外の人間がいつまでもここにいるべきじゃないよな。俺は帰らせてもらうさ。大丈夫か？」

長「ああ。エドには伝えておく。ありがとう」

ラース「おう、じゃあな」

それから二週間後、デルカダール城

訓練場

バン達「え……………」

新しい兵士が入ってきていた

エド「よっ！この前ぶりだな！俺、ここの兵士になったからよろしくな！」

バン「いやいやいや、なんでだよ！」

ベグル「お前、ラーズ將軍の言ってた村はどうなったんだ？」

エド「村の事？それがさ、俺自分がまだまだ弱い事に気付いてさ。ここの兵士くらい強くなれば村も守れるだろ？それに、強くなってお前らを倒すくらいになればラーズとも戦えるようになる。俺の目標も叶うってわけだ！そういう事で、これからよろしくな！」

兵士達「えー………」

その後

バンから教えられたラーズは訓練場に来ていた

ラーズ「いや、エド。いいのか？こんな所でこんな事して。初めてだろ？」

エド「強くなるためだ！じじいも許してくれたしな！というか、それまで帰ってくんなって喧嘩してきた！」

ラーズ「全く……。それと、ここであまりあの力は使うなよ？せめてバン達とかの指導者相手にしておけ。見習い達だと不安だからな」

ロベルト「いや、俺達はいいんですか？」

ギバ「話に聞いてただけだからわからないんですけど、危なくないんですか？」

ラーズ「一応お前らしくらいなら問題ないはずだ。油断してるとどうなるかわからないけどな」

エド「お！という事は、今の俺でもワンチャン勝てる!？」

ラーズ「ほぼ無理だけどな。バンみたいに一撃だと思っぞ。まあ、これから強くなっていけばいい。そのために来たんだろ？」

エド「おう！まずはバン以外のやつら全員倒して、それからバンを倒す！その後はラーズ！お前だからな！覚悟しておけよ！」

ガザル「ほ、ほう……。随分と舐められたものだな。なあ？ベグル」

ベグル「これはこれは……。さつきから生意気な話し方といい、この宣戦布告といい、極上のおもちやが来てくれたようだなあ」

エドの発言により、二人が怒りに満ちている

ダバン「今のは俺も聞き捨てならないな」

バン「エ、エド！お前、今の発言無かつた事にしておけ！これから地獄になるぞ！」

バンはベグル達を見て怯えるように言った

エド「え？何でだよ。これが俺の目標だ！手加減なんかしないでいから、どんどん強くしていってくれよなー！」

ラーズ「ハ、ハハ……（また医療部屋送りの人が増えるな。今度ドクターにお詫びとしてお金を増やしておこう）」

マーズ「ラーズ將軍……止めなくていいんですか？このままだとベグルやガザル、ダバンがあのエドとかいうやつにももの凄い事仕掛けますよ？」

ラーズ「ま、まあ……何とかなるんじゃないか？」

ラーズも苦笑いしている

マーズ「止められない事も多いので、また仕事増やすかもしれません。すみません」

ラーズ「大丈夫だ。まあエドが自分で選んだ道だ。きつと険しくても自分で進んでいくさ」

ベグル「ラーズ將軍、あいつ昔のバンから礼儀を無くしたような感じで本当俺の癪に触れますね。どれくらい痛めつけなければいいですか？」

ベグルが顔を赤くして、我慢ならないというように拳を振るわせている

ラーズ「まあ……… ベグルの好きにやるといい。魔物の世界にいたんだ。力が全ての世界。力が強いものに従うかもしれないぞ？」

ベグル「ほ、本当ですか!? よっしゃー!!」

ベグルはそれを聞き、大喜びでエドに殴りかかった

エド「いふあつ!!」

ベグル「覚悟しやがれ、てめえ!!! さつきから舐めた真似しやがって!!」

バン「あく、悪魔がついに解き放たれた。師匠、いいんですか？」

ラーズ「一応な。色々教えてやるといいさ。武器や強さだけでなく上下関係とかな。エドが人間の世界に慣れるようにな」

バン「わ、わかりました。あ、ガザルまで乱入してる」

その後、玉座の間

ラーズはエドが兵士になった事を伝えていた

マルティナ「へえ、兵士になっちゃったの。まあ、様子も見られるしいんじやないかしら」

グレイグ「だが、前のように魔物にされると困るのではないか？」

ラーズ「一応頻繁に使うのはやめろと言っておいた。バン達くらいなら問題はなさそうだけどな」

グレイグ「不思議なやつがまた入ってきたな。ラーズ、面倒みるのだぞ」

ラーズ「俺かよ。まあそのつもりだったけどさ」

マルティナ「感情が豊かで楽しいんじやない？少しバンに似てるわ

よね」

ラース「騒がしい所もな。賑やかになりそうだ」

夕方、バルコニー

エドの手当てをラースがしていた

エド「痛っ！ちよっ、ちよっど雑すぎるだろ！俺、こんなにでっかい傷つけられたんだぞ！優しくしろよ！」

ラース「少しくらい我慢しろ。どうだった？兵士達は？」

エド「鬼か悪魔しかいねえじゃねえか！あのベグルってやつとガザルってやつ、俺の事ずつと殴ってくるんだぞ！」

ラース「ま、まあそれはエドが挑発したからだぞ。そいつらも倒すのが目標なんだろう？」

エド「あんなやつらを倒すのか……。くっ、先は遠いな」

ラース「焦るなよな。まだ始まったばかりだ。これから何年も努力してれば自然と強くなるさ」

エド「おう！レース、見てろよな！俺、めちやくちや強くなってる！」

レース「まずはその口調から直した方がよさそうだぞ。いいか？人間には敬語っていうものがあつてだな」

エドの目標は遠い

行方不明の両親

それから二週間後、ソルティコの街

シルビアは自分のサーカスに必要な物などの準備をしに買い物をしていた

シルビア「道具はこんなもので大丈夫ね。あとはネタを作るだけ。……あら？」

男の子「駄目だって言ってるだろ！」

女の子「嫌だ！離して、お兄ちゃん！私、もう我慢できないの！」

二人の子どもが言い争っていた

男の子「父さんとの約束だろ！俺達はここで待ってるんだ！」

シルビア「どうしたの？二人とも。何か困りごと？アタシが力になりましょうか？」

女の子「え？あ、お姉さん知ってる。見た事ある」

男の子「シ、シルビアさんだ！この街にいるの知らなかった！」

シルビア「あら、アタシの事知ってってくれるなんて嬉しいわ。それで？喧嘩みたいだったけど？」

男の子「あ、えっと、俺、テルマと言います。こっちは妹のチャム。実は、妹が俺の父さん達に会いたくなかったみたいで」

シルビア「お父さん達は別の場所にいるの？」

チャム「そうなの！私がまだ赤ちゃんだった頃にお父さんがお母さんを探しに行っちゃったの。それでまだ帰ってこなくて……」

テルマ「父さんは俺に必ず帰るからここでチャムと待っていていろつて約束したんです。だから父さんが母さんを連れて帰ってくるまでは、俺がチャムの親代わりとして生活してるんです」

シルビア「そう……。チャムちゃんはお父さん達が心配なのよね。お母さんはどうしていなくなっちゃったの？」

テルマ「母さんはチャムが産まれてすぐに行方がわからなくなっただんです。デルカダールまでお使いにいくと行って出ていったきりで……」

チャム「それで、お父さんがお母さんを探しにいったのに……」

シルビア「そのお父さんも何年も帰ってこない……と。任せて、二人とも！アタシがお父さんとお母さんを探してきてあげる」

テルマ「い、いいんですか!？」

シルビア「もちろんよく。だ・か・ら、二人はここで笑って待ってね」

チャム「やった！お姉さん、ありがとう！」

シルビア「お父さんとお母さんの特徴を覚えてくれない？髪の色とか服とか」

テルマ「父さんは黒い短い髪をしてて、茶色のコートをよく着てたよ。母さんは金色の長い髪をしてて、紫の服をよく着てた」

チャム「あ！あとね、お母さんと半分こしたのがあるの！これ！」

チャムは自分の小さな鞆から縦に二つに割れた手鏡を出した

シルビア「これ……わざとこうしてあるの?？」

チャム「うん！お母さんがチャムとお揃いにしてくれたんだって

！」

テルマ「母さんがチャムに残した形見なんです。このもう半分は母さんが持っています」

シルビア「そうなのね。二人の名前はわかる？」

テルマ「父さんの名前はイグナ。母さんの名前はマリーです」

シルビア「わかったわ！教えてくれてありがとう」

その後、デルカダール城　玉座の間

ラース「うーん……短髪のイグナという男性も金髪のマリーという女性も聞いた事がないな」

グレイグ「住んでいる記録もない。この国にはいないようだぞ」

シルビア「じゃあ何年も帰ってないのはどうしてなのかしら」

マルティナ「わからないわね……。こつちも街の人に聞いて調べてみるわ。シルビアはもし万が一襲われていた場合も考えて、森の中を調べてくれるかしら？」

シルビア「そうね。あまり考えたくないけど、調べてみるわね」

ラース「ブレイブ、森ならお前が一番よくわかるだろ。シルビアに何か情報を教えてやってくれ」

ブレイブ「ガウ！」

シルビア「ふふ、またよろしくね、ブレイブちゃん」

ナプガーナ密林

ガザル「お願いします、シルビアさん」

ガザルも念のためとしてやってきた

シルビア「ええ、よろしくね、ガザルちゃん。わざわざごめんなさい」

ガザル「いえ、大丈夫です。場所とかの検討はついてないんですけどね？」

シルビア「そうね。何かヒントとかあるとわかりやすいんだけど」

ガザル「ブレイブの鼻を活かして探してみるのもいいと思います。」

何か物とありませんか？」

シルビア「あ！それならこれがあるの。マリーちゃんの手鏡の半分。妹のチャムちゃんから預かったの。これでいいかしら？」

ガザル「それならよさそうです！」

シルビア「ブレイブちゃん、この匂いの場所わかる？」

ブレイブ「スンスン……………クウーン…………フルフル

ブレイブはしばらく地面を嗅いでいたが、わからなかったようで首を横に振った

シルビア「あら……………わからなかったって事よね」

ガザル「マジか……………あのブレイブでもわからないなんて初めてだ。手当たり次第探してみますか？」

シルビア「そうね。わからない事ばかりで手を煩わせてごめんない。ブレイブちゃんもし今の匂いを感じたら教えてくれる？」

ブレイブ「ガウ！」

ガザル「それじゃあ探してみましよう」

一時間後

シルビア「ガザルちゃん、そっちはどうだった？」

ガザル「俺の所に一つ怪しそうな場所がありました。洞穴です。もし迷って入ってしまうと自然とそこに入ったと考えるもいいような場所にあります」

シルビア「お手柄よ、ガザルちゃん！ありがとう！早速そこにいつてみましよう！」

末路

洞穴

洞穴までの道は一本だけになっており、周りから少し離れた道を通るとその洞穴に続くようになっていいる。周りは木々で少し生茂り、洞穴には見えにくくなっている。

ガザル「ここです。慣れた人はこんな道来ないんですけど、初めての旅人なんかは遭難するところにいたりします」

シルビア「なるほどね。確かに一度迷うと元の道に戻るのさえもかなり大変なものね」

ブレイブ「……………ガウ」

ブレイブは中の様子を確認した後、シルビア達を少し押し出した

シルビア「ど、どうしたの？ブレイブちゃん。何かいた？」

ガザル「魔物でもいたか？シルビアさん、少し離れてブレイブに任せましょう」

シルビア「わかったわ。ブレイブちゃん、お願いね」

数分後

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブはシルビア達の元に戻ってきた

ガザル「お、戻ってきたか。ブレイブ、どうだった？」

ブレイブ「ガウガウ」クイ

シルビア「あ、ついてこいって言うてるわね。行ってみましょう」

洞穴内

リップス「プギ〜…」

中には数匹のリップスがいた。こちらを怖がっているようだ

シルビア「あら、ごめんなさい。ほんの少しだけお邪魔させてもら
うわね」

シルビアはリップスに近づく

リップス達「プギー！」

リップス達は驚いて逃げ出した

シルビア「あ、あら…。驚かせちゃったみたい。ごめんなさい」

ガザル「怖がりなんで仕方ないです。それよりも早く調べてリップ

ス達にも安心してもらいましょう」

シルビア「そうね。そこまで入り組んでるわけではないのね」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブはシルビアとガザルにまた合図を出している

ガザル「あ、ブレイブが何か知ってるみたいですよ。行ってみましょう」

シルビア「流石ブレイブちゃん。頼りになるわ」

少し進むと

スモーク「シユ」

奥に一匹のスモークがいた

全員「!？」

ブレイブ「ガウガウ！」

ガザル「魔物はリップス達だけじゃなかったのか！」

スモーク「シュー!!」

スモークは吠えるブレイブを煙で包んだ

シルビア「あ、ブレイブちゃん！助けないと！」

シルビアとガザルは急いで武器を出した

ブレイブ「ガウ！」ガブツ！

ブレイブはすぐに少し後ろに跳んで煙から逃げた後、すぐに噛み付いた

スモーク「シュ〜……」ジュワー

ガザル「おお、流石ブレイブ。自力でどうにでもなったか」

シルビア「一撃なんてやるじゃなくい。そういえば、ブレイブちゃんってかなり強いキラーパーンサーだったわね。まあ何事もなかったみたいで安心だわ」

二人は武器をしまった

スモークがいた場所には色々なものがあつた

食べ物や少し光るような物、または人間の着ていたものなどもある

ガザル「これは……あのスモークが集めていたものでしょうか」

シルビア「多分そうだわ。結構たくさんあるのね……………キヤツ！」

横を見たシルビアは少し驚いていた

ガザル「?どうしました?シルビアさん……………つて、うおっ!」

横にはまだ穴があり、行き止まりとなっていた。そこにはたくさん
の人間の死体があった

シルビア「ここに迷い込んだ旅人ちゃんの……………末路って事?」

ガザル「なるほど。ここに迷い込むような慣れてない旅人や人間が
スモークに敵うとは思えません。ましてやこんな狭い場所。ブレイ
ブは身のこなしが軽いから何とかありますが、俺達は避けるだけで精
一杯です。」

もしかして……………この中にそのイグナさんやマリーさんも……………」

シルビア「や、やだ。そんなの駄目よ。だって……………帰りを待つて
いる子ども達がいるのよ。こんな所にいるわけ……………」

ブレイブがその死体に近づき、匂いを嗅いだ

ブレイブ「……………ガウ……………」カプ

ブレイブは戻ってきてシルビアの手にあった手鏡と全く同じもの
を持ってきた

二人「!!？」

ガザル「……………シルビアさん、これって……………」

シルビア「やだ……………。じゃあ、本当に……………」

シルビアはショックを受け、その場に座り込んだ

ガザル「……………少し調べます。もしかしたら、そのイグナさんっていう人も」

ガザルは死体を触って物や服の痕跡を確認し始めた

三十分後

ガザル「シルビアさん……………この男性の死体。元は茶色のコートを着ていたようです。それと……………こんな写真が……………」

ガザルは一枚のボロボロになった写真を持ってきた

シルビア「!？」

その写真には小さなテルマと産まれたばかりのチャムが写っていた。無くなっているが、その近くにはイグナやマリーと思われる人の足なども写っている

シルビア「……………この子達よ。アタシにお父さん達を探してきてほしいって言ったのは」

ガザル「そうでしたか……。手鏡があつた死体より新しかったです。きつと、ここに迷い込んだというよりは、探し当てたのかもしれないですね」

シルビア「……………」

ガザル「……出ましよう、シルビアさん。もうここにいる理由はありません」

シルビア「そう……。ね。ごめんなさい」

デルカダール城

ガザル「シルビアさん、大丈夫ですか？」

シルビア「ええ、少し落ち着いたわ。ごめんなさい、少し動転してしまつて」

ガザル「当然の事ですよ。まさか……。もういないとは俺も思つていませんでした。その二人の兄妹には何て言うおつもりですか？」

シルビア「……………まだ、悩んでるわ。本当の事を言うか、嘘を言うか……。どっちが正しいのかしら」

ガザル「……………俺の個人の意見ですが、本当の事を言うべきだと思います。もう生きてもない、二度と帰ってこない人を待ち続けるより、少しでも前に進んでもらえるようにするのがいいかと」

シルビア「そうよね……………。ありがとう、ガザルちゃん」

ガザル「いえ、報告はシルビアさんがしますか？」

シルビア「ええ。ガザルちゃんはもうゆっくり休んで。後はアタシが何とかしておくから」

ガザル「わかりました。それではお疲れ様でした」

玉座の間

マルティナ「そう……………。シルビア、大丈夫？」

シルビア「ええ、アタシはもう大丈夫。でも、あの子達には少し辛い現実よね」

ラーズ「そうだな。だが、もう変えられない事だ」

シルビア「………………。それじゃあ、アタシはあの子達に伝えてくるわね」

ラーズ「わかった。その子達に何かあれば俺達も僅かながら力になる。両親を無くすのは辛い事ばかりだからな。助けになつてやりたい」

マルティナ「そうね。シルビア、お願いね」

シルビア「わかったわ。それじゃあまたね」

シルビアは去っていった

グレイグ「……………」

ラーズ「グレイグ、どうしたんだ？シルビアを黙って見ていたが」

グレイグ「……いや、何でもない」

旧友

その後、ソルティコの街　テルマ達の家

シルビアはテルマ達に事情を伝えた

二人「……………え？」

チャム「嘘……………じゃあ……………お母さんもお父さんも……………もないの？」

テルマ「そんな……………」

シルビア「ごめんなさい、二人とも。この手鏡返すわね。それと、これも」

シルビアは二つの手鏡とボロボロの写真も渡した

テルマ「この写真……………。父さんのやつだ。チャムが産まれた時に撮ったやつ」

チャム「手鏡が……………完成した。お母さん……………なんで……………」

チャムは一つになった手鏡を持ちながら泣いている

シルビア「……………」

チャム「お姉さん！お母さん達を見つけてきてくれるんじゃないかな？」

チャムは泣きながら睨むようにシルビアを見ていた

シルビア「ごめん…… なさい……」

テルマ「チャム!!シルビアさんはわざわざ探してくれたんだぞ！お前、何て事言うんだ!!」

チャム「だって…… だって……。お母さんに…… お父さんに会えると思ってたのに……。ぐすつ……」

チャムは二階へ走って行ってしまった

テルマ「チャム!!」

シルビア「チャムちゃんの言う通りよね。アタシ、余計な事しちやったみたい」

テルマ「そんな事ありません、シルビアさん。確かに……… 信じられないですけど、わからないままよりよかったです。チャムがすみませんでした。後で落ち着かせておきます。ありがとうございます」

シルビア「ありがとう、テルマちゃん。チャムちゃんにもごめんなさいって伝えてくれると嬉しいわ。何か困った事があったらアタシに言っつて。何でも力になるから」

テルマ「わかりました。ありがとうございます」

夕食時、ジエーゴの屋敷

シルビア「…………… 御馳走様でした」

ジエーゴ「?どうした、ゴリアテ。食い終わるのが速えじゃねえか」

シルビア「ちよつと体調が良くないみたい。早いけど、休ませてもらわね」

ゴリアテの部屋

シルビアはベッドに横になり、考え事をしていた

シルビア「(アタシ、あの子達に何ができるかしら。皆に笑顔でいてほしい……………。ずっとそう思っているけど、やっぱり難しいわね)」

コンコン

セザール「ゴリアテ坊っちゃん。グレイグ様が訪れておりますよ」

シルビア「グレイグが？」

玄関

シルビアが玄関に行くとグレイグが来ていた

グレイグ「先程ぶりだな、ゴリアテ」

シルビア「ええ、どうしたの？グレイグ。こんな時間に」

グレイグ「少し話したい事があってな」

シルビア「？わかったわ。アタシの部屋に行きましょう」

ゴリアテの部屋

グレイグ「ゴリアテの部屋に入るのは久しぶりだな。ここは昔と大きくは変わってないのだな」

シルビア「ずーっと帰ってなかったし、今も仕事が多いと帰らない日も多いからね。それで？アタシに話してどうしたのよ」

グレイグ「うむ。ゴリアテ、何か悩んでいるのだろうか？」

シルビア「……え？どうしたの？別にそんな事ないわよ」

グレイグ「癖は相変わらずだな。お前は昔から何か隠そうとしている時一度まばたきをした後、少し下を向くな」

シルビア「え……………。そ、そんな事してたかしら？でも、グレイグが心配するような事はないのよ？仕事だって順調だし、スケジュールだって」

グレイグ「それは旅芸人シルビアとしての事だろう？俺はシルビアには聞いていない。ゴリアテ、お前に聞いているのだ」

シルビア「……………」

グレイグ「俺で力になれるかはわからん。アドバイスも出来るとは思えない。だが、昔からの友が、大事な仲間が悩んでいるのなら少しでも力になろう」

シルビア「……………。ふふ、やだ、グレイグったら。アタシってそんなにわかりやすかったかしら？まさかグレイグに見抜かれちゃうなんて。そう、ちよつとあの兄妹ちゃん達の事でね」

グレイグ「やはりか。どうしたんだ？」

シルビア「さつきお母さん達はもういないって伝えてきたの。案の定ショックを受けてね。妹のチャムちゃんは受け入れようとしてなかったわ。兄のテルマちゃんも見た目はしっかりしてたけど、心ではどうかしら。」

少なくとも、二人の心に大きな傷がついてしまったわ。これまでだって……辛い事も多かったはずなのに。こんな傷がついてしまったら、あの子達はきつと心から笑える日が来るとは……考えにくい。それでもアタシはあの子達に笑顔でいてほしい。それがアタシの夢でもあるから。

でも……アタシに何ができるかしら。あの子達の親代わり？生活のサポート？それだとまるで、あの子達だけを赤鼻肩しているみたいじゃない。世界中にはまだあの子達のような子だっているに……そんな事できないわ」

グレイグ「なるほどな。ゴリアテのその立派な夢は知っている。これだけ努力をし、世界中の人々を笑顔にし続けている。普通の人には到底出来ない事だと思っている」

シルビア「ありがとう、グレイグ。アタシ、ずっと前から思ってた事があるの。こんな時、イレブンちゃんなら上手く出来たんじゃないかしらって。旅の時もイレブンちゃんは街の人達からのたくさんのクエストを嫌な顔一つせずにこなして、皆を笑顔にしていた。」

時には残念な結果を伝える事もあったけど、イレブンちゃんは優しく接してその人を少しでも悲しませないようにしてたわ。アタシとは全く違う方法でたくさんの人々を笑顔にして、世界まで救って見せた。イレブンちゃんは本当に凄いなと思うてるの。」

でも、アタシはイレブンちゃんとは違う。こうやって……よかれと思っただ行動が……悲しませてしまう。イレブンちゃんが羨ましいわ」

グレイグ「ゴリアテ……」

シルビア「ごめんなさい！イレブンちゃんは全然悪くないのに、アタシったら何言ってるのかしら。それに、大事な仲間を比べちゃうなんて本当どうかしてたわ」

グレイグ「ゴリアテ、しつかりするのだ。お前は下を向くようなやつではないだろう。負けず嫌いで、向上心に溢れていただろう。悪い事ばかりを見るな」

シルビア「グレイグ……」

グレイグ「お前は確かにイレブンとは全く違う。だが、イレブンがそうやって笑顔にしてきたように、ゴリアテも方法は違えどたくさんの人々を笑顔にしてきた。それは変わらない。優しく接する事だつてゴリアテは出来る。イレブンとは違っていいのではないか？」

イレブンはもしかしたらその兄妹を悲しませなかつたかもしれない。だが、もしそれがイレブンにしか出来ないとするなら、ゴリアテにもゴリアテにしか出来ない笑顔のさせ方があるはずだ。お前にはその力があるだろう」

シルビア「……アタシだけの、笑顔のさせ方。そう……よね。アタシにはサーカスがあるわ！皆が心から楽しんで笑ってくれるようなショーができる！」

グレイグ「ああ、そうだ。それはゴリアテにしか出来ない事だ」

シルビア「ふふ、そうね。でも、まだあの子達にそれを見せるには早いわね。もう少し様子を見て落ち着いてからじゃないとね」

グレイグ「明日も様子を見に行くのか？」

シルビア「ええ、今日チャムちゃんにしっかりと謝罪できなかったの。それもしつかりやりたいわ」

グレイグ「なるほど。なら、俺もついて行こう。少し兄妹が気になっただけだ」

シルビア「大丈夫なの？お城は？」

グレイグ「これから少し許可をもらってこよう」

シルビア「そこまでしてくれるのは嬉しいけど、無理しなくていいのよ?」

グレイグ「なに、友が頑張ろうとしているのだ。少し力を貸そうと思っただけ」

シルビア「うふふ、嬉しいわ。ありがとう、グレイグ」

その後、デルカダール城　大広間

グレイグが戻ってくると、ラースが待っていた

ラース「よう。お疲れ、グレイグ。明日は自由にして平気だぜ」

グレイグ「な、なに!?まだ何も言っていないぞ!」

ラース「シルビアが落ち込んでるのを解決しに行ったんだろ?時間が足りないかと思って王様に明日はグレイグがいないと言っておいたぞ」

グレイグ「気付いていたのか。なら、ラースが行ったほうがよかつただろう」

ラース「いやいや。俺達はシルビアは知ってても、ゴリアテは知らないからな。シルビアもそれをわかってるのか、俺達の前ではシルビ

アでいようとする。だが、グレイグはシルビアもゴリアテも知っている。

グレイグになら、俺達には話しにくい事でも話せるだろうし、ゴリアテを知っているグレイグだけのアドバイスも出来ると思ってるな」

グレイグ「……………なるほど。流石ラースだな。明日、あの兄妹に会いに行く事になった。夕方までには戻れると思うぞ」

ラース「了解。それじゃあまた明日な」

ラースは部屋に戻っていった

グレイグ「(このためだけに待っていてくれたのか。俺が戻ってくる事まで予想済みというわけか。昔からよく頭が回るやつだな)」

明日を生きる力

次の日、ソルティコの街　テルマ兄妹の家

シルビア達が行くと、家の前でテルマが焦った様子で周りを見渡していた

グレイグ「む？あれが話していた兄のテルマか？何やら焦っているようだが」

シルビア「ええ、そうよ。何かあったのかしら？おい、テルマちゃん」

テルマ「あ!!シルビアさん！丁度いい所へ！あれ？そちらの方……もしかしてグレイグ將軍!？」

グレイグ「俺を知っているのか」

テルマ「は、はい！勇者様の仲間よりも前から英雄グレイグ將軍として有名でしたから」

シルビア「それでどうしたの？テルマちゃん」

テルマ「あの！チャムがいなくなってしまったんです！探すのを手伝っていただけませんか!？」

二人「ええ!？」

シルビア「どうしていなくなっちゃったの!?!あ……………もしかして」

テルマ「すみません、シルビアさん。昨日、何とかチャムを落ち着かせようとしたんですが……………つい、喧嘩になってしまったんです。そしたらチャムが、俺ともう一緒にいたくないと言い出して、俺もその時はちよつとムカついててどこにでも行けと行ってしまったんです」

グレイグ「売り言葉に買い言葉か。喧嘩していたならよくある事だ」

テルマ「それで今朝起きたらチャムがいなくなつてて、急いで街中探したんですが……………見当たらなくて」

シルビア「じゃあ……………街の外つて事?」

テルマ「恐らくは……………。でも、チャムがソルティコから出た事は数えるくらいしかありません。向かった先ならある程度検討が付きます。シルビアさん、グレイグ將軍、手伝っていただけませんか?」

グレイグ「妹さんが一人で街の外か。魔物は少なくなつたとはいえ、襲われていない確証はない。確かに心配だ」

シルビア「これもアタシが撒いた悲しみのタネ。もちろん全力で手伝うわ！もうこれ以上大切な家族を減らしちゃ駄目！」

テルマ「はい！ありがとうございます！案内します！」

ソルティアナ海岸　　離れの洞窟

シルビア「ここって……　確か少し前まで夜になると星がよく見える洞窟で有名だった場所よね」

グレイグ「だが魔物もここを好んでおり、多く生息している場所で危険と判断された場所だ。まさかこんな所にその妹さんが？」

テルマ「多分。でも、ここは父さんと母さんがまだいた頃に二人の出会いの場所だと教えてくれたんです。それを俺がチャムに聞かせると、チャムもここを気に入って二人で何回か行った事があるんです。ここにいれば……　父さんや母さんに会えるかもしれない話しながら……」

シルビア「なるほどね。それならチャムちゃんがいってもおかしくないわね。でも、中から魔物の気配がするわ。手遅れになんて絶対させない！急ぎましょう！」

グレイグ「ああ。テルマ、一応剣を持っているようだが戦えるのか？」

テルマ「グレイグ將軍に比べればお遊びにしかありませんけど、多少は」

グレイグ「わかった。だが、絶対に無理はするなよ。俺達を頼ってもらって構わないからな」

しばらくして

魔物「ギイク……」ジユワー

グレイグ「こっちは終わったぞ。ゴリアテ、大丈夫だな？」

シルビア「もちろんよ。テルマちゃん、思ってるより強いじゃない」

テルマ「そ、そうでしたか？ありがとうございます」

グレイグ「そうだな。独学にしてはいい戦い方だ」

テルマ「グレイグ將軍にまで言われると照れますね。一時期はジ

エーゴさんの所に見習いとして通おうか悩んでいた事もあったんです。父さんがいなくなつてそんな事考える余裕もなくなつたんですけど」

グレイグ「なるほど。前から剣には慣れていたのだな。洞窟はまだ先なのか？」

テルマ「はい。もう少しで最深部だと思うんですけど、そこでも二人で吹き抜けになつた所で星空を見てたんです」

シルビア「そうだったの。でも、今は星なんて出てないわよね」

テルマ「近くには光る鉱石もあるので、昼でも綺麗なんです。それに、勘なんですけどこの先にいる気がします。なんとなくですけど」

グレイグ「今までずっと一緒だったのだ。行動がわかるのだろう。その勘は信じて大丈夫なはずだ。行くぞ」

最深部

そこには魔物数体に囲まれているチャムがいた

テルマ「チャム!!!」

グレイグ「まずい！ 囲まれているぞ！」

シルビア「急いで助けないと!!」

魔物達「ギーー!」

チャム「や…… やだ……。怖いよ……」

怖がって立ち上がれないチャムに魔物が攻撃してきた

魔物「シャー!!」

チャム「ヒツ……」

チャムが目を瞑ると同時に誰かに抱き抱えられた

グレイグ「ぐっ!間に合ったか!」

グレイグがギリギリ間に合い、チャムを攻撃から庇った

シルビア「双竜打ち!」

魔物「ギーく……」ジュワー

グレイグ「テルマ、妹さんを頼んだぞ」

テルマ「はい!!本当にありがとうございます、グレイグ將軍!」

チャム「………… お兄ちゃん…………」

グレイグ「ゴリアテ、俺も………… もう終わっていたか」

シルビアの周りにいた魔物達はもういなくなっていた

シルビア「これ以上テルマちゃん達を悲しませないわ!」

チャム「あの…………… ありがとう。ごめん…………… なさい……………」

テルマ「一先ず戻りましょう。チャム、一応怪我の確認もするからな」

チャム「うん」

ソルティコの街 テルマ兄妹の家

シルビア「よかったわ。怪我が無くて」

テルマ「チャム…………… 昨日は俺が悪かった。大事なお前に酷い事を言ってしまったな」

チャム「ううん！お兄ちゃんは悪くない！私が…… お母さん達に会いたくて…… 勝手にあそこに行ったの。一人で行くなんて約束も破っちゃったもん…… チャム、もうわかんなかったの。お母さんもお父さんもいなくて、これからどうしたらいいかわかんなくて…… そしたら自然とあそこに向かったの」

テルマ「チャム、本当に無事でよかった。昨日、あれからずっと考えていたんだ。母さんと父さんがいなくなって、俺もどうしたらいいかわからなかった。でも、俺にはまだチャムがいる。大事な母さんと父さんの娘で妹のチャムがいる。」

チャム、どうか死なないでくれ。お前は俺の明日を生きるための力になる」

テルマは涙を流しながらチャムを抱きしめた

チャム「お兄ちゃん…… うん。私にもお兄ちゃんがいる。ずっと守ってくれたお兄ちゃんがいる。ごめんなさい、お兄ちゃん」

しばらく二人は抱きしめあっていた

少しして

チャム「お姉さん、おじさん、どうもありがとう！」

シルビア「いいのよ、チャムちゃん。アタシこそ昨日はちゃんと謝れなくてごめんなさい。確かにお父さんやお母さんはいなくなっちゃったけど、他の大人達に頼っていいの。アタシだっていいし、こ

のおじさんでもいいのよ。それに、他にも優しい人達もたくさんいるわ。きつとあなた達を守ってくれる」

グレイグ「おじさん……。まあいい。今後はどうするつもりだ？」

テルマ「俺がどこかで働こうと思ってるんですけど、チャムを一人に出来ないし少し悩んでるんです」

グレイグ「なるほど……。……。それならいい場所をデルカダールで知っているぞ」

テルマ「本当ですか!？」

その後、デルカダール城下町 グラジー

ビル「なるほど、わかりました。テルマと言ったな。歳はいくつだ？」

テルマ「14歳です」

ビル「わかった。店員としては無理だが、アルバイトとしてなら歓迎しよう。妹のチャムちゃんといったな。歳はいくつだ？」

チャム「9歳です！」

ビル「わかった。多少のお手伝いとしてなら何とかなるだろう。二人ともこれからよろしく頼むぞ」

二人「はい！」

グレイグ「急に悪かったな、ビル。まさか妹さんの方まで世話してくれるとは思わなかった」

シルビア「本当助かったわ、ビルちゃん！ありがとう！」

ビル「いえ、こつちも働き手が増えるのはありがたいですから。それに、グリーとマヤの後輩ですからね。二人にもいい影響になるでしょう」

テルマ「でも、ここまで来るのに毎日カメラの翼を使わないといけませんかね？」

ビル「それなら店に泊まる事も出来るぞ。俺とマドリーの部屋になるが、一応部屋はある。グリーも借りている家があるし、マヤのように城に泊まる事も出来る。自由にしてもらって構わないが、ソルティコにわざわざ帰るよりはいいんじゃないか？」

シルビア「そうよね。働くとなるとデルカダールにいた方がいいと思うわ。思い出のお家にいられないのは残念かもしれないけど」

チャム「じゃあ、お引越しだね」

テルマ「それが一番ですかね。偶に帰ればそれでいいだろうし。お店に泊まってもいいですか？」

ビル「わかった。それじゃあ、荷物が纏まったら持ってきてくれ。じゃあな」

グレイグ「何とかかなりそうだな。よかったな、二人とも」

テルマ「はい！何から何までお世話になってすみません！でも、助かりました！」

チャム「私、これからここで頑張る！」

シルビア「ええ、アタシも偶に会いに来るわね。それじゃあ、またね」

オーブ

それから半年後の夜、デルカダール城

マルティナとラーズの部屋

マルティナ「どうしたのかしら？イレブン」

マルティナはイレブンから届いた手紙を読んでいた

ラーズ「何かあったのか？」

マルティナ「それがね、私達全員を呼んでるのよ。しかも同じ日に。何かあったのか心配になってきて」

ラーズ「イレブンから集まりか。珍しいな。まあ、緊急事態ではないんだろ？」

マルティナ「一応そうみたいだけど」

ラーズ「気にはなるがそれなら一先ず安心じゃないか？あと何日後だ？」

マルティナ「それもそうよね。えっと、今日から一週間後みたいね」

ラース「了解。ユグノアに行けばいいのか？」

マルティナ「ええ。大事な話みたいだけど」

ラース「イレブンから大事な話。何だろうな。エマちゃんと付き合い始めたのは知ってるしな」

マルティナ「まあ、明日お父様とグレイグにお話してお休みを貰いましょう」

一週間後、ユグノア城 玉座の間

マルティナ達が到着すると、既に他の皆も来ていた

マルティナ「あら、少し遅かったかしら？ごめんなさい、皆」

カミュ「いや、俺もついさつききたばかりだぜ」

ラース「あれ？イレブンは？」

玉座の間にはイレブンだけがいなかった

シルビア「ロウちゃん、イレブンちゃんはどこ？」

ベロニカ「そうよ！あいつ、人を呼んでおきながらいないってどう

いう事？」

ロウ「それがわしにも話してくれなくてのう。皆が集まったら天空の祭壇まで来てほしいと伝言されておるだけなんじゃ」

グレイグ「天空の祭壇に？勇者の剣でも取りに行くのか？」

セーニャ「ですが、それならばイレブン様一人でも問題ありませんし、何より緊急事態として集められるはずですよ」

ラース「何がしたいんだ？イレブンは」

マルティナ「まあ、向かってみましょう。イレブンはもうそこにいるんですよ？ロウ様」

ロウ「うむ。一足先に向かっていったからう」

ベロニカ「全く。それじゃあ私がルーラするわね。皆、掴まってるね。ルーラ！」

天空の祭壇

皆が着くと、虹の橋の前にイレブンが待っていた

イレブン「あ、皆来てくれた。わざわざごめんね」

カミュ「なあ、イレブン。どうしたんだよ。わざわざこんな所で」

シルビア「ここじゃないと出来ない話なのかしら？」

イレブン「うん。それにすつごく大事な話なんだ。このオーブを元に戻そうと思ったんだよ」

セーニヤ「オーブを？というと、虹の橋を渡れなくするという事ですか？」

イレブン「うん。勇者の剣を使うほどの相手はもう現れないだろうから。いつまでもこのままでいつ魔物に命の大樹にまた登られるかわからない方が危ないかなと思ってさ」

ペロニカ「確かに。私達も何回か襲撃されたり、防いだりしてたからね」

グレイグ「となると、元に戻すという事はあつた場所に返すのだな？」

ラーズ「だが、どこにあつたかわからないオーブもあるぞ」

イレブン「そうそう。だから数日僕が考えて一応全部もうどこに返すかは決めたんだ。まず、ブルーオーブはクレイモランの国宝だったからシャール様達に戻すんだ」

イレブンはブルーオーブを最初に外した

虹の橋は消えていった

マルティナ「そうだったわね。懐かしいわ」

イレブン「そしてグリーンオーブも海に落ちた物だったけど、セレン様が持ってたんだし、ムウレアに戻そうかなって」

イレブンは次にグリーンオーブを外す

シルビア「でも、確か返すって言われた物じゃなかったかしら？」

イレブン「そうなんだけども、これからまたもしも勇者が生まれて剣が必要になった時、このオーブ達は必要となる。それまでオーブは悪いやつらの手に渡りたくない。だから、渡りにくい場所にあるのも必要だよ。」

セレン様はこれまでもずっと海から僕達を見てくれていた。きつとそれはこれからも変わらない。あの国なら普通の人間も魔物も入れない。だからもしまた必要になった時はあの国に行ってもらって、セレン様に渡してもらおうって考えてね」

ベロニカ「なるほどね。結構しっかり考えてるじゃない」

イレブン「大事な事だからね。それでイエローオーブはどこにあつたかわからないけど、グロツタで貰ったから僕達ユグノアがしっかりと守っていかうと考えてるよ」

次にイエローオーブを外す

ロウ「となると、残りは誰にいくか少し検討がつくのう」

イレブン「そうだよ。まず、シルバーオーブはガラツシユの村の宝物。これはラース、君から貰った物だよ。村は無くなっちゃったけど、これからも君が持っていてほしいな」

次にシルバーオーブを外し、ラースに渡した

ラース「いいのか？」

イレブン「これは迷う事なくラースに渡さないと思ってってたよ。皆もそう思わない？」

マルティナ「ふふ、そうね。間違いなくラースが持っているべきだわ」

カミュ「寧ろ兄貴以外相応しくねえだろ」

グレイグ「そうだな。ガラツシユの村の大切な物をガラツシユの村一番の誇り高き戦士が持つ。当然の事だろう」

ラーズ「へへ、そうか。なら、これからもガラツシユの宝物として大事にしていこう」

イレブン「うん。ぜひそうしてよ。次にレッドオーブはデルカダールの国宝だったのはわかってるんだけど、違う人に渡してもいい？」

グレイグ「む？誰に渡すのだ？」

イレブン「随分遅くなっちゃったけどさ、カミュ。必要だったんだよね？もしかしたらもういらなないかもしれないけど、これは君に持つてほしい」

カミュ「な!?!お、俺が!?!」

イレブンはレッドオーブを外し、カミュに渡した

イレブン「うん。これが無かったら僕は君と出会えなかっただろうし、あのデルカダールの地下牢で終わってた。カミュがレッドオーブを盗んでくれたから、あの旅は始まったんだよ。だから、君に持つてほしい」

カミュ「……………いいのかよ。こんな大切なやつ、守っていけるかわからねえぞ」

イレブン「カミュならきつと凄い場所に隠しそうだよ。誰も入れないような迷宮とかにさ」

ラース「ハハハ、それはあり得そうだな」

シルビア「ふふ、それはアタシもそう思うわ。カミュちゃんらしいじゃない」

カミュ「全く……………じゃあ、大切に預からせてもらうぜ」

イレブン「うん。最後にパープルオーブなんだけど、これがどこにあつたか皆覚えてるよね？」

セーニヤ「確かバンデルフォン王国の跡地でしたわ」

ロウ「……………なるほどのう」

イレブン「これはさ、グレイグの元故郷にあつた物だよ。これをレッドオーブの代わりにデルカダールの国宝にしてもらおうかなと

思ってるんだ」

イレブンはパールオーブを外し、グレイグに渡した

グレイグ「バンデルフォンの…… 国宝」

マルティナ「そうね。これは確かにデルカダールで預かせてもら
うわ。グレイグ、いいわよね？」

グレイグ「はい。私としても嬉しい限りです」

ベロニカ「私達は？何かする事あるかしら？」

イレブン「もちろん。さつきも少し言ったけど、もしも勇者がまた
生まれてきてオーブを必要とする時に僕達の時みたいに伝説程度の
扱いでいいから、オーブの在り処を残してほしいんだ。」

はつきりと書かなくていいよ。海に落ちた、とかそんな感じで。そ
れをベロニカとセーニヤに歴史として作ってほしい。それで出来上
がったら、シルビアに各地でほんのりと広めてほしい。誰も知らな
かったら意味がないからね」

セーニヤ「私達が歴史の1ページを作るのですね！ワクワクします
わ！」

シルビア「やだ。そんな大事な伝説の始まりになれちゃうの？アタシ。ふふ、嬉しいわ〜」

イレブン「話はこれで終わりなんだけど、オーブをどこに保存するとかは自由にしてもらって構わないよ。人目につかない場所がいいとは思うけど」

ラース「そりやあそうだな。オーブは悪しき者の手に渡ると様々な力を与える。悪用されたらたまったもんじゃないからな」

イレブン「懐かしいね、そのセリフ。それじゃあ集まってくれてありがとう。何かあったらまた呼ぶね」

その後、デルカダール城

マルティナとラースの部屋

マルティナ達は部屋でオーブについて相談していた

ラース「結構重大責任だな。シルバーオーブ……どうしたものかな」

マルティナ「私達に渡す前から何年もずっと持ってたのよね？どうやって持ってたの？」

ラース「そりやあ鞆に入れてたさ。肌身離さず持ってたしな。毎日

確認してたんだ」

グレイグ「何年もずっとか。それは凄いな。だが、無くなったとはいえガラッシュの宝物なのだろう？あの場所に置こうとは思わないのか？」

ラーズ「考えてはいるがもう何もないからな。隠すも何もないから、魔物に取られやすいんだ。勇者だけに見えるとかにすればいいかもしれないが」

グレイグ「勇者だけに………………。そういえば、昔未来のイレブンが戻る時に勇者だけが開けた本が古代図書館にあった。その魔法を解読出来れば、何か出来るかもしれないぞ」

グレイグは少し考えた後、思い出したように言った

ラーズ「そんなのあったのか!?それはいい事聞いた！ベロニカ達と協力してやってみるか」

マルティナ「時間かかりそうね。長い休みにした方がいい？」

ラーズ「いや、そんな急に隠す事はしないさ。ゆっくり解読していけばいい。それまでは……………パープルオーブと一緒にデルカダール神殿に置いていいか？」

マルティナ「ええ、大丈夫よ。それじゃあ昔みたいにデルカダール
神殿の奥地は入れないようにしておかないと」

グレイグ「そうですね。今みたいに人なら誰でも入れるようにはし
ておけませんね」

恋するギバ

それから半年後の夜、デルカダール城

バンの部屋

バンとベグルとギバとダバンが集まってお酒を飲んでいた

もう既に何本か空になった瓶などが置いてあり、少し酔っている雰囲気になっている

バン「だからよく、メグが作る菓子が一番なんだって。お前らだつて何回も食べた事あるだろ」

ダバン「確かにメグさんの作る菓子はかなり美味しいが、そりやあかフェやってんだから当然だろ。それよりも頑張つて作ってくれたっていう料理が美味いに決まってるだろ」

ベグル「いいよなあ、お前らは。ジエーンは張り切ってくれるのはいいんだが、よく間違つた材料を入れたりミスして火事になりそうになつた事もあるんだ。俺と一緒にいないと危ねえんだぜ」

バン「あ！一緒に作るつてのは本当羨ましいぞ！俺、メグにキッチン殆ど入れてもらえねえんだ！摘み食いも怒られるしよ」

ダバン「摘み食いはそりやあ怒られて当然だろ。俺もミラと一緒に作つた事はねえな。作るのに慣れてるのかテキパキやつてくれて素

人にはついていけねえんだ」

ギバ「だー！お前ら、その妻自慢みたいな話やめろよ!!俺への当て付けか!?!」

ギバは立ち上がって怒りを露わにしている

ベグル「おいおい、落ち着けよギバ。酔いすぎだぞ」

ギバ「まだ酔ってねえ!前から気にしてたんだよ!俺ら四人同期だろ!!何で... 何で俺だけ... 彼女もいねえんだよ!」

バン「そりやあギバがロクに出会いもなくて」

ギバ「オラア!!」

バギイツ!

バン「ベフツ!」

ギバは思いつきりバンの顔を殴り飛ばした

ダバン「うおっ!ギバが殴った。殆ど見たことねえぞ。暴れんなよ、ギバ」

バン「キュウ.....」

バンは鼻血を流しながら気絶している

ギバ「俺だつて彼女の一人くらいは欲しいさ！しかもお前達はさらに先の結婚までしやがつて、馬鹿に至つては子どもまでいるんだぞ！！ベグルみてえなやつですら出会いがあつて、何で俺だけ出会いがないんだよ！」

ベグル「おい、てめえ喧嘩売つてるな。覚悟出来てんのか？」

ギバ「うるせえ！！今だけは俺が上だ！言いたい事言わせろ！！」

ベグル「お……おう」

ベグルはギバの今までに無い強い雰囲気を押されている

ダバン「暴走すんなよ、ギバ。まだ人生長いんだからお前にも絶対出会いがあるつて」

ギバ「本当にそう思つてるか？俺、この歳でまだ一人も付き合つた事ねえんだぞ。ヤバイだろ！マズいだろ！」

ベグル「俺だつてジェーンが初めての付き合いだ。ギバも初めての出会いがそのまま奥さんになるかもしれねえぞ」

ダバン「そうそう。俺もバンも一人だけしか付き合いは無えよ。ギバももう少し待ってみろって」

ギバ「くっそー！この勝者の余裕もムカつく！俺も早く妻が欲しい！」

それから三日後、訓練場

ギバが大慌てで荷物を持ってやってきた

バン「なに!?!ギバの母ちゃん倒れたのか!?!」

ギバ「そうみたいですよ！昨日連絡来たんだ！俺、今から急いで帰るから数日の休みとラーズ將軍とかに謝罪頼む！」

ベグル「わかった。こっちでやっておくからお前は急いで戻れ。落ち着くまで帰って来なくていいぞ。もし休みが長引いても勝手にしておくから」

バン「大事にしろよ！」

ギバ「おう！ありがとな！助かる！」

クレイモラン城下町 ギバの家

バタン！

ギバ「母ちゃん！」

ギバの母「おや、ギバお帰り」

ギバの母親は普通に机に座り、お茶を飲んでいた

ギバ「ガクツ………… あれ!? 元気じゃん! 倒れたって…………」

ギバはそれを見て拍子抜けする

ギバの母「ああ、それがね。私、うっかり階段から二段だけ落ちちゃったの。その音を聞いたお隣さんが慌ててやってきてパニックになっちゃったみたいでね。怪我もないし、お医者さんにも何とも無いつて言われたの」

ギバ「な、何だよ……………。俺、めちやくちや驚いたんだぞ。母ちゃんももうババアになってるんだから、あまり二階には上がるなよ」

ギバは脱力して肩を落としている

ギバの母「まあ! ギバったら母親にババアって言うのね。なんて汚い言葉遣いな。メツ! 皆を守る兵士さんがそんな口調じゃ駄目じゃない」

ギバ「う…………。わ、悪かったよ。お隣さんって確かあの早とちりしやすいおばさんだよ。あの人ならまあ、パニックになって俺に連絡

入れても不思議じゃないか」

ギバの母「そうそう。私は何とも無いって言ったんだけどねえ。焦らせてごめんよ。荷物もあるって事は数日休み取ってきてくれたのかい？」

ギバ「おう、当然だろ。倒れたって聞いたんだ。母ちゃん一人に出来ねえよ」

ギバの母「ふふ、ありがとねえ。ギバ、朝食は済ませたかい？余りだけど残ってるよ」

ギバ「あー、何も食べてねえや。連絡来てから大慌てで荷物揃えたからよ。全部食べるぜ」

ギバの母「はいはい。食欲は変わらないねえ。どれ、これだけだとギバは足りないだろうから少し何か作ろうかね」

ギバ「出来たら俺が持つていくよ。それまで俺の部屋に荷物置いてくる。呼んでくれ」

ギバの母「わかったよ」

その後、朝食も終わりギバは久しぶりの故郷をゆつくりと見て回っ

ていた

クレイモラン城下町 商店街

ギバ「へへ、知らない間にまた色々店が増えたな。人も多いし、変わらず魔法の商品とかも他より栄えてるな。魔法………か。もう何とも思わねえけどよ」

その時

女性「あの！やめてください！大事な商品なんです！」

女性の声が聞こえてきた

ギバ「何だ？」

その声の方を見ると、雑貨屋に数人の男達が集まっていた

男性「えへ、いいじゃん。少しくらい好きにさせてよ」

男性達は丸い球体の物で投げたりして遊んでいる。何やらそこには文字も書かれている

女性「駄目です！あの！話を聞いてください！」

男性「キヤーキヤーうるせえな。ほらよ!!」

男性は勢いよく球体を女性に投げつけた

女性「え………」

パシッ！

ギバは女性の前に立ち、球体を掴んで当たらないようにした

ギバ「お前ら、この人が迷惑がつてるじゃねえか。やめろよ、こんな事すんの」

男性「ああ？何だてめえ。いきなりしゃしゃり出てきやがって」

ギバ「俺はお前らみたいに他人に迷惑かけるやつは嫌いだ。やるなら来いよ。相手になってやる」

広場

ギバ「全く。少し治安が悪いのは昔からだな。発展した分、またこういう輩が増えるのかよ」

戦いはあつという間に終わり、ギバの近くには先程の数人の男性達が集められ動けなくなっていた

少ししてクレイモランの兵士も騒ぎを聞きやってきて、ギバと話をしていた

クレイモラン兵士「ありがとうございます！デルカダールの兵士の方にお手数掛けさせてしまうとは。申し訳ございません」

ギバ「いや、そんなの気にしねえよ。ここ、俺の故郷なんだ。誰だっ

て故郷で好き勝手されたくないだろ？それだけだ」

クレイモラン兵士「ありがとうございます。それでは」

クレイモランの兵士は男達を連れていった

女性「あ、あの！」

ギバ「ん？あ、さっきの店員さん」

女性「助けてくださいありがとうございました。まさか兵士さんだったとは。しかもデルカダール王国の兵士さんだったんですね」

ギバ「まあな。大事な商品だったんだろ？あの玉。あんな風に雑にされると嫌だもんな」

女性「はい。あ、私さっきの場所で雑貨屋を営んでるイリーナと言います。少しお礼したいので、寄っていただけませんか？」

ギバ「え。た、大した事してないのに悪いな。俺の名前はギバ。聞いたと思うが、デルカダール王国で兵士やってんだ。普通の兵士よりも腕にはちよつと自信があるんだぜ」

イリーナ「ふふ、そうだと思います。数人が相手なのに全然相手

にならなかつたじゃないですか。かつこよかつたですよ」

ギバ「へへへ、照れるな。ありがとう」

恋するギバ2

雑貨店内

ギバ「へえ、色々置いてあるんだな」

た
ギバはイリーナから飲み物やお菓子などを貰って一緒に食べていた

ギバは店を見渡している

イリーナ「はい。ここ、父から受け継いだのですが、商品の取り揃えてる数だけなら王国でもトップクラスなんです。それを私も頑張って揃えてるんです」

ギバ「父親を受け継いだのか。きっと喜んでもらうだろうぜ。しっかりと頑張ってくれてるんだからよ」

イリーナ「そうだと嬉しいです。でも、私がこうやって店を任せられてからあのような男性に絡まれる事が多くて……。父は追い払う事が出来たのに、私では舐められてしまうのか、全く言う事を聞いてもらえないんです」

ギバ「あんなやつらはよく来るのか？」

イリーナ「一週間に多くて二、三回は。何回か本当に商品を壊されたり、盗まれたりしてるんです」

ギバ「……：クズ野郎だな。デルカダール王国にいる將軍は俺によくこう言ってくれたんだ。努力していれば、必ずいつか報われるってな。俺はその言葉通りになったんだ。だから、努力は大切な事だ。そんな努力してるやつを馬鹿にしてるやつらは絶対許さねえ。」

イリーナさん、俺に任せてくれ。この店、俺が守ってみせる。そんなやつらをこの店に近づかせねえよ」

イリーナ「い、いいんですか？でも、ギバさんにご迷惑が」

ギバ「迷惑なんかじゃねえさ。兵士は人を守る仕事だ。それは国が違つたつて変わらねえ。それに、努力してる人を応援しないわけがないだろ？」

イリーナ「ギバさん……。ありがとうございます。私なんかを努力してる人なんて言ってくれるのはギバさんだけですよ」

ギバ「そ、そうか？この店やイリーナさんの話から簡単にわかりそうな事だけだな」

その時

ガシャアアン!!

二人「!!？」

店の入り口から何かが割れる音がした

イリーナ「もしかして……また！」

ギバ「くそっ！壊されるってこんな派手になのかよ！」

店先

イリーナ「ああっ!!ガラス模型の商品が!!」

床には綺麗なガラスで出来たコップや飾るためのリースなどが粉々になって壊されている

男性「へっへっへ、さつきはよくも仲間達を連れていったな」

近くには10人以上の男達が武器などを持ってニヤニヤしていた

ギバ「てめえら!!こんな事して何が楽しいってんだ!!」

男性「へっ、てめえが仲間達を兵士に送ったのは知ってる。だから仕返しだよ。この人数に勝てると思ってるのか？」

ギバ「ぐっ……。俺のせいだったのかよ」

男性「そうだ。てめえが変に暴れなけりやあ店の商品は無事だったんだ」

ギバ「……………悪い、イリーナさん。俺が迷惑だったみたいだ」

イリーナ「そんな事ありません！ギバさんが守ってくれて本当に助かったんです。店の商品とギバさんの行為は関係ありません！」

男性「お前もよ、いつつもいつつもキヤーキヤーうるせえんだよ。こんな店、とつとと潰れてしまえよ」

イリーナ「!!」

ギバ「……………おい、俺を狙いにきたんだろ。なら、俺が相手になつてやる」

男性「へっ、人数差つてのをわかってねえようだな。さっきの5人程度じゃねえんだぜ？20人は用意した。てめえ一人が」

ギバ「ごちやごちやうるせえ。相手になるって言つてんだろぅが」

ギバは男性達を睨みながら、殺気を出している

男性「そんなに死にてえならやつてやるよ！雪原にこい！雪に埋めてやるぜ！」

男性達はシケスビア雪原に向かっていく

ギバは黙って男性達についていく

イリーナ「だ、駄目です、ギバさん！いくらなんでも殺されてしま
います！」

ギバ「イリーナさん、大丈夫だ。イリーナさんこの店は俺が守っ
てみせる。待っていてくれ」

ギバは少し振り返ってイリーナに伝えようと、男性達を追いかけて
いった

シケスビア雪原

男性「本当に来るなんてマジで馬鹿だろ」

ギバは先程の男性達に囲まれている

ギバ「もう許さねえ。何が人数差だ。俺にとっちゃあてめえらが何
人集まったって同じだ」

男性「かかれえっ！」

十分後

動いているのはギバだけになっていた

ギバ「他愛もねえな。本当ならぶっ殺してやりたいが、兵士である

以上出来ないからな。死ぬギリギリで止めておいてやる。生きてる事に感謝しろよ」

雑貨店内

ギバ「イリーナさん、戻ったぜ」

イリーナ「ギバさん!!よかった……。私、ギバさんが本当にやられてしまったらどう責任取ったらいいかと思つて……。本当にお強いんですね」

ギバ「当然だろ。兵士なんだから鍛えてるんだ。特にあんな事してくるやつらなんかには絶対負けねえよ。商品は本当にすまなかつたな」

イリーナ「いいんです。ギバさんが無事だったんで」

ギバ「ありがとな。これであいつらが絡んでくる事も無いはずだぜ」

イリーナ「本当にありがとうございます。何とお礼したらいいか」

ギバ「お礼は平気だ。イリーナさんがまた頑張つて店を続けられるなら俺も頑張つた甲斐があるしな」

イリーナ「はい！ギバさんのおかげです！ぜひまた寄っていつてく
ださい。絶対サービスしますよ！」

ギバ「それは嬉しいな。それじゃあまたな！」

その夜、ギバの部屋

ギバはベッドで今日の事を思い出していた

ギバ「イリーナさん……いい人だったよな。しかも、めっちゃく
ちや感謝されちゃった。これって、俺にもついに出会いが!!へへへ
へ」

恋するギバ3

それから三日間、ギバは雑貨屋に通いイリーナと仲良くしていた

花屋

店員「ありがとうございますー」

ギバは赤やピンクや紫の色をした花束を買っていた

ギバ「よし、イリーナさんへのプレゼントはバッチリだな。にしても、まさか俺が誰かに花をプレゼントする日が来るなんて……。人って変わるもんだな」

雑貨屋

ギバ「イリーナさーん、今日も来たぜー」

店の中は静まり返っている

ギバ「あれ？留守か？おーい、イリーナさーん？」

ガタガタ！

イリーナ「ギ、ギバさん！すみません！少し聞こえなくて」

ギバ「あ、よかった。店の電気がついてるのにいないのかと思ったぜ。奥で何かしてたんだな」

イリーナ「…………… あ、あの！少し上がってもらっていいですか？少しギバさんにお話したい事があって」

ギバ「ん？構わないぜ。ま、まさか、また絡まれたのか？」

イリーナ「いえ！そんな事はギバさんのおかげで無くなったんですけど、今回は別の話なんです」

ギバ「ん？そつちに入っているのか？居住スペースなんだろう？」

イリーナ「はい。ギバさんにお話したい事はこの事なんです」

イリーナは部屋の扉を開けた

ギバ「なに!!？」

部屋の中には巨大な氷があり、その中には男の人が入っていた

ギバ「ど、どういう事だよ、これ？生きてるのか？」

イリーナ「はい。ですが、このまま放っておけば亡くなってしまいます。この人はアツシユ。私の…………… 彼氏です」

ギバ「!!!かれ…………… し……………」

ギバは自分の体温が低くなるのを感じた

イリーナ「一年前にミルレアンの森に行った時、魔物に襲われて庇ったアツシユはこのように氷と一体化してしまったのです」

ギバ「……………」

イリーナ「急いでリーズレットさんに氷を解いてもらえないか頼んだのですが、この氷は特別なものらしくある物が無いと溶かさないと言われてしまったのです。それがたいようの石。

その名の通り太陽の力を持った石らしいのですが、それは遠く離れたホムラの里という場所にある火山の中にあるらしいのです。私なんかの一般人では入る事すら出来ませんし、リーズレットさんも氷の魔女で熱い場所は行けないそうです。

なので、傭兵さんとかに頼み込んだのですが距離と難易度が高いらしくかなりの金額がかかってしまつて…………… 私一人で払えるお金は少ないんです。でも…………… アツシユをどうしても救いたいんです。このままお別れなんて…………… 絶対に嫌です。

ギバさん！私にはもうあなたしか頼れる方がいないんです！私に出来るお礼ならなんでもします！お金も用意します！道具も必要ならお金はいりません！何でも持っていつてください！だから…………… どうか、アツシユを助けてあげてください」

イリーナは涙を流しながらギバに頼み込んでいる

ギバ「…………… わかった。必ずそのたいようの石とやらを持つ

てくる。だから泣かないでくれ、イリーナさん」

イリーナ「ほ、本当ですか!!?ありがとうございます!!お、お金はいくらほど必要でしょうか?」

ギバ「ハハ、金なんかいらさないさ。俺に任せときな。すぐに取ってきてやるからよ」

イリーナ「で、ではお礼はどうしたら...」

ギバ「お礼...か。なら、またこの店に寄った時に今までみたい
に仲良くしてくれると嬉しいぜ。それをお礼にしてくれ」

イリーナ「そ、そんなの当たり前です!ここまで親切にしてくれる
方に変な態度は取れませんから。そんなのでいいんですか?もつと、
物とか」

ギバ「物なんかより俺はイリーナさんに幸せでいてほしい。だから、
イリーナさんの幸せそうな姿が何よりのお礼だぜ」

イリーナ「ギバさん...」

ギバ「それじゃあ行ってくる。取ったらすぐに戻ってくるからな」

イリーナ「はい！どうか、本当にお気をつけて！」

ホムラの里

ギバ「とはいっても、火山のどこにあるかわからねえよな。確かに
ラーズ將軍の話だとヤヤクって人がここの村長なんだっけ。聞き込
みしながら探してみるか」

神社内

村人「ヤヤク様！デルカダール王国の兵士殿がヤヤク様をお探し
したので、連れてまいりました」

ヤヤク「デルカダールの？というと、ラーズ殿の国だな。そなた、名
は何という？」

ギバ「ギバといいます。突然の訪問申し訳ございません。ラーズ将
軍のお知り合いでしたか」

ハリマ「ラーズ殿だけではない。イレブン殿勇者様達の力で私達家
族は助けられた。それに、ラーズ殿はここのお酒を気に入ってくれて
な。よく訪れてくれるのだ」

ギバ「ラーズ將軍、確かによくホムラの里に行ってます。それで実
は探しているものがあります。その場所を教えてくださいたいの

ですが」

ヤヤク「ふむ。何という物なのだ？」

ギバ「たいようの石というものが火山にあると聞きました。その場所を教えてほしいのです。それを必要としてる人がいるんです」

ヤヤク「たいようの石か。確かに火山の中にあるが……」

ハリマ「あるのは火山の最深部。それに道中の魔物もそれなりに強い。強さに自信が無ければ行く事はやめた方がいい」

ギバ「問題ありません。俺達デルカダール兵士は勇者様達に鍛えられています。ただの兵士の強さでは留まりません」

ヤヤク「承知した。勇者達が鍛えているならば信頼できよう。ならば、石の形などを教えよう。必要とする者に早く届けてやるのだ」

ギバ「ありがとうございます！」

ホムスビ山地　ヒノノギ火山内

ギバ「あっっっっ!!」

ギバは火山内の暑さで汗が滝のように出ており、バテそうになっていた

ギバ「暑いとかの次元じゃねえ。北国生まれが災いした。溶ける……。しかも、思ってるより魔物がいるな。この最深部か。こりゃあ……。骨が折れそうだ。でも、イリーナさんのためだ。俺の恋は終わっちまったが、やってやるか！人助け！」

二時間後、最深部

ギバ「暑い……。暑い……」

ギバは魔物を倒しながら進んでいたが、フラフラになっている

ギバ「マジで倒れそうだ。ここが最深部みてえだし、さっさと……」

奥では魔物達がオレンジに光る石を持って遊んでいる

ギバ「あ！あれだろ！見た目や色が聞いた通りだ！おい、その石くれよ！」

魔物「ギイ？ギイイー!!」

魔物達はギバに取られまいとして攻撃してきた

ギバ「チツ！やっぱりこうなるのかよ！さみだれ突き！」

魔物「ギイ〜……。ジュワー

ギバ「氷結らんげき！」

ジュツ！

魔物「ギ？」

槍についていた氷は周りの暑さと魔物の体温で一瞬で溶けた

ギバ「げ!!?そんなのアリかよ!？」

魔物達「ギイー!!」

ギバ「痛って!!アチチチ!!」

ギバに攻撃やメラミが飛んでくる

ギバ「チツ！もうキレたからな!!ジゴスパーク！」

槍に纏わせた雷が魔物達を中心に炸裂する

魔物達「ギイゝ……」ジュワー

ギバ「こんな所さっさと出ねえと死んじまう。どれ、石は……これか。確かにかなり暖かいな。この石だけでどうにかなるのか？戻ってみるか」

恋するギバ4

クレイモラン王国 港

ギバ「おおっ！涼しいー！さつきと比べたら天国だな！どうせなら、うりやつ！」

ギバは雪に突っ込んだ

ギバ「アハハハ！冷てー！気持ちいいー！！最高だなー！！」

ギバは雪の中を転がっている

雪の中で喜びながら暴れているギバを周り是不審な目で見ていた

ギバ「あ…………。や、やべ。火山があまりにも地獄だったもんでやらかしたな。急いで雑貨屋に行こう」

周りの目に気付くとギバは顔を赤くしながら足早に立ち去った

雑貨屋

ギバ「イリーナさん、持ってきたぜ。たいようの石」

イリーナ「ほ、本当ですか!?これが………… たいようの石。本で見たやつと同じ。本当にありがとうございます、ギバさん!!」

ギバ「いいって事よ。それでこの石だけであんな氷をどうやって溶かすんだ?」

イリーナ「リーズレットさんが魔法で解いてくれるそうなんです。そのため材料だったんです。急いでリーズレットさんに知らせてきます！」

数分後

リーズレット「デルカダール兵士ならあそここの火山でも取って来れそうね。ありがとう、ギバ。今度マルティナ達にも助かったって話しておくわ。さて、早速取り掛かるわね。二人とも、この部屋から離れてて」

ギバ「わかった。後は頼んだぜ、リーズレットさん」

イリーナ「よろしくお願いします！」

雑貨屋前

イリーナ「ギバさん、大変でしたよね？怪我とかされてませんか？」

ギバ「当然！俺は強えからよ！ただ、火山って信じられないくらい暑くてよ。冗談抜きで溶けると思っただぜ。あんな所、人が行く場所じゃねえな」

イリーナ「そ、そんなにだったんですか。火山って私、本でしか見た事ないのでどれくらい暑いかわからなかったんです。そんな苦

しい場所に行かせてしまいすみません」

ギバ「必要だったんだから構わねえさ」

その時、リーズレットが部屋から出てきた

リーズレット「終わったわよ。氷は無事に溶けて、彼も無事よ。ただ、記憶はその凍らされた時のままだから説明してあげて」

イリーナ「ありがとうございます、リーズレットさん！アツシュ!!」

イリーナは一目散に部屋に走っていった

ギバ「……………」

リーズレット「それじゃあ私はこれで。ギバ、たいようの石取ってきてくれてありがとう。じゃあね」

ギバ「お、おう（……………） そうだ。あの花、渡しそびれてたけどお祝いとして渡すか」

ギバは自分の家に戻っていった

数分後

イリーナ「あ！ギバさん、よかった！突然いなくなるからビックリしましたよ。彼がアツシュ。ギバさんのおかげでまた一緒にいられ

るんです」

アツシユ「俺がそんな状態になっていたとは知りませんでした。イリーナを守ろうとしてこんな事になるなんて。ギバさんがイリーナを助けてくれなければ俺、助かりませんでした。本当にありがとうございます」

ギバ「まあほんの人助けさ。思ってるより元気そうなんだな。体は平気なのか？」

アツシユ「はい。記憶や体は全部凍らされた時のままなんで」

ギバ「それはよかったな。これ、二人がこれからも一緒にいられるようにって花束を買ってきたんだ。よかつたら店先にでも飾つてくれ」

イリーナ「わあ！綺麗な花束！でも、お礼も満足に出来てないのにこんな物まで貰っていいんですか？」

ギバ「これは俺の勝手な押し付けだ。よかつたら貰ってくれると俺としても嬉しいぜ」

アツシユ「優しい方ですね、ギバさん。イリーナ、貰おうか。俺達の事を考えてここまで持ってきてくれたんだし」

イリーナ「わかったわ。ありがとうございます、ギバさん。大事に飾りますね。この花、何て言うんですか？」

ギバ「この花はサクラソウ。赤とか紫の花が店先にあると注目されそうだろう？客寄せにでも使ってくれ」

イリーナ「ふふ、素敵ですね。ギバさん、心から感謝してもし尽くせません。またクレイモランに来たらぜひ寄ってください。必ずサービスしますよ。寧ろ、好きなだけ持つていってもらって構いません」

ギバ「え。いやいや、それだと商売にならないだろ。俺も少しは金払うぜ」

アツシュ「いえ！恩人にそんな事できません。ぜひまたよろしくお願ひします」

ギバ「アツシュまでそんな事言うのかよ。まあわかった。今度寄らせてもらう。その時はまた楽しく話せたら嬉しいぜ」

イリーナ「はい！私も楽しみにしています。お元気でー！」

ギバは商店街から出ていった

広場

ギバ「………………。これでよかったんだよな。イリーナさんが幸せなら…………。俺はそれでいい。俺よりふさわしい人がいる…………。あいつらに会いたくなってきたな。帰るか、城に」

その後、デルカダール城　玉座の間

ギバ「マルティナ様、ラース將軍、グレイグ將軍。ご心配おかけしました。俺の母は大した事ありませんでした」

マルティナ「ギバ、お帰りなさい。お母様が何事もなくてよかったわね」

グレイグ「四日ほどいなかったが、母上の様子を見ていたのか？」

ギバ「一応は。それと困っていた人がいたのでそちらの人助けもしておりました」

ラース「おお、それはいい事をしたな、ギバ。流石だ。バン達には顔見せたか？あいつらも心配してたぞ」

ギバ「そうですね。それではバン達にも報告してきます。失礼しました」

ギバは訓練場に向かっていった

グレイグ「ギバ、何かあったのだろうか。どこか浮かない顔をしていたようだったが」

ラース「確かにな。まあ、そういうのは俺達よりバン達が解決してくれるだろうな。特にバンが」

マルティナ「皆、仲良しなものね。見てて楽しそうなのが伝わってくるのよね」

訓練場

ガザル「お！ギバ、戻ってきたのか。母ちゃんは大丈夫なのか？」

ギバ「おう。母ちゃん普通に元気だった。隣のせつかちなおばさんが焦って連絡がきたただけだったみてえだ」

ロベルト「そうだったのか。まあ無事でよかったな」

ギバ「まあな。他の皆は？」

ロベルト「マーズは予定があるから帰って、ダバンとベグルとバンはベグルの部屋にいると思うぜ」

ギバ「了解。そつちに向かつてみるか」

ベグルの部屋

ガチャ

ギバ「聞いてくれよー、お前らー」

バン「お！ギバ、お帰り！帰ってきてきたんだな」

ベグル「いや、ノックしろよ。急に入ってきて驚いただろ。てめえも馬鹿みてえにならねえと学ばねえのか？」

ギバ「そんな事気にすんなって。それよりよー、俺失恋した」

ダバン「し、失恋？母さんの見舞いじゃなかったのか？」

ギバ「それは隣のせつかちなおばさんが焦って連絡したただけで母ちゃん元気だったんだ。だから久しぶりに故郷を回ってたらある女性とめちやくちやいい雰囲気になったんだよ」

ギバはこれまでの事を話した

ベグル「なるほどな。だが、ギバらしいじゃないか。結局はその人の幸せを取ったんだからよ。酷い話になるが放っておく事だつて出

来ただろ」

バン「うわ!! 発想が最低だな、ベグル! そういうのは駄目だろ!」

ベグル「そういう選択肢もあったって話だろうが!」

ダバン「ギバは後悔してるのか?」

ギバ「いや、してねえ。だけどよ……俺が勝手に盛り上がってただけつても悔しいし、でも嬉しそうな顔を見る事ができて嬉しい、恋って難しいな! モヤモヤするな!」

バン「大丈夫か? ギバ。でもよ! 俺はその行動はギバラしくていいと思うぞ! それこそ俺が信じるギバだ! いつかその姿のギバを好きになってくれる人がいるに決まってるぜ!」

ギバ「バン……。へへ、ありがとな! お前の言葉はやっぱり勇気が出るな」

バン「そうなのか!? 俺にそんな秘められた力があるとは」

ベグル「おい、ギバ。面倒くさくなるから無闇に馬鹿を褒めるなよ」

バン「ああ!？」

ダバン「そうだぞ。こいつ調子に乗るとうざいし、うるさいし面倒だろ」

バン「言いたい放題だな! いいじゃねえか、少しくらい喜んだって!」

ギバ「偶にはそれでもいいだろ。また彼女探しかー。いい人いねえかなー」

セーニヤの秘密

それから二週間後、聖地ラムダ

ベロニカ達の家

セーニヤはどこかに出かけようと準備していた

ベロニカ「あれ？セーニヤ、どこに行くの？」

セーニヤ「あ、お姉様。今日は少し遊びに行つてこようと思ひまして」

ベロニカ「そうだったの。最近歴史作り、頑張つてたもんね。休憩も大事よ、楽しんできなさい。因みに誰と行くの？」

セーニヤ「ロベルト様ですわ。前にお約束していたので」

ベロニカ「え……？ロ、ロベルトつてデルカダールの兵士の？」

セーニヤ「はい、そうですわ。あ、そろそろ向かわないといけません。それではお姉様、夜には帰りますね」

セーニヤは家から出ていった

ベロニカ「セーニヤとロベルトつて……どんな関係なの？前ま

では話す程度だったのに突然そんな事……………も、もしかして！
セーニヤの彼氏!?!」

ベロニカは一人で考えが膨らんでいく

ベロニカ「こ、こうしちやいられないわ。セーニヤの事だし、知り合いだからつい気が緩んでるんじゃないかしら。私がすっかり見てやらないと！こっそりついていきましよう」

ベロニカも遅れて家から出ていった

デルカダール城 大広間

セーニヤ「あ、ロベルト様。お待たせしてすみません」

ロベルト「セーニヤさん、おはようございます。大して待ってませんよ。俺、今日を楽しみにしてました」

セーニヤ「ふふ、私もですわ。昨日の夜もウキウキして眠るのが遅くなってしまうました」

城の入り口近くではベロニカがこっそりとそれを見ていた

ベロニカ「今日を楽しみにしてた？ウキウキしちゃった？ま、まさか……………デートだったなんて。ロベルト、いい人なのはわかるけど、簡単にうちの妹は渡さないわよ」

ロベルト「それじゃあ早速ユグノアに向かいますようか。あ、俺の

キメラの翼で行くのでセーニヤさんは掴まっててください」

セーニヤ「わかりましたわ。よろしくお願いします」

シユン！

二人はいなくなった

ベロニカ「あ！私も追いかけないと！ユグノアって言ってたわね。ルーラー！」

ベロニカもすぐに後を追った

ユグノア王国

ロベルト「到着ですね。おお！結構賑わってるんですね！」

セーニヤ「本当ですわ！スウツ……。甘い匂いに包まれていますわね！」

広場や商店街にはお菓子やケーキなどのお店や出店がたくさん並んでおり、スイーツフェスティバルと書かれた旗などが出ており、たくさんの方が行き来していた

ロベルト「楽しみですね、セーニヤさん！」

セーニヤ「とつても！あ、でもまずはイレブン様とロウ様にお会いしましょう。ユグノアに来たら会っておきたいので」

ロベルト「そうですね。俺もイレブンさんとロウ様に会うのは久しぶりです。ユグノア城に向かいましようか」

二人は城に向けて歩いていく

二人から少し離れた所では

ベロニカ「スイーツフェスティバル……。こんなのやってたのね、知らなかったわ。セーニヤならとっても喜びそう。ロベルト、デートに女の子の好きなお祭りに誘うなんて……。本気なのね。ユグノア城に向かうって言ってたわね。バレないように行かないと」

ユグノア城 玉座の間

セーニヤ「イレブン様、ロウ様、お元気なようで何よりですわ。今日はスイーツフェスティバルのためにユグノアに来たので顔を見せておこうかと思って」

ロウ「やはりセーニヤなら来てくれたのう。しかし、一緒にいるのがベロニカやシルビアではなくロベルトとは……。予想もしておらんかったのう」

ロベルト「そうですね。でも、俺もこういうの好きだったんで丁度よかったです」

イレブン「あ、そうだったんだ。実はこのお祭り、街の人達が考え

てくれたもので僕達は少ししか協力出来なかったんだけど、かなり大きなお祭りになったんだ。楽しんでいってね」

ロウ「そうじゃな。ぜひ楽しんできてくれ。それとイレブンが作ったケーキが特別に売られておるんじや。それもよかったら食べてみてくれると嬉しいのう」

セーニャ「イレブン様の手作りですか!?!ぜひ食べてみたいですよ!」

イレブン「お、おじいちゃん。恥ずかしいよ。大した物じゃないんだよ?パティシエ達を作るケーキの方がずっと美味しいから」

ロベルト「いえ、それはぜひ俺も食べてみたいです!絶対、人間間違い無しですよ。味の感想伝えますね」

イレブン「わ、わかった。それじゃあね」

二人は出ていった

その頃、大広間

ベロニカ「あ、エマちゃん。イレブンから聞いてたけど、本当にお城に住み始めたのね」

エマ「ベロニカさん、こんにちは。そうなんです。イレブンから近くで一緒に生活したいって言われて……。でも、こんな立派な所にいると申し訳なくて」

ベロニカ「そこは仕方ないわよね。イレブンが王様だからどうしてもお城に住む事になっちゃうわよ。部屋や国には慣れたの？」

エマ「はい。ユグノアには何回も訪れてたので問題なくて、部屋はイレブンが気を使ってくれて豪華な部屋じゃないのにしてくれたので」

ベロニカ「そうだったのね。イレブンったらしっぴかり考えてるのね。あ！セーニヤ達が来ちゃった！エマちゃん、じゃあね！」

ベロニカは走っていった

エマ「は、はい。どうしたんだろう、ベロニカさん」

玉座の間

ベロニカ「イレブン！おじいちゃん！大変なの！」

イレブン「え!?!どうしたの？ベロニカ！」

ロウ「何かあったのかのう？」

ベロニカ「さつきセーニヤとロベルトが来たでしょ？あの二人、まさかのデートなのよ！」

ロウ「ほ!!何の関係じゃと思っておったがまさか恋仲とは!!」

イレブン「そ、そうだったの？でも、確かに仲はよさそうだったかも」

ベロニカ「でしょ!?さつきも今日を楽しみにしてたとか言ってたの！ロベルトがいい人なのはわかるけど、セーニヤを簡単に取られるのは困るわ！イレブン、私と一緒に二人を見張りましょう！」

イレブン「ぼ、僕も？まあ、気にはなるけどさ。あまり首を突っ込んだら駄目なんじゃないの？」

ベロニカ「姉として妹を守るのは当然よ！しっかり相手も調べないと！」

ロウ「気持ちはわからんでもないが一旦落ち着くのじゃ、ベロニカよ。二人を応援してやってはどうかの？」

ベロニカ「そりゃあ…… 応援はするけど！何の話もなくいきなりあんな光景見せられたらビツクリするわよ！まさかセーニヤが私

に秘密にしてる事があつたなんて知らなかつたわ」

イレブン「それは確かに。おじいちゃん、僕も行ってもいい？仕事は明日も出来るからさ」

ロウ「わかつた。お祭りもやっておるんじや。イレブンも街の者と一緒に楽しんでくるんじやぞ」

イレブン「わかつた。お土産買ってくるからね」

ベロニカ「早速行きましょう、イレブン！早くしないと二人を見失っちゃうわ！」

ベロニカはイレブンの手を引っ張っていく

イレブン「わわっ！待ってよ、ベロニカ」

二人は玉座の間から出ていった

ロウ「ほほ、賑やかでええのう。しかし、セーニヤにもついに彼氏ががのう。応援してやらんといかんな」

セーニヤの秘密2

広場

ロベルト「それじゃあセーニヤさん、片っ端から回っていきますか？」

セーニヤ「はい！このためにお腹を空かせてきたので問題ありませんわ！」

ロベルト「そうですよね。俺も今日は頑張りますね！」

セーニヤ「それではロベルト様は右側のお店からお願いします。私は左側のお店の物を頼んできます」

ロベルト「わかりました。じゃあこのテーブルに集めて埋まりそうになったら食べていきましようか」

セーニヤ「はい！それでは行ってきます！」

セーニヤは嬉しそうにしながら走っていった

ロベルト「セーニヤさんとうこうして二人きりで話すのは初めてだけど、話しやすくって優しい方だな。おっと、俺も買ってこないと」

ロベルトも人混みに紛れていった

少し離れた所では

イレブン「バラバラになったよ。買いに行ったのかな？」

ベロニカ「きつとそうよ。セーニヤったらはしやいでるわね。デー
トなのにそんな子どもみたいにしてたら駄目じゃない！」

イレブン「まあまあ。セーニヤの大好きなスイーツがこんなにある
んだから嬉しくなって当然だよ。どっちを追いかける？」

ベロニカ「二手に分かれましょう。私はロベルトの方に行くわ。イ
レブンはセーニヤをお願い」

イレブン「逆じゃなくて大丈夫？」

ベロニカ「私はセーニヤの彼氏を調べなきゃいけないの。ロベル
ト、しっかり調べさせてもらうからね」

イレブン「ああ、そういう事ね。ロベルトもラースに鍛えられてる
から視線とかに反応しやすいかもしれないから気をつけて」

ベロニカ「そうね。バレたら元も子もないわ。慎重にいかないと」

三十分後

テーブルには数えきれないほどのスイーツ達が集まっている

ロベルト「あ、流石にもう置ける場所なさそうですね」

セーニヤ「はい。続きはこれを食べてからにしましょう。どれも美味しそうですね！」

ロベルト「そうですね。こんなに食べれるなんて滅多にありませんからね。………また、か」

ロベルトは周りを見渡している

セーニヤ「どうかされましたか？」

ロベルト「何だか見られているような気がして……。視線を感じるんです。セーニヤさんはわかりませんか？」

セーニヤ「そ、そうですね？ 私つたらいはしやいでしまつて全く気にしてませんでした」

ロベルト「俺もあまり確証は無いんですけど、何となく……。でも、こんなに人が大勢いますから見られてたつて当然ですかね」

セーニヤ「きつとそうですわ。もしかしたらこのスイーツの量に驚かれているのかもしれませんが」

ロベルト「ハハハ、確かにそうですね。俺の無駄な心配だったみたいです」

セーニヤ「それでは食べていきましょう」

二人はどンドンテーブルの上にあるケーキなどを食べていく

少し離れた所では

イレブン「……危なかったね。やっぱり少しバレてたみたいだよ」

ペロニカ「本当ね。気配は隠してるつもりだったんだけど、それでもバレちゃうのね。セーニヤが勘違いしてくれて助かったわ」

イレブン「一応セーニヤの言う通り、驚いている人も多いけどね。というか、あの量を二人で食べれるの？」

ペロニカ「セーニヤからしたら一人で食べれる量よ。あの子ったら甘いものに関しては本当ラース並みだから」

イレブン「ほ、本当だ。セーニヤだけ食べる一口の大きさが違うね。」

でもとっても幸せそうだし、美味しそう。僕も食べたくなくなってるな」

ベロニカ「ちよつと私もお腹空いてきたのよね。二人はしばらくここにいるだろうから、二人で何か買いに行きましょう」

イレブン「わかった。僕、あれ食べてみたかったんだよね。ブツシュ・ド・ノエル？だっけ。クレイモランのケーキ」

ベロニカ「チョコレートケーキの事よね。一度食べた事あるわよ。美味しかったわ」

二人は商店街に向かった

セーニヤ「ロベルト様、こちらのクリームブリュレ食べられましたか？とっても濃厚で美味しいですわ！」

ロベルト「あ、まだ食べてないです。美味しそうですね。ありがとうございます。…… おおっ！美味しい！濃厚なクリームなのに、しつこくないですね」

セーニヤ「そうなんです！何個でも食べれてしまいそうです！」

ロベルト「あ、じゃあ俺も。俺、さつき初めて見たんですけど、この薄い皮みたいなのやつとっても美味しいですよ」

セーニャ「そちらはパステリートですわ。聖地ラムダではよくお菓子として出されているんです。私も小さい頃よく食べていました」

ロベルト「あ、ラムダのお菓子だったんですか。それならセーニャさんは知ってて当たり前ですね」

セーニャ「ですが、パティシエの方が作ったものは初めてですわ。貫きますね。……まあっ！中によくジャムなどが使われていたのですが、その代わりにクリームが入ってるんですね。初めてですわ！美味しいです！」

ロベルト「あ、なるほど。中身が変わっているのか。皮だけでも美味しいですよ」

そして約一時間で全て食べ終わった

セーニャ「それではまた続きにしましょう。ロベルト様もまた持ってきてください」

ロベルト「はい。それではまた」

その頃、別の場所では

イレブン「あ、セーニャ達もう食べ終わったよ。早くない?」

ベロニカ「セーニャは流石としか言いようがないけど、それについていけるロベルトも凄いわね。甘いもの好きだったなんて知らなかったわ。って、イレブンこぼしてるわよ」

イレブンの手にはシュケットというシュークリームのようなものがあり、皮がテーブルに落ちていた

イレブン「あ、本当だ。ごめん。これ思ってるよりずっと美味しくてさ」

ベロニカ「へへ、シュークリームとは違うの？」

イレブン「うん。皮がね、焼いてあつてパリパリしてるよ。クリームが入ってるやつと入ってないやつ買ったけど、どっちも美味しい。ベロニカのはそれ、何？星みたいな形してるね」

ベロニカ「これはヨウルトルトゥウ。クレイモランで一年の決まった月にしか出ないスイーツで、星の形のパイにフルーツのジャムが乗ってるのよ。食べる？」

イレブン「そんなのがあるんだ。美味しそう、貰うね」

イレブン達もスイーツフェスティバルを楽しんでいた

商店街では

ロベルト「あ、ここで出店が終わりみたいだな。それじゃあ一旦置いてこよう」

セーニヤ「あ、ロベルト様、こちらに来てください！」

少し奥ではセーニヤがロベルトに手を振っている

ロベルト「あれ？セーニヤさん。何かあったのか？」

セーニヤ「ロベルト様、ご覧ください。先程ロウ様がお話ししていたイレブン様のお手製ケーキですわ。こちらのお店で売られています」

セーニヤの手にはシフォンケーキがあった

ロベルト「そうだったんですか。美味しそうです。イレブンさんってこんな立派なケーキ作れるんですね。凄いや」

セーニヤ「イレブン様はお菓子作りが好きなようでして、よく色々作っているそうですわ。もう一つ、チョコレートブラウニーがあります。ロベルト様、そちらも買って半分こしませんか？」

ロベルト「いいですね、それ。俺も買ってきます」

ロベルトは店に入っていくた

セーニヤ「それじゃあ私は先に戻っておきましょう」

セーニヤが一人で歩いていると

男性「ねくえく、その綺麗なお姉さーん」

セーニヤ「？」

三人ほどの男性がセーニヤに話しかけてきた

男性「そうそう、お姉さんですよ。お姉さん、凄く美しいですね。俺達と一緒にどうですか？」

セーニヤ「申し訳ございません。私、お連れの方がいらっしやるので」

男性「そうなの？でも、近くにいないくない？それなら少しだけでもさ」

セーニヤ「すみませんが、こちらのスイーツもあつてご期待に応える事が出来ないんです」

男性「スイーツ美味しそうだよね。それなら俺、お金だからさ」

セーニヤ「いえ、そんな失礼な事できません。私は大丈夫ですので、ご心配ありがとうございます」

男性「(チツ！面倒くせえな)」

セーニヤ「それでは失礼します」

セーニヤが後ろを向いた瞬間

男性「夢見の花！」

男性はセーニヤの顔に夢見の花を出した

セーニヤ「!?スウ……」

匂いを嗅いだセーニヤは眠ってしまった

ドサ！

手に持ったスイーツと一緒に倒れ込んだ

男性「よし！持っていくぞ！」

男性達「へい！」

数分後

ロベルト「結構列になってたんだな。セーニヤさんは流石に席に戻ったかな」

ロベルトが歩いていると

ロベルト「ん？何でスイーツがこんな所に捨てられてんだ？あれ……シフォンケーキ……イレブンさんの手作りのやつか。勿体ないが、捨てておかないとな」

ロベルトがスイーツ達を集めていると

カラン

ロベルト「ん？何だ、これ？……へアバンド？……あ！！こ、これってセーニヤさんがいつもしてるやつ！！セーニヤさん拐われた!？」

セーニヤの秘密3

しばらくして、ベロニカ達は

ベロニカ「ねえ、イレブン。セーニヤとロベルト、いくらなんでも戻って来なさすぎじゃない？」

イレブン「確かに。もう席を立つてからかなり経つけど全く持つてこないよね。スイーツはまだ少し残ってるのに……」

ベロニカ「何かあったのかも。探しに行きましょう」

一方、ロベルトは

ロベルト「目撃者がいてくれて助かった。セーニヤさんらしき人が運び込まれたのはこの廃屋か」

ロベルトの前には古くなり使われなくなった家があった

ロベルト「よし、早く入ってセーニヤさんを助けないと」

ロベルトがドアから入ろうとした時

ヒュオオオオ！

男達「ギャアアア!!」

家の中から凄い音と共に男達の叫び声が聞こえてきた

ロベルト「な、何だ!？」

ガチャ

セーニヤ「あ！ロベルト様！ご心配をおかけしました」

ロベルト「せ、セーニヤさん！よかった。大丈夫でしたか？」

セーニヤ「はい。眠らされてしまつて起きたらこの家にて囲まれておりましたので、少々魔法を使つてしまいました。大きな怪我になるほどではないと思うのですが」

ロベルト「なるほど。今の音はセーニヤさんの風魔法だったんですね。無事でよかったです。さあ、戻つてまたスイーツの続きを食べましょう」

セーニヤ「はい！あ、でもイレブン様のケーキや一部のお菓子が駄目になってしまいました……。とても残念ですわ」

ロベルト「それは仕方ないですよ。買うにも少し時間も遅くなつてきましたし、我慢しましょう」

少し離れた所では

ペロニカ「いたわよ、イレブン。こんな所で二人きりなんて何してたのかしら」

イレブン「商店街からは少し離れてるもんね。お店も無いはずだし、本当にどうしたんだろう」

ベロニカ「気になるわね。変な事されてないといいけど」

イレブン「へ、変な事って……。ロベルトはそんな事する人じゃないでしょ」

ベロニカ「好きな人の前だと変わるかもしれないわよ。ほら、見なさい。今にもロベルトがキスしそ……」

二人「えええ!!？」

イレブンとベロニカはロベルトとセーニヤが顔を近づけている瞬間を見た

ロベルト「あ、取れたぜ。さっきの廃屋でのゴミだったみたいだ」

セーニヤ「ありがとうございます、ロベルト様。目の違和感もなくなりました」

ロベルト「いやいや。しかし、セーニヤさんのような綺麗な顔を近くで見ると少し照れますね。まるでキスしてるみたいでしたよ」

セーニヤ「そんな風に見えましたか？私、まだキスをした事がないんです」

ロベルト「俺ですよ。そうそうする機会なんてありませんからね。まあ誰にも見られてないですし、大丈夫ですよ」

ベロニカ達は

ベロニカ「いくら人氣が無いからってあんな堂々とする!?!ロベルトったら大胆じゃない！セーニヤもセーニヤで何許してるのよ！」

イレブン「う、うわ、僕もまだエマとした事ないよ。そこまで二人の仲は進んでたんだ」

ベロニカ「私の知らない間にセーニヤが旅立っていく……………」

ベロニカはショックでフラフラし始めた

イレブン「あ、ベロニカしっかりして！」

それから一時間後

セーニヤ「御馳走様でした。こんなにたくさん甘いものを食べれて幸せでしたわ」

ロベルト「俺も一人だとどうしても限度がありましたから。セーニヤさんがいてくれて助かりました。ほぼ全て食べれましたね」

セーニヤ「そのお気持ちわかりますわ。私も一人だと全種類食べたくても食べれない事が多いです。お金や時間や夕飯などの都合がありますから」

ロベルト「やっぱりそうですね。それに一人よりも誰かと話しながら食べるとずっと美味しく感じます」

セーニヤ「私もそう思っていました！スイーツは分け合って食べればもっともっと美味しくなりますわ！」

ロベルト「またこういう事があったら連絡しますね。ここまで一緒にスイーツについて話せる方って俺の中だとセーニヤさんくらいなので」

セーニヤ「私もですわ。お仲間がいらしてとても嬉しかったです。ぜひまたご一緒に食べましょう」

ベロニカ「ちよつ、ちよつといいかしら？」

ロベルト「え？あ！ベロニカさん、イレブンさん！」

セーニヤ「まあ!?!どうされたのですか、お姉様!」

イレブン「実はね、さつきまで二人をずっと見てたんだ。何でセーニヤとロベルトと一緒にいるのか不思議に思ってたさ」

ベロニカ「まさかあんた達が彼氏彼女の関係だったなんて思わなかったけど、少しは応援するわ。でも!!キスはもっと隠れてやりなさい!あんな堂々とするんじゃないわよ!」

二人「え?」

セーニヤとロベルトはベロニカの発言にポカンとしている

セーニヤ「お、お姉様?何を言っているのですか?」

ロベルト「俺とセーニヤさんが恋人!?!ベロニカさん勘違いしてますよ!そんな素敵な関係じゃないですよ、俺達!しかも、キスつて……………」

二人「え?」

今度はイレブンとベロニカがセーニヤとロベルトの発言にポカンとしている

イレブン「あ、あれ?違ったの?仲良さそうだったし、二人で楽し

そうにしてたからさ」

ベロニカ「そ、そうよ！今日を楽しみにしてたとかウキウキして眠れなかったとか言ってたじゃない！」

ロベルト「いつから聞いてたんですか!?デルカダール城での会話ですよ、それ！」

セーニヤ「申し訳ございません、ロベルト様。私がお姉様に説明しなかったのが原因のようですわ。お姉様、イレブン様、実はロベルト様は私と同じくらいスイーツが大好きでして、前のお城での飲み会の時にその事でとても会話が弾んでいたんです」

ロベルト「その時に例年開かれているスイーツフェスティバルが開催したら二人で食べ尽くしてみたいという話になって、それから連絡を取り合いながら今日の予定になったんです」

イレブン「そ、そうだったんだ。じゃあ、本当にただ二人でスイーツを食べてただけだったんだね」

ベロニカ「そ、そうだったのね。で、でも！さっきのキスは何だったの!?!すっかりこの目で見たわよ！」

ロベルト「それはセーニヤさんの目にゴミが入ったみたいでそれを

取っていたんです。まさか本当に誰かに見られていたなんて」

セーニヤ「ロベルト様の言う通りになってしまいましたね。まさかお姉様達に目撃されているとは思いませんでした」

イレブン「あ、あはは……。ベロニカ、全部勘違いだったみたいだよ」

ベロニカ「ハア……。何かしら、この安心したような、恥ずかしいような感覚。まあ勝手に勘違いしてごめんなさい。二人にそんな共通点があったのは知らなかったわ」

ロベルト「まあ知らなくて当然だと思います。俺がスイーツ好きなのを知ってるのなんてバン達くらいですから。男でスイーツ好きは少し恥ずかしいので」

セーニヤ「そんな事ありませんわ、ロベルト様。こんなに美味しいものを好きになるのに性別なんて関係ありません。それに度々男性の方がスイーツ店に並んでいるのも見かけますよ」

イレブン「そうそう。僕もスイーツ好きだしね。まあロベルトほどじゃないのかもしれないけどさ、それでも恥ずかしがる事ないと思うな」

ペロニカ「好きなものは好きでいいのよ。もつと堂々としてなさい。そうすれば誰かに馬鹿にされたって気にならなくなるわよ」

ロベルト「へへ、皆さんやはり優しいですね。ありがとうございます」

ペロニカ「それじゃあ夕日も沈みそうだし、そろそろ帰りましょう」

セーニヤ「はい。ロベルト様、今日はとても楽しかったですわ。またぜひ一緒にしましょう！」

ロベルト「俺も楽しかったです。またご連絡でも、城にでもご自由をお願いします。それでは！」

イレブン「ふふ、またねー。ロベルト、僕もスイーツよく作るから試食とか頼んでもいい？」

ロベルト「イレブンさんの手作りの試食なんてしてもいいんですか!?ぜひやりたいです！」

イレブン「もちろん。いろんな意見があった方がいいからさ。今度僕も連絡するね」

「ロベルト「楽しみにしています！それではありがとうございました！」

お月見

二週間後、デルカダール城 朝食時

ラーズ「昨日ふと思い出したんだが、俺の村でのならわしの一つで十五夜つてのがあってよ。それが明後日なんだ」

マルティナ「十五夜？聞いた事がないわね」

グレイグ「おお、懐かしい。バンデルフォン王国でもその日があったぞ」

デルカダール王「聞いた事はあるぞ。何でも月が一番綺麗に見える日だと」

ルナ「お月様が？でもいつも綺麗だよ」

ラーズ「月つて色々姿を変えるだろ？それが満月になってさらに空気が澄み渡って月の光がよく見えるんだ。その日が十五夜」

マルス「それが明後日なんだ。何するの？」

グレイグ「バンデルフォンでは豊作を願って少しお祭りとなっていた記憶がある。ラーズの村ではどうだったのだ？」

ラーズ「俺の所も同じだ。お祭りはしなかったけどな。皆で広場に集まって月を眺めながら餅を食べてたんだ」

マルティナ「豊作を願うためのものなのね。少し形を変えてもいいのかしら？」

ラーズ「ん？というところ？」

マルティナ「国の繁栄を願ってなら私達でも出来るんじゃないかしらと思ってるね」

デルカダール王「おお、それはよいではないか。他国の文化を真似るのも勉強になるじやろう」

グレイグ「私も十五夜を過ごすのは子ども以来です。久しぶりにまたやってみたいですね」

ルナ「私もー」

ラーズ「じゃあそれで皆でお願いしてみるか。月を眺めてお願いしますからお月見って言うんだぜ」

マルス「お月見かー。さつき父さんが言ってたお餅つてのは？」

ラース「あれは白くて丸いお餅を十五個並べてお願いした後に食べるんだ。白い団子でも大丈夫だぜ。用意しておこうか」

グレイグ「そういえばそんなものもあつたな。俺の国では確か一緒に麦も祀られていたぞ」

マルティナ「麦は流石に用意できないわね。お団子だけ食べましょうか」

グレイグ「そんな完璧に再現しなくても私は平気ですよ。月見をやるだけで嬉しいです」

デルカダール王「それでは明後日の夜、バルコニーでお月見じゃな。楽しみにしておこう」

その後、玉座の間

カミュが帰ってきた

カミュ「よっ！ただいま。少しの間顔出さなくて悪かったな」

マルティナ「あら、カミュ。お帰りなさい。久しぶりね」

グレイグ「仕事忙しかったのか？」

カミュ「それもあるんだが、実はデクに久しぶりに会いにいったら調達をお願いされてよ。それをいくつかこなしてたんだ」

ラース「デクさんか。盗賊時代の元仲間だったな。元気にしてたか？」

カミュ「ああ。見ねえ間にまた少し太ってたみてえだ。奥さんも苦笑いしてたぜ」

マルティナ「ふふ、やっぱり結婚すると皆男って太るのかしらね」

ラース「俺はもう太ってないからな」

グレイグ「そうだ。カミュ、お前もどうだ？明後日の夜、バルコニーでお月見をするのだ」

カミュ「月見？月を見るだけか？」

マルティナ「大体は間違っていないけど、実はね」

マルティナはカミュに十五夜の話をした

カミュ「ほー、国の繁栄ね。そんな所に行ってもいいのか？」

グレイグ「ああ。多少変化はあるが、外で食べたり飲んだりするだけだ。カミュも普段通りで構わないぞ」

ラース「酒もあるぞ」

カミュ「よし、行くとするか」

マルティナ「やっぱりそこに釣られるのね。まあいいわ」

カミュ「それならよ、マヤ達も呼んだ方がいいんじゃないか？ 賑やかにするだろ」

グレイグ「確かに久しぶりに家族団欒で過ごすのも悪くないな。マヤが用事がなければだが」

カミュ「俺がこの後声かけてみるぜ」

ラース「それじゃあ頼むな、カミュ」

グラジー

カラン

チャム「いらつしやいませー」

カミュ「ん？子どもがいたのか？」

テルマ「あ、チャムありがとう。いらつしやいませ、お一人様ですか？」

カミュ「ああ。悪いが、食べに来たわけじゃねえんだ。マヤいるか？ちよつと話があつてよ」

テルマ「マヤさんですか。わかりました。チャム、呼んできてくれるか？」

チャム「はい！」

カミュ「なるほどな。聞いただけだったが、あんたらがシルビアのおっさんとグレイグのおっさんが話してた兄妹か」

テルマ「あ、シルビアさんとグレイグ將軍のお知り合いでした

か。って、もしかして髪の色からしてマヤさんのお兄さん？」

カミュ「おう、そうだぜ。カミュっていうんだ。よろしくな」

テルマ「はい。俺はテルマ、先程のが妹のチャムです。よろしくお願ひします、カミュさん」

マヤ「兄貴！久しぶりだね。話って何？」

カミュは先程の話をマヤにした

マヤ「へく、面白そう！行ってみるね！」

カミュ「賑やかになるだろうから店のやつら全員呼んでも平気だと思っぜ」

マヤ「あー、どうだろ。ちょっと聞いてみるね」

十分後

マヤ「全員オツケーみたい。早く店を閉めてくれるってさ」

カミュ「了解。マルティナ達に伝えておくぜ。あ、酒もあるからテルマ達はマルス達と一緒にだな」

マヤ「うん、そうだね。会うのはこれで初めてになるのかな」

カミュ「なら交流にもなるだろ。マルス達がグイグイいきそうだけどな」

マヤ「いしし、確かに。でも、チャムちゃんも人見知りしないから仲良くなれそう」

二日後の夕方

マドリー「鍵閉めましたよー」

ビル「わかった。さて行こうか、デルカダール城へ」

グリー「テルマ君もチャムちゃんもお城初めてだよね。緊張する？」

チャム「全然！すつごく楽しみ！」

テルマ「俺達が入って大丈夫なんですか？王族や兵士さんじゃないと入らないと思ってたんですが」

マヤ「デルカダールはそんな事ないんだよ。普通に入って大丈夫。」

それに誘われてるんだから大丈夫だよ」

マドリー「マルティナ様達たくさん食べるだろうから料理とお酒持ってきたけど、あちらも用意してるだろうし多かつたかしら」

グリー「きつとラーズさんが何とかしてくれますよ」

マヤ「そうそう！兄ちゃんのお腹に任せれば大丈夫」

ビル「ハハハ、グリーもマヤみたいな事言うようになってきたな」

デルカダール城　大広間

二人「うわく……」

テルマとチャムはシャンデリアや花などが飾られている広い空間を見渡している

グリー「初めて来るとやっぱりその反応になるよね。僕もこんな感じだった」

チャム「きれいーい！あのぶらさがってるやつ、キラキラしてる！」

ラーズ「お、来たな」

ラーズとブレイブが階段から降りてきた

マヤ「あ！兄ちゃん、ただいま！」

ビル「ラーズ様、お久しぶりです。今日のご招待いただきありがとうございます
うございます」

ラーズ「マヤ、お帰り。ビル、別にそんな固くならなくて大丈夫だ
ぜ。それと君達がテルマとチャムか。グレイグとシルビアから聞いて
るぞ。俺はグレイグと同じでここで將軍やってるラーズっていう
んだ。よろしくな」

テルマ「はい！よろしくお願いします、ラーズさん。ほら、チャム
！挨拶されたんだから返事するんだ！」

チャム「はい！チャムといます。よろしくお願いします、ラー
ズさん」

ブレイブ「……………」

ブレイブはビルとマドリーをジッと見つめている

テルマ「わわっ！キラーパーンサー！チャム、隠れてろよ」

チャム「う、うん。でも、襲ってこないよ？」

グリー「大丈夫だよ、テルマ君、チャムちゃん。このキラールパンサーはブレイブ君。ここのお城に住んでて、僕達の味方だよ」

ブレイブを怖がっているテルマとチャムにグリーは説明している

マドリー「……………もしかしなくても、警戒されてますよね。私とビル」

ビル「だな。疑いというより、ほぼ確信を持つてるな。賢いキラールパンサーだ」

ラース「あー、そうか。ブレイブ、大丈夫だぞ。マヤが近くにいるから薄々わかっているだろうが、この二人は味方だ。襲わないから安心して大丈夫だ」

ブレイブ「ガウ」

テルマ「襲う?」

マヤ「大丈夫だよ。魔物の話」

ブレイブ「ガウガウ」ペコ

ブレイブはテルマとチャムにお辞儀した

テルマ「あ、挨拶してくれた」

チャム「可愛い！」

ラーズ「ハハ、ブレイブの事よろしくな。さて、バルコニーはこっちだ。まあマヤがいれば大丈夫だとは思ってたんだけど一応な」

十五夜

バルコニー

ガチャ

ラース「王様、皆を連れてきました」

デルカダール王「おお、ありがとう。今日はよく来てくれた。初めての者もおると聞いている。ぜひ楽しんでいってほしい」

ビル「デルカダール王様、お久しぶりです。ご招待いただきありがとうございます」

マドリー「こちら、少しですがお食事とお酒とおつまみも持ってきました。よろしければお食べになってください」

デルカダール王「わざわざすまん。それではありがたく並べさせてもらうでしょう」

マヤ「姉ちゃん、おっちゃんただいま！」

マルティナ「ふふ、お帰りなさい、マヤちゃん」

グレイグ「ああ、お帰りだな。それと久しぶりだな、テルマ、チャム。店では上手くやれているか？」

テルマ「少しは慣れてきました。チャムが結構動き回るののでちよつと大変ですけど……」

チャム「お兄ちゃんが気にしすぎるだけだよ！私は皆のお手伝いしてるの！」

グリー「そうだね。いつも助かってるよ。ありがとう、チャムちゃん」

グレイグ「問題ないようなら安心した。あまりそつちに顔を出せなくてな。兵士達から話を聞いてはいたんだが、本人がどう思ってるかも気にしてたからな」

ラーズ「グレイグはな、実際にかなり気にしててよ。兵士達からかなり細かく聞こうとしてたんだぜ」

ラーズはテルマとチャムに聞こえるように少し小さめに言った

グレイグ「ラーズ！余計な事は言わなくていい！」

テルマ「へへ、グレイグ將軍にそんなに気にしてもらえてたなんて嬉しいです」

「チャム「おじちゃん、ありがとう！私、頑張ってるから今度来てね！」」

グレイグ「…………… ああ、約束しよう」

マルティナ「ほら、お話は終わりみたいよ。話しかけにいったら？」

ルナ「うん！初めましてー」

チャム「あ！私と同じくらいの子がいる！」

ルナ「そうだよ！私、ルナ。ねえ、名前何て言うの？」

チャム「チャムだよ。ルナちゃんって言うんだ。よろしくね！」

テルマ「よかったな、チャム。同年代の子が見つかった。友達になれるといいな」

ラーズ「俺とマルティナの娘でな。あっちにいるマルスと兄妹なんだ。まあ同じ時に生まれたからどっちが上とかは無いけどよ。少し強引な所があるけど仲良くしてやってくれ」

テルマ「王女様達の娘!? ずっと偉い子達だったんですね! チャムは敬語じゃなくて平気でしようか?」

グレイグ「本人達は敬語で話されるのをとても嫌っているからな。俺達も身分はあまり気にしない。自由に話してもらって大丈夫だ」

マルス「……………」
「ジー」

グリー「えつと……………」

マルスは何も言わずにグリーをジツと見つめていた

カミュ「おい、マルス。何ずっとグリーを見てんだよ。グリーが困ってんだろ」

マルス「カミュ、グリーさんの隣に立ってみて」

カミュ「俺? これでいいか?」

カミュはグリーの隣に立った

マルス「…………… うん! カミュより背が高いし、顔も怖くない! 優しい人だね! 前にルナが言ってた通りじゃん!」

グリー「そ、そうなの？ありがとう」

カミュ「おいこら、マルス。てめえ、それはどういう事だ？こら」

マルス「うわ！カミュが怒った！父さーん！」

カミュ「あ！こら、マルス！逃げんな！」

グリー「あ、あはは……。マルス君ってイタズラ好きなんだな」

それから少しして

テーブルにはいろんな料理が置かれていた

デルカダール王「それでは今日はラースとグレイグから教わった十五夜という日らしくてな。それを少し真似てみようと思ったわけじゃ。確かに今日は本当に綺麗な満月じゃな」

夜空には雲がなく、満月の光がハッキリと届いていた

マドリー「そんな日があるんですね。確かに月が綺麗です」

カミュ「月がハッキリ見えるな。こんなに見えるなんて珍しいな」

ラス「空気も澄んで空が淀みなく見えるからな。今日はそういう日なんだ。ただの満月じゃないって事だ」

グリー「そう言われると特別感がありますね」

テルマ「確かに。満月は何回か見た事ありますが、月がこんなに明るかったようには思えませんし、輪郭まで見えるのも珍しいです」

マルス「はいはい、父さん、グレイグさん、質問！」

グレイグ「ん？何だ？マルス」

マルス「月って何で欠けたりするの？ずっとまん丸でいいじゃない！」

ルナ「私も気になる！毎日満月だったらいいのに」

チャム「私も！こんなに綺麗なら毎日なっちゃえばいいのに、三日月だけ？全然欠けて見えない時もあるよ」

グリー「言われてみると……何でだろう」

テルマ「俺もわからないですね」

デルカダール王「おお、中々面白い質問だな。だが答えが難しいな」

マルティナ「たまにこういう質問の時どうしたらいいかわからなくなるのよね」

グレイグ「…… ラース、頼んでいいか？俺にはうまく説明できる気がしない」

ラース「了解。これはな、太陽のせいなんだ。太陽の光が月を見えたり見えなくさせたりするんだ」

マルス「太陽？でも、今は夜だよ」

ラース「宇宙では朝夜なんて無いからな。太陽もいつでも明るいだ。太陽が昇ってきて、夕方には沈むだろ。あれは地球が回ってるからで、太陽の光は夜でも存在している。月が光ってみえるのは太陽の光によるものなんだ。わかるか？」

子ども達「??？」

グリー「僕は何とか……」

マルティナ「ちよつとラース、それじゃあ難しいわよ。もう少し噛み砕いて説明できない？」

カミュ「そうだぜ。子どもにはわからねえよ」

ラース「そ、そうだよな。えつと……」

マヤ「ふふ、任せて兄ちゃん。私も習ったからわかるよ。兄貴、ちよつとこつちに来て」

カミュ「わかった」

マヤ「皆はこの扉を遠くから見えてね」

デルカダール王「マヤの説明か。どれ、聞いてみようかの」

マヤとカミュ以外は扉から少し離れた場所で扉を見ていた

マヤ「まず、私の顔が見える人」

ルナ「眩しくてマヤお姉ちゃんの顔が見えないよ」

マヤ「そうだよね。じゃあ兄貴、扉閉めて」

バタン

マヤ「これで私の顔が見える人ー」

チャム「見えるよー」

マヤ「でしょ？じゃあ次は扉を開けて、私と向かい合わせになる場所に来て」

マヤは扉から僅かに離れて扉から九十度動いた場所で止まった

マルス「ここだね！」

マルス達はマヤの正面に立った

マヤ「正解！ここだと私の顔はどう見える？」

マルス「あ！半分が明るくて見えないけど、もう半分は見えるよ」

マヤ「そうだよね。これが月が欠けたりする理由だよ。光が強くて見えなくなっちゃうの。だから月は常に満月なんだけど、太陽があると太陽の方が強くて月が負けて見えなくなるんだよ」

ルナ「わかった！じゃあ月はずっと丸いんだ。欠けて見えるのは本当に欠けてるわけじゃないんだね」

マヤ「そうだよ！ルナ、正解！」

ビル「なるほど。こんな仕組みになっていたんだな」

マドリー「私達まで勉強になっちゃいましたね。マヤちゃん、よく知ってたわね」

デルカダール王「とてもよい説明だったぞ、マヤ」

マルティナ「わかりやすかったわよ。子ども達でもわかるようになってあつてとてもよかったわ」

カミュ「兄貴、俺達にはあの説明でもいいんだろうが、子ども相手にはあんな感じでやれよな」

ラース「そうだな。流石メダ女元主席だよ」

二人「メダ女主席!？」

グリーとテルマが同時に驚いている

テルマ「メダ女ってメダル女学園の事ですよね!？」

グリー「凄い！マヤさんってめちゃくちゃ頭いいんじゃないですか！」

マヤ「そんな驚く事じゃないよ。頑張ってたらいつの間にかけて感じだし」

ビル「あの、グレイグ様、主席とは？」

ビルとマドリーはこっそりとグレイグに尋ねた

グレイグ「む？ああ、そうだな。聞いた事がないだろう。学校という場所があつて、そこでは様々な事を学んで一つ一つに成績というものがつけられる。大体数でいうと十を超えるな。それを学園全体で比べて一番成績がよかった者が主席となるのだ。つまり、学校のトップという事だ」

マドリー「トップ!?マヤちゃん、凄いじゃないですか！そんな簡単になれるものじゃないですよね!？」

グレイグ「そうだな。一人だけに与えられるものでもあるし、全てで素晴らしい成績を収めなければいけない。マヤの決して手を抜かない努力があつてこそだ」

マルティナ「ふふ、グリーも知らなかったのね。マヤちゃんったら
凄いのよ」

グリー「驚きましたよ！学校に通ってたのは聞いてましたけど、まさか主席なんて！」

マヤ「もう！この話はいいでしょ！恥ずかしいから終わり！ほら、説明でご飯が途中だよ。もう少し食べようよ」

デルカダール王「ああ、そうだな。マルス達の疑問も解消されたのだ。また少し食べながら騒ぐとしよう」

十五夜2

一時間後

テルマ「あの…… ラース將軍。まだそんなに食べるんですか？」

ラース「ああ、まだ腹に入るからな。俺はまあまあ食べる方だからよ」

テルマ「まあまあですか……」

ラースの周りには空になった大皿が重ねられている

マヤ「気にしないで大丈夫だよ、テルマ。兄ちゃんは凄い大食いだからこれが普通なの」

カミュ「だな。驚くのはよくわかるが、心配いらないぜ。あ、でも食べたいものがあつたら遠慮なく取って大丈夫だぜ。兄貴もそこは配慮してるからな」

ラース「何か食べたかったか？この肉のソテーとか美味しいぞ」

テルマ「そうなんですか。それじゃあ貰いますね」

ビル「カミュさん、ラース様、実は今日私のお気に入りのお酒を持っ

てきたんです。よろしければ飲んでみてください」

「カミュ「お！本当か！兄貴、かなりいい酒が来たぞ！」

「ラーズ「ビルのお気に入りか。それは期待できそうだ」

ルナ「見ててね、チャムちゃん！ヒヤド！」

ルナの手のひらには小さな氷ができた

「チャム「わあっ！凄ーい！！ルナちゃん魔法使えるんだー！いいなー！」

マルス「僕も出来るんだよ！メラ！」

マルスも手のひらに小さな炎を出した

「チャム「ええ！マルス君も！私もやりたーい」

「マドリー「流石ラーズ様とマルティナ様の子ども。魔法をこの歳で使いこなせるなんて」

「グリー「僕も羨ましいですよ、魔法なんて」

マドリー「ふふ、グリーン君に魔法はあまり似合わない気がするわ。失敗してるイメージがあるわよ」

グリーン「ええ！酷くないですか、マドリーさん！」

デルカダール王「ラーズよ、少しこっちに来てくれ。わし達だけで願う事だけ済ませておこうと思ってな」

ラーズ「わかりました。ビル、カミュ、少し待っていてくれ。すぐ戻ってくる」

マルティナ「ガラツシユの村ではどうやってお願い事してたの？」

ラーズ「多分バンデルフォン王国と同じじゃないかと思うが」

グレイグ「それが恥ずかしい事に俺の記憶には祭りの記憶しかなくてな。細かいところは忘れてしまったのだ」

ラーズ「なるほど。まあ何十年も前の事だから忘れて当然だろ。それじゃあやってみせるな。俺の村では、まずこうやって静かに手を合わせて月をお願い事をしながら祈るんだ」

ラーズは手を合わせて目を閉じた後、しばらくそのままだった

ラース「……………それでお願い事が終わったら団子を入れ物ごと月に掲げて食べる。こんな感じだ。簡単だろ？」

デルカダール王「なるほど、確かに簡単だな。しかし、恐らくは願いをするポーズや団子を月に掲げる事などにも細かな意味があるのだろう。どれ、わし達もやってみよう」

マルティナ「願い事は口に出さなくていいの？」

ラース「そうだな。まあ出してもいいのかもしれないが、願い事なんて個人でバラバラだったからな。知られたくないものだってあったんじゃないか？今回は皆同じだけだよ」

グレイグ「なるほど。その可能性はありそうだな。それでは心の中で願うとしよう」

デルカダール王達も静かに祈り始めた

マヤ「へく、あれがお月見でやる事なんだ」

グリー「神聖な感じがするね。わざわざお祈りするなんて教会や女神像みたいだよ」

マルス「ルナ、僕達もやろう」

ルナ「そうだね。お母さん達もやってるもん。私はねー、綺麗な寶石が貰えますように！」

マルス「じゃあ僕は太刀がもつと上手くなってグレイグさんに褒められますように！」

料理も無くなってきた頃

ラース「そういえばな、月を見ていて思い出した事があるんだ。ガラッシュの村にあった伝説の話で、月にはゴールデンコーンが住んでるんだってよ」

ビル「ええ!? ゴールデンコーンが月に!？」

マドリー「それ本当なんですか!？」

グリー「ゴールデンコーン?」

マヤ「私も初めて聞いた。なに、それ?」

マルティナ「魔物の名前の事で、いつかくさぎに似た姿をした金色のうさぎよ」

チャム「金色のうさぎ!?そんなのがいるんだ!」

ルナ「絶対綺麗だよ。あ!!月に住んでるから金色なんだ!」

カミュ「だが、何でそんな事が言われてるんだ?」

ラース「月の模様をよく見るとゴールデンコーン、つまりいつかくさぎの模様があるんだ。あれが角と耳と足だ。今日はよく見えるぞ」

マルス「本当だ!いつかくさぎの形してる!」

グリー「へー、面白いなあ。そんな模様が月にあったなんて」

テルマ「じゃあ、もしかして本当に月にはゴールデンコーンがいるんだ」

ラース「だろうな。そう考えてみると面白いだろ?」

グレイグ「おい、ラース。そんな嘘をついて遊ぶな。子どもは喜ぶだろうが後々恥ずかしい思いをするのではないか?」

グレイグはこっそりとラースに話した

ラース「なんだよ、グレイグ。つまらないな。相変わらず頭が固いんだから。少しくらい夢があった方がいいだろ」

グレイグ「ぐ……。だが、周りから馬鹿にされるのではないか？」

マルティナ「あら、いいじゃない。もしかしたら本当に月には魔物が住んでる可能性だってあるかもしれないわ。勝手に私達が月には何もいないと思ってるだけかもしれない」

デルカダール王「ハハハ、そうだな。とても可能性を感じられる伝説だ。無碍に嘘だと言い切るのもつまらない。少し夢を持ってもらいたいかもしれない」

ラース「ま、俺もあまり信じてはいないけどな。昔からそんなわけないって思ってるしよ」

ラースは月から目を離して酒を飲んだ時

全員「あ!!」

月を見ていた全員が一斉に声を出した

ラース「え?どうした?」

マヤ「今、ゴールデンコーンの模様が動いた!」

チャム「跳ねたよ！ピヨンって！」

ルナ「私も見た！本当にいるんだー！」

マドリー「あの模様が動くなんて……」

ラース「い、いやいや何言ってるだよ。そんな訳ないだろう」

マルス「え？父さんは見なかったの？今の凄い瞬間だったんだよ」

カミュ「目の錯覚か？もう動いてないしな」

グリー「でもこんな一斉に同時で錯覚なんて起きますか？」

グレイグ「まさか……今の光景が信じられんな」

マルティナ「ほら、嘘なんかじゃないかもしれないわよ。ゴールデ
ンコーンは本当に月の使者なのかもしれないわね」

デルカダール王「よいものを見せてもらった。やはりまだまだ知ら

ない事はたくさんあるようだな」

「レース「マジかよ……。。くそっ！俺も見たかった！何で目を離したんだよ！」

追加キャラ設定2

さらに追加したキャラクターの設定を載せておきます。簡単な設定しかない者が多いですが、それでもよろしければ参考程度にどうぞ。

グリー

身長 177cm

体重 58kg

年齢 20歳

性格 穏やかな性格。少し怖がりな一面もあるが、ここぞという時にはしっかりと動く事が出来る

デルカダール王国にいつのまにか出来ていたお店で働いていた新人。何軒も回ったが、働かせてもらえなくかわいそうに思ったビルとマドリーがお店で働かせるようにした。緊張には弱く、最初はミスも多かったが段々と慣れていった。また、海の呪いが生まれた時からかかっており、故郷のナギムナー村では誰一人グリーに近づこうとしなかった。

海の呪いはラース達との介入で自分が勇気を出して解決する。呪いを気にせずに接してくれたラース達やマヤには非常に感謝している。特にマヤには不思議な思いを抱いている……？

ビル

人間時

身長 180cm

体重 85kg

魔物時

種族 アンクルホーン

性別 オス

人間のような生き方に憧れていた魔物。魔物の世界では弱く、生き残るだけで必死だった。ある時、ドルグに助けられてついていく。ドルグに力をもらい、自分の姿や周りを変化させる魔法を覚える。その力を使いドルグ達と生きてきたが、ドルグの暴走によりドルグの命令を反発するようになる。デルカダールにいる人間を捕まえるという命令も無視して、自分の店として魔法を使い、人間のように過ごせる事にとっても喜んでいた。

そんな時、何も知らないグリーがやってきて、グリーの熱意に惹かれてグリーを雇う。騙している事を申し訳なく思いすぐに辞めさせようとするが、頑張るグリーを見てしばらく様子を見る。マヤもそこに加わり、楽しく店を開いていたが、ドルグがやってきて正体を皆にバラされる。

ラーズ達には殺されても仕方ないと思っていたが、グリーとマヤの説得により人間の姿であればこのままで構わないと言われ、事なきを得る。さらに本物の店をもらい、またマドリーとグリーとマヤで店を

開ける事になり心の底からラーズ達に感謝している。

マドリー

人間時

身長 148cm

体重 ???

魔物時

種族 ブラッドレディ

性別 メス

人間のような生き方に憧れていた魔物。魔物の世界では弱く、生き残るだけで必死だった。ある時、ドルグに助けられてついていく。ドルグに力をもらい、物質を別の物に変化させる魔法を覚える。その力を使いドルグ達と生きてきたが、ドルグの暴走によりドルグの命令を反発するようになる。デルカダールにいる人間を捕まえろという命令も無視して、自分の店として魔法を使い、人間のように過ごせる事にとても喜んでいた。

ビルとは魔物の頃から一緒に暮らしていた。ラーズ達の助けにより、再び店を開ける事にとっても喜んでおり、ビルと一緒にラーズ達には心の底から感謝している。またグリーやマヤの事も気に入っており、お姉さんとして色々アドバイスなどをしている。テルマやチャムの事も可愛がっている。ビルとは違いどんな人でも優しく接するた

め、常連からも人気がある。

ステラ

グリーの育て親。血は繋がっていないが、前からグリー家とは仲良くしており、一人になったグリーを息子のように育てていた。グリーが安心して過ごせるようにと孤児院を作るが村の人達からの悪い影響もあり、グリーをあまり子どもらしく育てられなかった事を後悔している。グリーがデルカダールに行つてからはこのまま楽しくデルカダールで過ごしてほしいと願っている。

元神様

ベグルとジェーンがメダチャット地方の山の中にある古い祠から出てきた水のような物。昔は古代プロチャット王国を守る神様だったようだが、今となつては廃れてしまい力も無くなっている。

しかしその守護の力は限定されるが強力で、その人と最もゆかりのある場所では悪意のある攻撃や魔法から守られるという力を持つ。ベグルはこれにより、デルカダール城にいる間は怪我しような攻撃や呪文から守られている。

バース

種族 スカイドラゴンの色違い

性別 オス

謎の塔に住むドラゴン。遙か昔にその塔で王女と兵士が結婚をした時に塔にある立派な鐘を鳴らした事により、その鐘の音に魅了された。鐘の音を聞かせてくれた王女と兵士に感謝をして祝福をする。その事から伝承では祝福の竜と書かれている。

王女達から赤い花をつけた男女が再びあなたの前で鐘の音を鳴らしてくれると約束しており、何百年もの眠りから覚めた時に偶然赤い花をつけたベグルとジェーンの結婚式に現れる。

勘違いは解けるが、ベグルとジェーンにはあの時の王女と兵士に似たものを感じており、二人の事も祝福をして鐘の音を聞く事ができる。ベグル達からも感謝された後、塔で再び眠りにつく。

タキ

ロウ兄弟の長男。自分に厳しい性格で物怖じしない。しかし、周りには優しく接するため国民からも人気があった。弟であるチヨウとロウには優しく、時に厳しく接していた。チヨウとロウからも自慢の兄として尊敬されていた。武道に優れており、優秀な兵士であったが魔物との戦いで命を落とす。名前の由来は焚き火から。(ロウの名前が蠟燭からきていそうだなと勝手に想像した結果)

チヨウ

ロウ兄弟の次男。優しい性格だが少し適当にやり過ぎす一面もあり、タキからはよく怒られていた。しかし、根は真面目なためやる事はしっかりやっていた。兄のタキは尊敬しており、弟のロウには自分が守ってやりたいと思っていた。タキとは違い、魔導に精通しており魔法ではかなりの実力を持っていた。

結婚して妻とユグノアから出ようとしていたが、タキが亡くなり国王の座がやってきてしまい、王ともめる。ロウに助けを求めると、ロウからも期待されてしまい苛立ちのあまり、ロウとも喧嘩してしまう。最後は妻とこっさり王国から抜け出していく。ロウ一人に全て押し付けた事を強く後悔しており、ユグノアの事をずっと気にかけていた。名前の由来はちようちんから。(ロウの名前が蠟燭からきていそうだなと勝手に想像した結果)

ブダン

突如として現れたトレジャーハンター。仲間を集めて財宝を狙う珍しいタイプで、仲間を大切にしていた。商人に騙されており、万病に効くといわれるレッドオーブを狙っていた。窃盗として捕まるが、本当の目的は謎の病にかかってしまった自分の兄を助けるため。カミュの助けにより兄は助かり、ブダンもカミュに感謝している。盗みはもうせず、兄と共に仲良く過ごしている。

ワンス

ブダンの兄。子どもの時に謎の病にかかり、体がどんどん動かなくなっていく。正体は呪いによるものであり、カミュ達の助けにより呪

いは解かれる。しばらく動けなかったが、順調に回復していつている。ブダンが自分との約束を守ってくれた事に感謝していた。ブダンもしばらくして会いに戻り、兄弟仲良く過ごしている。

エド

身長 160cm

体重 54kg

年齢 17歳

特徴 魔物の姿になれる

幼児の頃から魔物に育てられた青年。自分を育ててくれた父親代わりのベンガルを尊敬しており、いつか父ちゃんのように強くなると豪語している。魔物の群れの中で生活していたせいか魔物の言葉がわかったり、木を軽々と移動したり、鼻がとても効いたりと野生じみている。

感情が昂ぶると父親の力を借りて魔物の姿になる。しかし理性は残っており、人間の言葉も話せる。ピンチになるとその力が暴走し、本当に魔物のように暴れ狂う。そんな事が起こらないようにさらに強くなるためにデルカダール城の兵士となる。

戦闘能力はまだまだだが、目標はベグル達を全員倒した後バンを倒して、ラースに挑む事。しかしそれがベグル達の怒りを買って、鬼のように指導される。人間の生活に慣れていないため、色々と勉強中。最近怖いものにベグルとガザルが上がりつつあるらしい。

テルマ

身長 155cm

体重 57kg

年齢 14歳

ソルテイコに住んでいたチャムの兄。母親と父親の帰りをチャムと共に待っていたが、シルビアによりもう既に亡くなっている事がわかった。数年間チャムの親代わりとして生活していた。母親や父親を知らないチャムに色々両親の事を教えていた。

もう両親がいないとわかりショックを受けるが、チャムを支えに生きるという働こうとする。グレイグ達の協力により、グラジーで働く事になる。アルバイトとして毎日頑張っている様子。度々シルビアやグレイグが様子を見にくるらしい。

チャム

身長 111cm

体重 ???

年齢 9歳

ソルティコに住んでいたテルマの妹。母親は自分が産まれてすぐにいなくなつてしまい、父親も顔を僅かに覚えている程度で両親をほとんど知らない。母親とお揃いである手鏡の半分を大事に持っていた。両親がいないとわかり、ひどくシヨックを受けて、洞窟に一人でいき魔物に襲われるが、シルビア達に助けられる。

テルマの言葉を受け、自分も兄と共に生きると言う。グレイグ達の協力により、グラジーでテルマと共に働く。いろんなお客さんから話しかけられて楽しそうにしているが、テルマからは心配されている。宝物は完成した手鏡。

イリーナ

ギバが恋したクレイモラン王国に住んで雑貨屋を営んでいる女性。毎度やってくるしつこい男性客達にとっても迷惑していた。絡まれている所をギバに助けられて、さらに二度と絡まれないようにしてもらう。そこから仲良くなり、ギバに秘密を話す。

恋人であるアツシユの氷を溶くためにたいようの石を取ってきてもらう。無事にアツシユは助かり、ギバの事を本当に感謝しており何でも助けになると言っている。

アツシユ

イリーナの彼氏。昔ミルレアンの森に行った時にイリーナを庇い、氷漬けにされた。氷を溶かすためにはたいようの石が必要となり、ギ

バに取ってきてもらう。本人からしたら突然何が起こったのかわからなかったが、イリーナの話によりギバに感謝している。本心はギバにイリーナが取られるのではないかと不安に思っていたが、ギバから応援された事で安心する。

敵

ドルグ

ビルとマドリーを部下にしていた魔物。巨大な斧を使い攻撃する。邪神の力により、凶暴になり力を求め人間を襲うようになった。ビルとマドリーは嫌々付き合っていたが、嫌気をさされ命令を無視される。そんな二人を役立たずと判断し、殺そうとする。

マネマネ

2000年ほど前にデルカダール地方周辺にいた魔物。相手の姿を真似るだけでなく、思考やそれまでの経験も読み取る力を持つ。その力を使い暴れていたが、ネックレスの中に封印される。しかし、それを逆手に取り相手の願う姿を真似て、反対に本人をネックレスの中に閉じ込める。

そうする事で本人が願う姿になりながら、また昔のように暴れられる事を目的としていた。バンが願う姿になりバンを陥れたが、ベグル達の必死の抵抗によりバンが解放され、バンに倒される。

スーナ

シンジを自分の養分にしようとした魔物。男性を狙い、美しい女性
の姿で気を引き、虜になつたところで栄養にして吸い尽くす恐ろしい
戦略があつた。シンジも対象にされていたが、ベロニカ達の介入もあ
りてこずっていた。そのためゆっくりと魅了をかけていたが、それも
ベロニカ達に邪魔され、ベロニカ達を始末しようとして倒される。

友達

それから一週間後、グラジ―

昼の営業も終わり、皆で片付けをしていた時だった

マドリー「テルマくん、ちよつといいかしら？」

テルマ「？はい、どうしましたか？」

マドリー「あのね、本当はマヤちゃんに頼めばいいんだけど、今日この後夜を休んで友達と遊ぶみたいなの。だから代わりにこれをデルカダール城にいるラーズ様にお届けしてほしいの」

マドリーはホムラの酒が入った包みをテルマに渡した

マドリー「あ、もしかしてテルマ君も予定あつたかしら？」

テルマ「いえ、そんな事ないですよ。ラーズ將軍にお届けすればいいんですね、わかりました」

マドリー「ええ、ありがとう。私とビルからの届け物って伝えといてね。それが終わったらもうテルマ君達は終わりだから自由にしていいわよ」

テルマ「はい。それでは行ってきます」

デルカダール城 玉座の間

テルマ「失礼します」

マルティナ「あら、テルマじゃない。どうしたの？」

テルマ「突然すみません、マルティナ様。えっと、ラーズ将軍にマドリーさんとビルさんからお届けものがありました」

ラーズ「お!!という事は、頼んでたやつか！」

グレイグ「何か頼んでいたのか。自分で取りにいけばよかつただろう。わざわざ持ってきてもらってすまなかつたな」

テルマ「いえ、もうお店もお昼が終わって俺の仕事も無かつたんでこれくらい平気ですよ。ホムラの酒だそうです」

ラーズ「そうそう、これこれ。本当は夜に取りに行くつもりだったが持ってきてくれるとは思わなかつた。ありがとな、テルマ」

マルティナ「ビルとマドリーにもありがとうって伝えておいて。また今度お店の方にも顔出しにいくわ」

テルマ「わかりました。それでは失礼しました」

ラーズ「あ、どうせなら入り口まで見送るぜ」

テルマ「ありがとうございます、ラーズ將軍」

大広間

二人が歩いていると大広間にはベグルとエドが騒いでいた

エド「俺一人でそれくらいできるわ!!馬鹿にすんなよ!」

ベグル「馬鹿になんかしてねえって言うてんだろが!もしものために一人つけようとしてるだけだ!」

エド「それが馬鹿にしてるんだろが!見回りくらいすぐに終わらせてやるよ!」

ラーズ「おい、何騒いでんだよ、ベグル、エド」

ベグル「あ、す、すみません、ラーズ將軍」

エド「あ!ラーズ!よっ!」

ガシ

ベグル「ラーズ將軍、だろ？」

ベグルはエドの頭を掴んで握りしめている

エド「いででで!!ラーズ…: 將軍…:」

ベグル「たくっ!」

エド「この馬鹿力め…:…:。人の頭潰す気かよ…:」

ベグル「ああん？」

エド「ひいつ!!」

エドは咄嗟に近くのテルマの後ろに隠れた

ベグル「ん？君は確か、グラジ―で前に新しく働いてた…:」

テルマ「あ、俺の事ご存知でしたか。テルマつていいいます。兵士さん、よろしくお願いします」

ラーズ「俺がグラジ―で頼んでた酒を持ってきてくれたんだ」

エド「グラジャー？何だ？それ」

テルマ「グラジャーっていうのは俺の働いてる店の名前で酒場なんだ」

ベグル「餓鬼にはまだ早えよ」

エド「はあ!?!誰が餓鬼だ！酒場つてあれだろ？よくくっせえ水が出てくる場所。俺、あそこすげえ苦手なんだ」

ライス「もう少し言い方を何とかしてほしいが、まあエドからしたらそうなのかもしれないな。それで何で大声で騒いでたんだ？」

ベグル「ああ、それなんですけど今日見回りを新人達に二人ペアで任せていたんです。でも、こいつだけ人数の関係で余っちゃって俺達の中から一人つけようとしたら猛反発してきたんですよ」

エド「見回りすらも一人でやらせてくれねえんだぜ!?!群れの中に入った時は俺一人で問題なかったつてのによ!」

ライス「なるほどな。エドの見回りの場所はどこだ？」

ベグル「デルカダール地方です。簡単にでいいので、やり方だけでも覚えてもらえればと思って」

ラース「ふむ…………… テルマ、この後空いてるか？」

テルマ「え？俺ですか？空いてますけど……………」

ラース「じゃあよ、金は出すからこのエドっていう新人兵士と一緒に見回りしてくれないか？」

三人「ええ!？」

テルマ「いやいや、ラース將軍！俺兵士じゃないですよ!？」

エド「そうだぜ!?第一こいつ、何か出来んのかよ!」

ラース「簡単な見回りでもいいなら一部、街の人達も出来る。グルつと回って魔物を遠目で見る。そんなやつでいいんだろ？」

ベグル「ま、まあ確かにその程度でも問題ありませんが…………… 本当
に大丈夫ですか？」

リース「デルカダール地方なら危険な魔物は非常に少ない。それも近づかないなら問題ないやつらだしな。頼まれてくれないか？テルマ。ちよつとした散歩感覚で大丈夫だからよ」

テルマ「……わ、わかりました。えっと、エドだっけ？よろしくな」

エド「お、おう」

リース「エド、しつかりテルマを守ってやれよ。人一人守れないなら村を守るようにならないぞ」

エド「!?おお、そうだな！よし、任せておけ！」

二人は城から出て行った

ベグル「リース將軍、本当の考えは何ですか？」

リース「エドとテルマには共通点がある。外部からやってきたという点だ。しかも見たと思うが、かなり年齢も近い。二人には多少親しくなってもらいたくてな。特にエドは人間の友人は初めてのはずだ。これでまた新しい経験をしてほしい」

ベグル「なるほど。ですが、エドはあんな性格ですよ。テルマって人がどうかはわかりませんが、喧嘩にならないといいんですが」

友達2

デルカダール地方

テルマ「ちよつ、ちよつと待てよ、エド！早く走りすぎだつて！」

エド「え？あー……悪い。いつもの感覚でやつちまった」

必死に走って追いついたテルマは少し息をきらしていた

テルマ「すげえ速いんだな。追いかけるだけで必死だったよ」

エド「まあな。ちよつと自信あるんだぜ。さて、言われた事は魔物を観察してこいつて言われたんだ。お前、ここの魔物達には詳しいのか？」

テルマ「お前じゃなくてテルマ。残念だけど、俺が住んでいたのはソルティコだったんだ。だからデルカダール周辺の魔物はあまり知らないな」

エド「チエー、それなら仕方ねえか。それなら少し探してみるか」

テルマ「探すって？歩き回ればたぶんそこらへんにいるんじゃないか？」

エド「あ、なるほど。それもそうだな」

テルマ「道自体は整備されてるから草むらに入らなくても大体進めるはずだ。グルツと回って戻ってこようぜ」

エド「おお！お前、詳しいんだな！」

テルマ「いやいや、これくらいで詳しいって……」

エド「というか、剣持ってるけどよ。戦えんのか？」

テルマ「ほんの少しだけね。ラーズ將軍が危険な魔物は少ないって言ってたから多分大丈夫だと思うけど念のため」

エド「ふーん、それじゃあ何かあったら俺が守ればいいんだな。任せろ！」

テルマ「まあ頼りにしてるよ、兵士君」

少しして

エド「へー、穏やかなやつらばかりだな。ズツキーニヤとかももんじゃ、マンドラか。可愛らしいじゃん」

テルマ「王国にあつた掲示板にはいつかくさぎとかおおがらす、おおきづちはあまり近づかないようにって書いてあつた。気をつけようか……って、あれ!？」

後ろにいたエドに話しかけて振り返ると、エドはいつの間にかいなくなつていた

テルマ「エド!?どこいったんだ!？」

エド「おーい、こっちだぜー!」

テルマ「何してんだよ!」

テルマの近くにあつた大きな木にエドは立っていた

エド「いやー、何だか丁度よさそうな木があつたからよ。登りたくなるよなー」

テルマ「どうやってそんな高いところまで登つたんだよ。ほらー、降りてこいよー」

エド「おお!海がよく見えるな!景色いいじゃん!」

テルマ「話聞けよ!」

ムギユツ!

テルマ「ん?」

テルマはふと何かを踏んだ

いつかくうさぎ「キュー!!」

テルマ「わわっ!ごめん!!」

いつかくうさぎ「キュー!!」

いつかくうさぎは怒ってテルマに突進してきた

テルマ「あぶね!!お、おい、エド!悪い、間違えて怒らせてしまった!何とかしてくれないか!」

エド「えー……全く。ドジだなー、お前。よつと!」

ムギユツ!

エド「あり?」

いつかくうさぎ達「キュー!!!」

エド「うおおおおっ!!」

今度は飛び降りたエドがいつかくさぎを踏み、群れで襲いかかってきた

テルマ「いやエドもかよ!!」

エド「悪い、ミスった。お、おい!わざとじゃねえんだ!落ち着け?な!」

エドは逃げるのを止め、いつかくさぎ達を説得しようとする

いつかくさぎ達「キュー!!」

いつかくさぎ達は聞く耳を持たず、止まったエドを囲んで突撃していく

エド「痛てて!!おいこら!囲むな!人が謝ってんのによ!」

テルマ「あー、もう!エド、こうなったら戦うぞ!」

エド「ま、待てよ。こいつらは悪くないんだ。痛ててて」

テルマ「いやそうだけだよ、襲われてるんだから仕方ないじゃないか」

エド「まずは……もう少し逃げるぞー!」

エドは囲まれている所を振り切り、走り出した

テルマ「あ!! 待てよ! 俺を置いて行くな!」

いつかくうさぎ達「キュー!!」

崖

エド「あ、やっべ。ここ行き止まりかよ」

テルマ「嘘! 追い込まれたじゃないか!

いつかくうさぎ達「キュー!」

エド「なあ、悪かったつて。痛かったのはわかるけどよ、もう許してくれないか?」

テルマ「魔物に言葉は通じないだろ。応戦した方がいいつて」

エド「馬鹿! こいつらだつて話せばわかるに決まってるんだ。それに俺は魔物を傷つけたくねえ」

いつかくうさぎ達「キュキュー!」

いつかくうさぎ達はエドの言葉を無視している

テルマ「傷つけないのはわかるけど、話を聞いてくれそうにな
いぞ」

エド「ぐぐぐ、どうしたもんか」

ピキッ！

エド「え?」

ミシミシミシッ!

エド「うおおおっ!!」

エドの立っていた場所が崩れて、海へと落ちていく

テルマ「エド!!!」

パシッ!

テルマが急いでエドの手を掴んでエドは落ちずにすんだ

エド「サ、サンキュ〜……。ヒャー、こんなありがたい」

いつかくうさぎ達「キューー!」

テルマ「痛い痛い！お、押される……」

エド「お、おい、お前！手を離せ！お前も落ちちまうぞ！」

テルマ「何言ってるんだよ！離すわけないだろ！痛てて！」

テルマの後ろをどんどんいつかくうさぎ達が突進している

エド「このままだとお前も俺も落ちる！俺は何とかするから！お前だけでも逃げろ！」

テルマ「嫌だ!!絶対離さねえ！」

エド「意地になってんじゃねえ!!さつさと離せ！」

テルマ「知るか!!どんだけ高さあると思ってんだ！こっから落ちたら死ぬに決まってるだろ！俺は!!もう誰にも死んでほしくねえ!!絶対助ける!!」

エド「……お前……」

いつかくうさぎ達「キュー!!」

テルマ「ぐうっ！」

ボロツ！

テルマの足元も崩れ始めた

バギイツ！

テルマ「あ!!」

テルマも落ち始めた時

エド「借りるぜ！父ちゃん!!うおおおっ！」

ガシツ！

テルマ「え?.....」

エドは魔物の姿になりテルマの足を掴んだ後、落ちてきた岩を足場にジャンプして元の位置まで戻った

エド「さて、これで何とかなったな」

テルマ「エド..... か?何だよ、その姿」

エド「後で話す。おい、いつかくさぎ共！」

いつかくさぎ達「キュ、キュ.....」

いつかくうさぎ達はエドの姿に怯えている

エド「ちよつと強気になりすぎたんじゃねえか？俺の言葉だつて聞こえてたんだろ？そのリーダー！」

いつかくうさぎ「ビクッ！」

群れの中で少し大きめのいつかくうさぎが怯んだ

エド「お前が選べ。ここで俺と戦うか、俺の食料になるか、逃げるかだ。さあ！好きにしろよ！」

いつかくうさぎ達「キュー!!」

いつかくうさぎ達はバラバラになって逃げていった

エド「……………さて、と」

エドは元の人間の姿になった

エド「悪かったな、テルマ。ビククリしただろ？」

テルマ「エド、俺の名前を……………じゃなくて、どういう事なんだ？」

エド「簡単に説明するとだな」

エドは自分が魔物に育てられた事、それによって魔物の言葉がわかる事、魔物の力を借りれる事を説明した

エド「だから俺は少し特殊なんだ」

テルマ「そう……か。だから魔物を傷つけたくなくなっただんな。今まで家族のように過ごしてきたから」

エド「そういう事だ。でも、お前からしたら俺の方が変だよな。おれの事は気にしないでくれ」

テルマ「何が変なんだ？」

エド「え？だってよ、急に魔物の姿になるんだぜ？変だろ？」

テルマ「そりゃあ驚いたけどさ、俺の事助けてくれたじゃん。誰かを助けるためにその姿になるのは変なのか？それはおかしくないか？」

エド「……………で、でもよ、気持ち悪いだろ？」

テルマ「俺は魔物は怖いけど、エドみたいに助けてくれるなら俺はその魔物を変に思わないし、ありがたうって気持ちになる。気持ち悪いなんて全く思わねえ。だからよ、エド。ありがたう。俺の事助けて

くれて」

エド「……………へ、へへ。テルマは変なやつだな……………よし
！俺、テルマの事気に入った！テルマ、友達ってやつになろうぜ！俺、
人間の友達いねえんだ！」

テルマ「なんだ、そうなのか。それなら喜んで。俺の方こそよろし
くな、エド」

テルマとエドは互いの手を握った

エド「やったぜ！へへ、俺知ってるんだぜ。友達ってのは一緒に遊
んだり、飯食べたりすんだろ？」

テルマ「ああ、そうだな。楽しみだな」

エド「これからよろしくな！テルマ！」

テルマ「これからもっと互いの事知っていこうな、エド」

友達3

その後、デルカダール城 大広間

エド「ラーズ、ベグルー、戻ったぜー！」

ベグル「ラーズ將軍と呼べって言ってるだろうが！」

テルマ「そうだぞ、エド。流石にラーズ將軍のような偉い人にその口調はよくないって」

エド「テルマもベグルも細けえなー。ラーズは気にしてねえんだし平気だって！」

ラーズ「そりゃあ気にしてないが、あまり大声出すな。形だけでも將軍って付けておけ。周りから変に思われるぞ」

ベグル「大丈夫です、ラーズ將軍。後でまたみっちり教えこみますから。それで？どうだったよ、見回りは」

エド「あー……………。問題なかったはずだぜ！」

テルマ「色々ありましたけどね……………」

二人は少し目を逸らしている

ベグル「……………ハア。やっぱり俺がいった方がよかったか」

ラース「テルマ、すまなかつたな。大丈夫だったか？」

エド「おい!!何だよ、その反応!俺が悪いみたいじゃねえか!」

二人「違うのか?」

エド「始まりはテルマからなんだぞ!いつかくさぎを間違えて踏んだのがいけねえんだ!」

テルマ「ちよつ、エド!そういう事言うなよ!お前だって踏んでたじゃねえか!」

エド「焦って間違えただけだ!」

テルマ「じゃあ俺と変わらねえじゃんか!しかも崖に行ったのお前だろ!あそこに行かなきゃ危険な目に合わなかつたはずだろ!」

エド「俺は一人でどうにでも出来たもんね!テルマが勘違いして無理に助けようとしたからだろ!」

テルマ「ムカつくやつだな、エド！あん時は知らなかったんだから仕方ねえじゃねえか！」

二人はいがみ合っている

ベグル「……………仲良しかよ」

ラーズ「はいはい、わかったから。二人が元気なようでも何よりだ。襲われたならどこか怪我してないか？医療部屋に行ってみてもらるか？」

エド「あ、そうじゃん。テルマ、お前あん時いっぱいつかくうさぎ達に突撃されてたんだから怪我してないか？」

テルマ「じゃあ一応見てもらおうかな。ラーズ將軍、いいですか？」

ラーズ「ああ、構わない。巻き込んだのはこっちだからな。医療部屋はこっちだ」

ベグル「よかったな、エド。友達ができてよ」

エド「え？な、何でわかったんだ？まあ、そうなんだけどよ。テルマって意外と度胸あるんだぜ。気に入ったんだ」

ベグル「ほう、そうだったのか。楽しかったか？」

エド「まあ……悪くはなかったかな」

ベグル「それじゃあ今度からグラジ―って店に行ってみろよ。あいつ、そこで働いてるからよ」

エド「そういえば言ってたな。でも酒場なんだろう？うーん……仕方ねえな、行ってやるとするか！」

ベグル「偉そうにしてんじゃねえよ」

医療部屋

医者「うん。少し切り傷とかが多いけど元気そうで安心したよ。はい、塗り薬。これ塗ってしばらくすれば大丈夫だよ」

テルマ「ありがとうございます」

ラース「ありがとな、テルマ。エドの面倒見てくれて」

テルマ「いえ、大したことないですよ。寧ろ、エドと友達になれま

したし、嬉しかったです。俺もチャムの事で忙しくて友達なんて殆どいませんから。ラーズ將軍はエドの事知ってたんですか？」

ラーズ「さつきも何だかそんな発言してたな。魔物になる事だろ？」

テルマ「やはりご存知だったんですね。あんな力があるなんて驚きました。でも、それ以外は普通の俺達と同じ人間ですね。ちよつと子どもっぽい気もするけど」

ラーズ「まあな。それにエドは17歳。テルマと年齢も近いんだ。これからも仲良くしてくれると嬉しいぜ」

テルマ「え!?年上!?あれで!?俺と殆ど身長とか変わらねえのに……」

ラーズ「あんまチビとか言うなよ?」

テルマ「そんな事は言いませんけど、年上かー。同じ年くらいかと……。タメ口だったし、呼び捨てにしちやいました」

ラーズ「エドはよ、敬語とか知らねえんだ。だから誰にでもあんな話し方なんだ。見習いだから時間はたくさんある。テルマも色々教えてやってくれ。人間にとって当然の事でも、エドにとっては知ら

ないルールばかりだ。変わったやつだが、いいやつなんだ」

テルマ「へへ、そうですね。友達というか、弟みたいな感覚ですけど頑張ります」

真っ直ぐな言葉

それから三日後の夕方、グラジー

マヤ「それじゃあお疲れ様でしたー」

グリー「あれ？ま、待ってよマヤさん。城まで送るよ？」

マヤ「あー、今日は大丈夫！グリーさんに毎回来てもらおうの悪いからさ」

グリー「でも、危なくない？念のためでもさ」

ビル「そうだぞ、マヤ。そろそろ暗くなる。女性一人で歩くのは危ないぞ」

マドリー「それとも何か用事なの？」

マヤ「そうそう。今日この後姉ちゃん、あつと、マルティナ様に用事があるんだ」

グリー「まあ……それなら仕方ないけど」

マヤ「それじゃあまた明日ね。お疲れ様でしたー」

マヤは走って店から出て行った

テルマ「なんだかマヤさん変じやありませんでしたか?」

チャム「焦ってるみたいだったよね。そんなに急いでたのかな?」

グリー「……………」

マドリー「何だか最近グリー君に対してどこか素っ気なくなつたわよね。前より距離があるように思えるわ」

ビル「何か考え事でもあるんじゃないか?」

デルカダール城 玉座の間

マヤ「ただいま、皆」

マルティナ「マヤちゃん、お帰りなさい」

グレイグ「お帰り、今日は夜は休みなのか?」

マヤ「うん。あと少し用事があつて」

ラース「ほう、用事か。俺達にか？」

マヤ「あ、えっと……。まずは姉ちゃんだけかな。ちよつと聞いてほしい事があるんだ。夕食の後、部屋に行っていていい？」

マルティナ「私？ええ、大丈夫よ」

ラース「それなら俺はまたバンの部屋かグレイグの部屋にでもいるさ。終わったら連絡してくれ」

グレイグ「あまり俺の部屋に来るな。貴様が来るといつも部屋を散策されて困るのだ」

マルティナ「……。それって、探されると困るものがあるって事？」

マルティナの目が細くなった

グレイグ「ち、違いますぞ!!別にそんなわけではありません!散らかされるのを迷惑してただけです!」

マルティナ「ふくん」

ラーズ「(自分から墓穴を掘るなよ、グレイグ)」

バタン

マーズ「失礼します、マルティナ様。グリーンが来ていて、ラーズ將軍をお呼びしています」

ラーズ「わかった、行ってみようか」

大広間

グリーン「あ、ラーズさん突然すみません」

ラーズ「いや、構わないさ。どうした？」

グリーン「あの、この後お時間ありますか？ご相談したい事があつて」

ラーズ「(グリーンもか)夕食の後なら平気だ。どこに行けばいい？」

グリーン「ありがとうございます。それでしたら僕達の店の前に来てください」

ラーズ「了解。しかし、グリーンはよく俺に相談に来るな。構わねえが、俺以外でもいいんじゃないか？」

グリー「そうなんですけど、なんだかラースさんは色々ご存知ですし、頼りになるのでつい……」

ラース「そう思ってくれてるのは嬉しいな。それじゃあまた後でな」

グリー「はい。ありがとうございます」

夕食後、グラジー前

ラース「お、悪いな。待たせたか？」

グリー「いえ、平気です。ここで話すのもあれなんで、僕の家に来てください」

ラース「グリーの家か。行くのは初めてだな。それと、大事な話みたいだな。マヤ関連か」

グリー「はは、流石ラースさん。理解が早いですね」

グリーの家

グリー「小さいですけど、気にしないでください」

ラース「これくらい普通だろ。俺の家もこれより少し広いくらいだったからな」

グリーン「あ、お茶どうぞ。それでお話なんですけど、実は僕前にマヤさんに……こ、こ、告白したんです」

ラース「え?……マジか!？」

グリーン「は、はい。でも、どうやら遠回しに言い過ぎたみたいで、マヤさんに告白だと受け取ってもらえなかったみたいなんです」

ラース「何て言ったんだよ？」

グリーン「マヤさんと一緒にいると楽しいって思えるんだ。これからもずっと一緒にいてくれる?って……何だか恥ずかしいです」

ラース「そこまで特段おかしなわけではないが……そうか。マヤはそのままの言葉通りに受け取って勘違いしたのかもしれないな。それで？」

グリーン「はい。それでしばらく様子を見てたら何も変わってないみたいで、伝わらなかつたのかな?って思ってたんです。でも、マヤさんが隠してるだけなのかと思って。お城とかでは何も変わってませ

んでしたか？」

ラース「まあな。その告白つてのも初めて聞いたからな。マルティナやグレイグだって知らないぞ」

グリー「やつぱりか……。まあ、遠回しに言ったのが悪かったんですよね。でも、そうなるって僕つてマヤさんから見たらただの友達なんですかね？」

ラース「それはどうだろうな。マヤがグリーを本心でどう思ってるかはわからねえな。ただ、好意的には思えるぞ」

グリー「うう、そうですね。どうしたらいいんでしょうか」

ラース「グリーはどうしたい？」

グリー「僕ですか？そりゃあ……。マヤさんと付き合いたいですけど、怖くなつてきました。もしマヤさんがなんとも思つてなかったら、とか断られたら、とか考えると……。」

ラース「その気持ちはわかるぜ。俺も同じだった」

グリー「ラースさんでもですか？ハッキリ言いそうなのに……。」

ラーズ「そりゃあ俺だって不安だったさ。ましてや相手は一国の姫。知られてもいないような村からの男なんて、振り向きもしないだろうなと思ってた。それに、知ってると思うが魔王を倒そうとしていた旅の途中だった。」

世界の命運がかかった旅で何してんだって感じだろ？ 大事な旅に私情を持ち込んで乱すのはよくない。だから最初はマルティナへの気持ちを持しつもらいだったんだ」

グリー「ええ!?!好きになつたのにですか!?!」

ラーズ「ああ、そうだ。でも、どこかのお節介達が俺達をくつつけようとしてな。その流れで告白したって感じだ」

グリー「な、なるほど。でも、いざって時にしつかり相手に伝えられるのがラーズさんらしいです。僕は…… 怖がりだから勇気なんて、もう出せないですよ」

ラーズ「んゝ……。グリーはよ、今俺とどうやって話してる?」

グリー「ど、どうやって?言葉でラーズさんに話してますよ?」

ラーズ「そうだな。その言葉はグリーが思ってる事か?それとも何

も考えずに話してるか？」

グリー「僕が思った事です。ラースさんの言葉を聞いて、僕が思った事を話してます」

ラース「だろ？俺も同じだ。緊張なんかしないだろ？」

グリー「は、はい」

ラース「言葉つてのはな、自分の心の声を表す。自分がやりたい事、したい事なんかを相手に伝える手段だ。ただ、どうしても感情がそれを抑えてくる。恥ずかしい、怖いみたいにな。それならグリーは最初その告白をした時、どうして伝えられた？」

グリー「えっと……………どうしてもマヤさんに伝えたかった……………からです」

ラース「そうだ。勇気を出すつてのは実は自分がこれだけは伝えたいって感情を爆発させた時に自然と出るものなんだ。その時の言葉は何よりも真っ直ぐで、相手に必ず届く。」

俺は、それが勇気を出して告白するつて事だと思っぜ。自分の一番伝えたい思いを言葉にして相手に伝えるつて事がな」

グリー「一番伝えたい思い…………。でも、僕にはそんな自然となんて」

ラース「大丈夫だ。もしもマヤやグリーがお互い同じ思いなら、必ずそれを伝える瞬間がやってくる。遠い先かももうすぐそこかはわからないけどな。その時を見逃すな。諦めたくはないんだろ？マヤの事」

グリー「……………そう……………ですね。僕はマヤさんと一緒にいたいです、これからも。だからこの思いをいつかマヤさんに伝えます。勇気を出して、真っ直ぐに。ラースさん、ありがとうございます。僕、少し勇気が出てきました」

ラース「お、それはよかった。頑張れよ、グリー」

友情と愛情

その頃、マルティナとラーズの部屋

コンコン

マヤ「姉ちゃん、いる?」

マルティナ「ええ、いるわよ。入ってどうぞ、マヤちゃん」

ガチャ

マルティナ「いらつしやい。自由に座って。紅茶でも飲みながら話しましょう」

マヤ「うん。ありがとう」

マルティナ「お砂糖やレモンはいる?」

マヤ「ううん、そのままで大丈夫」

マルティナ「わかったわ、はい。お菓子も食べていいからね。それで用事ってどうしたの?何か相談?」

マヤ「うん、そうなんだ。実はね…… グリーさんの事で相談が

あるんだ」

マルティナ「(やつぱり) 続けていいわよ」

マヤ「わかった。ここ最近、というかもう少し前かな。それくらいからグリーさんの事を考えるようになって、意識するようになって、意識するようになって、最初はなんて事無かったんだけど、最近だと顔を見てるとドキドキするし、近くにくるとどうしても普段みたいになれなくなっちゃうんだ」

マルティナ「マヤちゃんはそれが何でかわかる?」

マヤ「今まで体験した事なかったけど……恋ってやつなの?」

マルティナ「ええ、そうね。マヤちゃんはグリーに恋してるのよ。相手の事が気になったり、ドキドキしたりする事がまさにそうね」

マヤ「やつぱり……」

マルティナ「とつてもいい事じゃない。好きな人が出来るのは幸せな事だわ。マヤちゃんは告白しないの?」

マヤ「……… しない……… かな」

マルティナ「!?ど、どうして?」

マヤ「私さ、今までグリーンさんと色々過ごしてきた。一緒に働いたり、お店が消えてビックリしたり、海の呪いがあったてそれを乗り越えたり。グリーンさんと一緒に過ごしてきた、私いつも楽しかった。二人で喋って笑っているのが好き」

マルティナ「それならその気持ちを伝えましょう。どうして伝ええないの?」

マヤ「怖いんだ。この楽しい日常が壊れてしまう可能性が。グリーンさんは最初は友達で、仕事仲間だった。グリーンさんも同じはず。でも私は、友情って言葉じゃ足りないくらいグリーンさんを気にしてしまっている。グリーンさんは……どう思ってるのかな。きっと友達か仕事仲間くらいだと思う」

マルティナ「……………」

マヤ「友達と恋人はさ、全然違うじゃん。行動も思いも互いへの愛も全然違う。恋人ってのはお互いが好きじゃないと駄目だもん。私だけじゃ……………駄目だもん。」

グリーンさんは優しいから、きっと私が告白したら私を気にして了承してくれると思う。でも、それじゃあ本物の恋人なんて言えない。そ

れに、私は今のような関係が好き。互いに協力して、励まして皆と仲良くお店をやっているそんな関係が。

もしそこに私の私情を入れたらきつと壊しちゃう。そんなの絶対嫌だ。あの関係を壊したら……………もう戻れない」

マルティナ「……………なるほどね。その関係を壊したくないからグリーには伝えないのね。例え了承されても、グリーが自分の事を本当に好きなのかわからないから」

マヤ「うん。だからさ、姉ちゃんにはある事を教えてほしいの。このグリーさんへの気持ちを諦められる方法をさ」

マルティナ「……………残念だけど、私にはわからないわ。誰かへの思いを諦める……………。私はそんな事した事ないし、したいと思わなかったから」

マヤ「そっか、そうだよね。数日前にさ、マイ、えっと、私の友達にも相談したんだ。その時に私、マイにこんな質問したんだ。男女で友情ってあると思う？つてさ」

マヤは下を向き始めた

マルティナ「マイちゃんは何て言ってたの？」

マヤ「マイはね、わからないけど私は無い方が多いと思うって。男

女で友達同士仲良くしてたら、いつか恋愛になるでしょ？って。恋愛と友情は別物になっちゃうんじゃないかなって言うってた」

マルティナ「恋愛と友情は別物……なるほど。確かにそうかもしれないわね。恋愛対象となった時点で友達同士では無くなっちゃうから」

マヤ「それを言われてさ、まさに今の私だなんて。友達同士だったはずが、いつの間にか友達同士じゃなくなってる、私が好きになつた。

ずっと……友達でいれると思ってた……。私……友情も恋愛も……どっちも出来るものだと思ってた……。私が……グリーさんを友達じゃなくさせちゃった」

マヤが握りしめた手には涙が落ち始めていた

マルティナ「マヤちゃん……ねえ、マヤちゃん。私とラースが夫婦なのはもちろん知ってるわよね？」

マヤ「え？う、うん。当たり前じゃん。私と姉ちゃん達が初めて会った日からそうだったじゃん」

マヤは目を擦りながらキョトンとしている

マルティナ「そうよね。でもね、私ってラースはもちろん大好きなんだけどイレブンだって、カミュだって、シルビアだって、ロウ様だって、グレイグだって、バンドって大好きよ。でも、ラースへの大好き

とは少し違うの。違いがわかるかしら?」

マヤ「違い? え? …… 夫婦だからとかじゃないよね。友達として大好きって事?」

マルティナ「ふふ、その通りよ。違いはそれが友情か愛情か、よ。イレブン達は仲間としてって意味もあるけどね。ラースだって始まりは仲間として大好きだったわ。

でも、いつしかそこに本物の愛情が出来た。私はそれが好きの始まりだと思っわ。マヤちゃんもそうじゃない? グリーと友達として過ごすうちに愛情が出来たから、こうして悩んでる。どうかしら?」

マヤ「…………… うん、同じだね。でも、兄ちゃんへ愛情が出来たらやっぱり今まであった友情はさ、消えちゃったんじゃない?」

マルティナ「あら、そんな事ないわ。私は今だってラースの事を友達としても大好きよ。とっても素敵な友達だわ。でも、そこに恋人として、夫として大好きな気持ちが合わさっていくわ。私のラースへの大好きって気持ちは、何個も重なって出来ているの。」

友達を好きになったからって、今までの友情は絶対に消えないわ。ずっと残り続ける。だって、愛情の始まりはそこからだもの。友情があったからこそ、その中に愛情が出来るの。今まであった友情に愛情っていう気持ちが足されているのよ」

マヤ「友情は消えない……」

マルティナ「だから大丈夫。マヤちゃんのその思いは、これまでのグリーとの関係が生んだものよ。無くそうだなんて思うのはちよつとかわいそうじゃない？グリーにも、マヤちゃん自身にも」

マヤ「……でもさ、グリーさんからしたら私は友達。ずっと友達のままなんだよ。私だけ恋人になりたいって思っても……」

マルティナ「あら、それじゃあマヤちゃん。グリーに猛アタックしちゃいなさい。私は好き！って、行動でも言葉でも何でも使って。そうしたらきつとグリーだってドキドキしてくるはずよ。そこを落としちゃいなさい。本当に大好きなら、その人を離しちゃ駄目よ。あなたの素敵な未来のために、本気を出さなきゃいけないわ」

マヤ「ええ!?そ、そんなの無理無理！恥ずかしくて出来ないよ！それに、グリーさんに気味悪がられたら嫌だよ！」

マルティナ「グリーはそうそう簡単に人を気味悪がったりしないわ。だって怖い幽霊ですら、臆せず話したのよ？絶対大丈夫よ」

マヤ「うう、でもちよつと怖いよ。何したらいいかもわからないし」

マルティナ「まずはデートに誘ってみたらどうかしら？二人でどこ

か行った事あるの？」

マヤ「あ、あんまり無いよ」

マルティナ「それじゃあ尚更よ!!絶対行きましょう!私もサポートしてあげるから!」

マルティナはテーブルに両手をつけて勢いよく立ち上がった

マヤ「え、ええ……」

マルティナ「ビルとマドリーにも上手く話しておくわ。マヤちゃんは何も心配しないで大丈夫だから、デートに行つてグリーンを落としちゃいましょう」

マヤ「い、いしし……。何だか姉ちゃんを見てたら元気出てきたかも。じゃあ……。ちよつとだけ声かけてみようかな」

マルティナ「その意気よ、マヤちゃん!そのちよつとがとっても大事なんだから」

マヤ「……。そうだね。うん。私がここで初めて王様達と家族になった時も、ほんのちよつとの一歩が私をここまで変えるきっかけになったんだった。私、やってみるよ!」

マルティナ「懐かしいわね。マヤちゃんが初めてここで自分の思いを明かしてくれたんだもんね」

マヤ「うん。私も今でも覚えてる。ずっと忘れない。やっぱり姉ちゃんに話してよかった！あの時も、私の一歩を踏み出すきっかけをくれたのは姉ちゃんだから！姉ちゃん、ありがとう！」

マルティナ「マヤちゃん……。頼ってくれて私もとっても嬉しいわ。これからも何でも一緒に頑張りましょう。いつだって力になるわ」

マヤ「いしし、うん！」

憧れの自分

二日後、デルカダール城 訓練場

見習い達にマーズが魔法を教えている

マーズ「簡単な魔法を唱えるだけでいいぞー。出来ないなら仕方ないから、そのままにしてくれ。メラくらいなら何とか出来るやつは多いと思うけどな」

それを離れた所でバン達が見ていた

バン「いいよなー、魔法ってさ」

ベグル「確かにな。離れた場所からの攻撃ってのも、避けにくいってのも羨ましいぜ」

ガザル「俺もマーズみてえにたくさん使いりやあいいのによ。実戦で使うには威力も種類も少なすぎるからな」

ダバン「この中で魔力が無いのはバンとギバだけだったな。そもそも魔力が無いって少し珍しいよな」

ギバ「んだよ、ダバン。悪いかよ」

ダバン「え？いやいや、そういう事は言っていないぞ」

ロベルト「珍しいのは確かだよな。マルティナ様も魔力を持っていないけど、魔力が無いってどんな感じなんだ？」

バン「別に何ともねえけどな。ただ普通に生きてるだけだぜ」

ベグル「馬鹿はそうだろ。寧ろ、こんなやつが魔法なんて扱えるかよ。式とか構造とか覚えられねえだろ」

バン「馬鹿にすんな！俺だって魔力さえあれば、師匠みたいにたくさん魔法打てるんだからな！」

ギバ「……………」

その後、大広間

ギバは一人で自分の手を見つめていた

ギバ「魔法……魔力……。か。何とも思わねえようにしてたのにな」

その時、訓練場からバンとマーズがやってきた

バン「お！ギバー、急に訓練場出て行って驚いたぞ。どうしたんだ？」

ギバ「いや、別に何でもねえよ」

マーズ「今バンに魔法をまた教えてくれと言われてな。魔力も無いのにどうやって魔法使おうとしてるんだか」

バン「気合いでどうにかならねえか？こう、うりやあーってやつたらメラくらい簡単にボツってさ！」

マーズ「そんな方法で出たら苦労しねえよ」

ギバ「そうだぞ。メラは式や構造こそ簡単だけど、何も知らないやつが唱えるには順番が必要だ。炎をしっかりとイメージして、自身の中の魔力を使って構造を作り出す。その後を作り出した構造の中に式を入れてやっとならメラが出るんだ」

バン「え？な、なんでギバがそんな事知ってるんだ？」

マーズ「驚いた。ギバ、魔法に詳しくったのか？」

ギバ「ま、まあな。ほんの一部だけだ」

バン「そういや、ギバは出身がクレイモランだもんな！クレイモラ

ン出身なら魔法に詳しくて当たり前か！」

ギバ「!.....」

マーズ「よく考えてみると、ギバはどうしてデルカダールの兵士に？あっちにいたならクレイモランの兵士になるのが普通なんじゃないのか？」

ギバ「いいだろ！別にどこで兵士になろうがよ！」

ギバは少し怒鳴るように言った

マーズ「!?わ、悪い。嫌な事言ったみたいだな」

バン「だ、大丈夫か？ギバ。俺も変なこと言ったみたいで悪い」

ギバ「あ.....。別にお前らは悪くねえよ。怒鳴って悪かった。少し頭冷やしてくる」

ギバは少し駆け足で外に出て行った

マーズ「迂闊だった。ギバがそんなに魔法の話題が駄目だったとは」

バン「.....。なあ、マーズ。俺、ギバの事気になってきた。な

んかあるなるさ、俺達で解決してやろうぜ？」

マーズ「だが、恐らく魔法関連だ。ギバには……………解決出来ないんじゃないか？」

バン「そんなのわかんねえじゃん。マーズは知らなかったかもしれないけど、ギバって意外と傷つきやすいんだ。魔法関連だと昔からあだからきつと何かあるんだと思う。魔法は知らねえけど、俺はギバの力になりてえ」

マーズ「バン……………ああ、そうだな。俺もギバの力になりたい。追いかけるか、バン」

バン「おう！」

デルカダール城下町外れ

ギバ「…………… やっちまったな。また敏感に反応しちまった。もう…………… 諦めたはずだったのによ」

バン「あー！見つけたぞ、ギバ！」

マーズ「おい、待てよバン。あんまり大声を出すな」

ギバ「お前ら、何でここに」

バン「ギバがよ、落ち込んでるように見えたからさ。相談に乗ろうかと思つてな！」

マーズ「何かあったのか？それとも俺達のせいだったか？どちらにせよ、ギバラしくなかつたからな」

ギバ「わ、悪かつたな。心配かけさせて。大した事じゃねえんだ。心配するほどの事じゃ」

バン「魔法の事だろ？」

ギバ「……………」

バン「ギバはさ、昔から魔法の話題になると逃げるようにしたり、聞こえないようにしてたよな。だから何かあるんじゃないかと思つてたんだ。少し話してみてくれないか？ほら、俺だって魔力無いからよ。仲間だぜ」

マーズ「ただ羨ましいって感情だけには思えないからな。ギバの悩みを少し教えてくれないか？」

ギバ「…………… 全く。バンは馬鹿のくせに、昔から人の事はよく見てたよな。マーズも頭がいいのはわかるが、あんまり突っ込みすぎるのもよくないんだぜ？まあいいや。話すよ」

バン「俺は馬鹿にされた？褒められた？」

マーズ「褒められてたぞ、一応な」

バン「よっしや！ありがとな、ギバ！」

ギバ「ハア…………… 俺がまだ子どもの頃の話だな」

子ギバ「母ちゃん！俺、兵士さんになれるかな？」

ギバの母「ええ、きつとなれるわ。だってずっと夢だったじゃない」

子ギバ「へへ、そうだよね！今日広場で兵士さんが魔法教室やってくれるんだって。その時に聞いてみるんだ！」

ギバの母「ふふ、頑張ってね。きつといいお返事が来るわ」

ギバ「うん！」

その後、広場

兵士「はい。教えるのはここまでにして、次は実際にやってみようか。メラを練習してみようか」

子ども達「はい！」

子ギバ「魔力？俺、そんなの出来たっけ？」

ギバは必死に魔法を出そうとするが、全く出てこない

しばらくすると、周りの子ども達の手からメラが出るようになっていた

男の子「出た出たー！兵士さん、出たよー！」

兵士「お、やるねえ。これは将来楽しみだぞー」

女の子「私もー。出来ると楽しいね」

子ギバ「ふんっ！えいっ！うーん！ハア、ハア。あれ？出ないや」

兵士「あれ？君は……」

子ギバ「あ！兵士さん。魔法出ないんだ。やり方間違ってるの？」

兵士「いや……………そもそもが君は違うんだ。君は体内に魔力が無い。だから魔法はどんなに頑張ったって出ないんだよ」

子ギバ「え……………」

男の子「え？魔力が無いってそんなのあるの？」

女の子「お母さんとかも魔法打てないのかな？」

兵士の発言により、周りの子ども達もザワザワし始めた

兵士「ごめんね？魔力が無いと魔法は出ないんだ。君は……………この国の子かな？」

子ギバ「う、うん」

兵士「この国では魔法が使えないとあまりやっていけない。大人になつたら別の国に行った方がいいかもね」

子ギバ「そ……………そんな……………」

ギバ「つて事があつて、俺は自分に魔力が無いとわかった。クレイモラン王国にいながら魔力を持たないやつは珍しくてな。周りの子ども達からも馬鹿にされたもんだ。俺の夢も……一度そこで無くなつたんだ」

マーズ「クレイモラン王国は魔法大国つて聞くが、そんなに魔法が大事なのか。不思議な国だな」

ギバ「当時はまだ発展途上でもあつたからな。今より一層魔法が重視されていた。だからこそ、俺はあの国に必要とされていなかった」

バン「ギバは魔法を唱えたいのか？」

ギバ「昔はな。今はそうでもないさ。……魔法なんか無くても気にならないくらいに強くなったからよ」

バン「本当か？」

ギバ「え？」

バン「ギバ、お前嘘ついただろ。お前が下を向いた時に喋る事は大

体が嘘だ。自分に嘘をつくなよ。自分に素直になってみるよ。絶対に笑わねえから」

ギバ「…………… はは、何だよ。そんな事まで知ってんのか？ バンって馬鹿にならねえな。ああ、そうだよ。今だって本当は魔法が使えるようになりてえ。そうすりゃあ、あの時馬鹿にされたやつらを見返してやれる。」

昔の俺が憧れてた俺になれる。夢だったんだ。魔法で誰かを、ヒーローみたいに助けてやる事が。槍で誰かを助けるのもいいが、昔思い描いた姿とは違う。昔の憧れてた姿を、今でも心のどこかで追い続けているんだ。諦めの悪いやつだよな」

マーズ「いいじゃないか、それで。昔憧れてた自分になりたいなんて、思っただけの普通的事だ。俺だって今この姿が思い描いていた姿か？ 問われたら違うが、俺は満足している。でも、ギバは満足してないんだろ？ なら、魔法を使えるようになるうぜ」

バン「そうだな！ ギバが魔法を使えばもっと強くなるしな！」

ギバ「ちよつ、ちよつと待てよ。俺には魔力が無いんだぞ。使えるようになるって絶対にならねえよ」

バン「あ、そうだった。どうすんだよ？ マーズ」

マーズ「考えがある。まずはクレイモラン王国に行くぞ」

ギバ「クレイモラン王国に？」

憧れの自分2

クレイモラン王国 城下町

バン「寒い！相変わらず寒いな、クレイモランは」

マーズ「俺もこの寒さは苦手だ。何か暖かくなるもの持ってくればよかったか」

ギバ「これ、クレイモランでは暖かいほうなんだぜ？冬になったら今の半分以下の温度だからな」

バン「そんなに下がるのか!?温度とかもうマイナスとか行くんじやねえか!？」

ギバ「珍しくないな。んで?何でクレイモランに来たんだよ」

マーズ「ああ、そうだった。ギバなら知ってるんじゃないか?クレイモランには他の国には無い魔法道具が多い事をさ」

ギバ「そりゃあ知ってるが……だから何だよ。あれだつて魔力が無いと使えないぞ」

バン「魔法道具なんてのがあんのか」

マーズ「それがあるんだぜ、魔力が無いやつが使える魔法道具が。しかもかなり凄いやつだ。ついてこいよ」

商店街 道具屋

商人「いらっしやいませ」

マーズ「すまない。ここにソツプアはあるか？」

商人「おお、兄さんそれをお求めかい？それならここじゃなくて、少し遠くに見えるあの魔法道具店に行くといい」

マーズ「わかりました。ご親切にありがとうございます」

バン「ソ……？な、何だ？それ」

ギバ「いや、俺も魔法道具は詳しくないんだ。使えないって知ってるから興味もなくてよ」

魔法道具店

女性「あら、いらっしやい」

マーズ「この店にソップアがあると聞いたんだが、置いてあるか？俺達それがほしいんだ」

女性「ええ、あるわよ。旅人さんかしら？この使い方は知ってる？」

マーズ「大丈夫だ」

女性は棚から小さな丸い球のようなものを取り出した

女性「八万ゴールドよ」

二人「八万!？」

ギバとバンはその値段に驚いている

マーズ「ギバ、バン、今いくら持つてる？」

バン「え、えっと………一万ゴールド。へへ」

ギバ「四万ゴールドだな」

マーズ「じゃあ俺が四万五千ゴールド出すから、バンが五千ゴールド。ギバが三万ゴールド出してくれ」

バン「俺も払わなきゃなのか!？」

マーズ「ギバの力になるんだろ？」

バン「ぐ……。そうだな。これくらいなら仕方ないか」

クレイモラン港前

ギバ「買ったはいいいけどよ、それ何なんだ？」

バン「そうだぜ。ソツプア?とか言ってたよな。何に使うんだ?そんな球」

マーズ「これはな、この球の中に魔力を溜めてその魔力を使って魔法を唱える事が出来る、魔力無しで魔法が打てる道具なんだ」

ギバ「魔力無しで魔法が!？」

バン「えー!!?めちやくちやすげえじゃん!!俺も欲しい!」

マーズ「まあ魔法を唱えるために必要な魔力を溜めておかないとだけどな。一先ず、俺の魔力を少し溜めよう」

マーズが球を握ると中に紫色の液体が少し溜まった

ギバ「これが魔力なのか？」

マーズ「これでメラくらいなら何発か打てるはずだ。構造とか式とかわかってるんなら、後は手順通りにやってみろよ」

ギバ「……………メラ！」

ピカッ！

球が光り、そこから炎の球が出てきた

バン「おお!!ギバが魔法を打った！」

マーズ「やっぱり成功だな。どうだ？魔法を唱えた感想は」

ギバ「す、すげえ……………。諦めてたのに……………俺でも魔法が使えた」

バン「やったな、ギバ！憧れの自分に近づけたんじゃないか？」

ギバ「ああ、マーズありがとな！でも、マーズは何でこの事を？魔法は元から打てただろ？」

マーズ「俺には兄がいてな。その兄は魔力無しで産まれてきた。で

も、弟の俺には魔力があつて魔法が使えた。それを見て可哀想に思つた俺の両親がクレイモランからこれを買つてきてな。兄もそれで魔法が使えるようになったんだ。

色々制限はあるけどな。魔力が空になると使えないし、壊されても駄目。球から魔法が出るから球を相手に向けないといけない、とかな」

バン「俺も欲しい！メグに貯めてた俺の金、少し貰おうつと！」

ギバ「ありがとな、マーズ。わざわざ教えてくれて」

マーズ「なあ、ギバ。もう一度聞いてもいいか？何でクレイモランじゃなくて、デルカダールの兵士に？一度夢を諦めたと言つたな。兵士になる事を諦めたんだろ？」

ギバ「ああ、そういう事か。クレイモランで兵士になるには魔力があつた方が好ましいって言われてな。だから一度諦めた。でも、俺は魔法が使えないからって誰かを救う事が出来ないわけないって思つてな。

なら、魔法が使えなくても誰かを守れるようになってやるって思つて他の国で兵士になつてやろうと決めたんだ。それでデルカダール王国に来て、兵士に志願した。案の定魔法はあまり重視されないから、俺でも問題なくここまでこれた。それに、魔力無し仲間のこいつもいたしな」

ギバは肘でバンを小突いた

バン「へへへ」

マーズ「そうか。ギバのその諦めない姿勢は見習わないとな。だが、一つ覚えておけ。魔法の源は魔力だが、魔力そのものは大きければ大きいほど人を飲み込む。魔力に飲み込まれれば、待っているのは死だけだ。自身の体を凌駕する魔力は俺達を消し去る。そんな事にはなるなよ」

ギバ「わかった。肝に銘じておく」

バン「強すぎる力は身を滅ぼす、だよな。師匠から聞いた事あるぜ」

マーズ「そういう事だ。それにお前らはそんなものを使わなくても強いんだから、どうしてもって時だけにしておけ」

バン「あ！俺、いい事思いついたー。あれ使ってベグルに日頃の仕返ししてやろーっと！偶には俺がベグルを懲らしめてやらねえとな！」

ギバ「お！いいな、それ！俺も入ろよ。ベグルに偶には勝って、俺達をあまり舐めるなって見せつけてやろうぜ！」

バン「こうなったらすぐに向かうぞ！まずは俺の分の球を買わねえと！メグー！」

ギバとバンはキメラの翼でさっさとデルカダールに戻っていった

マーズ「言った側から……。やれやれだな。そんな事には使つてほしく無いんだがよ。そんな事するなら悪いが、俺はベグルの味方になるか」

マーズもキメラの翼でデルカダールへ戻っていった

デルカダール城 訓練場

ベグル「は？バンとギバに気をつける？」

マーズ「まあな。お前には一応これくらいの忠告だけしておく。後は何とかしろよ」

ベグル「お、おう」

一時間後

ギバ「お！やっぱりここにいたぜ、バン！」

バン「おっしや！やい、ベグル！いっつも俺の事馬鹿にしてぶん殴ってきやがって！」

ギバ「そうだ！偶には俺達だって強えって所見せてやるよ！俺達と相手だ！」

ベグル「は、はあ？二体一とか卑怯だろ」

ガザル「そうだぞ。いくらベグルでもお前ら二人同時は無理がある。ベグル、俺も入れろ」

バン「じゃあ仕方ねえな！ガザルも前から馬鹿にしてきたし、一緒に片付けてやるよ！」

ダバン「なあ、マーズ。バン達のやつ急にどうしたんだ？」

マーズ「事情は後で話す。まずは避難するぞ」

しばらくして

ベグル「随分と舐めた口聞くんじゃねえか、バン、ギバ。また騾が必要みてえだな」

ガザル「模擬戦という事だが、それは好きにやっていいって事だな？」

ベグルとガザルからは殺気が溢れている

バン「こ、こわ……………。だが、俺達には秘策があるんだ。見せてやるぞ、ギバ！」

ギバ「おう！いきなり行くぜ！」

ギバとバンはポケットからソツプアを取り出した

二人「!!」

ベグルとガザルは見慣れないものに警戒し、身を守っている

二人「メラゾーマ！」

二人のソツプアから巨大な炎の球が

二人「なに!？」

出なかった

バン「……………あれ？」

ギバ「……………ん？」

ベグル「……………は？」

ガザル「な、何も起こらないぞ」

バン「お、おい、何でだギバ。お前に構造も式も教えてもらった通りにやったぞ」

ギバ「わかんねえ！何で発動しないんだ!？」

バンとギバは焦ってコソコソと話し始める

マーズ「おい、そこの馬鹿二人」

上からマーズの声がしてきた

マーズ「さつきも言ったが、俺が溜めた魔力はメラが数発打てる程度だ。その程度じゃあメラゾーマなんて強い魔法は打てねえぞー。精々メラミ一回がいい所だ」

二人「何だって!？」

ガザル「な、何なんだ？一体」

ベグル「さあな。取り敢えず……」

ベグルはバンとギバに近寄っていく

ガシ

ベグルは二人の頭を掴んだ

バン「あ……………べ、ベグル様。あの、本日はとてもよろしいお天気です」

ギバ「あは、あははは。いやー、本当いい天気」

二人は顔が青ざめながら笑っている

ベグル「今からどうなるか、とつても楽しみだな？二人とも」

数秒後、激しい音とともに断末魔が訓練場に響いた

その夜、医療部屋

ラーズがバンとギバの所へ来ていた

ラーズ「ほう、それでこんな事に。まあ自業自得だが、魔法が使えるようになるなんて面白いじゃないか」

ベッドには包帯だらけの二人の姿があった

バン「酷い話ですよね！ちよつと調子に乗ったからつてここまでする事ないですよ！手加減とかしてほしいです！」

ギバ「まあ魔法が使えるって浮かれたのもあるのは確かですね」

ラーズ「魔法が使えるようになったら戦い方に変化や応用が出てくるな。今度ギバとも久しぶりに戦ってみるか」

ギバ 「あ！そうですね！動きに組み込んでみるようにします」

バン 「師匠も魔力入れてください！たっぷりと！」

ラーズ 「そんなに入れねえよ。少しだけな。魔導書が読みたくなったら、マーズに読んでもらえ。魔力が無い事には変わりないから読めないだろうしな。それと新しい力なんだ。またその力で色んな人を守ってやれよな」

二人 「はい！」

ドキドキデート

次の日の夜、グラジャー

夜も更けてきて、店仕舞いしようとしていた時にラースがやってきた

ラース「よう、お疲れさん。夜遅く悪いな」

ビル「あ、あれ？ラース様。こんな時間にどうされましたか？」

マドリー「もしかしてお酒飲まれますか？」

ラース「それは魅力的だが時間も遅い。また今度な。今回は違うんだ。少し頼み事があったな」

マドリー「どうされましたか？」

ラース「マヤとグリーンが互いに好意を持つてるのは気付いてるだろうか？」

ビル「まあ一応。でもマヤもグリーンも最近は距離感が微妙になってきてますよ」

マドリー「そうなんですよ。仕事もマヤちゃんが最近はずっと厨房で働いてるんです。ありがたいんですけど、ホールのグリー君とは別になってるんです」

ラース「やはりか。数日前にグリーが俺に、マヤがマルティナに悩みを話してくれてな。その結果互いに好きなんだが、勇気が出せなかつたり怖がって進めないようなんだ。だからそのきつかけを与えようと思つてな。協力してくれないか？」

ビル「怖がるのはグリーならわかりますが、マヤもそんな一面があつたんですね。少し意外です」

マドリー「それならぜひ協力します！ほーら、ビルも！」

ビル「お、俺はお前ほど人間の恋は詳しくねえぞ。どうすればいいんですか？」

ラース「なに、簡単だ。明日二人にはダーハルーネにデートに行かせる予定なんだ。だからビル達にはあの二人に休みをやってほしい。理由付けは何でも構わないからよ」

マドリー「強制的に休ませればいいんですね？わかりました！二人はいつも頑張ってるのでこっちも丁度いいです」

「ビル」だな。理由は考えておきます」

ラーズ「ありがとな。それをお願いしたかったんだ。それじゃ俺はこれで。また今度飲みに来るな」

その後、デルカダール城　マルティナとラーズの部屋

ラーズ「ビル達に伝えてきたぜ。すぐに協力してくれた」

マルティナ「ありがとう、ラーズ。こつちも店長さんに連絡取れたわ。案内も引き受けてくれたの」

ラーズ「おお、案内もか。ダメ元だったがそれはよかった。さて、俺達が手伝えるのはこれくらいだな」

マルティナ「ええ、そうね。きつといい方向に進むとは思ってるけどどうなるかしらね」

ラーズ「ゆつくりでも進展があればいい。ただ好きな気持ちを諦めるのだけはしてほしくない。俺の今この幸せは、俺が諦めた思いをシルビア達が諦めさせなかったからだからな」

マルティナ「そうね。私もラーズへの好きな思いを、自分の罪悪感で誤魔化そうとしていた。マヤちゃん達にはその素敵な思いを誤魔化そうしたり、諦めてほしくない。必ずその先には素敵な未来が待つ

てるから。見守っていきましょう」

ラーズ「だな。さて、寝るか。おやすみ、マルティナ」

マルティナ「ええ。おやすみなさい、ラーズ」

次の日の朝食時

マヤ「え？シンジさんのお店の割引券？いいの？」

マルティナ「ええ。随分前に貰ったんだけど、忙しくて行けないうちに期限が近いのよ。とてもじゃないけど私達は行けないから、マヤちゃんが使って」

ラーズ「折角なのに勿体ないだろ？しかも半額。グリーンでも誘って行ってみろよ」

マヤ「あ……………」

マヤは何かに気づいたようにマルティナを見た

マルティナ「ふふ」

マルティナはマヤにウインクをした

マヤ「そ、そうだね。じゃあ誘ってみようかな。あ、皆にお土産買っ

てくるよ。特に王様はケーキ好きだもんね」

デルカダール王「おお、嬉しいのう。だが、あまり気にしなくてもよいぞ。グリーと楽しんできてくれればわしはそれだけで構わん」

グレイグ「シンジにはよく世話になっているからな。またお礼だけでも伝えておいてくれ」

マヤ「わかった」

マルス「いいなー、マヤ姉ちゃん。僕も行きたい」

ルナ「私もー。シンジさんのケーキ美味しいもん」

ラース「また近いうちに行けたら行こうか。だから今回は我慢だぞ、二人とも」

その後、大広間

マヤの支度を待っているとグリーがやってきた

グリー「おはようございます、ラースさん。あの、実はてんちよ、ビルさんからマヤさんと僕に伝言があつて」

ラース「(お、きたな)お、そうなのか。じゃあマヤを呼んでくる。まだ支度してるけどきつと大事な事だろ?待っててくれ」

グリー「ありがとうございます」

数分後

マヤ「え!?!お休みの!?!」

グリー「う、うん。なんか頑張りすぎだつてさ。若いからどんどん遊びなさいって特にマドリーさんに強く言われちゃつてさ」

マヤ「想像はつくね。マドリーさん、押しが強いから。まあわかつた。それじゃあ今日はお休みか……………あ」

グリー「ん?どうしたの?」

マヤ「え、えつとね……………(い、言えるかな……………。な、何て言おう。あ、そうだ。さっきの兄ちゃんみたいな感じで)」

グリー「?」

マヤ「実はさー!兄ちゃんの友達にシンジさんっていうパティシエがいるの。その人の店のケーキがすごく美味しいんだ!今日姉ちゃん

達からその半額券貰ったからさ、もしよかったらグリーンさんも行かない!?!」

マヤは少し顔を赤くして早口気味に言った

グリーン「え……………（こ、これって、もしかして……………デートのお誘い!?はわわ……………な、何も考えてなかった。あーへ、返事しないと）」

グリーン「い、いいね!しかも半額って凄いいじゃん。僕も行ってみたいな」

マヤ「や、やった!じゃあ準備するから、グリーンさんも準備してきていいよ。一時間後、デルカダール城下町の広場に集合で」

グリーン「わかった、ありがとう」

マヤ「よ、よし!よく言った、私!グリーンさんも喜んでくれたし、姉ちゃん達には感謝しないと!」

グリーン「マヤさん、かなり喜んでくれてる。ぼ、僕もしっかり準備しないと。だって……………デートに間違い……………ないもんね」

二人は互いに見えないようにガッツポーズを取ったり、息を整えたりしていた

少し離れたところではそれを見ている

ラース「息ピッタリかよ。気持ちのすれ違いだな。これは上手くいけば今日にでもくつつくんじゃねえか？」

ドキドキデート2

ダーハルルーネの街

グリー「実は僕さ、ダーハルルーネに来たのこれが初めてなんだよね」

マヤ「え!?! そうだったの?」

グリー「うん。というか、行った事ない街や国ばかりだよ。行った事あるのはデルカダール王国だけだからね。あと一回だけイレブンさん達のおかげだけど海底王国ムウレアって場所に。海の中で人魚とか魚人とかいっぱいいたんだ」

マヤ「へへ、私は兄貴と世界中回ったから全部行った事あるよ。ムウレアも懐かしいな。すっごく綺麗だったからまた行きたい」

グリー「マヤさんも行った事あるんだ。流石カミュさんがいるだけあるね。この街の案内とか頼んでもいい?」

マヤ「うん、任せて。取り敢えず店長さん、えっと兄ちゃんの友達のお店に行こっか」

グリー「ついていけば大丈夫だよね」

少し離れた場所では

ベグル「やっぱり変だよな。こんな事しなきゃいけないなんてよ」

ベグルが普通の服を着て二人を見ていた

時は少し遡り、グリーとマヤが支度していた時の事

デルカダール城 訓練場

ベグル「え？マヤ達のデートの見張り？」

ラーズ「そうなんだ。頼まれてくれないか？今度特別に給料上乘せしとくからよ」

ベグル「嫌ですよ。他人のデートをこっそり見てるなんて。第一必要ないと思いますけど」

ラーズ「店長の事はよく知ってるからわかるが、あいつよく綺麗な石を集めててな。それを女性によく紹介してるんだがその石つてのは霊水の洞窟で取れるんだ。もしマヤ達が興味を持って取りに行ったら大変だろ？」

ベグル「霊水の洞窟……ですか。確かに綺麗な水晶とか取れましたね。マヤ達だともし襲われた時戦えないというわけですか。その時に守ればいいんですね？でも、何で俺なんですか？バンみたいに

上手く気配とかは隠せませんか？」

ラース「そこまで隠さなくてもマヤ達にはバレないさ。それにバンドと……不安だろ？」

ベグル「ああ……それはそうですね。でも、ギバやマーズだっていますけど？」

ラース「まあそうなんだが、ベグルはしつかりしてるから頼みやすいってのはあるな。後はダーハル―ネはベグルの故郷だろ？慣れる方が隠れやすいかと思ってな」

ベグル「……そういう事ですか。わかりましたよ。ほとんど見てるだけですからね。何もなければ大丈夫です」

ラース「ありがとな、ベグル。それと裏町に近づかないようにだけさせといてくれ」

ベグル「あー……それはそうですね。了解しました」

ベグル「こんな事で帰ってくる事になるとはな。まあいいか」

カフエ

カラン

マヤ「店長さーん、久しぶりー」

店長「お！来たな、マヤちゃん。久しぶりだな。ん？こっちの人は？」

グリー「あ、初めまして。僕、グリーっていいいます。マヤさんに誘われて来ました」

マヤ「私がデルカダールで働き始めたのは前にデルカダール生誕祭の時言ったでしょ？その働いてる場所で一緒に働いてるんだ」

店長「ほー、そうだったのか。初めましてだな、グリー。俺はシンジってんだ。この自分の店で店長やつてる。ラーズとは長い付き合いなんだぜ。よろしくな。さて、席に案内するぜ」

シンジは大きな窓があり、ダーハルーネの街がよく見える席に案内した

店長「ここでいいだろ。また何かあったら呼んでくれ」

マヤ「ありがとう。グリーさん、ここはねケーキもすごく美味しいんだけど、私が特にオススメしたいのはこのフルーツパフェ！初めてなら絶対食べた方がいいよ！」

グリー「へく、確かに美味しそうだね。じゃあそれにしようかな」

マヤ「私はねく……………どっちにしようかな。チーズケーキも美味しそうだけど、ピーチタルトってのも気になるな」

グリー「ケーキも色々種類あるんだね。確かに美味しそう」

マヤ「よし、決めた！ピーチタルト！店長さん、注文お願いしまーす！」

店長「お待ちせしました。ご注文お伺いします」

マヤ「グリーさんにフルーツパフェ一つ。私はピーチタルト一つでお願い」

店長「飲み物はどうされますか？」

マヤ「私は紅茶で。グリーさんは？」

グリー「僕はぶどうジュースで」

店長「わかりました。少々お待ちください」

マヤ「あ！忘れるところだった！店長さん、姉ちゃん達から半額券貰ったの。使っていいんだって。いつ使えばいい？」

店長「お、やつと使ってくれたか。いつ使いに来てくれるのか待つてただげ。忙しいのはわかってるから期限長めにしたのに、それでも間に合いそうになかったか。それじゃあ今貰うぜ」

マヤ「姉ちゃん達が行けなくてごめんってのといつもありがとうって言ってたよ」

店長「ありがてえな。マルチイナさん達らしいぜ。でも、わかってるんだぜ？どうせラースは言ってるねえんだろ？」

マヤ「あー……うん。兄ちゃんは特に何も。やつぱりわかるんだね」

店長「あの野郎、偶に素直に褒めてくれるのによ、大体ははぐらかすんだ。まあわかってっからいいけどよ。照れ隠しに俺で遊んでくるのはやめてほしいもんだぜ」

グリー「へえ、ラースさんって結構真っ直ぐに感情とか出しそうな

のに意外と照れ屋なんですね」

店長「そうだぜ？ラースはよ、昔から自分の事になるとすぐ無かった事にしたり、恥ずかしいのか隠そうとしたりするんだ。困ったやつだぜ」

マヤ「いしし、でも少し羨ましいな。そうやって兄ちゃんの事がわかるって事は、兄ちゃんと店長さんがとつても仲良しって事だもんね」

グリー「ふふ、確かに。普通そういう隠したりするやつって気づかない事多いですからね。そこに気付けるだけの仲って事だもんね」

店長「お、お……お前ら、よくそんな恥ずかしい事言えるな。それに、長い付き合いってだけだ。別に俺はラースとそこまで仲良しじゃねえよ」

シンジは顔を赤くして早口で言い切った

店長「つとと、話しすぎだな。じゃあ作ってくる。話しながら待っててくれ」

シンジは戻って行った

グリー「でもいいよね、ああやって誰かに理解してもらえてるのってさ」

マヤ「うん。私も友達にあそこまで理解してもらえてるとは思えないからなー。流石何十年の知り合いなだけあるよ」

グリー「そ、そんな長いんだ。僕達と同じ年齢くらい付き合いがあるのか」

マヤ「兄ちゃんがまだ一人旅をしていた時だって言ってたからね。確か兄ちゃんが21歳の時って言った」

グリー「うわ、そりやあ凄いや。シンジさんも仲良くないって言ってたけどそんなに長く一緒にいるならもう仲良しに間違いないよね」

マヤ「いしし、でしょ？恥ずかしくてそういうのが言えないのは兄ちゃんも店長さんも同じだね」

ドキドキデート3

数分後

店長「お待ちせしました。フルーツパフェとピーチタルトになります。それと紅茶にグレープジュースです」

グリー「凄くいい、こんなパフェ初めて見た。とっても美味しそう」

店長「へへ、ありがとな」

マヤ「久しぶりに見たら私もまた食べてみたくなっちゃった。グリーさん、私にも少しちようだい。ピーチタルトも少しあげるからさ」

グリー「え……（こ、これって、半分こって事だよな。つまり…… あーんってやつも出来る!?!）」

グリーはマヤの発言に少し顔を赤くしていた

店長「マヤちゃん、グリーのやつどうしたんだ?」

マヤ「え? わかんない。グリーさん?」

グリー「あ! えっと、うん! 全然問題ないよ!」

店長「そうだ。この後、俺がこの街と周辺のオススメの場所教えてやるよ。あまり慣れてないだろ？」

グリー「いいんですか？」

マヤ「店長さんが教えてくれた方が色々知ってるからありがたいな」

店長「おう。それじゃあごゆっくり」

グリー「じゃあマヤさん、はい。少し分けるね」

マヤ「うん。ありがとう、私のやつも……………あ」

マヤは前にマルティナが言っていた事を思い出した

マルティナ「まず、相手に好意を気付いてもらうにはどんどん好きな気持ちをアピールしていくのよ。例えば、一緒に何かを食べている時に相手に食べさせたり、食べてもらったりするのよ。マヤちゃんも知ってるでしょ？こうやって、あーんってやるのよ。ラースもこれ好きなのよ。ぜひやってみて」

マヤ「(そうだった。姉ちゃんが折角教えてくれたんだった。えつと……恥ずかしいけど、こうやって)」

グリー「マヤさん？」

マヤ「グ、グリーさん、折角だから食べさせてあげるね。は、はい、あーん」

マヤは顔を真っ赤にしながらグリーに自分のタルトをスプーンに乗せて出した

グリー「ふえっ?! い、いいいの? じゃ、じゃあありがとうございます……う、うん。とっても美味しい。ありがとう、マヤさん」

マヤ「よ、よかった。美味しいでしょ? このケーキ。パフエも凄く美味しいから食べてみて(よかったら、成功したよ。ありがとう、姉ちゃん)」

グリー「本当美味しい。これはパフエも楽しみ(ビ、ビックリした……)。マヤさんにまさかこんな事してもらえるなんて。嬉しすぎてタルトの味よくわかんなかった……)」

キッチンではシンジがそれを見ていた

店長「ハ……羨ましいぜ。俺だってああいう事してみたい

のによろ。マルティナさんが言ったよりよっぽどいい感じに見えるけどな」

しばらくして二人はケーキを食べ終わり、シンジが地図を見せながら話をしていた

店長「俺オススメの場所はまず港付近のステージだな。結構いい景色だし、カモメなんかもよく止まってる。ゆっくり潮風を浴びながらゆっくり出来るぜ。ショッピングしたいなら、中央にある通りにいけば大抵あるぞ。」

もしまだスイーツを食べたいなら、俺のこの店の通りを歩けばいい。んで、俺が絶対に行つてほしいのが霊水の洞窟だ」

グリー「霊水の洞窟？」

マヤ「それってダーハル―ネの外つて事？」

店長「そうだ。ダーハル―ネを右に出ればしばらくすると大きな滝の近くに洞窟がある。そこが霊水の洞窟。中に入ると綺麗な水晶がある事が多いんだ。すげえ綺麗だからよ。ぜひ行つてみてくれ。それにそこから湧き出てる水があるんだが、美味しいから飲んでみてくれよな」

グリー「へー、それはいいですね。マヤさん、行つてみよっか」

マヤ「うん。水晶なんて中々見られないもんね」

店長「おっと、そうだった。二人は戦えたりすんのか？一応道中や洞窟内には魔物がいるんだ」

グリー「え、そうなんですか。僕は戦えないです」

マヤ「私も。本当簡単な事しか出来ない」

店長「あー、そりゃあ悪かったな。なら、俺がついて行くか。多少だが戦えるからよ。行く時になったらまた連絡してくれ」

マヤ「お店もあるのに悪いよ。今度兄貴とかに連れてってもらおうからさ」

グリー「そうですよ。自分達だけそんなの悪いです」

店長「いいって事よ。俺が誘った事だしあまり気にすんな」

マヤ「じゃ、じゃあよろしくね、店長さん」

グリー「ありがとうございます、シンジさん」

店長「おう。まあまずは街の中を巡っててくれ」

マヤ「うん、わかった。グリーンさん、どこ行く?」

グリーン「じゃあステージで海見に行こうかな」

マヤ「わかった。案内するね。じゃあまた後で」

店長「おう、また後でな」

二人は店を出て行った

店長「……………あ、裏町の事説明するの忘れた。まあ大丈夫だろう。あの二人なら変な場所まで行かないだろうしな」

ダーハル―ネの街 ステージ

グリーン「わく、港だー。船とかたくさん泊まってる」

マヤ「そりやあそうだよ。港だもん。ナギムナー村だって大きな船こそなくてもこんな感じだったでしょ?」

グリーン「ほら、僕ってナギムナー村では海に近づかなかったから遠

くからしか見てなかったんだよね。こんな近くなのは初めてなんだ」

マヤ「あ、そっか。じゃあカモメとかもこんな近くなのは初めて？」

マヤが指す方に数匹のカモメが羽を休ませていた

グリー「あ！本当だ！うん、初めてだよ。可愛いなく」

マヤ「ふふ、グリーさん子どもみたいだよ」

グリー「へへ、そう？やっぱり今まで諦めてた景色がこうやって見れると嬉しいんだ」

マヤ「…………… そっか。少しわかるよ、その気持ち。諦めてたのが自分の前に現れると嬉しいもんね」

その頃、カフェでは

カラン

店長「いらっしやいませー」

ベグル「あんたがラース將軍の話している店長って人か」

店長「え？ラースと知り合い？つて…………… どっかで見たよう

な顔だな」

ベグル「だろうな、まあいい。さつきマヤとグリーが来てただろ。二人にどこを案内したんだ？」

店長「…………… マヤとグリーとも知り合いらしいが、素性もわからねえやつに教える気は無いぜ」

ベグル「ハア、面倒だな。ほら、これでいいか？」

ベグルはポケットからデルカダール王国の兵士の紋章を出した

店長「デルカダール王国の兵士!? そんなやつが何であるの二人を調べてんだ? なおさらわからねえぞ」

ベグル「ラーズ將軍から頼まれたんだ。二人のデートに危険が無いようにしてほしいってな。何もなきや何もしない。あの二人は戦えないからな。もし変な事に巻き込まれないようにしているだけだ」

店長「なるほど、ラーズのやつマヤちゃんの事大事にしてるもんな。って! わかったぞ! ずっとどこかで見た事あると思ってたんだ、お前の顔! お前、悪尽のベグルだろ!」

ベグル「チツ! その名前で呼ぶんじゃねえよ」

店長「へく、ほく、お前がかく」

シンジはベグルの事を調べるように見ている

ベグル「んだよ、そんなにジロジロ見るんじゃないよ」

店長「前にな、一度ラースとマルティナさんとバンにベグルつてやつが兵士にいて聞いてお前の事話したんだ。この街の暴走族の事をな。そしたら三人ともベグルはそんな事するやつじゃないって言つててな。特にバンなんか俺の話信じてなかったからな。どういうやつか気になってたんだが、いいやつそうな雰囲気してるな。怖いけどよ」

ベグル「てめえか、二人にその話をしたのは！よくも人が隠してた事話しやがったな！あれからバンにもラース將軍にも馬鹿にされてんだ！」

店長「え、そ、そうだったのか？いやー、悪かったな！」

ベグル「悪かったで済んだら兵士はいらねえんだよ！」

店長「ハハハハハ！まあ気にすんな。それとあの二人に教えた事だが、この街の店やオススメの場所だな。さつきはステージに行くって言つてたぜ。それと、しばらくしたら俺と一緒に霊水の洞窟に行く事になってる」

ベグル「ハアゝ……。本当にラーズ將軍の言う通りになった。俺はその霊水の洞窟に行くだろうから、それを止めてくれって言われてんだ。お前は戦えんのか？」

店長「まあ一応な。だから安心してくれ。というか、ラーズのやつ俺のパターン理解していやがったか」

ベグル「いや、だとしても一般人だろ。もし魔物の群れに遭遇したらどうする。二人を守りながら戦うのは難しい事だ。やめた方がいいだろ」

店長「ぼ、暴走族にまともな事言われた」

ベグル「今その話を出すんじゃないやねえよ。第一馬鹿にしてんのか？」

ベグルはシンジを睨みつけた

店長「うおっ！迫力がすげえな！ただ、もう約束しちゃったからよ。やめろって言われてもな……………。おお！そうじゃん！目の前に俺より戦えるやつがいるじゃねえか！」

ベグル「は？」

店長「なあ、ベグル。マヤちゃん達と知り合いなら話が早い。二人を守りながら霊水の洞窟に行つて来てくれよ」

ベグル「お断りだ。そもそも俺はマヤ達にバレないようにしてるんだからよ。ラーズ將軍からもそう言われてんだ。そんな事出来ねえよ」

店長「じゃあよ、俺がマヤちゃん達を霊水の洞窟に案内するからもしもの事があつたら戦闘に参加してくれ。そうなつたら俺が二人を無理矢理でも逃すからさ」

ベグル「だからそもそも行かなけりやいいだけの話だろうが」

店長「でも約束しちまつたんだよ。いいじゃねえか！な？頼むよ。一般人からの頼みを兵士は聞き入れてくれねえのか？」

ベグル「ぐ……………。だがな……………」

店長「粘るなあ、ベグル。じゃあ最後の手段だ。今度ラーズやマルティナさんにお前のとこの兵士は一般市民のお願いすら聞いてくれないやつだつて言うぞ？」

ベグル「ハア!?て、てめえ……………。それは反則だろうが!!」

店長「ハツハツハ！どうだ？」

ベグル「チツ!!てめえ、いつか覚えてろよ。絶対ボコボコにしてやる」

店長「怖っ！ま、まあいいさ。ラースを盾にしてやる。それじゃあよろしくな、ベグル」

ベグル「ふざけやがって」

ドキドキデート4

数時間後、街を巡っていたマヤ達がカフェへ戻ってきた

マヤ「店长さーん、戻ってきたよー」

店长「お、きたかマヤちゃん達。色々買ったみたいだな」

グリー「はい。マヤさん結構服に詳しくて、僕の服とかも選んでくれたんです」

グリーとマヤの手にはいくつか袋がある

店长「そりやよかつたな。また戻ってくるからここに置いておいていいぞ。さて、行くか」

マヤ「流石にいつもの姿じゃないんだね。私、店长さんの私服姿見るの二回目だよ」

シンジはいつも着ているエプロンではなく、私服に剣を持っていた

店长「まああれだと動きにくいからな。汚れるのも困るしよ」

霊水の洞窟

店长「到着だぜ。ここが霊水の洞窟だ」

グリー「結構湿気があるんですね。近くに滝があるからですかね」

マヤ「きつとそうだよ。水晶はまだ奥なの？」

店長「そうだな。まあ案内は任せてくれ。ただ、こっからは魔物が増える。俺から絶対に離れるなよ」

二人「はい！」

入り口付近では

ベグル「つたく、本当に来やがって。頼むから怪我とかしないでくれよ。俺がラーズ將軍に怒られるんだからよ」

道中

グリー「見た事ない魔物ばかりですね。ちよつと怖いかな」

マヤ「あまりジロジロ見ない方がいいよ、グリーさん。敵意があると思われたら厄介だからさ」

店長「そうだな。喧嘩売られてると思って襲ってこられても困る。マヤちゃんはわかってるな。カミュに教えてもらったのか？」

マヤ「うん。前に兄貴と世界中回った時にね。その時は言う事聞い

てなかったけど」

グリー「そ、そうだったんだ。何で言う事聞かなかったの？怒るとカミユさん怖いじゃん」

マヤ「あゝ……………。まあちよつとした反抗期つてのもあるんだけど、見たこと無いものばかりでそれどころじゃなかったんだよね。だからあっちこっちに行つて魔物に追いかけられたりしたんだ」

店長「マヤちゃんはお転婆さんだったか。いいんじゃないか？初めて見るものなんて全部輝いて見えるもんだからよ」

マヤ「そうなんだ。だからグリーさんが初めて見るものに対して喜んでるのも気持ちはよくわかるよ」

グリー「ふふ、ありがとう、マヤさん。あ！あの奥に見えるキラキラしたものって！」

店長「お、気付いたな、グリー。あれがこの洞窟によくある水晶だ」

マヤ「へ〜！本当にあつたんだね。もっと近くで見てもいいでしょう？」

店長「ああ、いいぜ。近寄ろうか」

マヤ「ほら、グリーさんも行こ！」

マヤはグリーの手を握って走り出した

グリー「う、うん！（わわっ！手を握ってくれた！嬉しい……）」

店長「転ぶなよー」

ゴトゴト

店長「ん？何か音がしたような？」

シンジは謎の音に周りを見渡すが、特に何も見えない

その頃二人は水晶を近くで見っていた

グリー「わく、凄く綺麗。紫色だから確かアメジストっていうんだよね」

マヤ「うん、その名前で合ってるはず。持って帰りたいよね。店長さーん、これって少し持って帰っても……」

そう言いかけた所でマヤは視界の隅に珊瑚のような物が動いているのを見た

店長「!?まずい、マヤちゃん、グリーー！急いで離れろ!!」

それを見たシンジは二人に急いで叫んだ

ゴゴゴゴ

珊瑚や石が合わさり、シーゴーレムが複数体起き上がった

シーゴーレム達「ギーガー！」

マヤ「ヤバっ！シーゴーレムの群れだ!!」

グリー「わ!!もしかして、起こしちやった!?! 囲まれてる！」

店長「今行くぞ！」

向かってくるシンジの前に一体のシーゴーレムが立ちはだかった

店長「チツ！」

マヤ達の前にも一体のシーゴーレムが攻撃してきた

シーゴーレム「ギー！」

マヤ「うわっ！危ない！」

グリー「ヒイイツ！」

ドゴオン！パラパラ…：

マヤとグリーはそれぞれ別の方向に避け、二人のいた場所に力強いパンチが打たれた

マヤ「グリーさん、大丈夫!? あ!!」

グリー「う、うん！僕は何か…：…：」

グリーの背中からもう一体のシーゴーレムが攻撃をしていた

マヤ「グリーさん、危ない!!!」

グリー「え？」

シーゴーレム「ガー!!」

ドガアン！

その頃、ベグルは

ドガアン！

ベグル「何だか騒がしくなって来たな。まさかとは思うけど…：…：行ってみねえと！」

グリー達は

マヤ「ハア……ハア……危なかつた」

グリー「あ、あり、ありがとう、マヤさん。本当助かった」

攻撃にいち早く気付いたマヤがグリーを引っ張って事なきをえた

シーゴーレム達「ギーガー！」

グリー「に、逃げないと！シンジさん、逃げましょう！」

店長「わかった！ただ、逃げるにも時間稼ぎが必要だ！俺が残って何とかするから二人は先に逃げろ！」

シーゴーレム「ギーガー！！」

店長「やべっ！！ぐはあ！！」

マヤ達を振り返ったシンジにシーゴーレムの攻撃が直撃してシンジは吹っ飛ばされる

マヤ「店長さん！！」

店長「ぐ……。いいから逃げろ！！早く！！」

グリー「で、でも……………。くっ、マヤさん、逃げなきゃ」

マヤ「う、うん！店長さん、必ず戻ってきてね！」

二人は走って離れていった

シーゴーレム達「ギーガー」

シーゴーレム達は倒れていたシンジを囲んでいる

店長「ハハ…………。こりやあやべえや。ピンチだったのに笑えてくるぜ」

シーゴーレム達「ガー！」

シーゴーレム達の攻撃がシンジに向かう

ベグル「オノ無双！」

シーゴーレム「ガッ」ジュワー

ベグル「ほんつとうに世話がかかるやつばかりだぜ！おい、生きてるだろ？」

店長「まあな、助かった。ベグルの言う通りになっちまったな。頼

めるか？」

ベグル「頼まれなくても倒さざるをえないだろうが、これは。怪我人は隅で大人しくしてろ。さあ、かかってこいよ！」

シーゴーレム達「ガー!!」

ダーハラ湿原

グリー「ハア……………ハア……………洞窟を出られれば何とかなつたね」

マヤ「うん。でも……………店長さんを置いてきちやったよ。攻撃喰らってたし、本当に大丈夫かな」

グリー「……………わからない。でも、きつと大丈夫だよ。そう信じてよう。悪い事を考えたらキリがないからさ。少しでも明るく考えないと」

マヤ「そうだね……………わかった……………ん？あ、雨が降ってきちやった」

グリー「あ、本当だ。街まで少し離れてるよ。どこかに隠れられるような場所……………」

ザー!!

マヤ「わわっ!結構激しくなってきた!急いでどこか雨宿りする場所探さないと!」

グリー「あ!マヤさん、あそこ!大きな木の下に穴がある!あそこに入ろう!」

マヤ「わかった!」

大きな木の中

マヤ「ふう、何とかなった。結構濡れちゃったね。グリーさんはだ
いじょ……………う……………」

グリー「え?マヤさん、どうし……………」

穴は二人で丁度といった狭さであり、二人の顔は真近に迫っていた

二人「……………(ち、近い……………恥ずかしい……………)」

二人は同時に顔を赤くして、違う方を向いた

マヤ「え、えっと……………大丈夫?寒くない?」

グリー「う、うん。大丈夫。マヤさんこそ暖かくしないと。風邪ひ
いちやうよ」

マヤ「私は雪国育ちだからこのくらい全然平気」

二人「……………」

しばらく沈黙が続き、外の激しい雨の音だけが聞こえていた

グリー「いつ…………… 止むかな」

マヤ「結構急だったからすぐに止むと思うんだけど、どうだろうね」

グリー「…………… ねえ、マヤさん。マヤさんにとって、僕ってどんな人…………… かな」

マヤ「え？」

グリー「ぼ、僕はさ、怖がりだし強くもないし、今まで普通の人みたいに過ごしてこれなかった。呪いがあつたから。デルカダールに来た時もあまり馴染めない気がしてたんだ。

でも、あの幻のお店でビルさんとマドリーさん、そしてマヤさんと出会えた。特にマヤさんは、僕に凄く興味を持ってくれたし、何も知らない僕の事を凄いつて言ってくれた。それから一緒にいるうちに、マヤさんという時の僕って僕が知らないくらいに明るくなれたんだ。

こんな自分がいるなんて、自分でも知らなかった。とつても嬉しかったんだよ。だから、僕にとってマヤさんは……僕を見つけてくれた人。たくさんの人の中から、怖い呪いの中から、僕ですらない新しい僕を見つけてくれた。ありがとう、マヤさん」

マヤ「グリーンさん……。ど、どうしたの？突然。それに、大した事何もしてないよ。何だかそんな凄い風に言われると、びつくりしちゃうよ。私にとって……グリーンさんは、隣にいたい人。一緒にいてずっと楽しいし、明るくなれる。」

それにグリーンさんと一緒にいると落ち着くんだ。こうやって……背中をくっつけてるだけでも、こんな雨に濡れた後でも、穏やかな気持ちになれるの。そんな気持ちにしてくれるのはグリーンさんだけ」

マヤは静かにグリーンに寄りかかった

グリーン「えへへ、そっか。僕にそんな事が出来てたんだ。僕もマヤさんと一緒にいると落ち着くよ。今でもね」

グリーンとマヤは同時に振り返った

二人「ふふ／＼いしし」

マヤ「ねえ、グリーンさん。私からの一生のお願い、聞いてもらえないかな」

グリーン「え？なに？」

マヤ「……………これからまさ……………ずっと、一緒にいようよ。私、グリーンさんが……………好きなの」

グリーン「……………」

グリーンは固まっている

マヤ「あ……………。や、やっぱりごめんね。この事はわすれ……………」

マヤが言いかけた時

グリーン「いいの?」

マヤ「え?」

グリーン「ほ、本当に僕の事が……………好きでいてくれるの?」

マヤ「う、うん！私は、グリーンさんが好きだよ！」

グリーン「そ、そっかく…………… 同じだったんだく……………」

グリーンはズルズルと力が抜けたようにマヤの背中を下がっていった

マヤ「え？…………… 同じって、もしかして……………」

グリーン「うん、そうだよ。僕もマヤさんが好き。僕もマヤさんとずっと一緒にいい」

マヤ「…………… や、やったー!!! いたっ!!!」

マヤは喜んで立ち上がったが、頭を木に強打した

グリーン「だ、大丈夫？マヤさん」

マヤ「いしし、ここが狭いって事忘れてた。でも、嬉しいー！グリーンさんも好きでいてくれてたなんて！」

グリー「僕もだよ。ずっと不安だったんだ。マヤさんが僕をどう思ってるかってさ」

マヤ「私も。グリーさんは私の事友達としか見てないと思ってた」

グリー「ふふ、そこも同じだったんだね」

マヤ「えっと…………… これからも変わらずよろしくね、グリーさん。ううん…………… グリー」

マヤは顔を赤くしながらグリーからさん付けを外した

グリー「!?あ、う、うん。えっと…………… マ、マヤ……………。や、やっぱり無理！僕はまだマヤさんで」

グリーも顔を赤くしてマヤからさんを外すが、難しいようで元に戻してしまった

マヤ「お互いまだ慣れないね。でも、いつかはさんを取ってくれると嬉しいな。気長に待ってるから」

グリー「う、うん。お待たせするようですみません」

マヤ「いしし。あ、見て、グリー。外が晴れたよ」

マヤが外を見ると先程の激しい雨が止んで雲から日差しが差し込んでいた

グリー「あ…… 本当だ。そこまで長くなくてよかったね」

マヤ「うん。さ、戻ろう、グリー。きっと店長さんも待ってるからさ」

グリー「そうだね。急いで戻ろうか」

二人は手を握って仲良く走り出す

そんな二人の上空には綺麗な虹がかかっていた

デートの成果

夕方、デルカダール城 大広間

マヤ「ただいまー」

グリー「今戻りましたー」

大広間ではベグルがラースに報告をしていた

ラース「よう、マヤちゃん、グリー。どうだった？楽しかったか？」

ベグル「何も知らない程で行くんですね。本当世話焼きすぎだと思いますよ」

マヤは今日あった事と洞窟での事、その後シンジが無事に帰ってきた事を報告した

ラース「なるほどな。色々あったみたいだが楽しめたようで何よりだぜ。グリー、もう少しで夕飯なんだ。お前もよかつたら食べていけよ。マルティナ達も気にしてるだろうからいっぱい話してくれ」

マヤ「あ、それいいね！グリー、一緒に食べよう」

グリー「じゃあお言葉に甘えてお邪魔しちゃいます」

「ラース「おう、どんどん来てくれよな」

夕飯後、グリーの部屋

そこにはラースが来てグリーと話していた

ラース「どうした？まだ相談でもあるのか？」

グリー「いえ、相談ではないです。ラースさんには本当にお世話になったのでお礼と報告だけでもと思って」

ラース「ああ、そういう事か。そんなのわざわざ報告しなくたってわかってるぞ。無事成功したみたいだな。おめでとう」

グリー「ええ!?!な、何も言ってないのにわかっちゃうんですか!?!」

ラース「まあな。流石にマヤのグリーへの呼び方で気付いたし、グリーの態度も少し変わったもんな。そうなったら答えは一つだろ。で？どっちから告白したんだ？」

ラースはニヤニヤしながら聞いている

グリー「うう………。そ、そんなにわかりやすかったですか？もしかして、グレイグ將軍や王様にまでバレてたりとか」

ラース「グレイグは鈍いから気付いてないと思うが、王様は気付い

てるだろうな」

グリー「告白は…… マヤさんからしました。僕がそれに安心して答えたから、せ、正式にお付き合いする事になりました」

ラーズ「おお、マヤからか。まあマヤらしいな。これからもマヤを頼むぜ、グリー。これからは俺やカミュの事はお兄さんって呼んでもいいんだぜ？」

グリー「そ、それもそうですね。じゃあ…… お、お兄さん！」

ラーズ「…………… い、いや、冗談だぜ？ そんなに真に受けられると困ったな」

グリー「え!?!じよ、冗談つて！もう、ラーズさん！ふざけないでくださいよ！」

ラーズ「ハハハハ！いや、悪かったよ。今度カミュが帰ってきたら報告してやれ、きつと驚くぜ」

グリー「何て言われますかね。少し怖いですよ」

ラーズ「何かされたら俺の所にすぐに来いよ。兄としてしっかり指

導してやるからさ」

グリー「は、はい」

その頃、マルティナとラーズの部屋

こっちにはマヤが来ていた

マヤ「そんな感じだね、私から告白したんだ」

マルティナ「頑張ったじゃない、マヤちゃん。グリーも喜んでたでしょ?」

マヤ「う、うん。凄く安心してたよ。気持ちはずっと同じだったみたい」

マルティナ「実はね、私にはマヤちゃんが、ラーズにはグリーが相談に来てたのよ。好きだけど怖くて伝えられないって」

マヤ「え!?!グリーも!?!しかも兄ちゃんに!?!じゃあ、二人からしたら私達がずっと両思いつて知ってたの!?!」

マルティナ「ふふ、そうなるわね。でも、それは私達が気付かせるんじゃないかって自分から知った方がいいでしょ?だから黙ってたの、ごめんなさい」

マヤ「じゃあ今日のデートも全部わかってたんだ」

マルティナ「あら、そんな事ないわ。私達がお手伝いしたのは場所と日時だけよ。どう過ごすかは二人次第だったもの。内容によっては全然楽しくならない可能性だってあったわ。それにまさかこのデートで告白するなんて少し意外だったわよ」

マヤ「そ、そうなんだ。じゃあ、私達の判断が大事だったんだね。上手くたって本当によかった」

マルティナ「ようやく肩の荷が降りたって顔してるわ。ここ最近のマヤちゃんはずっと何か考えてる顔してたもの」

マヤ「そ、そんなに顔に出た？もしかして、最近ホールやってなかったから顔に出やすくなってたかも」

マルティナ「私達、まあまあ一緒にいるからよくわかるわよ。また何かあったらぜひ頼ってね」

マヤ「うん。頼りにしてるけど、姉ちゃんこそ何かあったら私にも相談していいからね！」

マルティナ「ふふ、それはとっても嬉しいわ。ぜひそうさせてもら
うわね。あ、そうだったわ。マヤちゃん、ケーキありがとう。お父様
も喜んでたわ。私としてはまた太るんじゃないかと少し心配だけど
ね」

マヤ「いしし、うん。ちゃんとお土産買ってくるって言ったからね」

マルティナ「忘れてきてもデートだったんだから気にしないのに」

マヤ「えー、そんなのやだよ。だって家族との約束だもん。出来る
だけ守りたいからね」

マルティナ「そういう素敵な所、昔から変わらないわね、マヤちゃ
ん。とってもいい事だからこれからも大切にね」

マヤ「うん。それじゃあ私はこれで。おやすみ、姉ちゃん」

マルティナ「ええ、おやすみなさい、マヤちゃん」

記憶喪失

マヤ達が結ばれてから一ヶ月後

デルカダール城 訓練場

「そこではラースとベグルが勝負をしていた

ベグル「渾身斬り！」

ラース「うおつと！ベグル相手に簡単な目眩しは通用しねえか。なら！」

ラースはベグルよりも高く跳躍した

ベグル「何するかわかりませんが、負けないですからね！」

ベグルはラースの攻撃に備えて大剣でガードしている

ラースは大剣に着地すると同時に片手をついた

ラース「イオナズン！」

ドゴオオン!!

大剣が爆発して、粉々になる

ラース「なに!？」

はずだった

ラーズは爆発の威力が全て自分に返ってきて、勢いよく飛ばされる
ベグル「げ！またあの加護が発動しやがった！」

ベグルが神様につけてもらった加護により、ベグルは全くの無傷
だった

ガツン！

ラーズ「が……」ドサ

ラーズは訓練場の壁に頭を強打して倒れ込んだ

ベグル「ラーズ將軍!!すみません！大丈夫ですか!？」

それを見ていたバン達も大慌てで駆け寄ってきた

バン「師匠!!!大丈夫ですか!？」

バンは必死にラーズを揺らしている

マーズ「バン、落ち着け。あまり揺らすな。ベグル、どうだ?」

ベグル「……… 大丈夫、気絶みたいだ。ひとまず医療部屋に運び
込むぞ。やらかしてしまった」

ガザル「やっぱりあの力は反則だろ。ラーズ將軍ですら無理なのか
よ」

バン「どうにかならねえのか？ベグル」

ベグル「一応考えておく。まずはマルティナ様達に報告しないと。その後ラーズ將軍にも謝らねえとな」

その後、医療部屋

医者「ラーズ將軍が運ばれるなんて少し珍しいですね。それにしても……頭を強く打った、ですか。何も無いと信じておりますが……」

医者はバン達の話聞いて少し顔を暗くしている

バン「な、何ですか……その言い方。まるで、もしかしたら何かあるみたいな」

医者「頭への強い衝撃というのは時に脳にまでダメージが通るんです。そのダメージによっては、様々な障害が出る場合もあるんですよ」

ベグル「マ、マジかよ……」

ベグルの顔は少し青くなっている

医者「あ……別に怖がらせようと思っただけではないんですよ！何も無いはずだとは思いますが、もしも場合の話です。ベグル

さんのせいなんて事ではありませんよ。きつとすぐに目を覚ますと思います」

ガザル「そうだぞ、ベグル。あまり考えすぎるな。あれは事故なんだから」

マーズ「マルティナ様達に報告してくる。その……… 頭を強く打った事も一応な」

ベグル「…………… ああ、頼む」

その後、マルティナ達も医療部屋にやってきた

マルティナ「気にしすぎないで、ベグル。私達はあなたを悪くなんて絶対に思わないから。それにラースだって起きたら笑って許してくれるわよ。彼はそういう人でしょ?」

グレイグ「そうですね。訓練していたならこのような事故は起こってもおかしくない。特にお前達は強くなっている分、訓練も激しい。寧ろ起こって当然だ。誰にも非があるわけではない。ラースが起きるまで待ってしよう」

ベグル「はい。ありがとうございます、マルティナ様、グレイグ将軍」

バン「師匠にしては起きるの遅いですよね。いつもだと気絶程度なら結構早く目覚めるはずなんです」

医者「バンの言う通りですね。確かにいつもでしたらそろそろ目覚めてもおかしくないのですが……。まあそんな決まった時に目覚めるわけではありませんし、もう少し様子を見ています。

皆様はどうかお戻りください、ここは私が責任をもって見ておきますので。何かあればまたご連絡します」

マルティナ「そうね、わかったわ。皆、行きましょう」

それから一時間後

ラーズ「……………ん。ここは……………？」

ラーズはゆっくりと体を起こした

医者「ん？おお、ラーズ様。お目覚めですか？お体は大丈夫ですか？」

ラーズ「……………」

ラーズは呆然としている

医者「ラーズ様？」

ラーズ「……………ここは……………どこだ？」

医者「え……………。ラーズ様、お分かりになられませんか？」

ラーズ「すまない。何も……………わからないんだ」

医者「まさか……………ご自分の名前は覚えておられますか？」

ラーズ「いや……………先程、君がラーズと呼んでいた。それが……………俺の名前か？」

医者「はい……………そうです。ラーズ様、少々お待ちください。皆様をお呼びしてきます」

その後、医療部屋前

デルカダール王「どうしたのだ？急に集まってほしいと」

医者「この先にはラーズ様がいらっしやいますが……………皆様はおそらくショックを受けると思われます」

全員「!？」

マルティナ「それって…………… どういう」

医者「それでも、難しいとは思いますが可能な限り平静を装ってくださいますようお願いします。あまり混乱を与えてはいけません」

バン「ま、待ってください。一体何が」

医者「…………… ご覧になればわかると思われます。では」

ガチャ

ラース「あ、戻ってきてくれたか。って、こんなにたくさんいたんですね」

全員「……………」

全員ラースの様子がおかしい事に気づいた

マルティナ「えっと…………… ラース？」

ラース「やはり俺の事ご存知なんですね。あれ？…………… どこかで会ったことありますか？あなたを見てるとなんだか、とても懐かしい感じがします」

マルティナ「……………」

ラーズ「あの、よかったら俺の事教えてくれませんか？先程そちらの方に名前は教えてもらったのですが、それ以外何も思い出せなくて」

ラーズは少し困ったように笑っている

デルカダール王「なんと……………」

グレイグ「ま、まさか」

バン「…………… 師匠、その症状って」

ベグル「あ、ああああ」

マーズ「嘘…………… ですよ？だって、さっきまで」

ガザル「マジ…………… かよ」

マルティナ「…………… ええ、いいわよ。あなたの名前はラーズ。今いるのはデルカダール王国で、その国にあるデルカダール城の中よ。デルカダール王国は知ってるかしら？」

ラーズ「いや、覚えてないです。でも、今覚ええました」

マルティナ「そう……。それじゃあ続けるわね。私はここのお城で王女をやっているマルティナっていうの。よろしくね、ラーズ。この方は私のお父様でデルカダール王国の前王様にあたる方よ。こっちにいる男の人がグレイグ。お父様の付き人として働いている騎士よ。

こっちにいる人達は全員城の兵士で、兵士長のバン、副長のベグル、そしてマーズとガザルよ。覚えられたかしら？」

ラーズ「はい。マルティナさんにデルカダール王様、グレイグさんにバンさんにベグルさんにロベルトさんにガザルさん。間違いありませんか？」

マルティナ「ふふ、大丈夫よ。後は知りたい事はあるかしら？」

ラーズ「何で自分はここにいますか？」

マルティナ「それは……。あなたは」

マルティナはラーズの質問に答えにくそうにしている

デルカダール王「お主はわしの義理の息子だからじゃ。この城はお主の家。だからここにお主はおるんじゃ」

ラーズ「なるほど、そうだったんですか。それならここにいて当たり前ですね。あ、じゃあデルカダール王様じゃなくて俺もお父様と呼ばなければいけませんね」

デルカダール王「いや、そこまでしなくてもよい。今まで通り王様と呼んでくれ」

医者「ひとまずラーズ様、もう少しお休みになってください」

ラーズ「そうだな。何故かわからないが体も少し痛い。また寝させてもらおうとするよ」

医者「はい、ごゆっくりなさってください」

その後、玉座の間

全員「……………」

マーズとガザルは他の兵士達に伝えに行き、他の人達はラーズの事について考えていた

マルティナ「どうしようかしら。まさかこんな事になるなんて」

ベグル「本当にすみません!!!俺……………取り返しのつかない事を」

ベグルはマルティナ達に土下座している

バン「ベグルは悪くねえって！」

デルカダール王「うむ。訓練での事故なら誰かが悪いわけではあるまい。それとマルティナよ、助かった。医師に平静を装っておけると言われておきながら、わしはあの光景に言葉にならんかった。お主の初めのレースとのやり取りで目が覚めた。ありがとう」

グレイグ「私もです。あのレースに何を話せばいいのかわからず、立ち尽くすだけでした。お辛いのは姫様の方だというのに……自分が情けない」

マルティナ「そんな……。私もレースの途中の質問にどう答えたらいいかわかりませんでしたのでお父様には助けられました。でも、どうして息子だと？」

デルカダール王「記憶喪失のレースは右も左もわからんだろう。まずあのレースに必要なものは帰る家と帰る理由じゃ。それを教えておく事でもしもの時、レースをこの城に戻す事が出来る。それにレースがわしの息子というの何も間違っておらんしおう」

グレイグ「なるほど。確かに最低限帰る家があればどうにかしてここに帰ってこようとしますからね。流星は我が王です。それと姫様、皆にもこの事を教えておかなければ」

マルティナ「そうね。すぐに連絡するわよ」

記憶喪失2

数時間後、医療部屋

全員が集まってラースに会いに来ていた

ラース「イレブンさんにカミュさん、ベロニカさんにセーニヤさん、シルビアさんにロウさんにカミュさんの妹のマヤさんですね。覚えておきます。紹介ありがとうございます、マルティナさん」

マルティナ「ええ、気にしないで大丈夫よ。それにね、私とグレイグとラースを入れたこの九人は仲間なのよ。このメンバーで旅をしていたの」

ラース「旅……ですか。何だか不思議な感じですよ。皆さんを見ていると、何か思い出せそうなの……自分には何か大事な事があつたような気がします」

ロウ「無理して思い出そうとしなくてもよい。ラースよ、ゆっくり思い出していけばいいんじゃない」

ラース「はい、そうですね」

その後、玉座の間

全員が集まって暗い雰囲気になっていた

イレブン「結構…… ショックだね。本当に全部忘れてるなんてさ」

カミュ「本当ならわざと馬鹿にしてやろうとか思ってたが、あそこまで変われるとこっちも何も出来なくなるぜ」

ベロニカ「見た目や魔力は同じなのに、話すと誰なのかわからなくなるわね」

シルビア「記憶喪失っていつ頃治るとかはわかるの？ 治し方とか」

セーニヤ「確実な治療法は存在しておりません。なので、突然戻る事もあれば…… もう二度と戻らない可能性もございます」

全員「!？」

マルティナ「二度と…… 戻らない……」

マルティナはショックを受けた顔で下を向き始めた

ロウ「言つては不安にさせるかもしれないが、起こってしまった以上何処かで考えておかねばならぬ事じゃ。あの姿のラースとこれから生きる方法をな」

マヤ「姉ちゃん……………大丈夫？じや、ないよね」

マルティナ「ごめんなさい。最悪な考えばかり浮かんで、ちよつと動転してみたい。悪いけど、部屋で横になってるわね」

マルティナは弱々しく歩きながら部屋に戻っていった

グレイグ「……………これからはまず姫様にはラーズの様子を見てもらい、代わりに王が玉座へと戻られる。それと、ラーズが記憶喪失になった事は国民にはあまり言わない方がいいと判断している。それを心配してラーズに近づいてもラーズに混乱を与えるだけだ」

ベロニカ「でも、あのマルティナさんに今のラーズを見せ続けて大丈夫？マルティナさんが心配だわ」

シルビア「そうね。それにアタシはマルス君達も心配だわ、二人はどうするの？」

グレイグ「俺達で面倒を見るつもりだが……………正直今のところどうなるかはわからない」

イレブン「僕達も全力で手伝うよ。ラーズの様子なら僕達だって見れるからさ。僕達も頼ってよ、グレイグ」

マヤ「ねえ、兄貴」

カミュ「だな。グレイグ、マルスとルナなら俺達が預かるぜ。しばらくマルティナ達とは会えなくなるだろうが、あの二人の面倒を見るのは慣れてる。任せてくれ」

マヤ「私もお店休ませてもらうから、兄貴が仕事でも私とシロがいるから何とかなると思う」

グレイグ「それは助かる、二人とも。なら、よろしく頼む」

セーニャ「ブレイブ様とコロ様はどうされますか？お二人の世話もラース様とマルティナ様のお役目でしたよね？」

グレイグ「二人なら特に問題は無さそうだが、今のラースが見たら驚くだろう。姫様への負担も極力少なくしたい。二人の世話程度なら俺達でも出来るが」

ロウ「かといって、これ以上グレイグ達への負担を大きくしても得策ではないのう。イレブンや、ユグノア城でならキラーパーンサーがいっても問題ないじゃろう」

イレブン「そうだね。皆には軽く説明しておけば大丈夫だしね。グレイグ、ブレイブとコロは僕達が預かるよ。ちゃんとお世話するからさ」

グレイグ「了解した、ブレイブ達には後で話しておこう」

シルビア「それじゃアタシ達はやる事は一つね。マルティナちゃんの援護よ。これ以上悲しい思いなんてさせないようにしましょう」

セーニャ「そうですね。私達がしばらくこちらにいるようにしますので、何かあればすぐに皆様にご連絡しますわ」

ベロニカ「私達二人は大丈夫だけど、シルビアさんは公演とかあるでしょ？大丈夫？」

シルビア「そうね、だから全部延期にするわ」

カミュ「おいおい、それは大丈夫なのか？」

グレイグ「そうだぞ、ゴリアテ。お前の大事な事を奪ってまでやらなくても大丈夫だ」

シルビア「ありがとう。でも、アタシは大丈夫。寧ろ、そうさせてほしいの。だって、皆さっきのマルティナちゃんを見たでしょ？ラーズちゃんの前では隠してるけど、やっぱり誰よりもシヨックで悲しいのはマルティナちゃんよ。あんなマルティナちゃんは見たくない。

アタシは今の無理して笑っているマルティナちゃんの笑顔よりも、いつもの笑顔のマルティナちゃんが好き。アタシ達が頑張ればマルティナちゃんも笑ってくれるとは思うけど、それじゃ駄目だわ。マルティナちゃんの最高の笑顔のためにはラースちゃんが必要不可欠なの。

アタシはマルティナちゃんの笑顔を取り戻す！今アタシがやらなきゃいけない事はこれよ！もちろん、皆の笑顔だつて大事。でも、それは一旦お休み。アタシの大事な大事な仲間ちゃんが悲しんでるのに無視なんてできないわ！アタシに出来る事を全力でさせて」

グレイグ「ゴリアテ……」

ロウ「ほほ、流石はシルビアじゃのう。あつぱれじゃ」

イレブン「カツコいいよ、シルビア。僕も負けてられない。僕もマルティナの笑顔を取り戻して、ラースとまた幸せに過ごしてもらおうだ」

カミュ「だな。きつと兄貴もすぐに記憶を取り戻してくれるさ。それまでは俺達が兄貴とマルティナを支えてやらないとな」

マヤ「うん。私もいつもの二人が好き。だから私に出来る精一杯の事をやらないと！」

グレイグ「皆、本当にありがとう。俺も皆に頼ってばかりいられん。俺も早くラースが元に戻って、いつもの姫様になってもらえるように全力を尽くそう。頑張るぞ、皆！」

全員「オー！」

その後、訓練場

イレブン達はマルスとルナに話をしていた

マルス「記憶喪失？それってどういう病気なの？」

ロウ「全てを忘れてしまう病気じゃ。これまでの事や思い出、自分の名前まで何も思い出せなくなってしまうんじゃない」

ルナ「じゃあ……………お父さんはもう……………私達の事覚えてないの？」

ベロニカ「言い方を変えると知ってるけど、思い出せないの。でも、きつと大丈夫。私達が必ず元のお父さんに戻してあげるから。それまではいいい子でカミュ達の元に居て」

ルナ「……………わかった」

マルス「…………… 本当に忘れてるの？」

イレブン「うん。僕達全員だけじゃなくてマルス君達のお母さん、マルティナまで忘れてるんだ。きつと今のラーズは知らない場所で知らない人だらけで混乱してると思うんだ。だから今だけはそつとしてあげて。必ず元に戻すから」

マルス「…………… うん。イレブンさん、約束して。また父さんに会えるって」

マルスは小指を出した

イレブン「うん、約束しよつか。指きりげんまん、指きった。絶対守ってみせるからね」

カミュ「二人とも必要なものを準備してくれ。服とか本とかな」

マヤ「私と一緒にやろつか。ほら、お部屋に行こう」

マヤは二人を連れて部屋に行った

セーニャ「会わせないままでよかったですでしょうか。少しくらい顔を見せても」

シルビア「気持ちはわかるけど、何も知らないラーズちゃんがいきなりお父さんって呼ばれても驚く未来しか見えないわ。そこからど

んな発言がラースちゃんから出るかわからない。もしかしたら、傷付けられるような事を言われるかもしれない。どっちのためにもそんな風にはなってほしくないわ」

グレイグ「そうだな。さて、次はブレイブ達だ。大広間にいるはずだ」

大広間

イレブン達はブレイブ達と話をしていた

グレイグ「ブレイブ達なら何か異変が起こっているのはわかっているかもしれない。ブレイブ、コロ、すまないがしばらくラースとは会えなくなる。ラースからは離れて生活してほしいのだ」

ブレイブ「ガ、ガウ!？」

コロ「クウ?」

カミュ「ラースはな、ブレイブや俺らの事を全部忘れちゃったんだ。今、そんなラースを元に戻そうとしている。その間だけ、ブレイブ達には別の場所で過ごしてほしいんだ」

コロ「クウく……」

ブレイブ「ガウ……」

二人は項垂れている

セーニヤ「申し訳ございません。ですが、ラーズ様をあまり驚かせたくないのです。どうかご理解していただけませんか？」

ブレイブ「……………」

ブレイブはしばらく項垂れた後、ふとマルティナ達への部屋に向かい始めた

ロウ「ブレイブよ、どこへ行くのだ？」

グレイグ「あつちは姫様達のお部屋。何を？」

少ししてブレイブは喋れる薬を啜えてきた

ブレイブ「ガウ、ガウ」

ベロニカ「何か言いたい事があるのかしら？飲ませていい？」

グレイグ「ああ、大丈夫だ」

ベロニカは薬を出してブレイブに飲ませた

ブレイブ「…………… あー、あー。突然申し訳ございません。で

すが、どうしてもお話しねばならないと思い、この薬を持ってきました」

シルビア「大丈夫よ。どうしたの？ブレイブちゃん」

ブレイブ「私は……… 申し訳ありませんが、その命をお聞きする事は出来ません」

ロウ「ど、どうしてじゃ？」

ブレイブ「私はラーズ様に仕え、ラーズ様と共にあると決めました。そのラーズ様とお離れしなければならぬという命令は、私にとつてラーズ様本人から言われなければ例え皆様であつてもお聞き出来ません」

イレブン「ブレイブ……」

ブレイブ「私をラーズ様に会わせてください。全てを忘れてしまうという事が、にわかには信じ難いのです」

グレイグ「だが、本当に覚えていないのだ。俺らや姫様でさえ忘れられている。自分の名前までもな。そんなラーズがブレイブを見たらどうなるか予想が出来ない。それでもラーズに会うか？」

ブレイブ「……………はい。耐えてみせます」

イレブン「じゃあ連れて行ってみようか。きっと驚くだろうけど、ちゃんと説明すればわかってもらえると思う」

ブレイブ「(ラーズ様、本当にお忘れになってしまったのですか?)」

怪しきもの

医療部屋

ガチャ

グレイグ「ラース、もう一人お前に会わせたいやつを連れてきた」

ラース「あ、グレイグさんに皆さん。俺って結構知り合いが多かったんですね。それで、その人ってのは？」

ブレイブ「あの…………… ラース様、私を覚えておられますよね？」

ラース「え!？」

ラースはブレイブを見ると驚いてベッドの隅に身を縮めた

ラース「ま、魔物!?!しかも喋れるなんて!!」

ブレイブ「ラース様…………… (驚き…………… 戸惑い…………… それと…………… 恐怖。そんな感情しか感じられないなんて)」

シルビア「大丈夫よ、ラースちゃん。怖がらなくていいの。この子はブレイブちゃん。私達のとつても大事な味方なのよ」

ペロニカ「あんたの事とっても慕ってたのよ。何か感じない？」

ラース「魔物なのに……味方なんですか。随分変わってるんですね。でも、確かに見た事あるような……」

ブレイブ「……ラース様、驚かせてしまい申し訳ございません。いつか必ずラース様が戻る事を願っております。それまでは……お側にいないようにしますね」

ブレイブは悲しそうに部屋から出て行った

セーニヤ「ブレイブ様……」

ラース「なんだか悲しませてしまったようだ。やっぱり記憶が無いと皆さんも困りますよね。早く戻さない」と

イレブン「焦らなくて大丈夫だよ、ラース。一つずつ思い出しているよ。これからは僕達がついてるから何かあったらすぐに頼ってね」

ラース「ありがとうございます、イレブンさん。頼りっぱなしになると思いますが、皆さんよろしく願います」

大広間

カミュ「わかっただろ？ブレイブ。俺達は別に嘘をついてたわけ

じゃねえんだ」

ブレイブ「はい、疑ってすみませんでした。それにラーズ様を見て確信しました。今のラーズ様が見た時は恐怖の感情しか感じられません。前までの優しい顔や暖かい感情は……全くありません。私は今のラーズ様にとって恐怖でしかないようです」

ロウ「そうじゃな。じゃが安心するんじや、ブレイブよ。わし達が必ず元のお主が好きであった主人のラーズに戻すからもう。それまではわし達のお城にいるんじや」

イレブン「コロもいるし、僕もおじいちゃんもいるからさ。ちよつとラーズ達に会えなくなるけど、しばらくの間だけだから」

セーニャ「お辛いと思いますが、どうか私達とラーズ様を信じて待っていてください」

ブレイブ「はい…………… わかりました」

その頃、デルカダール城下町

ジールとエドが見回りをしていた

ジール「よし、見回りはこれで大丈夫なはずだぞ。戻ってバンさん達に報告しよう、エド」

エド「城下町の見回りってつまんねーの。前にやった外の見回りの方が楽しかったぜ」

ジール「そう言うなよ、エド。これだって兵士の大事な仕事なんだからさ」

エド「仕事だからって言われてもつまらねえとなー」

話しながら城に戻る二人の前に数人の人達がすれ違った

エド「なんかいつもこの広場や商店街通ると人が大勢いるよな」

ジール「そりやあこの城下町で一番といってもいいくらい人が集まりやすい場所だからな。これくらい当然だって」

エド「ふーん、皆ここを使うって事かー……………!？」

エドは近くをすれ違った一人に驚いている

ジール「ん？エド？どうした？」

ジールはエドが後ろを見続けている事を疑問に思った

エド「……………いや、なんでもねえ」

ジール「?そうか?まあ、戻ろうぜ」

エド「ああ(人間………か?今のやつ。どこか魔物みてえな、変な匂いがしたぞ)」

それから数日後

ラースは医療部屋ではなく、マルティナと同じ部屋で過ごしていた

マルティナ「どう?ラース。そろそろお城に慣れてきた?」

ラース「はい、もうバツチリです。よく教えていただくのもあるんですけど、やっぱりこのお城も俺の家だからですかね?何となく部屋を知ってるんです」

マルティナ「それはよかったわ。でも、そろそろその口調直さない?そんなよそよそしくしないでいいのよ。もっと気楽に話してほしいわ」

ラース「それもそうですね。あつ、そうだな。イレブンさん……イレブン達とも大分仲良くなれてきたし、ずっとこの口調ってのも変だよな」

マルティナ「ええ、その方がいいわ。ラース、今日は私と城下町に降りてみましょう。初めてでしょ?」

ラース「お城の外か！確かに初めてだ。また案内頼んでいいか？マルティナさん」

マルティナ「…………… ええ、もちろん。それじゃあ行きましょう」

デルカダール城下町

ラース「うわく…………… 窓から見てたけど、結構広いんだな」

マルティナ「ええ、そうね。旅人なんかだとよく迷っちゃうらしいのよ。そのために案内板も作ったの」

ラース「そうなのか。でも…………… この景色を見ると、どこか暗いな気持ちになるような、そんな気分ですね。不思議です」

マルティナ「そう…………… よね。でも、暗くなっちゃったなら明るくいきましょう！色んなところ回ってみましょう。新しい発見があるかもしれないわ」

ラース「ふふ、そうだな。それに何か食べたくなってきた。一緒にご飯食べようぜ、マルティナさん」

マルティナ「ラースらしいわ。一緒に食べましょう」

その頃、大広間

ビルとマドリーがやって来ており、グレイグと話していた

グレイグ「どうしたのだ、二人とも。折角来てもらったのに悪いが、実は色々あつて忙しくてな。早めに伝えてくれると助かる」

ビル「お忙しい中すみません、グレイグ様。少々気になった事がありまして、マルティナ様達にお伝えしなければと思つたんです」

二人は真剣な顔をしている

グレイグ「気になった事？」

マドリー「はい。実はここ数日、この城下町で怪しい魔力を感じるんです。この魔力が魔物特有のものでして、しかもこの魔力………かなり強いです」

グレイグ「!?それはつまり………凶悪な魔物が人間に化けている………と?」

ビル「可能性はあります。場所までは特定出来ませんが、これは私達かブレイブさんのような魔物で無ければ気づけないかと思ひ、報告に参りました」

マドリー「そういえば………この城から魔物の気配がありません

ね。ブレイブさんは？」

グレイグ「数日前から用で城にいない。ビル達が報告に来てくれなければわからなかっただろう。ありがとう、二人とも。皆に報告して、対策をしておく。もし本当なら大変な事になる前に手を打たなければ」

ビル「そうだったんですね。お力になれたようで何よりです。それではお忙しい中失礼しました」

マドリー「お仕事頑張ってくださいねー」

ビルとマドリーは去っていった

グレイグ「城下町に魔物か。急いで皆に報告しなければ。まずは王と姫様達からだな」

グレイグは玉座の間に向かっていった

その頃、レース達は

レース「おお！美味しいな、この肉！」

レースは酒場で大きな肉にかぶりついていた

マルティナ「よかった。少しずつだけど、レースらしくなってきたわ。このまま…… 思い出していけばいいけど。もし…… 本
当に記憶が戻らなかつたら私は…… いつまで頑張れるかし

ら」

マルティナはラースを見ながら少し気持ちが暗くなっていた

ラース「マルティナさん？」

マルティナが気付くとラースが心配そうにマルティナを見ていた

マルティナ「あ…………。ご、ごめんなさい、ラース。どうしたの？」

ラース「考え事してたのか？なんか………… 悲しそうな顔してた」

マルティナ「そ、そうだった？心配かけてごめんなさい、ラース。なんでもないのよ（私の馬鹿、ラースに迷惑かけちゃ駄目じゃない）」

ラース「ん………… 心配ってより、俺はマルティナさんのその顔、凄く嫌だったな」

マルティナ「…………… え？」

ラース「さっきの悲しそうな顔だよ。その顔見たら俺、何だか凄く嫌だった。なんでかはわからねえんだけど、マルティナさんにその顔は似合わねえなって思った」

マルティナ「ラース……………。ふふ、そうよね。ごめんなさ

い、ラーズ。嫌な思いさせて。私ももう少し食べようかしら」

ラーズ「あ、笑ってくれた。俺、マルティナさんのその笑ってる顔、好きだぜ。安心するっていうか、暖かい気持ちになれるんだ」

マルティナ「(そう。ラーズは全部忘れてるんじゃない。全部覚えてるわ、どんな事も全部。ただ、今は少しだけ思い出せないだけ。必ずラーズなら記憶を取り戻してくれる。それまでは頑張らなきゃ)」

その後、商店街

ラーズ「色々あるんだな、人も多くて賑やかで楽しそうだ」

マルティナ「そうね。こうやって皆が楽しく過ごしてくれてると王女としても嬉しいわ。あ、ラーズあつちにアイスが売ってるわ。一緒に食べましょう」

ラーズ「お！いいな、食べようぜ」

マルティナ「私はミントにしようかしら。ラーズは何が食べたい？」

ラーズ「俺はオレンジかな。美味そうだ」

マルティナ「わかったわ、じゃあ私が頼んでくるわね。ラースはこのベンチで待っていていいわよ」

ラース「ありがとな、マルティナさん」

ラースとマルティナは分かれてラースは奥のベンチに座った

ラース「(マルティナさん、明るくて面倒見がよくて優しい人だな。一緒にいると楽しくなれる。マルティナさんだけじゃない。イレブンさん達全員優しいし、明るいいい人達ばかりだ。そんな人達に囲まれていた俺は……… どんな人だったんだろうか)」

ラースが一人で考え込んでいると

??? 「ちよつといいかな?」

ラース「え?」

白い服を着た老人が話しかけて来た

??? 「ラースで合ってるよね?」

ラース「?俺がラースだけど……」

??? 「見つけた。ふんっ!」

老人はラースの胸に手を当てると、そこに力を込めた

ラーズ「え?..... うぐっ!」

ラーズは突然胸を押さええてうずくまった

老人「冷たい冷たい、氷に包まれる。さて、ラーズ、私についてくるがいい」

ラーズ「..... はい」

体を起こしたラーズからは目に光が無くなっていた

老人「ヒヒヒヒ」

老人とラーズはどんどん歩いていく

マルティナ「お待たせ、ラーズ..... って、ラーズ?」

マルティナは辺りを見渡している

マルティナ「どこいったのかしら?.....ここで待ってて言ったのに..... あら?あの後ろ姿、ラーズだわ!どこに行くのかしら」

マルティナは少し離れた人混みの中にラーズを見つけ追いかけていく

広場

エド「チエツ!また俺が見回りかよ。しかも今度はこの魔物の揭示

板も変えなきゃいけないなんてよ。まあ簡単だからいいけどよ、俺は早く特訓してえのに。

………ん？あそこにいるのってラース……將軍？なんでここに。確か記憶がどうのこうのって。しかも近くにいるやつ………変な匂いがあるな。あ、マルティナ………様もいる。ははーん、わかったぞ。デートってやつか！人間の女と男はよくやるってじじいが言ってたしな」

仕組まれた争い

しばらくして大広間

「グレイグにより全員集められていた

グレイグ「大変だ！姫様とラーズがいなくなったのだ！」

イレブン「え!?突然いなくなったの？」

グレイグ「姫様の部屋でラーズと一緒にいたはずなのだが、どこかに行つてしまわれたのだ」

ロウ「最近はラーズと姫はどうしておつたのじゃ？」

ベロニカ「私達と交代で様子を見たり、お城の中を説明したりしてたわ。今日はマルティナさんの番だったのよ」

セーニヤ「ラーズ様は最近お城の部屋などを全て覚えてきていて、一人でも一応城内は歩けるようになりましたわ」

カミュ「となると、マルティナはもしかしてラーズを外に出したんじゃないかねえか？少しくらいなら外に出した方がいいだろ」

シルビア「それはありそうだね、カミュちゃん！グレイグ、城下町は調べたの？」

グレイグ「いや、まだだ。しかし、今城下町に行ってしまったられるのはまずい」

ロウ「はて？どうしてじゃ？」

グレイグ「ビルとマドリーから報告があつてな。今城下町には人間に化けた凶悪な魔物が潜んでいる可能性があるらしいのだ」

全員「え!?!」

シルビア「それってとっても危ないじゃない！」

グレイグ「そうなのだ。だから姫様達にも城下町にラースを出させないように報告しようとしたら、既にいなくなっていたのだ」

ベロニカ「その魔物にバレてないといいけど………」

カミュ「俺達も急いで探しに行こうぜ！」

その時、見回りを終えたエドが戻ってきた

エド「あれ？グレイグ…… 將軍じゃん。何してんだ？こんな所でさ」

グレイグ「む？おお、エドか。見回りしていたのか」

セーニャ「あの、今城下町でラース様とマルティナ様を見ませんでしたか？」

エド「え？ラースとマルティナ？二人なら見たぜ」

全員「本当!？」

エド「お、おお。何だよ、ビックリしたな」

グレイグ「どこで見かけた!？」

エド「えっと…… 広場にいたらラースが一人で外に向かっていて、それをマルティナが追いかけてたぜ。デートってやつだろ？」

ロウ「外という事は…… 城下町の外の事か？」

エド「そうそう、近くに変な匂いのする怪しいやつもいてよ。ラーズがそいつについて行ってたんだ。それで少ししてマルティナもそれを追いかけていったんだ」

シルビア「ちよつ、ちよつと待って。それってもしかして……」

グレイグ「嫌な予感がする。エド、その怪しいやつの特徴は覚えてるか？」

エド「えく……。人が多かつたからあんまり。あ、でもかなり特徴的な匂いだからな。それを辿る事は出来るぜ」

カミュ「匂いを辿る？そんなブレイブやシロみてえな事がこの兵士に？」

グレイグ「よし、それなら案内を頼む」

エド「了解！こつちだぜ」

その頃、デルカダール地方

マルティナ「なんなのかしら、ラーズの近くにいるやつ。ラーズもどうしてついて行ってるの？」

マルティナはラーズ達の少し離れた場所でラーズ達を見ていた

マルティナ「どこに向かっているのかしら」

歩き続けていたラーズ達はふと足を止めた

マルティナ「あ!!」

ラーズ達は不思議な切れ目に入ってしまった

マルティナ「見失っちゃう!.....行かないと!」

マルティナも急いで切れ目に飛び込んだ

謎の建物

マルティナ「なに.....」

マルティナが切れ目に入ると、見た事もないボロボロの建物の中にいた

マルティナ「ラーズはどこに?あ!!」

マルティナが入ってきた切れ目は消えてしまった

マルティナ「戻れないって事ね。とにかくラーズを連れ戻さない
と」

その時、どこかから声が聞こえてきた

???「おやおや、誰かにつけられてると思えばマルティナですか。流石勇者の仲間であり、このラーズの妻なだけありますね」

マルティナ 「!? 誰!! ラースを返しなさい!」

??? 「それは出来ない。しかし、こんな簡単に勇者の仲間の一人、ラー
スが手に入るとは」

マルティナ 「ラーズを物みたいに言うんじゃないわよ!! どこにいる
の! 姿を表しなさい!」

??? 「おや、威勢のいい。勇者の仲間は全員揃えば強い力を持つと聞
く。だが、それも全員が揃わなければいいだけのお話。一人一人の力
なら対処も簡単だからな。たった一人でここに乗り込む勇氣は褒め
称えるが、たった一人で何が出来るかね?」

マルティナ 「一人だからって舐めるんじゃないわよ!」

??? 「では、その力を見せてもらおうとしましょう。行け!!」

マルティナ 「!?」

建物の周りから魔物の群れが続々と現れた

??? 「武器も無しにどこまでやれるか見物だな」

マルティナ「仕方ないわね、かかってきなさい！」

その頃、デルカダール城下町 広場

エド「ここら辺にラーズ達がいたんだ。それで外に出ていったんだ」

グレイグ「ふむ、ではその怪しいやつも外に？」

エド「ああ、そうだぜ。匂いも…… まだ僅かにあるな。やつぱり魔物みてえな匂いがするぞ。数日前にも嗅いだ事あるんだ。きつと同じやつだぜ」

ロウ「もしや、お主が姫の手紙にあった半魔人と言われておったエドという子かの？」

エド「ん？そうだぜ。じいさんも俺の事知ってたんだな」

ベロニカ「じゃあ、本当に魔物になれるの？人間みただけだ」

グレイグ「人間ではあるのだが、魔物の姿になれるんだ。魔物の群れで生活していたらしいからな」

カミュ「へく、そーいやそんな事書いてあつたな。本当がどうか疑つてたが」

グレイグ「エド、その匂いを頼りに案内できるか？おそろくその先にラースと姫様もいるはずだ」

エド「了解ー。まずは外だな」

デルカダール地方

エド「うーん…………… まずいな、外に出たら風があつたりしてわからなくなつちまつた」

エドは周りの匂いを嗅いでいるが、首を傾げている

セーニヤ「困りましたね。匂いが無いとなると、本当に足取りが掴めませんわ」

エド「いや、まだ何とかなるかもしれないぜ、姉ちゃん。借りるぜ、父ちゃん！」

エドは魔物の姿になった

シルビア「キヤツ！本当に魔物ちゃんみたいになつちやつた！耳に爪に尻尾まで。凄いわ、どうなってるの？」

エド「俺もなんでかはよくわからねえんだ。まあいいや、こうすれ

ば匂いもより細かく判断できる。えつとだな……………見つけた！こつちだぜ！」

イレブン「へく、そんな使い方もあるんだ。エドがいてくれて助かったよ」

グレイグ「よし、エドに続いていくぞ」

その頃、マルティナは

マルティナ「ふう、これくらいなら慣れてるわ！」

マルティナは群れを一人で倒しきっていた

???「おお、怖い怖い。どうやら中々やるみたいだ。それじゃあ兄とレースに会わせてあげるよ」

そう言うと、建物の奥に道が現れた

マルティナ「……………進めって事かしら。罨……………だろうけど、この先にレースが」

マルティナは意を決して道を進んでいく

少し進むと開けた場所に出た

マルティナ「レース!!」

そこにはレースと知らない男がいた

マルティナ「あなたがラースを連れ去ったやつね！ラースから離れなさい!!」

マルティナは男に向かっていく

マルティナ「しんくうげり!」

???「おおっと、危ないな。俺達はまだ出番じゃない。ここで勝ち残ったら俺達と戦ってもらおうか」

マルティナ「何をふざけた事を言っているの!」

???「ふざけてなんかない。さて、ラース。お相手がやってきたぜ」

マルティナ「ラース?相手ってどういう事?」

???「さあ、ラース。マルティナを殺せ」

ラース「……………はい」

ラースはマルティナに向かって猛スピードで距離を詰める

マルティナ「え……………」

ラーズ「はあ！」

バキイツ！

マルティナ「キャアアツ!!」

ドサア！

マルティナはラーズに殴り飛ばされる

マルティナ「ラーズ、どうして……」

ラーズ「マルティナ、あなたを倒します」

マルティナ「嘘……」

ラーズはまたマルティナへ向かっていく

マルティナ「くっ！あなた、ラーズに何をしたの!!」

??? 「ふふふ、少し小細工をただけさ。ラーズの心に氷を差し込んだ。魔法の氷だ。俺の言う事を聞くようになる氷をな」

マルティナ「なんですって!?!」

ラース「ハアアツ!!」

ドガアン!

マルティナ「!!なんて威力……。本気で……。きてるの?」

マルティナはラースの攻撃を回避するが、自身の後ろにあった柱を壊した威力に困惑している

???「さあ、やり返さないと君が倒れるぞ。俺達を楽しませてくれよな、夫婦同士の争いでな」

その頃、デルカダール地方

エド「あれ?ここで匂いが途切れてるぞ」

グレイグ「では、この近くにいるという事か?」

周りは草原が広がっており、特に隠れるような場所はない

ベロニカ「なにも見えないし、誰かいるように思えないけどね」

エド「おつかしーなー、こんな突然いなくなるか?」

ロウ「……………ん?何やらここに違和感があるのう」

セーニヤ「そうですね。僅かですが、不思議な魔力のようなもの

をここから感じます」

ロウとセーニヤは同じ部分を気にしている

シルビア「え〜？アタシにはわからないわ」

エド「この事だろ？俺も何か感じるし匂いも丁度途切れてるんだけど、わからねえんだよな」

エドもセーニヤ達と同じ場所を気にしている

カミュ「何も無い場所だぞ。ここからルーラでも使ったんじゃねえか？」

イレブン「魔物もルーラが使えるのかな？ここら辺？」

イレブンがセーニヤ達が気にしている場所に触ると周囲が光り始めた

全員「うわ!!」

光が収まるとそこには不思議な切れ目が出来た

セーニヤ「これですわ！不思議な魔力の正体は！」

グレイグ「おお！こんなものが！流石はイレブンだ！」

シルビア「この先にラーズちゃんもマルティナちゃんもいるのね」

エド「凄え、今の光つてもしかして、勇者なのか？あんだ」

イレブン「一応元、ね。まだ力は少し残ってるみたい」

ベロニカ「皆、入ってみましょう！」

全員「うん！」

謎の建物

??? 「聖なる光…………。勇者達が嗅ぎ付けて隙間をこじ開けたか。どうやってこの切れ目の場所まで…………。まあいい、兄にこの事態をバレないようにしないとな」

氷の力

謎の建物

イレブン「な、なに？この場所。僕らが旅してた時こんな場所来たことあったっけ？」

カミュ「記憶にねえな。どこか遠く離れた場所である事は確かだ」

???「どうやってここまで来たのかはわかりませんが、来てしまった以上相手するしかないようですね」

全員「!？」

奥から真っ白な体をした人型の魔物がやってきた

ロウ「お主がラースを連れ去ったやつじやな。ラースと姫はどこじゃー！」

???「まあそんな事は置いておきましょう。まずは俺の紹介から。俺はフロツズ。フリツズの弟です」

フロツズはそう言うのと腰を綺麗に90度に曲げて挨拶した

セーニヤ「こ、こちらこそよろしくお願いします」

セーニヤがそれに続いてお辞儀をした

ベロニカ「ちよつとセーニャ！こんなやつにお辞儀なんてしなくていいのよ！早くラースとマルティナさんを返しなさい！」

フロツズ「それは出来ません。なぜならもう二人はお終いですからね」

グレイグ「どういう意味だ!!二人は無事なんだろうな!？」

エド「な、なんだよ…… あいつから感じる不気味な感覚は。凄く……… 冷てえ」

シルビア「二人をどうするつもりなの！」

フロツズ「本来なら俺達の目的は勇者達の全滅。そのために一人一人ここに誘い込んで始末する手筈だったんです。まずはその手始めにデルカダール王国にいるラース、マルティナ、グレイグを狙ったのです」

全員「!？」

イレブン「僕達の全滅!？」

「カミュ「んな事させるわけねえだろ！」

ベロニカ「そうよ！第一あんた達なんかにはやられるほど私達は誰一人弱くないわ！」

フロツズ「おやおや、あまり私達を舐めないでいただきたい。一人一人なら俺達の力があればあなた達を無力化させる事など容易い。まあ、こうして仲間が大勢いると厄介ですが。現に俺達はラーズとマルティナを仕留めたと言っても過言ではないのです」

全員「!？」

ロウ「ラーズと姫がお主達に敗れたじゃと!？」

グレイグ「そんなはずあるわけないだろう！」

フロツズ「それなら見てもらうのが早そうですね。まあ……………俺を倒したらの話だけだな!!」

フロツズはそう力強く言うと、力を溜めた

パキパキパキツ!!

建物全体がそれに呼応するかのようになり氷漬けになっていく

全員「なに!？」

フロツズ「さあ、貴様らも俺の氷の一部となってもらおう!!」

その頃、マルティナ達は

マルティナ「くっ……………ハア……………ハア……………」

マルティナは何箇所か痣や傷がついている

ライス「……………」

一方でライスには全く傷もなく、疲れもない

マルティナ「ライス……………あなたはそんな事で簡単に支配なんか
されない人よ!目を覚まして!!私はあなたの味方よ!」

ライス「……………!……………」

ライスは一瞬体を止めるが、すぐにマルティナに向かい始めた

マルティナ「(やっぱり、言葉は僅かでも届いてる。ライスに目を覚
ましてもらえばあんなやつの思い通りにはならないはず)」

ライス「ハア!!」

ライスはマルティナに蹴りをいれる

マルティナ「ふっ！」

マルティナはそれを身を捻って避ける

マルティナ「ラース!!」

マルティナはラースに抱きついた

ラース「!!」

マルティナ「お願い、戻って」

ラース「ハア!!」

ラースはマルティナを投げ飛ばした

マルティナ「キヤアア!!」

ドゴン!!

マルティナ「うっ……………」

マルティナは壁に強く打ち付けられる

フリッツ「…………… つまらん。ラースが一方的では何も面白く
などない。どれ、俺が最高に面白くしてやろう」

フリッツはそうとうとマルティナに向かっていく

マルティナ「!?あんたさえ倒せば！」

フリッツ「出来るかな？お前一人に」

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階上昇した

マルティナ「ばくれつきやく！」

フリッツ「効かん！」

ガキン！ガキン！

フリッツは自身の体を氷のようにさせた

マルティナ「なんなの！こいつ！」

フリッツ「ハア!!」

フリッツはマルティナに近づき、胸に手を当てた

マルティナ「あ……………」ドサ

フリッツ「ヒヒヒ。さて、これでマルティナも俺の駒。マルティナ、起きろ」

マルティナ「ぐうっ………… 私は………… 貴様なんか」

マルティナは歯を食いしばっている

フリッツ「!?まさか耐えているというのか!なら、もう一つ差し込んでやろう」

フリッツは再びマルティナに手を当てた

フリッツ「ハア!」

マルティナ「あ…………… (駄目………… 私は…………… ラースと戦いたくない。だって…………… ラースは私の…………… たい…………… せつな)」

マルティナの目から光が無くなった

フリッツ「さてマルティナよ、ラースを殺せ」

マルティナ「はい」

ラース「!」

マルティナ「てやああ!」

マルティナはラースに突っ込み、蹴りかかる

「ラースはそれを避ける

ラース「!？」

ラースが避けた先にマルティナが回り込んでいた

マルティナ「ハア！」

バギイ！

ラース「ぐっ」

二人は互いを殴り、蹴り、投げ飛ばしたりなどを激しく繰り返している

フリッツ「ヒヒヒヒ、ああ最高だ。信じていた仲間を、家族を自身の手で殺すがいい」

フリッツは去っていった

その頃イレブン達は

グレイグ「蒼天魔斬！」

フロッツ「残念、ハズレだ」

フロッツは砕かれたように見えたが、別の場所から氷となって現れた

セーニャ「これではキリがありませんわ！」

シルビア「ベロニカちゃん、炎で溶かせないの？この氷」

ベロニカ「全部魔法の氷よ。私の炎では溶かせないわ！何とかしないところちが消耗するだけなのに！」

フロツズ「マヒヤデドス！」

氷で出来た場所全てから巨大な氷の塊が降り注ぐ

カミュ「グハア!!な、なんつー広範囲なんだよ！デタラメすぎるだろ！」

ロウ「イレブンよ、氷といえど元は水じや。わしらの事は気にするな。ギガデインであやつの場所を割り出すんじや！」

イレブン「わかった！皆、痺れるかもしれないけどごめんね！ギガデイン!!」

ドオオン!!

凄まじい雷が周りを襲った

グレイグ「ぐっ、少しピリピリするな」

フロツズ「ほう、なるほど。やはり勇者は厄介だ」

フロツズが氷から現れた

カミュ「ようやくお出ましたな！逃がさないぜ、デュアルブレイカー！」

フロツズ「ぐっ！流石の連携力ですね。では、こんなのはどうでしょう」

フロツズがそう言うのと周りは冷たく濃い白い霧に覆われた

セーニヤ「私にお任せください！霧なら風ですわ！バギムーチョ！」

ヒュオオオオ!!

巨大な竜巻が発生するが、霧は全く晴れない

セーニヤ「え!?!どうしてですか!?!」

フロツズ「この霧は俺の体だけでなく、氷全てから絶え間なく出ている。一時的に風が吹いただけではすぐに元通りです。さあ、いきますよ」

ベロニカ「キヤア！」

シルビア「ベロニカちゃん!?キヤツ!」

ロウ「何が起こっておる!周りがよく見えんわい!」

イレブン「皆、一旦くつつくよ!離れないで!」

フロツズ「ふふ、そんな事では防げ、ぐあ!!」

ドサ!

フロツズが誰かに倒される音が聞こえた

全員「え?」

エド「よつと!」

エドが魔物の姿でイレブン達の前に来た

エド「おい、勇者達!お前らあいつが見えてねえのか?」

カミュ「あ、ああ。エド、お前は見えてるのか?」

エド「当たり前だぜ。匂いもあるし、こんな霧程度なら俺には効か

ないね。俺はお前らほど強くないけど、手助けするぜ！」

フロツズ「な、なんだ！こいつは！魔物……ではないな！ぐっ！
こんなわけのわからないやつに！」

フロツズはイレブン達に向かっていく

エド「緑色の姉ちゃん、右からあいつが来るぜ！」

セーニヤ「こちらですか！」

フロツズ「何!？」

ガキン！

フロツズの攻撃はセーニヤの盾に防がれた

ロウ「ゴツドスマッシュ！」

フロツズ「グアアア!!チツ！」

ベロニカ「また見えなくなったわ！」

エド「やべ！俺だ！」

グレイグ「なら俺が！」

グレイグがエドの前に出た

フロツズ「これでもくらいやがれ！連続斬り！」

ガン！ガキン！

フロツズは氷で何度も斬りつけてくる

グレイグ「俺には効かんぞ！」

フロツズ「くそう！！マヒヤデドス！」

イレブン達の周囲から巨大な氷の塊が降り注ぐ

エド「マヒヤデドスだ！ど、どうすんだよ！」

イレブン「カミュ！ベロニカ！」

カミュ「言われなくても！デュアルブレイカー！」

カミュのブーメランが氷を切り裂いていく

ベロニカ「メラガイアー！」

巨大な炎により、氷は全て溶けた

少しすると霧が晴れてきた

シルビア「あ！霧が無くなったわ！」

フロツズ「ゼエ……ゼエ……」

フロツズがかなり息苦しそうにしている

フロツズ「クソが!!俺を倒したからって兄に敵うと思うなよ!!兄にかかれば、てめえらなんざバラバラになっちまう!勇者共はお終いだ!!」

イレブン「僕達は負けない!バラバラになんてならない!ギガブレイク!」

フロツズ「ガアアア!!」ジュワー

フロツズが消えると周りの氷も全てなくなった

エド「す、すっげ〜……。あんな怖えやつ本当に倒しちゃった」

ベロニカ「当然よ!私達に敵うやつなんかいるわけないわ。でも、今回はエドがいなかったらまずかったわね。ありがとう、エド」

グレイグ「ああ、そうだな。エドの力に随分助けられた。感謝する」

セーニヤ「エド様のお鼻も目もとってもいいのですね！羨ましいですわ！」

エド「へ、へへ。だろ？俺ってば群れの中でもよく目や鼻を頼りにされてたからな！俺の自慢なんだぜ！」

ロウ「じゃが、これ以上エドを巻き込むわけにはいかんのう。エド、わしらが戻ってくるまでここで待っておるんじや」

エド「え？俺は平気だぜ？じいさん」

カミュ「さつきみたいこれから戦闘続きになる。そうなったらもしエドを狙われたりすると俺達も守ってやれるかわからねえ。俺達は大丈夫だからここで待っててくれよな」

エド「そ、そりやあ戦闘はあんた達の方が強えけどよ………でも！またさつきみてえなやつがいるかもしれねえぞ！まだこの先にはあいつの兄がいるんだろ？似たような事してくるかもしれない！そうなったら俺の力が必要だろ？」

シルビア「そうだけど、私達も考えて対応すれば大丈夫。それよりもエドちゃんが危険な目にあってほしくないのよ。それにもう充分エドちゃんには助けられたわ」

イレブン「うん。エドにはこの場所まで連れてきてもらって、さっきの戦闘でも助けてくれた。それだけで本当にありがたいんだ。だからここで待っていて。必ず戻るからさ」

エド「…………… わかったよ。俺はここから動かねえからな！絶対戻ってこいよ！ラーズとマルティナも連れてこいよ！」

グレイグ「ああ、約束する。待っていてくれ」

ベロニカ「行きましょう、皆。ラーズとマルティナさんを早く見つけないと」

遮断

その頃、ラースとマルティナは

二人「ハア……………ハア……………」

二人とも身体中に傷痕や血がついており、どちらも満身創痍といった状態だむた

ラース「グツ……………ハアアア!!!」

ラースはマルティナに大振りで殴りかかる

マルティナ「!ヤアアア!!!」

マルティナもラース目掛けて殴りかかる

バギツ!!

二人「うぐっ!」

お互いの拳が顔に当たり、お互いの顔がくっつくくらいまで近づいた

ラース「……………!」

マルティナ「クツ!……………」

ラース「ウツ……………」

ラーズはマルティナの顔を見ると頭を押さえ始めた

ラーズ「ぐううう………」

パリイン！

どこかから小さく割れるような音が聞こえた

その音と同時にラーズの目に光が戻ってきた

ラーズ「!?こ、ここは……… マルティナ!?」

マルティナ「ハアアア!!」

マルティナは混乱しているラーズに飛び蹴りをしていく

ラーズ「うおっ！お、おい、マルティナ!!どうした!?俺がわからねえのか!?!」

マルティナ「ラーズ……… あなたを殺し……… ます」

ラーズ「な!?!」

バタバタバタバタ！

イレブン「あ!!皆、ラーズとマルティナがいたよ!」

カミュ「よかった！無事だったんだな！」

グレイグ「姫様！ラーズ！怪我はありませんか!?!」

ベロニカ「ちよつ、ちよつと!!二人ともボロボロじゃない!どうしたのよ！」

ラーズ「皆!!今は来るな!!」

全員「!?!」

マルティナ「ハアアア!!!」

ラーズ「クソツッ！マルティナが操られてる！」

ロウ「確かに姫から怪しげな魔力を感じる。それに姫がラーズに殴りかかるなどありえん」

セーニヤ「先程のフロツズという方がいつていたお終いというのはこの事だったのでしょうか」

シルビア「酷いわ！これじゃあ手が出せないじゃない！」

ラーズ「マルティナ!!!」

マルティナ「!？」

ラーズはマルティナに向かって飛びかかり、マルティナに乗りかかった

マルティナ「!!……………!……………!」

マルティナは必死に暴れて抵抗するが、ラーズが押さえつけている

ラーズ「マルティナ、大丈夫だ。俺は敵じゃない。俺はラーズ、君の仲間であり、ずっと君の隣にいと誓った。大丈夫、大丈夫」

ラーズはそのままマルティナにキスをした

マルティナ「!？」

マルティナは驚いた表情をした後、パタリと抵抗をやめた

パリイン！

イレブン「ん？何かが割れた音？」

ラーズ「マルティナ？」

マルティナ「……………な…な」

ラース「な？」

マルティナ「何してんのよー!!!」

バギイツ!!

ラース「グボアツツ!!」

ドガアン!

赤面したマルティナに思いつきりラースは殴り飛ばされた

マルティナ「ハア……………ハア。あ、あら？私、確かここで氷みた
いな変なやつに」

グレイグ「姫様、元に戻られましたか！よかった……………」

マルティナ「み、皆！どうしてここに……………
今のかもしかして、
今の見てた!?!」

ベロニカ「あ、あ……………マルティナさん、仕方ない事なのよ」

マルティナ「!!もうっ！ラーズ!!何してくれてるのよ!!」

マルティナは再び顔が赤くなっている

ラーズ「イテテ…… マルティナ、お前操られてたんだ。俺を殺すとか言っつてな。こっちは何とか解いたんだぞ」

マルティナ「あやつられ…… そ、そうだわ！ラーズ、あなたも操られてたのよ。最初は私にラーズが襲いかかってきたの。それを解こうとしてたら、氷みたいなやつに私も……」

ラーズ「そうだったのか？じゃあこの傷は全部俺とマルティナが付けたって事か」

イレブン「じゃあ二人は操られてずっと戦ってたって事？なんてやつなんだ、酷い事するよ」

ロウ「どれ、二人とも傷が多い。わしとセーニャで治そう」

セーニャ「そうですね、ロウ様。まずはお二人ともご無事で本当によかったですわ」

ラーズ「そうだな、一旦そうした方がよさそうだ。体が痛くて思うように動かねえ」

マルティナ「お願いします、ロウ様。って、ラース？あなた記憶が……」

シルビア「あ!!そうじゃない！ラースちゃん、記憶は戻ったの!？」

ラース「そうみたいだ。皆にはまた迷惑をかけてしまったな。マルティナ、特に君に」

マルティナ「ううん、いいのよ。信じてたわ、こーやって記憶が元に戻ってくれるのを」

ラース「そうか。マルティナの信頼に応えられたようでよかった」

二人は笑顔で向き合っている

しばらくして

ラース「よし、傷も塞がったし体力も全快だ。ありがとな、セーニャ」

マルティナ「助かりました、ロウ様」

セーニャ「いえ、お力になれてよかったですわ」

カミュ「この先にあのフロツズの兄、フリッツとやらがいるんだよな。兄貴達を操る力。油断は禁物のようだな」

グレイグ「そうだな。フロツズも俺達はバラバラになるとか言っていた。充分警戒しておけ」

コツコツコツ

こつちに向かって誰かが歩いてくる音が聞こえてくる

全員「!!」

フリッツ「まさか心の氷を溶かされるなんてな。しかも勇者達全員が揃うとは。フロツズは何をしていたんだか」

シルビア「あなたね！ラーズちゃんとマルティナちゃんを操ったのは！許さないわよ！」

フリッツ「どうやら結局は俺の奥義に頼るしかないようだな」

フリッツはそういうと腕をクロスさせ、力を溜め始めた

フリッツ「ハアアア……………」

ゴゴゴゴゴ……………」

建物全体が揺れ始める

ラーズ「何か来るぞ！皆、気をつけろ！」

全員「うん！」

フリッツ「これが俺の最終奥義!!」

バギバギバギバギ!!

建物についていた氷がラーズ達を包むように巨大化していく

全員「な!!？」

フリッツ「全員バラバラになるがいい!!」

ロウ「いかん!!この氷からとてつもなく嫌な魔力を感じる！皆、離れるでない!!」

ベロニカ「セーニャ!!」

イレブン「カミュ!!」

しかしどんどん大きくなる氷に阻まれ、一人、また一人と厚い氷の壁の向こう側へと追いやられる

ラーズ「マルティナ!!」

マルティナ「ラーズ!!」

二人は互いに手を伸ばし掴もうとするが、後一步の所で伸びてきた氷によって阻まれた

フリッツ「ハア……………ハア。ヒヒヒ、さあ勇者達の絶望の檻、出来上がりだ」

フリッツの前にはイレブン達を包み、巨大な球体となった氷が出来上がっていた

フリッツ「さて、まずは一番厄介な勇者から」

そう言うとフリッツは消えていった

球体の中

イレブン「……………う。こ、ここは……………あれ?何も見えない」

イレブンは周りを見渡すが、真っ暗で何も見えない

イレブン「カミュ!ベロニカ!セーニャ!シルビア!マルティナ!おじいちゃん!ラーズ!グレイグ!いたら返事して!!」

シーン……………

周りはイレブンの声だけが響いている

イレブン「魔力でベロニカとかおじいちゃんの位置は……………あ、あれ？おかしいな。何も感じない。あんなに近くにいたのに」

フリッツ「当然だ、これは遮断の氷。氷の向こう側には声も気配も魔力も遮断する」

イレブン「フリッツ!! 一体どこに!」

イレブンはフリッツの声を聞き、警戒して見渡すが真っ暗の中見つける事は出来なかった

フリッツ「お前の大切な仲間はもういない、助けもこない。勇者も一人なら何もできまい。まずは勇者から倒させてもらおう」

イレブン「グアッ! くっ、どこから……………痛っ!」

フリッツ「マヒャデドス!」

イレブン「うわあああ!!」

フリッツ「絶対零度！」

イレブン「ガッ！」

パキパキパキ！

イレブンは氷像となった

フリッツ「マヒヤド斬り！」

フリッツは氷像越しにダメージを与える

パリン！

イレブン「ウツ……………」ドサ

フリッツ「もう手は抜かねえ。こうやって一人一人確実に倒してやる」

イレブン「べ、ベホマズン……………」

イレブンは全快した

イレブン「僕が一人だけだと思うな。僕には大事な、頼れる仲間達がいる」

フリッツ「ヒヒヒヒ！その仲間達はもうバラバラだって言っている

だろうが！」

イレブン「バラバラになんてなっていない！皆はこんな氷程度じゃあバラバラにならない！」ゾーンに入った　ちから、みのまもり、会心率があがった

イレブンの手の痣が光り始める

イレブン「皆!!!僕はここだ!!!」

イレブンの叫び声と共に光が溢れていく

フリッツ「うっ………　聖なる光。眩しい………」

しかし、光が止まっても何も起こらない

フリッツ「?ヒ、ヒヒヒヒ。何が僕はここだだ!だーれもここに気づくはずもない、来れるはずもない。思い上がるな、勇者!!」

イレブン「そっちこそ僕の仲間達を侮るな。皆、必ず来てくれる」

フリッツ「ヒヒヒヒヒ!間抜け話もいい所だ。だが、俺に遊んでい
る時間はないのでね。さっさと終わらせてもらおうぞ!」

集う心

その頃、仲間達は

カミュ「くそっ！どうなつていやがる。何も見えねえ上に誰もいないとはな。イレブン達が危ねえつてのにこんな事してる暇ねえんだよ！」

その時

ピカアア

カミュ「ん？この光だけ見える……………この暖けえ光……………これを持つてるやつなんて一人しかいねえよな。そこにいるんだな、相棒！待つてな、すぐに向かう！ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

カミュ「デュアルブレイカー！」

三人による一斉攻撃を氷の壁にぶつける

別の場所

ベロニカ「待つてなさい、イレブン。魔力かくせい！」

ベロニカの攻撃呪文の威力が二段階上がった

ベロニカ「思いつきりいくわよ！メラガイアー！」

巨大な炎の塊を氷の壁にぶつける

別の場所

セーニヤ「イレブン様、いつも道を指し示してくださりありがとうございます。私もすぐにそちらへ！さみだれ突き！」

セーニヤは槍で氷の壁に少しヒビを入れる

セーニヤ「どうか届きますように。バギムーチョ！」

巨大な竜巻が氷の壁を抉っていく

別の場所

シルビア「見つけたわ！イレブンちゃんの大事な力！アタシも必ずそこに行くわ！」ゾーンに入った　ちから　魅力　身かわし率があがった

シルビア「キラージャグリング！」

シルビアも氷の壁にヒビを入れる

シルビア「久々に本気パワーいくわよー！ほとぼしるー、アモくれ！」

シルビアのアモーレショットが氷の壁にぶつかる

別の場所

マルティナ「そこにいるのね、イレブン。今行くわ!!デビルモード

！」

マルティナの全能力が一段階上がった

マルティナ「一閃突き！」

マルティナの狙いを澄ました一撃が氷の壁を貫いていく

別の場所

ロウ「ほほ、流星はわしの自慢の孫じゃな。いつもわし達を導いてくれる。わしもそれに応えねばな。ゴッドスマッシュ！」

ロウも氷の壁にヒビを入れた

ロウ「これで充分じゃろう。グランドクロス！」

十時の攻撃が氷の壁にぶつかる

別の場所

ラーズ「この光、皆も気付いてるはず。俺も皆と一緒にいくぞ！ばくれつきやく！」

ラーズも氷の壁にヒビを入れる

ラーズ「何とか届けよ、岩石落とし！」

ラーズはいつもより一際大きな氷の岩を投げつけた

別の場所

グレイグ「イレブン、待っている。今すぐに向かう！オノ無双！」

グレイグが斧で氷の壁を抉っていく

グレイグ「うおおおっ！」

グレイグはそのまま手を離し、斧はそのまま氷の壁を壊しながら飛んでいく

イレブン達は

フリッツ「ハア！」

イレブン「ぐうっ！」

イレブンはフリッツに頭を掴まれ、持ち上げられた

フリッツ「さて、このまま凍らせてやろう。さよならだ、勇者」

バギバギバギバギ!!

二人「!？」

フリッツ「なんだ!?ま、まさか……………」

パリン!!

フリッツの周囲全てから氷の壁を突き破り、攻撃が飛んでくる

フリッツ「ギヤアアア!!!」

フリッツの叫び声と同時に周りを覆っていた氷の壁も消えていく

フリッツ「な……………何故だ。勇者の位置など……………わかるはずもないのに」

カミュ「あんな足止め程度じゃ俺達は止められねえぜ」

ベロニカ「大体私達はそんな薄い関係じゃないのよ」

セーニヤ「気配、魔力、それだけで私達が繋がっているわけではありませんわ」

シルビア「そうよ！アタシ達はもつと深い所で繋がってるの」

マルティナ「心。仲間を信じて思いやる心よ。それが私達をいつも繋げてくれる」

ロウ「目に見えずとも、何も感じなくとも、心はいつも仲間の声を感じる事ができる」

ラース「俺達は心で繋がった仲間達。お前達が思うほど簡単な仲間

はやってないさ」

グレイグ「履き違えたな。俺達は必ずイレブンの助けに来る。どんなに離れていてもな」

フリッツ「ふざけるな!!心?仲間?仲良しごっこもいい加減にしようがれ!!」

イレブン「僕達は遊びで仲間になってなんかない。皆、大切な想いや決意の下集まったんだ。そして絶対の信頼を得た。そんな仲間達だから僕は頑張れる。皆がいるから僕は勇者なんだ!」

フリッツ「夢物語を!!」

マルティナ「私達を侮るな!言ったはずよ、私達は一人じゃないつて」ゾーンに入った　すばやさ　魅力　会心率が上がった

リース「俺達はバラバラにならないし、マルティナともこれから一緒だ。お前程度にこの絆が壊せるかよ」ゾーンに入った　ちから　すばやさ　呪文の威力が上がった

イレブン「行くよ!」

四人の足元と上空に巨大な魔法陣があらわれ、全員で空にある魔法

陣に魔力を使い、雷を放つ！

四人「ミナデイン！」

フリッツ「ギャアアアアア!!!」ジュワー

イレブン「ふう………終わったね。まさかこんな大変な事になるとは思わなかったけど」

ロウ「ほほ、そうじゃのう。ラーズが記憶を無くした事からここまですで大きくなるとは」

マルティナ「ごめんなさい、私が迂闊だったわ。城下町に行こうって誘ったのが原因なの」

ラーズ「いやいや、大変だったけどこうして俺の記憶も戻ったし、敵も倒した。無事に終わったんだから悪いとかそういうのは無しだろ」

ベロニカ「そうよ、マルティナさん。マルティナさんは悪くないわ！」

グレイグ「そうですぞ、姫様。さあ帰りましょう、王もお待ちします」

ラース「そういえば皆はどうやってここに？俺は変な隙間から入ったんだが」

カミュ「お前のとこの兵士に半魔人のエドってやつがいただろ？あいつに案内してもらったんだ」

セーニヤ「魔物になられた時は驚きましたが、お鼻がとてもよくて羨ましかったですわ。それに青い毛もふわふわしてそうどこか可愛らしかったです」

イレブン「可愛い……かな？まあラースを追いかけるマルティナを見つけてその匂いを辿ってここまできたんだ」

マルティナ「そうだったの。エドにも感謝しないとね」

ラース「だな。まさかそんな所で役立つとは思ってなかったが」

エド「あ！おーい、勇者達ー！ラースとマルティナは見つけたかー！」

シルビア「ええ、皆無事よ！エドちゃんも待っていてくれてありがとう！」

エド「それならよかったぜ！おいラース、あまり皆に迷惑かけるなよな！」

ラース「ふっ、悪かったな。今回は助かったぞ、エド」

エド「へへ、俺が必要ならいつでも頼ってくれよな！」

その後、デルカダール城　大広間

医者「本当に元に戻られたようですね。安心しました、ラース様」

ラース「苦勞をかけたな。もう大丈夫だぜ」

医者「はい。デルカダール王様もバンさん達やマルス様、ブレイブ君達もこれで安心されると思います」

マルティナ「そうね、皆にも知らせないと。あ、でもイレブン達から聞いて皆飛んでくるんじゃないかしら。特にブレイブなんかはね」

ラース「ああ、そうだろうな。まずは謝罪しないとな、そこから詫びも考えておかないと」

マルティナ「あら、そんな話してたら」

マルティナ達は遠くから見えるマルス達の姿に笑っている

リースも苦笑いしながら迎える体勢に移った

ハロウィン

ラーズの記憶喪失から三ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

マルティナ「どう？バン。城下町の飾りつけは」

バン「順調ですよ、マルティナ様！俺達もちろんやってるんですけど、街の人達も大勢手伝ってくれて本当助かってます。皆楽しみにしてるみたいですよ」

グレイグ「国民達もお祭りやイベントが好きだからな。やはり皆に楽しんでもらいたい。順調そうで安心した」

ラーズ「俺達も手伝いたいが、ハロウィンのためにやらなきゃいけない事も多くてな。予算とか計画とかよ。手伝えなくて悪いな」

バン「大丈夫です！というか、本当なら俺もその書類等があるんですよね…………。ベグル、怒ってますかね？」

グレイグ「問題は無さそうだったが、多少ストレスは溜まってるかもしれないな。ベグルだって書類関係が好きなのではないからな」

ラーズ「まあバンにやらせるよりは早いからな」

バン 「酷い！そんなハツキリ言いますか!？」

マルティナ「まあまあ。その分こうやって動いて働いてくれるとベグルも喜ぶはずよ。バンにはバンの出来る場所で頑張らしましょう。報告ありがとう、バン。また何かあったら教えてね」

バン「はい！ありがとうございます、マルティナ様！それでは失礼しました」

バンは出ていった

ラース「にしてもハロウィンか。デルカダールに来る前はただの祭り程度にしか思っていなかったんだよな。まさかこんなに有名で大きなものだとは」

グレイグ「まあ俺達が国民達に楽しんでもらえるようにするためのイベントの一つだ。他の国でもこうやって国全体でお祭りにするのはよくある事だ」

マルティナ「私達も当日は仮装しましょう。ドレスやスーツだと雰囲気合わないし、楽しめないわ。私達から楽しむ姿勢を見せて皆にもどんどん受け入れてもらいましょう」

ラース「仮装か……。まあ楽しそうではあるな。やってみるか」

グレイグ「しかし、その衣装はどうされるのですか？」

マルティナ「前にイレブンが色々作ってくれたのがあるのよ。私やベロニカ達向けだったけど、頼めば男性向けでも作れるはずよ」

ラース「なるほど。イレブンなら嬉々として作ってくれそうだ。さて、後二週間もないんだ。頑張らないとな」

二週間後、マルティナとラースの部屋

マルティナとラースは用意した衣装に着替えていた。先にマルティナが終わり、ラースは時間がかかっているようだ

マルティナ「大丈夫？ラース。手伝いましょうか？」

ラース「い、いや…………… もう少しで巻き終わるから大丈夫だ」

コンコン

グレイグ「姫様、ラース、入りますぞ」

ガチャ

グレイグ「姫様はもう終わっていたのですね。魔女ですか、似合っておりますぞ」

マルティナ「ええ、ありがとう、グレイグ。ふふ、グレイグも雰囲気あるわよ」

マルティナは黒い帽子や少し大きめの服を着ており、魔女のような小さな箒を。グレイグは頭に金具がついていたり、顔に傷痕や血の跡をつけフランケンのようになっていた。服も少し破けたような跡がついている

グレイグ「まさかここまで衣装に力を入れてくれるとは思いませんでした。イレブンもユグノアで衣装作りに励んでいたおかげですな」

マルティナ「本当ね。ラースが結構大変な衣装？だから時間かかるのよ」

グレイグ「なるほど。どんな姿なのか気になりますね」

ラース「終わったー。これなら動きやすくなっただろ」

マルティナ「あ、お疲れ様。あら、いいじゃない。マミーらしさが出てるわよ」

ラースの体には包帯が巻き付けられているという簡単なものだったが、包帯も血がついているように見えたり、色が白や黒っぽくなっている部分もあり汚れているようにも見える

グレイグ「まだ包帯が床に余っているがそれはいいのか？」

ラース「イレブンが全身に巻いてって言ってたけどよ、それだと動けねえし息しづらいからな。これで勘弁してくれ」

ラースは頭と首、腕と胴体に包帯が巻かれており、足や一部はそのままとなっている

マルティナ「それでも充分だと思っわ。お菓子は持った？」

ラース「ああ、持ったぜ。というか、持たないと大変な事になりそうだ」

グレイグ「王は既に興奮していたマルス達を連れて城下町に向かいました。俺達も行きましよう」

デルカダール城下町

城下町にはたくさんのお店が並んでおり、至る所にかぼちややコウモリの置物が置いてある。広場全体もオレンジや黒に塗り替えられている。周りの人達も様々な仮装をして賑わっている

マルティナ「思ってたよりも飾り付けが凄いわね。私達が最初計画していたよりもずっと広範囲になってるわ」

グレイグ「バンの言っていたのはこの事だったんですね。これは確かに皆が協力してくれたのでしょう。ありがたいですな」

ラーズ「なあ、ブレイブ達はどうしたんだ？城にいなかったんだが」

マルティナ「あ、そつか。ラーズは早く着替えに移ったから知らないだったわね。ブレイブとコロは今日城下町のカフェで本物の魔物役だそうよ。お客さんを驚かすみたい」

グレイグ「俺達も行ってみるか？」

ラーズ「そうなのか、少し興味あるな。働いてる姿は見た事なかったし、後で行ってみるか」

バン「あ！師匠！、マルティナ様！、グレイグ將軍！」

少し離れたところから黄色と黒の線が入った服を着て頭に耳をつけたバンがやってきた

バン「お疲れ様です！どうですか！この城下町！皆で頑張った成果ですよ！」

マルティナ「ええ、本当凄いわ。さつきも三人で感心してたの。皆もお疲れ様。こんなに頑張ってくれてありがとう」

グレイグ「バンも仮装しているのだな。その格好は何だ？」

ラース「おそらくキラーパー……いや、犬だな」

バン「ちよつ、何で最初合つてたのに変えたんですか!? 似合いますか? キラーパンサーの格好ですよ!」

グレイグ「ふつ、バンらしいぞ。バン一人だったのか?」

バン「いえ、メグとマサルでさつきまで回つてたんですけど飲み物買つてきてくれるみたいだったので待つてたんです」

マルティナ「あら、そうだったの。邪魔してごめんなさい。そういえばマルス達見てないかしら?」

バン「マルス達ですか? ここでは見てないですね。広場のお店が並んでる場所ならいるんじゃないですか? マルス達あいう場所好きじゃないですか」

ラース「確かにな。それじゃあ観光しながら向かってみるか。じゃあな、バン」

バン「あ!! ま、待つてくださいい師匠!」

ラーズ「ん？まだ何かあったか？」

バン「はい！もうそりやあ大事な用事ですよ！師匠、トリック オ
ア ト、トレート？です！」

ラーズ「ぷっ、アハハハ!!」

グレイグ「くくっ……… バン、流石だな」

マルティナ「ふふふ、今日はハロウィンだもんね。大切よね」

三人はバンの言葉に楽しそうに笑っている

バン「あ、あれ!?変でしたか!?あ、それともお菓子持ってませんか
？俺、いつでも悪戯の準備できてますよ！三人にするのは少し勇気が
りますけど」

ラーズ「はあ、笑った笑った。バン、それを言うならトリック オ
ア トリートだぞ。まあ面白いからいいけどよ。残念だったな、ほ
ら。菓子やるよ」

グレイグ「俺もな。マドレーヌだ」

マルティナ「私は飴よ。因みにどんな悪戯するつもりだったの？」

バン「やった!!ありがとうございます!悪戯はですね、これをそつと背中に貼るんですよ!」

バンが取り出した紙には私は酔っ払いになり、大衆の皆様にも多大な迷惑をおかけしました。と書いてある

ラーズ「いや、それ前にお前とギバが酔っ払って俺や酒場のマスターに迷惑かけた時のやつじゃねえか。何で持ってたんだよ」

バン「偶然残ってたんです。これを貼って街中歩いてもらいます!」

グレイグ「そ、それは中々嫌なものだな」

マルティナ「もう誰かに試したの?」

バン「ロベルトが菓子持ってなかったんでこれをもう既にやりましたよ。さつきも広場の近くでいろんな人にクスクス笑われました」

ラーズ「ご愁傷様だな。お、メグとマサル君が来たな」

メグ「あら、ラーズ様、マルティナ様、グレイグ將軍。こんにちは。皆様も仮装しているんですね」

マサル「見た事ある人」

マルティナ「メグさん、こんにちは。マサル君もしかして覚えてくれたの？嬉しいわ」

バン「メグ、飲み物ありがとな。師匠達と話してて喉乾いてきてたんだ」

グレイグ「どれ。俺達もそろそろ広場に向かうとしようか」

ラース「そうだな。メグ、お祭り楽しんでくれよな。バン、あまり羽目外しすぎるなよ。じゃあな」

バン「俺だけ忠告!? わかっていますよ！師匠達も楽しんでください
ね」

ハロウィン2

デルカダール城下町 広場

ラーズ「お？あそこにいるのはベグルとジェーンさん、それにダバンとミラさんもいるぞ」

ベグル「あ、ラーズ將軍、マルティナ様、グレイグ將軍」

ダバン「おお、三人とも仮装してるんですね。クオリティが結構高いです」

マルティナ「ふふ、ありがとう。皆は仮装しないの？」

ミラ「こんにちはは、マルティナ様、グレイグ將軍、ラーズ將軍。それが聞いてくださいよ。折角だから皆で仮装しようとしたらダバンとベグルさんったら恥ずかしいのか遠慮してくるんですよ」

ジェーン「先程あちらの方に自由に使っていいという衣装がたくさんあったのでそちらをお借りしようとしたんです」

グレイグ「そんなものまで。だからこんなにも仮装している人達がいるのだな。それならベグル達もやってみるといいじゃないか。皆でやっていればそこまで恥ずかしくもないだろう」

ベグル「いやー……俺はあまりそういう衣装とか着れる人じゃないですし」

ダバン「ま、まあ楽しそうとは思いますが」

ミラ「もう！ダバン、楽しそうだと思うならどんどんやっていきましょう！今日は一年に一回しかないのよ？私がダバンに似合うやつ選んであげるから」

ミラはダバンを引っ張っていく

ラース「はは、普段とはまた違う一面が見れるな。少し面白れえや」

ジェーン「私達も行こうよ、ベグル君。私あれがいいな、黒猫のやつ。可愛いしさ」

ベグル「く、黒猫!?待つんだ、ジェーン！もっと控えめなやつにした方がいい！」

ジェーン「え？そう？じゃあ魔女とかは？」

ベグル「わかった、わかったから！ジェーンのは俺が選ぶから一緒に行くぞ」

ジェーン「ふふ、わかったよ。ラーズ將軍、マルティナ様、グレイグ將軍楽しみましょうねー」

マルティナ「ベグルは何をそんなに焦ってたのかしら？」

ラーズ「…………… まあ、わからなくてもないが」

グレイグ「ベグル、お前も大変だな」

マルティナ「？」

ベロニカ「あ！マルティナさん達だわ！」

シルビア「本当だわ！三人ともすっかり仮装してるのね」

商店街の方から天使の格好をしたベロニカと悪魔の格好をしたセーニヤ、黒猫の格好をしたシルビアがやってきた

セーニヤ「魔女にミイラ男にフランケンですか。作り込まれてるのですね」

マルティナ「ベロニカ、セーニヤ、シルビア。皆も来てくれたのね」

ベロニカ「私達、色んなところ回ってるのよ。さつきはユグノアに、この後はクレイモランとダーハル―ネに行くの。どこもハロウインのお祭りやってるのよ」

ラーズ「へー、ハロウインってそんなに色んな街でやってたのか」

シルビア「うふふ、皆にも聞いちゃおうかしら」

セーニヤ「あの合言葉ですね」

三人「トリツク オア トリートー！」

ベロニカとセーニヤとシルビアは楽しそうに息を合わせて言ってきた

グレイグ「ふっ、残念だったな。菓子は用意してあるのでな。ほら、持っていくといい」

マルティナ「そうね。はい、私からも」

ラーズ「ほらよ。特にセーニヤなんかはこれ目当てなんだろ？」

ベロニカ「なーんだ、用意してあったんだ。まあ仮装して街にまで

来てたら当然よね」

セーニヤ「ありがとうございます！」

マルティナ「因みにどんな悪戯するつもりだったの？」

ベロニカ「そういえば悪戯は考えてなかったわね。皆の事だからきつとお菓子を持つてると思ってたわ」

シルビア「ふふ、アタシに任せて。これで顔に悪戯書きするのよ」

シルビアは黒いマジックペンを取り出した

ラース「はは、古典的だけど気になるやつだな」

セーニヤ「そういえば先程、商店街の方でデルカダール王様とマルス様達にお会いしました」

グレイグ「本当か。俺達も合流しようとしていたのだ」

マルティナ「商店街の方にいたのね。私達も行ってみましょう」

ベロニカ「あ、でもね。マルス達友達と一緒にだったわよ。デルカ

「ダール王様も付いてはいたけど、自由に楽しんでもらうだけみたいだったわ」

「ラース」そうだったか。マルス達はそれで構わないが、王様の事だ。お菓子をいろんな所から貰ってくるんじゃないか？」

「グレイグ」容易に想像がつく。健康のためにも止めなければ」

「シルビア」あら、でも今日くらいいいんじゃない？王様も城下町に降りているんな人と話せて嬉しそうだったわ」

「マルティナ」まあ……そうよね。お父様は殆ど城下町に降りる事はなかったから。今日くらいは目を瞑りましょう」

「ラース」了解。それじゃあ近くまで来たし、ブレイブ達のいるカフェにでも行ってみるか」

「グレイグ」広場の近くだったのだな。行ってみようか」

「セーニャ」ブレイブ様達がカフェにいるのですか？」

「グレイグ」ああ。ブレイブがよくそこで働いていてな。今日はハロウィンだから本物の魔物役としてコロも一緒にいて盛り上げている

ようなのだ。中々人気がいいぞ」

ベロニカ「へー！凄いじゃない、私達も気になるわ。セーニヤ、シルビアさん行ってみましょう」

マルティナ「じゃあ私達と一緒に行きましょう」

シルビア「アタシもブレイブちゃんが働いてる姿見たいわ！」

ラース「俺達も見たい事なかったんだ。少し楽しみだよな。エプロンしてるみたいだぜ」

カフェ モーデン

カラン

コロ「キャン！キャン！」

マルティナ「あら、コロ。お出迎えしてたの？」

マルティナは扉を開けてすぐの場所にいたコロを撫でている

コロ「グルグル」

店員「まあ！マルティナ様！それにラース様にグレイグ將軍まで

！」

グレイグ「突然すまないな。ブレイブ達が働いていると聞いて様子を見に来たのだ」

ラース「普通に客として来たから気にしないでくれ」

ブレイブ「ガウ!?ガウガウ！」

厨房からブレイブが驚きながらやってきた

ベロニカ「ブレイブもコロも特に何も着てないのね。エプロンしてるんじゃないの?」

店員「今日はハロウィンなのでそのままの姿にしてるんです。ブレイブちゃん、案内よろしくね」

ブレイブ「ガ、ガウ……」

ブレイブは後ろを度々見ながら歩いていく

シルビア「ついてきてつて言ってるわね。ふふ、ちゃんとお仕事はするなんて偉いわ」

ブレイブについていくと大きめのテーブル席についた

セーニャ「席もしつかりと把握されてるのですね！流石ブレイブ様ですわ！」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブはメニューを啜えて持ってきた

ラース「へえ、しつかり啜える部分が作られてるのか。頑張ってるじゃないか、ブレイブ」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブはラースに満足気に吠えた後、戻っていった

マルティナ「ねえ見て、ラース。メニューにこんなのがあるのよ」

マルティナが指す場所にはキラパンサーとベビーパンサーを模した大小のホットケーキが載っている

グレイグ「こっちはベビーパンサーの飲み物もある。中々似てるぞ」

ベロニカ「可愛い！私頼んでみようかしら」

ラース「完全に店の人気者だな。ブレイブも店員と仲よさそうだし、楽しそうだ。コロも皆に撫でられて嬉しそうだな」

その後

ブレイブ「ガウガウ」

ブレイブが注文した物を背中に乗せて持ってきた

シルビア「凄いじゃない、ブレイブちゃん。バランス感覚がとってもいいのね」

セーニャ「ありがとうございます、ブレイブ様」

マルティナ「この後シルビア達はクレイモランに行くのよね？」

シルビア「そうよ。これを食べ終わったら行こうと思ってるわ。あっちでも目一杯楽しむつもりよ」

グレイグ「俺達はどうする？商店街に行ってみるか？」

ラース「だな。俺達ももう少し楽しもうぜ」

ベロニカ「それならさつき面白い場所見つけたのよ。商店街でゲームをやっけて、その点数によって商店街で使える商品券とか貰えるんですって」

グレイグ「ゲームか。どんなゲームなのだ？」

セーニャ「それはですね。ダツ」

答えかけたセーニャをシルビアが慌てて止めた

シルビア「ストップよ、セーニャちゃん。凄く面白いゲームだったからマルティナちゃん達もぜひやってみたらどうかしら？内容は行ってみるまでのお楽しみ！」

マルティナ「なんだか隠されると余計気になるわね。行ってみましょうか」

ラース「だな。まあ俺達が商品券を貰ってもって感じはするけどな」

ハロウィン3

デルカダール城下町 商店街

ガヤガヤ

商店街の人達や観光客もマルティナ達の姿を見てざわめき始めていた

マルティナ「皆、驚いてるみたいね。あまり私とグレイグはここま
で来る事はなかったから」

グレイグ「そうですね。やはり商店街なだけあって人も多いで
すな。それに店にもいろんなハロウィンの装飾がされていて今の雰
囲気と合っていますな」

ラース「皆ー、俺達の事は別に気にしなくていいからなー。俺達も
ハロウィンで楽しんでるだけだー」

ラースが少し大きめに声をあげるとざわめきも少し落ち着いた

マルティナ「ありがとう、ラース。街に来てるだけあって皆もラ
ースには慣れてるのね」

ラース「まあな。俺の息抜きがこんな場面で役立つとは思わなかつ
たけどな」

男性「あ、あの、マルティナ様、ラース様、グレイグ將軍。もしお時間ありましたらよければゲームをやっつけていきませんか？」

ドラキーの格好をした男性が少し緊張した様子で話しかけてきた

グレイグ「ゲームか。先程友人からこちらで面白いゲームをやっていると聞いた。もしやその事か？」

男性「あ！そうなのですか！商店街ではこのゲームで今盛り上がっているので、おそらく我々の事だと思われれます。よければぜひ！」

マルティナ「楽しそうね。私達もやらせてもらおうね」

男性「ありがとうございます！こちらにご案内しますね」

男性についていくと人混みの中に空いたスペースがあり、そこには大きな桶があった

ラース「これは……？水の中にリンゴ？とレッドベリーだな」

グレイグ「看板にダックアップルとある。聞いた事がないな」

男性「こちら、ダックアップルというゲームでしてこの桶の中に水が張ってあるんですけど、そこにあるリンゴとレッドベリーを手を使わずに口だけで取るゲームなんです。」

レッドベリーが一つで一ポイント、リンゴが一つで三ポイントとなります。その合計得点に応じて様々な商品をご用意しております。一度に三名様まで同時に参加可能なんですよ」

マルティナ「へー、面白そうじゃない！きつとベロニカ達もこれをやったのよ。ラース、グレイグ、私達もやりましょう」

グレイグ「し、しかし、口だけでリンゴなどを掴むようなはしたない行為はあまり国民達に見せては……………」

ラース「まあまあ。マルティナがやりたいって言うてるんだし、俺達が楽しくやれば周りもきつと楽しんでくれるさ。グレイグ、俺達がこの祭りを大きくしている目的は？」

グレイグ「……………民達に祭りを楽しんでもらうためだが……………」

ラース「だろ？じゃあ俺達から楽しむ姿勢を見せないとな」

グレイグ「だが、王女としてだな」

マルティナ「三人でお願いするわ」

男性「ありがとうございます！」

グレイグがラースと言ひ合ひをしている間にマルティナは男性と受付を済ませていた

グレイグ「姫様ー!!!」

グレイグの怒ったような呆れたような声が響いた

その後

男性「制限時間は九十秒です！それでは……… 開始です！」

三人は合図と同時に近くにあるリンゴやレッドベリーを啜えた

マルティナ「ん……… 結構…… 掴みにくいわね」

グレイグ「むう………。レッドベリーすらも小さいおかげですぐに離れていってしまう」

ラース「お、コツ見つけたぜ。ヘタの部分なら安定して掴めるぞ」

ラースは早速リンゴを啜えてカゴに入れた

マルティナ「なるほど。よし、私も」

マルティナもレッドベリーをカゴに入れた

グレイグ「（これまでの最高ポイントは28ポイント。少なくとも

リンゴを10個。三人でおおよそ三個取れば………勝てる！」

グレイグもリンゴを一つカゴに入れた

九十秒後

男性「タイムアップ！お疲れ様でした！大丈夫ですか？」

マルティナ「ちよつと顎が疲れたわね」

グレイグ「顎なんて普段使いませんからね」

ラース「へへ、結構取れたな。これは最高ポイントいったらろ！」

男性「確かに中盤から追い上げが素晴らしかったですよ！これは期待できますね。それではカゴの方を預からせてもらって数えさせていただきますね」

男性が数えた結果

男性「おお!!三十六ポイント！先程のレディ・マツシブチーム様を追い抜きました！」

グレイグ「レディ・マツシブ？」

マルティナ「(その名前……)」

ラース「(誰だか丸わかりだな)」

ラースとマルティナは苦笑いしているが、グレイグは顔をしかめている

男性「おめでとうございます！三十五ポイントを超えたので商品はこちらになります！」

男性が持ってきたものは城下町の商品券10000Gだった

グレイグ「おお、本当に商品券を貰ってしまうとはな」

男性「それとわざわざマルティナ様達に盛り上げるためとはいえ、このような事をさせてしまったお詫びにこちらもどうぞ」

男性は頭を下げながらユグノア牛の上質な肉も渡した

ラース「うおおお!!マジか!!」

ラースは目を輝かせている

マルティナ「ええ?!いいのよ、そんな事気にしないで。私達から頼んだんだから」

男性「それでもですよ。このようなお祭りを開催していただいて、私達がいつも楽しく過ごせるのも一重にマルティナ様達のおかげで

す。これはほんの私達からのお気持ちです」

ラーズ「そうか！そこまで言われたら受け取らないわけにはいかないな！なあ！マルティナ！」

マルティナ「もう、ラーズったらその欲望に溢れた目をやめなさい。でも、そう言われたら受け取らないわけにはいかないわね。ありがとう、こちらこそ皆がいてくれるからこっちも頑張れるのよ」

男性「ありがとうございます！」

その後、ラーズ達は城に向かっていた

ラーズ「く♪」

ラーズは肉を抱えて上機嫌だ

グレイグ「全く。食べ物的事となるとお前はいつもああだな。恥ずかしいから控えてくれ」

ラーズ「いやー、それは無理ってもんだ。好きなもんを目の前に出されたらそりゃあ飛びつくだろう」

マルティナ「その気持ちはわかるけどね。取り敢えずお肉は早くお城に持ち帰らないと」

リース「だな、コックも驚くと思うぜ。……………ん？城前に誰
かいるぞ」

グレイグ「む？本当だ。誰か用事が有ったのだろうか。閉めていて
申し訳なかったな」

ハロウィン4

??? 「お、きたきた」

そこには黒いスーツに赤い蝶ネクタイをつけて、帽子を深く被った
ラースより少し大きめの男性が立っていた

顔は帽子を深く被っているせいで見えない

マルティナ「…………… ごめんなさい、今お城開けますね」

グレイグ「城に用事か？すまないが顔を確認させてほしいのだが」

二人は顔の見えない男性を怪しんでいる

ラース「……………」

ラースはその男性を驚愕の顔で見つめていた

??? 「まあそうだろうな。だが、確認は必要ないはずだぜ。もうわか
ってるやつもいるみたいだしな」

謎の男性はラースの元へ歩いていく

ラース「お、お前……………」

??? 「久しぶりだな、俺の事覚えてるだろ？」

マルティナ「？ラーズの知り合い？」

グレイグ「ラーズ？大丈夫か？様子がおかしいぞ」

ラーズ「なんで……………」

???「おいおい、今日はハロウィンだぜ。それに、まさか忘れたのか？お前のライバルの顔をよ」

謎の男性はそう言うと言った

マルティナ「あ!!あなたは！」

グレイグ「なんだと!!」

ギルグード「久しぶりだな、ラーズ。元氣そうで安心したぜ」

ラーズ「ギルグード!!!」

ラーズは肉を放り投げてギルグードに飛びついた

ギルグード「おっとと、って！肉捨てんなよ!!」

た
ギルグードはラースを受け止めながら投げられた肉もキャッチし

嬉しいぞ!!」
ラース「そうか!!ハロウィンだもんな!!またお前とこうして話せて

嬉しいぞ!!」
ギルグード「今日限りだけだな。本当ならじいさんのはずだったんだが、俺に役目を渡してくれてな。代わりに俺がきたってわけだ」

ラース「へへ、へへへ。じいちゃんの方が嬉しかったけどな。ギルグードでも別にいいや」

ラースは涙を流しながら笑っている

ギルグード「あ!!てめえ、そんな事言うのか!」

ラース「久しぶりだ、ギルグード!おかえり!」

ギルグード「!?..... ああ、ただいまだ。ラース」

デルカダール城 客室

マルティナ「はい、紅茶でよかった? コーヒーもあるわよ」

ギルグード「あ、いえ、気にしなくて大丈夫ですよ」

グレイグ「しかし、どうしてお前がここに？お前は死んだはずだろう？」

ラーズ「ガラツシユの村にもハロウインはあったんだ。だが、今日のようなお祭りではなくて、そのハロウインは死者を招くものだったんだ」

二人「死者を招く？」

ギルグード「俺達の村でハロウインというのは、一年に一度命の大樹から死者が自分の家族や友人の家を訪ねるものだったんです。その日一日だけは選ばれた死者と生者がこうして一緒の時を過ごすんです」

マルティナ「そんな日だったの。だからさっきの理由がハロウインだから、なのね」

ギルグード「はい。だから俺は早速ガラツシユの村に行ったら誰もいなくてですね。ラーズがいるであろう場所、デルカダール城下町に来たんです。歩いてくるの結構大変だったんです」

ラーズ「祭りに浮かれてすっかり忘れてたぜ。悪いな、ギルグード」

ギルグード「てめえ、俺だったからよかったものの本当にじいさん
だったらここまで絶対来れないからな。あの何も無い村にずっと一
人でハロウインを過ごす事になってたんだぞ！わかってんのか!？」

ラース「ぐ……………」

ギルグード「まあいいけどよ。それにしてもこうして話すのは初め
ましてですね、マルティナさん、グレイグさん。いや、一度俺が死ぬ
前にグレイグさん以外の勇者様達とは話してはいますが、あれはまあ、
ノーカウントで」

マルティナ「そうね。知ってるとは思うけど、デルカダール王国で
王女をやってるラースの妻、マルティナよ。よろしくね、ギルグード」

グレイグ「俺はここで王の騎士をしているグレイグだ。以後よろし
く頼む」

ギルグード「じゃあ俺も自己紹介しないとだな。俺はガラツシユ
の」

ラース「ガラツシユの村で守人をやってたギルグード。俺のライバ
ルであり、親友だ。因みに恋愛経験無し。女性を前にすると途端に気
持ち悪い性格になるやつだ」

ギルグードに割り込んでラースが紹介をした

ギルグード「てめえ……なにいらねえ情報まで言っただよ!!
マルティナさんに変なやつみたいに思われたらどうしてくれんだ!!」

ラーズ「お前なんか変なやつでいいんだよ!!俺のマルティナに変な
気を起こしてんじゃねえぞ!!」

マルティナ「大丈夫よ、ギルグード。別に変なやつなんて思っ
てないし、昔のラーズから救ってくれたのはあなたでしょ?一度ちゃんと
お礼を言いたかったの。ありがとう、ラーズを友達にしてくれて」

グレイグ「懐かしいですね。確か村にあるあの大樹の場所でギル
グードがラーズに声をかけたのが始まりでしたな」

ギルグード「へ?えつと………なんでそれを?」

ラーズ「あー、色々あつて俺の幼少期の記憶を見られたんだ」

ギルグード「な、なるほど。まさか感謝されるとは思ってもなかつ
たぜ。でもなマルティナさん、ちよつと勘違いしてるぜ。確かにこい
つとは親友だけどよ、それよりもライバルって感覚の方が大きい。仲
良しこよしってわけじゃねえんだぜ」

ラーズ「俺だつてお前と仲良しこよしなんてしてたまるか」

グレイグ「よかったらギルグードも夕飯と一緒に食べないか？王や子ども達、ブレイブもいるがもてなすぞ」

ギルグード「いや、俺は死人だからな。食べ物はいらないんだ。腹が空くとかなくなったからよ。でも、折角来たんだ。食事はいらんないが、一緒にはいようかな」

マルティナ「わかったわ。色々お話ししましょうね」

その夜、バルコニー

ラースとギルグード、マルティナは三人でお酒を飲んでいた

マルティナ「今日は月が綺麗ね。月見酒だわ」

ギルグード「羨ましい……。俺も酒をまた飲みてえ」

ラース「羨ましいだろ、ほくれ、ほくれ」

マルティナ「もう、ラース。あまりからかわないの。かわいそうじゃない。それなら今度お墓にお酒持っていくわね」

ギルグード「いや、流石にそこまで気を使わないでください、マル

ティナさん。こいつのじいさんから言われたんです。偶に程度で構わないって」

ラース「それにしてもなんだか丸くなったな、ギルグード。もつと前までは突っかかってただろ」

ギルグード「まあな。だが…………… お前が心の中で俺や村の事をずっと気にしてたのを見て、こう…………… 気持ちが変わったというか、俺の想像以上に重く捉えてた事が気になってな。偶には穏やかに過ごしてやるのもいいなと思ったんだ」

ラース「ギル……………」

ギルグード「はは、俺に湿っぽい話は似合わねえな！楽しく行こうぜ！あ、そうだマルティナさん！こいつの幼少期の恥ずかしい話教えてあげますよ！」

ラース「あ、馬鹿!!何言おうとしてんだ！」

マルティナ「ふふ、そんなのあるの？気になるわね」

ギルグード「こいつの初恋なんですけど、村の女の子に猛アピールした上で」

ラーズ「馬鹿ギルド!!!」

ラーズは顔を赤くしながらギルグードに殴りかかった

ギルグード「あつぶねっ!!」

ラーズ「てめえ、人の黒歴史を嬉々として話そうとすんじゃねえよ」

ギルグード「ハッハッハッ！悪い、悪い。口が滑っちゃまった。お、痛みがなくなってるぞ。ほら、ラーズ。持ってこいよ、まだ飲むんだろ？」

ラーズ「誰がそんな手に乗るか！その隙に話す気だろうか！」

ギルグード「いやいや、話さねえから。ほら、行ってこいって」

マルティナ「まだお酒残ってるし、お酒だけつてのも体に悪いわ。私が行くわ」

ギルグード「いやいや、女性が動く必要なんてないですよ。ほら、早く行けって」

ラーズ「チツ！絶対話すなよ！」

ラーズは渋々バルコニーから走ってキッチンに向かった

ギルグード「いやー、すみませんね、マルティナさん。あんなやつ
のどこに惚れたのか俺には全くわかりませんが、いつもラーズを支
えてくれてありがとうございます」

マルティナ「そんな事ないわ。私だつてラーズに支えてもらつてば
かり。ラーズは私をただのマルティナでいさせてくれるの。王女と
か、姫とかそんな外見だけじゃなくて中身のままでいさせてくれる。
それがとっても嬉しいのよ」

マルティナは優しく笑つてそう言った

ギルグード「…………… そうですね。マルティナさんにとってラー
ズが必要不可欠なのはよくわかりました。あいつは変に周りに気を
使うし、色々先回りしたりするくせ自分の事は蔑ろにするやつですけ
ど、これからもどうか、馬鹿で不安定なあいつを支えてやってくださ
い」

ギルグードもマルティナに釣られて優しく笑い、バルコニーから月
を見上げた

ギルグード「そろそろ時間切れみたいです」

ギルグードの体からは光が出ていた

マルティナ「やつぱり。なんとなくラーズを無理矢理追い払うよう
に見えたから…………… ラーズには別れを伝えないの？」

ギルグード「はい。あいつとの別れは本来なら俺が死んだ時に済ませました。二度も必要ありません。また悲しませるわけにはいけません。俺も、じいさんも、ガラツシユの村の全員が皆さんを見守っています。いつまでもお幸せに」

そう言うとき、ギルグードの姿はなくなった

バタン！

それと同時にバルコニーの扉が強く開かれた

ラーズ「ハア…………ハア。マルティナ、その話は嘘だからな！！……………あ、あれ？ギルグードは？」

ラーズが額に汗を浮かばせながらやってきた

マルティナ「もう帰っちゃったわ。時間切れだったみたい」

ラーズ「へ……………な、なんだよ、それならそうとさえいけばいい。しかもカッコつけて俺のいないうちに去るなんてよ。ちよつとくらいお別れを言わせるよな」

ラーズは少しキョトンとした後、バツが悪そうな顔をした

マルティナ「本来なら彼が死んだ時に別れは済ませたから二度も必要ないって、悲しませたくなかったみたいよ。ガラツシユの村全員が私達の幸せを見守ってくれてるんですって、嬉しい限りだわ。そんなにも私達を、ラーズを想ってくれてるなんてね」

ラース「そうか……………もう少しくらい一緒にいたかったぜ」

ラースは弱々しく呟いた

マルティナ「ラース……………。ねえ、ガラツシユの村での話、聞かせて。二人はよくどんな遊びしてたの？」

ラース「え？構わないが、どうした？突然」

マルティナ「だってそうやって思い出を話していれば、記憶の中の彼と一緒にいれるわ。それじゃ駄目かしら？」

ラース「……………。はは、そうだな！流石マルティナだ！いいぜ、どんどん話してやるよ。俺達はな、よく村の奥に山に続く林があつてな。そこで遊んでたんだ」

楽しく話す二人を月は静かに照らしていた。まるで、見守るかのよう

障害物競争

ハロウィンから二ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

ラース「なあ、マルティナ。大丈夫か？」

マルティナ「え？何が？」

ラース「最近また体動かしてないだろ？痛くなったり無理してないか？」

マルティナ「ああ、そういう事ね。それなら平気よ。まあ動かした
い気持ちはあるけどね」

ラース「それならよ、一週間後今やってる仕事も落ち着くだろ？そ
の日に皆で集まらないか？」

マルティナ「あら、いいわね。でも突然どうしたの？」

ラース「俺の元にカミュから手紙が来てな。来週イレブン達と一緒に
ここに遊びに来るそうなんだ。皆で久しぶりに遊ぶのもいいなと
思ってた。特に俺なんか一人だけ省かれた時あるからよ。リベンジ
だ」

マルティナ「ふふふ、まだ気にしてたの？ 私は賛成よ。それならグレイグも誘ってみましようか」

ラーズ「それで遊ぶ内容を少し考えたんだ。耳貸してくれ」

マルティナ「相変わらず先読みしてるのね。まあいいわ、なに？」

ゴニヨゴニヨ

マルティナ「なるほど。私達も体を動かさせて楽しめるってわけね」

ラーズ「駄目か？」

マルティナ「私は構わないけど、皆はどうかしら？」

ラーズ「そうだな……………。お！使えずに困りそうなアレがあるよな、それとあれを組み合わせ……………」

マルティナ「(皆、驚くんじやないかしら。一応お手紙で先に知らせておかないと)」

一週間後、訓練場

ラース「よー、お疲れ様。皆、話があるから少し集まってくれ」

ラースがブレイブを連れてやってきた

兵士達「はい！」

バン「師匠、どうしましたか？今日はお休みでは？見習い達も一部帰っちゃいましたよ」

ラース「いつものメンバーが揃っていれば大丈夫だ。俺達も休みなんだ。お前達にも少し遊んでほしいと思っつてな。遊びに誘おうとしてるんだ」

ダバン「遊び？俺達ですか？」

ギバ「あ！もしかして、どっか連れてつてくれるんですか!？」

ガザル「それはありがたいです！」

ラース「残念ながらどこにも行かないぞ。強いて言うならこの地方全体だな」

ロベルト「結構範囲が広いですね。何やるんですか？」

ラース「障害物競争だ。知ってるだろ？」

ベグル「障害物競走って、障害物を避けたり壊したりしながら進む競走の事ですよね」

マーズ「それを俺達が？」

ラース「ああ。二人ペアで進んでもらって、一番早く最後の障害を潜り抜けたらそいつらが優勝。優勝ペアにはこのデルカダール城下町で使える商品券10000Gと、お前らのため用の度数が高くないけど上物の酒セット。それとクレイモラン特産のホツカイマグロをプレゼントだ」

全員「おお!!!」

ギバ「やります!!めっちゃやる気出てきた!」

バン「俺も俺も!楽しそうだし、こんな豪華なものもらえるならやらない手はないよな!」

ロベルト「ラース將軍、俺達は7人ですよ?一人余るんですが」

ブレイブ「ガウ」

ラース「そうだな。だからそこにはブレイブが代わりに入ってもら
う。ペアは先に俺がくじ引きで決めといた。ペアはバンとブレイブ、
ベグルとロベルト、ギバとマーズ、ダバンとガザルだ」

バン「俺がブレイブとか。よろしくな、ブレイブ！一緒なのはユグ
ノアの時以来だな」

ブレイブ「ガウ」

ラース「一応参加者は兵士達だけじゃないが、それも一部だけだか
らな。ほぼお前達向けだ。ルートはここ、訓練場が開始で城下町、デ
ルカダール地方、デルカコスタ地方にいつてデルカダール神殿の中が
ゴールだ。それまでに障害物は九個ある。頑張れよな」

マーズ「でもラース將軍。ブレイブがいるとなると障害物を早く走
り抜けられるバンとブレイブのペアが有利じゃないですか？」

ラース「ああ、そんな心配いらないぞ。皆、平等だからな。あと大
事な事が一つあった。皆、もちろん武器は持ったな？」

全員「武器？」

ダバン「なんで武器なんですか？競走ですよね？」

バン「まあそれは持つてますけど、なんで？」

ラース「すぐにわかるから大丈夫だ。まず一番最初の障害物は」

ラースは地面に手を置いた

ゴゴゴゴゴ

全員「え!？」

バンとブレイブのペア以外の地面が盛り上がり、周りを覆った

バン「え!?!皆!？」

ブレイブ「ガウ!？」

ラース「俺が障害物だ」

全員「えええ!？」

バン「ちよっ、どういう事ですか!?!師匠が障害物!？」

ラーズ「俺と戦ってここ、訓練場から出れたら一つ目の障害クリアだ。さあ行くぞ！」

その頃、デルカダール地方

マルティナ「ごめんなさい、皆。ラーズが無理を言ったみたいで」

ベロニカ「別にいいわよ。私達だって全員を最後まで通さなかったらあの商品貰えるんでしょ？私達には別にスイーツまで用意してくれてるんだし、それならやるっきゃないわ」

シルビア「そうね。それに久しぶりにアタシも体動かさないとイケなかったから丁度いいわ」

ロウ「(わしとグレイグには特別にあの本もくれると言っておったな。ほほ、これはやる気が出てくるわい。ラーズには感謝せんとな)」

マルティナ「それじゃあ私はデルカコスタ地方だから戻るわね。皆も本気は出さなくていいからね。トレーニングだと思っただろうかい」

三人「はい」

その頃、訓練場

ラーズ「ばくれつきやく！」

バン「さみだれ突き！」

ブレイブ「ガウ！」

攻撃しているラーズに横からブレイブが噛み付いてきた

ラーズ「よっ！ほっ！」

ラーズは身を翻してブレイブを避けた後、バンに再び攻撃を始めた

ベグル「これ、いきなり障害物がキツすぎないか？」

ギバ「全くだよな！ここで負けたらいきなりアウトだろ？だー！
ラーズ將軍が相手とか聞いてねえ！」

ロベルト「障害物は九個。最初がラーズ將軍となるとおそらく残りの八個は……………」

ガザル「おいおい、まさか障害物は勇者様達のメンバーって事か？」

マーズ「可能性が高い。おそらくこんな感じで攻撃してくるのだから
うな」

ダバン「これは…………… 楽しめるのか？地獄の始まりの間違いじゃ」

バン「師匠！通してください！」

ラース「全く、少しは頭を使え。いつ俺が障害物は倒せと言った。潜り抜けたらとも言ったし、ここから出れたら一つ目の障害はクリアだとも言ったぞ。意味わかったか？」

バン「あ、なるほど。無理矢理でも通ればいいんですね。って、じゃあ通させてくださいよ！」

ラース「そしたら障害物の意味がないだろ。こっちだって本気でやろうなんて思っていない。遊び感覚だ。だから隙をついたり、頭を使えば追いかける気はないぞ」

バン「俺、馬鹿なんですよ！そんなのわかりません！」

ラース「いや、開き直るな。じゃあなんとかしてみせろ」

バン「師匠の意地悪ー！」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブがバンを引っ張って自分に乗せた

バン「うおっ！や、やった！ブレイブが乗せてくれたー！」

ブレイブ「ガウガウ！」

バン「お、なるほど！それなら行けそうだな！流石ブレイブ！」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブはバンを乗せてラースがいる出口に向かっていく

ラース「(なるほどね) 行かせないぜ！マヒヤド！」

バン「俺に任せろ！さみだれ突き！」

バンは上から降ってくる氷を槍で砕いていく

ラース「ばくれつきやく！」

ラースは向かってくるブレイブに向かって攻撃する

ブレイブ「ガウ！」

ラースの足を足場にブレイブはラースを飛び超え、出口を潜り抜け

た

ガツン！

バン「へブツ！」

ドサ

バンは出口に顔が当たりブレイブから落ちた

ラーズ「……………そこは避けようぜ、バン」

バン「痛えく……………鼻血出てきた。くっそー、ブレイブのバーク
！」

ラーズ「わかったから早く行け。第一の障害クリアだ」

ラーズは座ったままのバンを蹴り上げた

バン「痛い！ま、まあクリアしたならいつか！待てよ、ブレイブー
！」

ラーズ「さて、次はベグルとロベルトだぜ。どう来るか楽しみだな」

デルカダール城下町

バン「うわ、人っ子一人いねえじゃん。こんなに静かな城下町初め
てみた」

ブレイブ「ガウ……」

いつもは賑わっている城下町も今日だけは何故か誰も外に出ておらず、店も閉まっている

バン「となると、これはやっぱりここにも誰かが」

ヒュン！

ブレイブ「ガウ！」

バン「へ？」

ザクツ！

バン「痛えー！！ブ、ブーメラン！という事は！」

ブレイブ「ガウガウ！」

ブレイブは突然飛んできたブーメランを避けたが、バンは反応しきれずに当たってしまふ

カミュ「第一の障害の兄貴はクリアしたみてえだな。流石バンとブレイブだ。第二の障害物は俺だぜ」

屋根からカミュがブーメランを構えていた

バン「やっぱり……。カミュさん、俺とカミュさんの仲じゃないですか。こんな事やめましょう、俺はただ商品券がほしいだけなんですよ」

カミュ「なるほど。バン達は障害物を潜り抜けたらその商品が貰えるって事か。それなら尚更通すわけにはいかねえな。俺だって兄貴特選の酒はほしいんでな」

バン「うう……結局こうなるんですね。それならもうヤケクソですよ！ブレイブ、出口まで何とか走り抜けるぞ！」

ブレイブ「ガウ！」

カミュ「させると思ってたのか？ぶんしん！」

カミュは三人に分身した

バン「ま、まさか！人が全然いないのって！」

カミュ「これなら好きに放てるぜ。さあ、潜り抜けてみやがれ！デュアルブレイカー！」

三人の分身が一斉に攻撃した

バン「やっぱり!!って危ねえ！」

ガン!

バンに飛んできたブーメランを槍で弾いた

バン「ブレイブ、俺がなんとかするからさつきみたいにブレイブだ
けでも走って通れ!」

ブレイブ「ガウガウ!」

二人は攻撃を掻い潜りながら城下町の出口へ走った

その頃、訓練場

ベグル「つしやあつ!突破だ!」

ロベルト「よし!難関突破だな!」

ラース「面白くなってきたな。さて、次はギバとマーズだな」

ベグル「バンのやつ、先に進んでるはずだ。俺達も急ぐぞ!」

ロベルト「おう!」

デルカダール城下町 広場

バン「な、何とかここまで来た。あと少しで城下町から出られるぞ

！」

バンの腕などには避けきれずに当たった傷がついている

ブレイブ「ガウ、ガウ？」

バン「これくらい平気だ。ベグルに付けられる傷に比べたら痛くないかねえよ」

カミュ「どうやらもう一ペアが来たようだ。俺はそっちに行かせてもらおう。残りの道は頑張れよな、バン、ブレイブ。じゃあな」

カミュはそう言うのと城の方へ戻っていった

バン「え？や、やった！これはもう第二の障害物突破したも同然だな！よし、ブレイブ、走り抜けるぞ！」

ブレイブ「ガウ！」

二人は城下町の入り口へ向かって走っていく

その時

ブレイブ「ガウ!!」

バン「!?なんかくる！」

ヒュオオオオ！

バンとブレイブの一步手前に巨大な竜巻が出来上がった

バン「風魔法！という事は！」

セーニヤ「申し訳ございません、バン様、ブレイブ様。ここから先は私がお相手致しますわ」

家々の隙間からセーニヤが槍を構えて出てきた

バン「やつぱりセーニヤさんだ。うーん、中々簡単には通してくれないんだな」

障害物競争2

デルカダール城下町

ベグルとロベルトはカミユのブーメランに苦戦していた

カミユ「デュアルブレイカー！」

三人の分身による一斉攻撃

ベグル「どうしたもんか。被弾覚悟で駆け抜けるのが手か？」

ロベルト「いや、いい考えを思いついた。俺についてきてくれ、ベグル」

ベグル「よし、頼んだぜ、ロベルト」

ベグルとロベルトは家の隙間に入り込んだ

カミユ「どこいった？あの二人。広場の方に向かったようには見えなかったけどな」

ロベルト「よし、ここだ」

ロベルトは屋根に続くハシゴの前にきた

ベグル「なるほど。同じ高さにいれば関係ないってか」

ロベルト「それに距離がそこまで離れていないからブーメランで狙うのは少々不利なはずだ。その隙に俺達は屋根をつたって広場までいくぞ」

ベグル「了解だ。カミユさんがきても接近戦なら負けないはずだ」

その頃、広場では

セーニャ「一閃突き！」

バン「危ねえ！ギリギリ！」

バンは紙一重で攻撃を躲す

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブがやいばくだきを仕掛けるが、守備力が二段階上がっているセーニャには大きなダメージにはならなかった

バン「(ブレイブの攻撃が通っていない。やっぱりスカラの効果って凄えな。回復も出来るから長期戦になるとこつちが負ける。通り抜けたいけど、風が入り口を邪魔して通れない。倒すにも時間がかかりそうだ。あー、どうしたもんか)」

セーニャ「氷結らんげき！」

バン「超さみだれ突き！」

バンの強力な連撃がセーニヤの攻撃の隙をぬって直撃する

セーニヤ「キヤツ！スカラ越しでも中々痛いすわ、その技」

その時、入り口を覆っていた巨大な竜巻が消えていった

バン「(!!今が絶好のチャンス！セーニヤさんを足止め出来れば！
えっと、セーニヤさんといえば)」

ドサ

バン「イテテテ、あー、傷が。師匠につけられた傷が開いてきたー」

バンはお腹を押さえながら倒れ込んだ

しかし、演技だと丸わかりしそうなほどの棒読みである

ブレイブ「ガ、ガウ？」

セーニヤ「大丈夫ですか、バン様。私が今治しますわ」

セーニヤが心配してバンに近寄ってきた

バン「(今だ！)すみません、セーニヤさん！」

バンはセーニヤを追い越して走っていった

ブレイブ「ガウ……」

ブレイブも呆れたような顔でバンに続いていった

セーニャ「お元気になられたようでよかったですわ。あ……通
してしまいました」

その頃、屋根の上でベグルとカミュは戦っていた

カミュ「心眼一閃！」

ベグル「間に合え！ソードガード！」

ガキン！

カミュ「チツ！」

ベグル「ギリギリセーフ！（カミュさん、想像よりずっと接近戦ができる！）」

ロベルト「ベグル、そのまま下がれ！もう少して広場だ！」

ロベルトは先に屋根から飛び降りていた

ベグル「了解！それじゃあ失礼しますね、カミュさん！」

ベグルも続いて飛び降りようとする

カミュ「行かせるか！会心必中！」

カミュは降りるベグルに向かって殴りかかった

ベグル「げ!?その技は!グホア!!」

ドスン!

飛び降りようとしていたベグルに直撃して、体勢を崩されたベグルはそのまま落下した

ロベルト「ベグル!!大丈夫か!」

ベグル「な、なんとか……。接近戦ならとか思ってたけど、流石カミュさんだ。接近戦でもかなり強いな」

カミュ「まあそこから先は俺の範囲外だ。後は頑張れよな」

カミュは戻っていった

ベグル「範囲外?まだ入り口まであるだろ」

ロベルト「頑張れよなって事はまだ何かあるって意味だろうな。おそらくは」

セーニヤ「次はベグル様にロベルト様ですね。ここから先は通しませんわ」

ベグル「やっぱりか。しかし、セーニヤさんが相手か。勝負しにくいな」

ロベルト「いや、待て。セーニヤさんならいい作戦がある」

その頃、訓練場

ガザル「通り抜けた!!いいぞ、ダバン！」

ダバン「よし!なんとかあったか！」

ラーズ「おめでとさん。さあ、早く追いかけてな」

ガザル「バンなんか先にどんどん行ってるかもしれないぞ!俺達も急がねえと」

ダバン「だな。走るぞ！」

ラーズ「さて、次の参加ペアを呼んでくるか」

数分後

マルズ「父さん、僕もさっきのバンさん達みたいに父さんと戦わないとダメ？」

ルナ「私達バンさん達みたいに強くないよー」

リース「はは、流石に子どもと大人で同じ条件にはしないさ。お前達は二人で俺に二十回攻撃を当ててみる。それが出来たら先に進めるぞ」

マルス「それなら出来そう！」

ルナ「魔法でもいいの？」

リース「ああ、当てたらなんでも構わないぞ。俺は避けるからな。さあ、開始だ」

デルカダール地方

バン「やつと外に出れた。ここから先もきつと奇襲とかされるんだろうな。用心して進むぞ、ブレイブ」

ブレイブ「ガウ！」

バン「デルカコスタ地方に行かなきゃいけないからこっちだな」

ロウ「少々待つのじゃ、お二人よ」

バン「あ！ロウ様！」

ブレイブ「ガウ……」

二人は咄嗟に戦闘態勢を取った

ロウ「ほほ、そんなに身構えんでもよい。わしは四つ目の障害物じゃが、今までとは少し違うぞ」

バン「へ？違うってどういう事ですか？」

ロウ「ブレイブにはわからんだろうから見てもらうしかないのう。四つ目の障害物クリアはわしの問題に解けるかじゃ。要はクイズじゃな」

バン「え!!ず、頭脳系ですか!?ロウ様……俺、頭が弱いんですよ……」

バンは泣きそうな顔をしている

ロウ「ほほ、そうじゃったな。どれ、ならば少し簡単な問題にしようかの。わしから出す問題は三問じゃ。いや、バンには特別に二問だけにしようかの。全部正解できれば先に進めるぞ」

ブレイブ「ガウ〜」

ブレイブはバンを心配そうに見ている

バン「うう…… お手柔らかにお願いします」

ロウ「それでは一問目じゃ。この○に入る言葉は何じゃ？」

ロウが出した紙には

おひ○くこ

と書いてある

バン「え…… うーん…… なんだ？」

ロウ「わからんかったらヒントも出すぞ」

バン「じゃあヒントお願いしますー！」

ロウ「今お主の視界に答えがあるのう」

バン「え？俺の周りに？うーん……」

ロウ「頑張るのじゃ、バンよ。これでも簡単な方なのじゃぞ」

バン「うう……………頭の悪さがこんな所でアダになるなんて」

ブレイブ「……………ガウ、ガウガウ」

ブレイブはバンの手を軽く噛んでいる

バン「な、なんだよ、ブレイブ。俺は今必死に考えてんだ」

ブレイブ「ガウガウ」

バン「え？俺の手がなんだよ」

ロウ「ほほ、まさかブレイブがわかるとはのう」

バン「なに!?ブレイブ、答えわかったのか!？」

ブレイブ「ガウ」

バン「手？手がなんだよ……………あー!!わかった
!な、ですね!？」

バンは自分の手と問題を見比べた

バン「お、は親指でひ、は人差し指でく、は薬指でこ、は小指。その法則なら○は中指で、な！」

ロウ「正解じゃ。ブレイブよ、よくわかったのう」

バン「お手柄だぞ、ブレイブ！流石だ！」

バンは嬉しそうにブレイブを撫でている

ブレイブ「ガウガウ」

ブレイブは少し誇らしそうにしている

ロウ「それでは二問目にいこうかの」

バン「よし、この調子で俺にも解ければ！」

その頃、デルカダール城下町 広場

セーニャ「わ、わかりましたわ。それでしたらどうぞお通りください」

ロベルト「やった!!ありがとうございます、セーニャさん。約束は守りますんで」

ベグル「ありかよ、そんなん」

ロベルト「やつぱりスイーツ好きとしてはかかせませんよね！昔からよく食べてたんです」

セーニヤ「そうですね。私もいつもお店に並ぶのを楽しみにしているんです。それにしても羨ましいですわ。そんな有名な方が親族にいらしたなんて」

セーニヤはロベルトから期間限定であり、数量限定でもあるスイーツを作っているパティシエが自身の親戚におり、そのスイーツを好きだけプレゼントする事を約束に通らせてもらえるようになった

ロベルト「これも作戦ってな」

ベグル「まあなんでもいいが」

ベグルは若干呆れている

ギバ「あ！ベグルとロベルトがいるぜ！」

マーズ「なんとか追いついたか。つて、セーニヤさん！まさか三つ目の障害物はセーニヤさん!？」

セーニヤ「あ、次のペアが来てしまいましたね。それではロベルト

様、ベグル様、お通りください」

ベグル「よし、城下町から出られるぞ」

ロベルト「お先にな、ギバ、マーズ」

セーニヤ「ここから先へは通しませんわ」

セーニヤはそう言うとバギムーチョで入り口を覆った

ギバ「げ！走り抜ける事も出来ねえのか！」

マーズ「戦闘は免れられないか。もう一戦頑張るぞ、ギバ」

障害物競争3

デルカダール地方

ベグルとロベルトはロウ達のいる場所までやってきた

ベグル「あれ？あそこにいるのバンとブレイブだ」

ロベルト「よし、追いついたか。って、ロウ様もいるな。戦ってるわけじゃなさそうだけど何してんだ？」

ロウ「む？おお、ベグルとロベルトも来たかの」

バン「げ、追いつかれた」

ベグル「何してるんですか？ロウ様が四つ目の障害物なんですよね？」

ロウ「そうじゃ。わしは今までとは少し違って、わしから出題するクイズに全問答えられたら四つ目の障害クリアというわけじゃ」

ロベルト「まさかのクイズですか。これは………バン、ご愁傷様だな」

ロウ「少々待っててくれ。バン、二問目はこれじゃ。これは何を意味しておる?。」

ロウが出した紙には

0 > 2 > 5 > 0

と書いてある

バン「また難しそうなのが……。」

ロウ「ヒントが欲しかったらまた呼んでくれ。さてベグルにロベルトや、わしからは三問クイズを出させてもらおう。全問解ければ通つてよいぞ。バンは特別に二問だけじゃがな。お主達は頭がいいと聞いておるからバンのように甘くはせんぞ」

ベグル「まあバンよりは頭はいいと思いますけど」

ロベルト「内容によっては苦戦しそうだな」

その頃、訓練場

マルスとルナはレースにどんどん攻撃していた

ルナ「やあっ!」

レース「ん!これで二十回だな。合格だ!よく頑張ったな、通つて

いいぞ」

マルス「やった！ルナ、僕達も早く行こう！」

ルナ「うん！じゃあねー、おとうさーん」

ラース「さて、次だな」

数分後

エド「つしやあ！頑張るぞ、テルマ！」

テルマ「なんで俺まで……」

エドのやる気満々といった感じとは裏腹に、テルマはどんよりとした空気を纏っている

エド「暇そうにしてたからだぜ！」

テルマ「休日だったんだよ！チャムと久しぶりに遊ぶかか思ってたのに……なんでこんな事に」

ラース「エドがすまないな、テルマ。まあこれも遊びだからよ」

テルマ「俺、本当少ししか戦えないんですよ？ラース將軍となんて無理ですって」

テルマは首をかなりの速度で横にふっている

ラース「安心しろ、流石にそれはこっちもわかってるさ」

ラースもテルマの様子に苦笑いしている

エド「んで！俺達がここを通っていい条件はなんだ？」

ラース「俺はテルマの実力を知らないからな。それも測るという意味で子ども達と同じ二十回俺に攻撃を当ててみる。エドは極力避けるが、テルマは基本避けないさ。それでいいか？」

エド「テルマ！ラースにどんどん攻撃していけ！」

テルマ「俺なんかを頼るな！エドの方が強いんだからエドの方こそどんどん攻撃しろよ！」

ラース「まあ取り敢えずそれでいくぞ」

デルカダール城下町

そこではカミュとガザルが戦っており、互いに苦戦していた

カミュ「チツ！流石同じブーメラン使いなだけあるな。やりにく

いったらありやしないぜ」

ガザル「流石カミュさん、攻撃を弾くのがやつとだ。狙いも凄くて精度が高い」ダバン、そのまま進め！」

ダバン「ああ！」

カミュ「行かせるか！シャインスコール！」

ガザル「ダバン、いったぞ！」

ダバン「受け流しの構え！」

ダバンは自身に降ってきたブーメランを盾で上手く弾いた

ダバン「広場までこれた！」

ガザル「よし！ラーズ將軍よりは苦戦しなかったな」

カミュ「チツ！舐められたもんだが仕方ないか」

カミュは戻っていった

ガザル「よし！このまま行こうぜ！」

ダバン「あそこで戦ってるのギバとマーズだ。相手は……。セーニヤさんみたいだな」

セーニヤ「バギムーチョー！」

ギバ「またか！」

マーズ「チツ！また風で分断された！」

マーズとギバの間に巨大な竜巻が出来た

セーニヤ「少々心苦しいやり方ですみません」

ギバ「いえ、立派な戦術ですからね！構いませんよ！ジゴスパーク！」

セーニヤ「流水の構え！」

セーニヤは雷を纏った槍を受け流し、地面に向かわせた

ギバ「うおっ！今度は受け流しか！カウンターと受け流し、どうやって対処すれば……」

ガザル「なあ、これさ。もしかして、俺達通り抜けられそうじゃね？」

ダバン「だな。気配を頑張つて消せばいけそうだ」

ガザル「よし、通り抜けちまおうぜ」

デルカダール地方

ベグルとロベルトはロウの出す問題に順調に答えていった

ロウ「流石ベグルとロベルトじゃな。二問目も突破したか。早いもう」

ロベルト「結構意地悪な問題ですね、ロウ様」

ベグル「だが、バンがそろそろショートしそうですぜ。見てて面白えや」

バン「0?5?5が最大?」

バンは最後の問題に苦戦していた

バンは頭を抱えている

ロウ「大丈夫かの?バン。ヒントは5以上になる事はなく、幼い頃

「にやった事があるものじゃぞ」

バン「ううく……」

「な
ロベルト「俺はバンの問題の答えわかったけどな。流石に言えない
な」

「ロウ「ではベグルとロベルトには最終問題じゃ。○に入る数字はな
んじゃ？」

「ロウが出した紙には

1 || 1

6 0 || 1

2 4 || 1

○ 6 5 || 1

と書いてある

「ロウ「最終問題はヒントは無しじゃ。頑張るのじゃぞ」

「ベグル「はい！わかりました！」

ロベルト「ええ!?早くないか!？」

ロウ「ほ!!こ、これは驚いたのう。どれ、ベグル答えは?」

ベグル「3です」

ロウ「正解じゃな。どうしてじゃ?」

ベグル「時間を表してますね。1秒、1時間、1日の順です。それなら最後は数字的に1年。365日です」

ロベルト「確かに。よく気付いたな」

ロウ「うむ。通ってよいぞ」

ロベルト「それじゃあな、バン。早く解けるといいな。ブレイブが暇してるぞ」

ベグル「一生そこで頭抱えてても構わねえぜ」

バン「くそく……。。。ロウ様!もう一つヒントってありませんか?」

ロウ「す、すまん。う。二つ以上ヒントは考えておらんかった。だが、バンがかわいそうじゃのう。どれ………子どもが物事を決めるのによく使う手段じゃな」

バン「物事を決めるのに………うーん！」

ブレイブ「クワア〜………」

ブレイブは寝そべって大きな欠伸をしていた

デルカダール城下町

マルスとルナはカミュに遭遇した

カミュ「げ。まさかマルスとルナまで参加してたのか？」

マルス「あ！カミュだ！カミュ、通して？」

ルナ「カミュさんも条件を達成すれば通してくれる？」

カミュ「まあそりゃあ通すがどうしたもんかな………。よし、マルス、ルナ。俺が今から逃げるから、それを二人で俺に触れられたら通っていいぞ」

マルス「鬼ごっこだね！いいよー！」

ルナ「楽しそう！」

カミュ「じゃあ少し離れたらスタートだぜ」

広場

ダバン「バレてないみたいだ。このまま通っちゃおうか」

ダバンとガザルはセーニヤ達から少し離れた場所から入り口に近づいていた

ガザル「へへ、悪いな、ギバ、マーズ。お先に行かせてもらうぜ。セーニヤさん、すまねえな」

ダバンとガザルは入り口からこつそりと出ていった

デルカダール地方

バン「あー!!!」

バンが大声をあげた

ロウ「おお、少しビックリしたわい」

ブレイブ「ガウガ！」

バン「あ、すみません。でもわかりました、ロウ様！答えはじゃんけんですね!？」

ロウ「ほほ、やっとわかってくれたかのう。正解じゃ」

バン「やったー!!もう脱落するんじゃないかと思ったく……」

バンは安心したかのように座り込んだ

ブレイブ「ガウ」

ロウ「ほほ、よかったのう、バンや。通つてよいぞ」

バン「ありがとうございます、ロウ様！待たせてごめんな、ブレイブ！早くベグルとロベルトに追いつかないとな!？」

ブレイブ「ガウ!」

ベグル達は

ベグル「まだロウ様以外と会わないな。ここら辺は休憩ゾーンか?」

ロベルト「そうかもしれないな。まあ突き進むだけだ。俺達が今一番だからよ」

ベグル「だな。バンはまだまだかかりそうだったし、どんどん突き放そうぜ」

シルビア「ウッフ、残念だけど休憩ゾーンは終わりよん」

木の上からシルビアが降りてきた

二人「シルビアさん！」

シルビア「は〜い、ベグルちゃん、ロベルトちゃん。思ってたよりは苦戦してるみたいね。5つ目の障害物はアタシよ」

ベグル「シルビアさんもバトルですか？」

ロベルト「それは中々厄介だ。あの剣捌きは凄いからな」

ベグルとロベルトは顔をしかめている

シルビア「うふふ、それでもよかったんだけど、皆が戦いばかりだと疲れちゃうでしょ？だからアタシは皆に楽しんでもらわなきゃって思ってるね。ロウちゃんと同じで皆とは変えてみたの」

ロベルト「楽しむ、ですか。まあ遊びですからそれも大事なんですよけど、内容はなんですか？」

シルビア「そ・れ・は、ダンスよ〜！」

二人「ダンス!？」

シルビア「ええ、そうよ。踊りの内容はなんでも構わないから、これから流れる音楽に合わせてアタシと自由に踊るの！素敵でしょ？」

ベグル「ロベルト、任せた！俺には無理だ！」

ロベルト「いやいや、俺だってダンスなんて無理だぞ!？」

ベグル「俺よりはマシになるだろ！俺みたいな体格のやつが踊ったらヤベエだろ!!」

ロベルト「ブフツ…… た、確かに……」

ロベルトはそっぽを向いて口を押さえながら笑いを堪えているが、体も震えているため隠しきれていない

ベグル「おいこら、何笑ってやがる。ぶん殴るぞ」

シルビア「それでどっちが踊ってくれるの？ロベルトちゃん？アタシはベグルちゃんでも構わないわよ。見た目なんて何にも問題ないわ」

ロベルト「ま、まあ俺がやります。変でもいいですよ？」

シルビア「もつちろくん。音楽に合わせていけば変な事なんてないわ！自由に体を動かしてればいいのよ。楽しくいきましょーう、ベグルちゃんも踊りたくなったら混ぜたっていいからね」

ベグル「いや、絶対ありえないんで大丈夫です」

シルビア「あらん、いけずう。それじゃあミュージックスタートよ！」

障害物競争4

デルカダール城下町

マルス達はカミュと追いかけてっこをしていた

マルス「カミュ捕まえた！」

カミュ「あーあ、捕まっちゃったぜ。それじゃあ通っていいぞ。この先はセーニヤがいるからよ。どんどん頑張れよな」

ルナ「わかったー。ありがとう、カミュさん」

二人は先へと走っていく

カミュ「ふう、もう一つペアがあるんだったな。さて、誰が来るんだか」

訓練場

エド「おりゃあつ！」

ラース「！やれやれ、二十回いったか」

テルマ「やるじゃん、エド！」

ラース「テルマを少々甘く見てたな。グレイグとシルビアが評価するだけあって、一般人にしたら中々やるじゃないか」

エド「そうだよな！テルマ、かつこよかったぜ！」

テルマ「へへ、そうか？ありがとうございます。それじゃあ通つていいんですね？」

ラース「ああ、いいぞ。皆には誰が来るかは教えてないから驚かせてやれよ」

エド「勇者達と戦えるなんてな！俺がどれくらい通用するか試すいいチャンスだ！」

テルマ「なんだか面倒な事になってきたなー。ん？俺達が来る事を知らないって事は……………」

デルカダール地方

ダバンとガザルはロウのいる場所までやってきた

ロウ「ほほ、次はダバンとガザルか。どれ、わしの出すクイズに全問正解したら通つてよいぞ」

ダバン「ロウ様！まさかの戦いじゃなくてクイズ!?!くっ、ロベルト

やマーズとかが得意だよな」

ガザル「バンがここを通れたってマジかよ。奇跡か？」

ロウ「流石にバンはかわいいそうじゃったから簡単にしたものも二問にした。それでもかなり時間がかかっておったがのう。どれ、では一問目じゃ」

広場

ギバとマーズはセーニヤとの戦いをしながら、ようやく城下町の入りにたどり着いた

ギバ「つしやあ!! やつと突破!!」

マーズ「ナイスだ、ギバ！ 本当苦戦したぜ」

セーニヤ「お疲れ様でした、ギバ様、マーズ様。お怪我治しますね」

ギバ「ありがとうございます、セーニヤさん。セーニヤさんの槍使いバンみたいで俺、苦手なんですよね」

マーズ「受け流しとカウンターの判断が凄いですね。かなり勉強になりましたよ」

セーニヤ「そ、そんな……。私なんて皆様に比べればまだまだですわ」

マーズ「そんな事ありませんよ。補助呪文と攻撃呪文を使いながら自身も槍で応戦して相手を長期戦に持ち込ませる。長期戦になればなるほど、相手が不利になりますからね」

セーニヤ「照れますわ、マーズ様。それでは最後まで頑張ってくださいね」

ギバ「はい！急がないとヤバいぞ、マーズ！」

マーズ「ガザルとダバンの姿を見かけないのは変だな。ラーズ将軍かカミュさんに相当苦戦してんのか？」

デルカダール地方

そこでは楽しそうな音楽と共にシルビアとロベルトが踊っていた

シルビア「いいじゃない、ロベルトちゃん！とっても素敵よ」

ロベルト「へ、へへ。こんなのでいいのかわからないですけど、少し楽しくなってきました」

シルビア「自由だからいいのよ！アタシも負けてられないわ！」

ベグル「どうすりやいいんだ、これ？」

その時

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブとバンが走ってやってきた

バン「あー！追いついたぞ、ベグル、ロベルト！つて……… え？
どういう状況？」

ベグル「うわ、もう来たのかよ。案外早かったな。これはま
あ……… しょうがなくて」

シルビア「あら、バンちゃん！ブレイブちゃん！あなた達も一
緒に踊りましょう」

バン「え？お、踊り？」

シルビア「そうよ。ここをクリアするにはこの音楽に合わせてアタ
シと楽しく踊る事なの！自由に動かしていいから、一緒に踊りましょ
う！」

シルビアはバンの手を取っていく

バン「え、え。踊りなんてあんまり自信ないですよ、シルビアさん。というか、ロベルトって踊れたのかよ」

ロベルト「いや…… 恥ずかしかったんだが、なんだか楽しくなってきたな」

シルビア「ロベルトちゃん、とっても大事な事よ！なんでも楽しむのが一番！ほら、バンちゃんも！」

バン「う、うう…… こ、こんな感じですか？」

シルビア「やだ！とつても素敵よく！もっとやっついていきましょく。もちろん、二人とも笑顔を忘れずにね」

ベグル「(だんだんカオスになってきたぞ)」

ブレイブ「ガウウ……」

ブレイブとベグルは困惑し始めていた

デルカダール城下町

カミュ「ん？ありやあテルマ？なんでこんな所に」

カミュは屋根から降りてテルマの元に向かう

カミュ「おい、テルマ。お前こんなどこで何してんだ？この時間は城下町立ち入り禁止だぜ」

テルマ「あ、カミュさん。こんにちは。すみません、実はビルさんに頼まれて城下町の外に買い物にいかないといけなくて」

カミュ「ふーん、そうなのか。それなら仕方ねえな。入り口近くにはセーニヤもいるから、セーニヤにも話をすれば通してもらえるはずだ」

テルマ「セーニヤさん？という方がいるんですね。わかりました」

カミュ「長い金髪の緑色の服来た女だ。じゃあな」

テルマ「(よし、作戦通り通り抜けられた)」

テルマは上手くいったと内心安堵していた

数分前

エド「え!?!一般人のふり!?!」

テルマ「ああ。俺は普通こんな所に参加する人じゃないからな。知らないならバレにくいはずだ」

エド「やだ!!」

テルマ「な、なんでだよ。簡単に通れるんだぞ。最後まで行けば商品も貰えるんだろ?」

エド「う…………。でも、そんなズルみたいな事したくねえ」

テルマ「ズルって…………。これも作戦だ。なあ、いいだろ?エド」

エド「俺は全員と戦ってみてえんだよ」

テルマ「いや、それは今じゃなくても出来るさ。それにデルカダール地方に行ったら多分怪しまれるから結局戦闘は免れられない。そこからはエドの力の見せ所だぜ」

エド「…………… 少しだけの我慢って事か?」

テルマ「そうそう、そういう事だ」

エド「仕方ねえな！テルマの作戦に乗ってやるよ」

テルマ「ああ、サンキュー。エドはこつそりと家の隙間からついてきてくれ」

テルマ「さて、このまま城下町を通り抜けよう」

広場

広場ではマルスとルナがセーニヤと話していた

セーニヤ「それでしたら通って構いませんわ」

マルス「いいの？セーニヤさん」

ルナ「何もしてないよ？」

セーニヤ「はい。私はマルス様達の味方です。ぜひ頑張ってくださいね」

マルス「やった！ありがとう、セーニヤさん」

セーニヤ「頑張ってくださいねー」

セーニヤは手を振って走っていくマルス達を見送った

デルカダール地方

ギバとマーズ、ダバンとガザルはロウが出すクイズを解いていた

ロウ「ほほ、最終問題正解じゃな」

ギバ「よかったー！最終問題とかいうから相当難しいのかと思った
ら同じくらいの難易度だった」

マーズ「お前ら、ズルいぞ。こっそりと抜け出すなんて」

ガザル「へっ！ズルいとかは実践では通用しねえんだよ。作戦と呼
べ、作戦とな」

ダバン「まあお前らの気持ちもわかるけどな。ロウ様の問題は同じ
くらいで解けたんだ。結果変わらねえって事だよ」

ギバ「バンやベグルはもっと先に行ってるはずだ。追いかけてよう
ぜ」

シルビア達は

シルビア「は〜い、音楽終わり〜。ふふ、どうだった？ロベルトちや

ん、バンちゃん。ダンスって楽しいでしょ？」

ロベルト「はい！結構激しく動かしても構わないんですね」

バン「俺も楽しかったです！シルビアさん、最後の方とか凄い動きしてましたね」

シルビア「ふふ、アタシも二人を見てたら熱くなってきちゃったのよ。それじゃあ楽しい時間は残念だけどここで終わり。通つていいわよ」

ベグル「やたら楽しそうだったな、ロベルト。まさかあんなに楽しくやるとは思わなかったぜ」

ロベルト「ま、まあな。でも戦いよりはよっぽどよかったぜ」

バン「よし、ブレイブ！また乗せてくれ！二人を追い抜くぞ！」

ブレイブ「ガウ！」

バンはブレイブに乗って走っていった

ベグル「あ！ズリイだろ、こら!!」

ロベルト「流石ブレイブ、かなりの速さだな」

数分後

バン「かなり距離を離す事ができたな。おっと、ここを通ればデルカコスタ地方。神殿まであと少しだ!」

ブレイブ「ガウ!」

ブレイブは咄嗟に何かを避けた

バン「おぶあ!」

ドサ

バンはそのままブレイブから落ちた

バン「な、なんだ?炎?つて事は!」

ベロニカ「きたわね、バン、ブレイブ。六つ目の障害物は私よ!さあ、焼き尽くされる覚悟は出来てるかしら」

山の上の方からベロニカが魔法を放ってきた

バン「ベロニカさんか。魔法の威力はラース將軍より圧倒的だから被弾しないようにしないと」

広場

テルマはセーニヤに出会っていた

セーニヤ「あら？どうされましたか？」

テルマ「あ、もしかしてあなたがセーニヤさんですか？」

セーニヤ「はい。私、セーニヤといいます」

テルマ「初めまして。俺、グラジールでアルバイトしてるテルマといいます。店長のビルさんに買い物を頼まれてしまつて外に出ようとしてたんです。先程カミュさんにセーニヤさんに話せば通してもらえると聞いてきました」

カミュ「よつと。セーニヤ、こいつはただの一般人だ。通してやつてくれ」

カミュが屋根から降りてきた

セーニヤ「わかりましたわ。グラジールという事はマヤ様やグリーン様ともお知り合いなのですね」

テルマ「あ、お二人をご存知なんですか？つて、そうか。マヤさんはカミュさんの妹さんだから知つてて当たり前ですよね」

セーニャ「はい、今度伺おうとしていたんです。その時はお話できるといいですね。それでは」

テルマ「はい（やばいな。カミュさんにセーニャさんもいるとなると、通れるか？エド）」

少し離れた場所では

エド「どうすりゃいいんだよ、あれ。入り口一つしかねえのにそこに二人もいたらバレるだろ。テルマ、なんとかしろ！」

エドは近づく事が出来ずに焦っていた

セーニャ「そういえば、お買い物に行くのであればキメラの翼を使えばよろしいのではないですか？」

カミュ「確かに。キメラの翼は持つてるだろ？」

テルマ「（やべ）あー、そ、そういえばそうでしたね。はは、すっかり忘れてましたよ。あ！そういえば部屋に忘れてきたんだっけ」

テルマは内心焦り始めていた

カミュ「そうなのか。なら俺のをやるよ。ほら」

カミュは自分の袋からキメラの翼を出した

テルマ「あ、ありがとうございます」

セーニヤ「お買い物はどちらへ？」

テルマ「えつと…… ユグノアです。船を乗り継いでいけばいいみたいで」

セーニヤ「それでしたら尚更お使いください。お一人で歩いて行くには少々厳しいですから」

テルマ「そ、そうですよね」

カミュ「？使わねえのか？」

テルマ「え!? あー、いや、お二人の前でいきなりいなくなるのも失礼じゃないですか」

セーニヤ「私達は気にしませんわ」

テルマ「(やばい、やばい、やばい、やばい、やばい。どうしたらいい、これ!)」

カミュ「…………… なんかに怪しいな、テルマ。何か隠してんのか

？」

カミュがテルマの不思議な様子に疑うようになった

テルマ「!!!え!?!そんな事ないですよ!突然どうしたんですか、カミュさん」

カミュ「よく考え直せばビルがラースの指示を無視して買い物に行かせるのも、買い物するには身軽すぎるのも不自然だ。特にキメラの翼を使うのを渋るのも変だな」

テルマ「(終わったかもしれない……)そ、そんな……。考えすぎですよ、カミュさん」

テルマは顔が青白くなっている

少し離れた場所では

エド「どう見ても怪しまれてるな。くそっ!俺が助けるしかなさそうだな。借りるぜ、父ちゃん!」

エドは魔物の姿になり、テルマの元に向かった

ビュン!

テルマ「うおっ!?!」

二人「!?!」

魔物の姿になったエドは猛スピードでカミュ達とテルマの間に入り込んだ

エド「バレちゃったなら仕方ないよな。だが、ここまで来れたんだ。後は駆け抜けるだけ！」

エドはテルマを持ち上げて城下町の入り口へ走り出した

セーニヤ「エド様!? テルマ様をどこへ持っていくのですか!?!」

カミュ「やられた! あのと二人、この障害物競争の最後のペアだ!」

セーニヤ「まあ!! 全く気付きませんでしたわ!」

カミュ「兄貴のやつ、なんで一般人のテルマに見習いのエドまで参加させてんだよ」

障害物競争5

デルカダール地方

ロウはマルス達に簡単なクイズを出していた

ロウ「ヒヤドの次に強い魔法はなんだったかのう？」

ルナ「ほーい！ヒヤダルコ！まだ唱えられないけど」

マルス「流石ルナ、詳しいね」

ロウ「ほほ、正解じゃよ。ルナちゃんは賢いのう。どれ、通ってよ
いぞ」

ルナ「えっへん！」

マルス「よーし、どんどん進むぞー！」

マルス達が進んだ後、城下町からエド達もやってきた

エド「あ、あそこにいるじいさんって確か勇者の仲間だったよな」

テルマ「え!?!ちよつ、エド！もういいから！恥ずかしいから降ろせ
！」

エド「何が恥ずかしいんだよ。この方が速いだろ」

テルマ「ロウ様の前でこんな情けない姿見せたくなえんだよ！」

テルマはジタバタと暴れている

エド「わかったわかった。ほらよ」

エドはテルマを持っていた手を離れた

ドサ

テルマ「痛っ！急に落とすなよ！」

ロウ「ほほ、エドに確かお主はテルマ君じゃったかのう。姫の手紙に書いてあったわい。テルマ君とは初めましてになるのう。今はユグノアで王の付き添いをしておるロウという。よろしく頼むのう」

テルマ「俺の事ご存知だったんですね、ロウ様。よろしく願います」

エド「それでよ、じいさん！戦ってくれんのか？」

ロウ「ん？という事は、お主達もこの障害物競争に参加しておると

いう事か。残念ながらわしは戦いではないのう。わしをクリアするにはわしが出す問題に全て答えたらじや」

エド「よし！テルマ、お前に全て任せた！」

テルマ「なんでだよ！エドの方が年上なんだからエドも考えろ！」

ロウ「仲がよさそうだなによりじやな。二人で協力して考えてもらって構わんど。ヒントもいくつか教える事も出来る。頑張っしてほしいのう」

シルビアがいる場所ではダバン達が踊っていた

シルビア「やだ〜！四人とも最高よ！アタシも楽しくなってきた！ちやった！」

ギバ「な、なんでこんな事してんだっけ」

マーズ「全員巻き込まれるとはな。まあ確かに少し楽しくはあるが」

ガザル「ダバン、お前結構踊れるんだな」

ダバン「ま、まあな。俺は結構踊るのが好きだったからよ」

シルビア「どンドンヒートアップよ〜」

ベロニカはバンに苦戦していた

バン「しんくうげり！」

ベロニカ「くっ！」

ベロニカは杖でガードするが、威力で後方へと押し出される

ベロニカ「やるじゃない、バン。距離の詰め方が凄く早いわ」

バン「かくとう技を使う上で基本ですから！」

ブレイブ「ガウ！」

バンの後ろからブレイブが飛びかかった

ベロニカ「メラミ！」

ブレイブ「グルツ」

ブレイブは身体を捻って飛びかかる方向を変えた

バン「氷結らんげき！」

ベロニカ「キヤアツ！」

ベロニカはブレイブに追撃で魔法を詠唱していたが、バンに邪魔される

ベロニカ「結構体力無くなってきたわね。仕方ないわ、バン、ブレイブ。通っていいわよ」

バン「お！やった！」

ブレイブ「ガウ！」

ベロニカ「この先の障害物達は厄介揃いよ。精々倒されないように頑張るなさい」

バン「えっと、まだ会ってない勇者様達のメンバーだと……うわ、イレブンさんにマルティナ様、グレイグ將軍か。誰が来ても怖いなー」

ブレイブ「ガウ……」

ベロニカ「そういう事。ほら、さっさと行きなさい」

バン「はい。ブレイブ、覚悟を決めるぞ！」

ブレイブ「ガウ！」

デルカコスタ地方

バン「もうデルカダール神殿が近くまで来てる。そろそろ一人くらいきても」

ガサ！

二人「!？」

マルティナ「ふっ！」

マルティナが木の上から二人目掛けて降ってきた

バンとブレイブは別々の方向に避けた

マルティナは着地したと同時にバンの方へと突っ込み、連続で攻撃していく

マルティナ「やあっ！はあっ！」

バン「はっ！」

バンも負けじとマルティナの攻撃を避けたり、ガードしたりしてい

る

ブレイブ「ガウ！」

マルティナ「わかってるわよ！はあっ！」

マルティナは攻撃しながらブレイブにも蹴りを放つ

ブレイブ「ガウウ！」

バン「さみだれ突き！」

マルティナ「はあっ！」

マルティナは槍を足で払い除けると同時に後方へ飛び、距離を離れた

マルティナ「ふふ、流石バンね。やるじゃない。奇襲にもしつかり対応出来るのね」

バン「ビックリしましたよ、マルティナ様ー。こっちは必死だったんですから！」

マルティナ「あら、そんなに必死だったの？まだ余裕は感じられたけどね。さて、ついにここまで来たのね。私は七つ目の障害物よ。でも、これまでと同じにしないでね。手加減は殆どしないわ」

バン「それはさっきので充分わかりましたよ。今までは奇襲こそあっても、追撃まではありませんでしたからね。気を抜けないって事ですよね」

ブレイブ「ガウ」

マルティナ「ふふ、そういう事。さあ、いくわよ！」

その頃、デルカダール城 大広間

ラーズ「ハア、一番最初だともうやる事なくなっちまったな。暇なもんだぜ」

コロ「キャンキャン！」

コロが玉座の間からやってきた

ラーズ「あれ？コロじゃないか。お前も暇だったか？」

コロ「キャン！」

コロはラーズの顔を舐めている

ラーズ「はは、くすぐったいぞ。どうした？急に」

コロ「キャン！」

コロは城から走って出て行った

ラース「ん？どこに行くんだ？」

デルカダール地方

シルビア達はダンスが終わっていた

シルビア「お疲れ様。皆とつても楽しそうでしたわ！
少し休んでもいいからもう通って大丈夫よ」

ダバン「少し休ませてくれ、ガザル。今で疲れた」

ガザル「まあダバンはかなり動いてたしな。仕方ねえか」

シルビア「お水もあるから飲んでいいわよ」

ギバ「俺達は先に行かねえとな。バン達に負けてられるか！俺の
ホツカイマグロが待ってんだ！」

ギバはマーズを引っ張っていった

マーズ「うおっ！ま、待てよ、ギバ！俺も走れるから！」

シルビア「あらあら、マーズちゃんも大変ね」

ロウ達の場所ではエド達がやっと最終問題を解き終わっていた

ロウ「ほほ、正解じゃ。気付けばわかる問題というわけじゃ」

エド「は、よくわかるな、テルマ。お前やつぱり頭いいんじゃない」

テルマ「いやいや、あまり学力とか関係ないクイズだったからだよ。
エドだってもう少しわかってもいいと思うけどな」

エド「俺に向いてねえのはよくわかったぜ」

ロウ「ほほ、まあ向き不向きはあるからのう。どれ、通ってよいぞ」

エド「うし！どんどん進むぞー！」

テルマ「うえっ!?ま、また持つのかよーやめろよ、エド！恥ずかしいんだってばー！」

エド「知るか！うおおおお！」

「テルマ「人の話を聞けー!!」

エドはまたテルマを持ち上げてそのまま走って行った

ロウ「ほほほ、賑やかでええのう。そこは少しバンと似てるように
思えるのう」

デルカダール城下町

コロ「キャンキャン！」

カミュ「ん？コロじゃないか。どうしたんだ？」

セーニヤ「どうかされましたか？」

コロ「クウ〜ン」

コロは二人に擦り寄っている

セーニヤ「ふふ、可愛らしいですわ。撫でさせてもらいますね」

カミュ「シロはこんなに甘えてはこねえからな。お前は甘えん坊だ
な」

二人もコロを撫でている

コロ「グルグル」

コロも嬉しそうに目を細めていた

その頃、ベグル達はベロニカと戦っていた

ベロニカ「メラガイアー！」

ベグル「渾身斬り！」

ベグルは巨大な炎の塊を叩き切った

ロベルト「はやぶさ斬り！」

ベグルの後ろからロベルトが攻撃を仕掛ける

ベロニカ「読んでるわよ！双竜打ち！」

ベロニカも魔法を打った後、即座に鞭に持ち替えていた

ロベルト「ぐっ！」

ベグル「俺にもか！」

ベグルはギリギリで鞭を防いだ

ベロニカ「スパークショット！」

ロベルト「受け流しの構え！」

ガン！

ロベルトは盾で攻撃を受け流した

ベグル「蒼天魔斬！」

ベロニカ「イオラ！」

ベロニカは自身の前に大きな爆発を起こした

ベグル「ぐっ！」

ベグルは爆発に巻き込まれる

ベロニカ「さあ、どんだんかかってきなさい！」

ロベルト「思ってる以上に厄介だな、ベロニカさん」

ベグル「間合いに一気に入れればいいんだが、生憎俺やロベルトはバンやガザルみたいに素早くねえからな。そういうのは苦手だ。チツ、意外な場所で苦戦するもんだな」

その頃、マルス達はシルビアと楽しく踊っていた

シルビア「とつても楽しいわ、マルスちゃん、ルナちゃん！ウキウキしてきちゃうわ」

マルス「僕も踊るの好きだよ。父さんと一緒に習ったんだ」

ルナ「私はお母さんから。自由に動かしていいならもつとたくさん動くね！」

ルナはそういうとクルクル回り始めた

シルビア「いいわよ、ルナちゃん！楽しくいきましょ」

デルカダール城下町

コロ「キャン！」

コロはカミュとセーニヤにひとしきり撫でられた後、満足したように城下町から出て行った

カミュ「おいおい、出て行ったぞ。コロはどこに向かってんだ？」

セーニヤ「さあ……。あ、もしかしてブレイブ様にお会いしたくなったのではないでしょうか。今お城には人が殆どいませんし、寂しくなったのかもしれませんが」

カミュ「まああの甘えん坊具合だとありえそうだな。それか俺達に構ってほしいのかもな」

セーニヤ「ふふ、どちらにしても可愛らしい理由ですわ。もう大き

くなってきたというのに、いつもコロ様を見ると和んでしまいます」

カミュ「小さいベビーパンサーの頃から見てきたもんな。外見は成長したが、中身はあまり変わってないしよ。甘えさせるのも仕方ないよな。とりあえず俺達は兄貴と合流しようぜ」

セーニヤ「そうですわね」

二人は城に向かっていった

デルカダール城 玉座の間

ラーズ「え？王様も参加されたのですか？」

デルカダール王「うむ。なにやらとても楽しそうなのでな。わしもペアを組んで参加させてもらった」

ラーズ「王様と……誰ですか？俺、誰も通してませんよ？」

デルカダール王「ハツハツハ、どうやらわしの自慢の伏兵はしっかり仕事をしたようじゃな。あのラーズにすら気付かせぬとは」

ラーズ「ええ!?伏兵!?ま、まあ俺が気付けなくても大丈夫か。他に八人もいる。特に最後は最難関になるようにした。少なくともそこで止まってくれるはずだな」

デルカダール王「ほう、それはまた結果が楽しみじやな」

ラース「因みに王様は何がほしいんですか？」

デルカダール王「それはもちろんダーハルーネの特別スイーツセットじゃ」

ラース「だと思いましたよ。まあ、簡単に手に入ると思わないでくださいね」

デルカダール王「ああ、覚悟しておこう。簡単に手に入ってはつまらんからな」

障害物競争6

デルカダール地方

シルビア「は〜い、ダンス終わりよー！お疲れ様、二人とも。とっても可愛らしかったわ」

マルス「ルナ、大丈夫？」

ルナ「ちよつと疲れた〜」

シルビア「大丈夫？お水あるから飲んでいって」

ルナ「ありがとう、シルビアさん」

マルス「半分くらいまでクリア出来たよ、ルナ。もうちよつとだよ、頑張ろ！」

ルナ「うん！」

シルビア「二人は何がほしいの？」

マルス「僕はね、グレイグさんに褒めてもらうのと父さんに大剣の

稽古してもらおうんだ！後はねー、新しい練習用の大剣もほしいな！」

ルナ「私は魔導書もほしいんだけど、最近お母さん達お仕事で忙しそうだったから疲れが取れるようなハーブっていうのがあるんだって。それがほしいの」

シルビア「やだ……。もう〜！それくらいならアタシ、いつだって買ってあげるわよ！」

シルビアは口に手を当てて驚いた表情をした後、二人をギュツと抱きしめた

ルナ「駄目だもん！私達が自分達でなんとかするの！」

マルス「確かに頼めばじいちゃんも父さんも全員くれると思うけど、今回は自分達で取りたいんだ。だから頑張らないと！その方が皆驚くでしょ？」

シルビア「そうだったのね。それなら頑張つて!!アタシ、絶対応援するから！負けないでね、マルスちゃん、ルナちゃん！」

二人「うん！」

二人はそのまま走っていった

その頃、エドはテルマを持って草原を爆走していた

テルマ「もう………勝手にしろよ………」

テルマはどうでもよくなったのか恥ずかしがっていた抵抗をやめていた

エド「風が気持ちいいなー、テルマ！」

テルマ「本当だな。お前に持たれてなかったらもつと気持ちよく感じてたんだろうけどな」

エド「む………なんか嫌な言われ方だな。まるで俺が嫌な事してるみたいじゃねえか」

テルマ「おお、それは伝わるんだな。馬鹿には伝わらないと思ってたぜ」

エド「ハア!? 誰が馬鹿だ!!」

テルマ「人の話を無視してるようなやつなんか馬鹿で充分だよ！」

エド「ぐぐぐ………。そんなに俺に持たれるのが嫌だったのかよ」

エドはテルマを降ろした

そのまま二人はゆっくりと歩きながら進んでいた

テルマ「そりゃあ俺だつて男だ。自分で走れるし、僅かとはいえ身も守れる。それなのにこんな扱いされたら変だろ」

エド「テルマが楽になる方法だと思つたのによ。俺なら他の人間より速く動ける。それならテルマを運んで、テルマに頼らなきやいけない場所でテルマを降ろすのが一番早いと思つたんだ」

テルマ「……………ハアア。それならそうと言えよ。それなら怒らねえから」

テルマは大きいため息をつくど、やれやれという表情をしている

エド「あ、言わなかつたつけ？」

テルマ「全く聞いてないな。まあエドの気持ちはわかつた。俺も気分を悪くさせる言い方して悪かつた。ごめんな、エド」

テルマはエドに頭を下げた

エド「い、いや、俺が言わなかつたから悪いんだろ？テルマのあの発言は俺、気にしてねえよ。こつちこそ気付かずに悪かつたな」

テルマ「まあそのおかげでここまで順調に来れたんだ。こつからは俺もエドに自力でついていく。極力俺は何とかするからどうしてもの際は頼らせてもらうぜ、デルカダールの兵士さん？」

エド「おお、結構……頼もしいんだな、テルマ。へへ、それじゃあ俺、頑張ろうかな！」

シルビア「ふふ、喧嘩は終わったかしら？」

エド「あ！勇者の仲間だ！」

テルマ「シルビアさん!!お久しぶりです！」

テルマは嬉しそうにシルビアに向かっていく

シルビア「久しぶりね、テルマちゃん。最近はお店に行けなくてごめんなさい。でも、まさかエドちゃんとお友達になってるなんて知らなかったわ。上手くやれてるみたいでとっても安心したわ。チャムちゃんは元気？」

テルマ「そうなんです。ちよつとした事で知り合つて友達に。チャムも元気ですよ。いつも大きな声でお客さんと話してたりするんで、迷惑かけてないかちよつと気になってるんですけどね」

シルビア「うふふ、元気でいいじゃない。それでエドちゃんと二人でこんな所にいるって事はもしかして……」

エド「兄ちゃんもこの競争の障害物？なんだよな。バトルか？」

シルビア「ふふ、参加者って事よね。残念だけどアタシはバトルじゃないの。アタシと一緒にダンスするのが条件よ！もちろん、楽しくね」

エド「お！ダンスか！いいじゃん。俺、魔物の群れの中で皆と一緒に祭りで踊ってたぜ」

テルマ「そ、そうなのか？俺はやった事ないんだよな」

シルビア「音楽に合わせて体を動かすだけで充分ダンスよ。だからテルマちゃんも一緒に踊りましょう」

テルマ「じゃ、じゃあ少しだけ」

シルビア「ふふ、それじゃあミュージックスタートよ！」

デルカコスタ地方

バンとブレイブはマルティナと激しくぶつかりあっていた

マルティナ「しんくうげり！」

ブレイブ「キャウ！」

ブレイブがマルティナの攻撃に直撃し、倒れ込んだ

バン「ブレイブ！」

バンがブレイブに気を向けた瞬間

マルティナ「あら、よそ見しちゃダメよ。セクシービーム！受け取って！」

マルティナはバンにハートを打ち出した

バン「あ……………」

バンは魅了状態になった

ブレイブ「ガウ!？」

マルティナ「さあ、終わりにしてあげるわ！デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階あがった

マルティナ「ばくれつきやく！」

バン「ぐ……………」ドサ

バンは倒れた

ブレイブ「ガウ……………」

ブレイブはバンが倒れたのを見て動かなくなってしまった

マルティナ「……………」（ブレイブはおそらく動けないのね。力により屈服したといったところかしら）」

マルティナはブレイブの様子を見るとデビルモードを解いた

マルティナ「大丈夫？ブレイブ。悪いけど、ここであなた達は脱落ね。ブレイブ、バンを連れてお城まで戻れる？そこまで怪我は多くないだろうけど、医療部屋で治療してあげて」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブにバンを乗せると、城へと走っていった

マルティナ「ちよつと本気でやりすぎたかしら。バンが相手なら不足はないと思ってたけど、まあラースにも本気でやっていいっていわれたし、恨まないでね、バン、ブレイブ」

その頃、デルカダール地方

ベロニカ「ギラグレイド！」

巨大な炎がベグル達を包み込んだ

ロベルト「ぐっっ！」

ベグル「あっち！」

ベロニカ「(次の詠唱の準備を……………ん?)」

ベグル達が包まれた炎の上からベグルの大剣が出てきた

ベロニカ「ベグルの大剣ね。なにを仕掛けてくるのかしら」

ベロニカが大剣を見ていると

ベグル「油断大敵ですよ！」

ベロニカ「え……………」

ベロニカのすぐそばにはベグルが迫っていた

ベグル「オラァ！」

ベグルはベロニカを殴った

ベロニカ「キヤアッ！」

ベロニカは想像しない場所からの攻撃に直撃した

ベロニカ「ちよつと！レディを殴るなんて信じらんないわよ！」

ベグル「そ、そう言われましても……………。こうするしか方法がなく
て」

ベロニカ「あんた剣を使うなら殴ったりする？普通」

ベグル「も、元々はこつちのが合ってるんですよ。仕方ないじゃないですか！」

ベロニカ「ふん、まあいいわ。確かに戦い方を見ても魔法は苦手みたいね。それなら今の作戦といい、よくやった方だと思うわ。通つていいわよ」

ベグル「つしやあ！やったぜ！」

ロベルト「ハア、どうなるかと思った。ベグルの咄嗟の判断に助けられたな」

ベロニカ「この先の障害物は厄介揃いよ。倒されないようにね」

ロベルト「確かに。残りはイレブンさんにマルティナ様、グレイグ將軍ですからね。気を抜いたら終わりですね」

ベグル「イレブンさんが魔法で攻めてこなかったらワンチャン！」

ベグル達は先に進んでいった

その頃、ロウの場所では

ロウ「む？」

コロ「キャン！」

コロがロウへ嬉しそうにやってきた

ロウ「おお、コロかの。こんな所でどうしたんじや？」

コロ「クウ〜」

コロはロウに甘えている

ロウ「ほほ、可愛いもう。これがバニーちゃんであれば……おっと、いかんいかん。コロにそんな事を思っではいかな。どれ、久しぶりに撫でさせてもらうかのう」

コロ「グルグル」

その頃、ギバ達は

ベロニカ「今度はギバ達ね。私が相手よ！かかってきなさい！」

ギバ「ベロニカさんか。俺が上手く間合いに入り込めればっていった所か」

マーズ「いや、ベロニカさんなら俺に任せてくれ。ベロニカさん！」

ベロニカ「あら、何？」

マーズ「マホトーン！」

ベロニカ「!!ヤバッ！」

ベロニカは咄嗟にその場から引く

ベロニカ「くっ。やられたわ」

ベロニカは少し力が抜けたのかダルそうにしている

ギバ「ナイスだ、マーズ！ベロニカさん最大の武器がなくなった！」

マーズ「すみません、ベロニカさん。あまり消耗はしたくないんです」

ベロニカ「そんな魔法使えたのね、侮ったわ。力が出せないから、この状態で戦っても結果は見えてるわ。通っていいわよ」

ギバ「や、やったぜ！何もせず突破！」

ベロニカ「まあ私が突破されてもここからは大変よ。神殿まで頑張りなさい」

マーズ「残りはイレブンさん、マルティナ様、グレイグ將軍、か。全員やりづらいな」

ギバ「まあ手合わせだと思っただけよ。進もうぜ！」

デルカコスタ地方

ベグル達はマルティナと遭遇した

マルティナ「次はベグル達ね。二人と戦うなんて久しぶりじゃないかしら」

ベグル「本当です。何年前ですかね」

ロベルト「マルティナ様にどれくらい敵うかわかりませんが、本気でいきますよ」

マルティナ「ふっ！」

ベグル「はっ！」

マルティナとベグルが同時に動き出した

ベグル「かぶと割り！」

マルティナ「やあっ！」

マルティナは身を回転させて避けた後、斧を横から蹴り飛ばした

ベグル「ぐうっ！」

ロベルト「はやぶさ斬り！」

マルティナ「ばくれつきやく！」

マルティナは足で剣を弾きながら攻撃する

ロベルト「受け流しの構え！」

ロベルトは自身への攻撃を盾で流していく

ベグル「全身全霊斬り！」

マルティナ「ピンクタイフーン！」

マルティナは自身のおいろけを爆発させ、そのまま舞いながら攻撃する

ロベルト「うぐっ！な、なんだ！この技!？」

ベグル「初めて見た技だ。マルティナ様、こんな技が使えたのか。ただ、どこかいやら」

ロベルト「そういうのは言ったら駄目だろ、ベグル！」

マルティナ「レースから手は抜かなくていいって言われてるの。かくとう技と槍だけだと思っていたら、それはとんだ甘い考えだわ。デビルモード！」

マルティナはバニーへ変身すると全能力が一段階あがった

二人「ええ!？」

ベグル「マジかよ!!バニーちゃんになった！」

ロベルト「ちよつ、それ本物ですか!？」

マルティナ「氷結らんげき！」

ベグル「つて、危ねえ！（お、重たい……）」

ベグルは気を抜いていた所を一瞬で攻撃の間合いに入られる

マルティナ「ぼくれつきやく！」

ベグル「ぐああっ!!」

ベグルは避けきれずに吹っ飛ばされていく

ロベルト「ベグル!!こうなったら!さみだれ突き！」

マルティナ「一閃突き！」

マルティナの狙い澄ました一突きが攻撃の隙を掻い潜った

ロベルト「ガハッ！」

マルティナ「(やつぱりデビルモードは強すぎるかしら。兵士達のここまでの疲労も考えると使わなくても)!!」

マルティナが少し考え事をしていると

ベグル「うらあっ！」

ガァン!

ベグルが遠くから持っていた大剣を投げつけてきた

マルティナ「感心しないわよ、ベグル。武器を投げ捨てるなんて」

ベグル「狙ったつもりなんですけどね」

マルティナ「それに武器はどうするの？大剣も斧も持ってないじゃない」

ベグル「多少は無くてもなんとかあります。マルティナ様が取らせてくれる隙をくだされば！」

ベグルはマルティナにそのまま向かっていく

マルティナ「(ベグルが丸腰で向かってくるなんて！彼にかくとう適正はなかったはずだけど)」

マルティナはベグルの行動に内心驚きつつ、身構える

ベグル「オラァ！」

マルティナ「ふっ！」

ベグルのパンチをマルティナをギリギリで避ける

それと同時に足をベグルへと振り上げた

ベグル「わかっていますよ！」

ベグルも腕で足を防ぐとそこから足を掴んだ

マルティナ「！」

ベグル「はあっ！」

ベグルはそのまま引き寄せる

マルティナ「しんくうげり！」

マルティナも負けじと地面に手をつき、反対の足で攻撃を仕掛ける

ベグル「ぐうっ！」

ベグルは直撃するが、そのまま持ち堪えた

マルティナ「!？」

ベグル「ここ！」

マルティナの顔にベグルの拳が当たった

マルティナ「くっ！」

マルティナはベグルから少し距離を置いた

ベグル「よし！まだ感覚は残ってる！」

マルティナ「……………型にはまらない顔を狙うやり方。その動

き……喧嘩で養ったものね」

ベグル「流石にわかりますか。久しぶりでしたけど、まだ捨てたものじゃないみたいです」

マルティナ「荒削りで隙は大きいけど、適正がないとは思えない動きね。意外な戦い方をするものね、ベグル。でも、二度目が通用すると思わない事ね」

ベグル「マルティナ様に褒められるとは。それに時間稼ぎは終了しましたから問題ありません」

マルティナ「え!？」

ロベルト「ベグル!もう充分だ!」

二人から離れた所にはロベルトが大剣と斧を持っていた

ベグル「このまま神殿に行かせてもらいますね!」

ベグルはマルティナに背を向けて走っていった

マルティナ「くっ!やられたわ。接近戦に持ち込んだのはロベルトから注意を逸らす目的もあったなんて。副長の実力は伊達じゃないって事ね。ラースに報告しておきましょう。きつと喜ぶわ」

障害物競争7

その頃、デルカダール城　大広間

カミュ「え？伏兵だつて？」

ラース「ああ、王様がそう言っていた。俺は気付かなかつたが誰か通つたか？俺が通した最後はエドとテルマなんだが」

セーニヤ「私達もそのお二人で最後です。それ以降は誰も通してませんわ」

カミュ「だよな。しかもこの城に残ってるやつだつて少なかったんだろ？誰なんだ？一体」

ラース「二人に気付かれずに城下町を通つたのか。全くわからねえな」

デルカダール地方

ベロニカはダバン達と戦っていた

ベロニカ「マヒヤド！」

ガザル「デュアルブレイカー！」

ブーメランが降ってくる氷を砕いていく

ダバン「しんくうげり！」

ベロニカ「くっ！」

ベロニカは咄嗟に杖で防いだ

ベロニカ「中々バランスいいじゃない。近距離で攻撃を防ぐダバン、遠距離からの確に攻撃するガザル。私としてはかなり厄介だわ」

ダバン「ガザルとは得意武器的に相性がいいんですよ」

ガザル「どんどんいきますよ、ベロニカさん。覚悟しておいてくださいね」

ベロニカ「この大魔法使いベロニカ様が簡単にやられるわけないでしょ。そっちこそ足下掬われないようにしなさい！」

デルカコスタ地方

マルティナはギバ達と戦っていた

マルティナ「氷結らんげき！」

マーズ「俺を狙ってきますか！それなら、かえん斬り！」

ギバ「俺を無視しないでください、マルティナ様！一閃突き！」

マルティナ「ふっ！」

マルティナは横からの攻撃を後ろへ飛んで避けた

マルティナ「ヒップアタック！」

ギバ「ぬおっ!？」

マーズ「ギバ!？」

マルティナ「ばくれつきやく！」

ギバ「ぐああっ!!」

バキバキツ!

ギバは木を薙ぎ倒しながら飛ばされていく

マーズ「イオナズン！」

ドオオン!

マルティナを中心として大爆発が起こる

煙が全体を包み始めた

マルティナ「(これは……………動いたらすぐに位置がわかるってわけね)」

マーズ「(今のうちに……………)」

ギバ「いたた。ん？この煙、マーズか？」

マルティナ「(そこね) 一閃突き！」

ギバ「うおっ!?て、天地の構え！」

ギバは咄嗟にカウンターに移ろうとするが失敗する

マルティナ「甘いわよ！はあっ！」

マルティナはその隙にギバに蹴りを入れる

ギバ「ぐうっ！ジゴスパーク！」

雷を纏った槍がマルティナを中心に炸裂する

その威力で周りの煙も晴れた

マルティナ「その技なら知り尽くしてるわ。効かないわよ！」

マルティナは槍から距離を取っていた

マーズ「メラゾーマ！」

マルティナ「え!？」

マーズが放った炎の塊は複数あつた

マルティナ「くっ！キヤアツ！」

マルティナは炎を避けるが、見えない位置の攻撃が飛んでくる

マーズを見ると臃げなマーズがたくさんいた

ギバ「ど、どうなってんだ？」

マルティナ「これは、ラースの！」

マーズ「やはりマルティナ様もご存知でしたか。何度も練習しておいて正解でした。さあ、いきますよ！」

その頃、デルカダール地方

エド達はダンスが終わっていた

エド「あー、楽しかった！」

シルビア「エドちゃん、テルマちゃん、とつてもよかったわよ！エドちゃんは皆で踊ってただけあって慣れてる感じがしたわ。テルマちゃんこそ最初は恥ずかしがってたみたいだけど、最後はちゃんとエドちゃんやアタシに合わせてくれてよかったわ〜」

テルマ「そ、そうでしたか？シルビアさんに言われると照れますね」

シルビア「ふふ、アタシも二人と踊れて楽しかったわ。それじゃあ続き頑張ってねん」

テルマ「はい！よし、行こうぜ、エド」

エド「持ってもいいのか？」

テルマ「速く進むんだろ？重たいかもしれないけど頼むぜ」

エド「へへ、テルマなんかそんなに重くねえよ。よし、行くぜ！」

デルカコスタ地方

ベグル「次は誰だろうな。そろそろ疲れが溜まってきたんだよな」

ロベルト「そうだな。そういう意味でも残りの二人は厄介だ」

イレブン「あ、きたきた。お疲れ様、ベグル、ロベルト。君達が一番なんだね」

デルカダール神殿前の草原にイレブンがいた

ロベルト「イレブンさん！負けませんよ！」

二人もすぐに武器を構える

イレブン「わわっ、待って待って。僕は残念だけどバトルじゃないよ。シルビアやおじいちゃんと一緒。バトルじゃないのをやろうよ。疲れてるでしょ？」

ベグル「マジですか！それはありがたいです！」

ロベルト「待ってください、イレブンさん。俺達が一番じゃないはずです。バンとブレイブが俺達より先に進んでいるはずなんです」

イレブン「え？そうなの？僕の場所に来たのはベグル達が初めてだよ。デルカダール神殿に向かったのも見てないし」

ベグル「となると、マルティナ様に負けたのか、あの二人」

ロベルト「まあマルティナ様かなり本気だったから仕方ないな。イレブンさんの条件はなんですか？」

イレブン「ふふ、ラースから兵士達は苦手だつて聞いてね。料理だよ」

ロベルト「料理か！ベグル、出来たよな？」

ベグル「人並み程度だ。どんな内容ですか？」

イレブン「あそこにキャンプ場があるでしょ？そこで出来る料理を作ろうと思つてね。食材は持ってきたよ。それで僕と料理するんだ」

ロベルト「イレブンさんと一緒にですか。それなら教えてもらつてもいいですか？」

イレブン「うん、構わないよ。それじゃあ向かおつか」

その頃、デルカダール地方

ダバン「はやぶさ斬り！」

ベロニカ「キヤアツ！」

ベロニカはダバンの攻撃に直撃した

ガザル「今のは効いただろ、ダバン！どうですか、ベロニカさん！通してくれますか！」

ベロニカ「もうっ！体力もかなり少なくなってきたし、通っていないわよ」

ダバン「よし！なんとか終わりも見えてきたな」

マルス「あ！ダバンさんにガザルさんだ！」

ルナ「ベロニカさんもいるー。こんにちは」

ガザル「マルスにルナじゃねえか。二人も参加してたのか」

ベロニカ「あら、もう他のペアが来たのね。それじゃあ先通って、ダバン、ガザル。そうね、子ども達を相手するのはよくないわよね」

ダバンとガザルは走って通っていった

マルス「ベロニカさん、ここはどうやったら通してくれる？」

ベロニカ「うーん……………。じゃあ、私が今からいくつか課題を言

うからその魔法が出来たら通っていいわ」

ルナ「わかりました！」

ベロニカ「じゃあまずはメラを三個同時に出せる？」

ルナ「え？き、三個？待って待って、うーん……」

ルナは手のひらに頑張つて出そうとしている

マルス「ルナ、三つ出せる？」

ルナ「前に出来たの。それがまた出来れば……」

ベロニカ「ルナちゃん、焦りと力みが見えるわ。もつと落ち着いて。ほら、まずは深呼吸してみましよう」

ルナ「は、はい。スウー……ハアー」

ベロニカ「それじゃあもう一回」

ルナ「はい！……メラ！」

ルナの周りに三つメラが出てきた

ベロニカ「出来るじゃない！その調子よ、ルナちゃん。それじゃあ次にいくわよ」

シルビアの場所では

シルビア「あら？」

コロ「キャン！」

コロが尻尾を振りながら走ってきた

シルビア「コロちゃんじゃない。どうしたの？こんな所で」

コロ「キャンキャン！」

コロはシルビアの周りを回っている

シルビア「ふふ、元気いっぱいね。もしかして、お父さんを追いかけてるの？」

コロ「キャン！」

コロはシルビアに元気に返事した

シルビア「正解かしら？ブレイブちゃんはもう先に進んじやつたわ。デルカコスタ地方って言ってわかるかしら？そこにいると思う

わよ」

コロ「キャンキャン！」

コロはそれを聞くとそのまま走っていった

シルビア「あら、伝わったかしら？ふふ、お父さんに会えるといいわね」

その頃、デルカダール城　大広間

ブレイブ「ガウ」

バンを背中に乗せたブレイブが戻ってきた

カミュ「ん？ブレイブ、どうしたんだ？つて、バン！やられたみたいだな」

ラース「まさか最初の脱落がバンか。想像より早かったな」

セーニヤ「バン様もですが、ブレイブ様も所々怪我されています。今治しますわ」

セーニヤは二人に回復魔法を使った

ブレイブ「ガウガウ」

バン「あ、あれ………。俺、確かマルティナ様に」

カミュ「お、目を覚ましたか。マルティナにやられたか？」

バン「ここ、お城。あ、そうか。俺、負けちゃったんだ」

ブレイブ「ガウ」

ラース「お疲れ様だな、バン。本気のマルティナに油断したか？」

バン「師匠！は、はい。バニーの姿になったり見た事ない大人な技を使ってきたり、普段のマルティナ様と全然違って驚きました」

セーニャ「デビルモードまで使われているのですか。本当に手加減していないのですね、マルティナ様」

カミュ「兄貴の指示か？」

ラース「まあな。これは遊びでもあるが、もう一つの目的はマルティナの運動不足の解消だからマルティナだけ手加減なしでいいって言ったんだ」

バン「なるほど。流石マルティナ様です。俺、最後マルティナ様に魅了されちやって動けなかったんです」

ラース「ん？」

それを聞いたラースは雰囲気が変わった

カミュ「あ、バンの馬鹿野郎」

ラース「バン？魅了された？」

バン「え？は、はい。マルティナ様にちよつと誘惑されてしまって、こう気持ちがよくなったというか。つて、師匠!？」

ラース「ふーん」

ラースからはどんどん殺意が溢れてくる

セーニヤ「ラース様が怖いですわ……………」

ブレイブ「クウウ……………」

バン「な、なんでそんなに怒って……………あ。ち、違います！あれは不可抗力でして、決してそういうわけでは！」

バンは少し青ざめながら否定している

ラーズ「それはお前の鍛錬不足だな。兵士長が情けない。特別に課題を出してやろうか」

バン「ヒツ……」

ラーズ「夜中まで重装をしたまま訓練場を走ってろ」

バン「無理です！そんなの出来るわけないじゃないですか！」

ラーズ「ああ？」

バン「ヒイイ!!やります!!」

バンは泣きそうになりながら走っていった

セーニヤ「ラーズ様はどうして怒っていられるのですか？」

カミュ「バンはそこまで悪くねえんだ。まあ、セーニヤには少し難しい事かもな。兄貴が少しわがままなんだ」

障害物競争8

デルカダール地方

ベロニカ「それじゃあ最後の課題よ。ヒヤドとメラを同時に二つ出して」

ルナ「ええ!!別々だけでも難しいのに……」

マルス「……………ベロニカさん、二つ出せばいいの?」

ベロニカ「?そうよ」

マルス「ルナ、ヒヤドなら二つ出せる?」

ルナ「え?うん」

マルス「じゃあ出来るよ!僕がメラを二つ出せばいいんだから」

ベロニカ「そういえばマルス君もメラは出来たわね。でもそんなに得意じゃないって聞いているけど」

マルス「うん、得意じゃないよ。今まで二つ同時なんて出した事も

ないもん」

ルナ「じゃあ無理じゃないの？」

マルス「え？なんで？ルナに出来たら僕にも頑張れば出来るよ。兄妹だから。それになんとなくルナを見てたらやり方わかったかも。見てて、こうやってね……………メラ！」

マルスの手には二つの火の玉が出た

ルナ「マルス凄ーい！見ただけで出来るの!？」

ベロニカ「やるじゃない、マルス君。初めてでそんなすぐに出来るのは大したものだよ」

ルナ「じゃあ、ヒヤド！」

ルナの手には氷が二つ出来た

ベロニカ「ふふ、合格ね。それじゃあ通っていいわよ」

ルナ「マルス、ありがとう！」

マルス「そんな大した事してないよ。ほら、行こう！」

デルカコスタ地方

イレブン達はベグル達とボルシチを作っていた

ベグル「イレブンさん、トマトはこれくらいで大丈夫ですよ。他の野菜も切っておきました」

イレブン「うん、ありがとう。こっちのお肉も切り終わったよ。ロベルト、鍋は大丈夫？」

ロベルト「はい。タマネギってこんな切り方で大丈夫ですか？バラバラなんですけど」

イレブン「大丈夫だよ。それじゃあ鍋に入れていこうか」

ベグル「後はこのまま煮込んで味付けして終わりですね」

ロベルト「おお、ボルシチって確かソルティコのスープみたいなやつですよ。結構簡単に作れるんですね」

イレブン「そうだよ。僕もシルビアに教わって凄く簡単だから、旅の時間がない時よく助かってたんだ。でも、ここでもう一つあるものを加えようかなって」

二人「あるもの？」

イレブン「そう。ソルティコといったらの名物だよ。じゃん！レモンとぶどう！」

ベグル「だ、大丈夫ですか？それ。ボルシチに合います？」

ロベルト「レモンならまあ……でもぶどうって」

イレブン「あれ？合わないかな。買った時に折角だから試してみようと思ったんだ。あ！そんなたくさんは入れないよ？レモンは絞って汁を、ぶどうは少しだけ一緒に煮込んで味付け程度にするんだ」

ロベルト「それなら大丈夫そうです。美味しくなりそうな感じがしますよ」

ベグル「そ、そうか？ぶどうとトマト……… まあいいか」

イレブン「それじゃあ暇になったし、少し喋ってようか」

マルティナ達は

マーズ「マヒヤド！」

マルティナ「くっ！」

マルティナは蜃気楼によるマーズの幻に苦戦していた

マルティナ「(実物がどれか全くわからないわね。マーズも上手く距離を取ってくるし、全体攻撃が当たらない。厄介ね)」

その時

シュワー

マーズの蜃気楼がいなくなった

マルティナ「!？」

ギバ「やべー！バレたぞ、マーズ！」

マーズ「いや、森を抜けたぞ！ここまで来れば追いかけれないはず！」

二人はマルティナより少し離れており、森から出ようとしていた

マルティナ「ふふ、上手くやられたわね。まあ仕方ないわ」

ダバン「あ！マルティナ様！」

ガザル「次はマルティナ様か！」

マルティナ「あら、ダバン達もきたわね。私とは戦ってもらおうよ。残念だけど、手は抜かないから覚悟してね」

ダバン「ガザル！」

ガザル「おう！デュアルブレイカー！」

キン！

マルティナ「遠距離は厄介ね」

マルティナは槍で弾き、そのままガザルへと向かう

ダバン「行かせませんよ！マルティナ様！かえん斬り！」

マルティナ「はあっ！」

マルティナはダバンの武器を足場にして飛び越えた

ダバン「な!？」

ガザル「俺狙いか！」

マルティナ「氷結らんげき！」

ガザル「遠距離ばかりだと思わないでください！はやぶさ斬り！」

マルティナ「ぼくれつきやく！」

ガザル「ぐっ！」

ダバン「心眼一閃！」

マルティナ「やあっ！」

マルティナはダバンからの攻撃を足で弾いた

マルティナ「ピンクハリケーン！」

マルティナの色気の方が爆破した

二人「ぐうっ！」

マルティナ「雷光一閃突き！」

ガザル「ゲツ！あ、あぶなっ!!」

ガザルはギリギリで回避した

マルティナ「はっ！」

ガザル「ガハッ！」

回避の際にマルティナの蹴りがガザルに当たる

ダバン「はやぶさ斬り！」

マルティナ「さみだれ突き！」

ガザル「やられてばかりいられるか！シャインスコール！」

マルティナ「しんくうげり！」

マルティナはガザルのブーメランの攻撃を弾いた

ダバン「ここ！」

ダバンがその隙にマルティナに攻撃する

マルティナ「ふふ、残念」

マルティナはそのまま回避し、ダバンの目の前まで急接近した

ダバン「!？」

マルティナ「セクシービーム！ばつきゅーん、なんてね」

マルティナはハートを打ち出した

ダバン「うっ……」

ダバンは魅了された

ガザル「ダバン!？」

マルティナ「デビルモード！」

マルティナの全能力が一段階あがった

ガザル「わ……バ、バニー姿に」

マルティナ「あら、そんなブーツとしてる暇あるのかしら?」

ガザル「ハッ！」

マルティナ「雷光一閃突き！」

ガザル「ぐああっ!!」

マルティナ「終わりよ！氷結らんげき！」

ガザル「ガ……………」ドサ

ガザルは倒れた

マルティナ「さみだれ突き！」

マルティナは動けないダバンに攻撃する

ダバン「ぐうつ！」

マルティナ「ダバン、起きれる？」

ダバン「うう……………」

マルティナ「うーん、どうしようかしら」

デルカダール地方

ベロニカはテルマ達と遭遇していた

ベロニカ「ふーん、参加者だったの。エドが人攫いでもしたのかと思っただわ」

エド「そんなんしねえよ！」

テルマ「ベロニカさん、でしたよね。通してくれますか？」

ベロニカ「本当なら戦う所なんだけど、新人兵士に一般人相手だと
そうも言ってもらえないわよね」

エド「俺は構わないぜ！寧ろ、戦ってみてえ！」

テルマ「手を抜いていただければバトルでも構いません。俺もほん
の少しなら戦えます」

ベロニカ「そう？じゃあ手は抜くから、かかってきていいわよ」

エド「よっしゃ！借りるぜ、父ちゃん！」

エドは魔物の姿になった

ベロニカ「その姿は油断出来なそうね」

エド「おりゃあ！」

エドは一瞬でベロニカの目前まできた

ベロニカ「!?!」

エド「ダークパンチ!」

エドの手が黒くなり、そのまま殴りかかった

ベロニカ「はあっ!」

ベロニカはギリギリで杖でパンチを防いだ

エド「逃がさないぜ!メガトンパンチ!」

エドはそのまま攻撃する

ベロニカ「キャアッ!くっ!やってくれるじゃない、エド!メラ
ゾーマ!」

ベロニカは炎の塊をぶつけた

エド「あつぶね!魔法使えるのかよ!」

テルマ「今度は俺が!かえん斬り!」

ベロニカ「あら、特技使えるのね。やるじゃない」

ベロニカは攻撃を避けた

エド「ここだ!ダークタックル!」

エドがベロニカの場合目掛けて突っ込んできた

ベロニカ「キヤアツ！くっ！かなり素早いわね！」

エド「へへ、どうだ！兵士達でやる時はこの姿になっちゃ駄目なんだけど、今なら自由だからな！強いだろ！」

ベロニカ「厄介ではあるわね。相方がバンとかの兵士じゃなかった事に安心してるわ」

エド「テルマを馬鹿にすんな！」

テルマ「いや、当然だわ！何度も言うけど、俺一般人！」

エド「普通の人間はテルマみたいな事言わねえの！」

テルマ「なんだよそれ！」

ベロニカ「ほら、喋ってないで続けるわよ。テルマ君はいいとして、エド。あんたは少し本気を出させてもらうわ」

エド「へへ、そうこなくっちゃな」

その時

コロ「キャンキャン！」

三人「ん？」

コロ「キャン！」

コロが走ってきた

コロ「ハツハツハ」

ベロニカ「あら、コロじゃない。どうしたの？」

コロ「キャン！」

エド「通りたいて言ってるぞ」

テルマ「ここを通りたいのか？って、エドお前この子の言葉わかるのか」

エド「そりゃあ魔物と過ごしてたからな」

ベロニカ「ふーん、なんでコロが通りたいの？」

コロ「キャンキャン！」

エド「皆と遊べるから、だってよ」

テルマ「ふふ、可愛いじゃん」

ベロニカ「あら、そうだったの。でも、今私はエド達と遊んでるの。
この先にマルティナさんがいるからそこに向かってみて」

コロ「キャン！」

コロは走っていった

ベロニカ「全く。大きくなってもブレイブみたいに落ち着きはない
みたいね」

テルマ「コロ君可愛いなー。前にお城で会った時も随分人懐っこい
と思ってた」

エド「あんなに人間慣れした魔物も相当だぞ。ブレイブとかコロは
凄く珍しいんだぜ」

ベロニカ「さ、トラブルがあつたけど続けるわよ」

障害物競争9

デルカコスタ地方 キャンプ場

二人「ご馳走様でした」

ベグル「……ごっそさん」

ロベルト「残るはグレイグ將軍一人だな。というよりも、いる場所はもうわかってるけどな」

イレブン「まあそうだろうね。グレイグはデルカダール神殿の入り口、階段の場所にいるよ」

ベグル「階段の場所かよ。そこでよりもよってグレイグ將軍つて、通す気ありますか？」

イレブン「レースが意地悪してるんだよ。まあ、皆ならかなり強いんだし、その程度なるとかなるんじゃない？」

ロベルト「俺達は不安定な足場で戦う事は慣れてないんです。バンが特別に訓練されてるだけであって、他の俺達は」

ベグル「俺も出来るぞ。バンに負けたくねえからレース將軍の前に

教わった」

ロベルト「本当か、ベグル！それは心強い！」

イレブン「ふふ、でもそこを通れたらゴールドだよ。頑張ってね」

ロベルト「最後の正念場だな。頑張ろうぜ、ベグル」

ベグル「ここまでできたら商品券やらは俺達のもんだな」

デルカダール神殿 入り口

グレイグ「来たな。ベグル、ロベルト」

ベグル「グレイグ將軍、負けませんよ」

ロベルト「バトルですよね」

グレイグ「そうだ。そして、誰も通すなとレースから言われている。多少の手は抜くが、それでも負ける気は更々ないと思え。いくぞ！」

その頃、マルティナとダバン達は

ダバン「俺達ここで脱落かー」

ガザル「マルティナ様、見た事ない技がいくつかありましたね。それだけ本気だったって事ですか」

マルティナ「ええ、そうなの。レースから手は抜かなくていいっていわれてね。皆なら私が本気を出しても多少はついてこれると思うて私も了承したの。でも、見た事ない技使ってごめんなさいね」

ダバン「いえ、俺達の判断不足です。惑わされずにいければよかったです」

ガザル「そうだな。因みに他に脱落した人はいるんですか？」

マルティナ「最初はバンとブレイブが私の場所で脱落したわ。もうお城に戻ってるはずよ」

ダバン「バンが脱落!?!意外だな」

ガザル「絶対優勝候補だと思ってたぜ」

マルティナ「ダバンみたいに魅了されて動けなくなったの。仕方ないといえばそれまでだけどね。あら?」

コロ「キャン！」

三人「コロ！」

コロ「クウーン」

ダバン「なんでここに？」

ガザル「コロ、どうしたんだよ」

コロ「クウ？」

マルティナ「ブレイブを探しにきたのかしら？残念だけど、ブレイブはもうお城に戻ってるはずよ。コロ、お城に戻りなさい」

コロ「キャン！」

コロはマルティナに元気よく返事すると、デルカダール神殿に走り始めた

ダバン「え!?!そっちは違うぞ、コロ！」

ガザル「おーい、どこいくんだー」

マルティナ「二人はお城に戻ってて。コロ、待ちなさい！」

マルティナもコロを追いかけていった

デルカダール地方

エド「おらー！」

ベロニカ「危ないわね！エドは本気が抜けないわ」

エド「へへ、テルマ！」

ベロニカ「え!?!」

ベロニカの後ろにはテルマがやってきていた

テルマ「失礼します、ベロニカさん！かえん斬り！」

ベロニカ「キヤアツ！」

エド「ナイスだぜ、テルマ！」

ベロニカ「ふう、いつの間に挟み撃ちになつてたのかしら。まあいいわ、テルマもまあまあやるみたいね。通つていいわよ」

テルマ「やった！ありがとうございます！」

エド「よし、どんどんいくぞ！」

デルカコスタ地方

マルス「あれ？あそこで走ってるの母さんだよ」

ルナ「本当だー。おかあさーん」

マルティナ「あ、あら？マルス、ルナ。二人も参加してたの？って、それどころじゃないわ。コロ、待って！」

ルナ「コロと追いかけてっか？」

マルス「なんでここにコロが？お城で待ってるんじゃない？」

ルナ「わかんないけど先に進もつか」

マルス「そうだね」

キャンプ場

イレブン「おーい、ギバ、マーズー！こっちだよー」

ギバ「お？あそこにいるのイレブンさんだぜ」

マーズ「本当だ。キャンプ場でどうしたんだろうな」

イレブン「二人ともお疲れ様。僕はバトルじゃないけど、ここで料理を作るのがクリアの条件だよ」

二人「料理……………」

二人は嫌そうな顔をした

ギバ「おい、マーズ。料理の腕は？」

マーズ「調味料すら怪しいレベルだ。かなりまずいな」

イレブン「ふふ、苦手そうだね。僕も教えるからゆつくりで大丈夫だよ」

ギバ「頼りまくりですけどいいですか？」

イレブン「うん。全然構わないよ」

マーズ「それは心強いです。本当料理だけは出来る気がしなくて」

イレブン「それじゃあ始めよつか。作るのはボルシチだよ」

二人「難しそう」

デルカダール神殿

ロベルト「さみだれ突き！」

グレイグ「超はやぶさ斬り！」

ロベルト「うわっ！」

グレイグの攻撃で競り負けたロベルトはバランスを崩した

ベグル「渾身斬り！」

グレイグ「甘い！」

グレイグは後ろから攻撃してくるベグルに蹴りをいれた

ベグル「ぐはっ！」

ロベルト「ひょうけつ斬り！」

グレイグ「アイスブレード！」

ロベルト「ぐっ！うおっと！」

技がぶつかり合うとロベルトが下の段にいるため、バランスを崩しかける

ベグル「上の段にいる方が力がかかりやすいし、バランスも取れる。厄介ですね、ここ。かぶとわり！」

グレイグ「む。ビッグシールド！」

ガン！

ベグルの攻撃は盾に防がれた

グレイグ「シールドアタック！」

ベグル「いでっ！」

ロベルト「さみだれ斬り！」

グレイグ「なぎはらい！」

ロベルト「くっ！」

ロベルトの片手剣での攻撃もグレイグの大剣のパワーに押し負ける

グレイグ「さあ、どんどんこい！」

その時

コロ「キャンキャン！」

三人「ん？」

コロが階段を登ってきた

コロはグレイグの周りを回っている

コロ「キャン！ハツハツハ！」

グレイグ「コロ？どうしてここに」

ベグル「お城にいたんじゃないのかよ」

ロベルト「あれ？マルティナ様もきた」

マルティナ「待ってつてば、コロ！お城に戻りなさい！」

グレイグ「姫様まで。どうされたのですか」

マルティナ「コロがお城に戻らないのよ。いつもは言う事聞いてくれるのに」

コロ「クウーン」

グレイグ「コロ、城に戻るのだ」

グレイグが足下にいるコロを捕まえようとする

コロ「キャン！」

グレイグ「ぬっ！」

コロはグレイグの足を潜り抜けて神殿の入り口に向かっていく

グレイグ「ベグル、通すな！」

ベグル「え!?!と、止まれ!コロ!」

コロ「キャン!」

コロはベグルの手を避けて走っていく

そしてコロが神殿の中に入った

コロ「キャン!キャン!」

コロは中で楽しそうにクルクル回っている

グレイグ「全く。今日はどうしてそんなにわがままなのだ」

マルティナ「ここにそんなに入ってみたかったの?」

マルティナはコロをようやく捕まえた

コロ「キャン!」

マルティナ「やっと大人しくなったわね。ブレイブに叱ってもらわないと」

その時

ラース「あちやく、遅かったか」

全員「ラース／將軍！」

その後、夕方　デルカダール城　大広間

全員「コロが参加者!？」

ラース「そう。王様とペアだったらしい」

カミュ「じゃああの時のコロは王様に指示されて走ってたってわけか」

ベグル「じゃあ待ってください、つまりこれって」

ラース「そういう事だ。優勝は王様とコロだな」

ギバ「そんなんありかよ！」

ベロニカ「ちよつと！全員コロを通したって事!？」

イレブン「僕はわからなかったな。コロを見てなかったよ」

マーズ「俺達と料理していた時ですもんね」

ギバ「途中でラーズ將軍達にもう優勝者が出たっていわれて中断させられたもんな」

ロウ「ほほ、まさかの伏兵じゃったというわけか」

シルビア「アタシ、てっきりブレイブちゃんを探してるのかと」

セーニヤ「全く気付きませんでしたわ」

ロベルト「だからあんなに反抗してたんですね」

マルティナ「もっと早く気付ければよかったわ」

コロ「キャン！」

ブレイブ「ガウガウ」

マルス「コロ凄ーい！」

ルナ「いいなく、それ」

コロの頭には王様が作った手作りの王冠が載っている

グレイグ「王は俺達がコロ相手なら油断する事をわかっていたのか」

ラース「王様に告げられて急いで皆に知らせようと思ったんだけど。もう既に時間が経ってから知らされたから間に合わなかったんだ」

カミュ「じゃああの優勝賞品は全部王様に？」

デルカダール王「そういうわけではないぞ」

全員「王様！」

玉座の間からデルカダール王がやってきた

デルカダール王「すまんかったのう、皆があまりにも楽しそうなのでわしもつい参加させてもらった。まさか本当に優勝してしまうとは思わなかったがのう」

マルティナ「それは構わないのですが、商品は？」

デルカダール王「うむ。商品券とホツカイマグロ、お酒のセットは

欲しい者にプレゼントじゃ。じゃが、ダーハルーネの甘味セットは悪いが諦めてくれ」

兵士達「おお!!」

ラーズ「というわけだ。まあ欲しいものを自由に持つていってくれ」

ダバン「俺達もいいんですか？脱落したのに」

ラーズ「ああ、まあ参加賞みたいなものだ。楽しめたならなによりだ」

イレブン「そういえばバンは？姿が見えないけど」

カミュ「ああ………。あいつなら今訓練場で伸びてるぜ」

ラーズ「だらしないよな」

セーニヤ「回復しようとしたのですが、ラーズ様に止められてしまっ」

ペロニカ「ちよつと。何したのよ、あんた」

ラーズ「別に？鍛錬不足な弟子を鍛えてやったただけだ」

兵士達「（ああ、なにかやらかしたんだな）」

心の中で兵士達は同じ事を思っていた

ロウ「どれ、それではバンのためにも一つ残しておこうかの」

マルティナ「それじゃあ皆、今日はお疲れ様。実はこれはラーズが私の運動不足の解消のために考えてくれたの。それでも皆が楽しめたなら私としても嬉しいわ。皆、また遊びましょう」

ラーズ「今度は普通に祭りとかにしたいよな」

シルビア「それもいいわね。皆でわいわい楽しくはしやぎましょう！」

兵士達「はい！」

謎の魔物

半年後、デルカダール城

訓練場

ラース「俺が明日から三日間、クレイモラン王国に指導でいなくなるんだ。だから何かあったらグレイグに言ってくれ」

兵士達「はい！」

バン「師匠！お土産はありますか!？」

ラース「はいはい、覚えてたら全員分何か買ってきてやるよ」

バン「やった！」

ベグル「またお前はそうやってラース將軍に無理言いやがって」

ラース「ただし！バンがその三日のうちに書類を提出していたら、の条件つきだ」

全員「ええ!!」

全員の視線がバンに集中した

バン「うげ……。色々プレッシャーがかかってる」

ギバ「こりやあどうなるか怪しいもんだな」

ガザル「明日には忘れてそうだ。お土産は無いものと思っておこう」

ロベルト「見習い達のお土産もかかってるぞ、バン。頑張れよ」

ラース「まあ集まってもらってすまなかつたな。それじゃあ各自戻ってくれ」

その夜、グラジー

閉店後の片付けも終わった頃、ビルとマドリーから皆に提案をしていた

チャム「お塩？」

マドリー「そうなの、今日で切らしちゃってね。買ってもいいんだけど、どうせなら取りに行きましょうよ」

グリー「取りに行くってどこにですか？」

ビル「質がいいものであればナギムナー村やクレイモランのだが、そこは流石に遠いし、俺達を作る料理とは少し違う味になる。デルカダール料理を作るための塩はデルカコスタ地方で取れる。」

この地方特産の塩はまあまあ貴重でな。しかも、デルカダール料理を作るにはうってつけの味わいが出せるんだ。だから明日の昼を休んで、その時に取りに行こう」

マヤ「ここでも塩って取れるんだ。じゃあデルカコスタ地方に行くって事だね」

テルマ「塩にこだわってるんですね。そんな料理の味が変わるほどなんて少し想像しにくいですけど」

マドリー「調味料って大事なのよ。料理の決め手といっても過言じゃないわ。近いし、魔物も少ないから皆で楽しく行きましょう」

チャム「うん！皆でピクニック！」

グリー「ふふ、そう考えると楽しそうですね」

ビル「それじゃあ明日各自準備してきてくれ。明日の昼前には出発しよう」

全員「はい！」

次の日、デルカダール地方

チャム「〜♪」

チャムは楽しそうにスキップをしている

マドリー「ふふ、楽しそうね、チャムちゃん」

チャム「うん！こんなに大勢でお出かけしたの初めてなの。いつもお兄ちゃんと二人きりだったから」

マドリー「そうなのね。じゃあいい思い出にするようにしましよ
う」

グリー「テルマ君もこんなに大勢は初めてって事？」

テルマ「はい。だから俺も少しウキウキしてます。こんな年にもな
って、ですけど」

テルマは少し恥ずかしそうにしているが、口元は上がっている

マヤ「そんなの気にしないよ。私だってこうやって皆でお出かけす
るの楽しいよ！」

グリー「僕もだよ。同じ仕事仲間つてのもあるけど、やっぱり皆と仲良くいたいからね。こうやって手を繋いでみるのもいいんじゃない?」

グリーはテルマの手を握った

テルマ「へへ、そうですね。チャムー、兄ちゃんと手を繋ごうぜー」

チャム「あー、グリーさんと手繋いでるー。いいなー、私もー」

マヤ「ふふ、じゃあ私も」

マドリー「あら、楽しそうじゃない。私も混ぜて」

チャム「えへへ、皆仲良し!」

テルマ「ビルさんも入りましょうよ」

ビル「……………」

ビルは少し険しい顔をしている

テルマ「ビルさん?」

ビル「ん？ああ、すまねえ。考え事を、って何してんだ？」

マドリー「皆で手を繋いでいたの。楽しいわよ、ビル。そんな怖い顔してないであなたも」

ビル「あ、ああ。（魔物が少ない地方とはいえ………）こんなに見なかったか？」

その頃、デルカダール城下町

バンとベグルが見回りにきていた

ベグル「いいな、バン。どこにも行かずに来いよ。お前の見回りはいつも時間かかりすぎなんだからな」

バン「おう！」

ベグル「返事だけはいいんだからよ。さて、今日の魔物調査はどこまでいく？………あ？」

ベグルが振り返ると既にバンがいなくなっていた

ベグル「あんの……馬鹿野郎が。言ったそばから！」

商店街

バンは肉売り場にいた

バン「おっちゃん！これ、新しいやつか!？」

おじさん「ん？おお、バンじゃねえか。相変わらず目敏いやつだな。そうだけ、昨日出た新商品だ」

バン「美味そー！」

バンの目はキラキラしている

おじさん「ははは、だろ？自慢の商品だからな。なんなら少し味見してみるか？」

バン「いいのか、おっちゃん！ありがとな！」

バンは肉屋のおじさんから新商品をもらった

肉は薄く切られており、甘い香りのするタレが絡まっている

バン「うん!!美味しい!!」

おじさん「はっはっは！相変わらずいい顔して食ってくれるな、バンは」

その時、バンの後ろからベグルがやってきた

ベグル「見つけた!!」

バン「あ……………」

ベグル「てめえ、人が話してた側からいなくなりやがって本当お前は寄り道ばかり」

おじさん「ベグルさんか。あんたもよかつたらどうだい？うちの新商品味見していってくれよ」

バン「そ、そうだぞ、ベグル！俺はいい匂いがしたからうっかり釣られちまっただけだ！これ、美味いから食ってみろよ！」

ベグル「……………ハアー。つたく、それじゃありがたいもらいますね……………おお、美味しいな。肉にこのタレが凄くあってる」

バン「だよな！おっちゃん、これ売れるぜ！俺が保証する！」

おじさん「はっはっは！兵士長様からのお墨付きはいいもんだ！それじゃあ仕事の邪魔したみてえで悪かったな。見回り頑張れよ！」

バン「ああ！おっちゃんもファイトだぜ！」

ベグル「ごっそさん。ほら、さっさと行くぞ、バン」

デルカダール地方

ベグル「全く。街の人と仲良しなのはいい事だが、仕事を放つたらかしのすんじゃねえぞ」

バン「わかってるって！あれ食べたら俺も行こうと思ってたんだ」

ベグル「はっ、どうだか。お前の事だから近くにあった野菜のおばさんや花屋の婆さんにも話しかけられそうだ」

バン「だってよ、話しかけられたら無視するわけにはいかねえだろ」

ベグル「それはそうだけだよ……………ん？」

バン「ん？どうした、ベグル？つて、なんだこれ」

二人が歩いていた草むらには大きな跡がついていた

バン「何かの跡？結構大きいな」

ベグル「これ……………足跡だ。魔物の足跡」

バン「ハア!?こんなデケエ足を持つてるやつなんて、この地方にいねえはずだぞ!」

ベグル「だな、何かおかしいぞ。幸い跡が続いてる。これを辿ってみるぞ」

数分後

バン「魔物も見かけないと思ってたら端っこにももんじややスライム達、木の影にいつかくさぎやおおがらすなんかは自身の縄張りがある。何かに怯えているみたいだぞ」

ベグル「いつかくさぎやおおがらすなんかは自身の縄張りがあるやつらだ。それを無視してまで隠れる程の何かがいたって事か。この足跡、デルカコスタ地方に向かっている」

バン「俺達二人でどうにかなるか?」

ベグル「万が一もある。ダバンとギバも呼ぶぞ」

バン「そうだな」

その頃、デルカコスタ地方 海岸

チャム「海ー！」

テルマ「ソルティコでは当たり前だった海もしばらく見てないと懐かしく感じますね」

グリー「マヤさん、また一緒に海に入ろうよ！」

マヤ「うん！テルマもチャムもおいでよ！」

四人は海に入って遊び始めた

ビル「なあ、マドリー」

マドリー「流石にわかってるわ。早い所逃げ出さないと」

ビル「何処からだ、この恐ろしい気配は」

マドリー「デルカコスタ地方にこんな強い気配はあり得ない。いえ、この気配の強さ、ロトゼタシア全体でも相当のもの」

ビル「チツ！こんな時に限ってこんな事に巻き込まれるとは」

マドリー「いざという時は………私達が」

ビル「ああ、当然だ。時間稼ぎにはなってほしいものだが」

チャム「マドリーさん、ビルさん、見てみてー、ヒトデがいたの！」

チャムがこつちに向かってきた

マドリー「…… あら、本当だわ。チャムちゃんはヒトデ触れるのね」

チャム「うん！グリーさんがこれ怖がってたんだよー。変だよね」

ビル「ふっ、グリーらしいな。だが、あまりはしやぎすぎるなよ。海にも魔物はある。気をつけておけ」

チャム「うん！」

その頃、デルカダール城 玉座の間

二人「巨大な魔物の足跡!?!」

バン「はい！魔物達も隅で怯えておりました。今デルカコスタ地方には確認された事のない魔物がいると予想されます」

マルティナ「グレイグ、頼める？」

グレイグ「お任せください。バン、全兵士を連れて行くぞ」

ブレイブ「ガウ！ガウガウ」

ブレイブはマルティナ達の前にやってきた

グレイグ「どうした？ブレイブ」

バン「あ、ブレイブもとても強烈な気配を感じるって言ってます。ブレイブも力になるそうです」

グレイグ「そうか。それならば頼らせてもらおう、ブレイブ」

ブレイブ「ガウ！」

マルティナ「ラースも呼び戻した方がいいかしら」

グレイグ「いえ、その必要はありません。ラースは今自分の仕事をしておられます。ならば、私には私に出来る今の仕事をこなすのみ」

マルティナ「そうね、わかったわ。でも、もし何かあったら連絡して。リースも呼ぶし、私も行くわ」

グレイグ「はっ！」

ゴライアス

その頃、デルカコスタ地方 海岸

グオオオオ!!

全員「!!?」

突然大地を揺るがすような雄叫びが響いた

マヤ「なに!?!」

グリー「い、今のつて鳴き声?」

テルマ「こんな鳴き声の魔物が?」

チャム「こ、怖い……」

ビル「四人とも!急いで上がるんだ!」

四人「はい!」

マドリー「!?!ビル、あそこ!」

マドリーが山の方を指すとそこには体の半分が赤、もう半分が緑色

をして腕が四本生えたムキムキの魔物、ゴライアスがいた

ビル「ゴライアスだと!? あんなやつがこんな場所に!」

マドリー「私達じゃあ本当に足止めにもならないわ!」

マヤ「ビルさん、マドリーさん、全員出たよ! 逃げよう!!」

テルマ「大丈夫だからな、チャム。俺が守ってやる」

テルマは泣いているチャムを抱きしめている

しかし、テルマも膝が震えている

ゴライアス「グウウ……」

遠くにいるゴライアスと目があった

全員「!」

ゴライアス「グオオオオ!!」

ゴライアスがこっちに向かってきた

マドリー「ビル!!」

ビル「ああ!!お前ら、一目散に逃げろ!!そして急いで城にいるラース様にこの緊急事態を伝えるんだ!!」

グリー「ビルさんとマドリーさんは!」

マドリー「いいから早く逃げなさい!!」

マドリーは普段見せないような緊迫した表情で怒鳴った

テルマ「は、はい!!」

マヤ「……………ごめん、ビルさん、マドリーさん!」

四人は走っていく

ゴライアス「グオオオオ!」

ゴライアスはその四人めがけて岩を大量に落としてきた

四人「!!?」

ビル「はあっ!!」

マドリー「えい!!」

ドガアン!!

魔物になったビルとマドリーがマヤ達に当たりそうな岩を砕いた

ビル「今のうちだ！」

グリー「はい！」

グリー達の周りには岩がどんどん落ちてくる

テルマ「ま、また魔物！でも、その声って！」

チャム「ビル……さん？」

マヤ「固まってないで、後で説明するから！今は逃げるよ！」

マヤは立ち止まっている二人の手を引っ張っていった

ゴライアス「グウウ」

ゴライアスはビルとマドリーを標的に変えた

マドリー「どうしましょう、足が………恐怖ですくんで」

ビル「気持ちはわかる。だが、今俺達の後ろには絶対に守らなければならぬ人間達がいる。逃げるための僅かな稼ぎにでもなれば！」

ビルが突っ込んでいく

ゴライアス 「グオオオオ！」

ブン！

ビル 「うおつと！」

振りかぶってきたパンチをギリギリでかわした

マドリー 「はあ！」

マドリーは空を飛んで、目に向かって爪でひっかいた

ビル 「くらえ!!」

足にビルが殴りかかった

ゴライアス 「グオオオオ!!」

ビル 「ぐうっ！」

マドリー 「キャツ！」

ゴライアスは全くの無傷であり、逆に二人は四本もある腕に捕まっ
てしまう

ゴライアス 「グオオオオ！」

マドリー「キヤアアアツ!!」

マドリーは森へ思いつき投げつけられた

森の木々はその部分だけ全て薙ぎ倒されて行く

ビル「マドリー!!」

ゴライアス「グオオオオ」

ビル「グハツ……………」

ビルは地面に叩きつけられた後、拳でもう一発叩き込まれた

ドオン!!

巨大な土煙と衝撃が巻き起こる

ビル「……………」

マドリー「……………」

二人は動かなくなった

ゴライアス「グオオオオ!!」

デルカダール地方 駐屯所

グオオオオ!!

ゴライアスの声がここまで聞こえてきた

グレイグ「何かが暴れている。先程大きな音もあつたな。急いで止めなければ」

その時、デルカコスタ地方からマヤ達が走ってきた

マヤ「あ!!おっちゃん!バンさん達!」

バン「マヤちゃん達!?!どうしてここに!」

グリー「僕達、塩を取りにここに来てたんです!そうしたら山の方から巨大な四つの腕が生えた魔物が!」

グレイグ「四つの腕!メガトンケイルのようなやつらか!」

ギバ「ヒノノギ火山の中で戦った事あります。かなりのパワーと体力を持っている強敵ですね」

マヤ「ビルさんとマドリーさんが囷になつてくれたの!でも、さつき大きな音も聞こえたし、叫び声も聞こえたの!」

ベグル「暴れてるのは戦ってるからだつたのか。急がないとヤバそ

うだ」

ロベルト「全速力で向かうぞ！」

デルカコスタ地方

ブレイブ「ガウ！」

マーズ「な、なんだよあいつ！」

ガザル「かなりでかいな！こんな魔物見た事ねえ！」

ギバ「メガトンケイルと色が違う！」

グレイグ「こいつは、確かゴライアス！メガトンケイルの転生モンスターだ！メガトンケイルとは比べ物にならないくらい強いぞ！」

ダバン「あ！あそこ、土煙の中に魔物のビルがいるぞ！」

グレイグ「バン、ベグル、ギバ、俺とこい！こいつと戦うぞ！他の者はビルと何処かにいるはずのマドリーの救助、回復をするんだ！」

兵士達「はっ！」

全員がそれぞれ動き始めた

ゴライアス 「グオオオオ！」

ゴライアスがグレイグ達に向かってくる

グレイグ 「スクルト！」

全員の守備力が一段階あがった

バン 「ばくれつきやく！」

バンがいち早くゴライアスの足元に辿り着き、攻撃する

ゴライアス 「グオオオオ！」

ゴライアスはまるで効いてないかのようにバンに反撃してきた

ドゴオン！

バン 「ヒイイツ！」

拳が当たった場所の大地は抉られ巨大な穴ができた

ギバ 「こりやあ当たったら即死を考えないとだな！氷結らんげき
！」

ベグル 「アイスブレード！」

ギバとベグルも攻撃に参加する

ゴライアス「グオオオオ！」

ゴライアスは大量の岩をなげつけた

バン達全員を覆いつくすほどの岩が降り注ぐ

バン「ちよ、ちよつと待てつて！多すぎ!!」

グレイグ「なぎはらい！」

グレイグは大剣で砕いていくが、それでも岩の量が上回った

グレイグ「ぐうっ！」

ベグル「ぐっ………」

ギバ「お、重てえ……」

全員岩に埋もれてしまった

ゴライアス「グオオオオ！」

ゴライアスが岩にばくれつけんを繰り出した

四人「グアアアア!!」

岩を砕きながら動けない四人に直撃していく

ロベルト「おいビル、生きてるか！」

ビル「……………」

ロベルト「くっ！心臓は動いているのが幸いだが、意識無しか」

マーズ「マドリーさんを見つけた！こつちも相当酷い」

ダバン「俺の回復じゃあ到底追いつかない。急いで城の医療部屋に行かないと」

ブレイブ「ガウ！」

ガザル「よし、ブレイブ、二人を連れて戻ってくれ。頼んだ！」

ブレイブ「ガウ！」

ブレイブは二人を乗せて城に向かって走っていく

ロベルト「皆は大丈夫なのか？」

マーズ「俺達も救援に行くぞ！」

バン「ゲフツ……… 一撃だけでなんて威力してんだよ」

ベグル「だが、簡単に倒れるわけにはいかねえよな！」

ゴライアス「グオオオオ！」

ゴライアスはばくれつけんを繰り出した

グレイグ「ビツクシールド！」

ガンガンガン！

グレイグ「ぐうっ！なんて威力だ」

グレイグが盾越しにどんどん押されていく

マーズ「グレイグ將軍、スカラ！」

グレイグの守備力が二段階あがった

ガツン！

今まで押されていたグレイグが持ち堪えられるようになった

グレイグ「うむ、助かったぞ、マーズ！」

ガザル「ベグル、お前の馬鹿力見せてやれ！バイキルト！」

ベグルの攻撃力が二段階あがった

ベグル「！ナイスだ、ガザル」

ベグルは首や肩を回してゴキゴキと鳴らし始めた

ゴライアス「グウウ……」

ゴライアスは盾で痛めたのか拳を振っている

ゴライアス「グオオオオ！」

ゴライアスのパンチがベグルに向かっていている

ベグル「っしやあ！受けて立ってやるよ」

ベグルは拳を合わせてニヤリと笑った

グレイグ「なに!?無茶だ、ベグル！」

ゴライアス「グオオオオ！」

ベグルは利き足を地面にヒビが入るほど思いっきり踏ん張り、ゴライアスのパンチに合わせて足、体、腕全てを捻りながら大きく振りかぶり、拳にパワーを増大させた

ベグル「おらああああ!!!」

ドゴオン！

ゴライアスのパンチとベグルのパンチがぶつかりあう

ベグル「うぐぐぐぐ……… ふんっ!!」

ドオン!!

ゴライアス「!？」

ゴライアスのパンチが跳ね返され、大きくのけぞった

グレイグ「おお!!」

ロベルト「はっ！」

ロベルトはゴライアスの両足を切り、立て直しがしにくいようにした

バン「はあっ！」

バンはベグルを足場にジャンプして、倒れそうになっているゴライアスの正面に飛んだ

バン「超さみだれ突き！」

ゴライアス「グウウ！」

ゴライアスは避けられず、強力な五連撃全てが当たる

ドオン!!

ゴライアスが地面に叩きつけられた

ギバ「ハア！」

バンの攻撃が当たると同時に、ギバもベグルを足場にジャンプした

マーズ「ルカニ！」

ゴライアスの守備力が二段階さがった

ギバ「終わらせてやるぜ！雷光一閃突き！」

空中からギバの雷を宿し、狙い済まされた一突きがゴライアスの体を貫いた

ゴライアス「グオオオオオ………」
「ジュワー」

ゴライアスを倒した

ロベルト「ナイスだ、ギバ！」

グレイグ「素晴らしいコンビネーションだ、お前達。よく合図もなしに完璧と思うほどに揃えられるものだな」

バン「そりやあもうずっと一緒にいますからね！互いにわかりあっ

てますよ！」

バンは胸を張っている

ベグル「おい、馬鹿二人。てめえら、俺を踏み台扱いしやがって。大した根性だなあ」

ベグルからは黒いオーラが溢れている

二人「ヒイツ！」

バンとギバは一瞬で顔が青ざめ、冷や汗が出まくっている

ギバ「だだだだだつてよ！あの時は仕方ねえだろ！ああするしか方法がなかったんだ！」

バン「そ、そうだそうだ！それにベグルって踏みやすいし、俺があいいう行動するってわかってるから進んで踏み台になってくれて」

数秒後

ベグル「ギバは何か言いてえ事あるか？」

ギバ「全くございません、ベグル様!!踏んでしまい申し訳ございませんでした!!」

ギバは綺麗な土下座をしている

ベグルの横には全身が地面に埋まり、動かなくなったバンがいた

ベグル「いい謝罪だ。その潔さに免じて」

ギバ「(ホッ、助かった)」

ベグル「顔面パンチ7発で済ませてやろう。まだバイキルトの効果は残ってるから泣いて喜べ。あの魔物と同等のパワーが出せるぞ」

ベグルはニコニコしながら指を鳴らしている

ギバ「助かってないー!」

グレイグ「だが、本当によい動きだった。マーズやガザル、ロベルトのサポートも非常によかったぞ。俺が来る必要はなかったようだな」

ダバン「そんな事ありませんよ。グレイグ将軍が防いでいてくれたからこそ、あいつらも自由に出来たんです」

ガザル「本当ならダバンの役目だったな。取られちゃったぞ、ダバン。グレイグ将軍の方が堅いしな」

ダバン「……………うるせえよ」

ダバンは額に青筋が立っている

マーズ「煽るな、ガザル。しかし、これほどの強さを持った魔物がどうしてこんな場所に」

ロベルト「しかも転生モンスターって相当珍しい魔物ですよ。おそらく生息場所も違いますし、謎が多すぎます」

グレイグ「そうだな。この事は今後話し合っというと思う。取り敢えずは任務完了だ。姫様に報告とビル達がどうなっているかを確認せねば。皆、城へ帰るぞ」

ベグル「はっ！おら、立てよ。こんなんでへばってんじゃねえよ」

二人「……………」

ベグル「全く、手のかかるやつらだな。引きずってくか」

ベグルは動かないバンとギバを引きずっていった

マーズ「(重傷者二名追加…………… だな。理由はベグルつと)」

恐怖

その後、デルカダール城　　玉座の間

グレイグ達はマルティナに先程の出来事を報告していた

マルティナ「ゴライアスですって!?!どうしてそんな魔物がここに!?!」

グレイグ「お気持ちはわかりますが、どうか落ち着いてください、姫様。理由は不明です。後ほど検討していきましょう」

マルティナ「そ、そうね。取り乱してごめんなさい」

ベグル「重傷者は二名。ビルとマドリーが意識不明で、魔物の姿で倒れていたため治療が少々手を焼いているようです」

マルティナ「ビルとマドリーが!?!どうしてその二人が、しかも魔物の姿って」

グレイグ「マヤ達はグラジューのメンバー全員で塩を取りに偶然デルカコスタ地方を訪れていたようです。そこを襲われたそうです。ビルとマドリーでマヤ達が逃げるための時間を稼いだのだと思われま

す」

マルティナ「じゃあマヤちゃん達は無事なのね。二人には助けられ
たわね。後でお見舞いにいきましよう」

ベグル「報告は以上になります」

マルティナ「わかったわ、ありがとう。大きな被害が出る前に対処
できて本当によかったわ。よくゴライアスなんて難敵を倒せたわね。
流石ラースに育てられただけあるわ」

グレイグ「全員が素晴らしいコンビネーションを見せてくれたので
す。私が出る幕などありませんでした」

マルティナ「そんなに!? 本当に凄いわ、ラースにも報告しましょう。
絶対喜んでくれるわ。でも大変だったでしょう。ゆっくり休んでて」

ベグル「て、照れますね。それではこれで失礼します」

その頃、医療部屋

包帯が巻かれたマドリーとビルが横になっていた

その姿は魔物のままとなっている

近くにはマヤ達が二人の様子を見ていた

テルマ「まだ………信じられないですけど、本当にビルさんにマ

ドリーさんなんですか。魔物だったなんて」

チャム「さっきの魔物、物凄く怖かった」

チャムは先程のゴライアスを思い出して泣きそうになっている

グリー「そうだよ、僕も怖かったよ。でも、ほら。ビルさん達が守ってくれたよ。それにグレイグさん達が倒してくれたからもう大丈夫」

チャム「でも……………目を覚まさないよ、二人とも」

マヤ「……………ちよつとお昼寝しちやってるだけだよ。大丈夫、少ししたら絶対起きるからさ。それまでは待つてよう、ね？」

マヤはチャムの手をそつと握りしめた

チャム「……………うん」

テルマ「……………少し外に出てきます」

ガチャ

テルマは部屋から出ていった

グリー「テルマ君、大丈夫かな。あれから随分静かだけど」

マヤ「まだ信じられないのかもしれないよ。いきなりだったからね」

大広間

テルマ「……………」

テルマは階段に座り込んでいた

テルマ「俺、チャムに守ってやるとか言って、結局自分も守られた。あの魔物相手に恐怖で体も足も震えて、逃げるのがやっとだった。ビルさんとマドリーさんが体を張ってくれなかったら今頃……………」

ビルさんとマドリーさんも…………… 死んじゃうのかもしれない。誰にも…………… 死んでほしくなかったのに。こんなにも死が怖いなんて」

テルマ「俺、弱すぎるだろ」

エド「そんな事ないだろ」

テルマの後ろにはいつのまにかエドがいた

テルマ「のわああああっ!!!」

エド「くく!!うるっせえな! 叫ぶなよ、突然!!ビツクリしたわ!」

エドは耳を押さえている

テルマ「こつちのセリフだ、馬鹿野郎！急に人の背後に現れやがって！」

エド「声かけたわ！無視したのはテルマだろ！」

テルマ「そ、そうだったのかよ。悪かったな」

エド「考え事か？いい考え事はしてなさそうだったけどな。テルマが弱すぎるって事ないぞ。俺はお前は充分強いと思うぜ」

テルマ「…………… エドには、元から強いやつにはわからねえよ」

エド「なんだよ、折角相談にのってやろうと思ってたのに」

テルマ「…………… さっきな、デルカコスタ地方で」

テルマはポツポツとさっきの出来事を話し始めた

エド「へー、テルマの店のおっちゃん姉ちゃん変な匂いすると思ったらやっぱり魔物だったのか！」

テルマ「それでよ、俺はもう誰にも死んでほしくないんだ。誰かが死ぬ体験はもうしたくない」

エド「……………何言ってるんだよ、テルマ。お前、甘い事考えすぎだ」

テルマ「え？」

エド「人も魔物も死ぬぞ。誰かに止められてとか関係なくな」

テルマ「!!なんで、そんな事」

エド「そんな事?馬鹿かよ、テルマ。俺達は生きてるんだから死ぬのも当然だ。そんなのもわからなくなったのか?」

テルマ「そういう話じゃない!!俺は!!魔物にも、人間にも、俺の周りの人間が殺されてほしくないんだよ!!」

エド「そんなの夢物語だろ。それはテルマのわがままだ。人間は死ぬ、魔物でも変わらない。殺されるか病気が年齢か。それがこの後か、明日か明後日か。そんなのわからない。だか」

バギイツ!

テルマ「黙れ!!」

テルマは話しているエドを殴った

テルマ「黙れ!! 黙れ!! 黙れ!!! 大事な人が死んでほしくないって願って何が悪いんだよ! そんな感情すらも持ち合わせてねえのかよ、お前は! この化け物が!!」

エド「!!!」

テルマ「ハッ………………。俺、今なんて…………。」

エド「……………」

テルマ「エ、エド? 悪い、本音じゃ」

エド「はっ、悪かったな、化け物で。お前は俺の事を人間として見てくれていると思ってたのは俺の勘違いだったみてえだな。じゃあな」

エドは訓練場へ走っていった

テルマ「あ………………。くそ、なんであんな事を」

その夜、グレイグの部屋

コンコン

グレイグ「む？誰だ？」

テルマ「グレイグ將軍、いらっしやいますか？マヤさんに部屋はここだつて」

グレイグ「テルマか、入っていいぞ」

テルマ「あ、よかった。失礼します」

ガチャ

グレイグ「どうしたんだ。俺に用事か？」

テルマ「用事っていうほどの事じゃないんですけど、少し悩み事があつて」

グレイグ「そうか。構わないぞ」

テルマ「ありがとうございます。あの…………… 今日、魔物に襲われてビルさん達が俺達を逃してくれた時、思ったんです。ビルさん達に死んでほしくないって。」

俺、ビルさんもマドリーさんもマヤさんもグリーンさんも、もちろん

グレイグ將軍や皆さんも大事な人なんです。そんな人達が死んでしまふのは嫌なんです。もうあんな気持ちになりたくないから」

グレイグ「……………ご両親の事か」

テルマ「そうです。俺の両親が死んでから、大事な人の死が凄く身近に感じて、怖くて、ふとした瞬間にもう二度と会えなくなっちゃうんじゃないかって思う事があるんです。死が……………怖いんです。全てを奪う死が。」

だから俺は誰にも死んでほしくないのに、それなのにエドは、人は死ぬって言うんです。死んでほしくない人とか関係なく、死はやってくるって。そんなの……………わかってるのに」

グレイグ「俺も死は怖い。だが、今のテルマは、死を恐れているというよりも恐怖しているな。一度味わった死の絶望感から抜け出せていない。大切な者の死によって酷く傷ついたのはわかる。だが、今のテルマは生きている。大地を歩き、息をして、こうして生きている。」

死によって失ったものも多いだろう。だが、テルマに残されたものはなんだ。よく思い返してみろ。失ったものばかりではないはずだ」

テルマ「俺に残されたもの……………。チャム」

グレイグ「それだけじゃないはずだ。今のテルマの周りには誰がいる」

テルマ「ビルさん、マドリーさん、マヤさん、グリーさん、グレイ
グ將軍、シルビアさん、ラース將軍、マルティナ様……………」 エド」

グレイグ「そうだ。その者達のためにも恐怖を乗り越えるのだ。死
を恐れるなどは言わん。だが、怖がるな。飲み込まれてしまわないよ
うに足掻くのだ。生きて、生きて、生きて、生きるのだ。生きる強さを手に入
れるんだ」

テルマ「生きる強さ……………俺、強くなんて」

グレイグ「ならば、これから強くなっていけばいい。急に強くなれ
なんて無理な話だ。ゆつくりと強さを身につけていこう」

テルマ「……………強さ……………強くなれば、この恐怖もな
くなりますか？」

グレイグ「それはテルマ次第だ。テルマがどれだけ本気で強くなれ
るかにかかっているぞ」

テルマ「……………決めました！俺、強くなります！生きるため
に、今俺の周りにいてくれる大切な人達のために、強くなります!!」

グレイグ「ああ、その意気だ。もしテルマがよければ、兵士達との訓練に混ぜてみるか？見習いと似た扱いにしていれば、武器も体の鍛錬も出来るぞ」

テルマ「い、いいんですか？」

グレイグ「俺は歓迎だ。だが、レースにも相談しないと。それとバイトの方はいいのか？」

テルマ「夜の酒場の時に出来ます。それにしばらくはビルさん達の怪我が治るまでお休みです。昼はチャムに任せてしまいますけど」

グレイグ「そこもよく相談しておくのだぞ」

テルマ「死を恐れるな、俺。そのために俺は、強くなる！」

グレイグ「それと、先程の話からするとエドと喧嘩したのか？」

テルマ「は、はい。俺が………悪いんです。つい、心にもない事を言つてエドを失望させました」

グレイグ「感情が昂っていたのだろう。謝ったのか？」

テルマ「……………いえ、まだです」

グレイグ「ふむ……………。まあ急げとはいわないし、どうするかはテルマ次第だが、もしエドと友人であり続けたいのなら言葉の一つや二つかけてやるべきだ。勘違いをそのままにしてもいい事など何もない。それが今後を分ける永遠の溝となってしまう前にな」

テルマ「はい！」

魔物達の異変

それから数日後、デルカダール城

玉座の間

仲間達が全員集まっていた

セーニャ「まあ!!それでは皆様も転生モンスターが現れたのですか!?」

イレブン「そうみたいだね。まさかユグノア地方でオカルトビスクを見るなんて思わなかったよ」

カミュ「シケスピア雪原にはドラゴントイズだけ。俺と偶然いた兄貴でなんとか倒したんだ」

ベロニカ「私達はダーハル―ネの近くにある湿原にハートナイトの群れよ。こんな所にいるはずなのに」

シルビア「アタシはソルティコのすぐ近くの花畑でタイプGちゃんが出たの。どうしてこんな事に……」

グレイグ「そして、デルカコスタ地方にはゴライアスというわけだ」

ロウ「世界中でありえん場所に見かける事が殆どないはずの転生モンスターが湧いている。何が起こっておるといふのじゃ」

マルティナ「さつきお父様に連絡があつて、サマデー王国で黄泉の花がたくさん咲いていたそうよ。知らなかった旅人なんか触れてたくさん痺れたりして被害が出てるみたい」

ラース「皆、少し考えた事がある。これを見てくれ」

ラースは世界地図を皆に見せた。そこには転生モンスターが現れた場所が記されている

ラース「一先ず転生モンスターが出ている出現報告をまとめてみた。それを踏まえてみると一つわかつた事がある」

ラースは地図に新しく線を引いていく

ラース「出現場所とその近くの街の距離だ。どれも異様に近い距離に湧いている。これが一つの共通点。もう一つは普通湧かないはずの転生モンスターが別の場所で湧いているという点だ。」

野生の魔物の生態系ではありえない事だな。街のこんな近くに凶暴な魔物がいるというのも不思議な話だ。各街でそれは徹底しているはずだからだ」

イレブン「確かに。でも、その二つがどうしたの?」

ペロニカ「偶然にしてはおかしいって事？それはわかってるわよ」

ラース「そう、偶然にしては上手く出来すぎているんだ。こんな連続で起こるなんて普通じゃない。まるで……」

ロウ「もしや…… 人為的という事かの」

セーニャ「ひ、人の仕業というのですか!?魔物なのにですか!？」

カミュ「…… 兄貴の元父親の事件と似た扱って事か」

ラース「そうだ。俺は誰かが意図的に引き起こしていると考えている」

シルビア「でも、こんなのどうやって？それに犯人の特定やアジトは？」

ラース「それはこれからまた情報を集めていこう。まず考えてほしかったのは偶然で終わらせるんじゃなくて、人為的である事件だと思っ直してほしいって事だ」

マルティナ「わかったわ。それじゃあ皆には各街で情報を集めてもらいましょう。何か異変がないか、変な目撃情報とかを洗いざらい調

べるわよ」

グレイグ「俺達の方でサマデー王やシャルルには知らせておく」

ベロニカ「わかったわ。何か目ぼしいものがあつたら連絡するわ」

シルビア「ねえ、少し待ってもらっていい？実は一つ怪しい場所があるのよ」

全員「え!？」

シルビア「少し前からソルティコの住民達の報告があつてね。なんでもドウーランダ山の近くに、人を近づかせないような洞穴があるんですって」

ロウ「人を近づかせないと。それは怪しいのう。シルビアは調べたのかのう?」

シルビア「ううん、まだなの。調べてみようと思つて向かおうとしたら、花畑にタイプGちゃんがいて流石にそつちを優先したの」

イレブン「なるほどね。それは行つてみる価値はありそうだね」

ベロニカ「折角全員揃ってるんだし、今から行ってみましょう。皆はこの後予定大丈夫？」

マルティナ「私はこれからお父様と代わってもらおうわ」

グレイグ「私もそうします。俺の代わりは……」

ラース「グレイグの代わりはベグルに言っておく。後は、見回りの強化と何か起こった時用にバン達全員が出動できるようにも伝えておこう」

マルティナ「それがいいわね、ゴライアスを倒せるくらいなら安心して任せられるもの」

セーニヤ「まあ！バン様達がゴライアスを倒されたのですか!?! てつきりグレイグ様かマルティナ様かと」

グレイグ「俺もいたのだが、出る幕はなくてな。予想よりも遥かに兵士達は強くなっていた」

カミュ「流石としか言いようがねえな。兵力だけなら間違いなく世界一の国だな」

その後、ドウーランダ山

全員「……………」

シルビア「ここ……………ね。間違いないわ」

全員の目の前にある洞穴には入り口にバリケードがされており、大きく一般の方立ち入り禁止と書いてある

セーニャ「工事でもされているのでしょうか」

ロウ「そ、想像とはまた少し違ったものがあらわれたのう」

カミュ「なんか怪しさを隠す気がないよな」

イレブン「ハハハ……………まあ通ってみようか」

全員がバリケードを通ると

グオオオオ!!

全員「!？」

奥から魔物の声が聞こえてきた

ペロニカ「どうやら……………ビンゴみたいね」

シルビア「こんな山中で一体何してるのかしら」

マルティナ「急ぎましょう！」

洞穴を進んでいくと

グレイグ「!?何かくるぞ！」

カミュ「魔物か！」

ゴライアス「グオオオオ!!」

全員「ゴライアス！」

グレイグ「またこいつか！」

ラース「こんな洞穴で戦う魔物じゃねえぞ！崩れちまう！」

ゴライアス「グオオ…オオ…」

ゴライアスも身を縮めて洞穴を通ろうとしている

ロウ「どうやらそれはあちらも同じようじゃな」

イレブン「今なら倒せそうだよ！」

ゴライアス「！グオオオオ！」

ゴライアスもイレブン達に気づいて立ち上がった

ボゴン！ドガアン！ガラガラ！！

全員「うおおっ！！」

ゴライアスが立ち上がった事で洞穴が少し崩れていく

シルビア「立ち上がっただけでこれはまずいわ！暴れられたら埋まっちゃうわよ！」

ゴライアスは洞穴を広げながら立ち上がり、全体が少し縦に広くなった

ゴライアス「グオオオオ！」

ゴライアスはばくれつけんを繰り出した

グレイグ「避けてはならん！俺に任せろ！」

ラース「グレイグ、俺もいくぞ！防ぐより受け止める方がいい！」

イレブン「それなら僕も！」

セーニャ「サポートいたします！スクルト！」

全員の守備力が一段階あがった

ゴライアス「グオオオオ！」

三人「ふんっ!!」

ドオン！

イレブン、ラーズ、グレイグでゴライアスの拳を受け止めた

衝撃が周りを駆け抜けていく

カミュ「ナイスだ、三人とも！」

マルティナ「はっ！」

カミュとマルティナは止められた腕を足場にゴライアスの顔まで
飛び上がっていく

ゴライアス「グオオ」

ゴライアスは残りの腕で二人を捕まえようとする

ベロニカ「させないわ！メラゾーマ！」

ゴライアス「グオオ……」

ペロニカが炎の塊をマルティナに向かっていた腕にぶつけ、阻止した

カミュ「ぶんしん！」

カミュは三人に分身して、腕を避けた

シルビア「カミュちゃん、バイキルト！」

カミュの攻撃力が二段階あがった

ロウ「ルカニじゃ！」

ゴライアスの守備力が二段階あがった

マルティナ「氷結らんげき！」

マルティナが先にゴライアスに攻撃する

ゴライアス「グオオ……」

ゴライアスは怯んだ

カミュ「会心必中！」

三人の分身全員が会心の一撃を繰り出した

ジュワー

グレイグ 「うむ。久しぶりにしてはやはりいい連携だな」

ベロニカ 「まああんなに一緒に戦ったんだからこれくらいはね」

イレブン 「よし、このまま進もう！」

コレクション

洞穴 奥地

ラーズ「な、なんだよ……これ」

洞穴の広い空間に出るとそこには頑丈な檻がいくつも置いてあり、中にはボロボロの魔物達や既に動けなくなっている魔物達もいる

スライムナイト「ギユウ……」

ごうけつぐま「グウ……」

どの魔物達も怪我をしていたりとかかなり弱っている

イレブン「酷い……こんな可哀想な事、一体誰が」

マルティナ「全員助け出しましょう！セーニヤ、ロウ様、回復をお願いします」

グレイグ「姫様、私もお手伝いします」

シルビア「でも、どうやって出しましょう。乱暴に壊してもいいとは思うけど」

コツコツコツ

ペロニカ「!皆、誰か奥から歩いてくるわ!」

女性「あら?誰?あなた達」

奥からは白衣を着て眼鏡をかけた中年ほどの女性が歩いてきた

ロウ「わし達はこの怪しい洞穴を調べにきた。お主、この酷い光景はなんじゃ」

女性「あらあら、これがわからないの?これは私のコレクションの元よ。これから素晴らしい色違いの魔物に切り替わるの」

ラース「切り替わるだ?!」

カミュ「てめえ、それがどれだけ非人道的な事かわかってんのか!」

女性「そんな道徳的な言葉なんか必要ないわよ。あなた達知らないの?転生モンスターって呼ばれてるはずなんだけど、その子達ってとっても綺麗で美しくて、見てて惚れ惚れするの」

イレブン「そんなものの為に魔物達を痛めつけてるのか!!」

ペロニカ「あんた最低よ!!」

女性「酷いわね、誰にも私の考えがわかってもらえないなんて」

グレイグ「転生モンスターが各地で出現していたのは貴様の仕業か！」

女性「ええ、そうよ。皆にこの転生モンスターの素晴らしさをわかってもらおうと思ってね。動けないままはかわいそうだから興奮剤で動かさせたの。とつても素敵だったでしょ？」

セーニヤ「あなたのせいでどれだけの魔物が、人が迷惑していると思っっているのですか！こんな事はやめてください！」

マルティナ「そうよ！この魔物達も解放しなさい！」

女性「嫌よ。折角自由にコレクションが集められるんだから」

グレイグ「ならば仕方あるまい。貴様を捕まえさせてもらおう。牢屋で自分の罪を反省するといい」

カミュとラーズとグレイグが女に向かっていく

女性「え？つ、捕まえる？私を!? キャツ！」

女性はあるわけなくカミュとラーズに拘束された

グレイグ「ナイスだ、カミュ、ラース。さあ大人しく連行されても
らおうか」

グレイグは女性に手錠をかけた

女性「どうしてよ!!私、何も悪い事なんてしてないわ!!」

ラース「自覚なしか。相当タチが悪いな」

ロウ「この檻の鍵の在処はどこじゃ？」

女性「あんた達なんかに教えるわけないでしょ!!離しなさい!」

ベロニカ「全く、どうしようもないわね。さっさと吐いてくれると
ありがたいのに」

女性「私、知ってるんだからね!最近世界中で魔物と一緒に生きよ
うとしてる行動が増えてる事!私と全く同じじゃない!!私だって魔
物達が可愛いからこうやって私と一緒に動かさせてるのに!あんた
達と何が違うのよ!!」

マルティナ「あなた……………」

ラーズ「おい、ふざけるなよ。貴様みたいなやつと一緒にするんじゃない。てめえは自分の勝手な気持ちで魔物を傷つけ、強制的に側に居させてるだけだろうが！それは支配っていうんだ!!俺達はそんな事してない！望んでない！」

俺達は魔物と共存していくんだ！互いに理解して、助け合って生きていくんだ!!貴様なんかの一方的な気持ちなんかと同じにするんじゃない！」

女性「なによ、なによ、なによ!!理解できないわ!ここの魔物達は私の物!私があこの魔物達を生きさせてあげてたのよ!感謝されるべきじゃないの!?!」

シルビア「てんで駄目ね。お話が通じてないわ」

ベロニカ「グレイグさん、ラーズ、私がデルカダール城までルーラするわ。このまま連れて行きましょう」

グレイグ「うむ、わかった。頼む、ベロニカ」

マルティナ「じゃあ私達で鍵の搜索と魔物達の治療、やっておくわ」

ラーズ「了解。あ、城から手伝いが必要か?連れてくるぞ」

セーニヤ「それでしたら、そちらのお医者様の方と数人兵士様を呼んでいただけると心強いですわ」

ラース「わかった。じゃあまた後でな」

その後、洞穴の檻は開かれ魔物達も治療され元の住処へ戻っていった

その夜、クレイモラン王国　カミュとマヤの家

ガチャ

シロ「バウ！バウ！」

カミュが家に入るとシロが目の前で待っており、嬉しそうに尻尾を振りながら抱きついてきた

カミュ「おっと、へへ、ただいまだな、シロ。出迎えありがとな」

シロ「バウ!!」

カミュ「……………コレクションね。そんな勝手な考えであそこまでの行動をするのか。本当わけがわからねえやつっているもんだな」

シロ「クウ？」

カミュ「なあ、シロ。俺はお前が好きだぜ、お前は俺の事好きか？」

シロ「バウ!!」

シロは笑顔で元気よく吠えた

カミュ「はは、聞くまでもなかったか。俺はお前が困ってたら必ず助けてやるからな。だから、お前もし俺が困ってるようだったら助けてくれると嬉しいぜ。俺達は共存していくんだからな」

シロ「バウバウ！」

カミュ「変な事言っちゃったな、気にしないでくれよ、シロ。さて、飯にするか！」

シロ「バウ!!」

訓練開始

それから三日後、デルカダール城

訓練場

テルマが今日から訓練に参加する事になり、レースに案内されていた

バン達もテルマに自己紹介を兼ねて集まっていた

レース「ここでいつも訓練してるんだ。テルマは見習い達とやる事は大体同じだ。見回りとかはしなくていいけど、この時間の訓練には参加してもらおうぞ」

テルマ「はい！よろしくお願いします！」

ベグル「テルマ、お前なんの武器が使えるんだ？」

テルマ「片手剣、槍、かくとう、短剣です！」

レース「短剣か、それはすまないが専門外だ。もし使いたければカミュに聞いてくれ。カミュは短剣使いだからな。それ以外ならしっかり教えられる。それと、片手剣の基本はある程度出来てるのはわかっている。それ以外の経験は？」

テルマ「槍は少しかじった程度で、かくとうと短剣についてはほとんど……って感じです」

ラーズ「まあ初心者って事だな。じゃあ体の基本作りからいこうか。バンの所で練習するといい。筋トレ等の基本的な体作りも担当してるからな」

バン「俺だぜー！」

バンはテルマに笑顔で手を振っている

テルマ「はは、バンさんはよくわかりますよ。酒場にもよく来てくれますからね」

ラーズ「んで、それが終わったら慣れてる片手剣を使おう。片手剣はロベルト、彼が担当している」

ロベルト「俺がロベルトだ。よろしくな」

ロベルトは片手を上げて挨拶する

テルマ「はい！」

ラーズ「片手剣が終わってももし体力があるようなら槍も基本から始めてみようか。槍はギバ、彼が担当している」

ギバ「よっ！まさかグラジの店員がこんな所に来るなんて思わなかったぜ！」

テルマ「あ、ギバさん。本当ですよ。でも俺、弱いままは嫌なんです！だから強くなりになりました！」

ラース「他には副長のベグル、盾を使うダバン、魔法が得意なマーズ、ブーメランを使うガザルがいる。一芸特化じゃなく、それぞれ得意分野は様々あるから他の人にも話を聞いてみるとより理解が深まりやすくなるかもな。」

例えばダバンなんかは片手剣が相当使えるし、ベグルも槍が使えるといった感じだな。まあ仲良くしてほしい。こんなもんでいいか？」

テルマ「はい！ありがとうございます！」

ラース「よし、それじゃあ頑張れよ。何かあったら連絡してくれ。じゃあな」

ラースは去っていった

テルマ「気になってたんですけど、見習い達、エド達は？」

マーズ「ああ、見習い達も含めて自己紹介すると人数の関係で時間がかかるからな。今日は見習い達は別の時間なんだ。この後見習い

達にテルマが参加する事を伝える。明日からは見習い達と一緒にだぞ」

ロベルト「どれだけ体力があつてどれだけ基本が出来ているかの把握もしたかったからな。つまり今日はテルマのレベル確認といった所だな」

テルマ「なるほど。あまり期待しなくていいですからね。俺、本当一般人なんで」

ガザル「いやいや、一般人がラース將軍やグレイグ將軍に認められるわけないだろ。槍とかは初心者なんだろうけど、片手剣は期待してるぜ？」

テルマ「ええ!?あれは絶対お世辞ですよ!そんな気にしないでください!」

ベグル「まあ確認はしていく。バン、いつもの基礎を教えてやれ」

バン「おう!テルマ、こつちこいよ。まずは筋トレからやっていくぞ!」

テルマ「はい!」

三十分後

バン「筋トレはこんなもんだ！大丈夫か？」

テルマ「け、結構疲れますね。真面目に筋トレしたの久しぶりだから」

バン「まあついてこれるだけいいと思うぜ。見習いの中にはここで息切れ起こしてたやつもいたからな」

テルマ「そうなんですか。でも、筋トレくらいで疲れてたら駄目ですよ。次は片手剣でしたね。ロベルトさーん！」

ロベルト「ん？終わったか？」

バン「おう！あ、そうだ。さつき師匠が言い忘れてたけどよ、かくとう技を使ったかったら俺が担当してるからどんどん話にきてくれよな！簡単な体術や護身術でも大丈夫だぞ」

テルマ「あ、そうだったんですね。それじゃあ教えてもらおう事になりそうですね」

ロベルト「待て待て。バン、お前の護身術はレベルが高いからやめとけ。ベグルにしておくといい、あいつなら普通の人でも使いやすい護身術が教えられる」

バン「えー！俺だつてテルマと話してえのに……」

テルマ「ふふ、バンさんは本格的なものになるんですね。それだつたら体がもつと動かせるようになったらたくさん教わりにきますよ！それまでは普通にお喋りしましょう！」

バン「へへ、おう！」

ロベルト「さて、片手剣を見ていくぞ。まずは素振りをしてみてくれ」

テルマ「はい！」

素振り後

ロベルト「中々いいじゃないか。姿勢や構え方、どれも綺麗だぞ。それなら少し動いてみるか。俺と軽く打ち合うぞ」

テルマ「お手柔らかかお願いします」

その後

テルマ「はっ！」

カアンツ!

ロベルト「よし、一旦ここまでにしよう」

テルマ「ハア……………ハア……………」

テルマは汗だくになっている

マーズ「大丈夫か? ほら、水だ。休憩も大事だぜ」

テルマ「あり……………がとうございます」

ロベルト「確かに独学にしては基本がかなりしつかりしているな。見習い達より多少扱いには慣れていそうだ。だが、悪く言うなら基本的過ぎるって事かもな」

ダバン「そうだな、まあ初めは当たり前前だよな。俺達だってそうだったわけだし」

テルマ「基本的すぎる? というと?」

マーズ「型通りって事だな。基本的な動きしか出来ていないって事だ」

テルマ「はあ………。基本は大事なんじゃないんですか？」

ロベルト「それはそうなのだが、実践で基礎ばかりだと対応できない場面なんて数えきれないほどある。その時に対応出来なければ結局は何もできない。そのために基礎は当たり前。そこから更に上の技術、応用が必要となってくるんだ」

テルマ「俺、そんな応用なんて出来るレベルですかね？」

マーズ「見てる限りでは悪くなかったぞ。応用を使っていくには十分だと思うけどな」

ダバン「例を見せるか。ロベルト、俺が相手役になる。何か一例を見せてやれ」

ロベルト「了解。じゃあテルマ、見てろよ」

ダバン「はあっ！」

ダバンが斬りかかった

ロベルト「ふっ！」

キンツ！

ロベルトが剣を防いだ

ロベルト「ここまででは武器でガードする基礎の動き。ここからが応用だ。これだけだと相手はすぐに引いてくるだろう。もしくは力押ししてくるかだ。そのどちらの可能性でも自分が有利になる動きをする」

ロベルトは大きく踏み込み剣を瞬時に相手の武器に沿って動かし、素早くダバンへ距離を詰める

テルマ「ええ!？」

ロベルト「はあっ！」

ダバン「つと！」

ロベルトはその滑らせた勢いのまま切りつけた

ロベルト「こんな感じだ。引く隙を与えず、力押しでもその力を受け流すように相手に詰める。そうする事で一瞬で相手に逃げるか、避けるかの二択を迫れる。あの至近距離で攻撃するの選択が出来るやつはかなりの実力者。相手が限られるからな。結構使いやすい応用だ」

テルマ「おく……。一瞬だからこそ、相手の判断も一瞬で行わなければいけない。しかもミスしたら死ぬ。凄い、こんな事本に載ってなかった。勉強になります！」

その光景を訓練場の入り口からエドが見ていた

エド「……………」

ベグル「ん？あれはエドか。何してんだ？立ったままでよ……………テルマを見てる。話しかけにくいからか？そんなの気にするやつだったか？」

ベグルは気になってエドの元へ向かう

エド「…………… あ、ベグル」

ベグル「何してんだ？入りてえなら入ればいいだろ。見てわかると思うが、テルマも明日から訓練に参加する事になったんだ。よかったな」

エド「別に。何したいのか知らねえけど勝手にすればいいんじゃないの？」

エドはそう言うに戻っていった

ベグル「あ？もつと喜ぶと思ってたんだけどな。友達だったはずじゃ？さては……………何かあったな」

絆

その後

ロベルト「よし、今日はこの辺にしておこうか」

テルマ「へエ………へエ………ありがとうございました」

ダバン「少し体力が少ないかもな。まあ初めはそんなもんだ。そのうち体力もついてくる。そうしたらギバに槍を教えてもらったり他の人と一緒にやってみたりするといい」

テルマ「はい」

ガザル「片手剣に関しては悪くねえんじやねえか？見習いでも応用をしっかりとやってるやつは少ないだろ」

ロベルト「そうだな。片手剣は確かに期待されていただけはあるた」

ベグル「よう、終わったみてえだな。テルマ、この後時間あるか？」

テルマ「はい、大丈夫です」

ベグル「ちよつと面貸せよ。俺の部屋に來い、話がある」

テルマ「？わかりました」

ベグルはそう言うのと一足先に戻っていった

それを見ていたバンとギバが凄い速度でテルマに近寄った

バン「お、おい、テルマ！何したんだ？」

テルマ「え？俺別にベグルさんに何もしてないんですけど、どうしてそんなに焦ってるんですか？」

ギバ「ベグルは怖えやつなんだよ。鬼だ、鬼！俺もバンもあんな感じで部屋に呼ばれると大抵ボコボコにされるかキツイ説教されるかなんだ。覚悟しておいた方がいいぞ」

テルマ「ええ!?本当に何もしてないですって!」

マーズ「ま、まあこいつらみたいにしめられるなんて事はないとは思うけどな。一先ず部屋に案内する、ついてきてくれ」

テルマ「ありがとうございます。それではお疲れ様でした」

バン「じゃあなく。後で医療部屋に見舞いに行くからよ」

ギバ「命だけは持っていていられないようになー」

テルマ「なんだか凄い不安な事言ってくるんですけど!?!」

ガザル「お前ら、言いたい放題だな。ベグルがいたらお前らが医療部屋行きだぞ」

ロベルト「明日もこの時間にやっている。また明日な」

ダバン「(ベグルのやつ、どうしたんだ? テルマに話があるなんて)」

ダバンも気になるのかテルマ達についていった

ベグルの部屋

マーズ「ここがベグルの部屋だ。まあバン達の言っていた事は本当だが、テルマに何かするわけないだろうから安心してくれ」

テルマ「は、はい。でも、本当って事なら余計怖く感じますね。俺、何されるんでしょうか」

マーズ「さあな。まあノックしてから入れよ。じゃあな」

ダバン「俺もいいか？」

テルマ「あ、ダバンさん。俺は大丈夫ですよ」

コンコン

ベグル「おう、入ってこいよ」

テルマ「失礼しますね、ベグルさん」

ガチャ

ベグル「まあ適当に座ってくれ。って、ダバンもいたのかよ」

ダバン「お前がこうやって誰かを呼びつけるなんて何かあった時だけだからな。テルマの護衛と様子見だな」

テルマ「お、俺、何されるんでしょうか。悪い事していたなら謝りますよ」

ベグル「？なんでそんなに怯えてんだよ。別に取って食うわけでもあるまいし。俺の体格的に怖えのはわかるが、何か怖がるような事させたか？」

テルマ「さつきバンさん達がモゴモゴ」

ダバン「あー、聞かなかった事にしてくれ」

ダバンはテルマの口を塞いだ

ベグル「……………ハア。つたく、言おうとしてた事はわかった。あいつら後で覚えてろよ」

ダバン「それで？テルマへの用事は？」

ベグル「ああ、そうだな。さつきの訓練中、エドが入り口からテルマを見ていたんだ」

テルマ「!?……………エドが」

ベグル「んで、話かけてみたら様子がおかしいんだよな。俺達とは違ってあいつは見習い達には明るいやつなんだ。特にテルマ、お前の事となると喜んでいたやつなんだけどな。」

それがどうだ？まるで俺達みたいなの、いや俺達より冷たい態度に感じた。エドには話出来なかったからな。何かあったのか？」

ダバン「ほう、そんな事が。それは確かに気になるな」

テルマ「…………… ちょっと…………… 喧嘩というか。俺が全部悪いんです」

テルマはエドとの間で起こっている事を伝えた

テルマ「だからエドは俺に失望したんだと思います。いくら心にもない言葉だからといって、エドからしたらその言葉を禁句のようなもの。それを…………… 少しでも信頼してくれてた俺から言われたんですから」

ダバン「死への恐怖…………… か。テルマの気持ちはわかるぜ。大事な人が死ぬなんて嫌だもんな。まあ、それに拘りすぎてるのもどうかとは思うが」

ベグル「エドに謝ったのか？」

テルマ「実は、話すらさせてもらえなくて。エドは鼻とか耳がいいから俺がくる事を事前にわかっちゃうんだと思います。それでエドから離れていった」

ベグル「まあそうか。あの感じだとそうだもんな。なんて伝える気だ？言うつもりなかったんだってか？」

テルマ「……………そうですね。謝り倒すくらいにはしようかなと」

ダバン「あいつには謝るのもいいが、もつと言葉を慎重にした方がいい。馬鹿騒ぎするやつだが、言葉に敏感なんだ。警戒心が高いから言葉一つで距離を置かれるかが決まるぞ」

テルマ「そ、そうだったんですか。知らなかった。じゃあ……………どうしようかな」

ベグル「俺の予想だが、あいつはテルマが謝ってくる事を予想してるだろう。だからこそ、その内容によっては取り返しのつかない事になる。簡単な言葉と謝罪だけじゃあ二度とあの友達関係に戻る事はないな」

テルマ「そう……………ですか。俺、やっぱり最悪な事やったんですね。友情って……………こんな簡単に消えるんですね」

ベグル「そうだな。言葉つてのは俺達の想像以上に強い力を持っている。時には人を励ましたり慰めたり、勇気をくれたりするが、今回みたいに簡単に人を傷つけたり怒らせたりも出来る。それによって失われるものも多い。特にテルマとエドみたいな、友達になつて間もないやつだとすぐに友情は消えるな」

テルマ「……………」

ダバン「だが、友情が絆へと変わった時。それは簡単には切れない関係となる。互いに信頼して認め合う。その信頼があるからこそ多少馬鹿にしたりも出来る。絆を作るのが大事なんだ」

テルマ「絆……か。俺、エドに守られてばかりでした。初めて友達になった時から、この前の障害物競争の時もずっと。それじゃあ、絆なんて生まれませんよね。やっぱり……俺、強くななきゃ！そうじゃないとエドに並べない。友達として一緒にいられない。」

いつか俺がエドを守れるような日が来るように、エドが頼ってくれようかなやつにならなきゃ。そうしたらきつと、エドもまた友達として見てくれますかね」

ベグル「ふっ、いいんじゃないかねえか？生きるため、友達になるために強くなるか。面白えじゃねえか」

ダバン「エドには伝えないのか？勘違いされたままも嫌だろう？」

テルマ「そうですね。明日、見習い達に混じってエドも来るんですよ？。」

ベグル「だな。だから嫌でも明日はエドと直接話すチャンスだぞ」

テルマ「直接ぶつかります。俺の気持ちが悪くもエドに少しでも届くように。真剣である事をわかってもらえるように」

ベグル「ああ、頑張れよ」

テルマ「ありがとうございます、ベグルさん、ダバンさん！俺、頑張りますから！」

ダバン「楽しみにしてるぜ」

テルマ「はい！それじゃあ相談に乗ってもらって、迷惑かけてすみませんでした。失礼します」

テルマは部屋から出ていった

ダバン「珍しいな。ベグルがこんな事するなんてよ。どんな風の吹き回しだ？」

ベグル「うっせえよ。エドは、不安定なやつだ。立場もこれまでもあまりにも特殊だったからな。一見すると明るいやつだが、根っこは他人を常に警戒してる。自分の特殊性がわかっているからこそだろうな。」

そんなエドが唯一テルマの前でなら楽しそうにしていた。あいつも人間なんだ、魔物じゃない。あんな風に気を許せるやつが必ず必要

だ。それを失ってほしくなかっただけだ」

ダバン「……………ふう、流石だな、その判断力。というか、そんな優しさがあるならバンや俺達にもそれくらいで接してくれよな」

ベグル「はっ、嫌に決まってるだろ。俺がそんな事する柄じゃねえのはわかってんだろ？気まぐれだ」

ベグルは立ち上がって部屋から出ていく

ダバン「お、おいおい、どこに行くんだよ」

ベグル「ああ？んなの決まってるだろ。バンの名前聞いて思い出した。馬鹿二人に制裁をしないとなあ。どうせ俺が鬼だの悪魔だの騒いだんだろう。そんなに望んでいたら見せてやろうじゃねえか」

ベグルはニヤリとしながら首や肩をゴキゴキと回して準備している

ダバン「(逃げろ、バン、ギバ。鬼が来るぞ)」

友達になるために

次の日、訓練場

バン「昨日言ったと思うが、この子がテルマだ。今日から訓練に参加してもらう事になったから皆仲良くしてくれよな」

テルマ「よろしくお願いします」

見習い達「はい！」

ロベルト「見習い達の中ではガクとジール、ジャスが中心になっている。三人は手を挙げてくれ」

三人「はい」

テルマ「よろしくお願いします！」

ロベルト「もし何か困った事があつて俺達に話せなかったら彼らに話すといい。それじゃあやる事は昨日と同じだ」

バン「皆ー、いつもの筋トレからしていくぞー」

エド「……………」

ガク「どうしたの？エド」

エド「いや、なんでもねえよ」

その後

ロベルト「俺とダバンでよく片手剣を指導しているんだが、人数の関係で昨日みたいに付きつきりは無理なんだ。だからペアになってもらって、その動き方を見てそれぞれ教えているんだ。テルマも適当に誰かと組んでみてくれ」

テルマ「わかりました」

ジャス「じゃあ僕とやろうよ、テルマ君。さっきも紹介あったと思うけど、僕はジャス。よろしくね」

テルマ「ジャスさんですね！俺はテルマといいます、お願いします！」

ジャス「ふふ、真面目だね。片手剣は慣れてるらしいね。相手になるといいんだけど」

テルマ「大丈夫ですよ！俺、体力ないんで長い間とか無理ですし」

ジャス「筋トレで少し疲れてたもんね」

テルマ「そ、そうなんです……」

ロベルト「ほら、喋ってないで打ち合え」

ジャス「あ！すみません！じゃあよろつか、テルマ君」

テルマ「はい！」

数分後

テルマ「えいつ！」

テルマは斬りかかっていく

ジャス「はっ！」

ガンツ！

ジャスは攻撃の隙をついて脇腹に剣を当てた

テルマ「ぐっ！」

ダバン「ジャスののはいい判断だな。相変わらず隙を突くのが上手い」

ジャス「ありがとうございます」

ダバン「テルマはこんな奴と戦うのは初めてみたいだな。難しいか？」

テルマ「そうですね。まるで先読みされてるみたいで、不思議な感じですよ」

ジャス「ごめんね？嫌な戦い方して。僕程度だところじゃないと、テルマ君と純粹に打ち合ったら負けそうです」

テルマ「いえ、勉強になるので問題ありません！それに、少し考えが浮かんだので対抗してみせます！」

ジャス「えー、それは怖いな」

テルマ「やあっ！」

テルマはさつきと同じく斬りかかった

ジャス「まったく同じ…… なわけないんだろうな」はっ！

ジャスが隙を突こうとすると

テルマ「はあっ！」

テルマは攻撃の方向を変え、ジャスの剣を弾こうとする

ガッ！

ジャス「ごめんね、ああ言われると警戒しちゃうから」

ジャスもそれを読んでいたのかテルマの攻撃を打ち払った

テルマ「かかりましたね！」

ジャス「え？」

テルマは打ち払われた状態から前に踏み込み、その勢いでジャスに攻撃した

ガンツ！

ジャス「うぐっ！」

テルマ「やった！ やつと一撃入った！」

ダバン「ほう、やるじゃないか、テルマ。なんでそうした？」

テルマ「俺の隙を突かれたり、剣が打ち払われたのは相手の方が力が上手くかかっているから。そのための適正な距離があるのだろうと思いました。さつき偶然前に少し進んだらジャスさんは少し下がりました。

まるで、一定の距離を空けているかのように。それで一步大きく踏み込めば簡単にカウンター出来ないのかなと思つて」

ダバン「うん、正解だな。いい観察眼と閃きをしてるな」

ジャス「ありや、見抜かれちゃったんだ。ふふ、強いね、テルマ君。僕より年下なんて思えないよ」

テルマ「へへ、ありがとうございます」

訓練後

バン「よし、今日の訓練はここまでだ。各自出来なかつた所や不安な所は練習しておけよ！解散！」

ダッ！

エドは一目散に訓練場から出て行こうとする

ガシッ！

ベグル「まあ待てよ、エド」

ベグルはエドの腕を掴んだ

エド「な、なんだよ、ベグル！離せ！」

ベグル「なんで友達のホテルマから逃げてんだよ。喧嘩したのか知らねえが、少しは話してみるべきなんじゃねえの？」

エド「知るか!!あんなやつ、友達でもなんでもねえ!!俺の事、どうせ心の中では気持ち悪がつてたんだ!そんなやつと話す事なんか何もねえ!!」

テルマ「違う!!」

テルマが大声をあげた

エド「……………」

テルマ「確かに変なやつだとは思ってた。話は聞かないし、勝手に動き回るし自由過ぎるやつだと。でも、決してエドを気持ち悪いなんて思っていない!!あの言葉を言われて酷く傷付くのは当然だ。信じられなくなるのもわかる。」

だが!!俺はエドと一緒にいていつも楽しかった!親代わりにならなきゃいけない重責や不安、暗い考えも全部お前といた時は忘れられた!そんな時間をくれたエドを悪くなんて思うわけないんだ!」

エド「じゃあ……………なんであんな事言ったんだよ」

テルマ「俺、あの時はどうかしててエドの正論が認められなくて、怒りに任せた八つ当たりなのにエドに最低な言葉を言った。

心の底から謝らせてくれ。すまなかった」

テルマは土下座した

エド「お前……………」

テルマ「エドと友達ではなくなってしまったのは仕方ない事だ。だが、俺はもう一度エドと友達になりたい！また一緒に遊んで、笑って、いろんな事をしたい！友達としてみたい事はたくさんあるんだ！

でも、俺はずっとエドに守られてきた。初めて会った時からこれまですっと。そんなままじゃ駄目だ。守られてばかりじゃあ何もできない、何も守れない。俺が大切だと思う人達が俺を守ってくれるように、俺も皆を守りたい！強くなりたいんだ！

強くなればエドの隣にいれる。エドを守ってやれる。対等に立ちたいんだ。だから、俺が強くなるまでどうか待っていてくれ。必ず同じくらいに強くなる。守られてばかりの俺じゃエドの友達なんて呼べない。強くなったら、また俺と友達になってくれないか？」

エド「……………意味わかんねえ。なんでそこまでして俺と友達

に」

テルマ「エドを気に入ったからだ。前にエドがそう言ってくれたよな。俺も同じだ。変なやつで、話聞かなくて自由なやつでも楽しいし、毎日が面白い。そんな気分になんてさせてくれる。そんなエドだから俺は友達になりたいんだ」

エド「……………ハハ、ハハハハツ!!本当……………テルマは変なやつだよ!もの凄い馬鹿!阿保だろ!」

テルマ「な!!お、俺は本気で」

エド「面白いやつだな。それにそういうテルマの気持ち、好きだぜ。近くにしようとしてくれる気持ちだな。仕方ねえから待っててやるよ。でも、俺だって強くなるからな。いつまで経っても俺に追いつかねえのはやめてくれよ」

テルマ「ああ、わかってる!待ってろ、すぐに並んでやるからな!」

エド「どうだかなー。俺、気長な方じゃねえし置いていっちゃまうかもな」

テルマ「そしたら追いかけるさ。そんで必ず追いつく!」

エド「へへ、本当変なやつ。最高だよ」

二人は笑い合っている

訓練場の上ではバン達はその光景を見ていた

バン「テルマ……………カッコいいやつだな！」

ベグル「一件落着か。世話がかかるぜ」

ダバン「若いっていいなあ、あんなキラキラしてたもんか？」

ロベルト「言ってる事が完全におっさんだぞ。気持ちはわかるけどな」

バン「あれだな。雨降って地固まる、ってやつだろ。元からあった友情がさらに強くなった瞬間！それが今だろ！」

三人「……………」

三人はバンの言葉に呆然としている

バン「な、なんだよ、その顔。また変な事言ったか？」

ロベルト「バンが……… 正しく言葉を使った……… だと？」

ダバン「風邪だ!! 熱あるだろ、お前!!」

ベグル「夢見てんのか? いや夢だな、間違いねえ。こんな事言うやつはバンじゃねえ」

バン「ムツカー!! 馬鹿にしがって!! お前ら、そこに並べ! 一発ずつぶん殴ってやる!!」

バンが顔を赤くして三人に突撃していく

ロベルト「やべ、やべ。兵士長がお怒りだ」

ダバン「はは、マジで怒ってるじゃん」

二人は笑いながら逃げていく

ベグル「俺様を殴ろうだなんて舐められたもんだな」

ベグルはバンに立ち向かっていく

バン「まずはベグルからだ!」

ベグル「はっ! やってみろよ!」

バンとベグルで戦いが始まっていく

テルマ「な、何してんだ？あれ」

エド「だらしねえやつら。ガキじゃねえんだからさ」

単独任務

それから一ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

イレブンとロウがやってきていた

ラース「連れてきたぜ」

ラースはイレブン達に呼ばれていたバンを連れてきた

ロウ「うむ。ありがとう、ラース」

イレブン「ごめんね、突然来ちゃってさ。本当ならちゃんと連絡するべきだったんだろうけど、時間があまりなくてね」

マルティナ「気にしないで。でも、どうされたのですか？それに私達だけでなくバンまでもなんて」

バン「お、俺、何か悪い事しましたかね……」

グレイグ「なぜそんなビクビクしている。心当たりでもあるのか？」

バン「いや、ないんですけど、お二人に呼ばれるなんて初めてなん

で」

イレブン「ふふ、そんな怖がらないですよ。バンにお願いがあつて来たんだ」

全員「お願い？」

ロウ「うむ。実はユグノア地方で少し前から旅人を襲う事件が多発しててのう。わし達の方でなんとか犯人を突き止めてグロツタの街にいるのがわかったのじゃ。ケニーという男らしいのじゃが中々の手馴れでのう。敏感に気配や音で察知するのか簡単に逃げられてしまつておるんじや」

ラース「ほー、なるほど。それで気配を消したりして行動できるバンが抜擢されたのか」

バン「そ、そういう事なんですか!？」

イレブン「うん、そうそう。ラースから前にバンがそういった事も出来るって聞いててね。僕達もそうだけど兵士達にそんな事が出来る人がいなくてさ。困つてたんだよ」

マルティナ「カミュじやダメなのかしら？彼の方がそういったのは向いてるはずよ」

ロウ「わしもカミュを初めは推したのじやが、本人が忙しいらしく一週間ほど後でないと時間がとれないらしい」

グレイグ「なるほど。そこまで時間が空いてしまうと、手慣れならば地方から離れてしまう恐れや被害が拡大する恐れがありますね」

イレブン「流石グレイグ、やっぱりそう考えるよね。だからバンに頼ろうかなって。ラースでもいいんだけど、ラースも忙しいでしょ？」

ラース「まあバンの方が身軽に動けるな。しかし、バン一人……………ね」

バン「単独任務なんて初めてですよ。しかもこんな重大任務なんて……………緊張する」

ロウ「バン一人だと問題でもあるのかのう？」

イレブン「一人の方がやりやすいと思ってたんだけど」

マルティナ「少しだけ。でも、大丈夫だと信じてるわ。バン、一人でも平気よね？」

バン「はい！」

グレイグ「頑張ってくるのだぞ」

その後、ユグノア城 玉座の間

ロウ「犯人の特徴じゃが、こういう男らしい」

ロウは似顔絵をバンに見せた

そこには少し若いような男性が描かれている

バン「……………なるほど。目の下にホクロがあるんですね」

イレブン「あと、右手に傷がついてるんだって。さっきも少し言っただけど、名前は多分ケニーっていうらしいよ」

バン「多分？というと、確かではないんですか？」

イレブン「うん、偽名もあるからどれが本物かわかりにくいんだ。そういう意味でも慣れてるよね」

バン「やり口が盗賊ですよ。あと、抜擢してもらったのにこんな事いうのもあれなんですけど、俺そこまで気配を消すのが上手いわけ

ではないんですよ。師匠やカミュさんに比べたら全然」

ロウ「あの二人は慣れておるからのう。どれ、少しやってみてもらっていいかの？」

バン「は、はい！」

イレブンとロウは目を閉じて、バンは少し違う場所へと移動した

バン「それじゃあ気配消しますね……………どこにいったかわかりますか？」

ロウ「むう……………」

イレブン「ここ？あ、違った。ごめん、おじいちゃん」

バン「ど、という感じです」

ロウ「いや、これ程ならば大丈夫だと思うぞ。わし達ではこれよりもわかりやすいからのう」

イレブン「そうだよ。凄いじゃん、バン！」

バン「へ、へへ、ありがとうございます」

ロウ「難しいとは思いますが、なるべく被害が出る前に押さえてくれるとありがたいのう」

イレブン「あ、もちろん報酬は出すからね。知人だからってタダ働きなんてさせないし、自分達で出来ない事させてるんだから」

バン「ありがとうございます！他にケニーの特徴はありますか？」

ロウ「カジノの帰りを狙う事が多いのう。じやが、時折ユグノアに向かう旅人を襲う事もある。点々としているため、大きな特徴が少ないんじや。すまんのう」

バン「いえ、大丈夫です！盗賊つてのはそういうものらしいですから！それでは何かあったら報告しますね！」

イレブン「うん。よろしくね、バン」

グロツタの街

バン「グロツタの街なんて数回しか来たことなかったな。土地勘が無いから出身地のダバンから少し話でも聞いてくればよかったか。とりあえず色々探ってみるか」

酒場

マスター「へい、いらっしやい」

バン「少し聞きたいことがあるんだ。いいか？」

マスター「構わんよ」

バン「ありがとな。俺、旅人なんだけどよ、この街には初めて来たんだ。だけど、物騒な噂を聞いてな。なんでも旅人が襲われてるらしいじゃん」

マスター「らしいな。この街か地方か知らないが、噂にはなってるな」

バン「噂は本当だったんだな。何か犯人の特徴とか知らねえか？俺も旅人だから対策しておきたいんだ」

マスター「……………さてね」

バン「(むう……………何か知ってそうだな)これで話してくれるか？」

バンは金貨をマスターに出した

マスター「…………… 本当かどうかは知らねえが、お前さんくらいの年齢で名前はケニーらしい。だが、顔もわからねえしどうやって襲ってるかも不明瞭だ」

バン「そつか。いや、知ってるだけでもありがてえな」

マスター「あと、あまり嗅ぎ回らない方がいい。狙ってくださいって言ってるようなものだぞ」

バン「あー、そうだな。忠告ありがとな！」

バンは酒場から出ていった

マスター「…………… どう思うよ？ケニー」

マスターの背後にあった扉から茶髪の男性が出てきた

ケニー「…………… さあ？よくわからねえやつだったな。旅人っぽそうではあるが、どこかそれだけではないような…………… 変なやつだ」

マスター「つけるのか？」

ケニー「一応な。警戒だけしておいてなんでもなかったら放置だ。だが、怪しければ始末する」

マスター「こつちに迷惑だけはかけてくれるなよ。やるなら自分でやれ」

ケニー「わかってるぜ。いつも世話になってんだからよ」

ケニーはそう言って酒場から出ていった

その頃、デルカダール城 訓練場

マーズ「へえ、バンが一人でそんな事してるのか。頑張ってるんだな」

ギバ「まああいつはそういうった事が出来るから頼られるよな」

ガザル「お、おい、ベグルが……………見てくれよ、あれ」

ガザルが指す方には頭を抱えたベグルがいた

ベグル「バンが一人で……………？ロウ様達との重大な仕事だと……………絶対何か起こる。間違いねえ、責任……………負担……………ああ……………」

ロベルト「あ……………。やべえな、ありやあ。真面目にやってるはずだからきつと大丈夫だと信じておこう。どんな内容なんだ？」

ギバ「ユグノア地方で旅人がよく襲われてるらしいぜ。しかもかなりの手馴れらしい。特にグロツタの街で見られてるらしいぜ。そう

いやダバン、グロツタの街はお前の出身地だろ？何か知らねえのか？」

ダバン「別に最近は何も帰ってないからな。詳しい事は知らねえよ」

ギバ「ケニーっていうらしいぜ」

ダバン「なに!!？」

ダバンはそれを聞いた途端驚愕の表情に変わった

ギバ「うお!?!な、なんだよ突然。やっぱり知ってたのか？」

ダバン「そんな…………… あいつが……………」

マーズ「お、おい。どうした？ダバン」

ダバン「こうしちゃいられねえ！俺もグロツタの街に帰る！」

ダバンはそう言うのと走って訓練場から出ていった

ロベルト「な、なんだ？ダバンのやつ、急に」

ガザル「何か知ってそうだったよな」

ケニー

その頃、グロツタの街

バン「(うーん……………俺、変な事したかな？誰かに付けられるような……………。気のせいか?)」

バンは時折振り返ってみるが誰もいない

バン「おかしいな。勘がいるって言うてんのによ。まあカジノに行ってみるか」

近くにある家の屋根にはケニーがバンを見ていた

ケニー「あいつ、何者だ？俺の事に多分気付いてる。ただの旅人ではないみたいだな。警戒しなきゃいけないようだ」

カジノ

バン「うるさ……………。一旦様子見してみるか」

スタッフ「いらっしやいませー！カジノで一攫千金！夢の世界へようこそー」

バン「(カジノってこんな場所なのか。スロット？だっけ。どうやるんだ?)」

バンは初めて触るスロットに困惑している

ケニー「よう、お兄さん。スロットは初めてか？」

ケニーが普通の客を装って近づく

バン「ん？ああ、そうなんだ。よかつたらやり方を……………教え
てくれないか？」

バンはその声に戻り返って顔を見ると固まったが、話を続けた

バン「(ちよっ!?!こいつ、ケニーか!?!目の下のホクロ!間違いないねえだ
ろ!)」

ケニー「(ビンゴ、やっぱり何か知ってやがる。しかも街に慣れてね
えときた。さて、どう遊んでやろうか)」

その頃、グロツタの街 入り口

ダバン「久しぶりに帰ってきた。って、感傷に浸ってる場合じゃね
えな。早い所バンとケニーを見つけねえと!ケニーのやつ、なんでそ
んな盗賊みたいな事を」

カジノでは

バン「うおおっ!凄え!めっちゃ当たるじゃん!」

ケニー「やるねえ、お兄さん!運良くない?もっといってみるべき
だっ!」

バン「じゃ、じゃあもう少し」

ケニー「へっ、なんだこいつ。馬鹿みたいに正直なやつだな。裏技使ってるつてのに気付きもしないでバンバンと。さて、もう少ししたらきつと……」

バン「ええ!?こ、こんなに当たるもんなのか!？」

バンのスロットには777と並んでいる

スロットからコインがジャンジャン出てきた

ケニー「いやー、本当こんなに当たる人初めて見たよ。教えてやった甲斐があるもんだ。それじゃあ慣れたと思うし、程々に頑張れよな」

ケニーは去っていく

バン「あ、待ってくれ。まだ話が」

??? 「お客様」

バン「へ?」

バンの後ろには数人の男達が並んでいた

スタッフ「お客様、そのような方法でコインを稼ぐのは違法行為と

なります。他のお客様の不平等や不和の原因、更にはスロットの故障の原因となります。少々こちらでお話を伺わせてもらいます」

バン「ええ!?そ、そうなのか!?だって、さっきのやつがこうやれつて」

スタッフ「お話はあちらの方で」

バンは部屋に連れて行かれる

部屋

バン「悪かったって！俺、初めてで知らなかったんだ！」

バンが連れてこられた部屋は暗い個室となっていた

用心棒「へっ、なんだ？兄ちゃん。いけない事したって事か？」

スタッフ「この者に罰をお願いします」

バン「ちよっ、待てって！俺の話を聞いてくれよ!!」

バンの周りには五人ほどの屈強な男達がいた

用心棒「あいよ。それじゃあ兄ちゃん、悪いけどそういう事だから。大人しく殴られて反省しろよな」

男達はバンを囲んでいく

バン「えー……俺、こんな事してる場合じゃねえんだよ。なあ、悪かったからよ。ここから出してくれ。俺、任務があるんだ」

用心棒「そいつは無理なお願いだ。ジツとしてればその任務とやらもすぐに出来るぜ！」

男達はバンに殴りかかっていく

数分後

バン「絶対もうカジノなんかやらねえ。騙されたぜ！」

用心棒達はバンによつて全員気絶させられていた

バン「ここから出ないと。つて、ドア硬!？」

バンはドアを開けようとするが中々開かない

バン「もう!!ばくれつきやく!」

バギイツ!!

ドアが蹴破られた

バン「あ、やべ……。に、逃げろ!!」

バンは脱兎の如く入り口に向かって逃げていった

カジノ　入り口

バン「酷い目にあつたぜ。ハア、楽しいとちよつとでも思つた俺が馬鹿だったな」

ケニー「あんた、何者だ？こんな早くに、しかも無傷でカジノから出てくるなんてよ」

カジノの入り口近くの階段にはケニーが座っていた

バン「あ！お前、よくも騙したな！お陰で散々だったんだぞ！俺はバン！デルカダール城の兵士で、お前がここで旅人を襲っていると聞いて捕まえにきた！さあ、大人しくしろ！」

ケニー「へえ、あんた兵士さんだったのか。兵士ごときに俺が捕まえられるかな？」

バン「ただの兵士だと思ふなよ！はっ！」

バンはケニーに素早く詰め寄つた

ケニー「！おっと」

ケニーも瞬時に距離を離す

バン「しんくうげり！」

ケニー「ふっ！」

キンツ！

ケニーは咄嗟に短剣で防いだ

バン「ぼくれつきやく！」

ケニー「はっ！ふんっ！」

カンツ！ガツ！

ケニーも武器で防いだり避けたりと身軽に動いていく

バン「へえ、話通り中々やるみたいだな」

ケニー「……………お兄さんこそ、ただの兵士にしては信じられないくらいだね（やべえな、こいつ。防いだ腕が痺れてる。強い……………逃げた方がよさそうだ）」

ケニーが逃げようとする

ダバン「見つけた!!」

二人「!？」

バン「ダバン!?!なんでここに!?!」

ケニー「なに!？」

ダバン「ケニー、話は聞いたぞ。なんでこんな事をしているんだ!」

バン「え?知り合い?」

ケニー「チツ!」

ダバン「ケニー、俺は待ってたんだぞ。お前がいつか兵士になる日を。それなのに、どうして」

ケニー「うるせえよ!!兄貴に俺の気持ちなんかわかるわけねえだろうが!!」

ダバン「!!?何があったんだよ」

ケニー「はっ、今更兄貴ツラか?手遅れなんだよ、ゴミが。てめえは兄貴でも家族でもなんでもねえ。ただの他人だ」

ダバン「ケニー………」

ケニー「胸糞悪い。てめえの顔見るだけで吐き気がするぜ。あばよ！」

ケニーは煙が発生する玉を投げつけた

二人「！ゴホツゴホツ!!」

煙が晴れるとケニーはいなくなっていた

バン「逃げられた！」

ダバン「……………」

バン「ダバン、弟がいたのか。随分嫌われてんだな」

ダバン「昔はあんなやつじゃなかったんだ。俺を慕ってくれたいいやつだ。少し話すさ、俺とケニーの事を。俺達の家に来いよ。案内する」

バン「わかった」

兄としての役目

ダバンとケニーの家

ダバン「小さくて悪いな。デルカダールのような、あまりいい暮らしをしていたわけじゃないんだ」

ダバンが案内した家は周りより二回りほど小さく、寂れていた

一部屋しかなく、質素なキッチンに居間、トイレと風呂が一緒になった狭い家になっている

バン「別に構わねえよ。ダバンがここに住んでいたっていうのは意外だったけどな」

ダバン「そうか？まあデルカダールでの暮らしを見てればそう感じるかもな。さて、ケニーの事はわかったと思うが俺の実の弟なんだ。親は……… ずっと昔に死んだ。10代の頃から二人でここで暮らしてきたんだ」

バン「ふーん」

ダバン「はは、興味ないって感じだな。まあそこは置いておこう。俺はケニーにいつもこう言っていた。頑張れば幸せがやってくる。だから頑張る事を続けていけばいつか必ず報われる、ってな。俺自身、その言葉に縋り付くように生きてきた。

そうして大きくなるにつれて、俺は誰かを守りたいと思うように

なった。初めはケニーを、そこから俺達のような暮らしをしているやつが苦しまないようにしたいと発展していった。だから兵士になろうって決めたんだ」

バン「ダバンが兵士を目指すきっかけはケニーだったのか。まあ大事な弟なんでもんな」

ダバン「ああ、そうだ。だが、そのためにはグロツタの街から離れないといけない。そうしたらケニーは一人になる。俺は酷く心配したんだが、ケニーはどうやらわかっていたみたいだな。俺と約束してくれたんだ」

バン「約束？」

ダバン「必ず俺と同じ兵士になってまた一緒に暮らすんだ、と。そうすれば俺はこの目標を目指して頑張れるし、兄貴も心配しなくていいってな。だから心配するなと逆に励まされてしまった」

バン「それがさつき言っていた事か。だが、ケニーは変わったみたいだぞ」

ダバン「そうみたいだ。何があったのかわからない。俺自身ここにはずっと帰ってなかった。デルカダールに住んでからしばらくは手紙を出していたんだが、ケニーから金は大事にしろと手紙越しに怒られて出さなくなった。

それからは忙しくて時間もなく、ここまで来てしまった。ミラとの結婚式にも呼んだのだが来てくれなくてな。思えば、あの時から既におかしいと気付くべきだったのかもな」

バン「じゃあ俺から話させてもらうぜ、ダバン。俺、言葉とか上手く言えないからはつきり言わせてもらおうぞ」

ダバン「なんだよ」

バン「俺はお前の弟だろうと、ケニーを捕まえる。これは絶対に変わらない事だ」

ダバン「!?……………そう……………だよな。被害が出ている以上、仕方ないのかもな。だが……………俺は！誰よりもケニーを知っている！そんな事をするやつじゃないと！きつとこれは何かの間違った可能性だつて」

バン「やっぱりな。ダバン、目を覚ませ。師匠もグレイグ將軍も言っていただろ。兵士の役目に私情は関係ないと。今の俺の、俺達の役目はケニーという盗賊を捕まえて皆を守る事だ。履き違えるなよ」

ダバン「ケニーは盗賊なんかじゃねえ!!俺の弟で、大事な家族だ!!家族を捕まえるなんて……………出来るわけねえだろうが!!」

バン「じゃあ止めるか？俺の事を。俺はこのままケニーを捕まえに行く。抵抗して戦闘になって、ケニーを倒してロウ様達に牢屋に入れてもらう。それを止めるのか？」

ダバン「……………わからない。どうすればいいのか……………何が正解なのかわからない。俺は……………どうしたらいい」

バン「俺は兄弟とかいねえから知らねえけど、兄ならしつかりと弟のケニーに罪を償ってもらうのが正しいはずだ。そのためにまずは弟を止めないとだ」

ダバン「……………そう……………だな。バンの言う通りだ。だが、バン、俺に任せてくれないか？大事な弟が道を間違えているのなら、その道を直してやるのが兄としての、家族としての役目だと思う」

バン「わかった。どうしてもって時以外は見てるからな」

ユグノア地方　グロツタの街近く

山の中の木が切られて切り株が並んでいる場所にケニーはいた

ケニー「……………なんでここがわかったんだよ」

ダバン「昔からそうだったな。何かあるとここにいて、考え事をし

ていた。今も変わらないようでよかった」

ケニー「はっ、何がよかっただよ。そんな昔の事もう忘れてるもんだと思ってたぜ」

ダバン「話してくれないか、どうしてお前がそこまで俺を嫌ってしまった理由を」

ケニー「話して何になるんだよ。昔のように戻ってほしいってか？馬鹿みたいな考えだな。俺は俺の道を行く。お前みてえにはなれねえんだよ」

ダバン「どうして。お前だって、剣を使えたじゃないか。あそこから頑張れば必ず」

ケニー「うっせえなあ!!またその話かよ!!頑張れば幸せがやってくるなんざ嘘だろうが!!そんなの選ばれたやつにしか来ねえんだよ!!」

ダバン「!？」

ケニー「俺がどれだけ頑張ったと思っていやがる!周りの嫌な大人達も無視して、寝る間も惜しんで、兄貴との約束のためって、頑張れば必ず報われると信じて……………それなのに……………俺は……………弱かった……………。そこら辺の魔物や、コロシウムでも誰

にも敵わなかった……………。元から優秀だった兄貴とは違えんだよ!!

てめえと比べられ続けた俺の気持ちが変わるのかよ! 兄は強かったのに、兄ならもつと上手く立ち回れたのに、兄ならこんな情け無い戦いしないのに、つて……………」

ケニーからは怒りと共に涙が流れていた

ダバン「……………だから、やめたのか。頑張る事を」

ケニー「ああ、そうだ! お前がもし帰ってきてくれたら話は変わったのかもな。だが、お前は帰ってこなかった。忙しいことなんかわかってたから期待してなかった。それなのに、お前は呑気に結婚すると連絡してきた。」

許せなかった……………。俺がこんなにも傷付いているのに、当の兄貴は知りもせず幸せそうに笑いやがって。

俺だつて!! いつか幸せがくると信じていたのに…………… 兄貴のようになれると信じていたのに。俺の幸せはどこだよ……………。兄と弟の差が大きすぎて…………… 嫌になったんだ。

そんな時、前から馬鹿にしてきた不良どもが来たからな。腹いせに偶然持ってた短剣で相手したらどうだ? 片手剣なんかよりもずつと扱いやすい。不良どもも俺を恐れて平伏すようになった。これが本当の俺だと。兄とは違う俺の力だと知った。

それからは盗みに明け暮れ、盗賊として名を挙げるほどになった。旅人を襲ったのは俺を認めさせるため。兄と比べ続けて馬鹿にしてきたやつらを全員見返してやるためだ」

ダバン「……………お前はそんなにも……………追い込まれていたのか。すまなかった……………俺がもつと早く気付いてやればよかったのに」

ケニー「もう遅いんだよ、馬鹿が。俺はダバンの弟ケニーじゃねえ。盗賊ケニーだ。てめえとは他人なんだよ」

ダバン「俺の事は恨んでもらって構わない。他人になってもいい。だが、これ以上旅人を襲うな。皆が不安になっているんだ」

ケニー「はっ、知らねえよ、そんなの。これが俺の生き方だ。もう誰にも止められねえ。ダバン、お前だろうとな」

ダバン「ケニー……………」

ケニー「あのバンとかいう兵士、お前の仲間なんだろう？伝えておけ、俺は捕まらねえ、止められねえってな」

ダバン「なら、俺が止める」

ケニー「は？」

ダバン「お前がこんな事する必要がなくなるように、俺がお前を止める！これ以上ケニーに間違った道を進ませない！」

ケニー「てめえが止める？面白え、いつかダバンも倒してえと思つてたんだ。ぶっ飛ばしてやるよ、ダバン！」

兄弟喧嘩

ケニー「はあ！」

ケニーは素早くダバンへと近づく

ダバン「!? (昔よりもずっと速い!)」

ケニー「ヴァイパーファング！」

ダバン「うぐっ！」

ダバンは毒状態になった

ケニー「ぼさつとしてんじゃねえぞ！舐めてんのか!？」

ケニーは再び突っ込んでくる

ダバン「ミラクルソード！」

ケニー「よつと！」

ケニーはダバンの攻撃を避けた

ケニー「タナトスハント！」

ガン！

ダバン「あぶね！」

ダバンは咄嗟に盾で防いだ

ケニー「ライティングデス！」

ダバン「くっっ!!」

ダバンはギリギリで避けたが、喉を短剣が掠った

ダバンの喉の皮膚か切れて血が出ている

ケニー「チツ！」

ダバン「お、お前……… 本当に殺す気かよ!!」

ケニー「当然だろ。ダバン、お前を殺せば俺はお前を超えた事になる。もう誰にも、お前より劣ってるだなんて言わせねえ！」

ケニーの目は本気である事を語っており、まるで暗殺者のように鋭い目でダバンを睨んでいる

ダバン「くっ………信じられないくらいに慣れた手つきで喉を狙われた。まさか………こいつ」

ケニー「何突っ立ってんだよ！ライティングデス！」

ダバン「!?もう喰らってなるものか!ビツクシールド!」

ガン!

ダバンの盾ガード率が上がった

ダバン「しんくうげり!」

ケニー「ぐはっ!」

ダバンの蹴りが近くにいたケニーの顔に当たった

ケニー「チツ!ヴァンパイアエッジ!」

ダバン「はやぶさ斬り!」

ガキン!

剣と短剣がぶつかり合う

ケニー「タナトスハント!」

ケニーは瞬時に体制を低くして、下から攻撃する

ダバン「はあっ!」

ガン!

ダバンはケニーの武器を足場に後方へ下がる

着地すると同時にケニーへ向かっていった

ダバン「ばくれつきやく！」

ケニー「ガハッ！」

ケニーは避けられず、蹴りが直撃して飛ばされていく

ダバン「いなずま斬り！」

ケニー「グアアアッ！」

ドサ

ケニーは地面にたおれた

ダバン「勝負あったな」

ケニー「く……………まだ……………まだ負けてねえ」

ケニーは体を震わせながら武器を握り、立ち上がろうとする

ダバン「やめておけ、これ以上体を無理に動かすんじゃない」

ダバンはケニーの近くまでくる

ケニー「くそが……………何を……………勝った気でいやがる!!」

ダバン「!!」

ケニーは体を無理矢理立ち上がらせた

ケニー「お前に……………勝たねえと、俺は!!俺の存在価値がねえんだよ!!」

ダバン「ケニー……………」

ケニー「ナイトメアフアング!!」

ダバン「!？」

ケニーはいきなり攻撃を仕掛けた

ザクツ!

ダバン「ぐっ!!こ、この……………効果は……………ねむ……………」

ドサ

ダバンは眠ってしまった

ケニー「ハア……………ハア……………これで、終わりだ!!ヒュプノ

スハント！」

ケニーの短剣が倒れたダバンの後頭部を突き刺そうとする

ガキン!!

ケニー「うぐう!!」

カラン

バン「させねえよ。ダバンは俺の大事な仲間だ。殺させてなるものか」

バンがケニーの短剣を蹴り上げて遠くへと飛ばした

ケニー「てめえ、邪魔してきやがって!!」

バン「もう諦めろ、ケニー。これ以上は無駄だ。大人しくするんだ」

ケニー「何も知らねえやつは黙ってる!!」

バン「ハア……………。悪いな、ダバン。よっ!」

ケニー「!?!」

バンはケニーの背後に瞬時に回ると

ガン！

ケニー「ガハッ……………」

ドサ

ケニーは気絶した

バン「任務完了だな。縄で縛っておこう。ダバン、これでいいんだよな？」

ダバン「……………」

バン「ロウ様の所でダバンも目覚めさせてもらわねえと」

ユグノア城 玉座の間

ロウ「おお！この男がケニーだったか。本当にありがとう、バンや。こんなに早く捕まえてくれるとは思わなかった」

バン「い、いえ、それは俺ではなく、ダバンのおかげなんです」

イレブン「ダバンの怪我の治療は任せて。でも、どうしてダバンが？」

バン「色々ありまして。ケニーはダバンの実の弟だったんです」

イレブン「ええ!? 弟!? 兄弟って事!？」

ロウ「な、なんと……………。自身の弟を捕まえなければならんとは……………。ダバンはさぞかし苦しい思いじやっただろう」

バン「俺もそう思います。あの、無理を承知でお願いがあるんですけど、ケニーの犯罪を軽くする事は出来ますか？ 牢屋の期間を短くするでもいいので」

イレブン「うーん……………それがねえ」

ロウ「バンには言っておらんかったが、被害の中には殺された旅人もおつてのう。そこまでの犯罪をした者を軽くする事は出来んのじゃ」

バン「!? 人殺しまで……………していたんですね。それなら仕方ありません。でも……………。ダバンはそれを知ったら……………」

二人「……………」

ロウ「どうしようもあるまい。ダバンにはわしから伝えておく。バンはこんな事は伝えんでよい。まずは捕まえてくれた事に感謝せね

ばな」

イレブン「そうだね。本当にありがとう、バン。ダバンにもお礼を言っておくよ。まず報酬金はこれね。それと何かほしいものがあったら言って。出来る限り叶えるから」

イレブンは大きなゴールド袋を渡した

バン「わわっ！ありがとうございます。ほしいものですか………。あ！じゃあ、あれください！ユグノア名物のお肉詰め合わせ！師匠達にプレゼントしますんで！」

ロウ「ほほ、それはええのう。どれ、少し待っておるんじや」

ロウは去っていった

数分後

イレブンとバンはゆっくり話していた

イレブン「え？ラースって花好きだったの？」

バン「あれ？知らなかったんですか？イレブンさん。師匠は結構花とか草の知識ありますよ。てつきり花好きとかそういうものかと」

イレブン「あー、確かに。でもそれって、ガラツシユの村が自然の中にあっただからだと思ってたよ。そうじゃないのかな？」

バン「少しは関係してると思いますが、違うみたいですよ。前にマルティナ様達の部屋に植物図鑑があるのを見ましたから。師匠はやっぱり色々物知りですよね」

イレブン「そうだね。ラーズもそうやって知識を集めてるんだ。僕も色々知識はあった方がよさそう」

ロウ「待たせてすまんのう」

ロウが大きな箱と酒の瓶を持ってきた

バン「あ、ありがとうございます、ロウ様。って、あれ？その瓶お酒ですか？」

ロウ「うむ。ラーズにプレゼントしようと思って持ってきたんじゃない。一緒にこれもやってくれんかのう？」

バン「わあ！ありがとうございます、ロウ様！きつと師匠も大喜びですよ！」

イレブン「あれ？おじいちゃん、それ確か前にやっと手に入ってたか言ってたやつじゃない？」

ロウ「ほ、ほほ、そんな事もあったかのう。まあよいんじやよ、また手に入ればいい」

バン「き、貴重なお酒なんでしょうか。俺、酒とか詳しくないんで」

ロウ「きつとラースやグレイグならわかるはずじゃ。どれ、それでは今回は本当にありがとのう。助かったわい」

イレブン「そうだね。また何かあったら頼らせてもらうね。バン達も何かあったら連絡して。必ず助けにいくからさ」

バン「はい！師匠達にしっかりお伝えしておきますね！それではまた！」

その後、デルカダール城 玉座の間

バンはマルティナ達に一連の流れを報告していた

マルティナ「そう、ダバンの弟が。色々あったのね、わかったわ。お疲れ様、バン。一応無事に終わったみたいで何よりだわ」

バン「はい！」

マルティナ「…………… ちょっと、ラース、グレイグ？そんなに嬉しいの？」

隣ではラースとグレイグが口ウから貰った酒を興奮しながら見ている

ラース「いや、これ凄いんだぞ、マルティナ！一つ百万ゴールドはするって言われてるロトゼタシア3大珍酒の一つだ!!初めて見た、じいさん凄すぎるだろ！」

グレイグ「一度オークションに出された時には五百万の値段で競り落とされたらしいぞ。そんな伝説の酒が俺達の手に……………」

バン「そ、そんな凄い酒だったんですか。もっと大事に持ってくればよかったです」

マルティナ「だとしても！バンの前でみっともないわよ！しっかりしなさい！」

二人「は、はい……………」

バン「俺は気にしませんよ。それでは報告は以上になります！失礼しました」

その頃、ユグノア城　玉座の間

ダバン「ケニーが……………人殺しまで」

ロウ「うむ。まさかお主の弟とは思わなかった」

ダバン「一応、戦った時に異様に慣れた手つきで喉を狙われて、その時に不安に思いましたが、まさか本当にそうだったとは」

イレブン「うん。だから悪いけど、どんなに短くても4年以上は牢屋にいるよ。ごめんね、ダバン」

ダバン「いえ、イレブンさん達が謝る事なんてありませんよ。俺が……ケニーなら大丈夫だと、甘く考えていたからです。一番守らなきゃいけないやつだったのに……」

ロウ「……お主の心中は察しよう。特別ではあるが、ダバンならいつでもケニーと会えるようにしておく。話をしてやってくれ」

ダバン「はい、わかりました。ありがとうございます」

イレブン「それじゃあダバンもありがとう。こんな事になっちゃったけど、どうしようもないからさ」

ダバン「はい、わかっています。それでは治療ありがとうございます。失礼しました」

ダバンは去っていった

イレブン「大丈夫かな？ダバン。酷く暗い雰囲気だったけど」

ロウ「わし達にはどうする事もできん。わし達はダバンが元通りになってくれる事を願うばかりじゃ」

一から

次の日の朝、デルカダール城

訓練場

ギバ「なあ、ダバンのやつまだ来てないのか？」

マーズ「…………… 確かにそうだな。もう始まるぞ。遅刻なんて初めてじゃないか？」

マーズは周りを見渡してダバンがいない事に気づいた

バン「まだ…………… 来れないのかもしれないな。昨日の件でダバンは酷く傷付いていたからよ」

ベグル「弟の件か、まあそうかもな。まだ整理がつかないんだろう。そつとしておこうぜ」

ガザル「あれ？ラーズ将軍が入ってきたぞ」

ラーズが訓練場にやってきた

バン「師匠、おはようございますー！」

兵士達「おはようございますー！」

全員がラースに集まろうとする

ラース「おはよう。って、待て待て。バン達を呼びに来ただけなんだ。集まってももらわなくて大丈夫だ」

ロベルト「俺達ですか？」

ラース「いや、全員じゃなくてバン、ベグル、ギバが呼ばれている。ミラさんが来ているんだ。少し話がしたいそうだ」

ギバ「……………ダバンの事ですかね」

ラース「まあ十中八九そうだろう」

バン「ロベルト、マーズ、ガザル、一旦任せる」

ベグル「自主練にしても構わないし、各々武器を教えてても構わないぞ」

三人「おう」

客室

ラース「ミラさん、連れてきたぜ」

ミラ「あ、ありがとうございます、ラース將軍」

ラース「俺は邪魔か？」

ミラ「いえ、ゼビラース將軍にも聞いてほしいです。出来ればグレイグ將軍にもお聞きしたいですが、流石にお忙しいと思うので」

ラース「ふむ、了解した。グレイグには俺から話しておこう」

バン「ダバンの事だよな？何かあったのか？」

ミラ「はい。実は昨日帰ってきてからダバンがずっと落ち込んで……。事情はダバンから説明があつたので知ってますけど、部屋に閉じこもってるんです。私じゃあ……力になれないみたいで……」

ギバ「あのダバンが塞ぎ込んでるなんてな。意外だ」

ベグル「それを俺達に？悪いが、俺達でもダバンの傷が治せるかは……」

ミラ「いえ、傷までは治せないのはわかっています。ただ、少しだけでも部屋から出てほしくて。昨日の夜からご飯も食べてないんです。私、心配で心配で。」

こんな事初めてだし、どうしたらいいのかわからなくて。昔からずっと一緒にいるって言ってたバンさん達なら何か知ってるかなと思っただけです。ラース将軍もグレイグ将軍もダバンはよく尊敬していらつしやるので、少しでもお力になれるんじゃないかと」

ラース「なるほどな。そういう事なら悪いが、俺はどうやら力にはなれないかもしれない。こいつらほどダバンの事は詳しくないんだ。グレイグもおそらく同じだろう。俺はすまないが、関わらないようにしておこう。バン、ベグル、ギバ、行ってみてくれ」

ギバ「わかりました。何が出来るかはわからないけど」

バン「そうだな。どうしたらいいかなー」

ベグル「鍵はお前だと思っぞ、バン。お前の言葉は時に異様に核心を突いてくるからな」

ギバ「確かに。思っただ事そのまま言っちゃまえ。俺にもそうやって勇気を与えてくれたんだからよ」

バン「へへへ、照れるぜ」

ミラ「それでは案内しますね。あ、ベグルさんは知ってますもんね」

ベグル「まあな。それではラース将軍、ロベルト達には伝えておいてくださるとありがたいです」

ラース「ああ、もちろん。頑張ってこいよ」

ダバンとミラの家　ダバンの部屋前

コンコン

ミラ「ダバン、本当に大丈夫なの？」

ダバン「ああ……………　平気だ」

中からは覇気のないダバンの声が返ってきた

ギバ「おい、ダバン。気持ちはわかるが、ミラさんが凄く心配してるぞ。開けてくれよ」

ダバン「ギバ……………　か。気配が多いと思えばベグルにバンもいるみたいだな」

ベグル「ミラさんをあまり不安がらせるなよ、ダバン。訓練とかは

心の整理がついてからでいい。だが、飯くらい食べておけ。もったいないだろ」

バン「美味そうじゃないか、ミラさんのご飯！食べないなら俺が食べるぞ！」

ダバン「……………構わねえよ」

バン「……………ケニーの事だろ。あれはダバンのせいじゃない。誰も……………悪くないんだ。最終的には犯罪をしてしまったケニーが悪いのだろうが、その背景も仕方ない部分だってある。背負いすぎるのはよくないぞ」

ダバン「……………ハア」

ガチャ

全員「!？」

中からは目にクマが出来たダバンが出てきた

ダバン「中に入れよ、ミラも。少しだけ俺の話に付き合ってくれ」

ミラ「ダバン、寝てないの？」

ダバン「寝れないんだ。頭がごちゃごちゃしててよ」

バン「取り敢えず飯だ、ダバン！これだけでも食つとけ！食べば頭も冴えてくるぞ！」

バンは握り飯を渡した

ダバン「ん……………」

ベグル「いつものお前らしくねえなあ。仕方ねえとは思うけどよ」

ダバン「ケニーとは……………ずっと一緒に暮らしてきたんだ。俺が親代わりとして少ない金を稼いで、家でケニーが家事をしてくれて。僅かな時間で二人で剣を振っていた。俺達みたいなやつが生きるには武器を使っていくしかなかったからな。」

大きくなって俺はコロシウムや魔物の討伐で金をそれなりに稼げるようになった。まだ甘かったケニーは剣の練習を欠かさなかったけどな。ケニーは弱虫だったから、よくいじめられてた。周りのいじめっ子や俺達を気に食わない大人達のいい標的だったんだ」

バン「弱虫って……………とてもそうは見えなかったけどな」

ミラ「弟のケニーさんは一度だけ名前を聞いた程度だったけど、そこまで詳しくは知らなかったわね」

ダバン「まあバンは少し見たと思うが、今みたくない生活とは遠い生活だったからな。ミラに幻滅されなくなかったんだ。しないとは思っていたけど、勇気が出せなくてな。」

そうしていつもいじめられてたケニーを守るうちに俺の力で誰かを守るようになりたいと思ってな。兵士を目指す始まりになったんだ。バンには話したな。」

俺……………ケニーを守りたいと思ったのが兵士としての始まりだったのに……………何してんだよ。あいつは……………助けを求めてた……………他の誰でもない俺に……………それを俺は……………俺は……………」

ダバンは頭を押さえながら縮こまった

声を漏らさないようにしながら体を震わせて泣いている

ダバン「守りたかった。守らなきゃいけなかった。元に戻れない道まで進んでしまう前に。俺は、僅かでもあの家を恥じんでいた自身が憎い!!ミラに勇気を出せずにいた自分が、ケニーを見捨てた自分が憎い!!」

大丈夫だと勝手に信じ込んで、ただ待つだけだった!何もしてやれなかった!何が皆を守るだ!!家族を、弟を、真に守るべき者一人すら守れず、何が兵士だ!!」

ダバンは声を荒げながら涙を流している

ギバ「落ち着け、ダバン。今のお前は自分を責めすぎだ。確かに気付けなかったのは悔しいんだろうが、どうしようもない事だ。これ以

上考えすぎるな」

ダバン「ケニーが俺を他人だと言ったのもよくわかる。こんなやつが兄でいいわけがない。兄貴失格なんだ、俺は」

ベグル「違うぞ、ダバン」

ダバン「え？」

ベグル「お前は昔からケニーを守ってやってたんだろ。親代わりとして世話を焼いていたんだろう。家族として、兄として弟のケニーをしつかりと守っていた。それだけで充分お前はケニーの兄だろ」

ダバン「でも……………俺は」

バン「確かにダバンはケニーから家族でもなんでもねえって言われてたな。ダバン自身も兄貴失格だと思ってるんだろ？ただ、それだけか？」

ダバン「ど、どういう事だよ」

バン「悔やむのはよくわかる。だがよ、悔しいだけで終わらせるのか？何も出来ねえって決めつけるのか？まだやれる事があるだろ」

ダバン「やれる事？」

バン「関係がなくなったのなら、また一から家族として、兄として始めていけばいいんじゃない？ケニーだって死んでない、ダバンだって生きてる。それなら、またいつか昔みたいに笑い合える関係に戻す事が出来るんじゃないやねえか？」

ダバン「そんなの……。。ケニーは捕まったし、ケニーが認めるわけ」

バン「ケニーは何年かすれば牢屋から出れるし、ケニーは悪いやつじゃないんだろ？それならきつと話をしてみれば何か変わるかもしれないねえぞ！」

ダバン「……………無理……………だろ」

ギバ「いや、バンの言う通りだぜ。ダバン、少しは行動してみてもらもう一度色々考えてみろよ。何もしてないのに決めつけるのは駄目だぜ。何もしてないって事は何でも可能にする力を秘めてるんだからよ！」

ベグル「関係が切れたとしても、その体に流れる血は消えない。同じ血を持つ者同士、いつかきつとわかりあえる。昔がそうだったよう

に、今でもきつとわかり合えるはずだ。切れたものも結べばまた元通りだ。どんなに切れたとしてもな。大事なのは、その切れた関係を結ぼうとするかどうかの行動だ」

ダバン「……………俺は、兄になれるのか？今度こそ守れるのか？」

バン「ダバンなら出来るさ！なんたって、デルカダールの兵士長をいつも守ってくれる男だ！立派に守れるに決まってるぜ！」

ベグル「いや締まらねえな。なんだかかっこ悪いぞ、それ」

ギバ「同感。ダバンが可哀想だ」

バン「な、なんでだよ!!カッコイイだろ！」

ダバン「ぶつ、ハハハハ!!ああ、そうだな。お前は昔から守ってやらないと駄目なやつだもんな」

バン「へへ、初めて会った時からダバンには世話になりっぱなしだもんなー。頼りになるやつだからよ、ケニーだってきつと頼ってくれはるはずだぜ！」

ダバン「ありがとう、お前ら。少し光が見えてきた気がする。ミラ、心配かけてすまなかった」

ミラ「いいのよ。私が力になればよかったんだらうけど」

ダバン「この後、少し話がある。ミラ、君にも負担がかかるかもしれない。それでも俺がやりたいんだ。いいか？」

ミラ「そんなの気にしないで。私はいつも頑張ってるダバンが頼ってくれるなら、なんでもするわ」

ダバン「ありがとう、ミラ」

バン「それじゃあ俺達は城に戻るぜ。また元気になったら訓練に来いよな！」

ベグル「お前がいないとこの馬鹿を止めるのも一苦勞だ。早く戻ってこい」

ギバ「ロベルト達も待つてるぜ。もちろんガク達もな」

ダバン「ああ、すぐ行く。少しだけ待っててくれ」

スランプ

それから二週間後、デルカダール城

大広間

シンジがデルカダール城にやってきていた

店長「久しぶりにデルカダールに来たな。相変わらずでかい街だぜ」

バン「ん？おお！店長さんじゃん！どうしたんだ？」

その時、ちょうどバンが訓練場から出てきた

店長「お、バン。久しぶりだな、変わらず元気みたいだな」

バン「へへ、まあな！城に来るなんて珍しいな。師匠に用事か？」

店長「そうなんだ。頼み事があってよ。玉座の間か？」

バン「おう、案内するぞ」

玉座の間

バン「失礼します、マルティナ様。店長さんが来てくれたんですよ」

店長「よう、ラース！そんで久しぶりだな、マルティナさん、グレイグさん。それとブレイブとコロだったよな」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン！」

マルティナ「あら、店長さん。久しぶりね。案内ありがとう、バン」

バン「いえいえ、それでは俺はこれで。失礼しました」

ラース「何しに来たんだよ、わざわざ城に来るなんて」

グレイグ「何か困った事でもあったか？」

店長「まあその話は一旦置いておくさ。これ、皆で食べてくれ。俺の作ったケーキ達だ。王様も好んでくれてるみたいでありがたいぜ。いつもありがとな」

シンジは少し大きめの箱を渡した

マルティナ「いいの？ありがとう。お父様もきつと喜ばれるわ」

店長「それと三人にこの試作品の味見をしてほしくてな。そのために来たんだ」

シンジは渡した箱とは別の小さめの箱からケーキとプリンを出した

店長「ケーキは栗を使ってて、プリンはかぼちやを使ってみたんだ。ぜひ食べてみてどうか教えてほしくてよ」

グレイグ「試作品か。シンジの作るものはどれも美味しそうだ。どれ、いただこう」

マルティナ「美味しいわ！栗の甘さと砂糖の甘さがちょうどいいわね。プリンも美味しい。そこまでかぼちやが強いわけではないのね」

グレイグ「私も同じ意見です。どちらも普通のケーキやプリンよりも甘さが抑えられていてあっさりとお食べられるな」

店長「お、高評価みたいだな。へへ、嬉しいぜ」

ラース「……………」

ラースはどちらも食べながら目を瞑って考え込んでいる

マルティナ「どうしたの？ラース。そんな考えて。美味しくなかつ

た？」

ラーズ「いや……………美味いんだが……………なんか……………」
シンジらしくない味だな」

シンジ「!？」

ラーズ「シンジの作るケーキとかは他の店とは少し味が違うんだ。例えば同じパフェを出しても、シンジの作るパフェはクリームとかだけじゃなくてしっかりとフルーツなどの甘味や特徴を活かしている。他のケーキもそれは同じで素材を活かして作られている」

グレイグ「確かにな。果物と甘味のどちらもはっきりと感じられるな」

ラーズ「それが今回は違うよな。なんか……………詳しくねえからわからねえけど、無理矢理一つにしてるような……………どっちかしか感じられないように思えてな」

マルティナ「言われてみれば……………あ、でも、美味しいのよ？それは間違いないわ」

店長「いや、ラーズの言う通りだ。やっぱりこれでも駄目だよな……………」

シンジは項垂れている

ラーズ「これ、季節限定とかの商品か？今の季節らしいもんな」

店長「そうなんだ。そのために新商品を作ろうとしてるんだけどよ………なんかどれも上手いかねえんだ。納得出来ない味にしか出来なくてよ。実は今のも一応必要最低限の味は出せたって思った程度なんだ。スランプってやつなんだ、俺」

マルティナ「そうだったの。でも、これだつて充分美味しいし、店長さんのお店なら売れるんじゃないかしら？」

店長「どうだろうなー。季節限定つてやつはよ、今しか食べれないって意味や特別感があるから商売としては客の目を引くものにしたんだ。ただ、ダーハル―ネだとケーキやスイーツの季節限定でこういうったものはどこもやってる。

いろいろな果物が取れる季節だからな。桃、リンゴ、梨、ぶどう等々。色々出して他の店と負けないようにしてる。だから今のだとこのメニューもありきたりでパンチが弱いんだ。それでいて味も俺の店の一般メニューより落ちてるときたらなあ………客も他の店に行っちゃうんだ」

グレイグ「なるほど。単にメニュー考案といっても様々な兼ね合いがあるのだな。難しいものだな」

店長「なんか意見あつたりしないか？こんなものが食べてみたいとか、あつたら嬉しいみたいなやつ。俺だけだと考えも偏っちまうからよ」

ラース「無限に食べられるような」

店長「マルティナさんとグレイグさんなら何かいい案出してくれそうだなって思ってたよ」

ラース「おいこら」

店長「うるせえ、食欲魔神！お前の意見に応えたら食べれるやつなんかほんの一握りになっちまうだろうが」

グレイグ「俺としてもスイーツに詳しいわけではないから大した事言えんが、やはり甘いものを食べるのが多いのは女性だろう。そこを狙ってみるのがいいのではないのか？」

店長「まあな。それはそうなんだが、そういったメニューは既に普通のメニューにたくさんあるんだよな」

マルティナ「私だったら、健康とかにも気を使っているようなケーキだったら安心出来るわね。女性として気になる人は多いと思うわ」

店長「健康か……。考えてみるか。難しいんだよな」

ラース「糖分が殆どだからな。その段階で健康とは少し縁が遠いよな」

マルティナ「ごめんなさい、折角頼ってもらったのに大した事いえなくて」

店長「いやいや、こういう意見が大事なんだ。だからバツチリだぜ」

ラース「ベロニカやセーニヤ、シルビア達にも聞いてみたらどうだ？」

店長「それもそうだな。でも、俺あの三人のいる場所知らないぜ？」

マルティナ「それなら私が店長さんのお店に向かうように伝えるわ。きつと力になってくれるはずよ」

店長「おお！そこまでしてくれるのか、ありがとよ！ああ、そうだな。バンに言っつてメグさんにも意見聞いてみるか」

デルカダール城下町 カフェ

メグ「新商品の案……ですか」

店長「そうなんだ。同業者だし、いい案ありそうだなって思ってたよ」

メグ「そうですね。売上を伸ばせる大切なものですからね。私ならケーキやプリンのようなスイーツではなく、あえて違う路線に向かうかもしれません」

店長「強気だな。まあまああの賭けになるぞ」

メグ「ふふ、確かにそうですね。私が新商品を出すとよくバンがそこら中に宣伝するんです。そのおかげもあって多少は売れているんです。ありがたいですよ」

店長「あー、それはいいよな。宣伝役がいるのは羨ましい。特にバンの性格からすると、誰にでも正直に話しそうだから信頼されてそうだよな」

メグ「ええ、そうなんです。よくバンから聞いて来たって人もいます。その分期待に応えないとなんですけどね」

店長「因みに違う路線だとメグさんはどんなものにするんだ？」

メグ「そうですね……。ダーハルルーネのスイーツ店事情には詳しくないですから深くは言えませんが、ケーキなどのスイーツはお店の中でしか食べられませんよね。それなら逆に気軽に食べられるようなクッキーやカップアイスなんかにするかもしれません。」

そうすれば店内じゃなくても食べれるし、甘いものがそこまで好きではない方にもクッキー程度なら受け入れられやすいです。外で食べながら歩いて貰えれば宣伝にもなりますよ」

店長「ふむふむ、そうだな。確かに宣伝役がない俺としてはお客を宣伝に使うのはアリだな」

メグ「あと私の店だと健康にも気を使っている人向けにハーブティーなんかもあるんです。ケーキと一緒に頼んだりしている方も多くてまあまあ人気なんですよ」

店長「ハーブティーか。俺の所だとそこまで頼まれるものじゃないんだよな。よし、凄く参考になった！ありがとな、メグさん！やっぱメグさんはかなりいいパティシエだな！」

メグ「ありがとうございます。シンジさんの力になれたなら嬉しいです」

店長の秘密

夕方、ダーハルルーネの街　カフェ

ベロニカとセーニヤ、シルビアがマルティナの知らせによりやってきていた

ベロニカ「なるほどねえ。スランプになっちゃったんだ、店長さん」

店長「はは、情けねえよな。でも、本当に案が出てこなくてよ」

シルビア「職人技が試される職業よね、パティシエは。アタシも一度だけスランプに陥った事あるのよ。いいサーカスのネタが思いつかないし、出しても団員の皆からもそこまで評判がよくなかったりってね」

店長「シルビアさんのような方でもそんな時期が。どうやってスランプから抜け出したんですか？」

シルビア「アタシは簡単よ。一旦サーカスはお休みにして、世界中を回ったの。そこで困った人達を助けたりしながら楽しくね。サーカスの事を一旦全部忘れたの」

セーニヤ「そのような方法で大丈夫なのですか？どこかで考えないといけないような気がするのですが」

店長「俺もセーニヤさんと同じ意見だな。そこからどうやって？」

シルビア「うふふ、個人の意見だから完全に正解なんてないと思うんだけど、アタシが皆を笑顔にしたいって思った時に取った行動が一番人を笑顔に出来るって気付けたのよ。変な考えはいらなかったのもっと単純で、シンプルな方法こそ誰もが馴染めて楽しめる。それが一番なのよ」

ベロニカ「いろんな考えが邪魔して本当に大事な事を隠していたって事でいいのかしら？でも、そう聞くとシルビアさんの気付きて結構大事に思えるわね」

店長「もっと単純で……… シンプルに、か」

シルビア「ああ、ごめんなさい。アタシの意見は参考程度にして。きっと店長ちゃんには店長ちゃんりの方法があるはずなの。それを探してみましよう」

店長「シルビアさん………。はい！シルビアさん、流石です！少し励まされました！」

ベロニカ「いつもお世話になってるしね。私達も何か手伝うわ」

セーニャ「なんでもお申し付けください、店長様！私、全力でお助けいたします！」

店長「はは、ありがとな、ベロニカさん、セーニャさん。それじゃあまずは色々作ってみる。もしよかったら手伝ってくれると嬉しいぜ」

シルビア「もちろんよく、困ってる人は見逃せないわ。店長ちゃんのとっておきメニュー作り、頑張るわよ〜！」

三人「オー！」

その後

店長「よし、大体完成したぜ！」

キッチンには皆で作り上げたケーキやスイーツが並んでいる

セーニャ「どれも美味しそうですわ！」

ベロニカ「それじゃあ早速食べてみましょう。コーヒー味のチョコレート、気になってたのよね」

シルビア「それじゃあアタシはこの梨ちゃんのケーキにしましょ。ふわふわしてて美味しそう」

店長「俺も食べてみるか」

数分後

セーニヤ「全部美味しいですわ！流石は店長様です！」

ペロニカ「本当よね。私達が家で作ろうとするとこうはならないもの」

シルビア「流石はプロの手つきよね。クリームを混ぜたりしてる時なんて鮮やかだったわ」

店長「うくん……………まだ納得いかねえなあ」

ペロニカ「えく、こんなに美味しいのに？結構厳しいのね」

店長「そりやあいろんな人に食べてもらいたいし、凄く美味しいって思ってもらいたい。他の店にだって負けたくないし、常連の人達にも満足してもらえるようなものにしたんだ」

セーニヤ「どれもお店としては大切な事ですわね。特にダーハル―ネはどのお店も非常に魅力的ですからより一層厳しくないといけないというわけですわね」

店長「あゝ、頭がモヤモヤするな。せつかく皆の時間貰ってるのにこれって……………。俺ってこんなに」

シルビア「ストップよ、店長ちゃん。それ以上言ったら駄目よ」

シルビアはシンジの話を遮らせた。その声はいつもより少し強い声になっている

店長「シルビアさん……………。す、すみません。こんな事思いたいわけじゃないんだ」

シルビア「ねえ、店長ちゃん。少し休憩しましょう。久しぶりにあなたとお話ししたいわ」

ベロニカ「そうね。最近来れてなかったし、喋って考えを改めてみましょう」

セーニヤ「私達のお時間は気になさらないでください。店長様が困っているのならいつでもお力になります」

店長「皆……………。ああ、ありがとう」

窓際の席

セーニヤ「まあ！今日はとっても夕日が綺麗ですわ」

ベロニカ「本当ね！海に落ちていく瞬間が見れそうだわ。シルビアさんの船で前に見た事あったけど、海から見る夕暮れって最高のよねー」

店長「ああ……………へへ、懐かしいぜ。昔はよく見てたな」

シルビア「そうだわ。前から店長ちゃんに聞いたかった事があったのよ」

店長「え？なんですか？」

シルビア「店長ちゃんがどうしてパティシエになったのか、よ」

店長「そりゃあ……………ダーハル―ネに生まれたからだな。この街が俺は好きだからな」

シルビア「うふふ、隠さなくても大丈夫よ。アタシは店長ちゃんがパティシエになる前を聞いた事あるもの」

店長「!!？」

ベロニカ「え？店長さんってずっとパティシエだったんじゃないの？」

セーニヤ「私も知らなかったですわ」

店長「は、はは。ラーズのやつからか？」

シルビア「違うわ。初めて会った時からなんとなく似てるなって思ってたの。それでアリスちゃん、アタシの船を舵してくれる子に聞いたの。そしたらその通りだったわ。あなたが乗った船は沈まないとされて、少し前までは有名だったわよね。放浪船守シンジ。こう呼ばれてたわね」

店長「どうしてそれを……………。あ、船を持ってるって……………。ハァー、流石シルビアさんだ。いろんな所に顔が広いな。そうだぜ。久しぶりにその名前で呼ばれた」

ベロニカ「店長さん、パティシエじゃなかったの!？」

セーニヤ「放浪？というと、いろんな船に乗っていたという事ですか？」

店長「ああ、そうだ。俺、前まではパティシエじゃなくてコックだったんだ。しかもただのコックじゃなくて戦うコックだ。必要なら魔

物と戦って、そして船に戻ればコックとして料理を振る舞ってただ」

シルビア「そうだったわね。その上戦う強さも料理の技術も高い。更に船の知識も豊富でいざとなったら嵐にも対応できる。その万能さが有名だったのよね。アタシも一度お目にかかってみたいと思ってたわ」

ベロニカ「そんなに色々出来たの!? 凄いじゃない、店長さん! どうして放浪してたの?」

店長「まあ色々あるんだ。稼げるとか、気分とかな。第一はいろんなやつに腹を満たしてほしかったんだ。昔は今より船が発展してなくて今よりも魔物も多く、別の大陸に行くのに時間もかなりかかっていた。その時に危惧しなきゃいけないのは船員の飢え。海の上では食い物や水は貴重品。大事にしてないとすぐになくなっちゃう。

でも、そんな事をしていたら魔物との戦闘もしている船員達はどんどん飢えていく。それを助けてやりたかったんだ。そのために昔から好きだった船について勉強して、知識も得てコックになってつてな」

セーニヤ「昔からお優しい方だったのですね、店長様。では、なぜパティシエに?」

店長「昔から菓子作りは得意だったんだ。自信もそれなりにあった

しな。料理のついでに甘いものを作ってやるとどここの船でも大好評でな。皆が楽しそうにしながら俺の作ったものを食べてくれる。それが嬉しかったんだ。そんな時、ある船団の船長にこう言われた。パティシエとしてもやっていけるんじゃないかってな。

若い頃はそのまま放浪でもいいかと思っていたが、やっぱり大人になつてくるともつと安定した職がほしいと思つていてな。ダーハルーネはまだそこまでスイーツが有名な街じゃなかった。それでも俺の好きな海が近いし、商船も来るからスイーツ作りに必要なものも集まりやすい。それでパティシエになつてみようと思つたわけだ」

シルビア「なるほどね。あなたの噂を突然パツタリと聞かなくなつてしまつてどうしたのかしらと思つていたけど、そういう事だったのね。ラーズちゃんとはいつ？」

店長「ラーズとはそれから一年くらい経つてからだな。護衛を頼んだら驚かれてよ。まあ知られてたのはこつちも驚いたがそれから酷かつたんだぞ、あいつ！戦闘になつても見てるだけだったりよ、実力を知りたいとか言つて突然襲つてきたりとか。護衛としてどうなつてんだよ、つて思つたぜ」

ベロニカ「そういえばあいつの昔もその一人旅時代はあまり聞かないわね。どんな感じだったの？」

店長「いや、俺もその時しか頼んでねえから他は知らねえ。マルティナさんが前に色々知つてるみたいだったけどな。とにかく、あいつは俺がちよつと戦えるからつて自分の役割放棄しやがつて、まつた

く！」

シルビア「ふふ、いいじゃない、楽しそうで。レースちゃんって意外と自分の事話さないから。仲間のアタシ達でさえ、ね。今はそんな事ないけど、旅してた時は皆と仲良くしながらもどこか一線を引いてる感じだったわ。マルティナちゃんにはそんな事なかったけど」

セーニャ「その護衛のお話も聞きたいですわ。レース様からお聞きした事ないので」

店長「あー……………は、恥ずかしいからそれはまた今度な。レースのやつからでも聞いて……………いや、あいつ嘘言いそうだな」

ベロニカ「そう隠されると気になるわね。二人ってそこから仲良くなっただんでしょ？」

店長「まあ仲良くっていうか、知り合い程度というか。そんな感じだ」

シルビア「どう？店長ちゃん。少しは落ち着いたかしら？」

店長「ああ、結構な。それにさつき久しぶりに昔の話したからか頭も冴えてきた。よし、なんかいいもの作れそうな予感がするぞ！」

セーニヤ「もちろんお手伝いしますわ！」

ペロニカ「ええ、最高の一品を作っちゃいませう！」

シルビア「うふふ、よかった。焦ったような暗い顔はなくなったわね。あのままじゃあ悪い考えしか浮かばないと思ってたわ。今ならきつと」

打開策

それからしばらくして

店長「うーん……味が足りねえな。もつとこう……さつぱりとした味わいにしたいんだけどよ」

シンジは作っている途中で味見をしたが、難しい顔をしている

ベロニカ「どんなのを作ろうとしてるの?」

店長「ケーキとかスイーツってのは甘さを重視されやすい分、口味が強く残りやすい。それが嫌いだから食べないってやつも中にはいるんだよな。男性が特に。最近健康を気にし始めた女性も多いし、そこが気になる女性も増えてきた。

だからさつぱりとしたものにして健康的なスイーツを作ろうとしてんだが……このままだと上手くいかねえな。もつとさつぱりとした果実があれば……」

セーニヤ「さつぱりとした味わいの果実ですか……」

シルビア「あ!アタシ、それならピッタリのもの知ってるわ!」

店長「本当ですか、シルビアさん!なんてやつですか?」

シルビア「聞いた事あるんじゃないかしら？サマデーで時々食べられてるフルーツの一つ、サンドフルーツよ。水みたいな爽やかさとほのかな酸味と甘味が特徴的な」

店長「確かに…………。でも、サマデーに行かないと行けませんよね。明日行ってみると……………。待てよ、サンドフルーツになら……………。あー、色々案が思い浮かんできたぜ！ただなあ……………」

シンジは閃いた様子の後、腕組みをして悩み始めた

ベロニカ「どうしたの？なんか勝手にどんどん進んでるけど」

店長「ああ、悪い悪い。サンドフルーツの特徴的な味はスイーツにすると、割とどんなものとも合いやすいつて特徴もあるんだ。そこで色々合わせてみたいものがあるんだが、素材集めができる程もう余裕ないしよ」

セーニャ「それでしたらぜひ私達にお任せください！」

シルビア「そうよ、店長ちゃん！アタシ達が取ってくるわ」

店長「ええ!?そ、そんな事までさせられねえよ!」

ベロニカ「気にしないで、店長さん。せつかくいい案が浮かんだん

でしょ？それなら絶対形にしましょう。私達が持つてくれば出来るのよね？」

店長「それはまあ、素材があるなら出来ると思うが」

ベロニカ「じゃあ任せなさい。絶対持つてきてあげるから。作るのは店長さんの役目よ。ほら、教えて」

店長「はは、悪いな、皆。それじゃあよろしく頼む。必要なのは要となるサンドフルーツを五つ。それとサバナナの水つてやつもあると嬉しいが、なくても代用できるはずだ。」

あときよめの水も欲しいな、今のままだと足りないからよ。三個くらい頼みたい。最後はかがやきの樹液だ。これは飾り程度だから一つで十分だ。フルーツや甘味料は俺がここで集める。ベロニカさん達はこの4つを取ってきてもらえると非常にありがたい」

セーニヤ「はい！お任せくださいー！」

ベロニカ「手分けした方がよさそうね。シルビアさん、サンドフルーツとサバナナの水をお願いしてもいい？」

シルビア「ええ、任せてちょうだい。ベロニカちゃんとセーニヤちゃんはきよめの水とかがやきの樹液をお願いね」

店長「あー……………あとよ、無理ならいいんだが、きせきのきのみってやつも一つでいいからほしいんだ。噂でしか聞いた事ないから詳しくはわからないんだが、あれも随分爽やかな味がするらしい」

セーニヤ「きせきのきのみですか。それでしたらイレブン様が持っているはずですね。食べた事ありますけどあれだけでも美味しいですわ」

店長「おお、マジか。流石勇者様だけある。それじゃあお願いします」

ペロニカ「まずは私達はきよめの水を取りに行きましょう」

セーニヤ「そうですね。確かダーハラ湿原で取れたはずですよ」

その後、ダーハル―ネの街

店長「随分早かったな、ペロニカさん、セーニヤさん。しかも本当にきせきのきのみを持ってきてくれるなんて。こっちもちょうど買い出しが終わったところなんだ」

ペロニカ達がやってくると入り口近くに袋を抱えたシンジがいた

ペロニカ「すぐに取り掛かりたいと思って少し急いだの。シルビアさんは流石にまだかしら」

店長「結構な数のサンドフルーツを頼んじまったからな。少し時間かかるかもしれない」

セーニヤ「そういえばイレブン様から店長様に伝言がありました、応援しているそうですわ」

店長「はは、勇者様は変わらず優しいな。あ、どうせならこの袋に入れてもらって大丈夫だぜ。どうせすぐに使うからな」

セーニヤ「それではお水以外入れさせていただきますね。重くありませんか？」

店長「このくらいなんて事ないさ。さて、店でシルビアさんを待とうぜ」

その時、シンジの前から高級そうな服を着た女性がやってきた

女性「まあ！シンジさんじゃありませんか」

店長「ん？ああ………ブルージョーさんですか」

ブルージョー「相変わらずたった一人でみずぼらしく切り盛りしていらっしやるんですね。そんなだからお店にとって重要となる限定ものも出せないのですよね？あ！そんなお金すらありませんか、失

礼」

店長「……………これから作ろうとしているんだ。忙しいのでこれで失礼させてもらう」

ブルージョ「まあ!!それではそちらの袋はそのためのもの?」

店長「そうだ」

ブルージョ「悪い事は言いません、おやめなさい。お客が求めるのは私が作るようなゴージャスなスイーツ。あなたのような庶民的すぎるものは売れませんことよ」

店長「そんなのわからねえだろ。俺の店にだって常連さんがいてくれる。その人のためにも」

ブルージョ「わからないのですね。はつきり言わせていただきませす。あなたの店、邪魔ですの。私の店から客を取らないでくださりまし。これも邪魔なものですわ」

店長「!?!」

ブルージョは店長から袋を盗み取った

店長「おい！返せ！」

ブルージョ「ふうん、お砂糖や桃ですか。それによくわからない液体まで。こんなものでスイーツを作る？笑わせないでいただきたいですわ」

ベロニカ「ちよつとおばさん！それは店長さんのものよ！返しなさい！」

ブルージョ「おば……… なんですの？この小娘。私のこの気品さがわからないなんて。スイーツ作りをわかっていらつしやらないよ。うなのでこちらは捨てさせていただきます」

そう言うとブルージョは袋を近くにあつたゴミ箱の中に入れた

全員「!!？」

ブルージョ「おほほほ、これでお分かり？あなたにパティシエは似合わないわ。さつさとお辞めください」

ベロニカ「あんた……… なんて事を!!」

ベロニカが怒りを露わにして突っかかろうとするが、シンジがベロニカを止めた

店長「いいんだ、ベロニカさん。ブルージョさん、俺の事はどれだ

け馬鹿にしてもらって構いません。ただ、大切な食材を馬鹿にするあなたの方こそパティシエが似合うとは思いません」

ブルージョ「あの程度すぐにも手に入るでしょう？このくらい普通ですわ」

店長「…………… 失礼します」

シンジはベロニカとセーニヤを押しやして店に戻っていった

カフェ

店長「…………… くそが!!」

ガン!

シンジは怒りを露わにして壁を強く殴った

ベロニカ「なんなのよ、あの人!!店長さんの事は悪く言うし、せつかくの物を台無しにするし!!あー、もうムカムカする!!」

セーニヤ「あの方、店長様のお知り合いのですか?」

店長「知り合いなんかじゃねえさ。最近俺の店の近くにやたらと高い雰囲気のお店出来ただろ?」

ベロニカ「ああ。あの少し先にあるやたらとギンギラした変な店ね。あれ何の店かと思つてたけどスイーツ店だったのね」

店長「あそこの店長なんだが、俺の事や店が気に入らないみたいだな。たまに嫌がらせをしてくるんだ」

セーニヤ「嫌がらせ……。それにしても中々許しがたい事までしてましたけど」

店長「あそこまでハッキリとされたのは初めてだ。すまねえ、ベロニカさん、セーニヤさん。嫌な思いさせたよな」

ベロニカ「店長さんは悪くないわよ！あのおばさんが最悪なの！店長さんの事何もわかってないじゃない！何がパティシエに似合わないよ！あんな服着てパティシエ名乗ってる方が笑つちやうわ！どっかのお城で勝手に踊つてればいいのよ！」

ガチャ

シルビア「お待たせしちゃつてごめんね。って、あら？なんかよろしくない雰囲気だけど？」

セーニヤ「あ、シルビア様。実は先程」

セーニヤはシルビアにさっきの出来事を説明した

シルビア「なるほどね。それでベロニカちゃんも店長ちゃんもピリピリしてるのね」

ベロニカ「どう思う？シルビアさん！私あんなの絶対許せないと思うわ！」

シルビア「それはアタシも同意よ。大事な食材ちゃん達を無碍にしたのもそうだし、こんな素敵な店長ちゃんを悪く言ったのも許せないわね」

店長「はは、シルビアさんに素敵だなんて言ってもらえるなんて光栄だ」

セーニャ「ですが、どうしましょう。今手元にはシルビア様が持ってきてくれたサンドフルーツとサバナの水、私が持っていたきよめの水しかありませんわ」

ベロニカ「そ、そうよね……。もう一回取ってくるわ、店長さん」

店長「いや、これだけで大丈夫だ。俺もさっきの行為でやる気に火がついたからな。このままでいく」

シルビア「でも大丈夫なの？必要だったんじゃ」

店長「まあな。でも、どんな状況からでも立派にスイーツを作れる技術こそパティシエの本領が試される。見ててくれ、皆。こっからの俺の打開策をな」

「かいしんの出来栄え

それから二日後、カフェ

ベロニカ「完成したって聞いたけど大丈夫？」

店長「ああ、バッチリだぜ。俺のかいしんの出来栄えだ！」

セーニャ「とつても楽しみです！しかし、あれだけの材料でスイーツが出来るのですか？」

シルビア「スランプも抜け出したか心配してたのよ」

店長「ああ、きつと大丈夫だ！少なくとも前よりは自信があるんだ！それがこれだ！」

シンジが持ってきたものは白いスポンジに僅かに黄色いクリームが挟まっているシンプルなケーキだった。スポンジの上とクリームの中には鮮やかな黄緑色の粒が散りばめられている。また飾りとして小さいピンクの花が乗っている

ベロニカ「へー、中々綺麗じゃない！この花や緑色のは何？」

店長「ふっふっふ、それは食べてみてからのお楽しみだ。黄色いクリームはサンドフルーツをたくさん使っている。一応スポンジにも使っているぜ」

セーニヤ「それではいただきます。………んぐ、ケーキとは思えないほどあっさりとした味わいです！それなのに甘さも感じます」

シルビア「美味しいわ、店長ちゃん！でも、気のせいかしら？アタシ、どことなく苦味もあるように思えたのだけど」

ベロニカ「私も感じたわ。といつても気にならない程度だし、甘さの方が強いんだけどね」

店長「まあそうだろうな。シルビアさんやベロニカさんの味覚は正しいぜ。なんとたつて、その緑色の粒やピンクの花の元はうつくし草だからな！」

三人「うつくし草!？」

ベロニカ「うっそ?!結構貴重なやつよ!？」

セーニヤ「かなりの苦味があるものですわ！それをこんなケーキに使われるなんて!？」

店長「そんな大した量が入ってないんだけどな。まあ貴重なものな

のはわかってるから一日10品までだ。こうする事で多少高くできるし、期間限定つてよりも1日に食べられてる数に限りがある方が貴重感も増す。

そこに健康的なサンドフルーツ、栄養分の多いサバンの水ときよめの水、さらにみりよくが上がるうつくし草を使って健康にも重視してあるんだぜ」

シルビア「素晴らしいわ、店長ちゃん！それでこんなに美味しいなんて夢のようだわ！流石店長ちゃんはプロのパティシエね！あれだけの材料でこんな素敵なきーキが出来るなんて！」

店長「プ、プロって……へへ、照れますよ、シルビアさん。まだ試作品程度だったんだがかなりの出来栄えだったからな。今回一番世話になった三人には誰よりも早く食べてほしかったんだ。こんなに高評価なら更に自信がつくってもんだ！後でラーズ達にも持っていくつもりなんだぜ」

ベロニカ「これ売れるに決まってるわよ、店長さん！あんなキラキラしたお店なんかには負けないわ、絶対！」

セーニヤ「あ、あの………おかわりはありますか？店長様。私もう一つ食べたいのですが」

店長「はは、もちろんだぜ。三人は今日好きに食べてくれ。他のメニューももちろんオーケーだ。俺が出来る礼はこれくらいしかない

からよ」

セーニャ「本当ですか!?ありがとうございます!それではこちらのケーキと、フルーツパフェの方とシュークリームと」

ベロニカ「ちよつと待ちなさい、セーニャ!嬉しいのはわかるけど店長さん一人しかいないのよ!もつと自重しなさい!」

店長「ははは、セーニャさんは変わらずよく食べてくれるな。嬉しい限りだぜ。ベロニカさん、俺は全く気にしないぜ。寧ろ、食べたい事を我慢なんてしなくていいんだ!

俺はパティシエ!誰かが食べたいと願ってくれるならそれをいつでも、いくらでも作れる人だ。それで幸せな時間を送れるのなら、それが俺の最高のプレゼントなんだぜ」

シルビア「素敵よ、店長ちゃん!あなたのその立派な考えは本当見直しちゃうわ!」

ベロニカ「もう……でも、甘やかすのとは違うからね。それじゃあ私もチーズタルトを頼んじゃおうかしら」

店長「ああ!飲み物もほしいよな?どれがいい?」

ベロニカ「二人とも紅茶でいいわよね？」

セーニヤ「はい！」

シルビア「アタシもオツケーよ」

ベロニカ「じゃあ紅茶を三つでお願いするわね」

店長「ああ！それじゃあ待っててくれよな！」

シンジはキッチンに向かっていった

シルビア「ふふ、すっかり元通りね。寧ろ、元気になったんじゃない？」

ベロニカ「ええ、本当ね。スランプって聞いてあまり想像出来なかったけど、結構苦しそうだったもんね」

セーニヤ「つらそうな顔や暗い考えは普段の店長様らしくはありませんでしたからね」

シルビア「二人もマルティナちゃんから手紙が来たのよね？ラースちゃんの伝言、書かれてた？」

ベロニカ「え？ラースの？無かったわよね？」

セーニヤ「そうですね。マルティナ様の字だけでしたわ」

シルビア「あら、じゃあアタシだけだったのね。ラースちゃんの字で店長ちゃんは普段見せないけど、一人だからこそ悩んでしまうとそのまま沼にハマってしまいやすいんだって。だから少しでも側にいてくれたって」

ベロニカ「へへ、あいつがそんな事を。確かに焦った感じだったし、暗い考えをして一人だとうしろもなさそうだったわよね」

セーニヤ「ラース様はわかっていらっしやったのですね。流石は友人としてお付き合いが長いだけありますわ」

シルビア「そうね。きつとラースちゃん達も気にしてるはずよ。後でアタシ達も色々報告に行きましょう」

その後、デルカダール城 玉座の間

マルティナ「ふふ、よかったわ。スランプから抜け出せて」

ラース「それで？その新作とやらを早く見せてくれよ」

店長「お前、もつと劳いの一言くらい言え！マルティナさんみたいによかった、とかお疲れ様、とかよ！」

ラース「はいはい。ケーキは？」

店長「この野郎……」

シンジは渋々箱から先程のケーキを出して渡していった。ラースを一番最後にして

グレイグ「ほう、シンプルなのだ。よく果物が乗っていたり、クリームが凄い事になっていたりするのだが」

マルティナ「その分色合いが綺麗だね。黄緑に白とピンク、いいバランスね」

ラース「なんだ？この緑色のやつ。普通ケーキにこんなのあるか？」

セーニヤ「あ、そちらの方はですね」

シルビア「ストップ、セーニヤちゃん。きっとビックリするから食べなくて」

ベロニカ「そうよ。想像してなかったんだから」

ラース「ふーん、まあいいか。どれどれ」

グレイグ「おお、クリームが驚くほどしつこくないな。甘さも普通のケーキよりも少ないのだな」

マルティナ「不思議な味のクリームね。甘いのにしつこくなくて、何個でも食べれそう」

ラース「んー？この緑のやつ、なんか味するのか？苦い………のか？」

店長「へへ、その黄緑色とピンクの花はな、うつくし草なんだぜ！」

三人「うつくし草!?!」

ラース「あの苦い草か！」

グレイグ「それがこんなケーキにだど!?!」

マルティナ「全くわからなかったわ！甘味もそれなりにあるからほとんど苦味なんてないわ！」

ベロニカ「驚くわよねー。私達もビックリしたもの」

シルビア「それでクリームとスポンジにはサンドフルーツとサバンの水、きよめの水が入ってて栄養もバツチリ。みりよくも上がるっていう健康的なケーキなのよ」

マルティナ「あ……… 健康的なケーキって私の案かしら？」

店長「ああ、そうなんだ。どうしたもんかとは思っていたけど、やってみると出来そうだなって思えてな」

セーニヤ「やはり素晴らしい腕前ですわ、店長様」

ラース「まあお前なら出来ると思ってたぜ。流石だな」

店長「よっしゃ、ラースが珍しく褒めてくれたぜ！」

ラース「まあ頑張ったみたいだしな。シルビア達が助けになれたみたいでよかった」

店長「本当だぜ！ありがとな、マルティナさん！シルビアさん達がいってくれなかったらどうなってたか」

マルティナ「ふふ、どういたしまして。でも、一番心配してたのって実は」

ラース「これで用事は済んだか？さつきと帰れよ」

ラースはマルティナの言葉に被せるように話し始めた

店長「なんでだよ！もう少しゆっくりさせろよ！」

ラース「邪魔なんだよ、うるさいからな。ほら、さつきと帰ってそのケーキの宣伝でもしてろ」

店長「チツ！さつきの素直さが嘘みたいだぜ。まあ目的は果たせたいし、いいか。じゃあな、マルティナさん、グレイグさん、ラース。またいつでも俺の店に来てくれよな！」

マルティナ「ええ、もちろん」

グレイグ「また王が世話になる。こちらこそよろしく頼む」

シルビア「ふふ、レースちゃんったら隠しちゃって。照れなくてもいいのに」

波乱万丈

それから一ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

ベグル「という事なんで、すみませんが明日から二日間休ませていただきます」

マルティナ「わかったわ。ふふ、素敵な家見つかるといいわね」

ラース「デルカダール周辺にしとけよ。その方がなにかと便利だろう」

ベグル「流石にそうしますよ。俺もそんな離れた場所から来るのは大変なんで」

グレイグ「また決まったら何か連絡してくれ。少しだがお祝いしよう」

ベグル「ありがとうございます！それでは失礼しました」

マルティナ「新婚になってからまだ同居してなかったのね。それがついについてわけね。ベグルも楽しそうな顔してたわ」

ラース「まあそりやあ浮かれるよな」

ガチャ

バン「失礼します、マルティナ様。師匠にお話が」

バンが少し焦った様子で入ってきた

ラース「ん？なんだ？」

バン「今のベグルの話聞きましたか!? 二日休むんですよ!？」

ラース「聞いたが何をそんなに焦ってたんだ？変な事じゃないだろ」

バン「あの、明日から二日だけ書類は無しでお願い出来ませんか!？」

ラース「いやいや」

マルティナ「ごめんなさい、バン。流石にそれは難しいわね。あなたの気持ちはわかるけど」

バン「だって……………俺、数字がたくさん出てくるの苦手なんですよ……………。間違いがたくさん起こる気がします。そういうのはベグルに任せてたのに」

グレイグ「まあ容易に想像が出来るな」

ラーズ「ハア……………お前なあ、ベグルに頼りすぎなんじゃねえのか？書類に兵士長のサポート、遠征や見回り時の補助。本来副長がやるような内容が少ないだろ」

バン「うう……………でも、ベグルはそれでいいって」

ラーズ「まあそうなんだろうが、それはベグルがいるからの話だろ。明日と明後日はその頼りになるベグルはいない。つまり、お前が一人でもどれだけ頑張れるかって事だ。しっかりすればベグルだって俺達だって見直すんだぞ」

バン「しよ、書類以外は……………多分なんとかなります。きつと……………。でも！書類だけは無理ですー！一枚に何時間もかかりますって！」

バンは泣きそうになりながら首を横に振っている

ラーズ「あー、もう。わかった、わかった。数式系統は俺が全部やっておくから、それ以外を頼んだぞ」

バン「くく！やったー！！ありがとうございます、師匠！！」

ラーズ「ただし！」

バン「うつ……な、なんですか？」

ラーズ「それ以外がしつかりこなせているかどうかを判断したら、自分の職務を問題なくこなせたら書類は楽しんでいいぞ」

バン「つ、つまりえつと……頑張れって事ですか？」

ラーズ「いや違うわ！普段の訓練、見回り等をベグルがいなくても一人で問題なく出来たら、つて事だ！俺が明日と明後日監視しておくからな」

バン「ええ!?か、監視まで!?厳しいですよ、師匠ー。もつと、こう」

ラーズ「文句があるならこの話は無しだ。書類も全部やってもらう」

バン「うう………わかりました。頑張ります。失礼しました」

バンは少し元気なさげに戻っていった

ラース「つたく、すぐに甘えてくるんだから」

マルティナ「ふふ、結局はバンに押し切られちゃうのね。監視だなんて言ってたけど、本当は不安なんですよ？」

ラース「…………… まあな。問題が起きなきゃ何も言わないが、バンはトラブルメイカーだからな。何しでかすかわからねえんだよ」

グレイグ「まあ…………… そうだな。よく賑やかにしてくれる反面、そういう傾向が強いのがバンだ。いいやつなのは間違いないのだがな」

マルティナ「それじゃあバンのサポート頑張ってね、ラース」

ラース「ハア、胃が痛いぜ」

次の日、訓練場

バン「俺、これから見習い達とトレーニングしますけど、師匠はどうされますか？」

ラース「まあ適当に組手でもやってるさ。もちろんお前は見てるか
らな」

バン「そ、そんなに念を押さなくても平気ですよ！……………多分」

ラーズ「はいはい、ほら行ってこい」

ダバン「ラーズ將軍、バンを見てるってどういう事ですか？」

ラーズ「ああ、今日と明日ベグルがいないだろ？バンが不安でな、監視という名目で来たんだ」

ガザル「ああ……………確かに。まあ訓練の時は平気だと思いますよ。最近はこちらでは問題をあまり起こしませんし」

ラーズ「じゃあ他の所か……………」

ダバン「俺としては意外とバンとベグルが合わさった時の方がトラブルが起こりやすいと思うんですよ。ベグルが小さなトラブルは押さえられる反面、ベグルまで合わさると手がつけられなくなるんです」

ラーズ「あ……………それはありそうだ。バンがボコボコになったりするって事か」

ダバン「何かの行動中にされると少し大変なんです。まあ主犯格はここにもう一人いますけど」

ダバンはガザルをチラッと見た

ガザル「なんの事やら」

ラーズ「ベグルに隠れてバレてねえとでも思ってたのかよ、ガザル。お前も偶には止まれよな」

ガザル「はい。でも、バンがおちよくってきたり自由すぎるから仕方なくです」

ダバン「引きずるだけでいいから。精々げんこつ程度にしとけ。時間かかるだろ」

ガザル「へいへい」

テルマ「あ、あの…………… ラース将軍」

ラーズ「ん？どうした？テルマ」

テルマ「あれ…………… 俺じゃ止められなくて」

ラース「え？」

バン「だーかーらー、武器を使えつての！」

エド「俺の武器はこれだ！剣は似合わねえんだよ！」

バン「剣じゃなくても槍なら使えるだろ！ほら！」

エド「嫌だね！第一なんで爪が無いんだよ、ここ！俺、一番得意だったのに」

バン「仕方ないだろ、全部あるわけじゃないんだ。ほら、わがまま言うな」

エド「えー！気にすんなよな」

バン「仲間達と同じ事しろよ」

ラース「ハア……………。いつもこうか？」

ダバン「まあ割と。エドもかなり自由ですからね。テルマ、いつも

すまないな」

テルマ「いえ、もう慣れました。なんとかなりますか？」

ラース「ああ、待ってな。おい、バン、エド。いつまで言い合ってるんだ」

バン「あ、師匠！聞いてくださいよ、エドが言う事聞いてくれないんです」

エド「ちよつと武器持たないくらいいいだろ！」

ラース「それならエドだけ変えてみるのがいいだろう。武器を持たなくても出来る事はあるだろ。バン、かくとう適正はエドにもある。少し違う形のトレーニングをやらせてみる。なにも全員同じ事をさせる必要はない」

バン「は、はい！わかりました！エド、トレーニングならお前も好きだろ！」

エド「まあそれなら」

ラース「すまなかつたな、いつもこんな感じらしいな。中斷させら

れる事が多いだろうが、もし自分がやる事をわかっているならやってもらって大丈夫だぞ。立ってるだけより有意義だ」

見習い達「はい！」

訓練終了後

ラース「まああの程度ならいいだろう。この後は見回り、魔物調査、見張りをやってもらうぞ」

バン「え!?!ちよ、ちよつと待ってください!俺、今日は見張りで見回りは当番じゃありませんよ!?!」

ラース「じゃあ交代だ。言っただろ?書類以外の役割をしっかりとこなせているかどうかって」

バン「うう……………意地悪」

ラース「なんとでも言え。ほら、伝えにいけ」

その後、デルカダール城下町

バン「じゃあせめて話し相手くらいにはなってくださいよ。特に見張りの時!結構暇なんですから!」

ラーズ「兵士が暇とか言うな。まあそれくらいならいいだろう」

女の子「グスン……………グスン……………」

ラーズ「ん？おい、バン。って」

ラーズが泣いている女の子に気付いたが、バンは既にその女の子に向かっていた

バン「どうしたんだ？こんな所で泣いてよ」

女の子「お母さんにね……………お買い物を頼まれたのに……………お財布落としちゃったの……………」

バン「そっか、それは大変だな。でも、泣いてたって財布は見つからないぜ。俺が一緒に探してやるよ！な？だから泣き止んでくれ。そうしたら買い物も出来るぞ！」

女の子「いいの？お兄ちゃん」

バン「おう！当然だ！困ってる人を助けるのが兵士だからな！一緒に行きこうぜ！」

バンは女の子を抱き上げて肩車をした

女の子「うん！財布はね、ピンクのお花がたくさん書いてあるの」

バン「なるほどな！来た道はこっちか？」

女の子「うん！お兄ちゃん大きいねー」

バン「ははは、だろー？」

ラース「ふっ、バンはこういう所では本当いい動きをするな。バンらしいといえはそうだけどな」

犬「ワン！」

少し先にいる犬の口にはピンクの財布が啜えられている

女の子「あ！あのわんちゃんが持つてるやつ、あの財布お母さんの
！」

バン「あれか！いぬー、その財布返してくれよー。この子の物なん
だぞー！」

犬「ワン！」

犬は走って逃げていった

女の子「ああ！持っていていつちやう！」

バン「それなら！ごめん？ちよつと激しく動くからしつかり掴まってるよ？」

女の子「う、うん！」

バン「よし！」

バンは走って犬を追いかけていく

女の子「わー！はいはい！」

レース「やれやれ」

レースも後ろからついていった

波乱万丈2

その後、デルカダール城下町 裏通り

犬「クウ〜」

バン「悪いな、犬。それはこの子のやつなんだ。返してもらおうぜ」

バンは犬を捕まえていた

女の子「ごめんね、わんちゃん」

バン「さて、広場まで送ってくぜ。買い物はそこなんだろう？」

女の子「うん！ありがとう、お兄ちゃん」

広場

バン「ほらよ。もう落とすんじゃないぞ」

女の子「はい！じゃあねー、兵士のお兄ちゃん！」

バン「おう！またなー」

ラース「いい人助けしたんじゃないか？」

バン「あ、師匠も付いてきてくれましたもんね。すみません」

ラース「あれくらいなんて事ない。さて、見回りに行くぞ」

バン「はい！」

その時

爺さん「おお、バン君や。ちょうどいい所に」

バン「ん？あ、道具屋の爺ちゃん。俺に用事か？」

爺さん「すまんが、棚にしまった薬が取れなくてのう。息子も今日はおらんし、若い者に頼もうとおったんじや」

バン「それくらいお安い御用だぜ！薬無いと大変だもんな」

ラース「あー、なるほど。これは…………… 時間がかかりそうだ」

道具屋

バン「よつと。これか？」

爺さん「おお、これじゃこれじゃ。ありがとうのう、バン君や。お礼に何か持っていっておくれ」

バン「はは、これくらいでお礼なんかいらねえよ。それじゃあ俺はこれで。元気だな、爺ちゃん！」

爺さん「ありがとうのうー」

城門前

バン「へへ、いつもこうなっちゃうんですよ。断れないし、困ってるなら見逃せないですよね」

ラース「まあいい事ではあるんだがな。時間制限がある以上いい所で切り上げないとだぞ。ま、お前が街の人達に好かれてるのは知ってるからな」

バン「皆にも言われます。それじゃあ魔物調査ですよ。今日はどこまでですか？」

ラース「デルカダール地方だけで充分だ。俺は参加しないからな。一人だけでデルカコスタ地方までは大変だろうからな」

バン「わかりました。話し相手にはなってくださいね？」

ラース「はいはい。やる事はやれよ?」

バン「もちろんです!」

数分後

バン「あ!見てください、師匠!あの木になってる木の实美味しいんですよ。取ってきますね!」

ラース「わかったよ。一応気をつけておけよ」

バン「あれ?師匠!、この木にキラキラしたようなものがたくさんあります。なんでですか?」

ラース「ん?キラキラしたようなもの?..... あ!馬鹿、早く戻ってこい!」

バン「へ?」

おおがらす「グエー!」

バン「おわー!おおがらすだ!」

ドサ！

バンは木の上から落ちてきた

いつかくうさぎ「キュー!?キュー！」

近くにいたいつかくうさぎが落ちてきたバンに驚いて攻撃し始めた

バン「わわわ！いつかくうさぎまで！おおがらすもつつくなよ！悪かったって！」

ラース「ハア〜……………」

バン「師匠、どうしましょう」

ラース「まあ幸いそこまで怒ってないはずだ。一旦逃げるぞ」

バン「は、はい！」

その後

バン「ふう、なんとかなつたみたいです。危なかった」

ラース「危なかったじゃねえよ、馬鹿。また面倒起こしやがって。

本当不思議なくらいトラブルが起こるな」

バン「い、今のは仕方ないですよ！まさかあの木がおおがらすの巣とは思ってなかったんです」

ラーズ「前にも木の実のある木はおおがらすが住み着きやすいつて言っただろ。もう一回覚えておけ」

バン「はい」

駐屯所

バン「ガザルー、交代だぜ。遅れて悪いな」

ガザル「お、やっと来やがったか。まあお前の事だからいつもの事だけだよ」

ラーズ「いつも………ねえ」

バン「あ、いや！今日がたまたまですよ！でも、ほら、街の人達助けましたし、これくらい仕方ないですよ」

ガザル「ラーズ將軍がいても遅れるんだから本当どうかしてるぜ。いつもバンが馬鹿ばかりやってすみません」

バン「な、なんで俺が悪い言い方してんだよ！」

ガザル「ラーズ将軍が遅れるわけねえんだから遅れる理由なんてお前以外ありえねえわ、馬鹿！」

バン「馬鹿って言うな！」

ラーズ「はいはい。それで変わった所はあったか？」

ガザル「特には。さつきおおがらすといつかくうさぎの声が聞こえたくらいですね」

バン「あ」

ラーズ「ハア。それなら何も問題ないな」

ガザル「……………お前の仕業か」

バン「うっかりだ！うっかりおおがらすの巣を見つけて木から落ちたらうっかりいっかくうさぎの近くに落ちただけだ！」

ガザル「うつかりがそんな連続して起こってたまるか！闇雲に木に登るなって皆から言われてるだろうが、猿！」

バン「猿じゃねえから！美味しい木の实がなつてたんだよ。師匠にも食べてほしかったんだ」

ラース「もうそれはいいから。ガザル、お疲れ。城に戻って自由にしていいぞ」

ガザル「わかりました。それではバンの御守りお願いしますね」

バン「御守りってなんだよ！師匠はそんなんじゃねえから！」

ラース「任せておけ。じゃあな」

見張り台

バン「ひーまーだーなー」

ラース「だから兵士がそんな事言うんじゃねえよ。これも仕事なんだぞ」

バン「だってー。というか、ベグルもガザルも酷いんですよ。いつ

つも俺の事馬鹿馬鹿言ってきた」

ラーズ「あの二人にとって馬鹿って言われる行動をしてるからだろ」

バン「そんな行動してますかね？思った事をしてるだけなんですけど」

ラーズ「その思った事を行動にするのが馬鹿なんじゃないか？思うのは自由だが、行動に移す前にもう少し考えてみる。さっきの木に登る前にもしかしたらおおがらすの巣かもしれない、とかな」

バン「あ！見てください、師匠！あの雲の形、スライムに似てますよ！」

ラーズ「てめえは……………人の話を聞け！」

ゴツン！

バン「痛い！うう、酷いですよ、師匠」

バンの頭にはたんこぶが出来ている

ラーズ「人が折角アドバイスしてやってたのに。聞いてたのか？」

バン「ベグルとガザルが馬鹿って事ですよね？」

ラース「何も聞いてねえじゃねえか！」

ゴツン！

バン「いだー!!もう一回殴る事ないじゃないですか！」

ラース「そんなんだから馬鹿って言われんだ。自由なのは結構だが、自由過ぎるのも困りものだぞ」

カミュ「お、騒がしいと思ったらこんな所にいたのか」

下からカミュがやってきた

バン「あれ？カミュさん。こんにちは」

ラース「どうしたんだ？こんな所に」

カミュ「ちようど帰ってきたらガザルと会ってな。見張り台に兄貴達がいるって聞いたからどんな事してんのか見に来たんだ」

ラース「よくここがわかったな。あまり来た事ないだろ」

カミュ「騒がしいんでね。すぐにわかったぜ」

バン「ほら、師匠が騒ぐから！」

ラース「いやなんで俺だよ！お前が話聞かないせいだろうが！」

カミュ「兄貴が殴った音だったのか。鈍い音がしたと思ったんだ。痛そうなたんこぶだな、バン」

バン「二回も殴る必要ないですよね！」

カミュ「それはお前次第だろ。またどうせ変なことやらかしたんだろ」

バン「カミュさんまで俺が悪いみたいな言い方する！」

ラース「日頃の行いだな」

カミュ「まあ兄貴に比べたら圧倒的にバンの方が変な行動するからな」

バン「酷い……」

カミュ「んで？結構高いみたいだが、ここから全体を見るだけなのか？」

ラーズ「まあ基本はそうだな。魔物達の動きや困ってる人や迷った旅人がいないかを探したりとかだ」

バン「暇なんですよ！カミュさんもお話に付き合ってくださいよ」

カミュ「まあそれは暇そうだな。仕方ねえから付き合ってやるか」

バン「やったー！」

ラーズ「俺が監視してるって事忘れてねえだろうな？バン」

バン「うつ……。。で、でも、これくらいなら問題じゃないですよ
ね？」

ラーズ「取り敢えずは、な」

カミュ「監視？何の話だ？また面白え事やってんのか？」

ラーズ「実はな」

ラーズはカミュに今までの事を説明した

カミュ「ほく、なるほど。バンがしつかりやれば嫌いな書類が楽になると。それなら頑張らねえとだな、バン」

バン「はい！現在進行形で頑張ってますよ！」

カミュ「さつきお前の口から暇って聞こえたが？」

バン「だ、だって本当に暇なんですよ！ここにいとやる事なくて」

ラーズ「だからってだらけていいわけじゃないからな」

バン「はい」

波乱万丈3

夕方

バン達は三人で話していた

カミュ「つて事があつてな。シロがずぶ濡れになって帰ってきた時は驚いたぜ」

ラーズ「思ってるよりやんちゃな所があるんだな。コロみたいだ」

バン「でも可愛いですね。見た事ないんですけど、コロより少し大きいんですけどっけ？」

カミュ「そうだな。ブレイブよりは小さいし年下だ。結構可愛いもんだぜ。リーズレットには俺に似合つてるとか言われたけどな」

ラーズ「まあ……… 似てると思うぞ。青い髪なんか特に」

その時

バキバキイッ！

全員「ん？」

カミュ「どこかから木が倒れた音がしたぞ」

バン「あ！師匠、カミュさん、あそこです！」

バンが指差す方からはまた木が倒れようとしていた

ラーズ「あつちはデルカコスタ地方。山の中だな。何か暴れてんのか？」

バン「うーんと……………あ！見えました！グリーンバングル、イエロバングルが群れで暴れてます！」

カミュ「マ、マジか。こつからそんなの見えるか？デタラメか？」

ラーズ「お前、目がよかつたんだな。取り敢えず向かうぞ」

二人「おう！／＼はい！」

デルカコスタ地方 山中

ラーズ「いたな。あいつらだ」

グリーンバングル達「キエー」

カミュ「運良く纏まつてるな。俺が一掃するぞ」

カミュがブーメランを構えた

ラーズ「いや、待ってくれ。バン、一人で片付けろ」

バン「わ、わかりました！俺の役目ですもんね！」

バンはグリーンバングル達に向かっていった

カミュ「いいのか？俺がやった方が速いぞ」

ラーズ「今日の目的はバンの監視。これもバンの仕事だ。わざわざ仕事を奪う必要はない。それに複数とはいえ、バンの相手にはならぬいな」

カミュ「まあそれもそうか」

バン「お前ら、暴れるなよ！周りが危ないだろ！」

グリーンバングル達「ギエー！」

グリーンバングル達はバンに飛びかかった

バン「すぐに飛びかかってくるのかよ！血の気が多いやつらだな。ばくれつきやく！」

ドガガガ!

グリーンバングル達「ギイ……」ジュワー

飛びかかったグリーンバングル達はバンの蹴りによってやられていく

イエロバングル「ギイー」

バン「(偶には剣使うか)かえん斬り!」

イエロバングル「ギイー……」

バン「あれ?耐えちゃった。流石に威力が弱すぎだったか」

イエロバングル「ギイー!」

ガリツ!

バン「いたっ!せいけんづき!」

ゴスツ!

イエロバングル「ギイ……」ジュワー

バン「ふう。師匠、カミュさん、終わりました!」

カミュ「ああ、お疲れだな。剣使うの久しぶりに見たぜ」

ラーズ「少し甘く見てただろ。はやぶさ斬りなら問題なかったはずだぞ」

バン「あー……… 偶に使うと感覚鈍くなっちゃって。帰ったらまた特訓しておきます」

ラーズ「そうだな。ロベルト達に怒られてこい」

バン「そ、そうですよね。なんか言われそう」

カミュ「それじゃ終わった事だし、戻ろうぜ。まだ見張りは続けるのか？」

ラーズ「いや、もう夕暮れだ。夜にここは使わない。それにバンは流石に交代だ。そんなにずっとやってはいられないからな」

バン「暇ですからね！」

ラーズ「次それ言ったら一日中あそこにいさせるからな」

バン「すみません！」

その後、デルカダール城下町 広場

バン「それですね、俺がこうやって槍でガザルのブーメランを捌いて」

バンは前のガザルとの組手の話を動きを交えてやっている

カミュ「へえ、いいじゃねえか。ブーメラン使いとしてはされると嫌な動きだな」

ラース「一旦動くのはここまでにしておけ。槍をこんな場所で振り回すな」

バン「あ、はい。それでこっから俺が一閃突き・改をこんな感じで決めて」

スポーン！

バン「あ」

二人「は？」

ドガアン！

ブシャアアア!!

バンの手から滑った槍が広場の噴水に突き刺さり粉々になった後、周りに水を撒き散らしている

キャアアア!!

周りにいた人達も水がたくさんかかり、逃げるように噴水から離れていく

バン「……………や、やば。はっ!!」

バンが濃厚な殺気を感じて振り返る

ラース「この馬鹿野郎がー!!」

バン「ヒイイイ!!すみませーん!!」

顔を赤くしたラースがバンを追いかけている

カミュ「……………流石の一言に尽きるぜ、全く」

その夜、バンの部屋

バン「うう……………師匠、めちやくちや怖かった」

バンは泣きそうになりながら書類を片付けていた

バンの頭には大きな三つのたんこぶが出来ている

コンコン

バン「はい」

マルティナ「バン？マルティナよ。入って大丈夫？」

バン「マルティナ様!?は、はい！どうぞ！」

ガチャ

マルティナ「ふふ、頑張ってるみたいね」

バン「そりゃあ……… あんな事しちゃいましたから。師匠、今までにないくらい怒ってて」

マルティナ「まああれは……… ね。少し心配で来たの。結局全部やる事になったから苦手な数式とかたくさんあるでしょ？」

バン「そ、そうなんです。文句言えないですけどね。取り敢えず出来るやつ終わらせてその後で……… これを」

バンの机の隣にはそれなりの量の紙の束が積まれている

マルティナ「それじゃ出来るやつが終わったら教えて。私もその数式のやつ手伝うわ」

バン「え!?!いいんですか!?!でも、マルティナ様にこんな事」

マルティナ「いいのよ、気にしないで。一人でやるよりも二人でやった方が速く終わるでしょ?。」

バン「うう……… マルティナ様、お優しい!!頼りなくてすみませ
ん!お願いします!。」

数分後

バン「終わりました!。」

マルティナ「わかったわ。一通り見たんだけど、私でも教えられそ
うだったから安心したわ。あ、この事はラーズとグレイグには内緒に
してね?。」

バン「もちろんですよ!話したら絶対俺が怒られますから」

マルティナ「ふふ、それもそうよね。じゃあ最初なんだけどこれは
わかる?。」

バン「えつと……… えー……… へへ、えつとですな」

バンは苦笑いしている

マルティナ「ふふ、わからないならそれで大丈夫よ。ここはこの数字を変換して、この式に当てはめるの」

バン「変換……なるほど。式も必要なんですね」

マルティナ「そうよ。結構この変換のやり方は使うから覚えておくといいわ。答えは出来た？」

バン「はい！合ってますか？」

マルティナ「ええ、正解よ。ふふ、やり方がわかれば出来るじゃない」

バン「そうですよね！やれば出来るかもしれません！」

マルティナ「その調子で頑張りましょう。次もこのやり方のやつよ。さつき同じやり方をするやつをまとめておいたの」

バン「す、凄い！もう本当にありがとうございます、マルティナ様！」

マルティナ「今日頑張ってたのに最後でちよつと問題起こっちゃつ

たものね。でも、頑張ってたんだから少しくらい手伝ってもいいかなって思ったの」

バン「なんてお優しい……………。師匠にもその優しさがほしかった」

マルティナ「まあラースもあれはあれでバンの事大事にしてるのよ。よく呆れてるように話すけど、目や話し方なんかはとっても穏やかだもの。それになんだかんだ言ってもバンには甘いだよ。彼も充分優しいと思うわ」

バン「甘い……………ですかね？まあ確かに、今回の件だって本当ならこんな甘え許されないですもんね」

マルティナ「そうよ。グレイグが呆れてたわ。バンに甘すぎるのでは？ってね」

バン「そ、そうですね。俺、誰かに甘えながらじゃないと上手く動けなくて」

マルティナ「それでもいいのよ。バンは普段は皆を頼ってるかもしれないけど、いざとなったらバンは皆から頼られる側にいるもの。私だってそうよ。バンは明るくて皆を賑やかにしてくれるし、話してとても楽しいわ。」

戦いとなつたら兵士長として勇敢に皆を導いて戦つてくれる。個人としても、国としてもとっても助けられてるわ。ありがとう、バン」

バン「ううう〜……………て、照れますよ、マルティナ様。恥ずかしいです」

マルティナ「あら、ごめんなさい。でも本当の事なのよ。いつか伝えた方がいいと思つてたわ」

バン「俺、人にこんなに褒められると嬉しいよりも恥ずかしいが勝っちゃいます。でも、ありがとうございます、マルティナ様。俺、もつともつと頑張つてマルティナ様のため、俺の好きなこのデルカダール王国を守りますよ！」

マルティナ「ええ、それでこそバンよ。それじゃあこの書類は終わった？次は別のやり方よ」

バン「は、はい！ぜひ難しくないやつで」

バンの部屋前

ライス「(やれやれ。マルティナも大概バンに甘いよな。まあ……………結局手伝おうとしてた俺も同じか。さて、部屋に戻るとするか)」

ライスは手に持っていた数式などの本を片手に自身の部屋に戻つ

て
い
つ
た

ありがとう

それから半年後、ガラツシユの村　奥地

村の人達の墓の前で拝んでいるラーズがいた

ラーズ「皆、俺ようやくこんな自分に自信を持てるようになった。前までにあった不安はもう無い。皆が……助けてくれたから。必要としてくれたから、こうして誇りを持って生きている。ありがとう」

そう言うとラーズはそつとカンパニユラの花束を墓に置いた

ラーズ「花を燃やすのはかわいそうだ。ここに置いておく。遠くからでも眺めててくれ」

そうしてラーズは草を手にとってやすらぎの唄を吹き始めた

♪

誰もいない村に静かに音色が響き渡る

ラーズ「(そうだ。偶には……感謝を皆にも伝えないと)」

ラーズは演奏が終わると静かに去っていった

その後ろ姿を二人の老人のような影が見送っていた

ダーハル―ネの街　カフェ

カラン

店長「いらつしやいま、あれ？ラースじゃねえか。連絡も無しに来るなんて久しぶりだな。一人か？」

ラース「よう、シンジ。少し時間あるか？」

店長「まあ客がないから大丈夫だぜ。どうした？マルティナさん達にケーキの予約か？」

ラース「いや、そうじゃない。ほら、これやるよ」

ラースは手に持っていたカンパニユラの花束をシンジに渡した

店長「へ？お、おう。ありがとよ。どうしたんだ？急に」

ラース「ほんの偶然だ。綺麗だったから渡したただけだ。それと……………なんだ、昔から世話になってたからな。その礼だ」

店長「……………」

シンジはラースの言葉に固まっている

ラース「な、なんだよ」

店長「いや？べつづく。ラースらしくねえと思ってたけど、まあ

感謝されるのは悪くねえよな。ありがとな、ラース。店先に飾らせてもらうぜ。”感謝”の花言葉の花をよ」

ラース「そ、そう言うのは言わなくていいんだよ！」

店長「へへ、まさかラースがこんな事してくれるなんてな！サンキュー！」

ラース「つたく。俺はもう行くからな」

店長「おう！」

聖地ラムダ　ベロニカとセーニヤの家

コンコン

ベロニカ「はい」

ガチャ

ベロニカ「え!?!ラース!?!どうしたのよ」

ラース「よう、ベロニカ。セーニヤもいるか？二人に用事があったな」

ベロニカ「いるわよ。ちょっと待っててね」

その後、広場

ベロニカ「どうしたのよ、突然。一人つても珍しいわね」

セーニヤ「何か困り事でもありましたか？」

ラーズ「いや、大した事じゃないんだが少しプレゼントを持ってきたんだ。ほらよ」

ラーズはカンパニユラの花束を二人に渡した

ベロニカ「これ、カンパニユラね。綺麗だわ。でも、どうして？」

ラーズ「あー、その………なんだ。ようやく俺が自分に自信を持てるようになったんだ。そうなれたのは皆のおかげだからよ。その………ありがとうって事だ」

セーニヤ「ああ………夢の世界の事ですね。よかったですわ、ラーズ様が自分を誇りに思えるようになってもらえて」

ベロニカ「やっとだったのね。まあ昔からあんな事されたりしたら自信なんて持てないわよね。ま、助けてあげたのは確かだけど、それよりも前から私達はあんたに助けられてきたのよ。仲間なんだし助け、助けられは当然でしょ」

ラース「そう言ってもらえると嬉しいぜ。それじゃ俺はこれで」

ベロニカ「なるほど。他の皆の所にも行くのね」

セーニヤ「ふふ、きっと皆様も喜ぶと思いますわ」

ラース「ああ、そうだと思う。また城に遊びに来てくれ、じゃあな」

クレイモラン王国　カミュとマヤの家

コンコン

カミュ「ん？誰だ？」

シロ「ハツハツ！」

ガリガリ

シロが喜びながら扉を引っ掻いている

カミュ「おいおい、シロ。傷つくからやめろ」

ガチャ

ラース「やっぱりシロだったか。久しぶりだな」

カミュ「兄貴？一人でどうしたんだ？」

シロ「バウ！」

シロはライスに飛びついて顔を舐めようとしている

ライス「はは、久しぶりだもんな。覚えてくれて嬉しいぜ」

カミュ「んで？突然どうしたんだ？」

ライス「ああ、これをやろうと思ってな。ほら」

ライスはカンパニユラの花束をカミュに渡した

カミュ「花？綺麗だが、俺には似合わねえぞ」

ライス「確かに似合わねえな。まあ家にでも飾ってマヤに見せてくれ」

カミュ「まあそれなら……。これを渡すためだけにわざわざ来たのかよ」

ライス「まあ俺がようやく自分に自信を持てるようになったから

な。こうなれたのは皆が俺を必要としてくれたからだ。その感謝の気持ちだ」

カミュ「あー…… 夢の世界の事か。懐かしいぜ。まあ、兄貴が
あんなになっちまうのは想像出来ねえからな。今の姿の方がよっ
ぽど兄貴らしいぜ」

ラーズ「そうか、それならこれからもよろしく頼むぜ」

カミュ「ああ。こつちこそ頼んだぜ、兄貴」

ラーズ「じゃあまた来るぜ。シロ、またな」

シロ「バウ！」

ユグノア城 玉座の間

ラーズ「よう、イレブン、じいさん。エマちゃんもここにいるんだ
な」

エマ「お久しぶりです、ラーズさん」

ロウ「デルカダールからと聞いて誰かと思っておったがまさかラー
ズとはのう」

イレブン「本当だね。一人つてのも珍しいね。どうしたの？」

ライス「大した事じゃないんだがな。これを渡そうと思ったんだ」

ライスは二人にカンパニユラの花束を渡した

イレブン「わあ！綺麗な花だね」

エマ「本当ね。カンパニユラでしたっけ？初めて見ました」

ロウ「ほほ、嬉しいのう。じやが、突然どうしたんじや？」

ライス「ようやく俺、自分に自信が持てるようになってな。俺はこれでもいいんだと、思えるようになった。きつと俺一人じゃあこんな考えにはなれなかった。これは皆のおかげだ。皆が必要としてくれて、俺はここにいていいと教えてくれたからこそだ。その感謝の気持ちだ」

ロウ「なるほど。夢の世界の事じやな。あれもまた随分と不思議な出来事じやったからのう」

イレブン「そうだね。それにライスだったらやっとなり付いたんだ。意外と鈍いんじゃない？僕達は旅してた頃からずっとライスを必要と

してたんだよ」

ラーズ「はは、そうかもしれないな。俺、自分の事となると鈍いみてえだ」

エマ「そっか、だからカンパニユラなんですね。花言葉は感謝でしたから。ラーズさん、素敵ですね」

ラーズ「おっとエマちゃん。そういうのは言わなくていいんだぜ。恥ずかしいからな」

エマ「ふふ、恥ずかしがらなくていいと思いますよ。ね？イレブン」

イレブン「うん！ラーズのこういう所、昔から好きだったよ」

ロウ「お主の気持ちがいっしょとこもっておるのう」

ラーズ「あー、もう。わかった、わかったから。俺はもう行くぞ」

ラーズは照れているのか顔が少し赤くなっている

イレブン「うん。ありがとう、ラーズ」

ロウ「またいつでも遊びに来ておくれ」

エマ「お待ちしてますね」

ラース「ああ、そっちこそ城にいつでも来てくれよな」

ソルティコの街　ジエーゴの屋敷

セザール「おや、ラース様。大変おひさしゆうございます。本日はどうされましたか？」

ラース「久しぶりだな、セザールさん。シルビアはいるか？少し用事があつてな」

セザール「申し訳ございません。ただいまゴリアテ坊っちゃんは買い出しに出かけておりまして」

その時

ガチャ

シルビア「ただいま。って、ラースちゃん！」

シルビアがちょうど帰ってきた

ラース「おお、ちょうどよかった」

セザール「お帰りなさいませ、ゴリアテ坊っちゃん。たった今ラー
ス様がお呼びしておりました」

シルビア「ありがとう、セザール。一人でなんて珍しいわね。取り
敢えず、こんな所にいないでアタシの部屋に入って」

ゴリアテの部屋

シルビア「どうしたの？ラースちゃん」

ラーズ「わざわざ部屋に入れてくれなくてよかったんだけどな。ま
あいいか。これを渡そうと思ったんだ」

ラーズはカンパニユラの花束をシルビアに渡した

シルビア「やだ！とっても綺麗なお花ちゃん！カンパニユラちゃん
ね」

ラーズ「皆に配ってるんだ。俺、ようやく自分に自信や誇りを持つ
ていけるようになった。不安や自責に駆られてた昔とは全く違う穏
やかな毎日だ。こんな風になれたのは間違いなくあの日俺を助けて
くれた皆のおかげ。その感謝を伝えようと思ったんだ」

シルビア「ラーズちゃん……。とっても嬉しいわ、そうやってあ
のつらい過去を乗り越えてくれて。アタシね、ラーズちゃんの笑顔つ
て前から元気になれて大好きだったんだけど、今のあなたの笑顔はそ

ここに更に磨きがかかっているわ！幸せに溢れているって笑顔よ。あなた
のとっても素敵なお所よ。いつまでも大事にしてね」

ラーズ「ああ、そうさせてもらおう。シルビアこそ皆を励まし続けて
くれよ？皆を笑顔にするんだろ？」

シルビア「もちろんですよ！アタシの一生の願いだもの。任せて
ちょうだい！」

ラーズ「それじゃあ俺は戻るぜ。またいつでも城に来てくれよな」

シルビア「ええ！ありがとうね」

ありがとう2

デルカダール城下町

グラジー

カラン

マヤ「いらつしやいませー。あ、兄ちゃん！こんな早い時間にくるなんて珍しいね！」

ラース「よう、マヤ。少し時間いいか？」

マヤ「いいよ。ビルさん達に伝えてくるね」

数分後

マヤ「どうしたの？何か用事？」

ラース「まあ大した事じゃないからすぐに終わる。ほら、これやるよ。店に飾ってくれ」

ラースはカンパニユラの花束をマヤに渡した

マヤ「わく、綺麗だね！何の花？」

ラース「カンパニユラって名前なんだ」

マヤ「へー、カンパニユラって言うんだ。確かにお店に飾ったらいい感じになりそうだね」

ライス「マヤ、俺達皆と仲良くしてくれてありがとな。知らないかもしれないけど、マヤは明るくて俺はよく勇気づけられてるんだぜ」

マヤ「え?..... い、いしし、なんだか恥ずかしいな。兄ちやんこそ、私をいつも支えてくれてありがとう!」

ライス「それじゃ俺はこれで。また頑張れよ!」

マヤ「うん!ありがとう!」

カフェ

カラン

メグ「いらっしや、あ!ライス様!こんにちは!」

ライス「よう、メグ。ちよつと頼まれてくれないか?」

メグ「はい。大丈夫ですよ」

ライス「これをな、帰ってきたらバンにあげてくれ」

ラーズはカンパニユラの花束をメグに渡した

メグ「わー、綺麗なカンパニユラですね。でも、こんな事言うのもあれなんですけどバンに花束は似合わないですよ?。」

メグは少し苦笑いしている

ラーズ「だろうな、それは俺もわかってる。店に飾ってくれて構わないさ。それと伝言も頼みたいんだ」

メグ「はい!あ、メモしますね!」

ラーズ「大丈夫か?それじゃあ言うぞ。いつも俺を支えてくれてありがとう。あの日以降から俺は自分に自信が持てるようになったんだ。それは仲間達や俺を支えてくれる皆のおかげだ。」

もちろんお前もその一人。兵士の中で誰よりも俺を尊敬して付いてきてくれる。俺の自慢の弟子で、立派な兵士長だ。これからもよろしく、ってな」

メグ「はい!バッチリです!それにしても、凄く暖かい言葉ですね。まるで私に言われてるみたいでドキドキしちゃいました」

ラーズ「はは、そうだったか?きっとバンの事だ。泣いたり俺に会いにこようとしようだな。明日の朝が大変な事になりそうだ」

メグ「ふふ、私も思い浮かびます。ラーズ様はやはりいいお方です。バンが尊敬するのも頷けますよ」

ラーズ「ありがとな、メグ。それじゃあ俺はこれで」

メグ「はい！お仕事頑張ってくださいね」

デルカダール城 王の私室

コンコン

ラーズ「王様、ラーズです。入りますよ？」

デルカダール王「ああ、よいぞ」

ガチャ

ラーズ「失礼します」

デルカダール王「どうしたのだ？ラーズよ。何かあったか？」

ラーズ「俺の私情なのですが、王様にもぜひ伝えておこうと思って」

デルカダール王「ほう、なんだ？」

ラーズ「王様、俺は王様に出会い、家族になり、父親というものを教えていただきました。こうして俺がここにいられるのもひとえに王様の懐の大きき故です。心から感謝しております」

ラーズはしっかりと王様の目を見て話した後、深々とお辞儀をした

デルカダール王「…………… どうしたのだ、ラーズよ。お主らしくもない。それに、わしはそこまで大層な事はしておらん」

ラーズ「そんな事はありません。王様にとっては大した事でなくとも、俺にとってはとても大切で、暖かくて非常に大きな事だったので。デルカダール王の息子、ラーズは今一度誓わせていただきます。」

このデルカダール王国のため、この命尽きるまで王様と俺の妻であり、王女であるマルティナを支えていきます」

ラーズはデルカダール王の前に跪いた

デルカダール王「…………… ああ、お主の気持ちしつかりと伝わった。だが、お主もグレイグと似て張り切りすぎる面もあるからう。お主はこの国の宝の一人。国のためにも、わしやマルティナのためにも自身の事を疎かにするのではないぞ」

ラーズ「はっ！ありがとうございますお言葉」

その後、玉座の間

マルティナ「あら、ラーズ。お帰りなさい。村のお参りは終わったみたいね。どうだった？久しぶりのガラツシユの村は」

グレイグ「予想よりも時間がかかったな。掃除でもしていたのか？」

ラーズ「ああ、大事な思いに気付かせてくれたよ。時間がかかって悪かった。だけど、ようやく俺も皆と同じ場所に立てたんだ」

マルティナ「え？何の話？」

ラーズ「俺、自分に自信と誇りをようやく持てるようになった。胸を張って、な。昔の虚勢も不安も自責もない、嘘偽りない自信だ。この思いを持てたのはあの日、皆が俺を助けてくれたから。俺が必要だと教えてくれて、支えてくれたからだ。」

皆には感謝してもし尽くせない程だ。その感謝を少しだけだが、皆に表してきた。もちろん、グレイグ、マルティナ。二人にも心から感謝している。本当にありがとう」

グレイグ「ど、どうしたのだ、突然。恥ずかしい台詞をよくもまあそこまでスラスラと」

マルティナ「ふふ、あの夢の世界の出来事から数年が経ったわね。まだはつきりと覚えてるわ。」

初めてラーズが私達に本当の弱さを見せてくれた日。
そして、ラーズが立ち上がった日。

忘れないで、ラーズ。あなたは一人じゃない、皆がいるわ。私も必ず隣にいる。あなたに勇気を、自信を、愛を分けてあげる。あなたは私にそれをくれたのだから」

ラーズ「ああ、ありがとう、マルティナ。これを皆に配っていたんだ」

ラーズはカンパニユラの花束を二人に渡した

マルティナ「綺麗な花ね。いい匂い」

グレイグ「そうか。そういえばラーズは前まで自信が持てず、村の事をずっと引きずっていたのだったな。それをついに克服したか」

ラーズ「ああ、そうみたいだ。前までは心の中でずっと懺悔や罪滅ぼしをしようと思っていたんだが、今では平穏な心でいられる。本当にありえない変化なんだ」

マルティナ「私達は手を差し伸べただけよ。勇気を出して手を掴んだのはあなた自身。それに打ち勝ったのもあなたの力よ。カッコイイわよ、ラーズ」

ラース「へへ、ありがとな。これからも俺はずっと一緒にいるぞ、マルティナ」

マルティナ「もちろん。私もあなたに追い抜かれないようについて行くわ、どこまでもね」

不思議な木の実

それから四ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

イレブン達全員が集まっていた

グレイグ「では、皆の場所にもこの木の実が売られていたというわけだな？」

カミュ「だな。何の木の実か知らねえが、どことなく怪しい雰囲気があるぜ」

ここ最近市場で謎の木の実が出回っており、その調査をするために集まっていた

皆の目の前にも、黒くて丸い小さな木の実が置いてある

ベロニカ「これを食べようとか売ろうとするってどうなってんのよ」

イレブン「もしかしたら美味しいのかもしれないよ？」

セーニヤ「甘くなるかもしれないせんわ。店長様にお渡しすれば素晴らしいスイーツに変わりそうです」

ラーズ「いや、流石にシンジでもそれは無理だろ」

マルティナ「取り敢えず、私達で割ってみましょう。中身も確認したいし」

そう言つてマルティナは木の実を砕いた

パキッ！

全員「……………」

中からは綺麗なナッツのようなものが出てきた

ロウ「ほほ、見た目に騙されておっただけのようじゃな」

シルビア「ただのナッツちゃんね。匂いも木の実らしいわ」

ベロニカ「なーんだ、不安がって損しちゃった」

ラーズ「買い占めて悪かったな。後で謝っておかないと」

グレイグ「しかし、どうしてこんな真っ黒な殻をしているのだ」

カミュ「そこは考えてても仕方なさそうだな。安全そうだし、解散って事でいいよな？」

マルティナ「ええ。皆も集まってもらったのにこんな結果になってごめんなさいね」

セーニヤ「全く構いませんわ。皆様とお会いできて嬉しいですから」

シルビア「それじゃあまたなにかあったら連絡してね」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン！」

仲間達と入れ替わりで外で待機していたブレイブ達が入ってきた

ラース「お、そうだ。ブレイブ、このナッツ俺と半分こしようぜ」

ブレイブ「ガウ？」

マルティナ「え？食べちゃうの？」

グレイグ「危険ではないか？」

ライス「そうか？シルビアも言ってたけど、匂いも普通だし見た目も殻が変なだけだっただろ？大丈夫なはずだけどな」

マルティナ「でも……………」

ライス「まあ毒味だ、毒味。マルティナやグレイグに食べさせるわけにはいかないからな。他のやつにもこんな事させられないだろ」

カリツ

ライスはナッツを半分食べた

ライス「うん。普通のナッツだけ、美味いぞ。塩で味付けするのもよさそうだ」

ライスはもう半分をブレイブに渡した

ブレイブ「スンスン……………ガウ」

パク

ブレイブもナッツを食べた

ブレイブ「ガウ！」

ライス「美味しいだろ？ブレイブ」

マルティナ「もう。何かあったら早く言うのよ?」

グレイグ「食いしん坊なやつめ。コックに渡してもよかつただろう」

次の日の朝

ラーズ「ふわあく、なんだか少し早く起きすぎたか? って……あれ? 目線が低い? ん? コロが隣にいる。可愛い…… じゃなくて、あれ!? ベッドで寝てたはずじゃあ! というか、喋れねえぞ! おい、どうなってる!」

ラーズが必死に喋ろうとすると

ラーズ「ガウガウ!」

ラーズ「ハア!? な、なんだ今の声!? ブレイブみたいな声したぞ! え?

俺、ブレイブになってる!?!」

ラーズは自身の体が黄色い毛で包まれた手や体になっているのを見て、驚愕する

コロ「ふわあく、父ちゃんどうしたの? ちょっとうるさいよ」

ラーズ「(コロの言葉がわかる!?! おいコロ、俺だ! ラースだ!) ガウ

ガウ！ガウ」

コロ「え？ラーズ様？何言ってるの？父ちゃん。ラーズ様は別の部屋だよ」

ラーズ「そうじゃないんだ。ブレイブがラーズになって、ラーズがブレイブになってんだよ！」ガウガウ！」

コロ「???父ちゃん、意味わかんないよ。寝ぼけてるの?」

コロは首を傾げている

ラーズ「(当然の反応だけでも！それどころじゃないんだよ!)ガウ」

ガチャ

ドアが開いてラーズの姿をしたブレイブがやってきた

ブレイブ「ラーズ様！これはどうなっておられるのですか!?!」

コロ「キャン！キャン！（あ、ラーズ様だ。おはよう。父ちゃんがね、朝からおかしいんだよ）」

ブレイブ「む？な、なんと言っているのかわからないぞ。ラーズ様、私はどうされたのですか!?!どうして私がラーズ様に！」

ラーズ「ガウガウ（俺も理解出来てない。なんでこんなあり得ない事が）」

ブレイブ「ぐっ、ラーズ様からすると私達はこう聞こえているのですね。確かに何と言っているのかわかりませんね。しかし、これは困りました」

マルティナ「ラーズ？朝早くから走ってどうしたの？」

ブレイブ「あ、マルティナ様！起こしてしまい申し訳ございません」

マルティナ「え？………ど、どうしたのよ、ラーズ。その話し方。変よ」

ラーズ「ガウガウ（マルティナ、俺がラーズなんだ！今の目の前にいるラーズはブレイブなんだよ！）」

マルティナ「ブレイブもどうしたの？そんな鳴き声あげて。ラーズ、大丈夫？」

ブレイブ「マルティナ様、私はラーズ様ではございません。私はブレイブです。今のブレイブの姿をしているのがラーズ様でございます」

す」

マルティナ「え？え？……ちよつと待って？どういう事？」

ブレイブ「理由は不明なのですが、なぜか私とラース様が姿をそのままに魂だけ入れ替わってしまったようなのです」

マルティナ「……ええ!? 本当に!? じゃあ、ラースはこっちなの？」

マルティナはブレイブを指さした

ブレイブ「はい、そうです」

ラース「ガウ！（そういう事なんだよ、マルティナ）」

マルティナ「どうして……。ちよつと待っててね、ブレイブが喋れるようになる薬持ってくるわ」

ラース「ガウー！（そうだ！それがあつたな！それがあれば多少は便利になる！）」

その後、朝食場

ラース「俺がラース。四足歩行になったけどな」

ブレイブの姿をしながらラースが喋った

ブレイブ「私がブレイブです。人間がこんな風になっているとは……………」

ブレイブはラースの姿をしており、周りをキョロキョロと見渡している

全員「……………」

王様やマルス達が朝食場で固まっている

マルス「すごい！どうやったの!?僕もブレイブになりたい！」

ルナ「私もー！いっぱい走り回ってみたーい！」

ラース「いや、そんな気楽に捉えられても」

グレイグ「またわけのわからない事が」

デルカダール王「ハツハツハ！これは面白い！またと見ない例であろう。貴重な体験ではないか？」

マルティナ「笑い事じゃないですよ、お父様。解決方法も見つかってないんですから」

デルカダール王「だが、怪しいのは昨日のその木の実なのだろうか？
そうだとすれば、精々半日か一日で胃の中から成分は無くなるだろ
う。そこまで心配しなくてもよからう」

グレイグ「な、なるほど。流石王です。冷静に分析していたとは」

ブレイブ「長くは続かないのであれば問題は少なそうですね」

ラーズ「いや、問題はありそうだ。今日、バン達と稽古の約束をし
てある。明日ジエーゴさんが来てくれるからな。そのために少しお
さらいをしておきたかったんだが」

ブレイブ「…………… 私にはラーズ様の体をあんな風に動かせる
とは思いません」

ラーズ「俺もブレイブみたいに速く走れるとは思えねえな」

マルティナ「グレイグ、兵士達の稽古は変わってあげて。ラー
ズ…………… じゃなかった。ブレイブ、私の近くで立ってるだけでいい
から普段のラーズの真似してて」

グレイグ「はっ！」

ブレイブ「了解しました」

ラース「あれ？俺は？」

マルティナ「ラースは……楽にしていわ。ブレイブは普段寝てないけど寝ててもいいし、少し城内だけなら歩き回っててもいいわよ」

ラース「まあ、ブレイブだもんな。仕方ねえか」

グレイグ「二応皆にも伝えておきましょう。食べてしまおうとこんな事が起こると。やはり不思議な木の実だ。出元を絶たないといけませんね」

コロ「クウ？キャン！（父ちゃん！じゃなかった、ラース様。俺達のご飯美味しいでしょ？父ちゃん達も美味しそうだけどどつちが美味しい？）」

ラース「確かに思ってるよりはこの飯も美味しいな。食べにくいが」

コロ「キャン！キャン！（でしよ。じゃあ、ラース様には俺と父ちゃんのお気に入りの場所に連れてってあげる！）」

「レース（魔物の姿での生活か。何が起こるのかわからないもんだな）」

入れ替わり

その後、玉座の間

ブレイブ「しかし……………ここにただでよいのですか？」

マルティナ「ええ、そうね。私達に訪れてくるお客さんを見ているだけでいいわ。折角お話出来るんだし、それまでは少しお喋りしましょう」

ラース「ん？マルティナ、じいさんと……………誰だ？二人来るぞ」

マルティナ「え？わかるの？」

ラース「耳と鼻が凄くよくなつてな。匂いとか音がよく感じ取れる」

ガチャ

ロウ？「マルティナ、グレイグ、ラース、大変なんだよ！」

扉が開かれてロウがマルティナに駆け寄ってきた

マルティナ「ロ、ロウ様!？」

エマ？「あの後おかしな事になってのう」

マルティナ「え？エマちゃん？まさか……………」

イレブン「僕、イレブン！おじいちゃんの姿だけど、中身はイレブンなんだよ！こっちはエマじゃなくて中身はおじいちゃん！入れ替わっちゃったんだ！」

ブレイブ「イレブン様にロウ様までもですか！あの木の実を食べたのですね？」

ロウ「ほ!?どうしたのじゃ、ラーズよ。わざわざ様など付けて」

マルティナ「こっちも同じ事が起こってるんです。ブレイブとラーズがあの後木の実を食べたら今日二人が入れ替わっていたんです」

ラーズ「まさかイレブン達もか。イレブンの体にエマちゃんが入ってたって事なんだな」

イレブン「うわ、ブレイブがラーズみたいな話し方してる。ラーズ達もそうなっちゃったならどうする？どうやったら治るの？」

マルティナ「お父様が言うには、木の実の成分が切れるのを待つといいって。大体半日か一日だと予想してるけど」

ロウ「やはりか。言ったではないか、イレブン。そう焦る事もない、と」

イレブン「だって…………… 困るじゃん。こんなの」

ロウ「ほほ、わしとしては若い子の体なんて…………… ええのう」

ロウは自身のエマの体を見てニヤニヤしている

イレブン「うわ、おじいちゃん最低！嫌い！」

ロウ「ぬう!? す、すまん、イレブン」

イレブン「酷いや、おじいちゃん！」

ライス「じいさんが悪いな。エマちゃんはイレブンの恋人なんだぞ」

マルティナ「そうですよ、ロウ様。流石に自重なさってください」

ロウ「すまん……………」

イレブン「もういいよ。取り敢えず一日経ってまだ治らなかつたらまた考えるよ。ありがとう、マルチーナ、ラース…… じゃないや、ブレイブ」

ブレイブ「私は特に何もしておりません。不思議な事になりましたが、互いに頑張りましょう」

その後、城内をラースは歩いていた

ラース「(目線が低いと景色が違うもんだな。花とか絵があまり見えねえや)」

ダバン「お、ブレイブじゃん。よ」

ラース「(ダバンか。って、あれ？今はグレイグが訓練してるはずでは?)」

ダバン「城内歩いてるなんて珍しいな。コロ探してんのか?」

ラース「(一応…… ブレイブの程でいくか。返事しないのも変だしな) ガウ」

ダバン「コロならいつもの道でナプガーナ密林がある方に向かったぞ。お前も行くか?」

ラーズ「いつもの道？わからないが領いておくか」ガウ」コク

ダバン「そっか。じゃあなー」

ラーズ「ハア、なんとかなった。まさかブレイブが俺だなんて思うはずねえもんな」

バン「お！よう、ブレイブ！一人か？」

ロベルト「珍しいな。歩き回ってたのか？」

ラーズ「あー、面倒くせえな！バンにこんな恥ずかしい所見られてたまるか」ガウ」

バン「ん？」

ロベルト「城下町か？それともナプガーナ密林の方か？」

バン「ちよ、ちよっと待て、ロベルト。ブレイブ、もう一回喋ってみてくれ」

ラーズ「あ？なんだ？こいつ」ガウ？」

バン「……………」

ロベルト「おい、どうしたんだよ、バン」

バン「ブレイブ、俺お前が何て言ってるのかわかんねえ」

バンは真剣な顔でブレイブの目線に合わせてしゃがんだ

ラーズ「いや、当然だろうが。俺は今普通に話せるのに、ガウって発音してるんだぞ。意味なんかねえよ」

ロベルト「は？普通だろ。ブレイブが何言ってるかなんて薬がないとわからねえよ」

バン「いや、そうなんだけど、なんとなく伝わるっていうかよ。それが無いんだ。こんなの初めてだ」

ラーズ「（なんか怪しまれるのも嫌だな。とつとつナプガーナ密林の方にいくか）ガウガウ」

ラーズはバンとロベルトの間を歩いて行った

ナプガーナ密林近くの川

ラーズ「へえ、こんなに草や水、森の匂いに溢れてたのか。いろんな音が聞こえる。風の音や水が流れる音、遠くの魔物の声。これがブレイブの見ていた世界か」

コロ「あ！父ちゃん！……じゃなかった、ラーズ様！ここまで来れたんだ」

少し離れた場所からコロがやってきた

ラーズ「ああ、なんとかな。しかし、こんなに匂いや音がすると少し落ち着かないな」

コロ「そう？俺はいつも通りだよ。ラーズ様もすぐに慣れるって！ねえ、俺の友達と遊ぼう！父ちゃんだと一緒に遊んでくれないんだよ」

ラーズ「魔物との交流か。少し面白そうだ。遊ぼうか」

コロ「本当!?やったー！じゃあ案内するね、こっちだよー！」

コロは元気に走っていった

ラーズ「走るのか。まだあまり慣れてないんだけどな」

ラーズも少しおぼつかない足取りで向かっていった

その頃、玉座の間

ホムラからの使い「とういわけでして、ヤヤク様がこちらにいらつしやるラーズ様達に救援をお望みになっておられるんです。どうか私達にお力をお貸しください」

マルティナ「承りました。ただ、向かうのは私達の兵士になると思われます。そちらの方をどうかご理解くださいますようお願いいたします」

ホムラの使い「は！ありがとうございます、マルティナ王女様！ヤヤク様もお喜びになると思われます。それでは突然失礼致しました」

ホムラからの使い人は深く礼をして出ていった

マルティナ「ラーズ、じゃなかったわ。ブレイブ、そんなに強く睨まなくてもいいのよ？」

ブレイブ「も、申し訳ありません。表情？というのですかね。うまくコントロールが出来なくて……こう、力が入ってしまうんです」

ブレイブは目を細めたりして顔を動かしている

マルティナ「そっか。ブレイブ達は普段表情なんてあまりないものね」

ブレイブ「はい。私達はこんなに簡単に顔は動かないので、違和感というかちよつとした動きで口や目が動いてしまうんです」

マルティナ「人間の姿だと慣れないわよね。早い所効果が切れる事を願うしかないわね」

ブレイブ「こんなに人間が感じる世界は静かなのですね。気配を感じられるとはいえ、私達に比べれば範囲はとて狭いです。匂いや音もこんなに感じられないのは初めてです」

マルティナ「ブレイブ達からすると今は静かって事になるのね。このお城、そんなにうるさい？」

ブレイブ「いえ、そんな風に思った事はありません。ただ、様々な変化が至る所でよく起こっているのです。それを感じられないというのは少々寂しいですね。特に訓練場からはよく音が聞こえるのですが、今はよほど大きな音でも無い限り聞こえませんか」

マルティナ「ここから訓練所の音まで聞こえてたのね。それは少し羨ましいわ。あそこはいつも楽しそうな事が起こるから。ここよりずっと退屈しないと思うわ」

ガチャ

グレイグ「姫様、ラー……ブレイブ。少々問題が」

マルティナ「どうしたの？」

グレイグ「ベグル達がラースとこれからの訓練などについて話をしたいそうなのですが、ラースに直接話したいとおっしゃっています」

マルティナ「それは断るしかないわね。グレイグ、ラースに伝えるって言うてくれないかしら？」

グレイグ「それがどうしても言われてしまって。私が渋っていたせいなのですが、バン達にどうしてラースを出せないのか疑問に思われてしまって」

マルティナ「うーん……。仕方ないわね。ブレイブ、悪いのだけれど話だけ聞いてもらえる？グレイグがサポートするから」

ブレイブ「わかりました。グレイグ様、すみませんがよろしく願います」

グレイグ「いや、こっちこそこんな事になってすまない。それでは向かおう。姫様、少しの間だけ誰も客を入れませんので休んでいてください」

マルティナ「わかったわ」

訓練場

グレイグ「すまん、ベグル、マーズ、ロベルト。ラーズが来たぞ」

ブレイブ「俺にどうしてもって聞いたからな」

ベグル「あ、無理言ってますみませんでした、ラーズ將軍。でも、流石に言っておかないといけないと思って」

ロベルト「新入り達なんですけど、バラつきが多く見られるんです。得意武器や戦い方、型などがうまく活かしきれてないって感じで。やれるやつもいるんですけど、やれてないやつもそれなりにいます。やっぱりラーズ將軍が指導していただくのも必要かと思ひまして」

マーズ「俺達の力不足ですみません。でも、やっぱりラーズ將軍が直接教えていただいた方が効率的だと思ひまして」

ベグル「明日のジエーゴさんが来るまでには少しでも上達させておきたいんです」

ブレイブ「なるほど。グレイグ様が困っていたのはこういう事だったのか」

マーズ「様？」

ブレイブ「ハッ！すまん、言い間違えた」

ロベルト「今日ってラーズ將軍何もないって前にお聞きしていたんですけど、どうしてそんなに出てこれなかったんですか？」

ブレイブ「そ、それは……」

グレイグ「緊急で仕事が入ってな。ユグノア王国と話し合いの結果なのだ」

ベグル「え？そうだったんですか。俺やバンにくらい知らせてもよかったのに」

グレイグ「すまない。今朝に決まってな。ドタバタして伝えられていなかった」

マーズ「グレイグ將軍がいらっしやらなくて大丈夫なんですか？」

グレイグ「ああ。最低ラーズと姫様がいれば大きな問題はない」

ベグル「それでしたら指導は無理ですね。すみませんでした」

ブレイブ「いや、構わない。こっちこそすまないな」

ベグル「あ、あと、一つだけ言いたい事が」

ブレイブ「む？どうした？」

ベグル「ジエーゴさんの誘いの件、どうしましょう。俺としては少し魅力的なんですけど」

ブレイブ「誘いの件？」

ベグル「あれ？お忘れですか？前からジエーゴさんにバンと俺が誘われてるじゃないですか。指導役としてソルティコに来ないかって」

ブレイブ「(そ、そんな事が！ラーズ様はどうお考えなのだろうか)」

グレイグ「その件ならラーズは少し前に不定期なら仕方ないと言っていたぞ」

グレイグはブレイブの耳元でそつと答えた

ブレイブ「それなら不定期なら仕方ないと考えているぞ」

ベグル「まあそうですね。兵士をやめる気は俺もバンもありませんから。ただ、不定期だとしても時間がかかりますよね」

ブレイブ「だろうな。それを踏まえてどうするか考えてくれ」

入れ替わり2

その頃、ラースとコロは

きりかぶごぞう「コロ君、速いよー」

おにびどんぐり「あんま先に行くなよー」

コロの友達であるきりかぶごぞうとおにびどんぐりで遊んでいた

コロ「えへへ、父ちゃんと遊ぶの楽しくてさ」

おにびどんぐり「よく自慢してたもんな。珍しいじゃん、来てくれるなんて」

きりかぶごぞう「お久しぶりです。いつもコロ君がいてくれて助かってます。前にも絡まれてた所を助けてもらったんです」

ラース「ああ、こつちこそコロが迷惑かけてすまない。楽しんでくれているならなによりだ」

コロ「ねえ、ラース様。走ったら動かすの慣れた？」

コロはラースに近づいてこつそりと話しかけた

ラース「そうだな。さつきよりは慣れてきた。まあ、ブレイブ本人

と比べたらまだまだだけだな」

コロ「それは仕方ないよね。この後さ、皆でもう少し一緒に走って森の中で遊ぶんだけど大丈夫？」

ラース「平気だ。ただ、複数いるとはいえあまり危ない事はするなよ？俺は今戦えないからな」

コロ「うん、わかった！皆ー、もう一回走ろう！今度は森の場所まで！」

きりかぶごぞう「えー、また走るの？僕、走るの遅いんだよ」

おにびどんぐり「仕方ねえな。きりかぶごぞう、頑張るぞ」

きりかぶごぞう「えー」

ラース「俺が押してやる方が早いかな？」

きりかぶごぞう「え!?!いいんですか!?!でも、悪いですよ」

ラース「気にすんな。コロがいつも世話になってる礼みみたいなもん

だ。よし、走るぞ」

ラーズはきりかぶごぞうを頭で押しながら走った

きりかぶごぞう「わく、こんなに速いの初めて」

おにびどんぐり「いいなく、俺もやってほしいのに。火が邪魔で触りにくいんだよな」

ラーズ「(魔物で別種といっても遊んだり仲良くしたり、得意不得意があつたり。人間と同じだな。根本的な事は変わらないのか)」

ナプガーナ密林

リップス「あら？コロちゃん、きり君、おにび君じゃない」

コロ「あ、リップスお姉ちゃんだ。こんにちは」

ラーズ「ん？見ない顔だな」

リップス「あら！もしかして、噂のコロちゃんのお父様？イケメンですわねー」

きりかぶごぞう「久しぶりに僕達と遊んでくれてるんです」

おにびどんぐり「見た目よりずっと優しいんだぜ」

コロ「えへへ、俺の自慢の父ちゃん！」

リース「コロが世話になっているな。迷惑かけてないといいのだが」

リップス「そんなの全く。いつも楽しませてもらってますー。そうだよ。コロちゃん、あつちの木の下に美味しい蜜があつたのよ。ぜひ食べてみるといいわ」

コロ「本当!?!気になる!ありがとう、リップスお姉ちゃん!あつちだね?」

コロはリップスが指した方とは違う方へ走っていった

リース「おい!そっちじゃないぞ!」

おにびどんぐり「またかよ!あいつ、いつも違う方向に行くんだから!」

リップス「あらあら。まあ大抵最後は合流できるからきつと今回も大丈夫よ。二人は先に向かっていたら?」

きりかぶごぞう「リップスさんは？」

リップス「私はもう食べたのよ、美味しかったわ。それじゃあ कोरोちゃんのお父様、失礼します」

ラーズ「やれやれ。俺が追いかける。二人は先に向かっていくれ」

おにびどんぐり「ありがとうございます。よし、行こうぜ、きりかぶごぞう」

きりかぶごぞう「うん。それじゃあまた後で」

その後、森の橋近く

コロ「あれー？」

ラーズ「やっと見つけた。コロ、そっちじゃないぞ」

コロ「あ、ラーズ様。へへ、また間違っちゃった」

ラーズ「全く。方向くらいしっかり見ておけ」

コロ「ごめんなさい。じゃああつち？」

ラース「そつちで合ってるがもう走るなよ。追いかけるの大変だったんだぞ」

コロ「ラース様が父ちゃんになってもあまり話す事変わらないね。そこまで変じゃないよ」

ラース「そうか？まあブレイブがバン達に砕けた話し方をしてる時は、俺と話し方が似てるもんな」

コロ「父ちゃんって敬語なんて使わないはずだったんだけど、ラース様と出会ってからはずっと敬語なんだよ。ラース様は凄いからね。よくわかる」

ラース「そ、そうなのか？大した事してないんだけどな」

コロ「父ちゃん、俺にいつも言ってくれてるよ。ラース様のために俺は動くが、お前は自由にして構わない。ただ、ラース様に迷惑だけは絶対にかけるなってね。偶に守れてないけど」

ラース「……………そうか。他に何か言っていたりするの？」

コロ「えつとねー……………秘密！」

ラース「ふつ、そうか。まあ親子同士の内容だもんな。深くは聞かないでおくさ」

コロ「もしもの時は……………ってやつは言ったらまずいもんね」

その頃、玉座の間

マルティナ「え!?バンとベグルがジエーゴさんの所に!？」

ブレイブ「はい。マルティナ様もご存知ではありませんでしたか。ラース様とグレイグ様は知っていたようです。少々驚きました」

マルティナ「そうだったの。なんて言ってたの?」

ブレイブ「バンは聞けませんでした。ベグルは魅力的だと言っていましたね。ただ、兵士をやめる気はないので行くなら不定期だとなりました」

マルティナ「そう、それなら安心したわ。兵士をやめちゃうのかと思っただけドキドキしたもの」

ブレイブ「同じくです。ベグルはもちろんですが、バンまでもやめ

てしまったらここは崩壊すると思います」

マルティナ「そうね。二人にはいつも支えてもらってるから。ふふ、ブレイブもバン達がいなくなると寂しいでしょ？」

ブレイブ「別に……… そんな事は」

ブレイブは少し目を逸らしている

マルティナ「隠さなくていいのに。それじゃあまた誰か来たら立つてるだけでいいからね」

ブレイブ「はい、わかりました」

夕方、デルカダール城 大広間

ブレイブ「結局半日では治りませんでしたね」

ラース「だな。明日には治っている事を願うばかりだ」

ブレイブ「ラース様が普段どんな風に過ごしていらっしやるのかがわかって少し楽しかったです。おそらくやらねばならぬ事は他にたくさんあったのでしようが」

ラース「まあ今日は本来ならバン達と訓練するだけだったからな。

そこまで問題はないさ。ブレイブこそ、こんな目線や世界を見ていたんだな。コロ達と遊ぶの楽しかったぞ」

ブレイブ「息子と遊んでくださったのですか。ありがとうございます。喜んでいましたか？」

ラーズ「ああ、お気に入りって場所にも行っただぞ。崖の上とは思わなかったけどな」

ブレイブ「な!?!あ、あそこは慣れてないラーズ様には危険な場所。申し訳ございません。後で叱っておきますので」

ラーズ「いやいや、多少は慣れてからだっただけから平気だったぞ。眺めもいいし、風も気持ちよかった。いい場所だな」

ブレイブ「そう言っていたら嬉しそうです」

その時

マルス「ただいまー、あ！父さん、ブレイブ！ただいまー！元に戻った？」

ラーズ「いや、まだなんだ。ルナは図書館なはずだが、マルスはどこ行ってたんだ？」

マルス「僕は街で友達と遊んでたよ。剣で打ち合いしてたの」

ブレイブ「剣？危ないのではないか？」

マルス「本物じゃないよ、レプリカ！当たっても痛くないんだ」

ラーズ「街の子どもとマルスだとマルスの方が強いだろ」

マルス「うん。だからちゃんと手加減したよ。審判もよくやったんだ」

ラーズ「まあそれならいいか。楽しめたか？」

マルス「うん！皆にも上手って褒められたし、少し僕も簡単なやつ教えてあげたの」

ブレイブ「よかったな、楽しく遊べて」

ラーズ「そろそろ飯の時間だな。マルス、ルナはまだか？」

マルス「じゃあ呼んでくるよ」

ラース「頼んだ」

次の日

ラース「……………ん。ふわあく……………お！戻れてる！よかったー」

ラースは自分の体に戻っている事に安心した

ベッドから起き上がり、手や足を動かしている

マルティナ「ん……………あれ？ラース、どうしたの？」

ラース「マルティナ、元に戻ったんだ」

マルティナ「そうなの！よかったわ。これで一安心ね」

ラース「本当だぜ。あの木の実全部破棄しておかないとな」

マルティナ「昨日既に町中に広めたわ。危険だった」

ラース「それなら大丈夫だな。ブレイブもきつと安心してるだろう。迷惑かけたな」

マルティナ「もう油断して変なもの食べないでね」

ラース「そうだな。貴重な体験は出来たけどな」

クレイモランの危機

それから二ヶ月後、クレイモラン王国

クレイモラン城

カミュ「今回は何の用事だ？」

シャルル「最近、城下町で暴れている人達がいるとお聞きしたので。カミュさんもご存知ですか？」

カミュ「あー、まあな。ただ、多少トラブルはつきものだろ」

リーズレット「まあね。でも、なんだか集団で動いているみたいなのよ。街を荒らす事が目的ならこっちは黙っていられないわ。カミュ、一旦黙らせてくれない？」

シャルル「リーズレット、言い方が悪いわ。注意する程度でいいのです。お話すればきつとわかってくれるはずですよ」

カミュ「そんな甘い事あるか？」まあわかった。その調査、引き受けた」

リーズレット「そうそう、それと一緒に嫌な噂も聞いたわ。魔物と話す人を見かけたんですって。あ、カミュじゃないわよ？仲良くして

いるとは思えなかったみたい」

カミュ「へえ、それは気になるな。それも調べてみる」

シャルル「お願いします、カミュさん。お気をつけてください」

クレイモラン城下町

カミュ「暴れてるやつら、ねえ。面倒事は嫌いなのによ、まったく」
一旦商店街の方に行ってみるか」

その時

男性「よう、その兄ちゃん」

カミュ「ん？俺か？」

男性「ああ、そのちよつとカツコいい兄ちゃん。頼みてえ事があるんだ」

カミュ「悪いが仕事があるんでな。別のやつに頼んでくれ」

男性「そう言わずによー。商店街に行こうとしてたんだろ？」

カミュ「そうだが、別にお前の頼みを聞く気はねえぞ」

男性「俺、さつき見ちまったんだよ。男達が集まって商店街に向かっっていくのを。その時、そいつらやべえ事話してたんだ。この国を襲う、とか街を壊す、とかよ」

カミュ「な!?それはマジか!?おい、そいつらの特徴は!」

男性「全員サングラスつけててよ、顔はよく見えなかった。服は大體赤い服のやつばかりだったぞ。八人くらいだ」

カミュ「わかった。そいつらから守ってくれって事だろ?」

男性「おう、そうなんだよ。あんた、よく聞くカミュさんって人だろ?城から出てきたし、髪や特徴も話に聞いた通りだもんな。あんた程の腕なら止められるんじゃないかねえかと思ってるよ」

カミュ「ああ、そいつらを止めてくる。俺の仕事もそれだったしな。それじゃあ教えてくれてありがとうだな!」

男性「頼んだぜー」

商店街

カミュ「あ、見つけた！あいつらだな！」

商店街の中心にはサングラスをつけて赤い服をした男達が集まっていた

カミュ「何を企んでるか知らねえが、変な事になる前に」

その時

赤い服の男性A「てめえら、よく聞きやがれ!!」

その集団の中にいた男の一人が大声を出した

赤い服の男性A「今からこの国は俺達、レッドボーンが支配する！」

カミュ「何を考えてやがる！お前ら!!」

赤い服の男性B「おっと。邪魔はさせませんよ」

カミュ「どけ!!」

赤い服の男性C「この後とっても楽しい事が起こる。水を刺すな」

カミュ「うっせえ！」

赤い服の男性A「さあ、泣き叫べ！」

ギャオオオ!!

商店街の全員「!!？」

街の上空から魔物の声がした

空にはウルドラゴンの群れが飛び回っている

カミュ「な!? どうやってこんな近くまで！」

キヤアアア!!

商店街にいた人達は逃げていく

ドオン!!

ドオン!!

ウルドラゴン達はどんどん火球を街へ放っていく

赤い服の男性達「ハハハハハ!!」

カミュ「くそ野郎が！」

カミュは急いで広場へ向かう

広場

周りや家などは火球などにより燃え、街の人達は大混乱となっている

ゴオツ!!

どンドン火球が降り注がれていく

カミュ「これ以上は！デュアルブレイカー！」

カミュのブーメランが火球を切り裂いた

シロ「バウ!!」

カミュ「シロ！無事だったか！お前は急いで城に逃げろ！」

シロ「……………バウ！」

シロは城へ向かっていった

カミュ「チツ！俺一人じゃあ火球を防ぐだけで手一杯だ。兄貴達に救援を呼べれば」

リーズレット「カミュ！」

カミュ「リーズレット！街に魔物だ！すまねえ、一足遅かったみたい
えだ」

リーズレット「仕方ないわ。火球は兵士や私でなんとかする。カミュは急いであいつらを倒しちやつて」

カミュ「了解。あのウルフドラゴンの群れだけか？」

リーズレット「確認できるのはね。何がいるかはわからない、気を抜くんじやないわよ」

カミュ「当然。頼んだぞ！」

クレイモラン城門

カミュ「はっ！」

カミュは門に勢いよく登った

カミュ「ここからなら！デュアルブレイカー！」

ウルフドラゴン「グウ……」

ブーメランがウルフドラゴンへと当たる

カミュ「よし！このまま」

Bannon!

カミュ「!?ぐっ……」

カミュの後ろからボウガンが飛んできた

赤い服の男性A「邪魔するのはてめえか。要注意人物、カミュ。お前は計画に邪魔だ、消えてもらおう」

カミュ「チツ！」

カミュは近づいてきた先程の男性から離れる

カミュ「デュアル」

ザバアン！

セイレーンゴースト「ハッ」

カミュの背後の海からセイレーンゴーストが出てきた

赤い服の男性A「捕まえておけ！」

カミュ「な!？」

ガシヤン!!

カミュ「くそ！」

カミュはセイレーンゴーストの中の檻に捕まった

赤い服の男性A「よくやった。アジトに連行してやろう。俺達のおもちゃにしてやるよ」

この間にも上空のウルフドラゴン達は火球を街へと吐き続けている

カミュ「どこに連れてく気だ！離せ!!」

赤い服の男性A「アジトだよ。邪魔はされたくないんでな」

その頃、クレイモラン城

シロ「バウ！バウバウ!!」

シロがシャルルに詰め寄っていた

シャルル「カミュさんの仲間の。少々お待ちください、私達は今街の人達を招き入れるので精一杯なので」

エツケハルト「シャルル様！城の方にまで火球が！」

シャルル「このままでは、この国は」

シロ「バウバウ!!」

シャルル「そうだわ！シロさんはカミュさんの仲間。もしかした

ら、勇者様達にも知られている。エツケハルト、薬箱から魔物が喋れる薬を持ってきてください！」

エツケハルト「お待ちくださいませ！」

シャルル「シロさん、すみませんが大役をお願いする事になります。どうかイレブン様、ベロニカさん、セーニヤさん、シルビアさん、マルティナ様、ロウ様、ラーズさん、グレイグ様の誰かにご連絡をお願いします！」

シロ「バウ！」

数分後

シロ「はい！デルカダール王国って場所にラーズさん達がいると聞いた事があります！ラーズさん達なら僕を見ればすぐにわかるはずです！」

シャルル「こちら、キメラの翼というものです。デルカダール王国にはこれで向かってください。大至急だとお伝えください！お願いします！」

シロ「はい！」

デルカダール城下町

シロ「うわ………変わった場所。雪がない。というか、暑いな
〜。あのお城に行けばいいんだよね？」

シロは慣れない景色や気温に戸惑いながら走っていく

デルカダール城 大広間

シロ「ラーズさん、マルス君、ルナちゃん、マルティナさん！」

ギバ「ええ!? 魔物!? しかも喋ってる!? あれ……… ホワイトパン
サーって確か」

シロ「その人、ラーズさん達に会わせて! 大至急知らせなきゃい
けない事があるの! クレイモランを、カミュを手伝って!」

ギバ「クレイモラン!? お前、話に聞くシロか! こつちに来い、ラー
ズ様達に会えるからよ!」

シロ「ありがとう!」

玉座の間

全員「シロ!」

シロ「会えた! よかった!」

ラーズ「な、なんでお前がここに！」

マルティナ「カミュは？一人なんてどうしたの？」

シロ「シャルルって人から伝言なの！大至急、クレイモランに来て！今魔物達がクレイモラン王国を襲ってるの！」

全員「なに!？」

グレイグ「それは緊急事態だ！急いで向かうぞ！」

マルティナ「グレイグ、お父様にこの事と城を閉じる事を伝えて！ラーズ、イレブン達全員にも伝えて！」

ラーズ「任せろ！」

ラーズは飛び出していった

ギバ「マルティナ様、グレイグ將軍、俺も行かせてください！故郷を救いたいんです！」

グレイグ「わかった。戦力が増えるのはありがたい」

マルティナ「バン達に伝えて！城が閉まる事と、城下町への全力の
防衛を！」

ギバ「はっ！」

ギバとグレイグも出ていった

シロ「ハア、ハア。暑いよ」

ブレイブ「ガウ、ガウガウ」

コロ「クウー」

シロ「大丈夫ではないかも。少しフラフラする」

マルティナ「シロにはキツイ環境よね。もう少し待ってて。急いで
準備するわ」

レッドボーン、襲来

その後

マルティナ「先ず私達だけで行くわよ」

グレイグ「そうですね。ラーズ達を待っている余裕はなさそうです」

ギバ「シロ、頑張れ！急いで戻るからよ！」

シロ「うう……… 気持ち悪い」

シロはぐったりとしてギバに担がれていた

マルティナ「ギバ、頼りにしてるわ。行くわよ！」

クレイモラン城下町

三人「な!?!」

城下町は至る所が焼けており、広場や家、商店街はボロボロになっている部分も多い

グレイグ「酷い有様だ。国民達はどこに」

ギバ「!?!上空から何か来ます！」

ウルフドラゴン「ギャオオオ！」

マルティナ「ウルフドラゴン！火球はこいつらの仕業ね！」

ギバ「よくも俺の故郷を！ジゴスパーク！」

ギバの槍に纏った雷がウルフドラゴンを中心に広がっていく

ウルフドラゴン「グウウ………」ジユワー

グレイグ「中々の数だ。しかも空を飛んでいるというのも厄介だな」

ギバ「マルティナ様、グレイグ將軍！ここは俺が相手します！お二人は無事な人達を！」

マルティナ「わかったわ！ギバ、無理しないでね。グレイグ、城はまだ大きなダメージはないみたい。そこに行くわよ」

グレイグ「はっ！ギバ、任せたぞ！後で俺達も援護に向かうからな」

ギバ「はっ！」

クレイモラン城

マルティナ「シャルル！」

マルティナが入ると中には人がたくさん集まっていた

グレイグ「よかった。国民達はここに集まっていたか」

シャルル「マルティナ様！グレイグ様！シロさんに頼んでよかった。どうかお助けください！魔物達がこの国を襲っていて」

シロ「クウ……」

グレイグ「気温が合わなくて弱ってしまった。回復の方を頼む」

マルティナ「私達の国から一人兵士が来て、既にその人がウルフドラゴンを相手してるわ。皆が無事かを確認しに来たの」

グレイグ「カミュはどうした？」

シャルル「わからないんです。リーズレットが言うにはウルフドラゴン達を倒すために城下町を出ていったのですが、そこからウルフドラゴン達が倒される事はなかったようで」

リーズレット「カミュが放置するなんて考えられないし、もしかして何かあったのかも」

マルティナ「まさかカミュがやられた？そんなはずは」

グレイグ「ですが、カミュであればウルフドラゴンはたやすく倒せるはず。そうになっていないという事はやはり何かあった可能性が高いです」

その時

イレブン「シャル様！大丈夫ですか！」

ベロニカ「あ！皆いるわ！よかつた」

セーニヤ「お怪我している方はいらつしやいますか？その方は治療しますので私の方までお願いします」

ロウ「セーニヤ、わしも手伝おう。わしでもよいぞ」

シルビア「城下町でギバちゃんと会ったわ。凄い迫力ね、彼。どんなウルフドラゴンちゃん達を倒してるわ」

ラース「ギバも来ていたんだな。他には呼んだのか？」

全員が続々とやってきた

マルティナ「いえ、ギバ以外は城下町の防衛に徹させたわ。故郷を守るために付いていきたくって言うてくれたの」

ラース「そうか。そういえばギバはここが故郷だったな」

イレブン「ウルドラゴン達も結構少なくなってたよ。いなくなるのも時間の問題だね」

グレイグ「だが、もう一つ問題があるんだ。カミュの身に何かあったらしい」

イレブン「え!?!カミュが!?!」

ベロニカ「あいつ、そんなへマしたの? バツカじゃない!」

シルビア「そんな事言わないの。カミュちゃんはどこに?」

シャルル「場所や何があったかはわからないんです」

マルティナ「それじゃあカミュを探す所からね。でも、手がかりがないわね」

ラース「一先ず手分けするぞ。セーニヤとじいさんにはここで皆を守ってもらおう。残りはカミュを探す部隊と城下町を防衛する部隊だ。ギバは城下町防衛部隊に入れるとして、後は……」

ベロニカ「ギバは槍使いよね？なら、魔法で私が援護するわ。私も城下町に残るわね」

グレイグ「俺もそうしよう。何かあっても俺が守ってみせる」

ラース「了解」

ベロニカ「グレイグさん、多分大丈夫だけどギバの援護に行きましよう！」

グレイグ「そうだな」

ベロニカとグレイグは出ていった

ラース「それじゃあイレブんとシルビア、マルティナと俺でカミュ捜索だ」

シロ「僕も……僕も行く！」

横になっていたシロがゆっくりと立ち上がった

マルティナ「駄目よ、シロ。あなたはもう立派に役目を果たしたわ。環境が突然変わって大変だったでしょ？ ゆっくり休んで」

シルビア「そうよ。あなたのおかげでアタシ達はこの事態に気づけたわ。とつても助かったのよ」

シロ「駄目！ 僕、カミュと約束した。カミュがピンチな時は助けるって！ そうしてくれると嬉しいって！ だから僕も行かなきゃ！」

イレブン「カミュがそんな事を……。シルビア、マルティナ、ラーズ連れて行こうよ。きつと意地でもついてくるよ」

ラーズ「そうだろうな。シロ、無理だけはするなよ？ 死んだらカミュは悲しむだろうからな。悲しませたくはないだろ？」

シロ「うん」

ラーズ「ただ、お前が来てくれるのはありがたい。匂いを辿る事が出来れば位置が割り出せるかもしれない。いきなり力を借りる事になりそうだ」

マルティナ「確かに。シロ、歩けそう？」

シロ「大丈夫。少し動かせるようになってきた」

イレブン「よし、それじゃあ向かおうか」

シャルル「お気をつけください、皆様」

その頃、アジト

ドスツ！

カミュ「ぐっ……」

カミュの腕に矢が突き刺さる

赤い服の男性A「おい、下手くそ。何当ててんだよ。ギリギリで外
せって言っただろうが」

赤い服の男性B「すみません。睨んできてムカついたので」

そう言いながらボウガンを渡した

赤い服の男性A「まあいい。次は俺の番だ」

男性達二人は檻の中のカミュをマトにして遊んでいた

カミュ「クソ野郎共が。絶対ぶつ殺してやる」

カミュの側には既に何本も矢が散らばっている

カミュにも腕だけでなく、足や脇腹に突き刺さった跡がある

赤い服の男性B「計画は順調のようです。きっと他のやつらも今頃楽しんでますね」

カミュ「何の事だ?というか、あんなにいたのにどうしてこの二人だけがここに?」

赤い服の男性A「ふん、そうだろうな。このクレイモランのように今頃サマデー、デルカダール、ユグノアでもお祭り騒ぎだろうぜ」

カミュ「まさか!?他の国でもこんな事が!つまり、兄貴達もここには来れねえ。クレイモランは……… 本当に落ちたのか?」

その頃、サマデー城下町

赤い服の男性C「やつほーい!壊せ壊せー!」

サバククジラ「グオー!!」

ドガアン!

サバククジラが砂を纏いながら建物を壊していく

キヤーツ!!

城下町の人達は慌てて逃げていく

赤い服の男性D「ふつ、容易いな。俺達でもこんな事が出来るなんてよ」

その頃、ユグノア城下町

赤い服の男性E「さあ、楽しんでもらおうか」

トロルボンバー「ギャヒヒヒ!」

ドガアン!

うわー!!逃げろー!

こんぼうにより建物が壊されていく

赤い服の男性F「折角復興したのにごめんねー。でも、もう一回頑張ってる」

エマ「そんな……。イレブンにロウ様がいなくなった時にこんな……。」

その頃、デルカダール城下町 前

ブラックドラゴン「ギシヤア……………」ジユワー

ブラックドラゴンは一瞬で倒された

赤い服の男性G「な、なんだよ、こいつら」

赤い服の男性H「バ、バケモンじゃねえか。兵士ごときがなんでこんな」

バン「魔物を従えるなんてどうやってんのか知らねえが、城下町には入れさせねえぞ！」

マーズ「来る場所が悪かったな。簡単に俺達に敵うと思うなよ」

赤い服の男性二人「ヒイツ！」

ベグル「おら、牢屋に連れてってやる。ん？……………」

ベグルがその二人を見た

赤い服の男性G「あ、あれ？あんた……………見た事ある顔だぞ」

ベグル「……………ちよつといいか」

ベグルは赤い服の男達の首元を見た

そこには赤い文字でBBと彫られている

ベグル「な!?こ、このマーク!レッドボーンか!?!」

バン「レッドボーン!?それって」

赤い服の男性H「なんで俺達を知っている」

赤い服の男性G「やっぱりか!てめえ、裏切り者のベグルだな!リーダーが話してた事がある。昔、リーダーに選ばれた癖に何もしないですぐに辞めてった馬鹿がいるってな!確かに馬鹿そうなのツラしてるぜ!ガハツ!!」

ベグル「おい、そこのお前。どうしてこんな事をしている、話せ」

ベグルは大剣で男性Gを殴り倒した後、隣の男性の首筋に向けて脅している

赤い服の男性H「な、な、知るか!楽しそうだからやっただけだ!」

顔が青くなりながら焦るように話している

ベグル「クレイモランが魔物に襲われていると聞いた。それもお前達の仕業か?」

赤い服の男性H「はっ、そうだよ！主要の国を俺達が支配するんだ！」

バン「主要の国って、デルカダール、ユグノア、サマディー、クレイモランの事か！」

マーズ「となると、サマディーやユグノアにもこいつらが!？」

ベグル「くっ！バン、マーズ、ここは任せたぞ！俺はサマディーに行く！」

バン「マーズ、ロベルト達を呼ぶんだ！ここは頼む！俺はユグノアに！きつと今はイレブンさん達がいらないだろうから！」

マーズ「わかった。気をつけろよ」

二人「ああ！」

カミュ、暴走

シケスピア雪原

シルビア「どう？シロちゃん。わかりそう？」

シロは必死に地面を嗅いでいる

シロ「ごめん、わかんないや。雪ばっかりだから」

マルティナ「まあそうよね。でも本当にどうしましょう。誰も見てない、匂いもない。あと残っている情報だと……」

イレブン「確か元は変な集団の男達をなんとかしてほしって事だったんだよね？それでその男達がなぜか魔物を操っている、と」

ラース「そうだな。それなら、シロ。変な男達と会ったか？」

シロ「ううん、会ってない。突然火球が落ちてきてビックリしたんだ。広場にカミュがいたからそしたら城に逃げろって言われたんだ」

ラース「あー、駄目か。どうしたもんかな」

イレブン「悩んでも仕方なさそうだね。とりあえず闇雲に探してみるか全部さ」

シルビア「そうね。分担してやってみましょう」

その頃、アジト

赤い服の男性B「リーダー！クレイモランにいるウルフドラゴン達
がやられています！」

赤い服の男性A「チツ！想像より速いな。要注意人物は一人捕らえ
たつてのに」

赤い服の男性B「どうされますか？」

赤い服の男性A「そうなつては仕方ない。他の国を落とせた報告が
くるのを待つぞ」

カミュ「てめえらにはそんなの出来ねえよ。俺を捕まえただけでい
い気になってんじゃねえぞ」

赤い服の男性A「……………なるほど。他の勇者の仲間、という事か。
邪魔な存在だ、本当に」

赤い服の男性B「リーダー、人質がいる分こちらが有利なはずです。
こいつを上手く利用しませんか？」

カミュ「はっ！誰がてめえらなんか利用されるかよ。舐めんじやねえぞ」

赤い服の男性A「それもそうだな。人間に使った事はないが、面白そうだ。魔物を従えさせる薬だ。飲め」

男性は赤黒い錠剤をカミュに押し付ける

カミュ「誰が飲むか。こんなやつを使って無理矢理魔物を操りやがって」

赤い服の男性A「なら、こちらも力づくで飲ませてやる」

男性は檻の中のカミュを掴んで口に押し込ませようとする

カミュ「ぐっ……」

赤い服の男性B「俺もお手伝いします。リーダー、水を」

赤い服の男性A「ああ、ほら。飲め、飲め！」

カミュ「やめっ、てめえら、くそっ！」

ゴクッ

カミュ「ゴホッ！ゴホッ！（やべえ、飲んじまった！）」

赤い服の男性A「さあ、どうなる？」

カミュ「う、ううううう………」

カミュの目がどんどん赤くなっていく

カミュ「ガオオオオ!!」

ガシャアアン!!

二人「うおっ!？」

セイレーンゴースト「ハッ」ジュワー

カミュ「グルルルル………」

カミュは檻を中から壊してセイレーンゴーストを倒した

赤い服の男性A「ま、魔物になりやがった!!」

赤い服の男性B「人間に使うところなるんですか!？」

カミュ「ガオオオオオ!!」

カミュは男達を一瞥した後、アジトを出ていった

二人「た、助かった？」

その頃、クレイモラン城下町

ギバ「これでラスト!雷光一閃突き!」

ウルフドラゴン「グウウ……」ジュワー

ギバ「よし!安全確保!」

グレイグ「いい動きだ、ギバ。機敏に動いているな」

ギバ「ありがとうございます!グレイグ將軍やベロニカさんの援護があつてこそです!」

ベロニカ「ま、この大魔法使いベロニカ様にかかればこんなのもつという間よ。カミュとは違うわ」

ギバ「え?カミュさん?そういえば、この国はカミュさんがいたはず。カミュさんほどの方がいながらどうしてこんな事に」

グレイグ「それが何か不慮の事態があつたようだな。カミュがやられた可能性があるのだ」

ベロニカ「ほんといつまで経つてもひよっこなんだから！」

ギバ「カミュさんが!? 大変じゃないですか! どこに?」

グレイグ「それもわからない。今イレブンとゴリアテ、姫様とラーズが探している。見つかると信じているが」

ベロニカ「あの四人なら大丈夫でしょ。特にイレブンなんてカミュの相棒だもの。まずはシャルルさんに城下町は安全になった事を伝えに行きましょう」

ギバ「それもそうですね」

クレイモラン城

シャルル「よかった! 救援、心より感謝いたします」

グレイグ「このくらい構わない。一度デルカダールが襲撃された際にクレイモラン王国には助けられている。その時の礼となれたなら嬉しい」

ベロニカ「でも、中々被害は出ちゃったわ。少し直していかないかね」

シャルル「大丈夫です。民達がいれば国はいくらでも直ります。ですが、人がいなければ国としては終わってしまいます。守っていただき、本当にありがとうございます！」

大広間

イリーナ「ギバさん！」

ギバ「あ！イリーナさん！無事だったか！アツシユは？」

イリーナ「アツシユも無事です。店も無事なはずだと信じていますけど」

ギバ「きつと大丈夫なはずだぜ。まずは二人が生きている事が大事だからな。無事でよかった」

イリーナ「ギバさんには助けられてばかりですね。外のウルフドラゴン達が全部倒されたと聞きました。もしかして、ギバさん達が？」

ギバ「ああ、そうなんだ。まあ他にも人はいたけどな」

イリーナ「やっぱり！本当お強いですね。あんな怖い魔物がウヨウヨしているも負けないなんて」

ギバ「へへ、ありがとな、イリーナさん。あれから店は順調か？」

イリーナ「はい！おかげさまで。二人で幸せにやっていますよ」

ギバ「それが聞きたかった。俺が見たかったのはその景色だからな。へへ、頑張れよな！」

イリーナ「はい！」

その頃、シケスピア雪原

ミルレアンの森の近くでイレブンが洞穴から出てきた

イレブン「ここでもないか。うーん、皆は見つけられたかな」

その時

グオオオオオ！

魔物のような遠吠えが聞こえてきた

イレブン「な、なんの声？まるで人の声みたいだったけど」

ドサツ！

イレブンの近くにカミュが降り立った

イレブン「あ!!カミュ！よかった！無事だったんだね！」

カミュ「グルルルルル……」

イレブン「カミュ……？」

カミュ「ガウウウ……」

カミュは武器を構えて低く唸り声をあげている

イレブン「この状態……まさかビーストモード!? たった一人で
どうして」

カミュ「ガウ！」

カミュはブーメランで攻撃してきた

イレブン「くっ！カミュ、僕だよ！イレブン！気付いて！」

イレブンは避けたり防いだりしながら説得しようとしている

カミュ「グルルルルル」

イレブン「駄目だ。話が通用しない」

マルティナ「イレブン！大丈夫!? って、カミュ！イレブンに何してるの！」

音を聞きつけたマルティナがやってきた

イレブン「マルティナ、カミュが何故かビーストモードになってるんだ！シルビアとラーズに伝えてきて！なんとかしなきゃ！」

マルティナ「わかったわ！それまで持ち堪えてて、イレブン！」

危機脱出

その後

シロ「カミュ！」

マルティナ「大丈夫!? イレブン！皆連れてきたわ！」

ラーズ「ビーストモードか！どうやってこの姿に」

イレブン「ラーズ！押さえるの少し大変なんだ！手伝って！」

イレブンはカミュの手と足を押さえながら倒れさせていた

カミュはジタバタと抵抗を続けている

ラーズ「了解。俺が手をやる。イレブンは足を頼む」

シルビア「どうやって戻しましょうか。普通なら時間が経てば元に戻ったけど」

マルティナ「なった原因がわからないと、普段通りにいくかもわからないわよね」

シロ「なんか…… カミュから変な匂いがする。凄く嫌な匂い。」

僕も少しおかしくなりそう」

シロはカミュの匂いを嗅いで顔を顰めている

イレブン「そうなのか。もしかしたらその匂いが原因となってるのかもしれない。シロもあまり近づかないでね」

ラース「カミュ！聞こえてるか！」

カミュ「グウウウウ……」

イレブン「ずっと唸ったり吠えたりしてて話にならないんだ」

ラース「魔物みたいだな………ん？魔物？………試
してみるか。イレブン！俺が押さえておくから、カミュと俺目掛けて
ギガデインだ！」

イレブン「え!?!な、なんで!?!」

ラース「勇者の雷は聖なる雷。魔物を払い、悪を取り除く。カミュ
がこうなった原因を浄化出来るかもしれない」

シルビア「な、なるほどね。イレブンちゃんの勇者の力ならではっ
てわけね」

マルティナ「でも、危険よ。あれはかなり強力な魔法じゃない。喰らったらカミュもラースも相当ダメージが」

イレブン「そうだよ。いつもみたいに手加減するよ」

ラース「いや、全力で頼む。力を抜いたとして、もし力が足りなかったらそれはそれで問題だ。やるなら全力！魔物だと思って打ってこい！」

イレブン「…………… わかった。カミュ、ラース、後で必ず回復させるから。ごめんね！」

イレブンは詠唱を唱え始めた

シロ「え？え？何が起こるの？」

マルティナ「シロ、ここら辺は危ないわ。もう少し離れて見てみましょう」

シルビア「カミュちゃんは元に戻るから大丈夫よ」

カミュ「グウウウウ!!」

カミユの抵抗が激しくなった

ラーズ「おっと。危険を察知したか？だが、そんな抵抗じゃ俺の力は解けないぜ。荒治療だが許してくれよな、カミユ」

イレブン「いくよ！ラーズ！カミユ！」

イレブンが詠唱が終わると、カミユ達の真上に巨大な雷雲が現れる

ラーズ「ああ、こい！」

イレブン「ギガデイン！」

ドガアアン！！

カミユ達目掛けて巨大な雷が落ちてくる

その威力は周囲の雪を吹き飛ばし、その下の地面をも焦がしている

ラーズ「ゲフツ……………ゴホツ！ゴホツ！あー、焼けた焼けた」

カミユ「うう……………」

煙が晴れると雷で黒く焦げた二人が倒れていた

イレブン「うわ、二人して耐えちゃうんだ。本当に本気で打ったのに」

ラース「ギリギリだよ。蹴りでも喰らったら死にそうだ。立ち上がれねえよ」

カミュ「ゲホツ！ゲホツゲホツ!!」

イレブン「カミュ、大丈夫!?!」

シロ「カミュー!」

シルビア「久しぶりに本気のイレブンちゃんのギガデインを見たわ。相変わらず凄い威力してるわね」

マルティナ「シロが凄いビックリしてたわ。カミュはどう?」

カミュ「痛え……………ビリビリする」

シロ「カミュ!戻った!」

ラース「なんとか成功か。イレブン、回復頼む」

イレブン「うん!ベホマズン!」

みるみる内にカミュとラーズの怪我や焦げた体が戻っていった

ラーズ「ふう、疲れた疲れた。やっぱりこんな喰らうもんじゃねえな」

カミュ「あ、あれ？俺、どうしてここに」

シロ「カミュー！よかったー、元通りだー！」

シロは喜んでカミュの顔を舐めている

カミュ「シ、シロ!? って、イレブン！兄貴！マルティナ、シルビアのおっさんまで！」

マルティナ「気付いたわね。ビーストモードの状態になって大変だったのよ」

シルビア「記憶はある？」

カミュ「ああ、そうか。思い出してきた。俺、赤い服着たやつらに魔物を強制的に操らせる薬を飲まされて、そこからビーストモードになったんだった」

イレブン「そんな事されたの!? そいつらは!?」

カミュ「まだアジトにいるはずだぜ。クレイモランはどうなった」

ラース「ウルフドラゴン達は全員倒したはずだ。もうクレイモランは大丈夫だぜ」

イレブン「それじゃあアジトに向かおう！そいつらを捕まえないと！」

カミュ「案内するぜ、こっちだ」

アジト前

マルティナ「ミルレ안의森の中だったのね。随分人気がないように感じるわ」

シルビア「魔物ちゃん達を操って王国を襲う悪い子達は許せないわ！」

カミュ「皆、ここは俺に任せてくれないか？」

イレブン「カミュに？大丈夫？」

カミュ「へまやらかして心配かけさせたのは悪かった。だけど、今度は大丈夫だ。信じてくれ、相棒。散々おもちやにされたんでね。それのお礼をしてやろうと思ってるな」

カミュは悪い笑みを浮かべている

シロ「カミュ……………なんかいつもより怖い」

カミュ「こいつらは捕まえた後、もう未来は決まってるだろ？」

ラース「……………まあ、そうだな。それが遅くなるから早くなるかの違いだ。思う存分やってこい、カミュ」

カミュ「へへ、俺を散々コケにしてくれたからな。今度は俺があいつらをおもちや代わりにしてやる」

カミュはアジトに入っていた

マルティナ「行っちゃったわね。まあいいわ、私達は先に戻りましょう。無事な事を報告しておかないと」

シロ「僕はここでカミュを待ってるね。シャルルって人に伝えたい」

シルビア「わかったわ。それじゃあ行きましょう、イレブンちゃん、ラースちゃん」

ラーズ「ああ、わかった」

シロだけが残った後、アジトの中から男達の叫び声が響いてきた

その後、クレイモラン城 玉座の間

カミュ「戻ったぜ」

シャルル「あ、よかった！カミュさん！本当にご無事で」

リーズレット「まさかあんたが捕まるなんて思わなかったわ。元盗賊も鈍ったものね」

カミュ「うつせえ！昔の話を出すんじゃないやねえよ！まあ、心配かけさせたのは悪かった。すまん。つて、そうだ！アジトで捕まってた時にやべえ事聞いたんだ！あいつら、全員で八人いたんだがそいつら分担してサマデー、デルカダール、ユグノア、クレイモランを襲っているって聞いたんだ！」

全員「え!?!」

ベロニカ「襲われてたのはクレイモランだけじゃなかったの!?!」

イレブン「まずい！ユグノアは僕達がないから、もし強い魔物が来てたら」

シルビア「サマデーの方も危険だわ！」

マルティナ「私達も被害の確認をするわよ！皆、急いで戻りましょう！」

シャルル「す、すみません！まさか自分が全員をお呼びしてしまったばかりにこんな計画的な事が起こっているなんて」

ラース「いや、シャルルのその判断は当然だ。何も悪くない。相手が一枚上手だったというだけだ。まだ行けば間に合うかもしれない！皆、戻るぞ！」

素晴らしい働き

デルカダール城下町

グレイグ「な、なんともありませんな。やはり兵士達のおかげですね」

マーズ「あ！マルティナ様、グレイグ將軍、ラース將軍！お疲れ様です！」

マルティナ「マーズ！ここに魔物を連れた赤い服のやつらが攻めてこなかった!？」

マーズ「はい、来ました。ブラックドラゴンを連れておりましたが、俺とバンとベグルで難なく撃破。犯人も既に牢屋に入れています。それと、こことクレイモランだけでなくサマデーとユグノアにも襲っていると言っていました。」

なのでベグルがサマデーに、バンがユグノアに行つて被害を抑えているはずですよ」

ラース「ほ、本当か!?それなら……一安心だな。はー、優秀な兵士を持ったな」

グレイグ「ああ、二人がそれぞれの場所に向かったなら想像より被害は少なくなっているだろう。最悪、城下町全滅を考えたが安心し

た」

マルティナ「本当にありがとう。バンとベグルはまだそこに？」

マーズ「まだ戻ってきてないですからね。しばらく経ちますが、もしかして苦戦してるんでしょうか？」

ラース「マルティナ、俺が確認してくる。無事ならそのまま戻ってこよう」

マルティナ「わかったわ、お願い。ユグノアにはロウ様とイレブンが大急ぎで向かってたから苦戦してたとしてもなんとかなるわ。サマディーを優先でお願い」

ラース「了解」

サマディー王国 前

ベグル「あ！ラース將軍！マーズから聞きましたか？」

城下町の城門は閉められており、その前にベグルが立っていた

ラース「ああ、そうなんだ。戻ってきてないと聞いてな。被害を確
認しにきた」

ベグル「被害は大した事ありませんでした。少々建物は壊されましたが、負傷者はいません。敵のサバクドラゴンに恥ずかしながら砂で苦戦されましたが、ファールリス王子達の援助もあり撃破。」

赤い服着た犯人達も既に城で捕まっております。俺はまた襲ってくる可能性も考え、ここで防衛。中には侵入された時用にファールリス王子達もついています」

ラース「なるほど、流石の働きだな。クレイモランとデルカダールでも既に犯人は捕まえてある。おそらくもう襲われる事はないはずだ。ベグル、城に戻ってマルティナ達に報告を頼む」

ベグル「はっ！それではサマディー王様に報告が終わりましたらそちらに向かいますね。ユグノアにはバンが向かったのですが、そちらは？」

ラース「まだ確認していない。イレブン達が急いで向かったから苦戦していたとしても安心だろうと考えてこつちを優先した。今から俺はユグノアに行く」

ベグル「了解しました。それでは」

ユグノア城　大広間

イレブン「ありがとう！ほんつとうにありがとう、バン！」

イレブンはバンにずっと頭を下げながらお礼していた

バン「わ、わわ。や、やめてくださいよ、イレブンさん。俺、そこまでの事してませんって！」

ロウ「そんな事はないぞ、バンや。本当によく来てくれた。お主がいなければ建物だけでは被害はすまなかつただろう。感謝してもしきれんわい」

エマ「本当凄かったんだよ、イレブン。あの大きなこんぼうを受け止めたのもそうだけど、そこから素早い動きでやつつけちやつたんだから」

イレブン「流石バンだね。やっぱり僕達も本格的に兵士達を強くしていかないとだよね」

ガチャ

ラース「イレブン、じいさん。バンがいるはずなんだが、つてここにいたか」

バン「あ！師匠！もしかして、お迎えですか？！」

ラース「まあ被害の確認と状況だな。サマデーもベグルが無事安全にしてくれていた」

バン「それはよかったです。まあベグルですからね！当然の結果です！」

イレブン「ラーズ！聞いた!?バン達自分の判断で救援に来てくれたんだよ！偉くない!?凄くない!?!」

ラーズ「はは、興奮してるな、イレブン。城下町を見たが被害はかなり無いみたいだったな。よくやったぞ、バン」

バン「さ、さつきからイレブンさん達に褒められっぱなしで恥ずかしくって」

ロウ「今回ばかりは肝が冷えたわい。どんな惨状が待っているかと思えば。本当にありがとう、バン」

バン「うう。師匠、俺恥ずかしいです！もう帰りましょうよ！」

ラーズ「はいはい。いい働きをしたのは事実だからな。何事もないようでこっちも安心した。イレブン、じいさん、エマちゃん、またな」

イレブン「今度お礼持ってくるからー！」

ロウ「兵士達にお礼を伝えておいてほしいのう」

エマ「またそちらに伺わせてもらいますね」

その後、デルカダール城 玉座の間

マルティナ「そうだったの。どの国も大きな被害がなくて安心したわ。バン、ベグル、大助かりよ。その行動力に救われたわ。本当にありがとう」

ベグル「ありがとうございます。ですが、指示にない勝手な行動だった事は理解しております。今回は結果がよくなったのでよいのでしようが、次からは勝手な行動は控えます」

グレイグ「いや、もしお前達が周りにより影響を与えるような行動であると判断したならしてもらって構わない。それで助かる人達だけっているのだ。他国だろうと助けを求める人がいるという事は変わらない。その人達すらも助けられるような兵士になってくれ」

二人「はっ！」

ラース「なお、バンの普段の勝手な行動を許すものではないと言っておく」

バン「うぐ……………」

ベグル「それは本当にすみません。勝手にうろちよろして本当大変で」

バン「いい話で終わりそうだったのに……………」

ラーズ「まあ今回の行動は本当に素晴らしいものだ。いい兵士を持ってた事を俺達は光栄に思うぞ」

マルティナ「ええ、ラーズの言う通りよ。これからも頼りにしてるわね」

一から始めるために

それから一ヶ月後、デルカダール城下町

ダバンとミラの家

ミラ「ねえ、ダバン。まだ話してないの？」

ダバン「ああ…………… 中々言いにくくてな」

ミラ「気持ちはよくわかるけど、遅くなるよりいいはずよ。私も明日行こうかしら？」

ダバン「…………… そうしてくれると助かる。俺一人だどうしても…………… な」

ミラ「わかったわ、無理しなくていいのよ。私が説明できる所はするからダバンは自分の気持ちを伝えて」

ダバン「ああ、情けなくて悪いな」

ミラ「あら、ダバンは普段から私を頼ってくれないからこういう事でも頼ってくれるのは嬉しいのよ」

次の日、デルカダール城 玉座の間

ダバン「失礼します、マルティナ様、ラース將軍、グレイグ將軍。大事な話があつて参りました」

ミラ「お久しぶりです、皆様。ダバンがいつもお世話になっております」

マルティナ「あら、ミラさんまで。どうしたの？夫婦揃つて」

ラース「大事な話、か。一旦入れないようにしたほうがいいか？」

ダバン「お願いします。まだ誰にもバレたくないのです」

ラース「了解。ブレイブ、コロ」

ブレイブ「ガウ」

コロ「キャン」

二人は部屋から出ていった

ミラ「理解の早い子達ですね。偉いわ」

グレイグ「今この扉の前には二人がいて入れない。それで、話とは？」

ダバン「……………」

ダバンは下を向いて少し体を震わせている

マルティナ「ダバン？大丈夫？」

ミラ「ダバン、私が言った方がいい？」

ダバン「スウー……………いや、俺が言わなきゃいけない」

ダバンは深く深呼吸した後、三人を真っ直ぐ見つめた

ダバン「マルティナ様、ラーズ將軍、グレイグ將軍。俺は、春がやってきたらデルカダール兵士を辞めようと決意しました」

三人「!!」

マルティナ「え……………ど、どうして」

ラーズ「……………理由は？」

ダバン「少し前に俺の弟ケニーが人殺しをしてユグノア王国に捕まりました。俺が兵士になる事を決めた始まりはケニーを守りたかつたから。自分の決めた事すら守れなかった自分が嫌になったのです。ケニーからも俺を家族として見られる事はなくなりました。」

でも、バンはそんな俺にこう言ってくれました。関係がなくなつたならまた一から家族として始めていけばいい、と。ケニーは死んでいません。まだしばらくは捕まっていますが、釈放された後は俺が今度こそあいつを、弟を守ってやりたいんです。

あいつの苦しみや痛みに気付けなかつた俺が唯一出来る事は、またケニーを家族として迎える事。そう思い、ケニーとミラと一緒にユグノアに引越そうと思つたんです」

グレイグ「……………弟を家族として迎え入れる、か。だが、今の話だとダバンはケニーに嫌われているのでは？」

ダバン「嫌われています。でも、昔はそんな事ありませんでした。俺を慕ってくれる優しいやつでした。きっと心のどこかにはまだその一面があると信じています。それに今のままでもいいんです。ケニーは一人じゃないと教えてやりたいんです」

マルティナ「……………話はわかつたわ。家族のため……………。そうね、仕方ない事に思えるわ」

ラーズ「納得はした。だが、もう一人それを話さないといけないやつがいるはずだが？」

ダバン「……………バンですよね」

ラース「兵士長という役割上はそうだな。だが、仲間達全員もそうだろう。いつ話すんだ？」

ダバン「……………ギリギリまで話さないようにしたいです」

ラース「まあ……………そうなるよな。特にバンの事を考えるとな」

ミラ「マルティナ様達は納得してくださったのですか？」

グレイグ「ああ、一応な。兵士を辞めていった者は少なくないが、ダバンは俺が知る限りでもかなりの年月をここで過ごしている。バン達も同じだがな。その分、少し驚いた。飽きたや疲れるとは別の理由なのはわかっていたからな」

ダバン「そうですね。俺も……………ずっとここでバン達と仲良くやっていくのだと信じていたのですが、無視してはいけない問題がありました。もう見逃したくありません」

マルティナ「ユグノアに行ったらどうするの?」

ミラ「ダバンがイレブン様やロウ様に頼み込んでユグノア城で兵士として雇ってもらおうと思っっているんです」

ダバン「色々考えたんですけど、やっぱり俺は兵士でいるのがいいかな、と」

ラース「そうか、それなら会う機会もありそうだな」

ダバン「はい。デルカダールで鍛えられた剣を違う国で使うとしても、人々を守るという点は同じです。俺はここで育った事を誇りに思います」

グレイグ「ああ、俺達も応援している。なにか困った事があれば相談してくれ。少しなら援助しよう」

マルティナ「そうね。引っ越しとなるとお金とか大変でしょ？引退とは少し違うけど、今までダバンにはお世話になったからそのお礼としても、ね」

ダバン「あ、ありがとうございます！俺はバンやベグルとは違って大した事は」

ラース「はは、謙遜しなくていいんだぞ、ダバン。お前の盾や剣は皆を守っていた。その立派な意思の元、国民達を救っていた。それを俺達は知っている。その力をユグノアでも輝かせてやれよ」

ダバン「……………はい!!」

ミラ「ダバン、問題はバンさん達よ。本当に話さないの?」

ダバン「止められるに決まってるんだ。特にバンからな。あいつとは、初めてここで出会ってからずっと一緒だった。新米だった時にバンと俺とギバとベグルで約束した事がある。

ずっと一緒に兵士を続けるという事だ。いつか俺達がデルカダール兵士で一番強いつてくらいになって皆を守ると、約束した。その約束を破ってしまう。それを知られて不穏な状態で辞めたくない」

ラース「…………… あまりいい判断とは思わない。ダバンらしくないし、バン達は怒るぞ」

ダバン「いいんです。最悪ラース將軍達さえ認めてくだされば、辞められます。それ以外には…………… 嫌われてもいいんです。裏切り者だと、言われる覚悟はしてあります。逃げるようにして去った方が踏ん切りがつかますから」

ダバンは苦しそうに笑っている

マルティナ「ダバン……………」

グレイグ「…………… わかった。俺達はバン達に何も言わないでおく。言うならダバンの自由にするといい」

ダバン「ありがとうございます」

ミラ「…………… それでは突然失礼しました。こんなお話をしてしまい申し訳ございませんでした」

ラーズ「いや、大丈夫だ。ダバン、後悔するなよ?」

ダバン「はい」

クリスマスに向けて

それから二週間後、デルカダール城

朝食場

二人「サンタ？」

カミュとマヤはマルス達と言ったサンタという言葉がわからないようだ

マルス「え？カミュもマヤ姉ちゃんもサンタ知らないの？」

ルナ「サンタさんはね、クリスマス夜の今年一年いい子にしてる子どもにプレゼントを渡す人の事なのよ」

カミュ「へー、そんなのがいるのか。知らないやつからプレゼントトって怪しくねえか？」

マヤ「そういえばメダ女にいた時もそんな話を聞いたような……でも、迷信だつて」

ルナ「そんな事ないよ！絶対いるもん！」

マルス「ルナは子どもだなー。このお城に簡単に入ってこれるわけないじゃん。きっと誰かがサンタさんなんだよ」

カミュ「(ははくん、なるほどね)」

カミュは気にもしてない様子で黙っているマルティナ達をチラリと見た

ルナ「違うもん！サンタさんはいるもん！毎年プレゼント置いてあるじゃん！」

マルス「だからそれは父さんとか兵士さん達がそつと置いていってくれているだよ」

ルナ「むく！なんでそんな事言うの！マルス！違うよね、お父さん、お母さん!？」

マルティナ「ふふ、どうかしらね？私達も夜は寝てるから実際はわからないのよ」

リース「マルス、お前知らなかったのか？クリスマスの夜だけは城開いてるんだぞ？誰でも入り放題だ」

マルス「え!?!そうだったの!?!なんで？」

グレイグ「城下町で毎年パーティーがあるだろう？クリスマスは大

広間も開放しているからな。夜でもお城には入ってこれる」

マルス「えー、じゃあ本当にサンタさんいるの？」

ルナ「ほら〜！マルスのは嘘だったー」

マルス「おかしいなく。去年こっそり赤い服きたグレイグさんくらい大きな人を見たのに」

グレイグ「うぐっ」

マヤ「マルスはサンタさん見たの？」

マルス「布団からこっそりとね。顔はよく見えなかったけど」

ルナ「そんな事してたんだ、マルス。私も今回やろうかな」

デルカダール王「はっはっは、今年も来てくれればいいのう。だが、まずはクリスマス城下町パーティーをどうするか考えてからだな」

カミュ「城下町パーティー？またパーティーやるのか？」

マルティナ「ええ、そうなの。皆お祭り好きだから。毎年広場に大きなクリスマスツリーを飾っているのは見た事あるでしょ？」

マヤ「ああ、あの凄く大きなツリーだね。噴水の所にドーンッてあつて初めて見た時凄く驚いたもの」

デルカダール王「例年通りなら今年もそれを飾るはずだったのだが………」

マルス「え？あのツリー出さないの？」

ルナ「寂しー。皆で飾り付け楽しみだったのに」

ラース「いや、出したい事は出したいんだがあの木は本物でな。何年も同じ物を使ってきたから木の幹がもうボロボロになって折れそうなんだ。あんな大きな木が倒れたら大変だろ？だから新しい木が必要なんだ」

グレイグ「クレイモランにある木だからシャルル達に頼もうと思つたのだが、先日のクレイモラン襲撃の件であつちも忙しいはずだ。そんな事を頼むわけにはいかなくてな」

マルティナ「代わりとなる木が中々見つからないのよね。大きさや

頑丈さ、飾り付けが出来るくらいの葉っぱがついている木って結構少ないの」

カミュ「ふーん、その元々の木はまだあんのか？」

ラーズ「一応な。薪とかには使えそうだからとっておいてはある。飾らないけどな」

マヤ「兄貴が考えてる事、多分私と一緒に。その木、私達も探してるよ。クレイモランでさ」

デルカダール王「おお、それは非常に助かる。こちらもクリスマス予算や出し物などで忙しく、探す時間がないのだ」

マルティナ「いいの？お仕事とか」

カミュ「俺はしばらくは休みだ。シャルルが気を使ってくれてな。あれは俺のヘマだったのによ」

マヤ「私達もね、あと少しは働くけどクリスマス期間はお店を休みにするんだ。ビルさん達とグリーンとテルマ達はグラジィでパーティーするみたい」

マルス「ビルさんとマドリーさんとグリーンさんとテルマ君とチャムちゃんだけ？」

マヤ「うん、そうみたい」

ルナ「五人だけなんてちよつと寂しいよ。私達と一緒にやろう。そうすれば皆で仲良しだよ」

グレイグ「ああ、そうだな。俺達は構わない。マヤ、グリーンと一緒に皆を誘ってみてくれ」

マヤ「ルナは優しいね。いしし、きつと皆喜ぶよ。誘ってみるね」

ラース「それじゃあ後で木を見せて種類とか説明するから、もし何かいいものがあれば連絡してくれるとありがたい」

カミュ「了解」

その後、シケスピア雪原 山中

カミュ「モミの木、か。葉っぱが密集していて、30mくらいの大きさか。結構デカイよな」

マヤ「メダ女にいた頃、図書館で木の見分け方って本読んだんだ。

だから私わかるよ」

カミュ「お、そりゃ頼もしいな。まずはデカイ木を探さないとな」

マヤ「大きな木は山の中でも高い方に生えやすいはずだよ。もう少し登ってみよう」

カミュ「だな」

山頂付近

マヤ「うー、ここら辺まで来ると結構寒いね」

カミュ「雪もかなりの量だな。って、マヤ。あの木、かなり高くないか？周りよりも目立つぞ」

マヤ「あ、本当だ。大きい。これくらいあれば十分そうじゃない？」

カミュ「正確な長さは測れねえからな。んで、マヤ。この木はモミの木なのか？」

マヤ「えつとねー………んーと。兄貴、ちよつと葉っぱの雪どかしてくれない？」

カミュ「ん？おう。よっ」

カミュはブーメランで葉っぱの雪を落とした

ドシャ

マヤ「うん！葉っぱの分かれ方や枝もモミの木と同じ生え方。きつとモミの木だよ！」

カミュ「へへ、よくわかるな。俺には何が違うのか全くわからねえ」

マヤ「いしし、もうすっかり兄貴より物知りになったもんね」

カミュ「だな。学校で学んだ事が活かせてるみたいで嬉しいぜ。さて、この木に目印をつけておくか。あとは兄貴達に報告だな。取りに行く時は一応俺もついて行くか」

マヤ「きつと喜ぶよ、姉ちゃん達。さ、早く戻ろう」

デルカダール城 玉座の間

カミュ「つてわけで、一応それっぽいやつ見つけてきたぜ」

マルティナ「ありがとう、カミュ、マヤちゃん。兵士達に取りに行

かせるわ」

カミュ「その時は俺も案内でついて行く。連絡くれよな」

ラース「了解。それとカミュ、マヤ。クリスマスはここで俺達と一緒にだろ？イレブン達も集まるそうだから、少しクリスマスらしい事をしようと思ってるんだ」

マヤ「なんか面白そうな話。何するの？」

グレイグ「プレゼント交換だ。聞いた事はあるか？」

カミュ「プレゼント交換？人のやつを交換すんのか？」

マヤ「確か自分が用意したプレゼントを他の人のプレゼントとシャッフルして、それで誰のプレゼントが来るかってやつだったけ？」

ラース「そうそう、それだ。だからカミュとマヤにも何かプレゼントを用意していてほしい。個人に向けたものでもいいし、自分が欲しい物でもいい。くじ引きみたいで楽しそうだろ？」

カミュ「わかった。大した物あげれないと思うが、なんか用意しておく」

マヤ「うん！凄く楽しそう！いしし、誰にあげようかなー。喜ばれるようなやつがいいよね」

プレゼントを求めて

それから数日後、デルカダール城

大広間

マーズ「ついに明日はクリスマスパーティーだな。俺はソルティコで家族とパーティーするけど皆はどうすんだ？」

ギバ「俺も実家に帰るぜ。クレイモランで一人寂しくってやつだ」

ガザル「それならこっちに残ればいいだろ」

ギバ「いやー、襲われた件もあつてその復興も手伝いたいし、母ちゃんもいい歳だからな。偶には帰って様子見ねえとなんだ」

ロベルト「そうか、それなら仕方ないな。バン、計画通り俺達は飲み会だな」

バン「ああ！楽しみだな！あ、メグとマサルも来るぞ！」

ベグル「それなら俺はジェーンも連れてこよう」

ガザル「チツ！羨ましい限りだぜ。となると、ダバンはミラさんか

？」

ダバン「いや、悪いが俺達は用事があるからな。違う所に行かせてもらう」

マーズ「違う所？ダバンも実家に戻るのか？」

ダバン「まあそんなもんだ。参加出来なくて悪いな」

ロベルト「バンとベグルは奥さんにプレゼント決めたのか？バンはマサル君にもか」

ベグル「ああ、クレイモランに木を取りに行った時に少しな」

ガザル「あれはキツかったな。全員でやっとして感じだったもんな」

バン「……………あー!!」

バンは突然叫び出した

ギバ「ど、どうしたんだよ、急に」

バン「俺、まだプレゼント用意してねえ！すっかり忘れてた！やべえ！どうしよう！」

マーズ「やれやれ。お前は子どももいるんだから一番用意しておかないといけないだろ。何してんだか」

バン「皆！助けてくれー！」

ダバン「助けるってどうしたらいいんだよ。なんか出来る事あんのか？」

バン「えつとだな、なんかいいプレゼント持ってないか？もしくは知らないか？」

ベグル「城下町に買いに行けよ。幸い今日は明日の影響で早く終われるだろ」

バン「城下町だとメグがいつも買い物してるからそこで買ったってバレるだろ！」

ギバ「まあ確かに。じゃあどつか別の国に今から行くか？」

ガザル「面倒くせえな、おい」

バン「お前ら暇だろ？手伝ってくれ！」

ダバン「悪いがパス。バンの予想とは違って忙しいからな。先に帰らせてもらうぜ」

ベグル「俺もだ。馬鹿についていく義理はねえ」

ロベルト「悪いな、バン。俺もクリスマス限定のスイーツを買わなきゃいけない。この後は時間がほしいんだ」

三人はそのまま玉座の間に向かっていった

バン「ううう、薄情者ー！」

マーズ「俺は構わないぞ。ギバとガザルは？」

ギバ「仕方ねえから手伝ってやるよ」

ガザル「つたく、面倒起こされても困るんだよ。行くならさっさとしろ」

バン「やったー！ありがとな！んで、どうしたらいいと思う？」

ガザル「てめえの問題だろうが！人任せにすんじゃねえ！」

バン「ヒイイツ！ごめんなさい！」

マーズ「まあまあ。バン、それならソルティコに来るか？こことは違う物が売られてるはずだぜ」

バン「おお！ナイスだ、マーズ！よっしゃ、向かおうぜソルティコ！」

バンは三人を引つ張っていく

ギバ「おい、待てよ。まずはマルティナ様達にいなくなる報告だ。兵士が見習いだけになるのは伝えておいた方がいい」

ガザル「だな。だから引つ張るな、この馬鹿！」

ガツン！

バン「痛い！」

ソルティコの街 商店街

ガザル「へく、流石ソルティコだ。冬だつてのに風が暖かい」

ギバ「クレイモラン出身から言わせてみたらあり得ねえよ。デルカダールですら雪が無くて驚いてるってのに、更に暖かいなんて冬じゃねえみたいだ」

マーズ「逆に俺からすればクレイモランの寒さに驚いたけどな。さて、バン。色々あるが何がいいんだ？」

バン「いつも直感で選んでるんだ。これ！とかよさそうって感じのをババツてよ」

ガザル「それ本当に喜ばれてんのか？去年は何あげたんだよ」

バン「なんだったかな〜…………… あ！綺麗な絵をあげたんよ！今でも飾ってくれてるぞ」

ギバ「アハハハハ!!お前、絵って柄じゃねえだろ！」

バン「うるせえ！笑うな！」

マーズ「まあそれじゃあ色々見てみるとするか。ギバも母さんとかにプレゼントをあげてもいいんじゃないか？」

ギバ「あー、確かに。じゃあ俺も何か見てみようかな」

ガザル「あれ？あそこにいるのってテルマと確か妹のチャムだったか？」

バン達の前にある店ではテルマとチャムが店の商品を見ていた

バン「本当だ。おい、テルマー、チャムちゃん。何してんだー？」

テルマ「え？あれ!?バンさん達じゃないですか！ソルティコで会うなんて」

チャム「兵士さんだ。こんにちはー」

ギバ「おう、こんにちは。そういえば二人もここが出身だったな。故郷帰りか？」

テルマ「はい、少しだけ。ビルさん達が偶には家に帰れって言うてくれて」

チャム「お母さんとお父さんにこれまでの事たつくさん報告してたんだよー」

ガザル「そうか。明日はデルカダールでクリスマスパーティーだぞ？こっちにいるのか？」

テルマ「いえ！俺達もパーティーには参加させてもらいます。マヤさん達からお城に泊まっていたいとも言ってくれたので。ここには家の掃除といつもお世話になってる人達にプレゼントをと思って」

チャム「お兄ちゃんがね、兵士さん達にもモゴモゴ」

テルマ「チャム！」

テルマはチャムの口を塞いだ

その顔は少し赤くなっている

マーズ「はは、何も聞いてないから大丈夫だ」

テルマ「あ、ありがとうございます。バンさん達はどうしてここに？」

バン「俺、メグっていう妻とマサルっていう子どもがいるんだ。でもよ、プレゼントをかうのを忘れててな。デルカダールでかうより違う国で買った方がいいだろ？だからマーズの紹介でソルティコに来たんだ」

テルマ「プレゼントを忘れてたって……… はは、バンさんらしいですね」

ガザル「本当馬鹿なんだぜ、こいつ。バン、テルマの方がずっと子どもなお前よりしつかりしてるぞ」

バン「そ、そんな事ない……… はずだ！それじゃあよ、テルマ、チャムちゃん。一緒にプレゼント探そうぜ」

チャム「いいよー。兵士さんと仲良くなりたい」

ギバ「そうだよな。兄ちゃんばかりと仲良くしてたらチャムちゃんが可哀想だもんな」

テルマ「チャム、あまり迷惑かけないでくれよ」

チャム「はーい」

その後

バン「すっげー！これ、めちやくちや綺麗だな！」

チャム「本当だー。キラキラしてるー」

バンとチャムはスノードームに夢中になっている

ギバ「なんで子どもと反応同じなんだよ」

ガザル「全くだ。おい、バン！お前、プレゼント探してんのかよ」

バン「も、もちろんだぜ！でも、こうビビッてくるものが中々ねえんだよな」

ギバ「本当に直感で探してんのかよ。似合うものとか小物とか色々あるだろ」

バン「うーん、なんかなー」

別の店では

テルマ「うーん……」

マーズ「何悩んでんだ？テルマ」

テルマ「あ、マーズさん。あの、ビルさん達にプレゼントを探してたんですけど、ビルさん達って魔物なんですよ」

マーズ「ああ、そうだったな」

テルマ「だからこういう服とか暖かいものより食べ物の方がいいの
かも思ってる」

マーズ「でもあいつらだって人間の姿の時は服着てるだろ？大丈夫
だと思うぜ」

テルマ「ああ、確かに」

マーズ「それに、プレゼントなんてのは物より気持ちだ。自分が相
手にどれだけ気持ちを込めているかが一番大事だと思うぜ」

テルマ「気持ち……。そうですね！俺、この暖かい服にします
！」

マーズ「おう、行ってこい」

広場

バン「いいのがねえな」

ガザル「お前が楽しんだだけだったじゃねえか。なんであんなに
色々あったのに見つけなかったんだよ」

バン「なんとなくこれじゃないって思ってたよ」

ギバ「直感だけで選ぼうとすんなよ。必要なものとかあるんじゃないかねのか？」

その時

ザバアン!!

魔物達「ギイイアア!!」

キヤアアアア!

海岸の方から魔物の群れが現れた

全員「!?!」

ガザル「おいおい、こんな時に魔物かよ!」

テルマ「チャム、家に戻ってる!バンさん達、俺もお手伝いします!」

マーズ「頼む。ガザルとテルマは観光客を海岸から避難させてくれ!」

バン「ギバ、マーズ！俺達は魔物と戦うぞ！」

ギバ「そうだな！」

プレゼントを求めて2

海岸

バン「いた！マーマン達の群れだ！」

ギバ「ん!?待て、率いているやつはマーマンじゃない！奥にいるのはマーマンダインド！外海の魔物だ！」

マーズ「ここは内海だぞ。どうやって紛れ込んだんだ」

バン「どっちだっていいさ。まずは倒すぞ！」

テルマ達は

テルマ「皆さーん、落ち着いてくださーい！大丈夫ですから！」

テルマとガザルは観光客達を出口へと誘導していた

ガザル「テルマ、念のため武器は出しておけよ。片手剣ならもう問題ないはずだからな」

テルマ「わかりました！でも、バンさん達がいるからこんな所まで来るなんて事は」

ガザル「何かあるかわからないって事だ。あいつらが負けるほどの

相手はそうそういないけどよ」

その時

ザバアン!!

二人「!？」

テンタクルス「ギイイイ!!」

テルマ「デツカ!!な、なんですか、このイカみたいな魔物!？」

ガザル「テンタクルス!?!クレイモラン周辺の海の魔物だったはずだが!？」

テンタクルス「プギシヤー!!」

テンタクルスはやけつく息を吐いた

ガザル「まずい!あの息に当たると麻痺するぞ!テルマ、避ける!」

テルマ「は、はい!!」

ガザル「テルマ、二人だけだがいけるな?」

テルマ「はい！足を引つ張らないようにします！」

ガザル「テルマは本体を狙え！俺がブーメランで足諸共狙う！デユアルブレイカー！」

テナタクルス「ギシヤア」

テルマ「よし、俺も！かえん斬り！」

テナタクルス「ギシヤア！」

テナタクルスは腕で本体を庇った

テルマ「うわ！庇った！器用な事するんだな」

テナタクルス「ギシヤア！」

ドオン！ドオン！

テナタクルスの足で砂浜を荒らして砂埃を起こした

テルマ「うわ!?!ゴホゴホ！目に………砂が」

ガザル「大丈夫か、テルマ!?!」

テンタクルス「ギイイ！」

テンタクルスはスミをガザルの顔に吐いた

ビチャツ！

ガザル「うえっ!?き、きつたねえ!!臭え!見えねえ！」

テンタクルス「ギシャー!!」

テンタクルスのぼくれっけん

テルマ「痛い痛い!!」

ガザル「グフツ!く、くそ!きたねえ戦い方しやがって！」

その頃、バン達は

マーズ「メラゾーマ！」

巨大な火球がマーマンダインに当たった

マーマンダイン「ギイイ……」ジュワー

ギバ「よし、終了!あっけなかったな」

マーズ「まあこれくらいならな。早めに終わってよかった」

バン「さつきからあつちが騒がしいな。まだ観光客達がいるのか？」

マーズ「戻ってみるか。ガザル達と合流しよう」

ガザル達は

テルマ「や、やつと見えるようになった。って、ガザルさん!? 真っ黒!」

ガザル「あー、テルマか。悪い、スミかけられてよ。あまり見えねえんだ」

テルマ「イカらしい。って、そうじゃないや! お、俺が倒してみせます!」

ガザル「気をつけろ! バン達もしばらくしたら来るはずだ。持ち堪えろ!」

テルマ「はい! 練習中だけど、らいめい斬り!」

テンタクルス「ギイイ……」

テルマ「よ、よし！効いてるぞ！」

テンタクルス「ギンチャー！」

テンタクルスのぼくれっけん

テルマ「見えてれば！ふっ！はっ！」

テルマは足を避けたり、剣で防いでいる

テルマ「らいめい斬り！」

テンタクルス「ギイイ……」ペっ！

テルマ「うわ！スミだ！危なっ！」

ビチャッ！

テルマはスミを避けた

テルマ「気をつけないとだな」

マーズ「メラゾーマ！」

テルマの後ろから巨大な火球が飛んできた

テンタクルス「プギー!!」

バン「よつと!」

バンがテルマより上から飛んできた

バン「きみだれ突き!」

テンタクルス「ギンチャー……」ジュワー

ギバ「まさかテンタクルスがいるなんてな、驚いた。二人とも無事か?って、ガザル!!アハハハハ!!ま、真っ黒!!」

バン「うわ!スミかけられたのか!お、面白え顔してるぞ!!」

二人はガザルを見て大笑いしている

ガザル「だー!クソ!馬鹿にしゃがって!」

マーズ「よく二人だけで持ち堪えてくれた。テルマ、ガザルがこんなになってもよく頑張ってくれたな」

テルマ「は、はい!訓練のおかげです!」

ギバ「ぷぷつ、ガザル、早く洗えよー。汚ねえぞ」

バン「ふふ、そ、そうだぞ。それになんか臭うぞ」

ガザル「真水じゃねえと上手く落ちねえよ！というか馬鹿ども、見えるようになったら覚えてろよ」

その時

ジエーゴ「お？バン達じゃねえか！魔物が出たって報告があったから来てみりゃあ」

ジエーゴが見習い達を連れてやってきた

バン「あ、ジエーゴさん！お疲れ様です！魔物達は俺達で全員倒しておきました！」

ジエーゴ「おお、そうだったのか。そりゃあ助かったぜ、ありがとう。って、ガザル。お前、顔真つ黒じゃねえか！おい、誰か水持つてこいー！」

見習い「は、はい！」

マーズ「ジエーゴさん、魔物の中にマーマンダインにテンタクルス

がいたんです。こいつらは外海の魔物では?」

ジエーゴ「俺も詳しくはわからねえが、海で魔物の生態が変わりつつあるらしい。その兆候なのかもな。俺も何年か前から外海にいたはずの魔物をこっちで見かけるようになってる」

ギバ「そうだったんですか。覚えておきます」

ジエーゴ「いやー、それにしても助かった!お前らも買い物か遊びに来てたんだろ?悪い事したな。少しだが、これを礼にやるよ。自由に使え」

バン「これは?チケツト?」

ジエーゴ「おう。ここのリゾートホテルのスイートルームのチケツトだ。一泊二日出来るやつだ」

バン「おお!!」

見習い「水持ってきました!これで洗ってください」

ガザル「サンキュー、助かる」

マーズ「これ、プレゼントにいいんじゃないか？バン」

テルマ「そうですよ！スイートルームってかなり高級な部屋ですよ！」

ジエーゴ「それじゃあまた今度指導にいったらよろしくな。ラーズ達にも助かったって伝えておくぜ」

バン「ありがとうございます！」

ギバ「いいなー、ホテルのチケット。俺も泊まってみてえ」

バン「へへへ、まさかこんない物貰えるなんてな！よし！メグ達には旅行をプレゼントだ！」

ガザル「そんじや、俺からも二人にプレゼントをあげねえとなあ？」

二人の後ろには顔を洗ってスミを落としたガザルがいた

二人「あ」

ガザル「よくも大笑いしてくれたな。バン、ギバ。覚悟は出来てるだろうか？」

マーズ「やれやれ。テルマ、チャムちゃんを連れて俺達は帰ろうか」

テルマ「え？い、いいんですか？バンさん達こっちに助け求めてますけど」

マーズ「無視だ、無視。自業自得なやつを助ける必要はねえよ」

マーズはテルマを押しして海岸から離れていった

その後、海岸では男二人の叫び声が響いていた

勇者達のクリスマス

次の日、デルカダール城

大広間

普段はシャンデリアや花などが飾られてあるだけだが、今日は真ん中にクリスマスツリーと壁にリースや暖炉、天井からはオーナメントボールや星型の飾りがぶら下がっている。また、ツリーの近くではプレゼントの箱や靴下などもある。音楽団の人達もその近くで曲を奏でている。

大広間にも一般の人が入れるようになっていたのでいろんな人が大広間にいてこの空間を楽しんでいる。

全員「わあ〜……………」

セーニヤ「素敵ですわ！まさにクリスマスを象徴するかのような空間です！」

シルビア「本当ね〜！とってもステキ！」

ベロニカ「去年よりも豪華になってるのね。飾りもたくさんあるじゃない」

ロウ「ほほ、これは見事なものじゃのう。わし達も負けてはおれんな」

イレブン「うん、そうだね。僕達も天井にぶら下げるのよさそう」

カミュ「お、皆来たな」

玉座の方向からカミュがやってきた

シルビア「あ、カミュちゃん。カミュちゃんもここを手伝ったの？」

カミュ「まあな。兵士達とマルス達、俺にマヤって感じで結構頑張ったんだぜ」

セーニャ「とつても素晴らしくて見惚れてしまいましたわ。城下町にあるクリスマスツリーもいつもより大きく感じました」

カミュ「あれも俺達が見つけたものなんだ。まあこっちに来いよ、マルティナ達が待ってるぜ」

玉座の間

マルティナ「あ、皆。来てくれたのね」

ベロニカ「ええ、見たわよ。城下町や大広間の装飾。凄かったわ。どこもクリスマス一色で楽しそう」

ラース「今年は特に頑張ってみたからな。俺達も結構満足いくものになったんだ」

ロウ「ほほ、そうじゃろうな。街もとても賑わっておった」

グレイグ「街の人達も積極的に協力してくれてここまで大きくなったのです。やはり皆と協力するのはいい事ですね」

イレブン「あ！そうだった。皆にもあげたんだけど、これよかったら食べてよ。僕が作ったクリスマスケーキ。カミュのはコーヒーマ味のクッキーだよ」

イレブンはマルティナ達に小包装されたお菓子を渡した

ラース「おお、ありがとなイレブン。マルス達に羨ましがられそうだ」

カミュ「わざわざ違うもの作らせて悪いな。しっかり食べさせてもらうぜ」

シルビア「それじゃあそろそろ始めましょうよ！プレゼント交換！アタシ、とつても楽しみにしてたのよ」

セーニャ「私もです。皆様からはどんなものがプレゼントされるの

かワクワクします」

グレイグ「あまり喜ばれるかどうかわからないが構わないか？」

イレブン「ふふ、大丈夫だよ。そういうのも含めたものなんだからさ」

ベロニカ「それじゃあ丸く円になって座りましょうか」

全員がその場に円となって座った

マルティナ「ふふ、なんだかキャンプ場みたいで懐かしいわ」

カミュ「確かに。飯食う時とか基本この形だったもんな」

リース「それじゃあ始めるぞー。皆、プレゼントを出すんだ」

全員がプレゼントの袋や箱を出した

ベロニカ「なんかイレブンの箱大きくない？何入ってるのよ」

イレブン「あ、本当だね。皆これくらいの大きさだと思ったのに」

グレイグ「俺としてはリースが普通のプレゼントを用意していると

は思わなかったがな」

ラーズ「失礼だな、グレイグ。俺だって偶には普通に考えるさ」

カミュ「本当か？ 兄貴がこの場でイタズラしないなんてちよつと想像つかないぜ」

マルティナ「大丈夫よ。プレゼントは私と一緒に考えたやつだから」

シルビア「それなら安心ね。じゃあいくわよー！」

全員「メリークリスマスー！」

カミュ「メ、メリークリスマス……？」

全員がプレゼントを自由に回し始めた

反対に回したり、向こう側に渡したりなどして混ぜていく

数分後

シルビア「はーい、ストップよく！ 今、手に持っているプレゼントが皆の物よ」

セーニヤ「途中変な音がする箱がありましたわ」

ロウ「そうじゃのう。カサカサと軽そうな音がしておった」

カミュ「少し周りより重たいプレゼントもあつたな。何入ってんだよ」

ラース「まあ皆中身が気になるだろうから、イレブンから順番に開けていこうぜ」

イレブン「うん。僕のはねく…………… あ!!料理のレシピ本!やった!誰からの?」

マルティナ「私よ。カミュやグレイグに渡ったら不安だったけど、イレブンなら使ってくれそうね。安心したわ」

カミュ「まあ俺達は料理は得意ではないからな」

グレイグ「俺よりマシだろう。俺は…………… まあいい」

イレブン「ありがとう、マルティナ!大事に使わせてもらうね」

カミュ「それじゃあ次は俺だな。さて……………」

カミュは箱を開けたが、すぐに箱を閉めた

全員「？」

カミュ「おい、じいさん。お前の物だな？」

ロウ「ほほ、カミュに渡ったかの。どうじゃ？わしのオススメじゃぞ」

カミュ「はく……………。次、ベロニカだぞ」

カミュはやれやれといった表情を浮かべている

ベロニカ「大体想像がついたわ。私達に渡らなくて本当よかったわ。さて、私は……………」

ボン!!

ベロニカ「キヤアツ!!」

ベロニカが箱を開けると中から小さな爆発が起こり、箱が破裂した

全員「!？」

シルビア「ちよつと！ベロニカちゃん!?大丈夫!？」

ベロニカ「ゴホツゴホツ！なによ、もう！ビックリしたじゃない！」

ラース「くくく……………」

ベロニカ「ラース!!あんたの仕業ね!!どうなってんのよ!？」

マルティナ「え？ラース？私と考えたやつはどうしたの？箱まで用意してたじゃない」

ラース「もちろんあるぜ。ここにな」

ラースは自分の後ろからもう一つ箱を出した

マルティナ「え!?!じゃああれは……………」

ラース「ベロニカ、中見てみるよ？」

ベロニカ「中つて爆発して何も…………… あら？何かあるわ」

ベロニカは中にあるキラキラした物を取り出した

ベロニカ「これ…………… 氷？全然溶けないけど」

セーニヤ「綺麗ですわ、中に何か入っていますわね」

ラース「苦勞したんだぜ？ 炎を形のまま凍らせるの」

ベロニカ「え!? あ、本当だわ！ これ、中に炎が入ってる！」

ロウ「ほう、それは凄いのう。原型を保ちながら凍っておるとは」

グレイグ「相変わらず器用だな。こんな事が出来るとは」

カミュ「じゃあなんで爆発したんだ？」

ラース「開けたらイオが発動するようにしておいたんだ。ビックリしただろ？」

ベロニカ「当たり前じゃない！ でも、ありがとう。大事に飾らせてもらおうわ」

マルティナ「待って、ベロニカ。ラース、その箱はどうするの？」

ラーズ「もちろんわかってるさ。ベロニカ、これもやるよ。これに使えるようにしてある氷なんだぜ」

ラーズはマルティナと用意したもう一つの箱をベロニカに渡した

ベロニカ「これも何かしてあるんじゃないでしょうね？」

ラーズ「流石の俺でもそんな事はしないさ」

マルティナ「ベロニカ、安心して。私も入れる所まで見てるから」

ベロニカ「そっか、それなら大丈夫そうね。さて中身は………あ
！ブレスレット！」

中からは金色のブレスレットが出てきた

真ん中には穴が空いている

ラーズ「そこに穴があるだろ？そこに氷を嵌めてみるよ」

ベロニカ「もしかして……… あ！ピッタリだわ！」

ラーズ「これでブレスレットの完成だ。どうだ？」

ベロニカ「へく、中々いいじゃない！最初はふざけてんじゃないか

と思ったけど、ちゃんと考えてあるのね。見直したわ」

ラーズ「おっと、ふぎけたのは本当だぜ？」

ベロニカ「そうでしょうね！あんな爆発、本当ならいらないじゃない？いい！」

シルビア「でもいいわね、そのブレスレット。ラーズちゃんにしか作れないって事よね。ステキだわ」

グレイグ「確かにそういう事になるな。この世界に今は一つだけという事か」

イレブン「そう言われるとベロニカが羨ましいな」

ベロニカ「そ、そうね……………。ラーズ、ありがとう」

ラーズ「おう！」

勇者達のクリスマス2

セーニヤ「次は私ですね。ワクワクしますわ！では……………あら？こちらは……………なんででしょうか？」

セーニヤは箱の中から少しキラキラと光る四角い石を取り出した

グレイグ「むう、セーニヤに渡ってしまったか。すまない、それは砥石なのだ。もう少し武器を使う者に渡ればよかったのだが」

セーニヤ「グレイグ様からの物でしたか！ありがとうございます。すまない、私も槍の手入れに砥石を使っておりますが、随分と私の物よりも綺麗ですね」

カミュ「おお、これ少し前に出た高い砥石じゃねえか。中にオリハルコンが入ってて何回も砥げるっていう優れ物だったはずだぜ」

ラース「ああ、話には聞いた事あるな。中々手に入らないやつだ。よく入手したな、グレイグ」

グレイグ「武器は皆もよく使うからな。俺からは大した物をあげられないから皆の共通点を探したのだが、これくらいしか思いつかなかった。地味な物ですまないな」

セーニヤ「そんな事ありませんわ！グレイグ様が私達を大切に思っ

てくださるからこそ、贈るためのプレゼントは悩まれたはずです。それにこのような立派な物をくださる時点で既にプレゼントとして素晴らしいと思います。私も大切に使用させていただきますね」

グレイグ「セーニャ…………… ありがとう」

シルビア「じゃあ、次はアタシね！うふふ、アタシは誰からのステキな気持ちが入ってるのかしら？オウプンよ〜！…………… あ！凄いわー！見てみて、たくさんのお酒のおつまみよー！」

シルビアは箱からいくつものイカ焼きやナッツの袋などを取り出した

数人「おお!!」

ベロニカ「あーあ、シルビアさんに行っちゃったかー。それは私からよ。ここは酒飲みが多いからね。カミュにおじいちゃんにラースにグレイグさん。一応シルビアさんも飲むし、イレブンやマルティナさんに当たってもラースやおじいちゃんがいるから外れないと思ってたんだけどね」

シルビア「うふふ、とっても嬉しいわ！お屋敷でパパやセザールと一緒に楽しませてもらうわね」

ベロニカ「ええ、そうしてくれると嬉しいわ。セーニャに行っちゃったらどうしようかと思ってたの」

マルティナ「ふふ、確かに。そうなるよセーニヤのプレゼントがベロニカに行かなくてよかったわね」

セーニヤ「あ！そうですわね！今まで気づきませんでした！」

ロウ「ほほ、セーニヤらしいのう」

マルティナ「あ、それじゃあ次は私ね。私も楽しみ……………あら、宝石だわ。結構大きいわね」

マルティナは中から親指くらいの大きさの青い宝石を取り出した

カミュ「俺だ。魔物から盗み取った中で最大の大きさのダイヤだ。売ってもよかったんだが、まあプレゼントにならちようどいいと思っ
てな」

マルティナ「ふふ、カミュらしいわ。ありがとう、とっても綺麗。ぜひ飾らせてもらうわね」

イレブン「こんな大きな物が盗めたんだ。流石カミュだね。盗賊の腕、まだ鈍ってないんじゃない？」

カミュ「そうだな。どっかの相棒から偶に採取を頼まれるせいかも

しれねえな」

イレブン「う……………。い、いいじゃん、別に」

ロウ「なるほど。ちよくちよくカミュが城に来る理由はそのためでもあったか。さて、次はわしじやのう。どれ…………… おお！マフラーじや。この季節にはありがたいのう」

ロウは箱から白のマフラーを出した

セーニヤ「あ、私です。手編みなので不恰好なのですが、よろしければ使ってください」

ロウ「ほほ、これはええのう。首元が寒かったんじや。これでバツチリじやな」

ロウは早速マフラーを巻いている

しかし少し長かったようで二回巻いてある

セーニヤ「あ！す、すみません！私、どなたのサイズに合わせればよいのかわからず、標準男性の長さで合わせてしまいました！」

ロウ「そんなの構わんよ。二回巻く事で簡単には取れんし、なにより暖かい。セーニヤの優しい気持ちもこもっておるからのう。尚更じや」

セーニヤ「ロウ様……ありがとうございます。似合っておりますわ」

ロウ「そうじゃろう？わしの自慢のひげと同じ色じゃ」

ベロニカ「よかったわね、セーニヤ。結構頑張ってたもんね」

セーニヤ「はい。つて、お姉様！恥ずかしいのであまり言わないでください」

グレイグ「ふつ、いいではないか、セーニヤ。頑張ったからこそこちらにもセーニヤの気持ちが伝わってくるのだ。恥ずかしがらなくていいぞ」

ラース「さて、次は俺だな。なにかなー………ん？これ、シルビアのサインか！」

ラースは箱からサイン色紙を取り出した

色紙にはシルビアと綺麗に書かれてある。周りには雪だるまや星も散りばめられている

シルビア「大当たりよくー！ラースちゃん！アタシからのプレゼント！今日のためだけに書いたクリスマス限定サインなの！これ一つだけしかないのよー」

ラーズ「へー、今日のためだけって中々凄いな。シルビアのサインや公演チケットは凄い値がはるからな。それでたった一つしかないとなるとプレミア物だな。シンジが泣いて欲しがりそうだな」

イレブン「えー、いいなー、ラーズ。僕もシルビアのグッズとか結構集めてるんだよ」

ベロニカ「というか、あんたは私達関連の物が出ると大抵買ってるでしょ」

イレブン「うん！大事だからね！」

カミュ「デルカダールシャツに兄貴監修の限定菓子、俺が狩った魔物の毛皮で作られたコートとかもあつたよな」

マルティナ「デルカダールシャツ、イレブン持ってるの!?一瞬で売り切れたのに!？」

イレブン「もちろん！四日前から店の前で待ってたんだから！」

ラーズ「俺の菓子のやつよく情報得たな。誰にも言わないで販売協力したやつなのに」

シルビア「毛皮のコートなんてあったのね。今初めて知ったわ」

カミュ「色々あったんだよ。大分話逸れたな。最後はグレイグのおっさんだぜ」

グレイグ「うむ、そうだな。だが、残りはイレブンだけだからこの中身もイレブンが用意してくれた物だろう。どれ……… おお！新しい足具か！」

グレイグは箱から赤い縦線が入った足防具を出した

イレブン「うん、鍛冶で作ってみたんだ。火耐性が高いやつだよ。結構細かい装飾にも凝ってみたんだ。よかったら使ってみて」

グレイグ「うむ、ありがたく使わせてもらう。防具とは思えないほど軽いな。それでいて耐性もあるとは……… 流星は不思議な鍛冶で作られただけはある」

セーニヤ「イレブン様の鍛冶には本当にお世話になりますからね」

ラース「だよな。あれ、俺も旅の時試したけど相当集中力と根気があるよな。俺には無理だ」

カミュ「俺も駄目だったんだ。だからイレブンに渡して正解だったぜ」

イレブン「ふふ、ありがとう」

兵士達のクリスマス

夕方、デルカダール城下町

酒場

バン「悪い！マサルの支度にちよつと遅れちゃった！」

メグ「遅れてしまつてすみません。お待たせしてしまつていたら申し訳ないです」

ロベルト「大丈夫だ。悪いが先に乾杯したぞ」

メグ「構いません。むしろ安心しました」

マサル「パパみたい！たくさんいるー」

バン「そうだろー？マサル。全員俺の仲間……えつと、おともだちだ！」

マサル「ともだち！パパ、おともだちいっぱい！」

ガザル「へー、思つてるより親父やってんじゃん。メグさんに任せつきりかと」

バン「そんな事するかよ！それより俺達の飲み物は？」

ジェーン「こちらです、バンさん、メグさん。マサル君もおいで？」

メグ「ありがとう、ジェーンさん。前に何回か話した程度だから今日たくさんお話ししようと思ってたの」

ジェーン「本当？私ももつとメグさんと話せたらいいなって思ったの。たくさん喋ろう」

マサル「オレンジジュース！」

ベグル「持ったみたいだな。さて、乾杯をもう一回するか」

バン「待てー!!」

バンの渡されたコップは空となっている

ロベルト「なんだよ……バン。くく……」

ガザル「いきなり騒ぐなよな」

バン「どう見たっておかしいだろ！なんで俺のは空なんだよ！皆み
たいに酒入れろ！」

ベグル「何言ってるんだよ、バン。酒なら入ってるじゃねえか」

バン「どこがだよ！」

ベグル「おいおい、マジかよ。お前、正真正銘の馬鹿なんだな。そ
の酒は馬鹿には見えねえし、感じられねえ酒なんだってよ。俺ら全員
は見えてるし、さっきから溢れてるのも見えてんだぞ」

バン「ハ、ハア!？」

ガザル「(くくく、ベグルのやつ、最高)つまり、見えてないバンは
やっぱり馬鹿って事に」

バン「あー、見えた見えた！なんだよ、入ってんじゃない！よっしゃ、
乾杯しようぜー！」

ジエーン「ね、ねえ、ベグル君。やっぱり可哀想だよ」

ベグル「大丈夫。面白いだろ？」

ジエーン「それはまあ………騙されるなんて思わなかったけどさ」

ベグル「まあ乾杯したらネタバラシするさ。さて、兵士長。合図頼むぜ」

バン「おう！皆ー！今年一年ありがとな！またたくさん世話になった！」

ガザル「そうだぞー！俺達に土下座して感謝しろ」

バン「そこまではしねえよ！俺はなんやかんやあつたけど、楽しかったぞ！来年からもよろしくな！それじゃあ、かんぱーい！」

全員「かんぱーい！」

カツン！

マサル「飲んでいいの？」

メグ「ええ、いいわよ。むせないようにね」

ベグル「バン、飲まねえのか？」

バン「え？あ、ああ……今から飲むぞ！………？………う、うめえ！」

バンは何も無いコップを必死に飲んでるように見せている

ロベルト「アハハハハ!!もう無理！限界！」

ガザル「あー、こらロベルト！もう少し耐えろよ！」

バン「な、なんで笑い出してんだよ、ロベルト！」

ジエーン「ほら、ベグル君。もういい加減いいでしょ？」

ベグル「もう少し弄りたかったんだけどな。ジエーンがそう言うなら仕方ない。バン、そのコップ本当に何も入ってないんだぜ？」

バン「………ハア!？」

ベグル「俺達が馬鹿には見えない酒って説明したらどう反応するのか見たかったんだ。面白いもんみれたぜ」

バン「ふぎげ…………… 待てよ。さては、そう言つて本当に馬鹿には見えない酒が見えてるかどうか判断する気だな!? お、俺は見えてるぞ!」

ベグル「は? いやいや、だから」

バン「いやー、この酒美味いなー! 味わつた事ないから凄く新鮮だ!」

ベグル「…………… もういいや。放つておこう」

メグ「ふふ、バンの方が想像を超えましたね。本当賑やかで楽しい」

ジエーン「ええ、それでいいの? メグさん。旦那さん馬鹿にされてるんだよ?」

メグ「大丈夫です、これがバンですから。皆さんもバンをよくわかっけていらつしやるからこうして遊んでいるんです。本気なわけないですから全く心配してません」

ガザル「いや、メグさん。流石の俺達でも嘘を信じ続けるとは思わなかつたぜ」

ベグル「全くだ。ドが付くほどの馬鹿だな、こいつは」

ロベルト「面白いな、バンは。本当飽きさせないぜ」

バン「美味しい？美味しいー！」

バンは変わらず何も入っていないコップを必死に飲もうとしていた

その後

メグ「あ！忘れる所だった！皆さんにクリスマスのお菓子を作ってきたんです。よかったら食べてください」

メグは鞆から袋に入ったクッキーを出した

中には雪だるまや星、クリスマスツリーなど様々な形がある

全員「おお！」

メグ「たくさん作ったので好きなだけ持って行ってください」

ジェーン「凄い、メグさん！私、こんなに綺麗に出来ないよ。流石カフェを営んでるだけあるね」

メグ「ありがとう、ジェーンさん」

ベグル「ジェーン、何枚貰う？四枚あればいいか？」

ジェーン「うん、大丈夫だと思う」

ガザル「いや、ロベルト。お前取りすぎだろ」

ロベルト「う……………。メグさんのお菓子は美味しいからな。少し欲張りすぎたか」

ロベルトの両手には何枚もクッキーが重ねられている

バン「メグ！俺のは!?!」

メグ「バンのは無いわよ。帰ったらね」

バン「えー！今！今がいい！」

メグ「駄目。我慢してね」

バン「…………… シュン」

ロベルト「あまり奥さんを困らせてんじゃねえぞ」

ガザル「あ！クリスマスで思い出した！城から出る時にラーズ將軍から俺達にプレゼントだって渡されたのがあるんだよ！」

バン「なに!?師匠からプレゼントだと!?なんでもっと早く言わないんだ、ガザル！馬鹿野郎！」

ガザル「馬鹿に馬鹿って言われる筋合いはねえよ！ラーズ將軍だけじゃなくて、マルティナ様やグレイグ將軍からのプレゼントも一緒になってるらしい。これこれ」

ガザルは大きめの箱を開けた

ガザル「おお、名前が書いてある。これが馬鹿で、これがベグル。ギバとダバンとマーズは後でにして、これがロベルト、これが俺」

ガザルはそれぞれの袋を分けていく

バン「やった！俺、早速お礼言いに行ってくる！」

バンは走って酒場から出ていった

ベグル「あ、こら！マルティナ様達だって仲間達との……………
ハア」

メグ「きつとすぐ戻ってきますよ。それまで待ってましよう」

ガザル「メグさん、バンの世話大変だろ？あっち行ったりこっち行ったりしてさ」

メグ「そんな事ないですよ。いろんな場所に連れていってくれて楽しいし、たくさんの事を教えてくれます。ちよつと言葉が出てこない時とかは多いですけど、私はそれでもバンのまつすぐな気持ちになよりも嬉しいんです」

ロベルト「はは、奥さんとなるとバンの見方が違うな。どれ、俺達も開けてみるか」

ベグル「だな。さて、何が入っているのやら……… おお！手袋と砥石！しかもこの手袋凄え！デルカダール王国の紋章が縫われてる！」

ガザル「俺もだ！手袋は色違いだぞ！この手袋は嬉しいな！」

ロベルト「砥石もただの砥石じゃない！これ、最近出たオリハルコンが入った砥石！何度も研ぎ続けられるかなり高い砥石だぞ！」

ジエーン「ええ！凄え！よかったね、ベグル君」

ベグル「本当だ。まさかこんな立派なプレゼントだとは。食べ物とかだとばかり」

メグ「これはバンののも同じかな。大はしやぎしてそうだわ」

その頃、デルカダール城 食事場

バタン！

バン「師匠ー！マルティナ様ー！グレイグ將軍ー！」

イレブン「あれ？バンだ。どうしたの？」

そこではイレブン達がお飯を食べていた

ラーズ「ほら、言った通りだろ？マルティナ」

マルティナ「ふふ、そうね。ラーズの予想通り」

バン「これ、師匠達からのプレゼントだって！嬉しいです！ありがとうございますー！」

グレイグ「ふっ、喜んでくれたならこちらも用意した甲斐があるというものだ」

カミュ「へー、バンにもプレゼントあげてたのか」

バン「それが！兵士達全員にプレゼントなんです！凄いですよね！」

ベロニカ「あら、よかったじゃない。何あげたの？」

バン「まだ見てないです。あ！今見てもいいですか!？」

ラース「なんだ、まだ見てなかったのか。早く見てみるよ」

セーニヤ「私達も気になりますわ」

バン「それでは！………　　お！手袋だ！おおお!!
王国の紋章！凄え!!」

シルビア「あら！ステキ〜！手作り？」

マルティナ「ええ、そうなの。頑張つて似せてみたのよ」

バン「あれ？もう一つあるぞ………　　え？ペ、ペン？？」

ラース「俺からだ。バンにだけ特別なんだぞ」

バン「俺だけ!?という事は、このペンにも特別な何かが！」

ラース「ただのペンだ」

バン「えー!?じゃあ、何で俺だけ」

ラース「これ使ってもっと勉強にも励めって事だよ」

バン「勉強……………うう」

ロウ「ほほ、どうやら喜んでもらうだけのプレゼントというわけではないようじゃの」

マルティナ「頑張って、バン。頼りにしてるわ」

グレイグ「来年はもう少し書類を得意になっているといいな」

バン「が、頑張ります……………」

子ども達のクリスマス

夜、デルカダール城 食事場

マルス「父さん、母さん！」

マルスとルナは二人で決意したような顔をして二人を呼んだ

ラース「どうした？二人とも」

ルナ「あのね！私達決めた！」

二人「今日、絶対寝ないでサンタさんを見る！」

全員「……………」

その宣言に全員が少しポカーンとしている

マルティナ「駄目よ、夜更かしなんて。体に悪いのよ」

グレイグ「そうだぞ、マルス、ルナ。それにそんな事をしていたらサンタさんも来れないだろう。寝ている子どもにやってくるのだからな」

ルナ「えく、じゃあ私寝るー」

マルス「ええ!?変わるの早くない!?ルナ!」

カミュ「一日くらい別にいいんじゃないか?」

マルティナ「駄目よ。それで癖になって夜に寝られなくなったら困るもの」

チャム「お兄ちゃん、私の所サンタさん来れるかな?」

テルマ「え?なんでだ?」

チャム「だって今日はお母さん達のお家にいないでしょ?サンタさん間違っちゃうかも」

デルカダール王「ははは、チャムよ、その心配はいらないだろう。サンタという人は優秀でな、よい子どもがどこにいるのかわかっておるのだ。だから必ずよい子どもの元に向かう事が出来るのだ」

チャム「そうなの、王様!?じゃあ、今年もチャムプレゼント貰えるかな!」

テルマ「わかんねえぞー?チャムは今年頑張ってたけど、少しは

しやぎまくつてた時もあったからな」

チャム「そ、そんな事ないもん！」

マヤ「ふふ、きつとチャムちゃんなら大丈夫。絶対プレゼントは届くよ」

ラース「んで？ルナは諦めたみたいだけど、マルスは？」

マルス「僕は……… 起きてる！この日だけ！この日以外絶対に寝るからさ！」

グレイグ「随分やけになっているな。そこまでする必要はないだろう」

マルス「だって去年のは見間違えだと思わないもん！サンタさん、グレイグさんじゃないんでしょ!？」

グレイグ「そ、そうに決まっているだろう。俺はことs」

ドゴオ！

グレイグ「グフツ！」

「グレイグは脇腹を勢いよく殴られて机に倒れ込んだ」

マルス「え？グレイグさん？」

ラーズ「どうした？グレイグ。あー、食べ物急に食い過ぎたな。大丈夫だぞ、マルス（おいこら、何言おうとした、グレイグ）」

グレイグ「あ、ああ……ゴホッ！ゴホッ！す、すまない」

マルティナ「（ナイスよ、ラーズ）」

ビル「カミュさん、サンタ……ってなんですか？」

マドリー「私達には聞き覚えなくて」

カミュ「あー、だろうな。俺も悪いが詳しくは知らねえんだ。王様とかマルティナ達に聞いてみるよ。詳しく教えてくれるぜ」

その夜、マルティナとラーズの部屋

マルティナ「で？どうするの？ラーズ。マルスは意地でも起きてるみたいよ？」

ラーズ「まあな。じいさんみたいにラリホーが使えたら楽なんだけ

どな。ゆめみの花でなんとかするか」

マルティナ「匂いを嗅いでくれるかしら？」

リース「近づければいいんだけどな。まあ取り敢えず着替えようか」

マルティナ「去年はグレイグに任せたの失敗だったわね。姿を見られてたなんて」

リース「まあ仕方ないさ。それまでは普通に寝てくれてたんだから。王様の読み通りに子ども達が寝なくなる可能性を考えて王様と交代したけど、どうしたらいいかはこつちもよくわかってなかったからな」

マルティナ「まあそうね。今回は気をつけてね？リース」

リース「回る場所も増えたもんな。お、そうだ。見てくれよ、これ」

リースは青いプレゼントの箱を見せた

マルティナ「あら？こんなのがあったかしら？」

リース「急いで用意したんだ。カミュ用だぜ」

マルティナ「え!? カミュにも渡すの!? バレるわよ」

ラース「カミュならバレてもいいさ。ほら、サンタとか知らなかっただろ? それなら初めてのサンタからのプレゼントを体験してもらおうかなって」

マルティナ「そっか。ふふ、それはいい考えね。どんな反応するかしらね。呆れるか、照れてるかのどっちかかしら」

その頃、カミュとマヤの部屋

マヤ「ええ!? 兄貴がサンタやるの!?!」

カミュ「別になりきるわけじゃねえけどよ、マルス達にプレゼントは用意しただろ? それにテルマ達にも用意したんだ。それならこのクリスマスってやつに合わせてこっそりと置いてやろうかと思ってな」

マヤ「ふふ、そっか! きつとマルス達も喜ぶよ! 姉ちゃん達からと私達から二つのプレゼントがあるんだから」

カミュ「だろ? しかも、見てくれよこれ」

カミュはオレンジと緑の箱を見せた

マヤ「ん？これ誰へのやつ？」

カミュ「兄貴とマルティナだけ。グレイグと王様にもあるんだ」

マヤ「えええ!?ぜ、絶対バレるって！」

カミュ「へへ、スリルあるだろ？盗賊の腕が試されるってわけだ」

マヤ「こ、殺されないでね？」

カミュ「俺だってそうはなりたくねえ。まあバレたら……………
考えないでおく」

マヤ「だめじゃん」

その後、深夜過ぎ　　マルス達の部屋前

ラーズ「(きてきて、二人の気配は……………いるな。起きては……………いるか。マルスだな。やっぱりこれが必要みたいだな)」

ラーズはこっそりとゆめみの花を出した

ラーズ「(ベッドにはいるみたいだし、ゆっくり開ければ暗いからわからないだろう。さて……………)」

ラースは足音や気配を出さずに扉をゆっくりと開けた

開けると二人の息の音が聞こえてくる

ラース「(マルスから興奮してるような気配。さては少し気づいたな?)」

マルス「(く、空気が変わった気がする。もしかして……もしかして)」

マルスはベッドで横になり目を瞑っていたが、神経は外に集中していた

ラース「(まあ気配は消してるし、ここからなら………よっ!」

ラースはベッドにいるマルス目掛けてゆめみの花を投げた

ポス

マルス「はっ!」

マルスはその音に飛び起きて、音の場所を見た

スウ

マルス「あ………」ボスッ

マルスは匂いを嗅いでその場に眠りこんだ

リース「ふう、完了。やっぱり敏感になってたか。さて、マルスとルナには………これこれ」

リースはピンクとオレンジの箱をそれぞれの枕元に置いた

その後、テルマ達の部屋

扉が音もなく開いた

リース「おお、やっぱり寝てるな。ここはテルマに注意していればいいだけ。さて、二人のプレゼントは………これだな」

リースは緑と黄色の箱を枕元に置いた

リース「メリークリスマスだ」

テルマ「ん………」

リース「おっと、声を出したら流石にバレるか？早い所出るか」

カミュとマヤの部屋

音もなく扉が開いた

リース「さーて、ここが難関。カミュは………寝ている気配だが、本当に僅かでも起きそうだな。細心の注意を払うか。ゆめみの花」

リースは再びゆめみの花をカミュ目掛けて投げた

ポス

ゆめみの花はカミュの顔に落ちた

ラース「……………これでなんとかあったか？流石になったよな？」

ラースは無音で歩いてベッドまで向かう

ラース「よし、寝てるな。さっさと置いて立ち去るか」

ラースは水色と青の箱を枕元に置いた

カミュの枕元に置いた瞬間

ガシッ！

ラースの腕が掴まれた

ラース「!!？」

カミュ「へっ、油断したな？兄貴」

ラース「な!!お、お前ゆめみの花は……………」

カミュ「んなもん、吸わなきゃなんともなる。んで？今年のサンタってやつは兄貴なんだな。まあ去年のグレイグのおっさんでバレ

かけてたんだから、グレイグのおっさん以外になるよな」

ラーズ「ハア、バレたか。俺のお金を増やす賭けが……」

二人はこつそりと静かに話している

カミュ「何の事だよ」

ラーズ「毎年プレゼントをあげる時にバレないでプレゼントをあげれたらサンタ役の人のお金が一年増えるんだ」

カミュ「そんな事やってたのかよ。んで？マヤはわかるがなんで俺まで」

ラーズ「うっせえ。初めてのクリスマスなんだろうが。黙って受け取っておけ」

カミュ「へっ、そうかよ。まあ兄貴から純粋なプレゼントなんて珍しいからな。受け取らせてもらうぜ」

ラーズ「ハア。上手くいくと思ったのによ」

カミュ「扉の開け方がまだまだだ。音はないが、全開にする必要はないはずだぜ。風の入り方が変わるからな」

ラーズ「何のアドバイスだよ。俺は盗賊じゃねえ」

カミュ「へへ、そうだな。まあそれじゃあな」

ラーズ「ああ、メリークリスマスだ」

聖夜を終えて

次の日の朝　マルティナとラーズの部屋

ラーズ「ん……………ふわぁ……………朝か……………って、ええ!？」

マルティナ「ん……………どうしたの、ラーズ？」

ラーズ「あ、わ、悪い、起こしたな。見てくれよ、マルティナ」

ラーズとマルティナのベッド横にある机には緑とオレンジの箱が置いてある

マルティナ「え?……………ええ!?これって、私達に!？」

ラーズ「多分な。というか、この差出人つてもしかして」

マルティナ「お父様かしら?」

ラーズ「いや、だとしたら俺が気付くはずだからな。気配を夜に全く感じなかったって事は……………」

マルティナ「となると、そんな事が出来そうなのは一人しかいないわね」

ラース「開けてみるか。このオレンジのが俺だよな？」

マルティナ「多分そうね。中は…………… あら！ピアスだわ。私の
はオレンジよ」

マルティナは箱から金色のピアスに小さなオレンジの装飾がついたピアスを出した

ラース「お、色違いだな。俺は緑だ」

ラースもマルティナと色違いの小さな緑の装飾がついたピアスを出した

マルティナ「ふふ、いいわね。お互いの色をつけられるって事ね」

ラース「後でお礼言わないとな…………… いや、言ってもはぐらかされるか？」

マルティナ「そうね、きつと隠してくるわね。それなら言わなくていいかしら。きつと彼もそれを望んでるはずだわ」

その後、朝食場

ラース「おはようございます、皆」

マルティナ「おはようございます」

マルス「あ！父さーん！見て！今年プレゼントが二つもきたの！」

ルナ「私も！どっちも欲しかったものだったんだよ！」

チャム「私も二つ！こんなにきたの初めてー！」

マルティナ「ふふ、よかったわね。マルス、ルナ、チャムちゃん」

マルス「あ！じいちゃんもね！プレゼント来たんだって！しかもグレイグさんも！」

ルナ「お母さん達はサンタさんからプレゼント来た？」

ラーズ「ああ、俺達にも来てくれたぞ。綺麗なお揃いのピアスだったんだ」

チャム「でも、なんで皆にプレゼントしたんだろ。子どもだけじゃなかったのかな？」

デルカダール王「ははは！それはきつとわし達も心はまだまだ子ども

もという事なのだろう！」

ルナ「えー？グレイグさんも？」

グレイグ「ふっ、ああ。俺も心はまだお前達と同じように子どもなのかもしれないな。サンタには見抜かれているようだ」

マヤ「兄ちゃん、兄ちゃん」

ラース「ん？」

マヤ「ありがとね、プレゼント。あと兄貴が突然ごめんね」

ラース「ああ、大丈夫だ。むしろありがたいな。こうして平等にプレゼントをくれてよ」

マヤ「いしし、少し恥ずかしいけどね」

グリー「ラースさん、わざわざ僕にまでありがとうございます」

ラース「好みとかは詳しくわからなかったからな。いらなかったら売ってくれよ」

グリー「まさか！そんな事しませんよ！エプロン、これから大事に使っていきますね」

テルマ「ラーズ將軍、僕にまで二つも渡さなくてよかったですよ？」

ラーズ「ん？テルマ、わからないのか？俺が渡したのは一つだけだぜ？」

テルマ「え？……… じゃ、じゃあもう一人？あれ？」

マヤ「いしし、本当のサンタさんかもしれないよ？テルマ」

テルマ「ええ！？い、いやいや、まさかそんな……… ええ？」

マルス「カミュはサンタさんから何貰ったの？」

カミュ「俺か？そーいやまだ見てねえな」

ルナ「えー、カミュさん気にならないの？」

カミュ「はは、悪いな。朝飯食ったら確認してくるから後でな」

マルティナ「そうね。いつまでも話してたら駄目ね」

デルカダール王「では、皆で食べるとするかの」

その後、玉座の間

ラーズ「ありがとな、カミュ。プレゼント、皆に渡してくれてよ」

カミュ「いきなり兄貴は何言い出すんだか。あれはサンタってやつ
の仕業だろうぜ」

マルティナ「ふふ、そういう事にしておくわ」

カミュ「……………」。なんで俺だと思っただよ」

ラーズ「むしろ、お前以外俺達の部屋に入れるような実力はないだ
ろ。気配や部屋の構造とかを知ってるなんてよ」

カミュ「いや、そんな事ねえだろ。俺以外だって夜なら簡単に入れ
そうだぜ？」

グレイグ「だとしたら俺やラースが起きるはずだ。物音を立てず、気配を無くして行動が出来るのは慣れていなければいけないからな」

カミュ「俺以外の盗賊だってそれくらい」

マルティナ「それなら部屋が荒らされるかして、結局私達は起きるはずよ」

ラース「大体そんな強気な行動とる盗賊はいねえだろ。いるのなら俺達と張り合える自信があるか馬鹿かってただけだな」

カミュ「……………ハア、わかったわかった。クリスマスってやつに浮かれて楽しんでみただけだ」

マルティナ「あら、そうだったの。カミュもカミュなりに楽しめたなら嬉しいわ」

グレイグ「いいものだろう？クリスマスは」

カミュ「まあ……………な。悪くはねえんじやねえのか？」

ラース「クリスマスが終わってすぐだが、またイベントがあるから

な。そつちも楽しんでいけよ」

カミュ「まだあんのかよ！何があんだ？」

マルティナ「年越しね。今年の終わりと新しい年を迎えるお祝いよ。デルカダール国民全員に新春の挨拶もしないと」

カミュ「あー、年越しか。聞いた事はあるな。そんな大々的にやる事なのかわからねえが」

グレイグ「国によるだろうな。サマデーではやらないと聞いたし、ユグノアでは昔はやっていたらしい。クリスマスほど大掛かりではないが、国民からすれば連続でお祭りというわけだな」

ラーズ「あとな！年越しと年明けは美味しいものがたくさん食べられるんだぜ！」

カミュ「はいはい、それは兄貴が嬉しいだけだろ。俺はそこまで興味ねえよ」

ラーズ「んだよ、つれねえな。酒だっただくさんあるってのに」

カミュ「そりゃあいい事聞いた。久しぶりに兄貴達と飲むか」

マルティナ「まずは準備からよ。カミュもよかつたら手伝ってくれると嬉しいわ」

カミュ「まあ必要なら力は貸すぜ」

グレイグ「ありがたい。それならよろしく頼む」

年末

数日後、デルカダール城下町

クリスマスの装飾は全て片付けられ、その代わりに黒と白の旗や飾りが城下町全体を飾っている

カミュ「へー、また色々と雰囲気変わってるな。なんで黒と白なんだ？」

ラーズ「ほら、この国といたら双頭の鷲だろ？その象徴の色だ」

カミュ「いや、もうその一人はいなくなっちゃったんだぞ。変えたほうがいいんじゃないか？」

ラーズ「いいんだよ、ホメロスは今もこの国にいる。グレイグと共にな。それを忘れないようにするためだ」

カミュ「……………そうか。兄貴がそう言うなら俺は何も言わないぜ。けどだよ、もう兄貴もマルティナもこの国には充分ってほど認知されてるんだからその色もあっていいんじゃないか？」

ラーズ「というと？」

カミュ「ほら、昔旅してた時にイレブンが俺達の装備を作る時にイ

メージカラーの話をしてくれただろ？その色をこの黒と白だけの所に足してみようぜ」

ラース「俺がオレンジでマルティナが緑だったな。まあそれは城でやるか。城下町の旗は用意してないからよ」

カミュ「そうだな。んで？俺はどこに連れていかれるんだ？」

ラース「着けばわかるさ」

カミュ「？」

ホムラの里

バン「あ！師匠ー、こつちですよー！」

広場付近にはバン達が既に集まっていた

バン達の近くには大きな鐘が置いてある

ラース「待たせたな。いつもご協力いただきありがとうございます。さあ、ヤヤク様」

ヤヤク「なに、気にするな。我が里の伝統を他の国でも行ってくれるのはこちらとしても大変ありがたいのだ。これからもぜひ頼むぞ、ラース殿」

カミュ「このデカイ鐘は何に使うんだ？」

ヤク「この鐘はホムラの里では除夜の鐘と呼ばれていてな。今夜年を迎える時に鳴らすのだ」

バン「たつくさん鳴らすんです！めちやくちや気持ち良くて、スツキリするんですよ！こう、パーツて！」

カミュ「なんでたつくさん鳴らすんだ？」

バン「え？………へへ、師匠お願いします！」

リース「へへじゃねえよ。毎年やってんだろが」

ロベルト「確か人間には108個の煩惱、つまり欲望みたいなものがあるって、新年を迎える前にそれらを全て祓うために108回鐘を鳴らすんですっけ」

ヤク「うむ、その通りだ。しっかりと教えられているようで安心した」

ベグル「一人馬鹿がいるんでこいつの事は考えないでください」

バン「馬鹿とか言うな！」

カミュ「そんなんがあんのか、知らなかったぜ」

ラース「新年に向けて新しい気持ちになっていこうって事で何年か前から俺達もやり始めたんだ。さて、まずはこれをデルカダールに持ち帰るぞ」

カミュ「……………まさか俺が呼ばれた理由って」

マーズ「お願いします、カミュさん」

ギバ「結構キツイんですよ！広場まで持っていくの」

カミュ「は……………つたく！人づかいが荒い兄貴だぜ。おら、さっさと持っていくぞ」

ラース「それじゃあまた明日返しに来ます」

ヤヤク「うむ、デルカダール王国でもぜひよい年越しをな」

デルカダール城下町 広場

「広場周辺には鐘を置くステージが設置されていた

ドスン!!

「ラース「よし、終わり!」

「バン「あー、肩痛い」

「ベグル「流石にキツイですね」

「カミュ「この前の大木といい、この鐘といい重てえものばかり持たせやがって」

「ラース「よし!次だ!」

「デルカダール城

「ラース「次はこの城の大掃除!普段やってる鎧や武器だけじゃなくて、壁や骨董品、部屋の掃除まで全部やるぞ!」

「兵士達「おう……」

ラーズ「なんだよ、乗り気じゃないな。そんなに嫌か？」

マーズ「ベグルの部屋はまだいいんです。普通程度ですから。問題はこいつですよ！」

マーズはバンを指差している

バン「へへ」

ロベルト「こいつの部屋、ラーズ將軍も一度奥まで見た方がいいですよ。めちやくちや汚いんですから！」

ガザル「いろんなもん詰め込んであってビックリしますからね」

ラーズ「……………バン」

バン「は、はい！」

ラーズ「部屋は綺麗に使い」

バン「は、はい……………すみません」

カミュ「俺はどこに行けばいいんだ？」

ラース「カミュはマルス達の部屋をマルス達と片付けてくれ。二人だけだとあまり進まないんだ」

カミュ「了解。それなら楽しそうだな」

数時間後

玉座の間

グレイグ「大分綺麗になりましたね」

マルティナ「そうね、想像してたよりブレイブ達の毛が落ちてて驚いたけど」

ブレイブ「クウく……………」

マルティナ「ああ、違うのよ。悪く言ってるわけじゃないの。しよ
うがない事なんだから大丈夫。全く気にしてなんかないわ」

ガチャ

カミュ「おお、なんか少し綺麗になった感じがするな」

グレイグ「む、カミュか。マルス達はどだった？しつかりやって

いたか？」

カミュ「一応な。偶に遊んだりしてたが、真面目にやってたぜ。一段楽ついたから様子見に来たんだ」

マルティナ「ありがとう、カミュ。ラースは？」

カミュ「兄貴？ここにいると思ってたんだけどな」

グレイグ「まだ姫様のお部屋をやっているのでしょうか」

マルティナ「少し長いわね。見に行ってみましょう」

マルティナとラースの部屋

マルティナ「あら？いないわね」

グレイグ「掃除も終わっているようですな。本棚も整理されてあります」

カミュ「となるとどこだ？」

マルティナ「兵士達と一緒に行動してるかしら？」

大広間

ダバン「ラーズ將軍ですか？見てないですね」

訓練場

ガク「いえ、今日はこちらには来てませんね」

バルコニー

ギバ「わかりませんね。ずっとここにいましたけど、来てませんよ」

マルティナ「おかしいわね。どこに行ったのかしら」

グレイグ「城からは出ていないはずなのだが」

その時

ガチャ

コック「あ！マルティナ様、グレイグ様！どうかラーズ様を止めてはいただけませんか！」

カミュ「まさか……」

キッチン

ライス「なあ、いいだろ？」

コック「こ、困ります、ライス様！いくらなんでもそれはご用意し
かねます！」

ライス「えー、駄目か？少し！少しだけでも！」

マルティナ「ライス！何してるの！」

ライス「あ、マルティナ」

グレイグ「貴様、こんな所でコックを困らせて何しているのだ」

ライス「い、いや、困らせてたってわけじゃ」

コック「ライス様、どうかお考えを！いくら私達でも今から全ての
味を変えるのは無理です！」

カミュ「何してんだよ、兄貴。また食い物の事で暴走しやがって」

ライス「いや、少し部屋を片付けてたら故郷の料理本が出てきてな。
食べたくなったからその味に変えてもらおうと」

コック「今からは無理です！せめて昨日にお伝えしてください」

マルティナ「レース、やめなさい」

レース「はい……」

年末年始

夕方も暮れてきた頃

デルカダール城

バン「おー！綺麗になったー！」

ベグル「いらねえもんはとっとと捨てろって言ってるだろうが！」

ロベルト「本当お前の部屋の片付けは疲れる……」

バンの部屋の前には大きなゴミ袋がいくつか出来上がっていた

ラース「おーい、終わったかー？」

バン「あ！師匠！、終わりましたー！見てください！俺の生まれ変わった部屋を！」

ラース「前を知らねえよ。というか、こんなに捨てる物あったのか。お疲れ様だったな、ベグル、ロベルト」

ベグル「来年はこいつ一人にやらせてください」

ロベルト「俺達まで巻き込まれるの迷惑です」

バン「いや、次からは綺麗に使うって！」

ベグル「去年も同じ事言っただよ！」

ラース「ハア……。まあいい、終わったなら広場に集まるぞ」

ロベルト「もうそんな時間ですか？」

ベグル「ほら見ろ！お前の部屋に時間取られすぎたせいだ。他の手伝い出来なかったじゃねえか！」

バン「それはすまん！」

デルカダール城下町 広場

空は暗くなってきており、夜になろうとしていた

広場には先程の鐘の周りにたくさんの人が集まっている

ラース「皆ー、これから王様が通られるから鐘までの道を開けてくれー」

ラースがそう言う人と人達はバラけていき、鐘まで道ができた

バン「それでは俺達は警備ですね」

ロベルト「何かあれば呼んでください」

バン達もバラけていった

そして城の方からマルティナ達と共にデルカダール王がやってきた

マルティナ「それではお父様、よろしくお願いします」

デルカダール王「うむ。皆の者、今年もあと僅か。新年を清らかに迎えるためにも今年のうちに来るだけ邪なる気持ちを祓っておこう。これよりわしが108回鐘を鳴らす。その鐘の音に皆の様々な思いを乗せて祓うのだ」

デルカダール王はそう言うのと鐘のあるステージに立った

デルカダール王「それでは煩惱を祓う鐘の音だ！行くぞ！」

ゴォーン！

王国に響き渡るような澄んだ鐘の音が響いていく

デルカダール王「まだまだ行くぞ！」

ゴォーン！

ゴォーン！

ゴォーン！

集まっている人達はその音に拝むように静かに下を向いている

その後

デルカダール王「これでラストだ！思いっきり行くぞ！」

ゴォーン！！

パチパチパチパチ！

108回鳴らしきり、デルカダール王の額には汗が浮かんでいる

デルカダール王「うむ、ありがとう。これで少しでも皆が清らかな気持ちになれたなら本望だ。さて皆よ！まだ夜は始まったばかり！わし達も料理をたくさん用意した！さあ今年最後だ！騒ぐのだ！」

全員「オー！！」

その後すぐに広場周辺は人だらけとなり、賑わい始めた

皆と集まって飲み交う者、静かに空を見上げて食べる人など様々である

レース達は

ビル「次だ！」

ラーズ「お？やるな、ビル！よし、俺もおかわりだ！」

カミュ「へっ、負けてられるかよー！」

三人で飲み比べをしていた

マルティナ「全く……毎年ラーズが騒ぐのも恒例になってきたわね」

グレイグ「そうですね。まあ大切な事ではあるのですが、その後が少し大変ですからね」

マルティナ「酔う事だけはしないように言っておかないと」

マヤ「いしし、大丈夫だよ、姉ちゃん、おっちゃん。兄ちゃん達が飲んでるやつ度数が高いから、一人ダウンしたら終わりってルールらしいよ」

グリー「それでも少し心配だよね。あんなにガブガブ飲んでるとさ」

グレイグ「ビルは酒に強いのか？」

マヤ「まあまあ強いみたいだよ。でも本人も兄ちゃんや兄貴程ではないって言った」

マルティナ「結果は見えてるってわけね。カミュとラースで対決だけはやめてほしいわね。どっちも倒れたら大変な事になるから」

マヤ「私達も少し騒ごう？ほら、食べ物取ってきたんだ」

マヤは皿に乗っている料理をテーブルに乗せた

グレイグ「そうだな。ラースだけ楽しそうにしているはつまらんかな」

グリー「お邪魔させてもらいますね」

マルティナ「気にしないで、グリー。一緒に楽しみましょう」

鐘付近では

男の子「兵士さん！僕も鐘の音鳴らしたい！」

ギバ「お？鳴らしてみるか？いいぞー。それならこの紐を思いっきりぶつけてみる」

鐘には大きな紐と小さな紐が結ばれており、棒がくっ付いている

男の子「わかった！行くよー、せーの！」

ゴーン！

男の子「いい音ー」

ギバ「ぎ、危ないから打ち終わったら離れような」

男の子「はーい。ありがとう、兵士さん」

ジェーン「お子さんに慣れてるんですね、ギバさん」

ジェーンがやってきた

ギバ「あ、ジェーンさん。まあ慣れてるってほどじゃないんだ。バ
ンが扱い上手くてな。それを真似てるだけなんだ」

ジェーン「バンさん、優しい方ですからね」

ギバ「ベグルはどうしたんだ？」

ジェーン「さつき少し話してたんですけど、鐘が気になってこちら
に来たんです」

ギバ「そうか。ジエーンさんも鳴らしてみるか？」

ジエーン「いいんですか？ぜひ！」

そうして夜も更けていき、深夜になろうとしていた

グレイグ「王よ、そろそろ時間かと」

デルカダール王「うむ、そのようだな」

デルカダール王は再び鐘のあるステージに立った

デルカダール王「皆の者！今年ももうすぐ終わりを迎える。新年を迎えるためにこの鐘を最後に鳴らそうと思う。この鐘を鳴らした瞬間から新年の幕開けだ！皆の者、やり残した事はないな？わし達は今年には皆に大変世話になった。来年もよろしく頼むぞ。デルカダール王国は皆で創り上げていくのだからな」

パチパチパチパチ！

全員から拍手が贈られる

デルカダール王「では！新年の幕開けだ！」

ゴォーン！

デルカダール王「新年！」

全員「あけましておめでとー！」

全員が声を揃えていうと、各場所で乾杯をしたり踊り始める者もいる

グレイグ「あけましておめでとうございます、姫様、ラース。今年もより一層頑張りますのでよろしくお願いします」

ラース「まーたそんな固い挨拶して。あけましておめでとう、マルティナ、グレイグ。去年通り俺は俺らしくいるぞー！」

マルティナ「ふふ、ラースらしいわね。あけましておめでとう、ラース、グレイグ。私は………そうね。皆とたくさん集まりたいわね」

グレイグ「そうですね。些細な事でもいいですから色々な話をしたいです」

カミュ「その挨拶ってのはなんなんだ？」

マルティナ「ほら、新年になったでしょ？その事への思いと自分が今年どうしたいかっていう抱負みたいなものね」

ラース「カミュは何かあるか？」

カミュ「俺か。抱負ねえ……………ま、俺も兄貴と同じで変わらざるって事かな」

ラース「なんだよ、面白くねえな。ふざけてみてもいいんだぜ？暑い場所を克服する、みたいなよ」

カミュ「ふざけんな！絶対やるか。そんな事するメリットがねえよ」

マルティナ「ふふ、今年もよろしくね、カミュ」

カミュ「……………おう、よろしく」

三が日

次の日、デルカダール城 玉座の間

三人「三が日？」

カミュとマルティナとグレイグはラーズの聞き慣れない言葉に首を傾げている

ラーズ「俺も知らなかったんだけどよ、この本に書いてあるんだ」

ラーズは世界の文化という本を開いた

ラーズ「ここだ。ホムラでは年明けから三日間は三が日と呼ばれ、どんな仕事をしている人でも休みとする日。その三日はおせち料理が出され、主婦などの人も料理を作らないようにして過ごす」

グレイグ「どんな仕事をしている人でも休みとする、か。年明けの初めはゆつくりと過ごした方がいいという事か」

マルティナ「いいじゃない、私達も休みにしてみる？兵士達とかいつも働いてもらってるからありがたいんじゃないかしら？」

カミュ「このおせち料理ってのはなんだ？」

ラーズ「まあ待て、俺に少し考えがあるんだ。この城で一番働いている人は誰だと思う？」

グレイグ「それは王や姫様だろう。常に国や国民の事を考えているからな」

ラーズ「まあ普通はそう考えるよな。でも、それを支えている人がいるよな？」

マルティナ「グレイグやラーズの事？あと兵士達もそうね」

カミュ「てめえ、自分が休みてえだけなんじゃねえのか？」

ラーズ「違う違う。俺達は朝何してる？」

マルティナ「えつと、朝起きて朝食場でお父様やグレイグ達と朝ごはん……あ！もしかして」

ラーズ「そうだ。朝から夜、時には昼や夜食も栄養満点で美味しい料理を作ってくれるコックの人達だ。この人達が朝早くから夜遅くまで俺達の動く源となるご飯を作ってくれ、支えている。この人達は兵士のように休日は殆どないだろ？」

グレイグ「た、確かに……。この城で陰ながら最もよく働いてくれている者達かもしれん」

ラース「だからコックの人達にはこの三が日にちなんで、今日から三日間休みにしようと思う。どうだ？」

マルティナ「いいわね！当然のようになってお礼もあまり出来てないし、いい機会だわ」

カミュ「へへ、想像よりずっといい事考えてんだな。見直したぜ、兄貴」

グレイグ「それは俺も賛成だし、王にもぜひ話をしてみよう。だが、コックがいなくなると俺達のご飯は誰が作る？」

ラース「それをこのおせち料理つてやつを作つて皆で食べるんだ。見たところかなり量のある料理らしいからな」

マルティナ「なるほどね、とっても面白い意見だわ。おせち料理はホムラに行けば知ってる人も多いのよね？作るならそこで教えてもらいながら作りましょう」

ホムラの里

マルティナ「随分と久しぶりだわ。この暖かい気候も懐かしいわね」

グレイグ「私も久方ぶりです。前よりも賑やかな雰囲気を感じられます」

カミュ「んで？聞くつて誰に聞くんだよ」

ラース「まずはヤヤク様だな。あの人なら色々知ってるからよ」

マルティナ「それならちようどいいわ。昨日の鐘のお礼も言ってきたかったの」

神社

ヤヤク「そうか、コツクのためにおせち料理を。流石は勇者の仲間だ、いろんな人を思いやっておるのだな。もちろん協力しよう。腕のいい料理人を紹介する。その者ならばさぞ綺麗なおせち料理が出るだろう」

ラース「ありがとうございます、ヤヤク様！」

ヤヤク「ジンタに伝えに行け。デルカダール王国からの大切な来賓だど。丁重に指導するようにと」

男性「はっ！」

マルティナ「そんな、わざわざ指導してもらうのにそんな丁重にし
てもらわなくても」

ヤヤク「そうか、それはすまなかった。これからその料理人の元へ
案内する。そこで望むように指導してもらってくれ」

料理屋 焔

ヤヤク「ここが料理人のジンタという者がいる料理屋だ」

黒を基調とした建物に壁には赤い線で炎のような形が描かれてい
た

カミュ「なんか高級そうな店だな」

ヤヤク「ホムラでもかなり評判がいい。私もハリマに誘われて食べ
たが、とても美味だった。少し物静かだが、受け入れてくれるはずだ」

ラーズ「それは期待できますね。ありがとうございました、ヤヤク
様」

ヤヤク「うむ、ではまたいつでもきてくれ」

ヤヤクは去っていった

グレイグ「俺は大丈夫だろうか、料理などお世辞にも出来るといえ

ないほどなのに」

ラース「大丈夫だろ。グレイグが必要となる場面も絶対くると思うぜ」

カミュ「ん？誰かきたぞ」

??? 「あんだ達がヤヤク様が言っていたデルカダール王国の来賓か」

中から白い三角巾をつけ長いコック服をつけた渋い顔の男性がやってきた

マルティナ「はい。突然のご訪問、誠に申し訳ございません。私達は」

??? 「堅苦しい挨拶はいい。俺はジンタ、ここで料理人やってる。事情は聞いた、おせち料理を作りたいんだってな。ついてきな、教えてやる」

ジンタは中に足早に戻っていった

グレイグ「おい」

マルティナ「いいのよ、別に気にしてないから。わざわざ教えてくれるんだし、変な事言わないで」

グレイグ「…………… 姫様がそう仰るのなら」

焰 店内

ジンタ「おい、リリー。連れてきたぞ、準備は？」

キッチンにはリリーと呼ばれたピンクの髪をした女性がいた

リリー「はい、ジンタさん！準備はバッチリですよ！仕込みや道具も取り揃えてあります！」

ジンタ「うちの手伝いをやってるリリーだ。やかましいが気にするな」

リリー「酷いですよ、ジンタさん！お初にお目にかかります、デルカダール王国の皆様！この店、焰のお手伝いとして早15年！リリーといます！よろしくお願いいたしますね！」

リリーは笑顔で元気に礼をした

ラース「こちらこそよろしく頼む。ラースだ」

マルティナ「王女のマルティナといいます。ご指導のほどよろしく
お願いします」

グレイグ「グレイグだ。あまり料理は出来んが、極力手伝うつもり

だ」

カミュ「俺はカミュだ。俺も料理はそこまで得意じゃねえが、手先は器用なほうだからな。色々出来ると思うぜ」

リリー「はい！よろしくお願いします！」

ジンタ「んじゃ、教えていくぞ。わかんなかったらリリーに聞け。まずおせちってのは初めは神様への捧げ物だったんだ。そのためにいろんな料理を詰めていた。昔の話だな。」

今は形が変わって料理事にいろんな願いを込めて縁起のいい物とされている。料理の数は多い。二十は超えるな」

ラース「二十!?結構あるんだな」

リリー「それだけたくさん作れば主婦の方も三日は作らなくても過ごせますからね」

ジンタ「それと保存のきく物でもある。酢につけたもの、味を濃くしてあるものみたいにな。この容器におせちを入れていくが、これは重箱と呼ばれている。これを四段重ねて完成だ。重ねる理由は幸せを重ねる、福やめでたさが重なるようにって意味だ」

マルティナ「なるほど、そんな容器にまで意味が込められているんですね」

ジンタ「大体はいいな？次は料理だ。手を洗って準備しろ」

グレイグ「ああ……………。むう、どうしても姫様に対しての口調が気になる。あんなぶつきらぼうに話すなどなんて無礼な」

カミュ「仕方ねえだろ。別にこの国ではマルティナはパツと見、ただの旅人なんだ。マルティナ自身も全員に敬ってほしいわけじゃねえんだしよ」

ラース「あんま気にすんな、グレイグ。変な人じゃないんだからよ」

グレイグ「そ、そうだな」

おせち料理

ジンタ「まず作る料理はホムラでは数の子と呼ばれるものだ」

四人「数の子？」

リリー「他の国ではなんと呼ばれているのかはわからないのですが、ニシンという魚の卵なんですよ」

ジンタ「この数の子の卵の数は子孫繁栄を願っているとされている。作り方に移るぞ。といっても、やる事は簡単だ。水と塩を入れた所に既に数の子を浸しておいた。一晩くらいが目安だ。膜が出てくるからそれを取って、酒を入れてアルコールを飛ばした鍋にしようゆと共に入れるだけだ」

ジンタは流れるように見せた

グレイグ「ま、待ってくれ。早くて理解が追いつかん」

ジンタ「簡単だからやってみろ。やればすぐに覚えるだろ」

マルティナ「えっと、この数の子？から膜を取って、鍋に入れるのね」

リリー「はい！オツケーですよ、マルティナさん！」

カミュ「へえ、準備されてれば簡単だな」

ジンタ「次にいくぞ。次は黒豆だ」

ラーズ「これなら偶に食べるな。各地で色々な味がある」

ジンタ「なら話は早い。作り方は同じか？」

ラーズ「俺の知ってるものだと豆を水で一日かけて戻した後、茹でてシロップとしょうゆと一緒に煮ていたな」

リリー「わ！そうです！まさにその通りですよ！それなら黒豆は平気そうですね」

ジンタ「なら次だな。次はかまぼこ、これも有名か？」

グレイグ「魚のすり身だな。よく食べているぞ。何やら色は少し違うようだが」

カミュ「こんなに赤と白がハッキリしてたようには思えねえな」

ジンタ「まあこれはそういうもんだからな。赤は魔除け、白は浄化を表す。次はひろめだ」

ジンタは黒いものが巻かれたものを出した

四人「ひろめ?」

リリー「他の国ではなんと呼ばれているのでしょうかね?」

ラース「食べてみてもいいか?」

ジンタ「ああ、いいぞ」

ラース「……………お?この味、昆布だな!」

マルティナ「それなら馴染みあるわね」

ジンタ「コンブ?まあいい、そう呼ばれているのか。作り方を見せるぞ」

数時間後

空だった重箱には様々な料理が詰められている。ニンジン、黒豆、かまぼこ、昆布巻き、伊達巻、栗きんとん、酢れんこん、なます等々

ジンタ「これで完成だ。これを皆で食べるんだ」

カミュ「なるほどな。こうやって見ると色鮮やかだな」

リリー「ホームラでは縁起物と呼ばれる物が多いんですよ。あ！縁起物というのは、よい事が起こるような物という意味です」

マルティナ「確かにそうね。一つ一つの料理にも細やかな意味があつてとてもよく考えられていると思うわ」

グレイグ「幸福な未来を願って食べるのか。年明けにはもってこいの食べ物だな」

ラース「ありがとうございます、ジンタさん、リリーさん！大変勉強になり、助かりました！」

ジンタ「理解をしてもらえたならいい。なにかあれば聞きに來い。また教えてやる」

リリー「私も皆様とお料理が出来てとても楽しかったです！ぜひまたいつでも焔にご来店くださいね！」

デルカダール城 キッチン

コック達がマルティナ達によって集められていた

マルティナ「突然ごめんなさい、集まってもらって」

コック「い、いえ、そんな事は。しかし、突然どうされましたか？
なにかお食事で困りごとでも？」

グレイグ「実はだな、先程ホムラの里でおせち料理というものを
作ってもらってきた」

コック「おせち料理………。聞き覚えがありますね。確か、縁起
物を集めた料理だったかと」

ラース「まあそうだな。それとホムラでは年明けから三日間を三日
日と呼ぶらしくてな、この三日間はどんな仕事の人でも休みにしてい
るらしい」

マルティナ「だからね、普段何気なく私達の毎日を支えてくれる皆
を三日間お休みにしようと考えたの」

コック達「ええ!？」

コック「そ、そんなお気遣いをしていただけるとは………。大変あ

りがとうございます。ですが、私達がいなければお食事の方は？」

ラーズ「それを乗り切るのがこのおせち料理だ。保存のきくものばかりだから三日くらいなら持つそうだぞ」

マルティナ「足りなかったら私達で勝手に作るわ。だから今から皆はお休みにして。年明けくらいゆっくり過ごしてちょうだい」

コック「…………… なんとお優しい……………。誠にありがとうございます
います、マルティナ様、ラーズ様、グレイグ様。それでは私達は休ませさせていただきます！」

グレイグ「ああ、自由に過ごすのだぞ」

その後、玉座の間

カミュ「喜んでただろ？コック達」

マルティナ「ええ、涙まで流されちゃったわ。そこまで酷い労働環境にしていたとは思えないけど」

カミュ「いや、ここに一人が馬鹿みたいに食べるせいだろ」

カミュはラーズを一瞥した

ラーズ「お、俺のせいなのかよ」

グレイグ「まあ強く否定は出来ん。実際見てわかるくらいにはラーズが来てからのコックの忙しさは増えている」

ラーズ「くっ………城の飯が美味いから悪いんだ」

マルティナ「久しぶりに聞いたわ、それ。褒めてるのか貶してるのかわからないわよ」

グレイグ「それでは今夜の食事からおせち料理を食べるのだな。作る途中でいくつか食べる機会もあったが、中々だったな。独特の物もあつたがどれも美味しいものだった」

カミュ「だな。それに量が一つ一つ少なくても数があるからな。結構長持ちしそうだな」

ラーズ「いやー、夕食が楽しみだな！」

マルティナ「張り切って食べすぎないでね、ラーズ。一応作り方は教わったとはいえ、無くなっちゃうと大変よ」

しかし、マルティナの声も虚しく二日目の朝にはおせち料理がなくなり、ラーズとマルティナがおせち料理のメモと睨めっこしながら作

るハメとなった

エマの悩み

それから一ヶ月後、ユグノア城

玉座の間

ベロニカとセーニヤ、シルビアが遊びにきていた

シルビア「え？エマちゃんの様子が？」

イレブン「うん、どこかおかしくてね。エマが少し笑いながら話を終わらせる時って大抵何か無理してるんだ。最近それが多くて」

ベロニカ「喧嘩したわけじゃないのね？」

イレブン「全然！喧嘩はあまりしないよ」

ロウ「わたしには違いがわからなくてのう。イレブンは幼少期から共にしておるからこそわかるのだろう」

セーニヤ「エマ様は最近何かされておりましたか？」

イレブン「普段通りだと思うんだけどなく。朝起きて、一緒にご飯食べて、仕事の手伝いしてくれてって感じでね」

シルビア「わかったわ。ショッピングに誘って本人に少し話を聞いてみるわね」

イレブン「うん、ごめんね？こんな事頼んじゃって」

ベロニカ「大丈夫よ。女の子だもの、あんたに言えない事だつてあると思うわ」

シルビア「アタシ達に任せてちょうだい」

エマの部屋

コンコン

エマ「は、はい」

ベロニカ「エマちゃん、ちょっと用事があるの。入ってもいい？」

エマ「あ、ベロニカさん。はい、どうぞ」

ガチャ

ベロニカ「こんにちは、エマちゃん。これからダーハルーネで三人でショッピングしようと思ってただけど、よかったらエマちゃんも来ない？偶には違う街にも行きましょう」

エマ「いいんですか？ありがとうございます！」

シルビア「もっちゃんよく！たつくさんお話ししましょうね」

エマ「あ、イレブンになくなる事伝えないと」

セーニヤ「それでしたら私達が先程お誘いする事をお話ししておきましたので、出発する時に言えば大丈夫ですわ」

エマ「わ！準備が早いですね！助かります！それでは少々待ってもらっていいですか？」

ペロニカ「ええ、突然だったもんね。入り口で待ってるわ」

ダーハル―ネの街

エマ「うわく……………本で見た景色だわ、綺麗な街」

ペロニカ「ダーハル―ネには来たことなかったの？」

エマ「はい。イシの村からは遠かったですし、ユグノアから出た事も殆どありませんから」

シルビア「初めてならうんと楽しまなきや駄目よ、エマちゃん！アタシ達がオススメの場所案内するわね！」

エマ「それは嬉しいです！ぜひお願いします、シルビアさん」

シルビア「うふふ、前からエマちゃんとショッピングしたかったのよ。一緒に来れてアタシも嬉しいわ！まずは洋服ちゃんから見てくださいよ！」

数時間後、カフェ

シンジが営むカフェで四人は休憩していた

シルビア「ねえ、エマちゃん。ユグノア城で生活するようになってしばらく経つでしょ？何か困った事とかある？」

エマ「困った事……ですか。ですが、あまりご迷惑をおかけするわけには」

シルビア「やだ、エマちゃんったら！そんな事全然気にしないわ！寧ろ何かあるならどんどん相談しちゃって！イレブンちゃんやロウちゃんだけじゃなくても、アタシ達だって絶対協力するわ！」

エマ「ありがとうございます。イレブンやロウ様にはとても言いづ

らくて……。実は数日前、ユグノアの商店街に買い出しに出かけた時に見た事もない男性の方に捕まってしまい」

三人「ええ!？」

ペロニカ「大丈夫だったの!？」

エマ「それが……。王国のお金为目的のようで、私を利用してお金を盗もうとしているんです。今日から一週間後に、二千万ゴールドを指定の場所まで持つてくる事を引き換えに解放されました」

ペロニカ「なんてやつなの！エマちゃん、そんなのさつきとイレブンに言っちゃいなさい！早い所捕まえないと！」

エマ「それが、いつも着ている服に盗聴器を付けられてしまい下手な事を言えなかったんです」

セーニヤ「そんな事が……。では、私達の今日のお誘いはもしかして」

エマ「はい。いつもとは違う服を自然に着ていける都合のよい日でした。なので、少なくとも今日はイレブンに話せると思って」

シルビア「そうだったの。でも、この数日間恐怖でいっぱいだったでしょ？特に捕まった日なんて怖くて仕方なかったわよね？よく頑張ったわ、エマちゃん。そんなわるーい子は早く捕まえちゃいましょう」

エマ「はい………………。本当…………怖くて、イレブンにも助けけて言えなくて…………私、本当に」

エマはシルビアの優しい言葉によって今まで堪えていた涙が流れしてきた

セーニヤ「お気持ちは大変よくわかります。お一人でそんな怖い事を我慢されていたのは大変お辛かったです。もう大丈夫ですわ」

ベロニカ「店長さん、ごめんなさい。ティツシユ貰えるかしら？」

店長「ああ、もちろんだ。綺麗な顔が台無しだからな。拭いてやってくれ」

数分後

エマ「すみませんでした、突然」

シルビア「いいのよ、当然の事だわ。それよりもこの事はアタシ達とイレブンちゃん達で絶対解決してみせるから、エマちゃんは危険な目に遭わないように違う場所に行きましょう」

ベロニカ「そうね。勘づいた犯人がエマちゃんに接近してくるかもしれない。今日私達がダーハル―ネにいる事もわかってるはず。となると、ここからも離れた方がいいわね。デルカダールのお城に行きましょう。あそこなら何があっても大丈夫。兵士達もマルティナさん達もいるわ」

エマ「はい、ありがとうございます」

デルカダール城 玉座の間

マルティナ「そんな事が。怖かったでしょう？エマちゃん。無事に終わるまでここにいたいわ。絶対安全だから」

エマ「ありがとうございます、マルティナ様」

ラース「必要はなさそうだが、援助はいるか？」

シルビア「大丈夫よ、悪い子は一人みたいだからね。数人でもアタシ達なら大丈夫よ」

グレイグ「そうだな、エマちゃんは俺達が必ず保護しておく。イレブンにもそう伝えておいてくれ」

セーニャ「お願いします。エマ様、犯人の特徴や捕まっていた場所

を教えてくださいませんか？」

エマ「はい。男性はイレブンより少し大きくて、大ききさでいうと…… ラースさんほどです。髪はなくて、黒いサングラスをつけていました。服装は全身真っ黒だったのでなんとも。場所はユグノアから出て、右手にある古小屋のなかでした」

シルビア「わかったわ、しっかりと伝えておくわね」

見えぬ敵

その後、ユグノア城　玉座の間

シルビア達はエマから聞いた話をイレブン達にしていた

イレブン「エマにそんな事が!?全然わからなかった」

ロウ「なんと…………。隠しておったのか、恐怖すらも。偉い子じや
のう、エマちゃん。後はわし達の出番じやな」

イレブン「古小屋なら僕も知ってる！急いで向かおう！」

シルビア「それがね、アタシ達でそこを見てきたんだけど何もな
かったのよ」

ベロニカ「人どころか何もなただの小屋だったわ」

ロウ「そうか。既に立ち去ったか、証拠を隠したかじやな」

イレブン「探さないとまたエマにいつ負担がかかるかわからない。
絶対に捕まえないと！」

セーニヤ「私達もご協力いたします」

イレブン「怪しい人がいなかったか兵士達に聞いてみる。そのまま兵士達と一緒に街の人達にも聞いてみるよ」

ロウ「わしはもしもを考えて策を考じておこう。二度とこのような事がないようにしなければな」

ベロニカ「それじゃあおじいちゃんはお城で待ってて。私達で聞きに行くわ」

ロウ「うむ、頼んだぞ」

広場

イレブン「ベロニカ達はここで周りの人達から何か聞いてみて」

シルビア「了解よ。イレブンちゃん達は？」

イレブン「僕は商店街で聞いてみる。兵士達もね。何かあったら教えてね」

セーニヤ「はい、商店街に向かいますね」

数時間後

ベロニカ「どうだった？セーニヤ、シルビアさん」

セーニヤ「私は駄目でした。皆さんご存知ないようで」

シルビア「アタシもそうだったわ。やっぱり名前も顔もわからないから割り出しにくいわよね」

ベロニカ「そうなのよね。本当姑息なやり方ね！気に入らないわ！一旦イレブン達に合流しましょう。何かわかったかも」

その後、ユグノア城 玉座の間

ロウ「そうか、街の者もわからなかったか」

イレブン「ごめん、聞き方も悪かったかもしれない」

ロウ「いや、仕方あるまい。情報があまりにも少ないからのう」

イレブン「ただ、城下町から出た人と入った人のリストを見る限りだと三人怪しそうな人がいるんだ」

ベロニカ「え!?!そんなのあるの!?!」

シルビア「大きな街ではよくやる事よね。見張りの人がいて、何人入ったか出たかを集めるのよね。デルカダールでもサマデーでもやってるわ」

イレブン「そうそう、それ。それで、三人が昨日から今日にかけて何回も出入りしてるんだよ」

セーニヤ「同じ方なのですか？」

イレブン「うん、そうみたい。少し話を聞いてみてもいいかもしれない」

ロウ「そうじゃな。だが、夕方になってしまったからのう。続きはまた明日じゃ。エマちゃんには引き続き姫達に任せてもらおうかの。ベロニカ達もよかったら泊まっていつてくれ」

セーニヤ「ありがとうございます、ロウ様」

ベロニカ「明日こそは捕まえましょう！」

次の日、朝食時

イレブン達は朝ごはんを五人で集まって食べようとしていた

ペロニカ「今日はどうする予定？三人に話を聞くんではしょ？」

イレブン「そうそう、その後に話をまとめて嘘やどうかを判断して
いかないよ」

セーニヤ「探偵みたいですわ！」

シルビア「もう、セーニヤちゃん。気持ちにはわかるけどおおごことにな
ってきてるからあまりそういう風に言っちゃダメよ」

ロウ「む!?ゴホツ!!ゴホツ!!ゲフツ!!」

突然ご飯を食べたロウが苦しそうにむせ始めた

全員「!？」

ロウ「これは……毒、かの」

ドサ！

ロウは悶えながら椅子から倒れ込んだ

その顔は青白くなっている

イレブン「おじいちゃん!!!」

セーニヤ「ロウ様!!キアリー!」

ロウ「うう……す、すまぬ……」

メイド「ど、どうされましたか!」

シルビア「今ロウちゃんがご飯に毒を盛られたみたいだったの!」

メイド「ええ!?毒!」

ベロニカ「ここにご飯を運んだ人は誰!?作った人は!」

メイド「作ったのはコックですが、今日運んだのは風邪をひいた者の代わりとして来られた」

イレブン「その人は今どこ!!」

メイド「あ!あちらにおります!」

メイドが部屋から出て遠くにいる女性を指した

??? 「チッ!」

その女性はイレブンを見ると走って逃げ出した

イレブン「逃がさない！」

イレブンもそれを見て急いで追いかける

ベロニカ「あ、イレブン！私が追いかけるわ！シルビアさんとセーニヤはおじいちゃんの援護してて！」

シルビア「気をつけてね！」

セーニヤ「ロウ様、お体は大丈夫ですか？」

ロウ「むう、すまんう。まさか毒を盛られてしまうとは」

シルビア「救護部屋行く？」

ロウ「いや、このままで大丈夫そうじゃ。少し休めば動けるはずじゃ」

大広間

???「……………」

女性はかなりの速さで走っていく

イレブン「絶対逃がさない！エマだけでなく、おじいちゃんにまで！」

イレブンは気迫に満ちた表情で追いかける

城から出ると

イレブン「ハア、ハア。くっ、どこだ！どこにいった！」

イレブンは周りを見渡すが、既に女性の姿はみえなくなっていた

イレブン「くっ！見失ったか！」

ベロニカ「イレブン！あの女の人はい！」

イレブン「ごめん、見失った。外に出るまでは見てただけだ」

ベロニカ「仕方ないわね。外に出たら逃げ道はたくさんあるもの。まさかおじいちゃんに毒を盛るなんて。しかもあんな正々堂々と」

イレブン「……………僕、何してんだろ。王様なのに、家族も、恋人も満足に守れない。危険に晒して……………捕まえられなくて」

イレブンは悔しそうに唇を噛み締めている

ベロニカ「大丈夫よ、イレブン。あんたは充分頑張ってるわ、守ろ

うと必死になっているわ。それは私達が一番わかっている。ちよつと相手が強くて苦戦してるだけ。諦めなければ必ず守れるわ、おじいちゃんもエマちゃんも。ほら、一旦戻るわよ」

イレブン「…………… ベロニカ。うん、ありがとう」

玉座の間

シルビア「そう、逃げられちゃったのね。仕方ないわ、あんな突然だったもの。寧ろ、姿を見れただけ一歩前進よ！」

セーニヤ「イレブン様、落ち込まないでください。ロウ様もお元気になりましたので」

ロウ「うむ、心配かけたのう、イレブンや」

イレブン「よかった、おじいちゃん。倒れた時は本当焦ったよ」

ベロニカ「でも、少し振り出しに戻ったわね。犯人の姿は後ろ姿だけ。満足な特徴もないし、女性とは思えないくらい足が早かったわ」

イレブン「確かに身のこなしも軽かった。盗賊……………なのかな」

シルビア「可能性はあるわね。逃げられたのも外に出てから。つま

り、変装した可能性もあるわ」

ロウ「…………… 中々苦戦しそうじゃのう。これは、救援が必要かの」

イレブン「うん…………… 僕達の頭脳役に頼ってみよう」

デルカダール城 玉座の間

マルティナ「そんな事が。ロウ様、お体は大丈夫ですか？」

ロウ「なあに、セーニヤが迅速に対応してくれたからの。もう大丈夫じゃよ」

ラース「んで、俺に助けを求めに来たと」

ベロニカ「あんたなら昔みたいに何か作戦をたてられるんじゃないかと思っただけ」

ラース「ふむ…………… 少し考えさせてくれ」

グレイグ「エマちゃんはしばらくうちで預かった方がいいか？」

イレブン「うん、お願いしたいな。エマにも後で伝えるから。ただ、

この朝の事はエマには言わないで。エマは悪くないけど、自分を責めちゃうかもしれないから」

マルティナ「そうね、言わないでおくわ。あと、城の警備も強化しておくわね」

シルビア「ここにいるとは思わないだろうけど、そうしてくれると安心ね」

ラース「なあ、一つ聞いていいか？」

ロウ「なんじや？」

ラース「そつちではじいさん達がご飯を食べる時間は街の者にも知られてるのか？」

ロウ「いや、そんな事はない。知っておるのは城の者だけ……………まさか」

ラース「どうやら、犯人は一人じゃないようだ。随分と手がこんでいるみたいだな」

イレブン「城の中に仲間がいる!？」

ベロニカ「じゃあ、犯人はそこと繋がって今日の朝におじいちゃんをまさに狙って！」

ラーズ「気をつけろ、皆。俺の予測では犯人は既にベロニカもセーニヤもシルビアも狙っている可能性が高いぞ。そして、エマちゃんや城にいない事もわかっているはずだ。次に誰が狙われるかわからない」

シルビア「やだ………。つまり、今までの事が犯人には全部筒抜けって事よね？アタシ、流石にちよつとゾクつとしたわ」

ロウ「これは……想像より遥かにまずい事になったのう」

マルティナ「ラーズ、ロウ様達を助けられない？ユグノア城に行つて救援を」

ラーズ「出来なくはない。だが、それは最終手段にしておくべきだ。まだ早い」

グレイグ「早いとは思えんぞ！それに、お前が行けば何か他にもわかる事は多いだろう！」

ラーズ「犯人とその仲間の情報が少なすぎる。今のままで悪手となる可能性がある。誰が内通者なのか、城の者だけと繋がっているのか。相手はかなり頭がキレるようだ。計画もたててあるのだろう。もう少し情報を持ってからのの方が相手に負担となる」

ロウ「そう……：：：。じゃな。情報もないうちに慌ててはそれこそ相手の思うつぼ。少し落ち着いて対処するかの」

ベロニカ「でも！街の人達も何も知らなくて」

ラーズ「作戦ならある。ベロニカにはどんどん街の人達に聞き込みをしてもらう。広場でも商店街でもどんどん聞いていけ。」

シルビアは遠く離れた場所でその様子を観察。ベロニカと話し終わった後の人達の動向を確認しろ。街の外れに行ったり、物陰に潜んだりしたら怪しいと思え。

じいさんには城とユグノアに入るための門を閉めてもらう。閉めるタイミングは昼間。入り口は外からも中からも通すな。城は兵士やメイドが全員いる時に閉じろ。

イレブンとセーニャにはそれぞれ兵士とメイド達を観察。じいさんは門を閉めた後は大臣達を観察しておけ。イレブン、特に兵士を見ておくんだ。怪しい動きをしていたら少し話を聞いてみる」

ロウ「なるほど。街の者を閉じ込め、さらに城にもいれずに合流などを防ぎつつ両方とも炙り出すわけじゃな」

イレブン「でも、関係ない街の人達にも迷惑が」

マルティナ「王族が狙われて、しかも人数も複数。こっちも手段を選んでいられないわ。捕まるまでの辛抱よ、少し我慢してもらいましよう」

グレイグ「お前、まさかデルカダールで同じ事が起こったら」

ラース「当然こうやるな。なんなら貴族階層の部分とも遮断するかもな」

グレイグ「ハア……。敵ではなくてよかったと痛感するぞ」

ラース「全員にしつかりとした役割がある。あまり変な行動はするなよ？犯人の逃げる隙となるからな。それと、犯人に狙われる事も忘れるな。特に単独行動となるベロニカとシルビアは最新の注意をはらえ」

シルビア「そうね、わかったわ。でも、流石ラースちゃんね。話を聞いただけでこんなにしつかりとした作戦が浮かぶなんて！」

ベロニカ「よし！皆、絶対犯人とその仲間を捕まえるわよ！」

五人「オー！」

五人で拳を挙げた後、ユグノアに向かっていった

ラース「王族の金が狙い。エマちゃんを殺さず、生かしておいた理由。まるで、こうすればエマちゃんは言わないだろうという予測があるかのよう。

それとなぜ毒は王であるイレブンではなく、じいさんに
?.....まさか、随分前から城の内部に内通者が.....
?」

犯人を探せ

ユグノア王国 広場

イレブン「それじゃあ皆、作戦通りにいこう。絶対見つけ出すよ」

全員「ええ！／＼うむ」

全員それぞれの場所に向かっていった

ユグノア王国 入り口

ロウ「では、閉めさせてもらおう」

バタン！

ロウは王国に入るための門を閉じた

ロウ「見張りの兵士はまだおらんようじゃな。兵士の徴集はイレブンの役目。さて、わしもユグノア城に戻らんと」

商店街

ベロニカ「すみません、ある人を探しているんですけど何か知っている事ありませんか？」

女性「どんな人？」

ベロニカ「髪がない男性で、180cmくらいの人なんですけど」

女性「髪がない人……。うーん、ちよつとわからないわね」

ベロニカ「わかったわ、ありがとう」

ベロニカは商店街にいる人にどんどん尋ねていく

ベロニカ「シルビアさん、どこかで見てるかしら？きつと大丈夫なはずよね。私は襲われないように注意しておかないと」

居住地 屋根の上

シルビア「あら、本当だわ。ここからなら商店街が全部見える。イレブンちゃん達に聞いておいて正解だったわね。さて、目を離さないようにして警戒も怠らないようにしましょ」

ユグノア城 訓練場

イレブンが兵士達全員を集めていた

イレブン「突然集まってもらつてごめんね。今日はしばらくここにいてもらうよ」

兵士達「ええ!？」

兵士D「お仕事はどうするのですか？」

イレブン「やらなくて大丈夫。ここですつと待機だよ」

兵士「ハ、ハア…………？」

朝食場

セーニヤ「集まっていたいただきありがとうございます」

こちらではセーニヤがメイド達を集めていた

メイド「どうかされましたか？私達に用事でしょうか？」

セーニヤ「いえ、実は少し事件が起こっております。犯人を捕まえようとしているのですが、城の中に犯人と繋がっている方がいるようですのでその方を見つけようとしているのです」

メイド達「ええ!？」

セーニヤ「もしこの中で今朝のロウ様のご飯に毒が入れている事を知っていたという方はいらっしゃいますか？」

メイド達「……………」

メイド達は全員不安そうに互いの顔を見ている

その時

メイドA「す、すみません……………。私がそうです」

一人のメイドが手を挙げた

全員「!？」

セーニャ「勇気を出してください大変ありがとうございます。ですが、どうしてもそのような事を？よろしければ理由をお聞かせください」

メイドB「嘘ですよね!?だって、先輩はユグノア城が出来てすぐの頃からここで働いていたじゃないですか！誰よりもロウ様やイレブン様を尊敬して」

メイドA「いけない事なのは昔からわかっていました。ですが……………あの男に脅されて……………」

セーニャ「いつ頃からその犯人の方とお知り合いに？」

メイドA「もう十年前になります。ある日に私の家にあの男がやってきて、私に城の情報を教えろ、と。さもなければ殺すぞと言われて。最初は私も教えなかったのですが、痺れを切らした男に一度お腹を刺されて……………」

セーニヤ「そんな事が……」

メイドA「すみません、すみません！ほぼ監視されているようなもので、様々な情報を与えてしまいました」

セーニヤ「大丈夫ですわ。必ず犯人を捕まえて恐怖から救い出してみせますから。犯人の名前や特徴などは？」

メイドA「名前はわかりません。聞いても答えてくれず。ただ、変装が得意なようで男性であるにもかかわらず女性の姿になったり、老人の姿になったり出来るようです。また、盗賊が使うような道具も多数持っております」

セーニヤ「情報ありがとうございます。私はイレブン様にお伝えしてきますので、皆様はこちらの部屋から出ないようにお願いします。また、そちらのメイド様を責めるような真似もしないようにお願いします。どうか優しくしてあげてください」

訓練場

イレブン「一人見つかったの!？」

セーニヤ「はい、ご自身の命を理由に脅されていたようでした。十一年前からいたメイド様でした」

イレブン「え!?もしかしてあの人かな!その人なら心当たりあるよ。僕が王様になった頃からずっとお世話になってたから」

セーニヤ「そちらはどうでしたか?」

イレブン「誰もわからないのかもしれない。何も言わないからさ」

セーニヤ「メイド様お一人ということでしょうか」

その時

ロウ「二人ともどうであつた?」

セーニヤ「ロウ様!メイド様がお一人ご自身の命を理由に脅されていたようでした」

ロウ「むう…………。やはり内通者がおつたか。しかも脅されて………… 酷い事をするものじゃな」

イレブン「兵士にもいるかもしれないけど、まだ何も言わないんだよね。様子がおかしい人いる?」

セーニヤ「……………いえ、特段おかしい風には見えませんわ」

ロウ「ふむ……………。あの一番手前の右端の者、やたらと下を向いておるのう。視線が少し忙しいようじゃ。聞いてみてもよいかもしれんぞ」

イレブン「わかった。ありがとう、おじいちゃん」

ロウ「なに、勘違いかもしれぬ。わしは玉座の間で大臣達を観察し
てくる」

ロウは去っていった

イレブン「ごめん、少し話聞いてもいい？」

兵士C「は、はい！」

イレブン「そんな緊張しなくて大丈夫。何か知ってる事あればいい
など思ってたさ」

兵士C「い、いえ……………あの……………」

兵士は顔が少し青くなっている

イレブン「だ、大丈夫？顔、青白いよ」

兵士C「す、すみませんでした!!!」

兵士は突然土下座した

イレブン「ええ!?ど、どうしたの!」

兵士C「お、俺……………ギゼという男に、妹を人質にされて……………イレブン様や勇者様のお仲間達が城に訪れた際の情報などを全て流していました」

全員「!?!」

兵士D「お前!!なんて事を!」

イレブン「人質か。他には?」

兵士C「後は、俺が調べられる限りの勇者様達の情報も渡しました」

イレブン「そっか、わかった。言ってくれてありがとう。人質もいるのに、よく言ってくれたね。犯人の名前はギゼっていうの?」

兵士C「俺はその名前しか言われなかったので、他に何か名前があ

るのかは知りません。五年前に妹が誘拐され、助けてほしければ勇者様達の情報を渡せという条件でした。ですが、どれだけ渡しても妹は帰ってこなくて……………」

イレブン「酷い……………。絶対にそのギゼって人は捕まえる。約束するよ、他に特徴はわかる?」

兵士C「男性で、イレブン様より大きいです。変わった髪型をしていて、長い黒髭がありました。年齢は…………。断定は難しいですけど30代くらいかと。声は少し普通の男性より高いイメージがありました」

イレブン「うん、わかった。教えてくれて本当にありがとう」

兵士C「お、俺こそ…………。イレブン様達を危険に晒してしまつて」

イレブン「仕方ないよ。人質を取られちゃつてたんだから。君は何も悪くない。家族を助けようとした行動は正しいはずだよ。その妹さんも救い出してみせる」

兵士C「ううっ…………。ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます、イレブン様……………」

イレブン「他に何か知っている人がいたら連絡して。僕達は玉座の

間に向かうから。でも、極力この訓練場から出ないでね。あと、この兵士は悪くないから攻撃的にならないでね」

玉座の間

ロウ「二名の内通者。それも十年前からという長い期間、情報が流れ続けていたという事か」

イレブン「気付けなかった僕達にも責任がある。これ以上被害者を増やすわけにはいかない」

セーニャ「ですが、少し皆様と情報が合いませんね。エマ様からは髪のないサングラスをした男性、しかし、私達が城内で見た犯人は女性の姿でした。そして兵士様からは変わった髪型をした長い黒髭、メイド様からは変装が得意との事でした。この全ての姿も犯人の変装なのかもしれません」

ロウ「そうじゃな。全て仮の姿で行動していたとすると、本当の姿がわからん。ううむ、やはり熟練者じやのう」

イレブン「ベロニカ達は無事かな。城下町にはきつと犯人がまだいるはず。狙われないといいけど」

発見

商店街

ベロニカはベンチに座って休んでいた

ベロニカ「ふうく……誰もわからないわよね。エマちゃんと私達が見た犯人でさえ、違う姿って事はシルビアさんが言っていた通り変装できるって事よね。イレブン達は何か進展あったかしら」

ベロニカが城の方を見ていると

ベロニカ「ん？」

ベロニカの視界の隅で老人が建物の隙間に入っていくのが見えた

ベロニカ「あのおじいちゃん、どうしてあんな所に？追いかけてみましょう」

住宅地 屋根の上

シルビア「あら？ベロニカちゃん、突然どうしたのかしら。あ！隙間に入っていつちやって、見えなくなっただわね。何か見つけたのかしら。アタシも追いかけてみましょう」

裏通り

老人は大きめの家に入ってしまった

しかし、その家は綺麗にはされておらず、人が住んでいるようには見えなかった

ベロニカ「こんな家におじいちゃんが一人で？怪しいわ……………も
しかして、犯人の住処だったりするのかしら」

ベロニカは恐る恐る扉を開けた

中は真っ暗で全く見えない。物はどこにも置いておらず、どこか全
体的にヒンヤリとしている

ベロニカ「なにここ……………。家じゃなくて、廃屋みたいだわ」

バタン！

ベロニカ「!!？」

入ってきた扉が閉められた

ベロニカ「閉じ込められた!!」

ギゼ「クツクツク……………こんな簡単にノコノコと付いてきてくれ
るとはな」

暗闇から男の声が聞こえてきた

ベロニカ「誰!?!まさかあんたがこの事件の犯人なの!？」

ギゼ「ああ、そうだ。エマとかいう女を使った作戦は順調だったん
だがな。その隙に王族二人も狙おうとしていたのに、てめえらが邪魔
してきやがった」

ベロニカ「邪魔はあんたよ！こんなコソコソとして、とんだ臆病者じゃない！」

ギゼ「ふつ、情報通りかなりの強気な人だな。この状況でもその姿勢を保っていられるとはな」

ベロニカ「ふん！当然よ！あんたなんかこの大魔法使いベロニカ様が丸焦げにしてやるんだから！」

ギゼ「果たして出来るかな？そんな事が」

ベロニカ「見てなさい！ここが廃屋で助かったわ！燃えたって困らないもんね！メラゾーマ！」

しかし、メラゾーマは発動しなかった

ベロニカ「え!?な、なんで!?詠唱は何も間違ってなんか」

ギゼ「ベロニカ。聖地ラムダから勇者を導くという使命の下、勇者の仲間となった姉妹のうちの姉。強気な性格で得意とする魔法は炎魔法」

ベロニカ「な、なんであんたがそんな事まで！………!?な、なに

これ、くつついて取れない!!」

ベロニカが動こうとすると腕や足には細い糸がくつついていた

ギゼ「ハツハツハ!!勇者の仲間も俺の作戦には敵わない!ここはベロニカ、お前を殺すために用意した場所だ。ここではお前はお得意の魔法も、動く事すら出来ん!」

ベロニカ「ふぎけんじやないわよ!こんなの!メラガイアー!」

しかし、メラガイアーは発動しなかった

ベロニカ「だからどうしてよ!!おかしいわ、こんなの!」

ギゼ「なぜここがこんなにも冷たいと思う?」

ベロニカ「……………!」

ベロニカは考えていると、頭に雫が落ちてきた

ベロニカ「まさか!ここ、全部濡れて湿度が高い!水分が多すぎて炎を魔法で起こすには環境が整っていない!」

ギゼ「その通り。その糸はまだらまだ糸を改良した道具。一度服に着けば取る事は困難。さあ、俺の刃の餌となるがいい」

ベロニカの近くから短剣の光が見えた

ベロニカ「(ヤバイ……………。体は動かないし、炎魔法も打てない。このままだと……………。湿度?水?……………。考えている暇はないわね!一か八かよ!!)」

ベロニカの目前まで犯人は迫ってきていた

ギゼ「さあ、その命貰うぞ!!」

ベロニカ「マヒャド!!」

ベロニカは自身を中心に氷の塊を濡れた床から無数に作り出した

ギゼ「なに!？」

パキパキパキパキ!!

濡れた家屋は氷にどんどん反応して巨大な氷の柱がいくつも出来上がる

ベロニカ「ハアアア!!」

ベロニカはどんどんマヒャドを唱えていく

ドガアン!!

巨大な氷の柱は古い家屋を突き破っていく

ベロニカの足下も大きな氷柱となり、天井まで登っていった

ベロニカの体についていた糸も耐え切れずにどんどん切れていく

ギゼ「くそ!!」

犯人は逃げ出そうとするが

シルビア「見つけたわ!!」

ギゼ「!？」

犯人の前には音を聞きつけたシルビアがやってきた

シルビア「あなたがこの事件の犯人ちゃんね!こんな悪い事する子は許さないわ!お仕置きよ!」

ギゼ「チツ!」

ボン!

犯人は煙玉を投げつけた

シルビア「キャツ!コホツ、コホツ!もう!何よ、これー!」

煙が晴れると犯人はいなくなっていた

シルビア「姿は見れたけど、逃げられたわね。用意周到だわ、ベロニカちゃん!大丈夫ー?」

ベロニカ「私は平気よ！糸も切れたみたいだし」

ベロニカは氷柱から降りてきた

シルビア「何されたの？」

ベロニカ「犯人の罠にハマっちゃったの。炎魔法も出せないし、体も動けないしで危なかったわ」

シルビア「ベロニカちゃんの事、よく知ってたのね。やっぱりお城の内通者のせいかしら」

ベロニカ「わからないわね。とりあえずまた追いかけないと。つて…… あら？あそこに倒れてる人は」

ユグノア王国 入り口

城門の上にある見張り塔に犯人は登っていた

そこにある緊急用のスピーカーで王国に向けて話し始めた

ギゼ「勇者共！聞こえているか!!」

イレブン達「!？」

その放送は城の中にいるイレブン達にも聞こえていた

ギゼ「惜しいが一旦ここらで退散させてもらおう！だが、俺は諦めたわけじゃない！必ずまたこの城を狙ってやろう！それまではしっかり首を洗って待っているんだな！」

犯人はそう言うところから城門の方へ飛び降りた

ギゼ「よっと」

ギゼは城門を足場にして外に出た

ギゼ「へっ、閉められてようが問題ないな。人質もいたがまあ仕方ない。次はどこを狙うかな」

??? 「そこまでだ！」

ギゼ「!?」

草むらからラースが飛び出してきた

ギゼ「なに!？」

ラース「はやぶさ斬り！」

ギゼ「タイガークロー！」

ガキン！

爪と剣がぶつかり合う

ラース「しんくうげり！」

バキ！

犯人の顔面に蹴りが繰り出される

ギゼ「グハア!!」

ラース「確保！さあ、大人しくしてもらおうか！」

犯人はラースに拘束された

ギゼ「くそ!!なんでもう一人！ここには五人だったはずじゃあ」

ラース「運が悪かったな。心配になってきてみたら真上でお前が放送していたからな」

ギゼ「クソ野郎が!!」

その後、ユグノア城

イレブン「よかった!!本当にありがとう、皆！」

ロウ「かなりの難敵じゃったのう。わし達もたくさん反省せねばならぬ部分も出てきた」

ベロニカ「あんた、来るならそう言いなさいよ」

ラーズ「深読みしすぎたかもしれないが、内通者がもしかしたらかなり前からいるんじゃないかと予想してな。心配で許可を貰ってき
てみたんだ。そしたら真上に犯人がいるんだ、驚くよな」

シルビア「そのおかげでとっても助かったわ、ラーズちゃん！」

セーニヤ「お姉様、犯人に襲われたと聞きました。お怪我はありま
せんか？」

ベロニカ「大丈夫よ、私くらいならあの程度問題ないわ。それより、
あの子は大丈夫なの？」

イレブン「うん、大きな怪我は無いみたい。ベロニカが見つけてく
れて本当に助かったよ」

シルビア「まさか人質だったなんて思わなかったわ。聞いてビツク
りしちゃった」

ラーズ「犯罪の数は多いな。かなりの重罪だぞ」

ロウ「うむ、それなりの罰が必要じゃな。それに人質を取られていた兵士の男もさぞ安心しておった。五年ぶりに会う事が出来た、と」

セーニヤ「メイド様ももう命を狙われなくてすむと安心しておりましたわ」

イレブン「ラース、エマにも無事に終わった事を伝えておいて。戻ってきて大丈夫って」

ラース「そうだな。エマちゃんもイレブン達の事を酷く心配していた。安心させてやらないとな」

ロウ「イレブンよ、これからしばらくは新しく対策をたてるぞ。これまで通りではいかんからな」

イレブン「うん、そうだね。もっと厳しく考えていかないか。とりあえず、今回は本当助かったよ！ありがとう！」

ベロニカ「いいのよ、まさかここまで大きくなるとは思わなかったけどね」

セーニヤ「今度はまたゆっくりとお話出来るといいですね」

シルビア「皆が無事に終わってアタシも嬉しいわ！安心して笑えるのが一番だもの！」

ラース「皆の頑張りのおかげだな。また何かあったらなんでも協力するさ」

兵士長

それから二ヶ月後、デルカダール城

訓練場

??? 「おい!!ふぎけた事言うな!!」

突然大きな怒鳴り声が訓練場全体に響き渡った

ラーズ「おい、どうした」

大広間にいたラーズはそれを聞きつけて走ってきた

ガク「あ……す、すみません、ラーズ將軍。大声出してしまつて」

??? 「失礼しました。少し口論になつて」

ラーズ「それは構わない。だが、何かあつたのか?」

ガク「こいつが…… フランクがバンさんの事を悪く言うんです」

ガクの目の前にいる青年は最近新入りとして入ったフランクという男だった

ラーズ「バンがまた何かやらかしたのか?本人はいないようだが」

フランク「そうだ、ラーズ將軍にお聞きしたい事もあったんです。ラーズ將軍ってバンさんのお師匠様なんですよね？」

ラーズ「ああ、そうだな。それがどうかしたか？」

フランク「どうしてもつと優秀な人を兵士長にしなかったのですか？」

ラーズ「え？」

ガク「おい、フランク！ラーズ將軍にまでなんて事を!!」

ラーズ「いや、構わない。どういう意味なんだ？フランク」

フランク「新入りとしてもまだまだ浅い俺ですけど、バンさんはそんな俺でも見てわかるくらいには間抜け、悪く言うなら頭が弱いと見えます。」

副長であるベグルさんや他の人からよく指摘されてもヘラヘラしてるじゃないですか。俺としてはもつとしつかりと考えられる人の方が兵士長として立派なのではないかと思っっているのです」

ガク「お前はバンさんの凄さがまだわかっていないだけだ！あの人

は普段と本番では全くの別人になる人なんだよ！」

フランク「だとしても、普段からしっかりしているのはベグルさんやロベルトさん、マーズさんだろ。その人の方が絶対に兵士長に向いている！バンさんは兵士長に向いていないだろ！」

ラーズ「ふむ……。話はよくわかった。フランクの言う通りバンは兵士長というには向いてないよな」

ガク「え!?!ラ、ラーズ將軍!?!」

フランク「そうですよね。バンさんはラーズ將軍がお気に入りだから兵士長にしたのですか？」

ラーズ「まさか。そんな程度で決めるわけないし、俺は別にバン以外とも仲はそれなりにいいはずだ」

フランク「ならどうして！」

ラーズ「フランク、落ち着け。フランクは入りたてだから仕方ない事だが、バンの事をよく知らないんだろ。皆に聞いてみたらどうだ？バンをどう思うかってな」

フランク「聞く……ですか。そんな事したって」

ラーズ「おっと。確かに大した行動には思えないかもしれないが、知らないと知るでは大きく違うぞ。見えない部分が少し見えてくるかもな」

フランク「………わかりました。では、まずラーズ將軍からお願います。バンさんをどう思っていますか」

ラーズ「俺の自慢の弟子だ。常に明るく、ひたすらに真っ直ぐなやつだ。あいつは俺より強いからな。大したやつだよ」

フランク「バンさんが………ラーズ將軍より強い？ベグルさん達にいつも殴られて死にかけてるのにな？」

ガク「あれはまあ………うん」

フランク「ガクはどうなんだ？」

ガク「俺か？俺の憧れの人だ！兵士になった理由の一人でもあるんだ。あの人の凄い所は努力を怠らない事！毎日しっかり鍛錬を続けてるから凄いんだぞ！」

フランク「…………… そんなの、ベグルさん達だつて残つて練習して
るだろ」

ガク「まあな。俺からはこれだけだな」

ライス「詳しくはベグル達に聞いてみる。面白い事知れるかもしれ
ないぞ?」

フランク「…………… わかりました」

しばらくして

マーズ「え? バンがどんなやつかつて?」

フランク「はい、少し知りたくなって」

そこにはフランクだけでなく、最近入ったばかりの人達が二人いた

マーズ「そうだなあ……………。一言で言うくと、俺より凄いやつ、かな」

ジェイ「マーズさんより? バンさんは魔法使えませんか、賢くあり
ませんか?」

マーズ「はは、そうだな。バンは本当馬鹿だよな。だけど、魔法や
頭の回りがいいから凄いのか? 表面的な凄さつてのは案外大した事

ないんだぜ」

ロビン「じゃあマーズさんは凄くないんですか？」

マーズ「はは、失礼だな。でも、バンと比べたら俺は全然凄くないさ。俺はあんな風には絶対なれないし、真似も出来ない。少し羨ましいんだぜ？バンがよ。あ、本人には秘密な？」

フランク「ありがとうございます、マーズさん」

廊下

ギバ「うーん、バンがどういう奴ねえ。難しい質問するな、三人とも」

フランク「少しでも構いません。ギバさんがこれまでで感じたバンのさんの事とかでも」

ギバ「うーん、じゃあこれかな。俺達の前を作り出すやつだ」

フランク「前を作る？ど、どういう事ですか？」

ギバ「変な事言ったように思えるかもしれねえけどよ、これが俺としてはしつくりくるんだよな。バンは兵士長になるずっと前から俺

達の前に立って道を作り出してたんだ。

一人じゃどうしようもない壁にぶつかった時、負けそうになった時、夢を見失った時。そんな時にバンは必ず笑って助けてくれた、隣に立ってよ。いつのまにか目の前にあつた壁や問題はそいつに壊されてたんだ。進む道を指し示してくれた。だからバンは俺にとって前を作り出すやつだ」

ジエイ「……………そんな事があるんですか」

ギバ「そうだぜ！だから、お前らも何か困ったらバンに頼れよ！絶対なんとかしてくれるはずだぜ」

大広間

ガザル「バンを知りたい？珍しいな、お前らいつもバンを嫌ってただろ」

ロビン「ラーズ將軍にバンさんの事を聞いてみると言われて」

ガザル「ほく、まあいいんじゃないやねえの？嫌いだから知らなくていいってわけじゃねえもんな。んで、俺からは……………そうだな。目標だな」

ロビン「目標？バンさんですか？」

ガザル「あ！絶対本人に言うんじゃないやねえぞ!?言ったらお前らどうなるかわかってるよな？」

三人「は、はい！」

ガザル「目標つてのはだな。あいつの行動に、だよ。あいつはな、困ってる人を放っておかねえんだ。すぐに手を差し伸べてくれる。簡単な問題から厄介な事までな。それで全員助けちまうから本当凄いな。」

俺もあなれたら、昔の自分と変われるかなって……………。少し話が逸れたな。まあそんな感じだ」

フランク「ありがとうございます、ガザルさん。秘密にしておきますね」

兵士長2

城門前

ロベルト「バンの事か。そうだな……………」

ダバン「俺はすぐ言えるな。希望だ」

ジエイ「希望、ですか」

ロベルト「おー、いい事言うな、ダバン。確かに」

ジエイ「あの、理由を聞いても？」

ダバン「絶望、恐怖、不安、孤独。必ず誰もが感じる事だ、俺もそうだった。あいつはそこにいる俺を正しき道へ導いてくれた。自分では考えてないんだろうけど、あいつって眩しいんだぜ。その光は暖かくてな、頼もしいんだ。そんな大切なやつは守ってやらねえとな？」

フランク「光……………希望……………」

ロベルト「俺も思い浮かんだ。バンは俺に、皆にいつも力をくれるやつだ。共に戦う時、別々に戦う時なぜかは知らないけど、バンがい

るなら俺は普段より勇気が湧く。力が出せる気がする。頼もしい兵士長だからな。そんなやつに信頼されているんだ。その信頼に応えてこそ、俺であるのだろうか」

ロビン「信頼に応える。なんだか素敵ですね、羨ましいです」

ロベルト「そうか。バンを少しでも好きになつてくれると嬉しいぞ」

ダバン「まあ普段のあいっただけだと頼りないもんな。頼りないから兵士長じゃない。そんな事はないからな。俺達は誰もあいっには敵わない。あいつがリーダーだからだ。あいつがリーダーじゃなきゃ始まらないのさ」

フランク「リーダー……… 兵士長ではなくですか？」

ロベルト「兵士長でもあるさ。でも、バンは昔から兵士長だったわけじゃない。バンは兵士長である前から、俺達やきつとダバン達と出会った時からずっとあいつはリーダーだったんだよ」

ジエイ「違いがよくわからないのですが」

ダバン「はは、まあそうだろうな。でも、きつといつかお前達にもわかる時がくるはずだぜ」

ベグルの部屋

ベグル「ああ？バンの事だった？」

フランク「は、はい……。俺達、まだ新入りなのでどうしてベグルさんのような方ではなく、バンさんが兵士長なのかと思って」

ベグル「あー、なるほどな。というか……」

ベグルの前にはフランク達が綺麗な正座をして並んでいる

少し顔が青くなっている者もいる

ベグル「俺が怖いか？まあ自分でもわかってる方だけどよ。なんつーか、そこまで縮こまられると困るっていうか」

三人「す、すみません！」

ベグル「ハア、まあいいや。怒ってねえし、殴ったりするのはバンとかギバくらいのもんだ。お前達にそんな事はしねえよ。とりあえず落ち着いて聞いてくれればそれでいい。んで、バンの事だろ？んなの簡単だ。このデルカダール王国の兵士長だ」

フランク「わ、わかっています。でも、ベグルさん達の方が指示も的確ですし、指導もわかりやすいと思います。それに充分すぎるほど

お強いじゃないですか。それなのにどうして」

ベグル「俺達が信頼するにふさわしいやつだからだ。もしあいつがめちやくちや弱かったとしても、俺はバンが兵士長になってほしいと思うぜ」

ジェイ「強さは関係ないって事ですか？」

ベグル「そうだ。強さだけなんてちつぽけなもんで兵士長にはなれねえよ。バンはな、俺達を引っ張るんだ。前を向かせてくれる、大切な事に気づかせてくれる。俺達が必要だと心から叫んでくれる。だから俺達はあいつを信じる。兵士長を任せるんだ」

フランク「引っ張る……。兵士はたくさんいるのにまとめなくていいんですか？」

ベグル「大事だよな。でも、それは俺達の役目だ。一人で全部兵士長に任せるなんて難しいさ。助け合わねえとな。バンは必ず助けてくれる、それなら俺達もあいつを助けてやらねえと。仲間なんだからよ」

ロビン「仲間………。俺達のような新入りもですか？」

ベグル「あいつにとつちやそんなの関係ないさ。兵士を志して、努

力する者は皆仲間だ」

フランク「…………… 皆さんがバンさんを慕っているのはわかりました。でも！やっぱり兵士長はしっかりしていなければ！いざという時に！」

ベグル「いざという時に誰よりも力を発揮するのはバンだ。それに、バンが兵士長となる時にラーズ將軍がこう言ってくれた。兵士長という肩書きはバンにあるが、これは仕方なくバン、だけ”にある。本当ならお前ら全員に兵士長を任せたい。一人で出来る事なんてたかが知れている。兵士長は重要な役割だ。お前ら全員でこの役割を果たすんだってな」

フランク「!!?じゃあ兵士長は…………… このお城に七人いる？」

ベグル「そうとも取れるな。完璧な人間なんていない。必ずどこか足りないものがあるんだ。それが多いか少ないかの話。補っていくのが大事なんだ。お前らも俺達が補えないような所を助けてくれよな」

フランク「…………… ありがとうございました」

訓練場

フランク「どう思った？」

ロビン「正直羨ましかった。あんな信頼されて、助けてもらっていい」

ジェイ「確かに。バンさんがいい人なのはわかるもんな」

フランク「兵士長は全員に任せられている、か。もしかして、武力が強いつて言われてる理由はここにあるのかもな」

ロビン「俺……明日からは少し変わろうと思う。あまり困らせないようにする」

ジェイ「俺も、俺にも助けられる事ありそうだったから。バンさんにもっと信頼してもらえるような人になる」

フランク「俺、間違ってたのかも。兵士長だから優秀な人じゃないといけないとか、しっかりしてないといけないって思ってたけど、本当に大事なのは皆に信頼されているかどうか。俺達がついていきたくって思える人も兵士長としてアリなのかもな」

初調査

それから一週間後、デルカダール城

訓練場

全員「見習い達に!？」

ラーズ「まあそう考えている。最終判断は任せるが、内容自体は簡単な調査。未開拓の遺跡を調査してくるんだ。奥地まで行ければそれが一番だが、強い魔物とかがいた場合は素直に引いてこい。それだけだな」

ロベルト「魔物が住んでる可能性は？」

ラーズ「森の奥深くだからな。絶対いると言っているだろう。荒らし目的じゃないとわかってもらえれば大丈夫なはずだが。人数は多くするなよ？狭いからな」

マーズ「わかりました。こちらでメンバーを決めておきますので、決まったら連絡します」

ラーズ「おう、よろしくな。じゃあな」

ラーズは去っていった

バン「うーん…………… どう思う？俺は悪くはないと思うけど」

ベグル「優れたやつらならいいんじゃないか？ガクとかジャスとかよ」

ダバン「行ってみたってやつもいるんじゃないか？聞いてみてもいいかもな」

ガザル「お前らー、さっきのラーズ將軍の話聞いて行ってみたってやつはいるか？」

エド「はいはいはい！俺が行く！魔物なら任せろ！」

エドが大きく手を振っている

ギバ「そうか、エドなら魔物と話せるもんな。適任なんじゃないか？」

ロベルト「その点では問題ないんだが、戦闘となった場合がなあ……………」

テルマ「エド、魔物を倒せるのか？」

エド「やだ！」

ギバ「ああ、そっか。襲われたらどうすんだ？エド」

エド「話し合って交渉する！」

テルマ「すみません、気にしないでください。魔物との戦闘が予想されるならエドは不適任だと思います」

ガザル「まあ免れられねえ場合も多々あるからな」

ロベルト「となるとやっぱりガクやジャス、ジールの三人は確定にするか」

バン「あとは…… うーん」

その時

マルス「バンさーん！」

ルナ「お父さん達から聞いたー！遺跡に行くんだって？」

マルスとルナが走ってやってきた

ベグル「お、なんだ？行きたいってか？」

ルナ「すごい、ベグルさん！何でわかったの？」

ベグル「ウキウキしながら入ってきたからな。わかりやすいぜ」

マーズ「そうか、マルスとルナなら戦闘面はそこまで苦勞はしないな」

バン「いやいや！子ども達に行かせるのは駄目だろ！」

マルス「なんで？僕達も行きたい！父さん達も少し悩んでたけど、バンさん達がいつていつたら行つていつてき！」

ルナ「ちゃんと言う事聞くから！お願い！」

ギバ「だってよ。どうする？」

マーズ「マルス、ルナ。遊びじゃないってのはわかってるな？」

二人「うん！」

ルナ「私もお手伝いしたいの！兵士さん忙しいから！」

マルス「僕は将来この兵士になるから、今のうちに仕事に慣れておかないと！」

バン「そっか、ちゃんと考えてんだな。ガク、ジャス、ジール、任せて大丈夫か？」

ガク「問題ないですよ！マルス君、ルナちゃん、ちゃんと着いてくるって約束してよ？」

ジール「そうだな。それが約束できないと連れて行けないな」

二人「もちろん！」

ジャス「ふふ、じゃあお手伝い頼んでもいいかな？僕達と一緒に遺跡調査」

マルス「やった！ありがとう、ガクさん、ジールさん、ジャスさん！」

ルナ「お母さん達に伝えてくるー！」

それから三日後、ソルティアナ地方の山中

「ガク「本当に俺達だけに任されるなんてな」

ジール「信頼されてるって事だもんな、嬉しいけど失敗したら怖いよな」

ジャス「大丈夫、大丈夫。魔物とも訓練通りやってくればきつとなんとかなるからさ」

ルナ「どんな遺跡なの？」

ジャス「えつとね、話に聞くとこの森の奥に見た事ない遺跡が発見されたんだって。中から魔物の気配もするからその時は一旦引いたけど、未知の遺跡だから歴史的な発見もあるかもしれないって」

マルス「歴史的な発見!? 凄い! それってお宝って事だよな!？」

ジール「そうなるといいよね。つと、二人とも」

ガク達の前にはアマゾンキング達がいた

ルナ「キヤーツ!! カ、カエル!! 気持ち悪い!」

ルナはその姿を見ると悲鳴をあげてマルスの背中に隠れている

マルス「わわっ！ル、ルナ！押さないでよ！」

アマゾンキング「ゲエー！！」

ガク「完全に気付かれちゃったね。戦闘態勢！」

三人「おう！／うん！」

ルナ「無理ー！早く倒してー！」

アマゾンキング「ゲエー！」

ガク「はっ！」

ガン！

ガクは盾でアマゾンキングの攻撃を防いだ

ジール「せいけんづき！」

アマゾンキング「ゲエー！」ジュワー

ジャスとマルスの方にも一匹駆け寄ってきた

ジャス「こつちにもきたな！かえん斬り！」

マルス「僕も行くよ！ぶんまわし！」

アマゾンキング「グエー！」ジュワー

一人になっていたルナにも一匹寄ってきている

ルナ「やだー！こつちに来ないで！メラミ！メラミ！メラミ！メラミ！メラミ！」

ルナは周囲にメラミをどんどん打っている

ガク「わっ！ル、ルナちゃん！落ち着いて！こつちにまで飛んできてる！」

ジール「あっちい！」

ジャス「ま、まずいつて！木に引火した！燃えてる！」

その後火は消し止められ、無事？にアマゾンキング達を倒した

ルナ「うう………ごめんなさい」

ルナはしょんぼりとしている

ジャス「仕方ないよ、カエルなんて女の子は苦手だもんね。でもほら、もういないからさ」

ガク「な、なんかいきなり疲れた気がするけど早く遺跡に着くといけどな」

マルス「あ、見て！あそこ、木がなくなってる！何かあるのかもよ！」

ジール「本当だ。開けた場所があるなんて聞いてないからもしかして遺跡の入り口かも」

遺跡

そこは山の斜面に大きな穴が空いているだけだった

ルナ「遺跡？これ、魔物の巣じゃないの？」

ジール「た、確かに。ガク、大丈夫なのか？」

ガク「合ってるはずだけど。一応中を見てくる。皆はここで待っててくれ」

ガクはゆっくりと中に入っていた

ジャス「じゃ、僕は準備しないとね」

ジャスはカバンから紙とペンを取り出した

マルス「絵でも描くの？」

ジャス「ふふ、違う違う。こここの遺跡の地図を書くの。構造を書いていつか来る事になっても迷わないようにね。これも大事な事なんだよ」

ジール「絵がそこまで上手じゃないからジャスに任せただ。これも調査の仕事の一つだ」

ルナ「じゃあ何か見つけたらジャスさんに報告すればいい？」

ジャス「うん、そうしてくれると助かるな。紙に書いておけるからね」

ガク「お待ちせ、大丈夫だよ。中は少し狭いけど、迷いそうな遺跡だった」

ガクが戻ってきた

ジール「ありがとな、ガク。それじゃあ本格的に調査開始だ」

事故

遺跡内部

中は光が全くなく、所々に柱だった物や破片が散らばっている

ジール「随分暗いんだな、ここ」

ルナ「怖い……。早く調べちゃおう」

ジャス「ガク、ライトで照らしてくれ。それで壁に沿って歩いて行こう」

ガク「任せておけ、一応マルス達も武器をすぐに出せるようにしておけよ？」

マルス「僕はもう大丈夫だよ。ほら、ルナも」

ルナ「う、うん。でもマルスから離れないからね」

ルナはマルスにくつつきながら片手剣を持った

マルス「もー、ルナは怖がりなんだから」

ルナ「いいじゃん！暗いのは怖いのにねえ、ジールさん、メラでも

う少し明るくしてもいい？」

ジール「あまり大きな炎は出さないで指に出す程度にしてくれ。魔物もいるだろうから警戒させないようにな」

ルナ「はい。メラ」

ルナは人差し指に小さな炎をだした

ジャス「大体ここは書いたよ。先に進もうか」

ガク「どこまで続いているんだろうな。狭いとは聞いていたが」

マルス「でも、奥は広そうだよ。もしかしたら上とか下にあるのかもしれない」

ジール「そうになると時間は少しかかりそうだな」

ルナ「やだよー。ん？」

ガク「どうしたの？ルナちゃん」

ルナ「今こっちでなんか光った」

ルナは暗闇を指している

ガク「んー?..... よく見えないな、魔物かもしれないからあまり刺激しないでおこうか」

ルナ「はい」

少し歩くと階段があらわれた

ジール「やっぱりここより下があるのか」

ジャス「元は遺跡って考えたらまあ普通かもね。長年の時で洞穴みたいになっただろう」

マルス「でも！やっぱり遺跡って事はお宝も！」

ジャス「ふふ、そうだね。期待していいかもしれないよ」

マルス「楽しみ！探検してるみたい！」

ガク「ジャス、子どもだからって甘やかすなよ？」

ジール「まあいいんじゃない？魔物もあまりいないみたいだし、少

しくらい探検の気分を味わってもさ」

下の階につくとそこはより一層暗く、ボロボロの壁も床に落ちてい
る

ジャス「この壁の破片ももしかしたら歴史的発見に繋がるかもしれないよ。帰ったら学者達を呼んでもう一度訪れてもいいかもね」

ジャスは破片を拾いながらそう言った

マルス「本当!?!僕も少し拾って持って帰ろー」

ガク「まあ、邪魔にならない程度にだよ」

ジャス「ん？」

ジール「どうした？ジャス」

ジャス「あそこ、僅かに光ってる」

ジール「え？」

ジャスが指す遠くにはほんのりと微かに青い光が下の床から漏れ
出ている

ジール「本当だ、何かあんのか？」

マルス「お宝だ!! 本物!!」

マルスは走り始めた

ルナ「キヤーツ!! は、走らないでマルスー!」

ガク「あ! ころ、マルス君!」

マルスはルナの手を引つ張りながら青い光の元まで来た

マルス「わく……… なんでここだけ青いんだろう」

ルナ「綺麗………」

ガク「ころ! 俺達から離れるなって言っただろ!」

マルス「うっ、ごめんなさい。でも気になっちゃって」

「?」
ジール「もうするなよ? 勝手に行動されると俺達は責任取れないぞ」

マルス「はい、ごめんなさい」

ルナ「もー、マルスのせいで私まで怒られた」

ジャス「まあまあ。でも、どうして青いんだろうね？宝石かな？」

ジャスは地面を触っている

ジール「お、あつちに階段もあるぞ。あれで下まで確認してみようぜ」

ジールは少し先にある階段に気付いた

ジャス「あ、待ってくれ。まだここの階層を書ききって」

ピシッ！

全員「え？」

全員の足下からひび割れたような音が聞こえた

ガラガラガラガラッ！！

マルス「わー！！」

ルナ「キヤーー！！」

マルスとルナの青く光る足下が崩れていった

ガク「!?マルス君!!ルナちゃん!!」

ガクはすぐに二人を追いかけて穴に飛び込んだ

ガラガラガラガラ!!

崩れていくのは止まらず、どんどん穴は大きくなっていく

ジール「うおおお!!」

ジャス「ま、まずい!崩壊してる!!」

ジールとジャスの元にもどんだん穴は広がっていき、ジールは下に向かう階段側へ、ジャスは上がってきた階段側に取り残された

ジール「くっ!ジャス!!城に戻って救援を頼んだ!俺はこのまま下に降りて三人をなんとか助ける!」

ジャス「頼んだよ!無理しないでね!」

ジャスは走って階段を登っていった

ジール「三人とも、無事でいてくれ!」

最下層

??? 「…………… ナ!…………… ル…………… ってば!」

ルナ「う、うーん……………」

マルス「ルナ!!」

ルナ「マルス?..... あ!!私、穴に落ちて」

マルス「気付いた!ルナ、怪我はない?」

ルナ「う、うん。痛くなかった」

ガク「は、はは。それならよかった、でもそろそろどいてくれるかい?」

ルナの下からガクの声があった

ルナ「え?あ!!ガクさん!ご、ごめんなさい!」

ルナはガクの上に乗っていた

マルス「ガクさんが僕達のクッションになってくれたんだよ!」

ルナ「ありがとう!怪我は?」

ガク「な、なんとか大丈夫.....ぐっ」

「ガクはお腹を押さえて倒れ込んだ」

ルナ「あ！ご、ごめんなさい！回復します！ホイミ！」

ガク「ハア、ハア。ありがとう、少しだけ楽になったかも」

しかし、ガクが持っていたライトからは血が流れているのが見える

ルナ「わっ！な、治らないよ！もつとかな？ホイミ！ホイミ！ホイミ！」

ガク「はは、ありがとうルナちゃん。でも、一旦終わりにして。今はなによりもここから出ないと。多少楽になったのは本当だから」

ガクはフラフラしながらも立ち上がった

マルス「ガクさん、無理しないで。きつとここ一番下だよ、ほら」

マルスが指す先には青い光を放つクリスタルのようなものがある
つも生えている

ルナ「これ…… さつきと同じ光」

ガク「なるほど、これが発光源だったのか。随分明るくなって見やすいね」

マルス「僕達、一番下まで来たなら上に登ればジュールさん達に会え

るよ。上の階段を探そう」

ガク「うん、そうだね。マルス君、ルナちゃん、俺はここにいるから二人はジールとジャスに合流してここから出るんだ」

マルス「なんで!?そんなの駄目だよ!」

ルナ「ガクさんはどうするの!?!」

ガク「俺はここで救援を待つ。今こんな状態で歩くのがやっつとだ。進もうにも二人の足手まといになるだけ。それなら、ここにいた方がまだ安全だ」

二人「やだ!!」

ガク「二人とも……聞いて。これは大事な事だよ、二人は必ず生きなきゃいけない。何があっても。今優先されるのは二人の命だよ」

マルス「絶対嫌だ!!そんなの聞きたくない!」

ルナ「ガクさんが死んじゃうのは絶対嫌だ!!私達だけ助かっていいわけないもん!」

マルス「ガクさん！三人でここを出よう！僕とルナで守るから！」

ルナ「私も怖いなんて言ってられない！ガクさんがいなくなるほうがずっと怖いから！」

二人はガクの手を引っ張っていく

ガク「マルス君……ルナちゃん……。わかったよ。でも、絶対に慎重に行くよ。ライトは無し。ゆっくりと上に登ろう」

二人「うん！」

その頃、デルカダール城 玉座の間

三人「えええ!？」

ジャス「大変申し訳ございません!!どうか救援」

マルティナ「大変だわ!!マルス！ルナ!!」

マルティナは顔を青くして猛スピードで部屋から出ていった

グレイグ「ひ、姫様!!」

ラーズ「ジャス、事故だから仕方ない。救援を今すぐ出す。グレイ

グ、王様とマルティナを交代だ。俺達は救援に向かう」

グレイグ「了解だ」

ジャス「ありがとうございます！」

ラーズ「ジャス、案内を頼むぞ。それとバンとダバン、ロベルトとガザルを呼んで出動できるようにしておけ」

ジャス「は!!」

強敵

その頃、遺跡内

ジール「くっ、嘘だろ……」

ジールの前にある階段は壊れており、降りる事も登る事も出来なくなっていた

ジール「まだ下があるつてのに、これじゃあガク達も登ってこれない。ロープがあればいいんだが……」

ジールは周りを見渡す

ジール「暗くて何があるかも見えないしな。まずい、どうすれば……」

ガク達は

ガク「ハア……… ハア………」

ガクはフラフラとしながら歩いている

ルナ「うう、ガクさん辛そう。やっぱりホイミを出来るだけした方が」

ガク「大丈夫、大丈夫。兵士だもの、これくらい耐えてみせなきゃ。それにルナちゃんは今俺が戦えない以上、大事な戦力の一人。MPは温存しておかないと」

マルス「階段……見当たらないよね。どこにあるんだろう」

ルナ「こんなに明るいのにね」

ガク達の周りには至る所にクリスタルがはえている

ガク「ここは遺跡なんかじゃなくて、昔の発掘場だったのかもしれないね。今でこそ使われなくなったんだろうけどさ」

ルナ「そういえばこの階、魔物が見当たらない。上はたまにいたのに」

マルス「確かに。一匹もいないって珍しいね」

ガク「今はありがたい限りだね……………ん？二人とも、あれ上に繋がる階段みたいだよ」

ガクは遠くの壁に階段があるのを発見する

マルス「本当だ！よし！早くジュールさん達と合流してガクさんを回復してもらわないと！」

三人は少し足早に階段に向かう

ルナ「あれ？階段の前にクリスタルがあって通れない」

階段の前には塞ぐようにクリスタルが生えている

ガク「跨いで行った方がいいね。一人ずつ行こうか」

マルス「じゃあ僕から行って次はルナ、その後にガクさんだね」

マルスはクリスタルの間を登って階段に向かう

ガク「気をつけるんだぞ」

マルス「うん、よいしょっと」

グラグラグラ!

その時、クリスタルが突然動き始めた

全員「!?!」

マルス「わ!!な、なに!?!揺れてる!」

ルナ「ど、どうなってんの!?!」

ガク「まさか!?!」

コーラルモンス「ギャオオオ!」

クリスタルだと思っていたものはクリスタルが生えた魔物だった

全員「魔物!？」

マルス「わー!!お、大きい!!」

ルナ「マルス!!」

マルスは頭のクリスタルに乗ったまま動けなくなっていました

ガク「まずいぞ!一旦逃げろ!!」

ルナ「う、うん!!」

その頃、遺跡入り口

ジャス「こちらです!」

マルティナ「四人とも、どうか無事でいて」

バン「ジャス、落ちた場所はどこだ？」

ジャス「はい!案内します!」

ラース「ロープは？」

ガザル「持つてきてあります。長めの物を持つてきましたが、深さによつてはどうなるか」

ラース「大丈夫だと信じておこう。ジャス、魔物はどれくらいいる？」

ジャス「僕達はほとんど遭遇しませんでした。隅にいるか、離れていくかだったので」

ダバン「それなら襲われてる心配はそこまでしなくてもいいかな」

ラース「よし、行くぞ！」

遺跡内部

ギャオオオ!!

ジール「!?魔物の声!?下からだ!まさかガク達が襲われてんのか!?.....くっ、行くしかねえか!」

ジールは壊れた階段を飛び降りた

ドスン！

ジール「くっ！よ、よし！ガク、マルス、ルナ！待ってる！助けに行く！」

ジールは走って先に進み始めた

最下層

コーラルモンス「ギャオオオ!!」

ドガアン！

ルナ「キヤーツ！」

ドガアン！

ガク「ぐっ！」

二人は走り回りながらギリギリで攻撃を避けていく

マルス「わ、わー！と、止まれー！」

マルスは落とされないように必死にクリスタルを掴みながら抵抗している

ガク「ぐっ……ハア、ハア」

ガクは体力がなくなってきたのか、走るスピードも遅くなってきた

ガク「ハア……血が……足りない」

コーラルモンス「グオオオ!!」

足を止めたガクに魔物からの攻撃が繰り返される

ルナ「駄目!!」

ドガアン!!

パラパラ……

ルナはガクをなんとか引つ張り、攻撃の軌道から外れさせた

ガク「ありがとう、ルナちゃん。でも、もう俺体が動かないみたいだ」

ルナ「そんな……。マルス!!」

マルス「と、止まった!よいしょ!」

マルスはクリスタルから飛び降りた

ルナ「逃げてばかりじゃ駄目みたい!」

マルス「うん!僕達で相手できるかわからないけど!」

二人は武器を構える

ガク「駄目だ。逃げるんだよ、二人とも」

ルナ「やだ！ガクさんも一緒！」

マルス「僕、さっき三人で出ようって言ったでしょ！見てて、ガクさん！こんなやつ、僕達が倒してやるんだから！」

コーラルモンス「グウウウ……」

マルス「ルナ、全力だよ！僕も大剣じゃなくて、慣れた片手剣にするから！かえん斬り！」

マルスは魔物に斬りかかる

ルナ「もちろん！ヒヤド！」

マルスに合わせて氷の刃も数個飛んでいく

マルス「とりやー!!」

ルナ「メラミ！」

ルナのメラミがマルスの剣についた火と合わさり更に大きな炎となる

ザクツ!

マルス「どうだ!」

コーラルモンス「??」ポリポリ

魔物はまるで気にしてないかのように攻撃が当たった場所を搔いている

マルス「そんな!」

ルナ「通じてないよ!」

ガク「そうだと思う。こいつは、ソルティアナ周辺でもかなり強い部類の魔物。その更に更に変異種。ジール達がいてもダメージを与えられるかどうか……」

マルス「嘘…… そんな強いのを僕達だけなんて……」

コーラルモンス「グオオオオ!」

ガク「避けるんだ!二人とも!!」

ドガアン!!

その頃、穴があった場所

ジャス「ここです。ここから崩れていった」

ロベルト「かなり大きい穴だな！この階ほぼ全部が崩落したのか」

マルティナ「下がよく見えないのは……怖いわね」

ラーズ「マルティナからしたらある意味ありがたいんじゃないか？
まあそれなら手段は一つだけのようだな」

バン「そうですよね！行きます！」

ラーズ「待て、最後まで聞け」

バン「ぐえっ！」

ラーズは今にも飛び降りようとしているバンの首を引っ張った

ラーズ「飛び降りて怪我しても余計な手間が増えるだけだ。恐らくこの下の階は穴はそこまで大きくないだろう。ここからロープを垂らして、それにつたいながらまず一つ下の階に降りる。それを繰り返ししていくぞ」

ダバン「それなら安全ですね。じゃあ俺、ここでロープの押さえ役やっています」

ラーズ「頼むぞ、ダバン。全員降りたらダバンも飛び降りてこい。数人下にいれびなんとかなる」

バン「ゲホツ！ゲホツゲホツ!!で、でも、それだと時間かかりますよ！マルス達が！」

ラーズ「俺達の子どもだ。簡単に諦めるやつに育てた覚えはない。きっと今頃脱出しようとしているはずだ」

マルティナ「ラーズ……ふふ、そうね。あの子達が簡単に諦めるなんて思えないわ。でも、出来るだけ早く合流はしないとね」

ラーズ「そうだな。早足で進めていくぞ」

脱出

最下層

コーラルモンス「グウー？」

魔物の攻撃で土煙が起こり、魔物はマルス達を見失っている

ジール「ふうく……危機一髪ってどこか？」

マルス達に攻撃が当たりそうになった瞬間、横からジールが飛び込み二人を掴んで走り抜けた

ルナ「あ、ありがとう、ジールさん！」

ジール「ガク、立てるか？ベホイミ」

ジールはガクの腹の傷に手を当てる

ガク「ハア……ハア。マシになってきた。だが、血を流しすぎたな。クラクラする」

ジール「こいつ、頭に生えてるのがクリスタルなだけでコーラルモンスだな。ソルティアナ海岸にいる強い魔物だ。俺一人じゃあキツイ」

マルス「じゃあ」

ジール「ガク、俺が背負うから上まで逃げるぞ。マルス達も必死に走れ」

全員「うん！」

ジール達は階段に向けて走っていく

コーラルモンス「グオオオオ！」

気付いた魔物が四人を追いかける

ルナ「わ！き、来たよ！」

マルス「とにかく上にいこう！地面を泳いでるって事は上に逃げれば！」

マルス達は階段を勢いよく登っていく

ジール「よっ！ほっ！」

ジールもなんとかスピードを殺さずに登っていく

コーラルモンス「グウウ……」

魔物は階段の前で立ち止まっている

ガク「やはり登ってはこられないようだな」

マルス「ハア、怖かった。これで一安心だね」

ジール「よし、このまま上に行くぞ」

その時

ドオオン！

全員「!？」

コーラルモンスが地面を勢いよく飛び上がり、マルス達のいる階までやってきた

全員「ええ!!？」

コーラルモンス「グオオオオ！」

魔物はマヒヤデドスを繰り出した

パキパキパキ!!

この階全体が氷に包まれていく

ジール「逃げろ!!マヒヤデドスだ！」

全員一目散に走り出す

マルス「階段関係ないじゃーん!!」

ルナ「やだー!!おかあさーん!おとうさーん!」

ジール達の後ろからはどんどん氷柱が迫り来る

その頃、レース達

グオオオオ!

全員「!?!」

コーラルモンスの聲がここまで響いてきた

バン「今のは!!」

ダバン「あまりいい状況ではないみたいだな」

ジャス「ジールが先に向かってはいるはずなんですが、どうなっているんでしょうか」

マルティナ「レース、もうそろそろ」

レース「そうだな、流石に不安になってきた。マルティナ、捕まってるよ?お前ら!このままもう飛び降りるぞ!」

全員「はい！」

全員が穴に向かって飛び降りた

その近くでは

ジール「あ!!ここは！」

ルナ「嘘!!?階段が!!」

上に登るための階段が壊れていた

ガク「マジかよ……」

コーラルモンス「グオオオオ！」

マルス「わ!!き、来ちゃったよ！」

ジール「くっ!ガク!子ども達だけでも！」

ガク「ああ！」

ガクはジールから降りて近くにいたルナを抱きしめる

ジールも側にいたマルスを抱きしめた

コーラルモンス「グオオオオ!!」

魔物の攻撃が四人に振り下ろされた!

ドスン!!

コーラルモンス「グウ………」ドサ

バン「おっしや!クツションだ!!」

ラーズ「おお、大ピンチだった所みたいだな」

マルティナ「マルス!ルナ!」

魔物の頭にラーズ達が降ってきた

マルス「父さん!母さん!」

バン「ガク!ジール!無事か!」

ダバン「ガクが怪我してるな。ベホイムだ」

ロベルト「よく耐えたな、二人とも」

「ガザル「マルス達を守ってやってたんだな。流石だぜ」

ジール「助かった〜……」

ジールはその場に座り込んだ

ガク「ありがとうございます、ダバンさん。マルス達も本当によく頑張ってくれたんです」

コーラルモンス「グウウウ」

魔物はフラフラと起き上がった

全員「!!」

コーラルモンス「グオオオオ！」

マルス「また起きた！父さん、母さん、こいつ凄く強いの！」

ルナ「私達の攻撃全然効かなかったんだよ！」

ラース「マルティナ」

マルティナ「ええ、もちろん。準備はいつでも出来てるわ」

二人は同じ構えを取った

ジャス「バンさん、行かなくていいんですか？こいつ、結構強い部類の魔物では」

バン「え？いやいや、師匠とマルティナ様に割って入るのは不可能だぜ。まあ見てろよ、お二人凄えからよ」

コーラルモンス「グオオオオ！」

魔物はマヒヤデドスを繰り出した

二人「はっ！」

ラーズとマルティナは出来上がっていく氷柱を足場にして魔物に向かっていく

ラーズ「ふんっ！」

ラーズは魔物の目の前にやってきて蹴りや拳を連続で打ち込んでいく

コーラルモンス「グウウウ……」

マルティナ「はっ！」

更にマルティナがその後ろに降りてラーズと全く同じ速度で蹴り

や拳を繰り出していく

二人「疾風双脚乱舞！」

コーラルモンス「グオオオオ……」

二人「終わり！」

ドガアン!!

最後にリースの拳とマルティナの蹴りが力強く入った

コーラルモンス「グウウ」ジュワー

ジール「凄い、あんな息ピッタリな連携が取れるなんて」

ジャス「互いの姿は見えないはずなのに」

マルティナ「ごめんなさい。三発目と五発目、少し遅れたわね」

リース「あんな誤差だろ。久しぶりにやってこれなら上出来だ」

バン「な？俺が入る隙ないんだ」

ガザル「安心して任せられるんだよな」

ガク「流石ラーズ將軍にマルティナ様！あつという間ですね！」

マルティナ「ふふ、ありがとう。ガク、ジール、魔物からマルス達を守ってくれて本当にありがとう」

ラーズ「そうだな、よくこんな狭い場所で逃げ切ってくれた。二人がいなかったらマルス達は大変な事になってただろう」

ガク「そ、そんな事ないですよ！寧ろ俺が足手纏いになっちゃって」

マルス「そんな事ないよ、ガクさん。僕達が穴に落ちた時、ガクさんが守ってくれなかったら絶対ガクさんより大怪我してた！」

ガク「それは……そうだね。マルス達、ガクを守ろうと二人での魔物に立ち向かったんです。怖かったはずなのに立派ですよ」

ガクはマルスとルナを撫でながら言った

マルティナ「そうだったの、マルス達も頑張ったのね。偉いわ」

ルナ「えへへ、暗いの怖かったけど途中から少し平気になってきたの」

ロベルト「まあ一旦戻りましょう、ラーズ將軍、マルティナ様」

ラーズ「そうだな。つて……この階段、壊れて登れないのか」

バン「本当だ！え!?ど、どうすんですか!?出られないですよ!」

ガザル「確かりレミトは………マーズしか使えないか」

ラーズ「お、それがあつたな。バン、お前出来るだろ?」

バン「え?俺?」

ダバン「ラーズ將軍、バンに魔力はありませんよ?」

ラーズ「わかってるさ。ほら、あれだよ。ソップア。持ってるだろ?」

バン「あー!!なるほど!持ってますよ!はい!」

バンは袋から透明の玉を取り出した

ラーズ「魔力空じゃねえか。ちゃんと入れておけよ」

バン「前に練習で使ってたら空になっちゃって」

ラーズ「まあいい。よつと」

ラーズは魔力を入れた

マルティナ「なにこれ？」

ラーズ「魔力を溜めておけば誰でも魔法が使えるようになる魔法道具だ。よし、全員手を繋げよ」

全員輪になって手を繋いだ

ラーズ「後は構造と式を……………よし、リレミト！」

パン！

遺跡前

マルズ「外だー！」

ルナ「少し眩しいよ」

ガク「うう、暗い場所に慣れたから目が……」

マルティナ「ふふ、仕方ないわよね。さあお城に帰りましょう」

その後、デルカダール城 玉座の間

デルカダール王「うむ、怪我也少ないようで安心した。マルス、ルナ、楽しかったか？」

マルス「ハラハラしたよ！楽しかったかはわからないけど、探検みたいだった！」

ルナ「私はもういいかも。暗いの怖いもん」

グレイグ「王よ、マルスとジャスから壁画のカケラと思われる物が来ました。見覚えはありますか？」

デルカダール王「ふむ………。いや、わからんな。学者に渡してもらおう」

マルティナ「ラーズ、また行く事になるかもしれないわ」

ラーズ「そうだな。そしたら今度はバン達にも行かせてみるか」

その後、マルスとルナの部屋

ガクがやってきていた

マルス「どうしたの？ガクさん」

ガク「二人には今回とつてもお世話になったからね。俺を助けてくれたお礼だよ。はい、これ」

ガクはマルスに大剣を、ルナには槍をプレゼントした

ルナ「え!?!ほ、本物だ！いいの!?!」

ガク「うん、もちろん。これからも一緒に訓練頑張ろうね」

マルス「やった!!大剣は練習用のしか持ってなかったの!?!
う……………でも、結構重たい」

ルナ「私も……………少し大変」

ガク「そうかなと思ったよ。でも、大きくなったらきつと使えるからその時に備えてね」

ルナ「ありがとう、ガクさん！大切にするね！」

マルス「明日グレイグさんに自慢する！それでいつか本当にこの大剣で魔物を倒すんだ！」

ガク「その時は是非俺にも見せてくれよ。それじゃあ本当にありがとう、またこれからも頑張ろうね」

星夜祭

それから一ヶ月後、デルカダール城下町

グラジー

店の片付けが終わった後、ビルとマヤが話していた

ビル「そうか、楽しんでこいよ」

マヤ「うん！お土産買ってくるね」

マドリー「あら？どこか行くの？マヤちゃん」

マヤ「あ、マドリーさん。そうなんだ、明日から二日間故郷のクレイモラン王国に帰ろうかなって」

マドリー「そうだったのね。ふふ、そんな二日だけじゃなくてもつとゆつくりしてきていいのよ。マヤちゃんにグリーン君はいつも働きすぎってくらいなんだから」

マヤ「いいの、ここの方が私は好きだから」

グリーン「そういえばマヤさんってクレイモラン王国出身なんだったね。僕のいたナギムナー村とは正反対の場所らしいね。雪って一度

でいいから見てみたいんだ」

マヤ「そうなの？ 珍しくもないよ、あんなの。結構邪魔だったりもするからね」

テルマ「俺も雪を実物で見た事ないですね。本や写真くらいしか」

チャム「ふわふわしてて冷たいんでしょ？」

マヤ「そうそう、積もると凍ったりして大変だけどね」

ビル「それならグリー、お前も行ってみたいんじゃないか？」

グリー「え？ 僕もですか？」

マドリー「そうよ！ 折角だからデートしてきなさい！ マヤちゃんに故郷を案内してもらえばいいわ！」

グリー「えっと…………… 大丈夫？ マヤさん」

マヤ「ま、まあ…………… うん、いいよ。私もグリーがいてくれると少し楽しくなりそう」

グリー「なんか歯切れが悪いマヤさんって珍しいな）無理しなくていいんだよ？僕は別に無理してまで」

マヤ「ううん、大丈夫。デートしよつか、グリー」

グリー「ふふ、わかった。あ、何が必要なの？」

マヤ「もちろん寒さ対策だよ。長袖やコート、少し深めの靴とかないと無理だよ」

グリー「ええ!?!ぼ、僕そんなの持ってないよ」

マヤ「あ、そつか。ナギムナー村やここだと必要ないもんね。じゃあ明日行く前に少しグリーの分揃えないとね」

グリー「ごめん、マヤさん。手間かけさせて」

マヤ「いいの、いいの。それも楽しみにしておくね。それじゃあお疲れ様でしたー!」

グリー「お疲れ様でした」

マヤとグリーは出ていった

チャム「いいなー、グリーさんばっかり」

テルマ「仕方ないだろ、二人は恋人同士なんだ。今度機会があったら行ってみようぜ」

その後、デルカダール城 食事場

デルカダール王「ほう、グリーとクレイモランでデートか。よいではないか」

マヤ「うん。少し楽しみ！」

マルティナ「そういえばカミュから手紙でお誘いが来てたわね。確かブルームーンって書いてあったかしら」

ラーズ「そうだな、月が青く光る珍しい日だ。クレイモランで数年に一度しか見られない光景でクレイモラン王国でその日がやってくるとお祭りを開いていたな」

デルカダール王「そんな日があったのか。わしも知らなかったな」

マルス「月が青く光るの!?!なにそれ!凄いい!」

ルナ「私も見たい！マヤお姉ちゃん、私も連れてって！」

グレイグ「こら、ルナ。マヤはグリーとデートなのだぞ。あまり邪魔をするんじゃない」

ルナ「えく……」

マルティナ「そうだわ！私達は忙しくて断ったけど、マルス達だけならカミュに任せてもいいんじゃないかしら？確かシルビアの公演もやってるってあったわね」

マヤ「確かに兄貴なら大丈夫だと思うよ」

ラース「なるほど。マルス、ルナ、カミュと一緒にでもいいか？」

二人「うん！」

ラース「決まりだな。マルス、ルナ、お祭り楽しんでこいよ。色々やってるみたいだからな」

デルカダール王「しかし、カミュを信頼していないわけではないが

一人で二人も面倒を見るのは大変ではないだろうか」

マルティナ「確かにそうですね。二人ともお祭りで騒ぐのはラースに似てますからね」

ラース「そ、そんな事ないだろ」

デルカダール王「グレイグよ、明日マルス達と共にお主もついでやってくれ」

グレイグ「わ、私もですか!?!」

マルティナ「カミュとグレイグの二人がいれば大丈夫なはずだわ。マルス達をお願いね、グレイグ」

グレイグ「…………… 了解しました。ラース、俺の分も頼んだぞ」

ラース「わかったよ。土産や祭りの雰囲気とか教えてくれよな」

次の日、デルカダール城下町

商店街

グリー「こ、こんな分厚いの履くの!?!」

グリーは厚底のブーツを見て驚いている

マヤ「そんな大した事じゃないよ、グリー。これくらいないと今の靴だと雪に埋もれちゃうよ」

グリー「だって、暑くなるよ。コートだって服だってたくさん着てるのに」

マヤ「ここだと暑いと思うけど、あつちに着いたら気温は凄く変化するんだよ。ここよりも二十度くらい下がるよ」

グリー「そ、そんなに………。デルカダールだってナギムナー村に比べたらかなり涼しい場所なのに」

マヤ「だからこのブーツは必須。次はマフラーとか耳当てとか買うよ」

グリー「まだ着るの!?!」

その頃、デルカダール城 大広間

グレイグ「よし、ちゃんと着込んだな」

厚着をしたマルス達とグレイグが出かけようとしていた

マルス「暑いよ、グレイグさん」

ルナ「まだ脱いでいいでしょ？」

グレイグ「すぐ寒くなるからこのままだ、二人とも」

デルカダール王「それでは楽しんでくるのだぞ」

グレイグ「行ってまいります、王よ」

マルス「じゃあねー、じいちゃん」

ルナ「シロにも会ってくるねー」

星夜祭2

クレイモラン王国

城門前には大きく看板があり、星夜祭と青い文字で書かれている。周りにも観光客や港からやってくる人達がたくさんいる

グレイグ「ほう、中々賑わっているようだな」

マルス「これが昨日父さん達がいったお祭りなんだね。えつと……せいやささい？」

ルナ「マルス、違うよ。きっとせいやさいだよ。綺麗なお祭りな感じ」

グレイグ「ルナは魔導書で文字に慣れているな。カミュの家に向かう時に雰囲気も見てみるか」

二人「うん！」

広場

広場周辺にはたくさんのお店があり、人も賑わっている。またその奥にはシルビアが使うと思われるステージが立てられており、既に人が集まりつつある。星形や月のモニュメントなども至る所に設置され、祭りの名前にふさわしい雰囲気となっている

ルナ「見てみて、グレイグさん！あの青い月の飾り綺麗！キラキラしてるよ」

グレイグ「おお、本当だな。雪の光に反射している。しかし、青い月など見た事がないが本当にあるのだろうか」

マルス「でも父さんはあるって言ってたよ？」

グレイグ「まあ……：：：そうだな。ラーズは俺なんかよりよっぽど様々な事を知っているからな。きっとあるのだろう」

ルナ「じゃあグレイグさんも見た事ないんだよね？青いお月様」

グレイグ「そうだな。ある事すら昨日初めて知った」

ルナ「じゃあ今夜一緒に頑張って見つけようね」

マルス「グレイグさんなら背が高いからすぐだよ」

グレイグ「ふっ、そうだな。一緒に見れるといいな」

カミュとマヤの家

コンコン

マルス「カミュー、シロー、いるー?」

ガリガリ

扉を引つ搔くような音が聞こえる

マルス「あ!きつとシロだよ!このすぐ向こう側にいるんだよ!」

マルスは扉を開けようとする

グレイグ「待て、マルス。相手が開けるまで待てといつもレースから言われているだろう」

マルス「うっ、そっか。カミュー、シロが可哀想だよ、早く開けて」

ガチャ

シロ「バウ!!」

マルス「シロ!!わわっ!!」

シロ「クウ〜」

シロはマルスに喜んで飛びつき、マルスを舐めている

カミュー「大興奮してんな、シロ。久しぶりだもんな。んで、なんで

マルス達がここにいんだ？確かマルティナの手紙からでは忙しいと
かって」

グレイグ「急に変更してしまつてすまなかつたな、カミュ。昨日こ
こで祭りがある事を話したらマルス達が行きたいと言い出してな。
姫様達は忙しくて来れないが、子どもだけならカミュは面倒を見てく
れるのではと考えたのだ」

ルナ「カミュさん！今日つて月が青く光るんだよね？私、見てみた
い！」

マルス「僕も！」

マルスとルナはシロとはしゃぎながら話している

カミュ「なるほど、グレイグのおっさんはいいのか？」

グレイグ「カミュだけでは興奮したマルスとルナを対処するのは大
変なのではとなつてな。俺も来る事になつた」

カミュ「まあそうだな。その配慮はありがてえ。だが、青い月が見
られるかどうかは天気次第だぜ。昨日はバツチリ見えてたが今夜は
どうなるかわかんねえぞ」

ルナ「えー！昨日来ればよかつたー」

カミュ「まあ二人がいい子にしてたらまた見れるかもしれねえな」

ルナ「ずっといい子だよ！マルスがちよつといたずらするだけ！」

マルス「仕方ないよね！」

カミュ「やれやれ、イタズラ好きは兄貴の血か」

グレイグ「そうだ、これも言っておかねば。今日マヤとグリーもここに来るそうさ。デートらしいがな」

カミュ「ん？グリーも来んのか。マヤからは来るのは聞いてたがそれは聞いてなかったな。まあ構わねえけどよ」

グレイグ「雪用の準備をしてから来るらしいぞ。まあ本人達で好きに過ごした後こっちに来るだろうな」

カミュ「まあそうだろうな。俺達も自由に過ごそうぜ。まずは広場に行ってみるか。シルビアのおっさんがショーを開いてんだ」

ルナ「シルビアさんのショー、私好き。キラキラしてて楽しく見れ

るし、カッコいいもん」

「マルス「シロはどうするの?」

カミュ「シロは観光客達に怖がられると悪いから、いつもはシケスピア雪原で遊ばせてるんだ」

シロ「バウ!」

グレイグ「まあそうか。クレイモランはデルカダールほど魔物に慣れてはいないから当然だな。ブレイブ達のおかげではあるのだが」

ルナ「仕方ないよね。シロ、一人で大丈夫?」

シロ「バウ!」

カミュ「結構友達多いみたいだぜ。大人数で遊んでるのを見たことがあるからな」

マルス「それなら寂しくなさそうだね。また後でねー、シロー」

シロ「バウ!」

シロは雪原に向かって走っていった

グレイグ「では俺達も向かおう」

カミュ「どうせならシルビアのおっさんにまた会っておくか？待機してるテントも設置されてたぜ」

グレイグ「そうだな。少し驚かせてやろう」

テント前

係員「すみません、こちらは関係者以外立ち入り禁止です」

グレイグ「すまない、中にいるゴリ……シルビアの知り合いなのだ」

係員「そ、そうだったのですか。少々お待ちください」

係員の人は中に入っていった

その後

シルビア「やだ〜！グレイグ達まで来てくれたの？嬉しいわ！ありがとう〜」

カミュ「よ、シルビアのおっさん。様子見に来たぜ」

マルス「こんにちは、シルビアさん」

ルナ「今日のショーも楽しみにしてる！」

シルビア「うふふ、ありがとう、ルナちゃん。少しお話ししましょう、入って」

テント内

シルビア「セーニヤちゃん、グレイグ達も来てくれたの」

中にはセーニヤがいた

セーニヤ「まあ！カミュ様にグレイグ様、マルス君にルナちゃんまで」

グレイグ「おお、セーニヤもいたのか。ベロニカもいるのか？」

セーニヤ「お姉様は本日里で魔法の勉強をしているそうであれなかつたので、私一人ですわ」

カミュ「そうなのか、なら俺達と祭り回るか？」

セーニヤ「よろしいのですか？」

カミュ「俺は構わねえぞ」

グレイグ「俺も構わん」

マルス「セーニヤさんも一緒に行こう」

ルナ「美味しいスイーツ教えてー」

セーニヤ「ありがとうございます、それでは私も一緒にさせていただきます」

シルビア「それじゃあまずはアタシのショーで楽しんでいって！絶対笑顔にしてみせるから！」

その頃、クレイモラン王国 城門前

グリー「わく……」

グリーは周りの雪景色に見惚れてキョロキョロしている

マヤ「わく、本当に人が多いや。グリー、気をつけないと迷っちゃうかもよ……グリー？」

「グリー「本物の雪だー、冷たい」

グリーはしやがんで雪を手にとって眺めている

マヤ「ふふ、雪でこんなに感動してる人初めて見た。どう？」

グリー「冷たくて気持ちいい。あ、溶けてきた。これが元は水なんて思えないや」

マヤ「今クレイモランではお祭りやってるんだ。星夜祭っていうの」

グリー「そうなんだ。って、看板がこんなに大きくあるね。雪に夢中で気づかなかった。どんなお祭りなの？」

マヤ「ブルームーンっていうこの季節に青い月が見れるかもしれない日になると開かれるんだ。何度か見た事あるけど、かなり綺麗なんだよ」

グリー「月が青くなるの!?そんなの知らなかった!」

マヤ「そうだよね。もしかしたら今夜見れるかもしれないね」

グリー「ふふ、そうだといいな。僕も見てみたいし、実際に見てビルさん達にお土産話にもなるからさ」

マヤ「さ、入ろうか。きっと色々お店出てるからさ」

グリー「うん…………… うわっ!!」

グリーは足下の氷で滑りそうになった

マヤ「わ!だ、大丈夫?グリー」

グリー「な、なんとか。こんなにツルツルしてるなんて」

マヤ「氷って怖いよね。雪だとこんなに綺麗なのに、固まると怖いんだよね」

グリー「よくマヤさんは平気だね」

マヤ「…………… 昔からだからね。もう慣れちゃった」

マヤは少し下を向いた

グリー「(なんか…………… 変な感じするな) そうだよな、ここに住んでたんだもんね」

マヤ「うん……」

グリー「…… あ！広場でなんか人がたくさん集まってるよ！」

マヤ「え？あ、本当だ。何かやってるのかな。行ってみようよ」

グリー「うん！」

星夜祭3

広場

ガヤガヤ

マヤ「凄い人混みだね。座ったりしてる人もいるけど、何かあるのかよく見えないや」

グリー「えつとねく…… あ!!シルビアさんのショーだつて!」

グリーは背伸びをして看板を確認した

マヤ「え!?!シルビアさんがきてるんだ!へく、それならこの人混みも納得だね」

グリー「前にデルカダールでショーしてた時以来だな。久しぶりに見るよ」

マヤ「よく見えないや、シルビアさんもういる?」

グリー「いや、まだいないみたい。ショーがそろそろ始まりそうって所かな」

マヤ「そっか、それならギリギリ間に合ってよかった」

グリー「でもマヤさん見えないよね？」

「マヤ「まあ、雰囲気でなんとか」

グリー「出来るかわからないけど、僕が背負えるかもしれないよ」

グリーはしやがんだ

マヤ「え!?!いや、いいよ、そんなの。重たいだろうし、恥ずかしいって」

グリー「た、多分大丈夫だと思う。一旦やってみようよ」

マヤ「え、えく……………。わかった、無理ならすぐ諦めてね？」

マヤは恐る恐るグリーの背中に乗った

グリー「よ…………… いっしょっ！」

マヤ「凄ーい、グリー！よく見えるよ！」

グリー「ギリギリなんとかかなりそう。途中休憩いれないとかもしいれないけど」

マヤ「そ、そんなずつとは甘えてられないよ。キツくなったらすぐ降りるから」

その後、テント内

マヤ「シルビアさん！今回のショーも凄く面白かったよ！」

シルビア「あら！マヤちゃん、グリーンちゃんも！二人も見てくださいのね、ありがとう。って、グリーンちゃん、大丈夫？」

グリーン「い、一応…… 立ててはいます」

グリーンは汗だくになって息切れしている

マヤ「ショーがよく見えないって言ったらグリーンが私を背負ってくれたんだよ。キツくなったら言ってってお願いしたのに、グリーンったら無理してこんなに」

シルビア「あらあら。カツコイイ所見せたかったのよね？グリーンちゃんは。わかるわ、好きな女の子の前だもの。冷たい飲み物持ってきてあげるわね」

グリーン「あり…… ありがとうございます」

その頃、商店街

雑貨屋

マルス「グレイグさん！見てこれ！この水晶の中、色々入ってる！」

マルスは手にスノードームを持ってきた

グレイグ「おお、スノードームか。綺麗な物だな。だがマルス、それは割れやすいからな。あまり変に扱うなよ？」

マルス「はーい！」

ルナ「可愛いお花ー。これ、なんていう花なの？カミュさん」

ルナは店前に飾られている赤や紫の花びらがハートの形をした花をみている

カミュ「あー、悪いけど俺はそういうのは詳しくねえからな」

セーニヤ「綺麗に咲いていますわね」

イリーナ「ふふ、その花可愛いでしょ？気に入ってくれたの？」

ルナ「あ、はい。ハート形でとても可愛いって思ってる」

セーニヤ「こちらも売り物なのですか？」

イリーナ「いえ、申し訳ありませんがこちらは非売品なんです。デルカダールの兵士さんからの大切な贈り物です。」

ルナ「え？デルカダールの？」

グレイグ「すまない、俺達はデルカダール王国の城に住んでいるのだ。その者の名前は？」

イリーナ「まあ！そうだったんですか！それならご存知かと思われ
ます。ギバさんという方です。このお店を救ってくれただけでなく、
私達夫婦の命の恩人なんです。アツシユー！」

アツシユ「どうした？イリーナ。あ、お客様もいらしたのですね。
ごゆっくり見てみてください」

イリーナ「ここのお客様達、デルカダール王国のお城に住んでいらっ
しやるんですって。ギバさんの事をご存知みたい」

アツシユ「おお！本当ですか！」

ルナ「命の恩人？ギバさん凄い事したの？」

アツシユ「話すと長くなるのですが、氷漬けにされていた俺を助けるためにヒノノギ火山の中にあると言われるたいようの石を取ってきてくれたんです」

イリーナ「それがなければアツシユは今頃死んでいたと思います」

セーニヤ「そんな事があったのですか！氷漬けになってしまっうなんて」

カミュ「へー、ギバのやつやるじゃねえか」

グレイグ「なるほど。少し前にクレイモランで人助けをしたと言っていた。ヒノノギ火山にも行ったと聞いて、いつ行ったのか知らなかったがそんな事があったのか」

イリーナ「そうだ！ねえ、君。そのスノードーム気に入った？」

マルス「うん！こんなに綺麗だし、どうやって中に入れたのかも気になる」

イリーナ「ふふ、ありがとう。それならそのスノードーム持って行って。お姉さんからのプレゼント」

マルス「え!?!いいの!?!」

イリーナ「うん、いいよ」

アッシュ「皆様もよかったら何かお一つご自由に持って行ってください」

カミュ「い、いや、流石に俺達までそんな事するわけには」

イリーナ「ギバさんもいつもそう言ってくれるんですけど、私達としては何かお礼をしたいと思います」

グレイグ「大変ありがたいのだが、子ども達だけにして俺達は気持ちだけ貰っておこう。ルナ、お前もよかったら何か選ぶといい」

ルナ「うん!」

セーニャ「とても品揃えが豊富ですね、こちらのお店。見ていて飽きませんわ」

イリーナ「ありがとうございます。父からの伝統なんです。品揃えだけならクレイモランでもトップレベルなんです」

セーニヤ「それは凄いですわ！確かにこんなにたくさんあるお店は中々お目にかかりません」

アツシユ「お土産品だけでなく食料品や酒、簡単な武器の手入れ用品に衣服なんかもあります」

ルナ「お姉さん、私これにするー」

ルナは小さめのハーブキットを持ってきた

イリーナ「わかったわ、教えてくれてありがとう」

カミュ「それじゃあ本当にありがとう。子ども達が迷惑かけた」

アツシユ「いえいえ！とてもいい子達ですよ」

グレイグ「ギバにも伝えておく。ほら、マルス、ルナ。お礼は？」

マルス「ありがとう！」

ルナ「ありがとうございます！大切にします！」

イリーナ「じゃあね。またのご来店をお待ちしております」

その頃、マヤ達は

マヤ「大丈夫？グリー」

グリー「えへへ、ごめんね？情けなくてさ」

広場にあるベンチに座って休憩していた

マヤ「そんなの大丈夫だよ。私もシルビアさんのショーで興奮しちゃったし」

グリー「僕も結構楽しかったよ。でもそろそろお腹空いてきたな。マヤさん、どこかいい場所知ってる？」

マヤ「確かにもうお昼にしたいよね。あ！いい酒場があるよ！他国の酒場を視察してさ、私達のグラジーに活かせる場所ないか探そうよ！」

グリー「あ、いいね、それ。それじゃ案内よろしくね」

マヤ「うん、こっちだよ」

星夜祭 4

商店街

カミュ達は暖かい汁物を全員で飲んでいた

セーニヤ「ハア……… 温まりますわね」

グレイグ「ああ、本当だな。寒いのが苦手な俺にはありがたい限りだ」

マルス「美味しかったー。お魚も柔らかくて食べやすかった」

ルナ「おかわりって出来るかな？」

カミュ「出来ると思うけど他の店も見てみた方がいいんじゃないかねえか？」

ルナ「そっか、それじゃあそうするね」

グレイグ「俺はもう一つ貰おうか。もう少し温まりたいからな」

セーニヤ「あら？ルナちゃん？マルス君？」

カミュ「ん？どこ行った？少し目を離した隙に」

セーニヤ「遠くには行っていないと思うのですが…………… あ！あの
お店にいらっしやいます！」

ルナ「綺麗なネックレス……………」

ルナはピンクパールがついた銀色のネックレスを見ている

マルス「ルナ、こういうの好きだもんね」

ルナ「うん、いつかつけてみたい」

カミュ「こら、お前ら。勝手にどこか行くな」

マルス「えー、カミュ達が遅いんだよー」

カミュ「ああ？……………ごめんなさいは？」

カミュはマルスの頬を引っ張っている

マルス「ひよめんなしやい」

セーニヤ「ルナちゃん、このネックレス気になりますか？」

ルナ「うん。私にはまだ似合わないけど、お母さんがつけたら似合うと思う」

セーニヤ「私はルナちゃんがつけても似合うと思いますわ」

ルナ「そ、そうかな？まだ早い気がして」

セーニヤ「女の子ですからこういういった物が気になるのは当然ですわ。一度試してみるのがいいんですよ。すみません、着けてもよろしいですか？」

店員「はい、ご自由にどうぞ」

セーニヤ「ありがとうございます。はい、ルナちゃん。着けた方がいいですか？」

セーニヤはルナが見ていたネックレスを見せた

ルナ「じゃあ、お願いします、セーニヤさん」

カミュ「マルスはああいうのいらねえのか？俺みたいなのピアスとかよ」

マルス「あー、父さんもたまにしているよね。ピアスってカッコいいけど痛そう。僕はそれより武器とかの方が好きかな」

カミュ「男の子だもんな、そっちの方がいいか」

グレイグ「こんな所にいたか。ん？ルナはネックレスを買ったのか？」

カミュ「いや、気になってたから試しに着けてみるみたいだぜ」

グレイグ「ルナは昔から綺麗な物に興味があったからな。似合うはずだが」

セーニヤ「どうですか？ルナちゃん。つけてみた感想は」

ルナ「わく……。ふふ、嬉しい。初めてつけた」

ルナはネックレスを持ってみたりクルクルと回っている

セーニヤ「気に入りましたか？」

ルナ「うん！」

セーニヤ「では私からプレゼントしますわ。女の子ですからこういう物は一つでも持っておいた方がいいと思います」

ルナ「え？でも、こういうのって高いんだよ。セーニヤさんに悪いよ」

セーニヤ「ルナちゃんの嬉しそうな顔を見れたので私はもう充分です。今度はご自分でお金を貯めて買ってみるといいですよ」

ルナ「セーニヤさん……。うん！ありがとう！」

グレイグ「すまない、セーニヤ。いくらしたのだ？俺が出そう」

セーニヤ「大丈夫ですわ、グレイグ様。私の勝手な行動ですのでお気になさらずに」

グレイグ「だが、姫様達から驚かれています」

セーニヤ「それでは私からプレゼントだとお二人にお伝えください。ルナちゃんは魔法のお勉強も頑張っていてとても偉いですわ。それに女の子ですからああいった物に興味を持つのは当然です。きつとマルティナ様もラース様もご理解してくださいさるはずですよ」

グレイグ「感謝する」

その後、日も暮れ始め

マルス「ねえ、カミュ！そろそろ暗くなってきたよ！月はまだ？」

カミュ「今日の城下町は明るいからな。月が見えにくいな。シケスビア雪原に行くか」

セーニヤ「それではしっかりと防寒対策をしておかないとですね」

グレイグ「そうだな。マルス、ルナ。手袋や帽子もしっかり着るのだぞ」

二人「はい」

シケスビア雪原

グレイグ「ここに来るのも久しぶりだ。やはり寒い」

カミュ「おっさんはここに来るといつも言ってるよな。子ども達の方がずっと元気だぜ」

グレイグ「うるさい、俺は苦手なだけだ。それに子どもは風の子と
言うだろう。俺と比べるんじゃない」

セーニヤ「しかし、ブルームーンは奇跡の満月とも呼ばれています。
奇跡と聞くとどうしても珍しいように思いますわ。本当に見えるの
でしょうか」

カミュ「どうだろうな。さて、この高台からなら見えるだろ。んで、
月は…………… あー、雲があるな。よく見えねえ」

マルス「えー！折角来たのに……………」

グレイグ「仕方ないかもしれんな。天気ばかりはどうしようも出来
ん」

ルナ「でも、雲は途切れ途切れだよ。もう少し待ったら出てくるか
も」

カミュ「確かにな。待ってるって寒いが大丈夫か？」

二人「うん！」

セーニヤ「グレイグ様、大丈夫ですか？」

グレイグ「……………構わん。俺もここまで来たのだ。待つて見れるのなら見てみたいからな」

少しして

セーニヤ「あら？あちらの方が明るくなっていきますわ」

セーニヤは高台の先からどんどん雪の積もった大地が明るくなっていくのが見えた

カミュ「お？という事は」

マルス「もしかして！」

全員が空を見た時、月を覆っていた雲が晴れ立派な満月が姿を出した

全員「おおく……………」

その月は普段の色とは違い、ハッキリと青い光を放っていた

グレイグ「これが……………ブルームーン。本物なのだな」

マルス「……………綺麗……………」

ルナ「こんなに凄いだね。お母さん達も来ればよかったのに」

カミュ「まあ仕方ねえよな。クレイモランではこの月を見れると幸運が訪れるって言われてんだぜ」

セーニヤ「そうなのですか！確かにこの美しい光景を見るとなんだか幸せな出来事が起こりそうな気がします」

ルナ「カミュさん、セーニヤさん、グレイグさん。今日はありがとうございます。私、この一日がきつと幸運な日だったんだと思う。だって私、今日ずっと幸せだったから！」

ルナは笑顔で三人にお礼を言っている

マルス「僕も！お祭り楽しかったし、美味しい物もたくさん食べれたし、こんなに綺麗なブルームーンも見れた！間違いなく幸運な日だったよ！三人がいてくれたからだよ！」

マルスもルナに釣られて笑いながらお礼を言った

カミュ「へっ、いい事言うようになったな、二人とも」

セーニヤ「私の方こそとても楽しかったですわ。きつと皆様がお誘いしてくださったからです。ありがとうございます」

グレイグ「俺もかなり楽しめた祭りだった。とても充実した休日を通じた。マルス、ルナ、カミュ、セーニヤ。ありがとうございます。皆様達に

もいい土産話が出来そうだ」

その後、皆もそれぞれの場所に帰っていった

デルカダール城　　大広間

二人「ただいまー！」

マルティナ「あら、そろそろかと思ってたのよ。お帰りなさい」

大広間にはマルティナとラースが待っていた

グレイグ「ただいま帰りました」

ラース「お帰り、三人とも。どうだった？ブルームーンは。見れたか？」

マルス「うん！本当凄かったんだよ！大きな満月が雪原全部を照らして、青く光ってるの！雪も青くなってたんだよ！」

マルティナ「そんなに!?それは私達も見たかったわ」

ラース「また数年後にならないと見れないからな。今度は俺達も見たいな」

グレイグ「私も非常に楽しめました、カミュとセーニヤに二人を任せつきりになってしまったのではないかと少し反省しております」

マルティナ「ふふ、楽しめたのならそれでいいわよ」

ルナ「見て、お母さん、お父さん。セーニヤさんからプレゼントしてくれたの」

ルナは首にかけてあるネックレスを見せた

ラース「な!?!これ、本物か!」

マルティナ「ええ!?!これどうしたの?ルナ」

ルナ「私が綺麗だから見てたらセーニヤさんがつけてみるといって言って、気に入っちゃったらセーニヤさんが買ってくれたの。女の子だから一つくらいあってもいいって」

マルティナ「そう……………。ルナはこういうの好きだもんね。ちゃんとお礼は言ったの?」

ルナ「うん!」

ラース「それならいいか。ちゃんと大事にするんだぞ?セーニヤに

はお礼言っておかないとな」

マルス「あ！じいちゃんにも月の話ししてくるー！」

ルナ「あ！マルス、私も行くー！」

二人は王様の部屋に向かっていった

マルティナ「お疲れ様、グレイグ。カミュは知ってたけどセーニヤまでいたのね。二人にもお礼しておかないと」

グレイグ「はい、二人がいてくれて非常に助かりました。は！わ、忘れる所でした。こちら、姫様とラーズにお土産となります」

グレイグは青い月と星と一緒に描かれたハンカチをラーズに、便箋をマルティナに渡した

ラーズ「お、ありがとな、グレイグ。土産なんて話でよかったのに」

グレイグ「俺だけ楽しんでもとは思っていたからいいのだ。それとカミュとセーニヤが言っていたのですが、ブルームーンは奇跡の満月とも言おうそうです。見た者には幸運が訪れるとか。少しでも雰囲気をお二人に味わってほしくて」

マルティナ「ふふ、ありがとう、グレイグ。今度からイレブン達への手紙に使うわ」

ラース「そういやご飯は食べたのか？」

グレイグ「いや、まだだ。は！こ、この時間はもう夕食を過ぎてますか！」

ラース「まあコックに頼めば大丈夫だと思うぞ」

マルティナ「いざとなったら私達を作るわ。マルス達も呼んできましよう」

グレイグ「ありがとうございます」

星座

その頃、クレイモラン王国

カミュとマヤの家

カミュ「あれ？シロ」

シロ「バウ！」

シロが家の前で待っていた

カミュ「マヤ達はどうした？まだなのか？」

シロ「？」

カミュ「知らねえみたいだな。もう夜遅くなるぞ、あいつら何やってんだ」

シロ「クウく……」

シロは家の扉の前で待っている

カミュ「そうだよな、シロは腹減ったよな。一旦お前だけ食べてくれ。用意するからよ」

カミュとシロは家の中に入っていった

その頃、風穴の洞穴

マヤ「……………随分と久しぶりだな。ここに戻ってくるの」

グリー「マヤさん……………僕を連れてきたい場所ってここ？何も無いけど」

グリーは周りを見渡している

マヤ「うん、グリーに話しておきたいと思ってね。隠し事はしたくないから」

グリー「隠し事って……………そんなの気にしないよ」

マヤ「私が話しておきたいの。グリーがこれまでどうやって生きてきたかは教えてくれたのに、私だけ恥ずかしがって言わないなんて嫌だから」

グリー「……………そっか。じゃあ聞こうかな」

マヤ「まずね、私と兄貴は親に捨てられたの。ずっと子どももの頃に。まだ私がすごく小さかった頃だよ。兄貴に寒い雪の中手を引かれていた事だけ覚えてる」

グリー「!!マヤさん、やつぱり話さなくていいよ。辛い過去を掘り返すつもりはなかったんだ」

マヤ「ううん、私は大丈夫だから聞いてほしい。それからバイクングっていうこちら辺でいう海賊みたいなやつらの元に拾われた。そこで私と兄貴は育ったんだ。毎日ヘトヘトになるまで働かされて、この洞穴で何年も過ごしてた」

グリー「……………こんな場所で。風だって雪だって凌げないし、まともなご飯を用意する事だって」

マヤ「うん。いつも二人でお腹空かしながら一枚の毛布に二人で包まって寝てたよ。言葉だって私はまともな使い方出来なかったんだ。今とは違って乱暴な言葉使いだっだし、兄貴みたいな話し方してた。自分の事俺って言ってたしね」

グリー「……………」

その頃、クレイモラン王国 港

カミュ「つたく!あの二人、どこに行きやがったんだ。連絡もなしに。まさか街にいねえとは思わなかった」

船員「おーい、どうしたんだ? 兄ちゃん。誰か探してんのか?」

港で船の準備をしていた人が話しかけてきた

カミュ「悪い、俺と同じ髪色した女と赤い髪した男の人が二人でここに来なかったか？」

船員「あー、来た来た。かなり特徴的だったからな。よく覚えてるぜ。小舟を二人で借りて、今はもう使われてない元バイキング達のアジトに向かっていったな。あそこにはもう何も無いはずなんだがよ」

カミュ「そうか、教えてくれてありがとな。俺の分の小舟も借りていいか？」

船員「おお、もしかして妹さんとかか？髪色とかそっくりだもんな。もう夜も遅い。迎えに行つてやんな」

カミュ「ああ、そうさせてもらおう（マヤのやつ、あそこに今更何の用が。もう何もあそこには……………まさか、マヤのやつグリーに）」

その頃、風穴の洞穴

マヤは自分の過去を全て話し終わった

マヤ「そうして今はデルカダール王様の娘として、デルカダールのお城に住んでるんだ」

グリー「うう……………そっか、そっか」

グリーは涙ぐんでいる

マヤ「いしし、グリーったら泣くような事だった？」

グリー「だって……僕、マヤさんの事何も知らなくて……元気で賢くて優しい女性だと思ってたんだよ。過去にこんな事があったなんて……」

マヤ「あの頃のままなんて嫌だったんだ。優しく迎えてくれた王様達にも、何より私自身が嫌だった。だから学校で沢山の事を学んで、変わりたかったんだ。こんな過去なんて笑い飛ばせるくらいにさ」

グリー「マヤさんはやっぱり強いよ。めげずに努力したからきつと今のマヤさんがあるんだね」

マヤ「そ、そうかな？私は強くなってるよ。今日だって、この過去をグリーに話していいのかずっと考えてた。嫌われないかな、とか気持ち悪がられたりとか」

グリー「何言ってるの、マヤさん。僕だって海の呪いでずっと苦しんでたし、気持ち悪がられてた。初めてマヤさんにその事を知られた時は嫌われたと思ってた。

でも、マヤさんは違ったよね。真っ直ぐ僕を見てくれた、支えてくれた、嫌わなくてくれた。僕、すっごくすっごく嬉しかったんだよ。今でもあの感動は覚えている。そんな事されたの初めてだったから。

そんな僕がマヤさんのこの過去を知ったからって変わると思う？
何も変わらないよ。寧ろ、マヤさんをもっと尊敬するようになった。
マヤさんの強い心や努力を絶対に怠らない所はここから来てるんだ
よ」

マヤ「グリー……………。うん、ありがとう！私、グリーのこうい
う所大好きだよ。普段は怖がりだけど、大事な所では怖がらずに真っ
直ぐ見つめてくれる所。グリーのその真っ直ぐな勇気に励まされる」

グリー「えへへ、照れるなあ。僕もマヤさんの持つ光が好きだよ。
明るくて優しい青い光。いつも僕を照らしてくれてた。支えてくれ
ている事を教えてもらってたよ」

二人は笑顔で抱きしめた

ガチャ

二人「!？」

カミュ「やっぱりここにいやがったか」

二人「兄貴！／カミュさん！」

カミュ「つたく、遅くなるなら俺に知らせておけ、マヤ。心配かけ
させんなよ」

マヤ「あ…………… 本当だ。もうこんなに暗いや。ごめんなさい、兄貴」

カミュ「話したのか？ここの事、俺達の今までの事」

マヤ「う、うん。でも！グリーンなら信じられるって」

カミュ「別に俺も気にしちやいなえよ。マヤが自分からこの事を話してもいいって思える相手が出来たんだ。俺も喜ばねえとな」

マヤ「うん！」

グリーン「ごめんなさい、カミュさん。知られたくない事だったと思うんですけど」

カミュ「気なんか使わなくていいぞ、グリーン。俺もお前ならきつとマヤを嫌わねえでくれると思ってたからな。呪いに苦しんでた所とかまさにマヤと一緒にしろ」

グリーン「はい、そうですね」

マヤ「あ！そうだ！ここに来た目的はまだあるんだ。グリー、上見てごらん」

グリー「上？あ!!」

グリーが上を見ると満点の星空が広がっていた

カミュ「ああ、なるほど。この景色を見せたかったのか。ここなら魔物もないし、星がよく見えるもんな」

マヤ「そうそう。どう？グリー、綺麗でしょ？」

グリー「うん。凄く綺麗だよ。星がよく見える。一つ一つ輝いて、光の色の違いも見える」

マヤ「ねえ、兄貴。あそこに行こうよ。昔よく二人で星を見てた場所」

カミュ「お、久々に行くか。今日もブルームーンがよく見えたからな。あそこは特等席だろ。グリー、ついてこい」

グリー「はい！」

風穴の洞穴 上部

カミュ「よつと。グリー、引つ張るぞ」

グリー「は、はい。お願いします」

カミュ「ほらよ!」

グリー「えいつ!ふく、ここつて…………… あ、さっきの洞穴の上
ですな」

マヤ「そう。昔はここで寝そべって二人で星や月を見て話してたんだ」

カミュ「ほら、見てみるよ、二人とも。ブルームーンがよく見えるぞ」

二人「おく……………」

青く光る満月が満点の星空と共によく見えている

海にもその景色が反射され、鏡のようになっている

グリー「これがブルームーン。本当に月が青いや」

マヤ「私もこれを見るのは久しぶり。いつ見ても綺麗だな」

カミュ「星もよく見えるな。お、確かあれはオリオンだな。という事は冬の大三角ってやつも……あれか。今日は本当によく見えるな」

マヤ「え!? 待って、兄貴めちやくちや星に詳しいじゃん! どうしたの!？」

グリー「流石カミュさん、星座に詳しいんですね」

マヤ「違うよ、グリー。兄貴は星座なんか知らなかったはず!」

カミュ「俺だってあの頃より知識はあんだよ。星に関する本は結構好きだからな。前に何回か読んだ事がある。それで覚えたんだ。方角を知る時にも役立つしな」

マヤ「へく……。じゃあ私達が昔勝手に名付けてたスライム座とかって、実は全然存在しないのも?」

カミュ「そうだな。ごうけつぐま座とかおおさそり座とかも知ってるぞ」

マヤ「え!? 私より詳しくなってる! なんか悔しい!」

グリー「えー、二人とも星座に詳しいんだ。僕にも教えて、マヤさん」

マヤ「うん、いいよ」

カミュ「まあ俺はそんな星座とかよりも、昔やってた自由に星を結んで好きな形にするのが好きだったぜ。楽しいしな」

マヤ「あ、わかる！私も本見て思った！グリー、私が昔見つけたやつでね、あの星と隣の星、斜めのあの星を結ぶと」

グリー「あ！スライムだ！スライムの形になるよ、マヤさん！」

マヤ「でしょ!?!これはもうスライム座だよね!?!私、発見者だよ！」

グリー「すごい！僕もやってみよ」

カミュ「あの星と離れたあの星を繋いでベビーパンサー座」

マヤ「あ！似てる！コロだよ、コロ！」

カミュ「はは、そうだな。あれはコロ座だ。じゃあブレイブ座とかシロ座も作ってやらねえとな」

その後、しばらく三人で寝そべって星空を見ながら楽しく話していた

実力測定

それから数日後の夜、デルカダール城下町

グラジー ビルとテルマの部屋

テルマ「ふっ、ふっ！」

テルマは一人で筋トレをしている

ガチャ

ビル「なんだ、テルマ。まだ寝てなかったのか。早く寝ないとだろ」

テルマ「あ、ビルさん。すみません、少しまだ体を動かしておきたくて」

ビル「程々にしておけよ。にしても、初めてこの店に来た時より中々体が鍛えられてきたな。これも訓練のおかげだな」

テルマ「はい！グレイグ將軍やエドのおかげです。でも、俺がどれだけ強くなったかっただけがまだあまり実感できなくて」

ビル「まあそう急ぐような事ではないんだろうけどな。……………お、そういや明後日は店が定休日だよな」

テルマ「そうですね」

ビル「なら、俺と少し手合わせしてみるか？」

テルマ「え!?!ビルさんですか!?!」

ビル「おう、俺はテルマの実力を知らねえから自由な評価が出来る
だろ？」

テルマ「でも、ビルさんって戦え……………もしかして」

ビル「そうだ、俺は元の姿。つまり魔物の姿に戻ってテルマと戦う。
実戦により近いだろ？」

テルマ「それはありがたいんですけど、怪我とか」

ビル「んなもん昔に数え切れないくらい負ってるさ。俺もマドリー
もな。だから今更人間に傷つけられるなんざ大した事ない。魔物の
やつらからの方がよっぽど遠慮ないしな」

ビルは昔を思い出したのか顔をしかめている

テルマ「は、はは。まあそうですね。それじゃあ悪いんですけど
お願いしてもいいですか？」

ビル「おう、よろしく頼むぞ、テルマ」

次の日

エド「え!?!テルマ、あのおっさんと戦うのか!?!」

エドがグラジーにやってきていた

テルマ「ああ、そうなんだ。俺がどれだけ強くなれているか知れる機会だしな」

マヤ「そんな約束したんだ。危なくない?ビルさんは魔物だよ?」

グリー「あ、そうじゃん。人間の姿でやるの?」

テルマ「いえ、魔物の姿で戦ってくれるそうです」

エド「バツカ、テルマ!お前、魔物を舐めすぎだぞ!人間と魔物では戦い方とか全然違うんだぞ!」

テルマ「それならもっと好都合だ。その場の判断力が試されるってわけだな」

エド「いや、俺が言いたいのはそういう事じゃなくてよ」

テルマ「大丈夫だって！ビルさんだって本気じゃないし、多少の怪我なんて気にしないさ」

エド「ハア……… まあいいや」

マヤ「信じてるけど、危ないと思ったらすぐやめるんだよ？」

テルマ「はい！もちろんですよ！」

次の日、デルカコスタ地方

テルマ「なんでエドにグレイグ將軍まで!？」

テルマとビルがデルカコスタ地方で準備していると、エドとグレイグがやってきた

エド「やっぱり心配だ！だから昨日グレイグ……… 將軍達に話したんだ！」

グレイグ「過保護すぎるかもしれないが万一もある。俺は黙って見ているが、怪我をした場合は俺が回復しよう」

ビル「ありがとうございます、グレイグ様。よかったな、テルマ。憧

れのグレイグ様に友達のエドまで見てくれるってなって」

テルマ「逆にプレッシャーですよ、こんなの。軽い気持ちだったのがどうしてこんな事に」

エド「フレ、フレ！テルマ！頑張れ、頑張れ！テルマ！」

テルマ「うるせー！」

テルマは少し赤くなっている

エド「なんだと!?テルマ、友達からのエールをうるさいだと!?!」

テルマ「集中できねえんだよ！静かにしてろ！」

エド「ブー！」

ビル「まあそれだけ反応する元気があれば大丈夫だろ。さて、と」

シュン！

ビルは人間の姿ではなく、元の魔物の姿に戻った

ビル「見慣れないだろ？これが俺の元の姿だ」

テルマ「……………」

エド「あの種族、確かアングルホーン。中々強い魔物だったはずだよな」

グレイグ「そうだな。まあ魔物が全員同じ種族でも強さはバラバラだ。人にも色々あるように、魔物にも様々な事があるのだろう。エドならわかっているだろう」

エド「そうだな。同じやつでも優しかったり、弱虫だったり。戦いが得意だったり、後ろで待機していたりってな」

テルマ「ふうー……………。よろしくお願いします!」

ビル「はは、そんな緊張するな。まあまずはテルマから向かってこい」

テルマ「それじゃあお言葉に甘えて!」

テルマはビルに向かっていく

テルマ「はっ!」

テルマは片手剣を薙ぎ払った

ビル「よっと」

ビルは後ろに避けた

テルマ「まわしげり！」

テルマはそのまま更に一步踏み出し、薙ぎ払った時の遠心力を利用してそのまま攻撃する

ビル「！おおっ！」

ビルは腕で防ぐ

防がれたテルマはそのまま後ろに飛んで距離を離れた

エド「おお、やるじゃん、テルマ！防がれたけど今の攻撃は凄いな
！」

グレイグ「今のやり方、バンの教えか。流れるような攻撃で相手に隙を与えない戦い方だな」

ビル「やるじゃないか、テルマ。少し驚いたぞ」

テルマ「これくらいなら俺にだって！」

ビル「じゃあ次は俺だな。ふん！」

ビルはたいあたりをしてきた

テルマ「はっ！」

テルマは横に避けた

ビル「避けるだけか？なら！」

ガシ！

テルマ「!？」

ビルはすれ違う時にテルマの服を掴んだ

ビル「ほらよ！」

ビルはテルマを持ち上げ投げようとする

テルマ「くっ！はあ！」

ザク！

ビル「痛っ！」

テルマは片手剣をビルに刺した

ビルはその痛みでテルマを離す

テルマ「まだ練習中だけど！せいけんづき！」

ボス！

着地したテルマはそのままビルに攻撃した

ビル「イテテテ、よく咄嗟に判断できたな」

ビルはお腹を押さえながら下がっていく

テルマ「驚きましたけどね」

エド「いやー、ヒヤツとしたぜ。テルマのやつ、急にピンチになるんだから」

グレイグ「練習中なだけあつてまだせいけんづきと言えるほどの威力ではなかったな。拳の勢いが足りん」

エド「グレイグは厳しいなー、あれくらいならいいだろ、別によ」

グレイグ「技は戦闘において最も重要な物の一つだ。それを適当に済ませてはいかんぞ、エド」

エド「ぐ……………悪かったよ」

テルマ「ビルさん！様子見なんていりませんよ！全力でも構わないんで、お願いします！」

ビル「はいはい、わかったよ。かえんのいき！」

ゴオオツ！

ビルの口から炎のブレスがテルマに向かっていく

テルマ「こ、こんな事まで！流石魔物だな」

テルマはかえんのいきの範囲から逃げる

ビル「ヒヤダルコ！」

テルマ「!？」

ビルは更にテルマの逃げた先に氷の刃を複数ぶつけていく

テルマ「痛っ！というか、冷たい！」

テルマが顔を腕で覆っていた所にビルが更に追撃する

ビル「かえんのいき！」

テルマ「あっちい!!」

テルマは炎のブレスに包まれた

エド「あー!!おいこら、おっさん！何テルマをいじめてんだよ！

ぶつとばすぞー！」

グレイグ「まあ落ち着くのだ、エド。あれも一種の作戦であり、戦い方の一つだ。遠距離からの攻撃にどう対処する？テルマ」

ビル「少し汚ねえやり方だけど許してくれよな」

テルマ「アチチ、服が少し焦げた。構いませんよ、ビルさん！魔法も使えたんですね！」

ビル「そりゃあ魔物だからな。多少の魔法は使えるさ」

テルマ「行きますよ！」

ビル「バギマ！」

テルマに向かって竜巻が向かっていく

テルマ「これくらい！かえん斬り！」

テルマは竜巻を切り裂いた

ビル「ヒヤダルコ！」

テルマ「はああっ！」

テルマは片手剣で少し防ぎながら突っ込んでいく
その体や腕には少しずつ刃があたり、切れていく

ビル「かえんのいき！」

ビルは近づいてきたテルマに炎のブレスをぶつける

テルマ「ここ！」

テルマは素早く横に回り込んだ

ビル「!？」

テルマ「らいめい斬り！」

ザク！

ビル「うぐっ！」

グレイグ「ストップだ！どちらも今なので怪我しただろう。これくらいでいいんじゃないか？」

テルマ「そうですね。俺としても練習通りに動けたと思います」

エド「カツコよかったぞー、テルマー！」

テルマ「う、うるせえよ、エド！」

ビル「想像よりやるじゃないか、テルマ。こんなおっさんじゃあまり相手にならなかったか？」

テルマ「そんな事ありませんよ！多彩な技や遠距離、近距離共に戦えて魔物らしい技まで使ってきてとてもいい練習になりました！また今度お願いします、ビルさん！」

ビル「そうか、それなら嬉しいな。因みにマドリーは俺とはまた違った戦い方をするぞ。なんたって空を飛べるからな」

テルマ「そういえば羽が生えてましたね。それはまた参考になりそうです」

エド「魔物との戦闘かー。俺もいつかやらなきゃならねえのかなー。やりたくねえ」

グレイグ「必ず来てしまうとは思うぞ。だがエド、もし悪い魔物だとしてもお前は戦えないというのか？」

エド「いや、それは流石に戦う。群れにいた頃だつて攻撃してきた魔物とは戦つてたしな」

テルマ「まあ悪くもないやつと戦うのは嫌だつてのはそうだよな。俺だつて悪いと思えない人に剣を向けたくない」

グレイグ「それならまあいいだろう。テルマ、今度よければブレイブと戦つてみてはどうだ？あいつは相当強いが、手加減も出来るはずだ」

テルマ「ブレイブ君つてそんなに強いんですか？」

ビル「あー、ブレイブさんは俺よりずっと強いな。あの気配やオーラからして相当の実力だ」

エド「俺は警戒されてるのかあまり近くには来てくれねえけどよ、初めて会った時に感じたやつだけでも相当なもんだぞ。少なくとも見習い達の中で敵うようなやつはいないんじゃないかね？」

テルマ「そんなにか!?え!?それ、俺じゃあ太刀打ち出来ませんつて！」

グレイグ「だから手加減してもらおうという事だ。ブレイブも偶に訓練場でバン達と戦っているのだ。何回か勝っている事もあるようだ

ぞ」

エド「なに!?あの化け物揃いの兵士達に勝つのかよ!すまん、テルマ。お前じゃ一生かかっても勝てないわ」

テルマ「おいこら!勝手に絶対負ける判断すんな!」

グレイグ「どうする?テルマ。ブレイブも偶には体を動かした方がいいはずなのだ」

テルマ「そ、そうですね。かなーり手加減してもらおう事になりそうですが、お願いしてもいいですか?」

グレイグ「ああ、こちらこそありがとうございます。日にちはいつにする?」

テルマ「えっと……… ビルさん」

ビル「今日から四日後の夕方だな。食料の調達や酒の手配のために早く店を閉める。その日なら空いてるぞ」

グレイグ「了解した。ブレイブにも伝えておこう」

テルマ「お願いします！あ、俺も一緒に伝えますよ」

グレイグ「そうか？まあ確かにその方がいいかもな」

実力測定2

それから四日後の夕方、デルカダール城

訓練場

ブレイブ「あー、あー、これでよろしいですか？」

グレイグ「ああ、頼んだぞ、ブレイブ。しっかり手加減するんだぞ」

グレイグは魔物が話せる薬をブレイブに飲ませた

ブレイブ「手加減……ですか。できる限りやってみます」

テルマ「おく、ブレイブ君が話すのは初めて見た。本当に話せるんだ」

ブレイブ「まああまり使う機会がないからな。それで……」

エド「頑張れよー、テルマー！」

ベグル「激しくするなよ？ブレイブ」

ブレイブ「なぜお前達までいるのだ。俺とテルマだけだったはずでは」

エド「応援役だ！テルマが奇跡的に勝つかもしれねえだろ！」

ベグル「万が一のストッパー役だ。あと単純にブレイブが負けたら面白そうだから」

ブレイブ「ベグル、貴様面白がっているな」

テルマ「は、はは。まあいいんじゃない？ブレイブ君。実力は全然ないけど、よろしくね」

ブレイブ「俺は別にそんな事は思っていない。新入りの中では成長が早い方だと思っているぞ」

テルマ「そうなの？へへ、ありがとう。それじゃあどっちから動く？」

ブレイブ「テルマからでいいぞ。俺は一旦避ける事に専念させてもらおう」

テルマ「わかった。じゃあ、ふっ！」

テルマはブレイブに向かっていく

テルマ「かえん斬り！」

ブレイブ「ふむ……………」

ブレイブは振り下ろされる剣に対して一步下がった

テルマ「(この距離なら!) よいしょ!まわしげり！」

テルマは素早く体制を立て直して遠心力を利用して蹴りを出した

ブレイブ「はっ！」

ブレイブはその場で跳んで避けた

テルマ「じゃ、じゃあもう一度かえん斬り！」

テルマは横に剣を薙ぎ払った

ブレイブ「同じだな」

ブレイブはもう一度跳んで避けた

テルマ「ええ!?!」

エド「うわー、ほとんど動かねえで避けてるよ、ブレイブのやつ」

ベグル「必要最低限の動きだけの回避。まあブレイブくらいなら当

然の技術だな」

テルマ「じゃあこつちだ！」

テルマは片手剣から槍に持ち替えた

テルマ「けもの突き！」

ブレイブ「それは怖いものだな」

ブレイブは横に避けた

テルマ「連続でやってやる！」

テルマは連続でけもの突きをブレイブに繰り出していく

ブレイブ「ふむ、躲せないほどではないな」

ブレイブもその度に全て避けていく

テルマ「ハア、ハア。くっ、当たらないな！」

ブレイブ「疲れたか？」

テルマ「まだいける！まわしげり！」

ブレイブ「ほう、いい根性だ」

ブレイブはしゃがんで避けた

ブレイブ「何もしないのは可哀想なのでな。そろそろ動くぞ」

テルマ「来い！」

ブレイブ「は！」

テルマ「!？」

ブレイブはテルマの前からいなくなった

テルマ「どこ行った!？」

ブレイブ「後ろだ、テルマ」

テルマ「げ!!？」

ブレイブ「見えていなかったか。今お前は俺に自由に攻撃出来る隙を作ったという事だ」

テルマ「くうっ！凄いな、ブレイブ君」

ブレイブ「それでは攻撃するぞ。準備はいいか？」

テルマ「よし、こい！」

ブレイブ「はあ！」

ブレイブはテルマに飛びかかった

テルマ「早っ！」

ガキン！

テルマはギリギリ剣で防いだ

ブレイブ「そのガードでは甘いぞ！手が届く！」

ブレイブはそのまま爪を出してテルマの前で振り下ろした

ブンツ！

テルマ「ヒツ！」

ブレイブ「当たらないようにした。本当なら届いている。そのガードで牙を防ぐのはいいが、俺には爪もある。剣から体を離しておけ」

テルマ「さ、流石キラールパンサー。めちやくちや爪が鋭かった」

エド「なんか……… 指導みたいになってきてないか？」

ベグル「まあ仕方ないだろうな。テルマとブレイブでは圧倒的な戦闘力差がある。テルマも悪くはないんだが、それでもブレイブには通用しないというわけだな」

ブレイブ「どうする？テルマ。もう少しやるか？」

テルマ「はは、攻撃も防御もブレイブ君に全部通用しないとは。まだ実戦には程遠いつてわけだな」

ブレイブ「最初は俺ではなく息子の方がいいかと思ったのだが………」

テルマ「あ、コロ君の事？」

ブレイブ「そうだ。だが、あいつは手加減なんて出来ないからな。威力こそ俺よりないが、それでも止まらなくなった場合テルマは引き裂かれるだろう。それを考慮して俺になったのだ」

テルマ「ひ、引き裂かれるって…… そんなオーバーだよ」

ブレイブ「それは甘く考えすぎだ、テルマ。俺は兵士達の鎧ごと切り裂こうと思えば出来る。息子はまだ無理だが、剣くらいなら噛み付いて折る程度なら容易だ。まだ子どもに近いテルマの体は息子の爪や牙でも簡単に引き裂き、バラバラにするぞ」

テルマ「……………」

テルマの顔は青白くなっている

エド「魔物つてのはそういうもんなんだぞ、テルマ。俺が最初言っただろ？人間と魔物では戦い方が全然違うんだって。魔物は人間とは違って相手を無力化させる手段が命を奪う事のみ。だからこそ自身を持つ武器を最大限に活かす。そのパワーは人間からしたら絶大な威力になっている。甘く考えすぎるなよ」

テルマ「じゃ、じゃあブレイブ君がさつきわざと爪を当てなかったのは」

ブレイブ「いくら手加減していても慣れない事だからな。もしもを考えてのだ。顔に傷が残る程度ならまだいいが一步謝れば失明、もしくはそのまま死んでいたな」

テルマ「は、はは……………。世界が違うや」

ベグル「確かにブレイブは前に怒ってバンをボロボロにした時も鎧ごと切り裂いてたな。剣もへし折っていたしな。なんで俺との訓練の時は大剣を折らなかつたんだ？」

ブレイブ「む……………。俺にだって出来ない事くらいある。大剣や斧のような大きい武器は折れん。分厚い鎧の場合も同じだ」

ベグル「ほく、つまりブレイブは俺やダバンが弱点だな？確かに俺やダバンに勝った事ないもんな？」

ブレイブ「貴様、一々癩に触るな。馬鹿にしているのなら相手になるぞ」

ベグル「やめとけて、ブレイブは俺に勝てねえんだろ？無理すんなって」

ブレイブ「貴様……………もう許さん!!俺を怒らせた事、後悔するがいい!!」

ベグル「へっ、来いよ!バンみたいにくと思うなよ!」

ベグルとブレイブが激しくぶつかり合い始めた

テルマ「えく、なんで喧嘩になるんだよ」

エド「まあいいんじゃないやね？ほら、ブレイブの本気が見れるぞ」

テルマ「いや、なんか速くてあまり目で追えない」

エド「あちこち動くもんな。じゃあ今度は俺とやろうぜ、テルマ。俺に追いつくんだろ？」

テルマ「友達同士ってなんか複雑なんだよ。ためらっちゃう」

エド「えー、なんだよそれ。別に殺す気なんかねえって」

テルマ「まあまだお前には届いてなさそうだ。もう少し待っててくれよ、エド」

エド「おう、いいぞ！確実に近づいてきてるのはわかってるからな！」

ベグル「へっ！その程度か、ブレイブ！まだまだ浅いぞ！」

ブレイブ「くそが！調子にのるなよ！」

メグの焦り

それから一ヶ月後、デルカダール城下町

バンとメグの家

メグ「どう？バン。これ新作として出そうと思ってるんだ」

バン「いいんじゃない？いつも通り美味しいぞ！」

メグ「ふふ、そう言うと思ったわ。それじゃあ売り出してみようかな」

バン「おう！俺もまた宣伝しとくからな！」

メグ「あまり大声で言わなくていいんだからね？変に期待されるのも困るのよ」

バン「でも客がたくさん来るとメグも嬉しいだろ？」

メグ「それはそうだけどさ」

マサル「おかあさーん、ごはーん」

メグ「あら、まだ食べるの？マサル」

バン「はは、いっぱい食べて大きくなれよ？マサル」

マサル「おとうさんくらい！」

バン「俺くらいか、いいじゃないか。なんなら俺より大きくなっていいんだぜ」

メグ「ふふ、それじゃあもう少し待っててね」

バン「あ、そろそろ時間だ。それじゃあメグ、行ってくるぜ」

メグ「行ってらっしゃーい」

マサル「がんばってねー」

その後、デルカダール城 訓練場

ロベルト「ほう、メグさんの新作か。今回は何のスイーツなんだ？」

バン「えーつとな、なんて言ってたかな……………。オレンジとな

にかのロールケーキ？」

ベグル「お前、覚えてねえのかよ。今朝食べたんだろ？」

バン「美味かったぞ！」

マーズ「それはさつき聞いた。まあ今度行ってみるか」

ガザル「オレンジか、俺結構好きなんだよな。ロベルト、今度俺と行こうぜ」

バン「ガザルがオレンジ好きとか初めて知ったな。似合わねえぞ！」

ガザル「ああん？」

ガザルはブーメランの刃をバンの目の前に構えた

バン「とっても似合っております!!ガザル様らしいと思いますよ!!」

ロベルト「それじゃあ詳しい事は食べてからだな、楽しみにしておこう」

マーズ「といっても、今週は少し忙しいよな。行けるのは早くても来週だな」

バン「色々あるもんな。会議とか遠征とか」

ロベルト「人気商品になって売り切れてない事を願おう」

それから三日後

カフェ

女性「このオレンジとアプリコットのロールケーキ一つお願いします」

メグ「はい、ありがとうございます」

男性「あ、メグさん、俺にもその限定のやつ一つ！」

メグ「はい（ふふ、売れ行きは好調ね。どうなるか不安だったけどなんとかかなりそう）」

夕方、デルカダール城下町

商店街

メグは買い物に来ていた

メグ「えっと、今日はお肉と桃、あとはミルクも足りなくなってきたわね」

メグがメモを見ながら歩いていると

男性A「なあ、お前あそのケーキ食べたか？結構噂になってんだぜ？」

男性B「え？どこのだよ」

男性A「うるさい兵士が住んでるカフェだよ。あその店でつい最近出たケーキがよ、俺食べたんだけど不味いんだぜ！」

メグ「!!？」

男性B「マジかよ。なんでそんな俺に勧めてくんだよ」

男性A「いやお前も食ってみろって！他のも大した事なかったんだからよ」

男性B「えー、そんな場所行かねえよ。もっと美味しいもの食える場所に行く」

メグ「……………」

その夜、メグとバンの家

メグ「あんな風に思われる人もいるのね。やっぱり……………もつと自信持てるような物作らないと！」

バン「あれ？メグ？まだ起きてるのか？」

バンが降りてきた

メグ「あ、バン。うん、少しお菓子作ろうかなって」

バン「また？この前新しいの出したばかりじゃないか」

メグ「……………ちよつとね。あまり自信なかったからもつと美味しいやつを作ろうって」

バン「充分美味かったけどな。でも、夜遅くにやるのは危ないぞ？」

メグ「少しだけよ。バンは先に寝てて」

バン「……………わかった。早めに寝るんだぞ？おやすみ」

メグ「ええ、おやすみ」

次の日、訓練場

ロベルト「え？また新作が出来るかもしれないのか？」

バン「そうなんだ。メグのやつ、この前のやつに自信がなかったって言ってるよ」

マーズ「でも売れてるんだろ？」

バン「順調って聞いてたんだけどな」

ベグル「まあもつと美味しい物を作りたいたなんて、店をやってるんだから当然の考えじゃないか？」

バン「まあそつか。新作、楽しみにしてよつと」

ロベルト「できたらまた教えてくれよな」

その夜、メグとバンの家

メグ「ハア……………（思いつかないな。でも、そんなに美味しくなかったのかしら、あのケーキ。いい感じに出来たと思ってたのに。あ

まり馴染みないフルーツを使ったのが悪かったのかな。じゃあもつと馴染みあるフルーツとかで)」

バン「また起きてたのか。マサルももう寝たぞ」

メグ「うん、ちよつとね。ねえバン、どんな果物が好き？」

バン「ん？俺か？そうだなー……… 桃も美味しいよな。でも、リンゴも捨てがたい。ぶどうも美味しいしなー」

メグ「ふふ、どれか一つにして」

バン「じゃあメグがくれた果物だ！それなら俺はなんでも美味しいと思うぞ！」

メグ「もう、仕方ないんだから」

バン「へへ、悪いな、メグ。あ！なんか手伝える事あるか？」

メグ「今お手伝いしてもらおうとしたらあの返事だったでしょ？」

バン「うっ………。ほ、ほら、他にもなんかないか？悩んでるみた

いだし、他の人に聞いてみたいとか。店長さんとか、マルティナ様とか！」

メグ「そんな忙しい人達には申し訳ないよ。まだ思いついてすらいから大丈夫」

バン「うーん、そっか。まあそろそろ遅いし、寝ようぜ」

メグ「ええ、わかったわ」

次の日、デルカダール城 玉座の間

マルティナ「へえ、メグさんが悩んでるのね」

バン「そうなんです。俺、あまり力になれてやれなくて」

ライス「料理に少しは知識があればよかったんだろうけど仕方ないよな。バンは他の事で支えてやるといい」

グレイグ「明日は遠征だ、心配だろうが早く終わらせて帰って支えてやるのだぞ」

バン「メグに無理とかはさせたくないですよね。大丈夫かな」

ラース「まあ次々新作を出すのはいい事なのかもしれないけど、メグはあまりそういう事しなかった人だもんな。少し違和感はあるよな」

バン「そうなんです。今回のだって美味しかったのに」

マルティナ「まあ大丈夫よ、きっと。見守ってあげてて」

その夜、メグとバンの家

メグ「遠征なのね、わかったわ」

バン「言うの遅くなって悪いな。明日はいないけど、明後日の夕方には帰ってくる。一日マサルの事頼む」

メグ「ええ、大丈夫よ。頑張ってきてね」

バン「あと、昨日とか一昨日みたいに夜遅くまで無理するなよ？考えすぎもよくないんだからな」

メグ「ふふ、バンが言うとなんだか説得力ないわよ」

バン「え!? な、なんでだよ！俺はメグの事を思ってる」

メグ 「わかってるわ。大丈夫だから安心して」

バン 「絶対だからな！」

亀裂

次の日、カフェ

カラン

メグ「ありがとうございます(ぎ)ぎいきました(一応ケーキ売れてはいるけど、やっぱりどう思っているのかな。あまり美味しくなかったか思ってた(り)するのかしら)」

メグは考え事をしながら後片付けをしていると

カラン

メグ「いらっしや」

男性A「ここだぜー！あのケーキを出してくる店」

男性C「へー、普通のカフェじゃん。そんなに変なのかよ」

男性A「おう！もうそりやあ俺が間違うわけねえだろ！」

二人の騒がしい男性達が入ってきた。その一人は前に悪口を言っていた男性である

メグ「……………二名様でしょうか？(ぎ)自由なお席に」

男性A「俺こー！」

男性達はメグの話も聞かずに自分で勝手に行動し始めた

男性C「ねえ、その人ー、注文ー」

メグ「は、はい！ご注文はどうされますか？」

男性A「あれあれ、あのー、まずかったケーキ！」

男性C「おま！そんな注文あるかよ！ウケる！」

メグ「……………申し訳ありません、どちらのケーキの事でしょうか？」

男性A「あの新作とかいうやつだよ！それ二つねー」

メグ「わかりました。少々お待ちください」

男性C「待ってー、ねえ俺この人結構タイプだわー。お姉さん、ちよつと俺と遊ぼうぜ」

メグ「申し訳ございません、私には夫に子どももいますので」

男性A「この人兵士が夫なんだって！お前知らねえのかよ」

男性C「バレなきやなんとかなるって。それに兵士だってどうせ何人も好きな人がどっかにいるでしょ」

男性の腕がメグの腰に触れる

メグ「キャツ、や、やめてください！」

男性C「キャツ、だつて。かーわいいー。ねえ、いいじゃん。満足させてあげるからさ」

メグ「失礼します！」

メグは走ってキッチンに戻った

その後、派手な音がカフェから聞こえていたがメグは作る事に専念していた

メグがケーキを完成させて戻ると

メグ「な!?!やめてください!!」

テーブルや椅子が壊されているだけでなく、壁などにあつた装飾なども取られている

男性A「えー、俺達好みにしてやろうと思ったただけだしー」

男性C「ギャハハハ!!こいつ、マジ最低!ウケる!」

メグ「お店を破壊して、こんなの営業妨害ですよ!犯罪なんですよ!」

男性A「うっわ、流石兵士が夫にいただけある。マジ堅物じゃん、キモ」

パシヤツ!

男性は水の入ったコップをメグにかけた

メグ「!?!」

男性A「兵士がいるからって調子に乗るなよ?こんな店、ダーハルーネに比べたらゴミも同然なんだよ」

男性はそのまま去っていった

男性C「あ、行くのかよ!お姉さん、お相手してほしかったらいつでも来て」

もう一人の男性も去っていった

メグ「……………う、ううっ……………」

メグはその場に崩れ落ちた

メグ「なんで……………頑張ってるのに……………」

メグの目からは涙が溢れてきていた

カラン

男性「メグさん？さっきの人達って、うわ!!なんだこれ!?お店が!!」

常連の男性客が心配そうにやってきた

メグ「あ……………」

男性「大丈夫ですか、メグさん！怪我は!?すぐに兵士さん達に知らせないと！バンさん達は!？」

メグ「すみ……………ません……………」

夕方、メグとバンの家

バタン!

バン「メグ!!」

バンが知らせにより慌てて戻ってきた

リース「戻ったか。メグに怪我とかはないそうだ。見た目だけな」

家の中ではラースがマサルと共にいた

マサル「おとうさん、おかあさんが」

バン「メグは二階ですか？」

ラース「ああ。悪いが、マサル君は少しだけこっちで預かるぞ。メグの状態を回復させてやってくれ。バンもしばらくはこっちに専念している。城には報告以外来なくていい」

バン「わかりました」

メグの部屋 前

バン「メグ、俺だ。話は聞いたぞ、入っていいか？」

メグ「……………いいよ」

ガチャ

バン「メグ……………」

バンが入ると中では小さく座り込んだメグがいた

メグ「バン……………私、お店やめる」

バン「!?」

メグ「私、調子に乗ってたのかも。お菓子とか作って、誰かに美味しかったって言ってもらえるのが嬉しかった。でも、そう思わない人達はたくさんいた。私なんかが作るお菓子じゃ、誰も食べない」

バン「そんな事ない！メグのお菓子は、作る物はなんでも美味えよ！俺が何度も美味しいと言っただろ！」

メグ「バンだけ美味しいって言っても駄目なのよ!!」

メグは大きな声をあげた

バン「!?」

メグ「私、バンを信じられない。本当に美味しく感じたの？お世辞だったんじゃないの？それをずっと信じてた私も馬鹿よ！まずい料理を美味しいと信じてたなんて……」

バン「メグ、お前………それ本気で言ってるのかよ」

メグ「そうよ！だって、そうじゃなきゃ、おかしいわよ。まずいて騒がれて、馬鹿にされて、お店まで壊されて」

バン「……………」　　メグ、俺は嘘が下手だぞ」

メグ「だからその嘘を見抜けない私は！」

バン「メグに嘘なんかつくか！全部本当の事だぞ！」

メグ「嘘よ!!」

バン「くくっ!!もういい」

メグ「バン？」

バン「好きにしろよ、俺は知らない」

バンは出ていった

メグ「……………」

デルカダール城　　大広間

マサル「マルスくん、ルナちゃん」

マサルは家からボールを持ってきていた

マルス「ボール好きなの？マサル君」

マサル「うん、楽しいから」

コロ「キャン！」

コロがボールを啜えて走っていく

マサル「あ！返してー」

ルナ「コロー、それマサル君のやつだよー。返してあげて」

コロ「？」

コロはマサルの元まできた

マサル「ありがとう、犬さん」

コロ「クウ？」

リース「コロー、まだ小さいから優しくしてやれよ？」

コロ「キャン！………？キャン！」

コロは入り口に走っていく

ラース「ん？」

バン「あ、コロか」

ラース「バン。メグはどうした？なにかなつたか？」

バン「知りません。今のメグは俺の知るメグじゃありません。俺の事も信じられないようです」

ラース「…………… 何があつた」

バン「……………」

ラース「(ハア、不穏な雰囲気になってきたな。大丈夫かよ、これ)」

マサル「おとうさん、おかあさん大丈夫？」

バン「マサル、ごめんな？少しだけここにいてくれ。時間かかりそうなんだ」

マサル「?わかった」

ラース「バン、少し来い。何があったか細かく話してやる」

その後、バンの部屋

ラースはメグに何があったのかを話していた

バン「じゃあ!!そいつらがメグの店や心をボロボロにして!!」

ラース「そういう事だろうな。少し前から苦情が来ているグループ達だ。営業妨害行為をしてくるってな」

バン「許せない……………。俺、そいつらを絶対に捕まえます!」

ラース「駄目だ」

バン「な、何ですか!!被害だってメグの店以外にも出ているし、こんな悪質な事して黙っていられないですよ!」

ラース「それはわかっている。だが、捕まえるのは他の者がする。バンはするな」

バン「何ですか!!メグがあんな目にあつたつてのに、俺だけ黙っ

てなんか」

ラース「その感情だよ。お前、本人達を前にしたら暴れるだろ。手加減なんかせずに」

バン「……………でも！当然の」

ラース「それはこちらがする事だ。お前の役目じゃない。むしろ、お前の役目は違うだろ。メグを立ち直らせる事だ」

バン「……………無理です。メグは、俺の事を信じてくれません。俺、メグに嘘なんてついてないのに、メグは俺を嘘を言ったと決めてきて」

ラース「まだ混乱しているから満足に話できる状態ではないんだろ。うな。あまり気にするな。明日、もう一度話をしてみるんだ」

バン「……………嫌です」

ラース「なんでだ？」

バン「俺、悪くありません。メグが俺を信じてくれなきゃ話なんて出来ません。メグが俺を信じてくれるまで話はしたくないです」

レース「ハア……………」

メグとバンの出会い

その夜、バンの部屋

コンコン

バン「はい」

マルティナ「バン？大丈夫？少し相談に乗りましょうか？」

バン「マルティナ様！ど、どうぞ」

グレイグ「俺もいる。いいか？」

バン「グレイグ將軍まで。はい、構いませんよ」

ガチャ

マルティナ「レースから話は聞いたわ。メグさんも店もボロボロになっちゃったって」

バン「はい……………。俺、メグをなんとか励まそうとしたんですが、メグは俺すら信じてくれなくなってしまっただけ」

グレイグ「喧嘩とは違うのだな。バンはどうしたいのだ？」

バン「……………元通りになりたいです。でも、そのためにはメグが俺を信じてくれないと駄目なんです。今俺だけが頑張っても駄目なんです。それに俺、メグに何もしてやれませんでした」

マルティナ「そんな事ないわ。バンはいつもメグさんの事を嬉しそうに話してくれていたじゃない」

バン「それでも、メグの力になれていません。メグは俺だけが美味しいと言ったって駄目なのだと言っていました。その通りです。メグはお店をやっているから、料理はいろんな人が食べます。俺だけが美味しいといっても、意味がないんです」

グレイグ「……………難しい事ではあるぞ。全ての人に好かれる食べ物などほぼ存在しない。だからこそより多くの人が食べて美味しいと思えるような物を作る必要がある」

マルティナ「待って、グレイグ。ねえ、バン。少しお話の内容を変えましょう。メグさんとの出会いを教えてほしいの」

バン「え？メグとの出会いですか？いいですけど」

グレイグ「しかし姫様、今の問題とそれに何の関係が」

マルティナ「いいの、グレイグも聞いてて。それじゃあ教えて。始まりは何だったの？」

バン「えっと、初めて出会ったのは俺がこのお城で兵士になったばかりの頃です。本当最初で、ギバやダバンと知り合いたての頃です。グレイグ將軍は覚えているかわかりませんが、グレイグ將軍に初めて乗馬の訓練を指導していただいた時でした」

グレイグ「ああ、それはまた懐かしい。基礎の一つとしてやっていな

バン「それが終わった帰り、疲れて甘いものが食べたくなった俺は偶然カフェに立ち寄ったんです。それがメグのやっているカフェでした」

マルティナ「あら、じゃあメグさんは随分前からカフェをやっていたのね」

バン「その時は知らなかったんですけど、メグがカフェを開いて数日しか経っていませんでした。だから今思えばメグもどこか緊張している感じでしたよ。そこに兵士姿の俺が入ってきてもつと固くなっていたように思います」

カフェ

メグ「い、いらつしやいませ！好きなお席にお願いいたします」

バン「あ、ああ。ここ、カフェなんてあったんだな。知らなかった」

メグ「最近出来たばかりなんです。えっと、兵士さんは何を？」

バン「あ、悪い。鎧だと変だよな、気にしないでくれよ。えっと、甘いものが食べたくて立ち寄ったんだ。なんか甘いものが食べたいんだ！」

メグ「わかりました。ケーキでよろしいですか？チョコレートかショートのどちらかになるのですが」

バン「どっちもいいなー。じゃあ二つとも！」

メグ「わ、わかりました。飲み物はどうしますか？」

バン「そーいや喉も乾いたな。あるやつジュースで構わないぞ」

メグ「わかりました、リンゴジュースにしますね。それではお待ちください」

メグはキッチンに戻っていった

バン「俺と同じ年くらいか？頑張ってんなー」

その後

メグ「お待たせしてすみません！あ、あの………こちら、ショートケーキになります」

バン「あれ？チョコレートケーキは？」

メグ「す、すみません！私、まだ慣れてなくて失敗してしまつて」

バン「あ、そうだったのか？いいよ、そんなの。俺、その失敗したやつでも食べるぞ」

メグ「ええ!?そ、そんな事出来ません！お腹壊しますよ！」

バン「大丈夫、大丈夫。お腹空いたからなんでも食べれるぞ！」

メグ「………き、きつと見たら食べる気無くなりますよ？」

バン「へへ、そんな大失敗だったのか？」

メグ「そ、そうですよ！待っててくださいね！」

そう言うとメグはキッチンから焦げたチョコレートケーキを持ってきた

メグ「ほら！見てください！こんなに！半分も焦げちゃって！」

バン「アハハハハ！本当だ、焦げてる。でも、美味そうだぞ」

バンはそのまま食べようとしている

メグ「だ、駄目ですってば！！兵士さんにこんなの出せません！」

バン「平気、平気。それにここまで作ったのに捨てるなんてもったいないだろ？な？」

メグ「でも……」

バン「へへ、隙あり！」

バンはフォークでケーキを丸ごと持っていた

メグ「あ!!」

バン「あーん…………… うん！美味いぞ！甘いチョコレート
味がする！」

メグ「そ、そんなわけじゃないですよ！絶対苦いですって！」

バン「いやいや、美味いぞ！優しい味もする。いいケーキだな！」

メグ「…………… ふふ、変わった人ですね。ありがとうございます」

バン「これはこのショートケーキも期待出来そうだな！あーん！
〜！美味えー！〜！」

メグ「ふふ、大きなお口ですね。一口で食べるとは思いませんでし
た」

バン「腹空いてたからな！」

メグ「訓練してたんですか？少し汗かいてましたけど」

バン「ああ、そうなんだ。だからクタクタですよ」

メグ「あ！それならいい物がありますよ。少し待っててください」

バン「？」

メグはまたキッチンに向かっていた

メグ「これ、よかったらどうぞ」

メグはクッキーがいくつか入った小袋を渡した

バン「お！クッキーだ！いいのか？」

メグ「はい、やはり兵士さんは大変ですから。疲れた時には甘いものですよ」

バン「美味そうな匂いがするー。これも君の手作りなのか？」

メグ「はい。そこまで自信はないんですけど」

バン「いやいや、そんな事ないって！さっきのショートケーキもチョコレートケーキも美味かったんだから、このクッキーだって美味いに決まってる！」

メグ「チョコレートケーキは失敗したんですよ！」

バン「ハハハハ！そうだったな！」

メグ「もう……。私、メグっていいます。このお店を開いたばかりなんです。パティシエになるのが子どもの頃からの夢だったんです」

バン「メグっていうのか、よろしくな！俺はバンだ！俺もこの間兵士になったばかりの新入りなんだ。まだまだ覚えなきやいけない事たくさんだよ」

メグ「ふふ、お互い新米ですね。一緒に頑張りましょう」

バン「おう！それじゃありがとな！また来るからな、メグ！」

メグ「はい、お待ちしておりますね、バンさん」

バン「って感じで、そこから俺がよく通ったりメグが訓練中に来てくれたりしたんです」

グレイグ「そうだったのか、知らなかった。だが、あの時は寄り道するなど言っていた記憶があるのだが？」

バン「……………すみません」

バンは少し下を向いて冷や汗を流している

マルティナ「まあいいじゃない、こんな素敵な出会いがあったんだから。バンがメグさんの作る物が美味しいって言うのはもう最初からだったのね」

バン「はい、そうなんです。やっぱりメグの作る物ってこう、食べると心が温かくなるっていうか、満たされるっていうか、優しい味です。俺、それが一番好きなんですよ」

グレイグ「気持ちがおもっているのだろうか。バンはそれを感じ取っているのだろう。しかし、作る人にとっても美味しいと言われるのは一番嬉しい褒め言葉はずだ。なぜメグさんはバンの美味しいでは満足しなくなってしまったのだろうか」

マルティナ「仕方ないわよ。お店が大きくなったり、お客さんが増えるにつれていろんな人に美味しいって言われたいし、満足してもらいたくなるわ。メグさんもそうなのよ」

グレイグ「ですが姫様、姫様は前に料理を作ってくくださった際、ラーズが褒めていた時に一番嬉しそうな表情をされておりました。やはり料理が一番届けたい相手がいる物なのでは？」

マルティナ「!?ちよ、ちよつと！そんな所見てたの!？」

グレイグ「も、申し訳ありません！偶然そう感じ取ってしまったというか」

バン「一番届けたい相手……………。それって、メグにとっては俺じゃなかったって事ですよね。メグは俺の美味しいだけじゃ駄目だって」

マルティナ「そんな事ないはずよ、バン。メグさんの料理を一番初めに食べてたのは誰？」

バン「……………俺です」

マルティナ「でしょ？そしてバンの意見を聞いて、実際にお店に並べるか決めてたんでしょ？きつとバンの美味しいって言葉を聞いて、メグさんは安心してたのよ。だからお店に並べる事を決めていたはず」

バン「じゃあ……………なんで」

グレイグ「それはきつとメグさん本人にしかわからない事だろう。ただ気が動転していた可能性だってある。バン、お前は料理が出来ない。だからアドバイスが出来ない事を申し訳なさそうにしていたが、おそらくお前がメグさん出来る役目はアドバイスじゃない」

バン「え？」

グレイグ「メグさんに自信を与える事だ。例え作ったお菓子が自信がなくなるとも、お前が美味しいと嬉しそうに言えばメグさんはその姿を見て自信がつくのだ。誰よりも信頼出来る夫からの言葉だからな」

バン「俺が、メグに自信を……俺、そんな事」

マルティナ「ふふ、バンの言葉は真っ直ぐだからね。嘘をついてるなんて思えないもの。それが嬉しいのよ」

バン「お、俺、嘘下手くそですよ」

グレイグ「ああ、知っている。きっとバンと関わっている人は全員その事をわかっているだろう」

バン「本当に出来てたんでしょか、そんな事。美味しいって思ったから言っただけですけど、それだけでいいなんて」

マルティナ「明日、メグさんに聞いてみましょう。早く元通りにしてあげないと。お店も、メグさん自身もね」

バン「はい！ご相談に乗ってくださいありがとうございます！」

マルティナ「いいのよ、悩んでる時は話すのが一番なんだから」

グレイグ「頑張るのだぞ、バン」

理由

次の日の早朝、カフェ

メグ「(やっぱり…………… 私にはこれしかない)」

メグはキッチンに一人で立ち、お菓子を作り始めていた

メグ「美味しいと思ってくれるものを…………… 作らなきゃ」

しばらくして

メグ「…………… 駄目ね。こんなんじゃ駄目よ」

メグはクッキーやケーキを作っていたが、満足する味になつていなかった

メグ「私…………… 才能ないのね。バンが褒めてくれてたからわからなかったけど、私には…………… まずいものしか」

コンコン

メグ「?こんな朝早く?バン?」

店長「メグさん、いるか?シンジだ。ラースから事情を聞いて様子を見に来たんだ。入ってもいいか?」

メグ「シ、シンジさん!?はい!どうぞ!」

ガチャ

店長「ありがとな。悪いな、こんな朝早く」

メグ「そんな！私こそいろんな人に迷惑かけているみたいで」

店長「店…………… 確かに酷い有様だな」

メグ「…………… 当然なんです。私、向いてなかったんです。
このお店もこの機会に辞めようと考えてるんです」

店長「！なんでだ？」

メグ「美味しいと思われない料理を出してるお店なんかあっても仕方ありません。お客さんを少しでも満足させられるようなお店になって思っていましたけど…………… 現実には厳しいですね」

店長「そんな事ないだろう。メグさんの料理は美味しいはずだぜ。前に味見もした事あるから知っている。俺が言うんだから間違いないって！」

メグ「そんなわけありません。だって…………… まずいと話題にされて、お店だってこんなに……………。そんな風に思われているお店なんて」

店長「そいつらは前からいろんな店で悪質な妨害行為をしていたやつらしいぞ。ラースが言っていた。そんなやつらの事なんか信じない、メグさん」

メグ「でも……………」

店長「自信が持てなくなったか？」

メグ「はい……………。私、子どもの頃からパティシエになるのが夢だったんですけど、料理自体はそこまで好きではなかったんです。今でもシンジさんのような手際の良さなんてありませんし、他のお店の方がたくさんのメニューや美味しい物があります。私なんて……………」

店長「……………。まあ自信つてのは難しいよな。目に見える物じゃないし、それが本物かどうかもわからないものだ。俺だって自信を常に持つてるのは不可能だ。でもな、俺は自信があるかどうかよりも大事なものがあると思ってるぞ」

メグ「自信よりも？」

店長「これだけは他の店に負けない！って部分を持つ事だな。それがあれば他の店と違いが出るし、そこを伸ばしていけば自分への自信

にも繋がる」

メグ「私のお店にそんないい部分なんて」

店長「そうか？俺としてはアットホームな雰囲気はとてもいいと思っていたぞ。温かく迎え入れてくれたり、店全体の装飾だったり、馴染みあるようなメニューだったりとか。まあ一番良い点はメグさんの振る舞いだらうな」

メグ「私の？」

店長「明るく、優しくって感じの営業だもんな。お客さんも絶対落ち着いてここにいてくれていたはずだぜ。常連さんだっているんだろ？」

メグ「は、はい。でも、そんな程度じゃ」

店長「んー、そうだな。さっきメグさんは料理自体は好きじゃなかったって言ってたな。それは今もか？」

メグ「昔に比べたら慣れたのでってのはありますけど、それでも一番ではないですね」

店長「じゃあどうしてこのお店を続けられたんだ？好きじゃないのを長く続けるなんて普通は出来ないぞ」

メグ「え……………どうして……………」

店長「何か理由があるから、続けたいものがあつたからやめなかつたんだろ？」

メグ「……………わかんないです」

メグは少し下を向いて考えていた

店長「まあ半分無意識みたいな所もあるだろうしな。仕方ないか。料理してたのか？」

メグ「はい。やっぱり私にはこれしかもう残されてないって思つて」

店長「食べてみてもいいか？」

メグ「だ、駄目ですよ！美味しく出来ませんでしたから」

店長「どれどれ……………んー、確かにな」

シンジはクッキーを手に取って食べ、少し考えた後そう言った

メグ「!!で、ですよ。だから私、才能なかったんです」

店長「味変えたのか？前に食べたものから随分と変わったぞ。前の方が凄く美味かったな」

メグ「え？そんな事ないですよ。分量だって同じですし、作る手順も」

店長「……………メグさん、これ作る時なにを考えてた？」

メグ「え？」

店長「このお菓子里に込めた心はなんだ？」

メグ「……………心」

店長「前に俺はこう言ったはずだ。お菓子を作るのに一番大事なものは心だつてな。それがあればどんなお菓子でも美味しくなるんだ。暖かい味になるからな」

メグ「……………私、美味しいお菓子を作る事だけに精一杯でそん

な事まで考えてませんでした」

店長「やつぱりな。前に感じていた優しい味が無くなっていった。俺はあの味がメグさんの作るお菓子の特徴であり、最も美味しい部分だと思っていた」

メグ「!?……………思い出しました。私が……………このお店を続けた理由……………」

メグは立ち尽くしながら涙を流している

店長「お、おい！大丈夫か？」

メグ「すみません、すみません。私……………バンが褒めてくれたから……………それだけで嬉しかったから……………楽しかったから……………出会った最初の時から……………私はバンに褒めてほしかったから」

店長「バンのため、か。いい理由じゃないか」

メグ「私！バンに酷い事言っしまいました！バンが嘘なんてつくわけがないのに、嘘が下手なのをわかっていなのに、それを……………嘘だっ。私が一番言っほしかった相手の美味しいって言葉を、嘘だと決めつけた。バンはいつも寄り添ってくれてたのに」

店長「……………そうか。だからバンが家にいなかったんだな。大丈夫だ、メグさん。バンの事だからきつとメグさんの事もわかつてくれているはずだ」

メグ「私……………どうしたら」

店長「じゃあ、仲直りといこうぜ。メグさん、バンの好きなお菓子は知ってるのか？」

メグ「……………私が作るもの全部って言ってくれてました」

店長「はは、バンのやつ欲張りかよ。じゃあどれか一つにしようぜ。流石にそんな数は無理だからな」

メグ「……………じゃあ、チョコレートケーキにします」

店長「了解。俺も手伝うからよ、バンのためだけの最高のチョコレートケーキ、作ってやろうぜ。もちろん、心をこめて、な？」

メグ「はい!!」

あなたのために

しばらくして

メグ「出来ました！」

店長「おし、これは大成功だな！」

そこには綺麗に焼き上がり、甘いチョコレートの匂いがするケーキが一切れ出来た

店長「んじゃ、こんなアクセントはどうだ？」

シンジはその上に細かく刻まれたレッドベリーを乗せた

メグ「あ！いいですね！酸味と甘味でバランス取れそうです」

店長「だよな。それに、今度はさつきよりも絶対美味しく出来てるはずだぜ。なんとたつてメグさんがバンのために作った心のこもったケーキなんだからな！バンもきつと喜ぶはずだ」

メグ「はい！シンジさん、ありがとうございました！お店の方は大丈夫ですか？」

店長「今日は少しだけ遅めに開店するさ。ラースがメグさんの緊急事態だと言ってきて俺も焦ったからな」

メグ「ラーズ様……」

店長「それじゃあ俺はここで粗方片付けておくからそれをバンに届けてこいよ。出来立てのうちにな」

メグ「あ、そうですね。でもシンジさんはここまでしてくださいましたのですからそんな片付けなんて」

店長「別にすぐ終わるから大丈夫だって。ほら」

シンジは個包装した先程のケーキを渡した

メグ「わかりました。すぐに戻りますね」

店長「別にゆつくりしてても構わないからな」

カラン

店長「さて、と。なんかまだ心配なんだよな。さっさと終わらせてついていってみるか」

その頃、デルカダール城 朝食場

マルティナ「え？店長さんにも連絡したの？」

ラース「ああ、バンがメグに対してあまり力になれなさそうだったからな。メグの方が酷く傷ついているからどんな行動するかわからない。そこを同業者でもあるシンジに頼んだんだ」

グレイグ「そうだったのか。多少でも改善されているといいのだが」

ラース「まあ少なくともバンにはなんとかアドバイス出来たんだろ？」

マルティナ「ええ、一応ね。バンも少しでも元気になってくれるといいんだけど」

ラース「ならいい方向に向かう事を信じるさ。バンはすぐ行動に移すからな。ここからバンがどうしていか次第だな」

デルカダール城下町 広場

メグ「やだ、雨が降ってきちゃった」

空はドンヨリと暗く、雨が少しずつ強くなってきた

メグ「急いでお城に向かわない」と

男性B「あー！あんたは！」

メグ「？」

男性B「あんただよな！あのカフェの店員！俺の友人に何してくれてんだよ！」

メグ「な、なんの話ですか！」

男性B「とぼけんな！この前あなたの店に友人が向かってからあの二人牢屋に入れられたんだぞ！」

メグ「!?あれは、あのお二人が私の店を壊して！」

男性B「知るかよ！あなたのせいで友達が酷い目にあつて……………あ？なんだ？このケーキ」

メグ「あ、駄目！」

メグは奪われそうになったケーキを必死に掴んだ

男性B「な、なんだよ！こんなん持って必死になつてよ！俺だつて知ってるんだぞ！あんたのこのケーキがまずいってな！」

メグ「！」

メグはそれを聞いて少し力が抜けた

男性B「おっしや！」

メグ「あ!!」

男性にケーキを奪われてしまった

メグ「返してください！それはバンへの大切な！」

男性B「あんたなんかのまずいケーキを喜ぶやつなんかないって
！そらよ！」

ベシヤツ！

男性はケーキの袋を地面に勢いよく投げつけた

メグ「くく!!」

メグはその袋を夢中で取ろうとする

男性B「うっとうしいんだよ！」

バキツ！

メグ「キヤアツ！」

男性はメグの顔に蹴りを入れた

男性B「ほらほらほら！俺はあんたにムカついてんだよ！」

男性はその袋を何回も踏みつけている

メグ「やめてー！ー！！！」

その頃、大広間

バン「……………メグ、大丈夫かな。あ、雨がまた強くなってきた」

バンは大広間でウロウロしていた

バン「……………俺の役目はメグに自信を持たせる事、か。メグ、まだ俺の事信じられてないのかな……………行ってみるか」

バンは傘を持って城から出ていった

その頃、広場

ザワザワ

メグの叫び声により、人が集まってきていた

男性B「チツ！」

男性は去るように逃げていった

メグ「……………」

メグの前にはボロボロでグシャグシャになったケーキの残骸が落ちて
ちている

メグ「~~~~~どうして!!どうして!どうしてなの!!」

商店街 裏通り

男性B「結構なやつに見られたな。少し大人しくしておかねえと」

??? 「んな事出来ねえよ」

男性B「!?!」

店長「てめえ、どれだけの事やらかしたかわかってんのか?」

男性B「なんだ!お前は!」

店長「黙れ」

ドスン!

男性の真横に剣が突き刺さる

男性B「ヒッ……………」

店長「今すぐにもお前を殺してやりたいが、それはラーズ達の役目だ。さあ、牢屋まで連れてってやるよ」

貴族階層 外れ

メグ「ううっ…………… うう」

メグは雨の中ボロボロになった袋を持って泣いていた

メグ「私…………… もう何も残ってない」

??? 「やっと見つけた」

メグ「？」

メグに降り注いでいた雨が止んだ

バン「メグ、ようやく見つけた。家にもカフェにもいないしで心配したんだぞ」

メグ「…………… バン」

バン「こんなずぶ濡れになって風邪ひくぞ。って、顔に怪我してるじゃねえか！どうしたんだよ、それ！」

メグ「バン、どうして？」

バン「？なにがだ？」

メグ「私、バンに酷い事言ったわ。信じられないって。なのに、どうして優しくしてくれるの？」

バン「確かに傷ついたぞ。正直言って今もまだどうしたらいいかわかってねえ。でも、メグが泣いてるんだ。それを放っておけるわけないだろ」

メグ「……………ごめんね、バン。あんな事言っただけ。私、気付いたの。いつもバンの言葉で自信を貰っていたんだって。私がお菓子を作る理由はバンに喜んでほしかったから。バンの笑顔が、言葉がなにより嬉しかったから。それなのに、私は……………」

バン「……………そっか。俺もずっと考えてた。メグに何もしてやれなかったって。力になれなかったって」

メグ「そんな事ないよ！バンはいつだって私に！」

バン「ああ。それを聞いて俺も嬉しかったぞ。でも、伝わりにくかったかもしれないよな。だからよ！俺、さっき思っていたんだ！メグ、俺はメグの店の世界一のファンだぞ！これでどうだ？」

メグ「フアン？」

バン「おう！メグの作ってくれる料理は全部好きだし、メグがしてくれる事も好きだ！これってフアンも同じだろ？だから俺はメグの店の世界一のフアンだ！メグに対する好きって気持ちなら世界中の誰にも負けねえ！」

メグ「ふふ、ふふふ。なに、それ。変なの」

バン「えええ!?こ、これじゃ駄目か!？」

メグ「ううん、平気。凄く嬉しいよ、バン」

バン「へへ、よかった。ところで、その手にある袋？みたいなのはなんだ？」

メグ「あ……………。ううん！気にしないで」

メグはサツと後ろに隠した

バン「な、なんだよー。気になるだろー」

メグ「いいの、気にしないで」

バン「お？甘い匂いがするぞ！もしかしてお菓子なのか？」

メグ「……………元、ね。さっき前に来た男の人達の仲間にボロボロにされちゃったの」

バン「な、なに!?もしかしてその怪我也！」

メグ「うん。取り返そうとしたら蹴られちゃって」

バン「くく!!待ってろ、メグ!!必ず捕まえて絶対後悔させてやるからな！」

メグ「……………」

バン「メグ？」

メグ「これ、チョコレートケーキだったの。バンと仲直りしようと思っ、シンジさんと一緒に心をこめて作ったの。ほら、初めて私とバンが会った時にチョコレートケーキ失敗しちゃったでしょ?だから今度こそ成功したやつでっと思ってたんだけど」

バン「お、俺のために？」

メグ「でももう食べられないわ。帰ったらもう一回作るから待って、バン」

バン「いや、食べる。その袋くれよ」

メグ「え!?!だ、駄目だつて！これ、こんなボロボロだし、泥だつて」

バン「袋に入ってるから泥はねえよ。見た目なんか大して気にしねえつて」

メグ「でも！もう焼きたてじゃないし、美味しくなんか」

バン「隙あり！」

バンは袋をメグから横取りした

メグ「あ!!」

バン「あーん……………」

バンは袋からチョコレートケーキだった粉を口に全部入れた

メグ「もう！またそうやって！」

バン「美味しいぞ！メグ！」

メグ「そんなわけないでしょ。ケーキでもなくなっちゃったんだから」

バン「いやいや、美味いって！本当だって！いつものメグの味がする。暖かい味だ。俺、この味が一番好きなんだ。メグが作ってくれたってわかるからよ」

メグ「!?……………」
ありがとう、バン」

バン「おう！じゃあ帰ったら今度はケーキのやつ食べてえなー」

メグ「ふふ、わかったわ。今よりももっと美味しくするから待ってね」

バン「おお！やったー！」

その頃、デルカダール城　玉座の間

店長「ほら、ラース。さっさとこのクズ野郎連れてってくれ」

ラース「わかったよ。ただこの怪我治してからな」

運ばれてきた男性は胸に大きな切り傷がついている

店長「この程度で済ましてやったんだから感謝してくれよな」

ラース「はいはい。グレイグ、頼む」

グレイグ「わかった。ベホイム」

傷が塞がっていった

店長「二度とそいつ牢屋から出すなよ？それじゃあ俺は店に戻るからな」

ラース「おう、メグの援助とこいつの確保ありがとな」

シンジは少し不機嫌そうに去っていった

マルティナ「店長さんって怒ると普段と違って少し怖いわね」

ラース「まあ食い物を粗末にしたり、女性を泣かせたりするとああなるんだ。今回はどっちも起こったからな。まあ殺さなかつただけまだいい方だ」

グレイグ「まあそれで怒るのは誰もが当然だな。特にシンジの場合
は職業柄にも許せないのだろう」

ラース「それじゃ俺はこいつを牢に入れてくるぜ」

マルティナ「ええ、よろしくね」

支える者達

次の日、デルカダール城

玉座の間

メグ「大変ご迷惑をおかけしました」

バン「もう大丈夫になりました！師匠や店長さんにグレイグ將軍、マルティナ様のおかげです！ありがとうございます！」

グレイグ「それはよかった。お店の方はどうするのだ？」

マルティナ「そうね。壊されちゃったのよね？お金とか大丈夫？」

メグ「一応修理をしたり、貼り直したりしてまた使っていく予定です。お店も続けていこうと思います」

ラース「そうか。なにかあれば言ってくれ。少しは協力するぞ。それとメグさんの悩みはいいのか？美味しいお菓子だったか？」

メグ「はい。私、気づいたんです。皆に好かれるような物なんて作れない。だからこれからも美味しいお菓子なんて作れないと思います。でも、そんな物でも誰かが美味しいと言ってくれる。心がこもっていれば、誰かがそれに気づいてくれる。」

その言葉を信じて、支えにして何度でも作っていきます。それがいつか、私の中で皆に美味しいと思ってくれるようなお菓子になるまで」

ラース「ああ、そうだな。俺もメグの作るお菓子は美味しいと思っているぞ。懐かしい味がするんだ」

バン「師匠もでしたか！」

マルティナ「ふふ、そうね。メグさんのお菓子もとっても素敵よね」

メグ「ありがとうございます、マルティナ様。こちら、よかったら皆様に食べてください。私の作ったチョコレートケーキなんです。バンとの思い出のお菓子なんですよ」

メグは個包装されたケーキをそれぞれに渡した

グレイグ「おお、これがバンから聞いたチョコレートケーキなのか。どれ、ありがたく食べさせてもらおう」

ラース「へえ、思い出のお菓子か。それは期待できそうだ」

バン「絶対美味しいですから期待してもらって大丈夫ですよ！」

メグ「もう、バン。あまりハードルをあげないで」

バン「へへ、いいだろう？本当の事なんだからよ。それではマサルの事も含めて本当にありがとうございます！ございました！明日には俺も復帰しますんでまたよろしくお願いします！」

マルティナ「ええ、わかったわ。また明日ね」

その後、カフェ

メグ「さて、壊れちゃった椅子とかテーブルとか運んじやいませう」

バン「だな。俺がやるからメグは壁とか食器棚とか頼む」

メグ「ええ、そうね」

二人が作業を始めようとしていると

カラン

二人「？」

男性「あの、メグさん。噂に聞いたんですけど、お店を辞めるって」

常連客の男性が申し訳なさそうに入ってきた

メグ「え!?う、噂になっちゃってたの!？」

男性「と、という事はやっぱり本当に」

バン「あー、違う違うー！それはメグが少し落ち込んでただけなんだ。今はまだ無理だけど、この店直したらまたいつも通りだぞ」

男性「ほ、本当ですか!!よかったく……………」

メグ「心配かけてすみません」

男性「いえ、いいんですよ。俺も手伝いますよ。お二人では大変でしよう?。」

バン「本当か！ありがとな！」

男性「あ！皆さん！メグさんのカフェがなくなるというのは間違いだったようですよー！」

男性は外に向かって声をあげている

二人「え?。」

女性A「本当ですか！よかったー！」

女性B「私もめっちゃくちゃビックリした。安心したわ」

メグのカフェの周りには少し人が集まっていた

メグ「こんなに……皆、私のお店が心配で？」

男性「はい、そうなんです。ほら、あんな厄介な人達に目をつけられてお店もこんな事になってどうなるのかって話があったんです。それで心配になって皆で来てみたんです」

バン「よかったな、メグ。皆、メグの作るものが美味しいから心配してくれたんだと思うぜ」

メグ「……ふふ、よかった。私、何も間違ってたのね。誰かを満足させてあげる事が出来てたんだ」

女性A「私達も手伝います！メグさん、また無理していると心配だし」

女性B「バンさん、紐持ってきましたよ。壊れたテーブルとか畳んで結んじやいましょう」

バン「よし！皆で片付け始めようぜ！」

全員「オー！」

夕方

メグ「これでもう片付け終わりね」

カフェにあった椅子やテーブルは全て捨てられ、壁紙や装飾なども一部変わっている

バン「やっぱり大勢いるとあつという間だな！それに俺も安心した。メグの料理はやっぱり皆にも親しまれてたんだなって思ってたよ」

メグ「嬉しい限りだわ。これからまた頑張っていかないと」

バン「自信なかったらいつでも俺に相談してくれよな！俺がメグに自信を持たせるからな！」

メグ「うん、頼りにしてるね」

カラン

ロベルト「メグさん、バン、お疲れ様だな。って、ガラッと変わったな」

ガザル「うお!? テーブルとかほとんど何もねえ!」

ダバン「あ、まだやっぱり無理だったか?」

ロベルト達がやってきた

バン「おお! お前らか! どうした?」

メグ「ふふ、いらっしやいませ」

ロベルト「先週に言っただろ? メグさんの新作のケーキを食べに行くって。オレンジとなかのケーキ? なんだったよな」

ダバン「でも流石にまだ無理だったみたいだな。ロベルト、明後日くらいにしようぜ」

メグ「いえ、大丈夫ですよ。でも座る場所とかが」

ガザル「あ、作ってくれるんなら俺達はそのまま床にでも座るさ」

バン「悪いな、さっきまで片付けしてて今何も残ってないんだ」

ロベルト「楽しみで来てしまったが、メグさん達の事を考えてなかったな。メグさんはもう大丈夫なのか？」

メグ「はい、もう大丈夫です。皆様のおかげです」

ダバン「それなら安心した。バンから聞いていたがメグさんが少し心配だったからな」

メグ「それではオレンジとアプリコットのロールケーキと他はどうしますか？」

ガザル「それ三つで大丈夫だぜ。飲み物は水でいいさ」

メグ「わかりました。バン、ロベルトさん達と話してて。何もしていないのは退屈だろうから」

バン「おう！」

ロベルト「アプリコットだったのか。確かにあまり食べる機会はないものだな」

ダバン「初めて聞いたな。どんなやつなんだ？」

ロベルト「黄色い果実で少し酸味があるが、甘味も感じられるものだ。オレンジと相性はよさそうだな」

バン「そうだったのか！」

ガザル「いやお前は知っておけよ。食べたんだろうが」

バン「美味かったぞ！」

ダバン「それは前に聞いた、ってかこのやり取り前にもしただろうが！」

ロベルト「それにしてもメグさんも元気そうでよかった。バンも最近ずっと元気なさそうだったしな」

バン「俺、メグに何もしてやれてないってのは違つたんだ。メグに自信をあげていたんだってよ。へへ、気づかなかつた」

ダバン「ま、お前の事だからそうだろうよ。俺だつてお前に自信を貰う機会は多かつたぞ」

バン「本当か!? へへへへ」

ガザル「おいダバン。調子にのるからやめろ」

バン「そんな事ねえよ！あ、それとき、お前達もメグの店、支えてくれよ。この店は皆に支えてもらわねえと」

ロベルト「お店つてのはそういうもんだよ。客がきて、気に入って何度も利用してくれる。そうしていかないとお店は継続していけない。お店とお客は絶対に切り離せない関係だ。利用する立場としても支えていくのは当然だ」

バン「難しい事言つててよくわかんなかったけど、支えてくれるって事だよな？」

ロベルト「ああ、そうだよ」

ガザル「お前、もう少し理解する姿勢を見せろよな」

ダバン「あれで難しいは駄目だろ」

バン「うるせー！」

節分

それから数日後、ホムラの里

ラーズはホムラの酒を買いにやってきていた

ラーズ「さて、酒も買ったし後はヤヤク様の所に顔見せていくか。挨拶だけでもしておかないとな」

その時

リリー「あら？もしかして、ラーズさんですか？」

ラーズの近くには焰の店員でお手伝いのリリーがいた

ラーズ「ん？おお、確かリリーだったか。あの焰の店の」

リリー「はい！覚えていてくださって光栄です！こんにちはは！今日はどうされましたか？」

ラーズ「実は俺、ここの名物酒が大好きだよ。よく買いに来てるんだ。ほら、今回も」

ラーズは手に持っていた酒の瓶を見せた

リリー「ああ！なるほどです！ジンタさんもよくこちらのお酒を飲んでいらつしやるんですよ。私は度数が高くて飲めないんですけど」

ラース「リリーはどうしてここに？店にいるはずじゃあ」

リリー「私は明日の節分に向けて恵方巻きの準備をしていた所なんです。色々買わないといけなくて」

ラース「セツブン？エホウマキ？知らないな」

リリー「あら、ご存知なかったですか？ホムラだけの行事なのでしょうか。えつとですね、節分というのは魔物による災難から守り、幸福を呼び寄せるための行事なんですよ。」

それと恵方巻きというのは願い事を叶えるための食べ物でして、海苔にご飯を敷いてそこに好きな七種類の具材を入れた巻物を食べるんです。それを命の大樹のある方向を向きながら食べ終わるまで黙って食べるんです。そうすると願い事が叶うと昔から言われているんですよ」

ラース「ほうほう、中々面白いものなんだな」

リリー「お時間あるようでしたら、ラースさんも一緒に買い物しませんか？節分や恵方巻きに必要な物なども売ってますよ」

ラース「それはありがたいな。俺も一緒に行くか」

その後、デルカダール城 玉座の間

ラースはリリーから聞いた話をマルティナ達にしていた

ラース「んで、これがその聖水に浸したマメってやつで、恵方巻きに必要な海苔も買ってきたんだ。皆でやろうぜ、節分」

マルティナ「それは面白そうね。いいじゃない、やりましょう」

グレイグ「しかし、どちらも量が少ないのではないか？」

ラース「これは見本として買ったんだ。マメは大豆らしいから、それならコック達に言えばくれるだろうし、海苔も形や大きさを伝えれば用意してくれるだろうよ」

グレイグ「なるほど。マメを撒くとの事だが、どこに撒くのだ？」

ラース「あー………聞いてなかったな。でも魔物役の人にぶつけるっていう人や家の中でやるって人もいるって言ったような」

マルティナ「そこはあまり決められてはいないのね。なら、楽しくいきましよう。誰か魔物役になってもらって、その人に優しくマメを撒くって感じで」

グレイグ「ブレイブ達がいるが、本物では駄目なのか？」

ラース「いやグレイグ、お前魔物に聖水を浸したマメをぶつけるって……いくらブレイブ達でも怒るぞ」

ラースはグレイグの発言に少し呆れている

グレイグ「む、それもそうだな。すまない、よくない発言だったな」

ラース「そうだ。楽しめるように少し変えてもよさそうだよな」

マルティナ「というと?」

ラース「マメを当てた点数で勝負するのはどうだ?わかりやすいようにマメにスプレーで色を付けておく。そうすれば当たったかわかるだろ?」

グレイグ「掃除が大変になる気がするのだが」

ラース「城内だけだし、そこまでたくさん付けないさ。いつもやってた城下町の飾り付けの片付けより楽だろ」

グレイグ「まあ……そうだな」

マルティナ「ふふ、それは楽しめそうね。私も賛成よ。お父様にもお話ししてくるわ。少し待ってて」

その後、訓練場

ラーズ「というわけで！魔物役を兵士達からも二人決める事になったぞ」

ラーズは兵士達にも同じ話をしていた

バン「へー、節分って面白そうだな！魔物退治って事か！」

ベグル「魔物役は何人くらいなんですか？」

ラーズ「俺達の中から一人と兵士で二人だ。残りはマメ撒き役だな」

ガザル「ラーズ將軍、そんなマメを当てられる役なんてやりたくないです」

ラーズ「本気で当てるわけじゃないから大丈夫だ。子ども達のためにもど思ってやってくれないか？ゲームみたいにするから楽しむぐらいでいいからよ」

ラーズはガザルの発言に苦笑いしている

ロベルト「どうやって決めますか？」

ラーズ「じゃんけんだな。それなら公平だろ」

ギバ「よし！これは負けたくねえな！」

ダバン「まあ乗り気にはならないよな。さて、皆いくぞー」

兵士達「じゃんけんポン！」

バン「げえ!?俺、魔物役かよ！」

ガザル「だあー！負けたー!!」

ラーズ「決まったみたいだな。頼むぞ、バン、ガザル」

バン「まあ一応頑張ります」

ガザル「くっ………なんでパーを出したんだよ、俺」

ベグル「ラーズ將軍！マメってどれくらい強くぶつけていいんですか!?!」

ベグルはウキウキした様子で尋ねてきた

ラース「いやなんで当てる前提なんだよ。ちゃんと加減しろよ」

ベグル「わかりました!! 周りに気をつければいいんですね!」

ラース「いや、だから……… まあいいや」

次の日、玉座の間

ラース「よし、皆準備は出来たか?」

全員「はい!」

ラース「簡単なルール説明だ。まずこの城内に魔物役が三人いる。その人に今持っている色付きのマメを当てたら一点だ。たくさん点数を稼いだ人の勝ち。もちろん魔物役の人は避けてくる。それもしつかり考慮して当てていけよ。」

マメは一人二十個。あと入れる部屋にも制限がある。ここ玉座の間と各個室は入ったら駄目だからな。もし入ってもマメは撒くなよ? あと極力マメを思いつきり当てないように。もし怪我されても面倒だからな。他に質問はあるか?」

マーズ「はい、ラース將軍。何か一番になった人には報酬みたいな

ものとかあるんですか？」

ラーズ「もちろん用意してあるぞ。内容は一番になるまで秘密だ。あと魔物役の人にも、もし全部避けられたら特別な物も用意してある。頑張ってもらわないとだからな」

ダバン「となると、魔物役側も本気で避けてきそうですね。意外と難しいんじゃない？」

ルナ「おとうさん、コロとブレイブはどうするの？」

ラーズ「コロとブレイブはここで待機だな。微量でも聖水がマメについている。当たると嫌がられるぞ」

マルス「じゃあ仕方ないね」

ラーズ「まあこんなもんか。わからなかった時はその時に聞いてくれ。それじゃあゲーム開始だ！」

節分2

廊下

ギバ「そういえば魔物役はどこで待ってるんですか？」

ラース「魔物役の人待ってなんかいないし、今この城のどこにいるかもわからない。まずは見つける所からだな」

ルナ「まずはかくれんぼだね！マルス、私達の知ってる隠れ場所にもいるかもよ」

マルス「確かに！あそこわかりにくいもんね。行ってみよう」

二人は二階に向かっていった

グレイグ「二応俺もついていってみる。変なことされてもこまるからな」

デルカダール王「ああ、頼んだぞ、グレイグ」

ラース「王様はどちらに向かいますか？」

デルカダール王「はは、わしはもう決まっておるぞ。先程キツチンが入ってはいけない場所になかった。そこなら誰かおると予想して

な」

ロベルト「なるほど。そういえば確かに。王様、俺も行きます」

ギバ「よし！俺も！」

三人はそのまま大広間に向かっていった

マーズ「そうか、入ってはいけない場所以外ならどこにでもいる可能性があるのか」

ベグル「バルコニーも大丈夫って事だよな。いってみるか」

二人も二階に向かっていった

ダバン「レース將軍はどうされる予定ですか？」

レース「まずは訓練場に向かおうかと思っていた。ほら、バンが隠れていそうじゃないか？」

ダバン「ああ、確かに。あいつ、何かあると訓練場にいますからね。俺も向かいます」

訓練場

しかし、レースの予想とは違い誰もいなかった

ラーズ「んー、いなかっただか。流石に読まれると思っただか？」

ダバン「仕方ないですかね……………ん？ラーズ將軍、あそこに鎧なんてありましたっけ？」

訓練場の隅には武器やレプリカが置いてあるが、そこに鎧の一式が立てられていた

ラーズ「あ？俺もあんな所に置いてあるのは初めて見たぞ」

二人「……………もしかして」

二人はゆつくりと鎧に近づいていく

ラーズ「……………」

ラーズは頭の部分から顔を覗こうとしている

ダバン「どうですか？ラーズ將軍」

ラーズ「いや、誰もいない。どうやら本当に置いてあるだけらしい」

ダバン「そうですか、残念。まあ逃げられないですもんね」

ラーズ「だな。別をあたるか……………と言うと思っただか！」

ラーズはそのまま後ろにマメを投げた

ガザル「チツ！」

マメはガザルが避けて当たらなかった

ガザル「くそっ！もう少しだったのによ！やっぱりラーズ將軍には効かなかったか！」

ガザルがこっそりと訓練場から出ていこうとしていた

ダバン「ガザル!?!いつの間に！」

ラーズ「俺も鎧を見ていた時に気づいた。この訓練場にもう一つ心配があるのを感じたからな」

ガザル「絶対当たりませんかからね！」

ダバン「当たれ！」

ガザル「パワフルスロー！」

バリ！

ガザルはブーメランでマメが当たる前に破壊した

ダバン「ハア!?そんな反側だろ！」

ラーズ「魔物役だけ武器の使用を一つだけありにした。狭い場所では禁止だけどな。ブーメランだからこそ、ここや大広間じゃないと使えないがな」

ラーズは話しながらマメを投げた

ガザル「そうですよ!あの鎧に気を惹かれている内に大広間に逃げるんです。それを繰り返すつもりだったのに、いきなりバレるなんて幸先悪いですよ！」

ガザルは簡単に避けた

ラーズ「こつちは二十発しかない。ガザルだけに集中するわけにもいかな」

ダバン「いいところで諦めも必要って事ですよね。バンもガザルも身のこなしが軽いから避けるのは得意分野ですから苦戦しそうです」

ガザル「避け続ければいいならまだ余裕ですよ!さあ、もつと投げてください！」

その頃、キツチン

ロベルト「うーん、いないですね」

デルカダール王「むう、わしの予想が外れたか。すまんかったな」

ギバ「いえいえ！そんなの構いませんよ」

デルカダール王「む？おお、これは」

王様は机の上に美味しそうなケーキがいくつか置いてある事に気づいた

ギバ「ケーキがたくさん。なんで放置されてんだ？」

ロベルト「おお！これ、ダーハル―ネの有名店のショートケーキ！それにクレイモランのチョコレートロールケーキも！」

デルカダール王「おお、ロベルトもケーキに詳しいのだな。そうだが、かなり美味しい物だな。食べていいのだろうか」

ギバ「え」

ロベルト「俺、このショートケーキ食べた事なかったんです！」

ギバ「いや、ちょっと」

デルカダール王「そうなのか。それならば食べてみるとよい。甘味といちごのバランスがとてもよいのだぞ」

王様とロベルトは既に椅子に座って食べ始める体制になった

ギバ「いやいや！王様！ロベルト！こんなんおかしいですって！罨かもしれませんか!?!」

ロベルト「こんなにいい罨なら俺は喜んで引つかかる」

デルカダール王「よい事ではないか。中々食べられない物が貰えるのなら」

ギバ「えく……………」

二階

ルナ「いなかった？マルス」

マルス「うん、いないー。どこにいるんだらうね」

マルス達は絵や花瓶などが飾られている場所を探していた

そこには色々な隙間や物陰があり、隠れるにはいい場所となっている

グレイグ「あまりここでは激しく動いてはいかんど。壊したら大変

だからな」

ルナ「じゃあ誰もいないかー。いると思ったんだけどなー、この鎧とか」

ルナは横にある鎧を見た

マルス「確かに！誰か入ってもおかしくなさそう」

グレイグ「うむ……………。中を覗いてみるか」

グレイグが子ども達より前に出た

その時

ガシヤン！

三人「!!」

鎧が勝手に動き始めた

ルナ「キヤーーーーッ!!」

マルス「わわっ!!か、勝手に動いた！」

??? 「そ、そんな驚くなよ、マルス、ルナ」

二人「え？」

バン「俺だ、俺。まさか適当で当てられるとは思わなかったぞ」

鎧が頭を外すと、中にはバンが入っていた

グレイグ「こんな所に隠れていたのか。あまりバンらしくないな」

バン「いやー、ここならあまり暴れられないのでちょうどいいかなって」

グレイグ「ルナ、魔物役のバンだぞ。マメを投げないのか？」

ルナ「あ！忘れてた！バンさん魔物役なんだ！じゃあ、えいつ！」

バン「やべ！俺も忘れかけてた！避けないと！」

ガシャン！

マルス「な、なんか重そうだね。でも、それなら！えい！」

バン「げ、マルス！連続は卑怯だろ！」

ガシヤン

グレイグ「自分から得意な機動力を失くしてどうする。俺もいるのだぞ」

バン「げ」

ピシ

バンの鎧に小さく緑の色が付いた

グレイグ「これで一点というわけか」

ルナ「いいなー、グレイグさん。私も早く点数取る！」

マルス「僕だって！」

マルス達はどんどんマメを投げていく

バン「ま、待ってくれ。俺、動きにくくて」

その頃、バルコニー

マルティナ「あら、来たわね。ベグルにマーズ」

二人「マルティナ様！」

ベグル「魔物役ですよね。マルティナ様はやりにくいなー」

マルティナ「ふふ、大丈夫よ。ゲームなんだからお互い頑張りましょう」

マーズ「まあそうですね。よし！」

マルティナ「悪いけど避けさせてもらおうね」

ベグル「俺もいきますよ！」

マルティナ「ハアツ！」

マルティナはベグルが投げしてきたマメを足で蹴り碎いた

二人「ええ!？」

マルティナ「あら、聞いてなかった？魔物役の人は一つだけ武器が許可されているのよ。私はもちろんかくとう技よ。さあ、当てられるかしら？」

マーズ「ベグル、思ってるより相当苦戦しそうだぞ」

ベグル「同感。これ、一点でも与えたら優勝とかでいいだろ」

節分3

その頃、訓練場

ラース「もうやめよう、ダバン。これ以上はマメの無駄だ」

ダバン「そうですね、結構投げましたからね」

ガザル「よ、よし！一発当たったけどなんとかあった！逃げろ！」

ガザルは勢いよく訓練場から出ていった

ラース「残りは十三発か。二人には六く七発しか投げられないな」

ダバン「これ一発当てるだけでもかなり苦労するじゃないですか。大変ですよ」

ラース「ゲームといってもつまらないのは嫌だろう？だから互いにメリットがあるようにしたらこうなったんだよ。まあ楽しむ程度でいいからよ」

ダバン「確かにいつもと違って結構楽しくはありますがね。この後はどこに行きますか？」

ラース「まだ二階を見てないからな。二階に行ってみようと思う」

ダバン「わかりました」

その頃、キツチン

ロベルト「ご馳走様でした！いやー、流石ダーハルーネですね。このショートケーキも有名なだけあってやはり格別でした」

デルカダール王「そうであろう？わしもかなり気に入っておるのだ」

ロベルト「王様はクレイモランのケーキ、他に食べた事ございますか？俺のオススメはヨウルトトットウなんですよ」

デルカダール王「おお！あの星型のパイのようなケーキだな。もちろん食べた事あるぞ。あれもかなり独特のケーキで大変美味だからのう」

ロベルトと王様はケーキの話に花を咲かせている

ギバ「あの一、王様、ロベルト。食べ終わった事ですし、話もそれくらいにしていただいてゲームに戻りませんか？」

デルカダール王「おお！すまんかった、ギバよ。つい話が弾んでしまつてゲームの事を忘れてしまつていた」

ロベルト「王様、また今度お話ししましょう」

デルカダール王「ああ。甘い物はわしは大好物なのでな。喜んで話をしよう」

ギバ「どこに向かいますか？」

デルカダール王「このケーキは確かに罠なのだろうな。そしてこれを考えられる者の魔物役はただ一人。マルティナだ。おそらくわしがここに来ることを予想していたのだな。そしてその隙に自由に城を動く。つまり、マルティナはここより離れた場所におるというわけだ」

ロベルト「お、おお。凄い、王様。食べながらそこまで考えていたなんて。俺はケーキに夢中だったのに」

ギバ「見習えよな、ロベルト」

ロベルト「いや、お前だって時間はあつただろ。考える事はたくさん出来ただろ」

ギバ「俺はそこまで深く考えるのは苦手だ」

ロベルト「バンみたいな事言ってるじゃねえよ」

デルカダール王「ははは、仲良しでなによりだな。ではバルコニーか二階に向かうとしよう。一階にマルティナはおらんだろうからな」

その頃、一階 階段付近

バン「へエ、へエ……。はく、作戦失敗だ。動きにくいつたらないな、全く」

バンの鎧には緑や黄色やピンクなどの跡がついている

バン「くっそく、隠密してればいけると思ったのに」

マルティナ「あら！バン！いっぱい跡ついてるわね」

三階から逃げるようにマルティナが走ってきた

バン「あ、マルティナ様。そうなんです、隠れていたらマルス達に偶然バレちゃって」

マルティナ「そうだったの。大変そうね。あ、バルコニーからベグル達が来るわよ。今のうちに逃げておかないと」

バン「ええ!?それはまずい！見つかったら大変な事になる！逃げなきゃー！」

バルコニー

ベグル「あーあ、逃しちまったか。まあ仕方ないか」

マーズ「まあな。惜しかったのにな」

ベグル「とりあえず他の魔物役の人を探そうぜ。バンとかバンとか」

マーズ「もうバンしか狙ってねえだろ。加減はするんだぞ？」

ベグル「覚えてたらな。へへへ」

マーズ「あー、もう。本当にまぶしくなったら止めないとか。面倒なほうについたなー、まったく」

大広間

ルナ「バンさん見失っちゃったー」

マルス「でもマメも少なくなってきたし、たくさん当てたからきつと一番だよ」

グレイグ「そうだな。バンのやつ、ルナの突拍子もない発言で相当焦っていたのだろうか」

ルナ「ここには誰もいないのかなー」

マルス「階段の裏とか！」

グレイグ「あまり隠れられる場所は少ないからな。いたとしてもわかりやすいだろう」

チャリン

マルス「ん？こつちでなんか音がしたよ」

グレイグ「確かに。なんだろうか」

ルナ「誰かいるんじゃない!？」

音の発生場所に向かうと

ルナ「これ………コイン？」

グレイグ「カジノのコインだな。どうしてこんな場所に」

マルス「へー、これがカジノのコインなんだ。ソルティコとグロツタにあるんだよね」

ガザル「(今のうちに……)」

ガザルがゆっくりと訓練場に戻っていった

二階 廊下

三人「あ」

ベグル達とバンがちょうど目の前にいた

バン「うおーーー！」

ベグル「待てや、おらー!!!」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

バンはすぐに後ろに走り出し、ベグルも追いかけてながらマメを投げている

バリ！バン！

バンに当たらなかったマメが壁にももの凄い音を立てて碎けていく

バン「ば、馬鹿野郎、ベグル！マメなのになんて威力してんだよ！つて、顔ばかり狙うな!!」

ベグル「うっせえ！大人しく当てさせろ！」

バン「嫌だ！絶対痛いじゃねえか！」

ベグルとバンは激しく言い争いながら走り回っている

マーズ「ハア……………。騒がしいな、まったく」

節分4

バルコニー

デルカダール王「うむ、誰もおらんか。…… いや、前までいたの
だろう」

ロベルト「そうだと思います。マメの形跡がありますからね」

ギバ「ここも後で掃除しないとだな」

デルカダール王「どれ、今度は二階を探してみるとするかの」

その頃、二階

ベグル「だあー！クソ！すばしっこいやつだぜ、本当に！マメ無くな
なっちまった」

マーズ「本気出しすぎだ、ベグル。バンは一目散に逃げてったぞ」

ベグル「チツ！マーズ、後は頼んだ」

マーズ「俺だけしかいないじゃないか、全く。ペース配分考えろよ」

ベグル「俺は最初からバン一人しか狙ってねえ」

マーズ「はいはい。ほら、一階にバンを追いに行くぞ」

展示室

ラーズ「見つけたぞ、マルティナ」

ラーズは部屋の中で柱の影に隠れていたマルティナを見つけた

マルティナ「あら、見つかったやつた」

ラーズ「避けにくいんじゃないか？ほら！」

マルティナ「ふふ、舐めないでほしいわね」

マルティナはマメを蹴って碎いた

それと同時に柱から飛び出していく

ダバン「俺もいますよ！マルティナ様！」

マルティナ「わかってるわよ！」

マルティナはマメをギリギリで避けた

ダバン「もう一つありますよ！」

ダバンはその先に更に更に追加でマメを投げる

マルティナ「くっっ！」

ピシ

マルティナの服に赤い色が付いた

ダバン「よし！一点だ！」

マルティナ「あーあ、当たっちゃったわ。やっぱり避けるのも難しいわね」

ラーズ「まあまだマルティナは一つだけみたいだし、大丈夫だろ。さあ、俺も狙うぞ！」

マルティナ「うーん、ここはバレると少し不利だわ。逃げた方がいいわね」

マルティナは背を向けて走っていく

ダバン「追いますか？ラーズ將軍」

ラーズ「まあいいんじゃないか？そこまでして執着するのもよくないからな」

ダバン「確かに。バルコニーに行ってみましょう」

訓練場

グレイグ「むう、ここにもいないか。バン以外見ていないが一体どこに？」

マルス「あれ？グレイグさん、鎧がある。ここに鎧はあったっけ？」

グレイグ「ん？おお、本当だ。おかしいな、ここは武器庫のようなもので鎧は展示室やその近くにしかないはずだが」

ルナ「じゃああれにもバンさんみたいに誰か入ってるかも！」

マルス「そうだね！流石ルナ！行ってみよう！」

マルス達は鎧に近づいていく

ガザル「(よしよし、そのまま俺も……)」

ガザルがまたこっそりと訓練場から出て行こうとすると

グレイグ「そう何回もうまくいくと思うなよ、ガザル」

ガザル「!？」

グレイグが振り返り、ガザルと目があつた

マルス「え？あ！ガザルさん、みーつけ！」

ルナ「本当だー！いつの間に後ろにいたの？」

ガザル「き、気づいてたんですか、グレイグ將軍」

グレイグ「大広間でもそうだったな。カジノのコインで気を引いているうちに他の場所に移動していた。まだ気配を消すのは難しいよ
うだな」

ルナ「よーし、マメ当たれー！」

ガザル「くっ！こ、子ども相手だとどれくらい本気で避けていいの
か」

グレイグ「あまりそこは気にしないでいいぞ、一応ゲームなのだからな」

ガザル「グレイグ將軍は絶対避けます！子ども達はまあ………
避けるからな！」

マルス「絶対当ててみせるからね、ガザルさん！」

その時

バン「うげ!? またマルス達だ！」

バンが入ってきた

ガザル「なんでお前まで来たんだよ！」

バン「仕方ねえだろ！逃げてたらここに来るしかなかったんだ！」

マルティナ「ええ!? バンにガザルまでいるじゃない！」

更にマルティナまで入ってきた

グレイグ「ひ、姫様まで!?!」

ガザル「こ、これはまずいって！絶対他の人達もここにやってくる
！」

マルティナ「くっ！大広間に戻らないと！」

バン「お、俺も戻れ！」

キッチン

マルティナ「ここなら来ないはずね。一旦休憩しましょう。って、あら、ケーキが食べられてる。もう、お父様ったら本当にここに来たのね。三つも食べるなんて。なんだか廊下が騒がしいわね。バンかしら?」

廊下

ダダダダダ!

バン「ヒィー!!」

バンとラース達は廊下を走っていた

ラース「待て!バン!」

ダバン「ていかなんでそんなにカラフルになってんだよ!」

バン「隠密が失敗したんですー!というか、追いかけてくださいー!」

ラース「それは無理だ!おら!」

ダバン「俺も!」

ピシ!ピシ!

ダバンの投げたマメが鎧に、ラーズの投げたマメはバンの顔に当たった

バン「ちよ、ちよつと痛い！でもさっきのベグルの威力に比べたらマシかも」

ラーズ「じゃあもつとくらえ！」

バン「それはご遠慮します！」

夕方、玉座の間

ラーズ「さて、結果発表だな。魔物役の人についていた色が多かった人が勝ちだ。その結果、一位はマルスだ！おめでとう！」

マルス「ええ!?!ぼ、僕!?!やったー！」

ラーズ「ルナも多かったんだ。まあバンにたくさんついてたつてのが多いんだけどよ」

バン「最初にいっぱい投げられたから」

マルス「ねえねえ！一番になった人へのご褒美ってなに!?!」

マルティナ「ふふ、それはね、お父様お願いします」

デルカダール王「ああ。マルスよ、こっちにおいで」

マルス「?うん。なに?じいちゃん」

デルカダール王「よく頑張ったな、マルスよ。褒美はわしがマルスの言う事を一つだけなんでも聞いてあげるぞ」

兵士達「ええ!」

マルス「いいの!」

マルティナ「ふふ、中々ない機会よ。よかったわね、マルス」

ベグル「え、それってもしも俺達の誰かが一番だった場合も……?」

ラース「そうだぞ。嬉しいだろ?」

マーズ「な、なんかそれは逆に恐れ多いというか……… 申し訳な

いというか」

グレイグ「まあそうだろうな。俺は他のにした方がいいと言ったのだが、止まらなくてな。流れるようにこうなってしまった」

ロベルト「なんかマルス達が一番でよかったかも」

デルカダール王「それでマルスよ、決まったかな？」

マルス「あ！うん！思いついた！あのね！またじいちゃんどこか旅行に行きたい！」

ルナ「！マルス、それ最高！私も行きたい！」

デルカダール王「おお……………ああ、もちろんだとも。必ず叶えてみせるからな」

マルティナ「そ、それでいいの？マルス。ほら、欲しいものとか」

マルス「じいちゃんとの楽しい旅行が今の僕の欲しいものだよ！」

ラース「……………よし、急いで計画を立てる必要があるみたいだ

な
」

「デルカダール王「任せておくのだ、ラーズよ。わしもマルス達と旅
行に行くのは久しぶりだからな。楽しみにしておるぞ」

ベルとの出会い

それから数日後の夜、デルカダール城下町

酒場

そこではギバとマーズ、ガザルで酒を飲んでいた

ギバ「え？ダバンの様子が変？」

マーズ「なんとなくな。特別変ってわけじゃないんだが、行動が少しおかしくてよ」

ガザル「そうか？例えばどんな事だよ」

マーズ「俺達には変わらないんだけどよ、ラース將軍達に対して少し変わったような。よく玉座の間で話す事も増えてるしよ。この前なんて玉座の間から出てきたんだが、金貰ってきたんだぜ」

ギバ「え!?!ダバンのやつ、生活に困ってんのか?」

ガザル「ミラさんもいるのに生活が苦しいのはおかしいだろ。確かに少し気になるな」

マーズ「本人も気にするなって言ってたから心配というわけではな

いが、困っているなら頼ってくれてもいいよな」

ギバ「ふーん、なるほど。バンやベグルには言ったのか？」

マーズ「いや、まだだ。まあ大した事ないだろうから伝えてない。バンに言ったら勘違いして大騒ぎするだろ」

ガザル「確かに。まあ頭に入れておく。何かあったら動けるようにしておこう」

マーズ「ああ、頼んだ」

その時

ガシヤアン!!

三人「!?!」

突如皿やコップが割れる音がした

男性A「なんだと、ゴラア!!」

男性B「やんのか、ああ!?!」

近くでは男性達が取っ組み合いを起こそうとしている

両者とも顔は赤くなっており、酔っ払っていると見える

ギバ「おいおい、こんな所でか」

ガザル「まったくだ。仕事増やされるのは困るんだけどよ」

マーズ「起こったんだから仕方ない。止めるぞ」

マーズが立ち上がった時

女性「やめないか、お前達！」

男性達の近くで飲んでいた一人の女性が凜とした声をあげた

女性「ここは皆が集う酒場だ！暴れるのは外でやれ！」

その女性は腰まで伸びた紫がかった黒い髪をしており、青い花の髪飾りがついている。また近くには大剣も置いてある

男性B「なんだよ、姉ちゃん！こいつが悪いんだぜ、俺の酒がまずいって！」

男性A「お前みたいなのやつが飲む酒なんて酒じゃねえよ！」

男性B「んだとお!？」

男性達は再び取っ組み合いが始まろうとしている

女性「仕方ない、外に出ていってもらおうぞ！」

女性は近くにあつた大剣を取った

ガザル「おいおい、また面倒になってきてるぞ」

マーズ「ストップだ！」

マーズは女性と男性達の間割って入った

男性B「ぐっ」

女性「む……」

マーズは片手で乗りかかっていた男性の一人を掴み、片足で女性が掴む剣を止めていた

男性A「あ…… 兵士さん」

マーズ「これ以上暴れるのなら三人とも連行するぞ。特にその二人、酔っ払うまで飲んで誰かに迷惑をかけるな。仲良くしろとは言わないが、嫌ならさっさと家に帰って別々で飲むんだ。」

そのこの女性の方も勇敢に止めてくれようとしたのは助かるが、あなたまでそんな物をここで振り回す気ですか？周りの方にも危険が及ぶのでもう少し冷静にお願いします」

男性B「わ、悪かったよ、兵士さん」

男性A「俺も熱くなりすぎた。別にそこまで強く思ったわけじゃなかったんだ」

マーズ「次はないからな」

男性達は酔いが冷めたのか倒れたテーブルを直して、コップなども全て拾ってマスターに届けた

マーズ「まったく」

ガザル「優しいな、マーズは。もう少し強めに言ってもよかったんじゃないの?」

マーズ「そんな事して怯えられても困る。突っかかってきたら考えるが、まだそんな段階じゃないだろう」

女性「失礼した、兵士殿」

マーズ「いえ、これも仕事のうちですし、よくある事なんで」

女性「そうか。私も先程この有名なデルカダールに来て酒場でゆっ

くりしていたら邪魔されてな。私もどうやら気付かぬうちに熱くなっていたらしい。兵士殿もお仲間と楽しんでいただろうに申し訳ない」

ギバ「いいって、いいって。それにしても旅人だったのか、姉ちゃん。見たところ一人みたいだし、剣もあるけど女が一人でってのは少し危険じゃないか？」

女性「なんだ、女性だから旅をしてはいけないのか？」

女性は少し睨むようにギバを見た

ギバ「あ、いや、そういうわけで行ったんじゃないんだ。勘違いさせて悪かった」

女性「ふん、まあいい。兵士殿、先程の私と男達を止めた動き、力、素早く冷静な対処、どうやら中々やるみたいですね。兵士というのは名ばかりで実力は低いと判断していたのですが、どうやらあなたはそうでもないようですね」

マーズ「あー、まあな。俺だけじゃないがこの兵士は特別鍛えられてるからな。他の国の兵士達よりはずっと強い自信がある。こっちのギバやガザルも同じだ」

女性「ほう、それはまた面白い。名乗り遅れた。私、旅人をしているベルと言う。様々な場所を巡ってようやくこの有名なデルカダー

ルに来たのだ。それと先程の実力を見て兵士殿に頼みたい事がある」

マーズ「なんだ？」

ベル「私と戦ってはくれないだろうか？」

マーズ「え」

ベル「忙しい事は承知しているのだが、私自身もつと高みを目指したいのだ。そのため強き者と戦い、自身の実力がどれだけ通用するかを測りたいのだ。どうか引き受けてくれないだろうか」

マーズ「うーん……」

ガザル「面白い事になってきたじゃねえか、マーズ。引き受けてやれよ」

ギバ「明日なら昼から時間あるだろ。その時はどうだ？」

マーズ「まあ……少しだけだからな」

ベル「おお！ありがたい！明日の昼だな、どこに向かえばいい？」

マーズ「まあ戦闘って事だし、俺達が普段使っている訓練場がある。デルカダール城の中にあるからデルカダール城に明日の昼に来てくれ」

ベル「一般の人が入って平気なのか？」

ギバ「用事があつたりするなら普通に入って大丈夫だぜ。許可が出れば見学もいろいろ出来るぞ」

ベル「ほう、かなり開放的なのだな。それも珍しい」

ガザル「特徴的だろ？マルティナ様が王女様になってからなんだ」

ベル「ああ、勇者の仲間の一人である人だな。確か英雄グレイグと同じく勇者の仲間であるラーズという男もいるのだったな」

マーズ「流石に知っていたか。まあそういうわけで明日城に来てくれよ」

ベル「了解した」

疑心

その頃、デルカダール城

マルティナとラーズの部屋

そこではラーズによりグレイグも集められていた

グレイグ「どうした？ラーズ。真剣な話など」

ラーズ「グレイグ、この記述は本当なのかを聞きたい。まずはそこからだ」

ラーズは少し古めの赤い手帳のようなものを渡した

マルティナ「これは？」

ラーズ「とある人が書いたデルカダールでおこった現象の記述だ」

グレイグ「!!?こ、この筆跡!!ホメロスのものか!?!」

マルティナ「ええ!?!」

ラーズ「保管庫に残っていた。そしてその内容だが」

グレイグ「某年某月某日、デルカダール城下町に突如謎の男が出現。何の前触れもなく現れた男は記憶を失っていた。素性も確認できず、怪しいと思っていたが性格的に悪人ではないと判断した。名前だけは覚えていたようで、名前はバンというらしいだ?!」

マルティナ「!!?ま、待って!!バンって、今のバンの事!」

ラース「その続きも頼む」

グレイグ「あ、ああ。バンを観察する対象として判断した私は兵士として招くと同時に本人と口裏を合わせ、昔からデルカダールに住んでいた事にした。また、バンを常に監視が出来るようにもしていた。

しかし、監視をしても特に何もなく明るい性格から様々な人と仲良くなっている。だが、素性がわからぬ謎の男。何か不穏な動きをしないか今後も監視を続けていく」

マルティナ「嘘……………」

ラース「これは本当なのか?グレイグ。この日、本当にバンはデルカダール城下町に現れたのか?」

グレイグ「す、すまない。この日、記憶が正しければ俺は遠征に行っていた。数日後に帰った俺はホメロスからバンという男が新入りとして入ったと聞かされただけなのだ。まさかこんな事情があったと

は」

ラーズ「だが、間違いなくバンはいきなり現れ兵士に入った、と。だからバンの住民登録も無かったのか」

マルティナ「そ、そんな事まで調べていたの!? どうして、バンの事を?」

ラーズ「前から疑問に思っていた。なぜ魔物の言葉がわかるのかつてな。エドみたいに魔物と過ごしていたわけじゃないだろう。エドやビル達にも聞いたが、魔物の言葉を理解するには普通の人間では不可能に近いと言っていた。

また目が凄くいいというのも不思議だ。なんせデルカダール地方の見張り台からデルカコスタ地方の森の中の細部まで見えている。これは人間の領域じゃない」

マルティナ「バンが人間じゃない!? 何言ってるのよ、ラーズ! 彼は人間よ! 間違いなく!」

グレイグ「言われてみれば昔からバンは目がよかった。遠征時にもそれで助けられた事がある。だが、バンはいいやつだ。記憶も素性もなく怪しむのはわかるが、そんな悪い人ではあるまい」

ラーズ「それは俺もわかっている。調べた理由はほんの興味程度

だったんだ。まさかこんな事を見つけるとは思わなかったけどな」

マルティナ「バンをどうするつもり？まさか辞めさせるなんて言わないわよね？」

ラース「まさか。そんな事、俺だっしてしたくない。悪いやつなんかじゃないのもうわかりきっている。だが、あいつが何者なのか、どうして何の前触れもなく現れたのか、記憶を取り戻そうとはしないのか。色々知りたい事はある」

グレイグ「ふむ…………… 確かにな」

ラース「明日、昼ごろにバンに玉座の間に来てもらって直接聞いてみようと思っている。マルティナとグレイグはどうする？」

マルティナ「……………」

グレイグ「俺は聞こう。ホメロスが何を考えてそのような判断にしたのかも知りたい」

ラース「マルティナは？」

マルティナ「…………… 聞かす。どんな事が聞かされるのか少し怖

いけど、きつとバンの事だから大丈夫と信じてるわ。でも、ラース。これだけは約束して。絶対無理矢理聞こうとはしないで。誰にでも知られたくない事だあってあると思うし、知らなくてもいい事だあってあるから」

ラース「そうだな、マルティナの言う通りだ。もちろん約束する。俺だって強制なんてしたくないしな」

次の日、デルカダール城 大広間

ベル「こ、ここがデルカダール城か」

ギバ「お、来た来た。よつ、ベルだったよな。昨日はよく眠れたか？」

ベル「ああ、昨日の。昨夜は少々寝付けなかった。久しぶりに強者との戦いで興奮しているのだろうな。今もワクワクしている」

ギバ「はは、闘争心メラメラだな。さて、訓練場はこっちだぜ。ついでこいよ」

ベル「ああ、感謝する」

訓練場

ギバ「おーい、マーズー。ベルが来たぞー」

マーズ「ああ、本当に来てくれたのか。それじゃあ準備するから少し待っていてくれ」

ベグル「あんた誰だ？」

ベル「突然すまない。私はベル、旅人だ。昨夜そちらのマーズという兵士達と色々あり少々知り合ったのだ。その際、私のわがままでこちらで少し勝負をする事になった。すぐに出ていく予定なのであまり気になさらずに」

ロベルト「ほー、勝負か。マーズは結構強いぞ、そこら辺の魔物や兵士と比べてるような間違いだ。大丈夫か？」

ベル「ああ、私も腕には少々自信がある。どれくらい太刀打ち出来るか調べさせてもらう」

ダバン「まあマーズの事だから激しくはならないだろうけどよ、もし怪我したら言ってくれ。俺が回復するから」

ベル「感謝する」

ベグル「大剣、か。女性には似つかわしくない武器だな」

ベル「あなたも大剣使いのようですね。勉強にしたいのでこの後お願いしてもよろしいでしょうか？」

ベグル「構わないぜ。俺は周りよりちよつと強いぞ」

ガザル「どこがちよつとだよ」

ベル「ああ、楽しみにさせてもらうぞ」

マーズ「よし、準備オーケーだ。ベルさん、大丈夫か？」

ベル「ああ。私も準備は済ませてきている」

マーズ「了解。さて、と」

マーズは剣を抜いた

それを見てベルも大剣を構える

ギバ「じゃあ俺が始めの合図を言うぜ……………始め！」

マーズ「ふっ！」

マーズはベルに突っ込んでいく

ベル「ふむ、早い。だがこの程度！」

ベルは大剣を振り下ろす

マーズ「イオナズン！」

マーズは振り下ろされる少し前に止まり、魔法を唱える

ベル「魔法!？」

ドオオン!

ベルを中心に爆発が起こる

マーズ「は！」

マーズは煙がまだ立ち込める中に入っていく

ベル「ふん！」

キンツ!

マーズ「はやぶさ斬り！」

ベル「見えているぞ！」

キンツ!

煙が晴れてもベルはマーズの攻撃を防ぎ続けている

ベル「こちらもいかせてもらおう！アイスブレード！」

マーズ「はあ！」

マーズは攻撃の隙に背後に回り、すぐに攻撃に移る

ベル「!?ふん!!」

ガキン！

マーズ「!?」

ベルもすぐに振り返り、攻撃をガードした

ベル「ぶんまわし！」

マーズ「あつぶね！」

マーズの頭スレスレを大剣が通り過ぎた

ギバ「おう、やるじゃん、ベル。今のに反応できるのは中々だな」

ガザル「大剣も扱いが慣れているな。宣言通りそれなりに出来るみたいだ」

ダバン「女性でここまで強いのも久しぶりに見たなあ。マルティナ様とはまた違う強さだな」

ベグル「まあ俺に比べればまだまだだな」

ロベルト「はいはい、負けず嫌いを発揮させてんなよ」

マーズ「あれを防いだか。中々やるみたいですね、ベルさん」

ベル「そちらこそやはり私の読み通り兵士とは思えん強さ。しかも魔法も高度ときた。これで旅人でもないのだから驚きだ」

マーズ「ありがとな。メラゾーマ！」

ベルに火球が向かっていく

ベル「ふ！」

ベルは叩き切った

ベル「プラスマブレード！」

ベルは大剣を大地に刺し、雷を呼び起こした

マーズ「!?見た事ない技だな！だが！バラツキがあるなら！」

マーズは雷の間を掻い潜っていく

ベル「ほう！これでも攻めてくるか！」

マーズ「しんくうげり！」

ベル「ふ！」

ガキン！

マーズ「マヒヤド！」

マーズは蹴りで距離を離れた所に氷の塊を降らせていく

ベル「多様な高度魔法に接近戦も可能とは！厄介だな！」

ベルは氷を避けたり斬ったりしていく

ベル「渾身斬り！」

マーズ「よっと！ばくれつきやく！」

マーズは振り下ろされた大剣をギリギリでかわし、流れるように蹴りを繰り返していく

ベル「ぐうっ！」

マーズ「イオナズン！」

ベル「くっ！負けてはいられない！プラスマブレード！」

マーズの周りに雷が呼び起こされる

マーズ「これは……ギラグレイド！」

マーズの周囲から火が渡り、雷を消し去っていく

ベル「全身全霊斬り！」

マーズ「ビッグシールド！」

ガキン！

マーズは大剣を盾で防いだ

マーズ「くう！中々強力だな」

マーズも盾越しに力負けしそうになっていた

ベル「くっ！これでも駄目か」

マーズ「ふう、一旦ここまででいいか？」

ベル「もう少しやっていたかったが仕方ない。強いな、マーズ殿。このようなレベルは初めてだ」

マーズ「ベルさんこそかなりの腕前だな。一人で旅しているだけはある」

ベル「そうか、ありがとう。だが、まだまだのようだ。私ももつと精進せねばならんな」

ベグル「マーズとは武器的に相性悪いからな。でも、いい戦いしてたと思うぜ」

ベル「ああ。だが、そんなものは言い訳にしかないからな。どんな相手であろうと負けたくないような強さを持ちたいのだ」

ギバ「真面目だなー。ま、努力家なのはいい事だよな」

ロベルト「ベグルともやるか？」

ベル「ああ、お願いしたい。同じ大剣使い同士、どんな戦い方が気になるのでな」

ガザル「だってよ。ま、ベグルも勉強になるんじゃないやね？俺達の中で

大剣使えるのお前だけだし」

ベグル「だな。俺も勉強させてもらおうか」

ベル「六人だけなのか？兵士全体としてはもっというのだろうか」

ダバン「後はもう一人いるんだ。兵士長なんだ、そいつ。今はマルティナ様達に呼ばれて話してるからいないけどよ。後は新入り達とかだな」

マーズ「俺達は兵士長と一緒に新入り達に各武器や戦い方を教えているんだ」

ベル「なるほど、新入り達の師匠のような人だったか。それなら納得だ」

ギバ「まあ俺達にそれぞれの武器の使い方を詳しく教えてくれたのは二人だけだな」

ベル「二人だけだと!?見た所、様々な武器を使うというのに!」

ベグル「凄いよな。それが勇者様の仲間でもあり、こここの有名な將軍でもあるグレイグ將軍とラーヌ將軍だ」

ベル「ほう、流石は勇者と共に世界を救っただけはある。戦闘経験も豊富というわけだな。これは相当な強者と見た。いつか剣を交えたいものだな」

ガザル「あの人達は強いぜ。今でも勝てない時の方が多いからな」

ベル「兵士長という方もさぞ強いのだろう」

ダバン「バンは俺達より確かに強いが、ある意味同じくらいだぞ」

ベル「バン？今、バンと言ったか？」

ダバン「ん？そうだ。兵士長はバンっていうやつなんだ。知り合いか？」

ベル「……………いや、なんでもない。そんなはずはないのだからな」

バン

その頃、玉座の間

バン「……………」

マルティナ「……………」

ラース「……………」

グレイグ「……………」

四人が黙りこんでおり、静かな空間になっていた

バン「え、えつとく…………… 大事な話って、何でしょうか？俺、何か悪いことしましたかね？」

マルティナ「ううん、そうじゃないんだけど聞きたい事があって」

バン「は、はい」

グレイグ「ラース、お前から始めてくれ」

ラース「はいよ。バン、某月某日、お前はこのデルカダール城下町

に突如現れたらしいな」

バン「!!?え……………」

バンは驚愕の顔をしている

バン「な、なんでそれを……………。ラーズ將軍は知らないはず。俺、誰にも言っていないですよ!」

グレイグ「ホメロスの残したものだ。信じられないのだが、本当にお前は昔の記憶もないままなのか?」

バン「……………」

マルティナ「ラーズ、やつぱりやめましょう。バンがかわいそうだよ。過去がどうであれ、バンが誰であれ、今の彼はこの国の兵士長よ」

ラーズ「言いにくいか?バン」

バン「……………隠してすみませんでした。その通りです。俺、昔の記憶はまだなくて自分が本当は誰なのか、どんな人間なのかもよくわかっていません。でも!これが俺なんだと、今のままだが俺なんだと、わかりました。俺は今のままで構わないんです」

ラーズ「そうか。知りたくはないのか？」

バン「それは……少し興味はあります。でも、俺はそんな事よりもここにいたいんです。今の俺を受け入れてくれるここにいたいんです。変わりたくはありません」

グレイグ「わかった。もう一つ聞きたい事がある。ホメロスと口裏を合わせていたそうだが」

バン「そうですね。今までラーズ將軍達にお話しした事もその口裏合わせによるものです。両親が二人いて、兄弟はなし。兵士には反対されながら入ったという事にしてありました。騙っていてすみませ
ん」

グレイグ「いや、構わない。お前が周りに怪しまれないようにするためのホメロスなりの優しさだったのだろう。何か思い出したような事はあるのか？」

バン「いえ、特になにも……強いて言うなら、小さな村にいたような記憶がある程度です」

マルティナ「わかったわ。バン、隠していた事を知ってしまったてごめんさい。でも安心して。私達はこれを知ったからといって何も変わらないわ。怪しいからやめさせるなんてしないし、対応も変わらないし、周りにも話さない。いつも通りよ」

バン「はい！ありがとうございます！」

ラース「だが、もし何かあったり思い出したりしたら協力するからな。いつかわかるといいな、お前が元はどんなやつなのかをさ」

バン「そうですね。少し気になります」

グレイグ「それでは急に呼び出してすまなかつたな。訓練場に戻って構わないぞ」

バン「わかりました。ありがとうございます」

バンは去っていった

訓練場

ベグル「オラア！」

ガキン！

ベル「ぐうっ！凄いパワーだな」

ベグルの攻撃をベルは大剣で防ぐが、かなり押し戻される

ベグル「ま、一旦休憩だな。二連戦で疲れもあるだろ」

ベル「うむ、了解した。やはり強い。私もいつかこのレベルに到達できれば」

ギバ「駄目だ、ベル！ベグルのやつはとんでもない馬鹿力だからよ！こんな脳筋になっちゃお終いだぜ！」

ベグル「てめえをお終いにさせてやろうか？」

ギバ「げ!?逃げろ！」

ベグル「待てや、ゴラア!!」

ベル「はっはっは！仲がよいのだな」

ロベルト「まあ十年以上一緒にいるからな」

ギバ「お！バン！話は終わったのか？」

バン「おう。って、ベグル!?な、なんだよ！」

ベグル「どけ！バン！その阿保に話があるんだからよ！」

バン「へ？あ、ギバの事か！ほ、ほら！」

ギバ「あー！馬鹿！押し出すな！」

ベグル「捕まえた」

ギバ「ギヤアアア!!」

ベル「……………」

ベルは騒いでいるバン達の方を見ている

マーズ「ベルさん？どうした？」

ベル「いや、その兵士長であるバンという人が来たようなのでな。
少々気になっていた」

ガザル「あんなのは特に気にするようなやつじゃないぜ？」

バン「よー、お前ら！」

バンが降りてきた

ベル「!!?やはり貴様か!!バン!!」

全員「え?」

バン「へ?だ、誰だ?この姉ちゃん」

ベル「忘れたとは言わせぬぞ!!私の家族を皆殺しにした貴様を私は絶対に許さない!!」

全員「ええ!!?」

バン「な、何言ってるんだよ!俺、そんな事してねえって!!」

ベル「問答無用!覚悟しろ!」

ベルは凄まじい気迫で大剣を持って突撃していく

バン「いい!?!」

バンも必死に避けていく

マーズ「ど、どうなってんだ?」

ロベルト「とりあえずベルさんを押さえこむぞ！」

ガザル「あ、ああ！」

その後、ベルが縄で縛られた後、マルティナ達もやってきていた

ラース「なるほど。このベルって人がどうしてここにいるのかはわかった。バンを襲った理由は？」

ベル「皆様！その男から離れてください！その男は大変危険な人物です!!」

バン「そんな事ねえよ！それを言ったらベグルやガザルの方が絶対危険じ」

ドゴン！

バン「くっつ！」

ドサ

ベグル「馬鹿は黙ってろ」

ベグルが顔面に拳を叩き込み、バンは堪らず気絶した

ベル「……………」

グレイグ「なぜバンをそんな悪人扱いする。バンはそんなやつではない。別人と勘違いしているのではないか？」

ベル「間違うものか。その顔、名前、見た目全てが一致している。この男は私の村に住んでいる母や妹達を殺したのだ！」

ラース「バンの記憶が無い期間の出来事か？だとしても、バンがそんな事をする性格には見えない。記憶がなくなり、この性格になった？」

マルティナ「村はなんて村なの？」

ベル「ガオスの村だ。ユグノア地方の山中にある人里離れた小さな村だ」

グレイグ「聞いた事がない。地図にも載っていないな」

ベグル「だがよ、ベルさんや、こいつは凄え馬鹿のお人好しなんだよ。人を殺そうなんて考える事すら出来ないやつだ。そんなやつが人殺しなんて出来るのかよ？本人だって知らないみたいだしな」

ベル「私もそこが気になっていた。先程のやり取りでも感じていたが、私の知っているバンと一つ違う点がある。性格だ。こんなにやか

ましく感情が豊かなやつではない」

マーズ「じゃあやつぱり別人じゃないのか？同じ名前で、たまたま見た目がそっくりなだけだろ」

ベル「……………」

ラーズ「よし、一旦ベルを解放しろ。ベルにはそのガオスの村に俺達を案内してくれ。それで本当にバンがベルの家族を殺していたのかを判断する」

ベグル「了解しました。もう暴れるなよ？」

ベグルは縄を解いた

ベル「わかりました。どなたが共に行かれますか？」

ラーズ「まずそこで伸びてるバンは確定。後は俺と……………」

マルティナ「私も行くわ。バンの事が気になるもの」

マーズ「ラーズ將軍、俺にも行かせてください。ベルを連れてきた俺にも責任がありますから」

ベル「なんだ、マーズ殿。まるで私が悪人かのような言い草だな」

マーズ「少しだけ含ませたからな。城の中で暴れるなんてやってい
いと思っていたのか？ベルさん」

マーズは咎めるようにベルを見た

ベル「ぐ………………。それはすまなかった。感情が爆発してしまっ
てな」

ラース「それじゃあこの四人で頼む。グレイグ、マルティナと王様
を交代して王様についていてくれ」

グレイグ「了解した。ベグル、バンがない間頼んだぞ」

ベグル「お任せください。馬鹿がいないのでスムーズに動けます
よ」

ラース「おーい、バン。起きろー」

バン「キュウ……………」

ラース「全く。ベグル、もう少し優しくやれ。完全に気絶して簡単

に起きなくなってるじゃねえか」

ベグル「す、すみません。いい角度で入りすぎたかもしれません」

ダバン「殴った時の音、顔から出てるとは思えない音がしたもんな」

ロベルト「副長は凶暴で困るぜ、本当に」

分離

残酷な描写があります。苦手な方はお気をつけください

その後、ガオスの村

ベル「ここが私の故郷、ガオスの村になります」

村は山の峠となった場所にあり、多少道は整備されている。その道に小さな家々が立ち並ぶだけの本当に小さな村だった

マーズ「これはまた…… 本当に小さい村なんだな」

ベル「大した物もない村ですが、一応織物を作って売る事で村を存続させていました。まずは村長の家に向かいます。こちらのバンが村を襲った者かどうかを誰よりもよく知る人物です」

リース「了解した。案内頼んだぜ、ベル」

バン「……………」

バンは村を見て呆然と佇んでいる

マルティナ「バン？どうしたの？」

バン「俺……………何か思い出せそうな……………。ここに俺はいた事があるような」

ラース「(やはりバンがそのベル達家族を襲った本人なのか？記憶がなくなっていただけの可能性が出てきたな)」

マルティナ「ゆっくりでいいわ。ほら、ベルさんに続くわよ」

バン「は、はい」

村長の家

ベル「村長、ベルです。ただいま帰りました」

村長「ふむ、無事帰ってきてくれたか、ベルよ」

ベル「はい。それと村長に会っていただきたい方達がいらつしやるのでお連れしました。デルカダール王国からの者達です」

村長「デルカダール王国から？それはまた大層な所から。何かあったのかの？」

ベル「見ていただければわかるかと。入ってきてください」

ガラ

マルティナ「突然のご来訪申し訳ございません。デルカダール王国王女、マルティナと申します」

ラース「マルティナ王女を護衛する騎士、ラースという。よろしく頼む」

マーズ「兵士のマーズです」

村長「な、なんと……………まさか王女様が直接ご来訪なさるなんて。こちらこそこんな何もない村においてくださいまして大変ありがとうございます。ですがベルよ、この方達は一体どうして?」

ベル「もう一人います。本題はそちらの方です」

バン「あの……………兵士長のバンといいます、村長さん。よろしくお願ひします」

村長「な!?!なんと!?!」

村長は目を開いてバンをマジマジと見ている

ベル「全くの同一人物ではありませんか?村長。バンと名前も顔も同じです」

村長「……………バンよ」

バン「はい」

村長「お主は記憶はあるのかの？」

全員「!?」

バン「……………この村の記憶はほとんどありません。ですが、どこもなくここに俺はいたような……………」

村長「そうか。なら、帰るのじゃ。お主が今いるのはデルカダール王国なのじゃろう？それならそこで今まで通り暮らすのじゃ。ここ
の事は忘れなさい」

バン「え……………」

ベル「なぜです!!村長!!この男は私の家族を殺した」

村長「それは違うぞ、ベルよ。確かにお主の母と妹達はバンに殺された。じゃが、それはこのバンという人間がもたらした事ではない」

ベル「別人………という事ですか!!ここまでそっくりだというのに!？」

マーズ「ラーズ将軍、マルティナ様、一体どういう話なんですか？あれ。俺には何が何だか」

マーズは小さな声でラーズ達に尋ねた

ラーズ「後で全部話す、少し待っていてくれ。村長さん、少しお願ひしたい事があります」

村長「はい、何でしょうか」

ラーズ「こいつの、バンの事を教えていただけませんか？」

村長「……… 私達の知るバンとこちらのバンさんはもう違う方です。私はこちらのバンさんの事は知りません」

ラーズ「俺にはそうは思いません。全く同じ見た目をしていて、同名。少なくとも何かしらの縁があるかと思えます。親子………と
か」

バン「俺の親がここに？」

ラース「何かバンについて知っている言い方でした。なんでもいいのです、教えてください」

村長「…………… わかりました。ベルのためにも、少し話しましょう。バン、あなたが何者なのかを」

バン「!?」

マルティナ「やっぱり村長さんはバンを知っている?」

村長「もう何十年も前になります。この村にとある不思議な夫婦がおりました。母は人間、父は魔物の夫婦です」

全員「な!?!」

マーズ「人間と魔物が夫婦!?!」

ベル「そんな事があったのですか!?!村長!」

村長「誠に異端ではあったのだが、その魔物もとても人に優しくしての。その魔物の名はゲイン。ゲインはこの村を作るのに力を貸してくれたら、魔物の襲撃から何度も守ってくれておった。村人達も皆、ゲインを信頼しておった。そしてゲインは一人の女性に恋をした。

それがナーシャという女性じゃ。氣立てもよく、優しい方だった。そうして二人は結ばれ、村の中でもおしどり夫婦と呼ばれる程仲がよかった。しばらくして夫婦の間に生まれた子どもがおった。その子どもの名前は、バン。お主じゃよ」

バン「!!?俺が………魔物の血を………?」

マルティナ「本物の半魔人って事!？」

ラーズ「なるほど。だから魔物の言葉がわかったり、目が人間よりも優れていたのか。説明がついたな」

村長「子どももできて、村も二人を祝福しておった。あの時が最も幸せな瞬間じゃっただろう。じゃが、その幸せは長くは続かなかつた。ナーシャが買い物に行くために村を出た後、帰ってこなくなつた。ゲインは大層焦つてのう。何日も眠る事もせずに探し回っておった。

ナーシャがいなくなつて数日後、死体となつて見つかった。ユグノア地方の湖の中で沈んでおったそうじゃ。傷跡だらけになつており、元の美人とは思えないほどだったそうじゃ。盗賊の仕業だったんじゃない」

マーズ「酷え話だ」

ベル「そのゲインはどうしたのですか？」

村長「そこから歯車が狂っていった。ゲインは家に引きこもるようになった。バンの世話だけはしていたようじゃがな。村の皆もゲインの気持ちは痛いほどわかっておった。食べ物や服などを家の前に置いていったり、気持ちだけでもゲインに届くようにと祈る者もおった。

そんな時じゃったな、魔物達が凶暴になり始めたのは。何が原因だったのかは今でもわからん。周囲にいた魔物達が凶暴となり、この村も襲われる事が格段に多くなった。ゲインはそれでも出てこなかった。必死に村の戦える者達で対処をしていた。その中で最も優れた戦士がベル、お主の父じゃ」

ベル「……………」

ラース「(魔王の影響はこんな所にまで及んでいたのか)」

村長「そして、ついに崩壊は訪れた。ゲインも凶暴化してしまったのじゃ。暴走してしまったとでもいうべきじゃった。体は大きくなり、目は赤く血走っており、そこら中の家や人間達を壊していった。村の皆もゲインを傷つけたくはなく、必死に言葉をかけるがそれも届かず。

わし達は悩んだ。今まで平和に暮らせていたのはゲインのおかげ。ゲインがいたからこそ、安全に楽しく過ごせていた。ゲインもそれを

望んでいたはずじゃった。じゃが、そのゲインが自らわし達を殺そうとしておる。村を守るためにはどうしようもなかったんじゃ。

わし達はゲインの討伐を決めたのじゃ。そのリーダーがベルの父じゃった。激しい死闘じゃったよ。ベルも見たじやろう？村の奥にある祠と石碑がまさにその場所じゃ。ゲインとベルの父は相討ちじゃった。お主の父は最期まで勇敢じゃったんだぞ」

ベル「……………はい」

村長「ゲインが死んで残されたバンをどうするか。育てていく事を決めていたのだが、やはりゲインの件もあり魔物の血を少しでも持つバンを皆恐れていた。バンは当時6歳。まだよくわかっておらんかっただろう。そこでベルの母がバンを引き取った。バンは純真な少年でう。よく笑っておる子じゃったよ。そこからすすくと育っていった。何事もなく。」

じゃが、そんなバンにすら過酷な運命は牙を向いた。バンが20歳になる頃じやろうか。邪神が現れた」

マルティナ「邪神……………ここでやってくるのね」

村長「そうじゃな。マルティナ様やラーズ様はよく知っておられるだろう。魔物が更に一段と凶暴になった。見慣れぬ魔物の姿やありえぬ程の強さの魔物も現れた。ベルもわかるな？」

ベル「はい。村を安全のため一時的に封鎖した時の事ですね」

村長「その時じゃった。偶然黒い太陽を見たバンに異変が起こった。バンが苦しみ始めたのじゃ。わし達は突然の事態に困惑したが、ゲインの事が頭に浮かび、すぐさま戦える者達でバンを囲んだ。そして目を疑う事態が起こった。

バンが二人になったのじゃ」

全員「!？」

ラース「バンが二人!?どういう事だ？」

村長「わし達も何が起こったのかはわからん。だが、見てわかった事があった。おそらくじゃが、バンの中にあつた魔物のバンと人間のバンで分離したのじゃ。それを裏付けるかのように片方のバンは今まで通りの人間のように、片やもう一人はゲインを彷彿とさせる姿をしておつた」

バン「じゃあ俺は人間の姿のバンって事ですか？」

村長「そうじゃ。そして、人間のバンは突如姿を消した。どこにいったのかは今までわからなかった。残された魔物の姿のバンは目を覚ますやいなや、暴れ始めた。姿も変えられるようだな。人間の姿になつたり、魔物の姿になつたりしながら暴れておつた。

その騒ぎを聞きつけたベルの母と妹達がやってきた。ベルは確か遅れていなかったのじゃったな。その時、バンは偶然人間の姿じゃった。勘違いしたのだろう。ベルの母親と妹達は暴れているバンを止めに入った。そこをバンは何の容赦もなく切り裂いたのじゃ」

ベル「それが…………… 私を見た瞬間」

マルティナ「じゃあ、ベルさんの見たバンは魔物の姿のバンという事なのね」

村長「そうじゃ。その後、バンを押さえ込もうとしたのじゃが、力はかなり強くてのう。封印するのがやっとじゃった」

ラース「封印？」

村長「この山の山頂に小さな遺跡があります。その中に封じ込めてあります。今もまだ中で暴れているでしょう」

バン「……………」

マーズ「バン、こんな事があったんだな。記憶がなかったのなら言ってくれたって」

バン「ホメロス将軍に言われていたんだ。誰にも言わない方がいいって。俺もその方が怪しまれないし、城にいればいろんな人の情報がかかる。もしかしたら俺に関する情報もあるかもと思っていたんだ」

マーズ「そうか……」

村長「これがこの村で起こった悲劇と、バンの出生に関する事じゃ。バン、生きていてよかった」

村長はバンの両手を優しく握った

バン「村長さん……」

村長「ベルが勘違いしてしまつてすまなかつた。じゃが、わしはもう一度お主と会えただけで嬉しいぞ。さあ、帰りなさい。あなたがいる場所はデルカダール王国なのですから」

バン「……」

一騎討ち

バン「…………… 確かに平和に終わるならこのまま帰るのが一番です。でも！俺、それじゃあ嫌です！もう一人の自分がこんな事しておいて、それを放っておくなんて出来ません！」

村長「気にせんでよいのじゃ、バンよ」

バン「いえ、嫌です！俺、もう決めました！もう一人の俺に会いに行きます！それで俺が本当の俺なんだと証明してやります！」

ベル「だが、魔物の姿なのだぞ。バンといってももう人間ではない。どうするつもりだ」

バン「えつとく…………… 会えばわかりますよ！」

マーズ「お前な…………… こんな時にそんな適当に済ませるなよ。自分の問題でもあるんだぞ」

バン「で、でもよ！俺が二人つてのも気味悪いし、一人にしておきてえじゃん？それに大丈夫だ！同じ俺ならもしかしたら話出来るかもしれないねえ。無理なら俺がベルの母ちゃん達の分までぶっ飛ばす！」

ラーズ「全く……………。こうなったら止まらねえんだから。決めたんだな？バン」

バン「はい！」

ラーズ「なら、やり遂げてこい」

バン「はい!!」

その後、山頂　小さな遺跡

バン「ここに魔物の俺が」

村長「気をつけるのじゃぞ、バン。相手はお主といえど魔物。力はお主より強いじやろう」

バン「大丈夫です、村長！俺も負けなくらい強いので！」

マルティナ「私達もついていきたいのだけど……………それは野暮よね」

ベル「本当に大丈夫なのか？バン」

バン「ああ！ちよつと待っててくれよな」

バンは遺跡の中に入っていった

村長「うーむ……：…… やはり不安じゃ。元は同じ者であつたバンが割れて戦うなぞ。人間のバンがどれほど強いのかは存ぜぬが、魔物のバンの強さはよくわかつておる。もしも負けてしまった場合、バンはどうなる」

マーズ「大丈夫です、村長。バンはデルカダール王国の兵士長。決めた事は必ずやり遂げる男です。それをずっと俺は見てきました。きつと今回だつて」

ベル「村長、人間のバンが負けた場合、どうなるのですか？」

村長「私にも想像でしかないが、おそらくはバンという魔物が生まれる事になる。人間のバンを倒す、もしくは一つに戻る事でより強い力を持つやもしれん」

マルティナ「そんな事にはならないと信じてるわ。バンは強いもの。絶対大丈夫」

ラース「逆も然りという事だな。人間のバンが勝てば、魔物のバンは消えて人間のバンだけになる。もしかしたらより強くなつて戻ってくるかもな」

遺跡 内部

バンは大きな扉を開けるとそこには自分と同じ姿をしたバンがいた

魔物バン「やはり来たか、私よ」

そのバンは体こそバンと同じだが、皮膚の色は全て黒くなっている。赤く光る目が遺跡内でとても目立っている

バン「魔物の俺か。おい！俺！元に戻ろうぜ！」

魔物バン「戻る？何をふざけた事を。俺はお前でもある。お前の暴れたい心、衝動性そのものだ。ようやく自由に力を使えるようになった。戻ってたまるものか！」

バン「暴れてえなら訓練でいっぱい出来る！だから戻ってこいよ！」

魔物バン「私が望むは血。貴様のような生温い衝動などヘッドが出るわ！」

バン「……………駄目なのかよ」

魔物バン「それよりも貴様は邪魔だ。私の糧になってもらおう」

バン「そんなのはごめんなんでね。悪いけど、俺！ぶっ飛ばさせてもらうぜ！」

魔物バン「ふざけおって!!」

遺跡前

ラース「村長さん、さつき話してたバンの両親。ナーシャさんとゲインさんだったな。どんな人だったんだ？姿とか」

村長「そうですね。ナーシャは村の外からやってきた者でして、この村で皆の胃袋役。つまり、コックをしていました。面倒見もよくてですね、酔っ払った人などを介抱したり、風邪をひいた子どもには看病や食事を別に作ったりもしていました。」

ゲインは魔物らしく頭にツノが二本生え、体毛は緑でした。そこまですぐわぬパワーを持っており、見た目にそぐわぬパワーを持っていました。村にやってきたのはお腹を空かせていたからでした。そこをナーシャがご飯を作ったのです。ゲインはまあそれは驚くほどに食べてナーシャも嬉しそうにしていました。

最初こそゲインは疎まれていましたが、その魔物らしからぬ優しさや自慢のパワーで私達を幾度も助けてくれました。眩しい笑顔をしており、よく笑う方でした。バンとそこは似ておりますね」

ベル「話されて思い出した事があります、村長。確か祠の近くにあの絵にそのような二人組が描かれていたような」

村長「おお！そうじゃったな。それがまさにナーシャとゲインだつたはず。結婚した時に記念に描かれた物です。後ほどご覧になってみてください」

マルティナ「バンのご両親ね。挨拶はしておかないとね、ラース」

ラース「だな。どんな見た目か少し気になるな」

その時

ドガアン!!

全員「!？」

目の前にある遺跡が粉々に砕けた

村長「ヒエエエ!!」

ベル「村長！」

ベルは村長の前に出た

マーズ「なんだ!？」

土煙が晴れていくと

魔物バン「ハア………ハア、やるな、貴様。私も鈍っているせい
かうまく動かん」

バン「ゼエ、ゼエ。俺こそ、変な技ばかり使いやがって」

二人のバンが多少ボロボロになっていた

ラース「あれが魔物のバンか」

魔物のバンは体毛は緑になっており、頭から一本のツノが生えている。
目は赤く光り、闇のような黒い物体で出来た剣を持っている

魔物バン「このままではラチがあかん。ケリをつけさせてもらおうぞ
！」

魔物のバンをバンに向かっていく

バン「！こい！」

バンは槍を構えて防御している

魔物バン「その体！私の物になれ！」

魔物のバンの体は槍をすり抜け、バンの中に入っていった

バン「!!？」

全員「!？」

マーズ「え!?と、取り込まれた!？」

バン「ぐ……………ぐうううう」

バンは苦しそうにもがき始めた

マルティナ「バン!!」

マルティナはバンに駆け寄って行こうとするが

ガン!

マルティナ「な、なにこれ?くっ!!これ以上行けない!」

透明な壁がバンに近づかせないようにしていた

ベル「まさかこれもあの魔物のバンの仕業!？」

ラース「バン!!俺達の声が聞こえるか!」

マルティナ達は壁の前で必死に声をあげる

バン「ぐうっ……………聞こえ……………」

バンの体から黒い瘴気のようなものが出ている

村長「いかん!!このままではバンは魔物になってしまう!」

マーズ「なんだって!?体内から取り込もうとしてんのかよ!」

ラース「バン!!お前、決めたんだろ!!ここで魔物の自分を倒して、人間の自分が自分なんだって証明するんだろ!!俺の弟子なら!!決めた事實きやがれ!!」

バン「…………… し… しよ………… う」

マルティナ「立ちなさい!バン!こんな所で終わるあなたじゃないでしょう!デルカダールを守る兵士長がこんな無様な負け方許さないわよ!」

マーズ「ベグルもギバもダバンも俺もロベルトもガザルも、お前を待ってるからな!勝っていつものお前にいる事を信じてるからな!負けんなよ!」

バン「…………… へ、へへ」

バンの体から出る瘴気が止まった

バン「よく…………… 聞け…………… 俺。俺は…………… お前よりも…………… 強いぞー!!」

ドサ

バンがゆっくりと立ち上がり、そう力強く叫ぶとそのまま倒れて
いった

全員「バン!!」

アルモニア

バン「……………」

バンは目を閉じてそのまま倒れている

マーズ「お、おい！無事なんだよな!?おい、起きろ!!バン!!」

シュウウウ

バンの体がどんどん薄くなっていく

全員「!!」

ベル「村長!!あれはどうなっているのですか!?!」

村長「……………互いが互いの存在を消しておる。双方真逆の力がぶつかり合い、その力によりバンの体は消滅しようとしている」

マルティナ「なんですすつて!?!バン!!駄目よ!!バン!!」

マーズ「村長さん!なんとかならないのですか!?!このままではバンが!!」

村長「わしもわからん。こんな事など初めてじゃからのう。だが、一つだけ昔話で聞いた事がある。」

全てを一つにする曲があると。

その曲は人間も魔物も問わず全ての者を繋ぐ曲らしい。

その名もアルモニア。調和の曲じゃ。

この曲ならば、バンの体や心も一つに出来るやもしれん」

ベル「こんな時に曲ですか!?今はそれどころじゃ」

マーズ「その曲、村長さんは弾けるんですか!」

村長「無理じゃ。楽譜などないし、どんなメロディなのかもわからん。存在だけが伝えられておるのじゃ」

マルティナ「そんな……………。じゃあ、バンは」

バンはどんどん消えていっており、透けて大地が見えるようになってきている

ラーズ「調和……………。全てを一つにする曲……………」

ラーズは考え込んでいる

マーズ「こんなもの!!ふん!ふん!」

マーズは剣で壊そうとしている

ベル「私も行くぞ!はあ!!」

ベルも隣で大剣を当てている

しかし、壁はビクともしていない

マルティナ「ラーズ？考え込んでどうしたの？」

ラーズ「(…………… そうだ。昔、婆ちゃんに)」

ガラツシユの村

♪

ラーズの祖母が草笛で安らぎの唄を奏でていた

その隣では子どものラーズが穏やかな顔をして聴いている

祖母「ラーズ、この子守唄はね、遥か古の時代から伝わる曲なんだよ」

子ラーズ「へー、古って事はローシユ様の時？」

祖母「どうだろうねえ。もしかしたらそれよりも前かもしれないよ。この子守唄は曲名はないのだけど、心を一つにする曲なんだそうよ。私はこの曲が大好きでねえ。とつても落ち着くの」

子ラース「僕も！聞いててすごく気持ちよかったし、落ち着けた。婆ちゃんと心が一つになったね！」

祖母「ふふ、そうだねえ。それじゃあラースもこの曲出来るようになるといいねえ」

子ラース「うん！絶対吹けるようになる！それでね！ギルグード達に教えるんだ！」

祖母「おやおや、それはいいねえ。楽しそう」

ラース「(あの時、確か婆ちゃんは心を一つにする曲だと言っていた。別の曲である可能性は高いが……………」

マーズ「メラゾーマ！」

ベル「全身全霊斬り！」

マルティナ「ミラクルムーン！」

三人はがむしやらに壁を壊そうと攻撃している

バンは既に輪郭が見えなくなりそうなほど消えかかっている

ライス「時間はない！これに賭けるしか！」

ライス「足下の草を取り

♪

ライスは安らぎの唄を吹き始めた

マーズ「え？ライス将軍？」

ベル「なんだ？この曲は」

マルティナ「その曲、安らぎの唄」

その時、バンが消えていくのが止まった

全員「あ!!」

♪

ライスはそのまま演奏を続ける

村長「な、なんと……………」

まさか、これが……………アルモニア？」

♪

ライスの演奏はこだまして周囲に響き渡っている

バンの消えていた体がどんどん戻っていく

ベル「おお……………これが全てを一つにする曲」

マーズ「この曲がそんな意味があったなんて」

マルティナ「よかった……………」

♪

透明な壁もいつしか消えていった

そして演奏が終わる頃にはバンの体は元通りになっていた

バン「ん……………あれ、俺」

全員「バン!!」

全員がバンに駆け寄った

マルティナ「よかったわ！無事で！体は大丈夫？」

マーズ「魔物のバンじゃないよな？」

バン「そっか、俺あいつに勝ったんだな」

ベル「消えていく時はどうしたものかと焦ったぞ」

村長「ラース様、まさかアルモニアをご存知だったとは。なんとも素晴らしい曲でした」

ラース「俺の村に伝わる曲だったんだ。まさかこれがそのアルモニアだなんて思わなかった。曲名は誰も知らなかったしな。さて、と」

ラースはバンに向かっていく

バン「あ、師匠！俺、無事に」

ガツン！

バン「いったー！！」

ラースはバンの頭を思いつきり殴った

バン「な、何するんですか！！」

ラース「心配かけさせんな！馬鹿！なーにが無事だ！死んでたってなにもおかしくなかったんだぞ！！」

バン「う……………すみません」

ライス「もう一人はどうなったんだ？死んだのか？それともお前の中にいるのか？」

バン「わかんないです。前までと何も変わんないですよ」

ライス「そうかよ。まあいい、何かあればすぐに言えよ」

バン「もちろんです！」

その後、ガオスの村

ライス「それじゃあ俺達は帰らせてもらおう。色々ありがとな」

ベル「こちらこそ、私のせいでこんな事態にまで発展してしまい申し訳ありませんでした」

マルティナ「いいのよ。その結果色々知れたんだから」

マーズ「お前、それ持って帰るのか？」

バン「おう！俺の両親なんだろう？絵だけどこれくらい息子なんだから持っておかねえと」

バンはナーシャとゲインが仲良く手を取り合っで見つめている絵

を背負っている

村長「バンや」

バン「はい！」

村長「ほほ、よく笑う子じやな。昔からそこは変わらんくてよかつた。

元気に生きるのじやぞ、ゲインもナーシャもきつと見守っておるはずじや」

バン「ああ！俺の昔も知れたし、親もわかった。ちよつと驚いたけど、スツキリした！

いつか会えたら俺は元気に生きたぞ！って自慢してやるんだ！」

村長「そうじやな。二人も喜ぶじやろう。それではさようならじや」

バン「じやあなー！」

奥さん達のバレンタイン

ベルとの出会いから一週間後

デルカダール地方

森が広がる手前に少し大きな丸太で出来た家が建っている。入り口までの道は綺麗な石が敷かれてあり、庭には花が咲き誇っている。そこからは海も一望する事が出来る。

ここはベグルとジェーンの家。ジェーンが望む場所にベグルが建てた家である。

ベグル「おはよう、ジェーン。今日は早いな」

ジェーン「あ、ベグル君、おはよう」

ジェーンは本を読んでいたようで、机の上に本が置いてある

ベグル「ん？チョコレート特集？」

ジェーン「そう。ほら、そろそろバレンタインでしょ？だから雑誌もチョコレートの特集が組まれてるんだよ。各街の新しいチョコレートとか美味しそうなチョコレートがたくさん載ってるの」

ベグル「へー、まあバレンタインなら当たり前か」

ジェーン「あ、それとね、もちろんベグル君にチョコレートをあげ

るんだけど」

ベグル「今年は俺もやるからな」

ジェーン「あ、あはは……。覚えてるよね」

ジェーンは去年のバレンタインにチョコレートをベグルに内緒で作ろうとした結果、大失敗してキッチンで大爆発が起こり、ジェーン達家族が怪我をしてベグルに強く注意されていた

ベグル「お父さんの火傷とか家とか酷かったじゃねえか。あんなの忘れられねえよ」

ジェーン「うゝ…… あれはほんの手違いだったんだけど。まあそれでね！ベグル君と一緒に作りたいたいと思ってるんだけど、バレンタインの日は空いてる？」

ベグル「今のところ大丈夫だぜ。ま、俺も菓子なんて作った事ねえからレシピ見ながらだけだな」

ジェーン「それは私も一緒だから大丈夫。ふふ、じゃあ十日後のバレンタインの日に一緒に作ろうね。楽しみにしてる」

ベグル「ああ、俺も楽しみにしておくぜ」

一週間後、デルカダール城

訓練場

兵士達「護衛任務!?!」

ラース「そうなんだ。プチャラオ村で行われるバレンタインのお祭り、そこで異国交流の一貫としてクレイモラン王国からシャルル王女とマルティナが呼ばれてるんだ。そこに出ることになったんだが、その護衛役を務めてほしいんだ」

バン「師匠はやらないのですか?」

ラース「俺もいるさ。でも、お祭り騒ぎで人がたくさん集まる。俺一人じゃあキツイ。そこで三人、俺と一緒にマルティナとシャルル王女を護衛役としてついてきてくれ」

ロベルト「どれくらいかかりますか?」

ラース「それがなあ…… お祭り期間全部を頼まれてんだ。だから三日かかる。宿代とかは全てプチャラオ村が出してくれるそうだが」

マーズ「ラース將軍、三人といいましたけど二人の王女の護衛任務となると重大任務。やはり実力的に……」

ライス「……………わかる。だが、その三人はこの時期……………三日もないのはキツイだろう」

ライスとマーズはバン、ベグル、ダバンを見ている

バン「うう……………。でも、お仕事ですし」

ベグル「……………」

ダバン「ミラ、許してくれ。必ず埋め合わせはする」

三人もわかっているらしく、苦しそうな表情を浮かべている

ライス「やっぱり実力はどうでもいい。この三人は今回除外しよう、かわいそうだ」

バン「師匠……………」

ベグル「いえ、構いません」

ライス「ベグル……………。でも、お前だつてきつとジェーンさんとの」

ベグル「兵士の役目に私情は挟まない。そう言っていましたよね？」

ラーズ「……………」

ベグル「俺は問題ありません。その護衛役、俺が受けます」

ダバン「ベグル……………。ラーズ將軍、俺も行けます」

バン「俺もです、師匠！」

ラーズ「わかった。それじゃあ頼んだぞ、バン、ベグル、ダバン」

三人「はい！」

ラーズ「残りも重要な任務だ。なんせ王女がいなくてもデルカダール王国でバレンタインはある。旅人達も普段より多く来るだろう。さらに俺も一部兵士もいない。役割をしっかりと分担して城下町と城の警備を決して怠るなよ」

全員「は！」

その日の夜、ベグルとジェーンの家

ジェーン「ええ!?お仕事になっちゃったの!?しかも三日間!?!」

ベグル「すまない!! ジェーン!! 必ず一緒にチョコレートは作るから、どうか待っていてほしい!」

ベグルは必死になって頭を下げている

ジェーン「…………… し、仕方ないよ。だって兵士さんだし、ベグル君は副長さんだもの。こんな各国でイベントがある日なんて忙しくて当たり前だよ。ごめんね、私こそ忙しいのに約束しちゃって!」

ベグル「そんな事言うな、ジェーン! 俺だって本当なら仕事なんかやらずにジェーンと一緒に!」

ジェーン「それは駄目だよ、ベグル君。わかってるでしょ?」

ベグル「う…………… ああ、本当にすまない!」

ジェーン「少し残念だけど、それじゃあミラと一緒にベグル君のチョコレート作ってるよ。ベグル君が帰ってきたらもう一回作ろう!」

ベグル「ありがとう、ジェーン!」

それから三日後、デルカダール城下町

ダバンとミラの家

中ではミラとジェーンがチョコレート作りの準備をしていた

ミラ「そうなんだ。一緒に作る約束は本来ベグルさんとしてたのね。まあ当然よね。でもそれだと残念だったわね、ジェーン」

ジェーン「うん。今日本当ならベグル君と一緒に作って、次の日に出来た美味しいチョコレートを食べるはずだったのに……。私もベグル君もお菓子作りはほとんどやってないから記念日にもなるねって話してたのに」

ジェーンは少し暗い雰囲気になっている

ミラ「ふふ、仲良しねえ。ダバンは手伝おうとはしてくるんだけど、なーんにもわかんないのよ。この前調味料に分量つてのがあるって知って驚いてたわ。感覚だと思ってたそうよ、信じらんない。笑っちゃったわ」

ジェーン「ふふふ、それは私より知らないって事だね。じゃあ去年みたいに今回もミラが作ろうとしてたの？」

ミラ「ええ、もちろん。ま、渡すお相手さんはお仕事で行っちゃったから別の日にもう一回作るけどね」

ジェーン「いいなー、ダバンさん。ミラの上手な美味しいチョコレート貰えて。私、今回上手に出来るかなー」

ミラ「真似するのも得意じゃないもんね？ ジェーンは」

ジェーン「あー、笑わないでよー」

ミラ「うふふ、ごめんなさい」

その時

コンコン

入り口のドアを叩く音がした

ミラ「あら？ 誰か来たみたい。どなたかしら？ はーい、今開けますねー」

ガチャ

メグ「こんにちは、ミラさん」

入り口にはメグが立っていた

ミラ「あら！ メグさん！ どうしたの？ お店は？」

メグ「今日は兵士さん達にチョコレートを作るためにお休みしてたんですけど、バンが仕事でいなくなっちゃって、他の兵士さん達も忙しいって聞いたので別の日にしようと思って暇になっちゃったんです」

ミラ「そうだったの。バンさんも兵士長だから大変だもんね。マサル君は？」

メグ「マサルは今朝マルス君とルナちゃん達数人と遊びに行っちゃって。だからミラさん達とお話ししたりしようかなと思って来たんです。もしかしてお忙しかったですか？」

ミラ「ううん、大丈夫。あ！ちょうどいいわ！今ね、ジェーンも来て一緒にチョコレート作りしてたの。メグさんも一緒にどう？材料はたくさんあるの。一緒に食べましょう」

メグ「いいんですか？ありがとうございます！ジェーンさんも会うのは年末以来になります。それではお邪魔します」

ミラ「ジェーン！助っ人が来てくれたわ！メグさんよ！」

ジェーン「あ！メグさん！こんにちは！どうしたんですか？」

メグ「バンもマサルもいなくてお店もお休みだから暇になっちゃったんです。私も一緒にチョコレート作りますよ」

ジェーン「ほ、本当!?ありがとう！メグさんがいれば絶対美味しい

チョコレートになるよ」

メグ「そ、そんな。私は大した事ないですよ」

ミラ「大丈夫、ダバンからたまにお菓子貰うけどどれも美味しいもの。流石だわ、メグさん」

ジエーン「今準備してたんです。メグさんの分も用意しますね」

メグ「私ももちろんやりますよ。ふふ、楽しいお料理会になりそうです」

我慢のバレンタイン

その後

全員「いただきまーす！」

チョコレートケーキが無事に完成し、三人で食べようとしていた

ミラ「よかったわね、ジェーン。メグさんのおかげで結構いい出来になったじゃない」

ジェーン「本当だよね！もうメグさんがいなかったらどうなっただか……。ありがとう！メグさん！」

メグ「そんな……。ちよつとお手伝いしただけで、大体はジェーンさんが作ったじゃないですか。こういうのは慣れてないと大変ですもの」

ジェーン「メグさん優しく……。それに見た？ミラ。メグさんのクリームかき混ぜる動き！凄かったんだよ！ギューッて！」

ミラ「ええ、見たわ。流石よね。私もあんなに綺麗にかき混ぜられないし、速さが大事なのはわかるけど、結構苦勞するのよね」

メグ「クリームはやっぱりケーキを作る上では欠かせませんからね。あれも一度手の動きのコツを掴んでしまえば楽ですよ。ちよつ

と体力使いますけど」

ジエーン「それじゃあ！お互いのケーキ食べようよ！私はメグさんの貰う！」

ミラ「じゃあ私はジエーンの食べてみるわね」

メグ「それではミラさんの貰いますね」

ジエーン「くく！美味しい!!え!?中にしっとりしたやつが入ってる！凄ーい！」

メグ「クツキーを刻んで中に入れたんです。アクセントになると思いました」

ミラ「ジエーンのも美味しいじゃない！この上につた生クリームと合うわよ。今までのとは比べものにならないわね」

ジエーン「今までのと比べなくていいの！」

メグ「ミラさんのも凄く見た目綺麗ですし、美味しいです。ガトーシヨコラに近いですね」

ミラ「そうなの。それを目指してみたんだけど、ちよつとうまくいかなかったのよね」

メグ「層を作ろうとすると結構大変ですもんね。私もそこまで得意ではないです。初めてなのにこれはとつても上手ですよ。私が初めて作った時より全然美味しいです」

ミラ「うーん……………。ねえ、メグさん。そろそろお互い敬語やめませんか？」

メグ「え？」

ミラ「私はメグさんともっと仲良くなりたいですし、それなのに互いにさん付けしたり、敬語で話すのってなんか違うじゃないですか」

ジエーン「やつぱりミラもそう思ってた！私もメグさんともっと仲良くなりたかったの！メグちゃんって呼んでもいい？」

メグ「ふふ、はい。あ、うん、構わないよ。私も呼び方変えないと駄目だね。ジエーン、ミラ。こう呼んでもいい？」

ミラ「もちろん！私もメグって呼ぶわ。これからもたくさん仲良くしましょう。お互い兵士さんを夫に持つんだし」

ジェーン「私達共通点も多いよ！あ！メグちゃんのお家今度行きたい！マサル君にも会いたいな」

メグ「うん、ぜひ来て。マサルもいろんな人と交流した方がいいから。私、ジェーンの新しく建てたっていう家にも今度行きたい」

ミラ「そうじゃない！ジェーン！私、まだ行ってないわ！どこに建てたのよ！」

ジェーン「ま、まだ中があまり綺麗に片付いてないから少し待って。でも！呼べるようになったら絶対招待するから！」

ミラ「そう、楽しみに待ってるからね」

その夜、プチャラオ村 宿屋

シャルル「申し訳ございませんでした、兵士さん達にまでこんな時期に」

シャルルはバン達に頭を下げた

バン「うえ!? シャ、シャルル王女様！そんなお気になさらないてください！」

ベグル「そうですよ。自分達は望んで護衛役に候補しました。シャール王女様が気に病む必要はございません」

シャール「そうですね、本当にありがとうございます。また明日と明後日もよろしく願います。頼りにさせていただきますね」

ダバン「はい。お任せください」

ラーズ「クク……… 三人の内心の焦り具合がよくわかるぜ。面白かったらねえや」

マルティナ「バンは確かにそうだけど、ベグルやダバンは冷静そうよ?」

ラーズ「あの二人はバンと違って態度には出ないからな。でも見ろよ、ベグルは足を少しパタパタさせてるし、ダバンは目線が頻繁に動いてたり手を動かしてる。どっちも焦ってたりする時に出る兆候だな」

マルティナ「なるほどね。ふふ、そんな所まで見てたのね」

ラーズ「行動にその人の本当の心は現れやすいからな。昔からよく見てたぜ。怪しい人かどうかを判断するのに役立つからな」

マルティナ「あら、じゃあ私とロウ様に初めて会った時も？」

ラース「一応な。まあマルティナが熱出てたのは見てわかったし、あの状況で嘘をついたりする必要がない。すぐに信じたさ」

マルティナ「まあそれもそうよね」

その後、部屋

バン達三人は少し大きめの同じ部屋になっていた

バン「ハー、疲れたー」

ボス

バンはベッドに倒れ込んだ

ダバン「想像より動き回ったからな。移動も人が多いと一苦労だな」

バン「あーあ、メグは笑って許してくれたけどよ。やっぱりバレンタインなのにこれって……。。メグのチョコが食べてえー！」

バンはベッドで少しジタバタし始めた

ダバン「子どもみてえな事してんなよ。俺だって本当ならミラが美味い手作りのチョコレートくれるはずだったんだよ」

バン「そういやベグルは？ジェーンさんって確か料理がそこまで上手じゃないんだよな？」

ベグル「お前よりは出来るわ。まあ一緒に作るって約束はしてた」

ダバン「確か去年ジェーンさん大失敗して大変だったんだっけか？」

ベグル「ああ、そうだ。マジで焦ったぜ。ミラさんからジェーンの連絡きて大慌てで医者に行ったら料理の失敗が原因って言われてよ」

バン「ハハハハ！ジェーンさんはドジだなー」

ベグル「お前だつてやったら似た結末だろうが！まあそんなんがあつたから今年は俺と一緒に作るはずだったんだ。結構悲しそうにしてた」

ダバン「でも確かミラと一緒に作る事にしたんじゃないか？ミラがそう言ってたぜ」

ベグル「まあな。でも、悲しい思いさせちまったのは変わらねえ。とりあえず帰ったらすぐにジェーンの元に行かねえとな」

バン「ヒューヒュー！あつつあつー！」

バンは口笛を吹いている

ベグル「ああ？」

ベグルは近くにある大剣を手に取った

バン「すいませんでした」

ダバン「馬鹿、ここでいつもの流れをやろうとすんな。俺のベホイムやザオラルじゃ限界がある」

ベグル「チツ！わかってるよ。これは帰ったらにつけておく」

バン「(俺も帰ったらすぐ逃げよ)」

嫉妬のバレンタイン

二日後の夕方、デルカダール城

玉座の間

マルティナ「それじゃあ三日間本当にありがとう」

ラース「この時期にすまなかったな。さつさと帰ってチョコレート食べてこい」

バン「え？何言ってるんですか？マルティナ様、師匠。まだやる事あるじゃないですか」

ベグル「そうですね。いつもの報告書とか書類とか」

マルティナ「いいのよ。今回は私とラースでやっておくから。無理についてきてもらってたのに更にその時間を延ばすなんて出来な
いわ」

ラース「そういう事だ。ほら、帰れ帰れ」

ダバン「あ、ありがとうございます！」

バン「やったー！今回は書類がないぞー！」

ベグル「お気遣いありがとうございます。失礼しました」

デルカダール城下町

バン「いやー、まさか書類が無いなんてなー。めっちゃ嬉しい！」

ダバン「何日分かまとまってるから結構な量あるはずなのに。マルティナ様もラース將軍も優しいな」

ベグル「ま、久しぶりに書類を忘れて早く帰れるぜ。さっさとジエーンとチョコ作らねえと」

バン「あ、そうだったな。ベグル、俺達の方も作れよな！」

ベグル「は？嫌に決まってるだろ。食べるのは俺とジエーンだけだ」

ダバン「バン、お前はメグさんからのがあるだろ。わがまま言うな」

バン「チエ〜」

ベグルとジエーンの家

ガチャ

ベグル「ただいまー。帰ったぞー、ジエーン」

ジエーン「あ！お帰り！ベグル君！」

ジエーンはソファに座ってチョコレートを食べていた

ベグル「ん？チョコ食べてたのか」

ジエーン「そうなの。あのね！メグちゃんと仲良くなってね！一昨日から一緒にお菓子作ってたの！」

ベグル「へー、そりゃあよかったじゃないか。これがそうなのか？」

ジエーン「うん。メグちゃんやっぱり私よりずっと手際よくて、いろんな事を同時に進めるんだよ。すっごく楽しかった」

ベグル「……………そうか（ジエーンは……………もうそこまで俺と作る事を楽しみにしてなかったのか）」

ジエーン「メグちゃんの作るお菓子どれも美味しいんだよ。ベグル君にも分けてあげるね。はい、これ」

ジェーンは小さめのタルトを渡した

ベグル「これはメグさんの？」

ジェーン「うん、そうだよ！食べてみて！私より全然美味しいから！」

ベグル「……………いや、いらねえよ。ジェーンが食べるよ。好きだろ？」

ジェーン「え？う、うん。ありがとう」

ベグル「少し疲れたから寝てるさ」

ジェーン「あ、うん。そうだよ。戻ってきたばかりにごめんね。おやすみ、ベグル君」

ベグル「なんだよ……………この気持ち。なんかモヤモヤすんな。ジェーンは……………俺よりメグさんと作った方がいいってのかよ」

次の日、デルカダール城

訓練場

ベグル「……………」

ベグルは立ったままブーツとしている

バン「おい！ベグル！聞いてんのかよ！反応しろよ！」

ベグル「ああ、聞いてるよ」

バン「嘘つけ！なんで動かねえんだよ！今日は大剣の指導なんだぞ！お前以外教えられねえんだぞ！」

ベグル「あー、そうだな」

バン「そうだなじゃねえんだってば！動けー！」

ベグルの近くではバンが必死にベグルを動かしている

それを全員が不思議に見ていた

ギバ「ど、どうしたんだ？ベグルのやつ。上の空っていうか、もぬけのからって感じだぞ」

ダバン「(この感じ、さてはあの後何かあったな)」

ガザル「ハハハハハハ!!あのベグルがバンに怒られてやがる！めっずらしい事もあるもんだなー！」

ロベルト「だとしても様子がおかしい。ベグルのやつ、何があったんだ」

マーズ「すまない、お前ら。予定を変更して槍の指導に変える。大剣はまた後日やる。その時にもう一度集まってくれ」

見習い達「は、はい！」

訓練終了後

バン「どうしたんだよ！ベグル！今日は気持ち悪いぞ！」

ベグル「あー、俺もよくわかんねえんだわ」

ダバン「全く、昨日に何があったんだよ。ジェーンさんとチョコ作るんじゃないかったのか？」

ベグル「それがよー」

ベグルはバンとダバンに昨日の事を教えた

ベグル「それで俺の中でモヤモヤしちまって、ジェーンとうまく話せなくなっちゃったんだ。今朝もそれで冷たく対応しちまった。結局何も食わずに来たしな」

ダバン「ベグル、お前……その気持ちわかんないのか？」

ベグル「ダバンは知ってるのか？」

バン「バツカだなー、ベグル！お前なにメグに嫉妬してんだよ！」

ベグル「嫉妬？」

ダバン「バンの言う通りだ。ベグルはジェーンさんが楽しそうにメグさんとの料理の事を話すのが嫌だったんだろ？本当なら自分が一緒に楽しく作るはずだったから」

バン「わかるぞー、ベグル。ジェーンさんを横取りされたような気持ちだよな。俺もよくなる」

ベグル「……なんだよ。バンすらもわかってるのかよ。確かに俺が帰ってくればジェーンは喜んでチョコレートを作ろうとしてくれると思ってた。」

でも、ジェーンは違った。俺がいない間のメグさんとの料理が楽しかったんだろうし、自分の料理と比較してばっかだ。俺にはジェーンの料理だって美味しいと思うのによ。これが嫉妬なのか？」

ダバン「まあな。のろけてくれるぜ、全く。こんなんでさつきあんなみつともない姿になってたのかよ。心配かけさせんな」

バン「面白かったし、今のベグル全然怖くねえぞ！」

ベグル「………… チツ！癩に触るぜ。どうしたらいいんだよ、この気持ち悪い気分は嫌なんだ。対処法教えてくれ」

バン「まつすぐぶつかるといいと思うぞ！そのベグルの感じた事をジエーンさんにぶつけるんだ！」

ベグル「それはお前が考えなしにやってる事だろうが」

バン「ハア!?そんなんじやねえよ！」

ダバン「いや、ベグル。バンの意見もいいと思うぞ。ジエーンさんには何もその事を言えてないんだろ？一度話してみろよ。何かベグルの誤解とかジエーンさんの間違いがあるかもしれない」

ベグル「………… 気持ち悪いだろ、こんなん言われても。まるで俺がジエーンに他の人と楽しく料理すんなって言ってるみたいじゃねえか」

バン「うわ、なんかそう聞くとベグルが凄く嫌なやつに見えてきた。あ、元からだった」

ダバン「ハハ、まあそう捉える事も出来るかもな。でもベグルだつてわかってるだろ？ジエーンさんはミラやメグさんと一緒に楽しんで料理をしてるって。それを邪魔したくはないんだろ？」

ベグル「…………… ああ。ジエーンの楽しそうな顔は好きだ」

ダバン「じゃあジエーンさんの好きにさせてやれ。でも、そのままだと何も解決しないな。だからベグルがジエーンさんと料理をする時はお前以外入れない。ベグルの独り占めだ。これで妥協しないか？」

ベグル「…………… わかったよ。ま、ジエーンを縛るのは好きじゃねえ」

バン「嘘つけ！ベグルみたいな鬼畜が縛る事を嫌いなわけ」

一分後

ベグル「まったく、人が落ち込んでるからって好き放題言いやがって。後始末は頼んだぜ。俺は着替えた後、今夜のジエーンとの料理の準備してくる」

ダバン「お、おう……」

ダバンの側には見るも無惨な姿になったバンの骸が転がっていた

その頃、カフェ

ミラとメグがジェーンの相談にのっていた

ジェーン「つて事があつてね。ベグル君、何か怒ってるみたいなの。私、何か悪い事しちゃったのかもしれない。それがわかんないんだけど知らない？」

ミラ「ふふふ、やだー。ベグルさんったら意外と可愛い所あるのね」

メグ「そうだね。あのベグルさんでもそんな風になるなんて。バンだけかと思ってた」

メグとミラは互いに顔を見合わせて笑っている

ジェーン「え!?!?どういう事!?!二人とも何かわかるの!?!」

ミラ「ジェーン、それはねベグルさんの嫉妬よ。メグとの料理の話やジェーンの楽しそうな雰囲気嫉妬したのよ」

メグ「ベグルさんにはなんだか申し訳ない事しちゃったな」

ジェーン「し、嫉妬？え？なんで？」

ミラ「きつとベグルさんはジェーンと一緒にチョコレートを作るのを相当楽しみにしてたのよ。でも、いざ疲れて帰ってきてみたらジェーンはメグさんとの料理に夢中だった。まるで、自分だけ楽しみにしてたように思っちゃったんじゃない？」

ジェーン「そうなの!?そんな事ないのに！私、ベグル君とのチョコ作りで美味しいのを作りたいからメグちゃんに」

メグ「そうだね。私やミラはその事を知ってるけど、ベグルさんに言えてないんだよね？じゃあベグルさんは勘違いしたままだわ。寂しがつてるのよ」

ジェーン「そ、そっか。じゃあ今日ベグル君が帰ってきたらちゃんと第一に伝えないと！」

ミラ「ええ、そうしなさい。きつと大喜びするわよ。それにしてもいいなー、ジェーン。ベグルさんに愛されてて。メグもバンさんは素直だからわかりやすそうよね。ダバンももつと嫉妬とかしてくれていいのに」

メグ「バンはよく嫉妬してるよ。いろんな人にするから恥ずかしいけど」

ミラ「可愛いー。ダバンにもっとアピールしようかしら」

ジェーン「でも！ミラだって意外と鈍感だから気付いてないだけかもよっ..」

ミラ「えー！私は鈍感じゃないわよ！ジェーンに比べたらマシ」

ジェーン「そんな事ないもん！」

ハッピーバレンタイン

夕方、ベグルとジエーンの家 前

ベグル「…………… やべ、何言うか考えないで支度だけ済ませちまった。ジエーンになんて言えばいい……………。ジエーンの気配は…………… あるか」

ベグルはチョコを片手に家の前でこの後の事を考え始めた

ベグル「まず謝るだろ、勝手に色々考えすぎてただけって言って嫉妬の事は誤魔化して、チョコ作る流れにするか。よし！」

ガチャ

ベグル「ジエーン、ただいま」

ジエーン「あ！ベグル君！おかえり！あのね！ベグル君に言わなきゃいけない事があって！」

ベグル「お、おう。実は俺もなんだ」

ジエーン「あれ？そうなの？まず私から言わせて！ベグル君、この前のメグちゃんとのチョコレート作りはベグル君のためにやったの！」

ベグル「え？お、俺のため？」

ジェーン「そうだよ。ベグル君とチョコ作る時に失敗したりとか、知識もなしにやってベグル君を困らせたくなかったから事前に体験してみようってなってメグちゃんと一緒にやってたの。」

だからもしベグル君が勘違いしてるようなら私が言ってなかったからなの。ごめんなさい」

ジェーンは頭を下げている

ベグル「……………な、なんだよ。そうだったのか……………（ダバンの言った通りだった。俺の誤解か）」

ジェーン「だから昨日と今朝怒ってたんだよね？ベグル君との約束を放っておかれたって思っで。ごめんね？違うよ。ずっと楽しみにしてたよ！今もずっと！」

ベグル「ああ、すまなかったな、ジェーン。変な態度とっちゃったな。楽しそうなジェーンをみるのは好きはずなのに、あの時のジェーンを見ていたらどうしてもモヤモヤしちゃってな」

ジェーン「ふふ、ミラとメグちゃんがね、ベグル君は嫉妬してるんだって言ってたよ」

ベグル「!?ジェ、ジェーン……………二人にも言ったのか」

ベグルは少し赤くなっている

ジェーン「う、うん。私何か悪い事しちゃったかなって思って相談した時に……………ごめんね？」

ベグル「ハア……………まあいい。俺もからかわれたしな。ま、喧嘩とは違うけど仲直りだな。ジェーン、この後約束のチョコレート、一緒に作ろうぜ。準備もしてきたんだ」

ジェーン「あ！本当だ！私もレシピ本用意したし、メグちゃんから教えてもらった道具とかもあるよ」

ベグル「はは、楽しみにしてたのは本当なんだな。俺も楽しみにしてた。仕事のやる気に繋げてたんだぜ」

ジェーン「こんな事でやる気出るの？それくらいならいつでも大丈夫だよ」

ベグル「たまにやるからこそ楽しみになるんだろ？」

ジェーン「あ、そつか。それじゃあ今度お仕事大変そうな時は言つて。その仕事終わったらお疲れ様って事で一緒に作るようにしよう」

ベグル「それはいいな。やる気出そうだ。さて、まずは何するんだ

？」

ジェーン「まずはねー、チョコレートを砕いていくんだって」

ベグル「そんな俺にかかればすぐだな。ジェーンは次の用意しといてくれ」

ベグルは袋の中から買ってきたチョコレートを全部出し始めた

ジェーン「うん、お願いするね。じゃあ私はミルクと容器の準備」

ベグル「今度はもうあのモヤモヤした気持ちはねえな。むしろ、温かい感じだ。ジェーンは本当俺の気持ちを優しくさせてくれる」

ベグル「ジェーン」

ジェーン「ん？なに？」

ベグル「ありがとな」

ジェーン「？うん、どういたしまして」

次の日、デルカダール城

訓練場

ベグル「というわけで、ジェーンと張り切って作ったら余ったからお前らにもやる。残さず食べ」

バン「やったー！サンキュー、ベグル！」

ロベルト「ありがたい。喜んで食べさせてもらうぞ」

ダバン「ま、めでたしで終わってよかったな。ベグル」

ガザル「け、ついにベグルまでのろけるようになりやがって。甘ったるいったらねえぜ」

ベグル「へっ、悔しいならガザルもさっさと奥さん見つかるんだな。ま、その性格じゃ厳しいだろうけどな」

ガザル「お前には言われたくねえよ！」

ギバ「そうだそうだー。ちよつと運よく奥さんができたからっていはるな！」

マーズ「また始まったよ。僻みはみつともないからやめろ」

バン「美味しいぞ！ベグル！上手に作れてよかったな」

ベグル「当然だろ。失敗なんかしてたまるかよ。ま、メグさんの協力にも助けられた。メグさんにもありがとうによって伝えといてくれ」

ダバン「なんだ、随分と優しいな、今日は」

ベグル「ま、気分がいいんでね。普段よりは優しくなれてると思うぜ」

バン「嘘だ！」

ギバ「ありえねえ！」

ガザル「俺は信じねえ」

ダバン「ベグル、それはない」

マーズ「気のせいにもほどがあるぞ」

ロベルト「それは……… ベグルの思い違いじゃないか？」

ベグル「……… てめえらのおかげで一気に冷めたわ、馬鹿野郎共が」

ベグルはバン達の散々な反応にこめかみをヒクつかせていた

なくなつたケーキの謎

それから一ヶ月後の夜、デルカダール城

マルティナとラースの部屋

マルティナ「ふふ、明日の準備はバツチリだわ。楽しみね」

ラース「久しぶりに全員集まるもんな」

マルティナ「そうよね。それに最近はまだ色々忙しかったからより楽しみだったわ」

ラース「そういやマルティナの好きなケーキを頼んだんだつたな。美味しそうだよな」

マルティナ「昔からあそこのケーキ屋のがお気に入りなの。もちろん他のお店のも美味しいんだけどね。思い出ってやつかしら、あそこが一番好きなのよ。あ、皆の分も買っておいたわ」

ラース「お、それはありがたいや。じゃあ明日は皆でゆつくりお茶会だな」

マルティナ「シルビア達もお菓子持ってくるそうよ。ふふ、楽しみだわ」

ラーズ「ウキウキだな、じゃあ明日に備えて今日は早く寝ようぜ」

マルティナ「ええ、そうね。あ、でも少し喉乾いたわね。お水だけ飲んでくるわ。先にラーズは寝てて」

ラーズ「わかった」

次の日、デルカダール城 玉座の間

バタン

ベロニカ「マルティナさん、ラーズ、グレイグさん、来たわよー」

セーニヤ「お久しぶりです。この前お姉様と一緒に作ったお菓子を
お持ちしました」

マルティナ「いらっしやい、ベロニカ、セーニヤ。待ってたわ」

グレイグ「随分早かったな。まだ他には来ておらんぞ」

ベロニカ「セーニヤが朝からウズウズしてたから少し早めに来た
の」

セーニャ「マルティナ様のお気に入りケーキが楽しみでした」

ラーズ「なんだ、ベロニカ達もその事知ってたのか」

マルティナ「前にシルビア達と行った事あるのよ」

ラーズ「なるほど。まあそれじゃあ王様にそろそろ皆が来るから交代の連絡してくる」

グレイグ「ああ、頼んだぞ、ラーズ」

その後

マヤ「いしし、私も来ちゃった」

カミュ「悪いな、急にマヤも行きたいって言い出してよ」

マルティナ「あら、いいじゃない。大丈夫よ、マヤちゃん。一緒に
お茶会しましょう」

シルビア「これで全員……あら？ラーズちゃんは？」

イレブン「あれ？本当だ。まだ戻ってないの？」

グレイグ「そういえば……王に報告に行ったつきり戻ってないな」

ベロニカ「私達が到着した時からよね？いくらなんでも報告にしては長くない？」

マルティナ「何してるのかしら？リースったら」

バタン

リース「すまない。ちよつと色々あつて遅れた」

セーニヤ「あ、リース様。よかったですわ、ちよつと今リース様が遅いので心配しておりました」

ロウ「何かあつたのかのう？」

リース「いや、問題ないはずだ。ちよつと話が色々逸れちまつてな。待たせて悪かったな」

マルティナ「あ、それじゃあちよつどいいからリース。キッチンからケーキの入った箱、持ってきて」

ラース「早速か、そうだな……………。持つてこよう」

数分後

イレブン「あ、このケーキ屋の名前僕も知ってる。昔からあるやつだよ」

イレブンはラースが持ってきた箱の名前を見て懐かしいような顔をしている

マルティナ「ええ、そうよ。それじゃあ開けるわね」

パカ

マルティナ「……………え!?!」

マルティナが箱を開けて中を見ると驚いた表情になった

グレイグ「どうかされましたか?」

マルティナ「ないわ!私のケーキだけ入ってない!」

全員「ええ!?!」

カミュ「マジか。間違ってるのか」

マルティナ「そんなはずないわ。だって昨日の夜にこっそり確認したもの。その時はすっかり9つ入って、私のロールケーキもあったわ」

ラーズ「ああ、あの寝る前の時か」

シルビア「となると、今日の朝から今までの間にマルティナちゃんのケーキだけなくなった……」

ベロニカ「私達の方はちゃんとあるの?」

マルティナ「ええ、予約したもので間違いないわ。そんな……」

マルティナは自分のお気に入りのケーキだけがなくなり、かなりショックを受けている

セーニヤ「これは…… 事件の匂いですわ!」

セーニヤは突然勢いよく立ち上がった

マヤ「え? 事件? どうしたの? セーニヤさん」

ベロニカ「ちよつとあんたねえ……」

セーニヤ「大事に保管されていたケーキが狙われたように消失した。これは誰かが意図的に起こした事件だと私は睨みました！」

イレブン「えつと……セーニヤはどうしたの？」

ベロニカ「ごめんなさい、皆。気にしないで、いつもの事なのよ。最近流行りの探偵小説あるでしょ？この子、あれ気に入って読んでるのよ。その影響だわ」

グレイグ「ああ、シャルロットの事件簿だな。俺も読んでいるぞ。かなり面白い作品だな」

シルビア「アタシもよー。ハラハラしちゃうわよね。セーニヤちゃん、確かに好きそうだわ」

ロウ「しかし、セーニヤよ。これはあまり事件と呼ぶような事では」

セーニヤ「いいえ、きつとこれは予兆。マルティナ様が狙われているという始まりに過ぎませんわ！」

ラース「ノ、ノリノリだな」

マルティナ「そんな！これよりもっと酷い事がおこるの!？」

セーニヤ「ご安心ください、マルティナ様！この探偵セーニヤ、いえ、探偵ステイロがバシツと解決してみせます！」

ベロニカ「探偵になりきっちゃって……もう。こうなると止まらないんだから」

カミュ「まあ……好きにやらせてみてもいいんじゃないやねえの？」

セーニヤ「まず容疑者ですが、今日は私達以外このお城に入ってきておりませんね。つまり、一般の方はありません。この城内の誰かが犯人です。兵士様や私達の中に犯人がいらつしゃいます」

ラース「それでなおかつ、今日マルティナがケーキを予約していた事を知っている人物というわけか」

イレブン「となるとまず怪しいのは……コックの人？」

マルティナ「！そうだわ！コックの人に誰がキッチンにやってきたかを聞きましょう。そうすれば怪しいのが誰かわかるわ！」

セーニヤ「そうですね！それではキッチンに向かいますよ！」

キッチン

コック「ど、どうされましたか？皆様お揃いで」

セーニヤ「突然すみません。実は今日マルティナ様が予約してあったケーキの中に、マルティナ様本人が食べるはずだった物だけなくなっていたのです」

コック「そ、そうなのですか!?私達が一昨日確認した時は中にしつかりあつたはずですが」

マルティナ「ええ、わかつてるわ。私も昨日の夜にちゃんとあるのを見たもの。それでね、犯人は昨日の深夜から今までの間にキッチンに入った人って事になるわよね？誰がキッチンに入ってきたか教えてほしいのよ」

コック「な、なるほど。そうなりますと……深夜は私達はいなかったのでわかりませんが、朝にデルカダール王様、その後にはロベルトさん、次にベロニカさんとセーニヤさん、バンさん、ラーズ様の順ですね」

グレイグ「結構出入りしていたのだな」

コック「そうですね。今日はいつもよりもキッチンに来る方が多くて驚いています。まあデルカダール王様やラーズ様は割と頻繁に来

ていらつしやいますが」

ロウ「ベロニカとセーニヤも来ていたのだな。何をしに来たんじや？」

ベロニカ「私達が作ったお菓子を持ってきたんだけど、早めに到着しちやつたから冷蔵庫で冷やしておいてもらおうと思つてね」

セーニヤ「そういえば、その時に冷蔵庫の中にあのケーキの箱があるのは確認しましたわ」

マヤ「あ、あの美味しそうなパイのやつだよね。あれベロニカさん達の手作りだったんだ。それにその話だと、ベロニカさんやセーニヤさんが姉ちゃんのケーキを食べるわけないよね」

シルビア「じゃあ犯人の候補は決まったわね。デルカダール王様、ロベルトちゃん、バンちゃん、ラースちゃんの誰かって事になるわね」

ラース「王様まで候補に入れんのかよ」

カミュ「というか、バンもロベルトも勝手にケーキを食べるやつじゃねえだろ」

イレブン「ラーズは…………… ちょっと怪しいかな」

ラーズ「失礼だな！俺はマルティナがあのかのケーキを好きな事知ってる！それを知ってて食べるわけねえだろ！」

マルティナ「それはそうね。ご飯の時も私のお気に入りなのやつは絶対に食べないでいてくれるし」

グレイグ「確かに。だが、お前は自由に動いていた時間が長い。報告がやたらと長かったのも怪しいしな」

ベロニカ「そうじゃない！あんた、一番怪しいわ！あんだけ時間あったなら一口で食べて、顔洗う時間にも充分だわ！何食わぬ顔で戻ってきたんでしょ！」

ラーズ「おいおい……………マジかよ。信用がねえのは傷付くぞ」

セーニヤ「コック様、先程あげた四名の方がどうしてキッチンにやってきたのか知っておりましたらお聞かせください」

コック「そうですね。まず、デルカダール王様は朝食前に訪れておりました。今日の朝のメニューの確認と、少々つまみ食いの方を……………でも、それだけでしたね」

マルティナ「お父様ったら！つまみ食いはもうしないでくださいとお願いしたのに！」

グレイグ「全く……。昔から習慣になってしまっている。健康のためにも控えていただきたいものだ」

コック「は、はは……。まあ、止められない私達にも非はありませんので。お次は訓練後にロベルトさんですね。ロベルトさんはお疲れのようでしたので、甘いものを欲しがっておいりました。なので、たまにパフェなどに使うバナライスを一つご用意しました」

カミュ「そっか、訓練後とかなら仕方ないな」

セーニヤ「ロベルト様は甘いものが好きなのでそれは喜ばれそうですわ」

コック「そうですね、アイスをすぐに食べた後少ししてベロニカさん達がいらつしやいました」

マヤ「え、そんな早くから来てたの？ベロニカさん達」

ベロニカ「そんなにだったのね。それはわからなかったわ」

ロウ「わし達が来るよりも二時間ほど前からおったのじやな」

探偵ステイロ

コック「その後、一時間ほどするとバンさんが汗だくでやってきました。残って訓練をされていたようで、喉が渴いて死にそうだと言われて急いでお飲み物を渡しました」

ラーズ「あいつ、残るのはいいがやりすぎる時があるんだよな」

グレイグ「あまり人の事言えんど、ラーズ。お前も兵士長の頃はよくなっていただろう」

シルビア「ふふ、そういう所も似ちやったのね。バンちゃんはそれだけ？」

コック「そうですね、お水を飲んだらすぐに出ていかれました。なので、バンさんがここに滞在していた時間は僅かです」

セーニヤ「なるほど。バン様は犯人候補から外してもよさそうですね」

イレブン「それではさつきケーキの箱を取りに来たラーズ、と」

コック「あ、いえ。ラーズ様はそれよりも少し前にこちらに訪れております」

全員「え？」

コック「ラーズ様、あの時は何をなされていたのですか？まるで何かを探すようにしておりますが」

ラーズ「あー、いや、それはな……」

全員「……………」

全員がジッとラーズを見ている

ラーズ「そ、そんなに全員で見つめんな！俺は偶然怪しいやつを大広間で見かけただけだ」

マルティナ「怪しいやつ？誰か城に入ってきたの？」

ラーズ「そうなんだ。王様に報告するための移動中、大広間の方が視界に入ったんだが、その時に変な動きをした男が城にこっそりと入ってきたんだ」

イレブン「ええ!?そうだったの!？」

マヤ「全然知らなかったよ。そいつはどうなったの？」

ラーズ「残念だが見失った。どこに行ったのかまでは見えなかったからな。だから大広間の周囲を確認してたんだ。どこにもいなかったけどな」

コック「なるほど。だから大広間から近いキッチンにもやってきて、その人を探していたのですね」

ラーズ「そういう事だ。別に何も変な事はしてねえよ」

グレイグ「それならば俺達に報告してくれてもよかったですだろう」

ラーズ「結構念入りに確認したけど見当たらなかったからな。もう出ていったもんだと思って放っておいたんだ」

マルティナ「……………」

カミュ「まあ、それじゃあ兄貴も一応はアリバイがあるってわけか」

シルビア「そうね。その怪しい人つてのも気になるけど、もうお城にいないのなら大丈夫かしら？」

ロウ「ちなみに、どんな特徴をしていたとかはわかるのかのう？」

ラーズ「ああ……わかるぞ。髪色は黒で長めだったな。身長は遠かったから定かではないが、俺くらいか？目の色は紫で、フードを被ってた」

ベロニカ「随分詳しくわかるのね。そんなによく見えたの？」

ラーズ「まあな。昔から人の特徴はよく覚えてたからよ」

セーニヤ「なるほど、わかりました。コック様、お次の質問ですが、ケーキの箱が外に出される事はありましたか？」

コック「ああ、何回かありましたよ。個数が入っていた分大きくて、少々他の物を取り出したりする際に落ちないように出したりはしていました」

マヤ「まあ当然といえばそうだね。結構スペース必要だもんね」

セーニヤ「ありがとうございます。また何かありましたら尋ねさせていただきます」

訓練場

ロベルト「え？マルティナ様のケーキ？ああ、あの箱の中に入ってるやつですか？」

セーニヤ「ご存知なのですか？」

ロベルト「はい。といつても、箱しか見てませんけどね。キッチンに行った時にコックさんが大事そうにしていたので」

セーニヤ「キッチンで何をしていたか教えていただいてもよろしいですか？」

ロベルト「俺、今日の訓練でダバンと模擬戦したんです。やっぱりダバンは強くてですね、かなり接戦はしたと思うんですが負けちゃったんです。」

それで結構疲れたんで訓練後にコックさんに甘いものを頼んだんです。俺、甘いもの食べると疲れとか吹っ飛ぶんで。そうしたらアイヌを出してくれて、それをいただきました。それ以外は特にないですね」

セーニヤ「わかりました。ありがとうございます」

デルカダール城下町 城門

バン「へ？キッチン？……… ああ！行きましたよ！水飲みにですけど」

セーニヤ「それ以外に何かありましたか？」

バン「え？それ以外………。うーん………。あ！マルティナ様達が食べるケーキの中身を見ましたよ！」

全員「え!?!」

マルティナ「え？どうやって見たの？」

バン「えつとですね………。ああ！そうだ！コックさんに冷蔵庫にある物を取ってくれて頼まれてそれを出そうとしたんですけど、俺その時に間違えてマルティナ様達のケーキが入ってる箱を出して開けちゃったんです。あ！すみません！勝手に見てしまっ！」

マルティナ「いや、いいのよ。その時ケーキが何個入ってたか覚えてる？」

バン「え、え………。すぐにしまったから個数までは………。でも、隙間なく敷き詰められてましたよ。全部ケーキでした」

シルビア「じゃあ、その時にはまだマルティナちゃんのケーキはあつたのね」

セーニヤ「ありがとうございます。また何かありましたら聞きに伺いますね」

バン「はい」

デルカダール城 玉座の間

グレイグ「王は今仮眠中のようだ。立て札がしてあつた」

マルティナ「最近この時間に昼寝するようになったのよね。少し心配だけど、また後で話を聞いてみましょう」

ラース「だけどよ、結構詳しく調べたけどわかんないもんだな」

ロウ「そうじゃな。かなりギリギリまで姫のケーキはあつたようじゃが、突然姿を消した」

ベロニカ「セーニヤ、あんたはシャルロットじゃないんだから推理なんて無理よ。それにもう充分楽しんだでしょ？一旦ここまでにしましょう」

マルティナ「そうね。最初は感情的になっちゃったけど、また頼めばいいだけだし次の機会にするわ。セーニヤ、ありがとう」

セーニヤ「いえ！駄目ですわ！もう少しお待ちください。何か………何か見落としているはずなんです」

イレブン「随分必死だね、セーニヤ」

セーニヤ「当然ですわ！大好きなスイーツが取られるなんて、そんな悲しい事起こってはいけません！私がなんとか犯人を突き止めます！」

グレイグ「そういえば、シャルロットが推理で悩んだ時はよく一人で事情聴取をしていたな」

セーニヤ「!!そうですわ、グレイグ様！私、もう一度皆様に事情聴取をしてきます！」

マヤ「え!?!また行くの?」

シルビア「セーニヤちゃん、気持ちはわからなくもないけどケーキだってまだあるし」

「セーニヤ」少しだけですのぞ！皆様はごちらで待っていてください
！」

セーニヤは走って出ていった

カミュ「セーニヤのやつ、凄え張り切ってんな。まあいいか。マル
ティナ、どうせなら俺の分のケーキやるよ。俺はマヤからのやつ少し
もらうだけで充分だ」

マルティナ「え？いいの？カミュ。ありがとう」

マヤ「ちよつと兄貴、なに勝手に私のやつ貰おうとしてんの」

カミュ「別にマヤが一人で食べるならそれでいいさ」

解決、ケーキの謎

その後

ボタン

セーニヤ「皆様、お待たせいたしました！」

ベロニカ「あ、帰ってきた。もう！いい加減お遊びは終わりよ、セーニヤ！」

セーニヤ「はい、もう大丈夫です！ケーキを食べた犯人はわかりました！」

全員「え!？」

ロウ「おお。まさか本当に見つけるとは凄いのう、セーニヤ」

カミュ「それで犯人は誰だったんだ？」

セーニヤ「それでは、私の推理をお聞かせいたします！イッツシヨールタイムですわ！」

セーニヤは何やら片腕を前に突き出して、手を開いたポーズを取っている

シルビア「あら！シャルロットちゃんが推理する時のポーズじゃない！カッコいいわよー、セーニヤちゃん！あ！ステイロちゃん！」

セーニヤ「まず、先程候補にいた四名の方がどうしてキッチンに入ったのかは皆さん覚えておられますか？」

マルティナ「えっと、まず朝ご飯の時にお父様がだらしない事につまみ食いのためと、訓練後にロベルトがアイスを食べに、その後にはバングが水飲み、そしてラーズが大広間で見た怪しい人を探しに、だつたわよね」

セーニヤ「そうです。ですが、私はこの部屋を出てそこでおかしいと思ったのです。ラーズ様はデルカダール王様に報告のために移動していた時にその怪しい人を見たとおっしゃっていましたが、そんな事が本当に出来るのでしょうか」

イレブン「え？どういう事？」

セーニヤ「デルカダール王様のお部屋は玉座の間の横にある階段を登った先です。つまり、玉座の間の前からしか大広間の空間を見る事ができないのです。実際に見てもらった方が早いですね。少しこちらに来てください」

セーニヤはそのまま玉座の間の扉を開け放ち、そこで立ち止まった

グレイグ「王の私室にはここを右に曲がる必要があるな」

セーニヤ「はい。つまり、大広間を見る瞬間はこの場所だけ。どうですか？皆様。大広間は見えますか？」

マヤ「いや……………ほとんど見えないかな。入り口の光もあって、人が立っててもわからなさそう」

マヤの言う通り、玉座の間の前には広い廊下や大広間、三階へのバルコニーに続くための階段があったりして大広間の空間は全くと言つていいほど見えない。かろうじて入り口から城内に差す太陽光が見える程度だ

ロウ「ふむ……………これはラースが言つておつた人が見えたとしても、あそこまで細部の特徴が見えたとは思えんな」

セーニヤ「ラース様、もう一度その怪しい方の特徴を教えてくださいだいてもよろしいですか？」

ラース「え、えつと……………髪は黒で……………長めの髪だ。身長は確か……………イレブンくらいか？」

イレブン「あれ？僕？さつきはラースくらいって自分で言つてなかつた？」

ラーズ「あ、ああ、そうだったな」

セーニヤ「瞳の色や服装もおっしやっていましたね。お願いします」

ラーズ「……………瞳の色は黒で、服装は……………」

カミュ「兄貴、なんでそんなに歯切れが悪いんだよ、らしくねえな。しかもまた間違えてるぞ、瞳の色は紫って言ってただろうが」

ベロニカ「怪しい……………とーっても怪しいわ、ラーズ！ やっぱりあんたが犯人なんですよ！」

シルビア「これはちよつと本当に怪しいわ。ラーズちゃん、間違つて食べちゃったの？」

ベロニカ「しかもそれを隠そうとして嘘までついてたってわけね！ あんた最低よ！」

マヤ「兄ちゃん、流石に謝った方がいいって」

マルティナ「ラーズ……………私だって素直に謝れば許すわよ」

ラーズ「い、いや、違う。俺は犯人じゃないんだ」

セーニヤ「皆様、落ち着いてください。ラーズ様は本当に犯人ではございません」

カミュ「兄貴じゃねえのか？じゃあなんで兄貴はこんな怪しい事を」

セーニヤ「ラーズ様、本当は初めから犯人をご存知でしたね？」

全員「ええ!？」

ラーズ「……………」

セーニヤ「コック様から先程新しい証言がありました。ラーズ様が何かを探しに来る前に、お手洗いに行つてキッチンに不在の時間があつたそうです。犯人はまさにその時、マルティナ様のケーキを食べたのです。そしてその瞬間、ラーズ様は偶然にもそれを目撃していたのです」

グレイグ「なんと！では、なぜラーズは犯人を捕まえなかつたのだ？」

セーニヤ「それはですね」

ラース「セーニヤ、わかった。話すよ。俺は犯人がケーキを食べる瞬間を確かに目撃した。皆が来る時に備えてコーヒーとか紅茶を多めに用意したほうがいいと思って、それを頼もうとして行ったんだ。

コックはいないが、代わりにいたのはケーキを美味しそうに食べる犯人だった。その犯人は俺を見ると慌てて逃げ出した。その後にはそれがマルティナが食べるはずのケーキだったと知ったんだ」

マルティナ「なるほどね。その犯人は誰だったの?というか、どうしてその犯人を隠しているの?」

ラース「それはだな…………… まあ……………」

ラースが言いにくそうにしていると

バタン!

デルカダール王「すまなかった、マルティナ!!!」

デルカダール王が勢いよく入ってきた

全員「王様!?!／お父様!?!」

デルカダール王「悪かった、マルティナよ。まさかあのケーキがお

主の好物だとは知らなかったのだ。わしもあのケーキは懐かしくてのう。つい久しぶりに食べれると思い、口にしてしまった。もう一つ同じ物を買ってきたからわしを許してくれ」

デルカダール王はマルティナの前で土下座しようとしている

マルティナ「は、犯人ってお父様だったのですか!？」

セーニヤ「はい、そうです。ラース様のあの嘘の証言はデルカダール王様がケーキを買って戻るまでの時間稼ぎだったのです」

グレイグ「なんとあつけない……」

マヤ「じゃあ、あの怪しい人ってのは本当は」

ラース「いるわけないさ。俺がその場で考えた人物なんだからな。セーニヤの言う通り、玉座の間から大広間なんて見えるわけないだろう。本当なら静かに終わるはずだったのに、セーニヤが探偵を始めるから焦ったぜ」

シルビア「でも、どうやって王様はキッチンに？」

ラース「実は王様の部屋にある本棚には隠し通路があつてな。そこはキッチンへと繋がってるんだ。そこを通っていつつまみ食いをするのが王様の悪い癖なんだ」

カミュ「マジか……。じゃあ兄貴はそれを見たってわけか」

ラース「ああ。その後、王様に食べたケーキがマルティナの好物である事を言って、王様は大焦り。急いで買いに行こうにも時間がかかる。だから俺が協力してケーキを買う時間を稼ごうとしたんだ。

本当ならケーキを食べさせる前に色々皆と話そうと思っていたんだが、マルティナが予想以上に早くケーキを持ってきてほしがったからな。ある意味ではセーニヤの探偵には救われた」

マルティナ「まったく……。お父様、次からはもう勝手にケーキを食べるのはやめてください」

デルカダール王「あ、ああ。約束しよう」

マルティナ「罰としてお父様は一週間甘いもの禁止です。ラースはおかわり禁止」

二人「な!?!」

デルカダール王様「マルティナよ！それだけは！それだけはやめてくれ！」

ラーズ「待て待て、マルティナ！なんで俺まで!?!」

マルティナ「お父様と一緒に犯行をなかつた事にしようとした時点で同罪よ」

ラーズ「ぐ……………。せめて、せめて五日に……………」

マルティナ「駄目よ」

ラーズ「王様…………… どうしてくれるんですか。おかず一品じゃ割に合わないじゃないですか」

デルカダール王「すまん、ラーズよ」

グレイグ「ラーズもおかずで買収されるんじゃない」

セーニヤ「これにて閉幕ですわ!」

人攫い

それから二ヶ月後、ユグノア城

玉座の間

ダバンが一人で訪れていた

ロウ「住む家は見つかったか。ひとまず安心じゃな」

ダバン「はい、後はこちらに引越しの準備をするだけになりました」

イレブン「まさかダバンが兵士としてこっちに来てくれるなんて思わなかったよ。前にも言ったけど、僕達は歓迎するよ」

ダバン「ありがとうございます」

ロウ「じゃが…… まだバン達には言っておらんのかの？あまりあれこれ言うわけにはいかんが、バンの事を考えるとよい策とは思わん」

ダバン「そう…… ですよね。俺も少し考えが変わってきてはいます。言った方が楽なんじゃないかって。でも、俺………」

イレブン「…………… まあ難しい問題だよね。ずっと一緒にいたからこそ、言えない事だつてあるから」

ダバン「すみません、イレブンさん」

その時

兵士「失礼します。クレイモラン王国からカミュ様がいらつしやいました。シャール女王様からの交易品だそうです」

イレブン「カミュが？わかった、通して」

兵士「は！」

その後

カミュ「邪魔するぜ、イレブン、じいさん。つて、ダバンじゃねえか。なんでここに？」

ダバン「ちよつとお話してたんです」

イレブン「そうなんだ。あ、カミュの持ってるやつ」

カミュは大きめの箱を持っている

カミュ「おう、いつものやつだぜ。一応確認しておくか？」

イレブン「うん。…… オツケー、コック達に渡してきて」

カミュ「了解」

ロウ「そうじゃ。カミュや、ちょうどいい所に。この後時間あるかの？」

カミュ「あー…… 悪いな、じいさん。この後シャルル達の食料を取りに行かなきゃなんねえんだ」

ロウ「むう…… そうであったか。それはすまんかった」

ダバン「何かお困り事でも？」

ロウ「なに、実は民達の要望でプチャラオ村に行かねばならんのだが、イレブンは忙しく、兵士達も人数の関係で割く事が出来なくてのう。仕方ない、わし一人で行くかの」

ダバン「あ、それ俺でよければ護衛しますよ、ロウ様」

ロウ「おお！それは助かるのう、ダバンや。頼んでもいいかの？」

ダバン「はい、大丈夫です。今日は一日休みを貰っているので」

イレブン「あ、ちようちんの件か。そっか、必要なだったね。おじいちゃん、ダバン、お願いするね」

ロウ「ああ、任せておくのじゃ」

ダバン「少し早いですけど、ユグノアでの俺の初仕事ですね。しっかり護衛させていただきます」

その後、プチャラオ村

ダバン「プチャラオ村に来るのはこの前が初めてなんです。いつ来ても賑やかなんですね」

ロウ「そうじゃのう。昔から商人が多くおる村だったからのう。どれ、早速ちようちん屋に向かうかの」

ダバン「先程イレブンさんも言っていましたね。どうして必要なんですか？」

ロウ「民達の中にプチャラオ村出身の者がおつてのう。その者の妻がめでたく子どもを授かったらしく、わし達も祝いとしてなにか贈り

物をしようと考えたのじゃ」

ダバン「へー、それはおめでたいですね。でも、わざわざロウ様やイレブン様が街の人一人のためにこんな事をするなんて」

ロウ「子どもは大事じゃからのう。わし達の未来を継ぐ者達となるやもしれん。イレブンもわしもエマちゃんも、子どもが産まれる時には必ず祝っておるのじゃ」

ダバン「凄く暖かいですね、そういうの。マルティナ様達にも話したら賛成してもらえそうです」

ロウ「ほほ、そうじゃな。姫もリースもグレイグもやるかもしれん。う。じゃが、デルカダール王国はユグノアよりも大きいからのう。やるのならばかなり苦勞はしそうじゃが。さて、ついたぞ」

ダバン「あ、ここなんですか。確かにちようちんがたくさん飾ってありますね」

ロウが立ち止まった店には様々なちようちんが壁や看板にかけられており、それぞれが赤や緑、白などの光を発して綺麗な見た目となっている

ロウ「ここはプチャラオ村でも中々の大きさのお店じゃからのう。きつとめでたい日にふさわしいちようちんがあるはずじゃ」

二人が中に入ると

二人「な!!?」

中は酷く荒らされており、破けたちようちんや棚の商品があたり
に散乱し、所々には血のような跡が残っている

ダバン「何があつたんだ!?まるで激しい争いがあつたみたいな」

ロウ「人は………もうおらんか。他の者に聞いてみよう、何か
知っている者がおるやもしれん」

ダバン「そうですね!」

広場

広場では少し人だかりが出来ていた

ロウ「あそこの者達、どうして固まっておるのじゃ。何か知ってお
るのかのう」

ダバン「すみません」

女性A「え?ええ!!?へ、兵士さん!?でも、ちようどよかつたわ!あ
の、さっきたくさんさんの怪しい人達が村の人達を攫っていつちやっ
て!」

ロウ「なんと!?!その者達はどんな格好をしておった？」

女性B「剣を持ってて、大柄な人達だったわ。目つきも鋭くって身長も二メートルはありそうだったわ」

ダバン「二メートル!グレイグ將軍よりも大きいのか」

ロウ「ふむ、人攫いとは放つてはおけんのう。ダバンや、すまぬが人攫いの人達を捕まえるのも手伝ってはくれんかのう」

ダバン「当然です!必ず助け出しましょう!」

ロウ「うむ、助かる。どこに向かっていったかはわかるかのう？」

女性A「えっと、村を左に出ていったとしか……」

ロウ「左は崖だったはずじゃ。まずはそっちに向かってみるかのう」

ダバン「はい!」

人攫い2

岬の洞穴

ポラード「ゲヘヘへ。一人、二人、三人……… 八人か」

スキンヘッドの大きな男は洞穴にあった牢屋にプチャラオ村で攫ってきた人達を閉じ込めて数えている。また、その男の周囲には武装したイカツイ男達が五人ほどいる

男性F「ポラードさん、どうします？こいつら」

ポラード「そうだなあ………」

ポラードは攫ってきた人達をジロジロと見ている

村人達「ヒイツ…… や、やめてくれ」

ポラード「このまま売っちゃってもいいが、どうせならもっと人を集めてからでも悪くねえ。もう少し集めるぞ」

男性達「へい！」

入り口付近では

ダバン「……… どうしますか？ロウ様。突入してもあいつらが戦闘慣れしていた場合、人数の影響でこちらが不利になるかもしれない」

ロウ「そうじゃのう。もう少し様子を伺おう。どうやら村人達に今すぐ何かをしようとしているわけではないからの」

ダバン「了解しました」

岬の洞穴

青年「お、おい！俺達はどうなるんだ！」

ポラード「あー？そうだなあ、売りに出すか、俺達の奴隷になるか、駒になるか。どうしてほしい？」

青年「そ、それしか……選択肢はないのか!？」

ポラード「当然だな」

青年「そんな……」

男性E「ポラードさん、警戒に行ってください」

ポラード「おー、頼むわ。村人達に見られたからそれで傭兵とか来られても困るからな」

一人の子分が洞穴を出ようとしてくる

ポラード「さーて、後はどこに向かおうか」

メダチャット地方

男性E「えーっと、怪しいやつのはなし、と」

その時

グイッ！

男性E「!？」

男性は死角から誰かに突然引つ張られる

ダバン「ふー、まずは一人」

男性E「くくガッ！グッくく!!」

ギリギリギリ

ダバンは男性の首元を力強く締めている

ドサ

男性は息が出来ずにそのまま落ちた

ロウ「うむ、もう一人くらい減ってくれと助かるんじゃないか」

ダバン「でも、こうして待っているだけなのも時間かかりますよね。
うーん………!!ロウ様、いい事思いつきました」

ロウ「ほう、なんじゃ?」

その後、岬の洞穴

男性E「遅くなりました、ただいま戻りました」

ポラード「おう、誰もいなかったか?」

男性E「はい、怪しい影は見当たりませんでした」

男性D「お前、声変わったか?というか、兜までして」

男性E「変ですか?」

男性D「いや、別に。どこで拾ってきたんだか」

ポラード「まあいいさ。今度は別のやつが見回りにいけ。Eは牢屋
の前で警戒している」

男達「へい！」

男性E「……………」

Eは牢屋の中の人達をジツと見ている

村人達「……………」

中の人達は皆で固まっているが、先程のポラードの話により全員怖がっている

ポラード「どうした？」

男性E「いえ、どんな人がいるのか少し気になっただけです」

ポラード「そうか。その女は高く売れそうだと思うねえか？男共は駄目みてえだ、全員売れなかったら殺しちまうか、奴隷にするかにしようと思ってる」

男性E「……………」

Eはチラリと洞穴の入り口を見た

ロウ「……………」

ロウが僅かに気配を出した

男性E「……………」

Eはこっそりと3と指で表した

ロウ「……………」コクリ

ロウは静かに頷く

男性E「ポラードさん、少しいいですか？」

Eはポラードの前に行く

ポラード「あ？なんだ」

ダバン「ここの人達を解放してもらおうぞ！」

ダバンは男性Eが武装していた鎧などを全て脱ぎ捨てた

全員「!!？」

ポラード「てめえ!! Eのフリしていやがったか!!」

男性F「近づかせねえぞ！」

その場にいた他の男達もダバンの両側につく

ロウ「グランドクロス！」

三人「!?」

入り口からロウが走りながら十字の攻撃を放った

ダバン「よっ!」

ダバンはそれと同時に範囲から逃げる

ポラード達「グアアアア!!」

ポラード達は突然の攻撃に避けきれず、直撃する

男達の鎧に少しヒビが入った

男性G「い、いってえ………な、なんだよこのジジイ」

ポラード「くそ、俺達の人数が減ったのを狙ってきやがったか!」

ダバン「人攫いなんてして、しかも人身売買までしようとしていやがったな!そんな奴らを見逃すと思うなよ!」

ダバンは男性達に向かっていく

ダバン「ミラクルムーン!」

ダバンが身体を捻りながら後方回転して相手を勢いよく蹴りつけていく

男達「グハアツ!!」

ドカン!

蹴りに当たった二人は壁に強く叩きつけられる

ポラード「チツ!」

ポラードはそのまま逃げようとする

ロウ「逃がさんぞ。ゴツドスマツシユ!」

ロウが爪を構えたまま、雷を纏い高く跳躍するとそのまま落下の勢いも合わせてポラードに振り下ろした

ザシユツ!!

ポラード「ギヤアアア!!」

ポラードは強烈な一撃により、その場に倒れ込んだ

ダバン「流石です、ロウ様!」

ロウ「うむ。お主よ、こここの牢屋からこの者達を解放するのじゃ」

ポラード「くっ……………」

ポラードはポケットから牢屋の鍵をロウに投げた

ロウ「どれ、怖い思いをしたのう。これでもう大丈夫じゃ」

ガチャン

青年「あ、ありがとうございます!!」

女性「もう駄目かと思ってきました！本当にありがとうございます！」

中にいた村人達が喜びながら出てきた

ロウ「うむうむ、さあ村に戻るのじゃ」

ポラード「まだ終わらねえ!!」

全員「!!」

ポラードは血だらけのまま立ち上がり

おじさん「ぐっ……」

近くにいた短髪のおじさんを捕まえた

ポラード「こいつを助けてほしかったら今すぐジジイと鎧野郎は武器を捨てろ!!」

ポラードは隠し持っていたナイフをおじさんの首に当てている

女性「キヤアツ！」

ダバン「てめえ！汚ねえぞ！」

ポラード「黙れ!! さつさと落とせ！オラア!!」

ポラードは更にナイフを首に近づけた

喉の皮膚が薄く切れたのか血が流れてきた

ロウ「…………… わかった。これでよいかの？」

ロウは持っていた爪と杖をその場に落とした

ダバン「ロウ様……………」

ロウ「ダバンよ、あの者を助けるためじゃ。頼む」

ダバン「くっ……………」

ダバンも渋々剣と盾と槍を落とした

ポラード「そう…………… そうだ。初めからそうしていればよかったんだ」

ロウ「さあ、その者を離すのじゃ」

ポラード「黙れ、ジジイ!!次は俺がいいと言うまで動くんじやねえぞ!!」

ポラードはそのまま後ろ歩きに洞穴を出て行こうとする

ロウ「ぬう……………」

ダバン「どうしますか、ロウ様！」

ロウ「どうにも出来ん。魔法も隙が大きく、あの者も酷く興奮しておる。迂闊に手を出せん」

ダバン「くそ！」

ポラード「そのままだ……………いいな?絶対動くなよ」

おじさん「……………」

ガシ

ポラード「は？」

おじさん「はあ!!」

ブン!

突然囚われていたおじさんがナイフを持っていた手を掴み、ポラードを勢いよく投げ飛ばした

ポラード「な!!？」

ドスン!

全員「!!」

ダバン「今だ!!」

ダバンがそのまま倒れたポラードに走りこみ、手首に錠を掛けた

ポラード「な、なんだと!!？」

ロウ「おお、お主、よくやってくれたのう」

おじさん「ああ、多少は戦えるのでな。狙われたのが俺でよかった。こいつの隙をずっと伺っていたのだ。じいさんも兵士さんも心配かけてすまなかった」

ポラード「くそー!!」

その後、プチャラオ村

捕まっていた人達を無事に送り届けた

青年や女性達は皆、嬉しそうに家族達と涙を流して喜び合っている

ロウ「ふむ、一件落着じやな。しかし、あのちようちん屋の店主は一体どこに」

おじさん「なんだ、じいさん。俺の店に用事あったのかい？」

ポラードを投げ飛ばしたおじさんがロウの言葉に反応した

ダバン「あ、ああ、そうなんだ。って、おっさん！ちようちん屋だったのか!？」

タホル「おう、俺はタホル。自慢じゃねえがこの村で一番のちようちん作りを自負してる。変な男達が一斉に乗り込んできてな。応戦したんだが、腹に思いつきりブスツとやられてそのまま連れてかれたんだ。

じいさん達が助けてくれなかったらやばかったぜ。本当助かった！お礼に、じいさん達の願いなんでも叶えてやるよ。ちようちん、作ってほしかったんだろ？」

ロウ「おお、それはありがたい。実はお土産として作ってほしいちようちんがあつてのう」

タホル「はは、了解だ。ただ、話は俺の店に行ってからにしようぜ」

星のちようちん

ちようちん屋

タホル「ほうほう、家族が増えるお祝いね〜」

ロウ「うむ。何かよい物があると嬉しいんじやが」

タホル「うーん……… ないわけじゃあねえが、かなり時間かかるぜ？」

ダバン「そんな大変なのか？」

タホル「大変つてより、必要になる素材の一つが希少品だよ。それを取りに行くのに苦労するんだ」

ロウ「ほう、何という物なのじゃ？」

タホル「知ってるか？ほしのかけらだ。宇宙から落ちてきた隕石その物のカケラと言われてんだ。あれを使うんだ」

ロウ「ほしのかけらか。知っておるぞ。それを取ってくればよいのじゃな？」

タホル「へ？じ、じいさんが？やめときなつて。どこにあるかわかんねえものだし、落ちてても純度が高くねえと使えないんだ。酷い時は年単位かかるんだぜ？」

ダバン「めちやくちや大変じゃないか。ロウ様、流石にこれはやめましょうよ」

ロウ「なーに、わしに任せておくのじゃ。ほしのかけらは一つでよいのじゃな？」

タホル「お、おう。一つありやあ充分だ。だがさつきも言ったけど、純度が大事なんだ。綺麗なやつを頼むぜ」

ユグノア城 玉座の間

イレブン「ほしのかけらかー。悪いんだけど、今持っていないんだよね。今度カミュにお願いしようかと思ってんだ」

ロウ「むう、そうであったか」

ダバン「イレブンさんってそんな貴重なもの持ってたんですね」

ロウ「イレブンは昔から鍛冶の影響で様々な希少な素材を持っているから。ほしのかけらも昔使っているのを見ていたんじゃない」

イレブン「ほしのかけらは最近全然手に入らなくなったんだよ。あ
るとするなら、ミルレアンの森の奥かな」

ロウ「そうか。……… 誠にすまぬが、ダバンよ」

ダバン「大丈夫ですよ。こんな途中で投げ出したりしませんから」

ロウ「おお、本当にありがたい。連れ回してすまぬのう」

ミルレアンの森

ダバン「うわ、流石クレイモランだ。川が凍って歩けるなんて」

ロウ「この奥かのう。イレブンが必要としている分もあるとよい
が」

二人が氷の川の上を歩いていると

ヒュッ!

ダバン「!?ロウ様!!」

ダバンが突然ロウに覆い被さった

ロウ「ぬう!?!」

ブスツ!

ダバン「いて!」

ロウ「ダバン!なんじや、急に!」

ロウが向こう岸を見ると

アローインプ達「ケヒヒヒヒ」

頭巾を被った矢を打つ魔物、アローインプ達がロウとダバンを的にして遊んでいる

ダバン「あいつら、ふざけやがって。ロウ様になんて事を」

ロウ「急いで渡ってしまおう。アローインプは根は臆病。いたずら好きではあるが、少々脅かせばよい」

ダバン「は!」

ロウとダバンは走ってアローインプ達の元に向かう

アローインプ達「!!キー!」

アローインプ達はさみだれうちをダバン達に打っていく

ダバン「ロウ様!俺の後ろに!」

ダバンが盾を前に構えた

ロウ「うむ、頼むぞ」

ダバン「受け流しの構え！」

ダバンは盾の構えを変え、攻撃を横に受け流すようにした

ヒュン！ヒュン！

ダバン「はああ!!」

ダバンの盾に当たっていく矢はどんどん横に逸れていく

ロウ「どれ、少し驚かそうかの。ドルモーアじゃ」

ロウはダバンが矢を防いでくれているうちに、アローインプ達の近くに黒い魔法陣を描き、周囲を闇の魔力が包み込み爆発した

アローインプ達「!!?キー!!」

驚いたアローインプ達はバラバラに逃げていった

ダバン「ふう、いたずらもほどほどにしてほしいですね」

ロウ「助かったぞ、ダバンや。流石盾使いじゃな。いなし方がとても安定しておった」

ダバン「ありがとうございます」

しばらく進むと

ダバン「結構…… 雪が…… 深くなってきましたね。歩きにくいです」

ロウ「うーむ…… そろそろ奥地なのじゃが、こんなに雪があつては探す事すら出来んのう」

ダバン達の周りには降り積もった雪があり、足が埋まるほどの雪にダバン達は苦戦していた

ダバン「流石にこれ以上はまずいですかね」

ロウ「うむう…… 誠に残念なんじゃがのう」

その時

マントゴーア「グルルル……」

緑の体に青い翼とたてがみを生やした魔物、マントゴーアがロウ達の前に現れ威嚇している

ダバン「うわ、凄い色した魔物だ。なんてやつですか？ロウ様」

ロウ「こやつはマントゴーア。呪文や回復効果を下げる技があつた

はずじゃ、それに気をつけねば」

マントゴア「ゴオオツ！」

マントゴアは黒い怪しげな息を吐いてきた

ダバン「これか！ロウ様、俺にお任せを！ビッグシールド！」

ダバンがロウの前に割り込み、盾を構えた

ロウ「おお、ありがとのおう」

ダバンの盾で息が遮られ、ロウには効果がなかった

ロウ「マヒヤデドス！」

ロウはそこからマントゴアの足下に巨大な水色の魔法陣を描き、頭上から大量の巨大な氷柱を落とした

バリバリイーン!!

マントゴア「ギユウ………」

マントゴアは苦しそうにしている

マントゴア「ガアアアツ！」

マントゴアは即座に赤い魔法陣を描き、巨大な炎の塊をロウ達にぶつける

ダバン「！メラガイアー！こんな魔法使えるのか！」

ダバンは再びビッグシールドで防ごうとする

ロウ「!?これじゃ!!ダバンよ、先程の受け流しの構えじゃ！」

ダバン「え？は、はい！受け流しの構え！」

ダバンはロウの突然の指示に戸惑いながら盾を構え直した

ダバン「よっ！」

ダバンの盾に当たった巨大な炎の塊は逸らされ、深く積もった雪の中に落ちた

ジュウウウ!!

炎の塊が落ちた周辺の雪が全て溶けた

ダバン「!!なるほど！これで邪魔な雪を溶かすんですね!？」

ロウ「そうじゃ！よし、もっと打ってくるのじゃ」

マントゴーア「ガアアアッ！」

マントゴーアは再びメラガイアーをロウ達にぶつける

ダバン「受け流しの構え！」

ジユウウウ!!

マントゴア 「ガアアアッ！」

ダバン 「受け流しの構え！」

ジユウウウ!!

マントゴア 「グウウ………」

マントゴアは通用しないとわかったのか、そのまま帰っていった

周りにあつた雪はなくなり、かなり歩きやすくなった

ダバン 「流石です、ロウ様。これで探しやすくなりますね！」

ロウ 「ああ、マントゴアにも感謝せねばな。む？」

ロウは隅の方で淡く黄色に光る物を見つけた

ロウ 「おお！あつたぞ、これじゃ！これがほしのかけらじゃ！」

ロウはほしのかけらを手に入れた

ダバン 「これがほしのかけら。初めて見ました、結構大きいんですね」

ロウ「純度はわからぬが、これでひとまずは達成じゃな」

ダバン「他にも周りにありませんかね？」

ロウ「少し探してみるかの」

数分後

ダバン「ロウ様！これ、かなり透明ですよ！」

ロウ「おお、本当じゃ。綺麗な黄色じやのう。この方が純度が高いのかのう。どれ、プチャラオ村のタホルに見せに行こう」

その後、プチャラオ村

ちようちん屋

タホル「す、凄え……… じいさん、これ凄えよ!!ほしのかけらつてのは、純度が高いといつても精々半分は不純物なんだ。それがこれはほほ星の成分そのものだ！これはもうほしの結晶だな！」

ダバン「だからこんなに透明なのか、やりましたね、ロウ様！」

ロウ「うむ、頑張った甲斐があつたのう。それではそのちようちんとやらを頼んでもよいかの？」

！」
タホル「ああ、任せな！星のちようちんの最高傑作、作ってやるぜ

その後

タホル「どうだ！完成だ！」

二人「おく………」

タホルが完成させた星のちようちんは紺色の紙が張られ、そこには
星空や月が描かれている。また、中には先程のほしのかけらが入っ
ており、光を灯すとほしのかけらの色と反射して黄色くちようちんが照
らされる。それはまさに夜空を表しており、描かれた星空と綺麗に合
わさっている

ダバン「こりやあ凄えな、こんなちようちんもあんのか」

ロウ「見事な物じゃな。ロマンチックじゃのう」

タホル「この星のちようちんは、プチャラオ村では夢を叶えるちよ
うちんと言われてんだ。きつとほしのかけらが持つ星の力のおかげ
なんだろうな。なんだって、流れ星の一部なんだからよ！」

ダバン「そうか、確かにほしのかけらってそういう事だもんな」

ロウ「とてもよいものじゃな。どれ、いくら払えばよいかの？」

タホル「いやいや！これはあの男達から助けてくれた礼だし、素材だつて持つてきてもらったんだ。金はいらねえよ」

ロウ「それは嬉しいのう。では、本当にありがとのう。きつと喜んでくれるはずじゃ」

タホル「おう！またのご来店待つてるぜ！」

その後、ユグノア城

玉座の間

イレブン「よかったー、無事にちようちんが出来て」

ロウ「ちようちんを求めに行つたはずが大分遠回りをさせられたのう」

ダバン「ですね。でも、楽しかったですよ。ロウ様と色々話せましたし」

ロウ「そうじゃな。わしも楽しかったぞ。ダバンよ、またよろしく頼むのう」

ダバン「はい！」

古代のお宝

それから一週間後の夜、デルカダール城

食事場

二人「え!? サマデイー!？」

マルスとルナがデルカダール王からの案に喜びの声をあげた

デルカダール王「ああ。二人はあまり訪れた事はないだろう。サマデイー王と話をして、明後日から数日間旅行に行こうと思う。前のマルスとの約束じゃからな」

マルス「やった!! ありがとう、じいちゃん！」

グレイグ「サマデイーですか。あそこには私も久しく行ってないです。すね」

デルカダール王「わしも直接行くのは随分と久しぶりだ。サマデイー王も快く受け入れてくれるとう、ファールリス王子も楽しみにしておるそうだ」

ラーズ「サマデイー王に話をしたという事は、泊まる場所が」

デルカダール王「うむ、サマデイー城だ。なにやら豪勢にもてなし

をしてくれるそうだが、そこまでせんでもよいのに」

マルティナ「そうですね、なんだか旅行ではなくなってしまいそうです」

グレイグ「いくらご友人同士といっても、王とその家族がやってくる以上当然だと思われます。ありがたく楽しませてもらう事にしましょう」

ラース「サボテンステーキ……いや、最近話題の熱地ビーフ丼も美味しそうだよな」

マルティナ「ラース、ご飯中に違う食べ物想像するのは変よ」

デルカダール王「はははは！ラースらしいのう。マルス、ルナ、楽しんでおるのだぞ」

二日後、サマデー城下町

全員「ええ……」

「デルカダール王達がサマデーに到着すると、真正面にある競馬場に巨大な旗が飾られており、そこには大きく太文字で歓迎！デルカダール王ご家族御一行様！と書かれている

また、デルカダール王達に気付いた人達が拍手をして迎えている

デルカダール王「ハツハツハ！サマディー王も愉快的な事をしてくれる！」

ラーズ「こうも歓迎されると……………ちよつとな」

ルナ「な、なんか恥ずかしいよ」

二人はその歓迎っぷりに少し恥ずかしがっている

グレイグ「まあ気持ちはわかる。旅行感覚とは少し別物になってくるな」

マルス「えへへ、手を振ってくれるよ。こんにちはー」

マルスはあちこちに笑顔で手を振っている

マルティナ「ふふ、マルスは特に緊張とかしてないのね。あら？」

歩いていると、奥の方からフアーリス達が数人兵士を連れてやってきた

フアーリス「お待ちしております、デルカダール王様方！この度は私達サマディー王国に来訪していただき、誠にありがとうございます！」

兵士達「ありがとうございます！」

フアーリスが礼儀正しく一礼をすると、それに続いて後ろにいる兵士達も礼をする

デルカダール王「なに、そんな固くならんでもよい。伝えたはずだが、わし達は孫の願いを叶えるために来たのだ。丁重なもてなしには感謝するが、そこまで気にせんでも大丈夫だ」

フアーリス「い、いえ！父上から決して失礼のないように、そしてサマデーでの楽しいひとときを過ごさせるお手伝いをするようにと仰せつかっております！まずはお城にご案内させていただきます。こちらへどうぞ」

フアーリス達はデルカダール王の斜め横に並び、サマデー城に向けて腕を伸ばして案内する

グレイグ「フアーリス王子、見ない間に随分と雰囲気が変わりましたね」

マルティナ「そうね。やっぱり王子なんだし、真面目に頑張ってるのね」

サマデー城 大広間

フアーリス達に連れられて城に入ると、そこには大きな机がありその上には豪華な食事が用意されている。お肉、野菜、フルーツ、飲み物などどれもが鮮やかな色をしており、かつ大量に用意されている

ラーズ「おおー！」

ラースはその光景に目を輝かせている

ルナ「美味しそう！見た事ない食べ物もあるー！」

ルナもラースの隣ではしゃいでいる

フアーリス「あはは、流石はラースさんですね。この後のお昼として用意させていただきました。父上や母上、それと自分も参加させていただきますね」

デルカダール王「うむ、これだけの量があるのだ。皆で食べようではないか」

フアーリス「ありがとうございます。それでは、玉座の間にて父上がお待ちになっております。こちらです」

玉座の間

フアーリス「父上！デルカダール王様ご家族が来訪してくださいましたので、歓迎と案内をしてみました！」

サマデイー王「おお、ありがとうございます。いやー、デルカダール王様、マルティナ王女様、グレイグ様、ラース様、マルス様にルナ様。この度はサマデイー王国に来訪してください、ありがとうございます」

サマデイー王は頭を下げた

デルカダール王「気にするな、サマデュー王よ。お主達の歓迎の意
思は先程ので充分に伝わった。わし達の方こそ快く歓迎してくれた
事、誠に感謝する」

サマデュー王「そ、そうでしたか。お祭りも開催しようかと思っ
たのですが、流石に数日では大した用意も出来ずに無くなってしまいま
した」

マルティナ「大丈夫です、サマデュー王様。お祭りも素敵ですが、普
段の何気ない日常風景にも素敵な部分がたくさんあると思います。
マルス達にもきつとよい影響を与えてくださるはずですよ」

サマデュー王「そうですか、ありがとうございます、マルティナ王
女様。ご覧になられたと思いますが、この後の昼食のご用意をさせて
いただきました。私達には構わず、お好きに皆様でお食べください。

ラーズ様の話も聞いておりますので、おかわりも用意してありま
す。また足りない物などがありましたら、遠慮なく私達に申し付け
ください」

デルカダール王「ああ、感謝しよう。だが、サマデュー王と共に話
しながら卓を囲むのもわしにとって嬉しい事なのでな。共に楽しく
食べようではないか」

サマデュー王「ありがとうございます、デルカダール王様。それな

らば私もぜひ一緒に一緒にさせていただきます」

大広間

「デルカダール王達はそれぞれ話しながらご飯を食べていた

デルカダール王「そうか、昔は確かにそうであったな！」

「サマディ王「そうですよ、デルカダール王様。それは冗談になりませんよ」

「デルカダール王「ハッハッハ！すまんのう」

「マルティナ「お父様ったら。一番楽しんでるのはお父様なんじゃないかしら？」

「ラース「まあいいじゃないか、楽しそうな王様を見れて」

「ファリス「お隣いいですか？ラースさん。あ、ラース様」

「ファリスが皿を持ってやってきた

「ラース「はは、大丈夫だ、ファリス。前までは様なんて付けてなかっただろ？前のままでいいって」

フアーリス「す、すみません。慣れてしまっていて。言葉使い、難しいんですよ」

グレイグ「そうだな。だが、頑張っているのはよく伝わったぞ。リースも見習うんだ」

リース「俺は敬語とか似合わないんだって」

フアーリス「ふふ、確かに」

マルス「ねえねえ、フアーリスさん」

フアーリス「ん？どうしたんだい？マルス君」

マルス「この後、サマデーを回るんだけど僕達あまりここ周辺知らないんだよね。教えてくれない？あ、教えてください」

フアーリス「ああ、さつき少ししか言わなかったもんね。安心してよ、マルス君。この後は僕と一緒にサマデーを案内するさ」

マルス「本当!?!ありがとう!」

マルティナ「いいの？ファリス王子。色々やる事あるだろうか
ら、そつちを優先してもらっていいのだけど」

ファリス「大丈夫ですよ。むしろ、僕の数日の仕事は皆さんの案内
内なんで」

グレイグ「そうか、それなら頼りにしておこう」

ファリス「お任せください！あ、そういえば、サマデーでは最
近こんな噂が出てるんです。オアシスの湖の底に古代のお宝が眠っ
ているって」

マルス「え!?!お宝!?!」

ラーズ「ほう、それはまたどうして」

ファリス「どうしてなんでしようね？僕も聞いただけなので詳し
くは知らないんですけど、仲間達が話してたんで多分有名になってき
てるんだと思います。興味ある？マルス君」

マルス「うん！すつごくある！調べようよ、ファリスさん！」

ファリス「そうだね、皆が噂してるって事は何か信じさせるよう

な事があるのかもしれない。行ってみてもいいね」

マルス「やった、やった！」

宝探し

その後

ルナ「えー、おじいちゃんここにいるの?」

デルカダール王「ああ、すまぬがそうさせてもらう。わしにまた楽しい話をしてくれる事を期待しておるぞ」

マルス「わかった。絶対お宝見つけてくるからね!」

サマデイー王「フアーリスよ、くれぐれも危険のないようにするんだぞ」

フアーリス「はい! 父上!」

ラーズ「俺達もいるんで大丈夫ですよ。それでは行ってきます」

サマデイー地方 砂漠

マルティナ「久しぶりに来るとやっぱり暑いわね。いつもより涼しい格好なのに」

容赦なく照りつける太陽に熱い砂地が合わさり、マルティナ達からはジツトリとした汗が皮膚にはりつく

グレイグ「ですな。寒いよりはまだいいですが、この汗の感覚は私も嫌いです」

ルナ「暑いよ。お父さん、お水ちょうだい」

ライス「ん？もう飲むか？ほら」

ライスは冷たい水が入った水筒を渡した

マルス「ルナ、その後僕にもちようだい」

ファリス「はは、大丈夫ですか？皆さん。慣れないとキツイですよね」

ライス「まあ俺は温暖な土地育ちだからな。多少は平気だ。それにしても、魔物が昔に比べてサマデーも減ったな。前は探さなくてもうろついていた魔物の姿が探さないと見えないくらいになっている」

ファリス「そうですね。特にここら辺は城下町からも近いのでよく人が通る事もあって魔物が少ないんです。オアシス周辺や遺跡の部分ではまだ魔物がそれなりにいますよ」

ルナ「はやくオアシスに行こう。涼しくなりたいもん」

マルティナ「そうね。折角着替えも用意してもらったんだし、少しオアシスで遊びましょう」

オアシス

関所を超えてしばらく歩くと、砂漠の安らぎの地オアシスが現れた。かなり大きい湖であり、この近くでは蒸し暑い砂漠の暑さもどこか軽減されているように感じる。湖の周りには草花や木々が育っている。また近くでは魔物達も水を飲んだり涼んだりしている姿が見られる

二人「オアシスー！」

マルスとルナは湖が見えると嬉しそうに走っていった

ファールリス「あ！周りには魔物もいるんだよ、二人とも！」

グレイグ「大丈夫だ、ファールリス王子。そこは理解しているから邪魔はしないだろうし、万が一にも戦えるように鍛えてある。追いつくまでには問題は起こさなはずだ」

ファールリス「そ、そうなんですか。まあそれなら早足程度で」

マルティナ「私達も少し休みましょう。足下が砂だから流石に疲れるのが早いわ」

リース「そうだな。ゆっくり涼ませてもらうでしょう」

しばらくして

マルス「ねえねえ、父さん！一緒にオアシスの底、見てみようよ！」

ルナ「お宝あるかもしれないよ！」

ラーズ「お、俺か？俺はいいさ」

二人「えー」

グレイグ「ふっ、ラーズは無理だろうな。どれ、二人とも俺と一緒に探してみるか」

マルス「やった、流石グレイグさん！ありがとう！」

ラーズ「マルス、ルナ、あまり危険な事はするなよ？」

二人「はい！」

グレイグ達は軽く服を脱ぐとオアシスにどんどん入っていった

フアーリス「行かなくてよかったですか？ラーズさん、マルティナ様も」

ラース「まあな。ここにいてだけでいいさ」

マルティナ「ふふ、ラースは泳げないのよ」

ラース「折角言わないようにしていたのに」

ファリス「あ、そうだったんですか。でも、浅い場所もありますよ。ここら辺から少し前までなら膝がつかえる程度です。そこならラースさんでも大丈夫では」

ラース「うーん……………」

マルティナ「いいじゃない、ラース。たまには水に慣れておくのも必要よ」

ラース「わかったよ、少しだけな」

ラースはゆっくりとオアシスに入っていった

ラース「あ……………冷たくて気持ちいいな」

マルティナ「私も入ろうかしら。ファリス王子もどう？」

フアーリス「じゃあ僕もご一緒に。マルス君達を見ていたらなんだか楽しそうに見えてきました」

ラーズ「だよなく。あの二人はなんでも楽しそうにするからよ、見ているこっちも楽しくなってくるんだよな」

マルス達は

グレイグ「むう、ここら辺からかなり深くなってきたな。マルス、ルナ、泳げるか？」

マルス「もちろん！泳ぐの大好きだよ！」

ルナ「マルスほどじゃないけど、潜ったり泳いだりはできるよ」

グレイグ「そうか、ラーズの子どもだから少し心配していたがそこは遺伝されてないのだな。安心した」

ルナ「お父さん泳げないの？」

グレイグ「ああ、昔ソルティコで溺れていたからな」

マルス「へ〜！なんだか意外かも」

グレイグ「よし、ではまず普通に潜ってみるとしよう」

二人「はーい！」

ザバアン！

三人が中に潜るとオアシスの中は美しい青い世界が広がっていた。数は少ないが、小さな魚や水草も生えている。また空からの陽の光が中まで綺麗に照らし、ゆらゆらと光が揺れながら水中を照らしている

ルナ「んー！（きれーい！）」

マルス「んんんん！（本当だね！）」

グレイグ「んんん（一旦上に戻るぞ）」

グレイグは二人に上を指差しながら伝えた

二人「んー！（はーい！）」

ザバアン！

グレイグ「二人とも落ち着いていたな。よかったぞ」

マルス「海で潜るの好きだったもん。これくらい当たり前だよ」

ルナ「凄く綺麗だったー。でも、底がよく見えなかったね」

グレイグ「そうだな。想像よりも深いのかもしれん。ひとまず俺が潜ってみよう。二人は俺がまた戻ってくるまでここで待っているんだぞ」

二人「はい」

今度はグレイグ一人で潜っていった

グレイグは慣れた動きでどんどん潜水していく

グレイグ「(さて、どこまで続くのだ？このオアシスは)」

少しすると

グレイグ「(ふむ、ここがどうやら水底のようだな。やはり砂漠という事もあり、砂ばかりか)」

グレイグは底まで難なく到達し、下にある砂を触っている

グレイグ「(なんだ、マルス達からもそこまで離れているわけでは無いのだな。俺が注意していれば二人も大丈夫だろう)」

グレイグは上を見上げてマルス達との位置を把握すると戻っていった

ザバア！

グレイグ「二人とも底はどうやら深くないようだ」

マルス「本当!?!じゃあ僕もついに宝探しできるね！」

グレイグ「だが、底に近づけば息をするために上がる時間もかかる。危ないと感じる前に余裕を持って上がるのだぞ。本当に危ない時は俺に合図を出すのだ」

ルナ「わかった。気をつけるね」

グレイグ「では行くか」

その頃、ラーズ達は

フアーリス「マルス君もルナちゃんも泳げるんですね」

マルティナ「そうなの。ラーズだけなのよ、泳げないの」

ラーズ「上手く体がいう事聞いてくれねえんだよ。力入れると沈んでいってよ」

ファアリス「僕も慣れるまではそんな感じでしたよ。ラーズさんも慣れるまでやってみましょうよ」

ラーズ「えー、俺はいいよ。別に泳げなくてもそこまで問題ないって」

マルティナ「こんな事言ってるけど、泳げないせいで死にかけた事だってあるのよ」

ファアリス「だ、大問題じゃないですか！というか、もしかしてそれがトラウマに？」

ラーズ「いやいや、死にかけたくらいでトラウマにはならねえよ。一瞬すぎて殆ど覚えてないしな」

ファアリス「ならいいじゃないですか！挑戦ですよ、ラーズさん！」

ファアリスはラーズの手を握って進んでいく

ラーズ「えー」

マルティナ「ふふ、これくらい強引な方がラーズにとってもいいと思うわ、ファアリス王子」

ラーズ「初めて指導した時から随分変わったよな、フアーリス。果敢になったな」

フアーリス「シルビアさんやイレブンさん達に教えられましたから。本当の力は自分自身でつけるものだって、そこからラーズさんに自信と努力の強さを教えてもらいました。皆さんのおかげですよ」

マルティナ「旅の頃にあなたの事はベロニカやシルビア達から聞いていたわ。最初は頼りなさそうだったけど、今ではそんな事まったくなさそうね」

フアーリス「本当ですか、マルティナ様！ありがとうございます」

ラーズ「ま、待て待て、これ以上進むと浮くって！」

フアーリス「僕が支えていますから！」

マルティナ「ほら、前に二人で練習した感覚思い出して。私も支えるから」

ラーズ「だ、大の大人がこんな支えられて入るなんてかっこわりい」

マルティナ「あ、それが本音ね？そんなの気にしないから。ほーら、

いくわよ」

王になるために

グレイグ達は

水底で砂を掻きながら、何か落ちていないかを探していた

グレイグ「探しても探しても砂ばかりだな。所詮は噂という事かもしれないな」

ルナ「あー！綺麗な貝殻。あー！こっちにも」

マルス「あれ？なんだろう？石……かな？」

ザバア！

何かを見つけたマルスが先に上がっていった。それを見た二人も上に上がっていく

グレイグ「どうした？マルス。上がるのが今までより早いな。息継ぎか？」

マルス「ううん、何か見つけたんだ。あー！やっぱり石じゃない！見て！輪つかだよ！」

マルスの手の中には、小さいが輪つかのようなものがあった。しかし、その周りは苔のような物で覆われており、緑色になっている

グレイグ「ふむ、確かに。石ではなさそうだ」

ルナ「凄いじゃん、マルス！それ絶対お宝だよ！」

マルス「そうだよね！やったー！」

グレイグ「まだお宝かどうかはわからんぞ。それにそんな汚れていては」

ルナ「あ、確かに。マルス、取れる？」

マルス「うーん……………」 駄目かも、こびりついて取れないや」

グレイグ「長年の時の汚れなのだろうな。一度持ち帰ってみるか」

ルナ「待って、グレイグさん！私もマルスみたいな欲しい！」

マルス「僕もまだやる！他にもあるかもしれないし」

グレイグ「わかった。だが、寒くならんうちに引き上げるからな。無理するんじゃないぞ」

二人「はい」

オアシス付近では

ラーズ「ハアゝ……………。疲れた」

ラーズが大の字になって倒れていた

ファリス「慣れてないと疲れますよね。でも、なんとなくですけどコツを掴むのが速いと思いますよ。流石ラーズさんです」

マルティナ「そうなのよ。だからもつとしつかりやればきつと出来ると思うんだけどね。やりたがらないのよ」

ラーズ「苦手意識が強いからな。それにもう今更泳げるようになってもって感じはするしな」

ファリス「ははは、まあ長年泳げないでいるとそうなりますよね。僕も少し休憩しようかな。ラーズさん、お隣座りますね」

ラーズ「おう、好きにしろ」

マルティナ「ねえ、ファリス王子。少しお話しでしょ」

ファリス「はい、もちろんいいですよ」

マルティナ「頑張ってるみたいね、王子として。前見てからしばらく会ってなかったけど、大分見違えたわ。言葉使いもそうだけど、姿勢やお父様への立ち位置まで。かなり勉強してないとわからない事よね」

フアーリス「あ、あはは……。まだ慣れてはいないんですけどね。半年ほど前から勉強し始めたんです。王子ではなく、この国の王となる準備のために」

ラーズ「おお！ついにフアーリスがサマディー王に！」

フアーリス「はい、そうなんです。父上がそうおっしゃってくださいました。父上はもう交代してもいいとは言っていました。僕はまだまだです。勉強しても勉強しても、わからない事や不安な事はたくさんあります。」

父上のように立派にやれるのか、民達を引っ張っていけるのか、皆は僕についてきてくれるのか。最近こんな考えばかりで、王にふさわしいのは本当に自分なのだろうかと感じてしまってます」

マルティナ「……………わかるわ、フアーリス王子。いえ、フアーリス」

フアーリス「マルティナ様……………」

マルティナ「国の王として皆を守り、導く。そんな事が本当に自分出来るのか。私も悩んでいたわ。私は姫として生まれてきたけど、城で育った期間や姫として育った期間は短かった。尊敬するお父様の姿を後ろからではなく、遠く街の外から見っていたわ。」

あんな風になれるのか、こんな私に皆はどう思うのか。不安しかなかった。王女になったばかりの時が一番心の中で迷っていたわね。でもね、ファリス。きつとあなたも同じよ。近くに支えてくれる人がいるわ。」

お父様やラース、グレイグ、兵士達は私の出す案についてきてくれる。時には違う案も出して話し合う事もするわ。その時にね、わかったのよ。一人で王女をやっているわけではないってね」

ファリス「一人で……ではなく、皆と一緒に」

マルティナ「ええ、そうよ。遠くから見ると確かに王様や王女ってのは一人でなんでも決めて、皆をかつこよく導いているわ。でも、それは表側だけ。その裏には必ずそれを支えている人達がいるわ。だからファリス。あなたが王になっても、支えてくれる人を頼っているの。」

だってそうじゃないとやっていけないわ。皆で支え合っていていきましよう」

ファリス「マルティナ様……… はい!!ありがとうございます」

！」

マルティナ「ふふ、よかったわ。少しでも元気が出たみたいで」

フアーリス「感動しました！皆との支え合いで成り立つ。確かにその通りです。僕、間違っていましたね。父上だって、大臣や母上に注意されている場面を見ていたというのに」

マルティナ「でしょ？支えてくれる人を大切にね。間違ってもその人がきつと止めてくれるわ。もちろん、もうその間違いはしないようにだけどね」

フアーリス「はい！僕、仲間の兵士達に支えてくれそうな人に声をかけてみますよ」

マルティナ「ええ、そうね。味方はたくさん作りましょう。それに兵士と仲良くなるのもいい事だわ」

ラーズ「カー……………カー……………」

ラーズは大の字のまま眠ってしまった

フアーリス「あ、ラーズさん寝ちゃった」

マルティナ「もう！静かだと思っただら寝てたのね！リラックスしすぎよ」

古代の指輪

その後、サマデー城

歴史保管所

ラーズ達はマルスの発見した謎の輪つかを鑑定してもらおうとしていた

研究者「ふむふむ……………。おそらくは古代の物と見て間違いないでしょうな。材質が古い時代の黄銅となっているので」

マルス「本当!!?もしかして、凄い発見!」

ルナ「えー!!本物なの!」

グレイグ「おお、それは凄い。よく見つけたぞ、マルス」

研究者「しかし、この汚れが無ければもつとしっかりと判断出来そうですねのですが……………。やはりオアシスにあったというだけあって、苔の奥に錆びもあってかなり劣化していますね」

ラーズ「ふむ……………。その素材は銅なんだよな?」

研究者「はい。間違いありませんね」

ラーズ「なら、汚れはある程度落とせるはずだぞ」

全員「ええ!？」

マルティナ「ど、どうやって？水や洗剤じゃ落ちないわ」

フアリス「ラーズさんって古代物にも精通していたんですか!？」

ラーズ「いやいや、そんなわけないだろう。マルティナやグレイグも見た事あるんじゃないか？イレブンの鍛治さ。イレブンはよく鍛治の素材に使う銅鉱石を磨いていただろ？」

マルティナ「そ、そうね」

ラーズ「その時、何を使っていたか覚えているか？」

グレイグ「……………そうか！レモン！酸が強い物をかければ、銅の汚れを落とせるのだったな！俺も鍛治の勉強はした事あるから知っていた」

ラーズ「そういう事。やってみようぜ」

その後

ラース「ほら、さつきよりもずっとピカピカだ」

ラースは汚れが落とされて磨かれた輪っかを見せた

その輪っかは綺麗な黄銅で、輪っかの周りには何かの文字が彫られている

研究者「ほう、これは。なるほど、何に使うのかわかりました」

フアーリス「早いな、見ただけでわかるなんて」

研究者「既にこの部屋に保管されている物と同じです。古代の人達が使っていた指輪です。遥か昔、この地方にあった集落では好きな人に自分で手作りの指輪を贈る習慣があったのです。

これはその時の一つでしょう。近くで銅が多く採れた影響もあり、白銅や銅などで作られた指輪は他にも見つかっております。彫られている文字は古代文字で集落の名前が彫られてあります」

マルス「へー、じゃあ結婚指輪なんだね。母さん達と同じだ」

ルナ「じゃあ他にもいっぱいあるんだ」

研究者「そうですね。それでも普通の人には見つけられませんし、砂に埋もれてしまっているのが多いはずです。見つけられたのは凄く運がいい事だよ」

グレイグ「よかったな、マルス。宝探し、大成功だ」

マルス「うん!!」

マルティナ「それじゃあその指輪、研究者さんに渡してあげて」

マルス「えー………せっかく見つけたのに」

研究者「ふむ………。どうだね？マルス君。それ、欲しいかい？」

マルス「え？うん！だって、僕が見つけたお宝だもん！」

研究者「そうだね。それならマルス君にあげるよ。大事に持っていておくれ」

ライス「い、いいのか？大事な資料となるはずじゃあ」

研究者「先程も申しましたが、既にあの指輪はいくつか持っており

ます。文字を読みましたが、同じ集落から出たと思われる指輪もあります。もちろん黄銅のもので。なので、一つくらい誰かにあげていいんです。いい思い出になると思えますよ。あ、もちろん特別ですよ？」

マルティナ「すみません、マルスがわがままを言ってしまって」

研究者「いえいえ、あのよう喜んでくれるのはやはり嬉しいですから。宝探し、私も子どもの頃にやりました。あの時は何も見つけれませんでした。ああやって本物を見つけられるときつと心から楽しいと思います。マルス君の笑顔がそれを物語っています。あの楽しみを私は奪いたくありません」

ラース「ありがとう、感謝する」

マルス「見て、ルナ。まだ僕の親指でも入んないや」

ルナ「あはは、本当だ。ブカブカ。でも、綺麗だなく。私も見つけたかった」

マルス「帰ったら部屋に飾ろう。僕、毎日磨くんのだ」

ルナ「私もやる！」

数日後、デルカダール城下町

広場

そこではマルス達が友達と遊んでいた

男の子A「すっげー！マルス、それ本物なのかよ！」

女の子A「えー！凄ーい！」

マルス「いいでしょー！」

マルスの胸にはあの指輪が金属のチェーンで結ばれていた

男の子B「太陽に光って眩しいね。金色だよ」

ルナ「本当だー。マルス、ちよつとしまつてよ」

マルス「やだ。僕の宝物だもん」

男の子A「宝物こそ大事にとっておけよ！」

全員「アハハハハ!!」

ひな祭り

それから三週間後の昼、デルカダール城下町

グラジー

チャム「く♪」

チャムが一人で鼻歌を歌っている

マヤ「どうしたの？チャム。今日はご機嫌だね」

チャム「うん！だって明後日はひな祭りだもん！」

グリー「ひな祭り？」

テルマ「あー、もうそんな時期か」

チャム「お兄ちゃん、今年はどうする？皆でやろうよ、ひな祭り！」

テルマ「いやいや、流石にビルさん達には無理だから」

マヤ「なに？そのひな祭りって」

チャム「あれ、知らないの？ひな祭りは女の子の日で、綺麗な洋服
着て美味しい食べ物を食べる日なんだよ」

テルマ「そつか、ソルティコでの習慣だから皆さんはきつと知らない
ですよ。ひな祭りは女の子の成長を祝う日の事にして、おひなさ
まという綺麗な人形の姿のように見せてお祝いする事からそう名付
けられました。」

といつても、チャムが綺麗な洋服になった事なんてないんですけど
ね。そんなお金ありませんし」

その時

カラン

全員「いらっしやいませー！」

ルナ「チャムちゃん、いる？」

ルナが一人で入ってきた

チャム「あ！ルナちゃん！どうしたの？」

ルナ「マルス達と遊んでただけど、疲れたからこっちに来たの。
マルス達ずーっと友達と模擬戦してて大変なの」

チャム「マルス君強いもんね。チャムちゃんもだけど」

グリー「ふふ、それじゃあ喉乾いてない？なんか飲む？」

ルナ「いいの？じゃあ、リングジュース！」

グリー「はい。少し待っててね」

チャム「あ！そうだ！ルナちゃんはひな祭りって知ってる？」

ルナ「ひな祭り？なーにそれ？何のお祭り？」

チャム「女の子のお祭りなんだよ！綺麗な服着て、美味しい食べ物を食べる日なの！」

ルナ「えー！なにそれ！私やった事ない！」

チャム「明後日なんだよ！一緒にやろうよ！」

ルナ「やるー！綺麗な服も着たいし、美味しい食べ物も食べたい！あ！あのネックレスつけてみようかな」

テルマ「ど、どんどん話が大きくなっていく。チャム、俺一人じゃ出来る範囲は狭いからな。悪いが、あまり大人数を誘うなよ？」

カラン

シルビア「皆、久しぶりー！」

シルビアがルンルンとした様子でやってきた

全員「シルビアさん！」

シルビア「元気そうね！チャムちゃんとテルマちゃんに用事が、つてルナちゃんもいるじゃない！ちようどいいわ！ねえ三人とも、ひな祭りつてのがソルティコであつてね」

三人「もしかして！」

マヤ「なんていいタイミング」

シルビア「あ、あら？かなり反応が速いわね。まあいいわ、チャムちゃんとテルマちゃんは知ってると思うけど、ソルティコでひな祭りが開かれるからチャムちゃんもマルスちゃん誘って来てみない？」

ルナ「行く！行くよ、シルビアさん！待ってて、マルスを絶対連れ
てくるから！」

ルナは興奮した様子で店から出ていった

グリー「あれ？ルナちゃんは？」

グリーがリンゴジュースを持ってやってきた

チャム「そこに置いていいよ、グリーさん。この後戻ってくるから」

テルマ「いいんですか？シルビアさん。今ちようどひな祭りの話をしてたんです」

シルビア「もつちろんよ！だって今回はアタシ達がお祭りの主催者になったの。お祭りを大きくするためにね！だから、いろんな子ども達に来てほしいの。その時に真っ先に思い浮かんだのよ」

テルマ「ありがとうございます」

数分後

ルナ「連れてきた！」

マルス「ふええく……」

ルナの後ろでは無理矢理連れてこられたのか目を回したマルスがいた

グリー「ああ、大変。ほらマルス君、座って落ち着いて」

マルス「クラクラする……。なんなんだよ、ルナ」

シルビアがマルスにもひな祭りの事を伝えた

マルス「ふーん、でもそれならルナだけじゃないの？僕、男だよ？」

ルナ「確かに！なんで？」

シルビア「うふふ、それはね、おひなさまの王子様役よ！」

二人「王子様!?!」

テルマ「元々は人形のお姫様と王子様がいるんだ。二人は幸せな夫婦となったんだ。そこに倣って幸せな事があるようになって同じ格好をさせる人が増えたんだよ」

マルス「そうなんだ。じゃあルナの王子様だね」

ルナ「仕方なくだけどね」

シルビア「やだ、テルマちゃんよく知ってるじゃない！」

テルマ「チャムに喜んでもらうために色々してみましたから。二人だ
けでもこの日は楽しくって思ってる」

チャム「ありがとう、お兄ちゃん！」

シルビア「素敵ね、テルマちゃん。もちろんあなたも王子様役よ。
明日、楽しみにしてるわね！」

ひな祭り2

二日後、ソルティコの街

ジエーゴの屋敷 庭

そこには大きなひな壇が飾られており、観光客達が大勢集まってる

ルナ「凄ーい！これがおひなさまなの？」

チャム「私もこんな大きいの初めて見たー」

テルマ「流石シルビアさんだ。庭もそうだけど、こんな大きなひな壇を用意出来るなんて」

マルス「ふーん、全部人形なんだ。皆綺麗な服着てるね」

テルマ「一旦シルビアさんの家に入ろうか。シルビアさんが待つてるだろうからさ」

チャム「うん！楽しみ！」

ガチャ

テルマ「すみませーん、シルビアさんに呼ばれて来たのですが」

セザール「はい、坊っちゃんからお話は聞いております。テルマ様にチャム様、マルス様にルナ様でございますね？」

マルス「うん、合ってるよ。シルビアさんは？」

セザール「坊っちゃんはこの階段を登って右手にございますお部屋でお待ちしているそうです。ご案内いたします」

テルマ「ありがとうございます」

チャム「立派なお屋敷。確かここの街の偉い人の家だよね」

セザール「はい、この街の領主であるジエーゴ様のお屋敷です」

コンコン

セザール「坊っちゃん、テルマ様達がお見えになりました」

ガチャ

シルビア「ありがとうございます、セザール。皆、来てくれてありがとうございます。さっ、入って〜」

ルナ「お邪魔します。あ！」

テルマ達が部屋に入ると、中にはたくさん綺麗な服が飾られていた

チャム「わー！綺麗な洋服だ！可愛いのもある！」

ルナ「私このピンクのがいい！」

マルス「あ、この黒いのか青いのは僕達のかな」

セザール「坊っちゃま、お飲み物とかは必要ですか？」

シルビア「ううん、いらないわ。もし汚れちゃったりしたら大変だから」

セザール「承りました。それでは」

シルビア「さーて、皆！いろんな服を用意したわ！本来ならこのはかまっというのを着るんだけど、色々着て楽しんじゃいましょう！はかまも可愛いのを用意したし、ドレスやチュールスカートもあるわ！ほら、花柄とかピンクのやつとか」

シルビアは楽しそうに服を見せている

チャム「可愛いー！大きなお花が付いてる！」

ルナ「このはかまってどうやって着るの？」

シルビア「これはね、帯っていう長い紐がついてるからそれを結んで着るのよ」

女性達が騒いでいる間

マルス「楽しそうだね、あっち」

テルマ「女の子はああいうのは好きだからな。ま、俺達も先に着たい服決めていようか」

マルス「うん。僕達にもいろいろ用意してくれてあるもんね。あ！タキシードもある」

テルマ「え!?!マルス君、タキシード知ってるの？」

マルス「うん。だって前に着た事あるから」

テルマ「うわ、流石王族。俺は着た事ないよ」

マルス「そうなの？でも、僕もはかま？っていうのは着た事ないや」

テルマ「俺もだよ。こんな綺麗な服着る経験なかったからさ。全部初体験だ」

マルス「じゃあ楽しみだね。全部初めてなんだ」

テルマ「はは、そうだね。楽しみになると思うよ」

数分後

シルビア「ごめんなさい、テルマちゃん、マルスちゃん！ついはいじやって放置しちゃったわ！」

テルマ「いえ、大丈夫ですよ。あのシルビアさん、はかまってこれで着方合ってますか？」

テルマは青と灰色のはかまを着ていた

シルビア「ちよつと後ろ失礼するわね…………… オツケーよ、テルマちゃん！とっても似合ってるわ！」

テルマ「そ、そうですか？ありがとうございます」

マルス「シルビアさん、僕のタキシードはどう？」

マルスはタキシードを着ているが、上に着るはずの黒いシャツがなく下の白いワイシャツだけになっている

シルビア「あら？マルスちゃん、上着はどうしたの？」

マルス「え？こつちの方がカッコいいかなって。動きやすいし」

シルビア「うーん……まあキツチリ着る必要はないしそれでいいわ。でも蝶ネクタイだけはしておきましょう」

シルビアはマルスの首元に黒い蝶ネクタイを結んだ

マルス「はい」

テルマ「チャム達はどうしましたか？」

シルビア「チャムちゃん達はお屋敷から出ていっちゃったわ。庭にあるひな壇の所で待ってて言ってあるけど大丈夫かしら。セザールが見てくれると思うけど」

マルス「じゃあ僕達も早く行こう。ルナの姿見てみたいし」

テルマ「そうだな。行きましょう、シルビアさん」

庭

シルビア「あ、きつとあそこよ。少し人ばかりになってるわ」

ひな壇の前には旅人達や観光客達が集まって、何か話している

テルマ「おーい、チャムー、ルナちゃん」

チャム「あ！お兄ちゃん！」

ルナ「シルビアさんにマルスも！着替え終わったの？」

二人が人混みの中から出てきた

チャムはピンクの花柄がたくさん描かれている可愛らしいはかまを、ルナは腰に大きなオレンジの花がついているピンクのドレスを着ていた

マルス「わ、チャムちゃんのやつ、お花がいっぱいある」

チャム「うん！綺麗でしょ？」

ルナ「あ！テルマさん、はかま着たんだ。カッコイイね！」

テルマ「そう？ありがとう、ルナちゃん。その花、結構大きいね。邪魔じゃない？」

ルナ「そんな事ないよー。これも大事なアクセント！」

テルマ「そ、そっか」

シルビア「それじゃあ皆も綺麗な姿になった事だしー、ひな壇の前で色々食べましょう。ごちそうも用意したのよ」

セザールが屋敷から色々な料理を運んできた

全員「わく!!」

シルビア「折角来てくれた皆も一緒に食べましょう！」

シルビアは見ていた旅人達にも声をかけていく

チャム「凄い!!お兄ちゃん、こんなにたくさん料理、ひな祭りです初めて！」

テルマ「ま、前までと比べるなよ、チャム。俺の作るやつとじゃ比べようがないだろ」

ルナ「えへへ、なんだかお城みたいになってきたね」

マルス「そうだね。たくさん人がいて、皆楽しそう」

シルビア「さく、パーティーの始まりよ！」

その日は夕方過ぎまで、ジエーゴの屋敷の庭では楽しそうな声がソルテイコの街に響いていた

舎弟

それから四日後、デルカダール城下町

裏通り

そこでは数人の男達が金髪をした一人の若い男性を囲んでいた

男性A「お前、近くで見た事ねえ顔だな。旅人か？」

青年「別になんだつて構わねえだろ。俺はある人を探してんだ、知らねえならどけ」

男性B「こいつ、若いからつて調子に乗るなよ！」

青年「(おいおい、デルカダール王国つて治安いいんじゃないのかよ。ま、どこの国にもこんなんはいるって事かよ)」

互いに険悪な雰囲気となり、今にも殴りあい発展しそうになっている

その時

おじさん「あ！あの人達ですよ！」

ガザル「教えてくれてありがとな。おい、お前ら！そんな一人によつてたかつてんじゃねえよ！」

ガザルが青年が連れていかれる所を見ていたおじさんに連れてこられた

男性C「くっ！兵士が来やがった！逃げるぞ！」

男性達はすぐさま走って逃げていった

ガザル「つたくよく、すーぐこういう奴らは湧くんだから。大丈夫だったか？何もされてねえみてえだが」

青年「まあ大丈夫です。俺一人でもあんなやつら倒せましたよ」

ガザル「そんな事を心配したわけじゃねえよ。この街で無駄に争いとか起こすなって事だ」

青年「それはまあ、悪かったです。あんたって兵士なんだよな？その鎧」

ガザル「ん？そうだが？」

ソール「俺、ソールです。この国に俺の兄貴が兵士としてやっているはずなんで探しに来たんす」

ガザル「お前の兄貴？兵士に？そいつの名前は？」

ソール「ベグル兄貴ツス！」

ガザル「……………ハア!!？」

ソール「あれ？知らねえっすか？」

ガザル「い、いやいや、知ってる知ってる。俺の仲間だ」

ソール「やっぱり！あの、城に行ってもいいっすか？」

ガザル「あ、ああ。構わねえぜ」

ソール「よっしゃ！兄貴に久しぶりに会えるっす！デルカダール王国まで来た甲斐があった！」

ガザル「マ、マジかよ、あいつ。兄貴とか呼んでるって事はつまり、あれだろ。レッドボーンとかいう暴走族の……………つまり、こいつも見た目によらずに」

その後、デルカダール城

訓練場

ソール「おー!!すっげえ、すっげえ!マジの城っすね!!」

ソールは興奮した様子で周りをキョロキョロと見渡している

ガザル「おーい、ベグルー!お前の子分が来たぞー」

ガザルは入り口から兵士達に声をかけた

ベグル「は?俺の子分?」

バン「ベグル、いつの間に師匠になったんだよ」

ダバン「バン、それはお前とラーズ將軍みたいな師弟関係の場合の呼び方だ。子分って事はベグルは親分みたいな立ち位置なはずだぞ」

ギバル「ベグルの子分って、なんだ?それ?どんな凶悪なやつが」

マーズ「お?もしかしてガザルの後ろでキョロキョロしてる」

ソール「あー!!やっと見つけたっす!!兄貴ー!!」

ソールはベグルの姿を見るやいなや上から訓練場まで飛び降りた

全員「ハア!?!」

ドスン!

ソール「兄貴!! 久しぶりっす!! 何年振りですかね! 俺の事、覚えてますか!?!」

ベグル「お、おま、ソール!!? なんでここに!?!」

ロベルト「今の普通に凄えな、結構高さあるんだぞ」

ソール「ふおおお! 兄貴の鎧姿、似合うっすよー! やっぱ兄貴は何着てても俺達の兄貴っすよー! この大剣も兄貴にピッタリっす! とうか、かなりマッチョになりましたね! いやー、俺嬉しいっす!」

ソールはベグルの周りをウロチョロと周り、ペラペラと喋り続けている

ベグル「だー!! てめえは何年経つてもうるせえな! さっさと離れやがれ!」

ソール「すみません!!」

全員「……………」

全員そのやり取りに呆然としている

ガザル「あー、ベグル。ソールだっけか? そいつの兄貴ってーと、

やっぱりレッドボーンの時?」

ベグル「まあ……… そういう」

ソール「おお!! 皆さんもレッドボーンをご存知で!?!という事は、兄貴の伝説もやはりご存知!?!」

ソールはベグルの言葉を遮った

バン「ベグルの伝説? いや、それは知らねえな」

ソール「なんだと!?!それはもったいない!!ならー! 兄貴の一番子分の俺、ソールが1から丁寧にベグル兄貴の伝説を教えてさしあげ」

ガツン!

ベグル「余計な事言わんでいい」

ベグルがソールの頭を思いっきり殴り、ソール話を止めさせた

ソール「は……… はい。すみません、兄貴」

ソールの頭に大きなたんこぶが出来た

ギバ「なんだよ、面白そうだったのになんで止めるんだよ」

ベグル「面白くもなんともねえよ! 勝手にこいつらが伝説だのなん

だの騒いでただけだ」

ガザル「悪尽のベグル……………ププっ、そ、それとどっちが恥ずかしい？」

ソール「おお!?!兄貴の異名はご存知なんですね!その異名がついた由来こそ、兄貴の伝説の!」

ガツン!

ベグル「いいから黙れ!!」

ベグルは再びソールの頭を思いっきり殴り、黙らせた

ソール「な、なんでさつきから話させてくれないんっすか!!兄貴のカッコいいお話なんですよ!?!」

ソールは頭に出来た二つの大きなたんこぶを押さえながらベグルを見た

ベグル「もうそんなん昔の話だ、ボケ!!いつまでそんなもんにするがってやがる!」

ソール「!!?」

ソールはベグルのその言葉に口をつぐませた

ロベルト「お、おい、ベグル。ちよつと今のはあまりいい言い方で

はないんじゃないか？」

ベグル「うっせえ。ソール、そんな話をしに来たんならダーハル―ネに帰れ」

ソール「……………す、すみませんっした、兄貴。ちよつと興奮して夢を見ていたみたいです。俺、ダーハル―ネに帰ります。兄貴、兵士のお仕事頑張ってくださいね！」

ソールはそのまま階段を走っていった

ベグル「……………おい、ソール！」

ソール「！」

ベグル「お前が無事でよかった。お前がいるって事は、あいつらもまだいるんだよな？」

ソール「ヨシユアもドニもゼロも元気ですよ！俺達、今新生レツドボーンとしてダーハル―ネの街を守ってるんっす！」

ベグル「そうか……………。それなら安心した！無茶はすんなよ！」

ソール「もちろんっすよ！」

ソールはそのまま走って訓練場から去っていった

バン「ソールか、かなり懐かれてんだな、ベグル」

ギバ「子分とかいうからどんな関係なのかと思えば、普通だったな。バンとお前を見てるみたいだったぜ」

ベグル「は？ソールを馬鹿にすんじゃないやねえよ。こんなのよりよっぽど賢いやつだわ」

バン「ハア!?俺が馬鹿だったか!」

ダバン「何も間違っちゃいねえだろ」

ガザル「あーあ、知りたかったなー、ベグルの面白やらかし伝説」

ベグル「何か勝手に変な名前付けられてるし」

マーズ「だが、少し妙だな。あいつ、本当に話に來ただけなのか？」

ロベルト「俺もそこが気になる。そのためにわざわざ何年も会っていないベグルに会いに來たのか?というか、ベグルがここにいるとど

うして知っていた？」

ベグル「それは俺が兵士になる前にあいっただけに話したからな。デルカダール王国で兵士になろうと思うってな。だが……… マーズとロベルトの言う通りだ。あいっ、なんで今更になって会いに来た？」

バン「さつきベグルの昔の話にすがってんなって言葉の後に急にしおらしくなったよな。やっぱ何かあったんじゃね？それできつとベグルを頼りにきたんだって」

ギバ「となると、ベグルのあの言葉でベグルはもう頼ってはいけな
いって思ったのかもしれないな」

ベグル「……… チツ！どいつもこいつも面倒事持ってきてや
がって！おい、兵士長！」

バン「わかってるって。仕事は俺がなんとかしておくからよ！行っ
てこい！」

ベグル「ああ、頼んだ」

ベグルは訓練場から出ていった

侵略

その頃、ダーハル―ネの街　　ステージ上

男性達「ギャハハハ!!」

数人の派手な服装をした男達が三人の男性を囲んで笑い者になっている

ドニ「うう……………」

ヨシユア「ドニ!ドニ!!」

ゼロ「くそ……………腕が……………」

三人はソールと同じ新生レッドボーンであり、街の防衛団として行動している人達である

しかし、その三人は既に血だらけになっており、ドニは顔面から鼻血が止まらず、口も切れ歯も折られている。

ヨシユアもなんとか動いているものの、至る所に打撲後や切り傷がついている。ゼロは片腕が折られ、赤く腫れてきている

ヨシユア「くそ!いつもいつも街を荒らしやがって!俺達が何をしたってんだよ!!」

???「だってよー、お前ら自分達がなんて名乗ってるか知ってるのか?レッドボーン。ここいらでは有名だった暴走族の名前だぜ?そんな

なやつらが街を守る？ギャハハハ!!さいつこうに馬鹿げてるぜ！」

ゼロ「俺達は確かにレッドボーンを名乗っている！でも！もう暴走族のやつらはいない！生まれ変わったんだ！今までとは違うんだよ!!」

???「はあ？今までとは違う？どこがだよ。その証拠に見ろ！お前達がこんなにも無様にやられててもだーれも助けなんて来ない。寧ろ、邪魔者がいなくなつて清々されてんじやねえのか？」

ヨシユア「くっ……………」

実際にこんなに目立つステージ上でも、通りかかる人や商人達は遠巻きに見ているだけや見て見ぬ振りをしている人だらけだ

ゼロ「お前達のようなやつと関わりたくないからだろうが！ブラツクロア、ヴァルツ！」

男達のリーダー格ヴァルツ率いるグループ、ブラツクロアは様々な街を荒らして回っているグループであり、最近ダーハル―ネの街が標的にされていた。その下っ端がダーハル―ネの商人に絡んでいた所をソール達が助けたのが発端だった

ヴァルツ「へっ、そうかよ。まあいい、てめえらのような雑魚しかいねえ街は俺達が拠点にするにはちょうどいい。俺達がこの街を染めてやるよ、真っ黒にな！」

ヨシユア「そんな事黙ってさせると思ってたのかよ！俺達はベグル
兄貴の子分！簡単に引き下がるわけにはいかねえ!!」

ヴァルツ「ああ、あの異例のリーダーを務めたっていうやつね。あ
の頃からレッドボーンも変わったな。こんな弱っちくなりやがって」

ソール「ドニ！ヨシユア！ゼロ！」

騒ぎを聞きつけたソールがヴァルツの後ろから走ってきた

ゼロ「ソール！ベグルさんは!!」

ソール「……………元気にしてた。でも！もう兄貴は戻ってこな
い。やっぱり俺達だけでこいつらを」

ヴァルツ「おー、誰かと思えばソール君じゃないか。どこに行つて
たんだ？その間にお仲間達で遊んでただけど、やっぱり気合いが足
りねえんだ。お前くらい打たれ強い方が楽しみがあるのになあ
？」

ソール「てめえ!!俺の仲間達になんて事を!!」

ソールは勢いをつけてヴァルツの顔に殴りかかる

ヴァルツ「おー、怖え、怖え。影の狂犬の名は伊達じゃないねえ」

ヴァルツは横に体を捻って躲した

ソール「黙れ!!」

ソールはそのまま着地した瞬間後ろに跳ね返り、ヴァルツの顔に足を振り上げる

パシッ!

ヴァルツは足を掴んだ

ソール「くっ!」

ヴァルツ「ふー、やっぱお前も俺には敵わねえよなあ。どうだ?お前くらいの強さなら仲間に入れてやってもいいぜ?多少優遇させてやるよ」

ソール「そんなんに乗ると思うな!!俺はベグル兄貴の一番子分、ソールだ!それ以外の下につくかよ!」

ソールは掴まれた状態から身体を捻り、ヴァルツの腹に回転しながら拳を入れる

ボゴオ!

ヴァルツ「グホア!!ゲホッ!!ゲホッ!!」

ヴァルツもその衝撃にソールの足を離す

ソール「いつまでもてめえが上だと思うなよ！」

ソールは着地し、腹を押さえているヴァルツに殴りかかる

しかし

ガシツ！

ソール「くっ!!」

近くにいたヴァルツの仲間達に捕まえられ、組み伏せられる

ソール「離しやがれ!!」

男性D「こ、こいつ！なんつー力だよ！おい！もつと人来い！足も押さえろ！」

ヨシユア「ソール!!」

ドニ「ぐ……… ソール、助けに………」

ゼロ「無理に動くな、ドニ。お前は出血がやべえから下手に動くと危ない。俺とヨシユアでなんとかする」

ヨシユア「ソールを離せ!!」

ヨシユアはソールを押しえている男性達に蹴りかかる

男性E「痛ってえ！こいつ!!」

バキイツ！

ヨシユア「ぐうっ！」

ゼロ「片腕でも！」

ゼロも殴りかかる

男性F「邪魔してくんな、雑魚が！」

ゼロは避けられると、折れた腕めがけて相手に蹴られる

ゼロ「ギャアアア!!」

ゼロは腕を押しえて倒れ込んだ

ソール「ゼロ!!」

ヴアルツ「このクソ犬が。ちよつと優しくしてやれば反抗して噛み付いてきやがって。てめえらは!!俺達に支配されるんだよ!!」

ヴアルツは動けないソールに向かってどんどん蹴りを入れたり、顔を殴ったりしていく

また、他の男達もヨシユアやゼロを痛めつけていく

その近くでは

ベグル「あいつら……………。くそ、助けてやりてえけど、鎧着たまま来ちまった。それに俺はもう……………レッドボーンじゃ……………」

ソール「ガハツ!!ゲホツ!!」

ヨシユア「ガアアアア!!」

ゼロ「ゲフ……………ゴフ……………」

ドニ「痛えー!!痛えよー!」

ソール達の叫び声がベグルに届いてくる

ベグル「くっ!もう少し耐えてろ、お前ら!俺が必ず!!」

ベグルはある場所に走っていった

ステージ上

ヴァルツ「ハア……………ハア……………。これでわかったか?てめえらは俺達に使われるしか道はねえ」

ゼロ「うう……………ガッ！ゲホ！」

ヨシユア「ハア……………うぐっ！……………うう」

ソール「ゼエ……………くそ……………こんな大多数で卑怯なやつに」

ソールはかろうじて立っているが、ゼロとヨシユアは既にもう動けないのか血を流しながら倒れている

ヴァルツ「もう一度聞こう、ソール君。俺達の仲間になるよな？」

ペツ！

ヴァルツの顔に血混じりの唾がかかった

ソール「俺の答えが……………変わるわけねえだろ。カス」

ソールはヴァルツを射抜くような鋭い目つきで睨んでいる

ヴァルツ「……………」

ヨシユア「へ……………よく……………言った、ソール……………お前らしい」

ゼロ「そう……………だよな……………こんなものつくくらいなら……………俺達は死んだ方がマシだ」

ドニ「うん、うん。俺、こんなやつら大っ嫌いだ」

ヴァルツ「よくわかった。なら、お望み通り死ねええ!!」

ヴァルツは大きく足を振りかぶり、ソールに蹴りかかる

ソール「すみませんっす、兄貴。俺……………仲間も街も、何にも守れなかったっす」

バキイツ!!

空を舞う程の力強い蹴りが直撃する

ソール「!？」

ヴァルツ「グハッ!!」

ヴァルツに

ゴロゴロゴロ!

ヴァルツは空を高く飛び、地面を転がった

ベグル「よくも俺の可愛い子分達を可愛がってくれたな。次はてめえらの番だぜ」

ベグルが鎧姿ではなく突服のようなものを着ており、背中には大きくレッドボーンと書かれている

その髪もいつもの黒髪ではなく、逆立った赤髪になっている

ソール「兄貴!!!」

男性D「こ、こいつが！あの異例のリーダー、悪尽のベグル」

ベグル「てめえら、覚悟しろ」

男性達「ヒイツ!!」

ベグルは完全に怒っており、その顔は普段の凶悪顔が更に鋭さや凄みを増しており、相手に恐怖の感情を植えつける

ヴァルツ「て、てめえ!!この俺に喧嘩売るなんざいい度胸だ！やっちまえ！」

男性達「は、はい！」

「周囲にいる男性達が一齐にベグルに向かう

ベグル「チツ！面倒くせえ。おい、ソール！」

ソール「はい！」

ベグル「まだ動けるな？俺の背中、任せたぞ」

ソール「!!はいっす!!俺にお任せください!」

男性E「うおおお!」

ベグル「ふん!」

ベキ!

男性E「グハツ!」ドサ

男性G「後ろいただき!」

ベグルの後ろから棒を持った男がベグルに振りかぶる

ソール「させつかよ!」

ゲシツ!

ソールが横から飛び蹴りを喰らわせる

男性G「フギヤツ!!」

その後

男性達「うう………」

何人もの男性達が全員倒れており、ベグルとソールはヴァルツに向かっている

ヴァルツ「う、嘘だろ…………。あんなにいたのに」

ベグルはヴァルツの首元を掴んだ

ガシ

ヴァルツ「ヒツ…………」

ベグル「てめえだけは生きてるのを後悔するくらいぶん殴ってやる」

バキイツ!

バキイツ!

ヴァルツ「ヘブツ!ゲフツ!ガハツ!ゆ、許し、ギヤアツ!」

ベグル「嫌だ」

ベグルは黙々とヴァルツを殴り続ける

ゼロ「ちよ、ベグルさん、完全にキレてる」

ヨシユア「まずいって。これ以上は本当に」

ドニ「兄貴がこれじゃあ人殺しになっちゃう！ソール！」

ソール「兄貴!!もうやめてあげてほしいっす！」

ベグル「ああ？なんでだよ、俺は止めねえ。てめえらの分まできつちりこいつに」

ソール「もう充分です！兄貴もそれ以上やるとお仕事が！」

ベグル「知るか。止めてえならお前らが力づくで止めてみせろ」

ベグルは再びヴァルツを殴り始める

ドニ「ちよっ、ちよつと！止めないと！」

ヨシユア「力づくだつてよ！動けるか？皆」

ゼロ「歩くのがやつとだよ。一発しか殴れねえ」

ソール「…………… 兄貴、何を考えて。よし、ドニ、ヨシユア、ゼロ。ベグル兄貴の目を覚まさせるぞ！俺達の一撃で！」

三人「おう！」

ベグル「あ？」

ベグルがソール達の方を向くと

ソール「今だ、お前ら！」

四人「うおおおお！」

四人が一斉にベグルの顔面にパンチを入れた

バキイツ！

ベグル「ぶっ!!」

ベグルは殴り飛ばされ、ヴァルツから離れた

ゼロ「ハア……ハア」

ドニ「兄貴を殴っちゃった」

ヨシユア「ベグルさん、すみません！」

ベグル「痛つてえ。チツ！こんな事してくる奴らなんかもう知るか

よ」

ベグルはそのまま去っていった

ソール「兄貴……………」

その時

神父「だ、大丈夫でしたか？こんな怖い人達によく立ち向かってくれました。治療いたしますよ」

女性「わ、私も……………手伝います。街を守ってください、ありがとうございます」

ソール達の周りに数人が感謝を述べながらやってきた

ソール「あ、ありがとうございます。まず、こいつらをお願いします」

その頃、裏通り

ベグル「……………何の用だよ。隠れてねえで出てこいよ」

ベグルが建物の影に向かって話すと

店長「あ、バレてたか。いやー、止めてくれて助かったぜ、ベグル。本当なら俺が行くはずだったんだけど、エプロンとか着替えなきやだし剣も持ってなかったから準備してたらベグルが来てくれたってわけ」

シンジがいつものエプロンの姿ではなく、動きやすい服装になっており手には剣を持って現れた

ベグル「別に。この街は俺の故郷だからな。あんなわけわからん奴らに好き勝手されたくなかったただけだ」

店長「本当はそんな事言っただけの子分達が心配だったんだろ？昔からお前にくつついてたのを思い出したぜ。兄貴、兄貴って慕われてんだな」

シンジは少しニヤニヤしている

ベグル「本当に…………… てめえはムカつくな!! ラース將軍のダチじゃなかったらその命何個あっても足りねえくらいだからな!!」

店長「お、おお。怖え、怖え。ま、要するに理由はどうあれ助けてくれてサンキューって事だ。久しぶりにその姿見たけどな、髪も。とりあえず軽く濁してラース達に伝えといてやるよ、街を救ってくれて助かったってな」

ベグル「ああ、それで頼んだ。俺が暴走族に一時的に戻った事は言わなくていいからな」

店長「おう。さっきの演技も言わなくていいんだろ？」

ベグル「!? チツ！本当にてめえは嫌いだ！」

店長「カツコいい兄貴だな、あんな人前で悪そうなやつを退治しているように見せたんだからよ。あれで少しでも新生レツドボンとやらが認められるといいな」

ベグル「もういい、喋るな」

店長「へいへい」

数日後、デルカダール城

訓練場

ソール「兄貴ー！また来たつすよー！」

ドニ「おー！凄い！ここが兄貴の働く場所！」

ヨシユア「うわー！兄貴の鎧姿だ！カッケェ!!」

ゼロ「ああ、もうこの後の展開が予想できる。すみません、ベグルさん。俺にはこいつらを止められませんでした」

バン「おー、ソールか！今日は他の仲間達も連れてきたんだな。遊んでけよー」

ギバ「また特訓するかー？」

ダバン「ここは遊び場じゃねえんだが」

ロベルト「はは、これはまた……… ベグルが」

ガザル「俺、しーらね」

マーズ「お、おい、ベグル。少し落ち着け、な？だからその大剣を」

ベグル「この馬鹿野郎共がー！！次来たら斬り刻むって言っただろうがー！！」

四人「ヒイイイ！！」

ベグルが鬼の表情でソール達を追いかけ回していた

ベロニカの魔法教室

次の日、デルカダール城　玉座の間

ベロニカが一人でやってきていた

ベロニカ「突然ごめんなさい。もしかして忙しかった？」

マルティナ「ううん、そんな事ないわよ。どうしたの？ベロニカ。一人なんて珍しいわね」

ベロニカ「お願い事というか、助っ人を頼みに来たのよ」

グレイグ「助っ人？何か困っている事があるのか？」

ベロニカ「私ね、時々メダル女学園で魔法の先生やってるのよ。マルティナさんには前に話した事あったわよね」

マルティナ「ああ、そうだったわね」

ラース「へへ、ベロニカが先生か。まあ魔法に詳しいし、いいんじゃないか？」

ベロニカ「その講義がね、私は皆に魔法を教えてあげたいから参加

自由にしてるのよ。他の人達にはしっかりメンバーを決めなさいって言われてるんだけど、学校に行けるのは不定期だからこうした方が効率がいいのよ。結構人気なんだから！

ただ、そのせいで人数が前回からかなり多くなっちゃってね。30人くらいいるのよ。一人だとしてもじゃないけど見きれなくて」

グレイグ「それは確かに大変だな。魔法の暴発も慣れていないと頻繁に起こると聞く。そんなに人数がいると危ないな」

ベロニカ「そうなの。それで、明日講義があるんだけどその時の助っ人にラース、私と一緒に指導してくれない？」

ラース「やつぱり俺か。魔法関連だと俺かじいさんに頼るよな、ベロニカ」

ベロニカ「だってあんただって魔法に詳しいし器用だし、基本もしっかりしてるじゃない。おじいちゃんに比べればまだまだだけど、おじいちゃんはもう歳だし、イレブンの補佐で忙しいと思うのよ。まあラースも………忙しいのはわかるけど！お願い！」

マルティナ「ラース、行ってあげて。仕事はなんとかしておくから。ベロニカがかわいそうだよ」

ラース「べ、別に断ろうとはしてなかったぞ。いいぞ、ベロニカ。た

だ、俺は初めましてになるが大丈夫なのか？」

ベロニカ「ありがとう、ラース。そこは問題ないわ。明日の内容は至って単純よ。数人で一グループになってもらって別々に魔法を調べて勉強してもらおうの。その後で実際に調べた魔法を使ってみようって風に考えてるの」

ラース「なるほど。メラの式や構造を調べて、その後で実際に使おうって感じか。魔法がわからない人や慣れてない人には効果的だな。ただ、もう使えるやつだっているんじゃないか？」

ベロニカ「その人達も学べるように多少変化は入れるつもりよ。まあ詳しい事は明日になったら話すわ。それじゃあ明日、メダル女学園に来てよね！」

ラース「おー」

次の日、メダル女学園

ラースが着くと、ベロニカが校門で待っていた

ラース「おはよう、ベロニカ。なんか必要かと思って初級魔法と中級魔法の魔導書持ってきたが、いらなかったか？」

ベロニカ「おはよう、ラース。中級魔法の魔導書はありがたいわね。借りるかもしれないわ」

ラース「了解。えっと、場所はどこなんだ？」

ベロニカ「最初は教室でやるわ。その後外に出て実践って流れね。教室に案内するわ、こっちよ」

教室

ドアの向こう側からは既に生徒達が集まっているのか、ガヤガヤとたくさんの話し声が聞こえてくる

ラース「結構周りより広い教室なんだな」

ベロニカ「私が先生達に色々言つてここを使つてもらえるようにしたの。さ、ラース。入るわよ」

ガラガラ

ベロニカ「はい皆ー。魔法教室の時間よ。席についてー」

ベロニカがそう声をかけると、立って話していた生徒達もどンドン席に座っていった

しかし、ベロニカの言っていた通り生徒が多く、座れずに後ろで立っている生徒達もいる

生徒A「ベロニカ先生、隣の方はどなたですか？」

ベロニカ「この人は今日の助っ人よ。私一人だとこの人数は大変だから呼んだの。ラーズ、適当に紹介よろしく」

ラーズ「適当って……。ゴホン、初めましてだな。俺の名前はラーズだ。今はデルカダール王国でマルティナ王女の騎士をやっている。魔法は色々使えるから、何か困っていたら気軽に声かけてくれて構わないぞ。よろしく！」

生徒達「よろしくお願いします」

ベロニカ「ラーズは私より魔法の扱いはうまいのよ。結構器用だし、魔法式や構造にも詳しいの」

生徒B「ベロニカ先生の彼氏だったりしますか!?!」

ベロニカ「ハア!? 違うわよ!!」

ラーズ「残念だが、俺にはマルティナっていう妻がいるんでな。ベロニカとそういう関係ってわけじゃないからな」

ベロニカ「変な事聞かれる前にとっとと始めるわよ! 今日5人で一つのグループになってもらうわ。自由でいいから、まずは5人で集まってちょうだい」

ベロニカがそう言うのと、生徒達はまた賑やかに話しながらグループを作っていく

しばらくすると6グループが出来上がった

ベロニカ「出来たかしら？もし人数が足りなくても大丈夫だからね。まずはこれを貸すわ」

ベロニカは図書室から借りてきた魔導書を一グループに一冊置いていく

ベロニカ「じゃあ左から順番に一、二、三、四、五、六番ね。番号ごとに調べる魔法を決めるから、言われた魔法をグループの人達と協力して調べてみて。」

それじゃあ一番はメラ、二番はギラ、三番はヒヤド、四番はイオ、五番はバギ、六番はジバリア。今言った魔法の初級呪文の構造と式を調べてちょうだい。もし余力があるなら中級呪文もやっていいわよ。わからない事があつたら私かラースにいつでも聞いてね。それじゃあ始め！」

生徒達はそれぞれ本を開いて調べ始めた

ラース「ふーん、結構慣れてるんだな、ベロニカ。様になってんぞ」

ベロニカ「当たり前じゃない。先生は私の憧れでもあったんだから。それじゃあラース、四、五、六番の方をよろしく。私は一、二、三番を見てるわ」

ラーズ「了解」

ラーズが奥のグループに歩いていくと

生徒C「あ！えっと……… ラーズ先生！」

ラーズ「せ、先生か。慣れないな。なんだ？」

生徒C「バギに使われる文字が本にないんです」

ラーズ「ん？なんでだ？」

生徒C「さ、さあ？」

生徒J「ラーズ先生はご存知ですか？」

ラーズ「知ってるぞ。バギは使えるからな。でも、調べた方が君達のためになる。本、借りるぞ」

生徒C「はい、どうぞ」

ラーズは借りた魔導書を見た

ラーズ「ああ、そうか。これ、魔法使いの初級呪文用か。バギはな、少し特殊な魔法の一つで魔法使いでも覚えられる人と覚えられない人がハッキリしてるんだ。

そのせいか区分は初級呪文じゃないんだ。これ、俺が持ってきた中級呪文の魔導書だ。こつちには載ってるはずだから、こつちを貸すよ」

ラーズは持ってきた魔導書を渡した

生徒C「そうなんです！ありがとうございます！」

ラーズ「ああ、頑張れ。おーい、ベロニカ」

ベロニカ「なに？」

ラーズ「これ、魔法使いの初級呪文だとバギは載ってないぞ」

ベロニカ「あ！うっかりしてたわ。ありがとう、ラーズ」

ラーズ「後で返ってきてくれ。それじゃあ」

ベロニカの魔法教室2

その後

ベロニカ「皆、それぞれの魔法の式、構造わかったかしら？」

生徒達「はい！」

ベロニカ「それじゃあこれから外に出て、実際に魔法を使ってみるわよ！」

メダチャット地方

湖のある広い場所にやってきた

ベロニカ「ここなら問題ないわね。それじゃあさっきのグループで調べた魔法を使ってもらおうわ。グループの中の一人だけでいいからね。各グループの代表を決めて」

生徒達はガヤガヤと話し合っている

ラース「念のため周辺に聖水をまいてこようか。ちよつと任せたぞ」

ラースは近くの森や山を警戒していた

ベロニカ「そうね、安全にしておいた方がいいもんね。頼んだわ、ラース」

ラーズは小走りに離れていった

ベロニカ「さて……………ん？」

ベロニカの視界にあるグループの人達が入りこんだ

4人の生徒が一人の気弱そうな生徒を薄笑いするように見ていた。その気弱そうな生徒は困ったように笑っている

ベロニカ「(なにかしら、あのグループ。なんかいい感じしないわね。何か話してるみたいだし、少し聞いてみようかしら)」

ベロニカはそのグループに近づいていく。すると少し会話が聞こえてきた

生徒D「あんたがやってよ。お母様、お城の学者さんなんですよ？」

生徒E「そうじゃん！学者の娘なら魔法くらい使えるでしょ」

生徒F「私達、面倒なんだよねー」

気弱そうな生徒「う、うん。いいよ。でも、構造や式は皆もちろんと理解した方が」

生徒G「は？口答えしないでくれる？いいのよ、ちゃんとやってるんだから」

気弱そうな生徒「でも…… さっきの構造とか式も全部私が」

生徒D「だーかーらー、あんたは魔法が使える以外取り柄ないんだから私達の言う通りになささい！」

ベロニカ「なによ、こいつら。一人に全部任せっきりで何もしていないなんて最悪じゃない！この子も何言いなりになってんのよ」

ベロニカはグループに話しかけようとする

生徒B「ベロニカ先生、ちょっと質問が」

ベロニカ「え？あ、うん。いいわよ（後でちょっと声かけてみましょう）」

しばらくして、各グループから一人ずつ代表者が前に出てきた

ベロニカ「それじゃあ一番グループはメラだったわね。出来るかしら？失敗しても大丈夫だからね」

生徒A「は、はい！〜」

ゆっくりと呪文を詠唱し、女の子の前に小さな赤い魔法陣が描かれる

生徒A「メラ！」

ボツ！

小さな火の球が湖に向かって飛んでいき、途中で消えた

ベロニカ「うん、上手よ！すっかり炎をイメージ出来たみたいね」

ラーズ「落ち着いて詠唱も出来ていたな。初めは丁寧にやる事が大事なんだ、よかったぞ」

生徒A「ありがとうございます！」

パチパチパチ！

生徒達からも拍手が送られた

ベロニカ「それじゃあ次のグループね。次はギラよ。メラより少し難しいけど、基本は同じ。頑張って」

生徒H「はい！頑張りますね！」

ラーズ「何か目標の物があるとやりやすいよな。よつと」

ラーズは片手に小さな水色の魔法陣を描くと氷を出して、湖の前に置いた

ベロニカ「そうね。ありがとう、ラーズ。この氷を目印にして」

生徒I「凄い！あんな簡単にヒヤドを使ってる」

ラース「それじゃ始めていいぞ」

生徒H「はい！〜〜」

女の子は慣れたように呪文を詠唱していき、朱色の魔法陣が氷の横
一列に描かれる

ラース「お？」

ベロニカ「あら、もしかして」

生徒I「ベギラマ！」

ジュウウ！

氷の横から波打つ炎が現れ、氷を全て溶かした

パチパチパチ！

生徒達から早くも拍手が巻き起こった

ラース「ほう、中級呪文に挑んで成功させたか。魔法使いの素質が
あるな」

ベロニカ「そうね。やるじゃない！失敗したっておかしくないのに、いきなり中級呪文に挑むなんて」

生徒I「ありがとうございます！私、前にギラは成功させた事があったので、今回は中級呪文のベギラマに挑戦してみたいです。成功してよかったです！」

ベロニカ「皆も出来そうだったら中級呪文に挑戦していいからね。暴発も恐れなくていいわ。失敗は成功のもと。その挑戦する意気込みが大切な。さ、次のグループよ」

どんどん発表が続き、最後のグループになった

ベロニカ「これで最後ね。次の人、お願いするわ」

気弱そうな生徒「は、はい」

ベロニカ「あ、この子のグループなのね」

ベロニカがチラリと気にしていたグループを見ると発表も聞かずに4人で楽しそうに話しているのが見えた

ラーズ「最後はジバリアだな。トラップ系の少し特殊な魔法だ。物じゃなくて、俺が標的になるうか。俺の足下を狙うんだ」

ラーズは生徒の前に少し離れて立った

気弱そうな生徒「よ、よろしく願いします」

ベロニカ「まあいいわ）特殊だから初めてだと失敗するのが当然よ。それでも臆せず頑張って」

気弱そうな生徒「はい、いきます！〜〜」

静かに詠唱が始まるとラーズの足下に茶色の魔法陣が描かれていく

ベロニカ「あら、いい感じじゃない。結構器用な証拠ね」

魔法陣に魔力を込めようとした時

シユン！

全員「!!？」

ラーズの足下にあったはずの魔法陣がいきなり消失し、後ろの湖に大きな魔法陣となって現れた

気弱そうな生徒「え？あ、あれ？ええ!!？」

ラーズ「暴走か!!？」

女の子は焦って詠唱をやめるが、魔力は既に魔法陣に注がれており

湖の底から地面が勢いよく上がってきた

ボゴオン!!

大きな土柱が空に伸びあがった

バシヤアアツ!!

その影響により、湖の水が大きな波となってこちらに向かってくる

生徒達「キヤアアア!」

ベロニカ「皆、落ち着いて!一ヶ所に固まりなさい!」

ベロニカが全員を一ヶ所に丸く集める

ベロニカ「ラーズ!」

ラーズ「ああ、大丈夫だ!設置完了!ジバルンバ!」

ラーズは土柱を確認した瞬間に茶色の魔法陣を横に広く描き、巨大な土壁を作り出した

ドオン!

波はその壁により湖に戻っていく

ラーズ「よし、もう大丈夫だ。ビックリしたなー、皆」

ラースは地面を戻した後、笑いながら皆に振り返った

生徒達も安全なのを確認したのか、安堵した表情になっている

気弱そうな生徒「あ、あの……すみません！すみません！」

気弱そうな女の子は罪悪感を感じているのか、顔を青ざめながら皆に頭を何度も下げている

ベロニカ「大丈夫よ。あれは偶に起こるもので、魔力の暴走。魔法に必要以上の魔力を込めるとああなるの。前に教えたわよね。でも、今回はそうじゃないの。実はごく稀に魔力自身が勝手に暴走してしまう時もあるわ。それは誰にも制御出来ないし、いつ起こるかわからないわ。」

今回はそのごく稀にが起こってしまっただけ。あなたは悪くないわ。土柱も出たからちゃんとしてジバリアが成功していた証拠よ。胸を張っていいの。皆もこの子に拍手してあげて」

パチパチパチ！

気弱そうな生徒「あ、ありがとう……ごぞいます」

ベロニカ「それじゃあ今日の魔法教室はここまで。また次回よろしくね」

心と向き合って

その後、メダ女学園

ベロニカ「ラーズ、ちよつとこの魔導書図書室に返ってきてもらえる？私、話したい生徒がいるのよ」

ベロニカはグループに使った数冊の魔導書をラーズに押し渡した

ラーズ「わかった。最後の女の子か？グループの事についてならベロニカが口出しするような事じゃないだろ」

ベロニカ「あ、あんたも気付いてたの!?というか、なんで口出ししちゃダメなのよ。あんなやつらと一緒にいる方が駄目よ！」

ラーズ「それは俺達が関係していい事じゃない。本人次第だ。他者がどうこう言って変わるものじゃないだろう」

ベロニカ「……………でも！あの子自体は優秀だし、あんな人達にいるのはかわいそうだわ！」

ラーズ「それこそベロニカの押し付けだろう。とにかく、あまり感情的になって行動するなよ？何をしようが生徒の自由だ。いろいろ経験して学んでいくんだ」

ベロニカ「わかったわよ！ちよつと話すだけにするわ！」

二階 廊下

そこには一人で歩いている先程の気弱そうな女の子がいた

ベロニカ「あ、見つけた。ねえ、ちよつといいかしら？」

気弱そうな女の子「え？あ！べ、ベロニカ先生」

ベロニカ「こんにちは。少し聞きたい事があったのよ」

気弱そうな女の子「わ、私にですか？」

ベロニカ「そう、えつと……名前を教えてください？」

スミア「私、スミアといいます」

ベロニカ「そう、スミアね。スミア、今日の魔法教室でのグループ見てたわ。なんだか仲がいいようには見えなかったけどお友達なの？」

スミア「あ……は、はい。友達です」

スミアは顔を俯かせて静かに呟いた

ベロニカ「本当に？言いなりになつてない？」

スミア「そ、そうですね。多分扱いやすいとか思われています」

ベロニカ「なんで一緒にいるの？嫌じゃないの？」

スミア「私……人見知りで。他にお友達がいらないんです。だからグループでの作業とかになるといつも余っちゃって」

ベロニカ「だからってあんな人達と一緒にいる事ないわよ。優しい子なら他にたくさんいるわ」

スミア「でも……」

ベロニカ「言いなりになるのは嫌なんですよ？それなら嫌ってはつきり言っちゃいなさい」

スミア「そ、そんな事できません！私……そうしたら……また一人になっちゃう」

ベロニカ「一人になるのを怖がってちゃ駄目よ。勇気を出して。今一緒にいるのは本当の友達なんかじゃないわ」

スミア「本当の友達……」

ベロニカ「そう。本当の友達ってのは、心でしっかり向き合っている人達よ。ありのままのあなたを見てくれる人達。そんな人がきつとこの学園にいるはず」

スミア「…………… わかんないです。そんなの！わかんないです!!」

スミアは大きな声をあげた

ベロニカ「スミア、大丈夫だか」

スミア「私、この後授業あるのでこれで失礼します！」

スミアは走っていった

ベロニカ「…………… やっちやったかしら。ハア、ラーズにあまり深く関わるなって言われたのに」

その頃、図書館

ラーズ「えーつと、ここがこの魔導書でその奥がこつちか」

ラーズは魔導書を元の本棚の位置に戻していた

その時、近くから話し声が聞こえてきた

ラース「ん？」

生徒D「今日の魔法授業マジでビビった。あんな波起こすとか何考えてんの、スミアのやつ」

生徒E「わかるー！暴走とか言ってたけど、そんな事起こるわけないよね。あのスミアだもん！絶対皆を狙ったんだって」

生徒F「あー、それか私ドジっ子なんですーって思われたかったんじゃない？ほら、今日来た男の先生かっこよかったじゃん。なんか大きな壁を作って守ってくれてさ」

生徒G「やば、スミアなのに調子のりすぎじゃん」

生徒D「テストどうなるかわかんないけどさ、スミアを使えばまた満点余裕でしょ。私達魔力ないからわかんないけど」

生徒E「皆にスミアが褒められてたけどさ、ズルくない？ちよつと魔法使えるからってさ。私達の方が優秀じゃん。魔法がなんなのよ。あんな努力しなくて適当にやれば出来るに決まってるじゃん」

ラース「そんな事ないぞ」

四人「!!」

ラーズ「魔法を扱うには深い知識と努力が必要だ。単なる式や構造だけじゃない。自然の原理や発生条件など様々な事を知らなければ扱う事は出来ない。

魔法を扱えるつてのは、それだけの見えない努力がある。少なくとも、講義を聞かないで話してばかりの君達よりはスミアの方が圧倒的に努力しているな」

生徒G「ラ、ラーズ先生……」

生徒D「す、すみません」

四人の生徒は軽くラーズに頭を下げてそそくさと図書室を出ていった

ラーズ「(ハア……俺もベロニカの事言えないな。つい声に出してしまった)」

放課後、寮

スミアが部屋に戻ろうとしていると

生徒D「ちよつとスミア」

部屋の前にあのグループの四人組が待っていた

スミア「な、なに？」

生徒E「あんたさー、ちよつと魔法使えるからって調子のりすぎ」

生徒F「私達、ラーズ先生に怒られたんだけど」

スミア「そ、そうなの？」

生徒G「そうよ！折角仲良くなろうかなとか思ってたのに、なにあんたが褒められてんのよ」

スミア「だ、だって代表に立って魔法使っただけだし、失敗したし」

生徒D「そうよね、失敗したのに褒められたのはムカつく。まあいわ、その代わりにこの魔法授業のテストになったらまた答えよろしく」

スミア「え…………。だ、だめだよ、ベロニカ先生もラーズ先生も厳しそうだもん。私でも点数とれるか」

生徒D「いいからやりなさい!!」

スミア「……………（ありのままの私を……………受け入れてくれる人……………友達……………）」

生徒E「ちよつと！なにか言いなさいよ！」

グループの一人が何も言わないスミアに強く声をかける

スミア「嫌だ!!」

スミアは勇気を振り絞り、大声をあげた

四人「!!」

スミア「私をもういいように使うのはやめてよ！四人もちゃんと勉強してよ！私、こんな扱いもう嫌だ!!」

スミアの大声に近くの部屋から他の人達が顔を出した

生徒G「ちよつ、あんた何いきなり！ああもう！」

四人は焦ったように去っていった

スミア「…………… やっっちゃった」

生徒B「スミアちゃん…………… 大丈夫？どうしたの？」

スミア「あ、えっと……………その」

生徒C「スミアちゃん、あの子達にずっといいように使われてたもんね」

スミア「う、うん。でも……………やっぱり嫌になっちゃって」

生徒B「そうなんだ。あの子達、嫌な噂とかあるもんね。今までよく頑張ったね」

スミア「あ、あり……………がとう」

生徒C「あ！ねえ、スミアちゃん。今日のジバリア凄かったよ！私に魔法教えて。ほら、私バギ失敗しちゃったじゃん？」

スミア「あ……………そうだったね。でも、私なんかでいいの？」

生徒C「いいよ！スミアちゃん、あんなしつかり難しい式を詠唱してて凄かったもん」

生徒B「うんうん。ジバリアってね、中級呪文と同等の難易度なんだよ」

スミア 「そ、そうみたいだね」

生徒C 「私のお部屋に来て。お話しよ！」

スミア 「…………… うん！」

男達の隠し事

それから一ヶ月後の夜、デルカダール城

グレイグの部屋

夕食後、ラースはグレイグに呼ばれ部屋にやってきていた

ラース「なんだよ、グレイグ。頼み事って」

グレイグ「いや……………そのだな、どうしても必要なのだ」

ラース「何がだよ」

グレイグ「……………だ」

グレイグはか細い声で何かを言った

ラース「は？」

グレイグ「お、お金を貸してほしいのだ」

ラース「……………ハアア!?!」

ラースは顔を思いつきり顔をしかめた

グレイグ「ぐっ……………」

ラース「何変な事言ってるだよ。金なら困る事はほぼないはずだろ」

グレイグ「……………」

グレイグは静かに正座をする

グレイグ「頼む!!何も聞かずに金を貸してほしい!必ず倍にして返すと約束する!」

グレイグは土下座をして頼み込んでいる

ラース「……………」

ラースもグレイグのその勢いに呆然としている

グレイグ「頼む、ラース。一生の頼みだ」

ラース「……………何に使うのかだけは言え。それ以外は聞かないから」

グレイグ「それだけは言えない!」

ラース「じゃあ貸さない。断固拒否だ」

グレイグ「ぐうう……………」

グレイグは顔を赤くしている

ラース「……………俺の予想通りでも貸さないからな」

グレイグ「な、何故だ!!」

ラース「そんなくつだらねえ事に人の金を使ってんじゃねえ!!」

グレイグ「頼む!!10名限定のプレミア物なのだ!!ロウ様との大切な楽しみでもあるのだぞ!!」

グレイグはラースに縋りついた

ラース「知るかー!!」

グレイグ「ぐぐぐ……………ど、どうしても貸さないと言うのだな」

グレイグは何かを決めたようにラースから離れた

ラース「当たり前だ。なんで許されると思っていやがんだ、馬鹿野郎」

グレイグ「なら、俺も最終兵器を出そうではないか」

ラース「最終兵器？」

グレイグ「貴様が隠しているあれの場所を姫様にお伝えするぞ!!」

グレイグは更に顔を赤くして、強く言い切った

ラース「ゲエホツ!!ゴホツ!!ゴホツ!!」

ラースは突然のグレイグの発言にむせこんだ

グレイグ「ど、どうだ」

ラース「ふぎけんな!!てめえ、今何をしようとしてんのかわかってんのか?ああ!?!」

ラースは顔を鬼のようにしながら問い詰めている

グレイグ「うっ……………。そ、それでも俺は!あれを集めなければならんだ!」

グレイグはラースのその顔にも負けずにラースを見ている

ラース「ふぎけやがってええ……………。条件だ!その条件を飲めば貸してやる」

グレイグ「なんだ」

ラース「その1、必ず貸した金の二倍にして俺に返す事！

その2、その馬鹿げた本を買う以外に使わない事！

その3、明日俺の言う事は全て必ず聞く事！

その4、この約束はベロニカ、セーニヤ、シルビア、マルティナには死んでもバラさない事！

その5、金を返す期日は4日！いいな!!？」

グレイグ「了解した。男と男の約束だ。この命に代えても守ろう」

ラース「で？その金額は？」

グレイグ「20万ゴールド」

バゴン!!

グレイグ「ぐおおお……」

グレイグの頭に巨大なたんこぶが出来上がった

グレイグもあまりの痛みに頭を押さえ込んでいる

ラース「ふざけんなよ!!俺の給料ほとんど持ってかれるじゃねえか!!」

ラースはそのままグレイグの首を掴んで締め上げている

グレイグ「ま……………待つのだ……………。落ち着け……………。ぐるじ
い」

ラース「これが落ち着いていられるか!!!」

グレイグ「おれ……………俺も出す……………ロウ様も
だ……………三人で分担するのだ」

ラース「そうかよ。なら、最初からそう言え」

ラースはグレイグから手を離れた

グレイグ「ゲホツ!!ゲホツ!!……………だからラースに貸してもらいた
いのは5万ゴールドだ」

グレイグの首にはくつきりと跡が残った

ラース「わかったよ。ほら」

ラースは持っていた財布から5万ゴールドを渡した

グレイグ「心から感謝する」

グレイグは頭を深く下げて受け取った

ラース「条件を忘れんなよ!!明日、俺の言いなりになってもらうか
らな!」

グレイグ「ああ、わかっている。なんでもしてやろう」

ラーズ「本当ならボコボコにしてやりたいが仕事に影響が出るのも困るからな！仕方なくだからな！」

グレイグ「そ、そうか。それがないだけまだよかった」

次の日の朝

マルティナと王様は不思議な光景に目を瞬かせている

ラーズ「おかわり」

グレイグ「は！ただいまお持ちいたします！」

ラーズ「これもだ」

グレイグ「は！」

グレイグは軽くご飯を食べた後、ラーズに付きつきりでおかわりを持ってきている

マルティナ「ラーズ？グレイグと何かあったの？」

ラース「今日一日は俺の言いなりになってくれるんだってよ。こいつは悪い事したからな」

デルカダール王「そ、そうであつたか。程々にするのだから、ラースよ」

ラース「大丈夫ですよ。無理難題は言いませんから」

ラースはにっこりと王様に返した

デルカダール王「そ、それは当たり前なんじゃが……………。まあよい、ラースを怒らせたグレイグが悪いんじゃないだろう」

王様もラースの反応に深くは触れないようにした

その後、玉座の間

カミュ「よ、ただいま。って…………… 何してんだ？おっさん」

カミュが帰ってくると

グレイグ「む、カミュか。お帰り」

掃除道具を持ったグレイグが玉座の間を隅々まで綺麗にしていた

マルティナ「カミュ、お帰りなさい」

ラーズ「よう、久しぶり」

カミュ「お、おう。なあ、何があったんだ？」

マルティナ「グレイグがね、ラーズを怒らせたみたいなの。だから今日一日グレイグはラーズの言いなりらしいのよ。それで今は玉座の間を掃除してってラーズから言われているの」

カミュ「ほく、なるほどね。まあたおっさんは変な所で兄貴を怒らせんだからよ」

ラーズ「おいグレイグ、もっとテキパキやれ」

グレイグ「は！」

カミュ「…………… 兄貴、ちよつと楽しんでるだろ？」

ラーズ「まあな！でも、当然の報いってやつだろ」

その後

ラーズ「グレイグ、訓練場の設備の点検」

グレイグ「は！」

しばらくして

ラース「グレイグ、武器と鎧の点検」

グレイグ「は！」

更にしばらくして

ラース「グレイグ、食料と薬の不足品を買ってこい」

グレイグ「は！」

更に更にしばらくして

ラース「グレイグ！部屋のシーツの取り替え！」

グレイグ「は！」

夕方、大広間

グレイグ「ゼエ……………ゼエ……………。くっ、ラースのやつめ、こんなにコキ使う事ないだろう」

グレイグは普段の仕事よりも圧倒的に多い労働にクタクタになっていた

カミュ「見てるこつちもかわいそうになってきたぜ。兄貴のドS心に火がついてたからな」

グレイグ「もう夜になれば頼まれるものも少なく」

ラーズ「グレイグ！マーズと風呂掃除！」

グレイグ「は！今向かう！」

カミュ「やれやれ……おっさん、ご愁傷様だな」

その夜、酒場

カミュとラーズとグレイグは酒を飲みに来ていた

グレイグ「頼む、ラーズ!!いえ、ラーズ様!!私にお金を払わせる事だけは!!」

ラーズ「チツ！まあいいよ、今日は目一杯楽しめたからな」

グレイグ「ありがとうございます！」

カミュ「兄貴のやつ、舌打ちしたって事はあわよくば程度に考えてたな？」で？おっさん、何やらかしたんだよ。ここまで暴走する兄貴

は中々見れねえぜ」

グレイグ「……………カミュならよろしいですか？」

ラーズ「ああ、いいぞ。この馬鹿はな、プレミア物とかいうムフフ本を買うために俺に五万ゴールド借りたんだ」

カミュ「は？」

グレイグ「プレミア物でもただのプレミアではないのだ！10名限定の！豪華特典もついて、なおかつ」

カミュ「いや、わかったからよ。な、なんでそんなくだらねえ事をおっさんだって兄貴に金を借りるなんて事をわざわざする必要ねえだろ」

ラーズ「じいさんとグレイグと俺で分割したんだ。20万ゴールドするんだってよ」

カミュ「ハア……………本当くつだらね、酒のつまみにもならねえじゃねえか。英雄様も落ちぶれたもんだな」

グレイグ「カミュ！お前にも見せてやるからな！あの作品は素晴ら

しいぞ！」

カミュ「へいへい。でもよ、兄貴はなんで貸したんだ？こんな事に貸すなんて思わなかったが」

ラーズ「…………… まあ、いろいろあるんだよ。プライドとか」

カミュ「へー、それもくだらなさうだな」

ラーズ「くだらなくねえ！」

男達の隠し事2

それから数日後、デルカダール城

大広間

ギバ「あ、ラース將軍！お疲れ様です」

ラース「おう、見回りか。お疲れ様」

ギバ「そうだ、ラース將軍。街の人達がちよつと話題にしてたのを耳に挟んだんですけど」

ラース「ん？」

ギバは周りを確認した後、口元に手を当てて静かに話しかけてきた

ギバ「この前、本屋でグレイグ將軍と共にプレミア物のムフフ本買ったのって本当ですか？」

ラース「ブフツ!!」

ラースはその事に思いつきり吹いた

実際、ラースは先日の本の発売日にグレイグに買う所を見せると無理矢理連れていかれていた

ラース「あー……………俺は買ってない。買ったのはグレイグで俺は付き添いだ」

ギバ「あ、そうだったんですね。いやー、まさかラース將軍もそういう趣味があるのかと」

ラース「んなわけねえだろ。というか、街の人達がそんな噂を」

ラースは少し頭を抱えている

ギバ「はは、まあ皆からも不思議がられてましたから。まあグレイグ將軍がそういうのが好きなのは前にお聞きしてましたからわかりますけど。あ、マルティナ様にはバレないようにしておきますね」

ラース「頼む。バレたら言い逃れすらさせてもらえないだろうからな。あ、あとバンには話すなよ。うっかりでも話されたら厄介だ」

ギバ「それは確かに。わかりました」

夕方、玉座の間

ガチャ

バン「あ、あの……………書類の提出を」

ラース「遅い！」

バン「うう……すみません」

申し訳なさそうにしているバンが静かに入ってきた。その手には昨日までの期限の書類が握られており、頭には既にベグルに怒られたのかたんこぶが出来ている

ラーズ「何回目だよ、まったく。特に今週は忙しくはなかった。やる時間はどこにでもあったはずだ」

バン「はい、ごもつともです」

マルティナ「まあまあラーズ、落ち着いて。もう怒られてるみたいだし、あまり責めないであげて」

バン「うう……ありがとうございます、マルティナ様」

ラーズ「……ハア、まあ確かに。遅れる事も前に比べたらかなり少なくなっただけだな」

バン「そ、そうですよね！」

ラーズ「だからっていいわけじゃねえ」

バン「うつ……すみません」

ラース「部屋のカレンダーとかに期日をメモするなりして忘れないようにしろよ。遅れて困るのは俺達なんだからな」

バン「はい……」

ラース「よし、説教終わり。もう戻っていいぞ」

バン「は、はい……。あ、そうだ。一つ師匠にお聞きしたい事があつて」

ラース「ん？なんだ？」

バン「先日本屋にグレイグ將軍と」

パシッ！

バン「ムグッ!？」

ラースはすぐさまバンの口に手を押し付けた

ラース「ちよつとこつちこい」

バン「ムー!？」

ラーズはバンを部屋の外に引っ張っていく

マルティナ「え？ちよ、ちよつとラーズ？」

グレイグ「ひ、姫様、ラーズはバンと大事なお話があるそうです。きつといつもの事です」

マルティナ「そう？かなり焦ってたみたいだけど。それに本屋にグレイグと？私、知らないけど何かあったの？」

グレイグ「いえ、私オススメの小説をラーズにも読んでほしくて買っただけなのです。おそらく城下町に私と二人でいるのが珍しかったのかと」

マルティナ「ふーん、まあいいわ」

グレイグ「(よ、よし。なんとかやり過ごせたか)」

マルティナ「(寝る前にもう一度ラーズに聞いてみましょう)」

その夜、グレイグの部屋

ラーズはグレイグと作戦会議を開いていた

ラーズ「とういうわけで、バンにも話して絶対にマルティナには言うなど念を押しておいた」

グレイグ「うむ、一番の不安要素がこれで少しはマシになったか。かなりヒヤツとしたぞ」

ラーズ「本当だよな。バンのやつ、わざわざ玉座の間で話さなくたっていいのに」

その時

コンコン

マルティナ「グレイグ？ラーズを見てない？」

二人「!？」

グレイグ「ひ、姫様！ラーズならここにいますぞ」

マルティナ「あ、そうだったの。入ってもいい？」

グレイグ「はい、どうぞ」

ガチャ

マルティナ「あ、よかった。ラース、探したわ」

ラース「どうした？マルティナ。もう少しで部屋に戻る予定だったが」

マルティナ「…………… なにか隠してない？」

ラース「え？別に何も隠してないけど」

マルティナ「そう？数日前からラースとグレイグが一緒にいる時間
がかなり増えた気がするってね。まあいい事なんだけど、今日のバンの
話を遮ったのも気になるし」

グレイグ「ひ、姫様、ですからそれは」

マルティナ「グレイグは黙ってて」

グレイグ「は、はい」

ラース「はは、なんだ。心配かけたか？別に変な事は何もしてないぞ」

マルティナ「……………そうね。私の考えすぎだったかしら、ごめんない。それじゃあまた後でね」

ラース「おう」

マルティナは部屋から出ていった

二人「……………ふう〜」

二人は同時に安堵の息をついた

グレイグ「いやはや、姫様の勘には恐ろしいものがある。よく表情を崩さずに話せたな、ラース」

ラース「ポーカーフェイスは昔から得意だったからな。まさかこんな所で使う羽目になるとは思わなかったが」

グレイグ「今度ロウ様がここに来る事になっていてな。その時にロウ様にもお見せするのだ。先に見るか？ラース」

ラース「見ねえよ。いいから一番見つかりにくい場所に閉まっておけ」

グレイグ「むう、つれんな。カミュも少しは見たというのに」

ラース「もう興味ねえよ」

グレイグ「ほう?」もう”か」

ラース「んだよ」

グレイグ「いや、お前もやはり興味があつた時があるのだなと」

ラース「そりゃあ男だからな。ガラツシユの村でそういった本は少ないから皆で集まって隠れて見てたんだ。ギルグードが一番詳しくかつたんだぜ」

グレイグ「なるほど。皆で見るといふのもいいな」

ラース「ま、昔の話だ。それじゃあ俺は部屋に戻るぜ」

グレイグ「ああ、おやすみ。姫様に気をつけるのだぞ」

ラース「わかつてる。じゃあな、おやすみ」

お礼

それから数日後、デルカダール城下町

今日はホワイトデー。バレンタインのお返しを渡す日として、城下町のお店や商店街には白や青を基調とした旗などが飾られており、チョコレートやクッキー、コップや花束など様々な商品が目立つように置かれている

ベル「そうか、今日はホワイトデー。だからこんなに人が多いのだな。いや、この国からしたらこの程度は当たり前なのかもしれないな。まあいい、城までの道は……… あつちか」

ベルは城に向かって歩き始めた

デルカダール城 大広間

ベル「失礼する」

ベルが中に入ると

コロ「キャン！」

コロがベルに向かって走ってきた

ベル「な、なに!? 魔物!? こんな城の中に!?!」

ベルは突然の事に戸惑いながらも、背中に背負った大剣を取った

コロ「ク、クウ………」

マルス「コロー、突然どうしたの？あ、お客さんだ。こんにちは」
奥からは少し遅れてマルスが走ってきた

ベル「子どもか！離れろ！そいつは魔物だぞ！」

マルス「え？ま、待つて!!コロは悪い魔物じゃないよ！僕達の大事な家族！」

マルスはベルの様子を見て急いでベルとコロの間に入った

ベル「魔物が……家族？」

マルス「うん、そうだよ。ほら見て、このキラーパンサーはコロっていうんだけど襲ってこないでしょ？」

コロ「キャン！」

マルスはコロを撫でると、コロも嬉しそうに吠えた

ベル「な、なんと……………。随分と変わった魔物なのだな。突然すまなかった」

ベルもマルスとコロの雰囲気で大剣を背中に戻した

マルス「ううん、大丈夫。初めてコロ達を見ると皆似た反応するから。それでお姉さんはどうしてここに来たの？母さんや父さんに用

事？」

ベル「その母さんや父さんが誰かはわからぬが、おそらく違うな。私が来たのは兵士の一人であるマーズ殿に用があつて来たのだ」

マルス「あ、マーズさんに用事？僕、呼んでくるよ！」

ベル「おお、そうか。それは助かる」

マルス「ここで待っててね、お姉さん！」

マルスは走っていった

コロ「キャン」

コロもベルに小さくお辞儀をして戻っていった

ベル「ま、まさか魔物に頭を下げられるとは。本当に変わっているな。だが、落ち着いて見ると可愛らしいな」

数分後、マルスとベグルがやってきた

マルス「ごめんね、お姉さん。マーズさんいなかった」

ベグル「ベル、久しぶりだな。悪いがマーズは今、城下町で暴れているやつがいるって事で取り押さえに行っていないんだ。もう少し

したら戻ってくるとは思うけどよ」

ベル「久しいな、ベグル殿。そうか、仕事であれば仕方ないな」

マルス「お姉さん、ベルさんっていうんだね。ねえ、ベルさん。よかったです母さん達に会ってきたら？」

ベル「先程も言ったが、その母さんとやらは誰なのだ？」

マルス「この国の王女だよ。マルティナっていうの。父さんはラー
スだよ」

ベル「な!?!こ、この子はつまり!」

ベルはマルスの発言に驚きながらベグルを見た

ベグル「そういう事だ。この国の王子様ってな。あともう一人、ル
ナっていうお姫様もいるぞ。二人は兄妹なんだ」

マルス「凄いでしょ!」

ベル「驚いた、マルティナ殿とラーズ殿の息子だったとは。それに
娘もいるのか、知らなかった。それなら少し話をしていこう。お伝え
したい事もあるからな」

マルス「はい、玉座の間はこっちだよ」

玉座の間

ガチャ

マルス「父さーん、母さーん、グレイグさーん、ベルさんっていう人が来たよ」

ベル「お久しぶりです、マルティナ殿、ラース殿、グレイグ殿」

マルティナ「あら！ベルさん！久しぶりね」

グレイグ「何かあったか？」

ラース「マルス、ありがとな」

マルス「うん、じゃあねー」

マルスは戻っていった

ベル「いえ、特に何かあったわけではないのですが、少しマーズ殿に用事があったのと先日私がご迷惑をおかけしてしまったのに何も詫びをしていなかったと思います」

ラーズ「詫びなんていいさ、別に。そんな迷惑かかってないしょ」

マルティナ「そうよ、こつちこそバンの件でベルさんに迷惑かけたもの」

ベル「そう言っていただけとありがたいです。こちら、つまらない物ですがガオス村の特産品、絹で作ったタオルになります。もしよろしければお使いください」

ベルはカバンから様々な淡い色をしたタオルをいくつも取り出した

グレイグ「こ、こんなにいいのか？」

マルティナ「そうよ。確か織物で村を成り立たせてるって」

ベル「お気遣いいただきありがとうございます。ですが、私達は大丈夫ですのでご安心ください」

ラーズ「そうか。なら、ありがたく使わせてもらおうぞ」

ベル「はい」

グレイグ「それとマーズは今、急な仕事で城下町に出ている。悪いが、しばらく待っていてほしい。そろそろ帰ってきてくると」

ガチャ

バン「失礼します、マルティナ様。ご報告に、あれ!?ベル!」

マーズ「え?あ、本当だ!ベルさんじゃないか!」

グレイグが話していた時、バン達が報告に戻ってきた

マルティナ「あら、ちょうどいいタイミングね。どうだった?」

バン「は!旅人同士のいざこぎでしたので少々話をしたのですが、互いに興奮しており俺達に刃物で襲ってきたのでそれを退治。

手荒でしたが、街から追い出しました。あ、退治といっても刃物を壊したりしただけで旅人達には何もしていませんよ」

マルティナ「そう、わかったわ。最近血の気が多い人達が多くて困るわね。ありがとう」

ラース「マーズ、ベルはお前に用事があつて来たみたいだぜ」

マーズ「そうなのか?いなくてすまなかつたな」

ベル「いや、仕事だったのだから仕方ない。やはり兵士となると忙しいな」

バン「マーズ、この後は俺達でやっておくから自由にしていいぞ。ベルを待たせてみたいだしよ」

マーズ「そ、そうか？ありがとな、バン。まあ何かあったらすぐ連絡くれよ」

その後、デルカダール城下町

マーズ「久しぶりだな、ベルさん。また来てくれて嬉しいぜ」

ベル「ああ、マーズ殿も変わりないようで何よりだ。実は用事といても大した事ではないのだがな。これを渡そうと思っていたのだ」

ベルはカバンから少し小さい紫色の長方形の箱を取り出した。そこには黄色のリボンが巻かれている

ベル「前にマーズ殿には迷惑をかけたからな。それのお詫びとお礼としてチョコレートを作った。よかったら受け取ってくれ」

マーズ「……………お、おう、ありがとな。別に礼とか詫びなんていいのによ」

ベル「だが、何かしなければ私の気がすまなかったのでは」

マーズ「そ、そうか。俺、女性から貰ったの初めてだ。大事に食べさせてもらう。というかよ、これだったらバレンタインに来るべきだったんじゃないのか？」

ベル「ま、まあそうなのだが、別にホワイトデーだから女性があげてはいけないわけではなからう」

マーズ「ふふ、そうだな。じゃ、折角のホワイトデーなんだ。これのお返しをするよ」

ベル「さてはマーズ殿、楽しみたいだけなのではないか？」

ベルは先程からチラチラと商店街を見ているマーズの様子と今の発言で勘づいた

マーズ「そ、そうだよ。城下町がこんなにホワイトデー一色なんだ。兵士でも少しくらい楽しみたいだろ。といつても、どうするかな……。あ、ベルさんはデルカダールに来たのこれで二回目か？」

ベル「ああ、そうだな」

マーズ「それじゃあ大した礼にはならないが、俺がデルカダールを案内しよう。デルカダールの特産品とか食い物とか」

ベル「おお、それは助かる。観光は前回出来なかったのな。今回落ち着いてしようかと思ったが、こうも広い上に人も多いと大変な気がしていたのだ」

マーズ「おし、それじゃあまずは商店街の」

グギユウウ

ベル「……………」

マーズ「……………」

気の抜けるような音がハッキリと聞こえた

ベル「そういうえば昼時だな、私も腹が減った。先にご飯にしようではないか」

マーズ「はい、そうさせてください」

マーズは盛大に自分のお腹が鳴った事とベルの気遣いにより顔を真っ赤にして下を向いてしまった

ベル「そこまで恥ずかしがる必要はないだろう。人間なら当然の事だ」

マーズ「いや、だって、あんなタイミング悪く鳴るか？普通」

ベル「とてもよい音だったぞ」

マーズ「そういう意見は求めてねえ！」

お礼2

レストラン

ここはデルカダール城下町にある大きなレストラン。広い場所に大きな机とたくさん椅子が置かれてあり、多くの人が食事をする事ができる。メニューも豊富であり、常に満員となっている事も多い人気の場所

ベル「これは凄いな、酒場以外でもこんな大勢の人が集まっているとは」

マーズ「実は俺もここに入れたのは今回が初めてなんだ。なんせデルカダール一番といってもいいくらい人気店だからな。楽しみだ」

マーズはあの後、自分の家に一度寄って鎧姿から私服へと着替えていた。白いシャツに水色の横線が入っており、ズボンにはジーンパンを履き涼しげな見た目となっている

ベル「そんな場所にしなくても私は別にどこでもよかったのだぞ」

マーズ「まあまあ、折角の観光だろ？いい場所で食べた方が楽しめるって。ほら、メニュー見てみようぜ。たっくさんあるからよ」

ベル「うむ…………… おお！本当に色々あるのだな。見たことない物や各地の料理もあるとは」

マーズ「凄え！ソルティコの有名なカルパッチョもある！デルカダールでこれが食べられるのか！」

ベル「ソルティコは訪れた事があるぞ。暖かい気候に綺麗な海に砂浜、美味しい海鮮料理とワインは格別だったな。また訪れたいものだ」

マーズ「そこ、俺の故郷なんだ。故郷が褒められるとやっぱり嬉しいよな」

ベル「そうであったか。む？この…… フォツチャなる物はなんだ？」

マーズ「ああ、それはデルカダールの名物料理だ。中にじゃがいもが丸々入っててそれをグラタンで包んであるんだ。デルカダールに来たなら一度は食べてみるべきだと思うな」

ベル「ほう、それは美味しそうだ。どれ、私はこれとパスタにしよう」

マーズ「俺はカルパッチョとピザ、それとこのステーキも美味しそうだ」

ベル「中々食べるのだな。やはり兵士は食べねばやっていけない

か」

マーズ「そこまで食べる方ではないんだが、まあ仕事上よく動くかな。腹が減るんだ」

その後、広場

ベル「美味かった。とてもよい場所だった、感謝する」

マーズ「はは、感謝なんかなくていいさ。俺も美味しい物食べたかったからな。さて、今度こそ観光するか。まずはここ！ベルさんも通ったと思うが、ここは広場だ。この大きい噴水が目印だぜ。皆もここによく集まってるんだ」

ベル「ああ、そうだな。今も子ども達が遊んでいたり、旅人らしき人達が盛んに通っている。ベンチや飾られている植物も綺麗だな。む？この看板は……魔物の絵？」

マーズ「ああ、これは魔物の掲示板だ。デルカダール地方とデルカコスタ地方にいる今日の魔物を皆に教えてるんだ。今日は、おおきづちとズッキーニヤが多いみたいだな。デルカコスタ地方にはぐんたいガニか」

ベル「ほう、それは助かるな。私のような旅人だと慣れぬ地方にどんな魔物がいるなどはわからん。少しでも情報があるのはありがたい」

マーズ「危険度もあって、ズッキーニヤは星1、おおきづちは星2、ぐんたいガニは星3だ。

1は近づいても多少は大丈夫。

2は近づかなければ平気。

3は油断すると危険、って感じた。たまりにデルカコスタ地方の奥地から星5以上の魔物がいる時があるからその時はデルカコスタ地方には行かないようにさせている」

ベル「なるほど。様々な人の事まで考えられた素晴らしい物だな。マルティナ様の優しさが伺える」

マーズ「さて、次はこの左右に広がる商店街だ」

商店街

ベル「ここに来ると先程の広場よりも更に多くの人がいるな。皆、活気に溢れている」

マーズ「色々買えるからな。野菜、果物、武器、防具、薬草などの道具や服に装飾品。ベルさんは何か必要な物あるか？」

ベル「そうだな。では、武器屋と防具屋に寄ってもいいだろうか。大剣の整備や鎧の種類も拝見しておきたい」

マーズ「はは、まあ旅人だとまずは武器屋や防具屋だもんな。こつちだぜ」

武器、防具屋

主人「おく、いい大剣だね。ご自分で整備されてるのかい？」

ベル「ああ、そうだ。だが、プロではないのでな。たまには専門の人に見せねば壊れてしまったら大変だ」

主人「大切にされてるのがよくわかるよ。ただ、確かに少し柄の部分が欠けてるのと、先端に僅かに刃こぼれがあるね。直しておこう」

ベル「頼む。いくら払えばよいだろうか」

武器屋主人「これならそこまでお金は取らないよ。それじゃ大切に預からせてもらうよ」

防具屋妻「よっこいしょ。はい、これがうちにある鎧だよ」

隣では防具屋の女性の人がたくさん鎧を持ってきた

ベル「うむ、感謝する。ふむ……………」

ベルは籠手や鎧を持つたりして観察している

マーズ「ベルさん、この兜とかベルさん向きだと思うぞ。近距離で戦うんだからよ」

マーズは頭を覆える兜をベルに渡した

ベル「兜か……。確かに悪くないのだが、視界が狭まるのが私としては少し」

防具屋妻「あ！それでしたらご心配いりませんよ。ほら、こちら目元と口元は開けられるんです。しっかり真横まで見れますし、口も出せるので息もしやすいですよ」

ベル「な、なるほど。それならば今の装備と変えてもいいかもしれん」

しばらくして

ベル「すまぬ、マーズ殿。マーズ殿からしたらつまらぬ場所であったな」

マーズ「いやいや、気にしないでくれ。ベルさんの観光なんだからベルさんの自由にしていいんだぜ。さて、装備も新調したし、次は」

その時

女性「ハア……。ハア……」

城門から息切れをした女性が走ってきた。その顔や服は少し汚れ

ている

ベル「む？マーズ殿、あそこの女性なにやら様子がおかしいぞ」

マーズ「本当だ。何かあったのか？」

マーズ達はその女性に近づいていく

マーズ「すみません、どうかされましたか？」

女性「あ……あの！私達旅人なんですけど！さっきそこで盗賊達に囲まれてしまっただけ！」

二人「!?」

女性「私の彼氏が困りなすてくれたんです！助けてください！」

マーズ「それは見過ごせない。俺が助けに行こう」

ベル「マーズ殿、私も僅かながら力になろう」

マーズ「ありがとう、ベルさん。すまないな、巻き込んでしまっただけ」

ベル「なに、困っている人を見過ごすほど落ちぶれていない」

女性「ありがとうございます！本当すぐそこの森なんです！」

マーズ「了解した。待っていてくれ」

お礼3

その後、盗賊達はマーズとベルによりあつという間に倒され、旅人の男性を助け出した

デルカダール城下町 広場

男性「ありがとうございます！助かりました！」

女性「私からもお礼を言わせてください。ありがとうございますました。彼を助けてくれただけでなく、私の治療までしてもらえるなんて」

マーズ「兵士だからな。困ってる人を助けるのが仕事だ。無事であった」

ベル「彼氏の方も女性の方を助けるために困になるのは勇敢だが、彼女の気持ちからすればあまりいい判断とは言えんぞ。残された方は不安で心配で仕方ないのだからな」

彼氏「そ、そうですよね…… すみません」

彼女「ありがとうございます、私の気持ちまで言ってくれて。この人の言う通り！本当心配したんだから！もうあんな事しないで！」

彼氏「はい」

夕方

観光の続きとして道具屋や図書館に行きゆつくりしていると、外は夕暮れ時になってきていた

ベル「おお、随分と時間が早いように感じるな。知らぬ内に本に夢中だったようだ」

マーズ「ベルさん、ずっと読んでたもんな。その本、そんなによかったのか？」

ベル「ああ、中々勉強になる。立ち回り方や人と魔物との戦いの構えの違いなど細かく書かれてある」

マーズ「なるほど。まだ強くなるのか？」

ベル「ああ、そうだ。私は強くなりたいのだ。女だから戦えないと決めつけるのも、後ろで何もせずただ見ているだけなのも嫌なのだ。そうしては守りたいものは離れていく。私も守りたいものがある。そのために戦うと決意したのだ。だから私はどこまでも強くなりたい」

ベルは夕日が沈む方を見ながら真っ直ぐ、強く言い切った

その瞳は光に満ちており、ベルの綺麗な瑠璃色の瞳に夕日のオレンジが混ざり輝いていた

マーズ「……………かつこいいな、ベルさん」

ベル「!?そ、そんな事はないだろう!マーズ殿こそ、戦いの時も仲間の兵士殿達という時もかつこいいではないか。強さも優しさも持ち合わせている。少々羨ましい」

マーズ「はは、そんな風に見えてたのか?それこそベルさんの買い被りだ。俺はベルさんみたいな強い決意は無いからな。そういう高い目標を掲げて必死に頑張る人は皆、かつこいいさ。バンも俺の中ではかつこいいやつなんだぜ」

ベル「バンが?……………そうか。私は魔物のバンの事しか知らない。人間のバンの事は知らないからな。そういえば兵士長なのだったな。魔物のバンと同等の強さだったな、さぞ強いのだろう。是非とも手合わせ願いたいものだ」

マーズ「バンは強いぞー。俺と組み手をやると大抵俺が防戦一方になるからな」

ベル「マーズ殿が防戦一方か!それは凄いな」

マーズ「かなりのスピードでかくとう技と槍を組み合わせてくるん

だ。魔法はまったく使えない代わりに接近戦を誰よりも得意とするんだ。まあベルさんの大剣はバンのかくとう技とは相性がいいからな。リーチのあるベルさんが有利に立ち回れるはずだぜ」

ベル「だが、それはバンも当然わかっているだろう。弱点なのだからな。対策があるはずだ。考えていたら戦ってみたくなくなった。マーズ殿、訓練場に行ってもいいだろうか」

マーズ「構わないが、バンは兵士長なだけあってまあまあ忙しいからな。戦えるかはわからないぞ。それとベルさんは平気なのか？そろそろ夜になるが」

ベル「宿は既に取つてあるのでな、心配はいらない。バンの用事がなければよいのだが」

マーズ「ま、それじゃあ城に戻るか」

ベル「ああ。マーズ殿、とてもよいホワイトデーだった。かなり楽しませてもらった。ありがとう」

マーズ「ふふ、またお礼を言われるのか。もういいって。俺もベルさんといろいろ出来て楽しかったしな」

ベル「感謝はいくらでも伝えないと伝わりにくいものだからな。そ

れに嫌な思いをするものでもないだろう?」

マーズ「まあな」

虫歯

それから四日後、デルカダール城

朝食場

ルナ「うつ……………」

全員でご飯を食べていると、突然ルナが口を押さえた

マルス「ルナ？どうしたの？」

ルナ「痛い〜」

マルティナ「大丈夫？唇でも噛んだの？」

デルカダール王「いや、押さえる場所は奥歯の部分。まさかルナ」

ルナ「歯が痛い〜。なんか噛んだらズキツてした」

ラーズ「ちよつと口開けてみる」

ルナ「……………やだ」

グレイグ「おそらく虫歯だぞ、ルナ。歯は毎日磨いていたか？お風呂の後にするようにしていたらう」

ルナ「……………」

ルナはグレイグの問いに顔を背けた

マルティナ「ハア……………。ルナ、この後お医者さんに診てもらおうわよ」

ルナ「やだ！ちよつと磨かなかったただけだもん！」

デルカダール王「だが、そのままでは美味しい料理も食べれないぞ。いいのか？このソテーはルナの好物であろう？」

ルナ「ほしい！おじいちゃん、ちようだい！」

デルカダール王「残念だが、虫歯のルナにはあげる事は出来ん。無事治ったらまた好きに食べられるぞ」

ルナ「えー！おじいちゃんの意地悪！」

ラーズ「歯を磨かなかったルナが悪いんだぞ。面倒くさがるなよ」

ルナ「私だけじゃないもん！マルスだって磨かない事多いもん！」

マルス「ブフツ！ちよ、ちよつとルナ！」

隣で何食わぬ顔で食べていたマルスもルナの発言に焦り始めた

マルティナ「………… マルス？」

マルス「な、なに？母さん。睨まないで、怖いよ。僕は痛くないよ！固い物だつて食べられるよ！」

マルティナ「口、開けてみて」

マルス「うっ…………。は、はい」

マルスは水を飲んだ後、恐る恐る口を開けた

マルティナ「…………… 右の歯、怪しいわね」

グレイグ「本当だ。マルス、お前もやはり汚れているぞ。お前もこの後ルナと一緒に医者に診てもらえ」

マルス「えー！」

ライス「まったく……。自分で出来るって言ってたから任せたのに、こんなんじゃない俺達がまた見ないとだぞ」

その後、マルスとルナの部屋 前

ルナは扉に鍵をかけ、閉じこもってしまった

ライス「おい、ルナ。痛いんだろ？早く治してもらえって」

ルナ「痛くないもん！」

ライスは扉の前でルナを説得させようとしていた。マルティナとグレイグは先にマルスを連れて医者に見せに行った

ライス「さつき痛がってたじゃないか。医者が嫌なのか？あの人は優しいじゃないか」

ルナ「痛い事するもん！私、知ってるよ！歯を抜くんでしょ！」

ライス「なんでそんな一部分だけ……。それはもつと虫歯が酷くなったからだ。今ならまだ大丈夫だが、放っておくと本当に歯を抜く事になるぞ。凄く痛いぞ、嫌なんだろう？」

ルナ「大丈夫だもん！」

ラース「まったく……。反抗期ってやつか？」

その頃、医療部屋

マルス「あー……」

医者「あー、本当ですね。軽い虫歯です。まだ小さいので痛みとかはないと思いますけど、後々成長すると痛みも出てきます。早めに発見できてよかったです」

マルティナ「そうですか、歯磨きをサボっていたみたいで。まあ当然ですよね」

医者「はは、そうなんですか？マルス様、今夜からしつかりと磨いてくださいね。ご飯食べれなくなるし、酷いと話せなくなりますよ」

マルス「ひいひやだ！（嫌だ！）」

医者「そうですね。私もそんな事になりたくないですので、しつかり磨いてますよ。マルス様もまた歯磨きしてくださいね。こちら、歯に塗る薬と念のため痛みがやってきた時のための痛み止めです。痛み止めはまだ使わなくていいですが、もし痛がるようでしたら飲ませてください」

マルティナ「ありがとうございます。それと……実はルナも虫歯

でして」

医者「え！二人揃って虫歯に！昔の風邪の時といい、本当仲良しですね〜」

グレイグ「いや、なにもこんなものまで同時になってほしくはなかったがな」

医者「ふふふ、グレイグ様のおっしゃる通りですね。まあなつてしまったものは仕方ありません。まだ小さいうちは虫歯になりやすいですし。ルナ様はどちらに？」

マルティナ「自分達の部屋に閉じこもっちゃって。朝、歯を痛がってご飯を食べれなかったんです。だからルナの方がマルスより酷いはずなんです」

医者「あく、既に痛みも出ていましたか。それはまた……。ルナ様は大丈夫なのですか？」

グレイグ「ラーズに説得させてもらっているのだが、この調子だと苦戦していそうだ。そろそろ反抗期なのかもしれない」

医者「もうそんな年齢ですし、女の子は男の子より少し反抗期が早いですから普通ですよ。少し様子を見に行ってください」

マルティナ「迷惑かけてすみません、お願いします」

マルスとルナの部屋 前

医者「ラース様、お話はお伺いしましたよ」

ラース「あ、すまない。わざわざ来てくれたのか。ほら、ルナ！医者が来てくれたぞ」

医者「ルナ様ー、歯が痛いとお聞きしましたよ。大丈夫ですかー？」

ルナ「痛くないよ！お母さん達が嘘言ってるの！」

ラース「いや嘘じゃないからな！」

医者「あはは、なるほど。今ルナ様は歯が痛くないという事で大丈夫ですか？」

ルナ「うん！」

医者「わかりました。それではもし痛くなるようでしたら遠慮なく私にご連絡くださいね」

ルナ「そんな事ないもん！」

ラース「いいのか？絶対痛いはずなんだが」

医者「よくはありませんが、本人が強く嫌がっているのであまり刺激するわけにもいきません。痛みの強さがどれくらいかはわかりませんが、普通に喋れて叫べるあたりまだ大丈夫だと思います。」

マルス様は小さい虫歯でした。痛みはまだありませんし、歯磨きするようにも言いましたのでひとまず大丈夫かと。念のため痛み止めも渡しましたので、ルナ様にはそちらを飲ませていただければ多少痛みは和らぐはずです。時間稼ぎですが、その間にルナ様が来ていただければと思います」

ラース「なるほど、わかった。ルナがまさかこんなに嫌がるとは思わなかったんだ。兵士達の事もあるのに、迷惑かけて悪いな」

ラースは医者にペコリと頭を下げた

医者「いいえ、そんな事ありませんよ。これくらいどうって事ありません。それよりもまあ……兵士さん達の方が、というよりバンさんの治療と蘇生の回数が一向に減らなくて……。楽しそうではないのですが……ちよつと私個人としては……」

医者も少し苦笑いしている

ラーズ「すみません……………。後で副長を叱っておきますので」

ラーズはそれを聞いて更に深く頭を下げた

その後、玉座の間

マルズによりルナが半ば無理矢理連れてこられていた

ルナ「マルズー！離してっば！」

マルズ「大丈夫！話すだけだから！」

ラーズ「あー、ルナ。今はもう医者に行かないから落ち着け」

ルナ「……………」

ルナはそれを聞くとぶすつとした顔で暴れるのをやめた。顔は横になっているブレイブ達を見ている

マルティナ「ルナ、どうして医者に行きたがらなかったのかだけ教えて」

ルナ「…………… 言わない」

マルティナ「怒らないから」

ルナ「言わない！」

マルティナ「そう……。今は歯は痛くない？見せなくて本当に大丈夫？」

ルナ「痛くない！お母さん、なんでそんなに私を医者に行かせたがるの！」

マルティナ「だってルナが歯が痛いつて」

ルナ「もう大丈夫だもん！」

ラース「ルナ、喋れるだけでご飯を食べるのは大変なんだろう？」

ルナ「お父さんもいつつもお母さんの味方するんだから！放つてよ！」

ルナは走って玉座の間から出ていった

マルス「あ！ルナ！」

マルスが急いで後を追う

ルナ「来ないで！マルス！」

廊下からルナの叫び声が聞こえた

マルティナ「…………… ちよつとしつこかったかしらね。嫌われ
ちやつたわ」

ラーズ「だな。荒れてるみたいだ、夕食までに戻ってくるだろうか。
それにしても、ルナも大概強がりだったたり強情だな。親に似て」

マルティナ「自分の事よね？」

ラーズ「ん？そう思うのか？」

マルティナ「…………… ラーズだって強情な時あるわよ」

ラーズ「いやいや、マルティナの方が多いだろ」

グレイグ「(二人とも強情ですから受け継がれて当然です)」

グレイグは二人の言い争いに口を挟む気にはなれず、心の中で静かに
呟いた

虫歯2

その頃、グラジー

昼の仕事が終わり、片付けをしていた所にルナがやってきていた

マヤ「どうしたの？ルナ。泣きそうな顔してるけど」

ルナ「マヤお姉ちゃん……………」

ルナはマヤの腕を軽く掴んでいる

マヤ「……………ビルさん」

ビル「ああ、大丈夫だ。俺達でやっておくよ」

マドリー「ほら、マヤちゃん、ルナちゃん。この部屋使っくいいわ
「よ」

マドリーは自分の部屋に二人を招いた

チャム「ルナちゃん、大丈夫？」

ルナ「う、うん。ちよつといろいろあつて」

テルマ「チャムー、テーブル拭くから手伝えー」

チャム「あ、はい。また後でね、ルナちゃん」

その後

ルナはマヤに今日の出来事を伝えた

マヤ「そつか、それで怒って出てきちゃったんだ」

ルナ「うん。少し痛いけど、まだ大丈夫だもん。それに……磨
かなかった私が悪いんだからお母さん達が構う必要ないのに」

マヤ「ふふ、ルナは自分が悪い事をしたって自覚してるんだね。偉
いと思うよ」

ルナ「だって昔からお母さんとお父さん、グレイグさんにおじい
ちゃんにも歯を磨けって言われてたもん」

マヤ「大事だね。ルナはさ、構われる事が嫌だったの？それとも虫
歯を医者に見せるのが嫌だったの？」

ルナ「……構われるのはそこまで嫌じゃない。お母さん達基本
優しいから。たまに怖いけど。だから今回は悪い事をしたから怒ら
れると思ってたの。だから言わなかった。でも、お母さん達は全然怒
らなかった。

よかったと思って医者に見せたくないって言ったら少し怒り始めたの。意味わかんないよ。虫歯を治すのって痛いんでしょ?そんな所に無理矢理連れて行くこうとするお母さん達がわかんないの」

マヤ「私は虫歯になった事ないからわからないな。どんな風になるの?」

ルナ「歯に穴があくんだった」

マヤ「ええ!?それになっちゃったの!?ちよ、よく見せて!!大変だよ!」

マヤは大慌てでルナの口を開けようとした

ルナ「むー、まだ大丈夫!」

マヤ「だ、だって穴があくって」

ルナ「まだあいてないもん!」

マヤ「そうなの?でも、放っておくと大変だよ」

ルナ「知ってる」

マヤ「じゃあどうして行かないの?」

ルナ「痛い嫌だから」

マヤ「……………今も痛いんじゃないの?」

ルナ「これくらい我慢できるもん」

マヤ「もつと酷くなったらもつと痛くなるよ?」

ルナ「でも抜かれるのも嫌だもん」

マヤ「歯が抜かれちゃうんだ。それは痛そう」

ガチャ

マドリー「大丈夫よ、ルナちゃん。まだ歯を抜く事まではしないわよ」

手を拭きながらマドリーが入ってきた

マヤ「あ、マドリーさん」

マドリー「ふふ、虫歯になったの？ルナちゃん。でも話せるって事はそこまで大きくなつてはないのね」

ルナ「マドリーさんも知ってるの？虫歯」

マドリー「ええ、もちろん。私、ちよつとだけなら人間の医療知識があるんだから」

マヤ「そうなんだ、知らなかった。じゃあ虫歯についても知ってるんだね。どんなものなの？私知らなくて」

マドリー「しばらく歯を磨かなかつたりしていると、歯に食べかすや汚れが付着し続けるの。その汚れは歯の中にある菌の最高の餌なのよ。その菌が歯を攻撃して、歯に穴が空き始める。その穴を更に菌が攻撃して、いずれ歯を貫通する。」

そこまで進んでしまったらもうその歯は使い物にならないわ。歯を抜くという方法しか治療がなくなるわね。でも、それより前。つまり、菌が攻撃し始めた時や攻撃する前なら対処法はいくらでもあるわよ。ルナちゃんはまだきつと攻撃が始めたての頃。まだ治るわ、大丈夫」

ルナ「そ、そうなんだ！詳しいんだね、マドリーさん！お医者さんみたい！」

マヤ「へー、歯を抜くつてのは最終的な治療なんだ。ほら、ルナ。まだ大丈夫だよ、お医者さんに見せにいこう」

ルナ「……………やだ」

マドリー「あら、どうして？歯を抜きたくないんでしょ？」

ルナ「私…………… 出て行く時にお母さんとお父さんに放つといてつて言った。お母さんとお父さん怒ってるよ、きつと。私のために色々してくれてたのに」

マヤ「大丈夫。姉ちゃんと兄ちゃんがそんな事で怒るはずないよ。きつとルナの帰りを待つてるはず」

ルナ「…………… 本当かな。怒られないかな…………… 怖いよ」

マドリー「…………… よし。それじゃあルナちゃん、今日はここに泊まっていって。お姉さん達がマルティナ様達の様子見てくるから。それで怒っていたら宥めておくし、怒ってなかったら明日謝りに行きましょう」

ルナ「いいの？」

マドリー「ええ、もちろん。でも、もし怒ってなかったらルナちゃん
んは自分から謝るのよ？だって、悪い事したと思ってるんでしょ？」

ルナ「う、うん。わかった」

マドリー「それじゃあ決定ね」

夕方　デルカダール城　大広間

マヤ「ただいまー」

グレイグ「む、よかった。帰ってきたか、マヤ。って、マドリーか」

グレイグが待っていた。少し焦ったような表情をしている

マドリー「お世話になっております、グレイグ様。少しお話したい
事があります」

グレイグ「……………　ルナがグラジーに行っていないだろうか。城下
町にはいないようだな」

マドリー「はい、予想通りですよ。ルナちゃんがしょんぼりとした
様子でやってきました」

グレイグ「す、すまない。迷惑かけてしまったな」

マヤ「大丈夫だよ、ルナから何があったのかは聞いてるから。姉ちゃん達怒ってる？怒ってないよね」

グレイグ「姫様達か？怒ってはいないぞ。心配はしているがな。もういつも帰る時間を過ぎているのでな。もしや何かあったのではと思っていたが大丈夫のようだ。グラジーにいと聞けば安心するだろう」

マドリー「ふふ、やはりそうですよね。ルナちゃんを落ち着かせるためにこちらで一日お預かりします。そのご報告です」

グレイグ「そうか、度々迷惑かけてすまない。多少わがままな所があるからそこは叱ってくれて構わないからな」

マドリー「あら、そんな所もあるんですね。可愛らしいですよ。明日の朝、ルナちゃんを連れてまた来ます。その時にお医者さんにも行けるようにしておこうと思いますのでご安心ください」

グレイグ「そうか、早い所行かせた方がいいと思っていたのだ。その助けはありがたい」

マドリー「いいえ、これまでの恩返しに少しでもなればと思つて

ますので。それではまた明日。じゃあね、マヤちゃん」

マヤ「うん、また明日ー。お疲れ様でした」

夕食時

マルティナ「よかったわ、グラジーにいてくれて」

マヤ「うん、だから大丈夫だよ。ルナ、二人が怒ってないか心配してた」

ラーズ「別にあれくらいで怒るわけないのになあ」

マルティナ「そうね。まあルナからしたら怒らせたと思ったのかも
しれないわ」

デルカダール王「マルス、今夜はしっかり歯を磨くのだぞ。なんなら、わしが一緒に磨いてやろうかの」

マルス「えー……自分で出来るよ。でも、久しぶりだからたまにはいいかも。じいちゃん、一緒に磨こう」

デルカダール王「ああ、そうだな。一緒にやるかの」

虫歯3

その夜、グラジー

マドリーとチャムの部屋

ルナ「ど、どうだった？マドリーさん。お母さん達怒ってた？」

マドリー「大丈夫よ、ルナちゃん。どこに行ったのか心配してたけど、怒ってなかったわ。グラジーにいとわかって安心してたわよ」

ルナ「よかった……」

マドリー「お母さん達に怒られなくなかった？」

ルナ「…… うん。でも、言う事聞かなかったから怒られるかなって思ってた」

マドリー「じゃあ今ルナちゃんは悪い事したと思ってるのね。どうして言う事聞かなかったの？」

ルナ「…… 痛い事されなくなかったから」

マドリー「前にお医者さんに痛い事されたの？」

ルナ「…………… されてない。でも、歯を抜くと思ってたから嫌だったの。それを無理矢理やらせようとするお母さん達も嫌だったの」

マドリー「ふふふ、なるほど。じゃあそんな事してくるお母さん達は嫌い？」

ルナ「…………… ううん、好き、大好き。優しいし、かっこいいし、いつも私達のために頑張ってくれてるの知ってるもん。私の自慢のお母さん達」

ルナはそれを言いながら目からどんどん涙が出てきている

マドリー「あら、大変。ほら、泣かないで大丈夫だから。嫌な質問しちやっでごめんね。ルナちゃんがお母さん達をどう思ってるのかはよく伝わってきたわ。きつとマルティナ様もラーズ様もグレイグ様もデルカダール王様もルナちゃんと同じよ。ルナちゃんが大好き、もちろんマルス君もね。

二人はマルティナ様達にとって宝物よ。だって、マルティナ様達の子どもなんだからね」

ルナ「うん……………」

マドリー「親つてのは子どもに痛い事はさせたくないと思ってるはずよ、極力ね。でもどうしても痛みを伴ったり、そうしないと学べな

い事があるの。その時は親も心を鬼にして、子どもにその経験をさせるわ。

でも、それは断じてルナちゃんを嫌いになったからとかじゃないの。きつとルナちゃんが感じる痛みと同じくらいマルティナ様もラース様も皆痛みを感じるのよ。その痛みを我慢して皆、ルナちゃんを信じてるの。だからルナちゃんも頑張らないとね」

マドリーはルナの頭を撫でながら優しく話している

ルナ「……………」

ルナはしばらく黙り込んだ後

ルナ「ん！」

自分の目を強く擦って涙を拭うと

ルナ「私、明日謝る！それでお母さん達に大好きって伝えて、自分でお医者さんに見せに行く！大好きなお母さん達を困らせたくないから！」

少し赤く腫れた目をしながら、真つ直ぐ前を向いて宣言する

マドリー「ええ、その勢よ、ルナちゃん。私も応援してるからね」

次の日の朝、デルカダール城　大広間

ルナ「お母さん、皆！ただいま！」

ルナが走りながら帰ってきた。大広間には全員がルナの帰りを

待っていた

マルティナ「ルナ！お帰りなさい！」

マルティナのしゃがむとルナが飛び込んできた

ラース「お、家出娘が帰ってきた」

デルカダール王「元気そうだなによりじや、ルナよ。グラジーは楽しめたか？」

ルナ「うん！」

グレイグ「迷惑かけたな、マドリー。お礼といっではなんだが酒とつまみだ。よかったらビルと二人で楽しんでくれ」

マドリー「まあ！ありがとうございます、グレイグ様！大した事してないのにお礼なんて。気にしなくてよかったですよ」

ルナ「あ、あのね、お母さん！お父さん！グレイグさん！おじいちゃん！」

ルナはマルティナの胸から離れると、それぞれの顔を見た

四人「ん？」

ルナ「私、皆の事大好きだよ！全然嫌いなんかじゃない、自慢の家族だからね！」

四人「……………」

ルナの突然の発言に四人とも少しポカンとしている

マドリー「ふふふ」

マルティナ「ええ、もちろんよ！ルナは大事な家族よ。私もルナが大好き」

マルティナは再びギュツとルナを抱きしめた

ラース「はは、どうした？突然。ルナを嫌いだなんて言ったか？」

デルカダール王「嫌いになるわけがなかろう」

グレイグ「ありがとう、ルナ。俺もルナが大好きだぞ、なんたって家族なんだからな」

ラース達もそれぞれルナの頭を撫でている

ルナ「私、お医者さんに見せてくる。それでお母さん達に安心してもらう」

マルティナ「ルナ……。ええ、ありがとう」

マルティナはルナを下ろすとルナは医療部屋に走っていった

デルカダール王「また一つ大人になったのう、ルナ」

グレイグ「昨日まであんなに嫌がっていたというのに。本当にありがとう、マドリー。何をしてくれたのかはわからないが助かった」

マドリー「何もしてませんよ。ルナちゃんが自分から言ってくれました。大好きなお母さん達を困らせたくないって」

ラーズ「そうか。はは、ああやって真っ直ぐ伝えてくれるとやっぱり嬉しいよな」

マルティナ「ふふ、伝えると決めたら真っ直ぐ伝える。ラーズみただったわ。やっぱりルナはラーズ似だわ」

ラーズ「そ、そうか？」

マドリー「それでは私はここで失礼させていただきますね」

デルカダール王「ああ、助かった。ありがとう」

その頃、医療部屋

医者「おやおや、ルナ様。おはようございます」

ルナ「おはよう、お医者さん。あのね、私の虫歯治してください！」

ルナは綺麗に頭を下げた

医者「おや、自分お一人でこられたのですか？私はてっきりマルティナ様やラーズ様がご一緒だと」

ルナ「うん！もう困らせたくないから！」

医者「ふふ、そうですね。では、その虫歯とやらを見せてください。お口を開けて」

ルナ「あー……」

医者「ふむふむ………。うーん。ルナ様、これは薬だけでは治りが悪そうです。治療が必要ですが大丈夫ですか？」

ルナ「いいよ！痛い？」

医者「ちよつとだけですよ。出来るだけ痛くならないように私も頑張りますのでルナ様も頑張っていただけると幸いです」

ルナ「わかった！私も頑張るね！」

医者「はい。それでは少々お待ちください」

その後ラース達にもルナの治療が報告され、医療部屋前ではデルカダール王、ブレイブ、コロが常にウロウロしていた

コロ「クウく……」

コロは医療部屋の前で心配そうな顔をして扉を見つめている。その尻尾はさがり、どこかしよんぼりとしている

デルカダール王「コロもルナが心配じゃろう。わしも心配じゃが、きつとルナなら大丈夫だと信じておる。しかし、少しもルナの声が聞こえないのう」

ブレイブ「ガウ……」

デルカダール王の隣でブレイブも少し元気なさそうに鳴いた

ガチャ

三人「！」

ルナ「あ！おじいちゃん、コロ、ブレイブ！待ってたの？」

治療が終わったのかルナが元気そうに出てきた

デルカダール王「おお、ルナ。終わったのか？痛くはなかったか？よく我慢したのう」

ルナ「全然痛くなかった！」

医者「おやおや、デルカダール王様。ブレイブ君にコロ君まで。無事治療は終わりましたよ。後はマルス様と同じ薬を塗っていれば大丈夫です。あ、ルナ様。もちろん今日からまた歯磨きをしっかりとしてくださいね」

ルナ「はい！」

コロ「キャン！」

ブレイブ「ガウガウ」

コロとブレイブも嬉しそうにルナの近くを回っている

ルナ「コロもブレイブも心配してくれたの？ありがとう！早くお母さん達にも報告しよう！」

三人で朝食場に走っていった

破綻した関係

それから一ヶ月後、デルカダール城

訓練場

ラースとダバンが真剣な顔つきでやってきた

バン「あ、師匠！と、ダバン。どうされましたか？」

ラース「バン、兵士を全員呼び出すんだ。見習いも含めてな。重要な話がある」

バン「え？わ、わかりました！少々待っててください！」

しばらくして

バンの号令により、兵士全員が集められていた

ラース「よし、全員揃ったみたいだな」

バン「ダバン、なんでそっちにいるんだよ。こっちに並べよ」

ダバン「……………」

ダバンは顔を暗くしてバンの問いを無視した

バン「ダバン？」

ラース「ダバンから重大な発表がある。しつかり聞けよ」

ラースはダバンの背中をそつと押して前に出させた

ダバン「……………はい」

ダバンは深く深呼吸する

深呼吸が終わると真つ直ぐ兵士達を見た

ダバン「皆、突然ですまない。俺、ダバンはデルカダール兵士を辞めさせてもらう事になった」

バン達「!!？」

見習い達「え」

ダバン「今までたくさん世話になった。俺はもうここからいなくなるけど、皆の事絶対忘れねえから。ありがとう」

ラース「と、いうわけだ」

ベグル「……………チツ……………」

ギバ「嘘…… だろ」

ガザル「…………… おいおい」

マーズ「あの時のお金はそういう意味が」

ロベルト「マジかよ、ダバン。いなくなるのか」

ラーズ「言いたい事はたくさんあるだろうな。ダバンはあと五日でいなくなる。この数日は忙しくないから極力仕事は回さないようにしておく。ダバンと過ごす最後の時間だ、楽しむんだぞ。じゃあな」

ラーズは一足先に戻っていった

ダバン「……………」

ダバンは少し顔を歪めて下を向いている

ロベルト「あー、まあなんだ。ビックリしたけどさ、理由があるんだろ？多分ずっと前から決まっていたんだろうし、言わなかった理由とかもさ」

ロベルトは苦笑いしながらダバンの肩に優しく手を置いた

ダバン「あ、ああ」

バン「…………… ねえ」

バンがボソリと呟いた

全員「？」

ダバン「バン？」

バン「俺は認めねえ!!!」

バンは発表後からずっと黙っていたが、ついに感情を爆発させたよ
うな怒鳴り声をあげた。その怒号は訓練場全体に強くビリビリと響
いている

ダバン「バン…………… 俺は」

バン「なんで黙ってた!!なんで突然になってこんな事言い始めた!!
辞めるってなんだよ、昔にした俺達との約束はどうなったんだよ!!!」

バンは大声でまくしたてるように叫び続ける

ダバン「すまん……………。だけど、俺にだって」

バン「信じられねえよ……………。ずっと…………… 仲間だと思っていた
のに……………。そう思ってたのは俺だけで、お前の中じゃそんな事

なかったって事かよ！」

ダバン「違う！俺だっけとずっとお前らと」

バン「嘘つけ!!そうじゃなきゃこんな酷え事するわけねえだろ!!お前なんか信頼するんじゃないかった!!お前みたいなのやつを仲間だと思うんじゃないかった!!ダバンなんか大っ嫌いだ!!」

ダバン「!!」

バンの言葉にダバンは酷く傷ついた顔をした

バン「あ………………。知るか！」

バンはしまったというような顔を見ると訓練場から走って出ていった

全員「……………」

重い空気だけがその場に残り続けていた

ベグル「……………バンの言い分は最もだ。あいつの性格上こうなる事はお前にもわかっていたはずだろう。何故ずっと黙ってたんだ」

ダバン「……………言い出しづらかった。約束を破る事になるし、バンが止めないわけがねえ。でも、最悪兵士長の許可がなくともラーズ将

軍とマルティナ様からの許可があれば兵士は辞められる。これが最善の手だと思った」

ベグル「は？これが最善の手だあ？ふざけた事言ってるなよ、クソ野郎」

ベグルはダバンに近づいていく

ギバ「あー、待て待て！お前まで喧嘩モードになってどうすんだって！ダバンにだってきつと考えがあるんだからさー！それを聞いてから話し合おうぜ！」

ギバが急いでベグルとダバンの間に入った

マーズ「そうだな。ダバン、理由を教えてください。どうして辞めようなんて思っただんだ？」

ダバン「……ケニーの事だ。前に俺の弟がユグノアで盗賊として捕まったのは話したよな。あの時、バンにケニーと一からまた家族として始めていけばいいと言われて納得したんだ。」

俺はもう一度ケニーと家族に戻りたい。兄として、またあいつを守ってやりたい。そう思えたんだ。」

ベグル「それで？」

ダバン「そ、そのためにユグノアに行こうと思ったんだ。だからこ

こを辞めて」

ベグル「んな事聞いてねえ。家族に戻りたい？生温い事言っ
てんじゃねえよ」

ギバ「お、お前！立派な事だろ！なんて事言うんだ！」

ベグル「こんな軟弱者にそんな大層な事出来るわけねえだろ！お前
みたいな弱いやつには不可能だ！」

ダバン「!!な、なんでだよ！俺はちやんと考えてケニーと」

ベグル「うるっせえなあ!!無理だっけって言うてんだろが!!」

ダバン「お前が決めるなよ！なんでそんな事がわかるんだよ！」

ベグル「わかるに決まってるだろうが!!てめえがずっと弱いままで
変わった弟を戻せるわけがねえんだからよ!!」

ダバン「俺は弱くねえ!!」

ベグル「弱えよ!!この中の誰よりも！見習い達なんかよりもずっと

お前は弱え!!」

ダバン「なんだと……」

二人は互いに睨み合い、今にも取っ組み合いになろうとしている

ロベルト「待て待て！ダバン、落ち着くんだ」

ガザル「ベグル！もつとなんか言葉あるだろ。そんな攻撃的になるなつて！」

ロベルトがダバンに、ガザルがベグルの前に出て場を宥めようとする

ギバ「ダバン、ベグルのあれはちよつと違って。あー、なんだ。勘違いで」

ベグル「勝手な事言っつてんじやねえぞ、ギバ！勘違いなんかじゃねえよ！」

ベグルはガザルを無視して進んでいく

ガザル「や、やめろつて言っつてんだろ！」

ガザルはベグルを背中から取り押さえようとする

ギバ「ベグル！ダバンだつて今つらいんだぞ！そんな酷え言葉かけるなつて！励ましてやれよ！」

ベグル「ああ!? チツ! ギバもよー、いつもいつもヘラヘラしてよ、
場を盛り上げてればいいと思ってるなよ!」

ギバ「な、なんだよ…… それ。今関係ねえだろ! ベグルこそそう
やって短気になってこっちは迷惑してんだよ!」

マーズ「やめろって!! ギバまで雰囲気呑まれるな! 三人とも落ち
着け! 深呼吸だ!」

ベグル「チツ! やってられっかよ」

ガザル「うおっ!?!」

ベグルは背中で取り押さえていたガザルを投げ飛ばした

ドン!

ガザル「ガハツ!」

ガザルは壁に叩きつけられ、ベグルはそのまま訓練場から去って
いった

ロベルト「大丈夫か? ガザル」

ガザル「ゲホッ！あんの野郎、思いつきり投げやがって」

ダバン「……………」

ギバ「……………」

訓練場全体にはもう取り返しのつかないほど嫌な空気で満たされていた

ロベルト「………… あー、一旦このメンバーで訓練やるぞ。ダバンとギバは各自でやっててくれ。俺とガザルとマーズで見習い達を教えるからよ」

二人「おう」

訓練終了後

ダバンとギバもそれぞれ訓練が終わると素早く訓練場から出ていき、残ったのはロベルトとマーズとガザルになった

ロベルト「やばいぞ、四人の仲がバラバラになっっていく」

ガザル「やばいなんてもんじゃねえ、緊急事態だ。あの四人がこんなマジで喧嘩した事今までねえぞ」

マーズ「どこをどうしていけばいいか……………。俺達だつて別にダ

バンがいなくなる事をよしとしたわけじゃねえのによ」

ガク「あ、あの、ロベルトさん、マーズさん、ガザルさん」

真剣に話し合おうとしていた三人にガクとジール、ジャスが話しかけてきた

ロベルト「どうした？」

ジャス「バンさん達、大喧嘩しちやっただじやないですか。やっぱり仲直りさせた方がいいと思うんですよ」

ガザル「だよな。あんな雰囲気はずっと続くのは俺だって御免だ」

ジール「ですよね。だからさつき俺達で意見を出して、仲直りさせるにはやっぱり四人をよく知る三人じゃないと駄目だって思ったんです」

マーズ「お、おう。まあ確かにガク達よりは付き合い長いけどよ」

ガク「なので！三人にはバンさん達の仲直りに専念してもらいたくて！でも、俺達の訓練があったり見回りとかであまり動けないですよ。だから俺達で出来る限り分担して、訓練は俺達三人が教えられる範囲で。」

見回りは前に教えてもらったやり方で外と魔物調査、城下町の見回りに見張りもやります。極力三人にお仕事がいかないようにするんで、バンさん達を仲直りさせてあげてほしいんです！」

三人「お願いします！」

ガク達は頭を下げた

ガザル「お、お前ら……」

ロベルト「わかった。だが、無理はするなよ？何かあったらすぐに連絡するんだぞ」

三人「はい！」

マーズ「さて、責任重大だな」

交わした約束

その後、バンの部屋 前

マーズ「バン、いるんだろ？」

バンの部屋の前の扉は鍵がかけられ、開かないようになっていた。中からは物音一つしないが、バンの気配を感じる事は出来る

マーズ「ダバンの突然すぎる発表に驚くのは当たり前だし、受け入れるにも時間がかかる。俺だって…… まだ受け入れられない。

でも、それでも少しずつ受け入れていかなきゃいけないと思うんだ。そして、それはお前が一番受け入れなきゃいけないとも思っている。なあ、もう一度ダバンと話し合ってみないか？何か変わるかもしれないぞ」

マーズは中にいるバンに向かって話しかける

しかし、中からはなんの返事も返ってこなかった

マーズ「……………落ち着いたら考えてみてくれ」

マーズは内心ため息をつくときバンの部屋から離れていった

その頃、ベグルの部屋

ベグル「……………んだよ」

ベグルは書類を書いているように見えるが、ペンは逆向き、紙も逆さまである事に気づいていないようだ

ロベルト「…………… お前も結構わかりやすくなるんだな。じゃなくて、落ち着いたか？」

ベグル「…………… 落ち着いたように見えてんのか？」

ロベルト「全く。まあそうなるか。バンとベグルとギバとダバンは俺達よりずっと長く一緒にいたんだもんな。俺も昔、騒ぐお前達を遠くから見ていたから知っている。ベグルもバンと同じでダバンに裏切られたと思ってるのか？」

ベグル「別に」

ロベルト「じゃあなんであんなに怒ってたんだ？」

ベグル「おい、ロベルト」

ベグルは突然ロベルトを鋭い眼光で睨みつけながら、低い声を出した

ロベルト「な、なんだよ……………」

ロベルトもベグルに凄まれて少し怯みながらも、反応を返した

ベグル「まさかとは思うが、あの軟弱野郎と仲直りしろとか言い出すんじゃないだろうな？」

ロベルト「！お、大雑把に言うとうそだ。ちゃんとベグルの考えとかも聞いて、そこから」

バン！！

ベグル「出ていけ」

ベグルは机に強く手を打ちつけた。その衝撃で持っていたペンが二つに折れた

ロベルト「い、嫌だ！ダバンはあと数日でいなくなるんだぞ！お前だつてダバンとこんな不穏な別れは」

ベグル「出ていけと言った」

ベグルは置いてある斧をロベルトに突きつけた。ロベルトの話も聞かないあたり何を言つてももう無駄のようだ

ロベルト「……わかったよ。明日、もう一度来る。今夜までに落ち着いて考えをまとめてくれ」

ロベルトは部屋から出ていった

その頃、バルコニー

ギバ「だからよー、俺だつてダバンがいなくなんのは信じられねえし、嫌なんだよ！でも、それよりもバンとベグルだろ！あいつらが大荒れするなんてダバンからしても予想通りだったはずだぜ！なのに、

なんでダバンはそれを放置してたんだか」

ガザル「じゃあダバンにこの後聞きに行こうぜ。俺も気になるからよ」

ギバ「……………それはやだ」

ガザル「あ？なんでだよ」

ギバ「……………今、バンとベグルとダバンとは話したくねえ」

ガザル「そんな事言ってる場合じゃねえんだよ。このままだとお前ら、ダバンと喧嘩したままだぞ！」

ギバ「わかってるよ、そんなの!!」

ギバは突然大声をあげた

ガザル「!じゃ、じゃあなんで」

ギバ「ガザルやロベルトやマーズにはわかんねえよ。俺達四人はある約束してたんだ。それが破られたショックやダバンの隠れた判断に気づいちまったから、ダバンとは話したくねえ。このまま話したら俺だって……………怒りのまま大暴れする自信がある」

ギバが持つている槍の柄からはミシミシと激しい音が鳴っている。ギバの顔は驚くほど落ち着いているように見えるが、その何も映していないような瞳の奥からは煮えたぎるほどの怒りが見てとれる。その顔はガザルが今まで見てきたギバのどの顔よりも怒りに満ちているのがわかる

ガザル「ギバ……………」

ギバ「ふう……………。話した事あったっけか？俺達四人の誓いのこと」

ガザル「い、いや、少なくとも俺は知らねえ」

ギバ「そっか。ん？」

ガチャ

マーズ「ガザル、ギバとどうなった？」

ロベルト「おお、まだギバは落ち着いて話せたみたいだな」

マーズとロベルトが入ってきた

ギバ「なんだ、やっぱり分担してたんだな」

マーズ「まあな。予想はしてたが、バンは全くの無反応」

ロベルト「ベグルも勘づいて追い出されちゃったんだ」

ガザル「今、ギバがバン達との誓い？ってやつを話そうとしてくれてたんだ」

ロベルト「誓い？ああ、バンがさつき訓練場で叫んでいた約束の事か？」

マーズ「俺達はわからねえんだよな」

ギバ「だよな。ずっと前の事だし、思い出す必要もないくらいにはなってたんだがな」

ギバは遠くを見ながら話し始めた

バン達がまだ見習い兵士の頃

夕方、デルカダール城下町

バン、ベグル、ダバン、ギバの四人は城門にもたれかかりながら水を飲んで休んでいた。今まで城門前で模擬戦をしていたため、四人からは大量の汗が出ている。その様子を綺麗な夕陽が照らしていた

バン「づつがれだく……………じにぞく」

バンは仰向けになって倒れた

ギバ「よくあんなに連戦出来るよな、バンとベグルは。俺、そんなに体力続かねえよ」

ベグル「しつこいだけだ、この馬鹿は。もつと頭使いやがれ。闇雲に突っ込んできたって無理に決まってんだろ」

バン「はくい」

ダバン「ほーら、水。バンも飲んでけ。脱水症状で倒れるぞ」

ダバンはバンの目の前に水が入った筒を差し出した

バン「へへ、サンキュー、ダバン……………くー！疲れた体に染み渡るぜ！」

ベグル「うるせえ、黙って飲め」

ギバ「おっさんみてえだぞー」

バン「なんだよ！人が気持ちよく飲んでたつてのに！まあいいや、なあベグル！俺、今日どうだったよ！昨日とは戦法変えたんだぜ！」

ダバン「あ、確かな。昨日はあんなに剣だけだったのが足の攻撃が組み立てた」

ベグル「あんなんやれて当然だろ。お前らもだ。武器ばかりに頼ってたって隙が丸わかりだ」

ギバ「はは、相変わらずベグルは厳しい意見だな」

バン「で、でもよ！いい感じに攻撃を繋げてただろ？」

ベグル「…………… まあ、そうだな」

バン「だよな!!しかも聞いたか、ギバ、ダバン!あのベグルが俺の事褒めたぞ!!」

ベグル「ハア!?何勘違いしてやがる!」

ギバ「よかったじゃねえか、バン!ベグルから許しが出たぞ!」

ダバン「褒められたのかどうかはわからねえが、まあ評価してもらえてはいたな。よかったな」

ベグル「違うわ！大体、攻撃の繋ぎを意識しすぎなんだよ！そのせいで足が来るって丸わかりだし、威力もねえ！まだ何もしねえで避ける動きをした方がいい！」

バン「はい！」

バンはニコニコしながら元気に返事をした

ベグル「チツ!!」

バン「でもよ、ベグルと一緒に訓練してくれるようになってしばらく経つけど俺、前より明らか強くなってきていると思うんだぜ」

ギバ「そうだな！俺も前より筋トレ増やしたり、体の動かし方変えて大分マシになってきたと思う！」

ダバン「俺もベグルのアドバイスのおかげで片手剣に自信が持てるようになってきたんだ。ありがとな、ベグル」

ベグル「くくく！お前ら、うるせえよ!!」

バン「あれ〜？ベグルさん、顔赤くね？耳も真っ赤だぜ」

ベグル「夕陽のせいに決まってるだろうが！」

バン「デレた、デレた」

ベグル「ふん!!」

ゴン!ゴン!

ベグルは近くでニヤニヤしているバンの頭を掴むと思いつきり地面に何度も叩きつけた

バン「痛え!!痛え!!や、やめ、すびばじえん!!」

ベグル「ったく!」

バン「おう、いてて。顔中泥だらけの傷だらけになった。なあなあ!俺、兵士になるって決めた時は続けられるか不安だったんだけどよ、この四人とならずつと兵士を続けられると思うんだ!」

ベグル「あ?なんだよ、突然」

ギバ「俺も!こーんな愉快なやつらと一緒になら、キツイ訓練でも戦闘でも楽しくやれそうだ!」

ダバン「はは、確かに。それにベグルだけじゃなくて、ギバやバンにも俺にはない強さがある。頼もしいぜ。これからもずっとよろしく頼む」

ベグル「な、なんだよ、この流れ」

バン「ベグルは？俺達と一緒に嫌か？」

ベグル「……………」

ベグルは顔を険しくさせている

バン「そーんな顔すんなって！」

ベグル「……………嫌ならとっくに見放してる」

ベグルは小さくボソリと呟いた

バン「くっつ！そ、それはつまり！」

バンはしつかり聞こえていたようで顔がパアアツと笑顔になった

ベグル「うるせえ、馬鹿!!」

バン「へへへ、三人とも同じ気持ちだったんだな！嬉しいぞ！俺、決

めた!!

俺達、デルカダール兵士の中で一番強くなろうぜ！俺達なら絶対なれるって！」

ベグル「はっ！一番ときたか。いいねえ、その馬鹿みてえに高みを真っ直ぐ目指すのも。ま、最強の座はずっと俺だな」

ギバ「目標ってやつだな！いいな、それ！俺もやるぜ！俺でも誰かを守るんだって周りに証明させてやるんだ！」

ダバン「そうだな。兵士をずっと続けるんだから強さを目指すのが当たり前だよな。まあ三人とも脳筋ばかりだからな。俺が守ってやるよ。盾は少しだけ得意だからな」

バン「約束だぞ！俺は忘れないからな！」

ベグル「どうだか。お前の残念な頭じゃ明後日には忘れてそうだ」

ダバン「ははは、ありえる」

バン「そんな事ねえよ!!絶対忘れねえ!!」

ロベルト「なるほど、それが約束の内容って事か。想像以上に青春してたんだな」

ギバ「思い出すと少し恥ずかしいけど、それでも俺達にとっては大事な目標で、大事な約束だった。そのおかげで更に仲良くなったといっても過言じゃねえしな。それを………ダバンは」

ガザル「破った、とは違うだろ。大人になるにつれて避けては通れない事、どうしてもやらなければならない事は増える。その約束もダバンみたいにそういった出来事の前には消えてなく」

ギバ「消えねえよ!!絶対!!」

ギバは大声でガザルの声をかき消した。ギバはガザルを睨んでいる

ギバ「ガザル、今の発言を取り消せ」

ギバは槍をガザルの喉元に向けている

ガザル「………すまなかった」

ガザルは両手をあげて静かに謝った

ギバもそれを聞くと少し不満そうではあるものの槍を下ろした

ロベルト「大体の話はわかった。だが、ギバ。お前もやはりまだ落

ち着いてはいないみたいだな。お前ももう帰れ。家で少し考えてみてくれ。明日もう一度話し合おう、な？」

ギバ「……………悪い」

ギバはバルコニーから出ていった

ガザル「……………ふうく、ギバのやつ纏う空気が一瞬で変わるから厄介だぜ。荒れてる証拠だな」

マーズ「まだ誰もいつもの調子には戻れないな。まあ話を知れただけ前進だ。明日も頑張るぞ」

仲間

その日の夜、バンの部屋

コンコン

ライス「バン、いるんだろ？」

ライスがご飯を片手に扉を叩くが、中からは反応はない

ライス「……………開けろ、バン。飯くらい食べる」

ライスは少し呆れたように話すが、それでも反応は返ってこない

ライス「チツ、予想通りだな。無理矢理入るぞ」

ガチャ

ライスはあらかじめ持ってきていた鍵で扉を開けた

バン「……………」

バンはベッドにうつ伏せになっている

ライス「いつまでそうしてる気だ」

バン「……………ししよにはわからないですよ。はやくでていく
てください」

顔をベッドに押しつけているせいか、それとも満足に喋れないほど

傷ついているのかいつもの明るい声の面影はなく、くぐもったような掠れたような声が返ってきた

ラーズ「ハア…… わかったよ。飯、食べるよ。明日の朝飯と一緒にまた来る。じゃあな」

バタン　ガチャ

ラーズはご飯を机に置くと扉に鍵をかけ直して戻っていった

バン「…………… ダバン」

次の日、大広間

マーズとロベルトとガザルは集まって話し合っていた

ガザル「んで？今日はどうする？」

ロベルト「ダバンに話を聞きたかったんだが、あいつどこにいるんだ？」

マーズ「わからないんだよな。城にはいないみたいだし。というか、ギバもベグルも今日はまだ城に来てないみたいだ。本当大丈夫かよ、こんなんだ」

ロベルト「バンに話しかけてみるか？」

ガザル「昨日のままだと思っぜ。あいつ、部屋から出てきた所見てねえからよ」

マーズ「……………よし、俺が昨日みたいにまたバンと少し話してみる。昨日よりは粘ってみようと思う。ロベルトとガザルは城下町でギバとベグルとダバンを探してみてくれ。そこで話せそうだったら頼む」

二人「了解」

その頃、デルカコスタ地方 海岸

ベグル「……………」

ベグルが一人で砂浜に座って海を眺めていた

ザツザツザツ

ギバ「やーっと見つけた。こんな所にいたのかよ、ベグル」

その後ろからギバがやってきた

ベグル「……………なんだよ。ギバこそ城にいるんじゃないのかよ」

ベグルは気にした様子もなく、そのまま海を眺めながら返事をした

ギバ「ベグルに用事があったって探してたんだ」

ベグル「……………なんだ？あの時の発言が気に食わなくて俺を槍で貫きに來たつてか？」

ギバ「違えよ！というか、発想が物騒なんだよ！これだから元暴走族は。仲直りだ」

ベグル「……………」

ベグルは仲直りという単語にチラリとギバを見た

ギバ「昨日、一晩寝ないでずっと考えた。いろいろな。やっと気付いたんだよ、お前がダバンに弱いと言った理由がよ」

ベグル「……………そうかよ」

ギバ「まあまずはそこより俺達の仲直りが先だな。ベグル、あん時は短気で迷惑してるとか言つて悪かった。別に短気なのはベグルだけじゃねえし、迷惑とはそこまで思つてねえんだ。だから、すまん！」

ギバは綺麗にベグルに向かって頭を下げ謝罪した

ベグル「……………」

ベグルはそんなギバを少し意外そうに目を瞬かせながら見ている

ベグル「別に気にしてなんかいねえよ。俺こそ……………なんつーか、ヘラヘラしてるとか言つて悪かったよ。ムカついててギバに変な事

言っちゃまった」

ギバ「俺もベグルのその発言はそこまで気にしてなかったぜ。よし、次だな。ベグル、お前もダバンの間違いに気づいてたんだな」

ベグル「ああ、当たり前だろ。何年一緒にいたと思っていやがる。だからこそ、あいつのあの判断を最善の手とか言った事が許せねえ」

ギバ「その気持ちはよくわかる。俺も同じだ。だがよ、ベグル。お前くらい頭が回るならお前も気付いてるだろう？自分の発言がちよつと足りなかった事に」

ベグル「……………」

ギバ「ダバンもきつとこのままだと勘違いするぞ。もう一度伝えに行こうぜ。俺達の本当の気持ちをよ」

ベグル「…………… 言っただうなる。変わらなきやいけないのはあいつ自身だろ」

ギバ「そうだな。だが、変化つてのは自然と起こる事は少ないんだぞ。誰かの影響や力を受けて、受け入れて変化するんだ。何もしないままだとダバンはこのままだ。俺達の手で、ダバンを後押ししてやるんだ！」

ベグル「また喧嘩みてえになるぞ」

ギバ「必要ならいくらでもやろうぜ、喧嘩！それでダバンに伝わるんならな！」

ベグル「…………… ったく、わかったよ。じゃ、行くか。ダバンの元に。大暴れしてやろうぜ、あいつがこれから先も頑張っていけるよにな」

ギバ「おう！」

その頃、バンの部屋

マーズ「勝手にすまないな、バン。扉越しなんかじゃなくて、直接お前に話をしたかったんだ」

マーズはラーズ達からバンの部屋の鍵を借りて中に入っていた。バンはそれすらも気にしないようにベッドに伏せている

マーズ「ギバからお前達が昔にした約束の事を聞いた。大事な約束だったんだな。ダバンにとっても絶対あの約束は」

バン「そんなわけねえ!!」

マーズ「バン……………」

バン「俺……………あの頃は、本当に自分が誰なのかわからなくて……………毎日不安で、こんな場所にもいいのかわからなくて、怖かった。だから！あの約束は、俺にとってここにいてもいいっていう証明みたいなもので！俺の存在を認めてくれたもので！大事な……………大事な、大事な約束だったんだ！」

ギバもベグルもきつともう覚えてないのかもしれないけれど、俺は！ずっと覚えてた!!三人を誰よりも信じてた！ダバンは……………それを踏みにじったんだ!!」

バンはうつ伏せのまま、叫び声をあげる

マーズ「……………バン、ギバもベグルもその約束は覚えているはずだ。ダバンだって忘れてなんかいると思えない。お前にとって大事な約束だったように、あの三人にとってもきつとあの約束は大事なもので、目標だったんだと思う。そうじゃなきゃ、ここまでやって来れるわけがない」

バン「じゃあなんでダバンはこんな事を！」

マーズ「それは本人にしかわからないだろうな」

バン「ダバン……………なんで黙ってたんだよ……………。俺達……………仲間だったんじゃないかねえのかよ」

マーズ「……………」

信頼

デルカダール城下町 城門前

ダバン「……………」

ダバンは一人で遠くを眺めていた。その場所はバン達とあの約束をした場所と同じだった

ベグル「よう、裏切り者の弱虫君」

ダバン「！」

ダバンが振り向くとベグルが近くに立っていた

ダバン「…………… んだよ」

ベグル「べつ」

ガン！

ベグルが話そうとした言葉はベグルが後ろから殴られた事により中断された

ダバン「!？」

ベグル「いってえな！何しやる！」

ギバ「うるせえ、馬鹿野郎！穏やかに話すって言ったから任せたのに、なんだ今の呼び方！てめえは穏やかのおの字すら知らねえのか！！」

ベグル「いいだろうが、別に！任せたんなら黙って見てろ！」

ギバ「こんなやつに任せられるか！俺が話す！」

ベグル「まだてめえに用はねえよ！ひっこんでろ！」

ダバン「……………（何やってんだ、こいつら）」

ダバンは目の前で突然繰り広げられ始めた言い争いに少し呆れていた

ベグル「いいから！おい、お前」

ダバン「……………なんだよ」

ベグル「喧嘩しようぜ」

ダバン「は？」

「ベグル「だから喧嘩だつて」

「ダバン「……………嫌だが」

「ベグル「ああ!?!」

「ガン!

「ギバ「まったくこの暴走族は！言葉が足りねえって何回言ったらわかるんだよ！」

「ベグル「さつきから人の頭殴りやがって。てめえ、後でどうなるかわ覚悟しとけよ」

「ギバ「うつせえ！ダバン、喧嘩だよ。拳とかじゃなくて言いたい事言い合おうんだ。考えとか抜きにしてさ」

「ダバン「あ、ああ。そういう事か」

「ベグル「もう一度聞く。なんでずっと辞める事を黙ってたんだよ」

「ダバン「それなら前に答えただろ。お前達との約束を破る事になるし、絶対喧嘩になると思って言い出しにくかったんだ。俺はお前達と

ずっとこれまで通り仲良くいたかったからよ」

ベグル「……………ハア」

ベグルはその答えにため息をついた

ダバン「なんだよ、不満そうな顔して」

ギバ「お、おい、ベグル。落ち着けよ？」

ベグル「わーってるよ。お前、そんな事して俺達が喜ぶとでも思ったのか？」

ダバン「！そんな事、思っていない。だが、お前達が喜ぶような終わらせ方なんて存在しないと思って」

ベグル「そうかよ。バンがお前にこう言っていたな、ずっと仲間だと思っていたのに、お前の中じゃそんな事なかったってな。正にその通りだよ、お前は」

ダバン「違い!!俺はずっとお前達を仲間だと思っている!」

ベグル「そんなわけねえだろうが!!てめえのその行為はな!俺達の信頼や友情、今までの俺達を全否定する行為なんだよ!!」

ダバン「!!？」

ベグル「言い出しにくかったなんてのは、心の中でお前が勝手にこの程度で俺達の関係が壊れると決めつけたからだろうが！本心ではこの程度の関係だとお前は思ってるんだよ！」

ダバン「そ……んなはず……」

ギバ「少しでもいいから相談してほしかったんだ。困ってんなら力になってやりたかったし、決めたのなら応援してやりたかった。でも、ダバンは言ってくれなかった。まるで俺達は頼れないやつらだと思われているみたいだ」

ベグル「わかったかよ、馬鹿野郎。俺達が怒ってるのはそこだ。俺達の信頼を浅く見られた事が、俺達はショックなんだよ」

ダバン「……すま……ない。俺は……俺は、そんなわけじゃあ」

ダバンは膝から崩れ落ち、涙を流している

ギバ「わかってる。ダバンはよ、きつとたくさん悩んだんだよな。ケニーの事、ミラさんの事、これからの事、俺達の事。そんなたくさん一人で考えたら間違う事なんか当たり前だ。だから少し間違っ

しまったんだ。

俺達を頼ってくれよ、ダバン。仲間なんだからさ。なんでも力になってやりたいんだよ。もう遅いのかもしいれないけど」

ダバン「ああ…………… ああ……………。すまない、ギバ。すまない、ベグル。俺も…………… 皆に頼りたかった。不安で、一人で頑張らなきゃいけないように感じて……………。本当にすまなかった」

ベグル「なんだ、言えるじゃねえかよ。心からの声。お前は弟ともう一度家族になると言っていたな。そのためには、勇気を出していかなきゃいけない場面なんてたくさんあるはずだ。

それなのにお前は、俺達にすら勇気を出せず自分の心の声を無視していた。だから俺は弱いと言ったんだ。俺達にすら出来ないで誰に出来るんだよ」

ダバン「その通りだな。俺、弱いな。自分にすら正直になれないで、変わってしまった弟を戻せるわけがねえ」

ギバ「まだ変えられるぞ、ダバン。自分に正直になるんだ、今みたいにさ。そうすりゃきつとバンともケニーとも元通りになれるさ。勇気を出してよ」

ダバン「ああ……………。ありがとう、二人とも。俺、もう迷わねえ。バンにもう一度話してくる。逃げないで真っ直ぐ向き合ってくる」

ダバンは泣いた目を腕で擦った後、真っ直ぐベグルとギバを見た

ギバ「おう！」

ベグル「そうだ。行ってこい、ダバン」

ダバン「ああ！」

ダバンは城に向かって走っていった

ギバ「で？そこで隠れてる二人は何してんだ？」

ベグル「隠れる気あんのかよ、コソコソしやがって」

ベグル達が城門に向かって話しかけると

ロベルト「ほら、見ろ。気付かれてるぞ」

ガザル「結構頑張ってた方なんだけどな」

ギバ「まあ、あれだろ。俺達を心配して見てたんだろ？」

ガザル「そうだ、当たり前だろ。昨日の喧嘩の続きをまたここでするんじゃないかと思ったんだ」

ロベルト「ギバもベグルも落ち着いてくれたみたいでよかった。どう仲直りさせようかと苦労してたんだ」

ベグル「ああ……………。なんか……………すまねえ」

ギバ「まああんなにバラバラになりかけたのは初めてだもんな。戸惑うよな」

ガザル「本当だぜ！こっちがどれだけヒヤヒヤしたと思ってるんだよ」

ロベルト「後は……………バンか」

ベグル「ダバンがどれだけあいつに向かい合うかだな」

励ましの言葉

デルカダール城 バンの部屋 前

コンコン

ダバン「バン、いるんだろ？俺だ、ダバンだ」

バン「!？」

ダバン「まだ怒ってるよな。俺の声すら聞きたくないかもな。だから、耳を塞いでいてくれても構わない。ただ、どうしても俺がいなくなる前にお前にもう一度話しておかなければいけないと思ったから勝手に話させてもらうぞ」

ダバンはそつとバンの部屋の扉の前に座り込んだ

バン「……………」

ダバン「バンはそもそも、どうして俺がいなくなるのかの理由知ってるか？知らない前提で話すが、俺はケニーと一から家族としてやり直すためにユグノアに行こうと決めたからなんだ。お前が俺に言って勇気をくれたから、こうしてやり直そうという気持ちになれた。本当にありがとう」

バン「……………」

ダバン「だが、勘違いするなよ。お前が原因で辞めたわけじゃない。きつかけは確かにそうかもしれないが、決めたのは俺自身だ。バンは悪くない。それで……… ずっと黙ってた理由なんだが………。

俺は！ ずっとお前達と最後まで出来るだけ楽しく過ごしていたかったから……。

俺なんかを気にかけてくれなくていいと……… そう思っていた。あの約束を破って、バンからの信頼を裏切るようなやつを……… 止めないでほしかったから。

だから皆からは恨まれようが嫌われようが、辞めるのだからその方が都合がいいと思っただ。そう言われる覚悟もしていた。けどよ……… やっぱ効いたさ、お前からのあの言葉。俺を信頼するんじゃないかった、俺を仲間だと思っんじゃないかった、大嫌いだって。

……… は、はは……… 当たり前だよなあ………。ベグル達に言われてようやく気付いたんだ。俺……… お前達との大切な信頼関係を……… 壊したくないと言いながら……… 俺が壊していた。皆、怒って当たり前なんだ………。

もう無理かもしれないけど……… それでもまだ……… 俺はお前達と仲間でありたい!! こんな自分の心から逃げてるような弱いやつだけど、もう逃げないから！ 俺が進む道を、やるべき事を必ず成し遂げてみせる！

それが例え離れ離れだったとしても、心は!! ずっとお前達と共にありたいから!!」

ダバンは涙を流しながら、それでも力強く声をあげた

バタン！

ダバン「!?」

ドサア！

ダバン「重たっ!!」

突然ダバンの目の前の扉が開き、座っていたダバンにバンがのしかかってきた

バン「あたりばえだ!!」

バンも泣きながらダバンに抱きついた

バン「ごべん!!俺……ダバンのごと、嫌いになるわけがないに……ひでえこと言った。グズツ……確かになんで黙ってたのかとか、どうして俺達を頼ってくれなかったのか色々わかんなくてゴチャゴチャしてたけど、ダバンが全部正直話してくれたからもういい。

俺の方こそごめん！本当は俺、ダバンの事大好きだぞ！頼りがいのある所とか、昔からいろんなところで俺達をサポートしてくれた事とか、実はちよつと怒らせると怖い所とか！

ダバンならどこに行ったって絶対負けねえよ！俺が保証する！なんたって、デルカダール王国の兵士長を支える大事な仲間の一人なんだからよ！」

ダバン「バン……ああ……ああ……そうだな。ありがとう

とう」

バン「本音を言うなら、俺だってずっとダバンと皆とここで楽しくこれまで通りやっていたい。でも、どうしても譲れないもののためなら皆はきつとここからいなくなる。すげえ寂しいけど、悲しいけどそれを止めて悲しませる事は俺も絶対に嫌だ。

だから！ダバンが言ってくれたみたいに、離れてても心はきつと一緒だって信じてる！だからよダバン、頑張れなんて言わねえぞ。ダバンが努力家で頑張ってるのは俺が、俺達が一番知ってる！代わりに応援してるからな！遠く離れたこのデルカダール王国からずっと！ダバンなら出来るってな！」

ダバン「ああ。バンこそ俺がいなくなってもこれまで通り兵士長をやっていけよ。ベグル達と力を合わせてき。お前は皆がいてこそ輝くからな」

バン「おう！」

ギバ「一件落着きたいだな」

二人「げ!?!」

バンとダバンが声に横を向くと、ギバとベグルが少し離れた場所で見っていた

ベグル「男二人が目を赤くしてなんつー事やってんだよ。見苦しいからさっさと離れろ」

バン「う、うるせー！つい感情的になっただけだ！」

ダバン「ベグル、言い方がよくない。変な事なんかしてないからな。自分に正直になっただけだ」

マーズ「やーっと元通りになっただか」

ギバ「お、マーズ！」

ガザル「とんだ面倒をかけさせやがって」

ロベルト「お、ダバンとバンも仲直りしたみたいだな。よかった、本当に」

バン「あ……な、なんかあれか？もしかして、相当迷惑をかけてた？」

ベグル「そうみたいだぜ」

マーズ「まあ無事に仲直りしたみたいだし、問題ないさ。な？」

ガザル「いや、こんな面倒かけさせた四人には絶対謝罪してもらわねえと」

ダバン「しや、謝罪って……。ほら、始まりは俺だから俺が代表して」

ギバ「いやいや、ベグルのだって酷かったんだぜ!」

バン「え!?ベグル、なんかしたのか!」

ベグル「うっせえ!俺は謝んねえからな」

ロベルト「はは、本当いつも通りになってきたな。ほら、ガザル。お前も落ち着けて」

ガザル「チツ……。これは貸しだからな。いつか返せよ!」

ギバ「わかったよ。ま、心配かけさせたのは悪かったしな」

バン「そっか、確かに。ありがとな、ガザル、マーズ、ロベルト!」

マーズ「よし、それじゃあ皆仲直りした事だし、明日くらいにダバンの送別会やろうぜ！」

ダバン「え!?!いい、いいよ、そんなのしなくたって」

ベグル「へ、いいじゃねえか。離れる戦友をいっちょ揉んでやろうぜ」

ダバン「待て、ベグル。俺に何する気だ!?!」

バン「いいじゃん、それ!師匠とか皆誘ってやろうぜ!」

ダバン「だから話聞けつて!そんな規模を大きくするな!」

ギバ「じゃあ俺、マルティナ様達に声かけてくる!」

ダバン「待てー!!それをしたら本当に手がつけられなくなるから!待て、ギバ!」

その夜、バルコニー

ラースとマルティナ、グレイグに呼ばれてダバンとバンがやってき

ていた

マルティナ「よかったわ、四人とも元通りになって」

ダバン「大変ご迷惑をおかけしました」

グレイグ「本当ならバンやベグルに声をかけようかと思っていたのだが、ラースに何もすると言われてしまったな。何もせず見ているだけだったが、なんとかなって本当によかった」

バン「そ、そうだったんですか！師匠はなんでそんな事を？」

ラース「当たり前だろ。というか、マルティナもグレイグもこうなる事は予想出来てただろ？ダバンがバンに言わないでいると言っていた時から」

マルティナ「まあ……ね。でも、バンとダバンだけでベグルとギバまであんな不穏な感じになるとは思わなかったわ」

グレイグ「それは私も同じです。雰囲気には呑まれたのかは知らないが、どうしてあの二人も？」

ダバン「ベグルが俺の取った行動に腹を立てていたらしく、その影響でギバにも強くあたってしまったってギバもベグルと喧嘩になったん

です」

ラース「なるほど、まあ考えられなくもないか。まあ平和に終わってよかったよ。それで？明日の夕方からにするか？送別会」

ダバン「ほ、本当にいいんですか？俺は何もしなくても全く構わないのですが」

マルティナ「いいのよ。新天地で頑張るんだから、至少くらい応援させて」

グレイグ「どうせならロウ様とイレブンにも声をかけてみようか。忙しかったらこれないだろうか」

バン「あ、いいですね！グレイグ將軍！イレブンさんにダバンの事教えないと！」

ダバン「恥ずかしいからやめろ！」

ダバンは少し顔を赤くしながら笑っている

ラース「ふつ、後悔しないように……：と言ったあの時よりいい顔をしているな、ダバン。選択を間違わなかったみたいだな」

ダバン「はい!!皆のおかげです!」

焼き付ける瞬間

それから三日後、デルカダール城

大広間

今日はダバンがユグノアへと旅立つ日。ダバンを見送ろうと大広間にはデルカダール王から見習いの兵士達、コック達に医者の人まで集まっている

ダバン「な、なんでこんなに……。申し訳ないですよ」

デルカダール王「なに、一目見ようと思っただけ。そこまで固くならんでもよい」

マルティナ「ふふ、そうよ。前も言ったけど見送りくらいさせて」

グレイグ「向こうでもしっかりな。イレブン達をしっかり支えてやってくれ」

ダバン「はい。粉骨碎身の思いで頑張ります」

ラース「それにしても……。バン達は揃ってどこに行ったんだ？
こんな大事な時によ」

ガク「俺達もわからないんです。皆さんが来る前まではいたんですが」

ラース「……まあいいけどよ。ダバン、ユグノアについてたらいレブンに会いに行くんだぞ」

ダバン「?もちろんですよ。これからのご挨拶もしなければなりませんので」

ラース「そうだな、それならいいんだ」

ダバン「それでは……皆さん!!長年、本当にお世話になりました!ここでの経験や技術は俺のかけがえのない力となりました。ありがとうございました!」

ダバンは深々と全員に向かってお辞儀をした

ダバン「デルカダール王国に栄光あらんことを!」

マルティナ「誇り高きデルカダール兵士に!」

全員「栄光あらんことを!」

ダバン「!?!」

グレイグ「ふっ、驚いたか？俺達からのエールだ」

ダバン「ありがとうございます!!」

ダバンはもう一度深々とお辞儀をするとゆっくりと名残惜しそうに城を去っていった

マルス「母さん、ダバンさんどこに行っちゃうの？」

マルティナ「ダバンはユグノアに行くそうよ。また兵士さんになるんだって」

ルナ「どうして?」

ラース「大事な大事なやりたい事があるそうだ。二人もダバンを応援してやろうな」

二人「うん!」

デルカダール城下町 城門前

ダバン「な!？」

ダバンが城下町から出てくると、城門前にはバン達が集まっていた

ギバ「お、来たな、ダバン」

ダバン「お前ら、こんな所にいたのかよ。ラーズ將軍達が探してたぞ」

ロベルト「やつぱり一応ラーズ將軍達にも話しておくべきだったかもな」

マーズ「もう遅いさ。さ、ダバン。こっち来いよ」

ダバン「なんだ？」

バン「よし！じゃあまずは俺からな！俺はー！これからも兵士長として皆を支えていけるようになるぞー！」

バンは海に向かって叫び始めた

ダバン「バン？何してんだ？突然」

バン「何って…… 約束のやり直しだ！あの時の約束はもうダバンがいなくなるから守れなくなっただけど、もう一度約束を今やり直すんだ！それにあの時にはいなかったロベルトにマーズ、ガザルもいるからな！ダバンももちろんもう一度やるんだぞ」

ダバン「…………… ははっ！ そうだな。よし、やるか！」

ベグル「そんじや、次は俺な。うーん…………… よし。これからも最強の座は俺だー！ あとー、バンをこれからもいじめていくからなー！」

バン「こらー！ 最後に何変な事言っただ、ベグル！ そんなん取り消せ！」

ベグル「別に変な事なんか言っただろ」

バン「俺はいじめられたくねえ！」

ベグル「お前の意思なんか知るかよ。俺がしたいんだからするんだ」

バン「こいつ……………」

ダバン「はは、ベグルは変わらねえな。じや、俺だな。スウ……………俺はバンみたいになれるかわからねえけど！ ユグノアでは兵士達を中心に歩いていく！」

ロベルト「おお、兵士長って事か？」

ダバン「いや、そこまでじゃなくとも皆を引っ張っていきたいと思っただけ」

バン「いいじゃん、ダバン！絶対出来るって！」

ガザル「バンよりそういうの向いてんじゃない？」

バン「そんな事ないだろ！俺が一番！」

ギバ「はいはい、次は俺な。俺は！あの日の夢を追いつけるぞー！」

ガザル「あの日の夢？」

バン「あ！もしかしてそれって！」

ギバ「バンだけしか知らねえよな。その夢だけ、お前のおかげだからな。これからも大事にしていくぜ」

バン「へへ、いいじゃん！カッコイイぞ、ギバ！」

ロベルト「な、なんなのかはわからなかったが次は俺だな。といっても、ずつと悩んでて今決めただけだな。俺はダバンを継いでいこうと思う！」

ダバン「俺を継ぐ？」

ロベルト「ああ。ダバンは戦闘の時、バンやギバなんかの近くで攻撃を得意の盾で代わりに防いだりしていただろ。あの役割、非常に重要だと思っているんだ。俺もダバンほどではないが盾は使える。もつと磨いていって、ダバンの役割を担おうかと思ってな」

ベグル「なるほど。確かにダバンとロベルトは得意武器とかも似てるからな。出来なくはないって感じか」

ギバ「ダバンの誘導とか助かってたんだよな。動きやすくなつてよ」

ロベルト「俺だとあそこまでうまくはいかないと思うけどな」

ダバン「そうか、ロベルトありがとう。ただ、こいつらは本当動き回るから大変だぞ？無理しなくてもロベルトの強みを活かしてもらっているんだからな」

ロベルト「無理はしてないさ。大丈夫だ」

ガザル「ま、問題をあげるならダバンよりロベルトは脆いつて点だよな」

ロベルト「うるさい。そういうのは言わなくていいんだ、ガザル」

マーズ「ま、まあ次は俺だな。ふむ……………よし。俺は今より強くなるぞ！ギバよりも、ダバンよりも、ベグルよりも、そしていつかバンも超えてやろうか！」

全員「え!?!」

バン「お、大きく出たな、マーズ。なんか意外……………」

ギバ「確かに。それにもっと具体的にくるかと思ってた」

ベグル「へっ、悪くねえな、その意気込みは。ま、精々頑張れよな」

ダバン「マーズが強さを求めているとはあまり想像してなかったな。何があったんだか」

ガザル「最後は俺か。俺はだな……………よし、やっぱりこれだな。女がほしい!!」

ギバ「あ、それなら俺もー!」

バン「待て待て!ガザル、今は真面目にやれよ!」

ロベルト「お前、この空気でそれをやるのは流石だな」

ダバン「気持ちはわかるが変えておけ」

ガザル「チツ、やっぱダメか。じゃあ……………目標に近づくようになる!」

バン「目標?どんなのなんだ?」

ガザル「え……………。言わねえよ!」

バン「えく、気になるだろく」

ベグル「ま、言いたくねえなら別に無理して言わなくていいだろ。さて、これで全員だな」

ギバ「なんか昔を思い出して若くなつた気がするな」

ロベルト「ま、この年でこんなのをやるんだ。ちよつと若返つた気分だな」

マーズ「はは、よかつたと思うぞ。これで俺達も新しい約束を交わしたメンバーだな」

バン「そうだぞ！ロベルトもマーズもガザルもこれからも一緒だからな！よろしくな！」

ダバン「……………じゃ、俺はそろそろ行くよ」

ベグル「悪かつたな、長々付き合わせて」

ダバン「いや、むしろありがとな。身が引き締まつた」

バン「？今のだけで痩せたのか？変わってねえけど」

ガザル「はいはい、馬鹿は黙ってなさい」

バン「な、なんだよ！俺、そんな変な事」

ダバン「バン」

バン「！なんだ？」

ダバン「ありがとな、俺をもう一度仲間にしてくれて」

バン「当然だろ！ダバンは俺の大事な仲間だ！ユグノアに行ってもな！」

ダバン「手紙に進展を書いて送る。よかったら読んでくれよ」

バン「読む読む！絶対読む！」

ベグル「難しい字を使うなよ？馬鹿が読めねえから。全部簡単な言葉にしろ」

バン「ハア!?馬鹿にすんな、ベグル！俺だって文章くらい読めるわ！」

ダバン「はは、そうだな。簡単に書いておく」

バン「そんな事しなくていいからな、ダバン！」

ダバン「……………じゃあ……………な。行ってくる！」

ダバンはバン達に背中を向けた

全員「行ってこい！」

ダバンはカメラの翼で向かっていった

バン「ダバン……………」

ベグル「あいつ……………結局最後に堪えきれなくなりやがって」

ギバ「だな。ほら、キラキラしてるぞ。これ、ダバンの涙だろうな」

ダバンが飛び立った方向に向かって、キラキラと僅かな雫が一筋の線となって太陽に反射して光っていた

ロベルト「さ、早く城に戻ろうぜ。ラーズ將軍達が探してるだろうからな」

マーズ「確かに。心配かけさせるわけにはいかねえや」

ガザル「ほら、ギバ、ベグル、バン。戻るぞー」

ギバ「おう！」

ベグル「ああ、今行く……………バン？」

バン「……………」

バンはまだ真っ直ぐにダバンが飛び立った方向を見ていた

ベグル「もう何も見えねえぞ」

バン「……………ベグル」

ベグル「あん？」

バン「俺、今日のこの景色絶対忘れねえ。俺の大事な仲間が、旅立った日。もう思い出さなくてもいいくらいに、脳に焼き付ける」

ベグル「……………そうだな。俺も忘れねえよ」

慣れぬ生活

次の日、ユグノア城 玉座の間

ダバンとミラがイレブンとロウとエマに挨拶に来ていた

ダバン「というわけでして、バン達とも無事仲直りしました」

イレブン「そっか、そっか。いやー、よかったよ」

ロウ「うむ、どうなるかと少しヒヤヒヤしておったがこれで安心
じゃな」

エマ「素敵ですね、ダバンさん。バンさん達との深い友情って感じ
がします」

ダバン「ありがとうございます。それで今日から俺はこちらでお仕
事をさせていただくという事で」

イレブン「うん。それをね、昨日三人で話し合っとうしようか決
めたんだ。ダバンの役職」

ダバン「役職!? 新人兵士で構いませんよ!?!」

ミラ「そ、そうですよ、イレブン様、ロウ様。ダバンはデルカダールにいた時も役職というのについていたわけではないですよ」

ロウ「なーに、それはわかっておる。初めは城と街に慣れてもらう事から始めるが、慣れてからの話じゃ」

イレブン「バンやラーズ達から色々聞いてるよ、ダバンの実力。だからダバンには兵士長をお願いしようかなって思ってるんだ」

ダバン「俺が兵士長ですか!?!」

イレブン「うん。知ってるかもしれないけど、ユグノア城の兵士達は僕が指導しているとはいえ、僕もあまり指導経験が無いせいもあってあまり戦いが出るってほどじゃないんだよね。そこをダバンと僕で指導していくって感じにしたくてさ」

エマ「それにイレブンは王様だから指導出来る時間も限られてるんです。なので兵士達を強く出来て、まとめられる人がいてくれるととても助かるんです」

ダバン「…………マ、マジか…………。でも、俺に兵士をまとめられるとは思えないですよ」

ミラ「ダバン、また弱気になって。一度やってみてもいいんじゃないな

い？」

ダバン「うっ……」

ロウ「そうじゃよ。城や街に慣れるまでまだまだ時間もかかる。その間に少し試して考えてみてほしい」

ダバン「わかりました。出来る限りやってみます」

ロウ「では、この後はわしとエマちゃんて城内と街を案内しよう」

ミラ「いいんですか!?!助かります!」

エマ「もちろんです。他にも見てみたい場所がありましたら言ってくださいね」

ダバン「よろしくお願いします(また弱気になりかけてたな。いけない、常に心はバン達と同じだと誓ったんだ。あいつらみたいに逃げない姿勢にしていけないとな。……) どうしてるかな、バン達。俺がいなくなつて寂しがつてたり……。…… しないか!自惚れすぎたな)」

その頃、デルカダール城

訓練場

バン「今日は片手剣の指導だ。だからロベルトとダバンが指導役だぞ」

ロベルト「お、おい、バン。ダバンはもう」

バン「あ………………。うう、ダバンー!!寂しいー!!」

ギバ「だよなー!!俺もダバンが訓練場にいないってだけで寂しいぜー!」

マーズ「まあ気持ちはわかる。少し落ち着かないよな」

ベグル「うつせえなあ、馬鹿どもは。おい、ダバン。こいつらを宥めて……………チツ!」

ガザル「ま、当たり前だよな。今までののが当然だったんだからよ」

ガク「は、はは……………。俺達もダバンさんがないのは少し不自然です。早く慣れていかないとですね」

ロベルト「ま、ダバンの代わりにバン。お前が今度から俺と一緒に片手剣の指導をするぞ」

バン「うん……………。寂しいー!!」

その頃、ユグノア城

訓練場

ダバン「というわけで、明日から訓練に参加させてもらおうダバンという。これからよろしくお願いします」

兵士達「はい！」

ロウ「では挨拶も済んだ事じゃから、どうせなら誰か一人と組み手でもしてみてはどうじゃ？互いの実力がわかるじゃろ」

ダバン「いいのですか？ロウ様やエマさんのお時間などが」

エマ「大丈夫ですよ、今日はダバンさん達の案内が私達のお仕事なので」

ダバン「じゃ、じゃあ少しだけ」

ロウ「では、兵士の中から誰か一人、この男ダバンと戦ってみたい者はおるかの？」

??? 「はい！」

すると、茶色い髪を刈り上げた男性が手を挙げた

ロウ「おお、ロックかの。どれ、では頼んだぞ」

ロックと呼ばれた男性がダバンの前にやってきた

ロック「よろしくな。俺の名前はロック。ダバンって言ったか？」

ダバン「ああ、こちらこそよろしく頼む、ロック」

ロック「武器は？」

ダバン「じゃあ片手剣で」

ロック「お、一緒だな。じゃ、実力も伝わりやすそうだ」

ロックは稽古用の片手剣をダバンに投げた。ロックの手には両手に片手剣が握られている

ダバン「二刀流か」

ロツク「ああ。この方が性に合ってな。ダバンも出来るのか？」

ダバン「出来るがあまりやらない。盾も借りていいか？」

ロツク「いいぜ。ザ・兵士って感じだな」

ロツクは稽古用の簡易の盾も渡した

ロウ「それでは準備はよいかの？始めじゃ！」

ロツク「俺から行かせてもらうぜ！」

ロツクはダバンに距離を詰めていく

ロツク「お手並み拝見といこうか！はやぶさ斬り！」

ロツクが右手にある片手剣を素早く振りかざす

ダバン「……………こうだな」

ダバンは冷静に盾を構えた

ガン！

ロツク「二刀流はまだ行くぜ！」

左手にある片手剣を今度は横から振りかざしてきた

ダバン「よっ」

ガッ

ロック「!？」

ダバンはそのまま横からの剣を足で止めた。ロックは驚きつつも急いで離れようとする

ダバン「しんくうげり！」

しかしダバンにその動きは読まれ、距離を詰められたロックの顔に勢いよく蹴りが飛んできた

ベキイツ！

ロック「へブツ！」

ドサア！

ダバン「あ……………。い、一旦ここまででいいか？」

ロウ「うむ、軽くでいいからの。流石はダバンじゃな。冷静じゃったぞ」

ダバン「大丈夫か？結構思いつきりはいつていたが」

ダバンは倒れたロックに近寄って手を差し伸べた

ロツク「いててて、やるなあ、お前！まさか剣じゃなくて蹴りが来るとは思わなかったぜ！」

ダバン「元気そうでなによりだ」

エマ「お強いんですね、ダバンさん。かなり素早くロツクさんに距離を詰めてましたね」

ミラ「ええ、そうなんです。ダバンからしたら手加減してると思うんですけどね。私もダバンの本気ってのは見た事ないんです」

ロウ「それでは案内の続きに戻ろうかの」

ダバン「あ、はい！それじゃあな」

ロツク「ああ！明日からよろしくな、ダバン！」

エイプリルフル

ダバンが旅立ってから一週間後、デルカダール城下町

グラジー

カラン

テルマ「ありがとうございますー！……… さて、そろそろ昼休みですかね」

マヤ「うん。お腹も空いてきたしね。テーブル片付けたらビルさん達とご飯食べよう」

マドリー「今の大人数だったから片付けの量が少し多いわね。グリーくん、チャムちゃん、手伝ってくれるー？」

チャム「はいー！」

厨房からチャムがやってきた

マヤ「あれ？グリーは？」

チャム「今ビルさんに料理教えてもらってて手が離せないみたいだよ」

マドリー「そっか。それなら仕方ないわね」

チャム「あ！そうだ！ねえ、マドリーさん」

マドリー「なあに？」

チャム「私、お手伝い今日しないね！」

マドリー「え？ど、どうしたの？熱でもある？どこか痛いの？」

マドリーはチャムの突然の発言に驚きながら、チャムの額や体を触っている

チャム「えへへ、嘘だよ！騙されたね、マドリーさん」

マドリー「ええ？嘘？もう！どうして嘘なんかついたので？」

チャム「怒つちやダメだよ、マドリーさん。今日はエイプリルフルなんだから、嘘ついても怒られないんだよ」

マドリー「エイプ……？なにそれ？」

マヤ「あ、知ってるよ。そっか、今日はエイプリルフルか」

テルマ「すみません、マドリーさん。チャムがいきなり。エイプリルフルというのは、嘘について相手を驚かせる日の事なんです。そうやって互いに驚かし合って楽しむんです」

マドリー「へー、人間はまた面白い日を考えるのね。うふふ、いい事知っちゃったわ。私も後でビルに嘘ついて驚かせちやおうかしら」

チャム「でもね！ちゃんと嘘だよって言わないと可哀想だから、ちゃんと嘘って言わないとダメなんだよ」

マヤ「ふふ、そうだね。それに怖い嘘とかよりもつい笑っちゃうよ
うなやつとか嘘でも特に害のない方が楽しめるもんね」

テルマ「だけど、チャム。あまり嘘ばかり言うのも信用されなくなるから程々にしとけよ」

チャム「はい！」

テルマ「本当にわかってんだか」

その時

ポオオン!!

全員「!？」

厨房から大きな爆発音が聞こえてきた

マドリー「なに!?! どうしたの!？」

マドリー達が急いで厨房に向かうと

マヤ「うわ! 凄い煙……ゴホッ! グリー! ビルさん! 大丈夫!？」

ビル「あー、すまねえ、グリー。ビックリしたな。大丈夫か?」

黒い煙に包まれる中からビルの声が聞こえてくる

マドリー「もう! マヤちゃん達、ちよつと私から離れててね。ふっ
!」

シユン!

マドリーは人間の姿から元の魔物であるブラッドレディの姿に
戻った

マドリー「えい!」

ヒユウウ!

マドリーが羽を羽ばたかせて風をおこし、煙を店の外に追い出した

テルマ「マドリーさんの魔物の姿久しぶりに見た」

マドリー「よいしょつと」

煙が無くなった事を確認すると、再びマドリーは人間の姿になった

マドリー「驚かせてごめんね？それよりも、ビル！グリーン君！」

チャム「大丈夫!？」

厨房ではグリーンに覆い被さるようにビルがグリーンを抱きしめていた。ビルの体は魔物の姿に戻っていた

グリーン「あ、ありがとうございます、ビルさん」

ビル「いや、俺のミスだからな。庇うのは当然だ」

マドリー「ちよつ、ビル！あんた体火傷してるわよ！」

ビル「あー、まあそうだろうな。魔物の姿に戻ったがやっぱりそれでも熱いと思っただ」

マヤ「なにをしたの？キッチンとか結構黒焦げだよ」

キッチンは元は鍋であっただろう物が破裂して変形しており、その周囲も広い範囲で真っ黒く焦げていた

ビル「ちよつくら加減を間違えてな。爆発するとは思わなかった」

テルマ「大丈夫なんですか？」

ビル「ま、まあ……… 大丈夫だろ」

マドリー「大丈夫じゃありません！もう！！こんなにキッチンを汚して！」

ビル「す、すまん」

マドリー「マヤちゃん、グリーン君、テルマ君、チャムちゃん、悪いけど今日は閉店って事にしておいてくれる？キッチンを掃除しないとだし」

チャム「いいけど、お手伝いした方がいいんじゃない？」

マドリー「ううん、そんな事しなくていいわ。ビルが全部やってくれるから」

ビル「ま、待て、マドリー。俺一人でこれは」

マドリー「なに？あなたが間違っておいてグリーン君を危険な目に合わせただけでも大馬鹿なのに、更に関係のないマヤちゃん達にまで手伝わせる気？ふざけてるの？」

ビル「…………… ナンデモアリマセン」

マドリーはにつこりとビルに笑っているが、そのオーラは完全に怒っていた

テルマ「マドリーさん、怖」

グリーン「マドリーさん、でも僕にも多少間違いはあるんですし、ビルさん一人にそんな任せなくても」

ビル「あー、いや、グリーン。その気持ちはありがとな。平気じゃないがまあ明日の昼までにはなんとかしておく。だから休んでて大丈夫だ」

マドリー「そうよー…この阿保な魔物は心配しないでいいの。本当に怪我してない？」

グリーン「(阿保な魔物…………… ビルさん、かわいそう)はい、大丈夫ですよ」

マドリー「わかったわ。三人も今日はもうお休み！遊んできていいわよ」

その後、デルカダール城下町 広場

チャム「あ！マルス君！」

チャムが広場に行くと、そこではマルスと子ども達が遊んでいた

マルス「あれ？チャムちゃん！お店は？」

チャム「キッチンが爆発してお休みになったの。遊んでたの？」

マルス「うん。チャムちゃんも一緒に遊ぼう」

チャム「うん！あ、そうだ！ねえ、マルス君！」

マルス「なに？」

チャム「実は金色のスライムがいるんだって。知ってる？」

マルス「金色!? 凄い、見た事ないよ！本当!？」

チャム「ううん！嘘！」

マルス「えー！なんだー、嘘かー」

チャム「ごめんね。ほら、今日はエイプリルフールだから！」

男の子A「あ！そうじゃん！今日はエイプリルフール！」

女の子A「嘘ついてもいい日だ！」

マルス「うぐぐ、騙されたの悔しい」

エイプリルフール2

その後、デルカダール城門

マルス達はひとしきり遊び終わると、そろそろ夕方になろうとしていた

女の子A「あ！私、そろそろお母さんと買い物に行くの。帰らな
きゃ」

男の子A「俺も早く帰らないと父ちゃんに怒鳴られる」

二人はマルス達に手を振って城下町に帰っていった

マルス「じゃあ僕達も帰ろつか。楽しかったね、チャムちゃん」

チャム「うん！また今度遊ぼうね、マルス君！」

二人も城下町に戻ろうとすると

男性「待ちな、そのガキ二人」

二人「!？」

城門の陰から怪しげな男性が現れた

チャム「……だ、だれ」

マルス「な、なあに？おじさん」

マルスは怯えているチャムを静かに背中に隠し、守るようにして男性に話しかけた

男性「そこの女のガキ」

チャム「ヒツ……」

マルス「この子に何の用事。おじさん、誰なの。すつごく怪しいよ」

男性「男は黙ってる。おい、さっきの金色のスライムってのはどこにいるんだ？」

チャム「…… え？な、なんのこと？」

男性「とぼけんじゃねえ！広場でそこのガキに金色のスライムの話をしてただろうが！」

マルス「だから！それはこの子の嘘で、今日はエイプリルフールだから」

男性「ああ!?嘘なわけねえだろうが！金色のスライムっていったら

ゴールドensライム以外いねえだろ!!どこにいやがった!言え!!」

チャム「ご、ごーるでんすらいむ?私、そんなの知らない」

男性「俺を騙しやがったのか、このガキ!!」

男性は怒りを露わにして、マルス達に持っていた短剣で襲いかかってきた

マルス「くっ!チャムちゃん、逃げて!!」

マルスは護身用の模造された片手剣を構えた

チャム「で、でも、マルス君」

マルス「僕は少しでも戦えるから!早く!」

チャム「ごめん!!」

チャムはマルスから離れていく

男性「どきやがれ、ガキ!」

男性がマルス目掛けて短剣を振り下ろす。その刃が夕日に照らされ眩しく光っており、本物の刃である事をマルスに嫌でも認識させる

マルス「怖い、怖い怖い怖い。でも、父さん達みたいに頑張らない

と！）や、やああ！」

カン！

マルスは怯えながらもしつかりと短剣に合わせて剣で防ぐ

マルス「かえん」

マルスが剣に力を込めようとする

男性「オラア！」

バキイツ！

マルスの顔に男性の蹴りが直撃した

マルス「が……」

ドサア！ゴロゴゴロゴ

マルスは勢いよく横に飛ばされ、地面を転がっていく

マルス「い……たい……よう」

男性「あの女のガキは！」

男性は動けなくなったマルスなど気にも止めずにチャムが走って
いった方向へと向かっていった

デルカダール地方

チャム「ハア……………ハア……………」

チャムは大きな川が流れている場所へ来ていた

チャム「ど、どうしよう、マルス君大丈夫かな。やっぱり戻った方が……………。ダメだよね……………お兄ちゃん」

チャムは一人取り残された事に強い不安を覚え始めていた

チャム「ここから先……………道わかんないよ。どうしたらいいの」

チャムは途方に暮れながらトボトボと先を進んでいく

しばらく歩くと二つの分かれ道に到着した

チャム「どっちに行けばいいかな……………。えっと、看板にはデルカコスタ地方とイシの村?あ!デルカコスタ地方なら、前にお塩取りに行った場所だ」

その時

男性「あのガキ、どこに行きやがったー」

少し後ろの方から男性の声が聞こえてきた

チャム「!?嘘……………マルス君は!?に、逃げないと!!」

その頃、デルカダール城下町 教会

マルス「あ、あれ……………(´▽´)は」

マルスが目を覚ますと綺麗なステンドグラスがある屋根が見えた。マルスの顔や腕には包帯や絆創膏がついている

神父「起きましたか、マルス君。酷い擦り傷が顔や腕にあつて倒れていたからね。急いで私がここまで運んで治療したんだ」

マルス「あ、神父さん。ありがとうございます！」

神父「元気そうでしたですよ。先程シスターをお城に向かわせて、マルティナ様達に迎えをお願いしました。何があつたのか教えてもらえますか？」

マルス「あ、そうだ！チャムちゃんが危ないんだよ！」

その頃、デルカダール地方

男性「見ーつけた」

チャム「キヤアアアツ！やめて！離して！」

チャムは先程の怪しい男性に捕まってしまっていた

男性「なあ、もう一度聞けず？本当に金色のスライムはいねえのか？」

チャム「……………うう、ヒック」

男性「さつさと答えろ!!ガキ!!」

男性はチャムに見せつけるように短剣を出した

チャム「いる。本当にいるよ、金色のスライム」

チャムは泣きながら答えた

男性「そうか、そうか。そうだよなあ」

男性はその答えに満足したように短剣をしまった

男性「じゃあお兄さんをその見たって場所まで案内してもらおうかな」

ルナ「わかった……………」

チャムは適当に道を進むと、デルカコスタ地方に行くための駐屯所が見えてきた

男性「チツ!おい、ガキ。ここは兵士がいて厄介なんだ。まさかデルカコスタ地方なのか?」

チャム「(そうだ、兵士さんがここにいるんだ。じゃあ兵士さんに助けを求めれば) うん、そうだよ!私はこの先で見たの!」

男性「くそ、なら仕方ねえ。おいガキ、俺は親戚の人って事にして
おけ。いいな？」

チャム「う、うん……（あ、この人もついてくるなら駄目だ）」

駐屯所

マーズ「ん？あれ？チャムちゃん？」

チャム「あ……えっと、確か……マーズさん？」

マーズ「ああ、そうだ。どうしたんだ？こんな所に一人で」

チャム「えっとね」

男性「いやー、すみません。俺、この子の親戚なんですけど久しぶりに海をこの子と見たくなっちゃいまして。通していただけませんか？」

マーズ「え？あ、ああ、そうなのか……。兄ちゃんはどうしたんだ？」

チャム「お兄ちゃんはエド君と遊んでる」

マーズ「そっか。それじゃあ通つていいぞ」

男性「ありがとうございます」

チャム「マーズさん！」

マーズ「ん？」

チャム「私、今から本当の事言うよ！これから海に行くし、この人の事知ってるおじさんだし、私の事守ってくれてるんだよ！全部本当だよ！だって今日はエイプリルフルだから！」

マーズ「え？チャムちゃん、何を言つて」

男性「こーら、兵士さんのお仕事の邪魔しないの。すみません」

チャム「行こ！」

チャム達は走っていった

マーズ「な、何だったんだ？エイプリルフルだからってどういう事だ？うーん……………」

エイプリル fools 3

その頃、デルカダール城

大広間

マルス「チャムちゃん、大丈夫かな。僕が……すぐにやられちゃったから」

マルティナ「大丈夫なはずよ。さつきリースが兵士達に伝えに言ったんだし、きつと保護されて帰ってくるわ」

マルス「……………」

マルスは俯いたまま動かない

マルティナ「……………マルス、よく頑張ったわね。本物の刃物を持った大の大人に一人で立ち向かって。怖かったでしょう？怪我までして。さ、お部屋に戻りましょう」

デルカダール城下町

城門の近くでリースが多く兵士達を連れて指示を出していた

リース「今からチャムちゃんの搜索と怪しい男の確保に移るぞ」

バン達「は！」

ラース「それと男は短剣も装備しているらしいから気を抜くんじやないぞ。チャムちゃんは見つけ次第、保護するんだ」

その頃、デルカコスタ地方

男性「さっきの演技は中々よかったぞ、ガキ」

チャム「そ、そう？」

男性「で？どこまで連れて行く気なんだ？」

チャム「……………こ、こころ辺だったよ」

チャム達は神殿前の草原で止まった

男性「ほー、くまなく探してみるとするか」

男性はキョロキョロと見渡しながら周りを歩き始めた

チャム「……………お、おじさんは……………なんでそのスライムを探してるの？」

男性「ああ？まあガキは知らねえか。ゴールデンスライムってのは体が全部金で出来てんだよ。だからそいつの体を剥ぎ取れば金がガツポリ手に入るのさ」

チャム「ど、どうしてお金がいるの？」

男性「んなものに理由なんてねえよ。欲しいからだ」

チャム「働けばいいじゃん」

男性「ガキが何を知ったかのように」

チャム「だって……私だって働いてるのに」

男性「チツ！うるせえガキだなあ！黙ってる!!」

男性はチャムに短剣を向けた

チャム「ヒツ、ご、ごめんなさい……」

男性「それにしてもよ、全然見当たらねえじゃねえか。おい、ガキ！本当にここで見たのか!？」

チャム「だ、だからそれはエイプリルフールの嘘で、本当はそんなの私知らないんだってば!」

男性「エイプリルフル……だと。このガキ!!! 騙しやがったな!!」

チャム「ヒツ!!も、もうやだー!! 助けてよー!! お兄ちゃん!!」

チャムは大声で泣き始めた

男性「このクソガキめ!!」

男性が泣き叫ぶチャムに向かって走っていき、持っている短剣を刺そうとする

チャム「キヤアアアツ!!」

チャムが咄嗟に腕で顔を覆うと

ガキイン!

男性「な!?!」

チャム「あ……………」

マーズ「間一髪か! 間に合ってよかった!!」

マーズがチャムの前に立ち上がり、盾で短剣を防いでいた

男性「さっきの兵士!?!」

マーズ「チャムちゃん、ナイスヒントだったよ。まさかSOSに嘘を使うなんて思わなかった。エイプリルフルならでは、だな」

男性「SOSだと!?このガキがいつの間にも！」

チャム「よかった………。気付いてくれた」

チャムは安心したように座りこんだ

マーズ「こんな幼い少女を脅して誘拐しようとするとはなんて奴だ」

男性「ク、クソオー!!」

男性はもうヤケクソに短剣をマーズに振りかぶる

マーズ「ばくれつきやく！」

マーズは素早く短剣を見切ると、横に僅かに避けすぐさま足を男性の体に連続で叩き込んでいく

男性「ガハアツ!!」

マーズ「よし、確保!!」

マーズは男性の手に手錠をかけた

その後、グラジー

チャム「お兄ちゃん!!」

チャムはお店で待っていたテルマに急いで飛びついた

テルマ「チャム!よかった!!」ラース將軍から襲われているって聞いて凄く心配したんだぞ!」

テルマも安心そうにチャムを抱きとめた

ラース「マーズが男性に襲われそうになっているチャムちゃんを捕まえてくれたんだ。マーズはまだその知らせを受けていなかったのによくわかったな」

マーズ「チャムちゃんが機転をきかせてくれたおかげなんです。エイプリルフルにちなんで、嘘のSOSを言ってくれたんです」

全員「嘘のSOS?」

チャム「あのね、全部本当の事を反対にして言ったの。知らないおじさんの事を知ってるおじさんって言ったし、襲われそうになってる事も守ってくれてるって言ったの」

マーズ「その最後にエイプリルフルだからと言ってくれて、最初はよくわからなかったんですけど、エイプリルフルは嘘についても

いい日。つまり、チャムちゃんはエイプリルフルだから嘘を言った。だから今のは全部嘘の事なんだなと気づいたんです」

テルマ「す、凄いじゃないか、チャム！そんな危ない状況の中、よくそんな事を考えたな！」

ラーズ「テルマの言う通りだ。チャムちゃん、素晴らしい動きだ。まあ、今日の見張り役がマーズだったのも幸運だな。これがバンドだったらこうはならないからな」

マーズ「ははは…… 確かに。とりあえず無事でよかった」

チャム「ありがとう、マーズさん！ラーズさん！あ、あとマルス君にもお礼言わないと！初めに私を守ってくれたの、マルス君だから」

テルマ「本当にありがとうごさいました。マーズさんがいなかったらチャムはどうなっていたか……。本当にありがとうございました！」

ラーズ「そうだったな。マルスも少し怪我していたみたいだが無事だ。酷く心配していたからマルスにも伝えておくさ」

その後、デルカダール城

マルスとルナの部屋

ラーズはマルスにチャムが無事である事を報告した

マルス「そつかり、よかつた〜」

ルナ「マルスがずっとそわそわしてたけどそういう事だったんだ」

ラーズ「マルスもチャムちゃんが逃げるための時間稼ぎ、助かったぞ。そこで二人して捕まっていたらきつと大変な事になっていただろうからな」

ラーズはマルスの頭を優しく撫でた

マルス「う、うん……」

マルスも少し照れ臭そうにしている

ラーズ「もつと強くなれるさ、マルスなら。怖かっただろ？よく頑張ったな」

マルス「…………… うん、怖かった。でも、チャムちゃんを守らないとって思ったから」

ラーズ「そうだな。偉いぞ、流石俺達の子だな」

マルス「えへへ、うん！」

イースター

それから二週間後、デルカダール城

玉座の間

ラーズ達とデルカダール王、兵士長であるバンと副長のベグルなど
役職の人全員が集まって会議をしていた。

その内容は月に一度、国民達からの意見箱の内容を審議するという
物であり既に恒例となっていた

ラーズ「それじゃあ補修と改善はすぐに準備して、必要であれば順
次対応していくって事で」

デルカダール王「うむ、それで大丈夫であろう。さて、次はなんじや
？」

ラーズ「えつとですね……………ん？なんだ、これ？」

ラーズは紙を見ると少し首をかしげた

マルティナ「どうしたの？もしかしていたずら？」

グレイグ「そういうのは無視してもらって構わないぞ」

ラーズ「いや、そうじゃないんだ。ただ、俺は知らない単語があつ
てな」

バン「師匠が知らない単語？そんな難しい物が使われてるんですか？それって本当に文字ですか？」

ベグル「ま、少なくともお前は知らない事が確定したな」

バン「うるさい！ベグル！」

リース「落ち着けよ。いーすたーって書いてあるんだ。知ってるか？」

デルカダール王「なんだ、イースター祭の事であつたか。確かに外の者にあまり認知はされておらんからな。わし達はもちろん知っておるぞ。そうか、そろそろ暖かくなってきたからもう。その時期であつたか」

リース「イースター祭？お祭りなんですね」

マルティナ「リースは知らないのね、少し意外だわ」

グレイグ「国として大きくやる事はありませんでしたからね」

バン「師匠！俺だって知ってますよ、イースター！」

バンはラースに誇らしげに言っている

ラース「む……。じゃあどういいうお祭りなんだよ。由来は？」

バン「へ……………ゆ、由来ですか？確か……………暖かくなつて、やつほーいって感じ……………です！」

ベグル「物凄く簡単に言うくとバンの言う通りです。冬などで耐え忍んできた生活を春の訪れで楽しく、そして作物が取れるようになった喜びを祝うお祭りなんです」

ラース「へく、なるほど。どんな事してたんだ？」

デルカダール王「わし達はやってはおらんかったが、民達の間ではやっておる事も多くてのう。命の誕生や生命などを象徴とする卵やいっかくうさぎをモチーフとしたグッズなどが多く見受けられたはずじゃ。

他にも明るい音楽や色彩豊かな花々、綺麗な旗や紙吹雪で楽しませてくれるようにもしておったのう」

バン「そうですね！あと、ハッピーイースターって言うってお祝いの言葉を言うんですよ！」

マルティナ「ふふ、バンはそういうの好きそうだもんね。それで？
そのイースターがどうかしたの？」

ラーズ「ああ、そうだった。それを国の主催でやってみてほしいとの事だ。話に聞く限りだと楽しそうなお祭りなんだしやってもよさそうだが、なんで今まではやってなかったんだ？」

グレイグ「特段大きな理由はないのだ。元は民達の間だけで行われていた小さなお祝い事程度でな。なので自由にさせていたのだが、こうして王国が大きく有名になるにつれてイースターもどんどん大きくなっていった。今ではデルカダール王国に昔から住んでいる人の中では知らない人の方が少ないくらいだ」

マルティナ「そうね、私が子どもの頃は商店街で僅かに卵や小さないつかくうさぎが飾られている程度だった記憶があるわ。いつの間にかこんなに大きくなったのかしら」

ラーズ「へへ、元は民達のお祭りだったんだな。でも楽しそうだし、大きくなって知名度も出てきたんなら俺達が主催にしてもよさそうだな。たしかまだ予算はあったよな。今月の出費は少ないからよ」

グレイグ「ああ、そうだな。近々使う予定もないのだ、少し大きく祭りをしても問題はなさそうだ」

デルカダール王「わしも賛成じゃ。民達の要望というのものもあるが、わし達がサポートする事でより祭りを大きく賑やかにする事も出来よう。そこに旅人や商人が訪れれば更にお祭りの知名度が上がるだけでなく、商売も繁盛するだろうな」

ラース「そうですね。よし、これは俺達が主催するという事で。いつ頃が開催の目安なんだ？このイースター祭は」

マルティナ「春が訪れてきたらって感じだからもう開催しても問題ないはずよ」

ベグル「そうですね。城下町でも今年のイースターはどうなるのかって話を聞いていますから」

バン「もう勝手に始めそうな人もいましたので、やるのならば早く決定をした方がいいと思います」

ラース「そうなのか。なら、少し早急に決めようか。幸い、意見箱はこれで最後なんだ。このまま引き続きイースター祭の件について話し合って大丈夫か？」

全員「ああ／ええ／はい！」

ラース「んじや、まずは内容と予算の決定、装飾などの場所からだ

な」

それから三日後

デルカダール城下町

ガヤガヤガヤ

広場や商店街では大勢の人達が集まって装飾の準備をしていた。明日はついにイースター祭が開催される。そのための装飾として、たくさんの色が連なった旗やくす玉、触るとパカッと割れて紙吹雪が降りてくる大きな卵などが至る所に飾られていく

レースや兵士達が中心となり、それを国民達全員が楽しく作業に取り掛かっていた

男性A「レース將軍！こちらのいっかくうさぎの銅像、この広場に飾ってもよろしいですか？」

レース「おお、そんな物があるのか。これは凄いな、ぜひ飾って盛り上げてくれ」

男性A「ありがとうございます。これ、俺の手作りなんですよ」

ギバ「手作り!? 凄えな、目とか角の輪郭とか本物そつくりだ。凝ってるな」

男性A「へへ、ありがとうございます。あ、運ぶの手伝っていただいてもいいですか？」

ギバ「もちろんだぜ！というか、俺一人で持てそうだぞ。よっ……と！」

男性A「おー！流石兵士さん！力持ちだー、大丈夫ですか？」

ギバ「想像より少し重たかったけど大丈夫だぜ。えっと、この辺か？」

ラース「ああ、そこら辺で大丈夫だ」

ギバ「よっと！」

女性B「あ、ラース將軍！あの、こちら風船なんですけどどこか飾れませんかね？」

女性が様々な色がある風船を持ってきた

ラース「お、それもいいねえ。んーと……よし、商店街の右側に小さな広場があるだろ？そこに飾ってくれ」

女性B「あ、ベンチと街灯がいくつかある場所ですよね。わかりま

した」

ロベルト「あ、ラーズ將軍！少しご相談したい事が」

ラーズ「どうした？」

その頃、デルカダール城

デルカダール王「うむ、中々よいではないか」

マルス「頑張ったおかげだね！」

ルナ「目立つねー！」

デルカダール城のバルコニー部分に大きな旗が飾られ、そこには黄色と赤と水色と緑でハッピーイースター！と書いてある。その縁には鮮やかなボンボンがたくさんついており、とても華やかな印象となっている

マーズ「それではいきますよー。よっ！」

マーズがバルコニーから更に様々な色の垂れ幕を下ろした。そこにも大きく文字が書かれており、それぞれ春の生誕祭、春和景明などと書いてある

ルナ「華やかになったね！お祭りって感じがする」

デルカダール王「そうじゃな。これを見れば少しは旅人達もこれがどのようなお祭りなのかわかるじやろう」

その頃、デルカダール城下町 商店街

ラース「へー、イースターエッグか。面白いな、これは。可愛らしいし、いいじゃないか」

女性A「ありがとうございます!」

ロベルト「それでは商品もこれでいいという事で大丈夫ですか?」

ラース「ああ、大丈夫だ。なんなら、俺も協力しようか。子ども向けになるかはわからないが、多少の凶鑑なんかは持っているからそれを提供しよう」

女性A「いいんですか!?!」

ラース「問題ないさ。子どもからしたら宝探しみたいで楽しそうじゃないか。きつと皆、喜ぶだろうぜ」

女性A「はい!」

イースター2

その日の深夜、デルカダール城下町

皆が寝静まった夜、夕方まで続いていた飾り付けも終わり人の気配は全くしない

??? 「……………」

城門の脇にある小さな隙間から謎の光る目が覗いていた

次の日、デルカダール城

大広間

グレイグが朝ごはんを食べる場所に行こうとすると

バタバタバタ!

グレイグ「む?」

入り口からこちらに向かって走ってくる音にグレイグが入り口を見ると

バン「た、大変です!グレイグ將軍!」

まだ鎧を着ておらず、私服姿のバンが大焦りで走ってきた

グレイグ「どうした、バン!何かあったのか!」

バン「せ、窃盗です！」

グレイグ「なに!？」

デルカダール城下町 商店街

そこは昨日ロベルトと商店街の人が話していたイースターエッグが置いてあつた場所であり、あるゲームをするためのエリアだった

グレイグ「これは……………」

しかし、そこにあつたはずの卵は全て無くなっており何かに荒らされたような形跡も多く残っている

女性A「あ、グレイグ將軍。見てください、せっかく用意した卵が誰かに盗まれたんです！」

バン「朝早くにこちらの方が見た時には無くなっていたそうなんです」

女性A「昨日の夜には全部あるのを確認してるんです！きっと夜中に誰かが盗んだんです」

グレイグ「……………む、これは」

グレイグは傍らに落ちている灰色の小さな毛と商品や被せてあつた布についている何かで貫かれたような穴を見ている

グレイグ「……………まさか」

バン「グレイグ將軍？何かありましたか？」

グレイグ「いや、なんでもない。一度城に戻って姫様達にも報告してこよう。俺に少し思い当たる節がある」

バン「？わかりました」

その後、デルカダール城

朝食場

全員「えええ!?イースターエッグが盗まれた!?!」

グレイグ「はい、卵は全て無くなって荒らされておりました」

マルティナ「酷いわ、なんでそんな事を」

ラース「他の場所は無事なのか？」

グレイグ「特に何もなかったようだぞ。狙われたのはイースターエッグの場所だけだ」

デルカダール王「なぜそこだけを狙ったのだ。金目的なら銅像なりなんなりとあつたはずじゃが」

マルティナ「侵入経路はわかる？城門は閉じているはずだけど」

グレイグ「そこまでは……。ですが、城門からでない事は確かです。昨日城門を閉めたのは私ですので、しっかり鍵をかけたのも覚えていきます」

ラーズ「となると、内部の犯行か？」

グレイグ「いや、待つのだラーズ。俺に少し犯人が思い当たるのだ、これを見てほしい」

グレイグは先程商店街で拾った灰色の小さな毛を見せた

マルティナ「なにこれ？毛？」

グレイグ「イースターエッグの場所に落ちておりました。それと布や商品にまるで角で破かれたような痕跡もありました」

ラーズ「!?おいおい、まさかグレイグ。犯人はいつかくうさぎだとか言わないよな？」

グレイグ「そのまさかだ。俺は犯人はいつかくうさぎだと考えたのだ」

ラーズ「なんで魔物があんな卵を狙うんだよ、理由がわからねえよ」

デルカダール王「まさか………。グレイグよ、お主あの昔話が本当に起ころうとしておると言うのか？」

ラーズ「昔話？」

グレイグ「そうです、王よ。ラーズは知らんだろうな。姫様も昔の話なので知っているかはわかりませんが、イースターが出来たきっかけは確かに春の訪れを祝うためだったが、その裏にはもう一つある出来事があったのだ。それが、いつかくうさぎの卵隠しだ」

ラーズ「た、卵隠し？なんだそれ」

マルティナ「あ！聞いた事あるわ。確かこの地方に昔からあるお話の一つ「春と卵とうさぎ達」の事よね」

デルカダール王「ああ、そうじゃ。そこではいつかくうさぎ達が春になってようやく産まれた卵を盗むんじやったな。それを嘆いた大

人達を見た街の子ども達がいつかくさぎを探しに出た。その先々でいつかくさぎ達が隠した卵を見つけたりしていくのじゃ。

最後には大人達を助けようとした子ども達の優しき心にいつかくさぎ達が感動して、一緒にお祭りを楽しんだんじやつたな」

ラーズ「話と全く一緒だ。だが、そんな話が本当に現実には？」

グレイグ「確証はない。だが、そうだとすれば全て辻褄が合う。侵入経路もおそらくこの前話していた城壁の穴からだろう。いつかくさぎ程度ならあそこを潜り抜けられる」

デルカダール王「昔話にはなっておるが、この話は実際に起きた話だとも言われておる。グレイグの仮説はそこまで間違ったものではない」

ラーズ「そうだったんですか。なんか信憑性が出てきたな」

マルティナ「でも、どうするんですか？お父様。本当に昔話の通り子ども達を探しに行かせるのですか？マルスやルナに行かせたとしても、危険な事には変わりありません」

デルカダール王「それは…………… うーむ」

グレイグ「…………… いかくうさぎ達は警戒心が強い魔物です。自分より大柄な大人達だと警戒して出てこないでしょう。ですが、子ども達や青年程度であれば私達ほど警戒はしないかと」

ラース「青年……………。よし！こうしよう！」

その後、デルカダール城下町 広場

マルティナからの招集により、そこには若い人達や子ども達が集められていた

マルス「母さーん、緊急って何の集まりなの？」

マルティナ「少し待っててね。コホン、突然の招集すみませんでした。実は、今日のお祭りで使うはずだったイースターエッグがいかくうさぎ達に盗まれました」

全員「!？」

マルティナ「いかくうさぎ達の持つていったイースターエッグがないとお祭りは台無しになってしまいます。早く取り返したいのですが、私達では警戒心の強いいかくうさぎは出てきません。

そこで警戒されにくい皆さんなら、無事盗まれたイースターエッグを取り返してきてくれると思ったのです」

テルマ「マ、マジか〜……………」

マルティナ「お願いします。楽しいイースター祭のため、どうか探
してきてください」

ルナ「はいはい！行くよ、お母さん！」

マルス「僕も！すっごく楽しそう！冒険だね！」

チャム「私もー！」

テルマ「ちよつ、チャム！お前は戦えないだろ。兄ちゃんが守って
やるから」

エド「へへ、よくわかんねえけどテルマが行くなら俺も行こーつと
！」

続々と楽しそうな声をあげながら参加者達が決まってい

マルティナ「(よかった、なんとかかなりそうだわ)」

その後、城門前

マルティナ「何かあっても絶対無理しないでね」

医者「ここまで戻ってくれば私達が治療いたします」

神父「頑張ってきてください。皆様にご加護があらん事をお祈りしています」

全員「はい！」

マルス達は楽しそうにしながら走っていった

バン「ほ、本当に大丈夫なんですか？マルティナ様。監視すらしな
いなんて」

マルティナ「私だって心配よ。でも、戦える人達とチームにしたし
なんとかなると信じてるわ」

イースター3

デルカダール地方

テルマ「イースターエッグ？が盗まれるなんてな。しかも魔物に。それを取り返せて言われてもどうやればいいんだよ」

マルス「いつかくうさぎつて縄張りがあるんだよね？前に父さんが言ってた」

女の子A「そうなんだ。じゃあその場所に行けばいるかな？いつかくうさぎ」

ルナ「でも、返してくれるかな」

男の子A「確かに。そもそも話が通用するかもわかんないのに」

男の子B「魔物が話せるなんてブレイブ君とコロだけだよ。僕達には言葉通じないもん」

四人「あ」

男の子の発言にテルマとマルスとルナとチャムが一人を見た

エド「ん？なんだよ」

ガシツ!

テルマはエドの肩を掴んだ

エド「な、なんだよ!」

テルマ「エド!お前の力が必要だ!」

エド「へ…:…?よ、よくわかんねえけど、任せろ!」

女の子B「どういう事?この兵士さん何か出来るの?」

チャム「エド君はね、魔物とお話し出来るんだよ!」

男の子A「本当!?凄い!」

女の子A「いいなー!じゃあブレイブ君達とも話せるの?」

エドの周りに数人の子ども達が集まってきた

エド「おう、そうだぞ!魔物で困った事があつたら頼れよな!」

テルマ「エド、いつかくうさぎを探してるんだ。いつもなら木や草

むらにいるけど………」

テルマは周りを見渡すが、いつかくさぎの姿だけが見当たらない
テルマ「なぜかいないんだよな。ちよつと周りの魔物に聞いてみて
くれないか？」

エド「わかった！じゃあ早速、おーい！そこのおおきづち！聞いた
い事があるんだ！」

おおきづち「ギ………」

おおきづちは近づいてくるエドに警戒しているのか、持っている大
槌を構えている

エド「あ、俺、エド！危ない事しようとしてるんじゃないやねえんだぞ。ほ
ら！安心してくれ！な？」

エドは腕や足を広げておおきづちに何もしないとアピールしてい
る

おおきづち「ギ、ギイ………」

おおきづちも渋々といった感じで大槌の構えを解いた

エド「サンキュー。あのな、俺達いつかくさぎ探してんだ。どこ
にいるか知ってるか？」

おおきづち「ギイ……ギイ」

エド「そっか、それならいいんだ。じゃあなー」

おおきづちは戻っていった

テルマ「どうだった？」

エド「見てねえってさ。いつもいる場所にもいないから、あっちも少し疑問に思ってるみたいだ」

テルマ「そうか。どこかに隠れてんのかな」

男の子B「凄いや、エド君！なんでわかったの？さっきのおおきづちの話してる事」

エド「俺は魔物と暮らし……友達だからな！友達は言葉で話さないとだろ？」

男の子B「僕もブレイブ君やコロと友達だよ。なんでエド君みたいにわかんないんだろう」

テルマ「もう少し大きくなるとわかるかもしれないよ」

エド「そうそう！勉強してみるとわかると思うぜ」

男の子B「わかった！」

ルナ「あ！エド君、あそこにマンドラがいるわ。何か知ってないかな」

エド「お、本当だ。おーい！」

その後、何匹か聞いて回ったが誰もいつかくさぎを見たという魔物はいなかった

マルス「全然いないねー。なんでこんなにいないんだろう」

男の子A「もしかしてき、卵を盗んだのは夜中なんだよね。だから卵を持って動けないんじゃないかな」

女の子A「動けない？でも、どこで？」

男の子A「どうして盗んだのかはわからないけど、欲しかったから盗んだんだと思うんだ。欲しい物って、僕は部屋にしまっただよ。それと同じでいつかくさぎも家に持って帰ってそこで卵と一緒にいるんじゃない？」

チャム「そつか！お家の中にいるから皆もいつかくさぎを見てないんだ！」

ルナ「じゃあいつかくさぎのお家探しだね」

テルマ「エド、いつかくさぎはどんな場所に巣を作るんだ？」

エド「ええ!?そんなの俺も知らねえよ。あー……………でも……………あいつらは小さいし、高い場所にはそこまで登れない。長いツノと脚で地面を掘るのが得意なはずだから、どこかに穴が空いてるんじゃないか？」

男の子A「手分けしよつか。僕達はあっちに行こうよ、マルス君！」

テルマ「じゃあ俺達はこっちに行くか。チャム、おいで。マルス君達も見つけたら何もしないで俺達と合流してからにしてくれよ」

ルナ「はい！」

その頃、デルカダール城下町

商店街

イースターエッグが置かれていた場所は綺麗に片付けられていた

女性A「ありがとうございます、マルティナ様。こんな事を手伝わせてしまってすみません」

マルティナ「いいのよ、気にしないで。折角のゲームの企画残念だったわね。そういえば、私はここで何のゲームをするのか知らないけど何をする予定だったの？」

女性A「あ、そうだったんですね。ラース様にはお話ししたのですが、エッグハントをやるうと思っていたんです」

マルティナ「エッグハント……。確かそれも昔話の中に出てきたわね」

女性A「あ、それですよ！ いかくうさぎ達が盗んだ卵を探した事をゲームにして、子ども達が街の中に隠された卵を見つけ出すって内容なんです。多く見つけた人にはご褒美も用意してあったんです」

マルティナ「なるほど……。……あら？ じゃあ、今マルス達に任せたものこそ本当にエッグハントになるわけね」

女性A「ハッ！ た、確かに……」

ラース「そういう事。その意味でも、マルス達に行かせるのがいい

かなと思ってたんだ」

話していた二人の後ろからラースがやってきた

二人「ラース／様！」

ラース「形は変わったが、これもエツグハントだろう。子ども達も楽しそうにしてたし、戻ってきたらご褒美を皆にあげようと思ってるんだ」

女性A「そうですね！頑張ってくれてるだろうし、ご褒美もこのままどうしようかと思ってたんでちょうどいいです」

マルティナ「なるほどね。マルス達、頑張ってるかしら」

イースター4

その頃、デルカダール地方

デルカダール地方にある小さな森の中にマルス達はやってきていた

ガサガサガサ

男の子B「うーん、あまり奥まで入った事なかったけどそこまで魔物はいないんだね」

女の子A「スカートだと歩きにくいわ。葉っぱに引っかけちゃう」

女の子B「これ以上進むのは私達だけだと危ないかもしれないわ」

男の子A「マルスとルナがいるんだし、もう少しは大丈夫じゃない？」

女の子B「でも……」

ルナ「でも、私達もお母さん達に危ない事まではしなくていいって言われたからこれ以上進まない方がいいかも」

マルス「あ!!見て、あそこ！」

全員がマルスの指した先を見ると、木々が生えた根元に大きな穴が空いておりその前に二匹のいかくうさぎの姿があった

女の子A「あ!いかくうさぎだ！」

男の子B「こんな所にいたんだ。もしかして、あの穴が住処なのかな」

男の子A「ナイスじゃん、マルス！」

ルナ「じゃあ急いでテルマさん達に知らせないと！」

その後、反対方向にいたテルマとエド、チャムを連れて戻ってきた

テルマ「おー、本当だ。お手柄じゃん、マルス君、皆。よし、エド。話してこようぜ」

エド「だな。お前らは一旦ここで待ってるんだぞ。一応襲ってくるかもしれないからな」

マルス「待って、僕も!僕も行くよ！」

ルナ「私もー」

テルマ「え？ま、まあ、マルス君達なら多少は戦えるからいつか」

女の子A「いつてらっしやーい」

いつかくうさぎ達の住処

いつかくうさぎ「キュ!!」

エド「よっす！お前ら、えっと、なんだっけ、あの卵」

テルマ「イースターエッグを盗んだんだろ？どこにあるかとか知らないか？」

エド「そう、それ！」

いつかくうさぎ「キュ……………」

二匹のいつかくうさぎは顔を見合わせると頷いた後、住処に戻っていった

マルス「あ、あれ？行っちゃった」

エド「なんだ？」

ルナ「もしかして、逃げちやった!？」

テルマ「まさか……そんなはずは」

その時、住処から4匹のいつかくうさぎと少し体が大きく周りより幾分か歳を取ったようないつかくうさぎがやってきた

いつかくうさぎ「キュキュ」

年寄りいつかくうさぎ「ギュー、ギユ、ギユギユギユ」

エド「え？そ、そうなのか」

テルマ「なんだって？」

エド「えつと、この年寄りみたいないつかくうさぎがこの群れの長老で、卵を盗んだのは悪気があったわけじゃないんだってよ」

マルス「じゃあどうして盗んじやったの？」

長老「ギユギユギユ、ギユギユ、ギユ」

エド「私が幼い頃に仲間が春の訪れを祝っていた人間達の卵を盗む事件をおこした。その後、人間の子ども達が卵を取りに来て人間の祭りに招待してくれた事があった」

長老「ギユギユ」

エド「私もあれから随分歳を取った。もう一度だけ、あの祭りを一緒に楽しみたかったのだ。だってよ！」

ルナ「そうなんだ。おじいちゃん、子どもの頃が懐かしかったんだね」

いつかくうさぎ「キユキユ、キユキユキユ」

エド「お、そうか。おーい、お前ら！来ていいってよ。襲わないらしいぞ」

その声により、離れてみていた子ども達もやってきた

その後

長老「ギユ」

長老達は盗んだイースターエッグを全てテルマ達に渡した

長老「ギュギュギュ」

エド「大丈夫だぞ、ジジイ！俺が頼み込んでやるよ！きっと許してもらえるとと思うぞ」

ルナ「え？なんて言ったの？」

エド「昔と同じ事をすればまた祭りに参加できると考えたが、人間もこの長い時で変わったからやはり無理なのだろうなって言ったんだ」

マルス「そうだよ！僕達と一緒にイースター、楽しもうよ。父さん達に話せばきつと大丈夫だよ」

ルナ「ブレイブもコロもいるんだもん。いつかくさぎがいたって変じゃないよ」

女の子A「私もうさぎさん達と一緒に遊びたい！」

長老「ギュ……………ギュギュ」

エド「よし、決まりだな！俺達についてこいよ」

デルカダール城下町 城門前

全員「えええ!？」

マルティナとラースとグレイグは、戻ってきたマルス達の近くにいるたくさんのいつかくさぎ達に驚いている

マルティナ「ど、どういう事なの？」

ラース「まーたなんか仲良くなって戻ってきた」

グレイグ「イースターエッグは持っているようだが、あのたくさんのいつかくさぎ達は一体……」

その後、マルス達からこれまでの事を聞くと

三人「うーん……」

マルス「ダメ？父さん、母さん、グレイグさん」

ルナ「おじいちゃんのお願いなんだよ。少しくらいいいじゃん」

マルティナ「……… わかったわ。いつかくさぎ達もお祭りに参加していい事にするわ」

全員「やったー!!」

マルス達はその言葉に大きく喜んでいる

マルティナ「ただし!あまり城下町に入らないで。この城門前でいつかくさぎ達はいてもらって、料理や踊りなどは広場とここで分けてやるわ。それでいい?」

ルナ「わかった!やったね、いつかくさぎのおじいちゃん!」

長老「ギユギユ」

長老も目を細めて喜んでいる

その後、無事にイースター祭は開催された。賑やかな音楽に楽しげな踊りや煌びやかな衣装を纏った踊り子が楽しそうに舞っている。他にも美味しそうな料理がたくさん並べられており、レースが携わった花びらを使った料理などもある。また、急遽参加となったいつかくさぎ達も踊りの側で跳ねたり、食べ物を買ったりして楽しそうに参加していた

エド「よっしゃ、行くぞー!おら!!」

エドは多少手加減しながらボールを投げた

女の子A「当たらないよ。私の番!えいつ!」

マルス「わわっ、僕だ！危なっ！」

いつかくうさぎ「キュー！」

ボスン！

マルスの後ろにいたいっかくうさぎが喜んでボールを角に突き刺した

全員「あ」

いつかくうさぎ「キュ？」

ルナ「ふふ、刺さっちゃったね。痛いよ、うさぎさん」

エド「そのボール使えなくなっちゃったな。まあ仕方ないか」

男の子A「代わりは他にもたくさんあるよー」

マルティナ達は子ども達が遊んでいるのを離れてみていた

マルティナ「楽しそうね、お互いに。平和に終わってよかったわ」

グレイグ「そうですね。それにしても、本当にあの昔話の通りになりましたな。いつかくうさぎ達もこのお祭りの事は覚えていたので

すな」

ラーズ「中々面白いし、研究しがいがあるよな。生態調査に追記しておかないとな」

マルティナ「こうして見るといつかくうさぎもただのうさぎのよ
うに見えてくるわね。とつても可愛い」

ラーズ「(うさぎ鍋……………)」

マルティナ「ラーズ？今変な発想したでしょ」

ラーズ「え？いや？別に」

グレイグ「ラーズ、今完全に口元が緩んでいたぞ。どうせお前の事
だ、料理関連。つまりいつかくうさぎを食べる発想でもしていたのだ
ろう」

ラーズ「な、べ、別にそんな事ない…………… かな！」

しかし、ラーズはいつかくうさぎを見るたびに少し喉を鳴らしてい
るのだった

コロの変化

それから数日後、デルカダール城

玉座の間

マルスとルナが訓練から戻ってきてマルティナ達に報告していた

マルス「見て！グレイグさん！ソードガード！」

マルスが大剣のレプリカを持って防御の構えを取っている

グレイグ「おお、練習していたのがついに出来るようになったのか」

マルス「そう！グレイグさんやベグルさんのおかげ。まだ攻撃をしっかりと耐えるのは厳しそうだけど、軽い攻撃なら防げると思うって言うってくれたんだ」

グレイグ「俺がマルスくらいの頃はまだここまで安定してはいなかったはずだ。マルスはいつか俺を超えるかもしれないな」

マルス「えへへ、本当？」

ルナ「見ててね、お母さん、お父さん」

ルナはラーズの目の前に立って呪文を詠唱し始めた

ラーズ「こっちは大丈夫だぞ」

ラーズの周りに水色の魔法陣が描かれていく

ルナ「ヒヤダルコ！」

水色の魔法陣から氷の刃がラーズに降り注ぐ

ラーズ「よっ、ほっ、と」

ラーズは落ちてくる氷の刃を軽々と全て砕いていく

ルナ「わく、本当にお父さん全部砕いちやった」

マルティナ「でも、ヒヤダルコが成功してたじゃない。前までずっと失敗してたのに出来るようになったのね。偉いわよ、ルナ」

ラーズ「だな。安定しててよかったぞ」

マルズ「父さん、母さん、僕も褒めてー」

マルティナ「ふふ、そうね。マルズも大剣に慣れてきてるじゃない。偉いわよ」

ラーズ「流石は俺達の子どもだな。自慢の息子と娘だな」

ラーズ達がマルスとルナを撫でている

コロ「……………」

コロが離れた所からそれを見ていた

ブレイブ「ガウ？」

コロ「……………」

ブレイブ「ガウ、ガウガウ」

コロ「クウ……………」

ブレイブ「？」

次の日、デルカダール城下町 城門前

マルス達とコロはそこで遊んでいた

マルス「待て待てー」

男の子A「へへーん、速さなら負けないぞ！」

コロ「キャン！」

元気に走り回って鬼ごっこをしている

ガサ!

全員「!」

近くの草が揺れる音に皆が振り向いた

ルナ「今、そこの草揺れたよね?」

コロ「キャン!キャンキャン!」

コロがその草むらに近づくと

ももんじや「ギユ〜」

ももんじやが顔を出した

男の子A「あ!お前かー、ももんじや。また遊びに来たのか?」

ももんじや「ギユー、ギユ?」

コロ「キャン!」

マルス「ふふ、また一緒に遊ぼうよ」

ももんじや「ギュー！」

ももんじやが嬉しそうに近づこうとすると

親ももんじや「ギュー！」

遠くからそのももんじやの親のももんじやがやってきた

ももんじや「ギュー……」

親ももんじや「ギューギューギュー、ギュー」

ももんじやが親のももんじやになにか言われているようだ

コロ「クウ？」

ルナ「どうしたのかな？」

親ももんじや「ギューギュー」

親のももんじやはマルス達にペコリと礼をするとももんじやを連れて行ってしまった

ももんじや「ギューギュー！」

ももんじやは少し申し訳なきようにマルス達に手を振ってついていった

マルス「あ、行っちゃった」

男の子A「あれかな。用事が出来て遊べなくなっただけみたいなの」

ルナ「あー、確かにそんな感じだったね。まあ仕方ないよ。またいつか来てくれるよ、嬉しそうだったしさ」

マルス「そうだね。さ、続きやろう。コロ、おいで」

コロ「……………」

コロはももんじや達が進んだ方向をじっと見ていた

マルス「コロ？」

コロ「……………」

マルス「コロってば！」

コロ「!?キャン!?」

マルス「どうしたの?コロ。変だよ」

コロ「クウ？キャン！」

コロは何事もなかったかのようにルナ達の方へ走っていった

マルス「？変なコロ」

その夜、マルティナとラーズの部屋

マルス「つて事があつてね、コロが変なんだよ。病気……じゃない
とは思うんだけど」

ラーズ「ふむ、なるほど。少し元気がないって感じなのか？」

マルティナ「考え事でもあるのかしら。ブレイブは何か知ってるか
しらね」

ラーズ「よし、明日少し調べてみようか。何事もなければ安心だし、
何かあるなら治してやりたいもんな」

マルス「うん！お願い、父さん。何かあつたら僕達も手伝うよ」

マルティナ「わかったわ。グレイグとお父様にも伝えておくわね」

ラース「頼む。ブレイブもコロも俺にあんなに従順にしてくれるんだ。二人の主人として、異変は早めに対処しておかないとな」

次の日の早朝、マルティナとラースの部屋

ガリガリガリ

ラース「ん……………？何の音だ？」

まだ朝日が顔を出しきっていない頃、扉を引つ掻くような音が聞こえてきた

ブレイブ「ガウ！」

ラース「！ブレイブ？」

ラースがベッドから降りて扉を開けた

ブレイブ「ガウ！ガウガウ！ガウ！」

ブレイブは何やら随分と焦った様子をしている

ラース「どうした、ブレイブ。何をそんなに焦っているんだ」

ブレイブ「ガウガウ！」

マルティナ「ん……………。ラース？あら？ブレイブまで。一体どうしたの？」

マルティナもブレイブの声に起き上がった

ラーズ「なんだかブレイブがかなり焦っているな。マルティナ、そこにある薬取ってくれ」

マルティナ「はい」

ラーズ「サンキュー。ほら、ブレイブ。落ち着いて話すんだ」

ラーズは薬をブレイブに舐めさせた

ブレイブ「…………… あー、あー。ラーズ様、マルティナ様！こんな朝早くに申し訳ございません！ですが、緊急事態なのです！」

ラーズ「どうした、何があった！」

ブレイブ「息子が城のどこにもいないのです！」

二人「!?」

マルティナ「え!?寝る前には一緒だったわよね」

ブレイブ「はい、共に玉座の間で寝ていたはずなのですが。先程目

を覚ました時には、息子はどこにも……」

ラーズ「城から出たのか？それとも……いや。ブレイブや俺達が気配に気付かない方がありえないか。まずは探すぞ！城下町か導きの教会のどつちかなはず！」

マルティナ「私達は城下町を探すわ！ブレイブとラーズは教会の方に！」

ブレイブ「ありがとうございます！」

コロの変化2

導きの教会 周辺

まだ朝早くという事もあり少し薄暗く、魔物も寝ているのか姿が見えない

ブレイブ「息子よ！どこにいるのだ！返事をしろ！」

ブレイブは焦りながら走り回り、周りをくまなく探している

ラース「勝手に抜け出したとを考えていいだろうな。侵入されたというのは、城が荒らされていたわけでもないから考えにくい。だが、どうして抜け出した？」

ブレイブ「くっ、ここら辺にはいないというのか。ラース様、森の近くまで行ってみましょう」

ラース「そうだな。あそこはコロもよく居た場所。そこにいる可能性は高いもんな」

ナプガーナ密林近くの滝

ラース「うーん…………… 見当たらないな。どこに行ったんだ？」

ブレイブ「ラース様やマルティナ様にまでこんな迷惑をかけさせるなんて…………… 絶対にキツク叱ってやらねば」

ラース「まあまあ。コロは今までこんな事しなかつただろ。きっと何かあるんだ。最近、コロの様子がおかしかったんだろ？」

ブレイブ「……………そう……………ですね」

ラース「だろ？きっと関係があるのかもしれない。コロを見つけて話を聞いてみようぜ（ブレイブ、何か知ってるのか？）」

ブレイブ「はい。しかし、この周辺にもいないとなると残りは城下町か森の中ですかね」

ラース「うーん……………マルティナと一度合流するか？いや、森の中にも念のため……………」

ブレイブ「森でしたら私のみが探します。ラース様には危険ですの
で」

ラース「別に魔物とは戦えるから俺の心配いらねえけど
よ……………あ！もう一つある、コロが行きそうな場所！」

ブレイブ「どこでしょうか？」

ラーズ「お前達のお気に入って言ってたあの崖だよ！」

ブレイブ「！そうか！確かにあそこなら！流石です、ラーズ様！早速向かいましょう！」

滝に近づくと裏側に細い道があり、そこを進むと大きな崖が目前にたっている。ゴツゴツとしているが、段差も至る所にあり登る事が出来る

ブレイブ「私が上に登ってみてみます。ラーズ様はこの近くにいないか探していただけますか？」

ラーズ「そうだな、ブレイブの方が安定して登れるしな、つて！あそこ！」

ラーズがふと上の方を見るとコロが一人で座っているのが見えた

ブレイブ「！！見つけた！！あの馬鹿息子め！」

ブレイブが急いでそこに向かって崖を登っていく

ラーズ「まあ、無事なようで一旦安心だな」

その時

ヘルコンドル「グアアアア！」

コロの上空に大きな鷲の姿をした魔物、ヘルコンドルが飛んでいた

ラース「!?ヘルコンドル!.....まさか!」

ヘルコンドル「グアアアー!!」

ヘルコンドルは座っているコロ目掛けて空から攻撃を仕掛ける

ラース「まずい!!コロ!!気付け!!」

ブレイブ「息子よ!!逃げろ!!」

コロ「!?クツ.....」

コロがブレイブの声に気付き振り返ると同時に、向かってくるヘルコンドルにも気づいた

ヘルコンドル「ギイイ!」

ドガア!

狭い崖ではコロが思うように動けず、ヘルコンドルの蹴りを喰らい崖から真つ逆さまに落ちていく

ブレイブ「!!」

ラース「コロロー!!!」

ラースが全速力でコロの落下地点に向かって走り出す

ヘルコンドル「ギイイヤアア!!」

ヘルコンドルは落ちたコロを更に追いかけていく

ブレイブ「させるか!!」

ブレイブも崖から飛び降りた

ラーズ「間に合え!!」

ドサア!!

ラーズがギリギリで落ちてくるコロを抱き抱えた

コロ「クウ……」

ラーズ「はは、よかつ」

ヘルコンドル「グアアア!」

ラーズ「!」

ヘルコンドルが獲物を横取りされたとばかりに怒りながらラーズに向かってくる

ラーズ「よっ!」

ラースは身軽にヘルコンドルの攻撃を避ける

バギイツ！

それと同時に脚を使ってヘルコンドルを蹴り飛ばした

ヘルコンドル「ギイイ……」

ブレイブ「はっ！」

ズバツ！

その場所へ飛び降りたブレイブが爪を使い、背中を切り裂いた

ヘルコンドル「ギイイ……」ジュワー

ラース「ナイス、ブレイブ」

ブレイブ「ラース様こそ、あそこに飛ばしていただきありがとうございます
ございます」

コロ「……………」

コロはしよんぼりとした顔をしている

ブレイブ「大丈夫か」

ブレイブが抱き抱えられているコロに近づいていく

コロ「キャン」

コロがブレイブを見ると

ブレイブ「馬鹿息子が!!」

コロ「!!」

ブレイブ「貴様、どれだけの迷惑をかけたのかわかっているのか!!」

ブレイブが強い怒鳴り声をあげた

コロ「クウ……………」

ブレイブ「ごめんなさいで済むと思うな！今回ばかりは絶対に許さ
ん！勝手に城を抜け出しただけでなく、今俺達が見つけていなかった
らお前は死んでいたのだぞ!!」

コロ「……………」

ラース「まあ待て、ブレイブ。話はひとまず城に戻ってからだ。マ
ルティナにも無事に見つかった事を報告しないと。怪我はしてな
いか？」

コロ「キャン」

ブレイブ「ふん、強がるんじゃない。ラース様、息子の左下の背中を触ってみてください」

ラース「ここか？」

コロ「!?クツ……」

コロが顔を歪めた

ブレイブ「先程ヘルコンドルに蹴られた場所です。毛で隠れていますが、おそらく皮膚が切れています」

ラース「あ、本当だ。血がついている。治療してもらわないとな」

ラースは触った指に血がついているのを確認すると、そのまま城へと戻っていった

その後、デルカダール城 医療部屋

コロの胴体に包帯が巻かれた後、ラースとマルティナとブレイブはコロと話そうとしていた

マルティナ「よかったわ、見つかった。もう痛くない？」

コロ「キャン！」

ラース「ブレイブ達がお気に入りにしている崖にいたんだ。そこでヘルコンドルに襲われていたが、助ける事が出来た。無事でよかったよ」

ブレイブ「ラース様、マルティナ様、甘やかさないでください。どれだけの事をしたのかしつかりとわかってもらわなければ」

ラース「まあ待てよ、ブレイブ。コロから理由を聞いてからにしようぜ。コロ、どうして城を抜け出したんだ？」

ラースはコロにも魔物が話せる薬を舐めさせた

コロ「…………… あー、あー。あ、喋れる。えつとね…………… 俺、考えてる事があつたの」

マルティナ「考えてる事？」

コロ「うん。俺、父ちゃんしか知らないんだ。かぞく？ってやつ。マルスやルナや他の魔物には、父ちゃんと母ちゃんがいる。なのに、親、父ちゃんしか知らないなって」

ラース「確かに……………。でもブレイブ、コロがいるって事はお前に

も」

ブレイブ「ハア……………。やはりそういう事だったか。安心しろ、お前にも母ちゃんはいる。いや、”いた”が正しいな」

コロ「母ちゃんは……………どこ？」

ブレイブ「死んだ。お前を産んですぐだ。だから知らないのは当然だ」

コロ「……………」

コロはそれを聞くと悲しそうに顔を伏せた

マルティナ「群れにいた頃の話よね。ブレイブの奥さんはどんな人だったの？」

ブレイブ「どんな……………ですか。そうですね。落ち着きがなく、常にうるさいやつでした。それでいて、私と同じくらい強いキラーパーンサーです」

ラース「へえ、なんだかブレイブとは真逆って感じなんだな。どことなくバンみたいな感じがするな」

ブレイブ「そうですね。私が昔、バンを嫌っていた理由の一つでもあります。似ていたからこそ、少し腹が立っていたのです。まあバンとは違い、あいつは賢かったです」

コロ「母ちゃんはさ…… 優しかった？」

ブレイブ「…………… そうだな、俺よりはマシだ。怒る顔を見た記憶はない」

コロ「…………… 母ちゃんがいてくれればよかったのに」

ブレイブ「なに？」

コロ「怖い父ちゃんより、優しい母ちゃんの方がいい」

ブレイブ「…………… なんだと」

コロが小さく呟いた声は耳のいいブレイブにははっきりと聞こえていた

コロ「あ…………… 違うよ、父ちゃんも好き！でも」

ブレイブ「ふん、そうか。ならば、会わせてやろう」

ヒュツ!

全員「!?!」

ブレイブは素早くラース達の間にいるコロに爪を引っ掛けると、窓に向かっていく

コロ「え……………」

マルティナ「ブレイブ!?やめなさい!!」

ブレイブは窓を開けるとコロを窓から出した。今のコロはブレイブの引っ掛けられた爪のみで支えられており、宙に浮いている

ラース「馬鹿野郎!何している!!」

コロ「とう……………ちゃん」

ブレイブ「ここから落ちれば、あいつと会える。貴様はそれを望むんだろう?俺は優しくないからな」

ラース「本当にやめろって!!」

ラースはなんとかブレイブからコロを救い出し、窓を閉めた

ブレイブ「……………」

マルティナ「ブレイブ、今の発言で怒るのはわかるけど落ち着きなさい。あなたらしくないわ」

コロ「こ、ごめ…………… 父ちゃん」

コロはラースの腕の中でブルブルと震えている

ブレイブ「ふん」

ブレイブはコロを一瞥すると医療部屋から出ていった

ラース「ブレイブ……………」

ブレイブの過去

三人「……………」

少し気まぎらなくなった空気が漂っていた

ラース「…………… どうしてあんな事言ったんだ？今までブレイブに大事に育てられてきたじゃないか」

コロ「うん、わかってる。嫌いになったんじゃないよ。父ちゃんはずっと俺の自慢の父ちゃん。でもね…………… マルスやルナがラース様やマルティナ様から褒められたり、ももんじゃ君もお母さんに優しく手を繋いでたりして、いいなーって。俺、父ちゃんと手を繋いだ事も…………… 褒められた事もない」

マルティナ「そう…………… ブレイブは確かに無愛想な所はあるわね。でも、彼には彼なりの優しさがあるのよ。わかりにくいと思うけどね」

コロ「…………… 父ちゃんは優しくないよ。さっきだって俺を…………… 殺そうとした」

ラース「あれはブレイブがやりすぎただけだ。コロは母ちゃんがいした事を知らなかったんだな」

コロ「うん」

ラーズ「ブレイブの奥さんかー。どんな人、いや、キラーパーンサーだったんだろうな。さっきのブレイブの話だとやかましくて優しいって事しかわからなかったな。コロは自分の母ちゃんのこと、もっと知りたいよな」

コロ「うん」

ラーズ「だよな。そんじや、聞きに行こうぜ。ブレイブによ」

コロ「え……………」

マルティナ「ちよつとラーズ。ブレイブだつてきつとまだ怒ってるわよ。またコロが危なくなるかもしれないわ」

ラーズ「まあまあ。コロ、いい事を教えてやるよ」

その頃、バルコニー

エド「ごうか！」

バン「そうそう。足の使い方はうまいな。エドは素早いから、そこを活かしていこう。そのまま横に素早く移動してみろ」

エド「横、ほっ！」

バン「それでもいいけど、距離が離れるから相手に近づきつつ」

ガチャ

ブレイブ「……………」

エド「お！ブレイブじゃん」

バン「よう、ブレイブ…………… どうした？」

ブレイブ「別になんでもない」

バン「お、また話せるようになってるんだな」

エド「？変わってなくね？」

バン「あー、エドからすると変わらねえよな」

ブレイブ「バン」

バン「ん？なんだ？」

ブレイブ「俺は優しくないよな」

バン「ブレイブが？まあどっちかといったら厳しいと思うけどよ、優しいとも思うぞ！」

エド「俺もそう思うぞ、ブレイブ。お前、前にテルマとの訓練の時も手を抜いて指導してくれてただろ？そんな事、優しくないやつはないからな！」

ブレイブ「俺が優しい……？どこがだ。昔から俺は怖いだの、鬼だの言われてきた。さっきも自分の息子を殺そうとした。そんなやつが……優しいなど」

バン「ゴ、コロを殺そうとしたのかよ!?それはちよつとやり過ぎじゃね？ブレイブらしくないぞ」

ブレイブ「まあ……やり過ぎたとは思っている。息子も相当怯えていた」

エド「でも、魔物からしたら普通じゃね？厳しい現実を見せてより強くしていくんだからよ」

バン「それはそうかもしれないねえけど、ブレイブとコロはもう普通の魔物じゃねえんだからさ」

エド「まあ……そっか」

バン「んで、それでもブレイブは優しいぞ。だってさ、前に俺を助けてくれただろ？無視する事だって出来たのに、ブレイブは助けてくれた。俺、すっげえ嬉しかったぞ！」

ブレイブ「変な受け取り方をするな。あれはラース様からのご指示でもあったし、バンにはユグノアでの借りもあった。それを返しただけだ」

バン「ブレイブがいてくれたから、俺はペンダントから出れたんだ。これは変わらないぜ。ありがとな！」

ブレイブ「ふん、相変わらず楽天的な考え方だな」

エド「なんでそんな事聞いたんだ？優しくなりたいのか？」

ブレイブ「………昔の事だ。どうでもいい」

バン「教えてくれるのか？」

ブレイブ「なぜそうなる」

バン「どうでもいい事なんだろう？じやあ言っても平気じやねえか」

ブレイブ「…………… チツ！俺の話など面白くもないぞ」

バン「それは俺達が決める事だな。さあさあ！」

ブレイブ「ふん。俺がまだここに来る前。まだ息子も産まれておらず、群れにも属していなかった時の事だ。俺は周りより強いキラーパーンサーとして昔から恐れられていた。そんな時、俺につきまとう変なキラーパーンサーと出会ったんだ」

ここからはブレイブ達の会話です

ナプガーナ密林近くの崖

ブレイブ「……………」

ブレイブはそこで一人で日向ぼっこをしていた

ブレイブ「…………… 誰だ」

女キラールパンサー「あら、ごめんなさい。先約がいたのね」

ブレイブ「こんな所にくる者が他にいたとはな」

女キラールパンサー「同じ意見ね。あら？あなた……最近噂のキラールパンサー君？」

ブレイブ「だったらどうした」

女キラールパンサー「ふうくん、確かに怖いわね。表情死んでるんじゃない？」

ブレイブ「噛みちぎるぞ、貴様」

女キラールパンサー「あら、怒る時は顔が動くのね。それならもっと笑った方が素敵よ」

ブレイブ「本当に死にたいようだな」

ブレイブは牙を剥き出しにした

女キラールパンサー「やだ、怖い。それじゃあね」

ブレイブ「チツ！なんなんだ、あいつは」

数日後

女キラーパンサー「やつほー、また来たわよ」

ブレイブ「貴様…………… 目障りだ。なぜいちいち俺の前に現れる」

女キラーパンサー「そう怒らないでよ。私、あなたといると楽しいのよ」

ブレイブ「俺は不愉快極まりない。消えろ」

ブレイブはさっさと森に戻っていく

女キラーパンサー「やーよ、ついて行くから」

女のキラーパンサーもブレイブの後ろについてきた

ブレイブ「消えろと言った！」

ブレイブは俊敏な動きで振り返ると爪を伸ばして勢いよく振り下ろした

女キラーパンサー「やだ、怖い」

女のキラーパンサーは飄々とした様子で避けてみせた

ブレイブ「貴様！」

ブレイブはその動きに腹をたてたようでも連続で攻撃を仕掛けていく

女キラーパンサー「ちよつと、そんな怒んないで。私はただ面白い子が見つかったと思っただけよ」

ブレイブ「俺が面白いだど!？」

女キラーパンサー「ねえねえ!どうせなら勝負しましょ!私が全部避けたら私の勝ち。あなたが私を倒したらあなたの勝ちよ」

ブレイブ「ふぎけやがって!切り裂いてやる!」

数分後

ブレイブ「ハア…………ハア…………」

周囲の木は深い傷や爪痕がたくさんつき、周りに生えていた草や花は全て見る影もないほどに切り裂かれていた

女キラーパンサー「ちよつと休みましようよ。私、疲れちゃったわ。ほら、あなたも」

ブレイブ「クソ!なぜ攻撃が当たらない!」

女キラーパンサー「ふふ、女だからって舐めたかしら？私、結構強いよ。それで、私の勝ちね」

ブレイブ「勝手にしろ！」

女キラーパンサー「じゃあ、これからも私ずっと近くにいるわね！」

ブレイブ「なんだと!？」

女キラーパンサー「負けたんだから言う事聞きなさい」

ブレイブ「……………」

ブレイブ「そうして俺はあいつと……………一緒に行動を……………」

バン「アハハハハ!!ヒイツ！腹痛えー!!」

バンはブレイブが負けた所から大笑いしていた

ブレイブ「貴様ー!!俺の話聞け!!」

バン「あのブレイブが……ゴホッ!ゲホッ!負けて言いなりに
なつてたとか!!アハハハハ!!」

ガチャ

ラース「なんだ、騒がしいと思ったらここにいたのか、ブレイブ」

ブレイブ「ラース様……」

エド「よ!ラース!」

バン「師匠……ふふふ」

ラース「え、怖。なんでこいつ、こんなに笑ってんだよ」

ブレイブ「気にしないでください。後で引き裂いておきますので」

ラース「もう落ち着いたか?」

ブレイブ「……息子本来、私が育てるつもりはなかったの
です」

ラース「そうなのか?となると、ブレイブの奥さんが?」

ブレイブ「はい。ご存知と思いますが、私は愛想など持ち合わせておりませんし、周りからも恐れられていました。そんな者が子育て?笑ってしまいますよね」

ラース「そんなの関係ないだろ。現に、ブレイブはこれまでしっかりとコロを育ててきたじゃないか」

ブレイブ「……. そんな事ありません。息子があそこまで育ったのは群れの皆やラース様達のおかげです。私は今でも息子にどうしているのかわかっておりません」

バン「今のままでいいんじゃない?」

エド「うんうん。コロはブレイブの事、自慢してるしな」

ラース「俺も同意見だ。今まで通りでいいんだよ。ブレイブなりの愛情表現で伝わっているんだから」

ブレイブ「愛情…….。そんなもの、魔物の私は持っておりません」

ラース「そんな事ないさ。ブレイブが気付いてないだけ」

ブレイブ「そんなはずありません。現に息子には、あいつの方がいいと言われました」

ラース「コロは母ちゃんを知らなかったからな。興味本意な所もあるだろう。コロがブレイブを自慢にしているのは知ってるだろ？それは父ちゃんが好きだから自慢に出来るんだぞ」

ブレイブ「……………」

自慢の息子

その夜、マルスとルナの部屋

マルス「え？一緒に寝たいの？いいよ！」

ルナ「珍しいね、コロ。自分からお願いにくるなんてさ」

コロ「う、うん。久しぶりにマルス達と寝るのもいいかなって」

マルス「ベッドだともう入らないもんね」

ルナ「大きくなったねー、コロ」

コロ「そう？俺は床で寝てるから大丈夫だよ」

夜中

コロ「……………」

コロはマルスとルナが寝静まったのを確認すると閉じていた目を開け、静かに部屋から出ていった

デルカダール地方 滝近くの崖

コロ「え!？」

ブレイブ「やはりか」

コロが崖に向かうと既にブレイブが待っていた

コロ「なんで、父ちゃんが」

ブレイブ「たわけ。息子の事などわかって当然だ」

コロ「……………」

ブレイブ「俺よりあいつがいいのはわかる。俺はあいつのように優しくなれないし、言葉も足りない。お前の事を……………愛しているのかすらもわからん」

コロ「!!」

コロはその言葉に酷くショックを受けている

ブレイブ「だが、お前は間違いなく俺とあいつの息子であり、俺の……………俺達の大事な子だ」

コロ「う、うん……………」

ブレイブ「まだ俺が怖いかな？」

コロ「…………… ううん、怖くない。父ちゃんは優しくないうって俺言っただけ、あの後ラーズ様に教えられたの。父ちゃんは、本当は俺が大好きで大事で仕方ないんだって」

ブレイブ「ラーズ様が？」

コロ「うん。俺もわからなかったけど、説明されてわかった事があるんだ。父ちゃんって、俺が怪我したり危ない事がおこった後、必ず初めに大丈夫かって言ってくれた」

ブレイブ「当然だろう」

コロ「いたずらして怪我した時も、友達と喧嘩した時も、まず最初に父ちゃんは俺を心配してくれた。それって俺が大事だからなんだって言われた」

ブレイブ「…………… 俺にはよくわからん。だが、ラーズ様と言うのならきつとそうなのかもな」

コロ「ねえ、父ちゃん。俺、どうしてここの崖にいたと思う？」

ブレイブ「？勝手に抜け出して、偶然ここに来たのではないのか？」

コロ「違うんだ。俺、ほとんど無意識でここに来たの。誰かに呼ばれてたから」

ブレイブ「無意識？呼ばれていた？何を言っているんだ」

コロ「今日もね、呼ばれたんだ。暖かくて、優しくて、懐かしくて、どこか父ちゃんみたいな気配」

ブレイブ「……………」

コロ「ねえ、またあそこまで登っていい？」

ブレイブ「ああ、俺もついていくからな」

コロ「うん！」

崖の上

コロ「ハイ！」

ブレイブ「ここは……………」

コロ「姿は見えないんだけどね、今日もいるよ。ここにその気配が」

コロは何もない部分に寄りかかっている

ブレイブ「……………そこにいるのか」

コロ「うん！」

ブレイブ「俺の声も届いているのだろうか。久しぶりだな」

サアアア

静かな夜風が二人の間を流れていく

ブレイブ「息子がどうしてここに来たのかは深く考えていなかったが、そうか。お前のおかげか。どうだ？俺達の息子は」

コロ「父ちゃん？誰と話してんの？」

ブレイブ「お前が寄りかかっているのはおそらく、お前の母ちゃんだ」

コロ「え!?!母ちゃん!?!」

ブレイブ「ここは俺とあいつが初めて出会った場所。始まりの場所だ。ここにきてようやく俺も気づいた。この気配、間違うはずがない。俺が………初めて認めたやつなのだから」

コロ「そっか。へへ、母ちゃん見てる？俺、こんなに大きくなったよ」

ブレイブ「お前との契りのせいで、俺は柄にもない事をさせられ続けているのだぞ。お前によく似た自由な子を育て、更に群れのリーダーもやらされ、あの頃の一人を好んでいた俺はどこにいったのだろうか。全く………いつまでも俺を振り回してくれる」

ブレイブは夜空を眺めながら静かに話している

サアアア

再び夜風が二人の間を流れていく

コロ「父ちゃんと母ちゃん、なにか約束したの？」

ブレイブ「ああ、そうだ。お前が産まれるほんの少し前。つまり、あいつが死ぬ直前だ」

コロの母「ハア………ハア」

コロの母は横に力なく倒れ、息の間隔もかなり長くなってきている

ブレイブ「おい！起きろ！もうすぐ産まれる！持ち堪えるのだ！」

コロの母「ねえ……………一つ……………頼み事、しても……………いい？」

ブレイブ「なんだ！こんな時に！」

コロの母「私はもう……………あなたの隣には……………いられないみたい」

ブレイブ「!?そんな事、俺が許すわけないだろう！隣にいると言い始めたのは貴様からだ！お前からそれを破るなどふざけるのも大概にしろ！おい、何が必要だ！水か！肉か！果物か！」

コロの母「あなたにね……………これから生まれる子を……………育ててほしいの」

ブレイブ「俺がだと!?そんな事出来るわけない！お前だって育てる事を楽しみにしていただろう！」

コロの母「だから……………よ。私の分まで……………」

ブレイブ「無理だ！お前がいなければ……俺は子どもなどの扱いは知らん！殺してしまうかもしれないぞ！」

コロの母「ふふ……平気。だって私……知ってるわ。あなたが……本当はとっても優しく……世話焼きな事」

ブレイブ「そんなふざけた事を言っているのは貴様だけだ！俺は絶対子育てなどしないからな！」

コロの母「あら……酷い。最後のお願ひも……聞いてくれないなんて」

コロの母の目は力なく閉じようとしていた

体温もみるみるうちに下がっていく

ブレイブ「おい!!おい!!!」

コロの母「大丈夫……あなたは優しいの。きっと素敵な子に成長するわ。あなたが皆のリーダーなんてのも……ふふ、いいと思うわ」

ブレイブ「やらんと言っているだろう！おい！やめろ、目を開けろ!!」

コロの母「……………」

ブレイブ「……………」

コロ「ニヤァー!ニヤァー!」

コロの母の亡骸の近くには今まさに産まれたばかりのコロが元気に泣いていた

ブレイブ「……………俺が……………こいつを……………」

ブレイブ「そうして俺はお前を育てる事になり、リーダーにもなったのだ」

コロ「そんな話知らなかった。なんで教えてくれなかったの?」

ブレイブ「言う必要がないと感じたからだ。現にこれまで母親の事を気にしてはいなかっただろう」

コロ「そうだけど……………」

ブレイブ「だが、いつかあいつの事は聞かれると思っていた。必ずどこかで話さねばと思っていたのだ」

コロ「うん」

ブレイブ「……………俺でいいのか？」

コロ「え？何が？」

ブレイブ「俺なんかが父親でいいのか？俺は、お前に何かをしてやった記憶がない。群れの皆に囲まれて育ち、俺は見ているだけだった。多少狩りを教えたただけだ。後の生きる術は全て群れの皆からだ。」

ラーズ様と共に来てからも、マルス達やラーズ様達にお前は様々な事を教わっただろう。俺は……………こんな性格だからな。未だにお前との距離がわからない」

コロ「変な父ちゃん。何言ってるの！俺、父ちゃんの息子だよ！父ちゃんは父ちゃん！俺が世界で一番カッコイイと思ってて、誰よりも強いと思ってる父ちゃんは一人だけだよ！俺、父ちゃんの息子ですごく嬉しい！」

コロはブレイブの目の前まできて、目を見ながら伝えた

ブレイブ「!!……………そう……………か。ありがとう」

コロ「えへへ、父ちゃんにお礼言われたのなんて初めて」

ブレイブ「そうだな。何もしてやれない父親だが、少しはお前に父親らしい姿を見せられていたのかもしれないな」

ブレイブはコロの頭をポンポンと優しく叩いた

コロ「父ちゃんのその撫で方、俺大好き」

コロは嬉しそうに目を細めている

ブレイブ「この触り方もどうしていいかわからない時の触り方のままなのだ。だが、これでお前にはよかったのだな」

ブレイブもそのコロの様子を見て優しく目を細めた

コロ「うん！」

ブレイブ「…………… 昼はすまなかった。心の僅かにでも、お前を本気で殺そうとした気持ちがあった事を強く後悔している」

コロ「俺も、父ちゃんより母ちゃんがいいなんて言つてごめん。俺の自慢の父ちゃんを、俺自身が馬鹿にするなんて駄目なのにね」

ブレイブ「これからも俺についてきてくれるか?」自慢の息子”よ」

コロ「!!!うん!!もちろん!!俺の父ちゃんは世界一だもん！」

サアアア

笑い合う二人の間を優しく夜風が通り抜けていった

ぶつかる兄弟

それから数日後、ユグノア城

廊下

地下の牢屋へと続く階段の前に、イレブンとダバンとミラがいた

イレブン「それじゃあ、もう一度約束を言うよ。

ケニーの牢屋以外には見向きしない事。

特別にケニーの牢屋を開けるけど、入るのはダバンだけ。

ケニーと話せる時間は10分、それ以上は認めないよ。

いい？」

ダバン「はい！」

ミラ「わがままを申ししてしまい申し訳ありません。ダバン、落ち着いて話してね」

ダバン「そう……だな。時間も限られてる。グダグダしてはられないな」

イレブン「それじゃあ向かうよ。ついてきてね」

地下牢

見張りの兵士に軽く礼をして進んでいく。新しいユグノア城とは

いえ、地下牢にもなると暗く錆ついたような匂いが立ち込めている

イレブン「さあ、ついたよ」

ケニー「あ？」

ケニーは牢屋の隅で壁を見ていたのを振り返った

ダバン「ケニー」

ケニー「チツ！……… なんだよ。笑いに来たか？」

ダバン「そんな事するわけないだろう」

ケニー「ふん！……… その女がてめえのか」

ケニーはダバンの隣に立つミラを睨みつけた。その目は暗い牢屋の中でもはつきりと光って見えた

ミラ「…… 初めまして、ケニーさん。あなたの兄のダバンの」

ガシヤアン！

ミラ「!!」

ケニー「こんなやつが俺の兄なわけねえだろ。女、もう一度言っ

みる。その首、切り裂くぞ」

ケニーはミラが兄という発言をした瞬間、牢に勢いよく飛びかかりミラに向かって殺気をぶつけている

ダバン「ケニー……」

イレブン「大丈夫？ミラさん。無理しないで見守るだけでも」

ミラ「いいえ、大丈夫です。大きな音に少し驚いただけですので。ケニーさん、ダバンの妻のミラといいます。これからよろしくお願いします」

ミラはケニーの殺気を気にしていないように、ケニーを見つめたまま凛と発言を続け、綺麗に頭を下げた

ケニー「よろしく？はっ、何を馬鹿な事を。俺は盗賊！てめえはただの一般人！よろしくなんざ出来るわけねえだろ！」

イレブン「盗賊ケニー、今からダバンを牢屋の中に入れる。ダバンから君に話したい事があるみたいだ。ただし10分間だけだからね」

ケニー「断る!!こんなやつと話す事なんかねえ」

ダバン「聞くだけでも構わない」

ケニー「俺はてめえの声すらも聞きたくねえんだよ」

イレブン「…………… どうするかはケニーの自由だ。開けるよ」

ダバンが入り口を体で塞ぎながら、イレブンが牢屋の鍵を開けた

ガチャ

ダバン「よっ！」

ガチャ

ダバンは開いた瞬間に僅かに牢屋を開け、体を滑り込ませすぐに鍵を閉めた

イレブン「ダバン、今から10分だからね。僕達はここで見てるから」

ミラ「きつと伝わるわ。諦めないでね」

ダバン「ああ」

ケニー「聞かねえって言ってんだろ。勝手にしろ」

ケニーはダバンに背中を向け、耳を塞いだ

ダバン「勝手にするさ。ケニー、頼みがある」

ケニー「誰がてめえなんかの頼みなんか聞くかよ」

ダバン「もう一度！家族としてやり直さないか！俺とミラと一緒に！」

ケニー「は……？何言ってるんだ、てめえ」

ケニーは意味がわからないといったような顔で振り向いた

ダバン「ケニーは前にグロツタで俺に前こう言ったな。俺は兄貴でも家族でもなんでもねえ、ただの他人だと。確かにその通りだ。一番大事な弟であるお前を守らずにと苦しませ続けた。いじめられている事は簡単に予測していたのに……。」

お前がこうなったのは全て俺のせいだ！お前が俺を嫌いになり、失望するのも当然だ！だからやりなお」

バキイツ！

二人「!?」

ガシヤァン！

ケニーは話しているダバンを殴り飛ばした

ケニー「ぶぎけるなよ!!何が苦しませ続けただ、何がやり直そうだ

!!

誰のせいで俺が周りに馬鹿にされ続けたと思っっている!!

お前が俺の兄なんかになりやがったからだろうが!!!

お前がいると俺は永遠に比べられるんだよ! そんなやつと一緒になんていうわけねえだろうが!!」

ダバン「そんなやつら、見返してやればいいだろ!!」

ケニー「だから見返しただろうが!! 全員動かなくしてやっただろうが!」

ダバン「そうじゃない! 馬鹿にしてきたやつらは、功績で見返してやれ! 力でねじ伏せるのは間違っている!」

ケニー「そんなもの! 何の意味も持たねえ!! 結局比べられるに決まってるんだ!」

ダバン「なら、周りが比べられなくなるまで強くなれ! 俺を追い越せ!!」

ケニー「ああ! 追い越してやるよ! てめえをぶっ殺してな!」

ダバン「やってみろ。出来るもんならな」

二人は互いにキツく睨み合っている。その顔はまさに兄弟と思うくらい、鋭さや雰囲気こそつくりだった

ミラ「ちよ、ちよつとダバン！そんな事言ったらあなた」

ダバン「大丈夫だ、ミラ。たかが知れてる」

ケニー「舐めやがって……ここから出たら覚えてろよ！必ずてめえを殺して超えてやる!!」

その後、玉座の間

ミラ「何考えてるのよ、ダバン!!あなた、本当に殺されたらどうする気!？」

イレブン「ダバンが早々そんな事は起こらないと思ってるけど、僕もあの判断はよくないような気がする。なんであんな事を言ったの?」

ダバン「あいつが出てくるまで半年を切りました。ケニーが俺の話聞くとは思っていませんし、頼みも聞くなんて考えていません。でも、ケニーがこのまま外に出たらどうなるか。またグロツタの家へと戻り、前の生活に元通りだと考えたのです。

そんなの、俺は絶対に嫌です。ケニーにとってあそこは嫌いで嫌い

でたまらない場所です。そこにいても、ケニーにとっても周りにとっても何もいい事なんてありません。

だからケニーが俺にやってくる理由がほしかったのです。それがあれば、ケニーは俺の元へ来る。このユグノアに残り続けます。俺がいるであろう家や城に来るでしょう。その間にゆつくりと時間をかけて話していいこうと思います。まあ大体は命を狙われると思います
が」

ロウ「そのためにわざとケニーを焚きつけた、というわけか」

ダバン「はい。それにケニーに俺を追い越せと言ったのも俺の本心です。ケニーは俺と比べられ続けた事で自分に自信がなくなり、俺を恨むようになりました。なら、その俺をケニーが越えればいいと考えました」

イレブン「言いたい事はわかるけど、結構難しい事だよ」

ダバン「わかっています。これにも作戦があるんです。どうか協力していただけませんか？」

ロウ「それは一向に構わぬが……」

ダバン「ありがとうございます」

ミラ 「本当に大丈夫なのかしら、ダバン。心配で仕方ないわ」

「カミュと兵士達」

それから二週間後、デルカダール城

大広間

カミュがデルカダール城へ訪れると、玉座の間に続く扉の前にブレ
イブが座っていた

カミュ「ん？ブレイブ？」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブはカミュにぺこりと挨拶する

カミュ「どうしたんだ？中に入れてほしいんだけどよ」

ブレイブ「ガウガウ」

ブレイブは首を横に振っている

カミュ「あー、なるほど。会議かなにかしてんのか。タイミング悪
かったな」

ブレイブ「ガウ……。ガウガウ」

ブレイブは少し申し訳なさそうにしている

カミュ「いや、別にブレイブは悪くねえよ。門番みたいなもんなんだから大丈夫だぜ。じゃあ俺は訓練場にでもいつてバン達と話してくる。また後でな」

ブレイブ「ガウ！」

訓練場

カミュ「お、やってんな。よっ」

カミュはそのまま訓練場へと飛び降りた

バン「あ！カミュさん！どうも！」

ベグル「あ、本当だ。こんにちは」

ガザル「そこから飛び降りるの危ないんですけど」

カミュ「よう、バン、ベグル、ガザル。今自主練中か？」

ガザル「はい、そうですね。他の人達は見回りだったり見張りをやっています」

ベグル「カミュさんはどうしてこちらに？」

カミュ「いや、兄貴達に会いに来ただけだよ、今ちようど会議中みたいでな。入れなかったんだ」

バン「あー、そういえば師匠達今日は一日会議ですね。夕方過ぎくらいまでは玉座の間に入れないかと」

カミュ「そんな長いのか。それならクレイモランでゆっくりしててもよかったな」

バン「あ！という事はカミュさん！今お時間ありますよね？」

カミュ「ん？まあそうだが、どうした？」

バン「俺と手合わせお願いします！」

カミュ「あー……………。お前、本当昔から俺達に手合わせ申し込むよな」

バン「だって師匠以外の皆様も凄くお強いですし、勉強になりますから！いいですか？」

カミュ「ここ最近本気で体を動かしてたわけじゃねえから、前より

鈍ってるかもな。ま、それでもいいならやるか」

バン「はい！」

ガザル「俺も同じブーメラン使いとして勉強させてもらいますね」

ベグル「それなら少し片付けるんで、待っててください。おら、バン！お前が言い出したんだから、率先して片付けろ！」

バン「おう！」

数分後

バン「俺は大丈夫ですよ、カミュさん！」

カミュ「まったく……。まあいい運動になるだろ。いくぞー」

バン「はい！」

カミュ「よっ！」

カミュは勢いよく走りながら一直線にバンへ向かっていく

カミュ「ヴァイパー」

走りながらカミュが短剣に毒を纏わせていく

バン「(やっぱり師匠よりスピードが速い!)」

バンが身構えると

タツ!

バン「!?!」

バンの攻撃範囲ギリギリでカミュは飛び上がった

カミュ「フアング!」

キインツ!

バンの真後ろへと飛び降りたカミュがそのままバンの背中へと短剣を突き刺したが、バンは反射的に体を逸らした。鎧と短剣が擦れ合う音が鳴り響いた

バン「くくっ!! つぶない! 本当、一瞬でこれだからカミュさんは油断できない!」

カミュ「へえ、前はこれに対応出来なかったのに少しは成長したな」

バン「たまたまですよ!」

カミュ「そういうのは嘘でもいいから特訓しましたとか言うもんじゃねえのか？」

バン「俺、嘘つけないんで！」

バンがカミュに向かって走って行く

カミュ「知ってるよ。ま、バンらしいけどな！」

カミュも短剣を再び構えた

バン「ばくれつきやく！」

バンは走る姿勢から身をかがめ、脚をカミュへと向けると同時に強く連続で蹴りを繰り出していく

ガンツ！ヒュツ！キンツ！

カミュも避けたり、短剣で防いでいく

カミュ「その動きは兄貴やマルティナで慣れてるぜ！」

バン「なら！」

バンはその姿勢から勢いよく横に飛び移る

バン「ミラクルムーン！」

バンは身体を捻りながら回転してカミュに向かうとその勢いを合

わけて蹴りを繰り出していく

カミュ「よつと！」

カミュは勢いがある蹴りを危険と判断し、そのまま飛び退いて回避した

バン「まだまだ！」

バンはそのまま壁に激突するかと思われたが、また体を捻ると壁に足をつきカミュに向かって突撃する

カミュ「！チツ」

バン「はあ!!」

バンの猛スピードの蹴りがカミュに向かう

ビュンツツ!!

バン「!!」

カミュはそのままジャンプして足を避けた。バンはまさか避けられるとは思わず、足が大振りとなり隙だらけとなった

カミュ「会心必中！」

バゴオオン！

カミュの狙いを定めた拳がバンの脳天に直撃した。バンの顔は勢

いよく地面にめり込んだ

カミュ「ま、勝負ありだな」

ボコツ！

バン「負けたー!!悔しいー!」

カミュ「ま、あの連続攻撃にはビビったぜ。壁を足場にして更に向かってくるとは思わなかった」

バン「ですよね!絶対当てられると思ったのに!」

カミュ「俺があれに当たってたらどうなるかはわからなかったな」

ベグル「お疲れ様です。カミュさんってブーメラン使いなのに、接近戦も得意ですよね」

カミュ「勘違いされやすいけどよ、別に好き好んでブーメラン使ってるわけじゃねえんだぜ」

ガザル「え?そうなんですか?」

カミュ「俺は元々短剣が性に合ってるんだよ。ブーメランはたまた

ま使えたから使ってるってだけだ」

バン「片手剣も使えますもんね。確かにブーメラン以外は接近戦になる武器ですね」

カミュ「だろ？ま、今日のバンとの手合わせは俺の勝ちって事で」

バン「ぬぬぬ……。次は俺が勝ちますからね！」

ベグル「あ、そうだ。カミュさん、この後もお時間ありますか？」

カミュ「ああ、大丈夫だが？」

ベグル「それでしたら、バンの見回りのサポートをお願いしてもよろしいですか？俺、この後書類を作らなければいけないくて」

ガザル「俺はこの後、ギバと見張りの交代なんですよ」

カミュ「……………ハアア」

カミュは顔に手をつくとため息をついた

バン「な、なんでため息なんですか！」

カミュ「別に……。まあ引き受けてやるか」

ベグル「本当すみません。なにかしでかしたら先程みたいに容赦なく殴ってもらって構いませんので」

カミュ「そうさせてもらう」

バン「いやだ!!」

ガザル「見回り内容は簡単なので、カミュさんはバンを警戒していただくだけで大丈夫ですのでお願いします」

カミュ「はいよ」

デルカダール城下町

カミュ「なんで俺がこんな事……」

バン「いいじゃないですか！俺とお話しましょうよー！」

カミュ「俺はバンの保護者じゃねえんだぞ。そういうのは兄貴やベグルの役目だろうが」

バン「なんですか、保護者って！俺、子どもじゃないですよ！」

カミュ「精神年齢の話だよ。んで、何すんだ？さっさと終わらせようぜ」

バン「まずは街の人とコミュニケーションですよ！」

カミュ「……………そうか。俺は見とくからバンが自由にやれよ」

バン「えー、カミュさんも皆とお話しすればいいのに。皆優しいですよ」

カミュ「俺はパス。ほら、広場に向かおうぜ」

「カミュと兵士達2」

デルカダール城下町 広場

おばさん「あら、バン君！ちょうどよかったわ、よかったらこれ食べさせて」

バン「おおー！美味そうな料理！なんていうやつだ？」

おばさん「ラタトゥユっていうトマトを中心にした野菜の煮込み料理なの。どう？」

バン「うん！！美味しい！！」

おばさん「ふふ、ありがとねえ」

女性A「こんにちは、バンさん」

バン「ん、おう！こんにちは！あれ？何に使うんだ？その道具」

女性A「あ、これは前に家の屋根が少し壊れてしまったのでその修理をと思って」

バン「そ、そうなのか!?危ないだろ、俺達に言えば手伝うぞ!」

女性A「いいえ、忙しい兵士さん達を頼らなくても大丈夫ですよ。本当しだけなので」

バン「そ、そうか。無理すんなよな!」

広場にいるだけで様々な人がバンに話しかけていくのをカミュは離れた場所で見えていた

カミュ「人気者だな、バンのやつ。まあ明るいやつだし、好かれるのは当然か」

その時

女の子「わーい!」

女の子の母親「こら!勢いよく走らないの!」

カミュの横から赤い風船を持って嬉しそうな女の子が走ってきた

女の子「キャツ!」

カミュ「おわ!」

ドサ

カミュ「わ、悪い、よそ見しててわからなかった」

女の子「あ……………ご、ごめんなさい」

カミュ「いや、こっちこそ悪かったな。大丈夫か？」

女の子の母親「こら！だから走らないのって言ったのに！すみませ
ん、娘がご迷惑を」

カミュ「い、いや、大丈夫だ」

女の子の母親「あら？風船はどうしたの？」

女の子「え？……………あ！私の風船が！」

女の子が上を見上げると家の屋根に赤い風船が引っかかっていた

カミュ「あー、俺とぶつかった時に離しちまったのか」

女の子「私の……………風船が……………うわあああん!!」

女の子は泣き出してしまった

女の子の母親「もう！走るのが悪いのよ！」

女の子「だってー」

バン「ちよつ、カミユさん、何やってるんですか。こんな小さな子泣かして」

騒ぎを聞いたバンがやってくるやいなや、カミユを少し呆れたような顔で見っていた

カミユ「お、俺が好きで泣かせたんじゃねえよ」

バン「ほら、大丈夫だぞ。怖いおじさんに見えるかもしれないけど、この人はいい人だからな。風船ならまだあるからもう一つ貰ってこようぜ」

カミユ「てめえ…… 後で覚えてろよ」

女の子「あれがよかつたんだもん！」

女の子の母親「わがまま言わないの！」

カミユ「ハア、まあ俺にも責任はあるからな。待ってるよ、取ってきてやるから。よつと！」

カミュはそこから身軽に跳び上がると、屋根に手をひっかけて勢いよく体を起こして乗り上がった。どんどん屋根を登っていき、上に引っかかっていた赤い風船を掴むとそこから女の子のいる場所まで飛び降りてきた

カミュ「ほらよ、今度はしつかり前見て歩けよ」

女の子「う、うん………。ありがとう」

バン「さすがカミュさん！軽々とよく登れますねー」

女の子の母親「ありがとうございます！わざわざ取ってきていただくなんて。この子がわがママを言っすすみません」

カミュ「俺も気づけなかったしな。おあいこだ」

女の子「ありがとうー、カッコいいお兄ちゃん！」

女の子と母親は手を繋ぎ、カミュ達に手を振りながら広場を去っていった

カミュ「つたく、これだからあまり子どもは好きになれねえんだ」

バン「そうは言っても扱い上手じゃないですか」

カミュ「おい、バン。だーれが怖いおじさんだつて？」

バン「あ…………。い、いや、ほら、いい人とも言ったじゃないですか！」

カミュ「うつせえ！」

バン「ヒイツ！逃げろ！」

カミュ「逃さねえよ！」

その後、デルカダール地方

バン「酷い…………ぐすん」

バンの頭にはたんこぶが出来ていた

カミュ「んで？次は何すんだよ」

バン「俺が馬鹿になったらどうしてくれるんですか、まったく。次は魔物調査をして、それを駐屯所にいるガザルと城門で見張りをしているマーズとロベルトに報告です」

カミュ「了解。ん？」

ギバ「あ、カミュさんじゃないですか！バンと一緒になんてどうしたんですか？」

こちらに向かつてギバがやってきた

バン「おお、ギバ。ガザルと交代したのか」

ギバ「そうそう、お前はこれから魔物調査か？」

バン「おう！今日はカミュさんも一緒だ！」

カミュ「いろいろあつてこいつに付き合わされてんだ」

ギバ「へー、なんか面白そうですね。俺もご一緒してもいいですか？」

カミュ「別に俺は構わねえよ」

ギバ「ありがとうございます！バン、今回はデルカダール地方だけか？」

バン「いや、師匠達は会議だからな。そんな時に何かあるのはまず

いからデルカコスタ地方までやろうと思ってる」

ギバ「それもそうか」

カミュ「どんな風にやってんだ？」

バン「簡単ですよ。付近の魔物達の様子やどれくらい見かけるかなんかを記録していくんです。だからほとんど歩いて見渡してるだけですよ」

カミュ「そんなんでいいのか、それなら俺にも出来そうだな」

ギバ「実際たまりに街の人達も手伝ってくれるんですよ」

バン「羨ましい！俺の時はダメって師匠とベグルから言われてて、俺だけ街の人とやった事ないんですよ！酷いですよね！」

カミュ「あー……それは兄貴の言う通りだな。バンと一緒にちよつと」

バン「カミュさんまで！」

ギバ「街の人達は戦えねえんだから、お前みたいに突っ走るやつだと街の人達がもしもの時危ねえんだよ。仕方ねえだろ」

バン「そんな事ないしー！俺だつて危ない時は街の人達くらい守れるし！」

ギバ「そもそもなつちや駄目なんだよ！」

しばらくして

三人は話しながら駐屯所までやってきた

バン「それで師匠は本当流石って感じでした……… あ、駐屯所にもう着いた」

カミュ「気づいてなかったのかよ。魔物調査してたのか？」

バン「してましたよ！ほら！」

バンは持っていた記録用紙をカミュに見せた

カミュ「いや、話の事しか書いてねえじゃねえか！」

バン「あれ!?おっかしいなく、書いてたと思ったのに」

ギバ「なにやってんだよ、馬鹿。記入し直すぞ。ほら、まずはももんじゃが7匹。ズッキーニヤが2匹。フロッグが4匹」

カミュ「やれやれだな」

ガザル「騒がしいと思ったらやっぱりバン達でしたか」

駐屯所のテントからガザルが出てきた

カミュ「悪いな、邪魔した」

ガザル「構いませんよ、いつもこんな感じなんで。俺達の退屈しにぎにもなりますし」

カミュ「前に兄貴が見張りの仕事を暇って言うなって怒ってたぞ」

ガザル「げ……。カミュさん、今の発言は忘れてください」

カミュ「わかってるよ。そうだ、魔物調査だがこの後デルカコスタ地方も調査した後、報告に来る」

ガザル「デルカコスタ地方まで?…………… ああ、会議だから念のためって感じですかね。了解です」

カミュ「そういう事みたいだぜ。理解が早くて助かる」

ガザル「伊達にあんな馬鹿と長年一緒にいないんで。というか……おい馬鹿！なにカミュさんに報告させてんだよ！お前から俺に言いにくい！」

バン「馬鹿じゃねえし、馬鹿って言うな！報告ありがとうございませ、カミュさん」

カミュ「別に。それよりも今度はちゃんと書いたか？」

バン「もちろん！バッチリですよ！」

ギバ「バッチリつてのは初めから書いてる時に言うんだよ！数を覚えてた俺に感謝しろよ？」

バン「ははー！ありがたやギバ様」

ガザル「茶番してねえでさっさと調査してこい、馬鹿二人」

カミュ「ガザルの言う通りだ。さっさと終わらせて早いうちに城に戻るぞ」

二人「はい」

ガザル「(本当なら兵士長であるバンがリーダーシップをとるはず
なんだろうが、まあバンにそれを求めるのは間違ってるよな)」

「カミュと兵士達3」

その後、デルカコスタ地方 海岸

バン「これでよしつと！魔物調査はこれくらいですかね」

ギバ「特に変な所もなさそうだしな。このまま戻ろうぜ」

カミュ「……………」

カミュは山の方を静かに見つめていた

バン「カミュさん？」

カミュ「ちよつとついてきてくれないか？さつき山の中から音が聞こえたように思えてな」

ギバ「え？そうだったんですか？」

バン「俺もわかんなかった。きっと魔物が葉っぱか木の枝を踏んだんですよ」

カミュ「それならいいけどな。なんだか魔物の気配が多いように思うんだ。とりあえず行ってみるぞ」

バン「まあカミュさんがそこまで言うのなら……」

山中

奥に進んでいくと

二人「!!」

山の奥では様々な魔物が集まっていた。その中心にはリーダーと思われる魔物が立っている

ギバ「こんなに魔物が集まってる！何がおこってんだ？」

カミュ「気配はこれか。あの周りよりでかいやつ、おそろくりーダーだろ」

バン「指示を出してるみたいですし、間違いありませんね。しかし、どうして?」

ギバ「とりあえず、俺ガザルに救援要請を出してきます！」

カミュ「頼んだ。俺はもう少しだけ進んでみる。バンはここで待機してくれ」

バン「はい！」

カミュが気配を消して進んでいくと魔物の声が聞こえてきた

魔物リーダー「お前は西の方角からだ。俺達が正面の門から攻めている間に回り込め。デルカダール王国の逃げ道は限られているからな。そこを塞げ」

魔物「ギギツ！」

カミュ「(こいつら、デルカダール王国を襲う気か！)」

カミュはそれを聞くとバンの元へ戻っていった

カミュ「大変だ、バン。こいつら、狙いはデルカダール王国だ！襲撃の準備をしているみたいだ」

バン「え!?!そんな事絶対させません！早く食い止めないと！」

カミュ「あ、待て!!正面からなんて二人だと苦戦を」

バン「お前らー!!デルカダール王国に手出しはさせねえぞ!!」

魔物リーダー「なに!?!どうしてここが!?!」

カミュ「チツ!!この馬鹿野郎が!!」

夕方、デルカダール城下町

兵士達「バンがご迷惑おかけしてすみませんでした!!」

その後、バン以外の兵士達が魔物の群れの戦闘に駆り出され、事情を知ったベグル達がカミュに一齐に頭を下げていた

カミュ「いいって、別に。群れは食い止められたんだし最悪の展開は免れたんだからよ」

ベグル「ほんつつとうにすみません!こいつはいつつも人の話を聞かないで突っ込んでいく悪い癖が直らなくて!後で処刑しておきますので!!」

ベグル達の近くには全員からタコ殴りにされ血だらけのバンが倒れていた

カミュ「まあ知ってたのにそれを止められなかった俺も悪かったからよ。バンが率先して戦ってくれてこっちも助かったんだ。それくらいにしておいてやってくれ」

ベグル「すみません。お詫びといっではなんですけど、この後よろしければ酒場で飲みませんか?カミュさんの分は俺達が奢りますので」

カミュ「お、それはいいな。なら早速向かおうぜ」

酒場

ベグル「それでは、今日はカミュさんに助けていただいたという事で」

兵士達「ありがとうございました！」

ベグル達はカミュに頭を下げながら盃を上げた

カミュ「感謝されるほどじゃねえよ」

カミュはその様子に苦笑いしながら盃を上げた

バン「俺、俺にも酒をくれよー！」

バンだけは床に縄で縛られており、近くにはコップ一杯の水だけが置いてある

ベグル「なに生意気言っつてんだよ。誰よりもカミュさんに迷惑かけたのはてめえだ。水があるだけマシと思え」

バン「それは本当に悪かったけど、水一杯の価値すらないレベルだった!？」

ガザル「当然だけど水のおかわりもなしだからなー。つまみもないぞ」

バン「酷え!!兵士長虐待だー!」

バンは駄々をこねるように床でジタバタと暴れている

ロベルト「はは………。まあ同情の余地はねえな」

マーズ「たまにはいい薬になるだろ。カミユさん、カルパッチョです。おつまみにどうぞ」

カミユ「お、サンキュー」

ギバ「相変わらずよくいきなりそんな強い酒から飲めますよね」

カミユ「これで体をあつためていくんだよ。ま、飲み慣らしつてとこだな」

ギバ「飲み慣らし……。度数30が飲み慣らし……。」

カミユ「たまにはそっちのエールとかも貰うぜ。俺のも誰か飲むか？」

兵士達「全力でご遠慮させていただきます!」

カミュ「な、なんだよ、そんな一斉に」

ガザル「いや、ラーズ將軍が兵士長の頃に俺達の酒が弱いのを鍛え
るとか言つてほぼ無理矢理ホムラの酒を飲まされたんです」

ベグル「全員ぶつ倒れて次の日、誰も城に行けなかつたんです。俺
達、あれが結構トラウマでして……」

全員がその時の事を思い出したのか、どこか青い顔をしている

カミュ「ははは……。そういや、そんな話聞いたな。兄貴はたま
に自覚なしで暴れるからな。ご愁傷様だな」

数時間後

カミュ「へく、ダバンがユグノアに行ったのは知ってたがそんなト
ラブルがあつたんだな」

ロベルト「はい、そうなんですよ」

ギバ「ダバンー!! 頑張ってるよなー!」

ベグル「うるせえ、ギバ! ダバン、なんとかしろ!」

カミュ「…… 酔ってねえか? あの二人」

マーズ「ギバは酔いやすいんです。お酒好きなのに、お酒に弱くて少しかわいそうなんですよ」

バン「珍しいー、あのベグルが酔ってる」

ガザル「これ以上は迷惑になりそうだな。カミュさん、すみませんが今日はこのくらいでよろしいですか？」

カミュ「それもそうだな。中々楽しかったぜ」

ロベルト「それならよかったです。バン、ベグルを支えてやってくれ」

バン「そうだな。ほら、ベグル。顔赤くなってきてるぞ、歩けるか？」

ベグル「あー？てめえなんか支えてもらわなくてもいい」

バン「そうは言ってもふらふらしてるぞ、危ないって」

ベグル「大丈夫だって。というか、バンじゃなくてダバンがいるだ

ろ」

ガザル「まったくよー、ベグルも早い所ダバンがない事に慣れろって！」

マーズ「ギバ、ほら。一旦城に帰るぞ」

ギバ「あー、サンキュー……ロベルト」

マーズ「俺はマーズだ」

カミュ「(中々カオスだな、これは)」

デルカダール城 大広間

カミュ「ベグルは部屋があるからいいとして、ギバはどうすんだ？」

ガザル「とりあえずこのままだと明日に響くんで、二人ともこの後トイレで吐かせてきます」

カミュ「…………… 中々えげつない事するな。横にさせておけばいいだろ」

ガザル「これが一番手っ取り早いんですよ。ベグルを殴れる数少ない機会ですしね」

カミュ「なるほど、それが本音か。まあ程々にな。それじゃ俺はこれで。今日は一日ありがとな」

バン「こちらこそありがとうございます！また一緒に見回りしましょうね！」

カミュ「それは断らせてもらう」

バン「えー!!」

虎視眈々

それから五ヶ月後、ユグノア王国

ダバンとミラの家

商店街の賑やかな声が聞こえてくるくらい近くの家に、ダバンとミラが住んでいた

ダバン「それじゃあ今日も行ってくる」

ミラ「ええ、頑張ってちょうだい」

ダバン「そうだ。今日からケニーが釈放される」

ミラ「……そう。本当に大丈夫？」

ダバン「まあなんとかする。ただ、気を抜く時間が少なくなるからな。ミラには悪いが」

ミラ「いいわよ、そんなの。帰ってきたら思う存分リラックスしてちょうだい」

ダバン「はは、助かる。それじゃー！」

ユグノア城　　玉座の間

ダバン「おはようございます、イレブン様！ロウ様！」

イレブン「あ、おはよう。ダバン」

ロウ「ほほ、おはよう。今日も早いもう」

ダバン「訓練の前に体を温めておきたいですから。デルカダールではバン達もこの時間に集まってたんですよ」

イレブン「そっか、デルカダールは訓練が朝なんだったね」

ダバン「はい。昼の場合もありましたが大抵は朝でしたね。ユグノアが昼の訓練なので、まだ少し慣れないのですが」

ロウ「別に構わんよ。訓練場は開放してある。自由に使ってもらって構わん」

ダバン「ありがとうございます。それと……………今日って」

イレブン「……………うん。ケニーを釈放する日だね」

ダバン「……………」

ロウ「本当に大丈夫かの？お主にもしもの事があつたら」

ダバン「…………… そんな事にはなりませんよ。なるとしても、その時はケニーにもう一度家族に戻ってきてもらってからです。それだけはやり遂げてみせます。バン達との約束でもあるので」

イレブン「わかった。釈放するのは夕方だよ」

ダバン「承知いたしました。その時間はこちらに向かうようにします」

その後、訓練場

ダバン「ふっ！ふっ！」

ダバンは筋トレなどのトレーニングをした後、一人で剣を振っていた。ダバンしかない訓練場にダバンの声だけが響いている

ダバン「…………… 駄目だ。ケニーの事を考えすぎて邪念が多い。集中出来ない証だな」

その時

ロック「お！やーっぱりダバンだ！」

訓練場の入り口からロックがやってきた

ダバン「ロック、おはよう。今日は早いな、自主練か？」

ロック「まあな。ここ最近、かなり強い新入兵士がやってきたからな。俺も負けてられねえってよ」

ダバン「ふっ、そうか。それなら俺と手合わせしてくれないか？」

ロック「お、いいぜー。ダバンからは学べる動きが多いからな。どんどんやってこうぜ！」

ダバン「片手剣使い同士だしな。俺もロックとやるといい刺激になる」

ロック「んな世辞いらねえよ。ダバンからしたら俺なんて余裕だろ。ま、ちよつと待ってるよ。ストレッチだけさせてくれよな」

ダバン「世辞なんかじゃないさ。本心だよ」

ロック「な……………そ、そういうのは照れるからやめろ……………」

ダバン「はは、悪い悪い」

昼頃

イレブン「じゃあ、相手がカウンターを狙っていた場合、片手剣一本でどう対応すればいいと思う？」

兵士達「うーん……………」

イレブン「…………… ダバン、わかる？」

ダバン「はい。カウンターの武器や構えによってよりけりですが、槍の場合を想定するならカウンターは上か下からカウンターが飛んできます。それをわかっていれば、剣で受け流すなり避けるなりします」

イレブン「うん、そうだね。流石ダバンだよ」

ダバン「補足するなら、そもそもカウンターをさせない方法もありますね。カウンターはこちらの攻撃を利用する技。なら、こちらの攻撃を利用出来なくさせる攻撃をすればいい。」

例えば槍の場合、下からの攻撃は武器の構造上絶対にいなす事が出来ません。それをうまく使えばカウンターを使わせない戦い方が出来ます」

イレブン「お、おお……。僕も知らなかったよ」

ロック「すっげえな、ダバン！なんでそんなに知ってたんだよ」

ダバン「これは俺がデルカダールで教わった方法をそのまま言うてるだけだ。俺が凄いいんじゃない。俺達を指導してくれた人が凄いいだ」

イレブン「でも、それをしっかりと学べて使う事が出来るダバンだって凄いいさ。かなりの努力をしたのもよく伝わるよ」

ダバン「ありがとうございます」

夕方、玉座の間

ダバン「……………」

ケニー「……………」

イレブンが牢屋から手錠をつけたケニーを連れてやってきた

ロウ「ケニーよ、お主をこれより釈放する。今後は悪い行いはせず、過ごしていくのじゃ」

イレブン「手錠を開ける。暴れたりしないように」

ガチャ

ケニー「……………ふん」

ケニーはようやく自由に動かせるようになった手首を動かしている

ケニー「おい、クソ兄貴。黙って見てねえでなんとか言ったらどうだ？俺が解放されたんだぞ？」

ダバン「あ、ああ。そうだな。よかった。これでお前とゆっくり」

ダバンが話しながらケニーに近づくと

バシッ！

ケニーは近づいてきたダバンの顔を軽くはたいた

ケニー「必ずてめえを殺して俺がお前を超えてみせる。誰にも俺が下だと思わせねえようにな」

ケニーはそう言い残すと走って玉座の間から出ていった

ダバン「……………ケニー……………」

イレブン「明日から本当に気をつけるんだよ？ダバン。絶対に何かしてくるはず」

ダバン「もちろん肝に銘じています。長くご迷惑をおかけしますが、どうか見守っていてくださると大変ありがたい限りです」

ロウ「それはもちろんじやが、困っている時は遠慮なく頼るのじやぞ？」

ダバン「はい！」

次の日、ダバンとミラの家

ミラ「いつてらっしやい、ダバン」

ガチャ

ダバン「ああ、いつてくる」

ダバンが扉を開けて出ていこうとした時

ヒュツ！

ドスン！

ミラ「!!」

ケニー「チツ!!」

ダバン「よう、ケニー。おはよう」

ケニーが屋根から短剣を振り下ろしてダバン目掛けて落ちてきたが、ダバンは見向きもせず避けケニーに片手をあげて挨拶している

ミラ「嘘……。もう家がわかったの？」

ケニー「当然だろうが。盗賊なめんなよ」

ダバン「ケニー、俺はおはようと言ったんだが？」

ケニー「うるせえ!!これだけだと思ちなよ!」

ケニーはそう言い残すとそのまま屋根をつたって走り去っていった

ダバン「朝の挨拶くらい返せよ、馬鹿な弟め。昔は返してくれたのに」

ミラ「ダバン、なんでケニーがいるって?」

ダバン「玄関で話してる時に真上から僅かに気配を感じた。多分期待した感情が漏れ出たんだな」

ミラ「……………なんだかあなたの強さを垣間見たわ」

ダバン「まあこれくらいならバン達誰だって出来るさ」

ミラ「少し安心したわ。無事に帰ってきてね」

ダバン「当然。それじゃあな」

その後、商店街

人混みの中をダバンが歩いていると背後から物音を経てずに近寄っていく

ベキツ！

ケニー「くく!!!」

短剣を持っていたケニーの手を勢いよく曲げられ、嫌な音がした

ダバン「そんなんで俺を超えるつもりか？まだまだだな」

ケニー「くそ!!」

昼頃、広場

ロック「って事があつてさー！」

ダバン「はは、それは災難だったな」

ロックとダバンが見回りしながら話していると

ヒュン！

パシッ！

ロック「は……？」

どこからか飛んできたボウガンの矢をダバンは手で掴んだ。いきなりの出来事にロックはポカンとしている

ダバン「……………方向と速度、狙いの角度的に城の屋根近くか」

ロック「いやいや！何冷静に分析してんだよ！今の危うく殺される所だったんだぞ!？」

ダバン「ああ、気にしないでくれ」

ロック「いや、気にするわ!!」

ダバン「弟と勝負しててな。どっちが上かっていう」

ロック「命をかけた勝負ってなんだよ!」

ダバン「まあまあ」

綻んでいく心

それから三日間、ケニーは様々な場面でダバンを狙い続けた。しかし、どれも不発に終わっていた

夕方、ユグノア商店街

ケニー「チツ……この作戦も駄目なのかよ」

訓練中を狙ったがそれも防がれてしまい、仕方なくケニーは商店街を歩いていた

ケニー「あの野郎、完全に俺の行動を読んできていやがる。そんなにわかりやすいか？俺」

グギユウウ……

ケニーのお腹から大きな音が鳴った

ケニー「あー、昼抜いたせいで腹減った！イライラすんなあ、ったくよー！……どっかで飯食べねえと。でも……金……盗むか？」

ケニーが頭の中でいろいろ考えていると

ミラ「あら？」

ケニー「あ」

ケニーの前には買い物かごを持って買い物をしていたミラがいた

ミラ「ケニーじゃない」

ケニー「気安く人の事呼ぶな、女。俺は今イライラしてんだよ、消えろ」

ミラ「嫌よ。私、ダバンの晩御飯の材料買いに来たんだから」

ケニー「口答えすんな」

ミラ「ぎつきの大きな音、もしかしてケニーが？」

ケニー「チツ、聞こえてたのかよ。悪いか」

ミラ「お腹空いてるのね。もう少し待ってくれる？すぐに買い物終わらせるから」

そう言うと、ミラはケニーの手を掴んで歩き始めた

ケニー「は？」

ケニーはわけがわからないと言った顔をしている

ミラ「この後、塩とハーブ、それからお魚を買うだけなの。その後家でご飯作るから」

ケニー「だからなんだよ！俺には関係ねえ！」

ケニーはミラの手を振り解いた

ミラ「関係ないわけじゃない。私達家族よ？」

ケニー「てめえまでそんなふざけた事言ってるのかよ。俺はなった覚えはねえ」

ミラ「私もダバンもケニーを家族として迎え入れるわよ」

ケニー「お断りだね。あんなやつと一緒に飯なんか食えるかよ」

ミラ「それじゃあダバンがいない昼や夕方ならいいの？」

ケニー「どういう事だよ」

ミラ「だーから、私はその時間にケニーの分のご飯を作ればあなたは食べてくれるの？って事」

ケニー「は？お前が？そんなん、お前に何の意味が」

ミラ「意味？家族と一緒にご飯を食べる事がおかしい？人数も増えて楽しいし、私だってケニーの事もっと知りたいわ」

ケニー「そんななん何の意味もねえだろうが！」

グギユウウ……

再びケニーのお腹から大きな音が鳴った

ケニー「チツ！」

ケニーは少し顔を赤くしている

ミラ「話が長くなっちゃったわね。ほら、早く行くわよ」

ミラも再びケニーの手を取るとそのまま走り出した

ケニー「だから！俺の事なんか構わなくていいんだってば！」

その後、ダバンとミラの家

ケニー「……………」

ケニーは結局ミラに押し切られ、家の中でご飯を作ってもらった

ミラ「簡単でごめんなさい。今度連絡してくればちゃんとしたの作るから」

ケニーの前には野菜が少し大きめに切られたカレーライスが置かれた

ケニー「カレー……………。久しぶりだ」

ミラ「ふふ、そうなの？それならよかったわ。感想も教えてくれると嬉しいわ」

ケニー「あー」

ケニーがスプーンを持って食べようとする

ミラ「ごらー！」

パシッ

ミラが勢いよくケニーの手からスプーンを取り上げた

ケニー「な、なにすんだよ！」

ミラ「いただきますは？」

ケニー「は、はあ？」

ミラ「ご飯を食べる時はいただきますって言うのよ。ちゃんと作ってくれた人や食材、命の循環をしている大樹に感謝をするの」

ケニー「知るかよ！んな面倒な事！早く返せ！」

ミラ「そんな事言う人にはあげません」

ミラはテーブルの上からカレーも取り上げた

ケニー「あ！……… チツ！この女……… ダバンのじやな
かったら今すぐにでもぶっ殺してやるのに」

ミラ「で？いただきますは？」

ケニー「……… いただきます………」

ケニーは凄く嫌々な顔をしながら小さく呟いた

ミラ「はい、召し上がれ」

ミラは笑いながらカレーとスプーンをケニーへ返した

ケニー「面倒くせえ女だ、こんなやつはどこにダバンは惚れたんだか。睨んでも凄んでも強気に対応してくるのもムカつく。自分は大した力もない癖に」

ケニーはミラの事にイライラしながら黙々と食べていた

ミラ「美味しい？」

ケニー「…………… まあ悪くねえんじゃないかね？ 久しぶりに食ったからわ
からん」

ミラ「そう、嬉しいわ。ありがとう、ケニー」

ケニー「感謝なんかされる筋合いはねえよ」

ミラ「そうかしら？ ケニーは今、私が作ったカレーを少しでも褒めてくれたでしょ。私、嬉しかったわよ。だからありがとうでいいのよ」

ケニー「…………… 変な女」

ミラ「ねえ、女って呼び方やめてくれない？ 私、前にも自己紹介したけどミラって言うの」

ケニー「俺に関係ないやつの名前なんか覚える気はないんでね」

ミラ「関係あるじゃない。こうしてご飯食べてくれた」

ケニー「たまたまだ。もう来ない」

ケニーはカレーを全て食べ終わっていた

ミラ「冷たいのね。おかわりは？」

ケニー「あんのか？」

ミラ「ええ、あるわよ」

ケニー「じゃあ頼む」

ミラ「それじゃあ私の事、ミラって呼んでくれたらね」

ケニー「は、はあ!? そんな事しねえよ! それなら自分で行く!」

ケニーは立ち上がってそのままキッチンに歩いていく

ミラ「いいじゃない、一回だけ」

ケニー「うっせえ!..... あ?なんでキッチンに本が?」

キッチンにある鍋の近くには少し薄汚れた本が置かれていた

ミラ「ああ、これ?これは私のお母さんの大切なノートなの。子ども頃に離婚していなくなっちゃったんだけど、このノートを私にく

れたの。カレーの材料と作り方が載ってて、私の大好きな思い出の味なの」

ミラはノートを大切そうに抱きしめながら優しく話している

ケニー「ふうん……………。それが今のカレーってわけか」

ミラ「そうなの。皆、このカレーを食べると美味しいって言ってくれるの。私も昔からずっと大好きで、子どもの頃に食べたようなあの優しい味に近づきたいってたくさん練習してるのよ」

ケニー「……………。幸せなこったな」

ミラ「そうね、幸せだと思うわ。ケニーとダバンの昔の生活に比べたら、私はずっと裕福に暮らしてきたと思う」

ケニー「!?てめ、俺達の過去を」

ミラ「ダバンから聞いたわ、全部。つらい事、苦しい事たくさんあったのよね」

ケニー「何をわかったような口ぶりで!!」

ミラ「何もわからないわよ!どれだけ苦しかったか、つらかったか

なんてわからない！でも、そんな苦しみを少しでも分かち合いたいと思うの！それが、人間つてもものでしょ！」

ケニー「同情なんかいらねえんだよ!!」

ミラ「同情なんかじゃない！あなた達を大切に思うから！寄り添って、支えていこうとしているの！一人だけでは生きていけないわ。つらい時には、必ず誰かが支えてあげないといけないの。その相手がどんなにこれまで嫌っていた相手だったとしても、支えてくれる人が絶対側にいるわ！」

ケニー「そんなんは甘えだ！俺は！一人だって生きていける！兄貴を超えられる！」

二人は睨み合っている

ケニー「ふん！話にならねえ。じゃあな」

ミラ「あ、ちよつと！」

ケニーは走っていった。ミラも大急ぎでその後を追った

ミラ「またご飯食べたくなったら来てよねー！いつでも待ってるから！」

外に出ると走り去るケニーの背中に向けて大きな声を出した

ケニー「……………」

その夜

ダバン「は？ケニーとご飯を食べた？」

ミラ「ええ、そうなの。カレーを食べてくれて、悪くないって言ってくれたわ」

ダバン「え？俺の、魚のソテーだけど」

ミラ「そこまで多く作ってないもの。ケニーとは別にしたのよ」

ダバン「えー……………」

ミラ「あら？いらない？」

ダバン「あ、いやいや！これも美味しい！いる！というか、よくケニーを家に入れられたな」

ミラ「偶然商店街で会ったのよ。そしたらお腹空いてたみたいだったから少し無理矢理家に連れ込んだの」

ダバン「おお……。俺だとそうはならなかっただろうな。流石ミラだ」

ミラ「ふふ、ありがとう。少しでもケニーの事を知れてよかったわ」

ダバン「それならよかった。そうだ。それと明日以降、あまり外に出ないでくれないか？」

ミラ「え?..どうして?」

ダバン「随分前にバン達とも行った事がある屋敷跡があるんだが、その近くで呪術を扱う強力な魔物が発見されたらしい。呪術の範囲は広くて、この王国にまで届いている。何をしてくるかわからない。

だから明後日にユグノア王国でも外に出ないようにしてもらって、その間に俺とイレブン様とロウ様が討伐を計画しているんだ」

ミラ「そうなのね、わかったわ。ダバン、信じてるけど気をつけてね」

ダバン「ああ、もちろんだ。ありがとう、ミラ」

狙い

それから二日後、ユグノア城　大広間

イレブン「それじゃあ出発しようか」

ダバン「は！」

ロウ「何やらよくない魔力を付近から感じる。魔物の魔力と合わさって危険じゃ。早く倒して皆を安全にしてやらんとな」

イレブン「僕も嫌な予感がする。大変な事になってしまいう前に急ごう」

イレブン達は森の中にあつた屋敷の跡地に向けて出発していった

その頃、屋敷跡地

森の中にある跡地には黒く渦巻いた謎の大きな球体があり、その中で一体の魔術師のような姿をした魔物が水晶を覗いていた

???「けへへへ、中々集まってきた。不安、絶望、やはり人間から得られる負の感情は私の呪いに非常に合う。特に一人の男から感じる妬みや苦しみ、最高じゃ。もつと、もつと私によこせ……………そうだ、もつと効率のいい方法があつた」

水晶には屋根の上で座り込んでいる一人の男が映り込んでいた

その頃、ユグノア城下町

屋根の上でケニーが一人で座っていた

ケニー「……………」

ケニーはこの前のミラとの出来事により、昔の事を思い出していた

ダバンとケニーが共に暮らしていた時の事

ガチャ

ダバン「ケニー、ただいま」

ケニー「あ！兄貴！おかえり！今日はどうだった？」

ダバン「……………わり、また依頼邪魔されてさ。ほんの少ししか
お金、稼げなかった」

ダバンの手には三枚の銅貨が握られていた

ケニー「そっか、また……………あいつらが？」

ダバン「ああ。情けなくてすまないな。この金、兄ちゃんはいらな
いからさ、ケニーにやるよ。ちゃんと貯めておくんだぞ」

ダバンはケニーの手に銅貨を全て渡した

ケニー「え、いいよ！これ、兄貴の稼いだ金じゃん！僕……俺もいつか兄貴みたいに稼げるようになるからさ！」

ダバン「いいよ、明日こそもつと稼いでくるからさ。それより兄ちゃん、腹減ったな〜」

ケニー「あ〜ご飯出来てるよ！孤児院の子ども達に教わったんだ！かれ〜ってやつにしてみんだ！うまく出来てるかはわかんないけど」

ダバン「かれ〜？」

ケニー「うん！違う国の料理なんだってさ！はい」

ケニーは小さな鍋からカレーをすくい、皿に乗せた

ダバン「ほう……。美味そうな匂いがするな。これ、野菜か？こんな高いやつ、どこから」

ケニー「孤児院の人から傷んだりしてる物貰った！」

ダバン「はは、そうか。それはありがたいな。お礼言ったか？」

ケニー「もちろん！兄貴も明日言つてよね！」

ダバン「そうだな。さあ、食べようぜ」

ケニー「うん！あーん……………！うえ……………野菜、半生」

ダバン「まあこれくらいなんてことないだろ。噛みごたえがあつていいじゃないか、美味いぞ」

ケニー「うう、折角兄貴にもっと美味しいかれー作ってあげたかったのに」

ダバン「おいおい、そんな事ないって。俺の初めてのカレーがケニーの手作りでこんなに美味しいんだ。凄く嬉しいぞ」

ケニー「え、本当!?!美味しい!?!」

ダバン「もちろんだ。弟が俺のために作ってくれたカレーだ、まずいわけないだろ」

ケニー「じゃ、じゃあまた作ってもいい?」

ダバン「ああ、楽しみにしてる。でも、無理はするなよ?」

ケニー「うん!!」

ケニー「……………何思い出してんだよ、俺。こんな記憶……………邪魔でしかねえ」

ケニーは固く手を握りしめると

グギユウウ……………

ケニーのお腹から大きな音が鳴った

ケニー「またかよ。ま、昨日何も食べてないから当たり前か」

その時、ふとケニーの脳裏にある一言が思い浮かんできた

ミラ「またご飯食べたくなったら来てよねー！いつでも待ってるから！」

ケニー「……………行くか、ダバンもないだろうしな」

ケニーは屋根から飛び降りて広場へと向かっていった

その頃、ユグノア地方 山中

ガサガサ

イレブン達はどんどん屋敷跡地に向けて進んでいた

ロウ「進むにつれてどんどん魔力が濃くなつてゆく。やはり原因はあの屋敷跡地で間違いないようじゃな」

ダバン「ここまでくると俺でも感じます。この雰囲気、並大抵の魔物ではないようですね」

イレブン「そうみたい。もしキツそうだったら皆に援護を要請する。だから退く事も視野に入れておこう」

ダバン「承知いたしました。勇者様のお仲間が揃えば敵なしですからね」

イレブン「ふふ、敵なしは言い過ぎだよ。まあ負ける気はしないけどさ」

ロウ「!?なんじゃ、あれは」

二人「!」

三人は屋敷の跡地の場所にある大きな黒い球体にたどり着いた

ダバン「なんですか、これ。こんなの見た事ない」

イレブン「これが魔力の正体？」

ロウ「わからん。わしが近づいてみよう」

ダバン「!!いけません、ロウ様！何かあったらどうなさるのですか！俺が代わりに行きます！」

ロウ「じゃが……」

ダバン「イレブン様とロウ様は俺の後ろにいてください」

イレブン「わかった。よろしくね、ダバン」

ダバン「……」

ダバンは盾を構えながら恐る恐る黒い球体へ近づいていく

二人「……」

イレブンとロウもダバンの後ろについていく

ダバン「さ、触りますよ」

二人「うん／うむ」

ダバンの盾が黒い球体に触れた瞬間

ブワツ!!

三人「!?」

触れた部分が大きく広がり、三人を一瞬で包み込んだ

ダバン「え!？」

イレブン「な、中に入っちゃった!!」

ロウ「なるほど、これは魔力で覆われた空間の入り口じゃったというわけか。そしてここでおそらく何かをしておったのだろう」

三人の目の前には黒い空間が広がっており、その中心には大きな壺や謎の液体が詰まった瓶、本棚や薬品のような物など怪しい物がこれでもかと置かれている

イレブン「なんか…… ラースのお父さんの研究所だった場所と似てるかも」

ロウ「当事者はおらんようじゃ。今のうちに少し調べてみよう」

その頃、ダバンとミラの家

コンコン

ミラ「はい」

ガチャ

ケニー「よ、よう」

ミラ「あら！ケニー！こんにちはね、どうしたの？」

ケニー「いや……………その、大した事じゃねえんだけど」

グギユウウ…………

ケニーのお腹から再び大きな音が鳴った

ケニー「チツ!!」

ケニーは顔を赤くしてそっぽを向いた

ミラ「……………ふふふふ」

ケニー「笑うな！殺すぞ！」

ミラ「ふふ、ごめんなさい。またお腹空いてたのね。いいわよ、ご飯出来てるから」

ケニー「ふん！あ、それとよ」

ミラ「なに？」

ケニー「なんでこんなに人がいねえんだ？店もやってねえし、まさか全員家の中なんて事あるのか？」

ミラ「あー、ケニーは知らないのね。今日から極力外に出ないように言われてるのよ。なんでも強い呪術を扱う魔物が近くにいらしくて、被害を抑えるためらしいわ」

ケニー「ふーん、そんなのさつさと倒しちゃえばいいのに。ここには勇者様とかそのお仲間とやらがいるんだろ？」

ミラ「そうね。だから今日からイレブン様とロウ様、それとダバンが討伐に向かっていったわ。絶対倒してくれるから安心ね」

ケニー「そもそもそんな魔物がいるとわかった時点で倒しておけばいいのによ」

ミラ「そんな事言わないの。お二人は忙しいんだから。ほら、いつまでも玄関で話してても意味ないわ。あがって」

ケニー「そうだな」

ケニーが家の中に入り、扉を閉めようとする

ヒュオオオツ!!

二人「!？」

強い強風が吹き、扉が開かれた

ミラ「キヤア!!」

ケニー「なんだ!？」

???「お前だ、私の呪いに非常に合う負の感情を生み出している男は」

開け放たれた扉の前には謎の魔物が立っていた

ケニー「ああ!?!何の話だ!」

ケニーは短剣を構えて身構えた

ミラ「な、なんなの!?!あいつ!この国にどうやって!」

??? 「さあ！私と共に来るのだ！」

謎の魔物がそう叫ぶと謎の裂け目が出来上がり、吹き荒れていた強風が今度は切れ目の方へ向かって吸い込むように吹き始めた

ケニー「ぐっ…… やべ、これは」

ミラ「やだ、何よこれ！」

バサバサバサツ!!

二人は必死に掴まって耐えているが、家の中の物がたくさん裂け目の中へと吸い込まれていく

その時、キッチンから一冊の古びた本が吸い込まれていく

ミラ「!?駄目!!」

ミラはそれを見ると手を離して本を両手で抱き抱えた

ミラ「キヤアアアツツ!!」

手を離れたミラはそのまま裂け目へと吸い込まれていく

ケニー「あ!!んの、馬鹿女が!!」

ケニーもそれを見ると急いで追いかけていった

だいたくまの書

その頃、イレブン達は

ドサ！バサバサ！

突如現れた謎の裂け目から靴やタオルなどの物が出てくるのを警戒して眺めていた

イレブン「な、なに、この裂け目」

ロウ「わからん。出てくる物にも共通点は見つからんおう」

ダバン「見た事ある靴だ、あのタオルも」

その時

ミラ「キヤアツ！」

ドサア！

三人「!？」

本を抱えたミラが裂け目から出てきた

ミラ「いたた…ここは？」

ダバン「ミラ!？」

ミラ「え!?ダバン!?それにイレブン様にロウ様まで!」

イレブン「ど、どうしてミラさんがこんな所から」

その時

ケニー「うおっ!」

裂け目からミラを追いかけてきたケニーも出てきた

ダバン「な!?ケニーまで!」

ケニー「げ、なんでてめえがこの裂け目の先にいるんだよ!」

ロウ「ここはわし達が調べておった屋敷跡地じゃよ。一体お主達に何があったのじゃ」

ミラ「そ、そうだったわ!私達、変な魔物に襲われて!」

???「おや?私の空間に知らない人間が三人。いつの間に侵入されたのやら」

全員「!?!」

イレブン達の後ろから謎の声が聞こえ、振り向くとそこにはミラ達を吸い込もうとした魔物が裂け目を閉じて立っていた

ケニー「あいつだ！俺達をいきなり吸い込んできたやつは！」

イレブン「誰！どうしてミラさん達を狙った！」

ジュウ「私の名はジュウ。邪神様により授けられた呪術の力を溜めていた。その力を増幅させるため人間の負の感情を媒体にして、呪いにしていた」

ロウ「人間の感情を操り、力に変える。そんな事早々出来る物ではあるまい。皆のもの、油断するでないぞ」

ダバン「ミラ、下がっているんだぞ」

ミラ「え、ええ」

ジュウ「そして私の呪いに非常に合う負の感情を持つ男、それがお前だ！」

ジュウはケニーを指した

ケニー「俺がだと！」

ジユウ「そうだ。お前の兄に対する羨み、妬み、孤独、自分への劣
等感。全てが最高に呪いの力が溜まりやすい」

ダバン「ケニー、お前……」

ケニー「つぎけんな！勝手に人の事決めつけてんじゃねえよ！」

ジユウ「あと少しなのだ。あと少しで私の呪いは完全となる。さ
あ、私の呪いの力の糧となれ!!」

ケニー「誰がなるもんか！」

ケニーは短剣を構えてジユウの元へと単独で走っていく

ダバン「やめろ、ケニー！無謀な事をするな！」

ケニー「黙れ！ヴァンパイア」

ケニーの二振りの短剣が赤黒く力を纏い始めた

ジユウ「ジバマータ」

ジユウが地面に魔法陣を描いた瞬間、ケニーの周囲から数十発の地
面の塊がケニーに向かって飛んできた

ケニー「!?」

ドガガガガガ!!

ケニーは量と速度に対応出来ずに四方八方から攻撃され続けている

ダバン「ケニー!!」

ミラ「ケニー!」

ダバンとミラがケニーに向かっていく

ケニー「ぐっ……」

ケニーは攻撃が終わるとそのまま血を吐きながら倒れ込んだ

ジュウ「さあ大人しく来るのだ」

イレブン「させないよ!」

ジュウ「む!？」

ケニーが攻撃されていた間にジュウの後ろにはイレブンが迫っていた

イレブン「アルテマソード!」

イレブンは闘気のを剣に宿し、真っ白なオーラを纏った剣を振り下ろした

ジユウ「ぬう!!」

ガキン!

ジユウはギリギリで杖で防いだ

イレブン「ぐぐぐ……ハアツ!!」

ガアン!

イレブンはジユウと競り合った後、ジユウを勢いよく押しつけた

ジユウ「ぐうっ!」

ジユウはその勢いに後方へと戻された

ロウ「ケニーよ、大丈夫かの。どれ、ベホマじや」

ロウはダバン達と共にケニーへ駆け寄っており、ケニーに緑色の魔法陣を描くと完全治癒の力をかけ傷を瞬時に塞いだ

ミラ「よかったわ、ケニー」

ケニー「別にお前に心配される筋合いはねえはずだ」

ミラ「そんな事ないわ。私が吸い込まれた時、すぐにケニーも追いかけてきてくれたでしょ。私を心配してくれたのよね。だから私もあなたを心配して当然じゃない」

ケニー「また変な事を」

ダバン「ミラ、戦闘が始まる。早く遠くに避難していてくれ」

ミラ「そうね、頑張つて！」

ミラが立ち上がって足速に離れて行こうとすると

ジュウ「！その女！」

ミラ「!?!」

ジュウ「こっちに来い！」

そう言うとジュウの杖が怪しく光り出した

ミラ「キャアツ!!」

ミラはその光に吸われるように体が勢いよくジュウの元へと移動させられた

ダバン「な!?!なにしゃがる、あいつ！」

ミラ「な、なによ！離さない！」

ミラはジユウの腕に囚われながらもジタバタと暴れている

イレブン「ミラさんを離すんだ！」

ジユウ「ふん、勇者と真っ向から戦う気などはなから無いわ。……おや、なんだ？その本は」

ミラ「!?やめて！この本だけは渡さない!!」

ジユウ「そう言われたらさぞ気になる。ふん!!」

ジユウはミラが必死に抱えている腕を力強く握った

ミシミシ

ミラ「ああああ!!!」

バサ

ミラの手首から嫌な音が聞こえるとあまりの痛みにミラは抱えていたノートを離してしまった

ダバン「てめえ!!」

それを見たダバンは勢いよくジユウの元へと駆けていく

ジユウ「おっと」

ミラ「うう……」

ジユウはその様子を見てダバンに向かってミラを突き出した

ダバン「ミラを離せー!!」

ダバンがミラに手を伸ばすと

ジユウ「ドルマドン！」

ジユウは作戦通りといった顔でダバンの足下に黒い魔法陣を描き、強大な闇の力がダバンを包み込み、ミラの目の前で大爆発を起こした

ドオン！

ミラ「ダバン！」

ダバン「がつ……くつ、なんて威力だ」

ダバンは直撃をくらい、その場で膝をついた

ジユウ「さて、これがそのあなたの大事な物なんだな。汚らしい本だ」

ミラ「くっ、返しなさい！」

ジユウ「もうこの際、負の感情を出してもらうならこの男でなくともいい。あなたで私の呪いの力を完成させてください！ハアアツ!!」

ジユウが杖に力を込めて本に黒い魔力を注ぎ込んだ

本は黒く染まっけいき、怪しく光り始める。更に小さな本は膨張を始めていきどんどん大きくなっていく

全員「!？」

ミラ「やだ…………… や、やめて……………」

あくまの書「ギイイイ!!」

本は大きな魔導書のような姿になり、表紙には紫や赤黒くなった不気味な色に赤いギョロギョロとした大きな目玉が一つついている魔物の姿となった

イレブン「な、なんだこいつは！」

ロウ「知らぬ魔物じゃ！魔物を作り出しおった!!」

ダバン「こんな事まで出来んのかよ」

ケニー「…………… あいつの、あの大事にしてた本が……………」

ジユウ「さあ、勇者達を蹴散らせ！」

ミラ「やめてー！！」

ミラはこれまでに聞いた事がないような悲痛な叫び声をあげた。その顔は目に大粒の涙を滲ませて苦しそうな顔をしていた

あくまの書「ギイイイ!!」

そんなミラの声は魔物には届かず、あくまの書はオレンジ色の魔法陣をイレブン達に描き、大きな火柱を発生させた

ミラ「ああ…………… あああ……………」

ミラは絶望感に浸ったような顔をしてあくまの書を見ている

イレブン「ふっ！これはベギラゴン！」

イレブン達は全員火柱を避けていた

ジユウ「お？おお…………… 完成だ！あなたからの絶望で今！私の呪いの力が完成した！見せてあげましょう！私の呪いの本気をこの本に！」

ジユウはもう一度力を込めて杖を握ると、跡地を覆っていた黒い魔力の球体は全てなくなり杖に吸収されると、その杖事あくまの書に吸

われていった

ドクン

あくまの書が大きく跳ねると、更にその姿は大きく強大に成長していった

全員「!!」

だいたくまの書「ジャアアア!!」

あくまの書より遙かに大きくなり、森からも大きくはみ出すほどの巨大な本となり目玉も表紙も更に禍々しく恐ろしき姿の魔物となった

ミラ「私の……………皆を笑顔にする本が……………」

ロウ「こうなつては致し方あるまい。この本の魔物を倒すしか」

イレブン達が剣を構えた

ダバン「ミラ……………すまん」

ケニー「ま、待てよ、てめえら!!」

ケニーはだいたくまの書の前に立ちはだかるように立った

イレブン「ケニー、なんで」

ケニー「ダバン！てめえ、この本の事知らねえのかよ！あいつの大事な本なんだぞ！」

ダバン「え、なんでお前がそんな事知ってんだよ。この本、なんなんだ？ミラの物なのはわかるが」

ケニー「ハア!?この本はな、あいつがガキの頃の母親との思い出の大事な大事な本なんだぞ！お前だって食べた事あるんだろ、あいつのカレー！その作り方の本だ！」

料理できねえお前にはわからねえかもしれねえけど、あいつはめちゃくちゃこの本大事にしてるんだぞ！それを攻撃してボロボロにしてもいいのかよ！あいつの思い出を壊していいのかよ!!」

ミラ「ケニー……………」

イレブン「母親との…………… 大事な思い出」

ロウ「それが詰まった本じゃったのか」

ダバン「…………… 知らなかった。だけど、こんな姿になっちゃったんだぞ！」

ケニー「わかってる。だがよ、あいつは呪いとやらの力でこの姿にしたんだろ。だったら、あのクス野郎をぶっ飛ばせば元の姿に戻るんじゃないのか」

ロウ「うむ……可能性はある。じゃが、あやつの元に辿り着くためにはこの魔物との戦闘は避けては通らぬ。更にミラさんもあやつから救わないといかんのう」

イレブン「……よし、わかった。僕とおじいちゃんでこの魔物を引きつける。あの魔物からミラさんの救出と討伐はダバンと……ケニー、君達に任せたい」

ダバン「え……は、はい！」

ケニー「勝手に指示すんな。俺のやりたいようにやるだけだ」

ロウ「よし、ならば動き始めようかの」

息の合う連携

ダバン「ケニー、いくぞ」

ケニー「はっ、お前なんかと協力する気はねえよ。俺は俺のやりた
いようにやるだけだ」

ダバン「あいつは姑息な手を使ってくるんだぞ。一人じゃ難しい相
手だ」

ケニー「だからっててめえに頼るのはごめんだ！」

ケニーは短剣を構えるとジュウに向かって再び向かっていく

ダバン「あ、待て、ケニー！」

ダバンもケニーの後ろを追っていった

だいかくまの書「ジャアアア!!」

だいかくまの書はイレブンとロウに向かって本を開くと鋭く尖つ
た紙を高速で飛ばしていく

イレブン「はっ、ふっ！」

イレブンは盾で防いだり避けたりしていく

ロウ「マヒヤドじゃ！」

ロウは自身の前に水色の魔法陣を描くと、大きな氷柱を地面から生

やして氷を盾にした

イレブン「どうしよう、迂闊に攻撃する事が出来ない！」

ロウ「むう、防戦一方かもしれないのう。じゃが、ここまで巨大になるとこの山への被害も大きい。長期戦にならないとよいが」

だいたくまの書「ギイアアア!!」

ケニー「俺が相手だ！カオスエツジ！」

ケニーは持っている短剣に黒いエネルギーを纏わせ、そのまま素早くジユウに向けて切り裂いた

ジユウ「お前など私の敵ではない！」

ジユウは持っている杖で軽く短剣の一撃を防ぐと

ジユウ「マヒヤデドス！」

ケニーの上空に水色の魔法陣を描き、巨大な氷柱をいくつも降らせてきた

ケニー「チツ!..... な?!」

ケニーは即座に離れようとするが足が動かずに下を見ると、地面がケニーの足に絡みつくようにまとわりついていた。ジユウが仕掛けたジバルンバの罠である

ジユウ「真つ向から仕掛けてくるなど馬鹿のやる事です！さあ、死

になさい！」

ケニー「くっ！」

ダバン「させない！ばくれつきやく！」

追いついたダバンが大きく跳び上がり降り注ぐ氷柱を足場にしながら華麗な足捌きで碎いていく

ジユウ「チツ、貴様は中々やるようだな。たかが一兵士の分際で」

ダバン「ケニー、だから突っ込むなど言っただろう」

ケニー「うるせえ。俺に指図すんな、クソ兄貴が」

ジユウ「ふふ、見苦しいですねえ。昔は仲が良かった兄がどんどん上に行く事が許せないでしたね。あなたの心、ずっと見ておりましたよ」

ケニー「人の心勝手に見てんじゃねえ！気色悪いやつめ！」

ジユウ「必死に抗ってどうするのです？弱いものは弱い、強いものは強い。世界の理でしょう。あなたは弱いんですよ、兄と違って」

ケニー「俺は弱くねえ!!」

ミラ「あんた、ケニーを馬鹿にするんじゃないわよ！」

ジユウ「うるさい小娘ですねえ。あなたは用済みです、黙ってなさい!!」

ジユウは捕らえているミラを突き飛ばした

ミラ「キャツ！」

ミラは地面に倒れた

ダバン「ミラ！」

ジユウ「イオマータ！」

倒れたミラの周囲にオレンジの魔法陣が描かれ、連続で爆発が起
こる

ドオン！ドオン！ドオン！

爆発の煙と土煙でミラが見えなくなる

ダバン「ミラーー!!!」

ダバンは急いでミラに駆け寄る

ケニー「おい、やべえだろ！そいつ、ただの女だぞ！」

ケニーも焦ってミラへと向かう

ダバン「ミラ、ミラ!!平気か!？」

ミラ「つつ……ごめ、なさい……。私の……。せいで、大切
な……。ノートが、ダバン達が……。」

ミラは傷だらけになり、服もあちこち破けてしまっている

ダバン「ミラのせいなんかじゃない！あのノートは、あんなやつを絶対倒して元に戻してみせる！休んでいてくれ、ベホイム」

ダバンは優しく声をかけて緑色の魔法陣を描くと、ミラの傷を塞いだ。ミラはそのまま意識を失った

ダバン「お前、絶対に許さないからな」

ダバンはそつとミラを優しく地面に置くとジュウに振り向いて睨みつけた

ケニー「……………」

ケニーはミラの目元に残った涙を優しく拭き取った

ケニー「…………… おい、兄貴」

ダバン「!?なんだ、ケニー」

ケニー「お前と協力するのは癪だが、この女が泣いて俺達に謝る姿なんて見たくねえ。あのノートがねえと俺の昼飯や晩飯がなくなる。そっちの方が困るんでね。今だけ協力してやるよ」

そう言つてケニーはダバンの隣に立った。その顔は先程のダバンと同じようにジュウを鋭く睨みつけていた

ダバン「…………… ああ！頼む、ケニー！俺はお前のように素早く動けん。俺があいつの気を引く、その間にケニーはあいつに攻撃してくれ！」

ケニー「俺だつてあいつの攻撃を喰らいたくねえ、痛えからな。だから、しつかりその盾で守りやがれよ！」

ケニーはジュウへと走り出した

ダバン「当然！俺は守りたいものを守る盾だ!!」

ダバンも同じくケニーに並んで走り出した

ジュウ「二人になった所で片方が弱ければ何も変わらん！マヒャデドス！」

ジュウは地面に水色の魔法陣を描くと、巨大な鋭い氷柱を大量に生やした

ダバン「ケニー！」

ケニー「言われなくとも！」

ダバンは氷柱を軽々と足場にしてジュウへと向かう

ジュウ「メラガイアー！」

ジュウは赤い魔法陣を描くと、そこから巨大な火の玉を作り出してダバンにぶつける

ダバン「はやぶさ斬り！」

ダバンは素早く斬撃を二回繰り出して火の玉を切り裂く

ポオオン！

切り裂かれた火の玉が爆発すると、爆発の中からケニーが素早く
つつこんできた

ジュウ「チツ！」

ジュウは杖でガードしようとする

ケニー「へっ、馬鹿が！」

ケニーはそのまま高く跳び上がった

ジュウ「!？」

杖の先には剣を構えたダバンがいた

ダバン「はあっ!!」

спан！

杖はダバンによって真つ二つに斬られた

ジュウ「くっ、私の杖が！」

ケニー「まだ続け！さっきのお返しだ！」

ケニーはジュウの後ろに着地するとそのまま短剣を振り下ろす

ケニー「ナイトメアファング！」

赤黒く纏った二振りの短剣がジュウを切り裂いた

ズバン！

ジュウ「ぐうっ……調子に、乗るなー!!」

二人「!？」

ジュウは怒ったのか、体表が赤く変色していく。それと同時にジュウを中心に風が集まっていく

ケニー「チツ、なんだこれ！」

ダバン「なんか来るぞ、ケニー！」

ケニー「………ったく！」

ジュウ「イオグランデ!!」

ジュウは集まった風に向かって橙色の魔法陣を大量に描くと、そこから大爆発を引き起こした。更に風によって爆発の範囲が格段に広がっていく

ドオオン!!!

これまでとは桁違いの威力に大地が割れ、周囲にある木々も倒れていく

ロウ「ぬう!？」

ロウは突然の衝撃に足を転ばせそうになった

イレブン「うわ！つと、おじいちゃん、大丈夫!?!」

だいたくまの書「ギイイイ!!」

だいたくまの書はよそ見をしたイレブンに向かって朱色の魔法陣を描くと、巨大な火柱がイレブンを包み込んだ

ロウ「イレブン!!」

火柱が収まると

パライイン!

イレブン「大丈夫。アストロンで防いだよ」

鉄の塊となったイレブンは無傷で立っていた

ロウ「ふう、驚いたわい。あつちはどうやらかなり激しく戦っているようじゃな」

ジュウ「はあ……はあ……私の怒りの前には、あなた達ごとき簡単に消し去るんですよ」

ダバン達がいた場所は煙に覆われていた

ケニー「ヒュく、こりやあ喰らったらひとたまりもねえな」

ジュウ「なに!?!」

煙が晴れるとそこには盾を構えたダバンがおり、その周囲は紫色のオーラに包まれていた。ケニーとダバンはかなり密着した状態であるため、その範囲はかなり狭い事が伺える

ダバン「スペルガード。これが俺の決意の技！守りたいものを守り抜く技だ！」

ケニー「……………」

ジュウ「小癩なー!!」

ジュウは再び魔力を溜めようとする

ケニー「させねえよ！ヴァイパーファング！」

ケニーは素早くジュウに走っていき、毒を纏った短剣で素早く切り裂く

ジュバツ！

ジュウ「ぐっ……なんのこれしき……！」

斬られた場所を押さえながら後ろに下がる

ダバン「俺を忘れるなよ。はあ！」

ダバンは背後に回っており、下がってきたジュウを空へ蹴り上げた

ジュウ「ぐはっ……」

二人「はっ！」

舞ったジユウに向かってダバンとケニーが二人揃って片手剣と短剣の斬撃をお見舞いする

ジユウ「があっ……………」

ジユワー

ジユウはそのまま消え去った

ドクン

だいたくまの書「ギイイイイ……………」

暴れていただいたくまの書は煙を出しながらみるみるうちに小さくなり、元のノートの姿に戻った

ロウ「おお、どうやらダバン達がやってくれたようじやな」

イレブン「うん。おじいちゃんの読み通り元に戻ってよかった」

イレブンはノートを拾った

ダバン「イレブン様、ロウ様、そちらはご無事ですか!」

ダバンがミラを抱き抱えながらイレブン達の元にやってきた

イレブン「うん、こっちは大丈夫。二人は大丈夫だった?」

ケニー「当然だろ。あんなふざけたやつに負けるわけ」

ゴン!!

ダバン「お、お前!!馬鹿!!王様に向かってなんて口の聞き方を!!」

ダバンはケニーに向かって勢いよく拳を振り落とした

ケニー「いつてえな、クソ兄貴が!!何しやがる!」

ダバン「お前があまりにも失礼な事するからだろうが!」

ケニー「俺は兵士じゃねえんだから別にいいだろうが!」

ダバン「兵士だからとか関係ねえ!ちゃんと敬語を使え!」

ロウ「ほほ、ダバンよ、わし達はそこまで気にせんよ」

ダバン「いいえ、ロウ様!弟は教育がなってないんですよ!甘やかしてはいけません!」

ケニー「あーあー、やってらんねえ!俺はもうこんな所いられつ
よ!」

ケニーはそのまま走っていった

ダバン「あ、おい、どこ行くんだよ!ちゃんと帰ってこいよ!」

ケニー「うっせえ、そんなん知るか!」

イレブン「は、はは。。。二人で倒したから少しはどうかなるか
と思っただけど、まだ大変そうだね」

ダバン「申し訳ありません。今度しっかり言い聞かせておきますので」

ロウ「うむうむ。まあよいのじゃ、焦らず行こうではないか。どれ、元凶と思わしきやつはこれで倒した。後はしばらく様子を見ておこう。何事もないはずじゃがな」

イレブン「そうだね。しばらくはここも巡回ルートに入れるよ、何かあったら報告よろしくね」

ダバン「はっ!!」

ロウ「それでは国へ戻ろうかの」

兄の本音

その夜、ダバンとミラの家　キッチン

ミラ「♪」

ミラは楽しそうに鼻唄を歌いながら鍋のカレーをかき混ぜている。もちろん、片手にはあのノートが握られている。それをリビングからダバン達が見ていた

ダバン「よかった。これでまたミラのカレーが食べられる」

リビングにはダバンとミラに招かれてイレブン達もやってきていた

イレブン「僕も楽しみだな、ミラさんのカレー」

ロウ「ほほ、わしもカレーを食べるのは久しぶりじゃの」

ミラ「お礼として招いたのに大したものを作れなくて申し訳ありません。イレブン様達に出すようなものではないんですけど」

エマ「気にしないで、ミラさん。王様だからとか関係ないわ。私だって田舎の村出身だからカレーのように馴染みあるものの方が嬉しいわ」

ミラ「それならよかったです。ねえ、ダバン。ケニーは来てくれな
いのかしら。ケニーのおかげでもあるのに」

ダバン「うくん……どうだろうな。連れてこようか？」

ミラ「いえ、無理には言わないわ。ただ、皆で食べた方が美味しくなると思ってね」

ダバン「………… まあ来た時のために用意だけでもいいんじゃないか？」

ミラ「それもそうね」

少ししてカレーの独特なスパイスの匂いが家の中に広がってきた

イレブン「ん〜、美味しそうな匂いだ。どんどんお腹空いてくるね」

ロウ「ほほ、そうじゃのう。城では中々こういう出来立ての匂いは味わえんからのう」

エマ「この感じ懐かしいね、イレブン。よく私達もイシの村で匂い当てクイズやったよね」

イレブン「あ、やったやった。シチューの匂いとか揚げ物とかね」

ダバン「はは、そんな事やってたんですか？イレブン様」

エマ「イレブンはね、小さかった頃悪戯が大好きだったんです」

イレブン「言わないでよ、エマ〜」

全員「ハハハハ!!」

ミラ「出来ました！特製カレーですよ！」

ミラが全員分の容器にたくさんのご飯とカレーを乗せて運んでき

た。少し大きめに切られた野菜や卵が乗ってとても色鮮やかになっている

イレブン「わ〜！美味しそう!!」

エマ「卵まで乗ってる、野菜もいろいろ入ってて栄養たっぷりね」

ロウ「ほほ、これがミラさんの特製カレーか。大切に味わわせてもらおうしよう」

ダバン「…… これまでもミラが作ってくれる特別なカレーだと思ってたが、母親から受け継いだ大切な思い出が詰まっていたって知ると、このカレーは更に特別に見えてくるな」

ミラ「ふふ、そうね。私にとってこのカレーは母親との思い出。特別なカレーなの。このノートが教えてくれるの。優しい味を、皆が笑顔で美味しいと言ってくれる温かい味をね。今日は本当にありがとうございました、またこのノートが戻ってきてくれてよかった」

ミラは幸せそうに笑ってイレブン達を見た

ダバン「ミラのその笑顔を見ただけでも必死に取り戻した甲斐があつたさ。よし、食べるとしましょう!」

全員「いただきます!」

全員がパクリとスプーンに大きくかぶりついた

ミラ「…… どの、どうですか?」

全員「美味しい!!」

ミラ「くくつ、よかった!!」

ロウ「これぞまさに家庭の味。優しい優しい味わいじゃ、わしはこの味が大好きなんじゃ」

イレブン「懐かしい味がする。そう、本当に子どもの頃に食べたよ
うな懐かしい味だよ」

エマ「人の気持ちは料理のスパイスと聞きますが、これは正にその通りですね。ミラさんの優しい気持ちがしつかりとこのカレーにもついています」

ダバン「おかわり、ミラ」

イレブン「え!?!ダバン食べるの早すぎ!待って、僕もおかわりする!
!」

ミラ「ふふふ、そんな慌てないでください、イレブン様。たくさん
作ったので大丈夫ですよ」

ダバン「…… ちょっと待っていてくれ、ミラ。俺、ケニーに渡して
くる」

ダバンはケニーの分の容器を持っていった

ミラ「え、でも冷めちゃうわよ」

ダバン「大丈夫、すぐ戻る」

ダバンは外に出ていった

ミラ「もう」

イレブン「ふふ、大丈夫だよ、ミラさん」

ミラ「え?」

ロウ「そうじゃな。ケニーは近くにおるからろう」

ミラ「え!?! そうなんですか!?!」

エマ「え? イレブン達は気付いてたの?」

イレブン「うん。ケニーは、この家の屋根の上にいるよ。気配がするもの」

ロウ「隠しておらんからろう。きつと匂いに釣られてやってきたか、はたまた最初から来るつもりがわし達がおるせいで入れないかのどちらかじゃな」

ミラ「そうだったんですか!?! もう夜なのにそんな所にいたら風邪引くわ!」

イレブン「まあまあ。ケニーも今回の事で少しダバンを見てくれるようになったと思う。きつとミラさんのおかげだよ、ありがとう」

ミラ「そうですね。そうだといいんですけど」

ダバンとミラの家 屋根上

ケニーは屋根の上で横になっていた

ガツ……カツ……

ダバン「ふう、音をたてずに登るの難しいな。よくこんな器用な事やれるな、ケニー」

ケニー「コツがあるんだよ、クソ兄貴。とつととそれ置いて戻れ」

ダバン「まあ少しくらい話そうぜ。ほら、ミラの特製カレーだ。出来立てだぞ」

ダバンはケニーに容器を渡した。まだ湯気が立ち昇っている

ケニー「……おう。いただきます」

ケニーはガツガツと勢いよく食べ始めた

ダバン「すっかりミラに胃袋掴まされたな。どうだ？ミラはいいやつだろ？」

ケニー「別に俺はそこまであの女の飯を好きじゃねえ。ただ食べる場所が他にないだけだ。それにあの女はクソ兄貴なんかには勿体ねえやつだ」

ダバン「そうかよ。今日はありがとうな、ケニー。お前がいてくれて助かった」

ケニー「何もしてねえ」

ダバン「お前がいてくれたからあいつを倒せた。俺一人だったら無理だったからな」

ケニー「はっ、そうかよ。まあ、クソ兄貴の盾もよかつたんじゃねえの？魔法を完全に打ち消すあれには驚いた」

ダバン「ありがとう。前にジエーゴさんという方から教わったんだ。会得するのはかなり難しいって言われてたけど、なんとか土壇場で形に出来てよかった」

ケニー「は!?!土壇場だ?!じゃあ、失敗する可能性もあつたって事かよ!」

ダバン「まあな。でも、なんとなくだけどいけると思ったんだ。ケニーが近くに来てくれたから。絶対に守りたい対象が側にいてくれたからこそ、俺は力を出せた。ありがとう」

ケニー「くくっ!!ふざけんなよ!お前が守るって言ったから信じたんだろうが!」

ダバン「守り切れただろ?」

ケニー「結果論はな!だがそんな危なっかしい事何回も任せられるか!」

ダバン「はは、ごもつともだな。だが、一回出来たからな。コツは掴めた。次は絶対確実に出来るようにしておく。約束だ」

ケニー「はっ、んな約束なんかいらねえよ!俺は守られなくなつていい!」

ダバン「……………わかつてるさ。お前が昔よりずっと強くなって、俺が守ってやる必要がなくなっていくらになつているのはな」

ケニー「…………… じゃあ、なんで守ろうとしてくる」

ダバン「…………… 俺は、臆病なんだ」

ケニー「…………… 兄貴が…………… 臆病？」

ダバン「そうだ、俺は一人でいる事が怖い。一人でいると、不安で怖くて仕方ない」

ダバンは顔を下に向けている

ケニー「…………… んなの、知らなかった」

ダバン「だろうな。俺も、俺自身がこんなに弱いなんて思わなかった。だからきつと、一人でも逞しく生き抜いてきたケニーは俺より強い。心が、精神が、俺より逞しく強く勇ましい。笑えるだろ？こんなやつが、お前を守りたいって言ってたんだぜ」

ダバンはケニーに力なく笑ってみせた。その顔はとても哀愁的で小さく見えた

ケニー「……………」

ダバン「だが、これだけは言っておく。ケニーは俺の大事な弟だ。昔も今も変わらずな。お互いどんなに変わってもこれだけは変わらない。強くなったな、ケニー」

ケニー「…………… なんだよ、急に、訳わかんねえ！俺の親にでもなったのかよ！お前はもう兄貴でもなんでもねえんだよ！」

ダバン「それでもいいさ。俺がケニーの側にいたいのは変わらないからな」

ケニー「はっ、勝手に言ってる！」

ケニーは屋根を飛び降りて走っていった

ダバン「……………ミラの元に戻るか」

エドの郷帰り

二ヶ月後、デルカダール王国

酒場 グラジー

お昼が過ぎた頃、見回りが終わったエドがやってきていた

エド「テルマ、一週間後って予定あるか？」

テルマ「一週間後？えつと……」

グリー「お店の定休日だね。皆はお休みだよ」

エド「おお、やった！ラッキー！」

エドはグリーの発言に嬉しそうに笑いながらガッツポーズを取っている

テルマ「俺になんか用事なのか？」

エド「ああ！テルマは俺の大事な友達だ！」

テルマ「と、突然なんだよ。恥ずかしいやつだな」

テルマは少し顔を赤くしながら反応する

エド「前にラーズも連れていったんだけど、俺の故郷の皆にも教えてやりたくてさ！俺にも人間の友達が出来たんだってな！あと前よりも強くなったぞって！」

テルマ「エドの故郷？それって……もしかして魔物の住んでる場所って事か!？」

エド「そうだぜ！皆優しい奴らなんだ！テルマの事もきつと気にいってくれる！」

テルマ「いや、流石にどうだろう。気持ちは嬉しいけど、人間があまり魔物の群れに入るのってよくないと思うぞ」

グリー「僕もあまりオススメはしないかな。それにその場所は？デルカダール王国の近くの？」

エド「レースの時も大丈夫だったから平気だつて！場所はちよつと遠いんだけど、なんて名前の村だったかなく。えっと、確かぷちやなんとかって名前の村が近くにあったぜ！」

マヤ「ぷちやラオ村だね。ここから西に大分離れてて商人がたくさなんて、お祭りとかやってる大きめな村だよ」

テーブルを拭いていたマヤが話に入ってきた

テルマ「あー、確かソルティコの近くの険しい山や谷を超えた先にあるのを地図で見ました。確かに遠いな」

エド「テルマも強くなつたし俺もいるから平気だつて！それに久しぶりに仲間の顔も見たいしき！あ、じいちゃんにはバレねえようにしないとな」

テルマ「……育ての親みたいなものだもんな。親に顔見せるのは大事な事だ。まあきつと大丈夫か」

エド「だろ！まあ念の為、数日休み取っておいてくれよ」

テルマ「わかった」

グリー「大丈夫かな？マヤさん」

マヤ「うくん……」

その日の夜、デルカダール城

マルティナとラーズの部屋

そこでは今日の事を話しているマヤがいた。そこにはブレイブの姿もあつた

マヤ「つて事があつてさ、かなり離れてるし私としては結構心配なんだよね。いや、二人とも私より強いから問題ないのかもしれないけどさ」

マルティナ「そうね、私としてもそれは心配ね。エドもテルマも兵士としてそれなりに強くなってきたとはいえ、まだ二人だけでそんな距離を動かせるほどではないと思うわ」

ラーズ「そうだな。魔物の種類もガラリと変わる。テルマが対応出来ないやつも多くいるはずだ。となると、エド頼りだけというのは流石に心もとない。だが……俺達が行つても向かうのは魔物の里。あまり人間が近づくのはいい事ではないな。バンなら……いや、魔物と話せるのを知られてもあまりよくないよな」

マヤ「だからさ！ブレイブならどうかなくて。強さも問題ないし、

魔物だからさ！」

ブレイブ「ガウガウ…… ガウガウガウ」

ブレイブは首を振っている

マヤ「何言ってるのかはわからなかったけど無理って事だよね？」

マルティナ「そうだと思うわ。魔物の里はエドも言っていたように特定の魔物の住む場所よ。そこに突然他の魔物がやってきたら、それこそ敵だと思われて攻撃されてもおかしくないわ」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブもマルティナの意見にコクコクと頷いている

マヤ「あ、そっか。それはまずいね」

ラース「うーん、どうにかしてやりたいが、恐らく無理に対策を取るならバンしかないのかもしれないなあ」

マヤ「あ、ううん！無理には言わないよ。明日、私からもう一度二人に話してみる。辞めた方がいいんじゃないって」

マルティナ「そうね、それが一番だと思うわ。まだ二人には早いと思うの」

次の日の夕方、デルカダール城 大広間

エド「なんで駄目なんだよ、ラース！いいじゃんか、別によ！」

ラーズ「お前が一人で帰るのは止めはしないが、テルマまで連れて行こうとするなってだけだ。二人ともここに来る前より強くなつたのはわかる。だが、まだ二人だけで旅が出来るほどの実戦経験がないだろう。特にテルマには」

エド「それは俺がサポートするって！俺なら魔物の気配に敏感だから避ける事くらい造作もない！」

ラーズ「お前は暴走しがちだろうが。基本お前のブレーキ役はテルマだろ。そのテルマが止められなかったら大変な事になるんだからやめろ」

エド「そんなに言うなら前みたいにラーズが付いてこいよ！」

ラーズ「俺はそんな簡単に城から出られねえよ！」

エド「じゃあバンを連れてく！」

ラーズ「兵士長は忙しいんだ！って……なんでお前、バンを？」

エド「え？だって、あいつから魔物の匂いすんぞ。少し前くらいから。なんかあのベルって人が暴れてたって聞いた後くらい。バンに聞いたら俺と同じだったって言った。バンも俺と同じ半魔人って事だろ？」

ラーズ「……お前、それ絶対周りには言うなよ？」

エド「言わねえよ！人間にとって俺らのような存在が……どれだけ異端なのかはよくわかってる」

ラーズ「……そうだな。まあいい、とにかく！諦めろ！」

エド「レースのケチ！」

賑やかな旅路

それから六日後、デルカダール王国

テルマ「よし、向かうか！」

テルマは剣を装備しながら大きい鞆を背負い直した。意気揚々と上げた声からはワクワクしたような雰囲気を感じられる

エド「そんな準備しなくてもいいとは思っただけだな」

対照的にエドはかなり身軽な格好をしてテルマを笑いながら見ていた

テルマ「別にいいだろ、こんなに遠くに行くのは初めてなんだ。何かあつたら大変だろ」

エド「別に何も起きねえって。昔より魔物も穏やかになったしよ」

テルマ「念には念を、だろ！さ、バレるとまずいし早くソルティコまで向かおうぜ」

エド「だな」

数時間後、デルカダール城 訓練場

バン達が自主訓練を終えようとしていた

バン「498…… 499…… 500！よし、今日のノルマは終了っ！」

ロベルト「お疲れ、バン。流石にバンもそろそろ休めよ」

ロベルトは持ってきていた冷えた水筒を渡した。ロベルトも先程まで自主訓練をしていたため、汗がまだ額に滲んでいる

バン「お、サンキュー、ロベルト！ぐっ……ぐっ……プハア！にしても、今日は大体休みのやつが多いから城もどこか静かだよな」

ロベルト「だな。ま、俺達はもう休むってよりもここにいる方が落ち着くから自主的に来てるけど、ガザルや見習い達みたいに休むのも必要だよな」

バン「ロベルトも休んでよかったんだぞ。俺は……書類が……」

バンはふつと遠い目をした

ロベルト「どうせまたやり忘れてたんだろ。ベグルやラーズ將軍に怒られても知らないからな」

バン「うう……ロベルトー！助けてくれよー！ベグルにまたぶん殴られるー！」

バンは涙目になりながらロベルトにしがみついた

ロベルト「いきなりくっ付くな！というか、自業自得だろ！何回お前の書類手伝ったと思ってんだ！ああいう機密事項なのは普通は大勢に知られちゃいけないんだ！」

バン「だってよ〜」

その時、訓練場に走って入ってくる音がしてきた

ロベルト「ん？誰か来たな。ほら、とつとと離れてくれ」

入り口を見るとラースが足速にやってきた

バン「あ！し、師匠！どうされましたか？焦った様子ですけど」

バンは少し慌てた様子で飛び上がった

ラース「おう、よかった、バン。ここにいたな。ちよつと頼まれてほしい事がある」

バン「へ？は、はい！わかりました！」

その後、デルカダール城 城門前

見張りをしていたベグルの元にバンとラースがやってきた

ベグル「え？エドとテルマですか？見ましたよ、朝方に。どこかに出掛けていく様子でした」

ラース「ハア……。やっぱり」

ラースはため息をつきながら顔に手を当てている

バン「エドとテルマがどうかしたんですか？二人は数日お休みだと聞いてますけど」

ラース「実はな」

ラーズはこの前のエド達とのやり取りを話した

バン「ええ!? つまり、エド達は隠れて里に向かったって事ですか!？」

ラーズ「そういう事になるな。俺達には諦めたって言ってたが、心配になって確かめてみたらこれだよ、まったく」

ベグル「あの馬鹿! どうせエドが無理矢理テルマを連れ回したんだろ! 待っててください、俺が無理矢理にでも連れ戻してきます」

ラーズ「あー…… いや、ベグル。お前は行くな」

ベグル「え?」

ラーズ「バン、お前が連れ戻して来い」

バン「え!? お、俺ですか! ま、まあいいですけど」

ベグル「ラーズ將軍、なんでですか? こいつはあまり連れ戻すとかには向かないと思いますよ。なにより兵士長じゃないですか、やる仕事だってありますし」

ラーズ「あまり深くは言わないが、今回だけはベグルよりバンの方が適任だ。無理矢理連れ戻す必要はないが必ず無事に帰ってこい。数日以内に帰ってくればそれでいい」

バン「??は、はい! わかりました!」

ラーズ「ベグル、明日から兵士長代理を頼む」

ベグル「わ、わかりました」

バン「(なんで連れ戻すだけなのに数日かかると思われてんだ？俺ってそんなに期待されてない?)」

その頃、ソルティアナ海岸

エド「やつと森を抜けたな。魔物を避けながら進むのもやっぱり一苦労だな」

テルマ「ここら辺までなら俺でも戦えるからな。でも体力は温存しておくに越した事はないよな」

エド「まあな。さつさと進んでおきたい所だが、どうする？この後進むとなると今度は今よりも険しい森の中だぜ。夜営？も出来るかわからないぜ」

テルマ「なるほど、そんなになのか。それじゃあソルティコに泊ろうぜ。俺の家になるけどよ」

エド「おう！テルマの故郷だよな！行ってみたかったんだよな。海が綺麗なんだろう？楽しみだ！」

テルマ「どうせなら一緒に泳ぐか！気持ちいいんだぜ」

エド「いいな、それ！へへ、それじゃああの見えてる花畑まで競争な！」

テルマ「いいぞ！よいい、ドン！」

旅の理由

夕方、ソルティコの街

ジエーゴの屋敷

ラースから話を聞いたバンがシルビアを訪ねていた

バン「という訳でして、テルマとエドの行きそうな道のりを予測して辿るところ、ソルティコが一番行きそうだなとなって」

シルビア「なるほどね。エドちゃんとテルマちゃんがそんな事を。ウフフ、素敵じゃない！アタシ、そういう旅行もいいと思うわよ」

バン「シルビアさん、二人はまだ魔物をたくさん倒せるだけの」

シルビア「わかってるわ。確かにラースちゃん達の言う通り、二人だけで行動するにはアタシも心配だわ。」

でも、わざわざ言いつけを破ってまで向かおうとするのは少し不思議じゃない？特に、あの真面目なテルマちゃんがそれを止めなかった。きつと何かしらの理由があるんだと思うの」

バン「た、確かに……。エドならともかく、テルマまで隠してたのは変かも」

シルビア「でしょ？だから二人にお話を聞いてみましょう。連れ戻すかどうかはその後判断しても遅くないわ。アタシも協力するから、まずはテルマちゃん達の実家に向かってみましょう」

バン「はい！そっか、ソルティコはテルマとチャムちゃんの故郷

だった。シルビアさんは二人の実家もご存知なんですね」

シルビア「ええ、アタシとテルマちゃん達はそこで知り合ったのよ。
(故郷……ね。もしかして……うふふ)」

海岸

エド「ひゃっほーい!!」

ザバアアン!!

エドが砂浜から助走をつけながら思いっきり海へと飛び込んだ。
大きな水しぶきがたち、近くにいたテルマも巻き込んでいく

テルマ「わっ!!エド、お前もつと大人しく入ろよな!」

エド「いいじゃんか、別によ!それにしても海は気持ちいいな!
想像よりずっと暖かいし綺麗だ!」

テルマ「だろ?ソルティコの海は旅人とかにも大人気なんだ。で
も、流石にそろそろ上がろうぜ。もう少しすると夜になるぞ」

エド「もうそんな時間なのか。あつという間だったな。じゃあまた
今度遊ぼうぜ!」

テルマ「ああ、もちろん。俺も久しぶりに海で遊べて楽しかったか
らな。俺の家はあっちだ。体を乾かしながら行こう」

テルマとチャムの家

コンコン

シルビア「テルマちゃん、エドちゃん。中にいるかしら？」

中からは返事がない

バン「…………… いないみたいです。心配も感じられません」

シルビア「だとすると、まだソルティコに着いていないか、宿にいるかしら」

バン「そもそも予想が間違ってた可能性もありますからね。キャンブを…………… いや、エドもテルマもそんな事出来るとは思えないんだよなあ。師匠もソルティコに向かってるだろうって言ったのに」

シルビア「まあまた夜に来て…………… あら？」

テルマ「あ」

エド「げ!? 嗅ぎ慣れた匂いがすると思ったら！」

シルビア達の前には濡れた体をタオルで拭きながら歩くテルマ達がやってきた

バン「見つけたー!!」

テルマ「あ、えっと、バンさん。これはですね」

エド「逃げるぞ、テルマ！」

エドはテルマの腕を掴んでそのまま走り去ろうとする

バン「待て!!」

バンもそれを見て勢いよく走り出した

エド「ヒツ、速えな!!」

テルマ「エド! バンさんのスピードには流石に敵わないって!」

ガシ

バン「捕まえた。見ただけで逃げようとすんなよ」

テルマ「す、すみません」

エド「離せ! どうせ連れ戻しに来たんだろ! 俺達は戻らねえからな!」

二人は腕を掴まれ逃げられなくなった。テルマはそのまま大人しくしているが、エドはジタバタと暴れ続けている

バン「おいおい、暴れんなって。連れ戻しに来たのは正解だけどまだ」

エド「ほら見ろ! えい!」

エドは一瞬爪だけ魔物の形に変化させてバンの腕を引っ掻いた

バン「痛え!!」

エド「くっ、これでも駄目かよ!」

バン「全く、エドの人の話の聞かなさは面倒なんだよな。あんまこ
ういうの得意じゃねえけど、ベグルよりは痛くしないからな。ふん
！」

ガン！

エド「いつ……」

ドサ

バンはエドの頭に思いっきり拳骨を落として気絶させた

バン「よし。テルマ、一旦どうしてこんな事したのかを聞きたい。
まずはテルマ達の家を邪魔していいか？」

バンは倒れたエドを持ち上げながらテルマに話しかけた

テルマ「は、はい！どうぞ。あ、シルビアさんもそのために来てく
れたんですか？」

シルビア「ええ、そうなの。バンちゃんから話を聞いてね。何か理
由があったんでしょ？」

テルマとチャムの家

テルマ「自由に座って大丈夫です。冬に帰って以来掃除してないの
で少し汚いですけど」

バン「別に気にしねえよ」

シルビア「お邪魔させてもらうわね」

中に入ると、少し広めのキッチンの近くに大きなテーブルと椅子が四つ並んでいた。奥には2階へ続く階段もある。また、扉の横にある大きな窓から夕日の光が家の中に差し込んでいた

エド「ん…… あれ、ここは」

バン「お、起きたな、エド」

エド「ハッ!!は、離せ!俺達は」

テルマ「エド、大丈夫だ。バンさん達は黙ってたのかを聞きたいんだってよ」

エド「…… 連れ戻しに来たんじゃねえのかよ」

バン「それはそうだが、理由もなくこんな事やらないだろ。連れ戻すかどうかは理由を聞いてからにする」

エド「そつか。ありがとな、バン」

バン「おう!」

シルビア「この写真…… テルマちゃんとチャムちゃんのご両親ね?」

窓の近くには少し大きめな写真が飾られており、そこには笑顔で映る二人の姿があった。写真の近くには花瓶だけが飾られている

テルマ「あ、そうなんです。父さん達が結婚した時に撮った写真だそうです。まだ俺達が産まれる前なんですけど、二人の姿がしっかり

残ってた写真がこれしかなくて」

シルビア達はその写真を見つめていた

シルビア「そう。うふふ、チャムちゃんのお目目はママ似なのね。
テルマちゃんもパパにそっくりよ」

エド「なんで写真だけなんだ？」

バン「こ、こら、エド。こういうのはな」

テルマ「はは、構いませんよ、バンさん。エド、言っただけだったな。
俺達の両親はもう死んでるんだ。魔物に殺されてな」

シルビア「……………」

エド「…………… そうだったのか。魔物に…………… か」

テルマ「別にそのせいで魔物が怖いとかはないさ。それに、俺達みたいなのはこの世界にまだたくさんいる。悲しんでばかりもいられない。

俺にはチャムも、グラジーの人達も、兵士の皆も、ラーズ將軍方もいる。それにエド。大事な友達のお前がいてくれる。俺は幸せ者だ」

テルマは三人に幸せそうな眩しい笑顔を見せた。その姿は差し込む夕日の光と合わさってとても輝いていた

エド「…………… ああ！ずっと友達だぞ！」

バン「…………… それじゃあ隠していた理由を聞いていいか？」

テルマ「はい。いいよな？・エド」

エド「おう。まず、誘ったのは俺からなんだ。テルマはいい奴だからよ、仲間の皆に見せてやりたかったんだ。魔物になれる俺でもこんなに大事な奴が出来たんだって」

テルマ「エドにとって、魔物の里の皆は家族のようなものです。家族に会いに行くのがそんなにおかしい事ですか？きつと魔物でも仲間のエドに久しぶりに会いたいと思ってるはずです。」

会えなければ会えないほどその気持ちが強くなるのは、俺はよくわかります」

バン「……なるほどな。魔物といえどエドにとっては家族だもんな。だが、テルマは人間だしその里の魔物からすれば部外者だぞ。そこはわかってんのか？」

エド「それはわかってる。だから、俺が仲間の皆に絶対大丈夫だって言うんだ。皆は優しいし、多少人間には俺の例もあって少しは好意的だからよ。テルマなら、魔物の事を少しでも理解してくれるからよ」

シルビア「でもね、二人はまだプチャラオ村までの距離を戦ったりしながら向かうには厳しいと思うの。甘く見てるわけじゃないのよ。ただ、二人に危ない目に遭ってほしくないのよ。二人ともアタシ達の大切な仲間だから」

テルマ「……それは、ごめんなさい。心配かけさせたのは謝りませす」

シルビア「今である必要はあったのかしら？もう少し強くなってからでもよかつたんじゃない？」

エド「……俺は、さ。ラースと出会ってから俺はまだまだ未熟なんだってわかって、強くなりたいてって思ったんだ。止める爺ちゃんとは喧嘩して村を飛び出してきたんだ。」

別にそこは後悔なんてしてねえけど、仲間の皆に何も言わずに出て行ったのが心残りだよ。元気にしてるのか、とか、村はどうなってるか、とかずつと気になってたんだ」

バン「なるほど。確かに強くなるまで帰らないって言って喧嘩してきたのは兵士に入った時に聞いたな。寂しくなって群れの皆に会いたくなったのか」

エド「そ、そんなんじゃないぞ!!」

テルマ「あの、バンさん。無理を承知でお願いします!もうここまで来たんだし、俺達の小さな旅を認めてくれませんか!?!家族に会いたいエドの気持ちを、俺はサポートしてやりたいんです!」

家族はいつでも会える存在じゃないから。また今度にしたら、その次が来る事はないかもしれない。そんな後悔をエドにしてほしくないんです!」

エド「テルマ……」

テルマ「お願いします!!」

テルマはその場に座り込み、バンの前に土下座をして頼み込んだ

エド「俺からも、頼む!!城に帰ったらもつと訓練するから!今だけは頼むよ!」

エドもテルマの隣に並ぶと同じように土下座をした

バン「…… (なるほどな。師匠が数日休みをくれたのはこれを予想していたからか。それでいて、魔物と話せる俺が適任だと。流石師匠だな、なんでもお見通しって事か)」

シルビア「どうする?バンちゃん。二人がここまでしてくれてるのよ」

バン「よし、わかった!兵士長が責任を持って二人の旅は認めるぞ!」

二人「!?!」

テルマ「あ、ありがとうございます!!」

エド「つしやー!!流石バンだ!ベグルだったらこうはいかねえよな!」

バン「だが!これが条件だ!」

エド「えー……なんだよ」

バン「まずは俺が二人に同行する事。これは二人の安全のためだからな。」

二つ目は、危険を感じたら俺の指示に従う事。この先何が起こるかわからない。その時には撤退せざるを得ない時もあるかもしれない。

俺の指示には絶対従ってもらうぞ。

三つ目は、生きて城に帰る事！これは師匠から俺に出された指示でもあるからな」

テルマ「はい！わがママを言っつてすみません！でも、本当にありがとうございます！」

エド「それくらいなんて事ないぜ！帰って皆に土産話たくさんしてやろうぜ！」

シルビア「ウッフ、よかつたわね。テルマちゃん、エドちゃん。ねえ、よかつたらアタシも同行していいかしら？」

テルマ「え!?シルビアさんも!?でも、サーカスとかは」

シルビア「一昨日大きなのは終わって少しお休みなのよ」

バン「シルビアさんまで来てくださるならもう百人力ですよ！ぜひお願いします！」

エド「確かに勇者の仲間でもある兄ちゃんが来てくれればもう万全だな！」

シルビア「ありがとう！それじゃあ明日から楽しく頑張りましょう！」

見放し

次の日、ソルティアナ 山岳地帯

テルマ達はガサガサと音を立てて茂渡る草を掻き分けながら歩いてきた

テルマ「ハア、ハア。あー、結構大変」

バン「道がないからな、こうやって進むしかないけど山だから斜面もあってキツイな」

シルビア「大丈夫？テルマちゃん。無理しないでいいから、つらくなったらすぐに言ってね。休み休み行きましょう」

テルマ「い、いえ、まだ大丈夫です。それに、皆さんの足を引っ張るわけにはいきませんから」

テルマは息を切らしながら少し汗を滲ませている

バン「そんな事ないぞ、テルマ。この旅は二人がきっかけなんだ、それなら二人に合わせるのが俺達だろ。おーい、エド！魔物はいそうか？」

バンが上を見ると、エドは木の上で遠くから魔物がいるかどうかを見張っていた

エド「いや、特にいなさそうぞ！ただ、草の中とかに隠れてるかもしれねえ。そっちは変わらず慎重に頼む」

バン「おう！エドこそ空からの魔物にも気をつけておけよ！エドは

大丈夫そうだな。テルマ、少し休むぞ。朝から歩き続けてそろそろ昼にもなるしよ、休むのも大事だって師匠はいつも言ってるからな」

シルビア「そうよ、テルマちゃん。そろそろお昼ご飯にして元気を蓄えたら、またその後から頑張りましょう。無理はよくないわ」

テルマ「わ、わかりました。エド！ちよつと休んでいいか？」

エド「ん？おう！俺も腹減ったしな！ちよつどいいや！」

エドはそのまま木から飛び降りてきた

シルビア「それじゃあ皆で休憩ね。アタシは近くに聖水を撒いてくるわ」

バン「じゃあまずは休めるようにここら辺の邪魔な草を切るか」

エド「あまりたくさん切らないでくれよ。魔物や生き物達の隠れる場所でもあるからな」

テルマ「ああ、わかってるさ。俺達が座れる分だけにする」

バン達はそれぞれ武器で小さく円を作るように草を切っていた

その後

エド「それでな！ドラゴンバゲージのやつは本当デカイのに臆病だよ！いつも俺が守ってやってたんだ！まあ他にもゴーレムも一緒だったぜ。あいつは力持ちで皆を持ち上げられるんだ！」

エドはこれから向かう村にいる魔物達の事を嬉しそうに話してい

た

バン「へー、いろんなやつがいたんだな。俺もメダチャット地方の魔物は詳しくねえから色々見てみたいな！」

シルビア「ふふ、エドちゃんは皆の中心になってたのね。頼もしいじゃない」

テルマ「村に着いたらその友達にも会ってみてえな。よかつたら紹介してくれよ」

エド「もちろんだぜ！あいつら元気にしてるかな。俺がいなくなって寂しがってたりしてな！」

テルマ「そうかもしれないな。エドは賑やかだから静かになって寂しがってるんじゃないか？特にそのドラゴンバゲージは話に聞く限りだとそんなイメージがする」

エド「俺も俺も！へへ、楽しみになってきた！そろそろまた向かおうぜ！」

シルビア「そうね。そろそろ休憩は終わりにしましょう」

バン「このペースだと夜になる頃には抜け出せますかね？」

シルビア「うーん、どうかしらね。もしかしたら夜もこんな風に過ごす可能性もあるわ。まあそれも旅の醍醐味よ！テルマちゃん達は気にしないでね！アタシ達に全部任せてちょうだい！」

テルマ「また頑張りますね！」

エド「おう！」

次の日の昼

メダチャット地方 エドの故郷

エド「到着だぜ！久しぶりの景色だ！」

空を隠すように鬱蒼と生い茂っていた木々が無くなり、空から差し込む日の光が真ん中にそびえる大きな樹木を照らしていた。樹木には穴が空いており、家のようになっている

シルビア「あら、本当に魔物の住む場所って雰囲気ね。周りとは景色が違うわ」

テルマ「へー、ここがエドの故郷か。結構広いな」

バン「……仕方ない事だけど、なーんか怪しまれてる空気感だな。影からジツと俺達の事見てるみたいだぜ」

エド「まあ仕方ないよな。でも俺が話すから大丈夫！」

すると、エドの後ろからふわふわとベホイミスライムがやってきた

ベホイミスライム「○×☆・〜」

エド「お×！#☆○！」

エドとベホイミスライムは知り合いなのか未知の言語で話し始めた

シルビア「うくん、なんて言ってるかわからないわね。エドちゃんは本当凄いなと思うわ」

バン「あれ？前よりはつきり鮮明に聞こえる。一体化した影響か？俺わかりますよ。今、ベホイミスライムがエドに帰ってきたのかと尋ねたんです。エドはそれにそうだ、仲間や友達も連れてきたって言いました」

テルマ「え……。す、凄いですね、バンさん！魔物の言葉がわかるんですか!？」

シルビア「バンちゃんもわかるの!?アタシも知らなかったわ!」

バン「色々ありまして……。あまり言わないでもらえるとありがたいです」

シルビア「それはそうよね。わかったわ」

エド「あれ？おい、どこに行くんだよ」

エドと話していたベホイミスライムはそのまま去って行ってしまった

テルマ「ん？他の皆に伝えに行ったんじゃないのか？」

エド「いや、なんか。雰囲気がおかしくてよ。あまり嬉しそうじゃなかったんだ。失礼だよな、まったく!」

バン「あのベホイミスライムに好まれてなかったんじゃないの?」

エド「うっせえ！確かに女だからあまり話しかけられはしなかった

けどよ！嫌われてはねえはずだ！」

シルビア「あら、女の子だったの。見た目じゃ全然アタシ達には判断出来ないわね」

すると、周りから続々と魔物がやってきた

テルマ「わっ！なんかたくさん出てきた」

エド「おお！皆お出迎えか？って、ジジイまでいる……」

げんじゅつしを中心に様々な魔物がエド達を見ていた

げんじゅつし「ギギ…… #○*☆×#・」

エド「◎※♪∠#×*！」

げんじゅつし「…………… ☆\$#/×∠」

エド「え……」

げんじゅつしとしばらく魔物の言葉で会話していたエドが突然ポカンとした表情になった

バン「ん？何かおかしいぞ」

テルマ「な、なんて言ってたんですか？」

バン「今、あのげんじゅつしはお前の帰る場所はないと言ったんだ」

シルビア「ど、どういう事!?」ここはエドちゃんの故郷なんじゃない

の？」

エド「……・○?・＼#○☆☆#」

げんじゅつし「☆\$#/×＼」

エド「な、なんで……。俺、ずっとこれまで皆と仲良くしてきただろ！仲間だつて言ってくれたじゃねえか!!」

げんじゅつし「くくく」

げんじゅつしは赤い魔法陣を描くと、複数の炎の弾がエドに向かっていく

ポオン！

全員「!？」

エドの足下へ落ちたそれにエドが怯んだ

テルマ「ちよつ、今のつてメラミですよ！なんでエドは攻撃されてるんですか!？」

バン「い、いや、俺にも何がなんだかわからねえよ。ただ、あのげんじゅつしは人間の仲間などいないって言ったんだ」

シルビア「エドちゃんを仲間じゃない？でも、今エドちゃんは仲間だつて言ってくれたつて」

エド「……お、おい、嘘だよな！ゴーレム！」

エドは走って並んでいるゴーレムの元に走ろうとする

どくやずきん「……」

ヒュッ

ドス！

エド「ぐっ……」

遠くにいるどくやずきんが放った矢がエドの脇腹に突き刺さった

テルマ「エド!!」

エド「なあ…… ゴーレム。嘘だよな？俺達…… 友達だって」

エドは脇腹を押さえながらゴーレムの元に歩いていく

ゴーレム「…… ガー!!」

ゴーレムはエドに大きく拳を振り上げた

エド「!!」

バギイツ！

エドはゴーレムのパンチに直撃して横に吹き飛ばされる

テルマ「エド!!」

テルマはエドに向かって走っていく

シルビア「流石に止めないとまずいわ！アタシ達も行くわよ！」

バン「はい！」

エド「……………なん……………で……………」

倒れて動かないエドの元にトンブレロが炎のブレスを吐き、エドを焼いていく

テルマ「やめろ、やめろー!!」

エド「ゲホツ……………ゲホツ……………」

意識が朦朧としてきたエドの前にはドラゴンバゲージが立ち塞がった

エド「ドラゴン……………バゲージ……………お前は……………お前も……………俺を……………」

ドラゴンバゲージ「…………………………く!!」

ドラゴンバゲージは目を瞑ってエドを押し潰そうと足を踏み出した

ガァン!!

テルマ「ぐぐぐぐ……………」

テルマがその間に剣を持って割り込んだ

エド「…………… テル…………… マ……………」

テルマ「ぐっ、無理だ！エド、悪い！！」

ドカ！

テルマはエドを軽く蹴り飛ばした

テルマ「ぐあっ！！」

テルマはそのままドラゴンバゲージのパワーで足に踏み潰される

バン「テルマを、その足を離せ！」

バンがドラゴンバゲージに蹴りかかった

バシイ！

ドラゴンバゲージ「ギイ……………」

テルマを踏む足をバンが蹴るとそのままドラゴンバゲージは倒れた

テルマ「ぐっ、ありがとうございます、バンさん」

バン「お前ら、事情は知らねえけど仲間のエドを傷付けるなよ！これ以上やるなら相手になるぞ！」

バンを構えをとった

エド「!!やめ…………… ろ…………… バン！」

エドはかすれた声でバンに叫んだ

バン「エド……。だが、こいつらはお前を！」

エド「うっせえ……。俺の家族に……。手を出すな……。」

エドはふらふらと立ち上がり、バンを睨みつけた。その目はボロボロの姿でありながらも、はつきりとバンに敵意を持っているのが伝わってくる

バン「……。わかった。手は出さない。だが、ここは退くぞ。お前もこれ以上治療なしだと危険だ」

シルビア「そうね。アタシが先頭に立つわ、テルマちゃんはエドちゃんをお願い！バンちゃん、後ろは任せたわ！」

テルマ「はい！エド、俺が背負う。急いで治療してもらおうぞ」

エド「ぐっ……。どうして……。どうして」

エドは涙を流しながらテルマに無理矢理運ばれていった

バン「……。！」

バンはふと魔物達を見るとドラゴンバゲージが泣いているのが見えた

バン「(あいつ、なんで泣いてなんかいるんだ？そんなに俺の蹴りが痛かったか?)」

げんじゆつし「…… ギギ…… お前、自分達の声、聞こえてるな」

バン「な!? 話せるのか!？」

げんじゆつし「少し、人間の言葉、話せる。聞いてほしい事、ある」

バン「お、おう」

魔物、人間

バン「なんだよ、話つて。なんで俺に？」

げんじゅつし「ありがとう。エド、人間の仲間、なれた。エドは人間。自分達、魔物。生き方、違う」

バン「感謝されるような事はしてないぞ。人間だつて様々いるんだからな。エドは俺達の大事な仲間だ。だから、俺はあんた達が許せない。家族と信じていたエドの心を踏みにじった」

げんじゅつし「……………わかつている。自分達だつて……………こんな事……………したくなかった」

げんじゅつしはそのまま崩れ落ちると、涙を流し始めた。それを見た周りの魔物達も泣き始めたり、涙を滲ませていた

バン「……………さつき、エドに帰る場所はないと言ったよな。なんでだ？」

ゴーレム「……………〇く#\$>?・♪☆」

泣いて話せなくなったげんじゅつしに変わってゴーレムが話し始めた

バン「エドは元々人間だから魔物の自分達と一緒に暮らすべきではない、か。じゃあ、なんでエドを育てたんだ。話に聞く限りだとエドの父ちゃんが拾ったとか」

げんじゅつし「そう……………。ベンガルが、山に捨てられていたあの子を、持って帰ってきた。自分達は猛反対したのだが、ベンガルは聞か

なかった。澁々育てていくうちに……自分達に……ココロが芽生えた。

エドはとてもよい子。可愛く、真っ直ぐで、頑張っていた。自分達もエドにどれだけ救われたか」

げんじゅつしがポツリポツリと話していく。周りの魔物達も黙って涙を流しながら聞いていた

げんじゅつし「エドはきつと、もう自分達の事、嫌いになった。人間として過ごしてもらうために……魔物の自分達を気にしないでいいように……たくさん傷つけた。皆にもつらい思いをさせた、すまなかった」

げんじゅつしは村の皆に向かって頭を下げた

バン「……馬鹿だな、お前達。なんでそれをエドに言わないんだよ」

げんじゅつし「エドは、必ず自分達を気にする。エドは、ここが好きだから。帰ってこようとす。だから……嫌いになるようにした。こんな事、言えない」

バン「そうか。まあ事情があったのはわかった」

げんじゅつし「……これでいいと思っていた。思わなければいけない。だが……こんな気持ちになるのなら初めから……いや、ココロなど芽生えなければよかった」

バン「……」

バンは静かに涙を流す魔物達を見てそのまま去っていった

その後、プチャラオ村

宿屋

包帯や薬を塗ったエドがベッドに横たわっていた。バンは先程の魔物の話をシルビアとテルマにしていた

シルビア「そう……。エドちゃんは人間だから、ねえ。エドちゃんから見たらそんなの関係ないのに。エドちゃんはある村の皆を家族だと楽しそうに話していたのに」

テルマ「…… エドには、この事話すんですか?」

バン「まだ話さない。ここで話したらエドはすぐに村に戻るだろうから。エドが目を覚ましたらデルカダールへ帰る。その後でエドには話そうと思う」

テルマ「わかりました」

シルビア「魔物だから、人間だから。確かに全く違う種族だけど、時に分かり合える存在なのに心苦しいわね」

その夜

テルマ「ん……。まだ……。夜か」

テルマがふと目を覚ました。テルマはチラリと周りを見るとまだ真っ暗で夜な事がわかる

シルビア「スウ…… スウ……」

バン「メグ…… へへ」

近くのベッドにはシルビアとバンの姿はあるが、エドのベッドからはエドがいなくなっていた

テルマ「!?エドがない?」

テルマはそのまま外に出ていった

プチャラオ村 広場

夜も更けてきて商人の街といえど、流石に静かになり人気もなくなっていた

テルマ「どこ行つたんだ、エドのやつ」

おっさん「おう、どうした坊主、ヒック。探し物かい?」

テルマが走りながらキョロキョロと見渡していると、それを見た酔っぱらいのおっさんが話しかけてきた

テルマ「あ、すみません。あの、俺と同じくらいの身長で、前髪がこんな感じのやつ見ませんでしたか?」

おっさん「ん…… あ、あの坊主の事か。そいつならちよつと前に、この先にある高台に向かっていったのを見たぜ、ヒック」

テルマ「ありがとうございます!」

高台

テルマ「ハア、階段が多いな。あ、エ……ド……」

長い階段を登って村の高台へやってくると、大きな岩の上にエドが座り込んでいた

エド「……………」

エドは青い毛が生え、爪や尻尾、牙が生えた魔物の姿になっていた。その姿のまま、夜空の月を眺めていた

テルマ「………… エド、探したぞ。あまりその姿になるなよな。村人が驚くだろ」

テルマがエドに話しかけながら近づいた

エド「……………」

テルマ「おい、エド。無視すんなよ、聞こえてんだろ?」

エド「テルマ」

テルマ「ん?」

エド「お前には、俺が、何に見える?」

エドはつらそうな、悲しそうな表情でテルマを見た

テルマ「………… 何言ってるんだよ。その姿を見るのは久しぶりだけど、どんな姿でもエドはエドだ。俺の大事な友達だ」

エド「……………俺は、一体何なんだ。人間なのか？魔物なのか？俺は……………どっちにもなれない……………」

テルマ「エド……………」

エド「俺、知ってるんだぞ。見習い達の中で、俺の事を人間にならない魔物だつて言われてるの。別に気にしてはなかったけど、家族の……………魔物の皆からは、人間はこの群れにいらないと言われた。人間からは魔物に見られて、魔物からは人間に見られて……………。俺は……………俺は……………」

テルマ「エドは人間だ！ちよつと不思議な力が使えるだけだ！見習い達の意見なんか気にするな！俺が帰ったら絶対懲らしめてやる！」

エド「……………もうわかんねえよ。俺が何なのか、俺すらもわからねえ。父ちゃんから貰った自慢のこの力も……………今は何の役にも立たない」

テルマ「俺はその力で助けられたんだぞ。エドならきつとその力でいろんな人を助けられる！」

エド「……………魔物の力、だよな」

テルマ「まあそうだな」

エド「もう魔物になつちまいてえよ。そうすれば俺は、皆にまた家族として迎え入れてもらえる」

テルマ「それは……………エド？」

エド「そうだ……魔物になれば父ちゃんみたいになれる。俺の事を魔物だと言う人間達にも、本物の魔物を見せてやれる。魔物に……魔物に！」

エドは突然力を溜めながら眩き始めた。エドの体からはそれに合わせて怪しい雰囲気にもまれていく。赤いオーラがエドを包み込む

テルマ「な、なんだこれ！おい、エド!!しっかりしろ！」

エド「俺は!!!魔物だ!!!」

テルマの叫び声をかき消すようにエドが叫ぶと、エドに生えていた青い毛は逆立ち、エドの体を覆うように大量に生えてきた。また、尻尾は二つに分かれ爪や牙は更に伸びて凶悪になっている。エドは赤いオーラを纏い、目も黒い目ではなく、真っ赤な目をしている

その姿はまさに、理性を無くした魔物の姿

テルマ「エド!!!」

魔物「ギャオオオオ!!!」

一際大きな雄叫びをあげた。怒りと悲しみと困惑に囚われた、魔物の叫び声は村中全体に響き渡った

身を挺して

宿屋

ギャオオオオ!!!

二人「!?!」

突如現れた魔物の気配と咆哮にバンとシルビアが飛び起きた

バン「うおっ!?!な、なんだなんだ!?!」

シルビア「なに、この気配!?!普通の魔物ちゃんじゃないわ!」

バン「この気配……エドが魔物の姿になった時と似てる。あ!二人がいません、シルビアさん!」

シルビア「じゃあ、この異様な気配はエドちゃんが?まずは外に出ましょう!」

バン「はい!」

広場

広場では先程聞こえた魔物の咆哮により、多くの人達が戸惑っていた

バン「悪い、さつき聞こえた魔物の咆哮について教えてくれ!」

女性「は、はい。えっと、突然高台がある方から魔物の声が聞こえてきて」

シルビア「高台の方ね！ありがとう！」

バン「きつとテルマとエドもそこです！急ぎましょう！」

その頃、高台

魔物「グオオオオ!!」

青き獣となったエドが月に向かって咆哮をあげている

テルマ「エド!!大丈夫なのか！おい、返事しろ！」

テルマはエドが立っている大岩に乘ろうとする

魔物「グアオ」

魔物は大岩から飛び降りてテルマの前へと降り立った

テルマ「なあ、本当に…… エドだよな？魔物の姿になっただけだよな？」

テルマはゆっくりと魔物に向かって近寄っていく

魔物「ハア!!」

魔物が手に力を込めると手が赤黒いオーラを纏い始めた

テルマ「!?これ、エドの技のダーク」

ドガアアン!!

テルマが言葉を言い終わる前に魔物はテルマの真横へ移動しており、そのままテルマを殴り飛ばした。テルマの体は勢いよく岩を粉砕して飛ばされていく

テルマ「くっつ!!」

テルマの口から勢いよく血が出てくる。また、殴られた場所は薄鎧を突き破って素肌が出ていた

魔物「これが……魔物」

バン「エド、テルマ!!」

シルビア「キャツ、なんなの、これ!」

バンとシルビアが慌てて高台へとやってきた

魔物「お前らにも見せてやる」

魔物はバンの方へ向かっていく。今度は足に赤黒いオーラを纏い始めた

バン「!?この感じ、やっぱりお前エドだろ!なんでこんな姿に!」

シルビア「これがエドちゃん!?こんなの、本物の魔物みたいじゃない」

魔物「俺は魔物になるんだ!!」

魔物がバンへと蹴りかかる

バン「こい！」

バンが迎え撃とうとすると

シユン！

バン「!？」

魔物が瞬時にスピードをあげて、バンの真後ろへと回った

魔物「はあ!!」

バン「つつ!!」

ガアン！

バンは咄嗟に体勢を変えて体を捻って躲した。それと同時に足を振り上げて魔物の足へと蹴りを当てた

バン「ビツツクリした!!速い!!」

魔物「流石バンだな」

シルビア「テルマちゃん！平気!?簡単な応急処置だけど、リベホイムよ」

シルビアは崩れた岩の近くで倒れていたテルマの元へと駆け寄っており、腹部に緑色の魔法陣を描いた。赤くなっていた腹部が緑色に包まれるとゆっくりと傷跡が薄れていく

テルマ「あり……がとう、ごこざいます」

シルビア「何があつたの？あの魔物ちゃん、本当にエドちゃんなの？声までそっくりだわ」

テルマ「そう、です。エドは人間にも魔物にもなれないって言つてました。そして、エドが魔物になると言つた瞬間、赤い光がエドを覆つてあんな姿に」

バン「赤い光！それ、師匠から、危ねっ！聞いた事、あるぞ！魔物になる力が暴走する時があるって！うお！」

バンが魔物からの猛攻を避けながら大声をだした

シュツ

バン「つまず」

魔物の鋭利な爪がバンの額を斬り、流れた血でバンの視界が一瞬失われた

魔物「おらあ!!」

バギイツ！

バン「ぐっ！」

その隙に素早くバンの背後に回つた魔物がそのまま下に殴り飛ばした。バンはそのまま地面に勢いよく当たってボールのように飛び上がった

バン「ふっ！」

バンはそこから体勢を立て直して魔物と距離を離してシルビア達に近づいた

バン「すみません、シルビアさん。あいつ、俺一人じゃあかなりキツイです。救援お願いします」

シルビア「そうね。アタシも戦うわ、油断出来ないみたいね」

シルビアも持っていた剣を構えてバンの隣に立った

テルマ「ま…： 待ってください。あの魔物は、エドです！エドを、殺すんですか!？」

バン「…： 師匠から、前に言われていた。エドがもし、魔物の力が暴走して人を襲う時があれば斬り捨てろ、と」

テルマ「!!」

シルビア「ごめんなさい、テルマちゃん。アタシ達にもその話は回っていたの。それに見て、あの魔物ちゃんを。自我があって、友達だと言っていたテルマちゃんを何の躊躇いもなく殺そうとしたわ。あれがエドちゃんだと思えない」

テルマ「そ、そんなの、絶対嫌です!!俺の、俺の大事な友達なんです!!」

テルマは立ち上がってバン達と魔物の間に入った

テルマ「やめろ！エドを殺すな!!」

テルマはバンとシルビアの前に立ち、必死な形相で腕を広げている
シルビア「テルマちゃん…」

魔物「俺は!!魔物になって、家族に戻るんだ!!」

それを見ていた魔物がテルマの背後にやってくる

バン「やめろ、エド!!テルマをこれ以上攻撃するな!!」

ズバツ!!

テルマ「あ……………」

ドサ

魔物はテルマの背中を引き裂いた。テルマの背中から爪の跡に沿って血が流れていく

バン「くく!!この… 馬鹿野郎が!!」

バンは猛スピードで走り込み、倒れたテルマを見つめていた魔物に向かう

シルビア「ごめんなさい、テルマちゃん。もう、うやむや言ったら
れないわ」

バン「ばくれつきやく!」

バンが勢いをつけた体勢から素早く連続で足技を魔物に放つ

魔物「いつ…くっ！」

初めの数発は当たるがそのまま素早く足技を回避していく

シルビア「これ以上テルマちゃんを痛めつけるのは、アタシの正義が許さない!!ハア!!」

魔物の後ろへと跳んだシルビアがポーズを決めると魔物の足下がピンク色の爆発に覆われた

バン「うお!す、凄え、シルビアさん!俺も!ひょうけつらんげき!」

ピンク色の煙に覆われる中に氷を纏った槍でバンが乱れ打ちを放った

魔物「グオオオオ!!」

二人「!」

魔物が煙を振り払うように咆哮をあげた。その体は少し傷ついている

魔物「俺の邪魔をするな!俺は、魔物にならなきゃいけないんだ!父ちゃんみたいに強くなって、俺も家族として認められるんだ!!」

バン「そうか。父ちゃんに憧れて、か。なら、その父ちゃんはさぞ残念がつてるだろうな!こんな事をする息子になってよ!」

魔物「お前に父ちゃんの何がわかる!!」

バン「大事な友達を傷つける息子になんてなってほしくなかったはずだぜ！魔物になってまで家族になろうとしても何も得られないぞ！」

シルビア「エドちゃん、よく聞いて！村の皆がエドちゃんを追い出したのは、エドちゃんに人間として生きてほしいからよ！魔物になってほしくないから、アタシ達に託したのよ！」

そのあなたが魔物になっても、村の皆は嬉しくなんてないわ！だって、村の皆が好きなのは魔物のエドじゃなくて、人間のエドなんだから！」

魔物「……うるさい……うるさい!!俺は、俺は、一人になりたくないんだー!!!」

魔物は叫びながらバン達に向かって走り出した。赤くなっている目からは、涙がこぼれていた

二人「！」

バンとシルビアは同時に武器を構えた

魔物「うおおお!!」

ザシユツ!

全員「!!」

テルマ「ぐ……エド」

魔物とバン達の間でテルマが割り込んできた

魔物の攻撃がテルマの左肩を貫いた

バン「テルマ!!」

シルビア「テルマちゃん!?なんて事を!!」

魔物「テルマ……」

テルマ「ずっと……そんな事思ってた、のか。わかるぞ……俺も一人だった。チャムの世話ばかりで……友達も出来なくて……周りの大人も頼れなくて……寂しかった」

テルマが青白い顔で魔物へと倒れかかる。その体を魔物は優しくうに抱き止めた

テルマ「でもさ……俺、にも、友達ができた。エド、お前だよ。ちよつと騒がしかったり……不思議な力持ったりするけどさ。俺の、初めて出来た、大事な友達だ。

どんな姿でも……俺の大事な友達だけど。エドは、人間の姿の方が、よく笑ってる。今のお前は……苦しそうだ。そんな顔、見たくない」

テルマはそつと魔物の顔を触る

魔物「……………」

魔物を覆っていた赤いオーラが消えていく。それに伴って、逆立つ青い毛や尻尾、牙や爪も元通りになっっていく

テルマ「俺と……ずっと友達でいてくれるん、だろ？そ
う……言ってくれたもんな」

エド「ああ…… ああ……」

エドが涙を流しながらテルマを見つめる

テルマ「はは……泣き虫だな、エドは」

エド「すまねえ…… すまねえ……」

バンとシルビアも武器を閉まって二人の元にやってきた

バン「謝るよりも先にテルマを回復させてやらないとまずい。出血
多量で死んじゃうぞ」

シルビア「これ使って。せかいじゆのしずく、一瞬で元気になるわ」

バン「は、初めて見た。てつきり空想上の物かと」

シルビア「まあこんな貴重なの使う機会はないわよね。でも、今は
そんな事言ってもらえないわ。はい」

シルビアはテルマの体に振りまくようにしずくをかけると、テルマ
の周りがキラキラと輝きながらテルマの体についていた傷がみるみ
るうちになくなっていった

テルマ「おお…… 凄い、あんなに苦しかったのに楽になった」

テルマは立ち上がって腕や肩を回している

エド「テルマ…… 本当に」

テルマ「エドが元に戻ってくれて本当によかった」

テルマがエドを抱きしめた。その体は少し震えている

テルマ「お前を…… 失うのかと思つたら、怖くて怖くて…… 仕方なかった」

エド「……… ごめん」

テルマ「エドは一人ぼっちになんかならないぞ！俺も、皆もいる！家族にはなれないかもしれないけど、ずっと一緒だ！離さないからな！」

エド「ああ………。俺も、テルマ達と一緒にいたい」

テルマとエドは互いに涙を流しながら抱きしめあっていた

ライバル、友達

次の日、四人はデルカダールへ帰るためにまた来た道に戻る事になった

二日後、デルカダール城 玉座の間

バン達はマルティナ達へ出来事を報告していた

バン「という事がありました、なんとか無事に帰ってきました」

ラース「そうか……。流石にそこまでの展開は予想出来てなかった。大変だっただろ、悪かったな。バンもシルビアまで」

シルビア「仕方ないわよ、こんなの誰も予想出来ないもの」

マルティナ「そうね。でも、シルビアが手伝ってくれて本当によかったわ。もしもバン一人だけだったら、テルマもエドもどうなっていたか」

バン「本当ですよね！シルビアさん、大変助かりました！ありがとうございますごさいました！」

シルビア「ふふ、ありがとう。でも……。エドちゃんがね」

グレイグ「……。まあ察しはつく。大方、エドが避け始めるようになったのだろう？そんな騒ぎの後だ、仕方ない」

バン「そうなんです。帰りもずっと俺達と距離を取って……。特にテルマとはかなり距離を置いてるんです」

ラース「これは俺達がどうこう出来る問題じゃないからな。しばらく見守る事にしよう。とにかく、全員が無事に帰ってきてくれてよかった。シルビアもありがとう。礼はまた今度渡す」

シルビア「いいのよ、お礼なんて。アタシが自由にやった事なんだから気にしないで」

その頃、デルカダール地方 崖

エド「……………」

エドは一人で海を眺めていた

テルマ「見つけた。エド」

エドの後ろからテルマが走ってきた

エド「テルマ……………」

エドは近寄ってくるテルマに対して後退りしていく

テルマ「なんなんだよ、エド。昨日からさ。俺、なんか悪い事したか？」

エド「いや、してない。むしろ、俺がしたっていうか」

テルマ「だから！怪我は何も怒ってないってば！無事に治ったし、普通に動く！そんないきなり余所余所しくなるなよな」

エド「だって……………よう。俺……………あの時、本当にテルマを殺そうとした。テルマは必死に戻そうとしてくれたのに。俺は……………」

テルマ「……………はぁ」

テルマはため息をついてエドに近寄る

エド「!く、来んなって」

テルマ「いやだ」

エド「お、俺に近づくと」

テルマ「はっ!」

エド「!!」

テルマは大きく一步を踏み込んで素早く距離を詰めてエドの懐へと入り込んだ。そのままエドの足を振り払った

ドサ

エドはそのまま力なく倒れ込んで、その上にテルマがのしかかった

テルマ「はい、俺の勝ち」

エド「……………」

テルマ「あの時のエドは信じられないくらい強かったけど、今のエドは信じられないくらい弱いな。俺でも余裕で倒せるぜ」

エド「むっ……………別に俺は抵抗してないだろ」

テルマ「強がんよ、抵抗出来なかつたんだろ？俺があまりにも強くなりすぎて」

エド「むっかー！なんだよ、テルマ！人がせつかく怪我しないようにしてたのによ！」

エドは飛び起きて上に乗っているテルマを突き飛ばした

テルマ「そんないらぬ気遣いすんなよ！エドのためならいくらでも傷ついてやる！」

エド「いらぬ気遣いってなんだよ！珍しく優しくしてやろうとしてたのによー！完全に怒った！もう一戦だ！テルマ、俺を挑発した事後悔させてやるよ！」

テルマ「いいぞ、エドとも一度模擬戦しなきゃいけないと思つてたんだ！」

エド「怪我したって知らないからな！」

テルマ「そっちこそ、舐めてかかると痛い目見るぞ！」

夕方、デルカダール城 医療部屋

ラース「それでお互い動けなくなるまで暴れた、と。馬鹿だなあ、二人とも」

医療部屋には治療された二人がいた。互いの腕や顔には包帯がついている

エド「まあ俺の方が一戦勝ち越してるけどな！」

テルマ「な、おいおい！話を盛るなよ！あの一戦は俺の剣の方が先に首に当たってた！」

エド「残念だったな！俺の爪の方が早かった！」

テルマ「違う！それよりも俺の方が早い！」

エド「負け惜しみは見苦しいぞ、テルマ」

テルマ「お前……ならもう一戦だ！」

エド「おう、受けて立つぜ！」

ラース「受けて立つじゃない」

ゴン！ゴン！

ラースは二人の頭に拳骨を落とした

二人「いつ……」

ラース「引き分けて事にしておけ。にしても、テルマがエドにそこまで張り合えるようになったのか。凄じかないか」

エド「俺が手を抜いてたからな！」

テルマ「そんな事してないのわかってるぞ！危ねえって何回も言っただろ！」

エド「俺の演技に気付かないなんて、テルマも馬鹿だよな」

テルマ「お前演技なんてできる繊細なやつじゃねえだろ！」

エド「よーし、もう一戦だ！」

ドゴオン！

ラースが隣にあつた壁を殴った。その壁は思いっきり凹んでポロポロと崩れている

ラース「俺の言いたい事はわかるな？」

エド「……すみませんでした」

テルマ「お、大人しくしてます」

ラース「まあ元通りになったならそれでいい。ライバルでもあり、友達でもあるお前らなら互いにいい存在になれるからな」

テルマ「まあ、俺がエドを守れるくらいに強くなるって約束もありますし」

エド「基本は俺が守ってやらないとだけだな！背中くらいは任せられそうだけ！」

テルマ「！へっ、ありがとな」

エド「俺はあれから決めたんだけだ。この魔物になれる力で、大事な友達を守る人間になるんだ。それが例え、周りから疎まれても化け物だと言われてもいい。俺を俺として、人間として見てくれるテルマがいるから。俺は魔物にはならない」

テルマ「エド…」

リース「ふっ、そうか。これからも期待してるからな。頑張れよ」

再利用

一ヶ月後、デルカダール城

玉座の間

恒例となっている町の人達からの意見箱の内容を審議していると

ラース「じゃあ次に行くぞ……ふむ、なるほど」

グレイグ「なんと書かれていたのだ？」

ラース「最近、家の整理をしていたのですが色々いらぬ物などが出てきました。しかし、それらはどれも思い出が残っており、捨てたり売ってしまうにはもったいないように思っています。そのような物の使い道や再利用の方法を出してほしいです、だそうだ」

デルカダール王「ふむ、なるほど。思い出のある物が捨てられないのはわしもよくわかる」

マルティナ「私は賛成したいです。年々増えるゴミ問題の対策にも繋がると思っています」

バン「でも、どうするんですか？古い物とか壊れかけた物ですよ。直す時間ありますか？」

ラース「マルティナはどう考えてる？何か考えとかあるか？」

マルティナ「私は……そうね。こんなのはどうかしら。家具とかは無理だけど、きつと誰しも思い出が詰まった大切な物があると思うの。それを捨ててしまうのは心苦しいわ。でも、置き場が家にない。

なら、私達が置き場を作ればいいんじゃないかしら。飾るようにしておけば、いろんな人に見てもらおう事が出来て新しい使い道になると思うの」

ベグル「な、なるほど……。しかしマルティナ様、そんな置き場になるような場所は……」

グレイグ「そうですね。ベグルの言う通り、今のデルカダール王国には空いている場所がございません」

マルティナ「そうよね……。そこが問題ね」

ラース「賛成したいマルティナの気持ちは擁護したいが、場所の他にもどれだけその思い出の物を提供してくれるかも問題だな。多ければそれだけ広い場所を、少なければ別に作る必要も薄くなる。街の人達による所もあるな」

バン「お、俺はマルティナ様の意見素晴らしいと思いますよ！俺の家にだってメグの捨てられずに困ってる物とがありますし」

デルカダール王「ふむ。ならば、こうしてみてはどうか？まず、街の者達に簡単に今の案を説明する。そうして、各家にある思い出の物を持ってきてもらいその量によって作るかどうかを判断する。

その間に、わし達は必要となった際の事も今後の事も考えて、老朽化した建物や使わなくなった場所を解体してスペースを確保しておく」

ラース「そうですね。街の人達の協力が必要不可欠です」

マルティナ「ありがとうございます、お父様！」

ラーズ「それじゃあマルティナ、この件はマルティナに任せてもいいか？」

マルティナ「ええ、大丈夫よ。私が賛成した事だもの、きっとやり遂げてみせるわ」

グレイグ「もちろん、私達も姫様の指示があれば動かしていただいて構いません」

ベグル「俺達兵士もどんどんお使いください」

バン「はい！力になりますよ！」

マルティナ「ふふ、皆ありがとうございます！」

次の日、デルカダール城下町

広場

ザワザワ…

広場にはマルティナとラーズがやってきており、王女が突然やってきた事に周りの人達は少しぎわついている

ラーズ「皆！少し落ち着いてくれ！今からマルティナ王女から皆へメッセージがある。それをよく聞いてほしい！」

ラーズは大きな声を出して周りに言うのと、その声でぎわついていた広場は静まり返って台に立つマルティナに視線が集まった

マルティナ「突然のご連絡申し訳ございません。昨日、皆さまから頂いたご意見の中に思い出の品の再利用についてがありました。私達で話し合った結果、街の方達からいらなくなった思い出の品を集めて、それを展示する場所を作ろうという方針に決まりました。」

しかし、そのためには皆さまから思い出の品を提供していただかなければなりません。そのため、もし多数の方達に展示されても構わないという方がいましたら、こちらの仮スペースか直接お城へ来ていただいて私に渡していただければと思います。もちろん、展示した際の防犯については細心の注意を払わせていただきます」

話すマルティナの後ろには四角で囲った簡易的なエリアがあり、そこに小さい看板で思い出の品収集場と書かれている

マルティナ「思い出の品であればなんでも構いません。例えば私であれば、このグリズリーのぬいぐるみを出そうと考えているので、このように袋に詰めて置いてください。名前など特定される情報はないようにお願いします」

マルティナは自分の部屋に飾ってあった片目が取れてしまっている少し汚れたグリズリーのぬいぐるみを置いた

ラース「俺なら小さい頃に読み漁ったこの本だな」

ラースは少し古くなっている小さな魔導書を置いた

マルティナ「期日は二週間となります。一人で何個出していたいただいても構いません。ご協力よろしくお願いします」

パチパチパチパチ

マルティナに向けて広場で話を聞いていた人達から拍手が送られた。その拍手を受けながらマルティナ達は城へ戻っていった

デルカダール城　　玉座の間

マルティナ「あれでよかったかしらね？私があそこで話すなんてそうそうなかったから少し緊張したわ」

ラース「緊張してるようには見えなかったけどな。よかったと思うぞ。後は、どれだけ集まるかだな。俺達はこれから解体作業でマルティナに少し任せる事が増えるがいいか？」

マルティナ「ええ、もちろん。何かあったら連絡するわね」

ラース「おう、無理はするなよ」

消えた思い出達

一週間後、デルカダール城

玉座の間

男性「それではマルティナ様！頑張ってください！」

マルティナ「ええ、こつちこそ寄付してくれてありがとう。助かるわ、大事にすると約束するわね」

男性「はい！それでは失礼します！」

男性は思い出の品である一部が欠けた銅像を渡して帰っていった

マルティナ「ふふ、結構な数が集まったわね。小さな場所を予定していたけど、これならもう少し大きくしてもよさそうね。後でラースとグレイグに伝えないと」

リストを作って数を確認すると、30を超える数の物が集まっていた

ブレイブ「……ガウ？」

その時、ふと寝ていたブレイブが耳を動かして扉を見た。この合図はブレイブが知っている人が来た時にするサインだ

マルティナ「あら？どうしたの？ブレイブ？知ってる人でも来た？」

ガチャ

女の子「あのく……お、お邪魔します」

大きな扉を開けて入ってきたのは小さな女の子だった

マルティナ「あら、どうしたの？一人かしら？何か用事？」

女の子「はい……一人でできました」

ブレイブ「ガウ」

ブレイブがその女の子に近寄った

女の子「あ、ブ、ブレイブ君だ。こんにちは」

マルティナ「ブレイブの知り合い？というと、マルス達のお友達かしら」

女の子「あ、はい。私、いつもマルス君。あ、えつと、マルス様達と遊んでるルリっています。え、えつと、マルティナ様に言いたい事があって……」

ルリはモジモジとしながらゆっくりと話している

マルティナ「そうだったのね。ルリちゃん、ゆっくりで大丈夫だからお話してみて」

マルティナはしやがんで、下を向いているルリと高さを合わせて優しく微笑んだ

ルリ「あ、ありがとう……。えつとね、一昨日にね、私の大事なう

さぎのうーちゃんを、広場の場所に出したの」

マルティナ「あら、ありがとう。ちょっと待ってね……………うん、確認してるわ。いっかくうさぎのぬいぐるみね。それがどうかしたの？」

ルリ「それがね……………今朝見たら……………なくなってたの……………」

ルリは今にも泣きそうな顔をしながら必死に涙を堪えている

マルティナ「なんですって!?それは大変だわ!」

ルリ「私のうーちゃん……………どこかに行っちゃって」

ブレイブ「ガ……………ガウウ……………」

ルリは手で目を押さえてポロポロと涙を流し始めた。突然泣き始めたルリにブレイブが少し戸惑っている

マルティナ「そうだったのね。悲しかったわよね、教えてくれてありがとう。ほら、これで涙拭いて」

マルティナはハンカチを差し出した

ルリ「ありがとう……………」

マルティナ「一緒に広場まで行きましょう。他にも盗まれた物がなにか確認しないと」

ルリ「うん」

マルティナはルリと手を繋いで広場へ向かっていった

デルカダール城下町 広場

マルティナ「…………… 確かに無くなってるわね。それも、うちやんだけじゃないわ。ジョウロもクツションもランプも無い。誰かが盗んでるみたい」

ルリ「そんな……………」

マルティナ「迂闊だったわ。人が集まりやすい場所の方が宣伝にもなると思っただけど、その分多くの人の目に触れる。盗賊から見たらこんな所に物がたくさん置かれてたら盗んでくださいと言ってるようなものね。もう少し集める時の防犯面も考えるべきだった」

男性「おや？マルティナ様。こんな所でどうされましたか？…………… ああ、収集場の確認ですか？随分とたくさん集まりましたよね」

マルティナ「あ、さっきの。ちょうどよかったわ！聞きたい事があるんだけど、ここの物がいくつか盗まれているの。怪しい人とか見なかったかしら」

男性「ええ!? そうだったんですか!? 全く知らなかったです。でも、それは大変ですね！俺は…………… うーん、わかりません。ここ最近この周辺に人が集まりやすかったとは思いますが、皆さん思い出の品を出している事ばかりでしたから」

マルティナ「そうよね。他の人にも聞いてみるわ、ありがとう！」

男性「いえ！お力になれずすみません。でも、思い出の物を盗むなんて許せませんよね。俺も周りの人に聞いてみます！」

マルティナ「ええ、助かるわ！何かあったら教えてちょうだい」

今の会話を聞いたルリは泣くのをやめた

ルリ「私も……お友達やお母さんに聞いてみる」

マルティナ「ルリちゃん……。ええ、皆で協力して犯人を捕まえましょう。そして、うーちゃんも取り返さないとね」

マルティナは再びルリにしゃがみこんで優しく笑いかけた

ルリ「うん！」

その夜、マルティナとラーズの部屋

ラーズ「さつきバンに緊急で明日からあの広場の場所を厳しく見張るように言っておいた。警備はなんとかなるだろ」

マルティナ「ありがとう。私の不備でルリちゃんや街の人達に申し訳ない事しちゃったわね」

ラーズ「俺も平和ボケしてきたのかもしれない。そこまで頭が回らなかった。俺の方こそすまないな。あまり大きく協力出来そうになくて」

マルティナ「いいのよ、予定より大きい建物になりそうだし時間がかかるのは当然よ。こっちは私と街の人達でなんとかしてみせる。バン達の力も借りると思うけど、ラーズ達はそっちに集中してて」

ラーズ「わかった。だが、危ない事になりそうだったらマルティナ

だけで動くなよ？最低でも兵士を連れて行けよな」

マルティナ「ふふ、本当に言ってる事がグレイグみたいになってきたわよ。でも、わかってるわ。気をつけるわね」

目撃

次の日、デルカダール城下町

商店街

マルティナは多くの人に聞き込みをしていた

マルティナ「申し訳ありません。この数日間、広場で窃盗がありまして怪しかった者がいないか探しているのですが」

女性「ごめんなさい、私旅人だからわからなくて」

男性「マルティナ様!? あー、えっと、すみません。俺は思い出の物とかは捨ててしまったので広場の事はよくわからないんです」

広場

マルティナ「うーん、あまり情報が集まらないわね。どうしたらいいかしら」

ロベルト「マルティナ様! またお一人で行動されてましたか!」

ロベルトが広場から走ってきた

マルティナ「あ、ロベルト。でも、あなたにはここを警戒してもらいたいし」

ロベルト「俺、ラーズ將軍からもグレイグ將軍からもマルティナ様をあまり一人で行動させるなって言われてるんですよ! 俺が二人から怒られてしまいますよ!」

マルティナ「そ、それはごめんなさい。でも、私が動きたいの。私が始めた事よ、責任は全部私が受け持つわ。大丈夫、危険な事はしないと約束するから」

ロベルト「そういう問題でもない気はしますが……。でも、マルティナ様の覚悟は伝わりました。俺もお手伝いさせていただきます」

マルティナ「ありがとう。ロベルトは何か情報はあつた？」

ロベルト「少しだけ。思い出の物を集め始めて5日後に、見た事ない人がこの周囲を見ていたそうです。男性で、旅人にしては貧相な服装だったと聞いています」

マルティナ「ありがたい情報ね！となると、まず怪しいのはその旅人ね。その情報をくれた人ってどなたかしら」

ロベルト「それは……」

ロベルトは少し苦笑いしている

マルティナ「？」

メグ「私です、マルティナ様。バン共々いつもお世話になっております」

ロベルトの近くからメグがやってきた

マルティナ「あら、メグさん！もしかして、今の情報ってメグさんから？」

メグ「はい、そうなんです。数日前にバンからこのような事があると聞いて、私も家にある捨てられずにいた思い出の物を出そうとしてたんです。その時、この思い出収集場に見た事ない男性の方がいらして、何か呟いていました。」

少し気味悪くなったのですが、思い出の物に向けて最後の言葉をかけていると思つてそのままにしていたんです」

マルティナ「なるほどね。特徴とか覚えてるかしら」

メグ「少し怖かったのであまり直視はしていませんのですが、ラース様ほどの身長で全体的に綺麗な服装はしていませんでした。所々破けた黒いコートに、護身用なのか少し錆びていた剣も見られました。おそらく、バンや兵士さん達が持つ片手剣だと思われます。形が見慣れていたのでは」

ロベルト「流石メグさんだ。武器の事までわかるのか」

メグ「いえ、そんな！バンが持っている剣と大ききとかそっくりだったので、短剣や大剣ではないなと思つた程度ですよ」

マルティナ「貴重な情報だわ。ありがとう、メグさん。ちなみに、メグさんの出した物つて盗まれたのかしら」

メグ「はい……。先程見てみたのですが、無くなっています。私が赤ちゃんの頃から使っていたおもちゃのベルです。マサルにも使っていたんですけど、もうマサルも大きくなっていらなくなったので。」

あんな物を取って何に使うんでしょうか。いらなくなっていたので盗まれても困りませんが、大切な思い出も盗まれたような気がしてやっぱり悲しいですね」

マルティナ「そうよね。きつと盗られた人は皆悲しい気持ちになっているわ。私のグリズリーの人形も無くなってる。これ以上被害は出したくないわ。絶対捕まえてみせる！」

夕方、広場

マルティナはその後聞き込みを行っていたが、怪しい男の目撃情報こそ上がれど足取りまでは掴めずにいた

マルティナ「今日はここまでかしらね、集まった情報をまとめないと」

ギバ「おーい、ロベルト！ちよつとだけ運ぶの手伝ってくれ！」

汗だくになっているギバが援護を求めにやってきた

ロベルト「おう、今行く。マルティナ様、ちよつとの間離れますね」

マルティナ「ええ、今日はそのまま休んでいいわ。また明日頑張りますよ」

ロベルト「はっ！」

ロベルトはマルティナに敬礼をしてギバの後を追っていった

ルリ「あ、マルティナ様ー！」

商店街の方からルリとその母親が一緒に歩いてきた

マルティナ「あら、ルリちゃん。こんばんは」

ルリの母「マルティナ様、ルリがご迷惑をおかけしたようで大変申し訳ございません。ルリ、うーちゃんは諦めなさい」

ルリ「やだ!!うーちゃんが王国に住むのはいいけど誰かに盗まれるのは絶対やだ!私も犯人を見つuckerの!」

ルリの母「危ない事はしないでって言ってるでしょ!」

マルティナ「お母様、大丈夫ですよ。先程犯人と思われる情報がありません。うーちゃんも他の物も必ず取り返して見せます」

ルリ「本当!?!じゃあもうちよつとだね!どんな人!」

マルティナ「男の旅人さんだそうで、所々破れたコートと錆びた片手剣を持っているそうよ。あと黒ずんだ帽子もしてるみたい」

ルリの母「え………。それって……。あの方みたいですか?」

マルティナ「え?」

マルティナが振り返ると、思い出収集場に情報通りの男の人がしがんでゴソゴソと漁っている

ルリ「あー!!本当だ、そっくり!!」

怪しい男性「!?!」

ルリの大きな声に男は驚いて振り向くと、自分を見ている3人に気がつき慌てて逃げ出した

ルリ「あ、逃げちゃう！」

ルリが追いかけてようとすると

ルリの母「ダメよ、ルリ！危ない人なのよ！」

マルティナ「私が追いかけます！ルリちゃん達は待っていてください！」

ルリ「私も行くのー！うーちゃんが待ってるの！」

ルリの母の腕の中でジタバタと暴れるルリを横目に先程の男性をマルティナは追いかけた

想いが集まって

デルカダール城門前

マルティナ「待ちなさい！」

マルティナは先程の男を捉え、大きな声をあげた

男性「くっ！」

男性はその声に怯み、振り返ってマルティナを見た。その手には先程取ったと思われるおもちゃが握られている

マルティナ「どうしてこんな事をするの!? あそこにあっただのは思いの詰まった大切な物! それを盗むなんて!」

男性「うるさい、うるさい、うるさーい!!! お前らが悪いんだ!! 俺を、この国から追い出したせいだ!! これは報復なんだよ!」

マルティナ「報復? 何の話よ!!」

ロベルト「マルティナ様!」

その時、マルティナの後ろからロベルトとルリ達がやってきた

マルティナ「ロベルト! と、ルリちゃんまで!」

ロベルト「走っていくマルティナ様が見えたので後を追ってきました。こいつが、この女の子の言っていた犯人ですか!」

ルリ「私のうーちゃんを返して!」

ルリの母「ルリ、静かにしてなさい！」

男性「はっ、覚えているわけもない！俺は昔、この国に住んでいたんだ！だが、仕事をなくして税が払えなくなった俺を、お前達はなんの慈悲もなく追い出した！そのせいで、俺はこんなみずぼらしい生活をしなくちゃいけなくなった！」

マルティナ「税が払えなくなつたからといって追い出した？そんな話、お父様からも聞いた事ないわ」

ロベルト「……はっ！思い出しました！こいつ、見た事ある顔だと思つたら！昔兵士だつた男です！でも、街の人に恐喝を行つて追放されています！グレイグ將軍の部下だったのでグレイグ將軍ならご存知かと」

男性「兵士は力のない一般人共を守つてやってるんだ！優遇されて当然だ！」

マルティナ「そう……。自業自得ね。少しでも同情の念を向けようとした私が間違つていたわ」

男性「なんだと!!」

マルティナ「その追放は情けをかけたものよ。本来なら牢屋にいるはずなのだから。もしかしたら、更生するかもしれないとしてね。それすらも理解出来ずにこうやって罪を繰り返すのなら、大人しく牢屋に入っていないなさい！」

男性「あんなゴミを集めて何になる！あんな物、誰にも必要とされない！つまり、盗みでもなんでもないんだ！」

ルリ「うーちゃんはゴミじゃない!!」

男性「さつきからやかましいぞ、このクソガキ!」

男性はルリに向かって腕に仕込んでいたボウガンを発射した

ドガン!!

ルリ「!?」

ルリの母「駄目!!」

ルリの母が咄嗟にルリを覆った

ロベルト「!」

ロベルトも盾をルリ達に向ける

バキン!

全員「!」

男性「なに!?!」

マルティナ「……………」

しかし、ボウガンの矢はマルティナの蹴りで粉々になった

マルティナ「あそこにあるのは、ゴミでも必要とされない物でもない!! 誰かの大切な思い出達よ! これまで大切にしてきた素敵な記憶

達が詰まったかけがえのない物よ！」

男性「そんな物、何の役にも立たない！」

マルティナ「そんな事ないわ！思い出は、その人を支える大切な物となる！誰かを思い出させる大切な物！誰かの人生の大切な一部よ!!それをそんな風にしか考えられないなんて許せない！ましてや、ただの自業自得に逆上してこんなに多くの人を悲しませてきた！しつかりと罪を償ってもらおうわ！」

男性「何が思い出だ、何が大切な一部だ!!そんなものは慰めにしかない！」

マルティナ「どんな物にも誰かの思いがある。石像にも、人形にも、お花にも、本にも。必ず物には誰かの気持ちや思い出が込められているのよ。この国は、そんな誰かの思いが集まって出来た国よ。この国から、あなたが盗んでいい物なんて何一つとしてないわ!!」

男性「言わせておけば!!」

男は持っていた錆びた片手剣でマルティナに斬りかかった

ルリ「マルティナ様!!」

ガキン!

男性「なっ……!」

男の持っていた刃物は真っ二つになった

ロベルト「一応、面目は保たせてもらいますよ。マルティナ様なら

心配いらないのはわかっていますが、俺の立つ瀬がないので」

ロベルトがマルティナの前に出ていた

マルティナ「ふふ、そうね。ありがとう、ロベルト」

ロベルト「この俺の剣にも、鎧にも、兜にも。数え切れない大切な思い出が詰まっている。お前のような何の思いもないような刃に、俺の剣が負けるかよ」

男性「くっそー!!!」

その後、男は牢屋へと送られていき、盗んだ物の場所も吐いた

デルカダール地方 小さな山の中

穴の中にこれまで盗んだ物が無造作に積み重ねられていた

マルティナ「あつたわ。これで全部だと思っただけど」

ロベルト「わざわざマルティナ様が出向かなくても、俺達兵士が集めて持っていききましたよ」

マルティナ「いいのよ。この件は私が始まりなの、だからなんだって私がやる事に意味があるのよ」

マルティナはリストを見ながら足りない物がないか確認していく

マルティナ「あ」

積み重ねていた物の下に泥がついたいくつかうさぎのぬいぐるみが

落ちていた

マルティナ「これがルリちゃんと言っていたうーちゃんね……あ」

付いていた泥を払い除けると、角は折れて中の綿が飛び出ていた

ロベルト「あ、もうそんなになっちゃったんですね。流石にこれは、展示しない方がいいのでは」

マルティナ「……いえ、ちゃんと展示するわ。ただ、このままだとルリちゃんもうーちゃんも悲しむでしょうから少しだけ私がお手伝いするわ」

ロベルト「お手伝い？」

マルティナ「ええ。楽しみにしてて」

思い出の館

一ヶ月後、デルカダール城下町

新しく建てられた施設に思い出の品は飾られていき、ついに今日、思い出の館としてオープンする事になった

赤いレンガを基調として作られ、黄色い屋根に大きな窓がいくつもある広い館の前にはデルカダール王達が並び、それを国民達が見ていた

デルカダール王「マルティナ、このオープン式はお主が主役じゃ。頑張ってくるのだぞ」

マルティナ「はい、お父様。最後で最初のお仕事、しっかりやり遂げます」

マルティナはそう言って一歩前に出た

マルティナ「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます！この思い出の館は、皆様のご協力がなければ存在するはずのないものでした。ですが、皆様が寄付してくださった大切な思い出の数々、全てしつかりと拝見させていただきました。どれも素敵で大切な、美しく優しい思い出が感じられました。」

そんな思い出を皆様とも分け合いたい。私は、この施設ができる事を誰よりも楽しみにしていました。皆様のおかげでこの温かく素晴らしい建物が出来ました。心から感謝しております、ありがとうございます」

マルティナは深々とお辞儀をした

マルティナ「それでは、この思い出の館、オープンです」

マルティナが入口にある赤い紐を切る。国民達からは盛大な拍手が贈られた

その後、デルカダール城　玉座の間

オープン式が終わった後、マルティナ達はいつも通りの仕事に戻っていた

マルティナ「私も皆の意見聞きたかったわ。とつてもいい施設になったと思ってるけど、皆はどう感じてるでしょうね」

グレイグ「私もあそこまでのしつかりとした場所になるとは思っていませんでした。中の展示も全て姫様のご希望通りです」

ラース「わざわざあそこまでしなくてもよかったと思うけどな」

マルティナ「駄目よ、そんなの。皆の思い出はとつても綺麗で温かったの。それなら、その思い出がより相応しくなるようにしつかり整えてあげなきゃ皆にも思い出にも失礼だわ」

ラース「……　はは、そっか。マルティナらしいな」

バタン

ロベルト「し、失礼……　します……。マルティナ様……　国民達から……　お手紙です」

ロベルトがふらふらしながら入ってきた。その手にはロベルトが

見えなくなるほどの大量の手紙が山になって重ねられている。それを見たラーズとグレイグが駆け寄っていく

ラーズ「だ、大丈夫か、ロベルト。よく落とさなかったな」

グレイグ「俺達も手伝う。少し下ろすんだ」

ロベルト「その声、ラーズ将軍にグレイグ将軍。はい、ありがとうございます。ございますって、うおっ!!」

全員「あ!」

バサア!!

山のバランスが崩れて床に手紙が散乱した

ロベルト「も、申し訳ございません!」

ロベルトは大慌てで集めていく

マルティナ「ふふ、大丈夫よ。こんなにあると私一人じゃ大変だし、皆も一緒に読みましょう。楽しみだわ」

マルティナも笑いながらやってきて、しやがみ込んだ。そのままおもむろに落ちていた手紙を拾って封を開けた

ロベルト「お、俺までいいんですか?」

マルティナ「ええ、もちろん。ロベルトもたくさん手伝ってくれたんだもの。皆の感想、楽しみじゃない?なんて書いてあったか教えてちょうだい。もちろん、ラーズもグレイグもね」

ロベルト「じゃ、じゃあ、これにしよう」と

グレイグ「わかりました」

ラース「どれどれ。……お、やつぱり褒めてくれてるぞ。思い出の品があんなに綺麗になって嬉しかったってよ」

マルティナ「ふふふ、そういう意見が聞きたかったわ。見て、この手紙。ルリちゃんのやつだったわ」

マルティナが開いた手紙には拙い字で精一杯書かれていた

マルティナさまへ

うーちゃんをとりかえしてくれて、ありがとうございます。マルティナさまのおかげでうーちゃんがきれいになりました。うーちゃんのけがをなおしてくれたときいて、とてもうれしかったです。うーちゃんもきれいなばしよにすめてよろこんでます。

こわいひとにたちむかったマルティナさまは、とてもかっこよかったです。うーちゃんをガラクタといわれてとてもかなしかったけど、マルティナさまがいいかえしてくれてうれしくてないちやいそうになりました。

わたしもいつか、マルティナさまみたいになかったよくてきれいなひとになりたいです。またいっしょにおはなししてください。おかあさんやおとうさん、マルティナさまにわたし、いっばいのひとのおもいがあつまったこのくにがわたしもだいすきです

ルリ

マルティナ「嬉しいわ。ルリちゃんが喜んでくれてよかった」

マルティナは大切そうに手紙を抱きしめた。その目尻は少しだけ光が見えた

ロベルト「…… ええ、本当にそうですね。ご自身で裁縫されていた時は驚きました」

グレイグ「それもそうだし、姫様は一つ一つの思い出の物にコメントまでして飾ってあるのだ」

ロベルト「ええ!?!け、結構な量ありましたけど!」

ラース「わざわざ寄付した本人にどんな思い出なのか聞きに行ったんだぜ。流石というか、なんというか」

マルティナ「ふふ、だってその方が嬉しいじゃない。思い出を共有出来るのは幸せな事だわ。実際、思い出を話してる時の皆の顔はとても生き活きしてたし優しい顔をしてたわ。あんな顔にさせてくれる物は大切にしたいの」

ラース「優しいな、マルティナは。そういえば、マルティナが出したあのグリズリーのぬいぐるみにも何か思い出があるんだろ?なぜか片目だけ取れてたけど。マルティナならすぐ縫えそうなのにならずと部屋に飾られてたままなのも不思議だよな」

マルティナ「あれはあのままがいいのよ。ね、グレイグ?」

グレイグ「…… 私に言わなくても。あれはホメロスと姫様の思い出でしょう」

二人「ええ!？」

マルティナ「そうなの。昔にね、あのぬいぐるみをお父様が買ってきてくれたの。私はそれが嬉しくて、ずっと肌身離さず持ってたわ。ご飯の時もお城にいる時も、お風呂の時でさえもね」

ラーズ「そ、そんなにだったのか。凄いな」

グレイグ「だが、そうしていたせいかすぐにぬいぐるみは汚れてしまってたな。一度洗った方がいいとなったんだ」

マルティナ「それをね、私が嫌がったの。取られるではないんだけど離れたくなかったのよ。お父様もグレイグもすぐに諦めてくれたんだけど、ホメロスはずっと諦めてくれなかったの。私も汚れますよとか言ってる」

ロベルト「ま、まあ、当然といえば当然ですね。ホメロス将軍のお気持ちもわかりますし、マルティナ様のお気持ちもわかります。大切な物は離したくないですよね」

マルティナ「そうして二人で引つ張り合った結果、片目が取れちゃったの。それを見た私は大泣き。ホメロスは顔を真っ青にして大慌て。お父様もグレイグも駆け付けて大騒ぎだったわ」

グレイグ「凄まじかったですからな、あれは。王のあやしをもつてしても泣き止んでもらえませんでしたから」

ラーズ「うわあ、それはそれは。で？それがどうして未だに取れたままなんだよ。それなら付けてしまえばよかっただろう」

マルティナ「その目のボタンがね、特別性だったみたいでもう売られてなかったの。だから代わりとして違う物を付けたんだけど、それはそれでなんか違って嫌だったのよ」

グレイグ「ホメロスは大陸中を駆け巡って同じボタンと同じ人形を探したのだが、かなりレアみたいだな。どうやらプレミア物だったらしい。王もそうとは知らずに買われたからな。買う事は出来なかったのだ」

マルティナ「私はホメロスと大喧嘩。一切顔も合わせなければ口も聞かなかったの」

ロベルト「いや、なんか楽しそうに言ってますけどホメロス將軍随分とかわいそうに…」

グレイグ「ホメロスも見事ないほどに落ち込んでいてな。常に上の空だったし、部屋に来ては姫様にどうしたら仲直りしてもらえるかを延々と聞かされていた」

ラーズ「は、ははは……。思ってたより凄いドタバタしてる思い出だな」

マルティナ「ええ、そうね。今となっては笑えるいい思い出だわ。でも、あれを見る度に思い出してたわ。昔のホメロスも、あのホメロスもきつと変わってなんかいなかった。心の中は同じだったけど、求めようとした方法が違ったの。敵対してしまったけど、願うならば彼も救ってあげたかった」

グレイグ「……………」

マルティナ「ごめんなさい、こんな雰囲気させるつもりじゃないな

かったの。つい、口からね」

ラース「……大丈夫さ。思い出もいい物ばかりじゃない。苦しいもの、つらいもの、後悔するもの。たくさんある。でも、それを乗り越えたからこそ今の俺達だ。今の俺達になるための必要な思い出だ。絶対忘れないでいこうぜ」

グレイグ「そうだな。姫様、ホメロスとの大切な思い出をありがとうございます。ホメロスもきつと喜ぶでしょう」

マルティナ「ええ！そうだと嬉しいわ」

館にあるグリズリーのぬいぐるみにはマルティナのコメントとしてこう書かれていた

私の昔からのお友達です。ここには二人の記憶が刻まれています。一人は、まだ幼くて駆け回っていた自分。もう一人は、綺麗で強くて実は優しいこの国を支えてくれた人。これまでも、これからも忘れません。せめて、この言葉が貴方へ届きますように。

私と遊んでくれてありがとう

ベタヤール

思い出の館が出来てから1ヶ月後

デルカダール城　大広間

玉座の前でマーズがマルティナ達に報告をしていた

グレイグ「なに？城下町の質屋に変なやつだと？」

マーズ「はい、国民からその報告がありました。ベグルが向かっておりますが、何やら揉めているそうなのです」

マルティナ「となると、値段の交渉とかではないの？」

マーズ「す、すみません。俺も話しか聞いていなくてそこまでは」

ラース「まあベグルが行ったならある程度はなんとかなるだろう」

バタン

ベグル「失礼します、マルティナ様」

その時、ちょうどベグルが入ってきた

グレイグ「おお、速いな。どうだった？」

ベグル「それが……旅人が魔物の素材を売ろうとしてたみたいなのですが。質屋が言うにはあまりに素材がいいのでお金が足りずに買い取れないとの事でして」

全員「ええ……？」

グレイグ「そんなにいいものなのか」

ベグル「そ、そういうのは俺にはわからないのでなんとも……。とりあえず、こちらで預かってきました。旅人も付いてきて城の前で待っております」

ベグルが持つ麻袋にはそれなりに大きな膨らみがある

ラーズ「俺達もあまり素材はわからないんだよな」

マルティナ「グレイグ、あなたなら多少はわかるんじゃないかしら」

グレイグ「まあそれなりには。専門的とまではいきませんが、少し見てみます」

しばらくして

グレイグ「確かにかなり上物の毛皮だったり、珍しい魔物の体に着している宝石です。しかも相当の手慣れだと思われます。刃物の扱いも器用なんでしょう、綺麗に裂かれております」

ベグル「そうなんですか。とてもそんな風には見えなかったけど」

ラーズ「そういうのはカミュやイレブンに聞くと買い取ったり利用したりしてくれそうだよな」

マルティナ「確かに。ちよつと後で連絡してみましよう」

グレイグ「では、私達の方で買い取っておきましょう。ベグル、俺

もその旅人に話に行くぞ」

ベグル「はっ！」

デルカダール城下町 城前

そこには藍色の髪をした藍色の服を着て、サスペンダーをした背の高い男性がウロウロしていた

旅人「あ！兵士さん、遅いですよー！俺、ただ金が欲しかっただけなんだ。つて、あれ？こちらはどなたです？」

ベグル「悪いな、ちよつと時間かかってたんだ。この方はグレイグ將軍。俺達よりも偉い方だ」

旅人「ほ…… ほええー！そんな方にわざわざ出向いてもらえるなんて光栄です！」

旅人はベグルの説明を聞いてグレイグの顔を驚きの表情で見ている

グレイグ「貴方がこの素材を持ってきた旅人ですか。こちら、相当いい素材でしたのでぜひ我々の方で買い取らせていただこうと思いましたが」

旅人「え、あー、本当ですか！それならよかったです。もし駄目だったらどうしようかと思いましたが。ほら、せっかく頑張ったのにお金にならなかつたら悲しいじゃないですか」

グレイグ「相当な腕前ですね。何かこういった素材を集める方ですか？」

旅人「いやいや、適当に旅してたらいつの間にか溜まってたんでお金にしようかなと思って売りに出しただけですよ」

グレイグ「そ、そうでしたか。お金のほうはこのくらいをご用意しましたがいかがでしょう」

グレイグは持ってきた10万ゴールドを渡した

旅人「わっはーい！こんなに貰っていいんですか！ありがとうございます！
います！」

グレイグ「ああ。こつちこそいい素材に感謝する」

旅人「それじゃあまた溜まったらここに持ってきますねー！」

ベグル「いや、城はそういう場所じゃねえから」

旅人「だってこの質屋さん駄目だったじゃないですか。あ！兵士さん、もしよかったらまだ頼ってもいいですか？」

ベグル「ん？いいぞ。まだ何かあったのか？」

旅人「ありがとうございます」

グレイグ「では、俺は城に戻るとする。ベグル、ありがとう」

ベグル「いえ、当然の事ですので」

旅人「あ、えっと、グレイグさん、お金ありがとうございましたー
！」

広場

ベグル「で、なんだ？頼りたい事って」

旅人「まあまずは自己紹介するさ。俺の名前はベタヤール。ただの
しがない旅人だ。兵士さんは？」

ベグル「……ベグルだ。見ての通りデルカダール城の兵士をやっ
てる」

ベタヤール「ベグルか、よろしくな。頼みたい事ってのはこの地方
全体の魔物の事についてなんだ。ちょっと魔物について勉強してる
んだ。兵士さんならこの地方の魔物にも詳しいだろうと思ってるな」

ベグル「ほー、なるほどな。それならまあある程度は教えられるぞ。
それに、この広場にはこんな物もある」

ベグルはそう言っつて噴水の近くにある看板に向かっていく

ベタヤール「これは？」

ベグル「これは魔物掲示板。今日このデルカダール地方で主に見ら
れる魔物とその危険度を知らせてるんだ。今日はスライムとおおが
らす、マンドラが多いみたいだ」

ベタヤール「へー、こんなの他の国にはなかったな。便利だなー、こ
れ！でも、俺直接見たりしたいんだよ。ほら、俺だっつて戦えるんだか
らいざっつて時も平気だからな」

ベタヤールは自分の腰に添えられた二本の片手剣を軽く上げて見

せた

ベグル「まあそうだろうな。じゃあちょうどいい。俺の見回りに着いてくるか？魔物達を観察できるぞ」

ベタヤール「お！いいのかわ！ありがとうございます、ベグル！ベグルも兵士にしてはかなり体格いいし、大剣なんて持って強そうだよな」

ベグル「まあな。他の国の兵士よりは全然強いぜ。鍛えてるからな」

ベタヤール「じゃあいざという時の護衛もよろしくな」

ベグル「いや、戦えるんだったら自分の身くらい守れよな」

デルカダール地方

ベタヤール「へへ、可愛いじゃん」

スライム「ピキィ？」

ベタヤールはしゃがんで近くにいたスライムを撫でている

ベグル「……あの素材の剥ぎ取り方から実はかなりヤバイやつか思ってたけど、そんな風でもなさそうだな」

ベタヤール「そんなジロジロ見ないでよ。警戒するのはわかるけどさ、何もしないって」

ベタヤールは少し笑いながらベグルに振り返った

ベタヤール「俺、そんなに怪しかった？」

ベグル「……悪い。別に警戒したり怪しんだりするわけじゃない。最初は流石にあれだったけど、なんだかそうでもないように思えてな」

ベタヤール「ありがとう。警戒してても構わないけど、ベグルの顔怖いからさ。睨まれてるとなんだかこう、落ち着かないというか」

ベグル「わ、悪かったな。生まれつきこういう顔なんだよ」

ベタヤール「ははは！だろうな。生まれ持ったものは仕方ないよな、受け入れなくちゃ」

ベグル「お前は、どうして魔物の勉強を？」

ベタヤール「……うーん。なんとなく？」

ベグル「な、なんとなく？」

ベタヤール「そう、特にこれといった理由もないんだ。学者になりたい訳でもないしな。ただ、身近にいるのにわからない事は多いだろ？だから気になったんだ」

ベグル「まあ、そんなもんなのか。じゃあなんで旅を？」

ベタヤール「はは、めっちゃ聞いてくるじゃん。何？俺の事知りたか？」

ベグル「や。そ、そういう訳じゃ」

ベタヤールはふと草原に横たわった

ベタヤール「いいよ、別に。ただ、ベグルの事も教えろよな。俺ばかりは不公平だ。ベグルはなんで兵士に？」

ベグル「……………俺は……………」

ベグルが少し言葉に詰まっていると

ベタヤール「あー、言いにくかったか？悪いな」

ベグル「いや！なんて言葉にしたらいいかわかんなかったんだ。昔と今とで、兵士になる理由が変わったからよ」

ベタヤール「理由が変わる？それはまた不思議な事もあるもんだな」

ベグル「まあ、な。簡単に言うと、昔はデルカダール兵士になって強くなる事しか考えてなかった。でも、今はもう違う。俺の仲間が教えてくれた。自分の大切なものを守る事も強さなんだ。俺は、もう大切なものを失わないために兵士をやってる」

ベタヤール「……………」

二人の間に沈黙が訪れた。草原を走る風の音がする

ベグル「あ。と、突然悪い。いきなりこんな事言われてびっくりしたよな」

ベタヤール「いや、そんな事ない。ベグル……………お前、かつこいやつだな!!俺、惚れ惚れした!」

ベタヤールは立ち上がってベグルの両手を握り興奮したように息巻く

ベグル「え……。あ、ありがとうよ」

ちよつと困惑するベグルをおいてベタヤールはまた草原へと寝転がる。広い空を泳ぐ雲がよく見える

ベタヤール「そういう信念つてのがあるの憧れる！俺には……わからない。夢とかはあるけどよ、それも……夢物語みたいなものだ」

ベタヤールのその発言にベグルはゆっくりとベタヤールの傍に寄り、座り込んだ

ベグル「夢……か。夢があるのはいい事だ、俺は夢を持つ事を諦めたからな。俺もお前みたいな夢を持つてる人達が少し羨ましいぜ」

ベタヤール「そうなのか？互いに似た事を思ってるんだな。ベグル、お前いい奴だな。気に入ったさ」

ベグル「俺も、ベタヤールの事少し気に入ったぜ。その夢の話、聞いてもいいか？笑わねえからよ」

ベタヤール「ああ。俺は、国を作りたいんだ。皆が幸せになれるよ。うな、そんな国だ」

ベグル「国か。かなり大きな夢だな、でもいいじゃないか。いろんな人の幸せを願うなんて中々できた事じゃない」

ベタヤール「……でも、どうしたらいいかわからない。そもそも幸せって？俺には俺の、ベグルにはベグルの幸せがあるように、たくさんさんの幸せがある。俺には、大勢を幸せに出来る力なんてない」

ベグル「……難しい事だな。でも、そう思いながら動いているベタヤールの行動はきつと間違っていないはずだぜ。幸せを目指してるんだから、きつと相手にもそれが伝わるさ」

ベグルはベタヤールを見ながら穏やかな笑顔をみせた

ベタヤール「ベグル……。あー、その、なんだ……。ほら、み、見回りするんだったよな？早く行こうぜ」

ベタヤールは焦ったように立ち上がると、ベグルをおいて歩き始めた。その耳は少し赤くなっている

ベグル「……はは、わかりやすいやつ。ああ、もっと進んでいくか」

突然変異と強襲

デルカコスタ地方

二人は話しながらデルカコスタ地方までやってきた

ベタヤール「ほう、ここにはなんかでかい神殿があるんだな」

ベグル「デルカダール神殿だ。遠くからでも少し見えてただろ？というか、旅人なのにここを知らないで来るのも珍しいな。昔からある神殿で歴史ある建物なんだ」

ベタヤール「悪かったな、田舎者だよ」

ベグル「そーいや、出身はどこなんだ？」

ベタヤール「え？ああ、そつか。俺はシルファ村だ。もう無くなっちゃまったけどよ」

ベグル「シルファ村？知らないな……って、なくなった？」

ベタヤール「ホムスビ山地の北方にあつたんだ。昔に魔物の襲撃にあつて俺以外全滅したけどな」

ベグル「す、すまねえ。嫌な事聞いたな」

ベタヤール「いいって、別に。昔の事なんて気にしなくていいだろ、気が合うならそんなの大した問題じゃない」

ベグル「……はっ、だな。さて、あとは海岸まで行ったら見回りは終わりだぜ。どうだった？」

ベタヤール「んく、わりと可愛らしい魔物が多かった印象だな。平和な証だ。まあ、奥の方には結構危険なやつが潜んでるみたいだが」

ベタヤールは森の奥を睨んでいる。その先には、緑の体をした小さな鬼のような魔物、オコボルトがいた

ベグル「ああ。あれはオコボルト。かなり怒りっぽい魔物でな、剣や盾を使う少し面倒な魔物だ。人目につく場所まで来るのは珍しいな」

ベタヤール「……ここは、まだ無事か」

ベグル「？何がだ？」

ベタヤール「……まあ兵士だし、知っておくべきか。最近、魔物に変化が見られるようになったんだ。今まででは確認された事のない色の魔物や凶暴性、知能を持つ魔物が出てきている。

例えば、スライムナイトがいるだろ？あれは普通は緑色で、転生したハートナイトがピンクだろ？それが、黄色いスライムナイトがいるって事だ」

ベグル「聞いた事ない。つまり、突然変異って事か？」

ベタヤール「そういう事だろうな。何が原因かはわからないが、同個体とは遥かに凌駕する戦闘力を持ち合わせている。気をつけておけよ、きつとこの地方にも来る可能性が高い」

ベグル「……わかった。大事な報告を感謝する、王女達にも伝えておく」

ベタヤール「……その必要はなさそうだけどな」

ベグル「それって……？」

ベタヤール「そうだ、魔物で思い出した。デルカダール城には随分と魔物がいるんだな」

ベグル「え……？ま、まあキラーパーンサー2匹を飼ってるからな」

ベタヤール「2匹……：そうか。魔物を飼うなんて怖い事してるな」

ベグル「だろうな。まあいい奴なんだぜ」

その頃、デルカダール城

グレイグの部屋

グレイグとバン、マーズ、ギバが買い取った魔物の素材を選別していた

ギバ「この宝石はどうすればいいですか？」

グレイグ「ふむ、それはイレブンが使いそうだな。この袋に入れてくれ」

マーズ「にしても、結構な量あるんですね」

グレイグの部屋の床には毛皮や石などが散乱している

グレイグ「そうだな。しかもどれも状態がいい、あの旅人かなりの腕前だと思われるぞ。カミュのような器用さもあるのだろう」

バン「へく、俺もどんな人なのか見てみたかったなー!ん?」

バンは素材が入っていた麻袋の中にまだ一つ欠片が入っている事に気づいた

バン「グレイグ將軍、これまだ入って……」

ドクン

バン「!!?」

グレイグ「バン?」

ドサア

三人「!!!」

バンは麻袋に入っていた欠片を触った瞬間、そのまま倒れ込んだ

ギバ「お、おい、バン!!どうした!?!」

バン「か……かはっ……な、なんだ……」

バンは苦しそうに顔を赤くしながら胸を押さえている

グレイグ「ギバ、急いで治療班を呼んでこい!!姫様とラーズにもだ!!」

グレイグはバンに緑の魔法陣を描きながらギバに指示を出した

ギバ「は、はっ!!」

マーズ「おい、バン!!しっかりしろ!これか、この欠片のせいかな!」

マーズは急いでバンの手にある欠片を取るが、特にバンに変化はない

グレイグ「ベホイム!」

グレイグはバンに強力な治癒魔法をかけるが、それでもバンには変化が見られない

マーズ「魔法を受け付けていないのか!?呪いの類!」

グレイグ「いや、打ち消された感覚はない!確かに効いたはずだ。それでも駄目というのはどういう事だ」

バン「あ... ああああ...」

バンが苦しむ姿がより激しくなると、バンの胸の中心から黒くなっ
ていきバンの体を包んでいく

二人「!!」

バン「やめろーーー!!!出てくるなーーー!!!」

バタン!!

ラース「バン!!」

マルティナ「何が起こっているの!?!」

勢いよく開いた扉からラースとマルティナがやってきた。離れた場所からは治療班の姿が見える

グレイグ「私達にもわかりません!ただ、回復魔法は確かに効いたはずですが、バンの苦しみは取れずに!」

ラース「おい、バン!!しっかりしろ!!」

ラースはバンの目前まで近づく

マルティナ「ラース、危険だわ!」

バン「ぐあああああつっ!!」

バンの体が全て黒く包まれる

全員「バン!!」

それと同時に異様な気配が城を包み込んだ

ブレイブ「ガッルル…」

コロ「グウウウ…」

玉座の間にいたブレイブとコロも遠くに威嚇している。その方角は、バン達のいる部屋に向かっている

デルカダール城下町　グラジー

ビル「……なんだ、突然」

マドリー「嫌な予感しかしないわ。マヤちゃん」

マヤ「はい。って、あれ？どうしたの？ビルさんもマドリーさんも。なんか……怖い雰囲気だけど」

マドリー「今デルカダール城には帰らない方がいいわ。何か嫌な事が起きてる」

マヤ「え……に、兄ちゃん達に何かあったの!？」

ビル「わからん。あのお方達なら平気だろうが、事が止むまではここで大人しくしておけ」

マヤ「はい……わかりました」

広場

エド「なんだよ、突然気味悪い気配が現れたぞ。しかも、どこかバシンみてえな……まさか、あいつも」

デルカダール城　グレイグの部屋

バン「……」

バンは黒いオーラに包まれており、赤い目でこちらを見つめている

ギバ「ど、どうしたんだよ、バン!!その雰囲気、まるで」

ラース「ギバ、お前は一旦治療班を下げろ。そして、見張り役をやつてるロベルト達も呼んでこい。バンを止めなくちやならん」

ギバ「で、でも！」

バンの手と足に黒いオーラが纏われた

ラース「早く!!」

ラースがそう言つて動いたと同時に、バンが動き出した

バン「……………」

ラース「せいけんづき！」

ゴツツ!!

バンとラースの拳が同時にぶつかり、激しい衝撃が駆け抜ける。周りに散乱していた魔物の素材や麻袋が吹き飛んでいく

ラース「いっつった!!こつちが押し負けるのかよ」

ラースは拳を痛めたのか少し手を振っている

マルティナ「ふっ！」

その頭上からマルティナがバンに向けてかかと落としをきめる

ガンツ!!

バン「……………」

バンはそのまま跳躍して後ろに戻る

グレイグ「ふん！」

そこにグレイグが回り込み、バンの手と足を掴む

グレイグ「はあっ!!」

グレイグはそのままバンを投げ飛ばした

バァン!!!

壁に勢いよくぶつかり、大きな穴を開けた

マーズ「…………… 武器なしでこれなんだから、本当にこの方たちは…………… というか、情けは一体……………」

バン「……………」

バンは勢いよく起き上がると、グレイグに向かっていく

グレイグ「!!バンより速い！」

グレイグは横からの蹴りに反応が遅れる

ラース「お前の行動ならわかるぜ!!ふっ！」

ドスン!

ラースが割り込んで、足を受け止めた

ラース「ばくれつきやく！」

ドガガガ!!

ラースがそのままバンの顔に蹴りを連打していく

ドオン!!

バンは扉をぶち破って飛んでいった

謎に包まれた旅人

その頃、デルカコスタ地方

ベグル「どういう事だよ、こりゃあ」

ベグルとベタヤールはマンイーターやはめつの使者、ダースドラゴンなど普通なら奥地にいるはずの魔物達に囲まれていた

ベタヤール「……随分と、いるみたいだな」

ベグル「こんなにいきなり出てくる事なんてこれまでになかったぞ」

ベタヤール「そうか。だが、今起こっている以上考えててもどうしようもないだろ。倒すんだろ？この量は苦勞する、俺も手を貸すさ」

ベグル「助かる。こっちは俺が引き受ける。反対は任せてもいいか？ベタヤール」

ベタヤール「ああ、もちろん。ベグルの実力も見れるいい機会だ」

ダースドラゴン「ギヤオオオ!!」

ダースドラゴンがベタヤールに向かってしゃくねつの炎を吐いてくる

ベタヤール「よっ」

ベタヤールは瞬時に跳び上がる

スカルゴン「ギツ!？」

ベタヤール「その頭借りるぜ！」

ゲシ！

ベタヤールはスカルゴンの頭を足場にして更にダースドラゴンの背後に降り立った

ダースドラゴン「!!ギャオオー！」

気付いたダースドラゴンは尻尾でなぎ払おうとする

ベタヤール「そう血気盛んになるなよ。落ち着かせてやるからさ」

ズバン!!

ダースドラゴン「!!」

ベグル「な!？」

ダースドラゴンは瞬く間に4等分に切られていた

ベタヤール「超はやぶさ斬り」

ジュワー

ベタヤールが技名を言う頃には既にダースドラゴンは煙となって消え去っていた

ベグル「(斬撃が……見えなかった。動体視力にはかなりの自信

があるってのに。どれだけの速さで切ったんだよ………何者だ、こいつ)」

ベグルが驚愕した顔でベタヤールを見ていると

はめつの使者「ギギギイ！」

はめつの使者がベグルの周囲に向かって橙色の魔法陣を描き、巨大な炎がベグルを包み込んだ

ベタヤール「！おい、ベグル！何突っ立ってんだよ！」

それを見たベタヤールが助けようと動こうとすると

ベグル「悪い、ベタヤール。ちよつと動くのが遅かったみたいだ。だが、心配いらねえよ」

バァン!!

ベタヤール「!!」

ベグルを囲んでいた巨大な炎が真つ二つに切り裂かれ、中からベグルが出てきた

ベグル「これくらい、俺にはどうって事ないからな」

ベタヤール「……へえ、やるじゃん。でも、これからはボーツとしてんなよ！助けてやれるかわからねえぞ！」

ベグル「当然！まだまだここからだ！」

その頃、デルカダール城　大広間

ドガアアン!!

グレイグ「ぐっ……やはり強いな、強化されているだけある」

グレイグが吹き飛ばされ、大広間の壁に激しく打ちつけられていた

バン「……………」

その前には目が赤く、体から黒い煙を纏ったバンが近づいてくる

ギバ「一閃突き!」

その背後からギバが強襲をかける

バン「……………」

バンは勢いよく振り返ると、そのまま持っている槍でギバの槍と体の間に自身の槍をねじ込んだ

ギバ「な!?!」

ブウン!!!バアン!!

ギバはそのまま槍と一緒に投げられ、地面に叩きつけられる

ギバ「かはっ……」

突然叩きつけられ、ギバの肺から息が急速に抜けていく

バン「……………」

そのままバンに体を勢いよく蹴られる

ドガアアン!!!

ギバはそのまま壁に大きく穴を開けて中庭まで飛んでいく

グレイグ「ギバ!!!」

ラーズ「はっ!」

マルティナ「やあっ!!」

そこにラーズとマルティナが同時にバンへと攻撃を仕掛けていく

ラーズ「はああああ!!」

マルティナ「やああああ!!」

ラーズとマルティナの息のあった怒涛の連続攻撃も、バンは全てを防いだり避けたりしていく

マルティナ「(二人がかりでもダメなの!? さっきより、成長している!?)」

ラーズ「むっ……っ(っ)!!」

ラーズが僅かな隙を突いて、バンの片腕を掴む

マルティナ「!? ナイスよ、ラーズ! やあああ!!」

生まれた隙をマルティナは逃さず、バンの顔に勢いをつけた蹴りを当てる

ドオオン！

壁に当たったバンは崩れていく壁に飲まれて見えなくなった

マルティナ「平気？グレイグ」

グレイグ「面目ありません。武器がない今、私程度の格闘技術ではバンほどの相手は厳しくて」

ラース「そこは仕方ないさ。ギバも酷い怪我を負っていそうだが、ちよつと様子を見てきてくれ」

グレイグ「だが、ラース！今のバンに二人だけでは！」

ラース「わかってる。だから、出来る限り早く戻ってこい。その間の時間稼ぎくらいは……！」

二人「!!」

バンのいる場所を見つめていた三人だが、黒い煙が突如空に消えていくのを見た

マルティナ「今のは……？もしかして」

バン「い、いっただあぁー！！」

悲痛なバンの叫び声が城中に響き渡った

三人「!!」

地面を這って泣きながら出てきたバンの姿はボロボロで血まみれになってこそいるが、赤い目はしておらず、黒い煙もなくなっていた

バン「なんで……なんで、突然こんな目に……ううつ」

三人「バン!!!」

それを見たラーズ達がバンに駆け寄る

バン「じじょうく!!マルティナさまく!!グレイグじょうぐん!!だ
ずげでください……」

グレイグ「よかった、元に戻ったのだな」

バン「ふえ？」

マルティナ「一先ずはこれで安心ね。大暴れして大変だったんだから」

バン「ええ？な、何の話ですか？」

ラーズ「お前、覚えてないのか。覚えてるのはどこまでだ？」

バン「え？えつとですね、確かグレイグ將軍の部屋でギバ達とあの旅人からの魔物の毛皮とかを整理してて、麻袋にまだ何か入ってるのが見えてそれを持ったあたりで……そうだ!!」

え、えつと、俺の中？にいる魔物の俺？がいきなり暴れ出したんで

す！それに飲み込まれてしまっって感じですよ」

グレイグ「話聞いた魔物のバンか。今はどうなのだ？」

バン「今は落ち着いたみたいです。でも、なんで突然？」

マルティナ「グレイグ、あの麻袋にあったやつ残ってる？出来るだけかき集めて調べるわよ。人間の私達には無害でも、こうして特殊な人や魔物には何か嫌な効果がありそうだわ」

ラース「あと、その旅人って人にも話を聞いておこう。何もわからないだろうが、念のためな」

グレイグ「そうですね。バン、運が悪かったがわかった事も多い。怪我に関してはすまないが、ありがとう」

バン「ほ、本当ですよ!!ここまでの事ないじゃないですか」

ラース「……………」

魔導核

夕方、デルカダール城 城門前

魔物の群れを倒しきったベグルとベタヤールは二人で話しながら帰ってきた

ベグル「ベタヤール、あんなに強いなんて驚いたぜ」

ベタヤール「俺こそベグルがあんなにパワフルに動くなんてな、流石はその体格に大剣だな。正直言うところちょっと引いた」

ベグル「な!?!そんなに暴れてねえよ!あんなに一瞬で魔物を切り刻んでたお前に言われたくねえ!」

ベタヤール「はは、悪い悪い。ん?」

バン「よう、待ってたぞ」

城門の見張りの位置からバンが降りてきた。顔や腕には包帯がギプスがされてある

ベグル「バン、お前その怪我どうした?ガザルにされたにしては大怪我だな」

バン「ベグル、こいつと仲良くなったのか?」

バンは普段のおちやらけた顔はせず、睨むようにベタヤールを見ている

ベグル「あ、ああ。少しな。どうした?お前、そんな殺気立つなん

て珍しいな。って、そうだ！報告しなきゃいけない事があるんだ！デ
ルカコスタ地方で魔物が」

バン「その報告は後回しだ。お前、何者だ？」

ベグル「!？」

ベタヤール「……な、なんですか、兵士さん。そんな睨んで警戒
までされると、流石に怖いですよ。ベグル、ここの兵士達どうなっ
てんだよ。ただの一般人に向ける敵意じゃないだろ」

バン「……まあいい。明日の昼、城の玉座の間にお前を連行させ
てもらおう。王女様達がお前と少し話したい事があるそうだ」

ベグル「何があった」

バン「この後話す、その間に逃げられても困るからな。悪いが、こ
れさせてもらうぞ」

バンはそう言つて手錠を出した

ベタヤール「わ、わあ……。あれ？俺、何かしました？」

ベグル「そ、そこまでする必要ないだろ！罪人みたいじゃないか！
こいつはただの……」

途中で止まったベグルにベタヤールは少し驚いた表情をする

ベタヤール「いや、そこで止まるのかよ！俺を庇ってくれるんじゃないのか！」

バン「明日までの辛抱で頼む。これ付けて城まで来てくれ。部屋は用意してある、悪いようにはしない」

ベタヤール「お、俺の宿は」

バン「宿代が浮いて助かっただろ？荷物とかあるなら部屋を教えてください。くれれば俺達を取りに行く」

ベタヤール「流石に荷物を人に見られたくないな。取りに行つていい？」

バン「……いいぞ。ただし、俺とベグルもついて行く。変な気は起こすなよ」

ベタヤール「うへえ……。ベグルでさえあの強さだったのに、その上もう一人なんか強そうな人がいると流石にお手上げかな」

そのままベタヤールはバンに近づいて手首を差し出した

ベタヤール「君、中々面白い事してくれたね」

バン「!!？」

ふとバンにだけ聞こえるレベルでそう囁かれた

ベグル「どうした？」

ベタヤール「なんでもないよ。手錠掛けられてびっくりしただけ」

バン「(こいつ……やっぱり怪しいな。何を隠している)」

その後、宿屋まで行き荷物を取るとそのまま城へと向かった

デルカダール城 客室

ベタヤール「おー!!お城の部屋ってだけあって凄い豪華!!」

バン「あまりはしやぐなよ。ご飯は用意させる、ただし部屋から出るなよ」

ベタヤール「いやー、出たくなんてなくなりましたよ」

バン「ならいいけどな」

ベグル「……ベタヤール。正直言うと、俺はお前を怪しいなんて思えない。あの語ってくれた夢、眼差し、本気の間をした。そんなやつが怪しいわけない。俺は信じてるぞ」

ベグルはそう言って部屋を立ち去った

ベタヤール「……ベグル……」

その夜、デルカダール城 大広間

リースとマルティナ、グレイグは3人で麻袋に入っていた物を調べていた

グレイグ「どれだ、凶鑑にはあまり乗っていない物もある」

マルティナ「これ、多分ほうおうの羽根ね。凄い綺麗だわ」

リース「俺達が覚えてる魔物と照らし合わせていく必要があるのは

苦勞するな。明日、イレブンやカミュにも頼ろう。俺達より詳しいだろうしな」

そう言ってラーズが黒い物に何気なく触るとほのかに白く光った

ラーズ「!!」

バツ!

ラーズは反射的に持っていた物を投げ捨てた

二人「!?!」

マルティナ「どうしたの、ラーズ!」

ラーズ「……これだ。きつと、バンをおかしくさせた原因だ」

既に光は消えており、ただの黒い物体になっている

グレイグ「本当か!こんな、何の変哲もなさそうな欠片が」

グレイグはそう言って投げ捨てた欠片に手を伸ばした

グレイグ「む!?!」

グレイグも指が触れた瞬間にすぐに手を引っ込めた。再び白く光った

グレイグ「これは……なんだ。触れた時にだけ邪悪なを感じたぞ」

マルティナ「私も触ってみてもいい？」

ラース「…………… ああ。俺の予想が正しければ、マルティナは効かないはずだ」

マルティナ「え？……………？ 本当ね、特に何も」

マルティナは特に何も感じないようで、そのまま物体を触り続けている。物体も特に光る事はない

グレイグ「ど、どういう事だ」

ラース「これは、おそらく魔導核と呼ばれる、キラードとかの中身だろう」

グレイグ「中身？ 中にあるのは魔物ではないのか？」

ラース「あいつらは所謂、魔導人形のようなものだ。この魔導核があいつらの外装や中身のような物を作り出して動いている。倒せばそのまま煙となって消え去るが、詳しくは知らないがこうして魔導核を取り出す方法があるらしい」

マルティナ「そんな方法が……………でも、どうしてバンはあんな風になん？」

ラース「この魔導核、おそらくただの魔導核じゃない。邪悪な力や魔力が込められている。魔導核自体、魔力がないと働かない。だから俺やグレイグには感じ取れてマルティナには感じ取れない。」

バンにも魔力こそないものの、中には魔物の姿のバンがいる。魔物にこんな邪悪な塊を与えれば暴走するのは、これまででよくわかつて

るだろ」

グレイグ「なるほどな。なら、これは即刻で破壊した方がいいな」

マルティナ「そうね。こんな物あってもいい事はなさそうね」

ラース「……いや、少しだけ待つてほしい。試してみたい事がある」

二人「？」

次の日、デルカダール城 玉座の間

兵士全員に連行されてベタヤールがやってきていた

ベタヤール「こ、こんな状況初めてだ」

ベグル「……すまん。出来るだけ早く」

バン「ベグル」

ベグル「……わかってる。仕事に支障はきたさない」

マルティナ「突然ごめんなさい、旅人さん。デルカダール王女のマルティナといます」

ベタヤール「へ、あ。こ、こちらこそ初めまして。しがな旅人のベタヤールといます。あのー、お話とは？」

グレイグ「俺からさせてもらおう」

ベタヤール「あ！えっとー、確かブレイクさん」

グレイグ「グレイグだ！貴様から貰ったあの魔物の素材、どうやって入手した？」

ベタヤール「どうやって？えっと、魔物を倒したら煙にならずに残った物があつたのでそれを」

グレイグ「そうか。狙わないと取れない物もあるみたいだが」

ベタヤール「流石に狙ってますよ。ただ倒してるだけじゃ旅人出来ないんで。結構お金必要なすよ」

ラース「ただ、魔物が普通のやつではないな。何の魔物かわかるか？」

ベタヤール「見事な質問攻め。まあ予想してましたけどね。耳にした事ありませんか？魔物の突然変異について」

ラース「…… 数回だけ。だが、これ全部がそうだというのか？」

ベタヤール「まあかなりの数は突然変異体の素材です。馴染みがないのもそのせいですね。まだこの地方には来てないですが、他の地方の奥地では見られるようになってきてます」

ラース「…… そうか。よし、これで最後の質問だ。お前、魔物は好きか？」

ベタヤール「？いえ、嫌いですね。あまり関わりたくないです」

ラース「そうか、わかった。質問ばかりしてすまなかつたな、もう

解放していいぞ」

バン「え……。い、いいんですか？ 師匠。だって、こいつは」

リース「大丈夫だ、いつまでもこうさせてるのは可哀想だろ。ほら、鍵」

リースは持っていた手錠の鍵で手錠を開けた

ベタヤール「お師匠さん？」

リース「ああ、紹介がまだだった。俺はリース、マルティナ王女の騎士をやってる。以前は兵士長をやっていたから、兵士長からは師匠って呼ばれてる。よろしくな」

リースはベタヤールに手を差し出した

ベタヤール「そうなんですな、よろしくお願いします」

ぎゅっ

ベタヤール「…………… それでは、自由になった事ですし俺は帰りますね」

マルティナ「ええ、拘束させてごめんなさい。お詫びのお金も用意したから自由に使って」

グレイグ「持っていけ」

グレイグは5万ゴールドが入った袋を渡した

ベタヤール「わあ！嬉しいです、ありがとうございます、ブレイクさん！」

グレイグ「だから!!グレイグだと言っているだろう、貴様!!」

ベタヤール「へへ、すみません、グレイグさん。それではー!」

バタン

バン「……なんで、解放したんですか？あの素材は用意された罠だった可能性も」

ラース「それはない。本人にその意思はなかったようだし、偶然俺達が持つてしまったんだろうな」

バン「……師匠、実は俺……いや、いいです。わかりました」

ラース「?まあいい。とりあえず、この嫌なやつ取らないと」

ポト

ラースの手からあの魔導核が落ちてきた。ベタヤールと握手した際に、これに触らせたのだ

マルティナ「どうだった？反応は」

ラース「黒。反応なしに見えたが、魔導核は光っていた。紫に、な」

マルティナ「だとすると、彼は……」

ラース「ああ。少なくとも、嫌な力を持っているな」

グレイグ「本当に捕らえんでよかったのか？」

ラース「敵意がないのにそんな事出来ない。王国の規則にもそうあるしな。敵意が向けられれば、遠慮なくいかせてもらう」

ベグル「……………」

その頃、デルカダール城門前

ベタヤール「…………… あー、してやられた。あの茶髪の騎士のやつ、頭が回りやがるな、くそ」

ミラの夢

それから一週間後、ユグノア城 玉座の間

イレブン「へー、突然変異体。そんなのが出てきてるんだ」

ロウ「うむ。わしも耳にただけで詳しくはわからぬが、姫からの手紙にもあった。同個体よりも遥かに強いらしい。わしらも警戒しておかねばらんかもしれんのを」

エマ「そんなのがいるんですね。イレブン、ロウ様、無理だけはないでくださいいね」

イレブン「うん。ありがとう、エマ」

イレブン達が少し話していると、玉座の扉が開かれた

ガチャ

ダバン「失礼します、ダバンです」

ダバンが礼をして入ってきた。その後ろにはミラもいる

イレブン「あ、ダバン。それにミラさんまで」

ロウ「おやおや、どうかしたのかのう」

ミラ「ご無沙汰してます、イレブン様、ロウ様、エマ様。実は折り入ってご相談したい事がありました」

イレブン「どうしたの。なんでも力になるよ」

ダバン「ありがとうございます。あの、ミラは聖地ラムダが出身なのはご存知ですよ。その影響もあって古代文字を読めたりするんです」

ロウ「ほ!?!勉強しても苦勞すると言われるあの古代文字を!それは凄いのう!」

ミラ「そんな、ちよつとだけなんで大した事ではありません。それで、昔からの私の夢は考古学者になる事だったんです。いろいろあつて中断していたけど、ダバン達からの応援もあつてまた再開しようと勉強していたんです」

エマ「考古学者……。頭がよくないとなれないって聞いたわ、凄いです!」

ダバン「なので、もしもよかつたらなんですけど、城の学者チームにミラを入れてほしくて」

ミラ「私、ダバンだけの収入でやっていくのは申し訳なくて。それに、ケニーの事でもお金を使いそうだし、私も少しでも働かないと思ひまして。本当に大した事じゃなくていいんです!ちよつと探索とかに行ければそれで大丈夫なんで!お願いします!」

イレブン「うん、それは全然平気!むしろ、学者なんて中々人がいなくてね。こつちからお願ひしたいくらい!待つて、今学者リーダーの人呼んでくる!」

エマ「私が行くわ、イレブン。マリーさんよね」

イレブン「ありがとう、エマ。じゃあお願ひ!」

エマは走って出ていった

ミラ「ありがとうございます！」

ダバン「よかったな、ミラ。ただ……お金の事なんて考えてたのよ。別に俺の収入だって悪くないはずだろ？」

ミラ「収入に文句言ってるわけじゃないのよ。今後のため！それに、いつまでもダバンのお金で私やケニーまでお世話になるのはちよつと……情けない気がしてたの。ダバンのお荷物みたいだわ」

ダバン「お荷物?!ミラ、そんな事言うな！俺はミラの事をお荷物だなんて思った事ない！」

ダバンがミラの発言にカチンときたのか、強めの口調で声を出した

ミラ「あ、違……別に私だって」

ガチャ

マリー「失礼します、王様。歴史研究リーダー、マリーです」

ミラが慌てて言い直そうとしていると、タイミング悪く扉が開いて深緑色の長い髪をして丸い眼鏡をかけた中性的な顔つきの人がやってきた

イレブン「突然呼び出してごめん。新しくチームに入りたいって人がいて」

マリー「はい、お話はエマ様からお伺いしております。ミラさん、で

したね？」

ミラ「はい！雑用でもなんでもやるのでお願いします！」

マリー「なんでも古代文字が読めるとか。期待してますよ。おや、確か兵士長のダバンさん」

ダバン「こんにちはは、マリーさん。話すのは初めましてかもしれないな。ミラは俺の奥さんでもあるんだ。よろしく頼みます」

マリー「そうでしたか、幸せそうだなによりですね。ではミラさん、私達の事について詳しく説明しますので私についてきてください」

ミラ「はい！じゃあ、ダバン…… また後でね。さっきのは忘れて。イレブン様、ロウ様、ありがとうございます！」

ミラとマリーは玉座の間から出ていった

ダバン「…… はあ」

イレブン「えっと、ダバン。ミラさんもいろいろ考えてるんだよ。きっと自分の力でお金を稼いで、ダバンを楽させたいとかさ」

ロウ「うむ。ミラさんの性格から考えるに、甘えっぱなしは嫌なんじゃろうて」

ダバン「それは…… 理解してますけど。お荷物って…… なんてそんな」

ロウ「おそらく比喩表現じゃろうて。本気で思ってる訳ではないじゃろう」

ダバン「だと……いいんですけど。まあ夜にミラにもう一度聞いてみます。それでは、自主訓練してきます。失礼しました」

バタン

イレブン「……大丈夫だよね、おじいちゃん」

ロウ「ほほ、ダバンもミラさんも共に話し合おうとしておるから大丈夫じゃろうて」

その後、ユグノア王国 広場付近

王国に流れる小さな川瀬にぼーっとダバンが座っていた

ダバン「あー……今日はいいい天気だなあ」

その背後から音もなく近寄る人が

シュツ!

パシツ

ケニー「チツ!」

グルン!

ケニー「ぬおっ!?!」

ドサ!

ケニーが振るった短剣はダバンに当たる前に腕を掴まれ、そのままダバンの前に投げられる

ケニー「いってえな！」

ダバン「なあ、ケニー。聞いてくれよ〜」

ダバンは全く動じもせずにそのまま話しかける

ケニー「てめえ……腑抜けてやがるからチャンスだと思ったのにな。あと、てめえの話す事に興味ねえ」

ダバン「さつきミラによ〜」

ケニー「あの女に何かあったのか？」

ダバン「やたらとミラに食いつくじゃねえか。やらねえぞ」

ケニー「な!?!いらねえよ!あんな女!で!なんだよ、続き!」

ダバン「俺の金で生活していくのがお荷物みたいなんだってよ」

ケニー「……は?なんだ、そりゃ」

今までしかめていた顔が突然きよとした顔になった

ダバン「よくわかんね。ミラ、俺のお荷物みたいって言っててショックだったんだ」

ケニー「へ〜。お前がショック受けてるのはざまあみろだけど、なーんか気に食わねえな、それ」

ダバン「だろ？俺、ミラがいなかったら飯も生活もろくに出来ねえのに」

ケニー「昔から何も変わってねえのかよ。一人暮らしして多少出来るようになるもんだろ」

ダバン「兵士の金があればそれなりな家と外でいい飯が食えるもんでな」

ダバンはため息混じりに今までの生活を振り返っていた

ケニー「はっ、そうかよ。いいねえ、兵士様はお金持ちで」

ダバン「お前もなるか？兵士」

ケニー「まっぴらごめんだね。第一兵士なのに短剣使うなんて変だろ」

ダバン「使いたい武器があるならそれでやればいいだろ。何も剣だけじゃないさ。デルカダールには武器も持たずに突撃していく馬鹿が兵士長だったんだぞ」

ケニー「なんだそのかくとう馬鹿。というか、いい加減この手離せよ！」

その時

ロック「お！ダバン、いい所に！」

ダバン達の後ろからロックが走ってやってきた

ダバン「ん？ ロック、どうした？」

ロック「あれ？ お前、確かダバンの弟の。何してたんだ？」

ケニー「こいつを殺そうとしてた」

ダバン「弟と楽しくお喋りしてたんだ」

ロック「いや、お互いの解釈に乖離ありすぎだろ。一体どういう事だよ。まあいいや、聞いたか？ 遺跡調査の話」

ダバン「遺跡調査？ 知らないな」

ロック「そうか。さつき話題になってたんだが、この前新しく発見された大きな遺跡が山奥にあっただろ？」

ダバン「あー、あれか。柱とかゴロゴロしてる」

ロック「そうそう。そこにこの後、歴史研究チームを護衛しながら一緒に向かうんだってよ。お前は兵士長だから絶対行く事になると思うぜ」

ダバン「確かに。教えてくれてありがとな、ロック」

ロック「おう！ 俺も戦力としてはいい感じだし、選ばれたりしないかな」

ケニー「その遺跡、俺も知ってるぞ。ここから南西にある山の中だろ？ というか、馴染み深いな」

二人「馴染み深い？」

ケニーのまさかの発言に二人とも不思議な顔をする

ケニー「そこ、盗賊の時に俺が隠れて拠点にしてた場所だ。ある程度の勝手なら知ってるぜ」

ロック「へー！お前盗賊やってたのか。なんだ、強そうだと思ってたけどきつと強いんだろうな」

ケニー「……別に……」

ケニーは突然褒められた事に少し照れている

ダバン「ケニーは素早いからな、結構やる方だぞ。というか、それならお前も来るか？勝手が知ってるなら案内してほしい」

ケニー「はっ、ごめんだね。誰がそんな事」

ダバン「その歴史研究チームにな、さつきミラが加入したんだ。もしかしたら俺達と来る事になるかもしれないぞ」

ケニー「は!?!なんであんなただの女が！」

ロック「そうなのか、ダバン！」

ダバン「ミラは聖地ラムダの出身でな。考古学者を夢見て勉強してたんだ。だから古代文字とか読めたり、過去の歴史に詳しいんだぜ」

ケニー「へく、なんか意外」

ロツク「学者から、ダバンの嫁さん美人さんな上にそんな頭までいいのか。くっつ！そんな人を妻にしていると羨ましいっつらないぜ！」

ダバン「で、ケニーも来てくれるか？」

ケニー「……まあ、考えてやらなくもない」

ダバン「そうか、じゃあ気が向いたらついてきてくれ」

しばらくして、ユグノア城 玉座の間

兵士長のダバンとイレブン、歴史研究リーダーのマリーがこれからの予定について話し合っていた

イレブン「魔物の気配はあるとされてるから、くれぐれもマリー達はダバン達から離れないようにね」

マリー「はい、問題ありません。ダバンさん、いろいろご迷惑おかけしますがお願いします」

ダバン「いえ、護衛には慣れていきます。どこかに向かう際は連絡をお願いします」

イレブン「それじゃあ夕方には戻ってきて。何日かに分けてやっていこう」

二人「はっ！」

ミラ「ダバン、いきなり一緒にお仕事ね。私、役立ってみせるわね」

ダバン「ああ、前みたいに俺が周りを警戒しておく。ミラは気にせずには解読していきな。ああ、そうだ。それと、イレブン様、マリーさん。このメンバーにもう一名、連れていきたい人が」

イレブン「ん？誰？」

ダバン「おーい、ケニー！」

ダバンが声をあげて呼びかける

バダン！

しばらくして乱暴に扉が開かれた

ケニー「なっんでこんな所に来なきやいけねえんだよ！クソ野郎！」

ミラ「あら！」

ダバン「弟のケニーです。口は悪いですが、どうやら今回の遺跡はケニーが昔拠点としていた場所のようで、勝手がわかっているみたいです。案内役としてお願いしました。腕も立つので魔物相手にも問題ありません」

マリー「おお、そうか。それはありがたい、ケニーさん、よろしくお願いします」

ケニー「…… うっす」

イレブン「へー、ケニーとダバン。随分距離が縮まったんじゃないかな。あのカレーの件のおかげかな」

ミラ「ふふ、まさかケニーまで来てくれるなんて。とっても頼もしいわ、ありがとう」

ケニー「別に。見てるだけだからな」

ダバン「それでは出発しましょうか」

遺跡をめざして

ユグノア城下町 広場

噴水のある広場までやってくると、そこにはロックが待っていた

ロック「お、来た来た！ダバーン！」

ロックはダバン達を見つけるとこちらに向けて手を振っている

ダバン「あれ？ロック。お前どうした？」

ケニー「あいつ、さっきの兵士」

マリー「あら、ロックさん。こんにちは」

ロック「マリーさん、ども。あのさ、ダバン。俺もついて行っていいか？護衛。そんなに人数いらないのはわかってるけどさ、お前の戦いぶりは近くで見たいし、多少の戦力にはなるぜ」

マリー「申し出は大変ありがたいのですが、王様にはその旨をお伝えされましたか？」

ロック「一応は。見回りの仕事が終わったらいいとの事だったので、ちやっちやと終わらせてきた！な、いいだろ？」

マリー「それでしたなら私からは何も問題ありません。皆様は」

ダバン「俺は構わないぜ。ミラは？」

ミラ「もちろんお願いします。たくさんいてくだされば安心出来る

ので」

ロツク「よつしや、ありがとな！場所は確かここから北西だったよな？向かおうぜ！」

ユグノア地方 山間部

ダバン達はユグノア地方の深い山を登っていた。斜面が続き、道も整備されていない

ロツク「キツツ！俺、山道苦手なんだ」

マリー「大変なのはわかります。私もうっかり気を抜くと足が滑りそうに、きやつ！」

ロツク「うおつと！」

マリーが足を滑らせてバランスを崩し、倒れそうになった所を後ろにいたロツクが慌てて受け止めて支えた

ロツク「大丈夫ですか？」

マリー「は、はい。申し訳ございません」

ミラ「大丈夫ですかー！」

ミラやダバン、ケニーは少し先を歩いており余裕そうな雰囲気を見せている

ロツク「おう！三人ともこんな足場悪いのによくそんな軽々といけるな」

ミラ「私の出身の聖地ラムダはそれこそ大きな山の上でしたので、
こういう道には子どもの頃から慣れているんです」

ケニー「これくらいどうって事ない」

ダバン「うーん、鍛錬の成果かな？」

ロック「…： その兄弟は人外かよ」

マリー「足止めさせてすみません。ここからあと800mほどで
す、もう少し頑張りましょう」

ミラ「そろそろなんですね！」

ダバン「おっと」

ケニー「どうやらお出ましのようだぜ」

また進もうとすると、上空から緑色の体に大きな翼を生やした竜の
魔物キングリザードが3匹降り立ってきた

マリー「なんて強そうなドラゴン！」

ミラ「ダバン、ケニー、ロックさん、気をつけて！」

ロック「おっしやあ、腕の見せ所！」

ロックは意気揚々と前に飛び出ていく

ロック「竜にはこれだろ！ドラゴン斬り！」

竜の体を剣にオーラとして纏わせると、そのまま飛びかかって斬りかかる

キングリザード「グアオ！」

バサリ

キングリザードは飛んで空中へ向かう

ロック「ぬおっ！おい、飛ぶな！ずりいぞ！」

攻撃を外されたロックが怒りを顕にして空中にいるドラゴンリザードに怒っている

ダバン「ずるくはないだろ、別に」

ケニー「カツコつかねえやつ」

ロック「そこ！一々言うな！」

キングリザード達「ギャオオ！」

キングリザード達が一齐に火球を吐いてきた。その数は優に10発を超えている

ミラ「まずいわ！」

ロック「やっべ！マリーさん達が！」

その火球はダバン達ではなく、後ろのマリー達を狙っていた

ボオオン!!

火球がミラ達の前で大爆発を起こす

ロツク「ミラさーん!!」

ケニー「馬鹿、よく見やがれ」

ロツク「へ」

シュウウウ…

黒煙が無くなると、そこには大きな盾がミラ達の前にあった

ダバン「ビッグシールド。ま、これくらいどうって事ない」

ミラ「流石ダバンね。ありがとう」

マリー「凄い、あれだけの火球を真正面から受け止めてビクともしないなんて」

ダバン「お褒めに預かり光栄です」

ロツク「なーんだ、ダバンが向かってたのか。安心したぜ。でも、飛ばれてんのは面倒だよな」

ケニー「なら」

ケニーは近くの木に跳び移ると、その木からキングリザードの尾へと飛び上がる

尾を掴むと、飛んだ勢いをつけて体を捻り更に鱗を足場にして高く飛ぶ。身軽に背中へと着地してそのまま翼を短剣で切り裂いた

キングリザード「ギャオオ!!!」

ケニー「よっ!」

更にもう一体、もう一体へと飛び移り、どんどん翼だけを切り裂いていく

ケニー「飛べなくさせてやればいい」

ドスン!ドスン!ドスン!

ケニーが地面に着地すると同時にキングリザード達も落ちてくる

ミラ「ケニー、やるじゃない!」

ロック「本当だぜ、あんな身軽に動けんのか!なんて言ってる場合じゃねえ、いい加減俺もカツコつけさせてもらわないとな!ドラゴン斬り!」

ズバァン!

キングリザード「ギャヤ……」

ジュワー

ロック「まず一体!つぎも」

ケニー「おせえよ」

ロック「え」

ロックが一体を倒す頃には残っていた二体のキングリザードも煙となって消えていた

ロック「あ、あれ？なんで」

ケニー「俺が翼を攻撃した短剣に猛毒を付けた。痺れて動けなくなって、そのまま死に至る強力な毒だ」

ダバン「だな。落ちてくる動きも落ちた後も、全く動かないからそういう事なんだろうと思っただぜ。用意周到だな、ケニー。やるじゃないか」

ケニー「はっ、お前なんか褒められても嬉しくねえ」

ロック「くっ、この二人に任せてれば俺いらねえじゃんか」

ダバン「そんな事ない。俺達だってできる事に限度がある、ロックがいるから動ける時も絶対にあるはずだ」

ロック「ダバン……へへ、そうだよな！サンキュー！」

マリー「護衛されるだけでは情けないと、自衛道具は持ち合わせているんですが、どうやら必要なさそうですね」

ミラ「そんな物が。私も用意しておくべきだった」

マリー「私達のような一般人でも使えるような魔道具や錬金道具で

す。よければお貸しします」

ミラ「わあ、こんなにたくさん！」

「マリーが持つ手提げ袋の中にはたくさんさんの道具が入っていた

マリー「光る虫を利用した発光玉、大きな音を出して標的を変える音波弾、打ち付けるとマヌーサが発動する幻惑玉、相手を毒にしたり、身体のを奪うヴェレ弾にヘナトス玉など様々あります」

ケニー「ほう、盗賊も世話になるようなもんもいくつかあるじゃねえか。俺も持ってるぜ」

マリー「はい、これがあるから戦えるわけではありませんが、逃げたりサポートしたりはお任せください」

ミラ「(マリーさんは……自分に力がない事を自覚して、ちゃんと対策をしている。私は……ダバンに頼りきりだったわ。私は昔から、ダバンのお荷物だった……?)」

ダバン「でも、それにだって数に限りがあるだろう。そう易々と手に入るものでもなさそうだし、使うのは最終手段にしてくれ。俺達が基本は何とかするからな」

ロツク「そそ！そーんな物騒なもの使わなくても、俺達がしっかり護衛しますから！」

マリー「はい、頼もしい限りです。話が長くなりましたね。では、もう少して遺跡へ着きますので頑張りましたよ」

遺跡の中で

アルト遺跡

森の中に突如として現れた石で出来た大きな床、そこから無数に生える大きな石の柱がそりたっている。しかし、それもボロボロになり途中から折れており、無数の石片が散らばっている

ミラ「ここが、その遺跡なんですか。なんだか周りの景色とは不釣り合いですね」

マリー「そうですね、昔はここに森などなかったのでしょうか」

ロック「なーんか凄そうな場所だな。遺跡なんてまともに来た事ないからよくわからないけど」

ダバン「ケニー、ここには地下とかあるのか？」

三人は周りをキョロキョロとしているが、ケニーだけはつまらなそうにして先を進もうとしている

ケニー「うっせ、黙って俺についてこい。この先に階段がある」

マリー「あ、お待ちください、ケニーさん！少しここの石柱を調べさせてください」

ミラ「お願い、ケニー。ここ、少しだけ古代文字が書かれてるの」

そう言ってミラとマリーは石柱を眺めていろいろ話し始めた

ケニー「チツ、んだよ。そんなん見ても面白くもねえのに」

マリー「ふふ、確かにつまらないかもしれませんが。でも、古から残る物には必ず当時生きていた人達の記録があるの。それを読み解いていくと、この場所の歴史、果てには過去の時代がどうなっていたのかが見えてくる」

盗賊からしてみたら、ここの遺跡全てが私達にとってお宝の海なのでございます。盗賊をされていたら、おわかりいただけませんか？ お宝の価値を上げるためにお宝を調べようとする事が」

ケニー「……ふーん、なるほどな。そんなもんなのか」

マリー「ご理解いただけて嬉しいです。それではすみません、少し時間をいただきます」

ミラ「マリーさん、見てください！ここの文書！」

マリー「ん？……これって」

二人はまた興奮した様子で話し始めた

ロック「んー、まあここら辺はまだ見通しがいい方だよな。山の中よりは木々がないからな」

ケニー「俺は少しこの先にある階段から地下に行ってくる」

ケニーは一人で先に進んでいく

ダバン「じゃあ俺はここに残ってるさ。ロック、お前もケニーと一緒に行ってきてくれ」

ロツク「お、俺が？」

ケニー「別に俺一人で充分だ」

ダバン「それはわかっている。でも、バラバラで行動されても合流に困るからチームで動こうって話だ。な？頼む」

ケニー「……ま、勝手にしろ」

ロツク「ん、おっけー。行くか、ケニー。案内よろしくな」

ケニー「ふん」

遺跡 内部

階段を降りると、昔に使われていたのか通路が出来ていた。通路は複数に分かれ、様々な部屋に繋がっている。しかし、いくつかは崩落して行き止まりとなっていた

ロツク「へく、ボロボロだけど昔は綺麗そうな通路だったんだろうな。で、どこに向かってんだ？」

ケニー「元々使っていた俺の部屋だ。簡単なベッドとここの地図、俺の武器とか置いてある」

ロツク「ほく、地図があるのはありがたいな。ケニーが書いたのか？」

ケニー「俺がわかるように書いたただけだ、期待すんなよ」

ロツク「いやいや、こんな広そうな場所だろ？すげえじゃん、ケニー」

！器用そうだと思ってたんだ！ダバンとは違うな！あいつ、不器用も
いいところだもんな。特に手先とか」

ケニー「あいつが不器用？まあ料理とかは出来ねえけど」

ロツク「いやいや、それだけじゃねえって。あいつ、意外と力強
いからよ。訓練用の木の盾とか慎重に扱えって言ってるのにポロボ
ロにして壊してんだ。一人で4個も破壊してよ、ふぎけんなって感じ
だよな。はははは」

ケニー「ふっ、馬鹿だな、あいつ」

ロツク「だろ？今度言っておいてくれよ、もうあれで教えようと
すんなって（こいつ、こんな顔で笑うんだ。ダバンと似た笑い方して
んな。嫌がっても兄弟ってか）」

ケニー「さて、着いたぜ」

ケニーが通路を曲がると、そこにある小さな部屋には一つの小さな
ベットと丸められた地図や箱にまとめられた短剣や道具が床に無造
作に置いてあった

ロツク「こんな場所で暮らしてたのか？」

ケニー「長くいた訳じゃない、身を隠したり雨籠もりするのにちよ
うどよかったんだ。魔物もなぜかほぼいないしな」

ロツク「確かに。なんでこんなに見ないんだろうな」

ケニー「知らね。さて、あいつらの所に戻るか」

ロツク「おう。ん？この先は？」

ロツクはケニーの部屋より先に続く道を指している

ケニー「なんもねえ大部屋があるだけだ。吹き抜けになってるんだ。下からも着地して入れるぞ」

ロツク「着地って……地上からそれなりに下にあるだろ、ここ」

ケニー「んなもん、上手く力を逃がすんだよ」

ロツク「簡単に言ってくれれば、身体能力の高さは兄貴譲りか」

カラ

ケニー「！」

ケニーは短剣を抜いて奥の方を睨みつけている

ロツク「ん、どうした」

ケニー「……なんか、気配がした」

ロツク「マジ？」

ロツクも奥をじーっと見つめる

ロツク「……何も見えないぞ」

ケニー「……気のせい、か？まあいい、急いで戻るぞ」

ロック「おう」

階段前

ダバン「ここがケニーの話していた階段か」

ミラ「この通路も形も、使われてる石もやっぱり古代プワチャット王国の物と似ているわ」

マリー「そうですね。これは大変素晴らしい場所ですね、新たな歴史が明るみになるかもしれません」

その時、ロックとケニーが早足で戻ってきた

ロック「お、待たせたか。悪いな」

ダバン「別に大丈夫だ。ん？ケニー、それ地図か？」

ケニー「雑なやつだぞ」

ミラ「それはありがたいわ！見てもいい？」

ケニー「別に読めねえと思うぞ、汚ねえし」

ミラ「ふむ……この、×で書かれてるのは何？」

地図には所々に×が書いてある。先程通った通路にもあるようだ

ケニー「これは俺が仕掛けた罠の場所。落とし穴とかの簡単なやつから、通路に細工した武器が飛び出したりするやつだ」

ダバン「ま、まあ、盗賊だったならやって当然か」

ロック「待て待て待て！じゃあ、なんだ！さつき俺が引つかかかってた可能性も！」

ケニー「ああ、そうだな。何も言わなかったが、俺の隣にいなかったらわざと引っ掛けてやろうかと考えてたんだけどよう」

ケニーは悪そうな顔をして笑っている

ロック「こ、こいつう!!おい、ダバン！こいつとんでもなく悪いやつだな！」

ダバン「は、はは。まあ大目に見てやってくれ」

マリー「この通路の先には何があるのですか？」

ケニー「俺の簡単な部屋と何も無い大部屋がある程度だ。通路は他にもあるし、いろいろ繋がってるから全部はよく知らねえ。」

あ、さつきその大部屋の方向から変な魔物の気配がした。近づくな
ら気をつけた方がいい」

ミラ「わかったわ、そこには近づかないようにしましょう」

ダバン「それでは、ミラとマリーさんはここから俺達3人と極力離れないようにお願いします」

一時間後

通路をゆつくり進みながら小部屋を調べていると

ダバン「……なーんかこの先から嫌な気配がするな」

ケニー「だよな。これ以上進むのはやめるか」

マリー「わかりました。収穫は多かったので、今日はここまでにしておきましょう」

全員で小部屋から通路に戻ると

ひゅん、こつん

ロツク「ん？石？」

ロツクの鎧に小石が飛んできた

ミラ「石？飛んできたんですか？」

ロツク「ああ、こつちの方から」

ロツクがそう言ったその時

キイイン!!

全員「!!」

進んできた方向の通路の床から茶色の魔法陣が描かれる

ゴゴゴゴゴ

瞬く間に通路が石で塞がれていく

ケニー「な!？」

マリー「通路が!!」

ミラ「そ、それなら今の部屋に！」

ゴゴゴゴゴ

ミラ「きゃっ！」

今入っていた小部屋への道も石で塞がれた

ダバン「……これは」

ロック「進むしか……ねえってか」

ダバン達に残された道はただ一つ。嫌な気配がする方向、つまり小石が飛んできた方向への道だけだ

決戦

全員「……」

全員が黙って嫌な気配がする方への道を見つめていた

ダバン「よし、こうしてても仕方ない。ミラ、マリーさん。俺達三人が前に出ます。出来るだけ離れずに、でも後ろからついてきてください」

ミラ「うん。わかったわ」

マリー「はい。ミラさん、先程貸した道具をすぐに使えるようにしておきましょう」

ロック「よし、さっさと行ってさっさとこんな所抜けようぜ！走ればすぐだって」

ダバン「だな」

石の広間

そのまま道を進んでいくと、大きな空間に出た。上からは外の青い空が見えている

全員「！」

ダバン「なんだ、あれ」

その中央には大きな赤い塊が転がっていた

ケニー「……前に来た時はあんななかったぞ。あれは……宝石？」

マリー「ここで取れた物でしょうか。それとも誰かがここに？」

ガラ

全員「!!」

赤い塊が勝手に動き出し、意思を持つかのような動きで形を成していく

ミラ「これって！」

ゴーレム「ゴーレム!!」

赤いルビーで出来た巨大なゴーレムとなった。その大きさは普通のゴーレムよりも大きく、ダバン達が真上を向かなければ顔すらも見えない

ロツク「おいおい！こんな宝石みたいなゴーレムがいんのかよ！」

ゴーレム「ゴー！」

ゴゴゴゴゴ

ゴーレムが大きく声をあげると、通路への道が石で塞がれた。それと同時に、吹き抜けとなっていた場所も石で塞がれていく

ケニー「光がなくなるぞ！」

周りは空からの光がなくなっていく、どんどん真っ暗となる

マリー「私にお任せください！発光虫！」

マリーが袋から数個壁に向けて虫を飛ばすと、壁にくっついた虫がそれぞれ光を放ち始めた

吹き抜けとなっていた場所は石で塞がれ、広い空間にゴーレムとダバン達は閉じ込められた

ゴーレム「ガー」

ゴーレムがドスンドスンと足音をたてて近づいてくる

ロック「ダバン、やるしかないみたいだな」

ダバン「ああ。どうやらただのゴーレムなんかよりよっぽど知性も強さもありそうだ。気をつけろ」

ケニー「女達はそこでじっとしてな！はっ！」

ケニーが素早くゴーレムへと走っていく

ケニー「厄介な事はさせねえ！眠りな！ナイトメアファング！」

大きく跳んだケニーは二振りの短剣に黒いオーラを纏わせて腕に勢いよく切りつける

ガン!!

ケニー「いっ!!」

しかし、短剣はその身体に一切刺さらずビリビリとした感覚がケニーに返ってきた

ケニー「ちっ！」

なんとかゴーレムの体を蹴って距離を離し、ダバン達の元まで下がる。ゴーレムはまるで何もされてないかのように立っている

ケニー「こいつ、どんだけ硬いんだ。全く刃が通らねえ」

ダバン「そうか。ゴーレムでさえ、岩にも剣は通るのにな」

ロック「どんだけカッチカチなんだよ、こいつ」

ミラ「ほ、宝石だからかもしれないわ！」

ケニー「宝石だから？」

ミラ「ええ。宝石はダイヤモンドみたいに岩や鉄よりもずっと硬いのよ。赤い宝石。つまりルビーとかだとするなら、鉄や銀なんかじゃ傷一つ付けられない可能性もあるわ！」

ダバン「となると、剣じゃこいつの身体は壊さないのか？」

ロック「いやいや、だとしたらどうすんだよ！こんなん！」

ケニー「……………なら、これでどうだ？」

ケニーは目を閉じて集中すると、ゴーレムに緑色の魔法陣が浮かぶ

ダバン「！お前、魔法を」

ケニー「ルカニ！」

ゴーレム「ゴ…」

ゴーレムに特に変化は見られない

ロック「…効いたのか？」

ケニー「知らね。あまり使った事もないから失敗した可能性もある」

ロック「まあいつか、効いたと信じるぜ！俺も向かう！」

ロックがゴーレムに走っていく

ゴーレム「ガー！」

ゴーレムは巨大な足でロックを踏み潰そうとする

ロック「そんな見え見え、喰らうかよ！はやぶさ斬り！」

ロックは軽々と避けると、足に向かって素早く斬撃を二回繰り出した

ガアン！ガアン！

ロック「つつつくうー！！いってえー！！」

ロックは手を振って痛がっているが、その足には少し傷が付いてい

た

ロツク「ルカニちゃんとかかってるみたいだぜー！」

そう言いながらロツクが離れていくと

ゴーレム「ガー！」

ゴーレムがロツク目指して指を指した。すると

ボゴ

全員「！」

壁に付いていた石がいくつも勝手に浮いて動き出した

ダバン「なに!？」

マリー「これは！石が！」

ゴーレム「ゴーレム!!」

ヒュヒュヒュヒュ!!

ゴーレムの雄叫びに合わせて凄い勢いでロツクへいくつもの石が
飛んでいく

ロツク「マジかよ！」

ロツクは盾を持って一つ目を塞ぐ

ガアン!!

ロック「ぐうっ!」

ガアンガアンガアンガアン!!

なんとか防いでこそいるが、その威力と数に盾が凹んでいく

ケニー「おい、なんとか逃げろ!」

ダバン「ロック!」

ダバンがロックを助けようと向かう

ゴーレム「ガー!」

ゴーレムは今度は天井の石をダバンに向けて落としてきた

ダバン「チッ!」

ドオン!!

ダバンが後ろに避ける

ゴーレム「ゴーレム!」

ダバン「!?!」

落ちてきた石が今度はそのままダバンに向かって飛んでくる

ガアン!!

ダバン「ぐはっ！」

避けきれなかったダバンが直撃して壁まで吹き飛んでいく

バアン!!!

ミラ「ダバン!!」

ロック「なっ！」

そのままダバンに向かっていた石は違う角度からロックへと向かう

ドオオン!!!

マリー「ロックさん!!」

ロックは石に埋もれてしまった

ゴーレム「……………」

ゴーレムはケニーとミラ達へ振り向く

ケニー「……………こんな化け物、どうしろってんだよ!!」

ケニーはゴーレムへと走っていく

ゴーレム「ガー!!」

壁から石がどンドンケニーへと向かう

ケニー「はっ！よっ！」

ガアン！キン！

ケニーは素早く躲したり、短剣で防いでいきながらゴーレムへと近づく

ケニー「これでも喰らって……！」

ケニーが攻撃しようと跳ぶと、ゴーレムが既に腕を振り上げていた

ゴーレム「ゴーレム!!」

ボゴオン!!

ドドドドドド!

ゴーレムに叩き落とされたケニーの元に追っていた石が大量に落ちていく

ミラ「ケニー……」

マリー「あ…… あああ……」

ゴーレムがゆっくりとミラ達へ向かう

マリーが恐怖からか腰を抜かしてそのまま崩れ落ちていく

ゴーレム「……」

バラバラバラ

二人「！」

ゴーレムが崩れていくと、今度は体の赤い宝石一つ一つが浮いている

ミラ「?.....まさか！」

ビュン!

ミラ「マリーさん!!」

赤い宝石がミラ達に向かっていく瞬間にミラはマリーの手を取って走り出した

ガガガガガアン!

赤い宝石が壁に打ち込まれていく

マリー「ど、どうしましょう。私達だけに.....」

ミラ「..... まだダバン達は生きてます!なんとか皆で逃げない!」

ミラは塞がれた壁に向かっていく

ミラ「この壁を壊しちやえば.....」

ミラは叩いたりぶつかったりするがびくともしない

ビュン!

その後ろから赤い宝石が向かってくる

マリー「ミラさん!」

ミラ「!」

ダバン「ばくれつきやく!」

ロック「はやぶさ斬り!」

ダバンとロックが間に入り、宝石を攻撃していく

ガギン!!ガアン!!

ダバンとロックに全部落とされた宝石は力無く地面に落ちた。
ロックは頭や腕から血が、ダバンは鎧が大きく凹んでいる

ロック「いつつつつ… ミラさん、マリーさん、逃げてください」

マリー「ど、どうやって」

ダバン「ばくれつきやく!」

ボガアン!!

塞がれていた壁をダバンが蹴り破って壊した。しかし、石がピクピクと動こうとしている

ダバン「さあ、ここから早く!」

ミラ「ダバン達も！」

ダバン「俺達はここに残る！イレブン様やロウ様をお呼びしてきてくれ！俺達じゃ相手にならない！」

マリー「残ったらダバンさん達が！」

ロック「まあまあ。ほーら、早く行った行った」

ロックが二人を無理矢理押し出した

石がまた動き出し、元の壁に戻ろうとしている

ロック「男達にさ、最後の覚悟くらい決めさせてくれ。死にたくはないんだけどさ」

ロックが少し照れたように笑った

マリー「!!」

ロック「王様達によろしくな！」

ロックがもう壁になるタイミングで戻っていった

ダバン「……お前も逃げてよかったんだぞ」

ロック「そーんな薄情じゃないって。何も出来ないかもだけど、俺がいるから動けるかもしれないんだろ？ 罠や肉壁くらいにはなるさ」

ダバン「……ありがとう」

ミラ「駄目!!」

二人「!!」

二人が振り返ると、ミラがギリギリで戻ってきた

マリー「ミラさん!!」

そのマリーの声を最後に壁に戻ってしまった

ダバン「なんで……なんでわかってくれなかった!!!ミラ!!」

ダバンが苦しそうな顔で大声をあげた

ミラ「私だって、ダバンと一緒に!」

ダバン「ミラは今ここにいたら駄目なんだ!!お前は!!荷物も同然なんだよ!!」

ミラ「!!!」

ミラはその言葉に泣きそうな表情をするが、ぐつと堪える

ミラ「荷物でもいいわよ!!ダバンとケニーを置いていくなんて、私
が出来るわけないわ!」

ダバン「この…… わからず屋が。いつもみたいに守ってやれる
と思うなよ」

ゴーレム「ゴーレム!!」

三人の前にゴーレムが立ちはだかつた

決戦2

ゴーレム「グオオオ!!」

ゴーレムは3人に向かって両腕を振り下ろした

ロック「それくらい!」

ダバン「ミラ、無理矢理でも避けるんだぞ!」

ミラ「もちろん!!」

ドオン!

大きな土煙が起こる

ダバン「な!?!」

同時にダバンの足下の岩が大きく跳ね上がった

ガアン!

ダバンは岩に直撃して浮き上がる

ミラ「ダバン!」

ゴーレム「ゴー!!」

ゴーレムはそのままダバンに向かって腕を突き出した

ドガアアン!!

ダバンは壁に向かって大きな音を立てて飛んでいった

ミラ「ダバ……!!」

ミラがダバンの方を見ようとすると、ゴーレムが自分を見ている事に気付いた

ゴーレム「ゴーレム!」

ゴーレムはミラに向かって指を指した

ミラの天井の岩がミラ目掛けていくつも落ちてくる

ロック「まずい、避けるんだ、ミラさん!!」

ミラ「投網弾!」

ミラは袋から小さな球を上投げると、弾は一瞬で広がり大きな網が出来上がった

岩は網の中にどんどん入っていく

ミラ「これなら避ける時間が稼げる!」

岩が網と一緒に落ちてくる頃にはミラはとっくにその場になくなっていた

ロック「あれは、漁師とかバイキングが使う魚を捕らえる網。こん

な使い方もあるなんて」

ミラ「咄嗟の判断よ。使えないかしらと思ってるね」

ゴーレム「…：… ゴー!!」

ゴーレムは再びミラに向かっていく

ミラ「完全に私も敵認定されたわね」

ロック「ミラさんは戦えないんだぞ、俺の方を向きやがれ!」

ロックは走ってゴーレムへと飛びかかる

ロック「硬いつてんならこれはどうだ!?メタル斬り!」

ロックの持つ片手剣が黒く光り、そのまま斬りつけた

ガギイン!

ロック「ぐうう!!これもダメか!」

ゴーレムの体に小さな傷が付いた程度でゴーレムも気にする様子はない

ケニー「諦めんな!!何度でもやるしかねえだろ!」

瓦礫からケニーが出てきてロックの後に続く

ケニー「闇雲にやるしかねえ!ヴァイパーファング!」

ガン！

ケニーが毒を纏わせた短剣でゴーレムの体を思いつきり突き刺す

ケニー「つつ……からの！タナトスハント！」

バキイン！！

ケニー「な！！」

ケニーが更に追撃として短剣を振り下ろすと、短剣が折れてしまっ
た

ゴーレム「……」

ロツク「ケニー、お前武器が。でも、こつち向いたぞー！」

ミラ「……（ゴーレムは元々から目が弱くて光の当たり具合でしか
人を判断出来てないはず。このゴーレムはどうやってこんなに正確
に人を判断してるの………光の………試してみる価値はありそう
ね）」

ケニー「わり、もうあまり俺は攻撃出来ないかもしれねえ」

ロツク「ああ！気を引くくらいは頼むぜ！」

ゴーレム「ゴー」

ゴーレムが二人に向かおうとする

ミラ「二人とも！目を閉じて！」

二人「!？」

ミラ「これでも喰らいなさい！閃光弾！」

ミラがゴーレムの顔目掛けて投げた弾から眩い光が発された

ほとんど真っ暗で見にくくなっていた空間が一瞬鮮明に見えるようになった

ロック「ぬお!？」

ケニー「いきなり何しやがる、あの女！」

ゴーレム「グオオオ!!」

ゴーレムは膝を付いて目を押さえている

二人「効いてる！」

ミラ「やつぱり！今こいつはいきなりの光で全く見えてないわ！今がチャンスよ！」

ダバン「眩しいと思つたらミラのおかげか！チャンスなんだな！」

ダバンも今の光でこちらにやってきた。さっきまでの傷が塞がっている

ケニー「お前、なんか傷治ってないか？」

ダバン「ベホイムだ。これくらい使えないとな。ほら、ケニーと

ロツクにも。ベホイム」

ダバンはロツクとケニーに片手で緑の魔法陣を描いて強い治癒の力をかけた

ロツク「おお、サンキュ。少しマシになった」

ケニー「へえ、クソ兄貴も便利なの覚えてたんだな」

ダバン「まあな。とりあえず攻めるぞ！」

三人が一齐にゴーレムへ向かっていく

ケニー「ヴァイパーファング！」

ロツク「らいめい斬り！」

ダバン「ばくれつきやく！」

毒を纏った短剣が、雷を宿した剣が、無数の足技がゴーレムに直撃する

ガアアアン!!

ゴーレム「ギギギ…」

ダバン「！効いてるぞ！」

ロツク「マジか！やっぱり何回でも攻撃するもんだな！」

ゴーレム「グオオオ!!」

ゴオオン!!

全員「!?」

ゴーレムは立ち上がると自身の頭を思いつきり殴った

ピキ!!

ゴーレムの頭に小さな裂け目が出来た

ケニー「な、なにやってんだ、こいつ」

ゴーレム「ゴーレム!!!」

ゴーレムは勢いよくダバン達を見る

ゴーレム「ゴーレムー!!!」

ドオオン!!

ゴーレムが思いつきり地面を殴りつける

グラグラグラグラ

地面がひび割れていき、大きな穴となった

全員「うあああああ!!!」

全員が大穴と共に落ちていく

地下

ミラ「何も見えない……。えっと、もう一回。発光虫！」

地下へと落ちたミラは真っ暗な空間でなんとか袋を漁って発光虫を取り出した

パアア

ミラ「これで少しは周りが見えるわね。あ！ロックさん！」

ロック「おお、ミラさん。光があると思ったら。ここ、あの遺跡の地下か。あのゴーレム、なんであんないきなり」

ミラ「私に少し考えはありますが、まだなんとも。とりあえずダバンとケニーに合流しないと」

ケニー「俺はここにいるぞ」

少し離れた所からケニーがやってきた

ミラ「あ、ケニー！よかった！」

ケニー「あの化け物は？」

ロック「わからねえ。ダバンも見当たらないしな。あいつ一人でこんな場所で戦ってないといいけど」

ミラ「探さなきゃ！」

ケニー「ここから出る方法も見つけ出さないとまずいな。こんな暗い場所、あいつの独壇場だろ」

その時

ドオオン!!

大きな音がミラ達の耳に届いた

ミラ「きゃっ!?!」

ケニー「あっちか」

ロック「おいおい、まさか本当に予想通りなんて嫌だぞ!」

3人で音のした方に向かうと

三人「!!」

ゴーレム「ゴーレム!!」

ボガアン!!ドガアン!

ゴーレムが周りで暴れて壁や瓦礫をどんどん壊している

ケニー「げえ、完全に気がおかしくなってるじゃねえか」

ロック「ダバンはいないみたいだな。あいつどこ行った?」

ミラ「……私達には気がついていないみたいですね」

ケニー「でも、こんな奴いたらいつまで経っても帰れねえ。倒すしかないな。奇襲のチャンスだ」

ミラ「……ねえ、さつきゴーレムが頭を殴った時に傷が出来たでしょ？あれってもしかして、同じ鉱石ならあいつの体に傷がつけられるって事じゃないかしら」

ロック「そ、そう……なのか？」

ミラ「ダイヤモンドとかも同じダイヤモンド同士なら傷が付くの。それと同じ原理なら」

ケニー「……あいつの鉱石を奪ってそれで殴れって事か」

ロック「なるほど！つまり、そこら辺に落ちてるあいつの破片や塊を拾えば」

ミラ「ええ、武器になると思うの」

ケニー「……すげえな、女。なんでそんな事知ってんだよ」

ミラ「私もまさかこんな所で使えるなんて思わなかったわ。ただ、なんでもない雑学がこうやって命を助けてくれるかもしれない。今、知識は武器になるって言葉の有難みがよくわかったわ」

ロック「ミラさんがいてくれてよかった！よし、ケニーやるぞ」

ケニー「おう………女。いや、ミラ」

ミラ「!!………ケニー、私の名前」

ケニー「うっせ。……その力、ありがとな」

ミラ「……うん」

決戦3

ミラ「まずは私が周りを照らすわ！発光虫！」

袋から光る虫が入った弾を辺りに投げつけた。そのおかげでゴーレムの周囲は照らされてよく見えるようになった

ゴーレム「ゴー!!!」

ボゴオン!!ドガガガ!!!

ゴーレムは気づかないようで周りの瓦礫を壊し続けている

ロック「あいつ、マジで正気じゃなくなったな」

ミラ「今のうちに、このヴェレ弾とヘナトス弾で弱らせるわ」

ミラが袋から紫色の弾と青い弾を取り出した

ケニー「その二つは慣れてないと難しい。ミラ、貸せ。俺が投げる」

ミラ「わかったわ。お願い、ケニー」

ミラは2つをケニーに渡した

ケニー「よし」

ケニーは慣れた手つきで弾に着いていた蓋を外した。ヴェレ弾からは煙が出てきた

ケニー「喰らえ！」

ケニーは勢いよくヴェレ弾とヘナトス弾をゴーレムに投げつけた
パン!!

ゴーレムの背中に当たって弾けた

ゴーレム「ゴーレム」

ケニー「よし！ガスはしばらく吸うなよ！」

ケニーは辺りに落ちてたゴーレムの大きめな破片を拾った

ロツク「俺も！」

ロツクも近くにあつた破片を持った

ロツク「よいしょ！」

バキィ!!

ロツクは破片でゴーレムに殴りつけた。破片は折れて小さな剣のようになつた

ロツク「折れた！この形ならいける！」

ミラ「やっぱり！」

ケニー「ミラの知識は流石だな。俺もいくぜ。はっ！」

ケニーもゴーレムに殴りかかる

ゴーレム「ゴーレムー!!」

ゴーレムがケニーに腕を振り下ろした

ケニー「当たらねえよ!」

ケニーは軽く避けると、そのまま腕に破片を叩きつけた

バキイ!

破片は折れて刀のようになった

ゴーレム「ゴー……」

ゴーレムは腕を痛めたのか振っている。また、背中から少し煙が出ている

ミラ「(あの煙は……もしかしたら)」

ケニー「カオスエッジ!」

ロツク「らいめい斬り!」

バガアアン!!

ゴーレム「ゴーレム!!!」

二人の攻撃が入り、ゴーレムの腕と足にヒビが入った

ゴーレムは倒れ込んだ

三人「やった!!」

音を聞きつけたのか、ダバンがやってきた

ダバン「おお!!あいつ、倒したのか!？」

ミラ「ダバン!よかったわ、無事で。まだ倒したわけじゃないけど、傷を付ける手段が見つかったの」

ケニー「へっ、遅えぞ、クソ兄貴!このまま俺達がこの化け物倒してやるよ」

ケニーがダバンの方を向いた瞬間

ダバン「!?ケニー逃げろ!!」

ケニー「な!？」

ダバンの大声に振り返ると、ケニーの目前にゴーレムの大きな手が迫っていた

ミラ「ケニー!!」

ロツク「うおおおお!!」

ドン!!

ガシッ

ロツクが走ってケニーを突き飛ばした

代わりにロックがゴーレムに捕まえられた

ロック「ぐっ」

ゴーレムの巨大な手がロックを握り潰そうとしている

ケニー「お前!!」

ロック「助けられて……よかった……。もつと！兄貴と……
本心で……話せよ！ケニー!!」

ケニー「な……」

ダバン「ロック」

ゴーレム「ゴーレム！」

ゴーレムがロックを持っていた腕を高く振り上げてロックを地面
へ思いっきり叩きつけた

ドガアアアン!!

ゴーレム「ゴー!!!!」

ドオン!!ドオン!!

そのままゴーレムはロックの体を何度も踏み潰す

ケニー「やめろー！ー！ー!!!!」

ミラ「ひっ」

ダバン「ケニーーー!!!」

土煙が晴れる頃には、動かなくなったケニーが落ちていた

ダバン「……こいつ!!!」

ダバンが向かおうとすると

ケニー「兄貴、これ！」

ケニーは持っていた赤い宝石で削ったさつき刀を渡した

ミラ「あいつの体で出来た武器なら、あいつに傷がつけられるわ！」

ダバン「なるほど。ケニー、お前の分は？」

ケニー「俺はなんとかあいつをあの化け物から引き離す。化け物は頼む」

ダバン「わかった」

二人がゴーレムへ走り出す

ミラ「(ここからなんとかして逃げ出さないと。ケニーの地図だと、ここはどこかしら)」

ミラはケニーから貰った地図を開いていた

ダバン「ロックの仇!!超はやぶさ斬り！」

ダバンは貫った刀を目にも止まらぬ速さで4回斬りつけた

ズバン!!

ゴーレム「グオオオ」

ダバンの怒りの斬撃がゴーレムの片足を切り落とした

ケニー「やるじゃん。よし！」

ケニーはロックの亡骸を背負うとそのまま走っていく

ダバン「な!?これは」

ダバンの周りには、切り落とした足がバラバラになって赤い宝石の塊となって浮いていた

ミラ「うそ、あの体全てに意思があるというの」

ケニー「逃げろ、兄貴!!」

ダバン「くっ！」

ダバンも逃げ出そうとする

ガン!!

ダバン「つぶね！」

浮いていた宝石がダバンの頬を掠める勢いで飛んできた

そのままダバンの四方八方から凄まじい勢いで宝石が飛び交い続けている

ミラ「ダバン!!」

ケニー「くそ！兄貴までやらせるかよ！」

ケニーはその場にロックを置いて残った一つの短剣でゴーレムへ向かっていく

ケニー「こつちを向け!!!」

ガアン!!

ケニーが投げた短剣がゴーレムの背中へ突き刺さる

ゴーレム「ゴー……」

バキバキバキバキ

振り向いたゴーレムが片腕にバラバラになった宝石をくつつけていく

その腕はみるみる大きくなっていき、片腕だけ異様に大きくなった

ケニー「やば、マジか」

ミラ「ケニー、避けて!!!」

ゴーレムは巨大な腕を勢いよくケニーに振り落とした

ボガアアアン!!!

た その威力は周囲に大きな穴を作り出し、山全体をグラグラと揺らし